

【完結】 剣製の魔法少女 戦記

炎の剣製

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

錬鉄の魔術使いは駆け抜けた果てに憧れた女性に助けられる。

男——衛宮士郎——は新たな器をもらって性別すら変わり果て世界を渡る。

渡った世界でその少女はなにを見て、どういう選択をしていくのか。



性転換要素や女性同士の恋、ちよい最強系、オリジナル設定など地雷要素が複数ありますが見ていってください。

『暁』様でマルチ投稿をしていますので、もしよろしかったらそちらもよろしく願います。

15／02／17に完結しました。

目次

設定集

番外1

『味方・敵サ』

ヴァントのステータス』

1

番外2

『主人公&今

までのオリキャラ設定』

52

第零章 始まり

プロローグ

『劍製(少

女)は世界を越えて…』

92

第一章 無印編

第一話

『異世

界。溶かされる心』

111

第二話

『稽古

と料理』

129

第三話

『自身

の現状と車椅子の少女との出会い』

145

第四話

『シホ

の転校初日』

154

第五話

『なの

は、魔法少女になる』

169

第六話

『魔法

とジユエルシード』

194

第七話

『ジユ

エルシード探索。そして失敗…』

210

第八話	『金色』	との接触』	351
の魔導師』	229	第十五話	『争奪戦…海
第九話	『修行』	上の出来事』	378
とフェイトとの出会い』	259	第十六話	『なのはと
第十話	『海鳴』	フェイトの決着。そして真相、怒り』	
温泉（前編）』	280	406	
第十一話	『海鳴温泉（後	第十七話	『決戦！ 虹
編）』	296	色の輝き、迸る極光！』	430
第十二話	『核の暴走』	第十八話	『聖剣開放！』
312			455
第十三話	『介入者』	第十九話	『新たな始ま
332		り』	470
第十四話	『時空管理局	第二十話	『外伝Ⅰ な

	のはのシホちゃん観察記録』	——	492		景』	——	586
	第二十一話	『外伝2 夜の1			第二十六話	『とある出会い』	
	族とシホ、真実を語る時(前編)』			603			
518	第二十二話	『外伝3 夜の1			第二十七話	『強襲』	617
	族とシホ、真実を語る時(後編)』				第二十八話	『集結』	637
533	第二十三話	『外伝4 各々の			第二十九話	『敗北』	656
	日常・すずかの異変』		555		第三十話	『デバイス起	
	第二十四話	『外伝5 各々の			動』	——	676
	日常・シホの魔術考察』		567		第三十一話	『グレアムとの出	
	第二章 A, s 編				会い』	——	695
	第二十五話	『いつもの朝の風			第三十二話	『それぞれの思い』	714
						——	
					第三十三話	『お引越し(前編)』	

	第三十四話	『お引越し(後編)』	727	第四十話	『スーパー銭湯(後編)』	843
	第三十五話	『対策会議』	746	第四十一話	『再戦』	867
759	第三十六話	『謎の女性と王女の夢』	774	第四十二話	『シホとエミヤの邂逅』	890
	第三十七話	『つかの間の平穩』	787	第四十三話	『シホの過去の話(前編)』	906
	第三十八話	『学校生活』	805	第四十四話	『シホの過去の話(中編)』	919
	第三十九話	『スーパー銭湯(前編)』	817	第四十五話	『シホの過去の話(後編)』	942
				第四十六話	『守護騎士との出会いの話』	962

第四十七話	『管理局本局と リーゼ姉妹』	988	第五十五話	『決着』	1148
第四十八話	『つかの間の第四 次のサーヴァント達の話』	1010	第五十六話	『第三魔法による 救い』	1165
第四十九話	『思い出される記 憶。生まれる謎』	1027	第五十七話	『これからの未来 への道』	1196
第五十話	『見えてきた 光』	1045	第五十八話	『外伝 6 八神家 での御食事会』	1222
第五十一話	『交渉』	1062	第五十九話	『外伝 7 四家族 合同旅行（前編）』	1243
第五十二話	『聖夜』	1083	第六十話	『外伝 8 家族合同旅行（後編）』	1262
第五十三話	『受け継がれる魂 と記憶』	1111	第六十一話	『外伝 9 はやて』	1262
第五十四話	『救済と戦闘準備』	1111			

の日常。そして忍び寄る不安』―― 1283

第三章 聖杯大戦編

第六十二話 『現れる兆し、現れる敵』―― 1302

第六十三話 『状況説明と召喚』―― 1320

第六十四話 『セイバー対決』―― 1363

第六十五話 『速き者達の争い』―― 1376

第六十六話 『暗殺者の死闘』―― 1436

第六十七話 『因縁のある者達』―― 1474

第六十八話 『対サーヴァント』―― 1394

第六十九話 『幕間 ランサーの戦い』―― 1407

第七十話 『マスターとサーヴァント達の安らぎの時間』―― 1419

第七十一話 『姿を見せる英雄王。真祖の本気』―― 1453

第七十二話 『ランサーの覚悟』―― 1474

第七十三話 『二つの因縁の終』―― 1474

	わり』	1495			
	第七十四話		『聖王と霸王の戦場』		
	第七十五話		『夜天の奇跡、キヤスターの最後』		
	第七十六話		『光と影の人達の想い』		
	第七十七話		『総力戦。ネロの決死の一騎打ち』		
	第七十八話		『英雄王の圧倒的な力』		
	第七十九話		『聖杯大戦の終焉。そしてこれから…』		
1621					
1602					
1582					
1564					
1543					
1733					
	第八十話				『外伝10』
	遅れ馳せバレンタイン』				
	第八十一話				『外伝11 今日から小学四年生』
	第八十二話				『外伝12 お花見(前編)』
	第八十三話				『外伝13 お花見(後編)』
	第八十四話				『外伝14 時空管理局に所属』
	第四章 空白期編				
	第八十五話				『聖王教会』
1710					
1690					
1676					
1655					

- | | | | | | |
|------------|------------|------|---------------|------------|------|
| 第八十六話 | 『無限書庫開拓記』 | 1748 | 第九十三話 | 『リインフォース』 | 1851 |
| 第八十七話 | 『夜の一族の告白』 | 1763 | II | | |
| すずかの決意』 | | | 第九十四話 | 『墮ちるエース』 | 1866 |
| 第八十八話 | 『揺れ動く心、動き』 | 1781 | 1883 | | |
| 出す子鴉』 | | | 第九十五話 | 『見つめ直す心：』 | |
| 第八十九話 | 『オルタ降臨。』 | 1799 | 復活のエース』 | | 1899 |
| 屋恐怖の日』 | | | 第九十六話 | 『初代・祝福の風の』 | |
| 第九十話 | 『シホの魔術』 | 1817 | 心の行方』 | | 1926 |
| 授業』 | | | 第九十七話 | 『愛の証明編』 | 前 |
| 第九十一話 | 『士郎 VS 志』 | 1832 | 世の記憶を持つ少女と狂王』 | | 1948 |
| 貴によるガチバトル』 | | | 第九十八話 | 『愛の証明編』 | ラ |
| 第九十二話 | 『アングラー達』 | | イゼルという男の過去』 | | 1963 |

- | | | | | |
|--------------|----------|------|-------------|---------|
| 第九十九話 | 『愛の証明編』 | 奇 | ツルギ。激怒する一同 | 2100 |
| 跡の出会い、覚悟の証 | —— | 1979 | 『魔弾の射手』 | |
| 第一百話 | 『小学』 | | —— | |
| 六年生の毎日、流れる季節 | —— | 1997 | 第一百七話 | |
| 第一百一話 | 『士郎の子供』 | | リック回収任務（前編） | 2132 |
| と魔術事件 | —— | 2026 | 第一百八話 | |
| 第一百二話 | 『続・なのはの』 | | リック回収任務（後編） | 2151 |
| シホちゃん観察記録+α | —— | 2047 | 第一百九話 | 『空港火災』 |
| 第一百三話 | 『アリシアの』 | | 2174 | |
| フェイト観察記録 | —— | 2063 | 第一百十話 | 『仲良し八人』 |
| 第一百四話 | 『ファースト』 | | の女子会な温泉旅行 | 2192 |
| キスの話 | —— | 2079 | 第一百十一話 | 『戦技披露会』 |
| 第一百五話 | 『誘拐される』 | | 2209 | |

- 第百十二話 『とある魔導魔術師の教導体験記』 2234
 第百十三話 『陸士訓練校の変 わったトリオ (前編)』 2255
 第百十四話 『陸士訓練校の変 わったトリオ (後編)』 2274
 第百十五話 『シホのミッドチルダでの暮らし』 2294
 第五章 StrikerS編
 第百十六話 『集まる仲間』 2308
 第百十七話 『昇格試験とエリオとキャラの出会い』 2333
 第百十八話 『機動六課の始動』 2353
 第百十九話 『ぎこちない距離感、深めあう仲間達』 2374
 第百二十話 『シホのシュートイベイション』 2393
 第百二十一話 『お茶会と最初のアラート』 2414
 第百二十二話 『キャラの思い、そして任務終了』 2434
 第百二十三話 『訓練の日々』 2459
 第百二十四話 『故郷話、そして捜査』 2459

	の進展と』	2474		第百三十一話	『ティアナのお話』	2636
	第百二十五話	『出張任務(1)』		(後編)』		
	サーヴァントとの絆』	2496		第百三十二話	『過去と大切なこと』	
	第百二十六話	『出張任務(2)』				
	鳴市到着』	2516		第百三十三話	『フィアットのシホ』	2657
	第百二十七話	『出張任務(3)』		観察記録』		
	湯開始』	2549		第百三十四話	『機動六課の休日』	2682
	第百二十八話	『出張任務(4)』	2704			
	出張任務の裏側で。 士郎の一日』	2572		第百三十五話	『現れるナンバーズ』	2730
	第百二十九話	『ホテル・アグスタ』				
	第百三十話	『ティアナのお話』	2594	少女』		
	話(前編)』	2620		第百三十七話	『記された破滅の予』	2760

言』

第三百三十八話

『母と子』

27892775

第三百三十九話

『六課最強は？』

そ

して強さとは？』

2811

第四百十話

『それぞれの思惑』

2831

第四百十一話

『嵐の前の日常風景』

(表) 第四百十二話 『嵐の前の日常風景』 2860

第四百十二話

『嵐の前の日常風景』

(裏) 第四百十三話 『公開意見陳述会』 2882

第四百十三話

『公開意見陳述会』

(1) 前夜のそれぞれの想い』 2894

第四百十四話

『公開意見陳述会』

(2) 始まるひと時の宴』

2921

第四百十五話

『公開意見陳述会』

(3) 攻防戦、それぞれの戦い』

2941

第四百十六話

『公開意見陳述会』

(4) 激化する戦闘』

2962

第四百十七話

『公開意見陳述会』

(5) 行動開始と不安な思い』 2983

第四百十八話

『公開意見陳述会』

(6) レンの心の傷、癒しなす乙女』

3005

第四百十九話

『公開意見陳述会』

(7) 機動六課防衛戦』

3022

- 第三百五十話 『公開意見陳述会』
 (8) 宴の終わり』 3042
 第三百五十一話 『一夜、明けて…』
 3067
 第三百五十二話 『なのはのあの後と、
 隠された秘密』 3090
 第三百五十三話 『想い、強く…』
 3108
 第三百五十四話 『決戦への誓い』
 3127
 第三百五十五話 『聖王のゆりかご、起
 動』 3147
 第三百五十六話 『機動六課、出撃』
 3163
 第三百五十七話 『決戦(1) フォ
 ワード陣の戦い』 3184
 第三百五十八話 『決戦(2) ライト
 ニングの攻防』 3206
 第三百五十九話 『決戦(3) ゆりか
 ご内部侵入』 3226
 第三百六十話 『決戦(4) 闇落
 ちの心。進む戦況』 3247
 第三百六十一話 『決戦(5) スバル
 の想い、ティアナの強さ』 3266
 第三百六十二話 『決戦(6) レンと
 ギンガの覚悟』 3281

- 第三百六十三話 『決戦(7)』 ライト
 ニングの決着』 —— 3299
 第三百六十四話 『決戦(8)』 星の目
 覚め、暴走するゆりかご』 —— 3322
 第三百六十五話 『決戦(9)』 抑止力
 の声、そして』 —— 3343
 第三百六十六話 『——おはよう』 3364
 第三百六十七話 『外伝15』 シホの
 入院生活』 —— 3379
 第三百六十八話 『外伝16』 JS事
 件解決パーティー』 —— 3395
 第三百六十九話 『外伝17』 高町家 3395
 と月村家への帰省』 —— 3411
 第三百七十話 『外伝18』 戦慄
 の影響ゲーム(前編)』 —— 3429
 第三百七十一話 『外伝19』 戦慄の
 影響ゲーム(後編)』 —— 3445
 第三百七十二話 『外伝20』 海上隔
 離施設の人々のその後』 —— 3470
 第六章 正義の在り処編
 第三百七十三話 『それぞれの進路と
 異変』 —— 3492
 第三百七十四話 『事件に対する思い
 と、そして想い』 —— 3506
 第三百七十五話 『襲撃、暗殺者の名は

……』	3518	第百八十二話	『リオン、再び』
第百七十六話	『リオンの猛攻と違和感な表情』	3533	
第百七十七話	『リオンの能力考察、そして黒幕の影?』	3547	
第百七十八話	『とある模擬戦と苦しむ声』	3562	
第百七十九話	『魔術事件対策課への訪問』	3578	
第百八十話	『幕間 ミゼ・フロリアンの出世街道』	3593	
第百八十一話	『謝罪と新たな情報』	3605	
第百八十二話	『事情聴取と過去』	3633	
第百八十三話	『黒幕、現る』	3619	
第百八十四話	『罪の償いの仕方、そしてモリアとは…』	3651	
第百八十五話	『これからの捜査方針、ヴィヴィオの悩み』	3681	
第百八十六話	『罨、そして現れる騎乗兵』	3693	
第百八十七話	『クレーデーター』		
第百八十八話			

- 第三百八十九話 『緊急会議、そして出撃』 ————— 3720
 第三百九十話 『ライダーとの戦い、そして……』 ————— 3733
 第三百九十一話 『スターズ隊の戦い、驚愕するティアナ』 ————— 3748
 第三百九十二話 『ファンング隊：友達との戦い』 ————— 3761
 第三百九十三話 『武だけを鍛えた男。そして暗殺者』 ————— 3778
 第三百九十四話 『戦闘報告。語られるクラスカードの謎』 ————— 3790
 第三百九十五話 『正義とは……、そして語られる過去』 ————— 3802
 第三百九十六話 『ある男達の覚悟、決戦前夜』 ————— 3814
 第三百九十七話 『口上戦』 ————— 3839
 第三百九十八話 『圧倒的な力。抗うのはさらに異形の力』 ————— 3855
 第三百九十九話 『大混戦』 ————— 3869
 第四百話 『男達の壮絶なる戦い』 ————— 3887
 第四百一話 『ヴォルフ・イエーガーの真の目的』 ————— 3902
 第四百二話 『シホの新たな世界』 ————— 3920

界』

3919

第二百三話

『シホの身に起

こつた事実。そしてジグルドの手紙』

3935

第終章 これからも続く道

エピローグ

『シホの進

む先は光に満ちて……』

3950

設定集

番外1

タス
『

『味方・敵サーヴァントのステータス』

クラス : セイバー

マスター : シホ・E・S・高町

真名 : ネロ・クラウディウス

性別 : 女性

属性 : 中立・善

Weapon : アエストゥス・エストゥス
原初の火

筋力 : B

魔力 : B

耐久 : B

幸運 : C

敏捷 : B

宝具 : A +

・クラス別能力

対魔力 : C

二工程以下の詠唱による魔術を無効化する。大魔術、儀礼呪法等、大掛かりな魔術は防げない。

彼女自身に対魔力が皆無なため、セイバーのクラスにあるまじき低さを誇る。

・保有スキル

皇帝特権 : E X

本来持ち得ないスキルも、本人が主張することで短期間だけ獲得できる。

該当するスキルは騎乗、剣術、芸術、カリスマ、軍略、等。

ランクがA以上の場合、肉体面での負荷（神性など）すら獲得する。

黄金律 : B

人生において金銭がどれほどついて回るかの宿命。

頭痛持ち : B

生前の出自から受け継いだ呪い。

慢性的な頭痛持ちのため、精神スキルの成功率を著しく低下させてしまう。せつかくの芸術の才能も、このスキルがあるため十全には発揮されにくい。

・宝具

『インウィクトゥス・スピリットゥス 三度、落陽を迎えても』

ランク : C

種別 : 対人宝具

レンジ : ー

最大捕捉 : 1人

「ネロが自害した三日後、一人の兵士がネロの亡骸におそるおそる外套をかけると、死亡したはずのネロが突如起き上がり、

『遅かったな。だが、大儀である』と、最後の言葉を遺したと言う。

『三度、落陽を迎えても』はこの逸話を再現した宝具であり、自身が死亡した場合、一度だけ蘇生（レイズ）がかかる。」

『アエストゥス・ドムス・アウレア 招き蕩う黄金劇場』

ランク : A+

種別 : 対軍宝具

レンジ : 1~10

最大捕捉 : 100人

「生前の彼女がローマに建設した劇場を魔力によって形成、再現する、固有結界とは似て異なる大魔術。

展開中は自身のレベルアップ、攻撃時の補正、敵のレベルダウンなどの効果をもたらす。

この劇場は自己の願望を達成させるための黄金劇場ドムス・アウレアであり、彼女のみには許された絶対皇帝圏である。

皇帝である前に自分を「楽神アポロンに匹敵する芸術家」「太陽神ソルに匹敵する戦車御者」

と信じて疑わなかった彼女のみがなせる技である」



クラス : ファイター

マスター：高町なのは

真名：オリヴィエ・ゼーゲブレヒト

性別：女性

属性：秩序・善

Weapon：エレミアの籠手

筋力：A

魔力：A

耐久：C

幸運：C

敏捷：A

宝具：A+

・クラス別能力

対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。大魔術、儀礼呪法等を以つてしても、傷つけるのは難しい。

白兵戦：A+

接近戦において、自身の理想の戦いを展開して戦えることができるスキル。

ランクが高くなる事に白兵戦での生き残る確率が上がり敗北する可能性すら防ぐ。

・保有スキル

直感 : A

戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を“感じ取る”能力。研ぎ澄まされた第六感
はもはや未来予知に近い。

カリスマ : C

軍団を指揮する天性の才能。カリスマは稀有な才能で、一国の王としてはCランクで
は少し心もとない。

エレミアの構え : A+

格闘戦技という概念すらなかったベルカ戦乱時代に生まれた独特の構え。

これにより最強の力をものにした。格闘において優位になりうる力を持っている。

身体自動操作 : B

五体の完全外部操作により戦うスキル。たとえば体が壊れようとも戦い続ける危険な
もの。

魔力放出 : A

体に埋め込まれた聖王の核によって、武器ないし、自身の肉体に魔力を帯わせて、瞬間的に放出することにより能力向上ができる。

・ 宝具

『聖王騎士甲冑の鎧』

ランク : B

種別 : 対人宝具

レンジ : ー

最大捕捉 : 一人

「古代ベルカ王族が遺伝子レベルで所有している防御能力で、五体を武器化するという古代ベルカの戦乱の歴史の中で編み上げられた資質。

優れた兵器であることと生存することが求められた聖王血統保有者に遺伝子調整を尽くして付与された防御機能。

本人の意思とは無関係に発動し、危険や危機からその身を守る」

『聖王のゆりかご』

ランク : EX

種別 : 対軍宝具

レンジ : ?

最大捕捉 : ?

「古代ベルカ時代の聖王家が作り上げた遺産。

旧暦において一度は世界を滅ぼした巨大な質量兵器、巨大な宇宙空間すら飛行を可能とする万能戦艦。

聖王の血筋である王位継承者だけが操る事が可能なもので、制御中枢である玉座に座することでその真価を発揮する。

その威力は絶大であり最大火力ではひとつの星を焦土に滅ぼす力を秘める」



クラス : ランサー

マスター : フェイト・T・ハラオウン

真名 : クー・フリーリン

性別 : 男性

属性 : 秩序・中庸
 weapon : 刺し穿つ死棘の槍

筋力 : B

魔力 : C

耐久 : A

幸運 : D

敏捷 : A+

宝具 : B

・クラス別能力

対魔力 : C

第二節以下の詠唱による魔術を無効化する。大魔術、儀礼呪法など大掛かりな魔術は防げない。

・保有スキル

戦闘続行 : A

往生際が悪い。瀕死の傷でも戦闘を可能とし、決定的な致命傷を受けない限り生き延びる。

仕切り直し : C

戦闘から離脱する能力。また、不利になった戦闘を戦闘開始ターンに戻し、技の条件を初期値に戻す。

ルーン : B

北欧の魔術刻印・ルーンを保有。

ルーン文字は北欧神話の主神オーディンが、自身の命を囚に巨人から盗んだものである。

矢よけの加護 : B

視界内からの飛び道具の攻撃への対処能力。

ただし、超遠距離や広範囲攻撃には無効。

ランサーの射的武器への耐性は「風切り音と敵の殺気」から軌道を読む。

神性 : B

神霊適性の高さ。高ければ高いほど、神との交わりが深いことをしめしている。

神話の英雄は神の混血や、まさしく神の子という存在が多いため、

比較的英霊には保有者が多いスキルである。

信仰の加護などの加護系スキルを打ち破る。

・宝具

『刺^ゲし穿^イつ死^ホ棘^ルの槍^グ』

ランク : B

種別 : 対人宝具

レンジ : 2 ～ 4

最大捕捉 : 1人

『心臓に命中した』結果の後に突きを放つ、因果逆転の槍を放つ前に、前提として槍は既に心臓に命中している。

放ったから当たった、ではなく、当たったから放った、という運命そのものに対する攻撃。

対象の幸運値により命中率が代わる、突けば必ず心臓を貫く呪いの朱槍」

『突^ゲき穿^イつ死^ホ翔^ルの槍^グ』

ランク : B+

種別 : 対軍宝具

レンジ : 5 ～ 40

最大捕捉：50人

「魔槍ゲイボルクの本来の使用方法。渾身の魔力と力を持って投擲して放つ。

「刺し穿つ死棘の槍」が命中を重視したもならば、こちらは威力を重視している。

一人一人を刺し貫いていくのではなく、炸裂弾のように一撃で一軍を吹っ飛ばす。

因果を歪ませる呪い及び必中効果は健在であるものの概念的な特性や運命干渉などは無く、あくまで単純威力系宝具に分類される」



クラス　：ライダー

マスター：月村すずか

真名　　：メデューサ

性別　　：女性

属性　　：混沌・善

weapon　：無銘・釘剣

筋力　　：B

魔力 : B

耐久 : D

幸運 : E

敏捷 : A

宝具 : A+

・クラス別能力

対魔力 : B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。大魔術、儀礼呪法等を以つてしても、傷つけるのは難しい。

騎乗 : A+

騎乗の才能。獣であるのならば幻獣・神獣のものまで乗りこなせる。ただし、竜種は該当しない。

・保有スキル

魔眼 : A+

最高レベルの魔眼・キュベレイを保有。魔力が低い者はほぼ無条件で石化されてしま

う。

高い魔力を持つものでも、全能力値がワンランク低下する“重圧”をかけられてしま
う。

単独行動 : C

マスターからの魔力供給を断つてもしばらくは自立できる能力。ランクCならば、マ
スターを失つても一日間現界可能。

怪力 : B

一時的に筋力を増幅させる。魔物、魔獣のみが持つ攻撃特性。使用する事で筋力をワ
ンランク向上させる。

神性 : E |

神霊適性を持つが、ほとんど退化してしまっている。

・宝具

『自己封印・暗黒神殿』
ブレイカー・ゴルゴーン

ランク : C |

種別 : 対人宝具

レンジ : 0

最大捕捉：1人

「自身にかける魔眼殺し。封印解除で魔眼・キュベレイを常時使用」

『ベルレフオーン騎英の手綱』

ランク：A+

種別：対軍宝具

レンジ：2～50

最大捕捉：300人

「使用時は全ての能力値が1ランクアップ。神代の獣を使役し、その超突進を以って対象を粉碎する」

『ブラッドフォード・アンドロメア他者封印・鮮血神殿』

ランク：B

種別：対軍宝具

レンジ：10～40

最大捕捉：500人

「血の結界。内部に取り込んだ人間を溶解する」



クラス : キャスター

マスター : 八神士郎

真名 : 玉藻の前

性別 : 女性

属性 : 混沌・善

weapon : 水すい天てん日にっ光こう天あま照てら八や野の鎮しず石いし

筋力 : D

魔力 : A+

耐久 : D

幸運 : B

敏捷 : C

宝具 : A

・クラス別能力

陣地作成：C

魔術師として、自らに有利な陣地を作り上げる。

が、どうも性格的に向いていないらしく、工房を作ることさえ難しい。

道具作成：C

魔術的な道具を作成する技能。

・保有スキル

呪術　　：EX

ダキニ天法。

地位や財宝を得る法（男性用）、権力者の寵愛を得る法（女性用）といった、権力を得る秘術や死期を悟る法がある。

しかし、過去さんざん懲りたのか、あまり使いたがらない。

変化　　：A

借体成形とも。

玉藻の前と同一視される中国の千年狐狸精の使用した法。

殷周革命（『封神演義』）期の妲己に憑依・変身した術だが、過去のトラウマからか、あまり使いたがらない。

・宝具

『水天日光天照八野鎮石』
すいてんにっこうあまてらすやのしずいし

ランク : A

種別 : 対軍宝具

レンジ : ?

最大捕捉 : ?人

「玉藻の前が身につけている鏡。

玉藻鎮石（たまもしずいし）と呼ばれる神宝の中の神宝を一時的に解放したものの。

鎮石とは出雲に祀られていた、武日照命が天より持ち来たったという神宝である。

日本書紀の記述によると、朝廷の要請によって出雲より持ち出され、のちに河内に祀られるようになった。

おそらく後の八咫鏡（やたのかがみ）であり、すなわち、天照大神の神体である。

また、鎮石は物部の十種神宝（とくさのかんだから）の原型と考えられ、魂と生命力を活性化させる力を持つ。

本来なら死者さえも甦らせる冥界の神宝だが、サーヴァント化している彼女では、そこまでの権限は持てないらしい。

効果は負傷回復と自己強化を持って発動中は呪術を腕飯振舞する」



クラス : アサシン

マスター : アリサ・バニングス

真名 : 李書文

性別 : 男性

属性 : 中立・悪

weapon : 無し

筋力 : B

魔力 : E

耐久 : C

幸運 : D

敏捷 : A

宝具 : B

・クラス別能力

気配遮断：―

アサシンのクラスが持ち共通スキルだが、このサーヴァントが持つ気配遮断はそれらのどれにも該当しない。

・保有スキル

中国武術：A++

中華の合理。宇宙と一体になる事を目的とした武術をどれほど極めたかの値。修得の難易度は最高レベルで、他のスキルと違い、Aでようやく「修得した」と言えるレベル。

A++ともなれば達人の中の達人。

圏境　　：A

気を使い、周囲の状況を感知し、また、自らの存在を消失させる技法。極めたものは天地と合一し、その姿を自然に透けこませる事すら可能となる。

・宝具

『无二打（二の打ち要らず）』

ランク : B

種別 : 対人宝具

レンジ : 1~3

最大捕捉 : 1人

「李書文の剛打は、牽制やフェイントの為に放ったはずの一撃ですら敵の命を奪うに足るものであった。

「李書文に二の打ち要らず（神槍無二打）」

無二打は、そんな彼の称号がカタチになったものである。

明確に言うくと宝具ではなく、武術の真髄。

李書文は達人であり、その勁力が優れているのは言うまでもないが、それ以上に重要なのが相手を「気で呑む」事を実践していたことにあると考えられる。

一説によると、李書文は拳の破壊力だけで相手を倒してはいないらしい。

彼によって絶命せしめられた者たちのほとんどは内臓の破壊ではなく、現在で言うところのショック死状態であったと伝えられる。

「気で呑む」技法は、技法としては固定された名称がなく、わずかに仙道修行の周天行における空周天に酷似した発想があるのみである。

周天行とは気（エネルギー）を心身に巡らせ、それによって全身を活性化した上で気

を共鳴・増幅して養っていく鍛錬法の一種。

そのひとつの到達点が全身を気で満たすものであり、また、周囲の空間に自身の気を満たす事にある。

李書文はこの行法によって相手を「気で呑む」、つまり自身の気で満ちた空間を形成することで完全に自分のテリトリーを作っていたのではないかと考察される。

「気で呑まれた者」は、一部の感覚が眩惑され、緊張状態となり、この状態で相手の神経に直接衝撃を打ち込んだ場合、迷走神経反射によって心臓は停止する。

即ち、シヨック死である。」



クラス　：ファニーヴァンプ

マスター　：八神はやて

真名　　：アルクエイド・ブリュンスタッド

性別　　：女性

属性　　：混沌・善

weapon　：無し

筋力	: A +
魔力	: B
耐久	: B
幸運	: C
敏捷	: A
宝具	: A +

・クラス別能力

ブラッド・ドリッカー : A

相手の血を吸う。彼女が吸血鬼であることも相まって強力になっている。

しかしファニーヴァンプはあまり使用したがない。

ライフ・イーター : B

対峙した相手の体力を徐々に奪う。

ファイナンス・クライシス : B

その場での通貨を強制的に消費させる。男を惑わす毒婦。

・保有スキル

魔眼 : A

魅了の魔眼を所有。

意思を込めて目を合わせた相手を魅了し、短時間ながら意のままに操ることが出来るというもの。

他にも行動の束縛・洗脳・記憶操作などが可能。ランク『黄金』に位置する最上級の魔眼である。

対魔力スキルにより回避可能。

原初の一：EX

アルテミット・ワン。

星からのバックアップを受ける事で、敵対する相手より一段階上のスペックになるスキル。

しかし星からの絶対命令でそれ以上のバックアップは不可。

・宝具

『プルート・デイ・シエヴエスタア』

ランク … A + +

種別 … ?

レンジ … ?

最大捕捉 … ?

「血の姉妹による盟約。

宝具というよりは彼女が持つ特性のようなもの。

周囲を地球環境化（テラフォーミング）し、通常の状態へと帰環させる。」

『千年城ブリュンスタッド』

ランク … EX

種別 … 固有結界

レンジ … ?

最大捕捉 … ?

「アルクエイドが空想具現化で創り上げた、固有結界であるお城。

アルクエイドは人生の大半をこのお城で過ごしていた。

この城はアルクエイドのオリジナルではなく、過去において最も力があつた真祖が空想具現化によって創り上げたもの。

アルクエイドが現れる以前は六百年廃墟となっていたとされる。

この空間内では制限だらけのアルクエイドが本来もつ能力を十全に発揮することが可能」



クラス : セイバー

マスター : ノア・ホライゾン

真名 : アルトリア・ペンドラゴン

性別 : 女性

属性 : 秩序・悪

Weapon : 約束エされた勝利カの剣リ^パ

筋力 : A

魔力 : A++

耐久 : A

幸運 : C

敏捷 : D

宝具 : A++

・クラス別能力

対魔力 : B

大魔術、儀礼呪法等を以ってしても、彼女を傷つけるのは難しい。闇属性に染まっている為、対魔力が低下している。

騎乗 : |

騎乗スキルは失われている。

・保有スキル

直感 : B

戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を“感じ取る”能力。常に凶暴性を抑えている為、直感が鈍っている。

魔力放出 : A

膨大な魔力はセイバーが意識せずとも、濃霧となって体を覆う。

カリスマ : E

軍団を指揮する天性の才能。統率力こそ上がるものの、兵の士気は極度に減少する。

・宝具

『^エ約束された勝利の剣^カ』^リ_バ

ランク : A++

種別 : 対城宝具

レンジ : 1~99

最大捕捉 : 1000人

「人造による武器ではなく、星に鍛えられた神造兵装。光属性から闇属性に反転しているので黒い極光の剣となっている」



クラス : ファイター

マスター : ファイアット・スクライア

真名 : クラウス・G・S・イングヴァルト

性別 : 男性

属性 : 秩序・中庸

we a p o n : 無し

筋力 : A

魔力 : A

耐久 : B

幸運 : D

敏捷 : B

宝具 : A+

・クラス別能力

対魔力 : B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。大魔術、儀礼呪法等を以つてしても、傷つけるのは難しい。

白兵戦 : A+

接近戦において、自身の理想の戦いを展開して戦えることができるスキル。

ランクが高くなる事に白兵戦での生き残る確率が上がり敗北する可能性すら防ぐ。

・保有スキル

カリスマ : B

軍団を指揮する天性の才能。カリスマは稀有な才能で、一国の王としてはBランクで十分と言える。

修練の極み : A

一騎当千と呼ばれるようになるまでに培った修練の賜物。どんな状況下でも万全状態で戦える理想の戦闘を行える。

霸王流武術 : A

霸王家に伝わる武術を極めた証。どんな状況下でも霸王の技を繰り出すことが可能。

・宝具

『霸王の聖域』

ランク : EX

種別 : 固有結界

レンジ : ?

最大捕捉 : ?

「発動するとかつて戦った戦場風景が心象風景になり固有結界として再現される。

その中では幸運と魔力以外のパラメーターが2ランクアップし、すべての技が威力が底上げされどんな窮地の事態だろうと這い上がってくる。

逆に結界内の敵を霸王の気迫で圧倒しパラメーターをダウンさせる。

一人に集中すれば宝具すら発動不可の精神状態に追い込み、発動中ならばキャンセルすらもしてしまい堂々と宝具なしで戦う事を強いられる」



クラス : アーチャー

マスター : 言峰綺礼

真名 : ギルガメツシュ

性別 : 男性

属性 : 混沌・善

weapon : 乖離剣・エア

筋力 : B

魔力 : A+

耐久 : B

幸運 : A

敏捷 : B

宝具 : EX

・クラス別能力

対魔力 : C

二工程以下の詠唱による魔術を無効化する。大魔術、儀礼呪法等、大掛かりな魔術は防げない。

単独行動 : A

マスターからの魔力供給が無くなったとしても現界していられる能力。

本来のランクAはマスターを失っても一週間は現界可能だが、ギルガメツシユの場合、マスター不在でも活動可能。

ただし、宝具の使用等の膨大な魔力を使用する場合はマスターのバックアップが必要。

・保有スキル

黄金律 : A

人生でどれだけ金銭がつきまとうかという宿命を示す。大富豪でもやっていける金ピカぶり。

カリスマ：A+

大軍団を指揮・統率する能力。ここまでに至ってしまおうと、人望というより魔力・呪いの類である

神性：B

本来は最大の神霊適性を保有するのだが、彼自身が神を忌み嫌っているのでランクダウンしている。

・宝具

『^エ天地乖離^マす開闢^エの星^{リシユ}』

ランク：EX

種別：対界宝具

レンジ：1～99

最大補足：1000人

「乖離剣・エアによる空間切断。

圧縮され絡み合う風圧の断層は、擬似的な時空切断となって敵対する全てを粉碎す

る。

対粛清ACと同レベルのダメージによる相殺でなければ防げない。

宝物庫にある宝具のバックアップによってはさらに威力が跳ね上がる。

アルトリアのエクスカリバーと同等か、それ以上の出力を持つ『世界を切り裂いた』
剣である。」

『^{ゲート・オブ・バビロン}王の財宝』

ランク : E〜A++

種別 : 対人宝具

レンジ : ー

「黄金の都へ繋がる鍵剣。

空間を繋げ、宝物庫の中にある道具を自由に取り出せるようになる。

使用者の財があればあるほど強力な宝具になるのは言うまでもない。」



クラス : ランサー／バーサーカー

マスター：ミゼ・フローリアン

真名：ディルムツド・オディナ

性別：男性

属性：秩序・狂

weapon：破魔^{ゲイ}の紅薔薇^{ジャルグ}、必滅^{ゲイ}の黄薔薇^{ボウ}

筋力：A

魔力：D

耐久：B

幸運：E

敏捷：A++

宝具：A

・クラス別能力

対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。

大魔術、儀礼呪法等を以ってしても、彼を傷つけるのは難しい。

狂化：D

幸運と魔力を除いた。パラメーターをランクアップさせる。
 ランサーのクラスと重複しているので多少言語は理解はできるし喋れるがノイズが
 走っている。

・保有スキル

心眼（真） : D

修行。鍛錬によって培った洞察力。

窮地において、その場で残された活路を導き出す戦闘論理。

しかし狂化によってそのランクは低下している。

愛の黒子 : E

魔力を帯びた黒子による異性の魅惑。

デイルムツドと対峙した女性には彼に対する強烈な恋愛感情を懐く。

しかし狂化によってそのランクは低下している。対魔力が少しでもあれば回避可能。

・宝具

『^{ゲイ・ジャルグ}破魔の紅薔薇』

ランク : B

種別 : 対人宝具

レンジ : 2 ～ 4

最大捕捉 : 1人

「魔力による防御を無効化する長槍。

魔力によって編まれた防具はこの槍の攻撃に対し効果を持たず、

また武器に施された魔術的な強化、

能力付与もゲイ・ジャルグと打ち合う場合には一切発揮されなくなる。

事実上、物理手段によってしか防御できない《宝具殺し》の槍。

ただし、過去に交わされた契約や呪い、すでに完了した魔術の効果を覆すことはでき

ない。」

『必滅^ゲの黄薔薇^{イ・ホウ}』

ランク : B

種別 : 対人宝具

レンジ : 2 ～ 3

最大捕捉 : 1人

「回復不能の傷を負わせる呪いの槍。

この槍によるダメージはHPの上限そのものを削減されるため、
 いかなる治癒魔術、再生能力をもつても『傷を負った状態』にまでしか回復する
 ことができない。

「デイスペルは不可能で、呪いを破棄するためにはゲイ・ボウを破壊するか、使い手で
 あるデイルムツドを滅ぼすしかない。」



クラス : キャスター

マスター : トーラス・スタリオン

真名 : ヤガミ

性別 : 女性

属性 : 混沌・悪

Weapon : 闇の書、シユベルトクロイツ

筋力 : D

魔力 : A++

耐久 : D

幸運 : E

敏捷 : C

宝具 : A

・クラス別能力

陣地作成 : B

魔術師として、自らに有利な陣地を作り上げる。

しかし魔術師ではなく魔導師なので陣地作成はあまりしないのでこのランクである。

道具作成 : C

魔術的な道具を作成する技能。

・保有スキル

蒐集行使 : A

闇の書が保有・蒐集した膨大な数の魔法の使用方法をマニュアル化し、ヤガミが利用できるようにしたものである。

ただし、彼女が新たな魔法を習得する場合は、普通の人と同じように学習する必要がある

あり、応用はあまりきかない。

守護騎士召喚：A

意思のない守護騎士達を召喚させるもの。

Eランクの単独行動をそれぞれ会得する。

・宝具

『闇の書の悪夢』

ランク：A

種別：対人宝具

レンジ：1～3

最大捕捉：5人

「闇の書の中に閉じ込め、その人にとって最悪の悪夢を見せて精神を崩壊させるもの。

本来は取り込んだ人の望む夢だけを見せる機能だったが、変質し悪夢だけになってしまった」



クラス : アサシン

マスター : 三菱彩 ↓ アルクエイド・ブリュンスタッド

真名 : 殺人貴 (遠野志貴)

性別 : 男性

属性 : 中立・中庸

Weapon : 短刀・七夜

筋力 : B

魔力 : E

耐久 : C

幸運 : E

敏捷 : A+

宝具 : B

・クラス別能力

気配遮断 : D

サーバントとしての気配を絶つ。隠密行動に適している。暗殺一族の血から来るものでやろうと思えば気配を消せる。

・保有スキル

直感 : B

戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を“感じ取る”能力。自身の危機に際して直感のレベルが上がる。

七夜の体術 : B

七夜一族に幼少の頃だけだが習った体術。思考が戦闘態勢に移行すると技の名は分からぬが自然と体が動かせる。

魔眼 : A

直死の魔眼を所有。

対象の「死期」を視覚情報として捉えることが出来る目。またそれに加え、その視覚情報をもとに対象を「殺す」ことができる能力。

ただし、直死の能力者にとって死を理解できないモノ、

その時代において壊す（殺す）ことが不可能なモノ、

そもそもいつか来る終わり（死期、存在限界）の無いモノは、その死も理解できないので線も点も視えず、殺すことはできない。

その時点で対象の死が理解できない場合、殺すことは出来ないのである。

・宝具

『十七分割』

ランク : B

種別 : 対人宝具

レンジ : 1~4

最大捕捉 : 1人

「体に宿る十七の線を切り裂き解体し即死させる。これはかつて真祖の吸血姫を一度殺した技である」



クラス : バーサーカー

マスター : アクア・アトランティック

真名 : ランスロット

性別 : 男性

属性 : 秩序・狂

Weapon : 無^ア毀^ロなる^ン湖^ダ光^{イト}

筋力	: A
魔力	: C
耐久	: A
幸運	: B
敏捷	: A +
宝具	: A

・クラス別能力

狂化 : C

幸運と魔力を除いたパラメーターをランクアップさせるが、言語能力を失い、複雑な思考ができなくなる。

・保有スキル

対魔力 : E

魔除けの指輪による対魔力を有するが、狂化によりランクダウン。

無効化は出来ず、ダメージ数値を多少削減する。

精霊の加護：A

精霊からの祝福により、危機的な局面において優先的に幸運を呼び寄せせる能力。

その発動は武勲を立てうる戦場のみに限定される。

無窮の武練：A+

ひとつの時代で無双を誇るまでに到達した武芸の手練。

心技体の完全な合一により、いかなる精神的制約の影響下にあつても十全の戦闘能力を発揮できる。

・ 宝具

『ナイト・オブ・オーナー
騎士は徒手にて死せず』

ランク：A++

種別：対人宝具

レンジ：1

最大捕捉：30人

「手にした武器に自らの宝具としての属性を与え、駆使する。

どんな武器、兵器であろうともランスロットが手にした時点でDランク相当の宝具と

なり、

元からそれ以上のランクに位置する宝具であれば、従来のランクのままランスロットの支配下に置かれる。」

『フオー・サムワンズ・クローリー己が栄光の為でなく』

ランク : B

種別 : 対人宝具

レンジ : 0

最大捕捉 : 1人

「自らのステータスを隠蔽する能力。

ランスロットは多くの冒険で変装で正体を隠したまま勝利の栄誉を勝ち取っており、その故事の具現化としての能力である。」

『アロンダイト無毀なる湖光』

ランク : A++

種別 : 対人宝具

レンジ : 1~2

最大捕捉：1人

「上記二つの宝具を封印することによって解放できる。絶対に刃が毀れることのない名剣。「約束された勝利の剣」と起源を同じくする神造兵装。

もとは聖剣だったが、同胞だった騎士の親族を斬ったことで魔剣としての属性を得てしまった。

バーサーカーの全てのパラメーターを1ランク上昇させ、また、全てのST判定で成功率を2倍にする。

更に、竜退治の逸話を持つため、竜属性を持つ者に対しては追加ダメージを負わせる」



クラス：アヴェンジャー

マスター：ヴォルフ・イエーガー

真名：ライゼル・S・クロウリー

性別：男性

属性：混沌・中庸

weapon : 紅蓮、月下

筋力 : B

魔力 : A

耐久 : B

幸運 : E

敏捷 : A+

宝具 : A+

・クラス別能力

呪い : D

他者を呪う効果を持つが、ライゼルはせいぜい限定した相手を言葉で苦しめる程度。

復讐概念 : B

復讐対象が近くにいればいるほど狂気を増す特殊能力。

それによつて思考が単純化していくために複雑な思考が出来なくなる。

バーサーカーのクラスと酷似している能力であるがこちらは意識がしつかりとある分制御するのに厄介である。

・保有スキル

混血 : B

人と吸血鬼のハーフであり陽の光を浴びても大丈夫な頑丈の体を持つ。

カリスマ : C

軍団を指揮する天性の才能。カリスマは稀有な才能。

かつて鮮血の騎士団を率いた過去を持ち、真の目的のためならばカリスマは1ランクアップする。

冥土帰し : A

悪魔との契約により不死身に近い再生能力を持ち、例え「直死の魔眼」で斬られても直ぐに再生することが出来る。

しかしサーヴァント化により霊核を傷つけられれば再生はできない。

愛の吸血 : B

僅かでも好きな人の血を吸うと身体能力を高める事が出来る。

血を吸った後、上昇した能力継続は好きになった相手に対する情熱がさめない限り、半永久的に維持出来る。

ただしこの能力は本当に相手を愛し、愛されないと発現できないのであまり便利とはいえない。

心眼（真） : B

修行。鍛錬によって培った洞察力。

窮地において、その場で残された活路を導き出す戦闘論理。

・ 宝具

『紅蓮』

ランク : B

種別 : 対人宝具

レンジ : 1～2

最大捕捉 : 1人

「刀身が紅くなっているサーベルで、相手を刺した瞬間に刀身に魔力を込めると膨大な熱エネルギーが一瞬で相手の体内に入り込み、内部爆発を起こす」

『月下』

ランク : B

種別 : 対人宝具

レンジ : 1～2

最大捕捉：1人

「刀身は蒼い日本刀で、斬った瞬間にその傷口から凍傷させ、その能力で敵の治癒を鈍らせ、徐々に追い詰める。」

また月下には『武器殺し』といわれる能力も備わっているため、相手の武器が例え宝具でも月下の刃に触れた瞬間に溶けたバターのように問答無用に斬られてしまう」

『鮮血の盟約』

ランク：EX

種別：対軍宝具（固有結界）

レンジ：1～99

最大捕捉：1000人

「死してなおライゼルの愛馬と志同じくする人と死徒の混合の同胞達『鮮血の騎士団』ブラッド・デイ・ナイトをサーヴァントとして現界させる。

その中にはライゼルの愛馬である赤い鬣を持つ黒い馬『斬月』も一緒に召喚される。

召喚されるのはいずれもマスターの不在なサーヴァントであるが、それぞれEーランク相当の『単独行動』スキルを保有する。

最大20ターンに及ぶ現界を可能」

番外2

『主人公&今までのオリキャラ

設定』

『主人公』

・名前：シホ・E（エミヤ）・シユバインオーグ ↓ シホ・E（エミヤ）・S（シユバインオーグ）・高町

『剣製の魔法少女戦記』の主人公。

イリヤの願いにより【すべてを救う正義の味方 ↓ 大切な人達を守る正義の味方】に変わった。

どのルートや過去などについては第四十三話から第四十五話を参照。

うっかり（それだけでも奇跡級）でイリヤのインツベルンの記憶から完全に宝石剣を作り出してしまつて第二魔法【平行世界の運営】を会得してしまつたある意味チート野郎。

リリカル世界に来る前に死にかけていたところを遠坂凜、キシユア・ゼルレッチ・シユ
バインオーグ、蒼崎橙子の手によって助けられる。

そしてイリヤを複製した人形の体（イリヤの魂が宿った魔術回路込み）&
全て速き理想郷込み）に宿り、性転換してしまった最初から幸運：Eの人。

動作や仕草、言葉遣いまでイリヤに引かれてしまったために元の喋りができなくなっ
ている。

女性化の影響で、女性の裸を見ても性的興奮は起きなくなっているので普通に美由希
と何度もお風呂に入っていた。

イリヤの得意な歌『ローレライ』をよく歌う。

小学校入学時、クラスの男子女子構わず虜にしてしまったオールキラースマイルを所
持する。

そのもつとも最初の犠牲者はフィアット・スクライアであり、会った当初からお姉様
と言われ慕われている。

ここから百合ロードは始まったと言っても過言ではない。

無印編最終局面でイリヤが魔術回路に宿っていることに気づく。

無印編外伝話でまず、

なのは達友達関係（すずかは直接聞いた。フィアットもリンカーコアの精神リンクで

聞いていた）、リンディ達管理局以外の関係者にシホの過去を話す。

そして結果、さすがに惚れられる事になる。二人目の犠牲者である。

A、s編からアンリミテッド・エアという未知のデバイスの目覚めで、それから何度も夢の中でシルビア・アインツベルンの過去を見るようになる。

闇の書により夢の世界に連れてこられてそこで初めてシルビアと会うことになって魂の融合によって一つの人間となる。

第三魔法【魂の物質化】の上位能力である一度きりの裏技である【創造物質化】の魔法を会得。

同時にアルトリアというユニゾンデバイスも会得する。それによってエクスカリバーもわざわざ投影しなくても使用可能となった。チート度合いが上がった瞬間。

そしてリインフォースと士郎を【創造物質化】で救った。

そして使ってしまったために創造物質化はまた使えなくなってしまう残ったのが第三魔法【魂の物質化】である。

聖杯大戦編でセイバー【ネロ・クラウディウス】のマスターになる。

魂の物質化で捕らわれのアリシアを救った。

空白期編ですずかの告白により自分の気持ちを気づき、最近キスを普通にする仲間になった。

管理局での二つ名は『魔弾の射手』。

Strikers編ではセイバース分隊の隊長となる。

〈StrikerS編での出来事〉

・ティアナに『最強の自分をイメージする』などの言葉を贈り、ティアナはシホをなのは以上に尊敬するようになった。でも、なのはもちやんと尊敬している。

・公開意見陳述会でなのはとランをスカリエッティと隻眼の魔術師、ヴォルフ・イエーガーの手によってにさらわれる。

・決戦前にすずかとファイアットと一夜を明かし、二人ともお腹の中に命を授かる。

・聖王のゆりかごが暴走し、抑止力からも誘いを受けるがそれを断り、エクスカリバー・ツヴェイリングフォームで破壊する。

・シルビアの錬金術の知識でエリクシールを作り、ゼストの命を救う。おまけにスカリエッティに捕らわれていたメガーヌ含めた人達もエリクシールを使って全員意識回復した。

・容姿。

無印時

イリヤの銀色の髪が朱銀色の髪色になり目もルビーから琥珀色に変わった。

それ以外はほぼイリヤと同じ容姿である。

A's時 & 聖杯大戦時

黒い聖骸布のリボンでシグナムのようにポニーテールにしていた。

空白期時 & StrikerS時

月姫のレンと同じように大きなリボンをしている。結び方も同じ。イリヤとレンを融合させた感じを想像して頂ければ早いかと思えます。

もうほぼ大人の姿と同じですのでアイリさんの容姿にシグナム級の胸を合わせ持つ
ナイスなプロポーションが実現しています。

アルトリアとユニゾンした時には髪が金色、目が碧眼になりアルトリアと同じ格好の
騎士甲冑姿になる。

・デバイス

『アンリミテッド・エア』。

待機状態

遠坂凜のルビーの宝石がサファイアに変わっている。

ファーストフォルム〔干将・莫耶〕を元に〔ツヴェイリングフォルム〕。

セカンドフォルム〔無銘 西洋弓〕を元に〔シユツツエフォルム〕。

サードフォルム〔干将・莫耶オーバーエッジ〕を元に〔オーバーエッジフォルム〕。

フォースフォルム〔無銘・斧剣〕を元に〔アックスフォルム〕。

アルトリアとユニゾン時限定で出せる〔エクスカリバー〕を元に〔エクスカリバーフォルム〕。

リミットブレイク・ラストフォルム……………〔エクスカリバー・ツヴェイリングフォルム〕。

・形状 ツヴェイリングフォルムである双剣が光り輝き、魔力があるかぎりどこまでも伸び続ける代物。

・保有能力

従来より、魔術回路27本。

使える魔術は強化、投影、解析、変化、固有結界〔無限の剣製〕。

イリヤから譲り受けた魔術回路。数はメイン魔術回路200本、サブ魔術回路左右1

00本、計400本。

アインツベルンの魔術を使用可能。
主に錬金術、魔眼、暗示など士郎時代には使えなかった魔術を行使できるようになった。

宝石剣による第二魔法【平行世界の運営】。

シルビア・アインツベルンとの魂の融合により一時的に【創造物質化】魔法。同時に千年の知識も得る。

そして第三魔法【魂の物質化】。

魔力変換資質【風王】所持。

アルトリアとユニゾン。

……………以降、設定は増える可能性あり。



もし、シホがサーヴァントになったらの時のステータス。

アルケミストのクラスで呼ばれた場合。

クラス : アルケミスト

マスター : ???

真名 : エミヤ(シホ・E・S・高町)(シルビア・アインツベルン)

性別 : 女性

属性 : 中庸・中立

身長 : 165cm

体重 : 52kg

3サイズ : B86 W59 H82

イメージ色 : 朱銀色

Weapon : アンリミテッド・エア

ステータス

筋力 : C (B+)

魔力 : A+ (A++)

耐久 : C (B)

幸運 : D (C)

敏捷 : B + (A +)

宝具 : ???

※ (C) は融合騎とユニゾンした時のステータス。

クラス別能力

陣地作成 : B

錬金術師として、自らに有利な陣地を作成できる。

“工房”の形成が可能。

錬金術 : A

無から有を創造し、魔術に精通する道具を作成する技能。

ランクの度合いによって使用する各錬金術にプラス補正がかかり使用する魔力量が減る。この補正は魔術にも適用される。

ランクAならば想像できる事はほぼ創造可能。

保有スキル

千里眼 : C+

純粹な視力の良さ。遠距離視や動体視力の向上。

高いランクの同技能は透視・未来視すら可能にするという。

プラスは魔術により瞬間的な向上を含めたもの。

魔術 : A+

主に錬金術などの魔術適性でAを取得している。

だが、強化や投影といったオーソドックスな魔術の方が得意である。

他にも第二、第三の魔法を使用可能。

心眼(真) : B

修行・鍛錬において養われた戦闘を有利に進めるための洞察力。

わずかな勝率が存在すればそれを生かすための機会を手繰り寄せる事ができる。

戦闘補正を1点無効にする。

魔導 : B

魔術とは異なった異種の力。

“デバイス”というマジックアイテムで非殺傷の攻撃が可能となる。

魔力放出(風) : B

魔力変換資質『風王』を所持する。

この魔力を武器、ないし自身の肉体に帯させて、瞬間的に放出することによって能力を向上させる。

融合騎召喚 : A

かつて最後の時まで仕えてくれた使い魔（融合騎）を召喚する。

その名の通り、融合することによって使い魔の能力を上乗せで取得する。

使い魔単体でも能力は優れている。

宝具

『アンリミテッド・ブレイドワークス
無限の剣製』

ランク : EーA十

種別 : 対人宝具

レンジ : 30～60

最大捕捉 : ???

錬鉄の固有結界。

結界内には、あらゆる「剣を形成する要素」が満たされており、目視した刀剣を結界

内に登録し複製、荒野に突き立つ無数の剣の一振りとして貯蔵する。

ただし、複製品の能力は本来のものよりランクが一つ落ちる。

また、『約束された勝利の剣』のような神造武器の類は複製不可とされる。

しかし完全な複製は無理だが真に迫ったものであれば出来る、と豪語している。

ただし代償も大きいらしく、投影すれば自滅する。

刀剣に宿る「使い手の経験・記憶」ごと解析・複製しているため、初見の武器を複製しても『真名解放』が可能。

『マテリアル・クリエイション 創造物質化』

ランク : B

種別 : 対人宝具

レンジ : 1

最大補足 : 一人〜二人

かつて聖なる錬金術師と呼ばれたシルビア・アインツベルンが会得していた奇跡の魔法。

錬金術としては最高峰。

失われてしまった魔法だが、サーヴァント化により宝具と化し、魔力が続く限り何度でも使えるようになった。

“魂の物質化”もこの魔法の一端に過ぎなかった。

能力は任意に指定したものに魂を宿したり別のモノに作り替える、他に魂の改竄をして新たに能力を与えたり新たに体も作ることもできる。

逆に応用することで弱体化もできる多様性があるためにある意味 “禁呪”。

奇跡の代償とも言うべきか一回の使用で魔力が枯渇してしまうので一度魔力が全快して回復するまで使えないので燃費は悪い。

なにかのバックアップがあればそんな事態にはならない。二度言うが燃費は悪い。

しかし、アルケミストのクラスで呼ばれたために魔力消費は全快時に限り三度までの使用が可能となった。

『^エ約束^スされた勝利^リの剣^バ』

ランク : A++

種別 : 対軍宝具

レンジ : 1～99

最大補足 : 1000人

光の剣。人ではなく星に鍛えられた神造兵装。

聖剣というカテゴリの中では頂点に立つ宝具である。

神霊レベルの魔術行使を可能とし、所有者の魔力を光に変換、運動量を増大させ、光の断層による「究極の斬撃」として放つ。

攻撃判定があるのは光の斬撃の先端のみだが、その莫大な魔力の斬撃が通り過ぎた後に膨大な熱が発生するため、結果的に光の帯のように見える。

威力・攻撃範囲ともに大きい為、使用には常に周囲への配慮が必要とされる。

補足すると、これは融合騎であるアルトリア・ペンドラゴンとユニゾン・インを果たした時だけ使用可能な宝具。

機械寄りに変質しているために設定をすればこの攻撃も非殺傷にすることも可能。

殺傷・非殺傷はサーヴァント個人で設定可能。

『^{エクスカリバト}約束された勝利の双極剣^{ツヴァイリンゲ}』

ランク : A++

種別 : 対艦宝具

レンジ : ???

最大捕捉：???

光り輝く双子の中華刀を手に持ち放つラストフォーム。

『約束された勝利の剣』を秘めたる神秘をそのままに再構成した新たな形態。

魔力が続く限りは際限なく魔力刃を伸ばすことができレンジは広がっていき、切れ味も落ちることはない。

その威力は彼の巨大戦艦すら修復不能にまで切り裂いたほどの逸話を持つ。

これは切り裂くことに特化しているために斬撃として放つことは度外視されている。

『準主人公』

・名前：衛宮士郎 ↓ 八神士郎

A's編から登場。

リリカル世界に来るまではシホと経験や知識、記憶は同じである。

シルビア・アインツベルンの魂が世界を飛び越える瞬間に無理やりシホの魂に憑依してきたためにその反動で魂が二つに分かれてしまいシホと士郎に分かれてしまった。

最初は型月世界の使い魔状態Ⅱ鷹の姿で八神家の庭に記憶喪失で落ちてくる。

シホとの戦いの折に記憶を取り戻し、はやて及びリインフォースを救った後は、シホの【創造物質化】の魔法で新たな体を得る。

その時に魂の改竄も一緒に受けて魔術回路が27本から四倍の108本に増えた。

聖杯大戦編でキャスター【玉藻の前】のマスターとなる。

八神リインフォース・アインズと幾多の困難を得て恋仲になり結婚し、八神士郎と名前を変えて八神ツルギというチートの塊な男の子を授かる。

ある意味、シホより先に幸せを掴んでしまった男。

管理局での二つ名は『赤き弓兵』。

StrikerS編では機動六課の食堂及び機動六課をキャスターとともに守る戦うコック長。

デバイスは『ブレイドテミス』。

ファーストフォルム【干将・莫耶】を元に『ソードフォーム』。

セカンドフォルム〔無銘 西洋弓〕を元に『ボウフォーム』。
 サードフォルム〔干将・莫耶オーバーエッジ〕を元に〔オーバーエッジフォルム〕。
 フォースフォルム〔無銘・斧剣〕を元に〔アックスフォルム〕。



シホと士郎が今までに投影して使った、または名前だけでも出た真名開放宝具及び武器。

使用順。

初登場・第五話『干将・莫耶』。

初登場・第七話『天駆ける踵の靴』。

初登場・第八話『物干し竿』。

初登場・第八話『天の鎖』。

初登場・第十一話『黒鍵』。

初登場・第十二話『熾天覆う七つの円環』。

初登場・第十二話『偽・螺旋剣』。

初登場・第十三話『破魔の紅薔薇』。

初登場・第十五話『雷切』。

初登場・第十五話『子狐丸』。

初登場・第十七話『寶石劍』。

初登場・第十七話『破戒すべき全ての符』。

初登場・第十八話『約束された勝利の剣』。

初登場・第十九話『マグダラの聖骸布』。

初登場・第二十七話『突き穿つ死翔の槍』。

初登場・第二十九話『千将・莫耶オーバーエッジ』。

初登場・第四十二話『赤原猟犬』。

初登場・第四十九話『必滅の黄薔薇』。

初登場・第五十一話『巨狼束縛し強靱の鎖』。

初登場・第五十二話『全て遠き理想郷』。

初登場・第五十五話『斬山劍』

初登場・第九十一話『無銘・斧劍』及び『是、射殺す百頭』。

初登場・第九十五話『医術神の蛇の治癒杖』。

初登場・第九十七話『絶世の名劍』。

- 初登場・第九十九話『斬^フり決^ラる戦^ガ神^{ラッ}の劍^ク』。
- 初登場・第二百二十八話『猛^グり狂^アう雷^{ジュ}神^ユの鉄^ラ槌』。
- 初登場・第三百一十一話『身隱^シしの布』。
- 初登場・第三百二十二話『虎竹刀』。
- 初登場・第三百二十三話『原^ア初^エの火^{ストウス}』。
- 初登場・第三百二十三話『水^す天^{いて}日^ん光^に天^つ照^{こう}八^あ野^ま鎮^て石^ら』
- 初登場・第三百二十三話『無^ム銘^ボ・釘^ボ劍^ル』
- 初登場・第三百二十三話『吹^カき荒^ラぶ暴^ド風^ホの劍^ル』。
- 初登場・第三百二十三話『大^モなる激^ラ情^ル』。
- 初登場・第三百二十三話『小^ベなる激^ガ情^ル』。
- 初登場・第三百二十三話『紅^ベ蓮^ガ』。
- 初登場・第三百二十三話『月^{ツキ}下^ノ』。
- 初登場・第三百二十三話『左^タ齒^ル嚙^ウ咬^イ』。
- 初登場・第三百二十三話『右^サ齒^リ嚙^チ咬^エ』。
- 初登場・第三百二十三話『大^グ神^ニ宣^ル言^ル』。
- 初登場・第三百二十三話『轟^{ブリ}く五^ユ星^{ナク}』。



『Vivid主人公候補』

・名前：八神ツルギ

空白期編から登場。

Vividの主人公候補である士郎とアインスの子供。

髪の色はシホと同じ朱銀色。目はアインスと同じ赤色である。

魔術回路は148本。

リンカーコアの推定魔導師ランクがAAA+持ち。

魔術属性：『地水火風空』の全属性を持っているアベレージ・ワン十剣。

固有結界も所持。

保有魔法：第二魔法【平行世界の運営】。

ここまで見るとすごい能力だなと一見思うがまだまだ詰めが甘い。

メリットがあるようにデメリットも当然存在する。

まず士郎やシホのように剣一つの特化タイプにはならないでしょうから投影はできてもすぐに宝具一発投影しただけでダウンしてしまふだろう。

そして固有結界も本来は悪魔や精霊、死徒や英霊とかの使う大禁呪というカテゴリーである。

そして公式に沿ってまず固有結界はツルギははつきり言つて二十代までに使うことはまず無理である…。

魔術理論・世界卵が士郎は第四次聖杯戦争の災害をえてやつと下地ができた。

さらに第五次聖杯戦争で未来の自分と戦うという貴重な体験をしてそれからギルガメッシュとの戦いできつかけを得てやつと使うことができ描くことができました。

が、ツルギはそんなものは一切経験していないので心のはつきりと想像し、そして創造できないからまず心象風景を描くの修行をまず十年くらいつまないとできないという予測。

さらにやつと使えるようになってさらに自在に使いこなすまでぎつと通常の修行だと合計二十年以上は必要だと予測されるだろう。

そして、まだあつて無限の剣製は士郎から引き継ぎの承認を受ける必要があるからまず引き継がないことにはどうにもならないのである。

お次は第二魔法【平行世界の運営】であるが、シホ、士郎はたまたま運がよく根源に

繋がって会得したのであって完全に操ることはできない。

だからたとえ才能があっても会得するのに一生はかけないと無理だろうと予測される。

トータルで見ると固有結界と第二魔法は使える見込みがあるだけマシだね、という結果に終わってしまうのである。

だからまだ幼児であるツルギはどんな魔術を駆使するのか将来が楽しみであると魔術を教えているシホは思っているのである。

Striker編では投影魔術のダウン版魔術である『概念抽出魔術』を駆使する。概念抽出とは言葉の通り、宝具の概念だけを抽出して体に纏ったり武器に宿す能力。機動六課襲撃時にヴィヴィオを守ろうとした時に力が暴走し、朱色の髪がなぜか黄色に染まるという現象が起きた。

さらに赤黒い魔力光を出し、様々な形状の魔力の塊を放ち続けてルーテシア達を撤退にまで追い込んだ。

本人はその事は覚えていないが、これからどうなるかはまだ謎である。

番外でゲームの影響で髪が伸びてしまった。ウェーブもかかっている。

とある女の子と同じになったとのセリフを出しているがこれもまだ謎である。

ヒント：CVは阿澄佳奈。

これだけ言えばヒントは十分である。



・名前：イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

無印編から登場。

シホのイリヤから譲られた魔術回路と魂が一体化している。

シホの魔術回路とイリヤの魔術回路を直結することで膨大な力を発揮することができる。

闇の書にシホが取り込まれるまでは自由に表層域に出てこれなかったが、取り込まれてシホが覚醒した後から自由に意識を出せるようになった。

シホがイリヤのお下がりでという『ローレライ』をもうシホの歌声だよと絶賛してい

る。

空白期からシホがすずかとファイアットと付き合うようになり、アインツベルンの英知である錬金術製の擬似男〇器をシホに使うよう言い聞かせている。

それが見事叶って内心かなりホクホクであったり。



・名前：ファイアット・スクライア

無印編から登場。

本作のユーノ・スクライアのオリジナルの双子の妹である。

得意魔法はユーノと同じバインド魔法に、プラスして槍術に中国拳法である。

シホのキラスマイルの最初の犠牲者。

シホの事をお姉様と慕う。

すずかとはシホを奪い合うライバル。

でも最近を考えを改めてきたのかみんな（すずか、アルトリア、ネロ、自分を入れて）で幸せになろうと計画している。

大人版の容姿はユードの女性版でロングストレートの髪を想像して頂ければいいと思います。胸は標準サイズである。

空白期でシホとキスをすることができて嬉しいと思っている。

重婚を提案した人。

Strikers編ではシホの分隊であるセイバースで副隊長をつとめセイバース2のコールサインをもらっている。

決戦前にシホとすずかと三人で一夜を明かし、その後お腹に命を授かる。

デバイスは槍型のミッド式&ベルカ式の融合であるトリニティデバイス。名を『マグナ・スピア』。



・名前：シルビア・アインツベルン

A's編から登場。

リリカル世界のオリヴィエに忠誠を誓っていた『聖なる錬金術師』。側近扱いで友と

も言える中だった。

クラウスとエレミアとも当然知り合いだった。

オリヴィエの聖王家で一度きりの本作オリジナルの魔法である【異世界移動魔法】によつて世界を飛ばされ型月世界にやってきたアインツベルンの始祖。

死んだ後も魂は根源には行かずに代々受け継がれてきて士郎がイリヤの体に宿つたのを機会に憑依して魂の融合を果たす。

シホに【創造物質化】を託した張本人。



・名前：アルトリア・ペンドラゴン

A's編から登場。

約束の四日間が終わつて現界できなくなる寸前にキシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグと遭遇した。

状態をサーヴァントのまま維持して過去の異世界に飛び、まだ能力が劣化していなかった当時のシルビアに会い、シホのことをゼルレッチに聞かされた。

それで考えた末に「魂の創造 or 物質化 or 改竄」で魂を改竄してもらいサーヴァントから融合騎へと変貌を遂げる。

おまけにエクスカリバーとアヴァロンも【無機物（武装全般）の創造 or 物質化 or 改竄】でデバイスにそのまんま改竄されたので融合騎なのに単機で戦闘をこなせる実力を持っている。

アルトリアが宿るアンリミテッド・エアのデバイスの意思にもアルトリアの感情がインプットされている。

その後はシホにうまく会うようにできるように【運命の魔術】を施されて、シホと再会する。

シホとユニゾン・インした時には髪が金色、目の色が碧色、アルトリアと同じ騎士姿になり、エクスカリバーの真名開放ができる。（投影品より燃費はいい）。



・名前：ノア・ホライゾン

聖杯大戦編から登場。

アインツベルンでイリヤの予備として小聖杯を宿して生まれたホムンクルス。本来なら出番はなかったというのに言峰綺礼のせいで世界が泥に襲われてノアも飲み込まれる。

しかし、ノアはなんと呪いの泥を受け入れてしまい生き残った。

そして言峰綺礼が現れて「ノア・ホライゾン」という名前をもらい弟子になる。

セイバー・オルタ〔アルトリア・ペンドラゴン〕を譲り受けてマスターになる。

聖杯が降臨する様を見ようと思っていたが言峰綺礼に小聖杯である心臓を抉りだされて無残に死亡する。

容姿はA p o c r y p h aのホムンクルスと同じである。



・名前：ミゼ・フローリアン

聖杯大戦編から登場。

小さい頃から劣等感を感じて過ごしてきた。

魔導師訓練校でも万年最下位だった。

それでもともな職につけずにフリーの魔導師として過ごしていたが言峰綺礼の手ほどきにより魔術を習得。

ランサー／バーサーカー「デイルムツド・オディナ」のマスターになる。

周りを見返してやりたいと願うがデイルムツドに恋をする。

デイルムツドとの別れの言葉を受けて改心し心を強くする。

現在はシホにより才能があつたのだから魔術を学んでいきそれが実を結び開花して、魔術事件対策課の部隊長にまで上り詰めた。

出生街道まっしぐらである。

得意魔術は風属性で空気による切断である。

容姿はソラウ・ヌアザレ・ソフィアリを水色の髪に染めた感じである。



・名前：三菱彩

聖杯大戦編から登場。

背の高い鬼畜眼鏡。

猟奇思考を持っていたが一度も殺しはした事がなかったというヘタレ。
何を聖杯に願っていたのかは不明。

アサシン【遠野志貴】のマスターとなる。

下っ端。かませ犬1号。ヤラレキャラ。と散々な扱いであった。

実は裏設定で浄眼持ちで直死の魔眼を会得するかもしれないという才能があった。
そのおかげで志貴が召喚できたとも言う。



・名前：トーラス・スタリオン

聖杯大戦編から登場。

管理局の地上本部の二佐の陸官相当の人物だったが、裏金や密輸を色々なところに流していたせいでそれが発覚して退職させられた。

キヤスター【ヤガミ】のマスターになる。

聖杯に願う事は、無能な管理局を滅ぼして一からまた新しい組織を創造し立ち上げてトップになるといった醜い野望であった。

その過程でフィアットを人質にとったが最後には志貴によって左腕を切り裂かれた。この腕の傷が原因で錯乱して何を言っているのか支離滅裂で分からないので精神科にかかりながらも現在も刑務所に入っている。かませ犬その2。



・名前：アクア・アトランテイク

聖杯大戦編から登場。

小さい頃から幽霊の魂を見ることができた^{ネクロマンサー}死霊魔術師。

バーサーカー〔ランスロット〕のマスターとなる。

言峰綺礼の命令でアリシアの死体を回収し魂を呼び戻して操った。

その才能で最初の友達が幽霊。

聖杯に願う事はまたこの友達と会いたいと思う純粹な想いだったが、シホ達に追い詰められて最後には自分も死ねば友達と会えると思えばナイフを首に刺して自害する。

当時七歳、StS時は数えて十四歳。

魔術事件によってレンと一緒に親を失い落ち込んでいるところでシホと出会う。

そしてシホの養い子として一緒に暮らすようになり本来の明るさを取り戻していった。

レン曰く、ラン姉さんは少し明るすぎてお転婆な性格だからもう少しお淑やかになった方がいいとのこと。

シホの手伝いをしたいがために管理局員になり機動六課のセイバーズ分隊のセイバーズ3となる。

公開意見陳述会でトレディと交戦し、洗脳されて拉致される。

その後、レンの前に立ちふさがったがレンの必死の攻撃で意識を取り戻す。

洗脳の後遺症もなく元気ハツラツである。

デバイスは西洋剣型の青白い塗装が目立つ剣『バルムンク』。

容姿はDOG DAY Sのエクレールをイメージしている。髪はセミロング。



・名前：レン・ブルックランズ

空白期から登場。

当時六歳、StS時は数えて十三歳。

魔術事件はランと同じ境遇。

ランの弟。

しかしランとは違い、まだに親を失ったショックから立ち直れず、気弱な性格で治さないととは思っているが、踏ん切りがつかないでいる。

ランと同じ理由で管理局入りを果たす。

機動六課のセイバーズ分隊のセイバーズ4となる。

公開意見陳述会で相棒であるアウルヴァンディルをトレデイに破壊されて、ランまで拉致されてしまい、心が折れそうなところをギンガに勇気づけられて心を強くすること祈る。

そして最終決戦では弱さを克服し、交戦したトレデイとラン（洗脳）を奥の手であるサイドモード《シエルブローフォルム》を展開し、熱血説得&打倒した。

今現在、積み重ねてきた事でトレデイとギンガの二人に惚れられている。

デバイスは丸い両手盾型の『アウルヴァンデイル』。

容姿はランと同じくDOG DAYSのエクレールの男の子版で性格を気弱にしたイメージである。だがそれも克服しているために強気な表情になっている。

それでもいじられる時はとことんいじられる。

髪型はエクレールと同じ。



・名前：トレディ

StrikerS編から登場。

十三番目の名前を付けられたナンバーズの一人。

黒髪のショートカットの女の子。

少し間がある喋り方をする。例えば「……………はい、なんででしょうか」と言った風である。

物静かな性格で十三番目の名前をつけられているが目覚めるのが早かったためにチンクの次に目覚めたので年齢は妹たちより上である。

趣味はハッキング、クラッキング。その実力は管理局の本局にまで及び侵入できるためになのは、『レイジングハート・ブルート』の作成を手がけた事もある。

レンを画面越しで見えて一目惚れした経歴を持つ。

何度もレンとぶつかり合うことで自分の気持ちが高まっていくことを悟り、最終決戦でのレンとの交戦で説得されて改心する。

そしてさらに惚れた。

固有武装：クラツシャーバイト

蛇の顔をモチーフにした射出型の武器。

IS1：ウィップマニユピレート

固有武装であるクラツシャーバイトを操り制御するための能力

IS2：マインドハウリング

クラツシャーバイトの蛇の目から光を放ち相手を洗脳状態にする能力。

容姿はマテリアルズのシュテルを元になっている。



・名前：ヴォルフ・イエーガー

空白期から登場。

ライゼルを召喚した人物。

魔術が世界に知られるようになってから出てきた右目が隻眼の常にフードを被っている魔術師。

スカリエツティと繋がっていたようでStrikerS最終局面で姿を出し、己の名前を明かす。

そしてなのはから奪い取ったオリヴィエに聖王のゆりかごを暴走させる命令を出した。

どんな魔術を使えるかはわからない…。

風や土、ガンドなど様々な能力を披露したために判明はしていない。

配下に七体の異形を連れている。

それぞれがサーヴァントと似た仕組みの配下な為にサーヴァント（仮）と言われている。

様々な策略をする知略家なためになにを起こすかは不明だが取り返しのつかないことをしそうである。

なぜかシルビアの事を知っていて会いたがっている。



その他、原作との相違点や追加設定。

- ・なのはがユーノと恋仲になる。
- ・フェイトがランサーと恋仲になる。
- ・アリスアとヴェロツサが恋仲になる。
- ・セツテがクアットロによって記憶をリセットされてしまう。
- ・ゼストとレジアス両名生存。

捏造設定でなのはの家系は実は隠れ聖王家の末裔。それでオリヴィエが召喚できたとも。

- ・ヴィヴィオが誘拐されていない。
- ・すずかがシホとの子供を授かる。

他にもジグルド・ブリュンヒルデ提督、ブリューナク隊メンバー、リオン・ネームレスなどといったキャラがいるがまだそんなに登場していないためにまだキャラ紹介はしません。

おまけ

現在登場している女性キャラのバストサイズ比較。

- アルクエイド (88 cm・公式)、メドウーサ (88 cm・公式)、シグナム (88 cm・独自設定)
- ▽フェイト (87 cm・独自設定)、アリシア (87 cm・独自設定)、リインフォー
- ス・アインス (87 cm・独自設定)、シャマル (87 cm・独自設定)
- ▽シホ (86 cm・独自設定)、すずか (86 cm・独自設定)、玉藻の前 (86 cm・公式)

- ◇なのは(85cm・独自設定)、アリス(85cm・独自設定)
- ◇オリヴィエ(84cm・独自設定)、カレン(84cm・独自設定)
- ◇ネロ(83cm・公式)
- ◇ミゼ(82cm・独自設定)
- ◇ファイアット(80cm・独自設定)
- ◇はやて(79cm・独自設定)
- ◇アルトリア(73cm・公式)
- ◇ヴィータ(62cm・独自設定)
- ◇リインフォース・ツヴァイ(61cm・独自設定)

スバル、ティアナ、キャロ、ランなどといったキャラはまだ成長途中なために記載はしない。

ナンバーズなどもいれていません。

u n l i m i t e d b l a d e w o r k s ”
無 限 の 剣 で 出 来 て M y w h o l e l i f e w a s ”
こ の 体 は

あの死が常に隣り合わせだった聖杯戦争が終結した。
 突如巻き込まれた聖杯戦争という魔術師七名と《サーヴァント》という最上級の英霊の使い魔七体による聖杯を巡る殺し合い。

月下での剣の騎士『セイバー』との出会い。

義理の姉『イリヤスフィール・フォン・アインツベルン』との悲しい運命と闘争。
 憧れた女性『遠坂凛』との共同戦線、そして弟子になったこと。

己の可能性存在『英霊エミヤ』との死闘。そして真に見つけられた本当の道。

第八のサーヴァント『ギルガメッシュ』との戦いの折、義理姉による魔力供給によつて発動した俺の本当の魔術【固有結界 無限の剣製】。

黒の聖杯に染まった後輩『間桐桜』と、その姉である遠坂による戦いで桜を助け出すことが出来たこと。

言峰綺礼との聖杯をかけた最後の戦い。

最後にセイバーによる宝具の開放で大聖杯の完全破壊。

これですべて終わったと思った半年後に起きた約束の四日間の奇跡。

それによつて受け継がれた本来ありえない者達との平和な生活と、ある一人のすべての呪いを背負わされた男の決意の記憶。

：俺は、いや“私”はそれらすべてを乗り越えてセイバーとの決別の時の約束を実現するために世界に旅立った。

それから八年が経過し、確かに今の私は英霊エミヤと同じくらいの180cm代後半の身長。

そして、投影の酷使の代償として起こったのであろう、脱色した白い髪、肌が浅黒く、瞳が銀色に変色して、黒いボディーマーに赤い聖骸布によつて編まれた外套を纏っている。

まさにアーチャーそのものの姿になっていた。

夫婦剣の干将・莫耶を主に使うのも嫌になるがまさにアーチャーのそれである。

既に私には封印指定というレットルがはられ代行者や私を狙う魔術師との戦いで心身、そしてともに魔力も底をつきかけ、そして…

「くっ……くっまでか…」

埋葬機関や魔術協会から差し向けられた追っ手をなんとか倒したはいいがそれもここまで。

自身に解析をかけるまでもなく私の体はほぼ満身創痍…まだ四肢がついている事自体が奇跡のようなもの。

追っ手がこれ以上来ないのを確認後、私は暗い夜空を見上げた。目に映った月と夜空は爺さんと見た時の光景と重なった。

同時に俺の片腕とも言っていないほどの存在であるセイバーと数年前にホムンクルス体故に短命でこの世の生を終えた姉、そして師匠である遠坂凜、後輩の桜…。

思い出せばきりが無いほどの人物の顔がまるで走馬灯のように記憶を駆け巡る。

「ハハッ…これが走馬灯というものか。しかし案外悪くは無い。セイバー、遠坂、イリヤ…私もアイツと同じ道を進むかもしれない…」

「だけど世界と契約だけは決してしなかった。それだけは褒めてもらえるだろうか？」
誰に問うでもなく独り言のように呟いたその一言。

だがまるで返されるかのように「ええ、そうね。それだけは褒めてあげるわ。衛宮く

ん」という自身の耳を疑うかのように懐かしい声が聞こえてきた。

とつさに警戒を強める、だがすでにこの体は死に体といつても過言ではない。

ただ声が聞こえた方に顔を向けることしか出来なかった。

だが、それだけで私の中で一気に緊張は解れた。

そこにいたのは最後に会ったときはまだ少女としての幼さが残っていたが、今では見違えるほどに大人の女性として成長した遠坂の姿があった。

「遠、坂……？」

「ええ。久しぶりね、衛宮くん。でもすっかりアーチャーと同じ姿になったわね」

「開口一番で嫌な事を言ってくれるな……。まあそれはいい。それで遠坂がここにいますということは……」

「ええ。あなたを消しに来たわ」

遠坂は齒に衣も着せずに正直にそう言った。

だがそれは当然のことだと私は諦めて、「そうか」とだけ答えた。

しかし遠坂はなにか不満の表情をして、

「あなたはそれでいいの？ 今回の襲撃もあなたのことをよく知っている私だからこそできた事なのよ？」

「なるほど……道理で私の行動が筒抜けだったのか、やっと理解した。だが私は別に恨も

うとは思わない。遠坂だつて上から命令されてしかたがないという判断だっただろう？」

「はあ…：やつぱりばれていたか。でも最終的に判断したのは私よ。そこのところ分かっているわね？」

「…ああ。十分承知している。さすが私の師匠だと思うぞ」

そう私が言うのと「呆れた…：」という声が咳かれた。

そして数秒して遂に遠坂は先ほどまでの優雅な表情から一変して怒気溢れる表情になり同時に私の背中に冷や汗が大量に流れ出した。

血の流出よりそちらの方に意識が傾くとは、やはりトラウマとは凄まじい。そこにはアカイアクマが顕現していた。

「衛宮くん、本当は助けてあげようかと思っただけ…：本当に消してあげようかしら？」

「イヤ、ソレダケハオユルシクダサイ…：」

体は動かないために心身誠意、心のこもった言葉をカタコトながらも返すと、同時に急に周りの雰囲気が変わったことを察知して再度警戒をするが、遠坂がそれを静止した。

なぜ？ という顔をしたがすぐにその意味が分かった。

空間が歪んだかと思うとそこにはいかにも老成した老人がいた。だがその身から溢

れる魔力、そして人外の気配。

そう、彼こそ世界に五人しかないといわれる魔法使いの一人。

『魔導元帥』『カレイドスコープ』『宝石翁』と呼ばれる第二魔法『平行世界の運営』の担い手。

そしてかの死徒二十七祖の一角でもある。『キシユア・ゼルレツチ・シュバインオーグ』が立っていた。

そしてその後ろには誰かは分からないが眼鏡をかけた女性がタバコを吸いアタツシユケースを担ぎながら立っていた。

だが今の私には頭で情報が整理する事ができずに、咄嗟に「大師父!？」としか言葉を発する事ができなかった。

「久しぶりだな、衛宮士郎」

しかし大師父は私の驚きも意に介さずマイペースに話しかけてきた。

それに従い私も「は、はい：お久しぶりです」という少しドモリ具合にも返事を返した。

「ふむ、その様子ならまだ死にそうはないようだな。安心したぞ。なにせお前は一時とはいえ遠坂より先に「」に至ったのだから死なれては困る」

そう、私は聖杯戦争でイリヤと遠坂の手伝いの元に宝石剣ゼルレツチを設計図と記憶

を元に頭がかち割れるほどの痛みを感じながらも投影した。

だがそれは再現どころか本物とまったく性能が同じものを作り出してしまい、

あろう事かそれは遠坂には使う事ができず、意思があるのかないのか変わりに私を主と認めてしまい第二魔法を会得してしまい、

条件が揃えば私も使えてしまうものを作り出してしまい混乱の極みといった状況に大師父が「至った者が現れたな」という発言とともに現れた。

そして遠坂に「変わりにこれを使え」と自身の本物を渡すという大盤振る舞いを発揮した。

それからは聖杯戦争終結後に、事後処理を大師父がすべて請け負ってくれて色々と面倒も見てもらった。

なぜここまで自分達に良くしてくれるのかを聞くとおおらかに笑い、

本人曰く、「ワシは気に食わんやつはとことん気に食わんが、気に入ったものには色々としたい」だということ。

それで遠坂から嫉妬を大いに受けたのはもう今では笑い話だが。

閑話休題

「それでお主には悪いと思っておるが、この世界から消えてもらおうとおもつとる」
やはりか…：大師父が現れたからそんなことではないかと思つていたが。

だが、それには問題がある。

「ですが大師父…：私の体は見たとおりの人としてはもう使い物にはならないだろう。そこはどうするのだ？」

「そこは安心しろ。お主には代わりの体が用意されている」

「新しい、体…？」

「ここからは私の出番だ」

そこで今までずつと沈黙を保っていた女性が口を開いた。

「始めましてだな、錬鉄の魔術使い。私は『蒼崎橙子』。お前と同じ封印指定の人形師だ」

「蒼崎橙子!? それってあの魔法使いの一人である蒼崎青子の姉にあたる!」

「…不本意だがそうだ。さて、あまり時間も無い。早速だがお前にはこの人形に入ってもらおう」

そして橙子さんがアタッシユケースから（どうやって入っていたのかはこの際気にしないことにしよう）一体の人形を、人形を…?

私の思考はそこで一時フリーズした。

だって、その人形の外見は……！

「そう……この人形はイリヤスフィールが素体になっているわ」

遠坂が俺の思っていることを口に出してくれたが到底理解できるわけが無い。

素体だと？ ではこのイリヤとほぼ同じ外見の人形はイリヤの死体をもとに作られた訳で……！

それに思い至った途端、動かないにしろ私はその場で出せるほどの殺気を放出した。我慢できるものか！ イリヤのおかげで私は世界と契約もせずによってこれたというのに……これではあまりに！

「土郎、怒りたいのは分かるけどまずはこれを見てくれないかしら？」

遠坂が一枚の手紙を私に渡してきた。

なにが書いてあるのだ!? という怒りをなんとかそれを抑えながらもそれを読んだ。

途端、一気に頭は水を浴びせられたかのように冷めて変わりに涙がこぼれ出した。

『シロウへ

これを読んでいるって事はもう私は死んじやっているのよね？

だけど悲しまないで。私は今まで人形としか生きる事が出来なかつたけどシロウのおかげで人としての生き方も短いけど体験できた。

シロウには楽しいことをたくさん教えてもらった。愛情もたくさんもらった。いつも守ってもらった。

：だけどね、きつとシロウもアーチャーと同じような道を行っちゃうと思うの。でも私はそんな事は許さないんだからね？

だから今度は私がシロウを助けるの。出来損ないの体だけど私が死んじやった後、リオンやトウコには私の体を使ってシロウを助けてあげてつて伝えてある。

きつとシロウはこれを読んだら怒るかもしれないけど、私にはこれくらいしかできないから。

でも、私はこれでいつもシロウと一緒にいられるから守って上げられる。わがままな願いだと思うけど：私もシロウと一緒にいたい。

体だけだけど：大事にしてくれたら嬉しいな。でもきつとシロウのことだから無茶はしちやうと思うの。だから私の体に残っている魔術回路も全部シロウに上げる。

これなら今以上に戦えるし、人もより多く助けることもできるわ。

でも、これはシロウのお姉ちゃんからの最後の願い：シロウはもう十分に頑張ったよ。だから今度は自身の幸せも願ってもいいと思うの。

人助けもいいけど、守ろうと思った人達もちゃんと守ってあげてね。

：最後になるけど、いつ会えるか分からないけどあの世つてものがあつたなら今度は

ずっと遊んで欲しいな…うう、なんか愚痴っぽくなっちゃったね。

今度こそ本当に最後、幸せになってねシロウ。お姉ちゃんは天国でシロウのこと、ずっと見守っているから。

親

愛なる貴方の姉、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンより』

「くっ…ぐ…い…」

俺はもう三人がいるのにも関係なく盛大に涙を流した。

どうしてイリヤの気持ちに気づいてやれなかったのか。いや、気づこうとしなかったのか？

そんな想いが頭の中をリフレインする。まるでイリヤの言葉が全身に行き渡るかのように体が震える。

そこに遠坂が話しかけてきた。

「それが…イリヤスフィールの最後の願いよ。断るならこの場で私が一思いに殺してあげるわ」

「ありがとう遠坂…ああ、その心配は不要だ。私はイリヤの想いを踏みにじりたくない…」

「そう、それじゃ決心したのね」

「ああ、だから橙子さん…お願いします」

「…わかった。じゃしばらく目を瞑っている」

「……………」

私は無言で頷き目を瞑った。

すると橙子さんは私の胸に手を当てた。そして五感がすべて消え去り、得体のしれない浮遊感を感じて、次にはなにかに押し当てられるかのような感覚が一気に駆け巡った。

しばらくして急に感覚が戻ってきて橙子さんに「目を開けていいぞ」と言われたので開けた瞬間、私の元の体が横たわっているのを見た。

そしてもう自身の体とはさよならなんだと思い、

「今まで、私の無茶に付き合ってくれてありがとう。私もこれから頑張っていくから…」
「それにしても銀色の髪が煌めく緋色に変わるなんてやっぱり属性柄なのかしらね？」

反射具合で銀も残っているし…女性の敵だわ」

「目の色はルビー色から琥珀色に変化したようじゃの？」

「そうなの？ ずいぶんと変わったものだ。」

「さて、それでは衛宮。体の調子はどうだ？」

「ちよつと待つてくれないかしら？　すぐに調べる………ん？」

「ちよつと、士郎。体が女性になったからって急に女言葉は変よ？」

遠坂は呆れているが、私は結構動転している。

「い、いやちよつと待つて……！　え、なんで!?　もしかして元の喋りができない!？」

「なかなか面白い現象だの？　とりあえず落ち着いて調べてみたらどうじゃ？」

「え、ええ……」

とりあえず、

「——トレース・オン
同調開始」

肉体損傷無し。

肉体年齢9歳。

魔術回路27本正常稼働。強化、投影、問題なく使用可能。

無限の剣製正常封印。

及び別のメイン魔術回路200本、サブ魔術回路左右100本、計400本正常稼働。

アインツベルンの魔術を使用可能。

魔術の使える範囲が大幅に増大。

全て遠き理想郷の存在を確認。現在正常に稼動中。

鞘に魔力を流すことにより傷の修復が可能。

副産物として老化遅延の効果が追加。

口調、仕草ともに素体に引かれ気味。元の動作は意識しないと使用は困難。

「んんー？　まず肉体年齢が9歳？」

「ああ、それは遠坂の話によるとお前には剣、いや武の才能がないと聞く。だから最高のスペックを活かす為にまだ成長段階がちょうどいい位の歳にした。

それなら今からでもなにか一つは二流ではなく一流になれることができるだろう」

橙子さんが律儀に応えてくれた。

しかし、確かに素晴らしいスペックだな。

まあ、基本私の戦い方は変わらないと思うが。

「まあそれはいいんだけど、イリヤつて聖杯の部分がなくなっても魔術回路メインとサブで合計400本もあったのね…。」

それに私の魔術回路とは別物扱いらしくて投影とは別に、アインツベルンの蓄積してきた魔術が使用可能になったわ。それに今の口調と仕草だけどどうやらイリヤに引か

れ気味らしいのよ」

「なるほどね。それじゃもしかして女性としての知識もあるわけなの？」

「ええ、そうみたいね。でもね、そんな問題は別にいいのよ。それよりもなんでアヴァロンが私の体の中にあるの!? セイバーに返したはずでしょ!」

「ああ、それね。アインツベルンはコーンウォールから発掘したっていうからもしかしたらって思ってた大師父と一緒に調べたらまた発見したのよ」

「なんでよ…」

「あんたの口癖まで女性になっちゃったわね。なんだかお持ち帰りしたくなってきたわ」

ちよ!? いきなり不穏な発言は控えてくれないかな? 本気で怖気が走った!

大師父と橙子さんも一緒に頷かないでください!

「それより士郎、私達のお膳立てはここまでよ。後はあなたの好きなように生きて。でも自分の幸せもちゃんと見つけるのよ?」

「分かってるわ。イリヤの願いだから努力する」

「ならいいわ。それでは大師父、お願いします」

「うむ。それでは衛宮士郎…いや、もうこの名はお主には相応しくない。よって平行世界でお主が女性として生まれてきた場合につけられた“シホ”という名でこれからを

過ぐすんじや。

それと苗字じやが今の容姿で日本名だけではさすがにおかしいから、宝石剣も使用できることじやし特別にシュバインオーグを名乗ることを許そう。

よつて、今からお主の名は『シホ・E・シュバインオーグ』じや。どうじや？ なかなかきまつておると思うが…？」

「シホ・E・シュバインオーグ、か…うん、名前が変わるのはしょうがないけど衛宮が名乗れるなら別に構わないわ。ありがとうございます、大師父」

「よい。しかしお主は発表されてこそいないが立派な『六人目』じや。じやからたまには会いに行つてやるから安心せいよ。我が孫よ」

「はい…」

「それとシホ、忘れ物よ」

遠坂はリュックに私が所持していた聖骸布と私専用の宝石剣を入れて手渡してくれた。

中を見ると他にもいくつもの宝石や硬貨が入っていた。お金にはうるさい遠坂が私のために用意してくれたことに大いに感謝して、

「ありがとうリン、大切に使うね」

笑顔でそう言ったらリン、つて言い方までイリヤになつちやた。とにかくリンが真つ

赤になっちゃった。

「……………シホ、女性の前でもだけど男性の前ではその笑顔はかなり危険よ。まあ、今更言っても無理そうだけどね。」

それと大師父のように簡単にはいけそうにないけどいつか私も七人目になって会いに行つてあげるからそれまで覚悟していなさい」

「うん、その時までまたね」

満足したのかリンは笑顔になった。

そして最後に橙子さんに振り向き、

「橙子さん、あまり面識はありませんけどここまでしてくれてありがとうございます」

「なに、等価は第二魔法の使用の立会いに、お前の元の体だから気にしないでいい。実に興味深いサンプルだからな。」

もともと協会に渡される予定だがその後には宝石翁が手回ししてくれる手はずになっているしな」

「あ、あはは…」

やっぱり橙子さんは生粋の魔術師だけありちゃっかりしているな。

まあそれだけの対価なら安いものね。

それで話もあらかた終わったらしく、

「ではシホ。別の世界でも頑張るんじやぞ。お主の幸せを祈っておる」

「またねシホ。行つた世界でも元気にやりなさい」

「まあ無理はほどほどにな…」

「はい！」

それぞれ饞別の言葉をもらい大師父がかざした七色に輝く宝石剣によって私の視界はシャットアウトした。

第一章 無印編

第一話

『異世界。溶かされる心』

S i d e シホ・E・シュバインオーグ

目を覚ますと私の目に最初に映ったのは知らない天井だった。

まるであの大火災にあつた後、目を覚ましたときの光景に少し似ていた。

だが一つ違うとすれば私にはすっかりとつい先ほどの記憶があるしなによりここは病室というより懐かしい我が家を思い浮かべられる天井だった。

それで私はしばらくブーツとしていたらガラツと襖が開く音がしたのでそちらに向いた。

そしたらそこには大人、子供合わせて5人ほどの人が（おそらく家族だろうか？）私
が起きているのにびっくりしているのか目を大きく見開いていた。

「あ、あの…」

とりあえずなにか話そうと思って口を聞こうとした途端、いきなり喜びの声が一斉に

上がった。

うん、一ついえることは：私はこちらの世界でいきなりなにかをしたのだろうという漠然な感想だった。

それであちらはどうやら私の事が気になっているらしいが何故か話しかけてこない。

それを不思議に思い、少しして私は今ももう「衛宮士郎」の外見ではなくイリヤの体を持った「シホ・E・シュバインオーグ」という少女になっていたのだ。

しかもどうみても私の容姿は外国人。もしかして英語で通じないと思っっているかもしれない。

だから、まずこちらから接触してみることにした。

「あの、私日本語は分かるから大丈夫ですよ？」

すると案の定といった感じで全員からほっと息が出ていた。

「それでなぜ私が寝かされていたのかわからないんですけど、とりあえず助けてくださってありがとうございます」

「えっと、君はなにがあつたのか覚えていないのかい？」

この中でおそらく父親だろう人が最初に話しかけてきたので、

「…はい。あ、紹介が遅れました。私の名前はエミツ………シホ・E・シュバインオーグ………グっていいいます。長いのでシホだけで構いません」

「シホちゃんか。私は高町士郎。この家では父親をしているんだよ」

一瞬、名前が以前の私の名と同じということに驚いたが偶然だと思えば顔には出さずに「士郎さんですか、よろしくお願いします」と応えておいた。

そして続けざまに次は栗色の髪の女性の人が話しかけてきた。

「私の名前は高町桃子よ。よろしくね、シホちゃん。ちなみに私の横にいる男の子と女の子が私の息子の恭也、娘の美由希。最後にシホちゃんと同い年くらいの子がなのはつていうのよ」

「え…桃子さんが母親だったんですか？ てつきり一番上のお姉さんかと思っていたんですけど…」

「あら、嬉しいわ。お世辞でもありがとね」

「いえ、そんな事はないんですけど…」

「そうだぞ。桃子はいつまで経っても昔と変わらないからな」

「うんうん、お母さんは若いよね恭ちゃん？」

「そうだな。なのはもそう思うだろう？」

「うん！」

あ、なんか家族団欒な雰囲気になってしまった。

どうにも話しかけづらい…。

しかしそのことをすぐに察したのか桃子さんが改めて私に話しかけてきた。

「それで、シホちゃん。ちよつと質問してもいいかな？」

「はい。私がわかる範囲でなら…」

「それじゃシホちゃんは どうして森の中で泥だらけで転がっていたのかな？」

「えっ…？」

…森の中？

…泥だらけ？

一体どういうことだろうか？

ここは無難に記憶がないということにしておこう。



S i d e 高町なのは

名前はシホちゃんっていうんだ。

可愛い名前だなあ。

姿もなんかアリサちゃんに似ているけど髪色は煌めくような緋色で目が琥珀色でと

にかく綺麗で…それに名前からして高貴で清楚なお嬢様つて雰囲気がある。

でもどうしてだろう？

この子の目を見てみるととても孤独そうな雰囲気まで感じちゃう。

そしてお母さんが、

「それじゃシホちゃんは どうして森の中で泥だらけで転がっていたのかな？」

「えっ…？」

疑問顔を浮かべたシホちゃんを見た途端、さっきの不安感が増した。

…なにかあつたのかな？

とつても深刻そうな顔をしているけど。

しばらくしてシホちゃんは口を開いて、

「…わかりません。 どうして私は森の中にいたんですか？ どういった感じだったか教

えてくれませんか？」

「うーん…そうだね。 それじゃ質問を変えるけどシホちゃんは…、その、親家族とかはい

るか？」

お父さんがなにか言いくそうにしてそういったけど、私はどうしてかその先が聞き

たいって気持ちは浮かばなかった。

でも時間は止まってくれるわけなくてシホちゃんは現実をそのまま口にしてしまっ

た。

「私の家族は…今はもう誰もいません」

「…ッ！」

やつとわかった。さっきの孤独そうな雰囲気の意味が…

そう思ったときには私はいつの間にか客間を飛び出していた。

みんなの…特にシホちゃんの声が耳に響いてきたけど今はもう耐えられなかった。



Side シホ・E・シユバインオーグ

返答を間違えちゃったわね。

なのはちゃんには少し重い話だったかもしれない。

それでなのはちゃんを追おうと思って立ち上がったのはいいんだけど、どうにも足に力が入らなかつたらしくそのまま前に倒れるところを恭也さんがとつさに助けてくれた。

「あ、ありがとうございます。あれ、でもどうして…」

「その様子だと本当になにも覚えていないみたいだね」

「はい…面目ありません」

「気にしなくたっていいのよ。それでなのはの事なんだけど後で声を掛けてあげて。あの子昔ちよつとあつて感受性が豊かなのよ」

桃子さんがそう言ったのでしかたなく私は頷いた。

でも、なのはちゃんがいなくなってくれたおかげで少し話しやすくなった。

「それで、本当の事を教えてくれませんか？ 私は、本当はただ山で転がっていたわけではないんですよね？ 今の会話でわかったんですがこれはただの疲労だけじゃないと思えます」

「…それはどうしてだい？」

士郎さんが用心深い感じに聞いてくるので一か八か言ってみることにする。

外れていればごまかせば言いし、もし当たっていればそれこそ私も覚悟を決めなくてはいけない。

こんなことに使いたくないけれど、

「私が目覚めた時に桃子さんとなのはちゃんからはなにも感じなかったんですけど…士郎さん、恭也さん、美由希さんからはなにかをしようとする予備動作が常に感じられたからです。」

まるでいつでも私に仕掛ける事ができるような微妙な雰囲気……」

「「!!」」

「えっ……?」

桃子さんは本当に分かっていないみたいね。だとすれば黒は三人……

「美由希……桃子を」

「うん……」

士郎さんの指示で美由希さんがとつきに桃子さんを部屋から逃がそうとしたけど、今この部屋は私の——イリヤの知識だけけど——結界が張られているためそう簡単に抜け出せないだろう。

思ったとおり美由希さんがドアを開けようとしたが開かなくて焦っていた。

「……無駄ですよ。今この部屋には結界を張らせていただきました」

「「!!」」

これで私に対する警戒がより一層深まったけど、そろそろこの雰囲気も変えないと三人が持っている隠し刀に牙を向けられるかもしれない。

「……ふう、安心してください。別にどうこうしようとかは一切考えていません。ただ、なのはちゃんにはあまり聞かせたくない話でしたからちようどよかつたんです」

私は笑みを浮かべながらさつきまで放っていた睨みの圧力を解いた。

途端、四人とも深いため息をついて息を荒くしていた。

「すみません。手荒な真似をしてしまいまして…できれば話を聞いてくれませんか？
そしたら私も話せる限りの事は話しますので」

「それじゃ、君は何者なのかな…？」

「答えてもいいですけど、先に先ほど本当は私がどういう状況だったか教えてくれませんか？」

さて、ここが正念場ね。



S i d e 高町士郎

さて、シホちゃんなんらかの組織のものではないみたいだけどさっきの威圧感を出せるのだから相当修羅場を潜ってきたのだろう。

「結界といったものも私達の理解の範疇外のものだったし…実質今も張られているよ
うだけどね。」

「答えてもいいですけど、先に本当は私がどういう状況だったか教えてくれませんか？」

やっぱりそう簡単に吐いてはくれないようだ。

これは正直に話した方がよさそうだな。

「本当は覚えていないなら覚えていないでそのまま忘れておいてほしかったんだけどね
…実は君は空から降ってきたんだよ」

「降ってきた…?」

「うん。私達はある流派を持っている家だね。

ちようど恭也、美由希と三人とで裏山で修行していたところに、空が急に七色に光りだしてね。

それが収まったと思ったら君が50メートルくらいかな? …それくらいの場所に浮いていて、そのまま一気に落ちてきたんだ。

それでなんとか受け止めようと走ったが間に合わずに君は地面に思いつきり叩きつけられちゃって正直あの時は間に合わなかった…という後悔が頭を過ぎったよ」

「そうだね。私もシホちゃんの惨状を見たときは思わず目を逸らしちゃったから…」

「美由希は俺の胸で思いつきり泣いていたもんな」

「恭ちゃんも凄い顔で硬直していたでしょ!」

「こら、二人ともやめなさい! シホちゃんの話が聞けないでしょ!」

桃子が二人を叱ってすぐに二人は静かになった。

もういいかと思っただらしくシホちゃんまた話を再会してきた。

「それで傷はどんな感じだったんですか…?」

「うん、そうだね。頭部は奇跡的に無事だったんだけど、まず両手足が複雑骨折で私達のツテの病院で見ってもらったところ胸の骨にもかなりひびが入っていて非常に危険な状態だったんだよ」

「自分のことながらよく私無事でしたね…」

「まったくだ…それでかなり危険な状態だったのは確かだった。

だけど、病室で突然窓の外から謎の光が降り注いできて何事かと思っただけですがその光は止んで、再度体を調べてもらったところ外傷どころか中身の骨折すべて治っていたんだよ」

「きつと大師父の仕業かな…?」

「大師父…?」

ここでシホちゃんから興味深い台詞が聞こえてきた。

そしてシホちゃんも「あつ!」という顔になって頬を赤くしていた。

うむ、先ほどもまでの冷静さが嘘のようにうろたえだしたね。まるでなのはみたいだ。



S i d e シホ・E・シユバインオーグ

…失敗したな。大師父のことがつい言葉に出てしまった。

まあ、これくらいならカバーストーリーでどうにかなるかしらね？

私は顔の赤みがまだ抜けていないが、一度咳き込みをしてその場を無かったことにして、

「そうだったんですか。助けてくださってありがとうございます」

「いや、いいんだよ。それに結局は間に合わなかったしね。それでさっきの件もなかったことにしてあげるよ」

「助かります。それじゃ次は私が話しますね。結論から言えば私はこことはまったく違う世界の人間です」

「別世界…？」

「はい。正確には平行世界ともいいますけど…私は元の世界では魔術師というものでした」

「オカルトとかそういう類のもの…？」

「そうですね美由希さん。まあ近からず遠からず、です…。

私の世界の魔術については余計な手間ですので省きますけど、理由は話せませんがとある事情で魔術師達を統括している魔術協会という場所から追われるはめになってしまつて…。

先ほど大師父といった他にも師匠すじにあたる人物達の助けもあつて世界を飛ばされて今現在に至ります」

部屋の中は少しばかり静まり返つたが咳くように士郎さんは話をしだした。

「…どういった事情で追われるようになったんだい？ それを話してもらえないと信用できない」

「父さん!？」

「なんでわざわざ話したくないことを…」

「そうよあなた!」

抗議の声が上がるが私もそれは納得できる節がある。

だから桃子さん達に「大丈夫です、理由も話さないんじや不安ですからね」と言い、わかりました。私はこの世界に来る前は魔術を人助けのために使用していました。

ですが協会は私の必要以上の行動が目についたらしく追われるはめになってしまつたんです。それともう一つは私の魔術が異能だからです。今からそれをお見せしますね」

私は一呼吸置いた後、
トレース・オン
「投影開始」

と、もう言いなれた呪文を唱えて土郎さんが脇に差していた小太刀を投影した。

当然土郎さんは自身が差していたものだど勘違いしたらしく懐を探ったがある事に安堵したと同時に戦慄の表情をしていた。

他の三人も理解したらしく同じような表情をしていた。

「そう、皆さんのお思いの通り私の主に使う魔術はモノの複製を作り出す能力です。

それもほぼ真に迫るほどのものを…そしてそれが協会の興味をそそり私はもし捕まったら実験材料にされていたでしょうね。

もしこんな能力が解明されれば世界に喧嘩できるほどの脅威ともなるでしょうし…だから私は師匠達の勧めもあり世界から姿を消しました。これでいいですか？」

できるだけ無表情でそう言ったが私は内心複雑の極みだった。

イリヤの想いにも気づいてやれずに目先に捕らわれてしまった為にどれだけ悲しませただろうか？

そしてリン、桜、藤ねえ、バゼット、カレン、一成、美綴…他にもたくさんの人たちが何度も私に声を掛けてくれたのに私はそれを振り払ってしまったのか。

………どうして、それらすべてに気づけなかったのだろう。



Side 高町桃子

シホちゃんは無表情で淡々とまるで機械のように最後まで話しきった。

その瞳には感情は見られなかった。

それが私にはとても悲しいものに見えた。

でも………気づいてしまった。

いや、早く気づくべきだったというのかしら。

シホちゃんの拳からはすでにかなりの血が隙間から零れ落ちていると言うことに……。

そして無表情の仮面なのにその瞳からは何度も、そう何度も涙の雫が零れ落ちていた。

気づいた時には私はシホちゃんを両腕で抱きしめていた。

「シホちゃん……もう無理に心を閉じなくていいのよ？ 私達はあなたの事をすべて分かるって言うほど偉くないけど、でも無理しているってことだけは分かるのよ！」

「え………私は無理なんかして「それじゃその涙と手の血はなんなの……？」……え？ あれ、

私……どうして……」

シホちゃん……やっぱり気づいていなかったのね。

そうやっていつも心を殺していかないとやっていけなかったのね。

「泣いていいのよ……？ シホちゃんはもう十分頑張ったからいっぱい泣いてもいいのよ？」

「いえ、私は泣くことなんて出来ないんです……今までも私の全てを救いたって言う我侷な理由で置いてきてしまった人達の為にも……もう、今更気づいても償いすら出来ない」

「それじゃまたやり直せばいいじゃない……？ あなたにはその資格があるのよ？」

「あるんでしょうか……？ こんな、人でなしな私に……」

「あるからあなたの師匠さん達にこの世界に飛ばされてきたんでしょ？」

「あつ………はい、私……大事な親友に……大師父に………義姉に………幸せに、つて………幸せに……う、ぐう………つう……！」

シホちゃんはそれから声を殺しながらも静かに泣き出していた。

それでも、その涙は綺麗なモノだつて私は思えたわ。

「……決めたわ。あなた、それに恭也に美由希。私、この子の……シホちゃんの親になるわ」

「……母さんが決めたんなら俺はなにもいわないよ」

「うん、私も…シホちゃんのお姉ちゃんになってあげたい…」

「桃子…ありがとう。あんなことを聞いてしまった私は桃子のような言葉はきつと言えなかった」

恭也はとても優しい声で、美由希はもうシホちゃん以上に涙を流して、土郎さんは顔を俯かせながらも目じりに涙を浮かべてそう言ってくれた。

「さあ、シホちゃん！ 今日からあなたは私達の家族よ。だからいつでも頼っていいのよ？」

「は、い…ありがとうございます…桃子さん…」

「ダメ。私のことはお母さんって呼んで！」

「お母さん…？」

「そう、お母さん」

「で、でも…私今まで…その、母って言うものを知らなくて、どう接したらいいか、わからないです…だからまだ覚悟が決まってるからでいいですか？」

「うん…いつでもいいわよ。私はそれまで待っているから…」

「はい…」

——…やれやれ、一時はどうなるかと思つたぞ、シホ。だがこれからはお主も幸せというもの知るべきだ。じゃからこれはいい機会といつてもいいかもしれん。

それにしても、この世界には魔法や魔術を使うものは少ないようじゃの？

あの子も今のシホと比べて下位か同等の魔力を秘めておるのに…もつたいないの…

しかし、そうなるとシホはこの世界では神秘をほとんど一人独占できるということかの？

いや、しかし…世界の修正でリミッターがかかつておるかもしれんし、他の力に使われているかもしれん。

まあ、しばらくは放つておいても大丈夫じゃろ。なにかあればアレが反応することだしな。

…ワシ、少し過保護になつたかの？

久しぶりにあの娘に会いに行つてみるか。あつちもあつちで中々苦勞しているようじゃしな。

そうして宝石爺はこの世界から “一時だが” 姿を消した。

第二話

『稽古と料理』

S i d e 高町なのは

高町なのはです。

あの後、少し客間が静かになったから不思議に思った私は勝手に出て行っちゃってちよつと気まずい気持ちになりながらも部屋の中を覗いてみました。

するとシホちゃんがお母さんに抱きつかれて泣き出していました。

何事かと思つたけど、なにかとても温かい気持ちになりました。

だって、お兄ちゃんもお姉ちゃんも涙を流しながらも笑顔を浮かべていてお父さんもなにかあつたか分からないけど何度も頷いている。

そして一緒にシホちゃんと泣いていたお母さんが私に気づいて、

「なのは、いらっしやい。今日からシホちゃんはウチで暮らすことになったのよ。だからしつかりと挨拶をしなくちゃね」

「う、うん…」

私が近づくとシホちゃんはやつと泣き止んだのか顔を赤くしながらもこちらに笑顔
を向けてきてくれた。

だから私は、

「私の名前は高町なのは。これからよろしくねシホちゃん！」

元気を精一杯込めて挨拶しました。

それにシホちゃんはしつかりと「うん、なのはちゃん」と答えてくれた。

でも、シホちゃんはなにか言いづらそうなのか「なのは、って呼んでもいい？」と聞
いてきてくれたので余計私は嬉しくなったので何度も「うん、うん！」と頷きました。

これからシホちゃんも家族に加わってまた楽しくなっていくそうです。

そのことは夜になってからすぐにアリサちゃんとすずかちゃんにシホちゃんの境遇

(なのはには真実は伝えていない)も含めてメールで伝えた。

そしたらすぐに返事が返って来て、

アリサちゃんからは、『へえ、面白そうな子ね。会ってみたいわ』

すずかちゃんからは、『お友達になりたいね』

と、嬉しい言葉がいくつもあつたので何度もメールのやり取りをしちやつた。

そのうちお母さんが学校に通わせなくちゃねと言っていたのでそれがまた楽しみ

一つです。



S i d e シホ・E・シュバインオーグ

…翌日になってわざわざ用意してもらった私の部屋で目を覚ました途端、昨日の事が非常に恥ずかしくなっていました。

中身はもう大の大人だと言うのにあそこまで感情がグチャグチャになってしかも盛大に泣いてしまつて情けない。

やっぱり九歳児という子供の体に精神が引かれてしまつているのだろうか？

…否定できないね。昔の私ならあれくらい耐えられた。

この分だと一年もたない内に本当に子供の精神になつてしまうかも…、という得も知れない気分になつたのでとりあえず精神を落ち着かせる為に瞑想をしぼし…。

「…I a m t h e b o n e o f m y s w o r d .」

そう、体は剣で出来ている。

いつも精神が揺らいだ時にはこの暗示にも似た呪文を唱えていた。

そして次第に気分が休まってくる感覚が分かると一息つき、

「よしー。」

私はもう一度気合を入れて洗ってくれたらしい私が着ていたイリヤのに酷似した服の袖に腕を通す。

まだ女性初心者な為、この手の服装に慣れていないが…イリヤの女性としての知識も体や知識に染み付いていたためなんとなく着る事が出来た。

そして廊下に出るとまだ朝の日が昇ったばかりだと言うのに渡り廊下の方から竹刀だろうか…? の打ち合う音が聞こえてくる。

まるで惹かれるようにそちらに向かうとそこには私にとって懐かしい道場というものがあつた。

勝手に悪いと思つたが中を覗いてみるとなるほど、どうやら土郎さんが恭也さんと美由希さんに稽古をつけているみたいだ。

そういうえば桃子さんとなのは以外は御神という流派を習っているらしい。すると私が覗いている事に気づいた土郎さんが声をかけてきた。

「やあシホちゃん、おはよう。もう体はいいのかい？」

「おはようございます。はい、一晩睡眠を取ったらすっかり疲労も抜けました」

「そうか。それよりどうしてこんな朝早くにこちらに来たんだい？」

「ちよつと物音がして気になって来てしまいました。もしよかつたら隅のほうでいいので使わせてもらつてもいいでしょうか？　ちよつと訳ありで腕が鈍つていないか確かめたいので」

「うん、それくらいなら構わないよ」

「ありがとうございます」

恭也さんと美由希さんにも朝の挨拶をしてから、事情も知られていることだし私は干将・莫耶に似せた木の剣を刃を潰して投影して隅でならす様に少しずつだが動きを開始した。

…むー、やっぱり子供になつたことでリーチが減つたことにより回転が鈍い。

そしてなにより体重が軽くて筋力は最高スペックだけあり平均の子供以上はあるが（中学生平均は越えている）、しかし踏ん張りが利かない。

…これは戦い方を少し変更した方がいいな。

そう、足りないなら補えばいい。この体に合つた戦い方を検索。

重心を慎重にしかし常に変え続け、移動力をそのまま威力に変換。遠心力でもつて速度をさらに倍に、踏み込みを上乘せしろ！

それからしばしこの体になれる為に、さらに元の“私”の型を保ちながらも新たな動きをシミュレーションし、狭い空間の中で如何にどう動くかあらゆる方法を模索する。

しばらくその作業を繰り返していたら気づいたら土郎さんだけでなく恭也さんと美由希さんも私の方をじつと観察するように見ていた。

「…あの、どうしましたか？」

「いや、なに。最初はなぜかぎこちなさがあつただけど刀を振るたびに動きが良く精練されていつている感じでもう今では最初のぎこちなさが嘘のようになくなったから驚いていたんだよ」

「あはは…すみません。まだ慣れていなかったので…。それと稽古を邪魔してしまつてすみません」

「いや、俺は特に構わないよ。御神と違った流派の動きはあまり見た経験がないからいい勉強になったしな」

「うんうん。それにシホちゃん、剣を振るたびに緋色の髪が日の光で銀色に光つていてとっても綺麗だったよ」

「あ、ありがとうございます。でも私のは流派とかは特に無いですし、それにあまり褒められるような動きではありませんから」

「えー？ どうして？ あんなにいい動きをしていたのに…」

「美由希、察してあげなさい。シホちゃんの動きは確かに私もいいものだと思つている。でも見た限りシホちゃんの二刀による攻防一体の剣技は戦場で多数の相手から生き

抜くためだけのように特化されているんだ。

本場を知る私だからこそ分かるものだがな？ シホちゃん、もしかして君はずっと戦場に身をおいていたのかい？」

「ずつと、という訳ではありませんが大体はそうでした」

「…そうか。野暮な話を聞いたね。話はもうこれくらいにして朝食を食べに行こうか。つと、そのまえに美由希とシホちゃんはお風呂に入ってきたきなさい」

「やつぱり士郎さんはすごい…。 たったあれだけで私の戦い方を見抜いてしまうなんて。」

まあそれはいいとして、また美由希さんが泣きながら抱きついてきたのでしばらく落ち着かせるのに苦労した。

お風呂の件に関しては…、特記として体は女の子でも心はまだ男性よりなので見るのも見られるのもとても恥ずかしかったといっておこう。

でも知識のおかげで女性の髪の毛の洗い方もうまく出来たのでよしとしよう。

…ふと、これでいいのか？ という疑問が頭を過ぎったがもうどうしようもないので慣れるしかない諦めた。

ほどなくしてお風呂からあがり美由希さんのお古らしい下着と服を貸してもらいリビングに向かった。

そこではすでに桃子さんが朝食の用意を済ませて待つてくれている様だ。

後風呂の恭也さんも着替えてやってきたので食事を始めようという雰囲気だけど…

「あれ…？ ああ、なのはは？」

「ああ、あの子ね…朝はとつても寝起きが悪いのよ」

美由希さんがすぐに返してくれたのですぐに納得する事が出来た。

そしてタイミングよくなのはが寝巻きのままりリビングに入ってきた。

「おはよー…なの」

「ほら、なのは。早く顔を洗ってきなさい。シホちゃんの前ではしたくないでしょ？」

「シホちゃん…？ あー！」

寝ぼけ眼から一気に血が巡ったらしく眼を見開いてまるで猫のような悲鳴を上げながらなのは洗面所まで向かっていった。

どうやら相当恥ずかしかったらしい…。

しばらくして制服に着替えたなのは頬を赤くしながら、「お、おはようシホちゃん…」と微妙に照れを出して挨拶してきたので、

「ふふ…おはよう、なのは。慌てなくても大丈夫よ。まだ時間は十分あるから」

「ううう………恥ずかしいよお。でもシホちゃんってそういう喋り方もできるんだね」
「うん、まあこれが地なのかな？ 正直気にしたことなかったわ（引つ張られてしまうんだからしょうがないし…）」

私は内心で愚痴りながらも表情には出さずになのはに食事を促した。

しばらくしてまたなのはが「うにやあああ!?!」という奇声を上げ「遅刻だあー!」と
いつて桃子さんからお弁当を即座に受け取りリュックをしょって家を出て行った。

「なのはって落ち着きが無いんですね」

「まあそれがあの子の可愛いところでもあるんだけどな」

「そうですか。なのはの事大切にしてるんですね…」

「それは自慢の娘だからね。当然シホちゃんの事も大切に思っているよ」

「うツ…!?!」

ま、まさかそう切り返してくるとは思わなかったわ。

周りを見れば桃子さん達もうんうんと頷いていて恥ずかしい気持ちになった。

その後、美由希さんに盛大に抱きしめられながらも学校の時間らしく恭也さん達を送った後、暇な時間が出来てしまいどうしようかと考え込んでいたら桃子さんが突然学校の話題を持ってきてくれた。

「シホちゃんって学校とかはいったことはあるの?」

「いえ、ですが独学ですけど高卒くらい知識は持っていると思います」

高校時代は聖杯戦争後にリンに魔術とともにこっぴどく（ミスをしたらガンドとかガンドとか中国拳法とか…！）鍛えられて主席に近い成績で卒業した。

そして世界中を旅して語学に関して特に関題ない。

歴史なんてものはなおさら私の魔術には必要不可欠なもので心配ない。

体力に関しても今朝動かしてみたけど素体はイリヤだが、封印指定の最高の人形師・青崎橙子謹製の作品（アヴァロン込み）でハイスペックボディーらしく全然疲れは感じなかった。

なにより主に錬金の家系であるアインツベルンのイリヤの知識があるので数式なんて簡単。

今なら某アトラスの錬金術師…またの名を『有線式サトリ』に、吸血鬼解呪という無理難題っぽい内容を私の魔術が有効利用できるかもしれないという理由で固有結界を何度も発動させて隅々まで調べ上げられ、その等価交換として教えてもらったエーテライトと分割思考も前以上に使いこなせるかも…。

こう、糸で形だけ人の人形を作るくらいの事が…あ、知識にそんなのがあった…。

………落ち着け、思考が逸脱している。カット！ カット！ カット！！

…とにかく学校なんぞに行かなくても大丈夫…なんて、口が割れても言えるわけな

い。

後ろめたさを感じながらも妥当くらいの無難な返答をすると、桃子さんはニコツと笑顔を向けて、

「それじゃ今週の日曜なんだけどなのはも通っている私立聖祥大付属小学校って場所に転入試験を受けにいつてもらってもいいかしら？」

「はい？ え、私立ですか!? なにもそこまでして頂かなくても…！ 私は公立でも十分…」

「遠慮しないの。もう家族なんだから素直に受け取って」

母親というものは偉大なのだろうか。結局四の五の言う前に説得されてしまった。

それで昔懐かしドリルというものをいくつも渡され、桃子さんはというとそれはとてもいい笑顔だった。

その後には私の服その他も購入してくれるといったがさすがにそこまで迷惑かけたくなかった。

なのでリュック（落ちた衝撃で中身の宝石剣が壊れていないか心配だったが、すべて大丈夫だった）の中に入っていた魔力の宿った宝石を数十個残して午前中に桃子さんと一緒に換金してもらいそれで買うことになった。

…ちなみに換金したお金の量はリンとは思えないほどの振る舞いだったと記載する

(…もしかしたらウツカリで入れ過ぎたのかもしれない)。

なのでしつかりと通帳を作ってもらい貯金した。……——後でいきなり現れて『倍にして返しなさい!』と言われぬか私は不安で仕方がない。

その他にも保健所でさすがに苗字は違うが高町の施設からの養子(どこでそんな話を作ったのかは分からないが、後が怖いので聞けない…)として登録してもらい、午前中の内に服装その他を購入した。

女性の服装関係(主に子供用専門の服装専門店やランジェリーショップ)は私にはまだ理解の及ばない異界の場所だったので桃子さんに頼んで似合うらしい服をいくつか見繕ってもらった。

それだけで一日はあつという間に過ぎてしまい、でも桃子さんとても楽しそうだったので私もつい頬を緩ませた。

そして最後に高町家族が営業しているという『翠屋』という喫茶店に入れてもらうとそこには士郎さんをはじめ、恭也さんや美由希さんも働いていた。

どうやら主に家族を中心に切り盛りしているらしい。

「あ、シホちゃん。そんなに荷物を持って大丈夫?」

「はい。これでも力仕事には自信がありますので」

「それじゃ奥においてきていいぞ。折角初めての来店なんだしご馳走するよ」

士郎さんがそう言ってきたので折角だしご馳走になることにした。

そして夕食前だということで出された軽めのお茶菓子を口に含んだ瞬間、なにか…この奥から湧き上がってくるものがきた。

なんて表現したらいいのかわからないが、とにかく稲妻が私の体を貫通した。今もなお体が痺れている感覚に襲われる。

…思えば朝の朝食の時もこの感覚はあった。

目の前に出された数々の食事達。

いい具合に焦げ目を出して美味しそうなトーストに、自家製のジャム。

新鮮な野菜をこれでもかといわんばかりに一つのお皿にそれぞれ自己主張されずに均等に並べるその手際。多種多様のドレッシング。

スクランブルエッグは特に格別だったと言わざるを得ない。

食後の紅茶もかなり心を落ち着かせてくれた。

洋食に関しては桜に譲っていたが桃子さんは桜以上…いや、もしかしたらかなりの上位者かもしれない。

私の料理魂が大いに揺さぶられる。

なによりこのお菓子。これも実は桃子さん謹製オリジナルらしい…。口に含んだ瞬間に芳醇な香りや味とともに気分も幸せになる錯覚さえする。

「とてもおいしい…」

自然に私はそう呟いていた。



士郎はシホがお菓子を一つ一つ丁寧に食べては笑顔を浮かべている姿に思わず目を向けていた。

(…いや、これは参った。まさかここまでシホちゃんが呆然としてしまうなんて。

桃子はシホちゃんの嘘偽りない発言にとっても嬉しそうだった。

気づけば私もシホちゃんのあまりの笑顔に目を奪われていたらしい…。

それに気づいて冷静に店内を見回してみるとまだ残っていたお客さんどころか恭也や美由希まで手を止めて見とれていた。

もともと異国の容姿で目立つ存在だからそんな笑顔を出したら余計に見とれてしまうのだらう…)

…将来はとても美人になるのだろうと、物思いに耽る士郎であった。

今日の営業が終了して家族一同で高町宅に帰っている途中にシホが口を開いて、

「あの…桃子さん。もしよかつたらでいいんですけど、今度夜にでも私に食事を作らせてもらってもいいでしょうか？ なにからなにまでしてもらって何も返せないのもイヤですから」

「いいわよ？ それじゃ今度一緒に作りましょう」

「はい。それと私に桃子さんの料理の調理法を教えてくださいませんか？ 今まであんなに

おいしい料理は食べたこともないし、私もあそこまでのものを作った事が無いので」

「ええ、いいわ。でもウチの秘伝だからそう簡単には教えないわよ？」

「承知しています。だから今は目標だけにしておきます。だからご教授お願いします」

シホはゆつくりと両手をスカートに合わせて添えてお辞儀をした。

その光景を見ていた美由希はというと、

「…もしかして、シホちゃんって料理も相当できちゃったりしちゃうのかな？」

「そのようだな。あれはただ美味しいというだけでなく桃子の腕に驚いたというものが

含まれていた」

「うう……これじゃ私もうかうかしていられないよお……」

美由希が黄昏ていたのを恭也がなんとか慰めていた。

そして家に到着してなのはも合流し、その日に桃子はすぐにでもシホの腕前が知りた
いらしくシホは外見とは裏腹に和食を作った。

中身は衛宮士郎なのだからしょうがないことなのだがそのギャップでとても喜んで
もらってシホはまた笑顔を浮かべた。

その笑顔についつい和む桃子と男性陣だがなのはと美由希はシホのあまりの料理の
腕に撃沈した。

なのは曰く、「お母さんの次に美味しいよ……」

美由希曰く、「いけない……! このままじゃ私置いてかれちゃう!」

と、後日桃子に語ったと言う。

とうの桃子はというと、シホの料理になにかを感じたらしく「おみそれしました」と
いつて笑顔を浮かべていた。

シホも返すように「桃子さんに比べればまだまだです」といった会話をしていた。
とりあえず士郎は恭也に撃沈した二人を慰めておくと伝えた。

第三話

『自身の現状と車椅子の

少女との出会い』

Side シホ・E・シュバインオーグ

週末の日曜日に桃子さんの付き添いで聖祥に転入試験を受けに入った。

それは別にもう説得されてしまったので構わないのだけれど…。

桃子さん、あなたはこの短期間でどうやって一週間もせずに私の事を紹介したの
でしょうか？

…なにか怖い答えが聞けそうなので黙っていることにした。

「それじゃ、私はシホちゃんが試験を受けている間にちよつと用があるからはずさせて
もらうわね。お昼前には終わる予定だからそれまでには帰ってくるわ」

「わかりました」

そういつて私と桃子さんは別れた。

ちなみに今日、なのは『月村すずか』という友達の家でもう一人の友達という『アリサ・バニングス』という友達と三人でお楽しみとのこと。

後に紹介してくれるそうだ。

女性の友達というものはもちろん、男性時の友達も少なかった私にとつては実に楽しみである。

そんな懐かしくも浮かれた気持ちながら順に出されていく筆記試験を終え、試験官の先生も驚く中、転入試験はあつという間に終了した。

：いや、なんていうかさすが小学三年生のテストといったところである。

テスト用紙をすべて目を通した瞬間、答えがすぐに解かってしまい楽に終わらす事が出来た。

あまり目立ちたくないでそこそこ悩む素振りをいれながらやつといた。

その後に面接などもあったが差し違い問題がない程度に受け答えをして終了し、「ありがとうございました」と言つて、教室の外に出ると桃子さんが待つていてくれた。

それからは桃子さんと一緒に今日の夕食などはどうするかなど他愛のない話をしながらスーパーに寄つてお買い物をしたりして家に帰つた。

「そういうえば桃子さん。私が試験を受けている間、どこに行っていたんですか？ お買い物をする前からなにか手荷物を持っていましたけど…」

私はお買い物袋をキッチンスペースまで持っていき、それを下ろしながら聞いてみた。

すると桃子さんは楽しそうに、

「ふふふ…これよ。じゃーん！ シホちゃんの聖祥の制服その他のセットよ！」

「えい!? もう買っちゃったんですか！」

「ええ。通い始めは合格通知が来ていないからまだだけど着慣れておいたほうがいいですよ？」

「桃子さん…ありがとうございます！」

私は思わず桃子さんに抱きついてしまった。

…今思い返すと結構恥ずかしいことをしているな、と自覚してしまうのだが、こう本能的？

そういった衝動が勝手に体を動かしている。

今はもう私の体なのに振り回されているなあ…。

イリヤも母親のアイリスフィールという人に甘えていたのだろうか…？

ともかく、そんな事をしてしまったので余計桃子さんの母性を刺激してしまったらし

く逆に思いつきり抱きしめられてしまった。

…大師父、リン、私はもう…もとの振る舞いはできないのでしょうか？

一途の不安が過ぎて仕方ありません。



…それから、一週間も経たないうちに高町家に一通の手紙がやってきた。

そこには正式にシホの聖祥大付属小学校合格通知の紙が入っていた。

なのはは、まるで自分の事のように喜んで「一緒にクラスになれたらいいね！」とシホの手を握ってきたので、シホも「そうね」と嬉しそうに返していた。

この数日間でシホは同年（外見上だが）のなのはと本当の姉妹のように仲良くなっていた。

特にアリサ・バニングスと月村すずかとの対面時に、

「私はシホ・E・シュバインオーグ。長いからシホだけで結構よ。これからよろしくね。アリサにすずか」

と、普通に自己紹介と挨拶をしたのだが、なぜか二人はシホの眩しい笑顔に当てられて顔を赤くした。

それに疑問顔のシホだが、なのはは「うんうん」と頷いていた。

それからシホは二人：いや三人に色々聞かれたが特に支障ない程度に受け応えをした。

そして三人からは『友達の証』といって桃子さんの了承を得て携帯を皆と一緒に選んで購入した。

そしてシホを入れて四人は友達記念日というお題目で四人で一緒に写真を撮ってもらった。

シホの携帯の画面は今その映像が納められている。

…それと、この数日の間にシホはあることに気づいた。

最初は自身の事で精一杯だったのだが、いざ慣れてきて周りを観察できるようになると、なのはの魔力量が異常なほどあることに気づく。

本人はそれに気づいていないようで当然制御も出来ているわけでもないのにシホと違い魔力が駄々漏れ状態だったのだが…。

この世界はそういった者を取り締まる機関というものがないらしく、シホも害がないなら大丈夫かと一応心に留めておきながらも見送った。

(…っというか、なのはの歳でこの魔力量…私の世界ならまず最高クラスの魔術師になれるでしょうけど、体を触れる機会を伺って調べてみたけどなのはの体には魔術回路が一切ない。

でも、それとは別ににか小さいけど大量の魔力が凝縮されているみたいな核みたいなものがあるみたいね…?)

ちなみに自身にもその核みたいなものがあつた事にシホは大いにびつくりした。

大きさはなのはより少し大きいらしい。

魔術回路とはまったく別の魔力の核がいつの間にか自身の中にある事に驚きはしたが、世界の修正の影響だろうと自己完結することにした。

それにシホ自身、魔術回路とは違いこの名称不明の核をどう使うのか理解が及んでいないので、魔術を使うのに支障をきたさないのなら別にいいかと思っていた。

次に魔術方面だが、強化に投影、それにイリヤの魔術もだが、シホは前…つまり元の世界より負担が異常に軽いと率直に思った。

それは、蒼崎橙子がこの体を作る際に負担を軽くするように設計して作ったのか？はたまた神秘を理解するものが極端に少ないのか？

…シホは前者も多少なりとあるだろうが、おそらく後者だろうと目星をつけた。

理由は色々在るが、なにかしらの機関があればやはり、なのは並の魔力の持ち主を普

通にのさばらせておく訳がないだろうと感じたからだ。

そして最大の理由は自身の投影である。

投影自体も魔力を喰う訳だがやはり負担は軽く、さすがにE XやA ++ランクは固有境界を発動させるか、あるいはかなり無茶をしない限りは無理だろうが…それ以下なら以前よりも軽く投影できる。

さすがに真名開放ともなると負担は変わらないみたいだがそれでも前以上に破格だ。

そして最後に、

（宝具級の投影品をいくつか投影してみたけど、ランクが殆ど劣化していない…。つまりこの世界では私の贋作も本物と変わらない性能を誇ることになる。ここまで来ると本当に異常ここに極まれり、ね…）

シホは少し不安になったので聖祥大付属小学校に通い始めるまでの間、昼間は図書館に向かい元の世界と相違はないか色々調べ始めた。

それでわかったことは、歴史関係についてはほとんど変わりはない…。

そして、冬木という町が存在していた事に安堵して一度行ってみたいと思っていた。

ただし、あの大火災のような大きな出来事がなかったみたいらしく、シホは壊れていないこの世界の自身はどう生きているのか興味を抱いた。

それからその図書館で車椅子の同い年の少女（この子もかなりの魔力を持っている：とシホは思った）と偶然知り合うことになった。

その少女の名前は『八神はやて』という言葉のなまりが関西弁口調の女の子で、なのは達が届ってくるまでの時間はよく図書館で話す仲になった。

それではやても携帯を持っていたので電話番号とアドレスを交換して友達になった。そして日には過ぎていき、

シホははやてに、

「ごめんね、はやて。私、もう少ししたら学校に通わなきゃいけないから会う機会が減っちゃうかもしれないのよ」

「そうなんか…寂しくなるわ」

そう言うとはやては少し寂しそうな顔になったけど、シホはすぐにそれを察して、

「でもたまには顔を見せるね！ メールもするわ！ もう会えないって訳じゃないんだから心配しないで、はやて…」

「うん、ありがとな。シホちゃん、その時はまた色々お話聞かせてな？」

「うん。約束するわ」

指きりをしてシホとはやては別れた。

そう遠くない未来にまた再会することも知らずに…。

そして、とうとう明日からシホの聖祥入学初日である。

これからシホの介入によって本来の歴史からどう変動するかは…誰にもわからない。
もしわかるとするならばそれは宝石翁ぐらいだろう…。

第四話

『シホの転校初日』

S i d e 高町なのは

今日からシホちゃんが私達の学校と一緒に通うことになりました。

それで昨晩はあまり寝れなかったけど今朝はとも早起きできました。

…なにかよく分からない夢を見たけど、よく思い出せないからたいした事じゃないのかな…？

それよりシホちゃんは起きてるかな？ と思い一回ノックをした後に返事がなかったの、一言「シホちゃん、入るね？」と言って中に入りました。

でも、シホちゃんは既に起きていたらしく布団は畳まれていました。

お母さんがベッドを買ってあげるわ、と提案してたけど、どうしてかシホちゃんはお布団の方がいらしくて結局お布団を購入したそうです。

後、部屋を見回してみたけど最初の頃は殺風景だったんだけど、今では勉強机やなに

に使うのかわからないけど柵に綺麗な宝石がいくつか並んでいた。

その中でも一番目立つのがなにか銀の宝石が棒状になっていて剣の柄がついている
見ているだけでも不思議な形を取っている宝石(？)…。

シホちゃんはこれが一番大切なものだと言っていた。

：そういえば、シホちゃんってこれ以外にも首飾りにいつも赤いルビーの宝石のペン
ダントをかけているっけ？

なんでも大切な友達から貰ったお守りだそうなの…。

シホちゃんは「今はもう会えないけどね」と言っていたけど、その時は嬉しい顔を
していたので多分心配はないと私は感じた。

そしてなによりライオンのお人形が部屋の片隅に置いてあるのがなんとなくシホ
ちゃんらしいなあ…って思った。

…とつとつ、そうだ。シホちゃんの部屋を観察しに来たんじゃなくてどこにいるのか
探さなくちゃ。

でも、大体目星はついているんだけどね。

シホちゃんは大人しそうに見えて意外に武芸に長けている。

それでよくお兄ちゃん達と朝の稽古をしている事は知っていた。
だからすぐに道場に向かった。

それで道場の玄関をあけて中に入ろうとしたけど…。

中がとても静かかどうしたんだろう？と思つてそつと扉を開けて覗いてみた。

そしたら道場の中では審判をしているらしいお姉ちゃんが見守る中、お兄ちゃんとシホちゃんがお互いに二本の竹刀を持つて向き合っていました。

「…それでは、稽古の最後にお手合わせお願いします。恭也さん？」

「いいだろう。毎回引き分けだったから俺もそろそろ勝ち星をもらいたいところだからな」

知らずのうちに私も手に汗を掻いているのを自覚しながらもシホちゃん達の事を見守っていた。

そして緊張が渦巻く中でお姉ちゃんの「始め！」という言葉に先に動いたのはお兄ちゃん。

シホちゃんはお兄ちゃんの振り下ろしからの攻撃を片方の竹刀で受け止め、でもあえて反撃はせずにもう片方から迫ってくる竹刀をまた受け止めた。

そして今度はシホちゃんがカウンターとして一本でお兄ちゃんの両方の竹刀をまとめながらも片方で打ち込む。

その攻防はとてすごいものだった。

…私にはたったそれだけだったのにまるでほんの一瞬の出来事のように思えた。

それから少ししてシホちゃんの態勢が崩れてきたように見えて、お兄ちゃんはそこに付け入り打ち込んできて…。

それでお仕舞いかなと思つた矢先、シホちゃんはなんなくそれを受け止めて反撃をした。

「やはり、いつもながらシホちゃんは隙の作り方がうまいな。俺の攻撃の先の先をも計算して自然に誘導して限定して打ち込ませられる手際は頭では分かっているも止める事が出来ない」

「ですが攻撃を一度も当てさせてくれない恭也さんの技量も凄いものだと思います。ずいぶん昔から鍛錬を続けてきた証ですね。ハッ！」

「それはシホちゃんにも言える事だよ！ ヤッ！」

お兄ちゃんとシホちゃんはまるでダンスでも踊っているかのようにお互いの竹刀をぶつけあっている。

しかしそこでお姉ちゃんの「はい、そこまで！」というタイムアップの言葉で二人は竹刀を納めてお互いに挨拶をして今日の稽古は終了した。

そこでようやくみんなは私に気づいたらしく、

「なのは、おはよう」

「ああ。なのは、おはよー」

「おはよう、なのは。今日は早かったのね」

三者三様で朝の挨拶をしてきてくれたので私も「おはよー」と言つてタオルを用意しておいたので三人に渡した。

先をお兄ちゃんとお姉ちゃんが歩いていく中、私はシホちゃんと一緒に話をしていった。

「シホちゃん、すごいね。お兄ちゃんつてかなり強いのに互角に打ち合っているなんて」「そんな事はないわ。恭也さんはあれでも手加減していてくれるのよ？　本気を出されたら私も手を出し尽くさなきゃ勝てないと思うし……」

最近シホちゃんはお兄ちゃんの事を「あの人はきつと人以上の存在ね……」と呟いている節があるけど、本当にそうかもしれないと私も思いはじめてきた。

それはともかく、シホちゃんもお姉ちゃんと一緒に風呂に入るそうだからきつとお母さんとお父さんはリビングで待っているのだから制服に着替えてからその旨をお母さん達に伝えた。

(※) もうシホは美由希と一緒に風呂に入ることは日課になってしまっているので動じていない。

女性としての意識・喋り・仕草などは既にイリヤに近いものがある。

シホ自身も「男性体である衛宮士郎」としての自分は既に過ぎ去りし前世のよ

うなものとして、

今はもう “女性体であるシホ・E・シュバインオーグ” が現在の自分を形成する一つの要因として割り切っている。

自身はもう男性ではなく女性であるという自己暗示も完璧に施した。

だがまだ根本的に衛宮士郎としての男性のプライドは残っているらしく、入浴時に美由希の体はあまり見ないようにしている。

たまに桃子も乱入してくるので尚更である。

そして見るのも恥ずかしいが、同時に見られるのにも抵抗があるらしくお風呂に浸かる以外はタオルを巻いているのが基本であったりする。

シホ自身は気づいていないが美由希視点では、いつもお風呂入浴時には普段の凛々しい態度はなりを潜めて顔を赤くし小声にもなっている。

よってシホの普段見せない可愛らしい反応を見るのは美由希にとって唯一の楽しみというのは公然の秘密となっている。）



Side シホ・E・シュバインオーグ

今日は転入初日だということで、なのは達はバスで先に学校に向かつていった。

その際、見送りをしたんだけど…なんていうか、なのは、アリサ、すずか以外の生徒は私が聖祥の制服を来ている事に気になったのか質問が殺到していた。

バス内から「にやあああー!!?」と、なんとも間抜けな悲鳴が聞こえてきたのは聞かなかったことにしようと思う。

それでまた桃子さんの車に乗って聖祥まで送ってもらった。

送ってもらって桃子さんが帰り際に、

「それじゃシホちゃん、頑張ってきてね。学校に通った事がないっていうシホちゃんは分からないかもしれないけど、学校ってとっても楽しいところなんだから。

だから無理に緊張しないで自然に慣れて行けばいいのよ?」

なにかあつたらすぐになのはに相談するのよ。きつと助けになつてくれるから…」

桃子さんのその心遣いが嬉しいと同時に、やっぱり嘘の内容は結構心に響くなど思
い、でも感謝の気持ちを含めて、

「はい。頑張ってきます」



シホはその後、待つていたらしい先生に職員室に案内され、校舎内を案内されながらも目的の教室の前までやってきた。

「それじゃ呼ばれるまでここで待つていてね。高町さん達も同じクラスだから安心していいわよ」

「はい、ありがとうございます」

それだけ伝えて先生は教室に入つていった。

実質シホ——土郎——は一度冬木の大火災で通う学校を無くした身なので転校というのは初めてではないのだが、だが少しばかり緊張してしまうのはやはりしかたがないことである。

昔の事を思い出して心を落ち着かせている間に教室内から、

「それではシュバインオーグさん。入つてきてください」

「はい」

シホが教室に入つてきた瞬間、さつきまで多少騒がしかった生徒達は一齐に静かになつた。

それは当然かもしれない。

顔立ちは明らかに日系ではないし、肌もイリヤ譲りでとても白く、髪に關しては日の

当たり具合で銀にも朱色にも輝き煌めく緋色。

そして腰まで伸ばされているロングヘアで、名前からしても如何にもどこかのお嬢様といった雰囲気がある。

このクラスには同じような容姿のアリサ・バニングスもいるがそれとはまた違った印象を抱かせる。

さらに琥珀色の瞳がより一層神秘的なものを体现している。

「私の名前はシホ・E・シユバインオーグといいます。皆さん、これからよろしくお願ひします」

なにより自己紹介をした後にシホはできるだけ笑顔を浮かべたが：それがまずかったのかクラス中の男女問わず虜にしてしまっていた。

初めての生徒達もそうだが、その笑顔をもう既に何度も見ているのは達でさえ顔を赤らめていたのが印象的だ。

だがやはり、本質は衛宮士郎：某直死の死神ほどではないが、いくども鈍感と言われてきたために今回もその事に気づかず首を傾げて「？」の顔をしていた。

その表情にさらに撃沈した生徒多数。

(…ステータスに女性殺しの笑みに加え、男性殺しの笑みが追加更新されました。)

……なにか変な囁きが聞こえてきたがシホは寒気がしたので聞こえなかったことにした。

そして一時の静寂……だがそれは先生の「シュバインオーグさんも困っていますから……」という一言に一同は正気を取り戻し、仕切りなおしとも言いが、みんなして「よろしくー!」と歓迎されてシホは頬を緩ませた。

その後、HRも終わり休み時間になってやはりというべきか色々質問されていた。

「ここに来る前に住んでいたところはどこなの?」

「ドイツよ」

「この髪って地毛なの?」

「ええ。だから目立って仕方がなかったわ」

「趣味はなにかあるの?」

「うーん、そうね?…武道に家事、後は物の修理とかかな」

シホは律儀に受け応えをしてみたが止まることのない質問の嵐にさすがに参ってきいていた。

「ほらほら! みんな、シュバインオーグさんも質問続いで疲れているみたいだからここらで一旦止めておきましょう」

そこにアリサがシホに助け舟を出してくれた。

シホは助かった…とほっと息をついて、

「アリサ、ありがとう…」

「いいわよシホ、このくらい。あたし達の仲じゃない？」

「…バニングスさんってシユバインオグさんと知り合いだったの？」

「ええ。っていつてもつい最近知り合ったばかりなんだけどね」

「にやはは。シホちゃんは今はちよつとした事情でウチの家族なんだよ」

アリサに続いてなのはもそう言ったが、その瞬間クラス中が騒ぎ出した。

それで結局昼休みまでその話題が持ちきりとなりシホ、なのは、アリサ、すずかの四人は早々に屋上に避難した。

「シホちゃんも当分は大変そうだね」

「そうね。シホったら猫被りする性格じゃないからきつとモテルわね」

「うん。私もシホちゃんはとつても綺麗だと思うし」

すずかは本当に心配そうに、アリサはいいライバル感覚的に、なのはは素直な言葉をそれぞれシホに言った。

だがどうのシホは少し悩む仕草をして、

「うーん…でもやっぱ私としてはあまり目立ちたくなかったのよね…」

「諦めなさい。人当たりのいいシホが嫌われることなんてないと思うし…。」

それより、今日の授業で将来の夢って言うものがあつたじゃない？ シホって将来はなにになろうと思つているのよ？」

「将来の夢、ね…。今は特に決まつていないわ。それに私の過去は色々とごたごただからまだゆつくりと考えていこうと思つている。」

でも…しいていうなら、また人助けの仕事につきたいかな？

ほら、私つて物心ついた時から今は亡くなつた育ての父親の手伝いをしていたつて話をしたでしょ？

でも昔の私は向こう見ずで前に進むことだけしか考えてなくて、それに他人のことばかりを優先して自身の事はほとんど蔑ろにしていた。

それでよく周りの皆に迷惑をかけてばっかだった。

そしてそれを本当の意味で気づかされた時には後悔ばかり…。

それでここ海鳴に来る前に、今はもう会えるか分からない私の保護者みたいな人達に『人助けもいいけどまずは自分の幸せも考えなさい』と言われたのよ。

だから今は自身にとつての幸せとはなにか？

…つていうのを明確にしたいつてところね。

……ごめんね、なんか辛気臭い話になっちゃって……」

シホは先ほどまでの雰囲気や笑顔で振り払ってみたけど、どうやら三人にはとても重要な話に聞こえたらしく、なのはとすずかには優しく抱きつかれ、アリサも目に涙を溜めながら、

「そっか。それじゃせつかく友達になつたんだしあたし達もシホの「幸せ」って奴を探してあげようじゃないの」

といつて手を差し出してきたので、シホも嬉しくなつて、「ありがとう、アリサ」といって握手をした。

なのはとすずかも便乗して握手をしてくれたのでシホは、それはとても極上の笑顔をした為に、なのは達以外にも屋上で食事を取っていた生徒達がちらちらとこちらを伺っていたのは、まあ些細なことである。

……ちなみにこの聖祥にはなのは達のファンクラブが密かに存在しているらしいが、シホのファンクラブもたった一日で立ち上がったことをシホはもちろん、なのは達も知らなかった。

そしてシホはもうほぼ完全に女性として振舞いだしていた。

その後、今度はアリサはなのはの将来のことを聞いたが「自分には特に取り得もない」という発言に小さい喧嘩（一方的？）が起きたが些細なことなので割愛する。

午後の授業もどこおりなく消化してその帰り道、アリスの提案で一同は裏道を通って帰ろうと言うことになった。

しかし…シホはこの裏道にはなにかあると直感した。

(この感じは…魔力の気配? でも、どこか弱々しい…)

シホはこの体になったことで魔力探知も敏感になっていたのですぐ気づいた。

でも手がかりがつかめない以上、下手に行動してもいい事はないので静観することにした。

そしてなのにも魔力を持っているためになにかを感じ取ったのか立ち止まった。

《…助けて…》

《私達を…》

「!? (頭に直接の語りかけ! 思念通話!?)」

シホがそう判断した時には、なのにも聞こえてしまっていた為に先に走り出してしまった。

「なののは!?!」

「なののはちゃん!?!」

アリサとすずかの呼び止めの声にも反応せずになのはどこかへと走り去っていった。

(くっ！ まさかなのはも持ち前の勘で気づいてしまったの!?)

焦りを浮かべながらシホは魔術回路を密かに開き、そして魔術師としての顔を表に出してなのはの後を追った。

後ろからアリサの「はやっ!? ちょ、シホも!?’という声が聞こえたが今は無視。

もし、この何者か達の声が囁か何かなのだとしたらなのはの身に危険が迫るかもしれない。

いざという時には投影で撃退した後、三人には悪いがこの場の記憶を消させてもらう事をシホは最悪の場合考えていた。

しかし、なのはが立ち止まった場所には確かに魔力の痕跡は残っているが、そこには二匹のフェレットが傷だらけで横たわっていた。

(魔力を持っている動物…? 使い魔かなにかの類?)

シホはその二匹のフェレットに念話で話しかけようとしたが、なにもわかっていない三人によって遮られてしまい二匹も力尽きたのか気絶してしまった。

とりあえずなのは達は動物病院に連れて行くことにしたが、シホはなにか良くないことが起きる前兆かもしれないと…そう感じた。

第五話

『なのは、魔法少女にな

る』

Side シホ・E・シュバインオーグ

とりあえず二匹のフェレットは動物病院に預けて先生が診断した結果、傷も酷いが衰弱が主な原因だといった。

そして治療も終わり二匹のうちの一匹が目を覚まして周りを見回している。

もしかしたら警戒されているかもしれないけど、何度か私達の顔を見比べて、そしてなのはの方をそのつぶらな瞳でじっと見つめ出した。

(…もしかして、なのはの魔力に反応しているのかしら…？ 今の私は魔術回路を閉じて、どういふものか分からないけど魔力のコアみたいな核から流れる魔力も外に漏れないように礼装をつけて防いでいるし…)

しばらくなのはの方を見ていたフェレットはなのはが指を近づけた所、舐められたのでなのははとても喜んでいた。

だがすぐに気絶してしまったようだ。

それで今日は病院で様子見として経過を見て後日どうするか決めることになった。

なのは達三人は私と違いこれから塾なので、私はもうしばらく様子を見ていていつて三人を塾に行かせた。

先生も少しならまだ閉めないからいいと言ってくれたのでよしとする。

「さてと…」

私は一度先生がこちらに來ないかを確認後、人払いの結界を構築した。

それで先ほどまた気絶してしまったフェレットが反応するかと思った。

けど、そちらは無理に体を動かしたせいで体力を消耗していたらしく寝ているままだったが、代わりに怪我が酷い方の白いバンダナを首に巻いているフェレットが反応を示した。

《あなたは…もしかして“魔導師”の人なのですか…？ 先ほどまで全然魔力を感じな

かったのに、急に膨大な魔力が溢れたと思ったたら小規模な結界がはられましたから…》

《やっぱり思念通話ね…。でも“魔導師”？ “魔術師”ではないの？…》

《魔術師？ 私は聞いた事がありません。もしかしたらこの世界の魔力を扱う人の事を

魔術師というのですか？…》

《うーん…そうですね。今はうまく説明できないからお互いの詳しい事情は後ほどお話しま

しよう？ とりあえず今人払いはしてあるから生の声で会話しても平気よ」

一瞬、目を見張るフェレットだけどすぐに理解したらしい。

「わかりました…」

「それよりあなた達は使い魔かなにかの類なの…？ 思念通話に魔力、それに人語…あきらかに普通の動物ではないわね？」

「はい。この姿はとある事故で、隣で寝ている私の双子の兄の“ユーノ・スクライア”と…私こと“フィアット・スクライア”は多大な魔力の消費で回復の為に仮の姿としてこの姿をとっているだけであなた達と同じ人間です」

「どうしてその姿を取らざるえないほどの魔力消費と傷を負ったのかしら？ もしかしてこの町になにかよからぬモノがうろついているとでも言うの？」

「あなた…とても鋭いんですね。はい、まあ…これも後ほどゆつくりとお話したいと思います。ところで…あなたのお名前はなんていうんですか？」

「あ…ごめんなさい。そっか、そっちは教えてくれたのに私も名乗らなきゃフェアではないわよね」

私は一度目を瞑り、

「…私の名前は“シホ・E・シユバインオーグ”よ。この世界には他に存在しているかわからないけど一応魔術師というものをやっているわ。これからよろしくね、フィアッ

ト

笑顔を浮かべながらファイアットに自己紹介をした。

だけどもたファイアットは他の皆と同じく顔を赤くしてしまった。

…やっぱりイリヤの顔で笑顔を浮かべると誰でもこうなっちゃうのかな？

どこからか「この鈍感！」という天の声が聞こえてきたけど反応すると碌な事がないので無視をした。

「は、はい…その、私の事はファイアと呼んでください。お姉様…！」

「は？ え？…お姉様？」

「はい！ お姉様はまさに私の理想像の女性です！」

私はたぶん今盛大に頬を引き攣らせているのだろう。

しかしそれをなんとか抑えて、

「と、とりあえず…ファイアでいいのね？」

「はい、お姉様！」

「……………、まあいいわ。ところでそちらで寝ているユーノっていう兄の赤い宝石の首飾りにも魔力を感じたんで気になっていたけど…あなたの首にはまるでロザリオみたいなひび割れたアクセサリーにも魔力を感じるわ。これって一体なんなの？」

「あ！もしかして罅割れてしまっているんですか？」

「ええ…。とてもではないけど直すのには時間がかかりそうね」

私はそう言いながらファイアの首飾りを触った。

しかし、それがトリガーになったのかわからないけど、おそらく私の魔力に反応したのかそのロザリオがすごい輝きを放ち出した。

「嘘!?! 今まで私が使っても全然反応を見せてくれなかったデバイスがお姉様に反応を
!」

「デバイス!?! それって…」

デバイスとはなにかって聞こうとしたが、光り輝いていたロザリオが空中に上がって形を崩し始めたと思っただけで、リンから持つていていいと言われ、今では私の大切なものとなっているルビーの宝石の首飾りも浮かび上がった。

その両者がまるで共鳴するかのようになりだして崩れたロザリオが宝石に吸収されていった。

私とファイアはその光景を呆然と眺めていることしかできなかった。

次第に光は収縮しはじめて私の手の平にはルビーからサファイア色に変色して、今まで私の蘇生の為に使いきってしまった宝石から膨大な魔力が感じられる。

だが、それは一瞬で魔力反応がフツ…と止んでもう感じられなくなった。

「えっと…なにが起こったの? ファイアはわかる?」

「私にもなにがなんだか分かりません。もしかしたら再構成したのかもしれない…謎の多いデバイスでしたから」

「さつきまでこの宝石には魔力は一欠けらも残ってなかったからちょうどいい触媒になったってことね」

「ごめんなさいです…お姉様の大切な宝石だったみたいでしたのに」

「気にしないで。それよりデバイスって？今はもうなんの反応もないんだけど…」

「それは…うっ！」

ファイアは体を震わした。多分、傷が響いたのだろう。

「だ、大丈夫…？」

「は、はい…兄さんより傷が深かったらしくて、もう休まない…」

「そう…。それじゃとりあえずそろそろ病院が閉じる時間だからまた明日来るわね？」

「はい、お姉様…」

「あ、そうだわ。少し待って。今から治癒魔術をかけるから」

私はファイアと一緒にユーノという兄の方にも手を近づかせて、魔力を掌に流しながら、

「この者達の傷を癒したまえ…」

白い光とともにファイアとユーノの傷が完全ではないが塞がった。

それにファイアはとても驚いているようだ。

イリヤの知識だと治癒魔術は錬金術で新たな細胞を作るといったものだったけど、通常の魔力のみでの治癒魔術の知識もあって助かったわ。

錬金術で治癒を施すって事は新たな細胞組織を臓器移植みたいに作り出す方法だから、知識があっても技術がない私を使うとどうしても負担をかけてしまうから。

「すごい…魔力の回復はさすがに無理ですけど体の痛みがほとんどなくなりました」「これで幾分マシになったはずよ。それじゃもう人払いの結界を解除するわ」

解除した途端、先生がやってきて「もう時間だから」と言ってきたので分かりましたと返事を返した。

《それじゃ、また後ほどにね。ファイア》

《はい、お姉様！》

私はそうして高町家に帰っていった。



シホは家に帰宅後に宝石に吸収された“デバイス”というものについて調べることにした。

だが解析魔術を執行しても分かるのは宝石の構成材質と融合したロザリオの表面的な部分だけで中身に関してはエラーの連続。

おそらく自身では理解しきれない部分がある部分がある。そのデバイスというものには含まれているのだろうとシホは納得し、後でフィアとユーノとやらに聞く事にした。

しばらくしてなのはが塾から帰ってきた。

なのはの方はフェレットを自分で飼いたいらしく夕食時にその事を伝えるとシホに教えてくれた。

少しして夕食時になりシホは今度は洋食などを和食風に合わせた料理を桃子と一緒に創作しながら作って味見も込めて夕食を出した。

それにまたなのはと美由希は落ち込みながらも、なのはは食後にフェレット二匹を飼ってもいいか士郎達に相談した。

「…一匹ならともかく二匹かあ」

士郎は飼ってもいいか悩んでいた。

別段、桃子も反対はなくしつかりと飼えばいいと言ってくれたが、二匹も同時になるのが飼えるかどうかと皆で悩んでいたところ。

「私からもお願いします」

「シホちゃん！」

なのははシホが協力してくれるようでとても喜んでいた。

そして士郎達も高町家に来てからシホの遠慮がちではない初めての真剣なお願いに快く了承してくれた。

シホは飼ってもいいという報告を聞いてすぐに感謝の言葉を伝えて、なのははシホに抱きついて「ありがとー!」と言ってくれたので、シホも「どういたしまして」と言った。

その夜、シホは道場で結界を構築し干将・莫耶を投影して一人で稽古をしていた。

《お姉様!》

《ファイア? どうしたの?》

《助けてください! 危険が…危険が迫って…ッ!》

だが、急に思念通話でファイアットの助けの声が聞こえてきたが、すぐになにかの妨害で途切れてしまった。

だからシホはもしもの場合を考えてこの体に合った聖骸布の上着を投影して羽織り家飛び出そうとした。

だが、ふとなのはの気配（というより魔力）が家から離れていく感じがした。

この事態にシホはファイアット達だけではなく、なのはにも危険が迫っていると即座に

判断し、すぐに家を飛び出した。

だがシホが家を飛び出した所には士郎、恭也、美由希が立っていた。

「士郎さん…」

「なのはがどこかに行ってしまったって探していたけど、シホちゃんまで…一体どうしたんだい？」

「…今は私にも分かりません。ですがなにかなのはの身に危険が迫っているのは確かです。だから、少し出かけてきます」

「シホちゃん…」

美由希がシホの身を案じる。

シホの境遇を少なからず知っているだけに戦いというものにはもう関わって欲しくないというのが三人の共通の本心だった。

だけどシホは笑顔を浮かべて、

「大丈夫です。必ずなのはも連れて帰ってきます。ここは…私の帰ってこれる家で、迎えてくれる大切な家族がいますから…!」

三人は驚きと同時に顔を笑みで綻ばした。

シホは笑顔を浮かべながらも、次の瞬間には目を細めて魔術師の顔を前面に出し、

トレース・オン
「同調開始…!」

と、呪文を唱え身体を強化したのはの魔力の跡を常人が出せるかどうか怪しい速度でシホは駆けていった。

美由希は、

「シホちゃんが…初めてあたし達の事を家族って言ってくれたよ！」

と言って恭也に嬉しさのあまり泣きついていた。

そして士郎と恭也も、

「もう安心かな？ 今のシホちゃんは最初に出会った頃の危うさが幾分軽くなっていた」「そうだな、父さん…」

三人はシホの姿が見えなくなった方をじっと眺めていた…。



Side シホ・E・シュバインオーグ

(少し恥ずかしい台詞をいったかな…)

私は高町家から出ていった時の言葉に、そう思いながらも走る速度を緩めずに走っていく。

……リーンッ。

「鈴の音……？」

私がそう感じた時には周りの景色が沼の湿気のコもったような陰気な空間に染まっていく。

これはすぐに結界内に侵入したのだと判断。

そして遠くの方からまるで大型の獣が走り回っているような振動が響いてくる。

私は一度脚を強化して電柱の上に登り、さらに眼を強化してなのはの魔力を感じる方を見るとなにか黒い巨大な丸い魔物になのはは追いかけていた。

そして、なのはの腕にはファイアとユーノが抱えられている。

ユーノの方がなのはに「あなたには資質があります。どうか力を貸してください！」と言っている。

私はその光景を目にして、

（まさか、なにも知らない女の子に力を託すって言うの？　ファイアが言っていたようにあの赤いデバイスを……。なのはは争いを好まない性格だ。もし力を手に入れたら取り返しがつかないことになる）

私はそれを阻止するために足をさらに強化して電柱の天辺を何度も飛び跳ねて、なのは達に襲い掛かろうとしている魔物に助走をつけた跳び蹴りをお見舞いした。



なのはは、いやユーノとフィアットも正直目の前の光景を疑った。

先ほどまで猛威を振るっていた魔物が空から降ってきた女の子の一蹴りによって後方に吹き飛ばされたのだから。

そしてフワツとした感じで着地し、

「フィア…それになのはも無事だったようね」

女性は安心したような吐息をついた後、こちらに振り向いた。

その女性はシホだった。

その事になのはとても混乱した。

「え？ ええ!? シホちゃん!?!」

「とりあえず落ち着きなさい。…あの魔物は私が退治する。フィア！ 援護して！」

「わかりました、お姉様！」

「お姉様!?!」

とりあえず、なのはとユーノはこの際無視してシホはファイアツトを肩に乗せて事前に投影していた干将・莫耶を構えた。

「ファイア…あの魔物はなに？」

「あれはジュエルシードと言った危険なロストロギアを取り込んで魔物となったものです、お姉様」

「ジュエルシードにロストロギア…まだ事情は分からないけど、とにかく危険物と見て排除してしまつて構わないのね？」

「はい！ ですがジュエルシードはできれば回収したいものなのです。だから…」

「…了解。なのは、とりあえずあなたは隠れて見ていなさい」

「う、うん…」

なのはにそう伝えシホは干将・莫耶を握る手に力を込めて身体強化も施して突撃した。

当然魔物も応戦しようとして飛び掛ってくる。

だがシホはなんなく双剣をクロスに構え、

「せいッー」

双剣はいとも容易く魔物を四分割にして、即座に双剣を腰の鞘入れにしまい、振り向きざまに追い討ちをかけるかのように洋弓と四本の矢を投影して四つに分断されてい

た魔物にそれぞれ秒単位で矢を放ち、刺さった瞬間を見計らって、

「壊れた幻想！」
ブローケン・ファンタズム

矢の幻想を開放し、破裂した魔力が小爆発を起こし魔物は辺り一面に飛び散った。

だがシホは気を緩めずになのはの腕を掴んで、

「ひとまずここから離脱するわよ！」

すぐにその場を後にした。

シホはそのジュエルシードというものをどうにかしない限りあの魔物は再生すると踏んでいた。

それはまさに正解でシホ達が立ち去った後、かなりのダメージを受けたはずの魔物は神秘の籠もった武器で八つ裂きにされたために再生は遅いもののまた一つに纏まろうとしていた。

.....

.....

.....

ひとまず離脱できたシホ達だが、

「シホちゃん、さっきのなに!? すごい早くてよくわからなかった!」

「僕もあなたの使う術に興味がわきました」

「あれがお姉様の魔術なんですね! 感動しました!」

「……………」

三人(?)が騒いでいる中でシホはこめかみを押さえながら、

「今はまず現状を把握しなさい! まだあの魔物は生きているのよ!」

「「は、はい……!」」

三人はシホのあまりの剣幕にすぐにおとなしくなった。

それでしばらくしてシホは落ち着いたのか少し前髪を掻き揚げながら、

「でも、参ったわね……」

「敵の再生能力がですか、お姉様?」

「それもあるわ。でも、そんなものはどうだっていいの。なのはには私の裏の姿を見せ

たくなかったのよ……」

その言葉に一同はしばらく沈黙。

シホはなのはが自身に対して恐怖心を抱くのでないかと……そう危惧していた。

だが、なのははその逆でどっちかという憧れのような眼差しをしていた。

「そんなことないよ。シホちゃんの力は私達を守ってくれた……だから怖くなんかないよ

「？」

「なのは…ありがとう」

「うん！」

それでシホは気持ちが一瞬分楽になり思考を元に戻して、

「…さて、それでファイア。あの魔物はどうやって倒したらそのジュエルシードつてもものを取り出す事ができるの？ 私なら存在そのものをこの世から消し去ることもできるけど、ジュエルシードは大切なモノなのでしょ？」

「はい…。お姉様の宝石に宿ったデバイスを起動して使いたいところなんですけど、まだ発掘されてよく解明されていないデバイスな為に起動方法もわからないんです。だから…」

ファイアットはちらつとなのはの方を見た。

「ふう…なるほどね。どうやら私にもそのユーノっていうファイアの兄が言っていた『資質』があるらしい。」

けど、今はその『デバイス』っていう奴の方が中身がブラックだらけで使い物にならなくて、尚且つ私の宝石と融合しちやったから一度どこかで調べてもらわないとどうしようもない。

…私の方のデバイスはこういう解釈でいいかしら？」

「はい。だからその分使い方も分かっていて、それにお姉様と同格か下位の魔力を持ち合わせている…なのはさんに兄さんのデバイス“レイジングハート”を使つて封印してもらいたいのです」

「やつぱり、か…。私としては魔力資質が膨大でもただの一般人でしかないのにはお勧めしたくないわ」

「シホちゃんも一般人じゃ…?」

「…さっきの一連の光景を見て私を一般人だと思ふなら脳外科か眼科をお勧めしたいところよ?」

でも、今私はもう使い方がわからないけどデバイスは所持しちゃってる。

ユーノとフィアは私の治療魔術で傷は塞がっているけどデバイスを扱えるほど今は魔力がない。

さらにそのジュエルシードって奴はそのデバイスを使わないといつまでも封印はできない。

だから最善策としてなのはに頼らざる得ないのが現状でベストな判断。…これでよろしい?」

三人はシホの丁寧かつ的確なまとめに驚いていたが、ユーノとフィアは概ね正しいので頷いた。

「そう…それじゃしかたがないわ。私個人は反対だけど現状が現状だし私が奴の足止めをしている間にちやっつちやと契約しちやいなさい？」

そしてシホはまたホルダーから双剣を取り出して駆けていった。

駆けていった先にはまるで猪のように魔物が迫ってきている。

魔物から幾重もの触手が放たれるが、シホはそれを意に介さず次々とそれらを切り裂いて本体を攻撃していく。

再生しているとはいえ、その倍以上の攻撃をシホは与えているので魔物はどんどん傷だらけになっていく。

その光景を見ていたファイアットはというと、

「お姉様…素敵だわ。やっぱり私の目に狂いはなかった」

と、頬を赤くしながら呟いている。

それを見ていた兄・ユーノは妹が特殊な性癖に目覚めてしまったことを嘆きながらも呪文をなのはに教えようとする。

「一緒に唱えて。我、使命を受けし者なり…」

「えつと…我、使命を受けし者なり…」

「契約の下、その力を解き放て」

「契約の下、その力を解き放て」

「風は空に、星は天に。そして、不屈の心はこの胸に」

「風は空に、星は天に。そして、不屈の心はこの胸に」

ユーノとともに唱えていたのだが途中から自分で唱えるようになり、

「この手に魔法を。レイジングハート、セット・アップ！」

《stand by ready. set up.》

ユーノと同時に最後の呪文を唱えた瞬間、桃色の光が空高く舞い上がる。

シホはデバイスによって引き出されたその膨大ななのはの魔力反応に魔物を大きく吹き飛ばして一度見入る。

見ると光の中でレイジングハートと呼ばれる赤い水晶玉が杖の形に変形していき、なのはの姿もフィアットがいうには自身の守りの衣服のイメージで構成されるということが、なぜか聖祥の制服が構成材質モデルになっている。

そう…なのはは「魔法少女」になったのだ。

シホはそれを見て、とある古い記憶が呼び起こされる。

…アカイアクマの洋館で開けてしまったミミックの箱。

その中に入っていた羽根つきのアーパーステッキ…その名も！

…記憶強制封印！

一番から…（以下略）。カット！ カット！ カット！！

何度か頭を振るっているシホだったが、すぐに戦闘思考に戻し、

「さあ、なのは！ さっさとユーンにその魔法の杖の使い方を教わってこいつを倒して
ジュエルシードってモノを封印しなさい！」

「う、うん！」

シホはそう言いまた魔物に駆けていった。

だがなのはの魔力に反応したらしく魔物はなのはの方に向かっていった。

とうのなのはは目を瞑り使い方の——まいメージを頭に思い浮かべ、すぐにゆつくりと目を開けると杖を掲げ、

《Protection》

レイジングハートから電子音のような女性の声とともに桃色の膜——防御魔法——が展開し魔物の攻撃を防いだ。

防がれたために動きが怯んだ隙を狙って、

「リリカルマジカル。ジュエルシード2！」

なのはの掛け声とともにレイジングハートから光の翼が展開される。

のちにシホはこれがシーリングモードだと聞かされる。

（でも…魔法の呪文キーがリリカルマジカルって…もしリンがいたら同情の視線を送っていたかしら？）

シホがそんなどうしようもないことを考えているうちにそのシーリングモードから何本もの光の帯が魔物に向かって流れて縛り上げる。

それによって魔物は苦しみだし額にXXI：つまり21番の文字が浮かび上がる。

「リリカルマジカル。ジュエルシード、シリアル21。封印！」

それによって魔物が輝きだして一気に弾けた後、地面にジュエルシードと呼ばれる青い宝石だけが転がっていた。

ユーノの指示でレイジングハートを近づけるとジュエルシードはレイジングハートのコアの部分に吸収された。

これで終わったらしく、なのはの姿は解除され元の服装に戻っていった。

これも後にバリアジャケットというものだと聞かされる事になる。

シホはゆっくりと話をしたかったが魔物が盛大に暴れてくれたために（シホは自分も暴れていたがその事を棚上げした）辺りはボロボロでパトカーのサイレンも聞こえてきた為に、

「逃げるわよー！」

「ふ、ふええええーっ!?」

なのはを両手で抱える。ちなみにお姫様抱っこである。

それではのはは顔を赤くしたがシホは構わない。

そしてユーノはなのはの腕の中、フィアットはシホの肩の上に乗った。
シホはなのはが落ちないで姿勢が安定した事を確認した後、足に魔力を込めて、来た時と同じように電柱を足場になるべく遠くに移動していった。



とりあえず一同は人気のない公園に身を潜めながら、

「…ふう、ここまで来ればもう大丈夫ね？」

「お姉様はすごいですね。魔力の流れを感じましたけどそれ以上に身体能力がずば抜けていました」

「それは日々鍛えている事も関わってくるけど、私達の使う魔術には身体強化というものがあって、大まかに言うとまず言葉の通り身体のあるゆる強化、他にある一部をその瞬間だけ強化…眼力がいい例ね。」

私は先ほどの攻撃どおり剣術も使えば遠距離からの弓矢での射撃も使う。

相手の動きを的確に捉えるには重宝させてもらっているわ。

…つと、そうだわ。

そんな事は今はいいのよ。フィア、早速だけど色々教えてくれないかしら？

一体ジュエルシード…その他にもロストロギア、そしてデバイス、この世界の魔法つてものを…。

…とここで、なのはとユーノはどうしたのかしら？」

シホが見ると、なのはは目を回していて、さらにユーノはなのはの腕の中だった為に盛大に振り回されてぐったりしていた。

シホは思った。

いわゆる…やりすぎた？ である。

「…とりあえず詳しい事情は家に帰ってからにしましょう？ なのはも正気に戻さなきゃいけないし…」

「…そうですね、お姉様」

シホ達は溜息をつきながら帰り際になんとかなのはを正常に戻すまでこじつけてから帰宅した。

当然、恭也と美由希が待ち構えていて、なのはは気が引けたのか一歩後ずさるが、シホが目配せしてそれに二人も応えてくれたので事なきを得た。

そして二匹のフレットを見た美由希が思わず抱きしめていた。

続いて家の中では美由希以上に桃子はユーノの方を抱きしめて悶絶していた（フィアットは逃れてシホの肩に乗っていた）。

だが、その際フィアットは心の中で、

(…フェレットの姿を利用して優しくしてもらっている兄さんの顔がなぜか緩んでいるわ。…兄さん不潔よ！)

と、思っていた。

ともかくこれからどうするかはもう夜更けの為に明日相談することになった。

第六話

『魔法とジュエルシード』

翌日、学校ではさすがとアリサが昨晚起きたあちらこちらでの道の崩壊などの話と、動物病院も半壊していたという事で二匹のフェレットが心配だ…という話を聞かされ、なのはは微妙に顔をしかめた。

シホがとつさになのはの肩を叩き落ち着かせる。

《…なのは、まずは落ち着きなさい》

《ええ!? シホちゃんとも心で会話が!》

《思念通話の仕方をフィアに教わったからよ》

《あ、そうなんだ…》

《とりあえずは私と話を合わしなさい》

《うん!》

それから二人は真実をぼかしながらも偶然二匹のフェレットと夜の道で遭遇したごとと、その二匹は当分の間は高町家で飼うことに決まったこともアリサとすずかに伝え

た。

「へえ〜：そうなんだ。それで名前はなんて決めたの？」

「うん。赤い宝石をつけていたオスのフェレットの方が “ユーノ” 君で：」

「サファイアのロザリオをつけていたメスのフェレットの方が “ファイアット” よ。でも私は長いからファイアって呼ぶことにしているわ」

「ユーノ君にファイアットちゃんか：。今度私のウチに来る時に連れてきてくれたら嬉しいな：」

二人はずずかの言葉に甘えることにして、

「うん。わかった」

「ええ。：：そういえば、私はずずか達とはウチで何度か遊んだけど二人の家には行った事が無かったわね：？」

「それじゃ私が案内するね、シホちゃん」

「よろしくね、なのは」

「うん」

四人は笑いながら会話を楽しんでいるが、他のクラスメートは四人の中での空間がとても神聖なものに感じたらしく、話しかけるのを躊躇っていたのは余談である。

そして授業中。

なのはなのはでユーノと思念通話で会話している。

その為に授業は受けているようだけど表情はボーっとしていたりした。

見た感じはそんなに違和感はないが、たまに首がカクツと曲がる姿が見れてシホは苦笑いを浮かべていた。

だが、とうのシホは分割思考を活用していた為、よりファイアットと真剣に会話をしていった。

《まずファイアとユーノの話を纏めると、こうね？》

一に、ジュエルシードはここ地球ではなくて、ファイア達の世界で発掘された計21個の古代文明のある種のオーパーツ。

二に、そのジュエルシードは対象者の願いを叶えようとする宝石であるが、願いの叶い方が正確でないため、昨晚のような暴走する事態になる可能性が極めて高い。

三に、ジュエルシードは一つだけでも膨大の魔力を内包しているので発動していなくても危険物であることに変わりはない。

そして、そのような危険物をあなた達の世界では通称“ロストログア”と呼び発見次第“時空管理局”といういまだに接触してこない組織に引き渡す予定だった。

四に、輸送中の謎の事故で地球のここ海鳴市にばら撒かれてしまい、直接事故に関

わっているわけではないが責任を感じた二人は独力で探索を始めた。

最後に、なのはや私にあなた達で言う「魔導師」の資質が合ったため協力を依頼した。

…ここまではこれであっているわね…?」

「はい、お姉様。理解が早くて助かります」

フィアットは素直にシホの理解力に感心していたが、一方でシホは内心で舌打ちをした。

(ジュエルシード…まるで聖杯のようなものね。確かに危険極まりないものね。)

現在は昨晚のを合わせてまだ二つだけだと言うけど…悪人が狙っているかもしれないから早急に集めないといけない…!)

「…お姉様?」

シホが思考の海にダイブしている所でフィアットによって呼び戻された。

だからすぐに反応して、

「ごめんなさい。それで後でいいんだけど一度ジュエルシードを見せてもらっていないかしら?」

「はい、構いませんけど…なにか腑に落ちない点でもあったんですか?」

「少しね…それより次だけど——…」

シホはデバイスというものをフィアットから分かる程度で聞き出した。

《…つまり、あなた達の使う魔法というものは、今まで名称も使い方も分からなかった
“リンカーコア”という魔力を生成する核を源にして、今の私のように自身の魔力と精
神力で許容範囲内での簡易魔法は執行できるけど、あまり戦闘向きではない魔法が多
い。

主にあげると「変化」「移動」「幻惑」があつてそれを組み合わせるプログラムという
技術で様々な応用が効く。

だけど “デバイス” というものは魔法を補助する機能…つまり高速な演算機能が
詰め込まれていて、術者が使う魔法を保存し、使用する際に詠唱を簡略化して発動して
くれるものを “ストレージデバイス”。

次に、今の説明に加えて人工意思があり術者の魔法執行の補助を全面的にカバー。

そして危険が迫った際には術者の事を守ろうとする自衛機能も含まれている謂わば
パートナーとも呼べる “インテリジェントデバイス”。

これはなのが現在所有しているレイジングハートが該当するわね。

この二種類が主にあなた達の世界で使われているデバイスというものね。合ってる
？

《はい。そうですけど…お姉様は本当に私達と同年ですか？

なのはさんはお姉様が理解した内容を大まかにしか理解していないのに、お姉様はほぼ理解してしまっています。

なにか秘密でも…?》

《それは秘密よ。まあ、といつてもあなた達が使う魔法とは体系がまったく違う魔術を使うから考えは似たようなものだし…。

まあ、それは今は置いておくとして、それだと私の宝石に融合したデバイスはこの二つとは種類が違うものとして認識していいの…?》

《はい…。なにぶんこれもとある遺跡で発掘したものでして、ジュエルシードと一緒に管理局で調べてもらおうと思っていたものでしたから、なんていうものかも不明です。

お姉様の宝石に融合した原因も分からないから今は手の出しようがありません》

《なるほど…》

ほんの少し二人して黙り込んだが、急にフィアットの声が明るくなった。

どうやらシホに教ええられる範囲は説明できたのか今度は好奇心がわいたらしく、シホの魔術師というものを聞いてきた。

だが、シホはこれに関してはあまり説明しなかった。

というより説明しても理解してもらえないだろうと判断したからである。

理由として挙げるのならば、この世界の魔法は元の世界とは違い、神秘というものを

一切理解していないからだ。

《これに関しては帰ったら説明するわ。理解できるかはファイア次第ということでは…》

私の使う魔術はこの世界とは根本的に異なるものだから思念通話で語れるものでもないから…》

《わかりました》

そこでなのはから思念通話で、なのははジュエルシードの搜索を最後まで手伝いたいと言ってきた。

シホは一度溜息をつきながら、

《…なのは。手伝うと言うことはユーノやファイアも言っているけど昨日みたいに危険がつきものなのよ？ それでも手伝いたい…？》

《うん…。どこまでできるかわからないけど、ここまで聞いちゃったし、それにほっとけないよ。》

困ってる人がいて、助けてあげられる力が自分にあるならその時は迷っちゃいけないっていうのがお父さんの教えなの。だから…ごめんね、シホちゃん》

《はあ…なのはは意外と頑固なのね。私も人の事はいえませんが…。しかたない、わかったわ。私も手伝ってあげる。なのは一人じゃ不安だからね》

《いいの!?!》

《いいものにも私もそのつもりだったから…》

《でも、危険が…》

そこでユーノが意を唱えてきた。

だがシホはそれを意に介さず、

《別に、あの程度の事ならもう慣れているから平気よ。それになのははまだ魔導師初心者…前衛がいた方が安心して封印を行えるじゃない？》

《でも…》

《まだ、口答えするっていうの…？ 私が言ったことを忘れたかしら？ ジュエルシードを封印云々なんて制約がなければ…この手で消滅できるほどの力は持ち合わせているって…》

シホが少し恐怖を織り交ぜた発言をした為か、ユーノは言葉を失っていた。

逆にフィアットは『きゃー！』という黄色い声を上げていた。
実にたくましいものである。



Side シホ・E・シュバインオーグ

それから帰り道。

私は三人と一度別れて別ルートで結構大きいスーパーに寄っていた。

理由はというと、今日の夜の当番は私が受け持ち担当だったからだ。

それで店内をかごを片手に持って回っているのだけど…、

(なにか…：周りから視線を感じるわね？…なんていうか、珍しいものでも見るような感じ)

だがそれもすぐに理解することにする。

やっぱりこの容姿が目立つのだろう。

制服はまだ許容範囲内だろうけど、やっぱり学校同様に外国産の顔に緋色の髪は目立つものがある。

でも私はあえて平然と品定めをすることにする。

いちいち視線を気にしていたらキリがないからね。

それで今日のメニューに必要な食材は…？…と視線を動かす。

だけど、ふと視線の先に普通ならありえないものが見えました。

なんていうか…：そう、以前にとある魔窟屋敷で見た寡黙な冥土…。

ではなくて、リンと同じく宝石魔術を得意とし、一時期執事として雇ってくれたエー

デルフェルト家のルヴィアの豪邸にいたような、変な風俗紛いではなくしつかりとした英国式のメイドの姿をした女性が店内を歩いていた。

私には珍しい視線を浴びせるのにあの女性にはまったく目が向けられていない。

…まったくもって不思議ね。

(※ シホは気づいていないが立ち振る舞いがとてもしなやかで、このようなスーパーには場違いだと周りの客達は思っていた。

こんな所まですでにイリヤの仕草が侵食されてきている事は…まあ、私生活には別段悪影響はないので平気である。)

…それだけ頻繁にこのスーパーに出入りしているということかしら？

少し手に持っているメモに視線を集中してフラフラ歩きで危なっかしいけど常連のようだし大丈夫よね…？

それでとりあえず私も買い物続けようと後ろを向き歩き出した——途端、寒気を感じて咄嗟に後ろを振り向いた。

瞬間、先ほどの考えが甘かったと後悔することになる。

「あああ——！！ 避けてくださいいゝゝゝ！！」

先程のメイドさんが足を躓かせたようで私の上に落ちてきていた。さつきまで違う場所にいたよね!!?

という疑問はそのメイドさんの見事な頭突きを食らわされて一気に吹き飛んだ。

「星が…星が見えたスタ…?」

自分でも何を言っているのかわからないけど、そのままの勢いでメイドさんに押し倒されてさらに後頭部強打。かなり痛い…。

実にすごい衝撃だった。今のはバゼットのストレートに匹敵する威力かも…?

「ああ!? ごめんなさいッ! 大丈夫ですか!?!」

「は、はい…とても綺麗な星が見えました…」

いけない…まだ正常に頭が回っていないみたい。

それでまだ意識が朦朧としているのかと思ったメイドさんはあたふたと私を介抱してくれた。

そのおかげで私は少ししてなんとか回復しました。

うん。介抱の手際はとても良かったと思うわね。

その後にそのメイドさんに何度も謝られて私は落ち着かせるのに苦労した。

四苦八苦してようやく普通に話せるようになったが、今度は落ち込み項垂れてしまっていた。

泣きも入っていて被害を受けた方なのに良心が痛むのはなぜだろう？

「え、ええつと…そんなに落ち込まないでください。私は気にしていませんから。だから元気出してください！」

「ううう…ありがとうございます。優しいんですね…。あ！折角ですから紹介を…私の名前は　フアリン・K・エアリヒカイト　つていいいます。えつと…」

「そうですね。私はシホ。シホ・E・シユバインオーグといいいます。よろしく願ひします。フアリンさん」

「シホちゃんですか。あれ…？」

「どうしました、フアリンさん？」

「シホちゃんのお名前はどこかで聞いた覚え…あ！　そうだ、すずかお嬢様に聞いたんです！」

「すずかお嬢様…？」

その後にはフアリンさんは月村邸のすずか付き専属メイドという事を私は知った。

…専属メイドって、すずかの家はかなり大きい家なのね。

まあ、それがきっかけで私はフアリンさんととても仲良くなった。

特に料理談義での話がとても盛り上がった。

それでお互いに今夜の料理はなにを作るのかを話し合いながら、一緒にスーパーを

回って今まで食にたいして培ってきたある意味では心眼を駆使していい食材を選んであげた。

私なりの料理の工夫のアドバースも何度か教えてあげると「パアッ！」という効果音が出そうな輝く笑顔を浮かべて喜んでくれた。

…なんか、ファリンさんという癒されるわ。

そして帰り道、

「それじゃファリンさん。また機会があつたら一緒に買い物しましょう」

「はい、シホちゃん。それと今後ともずずかお嬢様と仲良くしてくださいね」

「はい」

私とファリンさんはお互いに笑顔で別れた。

だけど、何度か買い物中にちらちらと頬を赤くして見られたけどなんだったのかな？

（後にファリンがなにかに目覚めかけたと、ずずかに聞かされたけど、シホは結局分からずじまいだったという…シホは女性でありながらも女性キラーに変わりはなかった。）

………なんか、今誰かに妙に失礼な事を言われた気がするけど気にしないでおう。

それで帰宅途中、買い物袋を持ちながら歩いているとふと、また淀んだ魔力の気配が

感じた。

同時にフィアから思念通話で緊急連絡があり、すでにユーノと一緒になのはと合流して戦闘中だという。

《えっ…もう戦闘開始しているの?》

《はい、お姉様》

《わかった。すぐに向かうわ!》

私は魔力が反応した方の路地裏に人払いの魔術を使い、強化を施して制服ではしたな
いと思うけどまた電柱を使い疾駆する。

そしてとある神社の方から桃色の光が見えて、それが収まったと思うと淀んだ魔力の
気配が掻き消えた。

不思議に思っつて移動しながらも視力を強化すると、なんとなのはもうジュエルシ
ードを封印していた。

それで私は力が抜けたのか落ちそうになったけどなんとか体勢を整えてなのは達の
前に降りたつ。

「…私に来るまでもなかったようね」

「あ、シホちゃん!」

「お姉様!」

「それで、しつかり封印できたようね？」

「うん！」

なのは嬉しいようで「にやはは」とはにかんでいた。

それで私なのはをよそに二人に思念通話で語りかけた。

《…それでユーノ、ファイア。なのはの実力の程は？》

《まだ実力はわからないけど、魔導師の才能はかなりのものだよ。これなら将来はなのはがもし目指すならかなりの高みにいけると思う…》

《後、先天資質はかなりのものです》

《そう》

《でも、私もなのはさんくらい資質があったらもつと頑張れるのに…》

《落ち込まないの、ファイア。資質なんて言葉の飾りよ。あなたも磨けば光るわよ。だから気にしないの》

《はいです！　ありがとうございます、お姉様！》

ファイアはなんとか笑顔になってくれたのでよかった。

「それじゃ、まあとりあえずもう帰りましょう。今日は私が料理を作る約束になっているから急がなくちゃいけないし」

「わあ…シホちゃんのお料理か。前の和食料理もおいしかったけど今日はなにを作るの

「？」

「それはまだ内緒よ」

「えー…？」

「文句言わないの。その分美味しいものを食べさせてあげるから、ね？」

「はい…」

そして私達は帰る事にしたのだった。

第七話

『ジュエルシード探索。』

『そして失敗…』

それから、シホとなのはは普通に学校に通い、夕方・夜はシホがなのはを守るという事で士郎さん達には公認の許可（もちろん内容は話していない。いずれ話すと言う事で…）をもらっているの、結構派手に夜中は動き回っている。

なのはとユーノはこの事を知らないけど、シホはシホでフィアットとともに二人のサポートに専念している。

まさにシホはなのはにとって縁の下の力持ち状態である。

とうのシホはシホでフィアットを肩に乗せて日常ではよく一緒に出かけているのが主である。

その理由はというと、

「それじゃフィア。人間の姿に戻っていいわよ」

「はい。お姉様！」

フィアットの体が光りだすとフェレットの姿から人間の形になり——戻ったともいう——女の子の姿になっていた。

髪の色はフェレット状態と同じ色で肩くらいまで伸ばしていて、首に白い布を巻いて活発そうな雰囲気を出している。

服装に関してはユーノとほぼ同一だと言う。

……ここで補足するとシホは普段着ではスカートの下にスパッツを穿いている。

聞いた話だとユーノとはやはり双子な為、性別と女性としての仕草以外はほぼ外見は今のところ一緒と言う。

それとユーノは捕縛、結界、治癒と補助魔法に長けている支援型のエキスパートだという。

それに対してフィアットはユーノとはほぼ逆位置に対する攻撃型。

当然補助魔法も兄妹ゆえに競い合う形でフィアも同程度で行使できるが、どうにも性に合わないらしく小さい頃から武道にも力を入れていると言う。

ちなみにフィアットはユーノの自然治癒とは違い、シホによる常日頃からの今のところ使い道のないリンカーコア同士でパスを繋いで魔力を送ってもらい、もう人間形態で

も大丈夫なくらいには回復していた。

どうやってパスを繋いだかというと普通に魔法陣を敷いてである（と、言ってもいろいろ試行錯誤して繋いだのである。結構大発見かもしれない…）。

シホから魔力を送ってもらう際、内心で「お姉様の魔力が流れ込んできますう〜♪」と頬を赤らめる為、たまにシホは身の危険を感じている。

ある意味パスを繋いだ為にシホの使い魔的存在になっている現状をフィアットはかなり喜んでいたりする。

閑話休題

それで攻撃魔法をメインに置くタイプらしく、フィアットはシホに武術の指南を申し込んでいた。

シホは少し躊躇いがちに、

「でも、私の使う武術はほぼ我流よ？ 魔術だって今まで実戦で培ってきたものだし…」

「構わないですよ」

「そう。まあ私でよければ指導するわ。所でフィアはどんな技法をおもに使うの？」

「そうですね…。基本はやっぱり手足を自由に変則的に動かして一点集中で一発浴びせ

たら即座に離脱する戦法を取ります」

「ヒットアンドウェイ…ボクシングに通じている戦い方ね」

「ボクシング…?」

「ああ。フィアはこの世界の人間ではないから知らなかったわね。ボクシングっていうのは…」

シホはどういったものか説明をした。

ちなみに三人には詳しく話していないが、現状自身の使う魔術である投影は転送系の魔術という事しておいた。

元の世界でも異常とことごとく師達には言われてきたのだから、シホとしてはあまり公にしたくないのでこう伝えてある。

「それで…フィアとしてはその戦法が現状一番しつくりと来るわけだけど、やっぱり一撃の重みが軽い為になかなか実戦では使用できなくて結局はサポートに回るようになってしまっているわけね?」

「はい、そうなのです…。それでお姉様は色々な武術を嗜んでいると言っていましたのでなにか参考に来ないかと思いましたが…」

「そうね…? それだと中国武術とかもお勧めだけど、一応聞いておくけどフィアは槍の使い方はわかるかしら?」

「槍、ですか…。はい、故郷でも師が自衛のために使う事が多々あつて一応得意の分野に該当します」

「そう。それなら手っ取り早いわ」

シホは刃がなくてあまり概念がない槍を投影した。

ゲイボルクなんてもつての他だしフィアットに扱える代物だとも思っていないので練習用としては妥当のものだろう。

それをシホはフィアットに渡した後、

「…でも、なぜかしら？ フィアは一応ミッドチルダ式魔法を使うのよね。

これじゃどんな方向性が違ってきているのは私の気のせい…？ なんていうか、どちらかというとな魔導師というより思考が戦士、騎士よりね」

「あはは…はい。昔からよく言われてきた事ですのもう気にしていません。それでなにかお姉様にいい方法を学べないかと…」

「…そうね。それじゃフィアはなのはやユーノと違って筋が良さそうだから一つか二つ、武術の奥義を教えるわ。昔に妙ちきりんな爺さんに習つて会得したものなのよ」

「あ、はいー」

シホはそういつてフィアットに一言、「行くわよ…」という掛け声とともに一陣の風が通り過ぎたような、そんな感じがフィアットの横を通り過ぎた。

それと同時にファイアットの目の前に先程までいたシホは姿を消して、辺りを見回そうとした…が、すぐ後ろからシホの声が聞こえてきてファイアットは驚いて思わず尻餅をういていた。

「今のが武術の奥義の一つともいえる移動法…『縮地法』よ。魔術も魔法も一切使用しない純粋な武の術の一つ」

「すごいです…」

「まだよ。もう一つファイアの悩みに打ってつけの術があるわ。とりあえずファイアは痛い思いをしたくなかったら防御魔法を常時展開しなさい」

「は、はい…」

ファイアットの足元に魔法陣が浮かび上がったと同時に防御魔法『ラウンドシールド』が常時展開された。

それを確認したシホは、とある武術の構えをしてすぐに広げた掌をラウンドシールドに向けて放った。

…普通なら強力な魔法でない限りは物理攻撃でも防げる強度を持つシールドだが、シールド自体は砕けず変わりにファイアットが構えていた腕を押さえて痛みに堪えていた。

「ううっ…。お、お姉様…今の、は？ シールドを展開していたのにそれがまるで意味を

成していませんでした…」

「今のは、もう一つの武術の奥義、『浸透勁』というものよ。

平たく言えば表面を無視して体の内部に痛みを貫通させるといったもの。

これならファイアの悩みも解消できるかもしれないわ。

まだバリアジャケットには試していないけど、その防御魔法を打ち抜いた事からきつ

と効くはずよ」

「…後でなのはさんに手伝ってもらいますか？」

「…あのね、ファイア。これは二人には秘密の特訓って言っているでしょ？」

「あ、そうでした…」

「でも奥義と言われるだけあつて多少武術を嗜んでいたとしてもそう簡単にはたどり着けないもの…」

「それじゃ…」

「まあ落ち着きなさい。ファイアはまだ成長は発展途上…これから私がゆつくりと鍛えていくから焦らないの」

「わかりました。でもお姉様もすごいですね！　これだけの術をすでに習得しているなんて…！」

ファイアはますますシホに憧れを抱いた。

「だけどシホは少し表情を曇らせながら、

「生きていくためには、どうしても必要だったから習得しただけよ…」

「あつ…」

それを聞いてファイアットは自身の発言に後悔した。

シホは次元世界とは違い、平行世界というまったく別の世界から逃げのびてきて今ここにいるという事を失念していた。

当然この事は最初に打ち明けた高町家だけで、なのは、そしてユーノには年齢的に重過ぎるだろう事として話していないが、ファイアットは使い魔兼最も信頼できる友人同然のようになつたので特別に教えてもらっていた。

そのせいもあつてファイアットはひどく暗い顔になつてしまつていたが、シホがファイアットの肩に手を置いた。

「ありがとう、ファイア。その気持ちだけで私は十分満足よ」

「お姉様……」

嬉しい気持ちが我慢できなくなつてファイアットはシホに抱きついていた。

それをシホはよしよしとあやしていた。

その後、シホはファイアットにまず『縮地法』の簡易版でもある『瞬動術』という技法を教えた。

これは魔力を足に集中させて『縮地法』の要領で移動すると言うものである。さらにこれの応用で腕にも試してみたらフィアットはまだ荒削りながらも少しずつ様になってきた。

それでシホはやはり才能ある者は違うわ…と愚痴を零していたり。



…それから一週間が経過し、ジュエルシードの数は計四つ手にしたが、なのははやっぱりまだ魔法の扱いに慣れていないらしく疲れがたまって布団で横になってダウンしていた。

「頑張つてはいるけどやっぱりうまく立ち回るには当分先の話になりそうね…」
「そうですね。でも数はもう四個も手にしたのでそれから感謝しています」

シホがなのはの身を案じ、ユーノはそう言つて感謝の言葉を述べるが、やはりなのはの体力の無さは少し考え物であった。

落ち着いたら魔法以外にも無理させない程度に体力づくりの特訓メニューを追加しよう、とシホは考えていた。

それからシホは今日の予定を頭に浮かべて、なのはに話しかける。

「なのは。今日はアリサ達と約束があるでしょ？ とりあえず、ジュエルシード探しは中止して体を休めなさい。ただでさえ最近動きっぱなしで体力消耗しているんだから」

なのはは少し渋ったが「はい…」と返事をしていた。

そして二人と合流したシホ達がいる場所はとある広いグラウンド。

今日ここでは士郎が監督兼オーナーを務めているサッカークラブ『翠屋JFC』と他のチームとの試合が行われている。

シホ達は観客兼応援要員だ。

三人は元気に「がんばれー！」と言っているが、

さすがに気恥ずかしさを感じていたシホは小さく頑張れと言っている。

だが、そこは見ようによってかなり変化する。

シホ主観では、なんとか苦笑いを浮かべながらもなのは達と一緒に応援しているが…
転校してきて一週間…すでにシホの存在を知らないものは少ない。

というより人気は鰻上りで翠屋JFCの選手の中にも何人かファンはいたりした。

よって、選手視点だとシホの苦笑いもやはりどうしてもその美貌に影を潜めてしま
い、さらに照れで少しばかり頬を赤くして三人とは違い小さく応援しているのも「清楚
で物静か、そして照れ屋」という好印象に取られてしまうという罫。

最後になのは、アリサ、さすがの三人の応援も相乗して威力は何倍にも跳ね上がる。選手達の気力は一気に跳ね上がる。

それを相手側の選手達は見て少し悔しがっていたりした。

シホは気づいていないが士郎はそれを気づいていた為、苦笑いを浮かべながら、
(…将来どこかもう既に男性を虜にする力を天然で秘めているか。

もし付き合う男性がいたら苦労しそうだ。

だが！ なのは同様シホちゃんはまだもう私の娘同然だ。

だからそう簡単にはやらんぞ…？

もし貰うと言うならば私か恭也を倒してからにするのだな。フッフッフツツ…)

と、親馬鹿ぶりを盛大に発揮していた。

そうこうしている内に試合は終了し、『翠屋JFC』が2―0と完勝した。

士郎は勝った祝いにということに翠屋で昼食を取ることになった。

なのは達(＋ユーノ、フィアット)は店の中が選手達で埋まっている為、外のテラスで食事を取っていた。

ちなみにシホは士郎と桃子の手伝いで厨房兼接客をしていた。

接客姿のシホの姿に選手達はまぶしい目で見えていたが当然シホは気づかなくて桃子

と一緒に料理作りをしていた。

いつまでも見ていたい衝動に駆られていたが…太郎のニコニコとした威圧の笑みに震えていた為、萎縮していた。

少してサツカーチームは解散し、桃子にももう大丈夫という指示をもらったのでシホはなのは達の元へ戻った。

それからシホも遅れて食事を取った後、日常の会話を楽しんでいたが、アリサとずかには用があるらしく、お別れの挨拶をして太郎とシホ、なのは、ユーノ、ファイアットは帰宅した。

そしてすぐさまなのはは疲れがどつと出たらしく着替えて少し横になっていると言
うので、

「それじゃユーノ？ レディの着替えだから出て行きましようね？」

「そうよ、兄さん？」

「わ、分かっているって…！」

シホに掴まれたユーノはなのはの部屋を退出した。

そして退出後に一同はシホの部屋に集まっていた。

「でも、やっぱり慣れない魔法を行使するのは大変よね？ なのはの様子を見れば一目瞭然だし…」

「はい。知識も何も無く魔法を使うのは相当な負担になりますから…」

「兄さん。落ち込んでいてもしょうがないでしょ？ 今は私達でできることをサポートしなきゃ、でしょ？」

「そう、だね。ありがとう、ファイア」

一応は元気を取り戻したユーノだが、一方でシホも悩んでいた。

「はあ、せめて私の“これ”の使い方が分かれれば、なのはだけに負担を背負さなくて済むのにな…」

胸のサファイアに染まった宝石を手にながらシホは悩んでいた。

今現在シホは封印の出来る術を持っていなかったのですがどうしても援護だけになってしまっているのが現状。

シホの根本的な心の部分で色々とまだ九歳の子供に任せつきりは性にあっていなかった。

「落ち込まないでください、お姉様。お姉様の力はなのはさんにとってとても頼りがいのある力なんですよ？」

「そうですよ。僕達と同一年でその熟練した技術は確実になのはを助けています」

二人の必死の励ましにシホは礼をいった。

と、その時。いきなり巨大な魔力の波動を感じた一同は立ち上がった。

なののはもすぐに起きてきて急いで町に繰り出していく。

「これはっ……！」

シホ達は高いビルの屋上に登り、なののはバリアジャケットをまとったのを確認した後、周囲を見回すとまるで世界樹のような大樹が次々と町から生え出してきていた。

「ファイア！ こんなこともジュエルシードは起こしちゃうの!?!」

「はい。きつと人が発動させてしまったと思います。強い思いを持った人が願いをこめて発動するとジュエルシードは一番強い力を発揮しますから！」

「ッ……！」

その時、なののはの顔が一瞬曇った。

それをシホは見逃さなかったが今は保留して、

「厄介ね……。未だに成長している木があるわ。なののは！」

「は、はい……！」

「私が成長の進行を抑えているうちにジュエルシードの居場所を特定しなさい！」

シホはなののはにそう指示を出しながらも、剣の丘に空を飛ぶ宝具を検索していた。

…ヒット。

ヘルメスのサンダル『天^タ駆^クける踵^{ヒソ}の靴』。

これは飛翔能力が備わっていてヘルメスが神々の伝令を行う際に欠かせない靴である。

逸話では英雄ペルセウスがライダー——メデューサー——を退治した際にも使われたと言う宝具。

：ちなみになぜこんな物を私が持っているかというと、

どうも約束の四日間でギルガメツシュが子供状態の時に、

愚かにも士郎（正確にはアヴェンジャーだが思考パターンはやっぱり士郎である…）は修行の為に何度もお願いしてゲート・オブ・バビロンの中に入れてもらい片っ端から解析した過去を持つ。

そのおかげで剣の丘には原初の様々な武器が刺さっている。

しかし、乖離剣はやはり解析不可能な為に無理だったが…。

それ以外にも剣属性に入らないモノも沢山ある…。

さすが原初の英雄王である…。

だが、無償でやってくれるわけではない。

代償としてギルガメツシュが子供の状態だったので殺されはしなかったらしいが、その後に無理難題をいくつも出された。

四日間でリセットされるからよかったものの、内容についてはただ一言…聞かないで

！と心の内で叫ぶ。

「……—トレース・オフ
投影完了」

色々な雑念が渦巻きながらも天^タ駆^{クラ}ける踵^{ヒソ}の靴^アを足に直接投影した。

（くっ…：やっぱり剣属性から離れるものだから魔力を喰うわね。でも、これでいける…！）

同時になのはにああは言ったが、自身も解析を駆使して弓と矢を投影して空を飛ばうとする。

三人は驚いていたが、フィアはいち早く回復しシホの肩に乗ってくる。

そしてそのままシホは空を駆け巡る。

それからは成長しようとする木々を火の魔力が籠められている上級の矢で破壊しながらも解析をかけていく。

なのにも索敵したようで桃色の光が散らばっていった。

そして見つかった場所には二人の男女がいた。

「人が閉じ込められているわ！ フィア、なにか手はない!? このままじゃジュエルシードを狙えないわ！」

「…お姉様の魔術は非殺傷設定がないから、今は万事休すです」

くっ！ とシホは毒づきながらも木々の成長を抑えようと矢を放つ。

だが、その時後方からも一つ強大な魔力反応が起こり、何事かと思つた矢先に桃色の閃光が大樹に向かつて走つた。

「なっ!? 遠距離魔法!」

フィアが素で驚いていたがシホは違う意味で驚いていた。

(…あの距離から純粹な魔力光を撃つなんて…。私達の世界じゃ考えられないわ。

恐らく神代の魔術で比べて威力だけなら少なからず迫れるかもしれない。キヤスターが見たらおそらく呆れるか殺気を覚えるか、ぐらいに…。

異世界の魔法は驚きの連続ね…)

そしてあつという間になのははジュエルシードを封印してしまった。

これはもう才能とかどうとかの問題ではない。

こちらの世界ではどうかは知らないがおそらくかなりの使い手の素質を秘めている事は間違いない。

だけど、シホがなのは達の場所に戻つたらなのはは膝を抱えて座り込んでいた。

「…どうしたの、なのは?」

「シホちゃん…私ね、本当は気づいていたんだ。あの子が持ってたこと…でも、気のせいだと思つてた…」

「……………」

シホは黙ってなのはの言い分を聞くことにした。

「もしも、私がすぐに気づいていたら…すぐに封印していたら…!」

「なのは…、だったら今回のことを次に繰り返さないようにしよう。僕ももつとがんばるから」

ユーノはなのはを励ますが、シホは少し怒りを感じていた。

「…なのは。一つ言っておくわ。今後悔する暇があるなら…ユーノが言ったように次はこんな惨事を起こさないように努力をなさい。」

迷ってもいいの。でもそこから這い上がれないならあなたは一生立ち直れない…。

だから一人で背負い込まないで周りにも頼りなさい。あなたは一人じゃないんだから「うん。ありがとう、シホちゃん…」

それでやつとなのはは笑顔を見せてくれて皆で家に帰る事になった。

だが、シホは自分の言った言葉に反吐が出る思いだった。

“周りを頼れ”。

…今更どの口が言っているのか。という思いに駆られる。

ずつと誰にも頼らずに一人で突き進んできた。

その結果が今の姿…まさに滑稽と言わざるを得ない。

「反面教師もいいところね…」

誰にも聞こえないくらいにそう呟いた。

だけどファイアはシホの呟きを聞いていたらしく、

「…お姉様。無理なさらなくてくださいね？ お姉様ももう、一人ではないんですから…」

「ありがとう、ファイア…」

ファイアの心遣いにシホは感謝し、今ある幸福を護つていこうと誓った。

だが、落ち着いてきたところでシホはある事に気づく。

(…そういえば、天駆ける踵タクラの靴ラや洋弓リアが消してもいないのにないつの間にか手元から無くなっている。

無意識に消したのだろうか？

一瞬、サファイアの宝石が光ったような気がしたが、気のせいだろう) 今には気にしないことにして帰る事にしたのだった。

第八話

『金色の魔導師』

S i d e シホ・E・シュバインオーグ

つい最近の新聞にも大きく載っていたあの大樹の事件から少しが経った頃、なのはと私はさすがに家に招待された。

アリサも来るらしい。

そしてさすがの姉の『月村忍』という人物は恭也さんの彼女という話である。

それで私、なのは、恭也さんの三人で月村邸にお茶会に出かけることになったのだけど…。

「シホちゃん。ほんとうに先に行つていい？」

「大丈夫よ。地図ももらったから後から月村邸に向かうわ」

そう。私はなのはと恭也さんとは別に遅れて向かう手筈になっている。

理由は桃子さん直伝レシピのお菓子がまだ出来上がっていないから。

それで出来上がったらすぐに向かうと二人を説得した。

二人が出て行った後、美由希さんは家でお留守番らしくファイアと遊んでいた。

「美由希さん。もう少しで出来ますから味見してもらえますか？」

「うん、わかった。それじゃいこっか、ファイア？」

「キュッ！」

美由希さんはファイアを肩に乗せてやってきた。

私はテーブルの上に今出来上がったばかりの数種類のクッキーを並べる。

それを美由希さんに味見してもらおうと、

「うわー…シホちゃん、すごいね。なんか最近お母さんの作るクッキーと味が似てきた

よ」

「お褒めいただきありがとうございます」

なんとなく従者の態度で一礼して応じてみた。

それに美由希さんはとてもいい笑顔を浮かべた。

どうやら受けはよかったらしい。

「なんかシホちゃんってそういう仕草をするとメイドさんみたいだね。月村邸にもメイ

ドさんがいるけどいい勝負だよ？」

「ファリンさんとかですか？」

「あれ？ シホちゃんってファリンさんの事知っていたの…？」

「はい。まあ……」

それで美由希さんに出会いの話をしたら「やつぱり……」という表情をしていた。ファリンさん……あなたはやつぱりドジっ子メイドなんですネ。

それからクツキーだけじゃ……と思いい紅茶を出して淹れてみた。

少しの間、私と美由希さんはこの静かな雰囲気を楽しんでいた。

「……ふう、シホちゃんつてやつぱり料理も家事もできるし器量もいい。なによりとつても可愛いから将来付き合う人が羨ましいね……」

「(コクコク……)」

美由希さんはそんな事を突然言い出しフィアもなぜか首を縦に振っていた。

そうはいうが私としては元・男性なので付き合う事は恐らくないだろう。

なので支障の無い程度に受け応えを試してみた。

でも、と……美由希さんは少し意味深に低い声を出しながら、

「おそらく、ね？ 私やなのもそうだけどお父さんと恭ちゃんがきつと……『娘はやらん

！ 欲しければまず私達を倒すことだな！』とか言つて襲い掛かりそうだよネ。二人とも妙に過保護だから……」

「あ、あはは……」

そんな事は無い、とは言い切れない……。

翠屋でなのは言い寄ってくる同年代の輩にガンを飛ばしているのが時々窺えるから。

そういえば、この間のサッカーチームの時も私が接客をしていた時に同じ目をしていったっけ？

目は笑っているのに雰囲気は逆に怖かったのが印象的だった。

物思いに耽つているところに、美由希さんの「ご馳走様。美味しかったよ、シホちゃん」という言葉でこの場はお開きになった。

それから持っていく分のクツキーをリュックに詰めてフィアを肩に乗せて出かけようとしたところ、

「シホちゃん。月村邸にいくなら気をつけた方がいいよ？ あそこは初めての人にとつてはある意味人外魔境だから…恭ちゃんも破壊の選択取ったし…」

と、いう不吉な言葉を残して道場に向かつていった。

私は不安を拭い去りながらも今度こそ家を出る。

《お姉様…先程の美由希さんの言葉、どう取りますか？》

《なにかの例えか比喩じゃないかしら？ ほら、恭也さんが破壊を選択したっていうのも、もしかしたら冗談かもしれないし…》

《だといいいのですけど…》

フィアと思念通話でお互い冗談だという事で自己保管することになった。

それから少しして月村邸が見えてきた…のだけれど。

「でかいわね…」

「でかいですね…」

そう。とても広いのだ。左右どちらを向いても曲がり角や家が見えない。

いや、別に私の目にかかれれば見えないことも無いけどそれでも普通の人には到底見えない距離までいかないと見えない。

彼のエーデルフェルト邸もこのくらい広かったっけ？

とりあえずメモ書きを広げてそれに従い正門までたどり着きインターホンを鳴らした。

『いらつしやいませ。どちら様でしょうか？』

インターホンから電子音の言葉で話しかけられてきた。

正直に私は驚いた。

まさか正門に音声ロックがかけられているなんて。

「私はシホ・E・シユバインオーグというものです」

『声紋確認中………確認いたしました。どうぞお入りください』

そして正門がゆつくりと開いた。

「すごいわね。声紋まで確認するなんて……さすがが事前に私の声を登録しておいてくれたのかしら？」

私が暢気にそんな事を言っていた矢先に突如正門が凄い勢いで閉まり一般人では飛び越えるのも不可能なほどに扉や門が高くなった。

「ちよっ!!？」

「な、なんですか!？」

『侵入者！ 侵入者！ 迎撃体勢レベル5!』

「なんでよ!？」

不条理の叫びを上げた次の瞬間に足元に何かが撃ち込まれた。

……はい？

私の目がおかしくなければ今のはまさしく銃弾！ 銃弾!?

そして銃弾が飛んできた方を見ると二足歩行のロボットが何体もこちらに迫ってきていた。

その手には……剣？ 銃？ 他にもたくさん持っている。

ここは某死神が居座る魔窟と同じか!?

割烹着の悪魔……ッ！

「あの、お姉様……!」

私がかかりテンパっているとところでフィアの言葉に現実に戻された。

「と、とりあえずフィアはリュックの中に入っていないさい！ 私がなんとかするから！」

「は、はいです！」

フィアがリュックに入ったのを確認後、

「まったく…声紋の登録無しだけで襲いかけられるなんてたまったものではないわね？

とりあえずそちらの不手際という事で防衛行動を取らせてもらおうわよ？——
トリース・オン
投影開始。是、物干し竿…！」

私はアサシン——佐々木小次郎——の物干し竿を投影した。

以前の私ならアサシンと同じくらいに構えられたが、今では二倍かそこらの長さがあるので私が持つには少しづらいが投影した。

実は言うとうちは物干し竿と相性はいい方なのだ。

なぜかっていうと多重次元屈折現象キシュア・ゼルレッチを技として起こせるから。

宝石剣の一所有者としては是非ともアサシンに師事したのはいい思い出である。

もちろん四日間の話であるが…

何度も繰り返す事でアヴェンジャーを通して私の技量も上がっていったらしい。

それは他のサーヴァントにも通じることだからこれだけはアヴェンジャーに感謝している。

閑話休題

私は物干し竿を構えて迫ってくるロボットを撃退しようと試みる。



Side 高町恭也

…なぜだろう？

もう二度と聞きたくない防衛装置が作動しているような気がするぞ。

しかも俺の時と同じくらいの騒音が聞こえてくる。

「…なあ忍。俺が以前に味わったレベル5の防衛装置がまた作動していないか？」

「おかしいわね？ 恭也級の使い手なんてそうそうお目にかからないのに…。土郎さん

と美由希さんももう登録してあるし…」

「そういえばシホちゃん、まだ来ていないよな？」

「その子って確か恭也の家の子になったっていう女の子の事？ なに？ そんなに強い

の?。」

「ああ。おそらくなんでもありなら俺より強いかもしれない……。やばい! きつとシホちゃんも襲われているんだ!」

その時、なのは達とフアリンさん、ノエルさんが急いで部屋に入ってきた。

「お兄ちゃん!」

「ああ、分かっている!……忍、帰ったら少しおしおきな?」

俺は素晴らしい残しすぐに庭に向かおうと:「ドーーーーンツ!!」:した矢先に爆発音が響いた。

それで全員顔を青くした。

なのは達なんて涙を浮かべている。

「すぐに向かう! ノエルさんはすぐに防衛装置の解除を!」

「畏まりました、恭也様!」

俺は爆発音のした場所に全力で向かい、だがそこで目にした光景に目を見開いた。

服装は爆発の影響であちこちボロボロだが、それでも無傷でシホちゃんは自身の身長以上の長さはある刀を持ち、

「秘剣——……………」

シホちゃんが鋭い眼差しをして刀を水平に構えた途端、殺気がたち込めだし周囲の温度が一気に下がり、しかしまだ生き残っているロボット達はシホちゃんに向かったが。

「燕返し……!!」

その必殺の言葉とともに異なる軌跡を描く三つの斬撃が全く同時にロボット達に襲い掛かり回避行動も出せずにすべてのロボットは見事に切断された。

そして警戒を緩める気配を見せないでシホちゃんはゆっくりとこちらに振り向いた。

——視線が交差したその瞬間、俺は、シホちゃんの握っている刀に、斬り殺される光景を、幻視した。

思わず俺はシホちゃんのその目に恐怖を覚えた。

…あれがシホちゃんの裏の顔の一端だということのか。

どれだけ過酷な人生を送ってきたのだろうか…。

ただどすぐにシホちゃんはいつもの表情に戻り、

「きよ、恭也さん!？」

先程までの雰囲気が一気に霧散して慌てて刀を消したようだ。

「無事だったんだな…」

「…はい。途中何度も爆発や襲撃を受けてこんな有様ですけど…」

なんとか心に余裕が出てきてゆつくりと観察してみるとシホちゃんの髪は少し煤汚れていた。

他にもあるけど、とりあえず一回洗い流した方がいいな。

「シホちゃん。一回お風呂を貸してもらえ。その姿じゃ恥ずかしいだろう?」

「そ、そうですね。それじゃお願いします…」

頬を赤くしながらシホちゃんは承諾してくれた。

「ところで、さっきの技は…」

「あ…もしかして見てました?」

それから先程の技はやはり『燕返し』というものらしく屋敷に戻る道中で説明してもらった。

内容はとんでもないものだったが…。

三方向からの攻撃がまったく同時に発生するというもの。

一の太刀はまず頭上から断つ縦軸。

二の太刀は一の太刀を避けられない為に逃げ道を塞ぐ円の軌跡。

そして三の太刀は左右への離脱を阻む払い。

…つまり逃げ場はほぼないに等しいという恐ろしい剣技だという事。

これでは神速込みでの『薙旋』でも打ち合えるか怪しいところだ。

「シホちゃんはその歳ですごいな。そんなものまで使えるなんて…」

「ある知人の模倣をしただけです。本物はあんな物じゃありませんから」

「是非その人物に会いたいものだな」

俺は不謹慎とも思うが心が高揚としていた。

シホちゃんは剣の才能は確かにはないけど様々な引き出しをたくさん隠し持っている。

それがシホちゃんの強さの一つだ。



シホが服はボロボロで疲れた表情をして恭也と一緒にやってきた。

それで全員ホツとしたのかなのは思わずシホに泣きついてしまった。

そしてシホはノエルに連れられてお風呂場に向かっていった。

「…恭也。シホちゃんって…」

「忍、心配するな。少し訳ありだけどもいい子だよ。むしろ可哀想な子とも言える」
「後で教えてね…?」

「なのは達はこの事を一切知らないから内密に頼むぞ?」

「ええ…」

そして恭也と忍は静かに会話を終了した。

しばらくしてシホは、なぜかメイド服姿になって皆のもとに帰ってきた。

それで一同は言葉を失う。

なぜかという、似合いすぎていたのだ。

(…普通の服でもよかったのに…。やっぱり世界の意思は私に転職しろと言っているのかしら?)

シホは心の中で愚痴っていた。

だが周りはシホの心境などお構いなく、

「シホちゃん可愛い!」

「まさかここまで似合うなんて思っていなかったわ…」

「うんうん!」

上からずかずか、アリス、なのはの順に素直な感想を述べた。

シホは少し口を轢きつかせながら、

「あの…ノエルさん。お風呂を貸してもらったのは嬉しいんですけど、なんでメイド服なんですか？」

「すみません、シホお嬢様。現在ずかお嬢様の服はすべて洗濯をしております…」
ノエルは済まなそうにそう言った。なんでも月に一回は一斉に洗いに出してしまうという話である。

シホは運悪くこの日に当たってしまったのだ。

「…そうですか。それじゃ私はなにかした方がいんですか？」

「別に何もしなくていいわよ？ 大切なお客さんなんだから」

忍はそう言っているがシホはある事を思い出した。

急いで持つてきていたリュックを開けた。

中には未だに目を回しているファイアットがお菓子と一緒に入っていた。

「ファイア、大丈夫…？」

《は、はいです…》

ファイアットはなんとか復活したのかシホの肩に乗ってきた。

それで安心したシホは持つてきたお菓子が崩れていないことを確認して、

「あの、私が作ってきたものですけど良かったら食べてください」

「わあ……とっても美味しそうだね。これシホちゃんが作ったの?」

「うん、そうよ。独自の作りに桃子さんの技法をミックスして作ってみたの。結構自信作だから食べてくれたら私は嬉しいわ」

「それじゃ頂くわね」

「さすがが聞いてきたのでシホは詳細を伝えて、アリサの一言で一同はそれぞれクッキーを食べて美味しいという言葉を送ってくれた。

「それではお飲み物を用意してきますね?」

「ありがとうございます、ファリンさん」

「いえ、それより以前に教えてくれた料理の仕方を試してみたんですけどいつもより美味しくできたんですよ。だからありがとね。シホちゃん」

「そうですか。お役に立てたならよかったです」

またファリンと料理談義を始めかけていたシホだがそこで忍が急に迫ってきた。

「あの料理の作り方、シホちゃんがファリンに教えたの!」

「は、はい……。スーパーで買い物している時にちよつとした切欠でファリンさんと知り合いましたその時に……」

「へえ……」

（ちよ……いきなり何か企んでいるような目つきをしないでください。後ろに控えている

ノエルさんも何故かそういった気配が感じますよ!?)

シホが少し引き気味になっていたところ、すずかがある事を尋ねてきた。

「…ところでシホちゃん。ファリンだけど、その時になにか迷惑かけなかった…?」

「迷惑…? 別になかったけど…せいぜい振り向き様にヘッドバットをくらったくらいかな?」

「シ、シホちゃん!? それは言っちゃダメ!」

「え…?」

ファリンは思わず声を上げたがもう手遅れで全員一斉に『やっぱり…』という表情になった。

シホは「あ、もしかして地雷踏んじやった…?」と思っってしまった。

それでファリンも「なんですか皆さん! わ、私はそんなにドジじゃありません!」と必死に抵抗したが、全員一字一句間違わず『いや、ドジっ子だし…』と言われてしまった為にファリンはあえなく撃沈した。

シホはぼつが悪そうな表情をしながらファリンを慰めていたのが印象的だったと後にすずかが語る。



S i d e シホ・E・シユバインオーグ

それからなんとかフアリンさんを立ち直らせて私はメイドの真似事をしていた。

執事なら以前の体で、エーデルフェルト家で仕込まれたので平気なのだけど、メイドに關しては知識が少ない。だがやることは執事とあまり変わりもしないので結構早く馴染んでしまった。

「しっかし…シホって本当にメイド初心者なの？」

「え？ うん、そうよ。アリサ」

「…にしては妙に様になっているわよね？」

「そうだね、アリサちゃん」

「今度一日ウチでメイドをやってみない？ シホちゃんならすぐに習得できると思うわよ。」

恭也に聞いたんだけどシホちゃんって料理に家事洗濯、他にも頭もとてもいいらしいじゃない？

極めつけは恭也との朝の一本勝負でいつも引き分けているって話だし…」

私は別にすごくありませんよ…と言おうとしたが、

「もしかして、シホちゃんって猫アレルギー…?」

あ、そうかもしれない。

考えてみればイリヤって猫嫌いだったわね。

もしかして、これも一つの原因?

とりあえず私はお手洗いを貸してもらいにまた屋敷に入っていった。

そして帰ってくるとなぜかなのは、ユーノの姿がなかった。

「あれ?　なのはとユーノはどこにいったの…?」

「なのはちゃん?　なんかユーノ君を追っかけて森の中にいつちやったよ」

さすががそう教えてくれたので私は思念通話でファイアに話しかけた。

《ファイア…なのは達は?》

《ジュエルシードの反応がしたらしいので兄さんがどっかにいく振りをして森の中に

入っていききました》

《そう…:こんなところにもあったのね。ファイア、追うわよ!》

《はい、お姉様!》

ファイアが肩に乗ってきたのを確認して、

「それじゃちよつとなのは達を探してくるわね。すぐに帰ってこれると思うから待ってね」

「うん。わかったわ」

二人の了解をとって私は森に駆けていった。

駆けている途中で私はこの格好ではあまり派手な動きは出来ない判断し柄だけの黒鍵を投影して木の枝を足場代わりに魔力反応のある方へと向かった。

途中で結界があつたがそんなものは関係なく通過するとそこには巨大な猫：そして白いバリアジャケットのなのはとは対照的に、黒い服装とマントを纏った金髪の少女がまるで斧のような杖を構えてなのは達を見下ろしていた。

《…他の魔導師かしら？ 見たところ仲間内には見えないわね》

《なのはさんと兄さんはどうやらあの子と交戦中みたいです》

そしてその少女はジュエルシードによって巨大化している猫に注意が逸れていて集中できていないなのはの姿に好機と見たのか、

「ごめんね…」

そう呟き金色の集束魔法らしきをなのはに放つたけど私はさせまいと縮地法を使いなのはの前に立ち、

「熾天覆う七つの円環!!」

あまり投影する時間が無かつた為に花卉の数は七枚ではなく四枚になったが、それでも少女の放つた収束魔法を受け止めるには十分だった。

無駄とはいわないけど神秘が籠もっていないあの程度の魔法にこの一枚一枚が古の城壁に匹敵する無敵の盾を突破することなど不可能。

案の定、予想通り一枚にほんのちよびつとだけ輝が入ったが投影時間を考えれば許容範囲内だ。

「なのは、ユーノ、無事？」

「シホちゃん！」

「シホ！」

なのは達が驚いている中、私は金髪の少女に目を向けたまま、

「あなたは何者…？」

「あなたこそ何者ですか…？　メイドさん」

少女も同じく驚いていたようだがすぐに体勢を立て直して逆に私に問いかけてきた。

…ふむ、どうやら素人…というわけではないみたいね。

無表情だがその瞳には強い意志が感じられる。

ただ、孤独そうな瞳でもあるけど…。

でも、確かに今の格好はメイドだけどそのまま口に出されるとくるものがある。

少し落ち込みながらもすぐに表情を引き締めて、

「そうね。私はこの子…高町なのはを守護する者よ」

「そう…。でも、今みたいな強力なシールドは見たことない。あなたはただの魔導師とは思えない」

「教えるとも思っているのかしら？」

「それなら力づくで…！ フォトランサー、ファイア！」

少女が金色で槍状のスフィアを放ってきたが間髪いれずに私はその手に持っていた黒鍵の柄から刃を出現させフォトランサーと呼ばれる魔法の数分を投擲。

双方衝突して魔法は掻き消した。よし、黒鍵程度でも対処は可能と判断。

少女もすぐに中距離は不利と察したのか、

「バルディッシュユ！」

《Scythe form》

私が介入する前に見せた鎌状の形態にデバイスを変化させてそこから魔力刃が出現した。

それで私も干将・莫耶を投影して、同時に思念通話でファイアにある伝言を伝える。

ファイアは了解しなのは達の方へと向かっていった。

そして私は少女に向かって駆けた。

だが相手も素人ではないため隙をあまり見せていない。

次の瞬間、凄イスピードで突撃してきたため夫婦剣を交差させて魔力刃を受け止め

る。

スピードを重さに変えてそのまま叩きつけてきたか。なるほど、この歳にして確かに強い…。

少女は受け止められると即座に後退し鎌を横に構えて、

「アーク！」

《Arc Saber.》

「セイバー！」

魔力刃が杖から回転するように射出され私に迫る。

それを双剣を投擲することによつて粉碎する。そのまま双剣は霧散と化した。が気にしない。

私はその時、フィアとの会話を思い出してある事を実践してみることにした。

今度はこちらから徒手空拳で迫り、少女も追撃しようとするが…

魔力の制御が完全に出来ていないらしくスピードは速くても一直線気味でとても読みやすい。

木の幹を足場に縮地を使い少女の背後を取った。

少女はすぐに杖を構えるが、遅い。

胸に手を添えて足の踏み込みとともに掌を押し付けた。

そう…『浸透勁』を少女に叩き込んだのだ。

「カツ!?!」

少女は胸を押さえて苦しみだした。

どうやらバリアジャケット越しても通用するみたいだ。

そして少女に近寄ろうとした時に突如頭上から殺気にも近い気配を感じたので即座にその場から離れた。

「やっと出てきたようね。さつきから気配は感じていたからいつ来るか待っていたのよ」

「グルルルル…ッ!」

私が目を向けた先には額に赤い水晶が埋め込まれているオレンジ色の狼が少女を守るように私を威嚇していた。

どうやらこの少女の使い魔のようだ。



Side 謎の魔導師の少女

《フエイト、大丈夫かい!?》

《うん…なんとか。でもあの子、強い…。私の攻撃がすべて見切られている。そして今の攻撃…バリアジャケットの保護がまったく通用していなかった》

《なんだって!?》

《でも、ジュエルシードは封印しなくちゃ…!》

《そうだね!》

私達が思念通話で会話をしていた。

でもそれもあの少女にはお見通しだったようで、

「なのは! 今のうちにジュエルシードを封印しなさい!」

「!?」

思わず私達は戦慄した。

気づいてみれば白い子はシーリングモードで封印体勢に入っていた。

彼女はこれも想定して私と勝負をしていた!?

すぐにいなくなっちゃ…!

私とアルフはすぐに駆け出そうとしたが、

「…出でよ、天の鎖」

「!?」

またしても驚愕を禁じえなかった。

私達は地面から魔法陣もなしに突如として現れた無数の鎖によつて手足を拘束されてしまったから。

その間にも白い子はジュエルシードを封印してしまった。

悔しさが滲み出てきたが今はもうそれどころではない。

私は体を無理やり動かしてサイスフォームで鎖を切断。

アルフも力づくで引きちぎった。

「っー 逃がさないわよー」

少女が走ってきたが渾身の力で放ったアークセイバーで足止めをした。

そして転送魔法を展開して私達はかろうじて離脱する事に成功した。



S i d e シホ・E・シュバインオーグ

…せっかくの別の魔導師に接触したので捕まえようと思っていたがまだ読みが甘かったらしく天の鎖は引きちぎられてしまった。

その際、私は別思考で「…ああ。あれでもバーサーカーをも拘束した鎖なのに。なんて罰当たりな…」と考えていたがすぐに振り払った。

だがこれで敵勢力は大体分かった。あの少女にオレンジの狼。

戦ってみて分かったけど他に気配は感じなかったため現状は彼女等だけでジュエルシード集めをしていると判断。

背後関係は後ほど分かってくるだろう。

そしてかなり時間がかかった為、なのはには気絶している猫を任せて皆のところに戻った。

なぜかなのはは浮かない顔をしていたが今は聞かないことにした。

そしてお茶会は終了し、恭也さんはまだ月村邸に残るといつていたので私となのは達だけで帰ることになった。

メイド姿だが仕方がない…。

その帰り道、

「…シホちゃん」

「ん？ なに、なのは？」

「あの、ね…私に戦い方を教えて欲しいの！」

その驚きの発言に私はもちろんユーノとファイアも驚いた。

「どうして…？ やっぱり今日のあの子の事が気になったの？」

「うん。それもあるけど…私はあの子の事………ううん、なんでもない。でもシホちゃん達だけに戦わせて足手まといになるのは嫌なの…」

「別になのはの事は足手まといなんて思っていないわよ。ね、二人とも？」

私の言葉に二人は素直に頷いてくれた。

でも、と…私は一時言葉を切り、

「ねえ、なのは。戦うっていうのはどういふことかわかる？」

場合によっては相手を傷つけてしまうかもしれないのよ。そしてこちらも傷つくこともある。

私もなるべく傷つけないように穏便に今日は済ませたけどきつとあの子は傷ついた。それに次はそううまくいくか分からない。

あなたにその覚悟があつて…？」



S i d e 高町なのは

「あなたにその覚悟があつて……？」

シホちゃんはその真剣な言葉と眼差しに少し黙り込んでしまった。でも、あの子はとても悲しい目をしていて。

…そう、初めてシホちゃんが目を覚ました時に見せた、孤独を知っている目。シホちゃんはきつと私以上に孤独というものを知っていると思う。

そして今日のあの子も同じ目をしていて。

シホちゃんとはお話をして友達に、家族になれた。

だから、きつとまた戦うことになつちやうかもしれないけど、あの子ともお話をしたい！

「覚悟っていうのは曖昧だし…戦う理由も明確にはまだない。

だけどあの子はとても悲しい目をしていて。どう言えばいいのか分からないけどあの子にいつまでもあんな表情は似合わない。

私は放っておけない。だから今は力が欲しいの。あの子を救えるだけの力が……」

「……………」

私は伝えるだけの言葉をシホちゃんに言った。

それでシホちゃんは少し顎に手を添えて黙り込んでしまった。

その少しの沈黙が私にはとても長いものに感じたけど、やがてシホちゃんは口を開い

て。

「…わかったわ。なのはにそこまでの覚悟があるなら私はもう止めない。

明日からあの子に対抗できるように強化プランを作ってみるわ。ユーノにファイア、それにレイジングハート。協力してくれるかしら？」

「…うん。もとは僕達が招いた事だから全力で協力するよ」

「お姉様のお願いならなんでも聞きます！」

《わかりました》

するとシホちゃんだけでなくみんなも協力の意を示してくれたので私は嬉しくなつた。

だから私もただ強くなるだけじゃなくて、心も強くなろうとその日に誓った。

第九話

『修行とフェイトとの出

会い』

金色の魔導師（名前が分からない為に暫定的にこう決まった）との戦闘後、シホ達は暇を見てはシホの部屋に集まり話し合いをしていた。

なぜ、なのはの部屋ではないか？

と、いうとこの部屋には現在着々とだけどシホの結界が構築されてきているからだ。キヤスターのスキル、『陣地作成』と比べると像とアリほど差があるが十分昔に比べれば結界構築がうまくなってきた。

後は普通にユーノやフィアットが喋っていたら美由希あたりは失神でもしかねないという理由から。

そしてレイジングハートと魔法知識に詳しいユーノとフィアット、それにアレンジを加えるシホである程度強化プランが練られてきていた。

が、話に加わる事ができないという理由から、

「あの…私って今、もしかして孤立していないかな…?」

なのはがふとそんな事を言い出したが、全員揃って「きつと気のせい」と言った。

レイジングハートすら《気のせいですよ、マスター》と言った為に、なのはは少し落ち込んでいた。

とりあえずプランが纏まってきたので一気になのはに伝えることにした。

「まず今は暫定的だけどあの子の名前が分からない以上『金色の魔導師』って事にしておいて、あの子の厄介なところはやっぱりスピードね。」

なのはを鍛えることにしたから甘い事は言わないことにしたので正直に言うけど、あの子にスピード戦か接近戦勝負を持ち込まれたら即座に距離を取るか防御行動に徹しなさい。

たぶん身体的能力も関係していると思うけど、それを考えると例を上げるならフェアリオンさんだけど、あそこまでじゃないけどなのはもたまに何も無いところで転ぶところがあるから…」

なのはは自覚している節があるのであえなく撃沈した。

「はいはい。落ち込まないの。その為に今は対策を考えているんじゃない?」

それじゃ、今から彼女に対して対策をいくつか挙げるわね。

彼女が使った『フォトンランサー』…確認したけど今のところは二種類。

いくつか数を出してそれを対象に向けて放つおそらく直射型。

それとなのはの『デイベインバスター』と似た集束型。

たぶん他にも複数タイプがあるでしょうから、まずなのはは似たタイプのスフィアを複数生成できるようにしなさい。

望むところなら誘導型が好ましいわね。

そして数は彼女が撃ってきた数のせめて1.5倍くらいは操れるようになれたらこちらとしてはいいわね。

でも現状は正直時間が無い……だからせめていくつか操れるようになりなさい。

まずこれが一つ目。レイジングハートもなのはをうまくサポートしてあげてね？」

「うん。わかったよ、シホちゃん」

《お任せください》

まず一つ目の対策が終わり、シホは「よし、次ね」と言った。

「次は防衛系。これに関しては『プロテクション』があるけど少し心もとないものがあるわ。

まだなのはは意識的に——魔法全般だけど——すぐに発動させられる程まだ腕はない。

だから無意識だけでなく意識的にでも咄嗟にプロテクションが展開できるように努

力ね。

後、今後のプラン次第ではプロテクションの強化もした方がいい。いいわね？」

「はい！」

「次、これはちよつと重要になってくるけどファイア達と話し合つた結果、おそらく彼女はスピード重視の魔導師。」

だから今のスピードに加えて移動系の魔法を使用してくる事が想定されるわ」

「お姉様の縮地法には及びませんけどね」

「しゅくちほう…?」

「あー！ ファイア!」

「あ…ごめんなさいお姉様。でもこの間なのはさんを助ける時に使用した時は凄かったですから…」

「はあ…まあいいわ。縮地法っていうのはね…?」

シホはえらく疲れた表情をしながら二人に武術の奥義の『縮地法』とあの時彼女に喰らわした『浸透勁』の説明をした。

すると二人ともすごい驚いた表情をした。

「そんな技術がこの世界にあるんですか!」

「…ええ。つて、どうかあなた達の世界はファイアに聞いた限りでは魔法に頼りすぎな点

があるから。

それとあの時はバリアジャケット越しに通用するか試してみたけど問題なく使えたわ。

でもこれに関してはフィアはともかく二人には向いてないからこの話はもうおしまい。

さ、話を続けるわよ？」

シホが話を再開したがユーノはフィアットに思念通話で、

《…まさかフィア。シホに武術とか習っていたりしない？》

《よくわかったね。うん、兄さん達には内緒で前からお姉様に色々教えてもらっているわ。

今では縮地の簡易版だっという瞬動術を少しだけ出来るようになってきたの》

《はあ…ほんとにフィアは接近戦向きだね》

《当然よ。兄さんと違ってサポート面は性に合わないからね。今ならもう師匠に勝てる自信すらあるわ！》

《…そ、そうなんだ》

二人がそんな会話をしている間にも話は進行している。

「とにかく多分彼女も使ってくると思うから移動系の魔法もなにか習得しておきなさい

い。

レイジングハートにそこら辺は相談しておくのね。

後、対象を捕縛するバインドは必ず覚えること」

「うん！」

「そして次に厄介なのは、杖を鎌状に変化させて使うタイプ…あのバルディッシュっていうデバイスが発していた発言から『サイスフォーム』。

あれは幻惑の類に入る魔法だからさつきも言った通りあまり接近戦はお勧めしないわ。

加えてそれを切り離して飛ばしてくるから回避行動は必須ね。よってこれを喰らわないためにもさつき言った移動系の魔法の習得も頑張りなさい。

これで一応彼女に対しての魔法対策は終わり。

あ、そうそう…なのは？」

「ん？ な、に………えっ？」

シホは突如ナイフを投影してなのは目の前にかざした。

なのははそれにびっくりしてしまい目を瞑ってしまった。

ファイアットはある程度予測していたので平然としていたが、ユーノは言葉を失っていた。

シホはなのはが目を瞑ったのを確認して、

「…まずは何があつても目を瞑らないことを心得なさい。

それが出来ない以上さっきの対策も無駄骨に終わるから…。

そしてまとめとしては体勢を崩してもそのまま思考を硬直させないですぐにその場から反撃か離脱をすること。

近距離に持ち込まれたら回避か防御を重点して行うこと。

回避プログラムもいくつか作っておくこと。

そして、なのはの取り柄である中距離から遠距離にできるなら相手を誘導して優位性を崩さないこと。

…理解できた？ なのは

「…う、うん。って、いうかいきなりナイフを向けないでよ!? 私すぐく驚いちゃったん

だから!」

「ごめんなさい…。でもあれくらい相手はしてくると思うからこれからの短期訓練でこれをできるだけできるようにするわよ」

「は、はい…」

「それと一つ忠告しておくけど無茶な訓練は禁止よ。少しずつ日に日に増やしていくから。」

睡眠時間を減らしても逆に効率が落ちるし、いつか体を壊したらシャレにならないから。

日々の積み重ねが確実に身につくように私も厳しくいくから覚悟しておきなさい」

「……………」

「返事は…?」

「は、はい！ わかりました！」

シホが左手で目を隠しその隙間からなのはを覗き見た。

なのはは昔に見た怖い映画を思い出してしまいすぐに返事をした。

「そ、そういうえばシホってなんでそんなに教え方がうまいの？」

一回戦っただけの彼女の戦闘法をすぐ見抜いちやうし…。

それに今までずっと思っていたことだけど、どうやったらそんなに強くな……か

ふっ!？」

それ以上の言葉は続かなかった。

なぜかというファイアットがフェレット状態なのに構わず『浸透勁（修行中バージョ

ン）』を打ち込んだから。

それでユーノは体を痙攣させている。

中国拳法をするフェレット…シユールな光景である。

「…兄さん？ 人には知られたくない過去だつてあるんですよ。」

だから執拗に聞くのは頂けません。わかりましたね？」

「は、はい…」

ユーノはもう聞かまいと心に誓った。

でもなのはは逆に話してくれたら嬉しいな…とも思っていた。



Side シホ・E・シユバインオーグ

それからなのはの訓練が始まったけど、正直飲み込みが早くて上達がすごい。

今ではスフィア——『ダイバインシューター』に決まったらしい——を四つは形成できるとなった。うち二つは誘導可能。

それに魔法の習得に加えて、分割思考と似たマルチタスク（同時思考）も一緒にやっているからなのはの才能は天井知らずではないかと思うくらい。

ユーノ曰く、『なのはは基礎も癖も全くない更地の状態だから基本はすぐに覚えらる』と言っていたけどすごい一言。

目ももう咄嗟の事が無い限り瞑らなくなったので及第点ものだ。

私達は遠くで訓練しているのはとそれに付き合っているユーノを見ながら、

「本当にすごいわね。実はなのはって魔導師になる為に生まれてきたんじゃないかしら？」

「そうですね、お姉様…」

「フィアも…あれくらいになりたい？」

「えっ…?」

「フィアってたまになのはの事を見ては溜息ついてるから、もしかして羨ましいんじゃないかなと思ってね。勘違いだったら謝るけど…」

「そ、そんなこと…ない、です。でも少しだけ思っちゃうことも、たまにあります…」

「そう。前も言ったけどフィアって魔導師っていうより騎士よりだから、もしかしたらそっちなら高みを目指せると思うのよ。」

ただそういう体系があれば嬉しいんだけど…」

「…昔はあつたみたいですよ。『ベルカ式』っていうんですけど昔に使い手がいなくなつて衰退したっていう話ですけど。」

内容は、インテリジェントデバイスみたいに中距離から遠距離までなんでもできるタイプではなく、魔法サポートはある程度けずって武器としての性能を高めて戦うものら

しいです」

「ふーん……？ まさに私やファイアにピッタリなタイプね」

「そうですね。そういえばお姉様は魔法は習得しないんですか？ これもいい機会です

し、デバイスはありませんけど魔法理論がわかれば使えますし……」

私は少し考えた。

ま、試してみてもいいかな。

使えるならこれからの（魔術をあまり広げたくない）ためにも役立つし……。

そう思い私はリンカーコアに働きかけて見たところ、地面に魔法陣が出現した。

「……ん？」

「え……？」

確かに魔法陣は形成されたが、なのは達のように丸い円状のものではなく三角の形をした朱色の魔法陣が出現した。

これって、ミッドチルダ式じゃないわよね……？

とりあえず私はなのと同じようにスファイアを出そうと思ったが……やめた。

「あはは……これってなにげに公にしない方がいいと思うのよ。そ、それに私にはほら！

魔術があるじゃない？」

「そ、そうですね。これは二人だけの内緒にしておきましょうー！」

こうしてこの件はある事件が起きるまで心の底に封印されることになった。

そんなこともあつたが私はとある買い物帰りにとある公園によつていた。

理由は特にないけどたまにはゆつくりしたいと思う時もある。

別にフアリンさんがいたらまた料理談義ができる…なんて思つてないわよ？

それでベンチに腰掛けてゆつくりしていたら公園の鳥達や猫が集まっていることに気づき、そういえばイリヤはよく公園で歌を歌つていたことを思い出した。

だから私もこの体をくれたイリヤに感謝の意味をこめて…、

「~~~~~♪~~~~~♪」

ローレライを口ずさむ。

イリヤの得意の歌でもあり、バーサーカーにもよく聞かせていたという。

イリヤの知識とともに歌い方まで一緒に私の中へと流れ込んできた…。

私の中でイリヤは確かに生きているんだ…。

だからイリヤにも聞こえるように心をこめて歌う。

「~~~~~♪~~~~~♪」

歌いながら思う。

私はイリヤにここまで想われていて今は幸せなんだ。

だから、これからももちろん、この体も大事にしていききたいしイリヤとの約束もしっかりとして守っていききたい…。

せっかくイリヤが私に与えてくれたやり直すチャンスなんだから。

そう心の中で思いながら私は最後までゆっくり静かに歌いきる。

でも歌い終わって目を開けてみたら、周りにはいつの間にか飼われているもの、そうでないものも問わずに動物達が私の歌を集まって聴いていたことに驚き少し照れていた。

ふと、その動物の中につい最近見たような大型の動物もいることに気づいて、

「…いい歌ですね。隣、いいですか？」

「あ、はい。どうぞ…」

話しかけてきた人物を見るとその人物はあの時の少女だった。

まさか話しかけてくるとは思わなかったけどこれもいい機会ね。



Side フェイト・テスタロッサ

私は公園で広域探査中にアルフがいないことに気づいた。

どこにいったのだろうと思つて思念通話を試みてみたけど、あつちは気づかなかつたみたいで何故か心の中で鼻歌までしている。

なにがあつたのかな？ と思つてアルフがいるだろう方に向かってみると、

「~~~~~」

…とても綺麗な歌声が聞こえてきた。

何の歌かはわからなかつたけど、歌っている人物を中心に周りにアルフを含めた動物達が集まつて聴き入っている。

思わず私も聴き入ってしまったけど、ふと歌っている人物を見て息を呑んだ。

彼女はこの前に白い魔導師の子と一緒にいて私達を圧倒した少女だった。

「~~~~~」

私は彼女が歌いきつたところを見計らつて賭けにも近い話し合いを試みてみた。

「…いい歌ですね。隣、いいですか？」

「あ、はい。どうぞ…」

彼女は少し驚いた表情をしていたけどすぐに体裁を立て直した。

そして、

「少し近づいていた事には気づいていただけ…話しかけてくるなんて思わなかったわ」

「そうですか。でも、少しあなたの事に興味が持ちまして…」

「そう…。それで何が聞きたいのかしら？」

「あなたにはきつと言葉でも勝てそうにありませんから、率直に聞きます。あなたは、何者ですか…？」

「前にもその答えはしたつもりだけれど…？ 私はあの子…高町なのはの協力者。そして家族よ」

「そうですか。では話題を変えます。あの魔法はなんですか？ 今まで色々なものを勉強してきましたが、あなたの様なものは見た事も聞いた事も無い…」

「教えるつもりは無いわ。まあ、しいていうならそちらでいう転送系と想ってもらって構わないわ」

彼女は笑みを絶やさないうで私に受け応えしてくれている。

でも、その一方で目の奥にはとても強いものを感じる。

どう表現すればいいのか分からないけど、きつと私はこの子の目に本能的に怯えている。

アルフも気づいたのか警戒している。

だけどいきなりその威圧とも取れる眼差しがなりを潜めて、裏の顔が無い見た目通りの少女になった。

それに呆気に取られている中、

「あなたのお名前、教えてくれない？　いつまでもお互い名前が分からないんじゃないよ？」

「…私達は敵同士ですよ？　そんな必要はあるんですか…？」

「あるわよ。第一今この時は敵対してないじゃない？」

「……………」

この子は裏の顔を隠しながら話するときもあるけど、自然に表裏関係なく話するときもある。

とても不思議な子…。

「フェイト。フェイト・テストロッサです…」

「フェイトね。うん、とても可愛い名前ね」

「なっ！」

私はすぐに顔が火照ってきたのがわかる。

この子の言葉はなんでかとても心の奥底まで響いてくる。

「それじゃ次は私ね。私の名前はシホ・E・シユバインオーグ。長いからシホで構わない

わ

「シホ…」

「うん。これでもう私達は知り合いね」

彼女：シホは屈託ない笑顔を浮かべていた。

それを私はどう対応していいのかわからないから思わず視線を逸らしてしまった。

それでもシホは気分を害さずに、

「それじゃ、さつき質問されたんだから今度はこちらの番よね。…でもその様子だと答えてくれそうにないわね？」

「すみません…」

「別に気にしていないわ。でも今ならなのは達はいないから私を倒すなら絶好のチャンスだけどいいの?」

「構いません。私の目的はあくまでジュエルシードの確保…。だからそれ以外ではあまり戦闘はしたくありません」

どうしてここまで答えてしまったのか分からないけどなぜか言葉がつい出てしまう。

シホはそれになにか思ったのか、

「フェイトって意外にいい子なのね。割り切りに関しては不器用だけど。」

でも私としては好感を持てたわ。フェイトみたいな娘、私は好きよ。

…そしてなるほど。だからその使い魔さんもフェイトに絶対の信頼を置いてるわけだわ。

ね、そうでしょ？　せつかく喋れるんだから喋ったらどう？　狼さん。

今は私達の周りだけ結界をはってあるから気にしなくていいわ」

「!?」

そのシホの言葉に初めて結界らしきものが張られている事に気づいた。

それでアルフも遠慮をなくしたらしく、

「…そうかい？　それじゃせつかくだから名乗るけどあたしはアルフだよ。

それにしても、ほんとあんたは何者なのさ？

戦闘はフェイト以上出来るし、系統のわからない魔法を使うわ、それに歌は上手だ

し…」

アルフ、最後のは関係ないと思うよ？

でもシホは「ふふっ…」と含みの無い笑みを零して、

「私はただのお節介なだけ。」

今後は私の代わりになのが戦うことになるけどその時はあの子の話も聞いてあげ

てね？」

「…あの白い魔導師？　彼女では私には敵いませんよ？」

「わからないわよ？　最近私達が直で指導しているからメキメキ力を上げていつていつてから。」

でも、それでも勝てない場合は私が出張ることになるけどね」

そしてシホは「さて…」と荷物を持って立ち上がると、

「それじゃ、もうそろそろ帰らなきゃいけないから私はお暇させてもらうわ。」

次もまたこういつた場所で話したいものね。

またね、フェイト、アルフ」

「さようなら…」

「だめだめ。今後もまた会うかもしれないんだから『さようなら』じゃなくて『またね』よ。」

それと顔色悪いからちゃんと食事は取った方がいいわ。

無茶は体に毒だわ。

そうでないといフェイトの家を探し出して押しかけるわよ？」

そういつてシホは踵を返して公園を去っていった。

いつの間にか結界の気配も消え失せていたので本当に今日はお別れらしい。

それにしても、

「またね、か…。ねえ、アルフ。シホって不思議な子だったね」

「そうだね…。あの白い方はてんでダメだけど、なんていうのかな？」

あいつからはなにか暗いものがあるように感じた。

それに少しだけ匂いが…フェイトに似ていた」

「私に…？」

「うん。直感だけどシホはあの強さを手に入れるまでにすごい過酷な道を通ってきたと思う。

本当に直感だからどうかはわからないけど…」

「アルフがそういうならそうなのかもね…。本当に不思議な子。

でも、私はなぜかはわからないけどシホとは仲良くできるかもって思った…」

(フェイトがここまです喋るなんて滅多に無いことだね。

シホの影響かどうかは知らないけど…結構ありがたいね)

アルフはなにか思っているのか私に笑顔を向けてきてくれる。

「…さて、それじゃもう少し頑張ろう。

ここら辺にジュエルシードの反応があるから。

それを封印したら帰って少し休もうか？

シホに怒られたくないし…」

「そうだね！」

そして私達は公園をまた探索することにした。



S i d e シホ・E・シュバインオーグ

：ついつい話し込んでしまったわね。

でも少しは情報を得ることはできた。

フェイト自身はジュエルシードを集める事だけに執着していた。

だから、どう使うかとかはきつと考えていない。

よって、背後でフェイトを動かしている黒幕がいるということ。

：フェイトは見た目大人しそうな娘だったけど、素直で言うことははっきりと言える娘。

だからきつと動かしているのは血縁関係が妥当だろう。

：そういうえげなものはも言っていたけど私にもフェイトの目には寂しさが感じられた。なにかよからぬ事が起こりそうな気がする。

用心しておかないと…。

第十話

『海鳴温泉（前編）』

S i d e シホ・E・シユバインオーグ

本日は毎年の連休で恒例という家族旅行にいくらしい。

家族旅行といつても高町家だけでなく、アリサとすずか。

それに忍さん、ノエルさん、フアリンさんも誘った大勢の旅路である。

車の割り当ては、

士郎さんが運転する車には桃子さんと美由希さんとなのは達三人。

ユーノとフィアは二人とも士郎さんの方に乗っている。

そしてなぜか私は忍さんが運転する車の方に乗っている。

忍さんと恭也さんが前の席で後ろの席に私を真ん中に左右にノエルさんとフアリンさんが座っている。

前を先に行っている車からたまになのは達が手を振ってくるので私も一応返してお

くけど、どうにもこの配置は変だと思う。

普通なら見た目子供である私もなのは達と一緒にの方に乗っていると思うから。

「あの…忍さん。別に構わないんですけど、なぜ私はこっちに乗員しているのでしょうか？」

「ん。ちよつと聞きたい事があつてね。…恭也から聞いたんだけど、シホちゃん、この世界の住人じゃないんだつて…？」

「えっ…？」

「こら、忍。ストレート過ぎるにも程があるぞ？」

「でも無駄に話を引き伸ばすよりは効率的だと思うわよ？ あ、安心してね。すずかには話していないから」

「そ、そうですか…。でも、ということはノエルさんとファリンさんがこの場にいるって事は…」

「ええ…。当然知っているわ」

「はい。恭也様からお話は伺わせてもらいました」

「うん…。シホちゃん、ごめんね」

ノエルさんとファリンさんは少し声のトーンを落として気まずげに答えた。

「やっぱり、そうですよね…」

「…シホちゃん。悪いと思ったがどうしても忍達には話しておきたかったんだ。

いざという時にシホちゃんの素性がバレでもしたら…俺達だけじゃシホちゃんを守りきれないかもしれないから…」

「…大丈夫です。その時はまた姿をくらまします。慣れていきますから…」

「そうじゃない…そうじゃないんだ。シホちゃんはもう俺達の家族も同然だ。

だから一人で背負い込まないでいつでも相談して欲しい。

もう…俺はこの間の時のような目をシホちゃんにしてほしくないんだ…」

恭也さんはなにかを搾り出すような掠れた声で私に問いかけてきてくれた。

「この、前…?…」

「そう。あの時はうちの不備でもあるんだけど防衛装置が作動しちゃったでしょ？」

それで私達は直接見ていないけど、恭也がいうにはロボット達がすべていなくなつたのにそれでも緊張状態を解かないで恭也を敵だと思って睨んでしまったそうじゃない？」

「あ、あれは…ただ…」

「分かっている。シホちゃんの前の世界の話を思い出せば容易に想像がつく。そうでもないと思うとすぐに追っ手から逃げられなかつたんだろう？」

「……………」

私は恭也さんの言っている事がほぼ真実なだけに無言で俯くことしか出来なかった。そしてリン達の助けがなければ、私は当の昔に死人と化していただろう。

恭也さん達に迷惑をかけたくなかったのに少し話しただけでここまで心配してくれる…。

嬉しい、という思いとともに…同時にこうなるなら最初から素性などを話さずに隙を見て逃げ出せばよかったという思いも頭を過ぎる。

…この世界に来る前までの私ならまだ冷徹に振舞えていただろうに、今ではもうそれもうまくできない。

私は…いつからこれほど弱い人間になってしまったのだろうか…？

少しの心遣いの言葉ですぐに心が揺らぐ。

もうがらんどうではなく、確かに目指すものが心の中にあるというのに…ッ！

そう、もう『全てを救う正義の味方』にはなれないけど、だけどイリヤの願いの一つでもある『大切な者達を護れる正義の味方』という目標…。

そして、私にとっての幸せの探求…。

それらの様々な思考がグチャグチャになって上手くまとめられない…。



Side 高町恭也

…シホちゃんが俯いてしまい少ししてファリンさんの方に体を預けて気絶してしまつた。

安心させようとしたけど、どうやら逆に精神的に追い込んでしまつたらしい。気づけばシホちゃんの目じりにはわずかだが光るものが見える。

「どうやらまだ自身の中で葛藤をしているのでしよう。

おそらく迷惑をかけたくないというところですね…。

まだお嬢様達と同一年くらいだというのに、シホお嬢様の世界の裏は非情なものだったのですね…」

「シホちゃん、シホちゃん…大丈夫ですよ？ もうあなたを襲う人はいませんから…だから安心していいんですよ？」

ノエルさんがシホちゃんの頬をまるで硝子細工を触るように優しく撫でている。

そしてファリンさんが涙を流しながらシホちゃんをギュツと抱きしめてくれている。

そう…もうシホちゃんは一人じゃないんだぞ？

シホちゃんには俺達家族がついている。

だから、今は安心してお休み…。



S i d e 高町なのは

シホちゃん…どうしたんだろう？

途中のパーキングエリアでシホちゃんが車の中でファリンさんと一緒になって寝ていました。

お兄ちゃん達がいうには途中で疲れがたまっていたらしく寝てしまったんだろうと言っていたけどなにか隠しているみたいだった。

でも少ししてシホちゃんは起きたら、

「大丈夫よ、なのは。私は大丈夫…」

シホちゃんは笑顔を浮かべてそう言うってくれていたけど、やっぱり無理しているように見える。

やっぱり後でお兄ちゃんになにかあったか聞いてみよう！



そうして少しの不安が残る中で一同は海鳴温泉に到着した。

だがここに来て一変、一同は楽しそうに頬を緩ます。それはシホも例外ではない。むしろ楽しみにしていた節すらある。

元・日本人として温泉というのはひどく魅力的なものである。

高町夫婦は後でゆっくりと浸かるといので男性である恭也以外…否、シホ（…とフィアット）のたつての希望でユーノは恭也に預けられた。

その事になのはは不満の色を示していたが、一方でユーノはシホ達に感謝の視線を送っていた。

だが二人はもしユーノが女風呂に入ってこようものなら沈める心臓だった。

…それを言うと、シホも中身は衛宮士郎という青年体の魂を持ち合わせているのだから後で入るとでも言えればいいのだが…シホ自身もう男性としての意識を持っていない節がある。

シホは気づいていないが、

『女性の体に適応してきているので別に恥ずかしくない。』

『逆に男性に見られたら恥ずかしい…』

という気分を無意識に実行しているのです、美由希とも普通にお風呂を一緒に出来る。そして以前お風呂場で入浴後にぼったり恭也と遭遇してしまい自身でも信じられないくらいに“女性”の叫び声を上げてしまったのも苦い思い出であるらしい。

その際に士郎が恭也を気絶させて、どこぞに連れて行ったが、シホはその時思わず恭也に心の中で謝罪した。

同時にもう男性にもし戻る事があっても戻れないだろう…と、密かに涙したシホである。

まあ、それが意味することは脱衣時に、

「忍さんって胸、大きいよね」

「アリサちゃんだつて前よりでかくなっているんじゃない？」

「キヤー！ 忍さん、やめてー！」

「美由希さんも綺麗な肌をしていますね」

「すずかちゃんだつて綺麗な肌じゃない…」

というように一般男性が見聞きすれば偏見かもしれないが涙を流しそうな光景が広がっているがシホは特に関心はないらしい。

と、いうより逆に自身も恥ずかしいという気持ちで沸いてきている。

（…私もとうとうここまで麻痺してきたのかな？）

一同と少し離れた場所で、(なのはは隣にいるが…)シホは衣服を脱いでいた。だがシホが服を脱ぎだした辺りからなぜか急に周りが静かになってきた。

なぜだろう?　　と思いつつも気にもせず服を丁寧に畳んでタオルを体に巻き終わると、

「なぜ、皆さんは私の方を凝視しているのでしょうか…?」

シホがそう尋ねてみたけど一同は一度咳払いをして何事もなかったかのようにお風呂場に向かっていった。

「…?　　どうしたのかしら」

《それはきつとお姉様の肌がとても綺麗で魅力的だったからですよ》

《そうなの…?》

《はい!》

シホは少し釈然としない様子だったが気にしてもしようがないと思つて銭湯の中に入つていった。

少しして隣の男の風呂呂から恭世の声が響いてきて、「ユーノをそつちにやるから受け止めてくれ」と言つてきた。

シホとファイアットは同時に『馬鹿なツ!』という感想を抱いて未然に防ごうと思つたが、すでにユーノはこちらに投げられていた。

それをなのはが見事にキャッチして三人娘に弄られまくっていたが、

《兄さん！ 殺されたいんですか!?!》

《恭也さんに言つてよ！ 僕の方じゃ抵抗できないよ!》

《∴恭也さんも無謀なことを∴。狼を放り込んだにも等しい行為なのに∴》

それからなのは達三人は露天の方に（ユーノはなのは。フィアットはアリサに掴まれて）行つてしまった。

シホはやれやれと溜息をつきながら、美由希達がいる場所の隣に沈んだ。

「お風呂はもつと静かに過ごすものだと思うのですが、その所はどうなんでしょうか？」

「別になのは達の年齢ならあれくらいがちょうどいいと思うよ？　むしろシホちゃんの方が落ち着きすぎている感じだけどね」

「そうでしょうか∴」

「その通りよ。それで、少しは落ち着いた∴?」

忍の問いかけにシホは微笑を浮かべながら、

「はい。一度頭の中をクリアにしたらスッキリしました。

それに一気に想いが押し寄せてきてくれたおかげでこれからについても色々と考える事が出来ました」

「そう…。それならよかったわ。気絶しちやった時はどうしようと思っただから」
「ご迷惑おかけしました。でももう大丈夫です」

それで会話は途絶えてしばし経過した頃に、

「…まだ、胸をはって頼るつてことは私には難しいです。今まで一人で不器用に道を貫いてきましたから…」

「……………」

二人はシホのその言葉に無言で耳を傾けた。

「だけどいつか…うん、もう少し時間を置いたら少しずつでも頼つても…いいですか？」

私は…もう道を踏み外したくない。

美由希さんや忍さん…それになのは達や土郎さん、桃子さん、恭也さん達には…、前の世界で家族のように接してくれた人達のように悲しい想いをしてほしくない。だから…」

「…うん。それだけ聞ければもうなにも言わないよ。」

それに遠慮なんてしなくていいんだからね？ 私達は家族なんだから」

美由希がシホの後ろから手を回して抱きしめてくれた。

「そうよ。もうシホちゃんにとって二度と取り戻せない過去かもしれないけど、まだや

り直せるんだから現在（いま）を精一杯生きなさい……そうでもないと置いてきた人達に申し訳つかないわよ。

だから遠慮なんてしなくていいの！ わかったら返事！」

忍も励ますようにシホの手を握ってくれた。

それでシホは心が満たされる気持ちになって久しぶりに眩しい笑顔を浮かべて「はい」と答えた。

だがその際二人は思わず顔を赤くしてしまった。

そして『やっぱりその笑顔は反則ね！』と思っっている事が重なったりした。



Side シホ・E・シュバインオーグ

なのは達より先にお風呂から出た私は広間で一人コーヒー牛乳を飲んでいる。

周りからなにやら視線を感じるが気にしない。

どうせ異国の人が珍しいというものがほとんどだろう。

おまけにコーヒー牛乳を飲んでいれば尚更だ。

「ふう…でもやっぱり私は少し涙もろくなつたかもしれない。

それにすぐに心が揺らいでしまう…」

言葉に出すとさらにへこむ。

精神が幼くなつてきていると同時に、男性としての自覚も無くなつて来ている事を実感し始めているし。

まあ自己を形成する心象世界『剣の丘・無限の剣製』があるから別に構わないけど…そう、体は剣で出来ている。

これがある限り私は私という自我を保ち続けられる。

「はーい、おチビちゃん達」

…少し詩人の気分浸っていたところで外の廊下から最近聞いたような声が聞こえてきた。

それで覗いてみるとなのは達がなにか知らない女性にからまれていた。

少し考えて、ふと髪の色や額の宝石を見た時に「ああ…」と思ひ至つた。だからしかたなく私が出て行くことにした。

そろそろアリサが暴発しそうだったから。

「なのは達、どうしたの…?」

「あっ!」

「ッ……」

なのは達三人は私の声にすぐに振り向いた。

それと同時に女性が少し苦笑したのを私は見逃さなかった。

判明……この女性はアルフだ。

敵情視察かもしれないけどさすがに出すぎだろう？

「お姉さん、なのは達になにか用があるんですか……？」

「いや……ちよつと知り合いに似ていた子がいてね」

「あはは、そうだったんですかー」

私は少し演技のこもった笑みを浮かべた。

しかしおそらく目は笑っていないだろう。

多分今の私の顔は具体的に言うと、

『こんばんわー！ みんな元気？ わたしがいない間にシロウと仲良くしてる？ え、

してる？ うんうん、良きかな良きかな。——殺すわ。』

と、笑顔で言うイリヤみたいな表情になっているだろう。

……私は心の中でなにを言っているのだろう？

ともかく、それでアルフ（断定してはいないけど）はバツが悪そうにしているし、なのは達も少し怖がっている。

そう、今はここら一带に限定的に威圧感を発生させているから。

『ここで暴れるなら容赦はしない』という意思表示もこめて。

「ご、ごめんよ。別に悪気はなかったから…じゃあねー」

威圧に当てられたのかアルフは顔を蒼白にしながらこの場から離れていった。

それで私は威圧を悟られないように解くと、

「大丈夫だった？ 変な事されていない…？」

「う、うん…」

「平気だけ…シホ、あんたって可愛い顔しているのにあんな怖い表情もできるのね」

「思わず私達もビクツと震えちゃったよね」

「ごめんね。でもあーいう人にはあれくらいが丁度いいのよ」

なのは達と会話をしながらも目を強化して少し見回してみた。

すると少し離れた木の枝の上にフェイトの姿が見えた。

あ、目があった。すごい狼狽えているのが分かる。

それでなのは達に気づかれずに手を振ってみると条件反射なのだろうか…手を振り

返してくれた。

やっぱり性根はいい子ね。

でもフェイトがいるって事はここにもあるってことか…。

少し鬱な気分になりながらもその場を後にした。

第十一話

『海鳴温泉（後編）』

S i d e シホ・E・シユバインオーグ

それから夜になると宴会が開かれた。

なにやら士郎さんと恭也さんが隠し芸を披露しては皆を騒がしていたのが印象に残る。

そういえば四日間の世界で夜に衛宮の武家屋敷で人や魔術師、サーヴァント関係なしにどんちゃん騒ぎをする事が何度かあった。

もちろん現実にはサーヴァントは全員この世に存在していなくて死人もいた。

でも、それでも私にとってはとても楽しい思い出の一つだ。

それを思い出すといつ私も笑みを浮かべてしまう。

そう思いながら宴会場に置かれているジュースを口にする。

…それが悪かったのかどうか分からないけどどうやらお酒だったらしくすぐに酔い

が回ってきた。

おかしいな…？ イリヤってよくワインとか飲んでたよね？

しかし、鋼の精神力でそんなものはすぐに跳ね返した。

ただどやはりまだこの体には早かったらしいので少し外の風にあたって来ることにした。

するとファイアと一緒に歩いてきてくれた。

それで二人で夜空の月を眺めながら、

《…今日、夜に抜け出す準備をしておこうか？》

《はいです。兄さん達も昼間の女性について感づいているみたいでしたから…》

《そう。…ファイア、武器の準備をしておきなさい》

《はい…？》

《あなたの実力がどの程度上がったか見て上げるわ》

《あ、はい！》

そして夜もふける頃、

——キイインツ!

「「「!」」」

感じた……!

私達四人はジュエルシードの反応にとつきに起き上がり旅館を飛び出した。

だが到着した時にはもう事は終わっていた。

「あら、昼間の忠告も聞かずによく来たねえ?」

「ツ!」

なのはが一瞬怯んだけど、

「お話を聞かせてくれないかな!」

「…なにも話すことはありません」

なのはは必死に言葉を続けようとするが、フェイトは話すことなどなにもない、とばかりで平行線だったために埒が明かなかったので、

「いいかげん人の話を聞く癖くらいはつけた方がいいわよ? フェイト…それにアルフ

も」

「シホ…それでも、話してもきつとわからない」

「そう…。それじゃ力づくで聞き出さないといけない訳ね? あなた達がジュエルシ-

ドを集めている訳を…」

私の言葉に二人は身構える。

どうやら前回の戦闘で私が一番相手にしたくない対象になってしまっているらしい。

それなので開始する前に一言言わせてもらおうことにした。

「公園でもいったけど、私はもしもの時の保険よ。

なのはとフェイトとの戦闘には極力介入はしないわ。

さ、なのは。特訓の成果を發揮しなさい」

「うん！」

ちなみになのはが私とフェイトの会話で口を挟んでこないのには理由がある。

まあ、ぶつちやけると公園でフェイト達と遭遇したことを事前に話していたからである。

その時になのはは「それなら今度は私も名乗り合いたい！」という事で今回私は静観することになっている。

「それと、アルフの相手はファイアがするわ」

「え…？」

それは誰の声だっただろうか…？

張り詰めた空気が一瞬だけ霧散した。

「…えっと、フィアちゃんなの?」

「ええ、そうよ? さて、フィア。あなたの本当の姿を見せなさい!」

「はい。お姉様!」

そしてフィアは人間形態に戻った。

ついでにその手にはゲイ・ボルクのように矛先はついていないが身長より少し長い程度の槍…というより棒が握られていた。

それになのはは酷く驚いて、ユーノはもう普通に戻れるほど魔力が回復したの!?!と
いった表情を浮かべていたが今まさに戦闘が起こる前だと言う事で落ち着かせる。

「…もう、いいですか?」

それじゃジュエルシードを集めているもの同士、お互いに一つずつ賭けて負けたら相
手に譲るのでいいですか?」

「いいんじゃないかしら? 別にいずれは取り返すつもりだから痛くはない条件だわ」

「それじゃ…いっちょやりますか!」

アルフの一言でなのははフェイトと、フィアはアルフと戦闘を開始した。

私とユーノはお互いの戦いを見物することになった。



ファイアットが本当は人間だったって事になのははひどく驚いた。

それだとユーノ君も…、という疑問も浮かんだらしいが今はどうやら保留にするらしい。

今はフェイトとの勝負になのはは集中した…！

「いくよー！」

《divine shooter.》

なのはは掛け声とともにデバイスシューターを四つ展開した。

それにフェイトも一瞬驚いたけどすぐに同種のフォトンランサーを同じ数形成して。

「シューターッ！」

「ファイアッ！」

放たれたスファイアが同時にぶつかり合って視界が悪くなったところにフェイトはすぐに『ブリッツァクション』でなのはの死角に移動するが、なのはは予想していたかのように背後からの攻撃を杖で防ぎシールドを展開し、その場から離脱を図り、またスファイアを展開し牽制でフェイトに放った後、なのはの編み出した移動系魔法『フラッシュムーブ』である程度移動した後、

《Shooting Mode. Set up.》

《divine buster.》

「デイベイーン…バスター！」

「ツ…サンダースマツシャー！」

お互い同時に放たれた光はまた打ち消しあっていた。

だがなのはは攻め手を緩めない。

さらにシューターで牽制し、フェイトからの攻撃を意識的に展開し防ぎフェイトを近寄らせない。

（前の時より強くなっている！）

（絶対にお話を聞かせてもらおうの！）

二人の攻防、それは傍から見ればまさに人外の戦いのように見えるだろう。サーヴァント達の戦闘を知っているシホにとってはランクは低いだろうが…。

そしてファイアットとアルフの戦いというと、

「はっー！」

「ぐあっ!？」

ファイアットのゼロレンジからの鉄山靠（てつざんこう）がアルフのお腹に炸裂する。

アルフはお腹の痛みを堪えながらも突撃して鉄拳を決めようとするが、フィアットは最近やつと習得した『瞬動術』で二段瞬動をしてアルフの背後を取り魔力を流し込み強化した棒を構えた。

「突ッ！」

ドスッ！ という重たい音がアルフの腹を浸透し、吹き飛ばされたアルフは勢いで木々を数本かぶち抜いた。

それでもフィアットは油断などせず棒を片手で回転させながら隙を出さない構えを取っていた。

アルフの野性ゆえの直情的な動きがあるためにフィアットはなんなくそれを対処してカウンターで跳ね返したのだ。

カウンターという所がシホが教えているだけあり様になっている。

当然戦場の心得として最後まで油断は禁物と自身を戒めている。

「人間形態で挑んだのが失策ね…。獣形態ならあうまくは決まらないわ」

「というよりフィアの動きがすごい…。あれ、本当に魔法使っていないの…？」

「瞬動を使う時と武器や拳に魔力を瞬間的にこめる以外はほぼ自身の力ね。」

フィアはもともと武術家としての地盤は出来ていたからとても教えやすかったわ。

…さて、フィアの成長も十分見られたことだし、そろそろなのは達の方も決着が着き

そうね？」

「えっ……？」

傍観者と化していたシホとユーノは四人の戦いを見ながら色々と会話をしていたが、シホが動き出した。



Side フェイト・テスタロッサ

確かに強い……！

前の倍、いやそれ以上のものになっている。

シホが戦い方を教授したっていうけど、これはもうすごいを通り越して異常……。成長速度が半端じゃない。

「バルディッツシュ！」

《yes, sir. scythe form. set up.》

「あっ!? レイジングハート！」

《flash move.》

接近戦で攻めようとサイスフォームに移行したのを見た白の少女は移動系の魔法ですぐに私から距離をとり砲撃の構えをする。

そしてスフィアをまた形成して今度は一転集中させて放ってきた。

「バルディツシュ！」

《defenser.》

それをとつさに防御魔法で防いだ。

「接近戦の対策もしているんだね…」

「うん。全部シホちゃんやユーノ君達が考えてくれたんだよ」

「そう、やっぱり…」

シホは今のところ魔導師ではないけれど実力はおそらく私や目の前の少女とは比べ物にならないものだと思う。

見ればアルフもシホが使う体術の動きが似ている少女に少し…いや、かなり押されてるように見える。

シホに学ぶ事が出来れば私も強くなれるかな…？

そんな希望的思考をしたがすぐに振り払ってバルディツシュを構える。

「私の名前はなのは。高町なのは！ あなたのお名前は!?!」

「シホに聞いているんじゃないんですか…?」

「あなたの言葉から聞きたいの！」

「…フェイト。フェイト・テスタロッサ」

突然の事だったから私は気づけば白い魔導師…なのはに名前を名乗っていた。

でもこれは、彼女も私と同じ土俵に上がってきたという意思表示でもある名前の交換。

それならもう手加減は一切しない。

「アーク…ッ!？」

私がアークセイバーを放とうとした。

だけど私となのはとの間をすごい速さでなにかが通過したのを見た。

戦闘も忘れて私はそれを見た。気づけばなのはも見ている。

通過した先に見たのは大樹に一本の黒い十字架のような剣が突き刺さっている。

それだけならまだよかった…でも、それで大樹はぽつきりと折れてちようど私達の間倒れた。

あんな細腕のどこにあんな腕力があるのだろうか、啞然としている中、

「今日はもうこれくらいにしておきましょう。これ以上続けるなら私が参加するわよ？」

シホがそう言ってきた。

どうしてかと思っただけ…、

「二人とも思うところはあつたけど、これでもう二人は対等の場に立つたわ。

今日はそれが目的の一つでもあつたんだからもうこれ以上無意味な争いは避けなさい」

…そうか。

これもシホの計画のうちという訳だつたんだね。

本当に、不思議な娘。

でもつい私は笑みを零した。

「アルフ…今日はもう帰ろう。目的のモノは手に入れた。これ以上は高望みだよ。それにシホにも怒られたくないし…」

「はあい…それはあたしも思っていたところだよ。ところでその小娘！ 名は!?」

「ファイアットよ」

「ファイアットね…その名前、覚えたからね！ 次は覚悟しておくんだね!」

「ええ。油断しないで待っているわ」

それでアルフは「ふんっ！」と鼻を鳴らせながらもどこか嬉しそうにしていた。

「それじゃ、またね。シホ、なのは…」

私達はそれで転移魔法を使い撤退した。



S i d e 高町なのは

フェイトちゃんは「またね」と言っただけから消えていった。

結局ジュエルシードは先を越されちゃったけど…でも今は嬉しい気分。

だってやっとフェイトちゃんと名前前で名乗りあえるんだから。

だから今度は理由も聞き出したいと思っただけなら、

「なのは…二回目の戦闘にしては上出来だったじゃない」

そう、私をフェイトちゃんと戦えるように鍛えてくれたシホちゃんが褒めてくれた。

それですます嬉しくなって、

「ありがとう、シホちゃん！ シホちゃんのおかげでフェイトちゃんとお話できたよ！」

「何言っているのよ。それは全部なのはの努力の成果じゃない？ 私はただ背中を押し

てあげただけ…。」

それとフィアも強くなったわね。あの動きをさらに良くしてデバイスを使えるよう

になれば基準はわからないけど高みを目指せると思うわよ」

「ありがとうございます、お姉様！」

フィアちゃんはそう言ってシホちゃんに抱きついていた。

あれ？ そういえば冷静になって考えてみると、

「そういえば、なんでフィアちゃんは人間の姿をしているの…？」

「え…？ これが私の本当の姿だからですよ。前に夢で見せたと兄さんが言っていたんですけど…」

「……………え？」

「なのは、覚えていないの？」

そう言いながら今度はユーノ君の体も光りだしてフィアちゃんと瓜二つだけど、少し男の子よりな容姿の少年が立っていた。

「え…？ ふええええー！？」

私は盛大に大声を上げていた。

そういうえば夢で見たような気もしたけど、まさか本当に人間だったなんて…。

そこにシホちゃんがなにごとにしまっていたのか分からないけどメモ帳を取り出した。

フィアちゃんもフェレットの姿に戻りシホちゃんの肩の上に乗って、

「…えっと、何しているの？」

「え？ ユーノの罪状をメモしているだけよ？」

「そうです。兄さんは変態さんですから」

「つえ!!? 僕がなにをしたって言うの!?!」

「だって、女性のお風呂場に入ってきたじゃない?」

「だからあれは恭也さんのせいだって言っただでしょ!!? それに最初は僕も男湯にいた

じゃないか!」

そんな会話が繰り広げている最中、

(だとすると私達全員裸を見られちゃったって事…?)

その答えを得た途端、すごい恥ずかしくなり思わず「にやああああッ!」と叫びなが

らレイジングハートでユーノ君を殴ってしまいました。

「…気絶しているわ。当然の報いね」

「…そうですね。いい薬です」

二人が無表情でフェレットに戻ったユーノ君を見下ろしながら会話をしていたところगतても怖かったです…。

でも暗くなるよりはいいよね? シホちゃんも今はそんな感じじゃないから。

そして夜もふける中、シホちゃんが人避けの魔術…(?) というものを使ってくれたのでうまく皆のところに戻る事が出来ました。

今日はもう日が変わったちゃっているけど、安心して眠れそうです。

第十二話

『核の暴走』

S i d e シホ・E・シユバインオーグ

温泉旅行から少したった。

私としてはこの旅路では得るものがあつた。

まず家族の大切さの再確認。

私は、一人じゃない。

帰つてこられる家があるのだから場合によるけどもう前みたいに無理はしない。

……まあ、そんなことを考えているのは現実からの逃避だ。

いいかげん現実を見つめるとどこかで聞いたような天の声（アクマの声）が言っている。

「シホちゃん、どうして態度がまだ他人行儀みたいなの……？」

なのなのなにげない一言が夜の食卓を支配した。

「え、つと…なのは。別に私は他人行儀していいわよ?」

「えー? してるよー。だってまだ私以外はさん付けで、たまに遠慮している光景もよく見るし…」

「いや、あのね…?」

「それに私の相談は聞いてくれるけどシホちゃんからの相談事は私されたことないよ?」

それはあなたに言われたくありません。

君も結構溜め込んでいるわよね?

でもそんな事は口に出すことは出来ない。

「なのは…私はもう十分高町家の皆さんにはよくしてもらっているわよ?」

そう、前に比べれば頼る事が多くなったことは自覚しているから。

なのは以外にはまだ隠してあることはあるけど、話すことは話しちゃったり…。

でも、ここでののはに援軍がかかる。

「そうだな。まだシホちゃんは少し遠慮しているところがある。そうだろ恭也?」

「ああ、そうだな。別に迷惑なんて思っていないから出来ればもつと頼ってほしい所が本心だ」

「はいはい! 私も恭ちゃんの意見に賛成!」

「シホちゃん！ 前にも言ったけど私達は家族なのよ！ だから一人で何もかも背負い込まないでちょうだい！」

なのはのちよつとした一言が一気に感染拡大した。

や、本当に私は前よりかは幾分マシになったつもりですよ？

というより、それは現在フェイトとどうやったらお話できるか悩んでいるのはに聞いてやってください。

ユーノやファイアまで領いてるではないですか!?

当の発言者であるなのはここまで拡大するなんて思っていなかったのだろう。

思念通話で『シホちゃん、ごめんね…』と苦笑いを浮かべながら言ってきた。



所変わって現在は昼下がりの学校の屋上にいます。

それでそのことをアリサとすずかの二人に昨晚の事を話してみたけど、

「私はなのはちゃんの意見に賛成かな？」

「あたしもよ。シホって今学校でなんていわれているか知ってる？」

いい意味でだけ『聖祥の赤いブラウニー』とか言われているのよ。

シホって校内で困っている人がいたらすぐに助けに入るし、壊れている備品とかがあつたら無償で直しているそうじゃない？

まあ美化委員に入っているから領けなくもないけど一人で全部直しちゃうからちよつと頑張りすぎつてところがあるわ。

それになんでも普通の人より出来ちやう分、あまり人に頼ろうとしないところかかない？ 自覚ある？」

「…はい、あります」

思い当たるところを盛大にアリサは指摘してくれた。

なんかアリサがリンにかぶるなあ…。これでうっかりのスキルがあつたなら性格共に金髪だからルヴィアね。

なのは「ブラウニーってなに…？」とさすがに聞いている。

それにすずかは純粋な笑みを浮かべながら、

「ブラウニーっていうのは家主の寝ている間に無償で勝手に家事をしてくれる妖精さんの事だよ」

「あ、そうなんだ。確かにそう言われるとシホちゃんのイメージにピッタリかも」

グサツ！

無垢な一言は時として心を鋭利な刃物のごとく突き刺し抉り出す。

そしてそんな猫のような人懐こい表情で納得されると胸が痛い…。

私としては不本意極まりないのにそんな表情をされると結構来るわね。

体は剣で出来ている。でも心は硝子…。だから碎けないか心配です。

過去、学生時代もブラウニーはあつたけどやっぱりやりすぎているのかな？

『いいかげん自覚しろ…』

ええいつ、うるさい！

なんかりんっぽいものが葉巻を啜えながら車に乗って私の頭を過ぎつたようなイメージがふつてきたけどすぐに振り払った。

…そして放課後、

アリサとすずかと別れて二人で下校中。

「ねえ、なのは」

「…うん？　なに、シホちゃん」

「いや、昨晚の話じゃないけど…なのはも結構悩み、かかえているでしょ？」

「…うん」

「大方フェイトの事なんでしょ？ やっぱり戦いはしたくない？」

なのは無言。予感は的中か…。

「やっぱりね。ね、なにも争い事だけが戦いじゃないでしょ？」

「えっ…？」

「…今まで戦いだけに身を投じてきた私が言えた義理じゃないけど、なのはのフェイトに『お話をしたい、理由を聞きたい』っていう語りかけもきつと一つの戦い…。

だからなのはは諦めたくないんでしょ…？」

「うん…、フェイトちゃんとしつかりとお話をしたい。分かち合いたい…」

「それならそれを貫き通せばいい。甘い考えかもしれないけどそれもれっきとした戦いの一つでもあるわ」

「そう、かな…？」

「ええ。それでも聞いてもらえなかったらさらに考えて、考えて努力すれば、もしくは…」

…そう、しつかりと話を聞いてあげられれば私のようにはきつとならない。

そもそも私は話を聞こうともしなかった…。

本当に反面教師ね…考える余裕が出てくるといつも自身のあり方はなんだったのかと自問する。

それでも一つ分かることは、なのは…そしてフェイトにもだけど己と同じ間違いを犯してほしくない。

「うん！ 私、頑張るね！」

「元気が出たみたいね…。それじゃ私もちゃんと見守ってあげるから頑張るなさい。」

でも、無茶だけは絶対にしないで…私達が教えた戦い方はあくまでフェイトへの対策としてだから。

元々なのははこちら側の人間じゃない…だから無理して士郎さん達やアリサ達に心配はかけないように。

それと昼間は元気そうにしていたけど二人とも内心とても心配していたから後で謝っておくようにね。

語り合える友達がいるってのはとても幸せなことだから…」



Side 高町なのは

——でも、無茶だけは絶対にしないで…私達が教えた戦い方はあくまでフェイトへ

の対策としてだから。

——元々なのはこちら側の人間じゃない…だから無理して土郎さん達やアリサ達に心配はかけないように。

——それと昼間は元氣そうにしていたけど二人とも内心とても心配していたから後で謝っておくようにね。

——語り合える友達がいるってのはとても幸せなことだから…

その言葉がなぜか、とても不安なものに感じました。

もつともな言葉だけどやっぱりその中にシホちゃん自身が含まれていないような、そんな嫌な感じがした。

それに、それじゃシホちゃんは友達がいなかったような口ぶり。

でもシホちゃんはいつもと変わらない笑顔で私の事を励ましてくれていた。

…うん。だからきつと、大丈夫。



Side アルフ

最近、あの高町なのはつていう白い魔導師と、それにシホのおかげでフェイトは前より笑うようになった。

でも！ それに引きかえあの鬼ババア…！

フェイトが必死にジュエルシード集めをしているのにそれ以外は無関心。

それどころかフェイトを虐待している始末…！

どうして実の娘にああまで酷いことをできるんだ!?

フェイトは「大丈夫…」って言っているけどあたしは使い魔。

精神リンクでフェイトの痛みが伝わってくる。

できることならあたしがあのババアを懲らしめてやりたいけど…きつとフェイトは

止めてくる。

悔しい…。

悔しいけど、フェイトの支えになってあげられるのはあたしだけだ！

いざという時には…！

あることを決意しながらもあたしはフェイトの寝ている場所に向かった。

（食事が残ってる、か…でも最近は少し残る程度ほど食べるようになってきた。やつぱ

りシホには感謝しなきゃいけないかもね)

「フエイト…前より食事食べるようになったんだね」

「うん…シホの事怒らせたくないから。それよりアルフ、ジュエルシードがそろそろ…」

「あいよ!」

「かあさんが、待っているから…いこう!」

フエイトが笑顔を浮かべた。

うん。やっぱり笑うようになった。

だから大丈夫…。

それにフエイトになにかあつたら絶対あたしが守る!



夜になる。

シホ達は夜に探索を行っていた。

だが突如ある一角のビルの屋上から魔力反応が発せられ同時にジュエルシードの反応がした。

「こんな街中で強制発動!?!」

「兄さん！」

「分かつてる！ 結界構築、間に合え！」

ユーノが結界を作り出し周りの人が姿を消す。

そしてなのはがバリアジャケットの姿になりフィアットは人間形態に戻り棒を構えた。

シホも聖骸布を投影して羽織って夫婦剣を投影して腰のホルダーにさした。

ユーノは結界構築に専念している。

そして光が上がると同時になのはとフェイトがシーリングフォームで封印を同時にした。

封印はなのの方が若干成功したが、なのはは封印せずにフェイトに話しかけた。

それとは別に今回はシホとフィアットがアルフに足止めを食わされていた。

「やっぱり狼形態だと、今の私ではきついものがありますね……！」

「フィア、下がりなさい！ 後は私がするわ！」

先程まで矢を放ち牽制していたがフィアットの戦況が悪くなった為、シホが前に出た。

「今度はシホか……！ 相手になってやるよ！」

「そう簡単に私の守りを崩せると思わない事ね！」

「そんな事は百も承知さ！ だけどね、あいつはなんでさっさとジュエルシードを封印しないでフェイトに語りかけてるのさ!?!」

「あれがなのはの戦い方だからよ…。とても真っ直ぐな心を持っていて、ずっと話も聞かないで戦地を渡り歩いていた私には真似できない方法…」

「シホ、あんたやつぱり…!」

「今は私の事は関係ない。でないと…」

シホは夫婦剣を構えて、

「…あつさり倒すわよ?」

「わかった…あんたの事は聞いてあげたいところだけど、本来敵同士!」

「そういうこと…!」

そして二人が駆け出そうとした瞬間、ジュエルシードは不気味な脈動を始めだし、魔力反応が急激に高まっていく。

「っ!? アルフ! 一時休戦よ。アレを封印するわ!」

「確かに…アレはやばいね!」

「お姉様! 私もいきます!」

三人が駆け出したが空で戦っていた二人がジュエルシードに同時に杖を突き出して封印しようとしたが、互いのデバイスにひびが入り、そして突然の衝撃波が発生し二人

は双方ともに吹き飛ばされた。

シホはファイアットとユーノになのはの方に向かうように指示をした。

アルフもフェイトの方に向かっている。

シホはそれで安心した。

だがそれは一時のもので全方位にかけて衝撃波が広がっていく。



Side シホ・E・シュバインオーグ

私はとつさに周りを見回す。

突如の事で全員動揺としていて構えを取れていない。

それで私はある決断をした。

全員助かる為に双方吹き飛んだ中心点に立ち、

「^{ロ!}——^ア——^イ——^ア——^ス——[!]」
 I a m t h e b o n e o f m y s w o r d ———— ……

魔術回路を最大限駆使して今までで最強の出来栄であるだろうロー・アイアスを投

影した。

そして衝撃波とアイアスが衝突する。

衝撃波がアイアスを何枚か割り私の体を傷つけていく。

「くうっ……！」

(前に解析して少し分かったことだけどやっぱりあれは聖杯と同じ効果を持った石！

安心できるどころかといえは穢れがないということだけだけど、それでも十分危険物……！)

私は必死の思いで衝撃波を防ぎアイアスの盾はすべて砕けなかったが、それでも余波で体中にいくつももの切り傷を負う。

血の流し過ぎで少し立ちくらみがあるが、だが構っていられない！

「みんな！ 悪いけどもう形振り構っていられないわ！ 第二波が来る前に私はアレを

破壊する！」

『えっ!?』

全員の声が敵味方問わず聞こえるが今は構っていられない！

もしかしたら世界が滅ぶかもしれない緊急事態！

即座に私のもつとも頼りにする宝具を剣の丘から検索、

「――トレース・フラクタル 投影、重装」

その呪文とともに、手に黒い洋弓を投影。

だがまだ続きがある。

「I am the bone of my sword……！」

新たに投影したのは、アイルランドの英雄、フェルグスが所持していた「硬い稲妻」の意味を持つ魔剣。

それを刀身から柄に至るまで全体がねじれた歪な剣に変化の魔術で改造したモノ。それを弓に番えてジュエルシードに向かつて構える。

さらに矢にはありつただけの魔力を注ぎ込み、弦が切れるのではないかと思えるほど引き絞る。

おそらく今私がしようとしている事は全員理解しているようだが、宝具の存在は教えていないためフェイト達だけでなくなのは達も驚愕の表情をしている。

全員が矢から発せられる桁外れで凶悪なほどの魔力に恐怖を感じている中、

「みんな！ 衝撃に備えなさい！ 派手にぶっ飛ばすわよ！」

全員に警告をした後、この矢がジュエルシードに中るイメージをしつかりと確立し、なにも障害がない事を再確認し、

「偽・螺旋剣！！」

真名開放とともに私は弦から剣を放つ。

それは高速をゆうに軽く突き抜け放つてから一瞬でジュエルシールドまで達した。

だがジュエルシールドを破壊したとしても周りの飽和状態の魔力はどうにもならない。

「なら、こうするしかないでしょ！
ブロークン・フアンタズム
壊れた幻想!!」

最後のワードを唱えた瞬間、カラド・ボルクに宿る内なる幻想が開放して盛大に爆発する。

その影響で周りの魔力も巻き込まれ霧散した。

鷹の目で解析を試みて確認したがジュエルシールドはどうやら跡形もなく消滅したようである。

「よかった…被害を最小限に…っ、あれ…?」

私は体に力が入らないことを認識した時には余波で受けた時に負った傷から流れていた血の池の上に倒れてしまっていた。

全員が私を呼ぶ声が聞こえたが、もう意識が…イリヤ、ごめんね。体、傷つけちゃった…。

それを最後に私の視界は暗くなった。



「シホちゃん！」

「シホ！」

「お姉様！」

ジュエルシードが跡形もなく消え去った事が分かると、なのは達三人がすぐに駆け寄りシホの容態を確認していた。

フェイト達もシホの事が心配らしくその場に止まっていた。その顔には不安の表情がありありと浮かんでいた。

ユーノとファイアットがシホに治癒魔法をかけている間、なのはは涙を流しながらシホの手を握っていた。

「シホちゃん…死んじやダメだよ！ やつと家族になれたのに、シホちゃんがいなくなっちゃったら…！」

なのはの言葉は当然フェイト達にも響いてきていた。

それでアルフは先程シホから少しだけ聞いた『戦地を渡り歩いていた私には…』という言葉が気がかりでしようがなかった。

「なあ…シホはお前達の家族じゃないのかい？」

「今は家族…でも、シホちゃんは私のうちに来る前はずっと一人ぼっちだったみたいなの…！」

「そういえば話していませんでしたね…」

アルフの問いになのはは震える声で答え、そこに治癒魔法をかけていたファイアットが意味ありげな言葉を発した。

「…お姉様はこの世界の人間ではありません。かといって他の次元世界出身というわけでもない…」

「どういう、こと…?」

フェイトはなのはと同じように震えながら聞いた。

聞きたくないと本能が告げているがどうしても聞きたかった。

「私達の世界で言うなら次元漂流者。」

お姉様の世界では平行世界と、言っていました。

それはこの世界と似ているようでまったく違うものもしもの世界…。

お姉様はその世界で理由は聞いていませんが世界全体の組織から追われるはめになり、お姉様の師匠に当たる人達によってその世界の魔法の力によってこの世界に飛ばされてきたそうです」

ファイアットのその重い言葉は、だが全員に衝撃を与えるには十分だった。

だがそこで治癒魔法に加えてアヴァロンの効果も相まってほしい傷も塞がり目を覚ましていたシホが体を無理に動かして、

「…ダメじゃない、フィア。それはなのは達には内緒って言うておいたでしょ？」

「お姉様！ 良かったです…でも、ごめんなさい。だけどどうしても伝えておきたかったから…」

「そう…。まあ別にいいわ。みんな、私は大丈夫だから…気にしないで。」

それとこんなに派手に事をやらかしたんだからどこかの組織が感づくかもしれない…。

だからフェイト達は早くここから逃げなさい…」

フェイトとアルフは少し戸惑ったがシホの有無を言わさずの視線に、

「シホ…ごめんね。それと、守ってくれてありがとう…」

「体は大事にしろよ？」

二人は少し名残惜しそうにしながらも転移魔法で撤退していった。

それでシホ達も帰ろうということになったけど、シホを支えているのはが、

「後で、ちゃんとお話聞かせてね？」

「ええ…話せる範囲でなら構わないわ」

そうしてシホ達は帰路についた。

だけどシホはやはり無理をしていたらしくすぐに布団に横になってしまった。

血で汚れてしまった服は火葬式典で排除済みであるから問題ない。

しかし勘が鋭い高町一家は「なにかあったのか？」と思つてシホの所に向かおうとしたけどなのはが必死に言い訳をして事なきを得た。

それで顔だけでもと、シホの部屋を覗いた一同はシホの安らかな寝顔に安堵の表情を浮かべた。

第十三話

『介入者』

S i d e シホ・E・シュバインオーグ

あれから翌日。

魔力はイリヤの魔術回路のサポートのおかげでほぼ回復した。

どうやら体を調べた結果、イリヤの魔術回路は私が投影を酷使してもそれをサポートしてくれる役割を担っているらしい。

だから後遺症で以前みたいに褐色の肌に白髪の色になるという心配はない。

しかし、だがやはり体力の消耗まではどうにもならないらしく少し倦怠感がある。

おまけに久しぶりとも言えるけど現在私は微熱を出して今日の学校はお休みになった。

なのはが何回か心配してくれたけど、何度か説得して学校に行かせた。

それからユーノとフィアと部屋で会話をしていた。

「…どうして話してくれなかったんですか？」

「兄さん…前にもいったけど二人には心配かけさせたくなかったのよ。お姉様は…」

「それはわかってるよ。でもだったらどうしてファイアだけに…」

「夢を、見させちゃったからかしら…？」

「夢…？」

「ええ。今私とファイアはリンカーコアにパスを通してある意味従者の関係になっているの。

それでファイアは精神リンクでパスを通して私の過去の夢を少し覗いてしまった。だから教えたの…」

「そうだったんですか…」

「ええ。でも昨日ファイアが話しちゃったからなのはが帰ってきたら少しだけ過去を伝えるわ。

正直言えば平和な世で暮らしていたなには聞かせたくないけど、あの娘は強情でしょ？ 絶対引かないと思うのよ」

「確かに…」

「そうですね」

二人が納得してくれたところで部屋をノックする音が聞こえたので二人は会話を中

断させてそれぞれの籠の中に戻った。

それで私も「どうぞ」と言つて声の人物を部屋に招いた。

入つてきた人物はおかゆを持つてきてくれた桃子さんだった。

考えなくても必然的には今日は平日。

なのはもちろん恭也さん、美由希さんも学校に行つてゐる。

士郎さんも翠屋で現在営業中である。

だから桃子さんが来ることはだいたい予想はついていた。

「シホちゃん、具合はどう…？」

「はい。大分良くなりました。今はもう熱も引いて体力の回復を待つばかりです」

「そう、よかつたわ。…それでどうして、とか聞いちゃいけないかな？」

「…すみません。いつか時がきたらなのはと一緒になにをしているか教えます」

「分かつたわ…」

そこで一度会話は途絶えたけど突然私は桃子さんに抱きしめられた。

「うん。今は理由は聞きません。でもシホちゃんはもう一人じゃない…私達の大切な家族なのよ。だからいつかちゃんと話してね？」

「はい…ありがとうございます」

私はまた涙ぐんでしまい桃子さんに気づいたら逆にしがみついてしまつていた。

ファイア達が見ているから恥ずかしいけど、今の気持ちを偽りたくない。

それで桃子さんも笑顔を浮かべてくれた。

…その後はちよつと恥ずかしさが残る「あーん」をしてもらった。

しばらくして桃子さんが部屋を出て行くと私は咳払いをして二人を見るとなにやらとてもいい表情をした二匹のフェレットがいた。

「…なにかしら？」

「な、なんでもないよ？」

「はいです。お姉様がとても可愛かったなんてとても…「ファイア！」…あ」

それで二人には少し怖い目にあつてもらったと記載する。

そして場が落ち着いた頃を見計らったのか、

「ねえシホ。昨日のあの矢…いや、剣はなんなの？ それにあのジュエルシードの暴走

した衝撃に耐え切った盾は一体…？」

「確か以前お姉様が使ったものを入れるといつもお姉様が使用している双剣、干将・莫耶。

空を飛行できるタラリアという靴。

それと月村邸でロボット退治に使用した物干し竿。

そしてあの二人を拘束した天の鎖、黒鍵にロー・アイアス。極めつけは昨日使用した

カラド・ボルクという強力な魔力を秘めた矢。

どれにもすごい魔力がこめられていました。

あれらは一体なんなのでしょうか……？」

「前にも言ったけど転送系の魔術で『ある場所』から呼び出して使えるものよ。

ファイアが今使用している棒もそこから引つ張り出して使っているものだけ。

……まあ分かりやすく言えば私ことシホ・E・シユバインオーグの『武器庫』といったものね」

「武器庫って……まだあんな強力なものが他にもたくさんあるの!？」

「まあ、ね……でも武器庫の場所は教えないわよ？ あれは私の家系の魔術の集大成とも

言える場所だから」

二人はそれでとても感心していた。

我ながらよくこんな意地の悪い嘘を言えたものだ。

その武器庫は私の心象世界にあるから一生見つけ出すことは不可能に近いって言うの……。

固有結界を発動させしななければバレルものでもないし。

いや、でも別に嘘でもないかな？ 剣の丘から呼ぶという時点で転送といっても間違

いではない。

三時過ぎになってユーノがレイジングハートが回復したのでなのはに届けてくると言って出て行つた。

私も桃子さんにもう大丈夫と伝えて出かける了承をしてもらいファイアとともに町を探索していた。

そしてまたフェイトと出会ったあの公園にいけば会えるかなと希望的思考で向かった。

すると久しぶりに来たというのに私の匂いなのかな？

それを嗅ぎつけてやってやってきた野性の動物達が私が座ったベンチに集まってきた。だからまた歌わせてもらう事にした。



シホが公園に入る少し、いやかなり前にこの次元世界「地球」の近くの座標に、ある一つの次元航行艦が待機していた。

航行艦の名を巡航八番艦『アースラ』。

アースラは先日第97管理外世界：通称「地球」から小規模次元震が観測されたとの報告を受け到着していたのだ。

そのアースラのブリッジである場所の艦長席に座しているミント色の髪をした『リンディ・ハラOWN』が、

「ここが次元震の反応が観測された地球という星ね」

「はい、リンディ艦長。この世界には魔法技術は存在していないようです。」

ですがスクライア一族の話でこの世界にジュエルシードというロストログアが海鳴市という町を中心にして散らばったそうです。

それともう一つ、そのジュエルシードを発掘したという双子の兄妹が行方不明になっているそうです。

おそらく捜索にあたっているものではないかと……」

若い茶色の髪をしたオペレータの女性、『エイミー・リミエッタ』がリンディにそう伝えた。

リンディはただ「そう……」とだけ答えて、映し出された二人の写真を見ていた。

そこにはユーノとファイアットの顔写真が載っていた。

「捜索者は二組いるそうね。どちらかに協力している可能性があるわ。」

小規模とはいえ次元震が発生したのは事実……放っておくことはできないわ。

だからそういう事だけ頼めるわね、クロノ？」

「もちろんです艦長。僕はその為にいるんですから……」

リンディにクロノと言われた全身黒ずくめのバリアジャケットを着ているまだ幼さが残る少年はそう答えた。

そしてクロノは転移装置で海鳴市に降り立った。

「……が地球か……」

クロノはバリアジャケットを解いて私服の姿になり（これも全身黒）しばらく人気がない場所を歩いていった。

「（小規模次元震が起きたのはこの近くだというのにあまり騒ぎは起きていないようだ。もしかしたら境界内で起きたことなのかもしれない）……ん？」

そこでクロノは近くから微かだが魔力反応をキャッチした。

焦らずに向かってみるといつの間にか公園に着いていた。

そしてクロノはそこで幻想的な光景を目の当たりにする。

一人の煌めく緋色の髪をした少女が何の歌かは分からないが目を閉じ両手を合わせて歌っている。

それだけならまだ別にたいしたことではないがその少女を中心に数十匹の様々な動物達が集まって聞き入っている。

「（不思議な光景だ……でもあの少女と肩に乗っているフェレットから魔力反応を感じる。

どちらも普通の人と比べると大量の魔力を持っている。特に緋色の髪の子はもしか

したらランクは僕以上かもしれない……」

クロノはさっそく重要人物かもしれない者を発見したのでブリッジに連絡を取った。そしてブリッジではクロノの報告を受けてその少女の映像を映し出される。

するとクロノと同じでやはり幻想的に見えたのだろう、その少女に見入っていた。

だがリンディはいち早く復帰し、

『わかりました。クロノ、頃合いを見て接触を試みてちょうだい』

「わかりました。ですが白の場合は……いや、それはないでしょうね。二人ともおそらく関係者でしょう」

『おそらく、ね……だから接触したら相手を刺激しないように慎重にね。相手はまだ幼いとはいえ女性なんですから』

「了解しました」

クロノは通信を終えると少女が歌い終わったのを見計らって、
「隣、いいかな……?」



Side シホ・E・シュバインオーグ

私が今良い気分でもローレライを歌っているのにその気分を害するものがある。

私は歌いながらもフィアに思念通話で語りかけた。

《…フィア》

《はあー…え？　なんですか、お姉様？》

どうやらフィアも他の動物同様聴き入っていたようだ。

だけど今はお預けにしてもらおう。

《私達…今見られているわ》

《え!?!》

《誰かはわからないけど現れるにはでき過ぎているわ。先日あんなことがあったんだから》

《それじゃ時空管理局がどうやってきたってことですか?》

《おそらく、ね…だからフィアも余計な情報は与えないように注意しておいてね?》

《はいです。でも、お姉様の歌を邪魔するなんて許せない…!》

《それは同感よ。せっかくだからいい気分でも歌っていたのに…》

でも歌は最後まで歌いきる。

歌いきっていつ来るかと思ったらフェイトと出会ったときと同じように、

「隣、いいかな…?」

なんていう見た目同年代の黒髪の少年が尋ねてきたので私は、

「どうぞ。今ちようど歌いきりましたので……なにかご用ですか? かなり前から見ていましたよね?」

そう言つて聞いてみる。

すると少年は軽く驚いた表情をしながら、

「気付いていたのか……。それはすまなかつた。それでちよつと聞きたい事があつてね。」

それと肩の上にいる小動物：君はスクライア一族の双子の片割れかな?」

それでファイアがビクツと体を震わせてしまった。

はあ…これでやり過ぎは無理ね。

私は観念してこの少年の言葉を聞いてあげることにした。

「…嗅ぎ付けるのが早いですね?」

「そんなこともないさ。話はスクライア一族から聞いていたからね。」

それにこの町だつて気づいたのは昨日の小規模次元震の影響だからだね」

「次元震…?」

「なんだ? そつちから聞いていないのか? あー、それと話しても大丈夫だ。もうこ

「こら一体には結界を張らしてもらったから」

「手際がいいことで……」

「なに、用心に越したことはないからね」

それでファイアも観念したようで喋りだした。

「それで、あなたは誰ですか？ 名前を聞かない限りは信用できません」

「僕か？ 僕の名はクロノ。時空管理局の執務官。クロノ・ハラオウンだ」

「ハラオウン……聞いた事があります。わかりました。私はスクライア一族のファイアツ

ト・スクライアです」

「やっぱり……ということはこの少女が君の協力者なのか？」

「そうです」

「名を聞かせてもらっても構わないか……？」

「……シホ。シホ・E・シュバインオーグよ」

「それじゃ呼び捨てでシホでいいかな？」

「むっ……、ええ、構わないわ。でもいきなり呼び捨てなんて失礼ね」

「そこらへんは許してくれ。こちらとしては話を進めたいんだ」

子供の癖に意外に冷静なのね。

今は様子見をしておきましょうか。藪から蛇が出たらたまらない。

「それじゃ何から聞きますか？」

「まずこの世界にどういう風に関わったかを聞きたいね」

「私ともう一人いるけど、ファイア達の呼びかけに応じてジュエルシード集めに協力しているわ」

「そのもう一人の方にはユーノ・スクライアがついているわけだね」

「なんでもお見通しのね。ええ、そうよ」

「分かった。次にだけど君はこの管理外世界での戦闘は違法だと知っていたのか？」

「そんな事は知らないわ。そもそもそちらの組織に関しては少しかじった程度しかわからないし」

「そうか。ならまだ知らなかったって事で罪には問われないだろう」

「時空管理局では無断で戦うと罪になるんですか……？」

「場合による、という感じだ。そんなに心配しなくてもいいよ」

「ならよかったわ」

「なら、なのはは罪に問われることはないわね。」

それで詳しく話し合いをしようとしたところで、異様な魔力反応が感じられた。

それはファイアもクロノも気づいたようでファイアは人間形態に戻って、クロノは黒の私服にさらに黒いバリアジャケットをまとった。

「クロノ、あなた……いい趣味しているわね。全身黒づくめよ?」

「うるさい。これが正装なんだ」

「まあ、いいわ。それよりファイア、ジュエルシールドが発動した場所は分かる?」

「はい!」

ファイアが私にその事を伝えてくれた後、少しジャンプして電灯の上に乗り、目を強化し見てみるとすでになのはとフェイトがジュエルシールドの封印作業を執り行っていた。

でも相手はバリアを展開できるように苦戦しているようだ。

それで仕方ないと思い、

トレース・オン
「投影開始」

私はケルト神話の登場人物でファイアナ騎士団の一員でもあったデイルムツド・オデインの二槍の片割れで概念としては触れた対象の魔力的効果を打ち消す能力を持つ『破魔の紅薔薇』を投影した。

その光景を見ていたクロノは突然現れた槍に驚きを隠せないでいるようだが私は見向きもしないでタラリアも投影して空を翔けていった。

「待て! その質量兵器はなんだ!?!」

「私の武装の一つよ。今は見逃してくださいね」

「わかった。今はそれで納得しておく……」

そんなやりとりをしながらなのは達の戦っている場所にたどり着いた。

「なのは、苦戦しているようね」

「シホちゃん!?! もう大丈夫なの!」

「私は平気よ。それよりアレは私がなんとかするわ。フェイトも手を出さないように」

「…うん。シホ、無事でよかった」

それで笑顔を向けた後、私はゲイ・ジャルグを構えて疾駆した。

当然木の化け物は木の根を使って攻撃してくるがこの槍の前では紙くずも同然。

何度も薙ぎ払いながら進んでいき一気に解析してジュエルシードにある部分にゲイ・

ジャルグを突き刺した。

それで木の化け物はまるで崩れるように瓦解した。

そしてジュエルシードが空に浮かび上がる。

『なっ!?!』

周りからどよめきの声上がる。

それは当然だろう。

さつきまで苦戦していたのにこうもあっさりと退治してしまったのだから。

と、そこでやっつと追いついてきたクロノが、空中で浮いているジュエルシードの前に

立った。

「僕は時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。

その権限で、これ以上の戦闘行動の停止を命じる。

両名とも速やかにデバイスを収めるように。そして詳しい事情を聞かせてもらおうか」

「わかったわ」

「はいです」

そうクロノに言われたので私とファイアはおとなしくしておいた。

だがそこに乗じてフェイトが封印しようと駆けるがクロノはさすがに魔力弾を放つ。

威嚇もなしか……でもジュエルシードを守る行動と考えれば納得かもしれない。

でも、それとは関係なく私は魔力弾を払い落とした。

「なにをつっ!？」

「威嚇もなしに直接彼女を狙うのはよくないわ」

「だが、その少女はジュエルシードを封印して持ち去ろうとした。君も知っているだろう? ジュエルシードの危険性を……」

「まあ、ね。でも」

それから私は穏便に話をつけようとした。だが、その時アルフが空から魔力弾を放ってきた。

それをクロノはシールドで防御した。

「どうやら私には狙いは定めていなかったようだ。」

「フエイト！ 離脱するよ！」

「で、でも……！」

「でも、じゃない！ 今逃げなきゃ奴等に捕まっちゃう！」

「っ……！」

フエイトは苦虫を噛み潰したような表情をして魔法を展開して逃げようとしたが、かさずクロノはまた杖を構えた。

「ただどその斜線上になのが立ちふさがり」「フエイトちゃんを攻撃しちやダメッ！」
と言った。

その結果、フエイト達はここからの離脱を成功させていった。

「くっ……君たちは！」

「……ごめんなさいね。でも少し今回はなのはの味方しておくわ」

「まったく……逃したのは痛いぞ？」

「わかってるわ」

それでクロノとまた詳しく話をしようとしたが、そこに突如魔法陣が浮かび上がりそこには一人の女性の姿が映し出された。

『クロノ……一度落ち着いて話し合しましょう』

「艦長……？　わかりました」

『それとあなたもその武器を下げてもらって構わないかしら……？』

「わかりました」

そうして私はゲイ・ジャルグを幻想に破棄した。

クロノと、それにスクリーンの女性も驚いているようだけど気にしない。

みんなにも転送系の魔術だと信じ込ませているんだからどうか誤魔化そう。

『それでクロノ。詳しい事情を聞きたいからその子達をアースラに案内してもらって構わないかしら？』

「了解です。……で、君はどうするんだ？」

「もちろん着いていくわ。どうせ着いていかなかったら監視でもつける算段はついていそうだしね。今回は大人しく引いてあげるわ」

「そうか……それで安心した。」

（……しかし、この娘は一体何者だ？　僕達の知らない系統の魔法を使うし、それにあの質量兵器の槍……あれ一つでかなりの魔力を秘めていた。

ロストロギア……にしても見たことも聞いたこともない。絶対聞き出してみせる……！）

…こうして私達はアースラと呼ばれる場所に転移することになった。

第十四話

『時空管理局との接触』

S i d e シホ・E・シユバインオーグ

ククロノに連れられてゲートから転送されてアースラという戦艦に乗り込んだのはいいけど…。

「デバイスとかいう意思を持つ機械式の杖ならまだ許せる範囲だわ。魔法系統も認められる。」

でもさすがに戦艦だなんて…SFもここまで来ると笑えてくるわね」

「何を言っているんだ？ この戦艦だつてすべてとは言わないけど魔法を動力に使っているんだかられっきとした魔法文明の遺産の産物だ」

「…ごめんなさい。私には少し、いやかなり理解できないわ。もうこの話はしないで、お願いだから…」

「なにか事情があるのか？」

「とりあえず相応の場になったら説明してあげるから…」

「わかった。それで君は先程武器を消したようだけど、他の三人も魔法やバリアジャケツトを解除してくれ」

「あ、はい。わかりました」

話に着いていけずにおどおどしていたのはもやっと反応できたのかバリアジャケツトを解いて制服姿に戻った。

ユーノも変身魔法を解き人間の姿になった。

そしてフィアはというと、

「お姉様…この棒はどうしましょう?」

「また後であげるから今は消しておくわよ?」

トレリス・カット
「投影、解除」

私の詠唱でフィアの棒は霧散と化した。

「君は本当に不思議な魔法を使うな。転送系かなにか?」

「そうよ。…まああなた達とはそもそも系統からして違うものだけだね」

「どういうことだ? 君は魔導師じゃないのか?」

「だからそれも含めて後で説明するわ」

「そうか…まあ無理に詮索はしない。さて、ではこれからこの艦の艦長の場所に案内するから着いてきてくれ」

この艦の艦長か……。さて、どういう人物だろうか？

私の嫌いなタイプでないことを切に祈っておこう。

だが、その期待はいい意味で裏切られた。

艦長室に入った途端、迎え入れてくれたのは何ゆえに和室……？

畳みや盆栽は趣味なのだろうか……？

というよりここまでアレな部屋だと職権乱用ではないのだろうか……？

そんな事を思っていたら、部屋にいた緑色の髪の女性が話しかけてきた。

「クロノ、お疲れ様ね。それとよく来てくれたわね。さ、疲れているようですし座って
ちようだい」

「あ、はい。失礼します……」

なのは達がそれに答えて座っていく。

なので私も一応警戒しながらも座することにした。

なにかあればすぐにでも魔術回路は起動できるようにスタンバイしておく。

この世界の魔法は神秘なんでものは理解していないところがあるから気づかれな
いだろうし。

そして自己紹介がお互いにすんだ後、これまでの詳しい経緯をユーノが代表して話
していく。

「…それで僕達は散らばってしまったジュエルシードを回収しようとなのは達の世界に
来たんです」

「それは立派なことだわ」

リンデイさんは温和な表情でユーノを褒めるが、その一方でクロノは無謀だと降す。

まあそれは私としても賛成な意見だから口を出さない。

まず最初からこの機関に説明していれば私達…特に一般人であるのはは巻き込ま
れずに済んだわけだし。

それから次はロストログアの説明に入った。

こちら辺はフィアと会話した内容とほぼ一致していたので良いとするけど、やはりロ
ストログアとはその一部は私達の世界で言う抑止力。

そしてそれに付随して『次元震』と『次元断層』という実に物騒な言葉が出てきた。

発達しすぎた文明が滅びたのもこの世界の人達はおそらく理解していないだろうけ
ど、次元震と次元断層は「」に準備もなしに近づき過ぎたからの結果。

世界そのものを滅ぼしてしまうのだから守護者より性質が悪すぎる。

それとあの脈動が次元震の兆しだと知らされ私はいくら納得できた。

純度はどうあれ、あれはおそらく聖杯以上の魔力を秘めている。

それと話がある程度まとまったらしく、

「これより、ロストログア『ジュエルシード』の回収は時空管理局が全権を持ちます」
なのは達は驚いているが、あちらとしてはこれは当然の処置だ。

それにもともと私達の行動は例えでいうなら警察が到着する前に勝手に現場を動き回っている一般人のようなものだ。

普通なら違法すれすれで補導されてもおかしくない。

実際今がその状況だし。

でも、ジュエルシードが起こす事件は海鳴市が中心になる。

ましてたった一つだけで抑止力を発生させようとするものをどうして放っておけようか？

だが今は余計な発言はしない。

無意味に反論しても手痛い一手をもらうのが目に見えている。

そしてクロノが裏のない顔で、

「もう君達は今回の事件は身を引いて、もとの生活に戻った方がいい」

と、言っていたので最初の印象から少し好印象になった。

しかしそこから続けてリンディさんが放った言葉は少し反論したい気持ちになった。

「クロノの言うことはもつともね。

まあ、急に言われても気持ちの整理もできないでしょう。」

一度家に帰って、今晚ゆっくりと話し合うといいわ。その上で、改めてお話ししよう」

優しい笑みでリンデイさんはそう言った。

だけどこれは誘導に等しい言葉だ。

クロノの言葉はまだ信用に値する。

でもリンデイさんからは不穏な空気が漂ってくる。

それはそうだろう？

ここまで関わってしまい、記憶を消す事ならまだしもそんな魔法はない以上、ただで帰すわけがない。

それにユーノ達の話ではなのはと私の魔力量を持つ人物は管理局でも5%くらいしかないという、ぶつちやければ上位の魔導師の人員不足らしい。

そこで私はまだわからないけど、なのはは確保しておきたい人員だろう。

先の未来を見据えれば管理局にも入ってほしい魂胆だろうし…。

そこで口を出させてもらうことにする。

「…別に、一晩なくても大丈夫じゃないですか？

クロノの言った通り、関わりを断つなら今この場でなのはからデバイスを没収して

ユーノとファイアも元の世界に強制送還してしまえば済む話。

それなのに一晩時間を与えるという事はそれだけこの事件について考える時間を与えるということ。

そしてこれからどうするか後に聞く…これは私の予想が正しいならこちらから協力を申し出てほしいという所かな…？

なのはの性格からしてこんな中途半端なところで手は引きたくないだろうし。

そうでしょ？　なのは

私の物言いに驚いているけどなのはは一度領いて、

「まだフェイトちゃんとお話ができていないからこんなところで引きたくないの…」

「そう…。そうすればリンディさんの誘導は見事成功してこちらは協力せざる得なくなる。」

そちらはどうかは分からないけどまだ子供の私達にそちらから協力を申し出るのは管理局としての体裁に関わってくる問題かもしれない。

おまけだけど、なのはの魔導師としての適正はおそらくかなり高いと思うからそちらとしては手に入れたい人員でもある。

そして私の使うそちらとしてはまったく違う体系の技術の提供をしてほしい。

…これはただの私の思った予想ですが…間違っていてくれれば苦労に越したことはないですね。

クロノはどう思う…?」

ここでリンディさんの息子のクロノに話を振ってみる。

だがここで自身に問われるとは思っていなかったらしく少し考え込んでいるが、

「…僕自身はさつきと言った事は変えるつもりはないよ」

「そう。クロノはまだ素直でよかったわ。それでリンディさん…私の勝手な推論はどう

受け止めますか?」

「……………そうね。シホさんの言った事はだいたい合っているわ。

管理局としては一般人にこちらから協力を要請するのは極力ご法度。

だから私としても要請することはできなかつたからこういう回りくどい方法を取り

ました。

そしてなのはさんの魔導師としての潜在能力と、シホさんの未知の魔法もこれからの

管理局に貴重なものだと思つてしたこと。

意地の悪い言い方をしてしまったことを謝罪するわ」

リンディさんはそういつて頭を下げてきてくれた。

おそらく根はとも優しい人なのだろうけど自身の気持ちと管理局としての立場で

板ばさみになった結果だろう。

その事を伝えてみると、

「そこまで読まれてるなんて…私の気持ちも汲んでくれるなんて。これだとシホさんには言葉では敵わないかもしれないわ」

「苦労しているんですね…」

「口には出さないわ。ですが厚かましいかもしれませんが、出来たら協力してくれませんか？」

まだこちらは情報が少なすぎるしあの黒衣の少女の事も調べないといけない。

そしてジュエルシールドを追う事になればおのずと彼女は出てくる。

こちらにも戦力はありますがクロノ級の魔導師は今のところ他にこの艦にはいません。

それで協力をしてほしいところが本心です。

ですが、なにかが起これない事に越した事はありませんが安全は保障します」

「それを聞いて安心しました。

無理に協力させようものならこの部屋はすでに使い物にならなくなっていたでしょうから…」

さらつとお返しに笑顔で脅しをかけておく。

これは効果覷面でリンデイさんとクロノは顔を少し青くした。

なのは達も受けているがここはこの際放っておこう。

「ですがいくつもお願ひがあります。

そちらの手伝いをするのは構いませんがこちらはあくまで一般協力者…そちらの法はわかりませんが、ある程度はこちらで判断して行動する権利をもらいます。

そして私のまったく違う体系の技術の提供の件ですが残念ですが教えることはできません。

知識などはお教えできませんが私のものはそうやすやすと教えられるものではないですから…それと拾った知識から技術を盗むのには一向に構いません。

この二点が私の提示する等価交換…これだけなら破格な条件だと思えますが…？」
そう、私はともかくなのは達にはまだ自由に動き回れる時間があつたほうがいい。

その為のこの条件…いざという時には有効に使わせてもらおう。

「…わかりました。その条件を呑みましよう」

「艦長!？」

「いいのよ、クロノ。もう私達はすでにシホさんの広げた交渉というテーブルの上で『こちらからの協力要請』という等価を先に支払ってしまった。

…だからこれはもう私が返事を返した時点で交渉成立という形になる。分かつて、ク

ロノ」

「……………わかりました」

「条件を呑んでいただいてありがとうございます。さて、それで話はまとまりましたからこの話はこれで終了しましょうか」

「…ええ。そうね。でもシホさんはまだその歳なのにこういった交渉の場には慣れていないのね」

「こういった手合いは今まで何度も経験してきましたから。」

私としてはリンデイさんはまだ優しい部類に入るくらいですから」

「そうなの…」

「詮索はしないといったが以前君はなにをしていたんだ？」

「まあ、色々…」

目を閉じながらそう答える。

「そうか。まあ今はいいとして、それとは別に小規模の次元震が観測されたと聞くが、同時に瞬時に消滅したとも聞く…それで君達は何をしたんだ？」

「あ、それはシホちゃんが「なのは！…え!? なに、シホちゃん!」

私はその情報を相手に教えたくなかった。

そんな代物を「消滅」させましたなんて言ったらどんな目で見られるか…。

今はなのはその素直な性格が恨めしい…。

ほら、気づくとリンデイさんとクロノは私に感心をしめしてしる。

「詳しい事情を説明してもらっていいかな…?」

「…別に構わないわよ。でもこれだけは約束してくれませんか? 私が使う技術は映像に残しはしてもあまりおおよけには公表は避けてもらいたいです」

「どうして…?」

リンデイさんが優しい顔で尋ねてくる。

だけど素直に答えていいか迷う。

だが意を決して、

「私は魔導師ではなく魔術師だから」

「魔術師…?」

「ええ。魔術師とはこの世の理…世界に刻まれた魔術基盤に語りかけて神秘を扱う者達の事です」

それからフィアがなのは達に説明した内容に付け足してリンカーコアとは違う魔術回路や概念などを同じように二人に伝えた。

それを聞き二人はひどく驚いたがすぐに落ち着きを取り戻した。

「つまり結論から言えばあなたはもう元の世界に帰ることは不可能なのね」

「ええ。それにもうあの世界には私の居場所が存在していませんから…」

それとこの話はもう止しましょう? なのはを悲しませたくないですから」

見ればなのはは大粒の涙を流していた。

それを私はポケットからハンカチを取り出して拭きとってあげる。

少ししてなのはは落ち着いたので私はレイジングハートを貸してもらい、

「レイジングハート。あの時の映像を映し出すことは可能…?」

《All right.》

そしてレイジングハートから光が発せられ画面が現れる。

そこではジュエルシードの暴走によって私がロー・アイアスでそれを防いだ後、カラ

ド・ボルクでそれを破壊した映像が映っていた。

クロノ達はそれを見て驚愕していた。

なのは達も今一度同じ光景を見てそのすごさをあらためて実感しているようである。

「なるほど…だからすぐに次元震の反応が消えたわけか。」

元が消滅すれば消えるのは必然というわけだ。

だが、それとは別に疑問が生まれた。

シホ：君のそれは魔術だというのがあれらすべての武器は作り出しているのか…?」

「いいえ、あれはある場所、私の家系の魔術の集大成とも言える『武器庫』から取り出し

て使うものよ。」

ちようどいいわ。ここで概念武装というものを説明しておくわ」

先程の概念の説明に付け足すように、

「概念武装とは長い年月を得て魔力を帯びた代物」や「概念武装一つ一つにそれぞれ違う効果や能力が存在する」などを伝えた。

もちろん宝具の説明はしない。

しても理解できないだろうし、理解したとしたらしたで軍事目的に使われるかもしれないからだ。

…まあ何度が真名開放しているのでバレルのにはそう時間はかからないと思うけど。

「その『武器庫』っていうのはどこに存在しているの？」

シホさんはこの世界には必要最低限の物しか持つてきていないのでしよう？」

「それは黙秘させてもらいます。本来魔術とは隠匿されるものですから…まして私の魔術の秘奥をそう簡単に人様に教えるわけがありません。

それとさっそく等価交換に違反しますよ？」

「うっ！　そ、そう…それは残念ね」

リンデイさんが心底残念そうにしているがクロノが話を振ってきた。

「しかし…ジュエルシードそのものを破壊するほどの概念武装といったか？　そんなものが君の武器庫には他にも存在するの…？」

「あるかないかと聞かれれば答えはYesよ」

「そうか。それで先程の槍だがあれにはどんな効果がついているんだ？」

「さっきの…ゲイ・ジャルグの事ね。残念だけどさすがに教えることはできないわ。検証はそちらで行ってちょうだい」

「それがあの槍の名前か。まあそちらが話さないのならこちらで調べさせてもらうが…」

「別に構わないわ。私には特に被害は及ばないものだから」

「なにか引つかかる物言いだな…」

「気のせいでしょう…？」

それで話は一度途絶えた。

だがそこでリンデイさんが口を開き、

「シホさんはつらくないの…？」

元の世界にも家族はいたのでしょうか…？

帰りたいとは思わないの？」

「…まあ家族のような人達はいましたが基本私は一人暮らしでしたから。

それに魔術の世界に入るということは殺す殺される覚悟を持って挑むもの。

そしてもし帰る事が出来たとしても私の知人の人達は、私を追っていた組織に人質にとられてしまうかもしれない。

それくらい私の世界の魔術師は平気で行える集団ですから。だから帰りたいとは思いません。

それに今は…」

「あ…」

なのはの手を取り、

「なのはとその家族の人達のおかげで家族の一員になりましたから寂しくありません」

「シホちゃん…」

「ほら泣かないの。悪い事をしてるみたいで嫌だから」

「…うん。わかっているの。でも嬉しくて涙が止まらないの」

それでしかたなく泣き止むまで手を握り締めてあげていた。



それからしばらくして一人の女性が艦長室に入ってきた。

なぜか目元が赤く腫れているのは気のせいかな？

「あの、彼女は…?」

「彼女はエイミィ。エイミィ・リミエッタ。この艦のオペレーターをしているものよ」

「エイミイ・リミエッタです。よろしくねー」

エイミイさんは私の手を握って挨拶をしてきた。

なぜか抱きしめられたりもしたけどなぜだろう？

まさか…。

「あの、もしかして先程の会話を艦内に流していませんよね？」

「そこは安心して。おそらく聞いていたのは彼女だけだから。エイミイ、後でおしおきね？」

「許してください、艦長…」

それからクロノも含めて三人で色々話し合っているけど私としてはシリアスな話が終わったので、そろそろ突っ込みを入れたい衝動に駆られていた。

なのにも話の途中で「うえ…」という表現がピツタリな顔をしていたし…。

「ところでリンディさん。一ついいでしょうか…？」

「なにかしら？」

「その、緑茶なんですけど…」

そこでクロノとエイミイさんの表情が真剣なものになる。

…どうやら我慢はしているようだ。

だけど私がここにいる以上、手加減はしない。

「あら？　もしかしてシホさんもミルクと砂糖を入れたい？」

リンディさんはさもそれが一般常識のように問いただしてくる。

クロノはそれで少し顔を顰めた。

私は首を横に振って遠慮した。

というより、あなたは緑茶をなめているのか？　と、問いただしたい。

「…私ですね。この世界に飛ばされてくる前は統計時間的に特に多く滞在していた場所が日本なんですよ。」

それで世界を回る間に多くの料理文化も学び和洋中頼まれればなんでも作ってやろうという意気込みと自負の念もあります。

そして私は日本のお茶類は他の国にはない独特の苦味と酸味、同時に甘味も存在すると理解しています。

それで我慢ならないので言わせてもらいます。

リンディさん、今後一切とはいいません。せめて私の前ではそのお茶の飲み方は禁止してください！」

私の発した言葉にリンディさんの背後にコミカルな雷が落ちたような気がするが無視。

まわり…特にクロノは「よく言った！」とばかりに感動している。他もまちまちだが

拍手をしている。

そこでやつと正気に戻ったリンデイさんが先程の交渉の時にも出さなかったうろたえを出して、

「シ、シホさん…きつとあなたも飲めば良さがわかると…」

「わからないです。いえ、むしろ分かりたくないです。」

それは私からすれば日本茶に対しての冒流行為に見えてしかたがないです」

クロノが同意し頷いてくれている。

なのも同様だ。

飲んだ事が無いスクライア兄妹は状況が状況だけにあたふたしているから戦力外。

エイミイさんは状況を楽しんでいる節があるから即除外。

それからしばらく膠着状態が続き、結果…力技『甘味作り』で勝利した。

…や、ここまでのこのゲテモノ茶にこだわりを持つていたとは思っていなかった。

終止リンデイさんは打ちひしがれていたのが印象的だったと後にクロノが語った。



その後、シホ達はエイミイに連れられて検査を受けていた。

その際、なのはは既に映像で解析されていたようでやっぱり管理局全体で5%しかない魔力保持者。

フェイトも同様だったらしい。

「それにしてもなのはちゃん和黑い方がフェイトちゃんって言ったっけ？」

二人とも映像で見た限りすごい魔力量だよ。

なのはちゃんは127万でフェイトちゃんは143万：最大発揮時はその3倍以上。魔力だけならクロノくんよりも強いよね」

「別に魔力だけが強さの基準じゃないだろ？」

その場の状況に合わせた応用力とどの魔法を使用するかの判断力が大事だ。

さらに：当たらなければ意味はなさない」

「クロノの意見には賛成ね。結局はしっかりと作戦を練らなければ後で倍になって返ってくるケースが多々あるしね…」

クロノが少し苦しい言い訳をしたが、意外にシホがそれを援護した。

そしてクロノも意外だったのか、

「君が賛同してくれるとは思っていなかったよ」

「別に不思議なことではないわ。私には武術や魔術全般の才能がないから必死に甘い点や弱点をしらみつぶしに減らしていったから」

「え……？ シホちゃんって才能なかったの？」

「お姉様ほどの腕で、ですか……？」

「ええ……師匠達全員の共通認識で私には武や魔術の才がないから一流には絶対になれないと言われてきたのよ。」

だから二流は二流なりに必死に努力して鍛錬し様々な体術、武術を自己で取り入れ足りない部分は違うもので補い研鑽してきた。

……後はいつ終わるとも限らない実戦経験の賜物が今の私を形作ったのよ」

『……………』

シホの悲しみもない普段どおりの言葉に一同は沈黙した。

そしてどうしたらここまでシホは強くなったのかという疑問が解消されたと同時に気づけなかった申し訳なさが勝っていた。

だが、それをエイミーが話題を変えることで重たい空気を振り払おうとした。

「で、でもシホちゃんもすごいよね。」

ついさっきの検査で分かったことなんだけどシホちゃんの魔術回路っていうものなぜか状況によって変動してCからAAA+まで常に変わるものなんだよ」

「なんだ、それは？ やっぱり基本からして体系がまったく違うからなのか？」

「そこは私にも分からないよ。なにせまったく未知の力なんだから……。」

ちなみに色々レイジングハートから映像を見させてもらって分かったことなどだけ、シホちゃんが魔術回路を起動しない時はFランクで一般人と変わらないね。

そして起動したときには最低でCランクに跳ね上がってそこから魔術を行使する時に使う魔術や武器によって変動するみたい。

ジュエルシードの暴走を止めた時に計測した数値はAA+で、その後になにか捻じれた剣を放つ時に観測された数値はほぼSランクに近いAAA+ランクだったの。

もちろんそれに応じてシホちゃんの使う武装も込められている魔力量のランクは同じって事になるね。

だからもつと具体的に言うとならばSに最も近いAAA+ってところかな」

「…シホ。君の世界の魔術師というのはこんな桁外れな者達がゴロゴロといるのか？」
「そうね…？ まあおそらく分からないけど結構いるんじゃないかしら？」

魔術師は一子相伝でさつきも説明したけどその家系に伝わる魔術を魔術刻印というものに残して次の世代に伝えていくから代に応じて魔術回路の本数・魔力量や使える魔術は効果を高めていく。

私の知っている限りで続いていた家系は1000年以上もの歴史を持つもので私なんか比べ物にならない者たちがたくさんだったわ。

それに魔力量がなくても体術に特化している魔術師は私以外にもたくさんいる。

そして魔術師の総本山である魔術協会と相対している聖堂教会という組織では魔術はほぼ使用しないけど変わりに動きが人外じみているものがほとんど。

東でこられたらそれこそ私なんかすぐに殺されてしまうわ。

…まあこれ以上元の世界の話をしてもなんにも利にはならないからやめときましよう

「そ、そうだな…すまない。変なことを聞いて」

「別に…。もう過ぎたことだから気にしないで」

シホは少し苦笑をもらしながらもクロノを見た。

だがそこでクロノは顔を赤くしてしまった。

それに気づいたのかエイミイがクロノの事をからかっていたが、

シホは思考の中で、

(…：カラド・ボルクでAAA+ランク相当か。

それじゃカリバーンやゲイ・ボルクはいつてSランク突破…：エクスカリバーなどはおそらく計測できない数値までいってしまうのでないだろうか？

神剣や霊剣なんてもつてのほか。

まして固有結界…：考えるだけ無駄だけど計測装置が吹っ飛ぶのではないか？

…：はあ、考えるだけで私の戦略の幅が減っていく事が嫌でも自覚できる。

これはもう話の途中で出たレアスキル判定というものに望みを託すしかないわね）シホは考えがまとまったのでそれを心のメモに書きとめておいた。

そこで気づくと周りが騒がしいことに気づいたのでシホはどうしたのかと聞いてみた。

けど、クロノが顔を赤くして「なんでもない！」と言ったのでなにか良くない事なのだとわかったのでシホは素直に言葉に従った。

「それとだけ次はシホちゃんのリンカーコアの方ね？」

なんていうか正直言ってなのはちゃんやフェイトちゃんよりすごいかも…」

「…やっぱりお姉様のリンカーコアがなのはさんよりでかい事が関係しているのですか？」

「うん、そう…普通この歳でなのはちゃんやフェイトって娘も十分異常なだけどね。

シホちゃんは二人から群を抜いて魔導師の推定ランクはSランクなんだよね…」

『なっ!?!』

エイミーの話を聞いてシホも含めた全員が驚愕した。

だがエイミーはまだまだあるよ？　とって別のパネルを操作してファイアットの映像を映し出した。

「ファイア…？　ファイアにもなにかあったんですか？」

「うん。以前のデータだとファイアちゃんは双子のユーノ君と同じで推定魔導師ランクはAランクだったよね？」

「はい。そうですけど…それがなにか？」

「うん。それでよくわかった。ファイアちゃんってシホちゃんと魔力の回復を早める為にリンカーコア同士でパスを繋いだって言っていたよね？」

「はい」

「それが作用してかファイアちゃんのリンカーコアがシホちゃんの未知の魔力によって活性化したのか魔力貯蔵量が倍以上に膨れ上がってランクにしてAA+まで上がっているんだよね」

「えっ!?! 私が、ですか!?!」

「うん。こんな事例は今までなかったからこそ私は驚きを通り越してもう呆れちゃったよ…」

エイミイの言葉にクロノも同意して呆れた表情をしてシホを見た。

当のシホはここまで影響を及ぼしてしまった事に対してファイアットに謝罪したが、ファイアットはむしろ喜んでいた。

「お姉様に責任はありません。むしろこれでお姉様に着いていけるといいう希望がわいてきました!」

「そう。それならこれから修行は続けていくけど構わないわね？」

「はい！ 私は一向に構いません！ これからもよろしくお願いします、お姉様！」

二人が熱い友情を誓い合っている中、

「それじゃ…ファイアちゃん用にデバイスを作らせてもらおう？」

エイミーがそう切り出した事にファイアットは盛大な笑顔で「いいんですか!？」と喜びを表現していた。

それにエイミーは「艦長の許可しただけどね」と言った。

だがそこでファイアットはある事を思い出した。

「あ、そうでした」

「…ん？ どうしたのファイア？」

「兄さん。デバイスといえばまだ伝えていないことがありますたよね…？」

「え…？ うーん…あ、そうだ！ シホの宝石に融合した謎のデバイス！」

クロノはまた未知の話が出てきたので少しうんざりした表情を浮かべながらも「謎のデバイス…？」という事で表情を切り替えて話しかけてきた。

それでシホは首にかけているサファイア色に変化した宝石をクロノに差し出した。

「これはもともと魔力を溜めるだけのただの宝石だったのよ。」

「ただファイアがジュエルシードとは別に発掘したという未知のデバイスだって事で

輸送事故がなければ管理局に届けられる予定だったらしいのよ」

「それで使い方はわからないけどジュエルシードを探す際にお守り代わりに持っていたんですけどお姉様のルビーの宝石に融合しちゃいました…」

「なるほど…事情は理解した。とりあえず今日中に専門に調べさせてもらうから一時だけと預かるけど構わないか？」

「ええ。でも私にとつてとても大事なものだからすぐに返してね？」

「ああ。それはこの謎のデバイス次第だけど返す件は約束しよう。エイミー、マリーに後で連絡を取っておいてくれ」

「了解〜！」

それでシホは宝石を一時預けることにしたが、なぜかシホにはあの宝石にはラインらしきものを感じて解析で調べてみたところそのラインの先は自身だと知り少し不安になった。

（まさか、あれもロストログアとか言わないわよね？）

いや、でも一応発掘されたものだからロストログアなのよね。

…はあ、ここで幸運Dが発動するなんて…願うならちゃんと思えるものにしてもらいたいものだけ。

暴走されたらこちらでも対処が困るし…）

第十五話

『争奪戦：海上の出来事』

それから一時、自宅に帰宅したシホ達は大切なお話があるという事で桃子に相談していた。

そしてシホがなのはの横で黙っている間になのはは桃子に最後までやり通したいと言う覚悟の言葉を伝えた。

シホもなのはの補助をしたいという事で話を通した。

無論、魔法関係の話はしない方向で。

桃子はそれを聞いて少し涙を流したが二人の決意を聞いて快く送り出してくれた。

そしてなのはは着替えやその他をリュックに詰め込んで先に外に出ているとシホに伝える。

まだ家の中に残っていたシホは同じく着替えと、切り札である宝石剣をリュックに詰めてもう一度桃子のところに向かった。

「シホちゃん……」

「桃子さん、心配しないでください。なのはと二人で最後までしつかりやってきます」
「無茶だけはダメよ？ なのはもそうだけでもし怪我でもしたら許しませんからね？」
「はい。でも無茶はしないっていうのはなのは共々保障できないかもしれないので誠心誠意努力します」

「そう…」

桃子の悲しみを秘めた顔をシホは和らげるために腰に抱きついた。

「いつてきます…お母さん…」

「えっ…?」

「な、なんでもないです！ それじゃなのはも待っているのです…！ 今度こそいつてき

ます…！」

顔を赤くしながらシホは玄関へと駆けていった。

桃子はしばし呆然としていたが「いつてらっしゃい…」と言って涙を流していた。



Side シホ・E・シュバインオーグ

私達がアースラに再び戻り会議室にクルー全員が集められた。

そこであらためてこれからジュエルシードの搜索をリンディさんは宣言した。

その後に私達の自己紹介が行われていた。

ユーノとフィアはやっぱり管理局を知っているあたり少し緊張気味だけど、逆になのはというとはきはきしながら挨拶をしていた。

「そして最後の一人…もうクルー全員は知っているとありますが次元世界ではなく並行世界というまったく違う異世界から来たという魔術師の…」

「シホ・E・シユバインオーグです。正確には魔術師というより魔術使いという方がしっくり来ますが、これからよろしくお願いします」

私が社交的に挨拶をして愛想笑いを浮かべた。

するとクロノを含めた男性職員達が全員顔を赤くした。

それに女性職員が「ムツ!」といった感じで男性陣を睨んでいた。

はて、なぜだろうか…?

「フィア…シホってやっぱり天然だね」

「でもそこが素敵なのよ」

「シホちゃんの写真には誰でも敵わないよね〜?」

はて…? やっぱり笑顔はそうとうダメなのかな?

リンにも言われたけど別に普通に笑っているだけなんだけど…。

「おっほん！ それでですがジュエルシードの回収はこの四名を中心に行っていきますのでサポートをお願いするわね」

『了解！』

それで会議は終了した。

クロノは参加しないのかという話を振ってみたけどリンデイさんが代わりに「クロノは後のことを考えて温存させておきます」との事。

それからはアースラの中で暮らす事になったので一室を借りられることになった。クロノに部屋へと案内をされている間、

「そうだ。シホ、少しいいか？」

「ん？ なに、クロノ？」

「なのは達は魔導師としてもう実力は知っているけどまだ僕達は君の実力を知らない。

だから模擬戦してもらいたいんだ。もちろん訓練場でだけど仮想敵を数体出現させるけど構わないか？」

「別に構わないけど…：なにか裏はないわよね？」

「ないぞ？」

「言ったわね。その言葉を今は信じておいてあげるけど裏切るようなら呪いをかけるか

らそのつもりで…」

「呪いって…一体？」

クロノが顔を青くしながら聞いてきた。

だからイリヤの使える魔術の知識の中で適当に使えるものを色々吹き込んでおいた。

例えば「寝込むほどの熱を出させる」といった軽いものから始まり「魅了の魔眼で体を動けなくさせる」や「意識を無機物に移し変える」といった本格的なものまで。

「シホちゃんって…そんな怖い魔術も使えるの？」

「ええ。本来魔術はこういうった陰湿なものがほとんどよ。」

それと私は使えることには使えるけど経験と才能が少ないから失敗するかもしれないないけど…」

「わ、わかった！ 絶対に約束する！」

クロノの必死の表情で私は裏がないと確認してその件に承諾した。



Side クロノ・ハラウン

シホが訓練室に入ったのを確認して僕達はエイミーがいるモニター室に入った。

なのは達にも入ってもらったのはシホについて色々意見を聞きたいからだ。

「それじゃシホちゃん。模擬戦を開始するけど準備は大丈夫？」

「はい。私はいつでも」

そう言いながらも彼女は赤いコートを羽織って待機していた。

「あのコートにもなにかしら魔力を感じるな。あれはなんなんだろうな…?」

「お姉様が言うにはあれは外側からの魔力を和らげる効果があるらしいです。確か名前には『マルティーンンの聖骸布』って言っていました」

「…技術提供は等価交換で禁止されてしまったが彼女の武器庫というものを非常に見にくくなった」

「僕もです。考古学者の端くれとしては実に興味があります」

「シホちゃんってなんでも持っているんだね」

「エイミー、彼女等の話で今まで出てきた武装の名前を言ってくれ」

「はいはい」。

双剣を干将・莫耶。空を飛行できる靴をタラリア。すごい長刀の物干し竿。天の鎖。黒鍵。ロー・アイアス。カラド・ボルク。そして最後にゲイ・ジャルグだね」

モニターに映し出されたそれぞれの武装を確認しながらエイミーが順に名前を言っ

てくれる。

「しかし、これだけ多様な種類の武装を使いこなせている彼女はかなりの強さを持っているんだろうな。

魔術回路というものは今のところ推定で最高AAA+ランクでリンカーコアはSランク。

非殺傷設定がない分、敵だったらと思うとゾツとしてしまうな」

「そうだねえ。さてそろそろシホちゃんも痺れを切らしているようだし開始しようか」

エイミーが色々操作して訓練場に計30体くらいの魔導兵器である兵隊を仮想召喚する。

「それじゃシホちゃん。開始するよ」

「わかりました。それじゃ——同調開始」トレリス・オン

シホが魔術回路を開いたらしい。

計測値が一気にCにまで膨れ上がる。

「始め！」

エイミーの合図で魔導兵器達は一齐にそれぞれの役割の配置に着いた。

ある奴は剣や槍を構えた近接タイプ。

またある奴は魔導師の杖を構えた中距離タイプ。

そしてある奴は後方で魔力をためている遠距離タイプ。

他にも空を飛んでいるものもちらほらと見られる。

…ふむ。これはおそらく近接から中距離タイプのシホには手を折る奴も何体かいるだろう。

シホも鋭い鷹のような目で全員目視したらしくその手にまずは黒鍵という剣としては扱いづらそうなものを両手に指の隙間に挟んで計6本出現させる。

牽制のつもりだろうか？

あんな細い剣では切りかかっても防がれるのが落ちだろうか？

だがシホはその期待をいい意味で裏切ってくれた。

手に持っている黒鍵をすべて近接タイプの奴に向かって投擲したのだ。

普通なら兵器達の頑丈な鎧で防がれるだろうが前衛三体の奴等が防御したのにもかかわらず二本ずつ貫通してその場に崩れ落ちた。

「なっ!?! 今のはなんだ!?!」

「あれはお姉様の純粋な投擲技法だと思います。私もまだ名前は教えてもらっていませんが…」

「今のがただの投擲!?! 一応下位だがバリアジャケットに迫るものなんだぞ!」

僕がそういつている間にもシホに向かって中距離、遠距離からの攻撃が連続で発射されシホのいた場所にすべての的中する。

そしてとどめとばかりに近距離タイプの奴が剣を振り上げその場で佇んでいるだけのシホに振り下ろした。

それで終わりかと思つたが振り下ろされる直前でシホの姿が霞のように掻き消えた。

幻影かと思つた次の瞬間には敵の後方で爆発音が何度も響き渡る。

見れば遠距離タイプの敵をすべて双剣で切り伏せていた。

「い、いつの間にー」

すべて切り伏せたシホはまたその場から消えた。

魔導兵器達はそのシホの行動で起こつた爆発による粉塵により混乱していた。

「あれがお姉様の本気の『縮地法』……！ 残像まで残すなんてすごい……」

「君はあれがなにか知つているのか！」

フィアットは「はい」と答え、シホに教えてもらったという『縮地法』と『瞬動術』の内容を聞かされた時には頭が一瞬だが真っ白になった。

それだけシホは事武術に関しては二流だが奥義というものを使えるほど修練したということになる。

フィアットもシホの手ほどきで瞬動術をまだ荒削りな状態だがもう使えることに僕

は驚きを隠せなかった。

それともう一つ『浸透勁』というものも教えてもらったけど…これはもう笑うしかなかった。

軽装だがフェイトという少女のバリアジャケットを無視して直接体に衝撃を与えたという。

…ちなみにフィアットの補足としてなのはの母親以外の家族は御神流という流派を扱うらしい。

それでほぼすべての技にこれと似た技法を取り入れていると聞いた時には、その事を知らなかったらしいのは「お父さんやお兄ちゃん達って…」と言つて涙を浮かべていた。

それで僕も地球にある魔法以外の技術に興味を持ち出していたのが本音だ。

「そろそろ決めるわよ…!」

シホのその一言がもう既に十体以下になった敵兵に向かって投げかけられる。

「フリーズアウト停止解凍…!」

「なっ!?!」

全員の言葉が驚きで飾られる。

それはそうだろう。僕だって未だに信じられないと頭で思っているのだから。

シホの周りには十を越すほどの様々な形の剣が、いや中には槍とかなども含まれてい
る。

「全投影連続層写!!」
ソードバレルフルオーブン

それらがシホの最後の詠唱らしい言葉によって一気に放たれた。

それで残っていた敵兵は成す術もなく剣群によって蹂躪された。

その時のシホの魔術回路の計測値がA+だけというのにももう驚きしかない。

そして模擬戦はシホの快勝という結果で終わりを告げた。

「滅茶苦茶だな……」

僕の一言がモニター室にいた全員に届いたようで頷かれた。



Side シホ・E・シュバインオーグ

「……うーん、宝具を見せないように技術だけで戦闘を終わらせたけど最後の
ソードバレルフルオーブン
全投影連続層写はやりすぎたかな……?」

とりあえず回収されても困るので始まってから最後まで使った武器達を消した後、

「エイミイさん、これで終了ですか？」

「…え？ あ、うん…お疲れ様。もう戻ってきてもいいよ」

「はい」

私が訓練室から出てくるといの一番にファイアが抱きついてきた。

「お姉様凄すぎです！ あんな魔術も使えたんですね！」

「シホちゃん、すごかったよ！」

「まったくだな。さすがに最後には予想もつかなかったぞ」

クロノがその後ろから呆れた顔をしてそう言ってきた。

「ま、そうだろうけど…」

「何言っているのよ。最後のはなのはが使うディバインシューターやフェイトのフォト
ンランサーと同じようなものでしょう？」

「威力を無視すればな…あれも呼び出して一気に放つものなのか？」

「そうよ。あれを使えるようにするには昔はかなり苦労したからね」

「そうだろう。もし簡単に使えるようになったとか言ったら殺意が沸いていただろうか
らな」

「そう。あ、それで私の評価だけ…」

「ああ。文句の付け所はないさ。これからよろしく頼む」

「うん、よろしく」

それでクロノと握手を交わしたけど何故かクロノはその後には一緒にどこかに消えてしまった。

なにかあったのかな…？



その後、アースラを拠点として私達はジュエルシードの回収に専念していた。

現在アースラに来てから二つ入手して9個…今はなのはとユーノ、フィアが三つ目の回収作業に入っているので計10個になる。

そしてフェイトの方も動いているようで二つ奪われている。

おそらくこれで4個あちらに渡っていることになる。

私がつつ破壊してしまったので合わせて14個…よって残り6個…。

だけどその残りは居場所が掴めずについて目下捜索中である。

私はというと今はクロノ達と時空管理局のデータでフェイトについて調べている最中。

「フェイト・テストロッサ…かつて大魔導師と言われたオーバーSランクの魔導師と同

じファミリーネームだ」

「大魔導師…?」

「ああ。君はフェイト・テストロッサとその使い魔に戦闘以外で接触した事があるって
いつていたね」

「ええ。それで少しだけ話して分かったことは、

一に、フェイトはジュエルシードを集める事だけに執着している。

二に、どう使うかとかはきつと考えていない。

三に、背後でフェイトを動かしている黒幕がいるということ。

…その三点ね。私が見つかった事は…それでその大魔導師っていう人の名前はなんて
いうの?」

「プレシア・テストロッサ…かつてミッドチルダ——僕達の世界のことだが——の中央
都市で魔法実験中に次元干渉事故を起こして追放されてしまったんだ」

「追放、ね…」

そしてプレシア・テストロッサのプロフィールを見ると26年前にあるプロジェクト
の主任を任されたが、そのプロジェクトで致命的事故を起こしてしまい、「プレシア・テ
スタロッサが違法手段・違法エネルギーを用い、安全確認よりもプロジェクト達成を優
先させた」と記載されている。

だが事故の際にプレシアは娘のアリシア・テスタロッサを失い会社を告訴したらしい。

その裁判の結果、娘の賠償金を支払う事で告訴は取り下げられ裁判は終結した。

「資料はこれだけ…。これじゃプレシアはなんの目的でフェイトにジュエルシードを集めさせているのかわからないわね？」

それに26年前ってことは、フェイトはその後生まれつつ事になるけどその後の足取りが不明じゃどうしようもない。

今のところはお手上げね…」

「それに関してはどうちらかを捕まえて吐かせるしか情報はないな」

「でもフェイトはおそらく捕まえてもなにも話さない…いや、話せないと思う。

おそらく理由はなにも聞いていないと思うから」

「だろうね。それじゃやっぱりプレシア逮捕を優先した方がマシという事だな」

「まだまだ謎が多いということね」

それで話し合いはなのはが帰還したことで終了した。

それから十日間が過ぎた。

なのは達は食堂でお互いの身の上話をしているようで中々コミュニケーションを取れているようだ。

特になのはとユーノが見た限りいい雰囲気です。フィアが少し居心地悪そうにしている。そして私はとうとうとリン、テイ茶（命名）を阻止すべく甘味を作っていたりする。

ついでにいうとここ数日で食堂関係者にここで働かない？ という相談が何度も交わされているのでまいった。

とりあえず今回は月餅とその他に軽い栄養素のある食事を作ることにして、まずリン、テイさん達スタツプがいるブリッジに持って行って、その後待機中の魔導師の人達の場所を持つていった。

「ありがとう、シホちゃん。これで元気が出たよ」

「そうですか。それじゃいざという時には頑張ってください」

『おうー！』

魔導師の人達が元気よく返事をしたので私は「それじゃ」と言ってなのは達の所に向かった。



…シホが待機場所から去っていった後、魔導師達は、「あの娘は将来とてもいいお嫁さんになるだろうぜ？」

「あ、やっぱりそう思うか。それに魔導師適正がすでにSランクだっていうからもし管理局に入ってくれるんなら、なのはちやん共々有名になるだろうな」

「…しかし話で聞いたが世界から居場所を無くしてこの世界に来たっていうじゃねーか。」

あんな将来有望で可愛い娘に追っ手を出してまで殺そうとするなんてその世界は相当腐ってやがるな」

「ほんとだぜー！」

「もしシホちゃん魔術師の能力が原因でなにか上のやつらが動く事があつたら徹底抗議してやろうぜー！」

「それはいいですね」

密かにシホを守る会が発足していたりするのは余談である。

もしシホの真実を知つたらどうなる事だろうか…？

だがその時、アラートが鳴り響き魔導師達はさっきの件で元気な為、いつでも出られるように待機するのだった。



S i d e シホ・E・シユバインオーグ

私達は食堂で話をしている時にアラートが鳴り響いたので急いでブリッジに向かった。

ブリッジに入ったらモニターに映し出されている光景に驚いた。

そこには海上の上で竜巻と戦っているフェイトとアルフの姿があったからだ。

「クロノ、状況は？」

「…海上で強力な魔法を使って海に落ちていたジュエルシードをすべて発動させたらしい。」

しかしこれは無謀だ。いくら発動させたからといって封印できるかは分からない…
実際、彼女等は起こっている竜巻に四苦八苦している」

「それじゃすぐにフェイトちゃんを助けに…！」

「いえ、今回は待機を命じます」

「どうしてですか!？」

なのはが反論するが私は真意がわかるまで手を出さない事にする。

だけどそれは予想通りで思わず歯軋りをした。

「その必要はないよ。放っておいても自滅する。」

仮にしなかったとしても、消耗したところを叩けばいい」

それでなのは顔は絶句に染まった。

その間にもフェイトのサイズフォームが切れ掛かっていて、アルフも雷に拘束されていく。

「残酷に見えるかもしれないけど、私たちは常に最善の方法を取らないといけないうの。分かって……」

「でも……」

「確かにリンディさんとクロノの選択は正しいかもしれませんが……」

「シホちゃん!？」

なのはがこちらを向いて「どうして……」という顔をするが、私は話を続ける。

「でもそれで納得して、と言われても今最悪の場合死んでしまうかもしれない命が目の前にあるというのに放っておくことはできません」

「……そう、かつてもう目指すことは敵わないけど『すべてを救う正義の味方』を目指していた私には納得できないことだ。」

そして今は『大切な者達を守る正義の味方』というものを必死に行っている。

そう、私の中ではもうフェイトとアルフも“私の大切な者達”……見捨てるなんて、今の私の選択には含まれない!

「なのはは今どうしたい…？ フェイトの事を助けたいんですよ。それは私も同じ気持ちよ…」

「シホちゃん…うん、私はフェイトちゃんを助けたい！」

「決まりね。リンディさん、いえリンディ艦長。今この場で等価交換の条件の内、ある程度はこちらで判断して行動する権利をもらおう」を発動させてもらいます」

それでブリッジ内は騒然となったが、

リンディさんが一つ深い溜息をついて、

「…正直に言えば今でもあなた達を引き止めたい気持ちで一杯です。

それでもあなた達は行くと言うでしょう。わかりました。エイミイ、転送をお願い」

「艦長、いいのですか?!」

「私はシホさんとの約束は破りたくありません。

でも一つだけ条件があります。…無事に帰ってくることに。いいですね？」

『はい!』

「ついからですからクロノ、あなたも行つて来なさい。監視役を命じます」

「了解です」

…そしてブリッジを出ようとするが一度足を止めて、

「リンディさん、我俣を言つてすみません…」

「いいわよ。あなたの過去の話でこうなる事は予想していましたから。でも言葉の責任は重大ですよ?」

「わかっていきます。もう何度も過去に苦渋を味わってきましたから…それではいつてきます!」

私はそれでブリッジを後にした。

シホ達が立ち去った後、

「…よかったですか、艦長?」

「ええ。シホさんはクロノと同じく頑固だから言っても無駄だと思ったから」

「あはは…確かに二人は似ているところありますね」

「さて…では本艦はいざという時に備えて待機をします! 各員はいつ何が起こるかわかりませんから逐一報告を頼みます!」

『了解!』



S i d e フェイト・テスタロッサ

いけない…！

ジュエルシードを発動するだけに魔力を使いすぎて封印作業が出来ない！

アルフも雷に拘束されていて身動きが出来ないでいる…。

さらにもうサイスフオームも保てる程魔力が残っていない…！

これでお終い…？

母さんの笑顔が見られない…！

母さんの望みが叶えられない！

私は、こんなところであきらめたくない！

ああ…でも無常にも私の周りには竜巻が押し寄せてきた。

こんな時、あの白い子とフェレット達…そしてシホは助けに来てくれるだろうか？

でも、さすがにそれは無理かと…諦めかけ目を瞑って最後を待った。

だけど…！

「はああああーッ！！」

あの子の声が、シホの声が聞こえた。



S i d e シホ・E・シュバインオーグ

私はタラリアを履き、手にはゲイ・ジャルグを持ちフェイトを襲おうとしていた竜巻と雷を切り払った。

やはり一時的なものらしくすぐに復活してきたがどうということはない！

「ユーノ、フィア…そしてアルフも協力して！　なのはとフェイトはジュエルシードの封印を最優先に！」

「シ、シホ…！」

「話は後で聞いてあげる。だけど一ついえることは…なのは！」

「フェイトちゃん、助けに来たよ！」

「助けに…？」

「そういうこと！　封印、頼んだわよ！」

私はそう二人に告げて迫ってくる竜巻をゲイ・ジャルグでことごとく切り裂いていった。

ユーノ達もバインドで足止めをしてきている。

後はあなた達次第よ…なのは、フェイト!

そしてしばらくして、なのはとフェイトとの会話が終了して二人はそれぞれ杖を構えて、

「デイベイン・バスター!!」

「サンダー・レイジ!!」

二人のフルパワーの力で海上は盛大に荒れたが6個のジュエルシードは暴走をやめ空中に浮いてきた。

しかし、やっぱり二人の出力はすさまじい…。

そしてなのはがフェイトに向かって、

「友達に、なりたいんだ…」

なのはがフェイトに思いを告げた。

それでなんとかなろうとした途端、空から無粋にも雷光が降り注いできた。

それにフェイトが「母さん!」と怯えにも似た声を上げる。

「ちっ…!」

私はタラリアを全開して二人の前に出て、

「熾^ロ天^イ覆^アう七^スつの円環!!」

七つの花卉を投影してなのは達に降り注ぐ雷光をギリギリ防ぐ。

だけどやはりロー・アイアスは投擲に対しては絶対の防御力を持つけど自然干渉系には弱い……!

次々と降り注ぐ雷にアイアスがひび割れていき私の体にも流れ出す。

「ぐううう……っ!?!」

「シホちゃん!」

「シホ……!」

「お姉様!」

うめき声を上げながらも私は必死にこの雷をどうにかできる宝具を検索する。

千鳥: いや、ダメだ……! これは一時的なものだから全部は防げない。

失敗した時の代償の下半身不随もいただけない!

どうしたら……!

しかしそこで閃く。

(そうだ! 千鳥とは効果は違うけど要は当たらなければいい!)

「トレス・オン
投影開始!」

それで私が投影した宝具は二つ。

右手の方の一つは先程上げた『千鳥』またの名を『雷切』。

戦国時代の九州の武将、立花道雪が持っていた刀で落雷時の雷を切ったという逸話を
持つ名刀。

そして左手には、由来では菅原道真の崇りで京都に多数の稲妻が降り注いだ時に、宮
中に一匹の白狐が現れて授けたといわれる刀で、稲妻が落ちてきた時に、九条経教は腰
に差していたそれを使い、稲妻の軌道を変えたといわれる名刀。

その名を『子狐丸』。

アイアスがまだ維持している間に、子狐丸に力を蓄える。

「切り裂け！ 雷切！」

そしてアイアスを強制破棄して雷切で一本の稲妻を切り裂きながら子狐丸をかかけ
る。

「子狐丸よ！ 雷の軌道を変えよ！」

真名開放とともに子狐丸が輝きだし私達に降り注ぐ稲妻はすべて軌道を逸らしてい
く。



Side リンディ・ハラオウン

…その後、アースラをも襲った雷は収まったけどそれと同時にフェイトさんの使い魔さんがジュエルシールドを奪おうとしたがギリギリでクロノが入った。

それでも半分奪われてしまったけど全部奪われるよりはまだマシね…。

そしてフェイトさんは使い魔さんにすごい速さで連れてかれたが逃げる際に、

『シホ…フェイトを守ってくれてありがとう』

『ごめんね、シホ…』

といつてその場から強制転移して逃げてしまった。

とうのシホさんは稲妻を防いだ代償としてかざしていた右手が黒く焦げていた。

それでもあの次元干渉の雷を防いだ事はすごいことだ。

それに今回また新しく見せた武装…『雷切』と『子狐丸』。

どちらも雷に対抗できる神秘が込められていたそうだけどまさか雷を切ったり軌道を変えたりしてしまうなんて思いもしなかった。

でもなにかのペナルティがやはりあったようでそのまま気絶してしまい呼び出していた全ての武装も強制的に消えた。

結果、シホさんは飛ぶ事が出来なくなり落下していったがクロノがなんとか両手でキヤッチした。

うん、さすがが私の息子ね。後で褒めてあげないと。

でもシホさんが目を覚ましたらなのはさん達共々、今回の件についてお説教をしてあげないとね。

第十六話

『なのはとフェイトの決着。そ

して真相、怒り』

フェイト達は帰る家でもある時の庭園に帰ってきていた。

だが帰ってきた早々にフェイトは母親であるプレシア・テスタロッサによって鞭による虐待を受けていた。

アルフはフェイトのいう事を聞いて我慢していたけど、

(どうして!?! どうしてだ!?!)

フェイトはこんなに頑張っているのになんで…!?!

あいつは実の娘にあんな酷いことをできるんだい!!!(?)

アルフの嘆きは、だが言葉に出すことは叶わない。

出したらより一層フェイトに虐待の鞭が飛ぶ可能性が上がってしまうから。

ただただ我慢し続け…少しして鞭の音が聞こえなくなった。

アルフはフェイトがやっと開放されたと思い、主のもとに急いで走った。

だが、気絶しているフェイトの傍らにはまだプレシアの姿があった。

いつもなら気絶したらすぐにどこかへ引きこもるというのに…

アルフは憎しみの表情を晒しながらもただフェイトを抱きしめなんとか耐えた。

「…アルフ、答えなさい。あの少女はなに…？」

「あの少女つてのはどいつの事だい…？」

「あの赤髪の謎の魔法を使う少女のことよ…！」

「シホの事かい？　なんだ、今更興味を持ったのかい…？」

アルフは手を出さない代わりに痛烈に皮肉を込めた言葉を発した。

だがプレシアは挑発には乗らずにただただその少女の情報が欲しいという感情だけが優先されていた。

そしてその手に鞭を顕現させ、

「…知っているだけでいいのよ。」

教えてくれないとまたフェイトをこの鞭で痛めつけるわよ？」

「ぐっ…!？」

最後通告なのだろう…アルフに鞭を一度だけ叩き付けた。

その為、アルフは「こいつにだけは…」という想いがあつたが、主がまた傷つけられてしまうという恐怖が上回った。

そして断片的ではあるがアルフからシホの情報を聞き出したプレシアはその表情に

笑みを浮かべる。

「が、それだけ。「そう…」とだけ言ってもう用はないとばかりに踵を返してどこかへ行くとした。」

だがそこでついにアルフの我慢が限界を越えてしまい絶叫を上げた。

「なんでフェイトにここまで出来るんだい?! あんたの娘だろう!?!」

「何を言い出すかと思えば、当然の事じゃない? こんなに猶予を与えてあげたのに成果はたったの七個。」

出来の悪い娘を叱るのは当たり前のことよ」

「キサマアアアアーーーッ!!!」

アルフは怒りの声を上げてプレシアに何度も殴りかかり、魔法障壁まで破ったがそこまで…。

強力な魔力弾を腹にもろに受けてしまい吹っ飛ばされる。

そこに追撃の手を緩めないプレシアは、

「…使い魔の躰がなっていないようね」

感情のこもっていない台詞を言っ、アルフはフェイトのしている事を説いたが聞いてもらえず、

「消えなさい!」

「ッ……！」

最後とばかりの一撃を放ったプレシアに対してアルフは転移魔法でどうにか逃げ出した。

「……逃がしたわね。でももう必要のない駒。

それよりそのシホ・E・シユバインオーグという少女……次元世界ではなくまったく別の異世界の住人。

それがもしかしたらアルハザードに繋がる鍵になるかもしれない……フフフツ……」
そしてプレシアはフェイトを起こし再び戦場に送り込むのだった。



……一方、アースラに収容されたシホ達は現在医務室にいる。

そこではまだ眠り続けているシホの看病がなされていた。

傷の中で右手が特に酷く真っ白な肌に対して手だけは黒くなってしまっていた。

それを医務室の関係者やユーノ達が必死に治療している最中である。

「んっ……」

そこでシホがやっと目を覚ました。

「シホちゃん！ よかったあ…」

「お姉様あー！！」

「なのは…フィア…」

まだ覚醒しきっていないのか意識が朦朧としている中、かろうじて泣きながら抱きついてきた二人の名を呼ぶ事が出来た。

少し固まってしまっていたがようやく意識が正常に戻ってきたのか、

「二人とも安心して…私は大丈夫だから」

「でも、お姉様の手が…！」

そこでシホは自身の右手を見てやっとその事に気づいた。

だけど別段驚くことではなかった。

「これならまだ大丈夫…少し待って」

シホは目を瞑り集中を شدした。

そして心内で「接続トレストレス、開始ス・オン」と唱え、魔術回路を『全て遠き理想郷ヴァザ』に接続した。するとシホの体が発光しだして周囲は驚きの声を上げる。

同時に先程まで黒く焦げていた右手の傷がまるで逆再生のように塞がっていった。それで完全とはいかないものの黒みは抜けて元の白さを取り戻した。

ついでに千鳥の影響で少しばかり下半身が麻痺していたがそれも修復しておいた。

だがそれで魔力は枯渇気味になり力尽きたのかまたベッドに横になってしまった。シホは後は接続してあるアヴァロンの恩恵でこれ以上怪しまれないように少しずつ癒していくことにしたのだ。

「すごいな…君の体にはなにか秘密はあるのか？」

「さすがに教えられないわ。でもこれで当分は残った魔力を自己治療にしか回せないから約一日は安静にしていなと…」

「そうなの。でももうこれで大丈夫のようね？」

そこでリンデイが笑顔ながらもシホ達を説教した。

四人はそれで素直に謝ることにした。

それからは達は一度様子見で家に帰されることになったが、シホは一日絶対安静の罰を与えられてしまったのでアースラに残り組みになった。

それならとフィアットと一緒に残ってくれたのでシホは安心した。

なのはは桃子達にそれとなく伝えておくという事で話をついた。



Side 高町なのは

あれから家に帰ってお母さん達に心配かけた事を何度も謝った。

リンデイさんも着いてきた事には驚いたけどシホちゃんの事情もうまく隠しながら話しているリンデイさんの手腕に驚きました。

でもやっぱりシホちゃんの話題になるとお母さん達は過敏に反応するので少しリンデイさんも苦しかったらしい。

：シホちゃんつてみんなにも事情を話しているのかな？

それから翌日になりすずかちゃんとアリサちゃんにもすこい心配されたけど元気そうでよかったですと励まされた。

その分、シホちゃんがこの場にはいない事で色々聞かれたけど事前にシホちゃんに伝えてと言われた内容を言つて二人には安心してもらった。

嘘ついてごめんなさい……！

そして今日一日はいられる事を伝えたらアリサちゃんが「うちに遊びに来る？」と誘ってくれたのでいく事になったけど、アリサちゃんが怪我をした大型犬を拾ったという話を聞いてどういった容姿かを聞くとある人に似ていたので放課後、すぐにアリサちゃんの家に向かった。

そしたら案の定、その怪我をした大型犬はアルフさんでした。

それで思念通話で事情を聞いてみたけどアルフさんはそつぽを向いてしまった。

ユーノ君の提案で仕方なく一度その場を離れることにした。

それからユーノ君が事情を聞きだそうとしたけど、

「時空管理局も見ているんだろう？」

だったらシホを映してくれないかい？

他の奴は信用できないけどシホになら全部話せる…」

「…わかった。エイミィ、シホをここに連れてきてくれ」

「はいはい」

しばらくしてシホちゃんが会話に参加してきた。



Side シホ・E・シュバインオーグ

クロノの突然の呼び出しでフィアに急いでもらいモニター室に向かった。

そこでは怪我を負ったアルフの姿があった。

「アルフ！ どうしたの、その姿!？」

「シホ！ あんたこそやつぱりあの時怪我をしていたんだね！？…すまないね、あたし達の為に…」

「そんな事、今はいいわ。それでどうしたの…？」

「シホ！ フェイトを…フェイトを助けてやつておくれ！」

「フェイトを…？」

それからアルフはフェイトの母、プレシア・テスタロッサについて語った。

その内容に次第に私は腹が立つてきた。

「でも今は安静にしてなきやいけないから…なのは。あなたがフェイトを助けてあげて」

「私が…いいの？」

「フェイトと友達になりたいんでしょ!? だったら最後までその意地を貫き通しなさい！」

「！ うん。私はやります。フェイトちゃんとお友達になりたいし、それに助けてい！」
「…なのは、つていったね？ 頼めた義理じゃないけどシホの変わりにフェイトを助けてやつておくれ…！ 今、フェイトは本当の意味で一人つきりなんだよ。だから…！」

「うん、任せて！」

なのはの元気な声とともに私も安心した。

それと同じくしてアースラではプレシアを拿捕する作戦が立案した。

：色々な思いが交差する中、翌日の朝になり私は完全とはいかないけど体調は回復してもしもの場合のクロノと同じく待機になった。

そしてアルフと合流したなのははまるで待ちわびていたかのようにフェイトと対峙する。

するとなのははなんとお互いのジュエルシードをかけた本気の勝負をフェイトに申し込んだ。

それから二人は一進一退の攻防を繰り返している。

互いに同種の魔法の打ち合いや誘導弾での遠隔攻撃、バスターやサイスラツシュなど他にもなのはには禁じていた近接戦闘など。

「ああ…なのはには地獄の特訓で近接戦闘はあまりしない方がいいと言っておいたけどやっぱりやっつたわね…」

「地獄のって…シホ、なのはのあれは独自のものじゃないのか？」

「なのはさんの使うほとんどの魔法や動作などはレイジングハートや兄さんの助言もありましたけど、そのほとんどはお姉様が考案してレイジングハートに逐一シミュレーションや魔法の種類をインプットさせてそれをお姉様が文字通り特訓相手になってあ

げていたんですよ」

「なにかそこそと隠れて特訓していたらしいけど、ほとんどは私が心構えや覚悟…それに無駄がつかないように変な癖がつきそうになっただけに指摘してやってあげていたわ」

「…なるほど。魔法を取得して間もないのに扱いが上手いのはシホの教えもあったからか。なら強くなるわけだな」

「そんな事ないわよ。きつと私がいなくても一人で勝手に強くなっていったと思うわ。なんせあの娘は私にはない才能が満ち溢れているから」

「才能がない、か…シホちゃんってやつぱりクロノ君に似てるね。必死に修練や経験を積んできた辺りなんか特に」

「…そうか（しら…？）…？」

「ほら、息もピツタリなところとか」

返す言葉もないわね…。

「つと、話をしていたら展開が変わったわね。なのはの強さを認めたフェイトが大技を仕掛けるみたいよ」

「バインドで捕まえて一斉発射か」

そこでアルフが警戒し、ユーノが援護しようとするが「これは決闘だから入ってき

「ちやダメ！」というなのはの言葉に止められた。

そしてフェイトのフォトンランサー・フアランクスシフトが一斉に放たれた。

これで決まりか？　と思ったがなんとなのははすべて受けて耐え切った。

フェイトは大技を使ってかなり消耗してしまつて攻勢に転じたなのはの攻撃を耐え切るしか他無かつた。

「受けてみて。ディバインバスターのバリエーション！」

フェイトはそれで危機を感じ離脱しようとしたがすでに両手足にバインドがかけていて逃げ出せない。

そこになのはが叩き込むように周囲に散っていた魔力を一点に再度集めて、

「これが私の全力全開！　スターライト…ブレイカー!!」

それでも私も存在を知らなかつた集束砲撃は見事フェイトに直撃して、勝利をその手にした。

「うわ！　シホ、君はあんなものも教えていたのか!？」

「…いいえ。でも、あんな無茶な事は教えたつもりはないんだけど…体にも負担大ききそうだし。」

後でいざという時だけに取っておきなさいと釘をさしておかなくちゃ…。

それとクロノ、そろそろ…」

「ああ。わかつている」

するとやはり私達の予測どおりまたいつぞやの雷光が降り注いできた。

その為に私がすぐに出動して子狐丸を使い稲妻の軌道を逸らして二人に直撃だけはさせなかったが、それとは別にジュエルシード七つを奪われてしまった。

だがもう仕方がない事で疲弊しきっている二人をアースラに回収した。

ユーノとアルフも別でアースラに乗り込んできた。

フェイト達も含めた全員がブリッジに入っている。

そしてモニターには場所の特定が出来た時の庭園というプレシアの本拠地に乗り込んでいく武装隊の面々がいてプレシアを包围していた。

それとは別の武装隊が玉座の奥へと進んでいくとそこには…

「え…？」

それは誰の声だっただろうか？

フェイトより少し幼げだが瓜二つの少女がなにかの培養液の試験管のようなものに入っていた。

混乱している間にプレシアは武装隊を鎮圧していき、

「私のアリシアに近寄らないで！」

そう言った。

負傷した局員達はエイミーさんが回収したがそれとは別に私は嫌な予感がした。

だからフェイトをここから離脱させようとしたがもうフェイトはその光景に魅入ってしまっていた。

そしてプレシアは真実を語りだす。

「…もうダメね。たった七個のジュエルシードでは、アルハザードにたどり着けるか分からないけど。

でも、もういいわ。これで終わりにする。

この子を亡くしてから暗鬱な時間も、この子の身代わりの人形を娘扱いするのも…これで終わり。

聞いていて？ 貴方の事よ、フェイト。

せっかくアリシアの記憶を与えてあげたのにそっくりなのは見た目だけ…ちっとも使えない私のお人形…」

そこでエイミーさんが語りだす。

それでも私の心はどんどん冷えていく一方だけど、

「最初の事故の時にね、プレシアは実の娘、アリシア・テストロッサを亡くしているの。彼女が最後に行っていた研究は、使い魔を超える人造生命の精製…開発コードは『プ

ロジェクトF・A・T・E』。

そしてその目的は……」

エイミイさんは沈痛な表情で語っているけど最後の一線は踏みとどまった。

それは、フェイトの完全否定。言葉にできないのは当然だ。

だがプレシアはその最後の一線を越えてしまった……！

冷めていく感情が逆にぼうぼうと燃え始める……

「よく調べたわね。私の目的は、アリシアの蘇生、ただそれだけよ」

燃え始めたものは止まることを知らずどんどん膨れ上がっていく。

プレシアはまだなにか言っているようだけどもうあまり聞きこえてこない。

「でも駄目ね、ちっとも上手くいかなかった。作り物の命は、所詮作り物「黙りなさい……

!!」……ッ!」

!!」?」

膨れ上がったものがついに爆発した。

気づいた時には殺気と殺意、その他諸々の感情が込められた呪詛にも近い言葉が自然と私の口から発せられていた。

ブリッジにいた面々は自我を失っているフェイト以外が一斉にこちらを振り向く。

「フェイトの何処が人形? 作り物? 戯言を言うのも大概にしなさい……」

「あなたに何が分かるというの……?」

「ええ、なにもわからないわ。ただの愚者の言葉なんて…。」

それにプレシア…あなたはただフェイトにアリシアの幻影を、理想を押し付けただけ。

見た目が似ている？ それは当然よ。フェイトはアリシアを基に創られたのだからそれは必然。

そして中身や仕草が違うのもまた必然…だって宿っている魂そのものが違うんだもの。

同じ人間なんて生まれてくるわけがないでしょ。

世界の理は世界を傷つけようとするものを真つ向から否定する。そして抑止力が動き出し、きつとあなたは世界に邪魔されて辿り着けやしないわ」

「…すごいよね、異世界の魔術師さん。それならあなたならどうやって死者を蘇生できるかわかるのかしら？」

「術式は知らないけど知識だけなら知っているわ…」

するとその場の全員とプレシアは驚愕した。

プレシアだけは次に歓喜の表情を浮かべたが、

「…だけど残念ね。あなたではもうそれは不可能よ」

「どうして!?!」

「だってそこにあるのはただの器だけ。肝心の魂がもうこの世にはなく根源に帰ってしまっているもの。」

死者の蘇生にはね…私の世界の五つの魔法の一つ。最低でも『魂の物質化』が必要になつてくるわ。

だからそもそもその魂が存在しない以上、一生アリシアは蘇らない…」

「なら…！」

「…私の世界にいきたい？　とうてい無理な話よ。」

世界の理や神秘すら理解できていないあなたは本当の魔法に至るなんて不可能。

それにもし行けたとしても何百、何千年の時をかけなければ辿り着けないわよ…？

どうせその時もまた抑止力に邪魔されるけどね…」

私は皮肉を込めながら肩をすくめた。

それにまだ大事なことを言っていない。

「それに言わせてもらおうわ。死者は決して蘇らない！　起きてしまった事はやり直しは効かない。」

あなたの願いは、アリシアはきつと望んでいない！

あなたはアリシアを失った時に流した涙も、その記憶も、胸を抉る悲しみも、すべて嘘にしようとしている。

世界には多くの死と悲しみに耐えて乗り越えてきた人はたくさんいる。その歳月をもあなたは無意味にしようとしている。

：失ったその痛みを抱えて前に向けて進んでいくのが唯一の失われたものの残す道だというのがどうしてわからないの!？」

「うるさい……！ 黙りなさい！」

「いいえ、言わせてもらおうわ。」

さつきもいったけどあなたはフェイトやアリシアに理想を押し付けているだけ。

どれだけあなたがアリシアの事を理解しているのかは私にもわからないわ。

だれどこまでいっても真には迫れない。真に本物なんて一生に一度だけの命そのものなんだから。

だからあなたの理想はどこまでいっても都合のいいものでしかない！

そしてこれが最後……あなたはその歪んだ理想で今もアリシア・テストロッサを苦しめ殺し続けている。

あなたのその悲しい想いに同情すべき点は確かにあるわ……。

でも、だからこそ私は……あなたの身勝手な理想を止めるために、あなたを……プレシア・テストロッサを倒すわ」

そう宣言した。

「…いいたい事はそれだけ？　そう。それなら来なさい。相手になってあげるわ。未知の魔法というものにも興味はあったけど…もういい。」

管理局より、その人形よりも…真つ先に殺してあげるわ…このガキが！」

そこでモニターが一瞬だがぶれてしまいプレシアは後ろを向きアリシアの体が入っている容器を引き上げて玉座まで歩き出した。

私は一息つくつとファイアが近寄ってきた。

「お姉様…これを」

「ファイア…？」

ファイアがハンカチを差し出してきた。

何事かと思つて…ああ、今の今まで気づかなかつた。

私は泣いていたんだ。

「ありがとう、ファイア…」

「いえ。それよりお姉様…無茶をしないでくださいね？」

お姉様の心の叫びがリンカーコアを通して私にも伝わってきました」

「ごめんなさい…そこまで気が回らなくて…」

でも、こんな事をプレシアに言つたけどこの先、私は言つた言葉を返上してプレシアと同じ事をしようとする事になるなんて思いもしなかつた。まだ、先の話だけだね…。



Side リンディ・ハラオウン

シホさん、すごいわね…。

冷静な娘だと思っていたけど心のうちはとても激情なところもあつたのね。

泣きながらもプレシアと遣り合っていた姿はクルー全員の涙を誘うほどだった。

そしてシホさんのいう神秘という概念や本物の魔法…。

そしてプレシアに語った残された者の悲しみの数々…あれはきつとシホさんにも当てはまる言葉。

こちらに飛ばされる前にどれだけ彼女は失ったのだろうか…？

クロノよりも見た目歳は下だというのに彼女はどのような地獄を見てきたのか…？

考えるだけで私の涙腺が緩む。

でも今は現場指揮官として泣くことはできない！

「…艦長。後で少しですが艦長のタイムスケジュールをあけておきます」

だけどエイミイは気づいていたようで気を使ってくれたのかそう言ってくれた。

それで「ありがとう」とだけ言って頷いた。

…さて、それでは気持ちを切り替えていかなければいけないわ！

プレシアの言葉で自我を喪失してしまったフェイトさんの事も気がかりですし…。だけでも事態は急変した。

モニターに移っているプレシアが七つのジュエルシードをかかけて、

「私達は旅立つの…忘れられた都、アルハザードへ！」

プレシアはジュエルシードに強くそう願ってしまった。

そして起こる次元震の波。

クロノはそれを阻止するためにエイミィに転送の許可を取って駆けていった。

「さあ…きなさい！ 小生意気な魔術師が！ 私達の旅の前に殺してあげるわ！」

「…」注文を受けてしまったわね。さて、それじゃ私も準備をしなくちゃ…トレース・オン武装、開始」

シホさんが独自の呪文を唱えた瞬間、

靴はタラリアと呼ばれる鉄のブーツに変わり、スカートとスパッツを履いている腰に赤いマントが装着され、上半身に黒い鎧…そしてその上に手の甲まで及ぶ赤い外套。

バリアジャケットにも似通ったその姿はまさに騎士…そう彷彿させるような姿をしていた。

その姿にクルー全員…なのはさん達も魅入っていた。

約一名はその姿に盛大に頬を染めていたけど誰かとかは敢えて上げない事にする。

そして崩れ落ちているフェイトさんに近寄り、

「フェイト…あなたはもうどうしたい？」

「私は………人形………」

やはり精神に異常をきたしているわ。

でもシホさんはフェイトさんの頭に手を乗せて、

「あなたは決して人形なんかではないわ。もう意思を持つ一人の独立した人間。

プレシアは人形といったけど私は…私達はあなたをそう思っていない。

だって、プレシアの為に必死になっていたフェイトが人形なんてものわけがない

わ」

「……………」

「フェイト…あなたはプレシアに伝えたい事があるのでしよう？…どう？」

「私は……………それでもかあさんが大好き……………」

「そう…。それならその気持ちをプレシアに思いつきり伝えなさい…露払いを済ませてあげるわ。」

私達は先に向かわせてもらう。…先に行って待っている。フェイトが来るまでプレシアの足止めは任せなさい」

「シホさんはまるで聖母のように優しい笑顔を向けてフェイトさんの頭を優しく撫でた後、その手を離し、腰のホルダーにまるで剣のような宝石を差して赤いマントを翻して踵を返し、

「なのは、ユーノ、ファイア。あなた達も行きたいでしょう？」

「うん！」

「当然だよ！」

「どこまでもついていきます！」

「そう…それじゃアルフ。フェイトの事はお願ひ。先に行つて待つているから…」

「うん…うん…！」

そしてシホさん達はブリツジを出て行つた。

それにしても遅しい娘だわ。

なのはさんをこの短期間で強く育てあげた指導力。

冷静に周りを見回して状況を把握する戦術眼。

ずば抜けた魔術という神秘の使用。

そしておそらく才能がないというクロノと同じ境遇でありながらも、ひたすら鍛え上げ一線を凌駕する様々な実力。

なによりリンカーコアの魔力値がすでにSランク。

どれをとつても文句の付け所のないような程の将来有望な人材。
是非管理局に欲しいわ…。

でも今はその事は棚上げしておく。

まずはこの事件を解決するのが大事だから…！

…そうして最後の決戦の幕が上がろうとしていた。

第十七話

『決戦！』

虹色の輝き、迸る極光

！』

Side シホ・E・シユバインオーグ

私達がゲートに向かうとクロノが待っていてくれた。

一瞬私の格好に驚いたがそれだけ。

事態は一刻を争う……！

後からリンデイさんも出張ってくるらしいけどもう事態は秒読みを開始している。

「クロノ……プレシアとは私が決着をつけるわ」

「……勝算は？」

「あるわ。それでも私の世界の五人の内の魔法使いの一弟子を侮ってもらっては困るわ」

「そうか……だが無理は禁物だぞ？」

「それはプレシアの出方次第よ」

「ずいぶんと説得力の欠ける言葉だな…」

「…でもクロノとしてはこんなギャンブル的思考もたまにはした方がいいわ。ガチガチになつてもしかたがないし…臨機応変も大事よ？」

「違うない…」

それで私とクロノはお互い微笑する。

最初の印象はもうほとんど感じられず、もう親友に近いものになっているのかもしれない。

それと後一つ。

「フィア」

「はい、お姉様」

「…本気でやる事を許可するわ。だから盛大に暴れなさい！」

そして私はフィアに不釣合いとは思うがゲイ・ジャルグを授ける。

なのもバリアジャケットをまどつてユーノと一緒に待機している。

「これは…！」

「さあ…準備は整ったわ。いきましよう！」

「ああ！」



時の庭園に転移してきた私達を迎えてくれたのはジュエルシードでありつたけ召喚した傀儡兵。

なのはが構えようとするがクロノがそれを片腕で制し、

「君達にはまだ魔力を蓄えてもらおう。ここは僕が……！」

「私も……！」

そう言つてクロノとフィアは迫つてくる兵器達にS2Uとゲイ・ジャルグをかざして、

《Stinger Sniper》

「はあっ！」

光の一閃を放ち迫つてきた敵を一掃した後、空中でそれが凝縮し再度、魔法が構築され、

「スナイプショット！」

さらにもう一閃放ち前線を掃討していき、最後にでかい斧を持った奴の頭に乗り、

《Break Impulse》

杖を直接突きつけて光が放ったところで離れたら即座に爆発した。

「へえ…魔法にも振動系があるのね。いいものを見させてもらったわ。さて、ファイアは…見るまでもないわね」

そう、ファイアはクロノとは違いほぼ完全に近距離戦を挑んでいたが苦戦というものは一切感じられなかった。

瞬動を使い、敵の背後に回ってはゲイ・ジャルグを回転させ兵器達を次々と薙ぎ払っていくその姿は、比べるのも失礼だけど劣化版ランサーとでも言える。

そしてクロノとファイアが同時に私達のところまで戻ってきた。

「やるな、ファイアット！」

「クロノもね！」

二人はタイプは違えどすさまじい戦火をあげていた。

なのは達はそれを見て唾然としていた。

「ただでクロノの「行くぞ！」という一言で私達は先に進んだ。」

しばらくしてクロノが扉を蹴破るとそこにはたくさんの傀儡兵が鉄壁のごとく立ち並んでいた。

そこでクロノが階段を見つけて、

「ここで二手に分かれよう。なのはとユーノは最上階の駆動炉の封印を！」

「それじゃ私達はプレシア行きってことね。好都合よ！」

なのは！ 私がお道を作るわ。だから先に向かいなさい……！

トリース・フラクタル
 投影、重装。——I am the bone of my sword——

……」

そして私は弓と捻じれた矢を投影し番えて、魔力を溜める。

今回は前のように咄嗟の事ではないのでインターバル時間を稼ぐことにした。

それによりジュエルシードを破壊した時以上にカラド・ボルクの魔力量がありそれはすでにここの空気を一変させていた。

クロノ達もこの異常な魔力量に驚きを示している。

「これが真の威力よ。受けなさい！ 偽・螺旋剣!!」

放たれた矢は音速を越えて突き進み魔導兵器を次々と屠り、抉り、貫き、それでもなお威力を緩めようとせずちようど集まっている中心地点のところまで、

「一気に吹き飛びなさい！ 壊れた幻想!!」

それでそこにいた全ての傀儡兵は跡形もなく爆風によって滅び去った。

残ったのは傀儡兵の残骸にクレーターののみ。

「これが真の威力か……爆発の考慮も考えるともう笑えない」

「今はどうだっていいわ。さ、なのは達は早く駆動炉へ」

「う、うん……!」

「それとクロノとファイアも向かってあげて。派手にやるから今は巻き込みたくない」
それからどうにかして二人を説得して、

「すぐに向かうからな!」

と、クロノが言ったので私は安心して一人でプレシアのもとに向かった。



私は敵を倒しながらも進んでいく。

そして最下層に辿り着き待っていたのは大魔導師…プレシア・テストアロッサ。

…一歩を踏み出す。

「…来たのね。私の事を、理想を否定した憎つき魔術師のガキが…」

「ええ。来てやったわ…決着を着けるために!」

「でも勝算はあるとでもいうの? 今の私はジュエルシードを制御している。だから謂わば魔力は無限に等しいのよ?」

「勝つつもりよ。これでも私は魔導元帥…キシユア・ゼルレッチ・シユバインオーグの弟子だから」

そして私は投影をせずに腰に差しておいた宝石剣を使おうとしたけど、やめた。

こんな奴にこれを使う価値も、見せる価値もないのだから。

だからやはり私は投影を使う。

宝石剣は最後の切り札……いや、最後から二、三番目位かな？

きつとリンが聞いたら怒るだろうけどやはり私はこの戦いが生涯で一番馴染んでいるのだ。

プレシアは杖を構えたがおそらく戦闘経験はない。

だから、やれる……！

私はまず黒鍵を投影してプレシアの手から放たれた雷撃に向かって投擲する。

すべて着弾した時にはお互い消し炭になった。

「なっ!?!」

プレシアは防がれると思っていかなかったらしく驚いていた。だがこちらも驚いた。

あれは……もう非殺傷なんて生易しいものではない。

完全に殺す攻撃だ！

なら、当ってやるわけにはいかない。

追撃でまた雷撃が放たれるが今度は鉄甲作用を用いて投擲した。

そして、

「火葬式典―」

すべての黒鍵から炎が漲り雷撃を打ち消して地面に叩きつけられる。だが、ふいに背後から悪寒がして、縮地を使いその場から離れる。

私がいいた場所には雷撃が落とされていた。

「背後からの攻撃に気づくなんて…中々やるわね。でも次はこうよ！」

次は私の周りを雷撃が包囲した。それを子狐丸を投影して地面に刺し軌道を変えて瞬時に脱出した。

今のは危なかったわ…あれが直撃したら私はすでに生きていない。

油断も慢心もしていないが気を抜けばすぐに直撃をくらうだろう。

それだけプレシアはジュエルシードを操っている。

だが、

「確かに魔力は半端ないわ。でも、あなたの体はその魔力に耐えられるのかしら？」

「っ!? 気づいていたの？」

「ええ。あなたは何度も吐血をしていた。きつと不治の病にかかっている。だからきつと限界は近い…」

「そう…でもね。そう簡単にはやられないわ！」

そしてまた雷撃が放たれるが私は今度、ゲイ・ジャルグを投影して次々と雷撃を薙ぎ

払う。

「その槍はなに!? 魔法を薙ぎ払うなんて…ありえない!」

「そのありえないが今まさに目の前にあるのよ。自覚しなさい…!」

さあ、今度はこちらの番よ! フリーズアウト 停止解凍、ソードパレルフルオープン 全投影連続層写!!」

27本の剣群を放ち迫り来る雷撃をことごとく打ち落としプレシアの魔法障壁をも貫通させる。

そしてそれが刺さる前に、

ブローケン・ファンタズム
「壊れた幻想!!」

「きやああああー!!?」

壮大な爆音と共にプレシアはなんとか魔法障壁を張ったようだがそれでも勢いは殺しきれずに吹き飛び壁に激突する。

そして大量の吐血をするが、なお這い上がってきて私に雷撃を放ってくる。

「馬鹿の一つ覚え…? これじゃジリ貧よ」

「うるさいわ! はああああ…!!」

また放たれる雷撃を今度は干将・莫耶で受け流した。

今のところは優勢…! このまま体力の限界まで耐えれば私は勝てる。

「母さん!」

だけど、そこではまだ来てはいけな人物の声が響いてきた。

見るとそこにはフェイトを始めとする駆動炉に向かった面々が姿を現していた。

「フェイト!? それにみんなも!」

「……ここで私にも運が回ってきたようね」

「みんな……! くっ……!」

プレシアは私ではなくみんなの方へ向かって殺せるほどの雷撃を放った。

間に合わないと思ったが、

「そうだわ! フィア、ゲイ・ジャルグを使いなさい!」

「はいです!」

私の心からの叫びが勝敗を分けた。

フィアは直撃する寸前にゲイ・ジャルグを雷撃に向かって放ち薙ぎ払った。

それで私はホツとしたけど、それがブラフだった事に気づいたのは眼前に雷撃が迫ってきた時だった。

みんなの悲鳴が聞こえるがとっさに私はアイアスを投影した。

しかし構成が甘かった事と、余所見をして一瞬意識をプレシアから外してしまったのが原因で四枚しか発動できなかった為に硬度も維持できず一瞬で盾は碎けて私は壁に叩きつけられる。

聖骸布のおかげで威力は緩和はできたがそれでも非常にまずい状態だ。

「形勢逆転ね…まったく本当に出来損ないの人形ね。あなたが来なければ彼女は私にやられることはなかった」

フェイトは一度ユーノに治癒魔法を受けていた私を一瞥してきた。

だから「私は大丈夫」という意思を思念通話で伝えて、「後はあなたの努力次第よ」とも伝えた。

そしてフェイトは頷き、プレシアに向き合って、

「私は…、人形ではありません…」

「そう…ではなんだというの…?」

「…あなたの、娘です…!」

「娘ですって…? だからなに? 言ったでしょ。あなたはアリシアの偽者だと…」

「でも母さんは私を生み出してくれた事には変わりありません!」

それで一時だが時は止まる。

だがプレシアは実に冷めた表情で、

「くだらないわ…」

そう言ってフェイトに魔力弾を放つが、フラッシュムーブでフェイトは避けて、

「わかりました。それなら私はあなたを止める!」

「私も手伝うよ。フェイトちゃん!」

なのはとフェイトが杖をかざしてプレシアと対峙する。

しかし、

「ダメよ、二人とも! 今のプレシアは非殺傷を解除している。防御しても碎かれてそれで終わいよ!」

「それでも、もうシホには傷ついてほしくない!」

「シホちゃんは私達を守るよ!」

「右に同じだよ」

「お姉様には指一本触れさせません!」

「僕も足を引つ張りたくない!」

「そういうことだ。シホ、君は一人じゃないんだからな」

全員がそう言って私の前に立ってプレシアに戦いを挑んでいった。

でも今のプレシアの魔力は無制限…。とうていみんなの敵う相手じゃない。

こんなところでまた失いたくない…!

『大切な者達を守る正義の味方』を志した私には決して容認できない!

そして全員の周りに数え切れないほどの雷撃が形成されてしまい、その場にまだ刺さっていた子狐丸を発動し、

「天の鎖……！」

『なっ!?!』

全員を強制的に縛り上げ私の後ろに下がらせた。

それが功をそうしたのかわからないが全員のいた場所には無数の雷撃によるクレイターが出来上がっていた。

子狐丸も強度の限界を越えたようでもうその場に残されていない。

「もう少し遅れていたら全員命はなかったわ」

『……………ッ!』

それで全員は沈痛な表情をする。

「そして…もう、私は目の前で無残に散っていくものを見たくない!」

「そう…。でも、もう万事休すよ。あなた達の負け…もう私に対抗できる事は不可能よ!」

そしてプレシアはジュエルシードを使いたたださえ強力な魔力なのにさらに力を増す。

それと同じくして時の庭園が軋みを上げだし崩れ始める。

「この『時の庭園』を崩壊させるつもりね。でも、それはどうかしら? 最後まで取っておきたかったけどもう私も出し惜しみはやめたわ」

「なに…?」

プレシアは訝しげに私を見る。

その表情は余裕に満ちているが、その慢心が命取りよ。

私は使うまいと思っていた宝石剣を腰のホルダーから取り出す。

「…なに、その不細工な宝石もどきは?」

魔力も感じない…そんなものでこの私に対等できるというの? 笑わせてくれるわ

…」

「それはどうかしらね?」

さつきもいったでしょう。私は本当の魔法使いの弟子だと…そして魔法の一端の軌

跡、とくと見せてあげる」

「言ったわね。なら、見せてもらいましょうか!」

その言葉と同時にプレシアの手から雷撃が放たれる。

私は宝石剣をかざし、

「トレス、オン接続開始!——トリガー、オフ魔力、装填!!」

宝石剣に同調し、無色だった刀身は七色に輝き始める。

そしてそれを振りかぶり、

「Es last frei. Werkzug!!」

放たれた閃光が雷撃をすべて飲み込み、プレシアの横の壁に光の軌跡が激突する。

「なにを、したの…?」

「さて、当てる御覧なさい…」

私はそういいながらも、

「魔力、再装填!!」

と唱えて宝石剣の輝きを取り戻させる。

さて、後は長期戦に持ち込むのみ…!!



そこからはシホの独壇場と化した。

プレシアが雷撃を放つと同時に、

「Es last frei. Eile Salve!!」

またプレシアと同じ量の魔力は秘めているだろう光の極光を放ちすべてを消し去る。

だというのにシホの魔力は一向に減る気配を見せない。

彼には魔力を大気から吸収する才能がなかったからだ。

だが、イリヤの体を手に入れた事で皮肉にも魔力を吸収できるような体になった。

「それがおかしいわ。確かに今、ここの中はジュエルシードの力も渦巻いてたくさん大気に魔力は存在しているわ。」

でも、それでもあんなに連続で魔法を放つことなんて不可能よ。その剣で魔力を増幅しているわけでもないし…別に…にか供給源が存在するのかしら？」

「…すごいわね。やっぱりあなたはこちらの魔導師より私達の世界の魔術師よりの思考をしているわ。」

それじゃ種明かしをしましょうか…二回は言ったわよね。私は魔法使いの弟子って…その魔法使いは五つの魔法の内、『並行世界の運営』を行えるのよ。この意味がわかる？」

「並行世界の運営…：…尽きているはずの魔力を何度も行使する…絶えず放ち続けられる魔力の波動…まさか!？」

プレシアはその解に至ったらしく顔が青どころか紫色にした。

そこでクロノがみんなの代表としてシホに「どういうことだ…？」と聞く。

それにシホはあっさりど、

「簡単なことよ。ここほど魔力が満ちていても使用できてもって数回。

でもここと『同じ場所』があつたら使用回数は大幅に増えるわ」

「同じ場所って…まさか!？」

「そう…これ——寶石剣——は並行に存在する無限に連なる世界に向けて人も通れないほどの小さな孔を穿つだけの道具。

そして空けた孔から並列して存在するここ『時の庭園』から魔力を拝借しているだけ…。

私はあくまで弟子だからそれが今の限界だけど今はそれだけで十分よ。

さて…いい加減悪あがきは止しなさい! Es last frei.

Randverschwinden!!

プレシアは真実を知つてなおも雷撃を放ってくる。

どうしてそこまで必死なのか。

だがシホ達はプレシアのその執念の意味を次の言葉で知る。

「どうして…どうして娘にもう一度会いたいという願いも許されないの!？」

ついにプレシアは本音をぶちまけた。

(…そっか。プレシアにしてみれば理不尽な事なのね)

シホはプレシアの願いは歪んでいるが、同時に実に純粹なものだと納得した。

だけど数多の犠牲を出してまで得る結果なんて悲しいもの…。

「なぜ世界はことごとく私とアリシアの間に介入してくるの!？」

私はただもう一度アリシアの笑顔が見たいだけだというのに…!

私からアリシアを奪い、生き返らせる事をも邪魔してくる…なんでこんなに理不尽なの!？」

「世界はいつだって理不尽だらけよ…私もそれで幾度となく守ろうとしたものを失ってきたわ」

「シホちゃん…」

「シホ…」

全員がシホの底知れない悲しみのこもった声に涙していた。

だがプレシアは構わず、

「それなら…どうしてあなたは私の邪魔をするの!？」

「当然よ。プレシア・テストロツサ…あなたが行おうとしている事を見逃せば多くの人が次元震に巻き込まれて死んでしまう。」

だからそれをさせない為に私はあなたを止めようとした。そうすれば犠牲は出ずにすむ…」

「…そう」

プレシアは小さく眩き、その目に狂気を宿す。

それはとても暗く深い底なし沼の如き闇のようだ。

憎しみの感情が周囲に溢れてくる。

そして突然左胸を押さえて思い切り握り締める。

すると胸から青い光が点滅し始める。

「…? まさか! プレシアは胸にジュエルシードの制御装置を仕込んでいたの!?!」

「今更気づいてももう遅いわ…! 私は、アリシアを奪おうとするもの、たとえ世界だろうとすべてを否定するっ!!」

「やめなさい!」

シホの声も虚しくプレシアは制御装置を暴走させてしまった。

暴走したプレシアは所構わずに雷撃を放ちそれは当然シホ達に向かうが、シホがそれを宝石剣で一閃。

「クロノ! みんなをもう少し安全な場所まで避難させて! 暴走を止めるわ!」

「できるのか!?!」

「やってみせるわ…!」

シホはそう言うのと右腕を上げて、

トレース・オン
「投影開始!」

その右手に武器としては効率が悪すぎる歪な短剣が握られる。

全員はそれを見て、この事態に何をするのかと思いい見守ったが、事は単純。

その歪な短剣をプレシアに向かって投擲したのだ。

「なっ!?! ただの投擲であの強力な雷撃を突破できるわけがない!」

「いえ、あれならどんな魔法だろうと突破する…殺傷力は皆無に等しいけどね。あれには最高の効果があるわ」

「お姉様! その効果って…!?!」

「見ていれば分かるわ」

シホに施され見れば短剣は雷撃の渦の中をまるで何事もなかったかのように突き進む。

いや、短剣が通る道だけ魔法がすべて掻き消されているのだ。

そしてなお暴走をしているプレシアの腹部にそれが当たったと認識したシホは、

「破戒すべき全ての符!!」

その短剣の真名を開放した。

この歪な短剣はキャスター…メディアの「裏切りの魔女」たる象徴が具現化した宝具。

初級魔術から魔法まであらゆる魔術効果を打ち消してしまう、最強の対魔術礼装。

それを受けたプレシアは「ピクンッ!」と体を震わせた次にはそのまま地面に崩れ落

ちた。

それでプレシアから一切の魔力反応がなくなり当たり一面に飛び散っていた雷撃もすべて消え去った。

それを確認したフェイトは「母さん！」と叫びながらプレシアに駆け寄った。

「…僕の予想だけどついさっきの短剣は…ゲイ・ジャルグと同じく魔力の効果を打ち消してしまふものと見たが？」

「そう…まあ今しがたの光景を見ればその効果なんてすぐに検証できるでしょうね。」

ついでに言うけどジュエルシードとの繋がりも多分断ち切ったからもう暴走することはないわ」

「…本当に君には頭が上がりえないな。これでもう次元震は起こる事はないだろう。感謝する」

シホは「そんなことは別にいいわよ」とクロノに言おうとしたが、そこで先に向かつていったフェイト達。

特にフェイトの叫び声が聞こえた。

それでシホとクロノは向かうとプレシアの心臓部が見るも無残に破裂していた。

そのせいでプレシアは息も耐え耐えに呼吸を繰り返していた。

「これは…」

シホはこのような事態を予想していなかった為にあせるが、隣にいたクロノが、
「…おそらく、ジュエルシードを制御していた装置が膨大な魔力に耐え切れずに機能を
停止して壊れたんだろう…」

「それじゃ私は…結果的に。ごめんなさい、フェイト…今更謝れる義理じゃないけど…」
「シホが気に病まないでいいよ。きつと…しようがなかったんだよ」

「でも…私は直接ではないにしても…」

シホの言葉に後悔の念が込められている。

しかしそこでまだ息があったプレシアはフェイトの方を向く。

「…アリ、シア？」

「えっ…？」

プレシアはフェイトに向かって確かに『アリシア』と言ってフェイトの頬に手を伸ばす。

おそらくもう思考がうまく回っていなくてフェイトをアリシアと完全に勘違いして
いるようだ。

「目を、覚ましてくれたのね…アリシア」

「母さん…私は…」

「フェイト…プレシアの最後の願いだからそれを叶えてあげて…」

「…うん…」

シホの一言でフェイトはアリシアを演じることにした。

それから少しの間、フェイトとプレシアは仮初とはいえ本当の家族になれたのだ。

そしてプレシアは最後に、

「ごめんなさい…アリシア。私はもう眠くなったわ…」

「うん…うん…!」

もう大量の涙を流しながらフェイトはプレシアの手を握って何度も領いた。

「アリシア…聞いて。私はあなたのクローン…名前はフェイトっていうの。その娘にひどい事をたくさんしてしまったわ。

でも、もう償うことも叶わないでしょうね…こんなひどい親、きつと許してくれないわ…」

『!!』

そこでプレシアの思いもよらないフェイトに対しての謝罪を言い始めてフェイトはさらに涙を流した。

「そんなことないよ!?! フェエ、フェイトは母さんの事が今でも大好きだよって私の隣で言っているよ!」

「本当…? よかった…アリシア、これからフェイトと二人きりにしちゃうけど…頑

張って生きていくのよ?」

「うん……」

「さ、ようなら……私の愛しいアリシア、にフェイ、ト……」

……そしてプレシアは安らかな表情をしてまるで眠るように息を引き取った。

「母さん……ッ!!」

それから庭園にはフェイトの泣き叫ぶ声が響き渡った。

そしてしばらくして、

「フェイト……プレシアとアリシアの体をアースラに運ぼう?」

そしてちゃんと埋葬してあげよう……だから……」

「うん……私はもう大丈夫。ありがとう、シホ……」

「ううん。お礼なんて言われる筋合いはないわ」

「それでもだよ」

「そう……ありがとう。クロノ、護送、お願いできる?」

「……任せてくれ。しっかりと送り届けよう」

全員がそこで悲しい出来事だけどようやく「終わった」という実感が沸いた。

だがそのとき、まだ空中に浮いていた七つのジュエルシードが脈動をしている事を全

員は気づいていなかった。

第十八話

『聖劍開放!』

S i d e シホ・E・シユバインオーグ

これですべて終わった…。

罪悪感はあったけど、これでフェイトも前を向いて歩いていけると思う。

心内で安堵していた私だが、そこで異常な魔力の気配を感じその先を見ると空中のジユエルシードが光り輝いていた。

他のみんなも気づいたらしく動揺を隠せないでいる。

「クロノ！ まだ今なら間に合うわ。早く転送の準備を！」

「どういうわけかジユエルシードは周囲の魔力を勝手に吸収して一気に開放しようとしている！」

「わかってる！ エイミー！」

『了解！ 転移ゲートを作るよ。でも、まずいよ！』

さつき消えたと思った次元震反応が再度活性化して次元断層が起きちやうかもしれない！

艦長も必死になって抑えているけど時間の問題。このままじゃ付近の世界が次元断層に巻き込まれて消滅しちゃう！』

エイミイさんのその報告を聞いて全員が戦慄する。

でもまだ手は残っている。

「…エイミイさん。ようはアレ——ジュエルシード——を破壊すればこの次元震は納まるんですね？」

『そうだけど…もう暴走は止められないよ！あと少して庭園も崩壊しちゃう！』

「でしたらそれは私があんとかします。だからクロノ達だけは先に脱出させてください」

「ばっ！馬鹿な事をいうな!!」

アレを抑えることはもう君の力でも不可能だぞ！」

「今は論議している時間は無いわ！」

ジュエルシードを破壊するか、世界の終わりを待つかの二者択一なら私は分が悪くても破壊を選ぶ。

幸いそれだけの威力を秘めたものを持っているから！

だからみんなは先にいって!

巻き込んでしまうかもしれない!」

「お姉様……!」

「フィア……それにみんな。私は大丈夫。絶対いなくなったりしないから……」

そして私は安心させるように笑顔を作った。

「その言葉、信じるぞ。シホ・E・シユバインオーグ。」

ただし必ず生き残って生還すること……これが絶対条件だ!」

「わかっているわ。私もそうやすやすと死ぬ気はないし……お母さん達のいる地球を壊さ

せもさせない!」

「シホちゃん……!? お母さんの事!」

私は笑顔を浮かべながら無言で頷いた。

それでなのは涙を浮かべた。

「さあ、行って!」

「シホ、気をつけて……!」

「死ぬんじゃないよ!」

「待っていますから!」

次々と声をかけられみんなは庭園から転移していった。

そして残されたのは私と……いまだに次元震を庭園の入り口で抑えているリンディさんののみ。

おそらく先程のプレシアとの攻防で監視されていたスフィアはすべて消滅しているはず。

だからこれで心置きなく全力を出せる……！

私がかつての相棒の剣を投影しようとしている。

しかしあのアーチャーですら完璧な投影は無理と言っていた代物。

今の私にできるかはわからないけど、やるしかない……！

本当に一か八かの賭けね……。

「トリス・オン
投影開始……！」

私は27本の魔術回路の撃鉄を引き上げる。

でも、それだけではまだ足りない……！

もつと、あの聖剣を投影するには大量の魔力が必要になってくる。

まだ構成段階だと言うのにもう無茶が出てきたのか、先程の戦闘での魔力消費も後押しをして回路が悲鳴を上げだす。

そして同時に頭痛が激しくなり倒れそうになるがなんとか踏みとどまるがやはり無理か……？

という考えが頭を過ぎった。

《シロウ! あきらめちゃダメだよ!》

「え…?」

そこでこの場ではありえない人の声が聞こえてきた。

もう二度と聞けることのないと思っていた私の大事な姉の声…。

「イ、リヤ…?」

気づくと私の手に薄つすらとだが違う手が添えられる。

《久しぶりね、シロウ…いえ、今はシホだったわね》

《ど、どうしてイリヤが…イリヤは確かに死んだはず》

《私はこれでも小聖杯…だから死ぬ間に願ったの。

シロウの役に立ちたいって…そしたら願いが叶ったのか私の魂は気づいたら魔術回

路と一つになっていた…》

《で、でもそれじゃ今までどうして…!》

《一定の条件が起きない以上私の意識は魔術回路の中で眠り続けているの…。

そしてその条件はシホが無茶をしようとした時に覚醒すると言うもの。

だから今の状態なら私の魔術回路にもシホの魔術回路と接続できる。

…もうシホは『大切な者達を守る正義の味方』なのでしよう?」

だったら私はシホといつまでも一緒に歩んでいくよ……!

だから、もう一人で無茶はしないで……一緒にアレを破壊しよう!》

……そうだね。もう私は一人じゃない。

なのは達みんなや、イリヤがいつでも傍にいてくれる。

覚悟を決めて私は増大したすべての撃鉄を叩き落とす。

《イリヤ、一緒にいこう!》

《うん!》

——創造の理念を鑑定し、

……私達は一つの聖剣を作り出すために一切の妥協をせず、一本の剣を創造する。

——基本となる骨子を想定し、

……もう何度も過去に見た神々しい剣の姿。

——構成された材質を複製し、

私のパートナーであり最愛の女性の聖剣。

——制作に及ぶ技術を模倣し、

……難しいことじゃない。

——成長に至る経験に共感し、

…不可能なことでもない。

——蓄積された年月を再現し、

…もとよりこの身は、

——全ての工程を凌駕して幻想を結び剣と成す!

ただそれだけに特化した魔術回路…!!

そして私の手に握られるは彼の騎士王の聖剣。

人々の願いが凝縮された神造兵装であり、星の鍛えた『最強の幻想』ラスト・ファンタズム。

私一人の力では到底これを振り上げることも不可能…。

だけど今は一人じゃない…!

《イリヤ、いくわよ!》

《ええ、いつでもいいわ。私はシホのすべてをサポートしきってみせる!》

そして聖剣を構えて魔力を込め始める。

しかしやはり私とイリヤの魔術回路を持ってしても魔力が周囲の魔力も一緒に無尽蔵に次々と喰われていく。

だけど決して挫けない！　ここまで来てもう後戻りはできない！

世界を救うなんて陳腐な台詞は吐かないけど、みんなの居場所を無くさせはしない！
その想いが届いたらしく聖剣は魔力充填を済ませて神々しい輝きを発する。

《もう、これで後は……！》

《振り下ろすのみ！　やっっちゃえ、シホ!!》

私は聖剣をジュエルシードに向けて振り上げ渾身の力を込めて、

「《——約束エされた……勝利カリの剣バ——》

二人して真名解放をして放たれた黄金の極光。

それは文字通り光の線と化し、それは眼前のすべてのものを斬り裂き、焼き払い、飲み込んでいく。

それはジュエルシードと次元震の源も例外なくすべて飲み込み、時の庭園の外側まで貫き奔っていく、極光は虚数空間の彼方まで消えていった。

これで次元震反応は消滅したはず。

だつてジュエルシードも粉々に砕け散ったのだから。

聖剣は役目を果たしたのかその手から消えうせた。

そして…

《イリヤ…もう眠りについちやうんだね》

《うん。でも安心して…。私はいつでもシホと共にあるから…。だからそんな泣きそうな顔をしないで》

《そうだね…。うん。私、泣かないよ》

《うん！ それでこそ私の弟…。いや、もう妹ね。ねえ、シホ…。最後に言っておきたい事があるの》

《なに…?》

《とつても申し訳ないんだけど、世界を越えた時に修正が働いてシホの魂、完全に女性に塗りがえられちゃったみたいだから♪》

《……………、えっ!?!》

《それだけ。それじゃまたいつか会おうね、お姉ちゃん♪》

《ちよ、ちよつと！ イリヤーーーー!!?》

胸中で叫んだけど、もうイリヤは眠りについてしまったので少し気まずい空気が私の中で流れた。

ただ次第にしてやはり無理が祟ったのか私の体はその場に崩れ落ちた。

装備していた武装も解除されたのだからイリヤの魔力も私の魔力と一緒に一気に枯

渴したことを意味する。

なんとか意識をかき集めてアヴァロンを起動して魔術回路の暴走だけは防げたけど私の意識はそこで途絶える。



S i d e リンディ・ハラオウン

現在私は再び発生した次元震を防ぐためにディストーション・シールドを展開してこれ以上の進行を防いでいる。

クロノ達は息を引き取ったプレシア・テスタロッサとアリシア・テスタロッサの遺体とともにアースラに無事帰還したようだ。

：一人の少女だけを残して。

その少女、シホさんはジュエルシールドを破壊すると言った。

サーチャー越しに聞いていた私はもちろんクロノ達、そしてブリッジでそれを聞いていた全員も無理だと思ったことだろう。

でも、それと同時にシホさんという異世界の少女ならできるのでないかという最後の

希望も捨て切れていなかった。

そして機械越しでのサーチャーはシホさんとプレシアとの戦闘の影響で全滅してしまつたから現存、私の魔法でのサーチャーしか残っていない。

それでもシホさんの使う術は私達の常識を覆すには十分なものだった。

『そう……これ——宝石剣——は並行に存在する無限に連なる世界に向けて人も通れないほどの小さな孔を穿つだけの道具。』

そして空けた孔から並列して存在するここ『時の庭園』から魔力を拝借しているだけ……。

私はあくまで弟子だからそれが今の限界だけど今はそれだけで十分よ!』

と、シホさんが言った時にはブリツジの全員も驚愕の念しかなかったでしょう。

いまだにこちらの技術では解明されていない『並行世界』という代物。

シホさんはそれを完全とは行かずとも行使できる術を持つている。

それだけでシホさんの言葉どおりならば『魔法使い見習い』というのは納得がいく。だけどそれとは別に私は怖い想像が浮かぶ。

他の並行世界の『時の庭園』から魔力を汲み取っているといたけど、だとすると他の世界でも同じ事象が起きていることになる。

それはつまり、シホさんがこの世界に介入しない世界もあるということ、もしかし

たらこちらの完全敗北という無残な結果だけが残った世界もあるかもしれない…。

それを考えるとシホさんの存在はこの世界を救ったということになる。

シホさん本人は謙虚な性格でそんな事を言われても否定すると思うけど、それでもありがとうと言いたい。

だけどその後のプレシア・テストロツサの行動は思いもしなかった。

あれほどフェイトさんの事を嫌っていたのに、やっぱり心の奥底ではフェイトさんの事を完全に嫌いにはなれなかったのだろう。

…そして話は戻って私のサーチャーだけでシホさんの姿を撮っているけど今すぐにも助けに行きたい。

だけどここを離れるともう抑えが効かなくなり崩壊は秒読みになってしまいうから無理なのだ。

だから本当の意味でシホさんが最後の希望なのだ。

私は精神を集中させながらもサーチャーで観測していたら少し苦悶の表情を見せながらもその手に黄金に輝く綺麗な剣が握られていた。

しかしその剣だけでなにができるのか…という疑問が過ぎたがすぐにその考えすらも忘却に葬り去らされる。

そこには異常が存在していた。

シホさんの構えている剣はもう、そうシホさんの魔力だけでは飽き足らず周囲の魔力すらも…まるで、そう……貪り食う勢いで吸収していく。

それと同時にその剣が少しずつ光り輝いていく。

そして充填が完了した時にはその剣はもう形が見えないほどの輝きを宿していた。

『か、艦長! シホちゃんとあの輝く剣から計測されるランク値が測定不能です!!』

「それは本当!」

エイミイの報告に私はもちろんブリッジに戻ってきていたクロノ達もその光景に見とれていた。

そしてシホさんはその光り輝く剣を苦悶の表情をしながらも振り上げ、

『——約束エクスされた……勝利カトリの剣——!!』

その名と共に振り下ろされた剣からは、ありえないほど強大な魔力が凝縮された一筋の極光となり放たれた。

それはいとも容易くジュエルシードすべてを飲み込み、それだけでは飽き足らず時の庭園の内壁をも撃ち貫き、次元震の源である次元の渦すらも飲み込み虚数空間の彼方で消えていった。

『……………』

私はもちろん、アースラの全員も声が出せないほどに驚いているだろう。

あれはもう人間が出せる威力ではない。矛先が変わればアースラすらも一瞬で落ちることは確実でしょう。

そして、

『艦長…：ジュエルシード及び次元震反応が完全に消滅。』

次元も静寂を取り戻してもう少しすれば完全に収まるそうです』

「そう…：報告。苦労様、エイミー」

それでシホさんをサーチャーで再度確認したら先程まで武装していた服装もすべて解けて私服に戻り、その場で倒れこんだ。

もうここでとどまる必要はないと私は判断しすぐにシホさんの元へと飛んでいった。

そして着いた時にはシホさんは気絶をしているが、ただそれだけ…安らかな寝息を奏でていた。

私はそれでシホさんの事を硝子細工を扱うように優しく抱きしめて、

「ありがとう、シホさん。あなたは世界を救ってくれました」

気絶しているから聞いていないだろうけど、それでも私はその事をシホさんに伝え
た。

その後、シホさんとその場に唯一残っていた宝石剣という今はもう魔力も何も感じな

い剣を抱えてアースラに帰還した。

第十九話

『新たな始まり』

S i d e シホ・E・シユバインオーグ

目を覚ますとそこはまた医務室の中だった。

二回もお世話になるなんてまた抜けていることをしちやっているなど苦笑をしたけど、その考えは医務室の乱入者達によって中断させられる。

「シホちゃん！」

「お姉様あ……！」

そこでのなのは、ファイアが私に殺到して抱きついてきた。

でもそこでフェイト達がいらない事に気づいた私は二人にそれを聞いてみたけど、変わりに一緒にいたクロノが答えてくれた。

「彼女達は今は護送室だ。プレシア・テスタロッサの関係者だからさすがに自由にはしておけない」

「そう…やっぱり罪は科せられるのね」

「残念だが…それが現実だ」

「そうね。これほどの事件だから…」

そこで沈黙が訪れる。

ただどこでクロノが口を開き私の事について聞いてきた。

「それよりシホ。艦長が目覚めたら艦長室に来てくれとの事だ。僕自身も改めて色々聞きたいこともあるしな」

「うっ…やつぱりかあ。ま、あれだけ派手に見せたからしょうがないといえましょうがないんだけど…」

「最後に使った剣についても説明が欲しいそうぞ？」

「え…もしかしてアレも記録に残っていたの？ てつきりサーチャーはプレシアとの戦いですべて破壊されたと思っていただけ…」

「艦長自らが魔法でのサーチャーを放っていたらしい。だから僕達全員その映像は見ている」

「すごかったよね、シホちゃん」

「はいです！ まさしく必殺でした！」

「また見せて欲しいんだけど…」

そこでユーノが興味を示したらしいが、「ダメ」と一刀両断した。

あんな死に近いほどの投影をまたやれと言われても誰がやるか、といたい衝動はなんとか抑えた。

基本、高町家（なのはは別）以外にはすべて転送系の魔術と教えているから、アレは他のものとは使用も取り出すのも困難な代物と伝えておいた。

それでユーノは残念そうにしたけどこちらとて秘奥はそう簡単に教える気はないのでご愁傷様とだけとっておく。

そして場所は変わって艦長室。

予想通りリンディさんにもユーノと同じ事を聞かれたので同様に断った。

「あれは限定的な場所以外は使用も呼び出しも困難な武装なんです。

まず魔力が渦巻いている場所じゃないと私の魔力だけじゃすぐに尽きてしまうし、それに他にも言えませんけどリスクはたくさんあるんですよ？」

「やはり相当の負担がかかるのでしようね。計測値も軽く振り切ってしまったからシホさん自身今は魔力はほぼ空の状態でしょう？」

「はい。アレだけは私の最後に近い切り札の一つですから……ノールリスクでバカスカ使えるなんていったらそれこそ私の世界の人に普通に殺されます」

「それも追われる原因の一つだったのですか？」

「はい、まあ……」

「そう……それじゃしかたがありません。それと次ですがシホさんの許可が必要だと思つてなにもしていませんがこの宝石剣はお返しします」

「あ……医務室にもなかったからどこにいったのか心配だったんですけど……よかった。これは私の大事なものなんです」

「そうですか。それで相談なんです……嫌です」……まだ何も言っていないんですけど……」

「大方この宝石剣の事を調べたいと言いたいのでしようけど、これは私の世界で必死の思いで作り上げた大師父の弟子としての証ですから。」

「それに貸しても所有権というものがあつて私以外には絶対に使えませんから」
「残念ね……」

本当に心底残念そうにしている。

でもこれも私の投影武器同様に神秘の塊だ。

そうやすやすと解析されたらたまらない。

それにこの世界の住人は機械に頼りきつて神秘というものにまったくの無関心と
いっても過言ではない。

だから調べても今の状態じゃただの剣の形をした宝石としか鑑定されないだろう。

「それじゃ少し話を変えますね。あの戦闘でシホさんは並行世界から魔力を汲み取っているといいましたが、現状どこまで使用可能なのですか？」

「どこまで、と申しましても…あの時、クロノ達に説明したのが本当に今の私の限界です。」

（まあ並行世界移動はできないけど精密に操作すればこの世界の転移技術を使わなくても転移できるし、欠片同士で通信ができるなんてことは言わない。これ以上余計に興味を持たれてもろくな事がないしね…）」

「わかりました。それではシホさんはあくまで『魔法使い』ではなくて現状は『魔法使い見習い』といったところですか？」

「そうですね。はい、その言葉が当てはまります。」

私が現状でできるのは人も通れないほどの小さな孔を穿つくくらいしかできませんから。

それとこれ以上はお教えできないので…」

それから私とリンデイさんの熱論が交わされることになったが割合する。

内容は主に私の世界の魔法やらなんやら。

ただそれを聞いていた他のギャラリーは「なんていう会話をしているんだ…」という感じの顔をしてした。

なのはなんてもうダウン寸前だし。

「大体わかりました。つまり私達では根本から理論が違うから理解できても魔術の使用は不可能というわけですね」

「そうなりますね。この世界に魔術回路を持つている人間がいるかも分かりませんし私が自ら探そうとしない限りは発見も難しいといえます。

それに今更ですけれど魔術師になるということは非道に身を落とすということに変わりありません。

もう魔術協会のお話はしましたけど、もし私や他にもいるだろう封印指定をかけられた魔術師は捕まれば実験体として一生幽閉か、もしくは：脳だけにされてホルマリン漬けですね。

まあ本当かどうかは定かではありませんけど、幽閉は確かかと：」

「恐ろしい世界ですね：魔術の探求とはいえそこまで平気で行えるなんて：。安心して、シホさん。私達管理局は絶対にそのような事は行いませんから」

「そうですか。それを聞いて安心してました」

「：とところで何度か聞きました『抑止力』というのはなんですか？」

う、そつちか：。

私はそつち方面に関してはあまり理解していない節があるから：イリヤの知識を貸

してもらおう。

それで眠っているだろうけど一応イリヤに一声かけておいて、

「抑止力というのは、普通に考えれば悪い状況をこれ以上進行させないための事ですよ
ね？」

でも私達の世界では大まかに二つに明確化されています。

一つは霊長の抑止力『アラヤ』。

そしてもう一つは世界の抑止力『ガイア』。

その二つに分類されます」

「世界、というのはよく分かりませんが、霊長…というのはつまり私達人類のことですか？」

「そう思ってくれて構いません。ガイアについては私も詳しくありませんからアラヤに付け加える形で説明します。

アラヤとは世界を滅ぼしてでも霊長を存続させる意思の力の事。

そしてガイアはその逆で霊長を滅ぼしてでも世界を守ろうとする意思の力の事をさします。

双方に違いは存在しますが一つ共通する点は『霊長を滅ぼしえる可能性を持った因子』を排除するものです」

そこでクロノから質問があった。

「それじゃその滅びというのは起こそうとした本人を排除するというものなのか？」

「いい質問だけど、それはハズレ」

「それじゃ一体なにを滅ぼすというのですか……？」

「……その事象に関わったもの全てです」

リンディさんの質問にまどろっこしく言わずに本当の事を話した。

それと同時に艦長室が一気に静まりかえった。

それを聞いていたリンディさん、クロノ、エイミィさん、なのは、ユーノ、ファイア……全員ものの見事に固まってしまった。

「ただここで一々止まっていてもしかたがないので話を続ける事にした。

「抑止力に善悪は関係ないんです。

ただ霊長を生き長らえさせる為その原因に関わった者達……そしてまったく関係ないのにその原因に巻き込まれてしまった周囲の人間すらもすべて排除し消去されてしまう」

そう、だからアーチャー——英霊エミヤ——は意思を奪われ世界の忠実な駒にされて、理想も遂げられず無限の殺しをして磨耗したのだろう。

確かにあいつの言うとおり世界の掃除屋というのはピツタリの言葉かもしれない。

「そしてここが重要ですが、もしかしたらこの世界の数多の次元世界の滅びも抑止力に触れてしまつて滅びたのかもしれない。」

一つの星、世界自体を消す…これほど手っ取り早い手は他にありませんから」

「そう、ですね…シホさんの話がもし本当なら色々と辻褃はあいます」

「そうですね艦長…発達しすぎた文明は行き過ぎた結果という事象で滅びたと考えればありえます。」

ロストロギアという古代遺産はおそらく抑止力というものを発動する一つの鍵だったのかもしれないし…」

「そういう事です。」

だからたった一つだけで次元震を起こさせる力を持つていたジュエルシードは抑止力を起こしうる格好の餌とも言えたかもしれない。

だから私達が干渉しても、しなくてももし運が悪かったら結果は次元断層という名の滅びを迎えていたかもしれない…。

これが私の抑止力について知っている限りの説明と、あくまで憶測のすべてです」

そしてこれは私のただの思い込みかもしれないけど、もしかしたら私は抑止力を起こさせない為にこの世界から呼ばれて来たのかもしれない…。

だけどそれは心の奥にしまっておくことにする。

憶測で言葉を発しても話が余計にこんがらがるだけだから。

そしてもう湿った空気は嫌なので、

「でもあくまでこれは私の世界の常識だったからこの世界に当てはまるかは分かりません。」

それに今回の事件であれほど派手に事を起こしたのに抑止力は動かなかった。

だからまだ分からないけど安心してください。

もしかしたら時空管理局という組織があるから抑止力は干渉してこないのかもしれない……」

「つまり、それを究極的に考えるともしもの場合、時空管理局が崩壊して数多の次元世界があらされ放題になった時、抑止力は動くかもしれないという結論にも至るというわけか」

くっ……人がこの場の空気を軽くしてあげようとしてあげているのに……少しは空気を読みなさい！

私は懲らしめの意味もこめて少しだけ回復したなげなしの魔力を総動員してアレを投影する。

今は完全に女性の私なら自由に使いこなすこともできるかもしれないから。

「クロノ……なまじ頭の回転がいいのは感心するけどあまりこの場でその発言はいただけ

ないわ。……我ノリ・メ・ダン・ゲレに触れぬ」

そう、あの毒舌シスターの愛用した紅い布『マグダラの聖骸布』を投影してクロノの口を中心に巻き付け赤い芋虫にした。

当然「なんだ、これは!？」という動作の反論が聞こえてきたが、

「私が空気を軽くしてあげようとしたのに無粋な発言をするからよ」

「そうね……クロノ。しばらくそうしていなさい」

リンデイさんがそれに同意してくれたのでしばらくはこの状態を続けよう。

ちなみにエイミイさんがクロノを突っついていた。

「むー!（くっ……!） むむむう!（こんな布きれ!） むむっ!（セットアップ!）……む

む?（どうした?）」

「あ、ちなみにこの布は男性に対して絶対的拘束力を持った神秘の布だから。だから魔法も使えないし力を出すことも出来ないわよ?」

それを聞いたときのクロノの表情はすごくおかしいものだった。

ユーノもそれで顔を少し青くしている。

過去に私がされた時は悔しい思いをしたけど立場が違うとここまで気持ちのいいものだと実感できる。

「エイミイさん、もしよかったですらそれを上げますよ?」

それは女性が使用することによって真の力を発揮する礼装ですから」

「いいの？ それじゃありがたく貰っちゃおうかな」

「ぶはっ！ 待て、シホ！ エイミイにそんなものをやるんじゃない!? ただでさえ僕は……!」

もし私が男のままだったなら同情したのだろうけど今は楽しくてしょうがない。

エイミイさんがいい笑顔をしてサムズアップしてきたので私も返しておいた。

それでクロノの表情がある意味絶望に染まる。

「くそ……エイミイと君を会わせてしまったのが失態だったか!」

「はいはい、それではこれでお開きにしましょうか。エイミイ、クロノの事はお願いね？」

「了解です、艦長」

「母さん!」

それから部屋を出るあたりでクロノの叫び声が聞こえてきたがもう諦めてもらおうとしかいえない。

そして数日、次元震の影響が収まるまでアースラで暮らしていた私達はやっと帰れる

ことになった。

でもミットチルダという世界には当分は帰れないというのでユーノとファイアはまだ当分は高町家に住むことになった。

「ただひとつ私は気がかりな事があった。」

「……ところでクロノ。例の私の寶石はどうなったの?」

「ああ、それが。それなら今この場で返すよ。検査の結果、ロストロギア反応は感知されずただ古代のデバイスがなんらかの形で融合してしまったらしい。」

起動方法は中身が古すぎて解析もできなかったから現状は無理だということだから元々君のものだし持っけていても害はないし、もしかしたらいつか目覚めるかもしれない……。

「だからその時になったらまた報告をしてくれ。ロストロギアだったら即刻封印作業を取らせてもらうから」

「わかったわ」

「それとシホさんの魔術の件はクルー全員に緘口令を敷きましたので当分の間だけ知る者はわずかばかりですよ」

「ありがとうございます」

それからフェイトの処遇については分かったら知らせてくれるらしい。

そして私達はクロノ達と別れを告げ海鳴市に戻ってきた。



高町家に着く前にシホはある決心をしていた。

「なのは……お願いがあるの」

「なに、シホちゃん……？」

「少し、勇気をもらっていいかな？」

その物言いでのなのは何を言いたいのか気づいてくれたらしくて手を握ってくれた。

それでシホは心がほぐされた感じがした。

そして二人して門をくぐる。

「ただいまー！」

「ただいま帰りました……」

なのはの元気な声が響く中、当然シホはガチガチに緊張している。

すると一齐に高町家の一同がシホ達を迎え入れてくれた。

「よく帰ってきたわね。なのは、それにシホちゃん……」

「は、い……心配かけちゃってすみません……。その……」

「ん？ どうしたの…？」

そこでシホは言葉を一回詰まらせる。

だけど手を握ってくれたなのは笑顔を向けてくれたおかげでシホは決心がついた。

「その…桃子お母さん…」

『え…？』

なのは以外、全員目を丸くして固まってしまった。

それは当然だろう。

シホは今まで桃子の事を『桃子さん』と呼んでいたのだから。

とうのシホはまだ恥ずかしさが臨界点をいつている為に頬を盛大に染めていた。

だが次のシホの発言にもまた驚かされた。

「それと士郎お父さん、恭也兄さん、美由希姉さん…ただいま帰りました」

「やつと言えたね。シホちゃん！」

そのなのの一言が時を再び動かして全員はなのは共々シホの事を抱きしめた。

桃子はやつとお母さんと言ってもらえた事に盛大にうれし泣きをしていたのは言う

までもない。

その晩はもうパーティーを開いたそうだ。

そして翌日学校に久しぶりに向かったシホをすずかとアリサは、なのは共々嬉しそう

に出迎えてくれた。

こうしてシホ達は再び日常に戻ってこられたと実感できたのだった。

数日後、なのはの携帯に時空管理局から電話がかかってきた。

どうやらフェイトの情報で正式に処遇が決まったらしく当分会えることは出来ないけどクロノの話ではほぼ確実に無罪になるとの事でシホ達は喜んだ。

そして本局に移動になる前に会えるということとシホ達は待ち合わせ場所まで向かうことになった。



Side シホ・E・シユバインオーグ

待ち合わせ場所に向かった私達を待っていたのはクロノ、フェイト、アルフの三人。クロノ達が気を使ってくれたらしく私となのは、フェイトの三人だけにしてくれた。

「まずはなのはからでしょ？」

という私の言葉で二人は会話をしだした。

少し会話をしてフェイトが「どうしたら友達になれるかな？」と言ったのでなのはと

一緒に笑いあいながら、

「簡単なことよ、フェイト」

「うん。名前を呼んで…それだけでいいの」

それでフェイトとなのははお互いに名前を呼び合い、クロノがもうそろそろ時間だといつてなのはとフェイトはお互いのリボンを交換し合った。

だからここ数日私もフェイトのために製作していたあるものを渡すことにした。

「フェイト…」

「シホ…」

「私ね、フェイトに上げたいものがあつたのよ。ここ数日だけだから時間が無くてそんなに製作できなかつたけど…」

私はそういつて一つの剣型の首飾りをフェイトの首にかけてあげた。

「これは…あの時にシホが使っていた剣と同じ形の…」

「うん。これには対魔力、魔除け、その他もろもろの効果を施した私オリジナルの魔術礼装…きつとこれはいざつていう時にフェイトの事を守ってくれるわよ」

「うん…ありがとう、シホ！」

「うん。いい笑顔ね」

「それと私から一つお願いがあるの。聞いてもらっていいかな？」

「言ってみて…」

「別れる前に、あの時の歌を聴かせて…」

フェイトの申し出に私はクロノを一瞥した。

「まだ少しなら大丈夫だ。ゆつくりと歌うがいいよ」

「ありがとう、クロノ」

なのはとユーノは聴いた事が無いらしく「何の事？」という顔をしていた。

だから私は全員に届くように目を瞑り両手を合わせて、

「~~~~~♪~~~~~♪」

私は目をつぶって歌っているので周りに関しては気にしていない。

けど、みんなも静かに私の歌を聴いてくれている。

「~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪………」

そしてフェイトの為に心を込めて最後まで歌いきった。

そして、

「うん、やっぱりシホは歌がとても綺麗だね…」

「言っていないかったけどこれは『ローレライ』っていう題名なの。また寂しくなったらなのはのリボンや私の剣のアクセサリー…そして私の歌を思い出して」

「うん！」

そして「時間だ」とクロノが言った。

「アルフもまたね」

「ああ。シホ、なのは、それにユーノにファイアット…ありがとうね」

「ばいばい、またね…なのは、シホ…それにみんな！」

そして転移ゲートが開き、フェイトはしきりに手を振ってきたので私達は全員で手を振り返した。

そして三人は転移して消えていった。

残った私達は元気を出して家に帰るのだった。



人だった。

ゼルレッチはニヤリと笑い、次には憤怒の表情をして、

「まったく…シホはようやく幸せというものを掴み始めたというのに貴様等という人種は、この世界にもやはり存在したのだな…」

聞くものが聞けば卒倒するほどの威圧の声…そして殺気を放ち、ゼルレッチは宝石剣を構え、

「貴様等を見ていると虫唾が走る…シホの幸せのためにも、ここで死ぬがよい…」
『ひっ!?!』

七色の極光がその場の男達をすべて飲み込み消滅させ、それでは飽き足らずその施設すらも破壊した。

そしてゼルレッチは宝石剣を通して世界を見通し、

「まだまだこの世界の膿はあるようじゃがシホに手をかけようとしないう限りはなにもせん。」

だが、もしあの娘の幸せを砕こうというならばワシはいくらでも悪にでもなろうぞ…
!。」

そう言ってゼルレッチは愉快に「ハッハッハッ!」と笑いその場から姿を消した。

後日、ミッドチルダや各次元世界では各地で謎の爆発事故が起きたと大々的に放送さ

れたという…。

第二十話

『外伝1　なのはのシホちゃん』

『観察記録』

Side　高町なのは

…あのとても悲しい事件。

突然の出会いから始まる迷いや悲しみ…それと同じくらい嬉しい事や驚いた事。

たくさんあつて触れ合う時間なんてそんなになかったのにも関わらずすごい長い時間たつたようにも感じる。

フエイトちゃんも最後はお母さんの死という悲しみを味わったけど、それでもそれを乗り越えて前に進もうとしている。

そして友達にもなってくれた私の大事な親友。

たまに送られてくるビデオメールは私の楽しみにもなっていた。

それとは別にもう一人、シホ・E・シユバインオーグ…シホちゃん。

事件が終わってやっと家に帰ってこられた私にシホちゃんは『勇気をかして…』と言ってきたので私もその想いに応えてあげたくて、どんな方法がいいのかわからなかったのてただ手を握ってあげた。

だけどそれでシホちゃんは安心した顔になりお母さん達の事をまだぎこちないながらも家族の呼び方をした。

お母さんの事を『桃子お母さん』。

お父さんの事を『士郎お父さん』。

お兄ちゃんの事を『恭也兄さん』。

お姉ちゃんの事を『美由希姉さん』。

シホちゃんは本当の意味で私達の家族になつてくれたとても最良の日だった。

それにその時のシホちゃんは今までの凜々しい態度とか大人顔負けの落ち着きもどこかにいっちゃったのか本当に顔を赤くして照れている姿はとても可愛いという表現がピツタリだった。

お姉ちゃんに「姉さんじゃなくてお姉ちゃんって呼んでー！」と言い寄られてうるたえている姿はとても普段は見られないものだった。

それだけお母さん達はシホちゃんが心を開いてくれた事が嬉しかったらしい。

…でも、それと同時にシホちゃんはこの世界に来る前の話は積極的に話そうとはしな

い。

アースラの皆さんには事情説明のために、しょうがないといった感じがあったけど、きつと話す事すら辛かったと思う。

私以上の孤独を知っている目…。

どうしてそんな眼ができるのか事情を説明している時に聞いていた話で痛いほどに理解させられた。

シホちゃんはずっと一人だったんだ。

それは、シホちゃんの師匠さん達にあたる人達もいただろうけど、きつとシホちゃんは本当の意味で家族というものを知らないと思う。

なぜかはわからないけど、シホちゃんはお母さんの事を生まれて初めて『お母さん』と呼んだらしい。

小さい頃から魔術という世界で争いの中を駆けていたというシホちゃん。

だから戦闘毎になると誰よりも強い…。それはきつとフェイトちゃんやアースラの人達も同じ感想を持っていると思う。

色々な戦いを見てきたけどどれも私の常識…アースラの皆さんもだけど、シホちゃんは一個人の實力を遥かに上回っていると思う。

でも、それと同時に内面はとても臆病なものだとも思ってしまう。

シホちゃんの呪文詠唱は色々あったけどその中で一番不安を煽ったものは、

「I am the bone of my sword……ねえ、ユーノ君？」

「……ん？ なに、なのは？」

私は真夜中でもう全員就寝している時間にユーノ君に話しかけた。

どうしても意味が知りたくてしかたがなかったから。

レイジングハートと会話をしていく内に英語もそれなりにできるようになってきたけど、それでもシホちゃんの呪文は異質なものを感じてしまう。

「シホちゃんの呪文……『I am the bone of my sword』ってどういう意味なのかな？」

「そうだね……僕も色々調べてみたんだけどね。分かる限りだと『私は我が剣の骨である』って訳になるね。きっと意味は違うと思うけどね。」

それにシホに聞いた話だとシホの世界の呪文は自己暗示に近いものも複数存在するって話。

そしてこれは僕の憶測だけきつとこの呪文には続きがあると思うんだ」

「続き……？」

「うん。確証はないけどね。だからなのはは気にしないで。」

それに今のシホは初めて会った時よりもなのはや家族の皆さんに頼るようになった

でしょ？

だから心配は要らないと思う。なのはそのはもう不安とかは感じてないでしょ？」

「…うん。シホちゃんはまだ私の大事な家族だから」

「だったら大丈夫だよ。それにきつとシホもその事でなのはが悩んでいるって知ったら心配しちゃうから」

「うん。ありがとう、ユーノ君！ 少し元氣出たよ」

「そっか。それじゃ今日も色々やっちゃったし…早く寝ななきゃね」

「うん。お休みなさい、ユーノ君」

それで私はすつきりした事でぐっすり眠りにつく事ができました。



翌日、休日という事もあり私は運悪くアリサちゃんとすずかちゃんも今日はお家にいないという事で、一日が少しお暇になってしまったのでシホちゃんの一日の行動を観察してみようと思いました。

その事をユーノ君に伝えると「シホのこと、昨日に信じたんじゃないの!？」と言われちゃった。

そうかもしれないけどシホちゃんから今日の修行は絶対禁止されてしまったので、塾と家の手伝いもないし普段シホちゃんはなにをしているのか気になってしまったから。

それを伝えるとユーノ君も興味を持ったらしく賛同してくれた。

……ちなみになぜ修行の禁止を言い渡されてしまったかと言うと先日、

『スターライトブレイカー誤爆事件』。

…と、いうものを海上で起こしてしまい、制御を怠って津波を起こしてしまつて魔力もエンプティしてしまつたから。

そしてその事をシホちゃんとファイアちゃんに伝えていなかった事もあり二人の怒りを買つてしまつたから。

だから私の鈍い運動神経を鍛えるといつて始めた中国拳法も今日は呼吸法と、後は魔導師養成ギプスだけ…。

シホちゃんの怖い笑顔を思い出すだけで体の震えが出ちゃう…！

とにかく朝早くから私とユーノ君はシホちゃんの観察をする事にしました。

だけどそう言つてもシホちゃんの朝はとても早い。

特に早い時には朝日も昇る前に起きてしまうので私もいつの間にか早起きになつてしまつたものだから。

「あ、なのは。おはよう」

私が着替えていつもの修行場所に着くと既にシホちゃんとファイアちゃんが組み手を開始していた。

ちなみに事前に二人には今日は見学だけとあってあります。

それで、二人はやっぱり私やユーノ君と違い本当に接近戦主義でとても普通なら眼で見えない組み手をしている。

基本ファイアちゃんがシホちゃんを攻めてそれをシホちゃんが受け止めると言うものだけ…常に瞬動という歩方を使っているので眼に追えません。

「ファイア…なぜかもう僕はついていけない気がするよ」

ユーノ君が微妙にへこんでいます。うん、その気持ちは私も十分分かるよ？

そうしてしばらく拳や足のぶつかる音が聞こえてきたけどそれが止んだと思うとシホちゃん達は向かいあつて最後に同時に拳をぶつけ合っていました。

…痛くないのかな？

「よし、今日の早朝訓練はこれで終了よ。お疲れ様、ファイア」

「ありがとうございませす。お姉様！」

とてもいい笑顔でファイアちゃんは拳を合わせてシホちゃんに挨拶をしていました。

もう本当に師弟みたいな図になってきたな…、と思つてきました。

だけどシホちゃんの修行はこれで最後じゃないのが怖いんだよね…。

いつも訓練（魔法訓練もだけど…）が終わった後、シホちゃんが調合したという漢方薬を筋肉が張っている関節の節々に塗るの。

これがとても沁みて少しばかりピリピリ感が抜けなくなっちゃうの。私もそれを塗られた時は最初悲鳴を上げてしまったから。

でも不思議な事にこれを塗った後は筋肉の張りも治まりとても爽快感があつて力もみなぎってくる…。

シホちゃんつて本当にドイツの人なのかな…？

でも世界を旅していたっていうから色々と知識も豊富なんだろうなと思っておくことにしておきました。

「それじゃ家に帰りましょう。いつも通りにね」

「うんー」

そうして私達は家に帰ることにしました。

でもシホちゃんは大体いつも修行から帰ってくるとお姉ちゃんと一緒にお風呂に入ります。

シホちゃん本人曰く、「別にいつも一緒に入るつもりはないんだけど、姉さんにはどうしても捕まってしまうの…」との事で、いまだに一人で朝のお風呂は入った回数は少ないらしい。

：やっぱりお姉ちゃんも超人の一人かもしれない。

でもシホちゃんも普通に『姉さん』という呼び方が定着してきたらいいので私としてはうれしいです。

朝食後、お父さんとお母さんは翠屋の営業に向かつて行って、必然的に家にはなにかしら用がない限りお兄ちゃん達もいます。

それで始まる事も必然的に普通の家ではあまり見られないけど劍の修行に入ってます。

これが始まると半日シホちゃんはお兄ちゃん達と打ち合うのが日課らしいけど、今日はフィアちゃんと出かけるようです。

それで私も着いていくことにしました。

「なのは、別に今日は修行以外自由にしても大丈夫よ？」

「いいの。今日は私も少し手があるからシホちゃんと一緒に町を散策しようと思っただの！」

「そう？ それじゃいきましよう。今日はいい天気だから海岸線でも歩いてみようか？」

私達は二つ返事でシホちゃんに着いて行くことに成功しました。



場所は変わって今はみんな港辺りを歩いています。

空はシホちゃんの言ったとおり快晴。

もう少しで夏という時期もやってくるのでちょうどいい気温帯。

海風も心地よくて、うみねこの鳴き声もより一層寂しさを緩和させてくれる。

文句の付け所もない絶好のロケーション。

でも、

そこにとっても意外な人物がいました。

「ク、クロノ君…!?!」

「あ…。クロノ、こんなところでなにをしているの?」

「…ああ、シホになのは達か。なに、見れば分かるだろう?」

「竿に竿掛け…海釣りね?」

「ああ、その通りだ」

「に、しても仮にもあなた執務官でしょう? こんなところでのんびりと釣りをしてい

てもいいの?」

シホちゃんはクロノ君に自然に話しかけているけど…私とユーノ君、ファイアちゃんは

そのあまりにも違うクロノ君の姿に混乱していました。

（あの堅物なクロノが…！ あんなのほほんとした顔で釣りをしているなんてありえないよ!?）

（で、でも兄さん。人間、誰だって違った一面を持っているものですよ!）

（でも…少しクロノ君のイメージが変わったかも…）

私達が小声で会話をしているところで、

「…そこ、その三人。勝手に話を進めてくれるな」

そこでクロノ君から抗議の声が聞こえてきた。

それで私は意を決してどうしてクロノ君がここにいるのか聞いてみた。

「ああ、それはまだミッドへの航路が安定していないんで当分はここの辺の空間でアースは待機しているのさ。」

それでクルーにフラストレーションをためさせない為にも交代制でアースから降りてきているのさ」

「でも、それじゃフェイトちゃん達は…」

「さすがにフェイトとアルフに関しては艦長…じゃなかった。母さんでもそうやすやすと許可はできないらしい」

「そうだよね…」

それで少し空気が重くなったけど、それはしかたがないと割り切らないとダメだとシホちゃんに言われているので我慢した。

「なんだ…しつかりと自制はできているみたいで安心したよ」

「当然！ そこら辺は心身ともに私が鍛えているから！」

「それはなによりだ。……昨日の事故がなければとても信用できる言葉だけれどね……」

グサツ！

「はうっ!？」

「…やっぱり観測された？」

「そうだな。怪我はなかったとはいえ危険な行為だったと言えるな」

「安心して。昨日のはなのはとユーノの独断だから。それで今日はバツとして修行は一切禁止させているから」

「いい心がけだ。誰かがストッパーになってくれればこちらとしては嬉しい限りだからな」

「むう…クロノ君、けっこう酷い事言うよね？」

「当然の結果だから仕方がないだろう…？」

そう返されると私もなにも言い返せません。

ううう…いつか見返してあげるんだから！

「…ところでクロノ。釣りの調子はどうなの？」

「まあまあつてところだな。これでも釣りに関しては結構自信があるのでね。

アースラにも持ち帰らないといけないから…」

「今晚のおかずかなにか…？」

「ああ。さすがにずっと次元空間を漂っていると新鮮なものが恋しくなまって食べたくなるじゃないか」

「その気持ちはわかるわ。やっぱり新鮮なものが一番美味しいところよね。…そうだな。今度、私も混ぜさせていい？」

「ああ、いいとも。さっきもいったけど釣りに関しては結構自信があつてね。振り返りにし、て…？」

…あれ？ クロノ君の顔が少し青くなった。

同時に何故か空気に亀裂が入ったような、そんな感じの気分…？

それでどうしたのかと思つたらシホちゃんから異常な魔力が溢れている!!

それになにか黒いモノが体から噴出しているようにも感じるよ!!

「…ねえ、クロノ？」

「な、なにかな？」

「今、聞き捨てならない台詞が聞こえてきたんだけど…私の気のせいかしら？ 確か『返り討ち』って言葉…」

「い、言いましたけど…それがなにか？」

クロノ君が敬語になっている…。

でも、私もそれには納得しちやうかも。

だって、シホちゃんの表情が笑顔なのに眼が、眼が本気で笑っていないんだもの!!?

「フ、フフフ…面白いわね？ いいわ、その言葉を嫌というほど後悔させてあげる」

『……………(ビクツ!?)』

全員（私含む）がシホちゃんの地の底から聞こえてきそうな低い声にただただ怯えることしかできなかった。

それからシホちゃんは「少し準備をしてくるわ」と言っただけでその場を後にして堤防の影に入ってしまった。

…そして数分。

なぜか少し魔力の気配がした。

そして出てきたシホちゃんの姿は…まさしく釣り人だった。

紅いポケット付きのコートに白い帽子。その手にはクーラーボックスにいかにも本場の人が使っていそうな丈夫な釣竿!?

全部魔術で転送してきたもの!?

小さい声で「……………今ならアーチャーの気持ち分かるわ」と呟いているけど、なに!?

…それからはクロノ君が惨めに思えるほどの惨劇の幕が上がった。

シホちゃんは一匹釣り上げるたびに「フィィイシュツ!!」と声高らかに叫んでいた。

「…ふふ、ここはいい海ね。とても新鮮な魚が釣れるわ。おっと、十五匹目フィィイシュツ!!」

「うるさいぞ! 魚が逃げるじゃないか!?!」

「ふつ…腕のなさを他人の所為にするなんて愚かねクロノ。近場の魚が逃げるなら違う場所に移動するかりール釣りに変えればいいじゃない。」

もつとも、釣り場選びのなんたるかも理解できていないものについてもしょうがないでしょうけどね。おっとごめんね、十六匹目フィィイシュツ!!」

「くうっ…!?!」

クロノ君の意外な一面に驚かされたけど、シホちゃんはそれを輪にかけて普段の凜々しい姿から遠ざかっている。

でもクロノ君もまんざらでもない様子なのでまだ当分続きそう…。

「フフフ…この分じやお昼を待たずに勝負がつくわね。軽い準備運動で始めたんだけど様子をみるまでもないわね。」

…ねえ、クロノ…別にこの港の魚を釣りつくしても構わないでしょう?」

「やれるものならやってみろ! 絶対に負けないからな!」

「よく言ったわ、クロノ! どちらが漁港最強か、あなたの心に深く刻み付けてあげるわ! と、十七匹目フイイツシュ!!」

そしてシホちゃんとクロノ君の熱い勝負は昼過ぎを持って圧倒的数の差でシホちゃんの勝利となった。

クロノ君はそれで少し燃え尽きていたのが印象的だった。

だけどそこでシホちゃんは「ハッ!」といった顔をして、

「わ、私はなにを…!?!」

と顔を赤らめて、

「ごめんなさい、クロノ! 別にあなたの釣りを邪魔するつもりはなかったのよ!?!」

ただ、なんていうか…その、突然周りが見えなくなっただっていうか…それで、その…ツッ!」

シホちゃんは正気に戻ったらしくとてもあたふたして赤くなった顔を片手で覆って何度もクロノ君に謝罪している。

その必死な姿に私は思わず「可愛い…」と呟いてしまいました。

それがとどめだったのかシホちゃんは「はうつ…!」と可愛い声を上げてその場へたり込んでしまった。

…だけど、それでなぜか私以外全員が顔を赤らめていたのがなぜか非常にムカツとしたのはなぜでしょうか？

それから結局、シホちゃんはもう吹っ切れたのかクロノ君に魚をクーラーボックスごと譲って「美味しく食べてね…」と爽やかな笑顔で渡していた。

とうのクロノ君はただただ頷くばかりだった。

そしてクロノ君は、

「そ、それじゃ僕はもう帰るとしよう。また…」

と言ってすぐにどこかに行っちゃった。



「はあ…恥ずかしいところを見せちゃったわね。二重の意味で…」

「そんなことないよ？ シホちゃんの意外な一面も垣間見れたし…」

《はいです!》

《そうだね》

「もう…だからそれが恥ずかしいって言うのよ」

それでソツポを向いて拗ねちゃったけど、でも内心とても楽しそうに見えるのは私だけかな？

「それより、もうお昼過ぎだからそろそろ食事にしましょう。もともと出かける予定だったから軽食だけどサンドイッチと母さん仕込みのシユークリームを持ってきてるの」

「わあ…！」

シホちゃんはいつも通りという顔をしているけど私から見たらとても普通のサンドイッチに見えないよ…。

それでファイアちゃんに手渡しで食べさせているシホちゃんはとても笑顔を浮かべているので絵になります。

…大人らしい態度をとっていてもやっぱりこういう所もあるからシホちゃんは魅力的に見えるんだね。

ふと、私は食事を食べ終わってみてから周りを見回してみると、

《あ、やっぱり来ました》

《え？ なにが、ファイア…？》

《動物さん達がいっぱいだね》

そう。いつの間にか公園の私達がいるベンチの周りには野性の鳥や、飼われている動物さん達で溢れかえっていました。

遠くを見ると動物の散歩をしているらしい飼い主の人達もこちらの様子を窺っているみたい。

なんだろう…？

だけど、ここぞでなにが始まるのか分かりました。

《さあ、お姉様。いつもの日課、お願いします！》

《わかったわ。…でも、最近注目が前より集まってきたから恥ずかしくなってきたわね…》

シホちゃんはそう言いながらも目を瞑ってフェイトちゃんとの別れの際に歌ったローレライというドイツの歌をまるで楽器で出しているようなメロディを口で奏でました。

とても静かな、でも惹かれる歌声でやっぱり聴き入ってしまいます。

それから数分してシホちゃんは歌いきると動物達がシホちゃんに群がり観客が拍手を送っていました。

どうやらシホちゃんはこの公園では一種のアイドルと化しているようです。

「それじゃもうお暇しましょう。ちよつと残り時間は弓の練習をしたいから」

「あ、山の方にいくんだね」

「ええ。最近あまりしていなかったから勘が鈍っていないか心配になっちゃってね…」

そして山の中に私達が入るとフィアちゃんに結界を頼んでいました。

だけど本当にシホちゃんはすごい…。

初めて聞いたのは事件後の事だけどシホちゃんは目を魔力で強化することで最高4キ口先まで目視出来ちゃうっていうの。

私はあまりの現実味の無さにちよつと疑っちゃったけどそれを間近で見せられた時には口が開きっぱなしになっちゃったから。

私がそんな事を思い出しているとすでにシホちゃんは構えをしました。

すると結界の中だと言うのにさらに場の空気が一変して周り全ての音が消えてしまい、知らずの内に私の手に汗が浮かび緊張感に駆られてしまう。

でも、別に嫌な物じゃなくて逆にとてもいい心地よさを感じる…。

それから射法八節という弓道の基本らしい動作をして矢を弓に番えて、引き絞られた弦から矢が放たれる。

それを計十回放ち、その全てが的の木に吸い込まれていった。でも確認をしに行くとも見る限り矢は一本しかない。

「シホちゃん、一本しか刺さっていないけど…他の矢は？」

「なのはさん、よく見てみて」

ファイアちゃんにそう言われてまじまじと見てみると残り九本の矢が最後の一本に押し潰されて木の幹に埋まっていました。

「すごい…！」

「まさに百発百中だね！」

私とユーノ君でシホちゃんに賛美の言葉を送るけど、どうにもシホちゃんは不満そうな様子。なにが不満なのかな？

その理由を聞いてみると、「当たる事が既に分かっていたから別に嬉しくない」との事。

どうにもシホちゃんは『結果が見えてから矢を放つ』という…私達からしたらとても技術を持っているみたい。

シホちゃんがいうに、

「私の矢は他の技能に比べて達人の域に近い代物らしい。もともと心を空にする事が得意だったから師父がいうには無の境地というものに至っているみたいなの」

と、別段気にせず言っていたけど、心を空にするって…。

よくわからないけど、それってとても普通じゃできることじゃないよね？

でも、シホちゃんはそれを体得しているわけで…。

やっぱり、すごいという言葉しか浮かんできませんでした。

「そうだ。今の話で思いついた事だけど、なのはの砲撃系や操作系の修行にもっと精密さを出させるように撃つ前にしっかりと目標を定めることにしましょう。」

それで少しでも狙いが外れていたら一回バツを与えるっていうのはどう?」

「え? なんで!?!」

「なにかしらペナルティがあつた方がより集中できるでしょう?」

安心しなさい。別に怖いことはしないから……別になね」

ゾワッ!

最後に付け足すように言った一言がとても私の心に恐怖を与えました。

これじゃこれからは一つの失敗も命取りかもしれません! 気合を入れてやらないと……!



日が傾いてきた頃に私達は翠屋に向かっています。

その途中、おもむろにシホちゃんは携帯を取り出してメールを打っていました。

「シホちゃん、誰とメールをしていたの？ アリサちゃんかすずかちゃん？」

「いいえ、ちよつとした私の友達…あまり会えないからメール友達って奴ね」

「そうなんだ。ね、なんていう名前なの…？」

「はやて。八神はやってっというの」

私達とは別に友達が出来ていたんだ…。

いつか紹介してくれたら嬉しいな。

それから色々とお話をしながら翠屋につくとそこには本日二度目の意外な人達がい
ました。

「あら。なのはさんにシホさん」

「あ、やつほー、四人とも元気そうだね」

「クロノ君がいたからもしかしたらと思っただらやっぱりリンデイさん達もいたんです
ね」

リンデイさんとエイミイさんが翠屋のケースを持って出てきたところで私達と出く
わしたみたいです。

エイミイさんが四人と言っているけど今は二人と二匹なんですけど大丈夫かな？

「フエイトにお土産ですか？」

「ええ。ずっとアースラの中で居座っていたら退屈でしょう？」

出してあげたいけどまだ結果が出ていないからせめて料理とかで楽しんでもらおう
と思ひまして」

「フェイトちゃんは元気ですか？」

「うん。最近はもう元気いっぱいによくクロノ君とトレーニングをして鍛えているよ」

「そうなんですか…よかったです」

安心してるところでシホちゃんが、

「あ、そうそう。リンデイさん、今日の晩御飯ですけど魚が一杯だから是非味わって食べてください」

「え？ クロノ君、そんなに釣れてた!? いつもは十匹にも満たないのに…」

「あ、あはは…少しありまして」

「お姉様と勝負をしていたんですよ。ま、あっけなく敗れていましたけどね」

「それで、つい釣りの邪魔をしちゃったお詫びに三十匹くらいかな？」

それをクロノにほとんど分けてあげたんです」

「はあ…それじゃ今日はとても豪華なものになるねえ…」

「それじゃエイミイさん。少し…」

「ん？ なになに…?」

それでシホちゃんとエイミイさんは内緒話をして少しして二人とも笑顔を浮かべて

いた。

でもそれは決していい笑顔じゃなかったと思いました。

後、シホちゃんは手帳を取り出して、

「こんなメニューがいいんじゃないでしょうか？」

と、リンデイさんに簡易だけど料理と調理の内容を書いたメモを渡していた。

後日、アースラから携帯に「厨房係をやってみない？」というお誘いが来たらしくシホちゃんはとても苦笑いを浮かべていたけど…。

「ありがとうね、シホさん。それじゃまたなにかあったら連絡します」

「ばいばいー！」

リンデイさん達も帰って行って少し翠屋の手伝いをして家に帰りいつも通り全員で食事をとって一日が終わりました。

シホちゃんがお風呂に入っていた後、お姉ちゃんが乱入していったのは、もうご愁傷様としか言えませんでしたけど。



「…それで今日一日、シホを観察してみたのははどうだった？」

ユーノ君がそう問いただしてきたので私は笑顔を浮かべて、

「うん。また色々なシホちゃんの一面を知れたとても楽しい一日だったよ！」

「それはよかったね」

「うん！」

これは私、高町なのはがシホちゃんを一日観察したとても楽しい一幕でした。マル。

第二十一話

『外伝2』

夜の一族とシホ、真実を語る時（前編）』

あと少しで夏休みと言う絶好の炎天下日和。

そんな中でシホ達のクラスは校庭でドッジボールをしていた。

さて、ここでこのクラスには少し込み入った事情がある。

それは、シホ・E・シユバインオーグと月村すずかを一緒に班にしてはいけないという暗黙の了解。

：以前、一度シホとすずかが一緒になってドッジボールが行われた時、それはもう悲劇が起きたからである。

どちらかにボールが回った途端、それは相手側のチームにとって恐怖の始まりであり、狙われたら100%確実にどちらかに当てられてしまうからだ。

そして試合が終わればそこは死屍累々…。

アリスの的確な指示もあつたのだろうけど、それでも二人の息が合ったまるでパートナーばりの連携ですぐに総崩れしてしまう。

それから先生の手腕でシホとすずかは一緒の班になることはなくなつた。

しかし、それでホツとしたもつかの間、二組の班に分かたれた二人のチエイサー（追跡者）はそれぞれ皆に指示を与えながらも的確に標的をそれぞれ潰していく。

：当然なのはシホの特訓で多少運動神経のキレは解消されてきてはいるが、それでも早々に退場したのは言うまでも無い。

それで結局コートの中で双方に数人残っている中、最後には息のあつたパートナーとまで言われた二人の一騎打ちに持ち越されるのである。

その一部音声としては、

「はっ！」

「やあっ！」

「そっ！」

「甘いわ！」

と、言つた某少林で拳法な人達が出演する映画のようなやり取りが交わされている。

風きり音や空を飛ぶと言つた普通のドッジボールではまずありえないようなやり取りに内野、外野組みともに驚愕の表情をしている。

それで結局勝負はというと、人数が多く残っていたすずかの班の勝利と終わった。

「はあー…負けちゃったわね。やっぱりアリスの指示もあると戦い方面ではそちらが上に

なっっちゃうね」

「そんなことないよー…シホちゃんだつて一人で色々指示を飛ばしていたからすごかつたよ?」

「にやはは…。でもやっぱり二人はすごいよね」

「…つていうか、あんた達二人とも本当に人間なの?」

そのアリサの物言いにシホは苦笑いを浮かべていた。

(…まあ、確かに実質もう私の体は成長する人形だから人より一段上の存在になっているのでしようけど…)

やっぱりすずかもすごいわよね。身体強化は使っていないとはいえ私に着いて来るんだから…)

そう、シホは思っていた。

だけどアリサが発した『本当に人間?』という発言に反応したのはシホだけではなくすずかも少し目を見開いて一瞬だけど表情が暗くなった。

それをシホはすぐに察して、

「…すずか。気分が悪いの?」

「え…?。そ、そんな事無いよ?」

すずかがすぐに元氣一杯の顔をしたけどシホには無理をしている風には見えな

かった。

それで強引に、

「先生。月村さん、少し気分が悪いみたいなのでちよつと保健室に連れて行きます」

「あ！ シホちゃん、私は本当に……」

「嘘つかないの。少し顔が白くなっているわよ？」

「……………」

それですずかは反論が出来なくなったので、されるがままにシホに保健室に連れていかれた。

途中なのはとアリサが一緒に行こうとしていたけど、シホはこれは普通の状況じゃないと判断して二人を先に教室に帰らした。



Side シホ・E・シュバインオーグ

私はやっぱり無理をしていたらしいはずかを保健室に運んだ。

だけどちようど運悪く……いや、ちようどいいかな？ 保健室の先生の姿はなかった。

「すずか…どうしたの？ さっきまで平気だったのに…」

「本当になんでもないんだよ？ ただちよつとだけ——…」

そこですずかの言葉は途絶えた。

やっぱりなにか訳ありみたいね。

だけど無理に詮索しても碌な事態にならないので今は、

「そう…。それじゃ私は何も聞かない。誰だつて聞かれたくない事だつてあるものね」

「ごめんなさい…」

それですずかはシユン…としてしまったので元氣付けようと、

「ううん。いいの、私も色々と訳ありだから。それじゃ少し落ち着いたら教室に戻ろう」

「うん」

元氣が出たのかすずかは笑顔を浮かべてくれた。

顔色も先程よりよくなっているようだし、もう心配も無いだろうと思つて少し休んでから二人で保健室を出た。



そして帰りの事、私はというとすずかと一緒に月村邸に向かっていた。

理由は多岐あるけどファリンさんと色々料理談義もしたいところだから。それと恭也兄さんも先に忍さんと向かっているらしい。

なのはに關しては今日は魔法関連はユーノ、武術関連はフィアに任せてあるので修行は大丈夫だろう。

フィアにも私の代わりにストッパー役を任せてあるから問題ない。

「ごめんね、シホちゃん。ファリンがいつもお世話になっちゃって…」

「気にしないで。私も料理関連の話ができる人は少ないから結構楽しませてもらっているし」

私とすがが他愛の無い会話をしている中、

少し人気の無い場所を歩いていたら…ふと、私達の周りに複数の気配がした。

すずかは気づいていないみたいだけど、どうにも嫌な視線が付き纏ってしかたがない。

「…とりあえず、魔術回路だけでも開いておこう。…すずか」

「え…？ どうしたの、急に私の前に…」

「出て…」という言葉はすずかもどうやら気づいたらしく、その先は紡がれなかった。

それを察したらしく四方から黒いサングラスをかけたいかにも怪しい男達が影から出てきた。

動きはどうやら素人ではないらしく熟練した歩きをしている。

それで私は片手でわずかを守るようにした。

「…なんですか、あなた達は？」

「…君には用はない。用があるのは隣の女の子の方だ」

「しかし、隊長。その娘もいかにもといった風貌の娘みたいですが…」

「ふむ…そうだな。捕らえておく事に越したことは無いからな」

すると他の待機している男達もじりじりと私達に近寄ってくる。

サングラス越しでも分かるが、その目は性欲に駆られた奴も確認される。

(…下衆な集団か。大方月村に対して私達という人質を捕らえようとしている。そんなところね)

「し、シホちゃん…逃げて！」

「大丈夫よ、わずか。私がわずかを守るから…」

「…へー、強気なお嬢さんな事だ。だがこの人数で内心震えているんじゃないかな？」

「それはそちらの方ではないかしら…？」

すずかにばれちやうかもしれないけど緊急事態なので私は全員を見回すように威圧をした。

途端、奴等は顔を少し青くしだし、

「!? このガキ、ただモンじゃねーぞ！ 夜の一族の力を使われる前に片をつけるぞ！」
「!!?」

「…夜の一族？（さすがの家に関係している言葉かしら？ それにさすがの震えも尋常じゃない…早く帰らせないと！）」

そう決断し、私はさすがを両手で抱えた。

お姫様抱っこだが今は我慢してもらおう。

それにさすがは困惑している。周りの男達もそうだ。

「とりあえずここから一端お暇させてもらいますね！」

そういう残してさすがを抱えたまま電柱の上までジャンプした。

男達は全員して『なっ!?』という声を上げたが今は構う必要はない。

そのまま私は電柱を足場に月村邸まで跳んでいった。

「シホちゃん!? これって…!」

「今は話しかけないで！ 舌をかむから！」

「う、うん！」

そう言いながらも後ろから凄いスピードで何台もの車が迫ってきている。

くっ…お構いなしというわけね。

「さすが、携帯を出して月村邸まで連絡して！ 会話は私がするから！」

「うん！」

連絡をし、程なくしてノエルさんが電話に出てくれた。

『すずかお嬢「ノエルさん！」シホお嬢様!? どうしたのですか! すずかお嬢様は!?!』
「大丈夫です。今、私が抱えていますから。それよりすぐに門を開く準備をしてください! よく分かりませんが変な奴等から追われています!」

『わかりました!』

「それと恭也兄さんはもうそちらにいますか!?!」

『はい。もう忍お嬢様と到着しております!』

「それじゃすぐに戦闘の準備をお願いしてもらってよろしいですか? 実力は分かりませんが厄介な奴等だと思えます」

『畏まりました!』

それで携帯は切れた。

「…よし、これで迎撃準備はオツケイね」

「……………」

すずかがなにかを言いたげな表情だけど今は一刻も早く月村邸に到着しないと…!

それから追っ手は来たものなのかノエルさんが月村邸の扉を開いてくれていたらしく私は転がり込むように敷地に入り込んだ。

そしてすぐに扉が閉まり私が一度体験したレベル5の防衛装置が作動した。

「わずか！ シホちゃん！」

「あつ！ お姉ちゃん！」

すずかは忍さんの声が聞こえた方に振り向きすぐに抱きついた。

その隣で兄さんが小太刀を装備しながら、

「シホちゃん、大丈夫だったか？」

「はい、なんとか…。でもこうも堂々と追ってくるなんて奴等はもう正気じゃないと思います。だから少し牽制してきます」

そう言っつて私は扉の上にジャンプして登り左手に洋弓と矢を投影し、追ってきただろ
う車のタイヤ部分をすべて射抜いた。

それで車達はたちまち往生してお互いに接触しあい急停止した。

そこからすぐさま先程のサングラスの奴等が這い出てきた。

その手には普通物騒極まりない拳銃やマシンガンなどを装備している。

…どうやら月村邸の周りにはもう一般人の人払いは完了済みのもようである。

「やっってくれるじゃない…！ でも…」

そつちがそのつもりなら覚悟しなさい。

その心算で一番奥に止まっている車を動力部分ごと射抜いた。そしてその車は爆発、

炎上…そのまま近くの車も巻き込んだ連続爆発を引き起こした。

さすがに奴等も移動手段が消失した為に焦っているが、しかし各自それぞれ手馴れた動きをして即時撤退していった…が、一匹くらい捕まえておかないとね。

なので、マグダラの聖骸布で一番偉そうな奴をフィツシュして月村邸まで強制連行させた。

「恭也兄さん。一応撃退しました。…それと、たぶんあの中では一番発言力を持つてそうな奴を捕まえたので連れてきました」

「ナイスだ、シホちゃん。…それにしてもずいぶん大きな爆発の音がしたが…なにをしたんだ？」

「いえ、別に大した事じゃないんですけど一台の車を爆発させてそれが他の車にも飛び火したからです」

「そうか。でも改めて無事でよかった」

「本当にね…すずかの事守ってくれてありがとう、シホちゃん」

「はい！ それで…そろそろ尋問タイムといきましょうか？」

「そうね…」

「そうだな…」

すずかは一応という事もあり別の部屋でファリンさんと一緒にいらっている。

それから私、忍さん、恭也兄さん、ノエルさんの四人で捕まえた男を尋問したが一向に口を開こうとしない。

話すことなどなにもないの一点張り…。

それで仕方なく私は男の前に出て、

「な、なんだ…本当になんなんだ？ お前も人外の一味なのか？」

「何のことか知らないけど…正直に白状させてもらうわよ。私の目を『見なさい』…」
「？…、…ツツ！」

男は私の目を見た途端、まるで気絶するようにガクリツ！と肩を落とした。

そして次第にブツブツと呟き始めたので。

「あなた達の目的は…？」

「…はい。月村の次女を誘拐…その後にある組織に引き渡す予定でした…」

「その組織と言うのは…？」

「…組織名は聞いておりません。俺は下っ端なので知っているのは上の連中くらいかと…」

「そう…それで他になにか情報は…？ あるだけいいなさい」

それから色々男から搾り取った。

『夜の一族』という謎の種族を研究。及び月村邸にたいして脅迫。

アジトの位置。メンバーの数。武装。

…他にも主にすずかには聞かせたくない内容ばかりだった。

あらかた聞き終えた私は「もういいわ。だからもう眠りなさい…」という言葉に男は無言で頷きそのまま横に倒れて眠りについた。

「シホちゃんの魔術つてすごいわね。こういった催眠もできたのね」

「はい…まあ以前はモノを作り出す以外はてんでダメでしたけど…」

「以前…?」

「…いえ、なんでもありません。それより少々気になる単語があつたんですけど…聞いても構いませんか?」

そこで全員表情を少し暗くしたけど忍さんが代表をして話してくれた。

話によると月村の家系は『夜の一族』という突然変異の吸血種の一つだと言う。

「はあ…吸血種、ですか」

「あまり驚かないのね…?」

「まあ、私の世界には忍さんが教えてくれたモノより性質が悪いのがわんさかいますから。」

こつちでは血を吸っても吸血鬼化しないそうですけど…、私の世界では一度吸われればそれでもう死は確実。

そしてそのまま死徒という種族の吸血鬼の操り人形にされて仲間を増やしていきま
すから」

「う…確かにそれはいただけないな」

「そうですね。この世界とは根本的に違いがあるようです」

「それに私の師匠もその死徒でしたから別にもう驚きはないです」

『は…?』

途端、三人とも固まってしまった。

いけないなあ…少し話が飛びすぎたみたい。

それで私の世界の吸血鬼について色々説明を入れた。

だけど内容が長いのでここは割合する。

「真祖に死徒…それに最古参の死徒を総称して死徒二十七祖。

それでシホちゃんの師匠の人は元人間だったけど真祖の王…『朱い月のブリュンス
タッド』というものと対決して勝ったものの、その時に噛まれてしまって死徒化してし
まったと…」

「はい。それで魔術協会では生きた伝説とまで言われていますね」

「確かに頷けるわ。こっちの吸血鬼は人間の突然変異からなったもの。

だけど、そちらは星が作り出してそのまま増殖していったもの…本当にシビアな世界

で聞いているだけで嫌になつてくるわ」

「まったくですね。真実は小説より奇なり…と申しますが真実以上のものですから性質は確かに悪すぎます」

三人はそれぞれ意見を言い合つては私の世界の死徒に嫌悪感を顕わにしていた。

いい人も大師父を含めて何人かいたんだけどな…。

「あはは…それより本題もずれて来たのでそろそろ話し合いましよう」

「そうね。ごめんなさい、両方の世界の相違を検証している時ではなかつたわね」

そして四人でどうやってアジトを襲撃するか話し合い、私と恭也兄さんが泊まる事になつたのを家に報告した。

なのは達が別で連絡してきたけど大した内容じゃないからと、一応話は通しておいた。

あれで三人とも首を突つ込みたがりだからしようがないけど…今回はさすがに内容が裏過ぎるのでつき合わせるのは忍びない。

第二十二話
「外伝3 夜の一族とシホ、真実を語る時（後編）」

『外伝3 夜の一族とシホ、真実を語る時（後編）』

「さすがの誘拐未遂事件があつたその深夜の事、シホと恭也はアジトに忍び込んでいた。」

「忍とノエルはいざという時の為に家で待機してもらっている。」

「…相手の根城を攻める作戦だからあまり派手に行動しないようにしないとね」

「…はい。でも、驚きました。ノエルさんとファリンさんが魂の宿った自動人形だったなんて…」

「ああ、そのことか」

シホは前々から二人には人工的なものを感じていたけど義体かなにかだとあまり深く詮索していなかったが、夜の一族の件でこの事を忍から聞かされた。

それで忍とさすがは二人に任せても大丈夫だろうとこうして二人して忍び込んでるわけだ。

しかしシホは別段ショックは受けなかったが二人には普通の人間の暮らしもしてほしいと思った。

だが、二人はそれで満足しているのだからあまり深入りな思考をしないようにしている。

：別の思考ではシホはある決断をしていたが、今は事件を解決して安心させてあげようという気持ちがある。既に戦闘思考に入っている。

「少し訳ありだけど、シホちゃんだから話せた事なんだ。だからあまり忍達の事で気に病まないでくれると俺としては嬉しいかな」

「わかっています。私も色々訳ありですから…それに、他人事でもないですし」

「?」 どういう意味かな?」

「いえ、この件はまた後で話します。それよりそろそろ予定通り二手に分かれて全員を捕まえましょう」

「…そうだな。ちよつと気になるけど後で話してくれるなら、今は戦闘に集中できる!」
そう言い、恭也は小太刀を構えていた。

ちなみに恭也の装備は、黒いジャケットを見に纏い、腰の左側には二本小太刀を差した所謂『二刀差し』。袖には鋼糸。二の腕にはさらに飛針が仕込んである御神流のフル装備である。

それに対してシホはというと、P・T事件で身に纏った格好を闇夜に動くというわけで赤ではなく恭也と同じく黒い装飾になっている。

腰のホルダーには干将・莫耶が差してあり、マントの裏側には黒鍵（柄だけ）がいくつも仕込んである。

…徐々にカリーで代行者な人の格好に近づいてきたなあ…とシホは少し落ち込むがすぐに気を引き締めた。

そしてシホと恭也は耳に忍製通信機を仕込んで一気に闇を駆けていった。

………

………

………

恭也は気配を消しながら一人ずつ小太刀の柄部分で『徹』でもって衝撃を与えて周りを警戒している男達をすべて沈めてからシホがマグダラの聖骸布で縛り上げて無力化していく。

「しかし…そのマグダラの聖骸布といったかな。男性に対して絶対的拘束力を秘めている布はこういう場では実に有効だな。」

そして同じ男として恐怖を感じてしまう。まあ、こんな奴等には同情などする余地もないけどね」

「そうですね。さて、これで警備のものは片付けましたから後は……」

「幹部格とそのリーダーをすべて捕まえればミツシヨンクリアと言うことになるな」

「はい。それじゃ少し待ってください。この建物を少し調べます」

シホは壁についている端末に手をつけて「解析開始トレース・オン」と呟いた。

そしてこの建物の構造をすべて解析していき奴等の集まっている場所を特定する。

「……恭也兄さん。場所がわかりました。裏道も発見したのでそこから部屋に侵入しましょう」

「わかった。でも、この建物をすべて解析するとは……シホちゃんはすごいな」

「これが数少ない私の取り柄ですから。さ、いきましよう」

シホは気にしていない素振りで先に進んでいった。

だが恭也は内心で「そんな事無いぞ。シホちゃんは十分頼りになるから」と思っていた。

同時に「シホちゃんは どうして自身の力を誇れる事が出来ないのだろう」と……少し疑問に思ってしまった。

だが一度の油断が命取りな場で考えこんでいたら逆に荷物になってしまおうと思った

のでシホの隣にすぐに追いついた。

そして二人はその場所に着くと息を潜めて中の会話を聞いていた。

『なに…失敗したのか？』

『へい…ただの小学生と思つてやしたが月村とは別に“人外のガキ”がいたらしく逆にしてやられてしまったようで…それに部下も一人捕まつてしまいやした』

『馬鹿な…月村以外に“化け物”がこの町にいたというのか…。これでは迂闊に手を出すことはできないな』

『ボス、さすがに今回はこちらの分が悪いですぜ。うちの部隊を撤退にまで追い込んだほどの“化け物”相手に月村にも同時に攻められたらさすがに…』

中ではおそらくシホの事を口々に畏怖が込められた中傷の言葉が何度も交わされていた。

そして、家族の事を罵られて黙つて聞いていられるほど恭也の忍耐は厚くなかった。

つい手を出そうとし、動こうとしたがシホの片手に止められた。

（シホちゃん、行かせてくれ！ さすがに我慢できない！）

（私は大丈夫ですから…だからもう少し我慢してください…）

（しかし…！）

恭也ははちきれん気持ちで一杯だった。

もしシホの静止がなければ中の奴等全員をなぶりになぶっていただろう。だがそこでボスらしきものの口から、

『ならば月村に關係が深い高町とバニングスという家のものを人質に取ればさすがに手がだせんだらう?』

『そうですね…。部下達に報告しておきますぜ。今はこのアジトに全員いますから早々に手が打てることでしよう』

シホは「これで裏取りは取れた。もう全員お縄になっているのに馬鹿な人達…」と冷笑した。

恭也はその一言にまたシホの裏の顔を見てしまつて渋い顔をして、

(シホちゃん…君は、どれだけの闇を抱えているんだ?)

と、哀れみの視線をシホに向けた。

そして同時に奴等はまだ部下の数と言うアドバンテージを失っているという事を鑑みてシホの方をもう一度向くと気持ちには同じらしく小さく頷いた。

(私が先に行きます。囷をしますので後腐れなくお願いします。恭也兄さん)

(了解。だけど無茶はダメだぞ?)

(はい。わかつています)

そしてシホは堂々と部屋のあるテーブルの上に躍り出た。

組織の奴等は全員動揺したようだがすぐに拳銃を取り出して、

「てめえ、なにもんだ!？」

「あなた達が散々と化け物と言っていた張本人ですが、なにか?」

シホはまだ子供だと言うのに艶やかに、そして妖艶にクスクスと笑い、

「さて……つと。それじゃ手早くお縄についてもらいますね?」

夫婦剣を構えた。

組織の奴等は一斉にシホに向けて拳銃を発砲したがそれはシホにはまるで見えてくるかのように……——— 実際軌道は見えているわけだけど……—…避けるか剣で切り裂く行動をした。

そしてシホに意識がいつている隙をついて恭也は飛針を全員の手には放ち拳銃を落とさせた後、小太刀を抜き全員に『徹』を喰らわせ、シホも干将・莫耶の柄で浸透勁を行い数分もかからずに全員を地べたに落とした。

だがボスと思われる人物の意識だけは刈り取らなかつた。

「て、めえら……!」

「あら、まだ喋れたのね。それじゃまだ余裕がある内に言わせてもらおうわ。私の友人や家族に手を出そうとするものは誰であろうと容赦はしないわ……!」

「俺もその意見には同感だな。その腐った根性、伝手の刑務所の中でせいぜい治すこと

だな。治ればだが、な…」

そうしてその後シホは再度そいつを催眠状態にしてこいつらを動かしていた奴等の情報をすべて聞き出した。

後に、士郎や美由希も含めた総動員でそこに乗り込むことになるのだが、それは今語られるべき話ではない。



そして月村邸に帰還した二人はそれぞれの部屋に向かった。

当然恭也は忍のいる部屋へ。

そしてシホはすずかの部屋へと…。

すずかの部屋の前まで来るとファリンが、

「すずかお嬢様の事、お願いますね。シホちゃん」

「はい。大丈夫です。任せてください」

それでファリンは笑顔になってその場を離れていった。

シホはそんなファリンを見送った後、すずかの部屋の扉をノックした。

「ただど返事はなかったの。シホは一言「すずか、入るわよ？」と断って部屋の中に入った。」

中はカーテンがすべてかけられ、電気もついていない。

そんな中、すずかはベッドの上で膝を抱えていた。

「すずか…」

「シホちゃん…ダメだよ。聞いたでしょ？ 私は普通の人と違って血を吸う化け物なん

だよ。」

「そんな悲しいことを言わないで…すずかは化け物なんかではないわ」

「みんな、そういうよね…。でも私、いつなのはちゃんやアリサちゃんにばれちゃうかもしれないと思うと怖くて堪らないの。」

それに今もシホちゃんにばれちゃってとつても居た堪れない気持ちなの…！」

「……………」

シホにはすずかの気持ちはおそろくわからないだろう。

「ただどこかで「はい、そうですか」と開き直れるほどシホは薄情ではない。」

だから、

「すずか、聞いて。すずかは化け物の定義を勘違いしている」

「…え？」

「化け物って言うのは、すずか達のように血を吸う吸血鬼だとか、外見が異常だとか、なにかしら特異能力を持っている人間の事を指すんじゃないの。」

「本当の化け物って言うのは…人を襲うためだけに生を楽しむ生き物のことを指すのよ。」

だからすずかは決して化け物なんかじゃない…。

すずかはとても優しい子…、そして今も自分の力に苦悩している。

それに、もしそんな事を言う奴がいたら私が代わりに痛めつけてあげるわ」

「…シホちゃんは、本当に怖くないの？」

「ええ…私はすずかを信じているから。決して人を襲うことなんてしないって…」

シホは嘘偽りない顔ですずかに言い切った。

それですずか自身の心は少しずつ晴れ渡っていった。

「…ありがとう、シホちゃん。私、今まで臆病だった。」

この力が知られたらって、何度も落ち込むこともあった。

だけど、シホちゃんのおかげでこの能力と前向きに向き合っていける勇気が持てた

「よ」

「そう…よかった。もういつもどおりのすずかに戻ったね」

「うん！」

それからすずかは今度はシホの事についても聞いてきた。

それでシホも色々と今まで内緒にしていることを語った。（こちらの魔法関係はまだ内緒ということまで…）

しばらくして二人は居間で心配していた一同の前にやってきた。

その折、すずかは、

「お姉ちゃん、心配かけてごめんなさい。でも、もう私は大丈夫だよ」

「そう…よかったわね、すずか。シホちゃんもありがとね」

「いえ…私はただすずかの肩を押してあげただけです。後はすずか次第です」

シホは少し顔を赤らめながらもそう答えた。

「そういうえば、すずか。シホちゃんと契約したの？」

「うん！」

「私も夜の一族の事は他人には公言しませんし、すずかの盟友になることは誓いました。それといつでも苦しくなったら私の血を吸ってもいいからね？」

「その時は、お願いします…」

顔を赤らめすずかはそういった。

そして、

「…それと、恭也兄さん。アジトに忍び込んだ時に話した会話、覚えていますか？」

「ああ。なにかまだ内緒にしている事があるんだろう?」

「はい。それで明日になのは以外全員をまたここに集めてもらってもいいですか?」

「…なのは話してあげないのか?」

「はい。内容が裏過ぎるので、まだ話す時じゃないっていうところです」

「確かに…」

恭也はその意見に同意した。

まだ子供（シホも見た目子供だが…）には聞かせられない内容なのだろうと察したから。

「えっと、私はいいのかな…?」

そこですすが恐る恐る聞いてきたのでシホは「いいわよ」と答えた。

「月村の皆さんにもできれば聞いて欲しいです。」

もう…みんなの目を欺きたくないから…」

「それはどういう…」

「全員集まったら、その時に…」

「…わかった」

恭也は、いやその場にいた全員はそれで妥協した。



…翌日、高町家（なのは、ユーノ、フィアを抜いた）のメンバーと月村の主要人物が一つの居間に集まっていた。

「それでシホちゃん。話したいって事はなにか聞いていいかい？」

それまで誰も無言で空気が張り詰めていた部屋の中で、士郎が代表してシホに口を開いた。

それにシホは「はい…」と少しいつもより弱めの返事を返した。

全員は「きつと覚悟を持った話をしてくる」と思つてシホが話し出すのを待った。

「まず、最初に皆さんに謝罪したい事があります」

シホは椅子の上で両手をギュツと握つてそう言った。

「私の名前ですが今はシホ・E・シユバインオーグですが…そうですね。以前…いや、この体になる前の本当の名前は『衛宮士郎』といます」

「本当の名前？ それにこの体になる前？ それってどういう事？」

「それに名前の響きからして男性だったの…？」

忍と美由希がそう聞いてきた。

それにシホはただ無言で頷き、

「私の今から話す事を最後まで聞いてください。

そして、その後にこれからについて考えてください。私の処断について……」

シホの言う「処断」という言葉に全員は少し納得していない顔をしたが、無言で頷いてくれた。

それでシホも覚悟を決めてポツリポツリと過去を話し出した。

——最初の悲劇であり、衛宮士郎の原初の記憶：体は生き残ったが、名前以外……記憶と心が死んでしまった大火災。

——衛宮切嗣に引き取られ、魔術というものを知り、必死に教えてもらおうとした事。

——引き取られてから五年して衛宮切嗣に死に際に託された『正義の味方』という理想。それによって初めてがらんどろだつた自身に目指すものが見つかった事。

——高校生になり、そこで魔術が使える事で巻き込まれた聖杯戦争という七人の魔術師と英霊という最上級の使い魔であるサーヴァント七騎で何でも叶うという聖杯を巡る殺し合い。

——当然、魔術が使えるからといって聖杯戦争自体知らなかった為、アーチャーとランサーのサーヴァントの戦いを偶然目撃してしまい、ランサーに気づかれて心臓を貫

かれ死にかけた事。

——それをアーチャーのマスターによって助けられた事。

——再度ランサーに殺されかけた時、突如出現して私を守ってくれた剣の騎士『セイバー』との出会い。

——バーサーカーのサーヴァントを引き連れた義理の姉『イリヤスフィール・フォーン・アインツベルン』との悲しい出会いと闘争。

——アーチャーのマスター『遠坂凜』との共同戦線、そして弟子になったこと。

——その後ライダーとの死闘を辛くも勝利したが、キャスターによりセイバーを奪われてアーチャーすらも裏切ってしまった事。

——イリヤと共闘しようとアインツベルン城に向かったが、そこで現れた第八のサーヴァント『英雄王ギルガメッシュ』。

——かろうじてイリヤは救えたもののバーサーカーはやられてしまった事実。

——己の未来の可能性存在だという事が発覚したアーチャー…『英霊エミヤ』との死闘。

——死闘の際、剣を打ち合う度に自身に流れ込んでくるエミヤの知識と経験、そして守護者としての永遠の殺戮の記録…そして、それを乗り越え真に見つけられた本当の道。

——黒の聖杯に染まった後輩『間桐桜』の変貌した姿。そしてやられたサーヴァント達が黒く染まり襲い掛かってきた。

——對抗するためにイリヤと凜の協力の元、宝石剣を投影したが自身にしか使えないものを作り上げてしまい、一時的に「」に繋がってしまつて第二魔法を会得してしまつた事。

——そこに大師父が現れ、代わりに自身の宝石剣を使えと貸し与えてくれた事。

——ギルガメッシュとの戦いの折、イリヤによる魔力供給によつて発動した私の本当の魔術。

——桜とその姉である遠坂による戦いで桜を助け出すことが出来たこと。

——言峰綺礼との聖杯をかけた最後の戦い。

——最後にセイバーによる宝具の開放で大聖杯の完全破壊。

——そして幾人もの死人が出たものの、それでも最小限に止められて永遠に消えていった聖杯戦争。そしてサーヴァント達。

——これですべて終わつたと思つた半年後に起きた約束の四日間の奇跡。

——それによつて受け継がれた本来ありえない者達との平和な生活の記憶と、ある一人のすべての呪いを背負わされた男の決意の記憶。

——卒業後、フリーランスの魔術師として世界に出て人助けを開始した。

——だが平穏な生活とは無縁らしく死徒によって殺されていく仲間たち。なりふり構わず宝具を解放し死徒を滅ぼした。

——自身を鍛えながらも魔術を使い人助けををすしていったが、それによって封印指定の烙印を押され様々な機関に追われるようになった。

——身を隠しながらもそれでも人助けをやめなかったある時、イリヤが倒れたという話を受け冬木に戻った。

——そこでイリヤの体の真実と残された僅かな時間を知り、その死ぬ最後まで一緒にいてあげたこと。

——そして、イリヤの死後また世界に出て行ったある時に分岐点に追われることになった。それは世界による誘いの言葉。

——ただイリヤとの最後の約束と、アーチャーの記憶を思い出し苦渋の決断をしてそれを断った。それによって助けられなかった大勢の命。

——それで理想に反してしまい思いは崩れてしまった。けどもう後戻りはできずとうとう世界からも追われるようになってしまった。

——そして連戦による連戦で体はボロボロになり死を待つ体になったその時、大師父、リン、世界屈指の封印指定の人形師『蒼崎橙子』が私を助けてくれた。

そしてシホは懐から一枚の手紙を中心の机の上に置いた。

それはイリヤが士郎に送った手紙だった。

「これは……？」

「……読んでください。なぜ、今こんな姿になっているのかが分かります」

そして一同はその手紙に目を通した。

しばらくして読みきった一同の目には涙が流れ出していた。

すずかはどうフアリンの体に顔を埋めて泣いていた。

「私はここでイリヤの想いを知り、もう手遅れだということも知り後悔しました。

だからもう間違わないようにイリヤの想いも魂に刻んで事実上一回死んでからイリヤの体を素体にした人形に乗り移りました。

そして大師父から『シホ・E・シユバインオーグ』という新たな名をもらい、『全てを救う正義の味方』ではなく新しく芽生えた『大切な人達を守る正義の味方』という理想を目指す事になりました。

ちなみにセイバーの鞘ですがまたコーンウォールで発掘したって言っていました。

だけど、そこで異常が発生して私は口調、仕草、思考が変化して現在の私になり、

そして世界を越えてこの世界に来た時に世界からの修正で『魂は一生変化しない』という定義を無視して男性から女性の魂に塗り替えられてしまったんです。

そしてこの体は9歳が基準で作られた為に完全に私は精神と意識が9歳そのものになつてしまいました。

…これが私のすべてです。今まで隠していてごめんなさい…」

シホは立ち上がると深々と頭を下げて、どんな処断も受ける覚悟で精一杯の気持ちを込めて謝罪した。



S i d e 高町士郎

「シホちゃん…」

私はただ名前を呟くことしか出来ないでいた。

いつまでも頭を下げている小さな女の子は、元がなんであれ、もう私達の娘だ。

だけど、それ以上に彼女…もとい彼が経験してきた内容があまりに悲惨なものだという事実にただただ体が動いてくれない。

しかし、やはり私の妻は強かった。

未だ頭を下げているシホちゃんを強く抱きしめたのだから。

「シホちゃん…謝らなくていいのよ。こんな辛い話…本当なら話したくなかったんでしよう？」

「いえ、これはいつかは語らないといけないと思っていましたから…それに、これを話した以上私はどんな処断も受ける覚悟です。」

私は自分のエゴでたくさんの血を浴びすぎた…こんな私がやつぱり幸せを目指すなんて……。

それに今はこんな姿ですがもとは男性だったなんて、気持悪いですよね…？」
そういつてシホちゃんは自虐的に顔を歪めた。

その表情からはとても深い後悔や悲しみがこもったような、そんな表情だ。

「そんなことないよ！」

しかし、そこですずかちゃんが涙ながらに大声を上げた。

「シホちゃん！　もとがどうであつても私はシホちゃんの事を気持ち悪いなんて思わないよ！」

…それに過去はもう取り戻せないけど、もう一度やり直すチャンスをお姉さんにもらつたんでしょ!？」

だつたら精一杯お姉さんの分も生きなきや…！」

「あ…」

それはシホちゃんと初めて会話した時の蒸し返しの様な光景だった。

シホちゃんはそのでまた目を大きく開いてその瞳からいくつも雫を垂らした。

「いいのかな…？ 前も、いいましたけど…幸せを目指して、いいのかな？」

「いいのよ…それにもうシホちゃんは私達の家族じゃない…？ 遠慮はすることはないって前に言わなかった？」

「桃子…お母さん…」

「もうシホちゃんは吐き出すものは吐き出した…それでも私は、私達はシホちゃんを決して見放さない…それが『家族』というものよ。血の繋がりがなろうと関係ないわ」
桃子がそう言った瞬間、シホちゃんはまた普段見せないくらいの泣き顔になり桃子の胸で泣き出した…。

他のみんなもシホちゃんを暖かい目で見守っている。私もだが。

やはりシホちゃんとはとても優しい子だという事。

ただ…周りがシホちゃんの「運命」を変えてしまった。

だからまたシホちゃんが危ない道を歩んでいかないようにならずと見守っている。

そう…私達の仲で誓いが立てられた。



同時刻、高町家でリンカーコアでシホと繋がっているフィアットは精神リンクでシホの真実を偶然ではあるが聞いてしまった。

そしてその晩、一人涙し、

(私も、お姉様の幸せの為に頑張ろう…)

フィアットも士郎達と同じ考えに至っていた。

…だが翌日、シホに「聞いていたでしょう？」と問いただされたのは言うまでも無いことだが。

第二十三話

『外伝4 各々の日常・すずかの異

変』

夏休みに入りシホは本格的になのはとフィアットの修行を自身の鍛錬と水平展開しながらも進めていっていた。

そんなある夏の一日、シホ達は月村邸でみんなで集まり夏休みの宿題をしていたのだった。

だが、そんなものごとき大学入学並の知識を持つシホにかかればすぐに終わってしまうのだ。

それなので早々に宿題をコンプリートしてしまったシホは三人に宿題で分からない点などを教えていることが多いのだが…。

(…ねえ、アリサちゃん)

(なに、なのは…?)

(うん…最近、ね。シホちゃんとすずかちゃんが異常に仲がいいんだよね)

（奇遇ね。私もそう思っていたわ）

そう、今現在シホはさすがに付きっ切りで勉強を教えている。

それも今まで以上に二人して笑顔を浮かべながら。

それはというと、例の事件で三人の内、さすがにだけシホの真実が明かされている事が主な原因とも言つていい。

すずかはそれ以来、シホはもう完全に女性だと分かっているのに元男性だったという真実が後を押していて意識してしまっているのである。

所謂、あっちの世界に目覚めてしまったのだ。

肝心のシホはやはり気づいていないが、すずかのシホに向ける視線にはたまに熱がこもっている様に二人には見えてしまったそうだ。

それで休憩中に忍にその件について聞いてみたところ、

「うーん……二人にはまだ早い世界かなー？」

と、微妙にはぐらかされてしまった。

それですすますうねりを上げてしまっている二人に忍はクスクスと笑いながら助け舟を出した。

「シホちゃんって学校ではどんな評価を受けているの？」

「評価、か……そうですね。シホはあの性格で表裏ともはつきりしているからとても人気

が高いですよ」

「にやはは。うん、シホちゃんって学校ではかなり人気あるよね〜?」

忍は思った。

すずかもだけど、あなた達二人も相当の人気を持っているわよ? と突っ込みたい衝動に駆られたが必死に耐えた。

ちなみになぜ忍はシホ達の学校事情を知っているかと言うと、そこは…ほら、権力とかで。

とにかく、

「シホちゃんってかなり自分の事に関しては鈍いところがあるわよね?」

「はい」

なのはとアリサが即答する辺り、シホは相当鈍感だという認識は深いらしい。

「男女問わず人気よね? それにシホちゃん、普段はキリツとしているけどいざって時に見せる笑顔や照れた顔とかは誰もが魅了されてしまう。どう!?!」

「うんうん!」

「そうですね。シホって相当鈍いから、でもそれでも嫉妬とかの被害に会わないのが不思議なくらい人望が高いです」

「そうよ。そして今現在もっともその影響を受けているのが…もう分かるわよね?」

「「すずか（ちゃん）…？」」

二人は思わずすずかの方に向いた。

ここではシホとすずかの二人が紅茶を飲みながら笑顔で会話をしている。

シホは別段いつもと変わらないが、すずかはまさに恋する乙女のような目をしている。

その光景にさすがの二人も啞然としてしまっていた。

なぜかシホの肩に乗っているフィアットがライバル意識をすずかに向けているように見えたのは、おそらく見間違いではないだろうとなのはとユーノは思った。

《…そういうえば、フィアちゃんもシホちゃんの事が好きなんだよね？》

《うん…なんていうか、一生ついていきます的な事を前に言っていたような…》

それを思い出したのかユーノはがっくりと肩を落としているように見えたのもなのはの気のせいではないだろう。

それで二人はそれを確認するためにすずかだけ呼んでひそひそと会話をしだした。

「…ねえ、すずか。率直に聞くけどもしかしてただシホの事好きになっちゃったとかじゃないわよね？」

「えー？ うーん、そうだね。うん、好きなのかも…」

「え？ え？ でも、シホちゃんは私達と同じ女の子だよ!？」

「そうなんだけど…シホちゃんが男性のま…コホンッ！ 男性だったら本気で好きになつてたかも？」

「そ、それじゃ別に本気で好きってわけじゃないのね？」

「うん。……………今のところは。」

すずかは付け足すようにそう言つて、少し頬を赤らめて眩しい笑顔を浮かべた。

そしてなのはとアリサの二人は思った。

『すずか（ちゃん）がなにかに目覚めちゃった!？』

…と。

それで二人はその後絶句をしていたのは言うまでも無い。ついでにユーノも。

と、そこにくだんの人物であるシホがやってきた。

「みんなどうしたの？ って、え？ なに??」

そこで今度二人は有無を言わさずシホを連れ去つていった。

いきなりだったのでシホも対処できなかったのか困惑しているが悪意は感じられないのでされるがままに連行された。

そしてすずかとそれとなく似たような事を聞いてみたが、やはりそこはシホ…、

「え？ 別にすずかは可愛いと思うけど、やっぱり…色々だね。それに…」

そこでシホは言葉を切った。

なのはとアリサはどうしたのかと思つたが、シホはすぐに、

「それに私は誰の想いにも応える事は、きつとできないから…」

もとが男だという事実、こんな中途半端な存在が誰を愛せようか？

そう言つてシホは少し淋しそうに微笑した。

二人：もといユーノとファイアットを入れて四人はシホの底知れない気持ちを理解することはできなかつた事が少し悔しかつた。

だが、これ以上踏み込んでもいい試しがないと判断して、すずかを再度呼んで違う話をアリサが持ち出した。

「あ、そうだ！ 話は変わるけど今度ウチで別荘にいくんだけどみんなを招待するわ！」
「いいの？」

「あつたりまえじゃない！ 日にちは後日決まり次第教えるから準備しときなさい！」

「わー、楽しみだね。ね？ シホちゃん」

「そうね、なのは」

そこでいつもの笑顔を見せたシホに一同は安堵した。

そんなこんなでまた一つ夏休みの思い出が加算されるのだった。

その後に女物の水着を着る事に気づいたシホはすずかに必死に相談したという。

当日、シホは悶死してしまうのではないかというくらい真っ赤になつたという。



「そういえばお姉様…?」

「ん? なに、フィア?」

それから数日、

シホは自室でなのはとフィアットの訓練内容を計画している時にフィアットに話しかけられた。

「どうして今までお姉様はもとは男性だという事を隠していたのですか?」

「ぶっ……!」

フィアットの直球な質問に思わずシホは吹いてしまった。

それで気を取り直して、

「まあ…やましい気持ちとか、そんなものは特にないんだけど…ただ、普通信じがたい話だしあの時話した内容で後ろめたさとかもあつたからかな。

それに最初の頃はこの世界にも私の世界のような機関があるかもしれないとかで色々と慎重にならざるを得なかったのが正直なところ。

でも今じゃまだ时空管理局は完全に信用したわけじゃないけど、少なくともアースラ

の人達は信用に値する人達だから頃合いを見て真実を話そうとは思っているわ」

「そうだったんですかー…すみませんでした。お姉様もたくさん嫌な思いをしてきたから疑心暗鬼になっちゃうのも当然ですよね？」

あ、それとは別に。それじゃもとは男性なのになんてお姉様はそこまで魅力的な女性になつたんですか？」

「魅力的…か、どうかは一時置いておいてなんていうのかな？」

最初はこの体に引つ張られているのと、世界を越えた時に女性の魂に塗り替えられたのが原因かと思つただけ…。

この世界にきて少ししてから男性時の記憶はすっかりと残つてはいるんだけど、

まるで抜け落ちていくような、もしくは塗り替えられていくような奇妙な感覚で男性の時の諸々の仕草、思考、感覚がなくなつていつているのよ。

ま、戦闘に支障を来さなければ別に構わないけど、変わりに女性の諸々が知識としてどんどん浮上してきて最初の頃は気持ち悪くてしかたがなかつたけど今じゃもうそれが普通になつている感じね」

「それじゃもうお姉様は完全に女性という訳ですね」

「そうなるわね…少し寂しいものがあるけど。まあこの話はいずれなのは達にも話すことになるから慎重に言葉を選んでいかなきゃいけないわ」

「…そうですね。もし交渉が失敗して管理局の上層部に真実が知られちゃったら、お姉様の世界ではないですけど何をされるかわかりませんから…」

「そうなのよねえ。今はそこがネックだから立ち回りも考えていかないと…」

シホは一度溜息をついて、スツとまたフィアットの方に向き直り、

「…それで、後まだなにか聞きたい事があるの？」

「え?…どうしてわかつたんですか?」

「いや、なにか聞きたそうな顔をしていたから…」

「あはは…そうですね。はい、私はこれでも一応スクライアの血が流れていますから後学の為にお姉様の魔術について聞きたくて…。」

管理局には転送系と言っていますけど実際は投影という特殊な魔術の一つなんですよね?」

「ええ。フィアには隠す必要はなくなったから教えてあげるわ。」

本来の投影魔術は自己のイメージからそれに沿ったオリジナルの鏡像を魔力によって複製する魔術。

でも、自己のイメージなんてそうそう完璧なものはないから穴だらけで綻びが生じてイメージを崩してしまうとすぐに霧散して消えてしまうの。

すでにないものをその場で作り出すなんて、それこそ矛盾の極みだから…。

だから使いどころが悪くて使い手もあまりいなくて、いても魔術の儀式で一時的にその場に再現するくらい程度の低い魔術なのよ」

「…あれ？　ですけどお姉様の投影魔術は消すか壊されない限り存在し続けていますよね？」

「そう、そこが普通の投影と私の異常な投影の違いなのよ。」

前に一度真実を隠す嘘で私には「武器庫」があるっていったわよね。

でも、あながちそれも嘘ではないのよ。

私の投影は一度見た——解析の事ね——事があるものなら私の心象世界に登録されてそれを何度でも作り出せるものなのよ」

「お姉様の過去の話に出てきた「固有結界」という魔法に最も近いという禁呪の事です
ね」

「そう。今はイリヤの魔術回路が私の中には別に存在しているから使える魔術のレパトリーは増えたけど、本来私が見える魔術は固有結界という魔術一つだけ…。

強化に投影、解析、変化といった魔術はこれから零れ落ちた副産物に過ぎないのよ。

そしてその固有結界「無限の剣製」があるからこそ私は一から十までをすべてイメージできて投影したものは世界の修正に逆らっていつまでも存在し続けるもの…。」

「そ、それじゃ今まで使用した武器もすべてお姉様が魔力だけで作り上げた贗作という

訳ですか!？」

「そういう事。真偽はともかくとして私の投影は限りなく本物に近い贋作を作り出せる能力と言うこと。」

ただ、私の属性は“剣”だから武器以外のものを投影すると魔力もより喰うし、なにより外見だけで中身が空だからあまり自慢できる能力でもないわね」

それを聞いてファイアットは反論の声を上げた。

シホは自慢できるものではないと言ったが、話を聞く限りシホの魔術は異常を既に通り越している。

それなら確かに封印指定というものを受けてもしかたがないが、ファイアット達の世界にしてみても生唾モノの能力である。

だからファイアットはシホに、

「そんなに自身の能力を卑下しないでください。」

その力も含めてお姉様なのですから…。だからもつと自信を持って文句は言われ
ないです!

それにいう奴は私が懲らしめます!」

「ありがとう、ファイア…」

それでシホは嬉しくなっただけで笑顔を直球ストライクでファイアットに浴びせて

しまった為、フィアットは思わず気絶しそうになった。

(うう…お姉様の笑顔はやつぱり堪えます。本当に以前は男性だったのですか？ 眞実を知っても未だに信じられません…)

フィアットは顔を赤くしながらも「？」という表情をしたシホを見つめていた。

しかしいつまでもそうしているわけにもいかず、フィアットは次の質問をする事にした。

実は以前からフィアットは用が無い時は図書館に人間形態になり一人で向かいネットや神話、歴史の本などを使い今までシホが使用した武器を独自に調べていたのである。

シホ本人に聞くのもそれはそれでアリなのだけど、やはりそこはスクライア一族。自身で調べないと反則かな？ という思いでいくつか発見できなかったが大体調べ上げた。

「それでお姉様。今までお姉様が使用した武器ですけどあれってやつぱり全部実際に見たものなんですか？ その、聖杯戦争という戦いで…」

「まあ殆どはそうかな。それともう過去の話だからそう畏まらなくていいわよ？」

「あ、はい」

それからまたフィアットの質問タイムは続行されていた。

第二十四話

『外伝5

各々の日常・シホの魔術考

察』

：フィアットがシホに質問タイムをしている一方、未だ次元空間を航行中であるアースラでも同じ話題が会議室で開かれていた。

会議室にいるのはリンディは当然としてクロノ、エイミィ。そして当時の事に関して大きく関わっているフェイトにアルフ。

そして急遽として呼び出されたユーノ。

：ユーノに関しては最も身近な人物という事だが一番身近なのはフィアットである。

だがフィアットはいつも通り修行とあってシホと出かけていた為、今回はユーノだけ召集される形になった。

「まずは集まってくれてありがとうございます。それと急な呼び出しですみません」

まずはリンディの感謝と謝罪の言葉で会議は始まった。

それにユーノ達は気にしてないという意思表示をした。

「ですがファイアットさんも来て頂ければよかったですけど、残念ね…」

リンディがそういうと少しユーノが申し訳なきような表情をして代わりに謝罪していた。

しかし別にそれが悪いと言うわけではないのでリンディもすかさず謝っていた。

「それでリンディさん。私達もここに呼んだのにはなにか理由があるんですか…?」

フェイトが疑問顔でリンディにそう尋ねた。

アルフも同意見らしく「うんうん」と頷いていた。

それにはクロノが代わりに返答した。

「話と言うのは他でもない。シホの使う武具に関してのことなんだ」

「シホの…?」

「ええ。シホさんの使う様々な武具はどれも強力な魔力を秘めていますか、かといってロストログアという訳でもありません。

別の世界から来たのですから当然ですが…それにしても情報が少なすぎて未だに報告書がまとまっていないのよ」

そう。シホの使う魔術という神秘の力は管理局にとって凄まじく未知なものであり、色々な上層部から一目置かれているものだった。

そしてシホ自身も魔導師ランクがすでにSランクとくれば人手不足の管理局として

は是非とも引き入れたい人物に上がっている。

当然、なのはとフィアットもその対象には提示報告をした後に名前が上がっている。なのはは当然として、フィアットはシホの繋がりで魔力貯蔵量とランクが底上げされたと言う特殊な事例なので放っておけないものだろう。

閑話休題

「それでシホさんと協力、そして対立した三人にそれぞれ意見をもらいたいところね」

「うーん…でもフィアットはどうかは分からないですけど僕はシホについてはそんなに皆さんと情報量は変わらないと思いますよ？」

「ま、そうだろうとは思っていたよ。」

それでこちらで独自にシホが今まで使用した武器に関して調べさせてもらった。エイミー、頼む」

「はいはい」

エイミーが「ポチつとな！」と軽い調子で色々操作をしてあるボタンを押した途端、頭上の画面に今までシホが使用した武器達が姿を見せた。

「わあ…エイミー、よくこんなに詳細な映像を搾り出せたね…」

フエイトは純粋に驚いている。それでエイミイも自慢げに笑顔を浮かべて「ありがたい」と言った後、

「まずシホちゃんが使用した武器を名前が分かっているものだけ上げていくと、

まず最初にいつもシホちゃんが主に使用している双剣『干将・莫耶』。

空を飛行する際に出した『タラリア』という靴。

フィアちゃんの言伝で教えてもらった刀身が1メートル以上はある長刀『物干し竿』。

フエイトちゃんの集束魔法を少しの輝だけで済まして、次元震の衝撃をも防いだ七枚

の盾『ロー・アイアス』。

後、フエイトちゃんとアルフを拘束した『天の鎖』。

暴走したジュエルシールドを跡形も無く破壊した捻じれた剣を矢として放った『カラ

ド・ボルク』。

使いづらそうに見えるけど投擲技術に関しては強みがあって、大樹の木をへし折った

り仮想魔導兵器達をなんなくと貫通させた『黒鍵』。

そして次のこれはおそらく魔力を一時的に無効化する赤い槍『ゲイ・ジャルグ』。

稲妻をも切り裂く『雷切』。

そしてこれと同系統だと思うけど稲妻の軌道を変えた『子狐丸』。

ゲイ・ジャルグと同じ効果を持つていると思うけど多分こっちの方が性能は上…。

一時的じゃなくて触れた魔法はすべて無効化されてしまつて、まだ憶測の域だけどころく契約解除もできてしまう名前どおり反則的な歪な短剣『ルールブレイカー』。

そして最後に上げる二品がシホちゃんのいくつかの切り札だと思ふもの。

もうみんなには説明は不要だと思ふけど並行世界から魔力を組み上げる事が出来る『宝石剣』。

そして締めはジュエルシード七つと次元震の源である次元の渦すらも飲み込んで消滅させた光り輝く黄金の剣『エクスカリバー』。

それ以外はいくつもの剣や槍を一斉に放つソードバレルフルオープンという術。

そしておそらくどの武器でも爆発可能なブロークンファンタズムといったワード…。

他にも身体強化や本当にオカルトみたいな魔術の数々…。

…ほんとー、シホちゃんつてこれだけ多種多様でどれも強力な武装を持っていて、さらにまだ他にも『武器庫』というモノがあるんだからまだまだ未知の武器が出てくる可能性は高いね。

例えば………我ノリ・メ・タンザレに触れぬ。」

「なっ!？」

そう言つてマグダラの聖骸布をクロノに放ち、クロノは抵抗する間もなく縛り上げられエイミイの手により赤い芋虫になつていた。

「このマグダラの聖骸布も男性に対して絶対的拘束の神秘が込められているからね」
「そんな事はどうでもいいからさっさとこれを外せ！ これはされると一切力も出せないし魔法も発動できないんだから！」

それでエイミイは「ごめんごめん♪」と謝りながらも内心「癖になりそうだ…」と思った。

そんなエイミイの思いは気づかれること無くクロノは席に一度咳払いをしながら着席して、

「まあ、そういうわけでシホはとても僕達魔導師にとっては到底理解できない魔術という技術を使っている。

そしてそれ抜きでも体術に限らず幅広く武術は嗜んでいるからきつと僕達が束になつてかかってもシホが本気になったらそれこそ勝機は限りなく少ないだろうな」

「そうだね。それに最近フィアもシホの指導の下でさらに動きに磨きがかかつて毎日目で追えないほどの動作訓練をしているから二人がタッグを組んだらまず現状は敵無しかな…?」

普段のクロノならこんな弱気な発言もしないだろう。

だが、実際勝てる見込みがないのはあきらかな事実であり、クロノの表情は「苦虫を噛む」を通り越してむしろ清々しい感じだった。

そして普段、クロノには『フェレットもどき』とか言われてからかわれているユーノ（ファイアットはちゃんと名前で呼んであげている）もその意見には同意のようで珍しく意見が合った事により二人して神妙な顔をしていた。

そんな二人をして、フェイトも、

「やっぱりシホは色々すごいね。なのはは今もシホ達の修行メニューを頑張っているらしいし…私も一緒に鍛錬したいなあ…」

「フェイトもかい？ 実はあたしもシホやファイアットの使う縮地？…って奴かい？ あれを習得したいと思ってるんだよ」

「ああ、シホちゃんのだ純粋な武術の奥義って奴ね。すごいよね…あれが広がれば魔導師の人手不足も解消できるんじゃないかな？」

「…そうね。エイミィ、後で少し相談があるから…」

リンディの言葉になにか察したエイミィは「了解」と言った。

「…と、そろそろ本題に戻ろつか。それでだけシホちゃんの使う武器達ね…いくつかは不明だけど大体が地球の神話や昔話で出てくるものばかりなんだよ」



Side フェイト・テスタロッサ

「地球の神話や昔話…?」

「うん。さつき紹介した中でまだ判明していないものは『黒鍵』に『ルールブレイカー』と『天の鎖』だね。」

『宝石剣』は魔法に至るためのものだから神話とは関係ないものだけ…。

他のものは有名どころなものばかりだったよ」

それからシホが今までに使った武器についてエイミイが調べ上げた資料を読み上げだした。

まず『干将・莫耶』。

…なんだけど、中国と言う国で昔に作られた夫婦剣というだけで誰かが使ったと言う記録はないそうで用途は不明らしいからまだ保留らしい。

だけど次からはすごいものばかりだった。

次に紹介された『物干し竿』。

これは日本の昔の剣豪、宮本武蔵という人物のライバルだと称された佐々木小次郎という人物の愛刀。

仮説だけど『燕返し』という剣術を使ったらしくその太刀筋は振るった瞬間、同時に

三度の斬撃が発生したってという話。

話だけ聞くと三撃をまったく同時に放つなんてまるで想像できないけど、ファイアットの話だとシホはそれを使用したという話…。

シホってやつぱりすごいな…。

そして『雷切』と『子狐丸』。これも同じく日本の伝承で実は『子狐丸』は現在も宝刀として保管されているらしい。

でもどちらもやつぱり昔のものだから錆び付いてボロボロらしい。

そう考えるとシホはもとの世界ではどうやって手に入れたのかな…？

それからエイミィは後残りのものを解説し始めたけど、ここからは一気にグレートがアツプした。

だって、まだ地球に神々や妖精が存在していたっていうにわかに信じられない時代のものばかりだから。

まず『タラリア』。

ギリシャ神話の神、ヘルメスの愛用の翼の生えた魔法のサンダルでこれを履けば空を自由自在に飛び回る事が可能で、一説でペルセウスという英雄にゴルゴン、あるいはメドウーサという邪神を退治する際に貸し与えたというものらしい。

そして『ロー・アイアス』。

これも同じくギリシャ神話のもので、名前の由来はアイアスという英雄から取られたものだと言測されるらしい。

諸説によるとトロイア戦争において誰にも防げないと言われた大英雄ヘクトールの投擲を防いだという、七重、皮張りの盾らしい。

そして『ゲイ・ジャルグ』。

これはギリシャ神話とは違うケルト神話で登場する『フィアナ騎士団』に所属していたデイルムツド・オディナという人物の四つの武器の一つ。

話の中で最も注目した内容がどんな『呪い』や『魔法』も一時的に遮断する能力を秘めていたというもの。

「それって…やっぱり」

「その通り！ フェイトちゃんも気づいたと思うけどシホちゃんの使うゲイ・ジャルグは伝承とまったく同じ効果を持っていたんだよ」

「プレシア女史の雷撃魔法をも払いのけたのですから信憑性はかなり高いでしょう」

「まあ、つまりこれは僕達に限らず全魔導師にとっては天敵と言ってもいいほどの槍だということだな。」

以前、シホは僕に『私には特に被害は及ばないものだから』と言っていたが言葉どおりだったとはね…」

クロノが深い溜息をつきながらそう締めくくった。

確かにそう考えるとシホ以上に天敵は存在しないね…。

そして『カラド・ボルク』。

これも同じくケルト神話で登場する英雄フェルグスの魔剣でその一振りです。三つの丘の頂を切り落としたっていうとんでもない伝説。

私はさすがにありえないという感想を抱いてエイミーに質問してみた。

「うん。それは私達も思っただけだね…ほら、やっぱり伝説っただけで真実とも限らないじゃない？」

「僕もその意見には賛成だ。そこで考古学者端くれのフェレットもどき「誰がフェレットもどきだ！」…冗談だ。ユーノはそのところどう思う？」

「むー…後で後悔しないよう覚えておくことだね」

「期待しないで待っているよ。それでどうなんだ？」

ユーノがすごい悔しがっている。クロノはやっぱりユーノの事が嫌いなのかな？

でも見ているとただの喧嘩をしているみたいでなにか微笑ましい光景かも。

でもフィアット辺りに言わないところ、やっぱり区別しているのかな？

ユーノみたいに言ったら支援型のユーノと違って好戦的なフィアットじゃ反撃が怖
いからなのかな？

後でこつそりと聞いてみよう。

「…まあ、シホが言う概念武装っていうものからして使う武器は元になる話が存在すればそれが本物か偽者かに限らず “概念” として定着されて語り継がれるからこそ神秘として効果を発揮するんじゃないのかな？ 僕の今のところの見解はこれくらいだよ」

「なるほど…確かに概念武装と神秘の話を出されれば納得だな」

「それじゃ最後になるけどこれは地球でもっとも有名と言ってもいい武器『エクスカリバー』」。

これはイギリスに伝わるアーサー王伝説でその名の通りアーサーという人物が使った武器で、武器自身有名だけどそれ以上にアーサー王自身の方も有名だよ。

なんせ騎士の中の騎士と呼ばれ騎士王とまで称えられた人物だから」

そ、そんなすごい人が使っていた剣なんだ。

だったら庭園で見せたあの威力も納得できてしまうかも…。

そう思うとシホからもらったこの首飾りがいつも以上に神秘的に感じる。

でも、ふと思つた。

「…ねえ、シホが使う武器ってすべて概念武装なんですよ？ 全部本物なのかな？」

「それはわからない。シホ自身に聞ければ世話は無いだろ？が、簡単に口を割ってくれるような相手じゃないだろ？」

「それに何度かアイアスの盾が紛失したのにも関わらず次に使うときにはまた完璧な形で使われていますし、なにより放ったものを爆発させるといった過激なことをしますから本物という線は薄いかもしれませんがね」

リンディ提督がそう言った。

確かにそう考えたとシホって爆発させる際も遠慮というものは一切無かった。

やっぱり謎だね。

「そうですね、艦長。でもみんなの話を聞いているといくつか発見できた事があるからやっぱり聞いてみるものだね。

これで報告書も結構まとまったと思うよ」

「あ。待って、エイミィ…その、『天の鎖』っていうのもなにか分からないかな？

以前に私とアルフ…思いつきり壊しちゃった事があるから…」

「うう…：そういうえばそうだったね。あの時は必死だったけど今考えると如何にもつていう名前だから罰当たりな事をしたかもしれないねえ…」

アルフも思い出したのか結構項垂れている。

シホにもし機会があつたら聞いてみよう。

どうかそんなに有名なものじゃありませんように…。

…まあ、その希望はその後に見事に見事に打ち砕かれるんだけど今はまだ先の話。

そうしてあらかた話が終わったのか私達は会議を終わらせてユーノはまたなのは達の所に転移で送ってもらった。

そして私はこの会議であらためてシホの実力のすごさを認識させられたのでいても立ってもいられなかったのでクロノに特訓を頼み込んだ。

そして特訓が終了したら部屋に戻ってエイミイにあの別れ際に録音してもらったシホのローレライを聴くんだ…。



Side シホ・E・シユバインオーグ

今日はファイアとの修行から帰ってくるとどうやらユーノは現在アースラに行っているらしい。

それらしい書置きが置いてあり、ファイアはそれを見て、

「もしかして私も実は呼ばれていたんですかね…?」

「さあ…どうかしら? まあ、別にもう過ぎてしまったことだし気にすることじゃない

でしょ。

それよりこれから桃子お母さんに頼まれたお買い物にいくんですけどファイアも一緒にいく？」

「あ…本音をいえば私もお供したいんですけど、ちよつとやりたいことがありまして…」
「そつか。それじゃちよつと行ってくるわね」

「はい、お姉様」

ファイアと別れた後、私はスーパーに買い物に向かった。

相変わらず品揃えがよくて、料理のしがいがありそうなものばかりだ。

それに最近では私もよく足を運ぶので他に買い物に来ている人とかとの会話も楽しめるので実に楽しい。

するとふと目先に私のメール友達の子の少女、はやてが店内にいるのを見かけた。

よく見ると棚の上にある食材を取ろうとしているようだけど取れない様子。

だから後ろからそれを取ってあげた。

「…あ、おおきに。つて、シホちゃん!？」

「久しぶりね、はやて」

「ほんまやな！ シホちゃんもここの常連なんか？」

「ええ。このスーパーはいつも新鮮なものばかりだから。それより一人でこんなところまで大丈夫…?」

「大丈夫や。私もいつもここに買い物にきてるんよ。それに私の家族も今は違うコーナーにいるから安心や」

「メールで言っていた例の海外からの親戚…?」

「そ、そうなんよ。あはは…」

なんだろう? 妙に声が乾いているようだけど。

と、そこにその家族らしき人物が「はやてちゃん」と言いながら駆け寄ってきた。

その人物は一見して日系の人ではなく、金髪のショートボブが似合っている見るからにほんわかかな印象を抱かせる綺麗な女性だった。

「あ、シャマル。どないしたん?」

「いえ、どこかに行ってしまったかと思っただけで心配になっちゃいました…あれ? ところでそちらの子は?」

「ああ…いつも私のメール友達の話をしているやろ? この子がそうなんや」

「あ、そうだったんですか。私の名前はシャマルです」

「シホ・E・シュバインオーグです」

お互い自己紹介をしてシャマルさんと握手をした。

だが、その時なぜか一瞬シャマルさんの雰囲気が一変した様な…。
ただどうやら私の気のせいだったみたいでシャマルさんからはそんな気配は一切
感じられない。

だいたいこんないい笑顔をしている人がまるで■■■■のような気配を出せるわけが
無い。

身構えなくて正解だったかな？

それではらくはやと久しぶりに会えた事なのでシャマルさんを交えて雑談し合
い、家の方角が逆だというので少し名残惜しいけど別れることにした。



S i d e シャマル

…危なかったわ。

シホちゃんと握手した時に感じた…感じてしまった彼女の膨大な魔力量。

彼女のリンカーコアは今まで出会ってきたどんな魔導師よりも強大だった。

まだはやてちゃんと同じ年だというのにあれでまだ成長過程にあるなんて、普通なら

ありえない…。

それで思わず闇の書の守護騎士プログラムであるが故に『蒐集を…』という声に私の手が勝手に疼いてしまった。

昔ならいざ知らず、今はもう無闇に蒐集行為をしたくない…。ましてそれがはやてちゃんの唯一の友達と言うなら尚更だ。

後で他のみんなにも相談しなければいけない…。

できれば酷いことはしたくないけど、もしもは最悪…。

…止みましょう。

今はこんな事を考える時ではないわ。

「……ル、……マル……」

今はただはやてちゃんと静かに…。

「シヤマル！」

「は、はい!？」

「どないしたんの？ 急に黙りこくってしもうて…」

「な、なんでもないですよ、はやてちゃん。そ、それより早く帰りましょうか。みんなも待ってますよ」

「そうやね。それとシヤマル、シホちゃんは私の大切な友達やからもしまた会うことが

あつたら仲良うしてな？」

「はい、わかっています」

いずれ蒐集対象にしてしまうかもしれないのに私ははやてちゃんに嘘を吐いてしま
う。

それがどうしても罪悪感となつて襲ってくる。

でも、はやてちゃんの病気を治す為には…。

そう、決意を固めながらも私ははやてちゃんと共に我が家に向かう。

帰ればみんなが、あの暖かい家族が迎えてくれる。

…それに私達守護騎士以外に一人とても心強い味方が、家族がいる。

だからきつと大丈夫…。

第二章 A, S編

第二十五話

『いつもの朝の風景』

Side ???

それは不思議な出会いだった。

まだ桜が咲いていて春が抜けきらない季節、私がかかりつけの担当医師の石田先生に家まで送ってもらい、その後に食事の支度をしようと思った矢先の事。

庭の方からなにやら大きな音がしたと思ってガスの火を止めて庭に出てみるとまるでなにかが落下してきたみたいなかいかいクレーターが出来ておった。

そしてよく見るとクレーターの中心には一羽の鳥：見た目からして鷹か鷲のような大型の鳥が傷だらけで横たわっていた。

それで私は混乱しながらもすぐに石田先生を再度呼び、その鳥を見てもらった。

だけど石田先生は獣医ではないのでてんやわんやしなながらもなんとか二人で包帯や

ら傷薬などで手当てをしてあげた。

とりあえず応急処置が終わり石田先生は後で獣医の人を呼んでくれるとの事です。そのまま帰っていった。

…それからしばらくして鳥さんは目を覚ました。

どうやらまだ状況が分かかっていないらしく辺りをキョロキョロとしているのが少し可愛いと思つた。

やけど、次の瞬間、

「…ふむ、状況は把握した」

「……………へ？」

「さて、では問おう。少女よ、君が私のマスターか…？」

…突然鳥さんが人の言葉を喋りだして私の事を「マスター」だと言つてきた。

…ますたー？ …マスタード？

あかん、そないなボケを頭の中で考えている状況や無い。

これは夢や。うん、そうに違いない。

「…という訳でお休み」

「…ここら、いきなり現実逃避とは頂けないな。まあ気持ちは分かるんでもないが…私としてそうなのだから」

「そうやよね……」

それで回らん頭をなんとか稼働させてその鳥さんに話しかけてみた。

「…それで、君はなんやの？ 突然人語を喋りだすやなんて…」

「なに…人語だと…？ それは当然の事なのではないか？」

「…もしかしてわかつとらんの？」

「なにがだ？」

それで私はしかたなく鏡がある方に向かせてみた。

鳥さんは鏡を見た瞬間、ピキッ！ という音が出そうな感じに固まってしもうた。

そしてしばらくプルプルと体を震わせていたけど、

「……………なるほど。再度状況は理解した。…地獄に堕ちろ、世界」

なんや物騒な物言いをして少し鳥さんはへこんでいる様に見えたのは気のせいやな

いやろうな。

それからお互い自己紹介をして少しおかしいけど今まで一人だった私『八神はやて』に家族ができた。



S i d e シホ・E・シユバインオーグ

：P・T事件から半年ちよつとばかり経過して、既に季節は十二月の始めで冬の季節。私は四時過ぎの早朝に朝のジョギングをしていた。

特に変わった事はないが、この世界に来たばかりと違う点が一つだけある。

それは自身の髪型にある。

前まではストレートに流していて気にも留めていなかったけど、今では少し動くのにも鬱陶しく感じてしまいどうしたものかと思案したところ…。

ピンと閃いた。確か女性の魔術師は髪にリボンか髪留めを使用することによって魔力を蓄えておく事が出来る、魔力切れの時の最後の切り札にもなる、と。

それで色々考察してここはやはり一級概念武装である聖骸布を使うことにしたのである。

しかし、これも赤だとさすがに見た目が濃すぎるだろうと思って変化の魔術で黒く変色させた。

以降、私は髪を束ねてポニーテールにして聖骸布のリボンに魔力を溜めていたりする。

閑話休題

でも、やっぱり元の体の時と比べると…非常に寒い！

やっぱりイリヤの極度の寒がりの影響しているらしく今にもこたつの中に入りたい衝動が出てきてしまうが、それを抑えてこうして走っているのである。

それでいつも通り私となのはがトレーニンングしている場所に向かうと近づくにつれ魔力反応が伝わってくる。

(…はあ、魔法訓練するのはいいけど結界位は展開すればいいのに…。私が言えた義理じゃないけど…。こういう時にユーノとファイアの存在はありがたいと思ってしまうのよね)

そう、今ユーノとファイアの二人はフェイトとアルフの裁判の為に時空管理局本局という場所に向かう為、少し前にこの海鳴の地から離れていった。

それでののはとユーノは少し名残惜しそうにしている、ファイアなんて「また会いましょう、お姉様——」って涙を浮かべていたっけ。

だから二人の代わりに唯一残されたなのは相棒のデバイス『レイジングハート』とともに一緒に体力、魔法ともに鍛えてあげている。

閑話休題

私は声をかけようと思ったけどなのはも最後のシュートコントロールをしようとしている。

だからまあ、周囲には他に誰もいないようだしいつも通りだから終わるまで見学してしようと思いいじつとなのはを見ていることにした。

「リリカル！ マジカル！」

なのはの掛け声とともに足元に桜色の円形の魔法陣が展開して掌に一つの魔力スフィアが現れる。

「ダイバインシューター…シュートツ！」

そして持つていた空き缶を空に投げた。それを出現させた魔力スフィアが後を追いつつ次々と空き缶を叩き空に打ち上げていく。

その魔力スフィアのスピードは回数毎に増していきなのはも少々苦悶の表情を showed。した。

（でも、すごいわね…一つだけの魔力球とはいえあー何度も操作するなんて。私じゃ到底できない芸当ね）

感心しながら見ていると回数もそろそろ百を越えそうとしているらしい。

するとなのはは操作はもう限界だと悟ったらしく九十九回をいった瞬間、魔力スフィアを急旋回させ、それにより落下してくる空き缶にめがけて一気に最後の一回を当てた。

横に叩きつけられた空き缶はそのまま遠くまで飛んでいくと先には…、

(なるほど。最後にはゴミ箱に入れようとしているのか…)

空き缶は真つ直ぐゴミ箱に飛んでいった。だけど惜しいところで角に当たってしまつて外に弾かれてしまった。

それでなのはは「はあ…」と溜息をついた。

私はちようどいい頃合いだと判断して、

「なのは!」

「ふえ!?!…え、シホちゃん! いつからいたの!?!」

「いつからつて…やっぱり気づいていなかったのね。レイジングハート、あなたはどうか?」

《はい。私は気づいていましたがマスターは集中していらしたので…》

「そつか。でも魔法の練習をするなら結界を張るか、周囲の気配とかにも敏感になったほうがいいわよ?」

もし見ていたのが私じゃなかったらちよつとどこの騒ぎじゃなくなつちやうから」

「はーい…」

《以後気をつけます》

「よろしい。それじゃまだ時間はありそうだし…」

私は独特の拳の構えをして、いつもの日課である中国拳法での組み手をしようと相談する。

「やる…?」

「にや!?! お、お手柔らかにお願いします…」

「素直でよろしい。それじゃレイジングハート、五分きつちり時間を計ってもらえる?」
《わかりました》

それからなのはとの組み手を数回繰り返した。

以前の運動神経のキレの無さも当初に比べれば抜群に改善され伸びている、けど…。
「動きが相変わらず一直線すぎる…そして後の為の余力も一気に使い切っちゃ持久戦じゃ確実にアウトよ?」

そう。なのはは全力全開過ぎるのである。

何事も全力で取り組むその心意気は評価する点はあるけど、時と場合によってそれはとても不安要素が増すのだ。

私が虚実を交えたフェイントも全部受けようとしているから罫が明かない。

「これじゃクロノや私のような後の後を考えたタイプとの戦闘ではすぐにボロが出てしまうわ」

「むう…前よりはこういった攻撃をどう対処したらいいかとか判別できるようになったんだよ？」

「その意見に関してはまあ、認めるけどね。なのはは空間認識能力が他の人よりかなり高いから。」

「やっぱり八極拳を主体に入れてよかったわ。なのはは砲撃主体の魔導師だから余計防御力がないとやっていけないしね」

「それって、やっぱり私は接近戦には向いてないって事…?」

「正直に言う現状ははつきり言ってるね。でも、これからどう化けるかは教えている身としては楽しみの一つでもあるわね」

「そ、それじゃフィアちゃんと「フィアと比べたら雲泥の差はあるわよ?」…うう…」
変に期待を持たせても後で後悔するだけだからズバツとそこだけは否定しておく。

行き過ぎた自信は慢心を生むから厳しくしなければいけないのです。慢心王にはなつてほしくはないし…。

とりあえずフィアに比べれば格段に優しい組み手を終了させて私は懐から恒例の漢方薬を取り出す。

それを見てなのは隠しもせず「うえ…」という表情をしたが、未だに出来ないかな？ 半年間はずっとこれを使っているのに…。

「ほら、そんな顔しないの。これを塗れば後の疲労はすぐに解消するんだから。」

私の師匠直伝の漢方薬だからとつても効果あるのよ？ なのはももうその効果は十分身に沁みて知っているでしょうに…？」

「そうなんだけどお…やっぱり塗った直後はとてもピリつて来るからちよつと苦手なんだよね」

「贅沢言わないの。アリサは初めて使った時なんか『くうー…この全身に染み渡る痺れ、癖になりそうだわ』とか言って嬉々として製造法を聞いてきたくらいよ」

「え!?! アリサちゃんもこの塗り薬愛用しているの!?!」

「ええ」

私は話しながらも油断しているなのは腕に薬を塗っていった。

その直後にまるで猫のような「にゃあああつ!!」という叫びが木霊したのは、まあご愛嬌…。



それから二人は家に帰宅した。

その際、シホはなのはに、

「それじゃお風呂に入ってくるから…その、美由希姉さんには内緒にね」

「う、うん…最善は尽くしてみるね」

シホはなのはに手を合わせながらお願いをしてなのはは少し顔を引き攣らせながらも頼まれてくれた。

なぜなのとも顔を引きつらせているのかというと、以前のシホの真相暴露以来、シホはてつきり一緒に入るのはやめてくれるかな…？と淡い期待と少しの寂しさを感じていたのだけれど美由希はそんなシホの考えをあつさり覆してくれた。

そう、その話以来から美由希はより一層シホとお風呂に入るようになったのだ。

それでなのはも美由希の大胆な行動に関して少し引き気味だったりするのである。

それはともかくシホはそうとだけ伝えて、着替えを持って脱衣場に向かつていった。そこで当然ながら服を脱ぎ始めるシホ。

だが、無意識なのだろうがリボンを解いた後、まずスカートから脱ぎだし次にスパッツ、上着、最後に下着を脱いで丁寧に籠に折り畳んでタオルを持ってお風呂場に入っていく姿はまさしく女の子。

その後も髪や体を洗う仕草は、以前の男性体ならば気にせずガシガシと大雑把に洗っ

ていただろう…今はそれはもう丁寧に優しく硝子細工を扱うように洗っている。

以前は元はイリヤの体だから大事に扱わなければという思いで洗っていたが、今ではもう自然な動作になっている。

最後に頭からお湯をかぶり泡などすべて洗い流して、それから風呂に浸かるために腰まである長い髪をタオルでまとめて浸かった。

「…ふうう。やつぱりこの時がお風呂での一番の醍醐味よねえ」

シホはこの瞬間が一番の至福の時だと感じている。

だが、それと同時にこの瞬間こそシホは周囲への警戒心を一番緩ませる時でもあるという事を本人は気づいていない。

…そう。この家にはシホ限定で入浴時に乱入してくる猛者が数名存在しているのだ。

夜は主に桃子の名が上げられるが、朝は士郎とともに食事の準備をしている為中々その機会は訪れない。

だがもう一人…道場で朝早くから兄・恭也と稽古をしている美由希の存在がある。

それ故に、

「シホちゃん、入るよー？」

「え、…？」

シホが気を緩めている瞬間を見計らって美由希がお風呂場に乱入してきた。

しかもその傍らにはなぜかなのはまではないか。

《なのは!?!》

《ご、ごめんなさい! お姉ちゃんを何とか説得しようとしたんだけどいつの間にか主導権を握られちゃつていて、その…》

《ああ…うん。それじゃしかたがないわね》

《本当にごめんね、シホちゃん…》

二人は思念通話でお互いに話を済ませて、シホは次になのはには聞こえない程度に、
(美由希姉さん…)

(んー? なに、シホちゃん…?)

(いつもいきなり入ってくるのは反則だと思えます…最近はどうとう自覚してきてしまつて裸を見られるのが、その…女性の人に対しても恥ずかしいんです)

美由希はシホに小声で話しかけながらも体を平行して洗っている。

対してシホは赤くなっている顔から下を湯船に沈めながら尋ねる。

そのシホの構図は年頃の女の子特有のものを孕んでいるため、美由希のなにかのメーターは一気に上昇し振り切った。

なにかつて…? それはもうシホがとても愛らしいという感想以外浮かばないほどに威力は抜群である。

美由希は無言になり、だがなのはは姉の異変に気づいているのかいないのか首を傾げている。

変わりにシホは盛大に地雷を踏んだような気分になった。

それから美由希はさっさと体を洗い流し（ついになのはも）、いざ参らんとシホの入浴している湯船に入ろうとしてきていた。

「ね、姉さん!？」

「ふふふ…シホちゃんがいけないんだよお？ そんな態度を取られたら我慢できないじゃん！」

瞬間、美由希の口元には弧が描かれる。目も少し危なく光っていることから危険度が窺える。

シホは即座に頭の中で鳴り響いている警報に従いお風呂場から脱出しようと試みる。だが、その脱出しようとした手首にはこの場ではありえない物が巻きついていていた。

(こ、鋼糸!?! お風呂場の無防備な場所のどこに!?!)

シホはすぐに糸の先を辿るとそれは、

(鋼糸…じゃない!?! これは強化されたタオルの糸!)

「シホちゃん、どうしちゃったの？ 急に固まっちゃって…」

「そうだね、どうしたの。シホちゃん？」

「……………(なんでよう?)」

シホの思考が停止してしまったのを見計らい二人も湯船に浸かってきた。

当然シホは美由希に再度引きずり込まれたのは言うまでもない。

それと、なのはは魔力がらみでない為に気づかなかつたらしい…。

「もう、シホちゃんはすぐに逃げ出しちゃおうとしちゃうんだから…もつと裸の付き合
いになれた方がいいよ?」

「いえ、その…姉さんのは少し過剰だと進言します…」

「そうかな?　なのははどう思う?」

「えっ!?!」

ここで自身に振られるとは思っていなかったらしくなのはは目を見開いた。

シホの「ここは無難な返答を…」という視線は届いているのかは、分からない。

だが…、

「うーん…そうだね。私も実を言うとシホちゃんとは何度かゆつくりお風呂で浸かりた
いと思っていたの」

「そうだよねー」

シホの期待は見事にへし折られた。

それは、今までシホは行動が早い美由希以外の面々…いや、この場合たまたま泊まって

いく忍や実質この家の主である桃子以外…。

なのは達とはお風呂の際だけは結構離れていたり時間を置いてから入る事が多い為に裸のスキンシップをあまりしていないからこそ、子供特有の「もっとお近づきになりたいの」という思いでもある。

その純粋な眼差しにシホはどうとう陥落した。

…そしてシホは思った。

美由希は策士だ。諸葛凛をおそらく上回るだろう、と。…ところで諸葛凛って誰だ？

はふう…とシホはお風呂場から出た後に一息ついていた。

シホの頬はお風呂から出たてなのか赤く火照っていたので普段白い肌なために少し色っぽい。

そのまま制服に着替えてからリビングに向かうと既にシホ以外の全員が朝食の準備を整えていた。

なのははまたフェイトから送られてきたビデオメールを胸に抱いてシホに「一緒に見ようね」と言つてシホも「ええ、そうね」と笑顔で答えていた。

そしてシホは学校に出かける際、空を見上げ、

（大師父、リン：それにみんな。私は姿は変わってしまったけどこうして今も元気でやっています）

そう、誰にでもなく心の中で呟いた。

第二十六話

『とある出会い』

とある夜中、海鳴の町のある一角の路地裏。

そこで数名の魔導師と一人の赤い帽子を被り、ゴシック風の服装…否、甲冑を着た少女がその手にハンマーのような形をしたデバイスを持ち戦闘を繰り広げていた。

「この、おとなしく捕まれ！」

「……………」

魔導師達が杖から魔法を放つが少女はそれを焦る仕草も見せずただそのハンマーを的確に振りすべて叩き落した。

「弱いな……」

「なに…?!」

「お前達の魔力じゃ少しの足しにもなんないだろうけど…けど、面倒だけどお前等の魔力はもう。だから…グラーフアイゼン！」

《Jawohl!》

：グラーフアイゼンと呼ばれたデバイスは、一瞬光り輝くことで主の言葉に応えた。その後、魔導師達は抵抗空しくその場に叫びを上げながら倒れた。

「それじゃいたたくぞ…」

赤い少女は片腕に持っていた茶色い本を掲げた。

書は開き、すると魔導師達の体からリンカーコアが浮かび上がる。

それに呼応して魔導師達も苦しみだす。

「お前達の魔力は闇の書の餌だ」

闇の書と呼ばれた本が輝きを放った瞬間、リンカーコアは死なない程度まで魔力を吸収した。

それで用が済んだとばかりに少女はその場から立ち去った。

「…やつば、あんな弱い奴等じゃ10ページもいかないか」

「『ヴィータ』、終わったか？」

「ああ、『ザフィーラ』。今回も雑魚だったけどな」

赤い少女——ヴィータと呼ばれた少女は名を呼ばれて振り向いた。

そこには青い狼——ザフィーラが並ぶように空を駆けていた。

ヴィータはいきなり現れたにも関わらず、驚いた仕草も見せずに淡々とそう答えた。

「そうか。しかしその表情だとあまり埋まらなかったか」

「ああ…あんなじゃまったく埋まらないな。できればもつと魔力がある奴がいれば世話しねーけどな」

「でかい魔力の持ち主か…最近感じる奴はどうなのだ？」

「ああ…たまに感じる奴か。まだ見つからない…」

「そうか。あれだけ我等にも感じるのだから蒐集すれば相当ページはたまるだろう」

「だな。それと、そいつとは別に一人…目星はついている奴はいるんだけど、な」

「そう、だな…」

そこで急にヴィータは歯切れを悪くする。

それに気づいたのかザフィーラも声のトーンが少し下がる。

二人は一つのモニター画面を展開した。

それを見ながら、

「「シヤマル」に聞いた話だけど、こいつだけは少し気が引けるな」

「ああ。聞くに主の数少ない知り合いで唯一の友達というからな」

「メール友達だって、はやては嬉しそうに顔を綻ばせていたからな。だけど…」

「そうだな。いざという時は…」

二人は苦しい決意をしながらも画面の少女…シホ・E・シュバインオーグの事を見ていた。



S i d e 月村すずか

私は放課後の事、アリサちゃんの家車で途中の図書館まで送ってもらった。

「それじゃなのはちゃんにアリサちゃん、また明日ね。シホちゃんにもその事伝えておいてね」

「うん。それじゃバイバーイ」

「また明日ね、すずか」

二人とはそこで別れた。

ちなみにシホちゃんは今日の御夕飯担当だといって学校が終わったらすぐに商店街に向かっていった。

それで帰り際、夏休み頃から髪型を変えたポニーテールを揺らしながら私達に手を振っていった。

その光景を見て私はつい笑みを浮かべてしまった。

まだなのはちゃんやアリサちゃんには明かしていないらしいシホちゃんの秘密…。

元の姿は恭也さんより年上の成人男性で過去も含めてとても苦勞してきたらしい。

私が吸血鬼だということに悩んでいたのが馬鹿らしくなるくらいの過去をシホちゃんは背負っている。

でもそれを表に出さないでいつも元気に過ごしているシホちゃんの姿は私を勇気づけてくれる。

それにシホちゃん自身、本当に元は男性だったのかな…？ と首を傾げるくらい可愛いし、すごい女の子している。

理由はこの世界に来る際、世界からの修正でお姉さんの体に移っていた為、その影響で性別はもちろん精神年齢その他とも私達と変わらないくらいに塗り替えられたらしい。

記憶がある分、まだ少し男性の時の部分が残っているっていうけど…そこがまたシホちゃんの魅力を引き立たせている。

ここだけの話だけキリツとしている時はとても格好よく見えて、だけど体育の時に着替えの手伝いを頼んでくる時のシホちゃんは、その…とてもしおらしい。

なんかシホちゃんはこの世界に来た当初から男性の時のように女性の体とかにはほとんど興味を示さなくなっただけらしい。

かといって男性に興味を示しているわけでもない。

俗に聞く性同一性障害ともちよつと違うらしくて、別に拒絶反応とかもない。でも精神は完全に女の子。

少しややこしいけど…だからなのか、変わりに自身の体を見られるのが男女関係なく恥ずかしいと…そんな事らしい。

だから私はついつい色々なシホちゃんを見るのが楽しい。

特に私がシホちゃんを意識し始めた切欠でもある誘拐未遂事件…私を守る為に真剣な表情を見せた時のことを思い出すとまたどうしてか頬が赤くなるのを抑えられない。

女性同士つて変に見られてしまうかもしれないけど、シホちゃんはもとは男の子。だから私も気持ちではできるだけ正直にいきたいと思つてしまう。

その事をお姉ちゃんに伝えた時はびっくりしていたけど、すぐにニヤリといった表現がとても似合う笑みを浮かべて、

『別にいいんじゃない？ どう思うかはさすが自身の勝手なんだし周りなんか言つてきたら堂々と言いつ返してやればいいのよ。でもその場合、シホちゃんの意味もちやんと尊重してあげるのよ？』

と、むしろ応援するような発言をしてくれた。

だから私、頑張つてみようと思えます。

…それになぜか分からないけど近くに私の敵の気配がする気が…。

あの、前まで一緒によくシホちゃんといたファイアットちゃんから匂うよ。

クスクス：私とシホちゃんとの仲を邪魔する子はいけないんだよ？　なんでか分からないけどお腹がクウクウしてきました。

クスクスと笑ってゴーゴー♪…ってという言葉がなぜか頭に浮かんできたけど、なんだろう…？

………

………

………

…なんか変な電波を拾っちゃったのかな？

正気を取り戻した後（脳内トリップ終了とも言う）、なぜか非常に恥ずかしくなっちゃって猛省したい気分。

そして「ハッ！」と当初の目的を思い出して私は借りた本を返しに来たついでに次は何を借りようかと思案しているところ。

ふと、私の視線の先には車椅子に乗っていて精一杯手を伸ばして高い場所にある本を取ろうとしている少女の姿が映る。

その子はたまに見る子で、同じ年みたいに見えるかもないから話しかけても大丈夫かなと……そう、何度も思っても、でも人見知りの影響で見送っていたけど困っているのなら助けてあげたい。

それで未だに取ろうと奮闘している女の子の目当ての本を変わりに取ってあげた。うん。いい事したよね。

「あ、もしかしてシホちゃん……!? あ……」

「え……?」

そこで何故にシホちゃんの名前が出てくるのか分からなかった。相手の子も間違えてしまったという顔をして顔を赤くして固まっている。

……え、と。どうしよう……?

しばしの沈黙が続いたけど、

「……えっと、間違えてすみません。私の勘違いやったみたい。その、ごめんなさい」

「え!?……いい、いいですよ。気にしないでください! 誰だつて勘違いくらいしますから……!」

それからなぜかお互いに返事のパスを続けていたけど、やっと冷静な思考に戻ってきた。だからまずは取ってあげた本を少女に渡す試みをしてみた。

「あ、その…おおきに」

「ううん。別に構わないよ。それよりさっきのつて…?」

「あ、やつぱり失礼やったよね?」

「え? あ、そうじゃないの。ただちよつと気になっちゃつて…」

「うん。そうやね…私の唯一のお友達が前にもこうして助けてくれたんよ。」

スーパ―の買い物の時もおんなじ感じでやったから、つい…」

「さっきのシホちゃんつて名前の子?」

「うん、そうなんよ。つて、そうや。まだお互い自己紹介しとらんかったよね?」

「あ、そういえばそうだね。私の名前は月村すずか」

「すずかちゃん…。私の名前は八神はやてつていいいます。なんか変な名前ですよね」

「そんなことないよ。それよりさっき会ったシホちゃんつて子。」

もしかしてはやてちゃんの名前を聞いた時、『その響きは実にはやてに合っている名前ね』つて褒められなかった?」

「え!? どうしてわかつたん!? それも一字一句間違つていない…」

「やつぱり…。ねえ、試しに同時にその子のフルネーム言つてみない?」

「…ええよ。なんや面白そうやし。それじゃ…」

「せーの…」

「シホ・E・シュバインオーグ！」

二人同時に名前を言った。そして沈黙は一瞬、私とはやてちゃんは互いにクスクスと笑いあつた。

それから玄関カウンターまでの間、はやてちゃんの車椅子を押していきながら色々と話し合っていた。

「なんや、すずかちゃんてシホちゃんの友達やったんやね」

「うん。とても大事な親友だよ……今のところは」

「ん……？ なんや今、小さく眩かなかつた？」

「気のせいだよ？」

「…そ、そか。うん、きつと気のせいだったんや…アハハ」

「うん。そうだね。フフフ…」

なんか少し変な空気にしちゃったけどその後はお互いにお友達になつて迎えに来てくれていたらしいシヤマルさんという綺麗な金髪の女性と帰つていった。

今度、はやてちゃんのお家に誘われたので行くのが楽しみです。



S i d e 八神はやて

…なんやらずかちゃんって大人しそうな外見に反して少し黒い部分でも持つてるんやろかな？

でもお友達になれてよかったと今は思うとる。

すずかちゃんにうちの住所を教えて、そしたら今度シホちゃんも連れてきてくれるいうからとても楽しみや。

「…主はやて、どうされたのですか？」

「うん？ えへへ、ちよつとなあ〜」

すると私の事が気になったのかヴォルケンリッターの “烈火の将” で皆のリーダーである “シグナム” が私に話しかけてきたから曖昧に笑みを浮かべるだけにしていた。

「はやてちゃんに新しいお友達が出来たんですよね」

「あ、シヤマル。私が言おうと思うとったのに…」

「そうですか。それは喜ばしいことですね」

シグナムはそう答えて少しだけ表情を柔らかくしてくれた。

いつも冷静であまり笑みは浮かべない方だから私は嬉しいくらいや。

「それでな！　まだシャマルにも話しておらんけどその新しいお友達のすずかちゃんな。」

いつも私のメール友達をしてきているシホちゃんと大の親友らしいんだよ」

「ツ！」

「…？　どないしたん、二人とも急に目を見開いて…？」

「…あ、いえ。なんでもありませんよ、主」

「そつか？　シャマルはたまにスーパーで会うこともあるんやろ。話とか聞かんの？」

「は、はい。そうですね、シホちゃんとはスーパーでたまに会うとほとんどが料理談義になっちゃいますので…」

「あー、確かにそうやね。シホちゃん、料理に関しては結構真剣に話をしてくれるもんなあ」



はやてがまた嬉しそうに話を弾ませている所で二人は思念通話で話し合いをしていた。

《シャマル、そのシホという少女にはよもやお前の正体は気づかれていないだろうな？》

《え、ええ…管理局の関係者の線は薄いと思いたいけど、でも…なぜかたまに緊張しちゃう事があるのよ》

《お前が緊張するという事はやはり関係者の線が近いかもしれないということか…》

《信じたくないけど…あれほどの魔力の持ち主が無関係なんてやつぱり思えないわ》

《これは“アイツ”にも協力を仰ぐかももしれないかも知れんな》

《そうね…。あまり負担をかけさせたくはないけれど…》

「二人とも！」

「は、はい!？」

そこではやての一喝により二人は思念通話を咄嗟にやめて姿勢を正した。

「急にとはいかんけど私の話、あまり聞いとらんかったやろ？」

「い、いえ…そのような事は」

「はい…」

「ほうか…？ ま、ええよ。それでな、今度すずかちゃんがな、年末で忙しいそうだけ

どもし時間が取れたらシホちゃんを家に連れてきてくれるいうんよ」

「そうなのですか。それは主も嬉しいでしょう」

「うん。すずかちゃんもだけど、シホちゃんがもし来れたらめいっばい歓迎せなな」

「そうですね（とりあえず帰ったら相談だな）」

「はい、はやてちゃん♪(そうね…)」

表面上はいつも通りを通し二人は小声でそう決めた。

第二十七話

『強襲』

海鳴市の上空にヴィータとザファイラが佇んでいた。

一般人が見れば摩訶不思議な光景に見えなくもないが夜ということもあり、そしてかなりの高度にいるので気づくものは恐らくいないだろう。

そんな空でヴィータは目を瞑りなにかを探しているようである。

「…どうだ、ヴィータ？ 見つかりそうか？」

「いんや。いるような、いないような…そんな曖昧な感じだ。」

「やっぱりこの間から感じていた巨大な魔力反応…かなりの大物っぽいな」

「もしかしたら主のご友人かもしれないぞ…？」

「心配すんな、ザファイラ。あたしらの中で顔が割れているのはシャマルだけだから。」

「だからシャマルにはもしもの場合、正体を明かさない為に変身魔法で黒尽くめの格好をさせてある」

「そうか。ではその魔力反応を別れて探すとしよう」

「OK。お前もしつかりと探せよ、ザフィーラ」
「心得ている」

返事をした後、ザフィーラはヴィータの元から飛び立っていった。

ザフィーラが消えた後、ヴィータは管理局に気づかれるかもしれないという事を承知で封鎖領域を展開させた。



時は少し遡り、シホは恭也、美由希とともに山に入って盛大に訓練をしている真つ最中だった。

学校の帰り際、妙に早く帰った理由は今日の夕食当番以外に修行も含まれていたためであつたからだ。

それですぐにシホは食材を購入して家に帰り、桃子の手伝いもあつて仕込みは終わり、後は暖めるだけという事で食事の時間には帰ると伝えて三人は家を出て行ったのである。

ちなみになのは今日出された宿題などで家に残っていた。

「シホちゃん、今日の夕食は何にしたの？」

「はい。今日はメインをクリームシチューにして他にマカロニサラダ、食後のおやつにシチューとマカロニを使用して桃子お母さんと一緒にクリームシチューパンを作りました」

「今日は洋食がメインか。それじゃ楽しみだな」

「うんうん。シホちゃんの作る料理はなんでも美味しいし、それにちゃんとお母さんと同じでカロリー計算もしっかりしているから私は嬉しいな」

「ありがとうございます。それと、そろそろ始めましょう。この話になると自分でも早く食べたくなっちゃうんで」

「そっだな」

それから三人は支度を始めた。

今夜の修行の内容は現在手持ちの武器で闇夜での森で神経を研ぎ澄ませて殺気などそれらの感情を一切出さず奇襲をするバトルロイヤル的な方針だった。

従って三人とも始まりの合図と同時に森の闇に溶けていった。

それから何合か打ち合ったり、少しの音でも反応しないよう戒めたり、たまに過激に仕込んでいた爆薬（爆竹程度を幾度もつなげた物）が爆発したと同時に他の方角から攻められる等…。

なるほど、これは確かに山ではないとできない修行だとシホは思っていた。

（それに私は二人と違つてたまに月の反射で髪が光つちやうからより一層神経を集中しないとたちまち餌食にされちやう…）

シホは用心しながらも、だが奇襲する事に力は緩めなかつた。

そこでふとシホは魔力の気配を感じた。それも結界のようなものが迫つてくる感じである。

世界に敏感なシホだからこそすぐに気づけたものだからすぐに二人を呼んだ。

それで一時中断になり二人には少し言い訳をしながらも先に帰らせた。

と、同時に結界が自分達の領域にまで及び遠めに見えていた二人の姿も掻き消えた。

（誰かが町全体に広域の結界を構築したのか…？）

そう思いながらもシホは颯爽に山を駆け下りていく。

すでに武装も完了して魔術回路も開いている。

（もしかしたらまたロストロギア関連の事変かもしれない…！　なのはもこの異変には気づいているはずだし狙われているかもしれない！）　　なのはもこの異変には

「急がないと…！」と声を出して足に魔力をこめて山を抜けようとした矢先、シホは一人にしてはやけにでかい魔力反応に気づき咄嗟に上を向いた。

そこにはアルフと似ている青い狼が空からシホを見下ろしていた。

青い狼——ザファイラは地上に降りて無言でシホを威嚇している。

「いきなり現れてなんですか…？ 私、今急いでいるんですけど…」
「……………」

「だんまり、か…どうやらアルフと同じ使い魔みたいだけど…私はこの先にいかなければいけないの。だから…」

—— トレース・オノン
投影開始

その手に干将・莫耶を投影し、

「押し通らせてもらおうわ…！」

「……そうか。使い魔の存在を知っているという事は、やはり管理局の関係者らしいな」
「属してはいないけれどね…。私、そういつた組織は苦手な部類だし」

「そうか…。いや、今は理由は聞かん。しかし魔法を使ったというのに魔法陣が浮かばないとは…まあ、いい」

「貴方の目的はなに…？」

威嚇しながらもザフィーラに尋ねる。

「教える必要はない。知りたくば…」

瞬間、ザフィーラの体が発光し狼の姿から人型へと変化した。

その姿はやはりアルフに似ていて耳と尻尾がそのまま残っている。

だが、その身はかつての自分のように褐色の肌白い髪。

鋭い目つきと青い服の上からでも分かる鍛えられた肢体…その姿から戦士としての威厳が溢れている。

そしておそらく近接タイプなのだろう、腕に銀色の手甲をはめている。

「私を倒してから聞け！」

ザフィーラはそう叫びシホへと飛び掛っていった。

それをシホは、

「ええ。なら、そうさせてもらおうわ！」

受け答えをして疾駆した。



S i d e シホ・E・シュバインオーグ

「ハアアアアアアッ!!」

雄叫びとともに男の鋭く狙った拳が私に迫る。

それを左手の干将でいなし、右手の莫耶で切りつける。だが相手も読んでいたようで逆の手甲でそれを防いでいる。

——油断するな。目の前の敵はこと格闘戦に関してはシホ・E・シュバインオーグの遙か上をいくものだ。

別思考で心眼を発動している私がそう告げる。

そんな事は分かっている。

しかしこうも攻めに転じられないのはなんとかならないものか。

昔の自分なら同じ体格故にどうにかできたかもしれない。

しかし今はか細い少女の体に過ぎない。

その拳を受けるたびに衝撃が剣を通して直に伝わってくる。

魔力付加されているから尚更だ。

こう何度も受けきれぬのも干将・莫耶という宝具の恩恵があるがそれを担う私が耐えられなくなつてはそれこそお仕舞いだ。

こんなもの、まともにくらえば私なんてまるで風船のように何度も撥ねられた拳句に悶え苦しむことは必至。

だからいい加減、受けに重んじるにも限界を感じ始めた私は攻めに転じる為に夫婦剣に魔力を叩き込み強度を破限界ギリギリまで固め、そして男の攻撃をそのまま利用して後ろに飛びのいた。

男も攻撃した直後のため、ましてまさか自身の攻撃が利用されるなどと思っていなかった為に一瞬：そう、ほんの一瞬だけ膠着する。

「ハアッ！」

そこを狙い夫婦剣を投擲する。

当然私の行動は初見の者には馬鹿な行動だと思われるだろう。

だがそれが狙いだ！

「なにつ!？」

男はその類に違わずまんまと引つかかり、剣を弾こうと手甲を振るう。

そう、その隙が欲しかった。

瞬時に両手には新たな干将・莫耶を投影する。

そしてそれをさらに投擲。

「ぐう！ 目くらましのつもりか!？」

「まだまだ！ 本当の目くらましはこれからよ！」

再度、夫婦剣を投影。また投擲。

合計三回夫婦剣を投擲させた。

しかも今度のは鉄甲作用も施して、だ。

これは先程のとはスピードも威力も倍近くなっている。

「こんなもの、砕いてくれる！」

「砕かれる前に……——鶴翼しんぎ、欠落むけつヲ不ラズ！」

私のワードに反応して先程既に弾かれている二双一对の夫婦剣四本すべてが私の最後に放った夫婦剣に向かって引き寄せられる。

これの意味するものは今現在進行形ですべての夫婦剣が男に向かって集まる事を指す。

…そう、六双三対の剣がね。

それに気づいたようだけでもうこれで詰み。

私がそう思った矢先に頭の中で危険予知警報が鳴り響く。

——慢心は捨てろ。これほどの者がこの程度の小細工で討ち取れると思うな？

慢心しているつもりはない。

ええ、分かっているとも。

だからすべてを叩き落そうと行動を移そうとする男よりも早く、最後のワードを紡ぐ。

「ブローケン・ファンタズム
壊れた幻想！」

やるなら徹底的に。これがリンから教わった家訓…家訓とは呼べるものでもないけど。

まあ、それにより男を中心に計六本の剣にこめられている幻想が魔力暴走を起こして爆発する。

その間、私は次が来る事を予想して再度夫婦剣を投影する。

まだ『真の姿』を見せていないけどあの男にはもうあの技は通用しない。

夫婦剣の特性…磁石のように互いを引き寄せるといふもの。

故に、所見あつてこそ相手に通じる技なのだから。

もう先程なのでその効果は分かっただろう、二度も同じ手にはまる者は三流でない限りそうそういまい。

「オオオオオオッ！」

思ったとおり…。相手はおそらくなにかしらの魔法で防御したのだろう、ダメージはあるだろうがそう深くもない。

男はその場で止まり魔法陣を展開する。なにかしらの魔法を使おうとしている事は

明白。

すぐに迎撃に移せるよう思考を回転させようとして…停止した。

男の展開した魔法陣は私がいつしか前に一度だけ出した魔法陣と色は違うが同じものだった。

「ニアアアアアッ！」

それで動作が遅れてしまい突如として地面から出現した幾重もの光の棘が私に迫ってくる。

それをなんとか夫婦剣で切り裂き殺気の出ている方向を向いたがそれまで。

すでに男は目の前まで迫ってきていてその鍛えられた足を私目掛けて横なりに振ろうとしている。

途端、場面がスローモーションのようになり男の足が私の体に触れようとしているところで私は体を必死に捻じ曲げる。

頭からの「せめて致命傷だけは避ける！」という警告のような命令で全身を瞬時にできるだけ身体強化を施し、さらにそこに夫婦剣を置いて盾にしようとする。

「カハッ!？」

だけどそれは間に合わずもろに男の回し蹴りを脇腹に喰らってしまい私は受身も取れずに吹き飛ばされ一本の木に激突する。

その影響か激突した木はそのまま折れて後ろに倒れた。

つぐ…!? あばらが何本かいったかもしれない。

あつちはこつちがバリアジャケットを纏っていると思つて放つた可能性も捨てきれないけど、それでも動きに制限がかけられたのはまずい。

「はあ、はあ…中々梃子摺らせてくれたな」

「そう…カフツ！ 思うんだつたら…もうちよつと手加減して、欲しいわね。こつちはバリアジャケットなんて便利なものは纏っていないんだから…」

「なにっ!？」

話の途中で口から血を吐き出す。

…ヤバ、結構ピンチかもしれない。

私の発言と現状でどうやら本当だと分かった男は一瞬すまなそうな表情をするが、それでもすぐに冷静を取り戻し、

「…それはすまなかつたな。だが、私にも譲れないものがある。お前の魔力…頂くぞ」

「そう、簡単にやられるものですか！ フリーズアウト 停止解凍、ソードパレルフルオーバーン 全投影連続層写!!」

「なんだと…!？」

咄嗟に待機させていた26本の劍群を男に向かつて放つ。

そして動きが少し鈍くなって体がギシギシと音を立てているが構わず瞬動でその場

から離脱し、その手にもう一つ待機させておいた赤い魔槍ゲイ・ボルクを手にとって倒れないように地面に刺して支えている。

見れば男は先程の光の棘を再度出してすべての剣を自身に届く前に弾いているので無傷。

「本当に、ついてないわ……」

悪態を吐きながらも体に喝を入れて槍を構える。

だがダメージはまだ取れきれない為、全力戦闘は不可能でもまだ完璧にやられた訳じゃない。心が折れるまで足掻いてみせる！

だが、そこで最悪な事態が起こった。

気づけば男は空に浮いており、隣にはまた能力未知数の女性がいた。

その女性は桃色の髪をポニーテールにしてその身を同じく桃色の甲冑をまとい、その手に剣が握られていた。

でも、そんな事はこの際どうでもよかった。

彼女の雰囲気、立ち振る舞い……そしてなによりその瞳。

その瞳からとても高潔な精神の持ち主だと思わせる。

そしてなによりかつての私の従者、セイバーとそっくりなのだ。

月夜で見下ろされている事もあり、この危機的な状況で不謹慎だが彼の夜の出来事を

連想させてくれる。

だが、そんな事は終わってからでも思える事だ。

再度、体制を整えて二人を威嚇する。

「ザフィーラ、お前ほどのものが苦戦していると思えば……なるほど。我等の勘は当たっていたという事か」

「ああ、シグナム。今でこそあの様だが、あの歳にしてかなりの手練のようだ」
「お前の姿を見ればわかる」

「だけど、二人は私がまだともに動けないことを察しているのか話をしている。

あ……さつきまで懐かしい過去を思い出していたのに色々と残念だね。

「あの……敵を前にして話し合いをされると非常にこちらは苛立ちを隠せないわ」

「む？　そうか。すまなかつた。だが、お前もその体ではもう碌に動くことも出来まい」

「……いけないわね。その慢心は戒めた方がいいわよ？」

体の痛みも先程よりは引いている。

それにアヴァロンが自動稼動したようでも内部からだけ修復を始めている。

それで私は口の中に溜まっていた血を吐き出して、次の瞬間には木を足場に縮地を使いシグナムと呼ばれた剣士の背後に回りこむ。

「なっ！」

その勢いで槍を振ろうとしたが、辛うじてザフィーラと呼ばれた男の手甲に遮られた。

舌打ちをしてザフィーラの手甲をまた足場に使い木の上に立ち、その場でタラリアを投影。

まだ魔力に余力がある内に決めておくべきだ。

だけど、いざ現状を鑑みて：非常にこちらが不利だという事が分かる。

心眼を発動してここをどう打開するか思考を巡らすがあまりいい手は浮かんでこない。

ザフィーラという男は傷を負ってはいるがまだ軽い。

シグナムという騎士に関しては奇襲失敗。いまだ無傷で手の内も晒していない。

対してこちらは私一人だけ。

手の内もまだあるとはいえ少なからず出してしまい、重い一撃も受けている為行動が半減中。

防御に徹すれば：と、思考が過ぎるが却下。一人であれだけ攻められたのだ。二人なんて今の体では耐え切れることは難しい。

考えれば考えるほどに渦中にはまってしまう。

「…確かに。今回は私の慢心の結果、お前が付け入る隙間を与えてしまったのは事実だ」

「そう。それじゃ今度から気をつけることね」

「不思議な奴だ。こんな窮地に追い込まれているのに目はまだ死んでいない…。」

こんな時でもなければ万全の状態で相手をしてやりたいところだが、今はお前の相手をしている暇はない」

「どういうことよ…?」

「なに、今私達の仲間が一人管理局を相手に孤軍奮闘しているのでな。すまないがお前の魔力、早々にもらい往かせてもらおう」

「そう…。やっぱりあつちでもドンパチやっている訳ね。それじゃ尚更あなた達を行かせるわけにはいかないわ!」

「来るか…? む…」

「どうした、シグナム?」

「…どうやら今回は彼女の魔力は見送りみたいだ。シャ…奴の連絡でヴィータが結構苦戦をしているようだ」

「そうか」

「なにまた人を無視しているのよ!? 来ないならこちらから往かせてもらおうわよ!」

「それは次の機会に取っておこう。仲間がピンチなのでな」

するとシグナムは剣を抜き、

「レヴァンティン！ カートリツジロード！」

《J a w o h l ! 》

剣からなにやら硝煙が上がったと思つたらシグナムの魔力が一気に何倍にも膨れ上がりそのレヴァンティンと呼ばれた剣に炎を宿らせて、

「…お前の名を聞こう。まだ幼き騎士よ。」

お前は良い目をしている。大切な者を守ろうとする気概が感じられるからな。だから名を聞いておいて損はない」

「私は騎士とか呼ばれる程偉くないわよ…？」

「それでもだ。騎士とはなにかを守ろうとする者の心のあり方からくる物だから、我等の道を阻もうとし、仲間の下にいかせないという意思を見せただけで十分に値する」

「……………まあ、いいわ。でもそれなら先にそちらが名乗るのが筋じゃない？」

「クツ、確かにそうだな。改めて先程からの事も含めて詫びよう。」

私はベルカの騎士、ヴォルケンリツターの将にして烈火の騎士シグナム。そして私の相棒でもある炎の魔剣レヴァンティン」

「私はヴォルケンリツターの盾の守護獣、ザファイラ」

「あつさり名乗ってくれるのね。それじゃ次は私の番ね。私はシホ。シホ・E・シユバインオーグよ」

「シュバインオーグか。その名、しかと覚えさせてもらった。では…」
「行かせると思っているの?」

「ハアアアアアツ!!」

行かせまいと駆けようとしたが二人の咆哮とともに下からは光の棘が迫り、前方からは炎の波が押し寄せてきた。

それをなんとか交わした時にはすでに二人の姿はその場から消えうせていた。

さらに私が追うことを見越してなのか私の周囲一体に結界が構築させられている。

「完敗、か…。でも、まだ間に合わないことは無い!」

それで今手持ちのエモノ、ゲイ・ボルクを握り構えて、

「少しでも休憩する前に一発でかいのをかましてやろうじゃないの!」

——突^ゲき穿^イつ死^ボ翔^ルの槍^クツ!!

結界を破壊する程度の魔力を込めて真名開放をして結界に向けて放つ。

それによって私を閉じ込めていた結界を貫通して砕いた。

だけどそこで気が抜けたのか気づけば木に背中を預けていた。

傷と真名開放による負荷が祟ったのか今はちよつと手足を動かすだけで脇腹に激痛

が走る。

これじゃ現場に迎えないじゃない…。

「なのは…やられていないと、いいけど。でも私がこの様じゃ結構苦戦するかもしれない…。早く、回復させないと」

ふと、視界の内にはぼやけているが知った顔が見えた気がした。

「お姉様——ツ!!」

…——キーン——…

いい具合に響いてきた…うん。間違うことなきつて言葉が似合いそうな感じでフィアが私のところに、それはもう光速を越えるんじゃないかといえるほどの勢いで飛んできた。

よし、とりあえずこれでまだ私の運はつきていない事がわかった。

「お、お姉様！　すごい傷ですよ!?　大丈夫ですか!」

「…ええ。少しあばら何本かいったみたいだけど現在急いで修復中ね。それでフィア、すぐに現場に向かわなければいけないの。」

だから応急処置でもいいからすぐに回復魔法を使って私を治療して…。

私でこんなだからおそろくあつちは相当苦戦すると思うのよ。だからお願い…」

「お姉様…はい、わかりました！」

「それと…」

「はい？」

「久しぶりね、ファイア。会いたかったわ…」

「お、お姉様〜！」

ファイアに抱きつかれて痛みが走ったけど、すぐにファイアは気づいて私に回復魔法をかけてくれた。

シグナム…いえ、ヴォルケンリッター。あなた達の思い通りにはさせないわよ…！

第二十八話

『集結』

シグナムとザファイラはヴィータ救援のために現場へと急行しているところだが、

「ザファイラ：お前、少しやりすぎたのではないか？」

「むう：それを言うな、シグナム。まさかあれだけの戦闘能力を持ってしてバリアジャケツトを纏っていないなかったとは私も気づかなかった」

「そうか。しかしお前をそうも梃子摺らせたとも成ればこの先、彼女は最大の脅威になるかもしれないな」

「：追ってくると思うか？」

「ああ。まだあの目の輝きは失せていなかったからな。時間はかかるだろうが追ってくるだろう。先程、お前が張った閉じ込めるための結界がすぐに破られたことからして確実に、な」

「そうだな。しかし管理局の関係者だからデバイスを所持していると勘ぐっていたのがいけなかった。おそらく私の本気の蹴りで相当内も外もダメージを負っただろう」

ザフィーラはそれだけ述べて顔を俯かせる。

「主はやてのご友人だからやはり心痛むな…」

「だがそれも覚悟のうちだ。賽はもう投げられてしまっているのだからな」

「その通りだ。我等はもう後には引けない事情がある！」



シグナムとザフィーラが別の戦闘区域に向かう少し前…。

なのも既にバリアジャケットをまとってヴィータと交戦状態に入っていた。

「どうしてこんな事するの!？」

「……………」

ヴィータは何も答えず鉄球を取り出す。

ただどのものもデイベインシューターを遠隔操作させてヴィータに当てに行く。

なのはの頭の中にシホの言葉が蘇る。

『いい、なのは。あなたの使う誘導系の魔法は相手をかく乱させるのに打ってつけよ。』

別方向から誘導して相手に攻撃を加えれば必ず意識はそちらに向いて迎撃を取ろう

とする。

そこをなのはの自慢の砲撃で狙い撃ちなさい！

それでもし落とせなかつたら即座にその場から離脱。これを心がけること』

(うん……！)

シホの思惑通り、ヴィータはデイバインシューターを撃墜しようとグラーフアイゼンを振ろうとしている。

なのははその間に、

「レイジングハート！」

《Shooting Mode.》

以心伝心とはこの事だ。レイジングハートは即座になのはの意志を忠実に受け取り己の形を砲撃戦形態に変化させる。

《Divine Buster.》

「デイバインバスター！」

桃色の砲撃が放たれる。

だがヴィータは既にスフィアを打ち落としこちらに向き直り、

「ちっ！ グラーフアイゼン！」

グラーフアイゼンを大振りに構えてなんとヴィータはバスターに向けてハンマー部でフルスイング。

少し拮抗しているが溜める時間が少なかった為、デイバインバスターはどんどん威力を落としていく。

「おおおー！」

(でも……！)

なのははその光景に驚きはしたものの、すぐに意識を呼び戻してフラッシュムーブを使いヴァイターに接近した。

まだ碎かれるまで数秒ある。その瞬間を狙う……！

ヴァイターもなのはの接近に気づいていたがまだ破壊していないためにその場で止まったままだ。

そこをつき、なのはは杖ではなくあるうことか「腕」にリングが展開していてその手には球体のスフィアが形成されていた。

そして魔法陣の足場を作り、

「シホちゃん直伝！ デイバイン・シエイクバスター！」

「ガッ……!!」

その足場に震脚を力強く踏み込んで力を込めたほぼ零距离での掌底を叩き込んだ。

…いつかシホとクロノが漏らした一言。

——感覺で魔法を組む子は予想外の事も起こしてしまうから恐ろしい、と。

シホから教わっていた中国拳法は形だけならサマになってきたがファイアには劣るし威力もない。

だが、それを魔法とミックスしてみたらどうだ…？

と、いう独自の発想が身を結び、一度それを使用した際にシホは盛大に吹き飛ばされ寝込んで治療に丸一日かかってしまった事がある。

生身で魔法をくらえば当たり前なのだが、その時のシホはあまり効果は望めないだろうと踏んでいたため自業自得でもあるが、なのは泣きながら平謝りを何度もしたのは両者にとって苦い思い出だろう。

閑話休題

とにかくそれを喰らってヴィータはただでは済まなかったらしく空中で胸を押さええて苦しむ素振りを見せる。

当然、一撃離脱をその身で叩き込まれているのは距離において、

「どう！　これでお話を聞かせてくれる!?　どうして私を襲ったの！」

「くっ、ぐ…いつてえ、な！」

だが聴く耳持たずヴィータはなのはに特攻をしかけてくる。

だがすぐにフラッシュムーブを使い、再度レイジングハートを構える。

そして先程よりインターバルを伸ばして、

「お話を…！」

《Divine…》

「聞いてっば!!」

《Buster.》

レイジングハートから砲撃が放たれる。

ヴィータはそれを今度は迎撃できる時間がなく無理に体を捻じ曲げてそれをなんとか回避する。

だが、そこで帽子が掠ったのか頭から離れ地面へと破れながら落ちていく。

それを目にしたヴィータの目の色が変わり怒りが滲み出す。

「てめえ…！」

「!？」

ヴィータの怒りの咆哮と睨みになのはは背中に嫌な汗を掻いてしまい、その場で体を止めてしまった。

なのはは知らなかった。殺気を向けられるということをして…。

フェイトと戦った時は、フェイトはジュエルシード集めに専念していてそれに魔導師同士での戦いもなのはが始めてという事もあり敵意は出しても殺気までは出ることは無かった。

プレシア戦にしてもほとんどはシホが戦っていた為に直接殺気をぶつけられる事もなかった。

今までのシホの特訓でもあくまで敵と想定された模擬戦をしてきただけで一度も殺気は受けた事が無い。

だが、今回なのはは生まれて初めて殺気というものを直接ぶつけられて、訳の分からない感情に心が支配されてしまい動きが鈍ってしまったのだ。

「グラーファイゼン、ロードカートリッジ！」

《Explosion. Rocketenform.》

なにより、デバイスの一部が一瞬開き、そこには銃の弾丸みたいのが見えてそれが装填された。

それによりヴィータの持っているデバイスがハンマーから姿を大幅に変えて、片方にドリルのような突起、もう片方は飛行機の噴射口のようにヴィータ自身の魔力も増大する。

今まで見たこともないものになのはの思考はパニックを起こしていた。

「ラケーテン……！」

しかしヴィータはそんななのはの心情にも構わず、噴射口から炎を噴出して遠心力を使い回転をしながらなのは目掛けて突撃してくる。

なのはは考えより先になんとか回避行動を取ろうと距離を取ろうとするが、ヴィータはそれを遥かに上回るスピードで接近してグラーファイゼンを叩きつける。

咄嗟にラウンドシールドを展開したが、それはすぐに破壊され、

「ハンマー!!」

「きやあああーーツ!!」

シールドを破壊し、その威力は衰えを見せずレイジンググハートにまで及び杖部分をまるで削るようにしてなのはをそのまま弾き飛ばした。

なのはもその強力な攻撃に急ブレーキが効かずそのまま一つのビルに激突し、一つの部屋の奥にまで叩き込まれた。

そこでなんとかなのはは体制を立て直そうとするもあまりの威力だった為に立つのも辛く杖を棒代わりにして巻き上がった埃と衝撃による咳き込みをすることしかできないでいた。

そしてそんなところを見逃すわけもなく、ヴィータは追撃してきて再度その尖ったハ

ンマーをなのは目掛けてぶつけにきた。

《Protection》

かろうじてバリアを展開できたがそれも雀の涙ほどの程度で、ヴィータは威力をさらに上げて、

「ぶちぬけえー！！」

《Jawohl》

噴射口からさらに炎が吹き上がりシールドを完全破壊したのはバリアジャケットの上着部分を砕き、その勢いのままなのは瓦礫の山まで吹き飛ばされる。

ヴィータは幾分頭から熱が引いたらしくゆっくりとなのはに歩み寄り、グラーファイゼンを振り上げる。

(嫌だ……こんなところで……ユーノ君……ファイアちゃん……クロノ君……アルフさん……シホちゃん……フェイトちゃん！)

ガキイ！

なのはの心からの叫びは、届いたらしい。

かすかに目を開けば目の前にはフェイトがいてヴィータのグラーファイゼンを押さええている。

そしてなのはの後ろから、

「遅れてごめん、なのは…」

ユーノが優しく声をかけてくれた。

「フェイト、ちゃん…ユー、ノ君…？」

なのはは声を出すのも辛いらしくその声はとても弱弱しい。

ヴィータはフェイト達を見て、

「仲間か…？」

ヴィータの問いかけにフェイトは、

「友達だ…」

静かに、そう告げてサイズフォームを展開して構えた。



Side フェイト・テストロッサ

「テメエら………管理局、か」

「時空管理局嘱託魔導師、フェイト・テストロッサ。」

民間人への魔法攻撃………軽犯罪では済まない罪だ。武装を解除すれば、弁護の機会

が君にはある」

「誰がするかよ!」

そういつて赤い少女は外に飛び出していった。

離脱が速い。相当の腕の持ち主かもしれない…でなければなのはがここまでなる事はないから。

「ユーノ、なのはをお願い!」

「わかった!」

「ふ、フェイトちゃん…」

「なのは。もう大丈夫だよ。なのはの事は私が守る!」

「ありがとう、フェイトちゃん…:…:、あ! ユーノ君。シホちゃんは!」

「シホは一緒じゃないの!?! だからか…」

「だから、つて…?」

「こつちに転移してきた途端、ファイアはシホの魔力を感じる方へ飛んでいつちやつたんだ…」

「にやはは…ファイアちゃんらしい…」

「とにかく、あのシホがそう簡単にやられるとは思えないから大丈夫だと思う。だからお願い…!」

私は二人にそう告げて外に飛び出した。

すると待っていていてくれたのか赤い少女は上空で停滞している。

それなら！

「バルディツシユ！」

《Arc Saber.》

「はあ！」

アークセイバーを放つ。

だが相手の少女も球体の球を何個も作り出して迎撃してくる。

アークセイバーは少女にぶつかったがなにか知らない術式の魔法で防御して突破で

きないでいる。

逆に私は少女の放った鉄球に追いかけてしまふ始末。

そこにアルフが不意打ちでバリアブレイクをして防御を砕くけど…強い。

その後、何合か打ち合ったけど重みが違う。

まるでシホの攻撃みたいだ！

シホ…今どこにいるのか分からないけど無事でいて！



S i d e シホ・E・シユバインオーグ

今私はフィアに肩を貸してもらいながらなのは達の場合に向かっている。

どうしてこんなに早く対応できたのかというところとフェイトの裁判の結果が出て、おまけに管理局の囑託魔導師になれた事を聞く。

その知らせをしようとした所、通じないので来てみたらこんな惨事になっていたというわけだ。

…なにか都合がいい気もしないけど、助かったのは確かだ。

今、なのはの方にはフェイト、アルフ、ユーノが応援に駆けつけているらしい。

私も、急がないと…！

「フィア、もっとスピードは上げられる？」

「さすがに回復しながらだと…」

「そう…無理を言っでごめんなさい」

「いえ…お姉様の無事が確認できれば私はそれだけで…」

「ふふ、ありがと」

「それより、お姉様はどうしてアヴァロンを使わないのですか…？」

「今はまだ戦闘中だからよ。だから無駄な魔力は出来るだけ控えなきゃいけない…あいつらは只者じゃない事は身を持って体験したことだし」

「それなら、私もちよつと無理しますけど回復とスピードアップを並行して行います！」
「お願い…！」

私は連れてもらっている間にも回路に様々な武装を設計しておく。

いつでも出せるように…。

そして市街地に入るところで、

「見えた！」

「ほんとですか、お姉様！」

「ええ。ザフィーラっていう守護獣はアルフト、シグナムという剣士はフェイトと…つて、いけない！ フェイトがシグナムに押されている！」

「そんな…！」

「ファイア！ もう十分回復したからあなたはアルフトユーノの援護を。私はフェイトを助けにいくわ！」

「はいです！」

そこで私とファイアは二手に分かれる。

そしてタラリアを全開にしてフェイトの元へ向かう。

見ればフェイトはシグナムの振上げからの一刀の元、ビルにまで叩きつけられている。

シグナムはフェイトに向かって名を名乗る。

それに律儀にもフェイトは名乗りを上げる。

だけどバルデイツシュにはコア部分に輝が入っている。

後一撃をもらったら大破するかもしれない。

そんなこと、させない…！

シグナムがフェイトに襲い掛かろうとしたその瞬間、

フリーズアウト、ソードバレルフルオーブン
「停止解凍、全投影連続層写!!」

「!?!」

二人は同時にこちらに向きフェイトは「パアツ」という表現がしつくりくる喜びの笑顔をして、対照的にシグナムは「やはり来たな!」というまるでランサーのような好戦的な笑みを浮かべる。

もしかしてシグナムも戦闘バトルジャンキ狂か…?

とにかく私はシグナムが剣の群れから退避したのを確認してフェイトの前に立ち、

「フェイト、無事…?」

「うん。でもバルデイツシュが…」

「分かってる。これ以上の戦闘は負荷に耐え切れないでしょ？ だからフェイトは下がっていて！」

「で、でも！ シホ、体が傷だらけだよ!!? ここに来る前になにかあったの!!?」

「ちよつと、ね…」

そういう言葉を濁しながら私はその手に干将・莫耶と投影する。

「今は休んでなさい。でもいざって時には救援よろしくね。それとこんな時だけまた会えて嬉しいよ、フェイト」

「私もだよ。シホ…頑張つて！」

「ええ…!」

そして私はシグナムと同じ高さまで上がり対峙する。

「やはり来たか。しかしその傷ではそう長くは戦えないだろう?」

「それでもないわ。ここに来るまでに応急処置は済ませてあるから万全じゃないけど相手を出来ないということはないわ。ちなみにもう逃げることはしないの…?」

「それはない。あの時は場合が場合だったからな。騎士として後姿を見せるのはいささか私として汚つた。」

だが、ここには我等の目的は全員揃っている。もちろんシュバインオーグ…お前も含めてな」

「それを聞いて安心したわ。これで私も全力で相手をできる」

私とシグナムはお互いに笑みを浮かべる。

私としてはセイバーの面影を持った彼女と戦えるのはまたとない機会。

普段は楽しむという感情は戦場で起こすことはない。それは慢心を生むからだ。

だけど、この溢れてくる感情は止めようがない。実に気分が高揚している。

「しかし、先程は槍を持っていたようだが…今は双剣か。多様な武装を使うのだな」

「槍はあくまで二番手よ。本来私はこれが主流だから」

「そうか…。しかし無駄に話をしてしまったな。出来ればお前とはゆつくりと話したいところだが…」

そこでシグナムの雰囲気が先程までの落ち着きようがなくなり剣呑になる。

それでフェイトも少し当てられたのか体が微妙に震えている。

…殺気という物は初めてのようね。ちらりと目を向ければなのも相当消耗している事が窺える。

これは早期決戦で終わらせなきゃいけないわね。

そしてシグナムに向きなおし、

「それじゃ…」

「そうだな。いざ尋常に…」

「勝負……！」



S i d e シヤマル

やっぱりシホちゃんも関係者だったのね。

シグナムの提案が功をそうしたかもしれないわ。

今の私は普段の緑を基本とした甲冑じゃなく、変身魔法を使い黒塗りの甲冑の上にダウンコート、目を隠すグラサン。

さらに体格まで男性のようにしたからシホちゃんが私を見ても気づかない自信はある。

でも、それより驚きなのは今シホちゃんがああシグナムと対等に戦っている。

シグナムもそれだけ本気を出さなければ相手にできないということなのかしら……？

「シホちゃん……あなたは一体……」

つい言葉が漏れてしまう。

ザフィーラとの戦闘でかなり追い込んだと聞いたけど、それでもやっぱり戦闘能力は

他の子達と比べるとあきらかに高い。

それにデバイスやバリアジャケットすら使っていないことからして純粹に自身の力だけで戦っている。

この世界にそんな戦闘できる人物は今までいただろうか。答えは否。

やっぱり、そうなるとシホちゃんもあの人と同じ……いえ、今はそれを考えている時間はないわ。

現状で今一番魔力の蒐集がしやすいあの白い魔導師の子……

今はなにかの結界の中にいるから中々手出しできないけど、あれが解けるのを私は待つ。

「だからお願いね、クラールヴィント」

《Ja. Pendelform.》

私の指にある二つの指輪から振り子が射出して機会を伺う。

第二十九話

『敗北』

Side フェイト・テスタロッサ

シホはタラリアを駆使して空中でシグナムと剣を打ち合う。

しかしやはりシグナムはヴォルケンリッターの将というからに相当の腕の持ち主だ。

「はあっ！」

「ツツ！ トレース・オン 投影開始！」

また弾かれてしまった双剣をタイムラグ無しに出現させてシグナムの剣戟を交差させて受け止める。

「いつまで受けに回っているのだ？」

「攻めにまわらしてくれないのはそっちのくせに……！」

シホは悪態をつきながら、形勢を整えようと一度シグナムから瞬動という技法を駆使してビルの上に降り立つ。

そして双剣を破棄した。なぜ破棄したのかと思つたらその手には黒塗りの弓が握られている。

さらに数本の矢が手に出現し、それをシグナムに向けて放つ。

シグナムは急な武装の変更に一瞬戸惑つたようだけどそれでもすべての矢を切り払う。

その後、弓の射出範囲内に進入して同じくビルの上に降り立つ。

「まさか、弓の心得もあつたとはな」

「まあね。私は使えるものはなんでも使うわ。剣、槍、弓…なんならあなたの剣も使つてあげてもいいわよ？」

「冗談を…。しかしやけに現実味のある言葉で怖いな」

確かにシグナムの言うとおり怖い。

シホってなんでもありになるとそれこそ宝石剣やらエクスカリバーなんてとんでもない武器まで出しちやうから。しかも全部殺傷設定というオマケ付きで。

「でも、時間はこつちもあまりないの。私の家族が重症だから早く休ませないといけないし…」

それまで雑談な雰囲気だったのにシホからその雰囲気が消え去り先程シグナムから感じた怖い雰囲気が表に出る。

と、同時にシホの手にはシホの1.5倍くらいはある刀が握られていた。それにシグナムは警戒を強める。

「この一刀……捌けるものなら、捌いてみなさい。秘剣——……………」

途端、シホの周囲の空気がとても冷たいものになり目つきもより鋭くなる。

シグナムもそれを察したらしく、

「必殺の構えか……！ ならばレヴァンティン！ カートリツジロード！」

《Explosion》

（やっぱり……！ あの弾丸でシグナム達は自身の魔力を高めているんだ！）

「——燕返し!!」

「紫電……一閃!!」

同時に放たれる二人の剣技。

シグナムのは私が先程受けてバルディッシュを折られた時と同じく炎をまとった上段からの振り下ろし。

それに対してシホが放った技は三つの剣閃がまったく同時に放たれシグナムに襲い掛かる。

シグナムはそれを二つまでは切り裂く事が出来たが最後の一閃がシグナムの腹部に迫る。

それでシグナムは切り裂かれたと思ったが、

「まさか、片腕の籠手を犠牲にして防ぐなんて…やっぱりまだあの高みには程遠いか。慣れない事はやっぱりしない方がいいわね」

「…何を言う。私は久しぶりに死の恐怖という物を味わったというのだからそう自分を卑下するな」

「そうね、謝るわ…。だからここはやっぱり自身の得意分野で攻めさせてもらおうわ」

そして長い刀を消してまたシホは双剣をその手にあらわした。

「しかし面妖な魔法だな。次から次へと武装を出現させるなど…いや、もしかしたらそれは“投影魔術”か？」

「ッ!？」

するとシホの顔が驚愕に染まる。

でも、投影魔術って一体…？

「どうして、その事を…？」

「なに、少し仲間内に知識を持った奴がいるのでな」

「聞く事が一つ増えたわ…。シグナム、嫌でもその仲間って奴の名前を吐かせて貰うわよー！」

なぜか鬼気迫るシホの発言とともにシホの背後に様々な武器が出現する。

：剣、刀、槍、斧、鎌：中にはそれこそシホの倍以上はあるハルバードまで含まれる。それはもう数え切れないほどのものが待機している。

シグナムはそれを見て「ほう：」と感嘆の声を鳴らし、

「それだけ多種多様な武器を出して大丈夫か？ 全部使いきれぬわけでもあるまい」

「ええ、その通り。私には才はないからどれをとつても二流がいいところ。だから二流なりに使える限界分は修めたわ」

「そうか、納得した。疑問に思っていた事が一つ解消された。

どうりで剣を交える度に無骨な剣で才能が感じられないのにどうして私と同等に打ち合えるのか：それはシユバインオーグ。

お前の剣は長年の努力と修練の賜物というわけだったのだな」

「ええ、正解よ。それじゃ：いくわよ！」

そこからシホはシグナムに呐喊し、それに付き従うように武器達はシホの背後に追尾する。それはさながらシホに付き従う兵隊のように思えた。

シグナムも盛大な笑みを浮かべて、

「面白い！ ならばすべて受け止めて見せよう！」

シグナムも引く気はまるでないらしく同じく呐喊する。

シホはまず手元の双剣を振るう。だがそれは一閃の元に弾かれた。

だけどシホは構わず追尾する一つの赤い槍を掴み、高速の突きの連打を叩き込む。

それをシグナムはすべて剣で受け止め、いなし、回避する行動を繰り返す。シグナムが初めて防御に徹した瞬間だった。

それを好機と見たシホは槍を離し一番私が目に入っていたでかいハルバードを手に取り、シホの腕力では到底扱えなさそうなモノを軽々と振り回し上段の両手持ちでシグナムに振り下ろす。

それをシグナムは剣を盾にすることでなんとか受け止めるがその場で足場が地面に沈む。

「フリーズアウト停止解凍!!」

「!?!」

その言葉とともにシグナムの上空から2メートルはあるだろう剣が四方八方とシグナムに降り注ぎ剣の牢獄を作り上げる。

さらにまだシホに追尾していた武器達が牢獄をさらに強固なものに仕立て上げる。

シグナムは抜け出そうとするが剣が振れないほどの間合いで身動き取れないようである。

「フェイト! この場からすぐに離れなさい!」

「え!?! う、うん!」

シホの叫びが聞こえるが私もなんとなくこの先でシホが何をしようとしているのか分かってしまったので急いで離脱する。

「壊れた…」

「レヴァンティン！ カートリッジロード！」

《Explosion. Schlangeform.》

「幻想!!」

ドドドドドオオオオオオーーツ!!

二人の叫びはほぼ同時。

ただシグナムを中心に牢獄は盛大に爆発を起こした。

それでビルは耐久性が限界を越えたのか黒煙を上げながら崩れていく。

私はただただ呆然としながらもその光景を見守っていたけど、ふと思った。

「ね、ねえシホ！ ちょっとやりすぎじゃないかな!? あれじゃシグナムも死んじやつているかもしれないよ!？」

「そ、そうね…普通の人間なら…はあ、はあ…かろうじて生きていても生き埋めに重症は

…はあ、はあ…負うんでしょうけど…」

シホが胸を抑えて苦しむ仕草をしだしている!?

やっぱりあれだけの戦闘に体が耐え切れなかったのかな!

シホに寄りかかろうとした途端、爆心地から盛大に突風が吹き上がり、煙が払われた先にはシグナムを中心に剣がまるで蛇のようにうねりを上げている。

シグナム自身も悠然とした様子でその場に立っている。

だけど、服装はどこどころ焦げていて破けている。額や体中からも血が流れていることから先程のものがどれほどの威力だったかを物語っている。

「やっぱり、ただものじゃないわね……」

シホは私の心の言葉を代弁してくれるようにそう言った。

確かにあれだけのものを受けて気絶すらしていないなんて凄すぎる。

私なら確実に死んでいたかも……

敵対していた時にシホが本気を出さないと本当に良かったと改めて理解した。

《みんな、聞いて!》

と、私が密かに身震いしている時に突然なのはからの思念通話が伝わってきた。

《私が結界を壊すから、その間に転送を!》

《馬鹿いわないで! 一番の重傷者が何を言っているの!?!》

そこで隣でまだ胸を抑えて息を荒くしているシホがなのはに向かって叫んだ。

確かになのは赤い少女との戦闘で怪我を負っている、レイジングハートも大破寸前だ。

でもそれを言うとシホも結構傷を負っているけど…。

《大丈夫！ 私のスターライトブレイカーならきつと撃ち抜けるから！》

《だからって…！》

《私を信じて！》

なのはの叫びにシホが言葉に詰る。

普段からなのはの頑固さを知っているからこそシホは言葉を詰まらせたのだろう、私はそう感じた。

そして、

《…はあー、もう！ 分かったわ！ それならさつきと撃ち抜きなさい。その間、敵の相手は私達が引き付けるから。みんな、それでいいわね？》

《うん！》《はい！》《おー！》

《だけどそれ撃つたらすぐにアースラの医務室送りだから覚悟しておきなさい！

それに今日は私が夕食当番なんだから食べられないなんて言ったら罰ゲームを与えるからね！》

《は、はい…！》

シホは思念通話だというのに盛大に溜息をついてなのは魔法使用を許可した。ついでにお家事情も言う辺りシホらしい。

《…というわけ。フェイト、連携してシグナムと対峙するわよ。あなたは遠距離からの指示した時にフォトン・ランサーで牽制して！ その隙に大技を叩き込む！》
《うん、分かった！》



Side シホ・E・シユバインオーグ

…さて、それじゃ時間稼ぎといきますか。

シグナムは少し動きが鈍くなっていることから消耗していることは確かだし。

「くっ…ザフィーラから聞いていたがまさか本当に武器すべてを爆弾に変えるとは。厄介だな…」

「その割には表情が笑っているように見えるのは私の気のせい…?」

「なに、今まで様々な敵と相対してきたがここまで緊張する戦いは久しぶりだ。お前という難敵ということも含めてな。」

それゆえに心踊る。久々に高揚とした気分させられる。もっとお前と剣を交えた
いと、な」

「やっぱりバトルジャンキー様々ね…でも、シグナムのそういう性格は嫌いじゃないわ。
それならもう少しだけつき合わせて貰いましょうか。フェイト、いくわよ!」

「今度は二人がかりか…何か策を立てている様だが、ヴォルケンリッターの将である私
がすべて叩き潰してくれよう!」

「それならお構いなく!」

私はそこからすぐに夫婦剣を手にしてシグナムに接近する。

打ち合いながらも、

「しかし、シユバインオーグ。お前はその技術をどうやって身につけた?

確かにテストアロツサに比べればお前の言うとおり才能はない。

だがそれゆえにお前の振るう剣筋は生半可な努力では身につくものではない。

お前の過去に一体なにがあった…? お前の師などもいたのだろうか?」

「なにかって。そうね、特別…か、どうかは分からないけど色々あったことは確かね。

そもそも私に剣の師は確かにいたけど、私とは相性が悪かったからあまり馴染まな
かった。

しいていえば、ある男の模倣をしているといった事が正しいわね。

その男も私のように才はまったくなかったけど、それを覆すほどのものがあつた。

ただ、私はそいつに追いつきたいが為にずっと努力してきただけよ」

「ほう…お前以外にそんな奴がいるのか」

「まあね…。それより戦闘に集中しないとその首、いつか飛んでるわよ？」

「くくつ、確かに。それでは…ツ!？」

そこでシグナムは顔色を突如として変え、なのはの方を見る。

「気づいたわね! フェイト!」

「フォトン・ランサー…ファイア!」

「くつ!」

シグナムは魔法陣を展開してそれを防ぐ。

さらに私は千将・莫耶を叩きつけて先に行かせないようにする。

「これが狙いか…!」

「いかせない!——鶴翼しんぎ、欠落むけつヲ不してラズ!」

私は夫婦剣を投擲してザファイラに仕掛けた戦法をまた使用する。

おそらく話には聞いただろうが、まだあれは本領発揮されていない。

「つ! ザファイラに使用したものか!」

「そうよ、でもまだ…!」

再度、夫婦剣を投影してシグナムに迫る。

「心技、泰山二至り」

私の持つている夫婦剣に反応して弾かれた二本が反応してシグナムに迫る。そしてそれを翻弄するかのごとく手元の夫婦剣を再度投擲して四本の剣はあらゆる方向へと飛翔しようとするが、

「心技、黄河ヲ渡ル」

さらに投影してそれらすべてを引き寄せる。

シグナムの目には動揺が写される。

聞いて知ると、見て知るとでは違いは大幅に激しい。

一度経験をしなければ対策はできまい。

それを身を持つて知れ！

「唯名、別天二納メ」

その詠唱とともに私の手元にある干将・莫耶に変化が生じる。

ありつたけの強化を施し、夫婦剣はその真の姿を現す。

ビキビキッと音を立てて刀身が伸び、その背には岩肌のような突起が形成された。

その変化にシグナムとフェイトはともに驚愕の目をする。

どう信じられよう。先程までスリムな剣だったものが今や鷹が翅を広げたが如く、さ

さくれ立っているのだから。

「つつ!!」

「——両雄、われら共二命ヲ別ツ……!」

私は大きく巨大化した剣を振り上げる。さらに周りには四本の干将・莫耶が私の剣に引き寄せられ迫ってくる。

そこでシグナムの表情は悔しさや後悔で塗られるが、だがそれも一瞬……すぐに清清しい顔をして「さすがだ」と小声で呟く。

そんな顔をされたらもう後には引けない。私は死なない程度に振り下ろそうとし、

「——ああ。それもいいがそいつを消されるとなにかと都合が悪い。だからお前はここで退場だ」

そんな初めて聞く男の言葉とともに私の脇腹に何者かの強烈な蹴りが入るとは、思っ
て、いなかった…。

なぜか遠くでフェイトの泣きそうな叫びが響いてくるが、ザフィーラと同じ場所を、
さらに容赦なくまるで抉るように叩き込まれた為、さらに遅れて背中にとてもではない
衝撃を感じ私の意識はそこで途切れる。



Side フェイト・テスタロッサ

「シホッ!!」

「シュバインオーグッ!!」

私は後悔した。どうして戦闘に集中しているシホの周りを警戒していなかったのかを……

「貴様、何者だ!? 私とシュバインオーグとの戦いに横槍を入れるとは!!」

シグナムも、シホを蹴り飛ばした仮面をつけた謎の男に叫んでいた。

でも、それよりも今はシホの安否が!!

蹴られたシホはすごい勢いで一つのビルに叩きつけられ口から大量の血を吐き出し、さらに衝撃で割れたガラス片がシホの体中を傷つけて地面に落下していく。

バリアジャケットなら平気だろうけどシホは纏っていないからダメージは軽減されず全部体に伝わってくる。

装備もすべて解けて普段着になっていることから気絶したことは明白……!

しかも仮面の男はそんな完全に無防備なシホに対して、クロノがよく使う『ステインガー・ブレイド』をいくつも容赦なく放った。

それによってシホは落下していきながらそれに晒されて両手足に刺さりながら地面に墜落してしまった！

「シホーッ!!」

私はすぐにシホの後を追った！

背後でシグナムが剣を構えて、

「なぜ追撃した!?! もう決着はついていただろう!?!」

「あいつは一番厄介な奴だ…。だから手加減せずに放った。代わりに敵を排除してやったのだ。感謝はされど恨まれる筋合いはない…」

「貴様あーッ!!」

シグナムは切りかかったけど、それを仮面の男は受け止めて、

「逃げなくていいのか…? 白い魔導師が砲撃で結界を壊したぞ?」

「ぐっ…!」

シグナムは男の言葉に動きを止めて、歯をギリツと鳴らした。

私は傷だらけのシホを抱きかかえながらも、

「お前は誰だ!?!」

もう泣きながら叫ぶしか出来なかった。

だが男は無言。

私の怒りは頂点に達しようとした時、
カッ！

「なっ!!？」

「シホッ!!？」

「あれは、ベルカの紋章陣……！」

シホの体が光り輝いて私達の地面にシグナム達と同じ三角の巨大な朱色の魔法陣が浮かび上がる。

そしてシホの宝石が浮かび上がり、

《A n f a n g.》

その機動音とともにシホの体が光に包まれ、その光はそのまま男に向けて突撃する。

「なにつ!!? ぐうっ!!」

男は手をかざし防御魔法を展開するがそれを紙くずのように砕き、光はそのまま男の右腕を通過して腕を光で焦がす。

男の背後で光は止まり無言で目のような部分で男を睨む。

それで男は「くっっ！」という言葉を残し転移魔法で撤退する。

「……シホ？」

「シユバインオーグ、か……？」

私達は呆然とその光を見ることしかできないでいた。
だが光は、

《マスターを…頼みます。早くしないと…世界が暴走しますから》

光の人物はそう言った。

でも、世界の暴走って一体…。

それを聞いただそうとしたけど光は輝きを失いまたシホの傷だらけの体が晒され、落下しそうになる。

私を受け止める前にシグナムが受け止めてくれて、

「…すまない、テストアロッサ。シユバインオーグの事、任せた…」

私にシホを渡して、そのまま名残惜しそうに、そしてとても悔しそうにシホを見ながら撤退していった。

そしてしばし呆然としていたけど、ふと…

—— シャリ、シャリ、シャリ…

なにか、シホの体から何かが擦れあう様な、異様な音がする。

それはあの仮面の男に蹴られた腹部辺りから…。

それで私は恐る恐るシホの血の滲んでいる服をめくった。

——
イヤアアアア——
!!!!!!

瞬間、私は自分でも信じられないような叫び声を上げていた。

目から大量に涙を流して、目の前の光景を否定するかのように、ただただ泣き叫んだ。皆が駆けつけてきてくれた時、落ち着きの言葉をかけてくれたけど、そんなのただの気休め……。

だって……シホの腹部から……剣先……が幾重にも突き出しているのだから。

「お姉様!!? こ、これは、もしかして魔術回路の暴走!!?」

「ファイアット! 魔術回路の暴走ってなにさ!」

「説明は後で……! 今はお姉様を早く治療しないと命が……ッ!」

ファイアットはなにか知っているようだけど今は目の前の光景がただただ信じられず

ユーノとファイアットが治療を施している光景を、体を震わせながら見ている事しか出来ないでいた。

気づけばアルフの腕には傷ついて気絶しているのが持たれている…。

それで私は何度目かになる衝撃で意識を手放しそうになったけど、そこでファイアットがこちらを向き、

「フエイト、目を逸らさないでください！ まだこれだけならお姉様は死にません！
だから気をしっかり持って…！」

ファイアットが目に涙を溜めながらも必死に私を励ましてくれた。

それで少し冷静になれた…。

そうだ、まだあきらめちゃいけない！

一番シホの事を知っているファイアットが頑張っているんだから私もしっかりとしな
いと！

…そうして、私達は見守っている中、管理局から医療スタッフが何人も到着して私達
は收容されていった。

第三十話

『デバイス起動』

S i d e 高町なのは

…目を、覚ます。

覚ましたら白い天井が見えた。

確か、私は…胸から突然人の手が生えてきたけど構わずスターライトブレイカーを放った後、そのまま気絶してしまったんだ。

そして私を見てくれている先生にここはどこと聞いたら『時空管理局本局』だと聞いた。

その後、少し検査を受けている間、フェイトちゃんの事を聞いたら「大丈夫」と言ってくれたけど、

「それで、その…シホちゃんは？」

「……………」

先生は目を細めて何も答えてくれない。

それにどうしてそんな悲しそうな顔をしているの…？

私以外はそんなに傷を負っていなかつたんでしょ？

疑念が渦巻くと同時に、とても嫌な予感がした。

それにこの場には他の皆がいない…。

どうして、どうして皆いないの…？

気づけば私は先生の裾を握っていた。

「シホちゃんのところ…連れてつてもらえませんか？」

「それは…」

先生はなお言葉を渋っている。

そこにちようどフェイトちゃんとクロノ君が部屋に入ってきた。

だけど、二人とも表情はとても暗い。私に元気に振舞うようにしているけど、それは過去に見たお母さん達の姿と重なって見えた。

「フェイト、ちゃん…。シホちゃん、は…？」

「なのは…」

「先生、僕は外に出ていますよ。フェイト…気持ち分かるがなのは正直に話そう。そして落ち着いたら後から来てくれ…」

「うん。ごめん、クロノ…」

クロノ君は素晴らしい残りその場から出て行った。

残されたのは私とフェイトちゃんだけ…。

本当なら再開の喜びをしたいところなのに、空気がとても重たい…。

「なのは、聞いて…」

「フェイトちゃんも、どうしたの？ 私はもう大丈夫だよ。それより…シホちゃんや皆

のところにいるの？」

「なのは…ゆつくりと落ち着いて聞いて。シホは今…」

「いや…！ 聞きたくない！」

「…シホの事を話すんだ。だから気を取り乱さないで聞いて、お願いだから…！」

フェイトちゃんは突然抱きついてきてその目に涙をにじませる。

その途端、不安感がさらに増大した…。でも、聞かなきゃいけない。

「うん…、フェイトちゃん、話して…」

「なのは。今、シホは………」

私はフェイトちゃんの話した内容を聞いて顔を青くした。



S i d e リンディ・ハラオウン

…緊急治療室の前でユーノくん、アルフさんは無言で佇んでいる。

ファイアットさんに至っては魔術回路の暴走の件について説明が終わった後、気が抜けてしまったのか地面にうずくまって涙を流しっぱなしだ。

それをエイミイがどうにか落ち着かせようとしているが、エイミイすらそうしてなければもらい泣きをしてしまいそうだ。

「…先生、シホさんの容態は…？」

私は皆に聞こえないように離れた場所で医師にシホさんの容態を聞いていた。

「…それが、非常に危険な状態です。」

様々な打撲と切り傷が目立ち一番酷いのは脇腹ですね。

なまじ白い肌ですからそこだけまるで濃い絵の具を塗られたみたいに青く、そしてひどく腫れあがっています。調べてみたところ、肋骨が数本折れて内臓にまで達しています…。

それに私達には見ていませんがそこから剣が幾重にも突き出していたと聞きます。

今はもう無くなっていますが、映像を見たときは私達も我が目を疑いました。

魔術回路の暴走と聞きますが：いや、彼女の世界の魔術師達は全員そういった自身の属性にあつたなにかしらの暴走の危険を孕みながらも魔術を行使していると聞きますからシビアとしかいえません…」

「ええ。そこは私も異論ありません…」

「でしよう？ …さて、話が脱線しましたが他に魔力ダメージに関してもそうです。

彼女はバリアジャケットを纏わないで戦闘をしていたそうで、それで本来軽いものも直に体を受けていたから何かの特殊な服装で緩和させていたようですが相当なものでしょう。

そしてもつとも最悪なのは、最後に受けたという魔法の傷です。あれは非殺傷設定などされていませんでした。あきらかに殺す目的があつたと言わざるをえません。

両手両足に深々と突き刺さっていたらしく治療魔法でなんとか塞ぎましたが：当分は目を覚ましても満足に動くのは不可能かと…」

「そうですか…。いえ、ありがとうございます。引き続き治療をお願いします…」
「全力を尽くしてみます」

医師は報告をしてまた治療室の中に入っていった。

私は一瞬中が見えてしまい思わず口をおさえて涙を流した。

治療室の中のシホさんは体中に包帯を巻かれ、それでも血が滲んでいて口にはめられている酸素マスクでも見て分かるくらい荒い息遣いをしている痛々しい姿を垣間見ってしまったからだ。

ふと、気づくとクロノ、なのはさん、フェイトさんが遅れて治療室の前にやってきていた。

なのはさんはファイアットさんに抱きついて一緒に涙を流して、フェイトさんもアルフさんに抱きしめられた途端、声を殺して涙を流している。

まだこの子達にはこんな場面には直面して欲しくなかった。
クロノですらやりきれない気持ちからか壁に拳を叩きつけている。

だけどもいつまでもこのままではいけないと思ひ私は皆に声をかけた。

「皆さん、お気持ちちは分かりませんが今は静かに、シホさんの回復を祈りましょう……」

それで皆さんはどうか泣き止みましたけど、一向に重苦しい空気は消えませんが。

それにあんなシホさんのスプラッターな光景を見たのだから当然ね。

なにか話でみんなの気を紛らわさないといけません。

「ねえ、クロノ。シホさんの首飾りの宝石は今持つているかしら……？」

「……はい。先程、検査を終えまして返されました。結果は起動した事なのですが、また眠りについてしまったみたいで応答に答えてくれません。」

ですからシホが目覚めたら返そうと思ってはいますが…」
「そう…」

いけない…。話を外してしまった。

だけど、そこでファイアットさんが、

「せっかく…私専用のデバイスができたからお姉様に見せてあげようとしたのに、こんな事になるなんて…」

ファイアットさんは懐からシホさんの宝石と色違いの碧色のデバイスを取り出した。

形はファイアットさんの希望でそうなった。デバイスモードはミッドチルダ式には珍しく銃型である。

閑話休題

ファイアットさんがそれを仕舞おうとした時、それは起きた。

クロノのポケットに入っていたシホさんの宝石が浮かび上がって、それに共鳴したのかファイアットさんの宝石も空中に浮かび上がった。

全員その場で何が起きているのか分からず驚きの表情をして、私はとりあえずまくりーにすぐに来てもらうように連絡した。

《破損箇所をあなたを取り込んで修復します。一時、その身を私に委ねて取り込んでも構いませんか？ マスターを救う為に必要な事です》

《私が役に立つのでしたらいくらでも。私もマスターの泣き顔は見たくありません》

《了解いたしました。では、取り込む前にあなたの名をお聞きたい》

《マグナと申します》

《マグナ、ですか。いい名です。それではマグナ、あなたを今から吸収します》

ファイアットさんのマグナと謎のデバイスが会話しだしてお互い意見が一致したらしく、マグナはまるで散っていくように謎のデバイスに吸収されていった。

《破損箇所、修復開始…》

デバイスフォルム。パターンをマスターの剣の丘から抽出した武装で補います。

ファーストフォルム〔干将・莫耶〕を元に〔ツヅヱ^双ヱ^子リ^座ング^形フォルム^態〕。

セカンドフォルム〔無銘 西洋弓〕を元に〔シユ^射ツツ^手エ^座フ^形フォルム^態〕。

サードフォルム〔干将・莫耶オーバーエッジ〕を元に〔オーバーエッジフォルム〕。

…基本各フォルム設定完了。以降、フォームは増える可能性アリ。

魔法の構築、かつての私の技を継承完了。

魔術回路直結、全情報取得。魔術式デバイスシステムを復旧。マスターが使用する

魔術・技術・真名開放”を擬似的に再現、継承完了。非殺傷設定完了。

修正項目、マスターの内に”魔力変換資質【風王】”の存在を確認。各フォルム書き直し設定完了。

カートリッジシステム、破損箇所修復完了。正常起動。

騎士甲冑をマスターの武装から選出。過去・現在・未来の設定をもとに再構築、設定完了。

マグナの情報：ミッドチルダ式デバイスの情報を登録。

マグナの意識データをそのまま維持し、アームドデバイスの設定を追加。

カートリッジシステム、継承完了。

各フォルム、マグナのマスターの意向の元、再構築完了。

以後、私とマグナはミッドチルダ式・ベルカ式・魔術式の三面を持つデバイスとなり新たなデバイス”トリニティデバイス”として登録。

最後項目、私の内に眠る人格を呼び起こします…。ユニゾンデバイス”セイバー・アルトリア・ペンドラゴン”の目覚めの時。

全破損箇所修復完了。システムオールグリーン、デバイス名”アンリミテッド・エア

”起動”

起動という言葉がトリガーになり、サファイヤの宝石…アンリミテッド・エアと呼ばれたデバイスは一際大きな輝きを放ち、それは廊下を埋め尽くす。

そして光が晴れた時には、その場には、

「サーヴァント…いえ、ユニゾンデバイス、セイバー。ここに現界いたしました」

金髪碧目で青と白を基調としたドレスの上に銀の騎士甲冑を着たセイバーと名乗る女性がいた。

皆さんはあまりの出来事に目を丸くしていますがどうか接触を試みてみようと思つて、

「あの、あなたは一体…?」

「説明は後ほど。それよりシロウ。いえ、シホ…マスターは現在どこにいますか?」

「えっと、治療室の中で今手術中ですが…」

「そうですか…。はあ、やはり数年経つてもイリヤスフィールの願いがあつても根本的なところは変わっていませんね…」

そういうとセイバーさんは私達の制止も聞かず治療室に入つていつてしまいました。

当然、中にいたスタッフは勝手に入ってくるなど怒鳴ってきますが、

「マスターの一大事だ。切り捨てられなくては静かにしていただけるとありがたい…」

セイバーさんの威厳のある言葉で全員押し黙ってしまった。しかし物騒な物言いですね…。

それでもう良いとばかりにセイバーさんは痛々しい姿のシホさんの前に立ち、「シホ…また会えて嬉しいですが、このような再会は私としては不本意ですよ？

ですがもう安心してください。宝石翁からあなたの体には私の鞘が再度埋め込まれていると聞きました。

サーヴァントではなくなったこの身では聖杯戦争の時のようにすぐには全快いたしませんし、こうして鞘の能力を発揮するのも限定的で今回はこれ一度限り…。ですがシホの為です。力は惜しみません」

セイバーさんはシホさんを抱き上げてその身を光らせるとシホさんの体も発光しながら包帯がシウルシウルと解けていつて傷口が見る見るうちに塞がっていき、一番酷かった脇腹の青痣もしだいに消えていった。

この光景を見て奇跡という言葉が一番相応しいだろう。

多少の傷はまだ残っているものほとんど治っていてシホさん本来の白い肌が露出した。

それで唯一、助けがあるとすればシホさんの体には先程までの布が被さっていて裸は晒していなかった。クロノとユーノ君が顔を赤くしているから後で二人とも叱らなけ

ればいけませんね。

それはともかく、セイバーさんは一息つくとシホさんを台に降ろし、その手にフィアットさんのデバイスを具現化させ、

「マグナの持ち主は貴女ですね。今後もシホと仲良くしてあげてください」

「は、はい……！」

フィアットさんにマグナを返し、

「そうです。マグナ、あなたにはもうその名だけでは色々と不足でしょう。あなたに新たな名を授けます。……“マグナ・スピア”と」

《感謝します。その名、ありがたく名乗らせてもらいます。マスターも今後、この名でよろしく願います》

「う、うん……でもマグナだけで呼んでもいいよね？」

《マスターがそう望むのならば……》

「よかったあ……」

安心しているフィアットさんを微笑ましそうにセイバーさんは見ながら、

「……さて、それでは私はまだ目覚めたばかりですので本調子ではありません。

ですからまだシホが『本当の力』が目覚めるその時まで眠りに着く事にします。

それとシホには『無茶はほどほどに』とお伝えください。

傷は治ったとはいえ、当分の戦闘行為は出来るほど体は快復はしていないのですから…。

最後に、私の変わりにアンリミテッド・エアがあなたの力になるでしょうとも、伝えてください。

それではまたいつか…」

セイバーさんはその存在を薄めて一つの光玉となりアンリミテッド・エアの中に入っていた。

先程からの一連の騒動がまるで嘘のように、でもシホさんの体は治った事は事実で一同は少し間を置いた後、盛大に喜びの声を上げた。

でも、私とクロノ、エイミーはいくつか疑問点を上げあっていた。

どうしてシホさんの魔法陣は古代ベルカ式と呼ばれるものなのか…。

今まで発見されているので魔力変換資質は「炎熱」「電気」「氷結」の三種だけ。魔力変換物質【風王】などというものは聞いた事がない…。

剣の丘、サーヴァント、聖杯戦争、トリニティデバイス、セイバーというユニゾンデバイス。

そしてなによりセイバーさんが言ったシホさんの本当の力の目覚めとは一体…。



Side シホ・E・シュバインオーグ

…夢を見ている。

その夢の中でイリヤに似た、でも姿は成人した綺麗な女性。

その女性は右目が緑、左目が赤のオッドアイのどこかセイバーに似た王の威厳を持つ女性に片膝をつき、忠誠を誓っている風景。

『■■■■下…いえ、■■■■王女。』

どうか■■■■てくだ■■■■。■■■■は…あ■■■■に忠■■■■った■■■■、■■■■にど■■■■私を■■■■家でも■■■■使■■■■いという■■■■移■■■■いう■■■■を■■■■、■■■■する■■■■…!』

『■■■■術■■■■、■■■■ルン。■■■■…で■■■■た■■■■な魔■■■■術(■■■■

■■■■)はもし■■■■ならばこ■■■■世にさら■■■■いが■■■■る事が■■■■。

■■■■も■■■■は危■■■■い■■■■し、あな■■■■身も■■■■こ■■■■もう■■■■あり
ました…。私の■■■■いる■■■■はそん■■■■い運■■■■欲しく■■■■…』

『し■■■■…!』

王女と呼ばれた女性は涙を流している彼女を抱きしめ、
『め■な■…』

抱きしめながらも、なにかの魔法詠唱とともになにかの穴が開き、女性はその穴に吸い込まれていった。

『女！ い■、い■か■の元に■！ だ■…！』

王女は無言で笑みを浮かべた。

そして謎の穴は閉じてしまい、女性は世界をさ迷う…。

なに、この夢は…？ ノイズ交じりで内容がまったく理解できないし、きつとこの記憶も私のものじゃない…。一体…？

ふと、さ迷う女性は私のほうに歩み寄ってきた。

え…？ これは、夢のはずなのに女性は意識してこちらに歩いてくる。

そして私の前に立ち、

『どう■私の■を■く■だ■。きつと■の■代に■するで■う。■

■どうか■く■だ■…』

また、ノイズがして女性の言葉が聞き取れない…！

しばらくして急に私の意識は光に向かっていく…。

.....

.....

.....

…そこで私は目を覚ました。ここは、どこかの医療施設、かな。

それよりさっきの夢はなんだったのだろうか？　あまり内容が思い出せない…。

それより私はやけに電気の光が眩しいので光を遮ろうとしたけど、手があまりいう事を利いてくれない。

それどころか全身があまり動かせない。

それで無理に動かそうとして、

「痛ッ……！」

激痛が全身を駆け巡る。

よく見れば体中に包帯が巻かれている。　なんで…？

ふと、ベッドの上に重みを感じてそちらを見たらファイアが目を腫らして寝ていた。

どうやら私の事を見ていてくれたらしい。

起こすのも悪いと思ったけど現状を知りたいのでファイアを起こすことにした。

「お姉様、お姉様ッ!!」

…よほど嬉しかったのかな？

でも、全身が動かせないほどの重症を負ったシホちゃんに容赦なく抱きつくなんて、

「ファイアちゃん…」

「え…なのはさん…?」

「少し、頭冷やそうか…」

ミギャー…!!?

ファイアちゃんには少し地獄を見せてあげました。

内容は…言えません♪

あれー? どうしたのフェイトちゃん、そんなに顔を蒼白にしてガタガタと体を震わせて。

それにクロノ君とユーノ君は仲が悪いのにどうして怖いものでも見たような目をしてお互いに身を寄せ合っているの？

アルフさん、どうして動物形態になつて毛を逆立たせて隅っこで丸くなっているの？

…まあ、別にいいよね。シホちゃんの身を案じてした事だから私は何もいけないこと

はしていません。

第三十一話

『グレアムとの出会い』

S i d e シホ・E・シユバインオーグ

フィアの抱きつきによつて気絶した私は再度、目を覚ますとそこは混沌とした光景を形作っていた。

なぜかフェイトは顔面蒼白で体が震えている。

アルフは気絶する前は確か人型だったのに今は狼形態で部屋の片隅で全身の毛を逆立たせて頭を伏せてガタガタとフェイトと同じように体を震わせている。

クロノとユーノはいつもの仲の悪さが嘘のようにお互いに身を寄せ合つて怖いものを見たみたいな感じに目の焦点が合っていない。

フィアに至つては正座で全身を大いに震わせながらゴメンナサイ、ゴメンナサイとまるで壊れたレコーダーのように謝罪の言葉を繰り返している。

まさしくカオスと呼ぶべき空間で一体何が起こつたのか分からず、ふと全員の視線の

先に目を向けた途端、寒気がした。

そこにアクマが顕現していた。

：いや、なのはなんだけどなぜか笑顔なのに目がやけに据わっているように見えるのは私の気のせいかな？

そこでもようやく私が起きたことに気づいたのかなのはこちらに振り向いた。

や。しかしその据わった瞳のまま振り向かないで。黒化した桜みたいで怖いです…。でもそれは一瞬で納まり変わりに涙が次から次へと流れてきている。

「シホちゃんツ…！ よ、よかつたよお…もしかしたら目を覚まさないじゃないかと思ったんだから…」

それで先程までのカオス空間は一掃されたようで皆が私に声をかけてくれる。

また心配させちゃったみたいね…。

「ごめんなさい…」

私は嬉しい気持ちになり、申し訳ない気持ちにもなり、素直に謝った。

でも、どうして私は気絶を…というかこんな包帯だらけになっているのだろうか？

「ねえ、クロノ…ちよつといい？」

「なんだ？」

「どうして私こんな状況になっているの…？ シグナムに手加減で気絶させる目的で斬

りかかろうとした所まではなんとなく覚えてるんだけど、それ以降は記憶が曖昧で……」

「覚えていないのか……？ なるほど、それほどまでに強烈だったのか。くそつ、捕まえた時には民間人暴行罪と殺人未遂の罪で被告席に立たせてやる」

「……どういふこと？」

「それはですね、お姉様——……」

それから皆にどうして私がこんな事になったのか色々聞かされた。

そして暴走状態になっていた事を私は知る。みんな、トラウマにならないければいいけど……。

「あー……暴走状態を見られちゃったのね」

「シホ。フィアットから聞いたが改めて聞くが魔術回路の暴走とは一体なんなんだ……？」

「それね。魔術回路は魔術師の擬似神経っていうのは前に話したわよね？ それで回路を開く際、魔術師はなにかしら痛みを伴うわけよ」

「痛み……？」

「もともとある本物の神経にさらに擬似神経が上乘せさせられるのよ？」

だから魔術回路を開く際に感じる痛みは魔術師にとって当然のつき物。

そしてそれを制御して己の自由自在に扱えるようになれば痛みも気にしなくなる訳。でもなんであれ完璧に制御なんてできるわけではない。制御に失敗した魔術師はその属性によって様々な暴走を起こすのよ」

「た、例えば…?」

「私の世界での基本属性は『地水火風空』の五種類。総じて五大元素——アベレージ・ワンともいうわ。

だから一つの典型的な例を上げると火の属性を扱うものはこの世界でもよく聞くオカルト現象の一つ、自然発火現象を起こして体が燃え尽きたりしちゃうわ。

後はこの属性に限らず魔眼使いの例：目は脳に直結しているから行使し続けると脳のオーバーロードで発狂して、最悪廃人ね。

ようするに私達魔術師は死というペナルティーと隣りあわせで魔術を行使しているのよ」

それでその事を話していなかったファイアも含めて全員驚愕の表情をしていた。そしてすぐに、

「それじゃシホちゃんは大丈夫なの?!」

「ああ、私の場合を話していなかったわね。私の属性は特殊でね…五大元素に含まれない『剣』という属性なのよ。」

だから今回は瀕死の重傷を負った事がトリガーとなつて魔術回路が暴走して体から剣が突き出してきたつてだけ。

(…ま、本当は固有結界の内部からの暴走なんだけどこれはバレるとまずいので話さないでおこう)

…ああ、今回のような事は滅多に起こらないから大丈夫よ？ 前にも重症を負つても剣が突き出る事はなかったでしょう。

ただ今回は体力、魔力、精神力ともに大幅に消費していた事と、意識が一瞬で飛ぶほどの衝撃を受けた事…それに他にも詳しく話せないけど色々要因が重なった事が原因だから。

…だからそんな泣きそうな顔をしないで皆

私は心配かけさせないように笑顔を浮かべた。

だけど最後まで聞いていたフェイトが顔を俯かせて、

「ゴメン、シホ…私がつと周りを警戒していればシホはこんな事には…アタツ!」

「ツツ…あ、謝らないの。フェイトはあの状況ではベストな行動をしつかりと取つていたわ。ただ、その仮面の男がフェイトのそれを上回っただけの話…。だから気にしないこと。いいわね?」

私はあまり力の入らない手を無理に動かしてフェイトの頭に叩きを当ててネガティ

ブな考えを訂正させる。

「う、うん…。でもそれじゃ私の気持ちじゃ晴れないから改めて謝らせて。ゴメンね、シホ…」

「…まあ、うん。フェイトがそうまでいうなら私は構わないわ。でもいつまでも引きずらない事。それより次にどうするか考えること。いいわね？」

「うん！」

「…でも、そんな大怪我を負ったっていうのにどうして私の怪我は、包帯は巻かれているけどこんなに軽いの…？」

「それはだな。まあ、実際に見てもらったほうがいいだろう」

クロノは一つの画面を開いて何が起きたのかを見せてくれた。

そして私は非常に驚いた。

「せ、セイバー!?!」

「やっぱり顔見知りだったか」

「え、ええ…。それよりアンリミテッド・エアとかユニゾンデバイスとか魔力変換資質

【風王】って…なに？」

「それは今調査中だ。もう少ししたらエイミイから報告が来る頃だろう。それよりどうして今まで君はベルカ式が使える事を隠していたんだ？」

「ベルカ式…？ あ、もしかしてあの三角の魔法陣の事？」

「そうだ。あれを扱えるものは希少なんだぞ？ しかも調べた所、シホのものは古代ベルカ式らしい…。魔力変換資質【風王】もレアスキル判定が出たぐらいだからな」

「…もしかして、それって発見されている例が私だけって奴？」

「その通りだ。異世界から来たという諸々の事情も含めてもう君は注目の的といっても過言じゃないくらいだ」

「あちゃあ…また厄介なことにな」

「まあ、諦めることだな。こればかりは僕達だけじゃカバーしきれないからな。つと、話が脱線していたな…。」

「それで以前にも見せた回復力も含めてセイバーという人物は何者で君に何をしたんだ？」

「え、つと…。」

私は視線をつい泳がせてしまう。

その中で唯一事情を知っているフィアに目をやったけど《ゴメンナサイ、お姉様。私じゃ抑えるのは無理です…》という思念通話が聞こえてきた。

それでもう諦めもついた。

「…はあ。それじゃまだ私の事は全部話せないけど、セイバーと私の関係は話すわ」

「シホちゃんの一部はまだダメなの…?」

「話しても別に大丈夫だとは思うけど、クロノ達には悪いと思うけど私はまだ管理局を完全に信用している訳でもないの。」

「だから全部話すならそれ相応の時と場所で話すわ。だからファイアも私がいいというまで他言無用よ」

ギンツ!

「うっ!?!」

その瞬間、全員の視線がファイアを貫いたのを幻視した。しかもやたらに痛そうだ。

「ただとすぐに落ち着きを取り戻したようで、」

「…そうか。まあ君の世界の考えだと組織というのは恐怖の対象だからな。だからここでの話は艦長達だけでなんとか広がらないように尽力してみるよ」

「ありがと。それじゃ私とセイバーの関係だけど端的にいうと元マスターと元従者の関係ね」

「マスターに従者…?」

「ええ。そしてセイバーの真名は映像で見た限り皆聞いたと思うけど、アルトリア・ペンドラゴン」。彼の有名なアーサー王よ」

「「「「「……………はっ?」」」」」」

瞬間、フィアを除いたなのは、フェイト、ユーノ、アルフ、クロノの時は停止する。

私は即座にフィアに耳を塞ぐように促がし、私も耳栓を投影して塞ぐ。

さらに部屋を防音結界で完璧に外に響かないように塞ぐ。

そして時は動き出す。途端、大声が部屋中に響き、防音結界のおかげで行き場をなくした音は部屋を盛大に揺らす。

「…ま、やつぱりこういう結果になったわね」

「はいです…」

フィアは手だけでは完全に防げなかったらしくグテツとしている。

………

………

………

とりあえず全員落ち着いたので話を進めることにする。

「それじゃ次に話すことも多分大声を上げるだろうから事前に言っておくけど驚きだけにしておきなさいよ？ でないと私達の身が持たない…」

『はい…』

目を鋭くさせて警告をしておく。

投影した耳栓にヒビが入っているのがいい証拠だ。

「それでどういった経緯かは省くけど私の体の中にはアーサー王の失われた鞘……
全て遠き理想郷^{アヴァロン}が埋め込まれているわ。

それで昔にちよつとした事件でアヴァロンを触媒にしてセイバーが私のサーヴァントとして呼び出されたのよ。

本来のアヴァロンの効果は伝承どおり『不老不死』。でも私は真の担い手ではないから副産物の体を元に戻そうとする治癒効果だけが働いている。

だからさっきの魔術回路の暴走もそれのおかげですぐに納まったわけ。

そしてセイバーとセットで私は治癒能力が格段に効果を増すのよ」

「な、なるほど……だから異常なほどの回復力を君は持っているわけか」

「ええ。セイバーがいない状態じゃ鞘に魔力を送り込まないと回復しないから魔力が枯渴した時はそれこそ死を覚悟するものね」

「ハイ、センセイ。シツモンガアリマス」

私がいじみと語り終えるとユーノがロボットみたいな口調で話しかけてきた。

……って、ういか誰が先生よ？

「なに、ユーノ？ それとその変な喋り方はよしなさい」

「…わかった。それでサーヴァントってなに…？」

サーヴァントか…。

「まあ、こちらの世界での言葉の通り使い魔みたいなモノだけど比べると可愛そうな程、力の差はあるわね」

「むっ、それってどれくらい差があるっていうんだい…？」

「あ、アルフ、落ち着いて…？」

「…英雄って存在は信じる？」

「英雄…？」

フエイトがアルフを宥めている間に私は話を進める。

「ええ。英雄よ。英雄は過去の様々な理由や功績によって祭り上げられて私達の世界ではどこにあるかもわからない“座”っていう場所に英霊となって居座るの。」

歴史や文献、架空の存在でも…それこそ過去、現在、未来、並行世界に限らず名を残してきた人物のほとんどは、確証はないけど英霊となって座に居座っているといても過言じゃないわ。

そして前に説明した抑止力の説明に加えて、世界が危険と感じた瞬間に召喚されて…後は前の説明どおりにその場のすべてを滅ぼす自由意志を奪われた掃除屋として働くの。

諸説あるけどオーデインのヴァルハラが一番いい例えかもね。英雄の死後にオーデインがヴァルハラ神殿に招待していつか起こる決戦の準備をするっていう神話…まさに的を得ていると思わない?」

「確かに…」

「そしてサーヴァントって言うのはある戦いの儀式で召喚される七つのクラスの事をさすの。」

その七つのクラスは剣の騎士『セイバー』、槍の騎士『ランサー』、弓の騎士『アーチャー』、騎乗兵『ライダー』、魔術師『キャスター』、暗殺者『アサシン』、狂戦士『バーサーカー』…。

基本この各クラスに当てはまる英霊が召喚されるのよ。セイバーは文字通り剣を扱うもの。だから騎士王とまで呼ばれたアーサー…アルトリアが召喚された。

今はどうしてかユニゾンデバイスっていうものになっているらしいけど、実力は折り紙付きよ。

なんせ英霊に対して人間はどんなに強くても決して勝てないって言われるほどなんだから。

そして、これが皆にも分かる最もの理由だけどエクスカリバーは彼女が本当の担い手よ。私が使用した時とは威力は段違いといっていいいわ」

「そ、そりや確かにあたしじゃ敵いそうにないかもなあ……」

「で、でもお姉様はアール……!」

ギンツ!

「はわっ?!」 ゴメンナサイ! なんでもありません!」

アルフが頭をボリボリと搔きながらそう言った。

でもファイアが詳しい言葉を零しそうになったから未然に黙殺した。

皆、怪訝な顔をしていたけどここはもう気にしない。

「さて、これで私の世界での一部講座と、私についての秘密の一つを提示したわ。

それじゃクロノ……? 今回の事件について詳しく話してもらえないかしら? 等価

はきつちりとしておかないといけないわ」

「なっ!」 そこで等価交換を持ち出すか、君は?!」

「当たり前じゃない。いきなり一方的に襲われたのにどんな事件か分からないんじゃないや話にならないわ」

「やっぱり参加するつもりか……?」

「ええ。ここままでやられたんだから、しっかりと徹底的にボコツて事情を吐かせない限り腹の虫は納まらないわ!」

それに私が戦ったシグナムとザフィーラからはなにか事情がありそうに感じたわ。

でなければ私達に情けなんてかけっこないし……」

「あ、そうだね。シグナムは特にシホの事を気にかけていたから……」

「……………、わかった。ただ、今現状で分かっていることだけだぞ?」

「ええ。それで構わないわ。情報はないよりはあつた方が後で有利に事を運べるしね」

「そうだな」

それからクロノは私達に魔術師襲撃事件について内容を明かした。

「けどまだ詳細はよく分かかっていないらしくクロノは調査中だということで話を切った。」

「それと別件で……フェイト、こんな時だけでも面接の時間だ。それでなのはとシホも着いて来てくれないか?」

「えっ……?」

「なんで私達も……?」

「重要な話があるんだ。特にシホ……君にとつても」

「私にとつても、ね……それってやっぱり魔術とか異世界とか絡み?」

「まあそれもあるだろうけど……今一番新しい君の情報にも関わってくる事なんだ。だからそう邪険に構えないでくれるとありがたいんだが……」

クロノの言葉はすぐに流して私は少し物思いに耽る。

私達も面接に呼ぶということはリンデイさんよりもおそらく上の地位の高い役職の人物だろう。

それならここらで一度顔合わせもしておきたいところね。

「いいわよ。正直まだ分からない事が山ほどあるし……。なぜ私はその、古代ベルカ式つてものの？ を使えるのかも詳しく知りたいから」

「そうか。正直君はついてこないと踏んでいたんだが、安心したよ」

「それは結構なことね。それじゃなのは。申し訳ないんだけど車椅子押ししてもらってもいい？ 正直いつて体を動かすのも今は辛いだよ」

「うん、いいよー」

そして私達はある一室に入った。

そこではギル・グレアムという思ったとおり時空管理局顧問官という偉い役職についているお人が待っていた。

話を聞くにこのグレアム提督はフェイトの保護監察官らしい。

話の内容はフェイトの処遇とグレアム提督の過去話など。

その話の中でフェイトに対して、

「約束してほしい事は一つだけだ。友達や自分を信頼してくれる人の事は絶対に裏切つてはいけない」

と、言ったことだ。これが守ればフェイトの行動に特に制限はかけないらしい。それを聞いてフェイトはキツと背筋を伸ばして「はい」と答えた。

「…そしてシホ君。君とはこうして一度話をしてみたかった」

「それは光栄です。ですがこんな身で申し訳ありません」

「気にしないでいい。先の戦いでの報告は聞いている。」

それでシホ君、一つ尋ねたいのだが君は…そうだな。おそらく自身でも初めて知ったことだろう。

シホ君は希少で使えるものも現在君も含めて数名しか発見されていない数少ない古代ベルカ式の使い手だと判明した。

この件に関してなにか見に覚えとかはないかね…？」

「いえ。私自身グレアムさんも知っていると思いますが異世界からの出身なのでなぜ使えるのかは分かりません…」

「そうか…。いや、別に責めている訳ではないから気にしないでくれ。ただ興味をそそられた事があってね。」

それと、君を助けたセイバー・アルトリア・ペンドラゴンというユニゾンデバイスの女性だが…彼女はもしやすると彼のアーサー王なのではないかね？」

「！…なぜ、そう思うのですか？」

「いや、なに。あの堂々たる立ち姿、ペンドラゴン——最強の騎士に与えられる『竜の頭』、『王』を意味する称号——を名にもつものなど、アーサー王以外に考えられんだろう。

英国人にとってはペンドラゴンの名はそれほどに重いものなのだよ。

まさか女性であつたとは、夢にも思わなかつたがね。

それにアーサー王伝説は私の国イギリスでは一番有名なのでね」

「なるほど…：そうかもしれませんが…：」

でもここでは詳しく話せません。私としてもどうして彼女がユニゾンデバイスというものになっているのか理解が及んでいませんので。

それにここからは魔術の世界の話になってきますのでおいそれと事情を話すことはためらわれますから…：」

「そうか。残念だけどここは引き下がるとしよう。ではもうこの話は終わりにしようか。強制するのは私の理に反するのよね」

「…：助かります」

それから色々々と話をして部屋を出る際にクロノとグレアム提督は一言、二言交わしていたが、特に滞りなく終わり私達はそのまま退出した。

それと私としては退出する際にグレアム提督の表情が後ろめたいような表情になつ

ていたのに気づき、なにか闇の書事件に強い思い入れでもあるのかと、そう感じた。

こんな時にリンがいればもつと深く事情を探ることは出来るだろうけど私じやせいぜい腹の探り合いをするのがやつと。

だから少しだけどこかで手を打っておこうかと思う。なにかしら情報を持ちえていると思うから。

…しかし、ふと思う。私はこんなに用心深く人の腹を探るような性格をしていたらどうか？

さらにまるでリンのようにうけた喧嘩は最後までキツチリ終わらせないと気がすまないと思う好戦的な思考を持ち合わせていただろうか？

等価交換をこんなうまく利用していただろうか？

なぜかは分からないけど、自分が自分じやなくなっていくような…そんな嫌な気分になった。

「…シホちゃん？ どうしたの、やつぱりまだ寝ていた方がいい？」

「えっ…？ なんて？」

「なんか、シホちゃん…とても深刻そうな顔をしていたから。やつぱりまだ傷が痛むんじゃないのかなと思って…」

「そんなことはないわ。ちよつと考え事をしていただけよ？ だから気にしないで、な

のは」

なのはに心配ないと答えて、私はさつき感じた嫌な考えをしないようにこの思考に蓋をした。

そうしないと私のアイデンティティーが崩れてしまうかもしれないと思ったから…。

第三十二話

『それぞれの思い』

Side グレアム

クロノ達が退出した後、私は再び外を眺めた。

シホ・E・シュバインオーグ：異世界の魔術師。

その力はいまだ未知の部分が多い。

一部の上層部だけが知る事情だが次元の渦すらも消滅させる武装を持つ、今現在で敵に回してはいけない要注意人物。

だがその性格はいたって真面目。家族を、仲間を守る為に必死になれるその姿は好印象を抱かせる。

実際、彼女のことを悪く言う職員は一人としていないから信頼度は高い。

だがもしかしたらそれすらも計算に入れて冷静に物事に対処しているのかもしれない。だがそれでも守ろうとする気概は感じられる。

過去にどれほどの劣悪な環境を生きてきたか分からないが頭が回るようで先程の会話の時でも私との視線を一度も外していなかった。

どうやら少し警戒されているようだ。だがまだボロを出すわけにはいかない。

それに過去から続く闇の書事件で守護騎士達は大方顔が割れている。

だから私の娘達にも危ない橋を渡らした甲斐あってデータの改竄は概ねうまくいった。

それに今回、湖の騎士が姿を変装してくれたのはまさに僥倖だった。

シホ君は湖の騎士とその主とは顔見知りなのだからこちらとしてもありがたい事だった。

と、そこに娘達が部屋に入ってきた。

「大丈夫だったかね、ロツテ……」

「はい、父様……アリアの治療魔法でなんとか腕は無事に済みました」

「でも正直防御魔法が展開されていなかったら絶対腕の焦げだけじゃなくて飛ばされていた……きつとあのユニゾンデバイスがああ娘の体を使って一時的に攻撃したからこれだけの被害だったと思います」

「そうか。しかしこれで当分の間、シホ君は戦闘には参加は不可能だろう。」

しかし二人とも……いささかやりすぎだったぞ。もしかしたらシホ君は本当に死んで

いたかもだったのだから」

「ごめんなさい、父様。でもあの娘が消えれば計画も順調にいくと思つて……」

「ばか者……預言の件を忘れたわけではあるまい。まだ分からないがきつとシホ君こそ預言の示された人物だと私は睨んでいる。」

それにシホ君はアースラの者達……それにまだ若い者達の中心人物的存在だ。だからこれでもし墮ちでもしたら全員の士気は激減……計画は台無しになつてしまふ」

そう、それだけは避けねばいけない。でなければ私のエゴでここまでついてきてくれた二人にさらに厳しい任務を与えることになつてしまふ。

「あの預言かあ……ねえ、父様。あんな娘に預言の通りの事ができるのかな。それにいつ起こるかも分からない曖昧なものに……」

「それでもだ。だから今後はシホ君にはあまり攻撃は当てないように頼むぞ」

「……はい、わかりました」

私は二人を叱る意味で睨みを効かせた後、二人を抱きしめた。

「……すまないな。お前達まで巻き込んでしまつて……」

「いいんです。お父様の意思は私達の意志。だから一人で背負い込まないで……」

「そうだよ、父様。管理局全体が父様の敵になつてもあたし達だけはいつまでも父様の味方だから」

「本当に、すまない……」

それから二人の励ましを受けて私は冷静を取り戻した。

そうだ。この永遠に続く闇の書の呪いは誰かが解かなければいけない。

その為にはなんと言われようと最後まで意地を貫き通そう。

誰かがやらなければ、いけない事なのだから……。

「では二人とも。通常通り仕事に戻ってくれ。察知されると不味いからな」

「了解」

「監視もしっかりとやっておきます」

二人はそうして部屋を出て行った。

そこで私は一つの写真立てを手に取る。

そこには一人だった頃と違い、幸せそうな笑顔を浮かべている少女の姿がある。

一緒に写っているのは当然守護騎士達……だが、少女の肩に乗っている異常にでかい鷹

はなんなのか？

サーチャーで監視している時もその鷹は監視の目を掻い潜り気づけばどこかに消えているという神出鬼没ぶりだ。

帰ってくるるときもそう……守護騎士の誰かと一緒に“いつのまにか”いる。

もしやあの鷹はサーチャーに気づいていてわざと見逃しているというのか……？

いや、それはありえない…。

だが…これ以上イレギュラーな事態は起きるのは好ましくない。

だから監視はより徹底しておくべきだな。

しかし、覚悟はもう決まっているがやはり利用しているという罪悪感がある。

もう少ししたらこの少女を希望から絶望に叩き落す事になるのだから…。

だからもう少し、そう…しばしの間だけでも幸せに浸かってもらいたい。

この事件が終わったら、私も後を追う事になるだろう…。

「しかしやはり、つらいな…」

椅子に背を預けて目を瞑りながら私はそう呟く。



S i d e シグナム

あの激戦後、私達は散り散りになって撤退をいつも通りに我等の集合場所に戻ってきた。

だが他の三人はともかく私は相当ダメージを受けた。

テスタロツサにもらった腹の傷も相当のものだが、シユバインオーグとの戦いで消耗はかなりのものがある。

「シグナム、大丈夫か…？」

「そーだぜ、シグナム。お前がそこまで傷を負うなんて滅多なことじゃないだろ？」

「家に帰る前に治癒魔法で外面だけでも治しておきますね。はやてちゃんが心配しちやいますから…」

「そうだな。すまない、シヤマル…」

「いいのよ。私は前線組みじゃないんだからこれくらい役に立たないと。…でも、シグナムをここまで追い込んだなんて…シホちゃんは相当の使い手のようね」

「ああ。正直に言えば何度かやられると思ってしまったからな…」

…そう、シユバインオーグとの戦いは本当に切羽詰ったものだった。

もし、最後の攻撃が決まっていればおそらく私はやられていただろう。

シヤマルに治癒されている間も最後の光景が目には焼きついていて鮮明に思い出されるからな。

「でもよ、シホって奴とは実際に戦ったわけじゃねーけど…魔導師ってわけじゃなさそうだったな。肝心の魔法陣が展開されていなかったからな」

「それではやはり『アイツ』と同じ魔術というものなのか…？」

……——クツ、アイツとは酷い言われ様だな。

ザフィーラがそう呟いた時、突然一羽の鷹が私達の所に降りてきて私の肩にとまり身を預ける。

「…お前から迎えに来るとは珍しいな」

「なに、シグナムがやけに苦戦したと聞いたのでね。はやてには悪いがこっそりと抜け出してきた」

「そうか。主は大丈夫なのか…？」

「ああ。今は食事を作り終えて皆の帰りを待ちかねだ。それでそのシホ・E・シユバインオーグと名乗る少女が使う魔術はやはり投影魔術だったのか…？」

「ああ、おそらくな。今から映像を見せる…」

私はレヴァンティンに記憶されている戦いの映像を皆にも見せるように展開した。

それを見て実際に戦いを見ていなかったヴィータとシャマルはひどく驚愕していたのは、まあしかたのない事だろう。

おそらく私ですら、もし第三者視点から見れば二人と同じ反応をするだろうからな…。

そしてこのお方はその映像をじっと見て黙り込んでいます。

「どうかしたか？ 何か記憶でも思い出したのか？」

「……………いや、確かにこの映像を見て感じるものはあったが記憶を思い出すには至らなかつたようだ。

しかし…最後の光景でなぜか胸がチクリとした。やはり私は彼女とは無関係ではな
いらしい…」

最後の光景…それは私が負けを認めた瞬間に突如として現れた仮面の男。

シユバインオーグをビルに蹴り飛ばし叩きつけて、さらに非殺傷を解除した魔法を放
たれそのまま地面に墜落する瞬間。

「シホちゃん、あれじゃ…！」

「…ああ。バリアジャケット無しであれば生半可なものじゃねーな。最悪死んでるかも
しれねえ…」

シヤマルとヴィータがそう言った。

特にシユバインオーグの事を気にかけているシヤマルの声には少しばかり泣きが入
っている。

それで私は再度怒りを感じる。

「…シユバインオーグは私と真つ向勝負で戦ってくれた。襲撃した相手だというのに

な。

だから故に私はこの仮面の男の存在が許せない…。助けてもらった事は確かだがそれ以上の行為は容認できるものではない…」

「お前の口からそこまで言わせるとは…。そこまでして彼女との戦いが楽しかったようだな」

「ああ。あの歳で大した実力の持ち主だ。それに…。最後には気絶しているようだがベルカの紋章を展開させた。

しかもあれは古代ベルカ式だ。だからもしかしたらシユバインオーグはベルカ時代の名の知れた王や騎士達の誰かの末裔かもしれないな…」

「確かにそうね…。シホちゃんと触れ合った時に感じた魔力量はあの歳にしてはありえないほどのものだったから。

だからもしあれが切欠で力に目覚めたんだとしたら今後は相当の強敵になることは間違いないわ」

シヤマルの言葉で私も含めて全員がシユバインオーグの危険度を再確認した。

その中、お門違いかもしれないが主はやてのご親友でもあるのだから私はできれば無事でいて欲しいと願った。

「…だが、これで管理局とやたらに正体はばれてしまったのだからこれからはあまりこの

街で行動をするのは控えた方がいい」

そこでこのお方はそう告げた。

確かにその通りだ。

私達のうち、誰か一人でも捕まってしまえば主の居場所が知れてしまうかもしれない。
い。

「だから一つ提案がある。今度から私もお前達と行動を共にしよう……」

「なっ！ お前、ただでさえ自身の姿を実体化させているだけでも辛いのに戦いに参加しても平気なのか!？」

ヴィータが即座に叫んだ。

最初の頃はヴィータが一方的だが険悪な空気になることはしばしばあったがそれの甲斐あってヴィータはこのお方の事をよく気遣っている。

「だが私が闇の書の偽りの主として表に出れば、はやてにたどり着く事はそうそうないだろう」

「だがお前の姿は動物ではないか。それはどうするのだ……？」

ザフィーラがそう告げるがこのお方は「フツ……」と鼻で笑いその身を光らせた。

そして光が晴れた先には白髪、褐色の肌に黒いボディーマーの上に赤い外套をつけた青年が立っていた。

私達が唾然としてゐる中、

「ふむ…やつと人型を取れるくらい魔力は溜まつたようだな。さて、これで問題はないかね？」

皮肉な笑みを浮かべる青年はそう言った。

その鷹のような目つきからは相当の自信が感じられる。

しかしその姿を見て私は思った。

「…やはりお前はシュバインオーグとなにかしら強い関係があることは確かなようだな。」

姿は少し違うがシュバインオーグと同じような戦闘服を着ているぞ」

「まあ、そうだろうな。記憶が戻ればどうにかなるかもしれないが…こればかりは私にも分からずじまいだ」

「つていうか人型になれるんだつたらさつきと言えよ！」

「そう言うな。これでも人型になるとそれだけ自身を構築する魔力消費が倍になるのだから」

そしてこのお方はまた鷹の姿に戻った。

「しかし、人型になるのは初めての試みだがこれでは燃費が悪すぎるな。やはり戦う時はこの形態の方がいいらしい」

「戦えるのか…？」

「腕が使えない分、扱える武器のカテゴリは限られる…。だが撃ちだす事くらいなら可能だ。記憶と名はまだ思い出せないが自身がどういった存在かは認識しているからな」

「無理だけはすんなよ…：なけなしの魔力でお前自身が消滅しちまったらはやてが悲しむからな」

「承知している。今はこの姿になってしまい戦いも満足にできないという体たらくだが、はやてを守るといふ想いはお前達となんら変わらない」

「では、頼りにしても構わないか。『アーチャー』？」

「ああ。はやての為だからな」

「そうか…。しかし私達のうちの誰かとても契約できればお前も力を振るえると言うの…：すまない」

「はやても含めて魔術回路を持ち合わせていなかったのだからこの世界には持ち合わせているものは少ないのだろうよ…：だから気にするな。」

それに、シグナムもあの娘の事を気にかける事も結構だが第一に優先する事を忘れるな…：？

それはそうとシヤマル。シグナムの傷は治ったのだからさっさと帰るとしようか。

…我が家へ」

…そうだな。今考えるべきは主はやてのご病気を治すために、そして静かに暮らしていく為に。

主はやては我等の行動をきつと望んでいないだろう。

だが、それでも今の幸せな時を無くしたくないのは皆の総意。

だから我等の身勝手な行動、お許しく下さい…。

第三十三話

『お引越し（前編）』

S i d e 高町なのは

グレアム提督の部屋から退出後、私達は今、エイミーさんと車椅子に乗っているシホちゃんと一緒にエレベーターに乗って移動中。

フェイトちゃん達とは途中で別れちゃったけどまた合流する予定。

そこでエイミーさんが、

「ああ、シホちゃん。ちよつといい？」

「はい？　なんですか？」

「うん。シホちゃんの持つていたデバイス：アンリミテッド・エアの事なんだけど起動してくれたおかげで中身が大分解析できるようになったんだよ。

それで調べてみたところ、やっぱり特別というか、なんていうか……」

エイミーさんが妙に言葉を濁している。

どうしたのかな？

「特別って言いますと？」

「うん。今までこのデバイスの所有者権限を持っている人物の該当が調べられなかったの。

発掘されたっていうんだから、かつて誰かが使った形跡くらいの記録は残っていると
思っただけですけども該当0でね。

やっぱりこのデバイスはシホちゃんの特別な魔力でないと起動できない事が判明したの。

しかもとても驚いたんだけどね。この子ってね、シホちゃんのリンカーコアだけじゃなくて魔術回路にも繋がっているらしくて事実上この世界で使える人物はシホちゃんだけって話なの」

「ええー…魔術回路にも繋がっているって。まさしく前例がないですよね？」

「そうなんだよー。だからもうマリー……あ、デバイスをメンテナンスする人で私の知り合いの子ね……その子が破損したレイジングハート達の修理と一緒に並行して現在調査中なの。

それになのはちゃん、フェイトちゃん、ファイアットちゃんの時と同様に管理局に正式に手続きをして専用デバイス登録する必要があるからおそらく帰ってくるのは当分先

「になっっちゃうかもね」

「そうですか…」

シホちゃんは少し残念そうな表情をしている。

「そうだよね。私だってレイジングハートと離れちゃうと思うと寂しい気持ちになっちゃうから。」

それにシホちゃんのはもともと思入れのある宝石だから余計そう思っちゃうのはしかたがないことだと思う。

「まあ、シホちゃんがそれを使うかはまた後の話になるから今はそれだけ気に留めておいて。」

「それと話は変わるんだけどねー、ふふふ♪」

「どうしたの、エイミイさん？」

そこでエイミイさんは少し笑みを浮かべて、私達にとってサプライズな情報を教えてくれた。

「なんでもまだ本決まりじゃないけど艦長がフェイトちゃんにウチの子にならないかっていう話をしているんだよ」

「えー！」

「それはまた…」

本当にビックリの内容です。

まさかそんな話があったなんて。

「ほら、フェイトちゃんってプレシア事件で天涯孤独になっちゃったでしょ。

それでウチの子にするって艦長が張り切っちゃってね」

「そうなんですかあ……」

確かにそう考えるとアルフさんはいるけど二人だけじゃ寂しいから、フェイトちゃんにとつてはいい話かもしれない。

「まあ、フェイトちゃんはまだ気持ちの整理がついていないから。だから結論を出すのはまだ先、かなあ……」

「そうですね。フェイトっておとなしい性格ですからまだ遠慮しているところが目に浮かびます」

「うん、そうだね」

「そうだねえ。それでなのはちゃん的にはどう思う？」

「え。そうですね……えっと、なんだかとても良いと思います」

クロノ君は少し厳しいけど面倒見はともいいから良いお兄ちゃんになるだろうし、それにリンディさんは私のお母さんと同じでとても優しいから。

だからいい家族になれると思います。同じ境遇のシホちゃんももう私の大事な家族

ですから。

でもエイミイさんはどうして私だけに聞いたんだらう…？

だけどそれはすぐに分かりました。

「シホちゃんはそのおはちゃんの家の家族になれた時、嬉しかった？」

「えつ、あ…えつと…」

エイミイさんはフェイトちゃんと同じ境遇のシホちゃんになにか聞きたいらしいです。

それでシホちゃんは少し言葉に迷っているようで一回私の方を見てきた。

だから私は笑顔を返しておきました。

それでシホちゃんは「はい…」と照れながら言っていました。

「それだけでなくフェイトちゃん先輩として最初の時はどうだったの…？」

「そうですね。私は最初の時はまだこの世界の裏事情や情報取得とかに色々振り回されていきましたから、つい気を使ってしまっていました」

「確かに…そうだよね。ただでさえ自分の周りにはまったく違う世界だからそうなるのは想像に難しくないね。ゴメンね、変な事思い出させちゃって…」

「いえ、大丈夫ですよ」

「でも、今じゃもうそんな事ないよねー♪」

私がシホちゃんの言葉に便乗してそう付け足すと、

「そうね。それに当初は全員名前だけで呼んでいましたけど…なのはの手助けの甲斐あって、今は名前の後に…その、お母さんとか兄さんと言っています」

「そっかあ…。うん。とてもいいことだと思うよ。…そうかそうかあ…。そうなるトフェイトちゃんもクロノ君の義妹になる訳だから…」

…あ、なんか話の展開が怪しくなってきました。

なんでかシホちゃんとエイミイさんが一緒にいる時、こういう怪しい雰囲気になると何かとんでもない事が起こりそうな予感がヒシヒシとします。主にクロノ君にとって…。

「フェイトちゃんに『お兄ちゃん』って呼ばれた時、クロノ君、どんな反応するだろうね」
「おそらくうろたえた後に、なんとか返事を返してどこかで悶えている姿が想像できますね？」

「そうそう！ クロノ君って性格は堅物だから思わずの一撃は確実にヒットすると思うんだよね！」

「…ぜひ映像に残しておきたいですね」

「任された！ その時はシホちゃんにも映像を見せるよ。さらにクロノ君の弱みを握れるのは私にとっても利益になるし〜♪」

「フエイトのこれからの行動に期待ですね」

「そこら辺は抜きなし！」

もうフエイトちゃんには『家族になつたら名前で呼び捨てにするのはあまり控えた方がいい』と『兄妹になつたらお兄ちゃんと呼ぶのが鉄則』って教えてあるから。

なのはちゃんとシホちゃんの例をあげたらひどく納得していたしね」

「グツジョブです。エイミイさん……」

「なんの、なんの！」

「……………」

シホちゃん達は話がヒートアップして互いに手をガツシリと握り合っていました。

えっと……ゴメンナサイ、クロノ君。私だけじゃこの二人の会話に入っていけるほどの勇気がありません。

だから、これから色々苦勞するだろうと思うけど、頑張つてね……。

私は、その、応援するから。



Side シホ・E・シュバインオーグ

それからミーティングルームにアースラスタッフと私達は集められてこれからの方針を話し合っていた。

しかし肝心のアースラが使えないという事態にどうしたものかと私は思ったけど、そこはさしずめ手配していたらしい。

いや、なんていうか建前は私達の保護も兼ねてって言うてはいるけど、前々からフェイトの為に準備をしていたのは明白かもしれない。

それはなにかというとお…。

「まさか司令室という名の自宅を用意してしまうなんて、さすがリンディさん…」

「これでならなのはさん達の親御さんにも話を通せるし、なんとか現状のシホさんの状態を説明できるでしょう?」

「そうですね…この包帯だらけで動けない体をどう説明するつもりですか…? なのは部屋に転送すればどうにかなりますけど…」

「やっぱり…無理ですかね?」

「ちよつと、きついかもしれないです。だからちよつとこつちの口裏に合わせて貰ってもいいですか?」

「いいですよ。それでどういった事にするの…?」

「私が結界に取り込まれる前の山奥に包帯を全部はずして転送してくれませんか…?」

「「ええええー!!?」」

そこで大声を上げる一同。

「ど、どうしてそうなるの!？」

「…いえ、結界に取り込まれる前まで兄さん達と気配とかを完全に消して奇襲しあう訓練をしていたんですよ。」

「それで結界に取り込まれる前に私は異変に気づいたので先に二人には帰ってもらったんです。」

「そしてここから少し話を捏造して、私一人久しぶりに全力で体を行使して無理して全身筋肉痛を起こして動けなくなっただという口実にしようかと。」

「…幸い、傷はセイバーのおかげでもう跡はほとんど残っていませんから包帯無しでもどうにかなると思いますし、なのはが食事時に私はどこ? あたりを訪ねてくれればうまくいくかと…」

「ま、まあなんとなく理解はできたけど…。シホ、君達は普段からそんな訓練をしているのか?」

「…ええ、まあ。なのはは知らないと思うけど夜にはなにかと物騒な訓練はよくしているわ。殺気のない相手とかにも役立つし…」

「やっぱり、お兄ちゃん達って……………」

なのはが地面に手をつけてやたら目から汗を流しているように見えたけどここはスルー。

ユーノがさりげなく慰めているのが唯一の救いか。

逆にフェイト、ファイア、アルフの三名はいかにも参加したそうな顔をしていたのも気づかない振りをする。

ファイア、アルフの二名はギリギリついてこれそうだけど、デバイスがないと少し身体能力が高い程度のフェイトはついてこれそうにないし…。

……………

……………

……………

それで結局、私は動けない体ともあつて傍にはファイアがフェレット形態で着いていてくれたけど、

「なんか、私って結構無様…?」

「そんなことないです！ ああ、それにしてもなのはさん。早く迎えに来てください！

シホは正直、極度の傷の後遺症を侮っていた。

前の体の時ならいざ知らずこんな重症を負うのは今回が初めてな為、

(痛みが、痛みがぁー!!?)

苦痛に体を大いに震わせていた。

それで布団からは出る事が出来ず、結局午前中は寝たきりの状態だった。

それで午後頃になりやっと動けるようになったのでなのは達の場所にいく許可をもらったシホは指定された場所へと向かっていった。

が、走ろうとする動作だけで筋肉が引き攣りを起こしそうになってしまふ為、一歩一歩慎重に歩いていかなければいけないという苦行を強いられていた。

そしてやつとの事、到着したシホはなのはとフェイトがマンションのベランダから顔を出して街を眺めている光景を目にして、

(うーん…声がかげづらい。参ったわね…)

声を掛けようかどうか迷っていた。だが二人はシホがマンションの前まで来ていたのに気づいたらしくすぐにかけてくれた。

その時の第一声といえ、

「あ、シホちゃん!?!」

「え、シホ!?!」

…だった。どうやら今日は来られないだろうと二人は思っていたらしい。もちろんそれ以外の人達もだが。

「どうしたの、シホちゃん！ まだあんまり動けないでしょう？」

「いや、一応顔だけでも出しておこうと思つて…それと、これ。桃子お母さんから渡されたんだけど翠屋のケーキの詰め合わせ。リンデイさんに渡しておこうと思つたのよ」

「う、うん。でもシホ…本当に大丈夫？」

「うん。正直に言えば結構ピンチかも…」

シホは本当にここまで来るのに必死の思いで来たのでほぼ体力を使い果たしたといつても過言ではない状態であつた。

それなのでシホは申し訳なかつたけど二人に家の中に入れてもらった。

それと玄関口でリンデイと鉢合わせして、

「あら、シホさん。体はもう大丈夫、なの…？」

「こんにちは、リンデイさん…。…いえ、はつきり言つてここまで来るのに体力を使い果たしました。」

それとこれ、引越しのお祝いとして桃子お母さんから預かつてきましたから落ち着いた時に食べてください」

「わかりました。ありがとね、シホさん。それじゃちよつとリビングで待つてちよう

だい。今、ちょうどクロノ達も一段落して休憩している所だから
「わかりました」

それでののは達にリビングまで案内されていくとそこにはエイミイとフェレット形
態のユーノとファイアット。

そしてなにやらどこかで見たようなオレンジ色の子犬がいた。

(はて…? この犬はどこかで見たような…)

シホが少し考え込んだ隣でフェイトがすぐに分かったらしい。その子犬を抱き上げ
て、

「わあ…アルフ、ちっちゃい! どうしたの?」

「えへへー。子犬フォームだよ。可愛いだろう、フェイト」

「うん。とつても可愛いよ、アルフ」

シホもすぐに思い至ったのか「アルフだったのね…」と呟いた。

それでシホはファイアット達の方を向くとすでにユーノはなのはの腕の中に包まれて
いる。

それをファイアットがまさに「兄さん、不潔です!」という眼差しを込めながらもシホ
の肩に乗ってきた。

だが、シホの頬に顔をこすりつけている辺り、大概ファイアットの方が不潔と言われて

も文句は言われぬだろう。

だが、そこは女性同士という事で自身の事は棚上げしているところは策士ともいえなくもない。

「フィアとユーノもこつちではまたその姿で過ごすのね。それじゃまたこれからよろしくね」

「はいです！」

「うん…とところで、シホ。体、大丈夫なの…？」

「思い出させないで…今、なんとかここまで歩きで来てクタクタなんだから…」

「うっ…ゴメン」

「お姉様、それで調子はどうですか…？」

「うーん…結構ダメね。傷は治っているけど当分戦闘できる体じゃないわ。通常生活は明日くらいにはもとに戻れそうだけど。」

戦闘ができるくらい完治するまでは最低でも後、一週間かそこらは必要かも…」

「そうですか。それじゃなのはさんの魔力回復、そしてなのはさん達のデバイスと同じくらいには復帰できるといふ事ですね」

「そうなるわね…：そういえばフィアのデバイスはどうなったの？」

「よくぞ聞いてくれました！」

そこで出番とばかりにエイミーが声をあげた。

やっぱりそこそこマリーから報告は受けているみたいである。

「ファイアちゃんのデバイス『マグナ』改め『マグナ・スピア』だけだね。

ほら、一度アンリミテッド・エアに吸収されてトリニティデバイスとかいうものに変化しちゃったよね？」

それで調べてみたらね。カートリッジシステムを搭載していたんだよ。

それにもちろん元々インテリジエントデバイスだから遠距離からの魔法もファイアちゃん次第で使える。

アームドデバイスの顔も持っているからちやうどファイアちゃんの注文だった槍型デバイスがより一層近接寄りになったところがすごいね。

そしてなにより魔術式という未知の体系がシステムに組み込まれているんだよ」

「それじゃファイアちゃんってミッドとベルカと魔術の三方面の魔法を使えちゃうってこと？」

「いや、そこまで上手い話じゃないんだね。あくまで三つの面の顔を持っているだけであってファイアちゃんの使う魔法はミッドチルダ式だからそれに添って使っていくしかないんだよ。それに魔術はファイアちゃんは使えないから無用の長物だし……」

「それでも構いません！ 元々私は遠距離とかは得意な分野じゃありませんから！」

「確かにフィアはシホの修行でより近接戦闘よりになったからね…」

ユーノがそこでなにやら妙な溜息をついている。

そこでシホは「…なにか私の教育方針に問題があるっていうのかしら…ええ？」と脅しをかけるとすぐに降参のポーズをして、

「い、いや！ 別に変な意味じゃないから気にしないで！」

「そう………、今はそういう事にしておくわ」

ユーノがそれで顔を青くしているのを尻目に、シホはエイミイにあるお願いをしようと話しかけた。

「あ、エイミイさん。それでちょっと相談があるんですが…」

「ん？ なに、シホちゃん」

「アンリミテッド・エアに積まれているカートリッジシステムですけど、私は多分使用しないと思うので一応積んでおくだけで封印処置をしておいてくれませんか？」

「え？ どうして？」

「考えてもみてください。そのデバイスは私のリンカーコアだけならいざ知らず魔術回路にも繋がっているんですよ？」

「だからもしカートリッジを使って魔術回路に異常でも発生したら洒落になりません。まして前例がないから尚更…」

「なるほど…。そう考えると確かに危険だね」

「それに力の底上げなら強化の魔術を使えばいいだけです。魔術回路に繋がっているんですからそれだけあれば十分です」

「でもでも、シホちゃん！ それじゃまた力負けしちゃうかもしれないんだよ!」

なのはがそう叫ぶが、シホは鋭い視線になりポケットから教鞭を取り出した。

当然、投影品だがそこはもう誰も突っ込みは入れない。

「なのは、それに皆も…。少し聞きなさい。私の魔術は殺傷？ それとも非殺傷?」

「えっと…。あきらかに殺傷だよね?」

「そう。あきらかに殺傷能力に長けているものだわ。でもそれがアンリミテッド・エアを使用する事によつてどうなるでしょう?」

「あつ…。」

そこでの一番にエイミーが声を上げた。

まだ他の皆はわかっていないようだが、さすが管理局局員は伊達ではないとシホは思った。

それでエイミーは大声を上げながら、

「魔術回路に繋がっているから魔術も当然非殺傷設定になる。だからもう遠慮する事なく全力で力を振るえるっていう事!」

「ご名答。さすがエイミイさん。…そう、今まで私は殺さないように手加減して挑んでいたけど、矛盾した言い方だけどそれでも手は抜かず本気でやっていた事に変わりはないかった。」

「だけどその枷がなくなったことになるから…次はもう遅れは取らせないわ！」

「あ、でも非殺傷設定でもシホちゃんの使う武装は危険極まりないから当たり前所が悪かったら死んじゃうから扱いには気をつけてね？」

「あ、はい」

シホがそう言って意気込みを新たにしているところにエイミイが注意を施した。

それでシホもすぐにその考えに至り、頷いた。

しかし、もう既にシホがアンリミテッド・エアを使う前提での話になっているのは気づいているのはエイミイだけだろう。

めずらしくシホは遠坂凜の十八番である“うっかり”をしてしまっていた。

第三十四話

『お引越し（後編）』

それからしばらくしてアリサとすずかがやってきた。

二人はリンデイさんとも挨拶をして、いくらか話をして翠屋でお茶会をする流れになった。

それでちょうど高町夫婦に挨拶をしたというのでリンデイも出かける準備をしようとして部屋の奥へと消えていった。

その際、アリサが「リンデイさんってフェイトのお母さん…？」と尋ねてフェイトは顔を赤くしながら、

「えっと、その…今はまだ、違う」

と言ったので結構脈アリかもと全員は思ったそうだ。

だけど、ふと玄関の前ですずかが、

「…そういえば、シホちゃんも来ている筈だよ。いないけど、どうかしたの…？」

「あー…それがね…」

「あ、あはは……」

二人が乾いた声で苦笑しているところを見て、すずか達は首をかしげた。

それでまだリンディも準備しているところだし案内するねと言われてリビングに着く。

そこにはグテー……としてソファアに身を預けてなにやら苦悶の表情をしているシホの姿があり事情を知っているのは達も含めて急いで寄りかかった。

「うゝー……あ、すずかにアリサ。来ていたのね……」

「ちよつと、シホ……あんたもの凄く顔色悪いわよ?」

「大丈夫、シホちゃん……?」

「ゴメン……なんていうかちよつと昨日の特訓で自爆しちやつて全身筋肉痛で無理してこまで来たのが祟つたみたい……。少しすれば良くなるから気にしないでいいわよ」

なんとかシホは言い訳を押し通した。

だがこの中で唯一シホの裏事情を知っているすずかは、シホがみんなの前でこんな弱った姿を見せるのはさすがに信じられないという思いがあった。

だから、

「……シホちゃん、それって、嘘じゃないよね?」

「え……? ええつと、すずかさん、目が怖いんですけど……」

「どうなの……?」

「えつと……黙秘はダメ……?」

「ダメ!」

それからリンディが来るまでごたごたが続き、なのはとフェイトが必死に援護してやつと信じてくれた。

それでシホは余計に疲労困難に陥ったが、なんとか顔には出さずに我慢して一緒に翠屋まで向かった。

そして翠屋。

そこでは普段なら手が開けば手伝っているだろうに、オープンテラスでシホはなのは達と会話をする事しか出来ないでいた。

手伝う事ができない……そう、どこか悲哀が感じられる眩きをしているシホはやはり職業病だろうか……?

それはともかくアリサ達は再び高町家で飼う事になったファイアット達は抱きしめられている。

その際、普段ならユーノの浮かれた姿を目にすると不潔そうな眼差しを送るファイアットだが、すずかの手に抱かれた瞬間。

「ギンツ!」という音が響くような感じでお互い同時に目が鋭くなったのはなのは達は

見なかった事にした。

当然、対象のシホは気づかず、フェイトに至ってはまださすがシホの事を好きだという事を知らず首を傾げる。

一方で、アリサは手に納まっているアルフ（子犬バージョン）を見て、

「うーん……どこかでアンタの事、見た覚えがあるんだけど……気のせいかな？」

「ワオンツ!？」

姿は狼形態に比べればかなり遠のいたというのに勘だけでそこまで言い当てるアリサの直感力はすごいものがある。

どこかアルフは冷や冷やした顔をしているのは、以前お世話になったのだから仕方がない。

そこに一人の眼鏡をかけた青年……今は普段着だがアースラススタッフの一人、ランディが一つのケースを持ってきた。

ランディはフェイトに声をかけて、

「あの、ランディさん。これは……？」

「リンディ……つと、リンディさんからの贈り物と思ってもらっていいよ」

全員はそのケースの中を見て驚いた。

それで今現在、翠屋の中で高町夫妻と話をしているリンディの場へ急いで駆けていっ

た。

その中で冷静に場を見守っていたシホはランディに話しかける。

「…ケースの中身が聖祥大附属小学校の制服っていう事はもうフェイトの聖祥入学の手続きは終わったんですか？」

「うん。週明けにフェイトちゃんやんは聖祥に入学する予定になっているよ」

「相変わらず手回しが早いですね…。やっぱり色々大変だったんじゃないですか？」

「そこは、ほら…ひとまず艦長の手腕ってことで…」

「それを職権乱用ともいいますが、まあそれでフェイトが喜んでくれるなら私は構いません」

「手厳しいね…でも、確かにフェイトちゃんには効果覲面だったろうね。お店の中を覗いてみてもそれがよく分かるから」

お店の中では顔を赤くしながらランディに感謝の言葉を送っているフェイトの姿が映っていた。

それでシホも微笑を浮かべた。

それを見てランディが少し頬を染め、必死に平静の表情をしていた。

だが、心の中で『僕はロリコンじゃない…僕はロリコンじゃない…僕はロリコンじゃない…クロノ執務官と一緒にたにされたくない…！』とクロノにとって失礼極まりない

事を念仏のように唱えていた。

ちなみに一緒に残っていたフィアットはその視線に気づいてかランディを睨んでいたり…。

……そして、とうの本人であるクロノはなぜか謂れの無い怒りを感じて休憩中に飲んでいたりンディ茶（エイミイが隠れて仕込んだ）を飲んでも気づいていないのか全部飲みきってまた仕事を始めていたり…。

そしてそれを見て「あれ…？」と予想が外れたような表情をしたエイミイの首をかき上げている姿があったり…。

まだ設定確認の終わっていない他のスタッフが「南無南無…」と祈っていた。

しかしなんでもないうように仕事を再開したクロノを見て『ついにンディ提督に辿り着いたのか!』と違った意味での尊敬の眼差しを向けられていたり…。

中々にはカオスチックな事になっていた。

閑話休題

「ところで、傷の方は大丈夫かい？ 結構辛そうだけど…」

「そこは聞かないでください。今は歩くのだけでも必死なんですから…。」

それ以前に自分の立てた捏造話があんまり信じてもらえなくて昨日から追求の嵐だったから余計疲労もたまつて今はもうあまりその話題に触れたくないんです」

「そ、そうなの…。」

シホの表情は中々に哀愁が漂っていたのをランディは感じてもうこの話題には触れない事にした。

それほどに今のシホは疲労が激しかった。シホらしからず願うのならば今すぐにも横になりたい衝動が起きているくらいに…。

「とりあえず私も中にいってきます」

「うん。それじゃ僕も仕事に戻るとするよ」

「頑張ってくださいね」

ランディは笑顔を向けながらその場を去っていった。

しかしやはり心の中で…。(もういい…。)

ともかく中に入っていたシホはフェイトに寄って、

「よかつたわね、フェイト」

「うん！ これからよろしくね、シホ。それにみんな！」

フェイトの言葉は全員に行き渡ってそれぞれ言葉を返して、少ししてその場はお開き

になった。

それと帰り際、すずかがシホに話しかけた。

「どうしたの？」

「うん。シホちゃんってはやてちゃんって知っているよね？」

「え？ うん、私のメール友達よ。最近はタイミングが悪いのか会わないけど前はよくスーパ―や図書館で会ったりしたりするから…でもどうしてすずかがはやての事を…？」

「うん。私もはやてちゃんと図書館で会って友達になったの。それでね…」

それで色々はやての事で二人は話し合っていた。

幸い守護騎士達の名が語られなかったのは、さて吉と出るか凶と出るか…。まだ分からない。



Side 八神はやて

ん…？ すずかちゃんからメールがきとる。

えっと、なにになに…？

あ、シホちゃんに私の話をしたんか。

嬉しいわ。今度、シホちゃんの手があいた時があつたら連れてきてくれるんか。

そういうえばシホちゃん、私の家に招待した事ないから楽しみやなあ…。

でもどうも実家が忙しいらしく期待はあまり出来ないかあ。まあ年末近いからしかたないか。

「でも、ほんまに嬉しいなあ…」

「どうしたの、はやて…？」

そこで私の隣で食後に一緒にテレビを見ていたヴィータが話しかけてきた。

ふふふ、そうやな。ヴィータにも報告せな。

「うん。私の友達になつたすずかちゃんの事、知ってるやろ？」

「うん。今度うちに来るとか言っていた奴だろ」

「そう。その子なんやけどシホちゃんの友達なんよ」

「!? そ、そうなんだ…」

…ん？ どうしたんかな。ヴィータの顔が一瞬だけ変わったみたいやけど。

まあ、気のせいやろ。

「それでな。今すずかちゃんからシホちゃんの事を聞いたんやけど、なんでも昨日に家

での稽古、かな？　それで自爆したらしくて全身筋肉痛なんやて」

「そ、そうなんだ……」

うん？　やっぱり普段と違って様子がおかしい。

どうしたんやろうな？

「……なあ、ヴィータ。どうしたの？　いつもシホちゃんの話をしてもそれほど驚かないのになんか今日はやけに反応違うなあ……」

「えい!?　な、なんでもないよ、はやて！　ただ、そのシホって奴、はやての友達じゃなか。だから大丈夫かなと思ってる……」

「ほうか。うん。なんでもせずかちゃんの話だと早くても一週間くらいしないし完全復帰は無理そうだっていうんや。ホント、なにがあつたんかな……?」

「……………良くなるといいな」

「そうやね。それにシホちゃんはとつても笑顔が可愛いんよ。」

だから笑顔が消える事はしてほしくないんよ。ただでさえシホちゃんは今の家族に引き取られるまでは一人やつたんだから」

「それいつも、一人だったの……?」

「そうらしい……。詳しくは教えてくれなかつたけどな。」

でもきつとヴィータもシホちゃん的笑顔を見たら納得すると思うよ？　ほんまに可

愛いんやから！」

「は、はやての方が可愛いに決まっているだろ！」

「あかんで？ まだ見ていないのにそう決め付けちゃ…今度もし会う事があつたら見たらええよ」

「うん。もし会う事があつたらな」

「うん、よろしい。それじゃもうそろそろ時間も遅いし眠るとしようか」

「うん、わかった」

そして私達は寝室に向かつていつて眠りについた。すずかちゃんとシホちゃんと一緒に楽しく遊べる夢を見れたらええな…。



ヴィータははやてが寝静まった頃合いを見計らって部屋から出て行きある場所に向かった。

そこはあるビルの屋上。

そこにはすでにヴィータ以外の守護騎士とアーチャーが待っていた。

「主には気取られなかったか？」

「ああ。今はもうぐっすりと眠ってる…それよりシグナム、それにみんな。いい話なのか悪い話なのか分からないけど聞いてくれるか？」

「どうしたの、ヴィータちゃん…？」

「実は——……………」

ヴィータははやてとの話をみんなに話した。

「…そうか。シユバインオーグは無事か。しかし心配させまいと必死に外面の傷だけでも塞いだのだろうか。あの傷は筋肉痛だけで済まされるものではない」

「シホちゃん…前にスーパードで会った時、家族の心配した顔を見たくないと言っていましたから…」

「……………」

それで全員暗くなる。特に一番攻撃を浴びせてしまったらうザファイラは無言で沈んでいる。だがそこでアーチャーが声を上げた。

「お前達の覚悟はそれだけか…？ はやてを救うと決めたのだろうか…？ ならば今はその感情は心の奥に閉まっておく事だ。感情移入したら戦いにもならんからな」

「お前は薄情だよな…」

ヴィータが呆れた声を上げるがアーチャーは、

「放っておけ。私とて気にかけないといえは嘘になるが、それでもしなければやってら

れんだろうに……」

「そうだな……。確かにアーチャーの言うとおりだ。今は主を救う事だけ考えればいい。それにシュバインオーグが生きている事だけ分かればもう気にしなくて済む」

「そうだ。それでいい。……さて、では今日も行くとしようかね。我等の家族を救う戦いに……」

「おう！」

アーチャーが仕切るかのように全員が声を上げて甲冑をその身にまとい、それぞれ違う方へと飛び去っていった。

第三十五話

『対策会議』

S i d e シホ・E・シユバインオーグ

それは翌日の早朝の事。

私もある程度痛みは抜けてきたので日常動作は出来るくらい回復してきたこともありなのは達のたつての願いである特訓をすることになった。

今日はフェイトが聖祥小学校に編入してくるので早めに切り上げる事もあり、まず要点だけ絞っておこうと思う。

「でも驚いたわ…。昨日、いきなりすずかやアリサ達が帰った後に私に特訓をしてって言ってきた時は…」

私が話を振る側にはなのは、フェイト、アルフの三人。フィアは私の隣で立っている。ついでにいうと観客というか見学者としてユーノ、クロノ、エイミイさん、リンディさんまでいるではないか。

「それじゃこれからヴォルケンリッター戦に向けて修行したいと思えます。

といっても今現在私はまだ安静にしていた方がいいと言われてるので対策関係は私。実技はフィアにやってもらおうわ」

「えっ…シホはやらないのかい？」

「アルフ…それは突っ込み待ち…？ それとも本音…？ 今なら全投影連続層写で買ってあげるわよ？」

私は鋭い視線と言葉をアルフに浴びせると他からも冷たい視線が流れているを感じる。主になのは、フェイト、フィアから。

義務感からしてはクロノ。リンデイさんは笑顔なのにどこか怖い…。

すぐにそれは止んだけど…アルフは全身を大いに震わせていた。土下座をすぐにしたのがいい証拠だ。

「…さて、おふざけも済んだことだし。それじゃ時間ももつたないから始めるとしましようか」

「はい！」

「おう！」

「それじゃまずは最初になのはのリンカーコアを奪った黒尽くめの奴以外で戦った感想はなにかある？」

「そうだねえ。やっぱりあの青い狼…ザファイラっていったっけ？」

まずアルフがザファイラについて言葉を上げた。

「そうよ、アルフ。…で、どうだった？」

「そうだね。あいつはあたしと同じパワータイプみたいだけど力量がかなり違ったね。それになんていうのかな…場慣れしている」

「それは守護騎士全員にいえる事ね。それに加えると戦闘経験が並じゃない…それに、そうね。これは感想の最後に取りっておきましょうか。ね、ファイア」

「はい、お姉様」

ファイアはアイコンタクトですぐになにか分かったらしい。

さすが私が一番に鍛えた甲斐あるわね。

「あの…シホさん。なにか意味アリですけどどうしたのですか？」

「あ、リンデイさん。大丈夫です。感想を聞き終えた最後にそれを伝えますから」

「そうですか…？」

「はい。それじゃ次はなにかある？」

「うーん…ヴィータちゃんとシグナムさんっていう人はカートリッジシステムを使っているんだよね？」

「そうね。それは要するに魔力の一次的増量…ドーピングみたいなものかな？ 専門家

の意見としてはどうですか、エイミーさん」

「え？ うん、大体それであつていると思うよ。でもあのデバイス達はそんなもの使わなくても十分威力はあると思うんだよね」

「納得ですね。戦つていないけどヴィータつて奴はデバイスがハンマーだけあつて一点突破型。」

それにシグナムのデバイスは形状が剣。だから私達の中でなのは絶対的に相性が悪いと思うわ。

フェイトのバルデツシュが真つ二つに切り裂かれた事から察するに、砲撃が主体なのは距離を取らないと相手にならないと思う。

私ガなのは修行の一環で護身術も教えているけど今回に関しては任せるとしたら中距離、近距離主体のフェイトか接近戦主体のフィアにシグナムは任せた方がいいわ」

「でも私、ヴィータちゃんとお話したいよ！」

「あー、うん。それじゃヴィータに関してはなのはに任せるわ」

「うん！」

「それじゃまずはなのは防御力を上げる事が第一ね。」

ヴィータが一点突破型だというのは性格からも分かつたから、ならそれ以上に頑丈にシールドを展開すればなんとか戦いになるかもしれない。

魔力が回復次第、魔力の制御をより正確に組み上げる事を心がける事」

「わかったよ、シホちゃん！」

「でも無茶な修行はなしよ。これだけは最初の方針から一切変えないから」

「なのはの元気な声を聞いて、とりあえずなのはの方針は決まったとして、シグナムとザファイラー対策か…。」

「次にザファイラーの対策としては…：ファイア、アルフの事を任せていい？ 私はなのはと並行してフェイトにシグナム対策を仕込みたいから」

「わかりました。縮地と浸透勁の基本、中国拳法を教えるんですね」

「ええ。きつとアルフは感覚的…：後、動物的本能で覚えるのは早いと思うから。」

「フェイトの使い魔だからこれを使えるようになれば敏捷性はさらに上がると思うから相手手を翻弄する際、かなり役立つと思うから」

「へー…：ついにあたしもシホ達のような動きが出来るようになるのか」

「それはアルフ次第。ファイア、手加減はしなくていいからね？」

「はいです！ これから楽しみですね…。」

「ファイアット…：あんた、なにか怖いよ…？」

「ファイアの少し暗い笑みにアルフは怯えているようだ。」

「さて…：フェイト。それじゃ最後にシグナム対策だけど私が直々に鍛えるけど構わない

わよね?」

「うん…! あのシホとの戦いでシグナムの凄さは十分理解できたから。それに今の私じゃきつとシグナムが本気を出せばただじゃ済まされなと思うし…」

「そうね。まずは目を慣らすしか方法はないわね。」

シグナムが次になを出してくるか予想して最小限の動きで捌いて、且つフェイトの取り柄であるスピード戦でペースをシグナムに握らせない事を第一に考えなさい。なのはもそれは同様よ」

「はい!」

…さて、基本方針は決まったわね。

これから忙しくなるなと脳内で思っているとクロノが、

「シホ…本当は魔導師の戦い方を知っているんじゃないのか? 方針が的確すぎるぞ」

「知らないわよ。でも基本戦い方なんてどこでも一緒でしょ。私達とあなた達の違いは殺傷か非殺傷…機械頼りと神秘頼りの違いくらいじゃないの?」

「む…確かにそう言われるとそうかもしれないな」

「でしよう」

「シホさん…あなた、もしかしたら教導官の才能があるのかもしれないわ…」

「…そんなものはないと思うんですけど。ただ私は経験談をなのは達に教え込んでい

だけですし」

それに私はそんな柄じゃないですし…、と一応言っておいた。

でもリンディさんはエイミィさんとともに何か話し合いを始めているのは何故だろう。

聞いたら怖い返事が返つてきそうだから今は気にしないでおう。

——後に、聞かなかつた事を後悔する事になるのだけど、そこは致し方ない。

「ふう…それじゃこれで各修行方針は決まったとして。残り時間も少ない事だし最後にやっておきたい事が二つあるわ」

その言葉に全員興味津々に耳を傾けてくる。

そう注目されると恥ずかしさがあるけどここはグツと耐えて、

「なのは、フェイト、アルフ…今から三人で連携を組んでもいいから私を倒しにきなさい。私は魔術を一切使用しないから」

「ちよつと待ちなよ！ それはさすがにシホでもきついんじゃないかい!」

「そ、そうだよ。シホちゃん、まだ体は完全に治っていないんだよ!」

「無理な事はしないとかが言っていて一番シホが無理しているよ!?!」

三人はそう声を上げる。

ユーノも同じようで見学の席で頷いている。

でも、リンデイさん、クロノ、フィアはどういう事か分かったのか黙り込んでいます。さすがだ。

それでも私もそれを分からせる為に、

「…三人とも。それじゃ一つ聞くけど万全じゃない時に容赦なく攻めてくる敵がいたらどう対処するの…?」

戦いなんて攻められる側にとつて万全なんて時はとても稀なのよ? それでも万全だった私達は今回敗北した。

そう…戦いなんていつでも準備不足。相手がなにをしてくるか分かっているなら対処できるけど大抵初見の相手がほとんど。

だから「万全状態だから大丈夫」なんていう慢心は絶対にしてはいけないの。

慢心はなによりも大きな不安要素…もとの世界では己の力は絶対と過信し慢心して戦いを挑んだ魔術師が一瞬で手負いの敵に消し炭にされた光景を何度も目にしたわ」

その話をした途端、全員の顔から冷や汗がたれて顔も青くしている。

「そしてついさっき、三人は私がまだまともに戦闘できない体だという事で油断し慢心が芽生えてしまった。どう…ここまでいえばわかるでしょう?」

戦いはいつでも真剣勝負。たかが模擬戦、されど模擬戦、侮るなかれ。油断は慢心を生み、感覚を鈍らせる。

遊び感覚や死という恐怖がないという感覚でやっていたらそれこそ自滅しかねない。それを、みんなに覚えておいて欲しいわ」

それで実戦経験があるだろうリンディさんとクロノが拍手を送ってくれた。けど恥ずかしいからスルーしておく。

「さて…それじゃきなさい。本気でも構わないから」

三人は覚悟を決めたのか一回顔を合わせてそれぞれ散開して私にかかってきた。

まず身体能力だけでなら一番のアルフが力任せに足蹴りをしてくるが私は少し右にずれてその突き出した足を腕でガシツと挟みこむ。

そして即座にアルフのスピードを逆利用して反対の手で掌底を胸に叩き込む。

「ガッ!?!」

アルフは軽いうめき声を上げて自身のスピードをそっくりそのまま返された反動で盛大に吹っ飛ばされ地面に叩きつけられる。

「アルフさん!?!」

「余所見は禁物よ、なのは…」

「!?!」

なのはが余所見をした隙をついて私は瞬動術でなのはの背後に迫り首を軽く叩き気絶させる。

「これで二人…そして」

背後に気配を感じ、私はすぐにそこから退避すると棒を振り下ろしているフェイトの姿があつた。

「やあっ！」

「ふ、…！」

目の前に迫つた棒に寸勁をぶつけ、腕が痺れて棒を落とした瞬間を狙い震脚をして力をためて肘からの打ち込みを放つ。

それによつてフェイトはお腹を押さえながら地面にうづくまる。

念の為、これ以上の抵抗が出来ないよう地面に沈めておく。

そして最後、まだやる気の残っているアルフが突撃してくるが、これからアルフがぶだろう事を踏まえて縮地を使い一瞬で眼前まで迫り拳を顔面僅か数センチの所で止める。

これによつてアルフは動きが固まってしまい勝負はそのまま終了した。

…しばらくして三人とも復帰してきたけど、

「シホって、まだ全快していないよね…」

「シホちゃん…本当に魔力使っていないよね？」

「絶対嘘だ！ 魔力付与なしであたしを打ち負かすなんて…！」

…なかなかアルフは失礼である。

「これで分かったでしょう。相手が万全じゃなくても負ける可能性なんていつでも存在する。表面上だけで判断したら即アウトよ。

…さて、これで私からの心構えはだいたい教えたわ。最後に一つ、やりたい事があるから三人とも…いや、この際ユーノとクロノとフィアも一緒に私の前に距離を置いて立ってくれない？」

「え、僕も…？ いいけど…」

「一体なにをするんだ…？」

「嫌な予感がします。気をしっかりと保たなきゃ…」

全員が並んだ事で、

「さて、それじゃリンディさん。さっき言わなかった事をしますね」

「なにをするんですか…？」

「それはお楽しみです。…それじゃなのはにフェイト、一つ聞くけどあの戦いの時になのははウィータに、フェイトはシグナムにあずかり知らない感情を覚えて体を硬直させ

てしまったわよね？」

「う、うん…なぜか急にヴィータちゃんが怖いつていう雰囲気が出てきて…」

「私も、シグナムの視線だけで冷たい何か体が通り抜けた感じだった…」

「そう…それじゃ今からする事で注意する事は、気をしっかり持ちなさい。でなければすぐに意識を持ってかれるわよ？」



S i d e フェイト・テスタロッサ

「そう…それじゃ今からする事で注意する事は、気をしっかり持ちなさい。でなければすぐに意識を持ってかれるわよ？」

シホがそう呟いた途端、シホの目が鋭くなりあの時と…いや、あれ以上のなにかが…ッ!?

瞬間、私の周囲がまるで急に温度が下がったかのように寒くなり、体がガタガタと震えだす。そして金縛りにあったかのように体が動かない。

な、なにこの感情…!? シホがシホじゃないみたい…。まるで■■■■に遭遇したみ

たいな……!

(怖い……!!)

その感情が頭の中を埋め尽くしてしまうのではないかと恐怖したその時、

「シホさん……ッ！ もういいです！ これ以上は耐性がないのはさん達は……ッ!!」

リンディ提督の悲痛にも聞こえる声によってフツ……とその雰囲気は消え去る。

途端、私は地面にへたり込んでしまっていた。

全身から嫌な汗が流れて気持ち悪い……。

気づけば……なのはも、ユーノも、ファイアットも、クロノでさえも……全員私と同じような感じだった。

アルフは動物形態で茂みの中で盛大に毛を逆立たせて震えている。

エイミイもリンディ提督の後ろで普段見せない表情で体を震わせている。

「今のがなのは達が恐怖したものの正体……殺気よ。まあ今のは殺意がない分、軽い部類に入るものだけだね」

今のが、シグナム達の放ってきたものの正体……殺気。

でもシホが言う様に殺意が籠められていないものだとしたら、本当の殺気というのはどんなものなのか……。

様々な事件を担当したクロノでさえこの有様だ。

シホの形ばかりの殺気は相当なものだったのだろう。

なのはが震える声で、

「し、シホちゃん…」

「なのは、今の感覚をしつかりと覚えておきなさい。必ずって訳ではないけど相手はこんなものを平気でぶつけてくるでしょう。

それによって気をしつかり持っていないとすぐにその負の感情に呑み込まれて緊張の糸が切れてしまう。

最悪、戦意喪失して戦えなくなってしまうわ。だからこれからの修行ではこれも取り入れてやっていくけど、皆…覚悟はある？」

シホはまるで私達を試すかのような言い方をしてきた。

でも、確かにこれに慣れないと戦いにすらならないかもしれない。それを様々と痛感した。

そして、私達の答えはすでに決まっている。

「やるよ、シホちゃん！ どうしてあんな事をするのかヴィータちゃんに聞かないといけないの！ その為に必要なら…」

「あたしもだ。一々こんな怖い感情を抱いていちや埒があかないからね」

「だからシホ…。私達を鍛えて、こんなものに負けなくらい強くして…！ 今度こそ

守りたいものは守りたいから…!!」

私達の思いをシホに伝えるとシホは笑顔を浮かべ、

「うん。みんながその気ならもう止めないわ。最初はこれでダメだったら諦めていたところだったのよ?」

それでシホは肩をすくめていた。

やっぱりシホは私達の為にやってくれたんだ。

これでもう引き返しはできない…けど、覚悟は決まったよ。

第三十六話

『謎の女性と王女の夢』

時間は過ぎてシホ達小学生メンバーは学校へと向かっていった。

同時刻ではファイアットがアルフに基本から中国武術を叩き込んでいる。

そして対策室兼ハラオウン邸ではクロノがまだ苦い表情をしていた。

「しかし母さんとはかく僕も何度か事件で殺気は浴びたことはあつたけどあそこまでのものは初めてだった。

…正直言つて舐めてかかっていたのが本音なのかもしれない」

「そうだよねえ…。私なんてあんなの初めてだから腰を抜かすまではいかないけど、思わず泣きそうになつちやつたよ。

私でこれなんだからなのはちゃん達には相当厳しかっただろうね」

「考えてみればシホのものとの世界…正確には魔術の世界ではこんな殺気はごく当たり前だったのかもしれないな」

クロノがそう言つて表情を澁くした。

パソコン作業をしている傍らで聞いているエイミーでさえそのことに関して暗い顔をする。

だがいつまでもそうしているわけもなく二人はすぐに気持ちを切り替えてこれからのことに関して話し合っていた。

といつてもやはりシホの話が持ち上がってくるあたり、相当謎が多いのは確かなのである。

「新たに発見された魔力変換資質【風王】…。

アンリミテッド・エアといういまだ謎多い部分が存在するトリニティーデバイス。

その中の魔術回路に反応する魔術式という新たなシステム。

まだ完全覚醒していない管制人格…ユニゾンデバイスのセイバー・アルトリア・ペンドラゴン…。

シホちゃんの展開した古代ベルカの紋章陣。

そしてセイバーさんのいうシホちゃんの真の目覚めって意味深の言葉。

………これだけあげてもどれも新発見のことばかりだよ」

エイミーがモニターに展開した様々なデータの覧。それを見てクロノは顔をしかめつつ、

「確かに…。でもユニゾンデバイスが誰なのかが分かっているだけ収穫というところか

? どうしてユニゾンデバイスになったとかという疑問が浮上してくるけど」

「本当だよな。まさか彼の有名なアーサー王がユニゾンデバイスになってるなんて言っても多分ほとんどの人は誰も信じないと思うよ。」

まして真相は男と偽っていた女性だったなんて真相はまたとない歴史的発見だし」

「しかも過去にシホに仕えたことがあるというのだから言葉も出ないとはこのことをいうんだよな。」

P・T事件で使ったシホのエクスカリバーもこの人物には到底及ばないと言うし…。

まさに最強の使い魔だ」

「局には話すの?」

「母さんと話し合って正体だけは話さないようにするらしい。というか話したらそれこそどこかで嗅ぎ付けるかもしれない犯罪者にシホ共々狙われかねない。」

よってアンリミテッド・エアに宿っていたユニゾンデバイスとだけ話を通すことに決定した。グレアム提督もそこは承諾してくれたから多分安心だと思うよ」

「難儀な話だねえ…。シホちゃんもこれから相当苦労するだろうね」

「だな。でもそれより僕は一つ、確証はないけど感じたことがある」

「なにになに?」

「シホは、この世界にもしかしたら偶然で来たわけじゃないかもしれないというところ

だ。本当に確証は無いからどうともいえないけどね……」

「なるほどお……。確かに今までの問題を並べていくとほとんどが少なからずシホちゃん関係に繋がってくるからね。デバイスしかり、古代ベルカ式しかり……」

クロノとエイミイは憶測でしかないが、妙に真実味のありそうな話だけに頭を悩ませていた。



とうのシホはというと突如授業中に前触れも無く気絶して倒れてしまい保健室に直行されて寝かされていた。

保健室担当の先生が言うには体の疲れから来るものだろうと診断されてすずかとアリサはともかく、なのはとフェイトは思い当たる節がかなりあるので一緒に見ているとの事で保健室に残っていた。

すずかとアリサは心配げに、だが授業内容は後で教えるねと言って後ろ髪を引かれるように保健室を後にした。

保健の先生もちよつと用があるというので出て行き、都合よく部屋にいるのは気絶してしまったシホとなのは、フェイトの三人だけ。

シホは苦しそうな表情はせずただ寢息だけが聞こえてくるだけなので二人は安心していただけなのははふと、

「シホちゃん、やっぱり無理をしていたのかな…。いきなり倒れちゃったから私、とても心配しちゃった」

「…うん。そうだね、なのは。シホって他人に負担をかけないように無理している印象があるから今回それが一気に来ちゃったんだと思う。

朝のあれもやっぱり無理を隠し通していたんだよ。

直接とは行かないけどアルフの攻撃も魔術もなしで受け止めていたからそれもやっぱりあると思うから」

「ヴィータちゃん達との傷の件もあるけど…。結局、その原因は私達の力不足も関わってくるわけだから…。だからフェイトちゃん」

「ん。なに、なのは？」

「シホちゃんを安心させられるように、そして無理させないように一緒に強くなろう！」「…そうだね、なのは。必ず強くなる！」

二人は静かにだが決意を新たにしてシホが目を覚ますのを待っていた。

…そしてシホは夢の中でまた例の夢を見ていた。

『■■陛下…いえ、■■■■イ■■王女。

どうか■■■■直してください。■■は…あ■■たに忠■■誓った■■、■■にどうし■■私を■■王家でも■■■■だけ■■使■■いという異■■移■■という貴重■■法を■■、■■■■うとする■■■すか…!』

『聖■■■■金術■■、■■■■ツ■■ルン。■■■ません…で■■が■■た■■質な魔■■技術(■■■物■■■)はもし■用■■■さ■■ならばこ■■■乱■■世にさら■■る■■いが■■■る事が■■白。

■■言■■も■■■は危■■視■■れてい■■すし、あな■■■身も■■■れるこ■■■もう■■度■■ありました…。私の■■と認め■■いる■■■たにはそん■■■い運■■■味わ■■■欲しく■■…』

『し■■し…!』

(…また、王女と呼ばれている女性がイリヤに似た女性と一緒にいる…。なに、この言葉だけノイズだらけの謎の夢は…?)

シホはまた王女が女性に抱きついて涙を流しながらなにかの呪文を呟き、女性は開いた穴の中に吸い込まれていく光景を見る。

そしてその光景に既視感を覚える。

それはどこかキシユア・ゼルレッツ・シユバインオーグの使う第二魔法とそっくりだと言うことに。

女性はまた吸い込まれていく最中にまた涙を流しながら叫びをあげて、

『王女！ いつ■、いつかあ■の元にお■し■す！ だ■ら■い！』

また異空間をさ迷う光景を目にしてシホはなぜか胸が締め付けられるような思いになる。

そしてまた女性はシホの方に歩み寄ってきた。

シホは意を決して、

『あなたは、誰なの…？』

尋ねるが解答は前回と同じで、

『どう■私の■願を■えてくだ■。きつと■の時代に■再■するで■う。女をどうか■てくだ■い…』

『待つて！ あなたは本当に誰なの!?!』

シホは必死に声をあげるが女性は『まだ…』と、ノイズの無いはつきりとした言葉とともに首を振り儂げに笑みを浮かべてシホの前から消えていく。

するとまたシホの視界は光に包まれていく…。
そして…。



それは突如として起こった。

シホの寝ている布団を中心に古代ベルカの紋章が展開されなのはとフェイトはいきなりの事に戸惑いの表情を作る。

幸いこの保健室にはこの三名以外ないのでよかったがもし見られていたら大変だったであろう。

すぐそこにクロノがバリアジャケットをまとい転移してきて結界を展開する。

「クロノ!?!」

「クロノ君!?!」

「二人とも落ち着け。この教室だけ結界をはったから問題は無い。しかし…これはいつたい…」

クロノはシホが寝ている地面に展開されている朱色の魔法陣を見て難しい顔をする。

なぜいきなり、しかも術者本人は寝ているというのに魔法陣が展開されるのか…。

「クロノ…これっていったい…」

「シホちゃん…」

フェイトが不安げに尋ねてきて、なのはは心配そうにシホを見つめている。

とうのクロノもわけがわからない様子で首を横に振るだけ。

そこにエイミイがスクリーン映像とともに現れて、

『クロノ君、なにかわかったの…?』

「いや…。エイミイ、他にににか異常はないか？」

『今のところは…。それにしても、シホちゃん、急にどうしちゃったのかな？』

「さあな。わかっていれば苦労しない」

『だよね』

四人が唸っている間、しばらくすると次第に魔法陣は収まっていき完全に消えるといきなりシホは目を覚ましてガバツと勢いよく上半身だけ起き上がり、

「待って！ あなたは誰なのツ!? …… …… …… つて、あれ？」

『……………』

シホはいきなり起きて固まっている四人に目を移して、

「なんでクロノがいるの？ というかなんで私、寝かされているの？」

「なんで、つて…シホ、授業中にいきなり意識をなくして倒れちゃったんだよ？」

「覚えてないの？」

「…うん。そっちはわかったけどクロノがいるのはなぜ？」

「それはな。いきなり強力な魔力を感じて転移してきたんだ。その発生源は君だよ、シ

ホ」

「私…？」

「そうだ。ところでなにか変な夢でも見たのか？」

「あつ……。うん、前は一度……。そうだね？　アンリミテッド・エアが起動した時に見た夢だったんだけど忘れちゃって……。」「ということとは、今度は覚えているのか？」

「ええ。なんというか言葉がノイズだらけで何を喋っているのかよく分からない変な夢だった。でも人物の顔だけははっきりと思い出せるわ」

『ね、ね？　どんな人だったの？』

エイミイは興味深げに聞いてきてシホはポツリポツリと話し出す。

「……。どこか、戦場だったでしょう？　そこのあるお城の広間みたいな場所に私に似ていて赤い眼の色をした騎士甲冑を着た銀髪の女性と、それと女性に陛下と呼ばれていた右目が緑、左目が赤の虹彩異色の女性……。その人が私に似た女性を、まるで……。そう、大師父と私が使う第二魔法みたいな力で異空間に飛ばすという夢。」

そして異空間の中でその女性は私にまるで気づいているかのように歩み寄ってきてノイズ交じりに何かを必死に頼み込んでくるんです。

なぜか私も夢だと言うのに声を出させて『誰？』と聞いたけどその女性は、その時だけはつきりと『まだ……。』と呟いて首を振るんです。

そしてまるで、消えていなくなってしまうような儂い笑みを浮かべてどんどん遠ざかっていくと言う不思議な夢です」

シホの、夢だと言うのに鮮明すぎる内容になのはとフェイトは運命的ななにかを感じて目を輝かせている。

一方でクロノは「虹彩異色の王女……？」と呟いてなにかが頭に引つかかって考え込んでいる合間に、エイミイは突然大声を上げた。

『あーっ!?』

「ど、どうしたのエイミイ?」

「エイミイさん?」

エイミイは二人の声が耳に入っていないのか興奮気味にシホにあるものを見せる。それは誰かの肖像画だろうか?

『もしかしてシホちゃんが見たっていう王女の人って、この人!?』

「え、嘘!? は、はい。この人です!」

『やっぱりかあ……。ベルカの虹彩異色の王女で検索してみたら見事ヒットしたよ!』
「それで実際誰なんだ? 僕も初めて見るものだが……」

『詳しい資料は載っていないんだけど、旧ベルカ時代の王の一人、聖王家の最後の王、名前を【オリヴィエ・ゼーゲブレヒト】っていう名前らしいよ』

「オリヴィエ……、……っ!?」

その名を呟いた途端、シホは軽い頭痛に襲われ頭を抑えてしまった。

そしてどういいうわけか、

「私……この人の事、知っているかもしれない……。でも、どうして知りもしない事を……ううっ！」

シホは苦悶の表情を浮かべながらそう言ってまた頭痛が襲いかかってきて処理できないのか熱暴走してまたベッドに横になってしまった。

当然全員は慌てるがまた睡眠に入ってしまったものはどうしようもないとして一時保留扱いとなった。

「……なのは、フェイト、それにエイミイも。この件はあまり公開しないほうがいいかもしれない。だから誰にも喋らないように。艦長には僕自身が内密に話しておく。以上だ」

『は、はい……。』

執務官の顔になり三人は素直に頷いた。

クロノ自身、

「（もしかしたら、さっきの予想はあながち間違いじゃないかもしれない。異世界からやってきたシホ。そして異世界に飛ばされた可能性のある謎の女性。

………簡単にまとめるとしたら一度世界から追い出されてまたなにかしらの運命でこの世界に舞い戻ってきた子孫かなにかなのかもしれないな、シホは……）」

そう考えていた。しかし所詮憶測。今は考えても埒が明かないと判断し、それ故の保

留である。



…少し時間を遡り、シホが魔法陣を展開しているときに家ではやてのお手伝いをしていたシャマルは突然の魔力反応（すぐ途絶えてしまったが…）に目を見開き、

「今の強大な魔力反応は…、なに？ なにか、すごい反応だったけどもう収まったわ…なにが起きているのかしら？」

「シャマル？ どないしたの？ 手が止まっとるよ？」

「あ…なんでもないですよ、はやてちゃん」

はやての言葉に正気に戻ったシャマルだったが一度染み付いた感覚は忘れることができず内心頭を悩ませていたのだった。

第三十七話

『つかの間の平穩』

シホの謎の魔法の発動したその日にすぐに簡易ながらハラオウン邸で精密検査を受けたが目立ったものは特に発見されなかった。

ただ検査の件で分かったことはシホの内に眠るリンカーコアは完全に機能して現在も稼動中だという。

それを聞いてシホは顔をしかめながら、

「…とうとう私も魔法少女の仲間入り、なわけ？ これ…」

と、呟いていたそうなの。

その帰りにシホはなにか情報は入ったかクロノに聞いてみると、

「今分かっていいることは闇の書は魔力蓄積型のロストログア。

魔導師の魔力の根源となるリンカーコアを食ってそのページを増やしていく機能を保持っていて全666ページが埋まるとその魔力を媒体に真の力を発揮するものなんだ」

「666かあ…なんかサタン・獣の数字・ヨハネの黙示録が頭に浮かぶわ。それとネロ・カオス…」

「ネロ・カオス…?」

「ん? ああ、気にしないで。元の世界にそんな化け物がいたって話だから」

「…ちなみに聞くけどどんな奴だ?」

「ん…言伝に聞いた話だとある吸血鬼で体に666の獣の因子を渦巻かせていて倒すにはそいつら666体を一辺に倒さないと殺すことが出来ないとかいう強者」

「は…?」

その後、クロノは理解するのに苦労したと記載する。

「…君の世界にはそんな化け物も存在するのか」

「ええ。ま、もう倒されたらしいけど」

「倒されたって…倒す奴がいるのか」

「まーね。ちよつとした知り合いだったのよね。ま、そんな話はどうでもいいとしてそろそろ話を戻しましょう」

「そ、そうだな。どこまで話したか?」

「闇の書が666ページ貯まると真の効果を発揮するってところまで」

「それじゃ続きはというと本体が破壊されるか所有者が死ぬかすると白紙に戻って別の

世界で再生するという能力…」

「簡潔にいうと?」

「分かりやすく言えば転生機能と無限再生機能という所だろう。何度破壊しても復活してしまふんだ。だから闇の書の完全破壊は不可能だといわれている。対策があるとなれば…」

「完成前に捕獲、封印…そこらくらい?」

「そんなところだ」

「ふくん………そういえば過去に闇の書を完成させた者はいるの?」

「いるにはいるが、皆死亡している。それに闇の書は完成してもそれは破壊しかもたらさない危険なロストログアだ」

「そう…。後、それってやっぱり魔力以外にプログラムとかで構築されているの?」

「そうだと思うがなにか考えがあるのか?」

「ええ。それが魔法 “だけ” で作られていたらよかつたんだけど…そうすれば概念武装で初期化なり破壊なんなりできたりするんだけど」

「できないのか?」

「そこまで便利ではないわ。概念武装はいわば対魔術兵器だから機械よりのものには効果は薄そうなのよ」

「君が前に使ったルールブレイカーはどうなんだ？ あれは魔法にも有効に効いたかどうか」

「ま、ね。最後の手段として使ってみるのもありかもしれないわね。だから今の段階ではあまり期待されても困るものだけわ」

「そうか。まあいざというときには頼む」

「わかってるわ」

「ああ。それと別件だが魔導師一個中隊を借りられたからあまり君達の出番はないかもしれないぞ？」

「それでもなのはとフェイトは参加するだろうけどね」

「だろうな。ところで君はどうするんだ？」

「まだ万全に回復していない今は静観するしかないわね」

「そうだな」



それから数日が過ぎ、その間になのはとフェイトは魔力制御を重点的に行っていた。

その最中、

「うーん…難しいよお」

「うん。なんでこんなに難しいんだろう…？」

二人は魔力を一定以上固定して魔力球を両手の間に作ってそれがぶれないように集中するという修行。

一件地味だが、だが制御能力の向上に関しての修行についてはもってこいの事をしていた。

だが二人はそれを一定時間しか制御できないですぐにそれは弾けて最初からまたやり直しという作業を延々と行っていた。

「ほらっ、泣き言を言わないの。二人とも、いや聞いた話しだとクロノとか他の魔導師もだけど…。大抵感覚的でしか魔力の制御をしていないって話じゃない？」

「うん。今までバルディツシユと一緒に制御してくれていたから…」

「レイジングハートもそんな感じ、かな…？」

「そこが駄目ね！ 甘すぎる。なんでもデバイスと一緒にやろうとするから個人としての能力が向上しないのよ。自分ひとりの力で自身の魔力を全部制御できなきゃいつまで経つても半人前よ？」

「でもほとんどの魔導師はそうなんだよね…？」

「言い訳しない！」

：はあ。もしかしたら管理局の慢性的な魔導師不足っていうのは単純に魔力のランクが低い人とはことん低いと決定付けてあまり成果を期待していないからかな？

「そうだとしたらかなり危ういわね」

そこに見学にきていたリンデイが話しかけてきた。

「ええ。シホさんのいうことはあながち間違っています。魔力値が低い人達は大抵後方で支援に徹するパターンが多いですからね。」

それにデバイスがあれば資質をもった人はほとんどの人が魔法を扱えます。だからそういったこまかな魔力制御に関しておろそかになっているのかもしれないね…」

「そうですか。鍛え方次第では低ランクの魔導師でも弱点を見切れば高ランクの魔導師に打ち勝てる見込みは十分あると思うんですけど、残念ですね」

「言葉ありません」

「でも言ってもキリが在りません。幸い、いい例としてクロノは魔力制御に関しては人一倍努力したみたいで何度か動きは見ていますがそういった欠点はないようですが」

「あら、シホさんがクロノの事を褒めるなんて珍しいですね」

「気持ちが分かると思いますか…。私も昔は魔術の修行で制御を誤って死に掛けたことが何度もありますから。だからこちらはすべてが、とは言いません。」

「実際見たことがありませんから。ですがそこら辺の事は曖昧だと思うんです」

「そういえばシホさんの世界の魔術は制御を誤ったら悪くて廃人、最悪死で…よくても魔力枯渇で高熱付きで何日かは寝込む、が待っているのですかね」

「ええ。面白半分で魔術を使おうとしたら手痛いしつぺ返しが待っていますからそこら辺は三流でもない限り徹底していますね。」

前にもいったかどうか忘れましたが魔術師の最初の基礎は死を容認する事ですから「実体験者なだけに重みのある言葉ですね、見習いたいです」

「……………」

そんな、シホとリンデイの話の脇で聞いていた二人はまだまだ自分たちは甘いという認識を再確認しました気合を入れて魔力制御を繰り返していた。

それを見てリンデイは「あらあら」と笑みを浮かべて、シホは「いい起爆剤になりましたね」と相槌を打っていた。

そこでリンデイはふとあることをシホにたずねた。

「…そういうえば、シホさんは一緒にやらないのですか？」

「え？…えっと、それがですね。一度見てもらったほうがわかると思います」

シホは二人に一回やめてもらいたい自分が離れて目を瞑り魔力を制御しようとする。

すると最初静かだったが、いきなり風がシホを中心に発生し始めてたちまち目に見えるほどの小台風が出来上がる。

しかしそれはすぐに止みだして両手の間には野球ボールくらいの魔力球が出来上がる。

それを見てリンディは感心した表情を浮かべるが、なぜかなのは達は止めるよう言っているのになが？とリンディが思ったがすぐにそれはわかった。

シホの表情はいつも通りにしているが額には大粒の汗をいくつも浮かべている。

ついでに体の魔術回路がなにやら光っているではないか。

「あ、あれは…？」

「は、はい。シホは最初リンカーコアの方の魔力だけを操ろうとするらしいんですけど、しばらくすると閉じているはずの魔術回路の方からも魔力が自然と流れてくるらしいんです。

シホが言うのは魔力同士がごちゃ混ぜになってより難しい制御を必要とする、らしいんです…」

「なんでもこれなら魔術だけの方が楽だっっていっていました。最初の頃、体中の魔術回路が発光したときはびっくりしたよなー」

「それってつまり、今シホさんの体の中では例えるならリンカーコアの魔力が灯油で、魔術回路の魔力がガソリンと仮定しまして…。

そんな混ぜるな危険というフレーズがびったりの危険物極まりないものをシホさん

「は必死に制御しているということですか!？」

とどのつまり、その通りである。

現在シホはリンカーコアを中心に魔力を展開し、魔術回路の方を見方によつては補助の形で展開している状態だ。

その暴走具合といったら……かつて魔術回路を一からいちいち何度も生成していた時の感覚を二倍にした感じで体感しているのだからたまつたものではない。

おまけに魔力変換資質【風王】という力も押し掛かっているので手違いでも起こせばすぐに魔力は暴走して自身に返ってくるのは請け合い。

……——五分後、そこには制御を解除してぐったりとしているシホの姿があった。

「大丈夫……? シホちゃん?」

「やっぱり駄目……。これ、制御がとても難しい。魔術回路の方を抑えるのにも神経使うし、なまじ【風王】とか未知の属性も相まって体力を一気に持つてかれる」

「ふえ……。やっぱり大変なんだね」

「ええ。分割思考でなんとか整えているけど完全制御はとてもではないけど無理かもしれない……」

珍しくシホから弱気な発言が出てきて全員はその大変さを曖昧ながらも実感した。

と、そこに別に修行していたフィアットとアルフが帰ってくるが無言でフェイトに寄りかかった途端、子犬モードに戻りそのまま熟睡してしまった。

「えつと、フィアット？ アルフ、一体どうしたの？」

「そうですねー。基礎を体で覚えてもらうためですので直に技を何度もかけました」

《打ち込み約100回からしましてそのほとんどでアルフ殿は空を飛びました。マスタ―は容赦がありません》

マグナのバルディッシュよりも性格は軽めだが、それでも低音での簡潔な発言にフィアットは苦笑いを隠せないでいた。

その証拠にアルフの体にはいくらか痕が残っている。

そこでフィアットが取り出したるはシホ特製漢方薬。通のお人はよく使うがなれない人が使うと悲鳴を上げるといふ代物。疲労回復だけでなく美容にもいいという効能があるもの。

(実は密かに忍がこれで商売に出したところ、見事成功したという話を聞いた時はたいそうシホは驚いたという)。

お気に入りしている人は上げると高町士郎を筆頭に恭也、美由希。忍にアリサにすずかにフィアット。最近ではリンディも美容のために使っていてレティに勧めて苦笑

いを浮かべられながらも受け取ったという話だ。

反対にいまだに慣れないお方はよく運動をする人を例に挙げると知り合いだと、やはりなのは。これに後、フェイトとアルフも加入することになる。

現に今薬を塗られたアルフは目が思いつきり覚めて悶絶の声を上げている。しかしファイアットはすかさずバインドで縛り逃げないようにしている。

まさに生き地獄のような体験をアルフは今、味わっている。

終了後、アルフはフェイトの腕の中で泣き寝入りをしていたのはご愛嬌。

その後はなのはとフェイトが魔力制御を平行しながらシホに体の動きなどを教わっている光景が目に入った。

素人とは思えないその変な癖をつけない教え方はやはりリンデイの関心を高めることに繋がっている。

そうして今日の修行は終わりに近づき始めた時にふとアルフがこんなことを言い出した。

「…シホってさ、片方ずつだけ無理に制御せずに両方とも受け入れて魔力を扱ったほうがいいんじゃないのかい？」

『え？』

全員から視線を浴びてアルフは「うっ…」と後ずさりをするが別に悪いことは言っていない

いないと自身に言い聞かせて、

「もつとき、柔軟に考えてやったらどうってこと。片方だけ制御してもどの道シホのデバイス——アンリミテッド・エアだっけ…？」

そいつは魔術回路とリンカーコアの両方に繋がっているんだろ。だつたら両方とも同時に操作したら効率もいいし、手間も省けるんじゃないかな？」

「…そっか。そういうえば魔術も起動すればこちらの魔法に変換されるようになっていんだっけ。なら…」

シホはなにか思い至ったのかおもむろに立ち上がり、

「——同調開始」
トレース・オン

シホは目を瞑って神経を集中し魔術回路を開き体の内部、とくに魔力が通る通路を解析していく。

そしてしばらく経過すると、

「…見つけた」

『えっ？』

「魔術回路に細く、だけど魔力が通る別のラインを発見。さらに解析を継続…」

まるでまわりが見えていないかのようにシホは黙々と解析を進めている。

その光景を見て一同は、

「…シホちゃんって自分の体の中も解析魔術で色々調べられるから便利だよねー」

「私たちも出来たら異常とか違和感とかすぐにわかるのにな」

「いえ、もし出来たとしてもやめておいた方がいいですよ？」

お姉様はそういう体質に良くも悪くも恵まれていますから普通に解析できています
が、お姉様が言うにはこれを普通の魔術師が行ったら容量オーバーで脳がこう、パンツ
！ となるらしいです」

ファイアットの大きさなりアクションも含めた説明に一同は顔を青くした。

そしてそれだけシホは事解析に關してはある意味の才能かもしれない。

「…確かに事細かに調べ上げるとなると一つのパソコンではメモリーが持ちませんから
ね。脳も容量の限界がありますから当然ですね」

「はい。でもお姉様はそれで何度か九死に一生を得たと言っていましたね。」

以前に爆弾魔の仕掛けた高度な時限爆弾に遭遇してすぐさま解析をかけて瞬時に導
線を切断して助かったとかという話も聞きましたし…。

他にも畏だらけの敵地に侵入した際、ビル一つまるごと解析してしまつて悠々と相手
を確保したとかなんとか…やっぱりお姉様はすごいです！」

『……………』

その出鱈目な話に誰もが言葉を失うのは必然とも言える。

それは、シホが本気になれば管理局内のセキュリティすらも次々と解除できてしまいかねないほど脅威だからだ。

「改めましてシホさんが敵ではなかったと深く、それはもう深く喜ぶところでしようね」
引き攣り気味にリンデイがそう言つて反対の意見は上がることはなかった。

…と、ここでシホになにやら変化が訪れた。

「リンカーコアの魔力の流れをキャッチ…。魔術回路と直結。接続完了。――
トレース・オフ セット
同調終了。起動！」

するとシホの真下の地面にベルカ式の魔法陣が現れる。



同時刻。

マリーのもとでレイジングハートとバルディッシュのカートリッジシステムの搭載作業と平行してアンリミテッド・エアの解析作業が行われていた。

すでもう申請登録は通っているのでいつシホが使ってもいいように大事に保管されているがアンリミテッド・エアはシホの力の一端の兆しを感じ取った。

《第一キー解除します》

「へ？」

突然のアンリミテッド・エアの発言に作業に没頭していたマリーは素つ頓狂な声を上げる。

次には脳がフルに回転しだしてモニターを食い入るように見ながらカタカタとキーボードで検索していくとある一つの発見をする。

「ブラックボックスの一つが解除、されてる…？」

何が起こったのか分からないがとりあえずマリーは一応何が起こってもいいように緊急ツールをいくつも立ち上げてそのボックスの中身を見る。

その中身にはこう表示されていた。

【私を扱う資格を会得。よってデバイスの意思を復旧】

「復旧って…まさかユニゾンじゃない方の意思が蘇るって事!？」

《おはようございます》

「ひゃわっ!!」

いきなりのデバイスの発言にマリーは驚いて思わず椅子ごと転倒、頭を地面に強打して気絶してしまった。

弱30分くらい気絶していたらしいが起きると色々と問い詰められることになるが、このときデバイス“アンリミテッド・エア”は小声で、

《驚かすつもりはなかったのですが……。いたし方ありません、目覚めるまで待つとしましょう。ですが……。お腹がすくようなこの気持ちはなんでしようか？》

目覚めたばかりでいきなり本当にデバイスか？という発言をぶちかましていたのは秘密である。



場所は戻って、シホは魔法陣を展開させながら無言で手足をギョツ、ギョツと動かしていた。

「……………ぶむ」

何を納得したのか分からないがシホは干将・莫耶を投影して現在体の中で渦巻いている魔術回路とリンカーコア両方の魔力を強化に当てた。

そして全身に余すことなく魔力を循環させていきカッ！と目を見開いた瞬間、
「せいっー！」

双剣を一閃、二閃と次々に繰り出して演舞を踊るかのように舞いだした。

そして一閃するたびに微量に振った箇所が一瞬ぶれている。

見学していたのはとフィアットはあることに気づく。

「すごい…。シホちゃん動きがいつもよりさらにすごくなっている」

「なのはさんも分かりますか？ はい、私も驚きました。まさかここまで身体強化のレベルが上がるなんて思っていませんでした」

「では、これは制御に成功したと言うことでしょか？」

リンデイがそう尋ねると二人は笑顔で頷いた。

アルフはその光景を見て、

「まつ！ あたしの助言がなかったらうまくいかなかったけどな！」

「あ、アルフ…」

えへん！と犬姿のまま胸をはっている。

それにフェイトは少し恥ずかしそうにしながらもシホの動きをじつと見ていた。

「でも、やっぱりすごいね、シホは。追いつこうとするとまたすぐに距離を離されちゃうよ」

「でも自然と憎めないんですよ。そこがお姉様の魅力です！」

「うんうん！ なんとたつてシホちゃんって私達の師匠さんだからね！」

集中して話が聞こえていないシホをよそにあれこれ言っている三人。

その三人を見てリンデイはアルフに、

「シホさんはずいぶんと慕われているんですね。羨ましいくらいに…」

「そりやそうだよ。シホはまずなのはに基礎を叩き込んでフェイトと五分にやりあえるほど成長させたし、ファイアットの武術の師匠だしね。」

あたしなんかファイアットに習っているんだから後輩みたいなものだし。それにフェイトも色々あつたけどシホに救われたところが多いからな。

当然なのは達にも同じくらい感謝はしているよ、あたしは」

「そうですね…」

リンディは半年前のことを思い出しながら目の前の光景を微笑ましく見ていた。

第三十八話

『学校生活』

シホがやつとの事で体が全快してきて、フェイトも学校生活に慣れてきた頃の事。ずかふとした一言から一つの話は始まった。

「そういえばフェイトちゃん宿題ちゃんとやってる？」

「うん。少し難しいけどちゃんとやってるよ」

「頑張ってるね」

「うん」

実に和やかな会話である。

しかしここである意味フェイトは次に話す内容を間違ったかもしれない。

「でもアリサもすごいよね。英語も日本語も完璧なんだから」

「えっへん！ パーフエクトバイリンガル！」

「「わー！ー！ー！」」

それでなのは達が拍手を送る。

しかし、

「でもあたしはいいとしても、シホはなんていうか反則なのよ…」

「…ん？ なに、アリサ」

そこで話しに入っていないなかったシホが介入してくる。

「シホ。あんたの話せる言語をすべていってみなさい」

「え？ えつと、あまり自慢できるものじゃないわよ？」

「いいから！」

「…わかったわ。まず日本語、英語から始まり中国語、ドイツ語、ラテン語、ギリシヤ語、韓国語と…他にも読みしか出来ないけど色々読めるわ」

「「おー……」」

なぜシホがこんなに他国の言葉を話せるのかと言うとリンに魔術の修行を習い始めてからと言うもの色々な魔術書を読む機会が増えていった。

世界に出てからもシホは人と話すのに不便がないように勉強を重ねていたのが功をそうしてこうした知識が身に着いたのである。

しかしそんな泥臭い話はしないので見方によつてはシホはとても頭がいいという風に捉えられてしまう。

唯一すずかはシホの事情を知っている身だがそれでも凄いという感想しか出てこな

いのが本音である。

「シホちゃんは努力家だもんね」

「ま、まああまり誇れるものじゃないし…生きていく上で覚えたのが殆どだから」

「あー、もう！ シホはなんでそう謙遜しちゃうの!？ 理由は何であれ一度身につけた知識なんだから見せ付けてやればいいのよ！」

「そんなものかな…」

「あんたは自分の力を卑下しちゃうところが悪い癖よ」

「す、すみません…」

「あ、アリサちゃん…シホちゃんも謝っているんだからそんなに強く言わないでね？」

「まあ…さすががそう言うならもう言わないけど」

アリサはそれで引き下がっていった。

「まあシホが規格外だっていうのはもう承知済みだからこの際隅に置いておいて」

「ひどい…」

「シホちゃん、落ち込まないで。私は味方だから」

すずかに慰められているシホを尻目にアリサはあることを告げた。

「フェイトとなのはの理数系の成績についてビミョーに納得いかないのよね。

なんで二人して理数系だけが抜群に成績がいいのツ!？」

「え…」

「ええと、なんでだろう…?」

・文系

アリサ 学年一位(満点)

シホ 学年一位(満点)

すずか 中の上くらい

なのは 中の下くらい

フエイト かなり気の毒

・理系

なのは 学年一位(満点)

フエイト 学年一位(満点)

シホ 学年一位(満点)

アリサ 学年一位(満点)

すずか 中の中くらい

図に表すところという風になる。

それですが「わー、わかりやすい」と言っている。

「…こうしてみるとやっぱりシホはすごいね」

「や、なんていうか私個人としては一つでもミスをすると思しくなるから」

「なんで…?」

「ちよつと黙秘権を行使します…」

「ふふふ、私はその理由を知っているよ♪」

「すずか。まだみんなには話していないからこの件に関しては…」

「うん。内緒だよね。私とシホちゃんだけの秘密〜!」

シホの秘密を知っている事にすずかは浸って、にへらくという表情をしながらすずかはシホの腕に手を回した。

それでアリスはいつもの事かと溜息をつき、なのはとフェイトは少し顔を赤くしていた。

シホも最近頻繁に見るようになったすずかの大膽な行動に顔を赤くしながらも、

「でもフェイトは美由希姉さんの数学の問題も解けていたからなのはよりは上かもね」

「そんな事はどうでもいいのよ! 負けていられないわ! フェイト! 今度は塾のテストで勝負よ!」

「うん、いやー」

「フェイトちゃん、大丈夫？ アリサちゃん負けず嫌いだから…」

「うん！ 面白そうかな」

「そーそー。学校のテストなんて百点は当たり前で面白くないもんねー」

「あー、アリサちゃん？ それは絶対おかしいから…」

その後、お昼タイムが終わりなのはとフェイトは二人でお弁当を洗っている間に並行してお話をしていた。

最初は魔法の構築とか制御は理数系だもんね、やら…

みんな運動できるよねという話題になったりしていた。

「でもなのも最初に比べれば中国拳法をシホに嗜み程度に習っているから動きはよくなってきたよ？」

「そうかなー。ファイアちゃんに比べたら雲泥の差だし…」

「でもいいと思うよ。それだけ戦略の幅が増えるんだし。レイジングハートに残された赤い子との戦いの映像だけど技を決めていたじゃない。」

それにクロノとシホが二人で練った練習プランにも着いてこれているんだからなのは成長しているよ」

「うん、だいたいんだけど…シホちゃんは素直に成果が褒めてくれるっていうのは稀だ

から」

「それだけなのはに期待しているんだよ、きつと」

「うん、だいたいね。…でも」

そこでなのはフエイトにくつついて情けない顔をしながら、

「それでも私体育が苦手な事は変わらないから心配なの…」

「大丈夫だよ。午後の体育のドッジボールでは私がきつとなのはを守るから」

「うん…ありがとう、フエイトちゃん」

なにやら二人の間に友達以上の雰囲気醸し出してきたところで後ろから声が掛かってきた。

「あー。また二人でベタベタしてるー」

「今日は何のお話？」

「二人は仲がいいわよね。まるで恋人みたい」

「にやつ!? そそそ、そんなことないよ!？」

「そ、そうだよ？」

二人は終始三人にからかわれたのだった。



午後になり体育の時間になった。

それぞれが準備運動を開始する中、それを違う屋上で見ている三人の姿があった。

一人目はエイミー。二人目はアルフ。三人目はファイアット。

「お、やってるやってる」

「お姉様は髪で目立っていますからすぐに発見できますね」

「朱銀髪で更に陶器のように白い肌だもんな」

三人がなぜ見に来ているのかというエイミーの時間が空いてちようど暇を持って余っていたので修行をしていたアルフとファイアットを呼んで引つ張ってきたのだ。

「今日はドツジボールをやるみたいだね」

「班分けは………アリサさんとすずかさんが組で、お姉様となのはさん、フェイトが同じ組のようですね」

「バランス的にはちようどいいんじゃないかな？　なのはは体のキレが改善してきたとはいえ苦手なのは変わらないし」

そして試合が始まるとさっそくアリサがシホ達の班の誰かに当てに来ていた。

しかしそこは許さないとばかりにシホとフェイトが素早く走り込みどちらかが目配せでボールをキャッチする。

パスを回しながらもボールはシホの手に回り勢いよくシュートをかます。

アリサが当たりそうになるが、

「すずか!」

「うん!」

アリサの前にすずかが出てそれをキャッチする。

そしてなにやら試合の雰囲気は少しづつ一変してきている事に見ていた三人も気づいた。

「な、なにかシホとすずかの間で火花が飛び散っているように見えるんだけど…」

「そ、そうだね…」

「なにかありえない事が起こりそうです」

そして三人の予想通りそこからシホとすずかによる接戦が始まった。

「シホちゃん、いくよ!」

「来なさい、すずか!」

すずかの手からすごい剛速球がシホ目掛けて放たれそれをシホは危なげなく避けるが急にボールが円を描くようにカーブしだしシホに迫る。

そのボールは他の生徒に当たってしまったが変わりにボールはシホ達の方に周り今度はシホが反撃とばかりに、

「標的はアリサ！ 沈める!!」

シホはなにやら小声で「そのシンゾウ…」と呟いているのを耳がいいフェイトが聞き顔を真っ青にして「いやいや、聞き間違いだ」といつて顔を振っていたのはこの際放っておこう。

しかしシホは心の中で、

(ゲイ・ホルクもどき空間貫く剛速球!!)

と、本気なのかお遊びなのか分からない事を口走っていた。

そして放たれる直球は見事にアリサに突き刺さった。いや、本当に突き刺さった訳ではなく、例えで言えば顎を抉った。

それによりアリサは場外に退場。

お返しと言わんばかりにさすがが場外にパスを回し速攻で復活したアリサがなのは仕留めた。

いやしかしここでまだボールが空に飛んでいる事にフェイトは気づいて空へとジャンプをして空中で体勢を立て直してさすがへと放った、が相手が悪かった。

すずかはやってきたボールをキャッチしたまま腕を回転させていまだ空に浮いているフェイトにカウンターをしてフェイトは直撃して地面に落ちた。

「ああっ!」

「うわっ！ フェイトーッ！」

なのはとアリサの声上がる。

「直撃ですわね……」

「……なにげにあの子も凄いな」

「さすがなのはちちゃんとシホちゃんの友達だ」

三人はさすがの凄さに驚いていた。

「さすがちちゃんももし魔導師の素質があつたらなのはちちゃん達みたいにかなりの魔力あつたのかな？」

「どうでしょうね……。私としましてはあまり関係してほしくありません（できるならあの子にはお姉様とあまりこっちの関係はしてほしくありません）。私の出番が減りますから……）」

ファイアットが心の中でメタ発言をしている間にもドツジボールは熱が入っていく。

お互いに残りも少なくなってきたていよいよシホとすずかの定番の試合内容が開始されてきたのだ。

二人が投げればそれだけコート内の戦いは熾烈なものになっていき目で追っていくのも大変な動きをしているのだ。

その戦いに三人も見入っていて気づけば試合終了の笛が鳴らされ、結局シホとすずか

の決着は着かず、でも人数の差ですずか達が勝利を手にしていた。

「はあ……。白熱した試合でした」

「そうだね。さて、試合も終わった事だし私達は戻ろっか」

「それじゃファイアット。また稽古を頼むよ」

「わかりました」

それで三人も早々に引き上げていくのだった。

第三十九話

『スーパー銭湯（前編）』

学校の授業終了のチャイムが鳴って、今日も一日学校での授業が終わりを告げた。

「ううう眠かった」

アリサがそう呟く。

「アリサちゃんちよつとウトウトしていたもんね」

「だって、退屈なんでもん。あたしの席、窓際だから日差しがポカポカと暖かいし…」

そんな事を言っている間にフェイトがクラスの男子と会話していた。

それでフェイトと男子の会話が終了すると、ちょうどよくなのはが話しかけた。

「フェイトちゃん」

「なのは…」

なのはは楽しそうにフェイトと会話をしだす。

それを見てシホもクスツと笑みを浮かべる。

「微笑ましいわね」

そうシホが呟いていると、アリサが声をあげて、

「さあ、帰って昨日の映画の続きを見るわよ！」

「うん。なのはちゃん、フェイトちゃん、シホちゃん、準備いい？」

「うん」

そして帰り際、

「フェイトちゃんももうすっかり学校に慣れた…？」

「うーん…多分少しは」

「でもクラスの友達とも自然に馴染んでいるじゃない？」

「うん。いい子達だよ。話しかけてくれるのも嬉しいよ」

「フェイトは体育の授業でのスーパープレイ以降、男子に人気あるしね」

「結局はシホちゃんとすずかちゃんが全部最後は持ってたけどね」

「あ、あれは、そんなに二人と比べればスーパーじゃないと思うんだ」

「でも、フェイトちゃんそれからサッカーとか誘われていたよね？」

「うん。やってみただけどサッカーは難しいよ…」

「ウチのクラスの男子、サッカーが得意な子が多いから頼めば教えてくれるよ」

「うん。外で遊ぶのもいいけど私はすずかやアリサやなのはやシホと一緒にいるほうが

「一番楽しいよ」

「うん！」

「ありがとね、フェイトちゃん。ね、シホちゃん」

「そうね、すずか」

そして放課後、五人はすずかの家で映画を見ていた。

その度にアリサは映画に影響されてか、

「かつこよかった！ 私、将来ガンマンになろうかな」

「アリサちゃん、また」

「影響されやすいんだから」

「ふふ、アリサ、似合いそうだよ」

「でしよう」

他愛ない会話をしながら今度はゲームをしようという話になった。

そしてシホ、なのは、フェイトの三人は帰りを送ってもらい高町家とハラオウン家は家があるので大抵どちらかに寄っていく事が多い。

本日はハラオウン家にシホとなのはが寄っていくようである。

「ただいま」

「「お邪魔します」」

家の中に入ってみるけど中には人の気配はなく誰もいないようだ。

「あれ？ エイミイさん達はいないの？」

「え？ う、うん。リンディ提督とクロノは本局でエイミイはアレックス達のところに行くつて。アルフト、ユーノ、ファイアットも一緒にいつているみたい」

「デバイス絡み？」

「うん。…それじゃ夕飯まで軽くトレーニングでもしようか」

「それなら私が監修しているわね」

「お願いします」

「シホ、お願いね」

そして屋上まで移動し稽古試合が始まった。

内容はなのの方が誘導弾をフェイトに放ち当てたら勝ち。

フェイトの場合は誘導弾をその自慢の高速機動ですべて避けきりなのはに一撃を与えたら勝ち。

どちらもデバイスがないので公平な闘いになった。

まだなのは魔力が完全に回復していないとはいえ魔法を使えないわけではない。

魔力の効率的運用、デバイス無しでの魔力の扱い方を徹底的にシホは二人に叩き込んだのでいい具合に戦いになっている。

「シュート！」

「ッ！ まだ！」

フェイトはなんとか避けたが次弾を密かに待機させていたなのはの攻撃を受けて沈黙する。

「うー。私はこの機動じゃダメなんだね」

「フェイトちゃんはどれもすぐに対応して避けちゃうからどうやって誘導弾を隠して当てようかが考えようだったの」

「デバイスがないとどうしても力技はできないから読み合いの戦いになっちゃうからフェイトはもつと様々な機動をどう運用していくかがこれからの課題になってくるわね」

「うん、わかった」

「なのはも前より操作性能が上がってきたけどその分一個一個が少しだけ動きが単調になってきているからもつと集中力を高めるように」

「はーい」

「よし。それじゃなのははまだ魔力が万全じゃないから休んでいなさい。フェイト、次は私が相手をするわ」

「うん。ファイアットとまではいかないけど頑張る」

それで今度はシホとフェイトが向かい合った。手持ちはシホは二本の干将・莫耶と同じ長さの棒、フェイトはバルディッシュと同じ長さの棒を構えた。

「それじゃ二人とも、始め！」

なのはの掛け声と共にフェイトは一気にシホに最近出来るようになってきた瞬動術で詰め寄り背後に回り棒を振るう。

だけどシホは即座に右の棒でそれを防ぎ左の棒でフェイトに攻撃を加えようとした。

しかしフェイトは攻撃が出来なかつたと判断した瞬間にすぐに距離を取りシホの出かたを伺っていた。

「シホは防御が固いから中々崩せないね。いつも通り」

「攻防一体の構えは私の取り柄だからそう簡単に崩せないわよ。と、いつでもいつも私が受けに回っていたらフェイトも退屈でしょうし……」

シホの言葉が途中から近づいてくるように聞こえてきてフェイトは急に危機感を覚えて咄嗟に勘を頼りに棒を右に振った。

途端、カンツという鈍い音がしてフェイトはなんとか珍しく攻めをしているシホの振るう棒を受け止めていた。

「今、ただの勘だけで振ったでしょ？　今回は防げたからいいけど眼で追えなくなったらアウトよ？」

「うん、ごめん。もう一度お願いしますー！」

「よしー！」

そこからシホの怒涛の攻撃が始まった。

まずは右を踏み込みと共に上段から振り下ろしたがそれは防がれる。

そこから右薙ぎに振るうがそれは一度後ろに下がりになされる。

右に払われたのを狙い今度は左から仕掛けるがなんとか追いついてきて受け止める。

体勢を低くしてフェイトの視界の下に潜り込み突き上げからの切り上げを仕掛ける

も今度も両手に思う存分力を込めて受け止められる。

意表をつけてそこから心臓に向かって突きを見舞うが棒で打ち払われてしまう。

こうしてみると一見シホの攻撃は悉くフェイトに受け止められてしまっているよう

に見えるが、フェイト自身はこれもシホの予定の内なんだろうと思っている。

連続的に攻撃を放っているシホの表情からは涼しい顔をして疲れは見えず、逆に受け

止めているフェイトは神経を最大限にまで高めて受け止めている為に額に汗が滲んで

いる。

「はあ、はあ…！」

「これで最後よー！」

「はいー！」

最後と言いつつそこで先ほどまでの動きを二倍にしたかのように畳み掛けたがフェイトはそれをなんとか受け止めた。

「よし、今日は終了ね。フェイトの集中も切れてきたようだし」

「ふー、ふー…シホ、最後だけスピードを上げたよね？」

「目が速度に慣れてきた時に急に動きが変わる敵がいるからね。意表もつけていたでしよ？」

「確かに…最後のは驚いた。シホ、もう体は完治したの？」

「だいたいはね。さて、今日の訓練もここまでにしましょう」

「わかった」

それで片づけを始めながらフェイトは二人に時間は大丈夫？と聞いた。

それに対してなのはが答えた。

「うん。お父さん達もフェイトちゃんの家なら安心だからって」

「それだけフェイトは信頼されているって訳ね」

「そんな…少し嬉しいな」

そんな時になのはの携帯に連絡が入ってきた。

「あれ？ リンデイさんだ。はい。なのはです。はい、はい、今、マンションの屋上で練習を、はい、代わりますね。フェイトちゃん、リンデイさん」

「あ、うん。はい、フェイトです」

「荒事ではないみたいね……」

「にやはは。そうみたいだね」

シホの心配も杞憂で終わったようである。

「はい。聞いてみますね。シホ、なのは、提督が今日は外食にするからもしよかったら一緒にどうって」

「本当？」

「もしよければ提督から、なのは達のお家に連絡してくれるって」

「うん。私は大丈夫」

「私も大丈夫よ」

「うん。もしもし、大丈夫だそうです。はい、はい、そうですか。わかりました。はい、失礼します」

それでフェイトは通信を切った。

「提督とクロノももうすぐ帰るから、先にお風呂済ませちゃいなさいねって」

「うん」

「了解よ」



Side フェイト・テストロッサ

お風呂加減よし。

準備は万端。

よし！ もう準備は出来た事だし、お客さんであるなのは達に入ってもらおう。

そう思い、

「なのは、シホ、先にお風呂どうぞ」

「そんなフェイトちゃんのお家なんだからフェイトちゃんがお先に」

「そうね。私は最後でいいわよ」

なのはとシホがそう言うけどやっぱりお客さんであるんだし、

「やっぱりお先に」

「そんなそんな、フェイトちゃん」

「なのは、ほんとに」

「……」

お互いに譲り合って話が進まなくなってしまった。どうしよう？

やっぱりここは「なのは、一緒に入ろう」と言うべきなんだろうか？ それともシホと…。

あ、でも、それはちよつと…。

「うん？」

エイミイとは一緒に入ったことあるけどこっちの世界の常識としてそういうのはおかしかったりするって子も多いし。

「フエイトちゃん？」

「顔を赤くしたり悩んだりして面白いわね、フエイト」

それでなのはとシホが困っちゃったりしたら困るし、えつと…どうしよう？

でも、想いはちゃんと言葉にしようって決めたばかりだしここはやっぱり勇気を出して！

「なのは！ シホ！」

「はい」

「もしよかったら、あの、あの…！」

私が盛大な決断をしようとした時だった。

「ただいまー！」

「あ、エイミイさんだ」

「おー！　なのはちゃんにシホちゃん。いらっしやい」

「お邪魔しています」

「ただいま。フェイトちゃん」

「お、おかえり。エイミィ…」

「どうしたの、フェイトちゃん？　顔真つ赤だよ」

「別に、なんでも…」

告白を邪魔されたなんていえないし…。

「あー、お風呂場前で立ち話つてことは、三人ともお風呂はまだ？」

「はい。ちようど入ろうかなつて」

「ああ！　それはグッドタイミング！」

そう言つてエイミィは指を鳴らした。

どうしたんだろう？

「こつちもグッドタイミング」

「こんにちわー！　お邪魔しまーす！」

「お姉ちゃん？」

「美由希姉さん？」

「美由希さん？」

そこになのはとシホのお姉さんの美由希さんがやってきた。

「美由希ちゃん、いらっしやい」

「えへへ、お邪魔するよエイミイ」

「エイミイさん、お姉ちゃん。いつの間に仲良しに？」

「そりや、下の子が仲良し同士なら、上の子もねえ」

「えへへ、意気投合したのは今日なんだけどね」

「それにしても数年来の友人のような感じですけど…」

シホがそういう。確かに今日知り合ったばかりで仲がいいのは確かだね。

「ま、ね」

「それでグッドタイミングって言うのは？」

「あ、うん。これこれ。美由紀ちゃんが教えてくれたんだけどね」

一枚の広告をエイミイに渡される。

そこには、

「えつと…海鳴スパラクーア、新装オープン？」

「ああ…」

シホはなにやら分かったみたいだけど私は分からず首を傾げてしまった。

「えつとね、簡単に言うとは皆で入る大きなお風呂屋さん。」

温泉とか泡のお風呂とか楽しいお風呂がいっぱいなの」

「そうなんですか」

「より分かりやすくいうとスーパー銭湯とか言うよね」

「なるほど…」

「ふえー。こんなのが出来たんだ」

「知らなかったわね」

「どうやらなのはシホもこの事は知らなかったみたいだ。」

「で、美由紀ちゃんと一緒に行こうという話になって、私は着替えを取りに来たわけだ」

「なのは達も一緒に行く?」

「え、いいの!」

「あまり過激なスキンシップがなければ平気です」

「もう、シホちゃんは恥ずかしがり屋なんだから」

「何度もいいますが美由希姉さん、私は…」

「わかってるわかってる〜!」

「なんだろう? シホは美由希さんと一緒にお風呂に入るのが苦手なのかな?」

「後でなのは話を聞いてみるとなんでもいつも朝や夜のお風呂でシホが入った後に」

「一番目に美由希さん、二番目に桃子さんの確率でよく強襲を受けるといふ。」

シホ自身もなぜかお風呂でのスキンシップを苦手としているらしい。

「アリサちゃん達も誘ってもいい？」

「いいよー。それじゃみんな準備！」



…シホ達が銭湯に行く騒ぎをしている一方である家で、

Side 八神はやて

今私はおでんの汁を小皿にとって味見しとる。

「うん。仕込みはOK！」

「あく、いい匂い。はやて、お腹減った」

「まだまだ。このまま置いといて、お風呂に入って出てきた頃が食べごろや」

「ううー、待ち遠しい」

夕食の匂いにさすがのヴィータも限界のようや。

あ、そうや。もう一人にも味見手伝ってもらおう。

「アーチャー、味見してもらってええ？」

「任された」

すると部屋の高い所に掴まっていたアーチャーが鷹さんの姿のまま私のところへとやってきて、その姿を男性の姿へと変化させる。

最近になってアーチャーは人間形態になれるまでに魔力が回復してきたそうで普段は魔力節約のために鷹の姿になっているけどいざという時にはこうして人間の姿になつてくれる。

なんていうのかな。姿はザフィーラと似た白髪褐色肌の男性なんやけど性格からして頼りになるお兄ちゃんって感想が出てくるんや。

初めて見たときは驚いたけど今はもう普通になつとる。

「どれどれ。…うむ、いい出来だ。はやては料理が上手だな。将来が楽しみだ」

「ややわく。アーチャーに比べたらまだまだ修行不足やで。後、さらつと口説いとるで？」

「む。そうか？」

そう。人間形態になれるようになってからアーチャーは暇さえあれば私の料理の手伝いをしてくれるんやけど、その腕が超一流で私は敵わない物やった。

シヤマルなんかそれでシヨックで泣いていた。

他の皆もその腕を認めとるけど、ヴィータだけは「はやての料理のほうがうまいからな！」って言ってくれる。嬉しい事や。

閑話休題

「ヴィータちゃんとシグナムはこれでも食べてつないでね。はい」

シヤマルが二人の前に和え物を置いた。

「これは？」

「私が作った和え物よ。ワカメとタコの胡麻酢和え」

お腹を空かしたヴィータなら喜ぶと思っただんやけど、

「…大丈夫？」

「大丈夫って!？」

「お前の料理はたまに暴発というか深刻な失敗の危険が…」

「見た目に騙されるんだよな」

「ああ、ひどい！」

確かにシヤマルの料理で何度か危ない目にあってる二人の気持ちも分からなくもないけど…

「シヤマルの料理もだいぶ上達しとるし、平気やよ。さつき私も味見したし」
「なら、安心です」

「いただきまーす!」

「お前らは正直にもほどがあるだろうに……」

アーチャーがやれやれと頭を振っていた。

するとシヤマルがザフィーラに視線でなにか伝えていてザフィーラが困ったような表情をしている。

「シヤマル? ザフィーラが困つとるやん。そんな細かい事で落ち込んだらあかんよ?」

「あれ? はやて、今の思念通話受けてないよね」

「ん? 思念通話してたん?」

「失礼しました。お耳に入れる事ではないと思いましたがゆえ」

「ええよ、別に。ザフィーラ、滅多に喋らへんからたまに声を聞けると嬉しいよ」
「そしたらヴィータが面白そうに今何を考えているかなんて質問してくる。」

それで思いついた事をいつてみたら当たっていたみたいや。

「そういえば皆とは半年以上。アーチャーにいたつては春先やから一年の三分の二は一緒にいるんやな。」

みんなのうれしい言葉をもらいながらそう思っていた。

「さて、お風呂の準備もそろそろいいかしら」

そう言つてシャマルはお風呂に向かつていった。

「ふむ。主はやての調理とは比べるべくもないが、シャマルのこれも悪くはないな」

「うん。とりあえず腹には入る」

「あかんで、シャマルかて努力しとるんやから」

「そうだぞ。料理は味より作つたものの気持ちが一番大事なのだから」

あいかわらず辛口な二人を軽く嗜めつつ、和え物に手を伸ばす。

ちなみにアーチャーはいいこと言うた。

「うん。おいしいやん。ほら、ザフィーラも、あーん」

「あ、あーん」

ザフィーラにも和え物を食べさせる。

そんな時、

「きやああつ!!」

「シャマル？」

「なんだ？」

シャマルの悲鳴がリビングにまで響いてきた。

何事だと思いい向かおうとしたけどシヤマルはこつちまで駆け込んできて、

「ごめんなさい！ お風呂の温度設定間違えて、冷たい水が湯船一杯にいー…」

なんやそない事か。誰でもたまにはある事やん。

「沸かし直しか」

「そやけどこのお風呂の追い炊き時間かかるからな」

「シヤマル、しっかりしてくれ」

「ごめんなさい」

「シグナムさ、レヴァンティン燃やして水に突っ込めばすぐ沸くんじや」

「断る」

「即答かよ」

「私が炎系統の魔剣でも投影するか？」

「お前は自身を大切にしろ」

「すまん…」

普通はシグナムの反応は当然や。それとアーチャーは私も思うけど魔力を供給できる人がいないんやから無理しいな。

「闇の書のマスターらしく私が魔法でなんとかできたらええねんやけど…」

「いえ、そんな！ ここはやはり私がなんとか」

「炎熱系なら私だが微妙な調整は難しいな」

「火事とか起こしたらシヤレになんねーぞ」

「つて、よう考えたら、こんなしょうもない事に魔力使ったらあかんやん」

それではみんな考えこんでまう。

「そや！ シヤマル、ポストに入ってたチラシの束、まだ取つといてあるか？」

「はい。今週の方だけですけど…」

「ちよつと持つてきて」

「は、はい」

なにをするのか分からないといった感じの表情やったけど確かチラシの中にあれがあつたはずや。

「えくと、あつ、これや」

「海鳴スパラクア、新装オープン？」

「記念大サービス」

「なにこれ？」

「皆で入る大きなお風呂屋さんやね」

「皆でですか!?!」

それでシヤマルは顔を赤らめてしまったけど、

「あ、もちろん男女は別やで」

残念な事に混浴はないらしい。

「温泉に滝の打たせ湯、泡のお風呂に、バイブレーションボディマッサージバスに紅茶風呂。いろんなお風呂が十二種類もあるやて」

「それはまた、素晴らしいですが」

「なんか楽しそう」

「それに新装サービスで安い。三名様以上やとさらに割引やて。これは行つとけ！つて事ちゃうか？ 行つてみたい人！」

「は〜い！」

シャマルとヴィータが手を上げた。でも、

「我が家のお風呂好きさんがなんや反応が鈍いで」

「ああ、いえ…」

「んー…？」

それで思念通話で話しかけてみる。

《シグナムはまた身内の失態を主に補ってもらうのはよくないと思ってるんか？》

《う、はい》

《何度目かの注意になるけど、シグナムはごつつ真面目さんでそれは皆のリーダーとし

てええことやねんけど、あんままじめ過ぎるんはよくないよ」

《すみません》

《私があえ、言うたらええねん。皆の笑顔が私は一番うれしいんやから》

《はい。申し訳ございません》

《申し訳んでええから、私を主と思ってくれるなら私の言葉を信じてな》

《はい。信じてます。我が主》

シヤマルとヴィータが話し合っているところで、

「そやから、シグナムもいこう」

「わかりました。ではお言葉に甘えて」

それでシヤマル達も喜びの声を上げる。

「ザフィーラとアーチャーもいこうか。人間態になって普通の服を着ていたらええんやし」

「お誘い誠にありがたいのですが、私は留守を預からせていただきたく」

「私も遠慮しておこう。皆で楽しんでくれればいい」

「そうなんか？」

「夕餉の見張りもございますゆえ」

「うむ」

「ザファイラ、お風呂苦手だしな」

「アーチャーさんはどうしてなんですか？」

「いや、なにね。私の体には戦闘服で隠してはあるがたくさんの傷跡があるから一般のものには見せるわけにはいかんのでな」

「あ…」

「そういえばそうだったな」

最近人間形態になれるようになってたまたま上半身を見る機会があったからわかる。あんなにいろんな傷跡があったら普通に入るのはきついやろな。

「うん。ほんならそういう理由なら二人とも今日は留守番でお願いな」

「御意に」

「了解だ」

「ほんなら皆、着替えとタオルを持ってお出かけの準備や」

「おお!!」

「シヤマル、私の分も頼む」

「は〜い」

それで私はヴィータと一緒に部屋に戻って着替えの準備をする。

みなんでお風呂、楽しみやな。



その後、部屋にはシグナムとザファイラ、アーチャーが残った。

「主にたしなめられたか」

「ああ」

「だがなぜだろうな。恥いる気持ちはあるのだが、不思議と心が温かい」

シグナムは目をつぶりそう呟く。

「真の主従の絆とはそういうモノなのだろうな」

「そうなのかな」

「そうなのだろう。記憶がない私が言っても詮無い事だが理解しあうのはいいことだと思おう」

「アーチャー」

「不安もあるだろうが、心身の休息も戦いのうちだ。今は主と共にゆつくりと寛いでくるのがよかろう」

「うむ。お前達も少し眠っておくといい。今夜も蒐集は深夜からだ」

「心得ている」

「わかつている」

そして部屋の外から、

「シグナム、準備できたわよ」

「ああ、今行く」

シグナムはシャマルの声で部屋を出て行った。

出て行った後、男二人となった部屋で、

「…それでアーチャー。記憶は思い出せたか？」

「いや。しかしシグナムではないが…この生活は案外悪くない。今は力を十全に振るう事はできないが出来うる限り力になろう。はやての為に…」

「そうか」

第四十話

『スーパー銭湯（後編）』

S i d e シホ・E・シユバインオーグ

こうして私達は『海鳴スバラクーア』にやってきたわけである。

皆が新しくできた銭湯に浮き足立っている中、服を脱いでいく途中で以前に感じた視線をまたしても感じる。

今度は大勢から…なんだ？

「シホちゃん、お肌がすべすべだね〜」

「うきやあつ!?!」

うえっ！へ、変な声を出してしまった。

突然すずかが私の体を触ってきていた。

「それにとつてもお肌が白いし…朱銀の髪も相まってとつても可愛いよ」

「あ、ありがとう、すずか…それとだけど恥ずかしいんだけど…私はまだ心は、その…」

ついでもつてしまう。

助けを呼ぼうとしたが美由希姉さんはエイミイさんと本当に今日が会ったのが初めてかというほどの仲の良さだし、なのはとフェイトもなんか二人の世界に入っているし、アリサは…

「…アリサ、どうしたの？」

「んー？　なんかみんな仲がいいなあつて…」

なぜかアリサが少し頬を膨れさせながらもしよんぼりしている姿が目に入った。

「大丈夫だよ、アリサちゃん。一人蔑ろになんかしらないから！」

「すずかあ〜…」

すずかに慰められて抱きついていている。

どうやらアリサは寂しかったようだ。

それで私もロッカーの鍵を閉めて体にタオルを巻いて銭湯に入りに行った。

だけどアリサは最初に泡のお風呂の方に行くそうでそこで別れた。

なのはとフェイトも色々見て回るといったので必然的に私とすずかだけが取り残された。

「それじゃ私達は一緒にいこっか」

「そ、そうね…」

「どうしたの、シホちゃん？ 顔真つ赤だよ…？」

「いや、すずかならもう事情は知っているからいいんだけど私って、ほら…」

「あ…」

どうやら分かってくれたようだ。

「その、なんていうかもう私は女の子だっていう自覚はもう十分にあるんだけどやっぱり恥ずかしい事には違いないし罪悪感も感じるというかね」

「だから一人でいつもお風呂済ませちゃうの？」

「うん。それにあの話をした後なのに美由希姉さんや桃子お母さんは構わず私の入浴中に乱入してくるから参ったもので…」

「うんうん。その気持ちは分かるかも」

「すずかっ!？」

なんか少し裏切られた気分だ。

「だ、だってシホちゃん、本当に元は男の子だったのかって思うくらい可愛いし」

「そりやイリヤ譲りだからね」

「あ、違う違う。外面とかそんなことは関係なく内面でシホちゃんは可愛いって事。

ねえ知ってる？ シホちゃんって普段キリツとしてあまり笑わないけど途端に笑ったらすごい見惚れちゃうんだよ！」

「そ、そうなの？ そんな自覚はないんだけど………リンにもあまり他人に笑顔は振りまくなつて言われていたけどその事なのかな？」

「そうだよー。それに罪悪感なんて感じる事はないんだよ。シホちゃんはもう立派な女の子なんだから」

「そう、かな……？」

「うん！ だつてもしまだ男の子だったら女性の人の体をエッチな目で見ちゃうかもしれないでしょ？」

「そ、そう言われるとどう答えていいかわからないけど一般男性ならそうなのかな？」

私、男性の時もそんな事あんまり気にしたことがないから」

「シホちゃんは誠実な人だったんだね」

やっぱりすずかにこの事を話して正解だったかな？ 私の不安を何度も拭い去ってくれるから。

でも、誠実かつていうと……四日間の記憶でアヴェンジャーは私の殻を被つてリン達と色々、その……やっていた訳でカレンの言う通り私の本性つてやっぱり野獣なのだろうか？ 悩みどころである。

「さ、シホちゃん。話ばかりより本来の目的のお風呂を楽しもうよ」

「そうね」

さすがが手を差し出してきたので掴んで一緒に銭湯めぐりを開始するのだった。

しばらくいくつかのお風呂を巡って一度区切りをつけて皆を探しているとちようどアリサが誰かと別れている光景を見た。

あの赤い髪と後姿……どこかで見た覚えがあるんだけど……うーん、わからないから多分知らない子だろう。

「あ、すずかにシホ」

「アリサちゃん、誰かとお話してた？」

「うん。なんか可愛い感じのちっちゃい子がいたから世間話とか」

「そっか」

「ところでなのは達はどこだろう？」

「私達も皆を探していてようやくアリサを見つけたのよ」

「そっか。皆でジェットバスにいかうかと思っただけど……あ、いたいた！ あそこー！」
アリサが見つけたという方に目を向けるとなのはとフェイトが洗いっこをしている光景が目についた。

話的内容的にフェイトは一人で髪を洗うのが苦手だとかそんな感じで、なのはに洗われてフェイトが赤くなっているという感じだ。

それを見ていたアリサが「すごい気恥ずかしい光景だ」と言っている。

それなのでしばらくはそつとしておいてミストサウナに行つていようという話になった。

.....

.....

.....

しばらくしてすすかと一緒に歩いて歩いていると前方から歩いてくる金髪の女性がいた。

「あ、あれシヤマルさんかな？」

「本当ね。今一人かな？ 話しかけてみようか」

「そうだね。シヤマルさん！」

「あ、すすかちゃんに…シホちゃん!？」

「え、あ、はい。お久しぶりです。なんかすごい驚いてますけどどうしましたか？」

「え、えつと、ね…」

「なんかすごい慌てているけどどうしたのだろうか？」



Side シヤマル

ど、どうでしょう!?

今ちようど私が一人でいたのが幸いだっただけど近くにははやてちゃんにシグナム達がいる。

シホちゃんと会っちゃったらははやてちゃんが主だとばれちゃう!

こうしちやいられない!

「シホちゃん、すずかちゃん。ちよつと待っててね」

「わかりました」

それで少し二人から離れて思念通話を試みる。

《シグナム! 大変よー!》

《むっ。どうした、シヤマル。そのように慌てて》

《なんていうかね、すずかちゃんとばったり会っちゃったんだけど…》

《そうか。では主と一緒にそちらに向かおうか?》

《そ、それは駄目! すずかちゃんと一緒にシホちゃんがいるのよ!》

《シュバインオーグが！ それはまずいな…》

《どうしましょう…》

《むう…正体がばれるのも時間の問題というわけか。主はやてがこの事を知ったら会いたがるだろうしな》

《しばらく私だけで話を繋いでておこうかしら…》

《しかし、主が今シヤマルはどこにいるのかと言っているが…あ！ 待て、ヴィータ！》
《え…？》

思念通話に気が回っていたせいで近くに来ていることに気づかなかった私がいけなかったのかシグナムとシグナムに抱えられたはやてちゃん、それにヴィータちゃんが現れてしまった。

「あ、すずかちゃんにシホちゃんや」

「はやてちゃん！」

「ツ!？」

あ、やっぱりシホちゃんは表情を強張らせている。

《あああああ！ どうしましょう!!》

《お、落ち着け、シヤマル!》

《おい、シヤマル！ なんでこいつがここに!?!》

《気づくのが遅いわよ、ヴィータちゃん…》

それで年貢の納め時かと思っただけどシホちゃんは一瞬で表情を直して、

「はやて、久しぶり。それと他のお二人は“はじめまして”。はやてのご家族の人達ですか？」

「久しぶりや。そうなんよ。紹介するわ。こつちがシグナムでこつちが末っ子のヴィータ。二人とも私の家族や」

「こんばんは。月村すずかです。よろしくね、ヴィータちゃん。シグナムさんもこんばんわ」

「そうなの。それじゃ自己紹介をしますね。私はシホ・E・シュバインオーグです。よろしくお願いします。シグナムさんにヴィータちゃん」

「よ、よろしく…」

シグナムとヴィータもシホちゃんのペースに流されたのか呆けながらも返事を返している。

それで私も諦めてみんなと合流する事にした。

「あ、シヤマル。どこいっとつたん？」

「ごめんなさい、はやてちゃん…《ここはどうしましょうか…?》」

《とりあえずシュバインオーグに話を合わせよう》

《そうだな》

「それですずかちゃんとシホちゃんはどなたかとお風呂ですか？」

「はい、そうなんです」

「なんや偶然とはいえ運命的なものを感じるな」

「すごいよね」

「あ、すずかちゃんにシホちゃん。この後になにか予定とかあるか？ よかったら晩御

飯と一緒にとか」

「うん。友達の家族の皆さんと外に食べに行こうってことになってるんだけど、もしよかったら…」

「すずか…」

そこでシホちゃんが小さい声でなにかを言いたそうにしていた。

「あ、残念。ウチはもう用意してしまってるんよ」

「鍋の中でおでんが待ってるの」

ヴィータちゃんも調子が戻ってきたみたいね。

「いいね、おでん」

「はい。鍋の美味しい季節です」

「うん…ほんならまた今度かな」

「近いうちには非」

「私はいつでも。都合のいい日に呼んでください」

「シホちゃんも是非来てえな」

「ええ。時間を空けておくからすすかの都合がつく日に連絡してくれたら行かせてもら
うわ」

「うん！」

「はやてのお鍋、超おいしーよ」

「あ、ヴィータ！ 私にプレッツシャーかけたらあかん」

それで私達は笑い出してしまっていた。

警戒もしないといけないのになぜかシホちゃんの笑みは安心できるものだった。

そしたら素肌のまま立っていたのかヴィータちゃんがくしゃみをしてしまった。

それですすかちゃんが立ち話をしてしまつてごめんなさい、と言つて私達は別れるこ
とになった。

「すすかちゃんとシホちゃんもお友達と来てるんやつたらあんまり引き止めてもあかん
ね。帰ったらメールするな」

「うん。友達も今度また紹介するね」

「…あ、すすか。多分まだ当分は紹介できないかも…」

「え？ どうして？ シホちゃん」

「な、なんとなく…」

なんとなくシホちゃんの言いたい事が分かった。そのお友達というのがこの前に戦った二人の事なんだろう。

「ふーん。でもいつか紹介するね」

「うん、楽しみにしてる」

「じゃ、またね。すずかちゃん、シホちゃん」

「失礼します」

「またな」

「はい」

「また」

それで別れようとしてシホちゃんの横を通り過ぎるところで、

「…後でまた話をしましょう」

そう小さい声でシホちゃんは言っていてさらに小さい声で「トレース・オン」と唱えると私の手に今までどこに持っていたのかわからない小さい透明な宝石が握らされていた。

「…小さい通信機です。今夜、また通信します。傍受される事はないですから」

早声でそう告げてシホちゃんはすずかちゃんの後を追っていった。

「……………今夜の蒐集前に、シホちゃんと会いましょう」

《そうだな》

《ああ》

私達はシホちゃんと会う事を決めた。

シホちゃんはもしかしたら私達の味方になってくれるかもしれない。



Side シホ・E・シユバインオーグ

私の予測ではおそらくはやてがシグナム達ヴォルケンリッターの主。

あの一人だけ正体がわからない黒尽くめの男も正体は変身魔法を使ったシャマルさん。

でも、きつとははやてはシグナム達が蒐集行為をしていることを知らない。

おそらく隠している原因は私の推測だけではやての足を治そうとしているのかもしれない。だからはやてには話せないのだろう。

はやては優しい子…。だからきつと蒐集していると知られたら罪を感じてしまうと

思ったのだろう。だから守護騎士達の行動は独断。

こう考えれば辻褄は合う。

そしてこれからの問題は私がリンディさんやなのは達に隠し通せるか、その一点に限られてくる。

今夜は気合を入れて話をしないと。

「すずかー、シホー」

「アリサちゃん」

「あ、アリサ」

「誰かお知り合い？」

「うん。前に話したはやてちゃん」

「あー、なんだ。もう少し早く来ていれば挨拶できたのに」

「でも、こんな所で挨拶もなんだからまた近いうちにね」

「そうだね。ところでシホ。あんなにか顔色が優れないけどどうしたの？」

「あ、うん。ちよつと考え事をね」

「あなたの考え事は結構深いからあんまり根を詰めるんじゃないわよ？」

「うん。わかったわ」

アリサに気づかれるとは。気をつけないと…。

「で、さ。なのは達がまた見当たらないんだけど何処だろう？　そろそろみんなで色々回りたいのに……」

アリサが残念そうに言う。確かにあの二人は中では見かけなかったけどどこにいるのだろう。

「えっと、さつきとは別の洗い場にいたよ。ほら、あそこ」

すずかの指差したほうには、いまだに洗いっこしている二人の姿が映った。

本当に仲がいいわね。

それに沸点が少しばかり低いアリサがむくれた顔になり桶にお湯を入れだし周囲に迷惑がかからないように配慮してターゲツトを絞り、

「せーのー！」

その桶のお湯を二人に向かってぶちまけた。

当然かけられた二人は、

「にゃあああ!!!」

「きゃあああ!!!」

と悲鳴を上げた。

「よっし命中ー！」

「あ、アリサ……？」

「アリサちゃん…?」

「もういつまで洗いっこしてんの」

「アリサちゃん、早くみんなでいろんなお風呂に入りたいって」

「そうらしいわよ」

それで二人は赤い顔をしながら、

「あはは、ごめんね」

「ごめん、つい」

「そんな洗いっこなんて家が近所なんだから家庭の事情が許せば毎晩だつてできるでしょう。折角スパラクーアに来てるんだからここならではの施設を楽しまなくっちゃ」

「そうだね」

「毎晩でも…」

「今日は譲り合つてないで一緒に入ればよかつたんだね」

「う、うん」

「じゃ練習の後とかウチとかフェイトちゃんの家で一緒に入ろうか」

「うん!」

フェイトは嬉しそうに顔を綻ばしている。

仲良き事は良きかな。

「そういえば、フエイト。さつきエイミイさんに聞いたんだけど一人で髪を洗えないとか」

「エイミイ、なんで皆に言いふらしてるの…」

「フエイトちゃん、髪長いもんね」

「洗えるんだよ。ほんとだよ？」

フエイトの泣き言をみんなで笑いながら流して私達は色々なお風呂めぐりを再開するのだった。

………

………

………

それからみんなで夕食を取った後、なのははフエイトの家でお泊りをするそうだ。

私は急用が出来たといって一度家に帰ることにした。なのは達には気取られるとま
ずいから。

夜の事、家を出るときに周りに魔法での監視がない事を確認して私は部屋の窓から出て行った。

そして宝石剣の欠片レプリカで通信を入れると、

『はい、シヤマルです』

「あ、シヤマルさん。お話があります。残りの三人にも出てきてもらっていいですか?」

『わかりました。でも、もう少し待ってもらっていいですか? はやてちゃんがまだ寝

ていないので』

「わかりました」

『私が指定した場所まで来てもらっていいですか』

「わかりました。どこですか?」

『場所は…』

場所を聞いて私はある公園に入ってしまった。

そこにはシヤマルさんを始めシグナム、ヴィータ、ザフィーラが揃っていた。

「来たか、シユバインオーグ…。念のために聞いておくがお前一人か?」

「ええ。誰にも気づかれぬ自信はあるから」

「で、なんのようだよ。お前は管理局の人間じゃねーのか?」

「そうピリピリしないの。ご近所迷惑でしょ?」

「平気よ。もう小さいながらも結界を張らせてもらったから」

「それじゃこれで思う存分語り合えるって事ね。でも、その前に…」

私は黒鍵を数本投影して各所に放った。

「なにを！」

「安心して。どこかで見ている誰かさんの機械を全部壊しただけだから」

「「「なっ!?!」」」

それで全員驚いているようだ。

「気づいていなかったの？ まあそうか。結構細かいところに配置されていたから」

「お前は…一体」

「今その話はなし。それで単刀直入に聞くけどあなた達の主は八神はやてで間違いない？」

「…ああ。その通りだ」

「そう。それではやてはあなた達の行動は承知なの？」

「それは…」

「やっぱり。優しいはやてはそんな事は望まないと思うからあなた達の独断なのね」

「そうだよ。はやては闇の書の呪いにかかっているんだ」

「闇の書の呪い？」

そして聞く。

はやての足の麻痺は闇の書が原因で放っておけば病は心臓にまで進行して命を奪う

かもしれないという事。

それが判明した事ではやてとの騎士の誓いを破り蒐集作業を開始した事。

すべてを話し終えてシグナム達は俯いてしまっている。

辛いだろう。自分達のせいではやては病に苦しんでいると分かったのだから。

「ほかに手はないの？」

「現状打てる手は闇の書の完成だけだ」

「そう…」

「シホちゃん、あなたは他にになにか手は考えているの？」

「最終手段であれば、考えてあるわ」

「教えてもらいたい」

「それではやてが助かるなら教えてくれ！」

「いいわ。でも、教える前に言う事だけど、この方法はあまりお勧めできないわ。内容は

はやてと闇の書の契約を強制的に破戒することよ」

その事を告げた途端、シグナム達は一瞬だけ喜びの感情をしたけど次第に理解したらしく顔が真っ青になっていく。

「つまり、それを行う事によつて…」

「はやては助かるかもしれない。でも、あなた達とお別れをしなくちゃいけないわ。

そんなのは本意ではないでしょう…」

「当たり前だ！ そしたらはやては絶対悲しむ!! 確かに一人消えない奴もいるけど絶対はやては泣いちまう!! そんなの、受けられるか!!」

ヴィータは私の襟を掴んで何度も揺すってきた。

それを無言で堪えた。

「ヴィータ、落ち着け!」

「そうよ、ヴィータちゃん。シホちゃんはあくまで最終手段っていったでしょ」

「う…その、ごめん」

「構わないわ。それだけはやてを想っているって分かるから。」

それで話は戻して解決策だけど今は思いつかないのが現状ね。私もはやてを救うのには全力を尽くしたいけど…」

「手間をかける。シュバインオーグ」

「ところで、話は変わるけどあなた達は闇の書が完成したらどうなるか知っている?」

「どうなるって…大いなる力が入るんじゃないかねーのか?」

「完成の現場にい合わせた事はないの?」

「ああ、ない。どころか完成した光景を見たことがない。いや、違うな…記憶がないんだ」

なるほど。シグナム達はそれで悩んでいるのか。

本当に闇の書が完成すればはやてが治るといふ確証が欲しいのだ。

でも、今から私が言うことは彼女達にとって残酷だろう。

「記憶がないっていうのは確かに正しいかもしれないわ」

「…どういう事だ？」

そこで初めてザファイラが口を開いた。

「私が管理局で教えてもらった過去の闇の書のデータの話なんだけど闇の書の完成と同時に主は何の例外もなく闇の書に取り込まれて “死” を迎える」

『……………ツ?!?』

「そして完成した闇の書はただ純粋な破壊にしか使用できないと教えてもらったわ。

そして所有者が完全に死ぬか闇の書が破壊された場合、闇の書は白紙に戻って新たな主を探すといったものよ」

「では、私達は今までの主達を死なせてきたというのか…?」

「それだけじゃない。闇の書を完成させてもしなくてもはやてちゃんはどの道死んじやうって事なんですか!」

「現状ではそうね。でも、もう私はあなた達の強い想いを知ってしまった。

だからできるだけだけど私は裏のほうから協力させてもらうわ。

過去がどうであろうと私は諦めが悪いからはやてという友達は絶対見殺しにしない。

だからまたなにか情報が入ったらシヤマルさんに渡した水晶で知らせるわ」

「了解した。感謝する、シユバインオーグ」

「ありがとう、シホ…」

「ありがとね、シホちゃん」

「恩にきる、シユバインオーグ」

「感謝ははやてを助けた後でいくらでも聞くわ。」

…それと、たぶん次の管理局との戦いは近いうちに起こると思うわ。その時にタイミングを計って私の魔力を蒐集していいわ。

あなた達ならもう知っていると思うけど私はどうやらなぜか知らないけど、古代ベルカ式の魔法の使い手らしいからかなりページは埋まると思うし」

「…いいのかわ？」

「私自身がいいって言ってるんだから遠慮はなしよ」

「スパイとなにからなににまですまない。いつか借りは返す」

「ええ」

「それと私達には一人だけ協力者がいる。そいつにお前の魔術の事を聞いた」

「わかったわ。そいつの名前は教えてくれないの？」

「どうも記憶喪失らしい。仮名でアーチャーと名乗っている」

「アーチャー、ですって？」

「なにか思い当たる節があるのか？」

「ええ、なんとなく……」

アーチャー？ これはただの呼び名？ それともサーヴァント？

私の魔術を知っている奴と言えば随分と限られてくるけど、一度会うしかないわね。

「それじゃ今日はもう解散しましょう。私は家に内緒で抜け出してきたものだから見つかっただらやばいし」

「わかった。それではな、シユバインオーグ」

それでシグナム達はそれぞれ別々に飛び立っていった。

おそらく今から別世界に行くのだろう。

第四十一話

『再戦』

S i d e シホ・E・シユバインオーグ

シグナム達との出会い後の数日後、私達は時空管理局の医療施設に来ていた。理由はなのはの検査結果を聞くためと、デバイスたちの受け取りなどだ。

それでマリーさんに会うと、

「はい、シホさん。アンリミテッド・エアはもうあなたの登録も済ませてあるからいつでも使えますよ。意思もあるからあなたの想いに答えてくれるよ」

「ありがとうございます、マリーさん」

「あ、それとまだ完全に機能が復活していないからなにか前動作があつたら知らせてね。解析させてもらうから」

聞くと管制人格は復活したらしいがブラックボックスがまだいくつか存在しているらしい。

《よろしくお願ひしますマスター》

「あ、よろしくね、エア」

《はい。私のことはエアと呼ぶのですね》

「うん。大丈夫かな？」

《構いません》

「そう」

マリーさんと別れた後、なのは達と合流して、

「なのは、経過はどうだった？」

「うん！ もう全快だよ！」

「レイジングハートとバルディッシュも復活したからもういつでも戦えるよ」

「腕がなるね！」

「そういえばお姉さまもデバイスを受け取ったんですよね？」

「ええ。でもまだ起動はしたことないから一回クロノに試運転を頼もうと思うわ」

「それはいいね。初めて使うんだから初っ端で使うわけにはいかないもんな」

アルフがそう笑いながら言う。

確かにいきなり使えといわれても使えないものである。

まあなのはは何も知らないで起動していたから私も使えそうなものだけどね。

「それじゃ海鳴市に帰ろうとしましょう」

「待つて。先にエイミイさんに話を通しておこう」

ユーノがそういうので任す事にした。

それでユーノが連絡をしていると何やら慌しくなっているようである。

どうしたのか聞いてみると、

「どうやらヴォルケンリッターのうち二人を補足したらいいんだ」

「えっ!?! そうなのユーノ君!」

「それですぐ向かえるか、だつて…シホ、もしかしたら初っ端のデバイスの起動の機会があるかもしれないよ?」

「そうね…。なんか都合がいい気がするけど現場に行つてみるだけしましょう。さて、皆、修行の成果を見せるときよ（私の今回の狙いはアーチャーの顔を見る事と魔力を蒐集させることね）」

「うん!」

「わかつてる…!」

「おう!」

なんか元気よく返事をしてくれる三人には悪い気がするけど今は黙つておこう。

そして私達は現場へと向かったのだつた。



強装結界内部では今もなお武装局員達とヴィータ、ザファイラが対峙していた。

ヴィータ達がかかろうとしたがその時に囲んでいた武装局員達が一斉に離れたのでなぜ？と二人は思ったがすぐに上空からの魔力反応に気づいて上を向く。

そこにはクロノが数え切れないくらいのスティングガーブレードを展開していた。

「スティングガーブレード・エクスキューションシフト！」

言葉と同時に放たれる魔力の刃達。

とっさに防御魔法を展開したザファイラ。

だが何本か通ってしまい腕に刺さっていた。

しかしそれだけで消耗できるほど甘くはなかった。

すぐに魔力は割られて怪我の一つも残っていないかったのだから。

対してクロノは肩で息をしているのだから少し消耗してしまっただろう。

そこにエイミーから連絡が入る。

『クロノ君！ 武装局員の配置が完了したよ！ それから今現場に助っ人を転送したよ

！』

クロノは貯水タンクに立っているのはとフェイトの姿を見つめる。

近くにはシホ、ファイアット、アルフ、ユーノの姿があった。

二人はレイジングハートとバルディッシュを掲げて、

「レイジングハート！」

「バルディッシュ！」

「セーラアツプ!!」

バリアジャケットを展開しようとしたがそこで異変に気づく。

今までの変身とは少し違うのだ。

そこにエイミーから連絡が入り二機は新しいシステムを積んだと聞く。

そして二人は新たな名を呼ぶ。

「レイジングハート・エクセリオン！」

「バルディッシュ・アサルト！」

ついに起動した二機とともに二人は変身をした。

そして光が晴れたその場にいた二人の姿は以前のバリアジャケットとは多少意匠が異なった作りになって愛機の形も変化していた。

クロノは離れたところで見守っているシホ達と合流した。

「ナイスなタイミングだ」

「……これで二人は修行をしたし、デバイスも差はなくなった。これで存分に話す事ができるでしょう（と言っててももう私は話しちゃったけどね）」

すると天空から轟音と雷が轟き、シグナムが結界内に侵入してくる。

「役者は揃った、って訳ね」

すると思念通話でなのはヴィータと、フェイトはシグナムと、アルフはザフィーラと一対一でそれぞれ戦うらしい事を言ってきた。

それでクロノは残ったシホ、ユーノ、ファイアットに闇の書の主を探す事を提案してきた。

クロノとシホは外、ユーノとファイアは中を探す事になった。

シホはまだデバイスをしっかりと起動確認をしていないのでまだタラリアを投影して空を駆けていく。



S i d e 高町なのは

今、私はヴィータちゃんと戦っているところなの。

《Schwalbefeigen.》

「でやあー!」

それで赤い少女は四つの鉄球を放ってくる。

それを私はアクセル・フィンで上昇して避ける。

「アイゼン!」

《Explosion.》

デバイスがハンマーから突起がついたロケットに変化した。

あれで前に私は撃墜されたんだ。

「でやあああー!!」

ハンマーを振り回して突っ込んでくるけど前のようにはいかないよ!

《Protection Powered.》

「ふっ!」

展開されたシールドとヴィータちゃんのハンマーが激突。でも今回は防げている。

デバイスが強化されたからだと思うけど、それだけじゃない!

シホちゃんの行った魔力制御の特訓。それによって防御する点を集中させて魔力消

費を軽減させる力を私は体得しているのだ。

カートリッジ分の魔力を差し引いても十分すぎる防御力を誇っている。

これならやれる！

いまだ突破できないでいるヴィータちゃんを尻目に私はレイジングハートをバスターモードに切り替えて構え、

「デイバイン・バスター!!」

「ッ!? チイツ!! アイゼン、このまま粉碎しろ!」

《Jawohl!》

「オオオオオオオーオーッ!!」

ヴィータちゃんはグラーフアイゼンを思いっきり振り抜いてプロテクションとデイベインバスターと一緒に粉碎してしまった。

やっぱりすつごく強いよ。

でも、

「約束だよ。私達が勝つたら事情を聞かせてもらおうて! いくよ、レイジングハート! カートリッジロード!」

《All right. Load Cartridge.》

二発カートリッジロードをする。

それによってアクセルシユーターが計三十個くらい形成される。

「はんっ！ そんなに出して操れるわけねーだろ！」

「それは…やってみてからのお楽しみ！ アクセルシユーター、シユート!!」

一斉に仕掛けるアクセルシユーターの群れ。

でもヴィータちゃんと言通り私は全部操れない。操れても十何個くらい。でもさしずめ残りの各シユーターの方向性を設定しておけば！

そう、誘導性能をつければいいのだ。

そうすれば私の指示なしでも動いてくれる。短長だけど目隠しにはなる。

そして私はいくつかのシユーターを操作しながらもバスターモードを構えて、

「デイベインバスター！」

アクセルシユーターの群れに追われているヴィータちゃんめがけて当たる予測位置にデイベインバスターを放つ。

「そんなもんに当たるかよ！」

そんな事は分かっているの！

でも、

「全部集合!!」

まだ残っているアクセルシユーターを集めてヴィータちゃんの移動する場所を限定する。

さらに、

「バースト！」

デイバインバスターをヴィータちゃんの前で拡散させる。

それによってヴィータちゃんは逃げ場を失い、全方位からの攻撃を受けることになる。

「うわああああー!?」

ヴィータちゃんが悲鳴を上げて煙に包まれる。

でももともとバーストするとあまりダメージは望めないのも分かっている。

だからすぐに仕掛けてくるかもしれないと警戒しながら杖を構える。

「ケホツケホツ…やってくれやがったな！」

やっぱりあまりダメージはないみたい。

でも攻撃はしつかりと通った。

「どう？ お話してくれる気になった？」

「誰が！」

「しようがないな。それじゃもう少し痛めつけてあげるの！」

「こえーぞ?!」

先に仕掛けてきたのはそっちなんだからそっちの言い分は聞きつけません！
いくよ

!!

「かかってこいやー！」

シホちゃんとの今まで積んできた修行成果を發揮するときなの！



Side フェイト・テストロツサ

今、私はシグナムと打ち合っている。

シホに言われたとおり射撃系の魔法で牽制をしてのヒットアンドウェイを繰り返す。

前の時はバルディッシュを切り裂かれちゃったけど、今は戦えている！

「強いな、テストロツサ。それに、バルディッシュ」

「あなたと、レヴァンティンも。シグナム」

やっぱりこの人は強い。

シホとシグナムとの戦闘で様々と見せ付けられたから分かるがシグナムはあのような動きはまだ見せていない。

まだ私はシホの域に達していない証拠だ。

それなら手を尽くさなければいけない。

もとより私の実力は格下…本気で行かなければ行けない。

だから…！

そんな時にシグナムが話しかけてきた。

「一ついいか？」

「なんででしょうか…？」

「シユバインオーグの件だがあの傷をこの短期間でよく戦えるまでに傷が回復したものだな」

「その件に関しては秘密です」

「そうか…。まあいいだろう。しかしシユバインオーグとは決着をつけたかったが、テスタロッサ、お前という新たな好敵手ができたことに今は感謝しよう。

しかし…この身になさぬ事がなければ心躍る戦いだっただが、仲間達と我が主の為、今はそうも言ってられん。

殺さずに済ます自信はない。この身の未熟を許してくれるか？」

「構いません。勝つのは私ですから。フェイト・テスタロッサ！ いきます！」

「応!! 烈火の将シグナムが受けて立つ!!」

私は一度、カートリッジで魔力を底上げして、

「プラズマランサー……ファイアー！」

計八つの魔力弾をシグナムに向けて放つ。

当然シグナムはレヴァンティンを構えて、それを振り抜くとすべて弾かれてしまったがそれも狙い通り、

「ターン！」

その言葉と共に弾かれた魔力弾は標準をまたシグナムに向き直り襲い掛かる。ただどこれだけで終わらすつもりはない。

《Load Cart ridge. Haken Form.》

カートリッジをロードして、ハーケンフォームへとすぐさま移行させ、

「ハーケンセイバー！」

「ちいっ！ レヴァンティン！」

《Schlange Form!》

プラズマランサーとハーケンセイバーのダブル攻撃をシグナムはレヴァンティンを連結刃へと変化させすべて叩き潰してくる。

起きる爆発。

爆煙の中、私はすぐさまシグナムの死角まで移動して鎌を構えて、

「ハーケンスラッシュユ！」

「甘っ!!」

爆煙の中から剣を突き出してくるがそれも予想通り、そこでシホに手ほどきを受けていたある移動術を試してみた。

名を瞬動術。

まだ出来上がっていないから荒削りだけどソニックムーブとの重ねがけで速度をさらに倍加、いや相乗させて何度もシグナムの周りを移動し続ける。

そして完全にシグナムの死角を取ったと思った瞬間、再度ハーケンスラッシュユを仕掛ける。

「確かに速い！　だがまだまだ荒削りな動きだ！　見えているぞー！」

「ッ!!」

死角である背中を仕掛けたのにシグナムは魔力刃を受け止めてしまった。

ただどこれもさしずつめ予想はしていた。

だから、

「待機解除！　プラズマランサー！　ゼロ距離ファイア!!」

「なにっ!?!」

今度は私自身も囷にしての魔力弾をシグナムに放ち、爆発、即座にその場から離脱し

た。

「ハーケンセイバー！」

そしておまけでそくぎにハーケンセイバーを煙の中、シグナムがいるであろう場所に
向かって放つ。

多分防がれるとは思うけど追撃はしておいた方がいいと思うから。

でもそれで私は一度心を落ち着かせる。同じ手はそう何度も通じないと思うから。

思ったとおり煙が晴ればシグナムが無傷ではないにしろまだ平気そうに立っ
た。

どうやら防御魔法を展開してハーケンセイバーも防いだらしい。

「…なかなかいい手だったな。自身も囷に使うとは中々できることではない。追撃もよ
く出来ている。」

しかし短期間ですばらしい成長だ。デバイスが強化されているだけではここまでの
動きはできない」

「シホに鍛えてもらいましたから」

「やはりな。お前達の中で一番強いのはシュバインオーグ…彼女が鍛えればお前達も強
くなるというのは必然か」

「シホは教え方が的確ですから」

「だろうな。どういった事情かは知らないが、シュバインオーグは幾たびの戦場を越えてきたのだろう。あの歳で中々だ。」

“投影魔術” というのもっと詳しく知りたいところだからな」

「投影魔術……？ 前にも聞きましたがそれがシホの使う魔術？」

「なんだ？ シュバインオーグから詳しく聞いていないのか？」

「ええ。転送系の魔術としか……」

「なるほど……。やはり真実は語らないようだな」

それで私はシホにまだ真実を教えてもらっていない事に少し悲しくなったけど今はこの戦いに集中しなきゃいけない。

「その件に関しては後でシホにまた聞きます。今は……」

「そうだな。今は敵同士、やることは決まっている。いくぞ、テストアロツサ！」

「はい！」

強くなるって決めたんだ。だから……！



「オオオオオオー！！」

「デエヤアアアアー！！」

あたしとあつちの使い魔の拳がぶつかり合う。

その激しい衝突によって手甲の間から火花が上がる。

でもやっぱり力はあちらが上のようで拮抗していたようだがどんどん押されてくる。

(分の悪い戦いだって言うのは百も承知だよ。だけどね！)

一回奴の力に任せて攻撃に使われる力を応用して後ろに下がる。

「ほう…私の力を使い反動で後ろに一旦下がったか」

「ああ、そうだよ。これでも頭使っているんでね。それよりでかぶつ！ あんたも誰か

の使い魔か！」

「ベルカでは騎士に仕える獣を使い魔とは呼ばぬ！ 主の牙、主の盾…守護獣だ！」

「おんなじようなもんじゃんかよ！」

それでまた殴りかかる。

でもあたしとあいつの実力と経験の差はかなりあるだろう。

フェイトの使い魔だからその恩恵でスピードはかなり出せるけどそれもフェイトに

は及ばない。

できることは拳で語る事だけ。

それに実力が上なら戦闘技術を他で補えばいい。

それで一度あたしは動きを止め呼吸を整える。

思い出すのはこの一週間の間にフィアットによって仕込まれた中国武術という様々な体術。

…あ、思い出しすぎて涙が出てきそうだよ。

「むっ…：雰囲気が変わった。なにをするつもりだ？」

「さくてね。それはこの後のお楽しみだよ」

できるだけ余裕に振る舞いあたしは拳を独特の構えで固定する。

そして呼吸法を変えて、足に魔力を伝達させいつでも爆発燃焼できるようにする。

「いくぞ!!」

そして行う瞬動術。

「むっ!! この変則的な動きはシュバインオグの使う体術と同じもの!」

「種は分かっているようだね。そうだよ、あたしはまだ完全に会得していないけどあんと対峙するには十分だよ!」

「どうやら元からあるあたしのスピードに上乗せさせる形でスピードが上がっているようだ。」

証拠にこれで分かった事はあたしが瞬動をする度に奴は少し顔や目線を迂回させているので完全に捉えきれていないという事。

根っからのパワータイプのようなだね。あたしもスピード技能がなければ奴とそう変わらないようだしね。

そろそろいいかな？

仕掛けようと掌をこれまた独特の構えにして奴に掌底を当てに行く。

「む、そこかあー！」

奴はやはり防御に徹した。

狙い通り！

あたしの掌底は奴の腕を確実に捕らえた。

次の瞬間、

「ぐああっ!？」

奴は腕を押さえて悲鳴を上げる。

「貴様、なにをした!？」

「…さてね、なんだろうね?」

平静の顔でそう答えるが内心でガッツポーズを決める。

なんせ仕掛けたのは浸透勁という技術で防御をまったく意に返さずその力を直接内

面に叩き込むというある意味チート技。

シホ達と敵対していたときにシホが一度フェイトのバリアジャケットを無視してダメージを与えてきた事があった。

フェイトのバリアジャケットは通常の魔導師に比べれば防御は薄いほうだがそれでも十分やっていけるというのにシホはそれを紙の如く無視して打ち込んできたのだ。

話によるとなのは頑丈なバリアジャケットにも効果があったという話でなのは、その時、かなり痛みで悶えたという。

それほどにこの技術は通す事に特化しているのだ。近接戦闘に精通している奴らにとつて、いやどの魔導師にとつても効果は絶大でランクなんて軽く無視できる技術だ。

徹甲作用という技術にもこれが使われているというのだから本当にシホはことごとくあたし達の常識を覆してくれる。

もしこの技術が管理局にも広がればランクが低い魔導師でもやっていけるとシホは豪語している。

それはそうだろう。これは魔力を一切使わない純粹な格闘スキルなんだからな。

閑話休題

でも、それは今はいい。

奴は何度か拳の握りを繰り返して、

「ダメーじが直接内面に響いてきた…初めての感触だ」

「あたしの拳はあんたの防御を貫くよ。さて、もう一度食らってみるかいい！」

「二度も同じ手は食わん！」

「そうかい！ でも、あたしが教わったのはそれだけじゃないんだよ！」

様々な技を会得するために何度もファイアットに吹き飛ばされた。あの痛みとそれに耐えて得た努力は無駄にはしないよ！

なにか奴は誰かと念話を試みているようけど今は関係ない！



Side シホ・E・シュバインオーグ

今私はクロノと手分けして闇の書の主…まあ、はやてね。及び黒尽くめの男…正体はシヤマルさんだけど、を捜している。

千里眼にさらに目を強化して最高4km圏内を見回して辺りを詮索中であつた。

その時、

《見つけた！ 闇の書と黒尽くめの男だ！》

クロノからの念話が響いてくる。

《場所は？》

《君の場所からそう離れていない場所だ。僕の魔力を辿ってきてくれ。僕は先行する！》

《わかったわ。でもあまり深入りはしないようにね》

《わかってるさ》

《私もすぐ向かうから》

《了解だ》

クロノはそれで一度会話を切ったが、

《なっ!? 誰だお前は!……!》

突然、クロノとの通信が切れてしまった。

何が起こったのだろうか。

それで私もタラリアを最大限駆使してその場所に向かう。

そして見えた途端、私は一瞬息を止めてしまった。

クロノは黒尽くめの奴の近くに“赤い布”で包まれて転がっている。

別段、それは問題ではない。

それより問題なのはその布を扱う人物が、

「どうして…どうしてあなたがここにいるの？…アーチャー…いえ、英霊エミヤ…」

そこには白髪で褐色の肌、黒いボディーアーマーに赤原礼装を着た長身の男性。

未来の私の可能性の一つだった男。英霊エミヤがクロノを拘束していたのだった。

第四十二話

『シホとエミヤの邂逅』

シホは困惑していた。

事前にシグナム達に仮名だけは聞いていたとはいえ、どうしてここに英霊エミヤの姿があるのかということに。

「どうしてエミヤが……いや、今はそんな事を考えている暇はないわ。

あれだとクロノが魔力を蒐集されてしまう。《ファイア、聞こえる!?!》」

《はいです!》

《すぐに私のところに来て! クロノが捕まってしまっているわ》

《クロノが!?!》

《ええ。しかもその捕まえている相手が………エミヤよ》

《エミヤって……え!?! つまり英霊エミヤ。お姉様の未来の可能性の一つの人ですか!?!》

《そうよ。これから私も仕掛けるから早く来てね!》

《わかりました!》

フィアットと念話を切り、急行しようと駆けようとしたが、別のほうから気配を感じて咄嗟にシホは回避運動を試みる。

そこにはどうやらあの時にシホに重症を負わせた張本人である仮面の男が足を突き出していた。

「避けられたか…」

「あなたが仮面の男ね…この間はよくもやってくれたわね」

「……………」

「だんまりか…あまりいい性格していないでしょう？」

「余計なお世話だ」

「そう。でも急がないと仲間が魔力を蒐集されてしまうかもしれないの。だから…」

シホはポケットに入れていたサファイア色の宝石…アンリミテッド・エアを取り出し、

「あなたで試運転をさせてもらおうわ！ アンリミテッド・エア！ セットアップ!!」

《set up》

瞬間、シホの真下に朱色のベルカの紋章陣が出現し、体は光に包まれる。

服装は一瞬ではだける。

そしてアンリミテッド・エアが変化を始める。

宝石が二つに分かれそれを中心に干将・莫耶をベースとした剣が形取られていく。

干将・莫耶の陰陽のマークは替わりにサファイア色の丸い宝石へと変化をし、峰の部分に小さいながらもカートリッジが排出・差し込める場所が存在する。

シホはその二刀を手に取り、次にはバリアジャケットが纏われていく。

まず上半身に黒い長袖のシャツが体を覆い、次に白と黒が入り混じった軽鎧が装着される。

下半身には黒いスカートとオーバーニーを履いている。

靴はタラリアを模した鉄の作りになっている。

次に上半身に聖骸布の赤い外套が出現し装着され左右の外套は胸の間で糸で結ばれ、腰にも同じく聖骸布の腰マントが装着される。

髪は再度ポニーテールに整えられていた。

バリアジャケットがすべて装着されると、変身を終えた。

ここにきてシホは初めて魔導師の姿として降臨したのだ。

「へー…バリアジャケットってこういう風に装着されるのね。体に馴染む感じがするわ」

《マスター、指示を》

「了解よ、エア。さて、仮面の男。覚悟してもらおうよ」

「…今の私は時間稼ぎだ。積極的な戦闘はしないつもりだ」

「そちらがそうでもこちらは急ぐのよ」

足にブーストをかけてシホは仮面の男に肉薄する。

「早い!？」

「せいっ!」

背後に移動してからの干将の左薙ぎ。

それを仮面の男は辛うじて腕で防ぐ。なにかを仕込んでいるのだろうか？ 剣を当

てた腕からは「カンツ」という鉄製の響きが返ってきた。

シホはそれで一度瞬動を使いそこから後退して、

「それなら!」

《Illusion air.》

アンリミテッド・エアがそう言葉を発した瞬間、シホの周りにいくつもの干将・莫耶が浮遊し停滞した。

「いって!」

数は二十はあるだろう同じ形の剣達が一斉にすべて回転を始めて仮面の男に襲い掛かる。

仮面の男は一度その場から逃げるようにして空を飛び、だが一双二対の干将・莫耶が

抜きん出て襲い掛かる。

それを弾こうと腕を振るうが感触はなにもなくただ剣は空気に溶けるように消える。

「幻像か！　がつ!?!」

仮面の男の背中を違う干将・莫耶が掠り通り過ぎる。

「そう、これは幻像でもあり実体でもある。どれが本物か偽者か…あなたにはわからな
いでしょう?」

そして消えたと思った干将・莫耶は再度剣軍の中で数を放った時と同じ数に生産しな
おされる。

仮面の男の周りをくるくると旋回し続けている。

「さあそれを突破できるものならしてみなさい」

「くっ!　なめるな!」

すると仮面の男はエクスキューションソードを作り出し射出した。

何度かカンツカンツという音が響き干将・莫耶達はすべて消え去った。

「せいっ!」

仮面の男が剣の牢獄を突破して拳を突き出し始めるが、突き出されたシホの姿もこれ
また幻像でその姿は掻き消える。

どこにいったのかと視界を巡らせようとした仮面の男は頭上から聞こえてくる声に

上を向く。

《Sch・tzeform》

双剣は連結させて《ツヱイリ子ング座フオルム形》から一つの弓《シユ射ツ手ツエフ座オルム形》へと変化を遂げていた。

「赤原を往け、緋の猟犬！」

《Hrunting》

放たれた魔力でできた赤い魔弾は勢いそのままに仮面の男へと迫っていく。

それを距離を置きながら回避するがしかしこの矢はそう甘くはない。

避けたそばから急に旋回してまたしても仮面の男を追尾する。

「なんだこの矢はっ!？」

「あなたはそれにずっと追いかけていられていなさい」

シホは横目で見ながらその場を後にした。

矢から意識を離れたら効果は切れてしまうけど時間稼ぎには十分だろう。



Side シャマル

「湖の騎士、結界破壊魔法を放つ準備を…」

「はい、主。後、少しです」

アーチャーさんがそう私に問いかけてくる。

闇の書のページを使った結界破壊。

こうでもしないと皆が脱出できないから。

そこに先ほどアーチャーさんが拘束した管理局の少年が声を張り上げながら、

「くっ…これは『マグダラの聖骸布』！ お前は一体誰だ!? なぜこの布を使える!？」

「私は闇の書の主だ」

「なっ!」

少年は本当に驚いているようね。

でもどうしてこの武装の名前を知っているの？

私の思いを他所に少年は話を続ける。

「なら、なぜ闇の書の完成を目指す!？」

「何を聞くかと思えば…完成すれば大いなる力が手に入るのだろうか？ ならば答えは一

つだ」

「違う! その闇の書は、そんな生易しいものじゃない!」

「敵の言葉など聞く耳持たんな。そんな事より今からこの結界を破壊するのでな。そこで大人しく見ているがいい。魔力を蒐集されなだけよかったと思え小僧」

なかなかの悪役ぶりですね…。記憶を失う前は役者の仕事にでもついていたのではないのか、と思わせるほどの演技だ。

だけどそこで前に魔力を蒐集していいと言ったシホちゃんが飛んできた。

その姿はどうやら甲冑を纏っているようで、あの時の覚醒からデバイスも目覚めたのだから何が伺える。

「アーチャー…。いえ、エミヤ。あなたがなんでここにいるの？」

「エミヤ？ それが私の名だと」

「ええ、そうよ。あなたは英霊エミヤ」

「済まない。今の私は記憶喪失なのでね。君の望む回答はできそうにない」

「記憶喪失…（話には聞いていたけど本当にないみたいね）」

どうしてシホちゃんはアーチャーさんの事を知っているのだろうか？

それにエミヤ？ それがアーチャーさんの名前？

でもどうしてシホちゃんのファミリィネームと同じエミヤなの？

私が混乱している中、そこで一瞬シホちゃんは私に目を向けてくる。

私とアーチャーが話し込んでいる今がチャンスだと目は語っていた。

それで私は結界破壊の魔法を放つ準備と同時に旅の鏡を展開しシホちゃんの背後からリンカーコアを摘出する。

「ぐっ……！ これは!?!」

「しまった！ シホ！」

（ごめんなさい、シホちゃん……）

そう心の声で謝罪し、

「油断して、いた……あ、あああああー!!」

見る見るうちにシホちゃんのリンカーコアから魔力が闇の書に吸収されていき40ページ以上は溜まっただろう。

やっぱりすごい魔力保有量……。やろうと思えばまだページは埋まるけどこれ以上はシホちゃんが死んでしまう。

だから苦しそうにしながらも屋上に横にさせた後、

「湖の騎士。撃て、決壊魔法を！」

「はい！ 眼下の敵を打ち砕く力を、今ここに……!」

そして闇の書から雷が発せされ、

「………撃って、破壊の雷!!」

天から降り注ぐ雷に結界は破壊された。

そしたら結果から脱出してきたのかシグナム達が急行してきて、

「主、ご無事ですか？」

「ああ、問題ない。では脱出するとしよう」

私は人間形態では飛べないアーチャーさんを抱えてその場を脱出するのだった。

でも：やっぱりシホちゃんとアーチャーさんはなにかしら係わり合いが合ったのは確かのようなね。

後でまた会う機会を伺わないと。



「逃げられた、わね…」

シホは逃げられたというのにあまり気にしていないような素振りだ。

まあ、それは仕方がない。リンカーコアから魔力を搾り取られてしまったのだから顔に出す気力もないのだろう。

そこにマグダラの聖骸布が無くなったのか自由になったクロノがシホの背後に立ちながら、

「…大丈夫か、シホ」

「なんとかかね…でもこれでまた当分の間は戦線から退場ね」

「そうだな。ところでシホ…説明してくれないか？」

「なにを、つて…聞くまでもないわよね」

「ああ。あの白髪の男、アーチャーもとい『エミヤ』の情報を知っている事があるなら教えてほしい。どうして君と同じ武装…『マグダラの聖骸布』を使ったのかも含めて」

「……………わかったわ。でも、話す内容は私の中でもトップシークレットの部分だからハラオウン邸で話しましょう。もちろん公開は絶対にしない事を約束してくれなきゃ話せない…」

そこにリンディがモニター越しに姿を現して、

『わかりました。シホさんの意思を尊重します。クロノ、皆さんを連れて帰ってきなさい。でもその前にシホさんは検査入院ね』

「はい、わかりました。ですがすみません。取り逃がしてしまって…。それにシホの魔力まで…」

『あれは仕方がないわ。男性であるクロノには抗えない力だものね。シホさんの件も背後からいきなりなんだからなす術がないわ』

「そういえば…仮面の男はどうしました…？」

そこにエイミイが通信に割り込んできて、

『追っていた矢が効果が切れたのか消えてその後は転移で消えちゃった。でもシホちゃん放った矢はデバイスの発言からして“ブルンティング”？』

「え？ それまで映像に収まっているんですか？」

『当然！』

それでシホはまいったといった表情になり肯定の意を示したのだった。

『でも今回も仮面の男の転移先を特定できずにみすみす見逃しちやった…ごめんね、みんな』

『悔れませんか…』

リンデイの言葉でそう締めくくられた。

そこになのは達がやってきてシホが魔力を蒐集されてしまった事を聞き心配されたのをシホは苦笑を浮かべながら答えていた。

なんせこれはみんなを騙す演技でもあるんだから心苦しい事になるのは仕方がない。

しかし、その時シホは心の中で、

（でも、エミヤから感じたのは同族嫌悪ではなくて郷愁だった。なんでエミヤの事を懐かしむなんて感情が出てきたのだろうか…？）

そんな事を思っていた。

その後、一度本局の医療施設で見てもらってなのはと同じ症状だということ検査だ

けして入院はせずに済んだ。

そして向かうはハラオウン邸。話す内容はシホの過去。



S i d e エミヤ?

私達は一度散り散りになりながらも撤退し八神家に戻ってきた。

特に私は鷹の姿は晒していないので戻ってくるのは楽だった。

最初に戻ってきたのが私とシヤマルだったらしく皆が帰ってくるのを待っていると次第に全員が帰ってきた。

「それぞれ追手は撒いたか？」

「ああ。それより経過はどうだ？ アーチャー。：いや、＼エミヤ＼」

「著しくないな…。名だけではまだ思い出すのには至らないらしい」

「そうか」

「後で今度はじっくりとシホと会ってみればいいんじゃないか？」

ヴィータがそう言ってきたので「そうだな」と返しておいた。

その後ははやてに連絡を取った。

本日は友達である月村すずかという少女の家に泊まるらしい。

はやては全員と話を交わして私とも話したいといったのでヴィータから変わる。

「もしもし。はやてか」

『あ、アーチャー。大丈夫？』

「君は何に對して大丈夫といっているのだ？」

『えつとな。アーチャーって契約できる人がいないやろ？ だからいつも確認せんと心

配なんよ』

「心配のしすぎだ。自力でも少しは魔力を回復できるのだから」

『そか。じゃ安心や』

「ああ。だからはやても安心してそっちで泊まっていけ」

『うん』

その時、向こうから別の女の子の声が聞こえてきた。

おそろしくこの声が月村すずかの事だろう。

『はやてちゃん、アーチャーさんって？』

『ああ、私の家族の一人や』

『そ、そうなんだ…。変わった名前だね』

『あはは。そうなんよ』

『そっか…』

そこですずか嬢の声のトーンが下がる。

なにやらいやな予感がするので、

「では、はやて。もうシグナムに変わるぞ?」

『あ、わかった』

その後はシグナムとも話を交わしてどうやらまだはやての体調は大丈夫のよう
だ。

なので私は魔力消費を抑える為に鷹形態に戻る。

しかし、未だにどうして私はこんな体なのかと思う事がある。

記憶を思い出せばこの原因も掴めるのだろうか…。

しかし、シホ・E・シュバインオーグから感じたのは郷愁だと…?

やはり私の失われた過去にはなにか彼女と関係があるのか…?

い……。シホとエミヤは同時に同じ思いを抱いていた。これが意味することは、まだ分からない

第四十三話

『シホの過去の話（前編）』

S i d e シホ・E・シュバインオーグ

場所は戻ってきてハラオウン邸。

ここにいるのはリンディさんを始め、クロノ、エイミーさん、なのは、フェイト、アルフ、ユーノ、ファイアの魔法関係者全員。

さしあたって私はある事を指定した。

「まず私の話す内容は記録に残すのはとてもではないですが遠慮してもらいたいので皆さんの記憶にのみ留めてもらえませんか？

でないとい私は証拠隠滅のためにこの家を廃墟にしないといけませんから」

『……………』

それで全員は怯えながらも頷いてエイミーさんは機械系等をすべて停止させた。

「これでいいですね。…さて、今から私が話す内容は知っているのは名前を挙げていく

と、

桃子お母さん、士郎お父さん、恭也兄さん、美由希姉さん、忍さん、ノエルさん、フアリンさん、ファイア……………最後にすずかよ」

「えッ!？」

「どうしてすずかが?」

「前にとある誘拐未遂事件であることがきっかけで今の話した全員に話す事になったの。私の秘密を……」

「誘拐未遂って……」

「結構すずかは誘拐されそうになる事があるのよ。それで何度か私と恭也兄さんと美由希姉さんの三人で裏組織を潰して何かされる前に事前に取り返しているわ」

「すずかちゃん…私にはそんな話一度もしたことないよ」

「話せる内容でもないと思うが…というよりシホ達は結構頻繁に裏家業的な事をしていくのか?」

「緊急時はね」

「お兄ちゃん達って……」

「なのはがまたしても落ち込んでいるが今はそつとしておこう。」

「でもファイアットは……」

「未だに私とファイアのリンカーコアはパスが繋がっているから私が話していた時に聞いてしまっていたのよ……」

私が呆れながら話すと全員とはいかないがファイアはじとつとした目で見られていた。それで苦笑いを浮かべているファイアなのだった。

「でもお姉様も管理局に……リンデイさん達だけという限定ですが、ようやく話す決心がついたんですね」

「ええ。アーチャーが現れてしまったから話さないわけにはいかないわ。私達の関係性を……」

「そういえば自身を闇の書の主だといったアーチャーさんはシホのマグダラの聖骸布を使っただよね。」

それにシグナムに聞いたんだけどシホの本当の魔術を教えて欲しい……」

「……シグナムにどこまで聞いたの、フェイト?」

「シホが使う魔術は転送系じゃなくて投影魔術というものだけ……」

「はあ……私の秘密をべらべらと……。これでまた話す内容が増えたじゃないの……」

「お姉様、諦めが肝心です。これだけの規模で抑えられただけでも僥倖と考えればいいんです」

「ファイアットさんの物言いですとシホさんの使う投影魔術というものは管理局によほど

知られたくない能力なんですか？」

「…ええ、はい。リンディさん。ちなみに聞きますけど組織というものは決して一枚岩ではないですよ？」

「はい。私達はシホさんの能力を悪用しようとは考えていませんが…きつと今でも少しだけです。シホさんの力の話は上層部の幾人かに知れ渡っています。

特にジュエルシードを破壊するだけならよかったです。威力が人の出せる域を超えているエクスカリバーという武装…。

あれも転送系として報告書で提出済みですからもしかしたら裏では善からぬ人物に情報が流れてしまっているかもしれません…。

私達ではもうシホさんの情報を流出するのは止める事はできないから将来もしかしたら目をつけられてしまうかもしれません。考えたくありませんが…」

それではなのは達は「そんな…」と言葉を漏らしていた。

「それでなぜ私が転送系だという嘘をいったのかは…私の魔術は異端だからです」

「異端、ですか…」

「はい。どの世界でも異端者は物珍しい目で見られてしまい、前の世界では私はその能力がばれてしまい封印指定を受けて世界を追われることになりました。

だから管理局には本当のことを話さずただレアなスキルとだけの認識で留めておい

てもらいたいのです…」

「それでさ、結局シホの使うその投影魔術ってどんな能力なんだい？」

「それを今から説明するから我慢しなさい。アルフ」

「はい」

アルフはそう言葉を発して続きを促す。

「それで私が使う投影魔術というのは別名はグラデーション・エア。自己のイメージからそれに沿ったオリジナルの鏡像を魔力によつて複製する魔術の事です。」

そして事私の投影魔術は異端でほぼ真に迫れるほどの投影ができて私が消えろと命じるか、壊れるまで消えないんです」

「えっ…それってつまりシホの今まで使ってきた武装全ては魔力で作り上げた贗物つて、こゝろ？」

「その見解で間違いないわ」

その肯定の言葉を言った瞬間、フィアを除く全員は驚愕の表情をして特にリンディさんはなにかを納得したかの表情をして、

「なるほど…それで納得がいきました。ただ武器庫から取り出すだけなら魔力を消費する訳がないのにエクスカリバーを使った時に魔力が枯渇してしまった訳を…」

「ええ。エクスカリバーは私達の世界の宝具のランクにしてA++…最も上位に位置す

る宝具ですからもし投影に失敗したらまた体から無数に剣が生えてきて最悪死んでしまいます」

「あの現象がまた起こるっていうの!？」 あ、それと、あの、シホ…宝具ってなに?」

あれ? 説明していなかったっけ?

「ああ、ユーノ。説明していなかったわね。前に概念武装の説明をしたでしょ? 宝具っていうのは英雄のシンボルっていうてもいいわ。」

例えばアーサー・ペンドラゴンなら、『聖剣エクスカリバー』。それに次いで私の体に埋め込まれている持ち主に不死の力を与える聖剣の鞘『アヴァロン』。

例えばクー・フリーンなら、狙った瞬間に因果を捻じ曲げ必ず心臓を貫くという結果を残してから放つ魔の槍『ゲイ・ボルク』。

例えばメドゥーサなら、『石化の魔眼』に英雄ペルセウスに不死を殺す概念を持つ『ハルペーの鎌』で殺された際に首から零れ落ちた血から生まれたという幻想種『ペガサス』。

例えばメデИАなら、裏切りの魔女という伝説が象徴として宝具に具現化した効果はどんな魔術だろうと破戒し初期化してしまう魔の短剣『ルールブレイカー』。

例えばヘラクレスなら、過去に十二の偉業を達成した事からそれが概念武装と化し、十二回それぞれ違った効果で殺さないと完全に殺す事ができない蘇生魔術の重ねがけ

である『十二の試練』。

例えば英雄王ギルガメッシュなら、世界の始まりにすべての財宝を納めていた宝物庫が由来で、すべての宝具の原典を取り出せる『王の財宝』。

そしてもう一つはかつて混沌とした世界を天地に分けたというEX対界宝具『天地乖離す開闢の星』。

……………英霊は必ず一つは形は違えど宝具を持っているといってもいいわ」

私の宝具の説明を受けてフィアは再度その凄さに驚いて、初めて聞かされた他の面々は英霊というのとはとことん規格外だという認識を埋め込まれたらしい。

「それでは…シホさんはどうしてこれらを投影できるのですか？」

「実際に“視て”解析したからです」

「え？ 視たつてどうやって？」

「それに関してはこれから話す私の過去の話を聞けば分かります。ですがその前に一つ。私のこの体は本物ではありません」

「本物じゃないって…？ どういう事だ？」

「この体は、私の義理の姉の死んだ体を元に作られた人形なんです。元の私は26歳くらいでしょうか？ の男性で名前は『衛宮士郎』という名でした」

それから私は桃子お母さん達に話した時より簡潔かつスムーズに話しをしていった。

「…私の最初の記憶は突如として燃え上がる大地、一面の焼け野原、次々と聞こえてこなくなる人々の声、そして空に浮かび上がる黒い太陽でした」

「戦争…だったのですか？」

「戦争というには確かに正しいのでしょうか…ですがその戦いは小規模なものでした。

七人の魔術師と前に説明した七人の英霊という使い魔同士がなんでも願いの叶うという聖杯を競って争う戦争…聖杯戦争と呼ばれるものでした。

厳密に言えば私が災難孤児になった原因の戦争は第四次聖杯戦争と呼ばれるものでした」

「第四次聖杯戦争…」

「その火災で私はその火災以前の記憶をすべて失い、名前以外をすべて失ってしまいました。どうにか体は生き残ってくれましたが心はすでに死んでいたのでしょうか。

ただただ火が迸る道なき道を歩き続けました。道中で何度も生き残っている人の悲願の声が聞こえてきましたが何もできずただ声が聞こえなくなるまで歩き続けるだけ…。

次第に火は収まっていき変わりに雨が降り出して私も力尽きたのかその場で倒れてしまいました」

なのはとフェイトはそれで涙を流していた。もう内容は一度聞いているファイアですら涙を流している。

やっぱり誰でもこんな話はなれないはずだ。

「そして何を思ったのか私は片腕を空に伸ばして何かを掴もうとしていたのかもしれない。せん。」

でも次第に腕にも力が入らなくなり落ちそうになった時に、その腕を掴んでくれた人がいたんです」

「その人は誰だったんですか？」

「衛宮切嗣……第四次聖杯戦争の生き残りだと知ったのは随分先の話ですが……その時に私の意識は闇に落ちました。」

そして次に目を覚ましたのは病院の一室でした。そこには他にも助かった人たちがいましたが皆私と同じように感情を削ぎ落としたような表情をしていたのを覚えていきます」

「それは……僕も何度か見たことがある。戦争や災害後の生き残りは大抵そうなるらしいからな」

クロノは見たことがあるようだ。

執務官ともなればそういった経験もするものなのだろう。

「しばらくそうしていたら衛宮切嗣……私はじーさんと呼んでいたっけ。切嗣が私のところに来てきて孤児院にいくか知らないおじさんに引き取られるかどちらがいい？と聞いてきたんです。

その時はどちらでもあまり変わらないと思ったのかすんなりと私は切嗣と一緒に行く道を決めました。そして私は■土郎から衛宮士郎になった」

「切嗣さんは……どうして」

「なのはの言いたい事は分かるわ。でも切嗣も罪の念に駆られていたんだと思う。

そして私と切嗣は二人で広い武家屋敷に住むようになって私が一人でも家を切り盛りしていけると判断したのか切嗣は何度も海外に旅行するようになった。

寂しかったけど姉貴分の人はいたし切嗣の持ち帰ってくる旅行の話が私の唯一の楽しみだった」

「どうしてシホと一緒にいてくれなかったの？」

「うん……まあ理由はあったと思うの。今からして思えば切嗣は何度も迎えに行こうとしていたんだと思う。実の娘であるイリヤ……イリヤスフィール・フォン・アインツベルンを」

「アインツベルン……？」

そこでクロノが小さい声で呟いてなにかを考え出した。

そして何かに思い至ったのか、

「あ！ 濟まないシホ。話の途中で悪い！ エイミイ、アインツベルンといえば……」

「あ、そうだね」

「何か知っているの？」

「ああ。アインツベルンというのは、名前までは調べられなかったが最後の聖王であるオリヴィエ聖王女と共に同時期にその名を消した『聖なる錬金術師』……そういうあだ名で呼ばれていたらしい」

「えっ！ こちらのアインツベルンも錬金術が専門の魔術師の一族だったわ」

「クロノ、エイミイ。その件に関して後で調べてもらって構わないかしら？」

「わかりました、母さん」

「了解です」

「それじゃシホさん。話を再開してもらっていいですか？」

「わ、わかりました……」

どちらも錬金術師の繋がりにある。これは何を意味しているのだろうか？ 今はまだ答えは出せないけどきつとなにかある。そう直感が告げていた。

それはともかく私は話を再会した。

「それから切嗣に出来ないながらも魔術を習いながらも五年の月日が経過してある月夜の

晩、私と切嗣は空の月を眺めていました。

その時には切嗣の姿はやせ細っていて死期も悟っていたのでしよう……私にある話をしてきました。

『子供の頃、正義の味方に憧れていた』と……。その時はまだ切嗣の言葉が理解できなかったのか、でも怒りはあつた。

だって、あの火災の中、私を助けてくれた切嗣こそが私にとって正義の味方だったのだから。

でも思えば切嗣の事を何も知らなかったガキの我儘だったんだろう。

でも、切嗣が正義の味方は期間限定だ、なんて言うから。『子どもの俺なら大丈夫だから、代わりにやってやるよ』って言ってやりました。

そして『爺さんの夢は俺が形にしてやる』って、言おうとした。でも切嗣は、私が言い終わる前に『ああ、安心した』って笑いながら……。眠った。

切嗣がそれで本当に救われたのか分からないけど、でもそこで私の夢は決まった瞬間だった。

がらんどうの私に『正義の味方』という理想が体に、心に染み込んだ」

「それは………こういっちゃ悪いけど一種の呪いともいえないかな？」

「アルフ！ シホに対して……」

「いえ。それはあながち間違っていないのよ」

『えっ?』

全員の疑問の声を聞き、だけど先に促していった。

「それから上達しない魔術を死にそうな思いで鍛錬して人助けもやっつけていきながら高校二年生になったある冬の事、私はまた巻き込まれた」

「まさか…」

「そう。第五次聖杯戦争に」

第四十四話

『シホの過去の話（中編）』

S i d e フェイト・テスタロッサ

シホは巻き込まれたといった。それはつまり魔術は知っていたけど聖杯戦争なんて言葉は微塵も知っていなかった事になる。

話によると高校である事情で夜遅くまで残っていたシホは物音が響いてくる校庭にまで見に行ってしまうらしい。

「当手を振り返ってみればなんで引き返さなかったんだろうと思ったけど気づけば校庭の光景をじつと隠れて見詰めていた。

そこには赤い男と青い男が武器は違えど人間の出せるスピードを越えた動きをもつて戦いあっていたわ。一目で分かった。あれは人間ではないと…。

どれくらいかのスピードかという例えるならフェイトのソニック・ムーブを常に維持したほどの動きだったわ」

それはどれだけ異常かわかる。そんな動きを生身の人間がしたらきつと耐えることができない。英霊というのはやっぱり人知を超えた人達の集団なんだろう。そう感じた。

「そうしてしばらく見ていたら二人とも動きを止めた。何が起こるのかと思った矢先に青い男の持っていた槍から禍禍しい魔力が溢れ出した。

まだ当時は知識も経験もなかった私でも分かった。あれを使われたら赤い男は確実に死ぬだろうと。

でも、そんな時に私はミスを犯して青い男：ランサーのサーヴァントに見つかってしまい校舎の中までなんとか逃げた。

けど私が足を止めるのを待っていたらしくいきなり目の前に現れてその槍で心臓を貫かれてしまいそこで私の意識は一度なくなった」

「シホはそれでどうなったの!？」

「お、落ち着きなフェイト。生きていなきやここに居るシホはなんだっていうんだい？」
「あ…」

そうだった。シホがここに居るのは生きていたからなんだ。

「続けるわよ？ それで次に目覚めたときには廊下で横たわっていて、ただ何をしているのか分からずつい掃除をして血の跡とかを消して家に帰ったのを覚えている」

「シホちゃんってそんな時でもブラウニーだったんだね…」

「やかましい。でもその時に一緒になぜか落ちていた宝石があったの。なぜかは分からないけど大切なものだと思うたから私はそれを今までずっとお守り代わりに持っていた」

「それが、アンリミテッド・エアになったんだね」

「ええ。後になって教えてくれた事なんだけどこの宝石はリンのもので壊されてしまった私の心臓を宝石に宿る魔力で復元してくれたらしいの」

「心臓の復元…そんな技術は僕達の魔法技術じゃ到底無理な事だ」

「そうね、クロノ。もうそれですら奇跡の力と言っていいわ」

「そうですね。それで、まあなんとか家に帰ったんだけどわざわざ殺した相手が生きていると分かったらどう思うと思う？」

「また、証拠隠滅のために殺しに来る、か？」

「クロノ正解。それで再度ランサーに襲撃されて今度はなんとか強化の魔術で適当に丸めたポスターを武器にして何撃か受け止めたけどやはり敵うわけもなく私はただの一蹴りで土蔵まで蹴り飛ばされてしまった」

「そ、それでシホちゃんはどうかになったの？」

「基本サーヴァントと戦うのはサーヴァントだから、私は運がよかったんでしょうね。」

土蔵に切嗣が残っていてくれた魔法陣が起動して私の体に火災でボロボロになった私を助ける際に埋め込んだ『アヴアロン』が触媒となってセイバー…アルトリア・ペンドラゴンが召喚されたのよ」

それがセイバーさんとの出会いだったんだ。

あの病室で見たときのセイバーさんはとても強そうに思えたから強かったんだろうな。

「それで少し話は省略するけどランサーは宝具を使ったけどセイバーを死に至らしめる事はできずに撤退。

その直後に赤い男…アーチャーのマスターであるリン…遠坂凜がやってきてセイバーが迎撃と称して私に何も説明をせず飛び出して二人を倒そうとした。

けどその時私はマスターの証である三つの絶対命令権を有する令呪でセイバーの戦いをやめさせた。

そしてリンとは一時停戦となり聖杯戦争の内容を聞かされて教会にマスター登録する為に向かった」

「なんで教会なの？」

「そこには聖杯戦争の監督役である言峰綺礼という男がいたからよ。

まあ、一言で言ってしまうば…いつは世界の滅びを望んでいて狂っていた。

裏では色々と暗躍していてランサーの元マスターを騙し討ちして令呪を腕ごと切り取りランサーに鞍替えの命令をしたらしい」

「ど、どうやって…仮にも英霊なんだからそれくらい…」

「それが令呪の怖いところ。絶対的命令権は英霊ですら抗えない力を持っていておそらく『主換えを認めろ』なんて命令をしたんでしょうね」

なんて酷いんだろう。それは私に置き換えたらアルフを奪われてしまうという事になる。到底納得できる話ではない。

「そして私は聖杯戦争に参加する事を決めた」

「で、でもそこで引き返していればシホちゃんはこれ以上は聖杯戦争に巻き込まれなかったんじゃない」

「そうだろうね。そこで引き返していれば私もまた平穏に戻れたかもしれない。

でも私は引き返さなかった。なぜなら私は『正義の味方』になるのが夢だったから。

この力で助けられる人がいるなら助けようと…もう知ってしまったら見ぬ振りはないと…」

「……………、私と、同じだったんだ…」

そこでなのは少し間を置いてからそう言葉を発した。でもシホの正義の味方という夢は相当に根が深いものなんだろうと思った。

「その帰りの事だった。リンとはここで停戦協定は破棄しようと言われたけどその矢先に会ってしまった。二m以上はある鉛色の巨人、バーサーカーを従えたイリヤと…」

それからシホと遠坂凜さんは撤退しながら戦闘場所を墓地に決めたらしい。

セイバーさんはバーサーカーに切りかかっていき、苦戦しながらもなんとかやり合えていたらしい。

「でもそこでアーチャーが思いもよらない行動を起こした。

セイバー諸共バーサーカーを倒そうとして強力な魔力を宿した矢を放った。

当然、その時に気づいていた私は傷を負う覚悟でセイバーをなんとか庇いながらバーサーカーから身を置いた。

次の瞬間、バーサーカーを中心に火の海が生まれていた。私が気づいていなければセイバーは死んでいたのだろうと…。

でも、バーサーカーはその火の海の中、何事もなく立っていた」

「まさか、そのバーサーカーの正体はさつきいった…」

「ええ。ギリシヤの大英雄ヘラクレス。その時に一回しか殺す事ができなかったのよ。イリヤの口から真名を聞かされて私達はどうしていいかわからなかった。

でも、イリヤは気が変わったのかそのまま帰って行った。

それでその後にはバーサーカーの事は脅威にしかならないと再度リンとは停戦協定を

結んで共同戦線を張った」

そこで全員から息を吐く声が聞こえてきた。

一回きりだけの勝負の話でここまで緊張してしまうなんてそれだけ激しい戦いなんだろうと実感した。

「でも、なりふり構わずセイバーさんを助けようとするシホさんはなんていいですか、自身の命を勘定に入れていなかっただのですか？」

「よくわかりましたね、リンデイさん。私は壊れていたのでしょうね…その後も何回か後のことを考えずに行動をしてセイバーにもリンにも指摘を何度もされました。

その時の私はただ他人が助けられればという考えで自身の命は勘定に入れていなかったんです」

『……………』

そこで全員は押し黙った。

自身の命を勘定に入れていないシホのあり方。

それはなんていうのだろう。私には想像もつかないほどただ悲しいだけの感情が残った。

「その次の相手はアサシンのサーヴァントとの戦いだった。といってもセイバーが柳洞寺という寺にキャスターが潜伏していると分かり勝手に先行して飛び出してしまった

んです。

アサシンはキャスターにルールを捻じ曲げて門番として召喚されたイレギュラーな英霊で名は『佐々木小次郎』。本来なら架空の存在で宝具すらも持っていない無銘の亡霊だったんです」

「宝具を持つていなかったの？」

「ええ。でもアサシンは絶対の一を持つていた。ただ暇を持て余して振り続けた剣が技として昇華した秘剣『燕返し』」

「それってシグナムに向けてシホが使った技だよな？」

「うん。まあ、それによってセイバーはなんとか防ぐことができたけど撤退を余儀なくされた」

「ど、どうなったの？」

「結果は私の介入で引き分けという形になった。アサシンは門番に縛られていたからそこから動けなかったのよ。」

そして休む暇もなく次の戦いが起こった。場所は学校でマスターであり私の友達であった間桐慎二とライダーのサーヴァントとの戦い。

その戦いで結界内の人間を血に溶解して吸収する宝具『ブラッドフォード・アンド・ロメダ他者封印・鮮血神殿』を使われてしまい学校中にいた生徒達は生気を吸われ皆死んだように倒れてしまっていた。

なんとかライダーを操っていた慎二を止めることが出来て宝具は停止したけどライダーは慎二を抱えて逃げてしまった」

「その、生徒さん達は怎么样了の、シホちゃん…?」

「発動した時間が短かったから結果的には全員無事だったわ。ただ衰弱が激しくほとんどの生徒が入院を余儀なくされたけどね。それに戦いの余波で学校は破壊されて当分の間は休校になった」

それで私も安堵の表情をする。

皆も同じように死人が出なかった事によって表情は複雑だけど似たり寄ったりだった。

「だけど再度ライダーとの戦いは起こった。

今度は街中でセイバーとライダーはまるで落ちていくかのようにビルを昇っていった屋上にまで上っていった。

そこでライダーは本当の宝具であるペガサスを召喚してセイバーを葬ろうとした。だけど私を守ろうとしたのかもしれないが屋上、敵が空の上という好条件が重なりセイバーは宝具を開放しライダーを滅ぼした」

「エクスカリバーを使ったのですね」

「はい。あれは地上では威力が大きくて使えませんから」

確かに……。あれは地上で使うものなら一つの惨劇が生まれてしまうほどの威力だから、セイバーさんの選択は正しい。

「そして慎二もライダーを失い教会に逃げて一件落着になるはずだったけどセイバーはそこで私が緑に魔力を送れていなかったのが災いして魔力枯渇によって倒れてしまった。

そこまですらまだよかった……セイバーの回復を待てばよかったのだから。でもそこに突如としてキャスターが空間転移して現れて『ルールブレイカー』を使い私はセイバーを奪われてしまった……」

「奪われちゃったの!?!」

「ええ。それで一度聖杯戦争は降りなさいとリンに言われた。けど納得できなかった私はセイバーを助けようと行動を開始した。

でも、今度はよりもよってアーチャーがリンを裏切りキャスターに寝返ってしまった」

「なんて奴だ! ご主人様を裏切るなんて!」

「アルフの言い分も分かるわ。でもアイツにも事情があったのよ」

「その事情というのは……?」

「今はまだ……。それでアーチャーの口添えで殺されはせず命からがら私とリンは逃げ出

すことが出来たけどお互いサーヴァントを失ってしまつて途方にくれた。

けど、なら他のサーヴァントと協力すればという考えにいたつて私とリンはアインツベルン城に向かいイリヤと無理に近いけど協力しようとした。

でも、そこでは既に戦闘が起こつていた。慎二といない筈の八人目の黄金のサーヴァントがバーサーカーと戦つていたの。それも圧倒的な火力でもつて」

それでまたしても私達に緊張が走る。

いな筈のサーヴァント。

サーヴァントを失つたシホ達には恐怖の対象に映つたと思う。

「そいつは空間を歪めてそこから無数に武器を放出し、一つ、また一つとバーサーカーの命を刈り取つていった。

解析を使つて分かつた事だけでもそいつの放つ武器はどれも贋作ではなく本物だった。

そんなサーヴァントがいるのかと思つたがそこで慎二がまだ私達がいる事に気づいていなかつたのか上機嫌に正体を明かしてくれた。

そいつの正体は『英雄王ギルガメッシュ』だとね。

それを聞いて見ていることしかできないでいたイリヤは酷く震えて泣き出していた。

私は、そんなイリヤを見捨てる事が出来ずにリンの制止を振り切つてイリヤの元へ駆けつけていった。

理性より感情が上回っていたんだと思う。自分の死よりイリヤが殺されてしまうと考えたらもう形振り構っていられなかった」

「それは…あまりにも無謀だ。サーヴァントがいないのに突っ込むなんて命知らずにも程がある」

「もう驚きませんが…シホさんは…危ういですね」

「それはもう先刻承知のことです。でも今はこの体だから自身の命も大切にしようという考えになってるんです」

「そうですか…」

リンディ提督はそれで何度目の安堵の息を吐いていた。

「それで話は元に戻りますが、バーサーカーは私達を守るように盾になってくれた。本来バーサーカーには主を守ろうとする意思さえないと言うのに…」

でも最後はギルガメッシュの神性が高ければ高いほど拘束する力が強くなる『天の鎖』でバーサーカーを拘束し滅多指しにして、消滅寸前のバーサーカー…。

でも、バーサーカーというクラスは消滅の間際に正気を取り戻す事が出来るんです。

バーサーカーは私に向かってこう言った。『お前が私の変わりに守れ…！』と…そして完全に消滅した」

「使い魔の鑑だねえ…ヘラクレスは」

アルフが涙を浮かべながらそう言った。

確かにそう考えるとなぜか私も胸が熱くなってくる。

でも：天の鎖ってギルガメツシユの武器だったんだね。前に壊した時にあまり有名なものではありませんようにと願ったけど見事期待を裏切られたね。内心で私は地面に腕をついていた。

でも、そんな私の内情など気にせずユーノが、

「でも、それでも絶望的状况は変わらないんですよ？ どうやって逃げ切ったの？」

「…うん。そこで初めて私の投影魔術が役に立ったといえばいいのかな。ギルガメツシユが放ってきた武器を即座に解析して何度も打ち返した。

どうせ死にゲームだと分かっていたんだから魔術回路が焼ききれてもいい。イリヤを守りながらそんな思いで何度も投影した剣をぶつけた。

ギルガメツシユも面白い遊びを見つけたような表情になりしばらくして、『面白いぞ、^{フエイカー}贗作者。しばし聖杯を預けようではないか』と言って不機嫌から突然上機嫌になりその場を去っていった」

「そうなのですか：しかししなるほど。シホさんが宝具を視たというのは聖杯戦争で何度も視る機会があつたからなのですね」

「ええ。それでその後は魔術回路を酷使した影響なのか私は一度気絶してしまった。

そして次に目を覚ました時にはイリヤとリンにこっぴどく『自身の命は大切にしろ』と叱られてしまったけど……」

それでシホは苦笑いを浮かべていた。

でもシホのあり方は確かに命知らずかもしれないけど尊いものかもしれないと思いはじめた。

「そしてこれからどうしようと三人で話し合っているとそこにランサーが現れて協力してくれると言ってくれた」

「それも言峰綺礼の命令なの？」

「わからない。でもランサーの独断だったのかもしれないし今ではもう分からない。」

「だけどそれで勝機が見えてきた私達はセイバー奪還の為に場所を冬木教会に移していたキャスターに挑んでいった。」

「ただ教会の前で待ち構えていたのはアーチャーだった。」

「ランサーがアーチャーと戦うと言って私達は教会の地下に入っていく、キャスターはリンが、キャスターのマスターは私が対峙することになった」

「いよいよ本格的に戦いが始まる事が分かった私達は手に汗を握りながらシホの話をただ聞く。」

でも話によるとキャスターのマスターは暗殺者の類だったようでキャスターを追い

込む事が出来たけどシホは抑えることが出来ずに吹き飛ばされてしまったと言う。

それでやっぱり形勢逆転は無理かと思われた矢先に突如頭上からいくつもの剣が降り注ぎキャスターとそのマスターを貫いたと言う。

その実行者はアーチャーだった。

それで何度目になるか分からない怒りが私達を包んでいた。

何度裏切れば気が済むのかという事に対して。

「まあ、結果的にはセイバーは助けることができたしアーチャーもキャスターを倒すために態々ここまで計画を練ったんだと思う。

でも、そこから遂にアーチャーはその本性を現した。私を殺しにきたのよ」

「なんで…」

「奴の本来の目的がそれに集約されるからよ」

「その目的って…」

「もう、皆も気づいていると思うけどアーチャーの真名は『英霊エミヤ』。正義の味方という理想を実現した私の未来の一つの可能性存在よ」

その真実を聞いた途端、私達は驚愕した。

「そ、それじゃあの白髪の男性がシホちゃんの本当の姿って事!?!」

「ま、そうなるわね」

「あ！ 皆さん、勘違いしないでくださいね！ お姉様は事実を隠していたのはやましい気持ちとかそんな物は一切持ち合わせていなかったですから」

そこでフィアットが大声でシホを庇った。

「うん。わかっているよ、フィアちゃん。シホちゃんは嫌な嘘はつかないから今までの行動でそれが分かるから十分だよ」

「…ありがとう、なのは」

それでシホは話を再会した。

セイバーさんはアーチャーに挑むけど誰とも契約していないので力は発揮できず、リンさんも剣の檻に閉じ込められて絶体絶命の事態に持ち込んだとき、

「追い詰められたその時にリンは再契約の呪文を唱えセイバーと契約を結んだ。それによってセイバーは私の時以上の力を発揮しアーチャーを逆に追い詰めた。でもそこでアーチャーは剣を捨てた」

「諦めたのか？」

「いえ、本来の姿に戻っただけ。そして唱え始めた、詠唱を」

「詠唱？」

「ええ。それが唱え終わった瞬間、世界は一変し空には歯車が回り、炎で荒廃した台地に無数の剣が突き刺さっていた。

これがアーチャー……エミヤの真の宝具、固有結界『無限の劍製』アンリミテッド・ブレイドワークス」

固有結界……。それはつまりシホも使えるってことかな？

私が聞こうか悩んでいるとクロノが声を上げて、

「それはつまりシホ。君もその固有結界を使えると言う事か？」

「ええ、使えるわ。私の固有結界も無限の劍製……。……投影、強化、解析、変化。これらすべての魔術は固有結界から零れ落ちた副産物の魔術に過ぎないの。」

私が見えるのは固有結界という一つの大魔術だけ。まあ今は姉の魔術回路で他の魔術も使えたり出来るけどね」

「……今一理解できないんだけど固有結界って実のところどういった魔術なの？」

「自身の心象風景を表に顕現させ世界を侵食して新たな世界を作り出すといったものよ」

「心象風景の具現化……」

「つまり心を外に現すということですか？」

「はい。……。……さて、では話を戻します。英霊エミヤの目的は自分殺し」

「自分殺し……？　なんでそんな事を思ったの？」

「以前、抑止力と守護者の話をしたわよね？」

「ああ。世界を滅ぼしえる因子を刈り取る為に関わったすべての者を無差別に殺す者の

ことだろう」

「ええ。エミヤは世界と契約し死後を売り渡し守護者の任についていたから自身が嫌だと思つても意思を剥奪され永遠に世界に殺しを要求されていたのよ」

「永遠の殺戮……」

「そして何故自分殺しをしようと思ひ至つたのかは、自分の手で私を殺す事で自分を守護者から引き摺り下ろそうとしたのよ。

過去の改竄程度では無理だけど、それを自身の手で行う事に希望を見出した。矛盾が大きければ歪みは大きくなり、或いはエミヤという英霊を消滅させられるかもしれないと思つたから」

そんな……。永遠の殺戮なんて、きっと私には耐えられない。

そんな事をエミヤは延々と繰り返していたつて事……？

そんな悲しい希望を見出すほどまでに。

世界と契約して……、はっ！

そこで私はあることに気づいた。

「ねえ、シホは……シホは世界と契約なんて、していないよね？　死後を売り渡していない

よね？」

「……ええ。安心してフェイト。私は世界と契約する気なんて更々ないから」

「よかった……」

私が安心を得たのかシホは話を続けた。

「アーチャーは一度リンを攫つて、私はアーチャーと決闘をする場所をアインツベルン城と指定した。

そしてアーチャーはリンを抱えてどこかへと消えて、残った私とイリヤ、セイバーはランサーと合流してアインツベルン城へと向かった。

そしてアインツベルン城で私とアーチャーは向かい合った。ランサーはリンを助けに行つてセイバーとイリヤは見届け人になった」

「で、でもあくまでアーチャーは英霊なんですよ？ シホがかなう訳……」

「いや、敵わない訳でもなかった。私とアーチャーの戦いは基本同じ戦い方……つまり剣製の競い合い。でも戦う前にアーチャーは語った」

アーチャーが語った内容。

それは……

「アーチャーは語った内容。

それは『ああ、確かにいくらかの人間を救つてきたさ。自分に出来る範囲で多くの理想を叶えてきたし、世界の危機とやらを救つた事だつてあつたよ。英雄と。

遠い昔から憧れていた地位にさえ、ついにはたどり着いたこともある』……と。

だけどアーチャーがその果てに得たものは後悔だけで、残ったのは死、だけだった。できるだけ多くの人間を救うために殺して、殺して、殺しつくした。

お前の理想を貫くために多くの人間を殺して、殺した人間の数千倍の人々を救った……。

誰も死なないように願ったまま、大勢のために一人を殺し、誰も悲しまないように口にして、その影では何人かの人間に絶望を抱かせる。

理想を守るために理想に反し、助けようとした人間だけを助け、敵対する物を皆殺しにする事で自分の理想を守った。

そして、アーチャーは言った。

『それがこの俺、英雄エミヤの正体だ。……そら。そんな男は今のうちに死んだ方が世のためだとは思わないか?』……と

それで静かになる部屋。

誰も言葉を発する事が出来ず私も言葉が発する事が出来ない。でもわずかに言葉を私は発する事が出来た。

「シホは、シホは違うよね? エミヤと違って……」

「いえ、私も同類よ。どんな綺麗な言葉で飾ろうともかつての理想を体現するために救えるものは救い切り落とすものはとことん切り落としてきた……確かに私は死んだほう

「がいいのかもしれない」

「そんな…」

「でも、それでも私はアーチャーとは違うと言い切れる。」

アーチャーは切り捨ててきた人たちの分までもっと多くの人たちを救わなければならないという強迫観念にとらわれて、自分を犠牲にし続けただけです。

でも私は私は殺してしまった人の分まで想いを繋いでいこうと何度も挫けそうになる心を奮い立たせてきた…」

そう語るシホはさつきまでの自虐気味な表情ではなくなっていた。

それからまた何度もアーチャーの言葉がまるで自分の言葉のようにシホは語り続ける。

「私は…そんなアーチャーにそれなら俺達は別人だといってやった。」

俺は後悔なんてしない、どんな事になったって後悔だけは絶対にしない。だから…絶対にお前の事も認めない。

お前が俺の理想だって言うんなら、そんな間違った理想は、俺自身の手でたたき出す………と、言ってやった」

そして戦いが始まる。

「剣を打ち合う度に自身に流れ込んでくるアーチャーの知識と経験。それによって剣製

がよりしつかりしてアーチャーと打ち合えるほどに強化されていた。

でも、それと同時に守護者としての永遠の殺戮の記録：それらも私の中に流れ込んできた。それはどんどん私と言う小さな器を満たしていった。

さらにアーチャーは私に何度も正義の味方などという理想は間違っていると剣を打ち合いながら言葉を叩きつけてきた。

心が折れそうだった。自身の辿る未来のビジョンを端的にだけ知ってしまったのだから」

私のように生きる支えを否定されたのではなく、シホは全否定をされたんだ。

しかも私と比べる事も出来ないほど過酷なほどの自分自身の言葉に。

シホはどうして心が砕けなかったのか不思議に思うほど強烈な体験だ。

「セイバーの鞘の加護があったとはいえ体はズタズタにされていった。

でも、『お前には負けない。誰かに負けるのはいい。けど、自分には負けられない！』と吼えた。

そしてそれからは剣製もよりしつかりとしてアーチャーとまともに打ち合えるようになり気づいた時には私の剣はアーチャーを貫いていた…。

そして私は言った。『俺の、勝ちだ』と…。

アーチャーも笑みを浮かべながら『ああ…。そして私の敗北だ』と言った」

それからアーチャーは負けを認めて潔く引き下がっていったと言う。

ランサーもリンさんを助けて一緒に戻ってきた。

そしてアーチャーはリンさんが何度も説得をしてアーチャーが折れる形で再契約で戻り、セイバーはシホの元に再契約で戻り、そしてランサーは『ルールブレイカー』をシホが投影し言峰綺礼との契約を切り、イリヤさんが再契約を交わしたという。

第四十五話

『シホの過去の話（後編）』

S i d e フェイト・テスタロッサ

シホがアーチャーとの戦いまでを語り終えて一息つき、
「結果を見ればかなりの成果だった。」

なにせ三騎士が揃っているのだから…。イリヤももう私達と敵対しないと言うし後はギルガメツシユを倒すだけという話になったけど、そこから急展開を迎えたわ。

突如として溢れてきた黒い泥の中から慎二の義理の妹でリンの実の妹である間桐桜が黒い聖杯に染まって現れたのだから」

「黒い、聖杯…?」

「ええ。言っていないなかったけど聖杯の中身は黒い呪いによって中身がごっそりと変わっていたのよ」

「呪い…」

「呪いの名は『この世全ての悪』、『アンリ・マユ』。

それは第三次聖杯戦争にまで遡るけど、アインツベルンは絶対勝利を約束してくれるサーヴァントを召喚しようとした。

そして召喚されたのが『アヴェンジャー』：復讐者というイレギュラークラスのサーヴァントだった。

でもそのサーヴァントはただ『悪であれ…』という呪いを一身に受けながら殺されたただの人間だったために碌に能力も力もなかった。

話によると召喚されてたった四日で敗退したって言うけどそこから真の呪いが始まった」

「始まったって、倒されたからもう戦う事も出来ないのにな？」

「そうだけどそれとは別に聖杯とは倒されたサーヴァントの魂を吸収して聖杯の中身を満たすものなのよ。

それで当然アヴェンジャーの魂も吸収された。そして聖杯の中身はアヴェンジャーによつて無色の力だったものから悪の色に染まってしまい、もし願いを叶えたら破壊と死だけを振り撒く最悪の願望器と変わってしまったの…。

切嗣は第四次聖杯戦争終盤になって聖杯の中身を浴びた事によつて真実を知り、セイバーに令呪で聖杯を破壊させたけど中身の泥は溢れてしまつて起こったのが大火災

だったの」

「そんな…」

私の口からそう言葉が漏れた。

私達が絶句している中、リンデイさんは冷静に言葉をのべていた。

「でしたらもし切嗣さんがそのまま聖杯に願いを叶えていたらどうなったのですか？」

「おそらく世界は滅びていたでしょう。セイバーに聞いた事ですが切嗣の聖杯に願おうとした事は『絶対的恒久平和』というものだった。

もし叶えていたら破壊と死しか招かない聖杯はきつと『人々が地上からいなくなれば平和になる』と歪んだ願いが変わっていったでしょう」

「だから正義の味方として切嗣さんは見過ごす事ができないというので破壊を選択したのですね。まるで性質の悪いロストロギアですね…」

「まあ…それで聖杯の話はこれで終わりにして話を続けます」

再開された話によると慎二という人は桜さんが殺してしまつたらしくもういないという。

「後になって知った話だけど桜は間桐の家の魔術である蟲に体を犯されていて体を改造されてしまっていた。

さらに体の中に第四次聖杯戦争で砕けた聖杯のカケラが埋め込まれていて聖杯の機能をその身に宿していたの。

イリヤは小聖杯だったから既にやられたライダーとキャスターとバーサーカーの魂を取り込んでいたはずなのにそれが全て桜の聖杯の方に渡ってしまい、三体のサーヴァントは黒く染まりながら復活し理性も完全に奪われ襲い掛かってきた」

「そんな…せつかく倒したのにまた復活しちゃうなんて…」

「それでなんとか逃げる事に成功した私達は、逃げる直前に桜がいった言葉『柳洞寺の地下の大聖杯の場所で待っています、先輩』という言葉に従って前準備をすることになった。

一度、衛宮の家に戻って作戦会議を行った。

そして私の体の中にはセイバーの鞘が埋め込まれていると言う事にアーチャーが気づかせてくれて私はセイバーに聖剣の鞘を返した。

さらにリンにも切り札が必要というからイリヤの過去から受け継いできたアインツベルンの記憶と私の投影の二人の力を結集させて宝石剣を実現させようとした。

「ただどこでイレギュラーな事態が起きた」

「イレギュラーな事態って？」

「イリヤの歴代から引き継ぎられている記憶に残っている宝石剣を作り出そうと限界ま

で解析をかけて投影しようと試みたまではいいんだけど…。

それが切欠で私は根源に少しだけ手を伸ばしてしまつて第二魔法を会得してしまい、完成した宝石剣もどうまかり違つたのか私にしか仕えない代物と化してしまつていたの」

それは凄いいことだと思う。

偶然とはいえ魔法に手が届いてしまつたんだから。

「それで当然リンは怒り狂つて事態をどう収めようかと思つた矢先に突如として空間が裂けてそこから大師父：キシユア・ゼルレツチ・シュバインオーグが姿を現したの」

「何のために？」

「なんでも『第二魔法に至つたものが現れたか』なんて言つていたつね…。それで上機嫌でリンに自身の宝石剣を貸し与えてしまふという大盤振る舞いをしたのよ」

さすがシホの師匠さん。

伊達に吸血鬼になつて長くは生きていないと言う訳だね。

「そして最後に私は固有結界を展開するほどの魔力を集めるためにイリヤの魔術刻印の一部を私の体に移植してパスを繋げて準備はすべて済んだわけね。

そしてまず柳洞寺に向かつていつて、リンはランサーとアーチャーと一緒に地下へと先に潜つていつた。

「だけどもまだ生き残っていたのか門番に縛り付けられていたアサシンが最後の試合をしたと言ってきてセイバーがそれに挑んでいった。」

勝負は互角の戦いをしていって、だけど最後にセイバーの一閃でアサシンは笑みを浮かべながら消えていった。その魂はしっかりとイリヤが回収したと言う。

そして門を潜るとやっぱりというべきかギルガメッシュが柳洞寺の中心部で佇んでいた。」

「ついに始まるんだね。シホとギルガメッシュの最終決戦が。」

「セイバーはイリヤの護衛につけて私はギルガメッシュと対峙し、イリヤの魔力も十全に送られてくる事を確認して戦いが始まった。」

「最初はやっぱりギルガメッシュが優勢で私はなんとか投影を繰り返して弾き返す事しかできないでいた。」

「それが幾度も続き、私の魔力と体力はつきかけてきたがそこで私はある勘違いをしている事に気づいたの。」

「勘違い?」

「そう、私の剣製は剣を作り出すことじゃない。そんな器用な真似はできない。私が出るのは自分の心を形にすることだけだったのよ。」

そして唱える。私の呪文詠唱を……………それによって私は固有結界

『アンリミテッド・ブレイドワークス』
『無限の剣製』を初めて展開した。

そこからはもう物量による絨毯攻撃の嵐、ギルガメツシユが武器を展開するより早く叩き落し、それを何度も繰り返す遂には乖離剣を取り出そうとした腕を斬り飛ばすにまで及んだ。

最後の止めを刺そうとしたけど、突如としてギルガメツシユは地面から湧き出てきた聖杯の泥に包まれて飲み込まれしまい呆気ない幕切れを迎えて退場した。

恐らくだけど地下での戦いが凄まじかったからギルガメツシユの魂を取り込んで力を増そうと桜は考えたんだと思う」

「リンさん達の方は？」

「私達が向かった時にはすべて終わっていた。桜はアーチャーが投影したルールブレイカーを本来の桜の意識が取り戻せている間にリンが桜に突き刺して呪いを解きリンがその体を受け止めていた」

「それじゃもうこれで決着は着いたって事？」

「いや、最後に大聖杯の破壊の仕事が残っていたんだけどそこには言峰綺礼が立ち尽くしていた。その体からは黒い瘴気が湧き出ていても正気ではない状態だった」

「ここに来て言峰綺礼が出現してきたのかい…」

「執念深いね…」

「まあ数はこちらが優勢でもあって、でもランサーが俺が仕留めると言って言峰と戦い最後には心臓を貫いて勝利を納めていたわ」

「好き勝手使われていたんですから当然の結果という訳ですね」

リンディ提督がそう言う。

確かにそこまでの憎悪をランサーは抱いていたって訳だよな。

「そしてセイバーは私とアーチャーの戦いを見た結果で『過去をなかつたことにし、別の道を選ぶことによる国の救済』という自身の願いは間違っていたと言った。

そして剣先を大聖杯に向けて宝具を開放して、完全に大聖杯は破壊され聖杯戦争は永遠に消えていった。

生き残ったセイバー、アーチャー、ランサーもそれぞれ答えを得て消えていったわ。

……………これで聖杯戦争までの話はお終いです」

シホの言った終わりと言う言葉に私達は安堵の息を吐いていた。

結果的に見れば第四次聖杯戦争と比べれば死傷者もそんなに出ずに終わらすことが出来たんだから。

でも私は心の中でそれでも死人が出たんだ…という思いに気持ちがダウンしていた。

「でも、聖杯戦争は終わったけどその半年後に奇跡のような出来事が起こった。

私は直接関わってはいないんだけど…言峰綺礼に殺されていたと思っていたラン

サーの元マスター『バゼット・フラガ・マクレミッツ』。

その人が死ぬ間際にアヴェンジャーと契約して「生きて聖杯戦争を継続したい」という願いを持って仮死状態で生き長らえて四日間だけの聖杯戦争を夢の中で再現した」
「どうして四日間だけなの…?」

「さっきのアヴェンジャーの話で第三次聖杯戦争では四日間で退場したっていったでしよ?」

だから聖杯戦争を継続できても四日間しか持続できなかったの。

そして驚く事にその夢の世界ではサーヴァント全てとマスター全て：言峰綺礼以外の死んだ人も含めて生きていてしかも戦いもしないで日常を謳歌しているといったまさに理想の世界が展開されていた」

そんな世界があつたら私はどうしていたのだろうか?

やっぱり願うなら母さんとリニス、アシアにアルフが誰も欠けていないで一緒に暮らしている世界なのかな…?

だけどユーノの言葉で現実に戻される。

「まさに夢だからこそその世界だね…」

「ええ。それでアヴェンジャーも衛宮士郎という仮の器を被って日常を楽しんでいた。

時には各サーヴァント達と四日間だけ修行し、また最初の一日に戻されては技量

を上げていき…、

「なぜかいる大師父とも宝石剣と第二魔法『並行世界の運営』の使い方を習って技量を上げていったり…、

時には皆で遊び、酷いときには敵・味方・魔術師・一般人・サーヴァントというしがらみを関係なく夜にドンちゃん騒ぎを起こしたり…、

時には夜にセイバー達とこの繰り返し返す四日間を違和感に思い巡回を始めていたり…。

私の体で好き勝手し放題をしていたわ。最悪なことにギルガメッシュの『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』の『中の武器全部解析させて！』なんて暴挙にも出たし…」

『ぶっ!?!』

なんて無謀な事を!?

私達は誰もが吹いてしまった。

「私の人格を被っていたからって私ですらそんな暴挙は犯さないわ。さすがにそこまで命知らずじゃないし…。」

でもそれが成功してしまった。なぜかというとギルガメッシュはその時、魔法の薬で子供の姿になっていて大人の姿からは性格は百八十度回転して想像できないほどの利口な子供になっていたの。

それで何かは話したくないけどでっかい対価を背負って変わりに解析できたというの。心が広がったのね、その小ギルガメッシュは。世界は繰り返すからその口約束も無効になると言うのに……」

「あ……」

まさにしてやったりな光景が即座に私の頭の中に浮かんだ。

アヴェンジャーはとても策士だ。

「でもバゼットは少しずつだけ疑問を感じ始めた。なぜ四日間だけなのか、本当は私はどうなったのか……と。」

そして繰り返ししていく内に失っていた記憶が蘇ってきて、『私は死んでいるのでは?』という事に思い至りこの繰り返し四日間を終わらそうとしているアヴェンジャーに對して繰り返し終わるのを拒んだ」

「人間の生存的本能から来る行動ですね、分かります」

「次第に行動はエスカレートしていき遂には元自身のサーヴァントであったランサーと対峙した。結果はお互いの死という事になったけどランサーは俺の役目は終わりだといって消えていった」

「どうやって相打ちになったの?」

「相打ちになった理由だけはその前にバゼットは『伝承保菌者』ゴッスホルダーというものを持ってい

た。

『伝承保菌者』とは人間でありながら神代から受け継がれてきた数少ない現存した宝具を持ちそれを作り出せる者を指す異名。

バゼットが持っていた宝具は『斬り決る戦神の剣』。別名、逆光剣フラガラック。

その効果はカウンターに特化していて、因果を歪め、『相手よりも後から攻撃、先に命中させた』を『相手より先に攻撃した』という事実に変更してしまう恐ろしい宝具なの。それで一度セイバーのエクスカリバーですらも発動した瞬間にキャンセルされて殺されてしまった」

そう言つてシホは空中にそれを投影してみせた。

丸い鉄球みたいだけどこれが発動した瞬間に剣になるらしい。

これでセイバーさんのエクスカリバーがキャンセルされたなんて…。

「どんなものでもキャンセルされてしまうから必殺の一は使えないのよ。

それで話は戻すけど相打ちになったのはお互いに因果を捻じ曲げる特性を持つていたから。

ランサーのゲイ・ボルクはすでに心臓を貫いていると言う結果を残して放つ魔の槍。だからキャンセルされても心臓は貫いているわけでそれでお互いに死んでしまったのよ。

それでまた繰り返し、尚も拒むバゼットにアヴェンジャーは強引に、でも納得いく説得をしてとうとう説き伏せた。

そして四日間ではなく五日目の明日をバゼットは歩き出して夢の世界は終幕を迎えた。そして仮死状態から復活したバゼットは再び私達の前に姿を現したの。

……………ここまできて何もなければ後はハッピーエンドで終われたんだろうけどね」

そこでシホが憂鬱気な表情をしだす。

なにかあったんだろうか？

「アヴェンジャーのツケが回ってきたの。繰り返ししてきた記憶で得た知識、経験、見た宝具…そのすべてが私に引き継がれて濁流のように一気に押し寄せてきた。

結果は見る目もなくフィードバックのせいで一ヶ月間立ち上がるどころか手足すら動かす事もままならない闘病生活という事態にまで及んだわ」

『うわあ…』

それで私達は多分とても複雑な表情になっているだろう。

得た対価を考えればかなりのものだけど、一方的な押し付けみたいな感じでシホはそれを味わってしまったんだから。

「…まあもう過去のことだからいいわ。

そして高校卒業までの間、私は必死に魔術、知識の鍛錬をリンに教わりながら繰り返して卒業と同時に今まで溜め込んでいた資金を使い世界に飛び出していった。

己の理想を実現するために最初はフリーランスの魔術師としてNGOにも在籍をして人助けをしていました。

その頃はまだ何度も助けた人達の笑顔を見れて満足していたわね。

でもある時、悲劇がおこった」

それで再度私達は緊張する。シホの話はここからが本番と言うばかりの雰囲気だったから。

「死徒という吸血鬼が突如として現れて、町に住んでいる人々を次々と血を吸い殺していき自身の配下にしていき死の町と化していく光景。

私の仲間も抵抗はしたけど次々とやられていって配下にされてしまつてそれで初めて己の無力さと現実を叩きつけられた。

それदनにかが切れた私は形振り構わず宝具を開放し死徒ごと死の町を滅ぼした……」

『……………』

私達は無言でシホの後悔の籠った言葉を聞いていた。

「それから私は自身を鍛えながらも依頼を受けては違法魔術師や死徒と何度も戦つた。これ以上悲しむ人達を増やさない為に……」

「だけど結果、魔術協会は過剰に魔術を使いすぎた私に対して封印指定の烙印を押し、執行者、賞金に目がくらんだ魔術師、代行者…。」

様々な機関から追われる様になった。

その最中で何人もの理解ある人に匿ったりしてもらったりして助けてもらっていたけど次第に私の逃げる範囲は減っていった…。」

そしてそれでも人助けをやめなかったある日の事、イリヤが倒れたという一報を信頼できる知人に教えてもらい魔術で匿ってもらいながらも冬木の地に戻った」

「どうして、イリヤさんは倒れちゃったの…？」

「なのはがそうシホに聞く。」

「イリヤは元々切嗣とホムンクルスであるイリヤのお母さん、アイリスフィール・フォーン・アインツベルンとの間に生まれたハーフ。」

だから小聖杯の機能を埋め込まれていて生まれる前から、そして生まれた後も人体改造を施されていて体は十歳くらいの姿で止まってしまい、さらに短命になっていたの。」

その事を初めて知った私はもう助けられない事を悟り、イリヤが息を引き取るその時まで一緒に暮らした。それが一番最後の平穏の時間とも言えたわ…。」

「イリヤさん、かわいそう…。」

「でも、シホと最後まで一緒に過ごせたのはある意味では幸せかもしれない」

「そうだね…」

「その時にはまだイリヤが私のために全部を投げ打つてまで助けようとしてくれていた事も知る事が出来ず、リンに後の事は任せて私はまた世界へと発つていった。」

「そしてある時、最大の分岐点が私に迫ってきた」

「分岐点…？それって…。」

「ある魔術師が実験の為に町一つとそこに住む人々すべてを生贄にして大魔術を執行しようとした。」

「その魔術はもう私一人では止める事は不可能な代物だった。これでは町一つが滅びてしまうと焦りに駆られていた時だった。」

「急に周りの時間がすべて停止し、まるで頭に直に響いてくるような声が聞こえてきた」

「それってまさか…」

「そう、世界に…。世界は私にいった。『死後を対価に差し出せば人を超越した力を手にいれ人々を救う事が出来るぞ？』と。」

「その時の私には実に甘美な響きに聞こえた。生きた英霊になればこの事態も解決できるかもしれない。」

「でも、そこでイリヤの死に際の最後の言葉で『シロウは私の分まで生きて、幸せになっ

てね…。絶対世界と契約しちや駄目だよ?』という言葉が思い起こされた。

そしてエミヤの生涯も思い出して私は身を引きちぎられるような思いをしながらも世界からの誘いを断った。

その次の瞬間だった。止まっていた時間は急速に動き出して町は一瞬で跡形もなく滅びてしまい魔術師は倒したものの失ったものは大きくしばらくは立ち直れなかった」

「…イリヤさんとの約束が英霊エミヤとシホさんの道を違えたのですね」

「はい。エミヤの記憶とイリヤとの約束がなければ私もきつと世界と契約をしていたでしょう」

シホは苦渋の決断をしたんだ。

「そこで一度『正義の味方』という理想に反してしまったために想いは砕けてしまいました。た。

でももう私は引き返せないところまで来てしまっていた。

裏からだけではなく表からもとうとう罪を着せられて指名手配されてしまい全世界から追われる身になってしまった。

そして逃げ回る日々で代行者との戦いでなんとか撃退したけどボロボロになった体で横たわり後は死を待つような体になっていた。

そんな時に大師父、リン、世界屈指の封印指定の人形師『蒼崎橙子』が私を助けてく

れた」

そしてシホはどこからか一枚の手紙を私達に見せるように取り出した。

その内容を見て私は涙を流した。

そこにはイリヤさんのシホに対しての想いが何度も書かれていた。

「私はそこでイリヤの想いを知り、もう手遅れだということも知り後悔しました。

だからもう間違わないようにイリヤの想いも魂に刻んで事実上一回死んでからイリヤの体を素体にした人形に乗り移りました。

そして大師父から『シホ・E・シユバインオーグ』という新たな名をもらい、『全てを救う正義の味方』ではなく新しく芽生えた『大切な人達を守る正義の味方』という理想を目指す事になりました。

ちなみにセイバーの鞘ですがまたコーンウオールで発掘したって言っていました。

だけど、そこで異常が発生して私は口調、仕草、思考が変化して現在の私になり、

そして世界を越えてこの世界に来た時に世界からの修正で『魂は一生変化しない』という定義を無視して男性から女性の魂に塗り替えられてしまったんです。

そしてこの体は9歳が基準で作られた為に完全に私は精神と意識が9歳そのものになっちゃったんです」

「なるほど…。それが今現在のシホさんを形作っているのですね」

「はい。だからこの体はあまり傷つけないんです。大切に扱っていかなきゃイリヤに対して失礼だから…。」

あ、後これはお父さん達には伝えていない事なんだけど実はイリヤの魂はイリヤの魔術回路と融合していて緊急時の時のみ覚醒するというのが時の庭園で判明したんです」

『ええーっ!?!』

驚いた。イリヤさんはてっきりもう死んだものかと思っていたのに形を変えてシホと一緒にずっといたんだ。

話によるとあの時、やっぱりシホの力だけじゃエクスカリバーの投影は不可能だったらしい。

その時にイリヤさんの意識が覚醒して全魔術回路を直結して魔力を大幅にアップしてどうにかエクスカリバーを投影したという。

全部話し終わったシホは少し遠慮がちに顔を少し背けながら、

「…お父さん達にはこんな私でも幸せを目指してもいいんだよ、と言われたから後ろ向きな気持ちはもうないけど、やっぱりこれだけは聞いておきたいの。」

みんなはこの話を聞いて私を気持ち悪いと思わない？ 私は様々な秘密の露呈を恐れてずっと元は男性だという事を隠して、騙して、欺いてきた。これは許されないことだわ…」

「そんなことないよ！」

「そうだよ、シホ！ 誰だって秘密は持っているものなんだから！」

なのはとユーノが声を上げた。

「確かにシホの話す秘密は管理局には伝えられないからな」

「そうだよねー。きつと大事になること間違いないし」

「だからそう気を病まなくてもいいんですよ、シホさん」

「それにあたしらは以前のシホの事はこうして話で聞いた以外はほとんど何も知らないんだから遠慮なんてすることないよ」

クロノ、エイミー、リンディ提督、アルフも言葉を発した。

だから私も、

「シホはシホだよ。私達の友達、シホ・E・シユバインオーグという可愛い女の子。それは変えようが無い事実だよ。だから胸をはって、堂々とすればいいんだよ」

「…うん。ありがとう、皆さん」

「よかったですね、お姉様…」

シホは俯きながら涙を一滴流した。

第四十六話

『守護騎士との出会いの話』

S i d e シホ・E・シユバインオーグ

私の暴露話が終わりを告げて、改めて今回の事件について話し合われる事になった。「それですがエミヤは私と同じ能力を持っている。だから敵に回ったならそれだけ脅威ということになります。」

だから今度接触したら戦うのは私が担当します。奴と対抗できるのは私だけだから「わかりました。でも無茶はだめですからね？」

「はい。それはわかっています」

私は笑みを浮かべながらそれに肯定した。

もう過去の話で自分でも思う無茶ぶりな性格は存分に知られたためにリンデイさんも遠慮はしない方向で決めたらしい。

「それと魔力が回復するまで戦闘行為も禁止だからな」

「わかってるわよ。もう昔みたいに無茶はあまりしないと決めてるから」

「ならいいが……。さて、とりあえず主は判明したからいいとして次に守護騎士達の性質の話だな。彼らは人間でも使い魔でもない」

それでののは達は驚きの声を漏らす。

「闇の書に合わせて魔法技術で作られた疑似人格。

主の命令に従って行動する、ただそれだけのためのプログラムにすぎないはずなんだ」

確かにそれが本当ならシグナム達は世界から召喚された意思を剥奪された英霊達と一緒に類にされるけど、けど私はシグナム達のうちに秘めた思いを知っているからただプログラムだけではないと思う。

だけどそれを聞いてフェイトが僅かに反応を示す。

「あの、使い魔でも人間でもない擬似生命っていうと………わたしみたいな」
「違うわ!!」

リンデイさんの力強い否定の言葉でみんなは少し驚く。

でも、確かにそうだ。

フェイトはアリシアのクローンでもあるけどしつかりと命を宿して生まれしてきた立派な人間だ。

誰がなんと言おうとその事実が変わらない。

「フェイトさんは、生まれ方が少し違っていただけで、ちゃんと命を受けて生み出された人間でしょ」

「検査の結果でも、ちゃんとそう出てただろ。変なこと言うものじゃない！」

とりあえずリンディさんがフェイトの味方でよかったと思う。

フェイトの境遇だと運が悪ければIFの話になってくるけど実験材料にされていた未来も最悪あったかもしれないのだから。

「はい。ごめんなさい……」

それでフェイトは萎縮してしまい素直に謝った。

エイミーさんが空気を変えようと思ってモニターを表示させた。

「守護者達は闇の書に内蔵されたプログラムが人の形をとったもの。」

闇の書は転生と再生を繰り返すけど、この四人はずっと闇の書とともに様々な主の下を渡り歩いている……」

「意思疎通のための会話能力は過去の事件でも確認されてるんだけどね。感情を見せたって例は今までないの」

おそらくただ今までの主ははやてのように愛情を注ぐほど密接な関係にはならずただ従うだけの騎士として付き従ってきたからだろう。

「闇の書の蒐集と主の護衛：彼らの役目はそれだけですものね」

「でもあの帽子の子、ヴィータちゃんは怒ったり悲しんだりしてたし：」

「シグナムからもはつきりとした人格を感じました。なすべきことがあるって：仲間と主の為だって：」

「主のため、か：。同一人物のシホとしてはエミヤの行動はどう思う？」

「わからない。：彼は英霊のエミヤなのか、それとも平行世界のもう一人の私なのかが、エミヤがいうように記憶喪失でわからない以上判断のつけようがないわ」

「そうか」

後で会ってしっかりと記憶を思い出してもらわないといけないわね。

「それにしても、闇の書についてももう少し詳しいデータが欲しいな」

それに関しては私も同感である。なにか詳しい情報がつかめればはやてを救う手掛かりが見つかるかもしれないから。

それで何を思ったのかクロノがユーノとフィアに頼み事をした。

「ユーノ、フィアット。明日から少し頼みたい事がある」

「ん？ いいけど：」

「なんですか、クロノ：？」

「ちよつとね」

二人に用？　つてことは調べ者関係かしら？

なら、フィアもこつちの事情を説明して引き込んでおこうかな？

そんな事を思いながらその晩はフェイト達の家で食事をしてなのは達と一緒に自宅に帰宅した。



Side　フェイト・テストアロッサ

なのはとシホ達が帰宅していた後、リンディ提督達とまた話し合いをしていた。

「しかし、シホの話は思った以上に応えたな」

「そうだねー。シホちゃんって話に聞いたただけだけど本当に元は男性だったのかなってくらい女の子だし」

「その件ではないんだが…まあ世界を超えたときの修正といったか。精神を子供にまで退化させて、さらに魂を女性に塗り替えてしまうなんて世界というのは本当に神秘の力を秘めているな」

「うん、そうだね」

「ですがそれが今のシホさんを構成しているのですからいいことだと思わね。昔の衛宮士郎という理想を追い続けていた青年の頃のままだったら今回の件から手を引かせていたと思いますし」

「そうですね。今でも少し無茶な部分があるけどそれはイリヤという義姉のまさに命がけのおかげで自身の命を勘定にいれていない所や無茶する性格は矯正されたんだと思いますし」

「…でも、シホの元の世界って、世界のあり方を否定できるほど私は偉くないですけど…なんていうか聞いていて嫌な世界だと思いました」

「そうだね、フエイト。あたしが特に嫌だと思ったのはその世界の魔術師のあり方だね。中にはシホやその師匠さん達みたいな人もいるだろうけどそんなのは極稀で基本人助けなんて二の次な連中の集まりだろ？」

「そうですね。魔術の実験とって町一つを生贄に捧げるなんてわけない人もいるわけですし。」

それに紛争地域の人々はどうせ死ぬんだから、殺されるんだからと勝手に決め付けて尊い命に値段をつけて攫っては実験材料にしてしまう魔術師もいるわけですし…。

とても私達魔導師とは相容れそうにありませんね」

「ですが僕達の世界にもそういうった人を攫う違法組織は存在するわけで一概に世界のあ

り方を否定できないのが痛いところですね。

そしてそんな世界だったからこそシホはすべてを救う正義の味方という夢物語のよ
うな理想を目指してしまった。

衛宮切嗣という人物を否定するわけではないけど、シホが言うように呪いという言葉
はしつくりとくる。その際たる例が英霊エミヤという存在だな」

その名前が出てきた途端、私は悲しい気分になった。

「…私は、一度は母さんに存在を否定されたけど最後の瞬間には本当の想いを知ること
が出来た。

でも、シホはエミヤとの戦いで未来の自分自身の手で存在を全否定してしまった
…。

結果的にエミヤはシホを認めたらしいけど、でもそこまで後悔するほどに正義の味方
になるべきではなかったと思うようになるのにはどれだけ絶望を味わってきたのかな
…？」

「世界の奴隷…世界を滅ぼしうる因子が発生したと世界が認識して初めて召喚される守
護者。

しかし召喚されるタイミングはいつもすでに手遅れな現場。

関わったすべての人間を殺す事によって事態を終息させる自由意思を奪われたエミ

ヤ曰く掃除屋……」

「世界という意思も残酷ですな。エミヤは世界と契約すればもつと助けられる人の数が増えると思ひ契約したのに殺戮だけを命じるんですから……」

「シホは……イリヤさんのおかげで世界ともう契約をしないと心に決めてはいるけど、でもまた語りかけてくるかもしれないと思うと……怖いです」

私は自分の体を抱きしめて震える体を必死に抑えた。

「語りかけてくる世界の声か。そんなオカルト染みた話ももしかしたらこの世界にも存在するのかもしれないな。」

この世界の地球にもシホの世界の地球と同様に様々な英雄の話があるし、次元世界も含めるとベルカ時代の名のある王や騎士達も座という場所にいるかもしれない。

なんせ過去・現在・未来・並行世界・果てには創作の架空の人物ですら名が残れば英霊として昇華するんだからな」

「でも私は、シホにそんな場所にいつてほしくない」

「そうだね。でももう大丈夫じゃないかな？」

今のシホちゃんには正義の味方という理想はある事には変わりないけど、けどもう内容は【すべてを救う正義の味方】から【大切な人達を守る正義の味方】に変化しているから。

きつと大丈夫だよ」

「そうですね。それにイリヤさんの願いであるシホさんの幸せの探求も私達と一緒に探していけばいいと思うわ」

「そうですね、母さん。だからシホの秘密は管理局には伝えないほうがいいと思います。なんせシホは言い方があれですが質量兵器の塊ですからばれたらレアスキル判定どころでは無くなってしまいます。」

「だから報告は今まで通り武器庫からの転送魔術として話を通しましょう」

「そうですね」

うん。それはもうみんな承知していると思う。

だってシホは新たな人生で幸せを探求しようと頑張っているのにこの内容でシホがまた何らかの組織に目をつけられたらいけないから。

そこでふと私は自分の相棒であるバルディッシュになにも聞こえないように施していなかった事に気づく。

「…バルディッシュ。もしかしてさっきのシホの話した内容。記録しているとか言わないよね?」

《……………》

「ねえ、なんで答えてくれないのかな?」

それでつい何度もシエイクしてしまった。

「……とりあえず、後で調べてみようか。記録されていたらやばいからもしきれていたらそのフォルダだけ消去しなきゃいけないからね」

「そう考えるとレイジングハート、マグナ、アンリミテッド・エアも聞いていた訳だな」
「後で全機点検をお願いね、エイミー」

「了解です、艦長。あゝ、でも……」

そこでなにやらエイミーがなにか怪しい笑みを浮かべだした。

なんだろう。よくないことが起こりそう。

「この間の銭湯の時にね、美由希ちゃんに聞いたんだけどお風呂の時のシホちゃんはとつてもしおらしくなるんだって。」

思考が女性寄りになっちゃったけどやっぱり男性のときの名残があるのかな？ 恥

ずかしいのかもね、シホちゃん」

「それは当然だろう、エイミー。もう女性とはいえ男性の時の記憶が残っているんだから」

「そういえばなのはやすずかに聞いた話だといつもお風呂は一人で済ませちゃうらしいよ、シホは。」

「ただどそれを良しとしない美由希さんや桃子さんがシホが入浴中にいつも乱入して

「いつているらしい」

「ちよつと待つて。美由希ちゃん達つてシホちゃんの真実を知つてゐるメンバーだよね？　なのにお風呂に乱入するつて…」

「なのはが美由希さんに聞いたところシホは男女関係なく裸を見られるのが恥ずかしいらしくてそんな姿がなにかの琴線に触れてゐるとか…」

「なんでもエイミイの聞いた話と同じでお風呂時に限り数倍しおらしくなるとか言うんです」

「なんとなくその気持ち、分かるかも…」

「なにかを想像したのかエイミイの顔が妙ににやけてゐる。」

「でも、あれ？　すずかつてシホの事が好きなんだよね？　それつてもしかして元男の子だからつて事なのかな？」

「多分そうだろうね。話に聞いた誘拐未遂事件で颯爽と助けにやつてきたシホちゃんの姿に惚れちやつたんだね、きつと！」

「それはそうと話を戻していいか？」

「私とエイミイで色々話を盛り上げていたときにクロノが話を覚えてきた。」

「もう少しこの話題をしたかったけどしょうがないか。」

「シホの話で色々判明した事があるのは確かだ。」

投影という特殊な魔術、しかしそれは本当は固有結界という大魔術から零れ落ちた副産物。

宝具という神秘の塊をも作り出せる異常性…。

これはさつきも言った通り転送魔術として処理するとして、でもそれは今回敵として出てきたエミヤにも言えることだからもしかしたらシホからではなくエミヤから情報 がばれてしまうかもしれない」

「そうだね。シホは転送魔法と言い張っているけどエミヤは特に隠している感じはしないから」

「不安ですね」

「まあ今はどうしようもできないから保留として次に問題になってくるのがなぜシホが古代ベルカの魔法を使えるか、だ。」

これに関しては以前から調べていたけどアインツベルン…これが大きく関係してくる」

「どういうこと？ クロノ…」

「シホの世界のアインツベルンという一族はもしかしたら元を辿れば僕達の世界の人間だったかもしれないということだ」

それって、やっぱりシホの見た謎の夢が関係してくるのかな？

「エイミイ、データを頼む」

「了解」

それでエイミイが操作して映像を展開させると以前に聞いたオリヴィエ・ゼーゲブレヒトという人物の絵画が映された。

「聖王には『聖なる錬金術師』というアインツベルンの魔導騎士が専属でついていたという。

そしてシホが夢の中で見たという王女の力によって異世界に飛ばされるといいう女性の夢。

さらにシホの元の体の原型はアインツベルン。

この三つの事柄は偶然という言葉で無視できる代物じゃない」

「そうね、クロノ。私の感が正しければ明日ユーノ君とフィアットさんを無限書庫に連れて行くのでしょ？　ならこれも一緒に調べてもらったらどうかしら」

「わかりました」

これでなにか分かればいいな。

シホの事だから気になっていると思うし。

そんな感じで一応今日の話し合いは幕を閉じた。



S i d e エミヤ？

昨日の戦いから翌日になり今はヴィータだけが蒐集に出ていて残りはやての帰りを待っているところだ。

そこにシャマルが電話をしていたのかりピングに入ってきた。

「はやてちゃん、もうじき帰ってくるそうよ」

「そうか」

「ヴィータちゃんは、まだ？」

「かなり遠出らしい。夕方には戻るそうだ」

「あなたは、シグナム？」

「なにがだ？」

「だいぶ魔力が消耗しているみたいだから」

「お前達の将はそう軟弱には出来ていない。それをいうならアーチャーはどうなんだ

？」

「私か？ 今は大丈夫だ。節約モードで魔力の消費も抑えているからな。派手に投影を

繰り返さない限り支障はない。

：しかしシグナムはあの最初の出会いの印象から比べればだいぶ物腰が柔らかくなつたものだな」

シヤマルもその意見には賛成のようで私の言葉に合わすように、

「そうね。シグナムも昔はそんな風には笑わなかつたわ」

「そうだったか…？」

「はやてのお陰というべきだな。私も当初ここに来た時には神経をかなり逆立たせていたからな」

「シグナムだけじゃない。アーチャーさんもだけど、私達は全員ずいぶん変わったわ。みんな、はやてちゃんが私達のマスターになってからよね」

それで私はヴォルケンリッター達との出会いを思い出す。



…あれははやての誕生日の日の事だった。

その時まではまだ皆はいなく石田先生が家に来て共に祝って帰っていった後、

「今年は寂しくないわ。アーチャーが一緒にいてくれるから」

「そうか。しかし、本来の姿に戻れずこんな鷹の姿ではやての手伝いも碌に出来ずすまない……」

「ええんよ。アーチャーは記憶喪失でおまけに鷹さんの姿で確かに役に立つてへん……」
「ぐっ……」

「けど、一緒にいてくれるだけで私は嬉しいんよ。色々なお話もできるしな。アーチャーは記憶喪失の割に自分の事以外は博識やからな」

「それならば幸いだ」

それで私ははやての部屋に着くとはやてはベッドに入り私も高いところに設置してある台にとまり静かな時間を過している時の事だった。

突如として本棚に納まっていた以前から魔力が感じる鎖で巻かれた茶色の本が起動しだした。

「何事だ!？」

「本が…宙に浮いとる」

それで私ははやてを守るように前に出た。

しばらくして本を縛っていた鎖が砕け散り本が閉じると「起動」という音声を発して次にははやての胸辺りから小さい魔力の塊（後にリンカーコアだと知る）がでてきて一際光を放ち私も目を瞑ってしまう。

光が晴れると私とはやての前には四人の男女が片膝をつき跪いていた。

「…闇の書の起動を確認しました」

「我らは闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にてございます」

「夜天の主の下に集いし騎士」

「ヴォルケンリッター。何なりとご命令を…」

主、というのはおそらくはやての事だろう。

見ればはやてはあまりの出来事に気絶してしまっていた。

だから変わりに私が話をすることにした。

だが私が「お前達は何者だ？」と問いただすと逆に「お前こそ何者だ!？」と激昂気味に赤い髪の少女に問い返されてしまった。

「私か？ 私にはやての…使い魔、みたいなもので家族だ」

「みたいなものとは…?」

「契約を結べていないのだよ…」

それから私について少なからず伝えるとなんとなくだが納得してくれたようだ。

「それでだが、はやてが気絶してしまっているのですね。一応だが病院に連れて行きたいのだが私では連れて行けない。

こちらは面識はあるが相手の先生は私をただの鳥だと思っている事だからな。

だから変わりに病院に連れて行ってもらって構わないか？ 一応検査しないとはやての身が心配だ」

「承知した」

「君達の紹介や闇の書といったか？などの話などに関してはやてが起きている時にも一緒にしてくれれば助かる」

「わかりました」

「了解した」

「……………」

そこで赤毛の少女が黙って睨みつけてくる。

「どうした…？」

「お前、なんか気に食わねえ！」

「ほう、やるかね？」

そう言ううとハンマーのような武器を取り出したので、私は空中に複数の剣を投影して構える。

しばらく膠着状態が続いていたが、

「やめんか馬鹿者」

ポニーテールの女性が赤毛の少女に拳骨を振り下ろしていた。

「いつてえ…なにすんだよ！」

「それはこちらの言葉だ。仮にも主の家族と名乗るものに矛を向けるとは何事だ」

「だけだよ…」

「ヴィータちゃん、ただ気に食わないからって手を出しちや駄目でしょ？」

「少しは落ち着け、ヴィータ」

「どうやら一段落がついたようだ。」

「それで私は剣達を消した。」

「ッ！」

「だがそこで久方ぶりに魔術を行使したのが原因でその場で崩れ落ちてしまった。」

「おい、どうした!？」

「…す、すまない。契約者がいないのでどうしても魔力を使う＝身を削る行為になって

しまうのだ」

「先にそれを言えよ！」

「先に仕掛けてきたのはお前だろうに…」

「うっ…！」

「それでヴィータと呼ばれた少女は気まずそうな表情をする。」

「しかしいい加減気絶したはやてをどうにかしないとと思った私は話を再開して、

「それよりはやてを運ぶのを手伝つてくれ。病院は私が案内する。その…できれば名前を覚えてくれれば助かる」

「そうだったな。私はヴォルケンリッターの将で『剣の騎士』である。シグナムだ」

「…あたしは『鉄槌の騎士』の『ヴィータ』だ」

「私は『湖の騎士』の『シャマル』です」

「私は『盾の守護獣』、『ザファイラ』だ」

「そうか。では私からも紹介したほうがいいな。記憶喪失で名は思い出せないが『錬鉄の魔術使い』、仮名で『アーチャー』だ。よろしく頼む」

それから病院まではやてを運び私が石田先生の肩に止まると、

「アーチャーくん、はやてちゃんを連れてきてくれてありがとう。でも、あの人はどんな人ですか？」

いや、一応鳥の私に話しかけても話せるわけないだろう。

私はいつもはやてと共に病院まで来ているから怪しまれていないがヴォルケンリッターの一同は服装が統一した黒一色の服装なので怪しさ全開である。

どうしたものかと考えていたがそこでははやてが目覚ましてなにやらシグナムと念話かなにかで会話をしているようだ。

話がついたのかはやては口を開く。

「あー、石田先生。あの人は私の親戚なんです」

そんな感じであれよあれよという間にシグナム達ははやての親戚ということになり家に帰された。

そして家に到着して守護騎士達ははやてに自分達の使命について語ろうとしているが、どうやら私は関係ないらしく話をする前に席を外してもらえないかと言われた。

はやての身を案じてどうするべきかと悩んだが隣からはやての「待った!」という声が聞こえてきた。

「アーチャーも私の立派な家族や。だから仲間はずれしたらあかん!」

「ですが…」

「言うこと聞かんのやったら話はきかんよ?」

それではやての言い分にヴォルケンリッター達は折れて私も話しに参加できた。

内容としては自分達ヴォルケンリッターについてと闇の書、魔力の蒐集についてなど。特に関心を示した内容は666という数字。これにはなにやら不吉なものを感じた。

しかしはやては話を聞き終えると、

「私はなにかそういう縁があるんかもな」

笑いながらそういう話を話すはやては私との出会いのことを思い出しているのだ

ろう。

確かにそうかもしれないな。

守護騎士達は何のことかわかっていないみたいだがな。

「まあ、とりあえず、わかったことが一つある。

闇の書の主として、守護騎士みんなの衣食住きつちり面倒見なあかん言うことや。

幸い住むところはあつ、料理は得意や。

みんなのお洋服買ってくるからサイズ計らせてな？」

守護騎士達は面を食らったような表情をしているようだ。

それで私は思わず吹いて、

「ふっ、はやてらしいな」

「そやろー！ ホンマはアーチャーの服も今からでも手配したいところなんよ？」

でも人型になると魔力消費が激しい言うから我慢してっただけど今回はいい機会や！」

「そうか。まあいつまでもこんな服装にしとくわけにもいかなからな」

それからはやてが全員分のサイズを測り服装などを購入していった。

しかし、以前から思っていたがはやての親の友人で財産管理をしているグレアムとい

う人物は何者なのか？

はやてが財政難に会わないのもこの人のおかげといつてもいい。

閑話休題

とにかくはやては守護騎士達を私同様に家族に扱い、闇の書の蒐集に関しては望まなかつた。

願えば足の麻痺も治せるかもしれない。

でもはやてはその為に人様に迷惑をかけるのは駄目だといって蒐集の禁止を命じた。

だから私達はただ家族が増えて一段と賑やかになった家庭で楽しく過していった。

だが、そんな日々に陰りが出てきた。

守護騎士達が現れてから半年くらい経った頃。

はやての足の病の進行速度が上がっていていずれ内蔵機能にも達して命にもかかわるという知らせ。

シグナム達がいるにはこれはただの病ではなく、闇の書の呪いというものだった。

はやての体：正確に言えばリンカーコアと闇の書は密接に繋がっていて抑圧された強大な魔力がはやての体を蝕み健全な肉体行動はおろか、生命活動さえ阻害しているという。

そして闇の書の第一の覚醒で呪いの進行は加速した。

シグナムがいうには覚醒と共に現れた彼女らの活動も維持していて、極僅かとはいえはやての魔力を使用している事も無関係ではないらしい。

その事実を知ったヴィータはシャマルに病気を治せないかと泣きついていた。

皆も同じ思いでその表情から辛いものが滲み出ていた。

それはそうだ。知らず知らずのうちに自分達が主であるはやてを苦しめていた要因になっていたのだから。

そしてシグナム達はある決断を決める。

私には相談しないで四人だけでピルの屋上に集い、

「主の体を蝕んでいるのは闇の書の呪い」

「はやてちゃん、闇の書の主として真の覚醒を得れば」

「我等が主の病は消える。少なくとも、進みは止まる！」

「はやての未来を血で汚したくないから、人殺しはしない。だけど、それ以外なら……なんだってする!!」

そして四人の地面に魔法陣が浮かび上がり、全員の姿が甲冑姿に変わっていく。

「申し訳ありません、我等が主。ただ一度だけ、あなたとの誓いを破ります」

「——ならば私にもその話、かませてくれないかね？」

そこに私が登場すると全員が驚きの表情をした。

「アーチャーさん……。どうして……。伝えていなかったのに」

「君達が切羽詰った行動を取るとすればおのずとわかる答えだ。それに、水臭いぞ？ 私もはやての事を助けたいと思っっている」

「でもお前はまともに戦える体じゃないだろ!!」

「その通りだ。だが気持ちだけはお前達には負けない自信はある」

「……本当にいいのか？ これから私達が行う事に手を貸せばお前も犯罪者扱いされるのだぞ？」

「承知だ。そうでなければここに出てこない。……だが、今はまだ魔力が足りない。だから今は私もより魔力を溜めることにする。その時が来たら手を貸そう」

「……すまない。私達の問題にお前も巻き込んでしまい……」
「気にするな」

それから私達ははやてには内緒で蒐集活動をすることに決めたのだった。
そのすべてははやてを助けるために……！



「あの決意から時間が経った。ページもシュバインオーグのおかげで決壊魔法でのペー

ジの使用分以上は貯まった」

「シホちゃんも協力も得られた今では心強いものを感じますね」

「しかし、闇の書の完成が破滅を招くというのは…。悪い予感というのは当たるものだな」

「アーチャーは予想していたのか？」

「なんとなくはな…。呪いというのは大抵ろくな事にならないからな。魔術の世界でもそれは当然だった」

「お前の知識でどうにかならないか？」

「不甲斐ないが私にもそういった詳しい知識はない」

それでシグナム達は暗い表情をしてしまった。

「そう暗くなるな。まだ希望を見失ってはいけない。シホ・E・シュバインオーグが色々裏から調べているのだろうか？ 今はそれを待とうではないか」

「そう、ですね…今はもうシホちゃんの情報だけがはやてちゃんを救う手ですから」

「だがそれでも蒐集はやめない。それが破滅を招くかもしれないとしても…」

「そうね」

「そうだな」

そして私達は改めてはやてを救う事を心に誓った。

第四十七話

『管理局本局とリーゼ姉妹』

S i d e シホ・E・シユバインオーグ

二度目の戦いの次の日、私達は管理局本局へと赴いていた。

ユーノとフィアにも無限書庫で会ってきてフィアはもうこちら側に引き込んでおいたから管理局とは別に私に情報がすぐに届くように手配しておいたから抜かりなし。

しかし無限書庫という場所には驚かされた。

あそこは知識の宝庫とも言うべき場所であった。

たくさんの本が無造作に、けどしっかりと置かれていてそれが延々と道となつて続いていたからね。

だけど管理する人がいないために使われておらず私は非常に残念に思った。

「ふえ〜……。改めて見ると管理局本局の中つてすごいね」

「そうね〜……」

「…なんだかシホちゃん、あまり来たがらなかつたよね？ やっぱり秘密がばれるのが怖い？」

「まあね。どこで何を聞かれているとかつい身構えて考えちゃうから」

「シホちゃんの世界の魔術協会みたいにギスギスしていないから大丈夫だと思うけど…」

「そうなんだけど…」

「——なのは、シホ。おまたせ」

そこにフェイトが囑託関連の手続きを済ませてやってきた。

「囑託関連の手続き、全部済んだ？」

「うん。書類は何枚か書くだけだったから。なのは達はユーノとファイアットと会えた？」

「うん。差し入れもちちゃんと渡せたよ」

「私もファイアにちよつと頼みごとがあつたから済んでよかったわ」

「ユーノ君とファイアちゃんも無限書庫で調べ者をするために色んな手続きとかあるから一度中央センターに行くって言ってたけど…」

「うん…残念、それじゃ入れ違いだ」

「そっか」

「後で時間があったらもう一度様子見に行こうか」

「うん！」

「そうね」

それから三人で本局内部を歩いていると扉が開いてそこからリーゼロッテさんとリーゼアリアさんの二人が出てきた。

「あ。なのは、フェイト、それにシホ！」

「あ、リーゼロッテさん、リーゼアリアさん」

「こんにちは」

「どうも」

軽く挨拶を交わす私たち。

二人もなにやら「ちょうどよかった」と手を打っているので何か用があるのだろうか？

「ちようどいいところに来た。迎えに行こうと思っていたんだよ」

「……？」

「クロノに頼まれてたのよ。時間があるようなら本局内部を案内してくれっさ」

「え？ いいんですか？」

「フェイトちゃんもB—3区画以上は入ったことないでしょう？」

「はー」

「一般人が見てそんなに面白いもんじゃないけど、イケてる魔導師の二人とそれにまだ魔導師になり立てただけどシホならけっこう楽しいと思うよ？」

「どう？ 行ってみる？」

「はい！」

「お願いしますー！」

なのはとフェイトは元気よく返事をしたので私も返事を返しておいた。

魔術協会と比較したらどうなるか楽しそうなものだし。

そして私たちはエリアを移動してB-3区画に入ってしまった。

「ここがB-3。普段武装局員が働いている区画ね」

そこには普通にスーツ姿の局員の人達が色々な所で働いている光景で見た目は会社員のような光景にも映った。

「皆さん普通の制服姿なんですね…」

「普段はデスクワークもあるかんね」

「で、向こうが訓練場」

「今はちやうどトレーニングをしているはずだよ」

訓練施設を覗いてみると様々な魔導師が訓練に励んでいた。

こういった光景は魔術師には見られないから新鮮な光景かもしれない。
さすが非殺傷設定ね。

魔術師だったら最悪成り上がる為に蹴落とそうとしてうっかりを装って相手を殺してしまふ魔術師もいると執事の仕事中にルヴィアに聞いたことがあるから結構違いはあるものだ。

「わー…すごい。皆さん頑張っていますね」

「こういう実戦形式の戦闘訓練は週に三回か四回。基礎訓練だともっと多いかな？」

「あ、リーゼロッテさんとリーゼアリアさんは…」

「あー！ ちょっと待った！」

そこでリーゼアリアさんがフェイトの言葉を遮った。

「長々と呼ぶのはめんどいからリーゼの部分は省略OK。ロッテとアリアでいいよ」

「で、二人で呼ぶときはリーゼ。みんなそう呼ぶから」

「はい。それじゃリーゼさん達は武装局員の教育担当だとか…」

「うん。そうだよ」

「戦技教導隊のアシスタントが最近が一番多い仕事かな？」

「戦技教導隊…？」

「魔導師を教育する教官みたいなものですか？」

「シホ正解。武装局員に特別な戦闘技術を教えて導くチームね」

「武装局員になるのも結構狭き門だけど、その中でもさらに上のスキルを教える立場だから…まあ、トップエリートだね」

「まさにエースの中のエース。エース・オブ・エースの集団」

「はあ…」

「本局に本隊があつて支局に四つ。合計五つの教導隊があるけど全部合わせても百人中くらいなんじゃないかな？」

「そんなに少ないんですか…」

「私たちがみたいな非常勤のアシスタント合わせたらもつとだいぶ多いと思うけどね」

「武装局員の数に比べて腕のいい教導官が少なすぎなんだよね。だから武装局のガキどもがいまいち強くななんなんだ」

そう愚痴るロツテさん。

と、そこで訓練が終了してしまいあんまり見ることなく終わってしまった。

そして次のエリアに移っている時になのはがふとした質問をリーゼさん達に言い出した。

「ええつと、クロノくんも武装局員のメニューでトレーニングしたんですか？」

「ノンノン。クロ助の時はあたしとエリアがみっちりくっついてそれぞれの科目で個人

授業♪

「あの子が五歳の時から教えてたけど…あれはなかなか教えがいのある生徒だった」

二人はしみじみとそう語る。

「こんなことを言うのはなんだけど、クロノはそんなに才能のある子じゃなかったからね」

「え、そうなんですか？」

「そういえば以前にクロノは僕には才能がなかったからな、と呟いていたかしら？」

「そうなのよ。魔力量は両親譲りでそこそこあったけど魔力の遠隔操作は苦手だわ…」

私、苦手ね…。

「…出力制御はてんでできないわ…」

これも…。

「フィジカルは弱弱だわ…」

そこは…どうだっただろう？ でも…。

「想像できない…」

「同じく…」

「私は激しく共感持ってたわ…！」

「そういえばシホちゃんも昔は魔術は全然できなかったんだよね…」

「クロノと同じく想像ができない…」

「そうだったの？」

「ええ、まあ…」

「そう。あー、それで話はもどるけどあの子は頑固者だったからね。

覚えは悪かったけど一度覚えたことは絶対忘れないしバカみたいに一途だからさ…。

一つのことを延々と繰り返し練習し続けても文句を言わずについてきた」

「…それは、なんとなく想像できます」

「うん」

「確かにね…」

二人で笑いながらそう言った。

「滅多に笑わない子だったけどね。それがちよつと寂しかったっけ…」

「士官学校でエイミィと出会って仲良くなってからかな？ よく笑うようになったのは

…」

「うん。あの子のおかげは大きいね。今じゃ局内で割りと有名だもんね。ハラオウン執

務官とリミエツタ執務官補佐の名コンビは」

「へえ」

「なんとなくわかります」

「あの二人はなんだかんだで息があっついていて仲がいいですからね」

「うん。ああ！　そういえばフェイト」

「はい」

「フェイトはやっぱりあれ？　正式に局入りするの？」

「えっと…まだその辺はちゃんと決めていなくて…」

「九歳で使い魔持ちのAAAクラス魔導師っていったら局でも民間でもどこでも選ぴ放題だから、急いで決めることはないけどね」

「…色々と考えています」

それで一応フェイトの件は終わったらしく今度はなのはの方に話が及んでいるようだ。

「えっと…私は管理外世界の住人ですし管理局の仕事も実はよく把握していません」

「私も漠然としか…」

「漠然と？　どんな風に？」

「うーんと…次元世界をまとめて管理する警察と裁判所が一緒になったようなところ？」

「後は、各世界の文化管理とか、災害救助とか…」

確かに、多いわね。それもほんの一部に過ぎないし管理している世界の数によって役

職も色々が増えていくだろうし。

「あぁー！ そんだけわかっただけ上等」

「ほかに細かい仕事はたくさんあるけど大筋はそこだから」

「なるほど…」

「フェイトは…父様やクロノみたいな執務官か、そうでなきゃ指揮官向きだね。精神的にも能力的にもクロノとタイプ近いし…」

「そうですか？」

「うん。能力的には実の兄妹っていつでも違和感ナッシングだ」

確かにフェイトは色々頭が回るからそこらへんがもし管理局に入るんだったら合っているだろう。

それにフェイトは照れながらも感謝の言葉を述べている。

「ただし、執務官になるとしたら半年に一度しかない執務官試験は難しいぞ？ クロノだって一回落ちているんだから」

それに驚きの声を上げるのは達。

でも、確かに難しそうなおものである。年が若い分苦労したのだろう…。

「筆記も実技もそれぞれ合格率15%以下だからね」

「責任重大だし指揮官能力と個人スキルが両方必要だしね」

「ううん…大変だ」

「うん…」

「警察のエリートみたいなものだからかしらね…」

「フェイトはあれだよ。捜査官っていう手もあるぞ?」

「…ううん。なんていうか似合いそうで似合わない。捜査官はどっちかっていうと腕っ節のいい体育会系のイメージが…」

「あう…。インテリ型もいるけどな」

リーゼ姉妹は色々とフェイトに合いそうな役職を上げていくけどそうだな。フェイトはなんでもやっていける気がするのだけれど。私個人としては。

なのははフェイトに執務官が似合っているという話になっている。

「そうね。フェイトは頭いいしやろうと思えばなんでもできそうよ?」

「うんうん!」

「そんな…大げさだよ」

それでまた照れてしまうフェイトの姿がそこにあつた。

「な、なのはは局の仕事をするとしたらどんな…」「武装局員!!」…え?」

「ええーっ!?!」

「ほう…?」

そこで意気投合とばかりにリーゼ姉妹が会話に割り込んできてそう言った。

「うん、データ見る限りではそれ以外ありえない」

「戦闘派手だし。よかったな、なのは。将来が決まったぞ」

「…よ、喜んでいいんでしょうか？」

なのはは少し顔を引きつかせている。

「まあ、そのへんの冗談はさておいても武装隊入りは悪くないと思うよ」

「はあ…」

「君のスキルを考えたら多分候補生から入って士官直行コースだろうし二年くらいで中隊長くらいになっていて。」

そしてその間に教官訓練を受けて4、5年くらいには教導隊入り…なんてコースも夢じゃないかもね？」

それでなのはは少し考え込んでいる。

「そしてシホだけど…これはなんといいですか頑張れば教導隊なんてすぐに入れる逸材かも知れないね。」

なんていったってなのはを下手な癖もつけずにここまで鍛え上げたんだから条件としては悪くないよ」

「そうそう。それにもう生徒はなのはにフェイト、フィアット、アルフと何人も持ってい

るしね」

「それは…私も同感です」

「そうだね。シホちゃんはとつても教えるのが上手だから」

なんか皆して私を持ち上げているけど、

「…私はただ、実体験談をなのは達に教えているだけですよ？ 私みたいに馬鹿な事を起こさないように。いうなれば反面教師みたいなものです」

「それでもシホのおかげでこの子らは強くなつていつているのは事実でしょ？ もっと自信をもつたほうがいいぞ？」

「まあ…そうですね。それ以前に私は管理局に入るかどうかはまだ全然考えていないですから。」

本音を言えば私がもし入ったら独断専行、強行突破はまずしてしまいそうですし…私の持つスキルにしても個人戦向けですから指揮官はまずないでしょうし」

「そうかな？ シホちゃんつてアリサちゃんとドツジボールで競うときはいい具合にみんなに指示していると思うよ？」

「私もシグナムと戦う時はシホの指示で助けられたし…」

なんか、えらく持ち上げられるけど…なんかこの二人、もしかして悪い具合に私に依存して考えることをあまりしていないのかな？ フィアにしてもそうだけだ。

だとしたら危ういわね。今後はそこも治さないといけないわね。もし私がない時に変な事態に巻き込まれてもしもの時に決断ができなかったらいけないし。

そここのところをリーゼ姉妹にひっそりと伝えてみたら、

(ああ、そうかもしれないね…)

(うん。そこも正してあげるのが教師の役目だぞ？ やっぱりシホは教導隊向けだ)

と、いう感想をもらってしまった。

むう…そんな柄でもないのだけれどな。

そんな事を考えているとロツテさんが「知った顔発見！」といって駆けていき、アリアさんが奥の方の見学許可を貰ってくると言って後を追っていった。

「管理局もなんだか色々だね」

「ほんとだね」

「次元世界を統括するほどなんだから色々あるでしょうね。やっぱり私は合わないかなあ…組織とかそういうの」

「えく？ シホちゃんなら色々できそうだけどな」

「うん…」

「ま、考えるだけでもしときましましょうか。もし問題を起こしても結果で揉み消せるかもしれないし…それにまだ未来の話だしね」

「シホちゃん、ちよつと物騒だよ…。でも、そうだね。それでやつぱりフェイトちゃんはやつぱり執務官が似合いそうだと思うんだ」

「あ、ありがとう…」

「うん、でも私はどうなのかな？」

「どうって…？」

「将来のこと、なんだかあんまりちゃんと考えられてなくて」

「…今は色々忙しいしね」

「そうね。まずは闇の書事件を解決しなくちゃいけないしね（そしてはやてを救わなきゃいけないし…）」

「うん。でも一つだけいい？」

「うん？」

「武装隊がなのはにとつていいかどうかは分からないけど…」

なのはは自分の道を極めるのも、誰かに何かを教えたり導いてあげたりするお仕事もきつとどつちも似合うと思うよ。

そしてシホもだけどシホは私たちの先生なんだから絶対やることはうまくいくと思う。生徒の私が言うんだから間違いない」

「え、つと…」

そんなことを言われてつい言葉をどもつてしまう。…なかなか照れることを言ってくれるわね、この子は。

「そうかな…?」

「うん。きつと」

「うん…。今はまだシホちゃんやユーノ君、クロノ君に教えられているばっかしだし、そんな風になれるのがいつになるかよく分からないけど…」

「それは私も…。私も将来のことなんて全然わからないよ」

「私だつてそうよ。現に私は一度道を踏み外している事だし…」

それで苦笑いを浮かべる二人。

「だから色んなことをしながら、色んなことと真つ直ぐ向き合いながら考えていこう」

「そうだね。…うん。シホちゃんとフェイトちゃんと一緒ならちゃんと考えられる気がする」

「うん。私はなのはとシホが一緒だから」

「一緒だからだね」

「そうそう。だからみんなでいい未来を築いていかなくちやね。私も今度は道を踏み外さず生きていきたいし」

「頑張ろうね!」

「うん！」

三人で頑張ろう、と言っている話をしにいったリーゼ姉妹が帰ってきたので私達はまたついていくのだった。



そして私達は管理局本局から戻ってきて今はハラオウン邸である。

「お帰り。フェイト、なのは、シホ」

「ただいま」

「お邪魔しまーす」

「お邪魔するわね」

「クロノ、一人？」

「エイミィはアルフの散歩がてらアレックス達のとこに食事を差し入れにいつているよ。二人共、インスタントばかりなんだそうさ」

「うーん、なるほど」

「それは頂けないわね。今度私が作りに行つてこようか？」

「気持ちだけ受け取っておくよ。それで艦長はフェイトの学校。担任の先生とお話だそ

うだ」

「うん」

「しかし君達…本局でリーゼ達になにか妙な事を吹き込まれたりしなかったか？」

「ええ？　妙なことって？」

「どんなこと？」

妙になのは達の声が明るいわね。確かに色々と話をしてもらったものね。

「あの二人は腕は立つし仕事はしっかりしているんだがプライベート面がどうにも猫だから…」

「別にそんなに妙なことは言われてないもんね」

「ね」

「……………、ならいいんだが…」

「ふふ。将来のことについて色々と話していたの」

「リーゼさんによると私は執務官。」

なのはは武装局員の教官。

シホもなのはと同じで教官だけど別の意味での教官だって。なんでも管理局で取り入れている体系を教える違うタイプの教官らしいの」

「それはまた、あの二人にしてはえらくまともな話を…。どういう風の吹き回しだろう

？」

「クロノはどう思う？」

「確かに慧眼だな。似合うというかそれぞれの資質に対して的確だ」

「本当？」

「なのはの戦闘技術は実際大したもんだ。魔力任せなのでたらめに見えて要所で基本に忠実だからな」

「当たり前よ。そう教えているんだから」

「そうだな。それに頑丈なのと回復が早いのもいい」

「確かにそうね」

それではなのはがなにやら落ち込んでいる。

「喜んでいいやら傷ついていいやら…」

「なのは大丈夫。褒められてる褒められてる」

「フェイトは勉強好きだし厳しい執務官試験もそれなりに楽しめるかもしれないしな」

「うん」

「シホに關してもシホの持ちうる特殊な技術は魔術関連を除くとしてもあまりあるからな。なのはを鍛え上げた力も教導隊にはうってつけだろう。」

ただし、どっちも大変だぞ？ 教官訓練はものすごく高いレベルの魔力運用を要求さ

れる。教導隊を目指すならなおさらだな」

「うん」

「執務官試験は僕が言うのもなんだが採用率がかなり低い…」

「らしいね」

「確かに管理局はいつでも人手不足だから腕のいい魔導師が入ってくれるのは助かる」

「うん」

「事件はいつだって起こってる。今、僕等が担当している闇の書事件以外にもどこかで何かが起こってる…」

「そうね…」

「僕等が扱う事件では法も守って人も守る〓に見えてそうじゃない矛盾いつでも付き纏う。」

自分達を正義だなんて思うつもりはないけど厳正すぎる法の番犬になりきるつもりもない」

「なんとなく、わかるよ？」

「ええ、今なら正義については昔より分かっているつもりだから。私の正義もあるように相手にも違った正義があるってね」

「…難しいんだ。考えるのをやめてしまった方が楽になれる…まともにやろうと思った

ら戦いながら、事件と向き合いながらずっとそういう事を考え続ける仕事だよ」

「……………」

クロノの言葉で私達は静かになる。

「だから自己矛盾するけど僕は自分の“妹”やその友人にはもう少し気楽な職業についてもraitたい気がするな」

「あ…」

「難しいね…」

「まあ、君たちにはまだ時間がある。前にも言ったがフェイトも少なくとも中学卒業まではこちらの世界で一般教育を受けるのがいいと思うし」

「うん…」

「並行しながら出来ることもある。ゆつくりと考えるといい。ま、当面は今の事件だけだな」

「そうだね」

そしてその後は少し談笑をして私となのは家に帰ることにした。

その帰りになのはがユーノに電話をかけているので私は隣を歩きながら静かに聞いていることにした。

そしたらまだ子供にしてはなかなか未来を見据えた話をしているので私はなのはの

成長に嬉しく思った。

それで話は一段落して、そしたら今度はファイアが話をしたいらしく代わってもらった。

『あ、お姉様』

「や、ファイア。頑張ってる?」

『はいです! ファイアット、お姉様のために頑張ります。だから報告待っていてくださいね!』

「ええ。いい連絡を待っているわ。あれもお願いね」

『あれですね。はいです! 了解です!』

あれというのは隠語でありなのは達にはまだ教えられないことだから。

「それじゃそっちも頑張るのよファイア」

『はいです!』

そして電話を切るとなのはがもういいの?と聞いてきたので大丈夫という返事を返して私達は家に帰るのだった。

一方で後で聞いた話だがハラオウン邸ではクロノがフェイトにお兄ちゃんと言われて照れて挙動不審に陥っていたという。

第四十八話

『つかの間の第四次のサーヴァント

達の話』

Side リンディ・ハラオウン

私は今、レティと通信で話をしながら同時進行でデスクワーク作業をしているところだ。

闇の書事件も解決していない今はこうしてゆっくりトークをできる時間というのはとても貴重だ。

そしていくつか貴重なデータを送ってもらって私としては満足である。

『それで、今日はこっちは顔を出すんですよ?』

「うん。アースラの件でね」

そう。今は最悪の事態を想定してアースラにあるものを搭載している最中なのである。

『時間合わせて食事でもしようか。あの子の話もしたいし』

「あの子?」

あの子というのはどの子のことだろうか。やっぱりここはフェイトさんでしょうか?
それともシホさん、なのはさん…。

「ほら。あなたが預かってる養子にしたいって言っていた子」

「ああ。フェイトさんね」

「そう、フェイトちゃん。元気でやってる?」

「うん。事件に突き合わせちゃっててちよつと申し訳ないんだけど仲良しの友達も一緒に楽しそうにやってるわ」

「そう…」

「……………そういえば。ねえレティ?」

『どうしたのレティ? 急に改まって…』

「ええ。例の予言の話はあなたは聞いているわよね?」

『予言? ええ、知っているわよ』

これはレティに伝えていいか迷うが仲間を作っておいた方はいいと思う。

シホさんの過去はそれとなく誤魔化してだけれど。

もしこれが本当に起きる事だとすれば、シホさんは…。

「…詳しい話は後ほど話すわ。でも予言の中にある節にいくつかどうかどうしても見逃せない内容が、無関係ではない内容があるのよ」

『それって…。まさか予言の内容に当てはまる人物が見つかったとでも言うの?』

「おそらくは…。でもこの事は管理局にはまだ伝えないつもり。信頼できるあなただからこそ話すことなのよ」

『わかったわ。それもついでに食事の時に聞きましょう。内密に話せるお店を予約しておくわ』

「お願いね」

『ええ』

それでレティとの通信をきる。

冷めたお茶を温め直しながらも本音を言ってしまうえばこの予言は当たって欲しくな
いわねと願った。



S i d e シホ・E・シュバインオーグ

学校が終わり放課後のこと、私達はフェイトのある事について教室で話し合っていた。

その案件はというと：携帯電話の購入である。

フェイトは携帯電話のカタログを見ながら、

「…な、なんだかいっぱいあるね」

と、今も競争社会で争っている様々な会社と機種と数の種類に圧倒されている。

「まあ最近はどれも同じような性能だし見た目で選んでいいんじゃない？」

「でもやっぱりメール性能のいいやつがいいよね」

「カメラが綺麗だと色々楽しいんだよ」

三人が色々意見を述べている。ちなみにアリサ・なのは・すずかの順番である。

この三人は何かと機械に強いからそれぞれで意見を述べている。

「うーん…」

フェイトはそんな三人の意見を参考にさらにカタログをじっと見て悩んでいる。

私はいくつとフェイトと同じ立場になって聞いているだけ。

いや、なんていうかこういつた機械関係の話題に関して私は、まあ大丈夫な方だけど

魔術師にとっては鬼門である。

ただでさえ衛宮士郎時代はひたすら使いやすさを重点において火の中水の中魔術の

中でも大丈夫で頑丈な携帯をルヴィアに発注してもらって緊急時の時でしか連絡は取らなかつたからあんまり使った機会がなかつたのである。

この世界に来た時に荷物の中に一応携帯も入っていたけどこつちの世界ではただの鉄の塊と化してしまつていたので泣く泣く使っていないが…。

それなのでなのは達と友達記念という理由で携帯を一緒に選んでもらつた時には結構難航した。

世界が違えばそれだけで技術力は違う。

元の世界より今の世界の方が進歩が早いらしくこちらの技術に慣れるのに少し時間を要した。

まあなのは達の教えの甲斐あつて今現在は人並みには使えるようになった。

今ではメールに写真を添付するのも普通にできるしカメラ機能も普通に使えるからいい。

…まあ機械音痴のリンよりは少なくとも使えるだろうからそれでいいだろう。

リンは最後に会つた時にですら携帯を持っていなくなつたらしいから。

例外があるとすれば何度かルヴィアの執事時代に会つたことがある名物教授。

彼は昔にある偉大な人物の影響を受けてゲーマーになりアナログがデフォの魔術師の中で知識が抜きん出ていたのが記憶にある。

しかもその名物教授は第四時聖杯戦争の生き残りらしく断片的にだが過去の話を聞ける機会があったので良かったと今は思っている。

閑話休題

私が昔のことをしみじみと思い出していた時に、

「ね、シホちゃんはどう思う？」

「え？ なにが？」

「はあく…聞いていなかったの。だからさっきから無言だったのね」

「えっと、ごめんアリサ。それでフェイトの携帯はどんなのがいいかよね？」

「ええ」

「…そうね。やっぱりメール機能とカメラの機能がいいのを選ぶのがいいんじゃないかな？ 私もたまにメールに写真を添付しているし」

「そうね。シホはみんな撮った写真を待ち受け画面にしているもんね」

「シホちゃんは“今”をとつても大事にしているもんね」

「さすがの言葉で私は少し照れる。」

そしてなのはとフェイトも一緒に頷いていた。

アリサは一人解らずじまいといった表情だったけど私の過去を知らないのだから当然の反応である。

だけどそれがいけなかったのかずすがなのはとフェイトの反応に気づいた。

それで小声で、

（シホちゃん、もしかしてなのはちゃんとフェイトちゃんもシホちゃんの過去の事、知っていたりするの？）

（え…な、なんでそう思ったの？）

（ちよつと反応がアリサちゃんと違っていたから）

（そっか。まあ知っているとさえ知っているのかな…）

（そうなんだ…）

それでなぜか落ち込むずか。

（で、でもなのはちゃん達は態度はあまり変わっていないよね!）

（ええ。今の私で十分らしいから）

（そうなんだ。それなら…）

そしたら一人ブツブツ呟き始めだったので、なぜか直感で今はそつとしておこうという気になってアリサ達の話に合流することにした。



リンデイさんと合流してフェイトの携帯を購入する事ができたので目的も達成できたのでリンデイさんも管理局の方に帰っていった。

そして帰り道のこと、一回私となのは家に帰り普段着に着替えた後、ハラオウン家に向かった。

今日はフェイト達と一緒に食事をする事になっているので私達は調理担当。エイミイさんが食材調達担当という事になっている。

それまで私はフェイトの部屋でなのは達とお話をしていた。

「…そういえばシホちゃん。ちよつといいい？」

「なに？　なのは」

「過去の事を聞くようでなんだかと思うんだけどシホちゃんが体験した第五次聖杯戦争では前に教えてくれた英霊がでてきたんだよね？」

「ええ」

「それじゃ…、あの、第四次聖杯戦争の時に出てきた英霊って誰が出てきたか知っているの？」

「第四次のサーヴァント？」

「あ、それは私も気になるかも…」

第四次か…、ふむ。

まあ教えてもいいでしょう。別に害はないし。

「そうね。ま、まず知っている通りまずセイバーは切嗣が召喚したアルトリア。

そしてリンの父親である遠坂時臣が召喚したのがアーチャーのクラスでギルガメツ

シユよ」

「こうして改めて聞くとセイバーさんとギルガメツシユは因縁の間柄だったんだね」

「そうだね」

「そしてランサーのクラスが輝く貌の騎士『デイルムツド・オディナ』」

「デイルムツド…？　ちよつと聞いた事がないかも…」

「私はこの世界の歴史や神話に関しては全然わからないからどういった人物かもわからないよ。でも前にエイミーがシホの使う武器を調べている時に聞いたかも。

それとランサーのクラスだから槍使いでスピードもあつたんでしょ？」

「フェイト、いいところ突いてくるわね。

ええ。デイルムツドはクー・フリーンより後の時代に生まれた同じケルト神話の英雄。ファイオナ騎士団に所属していた戦士で、

槍二本【真紅の魔槍、ゲイ・ジャルグ】と【黄色の呪槍、ゲイ・ボウ】と劍二本【大なる激情、モラルタ】と【小なる激情、ベガルタ】、計四本の武器を自在に操ったという話よ。

前回の聖杯戦争の生き残りの人物に聞いた話だとおそらくランサーのクラスで召喚されていたから劍は持ってなかったんだらうという話」

「ふえー…すごい人だったんだね」

「シホは前にゲイ・ジャルグを投影して使っていたから他の三本も作り出せるの？」

「ええ。ギルガメツシュの原典宝具とセイバーの記憶を見せてもらった事があるからね」

それで二人は「そうだったね」と口を揃えて言った。

「でも、シホってやっぱりすごいよね。武器限定とはいえ過去の武器に関しては投影できないものはないんだから」

「そんなことはないわよ。さすがにエクスカリバーはギリギリイリヤと一緒に作って作り出せたけどそれ以上のクラスになると私は投影できないし…」

「エクスカリバー以上の武器なんてあるの!？」

「そりゃたくさんわるわよ。例えば雷神トールのミョルニルとか他にスルトの持つ炎の杖とか神様が使うクラスの神劍、靈劍。」

一応宝物庫で全部見たから出来ないことはないけど神様クラスの武器は一発で私の魔術回路が焼き切れて二度と魔術が使えなくなっちゃうから、たぶん……」

「やつぱりそんなに都合よく行かないんだね……」

「そうね。で、そろそろ話は戻っていい？」

するとすつかり頭からすつぽ抜けていたのか私の言葉で二人は大四次の英霊の話を思い出したらしい。

「それじゃ次いくわよ。ライダーのクラスはマケドニアの征服王『イスカンドル』」

「イスカンドル……？」

「名前がマイナーすぎたかな。それじゃなのはアレクサンダー大王といえはわかるかな？」

「あ、それなら知っているよシホちゃん！」

「そう。それでそのさつきから話に出している第四次の生き残りの人が召喚して聖杯戦争終盤まで共に戦場を駆け抜けたと自慢げに語っていたわ。」

なんでもイスカンドルの生き様をまざまざと魅せられて最後には忠誠を誓い家臣にしてもらったらしいわ」

「そんな事が……」

二人がどんな偉大な人だったんだろうと思っている間に私は次のクラスの話を開始

する。

「そしてアサシンのクラス。」

このクラスはさしずめ召喚される人物は固定されているの。暗殺教団の指導者『ハサン・サツバーハ』。複数いる歴代のハサンの中からランダムで召喚されるのよ。

だから第五次の佐々木小次郎が本当はイレギュラーな召喚だった訳。

そしてそのマスターが言峰綺礼だったらしいの」

「第四次でもやっぱり関係があつたんだね」

「そうみたいね。で、裏方に徹していたらしいけどライダーのマスターの話だとイスカランダルによってアサシンは全員、固有結界で抹殺されたらしい」

「ライダーも固有結界の使い手なんだ」

「それより全員ってどういう意味…？」

「あ、アサシンの能力を話してなかったわね。聞いた話だとなんでも複数に分離できる能力だったらしくて二桁以上のアサシンが出てきたって話よ」

「複数に分離する能力…」

「分身みたいなの…？」

「いや、実体を持ったものだったらしいわ」

「すごい能力だね…」

「そうね。それじゃ次行きましょう。」

次はキャスターのクラス。

召喚された英霊は百年戦争のフランス軍の元帥でかのジャンヌ・ダルクと共に戦場を駆け抜けたという『青髭』の異名を持つ『ジル・ド・レエ』

「…ジル・ド・レエは分からないけどジャンヌ・ダルクなら知っているよ」

「そう。でもキャスターに関してはいはあまりいい話は聞かなかったのよ」

「どうして…?」

「どうも狂人と化していたらしくて歴史でも語られるほどに多くの子供や女性を悪魔召喚の生贄として殺して最後には処刑された謂わば反英雄なのよ」

「反英雄…」

「セイバーに過去の話聞く機会が四日間の記憶の中にあっただけど、キャスターはセイバーの事をジャンヌ・ダルクと勘違いしていたらしく執拗に狙われたらしいのよ。」

そして…これは二人に話すには血みどろすぎる話だわ…。それでも聞きたい?」

「ちよつと怖いけど、でも聞きたいかも…」

「私も…」

「聞いた後に後悔しても恨まないでね? キャスターはね、歴史の通り殺人鬼で何人もの子供を誘拐してセイバーの目の前で子供達の血と体を生贄にして怪物を召喚したと

「ううの」

「うっ……」

それでやっぱり二人は酷い話のせいで涙目になって顔が少し引き曇っている。

泣きださなだけで二人は強いけど私も当時は聞かされた時はあまりの事に怒り狂った覚えがある。

「でも最後は結構あつけないもので巨大な怪物を召喚して町に侵攻してきて一時停戦協定を結んだサーヴァント達によって足止めをされ最後にはセイバーのエクスカリバーで滅ぼされたって話よ」

「町の人たちが犠牲にならなくてよかったね」

「そうね。」

……さて、それじゃ最後のシメといきましょう。

バーサーカーのクラスに召喚された英霊はアーサー王伝説に出てくる円卓の騎士の一人、湖の騎士『サー・ランスロット』

「円卓の騎士って……それじゃセイバーさんはかつての仲間と戦う羽目になったの？」

「……ええ。最後の戦いまで顔まで覆うフルプレートとバーサーカーというクラスで呼ば出されていたのが影響で正体は分からなかったんだけどセイバーが兜を割って顔を見て判別したらしいの」

「そんな…」

「最後には聖杯を望んだセイバーの手によって倒されたらしいけど…セイバーの昔話はこれ以上は野暮ね。

これで第四次聖杯戦争のサーヴァントは言い終わったわ」

私は第四次のサーヴァントを全員言い終わり一息つく。

あえて中身の話はあまりしなかった。私も知らない部分はあるし語れない部分もあるし、それに第五次以上に人死にが激しいから語れるものじゃないし。

「すごい人達だらけだったね」

「うん…特にセイバーさんが可哀想だと思ったの」

「そう思ってもらえるならセイバーも救われるかもね」

と、そんな話をしている時だった。

ちようどいい頃合に玄関の方からエイミイさんの『ただいまー！』という声が聞こえてくる。

「それじゃ食事の準備をしましょうか」

「うん」

「わかった」

私達はキッチンへと向かっていった。

それでエイミイさんと会話をしながら料理の支度を始めているところでリンディさんの話が出てなにやら物騒なものをアースラに積んだという話が出てどんなのかと予想している私。

クロノも家にいないのでエイミイさんが指揮代行をすることになっている。それに関して床でジャーキーを啜えてタレているアルフ曰く、

「責任重大」

らしい。

とりあえず言動と格好が合っていないわよとツツコミを入れておきたい。

「それもまた物騒な話だね。とはいえそうそう非常事態なんて起こるわけが——…」

ブーブー！

そこに鳴り響くアラート音。ランプが点灯しエマーゼンシーの画面が浮かび上がった。

いや、本当にタイミングがいいというか悪いというかなんというか…。

「非常事態?!」

「そうだね！ とりあえず三人は管制室に来て！」

「わかりました！」

そうと決まればという感じで色々と動き出す一同。

守護騎士の誰かが捕捉されたのだろう。

だとすればもうお決まりだろう。奴も出てくるだろう。
そいつの為に一つ策を弄してみるとしようかな。

第四十九話

『思い出される記憶。生まれる謎』

Side シホ・E・シユバインオーグ

管制室に移動して私達はモニターを見る。

そこにはシグナムとザファイラの二人が写っていた。

「文化レベル0。人間は住んでない、砂漠の世界だね」

エイミーさんがそう言って今シグナム達がいる世界を補足する。

「結界を張れる局員の集合まで、最速でも四十五分。ううん、まずいなあ…」

モニターを見ながらも忙しなくキーボードを叩くエイミーさん。

しかし四十五分か。さすがに時間がかかりすぎるわね。

状況が後手後手な状況だけに今回はまずいのだろう。

まあそれだけシグナム達が捕まる可能性が減るのだから別にいいとして。

でも手伝えないのが残念だけど一緒にモニターを見てみると、ふとフェイトの方でア

ルフと会話している声が聞こえてくる。

「エイミー」

「ん？」

「私が行く」

「あたしもだ」

エイミーさんがフェイトの顔を見て頷くと「お願い」という。

でも私たちの中でまだ蒐集されていないのはフェイトだけ。

とすると狙われる可能性がある。

ならば、

「それなら私も行くわ」

「え？ でも、シホちゃんまだリンカーコアが回復していないよ？」

「忘れた？ 私は本来魔術回路だけ使用している魔術師よ。幸い魔術回路の方の魔力はもう回復していますし。だからリンカーコアが使えなくても戦闘はできるわ」

「でも…」

そこで四人の顔がまだ曇る。

おおかたまた前みたいになっっちゃうんじゃないかと思っっているのだろう。

「安心して。今回私はシグナムとは戦わないわ。フェイトの保険よ。」

まだフェイトはリンカーコアを蒐集されていない。

ならチャンスを狙うセコイ奴が出てくるかもしれないしね」

「あつ……！」

「仮面の男だね……！」

「私ほもしもの時に奴と戦うわ」

「うー…あたしとしてはあまり賛成できないけどそう来る可能性もあるし今回はお願いしていい？」

「任されました。それじゃ武装開始^{トレリス・オン}」

私は赤原礼装を装備し足にタラリアを投影し準備をする。

「なのはちゃんはボックス。ここで待機して」

「はいー！」

エイミィさんに無人世界に転送してもらいアルフはザファイラのいる方へと向かっていった。

そして私とフェイトはシグナムのいる方へと飛んでいく。

まだ遠いが私の目にはシグナムの姿はすでに捉えている。

「見えたわ」

「え？ もう…？」

「ええ」

「今更だけどシホの目の視力はすごいよね。それで状況はどうなってるの？」

「ん。良いとは言えないかな？ 動きにも疲れが溜まっているのか精彩が欠けている。しばらくしたら蛇の怪物に捕まるかもしれないわ。それで、どうする？」

私はフェイトにそう聞く。

潰れるのを待つて漁夫の利を狙うもよし。助けるもよし。私は口出しはせずフェイトの判断に任せることにしている。

以前にみんながもしかしたら私に依存しているかもしれないという話題があったりしたので最近では判断は自分達だけで解決させている。

「助けるよ。放っておくこともできないし」

「フェイトがそう判断したなら私はそれに従うわ」

そしてフェイトの目にも写ったのだろう。

怪物の触手で拘束されているシグナムの光景が。

「…ほっとけないよね？」

「まあフェイトの気持ちも分からないでもない。でも今フェイトは無駄に魔力を消費するのは避けたほうがいいわ。だから…」

私は弓を投影し数本矢を構える。

「ふっー！」

放たれた数本の矢はシグナムを拘束していた触手を貫き破壊した。
それによって自由を得たシグナム。

さらに、

『ソードバレルフルオープン
全投影連続層写！』

少しばかり巨大な剣を複数投影して一気に放つ。

たちまちこちらに意識が向いて向かってきていた魔物の体に幾重にも突き刺さり魔物は絶叫を上げてその場に崩れ落ちる。

『シホちゃん！ 助けてどうするの!? 捕まえるんだよ！』

「すみません。でもあれは先に潰しておきたかったので…」

エイミイさんの怒り気味の声に謝罪する。

「礼はいわんぞ。シユバインオーグ、テストアロッサ」

「お邪魔でしたか…?」

「蒐集対象が潰されてしまった」

「それは仕方がないでしょう? あなたが潰れたら “誰かが” 困るし、こちらも捕まえられないからね」

誰かが、という言葉にシグナムは一瞬優しそうな表情になり、

「…ああ、そうだな。主が大変悲しむだろう」

「そう。それじゃ…」

私が少し話を切り出そうとした時、突如として私の真上から殺気を感じた。来るにしてもこんなに早くッ!?

とつぎに上を向くと太陽の光で視界が少しボヤけてしまったが確認できた。

相手は…!?

「アーチャー!?!」

「ふんっ!」

「ちっ!?!」

アーチャーが双剣を私めがけて振り下ろしているのを確認して私も干将・莫耶を投影してそれを防ぎそのままアーチャーの体重分の重力にかかり地面へと落下していった。

「シホ!?!」

「フェイト、安心して! あなたはシグナムに専念しなさい!」

落下していきながらも私はフェイトにそう指示して地面になんとか着地した。

アーチャーもしつかりと着地できたようで無言で双剣を構えている。

「主のあなたが白兵戦を仕掛けてくるなんてね…」

「私にできるのはこれくらいだからな」

「さつきまでどこにいたのかとか聞きたいところだけど、まあいいわ。さて、それじゃ
今回は〃 剣で語り合いましょう?」

「ああ、今回はな」

そして私とアーチャーは同時に地面をかけた。



Side アルフ

ザフィーラと戦闘中だけど、あいつももうあたしの動きについてきている!

前回一回戦っただけでももう動きが読まれてきてるっていうのかい!?

内心で少し戦々恐々しながらも気合を入れ直してあたしはザフィーラと拳をぶつけ
あう。

「あんたも使い魔…守護獣ならさ。ご主人様の間違いを正そうとしなくていいのかよ
!」

「間違いなどではない!」

「なにつ!?!」

ザフィーラの何かが込められている叫びにあたしは怯んでしまう。

「主は今必死になつて守りたいものを守ろうと戦っている。そのどこに間違いがあるというのだ!」

「だからつて……こんな事をしていたらさ!」

「犯罪だということは百も承知だ。罪があると云うならばいずれ裁かれよう。

だが、今は成し遂げねばならぬ事がある。その為の犠牲ならば甘んじてすべて受けよう!

守り通したいものがある。大切なモノがある。それを守ろうとする気持ちの間違ひであると、貴様はそういうのか? 我と同じ守護の獣よ!」

「それは……ッ!」

あまりの覚悟の言葉にあたしは言葉が繋げられずに口ごもつてしまう。

それにそれだとアーチャーや守護騎士達は誰かを守ろうとしてるって事になるのか!

「でも……やつぱりさ!」

「我等には少なくとも今他に考えられる術はない。故に、我らの願いは何人たりとも邪魔はさせせん! 止めたくば……決死の覚悟で挑んでこい!!」

「ぐあっ!」

いつの間にか一瞬で距離を詰められ腹に拳を貰ってしまった。
瞬動で一旦距離を置いて息と態勢を整える。

「…そうかい。なら全力であんたを止めるよ！」

「ついて来れるのならばな！」

あたしは更にギアを上げてザファイラにかかっていった。



S i d e 高町なのは

今私はエイミィさんと一緒に管制室でシホちゃん達を見ているところです。

シホちゃんはフェイトちゃんの見守り役として一緒にについていたけどそれでも心配です。

また前みたいにシホちゃんが傷ついちゃうかもしれないと思うと怖くなるから。

でも、前に一度そのことを言ったら逆に私達も同じ事態になるかもしれない、と返されてしまったのでヴィータちゃんに一度やられちゃった身としては言い返せませんでした。

だから今は怪我がないように祈ることしかできません。

そしてシグナムさんと対峙した二人に突如として闇の書の主であるアーチャーさんが現れてシホちゃんと戦闘になっちゃった。

私も出たほうがいいかな？　と思っただけの時でした。

またアラート音が鳴り響いて一つの画面が開きそこには別の場所でヴィータちゃんが闇の書を持って飛んでいました。

「なんで、闇の書と闇の書の主が別々に動いているんだろう…？」

どちらも本命と言ってもいいけど…だけど本が最優先だね。ということでは
「はい！」

今はシホちゃんとフェイトちゃんとアルフさんがやられないように祈りながら私も
ヴィータちゃんと話し合いをするの！

そして私も転送して現場へと向かった。

そして開口一番、ヴィータちゃんが、

「お前は…高町なんか！」

「うえ!?　なのはだつてば!　な・の・は!」

いきなり出鼻を色々な意味で挫かれた気分です。

「…もう。ヴィータちゃん。やつぱり、お話を聞かせてもらおうわけには行かない？ もしかしたらだけど手伝えれることとかあるかもしれないよ？」

そう私の言葉を伝えるとヴィータちゃんの顔が少し変化して悩みの表情になる。

やつぱり相談したいと思っていると私は思うの！

「うるせー！ シ…いやなんでもねえけど今は間に合ってるんだ！ それに管理局の間が信用できるか！」

「今何か言いかけなかった？」

「なんでもねえって言ってるんだよ！（シホの事をバラすわけにはいかない！）」

「それと、私、管理局の人じゃないもの。民間協力者」

手を広げてあなたの味方だよって意思表示をする。

これで分かってもらえたら嬉しいな。
でも、

「今はお前に付き合ってる暇はねえんだ。だから…！」

「!？」

魔法陣を展開したヴィータちゃんがなにか手に魔力を集中させている。

「吼えろ、グラーフアイゼン！」

《E i s e n g e h e u l.》

ハンマーを振り下ろしてその魔力の玉に叩き込むと、突如として紅い閃光と衝撃音で視覚と聴覚を一瞬だけど麻痺させられちゃった！

すぐにそれは治ったけどもうヴィータちゃんは遠くまで離れていてしまっていた。

「お話聞いてくれないか。まあしようがないか。レイジングハート」

《All right. Buster mode. Drive ignitio
n.》

「いくよ！ 久しぶりの長距離砲撃！」

シホちゃんとの度重なる修行でシホちゃんの無の境地とまではいかないけどそれに近い感覚を掴んできたから絶対とはいかないけど当てられる自信はある。

《Load cart ridge.》

二発のカートリッジをして砲撃の準備を整える。

ヴィータちゃんはやっぱり驚いているけどもう止めないの！

「デイベイーーーン・バスターーーー！！」

放たれた砲撃はヴィータちゃんまで狙い違わず伸びていき見事直撃した。

それで一息つく。

《直撃ですね》

「ちよつと、やり過ぎた？」

《いいんじゃないでしょうか?》

少しずつ煙が晴れてくるとそこにはシホちゃんの言っていた通り仮面の男がヴィー
タちゃんの前に現れていて私の砲撃を防いでいたみたい。

それで再度私はデイベイン・バスターを放とうとしたけど私の周りにバインドが発生
して捕まっちゃった!?

ヴィータちゃんは何度か仮面の男の人と言いつ争っています。何かを言われてそのま
ま撤退してしまっただけ。

なんとかバインドをブレイクして二人がいた方を見たけどもうどちらともいって
いませんでした。

レイジングハートが私に謝ってくるけどこれは私のミス…。

それより…! 仮面の男の人が来たってことはフェイトちゃんが危ない…!



………時間は少し遡り、シホとアーチャーは戦闘を繰り返していた。

双剣を打ち合いながら、

「それで、あなたは記憶を取り戻せたのかしら?」

「…いや、芳しくないな」

「そう…ならやつぱりこの方法で思い出させるしかないわね!」

シホは前はエミヤとの戦いで無意識にエミヤの記録を覗いてしまい壊れかけたが、今回は意識的にそれを実行しようと試みる。

それをすればもしかしたらアーチャーの記憶は蘇るかもしれないけどその方法は諸刃の刃だ。お互いに記憶の読み取りで激しい頭痛に襲われるからだ。

だがシホは今それをしなければこの先する機会はないだろうと読んだ。

だから剣に意識的に魔力を流してイリヤの魔術を応用して記憶を思い出させようと試みる。

「いくわよ!」

「ツ…来るか!」

投影使いは剣製の競い合いとはエミヤの弁だ。

ならもう負けてやれないという意気込みでシホは剣を高速でぶつけあった。

するとやはりというべきか意識的にしたのが功を奏したのかアーチャーの失われていたであろう記憶がシホに流れ込んできた。

シホがそうであるようにアーチャーにもシホの記憶が流れ込んでいく。

「ツ!?!」

「ぐあっ!?!」

途端、二人は少しであるが記憶を共有しだしてきて、そして、

「(なんで…!?! なんでアーチャーは私と同じ記憶を持っているの!?!)」

「(この記憶は私の記憶であり、シホ・E・シュバインオーグの記憶でもあるのか…)」

「アーチャー、あなたは…」

「シュバインオーグ、お前は…」

二人は確信に近い答えを言おうとしている。

「(あなたは(お前は) …私自身なの(か)?)」

その答えに辿り付き二人は動きを止めてしまった。

戦場では命取りな行動だが今二人が感じている気持ちは困惑一色だった。

だがその時、近い場所で戦っていたフェイトとシグナムの方でフェイトの叫び声が聞こえてきた。

シホはハッ!と意識を戻しその方へと目を向けるとフェイトのリンカーコアを仮面の男が掴んでいる。

「ッ! アーチャー、今は少し待って!」

「あ、ああ…」

まだ呆然としているアーチャーはただ言葉に従った。

トレース・フラクタル
「投影、重装！」

その手には弓と一緒に一本の黄色い槍が握られる。

「いつて！ 必滅の黄薔薇！！」

弓から放たれた槍はデイルムツド・オデイナの二槍の破魔の紅薔薇の片割れで概念としてはいかなる手段を以てしても治癒不能の傷を負わせる呪いの槍だ。

唯一それを破るとすれば槍を折るか存在を消すかの二択しかない。

そんな呪いの槍をシホは仮面の男に放った。

距離はあったがそんなものはすぐになくし仮面の男も気づいたがそれは遅く左肩が抉れる感じに掠っていつて地面に突き刺さった。

そしてシホはすぐにフェイトとシグナムの方へと向かう。

「くっ…仮面の男は逃げたか」

「シユバインオーグか。テスタロッサの事を頼む。それとすまないと伝えておいてくれ」

「…わかったわ」

「ではな」

そうしてシグナムはアーチャーの方へと向かっていき撤退した。

アルフとなのはも遅れてやってきた。

「……ごめんなさい。私がアーチャーに手こずっている間に仮面の男にまんまとフェイトの魔力を奪われてしまったわ」

「ううん。私も仮面の男を逃しちゃったから……」

「それより早くフェイトを医務室に連れて行こう！」

「そうね」

「うん！」

そしてシホ達も気絶しているフェイトを抱えて帰還するのだった。

それとシホはゲイ・ボウを布に包んで回収することを忘れずにした。



Side エミヤ

私は今鷹の姿に戻りシグナムと共に撤退中である。

しかし私は未だに困惑している。

シホ・E・シュバインオーグとの戦いであちらがなにかの魔術を執行したのか私と奴

の記憶がお互いに交差した。

そのおかげで私も記憶を全部思い出すことができたが、だがそれは新たな疑問を生んだ。

どうして私はイリヤの体から抜け出してしまったのか？

あの体に宿っている魂は本当は誰なのか？ 衛宮士郎なのか、それとも他の…。

いかな。考えるだけで更に混乱してしまう。

今はこの話題は私の胸の中に留めておこう。

今、皆に記憶を取り戻したことを話すのはまだ秘密にしておこう。

混乱を誘うだけだからな。

「どうした、アーチャー？ シュバインオーグと戦ってなにかあったのか？」

「…ああ。だが今はまだ混乱しているのでね。時が来たらその時に皆に真実を伝えよ

う」

「…………、わかった」

どうやら分かってもらえたらしい。だがいずれ真実をあの娘と共に話し合うことになるだろうが今ははやてを救う事を念頭に考えていこうとする。

第五十話

『見えてきた光』

S i d e シホ・E・シユバインオーグ

対策室にて私達は会議をしているところだった。

まずはフェイトに聞かせてだろう。

「フェイトさんはリンカーコアにひどいダメージを受けているけど命に別状はないそうよ」

リンデイさんのその報告で会議室にいた者たちはホッと息をつく。

「私やシホちゃんと同じように魔力を吸収されちゃったんですね」

「アースラの稼働中でよかった。なのはやシホの時以上に救援が早かったから」
「だね」

なのはがそう言いクロノがアースラに関して言ってるリーゼロツテさんがそれに頷く。

「三人が出勤してしばらくして駐屯所の管制システムがクラッキングであらかたダウン

しちゃって…。

それで指揮や連絡がとれなくて、ゴメンネ…。あたしの責任だ」

エイミイさんがそう言って謝罪の言葉を述べる。

でもそれはしようがないことだと思う。

まさか管理局謹製のシステムに介入できるほどの相手がいるというのが驚きなのだから。

「んな事ないよ。エイミイがすぐにシステムを復帰させたからアースラとの連絡が取れたんだし、仮面の男の映像だってちゃんと残せた」

リーゼロッテさんが仮面の男の画面を映し出す。

「でもおかしいわね？ 向こうの機材は管理局で使っているものと同じシステムなのに、それを外部からクラッキングできる人間なんているものなのかしら？」

「そうなんですよ。防壁も警報も全部素通りでいきなりシステムをダウンさせるなんて…」

「ちよつとありえないですね」

「ユニットの組み換えはしているけどもつと強力なブロックを考えなきゃ…」

「それだけすごい技術者がいるってことですか？」

「うん。もしかして組織だつてやっているのかもね」

なのはがそう言つてリーゼロッテさんがそう答えるけど多分それは違うと思うな。私の考えとしてはスパイかなにかがいるという考えが浮かんでいる。

「シホから見て状況はわかつているのか？」

「ええ。シグナムはフェイトとの戦いを邪魔されて仮面の男が去つた後、私にテストロッサにすまないと伝えてくれ、と言われたわ」

「そうか。ところで…シホ、一つ気になつたんだがその肩にかけている布で巻かれている長いものはなんだ？」

「…ん？ 今頃気づいたの？」

「いや、みんなだいたい気づいていると思うが…」

「フフフ…なに、ただフェイトのリンカーコアの魔力をみすみす奪われるだけだなんて護衛についていった私のプライドが許さないわ。」

アーチャーと戦っている間でもフェイトの叫びが聞こえて咄嗟に私は「あるものを仮面の男の肩に当ててやったわ」

すると一瞬だがリーゼロッテさんの私に向ける視線の感情傾向が変わつた。

そこから読み取れたのは、一番強いのは怒りだろう。

ふーん？ 面白いわね。

「なにを当てたんだ？」

「ふふふ…今は内緒♪」

「そうですか。それじゃ話を戻しまして、アレックス。アースラの航行に問題はないわね?」

「ありません」

「うん…。では少し早いですがこれより司令部をアースラに戻します。各員は所定の位置に」

「はいー!」

そうリンディさんは締めくくるとリンディさんは私となのはの方へと向いて、

「なのはさんとシホさんはおウチに戻らないといけないわね」

「あ、はい。でも…」

「フェイトさんの事なら大丈夫。私達がちゃんと見ておくから」

「はい」

「あ、それとちよつといいですか?」

私はある提案をする。

「なんですか、シホさん?」

「ちよつと帰る前に小話があるので艦長室に寄っていいですか? 一緒に来て欲しいのはリンディさん、クロノにエイミイさん、アルフ、なのはです」

「そっか。それじゃあたしは戻るとするね」

「それじゃ艦長。僕も失礼します」

リーゼロッツさんとアレックスさんが部屋を出ていき私達は艦長室へと向かった。

でも向かう前にクロノがリーゼロッツさんの方を向いて険しい顔になっていたけどクロノも気づいた口かな？

そして艦長室に到着して全員入室したら部屋の鍵をロックし、防音の魔術を発動する。

「…シホさん。いきなりなにか魔術を執行しませんでしたか？」

「それに手際よく鍵をロックしたよね？ 暗証番号もあつたと思うんだけど…」

「そんなものはとづくに解析して取得しました」

「…今、さらつと管理局のシステムに喧嘩を売ったような気がしますが今は流しておきましょう。それだけ大事な話があるということですね？」

「はい。話す内容はこの槍についてです」

私が布を解き必滅ゲイの黄薔薇ポウを顕にする。

「今回は黄色い槍か。それはなんの効果があるんだ？ それを仮面の男に当てたんだろ

うっ？」

「ふふ…正解。わざわざ回収までしたんだから無駄骨にならないことを祈るばかりね」

「シホちゃん。どうして魔力に戻さないの…?」

「それだと効果が消えちゃうからよ。この槍の呪いがね」

「呪い、ですか…」

「もしかしてシホちゃん。その槍って破魔ゲイの紅薔薇ジャルグと対になっている槍だったりする…?」

「エイミイさん、よくわかりましたね。この槍は真名を必滅ゲイの黄薔薇ポウ。与えた傷はこの槍が折れないか消えない限り傷の回復を一切望めない魔の槍です」

「ということは仮面の男の左肩には傷が残っているっていうことですか?」

「はい。かなり深く抉りましたから傷が治癒魔法で治らず焦って今もかなりの激痛が走っていると思いますよ?」

「えげつないねえ…」

「敵を炙りだすには効果的でしょう? 私の見解としてはスパイがいると睨んでいるのよ。」

さっきの話内容ですけどどうも簡単にシステムに侵入してくるなんてそれこそ内通者がいても不思議じゃない」

「君もそう思っていたのか?」

「クロノはもう、その先も感づいているようだけどね」

「まあね……」

私が笑みを浮かべるとクロノもフツと笑う。

それでなにになに？とエイミイさんが聞いてくるけどそれで今回はまだ判明していないという事で話すのは保留にしておいた。

アーチャーの件に関してはまだはやての事がばれるのはまずいと思って話さない事にした。

どうして私と魂が分裂してしまったのか？ という事情はともかく今のアーチャーの状態は記憶を見ることで把握してしまったから。

なぜかは知らないけど鷹の姿で「私達」の世界の使い魔状態になってしまい魔術回路持ちがいなくて契約できず人間の姿になるのも苦勞する程魔力が少ないという状態であるということ。

そして話はお開きになり私達は部屋から出て行った。



その翌日の朝方、ファイアから宝石剣の欠片の通信機で通信があり新情報が手に入ったとのことで話を聞いていた。

『お姉様、新情報です。まだクロノとかにも伝えていないものですけどいいですか?』
「いいけど、ばれない…?」

『大丈夫です。今は休憩の時間を使っていますから。ですけど手短にしますね』

「そ。それじゃお願い」

『わかりました』

そしてファイアが教えてくれた情報はまず闇の書は本当の名ではなく正式名称は『夜天の魔導書』。

その用途として本来の目的は各地の偉大な魔導師の技術を蒐集して研究するために作られた、主と共に旅をする魔導書。

破壊の力を振るう様になったのは歴代の魔導師がプログラムを改変してしまったからだと思っらしい。

「迷惑な話ね…。夜天の魔導書も災難だっただろうに…」

『全くですね。それじゃ続けます。その改変のせいで旅をする機能と破損したデータを自動修復する機能が故障しているらしいです』

「故障ね…。改変した魔導師もいかげんな仕事をしたわね」

『はいです。そして一番酷いのが持ち主に対する性質の変化です』

「性質の変化…?」

『一定の期間が蒐集がないと持ち主自身の魔力や資質を侵食し始めるし、完成したら持ち主の魔力を際限なく使わせる。無差別破壊の為に…。』

ですからこれまでの主は書が完成してすぐに…』

「ふむ。なるほどね。それで停止や封印方法などかはわかった…?」

『それは今兄さんと調べているところです。でも…完成前の停止は難しいです』

「どうして…?」

『闇の書が真の主と認識した人間でないとシステムへの管理者権限を使用できないんです』

「管理者権限、ね…」

『つまりですね。プログラムの停止や改変ができません』

「それはまた…」

『無理に外部から操作しようとするれば主を吸収して転生しちゃうシステムも入っていません』

「なるほど…」

『これで今のところは情報はすべてです』

「わかったわ。ありがとう、ファイア」

『いえいえ♪ なんでも言ってくください。お姉様の頼みならなんでも聞いてみせます』

「そ、そう…。でもそうになると、外からの力づくは駄目、闇の書の直接干渉も駄目。と、なると後残されてくる手としてはやっぱり…」

『なにか思いついたんですか、お姉様?』

「ええ。望みはまだ薄いけど闇の書の完成と同時に管理者権限をはやてに握らせればいんじゃないかしら?」

『それは、難しいのではないのでしょうか。完成と共に主は闇の書に意識を奪われてしまいます』

「そこをどうにかするのが私達魔術師の腕の見せ所よ。なんとか考えてみるわ」

『そうですか。頑張ってくださいお姉様』

「ええ。…とところで、ねえフィア。ちよつといい?」

『はい? なんてでしょうか』

「あなた達には確かリーゼ姉妹が手伝っているのよね?」

『はい。それが…?』

「最近おかしい事とかない? 特にリーゼロッテさんのほう…」

『リーゼロッテさんの方ですか? あ、そういえば最近時たま一瞬だけですけど何度か苦悶の表情をする時がありますけどすぐに元の顔に戻るといった行動があります』

「ブンゴ…」

「分かったわファイア。ありがとう。また頑張つてね」

『はいです！ それじゃそろそろ休憩時間が終わりますので失礼しますねお姉様』
「ええ」

それでファイアとの宝石剣の欠片による通信を終了させると学校の準備をする。
と、そこに違う欠片が光り出した。

その欠片はシャマルさん用であつた。

それで通信に出てみると、

『あ、シホちゃん！』

「シャマルさん？ どうしたんですか？」

『それが…… はやてちゃんが倒れちゃつて今病院で検査をしているところなんです』

「はやてが……!?!」

それで色々と会話をして私は放課後に向かう事をつけて通信を終了した。

「もう猶予が切れるのは近いという事か……。出せる手はできるだけうつておいた方がいいわね」

そこに「シホちゃん、朝ごはんだよ」となのはが部屋に入ってきたので私はとりあえず今日の放課後から作戦を立てる事を思案した。



そして放課後、私はなのは達に用があると行って八神家に向かった。はやては病院に入院することでもう全員帰っているらしいとのことだ。

呼び鈴を押し扉を開くと、

「あ！ シホちゃん！」

「シユバインオーグが来たか」

「シホ！ はやてが……！」

「分かってるわ、ヴィータ。もうそんなに時間の猶予がないのでしょうか？」

「ああ、もう余り時間をかけられない……」

ザフィーラがそう言う。

そこに続けて上のほうにいたのか鷹が一羽舞い降りてきた。

「……アーチャー。あなたもいてよかったわ」

「私ははやてを守ると誓っているからな」

「そう。やっぱりあなたは『私』なのね、アーチャー。いえ、衛宮士郎」

「お前こそな。シホ・E・シユバインオーグ……いや、衛宮士郎」

シヤマルは「え？ え？」と戸惑っている。見回してみれば全員困惑の表情をしてい

た。

「アーチャー……。お前、記憶を取り戻していたのか？」

「ああ。言わなかった事を謝罪しよう。この通り記憶はすべて取り戻した。シホ・E・シユバインオーグとの戦いでね」

「本当なのか……。それよりアーチャーはともかくシユバインオーグが衛宮士郎というのはどういうことだ？」

「それはね……。？」

私はこの世界に来る前の経緯を簡単に説明した。

本当の私の姿は衛宮士郎だが今はイリヤの体を素体にした人形に乗り移った事を。

そして魂が女性に塗り替えられ完全に女性になってしまった事を。

さらに世界を越える際に私と士郎の魂が分離してしまつて、士郎の魂が鷹へと姿を変えて私達の世界の使い魔状態になつてゐるといふ事を。

「そんな事が……。だがそれで納得した。子供であるのにその技術はありえないと常々思つていたからな」

「どうして魂が二つに分かれたのか以外はこれが真実よ」

「そうなのか。アーチャー？ いや、士郎でいいのか？」

「ああ、シグナム。私とシホ・E・シユバインオーグの記憶は同質のものだといふ事が分

かった時にすべて思い出した」

それで守護騎士達は全員驚いた顔をしていた。

「でも、士郎が実体のない使い魔化している状態である意味助かったわ」

「…どういう意味だ？ 私はこれでかなり苦労しているのだぞ？」

「はやてを助ける手助けが出来るからよ」

『なっ!?!』

それで全員声を上げる。

「それは、一体…?」

「その前に話しておくわ。新たに判明した闇の書…いえ、正式名称『夜天の魔導書』の今の現状を…」

それから私はフィアに教えてもらった情報をシグナム達に伝える。

話をしだしていく内にしだいに全員の顔色が険しくなっていく。

そしてすべて話し終えると、

「ばかな…!」

「そんな…」

「それじゃはやてを助ける事ができない…!」

「どうすればいいのだ…」

守護騎士達は一様に落ち込んでいるようだ。

でもまだ解決策を伝えていない。

「だから私なりに解決案があるというのよ。士郎が協力してくれれば救える倍率はかなり上がるわ」

「教えてくれ。私に出来る事ならばなんでもしよう」

「士郎……。そんな自身を犠牲にするような言い方はやめて。イリヤとの自身を大切にし幸せを探すという約束を破りたいの？」

それに私達はもう『全てを救う正義の味方』じゃなくて『大切な者達を護れる正義の味方』でしょ？ だから私達が犠牲になるなんてやり方は私は私は断じて認めないわ」

「そう、だったな……。忘れるところだった。思い出させてくれてすまない、シホ……」

「いいわよ。私自身の事なんだから」

「そうだな」

士郎も落ち着いたようだ。

さて、それじゃ話すとしましょうか。

「それじゃ私なりの解決案だけど、それははやてに管理者権限を握らせる事よ」

「で、でもよシホ。完成したらはやての意識は眠りについちまうんだろ？ それはどうすんだ……？」

「落ち着きなさいヴィータ。ここからが士郎の定番よ」

「私の……？ 何が出来るというのだ？ 使い魔状態が関係しているのか？」

「ええ正解。それは、士郎がはやての精神に憑依するのよ」

「憑依……？」

「ええ。闇の書自体の干渉が無理ならばはやて自身の方をどうにかしてしまえばいいのよ。

闇の書が完成したらはやては取り込まれる。一緒に憑依している士郎も取り込まれることになる。

もしかしたら闇の書に異物として判断されて吐き出されるか排除される可能性が無きにしてもあらずだけど、ここは賭けね。

そして取り込まれた後は士郎が必死に語りかけるのよ。はやての意識を呼び覚ますために……！

そして守護騎士のみんなは過去から続く闇の書の内容ではやてが管理者権限を握るまでの間、闇の書におそらく取り込まれると思う。

それまでどうか耐えていてほしい……。その間は暴走した闇の書の管制人格は私となのは、フェイト達でどうにか抑えるから」

それで部屋は静かになる。

だが別段悪い空気じゃない。

わずかの希望が見えてきたことにより部屋の中は少しばかり歓喜に満ちていた。

「…本当に何から何まで済まない、シユバインオーグ。主はやての御身、頼むぞ」

「ええ。でも感謝の言葉ははやてを救い出すまで取っておいてほしいわ。私自身、分の悪い賭けだと自覚しているから」

「それでも…はやてを救える可能性が出来たんだ。だからあたし達じゃ無理だから、だから…！ 頼むよ、シホ…」

「お願いします、シホちゃん」

「シユバインオーグ、お前を信じるぞ」

「私の力で役に立てるのならいくらでも協力しよう」

「そう。よかったわ。それじゃもう作戦は実行したほうがいいわ。今日中に士郎をはやてに憑依させる。はやてとの精神の同調率を上げるために。だから今夜、病院に忍び込むわよ士郎」

「了解した」

「他のみんなは、気の重い事だと思うけど魔力の蒐集を継続してお願いしていい？」

「任された」

作戦は決まり私達は夜にはやての病室に忍び込む事になった。

第五十一話

『交渉』

S i d e シホ・E・シユバインオーグ

その夜、なのは達が寝入った後、窓を開けて私は再度八神家へと向かった。

そこにはシヤマルさんが士郎と一緒にいた。

「他のみんなはもう蒐集しにいったの？」

「はい。シホちゃん、士郎さんをお願いします。士郎さんも私達の大事な家族なんです」

「シヤマル……」

「……ええ。任されたわ。……………よかつたわね士郎。あなたにもこんな大切な家族が
出来て」

「ああ。私には勿体無いくらいだ。それではシヤマル、しばしの間だが家の留守を頼む
ぞ」

「ええ、わかりました」

シヤマルさんに見送られ私達は病院へと向かった。

はやての病室の前まで忍び込んで私は事前に士郎にあるものをいくつか飲ませる。

「しかし、また寶石を飲む事になろうとはな…」

「文句を言わないの。憑依している間も魔力は消費されていくんだからない物ねだりはないほうがいいわ。」

リンからもらった魔力の籠った数少ない寶石を奮発するんだから文句は言わないで。

それと念のために私とパスを繋げておいた方がいいわ」

私は指を切つて血を出しそれを士郎に飲ませて術式を組んで簡易的なパスを結ぶ。

これで最悪士郎が魔力切れを起こす事はないだろう。

イリヤの方の魔術回路の魔力の方を士郎に回すように調整する。

「それじゃこれで士郎は私とパスを結んだわ。だから魔力が持つてかれそうになったら私の魔力を使いなさい」

「わかった…。しかし、お前は本当に私なのか？ 手際が良過ぎるぞ。イリヤの魔術が使えるとはいえ…」

「なんででしょうね…。もう私に馴染んだからじゃないかしら？」

「そういうものか…？」

「そういうものよ。それじゃ侵入するわ」

はやての部屋に侵入して最初に目に映つたのはベッドで寝ているはやての姿。

士郎が人間形態を取りはやての横まで移動する。
「そこではやては音に反応したのか起きたようだ。」

私は士郎の向かい側に立ってはやてに魔眼をかけてこれは淡い夢のようなものだと
いう認識を植えつける。

「…あれ？ シホちゃんに、アーチャー…？」

「はやて。これは夢だ。だから今は静かに話を聞いてくれ」

「うん…？ わかったわ。でもえらい現実味の帯びた夢やねー…」

「これは夢よ、はやて。そう淡い夢…だから目を覚ましたらすぐに忘れてしまうわ」
「そうなんや…」

すっかりはやては夢だと思い込んだらしい。

私は士郎に合図をした。

士郎ははやての胸の上に軽く手を置き、

トレス・ス・オン
「同調憑依開始」

瞬間、士郎の輪郭はだんだんと薄れていきはやてへと吸収されていく。

そしてすべてが終わった時には完全に士郎ははやての精神へと憑依したようだ。

「あれ…？ アーチャーが消えてもうた…？」

「大丈夫よ、はやて。アーチャーはあなたと一緒にいるわ。でも、今度目を覚ましたとき

にはあなたは今の出来事を忘れているわ。だからもうお休み…」
「うん、おやすみや…」

そしてしばらくしてはやての寝息が聞こえてきた。

さて、前準備も終わった事だし私は撤退しようとするか。

後、やらなければいけない事は…。



翌日、魔力が使えないがフェイトも無事学校へと通う事が出来た。

それで登校後、さすががはやての話をしてアリサの提案で今日は帰りにはやてのお見舞いに行こうと言う話になった。

「すずかとシホの友達なんでしょ？ 紹介してくれるって言う話だったしき。お見舞いもどうせなら賑やかなほうがいいんじゃない？」

「それはちよつとどうかと思うけど…」

「でも、いいと思うよ」

「私も賛成よ」

「ありがとう」

そして放課後、はやての病室に再度訪れるとはやてと一緒にシヤマルさんも一緒にいた。

そういえば守護騎士の中で唯一ばれていないのがシヤマルさんだったつけ。

「「「こんにちは」」」

「こんにちは。いらっしやい」

「こんにちは、皆さん」

「今日はシヤマルさんも一緒にいるんですね」

「はい。他のみんなはいませんけどね」

「そうですか。それじゃなのは」

「うん。これ、ウチのケーキなの。よかったら食べてね」

「おおきに」

それから七人で軽い話で盛り上がった。



S i d e
グレアム

「父様。あまり根を詰めると体に毒ですよ」

「そうだよ」

部屋で過去の闇の書の資料を見ていたら電気がつけられ娘達にたしなめられてしまった。

まあ私もいい歳だからな。

だがまだ私にはせねばならない事がある。

志半ばにして倒れるわけにはいかないな。

「そうだな。ところでどうだい様子は？」

「まあぼちぼちだね」

「クロノ達も頑張っていますけど、闇の書が相手ですから一筋縄では……」

「そうか」

そう簡単に行ったら苦労しない。

私ですらこうして手を尽くしているのだから。

「お前達まで付き合わせてしまつてすまないな……」

「なに言ってるの。お父様」

「あたし達は父様の使い魔。父様の願いはあたし達の願い……」

「うん。大丈夫だよ、お父様。デュランダルももう完成しているんだし」

「闇の書の封印、今度こそ大丈夫ですよ」

「うん！」

「うふふ♪」

そう言つて二人は笑みを浮かべる。

この笑顔に何度救われてきたことか。

「ここが頑張り時だな。」

「ところでロツテ。肩の怪我のほうは大丈夫かね？」

「それが…治癒魔法を何度もかけても全然塞がらないんです」

「だからクロノ達の目を盗んで痛みを和らげるのも苦労しているんです、ロツテは」

「そうか。とするとロツテが受けたのはシホ君のなにかの概念武装という奴か」

「おそらくそうだと思います」

「ふむ…」

これは困つた事態だな。

これでは遅かれ早かれロツテの傷がばれてしまう。

対策を練らないとな。

ピ。ピ。ピッ！

そこに誰かから通信が入ってきた。

それに私は出てみると、

『こんばんはグレアム提督。シホ・E・シユバインオーグです』

「！ シホ君か。どうしたんだい？」

ロツテとアリアが立ち上がるが手で静止して抑える。

『いえ、少しお話がしたくて電話をさせてもらいました。ちよつと今夜内密なお話があるんですけどそちらに伺つてもよろしいでしょうか？』

「大丈夫だが…シホ君、君は今一人かね？」

『はい。＼とても重要なお話＼をしたいんですが…他に誰かがいたらそちらにとって色々＼都合が悪いもの＼だと思ひまして』

これは…もう尻尾が掴まれているということかな？

「そうか。わかった。では今夜の何時頃に来るのかね？」

『すぐに伺わせてもらいます。家族にも帰りが遅くなると言つてありますので大丈夫です。後、フィアと一緒に連れて行きます』

それは裏返せばシホ君とフィアツト君に何かがあればすぐに行動が起こされるといふことだろうか？

これでは迂闊な行動も封じられてしまったに等しい。

リンディはかつてシホ君に交渉事でやりこまれたと聞いたが既に私もシホ君の交渉

という名のテーブルに座らされているということか。

私はただただ承諾するしかできないでいた。

返事を返したらシホ君は電話越しでクスツと笑い、

『それでは今夜そちらに伺わせていただきますね。では失礼します』

そしてシホ君との通信は切れた。

切れた後も私は手や背中に汗を掻いているのか気が抜けたのか椅子にドカッと座り込んでしまった。

「だ、大丈夫!? 父様!？」

「あ、ああ。大丈夫だロツテ…」

「でもすごい汗ですよお父様!」

「平気だ。緊張してしまっただけだからな。それより二人共、シホ君がこれからこちらに来る。だから迂闊な発言は厳禁だ」

「わかった」

「わかりました」

これから気の遠くなるような会話をしなければいけないと思うと憂鬱な気分になるがなんとか乗り切ろう。



S i d e シホ・E・シュバインオーグ

通信を切り一息をつく。

これから交渉をしようというのだからやはり緊張するものだ。

クロノ達にまだ感づかれるのはまずいと判断してフィアに頼んで通信を繋いでもらったけどバレないかヒヤヒヤものだった。

それに転送室は今のところあるのはフェイト達の家だけだ。

だから怪しまれないようにしないとね。

「あ、フェイト。今夜ちよつとそっちに行つていい？ フィアに会いに行きたいんで転送室借りたいんだけど」

『え？ うん、わかった。エイミィに伝えておくね』

「ごめんね」

『いいよ。それじゃ待つてるね』

「わかった」

そしてハラオウン家に到着して私は転送室を借りて管理局本局へと転送した。

向かうはグレアム提督の執務室。

向かう途中で無限書庫に寄りユーノとファイアに挨拶をしていく。

「あれ？ どうしたのシホ」

「うん。ちよつと管理局に用があつてね。ファイアはいる？」

「ちよつと待つて。今呼ぶから」

それからしばらくして、

「お姉様！ 会いたかったです！」

「ファイア、私もよ。それでだけど今からグレアム提督のところに行くんだけど貴女もい

く？」

「はい。大丈夫です」

「そう。それじゃユーノ。ちよつと一人にしちゃうけど大丈夫？」

「大丈夫だよ。一人でも十分資料は調べられるからファイアも少し休んできたらいよいよ」

「ありがとう兄さん」

「それじゃいきましよう」

「はいです」

ファイアを連れて私はグレアム提督の執務室の前についた。

「それじゃファイア。私がいいというまで手は上げないようにな？」

「わかりました」

そして私が失礼しますと行って部屋の中に入った。だが中に入った途端、首筋に手が添えられていた。

見ればリーゼロッテさんが手を出していたようだ。

フィアの方はリーゼアリアさんが出している。

おまけに私とフィアの体にはバインドがかけられていた。

フィアは少し驚いていたが私が慌てないのを見て落ち着いたようだ。

「手荒い歓迎ですね…?」

「済まないねシホ君、フィアツト君。私達はミスを侵すわけにはいかないのだよ。だから私の指示に従ってくれないかね?」

「早計な判断ですね、グレアム提督? まだ私がなにを話すのかも分かっていないのに手を出すなんて…これでは何かやましい事があると認めているようなものですよ?」

「わかっているよ。しかしもう君達はこれで動けないだろう?」

「ふふふ…私がなにも準備なしにこうしてここに来ると思っていたんですか?…
フリーズアウト、
停止解凍、
巨狼束縛し強靱の鎖」

北欧神話でフェンリル狼を拘束したと言われる魔法の紐を投影した。

これはギルガメッシュの宝物庫の中で見つけたもので動物ならなんであろうと拘束

してしまう効果を持つ魔法の足枷だ。

これは投影と真名開放するのに結構魔力を喰うが今回は別に戦闘をしに来たわけでもないので使わせてもらった。

効果は絶大でこれによってリーゼ姉妹は私達を捕えたと思っていたのに逆に拘束された形になる。

バインドも解かれて私達は自由になった。

「くっ…!？」

「引きちぎれない…!」

「…さて、先に手を出してきたんですから正当防衛ですよね？」

「そうですね、お姉様」

「……………」

グレアム提督は無言。

まだ隠し球を持っているなら、最終的にはこの部屋を爆破してもいいという心持ちで構えた。

しばらくして、

「まいったよ、シホ君。降参だ。だから二人を解放してくれ」

「もう手は出しませんか…?」

「約束する」

「わかりました。リーゼさん達もいいですか？」

「父様がそう言うんだからあたし達はもう手を出さないよ」

「うん。だから…」

「そうですか。…トレース・カット 投影、解除」

そして二人の拘束を解除する。

まだ警戒はしているようだけれどももう手は出してこないようだ。

「さて…ではようやく話ができますね」

「済まないね。手荒いことをしてしまつて…」

「別に…。予想はしていましたが。それでは話をしましょうか。仮面の男を操つていた黒幕さん」

「なんの事だね…?」

「ここまでしておいてシラを切るとはさすがですね。でももう言い逃れはできないと思つてくださいいね?」

…ああ。ところでロツテさん。肩の調子はどうですか?」

「何の事かな…?」

「血が垂れていますよ…?」

「えっ!？」

「ロツテ！」

それで慌てたリーゼロツテさんは左手を見る。

アリアさんが叫ぶがもう遅い。

ロツテさんは血は垂れていかなかった事に気づくと「しまった!」という表情になった。
「ありがとうございます。わざわざ反応してくれて。それと別に私はただ肩の調子を聞いただけで傷があるとは一言も言っていないですよ?」

それに私が傷を負わせたのは仮面の男なんだからロツテさんが反応するのは少し違
うと思うんですよ」

「うう……」

「ま、これで状況証拠は揃ったわけですが、再度聞きます。まだなにか言いたいことはあ
りますか?」

しばらく部屋は無言の空気に包まれたがグラム提督が重たい、それはとても重たい
息をつくくと、

「…そうだ。私が裏から色々と手を出していた犯人だ」

「父様! それは違う!」

「そうです。お父様は何も悪くない。仮面の男として演じていたのは私とロツテの独断

です！」

リーゼ姉妹がグレアム提督を庇う行為をする。

でもグレアム提督は「いいんだ」と言つて泣き出しそうな二人の頭を撫でた。

それでリーゼ姉妹は意気消沈してしまった。

「それで、シホ君はこの事をリンディ達に伝えるのかな？」

「いえ？ まだ伝えるつもりはありませんよ。それだと闇の書が完成しませんから」

『なっ!?!』

それで三人は驚きの声を上げる。

「ど、どういう事だ？ 君は闇の書の完成を望んでいるというのか？」

「そうですね。まあちょっと事情がありました……」

それと話す前になんて闇の書の完成を手伝っているのか事情を説明してくれませんか？

「でないと私も協力関係として信用できませんから」

「……わかった」

それでグレアム提督の話を聞く。

それは十一年前も前のクロノのお父さんがなくなった前回の闇の書事件後に闇の書ははやての元に現れた事を知ったグレアム提督。

はやての両親が死んだ事を知り身元引受人としてお金などを送りはやてに安定した生活を送らせてあげる事をした。

いずれ地獄に叩き落とす事になるだろう事を承知で…。

そして闇の書が完成した時の為に色々な手を尽くして開発したデバイス『デュランダル』ではやてを闇の書ごと完全凍結させ永遠に封印するという手段。

それを全部聞き終え話し終わったグレアム提督は片手で顔を覆って。

「私は、はやて君の幸せを願いながらも最後には最小の被害の犠牲として切り捨てる事を計画した。私はひどい大人だよ」

「……………」

「だが、何度考えを巡らせてもこれしか方法が思いつかなかった。

過去から永遠と続き未来でも起こるであろう闇の書により起こる事件やそれによって生まれる大なる被害や悲しみを考えたら…私は生まれなかった。止まることは許されなかった。

一人のか弱い女の子を地獄に落とすことになろうともそれが正義の行いだと何度も自分に言い含めて突き進んだ。

そしてあと少して私達のやってきた事は達成し闇の書の完全封印が成される。だから君達には邪魔をされたくない」

決意のこもった眼差しでグレアム提督は端を切ったように言い切る。

…そうか。この人も切嗣と同じ選択をしたんだ。

一を切り捨て九を救うという行動を。

「そうですか。安心してください。闇の書の完成 “まで” は私も邪魔はしません」
だからここからは私も話を切り出す。

これは苦しんできたグレアム提督の心も救う事になるのだから。

「まで、とはどういう事かな？」

「言った通りです。私ははやてと、そして守護騎士達を全員救うつもりですから」

「だ、だが私達ですらもう手がないと諦めこの最後の手を思いついたというのに、シホ君。君はもしかして何かはやて君を救う方法があるというのか！」

「はい。外からの力づくはダメ。闇の書への直接干渉もダメ。ならばやて自身に管理者権限を握らせるしかないじゃないですか？」

「それは、不可能だ…。今までの闇の書の主はそれすらできずに意識を飲まれて散っていったというのに知識も何もないはやて君が握るのは数%の確率もないだろう」

「それを可能とするのが私達魔術師です。…と言っても私も思考を巡らせても握らせる方法は結局は思いつかなかった」

「なら…」

「ですが一つの光明が見えたんです。話は変わりますがアーチャーの事はご存知ですか？」

「あの、鷹に変化する白髪の男性のことかね？」

「ええ。彼は特別で、私の“世界の使い魔の状態だったんです。そして今現在彼ははやくてに憑依しています」

「憑依……？」

「はい。はやての精神に。そして闇の書の覚醒と共に内からはやての目を覚ます為に呼びかける手はずになっています」

「そんな事が……」

「他にもそれがもし失敗しても次なる手も考えていますけどそれが今のところ一番の可能性です。」

「それでグレアム提督。あなたに聞きます。これは分の悪い賭けだという事を百も承知で私に協力する気はありませんか？」

「それは……」

「断つても結構です。その時は私達だけで計画を実行するまでですから。」

「でも、はやてを救いたいと少しでも思っているのなら……協力してください」

「そうやって私は手を差し出す。」

この手を握れば協力関係になるという証になる。

「…その前に一つ聞いていいかな？」

「なんですか？」

「本当に彼女を救ってくれるのか…？」

その真髓な眼差しを私は覚悟の目で返す。

グレアム提督は「そうか…」と一言呟き、私の差し出した手を力強く握った。

「……………」協力感謝します。必ずはやてを救う事を約束します」

「頼めた義理ではないがお願いする」

「わかりました」

グレアム提督の表情にはもう悲壮感はなかった。

代わりに力強い闘志を感じたくらいだ。

これが提督の地位にまで上り詰めた人の覚悟か。

それに報えるように頑張ろう。

それから闇の書完成までのプロセスを計画した。

闇の書の完成までは計画通りはやての心を闇に叩き落とす事になってしまっただけだけれども承知で私は計画を立てた。

そしてあらかた話し終えて今回はお開きになった。

それと忘れそうだったけどロツテさんの傷を治すために家に置いてあるゲイ・ボウを魔力に返しておいた。

そして部屋を出る間際、グレアム提督はうつすらと目に涙を浮かべて「ありがとう…」と私に言った。

そして地球に帰る道を歩いているとファイアが話しかけてきた。

「お姉様。救えるといいですね…」

「ええ。必ず救ってみせるわ」

そう決意し私は気合を入れ直した。

第五十二話

『聖夜』

シホがシャマルにシホとグレアムが立てている計画を話し守護騎士とグレアムとの共同の作戦が進められていく中、最初は自分たちが目の前で犠牲になる光景をはやてに見せるという提案に当然守護騎士達は反対した。

だが歴代の闇の書はどのみち最終的には守護騎士達を強制的に取り込んで闇の書を完成させたという話をした途端、全員なにか思う節があるのかそれ以降は反対意見はなかった。

だがもつと穏便に事は運べないかと……というヴィータの言葉はあつたがその役目は士郎が頼りだ。ということを終了した。

そして12月24日：クリスマス・イヴ。

この日は翠屋もクリスマスセールでイヴを過ごすカップルや家族達の為に深夜まで店が開かれているとのこと。

残念ながらシホとなのはは諸事情で手伝えなくなるがそれでも聖夜にふさわしく街は活気づくことだろう。

それでも計画は着々と進められていく。

闇の書の完成は今日と決められている。

イヴに一度闇に叩き落とすというのもアレだがしょうがないだろう。

プランとしては闇の書の完成から始まる管制人格の目覚め。

そして完全な暴走を起こすまでの短い時間の中でいかに速やかにはやてに闇の書の管理者権限を握らせるかが鍵になってくる。

士郎は未だにはやての中で事態を静観している。

いずれ起こるであろう暴走が起こるその時まで。

なのは達に関しては作戦が始まってから計画を知らせる手はずになっている。

そしてシホも士郎とパスを繋いでいるので士郎と一緒ににはやてを起こす役割も担っている。

責任重大だという事をシホは肌で感じながらも今はまだ何も知らないのは達によるサプライズプレゼントをあげる為にはやての病室に向かっているといるところだ。

シホはサプライズではやての病室にいく事を先にシャマルに伝えておいた。

これでいきなりの衝突は避けられるだろう。

さすがが最初にはやての病室の扉を叩く。

「はい、どうぞー！」

『こんにちはー』

そしてなのは達はシホも含めて病室の中に入る。

そこで遭遇する両陣営。

当然なのはとフェイトは驚きの顔をする。

だが全員揃っている守護騎士達は既に来ることは知っていたので驚かず平静を保っている。シホはそんな皆に話しかける。

「はやて、久しぶり」

「久しぶりやシホちゃん。今日は皆いるんよ」

「そうね。シャマルさん達もこんにちは」

「こんにちはー」

シホの言葉にすずかとアリサが続けて挨拶をする。

（ふ、フェイトちゃん…これってどういう事かな？）

（わからないよ…）

二人は慌てない一同にさらに困惑しているがそこでシホから小さく声が聞こえてくる。

(二人共。今は私達に口裏合わせて)

(う、うん。シホちゃん。でも…)

(ええ。事情は後で話すわ)

(約束だよ?)

シホが小声で落ち着かせた後、シホはすずか達の方へと向いて二人はそれに反応して隠していたプレゼントのケースをはやてに見せる。

それではやては喜びの顔をして嬉々としてプレゼントを受け取る。

そしてシヤマルが全員のコートを受け取ると言つて支度をしだす。

フエイトは小声で、

「念話が使えない…。通信妨害を…?」

「シヤマルはバックアップのエキスパートだ。この距離は造作もない」

ヴィータはなのは達が来ることを知っていたにも関わらずなのはを睨んでいる。

例え演技としてもこうして向き合うのはダメなのだろう。

「ヴィータもどうしたの? そうなのはを睨まないの。もしかしてなにかあつたのかし

らっ。」

「う…シホ。だけだよ」

「そうやよヴィータ。なのはちゃんに謝り」

「う、ごめん」

「ううん。いいよ…」

それからしばらくお見舞いをして一旦シホ達は病院から出て行った。



Side シホ・E・シュバインオーグ

そして私達は場所を移動してあるビルの屋上に来ていた。

いるのは私となのはとフェイト。そして守護騎士全員という事情を知らなければいっつ戦闘になってもおかしくない空間。

「シホ、事情を説明して…。どうしてシグナム達と普通に話しているの?」

「アーチャーさんが闇の書の主じゃないの? 本当ははやてちゃんが主なの?」

「どこから説明したほうがいいか…」

二人は事情を説明して欲しいという表情である。

「シュバインオーグ…テストアロツサ達に話してなかったのだな」

「そうよ。作戦当日までにうっかりミスを侵すわけにはいけなかったからそこら辺は徹

底しておいたわ」

「どういうこと……?」

「今だから話せることだけどこかなり前から私は守護騎士達と後、もう一つの陣営と同盟を結んでいた」

「えっ……」

「理由ははやてを救うために……。計画は順調に進んでいき後は守護騎士達のリンカーコアを闇の書に送れば闇の書は完成する」

「ど、どういうこと!?!」

「つまりあたし達は闇の書に一旦だけ回収されちまうんだよ……」

「ヴィータちゃん……」

それではのはは悲しそうな顔をする。

「私達はシュバインオーグの教えてくれた情報で闇の書が起こす破壊の力も全て知っている」

「だったらどうして……」

フェイトがそう聞く。

「闇の書の呪いを解き放つ為よ」

代わりに私がそれを言った。

「解き放つて…そんな事できるの?」

「確率は低いわ。でもアーチャー…いや、士郎のおかげでそれもうまく行きそうなところまで向かっている」

「士郎って…シホちゃん、アーチャーさんは記憶を取り戻してるの?」

「ええ。私が思い出させた。そして今ははやての精神に憑依して闇の書が覚醒するのを待っている」

「憑依って…どうやって?」

「士郎は今は私の世界の使い魔状態になっているの。私とも魔術のパスを繋いだ。」

だからはやての精神に同調して覚醒した後、はやてを私と士郎が外と内から眠っているはやてを叩き起して管理者権限を握らせる事…それが今私達が計画している事よ。

うまくいけばはやては闇の書の…いえ、夜天の魔導書の主となって暴走を止められる可能性が出てくるのよ」

「そしてうまくいけば闇の書の闇である暴走プログラムも切り離すことができる。それを倒すのがテストロッサ…お前達だ」

「私、達…?」

シグナムの言葉にフェイトは困惑する。

「そう…そして私と後に復活する守護騎士達もそれに携わることになる。…それが理想

系の形とも言える。

「ただ…：そのためには一度はやてを闇に落とさなければいけない。その闇から助け出すのも私達の仕事よ」

と、そこに仮面の男が二人して現れる。

「仮面の男!?!」

「それも二人も!」

なのはとフェイトはすぐにバリアジャケットを展開して構えるが、

「大丈夫よ二人共。彼らとももう話については」

「えっ!?!」

「どうやって!?!」

さらに混乱する二人を尻目に魔法陣が浮かび上がりそこからはやてが転送されてきた。

「あれ…? なのはちゃんにフェイトちゃんにシホちゃん。それにみんな…なにをしてるん…?」

「大丈夫ですよ、主はやて…。今詳しい事情は話せずしばしの別れとなっておりますがあなたが真の夜天の魔導書の主になる事を祈っています」

「シグナム…?」

仮面の男がその手に闇の書をとって開き、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラの四人のリンカーコアを吸収し出す。

「はやて……！ あたしは信じているからな！」

「なに……言ってるの？ ヴィータ……？」

「はやてちゃん……どうか真の目覚めを……そしてまた一緒に暮らしましょう」

「シャマル……！」

「主……もしまた会えるのでしたらまた、手料理を作ってください。私達は主の料理で活力をもらえます」

「ザフィーラ……！」

そして次第にその姿が消えていく守護騎士達。

最後に言葉を振り絞って、

「シユバインオーグ！」

「シホ！」

「シホちゃん……！」

「シユバインオーグ！」

『我が主を（はやてを）（はやてちゃんを）……頼んだぞ（頼みます）!!』

四人の言葉をもらい私はそれに力強く頷く。

「まかせて……！」

そして完全に守護騎士達は姿を消して闇の書に吸収された。

それにより闇の書は完成した。

はやては消えてしまった守護騎士達を呆然と見つめていた。

「なんなん、これ？ シグナム達が消えてもうた……そんな、そんな嫌や……いや、いやあ

あああああああああああ……！！！！」

はやては心からの叫びを上げて次にはビルの屋上が爆発を起こした。

私達は一旦避難した。

仮面の男達もとどまっている。

「シホちゃん！ どうしてこんな事に……！」

「そうだよシホ！ これじゃはやてが……！」

「二人共落ち着いて。さっきの説明を聞いていたならもうわかるでしょ？ ここからは

……」

私は次第に姿を変化していき銀髪に赤い目、黒い衣装に体中にいくつも赤い線を走らせ黒い羽を生やした変化した姿のはやてを見る。

「彼女が完全に暴走を開始してしまう前にはやての管理者権限を握らせるため、その間の時間稼ぎをしなくちゃいけないから」

私はバリアジャケットを展開してアンリミテッド・エア、ツヴァイリングフォルムを構成して先を見据えながら、

「だから、ここからはなのはの言葉を借りるなら全力全開の話し合いをしなければいけなくなるのよ」

「話し合い…」

「そう。外からも呼びかけて説得するのよ。闇の書の中のはやてを起こすために…二人共、できる？」

「うん…!」

「やってみる!」

「よし! でもそれができなかった場合は——」

「あたし達の出番っていうわけ」

そこにはまだ待機していたのかリーゼ姉妹が変身を解いて横にいた。

「リーゼさん!」

「もしかして仮面の男の正体ってリーゼさん達だったんですか!」

「そう。今まで隠していてごめんなさい」

「でもこれがあたし達の第一プラン失敗後の第二プランの切り札…」

そう言つてロツテさんはデュランダルを取り出す。

内容は完全凍結による永久封印。

「そんなプランがあつたなんて……でも、そんな事したらはやてちゃんが！」

「それを起こさせない為の第一プランよ。ちよつと待つてね？　士郎と繋がるか試してみるわ」

そして私はパスを通して士郎と念話を開始した。

《士郎、そつちの調子はどう？》

《あまりいいとは言えん。だが排除もしくは排出されることはないようだ。今からはやての意識を探す。近くにいるだろうからな》

《わかつたわ。見つけたらすぐに私に知らせるのよ》

《了解した》

それで一旦士郎との念話を切る。

「今現在士郎ははやての精神のどこかではやて本体の意識を探しているみたいよ」

「それじゃ今のところ計画は順調といったところだね」

「ええ。それじゃ戦いに巻き込まれないようにリーゼさん達は撤退して一応の準備をしておいってください」

「了解よ、シホ」

「任せたわよ、シホ」

そして二人は転移で姿を消した。

「それじゃ二人共準備はいいわね？」

「うん！」

見れば闇の書は巨大な球体のスファイアを展開している。

「…デアボリック・エミツション」

球体が膨れ上がりそれは私達に向かってくる。

それをなのはは咄嗟にラウンドシールドを使う。

私もなのはより早くロー・アイアスを出して防いでそのまま一時撤退をする。

「あの子、広域攻撃型だね。避けるのは難しいかな…」

「そうね。にしてもここまで強力なんてね。説得するのも骨が折れそうだわ」

と、そこに声が聞こえてきた。

「なのは！」

「フエイト！」

「お姉様！」

ユーノとファイア、アルフがやってきたようだ。

「ファイア。二人に事情は説明してある？」

「大丈夫です！」

「ホントフィアには騙された気分だよ…」

「右に同じ。もう黒幕と話を結んでいたなんてね」

「それってやつぱりグレアム提督のことなの？」

「ええ、そうよ」

「そうなんだ…」

なのははそう言つて少し表情を暗くする。

「ほら！　暗くなる時間があるなら全員で説得をすることを考えましょう」

「そうです！」

「それとクロノだけど先ほどリーゼさん達を捕らえたそうだよ」

「つて、第二プランが速攻で消え失せたわけなの!？」

「そうなりますね…」

「これはもう是が非でも第一プランを成功に導かなきゃいけなくなつたわね！」

そして私達はそれぞれ準備に入った。

「それでは私のデバイス『マグナ・スピア』のお披露目です！　セットアップ！」

フィアはセットアップするとその手に機械式の穂先が二つに分かれている赤い槍を手に取りバリアジャケットはシグナムに似た緑の騎士甲冑を着ていた。

みんなの準備は整つたので私達は戦闘態勢に入った。

「まずは闇の書と戦いながら話しかけることを専念して！ 士郎がはやての位置を掴んだら私も語りかけに専念するからファイアが護衛をお願いね」

「わかりました！」

「それじゃ皆、いくわよ！」

『おー！』

そしてまずフェイトとファイアが前に出て闇の書に向かった。

「はああー！！」

「やああー！！」

槍と鎌が接触するのではないかと思えるも交わずに闇の書に斬りかかる。

私となのはが距離を離れて、

「ディバインバスター！！」

「I am the bone of my sword——…：偽・螺旋剣！」
我 が 骨 子 は 総 じ れ 狂 う カラド・ボルグ

フェイトとファイアが射線上から撤退したのを確認して二人して遠距離魔法を放つ。

「…眼前の敵を防げ。ロー・アイアス」

『なっ?!』

なんで?! 闇の書がロー・アイアスを使用して私のカラド・ボルグとなのはのディバインバスターを防いだ!?

「あ！ お姉様の魔力も蒐集しています！ だからもしかしたら闇の書は宝具すらも使用できるということですか!？」

「そんな……！」

「強敵だね……」

そんな事を言っている間に、

「刃を撃て、血に染めよ……穿て、ブラッディダガー」

血染めの刃が私たちちめがけて飛来してくる。

それはまるでホーミングのように追跡してくる。

そしてモロにくらってしまい私達は吹っ飛ぶ。

「ツ！ これじゃ説得がかなり難しいわね！」

「無駄だ。お前達の行動は騎士達を通して予測済みだ」

「なら！ シグナム達が最後に希望を抱きながら消えていった事も知っているんですよ

!？」 あなたは主であるはやてを助けたくないの!？」

「助けたい。助けたいとも！ だが我が主は自分の愛する者達が消えたことに対する深

い悲しみで、これは悪い夢であって欲しいと願った。

同時に騎士達がいらない世界を否定した。主には穏やかな夢の内で永久の眠りを……

そして故に私は主の願いを叶えるために世界を滅ぼす……」

「この…！ 考えが極端なのよ！ 少しはあなた自身の希望も考えなさい！」

「主の願いが我が願いだ」

「くっ…わからず屋め」

「どう思われようと構わない…。そしてお前達に同じ悪夢を見せる」

そして闇の書は手をかかげて、

「咎人達に、滅びの光を…」

すると桃色の光が集まりだした。

まさか…！

「星よ集え、すべてを撃ち抜く光となれ…」

「もしかして、スターライトブレイカー…？」

「総員全力で回避！ できるだけ遠くに逃げるのよ!!」

『わかった!』

なのは以外がそれに強く反応して各自回避を始める。

ユーノはアルフが抱えて、なのははフェイトが抱えて、フィアは私が抱えて。

「貫け、閃光…」

「やばい！ あんなものをくらったらひとたまりもないわ！」

「フェイトちゃん、こんなに離れなくても…」

「至近で喰らったら防御の上からでも落とされる！ 回避距離を取らなきゃ……！」

「半年前の再現が広域攻撃にシフトしているなんて悪夢としか言えないわね！ フェイト、ファイア！ できるだけ遠くまで離れたら一箇所固まって……！」

「全力で防衛……！」

「です……！」

満場一致でその意見に固まった。

なのはを除いて、

「……えっと、そんなにがっちりする必要あるの……？」

「なのはは一度自分で受けてみればわかると思うわよ!? 自分の魔法がいかにかに恐ろしいものか……！」

「そうです……！」

「その意見には一回撃たれた身としては頷けるよ……！」

「フェイトちゃんまで……！」

フェイトは思い出したのか体を震わせている。

するとバルディッシュが突然ある事を言い出す。

《左方向300ヤード、一般市民がいます》

『えっ!?!』

それで慌てる私達。

取り込まれたのは私達だけじゃないの!?
それで私達はすぐにその方へと向かった。



S i d e 月村すずか

急に周りの人が私とアリサちゃん以外消えちゃった。

裏社会とまではいかないけど結構怖い目にはあつた事はあるけどこんな事は初めてだ。

「やっぱり誰もいないみたい…」

「そうなんだ…」

アリサちゃんが周りを回って戻ってきた。

何かわからないけどなにか嫌な予感がするの。

こんな時にシホちゃんがいたら守ってくれるかな…?

いや、ダメだ。今は私とアリサちゃんしかいないんだから私がアリサちゃんを守らな

きや…！

こんな時のためにシホちゃんに開いてもらった「魔術回路」が役に立つね。

吸血鬼の私がかまく力を運用できるようにシホちゃんの指導のもと隠れて訓練してきたんだから。

たとえアリサちゃんに『化物』だと思われてもいい。

私が守るよ…！

そんな事を思いながらアリサちゃんと避難していると背後から知っている声が聞こえてきた。

「あのー！ すみません、危ないですからそこでじつとしてくださいー！」

この声つてもしかして…。

振り向くとそこには四人の女の子。一人はわからないけど…、

「なのはちゃんにフェイトちゃん…？」

「それにシホ…？」

そこには私達の友達がいました。

服装はそれぞれ違うけど杖や剣を持っている。

なのはちゃんとフェイトちゃんはポカンといった表情をしている。

だけどシホちゃんが、

「ボーツとしていないで！ 来るわよ!!」

シホちゃんの一喝で二人は動き出した。

「二人はそこでじつとしていて!」

フェイトちゃんがなにかの膜を展開させて私達を覆った。

すると遠くで光っていた光がこちらに向かつて放たれてどんどん迫ってくる。

あれを防ぐというの…?」

「なのは! フェイト! ファア! あなた達も一箇所に集まって! 私が全力で防御

するから! きつとあれは二人じゃどうしようもないものだわ!」

「えっ…? でも…」

「いいから言う事聞きなさい!」

「は、はい!」

シホちゃんの鬼気迫る表情でシホちゃん以外の三人も私達の所にやってきてそれぞれなにかの魔法陣みたいなものを展開している。

その最前列にシホちゃんが立って、

「ロー・アイアスじゃダメだ。防げない…。なら、アレを使うしかない! 投影開始!」

私がつ知っているシホちゃんの呪文を唱えるとその手に黄金に輝く鞘が握られていた。

「来るわよ! 絶対に私の後ろから動かないように!」

「ア全て遠き理想郷^ロ!!」

瞬間、鞘が百以上あるパーツへと分解して私達を覆うように展開した。そして桃色の光と衝突した。

振動は一瞬だけ伝わってきたけどそれだけ。

しばらくして光はおさまったらしく、

「ふう……なんとかなってよかったわ……」

シホちゃんが防いでくれたらしくなるとかなったみたい。

シホちゃん……また守って貰っちゃったね。



Side シホ・E・シュバインオーグ

はつきりと叫びたいが今は心の中で言わせてもらおう。

本当に怖かった……!

今もアヴァロンを選択してよかったと心の底から思っている。

さて、なんとか防げてよかったけどさすが達にはバレちゃったわね。

なのは達がエイミイさんと通信していたらしく、

「もう、大丈夫…」

「すぐに安全な場所に運んでもらうから、もう少しジツとしていてね」

「すぐか達が何か言いたげにしていたけどすぐに転移魔法陣が展開して二人は転移していった。」

「見られちゃったね…」

「うん…」

「しようがないわよ。それより二人が気がかりだわ。ここはユーノとアルフに守ってもらった方がいいんじゃないかしら？」

「うん。そうだね」

「それではとフェイトは念話で二人を守ってくれとお願いしてユーノとアルフはすぐか達の方へと向かっていった。」

「…にしても範囲攻撃になって恐ろしさが倍以上になっていたわね」

「そうだね…」

「アヴァロンを使ってよかったわ。あれはただの防御魔法だけじゃ軽く貫通しちゃうだろうから」

「そこまでかな…?」

「私が防御の最後の手段を使わせる選択に迫られた気持ちになってもらいたいわ。なの

はのアレはもう人を軽く殺し得る威力よ」

「うんうん」

「そうです」

「そんなあ……私を化け物みたいに言わないでよぉ」

なのはが必死に抗議してくるがそろそろ休憩タイムは終わりのようだ。

私は必死に念話で闇の書に語りかける。

《こらー！ まだはやてを救える可能性があるのよ!? さつきも言ったけど守護騎士達は

それを信じて自ら犠牲になったのよ!?!》

《無駄だ。止めることはできない……》

《諦めるな……！ 夜天の魔導書!!》

《その名で、呼んでくれるのか……?》

《呼んで欲しくば何度でも呼んであげるわ！ だからあなたも希望を持ちなさい。主を

助けたいと思うなら……!》

そこになのはとフェイトとフィアも話に参加してきて、

《そうだよ！ 夜天の魔導書さん!》

《まだ希望は残っています！ だから……!》

《まだ絶望するには早いです!》

《だが、やはり無理だ。私は破壊しかできない。故に…》

すると突如として地面から生き物の触手が飛び出してきて私達を拘束した。

「私は主の願いを叶えるだけだ…」

念話ではなく近くまで来て生の言葉で夜天の魔導書はそう言った。

「願いを叶えるだけ…？ そんな願いを叶えて、それではやてちゃんはホントに喜ぶの！？」

なのはが拘束されながらも叫ぶ。

「心を閉ざして何も考えずに主の願いを叶えるための道具でいて、あなたはそれでいいの！？」

「我は魔導書…ただの道具だ」

「ならなんで涙を流す必要がある。それはあなたにも心があるってことでしょ!? 道具ではなく人としての…」

私が叫ぶ。

「これは主の流す涙…私はどこまでいっても所詮道具だ。悲しみなどない…」

「くっ…！ バリアジャケツトページ！」

フエイトがジャケツトをページして拘束を吹き飛ばす。

「悲しみなどない？ そんな言葉を、そんな悲しい顔で言ったって…誰が信じるものか

「！」

「そうよ！ あなたにもれつきとした心があるはずよ。それは自分を誤魔化すための嘘にしかな聞こえないわ！」

「はいです！」

「あなたは、悲しいって言っていていいんだよ？ あなたのマスターは、はやてちゃんはきつとそれに答えてくれる優しい子だよ」

「だからはやてを開放して…… 武装を解いて！ お願い!!」

私達の叫びは、夜天の魔導書は無言で通す。

しばらくしたら突然地面のあちこちから火柱が上がりだした。

これは、もう完全な暴走も近いってこと!?

士郎はなにをやっているの!?

「…早いな。もう崩壊が始まったか……。私も直に意識を無くす……。そうなればすぐに暴走も始まる。意識のあるうちに主の望みを叶える」

「それは私達の消去ということ……?」

「そうだ……」

「はやてはそんな事を願う子じゃない！」

「だが主は……」

「何度も言わせないで！ はやてはそんな子じゃない！ あなたが勝手に暴走しているだけよ」

「そう思いたければ思うがいい…。私は世界を滅ぼす…」

くっ！ 聞く耳なしか！

「なら…：なんとしてでも私はあなた自身も救ってみせる！ 嫌だと言っても無駄よ？

もう決定事項なんだから…！ だから…！」

私は剣を握り駆けようとする。

それに追尾するようにフェイトが並んで、

「あの駄々っ子を一緒に止めよう、シホ！」

「ええー！」

そして私とフェイトで同時に夜天の魔導書に斬りかかる。

「お前達も我が内で眠るといい…」

夜天の魔導書は本を私達の方へと開いた。

何をしようというの…？

でももう止まることはできない…！

そして斬りかかった途端、魔法陣に防がれた。

瞬間、悪寒が襲う。

気づいた時には私とフェイトの体は発光しだした。力が抜けていく感じがする……!

「闇に、沈め……」

「あ、やばいかもしれない……。なのは！　ファイア！　後は頼ん——……」

「シホちゃん！　フェイトちゃん！」

「お姉様！　フェイト！」

二人の声が聞こえてくるがそこまで私の意識は途絶える。

第五十三話

『受け継がれる魂と記憶』

シホとフェイトが消えてしまった事態になのはとフィアットは気持ちが悪く動転しながらもエイミイにどうなったのかを聞く。

「エイミイさん！ シホちゃん達が！」

「お姉様が！」

『ちよつと待つて………！』

エイミイは必死に調べ上げる。

『シホちゃんとフェイトちゃんのバイタル、まだ健在。闇の書の内部空間に閉じ込められただけ。助ける方法は現在検討中！』

エイミイがそう報告すると一応の安心を得たのは達であった。

だがそこに割り込みで通信が入ってくる。

相手はリーゼ姉妹だった。

『エイミー。シホはどうなったの!?!』

『ロツテ!?! い、今シホちゃんは闇の書の内部空間に閉じ込められているみたいなの…』

『…そうか。でもまだ第一プランは続行でよろしく』

『どういうこと?』

『まだ八神はやての精神にアーチャーが語りかける希望が残ってる。』

それにもしかしたらシホも内部から八神はやてにたどり着くかもしれない』

『…わかった。なのはちゃん、ファイアちゃん! だからまだ闇の書の意味に説得をよろしくね』

「わかりました!」

「はいです!」

そして二人を吸収した闇の書は。

「…我が主もあの二人も醒める事のない眠りのうちに、終わりになき夢を見る…生と死の狭間の夢、それは永遠だ」

「永遠なんてないよ…。みんな変わって、変わっていかなきゃいけないんだ。私も、あなたも!」

「そうです! そんなものはまやかしです。夢とは淡いもの…いずれは醒めるものなんです!」

二人は杖と槍を構え、

「なのはさん、いきますよ！ 私は前に出ます！ 後方からお願いします！」

「わかったよ、ファイアちゃん！」

「お姉様達が帰ってくるまで頑張りましょう！」

「うん！」



Side シホ・E・シユバインオーグ

ここは、どこだろう…？

…私は、確か。

夜天の魔道書と戦っている時になにかの攻撃を受けて意識を奪われたはずだ。
光が目を覆う。

それで開けてみるとどこか懐かしい場所だった。

「え…？ 衛宮家の、私の部屋、か？」

ッ!? 声が！

気づいてみて私はあることに気づく。

今は衛宮士郎の体だ。

ど、どういうことだ？

私は…一体？

「先輩、起きましたか？」

こ、この声は…！

ふすまが開かれそこから私の後輩の桜が姿を現した。

「さ、桜なのか…？」

「…？ もう、どうしたんですか先輩。今日はいつも以上にお寝坊さんのようですね。

すぐに目を覚ましてくださいね。居間ではもう皆さんが待っていますよ？」

「みんな…？」

「はい。藤村先生にセイバーさんにライダー、姉さん、バゼットさんにカレンさんです」

「…！」

「…もう、先輩は本当にどうしたんですか？」

「い、いやなんでもない。すぐに向かうから待っていてくれ」

「わかりました。それじゃすぐに来てくださいね？ 今日先輩の代わりに私が腕によ

りをかけて料理を作ったんですから♪」

笑みを浮かべながら桜は部屋を出ていった。

「……………」

私はしばし無言になる。

だが考えていても埒があかないのですぐに居間に向かうことにした。

居間の前に到着すると、

「おや、シロウ。今日はずいぶん遅いようですね」

「…あ、ああライダー。ちよつと寝ぼけていたみたいだ」

「そうですか。それとお早うございますシロウ」

「ああ、おはよう」

ライダーは笑みを浮かべながら部屋に入り席につく。

しかし現実ではライダーはいなかった。ならやはりこれは夢、か？

そこには私にとって懐かしい顔が勢ぞろいしていた。

「もう士郎く！ 遅いよー？ お姉ちゃん、お腹が空き過ぎちゃったよー」

「タイガはいつものことでしょう」

「むっ…そういうセイバーちゃんだって士郎が来るまでイライラしていたじゃないか

」

「そ、そんな事はないです。王たるものこれくらいの我慢は…」

「はいはい。藤村先生にセイバーも朝から騒がないでください。それよりおはよう、衛宮君」

「お、おはようリン」

「ツ!? え、衛宮君、いつから私のことを呼び捨てするようになったのかしら？ 私は許していないわよ?」

「え？ あ、いやなんでだろうな」

「……………なによ。まるでアーチャーじゃない…」

リンはブツブツと呟きだした。

「朝から口説きとはさすがですね衛宮士郎。私もその毒牙にかからないように気をつけましょう」

「カレンは何を言っているんですか。士郎くんが困っているでしょう?」

「あら？ バゼット、この早漏れにはちようどいいくらいのものでしょう?」

カレンがまたありもしない事を呟く。

「か、カレン…だから私にはそんな記憶はないと…」

「いえ、士郎くんはアヴェンジャーの記憶を受け継いでいるのですからどういった内容かは知っていますでしょう」

「そ、それは…」

「なにになに？　士郎、お姉ちゃんに隠れてなにかやましい事してんの？　お姉ちゃんは許さないぞー！」

「落ち着け、藤ねえ！」

朝食の前から色々と騒ぎ出す一同。

：ああ、これは私がつとも幸せの時間だと思ったものだ。

ここにはもう私が手にできない輝かしい過去がある。

『いちそうさまでした』

全員での食事が終了し私は後片付けをしている最中だ。

桜は最初手伝うと言っていたが朝食から片付けまで悪いと思ったので一人ですると言って断った。

その桜はリンと一緒に出かけを去っていった。

バゼットとカレンも教会の方へと向かっていき藤ねえも学校へと向かっていった。

ライダーはバイトに向かい今現在家に残っているのは私とセイバーだけだ。

「セイバーは、どう思っているのだろうか…この世界について」

後片付けを終了しどうしたものかと居間でボーっとしていると突然背後から気配を感じて私は振り向こうとした。

でもそれより早く首に手を回されて後ろから抱きつかれた。

こんな事をするのは…、

「シロウ、遊びに来たわよー」

「イリヤ…?」

そこには私の最愛の姉の姿があった。

自然と私は涙ぐんでしまった。

「…どうしたのシロウ? どこか痛い…?」

「なんでもないよイリヤ…そう、なんでも…」

「そうかなー?」

「ああ…」

「イリヤスフィール…来ていたのですね」

そこにセイバーがやってきた。

それで思い切って私は二人に聞いてみることにした。

「なあ…セイバーにイリヤ。単刀直入に聞くけど…この世界は私の理想の世界の夢なんだよな?」

「……………」

二人は無言。

しばらくして、

「…はい、そうですシロウ。あなたは夢を見ているのです」

「だから今こうして私達は自然とシロウと話していられるんだよ?」

「だったら…」

「いいではないですか…」

「えっ…?」

セイバーの思いがけないセリフに私は思わず言葉が詰まる。

「たとえ夢だとしてもここにはシロウ…あなたの幸せな世界が広がっています」

「永遠に続く悲しみの一切ない私達の理想の世界だよシロウ? 一緒にここで暮らそう

…?」

「……………」

二人からそんな話を振られる。

でも、こんな世界はありえない。だからこそこんな世界にいてはダメだ。

「…悪いけど二人共。私はこの世界にはいられない…。一回捨てた身でこの夢の世界に留まることは…みんなに、特にセイバーとイリヤに失礼だ」

「そうですか……………、ふう、安心しました。シロウ、私はもしあなたがこの世界に留

まる選択をしたら切り捨ててるつもりだったんですよ?」

「私も…きつとシロウを殺すわ」

それで私は苦笑いを浮かべる。
やっぱり敵わないな。

次第に世界にヒビが入っていき世界は砕け、気づけば私は衛宮士郎からシホ・E・シュ
バインオーグの体に戻っていた。

でも世界は砕けたというのにまだセイバーとイリヤは一緒にいる。

これはどういう事だろうか。

「安心してください、シホ。私はあなたと共に存在しています。アンリミテッド・エアの
中からシホのおかげで自由に出れるようになりました」

「私もシホの体の中にそのうち戻るわ」

「そっか」

「さて、では行きましょうか」

セイバーがそう言う。

でも、行くって言うてもどこへ。

「まだシホと完全に統合できていない人の目を覚ましに行くのです」

「ついてきてシホ」

イリヤに手を引かれて私は歩き出す。

するといつの間にかいつぞやの夢の世界に立っていた。

「はいは……？」

「シホは見えていてください」

場面はお城の中に移動する。

そこではイリヤを大人にしたような女性がオッドアイの陛下と呼ばれる女性と話をしている。

『聖王陛下……いえ、オリヴィエ王女。』

どうかお考え直してください。私は……あなたに忠誠を誓った身、なのにどうして私を聖王家でも一度だけしか使えないという異世界移動という貴重な魔法を使い、飛ばそうとするのですか……！』

『聖なる錬金術師、アインツベルン。すみません……ですがあなたの異質な魔法技術「創造物質化」はもし悪用されようならばこの戦乱の世にさらなる災いが起こる事が明白。』

予言でもそれは危険視されていますし、あなたの身も狙われることはもう何度もありました……。私の友と認めているあなたにはそんな辛い運命を味わって欲しくない……』

『しかし……！』

今度はノイズはなくしつかりと言葉を認識できる。

でも、やっぱり聖なる錬金術師というのはアインツベルンの事だったのか。

場面は動いていきオリヴィエと呼ばれた王女がアインツベルンと呼ばれる女性を抱

きしめて、

『ごめんなさい…』

抱きしめながらも、なにかの魔法詠唱とともに時空の穴が開き、女性はその穴に吸い込まれていった。

『王女！ いつか、いつかあなたの元にお戻りします！ だから…！』

王女は無言で笑みを浮かべた。

そして穴は閉じてしまい、女性は世界をさ迷う…。

「…彼女は、アインツベルンはずっと後悔していたのです。そして王女の元へと戻るこ
とができなかった不甲斐ない自分に対して怒りを感じていたのです」

「セイバー…」

「そして、アインツベルンが飛ばされてしまった世界は私達の使う魔術が存在する世界。

さらに異世界間だけでなく時間軸まで飛び越えてしまつて彼女がたどり着いたのは
私達の世界の千年以上前の事だつた…。

彼女はアインツベルンの始祖なのよ」

「つてことはイリヤのご先祖様みたいなもの…？」

「ええ、そう。でも世界に来て修正力が働いたのか彼女は「創造物質化」の魔法を劣化さ
せてしまった。

そして残ったのが第三魔法「魂の物質化」【天ヘブンズ・ファイールの杯】なのよ。まあ、彼女はその過去を隠して魔術の世界に血を残したらしいのよ。

でも、使い方を誤ったのか血を継いだ一族は第三魔法すら失い聖杯にまで願うようになったのが今のアインツベルンなのよ」

そんな壮大な歴史がアインツベルンにあったんだ。

「ちなみに私は四日間の聖杯戦争後に、宝石翁にまだサーヴァントとして存在している間に協力してもらいまだ世界を飛ばされる前のアインツベルンに会っていたのです」

「えっ!？」

「そして【創造物質化】の魔法を執行してもらいサーヴァントの魂をそのままに融合騎：ユニゾンデバイスに物質化させていただいたのです。

宝具であるアヴァロンとエクスカリバーと一緒に。シホの助けになるために…」

「そうだったのセイバー…」

「ええ。そしてアンリミテッド・エアの中に眠りについた後、宝石翁に運命の魔術をかけてもらい長い年月をかけて巡り会えるようにしていただいたのです」

「大師父に助けてもらえばなしね、私…」

「感謝をした方がいいですね、シホ」

「ええ。でも、それじゃどうして私と士郎は魂が二つに分かれてしまったの…?」

その疑問を述べると二人は曖昧な表情をしないで、

「それは…まあこれから分かることです。ではそろそろ登場してもらいましょうか」

……………——分かりました。

そこに新たな女性の声が背後から聞こえてきて振り向くとそこには先ほどの記憶の女性が立っていた。

「こうして話すのは夢以来ですね。シホさん…」

「あなたは…」

「私はアインツベルンの始祖…名は、『シルビア・アインツベルン』です」

「シルビアさん…」

「はい…。この言葉は覚えていますか？」

『どうか私の悲願を叶えてください。きつとあなたの時代に王は再誕するでしょう。彼女をどうか守ってください…』

…と、いう言葉を…」

「これも夢の言葉通りだ。ちゃんとノイズもなくしっかりと聞き取れる。

「はい。覚えています。でも、再誕、か…。王というのはやっぱり…」

「はい。オリヴィエ王女の事です。

私は結局元の世界に、陛下の下に帰ることができなかった。

だからあなたがゼルレツチさんの第二魔法で世界を飛ばされる瞬間、チャンスだと思いました。

まだ私の魂は根源にいかず、イリヤスフィールの中に記憶とともに残っていたのです。

あなたがイリヤスフィールの魂も宿った体に移った時に私はあなたの魂にも憑依したのです。

でももとよりシホさん、イリヤスフィール、そして私という三人分もの魂が一つの体に納まるわけがなく、魂が収まるちようにいい分配で世界を飛ばされた瞬間にシホさんの魂が二つに分かれてしまったのです。

そして分かれた魂は世界からの情けとも言うべき判断で彼に似合う動物の使い魔の姿にさせられ記憶をなくし飛ばされたのです」

それでシルビアさんは頭を下げて私に謝罪をしてきた。

「…なるほど。そんな経緯があつて私と士郎は分かれてしまったんですね」

「ごめんなさい…」

「いいですよ。士郎も使い魔という存在になりましたが今私とは別に家族を得ています

から」

「そうですか…。でも、まだ完全に私の魂とシホさんの魂は混ぜ合っていないのです。だから断片的に夢で私の記憶を見せることしかできませんでした…。

ですが、言い方は悪いですがたまたまなのか、それともこれも運命なのか夜天の魔導書があなたを夢の世界に連れてきてくれたおかげですべてがリンクし繋がりました」

そしてシルビアさんは私を突然抱きしめて、

「今、あなたに私のすべてを託します…」

シルビアさんの体が光りだして光の粒子となって私の体に流れ込んでくる。

「後は、お願いします…」

そう最後に言っただけでシルビアさんは完全に私の魂と融合した。

途端にシルビアさんの生涯の記憶と知識、経験の情報が流れ込んでくると同時に第二魔法を会得した時と同じように私は根源の渦に手を伸ばすイメージが浮かび、知識が流れ込んできて、気づけば…。

「第三魔法………会得してしまったの?」

「その通りです」

「シホもすごい存在になっちゃったよね。第二と第三の魔法を両方使えるんだから。おまけに一回きりだけだけど裏技が使えるんだから!」

今まで黙っていたセイバーとイリヤが話しかけてきた。

そう、確かにイリヤの言うとおりの一回きりだけどすごい奇跡を起こすことができる。その一回をどう生かすか殺すかが私の手に握られたわけね。

「それでは、そろそろ私はアンリミテッド・エアの中に戻ります。シホ、いつでも呼んでください。私の力はシホとともに…」

セイバーはアンリミテッド・エアの中に戻った。

イリヤも笑顔を浮かべて、

「シホ、悲しみにくれている子を救ってあげてね…?」

それと完全に魂が同調したから今度は緊急時だけじゃなくても私といつでもお話できるし魔術回路も直結できるからいつでも話しかけてね」

「わかったわ、イリヤ」

そしてイリヤも私の中に戻っていった。

すべてを正しく認識した私ははやての元へと向かうのだった。

第五十四話

『救済と戦闘準備』

S i d e 八神はやて

「眠い……………眠い……………」

私はどうしたんやろ。

なんか非常に眠いし、それになにか悲しい出来事があったようみたいやけどそれも思
い出せへん。

眠りそうになるけど、だけど寝たら終わりだ、という思いで必死に起きてようとする。

それで目をなんとか開くとそこには銀色の髪に赤い瞳の女性がいた。

なんか知らないけど私、この人のこと知っているみたい。

でもとても悲しそうな目をしとる…。今にも泣き出しそうや。

「そのまま休みを、我が主。あなたの望みは、全て私が叶えます。目を閉じて、心静かに夢を見てください」

その人はそう言うときさらに眠気が襲ってくる。
でも思う…。

私は、何を望んでいたのだろうか…。

でもそれも今は思い出せない。

とても大切なことだと思ふのにモヤがかかったかのように思い出せない。

「夢を見ること。悲しい現実は全て夢となる、安らかな眠りを…」

その人はそう言うけど、

（それは、あかん…）

必死に眠気と戦う。

この人が言っていることは何かおかしい。

まだこんなところで眠ったらあかん。

「私の本当の、望みは…私が欲しかった幸せは…」

「健康な体。愛する者たちとのずっと続いていく暮らし…眠ってください。そうすれば
夢の中であなたはずっと、そんな世界にいられます」

それはなんか違う。

私は首を何度も振り、手を握り締める。

「そやけど、それはただの夢や！」

意識が急にはつきりとし出す。

すると後ろから頭に誰かが手を乗せてきた。

この手には覚えがある。

この大きい手は……！

「——そうだ。夢はいずれ醒めるものなのだからな」

「アーチャー！」

「よく頑張ったな、はやて……だがもう大丈夫だ」

アーチャーが笑みを浮かべて何度も私の頭を撫でてくる。

なんかくすぐったいけど、でもいい気分や。

「なぜだ！ なぜお前がここにいる！ アーチャー！ ここは私と主だけの世界だとい

うの……！」

「何故と言われてもな。気づいていなかったのか？ 騎士達の記憶を見ればすぐにわか

るだろう」

「なに？……そうか、主に憑依していたのか」

「そうだ。ここまで来るのに苦労したがな。そしてはやてと守護騎士……そして闇の

書、お前も救うためにやってきたのだ」

アーチャーが力強くそう宣言した。

でも、するとこの目の前にいる女の人が闇の書ということになるんか。

「それとはやてにもだが一つ言っておく。私の本当の名は衛宮士郎だ」

「衛宮士郎……それがアーチャーの本当の名前……」

「そうだ。……さて、では闇の書」

「……なんだ？ お前はこれから何をしようとするのだ？ 私を殺すのか？」

闇の書がそう言うのと士郎は呆れた表情になり、

「先程もいっただろう。私は君達全てを救うとな。履き違えるな？」

……と、言ってもここまで来れたのはいいが私のできることはないに等しい」

「ではなにをしに来たというのだ？」

「はやての背中を押しに来た、と言えばいいか？」

「なに……？」

私の背中を押しに来たってどういうことやろう？

「はやての中から見ていたがシグナム達はシホと私にはやてのすべてを任せて消えていった。」

その想いに報いるためにもはやてにはある事をしてもらいたい」

……あ、思い出した。そうや。シグナム達は私に家族の誓いのような言葉をかけながら消えて行ったんや。

それで私は目に涙を溜める。

「はやて…お前にしてもらいたい事というのはな」

「うん、話して士郎…」

「闇の書の主として管理者権限を行使して、ここにいる闇の書と今外で暴れている闇の書の両方を止めてもらいたいのだ」

「え、でもどうやって…」

「それは直接闇の書に聞けばわかることだ。私もすべてを知っているという訳ではないからな。」

しかし、掌握できなければこのままでははやては闇の書に飲み込まれて死んでしまうことになる。

「おまけに暴走した後は外の世界を魔力がつきるまで破壊する権化とかしてしまおうだ」

「そ、それは嫌や！ そないなことしたくない！」

「だから暴走するまでに闇の書に管理者権限の取得方法を聞き出すんだ」

士郎はそう言って闇の書に目を向ける。

それに闇の書は反応を示すが、

「……………無理です。私では暴走を止めることはできません。」

自分ではどうしようもならない力の暴走。あなたを侵食することも、暴走してあなたを喰らいつくしてしまう事も、止められない……」

闇の書はそう言つて悲しみの顔をする。

でも、なんとかしないといけない。

幸い覚醒の時に色々とわかつた事がある。

ただ悲しんでいるだけじゃダメなんや。

「士郎がさつき言つた言葉。『夢はいずれ醒めるもの』。もう私は十分休んだ。

どんなに幸せの夢を見ていようともそれは胡蝶の夢でしかない。

それなら私は現実を見て歩いていきたい。どんな辛い現実がこの先にも待つていよ

うとも……守護騎士の皆や士郎……それにあなたがいれば乗り越えていけると思うんよ」

「主……」

「それに私はそんな事を望んでいない。だから……闇の書、あなたの力を貸して……」

その時やつた。なにかこの空間にヒビが入つたような感じがした。

「来たか……」

士郎がそう言う。

「馬鹿な……！ 士郎はともかく取り込まれたものが夢から醒めて、しかもここまで侵入してくるなんて！」

誰かが入ってきたみたいや。

誰やろうと見てみるとそこには士郎と似たような格好をしているシホちゃんの姿があった。

「士郎のラインを辿ってきたけどたどり着いてよかったわ。そしてどうやら話はいい方向に向かっているよね」

「ああ。後は管理者権限を握らせればどうにかなるかもしれない」

「そう…割り込みのような形で悪いと思うけど夜天の魔道書、あなたははやてを救いたいんじゃないの?」

「それは…」

「戸惑うようなら前向きに開き直ってはやてを救う手を考えなさい!」

あなたのマスターの一大事でしょうが!

それに主に従う魔導書なんだから主の命令には従うのが筋でしょ?」

そうや。私は闇の書の主。

「シホちゃんの言う通りや。」

今のあなたのマスターは私や。マスターの言うことはちやんと聞かなあかん」

途端、なにかが繋がった感じがした。

魔法陣が浮かび上がる。

それといつまでも闇の書なんてけつたいな名前はいらない。
だから……!

「あなたに名前を上げる。闇の書とか呪いの魔導書なんて言わせへん。わたしが呼ばせへん!

私が管理者や。∴私にならそれができる」

「無理です。自動防御プログラムが止まりません。管理局の魔導師が戦っていますが、それも……」

この子が何か言うけど聞いてあげない。

止めてみせる……!

そう強く念じる。

そして外への干渉を始める。

「外にはなのはとフィアがいると思うわ。二人に語りかけてみて。はやて」

「うん。わかったわ。外にいる方! 管理局の方、なのはちゃん! 聞こえますか!?

そのところにいる子の保護者、八神はやてです!」

『その声ははやてちゃん!?!』

「うん、そうや。今ここにはシホちゃんもおるで!」

『お姉様もですか! 成功したんですね! さすがです!!』

「それではのはちゃん、ごめん。その子をなんとか止めてあげてくれる？」
『えっ？』

「魔道書本体からはコントロールを切り離れたんやけどその子がああしていると管理者権限が使えへん。」

今そつちに出てるんが自動行動の防御プログラムだけやから」

『え？ え？』

なのはちゃんはわかっていないようだ。

と、そこでシホちゃんが私の肩に手をのせて外に話しかけるようにした。

すごい……！

「なのは！ フィア！ まどろっこしい説明はなんだから簡潔に言うわ！

どんな方法でも構わないからその外の奴を魔力ダメージでぶっ飛ばしなさい！！ そ

うすれば私達は全員外に出れる！」

『さっすがシホちゃん！』

『わかり易すぎます！』

「頼むわよ！」

『はい！』

どうやら分りやすかったらしい。

その間に私はこの子に名前を上げる。

少し恥ずかしいけど両手でこの子の頬を持ち、

「夜天の主の名において、汝に新たな名を贈る。」

強く支える者、幸運の追い風、祝福のエール……………『リインフォース』

瞬間、この空間が光に包まれて、

「…どうやら私達も外に出られるようね。リインフォース。いい名前をもらったわね」

「はい。私にはもつたいないくらいの名前です。感謝します、我が主…」

「うん」

「それじゃまた外で会いましょう。はやてにリインフォース」

「待っているぞ」

シホちゃんとうとうと一郎がこの空間から先に姿を消した。

「新名称、リインフォース認識。管理者権限の使用が可能になります」

「うん…」

「ですが、防御プログラムの暴走は止まりません。管理から切り離された膨大な力がじきに暴れます…」

「うん。まあ、なんとかしよう…いこか。リインフォース？」

「はい。我が主…」



Side シホ・E・シュバインオーグ

どうやら外に出られたようだ。

見れば私の肩には士郎が鷹の姿でとまっている。

フェイトも脱出できたようである。

あつちはどんな夢を見ていたのかな。

そこにファイアが高速の勢いで私に抱きついてきた。

「信じていました！ お姉様！」

「うん。それまでよく頑張ったわね。ファイアも、なのはも」

「うん！」

『みんな気を付けて！ 闇の書の反応、まだ消えてないよ!!』

そこにエイミイさんの警告の音が聞こえてくる。

これからが正念場という事ね…！

見れば目の前に黒いよどみが出来上がっている。

見ようによつては今にも破裂して厄災を振りまく球体のように見えるわね。

『みんな！ 下の黒いよどみが暴走が始まる場所になる。』

クロノ君が到着するまでむやみに近づいちゃダメだよ！』

エイミイさんの報告で私達はただそれを見守る。

それと上の方に白い球体が浮いている。

周りには四つの光が浮かんでいる。

きつとあれが…。

瞬間、球体は光をあげた。

そして光が収まつたらそこには守護騎士達が立ち並んでいた。

「ヴィータちゃん！」

「シグナム！」

なのは達が声を上げる。

「我ら、夜天の主の下に集いし騎士」

「主ある限り、我らの魂尽きる事無し」

「この身に命ある限り、我らは御身の下にあり」

「我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に」

騎士達がそれぞれ宣言を述べると中心の白い球体が割れて騎士の甲冑を着たはやて

の姿が現れた。

はやては杖をかかげる。

「夜天の光よ、我が手に集え。祝福の風リインフォース、セーットアップ！」

その掛け声とともにはやての甲冑にさらに追加の武装が施されていき闇の書と似たような格好になった。

士郎がはやての方へと飛んでいき肩にとまる。

守護騎士達ははやてにそれぞれ謝罪の言葉をのべる。

それにははやては柔らかい笑みを浮かべて大丈夫といった。

はやてが「おかえり、みんな」と言うときヴィータが感極まったのかはやてに抱きついて泣き出した。

どこか和やかな空気が流れる。

私達はそんな空間を邪魔しないようにしながらも近くによる。

「なのはちゃんにフェイトちゃん、それにシホちゃんもごめんな。うちの子達が迷惑かけて」

「ううん」

「平気」

なのはとフェイトがそんな事はないと首を振る。

「シユバインオーグ…約束を守ってくれて感謝する」

「ええ。これでもう素直に感謝の言葉を受け取ることが出来るわ。はやてを救う事ができたんだから」

「ああ…」

それで和気あいあいな空気になるかもしれないところでクロノが出てきて、
「水をさしてしまつて悪いが、僕は時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。」

時間がないので簡潔に説明する。あそこの黒い淀み、闇の書の防衛プログラムがあと数分で暴走を開始する。

僕らはそれを、何らかの方法で止めないといけない。停止のプランは現在三つある。

一つ、極めて強力な凍結魔法で停止させる。

二つ、軌道上で待機している艦船アースラの魔導砲アルカンシエルで消滅させる。

そして三つ目は…」

クロノは私の方へと向き、

「シホのエクスカリバーによる絶大な威力で塵も残すことなく消滅させることだ。シホ、できるか？」

「まあ、前までならできなかつたけど…私は夢の中である人の意思を受け継いだ。それによつてセイバーを呼び出せる。セイバー、出れる？」

『はい、大丈夫です。シホ』

そしてアンリミテッド・エアから光が飛び出しセイバーが姿を現す。

「なっ!?! セイバー、なのか!」

「ええ。シロウは私がいる事を知るのは初めてでしたね。ですが今は…シホ、いきましよう!」

「ええ! セイバー!」

『ユニゾン・イン!!』

瞬間、私とセイバーはユニゾンして赤い聖骸布の甲冑は一瞬で解ける。

そして代わりにセイバーの青いドレスが纏われその上に騎士プレートがはめ込まれて行き私の姿はセイバーに近い格好へと変貌を遂げた。

髪の色も朱色から金色に変わり、目の色も碧眼へと変わった。

《Excaltiburform.》

アンリミテッド・エアが聖剣エクスカリバーフォームへと姿を変えた。

「…よし。これでいつでも準備は万端よ」

「よ、よし…これで三つ目の手段も実行可能となったな」

クロノは少し驚いているようだけどなんとか平静を保てたようだ。

「それで、でもシホのエクスカリバーも威力が甚大だからこれ以外にもなにか方法はな

いか？

闇の書の主とその守護騎士達に聞きたい」

「えっと、最初のは難しいと思います。」

主のいない防衛プログラムは、魔力の塊みたいなものですから」

「凍結させても、コアがある限り再生機能が止まらん」

これで第一プランは消えたことになる。

「アルカンシエルも絶対ダメだ！　こんなところでアルカンシエルなんか撃つたらはや

ての家までブツ飛んじやうじやんか！」

「そ、そんなにすごいの？」

「発動地点を中心に数十キロ範囲の空間を歪曲させながら反応消滅させる威力を起こさせる魔法、っていうとだいたいわかる？」

ユーノの説明にとりあえずなのは達はその凄さをわかったらしい。

「あの、私はそれ反対！」

「同じく！　絶対に反対！」

「僕も艦長も使いたくないよ…でもあれの暴走が本格的に始まったら被害はそれより遙かに大きくなる」

「暴走を開始すると触れたものを侵食して無限に広がっていくから」

「それで第三プランだ。シホ、エクスカリバーの範囲はどれくらいだ？」

「限定して撃てば被害は海上だけだと思うけど…それだとやっぱり津波が起きちゃうからね。どこか別の場所で広い空間が必要になってくる…」

「あるではないか？」

「士郎…？」

「一つだけそんな場所があるじゃないか」

「まさか…！」

「そう…固有結界内部だ」

そうか。固有結界内部でエクスカリバーを使えば被害はなくて済む。

でも、

「でも、固有結界とエクスカリバーだけでも消滅は難しいと思うわ。そこは保険でどうするの？」

「やっぱり振り出しに戻ってくるわけか…」

「ええ。それに固有結界を展開するだけの魔力は…あるけど時間が少ないわ。でないとな暴走してまた剣が体を突き破ってくる」

それで私はそれで残りのまだいくつか持ってきていた魔力の籠った宝石を取り出しそれを飲み込む。

その光景に全員は呆気にとられたらしい。

でもすぐに再起動して、

「シホちゃん！　なんで宝石なんて飲んでるの!？」

「魔力補充の為よ。まだいくつかあるけどその中で一番魔力が籠っている宝石を飲ませてもらったわ。これで多分大丈夫…」

『シホ、私の魔力も使ってください。あれをするのならそれくらい持つていったほうがいいでしょう』

《私の魔術回路も直結して使用していいわ、シホ。これでかなり補えるはずよ》

セイバーとイリヤからも魔力を受け取りこれでかなり万全な状態になった。

「今、セイバーの声と一緒にイリヤの声が聞こえてきたな…」

「それも後で説明するから、ね？」

「…わかった」

それで最後の保険としてやっぱりアルカンシエルで消滅させる件だが、その話になり反対の意見が大多数を締めた。

それで色々意見を交わされるがどれもダメだということになった。

それでアルフが痺れを切らして、

「ああもう、なんかごちやごちや鬱陶しいなあ！　みんなで纏めてズバツとふっ飛ば

すってんじやイケナイの!？」

「アルフ、これはそんな単純な話じゃ…」

「ううう…」

それでアルフは押し黙るが代わりになのは達がなにやらブツブツ言いだし始める。

それで三人娘はなにかを思いついたのか提案をしてきた。

「ねえ、クロノ君！ アルカンシエルって、どこでも撃てるの?」

「どこでもって、例えば?」

「いま、アースラがいる軌道上」

「宇宙空間で」

そこでエイミイさんから通信が入り、

『管理局のテクノロジー、舐めてもらっちゃ困りますよ。撃てますよ。宇宙だろうとど

こまでも!』

どうやら宇宙空間までコアを転送して滅ぼそうということらしい。

なかなか面白いことを思いつくな。この子らは…。

それでプランは固まっていた。

「実に個人の能力頼りでギャンブル性の高いプランだがまあ、やってみる価値はある」

「防衛プログラムのバリアは第四層まで破る」

「そして私が固有結界とエクスカリバーを叩き込む！」

「それでもダメだったら本体を抜いて私達の一斉攻撃でコアを露出！」

「それならユーノ君達の強制転移魔法でアースラの前に転送！」

『後はアルカンシエルで蒸発、つと』

リンデイさんがそう言いつて締めくくる。

クロノがグレアム提督と話しているようだけど今は固有結界を展開するために集中しなければいけないので構ってられない。

第五十五話

『決着』

S i d e グレアム

画面で見えていたがシホくんは約束通りはやて君を救ってくれたようだ。

後は闇の書の闇を排除すればすべてが終わる。

クロノにもデュランダルを託すこともできた。

そして通信越しにクロノから、

『提督、見えますか？』

「ああ、よく見えるよ」

『闇の書は呪われた闇の書でした。その呪いはいくつもの人生を喰らい、それに関わった多くの人の人生を狂わせてきました。あれのおかげで僕も母さんも…。』

他の多くの被害者遺族もこんなはずじゃない人生を進まなければいけなくなった。

それはきつとあなたも…、リーゼ達も、無くしてしまった過去は変えることはできない。だから今を戦って未来を変えます!』

「そうか…頼むぞ。クロノ」

『はい!』

そして通信は終了し私はやってきたレティに、

「レティ提督。これで私ももう思い残すことはない。だから逮捕してもらって結構です」

「そうですか…。グレアム提督。あなたには捜査を混乱させた捜査妨害にクラツキング。他にも過去の闇の書のデータの改竄の罪があります。

そしてリーゼ達にはシホさんを非殺傷設定を解除して殺害しようとした民間人殺人未遂罪もあります。

さらに闇の書の主であるはやてさんを強制封印しようとした。これだけです。多くの罪があります。

おそろくかなりの任期の間、幽閉されると思いますが…」

「分かっている。それは承知のことだった。それとシホ君とフィアット君の件だが彼女等はただ私の言う事に従わざるえなかったということにしておいた。

だから彼女達には罪をかさないでくれ。彼女達は私と違いはやて君を救うために行

動していたのだから」

「…わかりました。グレアム提督の意向のままに事を進ませていただきます。

それですが情状酌量の余地もあると思いますからそう長い任期ではないでしょう。安心してください」

「そうか…」

「ですがこれ以降厳しい刑罰で大幅な魔力の封印をかけられると思います。

ですからリーゼ達を維持するくらいの魔力だけになると思います」

「娘達を無くさずに済むのなら一向に構わない」

「父様…」

「お父様…」

それでリーゼ達が涙を流しながら寄ってくる。

二人の頭を優しく撫でた。

「それと…彼女達の活躍を最後まで見ていってください。それくらいなら大丈夫です」
「感謝する、レティ提督」

それで私達は今も行われようとしている最後の戦いを見ることにしたのだった。



Side 衛宮士郎

「いいわね、みんな？ 固有結界を使用したら一旦私達は別世界に行くと言っても過言じゃないわ。」

その間は外界と一切通信が遮断されるからエイミイさん達の指示もきつと受けられない。

だからエクスカリバーを叩き込んでも闇の書の闇が消滅できなかつたらすぐに固有結界を解除するから。

そしてなのは達が最後にコアを露出させてユーノ達が転送！ わかった？」

「「はい！」「」」

『暴走開始まで後、二分！』

あと、二分か。シホも準備をしていることだし私も一働きをするか。

と、そこではやてがシホ達の傷についてシャマルに指示を出す。

「はい、みんなの治療ですね。」

特にシホちゃんが一番頑張るんですから万全にしておかないと。クラールヴィント、本領発揮よ」

《Ja》

「静かなる風よ、癒しの恵みを運んで」

それでシホ達は緑の光に包まれてあらかた傷は回復した。

「すごいわね…」

「湖の騎士・シヤマルと風のリング・クラールヴィント、癒しと補助が本領です」

その後、役割分担が決まる。

攻撃班のなのは嬢、フェイト嬢、シグナム、ヴィータ、はやて、私、ファイアット嬢、ク

ロノ。

サポート班のユーノ、アルフ、ザファイラ。

そして闇の書の闇の消滅を検討に入れたシホの固有結界にエクスカリバー。

これだけ揃っていればできないことなんて何も無いと言いたい。

そして暴走が始まる。

球体のはじけて中から化物《防衛プログラム》がその姿を現す。

「シホー」

ユーノに足場を作ってもらっている私はシホにタイミングの指示を出す。

「ええ、わかつたわ！———」

I am the bone of my sword.

それによって一枚目のバリアにヒビが入る。

and fire is my blood. Steel is my body,

「高町なのはと、レイジングハート・エクセリオン。行きます！」

《Load cartridge.》

「エクセリオン・バスター!!」

杖から高出力の砲撃が放たれる。

《Barrel shot.》

「ブレイク：シューート!!」

なのは嬢の砲撃で一枚目は完全に砕けた。

I have created over a thousand blades.

「次はシグナムとテストタロツサちゃん！」

シヤマルの叫びにシグナムがまず答える。

「劍の騎士シグナムが魂…炎の魔劍レヴァンティン！ 刃と連結刃に続くもうひとつの姿…」

《Bogenform》

劍と鞘を連結させ弓を形成するレヴァンティン。

そこから炎が上がりだし一本の矢が化物に狙いをつけられる。

「翔けよ…隼！」

《Sturmfalken》

放たれた矢は二枚目のバリアにヒビを与える。

そして次はフェイト嬢。

「フェイト・テストロツサ、バルディツシュ・ザンバー！ いきます！」

魔力刃から発せられる衝撃波で一度吹き飛ばした後、

「撃ち抜け雷神！」

《Jet Zamber》

大なる斬撃で第二層のバリアを切り裂く。

Unaware of loss. Not aware of gain.

化物が抵抗をして触手から魔力砲が放とうとするが、

「盾の守護獣ザフィーラ！ 砲撃なんぞ、撃たせん!!」

叫ぶと同時に魔法が展開し光の棘が出現し触手を次々と貫いて砲撃を止める。

「次ははやてちゃんに士郎さん！」

「次は私達の番か。はやて、ミスを犯すなよ？」

「士郎もな！」

それで先に私が構えを取る。

「——I 我 a m が t h e 骨 b o n e 子 o f は m y は s w o r d は………カラド・ボルグ 偽・螺旋劍

！」

シホから送られてくる十全の魔力でもってしてカラド・ボルグを放つ。

それによつて三枚目を貫いていった。

——担 W i t h い s t o o d 手 p a i n は t o こ c r e a t e に w e a p o n s 孤 .

さて、次ははやての番だ。

「彼方より来れヤドリギの枝、銀月の槍となりて撃ち貫け！」

はやてが夜天の魔導書を開き魔法陣を展開する。

それによっていくつもの光が出現する。

「石化の槍……ミストルティン!!」

石化の槍が当たった防衛プログラムは石化して砕ける。

それによって第三層を完全に砕く。

——
w a i t i n g ^剣 の ^丘 f o r ^で o n e ^鉄 , s ^を a r r i v a l ^鍛

「最後の第四層はファイアットちゃんにクロノ君!」

「わかりました! いきますよ、クロノ!」

「ああ、ヘマをするなよファイアット!」

「そちらこそ!」

そして先にファイアット嬢が動き出す。

「マグナ・スピア! フルドライブ!!」

《Fullmoonform》

槍が突如として鎖付き鉄球へと姿を変貌させ、

「月の煌きよ! 粉碎せよ!!」

《Mondglitzer》

「でやあーーーーー!! ぶち壊れなさい!!」

振り回された鉄球は巨大化しその勢いをつけて振り下ろされヴィータの攻撃の再現のように第四層を砕いた。

This is the only path I have no regrets.

「決めてやろう! 行くぞ、デユランダル!」

《OK, Boss.》

「悠久なる凍土に、凍てつく柩の内にて永遠の眠りを与えよ!」

それによって海面が凍りついていき防衛プログラムを凍りつかせる。

「凍てつけ!!」

《Eternal Coffin.》

それによって第四層は完全に凍結され砕け破壊される。

後はシホが固有結界とエクスカリバーで消滅させるのみ。

「シホ、出番だ!!」

un^無lim^限ited^の blade^剣 with^で my^出 whole^来 life^て was^い ”^た

シホの詠唱が終了し、空に炎の線が走る。それは私達も巻き込むように広がっていき一度世界を破壊し再度世界を構築する。

そして炎が晴れて目を開けてみればそこはすでに異世界。

先程までの夜の景色ではなく黄金の太陽が照らし剣の丘の無限の剣達が地面に刺さっている世界。

この世界には人は一切存在しない無の世界。唯一、武器達だけが存在する悲しい世界。

しかし、地面には草や花が所々に生えていて川も流れている…アーチャーのように炎が炙っていた荒廃したものでは決してないものだ。

これが今のシホの心象風景の顛れだということだろう。

シホも少しずつだが幸せを掴んできているということか。

!!???

そして未知の世界に連れてこられた防衛プログラムは意味不明の叫び声をあげる。

それに巻き込まれた全員もあまりの出来事にポカーンとしている。

「これが固有結界………新たな世界を創りだす魔術の奥義の一……」

「すごい……様々な剣達が刺さっている！」

「時間があるのならば見学をしたいものだ」

「でも少し寂しい世界……」

それぞれ驚きの言葉を発しており特にシグナムは某有線式サトリのような発言をしだす始末だ。

「ご覧の通り、貴様が挑むのは無限の剣………剣戟の極地」

シホが右手を上げれば剣達が一斉に地面から引き抜かれて空中に浮かび上がる。

その手を防衛プログラムへと向ければ剣達は標的を防衛プログラムに絞る。

「さあ………闇の書の防衛プログラム、恐れずして、かかってきなさい!!」

シホの号令ですべての剣が一斉に防衛プログラムへと向かって飛翔する。

だがやはりシホの魔力も吸収していたようであがきというべきか七枚の盾、ロー・アイアスが登場した。

「あれは、ロー・アイアス?!」

一同が驚く中、しかしシホは慌てずに盾を粉碎する物量で攻撃をしていき、我ら自慢の盾は無にも等しく破られた。

そしてある剣は貫通し、ある剣は雷撃を食らわせ、ある剣は焼き尽くし、ある剣は不死殺しの一撃を与える。

防衛プログラムは様々な剣を浴び続け針鼠と化し、気づけば原型を保てないほどに小さくなっていき最後にもう十メートル以上はある巨大な大剣「斬山剣」によつて一刀両断される。

「受けなさい！ 壊れた幻想!!」
ブローンファンタズム

体中に刺さっていた剣達が一斉に爆発し爆風が吹き荒れる。

しかし、防衛プログラムはまだ生きていた。

「しぶとこい……！ なら……！」

シホは止めとばかりにその手にエクスカリバーを構え、

「塵となりなさい！ 約束された勝利の剣————ッ!!」
エクスカリバー

その究極の斬撃によつて防衛プログラムは光に包まれた。

しかし防衛プログラムはエクスカリバーを喰らったというのにいまだに健在で再生をしようとしている。

「ちいっ!? これでもやっぱり再生は止まらないの!? みんな、固有結界を解除するわ

よー」

そしてシホは固有結界を解除したらしく世界は崩れ元の世界に戻っていた。

『あれ!? みんな今までどこにいたの!?!』

そこでエイミー嬢の通信の声が響いてくるが圧倒的な絨毯攻撃の攻撃力に全員魂が抜けたかのようにボーっとしている。

「みんな! 一応まだ終わっていないんだからなのは達は最後の締めをなさい!!」

シホの言葉に全員は意識を取り戻す。

見ればまだ防衛プログラムは再生しようと蠢いている。

「そ、そうだね! フェイトちゃん! はやてちゃん!」

「う、うん!」

「そ、そやね!」

三人がそれぞれ武器を構えて、

「全力全開! スターライト!」

なのは嬢が凝縮された魔力を解き放とうとし、

「雷光一閃! プラズマザンバー!」

フェイト嬢が剣を思いっきり振り上げ、

「ごめんな、おやすみな…響け、終焉の笛! ラグナロク!!」

はやてが防衛プログラムに謝罪の言葉を述べながら杖を掲げて、それぞれの魔力が最高潮まで溜まっつき、

「「ブレイカー……!!」

放たれた三つの光は防衛プログラムを完全に消滅させた。

そしてあとに残るのは露出したコアのみ。

「…本体コア、露出。捕まえ、た！」

コアをシャマルが捕らえる。

「長距離転送！」

「目標、軌道上！」

「「転送!!」

ユーノとアルフとシャマルの三人の手によってコアは軌道上のアースラの前まで持って行かれていった。

しばらくして空に一瞬閃光が走る。

そして、

『アルカンシエルでの貫通消滅を確認しました。コアの再生反応は無し。という訳で現場のみんなお疲れ様でした！ 状況、無事終了しました』

エイミイ嬢の元気な報告が響いてきてみんなはそれぞれ喜びの表情をする。

シホも魔力の大幅消費だけのようので固有結界の内部からの暴走は起こしていないよ
うで安心した。

私も魔力消費を抑えるために鷹の姿へと変化する。

色々な報告はあるだろうが今日はもう十分だろう。

そんな事を思っている時だった。

ヴィータのはやてが倒れたという叫び声が聞こえてきて私は、まだ終わっていないのか…と思ってしまう。

第五十六話

『第三魔法による救い』

S i d e リインフォース

主はやてが倒れられた後、私達はアースラへと収容された。

主が眠っている部屋で守護騎士達に私の今の現状を説明している。

「やはり、破損が致命的なところにまで至っている。

防御プログラムは停止したが、歪められた基礎構造はそのままだ。

私は、夜天の魔導書本体は遠からず新たな防御プログラムを精製しまた暴走を始めるだろう…」

「やはり、か…」

将…シグナムがそう眩く。

やはり予想されていたのだろう。

済まないと思っている。

「修復は、できないの?」

風の癒し手…:シヤマルがそう聞いてくるがそれはもう分かりきっている事だ。
だから素直に無理だと告げた。

「管制プログラムである私の中から夜天の書本来の姿は消されてしまっている」

「元の姿が分からなければ戻しようもないということか」

「そういう事だ」

蒼き狼…:ザフィーラは無念そうに顔を俯させる。

紅の鉄騎…:ヴィータも悲しい顔をする。

「…主はやては大丈夫なのか?」

「何も問題はない。私からの侵食も完全に止まつているしリンカーコアも正常作動している。不自由な足も時を置けば自然に治癒するだろう」

騎士達は安心の表情をして心残りのない顔をしだす。

「士郎…:残されるのはお前だけだが主を守ってやってくれないか?」

「…了解した」

アーチャー…:いや、士郎は苦い顔をしながらももう助ける術が思いつかないのだから、そう言葉を返す。

だがお前たちは残ることができるのだぞ?」

だから言わせてもらおう。

「…いいや、違う。お前たちは残る。逝くのは、私だけだ」

それで全員は驚きの顔をする。

その後、クロノ執務官にこの事を報告する。



S i d e シホ・E・シュバインオーグ

昨日の戦いから翌日、アースラで待機していた私達のところにクロノがやってきてある事を告げる。

「夜天の書を破壊する」

そう言った。

それによつてなのは「どうして…？」と聞く。

聞くところによるとこれは管制プログラム：リインフォースの進言だという。

どうしてそんな事になったのかクロノとユーノとファイアが詳しく説明しだす。

「防御プログラムは無事破壊できたんだけど夜天の魔導書本体はすぐにプログラムを再

生しちゃうんだって…」

ユーノがそう言う。

するとまた暴走の危険性が出てくるわけね。

「今度もはやてちゃんが侵食される可能性が高いんです。夜天の書が存在する限り、どうしても危険は消えないそうです」

ファイアがそう付け足す。

「…だから闇の書は防壁プログラムが消えている今のうちに自らを破壊するよう申し出た」

「そんな…」

「でも、それじゃシグナム達も…」

「はやての下には士郎が残るけどその分皆が消えた悲しみは癒せないわね…」

もう裏技を使う時が来たわね。

でも最低でも今の私じゃ二人が限界だ。

だから全員救うことができない。

どうすれば…。

「だけどそんな私の思惑とは裏腹にそこにやってきたシグナム達がやってきてある報告を言い出す。」

「いや、私達は残る」

「シグナム……！」

「防衛プログラムとともに我々守護騎士プログラムも本体から開放したそうだ」

ザフィーラがそう言う。

「それでリインフォースからなのはちゃん達にお願いがあるって……」

その内容を聞いた時の私の心情は計り知れないものだった。

これはもう私の計画を執行する時ね。

それで士郎を呼び皆に聞かれないようにしてから。

「士郎、ちよつといい……？」

「なんだ、シホ……」

「私のある準備を手伝って欲しいのよ。リインフォースを救うために……」

「なんだと……？　できるのか……？」

「ええ。私は、聖なる錬金術師の継承者だから……」

「聖なる錬金術師……？」

「今はまだ……後で皆に話す時に一緒に教える。それと、イリヤ……？」

《ふああ……なに、シホ……？》

普段は休眠状態のイリヤを起こして、

「あの『服装』の記憶を私に教えて。投影で作り出すから」

《分かったわ、シホ。なんならセイバーにも手伝ってもらったら？》

「そうね。出てきて、セイバー」

『はい、シホ』

そしてセイバーが姿を現す。

「セイバー…」

「わかっていますシホ。リインフォースを救うのですよね」

「ええ。だから協力して…」

「了解しました。私に出来ることならなんなりと…」

魔術と魔法のハイブリットでシルビアさんの記憶と力を受け継いだ私。

千年を超えるアインツベルンの知識を持つイリヤ。

そしてセイバーに士郎。

魔術に精通している私達が揃えばなんだってできるだろう。

私のリインフォース救済の計画は立ち上がった。



S i d e 高町なのは

雪の降りしきる中、私とフェイトちゃんはリインフォースさんに指定された場所までやってきた。

シホちゃんは少し込み入った用事があるというので一緒に来れませんでした。

「シホはなにか考えがあるのかな？ リインフォースを救う方法とか…」

「わからないよフェイトちゃん…。もしかしたら何か考えがあるのかもしれないけど…」

私達にまだ話していない事があるみたいだから今度も全部話して欲しいの。

でも、今はリインフォースさんを送るしか私達に出来ることはない…。

とても悔しいけど、リインフォースさんの願いを叶えてあげなきゃ。

「ああ、来てくれたか。……やはり赤き騎士はいないのだな」

リインフォースさんはシホちゃんがない事に少し残念そうな顔をする。

「シホちゃんはなにか考えがあると思うんです！」

「そうです！」

「そうか。しかしもう私は消えるのみの存在だ。」

だからもし間に合わなかったらシホ・E・シユバインオーグに私の代わりに主を救っ

てくれたことの感謝の言葉を言っておいてくれ」

ラインフォースさんはそう言つて儂い笑みを浮かべる。

その表情で私はまた悲しくなる。

どうして世界はこんな悲しい出来事で溢れているんだろうという思いで。

フェイトちゃんが先に声をあげて、

「あなたを空に返すのは私達でいいの…？」

「お前たちだから、頼みたい…。」

お前たちのおかげで私は主はやての言葉を聞くことができた。

主はやてを喰い殺さずにすみ騎士達も生かすことができた。

感謝している…だから最後はお前たちに私を閉じて欲しい…」

そうラインフォースさんは言うけどまだ私は納得できていないことがある。

「はやてちゃんとお別れをしなくていいんですか…？」

「主はやてを悲しませたくないんだ」

「つ、ラインフォース…」

「でもそんなの、なんか悲しいよ…」

「お前達にもいずれ分かる…海より深く愛しその幸福を守りたいと思えるものと出会えればな…」

そう言つて微笑を浮かべるリインフォースさん。

そこに遅れてヴィータちゃん達守護騎士さん達がきた。

あれ？ でも士郎さんの姿がない。

どうしてだろう…？

「士郎もいないか…。まあきつと主はやての下にいるのだろう」

それで空を見上げて、

「さて、それじゃそろそろ始めようか。夜天の魔導書の終焉だ…」

私達はその言葉を聞き準備をし始めた。



Side 八神はやて

…目を覚ます。

場所は私の家のベッドの上だ。

あれからどうしたんだろうか。

その時だった。

突然胸が痛くなり、嫌な予感がした。

リインフォースが消えていなくなってしまうような不吉な予感が……!

「みんなのところに、リインフォースのところにいかな!」

「…リインフォースを救いたい、はやて?」

そこにいたのに気づかなかったけどアーチャーが鷹の姿で私のそばにいた。

「士郎……?」

「今、リインフォースは自ら消えてしまおうとしている。お前を守るために……」

「そんな……!」

「だから、聞きたい。はやて、お前はリインフォースとどんな形になっても一緒に生きて

いたい? どうだ……?」

士郎がそう言ってくる。

「もちろんや! リインフォースももう私の家族の一人や! だから一緒にいて欲しい

!」

「その言葉に二言はないな?」

「そんなあるかい! どんな事があっても私はリインフォースを助ける!」

覚悟の言葉をもつてして士郎に言う。

すると士郎は人間の姿になり笑みを浮かべ、

「それを聞いて安心した。ならばリインフォオースのところにいこう。」

そして、私が起こすわけではないが…一つの特大の奇跡を見せてやろう」

そして士郎は私を車椅子に乗せてくれてみんながいる場所へと押していつてくれた。

絶対諦めへんからな。リインフォオース、待ってて！

「少し急ぐぞ、はやて！ 手遅れになる前に！」

「ええよ！」

士郎が足に力を入れて全速力で、でも私に気をつかったスピードで車椅子を動かしていく。

そして着いた先にはみんなが、そしてリインフォオースの姿があった。

なにかの魔法を執行しようとしているけどそんなんさせん！

「リインフォオース!!」

私は思いつきり叫んだ。

それでみんなは私の方へと向く。

「主…それに士郎」

「あかん！ リインフォオース、ダメや！ 消えたらアカン!!」

破壊なんかせんでええ！ 私が、ちゃんと抑える！ だから…！」

「主はやて…これでよいのですよ」

「いいことない！ いいことなんかなんもあらへん！」

「随分と長い時を生きてきましたか？最後の最後で私はあなたに綺麗な名前と心をいただきます。」

騎士達と士郎もあなたのそばにいます。何も心配はありません……

「心配とかそんな……！」

「ですから、私は笑って逝けます」

「……………それは本当か？」

「士郎……？」

そこで今まで黙っていた士郎が声を出す。

「リインフォース、それがお前の本当の望みなのか？」

「そうだ。私はこれ以上主はやてを苦しめたくない。だから、いいのだ……」

「それは勝手な押しつけだ。はやての姿を見て心を傷めないのか？ なんとも思わないのか？」

違うだろう。お前は本当は何時までもはやてや騎士達と一緒にいたいはずだ」

「それはお前の勝手な思い込みだ。私は逝ける事に満足している……」

「嘘だな。ならお前の目に浮かぶその涙はなんなんだ……？」

気づかなかったけど薄らとだがリインフォースの目から涙が流れている。

「その涙がお前の本心なのではないか？」

「ち、違う……これは！」

「もつと素直になれ！ お前ははやて達と一緒にいたいのだろうか！」

何も恥ずかしがることはない。心に溜まっている本心から来るものをぶちまけてみる！

それに、お前ははやてのもとに残る騎士達を羨ましく思わないのか？ 本当は一緒に輪に入っていたいのだろうか！」

それでリインフォースは一回言葉を切らす。

でもすぐに、

「……………ああ、その通りだ。私は主はやてと共に生きていきたい……。

しかし！ もうどうしようもないのだ！ このままではまたプログラムが暴走して今度こそ主の命を奪うかもしれない！」

なら……私は夜天の魔導書とともに消えるしかないではないか!!」

「助かる見込みならある！ 侵食もせずお前も生き残れる方法が……！」

「なに……!？」

「その前に聞いておきたい。お前の本心を言え。それを聞かなければ私達もお前を無理やり救っても心まで救う事ができない……。

だから、少しでもいい。お前の心からの叫びを聞かせてくれ…」

士郎の言葉にリインフォースは涙を流しながら、

「生き、たい…愛する主はやてと、私の生涯の友であつた騎士達と、そして士郎…お前とも生きていたい!! 主はやてに深い悲しみを残して死にたくなどない!!」

「そうだ。それでいい…。お前の生きたいと願う心、確かに聞き届けた。だから、私達はお前を救おう…」

士郎がリインフォースを救うと言つた。

でもまだ私はどんな方法で救うかは知らない。

本当に救う事が出来るのだろうか。この子の事を。

「…ありがとう士郎。リインフォースを引き止めてくれていて」

そこに新たな人物の声が聞こえた。

みんなは一斉に振り向く。

そこにはドレス姿のセイバーさんと、そして煌びやかな純白のドレスに身を纏い白い王冠を被っているシホちゃんの姿があつた。

「シホちゃん…綺麗…」

「うん…」

なのはちゃんとフェイトちゃんがそう言う。

私もそう思うし。

「天のドレス…間に合ったのだな、シホ」

「ええ。投影による模造品のドレスだから効果は一回きりだけどそれでも奇跡を起こす事くらいは造作もないわ」

天のドレス言うんか。

シホちゃんはリインフォオースの元へとゆつくりと歩いていき、

「…リインフォオース、たとえ姿形が変わろうとも、はやてと生きていきたいという気持ちは変わらない?」

「ああ。出来ることなら主とともに…生きたい!」

「そう…。それじゃあなたに一つの奇跡を見せてあげる」

シホちゃんはそれはもう見惚れるような笑みを浮かべて奇跡を起こすといった。

「…古代ベルカ諸王時代に生まれた異端の子、聖なる錬金術師…シルビア・アインツベルンの力と記憶を受け継いだ私ならあなたを救うことができる。」

でも、代償としてあなたは管制人格と闇の書の力、そして器…人格以外をすべて失うわ。それでもいい?」

「構わない…生きていけばいい事は必ずあるのだから…」

「そう。ならあなたに第三魔法『天ヘヴンズの杯キョウ』とシルビアから受け継いだ一回きりの裏技

【創造物質化】による魂の改竄と体の創造の魔法をかけるわ。

あ、士郎、あなたもリインフォースの隣に並びなさい。一回きりの奇跡なんだから派手にいかなきゃね！」

「わかった」

「シユバインオーグ…本当にリインフォースを救えるのか…？」

「ええ、大丈夫よシグナム。任せて…！」

それからシホちゃんは皆にそれぞれ何かを言われて最後には全部任せられて見守ることになった。

だから私も、

「シホちゃん…私の家族を、頼みます」

「ええ。はやて…。それじゃやりましょうか。セイバー、魔法制御のためにユニゾンを！」

「はい、シホ！」

『ユニゾン・イン！』

セイバーさんがシホちゃんに融合して金髪碧眼となった後、

「それじゃいくわよ！　まずはリインフォースと士郎の魂を物質化するわ」

シホちゃんは目をつぶり細かい呪文を唱えながら魔法陣が展開した。

そしたらリインフォースの体から光の玉が飛び出してきた。

途端、リインフォースはその場に倒れてしまった。

…つて、え!?

「し、シホちゃん!? リインフォースが!」

「大丈夫だはやて。それはもう意思のない抜け殻だ。っと、私ももう——」

士郎がそう答えて、そしてすぐに士郎も体が消え失せ光の玉へと変化した。

二つの玉が浮かび上がる中、

「…魂の改竄、執行!」

二つの光が色々な光を放ち少し変化した。

「体の創造を魂の情報から再現…」

すると二つの光を中心にどんどん輪郭ができてきて二人の体がどんどん現れ出す!

そして完全に二人の姿が出来上がると、

「^{トレス・オフ}全行程、完了………二人共、目を開けてみて?」

そしてゆっくりとリインフォースと士郎は目を開ける。

二人は体を調べ初めてそしてまずリインフォースが驚きの表情をする。

「これは…人間の体だと、いうのか?」

それにリンカーコアも正常に働いている。身体能力も変わりはない…いや、全体的に

能力が強化されているのか…？」

「ええ。リインフォース。あなたの魂の情報を改竄させてもらったわ。

だから今から鍛え直せばすぐに闇の書時代にまで実力を取り戻すことができるわ。

それにせつかく人間に生まれ変わったんだからもう苦しむ必要はないわ」

「シユバインオーグ…すまない。そして、ありがとう…」

リインフォースが助かったことに変わりはないので私は嬉しくなり思わずリインフォースに抱きついてしまった。

「リインフォース！ もうあなたは自由なんよ！一緒に生きられるんよ！」

「はい…はい…！」

また涙を流しているけどこれはきつと嬉し涙や。

「…うん。さて、士郎の方はどうなっているかしら？」

「ああ。解析で調べさせてもらったが私の身体能力も生身だけでもかなり向上している。

そして魔術回路が四倍の108本に増えている。しかも精神年齢と身体年齢が二十歳にまで下がっている。これは…？」

「私だけ恩恵を受けてるのはなんか嫌なのよ。だから魂の改竄で魔術回路の数を増やして魔力容量も倍以上にさせてもらったわ。」

それに、リンカーコアも生成されているでしょ？ 余計なお世話だと思ったけど私と同じくらいの魔力容量にしておいたわ。

そして私と同じように魔術回路とリンカーコアをリンクさせたんで宝具やその他の魔術もデバイスを通して使えば非殺傷の設定ができるからこれで士郎もめでたく魔導師になる事ができるわ。

あ、精神年齢と身体年齢に関してはただのオマケだから気にしないでいいわよ」
それを聞いて私はなんてチートなんや…と思ったのは許してほしい。

「でも、これで第三魔法『天の杯』^{ヘブンズ・ファイナル}以外の創造物質化の能力は失われてしまったわ。本当に一回きりだけだったから…でも後悔はしないわ。

それじゃ、なのはにフェイト…？」

「え、なにシホちゃん…？」

「なに、シホ…？」

「リインフォースの精神が抜けて抜け殻となった体を空に返しましょう…」

「あ…」

そうやった。

もともとまた防衛プログラムが復活しないようにリインフォースを闇の書と一緒に消す予定だったけど奇跡でリインフォース自体は生き残った。

だけど今はもう意思のない抜け殻なんや。

それでなのはちやんとフェイトちゃんはまだ魔法陣を形成して準備を始める。

その間、リインフォースは抜け殻となった元自分の体を抱きしめて、

「…すみません。本来なら私の役目だというのにその役目を放棄してあなただけ逝かせる事になってしまい…。」

だから、あなたの方も私は生きます。だから安らかに眠ってください、我が写し身よ…。」

そして儀式が終了しリインフォースの体は消え失せてそこに小さい剣十字の紋章の欠片だけが残されていた。

「主はやて…私はもう人の身になってしまいあなたの力になるには難しい体になりました。」

ですからリインフォースという名前はこの欠片から生まれてくる魔導の器に付けてあげてください」

「それはダメや。リインフォースはリインフォースなんやから」

「でしたら私をI…つまりアインス。次に生まれてくる魔導の器をII…ツヴァイと名づけたらどうでしょうか？」

「それはええ考えやね」

そう考えるとこれからが楽しみや。

そんな事を考えてる時やった。

なのはちゃん嬉しそうにシホちゃんに抱きついた途端、シホちゃんのドレスがボロボロと崩れていく光景を目にして思わず、

「士郎！ ザファイラ！ 目を瞑つとき!!」

大声出して男性二人の目を塞いだのはまあいい判断だったやろ。



Side シホ・E・シユバインオーグ

…危なかった。

セツトアップしてバリアジャケットを纏って裸になるのだけは防ぐことができた。

「ど、どうしてドレスが崩れちゃったの…?」

「これは人間が触れると黄金に分解しちゃう代物なのよ。もともと投影品だったし儀式が終わるまで持ったほうよ」

「そうなんだ…」

それで融合を解除していたセイバーが私の服を用意してくれて私は木の陰に入り速攻で着替えた。

「ありがとセイバー…」

「いえ、どうせこうなることだろうと思っていましたから…」

「そうなんだ…」

セイバーも結構いい性格になってきたわね。

「…シユバインオーグ、あの時から今回まで様々な事に力を貸してくれた件に関して騎士代表として言わせてもらおう。」

主はやてだけでも救ってくれるだけでかなりのものだといふのに、リインフォースの命まで救ってくれてどれだけ感謝の言葉を述べたらいいかすら思いつかない」

「いいじゃねえかシグナム。素直な言葉を言えばいいんだよ」

「そうだな、ヴィータ。感謝する、シユバインオーグ」

「あやしからも。シホ、ありがとな！」

「シホちゃん、ありがとう」

「シユバインオーグ、ありがとう…」

守護騎士達が全員感謝の言葉を言ってきて背中がムズ痒くなる気持ちである。

「私からも改めて言わせてくれ。主はやてと私すらも救ってくれてありがとう」

「シホちゃん。ありがとな！」

「…私だけではきつとリインフォースすら救う事もできなかつただろう。だから、シホ、深く感謝しよう」

「もう…土郎まで。やめてよ。とても恥ずかしくなるじゃない…」

たぶん今私はかなり顔が赤くなっているだろう。

それでそっぽを向きながらも、

「その、ありがたく気持ちは受け取っておくわ…」

「うん。それじゃシホちゃん、私達はアースラで事情聴取を受けなあかんからここでお別れや」

「そう…またね」

それではやて、守護騎士、リインフォース、土郎はその場を離れていった。

「それじゃ私達も帰るとしましょう。もう私は色々魔力消費が激しいんで休みたいし」

「シホちゃん、セイバーさんの紹介はどうするの？ これからセイバーさんもウチで暮らすことになるんでしょ？」

「そうね…セイバーはどうする？」

「…そうですね。私はまだアンリミテッド・エアの中で待機しておきます。」

今のシホのご家族の方々にはしかる時に紹介してくだされば結構です」
「分かったわ」

それでセイバーはアンリミテッド・エアの中に入っていた。

そして私達は帰りながら話をしていた。

「事件、終了だね」

「うん…」

「そうね」

「でも、ほんとによかったね。全部丸くおさまって…」

「クロノが言ってた。ロストロギア関連の事件はいつも悲しい感じだつて。

今回は全員救えたけどほとんどの事件では悲しみが付き物なんだつて…。

大きな力に惹かれて悲しみが連鎖していく…」

「うん…」

「人間欲があればなんでも起こすからね。私の世界もそんな感じだったわ」

それで一旦話が終了して、

「…私、局の仕事は続けようと思っっているんだ。執務官になりたいから。母さんみたいな人とか、今回みたいな事を早く止められるように…」

「それがフェイトの目指す道なのね…」

「うん……」

「なのははどのなの……?」

「私は、執務官は無理だと思うけど、方向は多分フェイトちゃんと一緒に。ちゃんと使いた
いんだ、自分の魔法を……」

それではなのはとフェイトは笑みを浮かべる。

「そういうシホはどうなの……?」

「そうだよシホちゃん。私達だけ聞いておいて自分だけ内緒はないよー」

「う……やっぱり聞いてくるのね。まあとりあえずまだ私は応検討かな?」

でも、もうかなり管理局の流儀に染まっちゃったし、事件に巻き込まれていく内に自
身に隠されていた力に目覚めた事もあるし局入りはマジメに考えようと思っっているわ。

自分ごとでも考えれば管理局という後ろ盾が欲しい事だし……」

「後ろ盾……?」

「どういう事……?」

「私の持つ様々な技術……投影魔術に固有結界、第二魔法『平行世界の運営』、第三魔法『魂
の物質化』。セイバーというユニゾンデバイス。」

これらはもし全容を知られれば狙われる可能性は山となってくるわ。

だから集団の中で後ろ盾を作って匿ってもらい、そしてレアスキルとして認定しても

らいたいところが私の今の考えよ」

「あー…そうだね」

「うん。それは納得だね。まだ知られていないけどどこかでバレちゃう事があるから。」

特にリインフォースを人間にしたのは隠す事はできないだろうし…」

「その通り。ま、気長に考えていくわ」

「そっか…」

と、そこにユーノ、フィア、犬形態のアルフが目の前から歩いてくる。

フェイトとはマンシヨンの前で別れてユーノ達と家に帰っていると誘われているところだ。

話によるとユーノとフィアは無限書庫の司書をしないかと誘われているらしい。

「でも私はできるならお姉様のもとについていきたいですから。」

もしお姉様が管理局に入るのでしたら私も戦う力がありますし武装局員と無限書庫

の司書を兼任というのもありかもしれません」

「そっか。でもあなたの未来なんだからじっくり考えなさいよ?」

「はいです」

「でも本局に寮も用意してもらえるみたいだし発掘も続けていいって話だから僕は決めちゃおうかなって…思っているんだ」

「そして未来はユーノは司書長になるかもしれないという訳ね」

「うん。その可能性もあるかもしれないね」

「本局だとミッドチルダより近いから私は嬉しいかな」

なのはがそう言う。

それでユーノが嬉しそうに「本当？」と聞きなのはは「うん！」と答えていた。なにやらこの二人の雰囲気はいいものかもしれないと思ったわ。

そして別れ際、二人は仕事が決まるまでアースラにいるというらしくまた会えるね。と言つて私達は別れた。

そしてなのはと私の携帯にメールが来ていてすずかから明日フェイトやはやてを交えたクリスマス会をしようという話になった。

「ちゃんと話さないといけないね」

「そうね。特にアリスは私の事を一から聞いてくるだろうし…また思い出話を頭で纏めておかなきゃね。」

なのは達にもどういった経緯で第三魔法を会得したとか、聖なる錬金術師の件も話さなきゃいけないし…」

「うん、教えてね…?」

「ええ」

それで今日はお開きになった。



Side リンディ・ハラオウン

今私はレティと話をしている。

そこにフェイトさんから連絡が入った。

それでいくつか驚く報告があつたが概ね解決したという。

「フェイトちゃんから…？」

「うん。魔導書本体の消滅を確認…後、シホさんの目覚めた力でリインフォースを救う事ができたって…」

「目覚めた力…？」

「ええ。なんでも古代ベルカ時代のレアスキルらしくて『創造物質化』という魔法でリインフォースの精神だけを取り出して魂を宿して体すら新たに創造したっていう話よ」

「魂の物質化に体の創造…とてつもないレアスキルね」

「ええ。でもそれは劣化を繰り返し返して一回きりだからもう失われたという話。でも『魂の物質化』という魔法だけは残ったそうよ」

「それだけでも十分レアスキルね…彼女は、管理局に入ってくれるかしら？」

「まだわからないわ。でも前向きに検討してくれているそうよ」

「そう…」

それからレティがシホさんがグレアム提督と協力していた件について話した。

「それと今回シホちゃんとファイアットちゃんがグレアム提督と協力関係にあった件についてもグレアム提督の口添えで不問になるみたい。

グレアム提督はともかくシホちゃん達ははやてちゃんを救う事を念頭に入れた計画だったらしいからなんとかグレアム提督が最後の仕事としてもみ消したとか…」

それからグレアム提督の件に関して話し合われた。

「グレアム提督の件に関しては提督はリーゼ達と短くない期間の間、刑務所に入ってから償った後、故郷に帰るそうよ」

「やっぱり罪はあるのよね。」

具体的には管理局員でありながら捜査を混乱させたクラッキングに捜査妨害…他にも過去の闇の書のデータの改竄。

それに加えてリーゼ達のシホさんの非殺傷設定を解除した殺す目的での魔法の使用で民間人殺人未遂が含まれてくるから。

それに何の罪もないはやてさんを封印しようと企んだ。

それは闇の書を封印しようとした事はいいことだけどやり方がダメね。間違っているといつてもいいわ。民間人の犠牲で終わらそうとするなんて…」

「かなり重い罪になるわね。情状酌量の余地もあるとはいえ魔力も大幅封印されてしまおうでしょうね。だからリーゼ達ももう戦うことはできないでしょう」

「シホさんが言うにはもう気にしていかないらしいけどやっぱり罪は罪よね」

「だから三人ともこれから少くない罪を償っていくらしいわ」

「そう。でもこればかりはしようがないからね」

「ええ」

それで一旦話は止まり、

「…はやてさんの事はどうなるのかしら？」

「グレアム提督は罪を償って出所した後、今までどおりに援助を続けるそうよ。あの子が一人で羽ばたける歳になったら真実を告げることになるだろうって」

「そう…」

「でもこれであなたもご主人への報告にいけるわね。いつ行くの？」

「来週…クロノとフェイトさんと三人でね」

「なんて報告する予定…？」

「そうね。多分いつもと同じよ。相変わらず慌ただしい日々だけど元気にやっ

すって！」

「そっか」

それでレティとの会話は終了した。

第五十七話

『これからの未来への道』

S i d e シホ・E・シユバインオーグ

私達は翌日の事、はやてを迎えに病院へと向かっている。

「はやて、病院に戻ったんだ」

「そういえば入院中に抜け出しちゃったんだもんね」

「そこらへんの事は計画外だったからなんとも言えないわね」

それで三人ではやての病室に入るとそこにはザフィーラ以外の守護騎士とリインフォースと土郎の姿があった。

リインフォースはどうやらシグナムの替りの服を着ているようで、土郎に関しては黒のシャツにパンツというまるでアーチャーの日常服とまんま同じ格好だった。

「ああ、きたのか」

「おはよう。なのはちゃんにフェイトちゃんにシホちゃん！」

「あれ？」

「もう退院…?」

「残念…。もうしばらくは入院患者さんなんよ」

「そうなんだ」

「ま、もうすっかり元気やしすずかちゃん達のお見舞いはお断りしたよ。クリスマス会直行やー！」

「そう」

「昨日は色々あったけど最初から最後までほんまありがと。特にシホちゃんにはとつても感謝しとるんよ。な、リンフォース？」

「ええ。シユバインオーグ、ありがとう」

「もうそれはいいって…」

『あはははは！』

それで笑いが起こったけどまあいいだろう。

それからはやての首にかけている闇の書の欠片の話になった。

「私な、管理局に勤めようと思ってるんよ」

「…はやてはただ巻き込まれただけなのよ？ いいの？」

「シホちゃん、心配してくれてありがとな。でももう決めたことなんや。

それにリインフォースやシグナム達、それに士郎もそれに付き合うと言ってくれたから私は頑張れる」

「士郎もやっぱり管理局に入るのね」

「ああ。魔導師推定ランクはお前の魂の改竄のおかげでSランク突破してしまつてな。

是非との声が上がってしまった。

そして、私の家族であるはやてがやるというのだから付き合わない訳にもいかないだろう？」

「そう…。それじゃ一つ忠告しておくわ。

私達の投影魔術はレアスキル判定が出るまで内緒にして転送魔術としておきなさい。

私もわざわざ管理局にまで魔術協会のように追われるのだけは勘弁だから」

「わかった。肝に銘じておこう」

士郎もそれは勘弁のようで私に苦笑いで返してくれた。

でも、これで大々的にばれる心配の種は減ったわね。よかったよかった。

「それとな、今回の件で私達は管理局から保護観察を受けることになったんよ」

「そうなの？」

「まあ…」

「管理局任務への従事、という形で罪の償いも含んでいます」

「クロノ執務官がそう取り計らってくれた」

「任期はかなり長いんですけどはやてちゃんと離れずにいられる、多分唯一の方法だつて……」

シヤマルさんがそう言う。

「ま、無条件で許されるわけではないからそこら辺が妥当か。

過去も含めてかなりの罪があるのだから軽いものだろう。」

「私は囑託扱いだからなのはちゃん達の後輩やね」

はやてがそう言うって笑う。

その後、はやての主治医の石田先生がはやてに今日はちゃんと帰ってくるようにと言っていた。

「昨夜とか今朝はやっぱり大変だった？」

なのはがヴィータに聞く。

それにヴィータは「ああ」と答え、

「無断外泊だったからシグナムとシヤマルがめちやくちや怒られていた……」

それにリインフォースと土郎という新しい家族の紹介もあってかなりカオスだったな」

「そうなんだ…怖い先生なんだね」

「でも…」

指切りをしている光景をヴィータは見ながら、

「いい先生だ…」

と、言っていた。

と、そこでフェイトとシグナムが目を合わせると二人共黙り込む。

多方理由は決着の件だろうね。

「テストロッサ」

「はい、シグナム」

「預けた勝負、いずれ決着をつけるとしよう」

「はい。正々堂々、これから何度でも…!」

フェイトの言葉にシグナムはちよつと驚いた顔をしたけど、でも笑みを浮かべてフェイトの頭を撫でていた。

それと私の方にも向くと、

「シユバインオーグ…お前との決着もつけねばならん。いつかつけるぞ?」

「私は構わないけど、本当にあなたってバトルジャンキーね…」

「ふっ…褒め言葉だ。それとセイバー殿とも後で一度稽古をつけてもらいたいと言って

おいてくれ。

「主はやてに聞いた話だとセイバー殿は彼の騎士王だといふのだから是非戦ってみよう」

「あはは…まあ、頼んでおくわ」

「よろしく頼む」

それでシグナム達は八神家に先に帰っていった。



そしてさすがかの家につくとそこにはアリサが立ちほだかっていた。

「…さあて、アンタ達の嬉し恥ずかし告白会と洒落込むとしましょうかね?」

「…アリサ。顔が悪役よ?」

「黙らっしやい、シホ。あんたの事も全部喋ってもらうんだからね? あたしだけ仲間

はずれなんて許されないんだから!」

「はいはい…長くなるけど、いい?」

「構わないわ! かかってきなさい!!」

『あはは…』

それで全員苦笑いを浮かべることになった。

それから中でお茶会をする場所に移動して全員に紅茶やお菓子が行き渡つてから、
「…さて、それじゃ始めるとしましょうか？　まずはなにを話すとしましょうか？」

「全部よ。それ以外はありえない」

「あ、アリサちゃん…私はシホちゃん関連は大体知っているけど涙無しでは聞けないけどいいの…？」

「大丈夫よ」

「それじゃまずは私がまずこの世界にきた経緯からかな…？」

そしてまず私はこの世界に来る前のお話。

衛宮士郎として駆け抜けた半生。

それを語りだして最初のアリサとはやてのツツコミが、

「シホちゃんて元は男の子なん!?!　信じられへん!」

「ありえないわよ!?!　どうやったら完全に女の子のあなたか元が男性になるのよ!」

「しかも士郎と分離したとか…:どれだけファンタジーなんや、シホちゃんの元の世界!」

「英霊とか宝具とか魔術とか死徒とか…:他にも色々あるけど化物の巣窟のような世界ね…」

他にも色々…。

いや、ほんと本来ツツコミとはこうあるべきよね、というくらいツツコまれた。

それでこの世界にきた経緯を全部話し終えると、

「…グスツ…イリヤさん…なんてええお姉ちゃんなんや…!」

「本当ね。そう考えるとシホってこの世界に来る前はかなりのろくでなしだったのね。

全てを救う正義の味方ってっていう特大の。特にそれを輪にかけて英霊エミヤとか

…」

「グハツ!?!」

アリサの直球の言葉に私は思わず胸をおさえた。

「アリサちゃん、言いすぎだよ! シホちゃんだつて本当に苦労したんだから!」

「ありがとうすずか…。私の味方はあなただけよ…」

「あ…。えへへくうん♪」

それですすが顔色を赤くするがどうしたのだろうか…?

「にゃ!?! それだつたら私達もシホちゃんを援護するよ?」

「そ、そうだよ…!」

そこになのはとフェイトも私の援護に入ってくる。

嬉しいやらなんやら。

それで話は再開して、

「…まあ、そんな経緯があつて私はこの世界に来たわけよ。

士郎と魂が二つに分離するわ、魂が女性に塗り替えられるわ、精神年齢が26歳から一気にみんなと同じ9歳になるわ色々あつたけどね」

「はあ…。色々と驚かせてもらったわー。ま、それが今のシホだつてんなら納得よ。あたしも今のシホの性格は気に入っているし」

「私もや。シホちゃんはもう完全に女の子なんやね。うちの士郎とはもう別の存在といつてもええね」

「そうね。これで一応私の話はまだあるけど終了かな。それ以降で判明した出来事はなのはとフェイトの話に付け足す感じで話していくわ」

「わかつたわ。さて、それじゃなのは、フェイト。今度はアンタ達よ?」

「うゝ…わかりました」

「わかつた」

それですなのはが話をしだす。

最初の出来事といえばユーノとフィアを助けたことから始つていくジュエルシード事件。

私も手伝つたけどみんなには内緒でジュエルシードの回収作業を行つていたこと。

その中であつたいろいろな事件。

「…あー、あのでっかい木はそれが原因だったのね」

「私もあれは家から見てたから知ってるよ」

「うん、すごかったんね。それもジュエルシードのせいやったんやな」

「うん。それで起きちゃった事件で私は落ち込んだけどシホちゃん達に慰めてもらったの」

「そんな事があつたわね…」

私がいじみと思ひ出している。

そしてここでフェイトとの初めての出会いの話。

最初はすずかの家の猫が巨大化した事から始まったジュエルシードの争奪戦。

「私はそこでののはとシホと初めて出会ったんだ。ジュエルシードを奪い合う敵として…」

「フェイトちゃん…」

「…大丈夫だよ、なのは。私はもう母さんの事は吹っ切れているから…」

「うん…」

それから色々話し出す。

温泉でも敵対したりして名前を名乗りあつた。

街中で敵対したりして私が次元震の衝撃をロー・アイアスで防いで重症になったり。

「そしてその次元震を合図にして時空管理局が介入してきたわ」

「時空管理局……？」

「そう。次元世界をいくつも統括して守っている組織の事。その世界では普通に魔法が使われているのよ」

「私ももとはそのミッドチルダ出身なんだよ。生まれが特殊だけれども……」

フエイトがそれで顔を伏せる。

それを私となのはが慰めながら話を進めていく。

「それから色々あつてリンデイさんを中心とするアーススタッフと一緒にジュエルシード集めを手伝っていたの」

「あの期間なのはとシホが学校に来なかったのはそれが大元の原因だったのね」

「ええ」

「それである時にフエイトちゃんが無茶をして海上で一気に残りのジュエルシードの封印にかかったの」

「でも、私とアルフじやそれを防ぐことはできなかった。それで暴走をして諦めかけた時になのはとシホが助けてくれて一緒になってジュエルシードを全部封印したんだ」

「そんな事があつたんだ……」

それですすが驚きの表情をしていた。

「うん。そしてもう全部ジュエルシードは回収し終わっていたから、私とフェイトちゃんで最後の戦いをしたんだ。

お互いのジュエルシードを全部かけて…。そして戦いは行われていって最後には私が勝利したんだ」

「あの時の光景は今でも忘れられないなあ…。なのはのスターライトブレイカーが私に迫ってくるといった光景は…」

それでフェイトは少し苦笑いを浮かべる。

「それってこの間のシホが防いだ桃色の光のこと…?」

アリスが気づいたらしくその事をいった。

「ええ。まああれよりは控えめだったけどね…。」

でも、正直言えば真正面から抑えていた私は恐怖がすごかったわ。

宝具のアヴァロンを使っていなかったらきつと貫かれていたと思うし」

「もう、また私を化け物みたいに言うんだから〜!」

「ごめんごめん。でもそれくらいなのは魔法の威力は凄まじいってことよ」

「む…。」

納得していないという顔だけどとりあえずなのはは一応黙った。

「でも、それからついにフェイトの母親であるプレシアが動き出したの。」

フェイトの持っていたジュエルシードを回収して…そして、これは私の口からは言えないわね」

「うん。大丈夫だよ、シホ。私が言うから…母さんは私に向かって言ったんだ。あなたは人形だと…」

『えっ…?』

それからプロジェクトFの事をフェイトは淡々と話し始める。

時折辛そうな顔をするけど全部言い切った後、

「フェイト、あんた…」

「フェイトちゃん…」

アリサとすずかがフェイトを優しく抱きしめて立ち上がれないはやては代わりに手を握ってあげていた。

それでフェイトは涙を流した。

「大丈夫よ、フェイト。安心しなさい。あたし達はそんな事は全然気にしないから」

「私もだよ、フェイトちゃん」

「だから気にしたらあかんよ?」

「…うん、ありがとう三人とも」

「よかったね、フェイトちゃん…ね? シホちゃん…」

「そうね」

それから最終決戦へと話は進んでいく。

なのはとフェイト達は駆動路へと向かっていき、私がプレシアと戦いを挑みに行つた。

行われる戦い。

その中で私が宝石剣でプレシアに対抗しながらも語られるプレシアの心の叫び。

最後には暴走を起こしたけどルールブレイカーによって断ち切られて勝つ事ができた。

でも、その代償としてプレシアの心臓は破裂してしまった事。

「そして、そこで私は母さんの本当の気持ちを聞く事ができたんだ」

プレシアの本当の気持ち。意識が朦朧としていて本当だったのかは定かではないが、フェイトに対しての気持ち。本当は愛してあげたかった事。

その話で三人は目に涙をためる。

「フェイトはお母さんとそんな別れをしたのね…」

「あの時、私がつとプレシアの行動をちゃんと把握していたらつと違った形になっていたかもしれないけど…」

「シホは悪くないよ。あれは、しょうがなかったんだ…。あの時、言ったでしょ?」

「そうね…」

そして最終局面に話は持ち込む。

暴走したジュエルシードはこのままにしたら近くの次元世界を崩壊させてしまうほどの驚異となつてしまう事を。

そこで私が破壊の選択をした事。

エクスカリバーを投影しようとしたがやっぱり消耗した魔力では無理かと思われたその時。

突如としてイリヤの意識が魔術回路から呼び起こされて私の助けになつてくれて完全に投影できてジュエルシードを完全消滅できたこと。

「イリヤさんは形は変わってもシホとずっと一緒にいたのね」

「本当に妹思いのええお姉ちゃんやね…」

「ええ。イリヤには感謝しきれないほどの物があるのよ」

それから事後処理が進んでいきフェイトとアルフは拘束されて保護観察処分となつた。

私達がリボンやネックレス、歌などをフェイトに送つてしばしの別れとなつた事。

「これが、後にP・T事件と呼ばれる真相よ」

一旦、これで話は終了した。

次からははやて達守護騎士の話が移されることになる。



「それじゃ次は私やね。まずは…そうやな。士郎との出会いから話していこか」

それは私も気になっていたところだ。どうして士郎がはやてと一緒にいたのか知りたいところだし。

「…それはある春先の出来事やった」

はやては語る。

突如として家の庭に落ちてきて自身の記憶を失いながらもアーチャーと名乗りはやての事をマスターと呼んだ事を。

「あの時は大変やったわ。その時はまだこういったファンタジーな事なんて一切関わっていないかった頃やからいきなり鷹が人の言葉を喋りだしたのにはびっくりしたわ」

「それは確かに…」

「時期はもしかしたらシホちゃんがこの世界に来た時と同じやと思うんやけどどうやら？」

それで日付を聞くと確かに同じ日だった。

「それから私と士郎の奇妙な二人暮らしが始まったんや。

足の不自由はあったけど寂しい時に私の話し相手になってくれたのはとても嬉しかった…」

「そうか。その時から士郎と家族になって一緒にいたのね」

「そうや」

「だから守護騎士のみんなが私の誕生日の日に出てきた時も一回気絶はしたもののその後の理解は早かったわ。

それで…それ以降は私はあまり詳しくないからシホちゃん達はなにか知っているんやろ?」

「ええ。まあ、ね…」

「うん…」

「そうだね…」

それで話す。

まず最初に私はザフィーラに。なのははヴィータに襲われた事。

なのははリンカーコアの魔力を奪われる事態になり、私もシグナムと善戦はしたものの最後には横槍をしてきた仮面の男にやられてしまいかかなりの重傷を負う羽目になった事。

それを聞いて三人は一斉に「あの時か…」と呟く。

「ヴィータがシホちゃんの話題がでた途端に態度が変わったのはそれが原因やったんやね」

「多分ね。それで本来私の体は速攻で緊急入院をしなければいけない程に傷ついていたんだけど…、

そこでアンリミテッド・エアが目を覚ましてその中に眠っていたセイバーが覚醒して私の傷をアヴァロンを介して完全治癒されたのよ」

「シホちゃん！　なのはちゃん！　フェイトちゃん！　うちの子達が迷惑をかけてホンマすいません!!」

「いや、もう終わったことだから…」

「そうだよ。もうヴィータちゃん達とはお互いに謝ったんだからこの話は気にしないで」

「そうよ。誰も死なずに済んでむしろよかったじゃない?」

「そうやけど…」

「気にしないこと。良いわね?」

「はい…」

はやてはまだ言いたい事がある感じだけど折れてくれた。

それから私がスーパー銭湯でシグナム達とばったり会ってしまいその深夜にシグナム達と話をした事。

「そんな時からもう話し合っていたんだー…」

「どうして話してくれなかったのかな…?」

そこでのなのはとフェイトの目が怖くなった。

いや、本当にごめんなさいとしか言えない。

「…ごめんね。その時はまだマスターがはやてだとバレルのはまずかったのよ」

それでむくれる二人になんとか説得をして話を進める。

再度の戦闘で私はわざとシヤマルさんに魔力を蒐集させたことなど。

三度目の戦闘で記憶喪失の士郎と戦い記憶を強制的に思い出させたこと。

はやてが入院すると言ってその時にまた守護騎士達と会い、士郎の使い魔化している現状を利用してはやてに憑依させてはやての目を覚まさせる役割を担わせた事。

そしてここではまだ正体は私の口では言う事ができないけど仮面の男達とも交渉をして計画を練っていった事など。

「シホとファイアットは裏から色々とはやてを助けるために動いていたんだね」

「ええ。皆に話さなかったのは中途半端に闇の書の主であるはやてが捕まったら助けることができないし、情報が漏れちゃう可能性もあったから隠していたのよ」

「そっか。そんな理由があったなら私は怒らないよ、シホちゃん」

「うん。シホのやり方は良かったと思う。でも本音を言えば話して欲しかったけどね」
「うん…」

それで一度話は切れる。

そして計画決行の日の12月24日。

はやてが闇の書を覚醒させて私達に襲いかかってきた事。

すずか達を守った後、私とフェイトは闇の書に夢の世界に引きずり込まれてしまった事など。

「…私の夢の中ではアルフ以外にアリシア、リニス、母さんが生きていてとても幸せな時間だったと思う。

でもこれは所詮は夢だとわかっていたからアリシアとは別れたくなかったけど、でもここをでる決意をして夢の世界を破壊したんだ」

「フェイトはそんな夢を見ていたのね…」

「シホは…?」

「うん。私は前の世界での一番充実していて幸せが確かに存在した衛宮の家での家族と呼べた人達との暮らしだった。

でもそれはすぐに夢だと思い、夢の中で出てきたイリヤとセイバーに聞き出した。

そしてこの世界に浸っていたら二人に対して裏切りになると思つてすぐに夢からは抜け出すことができたのよ。

でも、まだ違う夢が続いていた。そこでは聖なる錬金術師…シルビア・アインツベルンが登場する夢だった。

シルビアさんは私の魂に憑依して眠っていたらしく、私に思いを託すために夢の中に現れたの。

そして私はシルビアさんと魂を完全に融合させ記憶と力…第三魔法『魂の物質化』と、それが劣化する前の一回しか使えることができない裏技『創造物質化』の魔法を引き継いだのよ。

そして夢から脱出した後ははやての知っている通り…。

はやては夜天の魔導書の主として完全覚醒し皆と協力して闇の書の闇を完全消滅させた。

そしてはやての為に消える覚悟をしていたリインフォースに対して魂の劣化を繰り返して一回しか使えない『創造物質化』の魔法を使いリインフォースと士郎を助けたのよ。

これが闇の書事件のすべての真実よ」

私が主になって話をしてしまったが全員は「分かりやすかった」と言ってくれたので

いいだろう。

そしてはやてが、

「…そんな大層貴重でシルビアさんからせつかく受け継いだ魔法を私達なんかに使って、後悔はしていない？ シホちゃん…」

「後悔はしていないわ。力は使うもの。それで笑みを浮かべるものがあるのなら私は決して後悔はしない…。」

それに第三魔法『魂の物質化』だけは残っているのだからもう気にしていないわ」

「そか…。よかったわ」

それでお話はすべて話し終えてこれで全部隠し事はなくなり、後はみんなでクリスマス会を楽しむのだった。



そして家に帰宅後、リンデイさんとフェイトも家にやってきて桃子お母さんに今まで私となのはがしてきた事を話して、それぞれ理解してもらい、

「これからもこの魔法の力で働きたいと思っっているの…。」

「私もまだしっかりと決められませんけどなのはと大体同じ意見です」

「なのはにシホちゃん…」

「どうかこの子達の将来を検討してもらえないでしょうか？ 私達も微力ですが助力します」

リンデイさんの話で桃子お母さん達は難しい顔をするけど、でもしばらくして、
「なのはとシホちゃんの事…頼んで構いませんか？」

私達はもう二人の意見には反対はしません。ですがこれでも親ですからやっぱり心配をしてしまうんです」

士郎お父さんがそうリンデイさんに言う。

「わかりました。ありがとうございます。私の話を理解していただき感謝します」
「なのはにシホちゃん。やると決めたからにはしっかりとやるんだぞ？」

それで私となのはは元気に「はい！」と返事を返した。

そして私からも紹介したい人がいるのでアンリミテッド・エアを取り出して、
「セイバー、出てきて」

『わかりました』

セイバーが鎧は纏っていないドレス姿で現れて、

「シホの守護者のセイバー・アルトリア・ペンドラゴンです。以後、よろしく願いします」

セイバーの事を私の話で知っていたみんなは驚きの顔をして、でも新たな家族の訪れに歓迎したのだった。



………お話は概ね本来の歴史の綴りを辿って再構成されていく。

平行世界は無量大。各々個人のあらゆる選択によって無限に違う道を進んでいこうとする。

何名かの異世界からの来訪者の存在。

本来消える運命にあつたもの。

理由は様々だがそれでも世界の意思は安定を保っていく。

しかし、ある平行世界で悲劇が起こる。

それは、交わらないはずの近くの世界を侵食し始めようとする。

「…ふむ。ここまでは概ね予定通りといったところか」

「我の手をわざわざ煩わせたのだ。成功しない道理などないぞ？」

「……………」

暗闇の中に謎の四人の影が出来る。

「そうか。…さて、では始めようではないか。新たなる世界での戦争。我々の手による

聖杯戦争を…否、聖杯大戦を!!」

「ハハハハハハハッ！ なかなか愉快な催しになることだろうな!!」

「……………」

四人の内、二人は盛大に笑みを浮かべ二人は無言で通す。

第五十八話

『外伝6

八神家での御食事会』

S i d e シホ・E・シユバインオーグ

あの事件から少し経って新年を迎え日付は1月4日。

もう一週間以上経ち今夜から高町家、月村家、バニングス家、ハラOWN家での四家族合同旅行に行く事になっている。

はやて達家族とも一緒にいけないのは残念ではあるが、まあそこはしょうがないだろう。

そして、なのはとフェイトは居間のコタツで寛いでいるというのに私はというと、
「さあシホ。旅行前に稽古といきましようか！」

なぜかセイバーと道場で竹刀による稽古をやる羽目になっていた。

「できればシロウとも剣を交えたいですがシロウははまだ管理局に厄介になっている身……色々忙しいでしょう。」

ですから今はシホがどれだけ成長したか試させてもらいます」

「今夜から旅行なのにセイバーは元気ね…」

「何を言いますか。日々の精進が大切なのですよ、シホ？」

「まあ、わかったわ。それじゃ…やりましょうか！」

それで私は短い竹刀二つを持ちセイバーと対峙する。

「ほう…やはり二刀流なのですね？」

「うん。やっぱり私はどこまでいってもセイバーの剣には届かなかった。そしてエミヤの剣技は自分の事のように体に馴染んだのよ」

「私の剣が継がせられないのは残念ですが、では参ります」

そしてどちらがともなく私とセイバーは地面を蹴った。

竹刀同士が交差して竹刀特有のパシンツ！という小気味よい音が道場に響く。



Side 高町なのは

居間のコタツでフェイトちゃんと一緒に寛いでいる時だった。

携帯が鳴り相手ははやてちゃんだったので出てみると今は本局にいるらしいの。

話はやてちゃんのウチで一緒にお昼はどうかというもので私とフェイトちゃんは快く承諾したの。

それでシホちゃんにもこの事を知らせに行こうと思つて今はどこにいるのかなとフェイトちゃんと探していると道場の方から何かを打ち合うような音が響いてきました。

「道場にいるのかな？」

「とにかく聞いてみよう、なのは」

「うん」

それで道場の中に顔を覗かせてみました。

するとそこではとても目で追えない攻防が繰り広げられていました。

「ふっ！」

「はあっ！」

シホちゃんとセイバーさんがそこで目にも止まらぬ竹刀での戦いをやっています。

セイバーさんは竹刀一本に対し、シホちゃんはお得意の二刀流で挑んでいます。

今まで私とフェイトちゃんはシホちゃんに指導を何度も受けてきました。

その度に返り討ちに合うという事が定番だったのですが…。

「シホちゃんが、一方的にやられてる…」

「うん…。シホは基本私達にはいつも苦しそうな顔は見せないで涼しい顔でやってる。」

なのに、今は余裕がないのか私達にあまり見せない顔でセイバーさんの攻撃をただ受けだけになっている…」

そうなのである。

シホちゃんがあんな押されている光景を初めて見て私とフェイトちゃんは呆然としてしまい、同時にセイバーさんがそれだけ強い事がありありと思い知った。

そして時間は過ぎていき、シホちゃんの竹刀の片方が弾かれてしまい頭に面をもらい勝負は決した。

「はあ、はあ…参りました」

「よく頑張りましたねシホ。別れた後からも精進を怠らなかつたようですね。かなり腕があがつて成長していますよ?」

「セイバーから一本取れなきやまだまだよ…」

「まだそう簡単には一本を取らせませんよ。ギルガメツシユのように慢心王になってしまふようでは困りますので…」

「はは…手厳しいわね。でも久しぶりにセイバーとやれて楽しかったわ」

「私もですよ。シホ」

セイバーさんが笑みを浮かべたところでこちらへと振り向き、

「もう入ってきてても大丈夫ですよ？ ナノハにフェイト」

「えっ!? 二人共いたの…!」

シホちゃんが本当に今気づいたかのようにこちらへと視線を向ける。

私達が来たことにも気づかなかったなんて…それだけシホちゃんが集中していたわけで、やっぱりセイバーさんはすごく強い。

「すごい戦いでした…私達の強さの憧れのシホがこうも押されるなんて…やっぱりセイバーさんは強いですね」

「ふふ、ありがとうございます。それでも騎士王と呼ばれていましたからまだまだ遅れは取らせません」

穏やかにセイバーさんは笑みを浮かべる。

でもそれだけシホちゃんの成長が嬉しいのかな？

「でも、セイバーさん。シホちゃんって昔は本当にそんなに弱かったんですか？ 私達にはあまりイメージがわかないんですけど…」

「…弱い、というかそれ以前に命知らずでしたね。」

サーヴァントにはたとえ魔術師であろうとも絶対になわなない程の実力の差がある

というのに…。

シホ：いいえ、シロウときたら何度も私が戦うというのにあることか『女の子がそんな危ないことをしちやダメだ!』と言ってきたのです。

当時の私はかなり腹に煮えくり返るものがありましたね。

しかもアーチャーと戦闘はするわギルガメッシュとも戦っている姿を見せられ何度ヒヤヒヤさせられた事か…」

それでシホちゃんは居心地悪く苦笑いを浮かべていました。

「でも、当時はホントに知識とかなかったからセイバーを使い魔として見れなかったのよ」

シホちゃんがそう言うけど確かに、

「私もセイバーさんをただの使い魔として見れる自信はありません」

「…はあ、ナノハもそう言うのですか。困りましたね、どうやらシホとあなたは似ている所があるようですね」

セイバーさんがため息をつきながらそう言うてきました。

ううう、確かに私も一度決めたら覆さないとこがあるから言い返せません。

「…あの、セイバーさん」

「なんですか、フエイト…?」

「また後の機会でもいいですから私にも稽古をつけてもらっていいですか？ シホを圧倒するセイバーさんに私の今の全力を見てもらいたいんです」

「ふふ、わかりました。シグナムとも約束していることですし一緒に受けて立ちますよ」
「ありがとうございます！」

「構いません。しかし、シホはナノハとフェイトにかなり慕われているんですね」

うん。セイバーさんの言葉で私は頷きながらも、

「シホちゃんには私に戦いの基礎を一から叩き込んでくれたんです！ だから私のお師匠さんなんです！」

「私も…シホにうまい戦い方を教えてもらってシグナムと対等に戦えるようにしてもらいました」

「そうなのですか…シホは、あなた達の役に立ちましたか？」

セイバーさんがそう聞いてきたので元気よく「はい！」とフェイトちゃんと一緒に答えました。

それにセイバーさんは満足そうな笑みを浮かべて、

「やはりシホは成長しましたね。」

…自己を犠牲にした戦い方を二人には教えずまっとうな戦いをできるようにまで強く成長させたのですから」

「ありがとうセイバー。それだけでどちよつといい？」

「なんですか、シホ……？」

「私、リンディさんに腕を買われて戦技教導官の道になのはと一緒に誘われているの。それでもしよかつたらだけど一緒に手伝ってもらっていいかな？」

「私は今まで培ってきた経験しか教えることができないけどセイバーがいれば私も頑張れると思うのよ」

シホちゃんの言葉にセイバーさんはまた笑みを浮かべながら、

「お任せ下さい、シホ。私はあなたの剣です。だからどこまでもついていきます」

「ありがとう……」

シホちゃんがセイバーさんに感謝の言葉を述べているのを黙って聞いていました。

それでしばらくして私はある話を切り出しました。

「シホちゃん、ちよつといい？」

「なに、なのは？」

「これからはやてちゃんの家で昼食を一緒に作って食べる話があるんだけどシホちゃんとセイバーさんもいく？」

「大丈夫よ」

「構いません」

「よし！ それじゃ二人共着替えて食材を買いに行こう！」

「ええ。それじゃ私の解析魔術でとっておきの食材を買い揃えてみせるわ」

「…シホ、あなたはまだ魔術をそんな事に使っていたのですか？ リンが知ったら怒りますよ…？」

「あ、あはは…いいじゃない。それくらい」

それでシホちゃんがバツが悪そうな顔になってセイバーさんに言い訳をしていた。

またシホちゃんの新たな一面を垣間見た瞬間だった。



色々と食材を購入してはやてちゃんの家に向かっています。

ちなみにセイバーさんの服装は白いブラウスに群青のスカートという金髪碧眼のセイバーさんの色に合った服装でした。

聞くところの世界でも大抵この格好が定番だったらしいの。

「しかし、ユニゾンデバイスになって色々と便利になったのはマスター要らずで魔力を精製できることですね。

エクスカリバーもアヴァロンも創造物質化の魔法で一緒についてきましたから真名

「開放も限定的ですができるだけですし、サーヴァントにも引けを取らないと自負しています」

「それでさらにシホとユニゾンするとやっぱりかなり強力になりますね…」

「ええ。サーヴァント時代の私に迫るものだと思います」

「フェイトちゃんがそう言う。」

「確かにそうかもしれない。」

「しかしそれではいつまで経つてもシホが独り立ちできませんからいざという時にしかユニゾンはしないと私の中で決めておきましょう」

「まあエクスカリバーフォームはセイバーとユニゾンしないと使えないけど、でも十分アンリミテッド・エアは強いしね」

《《ありがとうございます》》

それでアンリミテッド・エアが反応を返していました。

そんな話をしながらはやてちゃんの家に到着しました。

「こんにちはー」

「お邪魔します」

「お邪魔するわね」

「失礼します」

四人で玄関を開けて挨拶をすることはやてちゃんが迎えてくれました。

「なのはちゃんにフェイトちゃんにシホちゃんにセイバーさん、いらつしやーい」

車椅子で出てきたので私のはやてちゃんの車椅子を押してキッチンまで誘導しました。

「食材の材料かなり買ってきたわよ。六人もこれから帰ってくるんだから大いに越したことはないでしょう」

シホちゃんがそう言う。

「そうだよ。ラインフォースさんと士郎さんの分もこれから作ることになるんだからもうかなりの大人数だ。」

「ほんまか？ おおきにな」

「いいよ。はやては気にしないでね」

「そうです」

「そうね。あ、そうそう…セイバーはこれからかなり時間ができるから四日間の聖杯戦争ではあまりできなかった料理のスキルも覚えていったらどう？」

掃除、洗濯はすぐに覚えられたんだしできないこともないでしょ…？」

「そうですね…。ライダーみたいにナノハの家族に白い目で見られたくないですから

…」

ライダーさん……。確か真名はメドユーサさんだよね。

セイバーさんとなにかあったのかな？

それを聞いてみると、

「……いえ、私はシロウと衛宮の家を守るという事で自宅警備員をしていたのですが……。

私以外のサーヴァント達は喋ることができないバーサーカーと門番として動くことができないアサシン以外は何かしら職に手を出していましたので少し肩身が狭い身上だったのです」

そうなんだ。でも、確かに現代に適応出来るだけでもすごいことだもんね。

「でもこれから管理局で働けますから大丈夫ですよね？」

「ええ、フェイト。戦闘ごごとに関しては自信はあります」

「あははー。セイバーさん、なんも管理局でもそない戦闘ごばつかやったら大変やし身が持たんやろ？」

「むっ……。確かにそうですね。不謹慎な発言でした」

それからセイバーさんはお皿の出し入れくらいを手伝いながら、そして私達ははやてちゃんの調理の手伝いをしながら料理を作っていた。

私達も含めると十一人分も作らないといけませんから大変です。

そこでパティシエールの腕を持つお母さんに最近実力が追いついてきたシホちゃん

が力を發揮するなど色々ありました。

そんな事もあり料理が出来上がった後は、私達ははやてちゃんにお茶を出してもらい休んでいました。

「ほんならみんなは正午過ぎには帰ってくるんでゆっくりしといてな」

「うん！」

それから今の日常などの会話などをしていました。

「なのはちゃん達は今夜から旅行やったよね？　もう準備はできてるん？」

「うん。大丈夫だよ。…でも、はやてやシグナム達も一緒にいけたらよかったんだけどね」

「まー行動拘束はそんなにないけど一応自粛やね。マジメに罪を償ってかんとアカンし…。」

重い怪我した人がおらんかったんは不幸中の幸いやけどな。シホちゃんを除いて…」

「あはは…」

何気ないダメ出しでシホちゃんが苦笑いで返す。

「シグナムやヴィータは強いからね。手加減もうまくやったんでしょ？」

「そやね。ホンマに優しい子達やから」

そこではやてちゃんは「でも」と一回話の区切りをつけてから、

「蒐集のコトとか早く気づいてあげられたらよかつたんし、私かもー少ししつかりしていたらよかつた。」

「過ぎたこと後悔してもしゃーないけど、せめてちゃんと罪を償ってあの子達のこれらを幸せな毎日にしたげなあかん」

「それはよい心がけです、ハヤテ。私も微力ですがお手伝いをします」

「私もよ」

「ありがとな、シホちゃんにセイバーさん」

「でもはやてちゃん、どこか大人っぽく見えたね」

「うん。驚かされた…」

「まあ色々と自覚せなあかんしな。自分の罪としつかりと向き合わなければいかんし

…」

「うん。それは私もあつたな…」

「フエイトちゃんもどうやら過去の事を思い出しているみたい。」

「みな誰しも大なり小なり罪なことは持ち合わせています。」

「肝心なのはそれをどう自身の中で処理して未来への架け橋にしていくかです。」

「私も…過去にたくさんのものを切り落としてきましたから罪がないといえば嘘になります」

「それを言ったら私はこの世界に来る前までは助けはしても心までは救えずにきていたからそれが私の罪といつてもいいわ」

なんかみんなの罪の度合いについての話し合いになってしまいました。でも、そんな話しいけないと思つたのかすぐに終わりました。

居心地悪くなるからそんなお話は私も勘弁です。

それからいろいろな話をしているとどうやら皆さんが帰つてきたようです。

「ただいまー」

「ただいま戻りました」

「今帰りました、主」

「戻りました主はやて」

「はやてちゃん、食事の手伝いができなくてすみません……!」

「では今夜は私とシヤマルが腕を奮うとするか」

「はい♪」

「士郎はともかくシヤマルは自重しろ!」

「そんな……」

なんか、コントを見ている気分になりました。

「お帰りなさい。みんな個人面接と第二試験はどうやった?」

「とどこおりなく終了しました」

「そか。ならよかったわ。あ、そうや！ 士郎とリインフォースの方はデバイス関連はどうなつとるん？」

「ああ、まだ教えていませんでしたね」

「そうだな」

どうやら士郎さんとリインフォースさん専用のデバイスの話のようです。

「まあつもる話はあるやろうけどももう食事の準備は出来てるからその件は食後にでも話してな」

「わかった」

「わかりました」

それで全員揃ったところで食事を始めました。

食事の中でヴィータちゃんが、

「な!? このギガウマな料理はなんだ!?!」

「ああ、それは私が作ったものよ」

「シホが…? くっ…はやての料理も美味しいが、悔しいけどこっちの方が美味しい…!」

「ヴィータも素直に褒められるようになったんね」

「だけど、やっぱりはやてのが一番だからな!」

「ありがとな♪」

「うう…どうして私は料理が下手なのでしょう…」

「後で腕を見てやるからそう落ち込むな、シャマル。磨けば光るさ。きつと…多分…おそらく…」

「それって慰めてるつもりなんですか!？」

「す、すまん。つい本音が…」

「うわーうわー!!」

士郎さんがシャマルさんを慰めている光景が見られました。逆に追い込んだようですけど…。

でも、もう士郎さんも違和感なくはやてちゃんの家族にとけ込んでいるようで安心しました。

そしてなにも問題なく(?) 昼食は終わりました。

みんなが食休みをしている時に士郎さんがデバイスに関して話し始めました。

「マリー嬢と色々と検討したのだが私のデバイスはやはりシホのデバイスを参考にするようだ。」

モードは双剣形態の『ソードフォーム』に弓形態の『ボウフォーム』、そしてやはり『オーバーエッジフォーム』の三形態のアームデバイスになる予定だ」

「ま、そこら辺は予想していたわ。で、名前は？」

「ああ。『ブレイドテミス』という名にしようと考えている」

ブレイドテミス…。

ブレイドは分かるけどテミスの名前の由来はなんだろう…？

でもそこで博識のシホちゃんが反応して、

「まずブレイドは刃、そしてテミスはギリシア神話の正義の女神『テミス』から持つてきたのね。なかなか洒落た名前じゃない？」

「そうか？ シホからその言葉を貰えたということはそれで採用するのでしょうかね」

「正義の女神から持つてくるのが士郎らしいところだよな」

「士郎さんは大切な人達を守る正義の味方さんですから」

ヴィータちゃんがそう言いシヤマルさんがそう褒めていた。

「では、完成した後は私が試運転を手伝ってやろう」

「私もシロウと戦ってみたいですのでよろしくお願いします」

「よ、よろしく頼む…」

シグナムさんとセイバーさんがまるでいい獲物を見つけたかのような表情でそう言っていた。やっぱり似た者同士なのかな…？

なにやら士郎さんが苦勞しそう…。

「それでは次は私ですね」

今度はリインフォースさんが話を切り出す。

「私のデバイスは両腕に装着されるナツクル型の『ファオストフォーム』と左腕の方を変えるパイルバンカー型の『バンカーフォーム』の二形態のアームデバイスにしようと考えています」

「リインフォースさんは接近戦が強いですからね。私の防御を何度も抜いてきましたし……」

「高町なのは……その件に関しては済まないと思っっているし、できれば忘れてはくれまいか……?」

「にやはは……。ちよつと無理かもです」

あの戦いはそう簡単に忘れることはできそうにないですから。

それでリインフォースさんは難しい顔になったがすぐに気持ちを切り替えた様子で、「そしてデバイス名は『ナハトヴァール』にしようと思っっています」

「ナハトヴァールか……。シホちゃん、由来はなんかわかるか?」

はやてちゃんがおそらくわかるだろうシホちゃんに話を振りました。

きつとシホちゃんなら知っていると思うから、私も。

「ええ、まあ……。ナハトはドイツ語で夜あるいは闇、そしてヴァールはおそらくだけど北

欧神話の誓いの女神『ヴァール』からとってきたのかしら?」

「正解だ」

「:そう。でもはやて達との関係を合わせるように直訳すると夜天の誓い、か:。それはやっぱり切り離した自分自身を忘れない為のものなの?」

「ああ。もう消えてしまったが私の半身だったのには変わりはない。だから忘れてやるわけにはいかないだろう? 謂わば戒めのようなものだ」

リインフォースさんはリインフォースさんでやっぱり苦悩を抱えているんだね。

引きずっているわけではないだろうけど残したいものがあるんだろうと私は思いました。

そしてお話はこれで終了になりました。

それから全員で後片付けをして私達は帰りの準備をしているところではやてちゃん
が、

「なのはちゃん、フェイトちゃん、シホちゃん! これから長い付き合いになるやろうけどよろしゅうな!」

「うん!」

「わかった!」

「ええ!」

そして私達は八神家を後にして家に帰ることにしました。
これからがとても楽しみです。マル。

第五十九話

『外伝7

四家族合同旅行（前編）』

Side フェイト・テスタロッサ

はやての家を後にした私達は帰ったら四家族合同の旅行に持っていくもので忘れ物はないかチェックをしました。

「フェイトちゃん、そっちはもう大丈夫…？」

「うん。大丈夫だよ、なのは」

「フェイトはそそっかしいところがあるからもう一度見ておいたほうがいいんじゃない？」

「シホ、ひどい…」

そんな他愛もない話をしながらも三人とも準備は完了しました。

そして夜になり車が三台私の家のマンションの前に並びました。

運転手は士郎さんにノエルさんに鮫島さん。

士郎さんが運転する車には桃子さん、美由希さん、恭也さん、忍さん、ファリンさん、セイバーさんの計七人。

ノエルさんが運転する車には子供組のなのは、私、シホ、すずか、アリサの計六人。鮫島さんが運転する車にはリンディ提督、クロノ、エイミイ、アルフの計五人。

それぞれが乗って現地まで向かうことになりました。

「それでは私が運転をしていきますのでよろしくお願いします」

「うん、ノエル。よろしくね」

私達も「よろしくお願いします」と言つて車に乗った。

それでそれぞれ車が動き出した。

「今から楽しみね」

「そうだね、アリサちゃん」

「…確か、これから行くのは月村家が運営する別荘でスキー場が近くにあるところなんですよ？」

私がそう聞く。

「うん、そうだよフェイトちゃん。今回行く場所は私の家が買い取つてある別荘の一つで今回いく人数が軽く入れる場所なんだよ？」

「そうなんだ…すずかのおウチつてすげえいいね」

「そんな…ありがとねフェイトちゃん」

「そういえばこれから二日はみんなでスキーの予定だけどフェイトってスキーの経験つてある？」

シホにそう聞かれて私は素直に「ありません…」と答えた。

ううう…そんな事はリニスに教えてくれなかったし連れて行ってももらえなかったから仕方ないんだよ…？

「なのはは…？」

「私は…一応何か経験はあるんだよ？ でも…」

「あたしとすずかが去年に色々教えたんだけどまったく上達の兆しを見せなかったのよ」

「去年は拗ねちゃってあんまり滑らなかつたよね、なのはちゃん」

「にゃあああ！ それは言わないで〜!!」

なのはがオタオタ仕出してちよっぴり可愛いと思っちゃったのはしよがないよね。

「それじゃなのは。私と一緒に初級コースで練習しよう。シホの運動音痴の改善修行でなのははかなり上達したんだから今回はきつと上達するよ！」

「ううう…フェイトちゃん…」

隣に座っていたなのはがそれで私に抱きついてきました。

それで私は思わず照れちゃった。

「暑いわね…」

運転するノエルさんの隣に座っていたアリサがなにか呟いたけど聞こえなかった。

「シホちゃん！ 少し滑ったら私と一緒に上級コースにチャレンジしない?」

「え、ええ…。いいわよ? でもすずかは大丈夫なの?」

「私は運動神経いい方だから。前にお姉ちゃんに連れてかれてかなり滑れた覚えがあるから!」

「そう。それじゃみんながある程度滑るのに慣れたらいきましようか」

「うん!」

シホは鈍感ですずかの気持ちに気づいていないけど私達は知っているので頬を赤くしているすずかの気持ちが報われる事を祈った。

でも…、私もなのはとこうなれたらいいなあ…。

…つて、なにを考えているんだろう私は!

私が悶々としていた心を落ち着かせていたらいつの間にか長いトンネルに入ってしまった。

そしてトンネルを抜けたら…!

「一面銀世界だね！」

「雪が今年もたくさん積もってるね！」

「これでこそスキーのしがいがあるってものね！」

「みんな目が良すぎない!? まだ深夜だよ！」

なのは達が感動しているところでシホがノエルさんにあることを聞いていた。

「ノエルさん。別荘まで後どれくらいですか…？」

「そうですね。後一回くらいパーキングに寄りましてからです。後一時間くらいですね。」

ですがまだ到着してしましても深夜の時間帯ですので荷物を運び終わったら皆さんは一回お眠りになられた方がよいですね」

「そうですね。ありがとうございます」

それでパーキングエリアに一回寄って休憩した後、高速道路を降りて山の道を進んでいくとでかい家が立ち並んでいるエリアに到着しました。

「到着です、お嬢様方」

「すずかの家の別荘に到着すると私達は荷物を別荘の中に運び入れて、部屋割りをした後、

「それじゃ皆さん。明日に備えてもう眠ることにしましょう」

忍さんがそう仕切ってそれぞれ眠りにつくことにしました。
ちなみに私と同じ部屋で一緒に眠るのはなのはです。

部屋割りとしては、

士郎さんに桃子さん。

恭也さんに忍さん。

美由希さんにエイミィ。

リンディ提督にアルフ。

ノエルさんにフアリンさん。

私となのは。

シホとセイバーさん。

すずかとアリサ。

クロノと鮫島さんはそれぞれ一人部屋を選択した模様。

「それじゃおやすみなさい」

『おやすみなさい』

それぞれ返事を返して私となのはは部屋に入りベッドに眠りにつきました。

「フェイトちゃん、明日が楽しみだね」

「うん。一緒に練習しよう、なのは」

「うん！ それじゃフェイトちゃん、お休みなさい…」

「お休み、なのは…」

それで私達は眠りについた。



そして翌日、カーテンを開けて空を見てみると太陽が出ていて絶好のスキー日和だった。

窓からさした光でなのはが起き出す。

「フェイトちゃん…?」

「なのは。おはよう」

「おはようなの…ふあ、よく寝たの」

可愛らしいあくびをしてなのはも起きだしてきた。

「それじゃ着替えたら食堂にいこうか」

「うん」

着替えた後、食堂に向かうとすでになかを作っているのかいい匂いがしてくる。

それで覗いてみるとキッチンでは桃子さん、鮫島さん、ノエルさん、ファリンさん、そ

してシホが楽しそうに料理を作っていた。

「シホちゃん、こっちのスープの味を見て頂戴」

「わかりました」

「はわわ〜！」

「フアリン、しつかりと動いてください」

「シホお嬢様。この料理の出来栄はどうでしょうか？」

「うん…。いいと思います。でも、桃子さんもノエルさんも鮫島さんもどうして私に一言入れるんですか…？ 別に全然大丈夫だと思っただけです…」

「そこはほら…ね？ ノエルさん」

「はい。シホお嬢様は私達と違う視点の見方をしていますから我々としては参考になるのです」

「我々にはない一種の才能を持っていますね」

「はあ…。そうですかね…？」

その光景を見て思ったことは。

「シホは大人達に混じっているのに全然違和感がないね…」

「うん…」

なのはと二人で感心していると士郎さんに恭也さん、忍さん、美由希さん、セイバー

さんもすでに椅子に座って着席していた。

違う席ではリンディ提督にエイミイ、クロノ、アルフの姿もあった。

「お父さん、おはようなの」

「おはよう、なのは。フェイトちゃんもおはよう」

「おはようございます」

「フェイト、よく眠れたかい？」

「うん、アルフ」

「ならよかった。今日は存分に楽しむといい」

「クロノもね」

「…あら？　ところでまだすずかさんにアリサさんは起きてこないの？」

リンディ提督がそう聞いてくる。

「あ。そういえばまだ二人共いませんね」

「起こしてきましょうか…？」

私達が起こしに行こうと思っていたら背後から「あー！」という叫びが聞こえてきた。

「はあ…あたし達が最後か…」

「まあまあ、アリサちゃん」

食堂の入口にはすずかとちよつと落ち込んでいるアリサの姿がありました。

「おはよう。すずかちゃんにアリサちゃん」

「おはよう、なのはちゃん、フエイトちゃん」

「おはよー二人共。そういえばシホはどうしたのよ…？　ここにいないけど…」

それで指を指している方へと顔を向けさせると、アリサは納得したのか、

「なるほど…シホはすでに桃子さん達と一緒に料理を作るレベルにまで達しているのね。」

だとすると士郎さんも…あ、衛宮の方の士郎さんの方ね。そっちもシホと同じ腕前と
いうことね」

「あはは…そうだね」

「そういえばすずか。あんた、シホの事は…その、……………アレなんでしょ？」

アレというとやっぱり好きだという関連なのだろうか？

「うん」

「同じ存在の士郎さんはどうなのよ。すずか的に見て…」

「士郎さんは士郎さんだよ。だから私はシホちゃんが、その……………だよ？」

「はいはい。聞いたあたしがばかでしたよ。そうよね、シホはシホ。士郎さんは士郎さんよね」

「すずかも成長したわよね」

「焚きつけた忍さんが何を言うんですか…」

「にしても、だとすると士郎さんはシホちゃんと同じ性格の男性版だから…かなりいい人になるかもね」

うん。それは私もそうだと思う。もうシホと士郎さんは別人だといつてもいいから。そんな話をしていると料理ができたのかトレーに乗せて運ばれてきた。

「それじゃいただきましょうか」

その声で全員で「いただきます」を言つて食事をし始めました。

…感想と言えばシホの料理が桃子さん達に負けず劣らずおいしかったと記載します。



それから私達はスキーウェアに着替えてスキー場までやってきました。見渡す限りの白い大地。ここを滑るんだ…。

大人組はすでにやる気満々でリフトへと乗りにいっている。

「クロノ君、勝負しようか！」

「望むところだ、エイミィ」

クロノとエイミィものつけから勝負事を持ち出している。

「それじゃセイバーも初心者の方ェイトとアルフと一緒に初級コースにいきましょうか」

「いえ、シホ。私は大丈夫ですよ？ セイバーのクラス能力の【対魔力】に【騎乗】も引き継がれていますので」

「いや、スキーにそのスキルは関係ないでしょう…。だからこそ一度は練習した方がいいんじゃない？」

「…わかりました」

なにやらセイバーさんが折れたらしくシホと一緒に大人しく初級コースまで向かっていく。

それで私達も慌ててリフトへと乗っていく。

「フェイトちゃん、着いたらすぐにリフトから足を出して降りなきゃダメだよ？」

「どうして…？」

「恥をかくことになるから…去年一回私やつちやったの。リフトから降りることができずにそのまま引き返すというのを…」

「それは…」

想像してしまった。

それは確かに恥かしいことになるね。

気を付けないと…。

それで少し緊張しながらも初級コースについたらなのはと一緒に降りることができた。

「はあく…。降りることができたね」

「うん」

それで二人で笑顔を浮かべていると後ろからアリサとすずかがやってきて、

「こんな事だけでなにを緊張してるのよ。これからが大変なのよ?」

「そ、そうだね」

「にやはは…それじゃ頑張ろうかフェイトちゃん」

「うん!」

それから待っていてくれたシホが私とセイバーさんとなのはとアルフに指導してくれた。

「ただどやっぱり初めての事もあり私は何度も転がってしまった。」

「わっ、とっ! うわあ!?!」

「む、難しいね…」

「運動神経がいいフェイトちゃんやアルフさんでも最初はやっぱりこけちゃうものなんだね」

「そういうなのはだつていっぱいこけてるよ?」

「うん…結構自信あつただけだね」

「ふう…なのはとフェイトとアルフの苦手な部分はもう把握したわ。次からは転がせないわよ」

シホの力強い宣言に私達は修行気分になった。

これもスキルを習得する訓練と思えばすぐにこなせるかもしれない。

「お願いします!」

「了解。それとセイバーはどうでしょうか…」

セイバーさんの方を見ればすでに初級コースは完璧にマスターしたのかスイスイと滑っていた。

「シホ。私の事はもういいですので後はナノハとフェイトとアルフの面倒を見てあげてください」

「そう? セイバーがそう言うなら分かったけど」

「私はキョウヤやミュキ達と一緒に滑ってきました」

「わかつたわ。セイバーは楽しんできてね」

「ええ。ですが後ほど勝負をしましょう、シホ」

「え、ええ…」

シホが苦笑いを浮かべながらセイバーさんを見送っていた。

苦笑いの真相を聞いてみると四日間の世界で一度水泳で勝負をする事になったんだけどセイバーさんの負けず嫌いが発動して力尽きるまで付き合わされたという話だ。

しかも全力でやらないと「手を抜いていましたね…？」と言われてしごかれたという。それは確かに怖いかも…。セイバーさんってやっぱりスパルタなんだね。

それでなのはと一緒には気持ちを切り替えてシホの的確な指示に従いながら午前中は訓練していった。

そして時間は過ぎていきお昼になりスキー場の食事処で食事をとっていた。

「なのはにフェイトにアルフ。三人共かなり上達したじゃない」

「あ…えへへ。そうかな？」

「そうかな…」

「あたしもそう思うよ」

「ええ。もうこれなら午後から中級コースにいけると思うわ」

「シホちゃんのおかげだね」

「うん」

そこで隣で話を聞いていたアリサが声を上げて、

「それじゃシホ。午後は上級コースであたしと勝負しなさい！」

「アリサちゃん、私が先にシホちゃんと予約していたんだよー?」

「あはは…。二人同時に相手をしてあげるわよ。ということではにはないにフェイト。」

後は二人の判断に任せるけど決して無断で上級コースにいかないように。

ましてエクストラコースなんてきたら心が折れるから絶対に来ないようにね」

「上級以上にコースがあるの…?」

「ええ。山の頂上で傾斜45度の急な坂でデコボコがいっぱいあって道も蛇行して一度踏み外すとなれてない人はそのまま回転して転がり落ちちゃうかもね。最悪遭難ね」

私は多分顔を青くしているだろう。

そんな、まだやつと中級クラスにいけるところなのにそんなところに行ったら滑れる自信はない。

「ま、私は何度もセイバーに付き合わされるんでしょうけどねー」

どこか黄昏た表情になったシホはきつと苦勞するんだろうな。

でも今日は楽しもうという事になり午後も一生懸命練習しようと思いました。

「それじゃいきましようか。すずか、アリサ」

「うん♪」

「わかったわ。負けないわよ、シホ」

三人は上級者コースへと向かっていきました。

私も滑るコツが掴めてきたので中級者コースがなれたら試してみようと思う。

「それじゃなのは。午後は中級者コースを頑張ろうか」

「そうだね。フェイトちゃん」

「あたしは美由希さん達と一緒にいってくるからフェイトはなのはと楽しんでな」

「うん。アルフ」

それから私となのはで多少不慣れながらも中級者コースを練習していきました。

途中何度も上級者コースから滑ってきたシホ達が私達を追い抜いていったけど私達は私達のペースで頑張っていこう。

.....

.....

.....

そして時間が過ぎていって夕暮れ時。

もう時間もいくらいだというので全員が降りてくるのを確認した士郎さんが集合をかけて本日はもうペンションに帰ろうということになった。

確かに不慣れなスキーをしたんで体にちよつと疲れが溜まっているから休めたいのが本音である。まだ明日もあるんだからゆつくりと体を休めとかなきゃね。



夕食前に私達はこの別荘自慢の露天風呂に入っていた。

「はふう〜…生き返るわねー」

シホが普段見せない緩みきつた表情で温泉に浸かっている。

そこにすぐさま魔の手がやってくるとも知らずに。

「シホちゃんー!」

「一緒に楽しみましょうか♪」

美由希さんと忍さんがやってきてシホを連れて行っちゃいました。

シホ、どうなるんだろう…。

反対側では、セイバーさんなのは達が集まっていた。

「セイバーさんって綺麗ですしやっぱりお肌も白くてきめ細かいよね」

「…そうですか? 筋肉質であまり綺麗と呼べるものではないでしょう…?」

「セイバーさん! 自身を卑下しすぎです!」

「そうよ！　こんなに綺麗なのに…！」

「うんうん！」

「やっぱりシホに似ていますねセイバーさんは…」

セイバーさんも私達の発言に納得いったのかそれ以降は卑下する発言はしなくなつた。

その後、シホが疲れた顔をしながら帰ってきたけど何をされたんだらう…？

そしてお風呂から出て夕食を食べた後はみんな家でトランプなどをしたりして夜を過ぎ、
ごしいい時間帯になったのでみんな部屋に戻って就寝しました。

第六十話

『外伝8』

四家族合同旅行（後編）』

S i d e フエイト・テスタロッサ

二日目になり私となのはは最初から中級者コースを走っていました。

「なのはにフエイト。もう上級者コースもいけるんじゃない？」

「あ、アリサ……。まだ多分怖くて無理だと思うよ」

「うんうん……」

「人間慣れが大事だと思うわよ？　それを言ったら空を飛ぶ方がよっぽどあたし達にとってでは怖いし……」

そう言われると確かに。私達はいつの間にか自然と空を飛んでいたから。

それで物は試しということでも私となのはは上級者コースに向かってみることにした。

「あ、あはは……やっぱり怖いね」

「うん……」

二人でリフトに乗りながらどんどん上へと昇っていく。

でも、ふとあることに気づいた。

「ね、ねえなのは……？ このリフトって上級者コースで降りられる奴だったっけ……？」

「え？ た、多分そうだと思うよ……？」

「にしてはなんかどんどん頂上まで昇っている気がするんだけど……」

「にははは……。うん、そうだね……おかしいなあ？」

そんな事を二人で言っている内になんだかんだで頂上まで到着してしまった。

「……………」

私となのはは二人で呆然としてしまった。

降りるコースをチラッと見たらとてもではないが普通の斜面ではなかった。

デコボコがとて多くて蛇行道でしかもおまけに斜めすぎるんだもん！

こ、怖い……。

「ど、どうしよう、なのは!？」

「どどど、どうしよう、フェイトちゃん!？」

「ナノハにフェイト。こんなところでどうしたのですか……？」

「うひゃー!」

「だ、誰!？」

振り向いてみるとそこにはセイバーさんがいた。そして後からシホもやってきた。

「…なのはにフェイト。こんなところになんではいるの? まだこんな場所は滑れないでしょう?」

「ご、ごごご、ごめんなさい! ただ上級者に挑戦しようと思っただけでリフトがそのまま一番上まできちちゃって…!」

「う、うん! その…滑ろうとは思ってなかったんだよ?」

私達が必死に釈明しているとシホはため息をついて、

「…しようがないわね。今回は許してあげるわ」

「ふふ。シホは二人の保護者のようですね」

「似たようなものでしょ?…でも参ったわね。迂回コースはないし、このまま二人を滑らせるのも不安だし…」

それでシホは聞いてくる。

「恥をしないでリフトで下まで降りるのは嫌でしょ?」

「うん…」

「それは恥ずかしい…」

「そうね。それじゃ二人はモーグルコースは…滑っているわけないわよね」

「モーグルコースって…?」

「デコボコしたコースの事よ」

「あー…うん。それはまだやっていないよ。上級者コースすら試していないから」

それでシホは悩む素振りをして、

「セイバー。今回は勝負はお預けにして二人を安全に下まで降りさせるようにサポートしていいこう」

「わかりました。私としましてももう十回ほどはシホと共にエクストラコースは滑りましたので満足気味です」

そんなに滑ったんだ…。さすがシホにセイバーさん。

「それでは私はナノハを担当します」

「わかったわ。それじゃ私はフェイトを担当するわね」

二人の役割分担が決まってそれぞれ動き出す。

「それじゃフェイト。私の言う事をしっかりと守って滑るのよ?」

「うん。ごめんね、シホ…」

「気にしないの。こんな事もあるわよ」

それで私とシホは急斜面のデコボコした坂を滑り落ちていく。

「いい? 膝で重心をうまく制御してコブを乗り越えるのよ」

「う、うん…」

ハの字で比較的滑らかな部分は進んでいきデコボコした箇所を通るとシホの言う通り膝に重心をかけてゆっくりと乗り越えていく。

ふと、なのはの方を見るとセイバーさんの指示でゆっくりとだが進めているようでは安心した。

でも他人のことを気にしていたのが私の気を緩めたのか急に速度が速くなった気がして気づいた時には操作が不能になっていた。

「フェイト！ 横に転びなさい!!」

「むむむ、無理だよ！ シホ!!」

シホが横に転べと言ってくるけど速度が早すぎて転ぶことができない!

い、いけない! このままだと林の中に入っちゃう!

「くっ…! 追いつかない!!」

シホの声が後ろから聞こえてくるけど私は今あんまり構っていられる状況じゃない!

「シホ! フェイト!」

「シホちゃん! フェイトちゃん!」

遠くでなのはとセイバーさんの声が聞こえてくるけど…もう、ダメ!

そのまま林の中へ入ってしまった。私は行き先を見失ってしまった。

ここ、これは本気でいけないかもしれない…。

私がとうとう目を瞑ってしまったそんな時に後ろから誰かに抱きつかれる感じと浮遊感を感じたのは同時の事だった。

そこで私の意識は飛んでしまう…。



シホとフェイトが林の中へと消えていく光景を見ていたセイバーとなのはは顔を青くした。

「シホちゃんとフェイトちゃんが…!」

「落ち着きなさいナノハ! シホがいるのですからきつと大丈夫です。」

それとナノハ、今は二人を追うよりあなたも危険になるのかもしれないからすぐに降りて皆さんを呼ぶことに専念しましょう」

「は、はい!」

なのはが錯乱するがすぐにセイバーが必死に落ち着かせて二人でなんとか下山をして、

「あら？　なのはさんにセイバーさん。シホさんとフェイトさんは…？　一緒じゃないの？」

「それが…落ち着いて聞いてください、リンディ。二人は林の中へと入って行ってしまいいおそらく崖の下に落ちてしまったようです…！」

「えっ!？」

そこから全員に連絡が行き渡りすぐに救助隊が動き出した。

しかし最悪なことに先程までよかつた天候は急に悪くなり雪が降り出してきてしまった。まづて全員は表情を固くするのだった。



Side フェイト・テストロッサ

……………、…あれ？

私は目を覚まし気がつくと周りは木がいっぱいあった。

確か、私はどうなったんだっけ？

それで思考を巡らせてすぐに私は思い出す。

「そうか…。私、崖から落ちたんだ」

とつきにさつききの出来事が鮮明に思い出される。

浮遊感を感じて下には地面が見えて私は意識が飛んでしまった事を。

でも、その前に抱きつかれる感じもした。

それは、多分…。

その考えに思い至り私はすぐに周りを見回す。

「シホ！ どこかにいるんでしょ!?! 返事をして!」

「……………うっ、フエイト…?」

シホの声は私のすぐ真下から聞こえてきた。

それで私は咄嗟に飛び起きる。

私、もしかして助けてくれたシホを下敷きにしちゃった!?

私、私がすぐにどくとそこには頭から血を流しているシホの姿があった!

「シホッ!!」

「…フエイト、あなたは、無事…?」

「うん！ 私はどこも痛くないよ！ それよりシホが…!!」

「そう…ヘマをしちゃったわね…」

「シホのせいじゃないよ！ 私がもつとしつかりと制御していればこんな事にはならな

かったのに……！」

そんな事よりシホを立たせてあげないと……！」

それでスキー板をシホの足から外して立たせてあげようとした時に、

「つう……!？」

シホが足を痛める仕草をした。

やっぱりどこか痛めたのかな!？」

「シホ！ 大丈夫!？」

「……ちよつと、右足をやっちゃったみたいね。右腕もどうやらやっちゃったみたいで動かせない……」

「そんな……ごめんね、シホ！ 本当にごめんなさい!!」

「……大丈夫よ……ちよつと待って。アヴァロンを起動して、傷を治してみるわね……」

そうだ！ シホには体を治癒させる宝具、アヴァロンがあったんだ！

それで少しシホの体が発光しました。

でもすぐにそれはおさまって、

「……どうやら、骨折までは時間をかけないと治らないみたい……」

積雪のおかげで痛みは軽減されたみたいだけど解析をかけてみたけどどうやら右足は捻挫に打撲で右腕の方は打撲がいきすぎて骨折みたい。

…で、後は頭が少しクラクラして痛むからもしかしたら頭蓋にヒビが入ったかもしれない…。

セイバーがいれば、どうにかなったんだらうけど…」

「やっぱりそんなに都合良くはないんだね…」

骨折は、どうにかなるかもしれないけど頭の痛みや揺れになると話は別になってくる

！

もしかしなくても私の全体重がかかっちゃったからだ！

「それじゃ私が左側からシホを支えるよ！ 元は私のせいなんだから怪我がない私がシホを支えてみせるよ！」

「…すまないわね、フエイト…」

「ううん、シホは気にしないで。私がちやんとみんなのところには届けるからね！」

それでスキー道具も全部片方の手で持ってバインドで固定して運ぶようにしてシホを片手で支えながら道なき道を進み始めた。

携帯も圏外だし連絡を取ることができない。

そして最悪な事に、

「こんな時に雪が降ってきてちゃった…急がないと！ バルドイツシュ、スキー場までの

方角は分かる!？」

《ここから北西の方角を進んでいけばつくと思われませう》

「わかった。本当は変身してシホを運んでいきたいけど無理に振動を与えるわけにはいかないから…シホ、少し我慢してね？」

「…ええ…」

シホの声にいつもの覇気がない。

それに体を触ってわかったことだけで体温が低い。

雪が降ってきて気温も低下してきているのにこのままだとまずい…!

リニスに習ったことだけでも急な体温の低下は視覚や聴覚すらも奪ってしまうと…。

吹雪いてきたら今のシホの体には毒にしかならない。

どこか洞窟か小屋があったらそこで体を休ませないと。

それから私とシホは吹雪いてきた中を必死に一步一步進んでいく。

「シホ、寒くない…? まだ平気?」

「…まだ、平気よ…だから先を、急ぎましよう…」

「うん…」

涙が出そうになるけど必死に出るのをおさえて私はシホと歩いていく。

そして歩き出して少しして、

「くっ…吹雪のせいで完全に道を見失っちゃった…!」

「どこか…吹雪をしのげる場所を探しましょう…。一度そこで休んだほうがいいわ…」

「うん…。それまでなんとか頑張つてね、シホ!」

「…ええ、頑張るわ…」

今頼りになるのはバルディッシュのレーダーだけ。

それで必死に進んでいく。

《サー。前方に建物らしきものを補足しました》

「本当!? それじゃそこまで急ぐ…!」

それでなんとか歩いていくとバルディッシュの言った通りに小屋が見つかった。

それですぐに入り、

「…吹雪が止むまでここで休みましょう。フエイト…」

「うん…」

シホをすぐに横に寝かせてなにか体を温めるものはないかと巡らせてみると暖炉が見つかった。

すぐに火を起こそうと思って魔法を使って電気の摩擦で火を起こした。

火はついてくれてそれによってなんとか暖を確保できた。薪もあるし当分は凌げるだろう。

でも、それでもシホは顔には出さないけど体を震わせている。

そ、そうだ！ ウエアが体を冷やしてしまう。

脱がせないといけない！

「シホ、ごめんね。ウエアを脱がすよ？ 痛みがあつたらすぐに言つて…」

「…ええ…」

それで私も乾かさないといけないので一緒に脱いだ。

そしてウエアは暖炉の近くに干して乾かすことにして、それで後は体を温めるものはないかと思探すがなかった…。

それでどうしようかと思つて、そこで私は自身のバリアジャケットのマントを思い出す。

それでマントだけ出してシホを包む。

「シホ、どう？ 暖かい…？」

「…ええ。暖かい…。でも、頭の痛みのせいで体があまり言う事を聞いてくれないのは、痛いわね…」

「…ごめんなさい…」

「…もう、さつき言ったでしょう？ 気にしないでつて…」

「そうじゃないんだ…。こんな時にリニスに習ったことが活かせずシホをうまく助ける

「…フエイト…誰だつてやれる事は限られてくるわ。」

その中でフエイトは今出せる最善の手を使つて私を助けてくれている…。

今はそれだけで私はとても嬉しいわ…。だから、自分を責めないでね…？」

それで私はシヨックを受ける。

シホはこんな状況だつていうのに私に氣遣いの言葉をかけてくれている。

やっぱりシホは私の立派な目標の人だ。

だからこんなところで弱気な発言をしている私を戒めない…。

それで私は両手で頬を叩き、

「ごめん、シホ。弱気になっていた…でも、もう弱気な発言はしない！」

「…うん、よかつた…。フエイト、あなたも下着だけじゃ寒いでしょ？一緒にマントで

温まりましょう…？」

「うん…」

それで私とシホは一緒にマントを包んでウェアが乾くのと一緒に吹雪が止むのを待つ。

そうしてしばらく二人でそうしていると、

「…シホの体、温まってきたね…」

「…ええ。フェイトのおかげね。きっと私だけだったらこううまくはいかなかった」
「私こそ。シホがいなかったらずつと錯乱していたと思う」

「それは…つて、やめましょうか。これじゃいたちごっこになっちゃうわ…」
「ふふ、そうだね」

「…やつと、笑つてくれたわね。これで私ももう少し頑張れるわ…」

「あ…」

そういえばこんな時だつていうのに私は笑みを浮かべている。

心に余裕が出来てきたのかな…？

やつぱりシホと一緒にだと心が落ち着いてくるなあ…。

……………

……………

……………

それから時間は過ぎていって外から吹雪の音が聞こえなくなってきた。

「シホ…どうやら吹雪がやんだみたいだよ？」

「…そ、そうね。…はあ、はあ…」

「シホ……？」

シホの吐く息が荒い……？ ツ!?

「シホ！ 大丈夫……!? やっぱりどこか我慢していたの！」

「……大、丈夫よ。ちよつと腕の骨折が急に痛み出したただけだから……」

「それだけじゃないよね！」

シホの顔色が少し悪くなつてきている！

早く何とかしないと……！

それで私は動こうとしたその時だった。

ゴトツ！

小屋の扉が急に開かれて、

「シホちゃん!! フェイトちゃん!!」

「士郎さん!?!」

「フェイト……！」

士郎さんを筆頭に恭也さん、鮫島さん、アルフ、セイバーさん……他にも救助隊の人達
が小屋の中まで入ってくる。

「士郎さん！ シホの体調は悪くなつてきているんです！ 私を庇つて頭に怪我をおつ
て右足を捻挫して右腕も骨折していて、それで……！」

「わかった、フェイトちゃん。だから今は落ち着こう。救助隊の皆さん、シホちゃんの事をよろしくお願いします」

「わかりました」

それでシホは待ち構えていたタンカに乗せられてセイバーさんも一緒についていきヘリコプターで運ばれていく。

その光景を乾いたウエアをすぐに着た私は見ていることしかできないでいた。

「アルフ…」

「フェイト、シホは大丈夫だから。だから今は帰ろう…?」

「うん…。…ううっ…アルフ、アルフ…」

「フェイト…大丈夫だよ」

それで私は溜め込んでいた想いが溶けてしまったのかアルフの胸で泣き出してしまった。

そして私に新たな思いが生まれた。

こんな事態になったらすぐに助けられるように実力をつけよう、と。



「フエイトさん！」

家に帰ったらまずリンディさんに抱きしめられました。

それでまた泣き出してしまいました。

それからなのは達に心配されたけど、

「シホが私の下敷きになってくれて助けてくれたんだ。だから私は平気だよ……」

「そう……。それじゃシホに関しても帰ってきたら叱らなくちゃね！」

「アリサちゃん!？」

「ま、待つて、アリサ！ 悪いのはちゃんと制御できなかった私だから……！」

「まあ、フエイトがそう言うなら何もしないけど。」

……でもそう考えると最初にあたしがなのはとフエイトに上級コースを試してきたら、つて言ったのが原因だし、う……」

「ま、何はともあれ二人共無事でよかったよ。なのは達を落ち着かせるのには骨を折ったからね」

クロノがそう言う。

それでクロノ達にも心配をかけちゃったので私は。

「心配かけてごめんなさい、お兄ちゃん……」

「き、気にするな……（反則だろう……）」

「おやく？ どうしたのかな、クロノ君？」

「え、エイミイ、なんでもない！」

…？ どうしたんだろう、クロノ。

まあ、みんながそこで笑顔を浮かべてしばらく経ってシホが帰ってきました。

シホは頭に包帯を巻き、右腕には骨折を固定するギプスを巻いていました。右足はどうやら包帯だけで済んだようみたい。

「ご心配をおかけしましてすみませんでした…」

「まったくです。体が頑丈なのが取り柄なのですから今度からはあまり心配をかけさせないでください」

セイバーさんが代表でシホを叱っていました。

それであらかた皆に絞られたシホに私は向かって、

「シホ、ごめんなさい…。そして私を助けてくれてありがとうございます…」

「うん。フェイトにも何もなかったようでよかったわ」

そう言つてシホは遭難時には見せなかったいつも通りの笑顔を浮かべてくれました。

私はそれで心から安心しました。



…そして帰宅後、数日して八神家で、

「はあー…そんな事があつたんやね」

「うん…」

「あはは…」

私はつい思い出して畏まってしまい、シホは苦笑していた。

「ま、なにはともあれ無事が一番や！ よかったよかった」

「そうだね、はやてちゃん」

なのはとはやてが笑みを浮かべて話していました。

「それとこれとは関係ないんだけどね。シホちゃんの名前にね、やつと高町の苗字が入ったんだよ」

「え？ そうなん。それじゃこれからは『シホ・E・シユバインオーグ』が『シホ・E・S・高町』になるって事？ 長くなるね」

「うん。いつまでも高町の名前を入れないと本当の家族になれないって桃子お母さんに駄々をこねられちゃってね…」

そうなのである。

桃子さんから頂いたバツが実はこれだったのだ。

それで私もその話を聞いて「よかったね」とシホを祝った。

「だが、私はこれからもシユバインオーグと呼ばせてもらうからな？」

「ええ。シグナム」

シグナムはこれからもシユバインオーグで通すらしい。

それとはやてがこの話を聞いて士郎さんの苗字をどうするかを検討すると言っていた。

なにはともあれこれは私の一つの失敗と教訓としてまた新たな目標ができたいい旅行の話でした。マル。

第六十一話

『外伝9 はやての日常。そして忍

び寄る不安』

Side 八神はやて

なのはちゃん達が旅行から帰ってきてシホちゃんが骨折したってという話に驚かされた。

しかしシホちゃんやフェイトちゃんも色々と得るものがあったという。

特にシホちゃんは名前を『シホ・E・S・高町』へと変えてより高町家の家族として浸透したという話やし。

「でな、士郎もこの際やから衛宮士郎から八神士郎に苗字を変えたらいいと思うんやけどどうやろ、みんな？」

本日の家族会議での議案はこれやった。

「いや、なんでさ」

「なんでさと言われても士郎ももう八神の家族やろ？ だから八神は必須の苗字やと思うんやけど…」

「私はいいと思います」

「そうだな。士郎もあたし等の家族だからな」

「いいと思いますよ、はやてちゃん♪」

「主がそうおっしゃるならば従います」

「士郎…そのだな、私もお前が八神の性を名乗ってくれれば私嬉しそ？」

…うん？ シグナム達の反応は十分想定内やったけどなんやリインフォースの反応が違う。

頬が少し赤くなってるし士郎を見る目がなんていうか…乙女なのである。

その回答に私の脳髓が辿りついた時には私はリインフォースに既に思念通話をやってた。

《リインフォース？》

《なんですか主はやて…？ その、なんていうのですか？ いいカモを見つけたような笑みを浮かべてどうしたのですか？》

《いやな、私の勘違いやったらよかつたんやけどな。もしかしてリインフォースって士

郎の事、好きになつたんちやうか?》

《…! ななな、なにをおつしやいますか。そ、そんな事はありません!》

《私に誓えるか…?》

《そ、それを使いますか…!?!》

《別に何でもないなら誓えるやろ? それで、どうなん? ん?》

《主はやては卑怯です…。私は、そのですね。消えようとしていた時にあなたと士郎がやつてきた時に士郎に色々と諭されました。

そしてお前を救うと言われて…私は主はやてと生きたいという言葉と一緒に士郎とも生きていきたいと言つてしまつたのです》

《うんうん…それで?》

《はい…。それで救われた後に私は自身で言つた言葉を何度も思い直してそれで気づいてしまつたのです。私の気持ちを…。

最初は救つてくれたからだと思つていましたが最近になりましただんだんと気持ちが変わつていくのを自覚しまして…。

それに私はもう人間の器になりまして将達には悪いと思ひますが人並みの恋も出来る体になつたのです。

それに精神年齢はともかく身体年齢は士郎は二十歳で私は十八歳と近いものにな

りました。ですから…》

それで顔を赤くするリインフォース。

驚いた…。

まさかあんな駄々っ子やったこの子がこんなに素直な子になるやなんて。

うちの子の成長を見られて私は満足や。

だから。

《それなら私はリインフォースの事を応援するわ。

もしかしたら近しい人達が狙ってくるやもしれん。

特に年齢が近い美由希さんとか後はリンディ提督とかそれとセイバーさんとか。

だから今のうちに鈍感な士郎の心をゲットするいい機会や。

それになんやようわからんけど私の乙女の勤では近いうちに士郎に言い寄ってくる

人が現れるかもしれないという予想が出ているんや》

《そ、そんな…！》

《だから、な…？ それに士郎もシホちゃんと同じで幸せの探求をしているんやしそれを隣で支える人がいればよりの結果が生まれると思うんや》

《は、はい…。頑張ります…》

《は、はい…。頑張ります…》

それで思念通話を終了させる。

と、同時にひっそりと念話を士郎以外に流しておいた私はシグナム達を見る。

「主の思うがままに行動されたらどうでしょう…。リインフォースも頑張れ」

「なっ!? まさか、将! 聞いていたのか!」

「鈍感だからな。ま、頑張れ…」

「ヴィータまで!」

「私も応援しちゃいますよ、リインフォース」

「シヤマル…」

念話が筒抜け状態だったことにうちひしがれるリインフォースの姿がそこにあった。

「ん? みんなどうしたんだ…?」

そこに一人未だに分かっていない鈍感が一人。

ザフィーラが士郎の肩に手を起き、

「ま、頑張ることだ…」

「ザフィーラ、なんの事だ…?」

「気にするな。お前もそのうち気づく。だから早く気づいてやれ…」

「何にだ。教えてくれてもいいだろう?」

「私からは何も言えん。この鈍感が…!」

「なんだ? 急に突き放されたぞ…?」

あはは……。ザフィーラも際どいところをついてくるな。

「見ている身としては面白いな。」

でも、リインフォースの気持ちが叶うとええな。



数日が経ち、今日はなのはちゃん達が遊びに来ています。

シホちゃんもあと少しでギプスが取れるというので早く動かしたいという感じである。

今日はヴィータ以外はみんなは管理局に用があつて席を外しとる。

なのでちょうどいいのでリインフォースの気持ちをなのはちゃん達にも教えておこうと思う。

「——つて、ことがリインフォースの口から聞けてな」

「そうなんだ。気持ちを通じるといいね」

「なのは！ あたしの髪をいじるな！」

「にゃははー♪」

なのはちゃんはヴィータの髪を弄りながらもそう答えている。

「士郎さん…リインフォースの気持ちに気づくといいね」

フェイトちゃんはマジメに答えてくれとる。

そしてとうの元同一人物の反応というと、

「うーん…士郎にね。同じ存在だったから複雑な気持ちだけど、でも士郎の幸せの探求が見つかるといい機会かもしれないわね」

と、概ね賛成意見やった。

それで思わず聞いてみた。

「シホちゃんはそういうのはあらんの？」

「そういうのって…恋愛事…？」

「そうや。シホちゃんならいい人は何人も寄ってくると思うんやけどな。シルビアさんやイリヤさんの影響かもしれへんけどもう完璧に女の子やし…」

「でも、私は元は男だし…男性と付き合うというイメージが全然沸かないんだけど…」

「それじゃ女の子同士ならOKってわけなん…？」

「う、うーん…」

それでシホちゃんは難しい顔をして腕を組み悩み始めた。

そこに念話で、

《はやてちゃん、ナイスなの。シホちゃんの気持ちが聞けるいいチャンスだよ》

《そうだね。すずかはシホの事が好きだしフィアットはお姉様と言ってシホの事を慕っているし》

《そうやったね》

「うーん…男性と女性とどっちと付き合いたいと考えればどっちかといえればやっぱり女性なのかな…?」

「ほーう…そうなんやね」

「ええ。相手が男性だと私は多分気持ち悪いと思うから。付き合えても友達止まりがいいところでしょうしね」

「そんなら…もし女の子で言い寄ってきたらそれに答えるん…?」

「どうだろう? でも、私なんかに言い寄ってくる女の子なんているのかしら…?」

「それ、ホンマに言つとるん…?」

「そうだけど…?」

「これは、強敵やね…」

「…?」

私の言葉にシホちゃんは首を傾げ、なのはちゃんとフェイトちゃんとヴィータは同感だという感じで頷いていた。

これはすずかちゃんとフィアットちゃんがとても苦労しそうや。

ま、それはそれ、これはこれという感じで気持ち切り替え（そうでもせんと聞いているこっちの身がもたん）という感じで、

「そういうえばシホちゃん」

「なに？」

「あんな。あの決戦時に見せてくれた固有結界やけどな」

「ああ…それがどうしたの？」

「後で士郎に聞いたんやけど、あれって自身の心の世界を表に顕現させるっていうすごい大魔術なんやろ？」

「そうよ」

「それだけでなく、あの世界がシホちゃんの心なわけよね？ 少し哀しい世界やと第一印象として思ったんやけどシホちゃん的にはどう思ってるん？」

「そうね…。でも、私は自身で言うのもなんだけど変わっていると思ってたわ。」

以前の固有結界の中には草は生えてなかったし川も流れていなかった…。

でも、それもなのはの家族になれたという事で内面が変化してきていると思うのよ。

だからあの世界は私的にはよくなってきたかと思うわ」

「そっか…ならええんわ。いらん事を聞いて悪かったんな」

「いいわよ。気にしないから」

そう言つてシホちゃんは微笑を浮かべる。

「それにエミヤに比べるとどうしても違いはハッキリとするわよ？」

「どんな世界だったん…？」

「そうね…。まず空は灰色の空で覆われて太陽はその姿を隠し、代わりに巨大な歯車がいくつも浮いていて回転して唸りを上げているのよ。

そして地面は荒廃していて炎があちこちの地面から上がっているといった感じの本当に寂しい世界…。私の原初の風景を現したような感じね」

「それは…確かに悲しい世界だね」

「うん。エミヤさんの心はどれだけ守護者という枠組みの中で壊され摩耗したのか想像できないね」

「確かにそれならシホと守護者のエミヤは別人だな。世界が違いすぎるからな」

ヴィータがそう言う。

「そうやろな。」

そんな世界には士郎にもなつてほしくないのが本音や。

「それと呪文詠唱やけどあん時はゆつくり聞くこともできへんやつたけどどういった意味なん？」

「…そうね。それじゃ…。」

まずは私と士郎の詠唱から言おうかしら」

まず、と言葉に付ける。

もしかしてそこまでエミヤさんと内容も違うんかな。

「それじゃいくわね。」

『体は剣で出来ている。』

血潮は鉄で心は硝子。

幾たびの戦場を越えて不敗。

ただの一度も敗走はなく、ただの一度の勝利もなし。

担い手はここに孤り。

剣の丘で鉄を鍛つ。

ならば、我が生涯に意味は不要ず、

この体は、無限の剣で出来ていた』。

…これが私と士郎の固有結界の呪文詠唱よ」

なんて言えばええんやろ。

なぜか言葉が出てきん。

でも、それでもやっぱし…。

「…やっぱり少し寂しい呪文詠唱だね」

なのはちゃんはその素直な性格での言葉を述べた。

確かにそうやな。

これは確かに寂しいし悲しいもんや。

「…ねえシホ。エミヤさんの方も知っているんだよね？」

「ええ」

「教えてくれないかな。そうじゃないと区別がちよつとつけられない…」

「わかったわ」

フエイトちゃんのお願いでシホちゃんはエミヤさんの呪文詠唱も唱え始める。

「…いくわ。」

『体は剣で出来ている。』

血潮は鉄で心は硝子。

幾たびの戦場を越えて不敗。

ただの一度も敗走はなく、ただの一度も理解されない。

彼の者は常に独り、剣の丘で勝利に酔う。

故に、生涯に意味はなく。

その体はきつと剣で出来ていた』。

…これが英霊エミヤの最果てにまで行ってしまったものの呪文詠唱よ。

私達の呪文詠唱は自身の生き方に対してある程度肯定的に対して、エミヤの呪文詠唱は自身の否定も含めたような意味合いが込められているのよ……」

確かにシホちゃん達のと比べてみるとやっぱり悲しい響きがあるんやね。

「なんつーかエミヤは正義の味方という事を最後までやり遂げたんだろ？」

士郎に昔話で聞かされたけど最後は死刑台で首を吊りながらもこれですべての悪意は自身に向くと思いい納得して逝ったっていう……。

あたしには残念だが考えられないな。そんな生き方は……。

しかもその果てには守護者とかいういつ終わるともわからない永遠の殺しを世界に要求されたんだろ？

あたし達も守護騎士だっていう似たような存在だけどそれは願ひ下げな話だ」

「そうね。私もそんなのは嫌よ。

私は……いや、私と士郎はもうエミヤとは違う道を歩いているから。

もう自身を犠牲にした生き方はできるだけしたくないのが本心よ」

「なら、それでいいじゃねーか」

「ヴィータ……」

「自身で納得して道を変えたんなら誰にも文句を言える筋合いはねえよ。

その決めた道をまっすぐに目指していけばいいと……あたしは思うぞ。シホに士郎も

な」

「ええ。ありがとう、ヴィータ」

ヴィータはいい事を言うなあ。

さすがうちの子や。

それでシホちゃんも嬉しそうな顔になりヴィータの頭を撫でていた。

普段なら嫌がるどころだが今回は素直に撫でられとる。

ヴィータもええ感じに成長しているんやね。



その後、シホちゃん達に誘われてお散歩をする事になった。

車椅子はヴィータが押してくれるから安全や。

「そういえばこうやってのんびりと街を友達と探検する機会はなかったから嬉しいわ」

「それじゃ今日は私とイリヤの歌を聴かせてあげるわ」

「ん？ どんなんや？」

私が興味津々に聞くと代わりにフェイトちゃんが答えてくれた。

「ローレライっていう歌でシホの一番得意な歌なんだよ。」

私もこの歌を聴いて癒されたことがあったの」

「うん。シホちゃんの歌は魅力がある歌なんだよ?」

「それは楽しみや」

それである公園に向かうとなにやら近所の飼い犬や野生の猫がシホちゃん目当てなかな? 集まってくる。

それにヴィータも驚きの顔をしだしているんやから私の感性は間違つたらんと思う。

シホちゃんは群がってくる動物達に「久しぶりね、みんな」と言つてそれぞれ頭を撫でたりモフモフしたりしている。

しばらくしてシホちゃんがある椅子に座り、

「それじゃまた久しぶりに始めるとしましょうか」

「いい歌を期待しているね」

「シホちゃん、頑張つて」

「これからその歌っていうのが聞けるんやね」

「どんだけうまいのかな…?」

そしてシホちゃんが歌い始める。

「~~~~~♪~~~~~♪」

なんやいい歌声やね。

心に伝わってくるわ。

これもイリヤさんから譲ってもらった歌だっというけどこれはもうシホちゃんの歌で行けるで？

「~~~~♪~~~~♪……………」

…そして歌い終わる。

ホンマにいい歌声やった。

ヴィータもなにやら感動しているようで拍手を送っていた。

そして再度群がる動物達。

その飼い主達もいい歌だと口々に言っけて拍手を送っているんや。

「…シホちゃん、将来歌手も目指せるんちゃうか…？」

「それは無理よ。歌えるのはイリヤ譲りのこの歌だけだから。

それにこれ以上は目立ちたくないしね」

シホちゃんはそう言っけて笑う。

うーん…もつたない逸材やねえ。

そのうちプロデュースしたいと思っただくらいや。

「それじゃ翠屋にいこうか」

「そうだね」

「はやて、シークリーム食べていくでしょ？ ヴィータもだけど」

「そやね。それじゃ食べていくわ」

「そこのお菓子はギガウマなんだよなー！」

「ヴィータ、ヨダレヨダレ…」

翠屋に私らは向かっていった。

でもその途中で前から歩いてくる黒いコートを着て帽子を深く被っている男性っぽい人が私の隣を通り掛ろうとしたその時、

ブチッ！

「あいたツ!？」

「なんや!? 急に髪の毛を数本か抜かれてしもうた。」

「誰だ!? はやてにいたずらする奴は!!？」

ヴィータが怒って振り向くがもうすでに男性はその場から姿を消していた。

「なんだったんや、一体…?」

「はやて、大丈夫か…?」

「う、うん。私は大丈夫や…でもいきなりなんだったんやろな？」

「いたずらにしては性質が悪いね…」

「そうね…」

「暴力反対なの！」

みんなが口々に私を擁護するように喋ってくる。

なんや、ようわからんけど何か、そう何か嫌な予感がした。

私の勘はよう当たるから、変なことが起きないで欲しいと願った。



…その後、翠屋でお菓子を数点購入して帰宅する。するとしばらくして全員が家に帰ってきた。

「あ、そうや。ある報告があるんやけどみんな聞いてくれるか？」

それでシグナム達やなのはちゃん達も耳を傾けてくる。

「まだ正式にやないけど通院があらかた終わったら、四月の新学期から私もなのはちゃん達と一緒に学校に通えるようになるんよ」

「そうなの!?!」

「よかったね、はやて」

「おめでとう、はやて」

「ありがとな！」

「一緒のクラスになれたらいいね」

「そうやね」

なのはちやん達と騒いでいる時がやっぱり楽しいな。

うん。私の人生はこれからや。しっかりと生きていかなな。

第三章 聖杯大戦編

第六十二話

『現れる兆し、現れる敵』

薄暗い部屋の中、一人の男がなにやらミットチルダ式魔法陣でもベルカ式魔法陣でもない魔法陣を地面へと描き始める。

そして魔法陣は描かれ男はニヤリと笑みを浮かべる。

ある触媒を持ちながら魔法陣の前へと立ち、

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公……」

男は詠唱を始めて地面に描かれる魔法陣から光が漏れ出す。

「降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。」

閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する……」

魔法陣から赤き光が放たれる。

「告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよ」

魔法陣からエーテルの嵐が発生し出す。

それですでに男は手応えを感じ取っていた。

そう、呼べると！

「誓いを此処に。」

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

莫大なエーテルの嵐は部屋中に巻き起こり男はなんとか目を凝らして魔法陣から浮かび上がってくる光が人の形をなしていくのを確認する。

そして、

「……問うぞ。貴様が我を呼び出したマスターか？」

私は今月村邸にいる。

なぜ月村邸かとうとすずかに魔術の指南をしているからだ。

なんでわざわざすずかに魔術を教えているかというそれは力の制御のためである。

本当は魔術回路は眠っているのなら起こさないでそのままにしておいた方がよかったのだけど…。

すずかには夜の一族の能力で魔眼があるのだ。

しかもこれは私の世界の魔術回路と繋がっている事が分かった私は慌てたものだ。実は夜の一族は魔術回路持ちだったのだ。

それですずかの魔眼の能力が結構強力でそれを無闇に発動するのを抑えるために魔術回路でオンオフを覚えさせているのが今の現状だ。

「ごめんね、シホちゃん…私の魔眼が制御が効かなくなってきたから教えてもらっちゃって…」

「気にしないで。すずかも魔眼をなのは達に当てたくはないでしょ?」

「うん…」

そこに誰かがドアをノックしてきて、

「すずか、入るわよ?」

「あ、お姉ちゃん! うん、いいよ」

入ってきたのは忍さんだった。

「あ、シホちゃん。今取り込み中だった？」

「いえ、大丈夫ですよ。すぐかは意外と魔術の才能があつて覚えるのも早いですから」

「そう…。ありがとね、シホちゃん。私にも魔術回路はあるんだけど夜の一族の力はさすがにほどない方だからあんまり必要ないしね」

「でも、結構魔術回路の本数も代を重ねているらしくかなりありますからもしすぐが私の世界の人間だったらかなり力のある魔術師になれますね」

「そうなんだー。でもそんなところにすぐかを行かせたくないからこの世界には魔術協会とか聖堂教会だっけ？ そんな組織がないのはありがたいわね」

そうなのである。

この世界には今までリンディさん達にも手伝ってもらったが地球にはそんな裏組織はないという。

だからだろう。

すぐかのように魔術回路を持つ人が発見されるのは珍しい方なのだ。

でも、やっぱりこの世界にも魔術回路持ちがいるという事が分かってからはもしかしたら魔術関連の事件も裏ではもしかしたら起こっているのではないかと勘ぐってしま

「…あれ？ シホちゃん」

「ん？ なに、すずか…？」

「右腕はもう骨折は治ったよね？」

「え？ ええ…」

「なんか、シホちゃんの腕から、血が垂れているよ…？」

「——えっ？」

それで私は既視感を感じ嫌な予感がしてすぐに袖を捲ってみた。

そして気づいてしまった。

「この痣は…!？」

手の甲にどんとどんと近づいているように出来上がっているミミズ張りのような痣。

これには私の過去の出来事で思い当たる節がある。

まさか…。

「すずか…最近だけど私のように腕に痣のようなものはできていたりしない…？」

「え？ よくわかったね」

すずかが袖を捲るとそこには包帯が巻かれていた。

「ちよつと見て、いいかしら…？」

「う、うん…」

それで包帯をめくって腕を見てみた。

そこにはやはり兆しのような痣が残されていた。

「なんで…!?!」

私は混乱した。

なぜ、今この痣が出てくるのだろうか。

「ちよつとちよつとシホちゃん！ 一体、どうしたの？」

「忍さん…落ち着いて聞いてください。私とすずかの腕にある痣は…令呪の兆しです」

「令呪って、まさか…！ サーヴァントを使役する為のついでというアレ!?!」

「はい、おそらくですが…」

「そんな…！ だってこの世界には聖杯はないんですよ？ シホちゃん!」

「ええ。そのはずよ、すずか…。ちよつと待つてね…。他にも宛があるから電話で聞いてみるわ」

電話を取り出して私は士郎の携帯へと電話をかけた。

しばらくして、

『…もしもし。どうした、シホ?』

「あ、士郎。ちよつと聞きたいことがあるんだけどいいかしら?」

『奇遇だな。私もお前に聞いておきたいことがあったのだ』

「…もしかして、そっちにも現れているの？ 令呪の兆しが…」

『正解だ。しかも私だけでなくはやてにも浮き出てきている』

「はやてにも!? だって、えっとはやてには魔術回路はないはずでしょ!」

『そのはずだった…。だが、その兆しが現れたと同時期にはやての中で魔術回路が出来上がっている事が解析をかけてみて確認された』

「なんて、こと…。こちらでははずかには兆しが浮かび上がっているわ…」

『そうなのか…』

それじゃ今確認出来るだけで私、士郎、すずか、はやての四人に令呪の兆しが現れているっていうこと…?」

「…わかったわ。でも、この世界には聖杯戦争のような記録はないわよ?」

『そのはずだが…。しかしこうも揃って知り合いに浮かび上がって魔術回路持ちが出てきているということは…シホ。』

他にも連絡を入れてみる。もしかしたらの事態だったら手遅れになりかねん』

「わかったわ」

それで士郎との通信を切る。

私は今、相当切羽詰った顔をしているだろう。

内心の動揺をなんとか落ち着かせながら、

「あつちでは士郎とはやてに令呪の兆しが確認されたそうよ…」

「士郎さんにはやてちゃんにも…?」

「ええ。それとはやてには今までなかったはずなのに魔術回路の存在が精製されているのが確認されたわ」

「それって…かなりやばい事態じゃないの?」

「忍さん。これはもうやばいと行っていられる事態ではありません。」

もしかしたら海鳴市を中心にしてまた事件が起こる可能性が高いです。

しかも今度は魔術絡みでもしたら死人がでるかもしれない…!」

それで忍さんとすずかは青い顔をする。

「ど、どうしよう!」

「すずか、落ち着いて。それじゃ一度知り合いには片っ端から連絡を入れて兆しが現れているものをうちに集合させましょう!」

「それはナイスアイディアです。忍さん!」

それで士郎ともう一回連絡を入れてすずかの家に来るように連絡を入れた。

それからすずかと分担して連絡をいれていく。

それで兆しがあるもの、ないものを関係なく召集をかけることにしたのだった。



そしてその夜。

月村邸に知り合いで主要人物たちが一斉に集められた。

まず月村家から忍さんにすずか。ノエルさんにフアリンさん。

バニングス家からアリサに鮫島さんが。

高町家からなのは、士郎お父さん、桃子お母さん、恭也兄さん、美由希姉さん、セイ

バー、そして私。

ハラオウン家からフェイトとリンデイさん、クロノ、エイミイさん、アルフが。

八神家からはやて、ヴォルケンリッターに士郎にリインフォース。

急遽無限書庫から呼び出されたユーノとファイアが。

「さて、集まってもらったのは他でもありません」

私から話を切り出す。

そして右腕の痣を掲げて、

「私、すずか、士郎、はやての四人からサーヴァント召喚に必要な令呪の兆しと、そして

魔術回路が確認されました」

それで私と士郎の話で聖杯戦争の事を知っている全員からどよめきの声上がる。

「それでこの中で私たち四人のように体のどこかに痣が出来たという話はありませんか？ 隠さないでいってください。手遅れになる前に…」

それでおずおずといった感じなのは、フェイト、アリサ、ファイアの四人が手を挙げた。

「え!?! さらに四人!?!」

「えっと、私はシホちゃんが今朝すずかちゃんの家に出かけた後に気づいたんだよ?」

「…私は、シホにその連絡があつて調べてみたら右手に痣が出来ていたの…」

「あたしもなのはとフェイトと概ね同じ感想よ」

「私もです、お姉様」

これで兆しが現れたのは計八人になる。

これってどういうことだろうか？

それで士郎と手分けして解析をかけて調べた結果、なのは達四人にも魔術回路が精製されている事が確認できた。

「…士郎。これはどういうことだろうか?」

「わからん。七人ならともかく八人となるとこれはもう通常の聖杯戦争のルールにもない事だろう…」

「シホ…これは聖杯戦争が起きる兆しのようなものなのか…?」

「ええ、クロノ。でもどうして私達なのか…。」

本来聖杯戦争では聖杯によってマスターは選定されるのよ。

なにか聖杯に願いたい欲望、あるいは叶えたい願いがあつた魔術師を…」

「シホの言う通りです」

元サーヴァントだったセイバーが話を引き継ぐ。

「私達サーヴァントがなにかしら聖杯に願いたいものがあると同時にマスターにあたる魔術師にも叶えたい願いが存在するのです。

例えば過去の私でしたら過去のやり直しという願いが、そしてマスターの士郎には正義の味方になるという夢が…」

「でもだからって、なんでなのはにシホちゃん達なんだ…?」

士郎お父さんがそう言う。

でも、それを聞きたいのは私も同じである。

だからその問いに答える術を持ってない。

「私と士郎は過去に聖杯戦争に参加した経験があるからだと思ひますが…。」

でも、その存在理由である聖杯が存在しない以上、この戦いは無意味なものに終わつてしまふ」

「はい。聖杯がなければサーヴァントも呼び出すことは不可能ですから」

「でも、それって少し矛盾していない…?」
『えっ?』

エイミイさんの言葉に全員が声を上げる。

「だって、それじゃそもそも令呪の兆しが浮かび上がるわけもないし、やつぱりどこかに聖杯が存在しているって証拠にならないかな?」

「そうかもしれないですけど…現状検討がつきませんから何とも言えません。ただ確かな事は私達八人は聖杯に選ばれたマスターだっていう事です」

「ねえ、クロノ?もしかしてあの予言は…」

「はい。母さん。もしかしたらコレの事かもしれない」

「クロノ、予言って…?」

「それは…」

その時だった。

ガシャーンッ!

「!?」

いきなり窓ガラスが割られ屋敷の中に二体なにかが侵入してくる気配がした。

「皆さん!各自戦闘の準備を! 士郎! セイバー! 仕掛けるわよ!!」

「ああ! トレース・オン 投影開始!!」

「わかりました！ いきますよシホ！」

『ユニゾン・イン!!』

そうして私と士郎は気配のする方へと干将・莫耶を構えて疾駆した。

そして気配のある方へと剣を同時に振り下ろした。だがそこで驚愕の光景を私と士郎は目にする。

干将・莫耶が四本とも半分以上がポツキリと切り裂かれてしまったのだ。

「バカなっ!?!」

「まがりなりにも宝具なのよ!?! それを切り裂くなんて…!」

「きゃあー!!」

そこでファイアの叫び声が出た。

「士郎! その黒づくめの相手をお願い!」

「了解した!」

士郎に武器を切り裂いた黒づくめの敵を任せて私は急いでファイアの方へと向かった。ただどこかでさらに驚愕の光景を目にする。

ファイアを気絶させている相手は…!」

「クククツ…他愛もないな」

「はやて…!?!」

「え、なんで!? 私がなんでもう一人おるん!？」

そこには紫の甲冑を纏つて髪色が灰色に変色していて目つきが険しくなっているが、はやてと瓜二つの少女がフィアを捕まえて立っていた。

「違うな…。我は、キャスターだ!」

「キャスター…!？」

「この小娘は数合わせの為に頂いていくぞ?」

次の瞬間には転移魔法陣が展開して、

「撤退するぞ、アサシン!」

「……………」

見ればはやてと思われるキャスターの隣には黒いちぎれちぎれのマントに白い包帯を目に巻いている男…アサシンが無言で立っていた。

あれ…? でも、どこかで会った事があるような?

と、そんな事より!

「士郎は…!？」

士郎の方を見ると倒されて気絶した後であつた。

「これから始まる聖杯大戦…せいぜい楽しませてくれよ! 我ら影のサーヴァント達が相手になつてやろう。アハハハ…!!」

キャスターはそう言つてアサシンとともに転移で撤退していった。

ファイアを連れ去つて……!

「ファイアー……!!」

ユーノと私が叫ぶがもう遅かった。

二人は転移して消えてしまい後には静寂だけが残された。

それからしばらく経過して、

「あのもう一人の私……キャスターが言つた聖杯大戦というのはなんの事なんやろうか……?」

「それよりファイアの事を数合わせといった。

つて言う事はあつちには既にキャスターとアサシン以外にもサーヴァントが四体揃つているつていうことなのかな?……連れ去られたファイアが心配だ……」

「ユーノ君……」

「ユーノ……」

それではとフェイトが心配げに声を出す。

「我らもキャスターの姿が主はやてと同じ姿で動揺していなければ……こんな事にはならなかつたものを……」

「だな……」

「油断してしまいましたね…」

「この屈辱は必ず返すとしよう」

ヴォルケンズ達が悔しそうにしている。

「…リインフォース。士郎の具合はどうなっている?」

士郎の具合を見ているリインフォースに聞いてみる。

「大丈夫だ。今はただ気絶をしているだけだからな。しかし、アサシンの方は士郎を上回る体術なのだな…」

「英霊と呼ばれるだけあるかもしれないわね」

「そうですねシホ。しかしこれは本格的にいけない展開になってきましたね。」

マスター候補のファイアットが連れ去られ、多分サーヴァントは召喚されるでしょう。

そしてファイアットはおそらくキャスターの手により洗脳かそこの魔術をかけられてしまうと予想されます」

「もう敵の手の内だからね…。くっ！なんてことなの！」

私は苛立ちでテーブルを思いつきり叩く。

「しかし腑に落ちません。サーヴァントの人数は原則7人。第五次ではギルガメツシユという例外はありましたがそれが基本のはず…」

——アーサー王よ。その疑問、儂が教えてやろう。

『!?』

私達は全員で部屋に響いてくる声の方へと顔を向ける。

するとソファアーには私の顔見知りである大師父が座っていた。

「大師父！」

「シホ、壮健でなによりだな」

「宝石翁…あなたが出張ってくるという事は、状況はかなり緊迫しているということですか…?」

「うむ…皆の疑問には儂が答えよう。状況は思った以上に緊迫しているからの」

「そうして大師父の言葉からこれから行われるだろう聖杯大戦の事が語られることになる。」

第六十三話

『状況説明と召喚』

S i d e シホ・E・S・高町

大師父が現れた後、士郎が少しして目を覚まして大師父がいることに驚きの声を上げていたが二度目なので流させてもらった。

今は聖杯戦争…いや、もう聖杯大戦と呼ばれる大魔術儀式の件について話し合われようとしている。

「…ふむ、まずは…そうじやの。シホ、そしてシロウ、アーサー王は平行世界についてはわかっておるな？」

「はい。私と士郎は第二魔法の一担い手です。だから理論については大抵わかっています。ね、士郎？」

「ああ」

「私も大丈夫です」

「うむ。では他のものは大丈夫かの？」

みんなに聞く。

それをリンディさんが代表して、

「あらかたシホさん達から聞かされましたから大丈夫です。

わからないところがありませんでしたらその都度聞かせてもらいます」

「うむ。承知した。まず初めに話すことといえ、違う世界の農からの連絡での。ある

平行世界が瀕死の淵に立たされているという話を聞いた」

「なにがあつたんですか、大師父……？」

「原因は第五次聖杯戦争じゃった」

「えっ!？」

大師父は語る。

ある平行世界で私とセイバーは言峰綺礼とギルガメッシュに敗北してしまった事を。

「そしてその世界の衛宮士郎は死に他のマスターも全員死滅し残ったのは言峰綺礼にギルガメッシュ。

そしてギルガメッシュによつて聖杯の泥を飲まされ人格を汚染されたアーサー王だけだった……」

「私も、敗れてしまったのですか…?」

「うむ。そしてそこから地獄が始まった。言峰綺礼は聖杯に何を願ったかは知らないが世界中に聖杯の泥は蔓延しほとんどの場所が不毛の大地と化してしまった。

…そしてほとんどの人々も滅びて生き残ったのはわずか数パーセントの泥の猛威から免れた人間のみだった。

他にも死徒の連中はおつたが泥に飲み込まれたという…真祖の姫も星から力を受け取る事ができずにギルガメツシユに敗れてしまった…」

そこまで聞いて、言峰綺礼は生かしてはおけないという思考に私はたどり着いていた。

「言峰綺礼がそこまでの奴だったとは…。アラヤは動かなかったんですか?」

「もちろんエミヤや他にも様々な英霊達が動いたが、記憶しているであろう…?」

聖杯の泥は英霊やサーヴァントにとって天敵であると。英霊達は抵抗はしたが泥に飲まれた途端に無に返されてしまった。

それでアラヤは沈黙し、ガイアが動いて人々を見捨て世界だけを存続させる力だけが発動した。

そうして、しばらくののちに人々は地上から全滅してしまった…。そしてそれを伝えてきたその世界の儂もついに力尽きてしまった…」

「そんな…」

「話には聞いていたが言峰綺礼はとんだ狂人だな」

「救いようがないね…」

みんなが口々に言峰綺礼を非難している。

当然だ。なんであろうと世界を滅ぼす要因となったのだから。

「そしてその世界の死んでいった魔術師の因子は近くの平行世界…つまりこの世界にばら蒔かれた」

「だから、なのは達に魔術回路が宿ったんですか…？」

「うむ、そうじゃ。だからこれからはこの世界にも魔術を使うものが色々な次元世界から出てくる事じやろう。今ここにいる者達に宿った魔術回路は尖兵というものじやろう」

「それはまた、はた迷惑な事ですな…」

クロノがそう言う。確かにそう考えるとこちらとしては申し訳なく感じる。

「幸い聖杯も泥を出し切ったようでも猛威は今のところこの世界にはまだ侵食しては来ない。」

だが、それも時間の問題じや。ギルガメッシュは宝物庫に大聖杯を入れて、そして様々な薬で改造をした。

それによつて自身も含めたサーヴァントを14体呼び出せるものにまで大聖杯は変貌を遂げてしまい、7対7の対抗戦形式になつてしまつた」

「14体ですか!?!」

「そうじゃ。じゃから先ほど連れ去られたフィアットという娘以外に既に六体のサーヴァントがあちらの陣営におることじゃろう。」

その中には当然ギルガメッシュと汚染されたアーサー王も数に含まれている。

おそらく言峰綺礼はこの世界にもまた聖杯にサーヴァントの魂を満たして願おうとすることじゃろう…。

じゃから力を蓄えている今が言峰綺礼を叩く絶好のチャンスとも言える」

「そして、それが聖杯大戦に結びついてくるんですね」

「そうじゃ。今は聖杯の自身はカラの状態じゃからの。たつた七体のサーヴァントの魂をいれても力を発揮はせんじゃろう。だから十四体召喚できるようにした」

そこでリンディさんが手をあげて、

「これが予言の示した内容だつたんですね…」

「む? 予言とはなんのことかの?」

「ミットチルダという私達の世界に未来の予言を出来る人物がいるんです。」

その子は予言でこう書き記しました。

『繰り返す闇の胎動、湧き上がる絶望の泥。

その者、愉悦を心から望みし愚者。

従いし王は絶望を実現せんとし人造の杯を作り出さんとする。

人造の器から漏れ出したるは黒い絶望。

絶望は世界すべてを覆いつくしあらゆる死が蔓延し誰も抗うすべを見出せない。

最後、あらゆる全ての頂上より悪夢が降り注ぎ世界は闇に閉ざされる』…と

その予言内容に全員関心をしめした。

『『愉悦を心から望みし愚者』…というのはおそらく言峰綺礼の事でしょうね。

当然、それに従いし王というのはギルガメッシュに間違いない。

漏れ出したる黒い絶望…これは聖杯の泥でもう間違いないと思うわ

私の推論にみんなは頷く。

「言峰綺礼…許しておけないね…！」

「うん、フェイトちゃん！」

「当たり前よ！ 何様のつもりよ！ そんなのが神父だなんて世も末だわ！」

「放っておいちゃいけないと思うんだ…。じゃないと私達もきつと殺されちゃう…！」

「その通りや！」

なのは達はもう言峰綺礼を止める気満々のようだ。

だけどまだ覚悟を聞いていない。

「…あのね、なのは。それにみんな。皆に戦う資格である令呪の兆しが宿つたのは確かだわ。

でもね、聖杯大戦を戦うということは話し合いも一切ない殺し合いに身を投じるということになるのよ？

あなた達は、それに耐えられる…？」

「シホの言うとおりだ。ここでは座して待つというのも一つの道だ。

なに、まだ幼い君たちが手を血に染めずとも私達が言峰綺礼とギルガメッシュを止めて見せよう」

「ええ。汚れ役は私達だけで十分です。

平行世界とはいえ私達が止められなかったのが原因なのですから尻拭いは私達で拭きます」

私と士郎、セイバーがそう言い、みんなは少し悲しそうな顔になる。

「…でも、もうシホちゃん達だけに罪を背負って欲しくないの！」

「なのは…でも…」

「なにも殺すだけが道じゃないでしょ？ それは、確かにサーヴァント達は倒さなきゃいけない…！ でも、そのマスター達だけでも逮捕は出来ると思うんだ！」

「フエイト…」

「フエイトちゃんと言う通りや。このままやつたらもしかしたらシホちゃん達だけじゃられちゃうかもしれないんやろ？」

「そんな大責任、私達にも乗っけてもええんよ？」

「はやて…」

「私達はシホちゃんの事を見捨てないよ！ そんな事したらもう友達だなんて言えないー！」

「その通りよ。それは確かに殺し合いをするのは少し勘弁だけどそんな事で友情を壊したくないわ！」

「さすがにアリサ…」

五人がそれぞれ覚悟の言葉を述べてくる。

それに続くように、

「シユバインオーグ、すまないが私達は引くことはしない。主が立ち上がっているのだから私達がついていかなければ騎士の名折れだ！」

「そうだぜ！ それにあのはやての格好をした奴は放っておくことはできないしな！」

「その通りです。だからお手伝いをさせてください！」

「主の敵は我々の敵だ。ただ打ち砕くのみに！」

「私にも協力させてくれ。主の助けになりたいし、幸いデバイスももう出来上がっている。力になろう！」

守護騎士達が口々に声を上げる。

「そうだぞ、シホ。そんな犯罪者は放っておくだけ今後のタメにはならない」

「私達管理局も微力ながら協力させてもらおうわ……！」

「そういう事だよ、シホちゃん」

「そうだぞ！」

「それにフィアも助け出さないといけないしね！」

リンディさん達も声をあげる。

……もう、みんなこんな事に付き合うことないのに……。

「もう、物好きなんですから……好きにしてください。でも引く時はしっかりと引いてくださいよ!」

『はい!』

それで全員が声を上げる。

そこに士郎お父さん達が揃って、

「……正直言つて私達家族はシホちゃん達にそんな危険な事はさせたくないのが本心だ。

しかし私達では力になれそうにないからな。

でも、だからー…最後にはしつかりと帰ってくることだ。これを守ってくれ」

「わかりました、士郎お父さん！」

『わかりました！』

「やれやれ…セイバー、ここは実に暖かい場所だな」

「そうですね、シロウ…」

暖かい空気になり始めてきて、そこにリンディさんが予言にはまだ残り半分が示されているというので私達はそれに耳を傾けた。

「予言の続きは…」

『これを阻止できうるは、かつて聖なる王に使えし者。

遙か遠き地に旅立ち、名すら忘れ去られた血の末裔。

その者、無限の虚構を作り出す神秘。世界を侵し、そして穿つ異端の体現者。

古の昔滅びし都の王の再誕。変貌した御身、絶大なる極光の輝きをもたらす星の使者を従える。

彼の者達の織り成す奇跡はあらゆる闇を祓い光に導く。

その志を共にするもの達は力を貸与えともに戦うだろう。

合わさった力を前に愚者と王は力を削がれ絶望は消え失せることだろう』…です。

この内容がシホさん達だという確信は既にもう得ています」

リンデイさんは笑みを浮かべた。

そして大師父が今まで黙っていた口を開き、

「…シホ、それにシロウ。お前達はいいい輩を得たな」

「はい…。本当に私にはもつたいない限りです」

「同感だな」



「さて、…それでは準備をしようかの」

大師父が宝石剣を手に持ちそれをひと振りすると、地面には七つの魔法陣が浮かび上がっていた。

「まずはシホとシロウ。お主達が召喚するのじゃ。」

きつとサーヴァント達も主達に協力的じゃろうからな」

「わかりました。土郎、やるわよ?」

「ああ、失敗は許されないな」

私と土郎がそれぞれ魔法陣の前に立ち、

「では、始めるが良い」

大師父の言葉に私達は魔術回路を開き始める。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公……。祖には我が大師シュバインオーグ……。

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せ

よ」

私と士郎は同時に召喚呪文を唱えていく。

途端、全身が魔術回路になつた感じになり、

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。」

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する」

二つの魔法陣が光りだしてきた。

「——告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよ」

「誓いを此処に。」

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者……」

詠唱完成前だというのに魔法陣から凄まじいエーテルの嵐が巻き起こる。

「汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

最大限まで高まった魔力は魔法陣へと集まっていき、そして二つの魔法陣からそれぞれ人型が形成されていき、

「余は至高の芸術にしてオリンピアの花！　セイバーのサーヴァントである。問おう、そなたが余の奏者で間違いないか？」

……………え？

つい変な気持ちになってしまった。

だって、服装は赤いけどその姿形はアルトリアにそっくりなのだから。

姿は胸元が開いた感じでなぜかスカートの前が半透明になっていて下着が見えているというなんとも際どい格好だった。

「ん？　どうした？　奏者よ？」

「えつと……」

一応私のサーヴァントなんだから。

「そ、そうよ、セイバー。私があなたのマスターであっているわ」

令呪を見せ確認させる。

「そうか！　うっかり余の間違いかと思ったが大事なようで安心した。よってこれか

らは余の手を取り突き進んでいこうか奏者よ！」

「よろしくね、セイバー！ 私の名前はシホ・E・S・高町よ」

「うむ！ その名、余の胸にしかと刻ませてもらった！ かしななんと可愛らしい奏者だな。余は思わず胸ときめいたぞ」

「そ、そう…」

「余の真名はネロ・クラウドイウスだ。よろしく頼む、奏者よ」

「ええ」

私とセイバーの第一対面はなんとかうまくいったようだ。

アルトリアの方のセイバーがとつても驚愕した顔になっているがそれかもしれない。
い。

ちらつと士郎の方を見てみると、

「きゃー！ イケメンなご主人様マスターですねー！ 私はキャスターのサーヴァントです。束者の駄狐ですがよろしく願いますね、ご主人様マスターー♪」

「あ、ああ…」

なにやら青い導師服に狐耳、尻尾を生やしたなんとも妙なコスプレのような子がいて士郎の手を両手で握っていた。

「そのだな、キャスター…。お前のその耳と尻尾は飾りか？」

「いいえー。しつかりとした本物ですよー?」

「む、そうか。…ということは狐だから真名はもしや…玉藻の前か?」

「いやーん! さすが私のご主人様♪ まだ教えてもないのに言い当てるなんてやっぱり素敵ですよ!」

「そ、そうか…。いや、いいんだ別に」

なにやらキャスターのペースに踊らされているみたい…。

遠くでリインフォースが「これが主の勦…さすがです我が主…」と言って落ち込んでいてはやてがそれを慰める光景が目に入った。

ま、私の事じゃないからいいとして、

「セイバー…。今の現状は把握している?」

「うむ。聖杯から知識が流れてきたので把握しているぞ。しかし…今回はまた種の違う聖杯戦争だな。共闘することになるうとは…」

「本当ですよ。本来なら戦う相手ですが今は共闘といきましょうか、セイバー」

「そうだな。世界を滅ぼすわけにはいかないからな。奏者よ。いつでも命令してくれば余は奏者の力になると誓おう」

「私ですよーご主人様」

それで色々と話し合って友好的な関係を私と士郎はそれぞれ結ぶことができた。

それから今度は一人ずつ召喚することになった。

「そ、それじゃ次は私がするね?」

最初はフェイトからだった。

なのでフェイトの希望を聞いてみることにした。

「フェイト、なにか英霊の希望はある…?」

「頼りになればなんでもいいけど…」

「そう。なら打って付けの奴がいるわ。トレース・オン 投影開始」

そして投影するのはゲイ・ボルク。

「これを触媒に使いなさい」

「これは…?」

「魔槍ゲイ・ボルクよ。これならクー・フリーンが召喚できるわ。いい兄貴分だから頼りになるわ」

「奏者よ! そなたはそんな魔術を使えるのか! すごいぞ!」

「はは…士郎も同じことはできるよ」

「そうなのですか、ママ主人様?」

「ああ…。私とシホは元は同じ魂だからな」

「え? むむむ…:…あ、ホントに起源は同じ魂です! どういったカラクリですか

「？」

「後でそれは教えるでしょう」

「わかりましたー」

「それじゃ、やるね？」

そしてフェイトが私たちと同じように唱え始める。

詠唱は佳境にまで進んでいき、

「汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

そして姿を現す青い軽鎧に青い髪 of 青年。赤い目は猛禽類を彷彿とさせる。その手にはゲイ・ボルクがしっかりと握られていた。

「召喚に従い参上した。聞くぜ、お前が俺のマスターか……？」

「は、はい……！ 私の名前はフェイト・テストアロッサです。はうく……魔力が一気に持つてかれちやう感じだよ……」

「そうか。しかと名を授かった。俺はランサーのサーヴァントだ。よろしく頼むぜ、マスター——」

「よ、よろしく……」

「しっかしマスターはまだガキか。ま、十年後に期待だな——」

「なっ!? いきなり失礼です!」

「わりーわりー!…って、なんでアーチャーの野郎がここにいやがる!? セイバーの姿もあるし!」

『え…?』

士郎の事をアーチャーと呼ぶということとは、

「ね、ねえランサー? あなたもしかして第五次聖杯戦争の記憶があるの?」

「あ? 誰だお前…? アイんツベルンの嬢ちゃんに似てるが…」

「そ、そうよね…。変わり果てたから分からないわよね…」

それで私と士郎とセイバーの状況を簡単に説明する。

「なるほど…。中身はセイバーのマスターの坊主だったのか」

「わかった…?」

「おうよ。しかし平行世界とはいえ言峰のヤロー…! 俺の手でぶち殺してやるぜ!!」

「ら、ランサー。あんまり派手にやらないでね? できれば言峰以外のマスターは逮捕

したいから…」

「あいあい。マスターの命令なら了解だぜ!」

フェイトとランサーもいい感じだ。

アルフが嫉妬しているけどそこは今後の仲の取り合いに期待だろう。

「それじゃ次は私がするね？」

「次はすずかね」

「頑張つていいサーヴァントを召喚するね！」

そしてまた呪文を唱え始める。

そして出てきたサーヴァントは…、

「召喚に応じまして参りました。聞きます。あなたが私のマスターですか…？」

黒い女性用のボディースーツに身を包んで目には眼帯をしている紫色の髪で長身の女性がそこに立っていた。

「はい。私は月村すずかです。よろしくお願いします」

「ふふ…よろしく頼みます、スズカ。私はライダーのサーヴァントです」

「今度はライダーね…」

「ライダーですね」

私とセイバー（アルトリア）でそう話していると、

「…セイバーとアーチャーとランサー…？」

「あ、やっぱり記憶があるのね」

それでまたライダーに色々と説明すると納得いったのか微笑を浮かべて、

「…あなたはシロウの半身なのでね。イリヤスフィールの体ももらった」

「ええ、そういう事よ」

「わかりました。それではサーヴァント・ライダー…真名をメドューサ。スズカの敵となるものを尽く粉碎してみせましょう」

「うん。これからよろしくね、ライダー」

ライダーはさすがの一族に関して感づいているようで目は見えないがさすがに慈愛の眼差しを送っているみたいだった。

「これなら大丈夫かな？」

「それじゃ次はあたしね！」

アリサが高らかに宣言する。

バツクに炎が見えているようだ。

「さーて！ かっこいいサーヴァントを召喚するわよ！」

そして詠唱を開始する。

だがそこで異常が発生する。

ちやんと詠唱は唱えられたのだけれど魔法陣の上に現れないのだ。

「あ、あれ…？　なんで現れないのよ!？」

「失敗か…?」

「そ、そんなー…」

「——いやいや、しつかりと召喚はされておるぞ？」

声は上から聞こえてきた。

それで上に向けてみるとそこには中華服を着た赤い色の髪をした武人というにふさわしい男性が天井に逆さまで足をついていた。

それからゆつくりと地面へと降りてくると、

「ふむ、一瞬だが違う場所に呼ばれたから儂としては焦ったぞ？　呵呵呵！」

豪快な笑いをする男性はアリサに歩み寄ると、

「さて、小娘。儂を呼んだのはお主か？」

「そ、そうよ！　名前はアリサ・バニングスよ！」

アリサが気丈に答えると男は「ふっ」と笑い、

「よかろう。儂はアサシンのサーヴァント。真名を『李書文』だ。よろしく頼むぞアリサ」

「李書文ですって!?!　それってあの中国の有名な格闘家!?!」

「うむ。知っておったか」

「はい。あたしの憧れの人の一人です！」

「そうかそうか。ならばもし儂に未来があるのならアリサが成人した暁にはともに酒を飲み交わそうではないか」

「はー！」

どうやら格闘関連でアリサのお気に入りに入りにヒットしたらしい。

最初はどうかと思うたが、まあなんとかなるわね。

それで後残っているのはなのはとはやての二人。

どっちが先に召喚するかジャンケンをしている。

残り物だと後はアーチャーにバーサーカーのクラスだから二人は必死になってジャンケンをしている。

そして先に勝利したのはなのはだった。

「やったー！」

「あああ…私はバーサーカーかいな」

「主はやて、気を確かに！」

それで先になのはは詠唱をしだす。

そして魔法陣から呼び出されたのは…え？

「召喚に応じまして参上いたしました。あなたが私のマスターですか？」

「え？ え？ えつと、はい。高町なのはです」

なのはは慌てている。

実を言うと私もあまり思考が回っていない。

私の魂に宿るもうひとつの人格、シルビアさんの気持ちが溢れてくる。

そう、そこにいたのは金の髪に右目が緑、左目が赤の虹彩異色で両手ともに義手をつけて白く輝く銀色の騎士甲冑を纏っている私が今の今まで会いたかった女性。

「サーヴァント・ファイター…真名をオリヴィエ・ゼーケブレヒトです。よろしく願いますね、なのは」

「は、はい…」

私はもう気持ちを抑える事ができなかつた。

「陛下!!」

「…え？」

自然と私は片膝をつき、

「オリヴィエ陛下…お会いしようございました」

「あなたは…？」

「今はシホさんと同化していますが、私です！ アインツベルンです!!」

「まさか…シルビアだというのですか？」

私は涙を流しながら何度も「はい！」と答えた。

「そうですか…。会いたかったですよ。わが友よ…」

「はい…」

そして私はオリヴィエ陛下と抱き合った。



それを見ていた一同は、

「おい、士郎。これはどういうことだ…?」

「ランサー、後で詳しい事情を説明してやるから今は茶々は入れないほうがいいぞ?」

「わかったよ…」

「むう…奏者よ」

「ネロ。落ち着きなさい。シホはそのうち貴女の事も構ってくれますよ」

「そうか…?」

「ええ。シホは私達を蔑ろにはしませんから」

「そうか。ならば今は許そう。余の寛大さに世界が涙を流すことだろう!」

「あ、あはは…そうですね」

セイバーは苦笑いを浮かべていた。

それからしばらくしてシホは復帰してきた。



S i d e シホ・E・S・高町

「…ごめん。魂がシルビアさんと混合しているから強い思いに惹かれちゃったわ」

「大丈夫だよ、シホちゃん。でもイレギュラークラスなんだね、ファイターは」

「そのようです。ですがなのはの力に必ずなってみせますね」

「うん♪」

どうしてなの是从陛下が呼ばれたのか分からないけどいい関係になりそうね。

それに残るは、

「最後は私か…」

「主、頑張ってください！」

「うん。頑張る！なのはちゃんはイレギュラークラスやったんだからもしかしたら私もイレギュラークラスかもしれないしな！」

それはどうだろう？アーチャーが出てくる可能性も無きにしても非ずだし。

そして魔法陣が発光し出して出てきたのは、

「呼ばれて参上！あなたが私を呼んだマスター？」

「え、えー?」

なんかずいぶんテンション高い人が出てきた。

金色の髪に赤い瞳。格好は上は白い服装で下は青いロングスカートと…。

どうみてもバーサーカーでは少なくともないわね。

「…違うの?」

「えつと…合ってます。八神はやていいいます」

「はやてね。わかったわ」

「そ、それでああなたはなんのサーヴァントなんや?」

「ん? 私? 私のクラスはファニーヴァンプよ。真祖の吸血姫で真名は『アルクエイ

ド・ブリュンスタッド』よ」

え!? 真祖ってもしかして!

そこで大師父が反応した。

「おー! アルクエイド。お主が呼ばれてきたか」

「あ、ゼル爺だ。やつほー!」

その反応に全員が驚く。

「僕はアルクエイドの後見人なんじゃよ。…しかしアルクエイド、お前が呼び出されるとは。いつ英霊になったんじゃ?」

「それがゼル爺聞いてよー。私が千年城で志貴と一緒に眠っていたのに外でなんか金ピカが暴れまわっているって言うのよ。」

それで退治しにいったんだけどなぜか星から力が受け取ることができずに志貴も殺されちゃって敗北しちゃったのよ。あー！今思い出しても腹が立ってくるわ！」

「なるほど…。お主はかの世界のアルクエイドじゃったか」

それで大師父が今この世界に訪れようとしている驚異について話を教えると、

「…なるほどね。あの金ピカがいるのね！」

それでファニーヴァンプはとてもいい獰猛な笑顔になり、

「今度こそ殺してあげるわあの金ピカ。私を殺した責任取ってもらうんだから…！」

実に心強い味方ができたものだ。

「はやて、最高のジョーカーを引いたんじゃない？ 聖杯大戦の戦力をひっくり返すほどの…」

「あはは。多分そうやろうな。でも、心強い限りや！」

そして、これでこちらのサーヴァントは全員召喚されたことになる。

これで対策を取ることができる。

言峰綺礼、ギルガメッシュ。

必ず倒してやるわよ…！

そしてファイアも必ず救う……！

第六十四話

『セイバー対決』

ある場所で、ファイアットは無表情で召喚の呪文を唱えていた。

「…召喚に従い参上した。あなたが僕のマスターですか？」

「……………」

召喚されたサーヴァントが聞くが、ファイアットは無言。

「…？ マスター…？」

サーヴァントが動こうとするがそこにある男性がファイアットの首に刃物を突きつけて、

「動くな。お前のマスターは今私の手の中にある」

「なんだとツ!？」

「サーヴァント。お前がマスターを助けたいと少しでも思うのなら私の言う事を聞け」

「くっ…！ そんな事が…！」

「さあ、どうした…返答は？」

サーヴァントは悔しみの顔をしながら、

「……………わかった、従おう。だからマスターには手を出さないでくれ」
「それでいいんだ…」

男はその顔に狂気の笑みを浮かべて言う事を聞くファイアットの頭を撫でた。

「(…兄、さん…………お姉…様…………、助、けて…)」

わずかばかりの意識しか残っていない体が自由に動かすことのできないファイアットはただそう願うしかできなかつた。



S i d e シホ・E・S・高町

「さて、これでサーヴァントは全員召喚されたことになるの。」

サーヴァント諸君…もうわかっていると思うがこの戦いでは皆の願いは叶えられないだろう。

聖杯はすでに汚染されているからな」

「ああ。その事なら俺とライダーは先刻承知だ」

「ええ。災いの種を破壊するのでしょうか？」

ランサーとライダーは私達にしつかりと協力してくれるようだ。

「私は特にないかなー。でも志貴の仇をとるっていうならあの金ピカを倒すって望みはあるわね」

「呵呵呵！ 血沸き肉踊る戦いができれば僕はそれで本望よ！」

フアンニーヴァンプとアサシンも特に反骨心はないようである。

そして、

「陛下…協力してくださいますか？」

「ええ。シルビア…いえ、今はシホでしたね。そんなものは今の平和な世界に撒き散らしてはならないのです。だから協力は惜しみません」

オリヴィエ陛下も協力してくれるようだ。

よかった…。

「奏者の願いならば余はなんでもこなしてみせよう！」

「はいです！ コテンパンに聖杯をぶち壊しましょう！」

「頼もしい限りだな、キャスター」

「そうね。それと皆には魔導師の説明もしておいた方がいいんじゃないかしら？」

なのは、フェイト、はやてはそれに「そうだね」と頷いた。

「魔導師…？ この世界では魔導師じゃねえのか？」

「うん。ランサー。一応魔術回路も世界の意思で宿ったけど本来私達はリンカーコアを使つて魔法を使うんだ」

フェイトの説明でサーヴァント達は这个世界出身のオリヴィエ陛下以外は驚いている。

その証拠に私達はそれぞれセットアップして見せた。

「おー！ 奏者よ。なかなか似合つておるぞ」

「はは…ありがとうセイバー」

「これは魔法少女つて奴…？ 私もしたいな…」

「いや、ファニーヴァンプ。魔導師やからね、あしからずな」

「マスター…子供にしてその際どい格好はどうなんだ…？」

「ら、ランサー！ 気にしている事を言わないで！」

「それに士郎はただアーチャーの野郎の格好に変わったただけだな」

「放つておけ、ランサー…」

「でも似合つてますよ。ご主人様^{マスター}」

「時代は変わるものですね。非殺傷設定とは、便利な世の中になりましたね」

「そうなんです！ ファイターさん！」

「…スズカはならないのですか？」

「私とアリサちゃんも魔術回路だけなんだよ？ ライダー」

「ふむ、なんとも面白おかしい光景ではあるな」

「あたしも最初は驚きっぱなしだったわね」

サーヴァント勢とマスター勢とで色々交友が結べてきたわね。

それで少し離れた士郎お父さん達はというと、

「もう、色々な事が立て続けで私はお腹がいっぱいだよ」

「お母さんも…？ 実は私もだよ」

「なのは達が遠くなつていくな」

「まだ父離れはしないでほしいがな…」

なにやらもう達観してきたみたいである。

「それではいい頃合ですし私達もし街中で戦闘が起きた時の対処のために結界を張つて人々からサーヴァント同士の戦いを遠ざける作業をしますね」

「そうですね、母さん。僕達ではサーヴァントには敵いませんからね。悔しいですが…」

魔導師達には街が壊れたのを修復してもらおう作業に移ってもらいましょう」

リンディさん達がそう話を切り出す。

確かにそれだと助かる。

私達のサーヴァントは話をしっかりと聞いてくれるからいいけど、敵Sideのサーヴァントやマスターはなにをしでかし分かったものではないから。

それから色々とは話は決まっていき、今日はもう私達は召喚の件もあり魔力が大幅に消費しているので一度帰り休養する事になった。



翌日から私とWセイバーで学校が終わった後、夜に街を回ることになった。

士郎は相方がキャスターなので拠点にしている月村邸で待機している。

別れる際に、士郎はキャスターのパラメーターを確認してかなり接近戦な能力でしかも「陣地作成がCとはこれいかに？」とキャスターを問いただしていた。

でも作れないことはないので拠点である月村邸を今現在キャスターは鋭意改造中である。

なんせ大師父に教えてもらったのだが月村邸の土地は龍脈が流れていて魔術師の拠点とするなら最適な場所だと教えてもらったから。

そして他のみんなもいざという時に備えて待機している。

ランサーは以前言峰に偵察任務をやらされた経緯があり独自で調べている。

それと二人もセイバーじゃ混乱するので私はアルトリアとネロと真名で呼ぶことにした。

前の聖杯戦争ではアルトリアは家で待機していたからいち早く駆けつける事ができなかった。

けど今回はアルトリアはアンリミテッド・エアの中で待機、ネロも霊体化してすぐに出れるようになってる。

《して奏者よ。サーヴァントとマスターに宛はあるのか？》

《マスターは分からないけどセイバーは宛があるわ。なんせ聖杯の泥に汚染されたアルトリアその人なんだから》

《そうであったな》

《シホ。もし私が来たらおそらく聖杯の泥で受肉しているのでネロだけでは敵わないでしょう。その時には私も出ます》

《うん。ユニゾンして擬似セイバーとして戦おう》

《二人のセイバーか。余は楽しくなってきたぞ》

ネロとアルトリアと念話を交わしながら町の中を歩いていく。

そして時間は九時過ぎになり通る人がまばらになってきたところで、急に強烈な視線を感じた。

視線の先には一人の少年がいた。

歳は15歳くらいだろうか。銀の髪に赤い瞳。

その少年の姿を見てすぐにある事に思い至った。

(彼は、もしかしてホムンクルス…?)

少年はクスリと笑い、

「……んにちは。小さいお嬢さん。

僕の名前は『ノア・ホライゾン』。君の思っているとおりホムンクルスだよ」

「なっ……！」

まさかそんなに簡単に答えてくれるとは思っていなかった。

「そして僕のサーヴァントは……」

少年…ノアの言葉とともに空の上から強烈な殺気が降りてくるのを感じた。

それで私は身構える。

そしておりてきた…いや、この表現はおかしい。

まるで隕石か流星のように地面へと降り注いでくるかのようにそれは降ってきた。

アスファルトを砕き、それは地面に着地し、その黒い騎士甲冑の人物は髪の色は灰色

に目は金色、肌の色も血が通っていないかのように白く変わり果てているが見間違える

はずがない。

「セイバーのサーヴァントだよ」

「あれは…やっぱリアルトリアね」

《奏者よ！ 出るぞ!!》

「うん！ お願いネロ！」

そしてすぐにリンディさんに連絡をいれる。

「リンディさん！ 私の周囲に結界を展開お願いします！」

『わかりました！』

それで黒いセイバーの登場に騒めきだしている一般市民の人達は姿を次々と消していき誰もいない空間へと変わる。

「お願い、ネロ！」

「任された！ 奏者よ！」

ネロが霊体化を解除して私の前に立つ。

その手にはネロの愛剣である隕鉄の韃アエストウス・エストウス（ふいご）：『原初の火』を出現して構える。
「…そのような歪な剣で私と対峙するか？」

黒いセイバーはその手に黒く染まった剣を出す。

すぐに解析をかけてわかった。

あれは属性が反転しているがれつきとしたエクスカリバーだということに！

「…ふん。これは余の至高の剣である。貴様にとやかく言われたくはないぞ、セイバー！」

「弱者がよく吠える…。いいだろう、貴様に我が剣を食らわせてやる。せいぜい足掻くのだな」

本物のアルトリアがこんな人を見下した発言をするわけがない。

やっぱり性格すらも聖杯の泥に汚染されてしまったんだ！

「本物のセイバーの力をとくと見よ！」

「本物だと…？ よくぞ吠えた。ならば、どちらが真のセイバーなのかこの戦いで決めようではないか！」

そして黒いセイバーが剣を構えてこちらへと一步踏み出してきた。

それだけで重圧が私達を襲いかかってくる。

「くっ…!?!」

それで私とネロは思わず目を覆う。

「ネロ、気をつけて。一筋縄では行かない相手だわ！」

「分かっている、奏者。最初から死力を尽くして挑んでいくとする！」

黒いセイバーが剣を掲げてまるで弓から放たれようとしている矢のように前に屈んで、そして地面を踏み抜き一瞬でネロと肉薄した。

「ツ!? 早いな!」

幾度もの剣同士のぶつかり合い。それだけで衝撃波が発生し、やはりあちらのセイバーが強いのかネロが少しずつ押しされてきている。

「ふっ…この程度も耐えられんか…? 話にならんぞ!」

「くっ!? 調子づきよってからに!」

だが…奏者の前で無様にやられるわけには、いかないのだ!

ゆくぞ! この剣舞、そなたに! グラディサヌス・ブラウセルン 喝采は剣戟の如く!!」

ネロの技が黒いセイバーの肩に決まり傷を刻む。

だが肩をやられたというのに黒いセイバーは笑みを浮かべ、

「面白い…私に噛み付いてくるとは中々のものだ。ならば…ヴォーテイガーン卑王鉄槌!」

黒いセイバーが剣に黒い風を溜めてネロに向かって放ってきた。あれはもしかして

『ストライク・エア風王鉄槌』の変質したもの!?

それによつて起こった衝撃波は塊となつてネロの腹を掠めていった。

「くっ…避けられなかったか…!」

なんとか致命傷は避けられたけどネロは傷を負つてしまっていた。

「ネロ!…すぐに治療するわね!」

私はすぐにネロへと寄りイリヤ譲りの治癒魔術を展開する。

それによってネロの傷は塞がる。

「…すまない、奏者よ。だが、次はもう喰らわん！」

「へえ…力の差が歴然だというのにまだ挑んでくるんだね？」

「当たり前よ！ 私達は勝たなきゃいけないのよ！ そしてあなたも止めるわ！ ノア！」

「僕を止める…？ それは無理な相談だね。だって、僕は “小聖杯” なんだから」

「なんですって…?! いや、確かにホムンクルスなんだからその可能性はあったわ。

でも、あなたはそれでいいの!? 言峰綺礼の操り人形のままです！」

「僕の師匠の事を知っているんだ？ 君、何者…？」

ノアはコロコロと表情を変えて聞いてくる。

「何者でもいいでしょ！ 私はあなたの気持ちを聞いているのよ！」

「僕はただ役割を果たすだけだよ」

「そんな…それじゃただの人形じゃない！ ノア、あなたにも心があるなら自身の事も考えなさい。」

そして言峰綺礼が起こそうとしている事を考えなさい！」

「師匠はただ生まれてくる命を祝福しているだけだよ…そののどがいけないの？」

「その生まれてくるものがこの世界に災いを振りまくことになるのよ!？」

「うん。知ってる。でも、それが…?」

「なっ……!」

なにも感じていないの? ノアは…。

そうか。なにか変だと思ったら、

「そう…。わかったわ。あなたは心が欠落しているのね。あなたは…」

「それ以上のマスターへの暴言は許さんぞ。娘…」

そこで今まで私とノアの話で戦いを停止していたセイバーがノアの前に出て剣を私に向ける。

「セイバー…。あなたにも言いたい事がある。あなたは以前のマスターである士郎を守れなかったそうね」

「……………何が言いたい?」

「その士郎を殺した言峰綺礼とギルガメッシュを憎いとは思わないの? あなたはそこまで心が汚されてしまったの?」

「そんな事か。ふんツ…シロウは愚かだったのだ。素直に聖杯に心売り渡していれば死なずにすんだものを…」

「間違っているのは貴様の方だ! セイバー!!」

そこで今の今まで待機していたアルトリアがアンリミテッド・エアから出てくる。

それを見て黒いセイバーは一瞬驚きの表情をするがそれだけ、ただ微笑を浮かべ、
「ほう…何かと思えば甘さを捨てきれない私か。なぜここにいるのか知らんが見ていて
心の底から嫌悪感が湧いてくる…倒すか」

「シホ…私達も行きましよう…！　ここであの間違った思いを抱いている私を正すので
すー」

「わかつたわ、アルトリア！」

『ユニゾン・イン!!』

そして私はアンリミテッド・エアを起動して一気にセイバーフォームへと姿を変え、
その手にエクスカリバーを構える。

「ネロ！　いきましよう！」

「うむ。ともに駆け抜けようぞ、奏者よ！」

そして私とネロが駆け出そうとしたその時だった。

目の前に一陣の風が巻き起こり、次には私のお腹に蹴りが決められていた。

それで吹き飛ばされる途中でネロに支えられながらもなんとか態勢を立て直して見る
とそこには長い赤い槍と短い黄色い槍を持った新たなサーヴァントが立っていた。

『まさか…ランサー!?!』

「ゲホツ…。…アルトリア。あのランサーつてもしかしてまさかデイルムツド・オデイ

ナ!？」

『はい、そうです！ ですがなぜ彼が……!』

新たな敵の登場に場は緊迫するのだった。

第六十五話

『速き者達の争い』

S i d e シホ・E・S・高町

私とネロは新たに現れたサーヴァント…おそらくクラスはランサーで真名はデイルムツド・オディナだろう。

その人物を見て、

「アルトリア…彼は本当にデイルムツドなの？」

『間違いありません。赤と黄色の二槍に右目の下にある泣き黒子はまさしくランサーです』

「うむ、ならば…。そのもの。余とセイバーとの戦いに横槍をいれるとは無礼であるう？」

「……………アー、サー……………」

…？ ランサーの様子がおかしい。

「アーサー……!!」

途端、デイルムツドの体から黒い魔力の瘴気が吹き出す。

『うっ……!!? まさか、ランサーのクラスではないのですか……?』

「待つて……! 今、サーヴァントのデータを調べてみるわ」

それで私はサーヴァントのステータスを目で見る。

そして表示されたステータスは……。



クラス ……ランサー／バーサーカー

マスター ……???

真名 ……デイルムツド・オディナ

性別 ……男性

属性 ……秩序・狂

筋力 ……A

魔力 ……D

耐久 ……B

幸運 …… E

敏捷 …… A + +

宝具 …… A

・クラス別能力

対魔力 …… B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。

大魔術、儀礼呪法等を以ってしても、彼を傷つけるのは難しい。

狂化 …… D

幸運と魔力を除いたパラメーターをランクアップさせる。

ランサーのクラスと重複しているので多少言語は理解はできるし喋れるがノイズが走っている。

・保有スキル

心眼（真） …… D

修行。鍛錬によって培った洞察力。

窮地において、その場で残された活路を導き出す戦闘論理。

しかし狂化によってそのランクは低下している。

愛の黒子 : E

魔力を帯びた黒子による異性の魅惑。

デイルムツドと対峙した女性には彼に対する強烈な恋愛感情を懐く。

しかし狂化によってそのランクは低下している。対魔力が少しでもあれば回避可能。

・ 宝具

???



確認し終わって私は驚いた。

「これは!! ランサーとバーサーカーのクラスが重複されているわ!」

『なんですって!?!』

「ほう…珍しいな。クラスが重複されているとは…」

私達がランサー／バーサーカー…ここはややこしいのでランサーとしておく。ランサーを見る。

「…憎い…聖■が憎い…! ■杯に呪い■れ…! ア■サーには死■…!! ■■■■

「—————!!」

ランサーはまるで狂化したヘラクレスのような雄叫びを上げる。

『ランサー、哀れな姿だ……。おそらく彼は第四次聖杯戦争の記憶をそのまま持っています。それが今のあの言動から判断できました』

「そうなの、アルトリア……?」

『ええ。彼は第四次で切嗣に脅迫されたマスターの手によって自害させられたのです。』

そして呪いの言葉を吐きながら消滅したのです』

「そんな事が……」

そしてランサーは今はセイバーの姿をしている私に襲いかかってきた。

「奏者よ。危ない!」

すんでのところでネロがランサーの槍を防いでくれたけどこれじゃセイバーとランサーの二組のサーヴァントと戦うことになってしまう。

と、そんな時に、

「シホツ!!」

「助けに来たぜ!!」

バリアジャケットをまとったフェイトとランサーが助けに来てくれた。

すぐさまランサーはデイルムツドの槍をネロの代わりに弾いて、

「おいおい…聖杯戦争の先輩が哀れな姿だな？ ええ？ デイルムツド・オディナよ…」
 「…■…■？…貴様は…誰だ？」

「…どうやら少しは思考があるらしいな。ならば紹介と行こうか。赤枝の騎士団クローリーリンだ」

「!! まさか、あの光の御■とやりあえ■とは…俺はファイ■ナ騎士団のデイ■ムツド・■ダイナ。■…■…■…■…!!」

「狂化してんに喋れんのかよ…紛らわしい奴だぜ！ フィオナ騎士団の輝く貌の騎士様の顔が歪んでいるぜ？」

「ランサー！ あのランサーをお願い！」

「了解だぜ、マスター！」

ランサーがデイルムツドと対峙している一方で、

「それじゃ続きをしようか」

「マスター、指示を…」

ノアとセイバーも動き出してきたようだ。

私も気を引き締めて、

「それじゃネロ！ 気を引き締めて私達もいくわよ!!」

「うむ！」

そして私とネロもセイバーへとかけていった。



S i d e フェイト・テストアロツサ

シホとネロさんがセイバーへとかけていくと同時にランサーもあつちのランサーへと戦いを挑んでいった。

私はあの戦いの渦中の中に入っていけるほど強くないから見ていることしかできないのが悔しい。

でも、私でも指示はできるから頑張ろう。

「おら、いくぜー！」

「■■■■ランサーー!!」

そしてランサーのゲイ・ボルクとあちらのランサー…デイルムツドの二槍が交差する。

それによって凄まじい音があたりに響き渡る。

しかもさすがランサーのクラスと言うべきか二体のランサーはとても私の目に追え

るものじゃない動きで戦いを行っている。

「ランサー対決となればその優劣はなんだ!？」

「遅いほ■が死ぬ…それだけ■■■■■ーー!!」

「その通りだ。狂化している割にはわかってんじゃねーか！」

ランサーの槍は一本。それに対してデイルムツドの槍は二本。

数はあちらが有利だ。

でも、それを覆すのが英霊という人のチカラでは及ばない偉大な人達。

ランサーは見事それを覆し一本だというのに二本に同等に対応している。

「どうした!?! スピードが落ちてきてるぜ!?!」

「■■■■■■■■ーー!!」

デイルムツドはランサーの槍を一度弾くと一旦後ろに下がる。

そして無言で黄色い槍を地面に置く。

「ほう…二本では不利と悟ったか。いい心がけだぜ！」

「いぎ…■■■■■■ーー!!」

デイルムツドが赤い槍だけを持って今度は両手持ちで槍を振るう。

それによって先ほどよりもさらにスピードが上がりお互いにどンドンギアの速度が増していく。

その殺陣には誰ももう侵入できないだろう。

もし邪魔したなら互いの槍で刺されることは明白だ。

だからただ勝つてと願う！

そして槍の突きによる攻防は延々と続きもはや千日手と化してきている。

互いに楽しそうに槍を振るっている。

しかしやはり攻めきれないのは考えものだろうと思つたのだろう。

ランサーも一回その場から下がると、

「罅があかねえな……。もうちつとこの戦いを楽しみたいがこちとら早くこんな戦争は終わらせなきゃいけないんだよ。だからよ……！」

するとランサーから念話で一言『使うぜ？』という言葉が伝わってきた。

私はそれに『うん！』と答えた。

それでランサーは槍を構えて体勢を整え、

「わりーが貴様のその心臓……貫い受けるぜ!!」

ランサーの槍に濃密なくらいの魔力が一瞬で集まってくのがわかる。

これが宝具を使う前兆……！

「■■■■……!?!」

ディルムツドも構えをするがそれよりランサーの速度の方が上回っていた。

ランサーは槍をデイルムツドに構えて疾駆し、そして、

「受けな……！ 刺し穿つ死棘の槍！！」

赤い呪いの槍はその真名を放たれた。

その槍は避けようとするデイルムツドのスピードに追尾し、その心の臓へと向かって放たれようとした。

ランサーに聞いた話だけど、ゲイ・ボルクは一度放たれば、槍を放つ前に、前提として槍は既に心臓に命中している結果を残してから打ち出されるといふものだという。

だから必ずデイルムツドの心臓は貫かれる。そのはずだった。

突然、デイルムツドの姿がおぼろげになりランサーが槍を振るった後には姿はなく、デイルムツドの姿は後方へと下がっていた。

「（見えなかった……！ なに、今の動き……!?!）」

私が動揺しているけどランサーはどうやらそのカラクリをすぐに見破ったらしく、「ちっ……令呪で逃れやがったな？ 俺の必殺の槍を！」

今のが令呪の効果！ 回避不可能の攻撃も避けることが可能となる令呪による強制力！

見ればデイルムツドのそばには魔導師の杖を持った女性が一人立っていた。

「デイルムツド様！ 大丈夫ですか!?!」

「■■■■■■……」

「大丈夫のようですね。今回は残念ですが一時撤退します。捕まっています。捕まっています。捕まっています。女性に黄色い槍を回収してディルムツの肩に手を置き転移魔法を発動する。

二人の姿はすぐに消え去った。

「エイミィ！ 追える!?!」

私はすぐにエイミィに連絡を入れてどこに転移したか割り出してもらおう。

でも、

『ごめん、フエイトちゃん……。行き先をロストしちゃった……。』

「そう……」

「今回はここまでか……。ちつ、逃げるとはつまんねえな」

ランサーが愚痴を零しているけどこつちとしてはランサーが無事でよかったという感想が持てた。

それで心に余裕ができたのかシホ達の方を見てみると、

「ふん……。二人がかりでやっとな私と同等か……」

「くっ……。！」

「ぐぬう……。！ さすが、やりおる！」

……。！ シホ達が押されている。

助けに入らないと。

でも、

「セイバー。ミゼさんが引いたみたいだから僕達も撤退しよう。三人がかりだとさすがに無理が出てくるだろうからね」

「了解した。マスター」

それでセイバーがマスターのノアって人を抱えてその場から飛び去っていった。

今回は引いてくれたみたいだ。

エイミーは途中まで追えたっていうけどなにか特殊な力が働いて行方を追えなかったっていう話だ。

「シホ…大丈夫?」

「ユニゾン・アウト…」

アルトリアさんとユニゾンを解除したシホは疲労がたまっている顔をしながら、

「…え、ええ。なんとか…。でも、二人がかりでやつと同等だなんて…やつぱりセイバーは強い」

「ええ…。我が事ですが侮れません」

「だが、次は負けんぞ。奏者よ」

「そうね。ネロ」

そこにリンディ提督から通信が入り、私達は拠点の月村邸に今日は戻ることにした。

第六十六話

『暗殺者の死闘』

拠点の月村邸まで帰ってきてきてシホは少し疲れた表情で、

「やっぱり、セイバーの相手は骨が折れるわね…」

「あれが私の変わり果てた姿だと思えますと胸が痛みます」

アルトリアも沈痛そうな表情をする。

「決着はいずれ着ける。それより奏者よ？ 余は湯浴みがしたいぞ」

「でしたらご案内します」

「うむ。任せるぞ」

ネロはまったく気にしていない様子でノエルに風呂まで案内されていた。

「神経が凶太いわね。さすが暴君…」

アリサのツツコミがよく通った瞬間である。

フェイトの方では、

「ランサーは、惜しかったね」

「ま、そうだが次があると思えば苦じゃねーよ」

「前向きだね」

「おうよ。…しかし令呪の使いどころがうまいな。あのタイミングで使われるとは思いませんでした。いいマスターに恵まれたな」

ランサーがそう判断する。

それを聞いていたリンディはすぐにエイミイに連絡を入れる。

すぐにスクリーンが表示され、エイミイが映りだした。

「エイミイ。ミゼという女性に関しては情報は特定した？」

『はい艦長。顔も判明してありますのですぐに分かりました。』

本名は『ミゼ・フロリーアン』。ミットチルダに住まうフリーの魔導師です。

現在数名の捜査員が彼女の自宅を家宅捜索していますが既に自宅の契約は解約された後で誰も住んでいませんでした』

「そう…。それじゃ行き先の手がかりはなしという事ね」

『ただ、部屋になにやら私達の世界では知られていない魔法陣の跡があったらしく、その部屋でサーヴァントが召喚されたのは確かかと思えます』

「わかったわ。捜査員には随時慎重に調査するように通達して。私達がむやみに挑んで

も返り討ちにあい殺されるのが関の山ですから」

『了解です』

それでエイミイとの通信が切れる。

シホは少し思案顔になり、

「おそらく言峰綺礼から情報を提供されたんでしよう。そうでなければサーヴァントが召喚できるわけないし、令呪もうまく使うことはできないでしょうから…。

それにしても、もう魔術師の魔術回路が様々な人に宿り始めているのはあきらかですね。

だから魔術回路を持つ人をできるだけ把握しておきたいのが本心ですね。今後、魔術による事件は増えると思いますから…。」

シホの言葉にリンディは頷き、

「魔術に対抗するための対策課を設立した方がいいかもしれませんね？」

「それは名案だな」

士郎がそれに相槌を打つ。

「特に誰かというわけではないが…シャーマニズムに似た由来の部族や、昔から続く豪族や名家などには最低一人は魔術回路が宿る可能性が一番高いだろう。」

後は、大がつく魔導師など、とかな。…肝心なのはどう世界に選定されて魔術師と

して選ばれ宿るかだな」

士郎はそう付け足し言う。

それにこの中で選ばれた面々は、

「私とアリサちゃん、後お姉ちゃんは何で選ばれたんだろう…?」

「おそらくすずか嬢と忍嬢は家…というより血がかなり継がれているからではないか？」

「あ…：そうかも」

それですずかは合点いった。

夜の一族とくればかなりの歴史はあるはずだからだ。

「そしてアリサ嬢も家が有名だからなのではと推測するが…。あるいはそういう才能があつたのかもしいないな」

「ふーん？ そんな曖昧なものでもいいんだ」

アリサもそれで一応納得しているようだ。

「それじゃ士郎さん。私は…?」

なのはが質問する。

「なのは嬢は…やはり、才能だからではないか?」

「うーん…そんな才能は魔導師だけで十分だったんだけどなく…」

「ですがそのおかげで私はなのはと出会う事ができましたよ？」

ファイターがそう言うとなのは嬉しそうな顔で「うん！」と頷く。

「それじゃファイアは…?」

「おそらく私とパスが繋がっていたからじゃない…?」

「そ、そうかもね…」

「ついでに言っておくと多分フェイトはプレシアの血でしょうね。多分だけど娘のアリシアにもその才能はあったと思うわ」

「そうなんだ…。母さん、アリシア…」

それでフェイトは少し物思いに耽る。

それに気づきながらもあえて見なかつた事にして、シホは士郎にあることを聞く。

「そういえば士郎。月村邸の陣地はどうなっている？ ネロやキャスター達が召喚された一昨日から色々と改造しているんでしょう？」

「よくぞ聞いてくれました！」

「はいー」

そこにキャスターとついでにシャマルが出現してきた。

「私自身は陣地作成スキルは低いものの作れないわけではありません！ 土地も良いものですよ！」

それにシャマルにも協力してもらい魔術と魔導のダブル結界を現在構築中ですのでかなり強力です。ですので二度とこの地には侵入させません！」

「はい。こういった作業はお手の物です♪」

「だ、そうだ」

キャスターとシャマルに全部言われたので手持ち無沙汰を感じている士郎であった。「でも、閉じこもっているんじゃないやつまでたつてもあの金ピカを殺せないわ！ 早くこの手で八つ裂きにしてやりたいのに……！」

「呵呵。確かに儂も早く強者と一戦交えたいものよ」

ファニーヴァンプが物騒なことを言い出す始末である。

アサシンもそれに乗るで結構空気が緊迫する。

「ファニーヴァンプ。もう少しだけじっとしててな。」

あなたはサーヴァントの中で切り札といってもええ。だから力は温存しておきたいんよ」

「まあ、はやてがそう言うなら従うけどさ……」

「アサシンもよ。早く戦いたい気持ちは分かるけど今は待つのが先決よ」

「はっはっは。委細承知した」

どうにかキャスターであるはやてとアリサが二人を落ち着かせたようだ。

「それと、大師父はこんな時にどこにいったの…?」

そう。ゼルレッチは今この場にはいない。

なにやら裏で動いていそうだが今は判断できない。

唯一情報を知っている士郎は、

「今後の地盤を整える、らしい…。魔導師社会に魔術社会が加わるのだ。そうすればおのずとすぐに混乱が発生するだろう。」

魔術回路を持つ子を魔術師として育成させるかの判断もこの世界の人々に一任されたわけだからな」

「それはありますが…。でしたら管理局にも協力してもらいたいのですが…」

「それは無理だろう。大師父は好む事は自分からやりですが、気に食わないことやつまらない事に該当するものには目もくれないからな」

「それは納得ね。大師父に弟子入りの魔術師は成功するか破滅するかか二択しかないと言われているくらいだし…」

「け、結構物騒な御仁なのね…」

それでリンディは汗をかく。

なのはが話に入ってきて、

「でも、それだとシホちゃんと士郎さんって大師父さんの修行に成功したんだ?」

「ま、そうね……」

「あまり思い出したくない過去だ……」

シホと士郎はそこで難しい顔になる。

元が同じ魂だけに考えることは一緒なのだろう。

何をされたのかと疑問顔になる一同だが二人は決して内容を明かさなかった。



それから一日が経ち、マスターであるシホ達は月村家に居座りながらも学校に通っている。

まだ学校に復学していないはやと、もう大人で管理局で本勤務ではないが働いている士郎は月村邸で待機しているがこれといって事件は起こっていない。

《しつかし、こんな時に学校に通うなんてマスターもよくやるよな》

《しようがないよ、ランサー。学校は休むわけにはいかないから……》

フェイトとランサーは念話でそう話している。

《スズカの事は私が守りますから……》

《うん。ありがとねライダー》

すずかとライダーはもう数年来並の絆が出来上がっている。

やはり同じ吸血種の血を引いている者同士で分かり合えているのだろう。

《学び舎か…襲われるとしたらまずそこだろうな》

《ちよ!? アサシン、物騒なこと言わないで!》

アサシンはまるで予想がついているかのように話し始めてアリスは慌てている。

《モノを教える場所ですか。いいですね、こういうった繁栄の営みは昔から変わりません》

《うん。そうだよファイター。さすがにこの世界に魔法はないから教えていないけどね》

なのはとファイターは呑気に念話をしている。

《ネロ…もしかまたセイバーが襲ってきたら今度こそ勝つわよ》

《うむ。奏者がそう言うなら必ず勝ちを拾おうぞ!》

シホとネロは今後の活動について色々と話し合っている。

全員が全員、念話で話をしているので教室で普段話している五人があまり話していない光景に他の生徒達は不思議そうに見ているのだった。

そして何事もなく学校は終わり五人は帰り道を歩いている時だった。

「やあ、お嬢さん方。ご機嫌麗しく…」

そこにはメガネをかけた長身の優男がいてニコニコと笑顔を振りまいてきていた。

だがその笑顔はすぐに陰険なものだと五人はすぐに感じ取って一歩後ずさる。
「…誰ですか？」

「僕の名は『三菱彩（ミツビシ・サイ）』。君達を殺しに来たものだよ」

三菱彩と名乗った男はその手にナイフを構えると疾駆してきた。

狙いはアリサだった。

だがすぐにアサシンが姿を現しそのナイフを弾くようにして防ぐ、が。

「む…？ 破壊するつもりで振るつたのだが、躲されたか？」

「あ、ありがと。アサシン…」

「いや、何も言うな。しかし解せんな…。その右手の令呪を見る限りマスターということだろうが真正面からかかってくるとは…阿呆かそれとも、やり手か…？」

アサシンがそう殺気をだし彩に話を振るがそれでも笑顔を消さずにナイフを舐めて、

「ただ僕は君達が切り刻まれる光景を見たいだけなのさ。お分かり…？」

「わかんないわよ！ この変態!!」

「特に金色の髪のお二人さんは両手足を刻んで飾ったらさぞ映るだろうね！」

「「ひっ!!」」

それでフェイトとアリサは小さい悲鳴を上げる。

シホが前に出て、

「あんまりこの子達を怖がらせないでくれる？ この変質者」

「…君、いいねー、その強気な顔。実に君の心の底から泣き叫んで歪んだ表情を見てみた
いー」

「…性格歪んでいるわね。汚物消去として撤去しても許されるかしら？ つていうか颯爽
と警察に捕まりなさい。あんたみたいな奴は刑務所の方がお似合いよ」

「ダメだね、あんな場所。ブサイクな奴らしかきつといないだろう？ だから僕の欲
求は収めることは決してないと断言できるよ」

「なら自殺したらどう？ あんたならきつと地獄の閻魔様がきつく折檻してくれるで
しょうね？」

「それもなかなか魅力的な提案だねえ…」

「まさか、これに乗ってくるとは…。強敵ね」

「シホ、話がずれてるよ？」

「そうね…」

フエイトの言葉で正常に戻るシホ。

「さて、それじゃさつさとやられてください。みんないくわよ！」

『待ってました！ 結界を展開するよ！』

シホ達は全員サーヴァントを実体化させる。

そして事前にフェイトから通信を受けていたエイミーからの通信で結界が構築される。

「ふふふ…面白くなってきたね。それじゃいきますとしましょうか。アサシン！」

彩の背後に一昨日に姿を見せた目に白い布を巻いているボロボロの黒い外套を羽織っている男が出現した。

「…こいつらが敵か？」

「そうだよアサシン。令呪一個使ってお前は僕の操り人形になっているんだからせいぜい働いてくださいよ？」

「…わかった。マスターの命令は守る。しかし、令呪を使いきってみろ。即貴様を八つ裂きにしてやる」

シホ達はこのやりとりでアサシンと彩は反りが合ってなく不仲だとさとする。

「ふん。令呪による強制か。なかなかお主も不幸よの、アサシン」

「黙れアサシン」

アサシン同士にチリチリとした殺気がぶつかりあう。

「しかし同じアサシンのクラス。色々とややこしいだろう？ どれ、一つ真名を名乗り合うのはどうだろうか？」

アサシン（李書文）がそう切り出す。

「…いいだろう。どうせこの世界には俺を知る者はいないだろうからな」

「いいぞ！ では俺の名は李書文だ！」

「これは有名な格闘家が来たな。…そうだな、俺の事は『殺人貴』とでも覚えておけ」
「殺人貴!？」

「シホちゃん、心当たりがあるの？」

「ええ…」

それゆえにシホは大いに驚く。それは士郎時代には何度も切り結びある時は共闘もした相手だ。

あちらはシホを知らないだろうがシホはよく知っている。

本当の真名は『遠野志貴』…いや『七夜志貴』と言ったほうがいいだろう。ファニーヴァンプ…アルクエイド・ブリュンスタッドを守る殺人貴と言われた青年だ。

「まさかあなたがアサシンとはね。ファニーヴァンプが喜ぶわ」

「誰かは知らないが俺を知っているという事はあの世界の人間か」
「ええ」

「やあやあセイバーのマスターよ。俺が戦おうとするのに邪魔立ては遠慮願おうか」

「わかったわ。でも気を付けてね。彼の宝具はおそらく『直死の魔眼』だから」

「直死の魔眼…？ シホ、それってなに？」

「魔眼には種類があるのはライダーは分かるわよね？」

「ええ」

「彼の魔眼は別名『バロールの魔眼』。それは見たものを死に至らしめる魔眼を持つバロールから取られているわ。」

その効果は人の死の線と点を見れるもので切られたら二度と再生はしないし点を刺されたら消滅するわ。」

「そしてそれは宝具も例外なく切り裂くわ」

「本当に何者だ…？ 俺の事をそこまで詳しいとは…」

「さて、ね…」

シホは今のところはもう話すことはないという意思表示をする。

それに反応した李書文は動きを開始する。

「では、一戦交えようではないか…」

「いいだろう…」

李書文が構えると殺人貴もナイフを取り出し構える。

「ほう。ナイフがあやつの武器か」

「見た感じはただのナイフだな」

「しかし、魔眼使いはただのナイフでも武器として使います。おそらくは…」

「見ているだけというのは辛いですね…」

観戦ムードに入った残りのサーヴァント達は二人の戦いをじっと見ている。

まず李書文が円の構えをしだす。

すると段々と李書文の体が透け始め出す。

「ぬっ!？」

それに殺人貴は警戒の色を示す。

そして完全に消えた李書文は誰の目にも映らなくなり、

「っー」

「ひゅっー!」

突如として殺人貴の背後から李書文の拳が見舞われる。

それにおそらく直感だったのだろう、殺人貴は高速で回避する、が。

「こ、これは…!」

「ほう…左腕だけを壊したか」

見れば殺人貴の左腕はダランと下がっている。

何が起きたのかは簡単なことでただ李書文が己の拳の一撃を首の頸動脈に放つつも
りが殺人貴はそれを避け損なったものの致命打にはできなかつたのだ。

もしこれが命中していれば殺人貴はすでに消滅していただろう。

「透化か……やっつかいな術を。だが、もう気配は読めた。右手が使えればそれだけで十分だ」

「もう儂の気配を読むと申すか？　面白いことをほざく。ならば、我が次なる一撃を交わしてみよ！」

そこから気で強化して鋼鉄と化した拳とナイフが何度も交差した。

左腕が使えないというハンデがあるうと李書文の猛攻についてこれる殺人貴の技量は確かなものなのだろう。

「ははははは！　お主、なかなかやりおるではないか！　やはり戦いというのはこうでなければいかん！　血が滾ってくるわ!!」

「うるさいぞ……！　次には、殺しきる！」

殺人貴は一度拳を受け止めた後、弾いて一度ナイフをしまい右手で目を覆っている包帯を取り払う。

それによつて殺気が倍以上に増したのを見学していた一同は感じる。

「アサシン！　気をつけて！　直死なんとかが来るわよ！」

「うむ。どんなものか見定めてやろうか」

アリサの注意の言葉に、しかし李書文は警戒をしながらも一度目にしてやろうという気になっている。

「その油断が命取りだ！ 貴様の身体、尽く分割する！」

まるで獣が四肢を伸ばして威嚇するかのようには体勢を低くしてクラウチングスタートをしようとする構えをして、

「教えてやる。これが——……………」

「ッ!!?」

殺人貴のとてつもない殺気にアリサはものすごい悪寒に襲われて令呪のある右手をおもわず握り締める。

すぐに殺人貴は李書文へと走り出す。

「モノを殺すということだ!!」

「アサシン！ 避けて——!!」

殺人貴のナイフが李書文の身体を通過しようとするのとほぼ同時にアリサの令呪が一画消え失せた。

それによつて李書文は五体満足でなんとか助かっていた。

そしてその数秒後には李書文の体があつた場所の空間にあつた空気が振動を起こしていた。

「…かたじけない。アリサよ。もう少しアリサの判断が遅かったら儂の体はとうの昔に切り刻まれていただろう」

「いいわよ。それより、傷はない…?」

「なんとかなった…。しかし、これが直死の魔眼か。なかなか肝が冷えるものよ。一度見据えようとしたが思わぬものだった」

「殺り損なつたか…」

「どうしたんですかアサシン? まだ殺していないですよ? あなたはここで引くんですか? ダメですよ。そんなんじやく」

「いまだに状況が不利だと分かっていないのか、はたまた分かっていてわざと発破をかけているのか彩は笑顔を顔に貼り付けながらも命令を下す。

殺人貴は左腕が負傷していてさらに宝具も避けられたというのだ。さらにもし李書文がやられたとしてもまだ四人のサーヴァントが控えているのだ。

「これほど不利な状況はないだろう。」

「わかった。次は殺すぞ…」

「二度どういうものか晒したもので儂を殺せると思うなよ?」

仕切り直しといった感じで二人は再度構えるが、そこにおそらく外側からの轟音が響く。

それによって一部結界が破壊され何者かが中へと侵入してくる。

新たな敵の襲来である。

第六十七話

『因縁のある者達』

S i d e シホ・E・S・高町

結界が突如として破られて何者かが侵入してきたという報告をエイミイさんから受けて私達は身構える。

そして一際凄い音を立たせてその侵入者が私達の目の前までやってきた。そいつは兜で顔まで隠す全身黒いフルプレート salva ヴァントのようである。

しかし、そんな時に、

《まさか、あれは我が盟友……!》

アルトリアの声が聞こえてきて、アルトリアはその姿を現す。

そしてまるで謝罪するような声で、

「あなたなのですな。わが友よ……サー・ランスロットよ」

『えっ!?!』

アルトリアの告白によって全員が驚きの声を上げる。

それよりランスロットですって!?

それって第四次聖杯戦争ででてきたあのバーサーカー!?

そうなるよアルトリアがまずい事になる。

「a a : : a r : : ■■■■■ーーー!!」

思った通りバーサーカーはアルトリアめがけて飛びかかってきた。

これはまずいつ!?

しかしユニゾンはしていなくてもアルトリア自身だけでもサーヴァントの時と同じ力を持っているのだ。

それでなんとか剣を出してバーサーカーの持つている鉄の塊を受け止めた。

話によれば手にしたものはなんであろうと自身の宝具にしてしまうという手癖の悪さらしい。

だからすでに鉄の棒を持つているのでそれはよかったと言える。

ただこのままじゃ力負けしてしまう。

「ネロ! しかけるわよ!!」

「うむ。その言葉を待っていたぞ奏者よ!」

「アルトリア! 一度弾いてユニゾンを!!」

「くつ、わかりました! はあああーー!!」

なんとかバーサーカーの攻撃を跳ね返してアルトリアは私のもとまで飛んできて、
「いきます。シホ！」

「ええ！」

『ユニゾン・イン!!』

それによってアンリミテッド・エアを起動した後、私はセイバーフォームへと姿を変
える。

『シホ！ 私は今度こそランスロットの心を救わなければならない！』

「ええ！ 協力するわ、アルトリア！ ネロもいきましよう！」

「了解した！ 奏者の思うままにいこう！」

「ライダーもお願い！」

「わかりました、スズカ！」

「ランサーも……！」

「おうよ！」

「ファイター！ お願い！」

「わかりました！」

全員でかかろうと仕掛けたがそこに、新たな侵入者の影があった。

「はあああああ——！！」

謎の男の雄叫びが遠くから轟いてくる。

見ればそこにははやての姿をしているキャスターの姿に、新顔の男性……けど、彼にも私は見覚えがあつた。

碧銀の髪に右目が紫に左目が青の虹彩異色の体が鍛え上げられた武人。その男性にオリヴィエ陛下も気づいたようである。

「クラウス、なのですか……？」

「そうです。オリヴィエ。まさか、こんな巡り合わせがあるとは……」

そう。彼こそクラウス・G・S・イングヴァルド。

聖王と縁のあつた霸王の異名を持つ古代ベルカの王の一人だ。

でも、それ以上になによりキャスターとクラウスの後ろには目が虚ろの金髪の女の子の姿がある。

なんで……!?

なんで「アリシア」の姿がそこにあるの!?

「どうして、アリシアが……!?!」

フェイトも戸惑っているのだから仕方がない。

それですぐにエイミイさんが詳細を調べているようで、

『間違いないよ！ 彼女の身体はアリシアちゃんに合ってる！ でも、どうしてなんだ

ろう?! 彼女の遺体はプレシアさんと同様に火葬されたはずなのに…!!」

「…バーサーカー…暴れちゃって…」

虚ろな声でアリシアはバーサーカーへと命令を下す。

それによってバーサーカーは今現在の目の前の敵であるネロへとかかっていった。

「ふふふ…知りたいか? 塵芥共?」

「ええ。是非とも教えてもらいたいものね。キヤスター?」

「知りたくば…我等に勝ってから聞くのだな! 出てよ、騎士達よ!」

サモン・ヴォルケンリッター
『守護騎士召喚』

!!

キヤスターがそう言う。でも、騎士達ってまさか!?

悪い予感はずぐに当たり地面に四つのベルカの魔法陣が浮かび上がりそこから無表情の守護騎士達の姿が現れる。

「シグナム!?!」

「ヴィータちゃん!?!」

「シヤマルさんにザファイラさん!?!」

「どういう事よ!」

なのは達の間には混乱がかなり発生している。

私だつてできればもっと慎重になつて調べたいけど今は乱戦中。

だから今は戦うことしかできない！

「特別に教えてやろう。私の正体を……！」

キャスターはそう言つて守護騎士達を前に出して語りだす。

「私は……八神はやてで相違ない。しかし、絶望的なまでに地獄へと落とされ心は摩耗した」

「どういう、こと……？」

なのはが怖々と聞く。

おそらく先を知りたくないのだろう。

「なにかの凍結魔法によつて何重にも凍らされ封印され私は次元の渦の底に落とされた……」

それから地獄だった……。体は凍らされて動けないというのに意識だけはしっかりとある。

我はそこで永遠ともとれる束縛を受けた。

それから何十、何百、何千という月日が流れ、溜まっていく怒りと呪いが爆発しそうになった時、欲のある人間が我を再び解き放った。

そして我は怨嗟の限りを開放して数多の次元世界を破壊しつくした。

闇の書もとうの昔に我と一体化していたから離れずついてきてくれた。理性を失い

操り人形と化した騎士達もだ。

そしてだし尽くせる限りの力を出し尽くした後、我は最後を迎え反英雄として祭り上げられ『反英雄ヤガミ』として『座』へと招かれた…。

今この世界に生きている我とは違う道を進んだ同一存在である八神はやてには恨みはないが、我は再びこの世に現界で力を得た…。だからこの力は破壊衝動に従うまでだ！」

！
ここにいるはやての姿をしたキャスター——英霊ヤガミ——はグレアム提督の提案したデュランダルによつて凍結され絶望の後に英霊化したはやての平行世界の存在…

まさに絶望の化身だ。だから話を聞いてくれるわけもない！

なのは達もキャスターのあまりの告白にショックを隠しきれないようである。

だがキャスターは待つてくれる訳もなく、

「いけ、我が騎士たちよ…！」

理性のない守護騎士達がシャマルを残しこちらへと向かってくる。

それにライダーが最初に動き出し、

「シホはシグナム。ランサーはヴィータをお願いします！ 私はザフィーラをやりま

す！」

「おう！ ライダー、頼むぜ！ シホの嬢ちゃんも頑張れよ！」

「ええ！ ネロはバーサーカーの相手を頑張つて！」

「任されたぞ、奏者！」

三人で分担して挑んでいった。

「さて、数で押すのも癪だがこれで互角となった。再開と行こうか……」

「応！」

殺人貴も李書文とまた戦いを始めている。

「オリヴィエ、今は命令に従うしかないんだ。不甲斐ない僕をどうか笑つてくれ……」

「クラウス……！ あなたのマスターはまさか!?!」

「名乗つてなかったな。僕はファイターのサーヴァント……。不本意な展開だが、いざ、あの時の決着を！」

クラウスもオリヴィエ陛下へと挑んでいった。

もしかしてクラウスのマスターはフィアだというの!?!

「みんなは何があつても手を出しちやダメよ！　そこで見守つてて！」
そして私もシグナムへと向かつていった。



Side 高町なのは

そこからは全員による戦いが始まりました。

シホちゃんはシグナムさんと。

ランサーさんはヴィータちゃんと。

ライダーさんはザファイラさんと。

ネロさんはバーサーカーと。

ファイターはクラウスという人と。

李書文さんは再びアサシンと。

全員の戦いは激化していきます。

私達魔導師が相手にならないくらいの戦いです…。

こんな時に力を貸すことができないなんて悔しいの…。

でも、それよりもショックなのはやてちゃんです。

あのはやてちゃんはシホちゃんの言うエミヤさんと同じように地獄を味わって心を
摩耗させてしまった。

それはつまり、私達がはやてちゃんを助けられなかった世界もあるという事。

それがなによりも悔しいです。

「はあっ！」

「……………」

シホちゃんとシグナムさんの剣同士がぶつかり合って火花を散らしています。

「くっ…！ 英霊の召喚するものだけあつて従来より強化されてるわね！ でも、意志が宿っていない剣なんてなまくらも同然よ！」

そう言つてシホちゃんはシグナムさんを押していきます。

見ればランサーさんも、

「おらぁー！！！！」

「あぁー！！！！」

ヴィータちゃんとの攻防を攻めていて、ライダーさんは持っている鎖付き釘を自在に操りザフィーラさんを圧倒しています。

ネロさんもなんとかバーサーカーの猛攻を耐えながらも反撃の機会を伺っている様。

李書文さんももう二度と直死の魔眼は喰らわれないという感じの体の動きをしています。

そして、ファイター…オリヴィエさんは同じファイターのクラウドさんと戦っています。

武器はもちろん拳闘士ですが、でもやっぱりクラウスさんの動きには精彩が欠けているように見えます。

おそらくただファイアちゃんがマスターで捕われ操られていてクラウスさんも従う事しかできないからあんなに動きが鈍いと思うんです。

「どうしましたクラウス？ 昔のあなたならもつといい動きをしていましたよ？」

「言わないでください、オリヴィエ。僕とてこんな戦いはできれば願ひ下げなのですから……！」

「やはりマスターを捕らわれているのですね……。ですが今は決闘の場。ファイターのクラスなのだから正々堂々と戦いなさい！ 情けない男は好みではないですよ？」

「言ってくれますね。ならば霸王の底力、お見せしよう……！」

「その意気です！ いきます！」

そして再び二人は拳での戦闘を開始しました。

なにか、なにかみんなを手助けできることはないかな!?

そうして見ていてふと、後方から魔力の高まりを感じました。

それでよく見てみるとキャスターが魔力を溜めていました！

それを知らせなきや……！

「シホちゃん！ 後方でキャスターが魔力を溜めているよ!!」

私は必死になって叫びました。

「おそい！ キヤスターの真髓！ とくと味うがいいわ!!」

キヤスターは空へと舞い上がり地上へと向けて、

「配下は上手く避けるよ?」

その言葉を合図に敵の方は一斉に後方へと飛び去っていき、

「絶望にあがけ！ 塵芥共！ エクスカリバー!!」

ベルカの魔法陣から特大の砲撃魔法が放たれてしまった…!

それはまっすぐに私達の方へと飛んできます!

セツトアップして防ぐ時間もない…!

このままじやられちゃう…!

でも、シホちゃんがすぐに反応して、同様に、

「間に合って！ 約束された勝利の剣!!」

それによって放たれた黄金の斬撃はキヤスターのエクスカリバーを飲み込んで、でも

溜めの時間がなかったのか相殺という形で終わった。

やっぱり本家の方が強いということだね!

「ちつ…。皆の者。今回はここまでだ。撤退するぞ!」

キヤスターはアリシアちゃんを抱えて全員の足元に転移魔法陣を展開させる。

「ふー…あの子達の絶望の顔を見れなかったのが残念でしたね」

「引き際くらい黙っている、駄目マスター…」

「わかっていきますよ」

三菱彩というマスターさんは残念そうにしていました。

あの人はあの中では一番苦手です。怖いから…。

「アリシアアー!!」

フェイトちゃんが叫びますがもう遅かったようで全員が転送して消えてしまいました。

どうにか全員生き残ることができましたが、

「でも、色々な事が起こっちゃったね…」

「そうね。なのは…」

「うん。色々と因縁があったね」

アリサちゃんとすずかちゃんがそう返してくれました。

うん。やつぱりこの戦いはすぐに終わらせないといけないと思いました。

あのはやてちゃんを倒すことになろうとも…。

そうしてまた一つの戦いが終わった私達は拠点の月村邸へと帰っていくのでした。

第六十八話

『対サーヴァント会議』

S i d e シホ・E・S・高町

あれから月村邸に帰宅して作戦会議を行っていた。

「今回はなんとかなったけど、英霊ヤガミには驚かされたわ。はやてには悪いけどキヤスターはもう別人と思ったほうがいいわ」

「そうやね…。でも私にそんな可能性があったやなんてな。」

シグナム達も理性をなくしてるやなんて、なんか悲しいわ…」

「主…もし今度キヤスターが出てきましたら私達の相手は我ら自身が行います」

「そうだな。あたしらで方をつけなきゃいけないな」

「そうですね」

「うむ」

ヴォルケンリッターはやる気を出しているようだ。

「それより志貴がいるって本当!」

「本当よ。ファニーヴァンプ。自分で殺人貴と名乗ったから間違いないわ」

「そっかー。志貴がいるんだー。えへへ」

ファニーヴァンプは恋する乙女のような顔になる。

「…そうか。妹もシエルもないから私が志貴を独占できるチャンス…。そうね。決めたわ。志貴を捕らえたら私の使い魔にするわ!」

ファニーヴァンプは力強く宣言する。

「でも、それだとはやての負担がひどくなるけど大丈夫…?」

「それはどういう意味だ? シュバインオーグ?」

「単純な話よ。はやてのサーヴァントであるファニーヴァンプがアサシンをさらに使い魔にするって事ははやてが二人分の現界でできる魔力を補わなければいけないわ」

『あつ…』

全員がそれに思い至ったのか顔をしかめる。

だけどファニーヴァンプは慌てずに、

「そこはゼル爺に頼んで私と志貴の体を作ってもらうのはどうかな? ようは私自身で魔力を精製できればいいんでしょ?」

「まあ、それなら…ちよつと待ってね?」

私は宝石剣を取り出して集中する。

すると少しだが色が宿りそれを合図に、

「大師父：聞こえますか？」

『：ん？ どうしたのだ、シホ？』

「ちよつと相談したい事があります。お時間よろしいでしょうか…？」

『わかった。すぐに向かおう』

「ありがとうございます」

それで通信を終了させる。

だがそこでリンデイさんが驚いた顔で、

「シホさん！ 宝石剣は通信もできたのですか？」

「ええ、まあ。同じ世界にいる時限定ですが…」

そんな事を話している間に空間が歪み大師父が姿を現した。

「何用じゃ、シホ？」

「はい。ファニーヴァンプの件についてなんですけど…」

それで大師父にファニーヴァンプの提案を話す。

「なるほど、新しい体か。アルクエイド。遠野志貴…いや殺人貴を使い魔にするというのは本気か？」

「ええ。ゼル爺。うまくやってみるわ」

「うむ。ならば蒼崎に依頼してみよう」

「ありがと！ゼル爺！」

「うむ。それで他になにか頼み事や相談ごとはあるかの？」

それならあれを聞いてみよう。フェイトも気になっていることだろうしね。

「でしたら大師父。ちよつとこの映像を見てもらつていいですか？」

そう言つて私はアンリミテッド・エアに記録されているアリシアの映像を映す。

「彼女を見てどう思いますか？　彼女は一度死んでいるのに今はああして虚ろながらも生きています。」

あれは何かの魔術なんですか？

大師父の知識をお借りしたいんですけど…」

「そうなのう…。もしやしなくても彼女の体は死体じゃ。そして魂も彼女のもので間違いない」

「それじゃ…！」

フェイトが声を上げる。

「じゃが無理矢理魂を呼び寄せているようじゃな。見たところ不安定と見て取れる。これはおそらく『死霊魔術師』の仕業じゃな」

「ネクロマンサー!?!」

私が驚くとフェイトが反応して、

「シホ、ネクロマンサーって、なに? 一体アリシアに何が起こっているの?」

「わかったわ。ネクロマンサーとは死んだ人の魂を呼び出して使役し死体に宿らして操る者の事よ」

「そんな…。それじゃアリシアは…」

「おそらく考えている通りだと思うけど、多分アリシアの死体は火葬される直前に盗まれてしまったんでしょう」

「くっ…っ…許さない。アリシアを、お姉ちゃんの魂を踏み躪るような事をするなんて…!」

フェイトは涙を流しながらも悔しがる。

その気持ちには同意できるわ。

「…アリシアを救いましょう。もしうまく行けばアリシアを助ける事ができる」
「でも、どうやって…」

「ここは私の【第三魔法】が役立つてくるわ。

アリシアを助けたとしてもアリシアの体は死体だからそう長く持たない…。

だから魂の物質化で魂を救った後、………大師父、もう一人分人形の身体を依頼して

いいですか…?」

「…いいのか、シホ? つまりそれは死者を蘇らせる事になるんじゃないぞ?」

「はい、わかっています。本当は禁忌だという事は…。でも、フェイトとアリシアには幸せになっても構わない。だから…今回、一度だけですが禁忌を侵すのを許してください」

大師父はしばらくして「ふっ…」と笑い、

「よかろう。シホの好きにすればよい。じゃがその責任は重大じゃぞ?」

「はい、わかっています」

「了解した。蒼崎にそれも依頼してみよう。素体はフェイト嬢の身体でよいな?」

「お、お願いします…!」

フェイトは少し顔を赤くしたがそれで承諾した。

「フェイト。アリシアを必ず救いましょう!」

「うん…必ず!」

フェイトとアリシアを救おうと誓うが、でもやっぱり迷いが発生してしまう。

「でも、それだと私はプレシアに謝らないといけないわね」

「母さんに? どうして…?」

「だってプレシアが目指していたアリシアの蘇生を私が代わりにしようとしているんだ

から。

それにあのプレシアとの決戦の時、私は死者は決して蘇らないと声高らかに言っちゃったから今の私の行動は矛盾してしまうのよ」

「それは…」

「そして、いざ魂の物質化が使えると分かったら、アリシアを助けようとそれを使おうとしている。

言った言葉の責任を放棄する形になるかもしれない無責任な行為よ」

自分で救うと言っておきながら今更悩みだしている。

私に覚悟が足りていない証拠だ。

これでは後悔が残ってしまう。

そんな時にフェイトが私の手を握ってきて、

「母さんとアリシアの為にそんなに必死になって考えてくれてありがとう、シホ…。でも、きつと大丈夫だよ。」

アリシアも今は操られているけどきつと心では今も助けてって叫んでいると思うんだ…。

だからシホが助けたいと思うなら私達もシホの行動は認めるよ」

「フェイト…」

「だからいつものシホに戻って。いつものように自信を持って言い切って！ 私は、私達はそんなシホがいいんだよ!」

『うん!』

それでなのは達も頷いてくる。

そうね…。

「ありがとう、みんな…。そうね…。弱気になっていたわ。だけでもう迷わない。この力で救える人がいるんだから救わなきゃね」

「うん!」

それで私も心を決めた。

「うん。それじゃ、後の問題はファイアだね」

ユーノがそう切り出す。

それは考えなかった事はないわ。ファイアは私の妹分なんだから必ず救い出すと決めているんだから。

「クラウスのマスターがおそらくその彼女でしょう。クラウスもそれで本気が出せていなかったようですから…」

オリヴィエ陛下がそう言う。確かに彼ならもつと善戦できただろう。

「…あの、ファイター。クラウスって誰のことなんですか?」

「なのは。そうですね。古代ベルカ諸王時代には様々な王がいました。

その中で私は『聖王』と呼ばれ、クラウスは『霸王』と呼ばれていました。

彼とは幼馴染で何度も武を競ってきました。シホ：シルビアも会ったことがあるはずです」

陛下がシホではなくシルビアとして話を振ってきたので、

「はい。陛下。私の記憶にも彼の姿は残されています。まあ、その時の私には錬金術の力はあつても武の才能はからつきしなかつたので競う機会はありませんでしたが……」

それでつい昔話に花が咲きそうになるが今は会議中だという事で今は後の機会ということになった。

「それで話は戻りますがフィアは絶対に救い出すという事は決定ですね。フィアは私の大事な妹分で友達だから」

みんなもそれに関しては何言もないらしく無言で頷く。

「さて、では今のところのまとめと行こうか」

士郎がそう話を切り出す。

「今現在判明している敵は、

セイバーが『アルトリア・ペンドラゴン』。

ランサーが『デイルムツド・オデイナ』。

ファイターが『クラウス・G・S・イングヴァルド』。
キヤスターが『ヤガミ』。

アサシンが『殺人貴』。

バーサーカーが『ランスロット』。

…そして残りはおそらくアーチャーのクラス。

このサーヴァントは元から召喚されている『ギルガメッシュ』が当てはまるのだろう」
「そしてマスターは、

セイバーのマスターが『ノア・ホライゾン』。

ランサーのマスターが『ミゼ・フローリアン』。

ファイターのマスターがおそらく『フィアット』さん。

アサシンのマスターが『三菱彩』。

キヤスターとバーサーカーのマスターはまだ判明していませんが、ギルガメッシュの
マスターが『言峰綺礼』だというのは疑うべくもありません」
リンデイさんがそう続ける。

「こうして並べてみますとやっぱり強敵だらけですねえ…」

「呵呵呵、倒しがいがあるというものよ」

「しかし、聖杯に英霊の魂をあまり送るわけにもいきませんから私達は脱落するわけに

はいきませんね…」

「金ぴかは絶対に殺すわ」

「俺もあの金バカは殺すつもりだぜ」

「奏者には勝利を捧げよう」

「必ず勝ちましょう！」

サーヴァント達はそれぞれ士気を上げているようだ。

だがそこではなのは達が、

「あの、私達はなにかできる事はありますか？」

「うん。色々協力したい」

「そうやね。少なくとも自分自身とだけは決着付けたいわ」

「…うん。気持ちは嬉しいけどやっぱりサーヴァント同士の戦いに人間は介入できるものではないから、だから令呪を使うタイミングをはかってもらってほしいわ」

「でも、シホは…」

「私はアルトリアとユニゾンする事でサーヴァントと同等の力を得られるから大丈夫よ。セイバーと同等とはいかずともそれなりに戦えていた事はもう知っているでしょ？」

「うん…」

それでなのは達は納得してくれたようだ。

「それじゃ今日の会議を終了しましょうか。今後もしつ敵が襲ってくるか分からないからまとまって行動しましょう」

「では僕も行くとしようか。：つと、フェイト嬢の体を調べんといかん」

私の言葉で今日はお開きとなり、大師父もフェイトの体を何かの魔術で調べた後、色々と準備があるため姿を消した。

第六十九話

『幕間 ランサーとバーサーカーの

マスター』

S i d e ミゼ・フローリアン

：私は昔から様々な劣等感をまわりから感じていた。

親からは優秀な魔導師になれるようにと様々な勉強を強いられてきた。

でも上達はしてくれなかった…。

どんなに魔法の修業をしても私はまわりの友達に追い付くことができなかった。

私の兄はエリート魔導師として大成したというのに私はいつまでたっても落ちこぼれ。

次第に親も私に期待しなくなってきて見放された。

見放されてからはグレはしなくとも学校などは休むようになり昼間からどこもしれない場所を出歩くようになった。

そんないつぱん自由な生活でも私の心は刺激が欲しくていつも退屈な日々を過ごしていた。

そんなある日に一度私を見放した親は私に話し掛けてきてまた魔導師を目指してみないか？と言ってきた。

その時はまだ私でも期待されているんだな…と漠然と思いつつまた真面目に学校に通うようになり進路を魔導師養成学校に進めた。

でもそれはやはり間違いだったのではと思うくらいの屈辱の日々が始まりだった…。魔法を学んでもやはり劣等生というのは変わらず他の生徒達が次の段階に進んでいるのに私はいつまでも同じ事を何度も失敗してその時のパートナーだった人物にもうんざりとした顔をされるのが何度もあった。

そのたびに夜遅くまで勉強して復習し必死に習得する。

それで習得できたよ！とパートナーに言ってみるがパートナーは「…いまさらなの？」と言って呆れの顔をする始末。

私の何が悪いというのだろうか…？

みんなより少し覚えるのが遅いだけでここまでの仕打ちを受ける。

何で私はここまでダメなんだろう？

そんな暗い思いを抱くようになり、でも必死に頑張り魔導師養成学校をなんとか卒業

した。

しかし卒業をする事だけ考えていた私は進路というものが明確にできていなかった。魔導師ランクも低いしクラスでは落ちこぼれでいつも最下位だった私をとつてくれる職場は見つからなかった…。

それでも短期の職場なら何度も関わる事があり実戦経験は積むことができた。

そんな時に偶然にも元・パートナーの職場を手伝うことがあり私は何かを言われるかもしれないとビクビクしながらも向かった。

それは案の定で、

「おまえか…せいぜい足は引つ張らないですよ？ 落ちこぼれさん」

「くっ…!?!」

何も言い返す事ができず私はその場の上司の命令にただ従いながらも仕事をこなしていった。

でもそんな日にかぎって私は失敗をおかしてしまいあるうことか元・パートナーが私のミスによって怪我をしてしまった。私は必死に謝ったが、

「しよせんあなたはこんな程度の低い仕事もこなせない落ちこぼれなのね。残念だわ

…」

くやしかった…。

私にもっと力があれば見返してやれるのに……!

その晩はまくらを涙で濡らした。

それから惰眠な生活を過ごすようになり私はあまり外に出なくなつた。

そんな刺激もなにもないくだらない日々を過ごしているときだった。

一人の神父が私の家にやってきたのは……。

「ミゼ・フロリーアンだな……?」

「ええ。そうですけどあなたは……?」

「私は言峰綺礼。おまえの悩みを解き放ちにきたものだ」

最初は何を言っているのだろうと疑心の目を向けた。

しかし言峰綺礼は私が抱えている劣等感をすぐに見抜いてきた。鋭い言葉で私の心を振り古傷を幾度も開いてきた。

それを聞いた時に私は目の前の男に怒りを感じはじめた、

「なによ! あんたなんか私の気持ちなんか分からないわよ! 放っておいてよ!」

「いや? 分かるつもりだ。私は神父であり迷える子羊を導くことをしている。

……して、ミゼ・フロリーアンよ。まわりのものを見返したいと思わないかね……?」

「見返したい……? それは無理よ。私には才能がない……だからどんなに頑張つて努力しても腕のたつ魔導師には決して敵わない。ダメなのよ……」

「そんなことはない。ミゼ・フローリアン…君には才能がある。『魔術』の才能がな」
魔術…？ 魔法と何が違うっていうのよ？

それにそんな胡散臭そうなものの才能があるといわれてもいまいちピンとこないわよ。

だが言峰綺礼はその顔にまるで引きずり込まれるような底なしみたいな笑みを浮かべて、

「私が教授してやろう。そしてともに戦おうではないか」

「戦うって、なにとよ…？」

「魔術師とサーヴァントというもの達でどんな願いでも叶う聖杯というものをかけた殺し合い…聖杯大戦を」

「聖杯大戦…」

その話を振られて久しく私の心のなかの刺激をくすぶられる思いになった。

そして話は進められて、

「…本当にどんな願いでもかなうの？」

「ああ。君が望むのならばどんな願いだろうと…」

「そう…」

そして私は願った。私を今まで落ちこぼれと見下してきた奴らを見返してやりたい

と……!

絶大な力をこの手にしたいと!

私の願いを聞いた言峰綺礼という男はまた深い笑みを浮かべ、

「喜べ、ミゼ・フローリアン。君にはマスターの資格がある。その右手に宿った令呪がその証拠だ」

それで私は右手の甲を見てみた。そこには三つの刻印が手に浮かんでいた。

「これが令呪……。サーヴァントという英霊を使役するための道具」

「さあ、さっそく唱えたまえ。魔法陣は私が用意してやろう」

「わかったわ」

私は教えてもらった呪文を覚えた後、魔法陣の前に立ち、詠唱を行った。

「抑止の輪よりきたれ、天秤の守り手よ!」

魔法陣から嵐が吹き荒れそこから一人の男性が現れた。

男は無言でこちらを見てきた。でもその途端私は胸がドキリと高鳴った。

その男性の顔を直視するとなぜか動悸が治まらない。

私はどうしてしまったのだろうか……?

こんな気持ちは生涯ではじめての経験だ。

もしかしてこれが恋だというのだろうか……?

S i d e
???

：私は、生まれた時は親達に祝福されていた。
確かにその記憶があるからだ。

だが、いつからだろうか？

親や兄弟達から怖がられるようになったのは…。

思い出せばその答えはすぐに分かる。

それはある時、一人で人形遊びをしている時だった。

「ねえ、あなたは私のお友達…？」

人形は答えない。

当たり前だ。それは本当に人形なのだから。

でも、私にはあるものが見えた。

それはなんと表現すればいいのか…？

ふわふわと空中に浮いていて透けて見えるもの。

それは何度も私の周りに集まってはしばらくしたらまたどこかへと去っていくとい
うもの。

親達に話してみても、親達は何も見えないという。

なんで私にだけ見えるんだろう？

ふと、そんな事を考えていた時だった。

私は好奇心からかそのふわふわしたものに手を伸ばしていた。

そしてそれは掴める事ができた。

なんでそんな事が出来たのだろうとまだ幼かった私には理解ができなかった。

でもそれをたまたま手に持っていた人形に押し当ててみた。

すると人形が、

「やあー！」

突然声を出して私に話しかけてきた。

普通ならびびったりしたり怖がったりするものだけど自然と私はその人形が怖いとは

思わなかった。

「あなたは、誰？」

「君のお友達だよ！」

当時、友達というものを持っていなかった私はそう言われてすごく嬉しかった。

それから親達の目を盗んではそのお人形とお話をするというのが私の遊び内容になっていった。

でも、それは親達にすぐにばれた。

「いつまでもこんなお人形と遊んでいないで学校でお友達を作りなさい」
そう親達に言われて私は頭にきた。

「この子が私のお友達だもん！　ね？」

「……※※※……その子は喋らないんだよ？」

「喋るもん！」

私は何度もお人形さんに話しかけました。

でもその時はお人形さんはなにも答えてくれませんでした。

「どうして……」

「※※※……お前はどこか疲れているんだよ。今は休みなさい」

「はい。お父様……」

それで私は部屋に戻りどうして話してくれないのかを聞いてみた。

すると今度はちゃんと答えてくれて、

「※※※、今は僕の声は君だけにしか届かないんだよ？　君がもつと力を行使できれば
他のみんなにも聞こえるようになるよ」

「ほんとう……？」

「そうだと。だから頑張ろう？」

「うん！」

それから私はお人形さんに習うようになり力を開花させていった。

ある時にはお人形さんを他のみんなの前で喋らせたり、ある時はお人形さんを空中に浮かせたり、またある時は、と…使える術を増やしていった。

最初、学校みんなは興味深そうに見てきてそれで友達ができた。

でもそれは本当に最初だけ…。みんなは気味悪がって私から離れていった。

学校でもいじめを受けるようになり、なんでいじめられるのかも分からずとうとうある時お人形さんがズタズタに切り裂かれて学校の裏に捨てられました。

「どうして、こんな事をするの…？」

私は泣きました。

なんで私の友達であるお人形さんがこんな目に遭わなければいけないのか。

でもお人形さんはそれでもまだ私に話しかけてきて、

「…泣かないで※※※。君の能力は素晴らしいものだよ…。だって、本当は死んでいた僕を人形に宿らせてくれたんだから…」

「え？ 死んだって…？」

「僕はいわゆる幽霊って奴だよ。君の周りを見回してみなよ」

私は周りを見回してみました。

するとどうだろう。

今まで見えなかったのに今はたくさんふわふわしたものが見える。

「君は、幽霊である僕達を操れる力を持っているんだよ?」

「操れる…?」

「だけど、僕はもう君といっぱい遊べたから悔いはないよ。だから、さよなら。 ※※※
…」

そうしてお人形さんは今度こそ喋らなくなりました。

私はその晩はすごく泣きました。

でも、泣いてばかりではいけないと思った。

それから私は特訓した。

様々な幽霊の魂を操って人形に宿らせる事を何度もやったし、死んだ人の魂をその人の体に戻してあげたりした。

でも元の体に魂を戻しても所詮は一時しのぎなだけ。

少しは生き返ることができても一日くらい経ったらその人はまた死んでしまった。

「どうしてすぐに死んじゃうんだろう…?」

それからまた私は独学で勉強しました。

そう言った書物はないかと書斎をあさったり、なかったら他の次元世界まで行ってそう言った書物はないかを探したりと。

でも、親達はそれがとても不気味なものに見えたのだろう。

私の隙を見て部屋の中に閉じ込められました。

親達はもう私の事を理解してくれないのは昔から知っていた。

だから私はある決心をした。

前々から貯めていた貯金と色々な道具をバックに詰めて部屋を破壊し家出をしました。

それからは一人旅を続け、色々な部族とも交流を持って力を高めていきました。

そして今では私は幽霊の魂と死体を私がいいというまでこの世につなぎ止めておく事ができるようになった。

そう、死者の復活だ。しかも私の支配下に置かれるもので少し腐りはするものの一時的だからそれで十分だった。

そんなある時、

「プレシア・テスタロツサの娘の死体を回収…?」

「そうだ。器とその魂には君と同じ魔術の力が宿っているだろう。これから始まる戦いには重要な駒だと思うがね?」

「戦いつて、なに…?」

「聖杯大戦…。どんな願いでも叶うという聖杯を巡って戦う儀式の事だ」

「どんな願いでも……?」

「ああ、君が願うならどんなものでもだ」

それで私はある願いを抱いた。

小さい願いだろうとまた私のいなくなってしまった最初の友達と会いたいという願いが。

だから私はその戦いに協力することにした。

どうせ私には仲間なんかいない。

なら使えるものはなんでも使えばいいという思いを抱いて。

作戦決行の日、プレシアの死体が焼き払われて次は娘のアリシア・テスタロツサの身体が火葬されようとしていて、私は秘密裏に霊達を使って人間に憑依させて操り死体を回収した。

そして私はアリシア・テスタロツサの体を得て、呪法を使いアリシアの魂を呼び戻した。

でも、自我を持つてもらっては困るのよ。

時が来るまであなたは眠っていなさい。

私はまた培養液の中にアリシアを沈めて合図が来るまで待った。

.....

.....

.....

そして時は経ち、

「……※※※よ。もう少して聖杯大戦が始まる。

よつて前々から教えていた呪文を唱え、この娘と自分に繋げるようにパスを繋ぎながら召喚するのだ。

聖遺物はないが聖杯の記録から再召喚できるようにセッティングしてある」

「わかったわ」

そして私は呪文を唱えていく。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せ

よ」

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返しに五度。

ただ、満たされる刻を破却する」

そこまで唱えて私は自身の体が別のものにならわっていくのを感じた。

「――告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよ」

「誓いを此処に。」

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者」

そこまで唱えて私は追加である事を唱えることにした。

これの方が強化できるというから。

「されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖を手繰る者」

魔法陣から嵐が巻き起こる。

魔法知識ではこんなものはなかったからこれから何が出てくるのか楽しみでしようがない。

「汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――！」

そして魔法陣から一人の黒騎士が出てくる。

「…成功のようだな。喜びたまえ。君の願いを叶えるためにサーヴァントが召喚された。これで君は私の同士だ」

「ええ。是非協力させてもらおうわ、『言峰綺礼』さん」

「後で同志達を紹介しよう。聖杯に選ばれたマスター…『アクア・アトランティック』よ」
そして私は結託した。

それからしつかりとアリシア・テストアロッサと私にパスが両方つながっているのも確認できた。

待っていてね。私の最初のお友達…。
必ず願いを叶えてあなたと会うから。

第七十話

『マスターとサーヴァント達の

安らぎの時間』

Side シホ・E・S・高町

先の会議後、一度みんな家に帰宅することになり久しぶりに高町家に帰っている私となのは。

それにアルトリアとネロ、オリヴィエ陛下もつれている。

今はなのはの部屋に集まってみんなで話し合っている。

ちなみにネロの格好はアルトリアの紺のスカートと色違いの赤のスカートを履いて赤いリボンを巻いている。二人で並ぶと双子の姉妹に見間違えるものだろう。

そしてオリヴィエ陛下は腕が義手なので黄色いスカートに上は白いセーターを着て義手は黒い布で隠している。

でも、こうしてみると豪華な顔触れであると思う。三人とも一国の王様だったのだから

ら。

私って結構王様関係の交友があると思う。

「…シホ？　じつとこちらを見てどうしましたか？」

「いえ、なんていうかこうも王様が揃っていると思うとすごいことなんだなあ…と」

「うむ。奏者よ。余も楽しいぞ。王として語れる相手がおるからな」

「そうですね…。生前身近な王はクラウスしかいませんでしたから話し合えるいい機会ですね」

「もしここにあの豪快な男、征服王イスカンドルがいたらまた聖杯問答を始めたのでしようね…。今なら自信を持って言い返せますでしょうが…」

「シホちゃん。聖杯問答ってなんだろうね…？」

「さあ…。王士の語らいだから自身はどんな王だったのか？　とか聖杯に願う事はなにか？　という感じじゃない…？」

「ふーん…：そうなんだ」

「なのはー。シホちゃんー。夕飯を食べましょう？」

そんな話をしていると下から桃子お母さんからの夕食のお誘いの声がかかってきた。

なので私達は向かう事にした。

「こうして家族で食事をとるのは数日間ぶりだけだけど久しぶりだね、なのは。シホ

ちゃん」

「そうですね。美由希姉さん」

「うん！」

「アルトリアさんもネロさんもオリヴィエさんも楽しんでいてね」

「はい。迷惑かけます、モモコ」

「うむ。この時代の食事は昔に比べて美味だから余は満足だぞ」

「そうですね…。食の文化も日々成長しているのですね」

「わかりますか？ ネロにオリヴィエ」

「それでアルトリアが同士発見とばかりに二人に話をふる。

「アルトリアさん。昔の食事はどんなのだったの…？」

「あつ！ なのは、いけない!!」

「…え？」

「そこでなのが禁句の言葉を放ってしまった。

それによりアルトリアは複雑な表情になり、

「……………雑でした。」

「精一杯ためてその一言を言いアルトリアは一度はしを置く。

それによって食卓は暗くなる。しかも今回はそれが連鎖するという罫。

「…むう。余も食に關してはこの時代の味を知ってしまうとどうにもアルトリアと同じ
感想を抱いてしまうな」

「そうですね。民達に比べたらよいものを食べていたと思いますが…やはり」

「それでずーん…と暗い雰囲気立ちこめだす。」

「そ、そうだ！ 話は変わりますが…」

「そこで恭也兄さんが空気を変えようと話題を振り出す。」

「さすが恭也兄さん！」

「アルトリアさんとネロさんはかなり似ていますが別に姉妹というわけでもないんです
よね」

「そうですね」

「うむ。余とアルトリアでは生まれた時代も場所も違う。だから姉妹という関係ではな
いな。しかし妙な親近感は湧いてくるのが不思議だな」

「ネロもそうですね。私も貴女とは以前からの知り合いのような気持ちにさせられま
す」

「だったらもしこの聖杯大戦を生き残れたら姉妹の儀でも結ぶか？ 余はアルトリアと
ならいつこうに構わないぞ」

「そうですね。考えておきましょう」

「ふっ…余は美しいものは好きだからな。自身に似ているとなれば偽りの姉妹でもよいぞ」

それでアルトリアとネロは和気あいあいと話し合っている。

二人に続く形でオリヴィエ陛下が語りだす。

「…そういえばこの時代にはもう私の子孫はいないのでしょね。私で聖王家の血は途絶えましたから…。」

他の王の子孫がもしいたら語り合いたいものです。特にクラウドの覇王家の子孫と話をしてみたいものです」

「そのためには勝って生き残らなきゃいけませんね！」

「そうですね。なのは。それに今はシルビアという友とまた話し合えるのですからまだ贅沢は言えませんね。言うのでしたら勝ってから言うとうします」

「うむ！ 必ず勝とうぞ！」

「そうですね」

三人の王は志し高らかに勝利する宣言をした。

「それじゃ精力をつけるためにいっぱい食事を食べてくださいね？」

「うむ！ ではいただくでしょうか」

「はい」

そして楽しい食事となって私達はそれぞれ眠りについた。

ちなみにネロとオリヴィエ陛下はサーバントなので寝ないで家の警備をしているという。

それをいうと融合騎となったアルトリアは寝ないと回復しないからやっぱり燃費が悪いのだろうか…？ 悩みどころである。



S i d e フェイト・テストアロッサ

私とランサーは今ハラオウン家でリンディ提督達と一緒に話し合っているとこころだ。

「しっかし…一度は前の聖杯戦争で会ったことがあるとはいえ今度の金ピカは四日間の記憶はないみたいだから説得もクソもないだろうな」

「やっぱり倒すしかないのかな…？」

「それは倒したほうがいいと思うぞ。フェイト。主犯は言峰綺礼とはいえそのサーバントであるギルガメッシュも一度は世界を滅ぼして同罪なんだから」

「そうだよフェイト」

クロノがそう言いアルフもそれに賛同する。

「…うん。そうだね」

「どうしたマスター？ やっぱり殺しは好かねえか？」

「それはそうだよ。ランサー」

「そうか。ま、金ピカを倒すのは俺達サーヴァントに任せておけ」

「うん。お願いね」

「おうよ。それよりもマスターは今は姉ちゃんを助けることを専念したほうがいいぜ？」

「うん。アリシアは必ず助ける…！ 魂も操られているなんて可哀想だから絶対に開放する！」

「その意気だ。俺も今回はまともなマスターに巡りあったもんだぜ」

そういえばランサーの前のマスターは言峰綺礼に騙し討にあつてマスターを替えられたんだっけ。

「ランサーは、どういう理由で聖杯戦争に参加したの？」

気になったので聞いてみた。

「…そうだな。ま、他の奴らは色々あるな。例えば祖国の復興とか良妻になりたいとか二度目の生を行きたいとかな。

でも俺のはもつと単純な理由だぜ？」

「どんな……？」

「強い奴との死闘を繰り広げたい。それが俺の聖杯戦争に参加する理由だ」

「そんなことでいいの？」

「おう。それに今回は敵に俺のトップスピードについてこれる奴がいるからな。血が滾ってくるぜ！」

ランサーの参加理由に呆気にとられながらも、でも心の赴くままに戦えるランサーの姿に少しあこがれを持ったかもしれない。

「ランサー。もし、もしもだよ……？ この戦いが終わったら役目を終えてすぐに消えたりしないよね？」

「あん？……まあ、マスターが俺に残って欲しいと望むなら俺は残ってもいいぜ？」

「うん。それじゃもし生き残れたらアルフとランサーの三人で頑張っていこう！」

「そいつはいいねえ。しかし皮算用はまだ早いぜ？ まずは目の前の敵を打倒してからその件は考えていこうぜ」

「うん！」

「それじゃ食事にしましようか」

リンディ提督が食事を用意してくれたので私達はそれを食べた。

エイミイもクロノも非常事態の時のためにあまり寝ないで待機しているから、アリシアも助けて早くこの戦いを終わらせて未来を考えていこうと思いました。



Side 月村すずか

私は今ライダーとお話をしていた。

内容はやっぱり夜の一族について。

それを最初聞いたライダーはやっぱりといった表情になり、

「それで私はスズカに呼ばれたのですね」

「うん…。いつかこの事はシホちゃん以外のみんなにも話そうと思っているの。」

「勇気があることだけど、シホちゃんのおかげで私はこの力と向き合っていこうという気持ちになったの」

「そうですね…。やはり姿は変わってもシロウ…いえ、シホは優しいですね」

「うん…。私の好きな人なの」

それで思わず私はライダーに私の気持ちを教えた。

どう思われるだろうか？ やっぱり変に思われてしまうのだろうか。
不安です。

「いいではないですか。スズカの気持ちの赴くままに行動したらいいと思います。それに：昔は女性同士の恋なんて探せば多く出てくるものです。だから気にしたらいいけませんよ」

ライダーに受け入れてもらえて私は嬉しくなりました。

「うん……」

それで嬉しくなって何度も頷きました。

「しかし、あのシホですからね……。相当手強いでしょう」

「うん。シホちゃんも鈍感だつてことはもう十分身に沁みているよ。

でも、いつか思いが叶ったらいいな、と思うの」

「そうですか……。そういうひたむきなところがサクラにそっくりですね」

「桜さんって前のマスターの人だよね……。？」

「ええ。サクラもシロウの事を好きで、でも気持ちを正直に告げることができなくて悩んでいましたから。」

「だから私も今回はスズカのことを積極的に応援しますよ」

「うん。ありがとうライダー。でもね？ 今はそれはお預けなの」

「どうしてですか…?」

「フィアットちゃんっていうシホちゃんを好きな子が今敵に捕らわれているの。」

だからその子を助けてあげないとズルをしちゃうように気が引けちゃうから…。

だから対等になって初めて勝負が始まるの…!」

私は握りこぶしを作ってそう宣言しました。

「そうですか…。でしたらそのフィアットも必ず救いましょう。そしてそれからが勝負ですね、スズカ」

「うん!」

「私もスズカが生き残れるように誠心誠意をこめて守ります」

「ありがとね、ライダー」

「ええ…」

そこで一度話は終わったんだけどライダーが今度は少しおずおずとしながらある事を聞いてきた。

「…ところで、スズカはもう夜の一族についてシホに打ち明けているという事は血も吸ったことがあるのですか…?」

「え?…えつと、うん。たまにだけだね。シホちゃんもよく私に吸わせてくれるの」

「そうですか…。シホの血は別格ですから今後も吸ったほうがいいでしょう」

「ら、ライダー！ 吸った事があるの!？」

「…え、ええ。シロウの姿の時にですが…。時たまに何度か…」

「そうなんだ…。……………吸っちゃ、ダメだからね？」

私はつい我が儘を言っつてライダーにシホちゃんの血を吸っちゃダメといつけた。

ライダーも分かっているのかすぐに頷き、

「大丈夫です。それに今はもう一人シロウがいますからキャスターの隙を見て吸いますので安心してください」

「そう。ならいいかな」

士郎さんには悪いけどシホちゃんの血は私だけのものなんだからね！

「……………独占欲もサクラそっくりですね」

「…ん？ なにかいった？ ライダー」

「いえ。なんでもありませんよ。スズカ」

ライダーが小さく何かを呟いてけど聞こえなかったので流しておきました。



うつ?! なんだ!? いきなり寒気がしたぞ?!

それはキャスターも同じく感じ取ったようで、

「…ご主人様マスターによからぬ相が出ています。結構近い場所からの念でしょうか?」

「キャスターがそう言うなら確かなのだろう」

「ご主人様マスターの貞操は私が守りますからね!」

「あ、ああ…」

頼もしいのか、逆に怖いのかよくわからない表情でそう言った。

「これはリインフォースも力をいれないとあかん!」

「あ、主…まだ士郎に打ち明けていないのですから気持ちがついたらで…」

「どうした? リインフォースにはやて?」

「なんでもないよ?」

「…え、ええ。今はなんでもない。……………まずはキャスターをどうにかしなければいけない…」

リインフォースがブツブツと呟き始めたがそれに関係したら痛い目にあうだろうという気分になったので今はそっとしておく事にした。

「なんか、見ていてイライラするな…」

「ヴイータもそういう気持ちになれたのだな」

「あん？ 悪いかよ、シグナム」

「いや？ いいことだと思っぞ？」

「フツ…青いな」

「なんだ？ ザファイラ、やるっていうのか!？」

「ヴイータちゃんもザファイラもやめなさい！」

「あははー。楽しい家族だね。ここはー！」

ファニーヴァンプが楽しそうに笑いながら私達をそう判断する。

「これからはファニーヴァンプも私の家族の一員なんやからな？ 私色に染めてあげるわ」

「それは面白そうね。いいわ。私を染められるものなら染めてみなさい、はやて！」

「ええんやね！」

なにやらはやてとファニーヴァンプの仲が妙な方向で深まったようだ。

そのうちはやての病気とも言えるあの行動の餌食になるのだろう…。

私は男でよかったとつくづくと思う。そう考えるとシホのこれからが大変だな、とついで他人事のように思ってしまう。

いや、もう他人といってもいいか。魂が分かれた時点だな。

「士郎も楽しみにしておいてな！」

「なにに、対してだ…？」

「ふふふ…それは秘密や」

なにやらはやてがよからぬ事を考えているように見て取れる。

注意しておかないとな…。



S i d e アリサ・バニングス

「ふっ…！」

「むう…アサシン殿、やりますな」

「お主も結構鍛えているように見えるな。鮫島よ」

なぜか今は鮫島とアサシンがあたしのうちの稽古場で稽古をしていた。

「鮫島ー！ もつとがんばりなさい！」

「わかりました！ アリサお嬢様！」

「むっ…？ 先ほどより動きが良くなったぞ？ これが忠誠心の力故か？」

それで二人は稽古とは言えかなり白熱していく。

鮫島はうちの執事兼警護主任だからもつと強くなつてもらわなければいけないわ!

そう考えるとアサシンを召喚したあたしはラッキーだったのだろうか?

いや、何も触媒がないとマスターに似たサーバントが召喚されるという。

それだとあたしにはアサシンのように強いものと戦いたいという欲求があるということかな?

それならそれで嬉しいわね。

それに鮫島には悪いけどアサシンがあたしの護衛をやってくれたらもう遅れを取ることはないでしょうし…。

そのためには、

「アサシン!」

「む? どうした、アリサよ?」

「必ず生き残つて将来一緒にお酒を飲みましょう!」

「なにかは知らんがアリサがそう言うのなら僕も頑張るとしようか!」

ええ!

だからやられちゃいけないわよ!? そんな事このあたしが許さないんだからね!

それぞれの家でマスターとサーヴァント達は士気を高めていくのだった。

第七十一話

『姿を見せる英雄王。真祖の本気』

シホ達は翌日になり学校帰りにまた拠点の月村邸へと集合していた。

キャスターとシャマルのダブル結果もちゃんと維持されているので侵入されてもすぐに対応できるだろう。

「さて、それじゃまた何日かかるか分からないけど聖杯大戦が早く終決する事を祈って行動を開始しましょう」

「それなんですけど…一つ不幸なお知らせがあります」

リンディがそう切り出す。

「どうしたんですか…?」

「いえ、管理局の方で動き回っていた局員達がある次元世界でバーサーカーらしきものとそのマスターらしき女性と接触したらしいのですが…。」

功を焦ったのか局員達は無謀にも戦いを挑んでしまい返り討ちにあい、局員数名を残

し九名ほどの死亡が確認されました…」

『ツ!?!』

とうとう死人が出てしまったことに全員は痛ましい表情になる。

「もう死亡者が出ましたか…残念です」

「私もよく注意してくださいと警告はしたのですが、自分達でも倒せるだろうと思つたのでしょね。

もつとサーヴァントは私達では手に負えないものだという事を訴えるべきでした」

「悲しいことですが、私達は現状での事で精一杯ですからせめて追悼の意を捧げましょう」

『うん…』

それで全員で目をつぶって黙祷を捧げる。

しばしして、

「もう死人も出ました。だからもう悠長に構えている場合ではないと思います。だからこちらからも攻めたほうがいいと思うんです」

「そうか、奏者よ！ ではどうでるのだ？ 余は楽しくなってきたぞー！」

シホの発言にいの一番にネロが反応する。

「そう急かさないの、ネロ。そうね。リンデイさん」

「はい。なんですかシホさん？」

「例のバーサーカーのマスターは誰か分かったんですか？」

「はい。数名の生き残りから情報証拠を得ました。」

女性の名前は『アクア・アトランティーク』。ミットチルダのアトランティーク家のご息女でお嬢様だったのよ」

「だった、というのはい？」

「今は家を飛び出して行方をくらましているそうです。」

そしてアトランティーク家のアクアさんの父親から耳寄りな情報を得ました」

「なんですか……？」

そこからリンディがアクア・アトランティークについて話し出す。

「彼女は小さい頃からよくお人形とお話をしていたそうです。」

そしてその人形も魂が宿ったように言葉を話せて、でも当時は気味悪がられてイジメも受けていたそうです。

それから次第に彼女の行動は大胆になっていって目の前で人の蘇生を再現したという話です」

「蘇生……ですか」

「ええ。でもその後がけっこう大事な事態で蘇生させられた人は一日も経たずにまた死

んでしまったといひます」

「無理に霊の魂を体に呼び戻した代償でしょうね…」

「そうなのでしょうね。これもいわゆる死霊ネクロマンサー魔術師の力の一端なのでしょうね。

魂を操る行為は死者の冒瀆に他なりませんから。

そして彼女は何度も色々な世界の民族などの集落に行つて情報を集めていたと捜査でわかっています。そして…」

「会得したのでしょうね…体に魂を留めておきさらに支配する呪法を」

「そしてアリシアさんを操っているという事になります。ひどい話ですね…」

「アリシア…」

それでシホとリンディの話は一旦終了する。

そこになのはが、

「魔術つて、怖いものなんですね…」

「なのは…でもね」

「うん。わかっているよ、シホちゃん。ちゃんと平和的に使用すれば魔術も安全なものだということとは…」

だから悪い使い方をしている魔術師さんは捕まえなきゃいけないんだよね？」

「その通りよ。それに魔術はこれ以外にも殺傷性の高いもの、陰湿なもの、人の命を媒体

にするものなど千差万別。

だからそんな事件が起こらないようにしっかりと取り締まらなきゃいけないのよ」

「それは前の世界でシホと士郎さんが実践していたことだよね？」

フエイトが二人にそう聞く。

「ええ。私と士郎は魔術による違法な事件を解決するために動いていたわ。

でも魔術協会は人の命は二の次で実験第一な集団だったから魔術の秘匿のために逆に私達を捕らえようとした…」

「そんな世界になってほしくないね。この世界は…」

「そうね…。つと、そうです。話を戻しますね。そのバーサーカーが現れた場所は今はどうなっているんですか？」

「はい。捜査員がバリケードを張って嚴重に封鎖して調べが行われています」

「近くにアジトがあるとかそんな情報ではないんですか…？」

「残念ながら…」

「そうですか。でもこれであと判明していないマスターはキャスターのマスターだけね」

「それなんやけど…」

そこではやてが声を上げる。

「そのマスターな。おそらく男性だと思っくんよ」

「どうしてそう思うの…?」

「ほら。シホちゃん達も覚えているやろ? ある時に私の髪が数本誰かに抜かれてしも

うた事が…」

「ああ。あの時ね。…あ、そうか。はやての髪を触媒にして英霊ヤガミを召喚した、と考
えれば辻褄が合うわね」

「あのすぐに消えちまった奴か! はやての髪をいきなり抜いていったからな。ただ
じゃおかねーな」

ヴィータが思い出したのか怒りの表情をする。

しかしそこでシグナムが神妙な顔つきになり、

「英霊ヤガミ、か…主はやての写し身といつてもいいキャスターは本当に倒していいも
のなのだろうか」

「そこは確かに色々と救いたいという気持ちもわくのはわかるわ。

でもね、シグナム。一度『座』に招かれてしまったらもう手の施しようがないのよ。

それにキャスター自身は世界の破壊を聖杯に望んでいる。だから野放しにしておけ
ないわ」

「そう、だな。理屈ではわかっているのだがな…」

「はい。それは私も思います…。違う存在とは言えはやてちゃんを倒すというのはやっぱり気が引けます」

シヤマルもそれに同意するように答えた。

「みんなありがとな。でも、倒さなきやあかん。これはもう私達だけが私情を挟める問題じゃないからな。だからシグナム達も気持ちも固めてな」

「はい…。わかりました、主はやて」

それではやて達も話し終え、

「でも、やつぱりなにか手がかりが欲しいわね…。私はファイアとリンカーコアが繋がっているからそれを辿ろうと思ったけどさすがに特定まではできないから」

「冬木…」

そこで士郎がポツリと呟く。

「…え？ 士郎、今なんて言った？」

「いや、もしかしたら冬木の土地に身を隠しているのかもしれないと思ってな。」

世界は違うとは言え冬木は聖杯降臨の地だ。大聖杯を設置するには適しているのではないか？

この世界にあるかは分からないが冬木という地名は存在しているのだからな」

「冬木か…。行ってみる価値はあるかもね…」

「それでは出るメンバーを決めましょうか？ 明日からは週末ですし出かけるにはちよ
うどいいでしょう」

リンデイさんの提案で選抜メンバーを決めることになった。

冬木に行くメンバーは、

シホ&アルトリア&ネロ。

はやて&ファニーヴァンプ&守護騎士達。

フェイト&アルフ&ランサー。

この三組のメンバーが冬木へと向かうことになった。

八神家の中で士郎だけはもしギルガメッシュが来た時の切り札として月村家で待機
してもらっている。

そして出されなかった他のメンバーも待機である。



Side シホ・E・S・高町

それから私とフェイトとははやて、守護騎士達、サーヴァント達は冬木の地に到着して

いた。

「まさか、こんな事で私の生まれ故郷に来るとは思わなかったわ…」

「ここがシホの生まれ故郷…」

「シホちゃんの世界ではこの地で聖杯戦争がおきたんやね」

「ええ。とりあえずどこか目星のつく場所を探しましょう」

「そうだな、奏者よ」

それで私達は行動を開始する。

まず向かったのは第四次の聖杯の降臨の地であり私の家があったであろう新都近くの住宅街。

私の世界では大火災で失われてしまったがこの世界ではしっかりと残されている。

「なんか私としては違和感のある光景ね」

「どうして…?」

「私にとつてはもう失われた土地でただ更地が広がっていたただけだったのに普通に街が存在しているから」

「あつ、そうやね」

「そういえばシユバインオーグは火災以前の記憶がなかったのだな」

「ええ。シグナム」

「街一つを聖杯が焼いてしまったんですからロストログア級に聖杯はおつかないものですね」

シヤマルさんが聖杯をそう判断する。

「そしてもう滅びた世界は言峰綺礼の望むままに聖杯が願いを叶えたことによつて滅びたつて話だからな。まったく嫌になるな」

「そうね。ヴィータ」

「その世界の士郎は敗れてしまったという…言峰綺礼は許されないな」

リインフォースがそう言う。

やっぱり好きな人が違う世界とはいえ殺されればそう思うか。

それでもここには用はないということ。で次の場所に向かうことにした。

次に向かったのはアインツベルン城があった郊外の森だ。

でも、そこにはバリケードが貼られていて中に入つていってもなにもないらしい。

とりあえずここはハズレか。

そして次に移動しようとした時に、

「シホ。シホの暮らしていた家つてあるのかな?」

「衛宮の家か。でも、もともと切嗣が聖杯戦争の拠点用に買った家だから誰も暮らしていないんじゃないかな?」

「別にええやん。一回いつてみよか？」

「そう？」

それで急遽私達は武家屋敷を目指すことになった。

そして到着してみるとそこにはなんと表札に衛宮とくつきりと名前が書かれていた。

「まさか、ね…」

私が少し不安に思った。

もしかしてここには切嗣が暮らしているのだろうか？

それで数分そこで留まっていると中から二人の子供が飛び出してきた。

「シロウー。待ちなさい！」

「イリ姉。早くいこうぜ…」

どうみてもその人物達は過去の私にイリヤだった。

それで思わず私は物陰に隠れてしまった。

二人は気にもすることもなくどこかへといってしまった。

それで私は物陰から顔を出しながら、

「衝撃の光景を見た気分だわ…」

「そやね…」

「うん…」

「確かにな…」

「ああ…」

「あれはどうみてもシホちゃんとかイリヤちゃんなのかしら…?」

「士郎に似ていたな…」

「シホだな。ありや…」

「どうみてもイリヤスフィールだったですね」

「まるで奏者だな」

「第五次聖杯戦争時の士郎を小さくすればああなるな」

「この世界ではシロウはまだ子供なのね」

まず私から発言して、はやて、フェイト、ヴィータ、シグナム、シヤマル、リインフォー
ス、アルフ、アルトリア、ネロ、ランサー、ファニーヴァンプの順に話す。

それで私達はもしかしたら中に切嗣がいるかもしれないけど鉢合わせしてしまつた
ら色々とまずいだらうと判断しその場をすぐに後にした。

それにしてもこの世界にはアインツベルンは存在しているか分からないけど少なく
ともイリヤがいるんだからその母親のアイリスフィールさんもいるのだろう。

魔術の世界にシルビアさんが転移してアインツベルンの家系が生まれたんだからも
しかしたら苗字も違うのかもしれないわね。

そんなことを思いながら先を歩いていく。

そして本来の目的通り冬木教会や他にもそれぞれの場所を巡っていき最後に到着したのが、

「ここが柳洞寺。大聖杯が地下に収められていた地よ」

「ここが…」

「確か、ここち側に地下への入口があつたと思うけど…」

それで私とアルトリアが先頭になって入口を探した。

そしてすぐに見つけることができた。

一応用心しながらも中へと進んでいくと鍾乳洞が続く道へと繋がりに奥へ奥へと進んでいく。

なにもなければそれでいいし、なにかあつたらそれこそ覚悟を決めないといけない。

そして奥底へとたどり着くとなにやら光っているように見える。

「なにか光ってる…」

「ちよつと待つて。調べてみるわ」

私は目に強化をかけて奥底まで見回してみた。

するとそこには一人の男が立っていた。

まさにそいつこそ…！

「あいつは、ギルガメッシュユ!」

『え!』

私が叫ぶと男はこちらへと振り向き、

「ほう…こんな場所までご苦労なことだな」

ギルガメッシュユもこちらに気づいたようでその姿を黄金の鎧へと変える。

「よくぞ来た。雑種ども…!」

そこでアルトリアとネロ、ランサーとフアンニヴァンプが実体化して構える。

「我と戦うというのか? 身の程知らず共め…」

しかし残念だったな。貴様達はここに大聖杯があると思いい来たのだろうかそれはない。

大聖杯はいまや私の宝物庫の中なのだからな!

「そんな事はどうだっていいのよ! 金ピカ! あんたを殺すわ!」

「ほう…もしや真祖か。あの時殺してやったというのにまた殺されに来るとは…」

「今度はそう簡単には殺されないわよ!」

フアンニヴァンプが爪を硬質化させて戦闘態勢に移行する。

「おいおい…。この人数差でその余裕、慢心はいけ好かねえな…? 金ピカ?」

「慢心せずして何が王よ。それより貴様はランサーか…」

「英雄王…あなたを倒します」

「騎士王もいるとはなかなか面白い構成メンバーだな。どれ、では一つ相手になつてやるとするか。王の財宝…」

ゲイト・オラ・バビロン

ギルガメツシュが王の財宝を展開してそこから数多の宝具の原典が顔をのぞかせる。しかし、そこにいきなりアサシンと三菱彩が転移して現れる。

「…む？ 雑種、貴様なんの真似だ？」

「おいおい王様？ まだあなたが出しやばるのは早いのではないですか？」

「王の戦いを邪魔立てするとは不敬だぞ？ そのふざけた笑みを引き裂かれたいか？」
「怖い怖い…。しかし今はまだ王様は力を蓄えておいたほうがいいですよ。代わりの相手は僕とアサシンが務めますので…」

「ふん…。誰からの命令だ…？ もしや言峰からか？」

「王様のご考えの通りの人物ですよ」

「くっ…いいだろう。雑種、我はもうここには用はない。よつて見事に散るがよい」

そう言つてギルガメツシュはその場から姿を消した。

「あつ!! 待ちなさい、金ピカ!」

「フアニーヴァンプ、もうギルガメツシュの気配は感じられません。おそらく立ち去つたのでしよう」

「うー…せっかく殺る気になっていたのに！　もういい！　ここは志貴を痛め付けるんだから!!」

「…奏者よ。どうする？　余達は見学とするか？」

「そうね…。どうやら今この場に他のサーヴァントはいないようだからここはファニーヴァンプに任せましょう」

「そうやな。それじゃファニーヴァンプ！　ギったんギったんにしたれ！」

「了解よ。はやて！」

それでファニーヴァンプがいざ挑まんと構える。

だがやはり殺人貴は驚愕の表情をしているようだ。

「アルクエイドなのか…？　まさかお前がサーヴァントになっていたなんてな…」

「志貴！　あなたを倒すわ！　覚悟しなさい!!」

「…しようがないか。やるぞ！」

そしてファニーヴァンプは爪を硬質化させて殺人貴へと向かっていった。

ファニーヴァンプが爪をふるうたびに、衝撃で地面がえぐれる。

「くっ!!」

「そらそら！　志貴！　あなたはもつと強いはずでしょ!?!」

「無茶を言う…!」

殺人貴はすでに李書文にやられた左腕は治っているようだがどうにもやはりファニーヴァンプの攻撃に攻めあぐねている様で防戦一方といった感じだ。

ファニーヴァンプもそれはもう楽しそうに爪をふるっている。

「ツ！…ここだ！」

殺人貴のナイフがファニーヴァンプの首を捕らえようと迫る。

しかしそこでファニーヴァンプはそのナイフを持つている腕を掴み、

「っ!?!」

「せーの！」

ドスンッ！

「ぐあっ!?!」

見事にその有り余る力で地面へと叩きつける。

それだけで地面が少し陥没しているのだからその力は計り知れない。

ヨロヨロと立ち上がるが私は殺人貴が長時間の戦闘は苦手としているのを知っている。

だからいまだ本気を出していないファニーヴァンプには敵わないだろう。

それを分かっているのか殺人貴は少し笑みを浮かべて、

「さすがだな。アルクエイド…。英霊になってもお前には敵わないか…」

「あつたりまえじゃない、志貴。私は世界から力を受け取つてるのよ？ だから必ず勝たなきゃいけないのよ」

「ははっ…お前らしいな」

もう二人は昔の関係のように会話も楽しんでいる。

こういった物騒な時でもお互いに笑い合えるのは羨ましい関係だ。

でも、そこに無粋な奴が命令を下す。

「なに遊んでいるんですか、アサシン？ さっさと倒してしまいなさい。令呪に命じる。

“その女を本気で殺せ”…！」

「貴様!? ぐあっ!!」

殺人貴の体に紫電が走り殺人貴は目に巻いている包帯を無理やり破り捨て、

「…くっ。世界に、死が満ちてくる…。…アルクエイド。もう俺はこの殺人衝動を止め

られないみたいだ…」

「うん。いいわよ。志貴の全部を私は受け止めてあげる…」

するとファニーヴァンプは目を瞑って両手を水平に広げた。

なにをするのかと思つたが、答えは決まっている。

宝具の発現だ。

「星の息吹よ…」

ファニーヴァンプの周りの空間が、いや私達の周りもただけど急に静かになり、途端世界は一変した。

急に周りは満月の月の光が照らすお城の中みたいな空間に様変わりをした。

「これって…!？」

「固有結界…いや、空想具現化の能力ね」

「私も…本気で往くわ!」

そしてどこからともなく幾重にも鎖が殺人貴にせまり縛り上げた。

そしてその爪で何度も殺人貴の体に致命傷ギリギリの攻撃を食らわしていく。

最後にファニーヴァンプの姿が一瞬だけだが短い髪から長い髪になりドレス姿に変わったと思うととてつもない衝撃波が発生し殺人貴は光に包まれた。

そして世界は元に戻り殺人貴は地面へと横たわっていた。

「…志貴。生きてるー?」

「…もつと、手加減しろよ。この、バカ女…」

そして殺人貴は消滅はせずにそのまま気絶した。

「うし! お仕事終了だね! さて…」

ファニーヴァンプの目に彩の姿が映される。

「志貴を好き勝手してくれたお礼、しないかね…?」

「うっ!？」

ファニーヴァンプは妖艶の笑みを浮かべてその目の魔眼を光らせた。

それによつて彩の体は固まってしまったかのように動かない。

「あ、ファニーヴァンプ。殺さないでね? 拘束するから…つと、その前に」

私はその手に破戒すルべき全レての符を投影し、気絶している殺人貴に刺す。

それによつて彩の手から令呪が消え失せる。

それを確認して私はマグダラの聖骸布で彩を縛り上げる。

「ファニーヴァンプ。これで殺人貴の契約者はいなくなつたわ」

「ありがとね。シホー!」

それでファニーヴァンプが再契約の呪文を唱えると、その手に一画だけある令呪が宿つて、これで正式に殺人貴はファニーヴァンプのサーヴァントになつたのだつた。

「それで、こいつ…どうしようか?」

見れば彩はファニーヴァンプの魔眼を直視したのが原因なのか魂が抜けたかのように放心している。

「管理局に引き渡そう。これでも言峰綺礼に協力していたんだから」

「そうやね。ま、刑務所の中で暮らさせたらええわ。それにもかしたらアジトを聞き出せるかもしれへんしな」

「私は志貴が私のものになっただけでもういいかなー？　でも、金ピカは必ず殺すけどね♪」

「そんなこんなで私達は特にこれといった収穫は…いや、殺人貴が仲間になったからあつたけど、特にめばしいものは発見できず冬木の街を後にして海鳴市に戻るのだった。」

第七十二話

『ランサーの覚悟の戦い』

S i d e シホ・E・S・高町

海鳴市に転送ポータルで戻ってきた私達は管理局に三菱彩の身柄を引き渡した後、あの戦いから目を覚ましていた殺人貴に情報を聞いていた。

ちなみに目を覆う包帯は破ったがすぐにスペアを取り出して巻いていた。

「…俺の情報はそう多くないだろう。あの駄目マスターもただ命令で動いていただけだったからな。本拠地などは知らなかった」

「そう…」

「しかし、一つだけなら拠点の場所は分かる」

それから一夜明けての翌日の日曜日に殺人貴に教えてもらった拠点の一つに私となのは、フェイトはサーヴァント達と一緒に向かった。

場所は次元世界の無人惑星の一つ。

草木が生い茂っていて色々な魔法の自然動物が生息している世界だ。

「ここはどこかに隠されたアジトがあるんだね？」

「そうらしいわね。なのは、フェイト。それにサーヴァントのみんなも一応気をつけて行動してね」

「うむ。もし襲ってきたら返り討ちにして見せようぞ。特にセイバーならば望むところだ」

「バーサーカーは私とシホが請負います」

「デイルムツドが出てきたら俺が相手するかな？」

「クラウスでしたら私に任せてください」

それぞれサーヴァント達も役割分担は決まっているようでも勝負ができるように構えている。

そして殺人貴の指定した場所には自然の中に不自然にあるでかい建物がポツンと立っていた。

「あきらかに怪しいね…」

「うん…」

「ちよつと入る前に調べておきましょうか」

私は出入り口の電子機器に手を添えて解析魔術を執行する。

それによつて建物全体の構造を解析把握していく。
そして…

「…どうだ。奏者よ。なにか罫はあるか？」

「いや、調べてみたけど中には特になにもないみたい」

「そう…。それじゃ入ってみよう？」

「そうね」

それでもし矢などが飛んできた時の対策として矢避けの加護を所持しているランサーが先頭で入っていき殿（しんがり）をオリヴィエ陛下下に任せて私達は中へと入っていった。

しばらく進んでいきなにかの研究室のような場所に到着するとそこにはなにかを実験していた跡が残っていた。

「なにかの研究施設だったのかしら…？」

解析をかけてみて分かったことだけど相当の年月が経っていたみたいで廃墟と言つても過言じゃないから」

「本来管理局の執務官が捜査する仕事みたいだね」

「なにか不気味だね…」

そうして私達がさらに奥へと進んでいくとまるで体育館の中のような広い空間へと

出た。

ランサーがなにかを感じ取ったのか、

「なにか嫌な予感がするぜ……。やっぱりサーヴァントの気配がしやがる。確実にいるぜ？」

それで明かりはないかと調べてみてボタンがあつたので照明を点灯させる。

それによつて広い空間全てに明かりがつけられる。

そして奥には一人の女性が立っていた。

その人物は一度デイルムツドとともに撤退した女性：ミゼ・フロリアンその人だった。

「……来たのね。ま、あの殺人思考を持つていた馬鹿な子とアサシンが敗れた時点でここがばれるのは分かっていたことだわ。」

紹介がまだだったわね？ 知っているでしょうけど私はミゼ・フロリアンよ。デイルムツド様、出てきてください」

「……………」

するとミゼのとなりに無言のデイルムツドの姿が実体化して現れる。

「いい機会です。私とデイルムツド様があなた達小娘を倒してあげるわ。」

そして聖杯で力を手に入れるのよ」

「戦う前に言わせてもらおうわ。聖杯に願っても全部破壊を招くだけだわ。あなたは言峰綺礼に騙されているのよ」

「それがなんだっていうの？ そんな言葉で私は動揺したりしないわ。それに、私のデイルムツド様は最強の騎士なのよ。」

だからあなた達を全員倒してあげるわ。では、お願いします。デイルムツド様……」

ミゼはデイルムツドに熱い視線を送り、デイルムツドはそれに答えて槍を構える。

「マス■■ーの命令■■……。いざ、勝負■■……」

デイルムツドは走り出そうとしている。

それに反応してランサーが前に出てゲイ・ボルクを構える。

「今度こそためーの心臓、貰い受けるぜ？……つと、その前にある儀式でもしておこうぜ、

デイルムツドよ？」

「■■……？」

ランサーは自身の後ろにルーンでなにかを削っていく。

でも、あの陣には覚えがある。

あれはバゼットと戦いを挑んだ時にやったものだ。

そう、あれは、

「『^{アト}四枝の浅瀬^{ゴウラ}……！』」

「そ■は……」

「そう……その陣を布いた戦士には敗走は許されず。

その陣を見た戦士に、退却は許されない。

我ら赤枝の騎士に伝わる、一騎討ちの大禁戒だ。

これを布いちまったらもうどっちかが勝つてどちらかが死ぬまで勝負は終わらすことはできない。

…デイルムツドよ。バーサーカーのクラスも混同しているお前にまだ騎士としての誇りがあるつていうなら、この戦いお互い令呪なしの己の力だけの全力勝負で挑もうぜ……？」

ランサーは本気だ。

これを布いたということとはもうこの場でデイルムツドと決着をつけようと心に決めているものだ。

「そんなわけですまねーがマスター。令呪はなしで頼むぜ？　これは完全に一騎討ちの戦いだ」

「…でも」

「フェイト。ランサーの覚悟、わかってあげて……」

それでしばしフェイトはうつむき、顔を再度上げると、

「ランサー！ 絶対に勝ってね!? そうじゃないと許さないんだからね!」

「おうよ! マスターの命令、しかと承ったぜ!」

見ればミゼの方でも、

「マ■ター…これ■決闘だ。■から…わかっ■くださ■」

「わかったわ…。だけど必ず勝ってください。デイルムツド様…」

「マスター■命■であ■ば…」

本当に狂化しているのか疑問の残るデイルムツドだがあちらも覚悟を決めたようである。

「ランサーの覚悟、しかと見させてもらいました」

「ああ。その姿、戦士の威厳に溢れておる。美しいものがあるな…!」

「私達はただランサーの勝利だけを祈りましょうか!」

アルトリアもネロもオリヴィエ陛下もランサーの覚悟に心を打たれて見守るだけになった。

「ランサーさん、頑張って…!」

「ランサー、絶対勝ってね!」

「バゼットの時みたいに相打ちなんてダメだからね!」

私達もランサーの応援をする。

「女性の応援とあらば俺はギアをどんどんと上げていくぜ…？ 赤枝の騎士団クー・フリーン…いぎ、いくぜ！」

「フィオ■騎士■、デイルム■・オ■イナ…いぎ、■いる！ ■■■■■ー！！」

ついにランサーとデイルムツドとの戦いの火蓋が切つて落とされた。

これはもう一切邪魔のできない真剣勝負。

もう後戻りはできないランサーの覚悟の証…！

そしてランサーとデイルムツドが同時に地を駆ける。

最初から全力でランサーは挑んでいきギアを全開にしてゲイ・ボルクを振るついでく。

それに応えるようにデイルムツドも二槍を速さの全開をとうに超えたように交互に振り抜く。

「おらぁー！！」

「■■■■ー！！」

ランサーが槍を回転させてゲイ・ジャルグを弾く。

しかしそこにゲイ・ボウがランサーの手に迫る。

「くらうかよ…！」

さらにギアを上げたのかゲイ・ジャルグを弾いた後だというのに即座に槍を反転させ

ゲイ・ボウに叩きつける。

それによってゲイ・ボウは床に突き刺さり、デイルムツドは何を思ったかそれをすぐに手から離し両手でゲイ・ジャルグを振るう。

やはりランサー対決…それは一本同士ではないとそのスピードに追いつけないのだろう。

前回の戦いでもデイルムツドはゲイ・ボウを一回手から離している。

やはり二槍使いと言われても武器は双剣というものとは違い一本の方が効果は断然に高いということだろう。

それからはランサーとデイルムツドは突きの連打を重ねた。

昔に四日間の記憶でランサーに直接聞いたことだが槍の一番の見せ所はやはり突きの一点に限るといふ。

両手でもって全力の突きを行う。

それによって生まれる破壊力は槍を振り回すよりはるかに威力は高いものとなる。

まして同じリーチの槍同士である。

ここまで来たらもう後はどちらが遅れをとるかで勝敗が決してくる。

まさに一騎討ちの様相を呈している。

「おらおらおらッ!!」

「■■■■■■ー！！」

もう何合打ち合ったか分からないほどランサーとディルムツドの突きの応酬は続いていく。

「ははははは！ 楽しいな！ ええ?! ディルムツドよ!!」

「こん■■勝負は■■生に何度■■るのかも■■だ…血■■滾る!!」

互いに防ぎきれない傷も増えていきそれぞれ色々な箇所を傷を負っていく両者。

そこには神話の戦いの再現のような光景が繰り広げられていた。

まさに神の突き合い…！

その戦いをなのは達も必死に目をそらさずに見つめている。

ネロなどは二人のまさに芸術のような至高の戦いに感動をしているのか恍惚とした表情をして戦いを見ている。

「おらぁー！」

「■■っ！」

二人はそれで一度弾かれた。

すかさずランサーは槍に魔力を貯めていく。

「いくぜ!!」

ランサーは盛大に後ろへとジャンプして下がりそこから四肢を盛大に伸ばして助走

し走り出す。

そして地面を蹴ると空へと飛び上がり、

「このクー・フリーン、最大の一撃！ 手向けとして受け取るがいい!!」

そして空中で思いっきり体を弓のように曲げて、そして放たれる。

クー・フリーン最大の対軍宝具が…!

「突^ゲき穿^イつツ………死^ホ翔^ルの槍^グ!!」

放たれた赤い呪いの槍。

それは放たれた後、全力での呪いが生み出す現象なのか幾重にも分裂して数がわからなくらいに増殖したゲイ・ボルグとなりディールムツドへと迫る。

あれが全力でのゲイ・ボルグ!

これを防ぐとなればロー・アイアス級の宝具でなければ無理だろう。

しかしディールムツドは、

「■■■■■■■■■■ー!!」

一度雄叫びをあげ、ゲイ・ジャルグを投擲態勢に入りゲイ・ボルグの突き殺そうとす

る呪いが渦巻いている中へと放った。

「呪い■■中心を抉■■! 破^ゲ魔^イの紅^イ薔^イ薇^グツ!!」

ゲイ・ジャルグはその呪いの塊に向かって放ちあろうことか複数あるゲイ・ボルグの

中の本物の一本を見抜きゲイ・ボルクの宝具の真名開放の効果を消し去り無効化した。それによってぶつかりあったゲイ・ボルグとゲイ・ジャルグは互いに弾かれていき持ち主のもとへと戻っていき、

「おいおい……これを防ぐか!? やるなあ!!」

ランサーは宝具が敗れたというのにまるで悪ガキのような獰猛な笑みを浮かべて、「デイルムツド!! やっぱてめえは最高だ!! やっぱし決着は突きに限るってか!」

「■うとも!!」

そしてまたランサーとデイルムツドは駆け出してお互いの距離をなくし槍による刺突の突き合いを開始する。

もう数にして千以上は突き合っただろうか……?

しだいに二人の周りは幾重にも衝撃が発生しだしそれによって起こるソニックブームにより地面も削れていく。

二人は威力が下がるどころかささらに激化していきもうどちらが勝負を決めてもいいほどの死闘を繰り広げている。

「すごい、戦い……! これがランサーの本気!」

「ええ。そうよ、フェイト。その目にしっかりと刻みつけときなさい。ランサーの勇姿を……! そして勝ちを!」

「私達はいっさい入れない空間、だね……！」

「そうですね、なのは！ あれはランサー同士だからこそできる芸当でしょう！」

「双方とももつとぶつかり合うが良い！ 余はこの勝負、どんな結末だろうと受け入れようぞー！」

「ランサー……！ あなたの勝利を祈っています！」

私達の会話を聞く時間も惜しむかのようにランサーとデイルムツドはそのしのぎを削っていく。

もう二人にはきつとお互いの事しか見えていないのだろう。

実にいい笑みを二人共顔に浮かべている。

そして戦いは終盤に入ったかのように、両者とも体中から血を流し息切れを起こしている。

「はあ、はあ……デイルムツドよ。俺の全力にここまで応えてくれて、サンキューな？」

「俺■方こ■……ここ■での命■削り合■は、初めて■……！」

「俺の方はもうあと少しでギアが切れる……」

「こちら■そ……」

「最後に一花咲かせようぜ？」

「■■■■■■ーー！！」

デイルムツドは答える代わりに雄叫びを上げた。

「いぎー！　いくぜ！　これが、最後の最後だ!!」

「ゆ■ぞ!!」

二人の槍に魔力が集まっていく。

最後のぶつかり合いをしようというのだろう。

「受けやがれ！　刺し穿つ死棘の槍!!」

「すべ■を打ち払■！　破魔の紅薔薇!!」

同時に二人の槍はお互いの心臓へと迫る。

そして、

ズドンッ！

二人は同時に動きを止め立ち尽くす。

先程までの槍同士の衝突し合いかち合う音が響きあう苛烈な激闘が嘘のようにあたり一帯が静かになる。

しばらく二人はそのまま動こうとしない。

しかし、

「俺の、負けだ…」

「俺の、勝ちだぜ…!!」

デイルムツドのゲイ・ジャルグはランサーの胸には命中せず脇の間をギリギリ通り過ぎ、逆にランサーのゲイ・ボルグはその真価を大いに発揮しデイルムツドの心臓を見事貫いて体の内部をゲイ・ボルグを中心に棘が幾重にも突き出し破壊していた。



S i d e ミゼ・フローリアン

「ぐはっ……！」

「デイルムツド様……！」

デイルムツド様が敵のランサーの手によって心臓を貫かれて吐血をする。

私は思わずデイルムツド様に駆け寄ろうとするが、でもデイルムツド様は負けたというのに爽やかな笑みを最後まで浮かべていた。

「……マスターよ。俺は……ここまでだ……しかし悔いはない。最後の最後で心に残る死闘ができたのだから……」

デイルムツド様はもう今までの言葉のノイズもなく普通に私に話しかけてくる。

でも、でも！ 私はあなたと一緒に暮らしていきたいというのに……！

消えないでください、デイルムツド様！

私がそう願いを込めるがそれでデイルムツド様はしばし迷いの表情をした後、目を瞑って瞑想する。

そして再び目を開くと優しい笑みを浮かべて、

「…マスターよ。あなたとの願いは全うできそうにありません。ですから俺はあなたに最期の言葉を残します。聞いてくださいますか…？」

デイルムツド様が私にかける最後の言葉…？ 一体、なに？
でもそれで私は一度頷く。

それでデイルムツド様は笑みを浮かべて喋りだす。

「マスター、あなたはまだまだもな道に引き返し戻れる事ができる…。なに、才能がないからと悲観することはありません。」

あなたはまだ生きています。生きているうちは何度でも這い上がることはできます…。

だから決して諦めてはなりません。諦めたらそこであなたの道は終わってしまします。

ですから心を強く…。心の芯が強くある人であってください。

そして、この先をまつすぐに生きていつてほしい…これが俺があなたに贈る最後の言

葉です」

「デイルムツド様…はい、わかりました。ミゼはもう諦めません。また頑張ります…」

「よかった…。ではもうお別れですね、さらばです…」

「はい…！ デイルムツド様…！ さようなら…！」

私はデイルムツド様と最後のお別れの言葉を言う。

もつと話したいことがあった。でも、これ以上彼を迷わせてはいけないと思ったから。だからもういいんだ。

涙が流れて心が痛むけど、でもこれを糧にまた再出発しよう。

そしてデイルムツド様は粒子になっていく体を無理して敵だった子達の方へと向ける。

「そしてクー・フリーン殿…あなたとの全力での心躍るような死闘、実に楽しかった…」

「俺もだぜ…！ これでこそ俺の本望ともいうべき戦いだった。感謝するぜ！」

「そして、アーサー王…あの時はお前にも怨嗟の言葉を浴びせてしまったが、あれは今考えればお前のせいではない。…あれは、仕方のなかったことなんだ…。だからお前を許そう…」

「…感謝します、デイルムツド・オディナ。そして、見事な戦いでした。まさに騎士の誉れです」

「ふっ…その言葉だけで俺はもう満足だ。心残りはない…」

なにか私には分からないやりとりをしていたけどきつと大事な事なのだろう。

いつか聞く機会はある。だから私は最後まで聞き届けよう。

そしてサラサラとデイルムツド様の体はもう下半身は完全に消え失せて残りは胸上だけの状態にまでなつて最後とばかりに大声を張り上げて、

「今回は実に楽しい戦だった！ マスターへの忠義も貫けた！ 悔いはない！ さらにさらばだ!!」

最後まで爽やかな笑みを浮かべたデイルムツド様はそして完全に消滅してしまった。

それを私は目をそらさず最後まで見届けて…もう我慢の限界だったのだろう私は涙を流しながら地面に両膝をついた…。

そんな私に金髪の少女が近寄ってきて、

「ミゼ・フロリアンさん…事情聴取のためにあなたを逮捕させてもらつて、よろしいですか…?」

「…ええ。構わないわ。私も、また一からやり直すわ…」

デイルムツド様の遺言とも言える言葉。

これを胸に大事にしまつておこう。

そしてやり直すのだ。私の人生を。そして新たに始めよう。

バインドで拘束されて連行されながらもそう心で誓った。

きつと今の私は憑き物が落ちたような表情になってすつきりとしているだろう。

デイルムツド様…私はまた頑張ります。見ていてください、私の初恋の人…。



Side シホ・E・S・高町

ミゼを管理局に預けて月村邸へと帰ってきた私達は広間で色々と雑談をしていた。

「ランサーよ！ そなたの至高の戦い、しかと見させてもらった！ 余は楽しかったぞ

！」

「はははッ！ よせよ！」

ネロとランサーはなにやら話に花咲くことがあったのか色々語り合っている。

まあ私もあの戦いの感想はすごいを通り越していたからね。

それをサーチャーの中継越しで見っていた居残り組はというと、

「すごいな…」

「ああ…最高の戦いと言ってもいいな」

「うむ。まさに死闘と呼ぶべきものだ」

「私だったらそっこうで死んじやいますね」

ヴォルケンズはひたすらランサーの戦いを感心しながら見ている。

「リインフォース、やつぱり英霊ってすごいんね」

「そうですね、主。キヤスターもかなりの強さを持っているのでしようね」

はやてとリインフォースも評価しているようである。

キヤスターは確かに強いのだろうね。

「確かに強かったねー」

「そうだな。アルクエイド」

フアニーヴァンプと殺人貴も敵の実力を感じ取って話し合っている。

「…アーチャーはよくあんなランサーの戦いを引き分けて防げたものだな」

「マスターからの魔力供給が少なかったからではないですか…?」

なにやら士郎とキヤスターは昔を思い出しながら話している。

「農もランサーのクラスで呼ばれておれば槍を使えたものよの」

「そうなの、アサシン…?」

アリスとアサシンもなにやらしもの話をしている。

「ライダーは同じクラスのサーヴァントがないから競う敵がないね」

「私はスズカが守ればそれだけで構いません」

「すずか達もどうやら残りのサーヴァントにライダーがないのは特に気にしていないらしい。」

「こうして一同は話をしながらも夜はふけていくのだった。」

第七十三話

『二つの因縁の終わり』

逮捕した後、ミゼ・フロリアンはすべてのことを隠さずに白状した。

「私は言峰綺礼という神父の言葉にのせられて聖杯大戦に参加したのよ。

でも、後悔はしていないわ。私ははじめて好きになれる人ができたのだから……」

そう取り調べの人に話す姿はとてすつきりとしていたそうだ。

そして敵のアジトはどこかを聞き出すとミゼットは、

「ええ。いいわ。私は敗者……。だから聞かれる内容はすべて白状するわ」

それによつて語られる敵のアジト。

協力者の数。マスターの居所。

しかしやはり言峰綺礼とギルガメッシュ本人達の居場所だけは分からないらしく語られることはなかったという。

そして語り終えた最後に、

「もし、またここから出られるのなら魔導師と魔術師の両方をまた一から学んで頑張つ

ていきたいわ。

「私みたいな落ちこぼれでも目指せば登っていけるんだっていう事を証明してみせるわ」

と、良い笑みでそう語ったという。

これならもう心配ないだろうと取り調べの人達は思ったという。



『と、いうのが今回の顛末よ』

「そう…」

レティとリンディが通信越しでそう語り合っていた。

『彼女に関してはサーヴァントともに言峰綺礼という人物に協力していただけ。』

そしてこれといったためばしい次元犯罪は犯していないから情状酌量の余地もあるという事ですぐに釈放できるでしょうね』

「よかつたわ。彼女には魔術師の一人としてこれからも協力してもらいたいから」

『そうね。でも、これから魔術師による事件が増えていくと思うから管理局も余計取り締まりが強まるでしょうね…』

「そうね。もしかしたらシホさん級の魔術の使い手が生まれるかもしれないという予想は最低限しておいた方がいいでしょうね」

『恐ろしい世界になるわね…』

「そうね。だから前から考えていた『魔術事件対策課』というのも設立できたらいいと思っっているのよ。

魔術に対抗するには魔導師でも大丈夫でしょうけど同じ魔術で対抗したほうがよりいいでしょうから。

でも、まずはこの聖杯大戦を乗り切らなくちゃいけないわね？ でないと世界が滅びちゃったらそんなものも立ち上げることできないから」

『そうね。それに今回の事件の戦闘映像をつい先日の映像も全部見させてもらったけどとてもではないけど私達魔導師では対抗はできないでしょうから。特にサーヴァントというものには…』

「ええ。くやしいけど真実ね」

『私も上に掛け合ってみるわ。管理局もバカじゃないんだからすぐに対応してくれるはずよ』

「そうね…。それじゃ報告ありがとうね、レティ。こつちでも頑張ってみるわ」

『ええ。頑張ってるわ。予言通りに事件が解決することを祈っているわ』

「わかったわ」

それでリンディはレティと通信を終了する。

そしてリンディはみんなのところへと戻り、

「皆さん、ミゼさんがすべてを白状してくれました。」

よつてアジトの場所や残りのマスターの情報をも掴むことができました」

『！』

それによつて全員が顔の表情を引き締める。

「最後のマスターは管理局の官僚だった人物。」

名前を『トーラス・スタリオン』。地上本部の二佐の陸官相当の人物だったそうです。

現在は管理局をとある事件で辞めさせられて行方が掴めないそうです」

「その事件というのは……？」

「裏金や密輸を色々なところに流していたそうでそれが発覚して退職させられたそうです」

「裏金に密輸か……」

「そんな男に魔術回路が宿るなんて……」

「そして今はキャスターのマスターだそうです」

「やっぱり……」

それではやてが声を出す。

「捕まえなければいけませんね…。そんな奴は野放しにしていたらなにをやりだすかわかりませんから」

「はい。それで今現在ひとつのアジトに管理局の魔導師が周りを警戒しながら監視しているようです。

ですが多分人質のファイアットさんを連れてそこからとうに脱出していると思います。

だからいるとしたら…」

「ノアの可能性は低いと思います。彼は言峰綺礼に付き従っていると思いますから。だからいるとしたら…」

「アクア・アトランティックという事になるな」

士郎が声を出してその女性の名を出した。

それにほかのみんなも同意のようで、

「でしたらランスロットは、私に任せてください」

アルトリアが声を上げる。

「彼の心は私自身が救わなければいけない。かつての盟友の魂は私自身で決着をつけま
す」

「アルトリア、あなただけに責務を負わせないわ。一緒にバーサーカーを倒しましょう

「？」

「余も手伝うぞ。アルトリアよ」

「ありがとうございます。シホ、ネロ」

「だったら今回は私とキャスターも向かうとしよう。キャスターならば接近戦の心得もある。役立つだろう」

「はい！ 不肖この駄狐、めいいっぱいご主人様マスタの手助けをしたいと思います！」

「それじゃ、ライダー…私達もいこう？」

「士郎が名乗りをあげ、そしてすずかも声をあげた。

「ですが、スズカ。魔術が使えるとはいえ危険な仕事には変わりありませんよ？」

「うん。わかっている。でも私もシホちゃんの役に立ちたいの！」

「すずかは力強くそう言う。

「それにライダーは頷き、

「わかりました。しかしあなたのことは私がしっかりと守ります」

「うん！」

「それですずかとライダーも行くことになった。

「…シホ。昨日の戦闘の事があったけど私も行くよ…」

「フェイト…」

「ランサーはまだ傷が回復しきっていないけど、けどアリシアを救う手助けをしたいんだ！」

そこにまだ全快していないランサーが姿を現し、

「マスターの想い、かなり感じるぜ。シホの嬢ちゃん、安心しな。俺は戦わないがマスターだけは守るからよ」

「わかったわ…それじゃこのメンバーでいきましょう！」

それで行くメンバーが決まった。

今回はシホに士郎にフェイトにすずかの四人にサーヴァント達。

「すずか。危ないと思ったたらすぐに帰ってくるのよ？」

「うん！ お姉ちゃん、少し行ってくるね！」

それで四人とサーヴァント達は転送ポートを通り、かの世界へと向かっていった。



そして到着してみるとどうも魔導師達がシホ達が現れたことに関して色々な視線を浴びせてくる。

なかには士郎以外のシホ達を見て「あんな子供が…？」という声が多数聞こえてくる。

それは当然の反応であり、しかしシホ達は気にせず、魔導師達に話しかけた。

「サーヴァント対策で来たものです。状況を教えてもらっていいですか？」

「あ、ああ。今のところは膠着状態を保っている。中にサーチャーを送ってみたが、それは一人の女性……アクア・アトランティックともう一人、そうだね。」

そこに居る君に似ている少女が一緒にいるみたいだ」

「きつとアリシアだ……！」

フエイトはすぐにも向かいたい気持ちを行行らせ、でもすぐに心を落ち着かせ、

「シホ……いこう！」

「ええ。士郎とすずかもいいわね？」

「ああ」

「うん……」

そしてサーヴァント達を実体化させる。

すると魔導師達は驚きの声を上げている。

やはりサーヴァントを見るのは珍しいらしく色々な表情を伺える。

「ネロ、任したわね？」

「うむ。まかせておけ奏者よ！」

「アルトリアもいつでもできるように……」

「そうですね、シホ」

『ユニゾン・イン！』

シホとアルトリアはユニゾンして聖剣を構えた。

「いきましようー！」

シホ達はアジトの中へと入っていった。

中にいるのは死霊魔術師ネクロマンサーのアクア・アトランテイク。

そして操られているアリシア。

最後にバーサーカー…ランスロット。

アルトリアとランスロット。

フェイトとアリシア。

今、二つの因縁の幕が開かれる。

全員は中へと進んでいき、そして…

「来たようですね…。ようこそマスターとサーヴァントの皆さん」

アクアは礼儀正しくスカートを摘み挨拶をする。

なるほど…お嬢様というのは本当らしい。

その顔に笑みを浮かべて、

「ですが私の願いのためにあなた達を倒させていただきます…バーサーカー」

バーサーカーはうめき声を上げるがすぐに立ち上がってきて鎖が巻きついて腕を強引に引つ張り逆にライダーを壁へと叩きつけた。

「ぐっ…… やりますね……！」

「■■■■■■ー！！」

バーサーカーはライダーにそのまま走り顔をつかみ強引に壁に叩きつける。

それも何度も……！

ライダーは口から吐血する。

「ライダー！！」

ネロが剣を振るいそれでバーサーカーはライダーを離れたがライダーは少しばかり消耗した。

すぐにシホが近寄り治癒魔術をかけ回復させている。

「今度は逃しません！ 氷天よ！」

違う呪符を構え今度はバーサーカーを氷漬けにする。

そこには一体の水漬けの像が出来上がるが、すぐにヒビが入ってきて中からバーサーカーは復活し今度の標的をキャスターに絞ろうと走る。

しかしそこにシホが前に出てエクスカリバーを構えてバーサーカーの足を止める。

「四人がかりでこうも圧倒されるなんて……！」

ライダーが場所が広がったことを好機と感じ、目の前に幾何学の魔法陣を形成する。そしてライダーは光となりその光は晴れると空にライダーはペガサスに跨っていた。「バーサーカー！ 勝負を決めます！」

そしてまた光となつて何度も旋回しバーサーカーの下へと突つ込んでいき、
「ペルレ騎英の………フォーレン手綱!!！」

「■■■■■■………!!！」

宝具を解放しバーサーカーへと突貫を決め込む。

しかしバーサーカーは避けるどころかその両手を広げ、なんと受け止めてしまった。
「■■■■■■………!!！」

ライダーの攻撃は確実に通っている。しかし、それでもまだバーサーカーにはいま一歩届かないのかその威力はどんどんと落ちていき、ついに宝具の効果が切れるまで耐え切つてしまった。

「バカなっ!? ぐっ…!!？」

そしてライダーはペガサスごと持ち上げられてまたもや壁へと叩きつけられてしまった。

それによつてペガサスは消えて、衝撃でライダーは気絶してしまった。

「ライダー!!！」

すずかが叫ぶが今のライダーには反応する術がない。

「ランサー！」

「おう！ わかっているぜ！！」

すぐにランサーが駆けてライダーを回収する。

それで息をまだしている事をすずかは確認すると安堵の息を漏らす。

「ライダー…霊体化して体を休めて…」

「…お役にたてず、申し訳ございません…」

「ううん、ライダーが無事なだけでよかった…」

「すみません…」

悔しそうにライダーは霊体化して姿を消した。

「ふふふ…さすがバーサーカーですね。さあ、残りの者も倒してしまいなさい！」

「■■■■■■ー！！」

そして残りのものに目を向けた。

次の標的は今度こそキャスターだった。

「私を傷つけられると思っているんですか!? 呪層・黒天洞!!」

それによってキャスターの前にある鏡からなにかの膜が展開しバーサーカーの剣を

防ぐ。

その隙にキャスターは宝具を開放する。

「出雲に神在り。審美確かに、魂に息吹きを。山河水天に天照す。是、自在にして禊の証。名を玉藻の鎮石。神宝宇迦之鏡也！ なんちやつて☆」

最後はおふぎけが出たがマジメに宝具である鏡が輝き出し、そしてキャスターの魔力が倍增していき、

「受けてくださいい！ 炎天、氷天、密天！ 三呪相、入り乱れ攻撃!!」

「■■■■■■■■■■!!?」

三つの攻撃が入り乱れながらバーサーカーを襲い、その体に様々な傷を与えていく。「とどめです！ いざや散れ、常世咲き裂く怨天の華——ヒガンバナセツシヨウセキ!!」

最後に猛毒が大量に込められた大呪術がバーサーカーへと放たれそれはバーサーカーに直撃した途端、何度も雄叫びを上げ体を仰げ反らせる。

大量の怨念が込められた猛毒の塊をくらったのだ。

さすがのバーサーカーでも耐えられるものではないだろう。

しかし、バーサーカーは生存本能を働かせてその兜を無理やり脱ぎ捨て、毒が渦巻いている空間から離脱することによって清浄の空気を吸い出す。

しかし、それで変わり果てた素顔が晒される事になる。

「うっ……これは！」

さすがのキャスターもそのバーサーカーの形相に恐れを抱く。

そこには狂化で歪み変わり果てた騎士の顔があった。

「■■■■■■ー！！」

バーサーカーは兜を取らざるを得なかったことに対して怒りを持ったのか体が傷ついていることも気にせず、キャスターへと向かって走り出す。

その剣は打ち込まれればキャスターの首は確実に飛ぶ。

そう直感した士郎は令呪を使った。

「下がれ！ キャスター！！」

「ご主人様!？」

それによって令呪が一画消える。

そしてキャスターは霊体化して士郎の後ろに下がることになった。

《ご主人様！ まだ私は……！》

「すまない、キャスター。しかしお前を失うよりはいい……」

《……はい。ありがとうございます。ご主人様……》

これによってキャスターも撤退したことになる。

残りはネロとサーヴァント級の力を持つシホのみだった。

「残りには私とネロだけね……」

「うむ。しかしこの逆境、見事駆け抜けて見せよう！」

「同時に仕掛けるわよ！」

「了解した！」

それによつてシホとネロは左右から同時に切りかかり、バーサーカーは剣を横にするこゝとで二人の剣を防いだ。

ギリギリと音を鳴らせ二人と一人の力の押し合ひは続く。

「さあ！ バーサーカー！ もっとこの子の魔力を吸いなさい！ あなたはもっと強くなるのよ！」

「ううう……ああー!?!」

アクアがそう叫ぶ。

それによつてアリシアから魔力を吸い取りさらにバーサーカーは力を増していく。

それに比例してアリシアが虚ろな瞳だというのに苦しみのうめき声を上げ出す。

「アリシアを開放して！ もう苦しませないで!!」

「私の願いのためにこの子は尽く使わせてもらうわ！ さあ、もっと吸うのよ！」

「黙りなさい!!」

そこでシホが大声を上げる。

「黙って聞いていればあなたは何様のつもり!? 人の魂を操るといふのは冒流行為にも等しいわ! そんな事…!」

シホの魔力がどんどんエクスカリバーへと溜まっていき、

「許す…ものか…!!! 約束された勝利の剣…!!!」

シホの咆哮と同時にエクスカリバーの真名が解放されバーサーカーは切り裂かれていく。

そうしてバーサーカーは体を両断され地面へと転がる。

「はあ、はあ…ユニゾン・アウト…」

シホはアルトリアと融合を解除する。

そしてアルトリアはバーサーカーへと…。シホはアクアへと歩いていく。

アルトリアはバーサーカー…いや、もう消える前だということは狂化の呪縛から解放され通常の言葉を喋れる。

よって、

「…アーサー王…」

「ランスロット…」

「私を、裁いてください…」

「なにを…?」

「私はギネヴィアの手を取り脱走してあなたと戦う事になってしまい、それはどんどんと大きくなり戦が始まり破滅を招いた…」

「……………」

アルトリアはただ無言でランスロットの言葉に耳を傾ける。

「…あなたがモードレッドと相打ちになったと聞いた時、私は絶望した…」

どうして私はこんな愚かな戦いを引き起こす引き金を引いてしまったのかと…

…ギネヴィアとも最後は悲恋の定めを迎えてしまった。

そして死して残ったのは後悔のみ…。それで狂う獣になればと招かれて前回の戦いに身を投じた時、あなたと会い、王はまだ責務に苦しめられていると分かった」

「ランスロット…それは…」

「ええ…。わかっています。あなたはもう解放されているのでしよう。

だからこそそんな王に私は裁かれたい…」

ランスロットは泣きそうな顔になりアルトリアにそう告げた。

しかしアルトリアから出てきた言葉は謝罪の言葉だった。

「すみません、ランスロット…」

ギネヴィアの件に関してですがむしろ私はあなた達を応援していたのですよ？

どのみち私にはギネヴィアを本当の意味で幸せにすることはできなかった…。

王としてあなたを追いしましたがそれでも私は、あなた達の事を心では祝福していたのです」

「王……」

「そして、あなたを許しましょう……」

もうあなたは解き放たれてもいいのですよ？ 過去に縛られることなくまた先へと

進んでいってください」

「ですが……」

「私があなたを許すのです。だから……」

アルトリアはもう消えかかって首しか残っていないランスロットの顔を持ち、その胸に抱き、

「あなたは私にとって最高の無双の騎士でした。だからもう心安らかに眠りなさい。そしてもう狂うことなく座に戻っても立派な騎士でいてください」

「王よ……感謝します。まだ、私を無双の騎士とお呼びしてください……また、いつか会いましょう。私の最高の王よ……！」

そしてランスロットは消滅した。

アルトリアはその目から一滴の雫を垂らした。



S i d e シホ・E・S・高町

アルトリアとランスロットの方は決着ついたようね。

アルトリアも満足そうに笑みを浮かべている。

さて、それじゃ最後のけじめをつけましょうか。

「アクア・アトランティック…これであなたはサーヴァントを失ったわ。その子を…アリシアを開放しなさい」

「まだよ！ まだ終わっていないわ!!」

アクアはアリシアを抱きしめるとその首を絞め出す。

それによってアリシアは苦しそうな顔になる。

「やめなさい。そんな事しても罪を重ねるだけよ」

「うるさいわね！ あなたに私の気持ちかわかるものですか!!」

「ええ。わからないわ。でも、あなたがしている事は魂を苦しめているということだけは分かるのよ。」

あなたが何を願って聖杯大戦に参加したのかは知らない。

でも、魂を弄んでいいというわけではない……いいわけがない！」

「私は、ただお友達と会いたいただけなのよ!!」

「それがあなたの願ひ……?」

「そうよ! それの何が悪いって言うのよ!」

「そのお友達はあなたがそんな事をして喜ぶと思っっているの……?」

「ツ!!」

そしてアクアはアリシアの体を抱きしめている力を緩めて離す。

それからヨロヨロと後退りをする。

「あ、ああ……嫌だ。会いたい……! お友達に会いたい! でも、こんな事をしていた私は

許されるの!?! あの子は許してくれるの!?!」

どうやら錯乱したらしい。

「……………そうか。あの子は死人だった。なら私も死人になれば……」

アクアはいきなりナイフを取り出した。

これはいけない!

「待ちなさい!!」

私の静止の声もむなしくアクアは自分の喉にナイフを深く刺してしまった。

「なんて……」

「ふ、ふふ…これでお友達のところにいける…待っていてね？　すぐに、会いに行くから…」

そしてアクアは目を開けたまま息を引き取った。

「くっ…。止められなかった…」

私の心に後悔の念が襲う。

だがそこにフェイトの「アリシア！」という叫ぶ声が聞こえてくる。

見ればアリシアは体が少しずつ崩れてきていた。

おそらく魔力を限界以上に大量に吸われて体も耐え切れなかったのだろう。

「…あなたは、フェイトだね…？」

「私が、わかるの…？」

「…うん。魂になって見ていたんだと思う…。ずっと、見ていたかった…でも、もうダメ

みたい…。フェイト、強く、生きて…」

「あなたはまだ終わらない！　終わらせない!!」

私の言葉にアリシアは目をこちらに向ける。

「あなたは…？」

「あなたを救うものよ…。待っていて。今、助けるから…大師父!」

「うむ」

私の叫びに大師父が現れてその手にはフェイトと同じ姿の人形が持たれていた。そして私は前からデバイスに登録しておいたある衣装を展開する。

《ヘブンスフィールフォーム、展開します》

アンリミテッド・エアの声と共に私の格好は天のドレス姿になる。

「魂の物質化！ 執行!!」

それによって私はアリシアの魂を物質化してそれを用意してあった体に宿す。

そしてどうやらもう少し遅かったらアリシアの魂も根源に帰っていた…。

体は崩れていたようだったらしく魂を移し終わった後、アリシアの元の体は崩れて灰と化してしまった。

でも、もう魂は新たな体に宿り、しばらくしてアリシアは目を開けた。

「…フェイト？」

「…うん！…うん！ 私だよ、アリシア…！ アリシアは、生きているんだよ！」

「フェイト…！」

フェイトとアリシアの抱きつく姿を見て、私はよかったと素直に思った。

でも、やっぱりアクアの事は救う事ができなかったのは痛かったわ。

「シホ…。彼女の事は残念じゃったが、今はアリシア嬢を救えた事を素直に喜ぶことじゃな」

「はい。大師父……」

それで私達はアリシアも連れて月村邸に帰るのだった。こうして二つの因縁は終わりを告げたのだった。

第七十四話

『聖王と霸王の戦場』

アリシアは月村邸でみんなに向かつて、

「私の名前はアリシア・テスタロツサです！ よろしくお願いします！」

フェイトと同じ姿形だがフェイトとはまた違う人懐っこい笑みを浮かべて元気に自己紹介をした。

それではみんなは拍手を贈り、

「それにしても本当にフェイトそっくりねえ……。本当にこの体って人形なの？」

「ええ。私の体も成長する人形の体だって事は知っていますでしょう？」

「そうだったわね……。でも魔術でこんなものを作っちゃうなんてその蒼崎橙子さんって人、すごい魔術師なのね」

アリサが感心しながらシホにその事を聞く。

「ええ。だからこそ私と同じく封印指定をかけられたわけだけどね」

「さて、アリシア嬢よ。体の具合はどうじゃ？」

「…うん。違和感ないです。むしろ死ぬ前より性能が上がっているかもしれない」

「そうじゃろう…。蒼崎によれば今回のお題は三体の人形ともサーヴァントが宿って全力で動いてもガタがこないをコンセプトに作ったと言うからな」

ゼルレツチが自分の事のように自慢げにそう話す。

それに一同は「おー！」という声を上げる。

「それじゃゼル爺！ もう私と志貴の体も出来上がっているの？」

「うむ。しばし待て」

ゼルレツチは一度その場から消え、次に現れた時には二体の人形を持ってやって来た。

それはまさしくファニーヴァンプに殺人貴と瓜二つの人形だった。

「まさか、俺の人形も作っているとはな…」

「私が頼んだのよ？ 感謝しなさいよ、志貴」

「ああ…」

「さて、では二人共。人形に宿ってみよ。霊体化して人形と重なるイメージを持ってバリンクできるだろう」

そして二人は人形に宿った。

しばらくして二人は目を開けて立ち上がり、

「わあー…。体が以前のようには動かせないよ。魔力も自身で作り出せるようではやてから供給を断たれても大丈夫になったわね」

「うむ。その通りじゃ。ちなみにこの体の見本となったのは農達の世界のアルクエイドじゃからな」

「へー…よく私が協力してくれる気になったわね」

「そこはまあ、農が頼んだことじゃ」

「そうなんだー？」

フアニーヴァンプはゼルレッチを褒めるように笑みを浮かべていた。

「して、遠野志貴、お主の方はどうじゃ？」

「そうだな。サーヴァントの力をそのまま発揮できるのはすごいことではある」

「それとやはりお主には包帯より眼鏡の方が似合っておる。だからこれをやろう。生前のやつより強力に作ったというから包帯より効果は上だろう」

ゼルレッチは懐から眼鏡を取り出して殺人貴にやった。

「あ、ありがとうございます…」

「よい。それとおまけでライダー。お主にも魔眼殺しをやろう」

「ありがとうございます。宝石翁」

ライダーにも魔眼殺しをやっていた。

それを随分気前がいいなとシホは思ったらしく、

「大師父：なぜか随分気前がいいですね…?」

「そうかの? まあ、しいていうならシホに感化されたということじゃろう」

「そ、そうですか…」

「お主達にはこれからも残りの聖杯大戦の敵と戦ってもらうことになる。

だからこれくらいはサービスのうちにも入らんよ」

ゼルレッチはおおらかに笑い、隣にいたアリシアの頭を撫でていた。

アリシアもくすぐったそうに「にゃく…」と鳴いている。

「でも、私はやっぱりリンカーコアはないみたいなの」

「そうなの? アリシア?」

「うん。その代わりと言ってはなんだけど魔術回路があるみたいなの」

それでアリシアは魔術回路を開くとその手に雷を宿らせた。

「やっぱりフェイトと同じで私の魔術の属性は雷に近いものみたいなの」

「そうなんだ…」

「あ、そうです。アリシアさん」

そこでリンデイがアリシアに話を振る。

「なんですか…? えっと、リンデイさん…」

「あのね。今フェイトさんをうちの子にしようという話があるのよ」

「り、リンディ提督…」

フェイトはその話になると顔を赤らめてどうにかしようと思うがリンディは話を進めていき、

「それでなんだけど、アリシアさんももしよかったら私の家族にならないかしら？」

「家族、ですか…。…そっか、薄々だけど覚えているけどお母様は死んじゃったんだよね…」

アリシアはそれで少し泣きそうになったがフェイトが手を握るとアリシアは途端に表情を緩めて、

「私はフェイトのお姉ちゃんなんだから泣き言を言っちゃいけないよね！ それじゃリンディさん。もう少しフェイトと話し合って決めてみます！」

「そうですか。いい返事を待っていますね」

「うん！」

アリシアもフェイトもそれでリンディとは近々養子になるのかを決めることになる。

でも今はまだ聖杯大戦中…。

その話はまだ先に持ち越されることになった。



S i d e シホ・E・S・高町

それからアリシアはウチで預かるということでもリンディさんの家にクロノによつて連れられていった。

話によると勉強次第では新学期からはやてとともに聖祥大付属小学校に入学予定かもしれないと言っていた。

ま、それなら楽しくなるわね。

「それですが、シホ。やはり『魂の物質化』はもうこれ以降乱用は控えた方がいいと思うのです」

アルトリアからその話を振られる。

確かにこの力を求めて人がやってきたら堪らないから控えようとは思っている。

「そうやね。きつと今回アリシアちゃんに使っている光景は管理局の人達の目にも晒されたと思うからきつとシホちゃんは今後大変やろうな」

「はやての言う通りだね。アリシアを助けてくれたのは嬉しいけどそれでシホが危ない目にあうのは私は耐えられない……」

はやてとフェイトがそう言うってくる。

むう、確かに管理局の目にも映ってしまったのだろうか。

そう考えると私ってかなりピンチ…？

「これはシホの全スキルはレアスキルとして登録してもらった方がいいだろう」

「そうね、士郎。落ち着いたら信用できる人に掛け合ってみましょうか」

「ああ、そうだな。だが今はとりあえずその話は置いておくとして…さて、それでは気を引き締めて聖杯大戦についてまた話し合おうか」

士郎がそう切り出す。

それでみんなは真剣な表情になる。

「今現在脱落したマスターは三人。そしてアサシンを除いてランサーとバーサーカーを倒したことになる。」

だから次はキャスターを攻めようと思うの」

「そしてマスターのトールラス・スタリオンさんもだね？」

「ええ、なのは。いま現状でもっとも攻めやすいのがトールラスその人。」

そしてあわよくばフィアを救出してクラウス：ファイターも仲間に取り入れたいのが本心ね」

「そうですね、シホ。クラウスが仲間になってくれれば心強いでしょう」

「そのためにはキャスターのところに攻め込まないといけない」

「キャスターとなると籠城攻めか……。しかし、それ以前に居場所がな」

それで全員が悩みの顔をしだす。

そう、いまだに居場所を掴めていないのだ。

これでは攻めようがない。

前回の戦いで場所を知つていそうなアクア・アトランティックは自殺してしまつたし、今のところ手がかりはない。

今こうしている合間にフィアがなにかをされているかもしれないと考えると早く助けないと、という気持ちにさせられる。

「近場の限定した場所で聖杯大戦が開かれていればよかつたものを、今は次元世界を跨いで戦っているからなかなか尻尾がつかめないのが痛いわね……」

「大聖杯は英雄王がその手に握っていますからね。破壊するのも一苦勞でしょう」
アルトリアの意見には納得ね。

もしギルガメッシュを倒しても肝心の大聖杯を壊さなきゃまたいずれこういう戦いは起きてしまう可能性は無きにしも非ずだから。

「まずはこの海鳴の町をまた回つてみるのはどうだろう……？」

「言峰綺礼とノアはもう寄らないと思うけどね……」

「困ったね…」

みんなでなかなか出ない案を出し合っているところ、リンデイさんが通信を開いて誰かと話をしている。

「リンデイさん。どうしましたか?」

「いえ、今ククロノと話しているんですけどアリシアさんがなにかを知っているそうです」

『えっ!?!』

それで私達は驚きの声を上げる。

それならそれで帰る前に話してくればよかったものなんだけど…。

そしてアリシアが画面に映りだすと、

『えつと…さつきはなにも話さないでごめんなさい。』

ついさつき思い出した事なただけで一人、マスターの行方がわかるの。

少し聞き取れなかったんだけどアクアさんとトールラスさんが別れ際に話していたんだ…』

アリシアの聞いた話をすぐにエイミイさんが解析にまわして場所をスキャンしてもらう。

『あつたよ。この世界もまた無人の世界で潜むには絶好の場所みたい』

その世界が判明し、私達はまたいくメンバーを選出することになった。

そして行くメンバーは私となのはとはやて、ユーノ。そしてヴォルケンリッターにサーヴァント達。

ファイア、必ず助けるわよ。



S i d e トーラス・スタリオン

くっ…！ くそくそくそツ！！

この役立たずどもが！！

あちらの手を削ることもできずにすんなりとやられおつて！

おまけに私がマスターである事がばれただど！?

このままではまずい…！！

これですでにこちらの手札は三体も削られてしまった。

唯一の頼みの綱の言峰綺礼も今は通信に出ない。

これでは私は見捨てられたようなものではないか…！！

だが今はまだ私には人質がいる。

そうしてフィアットという少女を見るが、そのサーヴァントが睨んでくる。

「マスターに手を出してみる。僕はお前を真つ先に殺すだろう。霸王の名にかけて……！」

「くくく…、忘れるな？ お前のマスターは今や私の支配下にあるということを」

「…ああ、わかつているとも。仕事はしつかりとこなすさ」

「それでいいんだよ……」

くくく…。サーヴァントというのはつくづくおかしいものだ。

マスターがいなくては現界もできないとは通常の使い魔より燃費が悪いのだからな。

だがその力は確かなことだけはあつた。

私ではあの戦闘の中に入っていった途端、すぐに殺されるのは目に見えている。

なら裏から操っていくしかないではないか。

そして聖杯に願ひ無能な最高評議会や管理局を滅ぼして一から私がまた新しい組織を創造し立ち上げてやるさ。

「ははは……！」

「ご機嫌だな、トールラス？」

「キヤスターか……。ああ、そうだ。お前も望みを叶えたいならせいぜい私に嘸み付かない」とどな

「ふんっ…分かっておるわ。うるさい塵芥め」

キャスターはその場から転移してどこかへと消えていった。

ふっ…令呪がある限りお前の命も私の手の中だということを忘れるなよ？ キャスター。

そこにすぐに出ていったキャスターからまた連絡が入り、

『どうやらここを特定されたらしいぞ？ さあ、どうするトールラス？ 出るのか？』

「ふっ…愚問だな。返り討ちにしてやれ」

『いいだろう…。まずはやつらを絶望に叩き落としてやるとしよう！』

キャスターはそう言って通信を切る。

「と、いうわけだ。お前にも働いてもらうぞ？」

「わかってるさ…」

「私の期待を裏切るなよ？ その時にはお前のマスターはどうなることか…」

私は杖を構えながら挑発する。

サーヴァントは怒りの表情だがそれでも己を律しているようだ。

無言で部屋を出ていった。

さて、では私はここで私のサーヴァントが勝利する様でも見ておくのでしょうか。



S i d e シホ・E・S・高町

転送ポートでトーラス・スタリオンとファイアがいるであろう世界へと飛んできた私達はまたアジトの前で警備網を張って待機している管理局の魔導師の人達に話を聞く。

中にはなにかの結界でサーチャーが飛ばせなかったという。

ということはやっぱりキャスターの陣地作成中はまだキャスターの根城と化しているという事だろうか。

「わかりました。それじゃみんないきましようか」

「うん！」

「わかった！」

「了解や！」

「特にユーノはこの中で一番攻撃力が低いからシャマルさんと援護に徹して！」

「わかった……！」

「わかりました」

それで私達は何が起こるか分からないアジトの中に侵入していった。

中に入った途端、外側の古ぼけたものではなくなり、あちこちに魔法文字が刻まれている不思議な空間と変わっていた。

「キャスターの陣地作成の結界内に侵入したようだな。気を付けよ、奏者よ」

「うん…」

「それにしてもなんだろう…?」

「どうしたんや、ファニーヴァンプ?」

「うん…なんか魔力が少しずつ吸われているような感じがするのよねー。私はそんなに気にならないけど…」

ファニーヴァンプがそんな事を言い出す。

という事はこの空間の中では常に魔力が吸収されているということになる。

「ファニーヴァンプのいう通りかもしれないわね。みんな、あまり魔力の消費はしないように気をつけて」

それにみんなが返事を返してくると同時に、

「なのは。…下がってください。サーヴァントの気配がします」

オリヴィエ陛下が感じ取ったのかなのはを後ろに下がらせる。

そしてそれは当たったようで目の前にはキャスターとファイター…クラウドが姿を現す。

「クラウス…」

「オリヴィエ…マスターを助けるためだ。だから今度こそ本気で行くぞ」
「わかりました…では。なのは、魔力供給をよろしくお願いします」

「はい！」

オリヴィエ陛下とクラウスが戦闘態勢に入る。

そしてファニーヴァンプがキャスターの方へと向かい、

「キャスター！ あなたを倒すわよ！」

「ふっ…やってみるがいい。まずは小手調べだ。出てよ、守護騎士達！」

キャスターの言葉により魔法陣が浮かび上がりまたしてもシグナム達が姿を現す。

「あれが意識の奪われた我らの姿か…」

「見ていて嫌になってくるからさっさと退治してやるぜ！」

「意志の宿った拳をぶつけてやろう！」

「シヤマルに関しては私がやろう」

「リインフォース、お願いします。私はみなさんの回復に専念します！」

シグナム、ヴィータ、ザフィーラは自分自身を担当することになり、リインフォースはシヤマルを倒すことになった。

そしてファニーヴァンプがキャスターへと向かっていくようだ。

「奏者よ。我らは手が空いてしまったな…」

「そうですね」

「今はみんなが勝利するのを見ていきましょう。いざつていう時には介入できるように力を蓄えておいたほうがいいから」

「うむ、それなら任せておけ！」

「了解しました」

そしてそれぞれの戦いが始まった。



S i d e 高町なのは

オリヴィエさんがクラウドスさんに向かっていきました。

その体から魔力をあふれさせてクラウドスさんへと突撃していきます。

そして最初の一手。

拳同士がぶつかり合いそれからというものの幾度も拳の応酬を繰り返します。

よくボクシングの中継とかでやっていますが殴り合いは痛そうであまり見ていない

ところがあります。

でも、今は目をそらさない。

そうじゃないとオリヴィエさんが負けそうになった時にマスターとして手助けができませんから。

「はあっ！」

「せいっ！」

また拳がぶつかり二人はいったん離れてまた拳を構えながら、

「クラウス、前回の戦いの時より力を出してきていますね」

「ああ。負けられない理由があるからな」

「その理由がマスターを救うためというのはわかっています。ですが私も手加減は致しません。あなたを打ち破り代わりにあなたのマスターを救って差し上げましょう！」

「それは僕の役目だ、オリヴィエ。だから君を倒す！」

「やれるものでしたらやってみてください！ はぁー…：せいやッ!!」

オリヴィエさんの拳から魔力のこもった光が飛び出しクラウスさんに襲いかかります。

でも、それは、

「霸王裂波!!」

クラウスさんの繰り出した拳気によって打ち消されてしまいました。

「今度こそ僕はあなたを倒してみせる！ あの時決着をつけられなかった聖王と霸王の戦い、今度こそ僕の勝利で終わらせる！」

「クラウス…あなたが願うことはもしや…」

「そう…あなたに勝利すること。あの時の決着をつけることだ！ そのためには…僕も本気を出す！」

「今こそ見せよう！ 生涯戦場を歩き霸王とまで呼ばれるようになった我が心象風景を!!」

クラウスさんがそう言った時、なぜかはわからないけどこの空間がさらに変わっていく気配がして次には世界が塗り替えられていきました。

場所はどこかの戦場風景なんだろうか…？ 空は灰色に覆われあちこちが崩れかかっている荒廃した大地。どこからともなく聞こえてくる雄叫び。

気づけば私とオリヴィエさんとクラウスさん以外は誰もいませんでした。

これには覚えがありません。

シホちゃんの使った固有結界と似ていた。

「これで僕の宝具…固有結界『霸王の聖域』だ」

「霸王の聖域…」

「この中では僕のステータスはアップする。そして……!」

クラウスさんの覇気が私達を襲ってきてオリヴィエさんは一度片膝をつき、

「まさか…対象のパラメーターのダウン、ですか」

「そう…そしてこの空間が発動されている間は誰も宝具の開帳は一切できない。宝具封じの固有結界だ。………さあ、オリヴィエ。正々堂々とまではいかずとも戦おうじゃないか」

「クラウス…そこままでして私に勝ちたいのですか…?」

「ああ。僕は生涯君に勝てなかったことを、守れなかったことを悔やみ、ひたすら修練を重ねて鍛えて鍛えて鍛えぬきとうとう霸王と呼ばれるようになった。

だがそれでも僕の心の渇きは満たされなかった…。ゆえに、僕は君に勝つて今度こそ本当の霸王になる…!」

「そうですか…。もう、引き返せないのですね、クラウス」

「ああ。退路はない。ここが僕とオリヴィエの最後の戦いだ」

「わかりました。ならば私はそのあなたの気持ちに答えましょう。いきます!」

パラメーターがダウンしているというのにオリヴィエさんはクラウスさんに向かって行つてしまいました。

私ができることは、

「オリヴィエさん！ 最初の令呪に命じます！ 今出せる最高の力を発揮してください！」

それによって私の令呪が一画消え失せました。

でも、ここが勝負どころだと思っただから…！

そしてそれによってオリヴィエさんは体に力が戻ってきたようで、

「感謝します、なのは。これでクラウスと同等に戦えます！ いきますよ、クラウス!!」

「応!!」

そこから二人は両手を振り拳をぶつけ合いました。

その拳速はすでにランサーさんの戦いの時と同じくらいのスピードを出しています。

武器がなかった昔の時代からの純粋な決闘方法。

それを私は今垣間見えています。

そして次第に両者とも顔や体にも拳を受けてダメージを負ってきています。

「やりますね、クラウス…。さすが私と武を競い合った友です」

「そちらこそ、オリヴィエ。僕はオリヴィエがゆりかごに消えていった後も鍛えていたというのにそれに追いついてくるとは…」

「これでも聖王の意地がありますから」

「こちらとて霸王の意地がある」

「どっちもどっちですね…」

「ああ…実に楽しい。いつまでもこの戦いを続けていたいと思うほどに…。ですが、僕にはそれ以上にマスターを助けたいという意思がある。だから…」

クラウスさんは拳を構えて足場をがっちり固定しました。

なにかくる…！

私は直感でそう思いました。

「受けてください！ 僕の技を!! 霸王…！」

「ッ!!」

「断空拳!!」

その拳はオリヴィエさんに直撃して大きく吹き飛ばされました。

でも倒れることはなくなるとか地面を削りながら持ちこたえました。

「…いい拳でした、クラウス。あれから精進したのですね」

「やはり、倒しきれないか…」

「はい。私も次で決めます…クラウス、何か言い残すことはありませんか…？」

「そうだな。また君と拳を交えて楽しかった」

「……………」

「そして僕の心残りであるマスターを必ず助けてくれ！」

「その約束、確かに引き受けました。決めます…!」

途端、オリヴィエさんから魔力が溢れ出し七色の光が周囲を満たします。

そしてそれは拳に集まっていき、

「受けてください! 聖王…鉄槌砲!!」

七色に輝く光の砲撃が放たれ、クラウスさんは防ぐこともなくそれに飲み込まれて、そして…。

世界は元の場所に戻ってきました。

クラウスさんは横たわり体が粒子に崩れていきながら、

「…ははっ、負けたというのになんて爽やかな気分なのだろうか。オリヴィエ、楽しかったよ…」

「ええ。私も楽しかったです。…クラウス。また、いつか会いましょう」

「ええ。では僕は退場ですね。…あ、そうです。もし僕の子孫に会うことがあったならよろしく伝えてください…」

「わかりました」

「さらばです…」

そしてクラウスさんはその姿が完全に消えて消滅しました。

すごい戦いでしたけど、やっぱり幼馴染同士で争うのはやっぱり悲しいことなんだろう

うな…と思いましたけど全力で戦った二人に失礼だと思つて私はそのことは話さないことにしました。

それで戦いは終わり、私ははやてちゃんの方はどうなったんだろうと思つて見てみたら、はやてちゃんの姿だけがありませんでした。

それで見んなも緊張の顔をしていてなになが、あつたのだろうかとても不安になりました。

第七十五話

『夜天の奇跡、キャスターの最後』

S i d e 八神はやて

こうしてみんなが戦闘を開始した。

なにやらないのはちゃんの方は境界みたいなものに取り込まれたみたいで姿を消し
とつたけど、きつと大丈夫やろ。

今はじつとみんなの戦いを見守ることに専念しよう。

まずはシグナム。

相手はもちろん自分自身。

同じ剣をぶつけ合いながらも両者ともに引けをとっていない。

「どうした!?! それでもお前はヴォルケンリッターの将なのか! 剣筋が甘いぞ!!」

「————!!」

シグナム（敵）は叫びをあげてシグナムに襲いかかるがやっぱりこは意思のない方が押されとるみたいや。

これならシグナムは安心して見ていることができる。
そしてお次はヴィータ。

ヴィータもシグナムと同じく自分自身と対決している。

「はぁー！ー！！ ぶち抜けえー！ー！！」

「■■ああ■■ー！ー！！」

敵のヴィータ（敵）も叫ぶがグラーフアイゼンが押されに押されてヴィータの勢いとともに打ち抜かれる。

それによってヴィータ（敵）は泣きそうな叫びを上げながら壁に激突する。

なんか、見ていて心が痛む光景や。

それは当然シグナムにも感じることでやっぱり自分自身と争うのは合わせ鏡みたいなものでなんかいい気分じゃないだろう。

やけどヴィータには勝つてと願う。

自分自身に打ち勝つ。これほど格好の良い戦いはないと思うからな。

そして次はザファイラ。

「でやぁー！ー！！」

「……………！！」

これはもう肉弾戦の様相を呈している。

何度も腕、拳、足をぶつけ合いその度に弾かれては再度向かっていく。

まさにインフアイトの戦いや。

でも、ザファイラ（敵）は私のザファイラがシホちゃん達の影響を受けて強くなっていることを知らない。

そう、何度もアルフさんとファイアちゃんと組手をしていてその度に中国武術も取り入れるようになった今ではアルフさんを逆にやりこんでいたりするのだ。

それが意味することは、

「くらえ!!? 守護の拳!!」

「がっ…ッ?!?!」

拳を見舞いそれを当然ガードするがそれがミソや。

腕を抑えて苦しみ出すザファイラ（敵）。

浸透勁を喰らったら誰でもあなる。

直接体の内部に打ち込んでいるんやからな。

それでもザファイラ（敵）は構わず突っ込むという単調な攻撃ばかりや。

ウチのザファイラの成長に比べれば弱いと断言できる…!

そして肝心のリインフォース。

リインフォースはシャマルの代わりにシャマル（敵）と対峙している。

その戦い方がもうすごいの一言で、

「撃ち込む！ 止められるものなら……止めてみる！ ナハトバンカー!!」

バンカーフォームを起動してクラールヴィントで縛り上げようとしているシャマル（敵）に向けて杭を何度も打ち抜く。

それによつてシャマル（敵）は何度も魔法障壁を抜かれて空を舞い、

「穿て！ ブラッドイダガー!!」

そうして何度も赤い刃を射出してシャマル（敵）に魔力ダメージを与えていく。

「受けよ！ ナイトメア!!」

直射砲を放ち、それにシャマル（敵）は何度も巻き込まれて地面に墜落する。

それを見ているシャマルはリインフォースのあまりの容赦のなさに代わりに涙を浮かべているほどだった。

そして肝心のサーヴァント同士はというと、

「このっ！ ちよこまかと、避けるなー!」

「はははっ! どうした、我には当たらぬぞ!」

なんとも凄いことになっていた。

キャスターに爪を振るうファニーヴァンプだがキャスターは何度も避けては距離をとり魔法を縦横無尽に放ってくる。

私も鍛えればあんな高機動で戦闘を行えることができるんやろうか。後で、みんなに手伝ってもらおうかな？

なのはちゃんとの1 on 1バトルの模擬戦だけはトラウマになつとるからあんまりしたくないけどな。

そんな事を思っているとキャスターは突然フアンイーヴァンプとの戦いをやめて急に私に向かつてきた。

「サーヴァントを倒すには、先にマスターを潰すのが常套手段だ！」

「はやてちゃん！」

シャマルが私の前に立ってガードしようとするけどキャスターは邪魔だとばかりにシャマルを横殴りして吹き飛ばし、私の前までやってきて、

「さあ、お前に絶望を与えてやる！」

「やれるものならやってみい！」

私はシユベルトクロイツを構えながら魔法を構築しようと試みる。が、「遅い!! さあ、闇の書の中で眠れ……!」

キャスターは私に向かって闇の書を開けた。

途端、私は何かの力に拘束され体が動かなくなり体が発光し始めた。

な、なにが始まるん……!?

「悪夢に、沈め……！」

それによって私の意識はそこで途絶えてしまう。

みんな、私がマスターやのに、ごめん…。



「はやて!？」

シホが叫ぶ。

はやてが闇の書に吸収されてしまい全員は騒然とする。

そこにクラウドスを倒したのだろうなのはオリヴィエがやってくるがどういう状況かわからないらしくあたふたしている。

そこにエイミーから通信が入ってきて、

『はやてちゃんのバイタルは正常だよ。多分シホちゃんとフェイトちゃんを取り込んだ時と同じように内部空間に閉じ込められただけみたい！ だから……！』

「無駄だ……」

キヤスターが会話に割り込んできた。

それで全員は、特に守護騎士達はキヤスターに殺気の視線を浴びせる。

「あの子鴉は今、私の味わった悪夢を追体験している。

だからもし助け出せてももう心は崩壊しているだろう。

これが我が宝具、取り込んだ対象に永遠の悪夢を見せる『闇の書の悪夢』だ」

「闇の書の悪夢……！」

「くっ……はやてえ！」

「さあ、お前達も取り込んでやろう。我は歓迎するぞ！」

「誰が……！ みんな、今ははやての意思の強さを信じて敵を倒していきましょう！」

『わかった！』

シホの声で全員が今対決している相手を倒そうと躍起になる。

ネロとオリヴィエもキャスターへと向かっていく。

そして、取り込まれたはやての意識は今……。



Side 八神はやて

……………寒い。

…なんや？ 体の全身が一切動かせへんしそれにめっちゃ寒い。
気づいたらすでにこの状態やった。

これはなんや…？

私はそう思っていた時やった。

目の前に次元空間が開かれて私は次元の渦の底に落とされようとしとる。

い、嫌や！ あんなどころに落とされたくない！

何度も嫌だ、と叫ぶが無情にも私はその次元の渦の中へと落とされてしまった。

……………

……………

……………

…それから、どれだけ時間が立ったかわからへんくらいの間私は次元の底で動けもせず
に固まっていた。

太陽の光も一切さしてこない無の空間。

こんな空間にいたら心が疲弊してしまう。

というか壊れてしまう。

ヤガミはこんな場所で体も動かさず何千年も過ごしたんか…？

それやったら心が壊れて絶望してしまうのも頷ける。

なんとか抜け出せへんかな…？

そう思い何度も体を動かそうと努力してみるけど一向に動かすことができん。

私は、ここまでなんか…？

このまま、キャスターの見せる悪夢の中で永遠の苦しみを味わうことに…。

《…大丈夫ですよ、はやてちゃん…》

そこに誰かの声が聞こえてきた。

聞いたことのない声や。

一体、誰…？

《…はやてちゃんはとっても強い人です。だからこんな悪夢もすぐに抜け出すことができます…》

《…あなたは、誰なんや？ どうして、私の事を…》

《…はやてちゃんは知らなくても、私はよく知っています…》

《………》

その誰かの声には私は安堵の気持ちになっていくのを感じる。そして、

《…こんな氷、はやてちゃんならすぐに壊せるはずです！》

《…無理や。体が一切動かせへんのよ?》

《…それは意思がまだ弱いからです…。もっと、強く想ってください。

シグナムやヴィータちゃん、ザフィーラやシャマル…そしてアインスに士郎さん、キヤスターさん、アルクエイドさん、志貴さんの事を。

はやてちゃんの大事な家族、大事な友達、大事な思い出、強い意志、強い心…。

それらをはやてちゃんが心から望めば、きつと奇跡は起きます。だから諦めちゃダメです!》

《…私にも、できるかな? そんなすごいことが…》

《…はい! はやてちゃんが望めばなんでもできます!》

《…そか。なら気張らんとアカンな!》

途端、私の周りに光がさしてきて私を覆っていた氷が溶け出してきて体が動かせるようになってきた。

《…その調子です。はやてちゃんの意味は今や無限大です。だからこんな場所、すぐに抜け出しましょう…?》

《…そうやな! ありがとな。…それと、せつかくやからあなたのお名前、教えてくれへん…?》

《…今は、まだ教えることはできません…》

《…そうか。残念や…》

《…でも、いずれまた会えます！ はやてちゃんが望むなら私はいつでもあなたに応えます！ だから…待っています》

《…そか。なら楽しみにしているわ！》

《…はい！ 私の■イ■ターはやて…》

最後のあたりがよく聞こえへんかったけど、近い未来に私はまたこの子と会える予感がして、思いを馳せながらもこの空間から脱出するのだった。



…近い未来のある部屋で、

「…※※※、はやてと話はできたの？」

「…はい。これではやてちゃんはまだ大丈夫だと思います」

「…そう、よかったわ。これでこの世界も私達の世界に似た世界に繋がるわね」

「…わざわざ私達のために手伝っていただきありがとうございます、※※さん」

「いいって事よ。これで…はやての未来も安泰だから…」

「…そうですね。私は…：…ちゃんと会えるでしょうか？」

「きっと会えるわよ。はやてが望む限りね」

「はい！」

「…さて、こっちはこっちでお仕事を頑張りましょうか」

「了解です！」

そうして水色の髪の少女と朱銀髪の女性は部屋を出て行くのだった。



ピシッ！

「…む？ なんだ？」

シホ達と戦っていたキャスターは闇の書から妙な反応がすることに気づく。

そして軋みの音はさらにでかくなっていき、

ピシピシピシッ！

「…ッ！ まさか!?! あの子鴉、私の宝具を…！」

瞬間、

ガシャンッ!!

闇の書からひとつの光が飛び出してきてそれは割れると中からはやてが姿を現した。

「…ふう。やっと出られたわ」

「はやてちゃん！」

「はやて！」

そこには五体満足で心も全然壊れていないはやての姿があり、なのはとシホが駆け寄り、

「はやてが、帰ってきた!!」

ヴィータは盛大に笑みを浮かべ、

「我が主、よくご無事で…」

「はやてちゃん！」

シグナムが温和な表情で話しかけてきてシヤマルがはやてに抱きつく。

「これでもう恐れるものなどない！」

「ああ。打ち抜いてやろう！」

ザフィーラとリインフォースが強い気持ちを取り戻した。

「さあて、はやてが帰ってきたんだからあんたの宝具も底が見えたわね？」

「そうだな。すぐに抜け出せる悪夢なぞ怖くもなんともないわ」

「はい。倒してみせましょう！」

サーヴァント達がキャスターに向かって駆けていこうとする。

「みんな。私のこと信じてくれてありがとな！ さあ、後はキャスターを倒すだけや！」
『はい（おう）！』

はやてが強気の声をあげて全員が頷く。

しかし、いまだに信じられないのかキャスターはうろたえだしている。

「バカな…：私の宝具を破るなんて…：私の苦しみを味わって心が壊れないなんて…！」

「あんな、キャスター？ 私を絶望させたいんやったらまずは私の騎士達を全員倒してから言うんやな！」

それによって全員が武器や拳を構える。

「いくで！ まずはシグナム!!」

「はっ！ 烈火の将、シグナム。参ります！ いくぞ、レヴァンティン！」

《Jawohl. Explosion》

「受けよ！ 我が一撃！ 紫電…：一閃!!」

「ツ…!?!」

「切り裂けえー!!」

ザンツ！

シグナムの一刀によってシグナム（敵）は切り裂かれ粒子と化した。

「お次はヴィータ！」

「ペンダルシユラーク！」

宝石部分で攻撃した後、

「渦巻く嵐!!」

緑色の竜巻が発生してその中に巻き込み、

「とどめです！ リンカーコア露出！」

シヤマル（敵）のリンカーコアを露出させ、最後に、

「ブレイク!!」

それを思いっきり握りつぶした。

それによってシヤマル（敵）はそのまま存在できなくなり消滅した。

こう言うてはなんだが一番えぐい攻撃である。

「バカなっ!? 我が騎士達が!!」

「意思の宿っていないみんなに私の騎士達が負けるわけあらへん！ さあ、最後はファ

ニーヴァンプ！」

「オツケイ!!」

「まてっ！」

ファニーヴァンプが駆けようとするがそこに今の今まで姿を現さなかったトーラス・

スタリオオンが姿を現す。

その片手にはまだ洗脳が解けていないファイアットが握られていてもう片方の手には質量兵器である拳銃が握られていた。

「ファイア!!」

ユーノが叫ぶ。

やっと会えたと思つたら今はトーラスの腕の中だというのだから笑えない。

「そこまでだ。貴様ら! それ以上動いてみる。この小娘の頭を撃ち抜いてやるぞ!」

「くっ…ゲスが!」

「何とでも言えればいい。勝利するためにはなんでもしてやるさ!」

—— だったら、その報いも当然受けることになるがいいんだな?

その低音の声と共にトーラスの後ろから今までずっと気配遮断で気配を殺していた殺人貴が姿を現しいつの間にかファイアットを脱出させ腕に抱えていた。

アサシンのクラスの真骨頂を發揮した瞬間である。

「貴様…ッ! ……ッ?」 なんだ。腕が、上がらない…?」

「…ああ。その腕は邪魔だったんでな。切っておいたぞ?」

「ぎ、ぎや——!!? わ、私の腕が…!!」

トーラスの拳銃を持っていた左腕は肘から下を見事に切り落とされていた。やるんだつたら両手を切り落とすくらいはやつてもいいんだがな…と殺人貴は思っていた。

「ナイス、志貴！」

「このくらいの仕事はさせてくれてもいいんだがな…」

「ぐっ…貴様らアアアア!? グアアアアツ!?」

トーラスはその場で地面に転がりのたうち回る。腕の消失による痛みが激しいのだろう。今までの報いを文字通り受けた結果である。

シホはそんなトーラスを冷たい目で流しながら、

「もうこれで心配事はなくなつたわ! はやて!」

「うん! 今度こそ、ファニーヴァンプ!」

「了解よ! さあ、覚悟しなさい! キャスター!」

素早くファニーヴァンプはキャスターの首をつかみ、地面に叩き落としそのまま引きずっていく。そして壁に辿り付きそのまま引き上げた。

「がっ…! ぐふっ…!」

そして捕まえている腕の反対側の手で何度も殴打を食らわせていき、最後に空へと投げて、

「星の息吹よ……！」

千年城ブリュンスタッドを発動させて、

「もう、手加減しないんだから!!」

鎖に雁字搦めにされ何度も爪での攻撃を食らわし最後に衝撃波が発生しキャスターを包み込む。

そしてすべてが終わわり、キャスターは地面へと横たわりながら少しずつ足から粒子となつて消え出す。

そこにはやてが近寄つてきて、

「……キャスター。いや、はやて……」

「……なんだ。子鴉……？　もう我のことなぞ放っておけばいいのだ。すぐに消えるのだから……」

「ううん、それはアカン。まだあなたの心を救っていないんよ」

「……はつ。何を言うかと思えば我の心を救うだと……？　座に招かれた時点で我の心は不変なのだぞ……」

「うん。それもわかつとる……でも、今あなたの心だけでも救いたいんよ」

はやてはヤガミを腕に抱き、

「……辛かつたんな。寂しかつたんな。あんなどころに何千年も閉じ込められて泣くこと

もできなかつたんやね…」

「……………」

ヤガミは答えない。

答えることなど何もないと言わんばかりに口を閉ざしている。

「…泣いても、ええんよ？ あなたは確かに破壊衝動に身を任したけど、でも私と同じ泣き虫や。だから今この時だけでも泣いてええんよ？」

「…誰が…泣くものか…。私は世界の破壊者だ。もう泣くという感情もとうの昔に消え失せたわ」

「正直にならんと怒るよ…？」

「ふっ…泣きはしながな。同一存在の貴様に慰められているだけで我はもう十分心安らいだ。これ以上の恥の上塗りは避けたいからな」

「そか…」

「お前はせいぜいその甘さを捨てきれないまま生きていくがいい。せいぜい頑張ることだな…我が写し身よ」

「うん。それでもええ。私はその甘さを持つて生きていくことにするわ」

「ならばもう話すことはない。じゃーな、このガキ」

最後に盛大に悪態をつき笑みを浮かべながらヤガミは消滅した。

「……………あんたも私とおんなじガキやないか。正直じゃないなあ……」

はやての眩きはそっと消えていった。

そして、その後は腕を切られて絶叫を上げているトールラスを魔導師達が取り押さえて連行していった。

こうして残りの敵はノアとセイバー、言峰綺礼とギルガメッシュを残すのみとなった。

第七十六話

『光と影の人達の想い』

左腕を失いあまりの痛みに絶叫をあげているトールラスが管理局の魔導師達に連行されていくのを尻目に、

「ファイア！」

「兄さん！」

ユーノとファイアットが感極まったという感じでお互いに抱き締め合う。

「よかった…よかった…」

「心配かけて、ごめんなさい…兄さん…」

ファイアットはやつと安心することができたのかその目から涙を流しだす。

うれしいのだろう、ユーノも一緒に涙を流している。

ユーノはファイアットが捕らわれてから今日この日まで心配しない日なんてなかった。できることなら自分自身で助けにいきたいという思いだった。

でもユーノは自身の力がどれだけ小さいかはよく分かっていたのでシホ達に任せる

他なかったのだ。

自身の無力さを痛感しながらも、同時にファイアットがなにも後遺症もなく無事な姿で戻ってきてくれたことにユーノは安堵の息をもらした。

しばらく兄妹の再会の時間が続いたが、ファイアットはまわりにいるものにはやてにそしてシホを見て、

「お姉様！ 怖かったです！ もう私はダメなんじゃないかと思いました！」

今度はシホに抱きつき久しぶりのシホとの抱擁を味わった。

「ふー…やっぱりお姉様はいい匂いがします。戻ってきたんだと実感します…」

「そう…無事でよかったですわ。ファイア」

「…でも、キャスターの洗脳で操られていてもかろうじて意識だけはありました。だから私のサーヴァントが消滅してしまったのはわかります…」

「ファイアちゃん…」

なのははそれで少し伏し目になる。

自分とオリヴィエの戦いでクラウドを倒してしまっただけだから。

何か言おうと思うけどなかなか言葉が出てこないのである。

でもファイアットはなのはのその視線の意味を察したのか、

「なのはさん、大丈夫です。私はファイターとそんなに話す機会はなかったですけど、

トールラスからファイターには何度も守ってもらっていた気がするんです。

それに令呪のつながりでファイターは悔いなく消えていったということも知っています。だから…なのはさんは気にしないでください」

「うん。ありがとう、ファイアちゃん…」

それでもなのも笑顔を取り戻す。

「…そういうえば、はやてはよくキャスターの宝具をやぶる事ができたわね」

ファニーヴァンプがはやてにそう聞く。

それは他のみんなも思っていたことなので気になっていた。

「ん…なんていうのかな。私にどこか関係ありそうな子に助けてもらったんよ」

「助けてもらった…?」

「うん。私は悪夢の中で「もうダメや…」と本当はあきらめていたんや。でも、いきなりってわけでもないんやけどその子の声が聞こえてきて私に励ましの言葉をかけてくれたんよ」

「そうなのですか、主ははやて…」

ラインフォースが話し掛ける。

でもそこでははやては心の中で（ラインフォースに似ている…?）と思った。

「なんや、その子、喋り方は似てなかったんやけど、だけど雰囲気はえらくラインフォー

スに似ていたな……？」

「私に、ですか……？」

「うん。たぶん私の予想では……」

はやてはそこで一度黙り込んだ。

「……はやて？」

ヴィータは突然黙り込んでしまったはやてのことが心配になって声をかけるが、

「ヴィータ。これから生まれるだろう私達家族の末っ子の事、可愛がつてあげてな？」

突然そんなことをはやては言い出した。ヴィータはよくわからなかったがとりあえず「わかった」と返事を返しておくことにしたのだった。

その後もはやてはなにか思うところがあるのか終始笑みを浮かべていた。



月村邸に戻り、ファイアットが無事救出できたことに喜ぶ一同。

特にさすががファイアットへと駆け寄り、

「ファイアットちゃん！ これからはシホちゃんをかけて正面からの全力勝負だからね
!？」

フィアットはさすがのライバル発言に驚きの表情をするがすぐにニヤツと挑戦的な笑みを浮かべて、

「私も負けません。お姉様は絶対に渡しません！」

それで二人は同時にいい笑みを浮かべて握手をしたのだった。

ライダーから応援する仕草が見られる。

しかしシホはシホでやつぱりというかこれでこそ正常運転のごとく、

「フィアとすずかは仲良しねえ…」

と、のんきに呟いていた。

それを聞いていたなのは達はアリサが代表して、

「この鈍感…」

とシホに言ったり。

そしてはたから見ていた士郎もさすがに他人事になると分かるらしくアリサと同じく「鈍感だな」と思っていたり。

だがザフィーラが士郎の肩に手をおき、

「士郎、シュバインオーグもお前だけには言われたくはないと思うぞ…」

「は…?」

と、論していたり。

結論、どっちもどっちと言う事である。

それによって聞いていたリインフォースが顔を赤くしたりと。場はなかなか力オスと化していた。



S i d e シホ・E・S・高町

それから一応の落ち着きを見せたみんなでやつとのこと話し合いを始めた。

「さて、それじゃフィアも助けだすことができて不安要素もなくなったわね。できればクラウスも仲間内に引き込みたかったけどもう過ぎたことを言ってもしょうがないわね…」

「これで後残す敵はセイバーとギルガメッシュのみだな、奏者よ」

「ギルガメッシュは最後まで姿を現わすことはないでしょう。ですから先にセイバーである私が仕掛けてくると思うのです」

アルトリアの言葉に私達は「そうね」と相槌を打つ。

「相手はアルトリアさんだから次は総力戦だね！」

「ええ、なのは。もちろん私達も全力で挑んでいきます」
なのはが総力戦だという。そうかもしれない。

セイバーもギルガメッシュも敵になるところも油断ならない相手だから。

「そうですね。セイバーの最大の強みはやはりエクスカリバー…それに単騎でも全員を
圧倒するでしょう」

「ライダーは一度エクスカリバーの直撃を食らったことがあるんだよね？」

「ええ、スズカ。私のベルレフォンがあっけなく破れてしまいましたからその威力は
絶大でしょう…」

そう、セイバーのエクスカリバーはアルトリアのエクスカリバーよりおそらく出力は
上だろう。

そこをどうやって差を補うかが勝敗に繋がってくる。

「過去に俺のゲイ・ボルクも当てにいったが致命傷を避けたからな。運も直感もいいだ
ろうな」

「そうなんだ…必中の槍も避けちゃうんだね」

あのランサーとの最初の戦いの時か。

そう考えるとアルトリアって最初にやられる可能性も持っていたわけね。

「呵呵呵、儂にとっては誰もが等しく強敵よ。倒しがいがあるわ！」

「アサシン、やるんだったら一発で仕留めなさいね？」

「おう！ 見ておれよアリサ！」

「ええ！」

アサシンとアリサはもう強気ね。

その意気込みが最後まで保てばいいけど。

「…私はサーヴァントとしては最弱ですから正面からはあまり戦いたくはありませんねえ。バーサーカーとの戦いもかなりギリギリで切羽詰まったものでしたから…」

「キャスターは後方で支援に撤したほうがいいな」

「はいです、ご主人様…」

…そうね。確かに危なかったわ。

聖杯にあまり魂をくべるわけにはいかないからみんなが死なないように戦わないといけない。

といつてもそんなこと言ったら戦いなんてできないからやっぱりその時の運任せになつてしまうのが痛いところね。

「セイバー相手なら私もより本気を出せそうね」

「アルクエイドが本気を出したらサーヴァントを上回るから…」

「頼りにしとるで。ファニーヴァンプにアサシン！」

「まっかしといてよ、はやて！」

「ま、足手まといにならない程度に頑張るとするか……」

真祖に直死の魔眼使い……この二人はやっぱりかなり心強いわね。

「みなさん、話し合いもいいですがそろそろ夕食にいたしましょう」

ノエルさんとファリンさんが料理を持ってきたので全員それに頷く。

そしてその後はみんなでお食事会を開いてみんなで勝利を祈った。



S i d e ノア・ホライゾン

僕の運命は生まれた時から決まっていた。

アインツベルンの人形という役割で。

そして第五次聖杯戦争のために同じホムンクルスでありながらも特別な小聖杯を宿したイリヤスフィール・フォン・アインツベルンお嬢様がかの冬木の地へとセラとリーズリットを連れて旅立っていった。

僕にもイリヤスフィールお嬢様の予備として小聖杯としての機能を埋め込まれてい

たけど使われる機会は多分ないだろう。

そう、思っていた。

だけど、それは第五次聖杯戦争でお嬢様が敗れたという話を聞いてから僕は思った。もしかしたら僕にも出番はあるのではないかと…。

そんな事を思っている時だった。

世界中はいきなり出現した謎の泥によつて汚染されていきアインツベルンの領地だった場所も例外なく飲み込んだ。

他のホームンクルス達もどんどんと飲み込まれていきとうとう僕も飲み込もうとしてきた。

そして泥に飲まれそこで僕は様々な悪意を見た。

「これは…」

普通なら気が狂つてもおかしくないと考える程の絶望が溢れているはずだった。でも自然と僕はそれを受け入れていた。

そうしてしばらく経ち泥はいつの間にか消え失せていた。

代わりに僕の目の前には一人の神父が立っていた。

「…祝福しよう。聖杯の泥に耐え切ったものよ。そして小聖杯の器を持つ者よ」

神父さんはそう言つて僕の手を握つてきた。

なにがそんなに楽しそうなのか聞いてみた。

しかし逆に質問をされた。

「なぜそんなに楽しそうなのか…?」

そんな事を聞かれた。

楽しそう…?

僕が…?

手で顔をなぞってみると確かに僕は笑みを浮かべていた。

それに神父さんは何かを思ったのか…、

「…ふむ。よもや私以外にもこのような者が生まれるとはな…」

「…どうしたの? そんなに笑みを浮かべて…」

「楽しいのだよ。かつての私と同じ空虚の心を持ち合わせているものと出会えたのだか

ら…」

「空虚…」

「どうだね? 私とともに新たな世界でまた戦いをしたいと思わないかね?」

「戦い…」

「君はそのために生み出されたのだろうか?」

「うん。僕は小聖杯として生み出されたホムンクルス…」

「ならばもう君は私の同士だ。さあ、新たな世界で再びこの世界を再現しようではないか……」

「今のこの世界は楽しい……？」

「……いや、もうこの世界には私の楽しみは消えてしまったのだよ。」

そして私の疑問も解消できないまま世界は滅びた。

だから目指すは新世界だ。そこで新たな聖杯戦争……いや、聖杯大戦を起こさないかね？」

「……………僕の存在意義。それを叶えてくれるなら僕はついていきます、神父さん」

「ふふふ……よろしく頼む。よければお前に名をやろう。……そうだな、ノア・ホライゾンという名はどうだ？」

「……ノア・ホライゾン……それが僕の名前……」

僕が名前をもらったところでそこに新たな人の気配を感じた。

「ふん……。言峰、我はもうこの世界は飽きたぞ？ 何もなくなってしまうたのだからな。王の次の居場所を選定しようではないか」

そこには黄金に輝く鎧を身にまとった王様がいた。

「王様……」

「ぬっ……生き残りがいたのか。言峰、こやつは……？」

「ふふふ……私の同士だ」

「そうか。ならば貴様と同じく性格破綻者なのだろうな。こういった存在は私の心を潤す。よい、私の家来になることを許そう」

一方的だけど僕はこの王様についていこうと思った。

そしてさらにそこから黒い甲冑の人が姿を現す。

「……………」

その人は無言で佇んでいる。

でもその気配からして人間ではないと思った。

「そうだ。ノアよ。同士としての暁にお前にこのサーヴァントをやろう。受肉しているがマスターはいた方がいいだろう」

「わかりました……」

そうして僕にはサーヴァント……セイバーが護衛につくことになった。

それからというもの、言峰綺礼……師匠は僕を鍛えてくれて世界を渡る時も一緒にいてくれた。

僕に楽しみというものを教えてくれた。

だから、僕は師匠の役に立とうと思った。

そして世界を残りの聖杯の力を使って渡って最初の戦闘の時、そこにはイリヤス

フィールお嬢様に似た少女がいた。

その少女は僕に向かって、

『あなたを止めるわ!』

と、言ってきた。

でも僕は止まらない…いや、止められないんだよ。

どのみち小聖杯としてのこの体は儀式が終了するまでしか生きられない。

そして少女は今度は僕に、

『それでいいの!? 言峰綺礼の操り人形のままです!』

操り人形、か。

それがどうしたっていうのさ。

僕が人形なのもう百も承知でしょう…?

『ノア、あなたにも心があるなら自身の事も考えなさい。

そして言峰綺礼が起こそうとしている事を考えなさい!』

知っているよ。聖杯に願ってまたあの泥を呼び出そうとしていることは。

でも、それが…?

師匠はそれも誕生する命だと思っているんだよ?

それならそれでいいじゃないか。

『その生まれてくるものがこの世界に災いを振りまくことになるのよ!』

うん…。知っているさ。そこまで知っているならどうして君は抗おうとするの？

もうこの大魔術儀式は止められないんだよ。

サーヴァントが脱落するたびに魔力は溜まっていつてしまうんだから君達が戦うということはその手助けをしているだけなんだよ…？

…わからない。

…君のことがわからない。

…どうしたら君のことが理解できるの？

そして戦いは終了し、僕はセイバーとともに師匠のどこまで帰ってきた。

「お帰り、ノア。どうだったかね？ 初の戦闘は…？」

「なんてことはなかったですよ。やっぱりセイバーは強いですから」

「ふむ、期待が外れたか…？」

「でも、変なことを言う子とは出会いました」

「変なこと…？」

「はい…」

それで僕は師匠にその事を包み隠さず伝えると、

「聖杯と私のことを知っているのか。その者の名は…？」

「すみません、聞き忘れしました…。でもイリヤスフィールお嬢様にそっくりな外見でした」

「ほう…？ アインツベルンの少女とか…」

師匠はそれで少し考え込む仕草をして、

「わかった。私の方でも少し手をつけて調べてみよう。その少女のことを…」

「わかりました」

それからしばらくして師匠はその子の名前を入手してきました。

「ははは。驚け、ノアよ」

「どうしたのですか、師匠…？」

「いや、なにね。彼女の名前がわかったのだよ」

「名前が？ それのどこがおかしいところがあつたんですか？」

「ああ。彼女の名前は『シホ・E・シュバインオーグ』…いや、今は『シホ・E・S・高町』だったか？」

シホ・E・S・高町…。

それが僕の心を揺さぶった少女の名。

「その名前の中に彼のシュバインオーグが入っていることにも驚いたが、彼女の最初のファミリィネームはE…つまりエミヤ…。」

これが意味することは私を過去に倒した衛宮切嗣、そして今度は私が倒すことになった衛宮士郎に次ぐ新たなエミヤなのだよ。

くくく…これだから平行世界は面白い。またしても私に歯向かってくるものがエミヤだとは…。実に彼女の心の傷を暴いてみたい…」

師匠は実に楽しそうにそう語る。

でも、僕にとってそんな事はどうでもよかった。

僕の心を揺さぶる存在…シホ・E・S・高町。

彼女とまた会えれば僕は何を思うのだろうか？

そしてそれから僕たちの陣営である仲間…いやこの場合は聖杯の生贄という駒と呼ばれる人達が次々と敗れていつている。

最初に敗れたのは三菱彩。

次はミゼ・フローリアン。

そしてアクア・アトランテイク。

最後にトールラス・スタリオオン。

全員サーヴァントは敗れてしまったらしい。

「これで聖杯大戦で残された私達の陣営はノアと私だけになったな。まあ、あいつらには期待はしていなかったがな…」

師匠はつまらなそうに顔をしかめてそう下す。

「まあ、私とノア、我らがいれば大丈夫だろう。順調に聖杯に魂も流れているのだから」

そう。僕の小聖杯にはもう四体ものサーヴァントの魂が流れ込んできている。

でも、まだ動ける。

僕の体は十四体魂を収めておけるように改造されているから。

まだ手足の感覚はある。

だからまだ戦える。

そして僕も間近で見るんだ。聖杯が降臨する様を。

第七十七話

『総力戦。ネロの決死の一騎打ち』

S i d e シホ・E・S・高町

…翌朝、私は月村邸の一室で目を覚ました。

隣ではネロが少し大胆ではあるが下着の姿だけで一緒に寝ていた。

それに多少恥ずかしいという気持ちになったがそれだけである。

そういえばこの聖杯大戦にネロが召喚されてからの戦いでも一緒についてきてくれた。

それはマスターとサーヴァントとの間柄だから普通の行動だけどアルトリアと同じくネロももう私の大事な人になりつつある。

絶対に脱落はさせないと心に誓いながらネロの頬をそつと撫でる。

「……奏者よー。余に、任せておくのだ……」

寝言か。

微笑ましいな。ネロは夢の中でも私と一緒に戦っているらしい。

それとは別に私はネロの過去をもう何度か見た。

彼女が暴君と呼ばれたローマのお話。

ネロ自身は市民達を愛していたのだけれど彼女の愛と市民の考えは一致することはなく、誰からも愛されることなく最後には追い詰められて喉に短剣を刺して自決するという最後。

それはとても悲しいものだった。

だから私だけでもネロのことをちゃんと理解してやって一緒に戦っていこうという気になった。

だからネロ、そんなに自分を苦しめてはいけないわよ？

「…シホ。起きていますか？ あ、ネロ、あなたはまたシホの寢床に侵入してしまいましたか。困ったものです…」

アルトリアが部屋に入ってきてネロを見て呆れの表情をする。

「アルトリア。ネロの好きにさせてやって。私は気にしないから」

「そうですか？ でしたら構いませんが…。それにしてもシホ。あなたはもう女性と一緒に寝ても平気になったのですね」

「あ、そうかも。これもやっぱり女性化してからの変化の一つかもね」

「男性の時はいつも恥ずかしがり私と部屋を一緒にしなかったシロウの時とは大違いで

すね」

「あはは、そうかもね」

「…むう？ どうしたのだ、奏者よ。そしてアルトリア…」

「起きましたか、ネロ。朝ですからもう起きてください」

「…わかった。では奏者よ。少し着替えをする…」

「わかったわ」

それでネロは着替えを始めようとする。

でもその時、私は一瞬ネロの姿が透ける光景を幻視した。

「ネロ…？」

「ん？ どうした奏者。そんな不安な表情になって…」

「あ、いや…なんでもない。そ、それより早く着替えようか」

「うむ。そうするとしよう」

気のせい、よね…？



そして私達はその後に学校に行ってもし攻めて来ようならすぐに学校にも結界を張

れるようにエイミイさんが随時待機してしてくれたので安心して学校生活をした。

そして全員で月村邸に帰り、これからについて話し合おうとしたその時だった。

ドンッ！

『ッ?!』

突如として月村邸に張られているキャスターとシャマルさんのダブル結界が揺れる音が響き渡ってきた。

「ご主人様！ 敵襲です!! 完全に破られたわけではありませんが中へと侵入されました！」

「わかった。全員出るぞ!!」

士郎の言葉にサーヴァント達全員が姿を現し広場へと向かっていった。

そして入口までやってきてそこにいたのはやはり、

「ノア……」

「そしてセイバーだな」

ノアとセイバーの二人が入口のところに立っていた。

「エイミイさん！ 結界をお願いします！」

『わかったよ！ 頑張つてねみんな!』

それで月村邸一带に結界が構築された。

「やあ、シホさん」

「!? どうして私の名前を…!」

ノアが急に私に話しかけてきた。

「君は色々と有名だからね。すぐにわかったよ。まあ調べたのは師匠だけどね…」

「そう…、言峰綺礼がね…。それで今日はあなたは何しに来たのよ?」

「当然…ここににいるサーヴァントすべての討伐にだよ。やっぱり下の者たちに任せたのがまず間違いだっただよ。」

最初からセイバーをぶつけていればすぐに全員倒すことはできたね。

まあ、君たちに感謝すべき点ではサーヴァントを四体も倒してくれたことかな?」

「…おいおい小僧。俺たちを舐めてんのか? セイバー一人でここにいるサーヴァント全員を倒すだと…?」

ランサーが挑発的なノアの言葉に血管を浮き上がらせる。

「その通りだよ。なんせセイバーは最強だからね」

「ほう…いうな、小童。呵呵呵! ならばその最強とやら、僕の必殺を受けて崩してやろう!」

アサシンが豪快に笑い拳を構える。もう戦う気マンマンである。

「油断は禁物ですね…。あのセイバーはアルトリアよりおそらく出力は上ですから」

「油断しないでかかっていきましよう」

「私は後ろから援護します！」

「私はもう油断なんてものはないわ。片っ端から捻り潰してあげるわ！」

ライダーは警戒の色を強め、オリヴィエ陛下が自身を鼓舞し、キャスターが呪符を何枚も構え、ファニーヴァンプが爪を硬質化させいつでもいいという感じに構える。

「なんであろうとモノならすべて殺しきってやる…」

殺人貴もナイフを構えていつでも突撃できる態勢に入っていた。

「奏者よ。そなたが命令を下してくれ。我らは皆そなたの言葉でいつでも仕掛けられる！」

「わかったわ。ネロ。…みんな！ まだギルガメツシュが残っているけどこの戦いを決死の覚悟で乗り切りましよう！」

『おう！』

私の声でなのは達、そしてサーヴァント全員が声を出す。

「ふふふ…楽しい戦いになりそうだね。セイバー？ これを最後の戦いで終わらすよ？」

「…了解しました」

セイバーがエクスカリバーを構えて殺気と魔力を放出し足を一步踏み出す。

それだけでビリビリとした威圧と重圧感が襲ってくるがみんなはそれを耐えて仕掛けていった。



まず最初にランサーが仕掛けた。

「おらおら！　まずは俺の槍をお見舞いしてやるぜ!!」

ランサーはゲイ・ボルクを構えて疾駆しセイバーへと迫る。

それを迎撃するセイバー。

それは剣と槍のぶつかり合い。

そこはさすがランサー。

最初はスピードとパワーで圧倒していた。

だがすぐにセイバーはそのスピードになれると今度は何度も剣に力を込めてランサーに打ち込んでくる。

「遅いな、ランサー。ランサーのクラスの名が泣くぞ?」

「いつてくれるじゃねーか!」

「ふふふ……さて」

そこでセイバーは空中へと飛んだ。

セイバーが元いた位置にはアサシンが拳を振るっていたが、

「儂の気配を直感で読むだど？ やりおる！」

そしてセイバーは空中から叩き落とすようにアサシンに剣を振り落とそうとしている。

そこにライダーが鎖を振るって剣に巻きつけ怪力でセイバーを地面へと叩きつけようとする。

「甘いッ！」

瞬間的に魔力放出をして黒い風を起こし叩き落ちる前に体勢を整えて地面へとたどなく着地するがそこに、

「はああああー！！」

ファイターが拳を構えてセイバーへと迫っていたがセイバーは剣を構えてファイターの拳を剣の腹で受け止めた。

そこから押し合いが発生するがそこはやはりセイバー。

徐々にファイターを押しつけている。

背後からファイアーニヴァンプと殺人貴が爪とナイフを振るおうとしているがその場で魔力を高めて小爆発を起こし周囲にいる一同を吹き飛ばす。

「なんで!? セイバーってあんな強かったの!？」

「無駄口を叩く暇があるなら爪を振るえ! アルクエイド!」

「わかってるわよ! 志貴!」

吹き飛ばされて悪態をつくファニーヴァンプに殺人貴がもつと本気を出せと発破をかける。

しかしそこでセイバーが背後を晒していた。

「その隙、いただきです! 陣地作成で築いた私の結界の底力。受けてください! 全魔砲門術式展開!!」

途端、結界内に設置してある何十もの数の魔法陣から魔力が溢れてそこから炎天、氷天、密天の三種の攻撃が一斉にセイバーに向けてられて発射された。

セイバーはそれに包まれるが、ただそれだけ。

魔力放出ですべてを吹き飛ばした。

「私の渾身の一斉攻撃を魔力放出だけで吹き飛ばした!？」

「まずは、一人だな…」

セイバーがそうつぶやきキャスターめがけて疾駆した。

「やばっ!？」

「キャスターよ。下がれ!」

控えていたネロがセイバーの剣を受け止める。

「ぐうつ!! やはり重たいな!」

「ほら、どうした? 真のセイバーになるのだろうか? その程度で弱音を吐いてどうする…?」

「わかっておるわ! 少し黙れセイバー!」

ネロがセイバーの剣を打ち払いセイバーは空中に反転して後ろへと下がる。

そしてついに構える。

エクスカリバーを。

極悪な魔力がエクスカリバーへと集まっていき全員は一斉に来る! と直感した。

この中でエクスカリバーに対抗しうる突進力を放てる宝具を持つサーヴァントは限られてくる。

「私が行きます!」

ライダーが声を上げた。

「ペガサスよ! 私に力を! ベルレフオーン 騎英の手綱!!」

ライダーとペガサスが光になってセイバーへと突撃していく。

そしてついに高まったセイバーのエクスカリバーは漆黒の光を宿して振り下ろされた。

「約束された勝利の剣——!!」
ベルレフオーン
騎英の手綱と約束された勝利の剣が衝突した。

それによって周囲は破壊されていく。

だがそれも最初だけで少しずつライダーが押され始めてきている。

それを見ていたはずかは咄嗟に、

「最初の令呪に命じます！　ライダー！　駆け抜けて——!!」

「はい！　スズカ!!」

すずかの令呪のブーストによって騎英の手綱の出力が倍増し、今度は約束された勝利の剣を押ししていく。

「セイバー！　これで勝負を決めます！　二乗の騎英の手綱!!」

ライダーは発動中の宝具にさらに宝具の力を上乘せしてついにはセイバーの約束された勝利の剣の出力を上回った。

それによってライダーは走破してセイバーへと一撃を浴びせられると思っていたが、そこはやはりうまくいかない。

ノアが令呪を構えて、

「最初の令呪で命じる。セイバー、全力で避けてください」

それによって必勝は覆された。

ライダーが駆け抜けた場所にはセイバーの姿はなくボロボロになった敷地だけが存在した。

「さらに第二の令呪で命じます！ エクスカリバーでここら一带を彼ら諸共吹き飛ばしてください！」

再度セイバーはエクスカリバーを構えて黒い斬撃を放ってきた。

ライダーはもう力を出し切った為にすぐに宝具を使うことはできない。

ここで他のサーヴァントにセイバーのエクスカリバーを防げる可能性は著しく低い。だがここにそれを覆す人物がいた。

いつの間にかアルトリアとユニゾンをしていたシホがみんなの前に立ち、

「^ア全^{ヴァ}て遠^ロき理^ン想郷!!」

それによって物理干渉のすべてをシャットアウトし、セイバーのエクスカリバーを防ぎ切った。

「私の鞘を……! 小娘、貴様何者?!」

「何者だっついていいわ! あなたを倒すためならね!」

「奏者よ。ここは余に任せてくれないか……?」

「ネロ……?」

ネロがシホにそう話しかけた。

「余の宝具で圧倒してセイバーに止めをさそう！ 奏者が命じてくれれば余はそれが可能だと信じている」

ネロはそう言うがシホは今朝に見た幻視した光景を思い出して不安な表情になった。だがネロはそんなシホの表情を察してか、

「そう不安な表情になるな、奏者よ。余は負けん。絶対に奏者に勝利を捧げよう。約束するぞ！」

ネロの力強い言葉にシホも心が決まったのか頷き、

「ネロ、お願い！」

「任された！」

そしてネロは一步前に出て剣を構えて、

「セイバー！ 一騎討ちをそなたに挑む！」

「……いいだろう。まずは貴様から葬ってやる」

「一騎討ちに応えてくれて感謝する。いくぞ！」

レグナム・カエロラム・エト・ジエヘナ——築かれよ摩天、ここに至高の光を示せ

！ ！ ！
そして我が才を見よ、万雷の喝采を聞け！ しかして讃えるがよい、黄金の劇場を
！！

それによってここら一体の空間が歪み、次にはまるでローマの劇場のような空間へと

様変わりする。

これこそネロの宝具。

アエストゥス・ドムス・アウレア
『招き蕩う黄金劇場』。

かつてネロがローマに築いた劇場を再現する宝具。

この中ではネロの様々なパラメーターがランクアップし敵のパラメーターをも下げる絶対皇帝圏を発動できる場所。

「これは……」

「さあ、セイバー。この中で余とともに舞ってもらおうぞ！」

「いいだろう！ 受けて立ってやろうではないか！」

そしていつの間にか全員観客席に座らされていてセイバーとネロの戦いを鑑賞するという場になっていた。

それにより全員はいつの間に座らされたんだ……？という感想を抱くがここでは詮無いことである。

ちなみにノアは反対側に座っていた。

劇場の中ではセイバーとネロがまるで舞うかのように戦闘を繰り広げていた。

「はあ！」

「ふっ！」

劍と劍がぶつかり合い火花を散らせる。

この戦いはもう互角である。

「うおおおおおー!!」

「はあああああー!!」

剛と柔の劍がお互いに衝突しあいまるで叫びを上げているようだ。

一見互角の戦いのように見える。が、このネロの宝具にはタイムリミットがある。

これが切れればまた両者のパラメーターは元に戻ってしまいセイバーがネロを圧倒するだろう。

ネロはここで勝負を決めようとしていた。

「奏者よ。この劍、そなたに捧げよう! いくぞ! これが…最後の一撃だ!!」

「はい!!」

「この一撃に、すべてを賭ける! ラウス・セント・クラウディウス 童女謳う華の帝政!!」

「負けん! エックス・カトリ 約束された勝利の劍!!」

二人の技が至近距離で同時に放たれた。

そしてネロの攻撃はセイバーの腹を見事貫通した。

しかしその代償としてセイバーの攻撃によりネロは袈裟切りに切られていた。

「ッ……………」

「ふっ……まさか、この私がやられるとはな……お前の勝ちだ、セイバー……」

……ああ、これでまたあのカムランの丘に戻ることになるのだな……。まあ、それもまたよからう……」

そうしてセイバーは消滅した。

そしてネロも切られた致命傷でその場に崩れ倒れた。

劇場も崩壊していきシホはすぐにネロの下へと向かった。

「ネロ……!!」

「……………」

ネロは目を閉じて無言。

エクスカリバーで切り裂かれたのだ。体がまだ繋がっているのが儲けものだが真つ赤な衣装がネロの血によってさらに真つ赤に染まる。

それでもシホは目に涙を浮かべながら治癒魔術をかけ続けて必死にネロへと呼びかける。

「ネロ！ 死んじやダメよ！ あなたとはこれから一緒に生きていきたいんだから！

だから、死ぬな!!」

「シホちゃん……」

シホのあまりの必死の姿になのは達が涙を浮かべる。

「令呪によつて……!」

そこでどうとうシホは令呪でネロの魂を呼び戻そうとするが、それはネロの震える手で遮られた。

「…天よ…。今一度の、祝福を…」

掠れた声だがその声はネロから確かに聞こえてきた。

「ネロ…?」

次の瞬間、ネロの体が発光しだしセイバーにやられた傷がみるみるうちに塞がっていく。

シホはまだ知らないことだがこれこそネロのもう一つの宝具。

『インウィクトゥス・スピリトゥス三度、落陽を迎えても』。

これはネロが自害した三日後、一人の兵士がネロの亡骸におそるおそる外套をかける、死亡したはずのネロが突如起き上がり、『遅かったな。だが、大儀である』と、最後の言葉を遺したと言う。

これが逸話となり宝具にまで昇華し、ただ一度だけの蘇生を可能とする奇跡の宝具だ。

「…奏者よ。余も、そなたと、生きていきたい…。だから決して余から、離れるな…?」

「ネロ…!!」

シホは感極まってネロを思いっきり抱きしめた。

その目から涙が幾度も流れ出している。

ユニゾン・アウトしたアルトリアもそこに加わり三人で抱きしめ合う。

ネロの瞳からも涙が一筋流れた。

なのは達もそれで貰い泣きをしているほどであった。

「そんな…セイバーがやられるなんて…僕は…！」

だがそんな感動的な光景とは対照的にノアはまさかセイバーが敗れるとは思っていなかったのかひどく狼狽している。

シホは一度流した涙を袖で拭き取り、ノアに向かって立ち上がり、

「ノア…あなたの負けよ。降伏しなさい…！」

「まだだ！ まだ僕には小聖杯という存在意義がある！ だからこんなところで終わるわけがない！」

「———そうだ、ノア。お前にはまだ利用価値がある」

ドスツ！

「……………あつ……………」

その声と共にノアは背後から黒鍵で貫かれた。

それによってなのは達が悲鳴を上げる。

そう、ノアの背後にはいつの間にか言峰綺礼の姿があったのだ。

「言峰綺礼……!」

「ほう……シホ・E・S・高町の姿があるからと思いい見ればアーチャー……いや、衛宮士郎、貴様の姿もあつたか……」

「言峰綺礼……! 何をしているのか分かつているのか!?!」

「承知しているとも……。もう、ノアにはマスター権はない。しかしまだ小聖杯は残されている。だからそれを私は譲り受けに来たのだよ」

「師匠……なにを……?」

「よく頑張つたな、ノアよ。しかし一体もサーヴァントを削れなかつたお前にはもはや用はない。よつて……」

言峰が手を水平に構える。

そして次の瞬間、ノアの心臓部に手を突き刺しその心臓をえぐり出した。

それによつてノアから大量の血が噴出する。

それでノアの目から一瞬で光が消え失せ心臓を引き抜かれてそのまま口から大量の血を吐血させて体から漏れ出た血の海に沈む。

そのあまりの残酷な光景によつて気の弱いはずが気絶して他の一同も息を呑む。

「これが手に入ればよい……」

「言峰…!!」

「小聖杯…確かに受け取った。そして…」

言峰は今度は自身の胸に黒鍵を突き刺し穴を開けた。

気が狂ったか!? と全員は思ったが話はそう単純ではない。

言峰はその穴にノアの心臓を心霊手術を執行し移植したのだ。

「はははははッ!! そうだ! この力が欲しかったのだ!!」

「言峰綺礼…! あなたを生かしておけないわ!」

「…まあそう焦るな。私は当分の間、これが馴染むまで戦いは起こさん。それまでのわずかな期間、一時の平和な時間を過ごすことだな。

そして次には貴様達全員を葬ることを誓おう…さらばだ」

そうして言峰綺礼はそこからまるで転移魔法でも使ったかのように消え去った。

そして後に残されたのはノアの死体だけだった…。

「せっかくの勝利も、後味が悪いものになってしまったな…」

「ええ…」

こうしてセイバーとノアとの戦いは終止符を打つことになった。

だが最悪の敵を代わりに生み出してしまったのだった。

第七十八話

『英雄王の圧倒的な力』

言峰綺礼が立ち去ってから月村邸に管理局の魔導師がやってきてノアの死体を回収していった。

そして戦闘の余波で受けた被害はやはり結界内だったのでそんなに被害はなく瞬く間に修復されていった。

ただ、正門だけは結界を張る前に破られたので修復はできなかったがこれだけの被害なら軽いものだろう…。

これももし結界が張られていなかったら被害総額は相当のものになっていただろう。

「…スズカ、大丈夫ですか？」

「ライダー…?」

そこで気を失っていたスズカが目を覚ました。

しかしすぐに先程の無残な光景を思い出したのか「ふう…」と青い顔になりソファーに横になってしまった。

「スズカ、大丈夫!?!」

「う、うん、アリサちゃん…」

「すずか。今は体と気持ちを十分休ませてね。誰もあんな光景を見たら心がまいってそうなっちゃうわよ……」

「うん……ごめんね、シホちゃん……」

それでライダーがすずかを手慣れた手つきで看病をしていた。

こんなところで四日間の記憶が役立つとは思わなかったらしくライダーは心の中で「サクラ、あなたのおかげです……」と感謝していた。

「他に気分が悪い人はいない？ いるならすぐに言つてね？」

「う、うん……私は大丈夫だけど、でもシホちゃんや土郎さんはやっぱりこういったものは慣れてるんだね……」

「うん。やっぱり心が強いと思うよ。シホ達は……」

「……まあね、なのはにフェイト。慣れないと戦えなかったからね」

「ああ。言峰綺礼の心臓を抉りだすという光景とまではいかんがかなり際どい光景はそう珍しいものではなかったからな……」

「でも、やっぱり許せないものがあるわ。今言つてももう手遅れだけどノアにもまだ生きられる可能性があったから……」

「だな。ホームンクルスとはいえ人間と同じく魂があったからな。イリヤも悲しむだろう……」

と、そこにシホはイリヤから話し掛けられた。

みんなにも聞こえるようにイリヤの声が響いてくる。

《…シホ。思い出したわ。ノアについて…》

「イリヤ…？」

イリヤの声は少し沈み込んでいる。

《彼は私の血のつながっていない弟みたいなものだったのよ…》

「弟…？」

《彼は名前はないけど私の予備として小聖杯を埋め込まれていたのよ。だから彼は私達の世界では役目も与えられず死んだと思うわ…。》

それなのに言峰綺礼のせいでその滅びちゃった世界では利用されちゃったのね…》

「そうなの…。アインツベルンは…いや、この場合は言峰綺礼か。奴は色々と業が深いわね」

「…しかし奏者よ。奴を討つならすぐに行動をした方がいいと思うぞ？　こうしている間にも奴は小聖杯に体を適応させてしまいなにをやらかすか分かったものではないからな…」

ネロの言葉にシホは「そうね…」と頷き、

「言峰綺礼討伐は急いだ方がいいわね。桜の前例があるけど小聖杯から無限に魔力を受

け取ってサーヴァントと同様の力を会得したら厄介極まりないわ…」

「だな。言峰のヤロー。まさかこんな行動に出やがるとは、本当に救いようがない奴だぜ」

ランサーがそう言峰を下す。

「言峰綺礼はもう人間をやめているのかな…?」

フェイトがふとそんな事を言いだす。

言峰綺礼にたいして恐れがあるのだろう、体をわずかに震わせている。

「それに加えて金ピカもいるから強敵になるわね」

「そうやね、ファニーヴァンプ。シホちゃんの話に出てきたサーヴァントが黒化して復活して襲い掛かってくる事も想定に入れておいた方がいいと思うんや」

「そうだとしたら…恐ろしいことになるわ。せつかくセイバー以外のサーヴァント達はほとんど悔いもなく消えていったっていうのに操られたら可哀想だわ…」

「そうですね、シホ。私やランスロット、デイルムッドがまた操られてくると思いますと心が張り裂けそうになります…」

アルトリアがそう言う。

「クラウスにはこれ以上苦しんでほしくはありません…」

「オリヴィエさん…」

「ヤガミにもだ。彼女は主はやての写し身も同然だ。だからこれ以上は悲しい姿を見たくないのが本心だ」

守護騎士代表でシグナムがそう言葉を発する。

それで言峰綺礼はやはりもう捕まえるだけでは済まさない事が決定したのだった。



Side シホ・E・S・高町

それからリンディさんが管理局で人員を動かして言峰綺礼の行方を追ってもらったけどなかなか居場所は掴めなかった。

どこにいいのかみんなで話し合ってみても特に案が出てくるわけでもなく、こうしている間にも言峰綺礼は小聖杯と完全に適合してしまう。

急がないと取り返しのつかないことになってしまう…。

そんな時だった。

また冬木市で正体不明の敵が彷徨っていて行方不明者が続発しているという。

それで以前ギルガメッシュが柳洞寺の地下にいたことを思い出し私達は今度は全員

で冬木市に向かう事になった。

そしてまた柳洞寺の地下に向かつていく事になった。

そしてそこにはなんと以前はなかった大聖杯が安置されていた。

「…来たようだな。雑種共」

そこにはやはりりというべきかギルガメツシュが待ち構えていた。

「もう大聖杯も安定した。言峰も小聖杯をモノにした。よつてもう手加減をする理由がなくなった」

「ギルガメツシュ…！」

「ふん。贗作者フェイカーもいるとはな…。よくぞ我の前にその面を出せたものだ」

「貴様には私の力を見せてやろう」

「はっ、笑わせる。人の身で我に敵うと本気で思っているのか？ 身のほど知らずめ、恥を知れ！」

あのギルガメツシュはもしかして私と士郎の固有結界の存在を知らない…？

「英雄王、言峰綺礼はどこにいるんだ？」

「…教えると思っているのか？ セイバーよ」

「ならば力づくで聞き出すまでです！」

「よーし！ 前の世界での雪辱をやっと晴らせるわね！ 覚悟しなさい、金ピカ！」

「真祖か。また殺してやろう」

「金ピカ、俺の槍であの世に送ってやるぜ？」

「狗は地べたを這いずり回っている」

「…狗と言ったな？ ならば貴様のその慢心、後悔させてやるぜ！」

「いいだろう。ならば見事我を屈伏させてみるがいい。できればだがな…クククツ」

ギルガメツシユはそう言い余裕の笑みを浮かべる。

そしてそれを合図に王の財宝を展開し私達に放ってきた。

「士郎は詠唱して！ その間は私達が食い止めるから！ ネロ、お願い！」

「うむ！」

「わかった！…I 体 am は the 剣 bone で of 出 my て sword る」

士郎が目をつぶり詠唱に入った。

後はその間、ギルガメツシユの猛攻を押しえつけておくのが私達の役目。

「アルトリア！ 私達もいきましよう！ 戦力は一人でも多いほうがいいわ！」

「了解しました！」

『ユニゾン・イン！』

そしてセイバーフォームへと姿を変え私もサーヴァント達とともに駆けていった。

最初にこれでもかと言わんばかりにフアンニーヴァンプが爪で攻撃を仕掛ける。

「ほらほら！ 前は星から力を受け取れなかったけど今回は一味違うわよ！」

爪の攻撃によって何度も地面を抉りながらもギルガメッシュに攻撃の手を緩めないフアンニーヴァンプ。

しかしギルガメッシュは紙一重のところでのその攻撃を交わしている。

そこに背後から李書文と殺人貴が迫ってきて、同時に拳とナイフを振り下ろす。

「はっ！」

「ひゅっ！」

だがそれは展開した王の財宝の武器達で防ぎ攻撃を通させない。

「ふん。…我を倒すと大口を叩いたのだからもつと一斉にかかってくるが良い！」

「けっ！ ならば受けてみるよ！ 刺し穿つ死棘の槍！！」

ランサーの槍がギルガメッシュに向けて迫るがそれは同じくゲイ・ボルグの原典である宝具で打ち消しあつて効果をなくした。

「私の魔眼を受けてください！」

ライダーが眼帯を外しギルガメッシュに向けて石化の魔眼を放つ、が、

「この蛇が！ ぬるいわ！ その程度の魔眼で私の行動を束縛できると思うな！ それ！！」

そしてお返しとばかりにライダーに向けて『ハルパーの鎌剣』を射出する。本能で危険と察知したライダーはすぐに離脱してなんとか受けるのは防げた。

「私の呪術を受けてください！ 呪相・炎天!!」

「受けなさい！ 聖王…鉄槌砲!!」

キヤスターの炎が走り、オリヴィエ陛下の技が放たれるが、ギルガメツシュは生ぬるいとばかりに、

「その程度の攻撃、我には通じん!!」

いくつもの宝具の盾で防ぎきった。

「ほら。お返しだ!」

そしてオリヴィエ陛下とキヤスターに向かつて王の財宝を放つ。

それをくらったらオリヴィエ陛下はともかく耐久力の低いキヤスターでは消滅も必須だろう。

だから私とネロで前に出てそれらをすべて防ぎ、

「ネロ! 同時に仕掛けるわよ!」

「うむ!」

二人で剣を振り下ろしギルガメツシュに攻撃を与えようと迫る。

だが、ギルガメツシュはその手に乖離剣を出して、それを回転させながら私とネロの

劍を防いでしまった。

しかもすでに乖離劍はその回転がとても早くなつていつていて風が吹き荒れすぐにも宝具を放てるほどに魔力が充填していた。

「これを我から抜かせた褒美だ。受けるがよい！ 天地乖離す開闢の星!!」

乖離劍から竜巻が起こりそれが一点に集中されて私たちめがけて放たれてきた。

その射線上には士郎やみんなもいる。ここは耐え切らないといけない！

ならばここが押し切る時！

私はアルトリアと念話で会話をして、

「いこう！ アルトリア!!」

『ええ、シホ！ 今度こそ打ち勝ちましょう！』

「約束された勝利の劍!!」

黄金の斬撃を迫ってくる天地乖離す開闢の星に向けて放つ。

そしてそれは衝突してすごい衝撃波が余波で発生する。

私とアルトリアの魔力の融合によって高められたエクスカリバーだ。

過去のように打ち負けはしない！

その意気込みで斬撃の威力を魔力を上乗せしてさらに高める。

「ふん…押し比べか。ならばせいぜい耐え切ってみろ！ はあああー!!」

「ッ!?!」

突如としてさらに威力を上げた天地乖離す開闢の星によって私のエクスカリバーが押されてきている。

「ただ、負けられない！」

さらに威力を上げようとしたけど、

『シホ……! このままでは私達の魔力が先に尽きてしまいます!』

「でもっ……! このままじゃ!」

「はははははっ! どうした? その程度なのか? ……まあ、それも仕方がない。今の我は言峰から無限に魔力を送られてきている。だから故に撃ち負ける道理がない!」

「ッ!!」

「さあ、さっさとくたばるが良い!」

さらに威力が上がりに埃クスカリバーは飲み込まれて私はそのまま天地乖離す開闢の星の直撃を受けてしまい、そのまま吹き飛ばされてしまった。

「うわああああー!?!」

何度も地面を跳ねていきようやく止まったと思ったならそこにはなのは達が駆け寄ってきていた。

私はなんとか立ち上がろうとするが、

「くっ…!? 腕が…!」

腕が天地乖離す開闢の星の影響で焼け焦げてしまっていた。

これではもう剣が握れない。

見ればアルトリアも強制的にユニゾン・アウトしてしまったのか私の隣で気絶している。

「シホちゃん!」

「シホ…!」

「シホちゃん! 大丈夫?」

「…ええ。なんとか命には別状はないわ。でも、アルトリアもこの様じゃこれじゃもう

戦闘に介入できないわね…」

そんな時だった。

un^無limited^限の^のblade^剣で^で出^出来^来て^てMy^こwhole^のlife^のwas^は”

士郎の詠唱が完了して世界は塗り替えられていく。

私の時とは多少違うがそれでも同じような空間に変わっていた。

「…ほう。贗作者^{フェイカー}、これがお前の自慢の力である固有結界か」

「そうだ。この空間でなら私はお前を圧倒する…！ シホ、ご苦労だった。後は休んでいろ」

「…ええ、わかったわ。頼んだわね、士郎…」

「ああ…」

ギルガメッシュは驚きの顔をするもすぐに冷静を取り戻し、笑みを浮かべて、

「ふふん。その程度の小細工で我に対抗できると本気で思うのか？ その思い込み、笑止千万！」

「それは受けてみてからのお楽しみだ。——いくぞ英雄王。武器の貯蔵は十分か？」

「ほざいたな！ 雑種!!」

そこから士郎は一本の剣を抜き放ちギルガメッシュへと呐喊していく。

抜けて空中に浮いた剣達もそれに追尾する。

士郎は私の魔術回路の四倍の数の108本にまで増えている。

一本一本もかなり精錬されているから固有結界を保つ時間はかなりあるだろう。

でも、それでもギルガメッシュは笑みを崩さず、

「その王を舐める態度、さすが贗作者^{フェイカー}と褒めてやるといいところだが…我の手にはこれが握られていることを忘れるな？」

そしてギルガメツシユは乖離劍を構えて、

「——世界を砕け。天地乖離す開闢の星……!」

乖離劍から衝撃波が発生してそれは世界に広がっていき、空にヒビが入っていきさらに地割れが起きて劍の丘は沈んでいき世界は砕けていく。

「そんな、バカな……!」

士郎はもちろん私達も衝撃を受けているだろう。

固有結界は世界を保つことができなくなりその外観を崩していく。

そして後に残ったのは、元の大空洞の中だった。

士郎も油断は全然していなかったのだろう。

しかし、それをギルガメツシユは上回ってしまった。

やはり対界宝具の威力はすさまじいの一言に尽きる。

それは私達の常識を尽く打ち破ってくれた。

「あははははッ! どうした贗作者! 先程までの威勢はどうしたのだ?」

「くっ……おのれ!!」

「皆の者! 陣形を立て直すのだ! 奏者達に奴を近寄らせるな!」

それでネ口達は仕切り直しのように体勢をそれぞれ立て直す。

「ここは、やっぱり私が本気を出すしかないかしら? シホもシロウも切り札を崩され

ちやつたから…」

ファニーヴァンプが一步前が出る。

「あかん！ ファニーヴァンプ！ 奴は強いんよ！」

「それはわかつているわよ、はやて。でも、やらないわけにもいかないでしょ！！ 星の息吹よ…」

ファニーヴァンプが目をつぶって両手を水平に伸ばし宝具、千年城ブリュンスタッドを展開しようとする。

「真祖の本気か…よい。ならば我を圧倒してみせよ」

「そっちが待つてくれるなら私はそれに応えて倍以上の力でお見舞いするわ!!」

そして世界は再び様変わりしてお城の中へと姿を変える。

「本気で往くわ!!」

その空間の中でどこからともなく幾重にも鎖がギルガメッシュを縛ろうと迫る。

だがそれは、

「縛れ、天の鎖よ！」

鎖はギルガメッシュが出した天の鎖によって阻まれた。

「まだまだ！ この中でなら私は本気を出せるのよ！」

高速の勢いでファニーヴァンプはギルガメッシュへとせまりその爪でもって何度も

切り裂こうとする。

しかしそれでもギルガメツシュは余裕を崩さず腕と爪をなんなく回避し続け、

「どうした？ 真祖の本気というのはそんなものなのか…？」

ありふれる魔力でもって移動力を底増しして回避し続ける。

「当たり前なさいよ！ この金ピカ!!」

「誰がそんなものに当たるか…！ さて、どうして——…」

「——その慢心が貴様の命取りだ…！」

殺人貴がギルガメツシュの背後に突如として現れ魔眼を解放しナイフを迫らせる。

「志貴！ 同時に行くわよ！」

「ああ！ アルクエイド！」

爪とナイフ、それが交差してギルガメツシュは左腕を切り裂かれる。

「ぬうっ!!」

それで初めてギルガメツシュはその顔を歪ませる。

「おのれ！ 魔眼使い！ 我の至高の腕を切り裂くか！ その罪、万死に値する!!」

「黙れ！ これは戦いだ！ だから貴様はここで俺に分割される運命にあるんだ!!」

「今がチャンスだ！ 皆の者！ 仕掛けるぞ!!」

『おう!!』

全員が声をあげて、

「騎英の手綱!!」

そしてライダーは騎英の手綱を発動して呐喊する。

「突き穿つ死翔の槍!!」

ランサーは対軍宝具の突き穿つ死翔の槍を放った。

「喰らいなさい! 聖王…鉄槌砲!!」

オリヴィエ陛下はその手に七色の光を宿し、聖王鉄槌砲を放ち、

「我が八極に二の打ち要らず——ふん、はあっ!!」

李書文は透化させてギルガメツシユの背後へとせまり无二打を叩き込む。

「さあ、舞うがよい! 喝采は万雷の如く!!」

ネロは喝采は万雷の如くを放ち、

「手加減しませんから! 炎天、氷天、密天! 三呪相入り乱れ攻撃!!」

キャスターは三種の呪相を一気に放った。

「この好機! 逃すか!」

「切り裂かれなさい!!」

それに加わる形でフアニーヴァンプと殺人貴も攻撃をした。

ほぼオーバーキル級の攻撃の嵐にギルガメツシユはさらされて、

「ぬおおおおおー……!!?」

そのすべての攻撃がギルガメツシュに尽く叩き込まれていき最後には…、

「…お、おのれ。我をここまで追い込むとは…貴様ら、ただではおかんぞ!」

体中に穴があいてほぼ満身創痍のギルガメツシュが、しかしまだ地に足を立たせていた。

「おいおい…俺のゲイ・ボルグを食らってるんだから死んでいてもおかしくないはずだぜ?」

「儂の一撃を受けて死なんとは…」

ギルガメツシュのあまりのしぶとさに数名かは呆れの表情をしている。

もうギルガメツシュはおまけという感じで利き腕も殺人貴に切り裂かれて天地乖離す開闢の星も振るえない。

後は止めを刺すだけだという感じになり、

しかしそこにどこにいたのか言峰綺礼が姿を現す。

「…お前がここまでやられるとはな。英雄王…」

「言峰…! 今の今までどこで油を売っていた?! 早く令呪で我的傷を治せ!!」

ギルガメツシュの発言に一同は今一度身構える。

「…その必要はない。ギルガメツシュよ、この場で自害せよ…!」

「なんだとツ!? 言峰、貴様あツ!」

ギルガメツシユが叫ぶが感情とは裏腹に勝手に王の財宝ゲイト・オブ・バビロンが展開し、中から様々な効果を持った原典である宝具がギルガメツシユに殺到する。

それによつて断末魔の叫びを上げながらギルガメツシユは先程まであんなにしぶとかつたというのに呆気なく消滅した。

「…ふむ。今の今までよく私を楽しませてくれた。さらばだ、ギルガメツシユよ…」
「ギルガメツシユを、切り捨てた…?」

私は言峰の行動がまったく理解できなかつた。

そして言峰綺礼は私達の方へと手を後ろで組み体を向けてきた。

「…さて、では最後の戦いといこうではないか。諸君…」

そう、宣言した。

第七十九話

『聖杯大戦の終焉。そしてこれから』

…』

「…さて、では最後の戦いといこうではないか。諸君…」

言峰綺礼は静かに、しかし全員の耳に届くようにそう宣言した。

なのはは言峰綺礼に対して恐怖を覚えているようで同じ感想を抱いているフェイトと手を握り合っている。

はやてにも守護騎士達が守りに徹している。

すずかとアリサも言峰綺礼のその不気味な笑みに顔を引きつらせている。

シホと士郎はその目を憎悪に染める。

そしてランサーが前に出て、

「…てめえは正気か？ 唯一の頼みの綱であるギルガメツシュを殺すなんてよ？」

「私は正気のもりだが。ランサー」

「ならばすぐにてめえを殺せる奴らがここに集まっているんだってことも分かるよな？」

？」

「ああ、承知だ」

「なら………。いや、てめえに問いはもう無意味なものだな」
ランサーはため息をついて、

「じゃ最後に質問だ。…てめえ、なんの力を手にした…?」

「無論聖杯の力だ」

「そうかよ。なら、もう手加減はいらねえってことだな?」

「分かっているではないか…? しかし、少しばかり私の話に付き合え。そこの衛宮士郎にもぜひ聞いてもらいたい…」

「…なんだ?」

警戒しながらも士郎は言峰に問いかける。

何を話したいのだと。

「私は前の世界で一度は衛宮切嗣に敗れた。しかし聖杯の泥の力で心臓を失いながらも生き残った。

そして十年後に起きた第五次聖杯戦争…その戦いでは私達は衛宮切嗣の意思を継ぐ衛宮士郎を殺した。

そして聖杯に私の中でくすぶっていた答えの意味を問いただした。

なぜ、私はこうも一般の人とは違うものなのかと…。

どうして人の不幸を愉悦として感じてしまうのかを…。

しかし、聖杯はどう判断したのか知らないが私の願いとは裏腹に世界に泥を撒き散らし世界を滅ぼした。

…そして私は今度こそ答えを得るために新たな世界で再度アンリ・マユを産み落とそうと考えた。

今度こそ絶対の問いかけで持つてして私の答えを得るために…」

そう言つて言峰綺礼はその顔に笑みを刻む。

「それだけのために、そんな事のためだけに世界を滅ぼしたというのか、貴様は…？」

「ああ…。貴様がそんな事と評するだろうが私にとつてはとても大事なことなのだよ。私はたとえ世界を犠牲にしてもその答えを知りたい…！」

「この外道が…！」

「ああ、いいだろう。答えを得るためには外道だろうとなんだらうとなつてやろう。

しかし、まだ死なん。

まずは貴様達を殺してから聖杯を降臨させまた見るのだ。あの愉悦の瞬間を…！」

言峰は恍惚とした表情をして笑みを浮かべた。

そしてもう言峰綺礼とはどんな話をしても埒があかないと判断したサーヴァント一

同は、

「ならば、その答えを知る前に貴様はここで葬る！」

ネロが剣を構えた。

「貴様の道楽に付き合う気なんぞ端からねえんだよ！」

ランサーが槍を構え、

「あなたがいては世界に平和がやってきません。よってここで打倒させてもらいます」

ファイターが拳を構え、

「あなたの思想は歪んでいます。ですからスズカ達の未来のためにここで倒させてもらいます」

ライダーが鎖釘を構え、

「あなたの事は私、とつても嫌いです。だから死んでくださいな♪」

キャスターが呪符を構え、

「…同じ格闘家としては残念でならないな。貴様の息の根は儂が止めてやろう」

李書文が残念そうに、だが殺す決意をして拳を構え、

「貴様を放っておくことは害にしかならない。殺しきる…！」

「あなたの願いのために世界を滅ぼされちやかなわなからね！」

殺人貴とファニーヴァンプが爪とナイフを構える。

全員が構えをとつたことを確認した言峰綺礼は、

「ならば貴様達を倒すのも私の役目だ！ いぎ、いくぞ!!」

その体から黒い魔力の瘴気を発生させて周りの空間が陰気な空間に変わっていく。そして次の瞬間には言峰の前には六体の黒い影が出現する。

その影はまるで本当に闇の底ではないかと思うくらい黒いもので顔は真っ黒い能面だった。

しかしその姿、形、輪郭…それらは今まで打倒してきたサーヴァント達と同じものだったのだ。

それはやつてくるだろうと思っていた全員はそれでやりきれない気持ちで思わず歯噛みする。

「さあ、サーヴァント達よ。こいつらを葬るのだ！」

そうして黒化したサーヴァント達は一斉に仕掛けてくるのだった。



「クラウス！ 正気に戻ってください！ クラウス!!」

「ファイター。無駄です。彼らはすでにただの人形…心もすでにありません…」

かつて自分もそうなった経験があるライダーとしては複雑の極みだった。

「だから遠慮なく倒してしましましょう。それが彼らのためになります！」

「……………はい！」

ファイターも決断をしてクラウスを倒しにかかった。

「デイルムツド！ てめえも損な役回りだな。せつかく悔いなく消えたっていうのに操られちまうなんてよ！ だから俺が今度こそ冥途に送ってやるぜ！」

ランサーはデイルムツドへと槍を突きにかかった。

「セイバー！ お前とまた戦うことになるとは…だがもう余は負けられんのだ！」

ネロとセイバーはまたしても剣を交えたがネロは残念な気持ちになっていた。

これがちゃんとした戦いなら楽しかったものをと…。

「キヤスター！ 今度こそ迷わず座へと送ってやるわ！」

「アルクエイド！ 同時に仕掛けるぞ！」

「ええ、志貴！」

フアニーヴァンプに殺人貴は同時にキヤスターへと挑んでいく。

「貴様の相手は儂がしてやろう！ バーサーカー！」

李書文はバーサーカーへと挑んでいった。

「先ほどより動きが短調でやりやすいです！ お覚悟を！」

「キヤスター。手伝います！」

キヤスターはギルガメッシュへと挑んでいく。

さすがに一人ではきついものがあるが先ほどのように威圧感はなくあんまり宝具も射出してこないのだから呪術でやり過ぎしている。

ライダーもクラウドをファイターに任せてギルガメッシュへと挑んでいく。

そしてそれぞれの戦いが行われている中で士郎が言峰へと向かっていく。

「言峰、綺礼…!!」

「こい、衛宮士郎よ。私の手でまた引導を渡してやろう!」

「誰が…! ここが貴様を倒す!!」

干将・莫耶を投影して士郎は言峰綺礼にかかっていく。



Side シホ・E・S・高町

くっ…! 腕が使えれば私も戦うことができるのに!

「シホちゃん! 無茶しちゃダメだよ!」

「そうだよ。シホは腕が焼き焦げているんだから…!」

なのはとフェイトがそう言ってくれるけど、でも言峰は油断ならない相手。

一人でも戦える人員はあった方がいい。

そこにアルトリアが目覚まし、

「…シホ。手を…、アヴァロンを起動します。ですが、聖杯を破壊するのは私達の役目です。だから今は耐えてください」

そう言つてアルトリアは私の腕をアヴァロンを起動して癒す。

「…わかつたわ。その時まで私は待っているわ。アルトリア、もう一回ユニゾン…いける?」

「はい。一回だけならエクスカリバーも放てるでしょう」

「そう…。それならみんなが勝つのを祈りましょうか」

「そうやね!」

「うん!」

「そうね!」

それで全員でみんなの戦いを固唾を呑みながら見守ることにした。

そしてまずランサーを見て、

「あの時より楽しめねえな…。見ていて遣る瀬無くなつてくるからさつさと決めるか…刺し穿つ死棘の槍!!」

デイルムツドへと槍を構えて呐喊し楽々と貫いていた。

ランサーはつまらなそうな顔をしながら、

「次があるならもつと燃え上がろうぜ…?」

消えていくデイルムツドにその声をかけていた。

そして次はオリヴィエ陛下を見て、

「クラウス…あなたをこれ以上苦しめません…。だから、決めます!」

「■■■■■■ー!」

クラウスが突っ込んでくるが構わずオリヴィエ陛下は拳を構えて、

「もう一度消え去りなさい! 聖王…鉄槌砲!!」

七色の光に巻き込まれてクラウスはまた消滅していった。

「もう…これで苦しむことはありませんね」

オリヴィエ陛下は辛そうに顔を俯かせた。

そして次は李書文を見る。

そこでは李書文が拳を構えて、

「見ていていいものではない…。よって儂の拳で朽ち果てよ。七孔噴血——巻き死ねえ!!」

それによってランスロットは頸動脈を貫かれてそのまま消滅した。

「今度こそ迷うな…」

そう言つて消えていくランスロットに声をかける。

そして次にファニーヴァンプと殺人貴を見る。

そこでは二対一の戦いを繰り広げていた。

ヤガミが連続で砲撃を放つがそれを殺人貴が殺してファニーヴァンプが切り込みを入れてる。

「さて、はやての写し身だからって手加減しないわよ！」

「迷わず逝かせてやる！」

そしてファニーヴァンプが挿んで空中に打ち上げたのを合図に殺人貴が空に飛び上がり魔眼を発動して十七分割されていった。

こんなところで宝具を使うことないけど、倒したのだからいいのかな…？

そしてネロを見る。

そこではやはり剣のぶつかり合いが発生しているがやはりネロは残念そうな顔をして、

「セイバーよ。やはりそなたには先日ほどの力を感じられない。

だから…ここで葬る。許せ！バリテーヌ・ブラウセルン 喝采は万雷の如く!!」

それによつて幾度も切り裂かれたセイバーは呆気なく消滅した。

「前の方が手応えがあつたぞ…？」

悲しそうにそう呟いていた。

これでギルガメツシュ以外の敵は排除したことになる。

後はギルガメツシュと言峰だけになった。

それで戦っているキャスターとライダーを見てみると、黒化して思考力がなくなつたとはいえさすがギルガメツシュ。

二人を圧倒していた。

それでも致命傷はなく二人はなんとか耐えていた。

しかしそこに士郎が吹き飛ばされてきた。

「ぐっ…!？」

「ご主人様!？」

「どうしたのだね、衛宮士郎？ お前はこれほどの力しかないのかね？」

「小聖杯の力でサーヴァント並みの力を手にしている時点で反則ではないか！」
思わず士郎が悪態をつく、がそれだけ士郎には荷が重いものなのだろう。

言峰は黒化しているギルガメツシュの横に立ち、

「さあギルガメツシュ。こいつらに止めをさすのだ！」

「……………」

言峰の命令に、しかしそこでギルガメツシュの動きは急に停止し止まる。

何が起こったのかと思つたが、突然ギルガメツシュの真つ黒な能面にヒビが入り砕けるとそこには憎しみの表情を浮かべているギルガメツシュの顔が出現する。

「コトミネー！ 貴様だけは許さんぞ……！」

「なっ……!? ギルガメツシュ、まだ意識が残っていたのか!?」

「ふん！ 我を完全に殺したくばあの三倍は持つて来い!!」

そして乖離剣を構えて、

「最後のあがきだ。受け取れよ、コトミネ……！ 天地乖離す開闢の星……！」

「ぐふう……!!」

それによつて言峰は体の中心を貫かれていき、心臓部も削り取られて小聖杯に悪影響が起きたのか言峰を中心に黒い孔が出現した。

それに言峰の体は少しずつ吸い込まれていき、ついでにその場に残っているギルガメツシュも一緒に吸い込まれていく。

ギルガメツシュは言峰の体を掴んで離さず逃さないように捕まえている。

「ふっ……つまらない終わり方だが、まあよかろう……」

「やめろ！ 離せギルガメツシュ！ 私は、まだ答えを得ていないのだ！ こんな、とこ

ろでえ……!!」

「言峰……貴様はやりすぎた。これも報いよ……癪だが一緒に冥途まで付き合つてやろう」

「ギルガメツシユツツツ!! あああああー!!!?」

そして完全に言峰とギルガメツシユは黒い孔に吸い込まれていつて呆気ない幕切れを迎えた。

あたりは静寂に包まれていた。

でも、これで戦いは終わったという実感がもてたのかなのは達は「やったー!!」と喜びの声を上げるのだった。

私も「やれやれ…」と眩きながら腰を地面に落とす。

これで終わったんだ。

だけど、アルトリアが私の隣に立って、

「さあ、シホ。私達の役目、大聖杯を破壊しましょう…あれはあつてはならないものなのです」

「そうね。アルトリア」

そして私達は再度ユニゾンをして、エクスカリバーを構えて、

「みんな、いいわね…?」

壊す前にサーヴァント全員に壊していいかという問いをする。

それにサーヴァント全員は無言で頷く。

ならもう容赦はしない。

魔力を溜めていきエクスカリバーが光り輝いていく。

そして、

「約束された勝利の剣——!!」

最後の魔力をこめて振り下ろして大聖杯を完全に破壊する。

これでもうこの世界でも聖杯戦争が起きることはないだろう…。

後に聖杯大戦事件と呼ばれる事になるこの事件はこうして幕を閉じたのだった。



…それからというもの。

残りのサーヴァント達は全員現界を続けている。

大聖杯のバックアップが無くなったとはいえ、この世界は私達魔術の世界と比べるとマナがかなり濃いのが原因なのか宝具を乱用しない限りは現界していられるのだ。

しかしネロやファニーヴァンプ、ライダーは宝具を使っても一日一回が限度だろう。

その分キャスターやランサーは比較的宝具は燃費が良く魔力消費は少なく使いやすいので結構何回か余力はある。

殺人貴とアサシンはそもそも宝具というより保有スキルに近いものだから魔力消費

はさして問題はない。

オリヴィエ陛下だけは、まあ…令呪を使ってブーストでもしない限りは使えないだろう。それだけ私の予想では強大な宝具なのだから。

そしてさらにお得なのが霊体化も実体化も魔力的にさして問題ないくらいである。やっぱりの世界は異常ね…。

それで見んながみんなマスターである私達についていき支えていく事を決めているようである。

それからリンデイさんの話によると、サーヴァント全員はもちろん、そして私は投影魔術と固有結界はバレなかったものの結局第二魔法、第三魔法の存在がおおやけにバレてしまった。

それではやてと同じく「歩くロストロギア」という不名誉な認定を受けてしまったらしい。

さらに私とアルトリアのユニゾンによる出力が今回の戦いでかなりおおやけになってしまった。

だから緊急事態並みの戦いが無い限り上の承認がない以上ユニゾンができないようにユニゾンリミッターを私はかけられる事になってしまった。

…ま、こんなサーヴァント級の戦いなんてそうそうしないんだからその判断は正しい

かもしれない。

それに完全に禁止されたわけではないのだからよしとしよう。

アルトリア単騎でも十分強いしね。

そして事後処理として今回黒い孔に巻き込まれて消滅した言峰綺礼に協力したマスタードが、アクア・アトランテイクとノア・ホライゾンの二名が死亡した…。

それとまずフィアは操られていただけなので特になにもお咎めはないらしい。

次に三菱彩は管理局の言う事に反省の色も見せず従わなかったらしくそのまま幽閉だということになった。

そしてトーラス・スタリオンも切られた腕の傷が原因で錯乱したらしく何を言っているのか支離滅裂で分からないので精神科にかかりながらも刑務所に入っているとの事。

だが、ミゼ・フローリアンだけは自分の罪を前向きに償っていく想いがあるらしく、保護観察処分でリンデイさんの話ではすぐにでられるだろうという話。

彼女には将来的に設立されるだろう魔術事件対策課というものに入ってもらいたい心算らしい。

そして私はどうと…。

「シホ。また公園にいきませんか？ 歌を聴かせてください」

「そうね。いいわよ、アルトリア」

「奏者の歌声か。聴いてみたいぞ」

「あはは…。あまり持ち上げないでね？」

《シホ、あまり謙遜しないの。私のお下がりだつて言うけどシホの歌声はもう十分本物よ。だから自信持つていいよ？》

「イリヤも…。もう…」

それで私は公園で動物達に囲まれながらローレライを口ずさむ。

ネロも私の歌声に感動しているようなのでよかった。

さて、

「大師父はなにをしているのか分からないけど、私達もこれからも頑張つていこうか？」

「そうですね、シホ」

「どこまでも着いていくぞ。奏者よ」

《シホは私達が支えていくからね！》

みんなに支えられていけば私も大丈夫だろう。

そうしてもうすぐ春がやってくる。



…どこか人知れず闇の空間で、一人の少年が黒い孔から吐き出された。

少年は姿こそ裸だったがそれでもその体から溢れる魔力はすごいものがあつた。

「…ふう、なんとか “片割れ” である僕と、 “彼らの記憶と霊格” だけでも形を変えて生き残らせることができましたね」

少年はそう呟き、

「さて…せっかかくこうして “受肉” し新たな体を得たのですから僕もこの新世界を楽しむとしましょうか」

少年は旅立とうとしている。

しかし、そこに…、

「もし…その少年よ」

「…ん？　なんですか、お爺さん？」

「せっかくだ。儂と協力をせんかの？　この世界に新たな組織を作る仕事だ。そのこのトップになる気はないか…？」

「面白そうですね…。新たな楽しみができました」

「うむ。ではこれからよろしく頼むぞ」

「ええ」

少年はその手に五枚のカードを並べて眺めながら老人：「宝石翁」の手を握った。

そして少年の持つカード一枚一枚からも膨大な魔力が溢れているのだった。

こうして少年は新たな居場所を得た。

シホ達との道が交わるのかはまだ、分からない。

第八十話

『外伝10 遅れ馳せバレンタ
イン』

…聖杯大戦が終了して、色々事後処理もあつてごたごたしていたけどそれもようやく落ち着きを見せた。

そんなある日になのはが手を「ポムッ」と叩いて、

「もう2月14日から日が過ぎちやっただけどバレンタインをしない？ シホちゃん」

「バレンタイン…？ ああ、そういえば聖杯大戦のせいでそんなイベント事も見逃し

ていたわね…」

シホがそんな余裕もなかったらしく今思い出したかのようになのはに反応を返す。

「奏者よ。バレンタインというのはなんなのだ…？」

「えつと、ネロ…バレンタインっていうのはね…？」

それでアルトリアとネロとオリヴィエにシホはバレンタインデーの事について説明をした。

「そんな行事があるのですか…」

「ええ。まあ、日本だけの独自の習慣もあるけどね」

「ですがそうなるともう行事は過ぎてしまいましたから少し急がないといけませんね。それでなのは誰に作ろうと考えているのですか…?」

「うん。もう時期は過ぎちゃったから友チョコでだけど、

シホちゃん、すずかちゃん、アリサちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃん、はやてちゃん、ヴィータちゃん、ファイアちゃんにチョコレートをあげようと考えているんだ。

もちろんオリヴィエさん達にも作るね！

そして後はお兄ちゃん、お父さん、ユーノ君、クロノ君、士郎さん、ザフィーラさんくらいかな？」

「…なのは、さすがに多くない？ 1日で出来るの？」

「うん！ お母さんに翠屋のバレンタインデーセールの子ョコレートの残りがあるか聞いてみるね！」

「そう。それじゃ私も作ろうかしら…」

それで急遽なのはとシホは友人達にチョコレートを作ることになった。

だがそれをどこで聞きつけたのかは分からないが各家でも少し遅れのバレンタイン

デーの企画が立っているのをなのはとシホは知らなかった。



ハラオウン家では、

「リンデイさん」

「ん…？ なに、フエイトさん？」

「えつとですね、なのはとシホがお家で私達にバレンタインのチョコを作っているって
いう耳寄りな情報がある人から教えてもらったんですけど…まずバレンティンってな
にかわかりますか？」

「それは私も知りたいです！」

アリスアも聞き耳立てていたらしく話に参加してきた。

「そうね…」

それでリンデイはネットでそれを調べてみた。

ミッドチルダにも似たような風習はあるが完全に同じと言うわけではないので調べ
るのは骨が折れたらしいが調べあげた。

「どうやら大切な人や友人、そして好きな人とかにもやるらしいわね」

「大切な友人……」

「好きな人か〜」

フェイトは少し考え込み、アリシアは楽しそうに笑みを浮かべる。

「それじゃやっぱりなのはとシホ、アルフにすずかにアリサ、はやてにアリシア、ファイアット、ユーノ、クロノ……それにランサーにかな……」

「私もフェイトに作るよ!」

「アリシア……」

「帰ったぜー!」

と、そこに私服姿のランサーが家に帰ってきた。

両手には竿とカゴが握られている。

どうやら海釣りをしてきたのだろう。

「あ、ランサー……」

「……ん? どうした、マスター? そんな熱い視線を俺に向けてよ」

「そ、そそそんなことないよ!」 そ、それよりちよつとしたらランサーに渡したいものがあるから楽しみにしていてね?」

「お……? なにか知らねえが楽しみにしているぜ」

「うん!」

フェイトのそのまだ幼く淡い想いは、いつかは届く時は訪れるかは、まだわからない。



八神家では、

「…さて、家族会議や。しかし今回は女性だけや」

はやてのその一言でもう何回開かれたか分からないが家族会議が開かれた。

言葉どおり女性だけの会議だが。

話は変わるが八神家はもう大所帯家族になった。

最初ははやてだけだったので一人だけでは少し広い家だった。

だが運命だったのか最初は士郎がやってきてその後にはヴォルケンリッター四人が出

現し、悲しい運命も乗り越えリインフォースという新たな家族も加わった。

そしてさらに聖杯大戦を終えてキャスター、アルクエイド、志貴のサーヴァント三人

も新たに加わり気づけば大家族になっていた。

ここにさらに一人末っ子が生まれる予定なのだから将来的に人数にして11人にま

で増える予定だ。

そして未来的な事を言えばここにさらに赤い融合騎までやってくる。

だから足長おじさんであるグレアム元・提督もかなり搾り取られてしまうだろう。救いがあるとするれば全員管理局で働き口があるというところだ。

でなければかつての四日間の衛宮家のようにエンゲル係数が限界突破して毎月赤字になってしまう。

この中で大食らいがないのは、さてどうなのだろう…？

閑話休題

「…今回の議題は少し遅いけどある筋からの情報でバレンタインの話や。せつかく士郎や志貴、ザフィーラには用をだして出ていかせたんやからさつきと話を決めよか！」

「あー、はやて。それ私知ってるよ。好きな人にチョコをあげることだよね！ 私は志貴に当然あげるわ！」

「その通りや、アルクエイド。それと友達にやるのもありなんよ？」

「そうなのか、はやて…？」

「ヴィータはなのはちゃん辺りにあげるのはどうや…？」

「なんでなのはにあげなきやいけないんだよッ!？」

ヴィータは大声を上げさんざん「ありえねえー!」と喚いている。

「リインフォースとキャストはもちろん士郎にやるんやろ？　ま、私も当然家族としてやるけどな」

「当然です！……ここは鈍感なご主人様マスターには惚れ薬でも調べて仕込みますかねえ？」

「なっ!?　キャスト！　それは卑怯だぞ！」

リインフォースがそれに反論の声を上げる。

「それに勝負は正々堂々とやると二人の間で決まっただろう!？」

「そうですねー。じゃ今回は惚れ薬は諦めるとしましょうか？」

よよよとわざとらしくキャストは泣く仕草をするがやはり油断ならない。

それを実際やろうと思えば本気で惚れ薬を調合しそうで怖い。

リインフォースは焦りに駆られていた。

「…リインフォースも大変だな」

「私もチョコ作ろうかしら…?」

シグナムが苦勞しそうだという思いでつぶやくが、そこに静かに呟く八神家の決戦兵器(笑)。

「いや、シヤマル。おまえはまずは味見もしろ。でない和最悪三人が死ぬぞ？」

「あー！　シグナム、失礼よ！　私だって士郎さんのおかげで料理の腕は上がっているのよ!？」

「……………士郎は頑張るよな」

ヴィータは落ち着いたのかシャマルをみっちり鍛えている士郎に同情の念を抱いた。ここにもし志貴付きの寡黙なメイドだった人がいればシャマルに料理の腕で同情しただろう。



バニングス邸では、

「鮫島！ すぐにチョコレートを用意するわよ！」

「はい。アリサお嬢様！」

二人が親の分も含めて手作りでチョコ製作に精力を出していた。

「呵呵！ アリサよ。励んでおるな」

「当然よアサシン！ せっかくのイベントなのに聖杯大戦のせいで日にちが過ぎちゃったんだから急いでみんなの分を作って渡さなきゃ！」

「ほうほう…」

「もちろんアサシンの分も作っているんだから楽しみにしてなさい！」

「それはじつに楽しみだ。ならばワシのために作ってくれると？」

「勘違いしないでよね!」 みんなと同じ分を作っているだけなんだからね!」

「…これが俗に聞く『ツンデレ』という奴か。いや、実に堪能させてもらった」

「呵呵呵!」 とアサシンは豪快に笑った。アリサは顔を真っ赤にして「し、知らないんだから!」とそっぽを向いてしまった。

アサシンももうこのやりとりは慣れたようでさらに顔に笑みを刻んでいたのだった。



月村邸では、

そこではさすがと忍がノエルやフアリンに習いながらチョコを作っていた。

「スズカ、頑張ってください。怪力持ちの私では役に立てませんから応援だけでもします」

「うん。ありがとね、ライダー」

「でも美由希ちゃんも耳寄りな情報を教えてくれたものね」

そう、知り合い全員に情報をリークしたのは美由希だったのだ。

「楽しむならみんなでも楽しもうよ!」 と、いう事で片っ端から連絡を入れたらしい。

「でもそのおかげで私もシホちゃんにチョコを渡すことができるよ!」

「そうね。私も結局当日はまだずか達が心配で心配で恭也に渡し損ねちゃったからね。ちようどよかったわ。」

「あ、だったらまた全員をうちに集めよつか！ それでチヨコの交換会をしましょうか！」

「それいいね。お姉ちゃん！」

「それじゃさつそく連絡よ！」

それで全員に連絡を入れる忍の姿がそこにあつた。

その際、シホ達はどこでバレたんだ…？ といった感想を持ったとかなんとか。



…そして数日後、月村邸に集められた一同は、

「さー！ 今夜は遅れたけどバレンタインデーよ！ だからみんな、盛り上がっていき

ましよう!!」

『わー！』

忍の言葉に全員が声をあげて拍手を送る。

「それじゃまずはシホちゃん！ あなたの渾身の力作を披露してもらおうわ！」

「まさか、こんな事になるなんて…もつと手を込んだほうがよかつたかしら…？」
そんな事を言いつつもシホはトレーを準備してもらい、どんと運ばれてくるチョコの群れ。

それは綺麗にラッピングされ、それを開けばそれぞれのチョコにしっかりとホワイトチョコで名前がチョコの表面に刻んであるなんともシンプルでしかししっかりと出ま上がっている仕様。

それにまず士郎（父）が、

「これがシホちゃんで作ったチョコレートか…」

「それじゃいただくがいいね？ シホちゃん」

「はい、どうぞ」

シホは笑みを浮かべてまず家族である士郎（父）と恭也がいただくことになる。

「むっ！ これは…まさかワインを使っているのか？ ボンボンか」

「ほんのりとしたチョコの味の中にしっかりとワインの風味があつて次には少し幸せな気分させられる…。さすがシホちゃんだ」

「お褒めいただきありがとうございます」

一礼をしてシホは次に他の男性陣に上げることになった。

「まさか、自分から貰うことになるとはな…」

士郎は元とは言え自分にもらうのは少し複雑の模様。

「ありがたくいただこう。シユバインオーグ」

ザファイラもうまそうに食べていた。

「それじゃいただくとしようか」

「そうだね、クロノ」

クロノとユーノもそれを味わい次には「うまい！」と言っている。

「確かにうまいな。こりゃ…」

「ああ、うまい。翡翠にも見習わせたかった…」

「呵呵。なかなかのものよ。酒が欲しくなったな」

サーヴァント男性陣も絶賛であるらしい。

そして次は友チヨコということで女性陣にも振舞われた。

「奏者よ。さすがの腕前だ。惚れ直したぞ！」

「さすがシホです。おいしいですよ」

「シホの作るものはうまいですね」

「さすがシホちゃん。私達の味のさらに先に行っているよ…」

「自信、少しなくすね…」

「やっぱりシホちゃんは生まれてくる性別が最初は間違えてたんやな。今の方が正しい

「姿や」

「お姉様、おいしいです！」

「シホちゃん、ありがとう！」

「さすが、やるわね…」

「おいしいよ、シホ♪」

「確かにギガウマだ」

上からネロ、アルトリア、オリヴィエ、なのは、フェイト、はやて、ファイアット、すずか、アリサ、アリシア、ヴィータと順に感想を述べていく。

なにげにはやては士郎の存在を否定しているのが効いたのか士郎はショックを受けていたのが印象的だ。

そしてシホも生まれた性別が間違いだったのだろうか？…と自問自答している始末である。

そしてお次はと続いていき、長いので割愛するが、

「はい、ユーノ君！」

「あ、ありがとう、なのは…」

なのははユーノにチョコをやつてとても喜ばれていた。

だがどこからともなく視線がユーノに突き刺さりユーノは冷や汗を流していた。

そして士郎（父）と恭也二人に「まだ娘はやらんぞ？」と言われて困っていた。

「ランサー、これ……」

「おう。ありがたく受け取るぜ？ お、うまいな」

「ありがとう、ランサー……」

フェイトはランサーにチョコをやる時に非常に顔を赤くしていたのが印象的だった。アリシアはそのフェイトの姿に「へー、そうなんだー……」と言う言葉を漏らしながらもクロノとかにあげていた。

エイミイも負けじとクロノにチョコをプレゼントしていた。

はやては八神家男性陣にチョコをあげて喜ばせていた。

ラインフォースとキャスターも「是非！」と士郎にチョコを受け取ってもらい喜び、だが士郎はまいていた。

アルクエイドも志貴にチョコをプレゼントし、「妹もシエルもない……！ 私って今は最高ね！」と呟いていた。

すずかもシホにチョコをあげて「うまいわよ、すずか」と言ってもらえて微笑んでいた。

その際、今回管理局本局にいたために唯一知らせもなく作る時間がなかったファイアツトは勝ち誇るすずかの姿に悔しがっていた。

忍は恋人の恭也にやつて「うまいぞ」と頭を撫でられてとてもいい笑顔を浮かべていた。

アリサは全員で食べられるようなチヨコを出してきて男性陣は食うのに苦労したとここに記載する。

そして最後にシヤマルによる最終兵器がご登場することになったのだが………ここは悲惨な事になったので書かないことにする。

こうして色々であったが遅れ馳せバレンタインデーは平和的に終了していったのだった。

第八十一話

『外伝11 今日から小学四年生』

Side シホ・E・S・高町

聖杯大戦も終わり、月日はすぐに経過して春になり私達も今日から小学四年生である。

なのはと二人でバス停まで向かうとそこにはフェイトとアリシアも乗っていたので近くに座った。

そうそう、アリシアも今年から四年生で私たちと一緒に聖祥に通うことになった。

それまでの期間、私達は管理局の研修などもあったが、アリシアはない学力を短期間で必死に勉強してなんとか私たちと同じく四年生になれた。

「私達ももう四年生だね〜」

「そうだね。なのは」

「私はいよいよ安心できたかな？ 聖祥に入るために勉強三昧だったけどやっとフェイトと一緒に通えるようになったんだから」

「アリシア…」

それでフェイトは少し頬を赤くする。

フェイトも嬉しそうであるのでよかった。

なんかプレシアのアリシアを蘇らせたかった気持ちもわかるかもしれない。

アリシアにはなにか癒しのようなものがあるからだ。

「でも聖杯大戦からの間、なにも事件が起きなくてよかったわね」

「うん。あつという間だったね」

「そうだね。本当に…。小学校と局のお仕事と、技能研修と資格試験…色々忙しいしね」

「うん！ でもなんか楽しいけど」

「…そうだね」

「あーあ…私も魔導師適性があったらフェイト達についていったのにね」

「アリシアはその代わりに魔術のお勉強があるでしょう？」

マリーさんの話ではアンリミテッド・エアの解析も進んでいるという話。

将来的にはアンリミテッド・エアとマグナ・スピアを元にして魔術回路に反応する魔術師のための魔術式デバイスっていう新機軸のデバイスが生まれていくっていう話ね。

士郎が使うブレイドテミスにも試験的に魔術式システムが埋め込まれているってい

う話だし。

ま、魔術式デバイスは魔術とその使う人を選ぶからほとんどのものがワンオフ機の特機タイプになるだろうけど……」

「それじゃすずかちゃんとアリサちゃんもデバイスを持てるってことになるのかな……？」

「二人が望めばね……。それにまだ二人は私たちと違って将来は決まっていなからね」

「すずかちゃんはシホちゃんについて行くと思うけどな……」

「え？　なんで……？」

「シホ、その鈍感さは治した方がいいと思うよ……？」

「うんうん！　フェイトの言うことには一理あるね！」

「アリシアまで……私って、そんなに鈍感……？」

それになのは、フェイト、アリシアは揃って頷いた。

くっ、悔しくなんかいいわよ……？

「それよりこつちでもあつちでもフェイトちゃんやシホちゃんと一緒に入れて私は嬉しいな」

「うん。私もなのはやシホと一緒にだと心強くて嬉しい……」

「にやは……」

「えへへ…」

それだにやらなのはとフェイトの間になにか空間が出来上がった。それによつて私とアリシアはいつもの事かという表情になった。

こうなつたら二人はどこまでもこの空間を続けていく。

「ランサーが不憫だねー」

「ま、そこはフェイトの将来の一つということだ…」

「シホつて自分のことは鈍感なのに他人のことだとすぐ反応できるよね…?」

「アリシア、なんかそれちよつと傷つくかも…」

私とアリシアでそんな取り留めもない会話をしているとなのは達が桃色空間から復帰してきた。

「あ、そういえばはやてちゃん…!」

「うん…メール来てた?」

「ええ」

「うんうん。今日の始業式には間に合わないけど明日からだつて!」

「七人とも一緒のクラスになれるみたいだし楽しみだな」

「うん!」

なのはもフェイトの言葉に嬉しそうに頷く。

はやてもなんとか退院はできたしまだ車椅子通いだけどそこはかたなく心配はないだろう。

なんせ八神家には屈強な人達が大勢いる。

前衛………シグナム、ヴィータ、ザファイラ、アルクエイド、志貴。

中衛………士郎、リインフォース。

後衛………はやて、シャマル、キャスター。

と、三種でそれぞれ得意な攻め方で万全に勤められる人員で溢れている。

その気になれば八神家で管理局の一部隊、いや数隊かとも喧嘩も売ることではできらるろう。

いや、これは実力ともに本気なことで。

はやてつて今では大勢の家族に支えられていいわね。

ま、私にも最優の二人のセイバー……アルトリアとネロがいるからなんとも頼りがいはあるけど。

ちなみに二人は今についてきていない。

そんな緊急事態というわけでもないので翠屋で今はオリヴィエ陛下もついでに一緒

に働いている。

余談だがアルトリアとネロとオリヴィエ陛下が時間がある時は翠屋で働きだしてからというもの客足がかなり伸びたらしい。

これがカリスマ持ちの所以か……という感じである。

特にネロは保有スキルに皇帝特権と黄金律もあるしすごいことになるだろう。

閑話休題

それからアリサとすずかとも合流して私達が乗ったバスは学校へと向かった。



その頃、はやては病院に通院していた。

『八神さん。八神はやてさんどうぞ』

「はい！」

はやては診療室に入り石田先生と会っていた。

「うーん、はやてちゃんすごいわよ。どんどん良くなってきているわ」

「ホンマですか？」

「足の感覚もだいぶ戻ってきているんじゃない？」

「はい。戻ってきてますね」

「うん。この調子でいけばすぐに全快しちゃうわね」

「えへへ。石田先生のおかげです」

はやては笑みを浮かべながら石田先生に感謝の言葉を述べる。

「ううん。はやてちゃんが頑張ったからよ」

「えへへ」

「発作もないから明日からは復学もできるし制服とか用具とかもう揃ってる？」

「はい。もうばつちりと！ 士郎とかがきつちりと揃えてくれました」

「士郎さんはマメな人だからね」

「でも、よく志貴と睨み合っている事が多いんで困っているんです。なんかやつぱり反りが合わないみたいで……」

「そうなの？」

「はい。前よりは関係も緩和したとは言っていましたけど……昔は切った張ったは何回もやったらしいです」

「あはは。おつかない親戚ね」

「でも、いい家族です」

「そう…。と、つととそれより話は戻るわね。しばらくは車椅子の通学だけ」

「あ、教室は一階にしてもらえるそうなので大丈夫です」

「さすが私立…融通が利くん」

「そうみたいです」

「…うん。立って歩けるようになるにはもう少し時間はかかるしリハビリはきつと大変だと思うけど、一緒に頑張ろうね？」

「はい…」

「ああ、そういえば士郎さんと志貴さんの話は聞いたけど他の人達…シグナムさん達とかはお元気？」

「はい。めちやくちや元気です」

…場所は変わって管理局。

そこではレティがシグナム、シャマル、士郎、ラインフォース達と会話していた。

「ではレティ。私達はこれで失礼します」

「うん。ごめんね。結局夜通し勤務になっちゃったけど…色々助かったわ。お疲れ様」

「いいえ、ありがとうございます」

「では失礼しました」

「あ、待つて士郎。あなたのデバイスだけとまだアンリミテッド・エアから引き継ぐ形で試験的に簡易型魔術式システムを積んでいるだけだからまた後で調整するついでに魔術について詳しく知りたいっていう話だからすぐに通つてね？」

シホちゃんとキャスターにもその旨は伝えておいて。士郎よりシホちゃんやキャスターの方が魔術の知識は豊富だから」

「了解した。善処する。…しかし、もうすでに管理局でも数名魔術回路を持つ者が出てきているという話だから大変になってきますね」

「そうなのよ…。幸いまだ持つ者が出てきただけで聖杯大戦事件ほど過激な魔術師は生まれていないのが不幸中の幸いだけ…」

「そこはやはり言峰綺礼の協力があつたからだと思えますが…」

「そうね。魔術師の資質がある子にはちゃんとした知識も学ばせないといけないから、だからシホちゃんやキャスター共々期待しているわよ？　士郎」

「ははは…了解です」

「それと話は戻つて、シグナムと士郎、ラインフォースはまた明日、ヴィータと一緒に武装隊への出向があるから時間と場所は大丈夫？」

「本日中におつて連絡があるそうです」

「はい」

「うん…シヤマルは明後日ザファイラを連れてきてね？ 支局の方にいつてもらうから」

「はい」

「それじゃ今日はゆつくり休んで。そしてはやてちゃんによろしくね」

『お疲れ様でした』

そう言つて四人は部屋から退出していった。

エレベーターに乗りながら、

「ふう…局のお仕事つて色々と肩が凝ることが多いわね」

「お前は内勤や医療班への出向が多いからな。気苦労も多いだろう…まあ、色々と重宝されていると聞いたが？」

「そうなのかな？ お仕事はちゃんと出来ていると思うけど。シグナムは最近なのはちやんとシホちゃんとファイアットちゃんと一緒なこと多いんでしょ？」

「ああ。あの三人は武装隊の士官研修生だからな。ファイアットはユーノと同じく司書も兼任するから大変だと言つていた」

「シホとなのは嬢も大変だろうに…。私のようにすぐに武装隊に入ることもなく小学校

も兼任しているからな」

「そうだな。主はやても小学校に通いながらも管理局に通うらしいからな。これから忙しくなるだろう」

「それとあの子等とはこの間ゆつくり話をした」

「どんなお話…?」

「シユバインオーグと高町とは取り立てて深い話ではなかったが多少なりと人となりは理解できた」

「ヴィータちゃんは相変わらずライバル心むき出しだけどね。なのはちゃんに」
「競いたい相手がいることはいいい事だ。色々な意味でな…」

シグナムがフツと笑う。

そこにシヤマルが笑いながら、

「シグナムにとつてのテストアロツサちゃんみたいにな…?」

「私は別にあれと競っているわけではないぞ…? 自力はまだだいぶ私のほうが上だ」

「はいはい。そうでした♪」

「正直になつたほうがいいぞ? 将よ」

「お前には言われたくないぞ。ラインフォース」

「うっ…それはだな」

「楽しそうだな、シグナム」

「士郎、お前ももつと周りの気遣いに気づけ」

「なにをだ…?」

「はあ…これだからこいつは…」

シグナムがやれやれとため息をつく。

「でも、どうしてヴィータちゃんはシホちゃんの方にはなのはちゃんのようにそんなに乱暴にならないんだろう…?」

「それはやはりはやてを救ってもらったからではないか?」

「それは士郎にも言えることだな。私をも救ってくれたからな」

「まあ…」

「そういえばヴィータとザフィーラは主はやてと一緒にだったか?」

「うん。一緒に病院に行っているはずよ。志貴さんも一緒にいっているらしいわ」

「アルクエイドとキャスターは…?」

「アルクエイドに関しては根っからの自由人だ。だから街で遊んでいるのではないか?」

それとキャスターは家で留守番だ。今は昨日からおこなっている耳と尻尾を隠す変化の特訓をしているらしい。今日中にも人間の姿で現れるんじゃないか?」

「そうか。いつまでも家の中で過ごさせるわけにはいかないからな」

「そうね。それは不衛生よ」

「キャスターが聞いたら泣くぞ：？」

それで四人は笑顔を出して笑った。

そして場所は戻って志貴とヴィータとザフィーラはと言うと、

「きゃー！ 可愛い！」

ザフィーラ（小型犬フォルム）は公園で子供達にいじられていた。

それを見守るヴィータと志貴。

実にのほほんとしている。

ザフィーラが何度かヴィータに思念通話で助けを求めてくるが、

「この子ってなんの犬？」

「えっと、ザフィーラってなんの犬だっけ：？」

ヴィータは志貴に思わず聞くが志貴も分かる訳もなく、

「さあ：？ 雑種じゃないか？」

志貴も無難な答えをしておいた。

「そうだな。まあ雑種ですね！」

「雑種なんだー！」

「やっぱり…?」

「雑種もいいんだよ? 丈夫だしねー」

「ザフィーラって名前なんだ! かつこいいね!」

「えへへ…愛想のない犬で…」

「(哀れな…)」

志貴は心の中でザフィーラに同情した。

「しかし、なんだかいい陽気だなー」

「それは頷けるな。平和というのはいいい事だ」

「ところでお兄さんは働いていないの…?」

「うっ!? い、今は休憩中なんだよ…」

「そっかー」

なんとか流したが志貴は焦りの表情をして、

「(…俺も士郎と同じく管理局に厄介になるかな? サーヴァントとは言えこのまま無職じゃはやてちゃんに申し訳が立たないからな…。アルクエイドにも相談してみよう)」

と、思っていた。



そして学校では四年生からフェイトの双子の姉として紹介し人気が出たアリシアがクラスメートに群がられている間。

アリサ達が春の陽気に眠くなるという事態に陥っていた。

「本当にいい陽気…」

「ううん…それはいいけど眠くなって困る」

「ファイトだよ、アリサ。明日からクラスメートのはやてに居眠りキャラだと思われちゃうから」

「あ、それは嫌…」

「シホちゃんは眠くならない…?」

「そうね…。こういう時は干したお布団で日向で横になって眠りたい気持ちになるわね」

「あ、その気持ちはわかるよ。シホちゃん!」

「…それって気持ちいい?」

「ええ、アリシア。前の時はよくイリヤと一緒に横になっていた事があつたんだ。

イリヤはすぐに眠りにつくんだけど眠る前に必ず私に魅了の魔眼で道連れにする事

が多かったのよ」

「シホ、それってかなり危なくない…?」

「え?　なんで…?」

「だってその間は無防備を晒しちゃうのよ?」

「…まあそうね。それでよくリンや桜に襲われそうになったっけ…」

シホが普通通りに話すが、

「…シホって実は結構無防備なのかしら?」

「ううん…どうなんだろう?」

「シホの無防備な姿かぁ…あんまり想像つかないね」

「私の時なら嬉しいけど…」

「すずか、あなた結構素直になつたわね…」

アリスがすずかの大胆な発言に顔を赤くしていた。

「あ、そうそう。今年ってまだみんなでお花見やっていないよね?」

「ああ…タイミングのいい日に雨が降っちゃったりとかで流れちゃってたね」

「お花見つてあれだよな?　桜を見ながらみんなでお弁当を食べる会…」

「ううん…要約しすぎな気がするけど、まあ大体あっているかな?」

「お花を見てのんびり楽しく過ごしたりとか…」

「過ぎ行く季節とか咲いて散っていく桜に風流を感じたりするのがメインの目的かな？」

「大人の人達はお酒飲んで騒ぐのがメインな気がするけどね」

「それは、どうだろうね…？　ちゃんと桜を楽しみにしている人もいると思うけど…」

「元・大人としてどうなのよ？　シホ」

「え？　えつと、そうね。実はあんまり経験がなかったり…学生の頃はよく姉替わりの人に無理やりお酒を飲まされていたけど…」

「ほら。やっぱりそんなものじゃない？」

「そうね…」

それでシホも押し黙った。

「ええつと…じゃあ今週末とかみんな予定とかどう？　場所はいつものところを私が抑えられるんだけど…」

「えつと…土曜日なら一日OK！」

「同じく」

「私も大丈夫よ」

「はいはい！　私も大丈夫だよ。一緒にお花見楽しもうね、フェイト」

「あたしは土日OK！」

「じゃあ六人は決定ね！ 場所は余裕があるから友達とか、家族とか、後はサーヴァントの人達とか各自でお誘いの上でって事で」

『おー！』

「じゃあさっそく心当たりにお電話を…」

「私も！」

「アルトリア、ちゃんと出るかしら…？」

「電話、つながるかな…？」

「パパにメールしておこう。そうだ、パパには忙しくてまだアサシンの事紹介していなかったんだ！ 一緒に紹介しよう！」

それで各自電話をすることになった。



最初にすずかはやてに連絡を入れた。

「あ、すずかちゃん。どないしたん？」

『あのね、今週の土曜にお花見をするっていう話があるの』

「お花見？ それはええね！ 素晴らしいな！ そんなら私達家族一同全員予定空けと

くわ」

『うん！ それじゃはやてちゃんも誰か誘える人がいたら連絡入れて見てね』
「わかったわ。任しとき！」

フェイトはクロノに連絡を取っていた。

「ああ、フェイトか。クロノだ」

『あのね、クロノ。今週の土曜日にお花見をすることになったんだけど…』

「土曜日…。ああ、その日はデスクワークだからちよつとした外出くらいなら付き合えるが…」

『そう。それじゃ大丈夫だね。リンディ提督とエイミイは？』

「ああ、艦長とエイミイもその日は忙しくないな…」

なのはは美由希に連絡を取っていた。

「あ、なのは」

『あ、お姉ちゃん』

「うん、お姉ちゃんですよ。どうしたの？」

『うん。今週末の土曜日にお花見をすることになったの』

「お花見？ いいね！ いくいく。すっごい行く！ あ、エイミイも来るかな？」

『フェイトちゃんが誘っているみたいだよ』

「そっか。わかったよ」

シホはアルトリアに連絡を入れていた。

「どうしたのですか、シホ」

『うん。今週の土曜日にお花見を計画しているからアルトリアも出れるわよね？』

「もちろんです。ぜひお付き合いですせていただきます」

『よし。それじゃネロにも伝えておいて』

「任せました」

…それから色々な人に話が伝播していき、エイミイ、リンデイ、レテイ、シグナム達、石田先生、アースラスタッフと伝わっていった。

エイミイと美由希が幹事になって計画は進んでいった。

各ご家族全員を合わせると少なくとも四十人以上の大所帯。

これは気合が入ってきた！ とエイミイは張り切るのだった。

第八十二話

『外伝12

お花見（前編）』

そして土曜日になり、空はみんなの祈りは届いたらしく快晴で、かぜは少し冷たいが日差しはポカポカ暖かい。

絶好のお花見日和なのである。すずかの家を手配した敷地では…。

「あー、テストス：大丈夫そうだね。それではお集まりの皆さん。お待たせしましたー！」

エイミーがマイクを取り会場を盛り上げる。

「幹事を務めさせていただきます時空管理局執務官補佐エイミー・リミエツタです！」

「そして高町なのはとシホ・E・S・高町の姉で一般人、高町美由希です！」

それでまたしても拍手が上がリ、

「それから今回の運営の責任者を買って出してもらいました管理局メンバーでもお馴染みリンディ・ハラオウン提督にご挨拶と乾杯の音頭をお願いしたいと思います！」

それでマイクはリンディに移り、

「はい、みなさんこんにちはい。今日は綺麗に晴れましたねー。

はい。こちらの世界の皆さん、特に関係者のご両親、ご兄弟の皆様は私達管理局や次元世界の存在や実情……そして魔術師やサーヴァントといった存在。

説明を受けてもいまだに馴染みが薄いという方もいらっしゃいますかもしれません。

こういった集まりを通して双方の親交を深めるというのも貴重な機会かと思えます……。

——と、まあ堅い話はお題目としておいといて、今日は花を愛で食事を楽しんで仲良くお話をして過ごしましょう！

それでは今日の良き日にカンパニー！」

『カンパニー!!』

それでお花見は無事開始された。

「はいはい！ せっかくなんであんまり身内同士で固まらないで日頃あまり話さない人達と交流を深めましょう。」

それから大人の皆さんはお酒をあまり飲みすぎませんように」

エイミーの言葉で全員は返事を返しながらもそれぞれお話をします。

なのはは呆然としながら、

「はあ……なんだか大人数になっちゃったね」

「うん…。アースラクルも結構来ているから六十か七十近いのかな？」

「まあ、闇の書事件と聖杯大戦事件を得て人が大量に増えたからね」

その増えたサーヴァント勢はそれぞれ酒盛りをしている。

ランサーとアサシンが豪快にお酒を飲んでいるしアルトリアとネロも酒の飲み比べをしている。

アルクエイドと志貴は食事でありついでにオリヴィエとライダーとキャスター（人の姿に変化できた）もそれぞれ楽しんでいる。

「うちの大人達はうちのお父さんにアリサちゃんのお父さん、すずかちゃんのお母さんと…」

「ウチのパパ、乾杯する前から既に士郎さんと飲み始めていたわよ」

「あはは…。あの二人仲良しだから」

「それから石田先生もいらっしやるって…」

「あ、でも石田先生って管理局とか魔法とか魔術のこととかって…」

「知らないわよね」

「うん、そういえば…」

「あはは。一応内緒にせなあかんけどまあ平気やろ。リンディ提督やレティ提督にはお願いしたいし」

「そっか！」

「それじゃ私達も内緒にしておかないとね」

「ごめんな」

それで全員が苦笑する。

「さて、それじゃぼちぼちかまけようか。ざつとあいさつ回りして軽く食べてそれからみんなで特等席にいきましょう！」

「特等席…？」

「それって、なに…？」

「私も聞きたいわ」

「私も私も！」

はやてとフェイト、シホとアリシアが反応を返す。

「にははは…内緒の場所があるの」

「すごく綺麗な場所…」

「それじゃいこ、すずか。挨拶回り」

「うん。それじゃシホちゃん、みんなまた後で」

それですずかとアリサは挨拶回りにしにいった。

「さて、私も分離や。レティ提督とかアースラの人達にご挨拶せな」

「うん。私もさつき武装隊の人達見かけたから挨拶してくる」
「なら私もいくわ」

それでシホ達は各自分かれた。

別れ際にアリシアはフェイトに、

「フェイト！　こういうのも楽しいね！」

「そうだね、アリシア」

「ここにもしお母様もいたらもつと楽しめたんだけど…無い物ねだりはしちやダメだよ
ね」

「うん…」

「アリシアも強くなったわね」

「うん。私はフェイトのお姉ちゃんだから！」

シホに褒められてえっへんと胸を張るアリシアの姿に微笑ましい光景だとシホは思
う。

それからフェイトはアルフの方へと向かい、なぜかそこでランディとアレックス、ア
ルフに歌を勧められ、そこにシグナムとシャルまで参加してきてなのはとユーノに聞
いてぜひと進める。

それでフェイトは赤くなりながらも、

「少しだけですからね？」

そう言つてフェイトは歌いだす。

それによつて近くにいた人達は聞き耳を立てる。

「♪♪♪♪♪」

そして歌いきると一同が歓声をあげる。

「フェイト！ 歌、よかつたよ」

「ありがとう、アリシア」

「はあ…でも恥ずかしかつた。なんだか変だつたでしょう」

「テストタロツサ」

「は、はい…」

「いい歌だ。お前は歌が上手いんだな」

「あ、ありがとうございます。シグナム…」

「テストタロツサちゃん、すごいわね。なんだかドキドキしちゃつた」

シグナムが褒めてシヤマルが絶賛する。

「フェイトは歌が上手いんだよ」

「うう…」

「良い歌は好きだ。よければこれからも時々聴かせてくれるか、テストタロツサ？」

「まあご希望でしたら…」

「それでいい」

そこでシヤマルがお肉をもらっていい？　と言ってランディとアレックスに聞いていた。

それに縄張り争いがすごいアルフがガウガウ言っていたが…。

「しかしお前はいい加減その言葉遣いはやめろというのに。姉のアリシアの方は普通に話しかけてくれるぞ？　なあ？」

「ねえ〜！」

「そんなこと言っても年上の人には丁寧語というのはウチの家庭教師の教えなんですよ。

まああれです。模擬戦の勝率が五割を越えるようになったら胸を張って対等に話せますかね？　えっへんと…」

「なんだ？　それじゃ一生無理じゃないか？」

「無理じゃないです。まだまだこれから身長も魔力も伸びますしね」

「背が伸びたくらいでそうそう強くなるものでもなかるうに…」

「まあ見ていてください」

「ま、私も立ち止まってはいいからな。せいぜい走って追いついてこい」

「はい。なるべく早めに追い抜くつもりで！」

「ふっ、生意気な……」

そう言つてシグナムはフェイトの頭を乱暴に撫でる。

それにフェイトも嫌な顔をせずに受け入れる。

「それじゃ次はシホちゃん！ お願ひします！」

「うえっ!? なのは、私……!?」

「うんうん！ こういう時こそシホちゃんの歌声を披露する時だよ！ いつも公園で

歌っているでしょ？」

「あ、あれは動物に聴かせているだけで……こんな大勢人がいる中でそれはさすがに……」

「なんだ？ ヴィータから聞いたがシユバインオーグ。お前の歌もそうとううまいと聞

いたぞ？」

「で、でもね……!」

「奏者よ。輝かしい姿を見せてくれ！」

「お姉様！ 期待しています！」

「ネロ、ファイア……!」

ネロとファイアットにも応援されてシホは観念したのか渋々とだが、でもいつもの気持ちでローレライを熱唱するのだった。

それに外国の歌が分かるアリサの父がシホの歌声に絶賛していた。

そして歌い終わるとまたしても絶賛の音が響き渡り、シホは顔を赤くするのだった。

「いい歌だったぞ。シュバインオーグ。お前の歌もテスタロツサと同様にたまに聴かせてくれ」

「いいけど…シグナム、あなた天然でそういうこと言うのね」

「何か変か…？」

「いや、別に…」



そのシホの歌声を肴にリンデイ、レテイ、すずか、アリサが乾杯をしていた。

「シホちゃんの歌、いい歌だね」

「そうね、すずか」

「うん。歌もいいけどこのお酒美味しい。これはこっちのお酒？」

「うちの父が持ち込んだワインだそうです」

「葡萄っていう果実から作った果実酒なんですよ」

「そう…いい香りで素敵ね」

「でもアリサさんもずかさんもあんまり驚かなかったわね。魔法のこととか次元世界のことを知っても…」

「えっと、まあそのびつくりはしましたけど…」

「なのはちちゃんとフエイトちゃんとシホちやんだからすぐに納得が言ったというか…」

「それに私とアリサちゃん、魔術が使えるようになったりサーヴァントを従えるようになったからもうこつちにはどっぷりと使っていますから」

「そう言いながらアリサはその手に炎を宿らせ、ずかはその手に氷の結晶を作り出す。

それにリンディとレティは驚きの表情をして、

「お二人共、もう魔術を普通に使えるのですか!?!」

「はい。私は前からシホちゃんに習っていたんです」

「あたしは聖杯大戦が過ぎてから少し習い始めました。制御できなきや大変だからと
いって…」

「そう…」

「そこでレティは少し真剣な表情になって、

「もしよかつたらお二人のこれからの将来、管理局で働いてみない?」

「あ、レティ。そんな勝手に…!」

「いいじゃない。一応魔術回路に反応する魔術式デバイスも順次開発中なんだから。だ

からもしよかつたらだけど、ね?」

そう言つてレティは二人にウインクをする。

それにアリサは少し考える仕草をして、

「それも一応考えの一つではあります。アサシンがいるおかげでボディガードは万全になりましたから。」

それにあたしもなのは達が活躍する光景を近くで見たいんです」

「そう。それでずかちゃんは…?」

「私も今は前向きに検討中です。ライダーも手伝ってくれるって言ってくれてるし、それにファイアットちゃんにシホちゃんの奪い合いの勝負で遅れをとって負けたくありませんから!」

「そ、そう…(リンデイ、もしかしてずかちゃんってちよつと百合系…?)」

「(ええ、そうなのよ。ファイアットさんと同じでお互いにシホさんを巡ってライバルなのよ。シホさんって女性にも人気だから)」

「(そ、そう…まあそれは個人の自由だしね)」

「(そうね…)」

それで二人のひそひそ話は一応の幕を閉じた。

「ま、それじゃもし協力したいんだつたらなのはちゃん達を經由して知らせてね? 頼

りになるから」

「わかりました！」

「はい！」

こうしてすずかとアリサの将来も少しずつ決まってきたところである。

それからレティはワインを一本開けてしまわずかとアリサが取ってくると言ってその場を後にしていった。

「うん。明るくてはつきりしていい子達ね」

「フェイトもなのはさんもシホさんも友達に恵まれているわ。

それにね、少し暮らしてて思ったの。この世界は幼くて未成熟だけどキレイだわ」

「うん。お酒のいい世界に悪い世界はないわね♪」

「ちよつと、マジメに聞いてよ！」

「ふふ…事前に聞いているわよ。今年中に巡航艦の艦長を降りてこつちの世界から本局に通うんでしょ？」

「あら？ お耳の早いこと」

「やつぱり、フェイトちゃんのため…？」

「まあね。フェイトも執務官を目指すって言っているけど中学卒業まではこつちの世界で暮らすのがいいと思うし少し遅くなっちゃったけどなるべく一緒にいてあげたいの

よ…」

リンディは寂しそうにそう言った。

「クロノ君の時もそう言っていたもんね。まあクロノ君の時はあの子がグレアム提督のところに行っちゃっていたからちよつと微妙だったけど…」

「まあ子供なんてそんなもんでしょ？ 親の思い通りになんてならないわ」

「確かに。うちの子もそうだしね！」

それで二人はお互いに笑い出す。

「それとは別件でだけど、シホさんの言う事が正しければ地球には一番魔術師が大勢生まれる可能性が高いわ。

地球の過去の歴史を紐解いても魔術師の話はいっぱいあるし魔女狩りの話もあるし日本にも魔術関連の呪術師といった話はいっぱい存在するわ。

だからもしかしたらそのうち地球も管理外世界という枠組みから逸脱して管理世界になるかもしれないわね。

今はまだ様子見という感じだけだね」

「そのうち魔導師と魔術師の戦争とかいう最悪のシナリオが生まれないように気をつけなきゃね」

「そうね…そこはシホさん達のこれからの動きに期待かしら？」

「そうね…」

「——そうじゃの」

「!?!」

そこにいきなりありえない声が隣から聞こえてきて二人は驚く。

そこにはゼルレッチがいていつの間にか酒の瓶を持ってお酒を飲んでいた。

「ぜ、ゼルレッチさん…!?!」

「うむ。シホが世話になっておるの。あの子も主達のおかげでもう幸せを掴んでおるしな」

「は、はい…そうですね」

「そう固くなるな。ここは祝いの席じゃ。だから無礼講で今の儂は孫を可愛がるただの爺じゃ」

「は、はあ…」

そこにすずかとアリサがやってきてやはりゼルレッチがいることに驚きの声を上げていたりした。

その後、シホがやってきてお酌をしていたり。

それでゼルレッチは楽しそうに皺を深くして笑みを浮かべていた。

第八十三話

『外伝13』

お花見（後編）』

その後、さすがとアリサは色々な所へと挨拶回りをしながら進んでいくと前方になのはとユーノを発見する。

「さて、次はつと……」

「あ、アリサちゃん……！　なのはちゃんとユーノ君が向こうに……」

「あ、ほんとだ」

なのはとユーノが楽しそうにスクライア一族の事について話し合っていていい雰囲気である光景を二人は見て、

「ユーノやファイアット、アルフも真実を知るまで変わったフェレットと犬だと思っただけ、まさかあの子達まで魔法関連だったとは……」

「びっくりしたよね〜」

「まあ、喋ったり人間に変身できるくらいならなのは達の魔法やサーヴァント達に比べたらそんなには驚かないんだけど」

「あ、あれれ？　なんだか違うような…？」

「うん…？」

「アルフさんは犬…というより狼の方が本当の姿だけどユーノ君とファイアットちゃんは人間のほうが本当の姿じゃなかったっけ？」

「あれ？　そうだったっけ？」

「ちよつと混乱しちゃうけど…」

「まあ、どっちでもあんまり変わらないわ。人間の時は人間として。動物の時は動物として接するのがあたり流！」

そんな話をしていた時だった。

ふとファイアットがそこに現れて一つのメモ帳を取り出して、

「はい。さすがにアリサ」

「ファイアットちゃん？」

「なに、これ…？」

「見てくれればわかるかと…」

それで二人はそれを見て、瞬間顔を赤くする。

それはもう忘れがちだがいつかの温泉の時にシホがメモをしていたものだった。

「そそそ、そういえばあの時…!？」

「ユーノ君、女風呂に入ってきていたね!？」

それで二人は無言になり、ふとアリサはファイアットに聞く。

「ねえファイアット…?」

「はい、アリサ」

「記憶消去の魔法つて、あつたっけ?」

「残念ながらありません…」

「そう、残念ね…うふふ♪」

「そうですねえ…あはは♪」

アリサとファイアットはお互いに邪悪な笑みを浮かべていて、さすがは少し引いていた。

今後、いつかユーノにお仕置きがされるのは…余談である。

とうのユーノは寒気を感じ体を震わせていた。

「どうしたの、ユーノ君…?」

「い、いやなんでもないよ、なのは。急に寒気がしたただけだから」

「そうなんだー」

それで二人は先の方に行くとクロノと美由希が焼きそばを作りながら話していた。

「あれれ? お姉ちゃん、クロノ君。なんで焼きそばなんて作っているの?」

「こんにはー」

「…見つかつたか」

クロノはそれでバツの悪そうな顔になる。

それで聞いてみると、誰かが鉄板セツトを持ち込んでいたから折角だからとエイミイを中心にして作っているらしい。

でもそのエイミイが席を外していると言う。

「そういえばユーノ。今日はフェレットもどきの姿じゃないんだな。フィアットもだけど…」

「一年経つて魔力適合がだいぶ進んだんだよ。だからフィアともどももうこの姿でいても問題ないんだ」

「むしろフィアットは人間の姿の方が多かつた気がするけどな。武装隊でももう普通に人の姿で活躍しているんだらう？」

「まあね…フィアは本当に接近戦向けだから武装隊で絞られてさらに全距離対応型になるだらうね」

「シホの影響でどんどん強くなっていくな…」

「うん…聖杯大戦も乗り越えて拉致された事を気にしているのかまだまだ力不足を実感したらしくて気配を読むのもシホと一緒に特訓中だよ」

「本当に司書と兼任できるのか…？」

「そこは本人は頑張るというらしい…。実際、僕的能力に戦闘力が加わったのがファイアと言つてもいいから優秀だよ」

「お前は立場が減つていくな」

「言わないでよ。気にしているんだから…」

「まあ、お前は司書一筋で頑張つてくれ」

「わかつたよ」

それでユーノとクロノは会話を切らせる。

そこに美由希が話に参加してきて、

「なんか難しい話はいいとして、ユーノつてもうフェレットにはもう戻らないの?」

「え? あ、あの、えつと…」

「去年は急にフィアットちゃんと一緒にいなくなつちやつて寂しかったんだよ? あの

撫で心地が忘れられなくて」

「お姉ちゃん、あんまり無理を言つちやダメだよ? フェレットモードはあくまで仮の

姿なんだから」

「はい…でもユーノ。あの姿になったら私のところにも来てね? フィアットちゃん

共々ぜひ撫でさせてね」

「ま、前向きに善処します…」

それからクロノが六人前終了と言い出して、そこにエイミーが帰ってきた。材料を持ってきたようで美由希に休憩をさせて二人はまた作業を شدした。

なにやら士官学校の自炊のメニューを作るらしく張り切っていた。

完成したら呼ぶというのではなのは達はその場を離れていった。

離れていきながらなのはユーノに話をふる。

「…ユーノ君、気づいた？」

「なにに？」

「クロノ君、なんだかどんどん優しくなっているの」

「ああ、そういえばそうかな。僕にも前よりアタリが強くなっているかも…去年の冬あたりから」

「話したっけ？ クロノ君、昔はあんまり笑わない子でエイミーさんと出会ってからよく笑うようになったって…」

「少し聞いたよ」

「今度はフェイトちゃんとアリシアちゃんが妹になったからかな？」

「そうなのかな…」

なのはとファイアがそんな事を話している間に、クロノとエイミーが会話をしていた。声変わりやらエイミーが旦那さん候補にしてあげるといった内容など。

でもその会話の中に、

「…クロノ君ってさ、シホちゃんの事、気になったりとかしてない…?」

「は…? いやいやありえないだろう! 彼女は元は、えつとだな!」

「でもシホちゃんももう今ではすっかり可愛い女の子だよ?」

「それでもそれはないと思うよ。なにより望みの薄いものに挑戦するのは僕の主義に反するからな」

「そっかあ…それならまあ、安心かな? ……でも、その言葉を今は信じさせてよ?」

「…なにか言ったか? エイミイ」

「ううん、なんでもなーい! それよりそろそろ行こつか。ファイヤー!」

「うわー!! なにやってんだエイミイ!!」

二人はとても楽しそうだった。



それからなのはユーノはヴィータと出会っていた。

「お、なのは…」

「ヴィータちゃん！」

「ユーノも一緒か」

「うん」

「最近ちよつと会ってなかったけどヴィータちゃん、お仕事の方はちゃんとできてる？」
「なんだよ、しつけーな！　ちゃんとやってるっつーの…お前らとは配置がちげえからな。」

「一緒になることは少ないけど現場じゃ結構可愛がられている…もとい、重宝されてんだぞ？」

「可愛がられてるんだ」

「なっ！　人の言い間違いにいちいち突っ込むんじゃねー！」

「にやはは…」

「くっそ…」

ヴィータはそれでそっぽを向く。

「これから一緒にお仕事する機会きつとあると思うけどその時はよろしくね、ヴィータちゃん！」

「おう。足を引つ張らなければあたしがちゃんと守ってやるぞ。騎士だからな、あたしは」

「うん、頼もしい！」

それでののはヴィータの頭を撫ででした。

「うあ！ 許可なく撫でるな！ あたしを撫でていいのははやてと石田先生とほか数名に、それにシホだけなんだぞ……」

「シホちゃんはいいんだ……？」

「おう。シホははやてとリインフォースを救ってくれたからな。あたしは撫でられてもいい」

「そっか……。ね、ヴィータちゃん。ちよつといい？」

「なんだ……？」

「もしね、もしもだよ？ シホちゃんがこの世界に来なかつたら、私達はどんな出会いをしていたのかな？」

「それは……やつぱり敵同士じゃないのか……？」

「そう言われちゃうとそうだけど。でもシホちゃんのおかげで色々な人が助けられたし救われもした。」

でもシホちゃんは平行世界の住人だからきつと介入しない世界もあったと思うからもしかしたらほかの世界では……それに別の平行世界ではキャスター、反英雄ヤガミの事もあるし……」

「だな……」

なのはとヴィータは黙る。

それからいけない想像をしてしまったのだろう。

それで頭をなんとか振って、

「なし！ やっぱりこの話はなしにしよう！」

「お、おう……わかった」

ヴィータももしもの話はこれ以上したくなかったのでなのはに賛同した。

この世界はこの世界なのだ。それだけでいいじゃないかとなのはは自己完結した。

場所は変わってはやてに視点を当ててみる。

はやては守護騎士やサーヴァント達がばらけていることに少し孤独感を感じていた。

そこに石田先生がやってきた。

「あ、石田先生、いらっしやい！」

「わあすごい人数ね。それにすごい場所……」

「色々ご縁がありました。ま、先生座って座って！ ゆっくりしてゆっくりしてください」

「ごめんね。少し顔出して差し入れを持ってくるつもりだったから…」

「そんな水臭い…。飲み食べていってくださいよ」

「そう…?」

そこにヴィータがやってきた。

一緒にリインフォースもやってきた。

「石田先生！」

「ご無沙汰です、石田先生」

「ヴィータちゃんにリインフォースさんも元気そうね」

「こんにちは。来てくれたの」

「うん。シャマルさんに誘ってもらったから」

「ヴィータ。石田先生、すぐに帰るとか言うてるけどどないや?」

「えー? ゆっくりしてこうよ」

「ううん…まあ大丈夫かな?」

それを聞いてはやて達は喜び、すぐにはやては守護騎士達や士郎、キャスター、アルクエイド、志貴に思念通話を飛ばして集合をかける。

それに全員はすぐにいくと連絡があった。

それでヴィータとリインフォースが石田先生の好きそうなものを取ってくるというので行かせた。

それからはやてと石田先生はこれまでの事について話し合っていた。

厄介な患者だったろうとか、ほかにも色々。

でも最終的に一番悪いのは病気だったという事になってお話は終了になった。

そしてヴィータとリインフォースが各所から様々な料理を運んできた。

続くようにシグナム達もやってきた。

「すみません、おまたせしました」

「石田先生、いらっしやい」

「よく来てくれた。ま、楽しんでいってくれ」

「そうです！」

「料理おいしいから食べていってね。石田先生」

「なにか手伝いましょうか？」

シグナム、シャマル、土郎、キャスター、アルクエイド、志貴がやってきた。

「シグナムさんにシャマルさん。それに皆さん、お邪魔しています。ザフィーラ君もここにちは」

それから八神家族に石田先生を加えた団欒な雰囲気になりはやても伝えることは伝

えられたのでよかったとするらしい。

と、そんなところに酔っばらいが乱入してきた。

「おー、いたいた。ヴォールケンリッター！　ちよつと来て。ちよつといらつしやーい！」

レティが完全に酔っ払ってこつちにやってきたのだ。

それにはやては驚きつい、「レティ提督……」とつぶやいてしまい、

「提督……？」

石田先生がそれに反応して顔にはてなマークを浮かべる。

それに焦ってシヤマル達がどうどうとレティを落ち着かせている。

そしてリンディとフェイト、アリシアがやってきてレティをどこぞへと連れ去っていった。

「ヴォールケンリッター……？」

「あはは！　石田先生、酔っ払いの事は放っておいて飲みましょう。ね？」
なんとかそれでバレずに済んだようである。



それからフェイト達はレティをアレックス達に任せてようやく落ち着きを見せていた。

アルフも子犬フォルムになり地面にたれていた。

それで全員でゆっくりとお花見を楽しんでいる時にフェイトとアリシアが大事な話があるというのでリンデイ、クロノ、エイミーは真剣に聞くことにした。

「アルフには言ったんですけど去年のクリスマス：闇の書事件の時、闇の書の中に閉じ込められた時、夢を見ていたんです。」

家族の夢でした。リニスがいてプレシア母さんがいてアリシアがいました…」

「今はもう現実でもいるけどねー!」

「うん…!」

「そして夢の中の母さんは私に優しくしてリニスは私の思い出のままです。アリシアは可愛くて…」

「えへへ〜」

それでそれを聞いていたアリシアは恥ずかしくなったのか笑みを浮かべて顔を赤くしていた。

「はやてが言っていました。闇の書が見せる夢はその人の心が一番柔らかくて脆い部分を捉えるって…。」

「だけど私は夢の中じゃなくてこの世界に、ここに帰ってきたいと思いました。」

「私はここにいってもいいですか…？ アリシアとともに…」

「いてほしいと思ってるわ…」

「いなくなると困る…」

「好きならだけいたらいいと思うよ」

リンデイ、クロノ、エイミイがそう答える。

フエイトは顔を明るくして、

「ありがとうございます。夢の中で私は一度ですがアリシアとサヨナラをしました。ありがとうとごめんねをちゃんと伝えました。そしてまた会おうねと約束しました。」

そしてその言葉は叶って私とアリシアは一緒になって姉妹になることができました。

アリシアのミスコピーじゃなくてちゃんとした妹として…自信を持って今なら言えます。

命を持って生まれた人間、フエイト・テスタロッサとして問いかけてもらった言葉にお返事をしたいと思います」

「うちの子になる？ つて、言葉に…？」

「はい。アリシアと一緒にこのうちの子になりたいです」

「…うん」

「よかった…」

「い、いや／＼あたしがここにいてよかったのかどうかはあれだけど…よかった。まあよかった！」

「エイミイもいてくれなきややだよ？」

「うん。もう現状でフェイトとアリシアの姉みたいなものだからな」

「あはは…そう言ってもらえると嬉しいけどさ」

それでエイミイは嬉しい笑みを浮かべる。

「ということでフェイトとアリシアがここの子になるってことはあたしもハラオウン家入りだ」

「うん、そうね」

「よろしく頼む」

「——ってことはサーヴァントの俺も家族入りってことか？」

そこで今ままでどこで聞いていたのかランサーが現れてそう聞いてきた。

「そうだね。ランサーも私の家族だもんね」

「お。いいこと言ってくれるね、マスター」

「いい兄貴分ができてよかったじゃない？ クロノ君」

「まあ…」

「アリシア、アルフ、ランサーともどもよろしくお願いします！　母さん、お兄ちゃん」
「よろしく願います！　リンディお母さん！　クロノお兄ちゃん！」

それにリンディとクロノは快くフェイト達を迎え入れる。

「それから…お姉ちゃん」

「え…？」

まさか自分にも回ってくるとは思っていなかったエイミイは間拔けな声を上げる。

「あ、あはははは…なんか照れるな。つてかあたしの将来の選択肢がどんどん狭くなるからあたしのこととはできれば今までどおりで…」

「そう…？」

「エイミイがお姉ちゃんでもいいのに〜」

「僕も別にクロノでいいから」

「じゃあお兄ちゃんは時々ね」

「時々、か」

「あれだね。お父さんのお墓参りと報告、改めて行ったほうがいいよね！」

「うん。さすがうちの使い魔だ。よく気が回る」

「だろ…？」

「うん！」

「今日はいいい日ね〜」

アルフの提案にクロノは賛同しリンディがそう締めくくる。

「それじゃいっちょ一杯やるか？ リンディよ」

「いいわね。付き合うわ。ランサーさん」

それでリンディとランサーが一杯お酒を飲み始めた。

そしてそれからはとシグナムが色々と会話したりしている。

シホはシホでアルトリアとネロと会話をしていた。

「ははは。奏者よ。お花見とは楽しいものだな。余はまた機会があつたらしたいぞ」

「そうですね、ネロ。私もこういつた会は過去に騎士達との宴以来のものです。実に楽しいです」

「アルトリアはその中でもあんまり笑わなかつたつぼいけどね」

「はい。シホの言う通り王として凜とした佇まいでいなければ下の者たちに示しがつき

ませんでしたから。

…それに私は笑つたことはあまりありませんでしたから今の方が充実しています」

「そう…。ネロも楽しそうだし、よかつたわね」

「はい」

「はい」

「うむ。奏者よ。これからもよろしく頼むぞ。余はいつでも力になろう」

「私もです。シホ」

「うん。ありがとう、アルトリア、ネロ」

「騎士王に赤き皇帝よ。シホをこれからも支えてやってくれ。儂は遠くで見守っている
としよう」

「任せてください、宝石翁」

「うむ！」

それでシホ達は互いに笑みを浮かべていた。

そして時間は過ぎていって、エイミイのお花見終わりの言葉によってそれぞれ片付け
を始めて行った。

その中ではやてはデバイスに関してやっぱり作るのはユニゾンデバイスがいいとい
う話になっていた。

将来出会うであろう八神家の末っ子にみなのは期待の眼差しをしていた。

それから全員は各自家に戻りなのは、フェイト、はやて、シホはそれぞれ夜の練習を
しに出ていった。

夜桜を見ながら、

「シホちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃん！ これからも頑張っていこうね！」

「うん、なのは」

「そうやね、なのはちゃん」

「そうね、なのは」

なのはの掛け声で全員はこれからも頑張っていく事を決めるのだった。

第八十四話

『外伝14

時空管理局に所属』

S i d e シホ・E・S・高町

五月になり、私達は仮配属期間も終わり正式に時空管理局に入局した。

なのは時空管理局武装隊士官候補生として。

ファイアットは時空管理局武装隊士官候補生と兼任して無限書庫司書として。

フェイトは時空管理局執務官候補生として。

はやては時空管理局特別捜査官候補生として。

そして私は時空管理局武装隊士官候補生と兼任でこの春新しく発足したらしい魔術事件対策課魔術士官候補生として。

しかも聖王教会にも所属という形になってるから忙しくなること請け合いである。

ちなみに武装隊の士郎やキャスター、志貴、そして聖杯大戦での容疑者の一人だった

ミゼ・フローリアンさんも出所後にそこに所属している。

まだ次元世界で確認されている魔術師の数はまばらなので規模も小さいし部隊運用資金もまだそんなに入ってこないらしいが将来的には一部隊くらいは大きくなるという予測が立てられている。

聖杯大戦という大魔術儀式の事件を経験してそれだけ魔術に対する上層部の不安があるのだろう。

ちなみに話は変わるがフェイトは正式にハラオウン家の養子になることが決まったので現在『フェイト・T・ハラオウン』と名前にハラオウンが追加となっていた。

アリシアもついでに『アリシア・T・ハラオウン』である。

私達が制服に腕を通してエイミイさんのところへやってくるとエイミイさんが熱く出迎えてくれた。

「おー似合う似合う!」

「ありがとエイミイ」

「えへへ」

「お姉様と一緒です!」

「そう騒がないの、フィア」

なのはとフェイトはまだ慣れないらしくそわそわしている。

私と同じ制服を通してしているフィアは嬉しそうである。

実を言うと私もこういった組織は初めての経験であるため緊張は一応している。

「奏者よ、そんなに緊張はせずそのままを体現すればいい。そうすればおのずと仲間は信頼してついてくるぞ?。」

「そうです、シホ。あなたは一人ではないのですから」

アルトリアとネロも制服を来て一緒にしてくれる。

ちなみに二人共私の使い魔として登録はしてあるがアルトリア自身はネロと違い単独でも任務は可能なので武装隊に入っている。

ネロは離れすぎると単独行動スキルがないため力が出せないので結構常に私についてきてくれる。

「…しかし俺達も組織だつて入局するとは思わなかったな」

「いいではないですか、ランサー。これで私達もなのは達を手伝えます」

ランサーとオリヴィエ陛下も制服に身を包んで歩いてきた。

オリヴィエ陛下は義手なので特注の制服である。

「オリヴィエさん、似合っていますよ」

「ありがとうございます、なのは」

「ランサーも似合っているよ」

「あんがとな、マスター」

オリヴィエ陛下もランサーもまんざらでもないようなのでそこはよかった。

「でもまだ緊張します」

「すぐ慣れるよ。これからちよくちよく着ることになるからね」

そう言いながらもエイミイはフェイトの首のリボンを整えていた。

「はーいっ！ こつちもできましたー！」

と、マリーさんがはやてを連れてやってきた。

はやても制服姿で車椅子を押している。

「あーどもです」

「はやて」

「はやてちゃん、可愛い」

「あはは、みんなもよく似合っとするよ」

「えへへ、みんなで制服そろい踏みだね」

そう、私達は春からそれぞれの部署で働き始める。

フェイトは基本的にアースラチームと行動を共にしながら執務官になるためのお勉

強。

はやてはラインフォースからもらった『蒐集行使』というすごいレアスキルを持っている。

だから四人の守護騎士、リインフォース、士郎、キャスター、志貴と共にその能力が必要とされる事件に随時出動する特別捜査官。

これに関しては百戦錬磨の人達なのではやては最初の方は実力不足で置いてかれるだろうと踏んでいる。

ちなみにだけどアルクエイドだけ彼女だけは管理局には勤めず日がな散歩をして放浪をされていてたまに顔を見せるくらいだろうと、はやては言っていた。

でも頼めば手伝つてもくれるらしいので心配はないらしい。

なのはは武装隊からスタートして目指すのは最高の戦闘技術を身に付け局員達にそのスキルを教えて導く『戦技教導隊』入りだという。

そして私は一応なのはと同じく戦技教導隊入りも目指しているが、それ以外にいきなり発現した魔術の力に苦しんでいるかもしれない人を助ける任務につきたいと思っている。

これも魔術事件対策課の一つの仕事ね。

ファイアも一緒に魔術を習って私に着いて来てくれるという。

「でもフェイトちゃん。アースラ勤務になれてよかったですね」

「そーだね。艦長、ほんとうはなのはちゃんやシホちゃんも欲しかったみたいなんですさすがにAAA級を三人以上は保持させてもらえないって」

「なるほどー」

それで私の頭の中では非常に悔しがっているリンディさんの顔が浮かぶ。

「お母さんお兄ちゃんと一緒によかつたな、フェイトちゃん」

「うん。そのうちアリシアも一生懸命勉強して局に務めるって言っているから来年辺りにはオペレーター勤務にでも入ってくると思うんだ」

「え？ アリシアは魔術事件対策課に誘われているって話を聞いたわよ？」

私の言葉にフェイトは「ええ？」と本当に知らなさそうな顔をしていた。

「なんでも魔術師は貴重だから是非魔術事件対策課に入ってくれと打診されているらしいのよ。私も直にそこに武装隊と兼任で出向する予定だしね」

「そうなんだー…。もしかしてすずかとアリサも…？」

「ええ。すずかはもう少し親を説得したらって話ね。アリサもそんなところね」

「ふーん…それじゃ将来は友達メンバー全員で管理局に勤められるかもね」

「そうね」

「そんでな。私も基本的にはうちの子達と一緒にやし管理局は人情人事をしてくれるんやねー。

…まあうちの場合はレティ提督が九人まとめて高ランク戦力をゲットしよって計算もあるかもしれへんけど…」

「あーその計算は間違いなくある」

エイミイさんとマリーさんが二人でそれに頷いていた。

「つていうか今更だけどはやてちゃん一家つて最強ぞろいじゃない！ 唯一気ままで管理局に入っていないアルクエイドさんも入れると相当の戦力だ」

「そうですね。もう慣れました」

「主はやて、こちらでしたか」

「はやてー」

はやてはもう言われ慣れたらしく平然と受け答えをしている。

そこに前の方からシグナム達が歩いてくる。

まずシグナムとヴィータは制服ではなくて聞くと武装隊甲冑のアンダースーツ姿。

シヤマルは制服の上に白衣。

リインフォース、士郎、志貴は普通に制服姿。

キャスターは少し胸がはだけている大胆な着方をしている。ここでは耳と尻尾も隠していないようだ。

どうもシグナムとヴィータは局員の制服は合わないらしくアンダースーツを着ているという。

「こつちのほうが馴染む」とはヴィータの弁である。

それから全員で近況の会話をしている中、

「はやてちゃんのだ杖…シユベルトクロイツだけどバージョン8が届いているはずだよ」

「ホンマですかー？」

「杖は落ち着いてきたから管制デバイスも作らないとですな」

そう、はやてはその膨大な魔力にこれまで何度も杖を破壊してきた実績がある。

それでやつとのこと8本目で落ち着いてきたというのだからデバイス作りの人泣かせである。

まあマリーさんも壊されるたびに熱を入れたらしく結構デバイス作成は白熱したというから本人が気にしていないのだから別にいいだろう。

「シホちゃんのアンリミテッド・エアも聖杯大戦で結構無茶させちゃって、一回オーバーホールしたんだからもうあんなにエクスカリバーフォームは乱用しないでね？」

「はい、気をつけます」

そう、やつぱりエクスカリバーフォームはアンリミテッド・エアにも結構負担がかかるらしくフレームを強化しないとそう何度も使えないという。

ま、今の私にはユニゾンリミッターがかかっているのだからこれからはそうそうエクスカリバーフォームは使用できない。

それに「ツヴィリングフォーム」「シユッツエフォーム」「オーバーエッジフォーム」の

三形態までで十分使えるから私としては十分だ。

それからマリーさんにある連絡が入ってきてきたのはレイジングハート・エクセリオンの補強調整が終わったという話なのでヴェータの髪をいじっていたのははそれを取りに行った。



…一方、無限書庫ではユーノがせわしなくクロノの指示に動いていた。

『…9991号次元の一般的魔法史歴とその進化記録。』

それからさつき送った暫定ロストログア指定物品の鑑定用資料…これは遺失物管理班とうまく連携して資料抽出してくれ。

それと裁判記録で探して欲しいデータがある。いま一覧を送るから』
クロノはマジメに言っているがその量は半端ではない。

命令されたユーノはあまりの量にしようじきまっていた。

「ちよ、ちよつと待った！ まさかそれ全部今週中にやるのかっ!？」

『そうだが何か?』

「無茶言わないでくれ！ こっちは長年放置されてた書庫内の整理だけでいっぱい

「ばいなんだからー!」

『そう言うな。忙しいのはどこもいっしょだ』

「もとはといえは局が怠慢だったからでっ!」

『それはそれ、これはこれだ。司書としての権限はあるんだ。人を使え指示をしろ』

「ううっ…」

『なんなら依頼料を申請してスクライアの身内に頼んでもいい。どうしてもというならファイアットも呼び出せ。』

「こういう時にファイアットは司書を兼任しているんだから使えるものは何でも使え』

「うう…当たっては見るけど」

『そう言った部分も含めて君には期待しているんだ。じゃあ今週中に頼んだぞ』

「いちおう了解…。検索ヒット率の一覧を送るから優先順位決めを」

『了解』

それでユーノは疲れた顔をしながら作業に掛かり出す。

そこにレイジングハートを取りに行っていたなのは。そしてシホとファイアットがやってくる。

「ユーノ君、忙しい…?」

「あれ? なのはにシホに…ファイア! ちょうどいいところに!」

「…え？ なに、兄さん？」

「お前も司書なんだから手伝ってくれないか？ クロノから色々頼まれているんだ」

「あー…そうなんだ。それじゃ少しだけ…」

それでフィアもユーノに付き合う。

「それよりなのは達制服が届いたんだ。特になのはやっぱり白ジャケが似合ってるね」

「えへへ、ありがとう」

「それを言うとシホは少し合っていないかな？」

「…なにか変かしら？」

「いや、やっぱりシホは赤いほうが似合っているなと思ってる…」

「それは私としては不本意ね。別に好きで赤い服を着ているわけでもないんだから」

ここにネロがもしいたら「赤はいいぞ奏者！」と言うだろう。

それに対抗してアルトリアは「いいえ。青も似合っています」と言い出すことは想像がつく。

とにかくそれで笑いが起きる。

「それでフィアはちょうど良かったけどなのは達は何か用事の途中？」

「うん。レイジングハートのフレーム強化と微調整が済んだから受け取ってきたの」

「私達は付き添いかな？」

「はいです」

「そっか」

「レイジングハートね。ピーキーだし機能が独特だから調整が一苦労なんだって」

「カートリッジシステムも入っているもんね。今後の予定で魔術式システムも導入する予定なんでしょ？」

「うん。せつかく私の魔術は魔導とは違って治癒系の魔術適正だから治癒魔術師にもなるしね」

そう、なのはの魔術適性は治癒系統に傾いていたのだ。

だからシホに治癒の魔術の仕方を教わったりしている。

今はまだかすり傷程度しか治せないけど将来的には負傷した傷もすぐに治せるようになりたいとなのはは言う。

閑話休題

それからお昼を一緒にしようというなのはの提案でシホ達はユーノの作業を手伝うことになった。

ユーノはそんな時にある事を語りだす。

「なのはとシホは今じゃ立派な魔導師だけど時々少し考えるんだ。

去年の春、あの時僕とフィアはなのはとシホと出会っていなかったら二人共魔法と出会うこともなくって、そしたら二人はどんな風に暮らしていたのかなって…」

「お姉様と出会えなかったらなんて考えるのはヤダです！」

「まあまあフィア…落ち着いて。

それでなのはとシホが助けてくれなかったら僕達は危なかっただろうしいろんな『もしも』を考えると少し怖くなるんだけど…」

それで一度ユーノの言葉は切れる。

それになのはは、

「そうだね。でも私はユーノ君とフィアちゃんとレイジングハートと魔法に出会えて本当によかったと思ってるよ」

「私もかな？　そうでなきゃ私はまた裏社会に身を染めていたと思うし…」

「あはは…」

シホの言葉にあんまり冗談に聞こえないからなのは達はとりあえず苦笑をした。

「ユーノ君達を助けられる力が自分にあつて、

フェイトちゃんと正面から戦って心を交わし合うことができて、

闇の書事件の解決のお手伝いが出てはやてちゃんとも友達に慣れて、

聖杯大戦でも私でも出来ることはあったと思うから、

…本当によかったと思ってるの。

みんなあの時ユーノ君とファイアちゃんと会えたからだもんね。

当然シホちゃんともだけど。

だからシホちゃんやユーノ君、ファイアちゃんにはまだまだ教えてほしいことがたくさんあるし、今も一緒にいられるのすごく嬉しいから『合わなかつたら』はあんまり考えたくないなあ…」

「そうね。そうじゃないと私もアルトリアとも再会できなかつただろうしね」

「そうですね」

それでその後は四人で作業を進めている時だった。

ユーノにシグナムから通信がかかってきた。

「はい、ユーノですけど」

『シグナムだ。済まないが少し手を借りたい』

「はあ少しならかまいませんが………訓練用の結界ですか？」

それで四人は訓練施設に向かった。

そこでは、シグナムとフェイトが向かい合っていた。

「レヴァンティンも中身はだいぶ新式だ。怪我をさせないよう気をつけるからな、テストタロツサ」

《Ja.》

「おかまいなく。バルディツシユ・ザンバーも元気いっぱいですから！」

《Yes Sir.》

そんな二人を見てなのは達は何事だと言いつけている。

シホは「二人共好きねえ」と呟っていたり。

「なのはちゃん、シホちゃん、ユーノ君、ファイアットちゃん。なんかデバイスの調整後慣らしのほがなんだけどまた模擬戦って流れなの」

「なるほど…」

シヤマルの適切な説明になのは達は納得した。

「うちのリーダーもテストタロツサもまったくあきれたバトルマニアだ」

「フェイトちゃんも嫌いじゃないから…」

「将もこの時が一番楽しんでるな」

「確かに…」

ヴィータ、シヤマル、リインフォース、士郎の順にそう話す。

「なのはちゃんもエクセリオン戻ってきてんねんやろ？ 参加するかー？」

「ええっ!？」

「そうだね。なのはとシホとヴィータも一緒にどう?」

「わ、私は今日は遠慮を…」

「あたしもパス。無駄な戦いはハラが減るだけだしな」

「私もできれば平時はじつとしていたいかしらね…?」

誘われた三人ともどうにもやる気は起きないらしく断っている。

それにシグナムは不満な表情をして、

「なんだつまらん。このレベルの団体戦ができる機会は貴重なんだがな」

「あはは…それは勤務訓練の時にでもー」

「なのはってシグナムさんとやるの苦手なんだよね」

「やりづらいタイプつてものあるけどシグナムさんのは訓練じゃなくてほとんど真剣勝負だから…」

「お姉様はどうして…?」

「ま、やってもいいんだけど結構シグナムには何度か私の技は見せちゃったから対策はもう結構取られちゃってるしね…」

「ヴィータも混ざらない…?」

フェイトが手招きをしてヴィータを誘う。

それにヴィータは、

「くどいぞテスタロッサ。あたしははやてのため以外で無駄に戦う気はねー。

お前らみたいなバトルマニアと一緒にするな」

「あー、ひどーい!」

「と、言つて主の前で敗北するのが嫌なだけだったりしないか?」

と、シグナムの挑発の言葉にヴィータはすぐに切れた。

なぜか矛先はなのはに向かうがそれはもうしようがない。

「いぞコノヤロー! やつたろうじゃねえか! 準備しろなのはツ!!」

「ええええ!?!」

「この流れだと私達も強制かしらね…」

「ですね、お姉様」

それから各自準備を始める。

ちなみにアルトリアやネロ達は見学と相成った。

さすがにサーヴァント達が戦闘に介入するとパワーバランスが崩れるということ。

「えーとゆうわけで久しぶりの集団戦です。

ベルカ式騎士対ミッド式魔導師。7対7のチームバトル!」

ベルカチームははやてをリーダーにシグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リ

インフォース、士郎。

ミッドチームはクロノをリーダーになのは、フェイト、ユーノ、アルフ、ファイアット……そしてなぜかミッド式ではないシホ。

「はやて。私はどつちかっていうとそつちじゃない……？」

「シホちゃん。そこは空気読んでな。数が合わなくなつてまうから。それに士郎と戦えるんわこの中ではやつぱりシホちゃんだけやしな」

「そう。わかつたわ」

「それじゃ気を取り直してー。ルールは局の戦闘訓練準拠で攻撃の非殺傷設定は言うに及ばず武器持ちの子は相手のバリアジャケットを抜かないようちゃんと威力設定してなー？」

はやての言葉で全員がそれぞれ準備をし出す。

はやての方は、

「ヴィータとザフィーラが前衛、シグナムは遊撃、シャマルは私の後ろや。士郎はシホちゃんをなんとか抑えといて。ラインフォースは私と一緒に砲撃の準備や。手が空いたらシグナムと交代制で遊撃やね」

それぞれに指示を出していく。

クロノの方でも、

「クロスレンジは引き付ける程度であり付き合うな。フォワード組ははやとシヤマルの捕獲か撃墜を最優先。なのははユーノをうまく壁にして火砲支援を頼む。フィアットはシホとともに中距離を頼む」

こちらでも色々と指示が出されている。

そして双方ともに作戦が決まり、

「管理局指揮官4名とその使い魔3名！ 高度な連携戦を教えに行くぞ！」

「おーっ！」

「クロノ！ ちよ……！ また……!!」

「私は別に構いませんけど……むしろいいですね！」

ユーノは反論の声を上げたがフィアットはむしろ使い魔でいいと宣言した。

「よっしや！ 魔導師のみんなに騎士の戦闘を見せたる！」

「おうっ！」

そして集団戦が開始された。



その光景をモニターで見ていたリンディとレティはというと、

「まーなんとというか若い子達は元気ねえ」

「そうねえ」

「仕事でもトレーニングはしてるでしょうに」

「技術向上が楽しいんでしょうねー」

「それにしても闇の書事件つてき、第一級ロストログア関連事件なのに終わってみれば死者0名。

おまけにアルトリアという珍しいユニゾンデバイスに、それにレア能力つきの魔導騎士と即戦力レベルの配下6名までゲットしてリンディ提督はいったいどんな奇跡を使ったんだって噂になってるわよ？」

「あらまあ」

「それにその後に起きた聖杯大戦事件…この事件では数名の局員や一般市民が犠牲になっちゃったけど、でも、それでも強力なサーヴァントという使い魔を計8体もゲットしたことになる。

それにそのサーヴァント達も主であるのはちゃん達には従っているから逆らうこととはないでしょう。

これの件に関しては上層部は静観するらしいわ」

「そうなの…よかったわ。なにかあったらゼルレッチさんが暴れると思うから一応は一

安心ね」

縦横無尽に宝石剣を振り回すゼルレッチの姿が頭に浮かんだのか二人は少しおっかなびつくりといった表情になっていた。

「ま、奇跡かどうかはわからないけどあの子達はなんとも頼もしいわ。

あの子達があつと大きくなつて部下とか教え子を引き連れて一緒に事件や捜査に向かつていくようになったら世界はきつともう少し平和で安全になるかもね」

「…それはいいけど今現在の訓練室がちよつと危なくない？」

画面では全員の様々な攻撃によつて廃墟に近い姿へと変貌していつている訓練室が写されていた。

《stand by ready, charge set.》

そのレイジングハートの言葉になのはとフェイトが大技のチャージを完了する。

「フィールド形成！ お待たせしました。おっきいのいきますっ！」

「N&F中距離殲滅コンビネーション！ 空間攻撃ブラストカラミティツ！！」

「どっこいこつちも詠唱完了や！ 広域攻撃Sランクの意地があるツ！」

その三人のおっかない発言にクロノは、

「ユーノ…」

「結界展開完了。大丈夫、訓練室は壊れない」

「本当にあの三人は魔法が高威力ね…」

「はいです…」

シホとファイアットの言葉は勢いによって流された。

「全力全開！」

「疾風迅雷！」

「プラスチック・シューートツツ!!」

それによつて訓練室が光に包められてそれが止んだ時には全員が全員ボロボロの姿だった。

それを見ていたサーヴアント達はというと、

「やるなあ…」

「そうですね。人の身でこれほどの威力を出せるとは…」

「良い戦いだつたな。さすが奏者達だ」

「ご主人様マスターがボロボロです…」

「確かにあれには俺も介入は難しいかな…?」

「ですが模擬戦としてはレベルは確かに高いですね」

上からランサー、オリヴィエ、ネロ、キャスター、志貴、アルトリアとそれぞれこの模擬戦を評価する。

なのはボロボロになりながらも胸中で、

(未来はこれから始まっていきます…。目の前にあるのは新しい夢。大人になっても忘れない巡り合いと願いを胸に抱いて私達は笑顔でいます。元気です！)

そしてシホも心の中で、

(これからこのメンバーでやっていけたら怖いものはないかもね。そして未来はどう生かすか殺すが私達にかかっている。気合を入れていかないとね)と、思っていたのだった。

第四章 空白期編

第八十五話

『聖王教会』

S i d e シホ・E・S・高町

武装隊でなのは、フエイトとともに色々と学んで切磋琢磨と励んでいる中、聖王教会所属にもなっている私とはやて：それにオリヴィエ陛下は聖王教会に招かれていた。

そしてアルトリアとネロも一緒にいつてきた。

ちなみにオリヴィエ陛下のマスターであるのはは別の用事がありこの場にはいない。

そこではその名の通り聖王を信仰している団体でオリヴィエ陛下とも深い結びつきがある場所である。

お話をする場所には金色の髪をした女性と緑色の髪をした男性、そして一人赤紫色の髪をしたシスターの三人がいた。

「よくお越しになりましたね。私の名前は『カリム・グラシア』です」

「僕は『ヴェロツサ・アコース』だよ。そしてカリム姉さんの義理の弟だ」

「私は『シャツハ・ヌエラ』です。聖王教会ではカリム付きのシスターをしています」

「あ、八神はやてです…」

「シホ・E・S・高町です。一応聖王教会所属ですけどこうしてくるのは初めてですね」

「アルトリア・ペンドラゴンです」

「ネロ・クラウディウスだ」

「オリヴィエ・ゼーケブレヒトです」

「お会いしなかったですよ。シホさん、はやてさん…そしてオリヴィエ陛下。あなた様と出会えて光栄です…」

そう言つてカリムさんはオリヴィエ陛下に頭をたれた。

「よしてください。私はもう過去の人なのですからできれば普通に話してください。さつてく
ださい」

「しかし…」

「お願いします」

「わかりました…」

それでカリムさんはなんとか普通に話をするようになった。

まあ、信仰している人が目の前にいればかきこまったりしてしまふものだろう。私達
はもう王様関係には慣れたものだが…。

「それではオリヴィエ陛下、また機会がある時にじっくりとお話がしたいので…」
「わかりました。予定を作っておきますね」

オリヴィエ陛下はそれで笑顔を浮かべる。

ちなみにオリヴィエ陛下が現代に蘇ったという珍事は意外に市民に知られていない。
勘がいい人はすぐに気づくものだが今現在は高町なのはの使い魔というくらいしか
知名度はない。

情報操作もされているのだからかなり機密だったりする。

閑話休題

「それで今日皆さんを呼んだのは同じく古代ベルカ式の継承者の者同士という理由がこ
められています。

はやてさんは『蒐集行使』というレアスキルを持っています。

そしてシホさんは聖なる錬金術師のシルビア・アインツベルンから受け継いだ『創造
物質化』…しかしそれももう失ったと聞きます。

そして残ったのが『天の杯』である『魂の物質化』というレアスキルの魔法のみ……」

「はい。調べさせてもらいましたから。気に障ったらごめんなさいね……」

「いえ、大丈夫ですが……」

「そう……よかったわ。私達はあなた達とは友好的な関係を築きたいと思っていますから」

「同じ古代ベルカ式を使う兄弟としてね」

二人もなにかレアスキルを持っていてるようね。

「僕の能力は『無限の猟犬』。

ウンセントリヒ・ヤークト

効果は魔力で生み出した猟犬を放つことで、その場にいなながら探査・捜索を行うことが可能なのさ」

それを聞いてつい私はアヴェンジャーの無限の残骸を思い出してしまった。

にしても『無限』か。私と縁があるのかしら？

「そして私の能力は『預言者の著書』。

プロフェーティン・ユリフテ

効果は最短で半年、最長で数年先の未来を、詩文形式で書き出した預言書の作成を行うのよ。

でも二つの月の魔力がうまく揃わないと発動できないから、ページの作成は年に一度

しかできないのよ。

そして預言の中身は古代ベルカ語で、しかも解釈によって意味が変わることもある難解な文章に加え、世界に起こる事件をランダムに書き出すだけで、解釈ミスも含めれば的中率や実用性は割とよく当たる占い程度といったものなのよ」

「あ、もしかして聖杯大戦の事を予言したのは…」

「ええ。私です。最初はよくわからなかったけどシホさんの事を聞いてからそれは確信に変わったわ。

まず前半の方の予言が出てきた時はどうなるかと思いましたが…」

「確か…」

「はい」

それでカリムさんは語りだす。

「『繰り返す闇の胎動、湧き上がる絶望の泥。

その者、愉悦を心から望みし愚者。

従いし王は絶望を実現せんとし人造の杯を作り出さんとする。

人造の器から漏れ出したるは黒い絶望。

絶望は世界すべてを覆いつくしあらゆる死が蔓延し誰も抗うすべを見出せない。

最後、あらゆる全ての頂上より悪夢が降り注ぎ世界は闇に閉ざされる』…。

まずこの予言が出てきた時、私達は騒然としました。

このままでは世界が絶望へと染まってしまふという事態でしたから……」

「確かに、これだけだと不安一色ですからね……」

「ええ……」

今、もう一度聞き直してみても言峰綺礼に当てはまっている言葉だというのが分かる。

まず『繰り返す闇の胎動、湧き上がる絶望の泥。』という節は何度も繰り返されてきた聖杯戦争を指していて第三次聖杯戦争でアヴェンジャーによつて汚染されてしまった聖杯を指している。

次の『その者、愉悦を心から望みし愚者。』

従いし王は絶望を實現せんとし人造の杯を作り出さんとする。』

これは愉悦を望みし愚者というのは言峰綺礼で間違いない。

従いし王というのもギルガメッシュだというのはもう分かっている。

『人造の器から漏れ出したるは黒い絶望。』というのは聖杯に溜まっている泥で間違いない。

そして最後の『絶望は世界すべてを覆いつくしあらゆる死が蔓延し誰も抗うすべを見出せない。』

最後、あらゆる全ての頂上より悪夢が降り注ぎ世界は闇に閉ざされる』という節。

これは聖杯が降臨して誰であろうと願えばすべて破壊でしか事象を招かない壊れた聖杯をよく表している。

あの泥はサーヴァントですら天敵の対象だから一度溢れたらもう取り返しができないだろう。

それがよく痛感するのが平行世界で聖杯の泥で滅びたという世界をよく表している。前半だけ聞けば絶望の予言でしかなくなってしまうわね。

そこにアルトリアが、

「ですがカリム。後半の予言はすぐに出てきたのですか…？」

「はい。アルトリアさん。まだ二つの月の魔力が切れる前に再び予言が出てきたのです。」

その予言とは…、

『これを阻止できうるは、かつて聖なる王に使えし者。

遙か遠き地に旅立ち、名すら忘れ去られた血の末裔。

その者、無限の虚構を作り出す神秘。世界を侵し、そして穿つ異端の体現者。

古の昔滅びし都の王の再誕。変貌した御身、絶大なる極光の輝きをもたらず星の使者を従える。

彼の者達の織り成す奇跡はあらゆる闇を祓い光に導く。

その志を共にするもの達は力を貸与えともに戦うだろう。

合わさった力を前に愚者と王は力を削がれ絶望は消え失せることだろう』

…と、記されました。

これを見てすぐに絶望は防げると思いました。

ですがやはりこの内容だけでは誰かの特定はできずに無理に探すこともできなくていつ現れるとも分からないその『かつて聖なる王に仕えし者』の出現を私達は一途に待っていました」

「それがシホちゃんやって事か…」

「ええ。はやてさん。シホさんが予言に見事合致したのです」

「シルビアの記憶と力を受け継いだシホだからこそですね」

「はい、オリヴィエ陛下」

「しかし、私はシルビアにひどいことをしてしまいましたね…。過去、予言でシルビアの力は危険視されていた為に私はシルビアを異世界へと飛ばす決断をしました。今はそれが本当に正しかったのかわかりません…」

それでオリヴィエ陛下の表情が俯き暗くなる。

でも私はシルビアさんをそのまま受け継いでいるといてもいい。

だから、

「オリヴィエ陛下…気になさらないでください。確かに私は異世界に飛ばされ一時期さ迷いましたがまたこうして戻ってこられたのですから…だから気になさらないでください」

「はい。すみませんでした、シルビア…いえ、シホ」

私はシルビアさんと意識を共有してオリヴィエ陛下に話しかける。

それでオリヴィエ陛下は幾分楽な表情になった。

「それで内容の解読ですが、

『かつて聖なる王に使いし者。』

遙か遠き地に旅立ち、名すら忘れ去られた血の末裔。』

…というのはシホさんで間違いないと思います。

でも、次の節で『その者、無限の虚構を作り出す神秘。世界を侵し、そして穿つ異端の体現者。』というのはどういった内容か分からないのです。

これもシホさんの力なのか…そこのところはどうなのでしょう？

「多分全部私に合致しています。もう知っていると思いますが私は第二魔法の使い手でもあります。」

そしてこれだけはまだ管理局に知られていない秘密の内容ですが他の誰にも話さな

いと言っていただければ教えます」

「誓いましょう。ロツサとシヤツハもいいですね？」

「かしこまりました」

「わかったよ、カリム」

それで私は秘奥である転送魔術は本当は投影魔術という名前で、後、固有結界の内容をカリムさん達に伝えた。

それを聞き終えると三人は驚きの表情をして、

「そんなレアなスキルも持っているんですね。シホさんは……」

「はい。投影はこれから零れおちた副産物でしかないんです。

だから私がこれを解読します。

『無限の虚構を作り出す神秘』というのは投影魔術。『世界を侵し、』は固有結界。『そして穿つ』とはおそらく宝石剣での第二魔法で平行世界への孔を開けることでしょう。

そしてついでに言いますと『古の昔滅びし都の王の再誕。変貌した御身、絶大なる極光の輝きをもたらす星の使者を従える。』というのはおそらくアルトリアの事でしょうね。

ユニゾンデバイスへと形を変えましたから。アルトリアは」

私の解読に三人と一緒に聞いていたはやて達は関心の表情をして、

「そこにさらにシホさんは『天の杯』も取得している…かなりの数のレアスキルを持っているのですね」

「はい。まあ…」

「これで納得が行きました。シホさんはやはり予言通りの人物でしたね」

カリムさんはそれで笑みを浮かべる。

「そして最後に残りの節。」

『彼の者達の織り成す奇跡はあらゆる闇を祓い光に導く。

その志を共にするもの達は力を貸与えともに戦うだろう。

合わさった力を前に愚者と王は力を削がれ絶望は消え失せることだろう』…。

これははやてさん達とサーヴァントを指していたのですね」

「多分ですが…」

「奏者はすごい人物だったのだな。余は我が事のように嬉しいぞ」

ネロが嬉しそうに何度も頷いているが私としてはもう取り返しがつかないとこまで

来ちゃったなあ…と思う。

こうして私の秘密はどんどん広がっていくのだろうか。

「これで十分予言の内容を理解させてもらいました」

「そうだね、カリム。つと、いつまでも他人行儀もあれだからせつかくこうして知り合い

になったのだから僕達で呼び捨てで呼び合うのはどうだい？」

「それ、ええね！」

ヴェロツサさんの提案にはやては乗り気だったので私も参加することになった。

これからはカリムさんの事をカリム。

ヴェロツサさんの事をロツサ。

シャツハさんの事をシャツハと呼ぶことになった。

それでその後は親交を深めるために色々と全員で話をし合って、

「あ、そうそう。シホ、あなたとアルトリアさんのユニゾンですが私でも申請許可はできませんので、

「わかったわ。カリム」

「僕と付き合いたい時は気兼ねなく言ってくれよ？」

「…ロツサ。それは多分ないから」

「そうやね」

それでロツサは落ち込み、シャツハがロツサを叱っていた。



それから家に帰ると、

「あ、シホちゃんにみんなおかえり！」

「ただいま帰りました。なのは」

「うん！ それよりお話はちゃんと出来たの？」

「ええ。有意義な時間を過ごさせてもらったわ」

特に支障のない程度に話をしていく。

と、なのはがふとオリヴィエ陛下にある事を聞く。

「そういえばオリヴィエさん」

「なんですか、なのは？」

「うん。ちよつと聞きたいことがあったの」

「言ってみてください」

「あのね…オリヴィエさんの宝具なんだけど…みんなのは分かっているんだけどオリヴィエさんの宝具だけ分からないの…それで気になっちゃって」

「そうですか。しかし、私の宝具ですか…」

それに関しては私は心当たりがある。

オリヴィエ陛下はクラスはファイターだけど本当はライダーとしても適性はあるんだよね。

「私の宝具は二つあります。一つはこの体を守る『聖王騎士甲冑の鎧』というものです」
「へー…それじゃもう一つは？」

「それは、今は教えられません」

「なんで…？」

「発動したが最後、私はなのはとお別れをしなくてはなりませんから…」

「えっ…」

それを聞いてなのははいきなりの事だったので目を見開く。

「それを発動したが最後、私はその宝具から降りられなくなってしまうのです。」

そしてさらにその宝具は燃費が悪く聖杯のバックアップもない今はなのはの魔力だけでは発動もできないシロモノです」

「そうなんだ…」

「だから…」

「うん。それならもう宝具に関しては聞きません。だから、いなくならないでね？」

「ええ、なのは…」

そしてその後、ひっそりと私はオリヴィエ陛下に宝具の事を聞いてみた。

「オリヴィエ陛下。あなたの宝具はやはり…」

「はい、シホ。あなたの思っている通り『聖王のゆりかご』です」

「やっぱりですか……。あれは確かにもう発動はできませんね。最悪一つの世界を滅ぼしかねない……」

「はい。だからシホもこの件に関しては誰にも話さないでくださいね……？」

「わかりました」

「だけど、今後この件が悲劇を生むとは誰が予想しただろうか？」

第八十六話

『無限書庫開拓記』

…ある時ユーノは無限書庫を開拓するために部隊を組んで無限書庫の奥へ奥へと進んでいくときだった。

「ユーノ司書！ 道が見えなくなりました！」

「俺の相方が遭難しました！」

「畏にかかつて死にかけました！」

「なにかでかい像が動きだしました！」

「道が迷路のようになっていて奥に進めません！」

「幽霊が出ました！ なにか白いものがいくつも浮いています！」

司書探索部隊の面々から次々とあがる悲鳴の声にユーノは、

「（これは僕だけじゃ対処は不可能だ！ 未知の力が働きすぎている！）」

ユーノも場の混乱に着いていけず一緒になって悲鳴をあげていたりした。

「もう、一回全員撤退！ 傷もなく無事な人は怪我をしている人を連れてなんとか運ん

「でください！」

それで泣く泣くユーノと司書達探索部隊は無限書庫の探索を一度中止して撤退したのだった。

入り口まで戻ってきて状況を再度確認してみれば全員が全員あまりの無限書庫の迷宮ぶりに疲労感をあらわにしていた。

「…ユーノ司書。どうしましょうか？ これ以上はさすがに私達では探索は困難です」「被害がすごいですから誰か頼りになる人の申請をお願いします」

「そうですね…。くそう、スクライアのみんなにもそう何度も迷惑をかけるわけにはいかないし…。」

クロノにもこの苦労を少しでも味合わせたい…」

「…こういった迷路にも耐性があつて幽霊といった心霊系にも強くて司書能力も高くて戦闘も自由自在にこなせる…そんな人がいれば心強いんですけど…そんな都合のいい人なんていませんよねえ…」

司書の一人がそう言つたため息をつくがユーノはそんな心強い人物に何人か心当たりがあつた。

「…いや、かなりいる」

『えっ…？』

司書全員がいつせいにユーノを見る。

そんな人がいるのかと…。

「相談してみよう。彼女達ならきつと力になってくれる！」

……………

……………

……………

「…とまあそんな経緯があつて私とファイア、アルトリア、ネロ、士郎、キャスター、志貴が呼ばれたわけね？」

無限書庫にはシホ、フィアット、アルトリア、ネロ、士郎、キャスター、志貴がユーノに呼ばれてやってきていた。

「そうなんだ…。特にシホとフィアットは武装隊の研修もあるだろうけど手伝ってほしいんだ」

「兄さん、そんなに無限書庫は魔窟なの…？」

「ああ。僕達だけじゃとても先に進めない。だから力を貸してほしいんだ」

「でもなんで俺まで呼ばれたんだ…？」

「志貴に関して私は私が提案した。慣れているだろう…？ 地下迷宮で…」

士郎の言葉に志貴はトラウマを刺激されたのか頭を抱えて、

「…ごめん琥珀さん、それだけは、それだけは…ッ！」

どうやら過去のトラウマは相当深いのだろうと全員は思いしばらく志貴はそつとしておく事になった。

「…さて、ではいくとしようか。時間も制限があることだしな」

士郎の一言で全員は納得して無限書庫の奥へと入っていった。

「それじゃ士郎。ちゃちゃつと解析して進むわよ？」

「わかった。解析開始」
トレース・オン

シホと士郎は二人して解析をかけて先に進もうとする。が、

「がっ!?!」

途端にして、二人は襲ってきたあまりの激痛に頭を押さえて地面に転がった。

「シホ!?!」

「奏者よ!?! どうしたのだ!?!」

「お姉様!?!」

「ご主人様!?!」
ママスター

全員がシホと士郎に声をかける。

しばらく二人は震えていたがしばらくしてようやく頭の痛みが抜けてきたのかなんとか立ち上がるまでには回復して…、

「…ここを作った奴、はつきり言っちゃうけど馬鹿でしょ!？」

「ああ。それに関しては同感だな」

「なにがあつたの…?」

ユーノが聞く。

それにシホは、

「情報量が半端じゃない…私のキャパシティを軽く振り切ったわ」

「同じくだ…」

「そっか…。それじゃ地道に進んでいくしかないね」

「そうね…」

「無限書庫というのですから道は限りなく続いているのでしよう。楽しみです」

「見事看破してやろう!」

アルトリアとネロが姿を戦闘衣装に変えてそれぞれ剣を構えて進む気満々である。

「私にかかりましたら迷宮なんて屁でもありません!」

「障害があるなら切り裂くのみだ」

キャスターと志貴もやる気を出している。

「それじゃ私達も本腰を入れるとしましょうか」

「そうだな」

「はいです！」

シホ達三人も騎士甲冑をその身に纏う。

「なんとも頼もしいね…」

ユーノはひたすら力強さを感じていた。

それから全員は奥へと進んでいく。



「■■■■ー！！」

ゴーレムが出現した。

「壊す！」

志貴により死の線を切られて解体される。

それはほんの一瞬の出来事でユーノはあんなに苦戦したゴーレムをいとも容易く破壊した志貴を尊敬の眼差しをして見ていた。

そしてお次はというと幽霊の靈魂が浮遊しているエリアへと入った。

「こんなもの、お茶の子さいさいです！」

キヤスターが呪符を放って飛んでいる霊魂を導いて成仏させる。

それによつて霊魂の群れの姿はなくなった。

そしてお次は迷宮区に入った。

「ここだけ限定して解析をかければ負担は軽いわね」

「そうだな。…つと、ユーノ。そこには罫があるから気を付けたまえ」

「あ、はい…」

シホと士郎が次々と解析をかけて先に進んでいく。

トラップも解析で先読みして解除して進んでいくのでユーノは安心を感じていた。

「あ、ユーノ！ その壁にはトラップが！」

「…え？」

…ガコンツ！

気づいた時にはユーノはトラップが発生するスイッチを押してしまっていた。

途端に道の前方から丸い巨大な鉄球がいくつもシホ達目がけて転がってくる。

「うわっ!!」

「ユーノ！ 下がりなさい！ アルトリア！」

「了解しました、シホ！」

アルトリアが剣を構えて、

「風王鉄槌！」
ストライク・エア

放たれた風圧の塊によつて鉄球は粉々に破壊される。

「この程度のトラップ：笑わせてくれるな」

「アルトリアよ。次は余に任せてくれ！」

「わかりました、ネロ」

「さあ鉄球よ、余とともに舞つてもらおうぞ！」

次々とやつてくる鉄球をネロは舞いながら切り裂いていく。

「すごい……」

思わずといった感じでユーノは眩く。

司書達が一日かけても突破できない道をシホ達は軽がると進んでいく。

そのあまりの走破ぶりにユーノは呆れを通り越して爽快気分だった。

そして……

「いったん休憩にしましょうか。うちで作ってきた昼食があるのよ」

「うちでも備えて作ってきた。全員分あるからあわてずゆつくりと食すがいい」

シホと士郎が弁当を出してきたのでそれで一同は休憩することになった。

ここに来るまでにあつたトラップもすべてシホと士郎が強化の魔術で強化のしすぎ

で劣化させて破壊したので二度目は安心して来ることができらるだろう。

それでユーノは感謝の言葉を述べた。

「ありがとうございます、みなさん。これで書物の探索作業がかなり楽になりました」「いいわよ。それよりまだ半日あるんだから進めるところまで進みましょう。今日一日は私達は付き合うから」

「わかった」

と、そこにクロノから通信が入ってくる。

『ユーノ。それにみんなも開拓作業ははかどっているか…?』

「ええ、クロノ。かなり進んだと思うわ。…っていうか無限書庫を作った人って実は魔術師じゃないでしょうね? そういった似た仕掛けがたくさんあったわよ?」

『そうなのか…? それに関してはさすがに無限書庫の歴史を紐解いて調べてみないと分からないな…』

「そう…まったくやつかいな巣窟よ、ここは。幽霊は出るわ、ゴーレムは出るわ、魔法的トラップは多いわ、迷宮になっているわで…」

「進めなくなっていた場所は無理やり道を開通して風通しをよくしておきましたからね」

『そ、そうか…』

「それでクロノ。あと半日は掘り進めていきたいと思っただけどなにかご希望はある？ この面子ならかなりいけると思うけど…」

『そうだな…。それじゃ今から詳細なデータを送る。最低でもここまでは無限書庫を開拓して安全に本が調べられるようにしてほしい』

それで送られてくるデータの数々。

ユーノはその一覧を見て思わず、

「まだ半分以上あるじゃないか!？」

と、クロノに叫んだ。

『今日は各部署から無理いってその面子を集めさせたんだからそれくらいはできれば進んでくれるとありがたい』

シホ達もユーノに送られてきた一覧を見て、

「…これって私達がいなかったら今日一日でなんてさすがに無理がある内容だわね」

「しかし燃えてきます!」

「うむ! まだ見ぬお宝があると思えば苦ではないぞ!」

管理局周辺ではシホの双子の使い魔姉妹で通しているセイバーコンビはなんとも頼りがいがある。

「ま、ここまで来たらなにかあるか確かめたいという気持ちではあるな」

「そうだな。遠野の地下迷宮に比べれば怖くもなんともない。なにせロボットとかが襲ってこないからな…」

志貴は過去をまた思い出しているのか渋い表情になっていた。

しかし志貴は気づいていない。

その発言がフラグであることを…。



午後になり無限書庫迷宮探索が再開されたが志貴の言っていた事が現実になった。

そう、人型をした人形が何体も現れて襲い掛かってきたのだ。

「おい志貴！ あれは予言ではなからうな!?!」

「まさか本当に起こるとは…恐ろしいな」

そう言いながらも各自でそれぞれ人形を破壊していく。

…していくのだが目からビームを放ってきたり、毒霧を吐いてきたり、ロケットパンチを放ってきたり、胸から熱線を放ってきたりと結構攻撃方法も本格的になってきたので全員は手を抜く事をやめた。

そして気づけば辺りには人形の残骸があちらこちらに転がっているという始末であ

る。

「…本当に魔窟じみてきたわね。こんなことで今日のノルマは達成できるのかしら…？」

「壊しても壊しても後から後から湧いてきますね、お姉様…」

さすがの面々も精神的に疲労を感じ始めていた。

「ユーノ…。マップはこつちで合っているわけ…？」

「うん…、合ってるよ。その証拠としてトラップが凶悪化してきているから…」

それで全員はまた気を引き締め直して再度前進していくのだった。

そして時間的に日が暮れ始める頃になってようやく、

「…も、目標の地点までの道を、走破した、みたいだね…トラップも全部破壊したから、もうなにも怖くない…」

死亡フラグ的な発言を最後に言いながらも一同の中でおそらく一番体力がないであろうユーノが地面に片膝をついて深いため息をついていた。

ユーノの前方ではシホ達も、

「奏者よ、余はもう帰ったら絶対に湯浴みがしたいぞ…」

「その意見には同感ですね…。もうクタクタですね」

「服や尻尾がホコリまみれですよ」

「さすが無限書庫と呼ばれるだけあるな…」

「ああ。正直舐めていた…はやてちゃんを連れてこなくて正解だったな。シグナムさん達に殺される」

「一応ノルマは達成したんだからこれで十分よね…」

「はいですー…」

そこにまたしてもクロノから通信が入ってくる。

『調子はどうだ?…うわっ!? どうした、みんな!?!』

一同のあまりにも疲れ果てている姿を見てクロノは驚愕した。

「…やあクロノ。なんとかノルマの場所までは達成したよ?」

『そ、そうか…それならよかった』

「これ以上やれって言われたらさすがの私達でもキレるかもね…」

「はい。この苦労を味わえと声を大にして言いたいです…」

シホとファイアットの発言にクロノはこれ以上は要求はすまいと思った。

『わ、わかった…。それじゃみんな、今日はご苦労だった。帰ったらゆつくりと体を休めるといい。今から入り口までの転送ポートを作るから』

それで全員は転送ポートで戻ってきて家に帰ったらそれぞれ体を休めるのだった。

その一部始終としては、

まず高町家で、

「シホちゃん！ アルトリアさん！ ネロさん！ どうしたの!? ボロボロだよ!」

「少し、無限書庫開拓をしてきたのよ。ユーノの手伝いで…」

「なのはよ。お風呂はもう沸いているか…? 余は湯浴みがしたい…」

「今回ばかりはネロに賛成ですネ…」

と、シホ達は疲れきっていた。

そして八神家でも、

「士郎、志貴、キャスターどないしたん!? 今日無限書庫の手伝いに行っていたはずや

ろ!?! なんでそないボロボロなん!?!」

「無限書庫は魔窟なのだよ? はやて…」

「ああ。もう二度と行きたくない…あそこは遠野の魔窟以上だ」

「もう埃だらけで嫌です…」

「ホンマになにが起こつたんや…?」

と、三人は愚痴をこぼしてはやては不思議がっていた。

……後日、ユーノの調べで先日 of 探索は普通の局員が一日として一カ月分くらいの成果だと教えられてたつた一日の強行軍でそれを達成したシホ達はクロノに対してキレた。

「…クロノ、よくも私達に一ヶ月分もの労働をさせたわね…？」

「お仕置きでしょうかねー？ お姉様？」

「ふふふ、クロノ。覚悟はいいですか？」

「余を怒らせたら怖いぞ？」

「まあ、報いとして受け取ってくれ」

「切り裂かれないだけいいと思え…」

「チャキチャキ呪うぞ♪」

全員から責められておまけでキャスターの呪いも受けて久しぶりに高熱を出して寝込んだという。

クロノ、いと哀れ…。

第八十七話

『夜の一族の告白、すずかの決意』

：ライダーは落ち着きの日々を続けていきかつての衛宮家でもした事のないメイド服を着て月村家のメイドをしていた。

「ファリン、これでよろしいでしょうか……？」

「はい。これでライダーさんも立派なメイドさんです！」

ファリンが教育係りに付きライダーに一からメイドというものを教えている。

しかしさすがライダーというべきかライダーはすぐにメイドの作法を飲み込んで自分の物にしていく。

かつて二人の姉、ステンノ、エウリュアレに躰と称していびられ、こき使われていた過去が生きてきている。

こんなことに発動しなくてもいいのに……とライダーは思っているがそれがすずかの為になるならいいかと自己完結している。

当然すずかも夢の中でライダーが誰からも愛されず最後には怪物ゴルゴンとなり姉

二人を飲み込んでしまった過去を知っている。
だからすすかは私だけでもライダーの味方でいようという決意を固めている。

閑話休題

「スズカ、似合っているでしょうか…?」

「うん! とつても似合ってるよライダー!」

「それならばよかったです。私のような大きな女性では似合っていないものかと…」

「ライダー…?」

「は、はい! なんでしょうか、スズカ!」

ライダーはすずかの少し低い声に怯えた。

それはかつてのマスターだった桜とかぶる言い方だったのだ。

「ライダーは自分を卑下しすぎです。ライダーはとつてもキレイなんだからもつと誇つていいと思うよ?」

「は、はい。スズカ…」

すずかに逆らえないのはやはり桜に似ているからだろうか…?

それともただ怖いだけなのだろうか…?

ライダーの疑問は尽きない。

「それとメイド服を着てメイドさんをしているけどライダーは自然体でいてね？」

「はい、わかりました。スズカ」

それでライダーは笑みを浮かべる。

「でも、やっぱり眼鏡がない方がキレイなのに…もったいないなあ」

「すずかは心底残念がっている。しかしそれだとせつかくの魔眼殺しが意味を無くしてしまおうので、

「申し訳ありません、スズカ。これを外したら…」

「…うん、わかっている」

すずかはライダーに抱きつきながら、

「でもライダーはそれでも私の大事なパートナーだからね…？ これからもよろしく

ね。ライダー…」

「…はい、スズカ」

二人が仲睦まじく抱き合っているところに忍が姿を現した。

「あ、すずかにライダー。こんなところにいたのね」

「どうしたの？ お姉ちゃん…？」

「どうしましたか？ シノブ？」

「うん。…今日はなのはちゃん達がうちに来るでしょ？ それでどうどうすずかもシホちゃん以外に夜の一族のことを打ち明けるっていうじゃない？」

「うん、お姉ちゃん。私、シホちゃんやライダーに勇気をもらったの。だからちゃんと話そうと思うの！」

「…そ。まあ頑張りなさい。私と恭也は応援してるから」

「うん。ありがとう、お姉ちゃん！」

「話はそれだけ。それじゃ頑張つてね」

忍はそう言つて部屋を出ていった。

「ついにナノハ達に話すのですね、スズカ」

「うん、ライダー。シホちゃんも協力してくれるって言つてくれるから私、頑張るね！」

「シホが協力してくれるなら心強いですね」

「うん！」

それですずかはライダーの手を握つて、

「でも、やっぱり不安なの。なのはちゃんやアリサちゃん、フェイトちゃんにアリシアちゃん、はやてちゃんにユーノ君、ファイアットちゃん…私の大事なお友達にもしかしたら拒絶されたらどうしようと…思うことがある」

「……………」

ライダーは無言ですずかの言い分を聞く。

「でも、恐れていちやダメなんだ。一步を踏み出す勇気を出さなきゃいけないんだ！」

「だから…見守っていてね？　ライダー…」

「はい。見守っています、スズカ。頑張ってください」

「うん！」

すずかは笑みを浮かべてこれから来るであろう大事なお友達を想う。

きつと、大丈夫だって…。



…そして月村邸の門の前にシホを筆頭なのは、アリサ、フェイト、アリシア、はやて、ユーノ、ファイアットの八人がやってきた。

この中で男の子はユーノだけだから少しいざらそうにしているがなんとか耐えている。

シホが呼び鈴を鳴らす。

『どちら様でしょうか…？』

毎度お馴染み電子音の声が聞こえてくる。

「すずかの友達の名前・E・S・高町です。そして他七名もすずかの友達です」

『声紋分析………確認がとれました。どうぞお入りください』

そして門が開き全員は中へと通された。

「…いつも思うけどすずかの家ってかなりの豪邸だね。サーヴァント達が戦えるくらいの敷地はあるし」

「そうね、ユーノ。でもいいじゃない？ そんな事は関係なくすずかは私達の大事な友達よ」

「うん！」

「そうね」

「そうだね」

「うんうん」

「そやね」

「そうですね」

「まあね……」

上からなのは、アリサ、フェイト、アリシア、はやて、ファイアット、ユーノの順に答える。

「それとみんな、一つ聞いて…」

シホが真剣な表情になりみんなに声をかける。

シホが真剣に声をかけるといふことはそれだけ大事な話なのだろうと今までの経験で全員は身構える。

「そんなにきつちりと身構えなくてもいいんだけど…」

「あはは…どうしてもシホちゃんの言葉は身構えちゃうよ」

『うんうん』

「…まあ、いいわ。それでだけどこれからすずかはみんなにとつても大事な話があるから。だから話を聞いても今までと態度は変えないでありのままにすずかの話すことを受け入れてあげてね？」

「なんだ。そんな事か。あつたりまえじゃないの。あたしとなのはシホ以上にすずかとは付き合いが長いのよ？ いまさらすずかがなにか秘密を隠していようと受け入れるわよ」

「そうだよ、シホちゃん！」

「……………そうね。無駄な問答だったわね。それじゃ私からは以上よ」

それでシホは笑みを浮かべながら、心の中で、

（すずか、心配はいらないわ。私達はどこまでいってもあなたの親友よ）

と、思っていた。

「でも、それやとシホちゃんはすずかちゃん秘密を知っているんやろ？」

「ええ。私は知っているわ」

「なら、シホちゃんが受け入れているんなら私達もきつとちゃんとすずかちゃんを受け入れるよ。な、みんな！」

「はやての言うとおりでよ」

「そうだね、フエイト。それをいったら私は元・死人だしね」

アリシアは普通に話すがさすがに人前では話せない内容だからシホ達に「言い触らさないように」と釘を刺されていた。

アリシアはそれで猫のように「にやはは」と笑みを浮かべて苦笑いをするばかりだった。

そんな話を交わしながら玄関口までやってくるとノエルさんがいて、

「ようこそおいで下さいました、お嬢様方。それにユーノ様」

ユーノはもしかしたらお嬢様と一緒にたにされるのではないかと少し不安がっていたがちゃんと区別されたので安堵していた。

それはともかく、

「すずかお嬢様がお待ちになっておいでです。案内いたしますね」

『わかりました』

それで全員はお茶会ができる場所まで通された。

そこではメイド服のライダー、フアリン、そして覚悟の表情をしたすずかの姿があった。

みんなが来たことを確認したライダーとフアリンはノエルとともにその場を離れていく。

「みんな、よく来てくれたね…嬉しいよ」

「なによ急に改まって…すずかからしくないわよ?」

「うん。それは私も自分で感じてるよ。でも私もついこういう感じになっちゃうのかもしれないの」

「それだけ、すずかちゃんは大変な話があるんだね…?」

なのはがそうすずかに問う。

「うん、なのはちゃん…とっても大事な話なの。その前に…シホちゃん、伝えたとおりに進めてもらって大丈夫…?」

「平気よ。いままで私とすずかは何度もしてきたじゃない? いまさら遠慮することはないわ」

シホがすずかに近寄りおもむろに上着を脱ぎだす。

それにユーノは「うわわっ！」と慌ててその目をふさぐ。

「大丈夫よ、ユーノ。上着だけだから」

「で、でもなんで下着姿になるの？ シホ…」

「そうです、お姉様」

「それは私が代わりに説明するね。まずはみんなに見てもらいたい。私の本当の姿を…」

それですすかは顔を赤く染めながらもシホに近づき口を開いてその歯を突き立ててシホの首筋に噛み付いた。

その光景はなのは達にどう映ったのだろうか？

「んっ…」

「うっ…」

「んっ…はっ…」

「んっ…」

シホの首筋から血が滴れてくる。

それもすすかは名残惜しそうに吸いそれを咀嚼していく。

シホもそれで少し身体が敏感になっていのか何度かうめき声をその口から漏らす。

そして…少し時間が経ち、やっとすすかはシホの首筋から口を離す。

「…ふう。おいしかったよ、シホちゃん…」

「はあ、はあ……それはよかったわ、すずか」

シホとすずかは二人とも顔を上気させて赤くしている。

それを見ていたなのは達は思わずの光景に絶句していた。なにを話しだせばいいのかわからずただあたふたするだけだった。

それでティツシユで口元を拭ってシホの首筋の血も拭いて上着を着させた後、先に話をしだす。

「私ね…みんなが思っているとおり吸血鬼なんだ」

「吸血鬼…?」

「うん…私の家はね。代々が『夜の一族』っていう種族なの」

「夜の一族…?」

「うん。夜の一族は人間の突然変異から生まれた一族で普通の吸血鬼のように日の光が弱点じゃないの。」

そしてそれぞれに特殊な能力を持っているの。私の能力は『氷の魔眼』。見たものを凍り付けにする能力を持っているの。

だけどその力を出すためには血を接種しなければいけないし通常生活でも血は必要不可欠なの」

『……………』

なのは達は黙ってすずかの話を聞いている。

これがすずかの大事な話だというのだろう。区切りがいい時まで口は出さないでいる。

「私は…いままで怖かった。この能力が…吸血鬼としての私がばれるのが。

初めてアリサちゃんやなのはちゃんと会ったときもとても臆病で自分から話しだせる勇気がなかった」

それを聞いてアリサは少し後悔する。

あたしはそんな事も全然知らずにただ臆病な子だと思っすずかをいじめちゃったんだって…。

「この事がばれるきっかけは今までもあったんだ。

なのはちゃんのお兄さん…恭也さんもお姉ちゃんのことを知ってもそれを全部ひつくるめて受け入れて恋人になった」

「お兄ちゃん…」

なのはは兄・恭也が立派な事をしたんだと感動していた。

「そして私のことがばれたのはある時、シホちゃんと帰り途中に夜の一族の事がばれて怖い人達に狙われた時だった。

それでシホちゃんは偶然私の真実を知っちゃって、でも私の事を嫌わずに受け入れてくれた」

「ちなみにすずかを狙った組織は土郎お父さんと恭也兄さん、美由希姉さん、私の四人で壊滅させたわ」

そこで今まで黙っていたシホがその事を伝える。

それになのは達は驚愕の顔をする。

「それでシホちゃんにばれちゃって私はシホちゃんに会わず顔がなくて部屋に閉じこもっちゃった。

でもシホちゃんはそれでも私の部屋に入ってきて私を励ましてくれたんだ。

私の事を血を吸う化け物なんかじゃないって言ってくれた。

優しい子だって言ってくれた。

化け物だつていう奴がいたら代わりに痛みつけてあげると言ってくれた。

そして、信じてくれた。人を襲うことなんてしないって…」

すずかは当時の事を思い出しているのか胸に手を当てて思う。

やっぱりこの私のシホちゃんを想う気持ちは間違いないんだと。

私はシホちゃんが大好きなんだと…。

「だから、私はシホちゃんのおかげで前向きにこの力と向き合っていこうっていう気持

ちになったの。

そして、そんな私だからこそサーヴァントにはライダーが召喚された。

ライダーにも何度も慰められた。助けてもらった。勇気をもらった…だから！」

すずかはひととき大きな声をあげて、

「今日みんなにこの事を告白する勇気が持てたの。恐がってもいい…だけど私はこれからもなのはちゃん達と友達でいたい…！」

私の身勝手だけどこれが本当の想いなの…。だから私の想い、受け取ってくださいませんか？」

すずかはもうそれは必死に目をつぶってただ手を差し出す。

それをまずアリサが、

「…ばっかじゃないの?」

アリサの物言いにビクツとすずかは震える。

そんなすずかにアリサは抱きつき手を握りながら、

「あたしとすずかはもう親友よ。それはもう変わらないわ。すずかはバカよ。そんなこと程度で嫌うなんてあるわけじゃないじゃない…」

「アリサ、ちゃん…」

「あたしはすずかがなんであろうと受け入れるわよ。それが友達っていうものよ。さす

がにシホの血を吸い出した時は驚いたけど、ただそれだけよ」

「うん……うん……」

それですずかは涙を流す。

なののがアリサに続くように、

「すずかちゃん、私達は気にしないよ？　すずかちゃんは私達の大事なお友達……それだ

けでいいと思うんだ」

「うん。なのはの言うとおりだよ、すずか。私もすずかは大事な友達だよ」

「私はまだそんなに付き合いは少ないけど、そんな事は気にしないでいいと思うんだ」

フエイトとアリシアも続いてすずかの存在を肯定する。

「その通りや。生まれが少し特殊な程度くらいやんか。気にしたらアカンよ？　すずか

ちゃん……」

「はやての言う通りだね。すずかは気のし過ぎだと思う。だから気にしたらダメだよ
？」

「はい、兄さんの言う通りです。すずかはすずかです。私のライバルには変わりありません。だから元気を出してください」

全員に自分の存在を肯定してもらえてすずかは涙を流しながらも笑顔を浮かべる。

「……よかったわね、すずか。心配することなんてなかったのよ。みんなはすずかの大事

な友達なんだから…」

「うん、シホちゃん。私、頑張れたかな…?」

「ええ、頑張ったわ。誇っていいわ」

「うん! どれもこれもシホちゃんのおかげなんだよ。シホちゃん、私…シホちゃんの事、大好きだよ!」

「えっ…!?!」

「さすがの真つ正面からの直球な告白にシホは思わず顔を赤くしてうろたえだす。

「えっと、すずか。それってlikeの好き…?」

「ううん…loveの方の好きだよ。シホちゃん、私…シホちゃんの事が…」

「す、すずか…」

「いい雰囲気になりそうだったがそこは問屋が卸さないと言わんばかりに、

「すずか! この雰囲気で告白はするんです! 卑怯です! 反則です!!」

「だって負けたくないもん…!」

「開き直られた!?!」

「ファイアットは思わず絶句する。まさかここまですずかが大胆になるなんて、と。

「とうのシホもすずかの気持ちにどう答えていいのか分からず顔を赤くして口籠もつてしまっていた。」

外野と化していたなのは達はシホの反応を見て、これですずかちゃんにも脈ありかと色々な期待の眼差しを送っていた。

話が済んだと判断したライダー達もお菓子や飲み物を運んできてライダーはすずかに、

「やりましたね、スズカ。シホの心が揺れ動きましたよ」

「うん！ 私やったよ、ライダーー！」

「すずかお嬢様、成長なされましたねえ……」

フアリンはすずかの成長に涙を流していた。

それからお茶会が開かれて終始すずかはすつきりした顔つきだった。

それとは逆にシホは顔を赤くして無言だった。

なのは達はシホの反応を見て初々しいなあ……と何度も思っていた。

それでフィアットは嫉妬をしまくっていた。

それから全員はすずかと盟友となる事を誓い、誰にも夜の一族の事は公言しない事を約束した。

そしてさすがは今回の話とは別で決断したらしく時空管理局に所属する決意を固めたという。

目指すはシホの補佐役だという事である。

第八十八話

『揺れ動く心、動き出す子鴉』

すずかの告白から数日、シホは大いに悩んでいた。

それは…。

「私は、どうしたらいいと思う…？ 士郎？」

シホは本日は学校帰りに八神家にやってきて自身と同じ存在だった士郎に相談しているのだった。

「そうだな…。すずか嬢はシホのことを本気で好いているのだろうか？」

「うん…。だから私はどうしたらいいのか分からないのよ。第一私はすずかと同じ女性だし、他にも理由はあるけどすずかの気持ちにどう応えればいいのか…それで悩みが尽きないのよ」

「シホの方はイリヤが言うには世界の修正で魂が完全に女性化したという話だろうか？ シルビアという人物とも魂が融合したというし…。ならば確かに悩みどころだな」

「そう…。私自身はそれでも男性を好きになるとかは想像つかないし、やっぱり男性と

しての記憶が残っているから考えただけで鳥肌が少し立っちゃうのよ。

それはシルビアとしての女性の記憶もあるけどさ。そんなのは些細な問題だわ」

「難儀だな…。これではシホは魔術師の子孫を残すのはとうてい無理そうだな」

「まあね…」

そこに二人の会話を黙って聞いていたはやてが、

「そんならシホちゃんの好きにしたらどうや？」

「好きにつて…」

「シホちゃんはすずかちゃんのこと、どう思ってるん？」

「どうつて…それはやっぱり可愛い女の子だし、私の事を最初に肯定してくれた大事な

親友だし、私にとってすずかは…」

そこでシホはふと「あつ…」となにかに気付いてしまった。

「私も、すずかの事が好き、なのかな…？」

「なにかに気付いたみたいやね？ そんならシホちゃんの心行くまで走ってみればい
と思っよう…」

「なにか分からないけど心にストンとなにかがはまったような不思議な気持ちね…」

「それがシホちゃんがすずかちゃんを好きだつていう気持ちや！」

はやては「こぞとばかりにシホの気持ちを固める行動を取つていった。

内心とてもいじりがあるカモを見つけたな、とはやては思つてほくそ笑む。

「で、でもやつぱり女性同士じゃやつぱり色々な問題が…」

「そんなん気にしたらアカンよ！ 他人の目なんて気にせず想いを突き進んだらそれだけで幸せはつかめる！」

「そう、かな…？」

「そうや。だからシホちゃんも素直にいったらええと思うんよ」

「そうか…。うん、少し心が楽になつたかも。ありがとう、はやて。私、もう少し考えて…そしたら答えを出してみるわ」

「その意気や。私は当然として士郎も応援するからな！」

「あ、ああ…」

士郎ははやてのペースに乗せられてつい返事を返してしまった。

「それじゃもう遅いし帰らせてもらうわ。おいとまするわね、また明日学校でね、はやて」

「うん。またな」

それでシホは笑顔を浮かべながら帰っていった。

それを見送つたはやてと士郎はというと、

「ついはやてのペースに乗せられて賛同してしまつたが…よかつたのだろうか？ 結構

シホにとって大事な話だったようだが……」

「別にええやん。はつきりしないよりは気持ちを引きつちりと固めさせた方がシホちゃん
の為や。フィアットちゃんにはちよつと悪いと思っただけだな」

「シホは女性に好かれているからな……その代表的なのがやはりすずか嬢とフィアット嬢
の二人と、後アルトリアとネロのダブルセイバーが含まれるわけだしな」

「そうや。士郎も分かっているやん……自分のことに関しては鈍感の癖にな」

「……なにか言っただか？ はやて」

「いいや。ただ、士郎も罪作りな人やねって話や」

「なんでさ……？」

士郎の鈍感さにはやてはため息をつくのだった。

……

……

……

その後、八神家に全員が帰ってきて一緒に『いただきます』をして食事を開始してそ
れぞれが食べ終わった後の雑談として、話題は当然シホの話になった。

「それでな。シホちゃんもやつと自分の気持ちにも気づきはじめたんよ」

「シユバインオーグがか…それは、よかったのでしょうか…?」

「いいことだと思えますよ。はやてちゃん!」

シグナムが少し悩む素振りを見せるがシヤマルははやてに賛成の意を示した。

「鈍感であるシユバインオーグが自身の気持ちに気づけただけでかなりの成果だと思われます。我が主」

「そうやろ。ザファイラー!」

「すずかとシホがか…いいんじゃないか、はやて? でもそれだとフィアットは引き下がるしかないかな…?」

「フィアットちゃんはあきらめへんと思うよ? ヴイータ」

「そうだよな…あたしとしてはすずかを応援するけどな」

「ヴィータはすずかちゃん派か」

「しかし、あの正義の味方を突っ走っていた男が片割れとはいえ少女になりここまで人間的になるとはな…」

「志貴。それは私に対する挑戦か…?」

「なにか言い返したいならお前もまずその鈍感を治せ」

「お前には言われたくないぞ…?」

「俺はもうアルクエイドについていく事を決めた後の英霊だぞ？ お前よりは鈍感な治っているさ」

フツ…と志貴は士郎へと挑発的な態度をとる。

それを聞いていたアルクエイドがいやんいやんしていたのは全員は見なかったことにした。

「やるか…？ 殺人貴」

「受けて立つぞ？ 偽善者」

「残念だな。もう私は偽善者ではない…！ はやて達の味方だ！」

「ならそれを証明してみろ！」

二人は喧嘩をする合図とも言おう二人限定の呼び合いをして庭へと向かおうとする。

だが一家の大黒柱であるはやてが一喝した。

「士郎！ 志貴！ 訓練ならともかく殺し合いで暴れるんなら私は承知せんよ！」

それで二人はすぐに殺気を抑えた。

「命拾いしたな…」

「貴様こそな…」

それで二人はまた席に着席する。

「さて、話が脱線してもうたけど私はシホちゃんを一生懸命応援するわ！」

「さすがです、はやて。恋は女性同士でも関係ありません。愛さえあればなんでもありませんですー！」

「キャスター、いいこと言うた！ 座布団一枚や！」

「いえい♪」

「ま、それとは話は別になつてくるんやけどそろそろ士郎もいい年やし身を固めたほうがいいと思うんやけどどうやろう？」

「は…？」

士郎は自分に話が回つてくるとは思つていなかったのか間拔けな声を上げる。

「あ、主…！ まだ！」

「リインフォースは黙つとき！ 今は士郎に聞いているんや！ それで士郎！ あんたはリインフォースとキャスターをどう思つているんや？」

「どう、とは…？ 良きパートナーではないのか？ 私はリインフォースとは仕事ではよくタッグを組むしな」

「そ、そうだな士郎…」

「それにキャスターとも信頼は築けていると思うが…」

「はあ…それだから士郎はダメなんや…。なんで私がせつかくシホちゃんの話をしていいと思つとるん？」

それで全員から向けられる視線に士郎は焦りの表情を見せる。

「な、なんだ…？ 私は何か悪いことでもしたのか？」

「この鈍感が…」

「ご主人様…もつと話に敏感になってください」

志貴がそう士郎を下し、キャスターからダメ出しされる。

シホはともかく士郎はまだ当分はこの関係が続くのだろう。

はやてはこれからも頑張らなな！ と思った次第だ。



Side シホ・E・S・高町

はやての家から帰って私はここはやはり一番信頼の置けるアルトリアにこの事を相談してみることにした。

「アルトリア、ちよつといい？」

「なんですか、シホ？」

「うん。今日はやての家に帰りに行ってきたんですけどの事について相談してきたのよ」

「スズカとの、ですか…?」

「うん。すずかの気持ちに私はどう答えたらいいのかという感じの話…」

「ああ、そういうえばシホは告白をされたのでしたね」

「そうなのよ。それでなかなかいい答えがでない時にはやてに『周りの目なんて気にせず突き進めばいい』と言われたのよ」

「それは…。ハヤテもいい事をいいますね」

「アルトリアもそう言うのね。変に思われなかな? 女性同士っていうのは…」

「私は気にしませんよ。シホの思うままに行動すればいいと思います」

「そう…?」

「ええ」

それで私も素直になったほうがいいのか…? と考え始めた。

「——しかし、奏者よ。余達も構ってくれないと寂しくて泣いてしまうぞ?」

そこにネロがやってきてそんな事を言い出したので、

「そうね。大丈夫。私はアルトリアもネロも大好きだから」

「ありがとうございます。シホ」

「…う、うむ…ならばよいのだ。奏者よ」

私はネロに犬の尻尾がついていてそれをぶんぶん嬉しそうに振り回している光景

を幻視していた。

「ネロはやっぱり可愛いわね…」

「そ、そうか…？ 奏者よ」

「ええ。とても犬っぽくて愛情が沸いてくるわ」

それでついネロの頭を撫でている私がここにいます、と。

「奏者よ。くすぐりたいぞ…」

「暴れないの。もう少しこうさせて…」

私がネロを弄っているとアルトリアが、

「……………シホ。あなたはもう十分変わってきていると思います。女性愛妻家みたいでまるでリンのようですよ？」

「そ、そうかしら…？」

それでつい気持ちよさそうに体をくねらせているネロから手を離すと途端寂しそうな表情をするネロがいて私はまた胸がドキツとした。

やばい。私、かなり変わってきたかもしれない…。

そうはつきりと自覚してきた。

それからなのはに呼ばれて晩御飯を食べようとする前になのはが、

「なんか、シホちゃん。ちよつとすつきりしてない？ なんか考え事が解決したような

…

「なのにも察せるということとは私も変わったってことかしら…?」

「そのようですね、シホ」

「もしかしてすずかちゃんの事、決心ついたの?」

「まあ、そこはまだ内緒ということ…」

「えー? お話聞かせてよ、シホちゃん!」

「なのは、あなたのお話を聞く姿勢は相手をまずボコるから始まるのと同義だから気をつけたほうがいいわよ?」

「…え? なぜかそれはちよつとシヨックかも…。…やつぱりそうなのかな?」

「自覚があるなら今後はもつと穩便にお話を聞くのよ?」

「はーい…でもお話聞かせて!」

「しつこいわね。今は内緒よ! 決心ついたら教えるから!」

「わかったの!」

それでなんとかなのは引き下がってくれた。

なののはつてちよつと強引なところがあるからそこが少し心配なところね。

それで食事中、

「あ、シホちゃん。忍さんから聞いたんだけどシホちゃん、すずかちゃんに愛の告白をさ

れたんだって……？」

「ぐっ、ゲホゲホッ……！」

食事が器官に詰まって痛い！

それにしても忍さん、言いふらすことはないでしょう!?

今、あつちでは多分ほくそ笑んでいるのだろうな。

すぐに想像できる。

「……そうか。すずかちゃんとか。ま、シホちゃんは元は男の子なんだから妥当といえれば妥当のところなんだがな。私としては少し寂しいな」

「そうね、あなた。こうして子供は親から少しづつ離れていくのね……」

士郎お父さんと桃子お母さんがなにやら二人して変な会話をしている。

……べ、別にそんな変なことではないでしょう？

いや、変なことなのかな？

「忍さん、喜んでいたよ。すずかちゃんが前より強気になったって」

「美由希姉さん、できればその話はもう勘弁してください……」

「えー？　なんで？　シホちゃんも気にしているんでしょ？」

「そ、それはですね……！」

「ドキドキ……」

なにかなのはとその主従のオリヴィエ陛下が期待の眼差しでこちらを見てきている!?

やめて！ 恥ずかしいから！ 私のライフはもう0よ…ッ！

「奏者よ。余は愛人でもいつこうに構わないからな？」

「おー！ ネロさん、大人だね〜」

「…いや、そうだな。むしろ奏者は余の嫁だ。異論は認めないぞ！」

「すごい！ 言い切った！」

なにかネロがぶつちやけている!?

やばい。ここの空間がなにか異様な空気が変わってきた。

唯一の正常なアルトリアは、

「…シホ、その、私もネロの意見には賛成ですよ？」

アルトリアもすでに正常じゃなかった!?

いけない。私だけじゃこのカオス空間を払拭できない！

恭也兄さんもすでに逃げの準備をしているし…！

私に味方がいないこの状況、どうしてくれようか!?

でも結局解決することはできず私はひたすら俯いて時が経つのを待つだけしかでき

なかつた…。



…翌日、シホは少し疲れた表情をしていた。

でも学校は毎日やってくるので休むわけにはいかない。

だからシホは気怠い気持ちで鍛え直して学校へと向かった。

でも学校でずっと朝から出会うと、

「あ、つと…ずっとか、おはよう…」

「おはよう。シホちゃん！」

すずかは眩しい笑顔をシホに向けた。

それでシホは顔が赤くなるのを抑えることができない。

それにもうすずかとシホの関係はすでにクラス中に知れ渡っているのであちこちか

ら「ヒューヒュー！」やら「きゃー！」という冷やかしが飛んでくる。

それでさらにシホは顔を赤くする。

「はいはい！ 冷やかすのも大概にしないとシホが発熱して倒れかねないからみんな

静かにねー？」

『はーいー！』

アリサの指示で全員は一応の落ち着きを見せた。

だがそれは一時凌ぎでしかない。

やっぱり噂が立っているのか色々としひしひ話が聞こえてくるのは仕方がないこと。

「シホちゃんも大変だね」

「そうだね。なのは…」

なのはとフェイトは他人事のように話しているが近い将来この二人も同じ扱いを受けるようになるのは誰が予想できただろうか…？

ランサー、本当に不憫でならない。

アリシアは心の中でそう思っていた。

「それで、シホちゃんは結局すずかちゃんと仲を深めていくということですか？ オツケイなん…？」 昨日、私に相談してくれたやん？」

「はやて！ それは内緒で…！」

「へー？ シホちゃん、はやてちゃんとどんなお話をしたの？ 聞かせてほしいな」

「す、すずか…えつと、あのね…？」

それでシホはまた顔を赤くして言い訳をしだす。

だがはやては手を緩めない。

「あんな。昨日シホちゃんがな、すずかちゃんの気持ちにどう向き合っていくべきかと

必死の相談を受けたんよ」

『おー!』

聞き耳を立てていたクラスメート一同は一斉に声を上げる。

それでシホははやてに話すべきではなかったかと少し後悔している。

「今でも思いうせるわ。シホちゃんはなにかに思い至ったのか『私も、さすがの事が…』

——」

「わーわー! 本当に勘弁して、はやて!!」

シホは必死にはやての言葉を止めようとするが時すでに遅し。

もうこの先の言葉を想像した一同はさらに騒ぎ出す始末。

それでシホはもうゆでダコのように顔を赤くして、

「…はやてえ」

「…なんや、シホちゃん? そない地の底から聞こえてきそうな声を出して…?」

「後で、一緒に全力全開で模擬戦をしようか。今なら本気を出せると思うのよ…!」

「シホちゃん!!? 力に訴えるなんてシホちゃんらしくないで!!?」

「ええい、うるさい! 今の私の羞恥心に比べれば容易いでしょう!?! だから一体一で

模擬戦しましょうね。」

今ならソードバレルフルオープンとフルンティングで許してあげるから!」

「それってリンチャや!？」

フルンティングにどこまでも追いかけられ高機動タイプではないはやてはすぐにサンドバックにされ、ソードバレルフルオープンで滅多打ちにされる光景を予想したのかはやてはシホに恐怖する。

ちなみに全部魔力刃でできたものなので宝具ではなくその宝具の効果を追加しただけのデットコピー攻撃だからバリアジャケットを抜く可能性はほとんどないので心配はない。

シホもそこまで鬼ではない。

「さすがに援護はできないよ。はやてちゃん…」

「はやて、ご愁傷様…」

「はやて、ガンバ…」

「ま、自業自得ね…」

なのは、フェイト、アリシア、アリサに見捨てられてはやては顔を青くする。

しかしそこに救いの女神(?)が現れる。

当然だがその人はさすがで、

「シホちゃん。『私も、さすがの事が…』の続きが聞きたいなー?」

「さすが…! そのね…!」

それで騒がしくなるクラスだったのだ。それは先生がやってくるまで続いたという。今日も日常運転で平和である。

第八十九話

『オルタ降臨。翠屋恐怖の日』

ある日の休日、なのはは管理局のお仕事もないので少し時間を持て余していた。

そしてふと中庭の縁側でアルトリアがお茶を飲みながらゆつくりしている光景を目にした。

それを見てなのはは平和だなーと思いつつも、ふと気になっていた事を試してみたくなった。

それとは…。

シホはようやく最近落ち着いてきた。

すずかとの件もほとほりが冷めてきたのか正常にまで戻ってきているし、管理局の仕事も軌道に乗り始めたので遅れをとることはない。

「奏者よ。こんなところにいたか」

「あ、ネロ。どうしたの？」

「いや、なに。今日は久しぶりの休日だからな。翠屋で食事でもしようかと思つた次第だ」

「そつか。それじゃ私も手伝いに行こうかな?」

「奏者の給仕姿か…、それだけで余は楽しみだぞ」

「ははは…、その変わりネロも働いてね?」

「うむ。余の皇帝特権にかかれればお仕事も楽に会得できるだろう。黄金律も持っているから役に立てるだろう」

「それじゃアルトリアとなのは、オリヴィエ陛下も連れて翠屋にいきましょう——…」

キインツ！ ドゴオオオオオンツ!!

「きやあああああ————ツツ!?!」

突如としてすごい轟音（エクスカリバーの宝具開放音とも言う）となのはの叫び声が同時に聞こえてきてシホ達は「何事!?!」と思ひながらも悲鳴の聞こえた中庭の方へと向かった。

見ればなのは茂みの中に頭から突つ込んでいた。

シホ達は急いでなのはを救出した。

「なのは!? いったいどうしたの! さっきの悲鳴は尋常じゃなかったわよ!」

「ふえー…目が回るよ〜」

「しつかりしなさい!」

「う、ううん…あれ、シホちゃん? ネロさんにオリヴィエさん? どうしてここにいるの…?」

「なのはの悲鳴が聞こえてきたから急いで駆けつけたのよ」

「それでなのは。どうしたのですか? 敵襲ですか? 相手は誰ですか?」

「敵ならば余に任せておけ。見事撃退して見せようぞ!」

「あ、敵じゃないの…ただ、私はアルトリアさんのくせつ毛がつい気になっちゃって…」

「——え?」

シホは瞬時に戦慄の表情をする。

「う、そ…まさか…そんな。そんな事って…!」

「どうしたのだ奏者よ!」

「シホ、どうしました!? すごい汗ですよ!」

「シホちゃん、どうしたの…!」

シホはしばし言葉を失い、次に言い放った言葉は、

「魔王の降臨だわ…」

『魔王……?』

全員がシホの言った言葉を理解できず首を傾げる。

しかしそれはすぐにやってきた。

ガシャンッ!

なにか、重い鎧のような物を着た人が歩いてくるようなそんな足音。

シホは泣きそうになりながら、

「オルタナティブが降臨してしまった……!」

泣きそうな表情でそれを見る。

そこには黒く染まった鎧を着用した反転したアルトリアの姿があった。

当然くせつ毛はなくなっている。

でもそれを見てネロがいち早く反応し、

「セイバー!? バカな! 彼奴は余が倒したはず!」

「……なにを言っている? それよりシホ、食事にしようか」

「は、はい。我らが王様!」

シホは泣きそうになりながらも「ははあ……!」とアルトリアに頭を垂れる。

「シホちゃん……? なんて、そんなに低姿勢なの……?」

「なのは達は感じないの!」 あの空間が歪むようなアルトリアの殺気と威圧感に!

そしてアルトリアは今や逆鱗を触られて反転してしまつた……！」

「逆鱗とは……？」

「アルトリアのくせつ毛よ……。あれを掴むとアルトリアは性格が反転してオルタナティブに変身してしまうのよ」

「な、なんと……そのような事が！」

「なのは、もしかして触つてしまつたのですか……？」

「う、うん……つい気になつちやつて……」

「そうだ、シホ。翠屋にでもいくとしようか。ぜひ味を見てみたい！」

「だ、ダメです、王様！ あなたのような人が行く場所ではありません！ だから今回は

この場だけで納めてください！」

「王の決定を覆すというのか？ シホ、お前はそこまで私に逆らうのか……？」

そしてアルトリアの殺気が瞬時に倍増した。

シホはそれに恐怖しながらも、

「そんな滅相もございませぬ。ですができれば……！」

「聞かん！ 翠屋にいくぞ。……つと、そうだな。服を変えるところか」

アルトリアはなにを思ったのかその姿を光らせて次には黒いゴシック系の服装へと変わつていた。

いつその服装を手に入れたという突っ込みは無しで。

「さて、ではまいろうか。私が翠屋の味を審判してやろう」

「は、はい…わかりました。我らが王様…。——翠屋が潰されるう…!?!」

シホは翠屋の未来を案じ悲観する。

「シホちゃん、翠屋が潰されるって、いったい…?」

「もう取り返しはつかないわよ。今、アルトリアの味覚は激しく変わっている。そして後に残るのは死屍累々だけよ…。」

なのは…アルトリアのくせつ毛を触ったことを今のうちに後悔しておきなさい…
もうシホの表情には悲壮感しかない。

この先、なにが起こるのかなのは、オリヴィエ、ネロは恐怖を抱いた。



そして到着した。到着してしまった翠屋。

アルトリアは乱暴に扉を開き、

「あら?! アルトリア、さん…?!」

「モモコ、手早く言うぞ。ここの最高級の品を出せ」

「はい……？」

「士郎お父さん！ 桃子お母さん！ 美由希姉さん！ 恭也兄さん！ ちよつと裏まで来て！ なのは達はアルトリアのご機嫌を取っていて！」

シホはすぐさま指示を出して桃子達を裏の方へと連れて行く。

「シホちゃん、アルトリアさんはどうしたんだ？ いつもと様子が違うようだが……」

「はい。なのはがアルトリアの逆鱗を触ってしまったんです」

「逆鱗……？」

「はい。くせつ毛を。あれはアルトリアの逆鱗で掴むと性格が反転して味覚まで変わってしまふんです」

「そんな事があるの？ シホちゃん……」

「はい。そして味覚が反転してアルトリアは『雑』だと評価するファーストフードを主食に食べてしまふんです。」

過去、私が作った料理は尽くまずいで潰されました……」

それを思い出しているのかシホの目に涙が浮かぶ。

こんな事に悔し涙を流すシホというのも珍しいが、それ以上に桃子は料理魂を燃え上がらせた。

「……シホちゃん。ようはアルトリアさんはファーストフード以外の料理をまずいで済ま

せちやうのよね？」

「はい。残念ながら…」

もうシホは半場泣き出していた。

過去、アルトリアとのご飯ライフがそれによって覆されたのだからたまったものではない事態である。

「燃えてきたわ！ シホちゃん、あなたの仇は私が取るわ！」

「ダメです！ 桃子お母さん！ 今のアルトリアは食欲の化身…太刀打ちできる相手ではありません！」

「でもファーストフードにかまけて負けを認めるなんて私のプライドが許さない！ 絶対にアルトリアさんにうまいと言わせてみせるわ！ パティシエールの意地にかけて！」

そうして桃子は調理を開始した。

それをシホは悲しそうに見守った。

そんなシホの肩に恭也が手を置き、

「今は母さんを信じよう。アルトリアさんもそこまで鬼じゃないさ」

「…過去、暗黒面になって高級中華料理店に行ったことがあるんです。

そこですべての料理を食べ尽くして最後に言い放った言葉は『ふっ、この程度か？

「まずくてならない」だったんです…。

そして店主は料理人のプライドをズタズタにされて店は数日して潰れました…。約束の四日間のことだから良かったものの本当のことだったら恐ろしいです…。

それに士郎、恭也、美由希の顔は引き攣る。

シホはトラウマになっていて体を震わせている。

今の今までこんな弱気でネガティブなシホの姿を見たことがなかった士郎達はこれは強敵かもしれないと…戦慄した。

シホはせめてもの助けとして接客でアルトリアに料理を運ぶ役を担っていた。

「まずはこれよ。具沢山のパスタの盛り合わせ！ シホちゃん、お願い！」

「わかりました！」

そしてアルトリアへと運んでいき、

「アルトリア。これを…」

「これがここの最高級か…?」

「まだよ。この先楽しんでもらうんだから」

「そうか。ならば許そう。ではいたたくとしよう」

そしてアルトリアはもつきゆもつきゆと料理を豪快に平らげていく。

そしてすぐに料理はなくなり、ただ一言。

「マズイ」

「グハツ…!？」

「ああつ…!？」

その強烈なボデイに響くが如くな言葉にシホと桃子の二人の叫び声が翠屋に響いた。

それを席に座つて聞いていたなのはほとんどでもない事をしてしまったのだと今更に後悔をする。

「こんなもので私が満足するとしても本気で思っているのか？ さあ早く次を持って来い」

「か、かしこまりました…：我らが王様…」

それでシホは食器を下げてすこすここと引き下がっていった。

そして厨房にまで戻つてくると、

「桃子お母さん、ダメです。今のアルトリアには太刀打ちできません…」

「弱音を吐いちゃダメよ、シホちゃん！ まだだわ。まだ私達は終わらないわ！」

桃子は心を奮起させてアルトリアへと挑んでいく気になった。

そして今度はジャンボオムライスを作った。

それをアルトリアへと運ぶシホ。

「今度はどうですか？ 王様…」

シホは引き攣る顔をどうにか正してアルトリアに問いかける。

そしてすぐさまアルトリアは平らげると、

「ダメだな、マズイ」

「ぐうっ!？」

またしてもアルトリアはマズイを言い放った。

それによつて精神的ダメージを負うシホ。

しかし桃子は負けない！ とさらにビックハンバーグを作り出した。

それを軽く消化して、

「ダメだな」

「うっ、うう……!？」

「母さん!？」

「無茶しちゃダメだよ、お母さん!？」

恭也と美由希がどうか慰めているが桃子の限界は近いのだろう。

でもしかし桃子はめげなかった。

「マキシマムカツ丼！ お願ひ!？」

「はい!？」

そして結果は、

「ダメだな」

「あああ…心が折れそうだわ…」

「桃子…もう無理するな!」

「いいえ、あなた。まだよ…まだこれからだわ!」

桃子は泣きそうになる心をなんとか立ち直らせて、

「ビックスターキ!」

「次!」

「ビックラーメン!」

「甘い!」

「私の本気! 翠屋自慢の海鮮盛り合わせ!」

「ぬるい…!」

.....

.....

.....

それから桃子の挑戦は続いていったがとうとう桃子は心の限界を大幅に越えてし

まっつて、

「…シホちゃん、みんな…後は、よろしくね…?」

そう言つてプライドを砕かれた桃子は倒れて気絶してしまつた。

それでどうしたものかという会議に陥る。

「ここは士郎やはやて、鮫島さん、ノエルさん、ファリンさんも呼んで総動員で桃子お母さんの仇を取るべきだと…!」

「しかし、桃子の腕で敵わなかつたアルトリアさんにどう立ち向かえばいいのだろうか…?」

全員はそれで押し黙る。

高町桃子の腕は上で出した全員が認めるほどのパティシエの腕だ。

だから太刀打ちできるものではない。

そも、たとえ全員を呼んだとしても桃子の二の前になるのは明らかである。

料理魂を砕かれてジ・エンドの未来を辿るだろう。

「…もうおしまいか?」

しかしそもそもアルトリアは待つてくれない。

もう出す手がない。

どうすればいいかと思つたその時に、

「ふむ、ミユキ。そなたが作ってみろ。私が審美してやろう」
「わ、私…!？」

突然のご指名に美由希は焦る。

私は料理は下手だから食わせられたものじゃないという気持ちである。

「モモコの娘なのだから腕は引き継がれているだろう。ならばいざ食してみたい」

「ううう…アルトリアさんがそこまで言うんだったら…」

それで美由希は今私が作れるありったけのものをサンドイッチに詰めた。

それを見た恭也が、

「美由希…それは、食べ物か？」

「そうだよ恭ちゃん！ 私が料理が下手なのは知っていますよ!? これでも一生懸命作ったんだからね!？」

それでシホの手で運ばれるがシホもさすがにこれはアルトリアには通じないだろうと内心諦めているほどだった。

そしてアルトリアはそれを目の前にして、

「ほう…食べごたえのありそうなものだ。どれ、食してやろう…」

アルトリアはそれを一口口に含む。

その瞬間、

(ぐああー……ッツツ!!?)

アルトリアは内心で強烈な叫びを上げた。

アツパーブローを食らったかのように舌と胃を多大に揺さぶられ悲鳴が轟く。

(な、なんとという味の破壊力……! たった一口で、この、私が……!?)

それでアルトリアは黙り込んだ。

それを見て不思議に思ったシホは、

「アルトリア……? どうしたの?」

「……見事だ」

「へ……?」

「私の舌を……ここまで驚嘆させたのはミユキ、そなたが初めてだ。誇って、いいぞ……?」

ガシャンツ!

そう言い残してアルトリアはテーブルに突っ伏して気絶をした。

見ればアルトリアのくせつ毛が戻ってきている。

それで状況を見守っていた一同は他のお客さんも含めて、

「やったー!」

と、歓喜の叫びを上げた。

「お姉ちゃん! やったね! アルトリアさんを倒したよ!」

「ああ、美由希！ お前の料理は翠屋を救ったんだ！」

「よく桃子の仇をとつてくれた！」

なのは、恭也、士郎が美由希を絶賛する。

「なにかアルトリアを屈服させたのかしら…？」

「ふむ、その原因はこのサンドイッチにあると見た。どれ一つ食してみるとしよう」

ネロがそのサンドイッチに手を伸ばして口にする。

途端、

「うっ!? こ、これは、正直に言ってあまり美しくないものだな…」

「や、やっぱり不味かったってことかな…？」

美由希はそれで喜んでいいのか悲しんでいるのか分からず落ち込む。

…その後、気絶した桃子が復活して美由希に感謝の言葉を述べていたり、アルトリアが復活して暗黒化した記憶がなくなぜか「胃が痛い…」と言っていたりしていたが今回はそれで話は終わった。

それからはアルトリアの食べた分も取り戻すということで全員で接客を切り盛りし

た。

全員給仕服を着て接客をして特にネロが黄金律のスキルを発動させて客が次々とやってきて翠屋は嬉しい大黒字になった。

「楽しいな、奏者よ」

「そうね。ネロ」

「…すみません、シホ。ご迷惑をおかけしました」

「いいわよ、アルトリア。もう終わった事なんだから」

「はい…しかしやはり私の暗黒面はそうとう強烈なのです。話では聞いていましたが…今後はくせつ毛を握られないように注意しましょう」

「私も反省するの…」

なのはが今日起きた事を反省して接客を頑張っている。

しかしふとなのははアルトリアとは別に揺れているくせつ毛を目にする。

それはネロのものでついついなのはは好奇心で手を伸ばそうとしてしまっていた。

それを見たシホは、

「なのは、よしなさい！何が起きるかわからないわよ!」

と、必死になのはを止めていた。

その後、ネロのくせつ毛は握られたのかは、分からない。



シホは士郎と会話をしていた。

「…ということがあったのよ」

「そ、そうか。アルトリアのくせつ毛をな」

「ええ。士郎ならこの苦しみを理解できるわよね？」

「…ああ、その気持ちは私にも分かるぞ。あれは恐怖と言っても過言ではないからな」

「そないうまい話があったんやね？」

「はやて。もしかして握ろうという魂胆じゃないでしょうね…？」

「い、嫌やわ。そないことあるわけないやんか…」

「そう…。ならいいけどね。はやてももし握った時には料理人のプライドを打ち砕かれると思いなさい」

「わかったわ…」

だが面白いネタを見つけたという感じではやては心にメモをするのだった。

第九十話

『シホの魔術授業』

アリサは日頃からずか、アリシアと共にシホの管理局の仕事がない日に魔術を習っている。

ちなみにずかとアリサ、アリシアはもう囑託魔術師として管理局に席を置いていたりする。

けっして囑託魔導師ではなく囑託魔術師としてだ。

まだ囑託なのは勉強不足でまだ小学生と魔術師を両立できないアリシアは別として、ずかとアリサは親がまだ小学生なのだから今は学業に励みなさいというお達しで本格的に管理局に所属しているわけではないのだ。

それを言うとなのはやシホ達が異常なのかどうか迷うところだが三人は本格的に動きだすのは中学生に上がってからだろうとは三人の言い分である。

そして一応囑託魔術師なのだから三人にも先行版魔術式システムデバイスを支給されている。

アリサのデバイスの名前は『ヴェルフアイア』。

片刃式のアームドデバイスタイプである。

すずかのデバイスの名前は『プリメーラ』。

手にはめるグローブ式の後方支援型のブーストデバイスタイプである。

アリシアのデバイスの名前は『スピードスター』。

フェイトのバルディッシュと同じ杖タイプのインテリジェントデバイスタイプである。

三人とも魔術の属性がそれぞれ炎、氷、雷と分かれているのでシホは教えるのに一苦労している。

「それじゃ三人とも。手にそれぞれの属性を意識して目標まで放ってみなさい」

「わかったよ。シホちゃん」

「了解よ、シホ」

「了解だよ、シホ！」

それで三人は手のひらに魔力を集めて一気に放つ。

それによってアリサの手からは炎の熱閃が発生し標的を燃やした。

すずかの手からは吹雪が発生して標的を凍り付かせる。

アリシアの手からは雷が発生して標的を焼き焦がす。

「うん。三人とももう精度も高まってきて狙いはバツチリね。」

それと魔術回路を開くときに起きるチクツとした痛みはもう慣れた?」

「うん、大丈夫だよ」

「あの程度ならもう慣れたわね」

「バツチリだよ!」

三人は元気に答える。

「…にしてもやっぱり才能があるっていいわねえ。私の時とは月とスッポンくらいの違いがあるわ」

「…そうなの?」

「ええ。まあ私は切嗣が間違った教え方をしていたから毎回魔術回路を一から作り出すといった方法を取っていて毎回死にそうになりながら魔術を行使していたから…。」

リンに指摘されるまでそれが当たり前だと思っていたのよ」

「…嘘。シホ、そんなまどろっこしい事を毎回やってたの!?! 基本的な事を習ったから分かるけどそんな事をしていたら身が持たないわよ!?!」

「ええ、まあ…」

「それじゃ魔術が上達する以前の問題じゃない…」

「おっしやる通りでお恥ずかしい…。でもそのおかげといつてもいいけど魔術回路の一

本一本がとても強固で頑丈になって精練されたのよ？

それに今はイリヤの魔術回路があるし、シルビア・アインツベルンとしての人格と記憶があるからこうしてすずか達に魔術を教えることができるのよ」

「シホってかなり魔術師としては出世したんだね〜」

「ええ、アリシア。かなり遠回りもしたけどね…」

それでアリサは思う。

やっぱりシホはあたしのライバルに相応しいと。

絶対追い付いてやるんだから！…と決心する。

と、そこで本日はバニングス邸で魔術の練習をしていたため、鮫島が休憩と称してお茶菓子を運んでくる。

それに全員はありつくことにした。

「…セイバーのマスターよ。アリサの魔術の上達具合はいかがかな？」

「ああ、アサシン。うん、結構早いと思うわよ。月村家もバニングス家も代は重ねているように魔術刻印はないものすずかは魔術回路の本数が75本、アリサの本数は65本と多いから」

「呵呵呵。なるほど、確かに多いほうだな。ライダーのマスターには負けているようだがな」

「うるさいわよ、アサシン。数なんて関係ないわよ。それを言ったらシホなんて初代の癖して27本もあつても代を重ねた魔術師よりは少ないのにこんなに強いのは？」

鍛えれば本数なんて関係なくなってくるわ！」

「いい事を言うわね、アリス。私の世界の魔術師達にぜひ聞かせてみたい言葉だわ。

…どんな痛いしつぺ返しが来るか分からないけど…」

「ふふん！ あたしが管理局に入ったらすぐにエリートコースを進んであげるんだから！」

「頼もしいな、アリスよ。ならば儂はアリスに変な思惑で近寄ってちよつかいをかけてくる輩を排除する事にいたすとしようか」

「頼りにしているわよ。アサシン」

「まあ、まずはアリスとすずか、アリスシアには『魔術事件対策課』に所属してもらうことになるわね。魔術を使える人材は魔導師以上に貴重だからね」

「上等よ。そこから出世して成り上がってやるわ！」

「頑張つてね、アリスちゃん」

「ガンバだよ。アリス」

「二人ともなに他人事のように言ってるのよ？」

「え…？」

「にや…?」

「あんた達は将来あたしの部下になるんだからしつかりついてきなさいよ?」

アリサはそう宣言する。

「ご立派です。アリサお嬢様…」

「えっへん!」

「…わ、私としては将来はシホちゃんの補佐役がメインの目標だからそっちにいきたくないなあ…」

「…まあ、さすががそう言うなら任せるけどね」

「私は、そうだなー? やっぱりフェイトを間近で見たいから立ち位置に着きたいかな? お姉ちゃんとして」

もしここにフェイトがいたら恥ずかしさで顔を赤く染めていた事だろう。

最近フェイトはアリシアに構ってほしい、といった行動を取る事が多くなったからである。

まあなのはに構ってほしいと比べれば少ない方なのだが…。

「それじゃ休憩も終わりにして次は基本の強化系を学びましょうか。基本もとても大事になってくるわ。私がカートリッジシステムを使わないのも身体強化を使っているおかげだし」

『わかった!』

三人とも大きく返事をしてシホに応えた。

「そして強化も様になつてきたようなら次は暗示系、結界系、治癒系、黒魔術系、呪術系、錬金術系……と少しずつだけ魔術の幅を増やしていきましょうか。」

三人の適性魔術も見極めないといけないしね」

シホの上げた魔術の数々に三人はどんな魔術が得意なのか胸を高らかにさせる。

「ちなみにやっぱりすずかかは魅了の魔眼が適性魔術だと思うのよ。そこは魔眼持ちのライダーかアルクエイドに習うのもいいかもね」

「うん!」

「後、今はいないけど実はなのはは治癒魔術が一番適性が高いのよね。魔導師とは正反対で平和な適性だわね」

「なのはらしいわね」

「うんうん!」

「そうだね!」

三人がなのはの適性に合っていると述べている中、

「それと三人とも。なにか緊急事態でも起きないかぎり決して人前で魔術は使わないようにね?」

過去の私が悪い見本だけど変に注目を浴びるのはあなた達にとっては不本意でしょう？」

「そうね…。もしかしたらもう私達の世界にもシホがいう魔術協会のような魔術師を総括する怪しい組織が生まれている可能性があるのよね？」

それとそういったもともとから存在するカルト集団から魔術回路持ちが生まれる可能性も考えておいた方がいい、そんなところ…？」

「その通りよ。だからむやみやたらに魔術の行使は控えることね。」

あ、それも見越して三人には記憶を暗示で操作する術を覚えさせるのもいいかもね？
記憶を操作して魔術を使った光景の記憶だけ無くさせるのも一つの手だわ」

シホはなにかシルビアとしての人格が半分混じっているようでさっきから妙に饒舌で舌が回っている。

それでも三人はタメになる話なら聞き逃しちやダメだという思いでシホの言葉に耳を傾けている。

そして近い将来は三人ともシホを越えてかなりの魔術師として成長するのは確定事項なのだが今はまだ咲き始めたばかり。

焦っては事をし損じてしまうのでシホの基本的方針である無茶は絶対にはいけないを無意識に実践しているのであった。

「…うん。やっぱり覚えさせる事は山ほどあるわね。だから…三人とも、覚悟しておきなさいね？」

私が三人をかなりの腕の魔術師に成長させてあげるから。それはもう魔導師にも引けを取らせないほどのね」

『うん！』

それから三人はもう使い終わったランプなどを強化させていく一見地味だが基本でもある魔術をしていた。

その折、

パリンツ！

「あっ…！」

ピシツ！

「わっ!?!」

ガシヤンツ！

「あうっ!?!」

三人とも強化のしすぎでランプを割ってしまっていた。

最後に派手に割れたのはアリサのだった。

「ほらほら。強化のし過ぎよ。そんな事じゃ先は遠いわよ？」

『はい…』

それで三人はまた強化の練習を再開する。

「くくくつ…まだまだ青いよの。儂のマスターなのだからもう少し頑張ってみよ、アリス」

「分かつてるわよ！ こんな単純作業、すぐに会得してあげるわよ！」

「その意気だ。呵呵呵！」

アサシンはアサシンなりにアリスの事を応援しているらしい。

そこにすずかの護衛としてメイド姿のライダーがバニングス邸にやってきた。

その姿を見てシホは、

「ライダーももうメイド姿が板に付いてきたわね…」

「はい。おかげさまで。それよりシホ、スズカの調子はどうですか？」

「まだまだこれからね。今はまだ基本の強化魔術を練習中よ」

「そうですか。スズカ、頑張ってくださいね」

「うん。ライダー。私、頑張るね！」

すずかはライダーの言葉に頑張りながらも返す。

「キャスターもいるからキャスターに呪術も学ぶならアリスかもしれないわね」

「こうして考えてしまいますとメディアももしいたらい師匠になれたでしょうね…」

ライダーがそんな事を言いだすがすぐにシホが、

「いない人を無い物ねだりをしてもしようがないわ。それにメディアだったらなにか対価を支払わないと教えてくれなさそうね？」

「確かに…：そうですね」

それでシホとライダーはため息を吐く。

「シホちゃん、ちよつとここを見てもらっていい？」

「なに、すずか？」

「今度はうまくいったと思うんだけど…」

「そうね…：少し調べてみるわ。解析開始」トレース・オン

それでシホはすずかの強化したランプを調べてみる。

「……………」

「どう、かな…？」

「うん。ちゃんと強化できているわ。この調子でやっていきましょうね」

「うん！」

「シホ、こつちも！」

「こつちも頼むわ！」

「はいはい、すぐに見るから慌てないの」

そんな感じでシホは三人の強化具合を解析するのだった。

ライダーはその光景を感心した目で見て、

「リンにこてんぱんに魔術で絞られていたシロウが、シホとなった今では人を教える立場になっているとは…変われば変わるものですね」

そこにシホが戻ってきて、

「…それはやっぱりイリヤとシルビアさんのおかげだと思ふのよ。シロウのままだったら人にモノを教えるなんて到底できなかつたと思うから。」

実際士郎ははやてに魔術を教えていないでしょ…？」

「そうですね。そのような話は聞きませんね。」

むしろ魔導の方はリインフォースに教わり、魔術はキャスターに教わっているそうです」

「やっぱり八神家は色々と豪華ね」

シホはそう呟いた。

八神家は教える人も充実していると。

将来は某鉄槌の騎士も人に教える立場になるのだからやはり有能な人材が揃っていることになる。



…そんなある日にアリサはさすがと一緒に学校の帰り道を歩いている時だった。

「こうして二人で帰るのも久しぶりね」

「そうだね、アリサちゃん。最近はシホちゃんとかと帰ることが多いけど、でも管理局のお仕事があるから途中で早退することも多くなったもんね」

「そうね。あたし達も中学に上がったらそんな生活になるのかしらね」

「そうだね」

そんな事を話している時だった。

突然目の前から黒いスーツを着た男達は何人も現れる。

それにすずかとアリサはまたか…と、鬱陶しそうに思う。

「月村すずかにアリサ・バニングスだな？」

「そうだけど…なんですか、あなた達は？」

「君達を迎えに来たものだよ。さあ、一緒に着いてきてもらおうか」

「嫌です」

二人は怖じけもせずその誘いを断った。

それで男達はすぐに表情を怒りに染めて、

「ガキだと思つて下手にでていりやいい気になりやがつて！　おい、野郎共！　さつきと二人を捕らえるぞ！」

『おー！』

のぶとい声をあげて男達は一齐に二人に仕掛けてくる。

しかし二人には守護者がいる事を男達は知らない。

どこからともなく鎖が伸びてきて一人の男を縛り上げ、他の男達も全員気を失い倒れだす。

命令していた男だけは状況が理解できずに間抜けな面をさらす。すぐにそいつも気絶させられる。

そして二人の前に二人の男女が出現し、

「スズカを襲おうとするとは命知らずですね…？」

「儂等がいることも知らずよくかかつてきた。よつて峰打ちにしておいた。ありがたく思え。儂の一撃を手刀だけで済ますのだからな。本当なら殺しておるところだぞ？」

ライダーは妖艶な笑みを浮かべ、アサシンは豪快に呵呵呵！と笑う。

「ライダー。全員連行しようか」

「そうですね、スズカ」

「たっぷり絞りだすわよアサシン！」

「うむ。セイバーのマスターにも協力を願うとしようか」

もう日常とばかりに男達を運んでいくライダーとアサシン。

すずかとアリサの二人はシホの教えにより精神的にも強くなっているのだった。

ライダーとアサシンという助けてくれる存在も二人を勇気づけてくれている。

「すずか。これからも頑張りましょうね！」

「うん！ アリサちゃん！」

二人で拳を付き合っただった。

第九十一話

『士郎

VS

志貴によるガチバトル』

八神家での全員による華麗なる食卓（笑）∴。

志貴は何気なくカリナーな代行者の人を思い出していた。

そんな事はどうでもいいとして、本日も夕食は終了となり食器洗いなどの作業が終わらした後、さっそくはやてがもう何回開かれたか分からない家族会議を開いていた。

なにげに日課になっていく家族会議。ここではどんな面白い事を話し合うかの場所である。人は多いので話題は絶えない。

もちろん代表ははやてでそれを主にシヤマルやキャスター、アルクエイドが扇動している。他のメンツは聞き手に回って受け答えなどをしている。

よく提案の犠牲にあうのは幸運：Eの士郎や志貴、そしてザフィーラの男連中だったりする。

さらに提案された内容によってはシホ達もたまに巻き添えを食うという少し怖いものだった。

そして今回議題に挙げられたのは何気ないはやての一言。

“士郎と志貴つてどつちが強いん…?”

その質問をはやてが発言した瞬間、士郎と志貴の互いの思考が一斉に戦闘状態にまで移行した。

「はやて。何を言うかと思えばただの人間であるシロウと英霊の志貴じゃ比べるのもおかしいんじゃない…?’」

アルクエイドがそう発言する。

士郎と志貴は無言を通す。周りのみんなに賽を投げたともいうが…。
「しかし…：そうだな。士郎は一度月村邸襲撃時に志貴に体術で負けていたと記憶しているが…。」

シグナムの発言。

それによつて士郎の表情は一瞬…：本当に一瞬悔しさに彩られる。
対して志貴は何も言わずただ「ふっ…。」と口元を笑みで歪める。

「でもよー、士郎もそんなときは本気を出していなかっただろ? ならまだ勝負はわからないんじゃないか…?’」

ヴィータの援護の言葉により下降傾向の気持ちちが幾分浮上していく士郎。
表情はなんとか回復した。

「ですがそれでもサーヴァントは人の身では敵わないと言われているんですよ……？
そこのところどうなんでしょうか……？」

シヤマルの発言で話は平行線をたどる。

だがそれに続くかのようにリインフォースが、

「しかし士郎は一度エミヤを倒し、さらにギルガメッシュを倒すというところまで追い
詰めた過去がある。だからサーヴァントだからといって勝てないという道理はないと
思います、我が主」

「そうですね。キャスターのクラスの私は^{マスター}主人様と戦ったら負ける可能性は高いで
す。キャスターのクラスはサーヴァントの中で一番最弱な部類ですから……」

リインフォースの言葉にキャスターも士郎を援護するようにそう発言する。

「ならば、一度試しに士郎と志貴での全力勝負を行ってみてはどうだろうか……？」

「それや！ ナイスアイディアやで、ザフィーラ！」

「……………」

はやてがザフィーラの提案に頷きを見せている中、士郎と志貴はそれでも無言。

しかししばらくして二人は同時に立ち上がり、

「いつぞやの決着をつけるのもいいかもしれないな…」

「そうだな。結局士郎には生前負けはしなかったが勝てもしなかったからな」

「お互い因縁も恨みも賭ける想いもない純粋な決闘…昔の私なら『ハツ…』と笑い飛ばしただろうが…」

「それは俺とて同感だ。決着をつけたいと思うのも案外悪くないな」

こうして士郎と志貴も互いに決闘を承諾した事によりかねてより計画されていたどちらが強いのか決定戦は開かれることになった。



S i d e シホ・E・S・高町

なにやら八神家を中心にして催し物を開くということとで私達は全員（誰が来るかは察してくれるとありがたい）海鳴の裏山に呼ばれた。

まだなにをするのか聞いていないのではやてになにをするのか聞いてみると、

「あ、それがな。士郎と志貴、どっちが強いかでの決着を着けるといふことなんよ」

「え…？ 士郎と志貴が？ 本気なの？」

「うん。それと当然殺しは御法度。でもそれ以外ならなにをしてもええというルールや」

「うーん……ま、殺し合いじゃないんなら、別に構わないのかな？」

私はそう結論づけた。

見ればすでにランサーとアサシンは二人の戦いを酒の肴にしようと酒を用意している始末である。

ま、別に構わないけどアリスももつとアサシンに酒の制限を付けたほうがいいと思う。

そのうち酒蔵がなくなるわよ？

「しかし士郎さんと志貴さんの戦いか。一剣士としては実にいいものを見れそうだ」

「そう思うか。恭也殿」

「そうですね、キョウヤ。シロウの本気、見させてもらいます。修行の成果、存分に発揮してください」

恭也兄さんとシグナム、アルトリアが想いを共感できたのか三人で今か今かと始まるだろう戦いを注目している。

「士郎さんだから強いんだらうね」

「そうだね、なのは」

「私は士郎さんを応援するよ。フェイト！」

「…アリシア、あんた実は士郎さんの事好きなんじゃない…？ でも、そうね。士郎さんはシホと同格なんだから強いでしょうね。体格のハンデもないしね」

「そうだね、アリサちゃん」

なのは達はいい戦いが見れると思いつつワクワクしていた。

やっぱり殺し合いじゃないと思えば観戦できるのね。

そして木がなく開けた広間で士郎と志貴はお互いに向き合い気合を入れているところであった。

「さて、それじゃ見させてもらおうかしら。私も関係しているし士郎には勝ってもらいたいのが本心ね」

『それじゃこの裏山だけ結界を貼らせてもらおうよ。一般人が見たら大変だから』

エイミイさんのそんな声と共にこの空間だけ結界が展開された。

「…さて、お膳立ても整った。勝ち負け恨みなしの決闘、存分に楽しむとしようか」

「ああ。生前の決着の意味も込めて今度こそ士郎、お前に勝つ」

「では、いくぞ殺人貴。私のすべて捌ききれる自信はあるか？」

「貴様こそ俺のスピードに追いついてくれるものなら追いついてこい。鍊鉄の魔術使い」

シュツ！

そして士郎と志貴は同時に動いた。

士郎の手には干将・莫耶が握られ、志貴の手には七ツ夜のナイフが握られ互いにまず切り結んだ。

それによつて刃のぶつかり合う音が響いてくる。

それも一瞬のことで二人は何度も得物をぶつけ合つていく。

志貴がナイフを何度も振り士郎の干将・莫耶を弾く。

だが士郎もタイムラグ無しに再投影して干将・莫耶を振るつていく。

それを何度も繰り返して志貴はすぐに千日手になるだろうと思つたのか、

「なんでもありという話だったよな…？　ならー！」

志貴はいきなり体勢を低くしそこから下段からの蹴りを士郎に見舞つた。

「落ちろー！」

士郎は急な動きの変わりように対応できず空に文字通り落とされた。

そこから志貴はさらに空に飛び上がり踵落としを食らわそうとする。

しかしそれを喰らうほど士郎とてそこまで甘くない。

すぐに空中で体勢を整えて空を蹴り瞬動術をかまして踵落としから逃れる。

「くっ…やつてくれる。なら私も全力で挑もうー！」

その手に洋弓を出現させて森の中を弓を構えながら駆けていき何度も木と木の間から志貴に矢を見舞っていく。

志貴はそれらをすべからくすべて直感で読み当たる軌道のものだけさばいていき他は全部避けていた。

「森の中に入ったのがお前の敗因だ！」

すると志貴の姿が消えた。

おそらく志貴も森の中に入っていったのだろう。

気配遮断：Dは伊達じゃない。

「くっ…気配を消したか！ ならばここら一帯を更地にしてあぶり出す！」

士郎は木の上まで跳躍しその手に偽・螺旋剣を投影し、

「I am the bone of my sword………偽・螺旋剣
我 骨 子 偽 投 影 し 狂 剣

！」
 地面に向けて放つ。

それによって衝撃波で周りの木々が吹き飛ばされていきクレーターが出来上がる。少しやりすぎだろうと思ったがそれは功をそうしたよう志貴は姿を現していた。

士郎は地面に着地し、

「さて、これで気配遮断は使えまい！」

「相変わらず無茶をする！」

「お互い様だな！」

二人はさらに林道を駆けていき士郎は干将・莫耶で切り込み、志貴はナイフを振るつていく。

それによつてまたしても木々が斬られてなぎ倒されている。

「何か見えていて森林伐採の光景を思い浮かべたかも……」

なのはがそんな事を言い出すけどあながち間違っていない。

あの二人はやる時はそんなものは一切憂慮しないで戦闘を行うから厄介と言っても過言じゃない。

「いくぞ！ 赤原を往け、緋の猟犬！」

フルンテイング
赤原猟犬!!」

赤い魔弾が志貴に向けて放たれる。

あれはあきらかに殺す攻撃だ。真名開放までやっているのだから。

「宝具の真名開放やつちやつた!?!」

みんなが叫ぶが私は慌てない。

あれでも倒しきれないのは私は知っている。

志貴は魔眼殺しの眼鏡を外すと、

「モノであるならなんであろうと……殺す！」

ザンツ！

やはりというべきか当然とも言うべきかフルンティングを切り裂いてしまった。

それで切り裂かれて消えていくフルンティングに目もくれず士郎はまた干将・莫耶を投影して志貴に向かって駆ける。

「やはり宝具すら切り裂くか！ このインチキな魔眼め！」

「貴様の方こそ無限に剣を作り出せるのは卑怯だろ！ 近寄れないじゃないか！」

二人は互いに悪態をつきながらも攻めの姿勢を緩めない。

そう。これこそ二人の戦いのジレンマ。

志貴は基本すべてが接近戦でしかない。しかし圏内に入ったが最後、その魔眼が待っている。

だから士郎もつかつに近寄れないから中距離から矢や剣を放つしかできない。しかもそれらも魔眼で切り裂かれてしまうからたまったものではない。

だいたい志貴の動体視力はおかしいのだ。

通常の人間の何倍もの体の動きをするしまるで獣じゃないかという動きすらする。

だから唯一の弱点とも言えるスタミナ切れを起こすのを待つしかないのだ。

さらに言えば伊達にサーヴァントじゃないのだから普通の人間との体力の違いがはつきりとしていてそのスタミナ切れもかなりの消耗戦をしないと起こさないので厄

介極まりない。

だから人間である士郎の方が先にスタミナ切れを起こす可能性だつてあるのだ。まさにイーブンの戦いをしているのである。



S i d e 衛宮士郎

くっ……!

やはり志貴とは戦闘がしにくい。

近寄れば獣のような体術と直死の魔眼が待っているからなかなか近づけない。

ここはやはり物量にモノを言わすしかないか？

「くっ……」

心眼で思考を巡らすが志貴は構わず近接に接近してこようとする。

ならばここは一度徹底的に打ちのめした方がこれからの為になる。

ならば……!

「フリーズアウト、ソードバレルフルオープン停止解凍、全投影連続層写!!」

劍軍を出現させて志貴に向けて放つ。

それによって志貴は動きを止める。

そして連続してソードバレルを展開しながらも私は詠唱に入る。

「I am the bone of my sword.
ぬっ!?!」

志貴が警戒する。

その隙をつく!

干将・莫耶を投影してそれを何度も回転させて放ち翻弄しながら、

「and fire is my blood. Steel is my body,
心 是 硝子 血 鋼 鉄

足に魔力を流し込み大きく後ろへと跳躍し黒鍵を投影して徹甲作用を用いて放つ。

それで志貴はさすがに徹甲作用の黒鍵をすべて切り裂くほど対応できずに避けては
何本か切り裂くという動作をする。

「I have created over a thousand blades.
幾 た び の 戦 場 を 越 え 千 不 敗

そしてさらに詠唱をする。

それによって全員は何をしようとするのか気づいたらしく特にシホから「やりすぎで

しよう!」という言葉が聞こえてくるがもうやると決めたのだ。

止められん!

「Unaware of loss. Nor aware of gain.」

「最後まで唱えさせるか!」

志貴も私のしようとすることに気づいたらしく止めようと駆けてくる。

だが足止めを用意していないと思うな…?

ヘラクレスの斧剣を投影して剣の憑依経験を引き出す。

「くらえ! 投影、装填…全工程投影完了——是、射殺す百頭!!」

「うおおおお——!」

さすがの志貴も九つの斬撃を全部防ぐことができなかつたのか大きく弾き飛ばされる。

しかししっかりと喰らわずに受身をとっているということはさすがだ。

「Withstood pain to create weapons.
waiting for one's arrival.」

いまだナインライブズの攻撃の影響で動けないでいる志貴を目にくれながら、

「I have no regrets.」

This is the only path.」

「くっ……！ させるか！」

志貴がまだ満足に動かない体を無理して私に突っ込んでくるが、もう遅い……！

「無limited のblade で 出My こwhole のlife はwas は”

詠唱がすべて完了し私を中心に世界が塗り替えられていく。

全員を観客として巻き込むことも忘れない。

「くっ……！ 間に合わなかったか！」

志貴が悪態を吐く。

それもそうだろう。

この世界は私の思うままの世界。

謂わば私はこの剣達の王なのだ。

瞬時にすべての剣を引き抜くイメージをし、地面から引き抜かれていく。

「さて、志貴。これらすべてを捌ききってみろ……！」

「ふっ……いいさ。ならば俺はこの世界そのものを殺す！」

「なに……？」

志貴はそう言うのと魔眼殺しの眼鏡を外す。

すると威圧感が増して、

「英霊にまで昇華した俺の直死の魔眼ならできるはずだ！　いくぞ!!」

そう言つて志貴は私の剣軍が立ち並ぶ中を駆けてきた。

くるかつ!?

「世界ですらモノであるなら…殺しきつてみせよう!」

私に突撃してきたと思つた志貴は突如として固有結界の地面にナイフを刺した。

瞬間、世界が何かの衝撃を受けて震撼したと思つたらあのギルガメッシュのエヌマ・エリシユを受けた時のように世界にヒビが入つていき固有結界は外観をあつけなく崩してしまつた。

「……………」

『……………』

それで私はもちろん観客として見ていたシホ達も思わず呆然としている。

「…志貴。お前の直死の魔眼はアンチ固有結界宝具にまで昇華していたのか…?」

「理解できるものなら…なんであろうと殺してみせるさ…。しかし…これは反動がすごいな。今にも倒れそうだ…」

志貴は体がフラフラしていて今にも倒れそうだ。

脳をフルに使つた影響での限界が来たんだろう。

そのまま倒れた。

「あっ?! 志貴ー!」

アルクエイドが志貴に向かっていったが私は無言でその場に立ち尽くしていた。

そこにシホがおずおずと話しかけてきた。

「…ま、結果はあんなだったけど志貴のスタミナ切れを起こさせたんだからよかったんじゃない…?」

「いや、固有結界まで出したというのに止めをさせなかったのだから私の負けだろう…」

「まあ、私もシヨックだったけどね。まさかギルガメツシュに続いて二回も固有結界を壊される経験をしたんだから」

「ああ。正直に言ってシヨックを隠しきれない…」

そしてそこにはやてがやってきて、

「それじゃ今回は引き分けてことで大丈夫なん…?」

「ああ、そういう事で頼む…」

こうして私と志貴の勝負は引き分けということになった。

しかし固有結界をまた破壊された私としては結構シヨックだった事を身にしみた事態だった。

まあこれが殺し合いだったら弱った志貴に止めを刺すということもできたがそんなことはもしもの話だ。

さて、これから私はまた心を鍛え直すことを始めるとしようかね…？
そう何度も奥義である固有結界を破られたらたまらないからな。
そんな事を思ったある意味有意義な一日だった。



それから一同は解散という形になったがなのは達子供組は集まって色々話し合っていた。

「でも、英霊である志貴さんと互角にやりあえる土郎さんはやっぱり強いと思うのよ」
「そうだね、アリサちゃん」

なのはがアリサの物言いに答える。

「シホちゃんも英霊のみんなの誰かと戦ったら互角の勝負に持ち込めたのかな…？」
「さすががそんな事を言い出す。」

「どうやろうな？ でもシホちゃんってアルトリアさんとユニゾンすると英霊のみんなと互角の勝負はできるんやない？ ほら、聖杯大戦でバーサーカーも倒していたしな…」

はやての発言で思い出される聖杯大戦でのシホの様々な戦い。

アルトリアとのユニゾンによる恩恵が大きいものそれでもサーヴァント達と互角にやりあっていたのは騙しようがない事実である。

「そうだねー。シホは色々とチートの塊だからね。」

まず投影魔術から始まって普通なら担い手本人にしかできない宝具の真名開放もできちゃって、そして魔術の奥義の一である固有結界も使えるでしょ？

お次は第二魔法【平行世界の運営】、第三魔法【魂の物質化】。シホ達の元の世界では本物の魔法と呼ばれるこれ等を使える人は合わせて四、五人しかいないっていう話なんでしょ？

そしてアルトリアさんとのユニゾンによる強大な馬力と絶大な出力、エクスカリバーも魔力が続く限り制限なく使えるのがすごいね。

さらに未だシホしか発見されていない未知の属性である魔力変換資質【風王】。

まだまだあつて魔術回路とリンカーコアを士郎さんもだけどシホは直結できて両立してしまう大胆さ。

そして二つの回路とコアを合わせた総魔力量は推定でもうSS＋ランク相当はくだらないレベル。

そしてオマケと言ってもそれでもかなりのレパトリーや引き出しがある様々な体術、技術…。

そしてイリヤさんの魔術回路で使える魔術や、シルビア・アインツベルンさんと魂を融合して得た膨大な魔法と魔術の知識と経験…といっぱいあるしね。

士郎さんも当然強いけど、それでも輪をかけて今更だけでもうシホは自分のことを才能は二流どまりなんて言っても誰も信じないと思うな〜？

最後にこれは本当にオマケと言ってもいいけど学力や家事洗濯、そして料理の腕も抜群で才色兼備だしなんていうか器用貧乏というよりむしろ完璧超人に近いものだと思うんだー」

アリシアがあげたシホの全技能を並べてみて全員はやっぱシホはすごいと思った。

そしてフェイトが、

「そうだね、アリシア。やっぱシホはすごい…また実力を離された気分だね。でも追いつきたいという気持ちはあるな…いつかきつと」

士郎と志貴との戦いを通して見て士郎と同格の力があるシホの実力の再確認もされて、色々なめぐり合わせで得た後天的ながらも確かな才能と裏付けされた実力を思い知らされてシホの株がさらに急上昇した瞬間であった。

そしていつか全員でシホと肩を並べて歩いていけるようになったらいいなと夢を見るのだった。

最後にそれをひっそりと聞いていたシホは顔を赤くしていたり…。

第九十二話

『アングラー達』

Side シホ・E・S・高町

本日はリンディさんもアースラの艦長の任から降りてクロノに艦長が移されてからののは、フェイト、はやて、士郎との久しぶりの合同任務である。

「今日はまたこのメンバーであるロストログアの回収任務をやってもらおう。気を引き締めて任務に勤めてくれ」

「わかったの！」

「わかった！」

「わかったで！」

「了解よ」

「了解した」

私たちが五人はクロノに返事を返す。

それに各サーヴァント達も返事を返す。

「にしてもまだ新米艦長様は前線に出るのね〜」

「そうだが、なにか不服か？ シホ」

「いえ、何事も経験も大事だからね。クロノもまだ前線に出るのもいいだろうしね」

「そうか…」

私達が会話している中、エイミーさんから、

「クロノ君はまだこういうった艦長の現場に慣れていないから優しくしてあげてね？ みんな」

『はーい！』

全員で返事を返す。

それに当然クロノは反論の声を出すがエイミーさん専用のマグダラの聖骸布で縛り上げられるという悲惨な状況。

クロノ、哀れね。

そこに士郎が、

「なぜ、エイミー嬢がマグダラを…？」

「私があげたのよ？ 今はいい具合にクロノの躰に使っているみたい」

「シホ。お前は変わったな。私は同情の念しか湧いてこないぞ？」

「そう？　ま、いいじゃない。楽しければ…」

「これがもう変わってきたということなのか？　シホがどんどん私と別離していくなら…」

士郎がぶつぶつと呟いているが一応今はそっとしておく。

私とてイリヤやシルビアさんのおかげ（のせいでは…？）で汚染されてきているという自覚はあるから。

………

………

………

それから私達とはある世界に降りてきていた。

その星は無人の惑星で動植物しか住んでいない未開の地だった。

「…報告によるとこの世界に動物を巨大化させるロストロギアがあるらしい。

この星には調べた結果、最高でも五メートル以上の生物はいないというからそれ以上のやつが出てきたらそれでアタリというわけだ。

方法は簡単で吐き出させるかそのままそいつを捕獲するかのも二択くらいだろう。

後は管理局本局で調べられるらしいが簡単な任務だ。この人数で来るほどのものが迷いどころだがな……」

『気をつけてね？ 一応そのロストログアは凶暴化させる力もあるというから』

エイミイさんの報告で私達はそれぞれ任務に取り掛かる。

「でも、小さいとはいえこの星の中から見つけ出すのは針の糸を通すくらい難しいと思うんだけど……目星はついているの？ クロノ？」

「ああ、どうもそのロストログアは水棲生物にしか反応しないというから湖くらいにしかないだろうという話だ」

「また限定的な話ね。この星に湖のある場所ってあったっけ？ 確か砂漠ばかりだったわよね？」

「それを調べるのも任務のうちだ」

「——ならばここは俺の釣りテクを見せる時か？」

ランサーがずっと私達の話を聞いて出てきてその手に釣竿を出す。

……どこに持っていたんだ？

「何を言う。ここはミッドで仕入れた最高級の釣竿で釣り上げるのが妥当だろう？」

そこに土郎が口を挟んできてその手に以前私と土郎で向かったミッドチルダ一番人気の釣りショップで全部解析した中で一番の代物が握られていた。

なんとその釣竿は魔法製で獲物が掛かれば魔法で教えてくれてさらに魔法の力を付与してリールが勝手に巻き上げられ獲物を釣り上げることができるといふ釣り師にとつてとつてもいい道具なのだ。

まあ、それは投影品だから買ったものではないが士郎はアングラーの血が騒いでいるのかいつもより楽しそうだ。

私もちよつぱり混ざりたかつたり…。

「…ああ？　士郎、お前はやつぱアーチャーと同類だったのか？」

「今更何を言う。私はあいつと同じ存在なのだぞ？　ならば答えは一つだ」

「ぜつてー負けねえからな？」

「望むところだ…！」

それで火花を散らせる士郎とランサー。

私も参加しようかなー？

「それじゃ数は多いほうがいいから僕も参加するでしょう」

そこにいい感じにクロノも参加するといふ。

チャンスね。

「クロノ、それじゃ私も参加するわ！」

「いいだろう」

それを聞いていたなのは、

「シホちゃん達も好きだね。それとクロノ君、懲りてなかったんだ…」

「あれくらいで僕の釣り魂は砕けはしない！ 今度の獲物は僕が釣り上げる！」

「おう、クロノの坊主！ いい根性だ！ どうやらお前は俺の仲間みたいだな！ 一緒に頑張るとしようか！」

「ああ、ランサーさん」

「ならばシホ。私達であの二人を負かしてみせようか」

「…え？ いつの間にか勝負になつてるの？」

「シホ…諦めた方がいいと思うんだ」

「そうやね。それより私達はさっさと湖を見つけるとしようか。この世界だと多分オアシスやね」

フェイトとはやてにそう言われて仕方がなく私達はまず湖を見つけることにした。

それから搜索は続き、一つのでっかい湖が見えてきた。

「ビンゴですね。ご主人様、たぶんここにその生物はいると思います。タマモの直感がそう告げています！」

「奏者よ。余にも竿を貸してくれぬか？ 余も釣りをしてみたい」

「わかったわ、ネロ」

それで私は釣竿を投影してネロに渡す。

「ふむ。これが最新式の釣竿か。余は楽しくなってきたぞ！」

それでネロはルアーを飛ばしてきつそく釣りを開始した。

なのはやフェイト、はやての三人はモノが出てくるまではここでバカンスをするらしく湖の低地に足をいれて楽しんでる。

「では、私達もいくとしようか、シホ」

「負けねーからな。いこうぜ、クロノの坊主！」

「ああ！」

なぜか勝負となつてしまい私達はそれぞれ二手に分かれた。

それからというもの、

「フイイイシュツ！」

士郎が何度も魚を釣り上げては叫んでいる。

その近くで私は少し恥ずかしがりながら魚を無言で釣っている。

そこになのはがやってきて、

「シホちゃんは今日は叫ばないんだね…？」

「あの時は頭に少し血が昇っていただけであつて今は正常だからね」

「そうなんだー。またシホちゃんの意外な一面を見れると思つただけだなあー」

「そこは諦めてもらうしかないわね」

「なのはちゃんの話やとシホちゃんは釣りでは人が変わる言うたけどそうでもないやね。むしろ士郎が変わつとるな」

そう、士郎はもう何度も魚を釣つては叫びを上げている。

まるで童心を取り戻した子供のように。

ヒヤッホーウ！と叫ぶのがどうかと思うのよ…。

「…さて、いいかげんヒットしてもいいと思うがその巨大な水棲生物は本当にいるのか？」

「さあ？ でも多分いるんじゃない？ 観測されたんだから…」

士郎に適当にそう返しておく。

「そうか。ではもう少し頑張るとしよう。おっと、フィィィイシュツ!!」

「あはは…もしかして私もあの時あんな風になっていたのかな？」

「うんうん。なつてたよシホちゃん」

それで私はまた非常に恥ずかしくなった。

それとランサー達の方はどうなっているのだろうか？

ちよつと見てこようかしら。

「なのは」

「なに？」

「ちよつとクロノとランサーの方を見てくるから代わりに魚を釣っておいてくれない？」

「…え？ 私でいいの？」

「ええ。大体はわかるでしょ」

「うん。わかつたの」

「シホ。私もしてみたいので竿をもらつていいでしょうか？」

「わかつたわ。オリヴィエ陛下」

それでオリヴィエ陛下にも竿を投影して渡した。

その後、私はその場をなのは達に任せてランサー達の方を見に行つた。

ここではフエイトが二人を応援していた。

「クロノ！ ランサー！ 頑張つて釣つてね！」

「おうよ、マスター！」

「任せろ！」

二人は意気込んで釣りをしているが、でも桶の中を見てみると、

「…二人共、あんまり釣れていないわね」

「…ん？ シホの嬢ちゃんか。…敵情視察か？」

「ま、そんなところ。で、なにかいいものは釣れそう?」

「ま、ボチボチだな。ここは意外といいものが釣れるからな」

「その割にはあんまり釣れていなさそうだけど…?」

「ばあか、逃がしてるんだよ。まだ小さいのばつか釣れやがるからな」

「そうなんだ…」

「それよりそっちはいいのか? こんなところがかまけていてよ」

「ああ…、あつちは士郎が相変わらず調子いいからなのはに任せてきちやったわ」

「そうか」

それでクロノの方を見てみるとなにやら難しそうな顔になっている。

どうしたのだろうか…?

「クロノ、難しそうな顔をしてどうしたのよ?」

「…あ、ああ。シホか。いや、やつぱり竿一本じゃなかなか釣れないなと思つてな」

「意地を張らないで最新式を使えばいいのに…」

「そこは僕のプライドが許さないんだ。だから僕はこれ一本で行かせてもらう」

「そ。まあ、頑張りなさい」

「奏者よ。少しこつちに来てくれ! 大物が引つかかかたみたいだ」

「わかつたわ、ネロ!…それじゃフェイト。二人をよろしくね」

「うん、わかった」

それでこの二人はフエイトに任せて私は戻っていった。

それから時間はお昼時になり、

「ちようどいい。この魚で食事を作るとしようか」

士郎は鍋やら台やら食器類などを投影して魚を焼きだした。

「…こういう時に士郎やシホの嬢ちゃんの魔術は便利だよな」

「なんていうのですか？　こう、実用的みたいな？」

ランサーとキャスターの言葉に私と士郎は揃って少し不服そうな表情をする。

まあそれでもこうして食事に取りつけている以上そう思われても仕方がないので口

を出さないことにした。

それでみんなして魚を食べながら、

「でも、クロノ…。本当にこんなところにそのロストログアはあるのかな？」

フエイトの疑問の声で全員は魚を食べながらもクロノに注目する。

「…確定はできない。でもいるのだけは確かなんだ。だから今日は見つけるまで帰れな

いかもな」

「そっか…」

「そう落ち込むなマスター。必ず釣り上げてやるからよ！」

「うむ。余の皇帝特権で魚を引き寄せてみるか！」

「二度、湖になにか落としてみてはどうでしょうか…？」

『それだ！』

オリヴィエ陛下下の提案に全員は賛成した。

それで昼食後に私達は湖の上空に飛んで、

「それじゃ一斉にいくわよ？　なのは、フェイト、はやて？」

『うん！』

「それじゃ… I a m 我 t h e 骨 b o n e 子 o f は m y 捻 s w o r d し | | | | | ……
カラド・ボルク
 偽・螺旋剣！」

「デイバインバスター！」

「サンダーレイジ！」

「いくで！　クラウソラス！」

私は魔法製の魔力でできた投影ではないカラド・ボルクを放ち、なのははデイバインバスター、フェイトはサンダーレイジ、はやては砲撃魔法のクラウソラスをそれぞれ発射した。

それによつて起こった勢いで飛び散った湖は一瞬中心だけ水がなくなり底が見える。そしてそれに呼応したのか体長十メートル以上はある巨大な緑色のヒレがついてい

る竜が姿を現した。

「ガノ〇〇ス!？」

「はやてちゃん、ゲームのやりすぎだよ!? 私も一瞬そう思ったけど……!」

「なのは、はやて! お遊びをしていないで掃討にかかるわよ! クロノ、こいつで間違いない!？」

「ああ! さつさと終わらせるぞ!」

そして戦いが始まる。

なのはとフェイトとクロノがバインドで縛り上げて、はやては後方から砲撃を幾度も放ち魚竜を攻撃していく。

私や士郎、ネロ、オリヴィエ陛下、ランサーが魚竜が陸に上がったのをいいことにオーバークル攻撃をしていきキャスターが隙を見て呪術で丸焼きにしていく。

しかし意外にしぶとく何度も潜っては飛び出してを繰り返して私達はその度に湖に攻撃を繰り返した。

そして……

「これで、最後だぜ!」

ドスッ!

「ギャアアアアッ!!」

ランサーの一突きでついに魚竜は力尽きて地面に倒れる。

「…こういうのは剥ぎ取るのが基本やと思うんやけど、どうやろうか？」

「君は何を言っている…？ ゲーム脳か…？」

士郎のツツコミではやてはなぜかツツコまれた事に喜びを覚えたのか「えへへ」と笑った。

ゲームのやり過ぎだと思ふのよ。絶対…。

「とりあえずこの生物の体の中にそのロストロギアがあるはずだから慎重に運ぶとしよう」

「別に、吹き飛ばしてしまっても構わないのだろう…？」

「それだけはダメだ。ロストロギアは危険なものだってことはもう知っているだろう？

少しでも刺激を与えたら暴走する危険性がある」

「しかしよー。本当にコイツの中にその危険物があんのか…？」

「そのはずだ。ロストロギアセンサーにも反応しているんだから」

「確かめてみませんかねー？」

キヤスターが呪符を構えて一気に近寄る。

「だからダメだと言っているだろう！」

「ちえー…」

「やれやれ、まったたく…。君達はロストログアくらいでどうにかなるとは思わないが人間にも限界はあるんだからそこは見極めてくれ」

それで全員はクロノの言う事に大人しく従った。

その後はクロノを中心にバインドをしていきエイミイさんに連絡を入れて転送ポートを開いてもらった。

そしてアースラへと戻ってきて早速巨大生物が運び込まれていきこれで任務は終了となった。

「しっかし、どうにも釣りの決着がつかなかったな」

「そうだな、ランサー」

「それでは今度の休日に三人で釣り勝負でもしましょうか？」

クロノの提案に士郎とランサーは快く頷いた。

そしていざ、釣りの日だと繰り出してみたら港に一人の男の影があったらしい。

その新たな暇人とは…!?

…その後、士郎とランサー、クロノはそれが誰なのかは一切語ろうとしなかった。

ただ、すごいショックを受けていたとフェイトとはやてに後に聞いた。

…私は参加しなくてよかったわね。

第九十三話

『リインフォースⅡ』

S i d e 八神はやて

私は、この一年と少しの間、この日を待ち望んでいた。

あの闇の書事件からアインスが生き残つてともに生まれてくるであろう願つた八神家の末っ子である管制人格の目覚めを。

「はやてちゃん！ 準備はいい？」

「いいですよ、マリーさん！」

足もすつかりリハビリもして治りもう普通に歩けるようになった小学五年生の春先。

私は自身のリンカーコアの一部を摘出して、そのリンカーコアをベースにして管制人格のコアを生み出し今の今まで育んできた愛しい子が生まれようとしている。

少しずつ形をとっていき、その子は人間の姿に変化していく。

もう少し、もう少しで生まれる。

私の子が。

そして生体ポットの中で一つの形が出来上がる。

ヴィータよりも少しばかり幼く設定し、リインフォースと違い銀色ではなく水色の髪をして髪留めには私と同じバツテンがつけられている。

そして私の騎士甲冑の黒色とは対照的に白色を基準にした服装をした一人の女の子。

アインスとそれを見ながら、

「主、ようやく生まれましたね。新たな融合騎が。あなたの支えとなるユニゾンデバイスが……」

「うん……。ここまで来るのに長かった……。元・ユニゾンデバイスのアインスやアルトリアさんというユニゾンデバイスを基本骨子にして生み出した新たな管制人格のデバイス……」

名前は『リインフォース・ツヴァイII』や！」

最後に名前も入力して少しずつツヴァイは目を開け出す。

「……名前認証確認しました。はじめまして。私はリインフォースIIです。よろしくお願
いしますです！ マイスターはやて！」

あ……

マイスターはやて……

その響きを私は以前にも聞いた覚えがある。

そう。あれは聖杯大戦事件でキャスターの宝具『闇の書の悪夢』に取り込まれた時に精神世界でかすかだけど聞いたあの子の言葉、そして声。

あの時は聞き逃してしまっただけでもう私は忘れへん。

「そうかあ…。やっぱりあの時の声はツヴァイの声だったんやね…？」

私は自然と涙を流してツヴァイを引き寄せて抱きしめる。

「マイスターはやて…？ どうしたんですか？ どこか痛いんですか？」

「ううん、違うんよ。あなたに会えてとっても嬉しいんよ…この涙は嬉し涙や」

「そうですか…」

「生まれてきてくれてありがとな、ツヴァイ」

「はい、はやてちゃん！」

ああ、やっぱりあの時に聞いた声と一緒に。ようやく私は巡り会えることができたんやね？

新しい八神家の家族に、末っ子に…！

「それと、アインスお姉様でいいのですか…？」

「ああ。ラインフォース・アインスだ。よろしく頼む。ラインフォース・ツヴァイ」

「はいです！ アインスお姉様！」

アインスとも仲良くやっていけそうやね。

これなら大丈夫そうや。

「よかったですね、はやてちゃん。無事完成して」

「はい。マリーさん、今までツヴァイを生み出すのを手伝ってくれて感謝します」

「いいよー。それよりこれからツヴァイを大切にしていってね」

「はいー！」

マリーさんに感謝しながら私はアインスとツヴァイと一緒に我が家へ帰ろうと思う。

私の家族達や親友達にツヴァイの事を紹介せんといかない。

「それじゃ、帰ろうか。二人とも？」

「はい」

「はいですー！」

ツヴァイはまだ生まれただでうまく飛行ができないのかアインスの肩に乗っていた。



「ただいまー！」

私が元氣よく家に帰ってきてみんなに聞こえるように声を上げる。

するといの一番にヴィータが走ってきた。

「はやて！ おかえり！」

「ヴィータ。今帰ったで。それとみんなはもう全員いるか？」

「いるよ。普段はどこかにいつているアルクエイドも今はいる」

「それはちようどよかった。紹介したい子がおるんよ」

「はやて、それつてまさか！」

それでアインスに目で合図をする。それで後ろに隠れていたツヴァイが姿を現す。

「えっと、ヴィータちゃん、ですよね…？」

「うん！」

それでヴィータは嬉しそうに顔を綻ばせる。

「私の名前はリインフォース・ツヴァイです。よろしくお願いしますです！」

「ああ、よろしくな。ツヴァイ！ おおーい！ みんなー！」

ヴィータはツヴァイをすぐに連れてみんながいるだろウリピングへと走っていった。

「それじゃ私達もいこうか。アインス」

「ええ、我が主」

それでゆつくりとしながら私とアインスもリピングへと向かう。

そこでは、

「きゃー！　かわいい！」

「しゃ、シヤマル、苦しいですう…シグナム、助けてくださいです！」

「まあ、少しはシヤマルの好きにさせてやれ」

「いきなり見捨てられたです!？」

「しかし、やはりアインスに似ているな」

「そうだな」

「ヴィータのご要望通りに幼いようだな」

士郎と志貴とザフィーラが感心した目をツヴァイに向けていた。

「士郎パパ！　助けてください！」

「だ、だれがパパだね!？」

「…?　はやてちゃんに士郎パパは士郎パパと呼ぶんだと教わりましたが…」

「はやて〜!」

「士郎、怒ったらアカンよ？　ツヴァイが悲しんで泣いてまうよ…?」

「ぐっ…!」

「士郎パパ…やつぱりパパはダメですか…?」

ほら。ツヴァイが涙目で士郎に泣きよっている。

計画通りや。あの夢の世界でツヴァイは士郎の事を『士郎さん』と言つとつた。

でもそれだと面白くないやろ？ 主に私のだが。

それでツヴァイには士郎の事はパパと呼ぶように言い含めておいたのだ。いや、いい仕事をしたと私は思う。

他にも理由はあるけどそれは士郎が気づく事はないかな…？

「ダメですか？ 士郎パパ…？」

「…いい、いや。別にかまわん。好きに呼べ…」

「わーいですー！」

ツヴァイはそれで「わーい」と嬉しそうに空を舞って士郎の頭に乗る。

どうやらもう士郎の頭をベストポジションに決めたらしい。

ぬくぬくとした表情をしている。

「それでは私がママですかね…？」

「なっ!! それなら私がママだろう！」

キャスターとアインスが毎度お馴染みの士郎の隣は私のモノだ合戦を開始した。

士郎もさすがに毎回言い寄られているので最近は気持ちに気付いているらしく「私はどうすればいいのだろう…？」とザフィーラに相談しているらしい。

ザフィーラ本人から聞いた事だから間違いない。

なんや士郎はシホちゃんと似たような悩みを抱えていたりする。

これも成長やね。

「アハハ、ツヴァイ、可愛いわね。志貴、私達もせつかくだし作ろつか!」

「ぶはっ!? いきなりなにを言いだすんだ、アルクエイド!」

「えー? 志貴は私が好きなんですよ? なら私も好きだから両思いでもう後はやるだけですよ…?」

「少し黙れ! このアーパー女!」

「あ、志貴ひどい!」

アルクエイドと志貴がなにやら乳繰りあっている。

あんたらはさっさと結婚しろと声を出して言いたい。

英霊同士の子供というのも見てみたいしな。

「アインスお姉様はアインスお姉様です。キャスターもキャスターです。私の大事な家族です!」

ツヴァイの向日葵のような笑顔を向けられて毒気が抜かれたのか全員は少し頬を赤くする。

うん。ツヴァイは癒し要素やね。

全員ツヴァイに癒されているみたいや。

「と、そうや。ツヴァイの呼び方を決めようと思うんやけどどうやろ?」

「いいと思いますよ、はやてちゃん」

「私はもう皆の中ではアインスと呼ばれていきますからね。リインフォース：いや、長いな。そうだな、リインなどはどうだろうか？」

「リインか。アインス、いい呼び方だね。ツヴァイ、リインはどうや？　これなら名前つぽいで？」

「はい！　嬉しいです！」

「よし決まりや。これからツヴァイはリインで決定や！」

「はいです！」

「リインか……。ではこれからそう呼ばせてもらおう」

「リイン。よろしくな！」

「リインちゃん。よろしくね」

「よろしく頼む。リイン」

「リイン、よろしく頼む」

「ま、よろしくなリイン」

「よろしくお願ひしますね、リイン」

「よろしくね、リイン」

シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、士郎、志貴、キャスター、アルクエイ

ドの順にリインに声をかける。

それでリインは嬉しそうに士郎の頭の上で「わーいです！」と声をあげている。

「そうだ。まだユニゾンをしてへんのやった。試しに私とユニゾンをして適合率を確かめてみようか？」

「はいです」

マリーさんのところで試運転をするのを忘れていた私はそれから騎士甲冑を展開して、

「それじゃリイン。いくで！」

「はいです！」

『ユニゾン・イン！』

私とリインはそれでユニゾンをする。

そしてそれをシヤマルがモニターで検査している。

「どうや、シヤマル？」

「はい。バツチリユニゾンできていますよ。アインストユニゾンした時とおんなじ適合率です。」

後はこちらをどれだけ持続できるか試していきましようね」

「わかったわ」

『はいです!』

そうしているとタイミングよくマリーさんから連絡が入ってきた。

『はやてちゃん! ごめんなさい、ユニゾン試験をやるのを忘れていました!』

「あ、マリーさん。ちようどよかったです。今、それをやっているところなんですよ」

『そ、そつかあ…残念。それじゃ今からユニゾンに関しての一通りの検査内容を送るか

らもしよかったですら終わったら私にデータを送ってもらっていい?』

「いいですよ」

『うん。それじゃ伝える内容はこれだけだからまたね、はやてちゃん。みんなにもよろ

しくね?』

「わかりました。それじゃまた今度です」

『うん。また今度ね。それじゃ』

それでマリーさんと通信を終了する。

「それじゃマリーさんから送られた検査内容をこなしていこか。ライン」

『はいです、はやてちゃん』

それで検査をこなしていくのだった。



数日後、私はシホちゃん達を家に呼んだ。

「はやて、大事な話ってなに？」

「なんか学校でもそわそわしていたよね？」

「うん」

「そうだね」

「はやてちゃん、なにか嬉しいことがあったの…？」

「隠していないでさっさと教えなさいよ」

シホちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃん、すずかちゃん、アリサちゃんの順に私に話をふってきた。

なので私はもう隠さないで私のデバイスを取り出し、

「リイン、出てきてな」

『はいです、はやてちゃん』

それでデバイスからリインが姿を現して空を舞う。

それに全員驚いた表情をして、

「ユニゾンデバイス…完成していたのね。名前はなんていうの？」

「私の名前はリインフォース・ツヴァイです。長いのでリインと呼んでくださいです！」

ほわつと笑みを浮かべたリイン。それによつて和むシホちゃん達。

「わーわー！ 可愛いよリインちゃん！」

「そうやる。なのはちゃん！ 私のリンカーコアの一部から生まれた私の子や」

「はやてのリンカーコアから：それつて親子だつて事だね」

「はいです。ちなみにパパは士郎パパです！」

『えっ…？』

それで勘違いしたのか全員、特にシホちゃんが顔を青くする。

「はやて、士郎がはやてを襲うなんて：考えていなかったわ。ごめんなさい…」

「いややわー。シホちゃんがいの一番に勘違いを指摘してくれなきやダメやる？」

シホちゃんはツツコミに定評があるんやから。

リインには私が言わたんよ。士郎の事をパパつて呼ぶようにな」

「ちなみにその心は…？」

「もちろん士郎を弄るネタの一つに決まつてるやる？ アリサちゃん！」

なにをいませら。だけどそれでシホちゃんはホツとして代わりに士郎に同情しているらしい。

「あ、シホさん！ 今度アルトリアお姉さんを私に紹介してくださいね？ おんなじユ

ニゾンデバイスとして尊敬していますから！」

「わかったわ。リイン」

それからリインを中心に色々雑談を交わしていった。

「そういうえげな。リインは私以外にもユニゾンができるんよ」

「はやて以外と…？ 誰とユニゾンできたの？」

「まずはシグナムやろ。お次はヴィータ、アインス、そして士郎ともユニゾンできたわ」

「士郎。パパとユニゾンできたのは嬉しかったです！」

「リインはそれが一番喜んでいたからなく。私としては複雑の極みだったわ…。なんか

リインが士郎にとられたみたいで…」

『あははー』

それで全員は苦笑いを浮かべていた。

「でもやっぱりはやてちゃんが一番ですからね？」

「うん。それなら嬉しいわ、リイン」

「でもはやてもいっぱいデバイス持ちになったわね。ストレージの夜天の魔導書にア

ムドのシユベルトクロイツ、そしてユニゾンのリインの三つでしょ？」

「ノンノン。リインにも直に『蒼天の書』というストレージデバイスが持たせられるん

よ。だから合計四つになるわ」

「それだけははやてちゃんの魔導の制御が困難だつて訳だね」

「そうなんよ。それでやつと完全に安定するんよ。自分のことながらやつかない力や」
それで私は「あはは…」と笑う。

あ、それとみんなにも伝えておく事があつたんや。

「そういえばな。聖杯大戦でキャスターに取り込まれた時に私を助けてくれた声なんや
けどリインとおんなじ声やったんよ。」

これってどういう事やろか？」

「はやてちゃん、聖杯大戦とはまだはやてちゃん達が九歳の時に起きた事件ですよね？」

私はつい最近生まれただから干渉は無理ですよ？」

「うん。それは分かつとるんよ。でもつい気になつてな」

それでみんなの顔を見ると、シホちゃんが悩む仕草をしている。もしかしてなにか心
当たりがあるんやろうか？

「はやて、それに関しては少し心当たりがあるわ。でも今はまだ内緒にしておくわ。私
の修業不足もあるから…」

「そうなんか。それじゃ教えてくれるのを楽しみにしておくわ」

「ええ」

でも修業不足…シホちゃんの使える魔法は、確か『投影魔術』、『固有結界』、『魂の物
質化』、そして…、

あ！ 『平行世界の運営』!?

それじゃあの時助けてくれたんはリインだけじゃなくてももしかしてシホちゃんもおったんかな!?

しかも平行世界の二人!

そう考えると色々辻褄が合う。

そうかあ…。

シホちゃんとリインがな。

それで私は嬉しくなり、

「シホちゃん、リイン。私を助けてくれてありがとうな！」

「え…?」

「はい…?」

シホちゃんとリインは分からないといった顔をしているけど私の勘は多分あたっているはずや。

だから感謝の言葉を送りたい。私の未来を繋いでくれてありがとう、と。

「はやてちゃん、なんか楽しそうだね」

「そうか? まあ、そうなんやろうな。うん、楽しみや」

せつかくみんなに支えられて助けてもらった命。ヤガミのように絶望しないように

頑張っていかうか。

第九十四話

『墮ちるエース』

時期は小学五年生の冬の時。

なのはの調子が最近おかしく感じる。

シホはふとそんな事を思っていた。

不安なものを感じシホはなのはに聞いてみることにした。

「なのは…」

「どうしたの、シホちゃん？」

「いや、大したことじゃないんだけど最近任務が多いじゃない？」

「うん」

「…無理とか、していないでしょうね？」

「…え？」

「なにか最近なのはを見ているときどき不安になってくるのよ。任務で無茶をしていないかを」

シホは普段見せないような不安の眼差しをなのはに向ける。
それになのはは、

「うん。大丈夫だよシホちゃん…多分今はまだ頑張れていると思うから。だから大丈夫なの」

「そう…。武装隊の訓練でもなのはには私の方針『絶対無茶な事はしてはいけない』を徹底させていたから、大丈夫だと思うけど、でもやつぱりいやな予感がするのよ。」

「…うん。わかってます」

なのはは元気にシホに答えた。

それでシホは一応の安心を見せた。

（大丈夫よね…?）

だがやはり不安は消えなかった。

だからシホはオリヴィエにも相談して、

「オリヴィエ陛下。なのはの事をお願いしてもいいですか？」

「当然です。なのはは私のマスターなのですから必ず守ります」

「お願いします。最近ですけどなのはに嫌な空気がまとわりついてるように感じるんです…」

「嫌な空気、ですか…」

「はい。近いうちになのはに災厄が起きると私は思うんです。だから…」

「安心してください、シホ。必ずやなのは守ります。信じてください」

「わかりました」

それでシホは一応相談もできたので不安はあるが心の底にこの件は落としていった。

——今、もう少し気を配って気を付けていれば不幸な事故は防げたかもしれないというのに。

…と後にシホは思い知らされる事になる。



なのはとある任務でオリヴィエ、ヴィータとともに吹雪が吹いているとある次元世界をともに飛んでいた。

ヴィータもシホからなのはが不安である事を聞いていた。

でもいつもと変わらないなのはの姿を見てシホの思い過ごしだろうと思っていた。

「ヴィータちゃん、今回の任務も大丈夫だったね」

「ああ。あたし達にかかればこんな任務は軽いな」

《なのは、気を抜いてはダメですよ？ 帰るまでが任務なのですから》

オリヴィエは飛べないので霊体になってなのはに着いてきていた。

「うん。わかつてるよ。オリヴィエさん」

「オリヴィエはなんだって…？」

「うん。帰るまでが任務だって」

「確かに。帰ればあたしにははやてが待つてる。だからあたしは頑張れる！」

「私もシホちゃんやお母さん達が待つてる。だから…」

そんな事を二人で話し合っているときだった。

《マスター！ アンノウン反応です！》

「ヴィータちゃん！」

「わかつてる！ 構えろ、なのは！」

「オリヴィエさん、お願い！」

「はい！」

なのはとヴィータはデバイスを構えて、オリヴィエは実体化して拳を構えた。

そして前方から謎の機械の群れが現れる。

「レイジングハート、あの機械はなにかわかる？」

《すみません、アンノウンです…》

「そう…ヴィータちゃん、気をつけていこうね！」

「ああ、前衛は任せろ！」

そう言つてヴィータが前進して機械の群れに突つ込んでいく。

なのもレイジングハートを構えて、

「いくよ、レイジングハート！」

《Yes, My master. Accelerate shooter set!》

周囲にアクセルシューターをいくつも展開。

二年前より訓練により操作できる数が増えたのでかなりの量が待機されている。

「シュートツ！」

放たれたアクセルシューターは機械の群れに向かつていくが…、

それは当たる前に掻き消えた。

「え?! 魔法が消えちゃった！」

「うわっ?!」

ヴィータが勢いに負けてこちらへと吹き飛ばされてくる。

「ヴィータちゃん、大丈夫!？」

「あ、ああ。だけど魔法は少し効かないみてーだ。直接叩くのは通じているみたいだが……」

「二人共、下がって！ 聖王…鉄槌砲！」

オリヴィエの攻撃によって機械の群れは少し減る。

「どうやら英霊の攻撃は大丈夫のようですね。蹴散らします！ なのはとヴィータは私の後ろで援護を！」

「わかりました！」

「わかった！」

「いきまず！ はああああー！！！」

オリヴィエの攻撃によって次々と破壊されていく機械の群れ。

これで安心かとなのはは思ったが突如として地面のそこから機械の群れが出現してなのはとヴィータを囲んだ。

「!? アクセル…！」

シンツ…。

なのはが魔法を使用しようとするが発動はしなかった。

「なにかのフィールドか!? なのはは下がってろ、魔法が使えない今のお前は『ただ』の人のようだ！」

ヴィータが機械の群れを殲滅しようとするがヴィータも動きをなにかの力で阻害されてしまつてあんまり動きはよくない。

そして魔法が使えない以上脱出できないなのははその場から動くことができない。

なのはは恐怖を覚える。

(私は、魔法を使えないとただの人と変わらないんだ！)

そんな当たり前のことも今まで分かつていなかったなんて私は…！

シホならこんな状況でもなにか打開できる方法を思いつくのだろうが…。

しかし、なのははただ焦りに駆られる。

そうしている間にも機械の群れからなにかビームのようなものが発射されたり鋭い爪が迫ってきてなのはに何度も当たつていく。

「なのはッ！」

「なのはッ、今行きます！ このっ、邪魔です！」

なのははビームや爪に曝されながらも心の中で、

(シホちゃん、ごめんね…私、やっぱり無理していたのかな？ 痛い、痛いよ…)

その手を握りしめてなのははシホに以前にももらった宝石でできたお守りを取り出し握り締める。

するとそれは光り輝いて、



…シホはなにか嫌な予感を感じた。

それは以前なのはにあげた宝石剣の欠片のお守りから伝わってくる。

(なのはに危険な事が起こっている!?)

本日はすずか達の魔術の訓練をしていたシホは咄嗟に宝石剣を自室からその手に転送して呼び出し、

「なのは！ 今行くわ！ 宝石剣よ、空間を切り裂きなのはの下へ誘え！」

「シホッ!？」

「シホちゃん!？」

「シホッ!？」

すずか達の声を置いてきぼりにしてシホは空間を飛び越えてなのは達の下へと直行した。

そしてシホが目の当たりにする。

「おい…！ おい…！ バカヤロウ、しっかりしろよ！ なのは！」

「なのは、しっかり…！」

そこではなのはが全身に傷を負って血を流していた。

レイジングハートも故障して地面に転がっている。

ヴィータとオリヴィエが必死になのはに呼びかけをしていた。

「なのはッ！」

「!? シホ! どうしてここに!」

「それよりなのはの容態は!」

「かなり危険な状態です! 早く医療班に連絡しなければなのはの命が…! マス

ター、しつかり!」

「どいて、ヴィータ! 応急処置だけでもするわ!」

「お、おう…!」

「お、おう…!」

トレース・オン

投影開始!

シホが投影したのは全て遠き理想郷。

これによってなのはの傷を治そうというのだ。

しかし、

「傷が深すぎる! アヴァロンの治癒だけじゃ追いつかない!」

そこに医療班が駆けつけてくる。

それによってなのはは担架に乗せられて運ばれていった。

それを見ていたヴィータとオリヴィエは、

「サーヴァントの私がついていながら……こんな失態をしてしまうなんて！」

「オリヴィエのせいじゃねえ。あたしがもつと魔法が使えなかったアイツをちゃんと守っていたらこんな事には……！」

「魔法が、使えなかつた……？ それ、どういうこと。ヴィータ？」

「言葉通りだよ……。なんか変なフィールドをこの機械共が起こして魔法が発動しなくなつたんだ。そしてビームや爪を何度もなほに浴びせて、それで……」

「そう……調査班にこの未確認を調査してもらつたほうがいいわね。それより早くなのはの下にいかないと……！」

それで私達はなのはが治療を受けている管理局本局へと直行した。

手術室の前では報告を聞いたフェイト達や桃子お母さん達が来ていた。

「シホさん、大丈夫だった……？」

「はい。リンデイさん。もう襲つてくるものはありませんでした。それよりなのはを応急処置としてアヴァロンを使って治療をしましたでしたが経過はどうですか……？」

「まだ手術中だからなんとも言えません。ですがこのままだともしかしたら二度と飛べなくなつてしまうかもしれません……」

「そんな……！ なのはが飛べなくなるなんて……」

フエイトがショックを受ける。

それは他のみんなも同様で苦悶の表情をする。

「なのはは…治るんでしようか？」

「士郎さん…」

「シホちゃんにもただけですがなのはには辛い事ややりたくない事はしてほしくないんです。」

それはなのはは自分でこの道に進みましたが、やはり私達の娘なんです。

だからいつも心配はつきません。だからもしなのはがこれで終わりだと言うならば私達はなのははこの仕事を諦めてもらう所存です」

「…はい。わかりました。」

ですがそれはなのはさん次第ですからなのはさんの言うことも聞いてあげてください。

「この道に誘った私達からはこれくらいまでしか言えませんから…」

「わかりました…。なのはの言う事を尊重させます」

「士郎お父さん…すみません、私がつと早くなのはのところに着いていればこんな事には…」

「いや、シホちゃんはちゃんとなのはの助けになつてくれたよ。ありがとう」

「はい……」

それから手術室のランプは消えて医師がでてきた。

「先生、どうですか……?」

「はい、一命は取り留めましたが元からの無茶もあつたのでしよう。かなり体に過労が溜まつていました。」

今までの事も踏まえて無茶のある魔法の行使をし過ぎたのも一つの原因でしょう。

ですからかなりの時間をかけてリハビリをしない限りは復帰は難しいでしょう」

それでみんなは今までのなのはの行動を思い出す。

常に全力全開で手加減をしないで純粹魔力砲を撃ちまくっていたような、だと。

「そうですか。わかりました。ありがとうございます」

それで医師は出ていき、代わりになのはが病室に運ばれていった。

それをフェイトやユーノ、ヴィータ、オリヴィエが追いかけていった。

シホはその場に残り、

「やっぱりあれは無茶の連続だったのね。カートリッジもまだ未成熟の体には悪いものだと思うし……」

「そうですね。お姉様はカートリッジを使っていませんから正解でしたね」

「そうですね、フィア」



それからなのはすぐに入院となった。

病室のベッドで体に包帯を巻かれた姿は痛々しいという言葉以外に見当たらない。

「…フェイト、ちゃん…ごめんね。私、無茶をしちゃっていたみたいなの…」

「うん、わかった。だからなのは、今は喋らないで…体に悪いよ」

「…うん。ごめんね…」

それでなのは鎮静剤も効いているようで眠りについた。

シホはなのはの頭を撫でながら、

「…これからはなのはの努力次第だわ。また飛べるようになれるにはリハビリを一生懸命しなければいけない」

シホの言葉に、

「そうですね。ですがなのはは不屈の心を持っています。だからきつと…大丈夫です」

「うん。なのははきつとまた人懐こい笑みを浮かべて元気な姿を見せてくれると思う…」

今はそう信じるしかない」

オリヴィエとユーノがそう答える。

「…でも、シホの不安は当たっちゃったね。なのははやっぱり無理をため込んでいたんだね…」

「ああ。あれだけ砲撃魔法を連発してしかもカートリッジを使用しまくっていたからな。やっぱ無理が祟ったんだな…」

フエイトとヴィータがなのはの無茶を指摘する。

「今後、なのはは復帰できるか分からないけどもし復帰したら今まで以上に大切に扱っていかないといけないわね」

「そうですね、お姉様。なのはさんは無茶が過ぎますから…」

レイジングハートも一回オーバーホールして修理するそうですし…」

そこにシホの携帯に電話がかかってきた。

誰だろうとスクリーンを確認すると相手はさすがだった。

「…そういうえば、すずか達をほっぽりだして駆け付けたんだったわね」

それでシホは電話に出る。

『もしもし、シホちゃん…?』

「もしもし。ごめんね、すずか。急にいなくなっちゃって…」

『ううん、大丈夫だよ。だけどなのはちゃんになにかあったの…?』

「ええ。落ち着いて聞いてね?」

『うん…』

「なのはは任務で瀕死の重傷を負って入院となっちゃったのよ…」

『なのはちゃんか!?!』

『シホ、それって本当!?!』

『なのはは大丈夫なの!?!』

そこに一緒に聞いていたのだろうアリサとアリシアが割り込んできた。

「ええ。今なのはは鎮静剤で眠りについているわ。命には別状はないから安心して…」

『そう…。シホ、今からそっちに向かうわ。すずかの家にある転送ポートでそちらにすぐいくから! ついでにはやても一緒に連れていくわ』

「わかったわ」

それからしばらくしてすずかとアリサ、アリシア、はやてが駆け付けてくれた。

病室の扉が開いて、

「なのはは!」

「なのはちゃん!」

「なのは、大丈夫!?!」

「なのはちゃん、大丈夫か!?!」

「四人とも、しーっ!」

フエイトの言葉で四人は思わず口をつぐむ。

「今は寝ているから静かにね？」

『はい…』

「でも、なのはがこんな姿になつちやうなんて…そりや怪我がする事はあるだろうと覚悟していたけど…」

「うん。やっぱり危険は付き物だったね…」

「なのはちゃんはもとから無茶はしてたからなあ…」

「うん。あんな大出力の砲撃はやっぱり体にダメージがあつたと思うんだ」

駆け付けてきた四人はアリサ、すずか、はやて、アリシアの順にそう話す。

「うん。やっぱりみんなが思う事はおんなじのようね。なのはには目を覚ましたら無茶は控えるように言い含めておかなかちやね」

それをみんなは同意で頷いたのだった。

第九十五話

『見つめ直す心…復活のエース』

…フェイトが執務官試験に落ちた。

まあ、今回はなのはの重傷の時期も重なったことなので集中することができずしよ
うがなかったと思いきらめられないだろう。

フェイトも今回の反省を活かしてもっと勉強して知識をつけて再度執務官試験を挑
戦しようと心を新たに奮起している。

アルフやアリシアも応援しているしまだ頑張れるだろう。

しかし、それになのは一番責任を感じてしまっているのだった。

フェイトがなのはのお見舞いをしてきていた時に、

「フェイトちゃん、私がこんな事になっちゃってフェイトちゃんの執務官試験にも影響
を及ぼしちゃって、ごめんね…」

「そんなことはないよ、なのは。私の事は気にしないでいいからなのはは早く体を治し

てね…?」

「うん。ごめんなさい、フエイトちゃん…」

なのはのネガティブな姿を見てフエイトは私だけじゃなのはを勇気づけることは難しいとさらに悩んでしまっていた。

それからいくつか話を交わした後、病室を後にするフエイト。

すると前方からシホがお見舞いにやってきたらしい。

それで、

「シホ…」

「フエイト、なのはの様子はどう…?」

「…うん。やつぱり色々と心に抱えちゃっているんだと思う。それに少し焦っているように見える。リハビリはやってるみたいだけどあんまり捗っていないらしいし…」

「そう…。いきなり壁ができちゃったら止まっちゃうものね。なのはは今決断を迫られているのよ。」

「だから傷がたとえ治っても立ち直る事ができなきやまた同じ失敗を繰り返しちゃうわ」

「そうだね…シホはどうにかできない?」

「期待されていて悪いと思うけどこればかりはなのは自身が乗り越えなきやいけない道

よ。だからいくら言葉を重ねてもなのはの心にはきつと響かないわ…」

「…うん」

それでフェイトは悲しみの顔になり俯く。

そんなフェイトの肩にシホは手を乗せて、

「安心しなさい。気休めかもしれないけどなのははきつとまた立ち上がれる事ができるわよ。そんな弱い心じゃないわ、あの子は」

「うん。私、なのはがまた空を飛ぶことを信じるよ」

「そう。その意気よ。まわりも暗かったら本人にも影響しちゃうんだから根気よくね」

「うん！」

それでフェイトは元気が出たのか笑顔を浮かべて帰っていった。

しかしその反面、シホはフェイトがいなくなると途端に浮かない顔になり、

「…とはフェイトに言ったものの、心配の種は尽きないのが正直なところよね。なのはにどんな顔をして会えばいいのかしら…」

《奏者の気持ちも分かる。だが本人の前では前向きに行くというのも奏者が決めたことだろう？ ならば奏者の心行くままに接しければいい》

ネロが霊体化してシホにそう話しかけてきた。

なのはの一件以来各サーヴァントはよりいっそうマスター達につくことが多くなっ

たというのも現状である。

フェイトの背後にはランサーの気配があつたからさつき会話の聞いているから後でフォローを入れてくれるだろう。

「…そうね。とうの私が気落ちしていたら締まらないものね。よし、なのはに会いにくとしようか」

《うむ》

シホはなのはの病室に一度ノックをして返事があつたので入った。

「あ、シホちゃん…」

「なのは、調子はどう…?」

「にやはは…大丈夫だよ。こんな傷、すぐに治せるよ」

「そう。でも無理はしちゃダメよ。もうなのはのあんな姿は見たくないからね?」

「うん。シホちゃん…」

「そういえば、レイジングハートは戻ってきたの…?」

「まだ修理中みたい…結構派手に壊しちゃったから…」

「レイジングハートも早く戻ってくるといいわね…」

「…うん。シホちゃん、少しお話しいいかな?」

「いいわよ。私に話せることならなんでも聞くわ。だって私は高町なのはの姉妹のシ

ホ・E・S・高町なのよ？ だから遠慮はすることないわ」

「うん…。あの事故の時ね、私、恐怖しちやっただ」

「恐怖…？」

「うん。どんなに頑張つて努力して鍛えても魔法が使えなかつたら私は所詮ちっぽけで無力な人でしかないよ、思い知らされたんだ」

「そう…でもそれは誰だつてそうよ。人は所詮人でしかないから。どんな力を持っていてもそれは変わらないわ」

「うん…それでこうして入院して考える時間があるといつも考えるんだ。」

私は、なんでこんなに無茶をし続けてきちやっただらうつて…」

「なのは…」

「弱気だよ、私。これじゃみんなに胸張つてありがとうを言えない…。ごめんなさいも言えない…。私は、こんなに弱かつただつて…今は思うの」

それでシホはどんな言葉をなにかけていいのか迷う。

「…でも、今回の件で一つ分かった事があるの」

「なに…？」

「私を支えてくれるみんなのありがたさが身に沁みるんだ…」

こんな無茶をした私をこんなに心配してくれて、お見舞いもしてくれて、フォローも

してくれる。

…ああ、私はこんなに恵まれているんだなあ…って」

「そう…そう思えるのは嬉しい事よ。私も過去、色々なものを無くしてきてこの世界に
来て得た家族、親友、仲間の大切さを改めて認識できたから」

「シホちゃんも…私みたいに大怪我を負ったことはある？」

「何度かあるわね…。その度に私の親友や仲間達は介抱をしてくれたわ」

「そっか…。やっぱり家族や親友、仲間は大切だね」

「ええ。とても大切で、でもその輪から逃げたらすぐに無くなってしまふような危うい
暖かさ…」

シホとなのはは心を通わせている。

そして二人は思う。

フェイトやはやて達親友の事を。

桃子や士郎、恭也、美由希達家族の事を。

サーヴァント達仲間の事を。

そしてなのはは今一番会いたい人物の事を思う。

「レイジングハートに会いたい…。私のパートナーに早く会いたい…。一緒にまた、空
を飛びたい…ッ！」

それでなのは涙を流す。

シホはそんななのはを抱きしめて介抱する。

少しそのまま二人はじつとしていて、しばらくしてなのは泣き止むと、

「…ごめんね、シホちゃん。なんか色々と恥ずかしい事私しちゃった…」

「いいわよ。なのはのためなら私はなんでもするわ。だから傷が治ったらまた一緒に空を飛びましようね？」

「うん…！」

それでなのは久しぶりに笑顔を浮かべた。

「よし、いい笑顔ね。なのは、リハビリを頑張るのよ。私はもちろん、みんなはなのはが早く治るように応援しているからね？」

「うん。ありがとう、シホちゃん！」

「それじゃまた来るわね。なのは…」

「うん！」

それでシホは病室を出る。

病室の外では、

「なのはを勇気付けてくれてありがとうございます。シホ」

「なのはのためですから。オリヴィエ陛下」

オリヴィエにそう答えてシホは道を歩く。
そして後は帰るだけなのだがシホは反対側を歩いていきマリーがいるデバイス室へと向かう。



Side シホ・E・S・高町

私はなののはの願いを叶えてあげようと思ひマリーさんの下へと向かった。

「すみません、マリーさんはいますか…?」

「あれ? シホちゃんだ。どうしたの?」

「はい。レイジングハートの修理具合はどうなっていますか…?」

「うん。色々とフレームを交換しなきゃいけなかったけどもうだいたい直っているよ」

「そうですか。…話はできますか?」

「できるよ。今、モニターに出すね」

マリーさんはそう言つてモニターを展開する。

そこにはレイジングハートが映し出される。

「レイジングハート、久しぶりね」

《はい、シホ。…とところでマスターは今どうしていますか?》

「少し元気がついたみたい。でも、涙を浮かべてレイジングハートに会いたって口をこぼしていたわ…」

《そうですね。私も早く直してもらいマスターのもとへ行きたいです》

「そうよね。それで一つ提案があるのよ」

《なんですか? マスターのためになるのならいくらでも協力しますよ、シホ》

「うん…それはね?」

私の提案にレイジングハートと、そしてマリーさんも賛成してくれた。

ネロも興が乗ったと言って話に乗ってくれた。

これだからやっぱいい人達である。

レイジングハートは人工AIだけどしつかりと自分の意思を持っているから嬉しいわ。

それから私はなのを勇気付ける会と評してみんなにも協力してもらおうことを決めた。



まずはフエイト達から。

「…シホ？ どうしたの？ え？ なのはを勇気付ける会！ うん、いいと思うよ！」

「なのはを勇気つけるなら私も協力するよ！」

「いいね。その案は賛成だよ」

「そうだな。いいと思うぞ」

「いいと思うよ、シホちゃん」

「いいですね」

「いいんじゃないか…？」

アリシア、アルフ、クロノ、エイミイさん、リンデイさん、ランサーも協力してくれるというのでよかった。

.....

.....

.....

次ははやて達。

「え？　なのはちゃんを勇気付ける会？　ええね。私は賛成や！　みんなもそれでええね？」

「はい、主」

「いいと思いますよ、はやてちゃん」

「シホもいい事を思いつくな！　あたしは賛成だ！」

「それで高町が勇気つくならいいだろう」

はやての言葉にまず守護騎士達が賛成し、

「高町をか。いいだろう、私で役立つならな」

「シホが言い出したことだ。なのは嬢にもきつと届くだろう」

ラインフォースと土郎も賛成、つと。

「いいですね。宴会ごとはタマモも楽しいですよ！」

「宴会じゃなくて勇気付ける会だからな、キヤスター。ああ、俺でよければ協力する」

「そうだね。いいと思うわよ」

キヤスター、志貴、アルクエイドも乗ってくれた。

「ラインも賛成ですよ！」

末っ子であるラインも賛成してくれた。これで八神家も全員オツケイね。

「あ、でしたら私の宝具である玉藻鎮石たまもしずいしでなのはの心を見つめ直すいい機会です

ねー」

キヤスターがなにかを考えているようだ。

内容を聞いてみて私はこれも使えると思ひ協力してもらおうことにした。

.....

.....

.....

次はすずかとアリサ達。

「なのはちゃんを……？ いいよ、シホちゃんの頼みなら喜んで協力するよ！」

「はい、スズカの友達であるナノハのためですからね」

「なのはのためなら協力させてもらおうわ！」

「呵呵呵！ 楽しい催しになること請け合いな」

すずかとアリサ、そしてライダーとアサシンも受けてくれた。

後は、高町の家族達。

「シホちゃん、なのはを勇気付けるといふけどなにか考えはあるのかい？」

「はい。これに関してはマリーさんもレイジングハートも納得済みです。後はなのはが

使えればの話ですが…。

「以前から何度も教えてきましたからきつとなのはならできません！」

「そうか。シホちゃんがそう言うなら協力させてもらうよ」

「そうね。なのはが良くなるんなら私たち家族もいくらでも協力するわ。ね、恭也に美由希」

「ああ、母さん」

「うん！　なのはの為だもんね！」

「今までシホが教えてきた甲斐がありましたね。まさか最初に自分に使うとはナノハも思わないでしょうね」

高町の家族とそしてアルトリアにも賛成してもらった。

それから後は、ユーノとフィアにも連絡をとった。

『うん。なのはのためなら僕は構わないよ』

『なのはさんの勇気をつけるんですね。はい、協力させていただきます、お姉様！』

よし、これであらかた知り合いには話が出来た。

後はマリーさんが仕上げてくれるのを待つだけ。

私も準備をしなくちゃ。



それから計画は立つて時間と日にちは過ぎていき、

「シホちゃん、どこに連れて行ってくれるの…?」

今日はリハビリ終了後のなのはを車椅子で連れてもうみんなが集まる場所の定番となった月村邸に向かつていった。

「今日はなのはを勇気つけるためにみんなである事を計画していたのよ」

「私を、勇気付ける会…?」

「うん…そのために今日まで準備をしてきたのよ。みんなの協力もしっかりととって…」

それで私達は月村邸に入る。

「なのはちゃん、いらつしやい!」

『いらつしやい!』

そこではもう先に集まっていたのかみんながなのはを出迎えてくれた。

それでなのはは驚きの表情をしている。

そうそう、驚いて欲しいのよ。

でも、まだ驚きは終わらないんだから。

なのはみんなに手を引かれて中心へと連れてこられて、

「なのは、みんなで録音したボイスレコーダーだよ」

フェイトが代表してそれを渡す。

それをなのはは、

「聞いていい…?」

「うん…」

それでなのははボイスレコーダーを再生する。

そこには私も含め『なのは、頑張れ!』といった感じの内容のみんなの声が入れられていた。

それを聞きなのはは涙を流す。

「にやはは…。嬉しくて、涙が止まらないの…これをみんながわざわざ録音してくれたの?」

「そうだよ、なのは。シホの提案でこれを録音したんだ」

「シホちゃんの…?」

それでなのはは車椅子を動かして私の方へと体を向ける。

その顔には感謝の意が込められていた。

「シホちゃん、ありがとう! とっても嬉しいの!」

「よかったわ。喜んでもらって…それと少し今からなのは心の闇を見つめ直す呪術をキャスターにやってもらうわ」

「私の心の、闇…?」

「ええ。それじゃキャスター、お願いね?」

「わかりました」

キャスターはその手に神宝である玉藻鎮石たまもしずいしを出現させた。

「古来より鏡とは人の心の真実を映し出すものと言われています。さあ、なのは。今からこの鏡をじつと見ていてくださいね?」

「う、うん…」

そしてなのはは鏡をじつと見つめていると次第に鏡が光りだしてそこにはまだ幼かったなのはの一人で部屋の中にいるという光景が映された。

「さあ、なのは。あなたはこの光景…覚えていますね?」

「うん…お父さんが事故で大怪我をして入院していた時期のこと。」

私はお父さんのお見舞いに行くお母さんやお店の手伝いをするお兄ちゃんやお姉ちゃん…いつも一人で寂しかった。

けどずつと家でこれ以上みんなに迷惑かけないようにみんなが帰ってくるのを良い子でいようと待っていたそんな時間…」

それで士郎お父さん達は「なのは…」と声をあげて改めてなのはが抱えている闇と対面する。

「…その頃からあなたは他人には無茶を隠すようになったのですね？」

キャスターの問いかけになのはは無言で頷く。

「では、次はご家族の事を映しますね？」

そう言ったキャスターはまた鏡を光らせる。

そして映し出される士郎お父さん達の姿。

そこではなのはが一人でもなにもかも抱え込んでしまい喋ってくれない事に対して自分達もどかしく不甲斐ない思いをしているといったものだった。

「…あなたの家族の人達はずっとあなたの事を心配していたのですよ？」

なのは、あなたはまだ子供なのですから素直に甘えてもいいのです。なんでも相談してもいいのです。それが家族の絆というものなのですから」

「うん…うん…！」

「次、いきますね？」

また鏡が輝くとそこには私がこの家にやってくる光景が映し出された。

「…シホが高町家にやってきた時期ですね。なのは、あなたはシホと…それにすずかかのアリサ、フェイトにアリシア、はやて、ユーノにファイアット。」

他にもたくさんの人々によって支えられているのです。一人でなんでもできるとい
うのは愚かな思上がりもいいところですよ。

ですからいつでも友人達に相談しなさいな。そうすればあなたはその心に抱えてい
る闇を乗り越えることができます。

たとえ遠く離れていようともいつでもみんながいますと自覚できます。

…あなた一人が無茶をする必要などありません。ここにいますみんなが…あなたの家
族、友人、仲間…他にも色々…あなたの手をとつてくれます。あなたは恵まれています。

だから、もう無茶をしないと約束できますか…？　なのは…
キャスターの問いかけになのはは、

「…無茶をしないっていう保証はできません。でも、もう相談なしに無茶はしません。

お父さんやお母さん、お兄ちゃんやお姉ちゃん、シホちゃん…それにみんなにも私と
同じように辛い気持ちになってもらいたくない…いつでも笑っていて欲しい…！」

なのはの心からの言葉にキャスターは笑みを浮かべる。

「それでいいのです。あなたの心の闇は一生かけても無くしたりはできませんが…それ
でも正面から向かい合うことはできます。だから…もうわかりますね？　なのは」

「うん…！　キャスターさん！」

それでなのはは私達全員に車椅子を向けると、

「みなさん、心配かけてごめんさい。でもこれからは無茶はあまりしないように心がけます。だから！ そんな私でもいいなら見守ってください！」

それに一同は「当然だ！」と言わんばかりに頷く。

どうやら全員なのは受け入れてくれたようだ。

桃子お母さんもなのはを抱きしめている。

他のみんなも色々な表情をしているけどどれもいい顔だ。

もう、なのはの心は大丈夫だろう。

それで私はキャスターに話しかける。

「ありがと、キャスター。なのはの心と向かい合わせてくれて…」

「いえいえ、この程度お安い御用です♪ 久しぶりにいい仕事をしました！」

「キャスターさん、ありがとございます！」

「なんのなんの♪…さて、それでは私の出番はここまでですね」

キャスターはそれで引き下がっていった。

「なのはにはビックリしてもらったけど、でもまだ驚いてもらいたいのよ」

「シホちゃん…?」

それで私はポケットから修理と改修が終えたレイジングハートを取り出す。

「あ！ レイジングハート！」

《マスター。待たせてしまつて申し訳ございません。ようやく帰つてこられました》
「うん！ うん！……よかつた、レイジングハート……」

私はなのはにレイジングハートを渡し、

「なのは、レイジングハートを握りしめて魔術回路を起動してみて……」

「魔術回路を……？　なんで……？」

「きつと、なのはは驚くわ」

「う、うん……」

それでなのはは魔術回路を起動した。

それによつてレイジングハートから光が溢れなのはを包み込む。

それは特定の人にしか話していなかつた事で話していなかつたみんなも驚きの声を上げていた。

なのはの魔術回路を通してレイジングハートがなのはの体を治療しているのだ。

「これつて……!?!」

「レイジングハートに今まで仕事があつて見送つていた魔術式システムを修理がてらにマリーさんに私が頼んでレイジングハートにも了承を得て搭載してもらつたのよ。

なのはの治療魔術がレイジングハートを通して使えるように……」

「シホちゃん……！　レイジングハート……!」

《マスター…》

「レイジングハート…」

《あなたが折れない限り、私は絶対にあなたの力になります》

「うん…！」

《そしてマスター。こういうものは前向きな気持ちと気概で乗り越えていけるものです。

私も気休めですが、これからもあなたの体を癒します。そして守り抜きます。

…大丈夫です。マスターの体は必ず快復します。

だって、あなたは不屈の心…レイジングハートのマスターなのですから…。

そしてまたあの約束の空へともに駆けましょ…。

あなたと私でならどこまでも飛んでいけます。そう、マスターが望む限りどこまでも…

「うん！ うん！ ありがとう、レイジングハート！ 私、リハビリ頑張るから！ だか

らまた一緒に…空を飛ばう！」

《はい、約束です》

そしてまたなのはレイジングハートを握りしめて涙を流した。

でも、もうそれは不安からくるものではない。

私達が安心できるものだ。

「シホちゃん、ひどいで…？　こんなサプライズ、私達に黙っていたやなんて…」
そこにはやてが話しかけてきた。

みんなも続くように私に教えてもらえなかったことで不満の声を漏らす。

「そうだぞ！」

「うんうん！」

「ごめんごめん…でもみんなもびっくりしたでしょ？」

「それは…まあ、うん」

「なら、それでいいじゃない？　なのはもう不安な事はないわ。後は体を治すだけよ」

「呵呵呵！　セイバーのマスターはなかなか粋なことをする！」

「奏者よ。そなたのその魂はともいま輝いているぞ。ますます惚れ直した！」

「シホ。とても今あなたはカッコイイですよ」

「ありがとう。ネロ、アルトリア」

「シホ…。なのはの心を救っていただきありがとうございます」

「オリヴィエ陛下…私にできるのはこれくらいでしたから」

「ですがなのはは笑顔を取り戻しました。感謝します」

「はい…」

それでその気持ちこそ素直に受け取ることにした。

そこになのはがやってきて、

「シホちゃん。レイジングハートに新しい力を与えてくれてありがとう！」

そして……ううう、色々言いたいことがあるのに言葉が出てこない。でも、全部をひっくるめてありがとうシホちゃん！」

「ええ。だからなのはもこれからもリハビリを頑張るのよ」

「うん！ 私、頑張る。そしてまたみんなのところに戻ってくるね！ そして遅れを取り戻すんだ！」

「その意気よ」

「うん！」

それから全員でなのはを勇気づける会が行われていきその日は全員表情に陰りもなく楽しんだ。



そして時間は経ち勇気づける会も終了となりなのはは一時帰宅を許されて一度家に帰ってきていた。

それから私は高町家の家族全員を集めてある事をしようとする。気休めだけど私はなのには対してある事を実施することにした。

「桃子お母さん、ちよつとなのはに試したいことがあるんですけどいいでしょうか…?」

「なに、シホちゃん…? 言ってみてちょうだい?」

「はい。どこまで効果があるか分かりませんがいいのではの快復がより早められるかもしれませので…」

「シホちゃん…それって」

美由希姉さんに聞かれるが少し待ってもらって、

「ちよつと待っててくださいね…? トレース・オン 投影開始…」

私はギルガメツシユの原典宝具から解析して得たある宝具を投影する。

それは二匹の蛇が杖に絡まっているというものだ。

解析して使い方も分かっている。

これをなのの前にかざして、

「いくわよ、なのほ…」

「う、うん…」

「我が前に傷つき横たわりし者に医神アスクレピオスの名をもって彼の者に加護を与

えん…」

これはマグダラの聖骸布と同じように言霊を発することで真名開放にまで繋がるもので、なのはの体を少しずつ癒していく。

これこそアヴァロンに並ぶ治癒宝具『アス術神の蛇の治癒杖』。

「なにか体が軽くなつていくよ…シホちゃん、これってなんの宝具…?」

「アスクレピオスの杖…ギリシア神話に登場する名医アスクレピオスの持っていた蛇の巻きついた杖よ。」

治癒の象徴という概念が刻まれているから使えば対象者を癒す効果を発揮するわ。

これはリンカーコアの損傷までは簡単に治せそうにないけど、でも気休めでも体が治ってくれたらと思つて使つてみたわ」

「うん！ なにかわからないけど体がリハビリ以上に癒えた感じがする！ シホちゃん、本当に色々とありがとう！」

「うん… よかった。レイジングハートの後なんでなんか悪い気はするけどね…」

「そんな事はないよ。レイジングハートもシホちゃんも私をしつかりと癒してくれたよ…」

「なら、よかつたわ」

「シホちゃん、なのはのために色々と手を打つてくれてありがとう…」

「士郎お父さん、気にしないでください。家族じゃないですか？」

「奏者よ。そなたはとても家族思いなのだ。余も嬉しくなってくるぞ」

「そうですね、ネロ」

「でも、その宝具はここだけで使用してよかったですね」

オリヴィエ陛下がそう話す。

「まあリンデイさん達が知ったら裏切るつてわけじゃないけど私の使える宝具の一つとして報告されかねないからね。」

「今まででも使つて映像に残されている宝具は管理局の上層部に知られていると思ふし。」

「それにそんな便利な能力だったらシホちゃんも他にもある宝具を頼りにされて色々なところに引つ張りダコにされてしまうからな……それだけが心配だな」

恭也兄さんの心配の言葉に感謝の気持ちになる。

「確かにそうですね……ま、今はなのはの体が快復が早まっただけでよかったですねえはいじゃないですか」

私の言葉に全員は「そうだね」と返してくれる。

「そう、何があろうとなのはやみんなは私が守つてみせる。だけど無茶はせずね！」



…それからなのは元気にリハビリに励んでいき、小学生の六年生に上がる頃に通常生活で普通に生活できるまでに復帰し、リンカーコアも完全に治つてすぐに管理局の仕事を再開した。

でも、もう以前のように考えなしではなく自身の体も考えて無茶はせずに冷静に行動するようになった。

「シホちゃん、私、やっと復帰できたよ！」

「そうね。頑張ったわね、なのは」

「一緒に教導隊に入ろうね？」

「ええ。頑張つていきましよう」

「お姉様！ 私も頑張つてお二人についていきますよ！」

「わかつているわ、フィア。三人で教導隊入り、よね？」

「うん！」

そして三人で一緒に教導隊入りをする誓いを立てたのだった。

第九十六話

『初代・祝福の風の心の行方』

S i d e リインフォース・アインス

主はやてが小学六年生にあがった。

高町も去年の冬に受けた傷もリハビリを得て治してもう仕事に復帰している。

私がシュバインオーグに『創造物質化』の魔法で助けられてからもう三年目になるのだな。

長いようで短かったな…。

「アインス…？ どうしたの？ 腕が止まってるわよ」

「あ、ああ。すまない、シヤマル」

今は今夜の夕食をシヤマルとともに作っているのだった。

ヴィータ達にシヤマルが変なものをいれないように見張っているといわれたが今のところは大丈夫だな。

「ところでアインス」

「なんだ？」

「最近、士郎さんとなにか進展はあつた？」

ガタツ！

私は思わずこけそうになつた。

「な、なななにを突然言いだす!？」

「突然でもないと思うんだけど…。だつて最近は士郎さんもアインスとキャスターの気持ちに気付きはじめてきているんでしょ？」

「…あ、ああ。ザフィーラがそんな相談を受けたと教えてくれたからな」

そう、士郎もやつと最近私達の気持ちに気付きはじめた。

だいたい遅いのだ。この二年とちよつと…何度キャスターと士郎を賭けて争つたか分からないほどだからな。

だというのにあの鈍感は…!

シユバインオーグとすずかの話を聞いても気付かなかつたからな。

それで思わずナハトバンカーを士郎に何度打ち込んでやろうかと思つたことか。

「…アインス？ 何か表情が怖いわよ？」

「はっ!？」

いかん。意識が少しばかり飛んでいたようだ。

「ま、それだけアインスが本気って事ね」

「そ、そうなのか？」

「ええ。ふふふ、早く結ばれたらいいわね。」

私達ははやてちゃんも含めてアインスの幸せを願っているのよ？

当然士郎さんの幸せの探求も家族として一緒に探していくし。

なにより士郎さんの隣はアインスが一番似合っているわ」

「…ありがとう」

シャマルの言葉に素直に感謝の言葉を送っておいた。

と、そこに主達が管理局から帰ってきたようだ。

「ただいま。あ、今日はシャマルとアインスが料理を作ってるんやね」

「私も手伝おうか…？」

「いや、士郎は待つていてくれ。もうすぐできるからな」

「…アインス、シャマルの料理は大丈夫だよな？」

「あー！ ヴィータちゃん、ひどい！」

「安心しろ。しっかり見ていたが特に不安なものはないからな」

「アインスも結構ひどいわよな…」

それでシャマルは落ち込む。

「今日も結構きわどい任務でしたね、マご主人様スター」

「ああ。はやては色々な現場に派遣されるからな。私達も特別捜査官補佐としてしつかりとせねばならないからな」

「ありがとな。士郎」

主はやてと士郎は楽しそうに会話をしている。

私もあの団欒の中に早く入りたいな。

「それじゃアインス。この盛り付けで最後ね」

「ああ。士郎、料理をテーブルに運ぶのを手伝ってくれ」

「了解した。……ところで志貴とアルクエイドはどうした？ 確か志貴は今日は非番だったよな？」

「ああ。二人だったら一緒に遊園地に出かけるとか言っていたぞ。だから今日は遅くなるらしいから食事はいいらしい」

「ほほう？ そうなんか」

そこに主はやてがなにか悪巧みを考えたような顔になった。私はそれで少しばかり悪寒を感じたのは間違いではないだろう。

それから残りの食事を運んで二人ばかりいないが食事を開始した。

「なあアインス…?」

「なんでしようか、主はやて」

「確か明日はアインスは非番やったよね?」

「え? はい、そうですが…」

「ついでに士郎も非番やったよね?」

「ああ。そうだがどうした。はやて?」

「うん。それを聞いて安心した。そんなら明日はアインスと士郎でデートをしてきたら
どうや?」

「…は?」

「え…?」

私と士郎は同時に間抜けな声を上げてしまう。

「いや、少しばかり待ってくれ。最近は特に進展もなかったのにいきなりデートとは
…。」

「あ、主? いきなりなにを…」

「そうです、はやて! 私を差し置いてご主人様とアインスがデートだなんて!」

「キャスター。今回はアインスに譲ってな。また今度キャスターの機会を作ってやるさ
かい」

「…それは本当ですね？」

「うん。夜天に誓つてな。だからキャスターは今度な？」

「はい、わかりました…」

キャスターはそれでシユンと落ち込む。

しかしまだ私と士郎は了承してませんよ？ 主…？

「はやて。そのだな…」

「士郎は黙つとき。たまにはアインスをエスコートしてやりなさい」

「…了解した」

士郎は主はやての言葉にすぐに落ちた。

立場が弱いぞ、士郎！

「…さて、士郎も納得したし後はアインスだけやね？」

「……………」

もう、退路はない。

ここはどうするべきか。

だがここで士郎がいつもより積極的に、

「アインス。明日、二人ででかけるか？」

『おー！』

士郎からのお誘いに私は思考を停止させる。

一同も驚きの声を上げている。

まさか士郎が主はやての提案に乗るなんて…。

「どうだ？ アインス」

「わ、私でいいのか…？」

「ああ、構わない。私も二人きりで話したいことがあつたからな」

「士郎！ ついにいくんやね!？」

「はやての期待に添えるか分からんがな。いい機会だしな」

士郎はそう言つて明日の話をし出す。

こ、これは本格的にまずいかもしれない…。

私は、二人きりというのに耐えられるのだろうか？

それは任務で二人で行動したこともあるがそれとは別物である。

やはり緊張は拭えない。



S i d e 八神はやて

まさか士郎がここまで乗り気なんてな。

でもいい機会や。これを有効に活用させてもらおう。

あわよくばこのままアインズといい仲間になつてもらいたいものや。

これは早速追跡班を結成しなければいけない。

シホちゃん達にも協力してもらおう。

私の中で即座に色々な計画が立てられていく。

題名は『士郎とアインズのデートを追跡せよ大作戦！』や。

：うーん、いまいちのネーミングセンスやね。

ま、ええやろ。

それで私は早速シホちゃん達に連絡を取り明日非番の子を誘う事にする。

残念ながらうちの子達は他は全員仕事がある。

よつてすずかちゃんやアリサちゃん辺りが妥当だろう。

そして翌日になつてアインズを今、私とリイン（アウトフレームフルサイズ）、シホちゃん、アルトリアさん、ネロさん、アリシアちゃんで見守っている。

他は仕事やお稽古などで来れないと言うけどこれだけ揃っていれば安心や。

アインスはやはりオシヤレをしたのかまだ時期は春先の事やし白いワンピースを着ている。

そしてさらに落ち着かないのか体をそわそわしている。

なんていうか、

「アインスにワンピースってなんか白すぎないか？」

「似合っている、でいいんじゃない？」

「そうだよ、はやて」

シホちゃんとアリシアちゃんにダメ出しをくらってしもうた。

「アインスお姉様もやっぱり女の子です！ とつても緊張しているのがわかります」

「そうですね、リイン。しかしシロウとデートですか。ふむ、少し胸が痛みますね」

「どうした、アルトリア。まるで過去に恋したようなその眼差しは？」

「いえ…なんでもありません。シロウの幸せは私も願っていますから。それに私達には

シホがいますから」

「うむ、そうだな」

アルトリアさんとネロさんが妙に大人の会話をしとる。

シホちゃんも少し顔が赤くなつとるし昔になにかあつたんやな？

つと、そうや。そんな事より今はアインスを見てやらんと。

「ただどアインスになにやら男が数名近寄ってくる。

おそらくナンパかそこらやな。」

「アインスの実力なら簡単に倒すことはできるやろうけど、さて…王子様は現るか？」

「お姉さん、可愛いですね。どうです。僕と一緒に遊びませんか？」

「すまない。今、人を待っているので付き合う気はない」

「そう言わず…」

「嫌だと言っている」

「アインスは強気に男達を威嚇して撒こうとしている。

それは正解やけどもつと懲らしめないとかあかんで？」

「それでやっぱり一人の男が強引にアインスの肩に手を置いて引つ張っていいこうとする。」

「…やめろ！」

「強気な女性だ。だが、それがいい！」

「さつさと連れてつちまおうぜ！」

「そうだそうだ！」

「男どもが強引にアインスを連れて行くこうとする。

「…ハヤテ、救援に行かなくてもよいのですか？」

「いや、ここはやつぱり王子様の出番やる?」

「そうだね! それが理想だよね!」

「士郎はそんな都合のいい人だったかしら…自分のことながら」

アリシアちゃんが乗ってくれて、シホちゃんがそんなことを言う。

でもな? シホちゃんやっついても助けてくれるやん。

だから士郎もきつと助けてくれる。

と、待っているをやつぱり来た。

士郎は黒のシャツにパンツの格好にさらに赤いジャケットを着ていた。

褐色の肌と白髪にいい感じにあつとる。

士郎は男の腕をつかみ、

「ウチの連れになにをしようとしている、貴様ら…?」

低音での士郎の突き刺すような視線によって男どもはたちまちに萎縮してしまい、

「用がなければ去れ…」

「「は、はい…」」

男どもはそれで去っていった。

でも去り際に何度も士郎の事をチラ見していたのはなんだたんやろうか…?

…アカン、怖い想像してしまうからよしておこう。

「アーツ！やなんて私は気持ち悪くて嫌や!!」

「それより、」

「ほらな？ やつぱり士郎はアインスの王子様や！」

「そうですね、ハヤテ」

「うむ、男の甲斐性だな。見せるときに見せんといかん！」

「士郎。パパ、かつこいいです！」

「私はノーコメントで……」

「なんで？ シホ……？」

「私ら六人がわいわいやっている間にも二人が話し始める。」

「待ったか？ アインス」

「い、いや。そんな事はない……」

「そうか。ならばいくとしよう。それより、その服は似合っているぞ」

「そ、そうか？」

「ああ」

「士郎！」

「なんだね……？」

「手を、繋いでいいか……？」

「ご要望とあればな」

それで士郎とアインスは手を繋いで歩き出した。

「……ごめん。なんか私見ていて恥ずかしくなった……。口から砂糖を吐きそうだわ」

「シホ。あなたはもう逃げ出すのですか?」

「シホちゃん、あかんで? もう一人の自分とは言え顛末はちゃんと見ておいたほうが

ええで!」

それでシホちゃんも渋々アインス達を観察する。

それでええんや。

それから二人はなにをするかと思えば映画館に入ってしまった。

「ま、デートとしては定番やな」

「そうだね!」

「なにを見るのかしら……? 少し口の動きを調べてみるわ」

そう言つてシホちゃんはその抜群の視力と読心術で士郎の口からなにを見るのか読

み取つた。

「どうやら今流行りの恋愛モノを見るらしいわ」

「もうわかつたの!?!」

「さすがシホちゃんや。その視力は伊達じゃない!」

「それで……？ 私達はどうするの？ 一緒に入る？」

「いえ、シロウの事です。すぐに視線や気配で私達がいることを察知してしまうでしょう。ですから出てくるまで待ちましょう」

「そうだな。二人の観る映画は時間的にもう上映時間だから今からでは間に合わないだろう」

「じゃ、それまで解散やね」

……

……

……

それから時間は過ぎて言つて上映終了前に私達は再度集まった。

なにやらアルトリアさんとネロさんが少し怒っている感じだけど何かあったんやろか？

その視線を感じたのかシホちゃんが、

「ああ、なんか二人にもナンパしてくる輩がいてあまりにもしつこいからちよつと力を見せたら怪力女だ！ とか言われちゃったのよ」

「それはご愁傷様としか言えんわ」

「あ！ 出てきたよ！」

士郎とアインスが出てきた。

なにやらアインスは感動したのか涙を流していてそれを士郎がハンカチで拭いてあげていた。

「むー…なにやら面白くありませんね」

「まあまあアルトリア。落ち着いて」

「そうだぞ」

「今、キャスターの気持ち少し分かりました。私ももつとシホと違う出会い方をしていたらー！」

「いや、それだとアルトリアはここにはいないでしょう…う？」

なにやらアルトリアさんが無意識に嫉妬をしているみたいや。

早めに二人をくつつける手を考えて手を打っておいて正解やったね。

それから二人は街の中を歩いていく。

そして一つの喫茶店に入った。

どうやらこれからお昼みたいや。

「はやてちゃん、私達もお昼にしませんか？ 士郎パパを見ていたらお腹がすきました

です」

「そうやな」

それで全員一致でお昼になり二人が見える位置で食事を取っていた。

すると士郎がアインスの要望らしくスプーンでケーキをアインスの口に入れていた。

そんな光景を見て、

「さ、砂糖吐く…。甘い…。」

「シホちゃん、ここが我慢や！」

「そうだぞ奏者よ。ならば余達も同じ事をしようではないか！」

「ドキドキ…」

「ドキドキですう！」

シホちゃんの介抱をアルトリアさんに任せて私はまた二人を見る。

どうやら話し合っているようで、やっぱり会話が聞こえてこない。

ここはシホちゃんの出番や。

「はいはい…お助けシホちゃんですよー？」

「シホ!? キヤラが崩壊しています！」

シホちゃんが少し壊れ気味や。

でもなんとか我慢してもらって二人の会話を読み取ってもらった。

「どうやらアインスの好きな事を聞いていらしいわね。でもなんか士郎のくれるものならなんでもいいとアインスが言っているわ。」

それで士郎が顔を赤くしているわ。なんていうか……爆ぜろ」

「おー！ アインスも甘えっ子やね！」

「私も士郎。パパに甘えたいです！」

「いいなあ。帰ったらいつでも甘えられるよね、リインは？」

リインとアリシアちゃんはなにやら士郎に色々と甘えたいらしい。もしかしてアリシアちゃんも士郎が好きやったんか……？

そして、シホちゃんの最後の小さく呟いたセリフはきつと今おかしくなっているからや。だから聞かなかったことにしといたろ。

それから二人は喫茶店を出て商店街へと向かっていくようや。

「追うで……？」

『了解』

それから二人はある店によって、雑貨ものを見ているみたいだ。

士郎がおもむろにこれはどうだろうか？と言ってアインスに渡す。

それは私とリインと同じでバツテンの髪飾りや。

士郎がそれをアインスにつけてあげている。

そしてそのまま購入するらしい。

これで私、リイン、アインスはお揃いやけどなんか士郎、いい具合にアインスをエスコートしているな？　もしかして偽物やないかと思うくらい気が利いている。

まあアインスも笑顔を浮かべているようなのでええやろう。

それから二人は色々なところを回り、二人で楽しんでいる。

「…士郎。あなたは何処へ行くというの…？」

「シホ！　しつかり！」

「奏者よ、落ち着くのだ！」

あまりの甘い空間にシホちゃんがやさぐれてそろそろ危険域に突入しそうや。

それだけ士郎の行動がシホちゃん的には信じられないのだろう。

そして二人は夕暮れ時に公園へと入っていき、

「…士郎」

「なんだ、アインス…？」

「私は、お前が好きだ」

「そうか…」

「できれば…わた、私と付き合ってくれ！　キャスターには悪いがこの気持ちはもう止められない」

「…私でいいのか？　また気が変わったら正義の味方に戻り世界へ走って行ってしまってもいけない愚かで危うい私に…」

「その時は私がお前を連れ戻す！」

「いいんだな…？」

「ああ」

そして土郎はアインスを軽く抱きしめる。

「ならば私も気持ちを正直に言ったほうがいいだろう。」

先に言わせてしまったが……私もお前が好きだ、アインス。私と付き合ってくれ」

「ああ……！　嬉しいぞ、土郎……」

それでアインスは涙を流した。

「…もう私らは帰ろうか。これ以上は野暮や」

「そうだね、はやて…」

「そうですね、はやてちゃん。でもこれで土郎パパは正式に八神土郎になりますよ！」

「そうやな…それでアルトリアさん、ネロさん、シホちゃんの事お願いしてもええですか？」

「？」

「はい、任せてください」

「うむ。任された」

「……………」

見ればシホちゃんは少しばかり燃え尽きていた。

その目は虚ろで少し危ない感じが漂ってくる。

シホちゃんを誘ったのは今回はミステイクやったかな…？

ま、ええわ。そのうち回復するやろ。

それより帰つたらまずはお赤飯を炊かなきゃな！

精一杯二人を祝福してあげねばあかん！

それに家で待機しているキャスターも慰めてあげないとアカンし。

それで私達は解散となった。

そしてリインと先に帰ったら案の定、キャスターは落ち込みを見せていた。

「アインスに、先を越されました。私はどうすれば…」

「あんな、キャスター。なんにも正妻だけが道じゃないやろ？ 愛人という手もあるで？

もしくは使い魔として一生を尽くすのも一つの手や」

「ここはもう、既成事実をでっちあげて…！」

「それだけはよしいな!! ドロドロの関係なんて私は認めへんからな！」

「恋とは複雑なのですね…はやてちゃん」

「リインも成長したんね…。さて、では早速お赤飯を炊こうと思う！ 準備せな！」
そして士郎とアインスが手をつないで帰ってきたところで一家総出で二人を祝った。
それから二人は知り合いの間では公認のカップルになった。



…とある場所でフードをかぶった男がどこから知り得たのかわからないがサーヴァント召喚呪文を詠唱していた。

「…誓いを此処に。」

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ…」

それによつて魔法陣から一人の男が出現する。

「…ふむ。聖杯システムは崩壊しているが、無理をすればサーヴァントを召喚はできる
ようだな。」

して、サーヴァントよ。お前のクラスはなんだ…？」

「…僕のクラスは『アヴェンジャー』だ」

「なるほど…。イレギュラークラスか…。そして聞くぞ？ お前の望みはなんだ？」

「…僕の望みは…エミヤへの復讐だ…」

「エミヤか…。それはもしや衛宮士郎の事か？」

「そうだ…。何か知っているのか…？」

「ああ、知っているとも。私の知りうることを教えよう。そしてお前の望みを叶えてくれるがよい」

「感謝する… 『ブラッディ・ナイト鮮血の騎士団』の名の下に衛宮士郎に死の報復を…！」

召喚された左目に傷を持つ男は残忍な笑みを浮かべるのだった。

第九十七話

『愛の証明編』

前世の記憶を持つ少

女と狂王』

Side 衛宮士郎

アインズと付き合いだしてから私はどうアインズと付き合い合っていくべきかを色々な人に相談したりしながらも魔術事件対策課におもむいて仕事をしている。

まだこれといって魔術による大きな事件は起きてこないがこの世界でもいずれは通る道だ。

「キャスター」

「はい、なんですかマスターご主人様？」

「地球に関してはどう思う？ 我らが干渉して良いものだろうか……」

「まだ分かりませんねー。この世界では魔術師はまだ生まれてくる者たちは私達に比べれば赤子に過ぎません。」

です。ですからまだ静観していた方がいいと思います。それに死徒とかはいないようですし」

「そうだな。しかし死徒になる秘術を生み出す輩は出てくるかもしれないからな。用心はしておいて損はないだろうな」

「そうですね」

そんな時だった。

「あ、あの…衛宮さん、少しお話を聞いてもらっていいでしょうか？」

「ん？ なんだ、〃カレン・ルージュ〃二等陸士？」

「カレンで構いません」

「そうか」

少し固い表情をしながらもそういうので私もそれに習ってカレンと呼ぶ。

彼女はカレン・ルージュ。

ミットチルダで発見された魔術師の一人で髪色は赤で髪は跳ねている。

まだ15歳だがその魔術の属性故か少々燃え上がる気質を持っている。

魔術の属性は火。得意魔術は〃炎熱・輻射波動〃。

対象に触れて熱を注ぎ込み膨大な熱量で焼き尽くすというものだ。

他にも輻射波動の応用でバリアを展開できたり遠距離から波動を溜めた熱線を放て

るという便利な能力である。

しかし物騒な能力でもあるのでナツクル式魔術式デバイス『カグツチ』で非殺傷設定に抑えているという事だ。

彼女はなにやら前世の過去というものを持っているらしく昔からそれで思い悩んでいたという。

あの毒舌家のカレンとは違い特殊な思考は持ち合わせていないようで私としては良かったと思う。

閑話休題

「それで、どうした？」

「は、はい……。私の前世の話で聞いてもらいたいことがあるんです」

「君の前世をか……？」

「はい……」

なにやら重要な話のようだな。

オフィスでは話しづらいだろう。

それで、

「なら会議室で話すとしようか。ここでは話しづらそうだしな」

「ありがとうございます…」

それでカレンとともに会議室に移動して二人で向かい合って話す。

私が紅茶を二人分用意しながら話を開始する。

「して、今まで重要な事は話してこなかったがその過去というのはもしかして私も関係している話なのかね？」

「は、はい…。今まで打ち明けなかったのも本音を言いますと衛宮さんの事が怖かったからなんです…」

「またどうして…？」

「はい。私は信じられないかもしれませんが前世であなたに殺された過去を持つんです」

「私に、か…？」

「はい。そして私が過ごしていた世界は魔術が存在していた世界でした」

ツ!?

それでその世界の様々な機関を聞いてみると私たちの世界とほぼ同じだった。

「…もしや、並行世界の私が君を…？」

「おそらくですが…」

「だが、君はなにかその私に殺されるような事をしたのか。どうにも信じられないのだが…」

「いえ、私は何もしていません。問題があるとしたら私の婚約者が人間と吸血鬼のハーフだったことなんです」

「人間と吸血鬼のハーフ…だと？」

「はい。彼の名前は『ライゼル・S・クロウリー』という名前でした。覚えはありませんか…？」

「いや、初めて聞く名だ。その彼が何をしたんだ…？」

「いえ、なにもしていません。突然衛宮さんに襲いかけられましたから」

「その私は何かを言っていたか…？」

「なんでもライの事を『外道な人体実験などの研究をしている死徒』と言っていました。でも彼はそんな事は一切していませんでした」

でも衛宮さんは一切話しを聞いてくれなくて様々な剣を放ってきてライも応戦したんですが逸れた剣が私に向かってきて、それで…」

それでカレンは黙り込む。

おそらくそれがカレンの最後の瞬間だったのだろう。

「そうか…。おそらくその私は魔術協会に騙されてそのライゼルという彼を討伐しに来

たのだろう…。

私とは違う衛宮士郎の事だからそうなのかは分からんが…しかし、今どうしてその事を私に？」

「はい。昨日に夢で久しぶりにその夢を見まして私が死んだ後、狂う彼の光景を見たいです。そして衛宮さんを殺す光景も見ました。

それदनにか胸騒ぎがしましてこうして相談してみました」

「そうか…その君の勘はよく当たる方か？」

「当たる方です。ですからもしかしたら彼が出てくるかもしれませんからお気を付けください…私にはその事しか伝えられませんから…」

「わかった。一応心の片隅にとどめておこう」

カレンにそう言つて私は話しを切り上げる。

しかし、ライゼル・S・クロウリーか…。

やはり知らん名だな。

並行世界での事なのだから仕方がないといえはそこまでののだがな。それで今日の仕事もすべて終わらせて帰り支度をしている時だった。

「士郎、迎えに来たぞ」

「ああ、アインス。わかった。すぐに向かうから待っていてくれ」

「わかった」

アインスが私を迎えにやってきた。

付き合いだしてからはよく迎えに来てくれることが多くなつて同僚の奴らからなにやら冷やかしが聞こえてくるがそれには睨みを浴びせておいた。

それでも黙らないのならばO・H A・N A・S H Iと洒落込むことになるがな。

それで荷物を持つてアインスに合流して、

「土郎、魔術事件対策課はどうだ？ 最近なにかめぼしい事件は起こっているか？」

「いや、今のところはそんなに大きな事件は起きていない。いたつて平和だよ。うちの課は」

アインスとそんなとりとめのない会話をしながらも帰りの道を歩いている。

ふとアインスが何度も手を出したり引つ込めたりしている光景を目にし、前にはやてから、

『ええか、土郎？ もしこんな仕草をしていたらしつかりとエスコートしてやるんやで！』

という言葉をもらっている。

なので私は素直にアインスのその手を握つてやった。

すると「パアッ！」と喜ぶ表情をしてくれたので正解だったようだ。

「…あのー、ご主人様マスターにアインス？ 私の存在を忘れていませんか？」

「ツ!？」

それで思わずパツと同時に手を離す私とアインス。

「いいですよー。どうせ私はそこらへんの木と一緒に扱いでも一向に構いませんから」

どうやらキャスターが拗ねてしまったようだ。

空気が重い。

さて、どうするべきかと思っていた、そんな時だった。

「ツ!？」

強烈な殺気の視線を感じ直感に従い私はアインスを腕に抱え横に飛んだ。

「士郎!？」

「ご主人様マスター！ サーヴァントの気配です！」

「分かってる！」

それで先程まで私達がいた場所に目を向けるとそこには赤いサーベルを振り下ろしてアスファルトを融かしている一人の男がいた。

格好は白い騎士服に銀色の籠手、赤い十字剣のマークが入った黒いマントを羽織っている。

銀髪で青い瞳。しかし左目には切られたような線の切れ込みが入っていた。

そして重要なのがその私に向けてくる目が憎悪に彩られていることだ。

「何者だ……？ サーヴァントだというのだから名を名乗れ」

「私は『アヴェンジャー』。フハハハハハハハ!! 会いたかった……会いたかったぞ

!! 衛つえ宮あつ士郎おお!!」

アヴェンジャーと名乗る男はその手のサーベルを構えて疾駆してくる。

そのスピードときたら常人を遙かに上回っている。

キャストがなんとか鏡を盾にして防ぐが、

「なぜいきなり仕掛けてくるんだ!」

「なぜだと……？ そうか、貴様は『あの』衛宮士郎ではないということか。しかし、そんな事は関係ない……逆恨みだろうとエミヤの名を冠するものには死を!!」

それで何度もサーベルをキャストと打ち合いぶつけてくる。

「くっ、っ!」

なんとかキャストは防いでいるが、

「キャスト……ときが私の前に立つな!!」

「きやあつ!」

回し蹴りをキャストに食らわせてキャストは吹き飛ばされてしまう。

「士郎！ 私達も！」

「いや、待てアインス。あのサーベルは危険だ！ 解析で調べてみたがあれは刺した瞬間に熱エネルギーで爆発を起こす！ だからアインスは下がっていてくれ！」

「くっ…わかった。だが勝て。士郎！」

「ああ！」

「…さて、これでもう私と貴様に壁はなくなつた。こうして貴様と出会えるとは私は幸運だな！ 貴様に斬られた左目の傷が疼くぞ!!」

「…生憎だがお前のことは知らん」

「ほう…やはりあの衛宮士郎とは別人の衛宮士郎か。ならば教えてやろう。」

我が真名は「ライゼル」。『ライゼル・S・クロウリー』…愛ゆえに生き、愛ゆえに戦い、そして…愛ゆえに狂つた王…『狂王』と呼ばれた男だ!!」

「ライゼルだど!? カレンが言っていたあの男の事か!」

「…なぜ貴様が我が愛する者の名を語る? 語つていいのは、私だけだー!!」

「くっ…聞く耳持たずか! 仕方がない! 応戦する!! 投影開始!」

私は干将・莫耶を投影してライゼルへと斬り込む。

「やはり…やはりやはりその剣か! 中身は違つても所詮は衛宮士郎! 同じ剣を使うか! 我が愛するものを刺殺した剣を使うかー!!」

ライゼルは狂っているかのように言葉を連呼し何度も私に剣を打ち付けてくる。

生前は騎士だったようだがなにかのクラススキルで攻撃方法が単純化しているのか？

なんとか受け止められる。

「援護します！」

そこにキャスターが背後から呪符を構えて、

「氷天よ！ 凍れ!!」

それによってライゼルの足元から凍りついていく。

しかしそのサーベルを凍っていく部分に刺し、

「爆ぜろ！ 紅蓮!!」

宝具の名か？ 紅蓮と叫び次の瞬間には爆発が起こりライゼルの足元は燃え上がる。

「自滅か!？」

そう思ったが次の瞬間にはライゼルの足は瞬くもなく修復されていった。

瞬間再生か!？

なにかの保有スキル、いやもしや奴の宝具の一つか？

「無駄だ無駄だ無駄だ！ 私に傷をつけられるものなどいない！ 私は不死身なのだか

らな！ ハハハハハハハ!!」

「ならば受けてみる！——」
トレース・オン
「投影開始！」

今私が投影するのはヘラクレスの斧劍。

——
トリガー・オフ
「投影、装填……全工程投影完了」
——
ナイフ・ライフズブレイドワークス
「是、射殺す百頭!!」

斧劍から放つ九つの斬撃によってライゼルに尽く叩き込む。

それらはすべて命中し腕や足、顔半分を吹き飛ばす。

これだけしたのだ。一回くらい死んでいてもおかしくない。

しかし……ライゼルはその体を瞬時に復元していきすぐに元の姿に戻る。

「無駄ア!!」

「化物か!?!」

「英霊の枠を超えています！」

「私は悪魔との契約で得たスキル『冥土帰し』がある。これがある限り何度でも復元してやる……さて、そろそろトドメと行こうか」

ライゼルはサーベルをしまうと代わりにもう一つの武器……刀身が青い刀を取り出す。

すぐに解析をかけてみて分かった。

あれも危険な宝具だ。

切った傷口を凍らせ治癒を遅らせる効果を持っていて、しかも武器殺しの効果も持っている。

ソード・ブレイカー

あれに触れた途端、どんな武器でさえバターのように溶けてしまうだろう。宝具までは分らないが投影の武器はおそらく溶かされるだろう。

恐ろしい武器を持っているな。

だが、負けてやれん！

念の為に私は絶世デュランダルの名剣を投影して構える。

それからは何度も剣の斬り合いをしていき、キャスターも呪術を放って二人で応戦している。

だが刃毀れしないことで有名なデュランダルをしても切り結ぶ度に少しずつ溶けてきている。

ありえないという感想がすぐに浮かび、しかしなんとか受け止める。

「くうっ!! ライゼル、少しは話しを聞け! お前に合わせたい人物がいる!」

「そんな言葉で私の気を迷わすつもりだろうがそうはいかんぞ!!」

「ぐっ!」

そろそろ英霊の攻撃を受け止めるのも限界に近づいている時だった。

『結果、展開するよ!』

そんなエイミー嬢の言葉が通信で聞こえてきた。

それと同時に私たちの周りに結界が構築されていく。

「士郎!」

そしてはやて、リイン、志貴にアルクエイド、そしてヴォルケンリッターの面々が駆けつけてきてくれた。

「くっ…増援か。まだ私の憎しみは途絶えることはないが…いいだろう。しかし…!」

ライゼルは高速で私に駆けてきた。

くるか!?

だがライゼルは私の横を通り抜けていった。

なぜだ? と思ったが次に起きた悲鳴で何が起きたのか瞬時にわかった。

「アインス!」

ライゼルはアインスを気絶させて捕まえていた。

「どうやらこいつはお前の大事な女らしいな。次の勝負までこいつは私が預かる。せい

ぜい覚悟をしておくのだな、衛宮士郎!!」

そして超跳躍をしてその場を去っていった。

「アインス…!!」

私を手を伸ばすがすでに遅くアインスは連れてかれてしまった。

「くそくそくそッ! 私を殺すことが目的ならなぜアインスを巻き込む!」

地面を何度もたたき私は心から悔しがる。

また守れないのか!?!という想いを抱く。

「ご主人様^{マスタ}…気をしつかり」

「ああ…」

そこに駆けつけてきてくれたばかりで状況が把握していないはやて達が、

「…士郎、これはどういうことや? どうしてアインスが…」

「一度帰ったら説明する…エイミ嬢、やつはどこに消えたか観測できたか?」

『ごめんなさい、士郎さん…結界を破壊していつて脱出されちゃった…』

「そうか…くつ、必ず助けるぞ、アインス!」

アインスを必ず救うことを決めた瞬間だった。

第九十八話

『愛の証明編

ライゼルという男の

過去』

S i d e アヴェンジャー

衛宮士郎と一緒にいた女性を誘拐してからしばらく経ち、僕は少しばかり後悔していた。

アヴェンジャーのクラススキルである「復讐概念」。

これがある限り僕は復讐者が近くにしていると狂気が増し思考が単純化してしまうからだ。

あの衛宮士郎は私の知るエミヤシロウとは違うようだった。

だから悩む。

もしかしたら僕はあの時のエミヤシロウと同じことをしているのではないかと…。

そこで連れの女性が目を覚ました。

「ここは…ツ？ 貴様は！」

「落ち着け…今お前をどうにかしようとなどは考えていない」

「どういう事だ…？」

誘拐してきた女性は僕に警戒心を顕にして睨んでくる。

まあ、それもしょうがない。

信用してくれとは言わない。

だが、

「少しばかり僕の昔語りを聞いてくれないか？」

「なぜだ…？」

「聞いてもらいたいんだ。かつてエミヤシロウの手によつて狂わされた僕の過去を…」

「…いいだろう」

女性は何度か表情を変えたが、でも聞いてくれるようだ。

「感謝する…そう、昔に一つの混血の家族がいた」



僕の生まれは中世イギリス、人間の母と吸血鬼の父、そして妹のアイリス・S・クロ

ウリーの四人家族。

吸血鬼という身分を隠しながらも静かに暮らしていた。

母は人間であり寿命で早く死ぬ運命であったけどそれでも幸せに暮らしていた。

だが僕の18歳の誕生日の日に急に吸血鬼としての殺人衝動が目覚めてしまいまず母を、次には抵抗してきた父を、そして：最後には愛しの妹を、この手にかけてしまった。

正気に戻った時にはもう手遅れで僕は一夜にして全部を失ってしまった。

それから僕は誰の血も吸わずに己の罪を償うために旅に出た。

世界各国を旅してふと一つの想いが生まれた。

この力は人々を救うことに使おうと。

それが贖罪の道につながると思った。

そしてその間に何度も戦を経験し義がある方に参入し勝利をもぎ取って力をつけていった。

人助けも続けていき次第に僕は名も知れ渡り僕の考えに賛同してくれた吸血鬼や死徒、人間の同志達も増えた。

しかし、そんなものは増やしてはいずれ破滅を招くと思いい現代社会に入る前に解散した。

そしてまた一人旅を続けていきその間に一人の少女と出会った。

「君の名を覚えてくれないか……？」

「カレン……カレン・シユタツトフェルト」

愛しいと思う人との出会いであった。

最初はどうして付きまとうのか不審がられたがしだいに僕に心を開いてくれるようになり、とある事件……。

そうだな。誘拐事件といえればいいか。カレンは名家の生まれでお嬢様だった。

それで誘拐され僕がそれを助けた事によってカレンの家族にも気に入られて付き合い合
い出すようになった。

当然僕は人間と吸血鬼のハーフだという事も教えた。

それでも彼女は僕のことを受け入れてくれた。

でも僕はやはり怖かった。

所詮は吸血鬼。

だからいつ血を欲しがってしまうかもしれないという恐怖で。

それで彼女に別れ話を持ちかけた。

「カレン……僕と別れよう」

「え………？　ちよつと待って………どういう事!？」

「カレン……前に話しただろうか？　僕が……人と吸血鬼のハーフで……化け物だといふことを」

「たしかにそう聞いたけど……でも！　私はそんなことは気にしてないって言ったはずだからだよ!!」……え？」

僕は彼女に背を向けて、

「僕は今でも君が好きだ……だからこそ僕は怖いんだ！　いつか君の血を吸って君と同じ吸血鬼に……化け物に変えてしまうのではないかと思うと僕は怖くてたまらないんだ!!」

そう言った。でも彼女はそつと背中から僕を優しく抱きしめてくれた。

「大丈夫。貴方がどんな存在でも貴方は貴方。私はライだから好きなんだよ……」

「カレン……」

「それに貴方は化け物なんかじゃない。優しい人よ」

「っ!!」

「だってそうでしょう？　貴方は家族を失って傷ついても誰かを助けようとしたり、今も私を守ろうとしている！」

何度でも言うわ。貴方は心優しい人だから……だから……うっ……化け物なんて……言わないで……自分を……傷つけないで……」

「カレン……………」

僕が振り返り、彼女と目を合わせる。

「だったら、此処で誓う」

「ライ?」

「僕はこの先、我が生涯を懸けて誰の血を吸うことは決してしない。僕は人として君を護り、君と共に生きていく」

「ライ……………」

そして僕と彼女は抱きしめ合った。

「カレン……………愛してる」

「ライ……………うん。私も……………貴方を愛してる」

そして僕達は相思相愛になり結婚も認められて彼女が学校を卒業したら結婚しようという約束さえした。

その後、何事もなく彼女は学校を卒業して僕と一緒に故郷のイギリスへと旅行にいった。

それまでは幸せだった。

でも運命は残酷だった。

突如として襲いかかってくる衛宮士郎。

彼は僕に言った。

「お前は違法な人体実験の研究をしている死徒だ。

魔術協会からもお前のせいで涙している人がたくさんいるとも聞かされた。

そしてそれによって表に出る事もない人の名前も出ている始末だとも聞いた。

だからここで見逃すわけにはいかない。ここで討伐させてもらう……！」

そんな事実はないはずなのに彼は僕達を襲ってきた。

おそらく彼も魔術協会に騙されて僕達に襲いかかったのだらうと誤解を何度も解こ

うと試みた。

でももう手遅れだった。

彼の目には僕を殺すとしか感じられない殺意しか映っていないかった。

だから僕は自衛手段として彼を殺す決断をした。

たとえまた魔術協会、聖堂教会から追われる羽目にならうとも。

そして戦いは続いていった。

彼は何度も剣を飛ばしてきては僕が打ち返すといった千日手とも言える戦闘を繰り返した。

左目に傷を負ったがそれほど深い傷でもないから大丈夫だった。

だけどそんな戦いも僕が弾いた一つの剣によって状況が変わってしまった。

その弾いた剣はなんてことか彼女に向かってしまいい突き刺さり彼女は地面に倒れた。すぐに僕は駆け寄り彼女を介抱した。

でももう致命傷の傷で手遅れだと経験で悟ってしまった。

「はあ……はあ……ら……ライ……」

「カレン！ しっかりして!!」

「もう……いいよ……ライ……ごほつごほつ」

「喋らないで！ 絶対助ける！ 絶対助けるから！」

すつと彼女が僕の手を握る。

「……………カレン？」

「けほつ……………私……………貴方が好き……」

「っ!!」

「私ね……………貴方と会えて……………好きになって……………ホントに……………嬉しかったんだよ……………私達……………本当なら……………出会うはずが……………無いのに……………コレって……………運命なのかな……………？」

「カレン……………僕だって……………僕だって君が好きだ!!」

あの時、父上と母上、妹のアイリスをこの手で殺してしまったあの時から僕の心は凍り付いていた！ 僕の時間は止まっていた!!

……………でも、その心を君が溶かしてくれた!……………僕にとって君は暖かい太陽だ！ だか

おそらく聞かされた情報はウソだったのだろうと気づいたのだろう。でも関係なかった。

もう僕は狂気を解き放ち殺人衝動のままに衛宮士郎を殺そうとした。彼の命を絶つ瞬間に、

「すま、なかつた……」

という言葉が聞けたがそんなものは所詮その場限りのものだとして首を切り裂き絶命させた。

今思えば彼も踊らされていた犠牲者の一人だったのだろう。

でももう手遅れだった。

狂気に身を落とし復讐し終えた僕に残ったのは守れなかつた想いと、狂気に染まつた想いだった。

そして僕は最初で最後の吸血をした。

「カレン……僕はこれから君の仇を取るために君の血を吸わせてもらう。

だからこそ此処に誓う。僕はこの先誰の血も吸わない。

君が言った『何度生まれ変わっても僕を探して好きになる』その言葉を信じて生まれ変わった君ともう一度会うまで何百年、何千年たつても……決して吸わない。

それが僕の正義で……愛だから」

その誓いと共に。

それから悪魔との契約で不死身の力も得た。

衛宮士郎を動かしていた魔術協会、そして聖堂教会に復讐するために同志を集めた。

過去、置き去りにしてきた鍛えて得てきた様々な技や術も復讐の一念で磨き直して過去以上の力を得た。

僕の武器である『紅蓮』と『月下』の封印していた特殊能力も解放した。

そして復讐を果たすためにまずは僕を外道という魔術協会の魔術師の違法を暴き、そして貶め最後には命を絶つ。

それを何度も繰り返した。

その都度で何度も追っ手をかけられたが迎撃して打倒してきた。

悪魔の力で強化された愛馬の“斬月”とも一緒に駆け抜けて敵をその蹄で殺してきた。

そんな事を繰り返してきて次第に同志は増えてきた。

恨みを持つもの、親や子供を殺されたもの、罪を擦り付けられたもの。

理由は様々だが共通する想いはただ一つ。

“復讐を……！”

それだけが僕達を突き動かした。

部下や配下も増え、僕達の組織は鮮血ブラッディ・ナイツの騎士団と呼ばれるまでに膨れ上がり、ついに表舞台上に上がり一大決戦を起こした。

「いくぞー！ 我が同志達よ。今こそ決戦の時だ!!」

「「「イエス！ マイ・ロード!!」」」

僕達は果敢に魔術協会と聖堂教会に戦いを挑んでいった。

だが所詮は少数部隊だった僕達は一人、また一人と志半ばにして倒れていき最後の一人となつて、なんて無謀な戦いを挑んでしまったのかを後悔した。

しかし僕には不死性の力があつた。

だから最後まで戦いぬこうと駆け抜けた。

が、

「狂王…ライゼル・S・クロウリー。埋葬機関第七位、弓のシエルがあなたを裁きます」
でかいパイルバンカーを持った女が僕へと向かってきた。

それでも僕には敵わない。殺してやる…!

その意気込みで挑んでいったがそのパイルバンカーを打ち込まれた途端、

「がはあっ！ なっ!!? さ…再生…できない!」

「私の第七聖典にかかれれば造作もありません」

「……おっ……おのれっ……ま……まだだっ……まだっ……わたし……たちは……ふく……しゆうを……はたし……て……いな……い」

「無駄です。あなたの魂はもう復元不可能です。静かに眠りなさい……」

「カ……レ……ン」

彼女の名前を最後に呟き、僕の魂は再生することを否定されたかのように消滅した。それが僕の最後だと気づいたのは『座』に祭り上げられたと知った後だった。

そして座で僕はこの復讐劇はどうして始まったのかを自問自答した。

そしてついにたどり着いた。

“そうだ。衛宮士郎さえいなければ……”

それが僕が座で願った願いだった。

そして此度召喚され、衛宮士郎がこの世界にいると知った時は歓喜した。

また殺せることができる。



「……それが僕、ライゼル・S・クロウリーの過去だ。どうだ？ 笑えるだろう？」

「…いや、笑いはしない。私もかつて闇の書というロストログアとして色々な人の運命を狂わせてきた…だから笑うことはできない」

「そうか。まあ、いい…ところであの衛宮士郎について聞かせてくれないか？」

「一体なにを聞くというのだ…？」

「今のやつはまだ踊らされている道化なのか、それとも芯の通ったまっとうな人間なのかを」

すると彼女は柔らかない笑みを浮かべて、

「…ああ。今の士郎のあり方はとても嬉しいものだ」

「なぜだ…？」

「お前は知らないだろうが、士郎はかつて『正義の味方』を目指していた」

「正義の、味方…？」

「そうだ。それは養父である衛宮切嗣から受け継いだという話だがな…」

それから聞く。

彼女が聞いた衛宮士郎の半生を。

その変わっていった心のあり方を。

そして『すべてを救える正義の味方』から様々な経緯をえて変り、今は『大切なものを守る正義の味方』を心新たに志しているということ…。

「確かにお前の世界の士郎は正義の味方を最後まで突き通していたのだろう…。」

だが今の士郎はあり方が変わってきている。主だけでなく私すらも助けてくれた。

そんな男だからこそ私は士郎に恋をした。そして結ばれた…。」

彼女は幸せそうにそう話す。

「そうか…。もう、やつは僕が殺した衛宮士郎とは別人なんだな?」

「ああ。確かに並行世界を辿ればお前が殺したいと思う衛宮士郎も見つかるだろう。

だがこの世界の衛宮士郎はもう危うくない…。むしろ応援したいと思う。だから私は生涯を手助け出来たらいいと思った」

この話を聞いて僕は悟る。

この世界で僕の復讐は意味を無くしたということ。

だがここままでやってタダで終わらすことなど僕のプライドが許さない。

だから衛宮士郎に問い詰めよう。

お前の覚悟は本物なのか? 本当に貫き通せるものなのかを。

「僕は衛宮士郎に問う事にする」

「なにを…?」

「お前を守るものとしてふさわしいかを…? お前の信念は本物なのかを。

それによって僕は見届けるか殺すかを決める。

それで…もし相応しいものだったのなら…僕は身を引こう」

「アヴェンジャー…感謝する。それでも土郎は必ず私の下にやってくる。だから…」

「ああ。騎士の誓いによつて約束しよう」

そして僕は居場所がすぐに分かるように魔力溜まりを発生させて衛宮士郎を待つことにした。

でも、僕はこれから知ることになる。

僕の愛した彼女が僕の前に現れるなんて…。

これも運命だったかという気分させられる事を…。

第九十九話

『愛の証明編 奇跡の出会い、覚悟の証』

八神家にはアインスを除いた全員が揃っていて、後シホとアルトリアとネロの三人。そして急遽呼び出された「カレン・ルージユ」がいた。

「…それで、アインスさんがライに誘拐されたというのは本当ですか？」

「ああ…。私をもつと気をつけていればアインスは…。くっ…！」

「士郎、今は後悔は後にしてアインスを救出することを考えましょう。それに新たに現れたサーヴァント「アヴェンジャー」についても色々調べないといけないし」

「アヴェンジャー…いえ、ライについては私が説明します」

それでカレンはライゼルについて語りだす。

それは奇しくもライゼルがアインスに語る内容と同じだった。

それを聞き終えて、

「士郎に…いや、エミヤに恨みを持つ英霊か…」

「俺も知らない奴だな…大抵の裏世界の奴らは知っているつもりだったが…」

志貴がそう口を開く。

「私も死徒じゃない吸血鬼なんて初めて聞いたわ。ヴラド三世でもないしね」

「ということはその世界だけの吸血鬼ということかな？」

「おそらくな…そしてこの世界にはそう言った限定された者達がやってきたりなり記憶を持つて生まれてきたりなどするのだろう」

「『特異点』の世界ということかしら…？」

「そうやね。シホちゃんや士郎、それに言峰綺礼も別の世界からまるで引き寄せられたみたいなのにこの世界にやってきたわけやし…」

それを通信越しで聞いていたリンデイが、

『そういった関係の深そうな人も出てくる可能性がこれからも出てくるわけですね。カレンさんもシホさん達のどれかの並行世界から記憶を持って生まれ変わってきたわけですし…』

「業が深い話だな…」

「それより早くアインスを助けに行こうぜ！ あいつが殺されちまったら嫌だからな！」

「そうですね、ヴィータちゃん！」

ヴィータとリインが声を上げる。

『でも、肝心のどこに連れてかれたのかが分からないとどうにもならないしね…ナハト

ヴァールの反応も辿れないしね』

エイミーがそう話しをしたら時だった。

同時間でライゼルが剣から魔力を発生しだして自身を囿にして士郎達をおびき寄せ
る。

『ツ!? 急にでかい魔力反応が観測されたよ! 場所を転送するね!』

それでこの場にいる全員が観測された場所へと向かう。

観測された場所は偶然なのか以前にシホがこの世界にやってきた山奥だった。



Side 衛宮士郎

私達が指定された場所に到着するとアヴェンジャー…いや、ライゼルが腕を組み無言
で立ち尽くしていた。

「……………」

「士郎! それに我が主!」

ライゼルのとなりには無事な姿のアインスの姿があった。

よかった。殺されていなかったのだな。

アインスの無事に安堵の息を吐き、しかしまだ予断を許さない事に気を引き締める。

「……………来たか、衛宮士郎」

「ああ。お前と決着をつけるためにな」

「私が自力でアヴェンジャーのスキル…復讐概念を押しえつけている間に聞きたい。お

前の今ある正義を…」

「私の、正義だと…?」

ライゼルは突然何を…。

「お前の今志す正義によって私はお前に対する戦いをどうするか決める」

「別に構わないが…アインスには手を出さないんだな?」

「それはお前次第だ…衛宮士郎」

「くっ…」

そう簡単にアインスを開放するわけがないということか。

「貴様はかつて『すべてを救う正義の味方』を目指していたそうだな…?」

「それを誰から聞いた…?」

「すまない。私が話した…」

アインスがすまなそうにそう話す。

…そうか。ライゼルが聞き出したのか。

「今のお前はどうかなんだ？　まだそんな御伽噺の中でしか存在を許されない正義の味方という愚かな夢を目指しているというのか？　私の大事な人…カレンを殺した時のように。そうなのであれば私はお前を…殺す！」

ライゼルの殺気は本物だ。

嘘をついたとしたら私は当然アインスも一緒に殺されるだろう。

ならばここは私の今の覚悟を見せる時ということだな。

「…ならばその問いに答えよう。今の私の目指す道ははやて達…私の大事な家族達…そして私の愛するアインスを守る。大切な者達を守る正義の味方」だ。

我が家族達がピンチの時は必ず駆けつける。助ける。そして、守る…！

もう私の養父である衛宮切嗣から借り受けた夢は諦めるしかないだろう…しかし、大切な者達を守る正義の味方”。

これが私自身でたどり着いた新たな答えだ。ライゼル…お前にどんな言葉を受けようとその想いだけはもう変わらない。

そして私の大切な者たちに刃を振るおうとしている貴様のようなものが襲ってこようものなら全力で打ち倒そう。それが私の覚悟の証だ！

「私も士郎と同じ考えよ！」

今言える全力での答えを全て言い切った。

シホも続くように答える。これが私とシホの想いだ。

…すまない、切嗣。もう私達はこの答えを貫き通す。

いつまでも…！

その時、ふと幻想かもしれない…白昼夢なのかもしれない。だが私達の前にヨレヨレのコートを着た男性…衛宮切嗣が穏やかな表情をしながら姿を現した。

その今すぐにでも消えそうな透明な姿でこれはひと時の幻ではと思ってしまう。

『そうか…士郎、それにシホ。君達自身の答えを得たんだね』

「切嗣…!？」

シホや他の一同も驚きの声を上げている。

ということは目の前にいる切嗣は幻じゃないということか！

『それならもう僕からはなにも言わないよ。それが君たち自身の…僕の借り物の夢ではなく、真実たどり着いた答えだっていうなら僕は全力で応援する』

「切嗣…ッ！」

『…だから大切なものをもうこぼれ落とすんじゃないよ…？』

さて、それじゃもう一度君たち二人に問うよ。

——僕はかつて“正義の味方”に憧れていた…。

…でもその過程で僕はたくさん命を天秤にかけてこの手で殺し、一を殺して十を生かし、また十を殺し百を生かし、また百を殺し…千を生かしてきた。

今思えば愚かな理想だったのだろう。そんな歪んだ想いを僕は士郎とシホ、君たち二人に託してしまった。

でも、君達はこの世界に来て新たな理想を…イリヤの願いだとしても自分自身で抱いた夢を、答えを得た。

だから今の君達は…どうなんだい？ 聞かせてくれ…』

「私は、もうその夢を継げない…諦めるしかない」

「ええ、切嗣。私と士郎はもう新たな夢ができたのだから」

『その夢とは…？ 教えてくれないかい？』

「大切な者達を守る正義の味方…それが私の夢だ（よ）…」

私とシホは同時にそう答える。

『そうか…。今度こそ心から安心した。守りたいと思った人達を必ず守れるように頑張るんだよ？ 士郎、シホ…。』

…そしてイリヤ、いまさら何を言っても遅いだろうけど第四次聖杯戦争後に迎えに行

けなくて、本当にすまなかつた……そしてこれからも土郎とシホと仲良くにね?』

《キリツグ……!》

シホの中からイリヤの泣きそうな声が響いてくる。

イリヤも切嗣と会いたかつたという想いはあつたのだろう。

泣きそうな声を出しながら、

《うん。バイバイ、キリツグ……!》

『うん、イリヤ……。それじゃ僕はもう消えるとするよ。これはつかの間の間の奇跡の出会いだったのだから……。いつか、また会おう。三人とも……』

切嗣はそう言つて笑みを浮かべて風が吹き荒れた瞬間に姿が溶けるように薄れていきその光は空へと昇つて消えていった……。

そして先程までの空気が嘘だったかのようにあたりは静寂に包まれた。

「——クククツ……」

しかしそこでライゼルが突如として笑い出した。

「なにが、おかしい……?」

「返答によつては容赦はしないわよ……!」

切嗣とのつかの間の再会を台無しにされたと思い私とシホは殺気をライゼルに浴びせる。

「…いや、すまない。君たちのことを笑ったわけではないんだ。笑ったのは私自身なのだから。」

復讐に身を焦がし闘争の果てにカレンの下へとついにはたどり着けなかった私が君たちの新たな夢を笑うことは侮辱だということにね」

「ライゼル…」

「でも、まだ完全に納得はしていない。君達の覚悟を聞いても僕はまだエミヤシロウに對する恨みが心から消えない。だから最後の決着をつけようじゃないか？」

そう言つてライゼルは腰に下げているサーベルと刀を同時に抜き放つ。

それで私達は来るか！ と構える。

でもそこで今の今まで私達の後ろに隠れていたカレンが飛び出した。

「ライ…ッ！」

「ッ!? カレン!?!」

ライゼルの表情が驚愕に染まる。

それはそうだろう。今まで会いたかつた人がお互いに目の前に現れたのだから。

「ライ、お願い！ その武器を下げて！ 私は土郎さんの事を決して恨んでいない。」

あなたが私に死んだ後、どんな道を辿つたのかはわからない。でも私はそんなライの姿は望んでなんていない！」

「カレン…」

「だからその憎しみの想いをなくして…私とまた一緒に暮らそう!」

カレンの必死の告白。

それはライゼルに届いたのかはわからない。

でもライゼルはその顔を悲しみに歪めて、

「もう無理なんだよ、カレン…。僕の恨みは晴れたとしても一緒についてきてくれた我が同志達の想いまではなくすことはできない」

途端、ライゼルの体から濃密な血と魔力の気配が吹き出してくる。

そして詠唱を紡ぎ出した。

「——この身に宿る魂ものは無い。

血潮は刃に、心は悪魔に捧げる。

幾度の戦場を駆け抜けて無情」

これは…。

まるで私の固有結界の詠唱に感じが似ている。

そう、己の心を曝け出すかのようにライゼルは続ける。

「数多の命を救えど、ただ一つの愛を失う」

「ライ…」

カレンの悲しみの声が漏れてきた。

「彼の王は常に軍勢。

血塗れの丘で好機ときを待つ。

故に、この生涯に意味を示す為に…、

この心をあらゆる憎しみに染め上げる」

そして詠唱が終わる。

途端、世界が震撼するかのように震えるような錯覚を味わう。

そして、一陣の風が吹き荒れて、世界は新たな世界へと侵食されていく。

固有結界…!?

その世界は一言で言えば負け戦の後の荒廃したような血濡れの世界だった…。

そして、気づけばライゼルの背後には百人ほどの様々な形相をしている人や死徒が全員同じ騎士甲冑をまとっている騎士の姿があった。

「これが私の宝具…固有結界『鮮血の盟約』。かつて私に付き従ったエミヤシロウや魔術協会、聖堂教会に恨みを持つ者たちの集まりだ。

私の心は彼らとともにあり、これからも不変である事の証だ」

ライゼルの隣に赤い鬣のある巨大な黒い馬が出てきてライゼルは馬を撫で、

「お前も来てくれたのだな。斬月……」

斬月と呼ばれた馬に跨り、

「いざ！ 最後の戦いの時だ!!」

「「「イエス！ マイ・ロード!!」」」

ライゼルの配下の騎士達がライゼルの声に反応して答える。

それに私は、

「もう、引き返せないのか……ライゼル?」

「ああ……。彼らの将である私が彼らを裏切るわけには行かないからな」

「そうか……。はやてとリイン、シャマル、カレンは下がっていてくれ。ならば……アインス

を取り戻すため……私達も本気で挑もう!」

それでヴォルケンリツターのみんなやキャスター、アルクエイド、志貴、シホ、アル

トリア、ネロが構えをする。

「準備はできたようだな。では……奴らを蹂躪せよ! 我が騎士達よ!!」

「「「イエス! マイ・ロード!!」」」

そして戦いは始まった。



士郎達はこちらへと駆けてくる百人以上の集団に果敢に挑んでいった。

「うおおおおおー！！！！」

ヴィータがグラーフアイゼンを振るい、次々と敵を潰していく。

「飛竜一閃！」

剣から放たれる砲撃級の魔法で次々と切り裂いていく。

「デヤアアアアアア！！」

地面から幾重にも刺を出現させて貫いていく。

「いくわよ！」

アルクエイドが爪を奮っていき引き裂いていく。

「殺す！」

志貴がナイフを振るって直死の魔眼で絶命させていく。

「すべて切り裂きます！ 受けなさい、密天！！」

風の嵐を発生させて切り裂いていく。

「イスカンダルの王アイオニオン・ヘイロイの軍勢に似ていますが彼らに比べれば劣りますね！」

アルトリアが剣を振るい次々と切り裂いていく。

「余を殺したくばもつと大勢で挑んでくるがよい！」

ロサ・イクトゥス
「花散る天幕！！」

舞うように次々と切り裂いていくネロ。

「全投影連続層写!!」
ソートバレルフルオープン

士郎とシホが剣を連続で放ち次々と貫いていく。

全員が全員敵を次々と撃破していき数では不利だったというのにもうライゼルを残し全員が倒れ尽くしてしまった。

「…やるな。私の騎士団がこうも簡単に敗れるとはな。まるであの最後の戦いの時のようだ…」

「アインスを救うためには倒すしかないからな。そして必ずアインスを助け出す…!」

「…そうか。ならば、最後の勝負と行こうか。いくぞ、斬月!!」

ライゼルの言葉に斬月が嘶き士郎へと突撃していく。

「紅蓮よ…! 今こそ光り輝け!! 暁!!」

瞬間、紅蓮から閃光があがり全員の視界を奪う。

しかし士郎は視界を奪われながらもその手に丸い鉄球を出現させる。

その鉄球から紫電が発生しだし士郎の全身にも伝わっていくが士郎は気にせずと言霊を紡ぐ。

「——後^アより出^ンて先^サに断^ラつもの…!」

「い^ギ、我が剣を受けよ! 衛宮士郎!!」

サーベルと刀から燃える炎と吹雪く氷雪が巻き起こりそれは士郎を襲おうとする。

だが、それよりも早く、

「斬り抉る戦神の剣ツ!!」

放たれたケルト神話の戦いの神ルールの短剣。

それによつてライゼルの攻撃はすべてキャンセルされて因果逆転の剣によつて貫かれて霊核を傷つけられて再生ができなくなる。

「ぐっ…まさか、攻撃をキャンセルされよう、とは…しかも霊核も傷つけられて冥土帰りのスキルも、発動できなく…再生も、できないか。ここまで、だな…」

それによつて固有結界『鮮血の盟約』も解除されていき、ライゼルは斬月から転がり落ちる。

そこにすぐにカレンが駆けていき、

「ライツッ!」

すぐに抱き起こし、

「どうしてここまで…私はあなたとまた出会えるだけでよかったのに、嬉しかったのに…!」

「それは僕も同じだよ、カレン。でも、もう僕は君と生きる時間は違っているんだ。だからこれでお別れだ…」

「ライ……！」

「そしてカレン……済まない。君との約束を……破ってしまった。」

『人として君を守る』と誓ったのに……それを踏みにじってばかりだ……済まない……済まない……！」

「そんなことないっ！」

カレンはすぐにライゼルのセリフを否定して、

「私こそ貴方に苦しい思いをさせてしまった……貴方を支えるはずだったのに……ごめんなさい……ごめんなさい……」

「……お互い様だったということかな……？」

「そうだね、ライ……」

ライゼルは儂い笑みを浮かべてそう言う。

カレンも泣き笑いで返す。

「……そして最期に……君に伝えたい……」

こんな……怪物の血を引く僕を……化け物に成り果てた僕を……愛してくれて……ありがとう……さよなら、カレン。今度こそ幸せになってくれ……僕はただそれだけを祈っているから……」

「うん……うん……！」

「そして、衛宮士郎……」

「なんだ……？」

「その決意と覚悟、必ず貫き通せ……ッ！　そうでなければ僕は何度でも蘇って君を殺すだろう……！」

「ああ。アインスは必ず幸せにする！」

「ならば、安心だな……。…お前とは、出会いが違えば友になれたことだろう……さらばだ」
そしてライゼルは消滅した。

士郎は地面に俯いているカレンに話しかける。

「カレン……すまない。ライゼルを救うことができなかつた……」

「いえ、これで良かったんです……。ライもきつと、士郎さんの覚悟をわかってくれたと思います」

「そうか……」

「ですから私とも約束してください。アインスさんを必ず幸せにしないと私がライの代わりにあなたの敵になると……」

「ああ、肝に銘じておこう」

そこにアインスが士郎へと駆け寄ってきた。

「士郎ッ!!」

「アインスツ!!」

士郎とアインスは抱きしめ合い互いの無事を祝った。

「アインス：必ずお前を幸せにする。約束だ!」

「ああ…。その言葉、信じるぞ士郎…」

こうしてアヴェンジャー…ライゼルの戦いは幕を閉じたのだった。



アヴェンジャーのマスターだった男はライゼルが消滅したことを確認すると、

「ふむ、やはりこの程度だったか。…まあいい。これでサーヴァント召喚の実験はできたからな。これからが楽しみだ。クククツ…」

男は不気味に笑うのだった。

第百話

『小学六年生の毎日、流れ

る季節』

S i d e シホ・E・S・高町

あの戦いから少し経ち私達はアヴェンジャー……ライゼルを召喚した魔術師を探そうという提案をしたが手がかりもなく今はただこの異様な静寂を不気味に思うのだった。

それと話は変わり士郎とアインスだがライゼルとの戦いを終えてからというもの、二人は前より距離が縮まったように見てるこっちはなぜか恥ずかしくなってくる始末。

その証拠として学校ではやてに相談されて、

「なあシホちゃん。最近な……士郎とアインスが仲が良すぎて困つとるんよ」

「そ、そうなの。はやて……」

「うん。それでキャスターも嫉妬をして家の中が少しギスギスしているんから私としては嬉しいのやら悲しいのやら……」

はやては後のこの悲劇を予想していなかったらしい。

実に哀れだ。

「シホちゃん、なんとかしてくれへん…?」

「…と、言われてももうライゼルの戦いで士郎の心変わりには絶対にならないでしょうからほとぼりがつくまでそつとしておいた方がいいと思うわよ?」

「シホの意見に賛成ー! もう二人は付き合っただからそのままにしておいた方がいいよー!」

「アリシアちゃんは士郎の事はもうええの…? 士郎の事、好きなんやろ…?」

「うん。でももう諦めもついたかな? それにもとより年が離れ過ぎているから叶わないものだしね…」

「アリシアも成長したんだね」

フェイトがホロリと涙を流していた。

「まあそうやね。もう私は気にせんようにするわ!…それに…」

ん? なんだろう。はやてがこちらを見て笑みを浮かべる。
と、そこに、

「シホちゃん!」

「ツ!? なに、すずか?」

すずかが私にいきなり抱きついてきた。

「シホちゃんやすずかちゃん達を見ている方が楽しいしな〜」

「私ね、アインズさんに負けていられないと思うの！ だから私達も正式に……！」

「すずかちゃん、落ち着いて！」

「落ち着きなさい、すずか！」

少し暴走気味のすずかをなのはとアリサが止めに入る。

それで事なきを得たが、

「……すずか、まだ私達は歳は若いわ。だからまだ、ね？ これからを頑張つていきましょ

う？」

「うん……これからだよね」

そう説得したけど聞いていた周りが少し騒ぎ出す。

だからどうした……？ もう私はこの空気には慣れた。

「シホちゃんも正直になつたんな」

「もう隠すのをやめたのよ。いちいち冷やかされたらたまらないしね」

「そうなんや……それより、ふむ？」

はやてが私の周りをなぜか回りだした。

「な、なに……？ はやて？」

「今や！ シホちゃん、隙ありや！」

そんな事を言い出してはやてが足に魔力を込めたと思った矢先に私の胸を鷲掴みにして何度も揉み始めた!?

「シホちゃんの胸、成長してきてるね？」

「な、ななな…!？」

「私の目測やとフェイトちゃんやすずかちゃんといい勝負やよ…？」

「はやて！ またそんな大声で…!」

「はやてちゃん…!」

「なにをしてやがりますかー!!」

それで思いっきりはやてに技をかけて腕ひじきをする。

「ギブギブ！ シホちゃん、ギブやあ…!」

「いいえ、許さないわ！ 乙女の胸を無断で鷲掴みにする子にはお仕置が必要よね…?」

「…はやてちゃん？ シホちゃんの胸を揉んでいいのは私だけなんだよ？」

「すずかもいきなりすごいセリフをぶつちやけないでー!?!」

「それはええからもう許してー!」

それでわいわいと皆でやっている私達は先生が来るまでそうしていた。

◆
◇
◆
まだ春も抜けきらない季節。

「えー…では今日の家庭科の授業は前より計画していました調理実習のお菓子作りをしたいと思います」

先生のお言葉でシホ達はエプロンや三角頭巾などをして準備をする。

「シホちゃん！ できたら俺に食わせてくれよ！」

「僕も僕も！」

「はいはい…できたら切り分けてあげるからちゃんと手伝うのよ？」

「おう！」

「任せておけ！」

それで男子達が元気になる。

「シホちゃんも人気者だね〜」

「それを言ったらなのはも人気じゃない？」

シホ達（シホ、なのは、アリサ、すずか、フェイト、アリシア、はやて）のグループは人気だ。

シホとすずかの絡みも見られて顔を赤くする男子が色々いるし。

最近はそのとフェイトもシホ達に負けず劣らずラブラブ感を出し始めたのでクラスではこの二組みのカップルは有名である。

そして友達の間をよく揉むはやてが場をしつちやかめつちやかにするのも見られるので男子は羨望の眼差しをしている。

閑話休題

それからクラスで六班に分かれてお菓子作りが開始された。

まずシホの班はアップルパイ。

すずかとアリサの班はプリン。

なのはの班はマドレーヌ。

フェイト、アリシアの班はマフィン。

はやての班はスイートポテト。

残りの班がクッキー。

これらを作ることになった。

シホはまずリンゴの皮むきをしていき薄く一口大に切り込んでいく。

それを他の子が煮る役目になった。

パイ生地を作る子や溶き卵を作る子で分かれている。

シホは丁寧にみんなに作り方を教えていき仕上げていく。

すずかとアリサは料理が苦手なアリサが使う砂糖などの分量を測ったりしている。

そしてすずかは卵を割ったりカラメルソースを作ったりしている。

なのはは薄力粉やベーキングパウダーなどを合わせてふるっていきメレンゲ作り、卵黄、溶かしたバターなどを混ぜ合わせていく。

フェイトとアリシアはそれぞれ分担して薄力粉をふるっていき、マフィンの生地作りをしていた。

はやてはさつまいもを蒸した後、砂糖、生クリーム、バターなどを混ぜ合わせていく。

それでアルミのケースに移していきそれをオーブンで焼いていく。

それぞれの班でお菓子は順調に作られていった。

そして出来上がってみんなです食会をしていく。

「あ、うちに持ち帰る分を取っておかなきゃね」

「そうだね、シホちゃん。お父さん喜ぶだろうね」

「シホちゃん！ 食わせて！」

「俺も！」

「わかったわ。切り分けるから待っていないさい」

それでシホがアップルパイを切り分けて男子連中にやるとすぐに食いつき、

「うまい……！」

「さすがシホちゃんだー」

「次はフェイトとアリシアちゃんのを食いにいこうぜ！」

「おう！」

それで駆けていく男子たち。

「男子は元気ねえ〜」

「シホちゃん、私のプリン食べてみて？」

「わかったわ、すぐか」

シホはすぐかのプリンを一口食べて、

「うん。おいしいわ」

「よかったあ……」

それから持ち帰る分とかも分けて全員で試食会と相成った。

全員は楽しそうにお菓子を頬張って楽しい調理実習となった。

ちなみに各家族達は作ったものを喜んで食べていた。



…夏の季節。

やってきました。プール開き。

それで唯一まだ2.5mも泳げないのはが奮起していた。

「シホちゃん！ 今年は泳ぎきれるように頑張るよ！」

「そう。頑張りなさい」

「うん！」

「ところでシホはもう女性の水着には慣れた…？」

アリサのそんなニヤツとした笑みでシホはピキツと固まる。

「な、なにをおっしゃるのかしら？ アリサさん…？」

「めっちゃ動揺しとるな」

「去年も私の後ろに隠れてたもんね、シホちゃん。可愛かったよ」

「ううう…だからこの季節は嫌なのよ。誰が好き好んで水着なんて着るかって言うの

よ〜」

「ま、諦めなさい。ようは慣れよ慣れ」

「ええ、分かっているわ…去年のような失態は犯さないわ」

そう、シホは去年のプールの時に男子連中にいっぱい見られてあまりの恥ずかしさでオーバーヒートしてしまい気絶してしまったのだ。

そして男子連中はそんな恥ずかしがってとてもしおらしいシホの姿を見たいがためにこの日を待ち望んでいたりする。

それに最近は出るところはちゃんと出てきて余計女性らしくなってきたので期待はかなり高い！…とは複数の男子の発言である。

「男子連中！…こつちを見るんじゃないわよ！」

アリサの一喝で男子連中は「見てないよ！」と反発の声を上げるがやはりそこは男性性…つい見てしまうのは仕方がないというものだ。

結局シホはやはり慣れることができずにいつもの凜とした態度は成りを潜めて去年と同じくすずかの後ろに隠れていたりする。

そのシホの姿に男子連中は思わず全員顔を赤くする。

「やっぱり見てるじゃない!? シホはプールでは特に恥ずかしがり屋なんだからあんまり見るんじゃない！」

それで男子連中はわあー！と散っていく。

「まったくもう…！」

「シホちゃん、大丈夫…？」

「な、なんとか…」

「やっぱり心理的なものは大きいね」

「シホー、もつと気楽に行こうよ？」

「ええ、アリシア…」

それから一通り授業は進められていき、

「では今から自由時間にします。各自溺れないように気をつけてね？」

先生の一言でそれぞれ自由に泳ぎだす生徒達。

「シホ！ 勝負しよう！」

フェイトがシホに勝負を挑む。

それにシホは、

（気が紛れるからちようどいいかも…）

と思つてフェイトとの勝負を受けることにした。

「シホちゃんどフェイトの勝負だつてよ！」

「見ものだね！」

生徒達が観戦ムードに入る。

そしてアリサが合図をする。

「それじゃ、いくわよ二人共！ シホ対フェイト！ 50mクロール対決！」

「うん！」

「ええ！」

「スタート！」

アリサの言葉を合図に二人は一斉に泳ぎだす。

シホは何度も息継ぎをしてフェイトを追い上げる。

（アルトリアとの勝負がこんなところで生きてくるなんてね！）

そう、シホは毎年アルトリアとプールで勝負をしているのだ。

その度に勝ったり負けたりしている。

それをフェイト達は当然見ている。是非勝負をしたいと闘志が燃え上がっているのだ。

そして25mを過ぎて折り返し地点に入り、そこからシホはさらにスピードを上げる。

（さらにシホのスピードが上がった！ でも、負けない！）

フェイトは必死にシホに追いつこうとする。

シホもフェイトの追い上げに感心しながらも、

（勝負の世界は厳しいのよ？ フェイト？）

一気に距離を離す。

そしてフェイトを突き放して一気に50mを泳ぎきる。

「勝者！ シホ！」

『わー！』

それで騒ぎ出す一同。

「はあ、はあ…やっぱりシホには敵わないか…」

「そう簡単に負けてあげないわよ、フェイト」

「シホちゃん！ フェイトちゃん！ いい勝負だったよ！」

なのはもそう言つて二人に走り寄つてくる。

「ありがとう、なのは」

だがそこでなのはは足を滑らせた。

「あ…!?!」

しかもちょうど悪い具合にシホの水着を両手でガツ！と掴む。

それによつてシホの水着が一気にずり落ちた。

…まあ、それで当然結果は、

『ぶっ!?!』

「い、いやあああああー!?!」

シホは叫びを上げてすぐにうづくまる。

すぐに女子達がシホを守るように囲いを作るがばつちり見てしまった男子生徒達は

鼻血を出しているものが複数いた。

「なくのくはく!?」

「し、シホちゃん! ごめんなさい!!」

すぐにシホは水着を着直して涙目でなのはを睨む。

水着でも恥ずかしいのだ。ほとんど裸を見られたに等しいシホは怒りと羞恥の表情である。

本日はこれで終了となったがシホは羞恥心で授業後もずっと顔を赤くしているのだった。

「なのはちゃん、ちゃんと謝ったほうがええよ?」

「ううっ…:そうだよね」

「今回はなのはのドジのせいだからねー」

「アリシアちゃん、ひどい…:」

「今回は同情できないよ、なのは…:」

「フェイトちゃん…:」

それでののははシホに謝るのに苦労したという。



…秋、運動会の季節。

「なんか、運動会って卑怯な感じなのよね、私」

「なんで…？」

「いや、この体って平均でも身体強化をせずとも中学生くらいのは馬力は出るから」

「あ、それは私も出るよ！　なんだってこの体はサーヴァントの全力にも耐えられる体なんだから！」

えっへん！　とアリシアはフエイトと同じく成長してきた胸を張る。

「そうだったわね。いまだに人形の体だっというのが信じられないからね。しっかりと成長しているし…」

「うんうん…」

「でもシホには魔術は使わずとも本気を出してもらわよ！　なんせ小学生最後の運動会なんだから！」

「そうね。頑張りましょう」

『おー！』

最近普通に身体強化の魔術も会得しているアリサ達だがこんな場所で使うほど落ち

ぶれてはいない。

やるなら正々堂々！ 自身の力だけでの勝負を挑むのだとやる気を出している。

そして競技は行われていき午前の部が終わりシホやフェイト、アリシア、さすが、アリサの活躍もあり今のところは一位をたたき出している。

「いやーやつとお昼だね」

「そうだね」

「お母さん達がシートを広げて待っているから早く行こうか」

「うん」

それでシホ達は観客の家族のスペースに立ち寄りみんなで食事をとっていた。

「奏者よ。大活躍だったな。余は誇らしいぞ！」

「あはは…ありがとネロ」

「マスターもアリシアもいい感じに盛り上がっていたぜ？」

「うん、ありがとうランサー」

「ありがとね、ランサー！」

「なのはは、抜かされてしまって残念でしたね…」

「ううっ…オリヴィエさん、どんなに鍛えてもやっぱり基本の身体能力は低い…」

「主、お弁当です」

「ありがとな、アインス」

「今日は重箱だ。みんな残さず食べてくれ」

「うん。ありがとう土郎さん」

「呵呵呵！ 競え競え！ されば己の力になる！」

「ライダーも楽しんでいってね」

「はい、スズカ」

「：ほう。土郎くんはやはりシホちゃんと一緒に料理が得意なんだな」

「ええ、土郎さん。私はシホと同等の腕だと自負しています。最近桃子さんの教えもありシホには抜かされてきていますが…」

ダブル土郎が話し出して不思議な会話だとみんなは思っていた。

それにしても一気にこの家族が集まるとやはりレベルが高い。

子供達も入れてサーヴァント連中は言うまでもなく、ヴォルケンリッター、そして各家族、メイド達も美女揃い。

それで周りにいた他の家族達は、

(レベルが高い…！)

と一斉に思っていたりする。

「あ、なのはー！」

「ユーノ君!? 来れたの!」

「私もいますよ!」

「ファイア! よく来たわね」

「はい。お姉様の活躍を見にわざわざ武装隊の休暇をとってやってきました。それに
…」

「ファイアットちゃん。久しぶりだね」

「そうですね、すずか」

すずかとファイアットの二人はお互いに笑顔で威嚇をしあっている。

「お姉様に気持ちを伝えたというのですから今のところはすずかが優勢だというのは認め
めます。ですが私は諦めませんからね…?」

「望むところだよ。ファイアットちゃん!」

それで二人は拳をくつつけあう。

いつもの恒例の挨拶である。

それで見えていた全員は苦笑を浮かべていた。

でもシホは二人の気持ちは知っているので笑うに笑えなかつた。

「ならばその勝負。余とアルトリア姉妹同盟も参加するでしょう。奏者は余にぞっこん
(死語) だからな!」

「ネロさんも面白いことを言いますね。受けて立ちます!」

「はは! 望むところよ!」

それで白熱するシホの奪い合いの様子。

「…そういえば今日はアリサちゃんの親は来ていないんね?」

「ああ。あたしのパパは仕事が忙しいからね。だからって気にしていないから大丈夫よ? アサシンや鮫島も来ていることだしね」

「そっか」

それでアリサは少し重い空気を払おうとはやてのお弁当のおかずを取り、

「あ、アリサちゃん!? なんてことを…!」

「へっへーん! 油断しているからよ!」

「はやてから取るなんてやるなあ…!」

ヴィータは感心していた。

そしてそれから午後の部になり男女混合リレーと相成って、

メンバーはさすがに、フェイト、残りは男子の二人となった。

しかしその片方の男子が急遽前の競技の騎馬戦で足を挫いてしまったのでどうするかという話になり、

「シホちゃんは…結構競技に出ているからもうクタクタだよね」

「いや、大丈夫よ？」

「でも、休んでおいたほうがいいよ。最後の六年生クラス対抗綱引きが残っているんだから」

「それじゃあたしが出るわ！」

「アリサ！　大丈夫!?!」

「平気よ。アンカーのすずかに棒を渡す位どうってことないわ！」

「それじゃ他に人もいないしアリサに決定！」

そして始まる男女混合リレー。

シホ達のクラスは男子が一人という不安があるが女子三人とも足が男子より早いのが売りであるので任せられる。

そして始まるリレー。

それによつて最初の走者のフェイトが走り出す。

それはいとも簡単に全員を抜き去り最初は一位で次の男子に流す。

そして次の男子は一人に抜かされるも二位で通過。

そしてアリサに渡されてアリサは疾走する。

そしてなんとか一位に躍り出ですずかに棒を渡すところまできたが勢い余つてすずかに棒を渡すと転倒してしまった。

「アリサちゃん！」

「あたしに構わず行きなさい！　　すぐか！」

「うん……！」

そしてすぐかは見事走りきり一位で勝利をとった。

でもすぐに転倒したアリサの下に走っていき、

「大丈夫!?!　　アリサちゃん！」

「平気よ。ちよつと顔打つちやつたけど……」

「膝も擦りむいているじゃない！　　シヤマルきーん！」

「はい！　　任せてください！」

それでシヤマルの応急処置は済まされていった。

その後は特に明記することもなく綱引きもシホ達のクラスが勝利し、小学生最後の運

動会は優勝で幕を下ろしたのだった。

「優勝よ！」

「アリサ、怪我しているんだから騒がないの」

「いいじゃない。せつかく勝ったんだから！」

「お嬢様。旦那様からお電話です」

『よく頑張ったな。アリサ。聞いていたぞ。後でアリサの勇姿をカメラで見させてもら

うからな』

「うん！」

それでアリサは笑顔を浮かべるのだった。



…冬、クリスマスの季節。

「もうすぐクリスマスやね」

「そしてそれが過ぎれば後はお正月だね」

「私達が友達になってもうあの事件の冬から三年も経つんやね。長いようで短かったわ」

「はやてちゃんも足ももうすっかり治って普通に歩けるようになったもんね」

「なのはが去年のこの季節に怪我をした事もあったけどこうしてまた普通にみんなで冬を楽しめるのは嬉しいことだわ」

「そうだね、シホちゃん」

「もうすぐ学校も冬休みで終わりだから学校の宿題も魔術のお勉強も一生懸命頑張れるね！」

「アリシアちゃんは勉強熱心だね」

「うん！ だつて楽しいもん！」

アリシアの笑顔にみんなは癒されている。

「あ、そうや。クリスマス会、今年はどうする？ 去年はいろいろあつてお流れだったやろ？」

「にやはは……迷惑おかけしました」

「全員で集まれる場所がいいわね」

「それじゃ私のうちにするか？ ヴィータも喜ぶやろうし！」

「ユーノ君やファイアちゃんも呼ぼうか！」

「そうね」

「そして今年の初詣は夜にいかない!？」

アリサの提案に全員は快く頷いた。

それからシホとなのは家に帰ると士郎がなにやらせわしなく動いている光景を目にする。

「お父さん、どうしたの？」

「ああ、なのはにシホちゃん。なに、今年もクリスマスケーキの予約が殺到していてね。色々忙しいんだよ」

「ああ、翠屋ですか……？」

「うん」

それではのはとシホはこの話を出していいものかと迷う。

しかし士郎はすぐに二人の様子に気づき、

「どうしたんだい……？ なにかその日に用があるのか？」

「う、うん……。その日にはやてちゃんのおウチでクリスマス会をするの」

「そうか。それじゃ楽しんできなさい」

「手伝わなくて大丈夫ですか……？」

シホがそう聞くが、

「その件に関しては問題ありませんよ。シホにナノハ」

「うむ。今回は余達が手伝うのだ。問題ない！」

「ですからなのは達は楽しんできてください」

三人の王様にそう言われて頼もしいと感じた二人は任せることにした。

そしてクリスマス当日。

はやての家では盛大にパーティーが開かれていた。

「士郎。手伝うぞ」

「ああ、アインス。頼む」

「タマモも手伝いますよ、ご主人様！ それにアインスはお腹を大事にしてくださいな？」

「そうだな。ならキャスターはそっちの料理を頼む」

「はいです！」

士郎達が忙しく動いている中で、

「えー…本日はこうして無事にクリスマススパパーティーを開けて嬉しい限りです。別に長つたらしく話もなんですから楽しんでいってください！ メリークリスマス！」

『メリークリスマス！ わー！』

それで盛り上がる一同。

「あ、はやてちゃん。うちからクリスマスケーキを持ってきたよ！」

「ありがとな、なのはちゃん。やっぱり翠屋のケーキが一番やからな」

それからみんなで歌を歌ったりプレゼントを交換したり途中で乱入してきたアルクエイドとかとも騒いだりして一夜を明かした。

そして今年は最後にみんなで大晦日と一緒に過ごし夜に初詣にいき、全員で初日の出を見て新年を祝った。

そして二月。バレンタインデーでいっぱい小さいチョコを作ってクラスのみんなや家族などに配った。

そして…春、聖祥大附属小学校の卒業式。

「…もう、つて感じがあるわね。私は…」

「それは私も…」

「私もだよ、フェイト」

「私もや」

小学校に途中編入のシホ、フェイト、アリシア、はやて四人はそう言葉を漏らしていた。

「ほらほら！ 辛気臭いのはなしにしなさい！」

「アリサ…」

「アリサちゃん…」

「こうしてもう卒業だけど中学でもまた一緒になるんだからまだ大丈夫よ」

「そうだよー」

「そうだね」

「でも、先の見えた話だけど中学を卒業したらもう私達全員管理局に完全就職という流れになるのよね。高校には行かずに…」

「ま、その時はその時よ。自分でいくつて決めた道なんだからそこを目指すだけよ」

「そうだね、アリサ！」

「ええー！」

「それより…もう答辞は覚えたの？ 学年代表さん？」

「あたしを舐めないでよね、シホ。そんなの簡単に覚えたわ！」

「アリサすごい…」

「それじゃ応援、いるか？ アリサちゃん？」

「それはやめて…。喋れなくなるから…」

「アリサちゃんのお父さんも来られるっていう話だから緊張するね」

「…うん、すずか。少しだけ」

それでシホ達は体育館に向かい、卒業生授与式が始められた。

そしてアリサは学年代表として答辞を読み、読み終わったら拍手が起きた。

そして無事卒業式も終わり、教室で、

「私…とっても感動したわ」

はやてがアリサの答辞を聞いて涙を流していた。

それを宥めていると寄せ書きなどの話がやってきて全員で回したりして最後を楽しんだ。

そして最後に教室を出ていき、学校の外に出ると家族達が待っていて、

「…なのは、シホちゃん。卒業おめでとう」

「うん！」

「はい…」

「今日のこの良き日は皆で盛大に祝おうではないか！」

「そうですね、ネロ」

「なのは、卒業おめでとう」

「お姉様、おめでとうございます！」

「アリサ。格好良かったぞ」

「アリサよ。目立っておったぞ」

「ありがとう。パパ、アサシン！」

「フェイトー！ アリシアー！ 卒業おめでとう！」

「一段落しましたらプレシアさんのお墓にもいきましようか。二人が立派に卒業したつ

て報告に…」

「はい、母さん…」

「うん、お母さん。プレシアお母様に会いに行くんだ…」

「そいつはいいな。俺もついでに着いていくぜ」

「すずかお嬢様！ おめ、おめでとうございます！」

「もうフェアリン。泣きすぎよ？」

「だって……！」

「それよりすずか。これからも頑張りなさいね？」

「そうですスズカ。これからです」

「うん、お姉ちゃん！ ライダー！」

「主はやて、ご卒業おめでとうございます」

「ありがとう、みんな！ 私、頑張ったよ！」

「はい。この数年、見させてもらいましたから……」

「はやてちゃん、おめでとう……！」

「はやて！ おめでとう！」

その後、五家族全員で盛大に宴会を開いて騒いだそうだ。

……みんながみんな、祝福され小学校を卒業していった。

そしてまた一歩、大人になっていく。

第百一話

『士郎の子供と魔術事件』

S i d e シホ・E・S・高町

ミッドチルダ新暦69年。

私達が中学生になってから私、なのは、ファイアが教導隊入りを果たした。フェイトも執務官試験に三度目にしてようやく受かってみんなで喜んだ。はやても上級キャリア試験を一発で合格。

アリサ、すずか、アリシアも正式に管理局入りして魔術師として魔術事件対策課に入った。

私達が全員軌道に乗り始めたこの年。

そんな時にビッグな事件が舞い込んできた。

それはというと…。

「あーあー…」

「こら ツルギ」。あんまり駄々をこねるな」

「ほら。いないいないばーだ」

アインスが一人の赤ん坊を抱いていて士郎があやしている。

「アインス、私にもアインスとご主人様との「子供」を抱かせてくださいな？」

キャスターがその赤ん坊の事を士郎とアインスの子供という。

実はというアインスは去年の夏から秋辺りから妊娠していることが発覚したのである。

そして今年の五月過ぎに待望の男の子を産んだのだ。

名前は『八神ツルギ』。

名前の由来は『八神の家族を守るツルギであれ』というらしい。

士郎もそれでアインスと出来ちゃった結婚をして衛宮の性を『八神』に変えてとうとう八神の家族に完全に仲間入りしたようである。

そして二人の左薬指には結婚指輪が光っていた。

私達も小学6年生の夏過ぎに行われた結婚式では盛大に二人を祝福したのは記憶に新しい。

ウエディングドレスを着たアインスもその時、お腹に宿った命を慈しみ、お腹をさすりながらとても幸せそうに微笑んでいた。

大師父もちやつかり式場に参加していたのには驚いたものだ。

どうも水晶玉で撮影をしていたようでそれをリンや桜に見せに行くときを出して笑っていた。

私はそれでリン達が怒るのか、はたまたそれとも心から祝福するのか…怖くて想像できなかった。

「…それにしても士郎。いつの間にアインズと子供を作っていたのよ？ 付き合いたしたのは去年の春過ぎでしょう？」

「いや…話すタイミングがなかったのだ。それに…話せるものでもないだろう？」

士郎は穏やかに笑う。

「そう…。それでツルギ君なんだけど、どんだけハイブリッドなの…？」

士郎の魔術回路は108本だからそれに40本プラスする形で148本に増えている。

しかもリンカーコアは士郎とアインズから引き継いだのかまだ生まれたてなのにすでに推定魔導師ランクがAAA+持ち、9歳の時のなのと同じだわ。

成長すれば魔力も増えてすぐにオーバーSランク突破は夢でもない…。

さらにどういわけか魔術適性が調べてみたら士郎も私と同じく『平行世界の運営』を使えるからなのか属性は『剣』に『地水火風空』の全属性を持っているアベレージ・ワシオという豪華ぶり。

一年前に再度私と素材や資金を集めて作り出した二個目の宝石剣も将来的にはツルギ君に継がせるようだし。

そして固有結界も調べた結果宿している。士郎もそのうち使える魔術を魔術刻印として託すのでしょうか…？

宝石剣や固有結界、投影魔術を使用する際に全面的に補助してくれるような魔術刻印を作り出して。

将来は魔導師としても魔術師としてもどちらでも大成できる能力を持っているわ。

………なにこんなチートな子供を生み出しているのよ？」

「…いや、………まですごい子供が生まれるとは私もアインスも予想だにしていなかったのだ」

士郎はそう言つて幸せそうに笑う。

アインスも一緒になつて笑みを浮かべながらツルギ君を抱っこしている。

もう士郎は私がまだ掴んでいるのかも明確にできていない幸せをどうの昔に掴んでしまったらしい。

「…力に溺れない真つ直ぐな子に育てるのよ？ ギルガメッシュのような傲慢な性格になつたら嫌だからね？ ツルギ君のおばさんとして…」

「分かっている。それでシホ。折り入つて頼みがあるのだが…」

「はいはい、分かっているわよ。ツルギ君が成長したら魔術指南をお願いしたい、って言うんでしょ？」

「頼めるか？ 私では強化に投影、解析、変化…そして固有結界に宝石剣の効率的な運用方法しか教えることはできないからな。」

その分お前はイリヤの魔術とシルビアさんの過去から続く千年の膨大な知識がある。教えるのにはこれ以上適した人物はいない。

キャスターでは呪術しか教えることしかできないからな」

「ご主人様…それはあんまりですよ」

キャスターの声はスルーするとして。

「わかったわよ。魂の繋がったよしみで等価交換は無しで教えてあげるわ。」

でもその変わり魔術講座は厳しくいって私の基本方針である『無茶は絶対にしない』を徹底させてツルギ君は私色に染めるからね？」

「ああ、シホなら安心だ。なにせ私自身なのだからな。異論はない」
「私もシュバインオーグになら構わないぞ？」

そこにアインスが声を上げる。

ちなみに今アインスは育児休暇に入っていて管理局で働いているのは士郎の方だけである。

はやて達が帰ってくれば全員がツルギを甘やかしているが女性率が圧倒的に多い八神家なので将来が少し女性の好意に疎い鈍感な子になりそうで心配です。

新しい家族なのだからリインも「末っ子ではなくなりました！」…と前に喜んでいました。

そこに今の今まで黙って話を聞いていたアルトリアが、

「シホ。ぜひツルギには私の剣を学ばせたい…きつと才能があると思います。私の直感がそう告げています」

「あー、別にいいんじゃない？ でもそれだとシグナムと奪い合いになるわよ？ きつと…」

そう、シグナムがツルギに将来私の剣を教えると張り切っていたのは聞いている。だからきつとアルトリアとは奪い合いになるだろう。どっちが師匠になるかで。

ま、私は剣より魔術を教える担当だから別に争う人はいないから気にしないけど。

「にしても士郎とアインスはどっちかっつていうと銀か白に近い髪色なのに元の私達の髪色に似たのか私と同じ朱銀色をしているのね。目も赤いし」

「そして将来は投影の酷使でやはりシロウと同じく白髪褐色肌になってしまうのですね。わかります」

「それはダメだ！ ツルギには投影は酷使しないように言い含めておかねば…」

「そうね。アインス」

そこに珍しくイリヤから目を覚まして、

《ツルギ君。可愛いわね。私もシホとおんなじでおばさんになるのかしら…?》

「そうじゃないの? イリヤ」

《優秀な魔術師に育てようね、シホ!》

「うん、そうね」

「ただいまー」

「ただいまですー」

そこにはやてとリインの声が聞こえてきた。

「おかえり。はやて、リイン」

「おかえりなさい。主はやて、リイン」

「うん。ただいまや。あ、シホちゃんがいる。今日は管理局の仕事はええの?」

「うん。ちよつとツルギ君を少し見に来ただけだから」

「そつか。それにしても私ももうおばさんかあ…まだ十三なのにな。…ツルギ君、将来

お姉ちゃんと結婚するか…?」

「あゝ?」

「まだ言葉もわかりませんよ。主」

「そっか。それは残念や」

はやてはそれで結構落ち込む。

本気だったのかしら…？

「ツルギ君、やっぱり可愛いです！ 私の大事な弟ですよ！」

「そうやね、リイン」

はやてはすぐに復活したのかアインスからツルギ君を受け取り二人であやしている。

「なにかベビー用品を買ったほうがいいわね」

「そうだな。優秀な子に育ってほしいからな」

「士郎も完璧に父親よね。堂に入っているわ」

「私の夫なのだから当然だ。シユバインオーグ」

「暑いわね…」

「暑いですわね…」

アインスの発言に私とアルトリアは暑いを連呼する。

「ご主人様マスターの気持ちはもう不動のもんですからね」

「…キャスターはもういいの？」

「そんな！ まだあきらめませんよ。私はたとえ愛人でもいいから良妻としてご主人様マスターが死ぬまで付き合う所存です！ だって私はサーヴァント魔ですから！」

「だ、そうよ？ 羨ましいわね、士郎」

「ええ、本当に…」

私とアルトリアは怖い笑みを浮かべながら士郎を見る。

「…なんだ？ 今回は私はなにかした覚えはないぞ」

「ま、もう立派な旦那さんなんだからそこらへんは大目に見てあげようかしらね」

「ええ」

「…と、そういうええだ。話は変わるがシホは教導隊ではどうなんだ？ しっかり学んでいるかね？」

「当然よ。なのはやフィアと一緒に頑張っているわ」

「そうか。一応魔術事件対策課にも席は置いてあるんだからたまには顔を出せ。」

まだそんなに魔術による事件は起きていないとはいえ前にすずか嬢がデスクワークの仕事で寂しがっていたぞ？

魔術師である彼女等が任務に呼び出されるのは稀だからシホ達と違いしつかりと学校も通えているしな。

学校帰りに魔術事件対策課によるのがほとんどだ。

だから学校でも任務であんまり会えないと愚痴を聞いているが…」

「わかっているわよ。すずかの気持ちには答えてあげたいからね」

「ならいいんだが……」

そこで今までツルギ君をあやしていたはやとリインが、

「それより私達な。まだ気の早い話だけど中学を卒業したらミッドにお引越りする予定なんよ」

「そうなんだ」

「うん。それにうちも人数がツルギ君も入れてかなり増えたから同部屋もきつきつになつてきたし広い家を購入したいのが本心や」

そうなのである。

今ははやとの部屋にはヴィータと一緒にいる。

シグナムはシャマルと。

士郎はアインストツルギと。

……と、いう感じでもう部屋がストックがなくパンパンな状態らしい。

それなら確かに広い家を買いたい気持ちは分かる。

ピピピッ！

そこでアンリミテッド・エアに通信が入ってくる。

「はい。なんででしょうか？」

『シユバインオーグ三等空尉、至急本部に救援お願いします。魔術事件です。それもか

なり特大の!』

「ツ! 分かりました! すぐに救援に向かいます!」

それで通信で居場所などが送られてくる。

「事件か…?」

「ええ。魔術事件対策課の出番らしいわ! 行ってくるわ! アルトリア、いきましょ

う!」

「はい、シホ!」

「ネロにもすぐに来てもらおうよう念話を取るわ!」

「シホちゃん、頑張つてな!」

「アルトリアお姉さん! 頑張るです!」

「ええ、はやて!」

「はい、リン!」

そして家を出るとすぐにネロがやってきた。

「奏者よ。事件か!」

「ええ。この三人でいきましょ!」

それで転送ポートを開いてもらい私は魔術事件対策課の隊舎へと転移した。



シホ達が対策室に到着してすぐに司令室へと向かい、

「ミゼさんー！」

「来たわね、シホさん」

魔術事件対策課の隊長、ミゼ・フロリアンが司令室で待っていた。

ミゼは聖杯大戦事件以降のこの数年、魔術をシホに鍛えてもらいこうして魔術事件対策課の一番偉い位置に立っていたりする。

出世すればするものだ。

ちなみに属性は風で得意魔術は空気による切断である。

「さっそくだけどここの世界に向かってもらおうわ」

向かう世界は第72管理世界『アトラス』。

それを聞いてシホは某有線式サトリの属していた錬金術を主に使用しているアトラス院を思い出したとか。

でもすぐに表情を引き締めて、

「今この世界は魔術による大災害が発生しているらしいわ。すでに犠牲者も大勢出ているらしいの」

「はぐれの魔術師が大魔術を決行しましたかね？」

「おそらくね…それですぐに向かつてほしいの。魔術事件では私がトップについているけど実力的にはあなたが一番隊長に似合っているからね」

「わかりました。それではシユバインオーグ三尉、行つてきます」

「任せたわ」

それでシホはすぐにアトラスへと向かった。

その世界ではすでに大魔術が執行されているらしくあっちこつちで地震や噴火が起きていた。

「これは…！ 私一人で片付けられるものなのかしら…？」

「シホ、一人ではありません。私とネロもいます」

「そうだぞ、奏者！」

「そうね、悪かったわ。それじゃさっさと魔術師を見つけてこの災害を止めるわよ」

「了解しました！」

「うむ！」

それでシホは広域スキャンの魔法をかけて魔術師の反応をキャッチする。

そこには半狂乱気味になっている一人の男がいた。

「壊れろ！ 壊れろ！ 全部壊れちまえ!!」

男の足元には巨大な魔法陣が描かれておりそれはシホ達の世界のものと一緒だった。シホはどうやってこの魔法陣を入手したのか疑問に思ったがすぐに捕まえるために行動を起こした。

「その人！　すぐにこの魔術を停止しておとなしく捕まってください！」

「はははははッ！」

「くっ…！　聞く耳持たずか！　アルトリア、ネロ！　あの男を捕縛するわよ！」

「わかった！」

「了解しました！」

シホ達はすぐに男に向かって駆け出す。

男は杖を掲げて、

「いけ！　ガンド！」

その男はいきなりガンドを放ってきて咄嗟にシホ達はそれを避けるが、

「どうやってガンドの知識を！」

「二人の男が俺に色々教えてくれたのさ！　そいつは名前は知らねえが俺のこの力を認めてくれた！　だからこの力を使ってこの腐った世界を滅ぼしてやる！」

シホはすぐに高位の魔術師が背後にいと睨み、男に魔術による尋問をかけようと算段を考えていた。

「…とにかくあなたは逮捕します！ 投影開始」トレリス・オン

シホが投影したのはマグダラの聖骸布。

「さつさと捕まりなさい！ 私に触れぬ！」ノリ・メ・タンゲレ

それによつて男は抵抗するが瞬くもなくマグダラに縛り上げられた。

「男を確保！ 次に魔術の執行を止めます！」

『了解！ お願いするわ』

「はい。投影開始…是、破戒すべき全ての符」トレリス・オン

シホはすぐにルールブレイカーを投影して魔法陣に刺した。

それによつて魔術儀式は破戒され災害は収まった。

「魔法陣消滅！ 災害もストップしました。これより男を連行します！」

『よくやったわ。さつそく本局に連絡を入れるわ』

「了解！」

それでシホ達は男を連行しようとするが、

「くくく…」

「なにがおかしいの…？」

「いや、これくらいで俺達魔術師は止められないぜ？ あの男はそんな小さな器じゃ

ねえからな…」

「…連行する前に聞くことが増えたわね」

「そうですね、シホ」

「そうだな、奏者よ」

それでシホはイリヤ譲りの魔眼を駆使して、

「あなたをそそのかしたその男の情報をつきなさい。全部ね」

「ぐうつ…!? お前も魔術師だったのか!」

「そのとおりよ。それよりさっさと暗示に掛かりなさい」

「くつ…うつ…」

それで男は意識を手放して次第に喋りだした。

「…俺にこの魔術の力を教えてくれた奴は…」

「奴は…?」

「…わからない…名前は一切名乗らなかった…俺はただ魔術を習っただけだからな…」

「なにかその男の特徴は…?」

「頭まで隠す黒いフードに…右目が潰れていて一本の線が入っていた…」

「他にはなにかない…?」

「……………」

男は無言。

「…そう。それじゃ移動するまで寝ていなさい」

男はシホの言葉でそのまま気絶する。

「隻眼の男ですか…名前も教えない徹底ぶりとは。

シホ、これからその男は様々な魔術事件を起こす可能性があります。

アヴェンジャーを召喚したのもそいつかもしれないね…？」

「そうね、アルトリア」

「これから大変になると余は感じるぞ」

「これからは隻眼の男を中心に調べを行う必要性が出てきたわね。さつきアルトリアが言ったように最悪、そいつは私達に対抗してサーヴァントももしかしたら召喚する術を持っているかもしれないから」

「侮れませんね…」

「うむ」

「さ、それよりこの男を連行しに行こうか。暴動を起こさないように男の魔術回路の封印もしくちやいけいなしね」

「はい」

「そうだな」

そしてシホは男を管理局に引き渡した後、もう一度アトラスへと出向いて、復興支援

をしていた。

でもこの災害で中心地域のほとんどの人は家や居場所を失ってしまっていた。

中には親が災害で死んで子供だけというのもあちこちで見られた。

その中でシホは自身と同じ魔術の気配を感じ、そちらへと向かうと、そこには二人の子供がいた。

二人は年の頃は六歳、七歳くらいの緑色の髪の子と女の子。

シホは小さくかがんで二人の目線に合わせて二人の頭を撫でながらも一緒に解析をかける。

「…ねえ、あなた達のお父さんお母さんは…?」

「死んじゃった…」

「そう…ごめんなさい。気が利かなくて…」

「赤いお姉さんは…?」

「私…? 私は時空管理局武装隊・戦技教導隊・そして魔術事件対策課のシホ・E・S・高町よ」

それだけで役職を言っても二人はわからない顔をする。

「…って、子供に難しい話をしてわからないわよね? それじゃシホって名前だけ覚えておいて」

「…はい、シホさん」

「それであなた達のお名前は…？」

「私は『ラン・ブルックランズ』。七歳です。そして弟の…」

「ぼ、僕は『レン・ブルックランズ』。六歳です」

ランは普通に答えてレンは少し弱気に答える。

「そう。ランにレンね。よろしくね」

「うん」

「それだけで…これから二人は管理局の保護施設に入ることになるんだけど、いいかな？」

「…うん。もう私達には住む場所はありませんから構いません」

ランが涙を流しながらそう答える。

「そう。それじゃ将来私と一緒に暮らさない？」

「…えっ？」

シホはそんな事を言い出す。

「私ね、数年したら自立してミッドチルダで暮らそうと思っているの。それでもしよかつたら二人も一緒にその時に暮らさない？」

「でも、いいの…？」

レンがそう聞いてくる。

「ええ。幸い私には二人の従者がいるわ」

「シホ！」

「奏者よ！」

そこにちやうどよくアルトリアとネロがやってきた。

「シホ、どうしたのですか？ 念話でちよつとすぐに来てと言ってきて…」

「うん。私、この二人を将来保護しようと考えているの」

「奏者よ。それは本気か？」

「うん。それにはリンカーコアと一緒に魔術回路があるのよ。解析かけてみて分かったわ」

「そうですか…」

「それで将来悪の道に進まないように私が二人を育てようと思っているの」

「奏者がそう決めたのなら余は一向に構わんぞ？ 子供よ、名は？」

「ラン・ブルックランズです」

「…れ、レン・ブルックランズです」

「ランにレンか。余はネロだ。よろしく頼む」

「でしたら私はアルトリアです。よろしくお願ひします」

「うん、ネロさんにアルトリアさん」

「…よ、よろしくお願いします」

二人は戸惑いながらも言葉を交わす。

「それじゃランにレン。当分の間は保護施設に入ることになるけど私が一人立ちしたら迎えにいくわ。その時に二人には私が魔術を教えてあげる」

「魔術…？ 魔法じゃなくて…？」

「なんですか、それ…？」

「二人が宿している力の事よ」

「？」

シホは笑みを浮かべて、

「またその時に詳しく教えるわ。その時までまたね」

「はい」

「…は、はい」

シホ達とラン、レンはそれで一度別れた。

将来二人は魔導と魔術を両方使える立派な魔導魔術師になれることだろう。

シホは帰ったらすぐにリンディと桃子にその話を通して二人を将来引き取る準備をし始めたのである。

第二百話

『続・なのはのシホちゃん観察記

録+α』

S i d e 高町なのは

私とシホちゃんとファイアちゃんの三人で航空戦技教導隊に無事入隊することができて嬉しい気持ちになった。

これからはもつと頑張つていこうと奮起している。

でももうみんななどの約束で無茶なことはしないようにね。

それと話は別になるけど土郎さんとアインスさんとの間にツルギ君という男の子が生まれた。

去年の夏頃にできちゃった結婚式をしたのもよく記憶に残っている。

アインスさんが投げたブーケはエイミイさんが受け取っていたけどやっぱりクロノ君狙いなのかな…？

シホちゃんとはやてちゃんが二人して「おばさんになっちゃった…」と呟いていたの

は、まあしょうがないよね？

でも、時々はやてちゃんが『逆・光源氏計画』なるものを発案しているというが、ツルギ君、土郎さんやシホちゃんと同じように将来が苦労人になっちゃう運命なのかな…？ 少し心配です。

閑話休題

今日は私とオリヴィエさん、シホちゃん、アルトリアさん（魔力軽減ミニサイズ）、ネロさん、はやてちゃん、リイン、土郎さん、キャスターさんの八人での任務です。

なんでも危険なロストロギアの回収任務ということらしいです。

それでシホちゃんに話し掛けてみた。

「今回のロストロギアはなんなのかな、シホちゃん…？」

「さあね。でも危険指定なんだから心して挑んでいくわよ。それとなのは私が守るからね…？」

「う、うん…」

わー！ わー！…ど、どうしよう!?

シホちゃんの「守るからね」と言ったときの顔がとてもかっこよかったよ。

それで思わず私は顔を赤くしてしまった。

そこにシホちゃんが、

「…？ どうしたの、なのは。顔が赤いわよ？」

「にやつ!? な、なんでもないよ!？」

「そう…?」

ふう…なんとかがまかせた。

こういうのはさすがちゃんとファイアちゃんだけだと思っていたのにもしかして私も、シホちゃんが好きなのかな…？

いけないいけない!

そんな事を考えたらさすがかちゃんに怒られちゃうの!

「…——あのな…? 私達の事、忘れてへんか? なのはちゃん…」

そこにはやてちゃんが話し掛けてきた。

でも、そんなことはないよ?

ただ、今回久しぶりにまたシホちゃんを観察してみようと思っただけだしね。

「…そか? なんかなのはちゃんがシホちゃんに落とされたように見えたんやけど…」

「そうなのですか…? はやてちゃん…?」

「そんなこと、ないよ…?」

「…なるほど。あれがシホのキラースマイルか。私にはもうアインズがいるからな。私はどうしないように気を付けるとしようか」

「士郎。パパ、えらいです！」

士郎さんもなにやらブツブツと呟いている。

だ、だからそんなんじゃないんだってば!!?

それで顔を赤くしながら腕を振るうが自分を客観的に見てみるとまさにシホちゃんのキラースマイルにやられていると判明してしまったのでなんとも言えなくなってしまうました…。

それを感じ取ったのかオリヴィエさんが念話で、

《なのはも自覚したほうがいいですよ?》

《なにに!? オリヴィエさん!》

《さあ…なんでしようね? フフ…》

霊体化しているために表情が分からないけどきつとオリヴィエさんはなにか含みのある笑みを浮かべていると思うんだ…。

うう…私、そんな気持ちなんて…フェイトちゃんだけで、つて! フェイトちゃんともそんな関係じゃ…関係、じゃ…?

あれ…? なんだろう。私とフェイトちゃんてなんだかシホちゃんかずかちゃん

みたいな事をもしかしてしよっちゆうやっていた…？

いやいや、そんな事は…。でも、していたのかな…？

迷うの…。

「ナノハは先程からかなり百面相をしていますますがなにか考え事でしょうか…？」

そこにアルトリアさんがそう問い掛けてきた。

うん。でもこの話はきつとはやてちゃんがいる場でしちやいけないんだと思うんだ。

じゃないとよくはやてちゃんに相談して自爆しているシホちゃんの二の舞になっ

ちやうから。

だから、

「なんでもないよ。アルトリアさん」

「そうですか。てつきりまたシホによる犠牲者が出たかと思いい心配しました。シホは最

近は女性キラーですからね」

それでアルトリアさんはため息をついていた。

でも内心私はホツとしていたり…。

そんなこんなで私達は現場へと向かった。



そして現場に到着してみるとあのジュエルシードの時のように色々な動物が暴走してお互いに争っていた。

さらによく見てみれば一番奥の方に唯一動かない巨大な生物がいる。

そこに今回のオペレーターの人から通信が入ってくる。

『…調べました結果、あの生物からロストログアの反応が感知されます』

「了解しました。魔力ダメージで倒した後、その生物を転送ポートにて移しますので手配をお願いします」

『わかりました。お気をつけてくださいね』

それで通信は切れる。

その通信は全員聞いていたようで、

「…さて、それじゃちやちやと片付けますか」

「だな。同時に仕掛けるぞ、シホ」

「ええ、士郎。アルトリアとネロ、オリヴィエ陛下はおそらく親玉の生物の力によつて暴走して襲い掛かってくるだろう生物達をお願い。

なのはとはやて、リイン、キャスターは後方で三人の援護を。

私と士郎が親玉を叩くわ！」

『わかった（わかりました）！』

それですまずアルトリアさんやネロさん、オリヴィエさんの三人が敵陣に乗り込んで
いって次々と暴走した生物を倒していってシホちゃんと土郎さんの通る道を確保して
いく。

そしてそれを合図にシホちゃんと土郎さんは同時に駆け抜けていく。

「よし！ それじゃ援護といこか！ なのはちゃん！」

「うん！ はやてちゃん！」

私達も砲撃魔法をチャージしつつでも放てるようにしながらも最近のシホちゃんの
強化の魔術の訓練で眼力の強化をしてよりクリアな光景が眼前に広がるようになった。

それでシホちゃんと土郎さんの動きを見ているとふと思う。

「なんか…もうシホちゃんと土郎さんは別人といってもいいんだけどやっぱり同じ動き
をするね？」

「そやね」

「そうですねー」

「はいです」

はやてちゃんとキヤスターさんとリインにも賛同をもらおう。

動きの一部としてはシホちゃんが右から仕掛けていき、土郎さんが逆の左側から仕掛

けていく。

しかし足幅を合わせたかのように二人は交互に剣で暴走生物を攻撃していく。

時にはシホちゃんが下がって後方から魔力矢を放ち士郎さんが剣を振るっていくが、敵の動きが変わるとすぐにスイッチが入り士郎さんが後方に下がりシホちゃんが前に出ていく。

これこそまさに以心伝心、阿吽の呼吸と言うにふさわしい動きを二人は繰り広げている。

やっぱり息が合っているなあ…。

あれほどの動きは長年の付き合いがないとそうそうできないと思う。

もともと一人の人物だったから姿は変わっても中身は一緒って事だね。

そんなことを思っているとアルトリアさん達ですでに他の暴走生物の鎮圧に成功したらしく私達と同じようにシホちゃんと士郎さんの戦いぶりを観戦していた。

「うむ。やはり奏者と士郎は魂は同じなため同じ動作だな」

「そうですね、ネロ。それだけが変わらないでしょう」

「士郎さんとはかくシホはシルビアと魂の融合をしているのですから少しは違う動きをすすると思いましたが…やはり主人格の方が圧倒的に我が強い傾向があるようですね」

三人はそれぞれ二人をそう評価しているようです。

そんな時に士郎さんが暴走生物の放つ触手に捕まってしまいました。

「士郎！ 油断しないで！ 私ノリ・メ・ダンゲルに触れぬ！」

シホちゃんがマグダラの聖骸布を投影して士郎さんを救出していた。

「すまん、シホ。油断した……！」

「もつと気をしつかり引き締めなさいよ？ 士郎にはもう家で待つてくれている妻と子

供がいるんだから」

「ああ。わかつているさ！ さて、あの触手はやつかいたがそろそろ決めるとするかね、

シホ……？」

「あら……？ 奇遇ね。私も決めようと思っていたところよ？」

「やはり考える事は同じということか」

「そうなるわね？」

それでシホちゃんと士郎さんは同時にニヤツとだぶるような笑みをする。

違う顔なのに同じ笑みに見えるってなかなかないよね。

「士郎はやっぱりシホちゃんとのコンビが一番力を発揮するなあ〜」

「そうですね。ご主人様マスターはシホと一緒ににかをする時がなんだかんだで一番生き生き

しています。思わず嫉妬してしまうほどに……」

「あそこまで揃った動きができるというのはユニゾンデバイスとしましては見習わなけ

ればいけませんです！」

はやてちやんとキャスターさんやリインもそう思っているらしいね。

もう二人はシンクロしているよね。

そしてシホちゃんと土郎さんとはどめと言わんばかりにデバイスを弓形態にして同時に構えて次も同じく魔法版カラド・ボルクを弓に番えて集中する。

この瞬間、やっぱりなにか気が引き締まる思いになる。

宝具を使うわけでもないのに思わず緊張して手に汗を握ってしまふ。

そして溜めに溜めた魔力矢はその真価を發揮する。

「カラド・ボルク!!」

二人が同時に叫び放たれた二本の矢は暴走生物に直撃し爆発を起こす。

：ちなみに余談だけど二人の放つカラド・ボルクはシグナムさんのシュツルム・ファルケンと同等かそれ以上の威力らしい。

宝具を使わなくてもやっぱりシホちゃん達は強いって証拠だね。

閑話休題

それで暴走生物は爆発の余波もくらって地面に倒れこんだ。

うーん：今回はシホちゃんの観察もあつたけどあんまり砲撃ができなかったので不完全燃焼気味です。

最近のシホちゃん是一緒の任務ではあまり前に出させてくれないからね。

：まあ、あの事件のせいでもあるんだけど妙に過保護気味なんだよね。

それは確かに嬉しいけど、やっぱり隣で一緒に戦いたい…！

だからこの任務が終わったらシホちゃんに色々と相談してみようと思います。

それから事後処理も終わらせて暴走した生物を転送ポートで本局まで護送し任務は終了となった。



それから今日はこのままはやてちゃんの家で一緒に食事をする事になっています。ただどこでもシホちゃんと土郎さんの息が合っていました。

二人で料理を作る際に、シホちゃんが土郎さんになにかを聞こうと口を開く。

「土郎」

「塩だな…?」

「ええ」

ただシホちゃんが士郎さんの名前を呼んだだけなのに士郎さんはすぐに希望の調味料を出して渡していました。

シホちゃんは「さすが！」と言わんばかりの顔です。

他にも、

「シホ、次は…」

「大丈夫よ。もう終わっているから次の作業をこなしましょう」

「了解した」

おそらく料理の盛り付けを頼もうとしたのだろうけど士郎さんがなにかを言う前にシホちゃんは終わらせていました。

それに士郎さんは不満な表情はせずむしろ「当然だな」と言わんばかりの笑みを浮かべていた。

ここまでくるともうプロの領域だね。テレビに出れるかもしれないです…。

それで思わず手伝いもできず手持ちぶさたでいるアインスさんが二人の息の合ったコンビネーションを魅せられてキャスターさんと一緒に嫉妬していたり。

それから八神家全員が帰ってきて一緒に食事をしました。

その際にヴィータちゃんはその敏感な舌で料理を作った人を言い当てて実に美味しそうに食していた。

“ギガうま”の言葉も聞けてシホちゃんは満足そう。

それから後片付けも終わらせてツルギ君とも少し遊んだりした後、私達ははやてちゃんの家を後にして家へと帰る途中、

「なのは。今日一日は少しぼおーっとしていたけど大丈夫…?」

「え? そうかな。でも結構有意義な一日だったよ? シホちゃんと土郎さんはやっぱり同じなんだな…って思いも感じたしね」

「そう? ま、もとは同じ人間だったんだからそうそう違いもないでしょうしね」

「うむ。しかし余は奏者が一番だからな」

「ありがとね、ネロ」

「なるほど…。今日のナノハはシホを観察していたのですね?」

「そのようですね。アルトリア」

アルトリアさん達にはばれちゃったか。

だけど観察してみて分かったことがあるの。

そんな二人でもやっぱり違いはあると思うの。

それはシホちゃんは私達高町家を大事にしている事。

だけど土郎さんの違いははやてちゃん達八神家を大事にしている事。

それはもう二人の違いだと思う。

やっぱり出会いのきっかけはあったと思うけど私はシホちゃんと出会えて家族になれてよかったという想いを抱いた。

この素晴らしい出会いに感謝しなくちゃ。

そしてその感謝を少しづつシホちゃんに返していくんだ。

そう思った色々と有意義な一日でした。まる。



…少し時間を戻して、

Side 八神はやて

今日はなのはちゃんやシホちゃん達との合同任務や。

でも今日はなのはちゃんの心はどうやらシホちゃんに向いているようや。

顔を赤くしたり考えていたりと見ていて面白かったわ。

そして少し気付いたことやけどなのはちゃん、シホちゃんに落とされかけてんのと

ちやうかな…？

シホちゃんのキラースマイルはこの私をしてもたまたまにドキツとしてしまうほど強烈やからな。

シホちゃんラバーズが増えるのも時間の問題かもな。

…ん？ 私はないのかって？

今のところはないんね。

私はみんなを見ているほうが楽しいしなあ。

それにツルギ君の『逆・光源氏計画』を発案している身としては計画は慎重に練らんとあかん。

だから今は私の恋はお預けやね。それにもしかしたら将来好きになれる人が見つかるかもしれへんしな。

色々と考えはあるけど今はまだ先の長い話やからゆっくり考えていこか。

閑話休題

それから暴走した生物を倒す時にシホちゃんと土郎のコンビネーションを見せ付けられて思ったことはただ一つや。

…シホちゃん、お願いやからアインスの席をとらんといてな。

この一言につきるな。

家に帰っても料理を作る際、その息の合いようはすごいしな。

そんな、土郎とシホちゃんがくつつくようなもしもはもう結婚してるし起こらないとは思うけどやっぱり心配やね。

だからこれからも一家の大黒柱としてみんなをしつかりと見守っていこうと思った一日を振り返っての感想や。まる。

第三百話

『アリシアのフェイト観察記録』

S i d e アリシア・T・ハラオウン

なのはから聞いたなにげないシホの観察記録の内容。

それを踏まえて私も本日はフェイトを観察したいと思います。

といつてもなのはの家じゃないんだけどフェイトも結構朝が早くてよくランサーに屋上で稽古をつけてもらっている光景が目立つ。

それで私も朝早く本日は起きることにしました。

それでマンシヨンの屋上に向かってみるとやっぱりフェイトとランサーがバルデイツシユとデバイス版ゲイボルクをぶつけ合っていました。

：さすがに宝具は使わない。ランサーのゲイボルクはただでさえ一つでも傷を受けたら治りにくいんだから使えないし。

それよりフェイトも中学生になってかなり成長した。まあ私も同じくらい成長しているんだけどね。

それで前までは持って5分くらいのランサーとの本気ではなくともかなり力の入った打ち合いも最近は一〇分くらい保つようになった。

強くなってきているよねフェイトは。

「おし！ マスター、早朝訓練はこれくらいにしとくか」

「う、うん……！」

ランサーもフェイトの限界を見極めて訓練を終了させた。

ランサーに限らずサーヴァント全員は普通に達人の集まりだから基本的に教え方は言葉より体で覚えさせるのが資本だから自然と経験と技量が身につけて上がってきているんだよね。

それで最近シグナムとも五分五分の勝負ができるようになったとフェイトは嬉しそうに言っていた。

でも最上級の稽古なので文句や弱音を言ったら管理局で普通に訓練している魔導師の人達に失礼なのでフェイトは愚痴や文句は一切言わない。

真面目だよ、フェイトは。

「はあ、はあ……ありがとランサー」

「ああ。また腕を上げたなマスター。……そうは思わねえか、アリシアの嬢ちゃん？」

やっぱりランサーは私が見ているのに気付いていたみたいだね。さすがだね。

それで私は二人分のタオルを渡しに行く。

「ありがとう、アリシア」

「あんがとな」

そういつて二人はかいていた汗を拭いていた。

…つていつてもランサーはフェイトと比べたらほとんど汗は出してはいない。

やっぱり英霊の体力は異常だね。

それからリンディお母さん、クロノお兄ちゃん、フェイト、ランサー、アルフ、私の六人で朝食を取る。

その時でも私はフェイトを観察していたらふと目が合つて、

「…？ アリシア、なにか用？ じつとこちらを見てきているけど…」

「な、なんでもないよフェイト？」

「そう…？」

危ない危ない…ばれるところだったね。

「ところでアリシア、今日は何にか用事はある…？」

「ううん、とくにはないよ。せいぜい魔術事件対策課に帰りにシホ達と一緒に少し顔を出す程度かな？」

「そっか。それじゃ今日は一日学校に行けるね」

「そうだね、フェイト！」

それじゃ今日は一日フェイトをじっくりと観察できるね。

「そんじや今日は海釣りにでもいつてくるかね。どうだ、クロノの坊主は？ 付き合うか？ 俺の釣りのとっておきの穴場を教えてやるぜ？」

「いえ、お誘いは嬉しいんですが今日から少し長期任務で当分は帰ってこれそうにないんですよ。」

釣り師魂としては是非とも参加したいんですがね…」

「そうか。艦長つつう職は大変だねえ…」

ランサーがそうしみじみと呟く。

そこに代わりにアルフが声をあげて、

「それじゃ代わりにあたしが付き合うぞ！ ランサー！」

「いいぜ？」

どうやらランサーとアルフの今日の一日は決まったらしい。

最近フェイトの魔力を食わない形態を模索していたようにだけど子供姿で落ち着いたようである。

ランサーと一緒に釣りをしているアルフの姿を想像したら、なんだろう…？

子連れ狼…？ アルフが狼なだけに。

「フェイトが保護責任者をしている。『エリオ』ともアルフは子供の姿で会いに行っているしね。」

「フェイトと同じで色々複雑な事情もあるけどエリオは可愛いよね♪」

「フェイトの可愛がる気持ちも分かるというものだ。」

「それとクロノお兄ちゃんもアースラの艦長職の仕事が忙しそうだなによりである。」

「第二次成長期で背もかなり伸びて男子平均を越えたと喜んでいたので伸び盛りだね。声も変声期で低くなって男らしくなったし。」

「それと仕事場ではエイミィと一緒に頑張るのだろう。」

「なにやら最近いい雰囲気になる事が多々あるので士郎さんとアインスさんに続いてゴールインは近い、かな…?」

「私とフェイトがたまにお姉ちゃんと呼ぶとまんざらでもない表情をエイミィは浮かべるしね。」

「このまま本当の義姉になってもraithたいものだね。」

「それから聖祥大附属中学校の制服に着替えてリンデイお母さんに行つてきますと言つて私とフェイトはマンションを出る。」

「それでいつもみんなが集まる合流地点に到着すると先になのはとシホの二人がいた。」

「おはよう！　なのは、シホ」

「おはよう。なのは、シホ」

「あら…今日は遅かったわね、二人とも。それとおはよう」

「おはよう。フェイトちゃん、アリシアちゃん」

四人で朝のあいさつを交わし残り三人が来るのを待つ。

その間に色々と話をする。

「そういえばなのは。最近髪が伸びてきたね？ ツインテールから変えたサイドポ

ニー…似合ってるよ？」

「うん、ありがとうフェイトちゃん。だから変身時以外の通常時はツインテールは卒業しようかなって思っているんだ」

「いいと思うわよ？」

「それにシホちゃんも少しイメージチェンジしてもうでかい黒いリボンが定着してきたよね。最近は普通にリボンをしながらも髪を流しているもんね」

「ええ、まあやつぱり慣れね。いつまでも嫌々しているわけにはいかないから」

うん。シホの今の髪型はアルクエイドさんに聞いた話だと某猫の使い魔っぽいらしいね。

前に志貴さんがシホの髪型を見て懐かしがっていたし。

そして少し髪型を変えただけで一気に可愛くなったもんね。

あ、髪といえは、

「そういえばアリサも髪をバツサリ切っちゃったよね？ 切ってきた日は失恋でもしたかと色々騒ぎが起こっていたからねえ〜…」

「うんうん。でもそれでアリサちゃん少しかっこよくなったよね」

そんな話をなのはと一緒にしていると噂をすればって感じで、

「誰がかっこいいって…？ なのは」

「アリサちゃん、髪を切ってからかっこよくなったもんなく」

「うん。アリサちゃん、かっこいいよ」

そこにアリサ、すずか、はやての三人が合流してきた。

いつも通りの仲良し七人組の集合である。

「…ん？ もしかしたら…アリシアちゃん？」

「うん？ なに、はやて？」

はやてが神妙そうな顔つきで話し掛けてくる。なんだろう…？

「もしかしてやけど今日はなにか面白いことやつとるんやないかな…？ 私の勘がそう

告げとるんやけど…」

さすがはやて…するどい！

それで小さい声で、

「うん：なのはの話を聞いてみて私もしたくなっちゃって今日はフェイトを一日観察しているんだー」

「(そうなんかあ。それなら面白い光景を色々で見れると思うよ?)」

なにやらはやてが瞬時に色々と計画を練ったみたい。

これからが楽しみだね！



それから学校に到着するとクラスが違うのでそれぞれ別れる。

一年の時は全員一緒だったのに二年生になったら私達はそれぞれ別のクラスに分かれてしまったのだ。

でも運良く私とフェイトは一緒のクラスなので観察していられるよ。

でもなのも一緒のクラスなので席替えの時にフェイトはすぐになのはと隣り合わせになってしまったのでお姉ちゃんとしては少し悲しいです。

ちなみに他のクラスではアリサとはやてが一緒のクラス。

シホとすずかが一緒のクラスである。

でもこういう時に男子とは校舎が別々になっているので女子同士で気軽に話せるか

らしいね。

この男女別々は一緒じゃない事に文句もいう生徒も多少いるけど学校行事では一緒になれるので限定された出会いを楽しみにしている女子も結構いる。

とにかく学校ではちよっかい出してくる男子がいらない女子の花園なので別段シホとすずか、なのはとフェイトの異常な仲の良さは気にされていない。

というより小学校の時から知っている生徒もかなりいるので生暖かい目で黙認されていると言ってもいい。

閑話休題

つとと、学校でのちよつとしたうんちくはいいとしてフェイトの観察をしなきゃ！
それで見ろ。

授業中だというのになのはとフェイトは念話で会話をしているのかマルチタスクで授業を受けながらもあまりペンは走っていない。

しばらく見ているとなにやらなのはが涙目になっていてフェイトがそれを慰めている。
る。

なにかもめ事かな…？

でも少し見てみるとどうやらなのはが授業の問題が分からなかったらしくフェイトが丁寧に説明している。

管理局に勤めているとどうしても仕事と学校の板挟みになってしまっているので勉強が疎かになってしまうのもしようがない事であるんだ。

それでも普通に両立できていて成績がトップクラスのシホとアリサだけが異常なのである。

それにすずかもそれなりに勉強ができています。

マリーさんにデバイス製作の教えを教授してもらっていて最近では簡易ながらも魔術式デバイスも作成できるようになったと言っていたから機械工学に関してはやっぱり才能なんだろう。

すずかは将来はシホの補佐を一番に目指しているというけど技術者としても十分やっていけるよね。

これだから才のあるもの達は…。

きつとシホがこの話を聞いたら謙虚そうに「私は勉強に関してはズルをしてるだけだから…」と言うだろう。

そしてすずかも柔らかい笑みを浮かべながら「こういうものは応用が大事なんだよ…？」と言うと思う。

最後にアリサにいたっては「できて当然よ！」と豪語するだろう。すぐに想像できる。

よく三人とも性格が顕れているね。

最後にはやても八神大家族のみんなの手も借り受けて自在に自身の力として使いこなして色々と多方面に手を出しているのが才覚を遺憾なく発揮しているね。

みんなやっぱすごいよね。

私も負けていられないね…！

頑張ろう！と思っていた矢先の事だった。

「アリシアさん、この問題を解いてくれませんか…？」

いきなり先生に指されてしまい、聞いていなかった私は「わかりません…」と言うしかできなかったよ。悔しい…。



そしてお昼になってみんなで屋上に集まってそれぞれお弁当を出して食事をとっている時に、

「アリシア。今日はどうしたの？ いつもなら普通に問題を解けているよね？」

フエイトの質問に苦笑いを浮かべる事しかできない自分がここにいる、と…。

「まあまあフエイトちゃん。アリシアちゃんだつてミスする時だつてあるもんや。だから多めに見てやつたらどうや…?」

「ありがとう、はやて!」

「ええよ。それよりな? フエイトちゃん、ちよつとええか?」

「なに? はやて?」

「うん。ここで提案なんやけどフエイトちゃんつて今好きな人つておるか?」

はやてがなにやら爆弾な質問をフエイトに投げ掛けた。

それでフエイトはあわててすぐに顔を赤くする。

おー…これも意外な一面つて奴だね。

「い、いないよ!」

フエイトはすぐに否定するけど、はやてはもう自分のペースにフエイトを引き込んで
いる。やつぱりやり手だね…!

「そうか? ランサーさんとかええと思うんやけどフエイトちゃん的にはどう思つとる
ん?」

「どうつて…ランサーはランサーだよ。私のパートナーでシホに続く戦闘や魔術のお師
匠様。」

最近はルーンの魔術も教えてくれるし仲はいいと思うよ……」

「うーん……そか。ランサーさんにはまだそこまでの感情は起きてないっていう事やな？」

そうみたいだね。やっぱりランサー不憫だね……。

「そ、そういうはやてはいないの!?! そういふ人は?」

フェイトがせめてもの反撃とばかりにはやてにそう聞くが、はやては余裕の笑みを浮かべて、

「私か? そうやねえ、将来株としてツルギ君を狙っているっていうのはダメか……?」

「それは反則だよ! それにそうなるとはやてはシヨタコンになっちゃおうよ!?!」

「おおいに結構や! それにもしかしたら運命の相手が見つかるかもしれないっていう夢も持つとるしな〜」

フェイトの反論ものらりくらりと避け続けるはやて。

そのたくみな言葉の手腕。行動力。

そこに痺れる、憧れるう!

…失礼、変な電波を受信したみたいだよ。

そしてそれを見学していた他の面々はというと、

「さすがはやてね。その言葉巧みな話術はなかなかのものよ」

「そうね、シホ」

「シホちゃん、私はシホちゃんの事が好きだからね？」

「え、ええ。さすが…」

「にやはは。さすがちゃんは相変わらずだね…」

なにやら話に便乗したのかさすががまたシホに告白している。

シホも否定しないところを見るともう両思いなのかな…？ 後でこっそりシホに聞いてみよう。

そしてフェイトの観察に戻るとかなりはやてにやりこまれてしまっていてもはや反論もできず涙目のフェイトの姿があった。

…うん。お姉ちゃんとして言わせてもらおうね？

フェイト、可愛い！

私の妹は可愛いです！と声を大にして叫びたい。

…と、また思考が暴走していたみたいだね。自重しなくちゃ。

そしてはやてはとどめの言葉を言い放つ。

「それじゃフェイトちゃん、なのはちゃんは好きなん…？」

「…う、あ…そ、それはなのは好きだけど…それは友達として…友達と、して…？ あれ？ 私、どうしちやっただろう？ なのは！ 私は、私はね…!?」

「う、うん…言ってみてフェイトちゃん…!」

「私は…あう…ダメ! 恥ずかしくて無理!!」

フェイトはそれで逃げるように弁当を片付けて足早にその場を離れてしまった。

なのはが「フェイトちゃん!?」と叫ぶがもう聞こえていないだろう。

「…はやて? 少しやり過ぎたんじゃない?」

シホがそう話す。

うん。確かにやり過ぎたかもね。フェイトの本音が聞けそうだったので残念な気持ちはあるけどね。

それでお昼休みは終了し、なのはと二人で教室に戻つてみるとフェイトは机に顔を預けて突っ伏していてなにやら燃え尽きているようだった。

こんなフェイトも見るのは初めてだね。観察観察と…。

こんな時になのはと隣り合わせの席っていうのはダメージが大きいよね。

午後の授業もフェイトはなのはの顔を直視できずにずっと顔を赤くしていた。

いや、やっぱりフェイトは可愛いにや〜。

それで一日は終了していき帰りのこと、魔術事件対策課にシホ、アリサ、さすが、私の四人で寄つていった後、私は真つすぐに家に帰りました。

そして夕食時にリンディお母さんに今日はどうだった？と聞かれてフェイトはなにかを思い出したのかまた顔を赤くしているのです。

これは私ことアリシア・T・ハラウンが妹のフェイトを一日観察して色々なフェイトの姿を見ることができた楽しい一日でした。まる。

第一百四話

『ファーストキスの話』

…シホとすずかが放課後で赤みがさした教室で夕焼けをバックにしてキスをしているのだった。

しばらくして二人はくつつつけていた唇を離し顔を赤くしながらも、

「…えへへ。初めてキス、しちやったね…シホちゃん」

「そうね…。私も初めてのキスだから恥ずかしいものね」

『……………』

そう言つて二人は初々しく恥ずかしがっていた。

そしてそれを影でこっそりと見守るなのは達。

どうしてこんな状況になったのかは少し時間を遡ることになる。



S i d e 月村すずか

朝のことだった。

「すずかー？ 今入っても大丈夫？」

学校に行く準備をしている時にお姉ちゃんが部屋をノックして入ってきていいかと話をしてきた。

なんだろう…？ いつもなら食事時に話をするのになにか大事な話なのかな？

でも私は断る理由もないのでお姉ちゃんを部屋の中へと招きいれた。

お姉ちゃんが入ってくると部屋の椅子にどかっとながれ物のように座り一言、

「…ねえ、すずか？」

「なに、お姉ちゃん？」

「ちよつと聞きたいことがあるんだけど…シホちゃんどこまでいった…？」

「へ…？」

なんか優しい笑みでお姉ちゃんはシホちゃんの事を聞いてきた。

どこまでつて…？ どう言う意味だろう？

「お姉ちゃん、どこまで、つて…？ どういう意味？」

「あー…そこから説明しないといけないわけね？」

「うん。教えて」

「そうね…それじゃまず。まずか、あなたはシホちゃんの事が好きなのよね？」
「うん！」

「即答、か…さすがね」

当然だよ、お姉ちゃん。

ほかの人たちに変に思われようとその想いは変わらないよ。

そう意気込んでいるとお姉ちゃんはニカツとした笑みを浮かべて、

「手は繋いだことはある…？」

「？ 何度もあるよ」

「お風呂は…？」

「一緒に入ったことはあるよ」

「吸血行為…」

「その、シホちゃんは私が苦しい時をすぐに気づいてくれて吸わせてくれるよ？」

「そう…そこまではまあ当然か」

それだけため息をつくお姉ちゃん。

だ、だから一体なんなの…？

「それじゃまどろっこしく言うのもなんだけど…さすがに性的なことはまだ早いと思うし、ずばり聞いわ」

ゴクリツ…。

何を聞かれるのだろうかと思わずつばを飲み込んで拳を握りしめて身構えてしまう。

「シホちゃんとキス、したことあるの…?」

「えっ…?」

一瞬なにを言われたのか分からなかった。

シホちゃんと…ええと、鱧、じゃなくってキス…?

あれ? そういえば私とシホちゃんってそういう事一切したことがないよね。

あれ? あれ?

私がメダ〇ニをくらったかのように顔を赤くして混乱をしていると、

「ふふふうくやつぱりまだそこまでの関係までには行っていなかったのね。いやあ、ウブ

ねえー」

「お、お姉ちゃん! からかわないでよー!」

「ごめんごめん、すずか。でも真面目な話、恋の相談なら付き合うわよ?」

「そ、それは嬉しいけど…まだ今は清らかなお付き合いをしたいんだけど…」

「甘いわよ、すずか!」

ズビシッ!

「ツ~~~~!!?」

おでこにデコピンを食らってしまい私は思わず痛みでうずくまってしまふ。

「い、痛いよお姉ちゃん…」

「あらら。そこまで力は込めていなかったただね。でもね、すずか。そんな悠長なこと言っているファイアットちゃんに先を越されちゃうわよ？」

「ファイアットちゃんに…？」

「そう。すずかはシホちゃんに告白しているから一日の長があるけどね。そんなものは余裕でもなんでもないわ。

突き放すくらいの行動を取らないとファイアットちゃんにすぐに追いつかれちゃうわよ。

「すずかはシホちゃんがファイアットちゃんに告白されている光景を見たいの…？」

「それは…嫌だよ！」

そんな光景を私はすぐに想像してシホちゃんがファイアットちゃんに取られちゃうイメージが浮かんた途端、私は大声で叫んでいた。

「そう。ならばは行動あるのみよ」

「行動…」

「そう。手をつなぐ次のステップとしてシホちゃんとキスをするのよ」

「で、でも…恥ずかしいよ」

「ああもう……いつもは大胆なのにどうしてこういう時に限っては臆病になっちゃうのかしらね、この子は。もつと大胆に行きなさい！」

そうお姉ちゃんに叱られてしまった。

でも、急にキスをしようと言われてもシホちゃんも簡単にしてくれそうにないし…。

「幸いまだシホちゃんも過去の話を聞いた限りではキスの経験もないらしいみたいだしシホちゃんとの初キスをするとっておきのチャンスよ、さすが」

「そ、そうなのかな…?」

「そうよお。もつと自信を持っていきなさい。あなたなら出来るわ」

「う、うん……。頑張ってみる」

そうお姉ちゃんには言っておいた。

でも、いざこういう時になってみてやっぱり困る。

こういう時どんな行動をしてシホちゃんとキスまでのステップを登っていけばいいのかわからない。

出る時にライダーにも相談してみたけど、

「ふふ…スズカ。悩みなさい。悩んで悩んで、そして人はたどり着くものです」
なにか達観したような言葉をもらってしまった。

それから延々とそのことを考えながらみんなとの集合場所へと向かうとすでに全員は集合していた。

「あ、すずか。遅かったわね？」

「おはよう、すずかちゃん」

「おはよう、すずか」

「うん、おはようみんな」

みんなと挨拶を交わす。

でもそこにすぐにシホちゃんが私が悩んでいるのを見抜いてきたのか心配そうな表情になって、

「すずか…？ どこか具合が悪いの？」

「え…？ なんでそう思ったの？」

「いや、なんていうかいつもの元気がないからいつかのようにまたなにかを思いつめているんじゃないかなと思って…」

すごい。シホちゃん、やっぱりそういうことに関しては敏感だね。

でも、まだシホちゃん本人にこの事を打ち明ける勇氣はないので曖昧な表情をしながら

ら、

「なんでもないよ。シホちゃんは気にしないで…?」

「そう…? でも無理があつたならすぐに教えてね?」

「うん…!」

シホちゃんの本心からの心配が良心を痛める。

シホちゃんとのキスに関して悩んでいたなんて恥ずかしくて話せないよ。

そんな時だった。

アリサちゃんとはやてちゃんがちよいちよいつと私の肩をつついてくる。

どうしたのかな…?」

それで振り向くと二人はニヤニヤした笑みを浮かべながら携帯を取り出してみんなに見えないように見せてくる。

そこに表示されていた内容に思わず赤面する。

それは二人共同じメールで宛先は当然お姉ちゃん。

内容としては、

『さすがにシホちゃんどうファーストキスをするか悩んでいるから手助けしてやってくれないかな? 二人にならずかを任せられるからお願ひね?』

などという内容だった。

お姉ちゃん…!?

思わず空を見上げてどこかにいるだろうお姉ちゃんに心で叫んだ。

「まあ、すずか。あたし達にどんと任せなさい?」

「そうやね。初めてはいい思い出を作ってやるからな」

アリスちゃんとはやてちゃんはいいい笑みでそう話してくる。

うう…話が発展しすぎだよ。

少し不安だ…。

でも、もう引き返せないんだなって思つて覚悟を決めている私がここにいた。

それから二人は学校に向かいながらもほかのみんなには内緒で瞬時に面白おかしくも計画を立てていく。

まずアリスちゃんはシホちゃんにあることを聞く。

「ねえ、シホ。ちよつといい?」

「なに、アリス?」

「つかのこと聞くけどシホってキスしたことあるの…?」

「ぶっ!?! アリス、と、突然なにを…!?!」

「いや、興味本位だから気にしないでいいわよ?」

「本当にい…?」

「当たり前じゃない！」

シホちゃんは疑いの目でアリサちゃんを見るけどアリサちゃんは無難にやり過ごしていた。

まずはシホちゃんの経験を聞きたいらしい。

「そうねえ…？」

シホちゃんは腕を組みながらも、

「……………あれ？　そういえば実際にキスした経験、なかったりするのかな…？　アヴェンジャーとの記憶も結局は夢の世界だし…」

「それじゃまだしたことがないわけね？」

「そうなるわね。でもいきなりどうしてそんな話を…？」

「だから興味本位だって」

「そう…？」

それで満足して聴き終えてきて戻ってきたアリサちゃんは私の肩に手を置き、

「すずか。頑張りなさい。最初を奪うのよ！」

「う、うん…！」

「次は私やね？　さて、なにをしようか。あ、いいこと思いついた。シホちゃんの本心を聞いてみよか」

ニヒヒ。という感じのチャシャ猫のような笑みを浮かべたはやてちゃんがシホちゃんに寄っていくと、

「なあなあシホちゃん？」

「なに、はやて？」

「私とキス、してみん…？」

「はああああー！？」

「えええええー！？」

シホちゃんと、それとはやてちゃんの計画だと分かっているつもりでもつい私も大声をあげてしまった。

事情を知らないのはちゃん達も大声を上げている始末である。

「な、なんでいきなりそんな話なの!？」

「だって、シホちゃんまだキスをしたことがないんやろ？ だったら一番乗りしておくのも面白いかなと思ってなあー？」

「そ、そんなのだめよ！」

「なんで？ 別にええやん。友達同士の友情のキスみたいなもので軽く考えておけばええんや。外国やと結構普通なんやろ？」

「でも、やっぱりダメよ！」

「なんで…？ 事情を説明してくれへんと納得できへんなあ…？」

…なんか、はやてちゃんの考えがわかったかもしれない。

きつとシホちゃんになにかを言わせようとしているんだ。

それでシホちゃんは顔を赤くし口ごもりながらも、

「や、やつぱりそういうのは好きだな同士でしたほうがいいと思うのよ…。だから私は

そんな軽い気持ちではキスはできないと思う…」

「ほんなら好きな人同士でならオツケイなんね？」

「ま、まあそういう事になるのかな？」

「だったら…！」

そこでアリサちゃんとはやてちゃんは同時に声をあげる。

「好き同士のすずかちゃんとならキスはしてもええってことやよね？」

「そうよねえ。そこのところはつきりとしておいた方が今後のためになるわね」

「え、えええー…？」

シホちゃんはさらに顔を赤くしていた。

でも、そこでシホちゃんはようやく二人の魂胆に気づいたのか「ハッ！」とした顔に

なり、

「…アリサ、はやて。なにか二人して企んでいるでしょ？ さつきからなにか私、誘導さ

れている気がするんだけど…」

「なんでもー?」

「ないわよー?」

「嘘おっしやい!」

シホちゃんはそれで怒声を上げるけどそこに計画外の人達の声が聞こえてくる。

それはアリシアちゃん、

「でもシホもすずかの事が好きなんでしょう? だったらファーストキスくらい捧げて

もいいんじゃないかな?」

「あ、アリシア…!」

純粹にそう言うアリシアちゃん。

私はもう聞いているだけで恥ずかしくてなにも言えないよ…。

「きっかけは大事だよ。シホちゃん。今回がいいチャンスかもしれないよ?」

「そうだね。気持ちはまだ伝わっているんだから後は行動あるのみだよ、シホ」

「なのはにフェイトまで…!」

どんどん追い詰められていくシホちゃん。

い。なのはちゃん達も最近あまり進展がなかった私達に結構焦らされていたらしいみたい。

実にいい笑顔である。

それでみんな敵になってしまったこの状況ではやてちゃんが私に話しかけてくる。

「（それじゃさすがちゃん。私達ができるのはここまでや。後はもうドカン！と気持ちをつつけていきな？）」

そう小声で言われて私も退路がないことを再確認して、そして、

「あ、あのね、シホちゃん…」

「…すずか、あなたは私の味方よね…？」

シホちゃんの涙目状態に止めを刺すようで心が痛むけど、でも私もシホちゃんとキスをしたい…！

だから思い切って言ってみる。

「わ、私もシホちゃんとキスをしたいな…？」

私がそう言った瞬間、みんなが「おー！」とどよめく。

シホちゃんも爆発したかのように顔を思いつきり赤くさせて耳まで真っ赤にさせて、視線を彷徨わせてゴニョゴニョと幾度か言葉を零しながらも、

「…そ、そう。でもすずか。それじゃ今日の放課後まで待つて…。私も心の準備をした
いから…」

「うん。待つてるね。シホちゃん…！」

私も嬉しくなって笑顔でそう答える。

それでシホちゃんもそれっきり無言になってしまった。

それから学校に到着して自分達のクラスに向かう。

二年生ではシホちゃんと一緒にのクラスになれたけど他はばらけちゃったんだよね。

でも体育の合同授業や休み時間、お昼の時は一緒になれるから別に気にしないかな。

私はシホちゃんと一緒にのクラスになれただけで嬉しいし。

でも今日は朝からあんな話になっちゃったからシホちゃんは私とあまり目を合わせ

ようとしな。

きつと色々と考えてくれているんだろうな。

放課後が楽しみだね。

そんな事を今日一日は考えているのだった。



S i d e シホ・E・S・高町

すずかから「キスをしたい」と言われてしまい私はみんなにも見捨てられてしまった

のである意味色々と考えてしまう。

すずかとも今日はなかなか顔を合わすことができずに考え事をするこゝしほしばしば。休み時間やお昼休みになっても話しかけることができずに他の女子からも心配されること度々。

授業も一応聞いてはいるが今日は頭に入つてこないこと何度も。

はあく…情けないぞ、シホ・E・S・高町！ もとは男子だったんだから好きな子の告白事にはちやんと答えてあげないといけないわよ!?

男がすたるわよ。もう男じゃないけど…。

…なに、一人ツツコミをしているんだか。

そうね、もう私もすずかのが好きなのよね。

今更すずかに初めて告白された時の気持ちを思い出している私がここにいる、と…。

もう、今がその時だ！というフレーズが頭を過ぎる。

なぜか葉巻を啜えたリンのイメージも頭に降つてきて『あなたの人生、正直にいけよ…』と言いつ残してヤサグレ顔で赤い車で去つていく。…うん、今後はヤサグレリンと命名しよう。

そして普段は休眠しているイリヤの意識を起こして一応相談してみると、

《シホの気持ちに正直にいったらいいと思うわよ？ お姉ちゃんはシホの恋を応援して

いるから。

あ！ なんならアインツベルンの知識にあるもので錬金術で擬似男〇器も一時的に作り出せるけどそのうち使う…？

ちゃんと子供も作れる優れものだよ！ 配偶（子）的に女性同士だと必ず生まれくる子供は女の子だって決まっているけどね〜

《イリヤさん、本当に勘弁してください…。今はキスだけで精一杯ですから》

《そう？ 残念ね…。でも使いたい時が来たら行つてね。全力で応援および協力はするから！》

《ええ…。そんな時が来たらね…》

それでイリヤは再び眠りにつく。

でも、そんなものまで作り出せるなんてさすが、アインツベルンの錬金術は世界一いーろーっ！ と豪語するだけあるわね。

そんな、どうしようもない事を考えているうちに今日の一日の学校のスケジュールも消化していつてあつという間に放課後になってしまった。

やばいなあ…今日一日悶々と考えていたがやつぱりすずかの気持ちに正直に答えるという選択肢以外が見つからない。

そうだね…よし！ ここは思いっきりが一番ね。

それで私は携帯で放課後にすずかを呼び出すことにした。

「場所は私達の教室。窓際で待っています…っと、メール送信」

すずかには学校の授業に加えて管理局でのお仕事。さらに部活も兼任している。

ま、それはアリサも生徒会に入ってはいるけどとても私には両立はできなさそうな事をしている。

そんな事はいいとして、

「はあ、ドキドキするわね…」

そろそろすずかの部活も終わりメールを見ている頃だろう。

私は爆発しそうな心臓をなんとか抑えながら教室ですずかが来るのを待つ。

そして日も暮れ出てきたそんな時に、

「シホちゃん…」

ついにすずかが、教室にやってきた。



シホとすずかとはこうして一日で向かい合うのは朝ぶりである。

でもそれだけで長い時間だったと思う。

すずかはシホに火照った顔のまま近寄っていく。

向かい合うシホもかなり顔が赤い。

「シホちゃん…朝の返事、聞かせてほしいな」

まですずかがそう切り出す。

「ええ、すずか…。そのね、色々と考えたけどやっぱり気持ちには正直に行くべきだと思つたのよ。だから、キス、しようか…」

「うん！ 嬉しいよ、シホちゃん…」

そして少しずつ二人は顔を近づけていく。

吐息が近くで感じられるほどに近づいた二人は示し合わせたかのように同時に目をつぶる。

二人の手はすでに両手とも合わせられていて力強く握られていた。

そしてついに二人はその唇を重ねる。

「んっ…」

そしてしばし静寂が二人を包み込む。

キスをしている時間は少しのはずなのにかなりの時間が経過しているような錯覚に陥る。

二人は息が苦しくなったのか少しして唇を離す。

そして文頭の状況になつてゐるのだった。

「…えへへ。初めてキス、しちやったね…シホちゃん」

「そうね…。私も初めてのキスだから恥ずかしいものね」

二人がしみじみとそう言い合つてゐるとなにやらひそひそと声が聞こえてくる。

それは教室の外でシホとすずかの二人はすぐに振り向き廊下を見る。

そこにはなのは達五人の姿があつた。

五人とも「やばっ…！」という顔をしていて見られていたことを知つたシホとすずかは顔を赤くしながら、

「なに、見ているのよー！」

「みんな、いるなら言つてよー！」

『ごめんなさーい！』

五人はシホ達から脱兎のごとく逃げ出すのだった。

二人はそれでやれやれと言いながらも、

「これからも、仲良くしていこうね。シホちゃん」

「ええ。すずか…」

こうして二人は今後、普通に軽いキスだけならする仲となる。

後になのは經由でその事を知つたファイアットはえらく落ち込んだという。

これがある意味オチなのかもしれない。

第百五話

『誘拐されるツルギ。激怒する』

一同』

…とある裏社会のもの達がすずかとアリサの誘拐ということにごとく失敗し任務に携わった部下がそのほとんどが刑務所入りを果たしているというのが現状である。

「…隊長。もうあきらめませんか？ なにやら月村とバニングスには凄腕のボディガードがいるようで手を出した瞬間にそくぎに刑務所入りは確定だとまことしやかにささやかれていますし…」

それに自分達とは別の組織がいくつも壊滅させられたという話ですしね」

それは高町一家（士郎、恭也、美由希、シホ、アルトリア、ネロ）の精鋭揃いがことごとく壊滅させているからである。

シホの解析魔術と忍謹製の数々の道具が効果を發揮しているのもう何度もいくつもの裏組織は一網打尽にされている。

すずかとアリサはある意味裏組織をおびきだすオトリと成り果てていたりする。本

人達もそこは承知済みなのでオツケイである。

もしうっかり連れ去られても魔術を行使すれば簡単に抜け出せるし最悪アサシンとライダーが助けに入るのがテンプレートと化してきていた。

ある意味裏組織以上にシホ達は裏の人間でもあるのでそんな事は日常茶飯事である。

そんな裏事情を知らないこの隊長と部下は、

「…うむ、それは俺も聞き及んでいる。だからもう上にはおまえの言った内容は何度も伝えたんだがな…」

「また突っぱねられましたか…?」

「ああ。どうにかしてなんとしてでも捕まえろと口を酸っぱくして言われたよ。下の俺達は命令に従うしかないのさ」

「そうっすね…」

それで隊長の男とその部下はため息をつくのだった。

だがそこに部下の男が名案だと言わんばかりに、

「でしたらまず関係を持つ周りの奴らを誘拐して外掘りを埋めていく作戦はどうですかね…?」

「それは妙案だな。よし、では計画を立ててみるとしようか」

男達はそれで動きだす。

しかし後にこの行為を後悔をする事になるだろう。

彼らは逆鱗を触る行為をしてしまう。

今引き返していればよかったのだと思う時がやってくるだろう。

そう思ったのは刑務所の檻に入れられた後であった。

いと哀れ…。



S i d e ヴ ィ ー タ

今日は管理局の仕事がないから一日ゆっくりとしていられる。

なのも落ち着いてきたしまた墜ちることもないだろう。

また無茶をするかもしれないという不安はあるがそれはお互い様だ。

あたしもはやて達の危機だったら無茶をしてしまう可能性はなきにしもあらずだからな。

ま、せつかくの休みなんだからゆっくりしよう。

それに今のあたしの最近の楽しみといえば…、

「あーうー……」

ツルギを可愛がることだからなあ。

アインスの奴も家にいるにはいるが最近はお近所のママさん達と色々話をするのも楽しいらしい。

うちには料理、家事、洗濯できる奴は多いがそれでも人が多い分、それを一日で終わらすとなると必然的に忙しくなる。

だからツルギの面倒を見れないときは誰かが代わりに面倒を見ることがうちでは常識となっている。

今日はあたしの役割担当の番である。

ツルギは可愛いからあたしはいつでも面倒を見てやりたいが他の奴らもそれは同意見だからわがままを言うわけにもいかない。

それにたまにできるからこそいいんだ。

そう思い、そしてあの驚きの日々をあたしは回想する。

……

……

……

それはアヴェンジャーとの戦いの後からさらに仲良くなつた士郎とアインス。そんな時に二人は何度か夜に帰つて来ないことが度々あつた。

なにをしていたのかは聞き出してないが色々頑張つていたのだろう。

そんな夏過ぎの事だつた。

アインスが何度もトイレに駆け込み嘔吐することが多くなつた。

それで家族一同で何事か!?…という事態になりすぐさま病院に運ばれたアインス。

病院での先生の一言、

「これは、つわりですね…」

「つわり…?」

あたしはそんな単語を知らなかつたがはやてはすぐに分かつたらしく、

「それじゃ先生、まさかアインスは…!」

「はい。妊娠しています。おめでとうございます」

それで家に帰つたあたし達は一気に喧騒ムードに包まれた。

士郎もそれで今出せる金額の指輪を至急で買つてきて、

「お前を必ず幸せにする。だから私と結婚してくれ…!」

「嬉しいぞ、士郎…。必ず幸せにしてくれ…信じているからな」

「ああ……」

と、指輪を渡しながらのプロポーズをあたし達の前で堂々とアインズに言っていた時はもうかなりの騒ぎだった。

アインズもそれで最近かなり緩い涙腺で嬉し涙を流していた。それからだな。

色々アインズの事を気遣うようになったのは。

キャスターも嫉妬をするかと思われたのに逆に清々した顔で、

「ご主人様とお幸せになつてくださいな。アインズ……」

と言っていた。それからはもうギスギスな空間は形成されなくなった。

それでやつとはやてやあたし達も胃薬を飲まずに済むようになった。

そして二人はそのまま結婚という流れになつてありつただけの知り合いを呼んで盛大に結婚式は開かれた。

ゼルレツチの爺ちゃんなんか「はははっ！ なかなか愉快だな！」と豪快に笑つていた。

それだけ士郎の結婚が嬉しかったのだろう。

ブーケを投げた時なんかエイミイが受け取っていたからあれはなにかあるな？…と睨んだりもした。

それから妊婦さんとしてアインスはプールに通ったり編み物を始めたりと色々手を出し始めた。

みんなに支えられながらアインスはお腹を少しずつ膨らませていつてはやてやなのは、シホ達が中学生にあがった年の五月にツルギを出産したんだ。

出産現場には士郎しか立ち会えなかったけど部屋の中から聞こえてきた産声を聞いた時は感動したもんだな。

リインなんか感動しまくって涙を流していたほどだ。

そんな事を思い出しながらツルギが乗っている乳母車を押している時だった。

なにやら不穏な気配がするなあ…。

なんだ？ 誰かに見られている感じがする。

でも魔力の気配はしないからただの人間か？

するとたちどころにあたしとツルギは変な黒づくめの集団に囲まれてしまった。

「…なんだ、てめーら？」

あたしが殺気を出して威嚇するが慣れているようであまり効果は見られなかった。

「…お前達を人質にしてさらわせてもらう。恨むなら月村とバニングスを恨むんだな」

「あー…」

…なるほど。話は読めた。こりゃ最近アサシンとライダーのおかげで誘拐されなくなっただるかどアリサの代わりにあたしとツルギを誘拐しようという魂胆か。

そしてあわよくば人質を増やしていくという算段だろう。

あたしがこの場で全員ねじ伏せてもいいんだけどそれだとなんか面白くないな…。
こういう奴らは一人いたらGのごとくいっぱい出てくるといった感じだからな。
ここはひとまずおとなしく人質になっておくとしようかな。

それに念話で伝えれば士郎やシホは般若のごとくこいつらを倒しに来るだろう。

それまで待とう。少し演技も入れておこう。

「ふ、ふざけんな！ あたしとツルギに手を出したら承知しねーぞ!」

「気丈なお嬢ちゃんだ。だがもう我らはどんな手を使っても作戦を成功させないといけない!」

「やめろー! ツルギから離れろー!!」

と、演技をしながらも捕まるあたしとツルギ。

…ふん。地獄を見ればいいさ。

怒ったら怖えからな。士郎達は…。



Side 八神はやて

なかなか帰ってこないヴィータ達を心配しているアインスが家の中にいた。

「…ヴィータ。どうした？ もう二時間以上も帰ってこないじゃないか？ ツルギをそろそろおむつを替えて寝させたいというのに…」

アインス、焦りすぎや。

オロオロとし過ぎやで？

そこにもうすでに全員帰ってきていた他のみんなはというと、

「ヴィータがこんなに遅いとは珍しいな…」

「ヴィータちゃん、ツルギ君を連れ回しているのかしら…？」

シグナムとシャマルがそう心配していた。

それで私は提案というように、

「そんならヴィータに念話をとってみるか？ 妨害がない限りは繋がると思うしな」

それでヴィータと思念通話を行う。

《ヴィータ？ 今どこにおるん…？》

《はやてか…？ いや、今はちよつと場所は分かんない》

《…どないしたん？ なにか揉め事か》

《みんなにはツルギと一緒に誘拐されたと伝えておいて》

《なっ…!?!》

誘拐やて…!?!

《ま、あたしのみみずから捕まっただけどな》

《つて、へ…? どない事?》

《いや、前に何度もみみずかとアリサが誘拐されそうになったけどアサシンとライダーが逆に捕まえているとかいう話を聞いたんで今回は見た目子供のあたしに来たんだなと思ってなー》

《…ヴィータも結構余裕やね》

《まあな。ねじ伏せることもできたけど今回はこいつらを全員あぶりだす為にみみずから捕まってみたんだ。安心しろ。ツルギは無事だから》

《そか…。わかった。それじゃシホちゃん達にも要請願うわ。助けに行くから待つてな? ヴィータ》

《おう。待ってるね、はやて》

それで私はヴィータとの思念通話を切ると、みんなに真剣な顔になって、

「ヴィータとツルギが誘拐されたみたいや…!」

『な、なんだってー!?!』

それで全員は立ち上がる。

私は内心で、

(んー…みんないいリアクションをするなあ…)

と、思っていたり。

「というわけで救出班と逮捕の班に分かれようと思う。

シホちゃん達家族にも協力してもらおうか」

「そうだな、はやて。…クククツ…ツルギを誘拐したことを二度と立ち直れないくらい
の恐怖を植えつけて後悔させてやるとしようかね?」

士郎はそう言ってこわい笑みを顔に刻んでいた。

もう手加減無用だということだろう。

裏組織の人達、御愁傷様や…。



それから士郎達はシホ達とも合流して、

「…とうとうやりやがったわね。ツルギ君を誘拐するなんて、とうとう地獄を見たいら

しいわね?。」

シホがその表情を怒りに染める。

恭也や美由希も、

「シホちゃん言うとおりでね。私達で倒しちやおうか!。」

「そうだな、美由希!。」

御神流のフル装備でそう答える。

今回はかなりヤル気だ。

「土郎さん、すみません…さらわれたツルギとヴィータのために手を煩わせてしまい…」

「なに…気にしないでいいよ、土郎くん。子供を持つ同じ親の仲じやないか」

「ありがとうございます」

ダブル土郎はそう言つて真剣に話をしているのだった。

「俺ももう他人事じゃありませんからね」

恭也もそう続く。

最近やつと忍と結婚して忍はお腹に子供も宿しているので感情移入していたり。

「さて、それじゃヴィータのグラーファイゼンの発信する電波をたどつてみて到着した

施設だけ…侵入して救出する班を土郎、キャスター、シグナム、志貴、ザフィーラの

五人…」

「そして壊滅班がシホ、アルトリア、ネロ、そして高町一家なのだ」

「そうなるわね。それじゃそれぞれ解析して侵入していくわよ」

「了解した。そちらは頼むぞ、シホ」

「ええ、士郎もね」

.....

.....

.....

士郎がまず解析をかけて中に侵入していく。

「やはりこういう時には士郎の解析は便利だな……」

「そうだな、志貴」

志貴とザフィーラがそう話す。

「ある意味解析魔術は超絶技だな。前に無限書庫の貴重な書物の探索にも役に立ったの
だろう？」

「はいです。ご主人様はこの魔術が一番才能ありますからねえ」

シグナムとキャスターがそう話している。

「ほら、みんな。無駄口をたたいていないでさっさとヴィータとツルギを救出するぞ。居場所も判明しているとこころだしな」

そんな時に各所から爆発音が響いてくる。

どうやらシホ達が派手に暴れているのだろう。

実にいい音がしてくる。

そんな時に士郎達の目の前から何人もの黒いスーツの男が現れる。

「なんだてめーらあ!?!」

「貴様たちこそ倒させてもらうぞ。私の息子をさらった事、心の底から後悔させてやる……!」

士郎はその顔の口元に弧が描かれてまるでワラキアのごとく阿修羅の表情で一瞬で男共と肉迫し浸透勁を食らわせていき吹き飛ばしていく。

さらには首の骨を折る一歩手前の手刀をかまして他の四人が動く前に全員を片付けてしまった。

「…士郎だけでも十分だったかもな…」

「ああ。父親は強し、だな…」

そんな事を施設の中を壊滅させていきながら進んでいくとヴィータの声が聞こえてきたので強化魔術で錠を劣化させ破壊し中に入る。

「ヴィータ！ 無事か!？」

「あ、士郎にみんなか。遅かったな」

そこには何人もの男共がグララーフアイゼンによって沈んでいる光景が映された。

「ヴィータ。こいつらは…?」

シグナムの問いかけにヴィータは苦い表情になりながら、

「あたしにいやらしい目つきをして襲いかかろうとしてきやがったから捕まっているのに嫌気が差して倒しちまった。キモいぜ、こいつら…」

「そ、そうか。それでツルギは今どこに…?」

「ああ、大丈夫だ。今はその物陰に隠してあるからな」

それで士郎が向かうとそこにはすやすやと眠っている無事の姿のツルギがいた。

「よかった…。ツルギ…」

士郎はツルギを抱きしめた。

感動の再会である。

だがそこにヴィータにやられた男どもの一人がゆらつと立ち上がりその手にナイフを出して士郎を襲おうとする。

それに全員は気づいたが、間に合わないと思った矢先だった。

「ぎゃああああ!？」

そいつは突如として炎で体が燃え上がり、次には電撃が体を伝わり痺れて、風が起り切り刻まれ、最後には体が凍りついていた。そして男はそのまま気絶した。

「…は？ キャスター、さすがにこれはオーバーではないか？」

「え…？ 私ではありませんよマスター主人様？」

「それじゃ誰が…」

「パーパ…」

「ツルギ…？」

そこにはいつの間にか目を覚まして士郎の事を「パーパ」と呼んでニコツと笑っているツルギの姿があった。

しかもその指先一本一本に違う属性の魔力の残滓が宿っていた。

「ま、まさかツルギがしたのか…!？」

「そのようですね。マスターご主人様…私の即効の診断でやったのはツルギ君で間違いありません」

「すごい潜在能力だな。もう属性魔術を操っているとは…」

「さすが士郎とアインスの子供だな」

「だな。しかもツルギの善意でやってみたいだからな。父親想いだな、ツルギは」

ツルギの潜在能力に全員は驚愕しながらもとりあえず外に出ることにした。

そして外に出るとすでにシホ達がいる、

「あ、士郎。こいつらの親玉も捕らえたからもう安心していいわよ。久しぶりに暴れさせてもらったしね。そつちもヴィータとツルギ君をちゃんと救出できたんでしょ？」

「あ、ああ……」

「……？ どうしたのよ。そんな曖昧な表情をして……」

「それがな——……」

それで士郎はシホにツルギの潜在能力の一端を教えた。

「……そう。やっぱりツルギ君は色々とすごいわね。物ごころがついてきたら魔術制御を最初に学ばせたほうがいいわね」

「そうだな。よろしく頼む」

「ええ」

その後には士郎（高町の方）の伝手の刑務所に全員ぶち込んで今回の件は一件落着となった。

ツルギの力も見られたので満足とのことである。

しかし、ツルギのこの力が、まだ氷山の一角でしかないということに後に気付かされるのだが、まだまだ先の話である。

それと驚いていて流していたのだが、少しして士郎は「パパ」と初めて呼ばれたこと

に気づき喜びの笑みを浮かべているのだった。

第百六話

『魔弾の射手』

時空管理局の中では『エース・オブ・エース』といえば高町なのはが有名である。

過去の負傷のブランクから立ち直り今も空を飛ぶ姿は空戦魔導師を目指すものにとって憧れの的であるからである。

なら『魔弾の射手』は誰かと聞かれたらコアなファン達はこう答える。

“シホ・E・S・高町”と…。

いつの間にかこんな異名で呼ばれているようになったシホ。

なぜこう呼ばれるようになったのかと言うと幾度もの事件で主に使用するデバイスの形態が弓だからが一番の要因かもしれないがそれだけだったらそんな異名はつかないだろう。

ではなぜついたのか…？

答えは簡単だ。

彼女の放つ矢は種類が豊富であるからである。

まず風属性の幻影込みの矢、イリキュジョン・アローから始まり、

どこまでも標的を追跡するフルンティング。

高速で突つ切るカラド・ボルク。

放った瞬間に九つの魔力矢に分裂して威力も落とさず標的を襲うナインライブズ。

…数々の種類の豊富な矢を使いこなしているのが要因である。

しかしこれをしてはまだ魔弾とは呼ばれない。

なら、後はなにか…？

追求していくとたどり着く答えがその視力のあまりの異常精度にある。

4キロメートル先まで見通せて射程圏内である千里眼、鷹の目とも…。

それゆえに“魔弾の射手”という異名、二つ名で呼ばれるようになったなによりの証拠である。

それなら士郎も呼ばれてもいいだろうという話になるのだがやはり年齢（実年齢はともかくとして）が若いシホの方が名は売れるだろうという話である。

今回はそんなシホが数々の事件でその弓で活躍する記録の一部抜粋のお話である。



シホは現在魔術事件対策課でデスクワーク作業をおこなっていた。

魔術師は基本アナログがデフォオである。

それでシホおよび士郎もその例に洩れずこの世界に来る前はそんな作業はたいしてしたことがなかったので苦手な部類だった。

だがそれでは仕事ができないと言ひ、なのは達に隠れてパソコンの練習を重ねた。

シホと士郎は昔から努力タイプの人である。

人よりできないのであればその倍以上の努力を重ねて習得していく人間である。

あらゆる武術や剣術も二流の限界を極めたほどだからそれでどういふ事かなどがたやすくわかるだろう。

とにかくシホは持ち前の努力がみのりデスクワーク作業はお手のもので、某有線式さとりから教えてもらったエーテライトと分割思考、さらにこの世界の並列処理マルチタスクも会得してそれらを全部併用して行なうためにやはり一人分突き抜けたスピードを叩きだせる。

ブラインドタッチも軽くやってのけるので他の人が見たらやつぱりすごいと思われるらしい。

そんなシホのところ一人の女性がやってくる。

その女性はミゼであった。

「…シホさん、少しいいかしら？」

「はい。なんででしょうミゼさん？」

「ちよつと地上の武装隊から教導隊として一日短期教導をやつてほしいと依頼がシホさん宛てに来ているのよ。」

それで悪いんだけど向かつてもらつていいかしら。

もし魔術事件が発生したら土郎さんとカレンさん達やあなたの自慢の魔術の教え子達に向かつてもらうから安心していいわ」

「わかりました。それでは向かわせてもらいます」

二つ返事でシホは承諾してとある武装隊に向かうことになった。

そこに将来一緒の課に配属になるだろう一人の男がいてシホは出会うことになる。



Side シホ・E・S・高町

私はミゼさんに言われた武装隊の隊舎に向かった。

そういえばこの部隊には確かシグナムがいたなあ…と思ひ出したり。

もしかしたらシグナムが私の名前を出したのかもしれないわね。

そしてそこにはかなりの腕の狙撃手がいるという話である。
一度会ってみたいかも。

そんな事を考えながら隊舎の中に入り受け付けをした後、部隊の人達が集まっているロビーに向かうと途中で待っててくれたのかさつそくシグナムと遭遇した。

「来たか、シユバインオーグ」

「ええ。今日一日よろしくねシグナム」

「ああ。隊舎の中を案内しよう」

「お願いね」

それでシグナムに案内されながら色々と話をお互いにする。

「シユバインオーグ、魔術事件対策課で士郎はすっかりと仕事をしているか？」

「ええ。アインズとツルギ君のために一生懸命働いているみたいよ」

「そうか。それならなによりだな」

そこに一人の背が高い男性が走ってくる。

「シグナムの姐さん、シホ・E・S・高町二等空尉は来ていますか？」

「ああ、『ヴァイス』。ちょうど今一緒にいるぞ。おまえも顔は知っているだろう？」

「ええ。同じ狙撃手としては憧れですからね。」

初めまして、自分は『ヴァイス・グランセニック』一等陸士です」

「シホ・E・S・高町二等空尉です。気軽に名前と呼んで結構ですから。後、堅苦しいのもアレなんで気軽にいきましよう」

「そうっすか？ でしたらそうさせていただけますよ、シホさん」

「ええ、ヴァイスさん。それよりもしかしてヴァイスさんが噂の凄腕のスナイパーなの……」

「ああ。ヴァイスはウチの隊の狙撃手だ。かなりの精度をつけられるぞ」

「ははっ。恥ずかしいっすね……」

ヴァイスさんはそれで照れていた。

でもシグナムは持ち上げといて落とすというのを忘れないで実践しているようで、

「……まあ、シユバインオーグと士郎の腕に比べれば断然劣るがな」

「手厳しいっすね……」

「調子付かれては気を緩めるからな。私はそこは厳しくいくと決めている」

「そうっすか。それよりシホさん、今日は一日よろしくっす」

「わかったわ」

それから私は短期教導を行なっていった。

でもその最中で事件の報告が入ってくる。

ミッドチルダの市街地で立てこもり事件が発生して人質を何人もとられているとい

う話である。

それでシグナム達と私は現場へと向かうのだった。

.....

.....

.....

現場に到着すると先に到着していた部隊が犯人と何度も話をしていて口論となり膠着状態に陥っているという。

それで私も遠目で犯人を確認すると一人の少女が犯人によって捕らえられているようだった。

「なっ!? ラグナー!」

そこにヴァイスさんが突然声をあげる。

「ヴァイスさん、知り合い:~?」

「俺の、妹です:~。でもよりによってなんで:~」

それでヴァイスさんはどこか悔しそうな顔をする。

「:~今日はシヨップピングに行くって言ってたからタイミング悪く捕まったんだと思いま

す」

「そうなの……」

そんな話をしてしていると作戦が伝わってくる。

犯人は一人だけだからアウトレンジからの魔力ダメージによる狙撃で犯人を昏睡させるというものだった。

それで役目は部隊一の狙撃の腕を持つヴァイスさんが選ばれた。

でも見ているかぎりヴァイスさんは妹さんを助けようと躍起に駆られている。

だから冷静な判断ができていないと思う。

その証拠に、

「落ち着け、落ち着くんだけ俺……犯人をただいつも通りに撃ち抜くだけじゃないか……？
俺とお前でならできるはずだよな？ ストームレイダー」

《あなたならできますよ。自信を持ってください》

デバイスのストームレイダーに何度も話し掛けて気持ち落ち着かせている。

そこにシグナムが話し掛けてきて、

「今のヴァイスはかなり不安だ。シユバインオーグ、もしもの時は頼めるか……？」

「ええ、任せて。私も少し離れた地点から狙ってみるわ」

「よろしく頼む」

それで私は構えているヴァイスさんよりさらに後方に下がって弓を構える。視力を強化して見てみればヴァイスさんの手は少し震えているように見える。

そのたびにストームレイダーがヴァイスさんを落ち着かせているというある意味悪循環。

妹さんのために集中力も欠いていればああもなってしまうわね。

それから少ししてヴァイスさんは魔力銃から魔力弾を放つ。

でも私は瞬時にそれが妹さんの目に直撃するビジョンを見た。

そこからは行動は早かった。

私は即座に魔力矢を放ちいまだ直進している魔力弾に追尾し当たる前に弾く。

「なっ!? いったいどこから……!」

ヴァイスさんは驚きの声をあげているが私はすぐに再度イリュージョン・アローを放ち犯人の脳天に直撃させる。

それによって犯人は昏睡し妹さんは解放される。

「ふう……なんとかなったわね」

そう言つて一息をつく。

それから事件は解決し私もシグナム達のとこに戻る。

「戻ったか、シユバインオーグ。さすがだな。私ではあそこまで正確には移動し続けて

いる魔力弾を撃ち抜くことなどできんからな」

「ま、なんとかなってよかったわ。あのままだとヴァイスさんの妹さんの目に直撃コースだったから」

「私もそれは分かっていたが…それがわかってから即座に構えて放ち追尾させる腕とは…さすが魔弾の射手と異名で呼ばれるほどの腕前だな」

「シグナムまでからかわないですよ。私としては恐れ多い二つ名なんだから…」

「まあそう言うな。その腕のおかげでヴァイスの妹も傷なく無事に帰って来れたのだからな」

それで見ると。

シグナムと見た先ではヴァイスさんと妹さんが抱きしめ合っている光景が目に入ってきた。

それからしばらくしてヴァイスさんがこちらに歩いてきて、

「シホさん…俺のミスショットを射抜いてくれて感謝します。もしあれが当たっていたら今頃俺はラグナに一生消えない傷を残して後悔しているところでした。ほら、ラグナも…」

「…えっと、シホさん。助けてくれてありがとうございます」

「気にしないでヴァイスさん。妹さんも無事に助かったんだからよかったじゃない?」

「そうっすね…。でも今回の件で俺は自分の腕がまだ未熟だということを心底思い知りました。ですから今日限りで当分の間は狙撃手の道を一度封印しようと思えます」

「お兄ちゃんツ!?! いいの!?!」

妹さんがそう叫ぶ。

「ああ、ラグナ。でも自粛の意味もあるからまたそのうち復帰はする予定だ。それに今俺はヘリパイロットの道も目指している。だからそつちに今は集中したいんだ」

「ヴァイス、それでいいんだな…?」

「うっす。シグナムの姐さん」

「ではしばらくしたら復活して今以上に腕が上がったお前をいずれ見せてくれ」

「了解っす!」

「でも私から見てもヴァイスさんの腕はかなりのものだと思うのにもつたいないですね…」

「言わないでください、シホさん。もう決めたことですから」

「そう…。でも復活する時は教えてね? 私も色々腕の上達の手助けをするから」

「うっす!」

「さて、それでは帰って事件解決のパーティーでもするのでしょうか。シユバインオーグ、今日は一日まだ時間はあるか?」

「あるけど…なに？ 料理を作つてとかいう提案？」

「そうだ。わかつているじゃないか」

「やっぱりね。シグナムも私の料理は美味しそうに食べてくれるから腕の振るいようがあるしね。」

「え？ シホさんの料理つすか？」

「ああ、ヴァイス。シュバインオーグの料理の腕は主はやてを超えているからな。期待したほうがいい」

「それは楽しみですね。ラグナムも参加させてもらつていいですか？」

「構わないわ。せつかくだから盛大に行いましょう」

それから私達は隊舎に戻ると調理場を借りて久しぶりに大人数用の料理を振舞つた。それを食べてヴァイスさんが、

「ツ!? シホさん、これすごい美味しいつすね！」

「うん。とつても美味しいね。お兄ちゃん」

「さすがだな。いつもながら素晴らしい腕だ」

ヴァイスさんとラグナムちゃんとシグナムからそんな言葉をもらう。

嬉しいものね。

「それとシホさん。その“ヴァイスさん”ですけどなんか聞いてどうにも呼びにく

そうですからヴァイスのままでもいいっすよ…?」

「え? いいの?」

「ええ。俺は気にしませんから」

「そう? なら私もヴァイスって呼ばせてもらおうかしらね。そっちの方が気を使わなくていいから」

「こちらこそ。これからもよろしくお願いします、シホさん」

「ええ、ヴァイス」

そして私達は友人関係になったのだった。



…本来の歴史であればヴァイスはラグナの左目をミスショットで傷つけてしまい後悔して銃をろくに握れなくなってしまうハズだった。

だがシホの存在がヴァイスを知らず知らずのうちに救っていた。

この世界の彼も結局は一度狙撃手としては引き下がったが、それでも普通に構えられるシトラウマもないからやろうと思えばすぐに部隊に復帰できるだろう。

これからもシホ達のなにかのきっかけ、行動があるとすれば歴史は少しずつ変わって

いくだろう。

すでにシホ達の介入という布石によって本来の歴史はすでに意味をなさず辿つてい
ないのだから。

そしてこれからも本来の歴史を変え続けるのだろう。

それでも世界は黙認する。

それもひとつの世界の在り方だといふのだから…。

第百七話

『最初のレリック回収任務（前

編）』

シホ達が中学三年になりとある任務でシホ、なのは、フェイト、はやての四人が呼び出された。

アリシア、アリサ、すずかと合わせて七人ともこの数年で大きく成長しもう十分大人の姿になってきていた。

事件も七人とも結構体験したので実戦経験を積んでいる。

「じゃいつてらっしやいフェイト。授業のノート取っておくから」

「うん！　ありがとうアリサ」

「シホ、しっかり仕事してきてね？」

「わかってるわ。アリシア」

「ほんならすずかちゃん。管理局でまた会おうな」

「うん。私達の対策課にもたまには顔を出してね。はやてちゃん」

「わかった」

「なのはも気をつけてね！」

「はぁーい！」

四人はアリサ達と別れて屋上へとやってきていた。

「レイジングハート！」

《Yes. My Master.》

「バルディッシュュ！」

《Yes Sir.》

「リインフォース！」

「はい！ マイスターはやて」

「アンリミテッド・エア！」

《Roger Master.》

《いきましよう、シホ》

四人の言葉にデバイス達とアルトリアがそれぞれ反応し、

《Stand by Ready.》

「「セーット・アアップ！」」

それによって四人はそれぞれバリアジャケットをまとっていく。

転送ポートを通り四人十二人は空を駆けていく。

『それじゃ改めて今日の任務の説明ねー』

エイミイから通信が聞こえてきて四人はそれを聞く。

話的には一回最寄りの基地で詳しい話を聞いた後、二つのロストログアの回収任務、アースラに引き渡して本局まで護送というもの。

「平和的な任務ですねえ」

「でも油断は禁物よね」

「はい、シホ」

シホの肩の上でミニサイズになったアルトリアがそう呟く。

最近、移動する際は結構リインと同じくこのサイズになることが多くなったアルトリア。

それでアルトリア自身は食事が多く取れると喜んでいたのは本人だけの内緒である。

『ま、なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃん、シホちゃんの四人が揃ってて…』

もう一箇所にはシグナムとザフィーラ、土郎さんが待機しているわけだし。

多少の天変地異くらいはなんとかしちやうよね』

『よろしく頼む』

エイミイがそう言って笑い、アースラ艦長のクロノがそう四人に頼む。

実際戦力過多といってもいいくらいの人選である。

これでミスを犯すとしたらかなりの実力の敵が相手となるのは明白である。

それからシホ達は定置観測基地へと到着し、ジャケットを解除し制服姿になる。

シホとなのはは教導隊色の白ジャケット。

フェイトは執務官色の黒ジャケット。

はやては地上部隊色の青ジャケットである。

四人を待っていたのは二人の男女。

「遠路おつかれさまです！ 本局管理補佐官『グリフィス・ロウラン』です！」

『『シヤリオ・フィニーノ』通信士です！』

シホ達は敬礼をして挨拶を交わす。

休憩の準備は出来ているというがシホ達はすぐに出るといふ。

「私らこれくらいの飛行じゃ疲れたりせーへんよ。グリフィス君は知ってるやろ？」

「はい…存じ上げてはいるのですが」

グリフィスはシホやなのは達を見て少し困った表情をする。

おそらく初対面でどう接したらいいかわからないのだろう。

「あ、三人は会ったことなかったな。こちらグリフィス君。レティ提督の息子さんや」

「はじめまして！」

それになのは達は「似てる!」と言った。

「フィニーノ通信士とは初めてだよね?」

「はい! でも皆さんのことはすぐーく知っています!」

本局次元航行部隊のエリート魔導師。『金色の閃光』の異名で知られるフェイト・T・ハラオウン執務官!

いくつもの事件を解決に導いた本局地上部隊の切り札。『最後の夜天の主』の八神はやて特別捜査官!

武装隊のトップ航空戦技教導隊所属! 『不屈のエース・オブ・エース』、高町なのは二等空尉!

なのはさんと同じく戦技教導隊所属。そして昨今立て続けに発生している魔術事件を解決している魔術事件対策課の『魔弾の射手』の異名を誇るシホ・E・S・高町二等空尉!

陸海空のトップエースの皆さんとお会いできるなんて光栄ですー!!」
シヤリオはそう言つて体をぶんぶんと振る。

よほど嬉しいらしい。

「リインフォース・ツヴァイさんとアルトリアさんの事も聞いています。優秀なデバイスだつて!」

特にアルトリアさんは単騎でも相当の戦力を有しているそうで」

「ありがとうございますすー！」

「ありがとうございますす」

「それに四人とも最強のサーヴァントという使い魔を使役していると聞きます。

今日は一緒じゃないんですか…？」

「ええ。いつも一緒ってわけでもないからね。みんなは別の場所にいるわ」

ちなみにサーヴァントという存在もバレてはいるが、真名まではそこまで出回っていないのが現状である。

聖杯大戦事件の映像であらかた上層部には真名はバレてはいる。

だが、皆これといって判明しても破られる弱点という弱点は持ち合わせていないので大丈夫だろう。

例を上げればジークフリートのように背中が弱点といったものであるが、せいぜいネ口の頭痛持ちくらいだろう。

「シャーリー、そろそろ失礼だろ？」

「あ、いけない。つい…」

「シャーリーって呼んでいるんだ。仲良し…？」

なのはがそう聞く。

二人は子供の頃から近所で幼馴染というらしい。

「幼馴染の友達は貴重だから…大事にしてね？」

「はい！」



…一方、時空管理局本局の無限書庫ではユーノとファイアット、アルフが今回の事件について調べ物をしていた。

数年前の無限書庫開拓時からかなりのデータを取り出せるようになったからすぐにはいかずともデータは揃えられる。

ちなみにユーノは現在司書長となっている。

ファイアットは今日は手伝いで司書をしている。

これでも教導隊の一人だから同窓会の時間が取れただけめつけ物だ。

「はいよ。ユーノ！ ファイアット！」

アルフが書物を運んできたのでユーノは感謝の言葉を述べる。

「でも、アルフももうそっちの姿で定着したね」

「本当ですね」

「まーね」

そう、アルフはフェイトの負担を減らすために何度も試行錯誤した結果、子供サイズにまで姿が落ちこんだのだ。

アルフはフェイトはもう強いからあたしがいなくても大丈夫だろうと言う。

それに家事をやるのも楽しいという。

「来年には士郎とアインス、恭也さんに忍さんに続いて、やつとクロノとエイミイも結婚する予定だし。」

sonでツルギや雫みたいに子供とか生まれたらもつと忙しくなるだろうしねー」

そこにエイミイから通信が入ってきて、

『ア〜ル〜フ〜。まだその話は秘密だつて言つて…』

「あー、まあいいじゃん」

それでユーノとファイアットが祝福の言葉を贈る。

仕返しとばかりにエイミイはユーノになのはとの関係を聞かれたがユーノは特に進展もないらしく友達だけですよと言っていた。

それで二人共仕事が好きなんだからとエイミイは呆れていたりする。

ファイアットも聞いて欲しかったと泣きを見せるがここはスルー。



場所はシホ達に戻って、

『皆さんの速度ならポイントまで15分ほどです。ロストログア受け取りと艦船の移動までナビゲートします』

「はい…よろしくね、シャーリー」

「グリフィス君もね」

それで一旦通信を終了する。

「しかし私達ももー6年かー」

「中学も今年で卒業だしね」

「卒業後はもつと忙しくなるかな」

「そうね…」

フェイトは、

「私は長期の執務官任務も受けることになるし」

なのは、

「私とシホちゃんとファイアちゃんも教導隊の一員としてあちこち回ることになるね」

はやては、

「私は卒業の少し前にミッドの地上にお引越しゃ。

クラナガンの南側で家族12人で暮らせるでかい家。

えー感じのトコを探し中や。なんせ大家族やからな。私の家族は」

シホは、

「私も卒業後はアルトリアとネロ…そして私が保護する予定の二人の姉弟と一緒にミッドで暮らそうと思ってるのよ」

「前に会った事があるランちゃんと言君の事だね？」

「そう。そして二人に私直々に魔術を教える予定」

「私とフェイトちゃんもミッドに移る予定だから近い家にしようね」

「そうね。いい物件が見つければいいけど…」

そんな世間話をしてる中だった。

前方から煙が上がっているのだ。

「現場確認！ 機械兵器らしき未確認体が多数出てます！」

「ん！」

「フェイトちゃん、シホちゃん！ 救援には私が回る！」

「私とシホが遊撃する！」

「はやてとラインは上から指揮をお願いね！」

「了解ッ！」

それで全員は各自散り散りに動く。

はやてはリインとユニゾンを交わして戦況を見る。

「中継！　こちら現場！　発掘地点を襲う不審機械を発見！　強制停止を開始します
！」

『本部に中継します！』

「お願い！」

機械兵器からビームが放たれるがなのははそれをプロテクションEXで防ぎ発掘員を守る。

シホとフェイトが、

「ソードバレル展開……！」

「プラズマランサー……！」

シホが魔力刃でできた剣を展開し、フェイトはプラズマランサーをセットする。

「フルオープン！」

「ファイアッ！」

二人の魔法の攻撃によって次々と機械兵器を貫く。

なのはが発掘員二人に安否を問い、大丈夫だということを確認する。

そこにリインが広域スキャンを終了させてここにいるのは二人だけだと報告をする。

「あれは、機械兵器…?」

「そうみたいね」

そこにシャーリーから通信が入ってきて、

『中継です！ やはり未確認！ 危険認定破壊停止許可が出ました！』

その報告にはやてが反応し、

「了解！ 発掘員の救護は私が引き受ける！ 3人で思いつきりやってええよ！」

「了解！」

シホ達が行動を開始しようとした時に機械兵器の集団は固まってなにかのフィールドを展開した。

「フィールドエフェクト…? 様子見でワンショット！ レイジングハート！」

なのははアクセルシューターを放った。

だがアクセルシューターは当たる前にかき消されてしまった。

「無効化フィールド!?!」

それによってなのはは過去の出来事を思い出す。

かつて魔法が使えず手も足も出せずに撃墜されてしまった機械の群れの光景を。

（でも、もうあの時の私じゃない…!）

なのはは気合を入れなおした。

アンチマジックフィールド

「A M F、A A Aランクの魔法防御を機械兵器が…?」

それでリインが魔法が通じないことに焦りを感じていた。
でもはやては落ち着いて、

「リインはまだ子供やな」

《ええッ!?》

「覚えとこうね。戦いの場で『これさえやっておけば絶対無敵』って定石はそうそう滅多にないんだよ?」

「そうです。必ず崩せる場所が見つげ出せます」

はやての肩に乗っかっていたアルトリアがそう話す。

「どんな強い相手にもどんな強力な攻撃や防御の手段にも必ず穴はあつて崩し方もある」
…

なのはは魔法攻撃で地面を砕き、石を操つて空に浮かす。

フェイトは天候を操り雷を発生させる。

シホも天候を操つて風が吹き荒れる。

「魔力が消されて通らないのなら『発生した効果』のほうをぶつけければいい。例えば小石、例えば雷、例えば竜巻…」

「スターダスト……！」

「サンダー……！」

「サイクロン……！」

「「フオール!!」」

三人の攻撃によつて操られた石が機械兵器に当たり、雷が降り注ぎ、竜巻が落ちてきて切り刻む。

《ふえー……すごいです》

「三人とも一流のエースやからな」

「ええ。シホも腕を磨き魔力変換資質である【風王】のおかげで成長をしました」

それから数機が逃げていくがそれはリインが受け持つて全部【凍てつく足枷】で氷漬けにして停止させた。

それになのは「お見事」と言つて褒めていた。

その後、発掘員にロストロギア『レリック』を渡されて回収をしたシホ達。

そこにシグナムから連絡が入ってくる。

「こちらアースラ派遣隊！ シグナムさんですか？」

『その声、なのはか？ そちらは無事か？』

「機械兵器の襲撃があつたんですけど……まさかそつちも？」

『いや、こちらは襲撃ではなかった。危険回避のためすでに無人だったのが不幸中の幸いだったが…発掘現場は跡形もない。』

先ほどシヤマルとヴィータを緊急で呼び出した。今日の任務、気楽にこなせるものはなさそうだな…』

シグナムからの通信で発掘現場が映されるがここでは爆発にでもあったかのようにクレーターが出来上がっていた。



第12管理世界「聖王教会」中央教堂ではカリムがクロノと会話をしていた。

『片方は無事ですがもう片方は爆発して発掘現場ごとロストしてしまっています。』

発掘現場はこれから調査と捜索を行います』

「クロノ提督、現場の方達はご無事でしょうか…?」

『ええ。現場の発掘員にもこちらの魔導師達にも被害は何もありません』

「そうですか。よかったです」

それからクロノとカリムが色々と会話をしながらレリックに関して話し合われている、

「現場のみなさんに十分気をつけてくださるようにお伝えいただけますか？」

『はい、それでは』

それでクロノとの通信を終了させるカリム。

そこにシャツハがやってきて、

「騎士カリム、やはりご友人が心配でしょうか？」

「シャツハ…」

「よろしければ私が現場までお手伝いに伺いますよ。」

非才の身ながらこの身に賭けてお役に立ちます。

クロノ提督や騎士はやて、そして騎士シホはあなたの大切なご友人。

万が一のことがあつては大変ですから」

「ありがとう、シャツハ。でも平気よ。」

はやてとシホは強い子だし今日は特に祝福ライオンフォースの風はもちろん守護騎士ヴォルケンリッター達も一緒ではや

てとシホの幼馴染の本局のエースさん達もご一緒だとか」

「それは私の出番はなさそうですね。おとなしくあなたのそばについているとしまし
う。…お茶をお入れしましょうね」

「うん」



それからクロノ達はグリフィスの報告を聞きながら話を進めていつている。

そしてシグナム達の現場にヴィータとシャマルが到着した。

「ひでえな、こりゃ…完全に焼け野原だ」

「かなりの範囲に渡っているが汚染物質の残留はない。典型的な魔力爆発だな」

「ここまでの話を総合すると聖王教会から報告・依頼を受けたクロノ提督がロストロギアの確保を四人に要請。

平和な任務と思つてたらロストロギアを狙つて行動しているらしい機械兵器が現れて、こちらのロストロギアは謎の爆発…つて流れであつてる？」

シャマルがシャーリーにそう聞く。

『はい！ あつてます！』

「聖王教会といえば主はやとシユバインオークのご友人の…」

「うん。騎士カリムからの依頼ね。クロノ提督ともお友達だし」

そこでザフィーラと士郎は爆発現場を見ていたヴィータに声をかける。

「ヴィータ、どうかしたか？」

「やはり気になるのか？」

「ザファイラ…士郎…別になんでもねーよ。相変わらずこーゆー焼け跡とかは好きになれねえだけさ。」

戦いの後はいつもこんな風景だったしな…それに、あんまり思い出したくねえことも思い出すしさ…」

それでヴィータの頭に過ぎるのはなのが撃墜された時の光景。

だがそこでシグナムが背中を叩き、

「ヴィータ、なにを怖い顔をしている。そんな顔では帰ったらリインやツルギが心配するぞっ。」

「うるせえな、考え事だよ。それとなでんな…」

「よし…調査魔法陣展開！ アースラと無限書庫に転送してね」

『はいっ！』

.....

.....

.....

それからシホ達に場面は移る。

そこではリインがなのは達にはフィールド系について学んでいた。

基本魔法防御の四種のうちのひとつなどといった感じのお話。

「魔力攻撃オンリーのミッド式魔導師はとつきには手も足も出ないだろうね」

「ベルカ式でも並みの使い手なら威力増強は武器の魔力に頼っている部分が多いただの刃物やとアレ潰すんはきついよー」

「唯一まだ対抗されていないのが魔術式による魔術攻撃って事ね」

「そうやね。まだ管理局でも魔術師の力は手に余っているから解析が進められていないのが現状や。」

だからやつらにはシホちゃんやアリサちゃん達があたってた方がまだ勝算はあるな」

「ま、まだそんなに管理局に勤めている魔術師の育成が進んでいないから魔導師よりかなり弱いという見方が多いんだけどねー…」

それでシホはため息をつく。

それからどうして簡単にフィールドを抜けることができたのかというリインの質問に、三人は的確に答えていく。

完全魔法攻撃メインのリインだとかなり危険という話になった。

それからまた対処と対策が話し合われながら四人は飛んでいった。

第百八話

『最初のレリック回収任務（後

編）』

ヴィータとシグナム、士郎は久しぶりの任務だなという話をしていた。

「あたしとシャマルは本局付きでシグナムと士郎、志貴はミッドの地上部隊。ザフィーラはもっぱらはやてかシャマルの護衛。」

「アインスは今もツルギの育児休暇に入っていてキャスターも手伝いをしているから二人の復帰はまだ先だしな。」

「ま、家に帰れば顔を合わせるしあんま関係ねーけどな」

「緊急任務がない限り休暇には皆揃うしな」

「そうだな。それがなにより幸いだ」

「しかし来年には引越しか、海鳴のじーちゃん、ばーちゃんともお別れだな……」

「住所が変わるだけで別れではなからう。会いたいと思えばまた会える」

「ちよつと間が開いたら士郎とアインスはともかくもー変身魔法を使わねえと会えねえな。育たねえから心配されるし……。年齢だけならじーちゃん達より年上なんだけどな」

「違うない」

そこにシヤマルが話しかけてきた。

「あらーじやあ私がちやんと調整して可愛く育った外見に変身させてあげるわよ」

「…いい。自分でやる」

「私達は当分は服装や髪型程度でごまかせるしな」

「ザファイーラはいいよな。犬だし」

「…狼だ」

「というより士郎、お前はもう本当に26か？ 若すぎないか？ シュバインオーグと違ってアヴァロンの老化遅延の性能はないのだろう？」

「ああ。しかし、そうかね？ 別に若作りを実践しているわけではないのだが…」

そう、士郎は六年前から全然変わっていないのだ。

アインスは24でまだ若いながらも成長はしているというのに。

このまま進めば士郎はどんな若作りをしているのか将来各所から聞かれそうだ。

「…それにしても、ミッドへのお引越しは色々と不安が多いのよ。

士郎さんとアインス、志貴さんとアルクエイドさんは一緒に部屋でいいと思うけど将来を考えるとツルギ君の一人部屋も考えたほうがいいから何個か空き部屋も考えないといけないし。

なかなかいい物件が見つからないのよね」

「そのへんはお前に任せた」

シグナムとヴィータはシャマルに丸投げした。

酷い仕打ちである。

「私とアインス、ツルギ、キャスターは別の家にするか？ 家を隣同士にすればそっちの負担は減ることだしすぐにそっちに遊びにいけるしな…」

「考えておきます…」

シャマルがそう言つてなんとか沈む気持ちを上昇させている時だった。

「むっ…?」

そこでザフィーラがなにかを察知した。

「ザフィーラ？ どーした？」

「森が動いた…座標を伝える。シャマル、調べてくれ」

「うんっ！」

それですぐにシャーリーが分析して、

『こちら観測基地！ 先ほどと同系統と思われる機械兵器を確認！ 地上付近で低空飛行しながら北西に移動中。』

高々度飛行能力があるかどうかは不明ですが護送隊の進行方向に向かっていているようです！

狙いは……やはりロストロギアなのではないでしょうか？」

「そう考えるのが妥当だな。主はやてとテストロツサ、なのはにシユバインオーグの四人が揃って機械兵器ごときに不覚を取るとは方にひとつもないだろうが……」

「運んでいるものがアレだものね……、こつちで叩きましようー！」

「ああ」

それでまだ険しい目つきをしているヴィータの背中をシグナムは叩き、

「観測基地！ 守護騎士二名と士郎が出撃する。シグナムとヴィータ、士郎で迎え撃つ

！」

「……あに勝手に決めてんだよ？」

「なんだ……？ 将の決定に不服があるのか？」

「……ねーけど」

ヴィータは少し拗ねた感じだった。

「こつちは二人で大丈夫よ」

「危険あらば駆けつける」

シヤマルとザフィーラは二人で大丈夫だという。

「守るべき者を守るのが騎士の務めだ。行くぞ、その務めを果たしにだ」

「しゃーねえーなっ！」

「ククク…ヴィータも素直になればいいものを…」

「うるせーぞ！ 士郎！」

「というわけです。主はやて。邪魔者は地上付近で我々が撃墜します………テストロッサ、手出しは無用だぞ？」

『はい…わかっていきます。シグナム』

「なのは！ おめーもだぞ！」

『はあい！ 片手はロストロギアで塞がってるしね』

「シホも手はいらんぞ？」

『分かってるわ、士郎』

『三人共おーきにな…気いつけて』

「はい」

「おう」

そこでフェイトからAMFについて話されるが、

「テストロッサ。貴様、誰に物を言っている？ おのが信ずる武器を手にあらゆる害悪を貫き敵を打ち砕くのがベルカの騎士だ」

「魔導師共みてーにゴチャゴチャやんねーでもストレートにブツ叩くだけでブチ抜けんだよ！ リインもあたしの活躍をしつかりと見てろよ！」

『はいです、ヴィータちゃん!』

「出撃!」

「おう!」

それでシグナム、ヴィータ、士郎は空を駆けていった。

『機械兵器移動ルート変わらず!』

『あまり賢くはないようですね』

『特定の反応を追尾して攻撃範囲にいるものを攻撃するのみのようです。ですが対航空戦能力は未確認です。お気を付けて!』

その通信を三人は聞き流し程度に聞き、

「未確認なのはいつものことだ。問題ない」
アンノウン

「……………」

それでヴィータはまたあの日を思い出す。

あいつらも未確認だったと。

それも同じくAMFを展開した憎い奴ら。

だからもう手加減はしない。

そう意気込む。

シグナムはシユランゲフォルムを展開し、ヴィータはグラーファイゼンを力づくで振

り回し、士郎はオーバーエッジフォルムで斬りかかる。

それによってあつという間に機械兵器達を屠っていく。

それを画面越しで見ているクロノとエイミーは、

「シグナムとヴィータ、それに士郎さんはやつぱりすごいね。未確認だとしても歯牙にもかけない。

合流地点までもうすぐだしそろそろアースラも回収の準備をしておこうか。…ん？

どしたの、クロノ君。難しい顔をして…」

「……………ああ、この後のことを考えていた」

「あと？」

そしてなのは達はその映像を見ながら、

「はやて、特別捜査官としてはどう見るの？ 今回のこと」

「んん？ あのサイズでAMF発生兵器が多数存在してるゆーんが一番怖いなー。」

今回この世界に出現してるんが全部であつて欲しいけど…そうでないなら規模の大きな事件に発展する可能性もある。特に量産が可能だったりするとなー。

執務官と教導官、そして魔術師の三人はどないやろうか？」

「…私はあの未確認がロストログアを狙うように設定されているのが気になるかな？

猟犬がいるってことはその後ろに狩人がいるってことだもんね」

「…ロストロギアを狙う犯罪者か…」

「そう。技術者型の広域犯罪者が一番危険だから」

「私も同意見。技術者型は魔術師と似たような考えだから大々的に自身の力を誇示したいと思うやつもいるだろうし、なにか企みがあるかもしれない…」

同じようにクロノとエイミーもそんな会話をしていた。

「そういった事件になると管理局でも対応できる部隊はどれくらいあるか…？」

人や人材が揃ったとして動き出せるまでどれくらいかかるのか、そんな状況を想像すると苦い顔になるさ」

「なるほど…指揮官の頭の痛いところだね」

「はやてと、それにアリサも指揮官研修の最中だからな。一緒に頭を悩ませることになる」

『シグナムさん、ヴィータさん、土郎さん未確認撃破！ 護送隊と合流です！』

画面の向こうではシグナム達とシホ達が合流する映像が映し出される。

「まあ、今回の事件資料と残骸サンプルはそのテの準備の貴重な交渉材料でしょ。事件がどう転ぶのかわかんないのなんていつものことだし」

「それはそうなんだが…」

「なんとかなるよ。『P・T事件』も『闇の書事件』も『聖杯大戦事件』もその他の色々

な事件もみんなでなんとかしてきてるんだもの。

今日はきつちり任務を済ませて予定通りに同窓会！ 笑顔で迎えてあげようよ！」

「そうだな」

それでクロノは苦笑する。

……

……

……

『こちらら護送隊、全員無事に転送ポートに到着！』

『こちららアースラ。転送了解！』

観測基地の二人もナビとサポートご苦労さま。そちらの任務は無事終了！」

『ありがとうございます』

『さて、転送処理開始！ 食事の準備してあるからねー。最後まで気を抜かずに戻って

きってー！』

「はあいー！」

それで全員はアースラに入るとレクリエーションルームに向かうのだった。

クロノとヴェロツサが話をしているがここでは割愛する。

そこではシホ達の各サーヴァント達とリンデイ、アインスがツルギを連れて食事の準備をしていた。

「おおー！　すごいですねえ」

「肉がある！」

「こんなに用意されていたんですね」

「そりゃこれから大勢来ますからね、兄さん」

エイミイ達が驚く。

そこには何人前だ！？　とツツコミがきそうなほどの料理の数々が置かれていたのだ。

当然調理したのはリンデイとサーヴァント達。

最近アルトリアも料理ができるようになってきたので参加したかったらしいがシホの警護で代わりにネロに任せられた次第だ。

特にランサーの魚の塩焼きが絶品だろう。

「三分の一くらいはアコース君からの差し入れよ。任務を終えたエース達に…ですつて」

「他は余達が準備をしたのだぞ！　喜べ！　さあ、喜べ！」

「ネロ、あんまり騒がないでください。ツルギ君が起きますから…」

「大丈夫だ。むしろ起こしても構わないぞ？　この騒ぎの中でツルギは立派に成長していくのだから」

ネロが騒ぎオリヴィエが宥めようとするがアインスの賛成がもらえてランサーがさっそく起こしにかかって両手で抱っこをしていた。

「ははは！　もう二歳だもんな。早いもんだな。おい！」

「…うー、えい！」

バチッ！

「あいた!？」

思いつきり顔を叩かれていた。

「ははは！　ランサーよ。嫌われたものだな！」

「うつせえな、ネロ！」

「ツルギ君は今は準反抗期なんですもんね〜」

「うい！」

ツルギがピースサインをキャスターにする。

「やんちゃなところがキャスターに似てしまったな」

「士郎も坊主の時はこれくらいだったのかねえ〜？」

ランサー達が士郎の子供時代を想像している間にエイミイがリンデイに話しかける。

「艦長：じやなかった。リンデイさんもすみません」

「ふふ、いいのよ。私も艦を降りてからは平穩な内勤職員だもん。子供達のお世話をし
てあげたいしね。つと：言ってるそばから」

「来たみたいですね」

「ただいま戻りました！」

ドアが開かれてシホ達が入ってきて一気に騒がしくなる部屋。

「おかえりー」

「おつかれー」

「フエイト♪」

まずリンデイとエイミイ、アルフが話しかける。

「お姉様。さ、食事にしましょうか！」

「すごい量ね…。よくここまで作れましたね」

「この辺はアコース君からのものも多いわ」

「ロツサ、来てるんですか？」

「クロノ君と一緒に本局まで護送だって」

「それは残念。ヴェロツサに久しぶりに会う機会だったんですけど…」

「お疲れ様です、母さん」

「うん」

「ユーノ君三日ぶり！」

「うん、なのは」

「ロツサもクロノ君と一緒になら会いに行ってもお邪魔かなあ？」

「あの二人は仲良しさんですものね」

やはりこの人数では騒がしいのはしょうがない。

エイミーが通信を開き、

「アースラ本局直通転送ポイントに到着。クロノ君とアコース査察官転送室から無事出立！…というわけでみんなは安心して食事を楽しんでねー」

それで元気よく返事を返すなのは達。

それからというものそれぞれ任務終了のお疲れ会的な流れになりそれぞれ食事を始める。

そこでリインが聞きたいことがあるらしくなのはとシホ、フィアットの三人に質問をしていた。

「なのはさん達が所属している『戦技教導隊』ってよく考えたらリインは漠然としか知らないんですが、やっぱり教官さん達の部隊なんですか？」

「んー、一般イメーজでの『教官』は教育隊の方かな…？」

なのはがそう一言。

フィアットが続いて、

「そうですね、なのはさん。私達戦技教導隊のお仕事は魔導師用の新型装備や戦闘技術をテストしたり…」

「そうね。他には最先端の戦闘技術を作り出したり研究したり…」

シホもそう続く。

「それから訓練部隊の仮想敵として演習の相手…想定される敵の能力やシミュレーションするからいろんな飛び方や戦い方をしますね」

「後は、預かった部隊相手に短期集中してでの技能訓練…これが一番教官っぽいかな。私はこれが好き」

なのははやつぱり訓練が好きだという。

「お姉様が担当する部隊は殆どの場合が隙なく緩み無く研鑽された兵士のような動きになりますよね。なんていいいますか…スーパーマン…?」

「そうそう。シホちゃんの担当する部隊はほとんどが屈強な魔導師に育つんだよね。」

おまけに短期実習でシホちゃん独自の中国拳法を会得する生徒が多いし…瞬動術とか浸透動とか…。

それでランクが低い魔導師でも十分強くなるのがやつぱりすごいところかな?」

なのなの言うとおり。

シホの鍛えた魔導師は全員各所で鍛え上げられた技術を惜しみなく発揮している。

中には飛び抜けている人もいて魔法より体術を主に使用する者もいたりするから驚きだ。

一感想としては…『下手に魔法を使うより効果が十分でかいから良い!』というのも挙げられる。

絶招や浸透勁を犯罪者に叩き込む魔導師というのも面白い図である。

「やっぱりシホはこの職業が向いていたんだね」

「最初の弟子の私が言うんだから間違いないよ」

フェイトとなのはにそう褒められシホは顔を赤くしながらジュースを人飲みして、

「だ、だから昔から何度も言っているでしょ?」

私は昔の経験談を教えているだけだって…。

それで魔導師達が強くなるならなるで私は一向に構わないわ」

「すごいですう…」

「それにまだ規模的に小数部隊の魔術師隊も魔術事件対策課で教えているんでしょ?」

「ええ。魔導と魔術は考え方が違うからお互いに違う点を検証しあうのもなかなか楽しいわ」

「ま、端的に言えば要はあれだ。戦時のエースが戦争のない時に就く仕事だ。技術を腐らせず有用に使うためにな」

ざつくばらんにシグナムがそうまとめた。

「うーん…シグナムさんのそれは、まあそんな感じではあるんですが…」

でも、ウチの航空教導隊にもいろんな年齢や経歴の人がいるんですけどみんな飛ぶのが好きなんですよね」

なのはが語る。

「空を飛ぶのが好きで一緒に飛ぶ人や帰り着く地上が好きで、だから自分の技術や力で自分の好きな空と地上を守りたいって…そういう思いはみんな一緒なの」

「なのはがずっと憧れていた舞台だものね」

「夢はまだまだこれからだけどね！ それにシホちゃんみたいにハキハキと教えられる教官になりたいしね」

「勉強になりました。ありがとうございます。なのはさん、シホさん、ファイアットさん！」

「ええ」

「はい」

「どういたしまして」

そこでフェイトがユーノに話をする。

「なのはは本当に嬉しそうだけどユーノはやっぱり心配でしょ？ あの事件のあと、私達は付きつきりだったし…」

「うん…。心配は心配だけどなのはが空を初めて飛んだ時からなんとなく思っていたんだ。なのはには他のどんな場所より青い空がよく似合うって…」

それでヴィータとフェイトはなにか感じたのか一緒になっていい顔になる。

「あ！ そういえばフェイトちゃん！ あの子達の新しい写真は持ってきてる？
ヴィータちゃん達に見せてあげようよ」

「あの子達…?」

「ほら、あれよ。フェイトちゃんが仕事先で出会った子供達」

「お！ エリオの話か！」

それでランサーが話に加わってきた。

「あいつは育つぜ。俺の感がそう言っている。いい戦士になるだろうぜ！」

「…エリオにはあんまり戦いはさせたくないけど将来はできるだけエリオの思う通りに進ませたいと思っているんだ。」

それと話は戻って…執務官の仕事で地上とか別世界に行った時にね事件に巻き込まれちゃった人とか保護が必要な子供とか…。

保護や救助をした後、お手紙をくれたりすることがあるの。特に子供だとなつてくれたりして…」

「フェイトちゃん、子供に好かれるもんね」

それでエリオの姿が映し出されて、

「おー！ エリオ、しばらく見ないうちに大きくなつたなー！」

「あーこいつもその手の子供か。エリオ・モンディアル…6歳祝い？」

「うん。いろいろ事情があつてちよつと前から私が保護者つて事になつてるの。法的後

見人はうちの母さん」

「元気で優しいいい子だよ」

「ランとレンもエリオと同じところに通っているからエリオと仲良しなのよね」

「あー。シホちゃんが卒業後に一緒にミッドで暮らすつていう姉弟の事やね」

「ええ」

それでシホは二人の写真を見せる。

「ラン・ブルックランズ…現在9歳。

レン・ブルックランズ…現在8歳。

二人共第72管理世界アトラスで魔術事件に巻き込まれて親を無くしたのよ。それで私が保護することにした二人なの」

「シホがな…育てられるのか？」

士郎がそうシホに聞く。

「フェイトと同じくちよくちよく二人には会いに行っているから信頼はされているわ、士郎。

でもお姉ちゃんのランはいいとして弟のレンが泣き虫でね。よく会うたびに泣きついてくるわ…」

「将来は私の剣をどちらかに学ばせたいですから弱虫は治してもらわなければなりません」

「アルトリアも心配性よの」

「ネロ、あなたにもそのうちわかりますよ」

アルトリアは少し慈愛の表情をしていた。

「そうか。でも、魔術事件もそうやけど、フェイトちゃんが専門のロストロギアの私的利用とか違法研究の捜査とかだと子供が巻き込まれる事多いからな」

「…うん。悲しいことなんだけどね。特に強い魔力や先天資質のある子供は…」

「だからお前はそれを救って回っているのだろう」

「そーだよ」

シグナムとアルフがフェイトにそう答える。

「子供が自由に未来を見られない世界は大人も寂しいですからね」

「そう言う意味ではお前は執務官になれてよかったのだろうな。試験に二度も落ちた時はもう駄目かと思っただが……」

「あう………！ シグナム！ あなたはそうやって事あるごとに……写真見せてあげませんよー！」

「し、試験の時は私が色々心配かけたりしましたから……」

なのは萎縮してそう語る。

確かにあの時は色々重なっていた時期だったとみんなは思う。

「その点はやてさんはすごいわよね」

「上級キャリア試験に一発合格！」

「ふえ……私はそのタイピングとか色々運が良かったただけですからー。希少技能持ちの特例もありましたし」

「またまたあ」

エイミーがはやてをからかう。

かつこうの餌なのだろう。

「すごい勉強してましたもんね」

「あの時から試験と聞くともう心配で心配で」

「希^{レア}少^{スキル}技能保有者とかスタンドアロンで優秀な魔導師は結局便利アイテム扱いやからな。適材が適所に配置されるとは限らへん」

「はやてとヴォルケンスの悩みどころだな」

「でも、はやてちゃんの目標通り部隊指揮官になれば…」

「そのための研修も受けてるじゃない」

「準備と計画はしてるんやけどな。まだ当分は特別捜査官としていろんな部署を渡り鳥や」

「でも経験や経歴を積んだり人脈作りができるのは良いことですよね」

「まあ確かに」

「陸上部隊は海や空と違って部隊ごとの縄張り意識みたいななんも強いしそのへん肌で感じてみるといい……………ってクロノ君も教えてくれたしな。」

まあ、部隊指揮官はなったらなつたで大変そーやしどこかで腰据えて落ち着いたらそれはそれで……………ゆー感じやね。

アリスちゃんは技能を身につけたらそのまま魔術事件対策課を乗っ取るとかこないだ宣言していたしな」

「落ち着ける場所見つかるといいね」

「私も三人においつかなな」

それからGWの連休の話になってシホ、なのは、フェイト、はやての四人が行けると言うことになった。

アリシアにアリサ、すずかは用があり来れないということになったが仕方がない。



クロノとヴェロツサは本局の廊下を歩きながら、

「ところでクロノ君。君から見えてどうだい？ 君が見守ってきたエース達は」

「……………シホなのはやはやて、フェイトの事か？ 今更僕が語るまでもないよ。それぞれ優秀だよ」

「しかし四人ともまるで申し合わせたように技能と能力がバラけているね。

希少技能レアスキルと固有先力を持つて支援特化型で指揮能力も持つ八神はやて特別捜査官。

法務と事件捜査担当。多様な魔法と高い戦闘力で単身でも動けるフェイト・T・ハラオウン執務官。

部隊メンバーを鍛え育てることができてこと戦闘となれば単身でも集団戦闘でもあらゆる戦況を打破してみせる勝利の鍵高町なのは二等空尉。

そして高町二等空尉と同じく鍛え育てることができる能力を持ち魔術という強大な

力と本当の魔法を駆使し、魔術事件対策課で単身ですべてをひっくり返してしまおう戦闘能力を誇るシホ・E・S・高町二等空尉。

四人が揃えば世界の一つや二つ軽々と救ってみせてくれそうだなってさ。かの「三提督」の現役時代みたいに」

「まあ夢物語ではあるがな。部隊の魔導師は保持制限があるしそれぞれの目的や進路もある。

だがまあそれでも正直夢は見たくなる。しがらみとやるせない出来事と手を伸ばしても届かない苦しみばかりの仕事の中でも、あの四人なら光だけを掴んでくれそうに思っている」

「クロノ君はやっぱり優しいお兄ちゃんだねえ」

「なんだ、それは…?」

クロノとヴェロツサは笑いながら歩いて行った。

第百九話

『空港火災』

シホ達はGWを利用して休暇を取り、陸士部隊研修中のはやてに呼ばれて空港に来ていた。

「でもすずかとアリサはともかくアリシアは用はなかったんだから来ればよかったのですね」

シホがそう話す。

「そうだね。久しぶりの休暇なんだから私たちと一緒に来れば楽しめたよ？ きつと」

「そうだね。アリサちゃんとすずかちゃんも仕事が好きだもんね」

「アリサは、指揮官部隊研修生だっけ？」

「ええ。やっぱり人を指揮する仕事が得意だから、この適正はあっていると思うわ。今ははやての後輩関係ね」

「すずかちゃんは技術部に入ったんだっけ？」

「うん。マリーさんの弟子として魔術式デバイス作成を中心に学んでいるわ」

「そしてアリシアは前線部隊で魔術を駆使して活躍しているんだよね。」

『ソニックスター』の二つ名で有名だよね」

「ええ。将来はアリサが魔術事件対策課の部隊指揮。魔術式デバイスの修理や作成をす
ずか。前線をアリシアが担当する理想の部隊になりそうよ?」

他にも士郎やキャスターに志貴、カレンさんに部隊長のミゼさん、その他色々な得意
魔術を使う魔術師がいるから戦力は充実しているわね」

シホが自慢げにそう言う。

期待は高いのだろう。笑みを浮かべている。

でも、となのはが眩き、

「シホちゃんは…?」

「私は教導隊も兼任しているから魔術事件対策課に行くことも緊急事態以外は最近少
ないよね…。」

アリシアが『私達が頑張るからシホは教導隊の方も頑張つて!』って、言われている
のよ」

「アリシアらしい…。三人にはもうシホの教える魔術はほとんど教え切つたの?」

「いえ? まだ教えることはたくさんあるわ。私が今教え終わつたのは、前線で使える
攻撃系・補助系・防御系・治癒系・暗示系の魔術くらいよ」

「そっかー」

シホ、なんは、フェイトは楽しそうにしながら空港を後にしてホテルへと向かう。

途中ではやてとも合流した。

「よくきたなあ、三人とも。歓迎するよ！」

「はやて！」

「はやてちゃん！」

「はやて、部隊研修は忙しい…?」

「うーん、まあそこそこやね。やっぱり難しいことも色々あるからな…」

それから四人でホテルへと向かい、昼食を取った後、四人でどこかいい観光名地にかけてようかと話をしている時だった。

そこにいきなり非常回線が開き、

『八神一尉！ 空港で爆発が起こり、全体に火が広がって民間人が多く取り残されています！』

航空救助隊の首都からの航空支援魔導師がまだ到着しないという報告を受けています！ ですから救援に来てもらって構いませんか!?!』

「了解！ 今ここに腕っ節の強い魔導師が他に三人もいるから一緒に向かうわ！」

『お願いします！』

それで通信は切れる。

「…と、いうわけや。三人とも、休暇はせつかくやけどお預けや。緊急出動や！」
「わかった！」

それで四人はすぐに顔色を変えて現場へと向かう。

そこではすでに色々な人が動いていて見れば空港はすごい火災になっていた。

「…数時間前まで私達もいた場所だね」

「そうね」

「そうだね」

「三人とも。私は現場指揮を担当するから、三人は民間人の救助に向かってもらってえ

えか!」

「了解！ それじゃなのは、フェイト。行くわよ！」

「うん」

「了解だよ！」

そして三人ははやてを残してバリアジャケットをまとって空を飛んでいった。

「任したで…！」

はやては三人を見送り自身は部隊指揮に入った。

《フリーゲル・タラリア。展開します》

シホ達は空を駆けていく。そして三人は今も救助されていないリストを送ってもらい、そこへとそれぞれ駆けていった。

「でも、こんな時にネロ達を家に置いてきたのは痛かったわね…」

「そうだね。ランサーやファイター、セイバーがいればもっと早く救助できたんだろうけど…」

「最近、みんなも休みの時は家で過ごすことが多くなったもんね。もっと柔軟に待機していた方がよかったね」

《シホ、私も出ますか？》

そこにユニゾンデバイスのアルトリアがアンリミテッド・エアの中から話しかけてきたが、

「いえ、アルトリアはまだ待機していて！ アルトリアはいぎという時の切り札だから。

それにユニゾンは緊急事態以外はリミッターがかけられていて、承認されないかぎりできないから…」

《わかりました。…ですが、この事件が緊急事態に承認されないなんて管理局も心が狭いですね》

「そうね…。黙ってユニゾンできないものかしらね…？」

そんな話をしながら救助者を助けにいった。



『航空魔導師！ 教導隊02応答願います！』

「はい。教導隊02、シホ・E・S・高町です！」

『現在、6番ゲートにて要救助者がたまっているみたいです！ 至急向かってもらつていいですか？』

「わかりました。アンリミテッド・エア、一番近いルートを……！」

《はい、ルートを検索します》

そしてシホは6番ゲートに入っていく、消火作業をしている局員に話しかけて、

「要救助者が集まっているのはこの場所ですか？」

「……！ あ、あなたは……いえ、はいそうです！」

局員はシホを見て一瞬驚きの顔をするがすぐにこの先、炎が回っている扉を指差す。

「この先にいるんですね？」

「はい！」

「わかったわ！ アルトリア、出しましょう！ 各自救助していきましょう！」

《わかりました、シホ！》

アルトリアが実体化して外に出てシホと共に救助者の下へと駆けていった。
そんな二人を置いていって、話しかけられた局員は、

「魔弾の射手のシュバインオーグ二等空尉に話しかけられたぜ！」

「ああ！ これで俺達はまだ頑張れる！ 野郎ども、気合を入れろ！」

『おー！』

なにげに人気の高いシホなのであった。

それはともかく、シホは民間人を救助していく。

逃げ遅れた民間人に防御魔法を展開させて、送る道を確保して急ぎながらも安全に誘導していく。

「これで…このエリアは全員かしら？」

「そのようですね、シホ」

「それじゃ次の場所に向かおうか」

「はい」

それでシホとミニサイズになったアルトリアはシホの肩に乗り移動を開始した。

空でなのはと合流して、

「シホちゃん！ そっちの方はどうだった!?!」

「今のところ死亡者は出ていないわ！ なのは、次に向かいましょう！」

「うんー！」

二人は取り残されている一人の少女の話聞き、それで中へと入っていき、前方の炎の海の中を、

「ストライク・エア!!」

ツヴィリングフオルムで風を溜めて一気に放ち炎の中に道を作る。

二人はそこを進んでいき、

「見えたわ！　なのは、天使像が崩れそうだからバインドを仕掛けるわよ！」

「うんー！」

それでなのは通常のバインドを。シホは天の鎖を放ち、少女に天使像が倒れるのを防ぐ。

しかし、なのはのは設置したらそのまま当分はほつといて大丈夫だがシホのは離れると解除されてしまうのでそのまま待機だった。

「ええい！　めんどくさい！」

シホは深く考える事を放棄して天使像を剣で粉々に切り裂いてしまった。

「あはは…シホちゃん、もう使われないからって過激だよ？…それよりよかった…。間に合つて。助けに来たよ！」

なのはは一人の取り残された女の子に寄って、

「よく頑張ったね。えらいよ」

「そうね。よく無事だったわ」

「えっ…えぐっ…」

「もう大丈夫だからね。安全な場所まで一直線だから！」

シホが女の子に防御魔法を展開して守っている間に、なのははレイジングハートを天井に構える。

《上方の安全を確認》

それでなのはは杖をふり、

《ファイアリングロック、解除します》

「一撃で地上まで抜くよ！」

《All right. Load Cartridge. buster set.》

「デイバイーン・バスター！」

それによつて壁抜きで一直線の道が作られた。

「なのは大抵過激だと思ふのよね…」

「なにかいった？ シホちゃん…？」

「いえ、なんでも？ それより早くこの子を運びましょうか」

「そうだね」

それでなのはが女の子を抱えて空を飛び、シホもそれを追っていった。

「こちら教導隊01、及び02。エントランス内にて要救助者の女の子一名を救助しました」

『ありがとうございます。さすが航空魔導師のエース・オブ・エースに魔弾の射手ですな！』

「西側の救護隊に引き渡した後、すぐに救助活動を続行しますね」

『お願いします！』

落ちていてなのはとシホは女の子に話しかけた。

「…あなたのお名前は？」

「スバル・ナカジマ、です…」

「スバルね。もう少しで救助隊に到着するからそれまで空は怖いだろうけど我慢していいね。」

なのはは空を飛ぶのは一番得意だから快適に運んでくれるわよ？」

「シホちゃん、私にプレッシャーをかけちゃ駄目だよ！」

「あはは！」

その後はスバルを救護隊に預けて、二人はまた救援に向かっていくのだった。

将来スバルはなのは達に大きく関わってくるがまだそれは先の話。

二人ははやてに連絡をいれ、

「はやてちゃん！ 指示があつた女の子一人無事救出！ 名前はスバル・ナカジマ。さつき無事に救護隊に渡したんだけどお姉ちゃんがまだ中にいるんだって……！」

『了解！ 私もすぐに空に上がるよ！』

「了解！」

それでははやてと通信を切る。

はやては指揮官応援に来ていたスバルの親であるゲンヤ・ナカジマとリインにここを任せた。

「それではナカジマ三佐、後の指揮をお願いします！ リイン、しっかりな。説明が終わったら上で私と合流や！」

「はいです！」

それでははやては甲冑を展開して空を駆ける。

一方、フェイトも救出した民間人を外に送った後、スバルの姉のギンガの救出を行っているところだった。

ギンガはもう救出されているスバルを探して中をさま迷っていた。

何度も爆発に見舞われ、それでも助けるといつて泣きそうな気持ちを奮い立たせて前に進む。

フエイトもすぐに向かってギンガを発見するが、

「その子、じつとしてて！」

「えっ…？」

「今助けに行くから！」

「ただ、ギンガの足元が突如として崩れてしまい地面へと落下していつてしまった。ただ、ギンガの足元が突如として崩れてしまい地面へと落下していつてしまった。」

「フエイトは即座にソニック・ムーブを使い加速して落下しているギンガを拾い上げる。」

「危なかった…！」

「フエイトは両手でギンガを抱えて、」

「ごめんね。遅くなって…もう大丈夫だよ」

「はあ…そ、そうだ！ スバル！ 私の妹がまだどこかにさ迷っているんです！」

「妹さん、名前は…？」

「あっ…！」

「どっちにいったとかは分かる？」

「あの、エントランスホールの方ではぐれてしまつて…名前はスバル・ナカジマ。11歳です！」

それを聞いていた通信班は、

『こちら通信本部。スバル・ナカジマ。11歳の女の子。すでに救出されています』
画面が映し出され、そこにはシホとなのはに救出されているスバルの映像が映りだす。

『救出者は高町教導官とシュバインオーグ教導官です。怪我はありません』

「スバル…よかった」

それを見てギンガは涙を流す。

「さすがシホになのはだ。了解。こっちは今お姉さんを保護。お名前は…？」

「あ、ギンガ…ギンガ・ナカジマ。陸士候補生13歳です」

「候補生か…。未来の同僚だ」

「恐縮です…」

それでフェイトはその場を脱出していった。

そしてはやては空で、詠唱を唱えていた。

「灰白き雪の玉、銀の翼以て、眼下の大地を白銀に染めよ！」

それによって、はやての周りに氷の結晶が作り出される。

今か今かと射出されるのを待ちわびているようだ。

「八神一尉、指定ブロック非難完了です！」

「お願いします！」

「了解！ 来よ、氷結の息吹！ アーテム・デス・アイセス！」

それによつて放たれた氷結魔法は地面を、そして燃え盛る空港自体を氷付けにしている。

「よし……！」

その広範囲攻撃に局員は思わず、

「すっげえ！」

「これが、オーバーSランク魔導師の力……！」

巻き添えを食らっているのに余裕の二人である。

「巻き添えごめんな。私一人やと、どうも調整が下手で……！」

「あ、いえ……！」

「次の凍結可能ブロックを探します」

そこに通信が入ってきて、

『遅くなつてすまない！ 現地の諸君と臨時協力のエース達に感謝する。後はこちらに任せてくれ！』

首都の航空隊が到着したようだ。

「了解しました。引き続き協力を続けますので指示をお願いします」
『了解!』

それからシホ達四人は協力を続けていった。

.....

.....

.....

それから翌日になって、ホテルで航空火災が報道されているのを見ながらなのは、フエイト、はやての三人とリインはベッドでぐったりしていた。

唯一シホとアルトリアはまだ余力が残っているのか立ちながら報道を見ていた。

「うーん…やっぱりなあ」

はやてがため息をつく。

「うーん?」

「…どうしたの、はやて?」

「実際働いたんは災害担当と初動の陸士部隊。そしてなのはちゃんとフエイトちゃん、

シホちゃんやんか」

「あはは…まあ休暇中だったわけだし…」

「民間の人達が無事だったんだし…」

「死人もなく無事終了したからよかったじゃない？」

「そうですね」

それではやてが起き上がり、

「あんな。なのはちゃんにフェイトちゃん、シホちゃん」

「「うん…？」」

「私、やっぱり自分の部隊を持ちたいんですよ！

今回みたいな災害救助はもちろん、犯罪対策も、発見されたロストログアの対策も、なんにつけんミッドチルダ地上の管理局部隊は行動が遅すぎる。

後手に回って承認ばかりの動きじゃあかんし、私も今みたいにフリーで呼ばれてはあっちこっち回ってたんじゃないとも前に進めている気がせえへん…。

少数精鋭のエキスパート部隊。それで成果を上げてつたら上の方も少しは変わるかもしれないへん。

でな？ 私がもしそんな部隊を作ることになったらフェイトちゃん、なのはちゃん、シホちゃん。協力してくれへんかな？」

それでシホ達は顔を見回して、考えに耽る。

「もちろん三人の都合とか進路とかあるんは分かるんやけど…でも、その…」
それでどんだん声小さくなつていくはやて。

まだ自信がないのだろう。

だがそこでなのはが一声をあげて、

「はやてちゃん、なにを水臭い」

「小学三年生からの付き合いじゃない？」

「そうよ、はやて。今更遠慮なんてしなくていいわよ」

「それに、そんな楽しそうな部隊に誘つてくれなかつたら逆に怒るよ？　ね、フェイト

ちゃん、シホちゃん？」

「うん！」

「そうね。それに私も地上部隊には少し不満を持つていたからね」

「私も微力ながら協力させてもらいますよ、ハヤテ」

それでシホ達ははやてに笑みを向ける。

信頼関係のできた感じのいい笑みだ。

「おおきに…。ありがとうな。なのはちゃん、フェイトちゃん、シホちゃん…それにアル
トリアさん」

そして、はやては部隊を持つという夢にこれから進んでいく事になるのだろう決意を

するのだった。

それからシホ達は休んだら改めて休暇を楽しんだのだった。



…とある場所で、

「では、私と組んでくれるかね？ 魔術師殿」

「ああ、ドクター……… “ジェイル・スカリエツィ” 殿」

「くくく…これだからが楽しみだね！」

「ふふふ…そうだな。まだ準備期間だが、いずれ魔術の力を大々的に知らしめる絶好のチャンスだよ。それに同士を集めなければいかんしな。ふふふ、ははははは…!!」

闇の中で最悪の二人が共闘してしまった。

未来はもう本来の歴史を辿ることは…ないかもしれない。

第百十話

『仲良し八人の女子会な温泉旅行』

空港火災があつた年の八月。

シホ、なのは、フェイト、はやて、アリサ、すずか、アリシア、ファイアットの八人は全員一緒に休暇を取ることができてなんとか押し込む形で旅行に出かけることができた。

「…さて、それじゃ五月は空港火災で計画がおじゃんになつてしまつたんで改めて今回は友達関係全員で旅行に出かけられます。

無論、サーヴァントやほかのみんな、ツルギ君とかも連れてきたかつたけど今回は今年ということので女子会を楽しみましょう！」

『おー！』

八人はそれでバスの中で声を上げているのだつた。

今回行く場所はよく家族で行く定番であつた海鳴温泉に八人で宿泊という形になっている。

97管理外世界『地球』なので管理局からの緊急の呼び出しもほぼないのでゆっくりできるという感じである。

それで八人は海鳴温泉に到着すると荷物を置いてさっそくお風呂に入りに行こうとする。

「…それにしても、懐かしいわね」

「なにが？ シホ」

「いや、かなり前にまだフェイトと敵対していた時、あその木の上で私達を見ていたわよね。フェイトは…」

そう言つてシホはフェイトが寄りかかっていた木を指差す。

「し、シホ…当時のことはそんなに話さないで。恥ずかしくなってくるから…」
フェイトは当時のことを思い出したのか顔を赤く染めている。

「あ…あのアルフさんが来ていた時ね。あの時にフェイトもやっぱりいたのね」
「お姉様は気づいていたのですね」

「ええ」

シホはそう頷いていた。

「もう…みんな、からかわないで」

フェイトはもう真つ赤になっていた。

「にやはは。シホちゃん、もう過ぎた事なんだからいいじゃない」
「そうね、なのは」

なのはのフェイトを援護する言葉でその話は終了となった。

「そういえば、すずかー？」

「なに、アリシアちゃん？」

「『雫』ちゃんは元気…？」

「元気いっぱいだよ。生まれてまだ半年だけどとっても可愛いよ」

「なのはとすずかもおばさんになっちゃったもんね」

「そうだね」

それで全員笑い出す。

ちなみに雫というのは恭也と忍の間に生まれた子供で『月村雫』という名前の女の子である。

すずかとなのは、シホの姪っ子なのである。

こうしてツルギに続いて雫が生まれて最近はめでたい話が多いのである。

閑話休題

それからシホ達は温泉に入るために脱衣場へと入っていった。

だが、そこで最初から騒動があるとはある意味予想通りである。

それはというところ…。

「シホちゃん、やっぱり胸が大きくなってるなー。実は自分で揉んでるとちやうか？」

はやてが脱いでいる途中のシホに勢いよく近寄りその膨らんできていた胸を驚掴みにする。

「きやうつ!? ま、またなにをしますか！ この揉み魔は!?!」

シホは胸に刺激を受けて普段出さないような声を出しながらもすぐにはやてを引き剥がそうとするが、はやてはこの時限定で發揮する謎の力でなかなか離れようとしな

い。

「んー…やっぱりフェイトちゃんとアリシアちゃんといい勝負やと思う」

「はやてちゃん…? おイタはいけないんだよ?」

すずかがすぐにはやてに近寄って両腕を掴んで夜の一族の力ではやてをシホから引き剥がす。

「はあ、はあ…すずか、ありがとう」

「いいよ。シホちゃん」

少し揉まれすぎて腰砕け状態になっていたシホはなんとか助かっていた。あのままだったらやばかったとシホは思う。

「シホちゃんはここまでかー…それじゃ次はさすがちゃん！」

「そう簡単にはいかないよ、はやてちゃん！」

「さすがは身構えるが、

「…と、見せかけてそこで油断をしているフィアットちゃん！」

シホとはやてのやり取りを顔を赤くして見ていたフィアットにはやては牙をむく。

「やっ!? はやて、やめてください！」

「うん。フィアットちゃんは標準サイズやね。まだまだ成長の目処はありそうやけど

…」

「な、なんかすごく悔しい気持ちになりました…」

はやては少しフィアットを揉むとすぐにやめてフィアットはなぜかやるせない気持ちになった。

「アリサちゃんはどうやろうな？」

「あたしをそう簡単には揉ませないわよ、はやて」

「アリサちゃんはガード高いからなあ…それじゃ後はなのはちゃんかな？」

「はやてちゃん、やめてー！」

「覚悟はええかあ、なのはちゃん…?」

「ふっふっふ…油断しているはやてに一手! お見舞いするよ!」

みんなの胸を揉むことに夢中になって自分のガードを緩めて疎かになっているはやてにすかさずアリシアが仕掛ける。

そしてアリシアははやてを見事討ち取っていた(笑)。

「うわっ!? まさか私がやり返されるとは…油断したわ」

「フフフ…。はやてだけの特権じゃないんだよ? それじゃ改めて…はやてもファイアツトと同じで標準サイズだね」

「あかん、アリシアちゃん…その優しい手つき、クセになりそうや」

そんなやり取りをしていて温泉に浸かる時間がかなり遅れたが全員はやつと温泉に浸かると、

「はふうー…やつぱり温泉は心休まるわね」

シホがいつも通りにつかの間の幸せと言わんばかりに顔を緩めているのだった。

「シホちゃん、温泉かなり好きだもんね」

「ええ、なのは。体は外国産でも心はれっきとした日本人だからね」

シホはそうしみじみと呟いている。

その一方でずっとファイアツトが、

「…すずか。お姉様とのファーストキスをした感想はどうでしたか？」

「うん…。とつても心がホワツとしたよ。お互い初めてのキスだったから最初を捧げられて嬉しかったし…」

「そうですか…。非常に悔しい思いです。私もしたいです」

「フェイトはシホとすずかがキスをしたあの後、家に帰ってずつとなにかを考えて悶々していたもんね」

「あ、アリシア！ それは内緒で…！」

アリシアの暴露に思わずあうあうしだすフェイト。

それを見てやっぱり私の妹は可愛いなーと萌えを感じている姉のアリシアだった。

そこにはやてが、

「ほうほう…？ やっぱりファイアットちゃんもシホちゃんとキスしたいんか。だったら、アリサちゃん？」

「わかったわ。はやて」

はやての呼び出しにアリサもすぐに承知して温泉に浸かり緩んでいるシホを後ろから羽交い絞めにする。

「あ、アリサ!? 突然なにを！」

「ぎ、ファイアット！ 今がチャンスよ！」

「チャンスって…!？」

状況が理解できていないシホが慌てながらそう聞く。

「あんなあ？　ファイアットちゃんがシホちゃんとキスをしたんやって」

「え!?　で、でも…すずかはいいの？　私、二股とか嫌なだけ…」

「大丈夫だよ、シホちゃん。最近は何度もしているからファイアットちゃんに譲つてもいいかと思うの」

「…なんか、すずか。あなた、強くなったわね」

「うん。心に余裕が出来てきたのが一番かな？」

「それよりお姉様…キス、しましよう？」

「ファイア…私はすずかを第一に優先してしまうかもしれないけど…いいの…?」

「構いません。私がお姉様を好きな事は変わりありませんから」

「そう…」

それで温泉の中でシホとファイアットは向かい合いみんなに見られながらもつえばむようにキスをした。

そしてしばらくして唇を離し、

「…プハッ。やっと私もお姉様とキスができました!」

「ムードもなにもないけど、まさかファイアともキスをするとは思わなかったわね…」

「よかったね、ファイアちゃん！」

「はい、なのはさん！」

それで喜んでいるファイアットだったがそこにはやてが口をはさんできて、

「でも、結局はシホちゃんはずかちゃんを選ぶやろうし、ファイアットちゃん的にはそこからへんはどないするの？」

「うんうん。それは私も知りたいかな？」

「わ、私も……」

はやての言葉にアリシアとフェイトが反応して聞きたいと言い出す。

「ふふふ……私、これでも色々な世界をスクライア一族と一緒に小さい頃は回ってきたんですよ？　ですからとっておきの次元世界を知っているんですよ？」

「その世界ってなによ？　興味があるわ」

アリサが興味深そうにファイアットに聞く。

「はい。一言で言えば『重婚』ができる世界です！」

『!?!』

その発言に全員が驚きの表情を浮かべる。

「……た、確かに地球にもどこかの国では重婚できるところがあるって聞いたことがあるけどやっぱりそう言う次元世界もあるのね」

「はい。そこは重婚アリ女性同士の結婚もありの割と制度が軽い部族なんです。そこでなら私もチャンスはあります！」

ファイアットは握りこぶしを作ってそう宣言する。

それでシホはまたしても顔を赤くしていたり。

すずかも興が乗ったのか、

「それじゃそこでなら取り合いも喧嘩もなく丸く事を収めることができるね！」

「その通りです！」

そしてそこにさらに場をしつちやかめつちやかにする人物が目覚める。

《それじゃアインツベルンのとっておきの秘術を使う…?》

「イリヤツ!? 聞いていたの!?!」

《うん、なかなか面白い会話をしているから参加したくなっちゃった》

イリヤは全員に聞こえるように声を出している。

それで前にシホはある提案をイリヤにされている事を思い出して顔を青くする。

「その秘術ってなんですか!?! イリヤさん!」

「聞かせてください!」

それですずかとファイアットはすぐに食いついた。

《フッフ…もうシホには教えてあるんだけどねえ…?》

「アインツベルンの錬金術で使い捨てだけど擬似男〇器を作り出すことができるわよ？」

「それって……！」

「つまり……！」

《その通り！ それを使えば女性同士でもしっかりと子供も作れる優れものなんだよ！》

それでシホ以外の全員は今日一番の驚愕の表情を形作る。

《ふふん！ アインツベルンの錬金術は世界一よ！！ そのくらい造作もないわ！ でも欠点があつて女性同士だと生まれてくる子供は女の子限定なんだけどね》

「それでもさすがです！ イリヤさん！」

「はいです！ 尊敬してしまいます！」

それでするかとファイアットはシホとの子供が作れるんだあ…と桃色の夢を夢想する。

そしてさすがはすぐに行動に移す。

「シホちゃん！」

「は、はい!？」

「名前は『咲夜』ちゃんがいいかな!？」

「気が早いわよ!?! すぐか!？」

「私は「クオン」ちゃんがいいです！」

「フィアも落ち着いて！ お願いだから……！」

シホはなんとか二人を落ち着かせようと躍起になるが、興奮した二人はなかなか収ま
りが効いていない。一種の暴走状態である。

それを見てはやてが一言、

「やっぱりシホちゃん達を見てると楽しいな〜」

「その気持ち、わかるわよ。はやて」

はやてとアリサが思いを同調させていた。

「——そっか……。女性同士でも……」

フエイトが小声でそう呟っていた。

「フエイト……？ ぼーっとしてどうしたの？」

「えっ!? な、なんでもないよアリシア！」

「どうしたの、フエイトちゃん……？」

「なのはもなんでもないから！ だから気にしないで！」

「う、うん……」

結局フエイトが一人で悶々としてあうあうする結果となってしまったのだった。

フエイト、残念……！

そして心を落ち着かせる場所であるはずの温泉では逆に騒ぎになってしまつて全員ゆつくりと浸かることができなかつた。



一騒ぎした後、温泉をあがつた一同は夕食の前に軽く運動をしようと卓球場のスペースに来ていた。

「シホちゃん、勝負しようか！ 相手はフィアットちゃんだよ！」

「いいわよ、すずか。それじゃ私はフィアットを選択しようかしら」

「それじゃ私は審判をしようかしらね？」

シホ&フェイトとすずか&フィアットの勝負にアリサが審判のするという声をあげる。

そして観戦する残りのメンバー。

始まる卓球勝負。

「いくわよ！ それ！」

カンッ！

まずシホが球をコートに入れる。

「なんの！ お姉様甘いです！」

カンッ！

ファイアットが弾いて打ち返す。

「そちらこそ甘いよ。ファイアット、すずか！」

そこにフェイトの強烈なレシーブが見舞われる。

球は網を越えた瞬間に急に回転を変えて急速落下する。

そして球はその場で二回跳ねてまずシホチームが一点ゲットする。

「シホチームに一点！」

「さすがフェイトね！」

「うん。いつもすずかに負けっぱなしじゃないよ！」

「…さすがフェイトちゃん。でも負けないよ！ ね？ ファイアットちゃん！」

「はいです！」

それから勝負は白熱していき右へ左へと球は跳ねていきその度にそれぞれ四人が打ち返す。

そして迎えたマッチポイント。

両方共に同点でどちらかが一点を取ったら勝利となる。

「…さて、恨みなしの最後の一点争い。決めるわよ?」

「こちらを負けないよ? シホちゃん、フェイトちゃん…」

「始め…!」

アリサの言葉と同時にさすがが球を打つ。

それですかさずシホが打ち返した。

「お姉様、もらいます! はっ!」

ファイアットはかなり際どいコースに球を打った。

それはそのままいけばコート外に出てしまい負けとなってしまうがそこはさすが

ファイアット。

フェイトと同じ事をしてちょうど角っ子で球をバウンドさせる。

「させない…!」

フェイトがそのまま飛んだ。

そしてなんとか弾いて打ち返す。

「ナイス! フェイト!」

そしてさすが達のコートで球は空に上がって狙いをつけやすいコースだった。

「決めるよ!」

さすがが飛んでスマツシュを叩き込んだ。

だがそこでシホはある意味絶技を披露する。

「……——秘技、なんちゃって燕返し！」

卓球のラケット高速振りでなんと三つもの軌道を描きすべて球に命中させて、超高速のスマツシユ返しを叩き込んだ。

それはさすがとファイアットのちょうど真ん中を突っ切って行ってシホチームの勝利で終わる。

「シホちゃん、今のは反則だよ……」

「そうですよ、お姉様！」

「あれは技の一つよ。審判のアリサはどう思う？」

「いいんじゃない……？ 結局はさすが達は打ち返せなかったんだし……」

「と、いうわけ。これで勝利確定ね！」

それで見えていたなのは達が、

「すごい戦いだったよ。シホちゃん、フェイトちゃん！」

「やったね、シホ、フェイト！」

「ありがとね。なのは、アリシア」

「ありがと。なのは、アリシア」

「さすがちゃん達は惜しかったね……」

「うん…。あと一歩及ばずだったよ」

「はいです…」

それからいい汗を流した後でまだ学生なので高い料理は頼めないけどそれでも十分出された料理に舌鼓を打ち八人は楽しんだ。

そしてそれから深夜まで女子会などを開いて色々語り合った後、就寝となり、

「それじゃみんな。今日も楽しんだことだし明日に備えて眠るとしましょう」

「それじゃお休みや」

『おやすみ…』

それで全員は眠りにつくのだった。

だが翌朝、シホの布団の中にはさすがとフィアットが入り込んでいて夏という季節でもありシホは寝苦しい表情をしていたという。

そして二日目も近場のお土産屋さん巡りなどをして全員は楽しみそれぞれの家に帰ったのだった。

第百十一話

『戦技披露会』

Side 高町なのは

中学生を卒業した私達は本格的に管理局の仕事に勤めるようになった。

それで住んでいるところも、今はまだ寮生活だけどもまあなんとかやれています。

でもシホちゃんはどんな裏技を使ったのかわからないけどもうマイホームを手に入れています。

ツルギ君を鍛えるためにはやてちゃん達家族の家の近くに住まいを決めたらしい。

シホちゃんが言うには家を購入できたのもひとえにネロさんのおかげだということだね。

保有スキル：黄金律が効果を発揮してかなりのお金を荒稼ぎしたという話。

でもその分芸術にかける情熱を解放しているので出費も激しいという感じ。

やつぱりネロさん、うちでは我慢していたんだね…。

それでかねてからの予定だったランちゃんとレン君を家族に迎え入れたという。

そしてついでにいえばさすがちゃんも隣に家を構えていたりする。やつぱりさすが

だね。

閑話休題

そんな、ミッドチルダへのお引越しのゴタゴタもすべて済んで落ち着いてきたある日、管理局の集会みたいな？

本局に普段こない人や高官の人達が集められる。

本日は「戦技披露会」なのである。

戦技披露会とは普段戦っても模擬戦がせいぜいであるが、それを大勢の人に見てもらい色々と参考にして意見などももらいたいという意味合いもこめられている。

後、能力向上もあつたりする。

今回色々な人の戦いが見れるので私としても楽しみである。

でも当然私も戦う相手は決まっただけでシグナムさんだったりする。

どこまでできるかわからないけど頑張ってみようと思う。

それに肉体とリンカーコアに相当の負担を強いるエクセリオンモード…。

その代わりとして調整されて誕生したエクシードモード。

これがあればなんとかなる。

それにちよつとした裏技もあるしね。

これを聞いたシホちゃんからは、やっぱり無茶してるじゃない…?という辛口のコメントをもらつちやつたけどね。

「なのはー!」

「フェイトちゃん!」

前からフェイトちゃんが走つてきた。

「なのは。なのはの大戦相手はシグナムだつて話だけど…無茶しないでね?」

「うん。できるだけ無理はしないように頑張つてみるね、フェイトちゃん」

そこにシホちゃん達も歩いてきて、

「なのは。具合はどう?」

「うん。コンデイションはぼっちしだよ」

「そうかあ。でも相手はうちのシグナムやからなのはちゃん、無茶しそうやね?」

「うんうん。そうだね、はやて」

はやてちゃんとアリシアちゃんがそう話している。

ううー…:やつぱり私、信頼されていけないのかな…?

表情で読み取られてしまったようでありサちゃんが、

「なのはは無茶が定番だからね。誰かがストッパーにならなきゃどこまでも際限なく無

茶しちやうものね」

「そうだね、アリサちゃん」

「アリサちゃんにすずかちゃんもひどい…」

「ま、しようがないわよ。なのははせつかくエクセリオンモードを封印したのに、あんな無茶なモードを搭載しちやったからね」

やっぱりそれが原因かな。

でも、

「それを言ったらシホちゃんも私以上に無茶なモードが搭載されているよね？」

下手したら戦艦を軽く落とせるよね…」

「まあ、ラストフォームだからね。」

でもそれはエクスカリバーフォルムと同様に上の人の承認がないかぎり結局は使

えない代物だし…」

シホちゃんのラストフォーム…。

話だけ聞いてるけど実際とんでもない性能なんだよね。

私のとっておきが小さく見えるほどに…。

「ま、無茶はしちやうだろうけど頑張つてきなさい。なのはは」

「うん！ それとシホちゃんも戦うんだよね？ 確か、士郎さんと…」

「ええ。ま、ここで白黒つけるのも一興かも知れないわね」

そう言つてシホちゃんも楽しそうに笑う。

うん。よかつた。やっぱり腕試しみたいな大会だからシホちゃん達も楽しんでいるみたいだね。

そこにアナウンスが聞こえてきて、

『……まもなく戦技披露会が開催されます。出場されます魔導師の方々には選手控え室に向かつてください』

「よしっ！」

それで私は再度、気合を入れ直す。

「なのは、頑張つて……！」

「シグナムにも出番見せてな？」

「ま、頑張るなさい」

「頑張つてね」

「シホちゃんも頑張つて！」

みんなに応援されながらも私とシホちゃんは控え室に向かうのだった。

そして控え室に到着するとそこにはすでに甲冑を身にまとつたシグナムさんと士郎さんの姿があつた。

「来たか、なのは。それにシユバインオーグ」

「うん、シグナムさん」

「ええ、シグナム」

「今回は奇しくもなのは嬢とシグナム。そして私とシホというカードだ。」

「このメンツでは模擬戦でさんざん競い合っているだろうが、今回は大きな大会だ。負けてやれんからな、シホ？」

「こちらこそ。存分に力を発揮させてもらおうわよ？ 士郎」

「ふっ……」

「ふふ……」

そう言つてシホちゃんと士郎さんはお互いに笑みを浮かべ合う。

二人共とても楽しそうだ。

いつも二人はお互いに息の合ったコンビネーションを見せるけどいざ戦いとなると、そこでも同じような戦いになるからどちらが勝つか分からないんだよね。

「なのは、少しいいか？」

「はい。なんでしようか。シグナムさん？」

「我が主も見ている手前、格好の悪い姿を見せるわけにもいかない。」

よつてこの戦い、私が勝たせてもらおうぞ？」

そう言うってシグナムさんは触れれば切れるような鋭い視線を私に向けてきた。

いい感じにシグナムさんも闘志を燃やしているようである。

だから私も、

「私も負けません。みんなの応援があるならそれに応えるまでです」

「そうか。ならお互いに存分に技の限りを出し尽くすのでしょうか」

「はい！　いくよ？　レイジングハート」

《Stand by Ready.》

「セットアップ！」

私もバリアジャケットをまとってレイジングハートを握り待機席に向かう。

それから一回戦、二回戦と色々な魔導師の戦いは繰り広げられていき、私達は試合の度にこんな戦いをする人もいるんだ…と感嘆の声を出していた。

そしてやっと私とシグナムさんとの戦闘がこれから始まる。

戦闘場所は崩れかけのビルだけが立ち並ぶどこかの戦場風景。

そこで私とシグナムさんはお互いにデバイスを構えながら、

『さて、次の戦いは武装隊所属、シグナム三等空尉　VS　航空戦技教導隊所属、高町なのは二等空尉となります』

アナウンスが聞こえてくるがもう気にしている暇はないだろう。

もう空気はシグナムさんの意思に答えて緊張状態でビリビリとしている。

「それでは、いくぞ。なのは」

「はい。シグナムさんの期待するような戦いを見せます！」

「いい度胸だ。ならばついてこい」

「はい！」

『おっと、なにやらすでに二人の戦いは始まっているようですね。では時間もありませんので始めさせていただきます。』

地形条件は『地上・崩れかけたビル立ち並ぶオフィス街』。

制限時間は25分。この限られた時間の中でお互いの魔導を競い合ってもらいます

！』

そして始まりのカウントが取られ始める。

『3……2……1！ 始め!!』

「いくぞー！」

まずシグナムさんが私に向かって突撃をかましてくる。

やっぱり突撃力にはウィータちゃんの次に早いシグナムさん。

でも……！

「アクセルシューター……！」

瞬時に二桁以上のアクセルシューターを形成しシグナムさんに放つ。

それらはすべて弾幕となりシグナムさんの行く手を阻む。

「その程度…ぬるいぞ！」

レヴァンティンに炎を宿らせて次々とアクセルシューターを切り裂いていくシグナムさん。

でもその切り裂いている時間があればそれでチャージは十分！

「レイジングハート！」

《ディバインバスター。セット》

「ディバイン…バスター！」

「ちいッ！ パンツアーガイスト！」

シグナムさんはシールドを展開するが、

「くっ!？」

防ぎきれずに直撃する。

そして爆発音が響いてくる。

でも、これくらいで沈むとは私は思っていない。

そして思ったとおり一瞬で私の背後に出現するシグナムさん。

「紫電…一閃！」

「シールド！」

炎をまとったレヴァンティンと私のシールドが衝突する。

それだけでけたたましい音が鳴り響く。

だけどまだやられない…！

「バインド！」

衝突している間は両手で剣を振り下ろしているために両手が使えない。

ならばここは攻め時だ。

すぐさまにバインドがシグナムさんを捕らえようと迫る、が…。

「それは予測済みだ！」

シュンツ！

「!?」

一瞬でシグナムさんの姿が掻き消えた。

これは魔力の気配がしない！ もしかして虚空瞬動！

「存外はこの移動法は役立ってくれるな。教えてくれたシュバインオーグに感謝、というところか…？」

「あはは…：そうですね。私は使えないから残念です」

「話もなんだ。いくぞ？ 飛竜一閃!!」

咆哮のような音が聞こえた瞬間、衝撃波が私に迫ってくる。

「砲撃なら私の専売特許です！ デイバイン……！」

私が構えをしたその時だった。

急に悪寒に襲われて咄嗟に背後に向かって手を伸ばしシールドを作る。

そこにはすでに肉薄しているシグナムさんの姿が……！

でもシールドも展開が遅かったのか私はそのまま力づくで吹き飛ばされてビルに背中から衝突する。

「かつ……は……」

一瞬息が止まってしまい、なんとかたまった空気を吐き出すが今のはちよつとやばかった。

「私の売りはスピード戦だ。チャージの時間など与えんぞ……？　なのは」

そう言ってシグナムさんは笑みを浮かべる。

「……そうですか。なら、私も本気を出します！ エクシード、ドライブ……！」

そして私のバリアジャケットとレイジングハートも姿を変えてエクセリオンモードに近い形に変わる。

「いきます！　私がただ砲撃だけの魔導師だと思わないでくださいね!!」

レイジングハートから桃色の翼が展開する。

やっぱりちよつと無茶しちゃうけど負けたくない。

「A・C・Sスタンバイ！」

槍状に展開したレイジングハートを構えて私は突撃姿勢に入る。

「こいつ！　なのは！」

「いきます！　チャージ……　そしてドライブ!!」

そして私は高速でシグナムさんに突撃をかましに行く。

シグナムさんもレヴアンティンから炎を出して突撃してくる。

そして衝突……！

それによって先ほどよりもすさまじい衝突音が鳴り響いてギリギリと摩擦音が聞こえてくる。

「ここは押し込む……！

「くうっ!!」

やった……！　シグナムさんの防御を抜いた！

「ここが……チャンス！」

「決まって……！　エクセリオン・バスター!!」

魔力砲を放ち超近距離での直撃を受けたシグナムさんはそのままビルに激突する。

「カフツ……まだ、まだだ！　まだ私を倒しきるには早いぞ、なのは！」

「わかっていきますー！ いきますー！」

そしてまた私とシグナムさんの激突は続く。

砲撃魔導師である私が近距離戦を行うのはなんか変だけどそれも戦術の一つ…！

杖と剣が何度も交差してその度に壊れてもおかしくないような音が聞こえてくる。

服もあちらこちらが破けていき傷を刻む。

…レイジングハート、まだいけるよね？

そして何度目かの衝突を弾いて私は掌を眼前に掲げて、

「ストライク・スマッシュャー！」

フエイトちゃんのサンダー・スマッシュャーの純粹魔力版砲撃を放ち囨に使う。

そして、

「ブラスタターー！ リリース!! ブラスタタービット展開！」

私は奥の手であるブラスタターを開放する。

それによっていくつも出現するブラスタタービット。

それをシグナムさんに向かって放ち多方面からのバインド攻撃を敢行する。

「くっ…！ こしやくな！」

「無駄です！ そのビットはいろいろな方面から仕掛けていきますから包囲されれば逃げ場はありません！」

「おのれ…！　ぬあつ?!」

そしてやっと幾重にもビットから放たれたバインドで拘束されるシグナムさん。

「今度こそ決めます！　星よ集え!」

レイジングハートと拘束に使っていない残りの二つのビットに魔力を溜めていく。

そして、

「これが私の全力全開！　スターライト・ブレイカー!!」

極太の桃色の閃光が放たれてそれはシグナムさんを今度こそ飲み込む。

それによって地面を貫いてこの戦場ブロック外の外のエリアにまで魔力砲が貫通してしまった。

いけない…。やりすぎたかな？

『ええつと…報告します。今の砲撃によって隣の複数のエリアにまで貫通してしまいシステムが結構ダウンしてしまいました…』

そんな、報告が聞こえてくる。

やばいかも…！　また始末書を書かなきゃいけないかもしれない。

そんな後の事を考えてゾツとする。

でも、まだ戦闘は終わっていないことに気づき構える。

そして遠くからなにやら赤い物体が私に向かって飛翔してくる。

あれは…もしかしてシユツルムファルケン？

なんとか回避して避けるけど避けた場所にさらにもう一本矢が飛んでくる。

ツ!? あれはチャージ時間が必要なはずなのに…!

それによつて私は直撃してしまい地に落ちる。

「油断大敵だぞ、なのは。まだ、私は終わつてはいない…!」

そう言つてシグナムさんが少し足をガクガクさせながらも歩いてくる。

「お互いボロボロみたいですね…」

「ああ…。次が最後の一撃になるだろうな」

そして私とシグナムさんは同時に構えて最後の一撃を叩き込もうとするが、

『ピーー!』

そこで試合終了の鳴り響く。

「えっ!?!」

「なんだとツ!?!」

『えー…まことに残念ですが規定時間を過ぎてしまいましたのでお二人の勝負は終了となります。よつてこの戦いは…引き分けです!』

そんなあ…。

せめてどちらかが勝つか負けるか白黒つけたかったのに。

それはシグナムさんも同じ気持ちだったようで。

「くっ…不完全燃焼だ。なのは、この決着はいずれ着けるぞ？」

「はい…」

それで私とシグナムさんの戦いは終わりを告げるのだった。



S i d e シホ・E・S・高町

なのはとシグナムが少し残念そうな面持ちで控え室に戻ってくる。

「あ、なのは。それにシグナムもいい戦いだったわね。引き分けは残念だったけど…」

「そうだね…」

「ああ…」

「まあ、今は消耗した体を休めておけ。それで観客席にでも戻って残りの戦いでも見ておけ」

士郎がそう二人に話す。

「そうするとしよう…士郎」

「なんだ…?」

「シユバインオーグを倒せ。お前が八神家の代表だ」

「任せておけ」

「シホちゃん、勝ってね！ 応援しているから」

「任せなさい」

それで二人はそのまま控え室を後にしていく。

それからいくつか試合が行われた後、私と士郎の戦いの時がやってきて、

『続きまして次の試合は『赤き弓兵』の異名を誇る八神士郎三等空尉 VS 『魔弾の射手』の異名を誇るシホ・E・S・高町二等空尉の試合になります。

手元の資料によりますとこの二人はほとんど同じ戦いをするという話です。

『デバイス、バリアジャケットともに似たものですからどんな試合を見せてくれるのか楽しみです』

アナウンスがそう解説している。

確かに私と士郎はほぼ同じ姿ではある。

経験もほぼ同一。

『デバイスもアンリミテッド・エアとブレイドテミス…どちらも各フォルムはほぼ同じである。』

違いがあるとすれば私にはアルトリアとのユニゾンによるエクスカリバーフォームともう一つラストフォームがあるくらいか。

そんな事を考えていると士郎が話しかけてきて、

「シホ。今回は勝たせてもらおうぞ?」

「こちらこそ。そう何度も引き分けのままじゃカッコ悪いからね」

『それでは地形条件は『地上・森林地帯』。試合、開始します』

それで私はアンリミテッド・エア、ツヴァイリングフォームを構える。

『始め!』

始まったと同時に私と士郎はやっぱり考えが同じかのか同時に後方へと下がりお互いに森林に入っていつて身を隠しながら移動を開始する。

士郎は志貴ほどじゃないけど空気が気配を同化させる術を持っている。私もだけどもね。

だから時間いっぱい戦える。

そして移動を続け士郎の姿を1km先に見つける。

なので私はデバイスを弓形態に変化させてイリユージョン・アローを複数放つ。

だけど士郎も私の気配に気づいていたのか同じく弓形態で私のイリユージョン・アローをすべて射抜く。

「ツッ！ やるわね！ なら時間制限もあることだし、仕掛ける！」

私はわざと空中に飛んで身を晒して士郎の位置を確認する。

士郎も接近戦になるだろう事を悟ったのか双剣フォルムで迫ってくる。

そして肉薄。

「せいッ！」

「ふッ！」

ガンッ！

士郎との剣が双方にぶつかり合う。

それからは何度も切り結び互いに体に傷を負っていく。

「フォルム、フィーア！」

《《A x e d f o r m . 》》

私と士郎は同時に4thフォルムである斧剣形態に変化させる。

「ツッ！ 考えは同じか！ ならば後は力押しだ！」

「決めるわよ！」

「ナインライブズ：ブレイドワークス!!」

斧剣による九つの斬撃を同時に放つ。

それは衝突しあい相殺されるかと思われたけどやっぱり男性である士郎と女性であ

る私では力が違うのか少しずつ私が押されてきている。

「くっ！ だけど負けない！」

なんとか相殺で終わらせて私は反動で後ろへと下がり斧剣をそのままに私独自の風の魔力変換資質による恩恵で得たアルトリアの技を放とうとする。

「ストライク…エア!!」

風の衝撃が士郎に襲いかかる。

「ぬおおおッ!!」

それによって士郎は全身に衝撃を喰らって大きく吹き飛び一本の木に激突して動きが止まる。

「くっ…ぬ…やはりその魔力変換資質は私にはないものだから相殺はできんか。だがそう簡単にはやられん！」

「なら次で沈める！ フォルム、ツヴァイ！」

弓形態に変えて私は捻れた魔力矢を作り出す。

「これでもくらいなさい！ カラド・ボルク!!」

「それはくらわん！ アンサラー…!!」

やばっ…!!

アンサラーとか何つぶやいてんの!? この人間凶器二号!?

だけでももう私は魔法を放った後である。だからもう止めが効かない！
ならなんとか防いでみるとしよう。

「フラガラック!!」

「ロー・アイアス!!」

魔力ダメージには魔力バリアで防ぐ。これが鉄則。

でも宝具ではないとは言えフラガラックはやっぱり危険だ。

私のアイアスをどんと削っていく。

「くう……ッ……!」

私になんとか防いでいる中、士郎が私に向かってフルンティングを構えている。

今度こそやばい……! 手が塞がっている今は迎撃できる状況じゃない。

「これだとどめだ! フルンティング!!」

「うわあっ!?!」

フルンティングの魔力ダメージが手を出せない私に直撃してしまった。

それで私は地面へと墜落してしまい、体を動かそうとするが、

『クリティカルヒットです! シュバインオーグ選手のマジックポイントもエンプティ

で勝者、八神士郎選手!』

そんなアナウンスの声が聞こえてくる。

「今回は、私の負けか…これで128戦40勝40敗48引き分け、か。せつかく勝ち越ししていたのになあ…」

「今回は勝たせてもらつたぞ、シホ」

士郎が私に近づいてきてそう言う。

「ええ。今回は私の負けね。でも、次は負けないわよ?」

「ああ」

それで私と士郎は控え室に戻っていった。

だけど戻る途中でとある二人の人物達と出会う。

その人は士郎より高い背で金髪のツンツン頭、目の色は灰色の容姿であつた。

そしてもう一人はオレンジ色の髪に黒いバイザーをつけている少し怪しい人物。

「戻ってきたか、シユバインオーグ二等空尉に八神三等空尉」

「あなたは…?」

「私は『ジグルド・ブリュンヒルデ』提督だ」

「ああ。あなたが噂のあの『管理局の正義の象徴』とまで言われているジグルド提督で

すか」

「ああ、そうだ。今回の戦い、見させてもらつた。それでさつそく折行つて相談だが君達には将来私の隊に入ってもらいたいと思つているのだ」

「あなたの組織に……？」

「また、どうして……？」

「私は将来この管理局の未来を思つてとある変革をしようと考えている。それには同志が欲しいところなのだ」

それで私と土郎を誘つてきているのか。

「……そうですか。でも残念ですが私は所属が教導隊ですし、それに将来はとある部隊に誘われていきますので今はあなたの部隊には行くことができません。すみません」

「私もシホと同意見です」

「そうか。それは残念だ……。ま、気が変わったら声をかけてくれたまえ」

「わかりました」

ところで少し気になつてはいるが、

「ところで、先程から無言の彼は一体……？」

「ああ、紹介していなかったね。彼の名は“タスラム”。

名前は仮の名ではあるが、私の右腕であり良きパートナーである」

「……………」

タスラムさんはそれでも無口を通している。

何か秘密があるのだろうか。

その視線に気づいたのかジグルト提督は、

「ああ…彼の無口は気にしないでいい。」

私の前ぐらいでしかバイザーを外さないし喋りもしない少しシャイな青年なのだから」

「はあ…」

「……………」

タスラムさんはやっぱり無口を通してている。

気になるけど本人達が気にしていないのなら他人の私達は口出しはできないわね。

それでジグルト提督は笑いながら「それでは」と私達から離れていきタスラムさんも無言でついていく。

「シホ、あの男…なにかをやりそうな目をしていたな？」

「ええ、なんとか平静を保てたけどなにか目に野心を感じたわ」

「それにタスラムという男も気になる。動きが精錬されていたからな。あれは単純に鍛えたからである動きであってほしいな…」

「そうね…」

少し不安を感じながらも私達はなのは達のところへと戻ったのだった。

戻るとさっそく、

「士郎、勝ったようだな。家族として誇らしいぞ」

「シホちゃん、残念だったね……」

「シホちゃん、後で慰めてあげるからね……？」

「すずか、ちよつと大胆ね。さすが隣同士の家で暮らしているだけあるわね」

「そんな事を話し合いながらも本日は戦技披露会はつつがなく終わっていったのだった。

第百十二話

『とある魔導魔術師の教導体験記』

S i d e
???

俺の名前は「アルテア・ステイング」。

俺には管理局ではまだ数が少ない魔術師という少し胡散臭げな力が宿っていると
う。

だか、そんなまいち信用に劣る能力より魔導師の方が断然良いに決まっている。

…とは言ってみても俺の魔導師ランクは低いし空戦適正もない。

魔導師訓練校ではまずまずの成績で卒業はしたもののそんなに活躍できそうにない
しこれからどうしようかと思われたそんな時に一人の女性が俺のところに来てきた。

「あなたがステイング二等陸士かしら…？」

「そうですけど、あなたは、もしかして…」

「ええ。知っていると思うけど、航空戦技教導隊及び魔術事件対策課所属の魔導魔術師
のシホ・E・S・高町です」

シホ・E・S・高町といえばあの『エース・オブ・エース』の高町なのは二等空尉と

義理の姉妹で、『魔弾の射手』の二つ名で有名な人じゃないか。

そんな有名な俺になんの用があるっていうんだろう…？

でも一応話は最後まで聞いてみることにする。

もしかしたら俺の力が開花するかもしれないという予感を感じたからかもしれないからだ。

それからシホ・E・S・高町二等空尉に色々話を聞く。

「もう知っていると思うけどあなたには魔術師の才能があると診断されているわよね？」

「はい、まあ…」

「それでものは相談んだけど、私達魔術事件対策課に所属する気はないかな…？」

「それっていわゆるヘッドハンティングってやつですか？」

「まあ、そんなところね。もちろん断つてもいいわ。そのところはあなたの判断に任せる。」

でも、もし今以上の力を身に付けたいと思ったなら私に連絡してみて。

その時にはあなたにとっておきを教えてあげるわ」

それで俺はシホ・E・S・高町二等空尉の連絡先を教えてもらい今日一日は家に帰って考えてみることにした。

そして家に帰宅後、色々と考え込む俺。

魔導師ランクが低い俺でも魔術師でならもしかしたら活躍できるかもしれない…そんな思いを抱く。

なにかこれといって魔力値が高いとか、変換資質があるとか、レアスキルがあるとか、そんな目立つ長所もない俺にも伸ばせる力が発見できるかもしれない。

色々と考えてみて翌日のこと、今の部署の仕事が終わった後に俺はシホ・E・S・高町二等空尉に連絡をとってみることにした。

連絡してみても、

『あ、ステイング二等陸士？ よく連絡を入れてくれたわね。それでどう…？ 私達の対策課に来てみる気になってみたかしら？』

「あ、そ、そうですね。昨日帰ってから色々と考えてみたんですけど、その話、受けてみることにしました」

『そう、よかったわ。それじゃさっそく明日にでも魔術事件対策課の隊舎に来てもらっても構わないかしら？』

「わかりました。えっと、場所とか行く時間とかを教えてくださいませんか？」

『わかったわ。今から場所を転送するわね』

それから場所と明日の時間を教えてもらい、その翌日に俺は魔術事件対策課の隊舎に

来ているのだった。

受け付けではシホ・E・S・高町二等空尉が待つてくれている。

「来たわね。ステイング二等陸士」

「はい。シホ・E・S・高町二等空尉。」

それでさつそくですが魔導師ランクが低い俺でも役立ちますかね…?」

「それはこれからのあなたの努力次第よ」

それでシホ・E・S・高町二等空尉は人懐っこい魅力ある笑みを浮かべる。

それに対して俺は思わず顔を赤くしてしまった。

しかもそれが気付かれてしまったのかそうでもないのか、

「…? ステイング二等陸士、顔が赤いけどどうしたの?」

「い、いえ、なんでもありません!」

「そう…? それと私の事はシユバインオーグ二尉かシホさんかのどちらかで構わないから。固っ苦しいのも嫌でしょ?」

私もアルテア君で呼ばせてもらおうとするから」

「は、はい。シホさん…」

「ん。まだ固いけど十分ね」

それから一つの部屋に移動した俺達。

二人つきりというのも緊張するものである。

「さて、それじゃまずアルテア君の中に眠っている魔術回路を起こす作業をしましょうか」

そう言つてシホさんは色々と準備を始める。

なにやらキラキラしたビー玉サイズの球状の宝石？を取り出すシホさん。

「まずは魔術回路を自覚するところから始めましょうか。まずはこれを飲んでみて」

飲む…？ この、宝石もどきを…？

「えっと、これを飲むんですか？」

「ええ、飲むの。そうすればすぐに何が起こるか実感できるわ。」

魔術師みんなはほとんどが通つてきた道だから安心していいわよ」

それで俺は少し躊躇しながらもそれを一飲みで喉に飲み込む。

しばらくして、

「うっ!! なんだ、体の中が熱い…! まるで熱を出したみたいだ…」

「気をしつかりと持つてね? しばらくはその症状が続くから」

「は、はい…」

それでしばらく俺はその気の遠くなるような苦しみに耐えた。

シホさんはじつと見てくれているけど本当にこれは正しいのか？

そんな事を思っているときだった。

頭のなかになにかのイメージが沸いてきたのだった。

「あ、あのシホさん。さつきよりは楽になったんですけど、その代わりに頭に変なものイメージが出てきたんですが…」

「…早いわね。それじゃ次はそのイメージを保ったままあなたの内にあるリンカーコアとは別の魔力を探してみて。すぐに見つかると思うわ」

「わ、わかりました…」

それで俺はイメージを保ったまま魔力を探してみた。

これかな…？

そんな事を感じ、自然と俺はイメージに魔力を流すさらなるイメージを重ねた。

瞬間、俺はリンカーコアとは別の体を循環する魔力路を自覚する。

「…はあ、はあ…これが魔術回路をイメージするって事ですか？」

「ええ、そうよ。初めてにしては上々よ。それじゃ魔術回路も開いたことだしいつまでも魔力を垂れ流しておくのもなんだから、次はその魔術回路を閉じるイメージをしてみて」

「閉じる、ですか…？」

「そう。魔術回路は閉じている間は魔力の消費をカットしてくれて他人にも気づかれに

くくなるのよ。

リンカーコアはそこら辺が曖昧だから結構便利よ。

さ、やってみて」

「は、はい…」

そしてまたイメージして閉じる動作をやってみる。

するとさつきまで感じていた魔力が感じなくなってしまった。

でも、また開けば感じるということはなんとなくなかった。

「うん。上出来ね。その感覚を覚えておいてね？　そして自然とすぐに開けるように努力していかうか」

「わかりました」

「よし。それじゃ今日半日は魔術回路を開いた影響で熱が体を駆け巡っていると思うから、しばらく休んでいようか。」

それで午後からは本格的に魔術について講座を開いて教えていくわ」

「はい、シホさん」



それから午後になりある程度熱も抜けてきた頃に俺は魔術の勉強室だと言われている教室に呼ばれた。

そこには俺以外にも数人の人がいてそれぞれメモ用の端末などを準備している。

「あら？ あなた、新顔？」

そこに一人の女性が話し掛けてきた。

黄色い髪をポニーテールにしている少し勝ち気そうな女の子だ。

「あ、ああ…。俺は今日からここに來る事になったアルテア・ステイング二等陸士、十四歳だ」

「そう。それじゃ私の魔術師の後輩になるわけね。自己紹介をしておくわ。

私は「セラ・アスコット」二等陸士。十五歳。

シホさんに魔術の力を見込まれて魔術事件対策課にやってきた新米魔術師よ。ちなみに魔術属性は雷。

あなたは知らないだろうけど私が目指している魔術師はアリシア・T・ハラウン三等陸尉よ」

「ハラウンって…確かクロノ・ハラウン提督と、そして『金色の閃光』で有名なフェイト・T・ハラウン執務官の…」

「そう。そのフェイトさんの姉の人よ。魔術事件対策課では前線で出張しているエリー

トなのよ？」

「へえー……」

そう感心していると魔術の授業が始まるのだろう、シホさんが教室に入ってきて、「さて、それじゃ魔術授業を始めます。いつもはアリサ・バニングス二等陸尉が講義を開くけど今日は新人もいる事だし魔術師の基礎を教えていくわよ」

それから開かれる講義。

その内容を聞くたびにそんな事が、と感心する内容がいくつもあり、そのたびに端末にチエックを入れていく俺。

そんな事をしている時だった。

「…さて、それじゃ新人のアルテア君のために属性魔術を調べようと思うわ。属性によつて教えてくれる先輩が変わるから最初が重要ね」

それでシホさんが俺に向かって歩いてくる。

「それじゃちよつと私の魔力を解析魔術で流すから受け入れるイメージをしてね？」

「わかりました」

「それじゃ、トレスオン解析開始」

するとなにか俺の魔力とは別の魔力が流れてくる感覚がした。

「ふむふむ…アルテア君の属性魔術は風ね」

「風、ですか…?」

「そう。風を操って空気による切断や天候操作、他にも色々と応用が効く力ね。

起源に関してはもう少しじっくりと調べてみないとわからないけどとりあえずアルテア君の上司は魔術事件対策課の隊の部隊長であるミゼ・フローリアン三等陸佐になるわ。

ミゼさんも得意魔術は空気による切断だから色々風属性に関しては学べると思うわ。後で顔出ししておくといいわ」

「わかりました」

「それじゃ今日の講義はここまで。」

私はこれから航空戦技教導隊の方に出向かないといけないからみんな、別々の属性、得意魔術に分かれて担当の上司の場所に向かうように。以上よ」

『わかりました』

それから教室にいた様々な人達が移動を開始している中、

「それじゃステイン君、私はこっちだからあなたも頑張りなさいよ?」

そう言つてセラは違う教室へと向かっていった。

俺も移動するか。



それから部隊長のミゼという人に会いに行く。
でも到着してみても驚いた。

なんかミゼ部隊長？ともう一人、えっと跳ねた赤い髪の女性がなにか知らないけど語り合っていてお互いに涙を流し合っていたのだ。

「わかる、わかるわ。カレンさん。あなたもパートナーを失った痛みがあるのよね」

「はい、ミゼ部隊長。なんか私達、分かり合えますね…」

どうにも入りずらそうな場所に立ち合ってしまったな、と思ったけどあちらもこっちに気づいたのか、

「あ、ごめんなさいね。あなたがシホさんが言っていた新人魔術師の子ね」

「は、はい。アルテア・ステイング二等陸士です」

「そう。私がこの魔術事件対策課の部隊長をしているミゼ・フローリアンよ。よろしくね。

そして…」

「あ、私はカレン・ルージュ三等陸尉よ。よろしくね。カレンで結構よ」

「よろしくお願ひします」

「しかし、シホさんもまた可愛い子を対策課に連れてきたものね」

「ミゼ部隊長。男の子に可愛いは失礼ですよ……？」

「ま、そうね。それじゃあなたも風属性の魔術師で間違いないのね？」

「はい」

「シホさんが言うには風属性の魔術師は希少だという話だからお互いに頑張っ
ていきま
しょうね」

「はい、ミゼ部隊長」

それから希少というだけあり風属性は俺とミゼ部隊長だけみたいで個人
レッス
ンに
なるみたいである。

「ところで、仕事とかはいいんですか……？ 部隊長なのに……」

「部隊長だからといっていつも仕事をしているわけではないわ。それに、私
自身ま
だ
だ魔術を鍛えるのに熱心だからね」

「ミゼ部隊長は魔術の分野になるとほかの技能が霞むくらい能力を
発揮し
ます
からね」

カレンさんがそう言う。

どういふことか聞いてみるとミゼ部隊長は俺と同じ魔導師でもあるらしいが
そつち
方面はからつきしらしくシホさんに鍛えてもらって今の力を開花させたとい
う話
なのだ。

「俺以上に、才能がなくて苦しんでいたんですか…」

「あなたはまだまだマシよ？ 私はどうなに学んでもあんまりできなかったんだから…出来て転移魔法が得意だったってくらいかしら？」

「はあ…そうなんですか」

俺にとつては転移魔法もかなりの高位魔法だと思っただが、そのところはどのようなだろうか…。

怖い返事が聞けそうだから空気を読んで聞かないことにした。

そして始まる実技レッスン。

でも、属性魔術別に分けたといってもやることは対して変わらないらしい。

まずは基礎の魔術である強化や暗示系の地味な魔術の習得から開始するという。

でも、一口に言っただけ強化といっても奥が深いという。

モノや物質を強化する硬度強化魔術。

身体や体の一部を強化する身体強化魔術。

炎や水、風などを強化する属性強化魔術。

…と、強化の種類を上げていけばキリがないという。

そして応用で強化しすぎると劣化現象を起こしてしまうという。

さらに強化するといっても意味合いは異なっていく。

例えばナイフを強化すれば切れ味上がり、食材などに使えば栄養度が上がり、メイドに使えば萌え度が上がるという。

ナイフと食材は…まあ、信じられるが、さすがにメイドはないと思うけど…。

暗示に関してもどんな暗示をかけるのか、どんな方向性を示すのかと色々複雑らしい。

すごい暗示使いの魔術師は人を死に至らしめるほどの暗示も可能だという。

ちなみにシホさんがよく使う暗示は犯罪者から情報を無理やり引きずり出すほどらしい。

やっぱりすごいなあ…。

閑話休題

そしてレッスンは進んでいって何度かランプを割ってしまおうということがあったがそれでも強化の魔術は教え方がうまいのか物質強化はできるようになってきた。

お次はやってきました風属性の特訓。

「それじゃ見本を見せるから見ていてね？」

そう言つてミゼ部隊長は拳に風を溜めていく。

ちなみに魔力が集中していくのが分かるから見えるのであって実際見ただけでは空気の变化などわかるわけではない。

そして手刀の構えをすると振ること一閃！

すると目に見える風の刃が出現し、目標物を真っ二つに切り裂いてしまった。

「これが単純に空気による切断よ。切断といってもやっぱり強度具合によつて威力は変わつていくからやっぱり強化の魔術は疎かにしてはいけないということね。わかつたかしら？」

「はい、勉強になります」

「ここで豆知識だけどよく風で体が切れるつていう話、聞かない？」

「あ、はい。ソニックブーム現象ですか？」

「そうね。あれもやろうと思えば人為的に風属性の魔術師はできてしまうから扱いには注意が必要ね。」

魔導と違つて魔術は非殺傷がないからある意味危険な術なのよ。すべての魔術は……
「へえー……そんなんですか」

……ん？ でも、それだとよく管理局はそんな危険な力を採用したものだな。

そこのを聞いてみると、

「ああ、その件ならもう解決済みなのよ。シホさん達が使う魔術式デバイスのおかげで

魔術もデバイスを使えば非殺傷になるように調整ができるようになったのよ。

でも、やっぱり魔術は魔導と違って神秘の塊だからどうやって非殺傷になっているかがまだ解析が不十分らしくて魔導師のように出力リミッターがかけれないのが今の現状。

だからね？　うちに所属している魔術師は数が多いから魔術事件対策課は十分危険な集団と見られているのもひとつの顔でもあるの…」

それはそうだ。部隊によって出力リミッターがかけられてやつと今の管理局は安定した実力で拮抗している。

それなのに魔術事件対策課の魔術師はそのリミッターをかけられないから、ある意味どこまでも戦力を増やすことが可能になってくるのである。

「だからそのうち、魔術事件対策課も第二、第三と隊の規模を増やしていくかもという話が検討されているのよ」

「なるほど…。増えるなら増える前に分けてしまえばいいというわけですね」

「そうよ。まあまだ将来的な話ではあるけどね。魔導師に比べればまだ圧倒的に魔術師は数が少ないから。」

でも、シホさんの話だと第97管理外世界『地球』にはたくさん隠れ魔術師が潜んでいるという話。

だからそのうち地球も管理外という枠組みから逸脱して管理世界に変わるかもという話があるわ」

「そうなんですか…。大変な話ですね」

「最悪、説得するためにひとつの戦争が起きるかもね？」

「その冗談はさすがに笑えないんですけど…」

「あら、意外と冗談でもないのよ？ 地球は次元世界で使用を禁止されている質量兵器を多く扱っている世界でもあるから意見が合わずに衝突すれば世界の一つくらいは滅ぶと私は予想しているわ」

本当に、笑えない…。

「ま、そんな事を今から言ってもしょうがないから今できることをやっていきましょう？」

「…は？」

ミゼ部隊長にそう言われて俺は修行に明け暮れるのだった。



そして次の日にシホさんが魔術事件対策課に勤めている魔術師を全員集めて合同の

特殊教導を行うという。

「はい、それじゃ各種属性隊に分かれて練習を開始するわよ」

『はいー！』

シホさんの教導は凄いの一言である。

まだ勤めて二日目の俺でも実力が少し上がったという感想が持てるのだから。

時には親身に、時には厳しく教えてくれてそれでも優しく監修してくれるのはありがたいと思う。

そしてあらかた半日魔術の練習を終えて次に行うのはシホさん達地球の武術である中国拳法という独自の動きを教えてくれる。

そんなに力を込めていないのに吹き飛ばされる人を見てすごいと思った。

まだシホさんレベルの動きは無理でも将来的には浸透勁と瞬動術は最低でも会得してもらいたいという。

これを覚えれば高位犯罪者にも有効だという話だから。

でも、まだやり始めたばかりの俺には厳しいものであるのは変わりない。

それで訓練終了後に少しへばっているとそこにセラさんがやってきて、

「ステイン君、これくらいで参っていたらこれからをやっていけないわよ？」

「わ、分かっているんだけどね…」

「もう、男なのにだらしががないなあ…。しようがない、ここはシホさん謹製の塗り薬を出しますかね？」

そう言うところから取り出したのか分からないがセラさんがなにかの塗り薬を取り出していた。

シホさん謹製の塗り薬…？

なんか、危なそうな雰囲気伝わってくるんだけど…。

その予想は正解で塗られた瞬間に体に響き渡るピリツとした痛みがッ!?
それで思わず悶絶していると、

「あら？ やっぱり最初は慣れないものなのかな？」

「そ、そういうセラさんは慣れてるのか…？」

「うん。これって爽快感が半端じゃないんだよね。私のお気に入りなの♪」

「そ、そうなんだ…」

「ええ」

そこにシホさんがやってきて、

「アルテア君。ちよつと疲れているところ悪いんだけどいいかしら…？」

「はい？ なんででしょうか」

「あ、これはあれだね。よかったわね、ステイン君。シホさんのカウンセリングを受

けられるわよ)」

「(カウんセリグ…?)」

セラさんが小声でそう話しかけてくる。

「(シホさんってメンタルにも精通していてよく入ってきたばかりの人には親身になって対応してくれるのよ)」

「(そうなんだ…)」

「(シホさんは弟子思いのいい人だからね)。それじゃ私はもう戻るから頑張つてね、スティング君)」

それでセラさんは先に帰っていった。

代わりにシホさんが近寄ってきてへばっている俺の隣に座り込み、

「もうセラと仲良くなったのね。絆を深めておくのはいいことだから私はいいと思うわよ」

「は、はい」

「それで昨日、今日とここで働いて特訓してみよう？ なにか実感わいた？」

「まだまだですね。でも、なんか楽しいです」

「そう。それじゃ一つ心得を覚えておくわね。」

魔術の力は裏返せば外道の力と言ってもいいわ。

だから魔術師による犯罪も最近増えてきているわけだしね。

それを止めるのが私達正しく魔術を使う魔術師の自分。

決して悪の力に使ってはいけない。これは魔導師も魔術師も共通の想い。

だからデバイスで非殺傷になるからといって油断していたら当たり所が悪ければ死ぬ可能性もあるんだから用心して魔術は使用してね？」

優しい笑みを浮かべながらシホさんはそう俺に教えてくれる。

そうだ。魔導師も魔術も結局は非殺傷を外せば人殺しの道具になってしまいうんだからちゃんとした使い方をしないといけないんだ。

俺も、そう自信を持って人のために使っているということを証明できる人間になるう。

「シホさん！ これからも教導のほど、よろしくお願いします！」

「ええ。あなたも将来は立派な魔術師になれるように育ててあげるわ。覚悟しておきなさいね？」

「はいー！」

これは、シホさんのおかげで新たな道を開けた俺ことアルテア・ステイングの魔術事件対策課での日々の始まりの話である。

第百十三話

『陸士訓練校の変わったトリオ（前

編）』

S i d e スバル・ナカジマ

去年の空港火災から一年。

あたしを助けてくれた高町なのは二等空尉：なのはさん。

それとシホ・E・S・高町二等空尉：シホさん。

あたしは二人を：特になのはさんを目指して魔導師になろうと思った。

魔法学校に行つていかなかったけど、でも魔導師になりたいと思ひギン姉にシューティングアーツを習つて今年の六月に陸士訓練校に入学した。

それで入隊式も終わつて各自部屋割りを見に行こうとしていた時に教官の一人から声をかけられた。

「スバル・ナカジマ訓練生」

「はい？　なんででしょう？」

「お前の部屋割りと当分のパートナーの話なのだがな…」

「はい」

「普通なら二人で当面のコンビパートナーを組まされるのだがな…急遽一人飛び込みで入ってくる生徒がいてな。

一人余ってしまった、相性的にお前がいいと思ってお前達の部屋は三人部屋でコンビではなくトリオという形になった。

だから少し環境が他の者と違うだろうと思うが、まあ頑張れ」

「はい…」

あたしと一緒にいるメンバーが二人もいるんだ。

楽しみだなあ…。

そして改めて部屋割りを見に行くと、

「32号室…」

そこでは32号室の表示を見ている二人の女の子がいた。

「…あなた達も話に聞いているけど32号室なの…？」

「あなた達もですか…？」

オレンジ色の髪の毛のツインテールの女の子と黒髪のセミロングの眼鏡をかけている女

の子があたしを見てそう言ってきた。

「は、はい。あたしはスバル・ナカジマ、12歳です」

「グディアナ・ランスター」…13歳よ。よろしく」

「えつと…話しには聞いていると思うけど私が急遽二人とトリオで頑張っていく事になった」リオン・ネームレス」…一応ですが12歳になっています。よろしくね」

ランスターさんにネームレスさんか。

ネームレスさんは同じ年だけどランスターさんは年上だ。それに綺麗だし…。

それと、なんかネームレスさんは歳を言う時が変なアクセントだったけど、気にしたらダメかな…？

「それじゃ挨拶もなんだからさっさと着替えて訓練に向かうわよ」

「はいっ！」

「うん！」

「それとあたしは年上だといっても対等な立場なんだから敬語はいらないからそのところよろしくね」

ランスターさんがそういうのでまた敬語で話しそうになったけど、

「うん！」

と、普通に話しかけた。



それから三人で着替えを済まして訓練用デバイスを支給されることになっているんだけどあたしは自前があるのでいらなんだよね。

「あなた達二人デバイスは…?」

「あたしは自前なの。近代ベルカ式で自分で組んだローラーブーツとりボルバーナックル。」

「そう。前衛なのね」

「うん!」

「それで…えつとネームレスだっけ? そつちは…?」

「私も自前なんだよ。〃シルバー・ブレット〃。サーベルタイプの近代ベルカ式デバイス」

「あなたも前衛…それだと後衛タイプのあたしには少し二人をカバーするのが骨が折れそうだわ」

そう言つてランスターさんは銃型のデバイスを取り出す。

「わあ! 銃型なんだね」

「ええ。カートリッジも積んでいるから。あたし達三人は自前のデバイスだから組まされたんでしょうね」

「そうみたいだね。あ、それと二人共、ちよつといいかな？」

「……？」

ネームレスさんがなにか改まってそうあたし達に話しかけてくる。

「私ね、ネームレスって苗字にはあんまり愛着がないの……。むしろ嫌いかな？ だから名前で呼んで欲しいな、って……」

「うん！ それならリオンって呼ばせてもらうね！ あたしもスバルって呼んで！」

「そうね。本人が嫌がっているならあたしもリオンさんって呼ばせてもらうわ。ティアナで構わないわ」

「うん！ スバルにティアナ！ これからよろしくね！」

うん。なんか距離がぐつと縮まった感じがするよ。

なんかりオンさんって癒し効果でも持っているのかな？

そんな事を話している間に練習開始の時間となった。

「次！ Bグループだ。ラン&シフト！」

教官さんからそう命令を受けたので三人で構える。

「この中でスバル…あんたが一番突進力がありそうだから先行して？」
「わかった！」

「——あ…」

そこでリオンがなにか物思いにふけっている。

するとあたしに近寄ってきて、

「ねえスバル。行く前にしつかりと魔力の制御はしてね。私達を置いて先行しすぎないでね？」

なんだろう？ なにかのアドバイスなのかな？

でも、うん…それなら少し気をつけてみようかな？

それでいつもより少しこめる力と魔力を抑え気味でスタートする。

「いっくよー！ ゴー!!」

それですぐにフラッグポイントを確保した。

するとなんとか二人も付いてこれていた。

でも、

「バカッ！ あんた、もうちよつと力を抑えなさいよ！ 吹き飛ばされそうになっちゃったじゃない！」

「(ぎゅ)めん…」

「……………やっぱり言っただけじゃ無理だったかあ」

「どうしたの、リオン？」

「え？ ううん、なんでもないよ」

なんか呟いていたけどあたしのこの行動がもしかして分かっていたのかな？

さっきのリオンのアドバイスがなかったらもつとあたしだけで先行しすぎちゃったかもしれないし。

そして次は垂直飛越の訓練だった。

ここでもあたしが二人を持ち上げて上に飛ばす役目を担った。

だけどここでも、

「——あ……………スバル、力をセーブして私達を飛ばしてね？ 馬鹿力を発揮しちやダ

メだからね？」

「え。リオン、あたし力がかなりあるの教えたっけ…？」

「聞いていないけど、ちよつと知っちゃったって事もあるから…。だから気をつけてね？」

「う、うん…」

「二人共、さつきとやるわよ？」

ランスターさんにそう言われてあたしもとりあえず力がある程度絞って二人を上

飛ばした。

「ただどやっぱりまだ力が込めすぎていたのか他のグループより二人は空高く飛んでしまっていた。」

「なんとか、二人共着地は出来ていたけど上から「飛ばしすぎよ!」とランスターさんの怒りの声が聞こえてくる。」

「うう…力の制御がまだ完全にできないのがやっぱり問題点かな?」

「その後もなにかをやる度にリオンから指摘を受けてなんとか問題行動は起こさずに済んだけど、訓練終了後にランスターさんに、

「…ねえ、ナカジマさん。あんたつてもしかして力をしっかりと制御できていないでしよう?」

「あ、やっぱり分かった?」

「そりゃ訓練と一緒にしていれば嫌でも気づくわよ。リオンさん、あなたも分かってて言っていたんでしょ?」

「う、うん…分かっててっていうか瞬時に先のことを知ったっていうか…」

「? どう言う意味よ」

「うん…あまり周りには話さないでね? 私ね、たった五秒だけだけど先の未来が分かる能力を持っているんだ」

驚いた。

先の未来っていわゆる予知能力だよな？

それで聞く。

リオンが指摘していなかったら今頃あたしが先行しまくったり、ランスターさん達をかなりのバカ力で飛ばしていたりしていたんだという事を。

「はあく…そんなレアスキルを持つているのね、あんた」

「うん、五秒だけだからそんなに気前のいい能力じゃないけどね」

「それでもすごいよ！ そんなスキルを持つているなんて…！」

「ありがと…それで少しだけ未来を変えて今回はなんとかミスもなくうまくいったけど…。」

スバル？ あなたはまず力をうまくコントロールする事を身につけたほうがういと思う」

「同感ね。毎回リオンさんに指摘してもらっていちや身につかないから。当面のトリオとしてナカジマさんを鍛えることを念頭に入れていきましよう」

「うん。ティアナ」

「ありがとう。リオン、ランスターさん」



それから二ヶ月、二人にいろいろな指摘を受けながらもあたしの力と向かい合っているのか制御できるようにまでこぎ着けてきた。

二人は朝晩と自主練に付き合ってくれるのでとても嬉しい。

「これで来月分までの予習は終了ね」

「そうだね。スバルもなんとかまともになってきたし私の予知能力も使う機会は減ったほうだし…」

「二人共ごめんね。ここまで付き合ってもらっちゃって…あたし、要領が悪いから」

「いいわよ。当面のパートナーが使えないんじや訓練にもならないからね」

「ティアナ、ちよつと辛辣だね…」

「なんともいいなさい。あたしは真実を言っているだけなんだから。」

リオンさんも言いたいことがあったら素直に言ったほうがいいわよ？ アンタ達二人共あたしにはない恵まれた魔力と体力を持っているんだから…」

「う、うん」

「ティアナ…ティアナも十分才能はあると思うよ？」

リオンがそう言っていた。

うん。それはあたしも思うよ。

あたしをここまで矯正してくれたのはほかならないランスターさんだし。

「褒めてもなにもでないわよ？ それとデバイスもいいもの使っているんだからそれを
使いこなせるように頑張りなさい。今のままじゃ宝の持ち腐れ状態なんだから」

「う、うん。使えないことに恥じないといけないね！」

せつかくお母さんの形見のデバイスなんだからしつかりと使いこなさないとね。

それから三人で遅れてシャワー室に入ったけどもう混みまくっていた。

「あちゃー…やつぱり混んでいたね」

「リオンさん。あなた、これももしかして予知していた？」

「うん、少しだけ…」

「そう…」

「あたしのために時間とってごめんね、二人共」

「いいわよ、気にしないで」

「うんうん」

それで服を脱いでいる時にランスターさんがある事を聞いてきた。

「そういうええ、あんたっていつもその写真持ち歩いているわよね？」

「えっ？」

見ればランスターさんはあたしの雑誌の切り抜きであるのはさんとシホさんの写真が入っているアクセサリーを見てそう言っていた。

「あ、この人達って戦技教導隊の高町なのは二等空尉とシホ・E・S・高町二等空尉の写真だね」

「うん。あたしの憧れの二人なんだあ…」

「そうなの。でもあたしもシホ・E・S・高町二等空尉は目指す人の一人ね。」

「なんせ『魔弾の射手』って異名がついていて射撃型の魔導師からすれば高みの存在の人だしね」

ランスターさんはシホさんを目指す人だっけと言っている。

あたしはどっちかというとなのはさん寄りだからね。

それでリオンさんも、

「私もシホ・E・S・高町二等空尉は目指す人かな？ 双剣使いってところが同じだし…」

「え？ リオンさん、あんたってデバイス、サーベルよね？」

「う、うん…でもモード2は双剣形態なんだよ？ 今は封印されていて使えないけど…」

「ふーん…結構高価なのね。そのデバイスは」

「うん…ちよつと昔にいろいろあってもらったんだ。ちよつとした制御のために」

「なんの制御よ？」

「これだけは言えないかな？ 私の秘密なの。ごめんね」

「ま、いいわよ。話したくない事だつてあるものよね」

「そうだね、ランスターさん」

それでシャワーを浴びながら、

「でも目指しているつてことは空戦希望なの？ ナカジマさんは」

「うーん…近代ベルカで空戦つて今はほとんどいないしね」

「私も空戦はしたいけど色々と練習を積まないといけないしね」

「まあ、近代空戦はミッド式の長射程&大火力が主流だしねえ…」

ランスターさんがそうしみじみと言う。

「うん。飛んでみたいしミッド式も興味はあるんだけどどちらも今のところ適性はな
いみたいだから自分で陸士を選んだわけなんだけどね」

「それは私もだよ、スバル。今はまだ色々手を出すのはあまりできないよね」

「そうだね。ところでランスターさんはやっぱり空戦希望なの？」

「まあね。今はまだ飛べないけど、飛べなきやあたしの夢は叶わないからね」

「そつかあ…ね、ランスターさんは…」

「…ナカジマさん。それにリオンさんもだけど、悪いんだけどあたしはあなた達の友達
じゃないのよ。」

仮トリオだから世間話くらいはするし訓練も付き合う…けどね必要以上に馴れ合う気もないから、そのへんは誤解しないで欲しいわ。

…あたしってこういう嫌な奴だしね」

「ランスターさんはいい人だと思うけどなあ…」

「うんうん…」

「でも、気をつける」

「そうだね」

「悪いわね、二人共…」

それは魔導師になりたいって言う子はいろいろな理由があるけど、それでも友達になりたいなあ…って思ったりした。

リオンとは友達関係になれたんだからランスターさんともきつといいお友達になれると思うし。

.....

.....

.....

それから日にちはたって訓練成果の発表が張り出された。

それで三人で見に行くことにした。

こんなのもあるのにびっくりした。

ランスターさんが言うには競争くらは当然あるから、らしい。

「つていうかなかなか混んでいて見えないわね」

「それなら私が見ようか？ 視力には自信があるんだ。特殊な眼も持っているし…」

あたしが見ようかと提案しようと思つたが、先越された。

それでそう言つてリオンが掲示板を見る。

でも、特殊な眼つてなんだろう…？

それよりリオンは背はあたしたちより小さいのによく見えるな。

なんか背伸びしているみたいで微笑ましい。

「むっ、スバル。今失礼なこと考えたでしょう？」

「そ、そんな事ないよ？ リオン」

「そう？…まあ、いいけどね。それでだけど私達は…32号室、ナカジマ&ランスター
&ネームレス、総合三位だよ」

「ほんとだ…」

「やったね！」

それでランスターさんはあまり見せない笑顔を浮かべていた。やっぱり綺麗だね。

そんな事を思っていた時だった。

どこからか陰口が聞こえてきたのは、

(あの子、士官学校も空隊も落ちているんでしょ?)

(一人は知らないけどもう相手の一人はコネ入局で陸士士官のお嬢だし…)

(格下の陸士部隊ならトップ取れると思ってるんじゃない?)

(恥ずかしくないのかしらねー?)

そんな言葉が聞こえてきた。

それで思わずランスターさんは振り向く。

ランスターさんはそれで拳を握りしめていた。

なんかこの空気は嫌だ。だから、

「ランスターさん、休憩行こう?」

あたしはランスターさんを引つ張っていった。

でもリオンはちよつと立ち止まっていたけどどうしたんだろう?

「リオンも行こう…?」

「先に行つて。私はちよつとお話してくるから」

「あ、ちよつとリオン……！」

リオンはそれでどこかへと行ってしまった。

と、とりあえずあたし達は外に出ることにした。

それで少しランスターさんと話をしているとしばらくしてリオンが追いついてきた。

表情はすつきりとしていて、その拳にはなにやら赤いシミがついていたけど、あたし

の気のせいだよね……？

「ちよつとすつきりしたかな？」

「あのさ、リオン……一体何を？」

「気にしたら負けだよ？ スバル」

「う、うん……」

「それでどこまで話したの……？」

「うん。えつとね……」

それで説明する。

あんなのは軽口だ、とか。

本当は士官学校か空隊に入りたくて、ここなら楽勝だと思つて入つてきた？とか。

など。

「ふーん……そこらへんまでは話したんだ。それじゃ私もスバルと同意見かな？」

トリオとして仲間のプライドを守るのは当然の義務だからね」
「…そう」

それでランスターさんはポツリポツリと語りだす。

曰く、士官学校も空隊も落ちたのは本当。

だけど今いる場所を卑下するほど腐ってはいない。

いつかは空に上がる、けど今は誇りを持ってここにいる。

一流の陸戦魔導師になって、ここをトップで卒業して陸戦Aランクまではまっすぐに駆け上がる。

…など、ランスターさんの本心はだいたい聞けた。

なら後は、

「そうだね、スバル！」

リオンもあたしの言いたいことを未来予知したのか、

「あとは証明するだけだよ。三人で証明して言ってみんなに実力を認めさせよう」

「そうだよ、ティアナ」

あたしとリオンでそう話す。

それにランスターさんは呆れながらも、

「ああもう、あんた達の好きにきなさい。あたしも実力を示すつてのは反対じゃないか

ら付き合つてあげるわよ。まったく…」

「あはは…！」

「ふふふ…！」

それで三人で笑いあつた。

うん！ いい雰囲気だね！

これからも頑張つていこう！

第百十四話

『陸士訓練校の変わつたトリオ（後

編）』

Side ティアナ・ランスタ―

あのナカジマとリオンさんに話した決意から少し経過した。

最近のナカジマとリオンさんは二人して近代ベルカチームの方に行っているので、一人ミッド式のあたしとしてはうるさいのがいなので個人のスキルを上げることには集中できる。

そんな中で宿舎に戻ってみると二人してなにかを記入している。
あ、アンケートか。

「アンタ達、もうアンケート記入しているのね？」

「うん！」

「早く書いたほうがいいからね」

それならあたしも書いちゃおうかなと思っていて、ふとナカジマとリオンさんが二人してあたしのことを見てくる。

多方あたしがなにを書くのか気になってるんでしょうね。

なら先制パンチをしてみようかしら？

二人が油断している隙に、

「ティアナ、残念。その行動は予知済みだよ？」

「あなたのその予知能力は便利よね？ ON、OFFもしつかりと効くのが羨ましいわ」

奪えたのはナカジマのアンケート用紙だけだった。

リオンさんはうまく逃れたようである。

でも、

「私のも見ていいよ。ティアナ」

「そう？　ありがとう」

それでナカジマとリオンさんのを同時に見ると二人共、

まずナカジマは備考欄に『在校中はティアナ・ランスター訓練生とリオン・ネームレス訓練生とのトリオ継続を希望します』。

リオンさんも同じような内容だった。

「あんた達ねー…？」

あたしは呆れていた。

でも、卒業後の進路は少し違っていた。

ナカジマはあたしと同じ災害担当希望だった。

でもリオンさんは、『行く場所はすでに決まっています。場所については秘匿とさせていただきます』と書いてあった。

「ナカジマは、あたしと同じで災害担当か」

「ランスターさんと同じ希望なんだ！ やった！」

それでナカジマは嬉しそうな顔をする。

なんか、あたしの勘だどこいつとはかなりの付き合いになりそうだと感じてしまうのが恐ろしい…。

「ま、いいけどね。それで理由は…?」

「うん。あたしは人助けができる部署ならどこでもいいかなと思ってね。」

災害や、危険があれば火の中、地の底、水の中なんて当たり前で災担当や救助隊は魔法戦技能を十分に活かせるお仕事だし。

それにランスターさんも陸地で活躍、昇進して魔導師ランクアップ&空隊入りもして、それでようやく執務官試験を受けるんだよね?」

「そういうのは辛いだらうけど応援するよ」

ナカジマとリオンさんがそう言つて応援してくるけど、

「…あんだ達にうつかり漏らしちゃったのが最初の過ちよね…」

「そんなこと言わずに頑張ろう！」

「ま、なんだかんだで長年の付き合いになりそうだしね…。」

それより、リオンさん。あんたはいくところかすでに決まっているの？」

「…うん。ちよつと他人の人には言えない場所に行くことが決まっているんだ…」

それでリオンさんは少し辛そうな表情になるのをあたしは見逃さなかつた。

それはナカジマも同じよう。

「どこか変な部署なの？ もしかしてその上司に苛められているとか…？」

「ううん…そんなんじゃないんだ、そんなんじゃないや…でも、ねえ、ティアナにスバル…」

なにやらリオンさんが改まって真剣な表情で話をしてくる。

「もしね、もしもだよ？ 私が…その——…」

なにかを言いかけている。

でも、少しして顔を何度も振つて、

「やつぱりなんでもない！ 二人共気にしないでね！ 私は二人とは違う道に行くこと

になるだろうけど、お互いに頑張つていこう！」

先程までの少し無理をしている表情が嘘のように元氣に戻つたために、ナカジマは心

配していたけど付き合いが短いあたしはなんでもないなら別にいいか……くらいにしか考えていなかった。

でも、もう少し深く関わっていたならリオンさんを助けたいと思ったのだろうな……と、そう遠くない将来に思い知る事になる。

そして衝撃の出会いも体験することも……。

今はまだ自分のことだけしか考えていなかった無知なあたしなのだった。

……それからナカジマに週末のお休みを誘われたけど、あたしは断った、つもりだったがワガママと強引さで結局付き合い合わされる羽目になってしまった。



そしてお休みの日、あたしとナカジマ、リオンさんは「パークロード」まで遊びに来ているのだった。

それで付き合い合わされてやれやれ……と思っていると、リオンさんが、

「お疲れ、ティアナ」

「ありがと、リオンさん……」

慰められてなんとか気持ち落ち着いてきた。

それから会うというナカジマのお姉さんがいる場所へとやってくる。そこには少しナカジマと似ている女性がいた。

「ギン姉！」

「スバル！」

二人は会えることが嬉しいのかいろいろと話を交わしていた。

あの元気の良さのノリはお姉さんも持っているのね…。

つていうか、もしかしてナカジマってお姉ちゃんっ子だったりする…？

色々と考えているとナカジマの姉のギンガさんがこつちにやってきて、

「紹介するね。こちらはランスターさんにリオンだよ」

「初めまして。ギンガ・ナカジマです。スバルがいつもお世話になっています」

ギンガさんは優しくそんな笑みを浮かべて挨拶をしてきたのでとりあえずあたしとリオンさんは挨拶をしておくのだった。

「えつと、ティアナ・ランスターです」

「リオン・ネームレスです」

二人で挨拶を交わした後、ナカジマが四人分のアイスを買ってくるね、と言ってアイス屋に行ってしまった。

それでちょうどいいわね、とギンガさんが話してあたし達に色々話を聞いてくる。

「スバルはどうですか？ 迷惑はかけていない…？」

「妹さんは優秀ですよ」

「はい。最初はムラがあつたのに今ではもうしつかりとしていますから。個人成績も上位なんですよ」

「本当に…？ それならよかつた。それでランスターさんとネームレスさんはご家族は…？」

痛いところをついてきた。

でも今のうちに言っておくのもいいだろう。

もうナカジマとリオンさんにも話してあることだしね。

「あたしは…一人です。両親はあたしが生まれてすぐに、育ての兄も三年前に事件で…それで天涯孤独つてやつです」

「私も…生まれた時からすでに一人だったので親の顔は知りません」

「ごめんなさい…」

それでギンガさんは申し訳なきように謝ってくる。

「気にしないでください」

「はい。私達は気にしませんから」

「あたしは兄の残してくれた遺族補償もありますし…」

「私もちよつとした場所からお金はもらっていますから」

「そう…ランスターさんは遺族補償ってお兄さんも局員？」

「はい…」

「憧れだつたりする…？」

「今も憧れています…」

ギンガさんはそう…と行つた後、空を見上げながら、

「ランスターさんもネームレスさんもスバルから聞いているかな？」

うちも母が亡くなつていているんだ。私達がまだ小さい頃なんだけどね」

「はい、聞いています」

「私も聞きました」

「スバルがやっていているシューティング・アーツね…あれもともと母がやっていたの。」

だから私は小さい頃から、スバルも基礎くらいはやってただけど、あの子つて少し臆病なところがあるでしょ？」

「あ、はい」

「それは時たま感じます」

ナカジマつて時々怖気付く事があるのよね。

「それで、怖いのか痛いのとか他人を痛くするのとかが嫌だからつてあんまりシュー

ディング・アーツをちゃんとやっていなかったのよ」

「そうなんですか」

「今からは少し想像つきませんね。スバルは勢いがありますから」

「うん。それも理由があつてね。あの事故からS Aも魔法も真剣にやるようになったの」

「あの事故…?」

あたしとリオンさんは同時に首をひねる。

それでギンガさんは気づいたのか、

「聞いていなかったのね。去年の春に起こった空港火災なんだけどね」

「あ、空港一個丸々ダメになったっていうあれですね?」

「そんな事があつたの…?」

「リオンさん、あんた知らないの? 結構有名だったのよ?」

「う、うん…その頃はまだ目覚めていなかったから…」

「目覚めて…?」

「あ! ううん、なんでもないよ!」

なんか気になる単語を聞いたけどよくわからないので今は放っておこう。

「続けるわね? スバルと私はその事故に巻き込まれちゃつたの」

「え……？」

巻き込まれたって、あれに……？

「空港でかなり奥の方で一人ぼっちでね。もう絶望的な状況だったんだけど……」

「それって去年の事ですよ？ それから半年ちよつとで訓練校に？」

「信じられないです……」

「うん。怪我はワリと軽めだったしね。それで決めちゃったのよ。」

私と父さんは止めたんだけど訓練校を出て局員になるんだって大急ぎで色々と学んで練習していたの」

あ……あのワガママは身内にも効果あるんだ……。

「魔法学校とかは行ってなかったんですか……？」

「うん。普通校よ。だからまだ魔法は初心者と言っても過言じゃないわ」

「ますます信じられないです……」

リオンさんと一緒に同じような顔をあたしはしていた。

「魔法歴1年以下……なるほど。道理で飲み込みが早いと思いましたよ」

「確かに習ってからすぐに覚えてきたよね。でも、それだとやっぱり事故のショックで

……？」

リオンさんがそうギンガさんに聞く。

「いえ、なんていうか出会っちゃったのよ」

「出会った…?」

「空港火災でスバルの憧れと理想そのままの人達にね」

「…ああ、もしかして高町なのは二等空尉ですか…?」

「それとシホ・E・S・高町二等空尉…」

「そうなの。スバルは二人の写真の切り抜きをお守りにしているのも知っているんでしよう? それからなのよ。二人を憧れに持つようになったのは。」

憧れを見つけて、自分を見つめて、スバルは泣いていたの…弱い自分が嫌だって、強くなりたいてって」

ギンガさんはナカジマの気持ちを知っているのだろう。同調しているみたいね。

「ああ、ごめんなさいね。私ばかり話しちゃって…」

「いえ…」

「大丈夫です」

「あの子、メールでよくランスターさんとネームレスさんのことばっかり書いているのよ?」

「だから二人の話も聞きたいなって…」

「はあ…」

「いいですよ？」

リオンさんはすぐに頷く。

っていうかギンガさんってナカジマと同じで二人揃って本当にじつと目を見て話すのね…少しやりづらいかも。

それで二人で、あたしは射撃系や幻術魔法、リオンさんはサーベルによる近接戦にレアスキルの未来予知などを話すとギンガさんは目を輝かせて、

「幻術を使うんだ！　すごいわね！　それに渋い！　どんなの練習しているの!?!」
「えつと…まあ基礎的なことくらいで…」

「ベルカ式はそっち系がほとんどないから羨ましいなー！　それにリオンさんも未来予知ってすごいレアスキルを持つているのね！」

「はい、まあ五秒だけのパツとしない能力ですけどね…」

「それでもすごいわー！」

なんか、ギンガさんってノリがナカジマと同じだ。

それからナカジマが四人分のアイスを持って帰ってくるとギンガさんは自分のことのようにあたし達の事を話している。

なんか、姉妹揃って騒がしいなあ…。

それから挨拶だけするって約束が結局フルで付き合ってしまった。

そしてなんかナカジマのリボルバーナツクルの話になると少し声のトーンが落ちた気がした。

それであたしは聞いてみると、

「リボルバーナツクルね…母の形見なの。母は両手で使っていたんだけど、今は私とスバルで片方ずつね」

「あたしが右利き。ギン姉が左利きで使っているんだ！」

「へー、そうなんですか」

リオンさんは素直に感心しているけど、あたしは以前にちよつと意地悪なことを言った覚えがある。

それを謝らないといけないわね。

リオンも気づいたのか、

「ティアナはやっぱり優しいね。スバルに謝ろうとか考えているでしょ？」

「言わないですよ？ 恥ずかしいんだから…」

「うん！」

どうもリオンって子がいまだに掴めないわね。

先を見透かされているような感じだわ。

それから寮に帰ってナカジマが寝ている間にリオンさんも手伝ってくれてあたしは

リボルバーナックルを綺麗にしてやった。

そして朝になりナカジマが何度も聞いてくるけど何度も躲していく。

その度にリオンさんはクスクスと笑っている。

覚えときなさいよ……?

それで謝ったのはいいけど、

「いつかのアレ……? え……え? ランスターさん、何かしたっけ?」

ナカジマ自身が覚えていないという始末である。謝りぞんだ!

それでまた一方的な口撃をカマしてしまい周りから笑われる始末であった。

それから気まぐれであたしはナカジマの事をスバルと呼び、リオンさんの事をリオンって呼ぶと二人共揃って、

「うん、ティア!」

「ちよ……! どうして二人共知っているのよ!」

「ギン姉に話したでしょ?」

「私はスバルに聞いたんだよ」

「友達とか仲良しの子はそう呼んでいたって……」

「あたしとあんた達とは友達でも仲良しでもないっ!」

「でも、今はトリオでしょ?」

「ああ、もうなんでこんな時だけアンタ達二人は息がピッタリなのよ!」

「だから呼ばせて…仲間としての呼び方として」

「私もティアって呼びたいな」

あたしはそれで顔が赤くなってくるのを抑えられない。

まったくもー、こいつら二人は恥ずかしがらずに言うんだから!

それで結局あたしが折れる形で承諾してしまった。

もう、しょうがないわね。

でも、あたしはこの時に気づいておくべきだった。

リオンとはともかくスバルとはかなり長い付き合いになってしまおう事に…。



そんな訓練校の日々を続けていき、とうとう卒業が迫ってきたそんな時に夜に三人で込み入った話をしようという事になった。

「それじゃまずリオンからかな? リオンはどんな秘密を持っているのかな?」

「そんな…そんな重要な秘密はないよ。あっても二人に話せるようなものでもないしね」

リオンはそう言つて少し暗い表情をする。

やっぱりなにか隠しているのかしら？

「そ。まあ、いいわ。それじゃスバルは…？」

「あー、それじゃ驚かないでね？ 実はあだし、普通の人じゃないんだ」

「は…？」

「戦闘機人つて知ってる？ 違法の技術だけど、ギン姉とあだしは体に機械が埋め込まれているんだ」

「あんた…軽く話すわね？ いいの？ そんな重要な話をしてもらつちやつて…」

「いいんだ。二人には話しておきたかつたから」

それからスバルは色々と経緯を話してくれた。

ここまで話されたんじゃあたしも話さないわけにはいかないじゃない。

それで兄…ティータ・ランスターの事を話すことにした。

「兄さんはあたしの憧れの人だったんだ。でも違法魔導師の追跡で手傷を負わせはしたんだけど取り逃がしちやつてその返り討ちのせいで死んじやつた。

でも、そこまでならまだよかつた。でも、兄さんの遺体はどこかに隠されたのか行方不明になつてしまつたらしいの。

だからお墓には骨は入っていないのよ。

しかも、兄さんの上司は、

『犯人を追い詰めたくせに取り逃がすなんて首都航空隊の魔導師としてあるまじき失態だ。』

たとえ死んでも取り押さえるべきだった。しかも行方不明になるなんてどういう事だ。馬鹿者め!』

とか、ふざけたことを言い出したのよ。果てには『任務を失敗するような役立たずは云々…』とか言い出してさ。

その上司はそれが原因で退職させられたらしいけどね。いい気味だわ。

それで、だからあたしは兄さんの、ランスターの魔法は無駄じゃなかったって事を証明するために今頑張っているのよ」

それを話終わるとスバルとリオンは二人して涙を流しているのだった。

「ちよ、どうしたのよ二人共…?」

「お兄さん、可哀想だよ」

「うん…」

「……………、ありがとう、二人共」

兄さんのために泣いてくれる二人に感謝をしておいた。

それから他にもまるで本当の友達のようにあたし達は会話をしていた。



そして卒業式の日、

「それじゃティア、スバル。進路は別だからトリオはここで解消だけど絆は一緒だからね？」

「うん、リオン！」

「あなたも頑張んなさい」

「うん。最後に聞いておきたいことがあるんだけどいいかな？」

「なに？ 言ってみて」

「うん。前に言えなかったことなんだけど、もし、もしもだよ？ 私が危機に陥ったら…

その時は、助けてくれるかな？」

「当然だよ！ あたし達は友達なんだよ！」

「ま、その場面に出くわしたららでできるだけ助けてあげるわ。でも、本当にあんたの進路ってどこなの？」

「ごめん…それだけはやっぱり秘密なんだ」

「そっか…連絡が取れないから残念だね」

「うん…。でも運が良かったらまた会えるかもしれないからその時はよろしくね！」
「うん！」

「ええ」

あたしとスバルは二人で返事を返す。

「それじゃ、またね。二人共…」

リオンは涙を流しながら訓練校を卒業していった。
それじゃあたし達も頑張っていきましょうかね？



リオンはある隊舎にやってきて、

「よく帰ってきたねえ、リオン。ひと時の自由は楽しかったかね？ くくく…」

「ツ…」

「おっと、俺様に歯向かうのはお勧めしないよ？ お前の自由は俺様が握っているんだからね」

その男は嫌な笑みを浮かべながらそう語る。

「私は、これからなにをすればいいのよ…」

リオンは苦虫を噛み潰したような表情をする。

「さて、まだ当分はあのお方の手足として頑張ることだね。俺様は裏から操らせてもらうからね。くくく…」

リオンは心の中で、

（ティア、スバル…助けて！）

と、呟くのだった。

将来、リオンはスバル達ととある理由で対峙する事になる。

でも、そんな未来は予知できるほどリオンには力がなかった。

リオンの未来には今のところ暗雲が立ち込めているのだった。

第百十五話

『シホのミッドチルダでの暮らし』

S i d e シホ・E・S・高町

ミッドチルダで暮らすようになってはや三年、ランとレンという姉弟を迎え入れて魔術の修業と同時平行に家族として育てる事もやっているそんな最中。

来年ごろにははやての夢見た部隊設立も迫ってきているそんな時、部屋でアルトリアとネロと会話を楽しんでいるときだった。

「そういえばシホ、少しいいですか？」

「ん。なに？ アルトリア」

「ランとレンですが、エリオとともに局員になる訓練を頑張っていますでしょうか？」

「そうね…。頑張っていると思うわ。」

ランとレンは二人とも魔力変換資質〔氷結〕を持っているから割りと有利に学べると思うわ。

短期訓練校を卒業したら私の分隊に二人を入れるつもりだしね。

そしてエリオの方もフェイトは自分の分隊に入れるつもりらしいわね。前に会った事があるキャラotteと子と一緒に。

歳はまだ現在二人とも九歳くらいだからあまり局入りはお薦めはしないんだけど、達もそのくらいにすでに働いていたから何も言えないのよね」

「そうだな、奏者よ」

それで私は二人が相談してきた時のことを回想する。



ある日、扉がノックされる。

「はい、どなた？」

「私です。ランです」

「ぼ、僕もいます…」

「あ、ランにレン。なにか用？ 遠慮せず中に入ってきていいわよ」

「それじゃ失礼します」

「失礼します…」

それで二人は中に入ってきた。その表情は真剣なものだった。

「シホさん！ 少しいいですか!？」

「どうしたの？ ラン？」

「はい。私とレン、管理局に入ろうと思っっています。なにからなにまでシホさん達にお世話になるわけにはいけませんから」

「うん…まともな学校に通わせてもらっているのもシホさんのおかげです。

だから恩返しがしたいです」

ランと、普段は弱気であり自己主張しないレンもそう話す。

「でも、いいの?」

「そうです。まだランとレンの二人は子供なのですからじっくり考える時間がありますよ?」

「その通りだぞ」

私、アルトリア、ネロの三人で本当にかと聞く。

それに二人は元氣よく「頑張ります」と答える。

「それに、私とレンはシホさんのように人の助けになる仕事に着きたいんです」

「うん…シホさんが助けてくれなかったら今の僕達はありませんでしたから…」

「そう…」

「いい志しですね」

「そうだな、アルトリアよ」

私達は二人の成長になにかいいものを感じているのだった。

「それにメールでエリオも管理局に入るって聞きましたから」

「ああ、そういえばフェイトがそんな事を言っていたわね…」

「だからエリオ君と一緒にの時期に短期訓練校に行こうと考えています」

「それじゃ三人ともまずは陸士研修生からスタートと言う事になるのね？」

「そうなりますね」

「うん…」

そうね…。それじゃ早速下準備を始めましょうか。

それで私は隣のすずかの家に向かう。

扉をノックするとすぐにはすずかが家から出てきた。

「あ、シホちゃん。いらっしやい」

「ええ、すずか。それでちよつと頼みたいことがあるんだけどいい…？」

「うん。シホちゃんの頼みならなんでも聞くよ！」

「そう、よかつたわ。それじゃ少し私の家に来てもらっていい？」

ランとレンを訓練校に入れるためにすずか謹製のオリジナル魔術式搭載のデバイスを作ってもらいたいよ。

それでどんなデバイスがいいか希望を聞いてもらいたい。任せていい？」

「うん、任せて。それじゃどんなデバイスかさつそく意見を聞いたら製作してみるから二人の意見を聞くよ」

それですぐに私の家に来てもらいさつそくすが二人にどんなデバイスがいいか意見を聞く。

「それでまずランちゃんはどうなデバイスがいいの…？」

「やっぱり私はベルカ式で剣型のデバイスがいいです。」

アルトリアさんとネロさんに剣術を習っていますからそれを十全に発揮できる形態があつたらいいですね。

それに魔術も行使できて、後は私とレンの魔力変換資質【氷結】も斬撃として放てたら嬉しいです」

「うんうん…それじゃシグナムさんのレヴァンティンタイプの剣型デバイスがいいかな？」

「はい、構いません」

「うん…それじゃ名前はなにがいいかな？」

「ええつと…『バルムンク』でお願いします」

バルムンク、ね。

どこから持ってきたのかしら？」

有名どころだとジークフリートの剣だけど。

それで試しになんでか聞いてみると、

「それはですね…前にシホさんが地球の神話などの本を見せてくれた時にこの名前はかっこいいと思ひまして。それに同じ剣型ですし」

「そっか。それじゃすずか。ランのデバイスはバルムンクで登録お願いね？」

「うん、わかったよシホちゃん。それじゃ次はレン君かな？　どんなデバイスがいいの？」

「は、はい…。えっと、僕は盾型がいいです」

「盾型ね…。それだとやっぱりアームタイプになるのかなあ…ほかにはなにか希望はある？」

「はい。本来の使用はやっぱり盾でいいんですけどラン姉さんと同じで斬撃が展開できたらいいかなと考えています」

「盾に斬撃…：…それじゃ魔力の刃を展開できるように作ってみようかな。面白そうなものが作れそうだよ。でも、なんで盾なの…？」

「はい…。僕の性格は知っていると思ひますが自分でも分かるようにどうにも消極的です。」

だからあまり前に出れないかもしれません。それなら中衛でどこにでもすぐに回れて攻撃と防衛を同時にできたらいいかなと思っただけです」

「そっか……。うん、わかったよ、レン君。そんな感じで作ってみるね？ それで名前はなにがいい？」

「アウルヴァンデイル、でいいですか……？」

「アウルヴァンデイル……？ シホちゃん、名前はなにが由来かわかるかな？」

「そうね……アウルヴァンデイルっていうと、北欧神話に登場する小人の事で弓の名手で、ホズを弓矢で盲目にしたって言われている人物の名前、だったかしら？」

「あ、シホさん正解。それで合っています」

合っていてよかったわ。

でもなんでこんなややこしい名前にしたのかしら……？

理由を聞いてみると、

「その人は小人なのに関係なく大きい人に立ち向かっていったっていう話があります。だから僕もそんな勇気を持てる人になりたいと思ってデバイスの名前にしたいと思っただけです」

「なるほどね。自身の成長をデバイスと一緒に行っていくという意味合いもあるのね」

「はい」

「なら構わないかな。それじゃすずか。二人の意向でデバイス作成を進めていってほしい？ もちろん魔術式搭載は絶対条件で」

「うん。わかったよ、シホちゃん。ランちゃんにレン君もできるのを待っててね？」

「はい」

それですずかはそれからマリーさんの意見も参考にしていきながらもデバイス作成を取り掛かっていった。

そしてランとレンが短期訓練校に入学するちよつと前にデバイスが完成したという報告で家にやってきた。

「はい。ランちゃんにレン君。これがあなた達の意向の元に作られたデバイス達だよ」

すずかの手にはミニ剣の形をしたものと二枚のコインが糸で繋がっているものの二種類の待機形態のデバイスがあった。

それでそれぞれ剣型はランに、コイン型はレンに渡された。

「わあー…これが私のデバイス」

「それでこれが僕の…」

「その子の名前を言って展開してみて？ この子達はそれぞれに答えてくれるから」

「はい！」

「うん！」

それで二人は待機形態をかかげて、

「バルムンク！」

「アウルヴァンデイル！」

「セットアップ！」

それで二人のデバイスは展開されていく。

ランの手にはシグナムと似た形の青白い片刃の剣が握られていた。

そしてレンの方には両手にとりつく形で二枚の標準サイズの盾が装着されていた。

それを見てさすがが、

「うん。試作タイプにしてはちゃんと起動してくれてよかった。まだ初期型だからその形態しかないけど物足りなくなったら言うてね？ 新しいフォルムも考えてあげるからね」

「そんな…。これだけでまだ私達は十分ですよ」

「うん。まだ慣れないといけませんから」

「うん。了解だよ」

「ありがとね、さすが」

「ううん、いいよシホちゃん。いつでも頼ってね？」

「ええ」

すずかはやっぱりこういう分野では頼りになるわね。

それでランとレンはしばらくの間、寮通いの住み着きで訓練校に入っていた。しばらくは少し家の中が寂しいと感じてしまうことだろう。



…しみじみとその時のことを思い出していた。

「二人の成長が今から楽しみね。はやての部隊でみっちり鍛えるつもりだし」

「そうですね」

「奏者のことは余が守るからな？」

「うん。二人共頼りにしているわね」

「はい」

「うむ」

ピンポーン♪

と、そこにインターフォンが鳴る音がして外に出てみると、そこにはすずかとライダー、ファイアの三人がやってきていた。

「あ、お姉様。こんばんわです」

「こんばんは、シホちゃん」

「こんばんは、シホ」

「ええ。でも三人共こんな時間にどうしたの…?」

「うん。アルトリアさんとネロさんを交えた六人で女子会を開いて色々話し合おうかなと思って…」

「はいです」

「将来、ね…。いいわよ。今はランとレンも家にいないことだしね」

……………

……………

……………

それから六人で色々話をしていた。

途中で私が料理を作ったりしてみんなでつまんだり。

特にアルトリアが黙々と食べていたわね。それを見てライダーがなにやら含みのあつる笑みを浮かべていたり。

それはともかくとして女性になってから体重とかも気にするようになった身として

は太らないのは羨ましいのである。

「…シホ？ どうしたのですか？ そんなにじっと見られては恥ずかしいですよ」

「いえ、いくら食べても太らないアルトリアとネロ、ライダーが羨ましいなって思っ
てね」

「あ、それは私も思いますよ、お姉様」

「うんうん、特にライダーはすごいプロポーションだもんね」

「…スズカ、恥ずかしいですから。それに私はそんな綺麗では——…」

ライダーの言葉は最後まで紡がれなかった。

なぜかというはずすがこわい笑みを浮かべていたからだ。

「ライダー？ なんでもいいつもいつも自分を卑下しちやうのかなー？」

「い、いえ…す、すみません、スズカ。もうこれは癖みたいなものにして」

「相変わらずですね、ライダーは」

「黙りなさい、アルトリア。ベルレフオンを喰らいたいですか…？」

「エクスカリバーで返り討ちにしますよ？」

アルトリアとライダーがお馴染みの仲の悪さで喧嘩腰である。

「ははは、相変わらずの仲の悪さよの。アルトリアにライダーは」

ネロは二人の争いを肴にお酒を飲んでいるしね。

「ふむ、ここは余の歌で場を盛り上げようとするか」
「ツ!？」

ネロがそんな事を言い出して思わず私は顔を引きつらせた。
アルトリアも聞き捨てならない内容だけに私と同じような表情になっている。
他のメンツはまだ知らないらしくなんのこと?という表情になっている。

今回は洗礼としてみんなにも味わってもらおう。

ネロがマイクを持ち歌おうとしている。

それで私とアルトリアは耳を塞ぐ。

そして始まる。恐怖のリサイタルが。

——ボエ~~~~~♪

しばらくして恐怖の時間は過ぎていったがそこにはグテつとしてるすずか、ファイア、
ライダーの姿があつた。

やっぱりかあ…。

「うむ、あまりの余の美声に驚いているようだな!」

ネロは状況が分かかっていないらしく御満悦である。

「し、シホちゃん…ネロさんって、かなり音痴なの？」

「(ええ…。せっかくの美声なのにそれが台無しにしているのよね)」

「(い、言っておいてくれたらよかったです。はう…)」

フィアはそれでダウンしてしまった。

それからお口直し(？)という感じで私がローレライを熱唱するとダウンしていた一同はなんとか復活してくれた。

そんな感じで夜は過ぎていった。

——そして翌朝、いつ寝たのか覚えていないけどなぜか下着姿で私達は一つのベッドで雑魚寝をしているのを見て、なにがあった…？という感想を持ったのだった。

第五章 Striker 編

第一百十六話 『集まる仲間』

S i d e 八神はやて

私が部隊を作るといふ夢を志して、それからもう四年の月日が経ち様々な後ろ盾、協力もあり、私はついに古代遺失物管理部『機動六課』を立ち上げる事ができた。

シヤマルと隊舎を見ながら、

「なんやこーして隊舎を見ていると、いよいよやなあつて気になるんね」

「そうですね。はやてちゃん…いえ、八神部隊長♪」

「あはは♪」

部隊長つて言われるのに慣れていないから、つい背中がムズ痒くなつてきてまうやん。

「でも、驚きました。隊舎の食堂のコックさんに土郎さんとキャスターの二人をねじ込

んでしまうなんて：戦うコックさんですか？」

そう、士郎とキヤスターの二人を入れるのはとても苦勞した。

この日のために士郎には調理師の免許を取らせたのだからよかった。

もう機動六課の料理長の腕に抜擢されとるしな。

「そうなるな。でもやっぱりここでも士郎は魔導師ランクを2ランク下げなあかんかったから苦勞したわ」

「士郎さんはSランクですからAAランクにですか」

「そうや。コックさんだからといって武装隊から出向扱いやから厳しかったわ」

「アインスも連れてこれたらよかったんですけどね…」

「それはしゃーないよ。ツルギ君も子育てもしないといけないから、学校に通うようになるまではアインスは自宅で待機やね」

「他に「スターズ」の隊長のなのはちゃん、副隊長のヴィータちゃん。

次に「ライトニング」の隊長のフェイトちゃん、副隊長のシグナム。

そして「セイバーズ」の隊長のシホちゃん、副隊長のファイアットちゃん。

全員がランクを下げられることになるんですね」

そう、シホちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃんが分隊長の部隊を三つも作った。

これを作るにあたってランク振り分けも苦勞した記憶がある。

「そや。幸いまだ魔術の方がリミッターがかけられるほど神秘の力が理解されていないんよ。」

それで、十全に使えるからシホちゃんと土郎と、後、ユニゾンデバイスのアルトリアさんがうちらの中で今のところ最大の戦力やね」

「サーヴァントの皆さんは…?」

「あんな反則の塊連中にリミッターをかけられると思うか…?」

「思いません…」

「だからな? シホちゃん以上の戦力には違いないわ。私も期待してるんよ。いざって時の貴重な令呪もまだみんな数は残しているしな」

そうなのである。

聖杯大戦でまずシホちゃんとフェイトちゃんと私の三人は使う機会がなかったのか最後の切り札の令呪はいまだ三画とも残ってしまっている。

なのはちゃんと土郎も一画だけの使用なので後、最低でも一回は余裕で使用できる。

機動六課に向向できなくて悔しがっていたアリサちゃんとすずかちゃんも一回だけの使用なので、なのはちゃん達と条件は一緒だ。

「…といふかな。教導隊のシホちゃん、なのはちゃん、ファイアットちゃんのメンバーを三人も引つ張ってくるのが一番苦労したかもな」

「そうですねえ…」

それで私とシヤマルはため息をつく。

「でももうそれも解決して済んだ事や。だから後は余計な揉め事さえない限りレリック事件をこのメンバーで追える事になるな」

「戦力としては十分ですよね」

「そうや」

「まあ、リミッターの話はこれくらいにしておきまして…いい隊舎の場所が見つかったよかったですね」

「そうやな。交通の便がちよう良くないけどヘリの出入りはしやすいし機動六課にはちようどええ隊舎や」

「なんとなく海鳴市と雰囲気も似てますしね」

「あはは。そういえばそうやな」

「隊長室はまだ机とか届いてないんですよ？」

「ライン用のデスクでええのがなくなつてな。今はエイミイさんに探してもらってるんですよ」

「そうですか。ラインちゃんも常時フルサイズでいられたら良かったんですけどね…」

「ま、それはまだ今後の成長具合やな」

これからが楽しみなことが多いな。頑張らな。



…機動六課駐機場ではシグナムとヴァイスが話し合っていた。

「ヘリの実機はまだ来ていないんだな」

「今日の夕方には到着っす。届くのは武装隊用の最新型！ 前から乗ってみたかったん機体なんでこれかもー楽しみで！」

「隊員達の運搬がおまえとヘリの主な任務だ。お前の腕からすれば物足りなくはあるかもしれないが…」

「いや、なに。ヘリパイロットとしちや操縦桿を握れるだけでも幸せでしてね。めいっばいいやらせてもらっすよ！」

ヴァイスがいい笑みを浮かべてそう言った。

そうしていると前方の方から一人の女性が走ってくる。

「シグナム副隊長〜！ ヴァイス陸曹〜ッ！ アルト・クラエッタ二等陸士、ただいま到着ですー！」

「ああ、早かったな」

「なんだおめー半年ばかり見ねーうちに背え伸びたか？」

「えへへ、3センチほど」

アルトは元気に答える。

「ヘリはまだ来ていないんですか？ ああ、JF704式が配備されるって聞いて急いで来たんですよ！」

「まだまだ夕方だ」

「相変わらずだな、アルト。通信士研修は滞りなく済んだのか？」

「はいっ！ シグナム副隊長！」

シグナム、ヴァイス、アルトは以前まで同じ部隊で働いていたので顔見知りなのである。

「気も知れた友人のようだ。」

「ついでにいくつか資格も取ってきました！」

そう言つてアルトは管理局の資格が書かれているIDカードを取り出した。

それをヴァイスは見て、

「うお！ 生意気な資格が並んでる！ アルトのくせに！」

「えへへー……。いつかヘリパイロットのAも取りますよ」

「人員配置の都合で整備員や通信スタッフは新人が多い。お前ももう新人気分ではいら

れないぞ？ しつかり頼むぞ。先輩としてな」

「はいっ！」

と、そこに新たに女性がやってきて、敬礼をしながら、

「こんにちは。失礼します！ アルト・クラエツタ二等陸士はこちらに——…」

「あ…！ ルキノさん！ おつかれです！」

「どうもお疲れ様です！」

シグナムとヴァイスが誰だという顔をしているのでそれをすぐに察したのかアルトが、

「あ、紹介しますね。通信士研修で一緒だったルキノさんです」

「本日より機動六課『ロングアーチ』スタッフとして情報処理を担当させていただきます。ルキノ・リリエ二等陸士です！」

「前所属は次元航行部隊で艦船アースラの事務員だそうで」

「ほう…アースラか。アースラには昔には幾度か大変なお世話になった。艦長のクロノ提督はご健勝か？」

「はい！ 今はアースラを降りてXV級新造艦の艦長をされています」

「そうか。お前達の上司については聞いているか？」

「はい…通信主任のシャリオ・フィンニーノ一等陸士と…」

「指揮官補佐のグリフィス・ロウラン准陸尉ですな」

アルトとルキノはそう答える。

「おう。そのお若い准陸尉殿とメカヲタ眼鏡の一等陸士がお前らの直接の上司だ。まあロングアーチのトップは八神部隊長だな」

「はいっ！」

「二人は今後コンビで通信管制や事務作業をしてもらうことになる。

シヤリオが戻るまで二人で隊舎の中でも見回っているといい」

「はい！」

それで二人は出て行くがアルトがヴァイスに振り返り、

「ヴァイス陸曹。ヘリが到着しましたら……」

「あー通信で呼んでやるよ」

それで今度こそ二人は出ていった。

そんな姿を見てヴァイスは、

「大丈夫なんすかねえ？ あんなガキどもで」

「入隊したてのお前を見て私はまったく同じ感想を持ったものだよ。なあ八年目？」

「いや、シグナム姐さん。それは言わねー約束で……。ところでセイバーズの隊長ですけど……」

「シュバインオーグの事か？ どうしたんだ？」

「いや、俺は尊敬しているんすよ。シホさんのこと。『魔弾の射手』という異名がつけられているくらいっすから射撃の腕はかなりありますし。」

それに以前ラグナを立てこもり事件で助けてもらいましたしね」

「ああ。私もデバイスは弓形態があるがシュバインオーグには到底及ばないな」

「早く会いたいっすね。久しぶりに弓の腕を見させてもらいたいですよ。彼女の腕は神クラスですから」

「そうだな。出向してくればいつでも会えるから今のうちに仲良くしておくのも一つの手だな」

「うっす！ それにシホさんは管理局人気ランキングでなのはさんと同等ですから一緒に働ける整備員達は楽しみにしているんすよ？」

「…そ、そうか。シュバインオーグがな。本人が聞いたら微妙な顔をするだろうが…」

シホの真実を知っているシグナムは思わずシホに同情をした。

やはりシホは魅了の効果を持っているのだな。と、思ってもいた。

一方、シグナム達と別れたアルトとルキノは隊舎の中を歩きながら、

「隊舎内広いですね」

「ちよっと古い建物らしいですけどね。…ん？ ルキノさん。どうかした？」

二人の視線の先では小さい人形のような子が浮いていたのだった。
二人は思わず、

「か、かわいい……」

と、呟いていた。

「なに、あの子！ 誰かの使い魔とか!？」

「そうかも！ あんなちっちゃい子は初めて見るけど!」

それで二人で色々言い合っているとその少女が話しかけてきて、

「あーお疲れ様です。クラエツタ二等陸士とリリエ二等陸士ですね」

「はいっ……」

「え、あ……」

「二人のお話はシグナムやフェイトさんから伺っているですよ。」

はじめまして。機動六課機動六課部隊長補佐及びロングアーチスタッフ。リイン
フオースⅡ空曹長です!」

それで二人は上司だということを悟り、

「し……失礼しました!」

「あーいいですよ。そんなに固くならなくて。私のほうが年下ではありませんしロング
アーチスタッフ同士仲良くやれたらうれしいです」

二人して、

「あ、ありがとうございます…」

「はいです」

「『アルト』の事はシグナムによく聞いてたですが私のことは聞いてなかったです？」

「あの、ご家族に『リイン』という小さな末っ子がいるとは伺っていませんが、まさか、

その…こんなに小さいとは……」

「あははーシグナムらしい説明不足です。あ、それと私以外にもセイバーズのシホさん…シユバインオーグ教導官にも補佐でアルトリア空曹長がいますから後で会っておいたほうがいいです」

「リイン空曹長以外にもこんなに小さい人が！」

「早く会いたい！ それにシホさんってあの教導隊の『魔弾の射手』の人ですよね！」

「わー！ 憧れですわー！」



管理局市民窓口センターでは三人の男女の子達がIDカードの更新を行っていた。

「エリオ・モンディアルさん」

「はいー！」

「ラン・ブルックランズさんにレン・ブルックランズさん」

「はいー！」

三人は呼ばれて窓口まで向かっていき、

「三人ともIDカードの更新ですよね。」

エリオ・モンディアルさんの更新事項は武装局員資格と魔導師ランク陸戦B。役職は陸士研修生改め三等陸士。

同じくラン・ブルックランズさんとレン・ブルックランズさんは同じく武装局員資格と魔導師ランク陸戦B。二人共役職は陸士研修生改め三等陸士。

「お間違いないですか？」

「はいー！」

「大丈夫ですー！」

「だ、大丈夫です」

エリオ、ラン、レンの順に答える。

ランはともかくレンはやはり少し気弱なイメージがある。

「ではこちら正規の管理局員としての新しいIDカードです」

「「はい。ありがとうございますー！」」

それで三人はカードを受け取ると、

「でもランさんとレンさんと一緒に卒業できてよかったです」

「うん！」

「う、うん…シホさんの役に立ちたいから…でもやっぱり部隊に入るのは緊張するね」

「レン、何を言っているのよ。シホさんの役に立ちたいから管理局に入ったんでしょ

？ 一緒に住むようになったことだしもう遠慮はしないでって言われているじゃない

？」

「…そ、そうだけど、ラン姉さんはもつと遠慮を覚えたほうがいいよ？」

「あんたはもつと強気になりなさい」

ランとレンが二人で言い合う。

それをどう止めたらいいかとエリオが迷っているとシャーリーがそこにやってきた。

「エリオ。ランにレンも！」

「あ、シャーリーさん！」

「三人とも更新は終わった？」

「はい」

「ふっふっふっ…それじゃまずはエリオの方からフェイトさんからお祝いメッセージだ

よ」

画面が出現し、そこにはフェイトとランサー、アルフ、アリスアが映っていた。

『エリオ。正規採用おめでとう』

「フェイトさん！」

『あたしとアリスアとランサーもいるぞ！』

「アルフ！ アリスアさん！ ランサーさん！ あれ？ でもフェイトさんとランサー

さんはお仕事じゃ？ アリスアさんも魔術事件対策課で、それにアルフも……」

『今は食事休憩中』

『俺もマスターの使い魔だから休憩中だ』

『あたしはちよつとおつかいがあってな』

『私はエリオの祝福のためならいつでも駆けつけるよ！』

四人が一斉に話をしてくる。

『エリオのことだから大丈夫だと思ってはいたけど試験も研修も無事に終わってよかった』

『頑張ったなー』

『ねー♪』

『おう！ 頑張ったなエリオ』

「ありがとうございます！」

『出会った頃はあんなちっちゃかったエリオがもう正規の管理局員なんて…私はなんだか感慨深いやら寂しいやらだよ』

「すみません、フェイトさん…」

『なんで謝るの？ いいんだよ。エリオが選んだ夢なんだから』

「はい…」

『元氣出せ少年！』

「は、はい、アリシアさん！」

『私との約束もエリオはちゃんと守ってくれるもんね』

「友達や仲間を大切にすること。戦うことや魔法の力の怖さと危険を忘れないこと。どんな場所からも絶対元氣で帰ってくることに！ ですよね！」

『そうだよ。六課では同じ分隊だから来月から私や新しい仲間達と一緒に頑張ろうね！』

『俺が槍使いの心得をじっくりと教えてやるぜ！』

「はいっ！」

『それと、ランとレンもこれからエリオと仲良くしてやってね。同じフオワードの仲間なんだから』

「わかりました！」

「は、はい……！」

フエイトに話を振られてランとレンは返事をする。

『うん。それじゃシャーリーはこの後は？』

「三人とは訓練校に挨拶に行くので付き合っただけから六課の隊舎に行きます。それとランとレンは挨拶後に一回シホさんの自宅に帰るそうです」

『そっか』

「フエイトさんとなのはさん、シホさん達のお部屋とかデバイスルームの最終チェックとか色々やるのが山積みでー♪」

『ありがとう、よろしくね。それじゃエリオ。本当におめでとう』

「ありがとうございます！」

『あたしとアリシアで今度お祝いしてやっからなー』

『楽しみにしていてねー』

「あはは……ありがとアルフ、アリシアさん」

『エリオ、また六課でな！』

「うん、ランサーさん！」

それでフエイト達との通信が切れる。



通信を切った後、フェイト達四人は、

「でも、フェイトもすっかり保護者だよねー」

「うん。育てるのも楽しいし…」

「でもエリオはフェイトと同じで…」

「…うん、そうだね。でもいいんだ。そんな事は関係なく私はエリオが大好きなんだから」

「立派な女に育ったな、マスター。今なら付き合ってもいいぜ？」

「も、もう…ランサー、からかわないでください!」

「俺はこれでも真剣だぜ…?」

「えっ…?」

なにやらしい雰囲気になるがそこでアルフが横槍を入れてくる。

「おっとランサー。あたしの目が黒いうちはフェイトとの交際は許さないよ?」

「番犬が…やるか?」

「いいぞ!」

「ちよ、ちよつとアルフもランサーもやめて…アリスアも笑っていないで止めて…」

「あはは。いいじゃない、フェイト。本気でやるわけじゃないんだからー」

「そうだよ。戯れじゃないか、フェイト」

「ふっ…そうだな。それよりエリオの坊主はまだ六課には合流つてわけじゃないんだよな?」

「うん。まだ出向研修の日程が残っているんだって。

…うーん、でも今の日程だとエリオとキャロの初顔合わせに私は立ち会えそうにないのが残念だな…」

「そーか。キャロも保護隊から陸士研修の日程があるもんね。まああの二人ならきつと仲良くなれるよ」

「そうだな。同じ年齢なんだし色々二人で支えあえると思うぜ?」

「ランサーの言い分に賛成だね。…あーあ、でも私も六課に出向したかったなあ…」

「アリシアは魔術事件対策課のエースなんだから頑張らないとなー」

「そうだね。シホの出向中はレリックク事件捜査でなかなか顔出しができないと思うし…それに、隻眼の男の捜査もしないといけなしいね。

アリサが絶対に捕まえると言って気炎を上げているよ」

「魔術事件を引き起こす人が話す共通の人物だよな。

分かっているのは右目が隻眼だけという事しか分かっていない謎の魔術師…」

「俺もそつちが気になるが、シホの嬢ちゃんと前にあつた時に聞いたがどうにもきな臭く嫌な予感がするらしい。」

「どんな魔術が使えるのかも教える魔術はバラバラで分かっていないからな…」

「不安だなー…」

「ま、今から焦つても捕まえられるわけじゃねーし、キャロの話だったんだからそれで楽しもうぜ?」

「そうだね」

「うん!」

「おう!」

四人が今話題にしているキャロはというと、



S i d e キャロ・ル・ルシエ

私、キャロ・ル・ルシエは使い魔の飛竜フリードと一緒に保護隊のミラさんとタントさんとお別れをしていた。

「じゃあキャロ。忘れ物はないね？」

「はい。本当にお世話になりました」

「あー、いざ行っちゃうとなると寂しいもんだね」

「ミラさん…」

「キャロにはずつといてほしかったよー…」

ミラさんがそんな事を言い出す。

そう言われちゃうと私もまた涙が出てきてしまう。

「おいおい。キャロの保護者の方がいる部隊に行けるんだし…こんな山奥から都会の陸士隊に栄転でもある。華々しい門出じゃないか」

「タントさん…」

そう、フエイトさんの役に立てる仕事ができるんだ。

「あの…私、保護隊でお世話になってお仕事させてもらって、本当に楽しくて…」
「あたしも楽しかったよ。キャロはまだまだちっちゃいけどさ。」

一人前の魔導師になれるようにいつか大好きなフエイトさんのこと助けてあげられるように…。

いつも一生懸命頑張ってたこと、あたしやタントはちゃんと知ってる…。キャロはもう保護隊員として一人前だからさ。

陸士も魔導師もきつとしつかりとやってけるよ。頑張っておいで！」

「ありがとうございます。頑張ります…ッ！」

「じゃあ行つといでキャラ。気が向いたらいつでも帰っておいで。もちろん仕事は手伝わせるけどね」

「ありがとうございます。行ってきますっ！」

それでミラさんとタントさんの二人と別れて私はフリードと一緒に旅立ちました。フエイトさんが待っている。だから私は頑張れるんだ。



陸士386部隊隊舎でなのはとヴィータが災害担当部・配置課の応接室で担当の人と話し合っていた。

「ナカジマ二等陸士とランスター二等陸士はどうですか？」

「ええ。二人共うちの突入隊のフォワードです。新人ながらいい動きをしていますよ。」

二年間で実績もしっかりと積んでいますし、いずれそれぞれの希望転属先に推薦してやらんととは思っていましたが本局から直々のお声がかかりとはうちとしても誇らしいですなあ…」

それから色々と話は交わされていき、

「…まあ、航空教官のヴィータ三尉や戦技教導隊の高町一尉がご覧になれば穴だらけだとは思いますが…」

「いえ、いい動きをしていると思います。将来有望ですね」

「そうですか？」

「はい。二人には時期を追って接触したいと思います」

「あの二人はまだまだ伸びますからよろしくお願いします」

「はい。任せてください」

それでなのは達の話は終わった。



Side シホ・E・S・高町

家に帰るとすでにランとレンが帰っていた。

「あ、おかえりなさい。シホさん！」

「お、おかえりなさい。シホさん…」

「うん。ただいま二人共」

アルトリアもアンリミテッド・エアの中から出てきて、

「ただいま帰りました」

「奏者とアルトリアよ、今帰ったか」

「ネロもただいま」

「うむ、ところでもう食事は作ってあるぞ。余が直々に調理したのだから感謝しながら食うがよい」

「また大きい物言いですね、ネロ……」

そうだね。ネロももうすっかり家で料理をする側になっちゃったから私が料理をする機会が減ったのよね。

初めて食したときはあまりの味にきりもみ回転をした苦い覚えがあるけどね。成長するものね。

ま、私が作った時はみんな美味しそうに食べてくれるけどね。

「それより、二人共。陸士研修生から三等陸士に上がって魔導師ランクもBに上がったそうね。遅ればせながらおめでとう」

「はいー！」

「が、頑張りました……！」

「それにしてもランとレンは生まれくる性別を間違えたのでないか？　まるでレンは女子のように気弱だな」

ネロがそんな事をいいだす。

それに対してランが、

「レンはいつまでも泣き虫ですから…」

「ランも少しお淑やかになった方がいいですね」

「いいんです。私はこれでもう進んでいきますからー」

あらら。ランが不貞腐れちゃった。

「それじゃ二人共。他の四人のフォワードメンバーに遅れを取らないように私が直々に教える魔術の授業、そして六課では魔導の勉強を頑張るのよ」

「はいー」

「が、頑張ります…！」

うん。いい返事。これなら大丈夫かしらね。



Side 八神はやて

まだ隊舎暮らしではないので家に帰るとヴェー々達が私を迎えてくれた。

「はやて、お帰り！」

「おかえりなさい、我が主」

「うん、ただいま！………みんな、あと少しで機動六課が完全起動する。だから最後まで付き合っつてな！」

「問題ないです。我らはどこへまでも主はやての下についていきますから……」

「うん。ありがとな！」

想いを馳せながらも私はまた幸せを噛み締めていた。

第百十七話

『昇格試験とエリオとキャロの出会い』

い』

Side シホ・E・S・高町

今、私はなのとは一緒にスバル・ナカジマとティアナ・ランスターの魔導師ランク昇格試験を見守っていた。

「…でも、四年前のあの少女がここまでやってくるなんてね」

「うん。驚いたね」

「ま、二人はなののが受け持つスターズ分隊の候補だから心配はしちゃうかしらね？」

「そんなことないよ。でも、二人の成績を見させてもらったけどかなり伸びしろはあると思うよ」

「そう。教官のなののがいうなら確かかもね」

「そういえばランとレンはどうなの？」

「二人はすでにBランク昇格試験は通過済みだから後は機動六課が完全に始動したら十分な戦力になると思うわ。」

ま、昔の私だったらまだいい年の二人にはこんな仕事には付いてほしくないけど…もう管理局色に染まった私からはなにも言えないからね。

二人も手伝う！ と何度も言われちゃったから管理局入りも許したわけだし…」

「なんか、シホちゃん達って親子っていうより兄妹姉弟みたいな関係だね」

「まあね。二人は私の魔術の弟子でもあるし…」

つと、そろそろ試験が始まりそうね。

ラインが二人の前にスクリーンで現れて説明をしている。

そしてラインが敬礼をすると二人も敬礼を返す。

なのははコースのチェックを再確認しながら、

《範囲内に生命反応、危険物の反応はありません。コースチェック終了です》

「うん。ありがとう、レイジングハート」

レイジングハートがそう言うって私達は後は見守るだけになった。

さて、どんな手を使ってくるのか同じ教導官としては楽しみではある。

「サーチャーとオートスフィアも設置完了。私達は全体を見ていようか」

《Yes. My Master.》

「そうね」

開始のカウントがされる。

そして始まったと同時に二人は走り出した。

「でも、ナカジマ二等陸士はローラーブーツってまた特殊なものを使っているわね」

「そうだね。ま、二人のおてなみ拝見といこうか」

見ていたらまずランスタター二等陸士がアンカーガンを射出してビルに刺して二人の体重を一気に抱えて飛び立つ。

あれも結構古そうな武装の銃だけど使えそうね。

それでナカジマ二等陸士がビルの中にガラスを割って侵入。

次々とオートスフィアを破壊していく。

「いい動きね」

「うん」

そしてランスタター二等陸士が外でポイントターゲットを破壊していきダミーターゲットはきつちりと残している。

うん、射撃もいい腕だ。

射撃型だとなのはが教えるのが一番適しているわね。

そして二人は今のところのターゲットを全部破壊して合流する。

「いいコンビね。息があっているわ」

「だね」

「でも、ここからが大変よね。大型のオートスフィアで大抵の受験者達は半分以上が脱落しているから」

「どんな行動をするのか試験管としては楽しみではあるよ。今の二人のスキルだと防御も回避も難しいからね」

そして二人は進んでいきターゲットを次々と破壊していき、次は一斉射撃を受けるところにやってきた。

サーチャーで確認したらアンカーガンが伸びてきて天井に刺さる。

でも上がってきたのはアンカーガンだけで担い手のランスター二等陸士の姿はない。

そして攻撃を受けるアンカーガン。

：あれは意思があつたら多分後でデバイスが文句を言っていただろう。

そしてローラーの走行音が聞こえてきてサーチャーで確認すると多分幻術魔法を使っているのかローラーの音だけが響いてくる。

そして透明のまま次々とスフィアを撃破していく。

途端二人の姿は見えるようになってナカジマ二等陸士のリボルバーシユートとランスター二等陸士のクロスファイヤーシユートでスフィアはすべて破壊されていった。

それで二人は意気揚々としているけどまだ一つだけ残っていたスフィアに攻撃されてなんとか撃墜するがなぜか私達が見ていた画面が映らなくなった。

この映像を見ているフェイトとはやても多分同じ状況だろう。

「直前の映像だとサーチャーに流れ弾が当たったみたいね」

「うん。トラブルだね。リイン、一応様子を見に行くね?」

『はい、お願いします』

《私もセットアップしますか?》

《そうですね。セットアップしましょう》

レイジングハートとアンリミテッド・エアからそう言われる。

なので私となのはは二人してジャケットを展開して見に行くことになった。

：しばらくしてランスター二等陸士だけが走ってきた。

ナカジマ二等陸士は…?」

それと大型スフィアの攻撃でランスター二等陸士は撃たれてしまった。

直撃かと思われたがそれはやはり幻術魔法だったみたいですぐに姿は掻き消えた。

「フェイクシルエット…うまい使い方をするわね」

それで次々とランスター二等陸士の姿が現れる。

それで他のサーチャーで確認するとナカジマ二等陸士がビルの上に立っていて固有

魔法なのだろう青い道が出来上がりそれはまっすぐ大型オートスファイアまで道をつないだ。

大型スファイアはナカジマ二等陸士の方にビームを撃とうとするがそれはフェイクシールエツトで次々と現れるランスター二等陸士の幻影にスファイアは混乱していた。

その隙をついてナカジマ二等陸士は魔法の道を走り出す。

そして中に侵入。

一気に大型スファイアまで走り拳をぶつけていくがそれはバリアで防がれる。

でも負けじと手がバリアを貫通してバリアを破壊する。

そして一旦退避するとオートカートリッジをして、

『一撃必倒！ デイバイン・バスター!!』

青い砲撃が放たれ大型スファイアが破壊された。

「へえ…なのはのデイバイン・バスターを使うなんて、なかなかの好かれようじゃない？

なのは」

「し、シホちゃん。からかわないで…」

なのはをからかいながら二人を確認する。

後はゴールを目指すだけだ。

でもどうやらランスター二等陸士が足を怪我しているようでナカジマ二等陸士が背

負って一緒に進んでいる模様。

ナカジマ二等陸士が魔力を全開にして一気に駆けるが、

「…あれ、止まる事を考えていないわよ？　なのは」

「そうだね。ちよつと危険行動で減点かな？」

「私は古代ベルカ式だからそこまで精密なミッド式魔法は使えないからなのは、お願いね？」

「うん。それじゃしようがないな…。アクティブガードとホールディングネットもかな？」

なのはが魔法を展開して二人の走行場所に魔法を設置する。

そして二人は見事網にかかって緊急停止した。

そこにリインが怒りながら二人に寄っていき、

「二人共、危険行為で減点です！　頑張るのはいいですが怪我をしては元も子もないんですよ！　そんなんじゃ魔導師としてはダメダメです！」

二人はリインに怒られているのというのに呆然としていた。

ランスター二等陸士が「ちつき…」と呟いている。

ふむ、あれはあんまり効果が無さそうな説教ね。

「それじゃいっこつか。シホちゃん」

「そうね、なのは」

それで私となのはは二人の下へと向かい、

「あはは、まあまあ。ちよつとびつくりしたけど無事でよかつた…。

とりあえず試験は終了ね。お疲れ様」

それでなのはとリインが魔法を解除し、二人は地面に降りる。

「リインもお疲れ様。ちゃんと試験官できていたよ」

「そうね。成長したわね」

「わーい。ありがとうございます。なのはさん、シホさん！」

そして私となのははジャケットを解除し、なのははナカジマ二等陸士による。

「まあ細かいことは後回しにして…ランスター二等陸士」

「あ、はい！」

「怪我は足だね。治療するからブーツ脱いで？」

「あ！ でしたら治療なら私がやるですよ？」

リインがランスター二等陸士に寄っていく。

「なのはさん…シホさん…」

「ん？」

「なに？」

「あー！ いえ、あの…！ 高町教導官一等空尉、シユバインオーグ教導官一等空尉！」

「なのはさんでいいよ。みんなそう呼ぶから…」

「私もシホさんで構わないわ。そっちは背中がムズ痒くなるから」

「それより四年ぶりだね。背、伸びたね「スバル」」

「そうなのはに言われるとあの時のように涙を浮かべて、

「えっと、あの、あの…」

心の整理ができていないようね。

それにどうやら私はお邪魔のようだ。

だから二人を見守っていることにした。

「うん。また会えて嬉しいよ」

なのははそう言ってスバルの頭を撫でる。

そして泣き出してしまふスバル。

「私とシホちゃんの事、覚えていてくれたんだ」

「あの、覚えているっていうか…あたし、ずっとなのはさんとシホさんに憧れていて…」

「嬉しいな。バスターを見てちよつとびっくりしたよ？」

「あっ!?!」

それで何を思ったのか大声を上げるスバル。

「す、すみません。勝手に使用して…!」

「ふふ…いいよそんなの」

私はなのはにスバルを任せて、ランスター二等陸士に寄る。

「ランスター二等陸士、足は大丈夫?」

「あ、はい! 大丈夫です!」

「ランスター二等陸士はなのはさんとシホさんの事ご存知ですか?」

「はい…知ってます。本局武装隊のエースオブエース。航空戦技教導隊の若手ナンバー1。高町なのはは一等空尉。」

そして同じく航空戦技教導隊の実力は高町なのはは一等空尉を凌ぐと言われている『魔弾の射手』という異名で呼ばれているシホ・E・S・高町教導官一等空尉」

「はいです!」

「あはは…変な異名が流れているものよねー」

「あの…私はなのはは一等空尉よりあなたの方を尊敬しているんです。」

魔術事件対策課という未知の部署で超長距離から放つ矢の話はよく聞きますから同じ射撃手として会えて嬉しいです…」

「そう」

それから空からヘリが降りてきてそこからフェイトの顔が見えてスバルは敬礼をし

ていた。



場所は移り、私は今フェイトとはやてと三人＋リインでスバル達に話をしている最中である。

二人には部隊を設立する経緯を説明して、

「……………」と、まあそんな経緯があつて八神二佐は新部隊設立のために奔走」

「四年ほどかかつてやつとそのスタートを切れたというわけや」

「部隊名は時空管理局本局遺失物管理部『機動六課』ですよ！」

「八神二佐が立ち上げる部隊の名よ」

「登録は陸士部隊。フォワード陣は陸戦魔導師が主体で特定遺失物の捜査と保守管理が主な任務や」

それでランスター二等陸士は少し考えるポーズをして、

「遺失物…ロストログアですね」

「そうや」

「でも広域捜査は一課から五課までが担当するからうちは対策専門だよ」

フェイトがそう答える。

なにかそれで二人は念話で会話をしているっぽいがはやては話を進めていく。

「それでスバル・ナカジマ二等陸士。それにティアナ・ランスター二等陸士。

私は二人を機動六課のフォワードとして迎え入れたいって考えてる。

厳しい仕事にはなるやろうけど濃い経験は詰めると思うし昇進機会も多くなる。ど

ないやろ？」

はやての問いに二人は少し困った表情をした。

「スバルは高町教導官に直接魔法を教われるし…」

「はい…」

「執務官志望のティアナには私でよければアドバイスとか出来ると思うんだ」

「あ、いえ…とんでもない！」

それでティアナは何度も言葉を言い直してはしどろもどろに答えるばかりだ。

やっぱり緊張をしているのだろう。

そこになのはが試験の結果を持ってやってきた。

「いま取り込み中…?」

「大丈夫やよ」

「とりあえず試験の結果ね。二人共技術はほぼ問題なし。でも危険行為や報告不良は見

過ぎてやるレベルを越えています。

自分やパートナーの安全だとか試験のルールも守れない魔導師が人を守るなんてで
きないよね？」

その意見には賛成だ。

でも、昔はよく私もみ消していたからなあ…。

あまり強く言えない。

「はい…」

「だから残念ながら二人共不合格。……………なんだけど」

なのはの言葉に二人は揃って声を上げる。

なにか続きがあるのか？という眼差しだ。

「二人の魔力値や能力を考えると次の試験まで半年間もCランク扱いにしておくのはか
えって危ないかも。

というのが私とシユバインオーグ一等空尉とリイン試験官の共通見解」

「です〜！」

「そうね」

「と、いうわけでこれ」

なのはは二人に封筒を渡す。

「特別講習に参加するための申請用紙と推薦状ね。これを持って本局武装隊に三日間の特別講習を受ければ四日後に再試験を受けられるから」

それで二人は戸惑っている。

「来週から本局の厳しい先輩達にしつかりと揉まれて安全とルールをよく学んでこよう。そうしたらBランクなんてきつと楽勝だよ。ね？」

それで二人は感謝の言葉を述べた。

「合格までは試験に集中したいやろ？ 私への返事は試験が済んでからってことにしようか」

それで二人は敬礼をして出ていった。

それから中庭で色々と会話をしている二人の光景を見ながら、

「ま、あの二人は入隊確定やね」

「だね」

「そうね」

「なのはちゃん、嬉しそうやね？」

「二人共育てがいありそうだし時間かけてじっくり教えられるしね」

「はは、それは確実や」

「私とフィアとヴィータ、サーヴァント達も手伝うからみんな強くしていこうね、なの

は」

「うん！」

「新規のフォワード候補はあと、四人、確定しているのはランとレン。後の二人は……」

「二人共別世界。今、シグナムとランサーが迎えに行ってるよ」

そこにフェイトとリインがやってきて、

「——なのは、はやて、シホ。おまたせ」

「おまたせですー！」

「ほんなら次に会うんわ六課の隊舎やね」

「みなさんの部屋もしつかり作ってあるですよ！

なのはさんとフェイトさんは同室。サーヴァントの人達は各部屋。

そしてシホさん、アルトリアさん、ネロさんは同じ部屋。

フィアットさんも一人部屋……と色々と作ってあるです！」

「うん！」

「楽しみにしてる」

「アルトリア達と同室ね。分かったわ」

「後、魔術師の工房部屋も手配してあるのでシホさんはそこでランとレンの二人の魔術の腕を鍛えるといいですよ？」

「ありがとね、リイン」

「はいです！」

それで解散となり、

「それじゃ私とシホちゃんは隊に帰ろうか」

「そうね」

「私、車で来ているから中央まで送っていくよ」

「ホント？　ありがとう」

「そういえばなのは。体調は平気…？」

なのはの体調か。やっぱりフェイトとしては不安よね。

あの事故以来前より無茶はしなくなったとはいえ。

「にやはは。平気平気。全然問題なしだよ」

「だったらいんだけど…」

「そうね」

「二人共心配性だな。フェイトちゃんもシホちゃんも私の頑丈さを知っているでしょう

？」

「知ってるけど…心配はするよ。友達だからね」

「本当に平気だから。心配しないでね」

「うん…」

「ま、いざって時は私が無理やりなのはを撃墜してでも止める所存だけどね」

「シホちゃん、おつかないよ…」

「それだけなのはには不安があるんだから自覚しなさい」

「はい…」



Side エリオ・モンディアル

僕は今迎えに来るといふシグナム副隊長とランサーさんを待つていた。

時間を確認するとちょうどいい時間であつてそこにシグナム副隊長とランサーさんがやつてきた。

「お疲れ様です！ 私服で失礼します。エリオ・モンディアル三等陸士であります！」

「ああ。遅れてすまない。遺失物管理部機動六課のシグナム二等空尉だ。長旅ご苦労だったな」

「よー、エリオ。久しぶりだなこうして会うのはよ」

「はい、ランサーさん！」

久しぶりにランサーさんと直に会うことが出来たので嬉しい気持ちになる。

ランサーさんは僕の槍の師匠だから色々教えてもらおう予定だ。

「…ところでもう一人は？」

「はい。まだ来ていないみたいで…」

確か、キャロル・ルシエさん。僕と同じ年の女の子。

フエイトさんが保護しているもう一人の僕の兄弟みたいな子という話だ。

「あの、地方から出てくるということですので迷っているのかもしれない。探しに行ってもよろしいでしょうか？」

「頼んでいいか？」

「はい！」

「エリオ、しっかりと守ってやれよ？」

「わかりました！」

それで僕はルシエさんを探しに向かった。

そして名前を出しながら探しているとエレベーターの上からルシエさんが走ってきた。

でも、少し危なっかしい。

思ったとおり、ルシエさんは足を躓き、倒れそうになる。

《Sonic Move》

ソニックムーブを展開してルシエさんをすぐに抱きかかえる。

でも安定が保てずそのまま転んでしまった。

「あいつてて…すみません、失敗しました」

「い、いえ。ありがとうございます。助かりました。ん…？」

「あ…」

それで僕はある事に気づく。

ルシエさんの胸を揉んでしまっていた…！

「…あ、すみません。すぐにどきます」

「あ、あの！ こちらこそすみません！」

ルシエさんは気にした素振りも見せずすぐにどいてくれたけど…。

忘れるろ！ 忘れるんだ！

それで息を整えていると、バックが揺れて中から竜が姿を現した。

「あ、フリードもごめんね。大丈夫だった？」

「キュックル」

「竜の子供…？」

僕はすぐに関心が竜の子供に移っていた。

「あの、すみませんでした。エリオ・モンディアル三等陸士ですよね？」

「あ、はい！」

「はじめまして。キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります。それからこの子はフリードリヒ。私の竜です！」

「よ、よろしくお願いします！」

それで僕達はシグナム副隊長とランサーさんの下に戻った。

「お、キャロ。久しいな」

「はい、ランサーさん」

「では揃ったことだし向かうとしようか」

「はい！」

それで僕達はシグナム副隊長に連れられて機動六課に向かつていくのだった。

第一百八話

『機動六課の始動』

S i d e シホ・E・S・高町

それからまた数日が経過しついに機動六課発足の日がやってきた。ランとレンもちゃんと来れていたのでよかった。

なのはとフェイトとフィアットと四人で部隊長室まで向かう。

「これで当分の間がお姉様と一緒にの隊で働けますから楽しみです！」

「そうね。フィア」

「でもフィアちゃんも無限書庫の手伝いもあるからなかなか訓練には出られそうにないけどね」

「そうだね。兼任業は時間がとられちゃうからね」

そんな話をしながら部隊長室に到着し中に入るためコールを押す。

「はい、どうぞ」

中からはやての声聞こえてきたので私達は中へと入る。

「失礼します」

「あ、お着替え終了やな」

「四人とも素敵です」

そう、私達は陸士部隊の制服を着ているのだ。

「五人で同じ制服姿は中学校の時代以来やね。なんや懐かしい…」

「私は中学はいつていませんでしたけどねー」

「まあまあ、そう拗ねないの。フィア」

「まあなのはちゃん、シホちゃん、フィアちゃんは飛んだり跳ねたりしやすい教導隊制服を着る機会の方が多くなると思うけどな」

「まあ事務仕事や公式の場所ではこっちっこで」

「さて、それでは…」

「うん…」

「そうですね」

「ええ」

それで私達は背筋を伸ばし敬礼をして、

「本日只今より高町なのは一等空尉」

「フェイト・T・ハラオウン執務官」

「シホ・E・S・高町一等空尉」

「ファイアット・スクライア三等空尉」

「四名とも機動六課へ出向となります」

「どうぞよろしくお願いします」

なのはの言葉に続き一斉に挨拶を交わす私達。

「はい。よろしく願います」

はやても敬礼をして返してくれた。

それで笑い合う私達。

と、そこにブザーが鳴り一人の男性が部屋へと入ってきた。

この人はかなり背が伸びたけど見覚えがある。

グリフィス・ロウラン准陸尉だ。

「お久しぶりです。高町一等空尉、テストロッサ・ハラオウン執務官、シュバインオーグ・

高町一等空尉、スクライア三等空尉」

「久しぶりね。でもやっぱり男性だから成長が早いわね。私達をあつという間に追い抜

いているわ」

「うんうん！」

「そうだね。前は私たちより小さかったのに……」

「はいですー！」

そう、私の今の身長は165cmと男性の時に比べればやっぱり低いが、私と比べてもグリフィスはかなり高い。

成長するものね。

「その節はお世話になりました」

「グリフィスもこの部隊員なの？」

「はい！」

「私の副官で交代部隊の責任者や」

「運営関係も色々と手伝ってくれてるです」

「お母さん…レティ提督はお元気？」

フエイトがそう聞く。

「はい。おかげさまで…あ、報告してもよろしいでしょうか？」

「どうぞ」

「フォワード六名を始め機動六課部隊員とスタッフ、全員揃いました。今はロビーに集合、待機させています」

「そっか。早かったな。ほんなら四人ともまずは部隊のみんなにご挨拶や」

「うん！」

それで私達はロビーへと向かい、はやてがスタッフのみんなの前に立ち、

「機動六課課長、そしてこの本部隊舎の総部隊長・八神はやてです」

それによって拍手が起きる。

見れば一緒に並んでいるサーヴァント連中も拍手をしていた。

「平和と法の守護者。時空管理局の部隊として事件に立ち向かい人々を守っていくことが私達の使命でありなすべきことです。」

実績と実力にあふれた指揮官陣、若く可能性にあふれたフォワード陣、それぞれ優れた専門技術の持ち主のメカニックやバックヤードスタッフ…。

全員が一丸となって事件に立ち向かっていけると信じています。ま、長い挨拶は嫌われるんで以上ここまで。機動六課課長及び部隊長八神はやてでした」



Side ラン・ブルックランズ

部隊長の言葉は心に響いてきたわ。

私もああいう人になりたいからこれから頑張っていこう。

その後、フォワードの仲間達と話し合いをして名前と経験のスキル、部隊分けとコールサインなどを確認などをして、それからはさんとシホさんのみんなと一緒に歩いている時だった。

「そういえばお互いの自己紹介はもうすんだ？」

なのはさんがそう言うのでティアナさんが代表で言ってくれた。

うーん…ティアナさんがこのフォワードのリーダーかな？

年齢も一番上だし。

私は指揮官向けじゃないからね。

レンも気弱だし。

私はシホさんの受け持つ部隊『セイバーズ』でコールサインはセイバーズ3、そしてレンはセイバーズ4。

こういうところは初めてだから緊張する！

「それじゃ訓練に入りたいんだけどいいかな？」

「「「「はい！」「」」」」

六人全員で元気よく返事をした。

それから全員で訓練姿に着替えてなのはさんの下に向かう。

シホさんはまだ本格的に訓練には入らず見物らしい。

なのはさんのところにやってくるとなのはさんとシホさんはすでに教導隊の制服に着替えていた。

隣にいるのはシャーリーさんだった。

なんで一緒にいるんだらう…？

「今返したデバイスにはデータ記録用のチップが入っているからちよとだけ大切に扱ってね？」

「あ、それと今のうちに知っている人もいるけど紹介しておこうか。ファイター、セイバー、アルトリア、出てきて」

「はい（おう）」

するとアルトリアさんがシホさんのデバイスから出てきて、ファイターさんという人とネロさんが突然この場に現れた。

それにティアナさんとスバルさんは驚いていた。

私達は霊体化を解除して実体化したというのを知っているから驚かないけど。

「今後個人のスキルを上げていくことになったらこの場にはいないけどランサーという人もあなた達の教導を手伝ってくれるわ。」

だから今のうちに覚えておいてね？」

「……………」

「よろしくお願ひします」

「お願ひしますね」

「よろしく頼むぞ」

アルトリアさん達が挨拶をしてくる。

私も剣の修行でしぼられたからなあ…。

ダブルセイバーに。

「それとメカニツクのシャーリーから一言」

「ええー…メカニツクデザイナー兼機動六課通信主任のシャリオ・フィニーノ一等陸士です。

みんなはシャーリーって呼ぶのでよかったらそう呼んでね。

みんなのデバイスを改良したり調整したりもするので時々訓練を見せてもらったりします。

デバイスの相談とかあつたら遠慮なく言つてね」

『はいー！』

うん。私のデバイス西洋剣タイプの『バルムンク』とレンのデバイス、盾と反撃タイプの『アウルヴァンデイル』は魔術式も組み込まれている特殊なデバイスだからいっぱい相談するかもしれない。

「じゃ、さっそく訓練に入ろうか？」

「は、はい……」

「でも、ここですか……？」

「うん。シャーリー？」

「はい！」

シャーリーさんが返事をして色々モニターを展開した。

「機動六課自慢の訓練スペース。なのはさんやシホさん完全監修の陸戦用空間シミュレーター……ステージセット！」

するとなにもなかった場所から突然ビル群が現れてきた。

すごい……！ こんな技術があつたんだ。



「ヴィータ、ここにいたか」

「シグナム……」

ヴィータはなのはの訓練が行われる光景を見ているとシグナムが後ろからやってきた。

「新人達は早速やっているようだな」

「ああ…」

「お前は参加しないのか…?」

「まだ六人ともヨチヨチ歩きの子だ。あたしが教導を手伝うのはまだ先だな」

「そうか」

「それに自分の訓練もしたいし。同じ分隊だから…あたしは空でなのは守ってやらないといけね」

「頼むぞ?」

「ああ…」

もうあんな思いはしたくない。

あたしが絶対なのは守る。

そう、思っているがこの先ヴィータは、いや全員はまだ甘かったと思う時がそのうちやってくる。

ヴィータ、そしてシホはその時正気でいられるかわからない…。

まだ、先の話ではあるが…。

「そういえば、シヤマルは…?」

「自分の城だ」

シヤマルは医療室で機材を確認しながら、

「いい設備。これなら検査も処置もかなりしつかりできるわね」

シヤマルの言葉に一緒に手伝っていたルキノとアルトが、

「本局医療施設の払い下げ品ですが実用にはまだまだ十分ですよ！」

「みんなの治療や検査。よろしくお願いしますね？ シヤマル先生」

「はーい！」



Side レン・ブルックランズ

『私達の仕事は搜索指定ロストログアの保守管理。その目的のために私達が戦う事になる相手は…これ！』

なのはさんの指示でターゲットが出現する。

それは話によると自立行動型の魔導機械で近づくと攻撃してくると言う。

名前はガジェットドローンというらしい…。

しかも10体もいる…。

怖い、という思いもあるけどシホさんの役に立つんだ！　という思いで弱い心を奮起させる。

エリオ君だつてやる気出しているんだ。

同じ男でしかも年上の僕が弱気じゃダメだよね！

『第一回模擬戦訓練。ミツシヨン目的。逃走するターゲット10体を破壊または捕獲、15分以内：それではミツシヨンスタート！』

そして魔導機械はスタートと同時に逃走を開始する。

それから一番移動力のあるスバルさんがいち早く攻撃を仕掛けるがどれもこれも素早いスピードで避けられてしまう。

エリオ君も槍を振るうがそれも避けられてしまう…。

「レン！　仕掛けるよ！」

「うん、ラン姉さん！」

それでまずラン姉さんが剣を構えて仕掛けるが悪い感じに翻弄されて避けられてしまう。

「いくよ！　サークルザンバー！」

二重構造の盾を展開して隙間から円状の魔力刃を出現させ僕も斬りかかる。

何度も攻撃を受けるがその度盾で防いで攻撃を仕掛ける。

それで掠ったがそれはなにかの防御で防がれてしまった。

なんだろう、今の…？

そこにティアナさんの叱咤の声が聞こえてきて同時に魔力弾が撃ち込まれてくる。

でも、それは僕の先ほどの攻撃と同じようになにかのバリアで防がれる。

「バリア…!？」

「いえ、フィールド系！」

「魔力がかき消された!？」

『そう、ガジェットドローンにはちよつと厄介な性質があるよ。』

攻撃魔力をかき消すアンチマジックフィールド、AMF。普通の射撃は通用しないし…』

なのはさんの言葉が聞こえてくる。

それでスバルさんが先行して移動系魔法『ウィングロード』で突つ走るが、それは発生したフィールドでかき消されて消滅した。

『それにAMFを全開にされると飛翔や足場作り…移動系の魔法の発動は困難になる』

そんな…。

で、でもそれなら……!

前にシホさんは説明してくれた。

魔術は今の科学力では解明されていない未知の力だという。だから……!

「ラン姉さん! 魔術式の起動を!」

「そうだね、レン!」

「なにをするの? ブルックランズ姉弟?」

「私とレンの魔術式なら対抗されていないはず! だから……!」

それで僕とラン姉さんでロードカートリッジをした後、

「魔力刃……物質強化、氷結開始……!」

「3……2……1……!」

「「斬氷閃」!!」

姉さんの剣と僕の盾から発生する魔力刃から発せられた攻撃によって二体撃破する。

僕と姉さんの魔力変換資質『氷結』と魔術の強化を融合させて放ったのだ。

「これなら……!」

「うしっ!」

「やった!」

『うん……魔術はまだ管理局の技術で解明されていない未知の力だからガジェットには搭

載されていないんだよ。気づくのが早かったね、レン』

「はー！」

『でも、それだと甘えが出ちゃうからいざつていう時にしか魔術式は発動しないほうがいいよ？ みんなの修行になんないから…』

「わ、わかりました！」

注意されてしまった…。

そうだね。魔導師社会では魔術はある意味反則の力だし…。

シャーリーさんの話では擬似的に再現しているけど本物とあまり変わらないという。

残り八体しつかりと撃破しなくちゃ…！

『対抗する方法はいくつかあるよ？ どうすればいいか素早く考えて素早く動いて！』

そうなのはさんが言ってくる。

よし…！ 次も頑張るよ！

それからエリオ君が繋がっているビルの上に立ちカートリッジロードをしてビルを崩してガジェットを足止めして上に上がってきたのをスバルさんが叩く。

でも魔力が消されて威力が落ちているみたいでもう一度今度は直接デバイスを叩き込んで爆発させた。

次にキャロちゃんフリードで火炎を放ち足止めをした後、召喚魔法で鎖を召喚して

ガジェットを三体捕らえる。

お次はティアナさんが魔力弾を膜でさらにくるんで多重弾幕射撃を放った。それによつてフィールドを突き抜けて爆散させた。

あんなのもあるんだ。

学ばせてもらいました。

なら僕も足止めをしなくちゃ！

「姉さん！　いくよ！　捕らえる！」

「オツケイ！」

二人でビルの上に立ち掌に魔力を溜めて、

「二人なら…できる！」

「うん…！　二人の魔力を合成！」

「グレイシャフオール!!」

空からいくつもの氷の結晶を降らせて地面を凍らせながらも残りのガジェットを氷漬けにして捕らえる。

これは魔術じゃないから反則判定はもらわない。

でも、この魔法は一人じゃ魔力が足りないのが欠点なんだよね。

そしてそれからまた訓練は続行されていた。



S i d e 八神はやて

色々な上司の皆さんにフェイトちゃんと一緒にレリックについてプレゼンをしてきたけど疲れたわ。

…そして夜になり私は隊舎に戻ってきて食堂にシグナム達が集まっているのを目にする。

そこにはもうあまり人もいないので食堂の手が空いたのか士郎とキャスターも一緒にいた。

「あ、はやて！」

「ヴィータ。みんなでお食事か？」

「はい。色々と打ち合わせがてら」

「はやて、ご飯食べた…？」

「お昼抜きやったからもうお腹ペコペコや…」

「ならばすぐにでも作るとしようか。いくぞ、キャスター」

「わかりました。全員分のおいしい料理をご提供しますよ。ご期待くださいまし♪」
「ありがとうな」

それで士郎達は調理をしにいった。

「ここでも士郎達の料理が食えるんはいいことや。」

「でも、志貴とアルクエイドはいないんはやっぱ残念や。それにアインスもな」

「アインスはツルギを育てないといけないからしかたがありません。」

「それにあの二人はそのうち出向してくるでしょう。今は志貴は武装隊で活躍中ですから」

「アルクエイドさんは呼べば来ると思います。暇を持て余していますから……」

「あいつはいつもどこでお金を稼いでくるのか不明だよな……実質ニートなのに」

「ヴィータも辛辣やな。」

「志貴は管理局で単独任務が多いと聞くからな。」

「それに志貴の要請でたまにアルクエイドも手伝っているというしな。」

「ま、今はそのうち出向してくるのを待つとしよう。」

「それから全員で食事をとっていた。」

「中央の方はどうでしたか？」

「まあ、新設部隊とはいえ後ろ盾は相当しっかりしているからな。そんなに問題ないよ」

「後見人だけでもリンディ提督にレティ提督にクロノ君…じゃなくてクロノ・ハラオウン提督」

「そして最大の後ろ盾…聖王教会と教会騎士団の騎士カリム。ま、文句の出ようはありませんね」

「現場の方はどないや？」

「なのはとシホとフォワード隊は挨拶後朝から夜までずっとハードトレーニング…新人達は今頃グロッキーだな。ランとレンはその後に魔術の訓練もあるしかなりきついと思う」

なのはちゃんの訓練はきついかなあ。

シホちゃんの魔術訓練も地味にきついし。

昔体験したから分かる。

ま、私は起動とかそこら辺くらいしか学ばなかったが。

アルクエイドを維持できる魔力の使い方と対魔力を学べれば私はそれだけで大丈夫や。

驕りかもしれないけど魔導の力があるしな。

「ま、全員やる気と負けん気はあるみたいだしなんとかついて行くと思うよ」
それからバックヤード陣やグリフィス君の事も聞いた。

特に問題はないみたいや。

まだ立ち上げて間もない部隊やけどしつかりとみんなで頑張っていこうな。
みんなとそう約束した。



S i d e シホ・E・S・高町

私が部屋で色々と準備しているとそこにブザーが鳴り誰かが入ってくるみたい。

それで、「いいわよ」と言っているうちにランとレンが入ってきた。

「いらっしやい、二人共」

「は、はい…」

「初訓練はどうだった？」

「き、きつかったです…」

「そう。でもこれは毎日行っていくことになるから泣き言は吐いていられないわよ？」

「「が、頑張ります！」」

「うん…それじゃ私・土郎・キャスターの魔術工房に行こうか。そこで魔術の訓練をする

から」

「はい！」

私達はそれで魔術工房の部屋に行つて疲れているランとレンにはきついかもしれないけど魔術の訓練を施した。

そして時間は過ぎて、お風呂に入れた後、二人はそのままベッドで寝てしまったようだ。

昔の私みたいね。

それで朝はよく桜に起こされていたっけ？

そこにアルトリアとネロがやってきて、

「二人はどうですか？ シホ」

「はかどつているか、奏者よ？」

「いい感じね。魔術も覚えは早いからこれならすぐに一流になれるでしょうね」

「そうですか。でしたら二人の進路はここを出たら魔術事件対策課ですか？」

「そうね。立派な魔術師として活躍してくれるのを信じているわ」

二人の成長した姿を予想して将来に想いを馳せる。

第百十九話

『ぎこちない距離感、深めあう仲間』

達』

Side ラン・ブルックランズ

機動六課が始動して数日。

私達はまだ慣れないデスクワーク作業をオフィスでしている時だった。

『隊員呼び出しをします。』

スターズ分隊、スバル・ナカジマ二等陸士、同ティアナ・ランスター二等陸士。

ライトニング分隊、エリオ・モンディアル三等陸士、同キヤロ・ル・ルシエ三等陸士。

セイバーズ分隊、ラン・ブルックランズ三等陸士、同レン・ブルックランズ三等陸士。

10分後にロビーに集合してください』

「ん……？」

「姉さん、なんだろうね……？」

レンと二人でなんだろうと話している。

それからスバルさんとティアナさん、エリオとキャロちゃんと合流して向かう途中で、

「呼び出しなんて初めてだねえー」

スバルさんがそう話し出す。

「そうですね」

「う、うん」

「はい」

私、レン、エリオ、キャロちゃんですらそう返事をする。

「ティア、行こう？」

「あー、今行くわ…」

ティアナさんがそうスバルさんに言葉を返してくるが肩を何度も捻っていてどうやらお疲れのようだ。

スバルさんも心配したのか、

「…ティア、筋肉痛？ やっぱりつらい…？」

「まあ少しね」

「なのはさんとシホさん達の訓練ってハードだもんねえ」

「そうね。いままででも結構鍛えていたつもりだったけど、あの指導を受けているとまだまだ甘かったんだって思うわね…。」

「そうは思わない？ ランにレン、エリオにキャロ？」

「まあ、そうですね。私とレンはシホさんに追加で結構魔術の修行で絞られていますからおそらくティアナさん達の二倍くらいは疲労は溜まっていますかね？」

「そうだね、ラン姉さん。でも、もう慣れたって事もあるかな？ アルトリアさんとネロさんの剣術の修行は普通にハードだから」

「あー、そういえばあんたら二人はシホさんの養い子で、シホさん達と一緒に暮らしているんだっけ…？」

「うんー」

「はい」

「ふーん…それじゃその歳でちよつとレベルが高い技を使うのも納得できるわ」

「どこか、ティアナさんの表情には羨ましいというものが込められているのを感じた。別段気にはしないんだけど、どこか不安になる感じがしたのは気のせいかな…？」

「私がそんな事を思っていたがそこにキャロちゃんがティアナさんに寄っていき、

「あの、ランスター二士。よろしければ簡単な治療をしますが…」

「ああ…そういうえばキャロはヒーリングのスキルも持っていたっけ。それじゃお願いし

「ちゃおうかしらね」

「は〜…」

それでキャロちゃんはなにかの詠唱を開始するとそれをティアアナさんの腕に当てていく。

するとティアアナさんはかなり気持ちいいのか、

「あ、あ、あ〜〜〜…効く効くう」

とても気持ちのいい表情をしていた。

あ、それなら私もシホさん謹製の塗り薬をおすすめしてみようかな？

あれは好きな人と苦手な人とで確実に分かれるからティアアナさんはどっちかな？

「あの、ティアアナさん。気持ちいいところ悪いんですけど、シホさん謹製の塗り薬を後で使ってみます…？」

「ん…？ シホさん謹製の塗り薬…？ それって効くの…？ っていうか、シホさんってそんなものも作っていたの？」

「はい。なんでも伝手の協力者によって販売したら大ヒットしたらいいですよ？」

「そうなの。それじゃ後で使わせてもらおうかしらね？」

そうティアアナさんは言っていた。

ちなみに後日に使ってみたらしく、それ以降スバルさんと一緒によく使うようになって

たという。

どうも、こう…突き抜けるような刺激が癖になったとか…。

ちなみになのはさんは昔から使っているらしいがいまだに慣れないというらしい。

もつたないなあ…。

そんなどうしようもない事を思っていると近くではスバルさんとエリオが会話をしていた、

「エリオはヘーキなの？」

「はい、なんとか…。これでも鍛えていますから」

「そっかー。やっぱりちっちゃくても騎士だねえ。今度レンと一緒に三人で組み手とかしてみよっか」

「はい！ お願いします。ナカジマ二士」

ん…？

なにか違和感を感じた。

スバルさんもうやら感じたらしく「ん？」という感じの顔になっていた。

そしてティアナさんのほうでも、

「あー、ラクになったあ。ありがとね、キャロ」

「恐縮であります。ランスター二士」

あ、こっちも。

違和感の正体は気づいているけどね。

ティアナさんも少し堅苦しいという表情になっているし。

それでティアナさんが最初に、

「あのさ、二人共？　なんつーか、こう…」

「そうだね。チームメイトなんだしもうちよつと柔らかくてもいいよ。階級付きで呼ばなくても。」

エリオはランとレンは普通に名前と呼んでいるでしょ？　なんか、少し嫉妬するっていうか…」

「あ、はい…」

「えっと、ではなんとお呼びすれば…」

エリオとキャロちゃんは どうしていいか迷っているようである。

「ランとレンのように名前でもいいよ。スバルとティア！　そしてキャロはランとレンの事も階級をつけないでいいと思うよ」

「…いい、いいんでしょうか？」

「いいんじゃないの？」

「うん。それじゃ私もティアナさんの事をティアさんって呼ばせてもらおうかな？」

「ぼ、僕もいいですか…?」

「いいわよ」

よかった。なんか、これこそ仲間って思いになるしね。

「それでは、スバルさんとティアさん」

「ランさんとレンさん」

「うん♪」

「いいと思うよ。キャロちゃん…いや、キャロでいいかな」

「構いませんよ。ランさん」

「よかった」

うんうん。距離感が縮まった感じがするよ。

私がかまた一人感激しているとティアさんが「さ、遅れてもなんだからさっさと行くわよー」と言ったので私達六人で向かうことにしたのだった。

そして到着するとリインさんが待っていてくれた。

リインさんは自宅、つまり八神部隊長の家はシホさんの家とご近所なので昔から良くしてもらっていたからあまり頭が上がらないんだよね。

「はい！ みなさん集まりましたね」

「「「「「はい！」」」」」」

リインさんが元気に挨拶してくる。

「おいーっす」と言っているのがなにげに可愛いです。

それはいいとして、私達は元気に挨拶を返す。

「今日の午前中は訓練なしということので六人には六課の施設や人員なんかを紹介していただくですよ」

「「「「はいっ！」「」」」」

「いい返事です。ほかのみなさんは初日にオリエンテーションをやったですが六人はずーつとなのはさん、シホさん達と訓練でしたから」

「そうだよね。いまだに施設の中がわからないところがあるから自由に行き来できていないんだよね。」

今回はちようにいい機会だね。

でもそこでリインさんが少し恐ろしいことを言った。

「でもおかげで最低限の基礎は終わって今日からは本訓練のスタートだとか」

あ、あれで本格的な訓練じゃなかったんだ…。

ティアさんなんか怖々とした表情になっているし。

スバルさんはのんきに笑っているけど。



S i d e シホ・E・S・高町

私となのはいまはやてとお話をしている途中だ。

「それで、訓練ももう四日目や。新人達の手応えはどないや？　なのはちゃん、シホちゃん」

「六人ともいいね。かなり伸びしろがあるよ。あの子達」

「そうね。取り急ぎ準備だけは終えたけど伸ばしていく方向もだいぶ見えてきたかしらね」

「うん！」

まずは高速機動と電気資質、突破・殲滅型を指せるガードウイングのエリオ。

乾坤一擲の剣の技術と凍結資質、同じくガードウイングのラン。

一撃必殺の爆発力に頑丈な防御性能、フロントアタッカーの理想型を目指していくスバル。

スバル以上に防御重視の頑丈な護りの要、そして凍結資質で攻撃にも転用できてフロントアタッカーのレン。

二騎の竜召喚を切り札に支援中心に後方型魔導師の完成形を目指していくフルバツクのキャラ。

射撃と幻術を極めて味方を生かして戦う戦術型のエリートガンナーになってくはずのセンターガードのティアナ

「全員一癖も二癖も伸ばせる技能を持っているのよね」

「そう。だからどこまで伸びるか楽しみだよ。六人が完成したらすごいことになるよ！きつとね！」

「それは楽しみや。それで、六人のリーダーは誰になるんやろな？」

六人のリーダーか。それだとやっぱり…。

「ティアナで決まりじゃないかな？」

「そうね。やっぱりみんなに指示を出せる人が一番的確だと思うわ」

なのはの意見に私も賛成の意を示しておく。

「そうかあ」

「ティアナはちよつと熱くなりやすいところがあるけど、視野は広いし指示も正確。自然に他の五人を引っ張っているしね」

「そうね」

「ええ感じやね」

はやてがそう言葉を発するがなのは少し困り顔になる。私も事情は知っているから何とも言えないわね。

「ただねえ。ライトニングとセイバーズは経験不足以外だとレンの少し弱気なところ以外は特に問題はないんだけどね。」

スターズのコンビが二人揃ってすごい突撃思考なんだよ。ここは厳しく教えていけないとね」

「あー…なるほどな。なのはちゃんのちっちゃい頃みたいなの？」

「あははっ！」

はやての比喩に私は思わず笑いをこぼしてしまった。

「あ、シホちゃん。笑うのはひどいよー」

「や、ごめん。なんていうか昔になのはをユーノ、フィアと三人で鍛えていた頃を思い出して、苦労したなあ…と思いついたら思わず笑いたくなって…」

「うう…そんなに迷惑かけていたかな？」

「私が生き証人や。安心してええよ。なのはちゃん」

「は、はやてちゃんまで…泣いちゃうよ、私!？」

「あははははッ！」

それで三人でひとしきりじゃれあつた後、

「うー…なんかいまいち納得できないけど、話は戻すね。」

今すぐにも出動はできないはないんだけどね。三つの分隊もまだあと一週間くらいはフル出動は避けたいかな。

もう少し確実に安全な戦術を教えてからにしたいんだ」

「その意見には同意ね。私もランやレンには危ない戦いはしてほしくないからね」

「そのところはヘーキや。そのための隊長・副隊長の配置やし。」

新人達の配置についてもなのはちゃん、シホちゃんの裁量に…いや、高町教導官、シユバインオグ・高町教導官に全面的にお任せや」

「ありがとうございます。八神部隊長」

「さすが部隊長ですね」

「二人共あかんよ。そう何度も部隊長呼ばわりはまだ慣れへんから背中がムズ痒くなってくるわ」

それでまた三人で笑いをこぼすのだった。



Side ラン・ブルックランズ

それからリインさんに色々と案内をしてもらって食堂にまでやってきた。

「はい。こちらの食堂で案内は一通り終了です。食堂の使い方はもうわかっていますよね？」

「「「「「はい」」」」」

「それではちようどお昼休みですのでこれにて解散にしましょう」

「「「「「ありがとうございます」」」」」

「さて、それでは…土郎。パーパー！ お腹空いたです！」

『!?!』

そのリインさんのある意味問題発言によって食堂にいた全員がギョツとしていた。

それに対して食堂の土郎さんというと、

「…ああ、リインか。少し待て。特別メニューをご提供してあげよう」

「少しお待ちくださいませぬ。リインさん」

「わーいです！」

なんか和気あいあい…。

土郎さんとキャスターさんはもう慣れたというか普通に日常だと感じているようであんなにもしないで料理を作っている。

リインさんはもうベストプレイスらしい土郎さんの頭の上で料理が来るまでくつろいでいるし。

それに呼応して何名かの男性局員が羨望の眼差しを土郎さんに贈っていたのは、うん、忘れよう…。

それで少し落ち着いてきた頃に全員で食べようかという話になった。

スバルさんは用があるらしいアルトさんに呼ばれて私達だけで先に準備をすることになった。

だけど、そこでもやっぱりエリオとキャロは無言で佇んでいた。

ティアさんも気にしているようで二人に話しかけて、

「…あのさ、じつは三日前から思っていたんだけどアンタ達二人揃ってお互い全然しゃべんないわよね？」

「うんうん、ティアさんの意見には同意だよ」

「僕もエリオ君とキャロちゃんはあんまりお互いに喋らないなって思っていたんだ」

それでエリオとキャロは不思議そうな表情になりながら「そうでしょうか…」という感じに答えていた。

「アンタ達二人共兄妹みたいなものだって聞いたんだけど…」

ティアさんの問いにエリオは、

「実際に会ったのは六課に来た時が初めてです。写真では知っていたんですが……」
「私達は二人共フェイトさ……フェイト隊長が保護責任者なのですが、別々の場所で過ごしていましたので」

それに対してティアアさんは少し申し訳なさそうな顔をして、
「……………そっか。ごめんね、あんたらもいろいろ複雑なんだ」

「いえー！」

「大丈夫です！ それにフェイト隊長からもなるべく二人で仲良くして欲しいと言われて
いますので……」

「そう……。お母さんの言うことはちゃんと聞かないとね」

「はいっ！」

それで五人で食事を運ぶのだけれど、やっぱりエリオとキヤロは喋らないようである。
る。

うーん、もったいないわね。

仲良くするのは大事だと思うんだけどね。

ティアアさんもそれで呆れているし。

私とレンはティアアさんに同情して思わず苦笑いを浮かべていた。

それで謝ってくる二人だけどティアアさんは面倒見がよく二人の頭をグリグリして、

「あんたたちライトニングはコンビなんでしょ？　しかも同い年。

スターズのスバルみたいにむやみに誰とでも馴れ合う必要はないけどさ。

お互いにコミュニケーションはしっかりと取れていないとまずいんじゃないの？」

「そうだよ、エリオ。キャラとはもつと仲良くなったほうがいいよ」

「うん。仲がいいのはいい事だよ。エリオ君」

「は、はい」

と、三人で二人に言い聞かせているとスバルさんが遅れてやってきた。

「五人でなんの話〜？」

「別に。ちっこいの二人があんまり話さないなって感じの話題を言っただけよ」

「あーそれあたしもちよびつと思っただよ。お話はちゃんとしたほうがいいよー？」

「はい」

それでスバルさんも二人の頭を撫でて、

「最初は話なんて合わないのは当たり前だよ。エリオにキャラ。

だからなんでもお話していくうちにいろいろとわかってくるもんなんだから」

うん。スバルさん、いい言葉だね。

私達も見習いたいものだけわ。

それでエリオとキャラも元気が出たのか、

「がんばりましょう、ブルシエさん！」

「がんばるであります。『モンディアル三士』！」

あれー!?

やっぱりまだ違和感があるよ!?

思わず滑りそうになってしまったよ。

「その呼び方も良くないね。」

『行くよキャロ!』『うん、エリオくん!』：とかでいいんじゃないのー?」

「が、頑張りますっ!」

うん。まだまだこれからだね。時間はいっぱいあるんだしこれからもっと仲を深めていけるよね。

それから食事も終了し、食堂から出る際に土郎さんに、

「六人ともしつかりと訓練をしてくるといい。まだまだお前達はヒヨっ子だ。」

だがな、ヒヨっ子はヒヨっ子なりに頑張れることがあるのだ。

「無茶はせずに確実に頑張ってこい」

「「「「「はい!」」」」」

「いい返事だ。さ、行ってこい」

土郎さんは男気溢れるような笑みを浮かべて私達を送り出してくれた。

あー…あれが男性局員が憧れるという土郎さんの漢の笑みか。かっこいいよねー。

そんな事を思いながら、ふとレンとエリオを見てみると二人共あこがれの眼差しを贈っていた。

やっぱり弱気なレンとしては土郎さんが理想系か。

だがそこに遅れてきたのかランサーさんが食堂にやってきて、

「おい、土郎。なにかつまめる物はないか？ ヴァイスと後で酒飲みをする予定なんだから…」

「控えめにしておけよ、ランサー。ヴァイスはヘリパイロットなのだからいざという時に酒が入っていて動けないとかだったら職務怠慢になるからな」

「へいへい。さすがオカんだな」

「……………私は男だぞ」

「いや、お前はやっぱり生まれくる性別を間違えてるって。シホの嬢ちゃんの方が逆に正常に見えてくるぜ？」

「それは、シヨックだな…」

なにやら意味深な言葉が聞こえてきた。

そういえば、シホさんと土郎さんって兄妹な関係らしいけど本当はどんななのだろう

う…？

ま、いつか話してくれるよね。

それで私は先に行く五人に追いつくのだった。

そして午後の訓練。

そこにはまだなのはさんとシホさんだけしかいないようである。

「さて、それじゃこれから第一段階に入っていくわけだけど…まだしばらくは個人スキルはやりません。コンビネーションやチームワークが中心ね」

「六人ともそれぞれ得意の分野でしつかりと生かして協力しあうのよ。ムチャもせずからね」

「「「「はいっ！」」」」

私達はなのはさんとシホさんに元気よく返事を返す。

「個性を生かして能力をフルに活用してまずは六人チームでの戦いをしつかりと身に付けようね」

「「「「はいっ！」」」」

みんなで過ごす私達の居場所。

こんな楽しい場所を続けていけるように私もしつかりとやっついていこうと思いました。

ラン・ブルックランズ、これからも頑張ります。

第二百十話

『シホのシュートイベイション』

S i d e ティアナ・ランスター

あたしは今、書類仕事の傍らでなのはさんやシホさん達の事を調べている。

局入りは10歳からでそれ以前にも幾度か事件を解決したというのがその詳細はあまり詳しく載っていないかった。

でもどんな事件に関わったかくらいは割り出すことはできた。

内容は分からないが『P・T事件』と呼ばれる事件。

次は『闇の書事件』。

そして最後にこの世界に魔術という新たな体系を知らしめる切欠となった『聖杯大戦事件』。

三つの事件ともおそらくなのはさん達は関わったとあたしは予想する。

それでどんな9歳よ?と思うたくらいだ。

なんかこうして並べてみると、しかしどれもデータラメで本当に関わっていたのかどれが嘘か真なのか分からなくなってくる。

でも、少なくとも聖杯大戦事件には関わったことは確かだ。

ランとレンに聞いたがセイバーさん、ランサーさん、ファイターさんは聖杯大戦でしか呼び出せないサーヴァントという最上級の使い魔だという。

しかもファイターさんはバレていないと思っっているだろうが少し容姿を調べればすぐに名前が割れてくる。

ベルカ時代の聖王『オリヴィエ・ゼーケブレヒト』。

調べてみたら分かった事でこんな有名人を使い魔にしているのはさんってどんだけ……?とも思っただし。

「…ティア、何を調べているの?」

「ん? なのはさん達のこと。昔になにがあつたらこんなな事件に関わることがあつたんだらうってね…」

それでスバルにも詳細のデータを見せる。

「あ…確かにいっぱい事件に巻き込まれているね。これってまだ管理局に所属する前だよな?」

「そうなのよ。だから不思議なことばっかりでね…。内容は秘匿で詳しく見れないし

…

「そつか。ま、いつか話してくれるよ。それよりティア、書類仕事手伝って〜」

「バカスバル、自分でやりなさい！」

「えー!?!」

「慣れていないエリオとキャロはともかく年下のランとレンはあんたよりデスクワーク作業が得意じゃない！」

「だからあんたももつと頑張りなさい！」

「は〜い…」

それでスバルはさすがごと引き下がっていき、またデスクワーク作業に取り掛かっていった。

あたしもなのはさん達のデータを保存して閉じ、またデスクワークを再開した。

………

………

………

そんなこんなでなのはさんとシホさんに鍛えてもらいながら一ヶ月、

「はい整列！」

「はい！」

あたし達はあちこちボロボロになりながらもなのはさんの言葉に従って整列する。

「それじゃ本日の早朝訓練、ラスト一本。みんな、まだ頑張れる…？」

「はい！」

「それじゃシュートイベーシオンをやるよ。今回のお相手は…セイバーズ隊長のシホちゃん！」

「よろしくね」

シホさんがそう言って笑みを浮かべながらやってきた。

「で、でも…シホさんは古代ベルカ式でこういった細かな訓練は向いていないんじゃない…？」

ランがそう言う。

そうなのよ。

この人、古代ベルカ式の使い手でかなりの上級者なのだ。

実力は八神部隊長と同じでSSランクという強者。

あたし達で敵うかどうか。

「大丈夫よ。これでも私はトリニティーデバイスの使い手よ？」

ミッド魔法もそこそこ使えるわよ」

「というわけ。だから私は見学しているね」

なのはさんは制服に戻った。

本当にシホさんがやるみたいだ。

シホさんはその赤い朱銀髪のをさらにバリアジャケットで真つ赤にしてデバイスを弓形態にして構える。

「…私の攻撃を五分間、被弾無しで回避しきるか私に一撃を与えればクリアといった簡単なものよ」

簡単なのかしら…？

あたしにはとても難しそうとしか感想が持てない。

「誰か一人でも被弾したらやり直しだからねー？ 頑張つてねー！」

なのはさんがそう言うてくるけど今は集中したい。

みんなに、

「このボロボロ状態でシホさんの攻撃を5分間避けきる自身はある？」

「ない！」

「僕もありません！」

「一撃を当てたほうがいいと思います！」

「私もないかなー…シホさん、きついし…」

「う、うん…怖いほどだよね」

スバル、エリオ、キャロ、ラン、レンの順にそう言葉を返してくる。

っていうか、ランとレンは日頃どんな魔術訓練を追加でやっているのかしら…？

レンは怯えようが半端じゃないわね。

それでも男か！って内心で思ってしまう。

少し女顔だしね。

「ふう…それじゃ絶対に一撃入れるわよ！　あたし達が乗り切るのはそれしかないから

！」

それであたしは一息ついた後、全員に発破をかける。

「はい、わかりました！」

「頑張ります！」

「やるぞー！」

「よし。レン、気合を入れるよ！」

「うん！　ラン姉さん！」

エリオ、キャロ、スバル、ラン、レンの順に気合を入れていく。

みんないい具合にやる気を出しているわね！

「こちらの準備が出来たのを確認できたのかシホさんが、
「それじゃ準備はいいかしら？」 それじゃスタート！」

そう始まりの宣言をする。

そして始まった瞬間、シホさんは弓を構えて、

「ナインライブズ！」

ナインライブズという魔力矢が放たれた瞬間、魔力矢は一斉に九つに分かれてあたし達に殺到してくる。

それで避けたはいいが一個か二個かがあたしに追尾してくる。

九本がそれぞれ全員に分散して向かって行っている!?

それも誘導弾ならともかく矢が追尾してくる!?

そんな馬鹿げた攻撃があり!?

「ほらほら。じつとしていると当たっちゃうわよ?」

威力を弱めていると思うけどこの追尾性能…やっかいね。

《スバル!》

《うん!》

思念通話でスバルに合図を出す。

そしてスバルが魔力の矢を何度も避けてシホさんに一撃を当てに突っ込む。

でもシホさんはバリアを展開してそれを危なげもなく片手で防ぎ切り、反対の手で、
「反撃よー！」

なにか独特の手の構えをしてスバルに反撃した。

それは後にシホさんの特別武術訓練で浸透勁という術の構えだと知る。

だけど、まだ分からないスバルはシホさんのその手の構えを本能的に危険だと判断したのか、それをなんとか避けきり距離を取る。

だが、ウイングロードの上に飛び降りた途端にローラーが変な音をしだし、それでスバルは足を踏み外している。

デバイスの不良!?

「うん。いい判断ね。でも、そんな姿を見せたら危ないわよ？ 赤原を往け、緋の猟犬
！」

《H r u n t t i n g . 》

また違う種類のなんかゴツゴツとした魔力矢を放ち、それはどこまでもスバルを追尾していく。

スバルはいろんな方向に逃げていくがそれを追っていく。

あの矢も追尾性能！ しかもさっきのより精度がいい！

これが魔弾の射手と呼ばれる人の弓の実力！

「スバル！ 今援護するわよ！」

あたしが魔力弾を放とうとするが、
ボスッ！

「不発!? ああ、もうこんな時に！」

あたしは焦りながらも玉を詰め替えて再度魔力弾を放つ。

それでなんとかあの追尾の矢は撃墜したけどそれでもシホさんは余裕を崩さない。
いや、あの人に余裕とか慢心なんてものはないだろう。

常に本気でやっているのはこの一ヶ月で十分身に沁みているから。

「いくよ！ ストラீダー！」

「エリオ君、頑張つて！」

そこにライトニングのエリオ・キャロのコンビが、キャロがデバイスをブーストさせてエリオがチビ竜の炎とあたしの魔力弾を避けているシホさんに向かって槍を構えて突っ込んでいった。

でもシホさんはまた瞬動術という歩法で避ける。

でも、

「今だ！ ランさん！ レンさん！」

通り過ぎながらもエリオは二人の名を叫ぶ。

瞬間、ビルの上からセイバーズのランが剣を振り抜いていて、隠れていたのか下からレンが円上の魔力刃を構えて突っ込んでいた。

二人同時の一撃！

これで喰らって！

「斬氷閃!!」

そしてそれらはシホさんに直撃する。

でも、二人はそのまま吹き飛ばされてしまっていた。

「失敗!」

あたしは思わず叫ぶ。

でもシホさんは、

「…うん。最後の攻撃はバリアを抜けていたわね。」

まだまだ拙いけど連携はよくできているわ。合格よ」

そう言っつてシホさんは制服姿に戻りなのはさんのところに戻っていった。

でも、なのはさんはシホさんに少し微妙な表情を向けて、

「…シホちゃん。ナインライブズとフルンディングはまだちよつと六人にはきつかったんじゃない?」

「威力とスピード…どちらも落としていたから大丈夫よ。」

それと、あれくらい切り抜けてもらわないとね」

「そうだけど……前に、はやてちゃんかシホちゃんのお仕置きと表した本気のフルンディングでサンドバック状態になっていたよね？」

「そんなこともあつたわね…懐かしいわね。あの頃は私もまだまだ考えが若かつたわねえ…」

なんか、そんな恐ろしい会話が聞こえてくる。

八神部隊長ほどの人がサンドバック状態って…。

…よかつたわね、スバル。シホさんが本気を出さなくて。

二人は会話を終了させてあたし達のところ歩いてきて、

「さて、それじゃみんなもチーム戦にだいぶ慣れてきたね」

それであたし達は揃って「ありがとうございます」と返事を返す。

それからなのはさんはあたしの事を褒めてくれて「指揮官訓練受けてみる…？」って言うてきたけど、まだあたしにはそんなものは早いのでやんわりと断つておいた。

「きゅくる〜…」

そこにチビ竜がなにか言っているようだ。

「フリード、どうしたの…？」

「なんか、焦げ臭いような…」

それであたしも匂いを辿ってみると、スバルのローラーが焦げ付いていた。やっぱりさっきの不良な動きは故障している合図だったのね。

「ああー！ いけない!! しまったなあ。無茶させすぎたみたい…」

「オーバーヒートかな？ 後でメンテナンスツプに見てもらおうか」

「はい…」

それでスバルは落ち込む。

でも、あたしも結構やばいのよね。さっきの不発はガタが来ていた証拠だし。

「ティアナのアンカーガンも厳しい？」

「はい。騙し騙しです…」

「みんな、訓練にも慣れてきたし、そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えかな…？」

「そうね。ランとレンのも試作品だからそろそろ厳しいだろうしね」

「「「新デバイス…？」」「」」」

そんなものも用意されているんだ。あたしなんかの為に…。

いいのかな？ こんな凡人のあたしに新デバイスなんて…。



S i d e シホ・E・S・高町

「それじゃ一旦寮でシャワーを浴びて着替えてロビーに集まろうか」

「「「「はい」」」」

六人がなのはの言葉に返事を返している。

ふと、前方から黒い車…フェイトの車が走ってくる。

「あの車って…」

「フェイトのね」

それで車は止まり中からフェイトとはやて、そしてランサーが姿を現す。

「フェイトさん！ 八神部隊長！ ランサーさん！」

「すごい！ これフェイト隊長の車だったんですか？」

「そうだよ。地上での移動手段なんだ」

「みんな、練習の方はどないや…？」

「あー…あはは」

「頑張っています」

「なんとかついてこれています」

「お、同じくです…」

全員が少し疲れ目だがなんとかはやてに言葉を返している。

そこにフェイトが申し訳なきような表情をして、

「…エリオ、キャラ、ごめんね。私は二人の隊長なのにあんまり訓練見てあげられなくて」

「あー、いえ…」

「大丈夫です」

「六人ともいい感じに慣れてきてるよ。いつ出勤があつても大丈夫！」

「そうね」

「そうか。それは頼もしいな」

「三人はどこかへお出かけ？」

「なのはちゃん、三人やなくて四人や」

「そうね。それじゃフェイト、ちよつと狭くなっちゃうけどよろしくね」

「うん、シホ」

それで私も同乗させてもらおう。

「シホさんも一緒ですか？」

「うん」

「私とランサーは6番ポートまで」

「教会本部でシホちゃんとカリムとで会談や。夕方には戻るよ」

「私達は昼前には戻るから、お昼は一緒に食べようか」

「「「「はいー」」」」」

「ほんならなー」

「行つてくるわ」

それで見んなと別れて私達は聖王教会まで向かうことになった。

車内で、

「聖王教会騎士団の魔導騎士で管理局本局理事官、カリム・グラシアさんか。

私はまだお会いしたことないんだけど…」

フエイトがそんなことを話します。

「あ、そやったね」

「はやてとシホはいつから…?」

「私達は…そうね。管理局に勤めてからそんなに時間が経っていない時だったから9年前からの付き合いかしら?」

「そうやね。同じ古代ベルカ式の使い手として呼んでもらったんよ。オリヴィエさんも

一緒に」

「オリヴィエさんも…？」

「ええ。聖王教会っていうからやっぱりオリヴィエ陛下は名前が有名だからね」

「そうなんだ」

「カリムと私は信じてることも、立場も、やるべきことも全然違うんやけど、今回は二人の目的が一致したから。」

「そもそも、六課の立ち上げの実質的な部分をやってくれたのはほとんどカリムなんよ？」

「へー…」

「だからおかげであたしは人材集めの方に集中できた」

「信頼できる上司って感じ…？」

「仕事や能力はすごいんやけど…上司って感じはあんまりせえへんのよ。どっちかっていうとお姉ちゃん、って感じや」

「そっか」

「レリック事件がひと段落したら紹介するよ。フェイトちゃんもなのはちゃんも気が合うと思うで…？」

「楽しみにしてるよ」

「しっかしこう訓練ばっかだと飽きてくるぜ」

「ランサーは鍛える方なんだからそう言わないの。エリオも感謝しているから」
「へいへい…」

そんな話をしながら私達はフェイトに送ってもらった。



六課隊舎に戻ってスバル達女性陣はシャワーを浴びているところだった。

シャワーを浴びながら、

「えっと、スバルさんのローラーブーツとティアさんの銃ってご自分で組まれたんですよね?」

「うん。そうだよ」

「自作で組むってすごいよね」

「訓練校でも、前の部隊でも支給品って杖しかなかったのよ」

「あたしはベルカ式で、それに戦闘スタイルがあんなだから。そしてティアもカートリッジシステムを使いたいからって…」

「そうなる自分で作るしかないのよ。訓練校じゃオリジナルデバイス持ちはあたしとスバル、それにリオンって子の三人だけで…」

それが縁でトリオを組んでいたけど、ほかにはいなかったから目立って仕方がなかったわ」

「あ！ それでスバルさんとティアさんのお二人はお友達に？」

「腐れ縁とあたしの苦悩の日々の始まりって言って」

「あははー。でも…リオンは今、元気になっているかな…？」

「スバルさん、リオンさんってどんな人だったんですか…？」

ランがそうスバルに聞く。

それにスバルは、

「…ん？ そうだね。」

同じ訓練校であたしとティアとトリオを組んでいて、ちよつと背が小さくてよく背伸びをしているのが微笑ましかったかな。

でも頑張り屋さんでなにをやるにも一生懸命だった。

それにレアスキルで五秒先の未来を予知するとかいう能力を持っていたんだよ」

「へー…すごいですね」

「うん。今は連絡も取れていないし、どこの部署に配属しているのかわからないんだけど、元気にやっていたらいいなって、思うんだ。…ね、ティア？」

「そうね。…それになにかあの子、少し訳ありっぽそだったしね」

「そうだね。…つとと、リオンの話はまたあとで教えてあげるね。」

それで、話は戻ってランとレンは誰にデバイスを作ってもらったの…?」

「はい。魔術事件対策課のデバイス技術班の月村すずかさんという人に作ってもらったんです。」

でもやっぱり試作品だけあつて初期形態しか組まれていないんですよ」

「そうなんだー。さて、それじゃキャロ、頭洗おうか?」

「お願いします」

「あ、先に上がっているから」

「あ、私も上がります。スバルさんとキャロはゆっくりとしていいですよ?」

「はい」

…一方で外で先に待っていたエリオとレンは、

「みんな、まだですかね…?」

「女性は長いもんなんだよ、エリオ君。うちの家族は僕以外は全員女性だからお風呂長
いし…」

「そういえばシホさんとは一緒に暮らしているんですたよね」

「うん。今は寮暮らしだけどね。」

特にネロさんが長いんだよ。隙を見せたらすぐにバラのお風呂にしちやうから…」

レンはそんな話をしながらエリオと笑い合うのだった。

第二百二十一話 『お茶会と最初のアラート』

S i d e カリム・グラシア

私は部屋で書類仕事をしていた。

そこにシャツハから通信が入ってきて、

『騎士カリム。騎士はやてと騎士シホがまいました』

「早かったのね。私の部屋に連れてきてちょうだい」

『はい』

「それとお茶を三つ。ファーストフラッシュのいいところをミルクと砂糖付きでね。後、くれぐれもリンディ提督のように入れすぎないようにお願いね？」

『か、畏まりました…』

シャツハとはそれで通信は切れる。

少し最後のセリフの後に苦笑いを浮かべていたから分かってくれただろう。

そしてすぐにターバンを巻いた姿のはやてとシホが部屋に入ってくる。

「カリム、久しぶりや」

「久しぶりね、カリム」

「はやて、シホ。いらっしやい」

それから三人でお茶会を開きながら話を交わしていた。

「ごめんなあ、すつかりご無沙汰してもうて」

「気にしないで。部隊の方は順調みたいね。シホの方は大丈夫…?」

「ええ。魔術を封じる手は今のところ魔術回路そのものを封印する以外に手はないからね。」

「だからいつでも全開で戦闘が出来るわ。そこは大丈夫よ」

「そう」

「なにもかも全部カリムのおかげや」

「ありがとね、はやて。」

でも、そういうことにしておくとは色々とお願ひもしやすいかな…?」

「なんや。今日会って話すんはお願ひ方面か?」

「なにか重要な話…?」

はやてとシホは気づいたようだ。

だから私は部屋に暗幕をかけて映像を映し出す。

「これ…ガジェット？ 新型？」

「今までの一型以外に新しいのが二種類。戦闘性能はまだ不明だけど、これ…」

三型の画面を拡大する。

「人よりかなり大きいわね…」

「大型ね。本局にはまだ正式に報告はしていないんだけど監査役のクロノ提督にはお伝えしたけど…」

もう一つの画面を映す。

そこにはレリックに似たケースが映し出される。

これに二人はやはり表情を変えてじっと見ていた。

「レリックやね」

「これはどうしたの…？」

それで一昨日からの事を二人に伝える。

二型と三型も昨日からの出現だということも。

「ガジェットがレリックを見つけ出すまでの予想時間は…？」

「調査では早ければ今日明日よ」

「でも少し早いな…」

そうなのである。

だから今日二人を呼んで話がしたかったのだ。

レリック事件では失敗をするわけにはいかないから。

でもはやては突然暗幕を解除して、

「まあ、なにがあつてもきつと大丈夫。

カリムが力を貸してくれたおかげで部隊はもういつでも動かせる。

即戦力の隊長達はもちろん：新人フォワード達も実戦可能。

予想外の緊急事態にもちゃんと対応できるような下地ができているからな。

そやから大丈夫や！」

「そうよ、カリム。それに私達には他にも心強い味方が何人もいるから平気よ。

いざとなればサーヴァント戦闘承認を許可してくれれば、サーヴァントも全員出動できる。

それなら全員力を合わせればなんでも解決してあげるわよ」

「そう…頼もしいわね」

サーヴァントの皆さんは私かクロノ提督の許可がないと極力戦闘に参加できないという決まりが機動六課を作る際に決められたから面倒なのよね。

「それにいざって時はレリックを闇に葬っちゃえばいいんだし…」

「シホちゃん、またそんな過激なことを…」

「できるできないかで言えばできちやうのがシホの恐ろしいところよね……」
それで三人で笑いあった。

それから紅茶を飲みながら談笑している時である。

ふと私はある事を思い出した。

「あ、シホ。まだ時間はあるわよね？」

「どうしたの、カリム。改まって……？」

「ええ。もしよかったらだけど、また古いベルカ語の書の解読作業を手伝ってもらってもいいかしら？」

「………また無限書庫からの依頼？」

「そうなのよ。」

昔の古いベルカ語を読めて解読できる人は限られてくるからシホと、それとオリヴェイ工陛下は貴重な戦力なのよ。

私もそこそこできるけどシホ並みにはいけないし……。

それにオリヴェイ工陛下の手も煩わせるわけにはいけないのよ。

だからシホが一番気兼ねなく頼めるのよね」

そう。

シホは『聖なる錬金術師』、シルビア・アインツベルンと魂と記憶が融合しているから

古代ベルカ語がペラペラなのである。

それでよくユーノ司書長から依頼を受けることが多いという。

「ユーノもいい加減な仕事をするわね…。」

私だって色々忙い身なのはわかっていようでしように…。

私より考古学者の人を使えばいいじゃない…。」

「あはは。それでもやっぱり解読できるスキル持ちは嬉しいものやし手伝わたらどうや
? シホちゃん。」

解析魔術の幅も増えたことやしな」

「ま、そうだけどねえー…。」

シホはもう何度も翻訳をしているからその面倒さが身に沁みて分かっているからな
のか、シホにしては珍しくダルそうに答えている。

と、そこにシャツハから通信が入ってきて、

『騎士カリム。騎士シホの使い魔であるアルトリアさんとネロさんが到着されました』

「そう。それじゃ追加でお茶を、それとアルトリアさん用にケーキも用意してね」

『畏まりました』

「悪いわね、カリム。わざわざケーキまで出してもらっちゃって…。」

「いいわよ。アルトリアさんのケーキを食べる姿はある意味癒しだから」

でも本人の前では言わない。

言ったらきつと、

『カリム、あなたは勘違いしている。決して私はケーキが美味しいという理由だけで顔を綻ばせているわけではありません。これは、そのですね…』

と、必死に言い淀む姿がすぐに思い浮かぶのは、もう慣れたからだろう。

アルトリアさんは騎士道精神とプライドが高いから素直ではないのである。

それから二人が部屋にやってくるなりケーキをご馳走すると、思ったとおり。

アルトリアさんは想像通りの反応をしているのである。

それで私は思わず「クスツ」と笑ってしまった。

「…？　む、どうしたのですか、カリム。私の顔を見ながら笑うのはよしてください」

「それは無理な相談であろう。アルトリアよ。」

まずは鏡で自分の顔を見つめ直してみるのだな。

ほつぺたにクリームがついておるぞ…？」

「ツ…！　恥ずかしいところをお見せしました」

「むう…仕方がないな。ほれ、顔を貸してみよ？」

それでネロさんがアルトリアさんの顔をハンカチで拭いてあげている。

その光景は、二人の容姿が似ていることもあり姉妹のやりとりのような光景に映って

しまう。

シホとはやても和む光景で思わず笑みを零して二人を見ているから私のこの想いは間違いではないだろう。

「す、すみません。ネロ……」

「よい。姉妹同盟では余が姉の立ち位置なのだからこれくらいの事は雑作もないからな」

えっへん！と胸を張るネロさん。

背は小さいから背伸びしている子供のように見えて微笑ましい。

「……カリムよ。なにか失礼なことを考えはしなかつたか？」

特に余のコンプレックスである背のことに關して」

「い、いえ……そんな事はないわよ？ ネロさん」

「そうか……？ まあ、別に構わないがな」

よかつた……。やつぱり勘が鋭いからヒヤヒヤものである。

そんな感じでお茶会はつつがなくな行われていったがそこで緊急のアラートが鳴り響く。

それですぐにシャツハに通信を入れて、

「シャツハ、どうしたの……？」

『はい。ガジェットの大群が出現したそうです。狙いはやはりレリックだと思われる
す』

「わかったわ！…というわけよ。はやて、シホ。お願いね？」

「任せときー！」

「任せて、カリム！」

それで慌ただしくなる室内。

はやてを送り届けるようにシャツハに準備をさせる。

シホ達も裏手から飛べるように手配をする。

…これが機動六課初の任務なのね！

打つ手はもう出来る限りは打ってあるから、後は任務に失敗しないことを祈るだけだ
わ。



…時間は少し遡り、

S i d e ラン・ブルックランズ

「これが…」

「あたし達の新デバイス、ですか…」

スバルさんとティアさんが驚いている。

でも、私とレン、エリオとキヤロは特に驚きはないかな。

待機状態はとくに変わりはないさそうだから。

「そうです。設計主任あたし！」

協力、なのはさん、フエイトさん、シホさん、レイジングハートさん、リイン曹長」

やっぱり豪華な顔ぶれだなあ…。

「ストラーダとケリユケイオン、バルムンクにアウルヴァンディルは変化なしかな？」

「うん。そうなのかな…？」

「違いまーす！ 違うのは外見だけですよ」

「リインさん！」

「はいです！」

そこにリインさんが登場する。

「四人はちゃんとしたデバイスの使用経験はなかったですから感触に慣れてもらう為に

基礎フレームと最低限の機能だけで渡していたです!」

「あ、あれで最低限…?」

「本当に…?」

「あれでかあ…それじゃこれからいろいろと振り回されちゃうかな?」

「気をつけなきゃね、ラン姉さん」

「みんなが扱う6機は六課の前線メンバーとメカニックススタッフが技術と経験の粋を集めて完成させた最新型。」

部隊の目的に合わせて、そしてエリオやキャロ、ランにレン、スバルにティア。それぞれの個性に合わせた機能の付いた文句なしに最高の機体です!

この子たちはみんなまだ生まれたばかりですが、色々な人の願いや思いが込められていていっぱい時間をかけてやっと完成したです。

だからただの道具や武器と思わずに大切に、でも性能の限界まで思いっきり全開に使ってあげてほしいです」

すごい…。

こんな最新式をもらえるなんて嬉しくなっちゃうな。

あ、でも、

「魔術式は積んであるんですか? これってずずかさんが積んでくれたんですけど…」

「うん。しつかりと積んであるよ。そこらへんはしつかりと学ばせてもらったからね」
「そうですか。なら、よかったです」

「で、この子達もきつとみんなに使われることを望んでいるから」

そこにドアが開いてなのはさんが中に入ってくる。

「ごめんごめん！ おまたせ！」

「なのはさん！」

「ナイスタイミングです。これから機能説明をしようかと」

「そう…。もう、すぐに使える状態なんだよね？」

「はいです！」

それでシャーリーさんが機能説明に入る。

「まずその子達はみんな。何段階に分けて出力リミッターをかけているわけね。」

一番最初の段階だとそんなにびっくりするほどのパワーが出るわけじゃないから、まずはそれで扱いに慣れていって」

「それで各自が今の出力を使いきれれるようになったら私やフェイト隊長、シホ隊長、リインやシャーリーの判断で解除していくから」

「ちようど一緒にレベルアップしていく感じですね。わかりやすく言いますとですけど」

「出力リミッターっていうと…なのはさん達にもかかっていますよね？」

「ああ、私達はデバイスだけじゃなくて本人にもだけどね」

「ええ？ リミッターがですか？」

それは一応シホさんに聞いていたから理解はしている。

「能力限定って言ってるね。うちの隊長と副隊長はみんなだよ。」

私とフェイト隊長、シホ隊長、ヴィータ副隊長、シグナム副隊長、ファイアット副隊長
も」

「はやてちゃんにもですよ。後、士郎パパもです！」

「うん」

「ええつと…」

それでキャロは少し迷っている。

「ほら、部隊ごとに保有できる魔導士ランクの総計規模って決まってるじゃない」

「ああ、うん。そうですね…」

スバルさんが少し乾いた声で答えていた。もしかして忘れていたのかな？

「一つの部隊でたくさんの優秀な魔導師を所有したい場合はそこうまく収まるように魔力の出力リミッターをかけるですよ」

「ま、裏ワザしてみたいなものだけどね」

「うちの場合ははやて部隊長が4ランク、シホ隊長が3ランク、あとの隊長たちは2ランクダウンかな。おまけに士郎さんも2ランクダウンしているね」

「四つ…八神部隊長はSSランクだから…」

「Aランクまで落としているんですか…?」

「シホさんも3ランクだからAAランクまで…」

「はやてちゃんとシホさんも色々と苦労をしています」

「それじゃなのはさんは…?」

「私はもともとS+だったから2.5ランクダウンでAA。だからもうすぐみんなの相手もそう簡単にできなくなるかな?」

「隊長さん達ははやてちゃんの。」

「はやてちゃんは直接の上司のカリムさんか、部隊の監査役でもあるクロノ提督の許可がないとリミッター解除ができません。」

「そして許可は滅多なこと以外は出せないそうです」

「そうだったんですか…」

「でも話は変わりますが、シホさんに関しては何導師ランクはあつてないようなものですから」

「なんでですか…?」

「シホさんの本質は魔導師じゃなくて魔術師…今の管理局の技術では魔術師にリミッターをかけられるほど神秘の理解はされていないですよ。」

だからシホさんが魔術だけを使用しようと思つたら軽くSランクは突破です。

でもシホさんの魔術は強力でですから滅多なことがない限りはあんまり使うなつて何度も口うるさく言われているんですよ。」

そしてサーヴァントの人達も許可がない限り極力戦闘には出られませんから」

「八神部隊長以上の最高戦力ということですか…」

「そういうことです。それと食堂にいる士郎パパもシホさんと同じくSSランク魔導師魔術師ですからね？」

食堂にも最高戦力がある部隊ってあんまりきかないよね？

それだけこの部隊の異常さが際立っているってことだね。

「ランとレンも魔術師だけの方なら魔導師ランクより高いですよね？」

「あ、はい」

「うん…リミッターがないからやるならどこまで力が高めることができます。」

上げすぎると自滅の可能性も孕んできますけど…」

「そうですね。それで魔術師に関してはどこまでにしておきましょうか」

「そ、そうですね…」

それでティアナさんが少し考え込んでいるけどどうしたのかな？

「話は戻して隊長達の事は心の片隅くらいにいいよ。」

今はみんなのデバイスの話だから」

「新型もみんなの訓練データを基準に調整しているからいきなり使っても違和感はないと思うよ」

「午後の訓練の時に微調整しようか」

「遠隔調整もできるから手間はそんなにかからないと思いますよ」

「ふえー、最近は便利だね」

「便利です〜！」

なのはさんとリインさんがそう言って驚いている。

「スバルの方は、リボルバーナックルとのシンク口機能もうまく設定できてるから」

「ほんとですか!？」

「持ち運びが楽になるように、収納と瞬間装着の機能もつけといたよ。」

これでいちいち持ち運びしなくて済むよ」

「わあ、ありがとうございます！」

これから一緒に過ごしていく相棒を片手に私達はやる気を出していた。

でも、そんな時にいきなりアラートがなった。

これって、

「一級警戒態勢!？」

エリオがそう叫ぶ。

タイミングがいいのか悪いのか分からないね。

「グリフィス君!」

『はい。教会本部から出動要請です!』

そこに八神部隊長が画面に映ってきて、

『なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君! こちらはやて!』

「うん! 状況は?」

『教会騎士団の調査部で追っていたレリックらしきものが見つかった。

場所は山岳丘陵地区。対象は山岳リニアレールで移動中!』

『移動中!』

移動中のフェイト隊長も画面越しで驚いている。

「まさか!」

「そのまさかや。内部に侵入したガジェットに列車のコントローラーが奪われてる。リニアレールの車内のガジェットは最低でも30体。

大型や飛行型の未確認タイプも出てるかも知れへん。

いきなりハードな初出動や。

なのはちやん、フェイトちゃん、いけるか…?」

『私はいつでも!』

「私も」

『スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、ラン、レン、みんなも大丈夫か?』

「「「「はい!」」」」

『いい返事や。』

シフトはAの3。グリフィス君は隊舎での指揮。リインは現場管制。なのはちやんは現場指揮!

…シホちゃんもすぐにこちらから向かわせるわ!

…ほんなら、機動六課フォワード部隊、出動や!!』

「「「はい!」」」

『了解。みんなは先行して! 私とランサーもすぐに追いかける!』

「うん!」

フェイト隊長からの言葉もあり私達は準備を開始した。

そしてヘリに乗り込み私達は隊舎を後にする。

「新デバイスでぶつつけ本番になっちゃったけど練習通りで大丈夫だからね?」

「はい…」

「頑張ります！」

「ランとレンも自分のペースでね」

「わかりました！」

「が、頑張ります…！」

「エリオとキャロ、そしてフリードも頑張るですよ」

「はい！」

「キュクルー！」

「危ない時は私やフェイト隊長、シホ隊長とリインがフォローするからおっかなびっくりじゃなくて、思いっきりやってみよう！」

「はい！」

ようし！ 初任務だけどシホさんに褒められるように頑張ろう！

「レン、頑張るわよ！」

「う、うん！ 僕も頑張る！」

「その意気！」

それで落ち着いて周りを見回してみるとやっぱり緊張の色が見え隠れしている。

特にキャロは落ち着いていない。

でもエリオがしっかりと氣遣っている。
やっぱり同い年、わかりやすいのかもね。
年下三人に負けないように頑張るわよ！

第百二十二話 『キヤロの思い、そして任務終了』

S i d e キヤロ・ル・ルシエ

私はヘリの中では不安一色だった。

自分はアルザスの竜召喚士だけどフリードと後、*“もう一体”*。
うまく操れるかも自信はない。

でも、私を救ってくれたフェイトさんの為にも頑張ろう、と私は今までエリオ君や他の皆さんに遅れないように、そして役に立てるように訓練も一生懸命頑張ってきた。

そして今回の任務が初めての实战となる。

だからしつかりとできるか、失敗しないかと…。

ついそんな事を心の中で何度も思ってしまった。

でもそんな私の不安な感情をエリオ君は気づいてくれた。

そして優しい声を私にかけてくれて、

「…大丈夫だよ、キャロ。キャロは僕が必ず守るから」

「エリオ君…」

「だから、自分のできる限りの力を出し切っているよ！」

「今までのなのはさんやシホさんの訓練を思い出せばなんでもできるよ。きつと…！」

「うん！」

優しい子だな。私は本当は臆病な子なのに…。

話には聞いていたけどこの子もおそらく私と同じ境遇の子。

だから私の気持ちがかかるのかな？

それに同い年だし。

それから場面は進んでいき、

『こちら通信管制！ ガジエツト反応、空から…！ 航空型。その数、100体以上!!』

それに私達はどよめく。

でもフェイトさんとシホさんもすぐにこちらへとバリアジャケットをまとって来て

くれるという。

だからきつと大丈夫…。

「ヴァイス君。私も出るよ。フェイト隊長とシホ隊長の三人で空を抑える！」

「うつつ。なのはさん、お願いします！」

それでハッチが開き、なのはさんはこちらへと向き、

「それじゃちよつと出てくるね。大丈夫。みんなでズバツとやつつけよう！」

「「「「はい！」」」」」

「それと、キヤロ」

「は、はい！」

なのはさんは私の頬を両手で優しく包みこんでくれて、

「大丈夫だよ。そんなに緊張しなくても…。」

離れていても通信で繋がっている。

一人じゃないし：ピンチの時は助け合える。

キヤロの魔法はみんなを守ってあげられる。

優しくて強い力なんだから。ね？」

なのはさんは私の不安を的確に見抜いてきてくれた。

やつぱり私達をちゃんと見てくれているんだ。

シホさんやフェイトさん達もきつと…。

そしてなのはさんはへりから飛び出していき、バリアジャケットをまとって、

「スターズー！ 高町なのは、いきますー！」

飛び出していった。

それからリインさんに任務の説明を受ける。

「任務は二つ。

ガジェットを逃走させずに全機破壊！　そしてレリックを安全に確保する事！

ですからスターズ分隊は前方から、そしてライトニング、セイバーズ分隊は後方からガジェットを破壊しつつ車両前後からレリックへと向かうです」

レリックの居場所も聞き、

「スターズかライトニング、及びセイバーズ、早いほうが先にレリックを確保するですよ」

「……はい！」「……」

そしてリインさんも姿を制服からジャケット姿に変えて、

「私も現場に下りて管制を担当するですよ！」

リインさんも一緒になってついてきてくれる。だから私は頑張れると思う。

だから頑張ろう！

私の魔法は、力は…傷つけるだけじゃない。

皆さんの助けになれる力なんだって…！



S i d e シホ・E・S・高町

聖王教会から飛びだった私はアンリミテッド・エアの中に入っているアルトリアと私の背後に霊体化して着いてきているネロに話しかける。

《と、いうわけでアルトリアは現場に到着したらラン達の方に向かっていって》

《わかりました》

《奏者よ。余は出ては駄目なのか…?》

《情報は多分漏れていると思うけど敵にわざわざ私達の戦力を教えるわけにはいかないから今は待機していて。》

それに承認要請が下りないと戦闘には自衛以外では極力サーヴァントは参加できないとかけたいたいな約束事があるから今は我慢していてね?》

《つまらないな…。これだから組織というものは堅苦しくてならないな…》

ネロはそれでぶつぶつと言出し始めた。

私もできればネロには参加してもらいたいけど管理局の目があるからね。

まったく、せつかくの使い魔なのに参加不可とは管理局に一度異議を申し出たほうがいいかもしれない。

まあ、危機に対する自己防衛による戦闘行動は大丈夫だといふのだから、まあいいだろう。

そんな事を考えながら私は現場へと到着する。

『こちらの空域は私達が食い止める！』

おっと、フェイトの通信の声が聞こえてきた。

ならもう近いか。

『二人ともおんなじ空は久しぶりだね』

「そうね、なのは」

『うん』

「さっさとフオワード陣に合流するためにこいつらを倒しつくそうか！」

『うん！』

それで私を追ってきたガジェットにまず双剣モードで切りかかる。

それによって飛行型のガジェットは容易く切り裂かれる。

よし、この程度のAMFならただの切る攻撃でも対処可能。

なら、一気に駆け抜ける！

「なのは、フェイト！ でかい一撃で一気に仕留めるから私の射線上から退避して！」

『『わかった！』』

二人から了承をもらい、私はモードツヴァイの弓形態にして、

「受けなさい！ カラド・ボルク!!」

道具の偽カラド・ボルク・螺旋剣とは違い、魔法攻撃は威力は控えめだがこいつら程度には十分だ。

どんと射抜いていきその余波で巻き込まれたガジエツトも巻き込まれて次々と爆発していく。

そして一番集まっている場所で、

「ブロークン！」

ブロークンファンタズム
これもまた壊れた幻想の再現で、魔力の爆発を起こさせて盛大に巻き込んで爆散させる。

『シホのカラド・ボルクも宝具じゃないのにすごい威力だね』

『うん…。やっぱりそれだけシホちゃんの投影魔術が異常な威力なんだね』

二人からそんな感想が聞こえてくる。

「でも、魔法に触れてみてやっぱり威力不足がしてたまらないわ…」

『シホちゃんはやっぱり投影の方が合っているね。』

でも、ちよつと威力の件に関しては嫉妬しちゃうかもしれない…』

なのはがそんなことを言い出す。

やっぱり私も少し宝具という甘えが出てきているのかもしれない。

心に甘えが出てたるんでいる証拠だ。気を引き締めないと……!

ここ数年、投影魔術は魔術訓練では使うけど戦闘ではめっきり使っていないからね。

緊急事態だったら躊躇わず使う気ではいるけど。

そんな事を思いながら次々と私達はガジェットを各個撃破していくのだった。

フォワード陣の皆が安心して初戦を乗り越えられるように、負担を少しでも減らせられるように。



一方、ヘリのほうでは、

「さあて、新人ども。隊長さん達が空を抑えてくれている間に安全無事に降下ポイントにご到着だ! 準備はいいかい!」

ヴァイスが豪快にフォワードメンバーに声をかける。

そしてまず、

「スターズ3、スバル・ナカジマ!」

「スターズ4、ティアナ・ランスター!」

「いきますー！」

まず前方ポイントにスターズの二人が飛び出した。

「次！ ライトニング！ 行って来い！」

「はい！」

しかしそこでキャロが少し飛び出すのに戸惑っているが、エリオがそれにすぐに気づいて、

「一緒に降りようか」

「え……？」

エリオが手を差し出して二人は手を握り合い、

「うん！」

「頑張つてキャロをエスコートするんだよ。エリオ」

「頑張つてね、エリオ君」

「はい！」

二人は手を握り合いながら、

「ライトニング3、エリオ・モンディアル！」

「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ！」

「キュファー！」

「いきますー！」

そしてエリオとキャロも飛び出していった。

「最後だ！ セイバーズの姉弟、気張っていけ！」

「レン、いくよ？」

「うん、ラン姉さん！」

「セイバーズ3、ラン・ブルックランズ！」

「セイバーズ4、レン・ブルックランズ！」

「いくよ（いきます）！」

そして六人は空中でバリアジャケットを纏い、それぞれ列車の上へと降り立った。

スターズ分隊のバリアジャケットはなのはに似た白い線が入っているもの。

ライトニング分隊のバリアジャケットはフェイトのマントに合わせた衣装。

セイバーズ分隊のバリアジャケットはシホの聖骸布に似た紅い衣装がそれぞれ入っていた。

「このジャケットって…」

そこにリインが後から降りてきて、

「みんなのバリアジャケットは各分隊の隊長さんのを参考にしてるですよ？ ちよつと癖はあるけど高性能です！」

各自がそれぞれ具合を確かめているとやはり反応してきたのかガジェットが飛び出してきた。

それでまずスバルが出てきた穴から中に進入して高機動で動き回りそれぞれガジェットを撃破していく。

「リボルバー…シュートツ!!」

リボルバーシュートを放ち突き進んでいく。

だが、勢いあまって外に飛び出してしまい大きく投げ出されてしまった。

「うわわわわッ!!」

慌てるスバルだが、マツハキヤリバーがすぐに反応して、

《Wing road.》

スバルお得意のウイングロードをすぐに展開した。

そして無事列車の上に降り立ち、

「マツハキヤリバー、お前つてかなりすごい？ 加速とか…グリップとか…それにウイングロードまで…」

《私はあなたをより強く、より速く走らせるために作り出されましたから》

その言い方にスバルは少し納得がいかなかったらしく、

「うん…。でも、マツハキヤリバーはAIとはいえ心があるんでしょ？ だったら

ちよつと言ひ換えよう。

お前はあたしと一緒に走るために生まれてきたんだよ?」

《同じ意味に感じます》

「違うんだよ、色々と!」

《∴考えておきます》

「うん!」

まだ初起動で悩む素振りを見せるのだからAIとしては優秀な方だろう。

それからスバルはまた中へと入ってガジェットを潰しにかかっていった。

そしてティアアナの方はケーブルで繋がっていたガジェットを破壊したけど効果はな
いと悟るとリインに連絡を入れて、

「駄目です! ケーブルを切っても効果はありません!」

『そうですか。車両の停止は私が引き受けます。』

ティアアナはスバルと合流、各個ガジェットを撃破してください!』

「了解!」

それでティアアナは銃を片方消して一本だけで進んでいき、

「それにしても、クロスミラージュ、あんたってかなり優秀ね。弾体生成までやってくれ
るしね」

《不要でしたか？》

「あんたみたいな子に頼りすぎるとあたし的にはよくないと思うんだけど…でも、実戦では助かるわ！」

《ありがとうございます》

ランは新しくなったバルムンクに魔力変換資質「氷結」を纏わせて切りかかる。

しかし、やはりAMFで阻まれ威力が足りず切り裂けない。

「でも！」

《魔術式、起動！ 強化開始！》

バルムンクがランの魔術の強化を補助する。

そして魔術はAMFでは阻害されないので結果は、

「うわあああ！」

斬ッ！

魔力を一点集中させてガジェットを見事切り裂く。

「魔術まで起動してくれるなんてやっぱりすごいね。バルムンク！」

《それが私の役目ですから》

「うん、頼りにするよ！」

《了解です》

そしてランはレンの方を見てみると、

《Schield Zamber.》

「サークル…いや、シールドザンバー!!」

片方のアウルヴアンデイルの二重構造の盾を展開して円状の魔力刃を発生させて何度も切り裂き、もう片方の盾も展開してそれを手に持ってまるで投げつけるように構えて、

「いつて!」

《Kreis bumerang.》

アウルヴアンデイルの発言通りにブーメランのように放ち、円状の魔力の刃が展開している盾は次々と標的のガジェットを切り裂いていく。

しかし残りのガジェットがレンに向けてビームを放ってくるが、ランは盾を構えて、

《Protection Powerd.》

すべてのビームを盾から展開したシールドで防ぐ。

「すごい防御力だね…」

《私はあなたの剣であり盾でもある。》

あなたが望めば攻防どちらでも即座に対応させてもらいます。そして…》

またビームを受けるが、

《Reflexion》

盾に当たったビームがすべて一度盾に吸収されて二倍の威力になって跳ね返され撃ってきたガジェットに当たり爆散した。

「すごい……！」

《防御と反射。これが私の一番の取り柄です。

私達は仲間を守る“盾”なのです。

一番の防御の要である私達で戦場を戦い抜きましょう》

「う、うん……。常に前線に出るのは怖いけど、でも頑張るよ。だから“アウル”も僕を助けてね？」

《私をアウルと呼ぶのですね》

「うん。駄目かな？」

《構いません》

そしてランとレンはそこにいるすべてのガジェットをそれぞれお得意の技、『斬水閃』で切り裂き、

「やったね、レン！」

「さ、早く先行しているエリオ君達に合流しよう。ラン姉さん！」

「うん！」

そして先行しているエリオとキャラは、ガジェットの新機に遭遇していた。

ストラダーで斬りかかるがAMFで魔力結合を解除されて離れていたキャラの方も魔法をキャンセルされてしまった。

そして防戦一方になりまだ体格的に幼いエリオには荷が重く、やられてしまいエリオは外に投げ出されてしまった。

そこにキャラがエリオを助けるために一緒に飛び降りた。

それを通信で見ていたロングアーチのアルトとルキノは、

「ライトニング4飛び降り!?!」

「あの高度からのリカバリーなんて……」

「いいや、あれでええ」

管制室に戻って指揮をとっていたはやてがそう言う。

「そうか!」

『そう、発生源から離ればAMFも弱くなる。使えるよ、フルパフォーマンスの魔法が!』

なのはがそう言う。

そして現場ではランとレンが二人が落ちていく光景を目にして、

「キャラ!」

「エリオ君！」

二人して叫ぶ。

でも、キヤロは冷静に思う。

私に優しくしてくれたエリオの事。

そして仲間のみんなの事を守りたいという強い思いを抱き気絶しているエリオの腕を掴み、

「いくよ、フリード。私、ちゃんと制御するから！ 竜魂召喚！」

それによってフリードは巨大化し、二人を乗せて空へと飛ばたく。

そしてガジェットのところまで戻り、キヤロがガジェットにフリードの火炎攻撃『ブラスト・レイ』を放つがここでもAMFに阻まれる。

しかし意識が回復したエリオが、

「キヤロ、僕があいつをやるよ！」

「うん！」

そこに霊体化していたランサーが実体化してフリードの上に現れた。

「その意気だけ、エリオ！」

「ランサーさん！」

「俺は戦闘に参加はできねーが、俺が教えた槍の取り柄を思い出せ、エリオ！」

「槍は突く事が最大の攻撃……！」

「その通りだ。分かったなら行って来い！　しっかりと見てやるからよ！」

「はい！」

そしてキャロのツインブーストの力によってエリオは高速でガジェットに突撃をかまし、

「貫徹……！！」

エリオはガジェットを見事貫通し大穴を開けてやり爆発した。

「へっ……やりやできるじゃねーか。若き騎士様よ」

フリードの上で戦闘を見守っていたランサーがそう呟く。

そこに通信が入ってきて、

『車両内、及び上空のガジェット反応、すべてロスト！』

『スターズF、無事レリックを確保！』

ミッシェンコンプリートの報告を聞き、全員は喜びの声を上げた。

『それじゃちょうどええからスターズ、セイバースの六人とリインはヘリで回収してもらってそのまま中央のラボまでレリックの護送をお願い。』

そしてライトニングは現場待機で現地の局員に事後処理の引継ぎ。よろしくな』

それで一応警戒態勢だがそれぞれ動き出す一同。

でもシホは、

(やけに簡単すぎないかしら…?)

そんな事を思い、はやてに個人で通信をいれ、

「はやて部隊長…」

『どうしたんや、シホ隊長?』

「今回の任務、少し簡単すぎないかしら…?」

それはフォワード陣の初任務としては上々だけど、ガジェットが数は多くせにあまりにも弱すぎた」

『そうやね。それが気がりだと私もおもつとる』

「これからも警戒は続けた方がいいわね。」

きつとガジェットを通して今回の戦闘映像は敵に見られていると思うから」

『そやね』



そしてやはりシホの予想通り、その光景を映像で見ていた一人の男がいた。

「ふふふ…なかなか面白い光景が撮れたな」

『追撃の戦力を投入しますか？ ドクター』

「いや、構わないよ。レリックもおもしろいが彼女達のデータが取れただけでも十分さ。ウーノ」

そしてシホ達の各映像が映され、

「実に興味深い人材が揃っているね。」

特に生きて動いているプロジェクトFの残滓達を手に入れるチャンスだということだからな。

そして戦闘には参加はしなかったが姿だけ現したサーヴァント・ランサーと名乗る青い髪の男。

まあ、私が一番ほしいのは魔術という神秘を使うシホ・E・S・高町…なのだがな。

そしてさらに手に入れば強大な力になりうるだろう彼のお方を保有する彼女…実に欲しい」

そして男…ジェイル・スカリエッティは盛大に笑い声を上げるのだった。

だがそこにウーノが通信で、

『ドクター。またハツキングして映像を見ていた悪い子を発見しました』

「ほう…？ その悪い黒ブラックキャット猫の姿を映したまえ」

スカリエッティがそうウーノに指示を出し、するとそこに黒髪のショートカットの少

女が映し出された。

『うつ…ドクター』

少女は少し怯んだ表情を見せる。

だがスカリエッティは特に気にせずに一言、

「また君かね。そんなに映像を見たいのならウーノと一緒に見ればよいではないかね

？」

『…ウーノ姉様は一緒に見させてくれません。』

ですから仕方がなくハッキングをさせてもらっています…』

「君のそのハッキング能力も、ウーノやクアットロに負けじの腕前だからね。」

期待はしているが、おいたが過ぎるとあとがきついよ…う。」

『すみません、ドクター…』

「うん。素直でよろしい。…それで今回の映像を見てなにか気になることはあつたかね

？」

『…はい。あの緑色の髪の男の子。彼を見た途端になにか胸の奥がズキリと痛みまし

た。

なにか故障をしたわけでもないのですが、少し怖いです…』

「ふむ、胸がね…？ さすがの私にも分からないことだね。後で皆にも相談してみると

いいだろう」

『はい、ドクター…』

「君にはこれからも期待しているよ。頑張りたまえ、”トレディ”」

『了解しました、ドクター…』

感情の乏しそうな『トレディ』と呼ばれた少女はそれで通信を切る。

だがスカリエッティとの通信を切った後、トレディは心の中で、この胸の高鳴りはなんなのでしょう…？と考え自問自答をし始め、

（あの男の子と直接会ってみれば、この胸の痛みの意味はわかるのでしょうか…？）
トレディはそのうち、レンと会いたいと思い始めていたのだった。



そして場面は戻り、機動六課に全員が帰ってきて、食堂に主要な人物たちが集まり、「さあ、今日の任務を無事成功させてきた隊長陣、フォワード陣は疲れているだろう。

ささやかながら私とキャスターと食堂スタッフ全員で誠意を込めて料理を作らせてもらった。

だから残さず食べてくれ」

士郎の言葉で全員が「いただきます」と言ってそれぞれ食事でありつくのだった。まずセイバーズのシホ達は、

「お姉様、私も現場に駆けつけたかったですよー」

「フィア。あなたは無限書庫の司書も兼任しているんだからそちらも頑張りなさいな」
「はいです…」

シホにそう言われて凹むフィアット。

「それよりランにレン、今日は頑張ったわね。誇りに思うわ」

「はいー」

「あ、ありがとうございます！」

「でも、この程度の任務はこれからも何度も起こる事になるんだから向上心は常に持ち続けるのよ？」

「わかりました」

「さ、それじゃもう食事にしましょうか」

それでシホ達は食事にありつくことにした。

それからスターズのスバル達は、

「うわっ！ ティア、これ、すごくうまい!？」

「本当ね…これを本当に士郎さんが中心に作ったのかしら？」

「それはそうだよ。士郎さんは食堂のコック長だよ？」

「なのはさん」

「お疲れ様です」

「うん。なんだって士郎さんはイクメンだよ！」

もう六歳になるツルギ君って言う子供もいるんだから」

「そ、そうだったんですか…」

スバル達は士郎に子供がいる件に関してびっくりしていた。

二人揃って「まだあんなに若いのになー…」と心の中で呟く。

しかし実際問題、士郎はもう三十過ぎである。

なので、いまだに二十代の若さを保ち続けているのは密かに機動六課女性陣スタツフの噂で「どうやったらあの若さを保っていられるのか…？」と話題に挙げられていることとしばしばである。

実は士郎の若さは機動六課の七つの不思議の一つとして数えられていたりする。

これでもし高町夫婦やリンディを見たら一同揃って「若すぎる…」と思うことだろう。

「で、でもそれじゃキャスターさんは…？」

スバルはそんな話はまだ聞かないので純粹にキャスターとの仲を聞く。

「うーん…彼女は士郎さんのサーヴァントだから結局は愛人止まりかな…？」

「複雑な関係ですね…」

「そうだね」

それで三人に見られていた土郎は身震いをしていたという。

最後にライトニングに視点を当ててみると、

「キャラ。今日はフリードの制御、出来て良かったね」

「はい、フェイトさん！ それでエリオ君を助けることもできました！」

「うん。だからキャラの力はちゃんと人を助けられるんだよ」

「はい！」

「エリオもキャラを勇気付けてあげてありがとうね」

「いえ、そんな…当然ですよ」

「うん。えらいえらい」

フェイトはエリオとキャラの頭を撫でるのだった。

それから守護騎士達も遅れてやってきてミッションコンプリートパーティーはかなり続いたのだった。

第二百二十三話 『訓練の日々』

Side レン・ブルックランズ

「よし！ スバル、いくぞー！」

「はい！ ヴィータ副隊長！」

ヴィータ副隊長がグラーフアイゼンを構えてスバルさんに突撃していく光景を見ながら僕はファイアット副隊長に槍を向けられて突撃されていた。

「いきますよ！ レン！」

「はい！」

そしてファイアット副隊長の攻撃を僕は防ぐために盾を構える。

《Protection Powerd.》

アウル発言とともにプロテクション・パワーが展開される。

でも、驚いたのがアウルはデフォルトの初期防御魔法がパワーなのである。

カートリッジも使わないでこれが初期防御魔法とかすごいなあ…。

「私は位置的にガードウィングですがレンはヴィータ副隊長、スバルと同じフロントアタッカー。」

そしてレンはスバル以上に防御に特化したメインが盾であるべきの魔導騎士です。ですから最前線で一番防衛ラインに回されることが多くなります。

レンのデバイス、アウルヴァンデイルは攻防一体のデバイスですから攻撃にも防御を転用して攻撃するのでもあります。覚えておいてくださいね？」

「は、はい……」

「それで今ちようどあちらではヴィータ副隊長がスバルに言っていることです。ですからよく聞いていてください」

それで僕はヴィータ副隊長の言葉を耳を澄ませてよく聞く。

「受け止めるバリア系、弾いて逸らすシールド系、身にまもって自分を守るフィールド系。」

この三種を使いこなしつつポンポン吹っ飛ばされねえよう踏ん張りどマツハキヤリバーの使いこなしを身につけろ」

「がんばります」

《学習します》

「……と、いうわけです。ですからレンはスバル以上に下半身に力を込めて防御の練習を

頑張りましたよね」

「はい……」

「それとですが従来のその弱気なところを克服していくのも頑張りましたよ。レンもやれば出来る子です」

「わ、わかりました。善処します……」

やっぱりいつまでも弱気なところじゃダメだよな。

それじゃいざつていう時に守りに徹することができない。

「それじゃもつと力を込めて打ち込んでいきますので……吹っ飛ばされないようにしっかりと防衛してくださいね？」

「はい！」

「それじゃ……いきますー！」

そしてファイアット副隊長は僕に槍を構えて突撃を何度もかましてきた。



S i d e フェイト・T・ハラオウン

エリオとキャロに久しぶりに訓練を教えることができる。

それに今日はランサーもいるからまずは見本を見せてあげようか。

「ランサー。エリオとキャロにスピードの真髄を見せてあげて」

「おうよ！」

そしてランサーが中央に移動すると次々とオートスフィアから射撃を受けるランサー。

でもそのお得意の反応速度でよける行動を繰り返す。

私はランサーの動きを二人に見せながら、

「二人はスバルやヴィータ、レンみたいに頑丈じゃないから反応と回避が最重要。ランサーの動きを見ててね」

最初は遅いスフィアの遅い攻撃をただ単に避けるランサー。

「まずは動き回って狙わせないことが第一」

ランサーがその動きをあげてスフィアはついていけずに混乱する。

「次、ランサー！」

「おうよ！」

私の指示でランサーは動きを止める。

それによってスフィアはランサーに狙いを定める。

でもすぐにそれは避けられた。

「攻撃が当たる位置に長居しない。ね？」

「はい！」

「これを低速で確実にに行えるようになってきたら……スピードを上げていく！」

そして数十のスフィアの攻撃にさらされたランサーだが普通に早いのに私の魔法『ソニック・ムーブ』も使い私達の後ろに一瞬で移動をかましている。

やっぱりランサーは早さが取り柄だね。

それにここ数年でランサーは……いや、サーヴァント全員にはリンカーコアも精製されている事が分かり魔法が使える事が判明したのだ。

シホがいうにはこちらの世界に呼び出された処置だろうと予測している。

それで私の魔術回路の魔力だけではなく自身でも魔力を作り出せるようになったから十分現界分の魔力はまかなわれているので助かっている。

だから私の基本魔法のフォトンランサーやプラズマランサー、ライトニングスマッシュャー、デیفエンサーなどといったのもランサーはほとんど使えるようになったから宝具を使わなくても十分戦力だ。

宝具であるゲイ・ボルクも封印していて代わりに槍型のデバイス、名前は同じでややこしいけど『ゲイ・ボルク』を使っている。

各サーヴァント達も武器持ちはデバイスを代わりに使っている。

ネロさんは『アエストウス・エストウス』という大剣型のアームドデバイス。

アルトリアさんはシルビアさんによって宝具からデバイスに改竄してもらったという聖剣『エクスカリバー』。

志貴さんは『ナナヤ』という短刀型のアームドデバイス。

をそれぞれ使っている。

当然リミッターはかけられている。

なのにユニゾンデバイスであるアルトリアさん以外のサーヴァントの皆は戦闘には承認がないと参加できないとかあんまりだよ。

シホと一緒に愚痴った覚えがかなりあるよ。

閑話休題

「今のもゆつくりやれば誰でもできるような基礎アクションを早回しにしているだけなんだよ。ね、ランサー?」

「ああ。あんな程度ならすぐにエリオやキャロもできるようになるだろうな」

「はい! 頑張りますランサーさん!」

「おうー！」

「スピードが上がれば上がるほど勘やセンスに頼って動くのは危ないの。」

ガードウイングのエリオはどんな位置からでも攻撃やサポートをできるように…。

フルバックのキヤロは素早く動いて仲間の支援をしてあげられるように…。

確実に有効な回避アクションの基礎をしつかりと覚えていこうね」

「俺もマスターよりは練習に参加してあげられるからよ。みっちり鍛えてやるぜ！」

「お願いします！」

「もう…最後はランサーが全部持って行っちゃうんですから」

「わりーわりー…」

ランサーは謝ってくるけど私はついついむくれてしまうのであった。

でも、頼りにしているよ、ランサー。



Side シホ・E・S・高町

アルトリアとネロと一緒に私はランを鍛えている。

アルトリアは教える立場。ネロは実戦向けなのである。

「ラン。剣の真髄とはいかに素早く動き敵を力強く切り裂くかがかかってきます」

「はい！」

「そして仕留めたらすぐに次の支援に向かっていくことですよ。エリオと同じガードウイングなのですから」

そしてアルトリアは的確に指示をしていきながらもネロに指示をして、

「ではラン。余から仕掛けるぞ。見事耐え切ってみよ」

「わかりました！」

そしてネロとランが何度も剣をぶつけ合っている。

これがネロの武器が本物だったらすぐにランのデバイスは切り裂かれていただろう。

「なんか、私が教えるよりアルトリア達のほうが的確かもしれない」

「いえ、シホ。そんなことはありませんよ？ マンネリ化はいけませんからランには色々な相手と経験を積ませるのがいいでしょう。」

手が余っているシグナムにもお願いするのもいいでしょうね」

「そうね」

そんなこんなでランの個人訓練は続けられていった。

◆
Side 高町なのは
◆

ティアナの射撃訓練を行っているところだ。

ティアナは的確に私の放つシューターを撃ち抜いていくのでその腕は確かだ。

「いいよ、ティアナ。その調子」

「はい！」

「ティアナみたいな精密射撃型はいちいち避けたり受けたりしていたら仕事ができないから……」

私がまた誘導弾のシューターを放つ。

それにすぐに対応をしようとするが後ろからの攻撃に気づいた。

そこまではよかったが、その場を避けて動いてしまった。

「ほら、そうやって動いちやうと後が続かないよ?」

「はい！」

そしてティアナは動きを止めて迫ってくるシューターをしつかりと撃ち抜いていく。

「そう、それだよ! 足は止めて視野を広く!」

いい感じだ。これなら安心できる。

「射撃型の真髄は？」

「あらゆる相手に正確な弾丸をセレクトして命中させる。判断速度と命中精度！」

「その通り。チームの中央に立って、誰より早く中・長距離を制する。」

それが私やティアナのポジション、センターガードの役目だよ！」

「はい！」

.....

.....

.....

みんなの訓練をモニターで見ていたシグナムとヴァイスは、

「いやー、やってますね」

「初動がいい刺激になったみたいだな」

「いいつすね。若い連中の成長っていうのは……」

「若いからな。成長もそれだけ早いしな。まだしばらくの間は危なっかしくてならないかな」

「そうっすね。シグナム姐さんは参加しないんですか？」

「ランあたりに剣を教えられそうっすけど」

「…私は、古い騎士だからな。」

「スバルやエリオ、ランのようにミッド式と混じった近代ベルカ式の使い手とは勝手も違うしな。」

「剣を振るうことしかできない私にはバックス型のティアナやキャロに教えられることもないしな。」

「そして防御主体のレンにも剣を叩き込むしかできないからな。」

「ま、それ以前に私は人にものを教えるという柄じゃない。」

「アルトリア殿も私と同じタイプだが教えるのはうまいからな。」

「…まして戦法など届く距離まで近づいて斬れ、くらいしか言えん」

「ははは…奥義って言えばすぐー奥義なんすけどね。」

「ま、確かに連中にはちいっとばかり早いっすね…」

「しかし、腕がなまるから食堂が閉じている時に休んでいる士郎に模擬戦でも頼むとしよう」

「士郎の旦那はコック長のくせに一応二等空尉ですからね。腕は確かっすよね」

「ああ。いつも競い合ってきたからな」

「同じ家族ですもんね」

「ああ」

「…姐さん、アインスさんに士郎の旦那を取られて実は悔しいとか思っていないですか…?」

「バカ抜かせ。そんな事はない。それに…もしそんなことを言ったらアインスに後ろから刺されかねん」

「あはは…そこまで心が小さい人には見えないっすけど」

「ああ見えて独占欲がかなりあるからな。アインスは」

「そうっすか。まあなにはともあれお昼が楽しみっすよ。キャスターの姉さんも料理がうまいっすからね」

「ああ、そうだな」



それから午前前の訓練は終了して、

「はい、お疲れ様。みんな。」

個別スキルに入るとかなりきついでしょう?」

「ちよつとというか…」

「かなり…」

「フェイト隊長は他に仕事があるからそうそう付き合えねえが、あたしは当分お前らに付き合つてやるからな？ もちろんフィアット副隊長もな」

「はいです♪」

ヴィータとフィアットがそう言うのとスバルは苦笑いを浮かべながら、

「あ、ありがとうございます…」

「私も時間があればシホの教導のお手伝いをします」

「余もだ」

「俺もマスターに比べてやることは少ねえから付き合つてやるぜ」

「ここに居るメンバーは誰もがそれぞれの分野で強者ですから、いろいろ教われるからいい勉強になるでしょうね」

アルトリア、ネロ、ランサー、オリヴィエがそう言葉を発していた。

「あ、それとライトニングのエリオとキヤロは特にだけど、スターズ、セイバーズの四人もまだ体が成長している最中なんだから無茶はほどほどにね」

「」「」「は」「」「」

「それじゃお昼にしようか。今日もコック長の士郎さんの料理がみんなを待っているよ

「？」

それに反応して、じゅるりとスバルとエリオがヨダレを垂らし喉とお腹を「グウー」と鳴らす。

それから食堂に向かう途中ではやてとシャーリー、リインの三人に出会う。
どこかに出かけるようだ。

「あ、みんなお疲れさんや！」

「「「「はい」」」」

「はやてとリインは外回り：？」

「はいです。ヴィータちゃん！」

「ちようナカジマ三佐とお話してくるよ。」

スバルはお父さんとお姉ちゃんになにか伝言あるか？」

「あ、いえ：大丈夫です」

「そか」

「それじゃはやてちゃん、リイン、いつてらっしやい」

「ナカジマ三佐とギンガによろしくね」

「うん」

「いつてきまーす！」

それでジープを走らせてはやて達は出かけていくのだった。
スバル達はそれから食堂へとシャーリーと一緒に向かっていった。

第二百二十四話 『故郷話、そして捜査の進展と』

S i d e スバル・ナカジマ

訓練終了後に食堂へと向かうあたし達。

食堂ではテーブルの上にあるお皿に山盛りのパスタが乗せられていた。それを囲んでいるのはあたし達フォワード陣とシャーリーさん。

士郎さんはいいい仕事をしたとばかりの顔になり調理場に戻っていった。それから全員で食事をしながら話はあたしのお父さん達の話になる。

「…なるほど。スバルさんのお姉さんとお父さんは陸士部隊の方なんですネ」
キャロがそう聞いてくる。

「うん。八神部隊長も一時期お父さんの部隊で研修していたんだって」

「そうなんですかあ…」

「しかしうちの部隊って関係者繋がりが多いですよね。」

隊長達も幼なじみ同士なんでしたっけ？

そしてなのはさんとシホさんは血が繋がっていないけど苗字からして義理の姉妹同士だっという」

「そうだよ。なのはさんと八神部隊長は同じ世界出身で、フェイトさんも子供の頃はそっちの世界で暮らしていたんだとか…」

「確か…管理外世界の97番、でしたっけ？」

「そうだよ」

「97番って、あたしのお父さんのご先祖様がいた世界なんだよね」

「そうなんですか？」

「そういえば名前の響きとか似ていますよね。なのはさん達と」

「そっちの世界にはあたしもお父さんも行ったことないし、よく分からないんだけどね」

「そうですか」

「そういえばエリオはどこ出身だっけ…？」

なにげなくあたしはエリオに聞いてみた。

でもちよつと声のトーンが落ちて、

「あ、僕は本局育ちなんです」

「管理局本局…？ 住宅エリアってこと？」

「スバルさん…！」

「ん、なに？ ラン？」

「…いえ、本局の特別保護施設育ちなんです」

「あ…」

いけない。聞く内容を間違ったかもしれない。

ティアからも「バカ」と念話が聞こえてきた。

「あの！ 気にしないでください！ 皆さんには本当に良くしてもらっていましたが、
ら。」

全然普通に幸せに暮らしていましたんで…。

それにランさんとレンさんもいましたし…」

「え？ ランとレンも!？」

「あ、はい…。」

私達の故郷は第72管理世界『アトラス』だったんですけど、魔術事件で両親と住む場所を失いエリオと同じ場所で少し過ごした後、それからシホさん達に引き取ってもらったんです」

「そうそう。その頃からエリオはフェイトさん。ランとレンはシホさんが保護責任者だったのよね」

「はい。物心ついた時からフェイトさんに色々と良くしてもらって魔法も僕が勉強を始

めてからは時々教えてもらって…。

本当にいつも優しくしてもらって…僕は今もフェイトさんに育ててもらっていると思っっています。

フェイトさん、子供の頃に家庭のことでちよつと寂しい思いをしたことがあるって…だから寂しさや悲しさを抱えた子供の事を放っておけないそうです。

自分も優しくしてくれるあつたかい手に救ってもらったからって…」

「そっか…」

「…僕達もシホさんというには昔の自分にかぶったって言っていました。

シホさんも昔に家族と過去の記憶とかごつそりと大火災で失ったって聞きましたから…」

「記憶も…?」

「はい。詳しくは教えてもらえなかったんですけど一度心が壊れてしまったらしいんです。でも養父の人に救ってもらったって…」

なんかやつぱり色々を抱えているんだね。

隊長達は。

「あの、ところで僕達もまだ聞いたことがないんですけどシホさんはどこの出身なんですか…?」

「ランとレンはまだ聞いたことがなかったんだね」

「はい。シホさんは過去の話はあまり話しませんから…」

「うん」

それで二人は少し寂しそうな表情をしていたのが印象に残った。

でも、シホさんの出身地か。どこなんだろう…？

でもシャーリーさんがそれを答えてくれた。

「シホさんはちよつと特殊かな…？」

「と、いいますと…？」

「みんな、平行世界っていうのを信じる…？」

「平行世界、ですか…？ えつと次元世界とは意味合いが異なつて似たような隣り合わ

せの世界みたいなものですか？」

「うん。近からず遠からずだね。」

シホさんと、後ついでに土郎さんはね…そのまったく別の魔導が存在せず魔術というものが存在する異世界から来た所謂次元漂流者みたいなもの。

なんでも二人共自身の魔術の異常性の為に世界中から追われる羽目になって師匠さん達の手によってその世界からこの世界に逃げてきたんだって」

「そんな事が…」

「うん。それで詳しくは分からないんだけど、二人は一度離れ離れになって、それでシホさんは紆余曲折あつてなのはさんの家の養子に。」

「シホさんも色々な事情があつてアインズさんと結ばれて八神家の家族になつたつていう話なのよ」

「シホさん達、世界から追われるほどの事があつたんだ。」

「追われる原因に関しては…?」

「うん。シホさんと士郎さんの魔術は“転送”魔術というもので様々な武器防具をどこにあるのか分からない武器庫から取り出せるというものでその武器一つ一つがチート臭い威力を発揮するらしいの。」

「ここ最近使っていないらしいけど、もし本気で使ったら機動六課全員で挑んでもきつと敗北は必至かもしれないね」

「なのはさん達でもですか!?!」

「うん。そもそもなのはさんに戦い方を一から叩き込んだのはレイジングハートさんやシホさんなんだよ?」

「「「「ええー!?!」」」」」

「驚きだ。そんな裏話があつただなんて。」

「それならシホさんも教導隊に入るのも必至だったのかもしれない。」



S i d e シホ・E・S・高町

…スバル達と少し離れた席ではなのは達と一緒に食事をとっていた。
料理をわざわざ士郎が運んできてくれて、

「ふむ、それでシホ。最近のフォワード達の動きはどうかね？」

「まあ、いい感じだと思うわよ。ね、アルトリア」

「はい。個人訓練に入りましたらそれぞれの目指す分野がさらに見えてきた気がすると言っていますから確かでしょう」

アルトリアは三人前くらいはある料理を丁寧に食べながら返事を返してくれる。
ユニゾンデバイスだから太らないのは羨ましい…。

「でも、ちよつとなのはのティアナに対する訓練に一言物申すわ」

「…え？ な、なにかいけないことがあったかな？」

それでののはは久々に体をビクビクと震わせている。

別に怒るわけじゃないんだからそう構えなくてもいいわよ。

「別に、なのはの教導は別段いけないというわけじゃないわ。

でも、ティアアナにはもう一つの道も示してあげたらいいかなと思うのよ」

「もうひとつの道……?」

それでののは少し首をかしげる。

「そう。なのはの教えるセンチターガードの心構えなのは基準で行っているけど、ティアアナはなのはと違ってまだそんなに長距離が得意というわけでもない。

いまのところは中距離で力を発揮するタイプね。

それでもう一つは防御がなのはと比べるとティアアナは薄いから足を止めて精密射撃をするのはチーム戦なら有効だけど、いざ単体戦闘になったら一気に狙われて袋の鼠になつてしまうわ。

言葉で表してみると分かるとおおり、なのはは『射程が長く、防御も堅い重砲撃型』。

それに対してティアアナは『射程も短い上に一発の被弾で致命傷にもなる恐れがある防
御の薄い軽射撃型』つてところかしら……?」

「おー！ シホの嬢ちゃん、なかなかいいところをついているぜ」

「ランサーに同意してもらえると私も嬉しいわ。

それでね。なのはの教導と一緒に私もティアアナに私流の教導を教えたいんだけど、いかしら……?」

「たとえばどんなものなのだ？ 奏者よ」

「うん。常に動き続けながらも標的を正確に狙える集中力や持久力に命中率の精度の向上、そして射程距離も伸ばせる方向性も示したらいいかなと思って…。

せっかくクロスミラージュのサードモードである長距離特化型のロングレンジ戦闘用であるブレイズモードがあるんだし。

なのはの教導がある程度身に付いて、サードモードも解禁になったら今言ったのも本格的に教導も行なっていくたらティアナはもつと強くなると思うわよ。

それに銃の使い手であるヴァイスにも教わるのも一つの手でもあるわ。

最近、「腕が錆び付いていないか見てくれませんか？」とか相談をヴァイスに受けているからちようどいいと思うしね」

「うーん…さすがシホちゃんだね。ティアナの事を色々と考えているのがわかるよ。

…うん、それもティアナがスキルを上げていったらお願いしてもいいかな？ シホちゃん」

「任せて、なのは。みんなでティアナをセンターガードにふさわしい子に育て上げましょう。」

そして他のフォワードのみんなもすっかりとついてこれるように頑張りましょう」

「」「うん（はい）（おう）」「」

みんなも快く返事を返してくれたのでこれからのティアナだけじゃなくみんなの成長が楽しみだわ。

まあ、それはそれとして、

「…さて、真面目な話をした後でなんだけど…土郎…少しいい？」

「なんだね、シホ？ 急に猫なで声を出して…」

「いやね。最近、料理を作る機会がなくてなんか禁断症状が出ているのよ。

こう、料理を作りたいって…。

だからそのうち厨房を借りてストレス発散させてもらってもいいかしら…？」

「なんだ、そんな事か。ならば時間が空いている時に来るがいい。

シホになら一角を任せても安心できるからな」

「ありがとう、土郎…」

「シホちゃんの料理か…：そういうえばここしばらく食べていないよね？」

「シホの料理ですか…：楽しみです」

「うむ、余も奏者の料理は好きだぞ！」

「私も食べたいです！ お姉様！」

「作る時はみんなを呼ぶわね」

それで近々、私はみんなに料理を振舞う約束をしたのだった。



S i d e 八神はやて

今108部隊の隊舎で私はナカジマ三佐と話している。

「新部隊、なかなか調子いいみてえじゃねーか」

「そうですね。今のところは」

「しかし、今日はどうした？ 古巣を見に来るほど暇な身でもなかるうに」

「愛弟子から師匠へのちよつとしたお願いです」

「——失礼します」

そこにブザーが鳴り中にギンガとリインがお茶を持って入ってきた。

「ギンガ！ 久しいな！」

「はい八神二佐、お久しぶりです！」

それで二人で話し合いながらも、ナカジマ三佐に本題を振られる。

「で…？ なにをお願いしたいんだ？」

「はい。お願いしたいのは、密輸物のルート捜査なんです」

「お前のところで扱っているロストログアか？」

「それが通る可能性がいくつかあるんです。」

詳しくはリインがデータを持ってきてきますのでそちらを後で渡しますが……

「ま、うちの捜査部を使ってくれるのは構わねえし密輸捜査はうちの本業だがな、だが本局や他の捜査部で頼まないのにはなにか理由があるのか？」

「捜査自体は彼らにも依頼をしていますが地上の事はやっぱり地上部隊の方がよく知っていますから」

「ふっ。まあ、筋は通っているな。いいだろう、引き受けた」

「ありがとうございます！」

「捜査主任はカルタスでギンガはその副官だ。」

二人共知った顔だしギンガならお前も使いやすいだろう」

「はい。うちの方はテストアロッサ・ハラオウン執務官が捜査主任ですからギンガもやりやすいでしょう。」

すみません……スバルに続いて、ギンガまでお借りすることになっちゃいまして、ちよつと心苦しくあるんですが……」

「なに、気にするな。」

スバルは自分で選んだことだしギンガもハラオウンとのお仕事は嬉しいだろうよ」

「はい」

「しかし…まあ気がつけばお前も俺の上官だもんな。」

魔導師キャリア組の出世は早いなあ」

「魔導師の階級なんてただのお飾りですよ。」

中央や本局にいったら一般士官からも小娘扱いを受けるんですよ？」

「だろうな……おっと、俺もそういえば小娘扱いしていたな」

「ナカジマ三佐は今も昔も私が尊敬する上官ですよ」

「ふっ、そうかい。ならこれからも小娘扱いをしていくとするかね」

「それはひどいですよ」

「はははッ！」

それで二人で笑い合いながら話しているとモニターが映りだし、

『失礼します。ラッド・カルタス二等陸尉です』

「おう。八神二佐から外部協力任務の依頼だ。ギンガ連れて会議室で打ち合わせをしないとくれや」

『了解しました』

それでラッド二等陸尉との通信は切れる。

「と、そういうわけだ」

「はい。ありがとうございます」

「打ち合わせが済んだらメシでも食いにも行くとするか」

「はい。ご一緒します！」

それからリインと合流して、

「ギンガもこちらに協力的ですし新デバイスの件も喜んでいました」

「そうか。ならええな」

ギンガも出向してくればウチの部隊はかなりの強化がされるだろう。楽しみや。

まあ、ウチはもう十分強化されまくっていて異常といってもええけどそこは言わないお約束ということでは…。



Side フェイト・T・ハラオウン

私は現在、シャーリーと一緒に首都中央地上本部まで赴いて調べ物をしていた。

「レリック自体のデータは以上です」

「封印はちゃんとしてあるんだよね？」

「はい。それはもう嚴重に……でも、よくわからないんですよ。レリックの存在意義。」

エネルギー結晶体にしてはよくわからない機構がたくさんありますし、動力機関としてもなんだが変ですし……」

「ま、すぐに使い方がわかればロストログア指定なんてされないもんね」

それからシャーリーは破壊したガジェットの映像を映し出す。

「はい。こっちはシグナムさん達が捕獲してくれたのと変わりはないですね」

それから色々な残骸映像が映されたがそこに見逃せないものが映っていた気がした。それですぐにシャーリーに映像を戻してもらい、発見した。

「ジュエルシード……ずいぶん昔に私となのは、シホが集めていたもの。」

今は局の保管庫で管理されているはずのロストログア……」

「おー、なるほど……って、なんでそんなものが!？」

「シャーリー。ここ、ここの部分を拡大して！ なにか書いてある!」

「は、はい!」

そして拡大してもらおうと、

「これ、名前ですかね?」

そこに書かれていた名前は……。

「ジエイル・スカリエツティ…」

「誰です？ その人…」

「Dr. ジエイル・スカリエツティ。」

ロストログリア関連事件を初めとする数え切れないくらいの罪状で超広域指名手配されている一級指定の次元犯罪者だよ」

「次元犯罪者…」

「ちよつと事情があつてこの男は何年も前からずっと私が追っているんだ」

「そんな犯罪者がなんでこんなにわかり易い手がかりを残すんですかね？」

「本人だったら挑発。他人だったらミスリード狙い。」

どっちにしても私やなのは、シホが関わっていることをきつと知っている。

「だけど本当にスカリエツティだとしたらロストログリア技術を使ってガジェットを製作できるし、レリックを集めている理由も想像できる」

「理由…?」

「シャーリー。このデータを集めて隊舎に戻ろう。隊長達を集めて緊急会議をしたいんだ」

「はい。わかりました」

それでシャーリーにデータを全部まとめてもらう。

これでスカリエッティの事に少しでも近づければいいけど…。



はやてはナカジマ三佐達と食事をとっている時にフェイトからその連絡をもらい、「わかった。すぐに戻るから対策会議をしようか。ちようど捜査の手も借りられたところやから。うん。そんなら後で」

フェイトとの通信を切り、

「なにか進展ですか？」

「うーん…事件の犯人の手がかりがちよつとな。」

というわけですみません、ナカジマ三佐。私はこれで失礼させていただきます」

それではやてが伝票を取ろうとするとナカジマ三佐に取られてしまった。

「そんなっ!？」

「さっさと行ってやんな。部下が待ってるんだろう？ 勘定は俺持ちで払つといてやる

よ」

「…はい！ ギンガもまた私かフェイトちゃんから連絡するな」

「はい。お待ちしています」

それではやてはナカジマ親子に後を任せて店を出ていった。

…フエイト達も車の中で、

「Dr. スカリエツティでしたっけ？ あの広域指名手配犯の。その人がレリックを集めている理由って例えばどんな？」

「あの男は、Dr. の名の通り生命操作とか生体改造に関して異常な情熱と技術を持っている。」

そんな男がガジェットみたいな道具を大量に作り出してまで探し求めるからには………なにかとんでもない事を起こすかもしれない。それだけは言えるよ」

「そうですか……」



S i d e シホ・E・S・高町

「それじゃ夜の訓練も終了ね」

「「「おつかれさまでした！」「」」」

そう言つてフオワードの六人はその場を後にしていく。

ヴィータが「ちゃんと寝ろよ！」というとなんとか返事が返ってくる。

「…しつかしなのは達も頑張るよな。朝から晩まで連中に付きっ切りだよな」

「そうね。私もだけどなのは少し働き過ぎなところがあるわね」

「はいです。私達も同じ戦技教官の仲間なんですから頼ってください。なのはさん」

「うん」

「それともつと厳しくしねーでいいのか？ あたしらが昔受けた新人教育なんて歩き方から挨拶までもうなんでもかんでも厳しく言われていたじゃんか？」

ヴィータの言うとおりね。

私も初めてまつとうな教育というものを受けたけど疲れるものだったから。

「戦技教導隊のコーチングってどこもだいたいこんな感じだよ」

「そうねえ…」

「はい…」

「細かいことで叱つたり怒鳴りつけたりしている時間があるなら模擬戦で徹底的にきつちり打ちのめしてあげる方が教えられる方が学ぶことが多いって…教導隊ではよく言

われているしね」

「確かに…私も模擬戦でよく叩きのめしているし」

「私もです」

「おつかねえな…」

ヴィータが少し引いている。

ま、それはそうだろうね。

「私達がするのはまっさらな新人を教えて育てる教育じゃなくて、強くなりたいうて意志と熱意を持った魔導師達に今よりハイレベルな戦闘技術を教えて導いていく。戦技教導だから」

「ま、なんにしても大変だよな。教官ってのは」

「でも、ヴィータちゃんもちゃんとできていますよ」

そう言つてなのはヴィータの頭を撫でる。

「なのは！ あたしの頭を撫でるな！」

「立派立派〜」

「微笑ましいですね」

「そうね」

「奏者よ。余も頑張っているから頭を撫でてくれ！」

「はいはい。わかったわ」

それでネロの頭を撫でると犬のように喜ぶ。

ああ、やっぱり癒しだ。

「シホもネロに甘いですね」

「ん？ アルトリアも撫でてもらいたい？」

「いえ、私はいいですよ。シホ」

「そう、残念ね…」

そこにオリヴィエ陛下がやってきて、

「ですが、なのは。あなたも少し休んだほうがいいですよ？ 体は一つしかないのです

から無茶をしたら倒れてしまいます」

「うん。わかっているよ。オリヴィエさん」

それから隊舎まで歩いていく中で、ヴィータに話しかけられて、

「フォワードの連中は自分たちがどれだけ幸せか、気づくまでかなり時間がかかるだろ

うな」

「そうね…」

「自分勝手に戦っている時もいつでもなのはやシホ達に守られていて幸せに…。」

あたしはスターズの副隊長だからな。なのはの事はあたしが守るんだ」

「そっか。でもなのはの前でも素直に言えたらいいわね」

「うるさい！ 恥かしくて言えるか！」

「…ん？ どうしたの、みんな？」

「いえ？ なんでもないわよ。ね、ヴィータ？」

「お、おう…なんでもねえよ！」

「ふふふ…」

私は微笑ましくてついつい笑みを浮かべるのだった。

第二百二十五話 『出張任務(1) サークヴァントとの絆』

ある日、機動六課にちょうど同時にお休みをもらって三人の女性と二人の使い魔が遊びに来ていた。

シホがその三人をお出迎えしていた。

その三人はというと、

「シホちゃん、遊びに来たよ」

「機動六課がどんな場所か見に来させてもらったわ。あたしの将来の夢のためにね」

「フェイトは元気…？ シホ」

「アルトリアは怠けていませんか。シホ」

「呵呵。久しぶりよの。セイバーのマスターよ」

「ええ、よく来たわね。歓迎するわよ。さすが、アリサ、アリシア、ライダー、アサシン」

そう。魔術事件対策課のアリサ、すずか、アリシアの三人＋ライダー、アサシンの二騎が遊びにやって来ていたのだった。

「それで今日はこれからの予定はどうなっているの？

ウチはまたフォワード陣の訓練漬けだけどね」

「うん。ちよつとなのはちゃんやフェイトちゃん、フィアットちゃんやはやてちゃん達に挨拶をした後は一回実家に久しぶりに帰ろうという話になっているの。」

せつかくの休暇なんだし、家を任せているフアリンとまだ四歳だけど次期月村家当主の雫ちゃんにも会いたいしね」

「そつか。一緒についてけないのが残念ね…」

「ま、それは今度の機会ってことで。それより少し見学していったいいかしら？ シホ」

「はやての邪魔だけはしなければ大丈夫だと思おうわよ、アリサ。」

…まあ、今はまださほど忙しい事案はないから手は余っていると思うけど」

「それじゃフェイトの訓練の光景を見たいなー♪」

全員で色々と話し合っている時だった。

そこにシホの前にスクリーンが映し出される。

「緊急呼び出し…？ 誰からかしら？」

それでシホはモニターを開くと相手ははやてだった。

『あ、シホちゃん？ ちよつとええか？』

「…どうしたの、はやて？ 今、すぐか達を隊舎内の中を案内しようと思つてるところ
なんだけど…」

『うん。それがな。カリムからの要請でロストログアの回収任務を受けてもうたんよ』

「もしかして、レリック…?」

『いや、どうやら違うっぽいんよ。』

でも異世界での回収任務だから私とリインにシャマル。

それにスターズ、ライトニング、セイバーズの隊長、副隊長、フォワード陣、サーヴァント陣前線メンバー全員での出動になる』

「全員…!?!」

シホは全員出動のことにに関してかなり驚く。

そこまで重要な任務になるのかと言う感じで真剣な表情になった。

「このメンツ全員で行くってことは、第一級クラス指定ロストログア関連ってこと…?」
『いやいや、それも違ってな。場所が場所なだけに私らが任されたんよ。謂わば里帰りみたいなもんや』

「え…? もしかして、その場所って地球ってこと?」

『そや。もうなのはちゃんとフェイトちゃん達にも伝えてあるからシホちゃんも準備してな?』

「すずかちゃん達も里帰りするっていう話やからちようどええやろ。だからよろしくなー』」

「ええ」

それでシホははやてとの通信を閉じる。

そして五人の方に向き直ると、

「…と、いうわけ。これから私達も地球に向かうことになったから大人数での移動だから…。」

アリサ、場所を提供してもらっていい？ 確か別荘に転送ポートを設置してあったわよね」

「任せなさい。それじゃ鮫島に連絡を取ってみるわ」

「私はフェアリンに連絡しておくね」

「私もリンデイお母さんに連絡を入れておこうかな？」

という感じでシホ達は準備を開始した。

シホはランとレンを呼んで派遣任務に関して話をする。

「地球にいくんですね」

「久しぶりだね。ラン姉さん」

「うん。あ、それとすぐかさんはお久しぶりです。」

バルムンクとアウルヴァンディルは少し中身が新式に変わりましたが大事に使っています」

「うん。それならよかったよ」

ランとレンがすずかと会話を始める。

「それと……えっと、魔術事件対策課のアリサ・バニングス二等陸尉とアリシア・T・ハラオウン二等陸尉ですよね？」

「ええ。未来のあなた達の上司だからよろしくね、二人共」

「よろしくねー」

「はい！」

アリサは先輩風を吹かすがアリシアはいつも通りに挨拶をしているのだった。

それでもランとレンは二人共真面目に敬礼をして答えていた。

二人の生真面目さが現れている瞬間である。

「それじゃ時間までに準備をして屋上のヘリポートまで集合ね。私達もすぐに合流するから」

「わかりました」

それでシホ達とラン達は一度別れた。



Side レン・ブルックランズ

シホさん達と一度別れてからラン姉さんと準備をして屋上のヘリポートまで向かうとスバルさんとティアさん、エリオ君にキヤロちゃんはすでに来ていた。

「あ、ランとレン。やっと来たね。フォワードではラン達が最後だよ？」

「す、すみません、スバルさん」

僕はとつさに謝るけど、スバルさんは笑みを浮かべながら、

「別に謝らなくていいよ。咎めているわけじゃないんだから」

「は、はい。すみません」

「だからあ…はあ、少しレンはやっぱりその弱気な腰の癖を直したほうがいいと思うよ

？」

「あ、はい。努力してみます」

スバルさんにそう言われたので、またしつかりしないと、と心を鍛え直している僕がいた。

でも、僕たち姉弟がフォワードでは最後かあ…。

それでちよつと落ち込んでみたり。

そこにラン姉さんが念話で、

《そんなくだらない事で落ち込んでるんじゃないわよ、レン》

《う、うん》

叱られてしまった。

まあ、そうだよ。うん、気楽に行こう。

「ま、レンもそうだけどそう落ち込むもんでもないわよ。

まだ隊長達も来ていなんだから気楽に生きましょう」

ティアさんがそういうので「はい」と答えておく。

それからしばらくして複数の足音が聞こえてきて見てみる。

「おー！ みんなお揃いやね」

そこには八神部隊長を筆頭になのはさん、シホさん、フェイトさん、ヴィータ副隊長、

フィアット副隊長、シグナム副隊長、シャマル先生、リンさん。

そしてアルトリアさん、ネロさん、ファイターさん、ランサーさん。

さらにすずかさんにライダーさん、それと先ほど紹介してもらったアリサさん、アリ

シアさん、アサシンさん、と…。

なんだろう…？

この豪華なメンツは。

それはスバルさん達も思ったらしく、

「あれ？ 八神部隊長にヴィータ副隊長？」

「おう」

「シグナム副隊長にシャマル先生も」

「ああ」

「はい」

「ファイアット副隊長にアルトリアさん。それにサーヴァントの皆さんも」

「はいです♪」

「はい、ラン」

「おう」

「私達もいくのですよ？」

「短い旅だがよろしく頼むぜ」

「私もいるですよ！」

「リイン曹長も……。あ、それとそちらの見慣れない五人の方は？」

ティアさんが質問したのですかさん達もまた改めて紹介をするのだった。

特にライダーさんとアサシンさんもサーヴァントだということに知らなかったみん
なはひどく驚いていた。

「それでまさか全員出動ですか……？」

「うん。部隊はグリフィス君がしっかりと指揮をとって、ザフィーラ、士郎、キャスター

がしっかりと留守を守ってくれる。だから安心や」

そうだね。守りも万全だし言う事はないかな。

「詳細不明のロストログア相手だから、主要メンバーは全員出動つてことで」

「後は、行き先もちよつとね…」

「行き先はどこなんですか…?」

ティアさんが聞く。

でも僕達はもうすでにシホさんから聞いているのでそこまで緊張はしていない。

小さい頃にシホさんに連れてもらつて地球は何度か行った事があるからそこまで気を張ることもないから。

「第97管理外世界、現地惑星名称『地球』や」

八神部隊長がそう発言する。

するとまだ知らなかったらしいティアさん、スバルさん、エリオ君にキャロちゃんは驚いていた。

「その星の小さな島国の小さな町…日本、海鳴市。ロストログアはそこに出現したそうや」

「地球つて、フェイトさんとアリシアさんが昔住んでいたつていう…」

「うん。私とはやて部隊長、すずかちゃんにアリサちゃんはそこの生まれなんだよ」

エリオ君とスバルさんの二人が楽しく会話をしている最中でティアさんとキャロちゃん地球について色々検索をしている。

でも多分今のところは過去の履歴が出てきそう…。

「ええつと…第97管理外世界『地球』…。文化レベルB」

「魔法文化無し、次元移動手段無し…つて、魔法文化無しなの!？」

「ないよー? ウチのお父さんも魔力ゼロだし」

「スバルさん、お母さん似なんですネ」

「うん!」

スバルさんのお父さんは確か祖先が地球の出身つて話だったよね。

「で、でもなんでそんな世界からなのはさんとか八神部隊長みたいなオーバーSランク魔導師が…?」

それに前に座っている八神部隊長がこつちを振り向いてきて、

「突然変異というか、たまたまーな感じかな?」

「あ! すみません、八神部隊長!」

「ええよ、別に」

「私もはやて隊長もシホちゃんも魔法と出会ったのは偶然だしね」

「「「「「へえ…」」」」」

僕達が驚いているところでシホさんがこちらに向いてきて、

「それにさっきの魔法文化無しっていうのは合っているけど、少し訂正ね。

地球には今もたくさん魔法文化がないけど魔術師が隠れ潜んでいるわ。

だから追加で魔術文化有りってところかしら…？」

「そうやね。

当時はまだこの世界の魔術を起動するために必要不可欠な魔術基盤は曖昧でシホちゃんと士郎しか使えなかった魔術だったけど…。

私達の世界にもしっかりと魔術基盤が聖杯大戦をきっかけに全次元世界に刻まれたおかげでここ近年で魔術師は増える一方だからなあ」

「ま、そのおかげで今の俺達もいられるってわけだな」

「その通りだよ。ランサー。私達も魔術師の一人だから色々便利だしね」

「フェイトさんも魔術師だったんですか!？」

エリオ君が驚く。

「どうやら教えてもらっていなかったらしい。

それにフェイトさんは笑みを浮かべながら、

「うん、そうだよ。魔術事件対策課は知っているでしょ？」

「アリサとすずかどアリシアが勤めているところ。」

「そしてシホもそこから機動六課に出向しているってこと」

「あ、はい」

「私達は色々な巡り合わせや偶然が重なって魔術師にもなれたんだよ。」

そしてそのおかげで魔術儀式でしか呼び出せないランサー達サーヴァントをこの世に呼び出すことができたの」

「でも、ランサーさん達って過去に様々な功績を残した英雄の魂なんですよね？」

「そんなすごい人達をなのはさん達はどうかやって呼び出せたんですか…？」

「ティアさんがその件を聞く。」

それにフェイトさんは曖昧な表情を浮かべて、

「うーん…それに関してはシホの方が詳しいかな？」

「やっぱりそこで私に話が回ってくるわけね。わかったわ。少し説明をするわね。」

サーヴァントという英霊の魂は本来人の身ではそう簡単に呼び出せるものじゃないの。

でも、とある大魔術儀式で私達の右手に刻まれているこの令呪…」

そう言つてシホさんは右手を掲げる。

そこにはなにか刺青みたいな黒い紋様が手に刻まれていた。

「あたし達も持っているわよ？」

「うん」

それでアリサさん、すずかさん、なのはさん、フェイトさん、八神部隊長も右手を掲げる。

そこには全員紋様が形が違うけど刻まれていた。

「これが手に宿ったものと、とある大魔術儀式がセットで限定でサーヴァントを呼び出せるのよ。」

たまにイレギュラーで令呪無しでも呼び出せる人もいるけどそれも希なことね」

「すみません、シホさん」

「なに、スバル…?」

「つまるところ令呪ってなんなんですか…?」

「スバル。あんたにしてはいい質問をするわね…」

「えへへ。ティアに褒められた」

「褒めていないわよ、バカスバル」

「ふふ。確かにいい質問ね、スバル。」

つまり令呪は簡単に言うたサーヴァントを従わせるために必要な絶対命令権を3度だけ発動できる大切なものなの」

「絶対命令権…? その範囲ってどこまであるんですか?」

「そうね…？ マスターが命じれば実現可能範囲の奇跡は起こせることが可能だわ。
例えば、必ずあの人物を倒せ！とか命令すれば力がその対象の倍以上に膨れ上がるわ。」

でも、そんな命令だとデメリットもあって、その対象以外の敵が立ちはだかつたら命令以外の戦いになつちやうから命令対象外の敵と戦おうとすると命令の効果優先されて動きが逆に鈍ってしまうのよ」

「曖昧な命令だと効果が十全に発揮しにくいということですね？」

「そういうこと。それと他にももう絶対回避不可能な攻撃だつたとしても、『必ず避けろ！』とか命令すればワープでもなんでも駆使して必ず避けて生還を果たしてくるわ」

「つまりサーヴァントの最後の切り札みたいなものだよ」

「そんな事が…」

「でも、逆に言うとか呪いがある限りサーヴァントはマスターには逆らえない」

「どうしてですか…？ 仮にも人間を超越した英霊なのに…」

「さっきの説明に追加だけど呪いはどんな命令でも出来るといつたわね？」

だから例えば反りが合わないマスターとサーヴァントとかはもしかしたら離反して殺し合いを始めてしまうかもしれない。

仮にそんな事が起きたらまずマスター側が力量が上のサーヴァントに殺されて死ぬ

のは目に見えている。

でも、令呪があればこんな命令もできる」

「ど、どんなですか…？」

キャロちゃんが少し怯えながらも問いかける。

「そう、『自害しろ』とかね…」

「！！！！！！」

シホさんが少し声のトーンを落としてそう話す。

そうか。絶対命令権だからそんな命令もサーヴァントは従わなきゃいけないんだ。

「だから呪い級の命令もできる。」

だから故に命令の「令」と呪いの「呪」という言葉をくつつつけて正式名称が『令呪』
という名前なのよ」

「そ、そんな危険なものを持っていてサーヴァントの皆さんは不安ではないんですか…？」

エリオ君がそう聞くが、ネロさん、ランサーさん、ファイターさん、ライダーさん、ア
サシンさんは自信の笑みを浮かべて、

「余は奏者を信じているからな。」

そんな命令は奏者は絶対にしないという自信と確信と信頼は持っている」

「ああ。俺達は伊達に十年も一緒に過ごしていねーんだぜ…?」

「その通りです。なのはそんなひどい人物ではありません」

「私はスズカを信じていますから…」

「呵呵。確かに。だが仮にもそんな命令をされてもせめて道連れくらいは成し遂げてやるぞ?」 伊達に英霊ではないからな

五人とも『自害』という命令の不安という感情は一切ないらしくシホさん達を信頼しているようだ。

なんか、聞いていて胸が暖かくなってくるな。

「そうね。ネロ。これからも一緒に頑張っていきましょう」

「うむ!」

「信じているからね、ランサー」

「おう!」

「ファイターさん。信じてくれてありがとう」

「はい」

「ライダーもこれからも一緒に道を歩いていこう」

「はい、スズカ」

「ねえ!? ちょっとアサシン! なんかアナタだけちょっと物騒なこと言わなかった

!？」

「例えばの話だ。あまり気にするでないぞ、アリサよ」

マスターとサーヴァントの皆さんはそれぞれ言葉を交わして、アリサさんとアサシンさんは少し反応に困るけど、それでもお互いに信頼し合っている。

やっぱりいいなあ。こういうのは少し憧れるね。

そんな事を思っていると少し離れたところでシヤマル先生とリインさんがなにかをしている。

シヤマル先生が子供サイズの服を取り出しているけどあれって…？

「はあい。リインちゃんのお洋服」

「わあ！ シヤマル、ありがとうございます！」

「え？ リインさん、そのお洋服って…」

「はやてちゃんのちっちゃい頃のお下がりです」

「あ、いえ。そうではなく…」

「なんか普通の人のサイズだねって…」

エリオ君とキャロちゃんがそう話している。

そこにラン姉さんが、

「ああ。そういえば二人は…それとスバルさんとティアアさんも知らなかったんですよ

ね」

「なにが？ ラン」

「ランとレン以外のフォワードのみんなには見せたことなかったですね」

「……？」

四人が不思議そうな表情をしているが、それでリインさんの体が光りだして、

「システムスイッチ！ アウトフレームフルサイズ！」

それでリインさんは人間のサイズになった。

「と、これくらいのサイズにはなれるですよ？」

「でか……」

「いや、それでもちっちゃいけどね」

「普通の女の子のサイズですね」

「向こうにはリインサイズの人間もふわふわ飛んでる人間もいねーからな」

「あの…一応ミッドにもいらないと思います」

「はい……」

ヴィータ副隊長の言葉にティアさんがさりげなくツツコミを入れていた。

「んーと…大体エリオとキャロとおんなじくらいですかね」

「ですね」

「リインさん、可愛いです！」

「私とレンは久しぶりに見ました。家が近所ですからたまたまその姿で会っていました」

「そうだね、ラン姉さん」

それからスバルさんの素朴な疑問。

「リイン曹長。そのサイズでいた方が便利じゃないんですか？」

「こつちの姿は燃費と魔力効率があまりよくないんですよ…。コンパクトサイズで飛んでいる方が楽ちんなんです」

「なるほどー」

それからシグナム副隊長が八神部隊長に話しかけて、

「それじゃなのは隊長、フェイト隊長、シホ隊長。」

私とヴィータ副隊長、シグナム副隊長、シャマルはずかちゃん、ライダーさんと月村邸に向かわせてもらうからまた後で合流な」

「わかったわ」

「フアリンさんと雫ちゃんによろしく言っておいてね？」

「了解や」

それで八神部隊長達は先にへりから出て行くのだった。

第二百二十六話

『出張任務（2）』

海鳴市到着』

S i d e シホ・E・S・高町

そして転送ポートでアリサの別荘に到着した。

「はい！　到着です！」

ラインが元気にそう言葉を発する。

「はあー…」

「ここが…」

「なのはさん達の故郷…」

「そうだよ」

「ミッドとほとんど変わらないでしょう」

「空は青いし、太陽も一つだし…」

「山と水と自然のおいもそっくりです」

「キュクル〜！」

「湖、綺麗です」

「やっぱり地球はいいところだね。ラン姉さん」

「そうだね、レン」

フオワード陣はそれぞれここを満喫しているようだね。

「とうかここは具体的にどこでしよう？」

テイアナがそう聞いてくる。

そこにアリサがえっへんと胸を張って、

「ここはあたしの別荘の敷地内よ！」

いつも大勢で地球にやってくる時はここを通ってくるのよ！」

「[[[[[[ヘー…]]]]]]」

「今回は大人数だつて言うから鮫島に連絡して許可してもらったのよ。

…つと、言ってるそばからやってきたわね？」

そこには黒いベンツの車がやってきた。

そこから鮫島さんが降りてきて、

「お帰りなさいませ、アリサお嬢様、アサシン殿。

それに皆さんもよく来られました」

「うん、ただいま。鮫島」

「壮健であるか、鮫島よ」

「はい。日々、鍛錬を怠っておりませんよ」

「呵呵呵。ならば今宵は勝負と洒落込むとしようか」

「望むところですよ」

アサシンと鮫島さんは元気そうに勝負事を始めようと張り切っている。

昔から鮫島さんはアサシンに負け越しているからね。

まあ、アサシンが負けるわけがないのだけれど。

「…この世界にも車ってあったんですね」

「いや、ティアナ。私達の世界の文化をどれだけ低く見積もっていたの…?」

「あ、すみません…」

思わずの発言だったので一応ツツコミをしておいた。



Side 月村すずか

私とはやてちゃん達でなのはちゃん達とは別の転送ポート。

…つまりうちの敷地に直接繋がっている場所に転送してくると待っていてくれたのかフアリンが転送ポートの前で待ち構えていてくれた。

「すずかお嬢様、お帰りなさいませ。それにはやてちゃんにみなさん。お久しぶりです！」

「フアリン、ただいま」

「お久しぶりです、フアリンさん」

「ご無沙汰しています」

「お久しぶりです」

フアリンとみんなで一緒に話をしていると猫さん達がたくさん寄ってきた。

「あ、猫ちゃん達も久しぶりな」

「にゃあ〜」

それではやてちゃん達に擦り寄っていく猫ちゃん達。

でも、ふと思った。

「シホちゃんがいたら絶対惨事になっていたね…」

「あー、うん。そやね。」

シホちゃん、すずかちゃんの家に来る時はいつも来襲に警戒していたからね。

猫好きなのにもつたいたいなあ…」

そうなのである。

シホちゃんはいリヤさんの猫アレルギーが移ってしまいすぐに涙と鼻水が出ちゃうんだよね。

だからうちに来る時は猫ちゃん達が来ない室内でいつもお話をしていたっけ。

と、そこに、

「すずかお姉ちゃん！」

黒髪の女の子、雫ちゃんが家の中から出て私に走り込んできた。

そして私の足元に抱きつくと、

「おかえり！ すずかお姉ちゃんにライダーのお姉ちゃん！」

「うん、雫ちゃん！」

「ただいまです、シズク」

「あのね、あのね！ すずかお姉ちゃん、何日かお休みもらったんだよね！」

「うん、そうだよ」

「それじゃ私と一緒に遊ぼう！」

「いいよー。いっぱい遊ぼうね」

私が雫ちゃんをグルグル回して遊んでいる向こう側でははやてちゃんがファリンとなにかを話していた。

それでよく聞いてみると、

「恭也さんと忍さんとノエルさんはまた海外ですか？」

「はい。三人で今は仕事でドイツの方に行っています。ですから雫お嬢様の面倒は私に

一任されているんです！ 責任重大です！」

「そですかー。頑張ってください」

「はい！」

そつか。お姉ちゃんと恭也お兄ちゃんはまた海外か…。

私ที่บ้านにいない分、雫ちゃんには寂しい思いをさせちゃってるね。

でも、大丈夫だよ雫ちゃん。

将来は従姉妹が出来る予定だから！（※ 爆弾発言）

楽しみにしていてね！

私は心の中でそう呟いているのだった。



S i d e 高町なのは

ん…？

どうしたんだろう、シホちゃん。急に身震いをしているけど。

まあ大丈夫だよね。

それより、と私はみんなの前に振り向き、

「それじゃ改めて今回の任務について説明するね」

「……はい！……」

フオワードのみんなは元気に返事を返してくれる。

うん、いい反応だ。

それで私はモニターを開き、

「搜索地域はここ。海鳴市全域。反応があったのはここと、ここと、ここ…」

私がモニターで説明していくと全員がそれぞれ真剣にモニターに食い入って覗き込んでいる。

するとティアナが気づいたのか、

「移動していますね…？」

「そう。誰かが持つて移動しているのか、独立して動いているのかわからないけどね」

「対象ロストログアの危険性は今のところ確認されていない」

「仮にレリックだったとしてもこの世界にリンカーコアの方の魔力保有者は滅多にいな

いから暴走の危険は薄いと思うんだけど……」

「でも、ここで魔術師がもしかしたら活動しているかもしれない」

シホちゃんが魔術師の話題を出す。

そう。それがこの世界の不安要素の一つ。

魔導師ならまだ比較的安全だけど魔術師だと魔導師以上にどんな事を引き起こすのかわかったものじゃない。

「でも、それも別段安全だとは思うけどね」

「どうして分かるんですか……？」

「うーんとね……簡単に言うところの海鳴の町はすでに私の支配圏内に入っているから」

「支配、圏内……？」

「どういう事ですか……？」

六人とも思案顔になっている。

私も初めてこの町に結界を張ると聞いたときは分からなかったからその気持ちは分かるよ。

「うん。私が管理局に所属する前に士郎やサーヴァント達と相談してキャスターにも協力してもらって、この町の霊脈が一番流れている月村家を中心にこの町全域に結界を張ったの。」

その効果は魔術師や魔導師がこの町に侵入してきて悪事を働くことがあつたらすぐに反応して私に知らしてくれるというもの。

侵入してきただけでもすぐに魔力を感じ知して知らしてくれるから便利なものよ」「すごいですね…。でも、それじゃどうしてロストロギアが…?」

ランがいいところに気づいた。

そこがシホちゃんの今回のうっかりポイントだね。

「そこが今回の結界の落ち度かしらね?」

まさかロストロギア単体でこの町に発生するとは想定はしていなかったのよ。

だから今回発見が遅れてしまったの」

「なるほど…」

「ま、結界云々はここまでにしておきましょう」

「そうだね。」

それで話は戻ってくると、それでも相手はやっぱりロストロギア…何が起こるか分からないし、場所も市街地…油断せずにしつかりと捜索していこう」

「スターズとライトニングの副隊長たちは後で合流してもらおうで…」

「私達は先行して出発しちゃおう!」

「「「「「はー!」」」」」」

それから動き出す私達。

まず、

「それじゃ中距離探査は、リイン、お願いね？」

「おまかせです！」

「クロスミラージュにも簡易型の探索魔法をセットしてあるから、そっちとこっちの二人ずつで少し離れて探して歩こう？」

「はい！」

「後は、市内の各所にサーチャーやセンサーを設置。作業としてはこんなかんじかな？」

「はい！」

みんなで話していると、

「隊長、すまない、遅くなった」

シグナムさん達が到着したようだ。

「大丈夫よ、シグナム。今始めているところだから」

「そうか」

「ロングアーチも準備万端や」

『あたしもこれから探索と設置をしながらスターズに合流する』

『私もヴィータと一緒に設置を担当します。それからお姉様達と合流しますね』

ヴィータちゃんとフィアちゃんも仕事が早いね。

「そんなら機動六課出張任務、ロストログア探索、任務開始や！」

「「「了解！」」」

そしてフェイトちゃん達ライトニング分隊と別れて今はスターズ、セイバーズのみんなとリインとで一緒に歩いているところ。

リインに久しぶりの海鳴の景色はどう？と聞くと、

「懐かしいですう！　なのはさんは？」

「私は懐かしいっていうより、『あれ？　仕事なのに帰ってきちやった…』みたいな感じかな？」

「私もそんな感じね。アルトリア達はどう？」

「私もナノハと概ね感想は変わりありません」

「余達も息抜きは必要だからな」

「急いでも事態は変わりませんからね」

シホちゃん、アルトリアさん、ネロさん、オリヴィエさんが順にそう話す。

そこに事態を見守っていたアリサちゃんが、

「ふーん…やっぱり隊長さんにもなるとなのははしつかりするのね。

昔はあんなに暴発していたのに…」

「日々成長しておるな。呵呵呵」

「あ、アリサちゃん、アサシンさん、それは言わないで…」

昔のことを話されると恥ずかしくなるから言わないで、アリサちゃん！

「…つうか、本当にミッドの田舎の方とそんな大差ないわね？ 街並みも人の服装も…」

「うーん、あたしは好きかな。この感じ」

「まあね。なんかのんびりしてる」

「あ！ ティア、あれアイス屋さんかな!?!」

「うん、そうかも…つてやめなさいよ？ 任務中に買い食いなんて！ 恥ずかしい…」

「うん…」

うんうん、二人は概ね楽しんでいるようだ。だから今回は見逃してあげよう。

そこにヴィータちゃんが念話で話しかけてきて、

《おう、なのは隊長。あたしとファイアット副隊長はロングアーチからの直接指示で動いているからな。上空からのセンサー散布だ》

《了解。お願いね、ヴィータ副隊長、ファイアット副隊長》

《了解だ。いくぞファイアット》

《わかりました!》

《ラインも手伝わなくて平気です…?》

《平気だ。リインはなのはとシホ達を手伝ってやんな。お前の探査魔法は優秀だからな》

《はいです♪ ヴィータちゃん》

《じゃ、また後で》

《おう》

それでヴィータちゃんとの念話を終了させる私なのだった。

そこにアリサちゃんが話しかけてきて、

「なのは、シホ。

晩御飯はあたしとすずか、アリシアにフアリンさんとライダーさん、鮫島で準備させてもらうわ。

コテージで待っているから」

「うん！　ありがとう、アリサちゃん」

「ありがとうね、アリサ」

「うん。それじゃあたしはすずかとアリシアと合流するからここで別れるわ」

「わかったわ」

それでアリサちゃんと別れる私達。

それから少し捜索が続き、そこに、

『ロングアーチからスターズ、ライトニング、セイバーズに通達します』

ん？ シヤマルさんからの通信だ。なにか新情報かな？

『さっき、教会本部から新情報が来ました。』

問題のロストロギアの所有者が判明。

運搬中に紛失したそうで事件性はそんなにないそうです』

『本体の性質も逃走のみで攻撃性は無し。』

ただし大変に高価なものでできれば無傷で捕らえてほしいとのこと。

まあ、気い抜かずにしつかりとやろう』

「「「了解！」「」」」

よかった…。

レリックじゃなかったんだね。

少し安心したかな。

それで見んなを見回してみると特にフォワードのみんなは落ち着いた表情をしていました。

「少し、肩の力は抜けたかな…？」

「はいです…。」

「ほっとしました」

「大きな事件にならなくてよかったですね」

「だね。ラン姉さん」

「…というか、そろそろ日も落ちてきましたし晩御飯の時間ですね」

ラインがそう言う。

確かにそうかもしれないね。

それで私は別行動しているライトニングのフェイトちゃんに通信で連絡を取ってみる。

「ライトニング、そちらはどう？」

『こちらライトニング。こっちもひと段落ついたから待機所にもどるよ。』

ロングアーチ、なにか買って帰ろうか？』

『こちらロングアーチ。』

ありがたいことに夕食はすずかちゃんやアリサちゃん、アリシアちゃん、その他民間協力者が用意してくれるそうや』

『了解…。それじゃスターズ、セイバーズのみみんなを車で拾って帰るね』

「ありがとう、フェイト隊長」

「助かるわ。フェイト隊長」

私とシホちゃんフェイトちゃんに感謝の言葉を贈っておく。

「うーん…でも手ぶらで帰るのもあれかな？」

「それじゃここから近いことだし寄ってかない？　なのは」

「そうだね、シホちゃん」

それで私はお母さんに連絡をとって見ることにした。

携帯を取り出して、

「あ、お母さん？　なのはです」

「「えっ!？」」

なにかスバル達が驚きを見せていたけど私は構わず電話をする。



Side ラン・ブルックランズ

なにかなのはさんのお母さん、つまり桃子さんについて念話で話し始め出すスバルさんとティアさん。

なので私も会話に混ざることにした。

《お二人共念話でなんの会話をしているんですか？》

《あ、ラン。なのはさんのお母さんについてちよつとね》

《桃子さんのことですか》

《ランは知っているの…?》

《はい。シホさんに何度か連れてきてもらったことがありますから会ったことがあります》

《どんな感じの人なの…?》

《とても優しい人ですよ? それになんととっても若いですよ!》

《《そう(なんだ)…》》

それからなのはさんはお話が済んだのか、

「さて、ちよつと寄り道をしていこうか」

「はいです♪」

「あの、今、お店って…」

あ、そういえばまだ知らないんだったね。

なのはさんが二人にわかりやすく、

「そっだよ。うち、喫茶店なの」

「喫茶翠屋。おしゃやれで美味しいお店ですよ」

「そうね。未だに私は桃子お母さんに料理の腕では負けているから…」

「ええー!?」

それで驚くスバルさんとティアさん。

そして翠屋に到着するとなのはさんが先行して中に入っていて、

「お母さん、ただいまー!」

「ただいまです。桃子お母さん」

「なのは! シホちゃん! お帰りなさい!」

桃子さんがなのはさんとシホさんを暖かく出迎えてくれている中で、

《なのはさんとシホさんのお母さん、わっかい!》

《ホントだ…》

《だから言ったとおりだったでしょう?》

《うんうん、桃子さんはとっても若いよね》

レンも念話に加わってきたのでみんなで念話を始め出す私達。

「桃子さん、お久しぶりです!」

「わあ。リインちゃん! 久しぶりー!」

「モモコ、お久しぶりです」

「また飲みに来てやったぞ、桃子よ」

「お世話になります。桃子さん」

「アルトリアさんとネロさんとオリヴィエさんもよく来たわね。歓迎するわよ」
リンさんやアルトリアさん達もも久しぶりなのか笑顔で喋っている。

そこにぞくぞくと家族の人達がやってきた。

「おー。なのはにシホちゃん。」

アルトリアさんにネロさんにオリヴィエさんもよく帰ってきたな」

「おかえりー。なのはにシホちゃん、それにアルトリアさん達も」

「お父さんにお姉ちゃん」

「ただいまです。士郎お父さん、美由希姉さん」

お父さんとお姉さんの登場になのはさんとシホさんも嬉しそうに顔を笑顔で弾ませている。

《お父さんも若いわね…。というかお父さんの方は士郎さんと同じ名前なのね》

《びっくりだね…。》

《使い分けが難しいですよね。》

シホさんは士郎さんの事は呼び捨てで、お父さんの方は士郎お父さんと呼んでいますから》

《でも、やっぱり家族っていいものだね》

《そうだね、レン》

するとなのはさんがこちらに向いてきて、

「あ、お父さん。紹介するね。この子達、私とシホちゃん達の生徒だよ」

「ああ、そうか。こんにちは、いらつしやい」

「は、はい」

「こんにちは」

「それと、ランちゃんにレンくんもよく来たね」

「はい」

「ご無沙汰しています」

士郎さんが挨拶をしてるので私達も挨拶を返しておくのだった。

「ケーキはいま箱詰めしているから」

「フェイトちゃんと待ち合わせなんだけど、いても平気…?」

「もつちろん」

「うん！」

「ありがとうございます」

「ああ、コーヒーと紅茶も用意してあるから持ってきなさい」

「ありがとうございます！」

「お茶でも飲んで休憩して行ってね」

「はい。えつと…スバル・ナカジマです！」

「ティアナ・ランスターです」

スバルさんとティアさんは自己紹介をしていた。
うん。最初が肝心だよね。

「スバルちゃんにティアナちゃんね」

「二人共、コーヒーとか紅茶はいけるかい…？」

「あ、はい」

「どっちも好きです！」

「リインちゃんはアーモンドココアよね」

「はいです♪」

どうやらリインさんもこの常連だったようだ。

そりやそうだよね。

昔はこちらで暮らしていたんだから好みも知られていても不思議じゃないからね。

「スバル、ティアナ。おいで」

「桃子お母さんの淹れる紅茶はおいしいから飲んでおくことをオススメするわよ」

「お仕事が大変そうだから、元気が出るミルクティね」

「はい」

「ありがとうございます」

「ランちゃんとレン君はどうする？ 今日ではミルクティは飲んでいく？ それともコーヒーにしておく？」

「いえ、同じミルクティで構いません」

「うん。一緒にお願いします」

「わかったわ」

それで準備をし始める桃子さん。

そこに土郎さんが話しかけてきて、

「それにしても、四人共。」

なのはとシホちゃんは先生としてどうか？

お父さんは向こうの仕事のことはどうも分からなくてな…」

「あ、その、すごくいい先生達です！」

「局でもお二人は有名で、若い子達の憧れです」

「「へー…」」

「うー…ティアナ、少し恥ずかしいから」

なのはさんにしては珍しく恥ずががしているようである。

とても機動六課では見れない光景だな。

そしてシホさんも、

「そ、その……自分の出来ることを一生懸命しているだけですから……」

……驚いた。

シホさんがこんなに素直に顔を赤くして恥ずかしかっているのも滅多に見れないかもしれない。

ティアさんが念話で、

《ちよっ!? シホさんのこんな姿、初めて見たんだけど……!》

同性愛者じゃないけど、ちよっとかラツときたわ!》

《うん。そうだね、ティア! シホさんってキレイとカワイイを両立しているから今回は可愛さが表に出てきているね!》

《やっぱりシホさんは魅力的な女性だっていうことだね、ラン姉さん》

《そうだね、レン》

それからなのはさん達はお兄さん達の話で盛り上がっているようであった。

どうもお兄さんはドイツという場所に行っているみたいで、雫ちゃんという子供を家に残しているという。

「寂しがつていない……?」とシホさんが聞くが、よくすずかさんが帰ってきているしファリンさんもいるから心配はなさそうであるとのこと。

それからなのはさんとシホさんも普通にお父さん達と会話している光景を見て、

《なんか、なのはさんとシホさんが普通の女の子に見える…》

《そうね…》

《実家ですから素の自分を出せるんだと思いますよ？》

《うん、そうだね。家ではシホさんはいつもあんな感じですよ？》

《へー…》

《そうなんだ…》

それからフェイトさん達が到着するまで翠屋でひと時の時間を楽しむのだった。



S i d e レン・ブルックランズ

それからフェイトさんの運転する車に人数がギユウギユウ詰めで違反スレスレでなんとか補導されずに無事にコテージまで到着することができました。

捕まったらどうしよう…とヒヤヒヤものでした。

そこを聞いてみるとシホさんがさらつと、

「もし捕まったら暗示をかけて無かったことにしておくわ」

とか、さらつと物騒な発言をしていたのはれっきとした仕事をしている僕達的にはいいのかな?とも思いましたが、まあそうならなくてよかったです。

そして全員でコテージの近くのところまで行くといい匂いがしてきた。

「いい匂いがします」

「はやて達が晩御飯の用意をしているのかな?」

「あ、なのはちちゃん達、来たんだね」

そこにすずかさんがやってきた。

「あ、すずか。もしかしてもう料理とか作り始めちゃってる…?」

「うん。シホちゃんも参加したかっただろうけど、今回ははやてちゃんとアリシアちゃんに任せて大丈夫だよ」

「そう。私も作りたかったけど今回は我慢しておきますか」

「それよりシホちゃん、一緒にご飯食べようね」

「そうね、すずか」

「あー! すずか、お姉様を独り占めはするいですよ〜!」

「ファイアットちゃん、安心して。」

シホちゃんは私とファイアットちゃんとアルトリアさんとネロさんのみんなのシホ

ちゃんなんだから♪」

「そうですね！」

「あ、あはは…恥ずかしいわね。フォワードのみんなも見ているからここは穏便に…」
「シホの嬢ちゃんもすっかりハーレムを形成しているねえ。」

士郎は一人を選んだのにこっちはすごい人数だぜ」

「ランサー、からかわないで…」

ランサーさんがそう言つてシホさんをからかっている。

それにしても…なんか、今日はいつもにも増してすずかさんとフィアット副隊長がシホさんとの距離が近いなあ…。

そこにティアアさん達から念話が聞こえてきて、

《…あのさ、レン。前から思っていたんだけど、シホさんつてすずかさんとフィアット副隊長とどういった関係なの…？》

なんか友達にしては行き過ぎてているのをチラチラと感じるんだけど…》

《うんうん。ランも何か知っているなら教えてよ》

《えつと…そうですね。少し恥ずかしい話題になりますけどいいですか？》

《ええ、聞いてあげるわよ》

《ズバリ言いますとすずかさんとフィアットさんはシホさんの事が好きで、シホさんも

二人の気持ちにはちゃんと応えているんですよ」

ラン姉さんがその事をティアさん達に教えると一気に聞いていた四人は顔を真っ赤にする。

《え…でも三人とも女性ですよね？》

《エリオ君。もうあの三人は女性という括りは気にしていないんだよ？》

前に聞いた話だけどね、三人は結婚できる年齢になったら同性でしかも多重結婚ができる部族がいる世界で結婚する約束をしているんだよ》

《えええー！?! それ、ホントなの?! レン！》

《は、はい。スバルさん…》

《でも、それって本当に幸せになれるのかしら…？》

女性同士だから子供は作れないだろうし…》

《あ、それももう解決していますよ？》

《ど、どういうことですか、ランさん？》

《キャラ、シホさんはある意味世に知られれば革命的な魔術を使えるんだよ？》

《えつと…どんな？》

キャラちゃんが顔の赤みが増してきた。見れば他の三人も同様である。

《シホさんは錬金術で男性のアレを擬似的に作り出せることができるんだそうですよ。》

ちゃんと子供も作れる優れものを…》

《マジで!?!》

《すごいわね…》

《はい…》

《うん…》

《そ、それじゃ例えばもしかしたらそれ使えばあたしとティアも子供を作れたり…?》

《バツ!?! バツカじゃないの!?! スバル! あたしはそんなことしないわよ!?!》

《はい…》

《でも、事実上は可能だとシホさんは言っていましたけど…》

《でも、欠陥があつて生まれてくる子供は女の子限定だとか…》

《それだけでもすごいわよ…》

そこにシホさん達が不思議そうな表情でこちらを伺っているのを見て咄嗟に「この話は今回はここまで!」という事で話は終了された。

するとそこにもう一台車がやってきた。

誰だろうと思つているとそこから美由希さんにエイミイさん、そしてアルフさんが登場してきた。

「はあい!」

「みんな、お仕事してるかー？」

「お姉ちゃんズ、参上！」

「エイミイさん…」

「アルフ！」

「それに、美由希さん…？」

「さつき別れたばかりなのに…」

そうだよ。多分話を聞きつけて駆けつけたんだと思うな。

美由希さん、こういうの好きだし。

そして案の定、美由希さんはエイミイさんが僕達と合流するといふのでついてきたという。

エイミイさんもエリオ君とキャロちゃんに「元気だった？」と聞いている。

アルフさんも「背、少し伸びたか？」と聞いているししっかりもののお姉さん(?)だね。

後でフェイトさんに聞いた話だと実際問題、アルフさんは年を数えると僕達より年齢は下だという…。

そこにフェイトさんとアリシアさんが走ってきて、

「アルフー！」

「アルフ、来たんだね！」

「フェイト、アリシア！」

アルフさんは二人の名前を呼び、そしてフェイトさんに飛びついていた。

こうしてみるとやっぱり子供に見えてしまうからどう接していいか分からないんだよね…。

それからアルフさんのハラオウン家での過ごし方など他にも色々と話し合っていて楽しそうだね。

そしてカレルとリエラってエイミイさんの子供かな…？

それから少ししてコテージの方に向かっていくとなんとそこには鉄板焼きをしている八神部隊長の姿があつた。

それで驚く僕達。

八神部隊長に手伝いますと言ったけど軽くあしらわれてしまったので仕方がなく僕達フオワード陣は食器出しと配膳作業をするのだった。

そこでシャマル先生は実は料理が苦手だということがわかったけど、まあ些細なことだね。

そして食事と飲み物も全員に行き渡り八神部隊長が代表して、

「では皆さん。任務中にもかかわらずなんだか休暇みたいになっていますが」

「ちようどサーチャーの反応と、広域探査の結果待ちとなっていてますので少しの間休憩できますし…」

「でかい事件にも発展するわけでもないから」

「だから、六課メンバーはお食事で鋭気を養って引き続き任務を頑張りましょう」

「……はい……」

「現地の皆さんはどうぞごゆっくり」

「はやてー。あたしとすずか、アリシアは休暇で来ているだけだからねー?」

「わかっとなるよ、アリサちゃん。で、せっかくの機会なんで協力者の皆さんと六課メンバー、初対面組の各自自己紹介など…」

八神部隊長の発言でまずはアリサさんが立ち上がり、

「えー…ではあたしはアリサ・バニングス。」

魔術事件対策課の前線指揮官をしている一等陸尉です。

なのはとフェイト、はやてにシホ、フィアット、すずか、アリシアとは十年前からの友達です。

今も仲良しです。

そのうち機動六課と魔術事件対策課は合同で作戦をする機会もあるかもしれませんがのでよろしく!」

そう言ってますがアリサさんは喋り終わり座る。

次はさすがさんだ。

「私は月村さすがです。」

私も魔術事件対策課のデバイス技術班で魔術式デバイス作成を手がけている三等陸尉です。

アリサちゃんと同じくなのはちゃん達とは友達で、シホちゃんとは…その、女性同士で変だと思われれますけど恋仲です」

「さすがー!? 今話すことじゃないわよね!？」

「宣言はしておくものだよ? シホちゃん」

「さいですかあー…」

「さすがー! それなら私もお姉様とは恋仲ですよ!」

「そうだよね、フィアットちゃん」

「フィアも乗らないで…恥ずかしくなってくるから…」

シホさんは顔を真っ赤にして言っていたが諦めてすぐに座り直した。

そして次はアリシアさんが立ち上がった。

「私はフェイトの姉のアリシア・T・ハラOWN二等陸尉です!」

魔術事件対策課で前線部隊のガードウィングを勤めています。よろしくねー!」

フェイトさんとほとんど同じ顔なのにこちらはフェイトさんと比べて活発というイメージが多分にあるね。

そして次はアルフさん。

「あたしはミッド出身でフェイトの使い魔のアルフです！」

と、そんな感じでお次はエイミーさん、美由希さん、ファリンさん、鮫島さんと自己紹介をしていって特に美由希さんになのはさんとシホさんの事をよろしくと頼まれてしまった。

そして次は僕達フォワード陣の紹介となつて全員が紹介し終わると食事が開始された。

それから飲み物が足りなくなつたので冷やしてあるという場所まで僕達フォワード陣で取りに行くことになつて、そこでちょっと危ないやりとりがあつたけど概ね大丈夫だった。

なんかスバルさんとティアさんが二人で大事そうな話をしているけどラン姉さんに余計な詮索はやめときなさいと言われて気にはなつたけど二人を残して戻ることにしたのだつた。

第二百二十七話 『出張任務（3） 銭湯開始』

S i d e シホ・E・S・高町

その後、つつがなく食事は終了となり全員で「ごちそうさま」をした後、

「さて、サーチャーの監視もしつつお風呂も済ませておこか？」

はやてがそう発言するので、

「「「「はい！」」」」

フオワードのみんなは元気よく返事を返すのだった。

まあ、もつと気軽にしてもいいと思うけど仕事申だしね。

これが当たり前、か。

「監視といつても、デバイスを身につけていればそのまま反応を確認できるしね」

「最近は本当に便利だよね」

「技術の進歩です」

シヤマルさんの物言いになのはとリンが二人で感心していた。

そうよね。

昔はそんな技術はなかったから。

リインの言うとおりの技術は常に進歩している。

でも、と思う。

まだまだ遠い先の未来の話になってしまいうけど技術の進歩が進みすぎて崩壊した世界があるのも確かだから気をつけてやっていけないとね。

「あー……ただ……お風呂もないし」

一人遠いもしもの未来に思いを馳せているとアリサがそう切り出していた。

「うん、ここはやつぱり……」

「あそこですかね……?」

「あそこでしょう!」

……ん? なにやら不穏な気配のする会話が始まっているような?

お風呂? やつぱり? あそこ?

そこから導き出される答えは一つなり。

そう、スーパー銭湯・スパラクーア。

「それじゃ機動六課一同、着替えを準備して出発準備!」

「これより市内のスーパー銭湯に向かいます」

「スーパー……？」

「銭湯……？」

スバル達はこういうものか分からずに首をかしげている。

ま、やっぱりの展開よね。

みんなで入れるところと言ったらあそこしかないから。

そしてスパークーアの受付までやってくる私達。

でも、人数が多いから大変だろう。

「いらつしやいませ……って、多………だ、団体様ですか？」

あまりの人数に受付のお姉さんも思わず本音が溢れていたことからそれが伺える。

「えっと……大人が二十三人と……」

「子供が四人です」

「エリオとキャラと……」

「私とアルフです！」

「おう！」

ティアナがエリオとキャラの名前を言ってるインとアルフが続いて声を上げる。

しかし、改めて見てやっぱり人数が多いわよね。

まず大人組の私にアルトリア、ネロ、ファイア。

なのは、オリヴィエ陛下、フェイト、ランサー、アリシア。
はやて、シグナム、シャルルさん、ヴィータ。

スバル、ティアナ、ラン、レン。

すずか、ライダー、アリス、アサシン、美由希姉さん、エイミーさん。

そして子供組のエリオ、キャロ、リイン、アルフ。

二度目だけど多いわよね…。

「…ちなみにヴィータ副隊長は？ 見た目エリオ達とそんなに変わりませんけど…」

「あたしは大人だ！ 馬鹿にすんな！」

「ぶっ…くくっ！」

それで誰が漏らしたかわからないけど笑う気配がしてヴィータが目つきを鋭くして
「誰だ、今笑った奴は!？」と待機状態のグラーファイゼンを握りながら叫んでいたのはご
愛嬌。

おそらく笑ったのは声からしてリインあたりだろう。あるいはランサーもか…？

「とにかくお会計をしておくから先にいってな」

「「「「はい！」」」」

それで向かう私達。

銭湯の入口で、

「よかった…。入口は別だ」

エリオが安心する声を出していた。

しかし不用意にそんな発言をしないほうがいいと思うわよ？

「おうエリオ。なんだ？ マスター達と一緒にの方がよかったか…？ ませガキだなあ」

！ いや、男として当然か？

「い、いいいえ！ そんな事はないですよ、ランサーさん！」

「呵呵。小童、なかなか主も隅に置けんな」

「アサシンさんもからかわないでください！」

「エリオ君、ドジを踏んだね…」

数少ない男子連中がすでに盛り上がっているようである。

レンがこの中でエリオにとっては良心かしら…？

キャラもエリオに話しかけて、

「楽しみだね、エリオ君」

「う、うん…キャラはスバルさんやランさん達と楽しんできてよ」

「え…？ エリオ君は？」

「え、ぼ、僕は一応男の子だし…」

キャラが純粹な眼差しでそうエリオに聞いている。

エリオも恥ずかしそうにそう答えている。

まだ十歳とは言えやはりもう恥ずかしいのだろう。

「れ、レンさん、助けてください……！」

「エリオ君、今のうちに楽しんできたら？ まだ子供だからそつちでもきつと大丈夫だよ。僕も昔はシホさんと一緒に入っていたし……」

普通にレンはそう答えていた。

……うむ、小さい頃に何度か一緒に入つてあげていたけど純粹に育ってしまったものね。

見ればエリオも見捨てられたという感じである。

純粹なレンの後ろではランサーとアサシンがニヤニヤと笑っているし……。

「それに……」

と、キャラが看板に書かれている注意書きを読み始めた。

聞けば十一歳以下なら女性のお風呂でもお子様は入れるという感じである。

「エリオ君、十歳……！」

「エリオ、せっかくだから一緒に入ろう……？」

キャラにフェイトも加担してエリオを誘う。

うーん……エリオ、少し可哀想ね……。

そう思っていると、

「で、でも隊長達やスバルさん達、それにアリサさん達もいますし…！」
と、せめてもの抵抗を見せるエリオだが、

「あたしは別にいいけど？」

「とうか前から頭洗ってあげるよって言ってるじゃん？」

と、次々と声を上げていく一同。

ライダーも近寄ってきて、

「…ふふ、エリオ、大丈夫ですよ。優しくしてあげますから…」

その妖艶な笑みを浮かべるライダーの姿にエリオはピキッ！と固まってしまった。

「まだ幼い子供は吸ったことがありますから楽しみですね…フッフ」

「や、やっぱり僕はレンさん達と一緒に入ります！ それでは!!」

それでエリオはさっさと男の脱衣所に入っていくってしまった。

そんなエリオの姿に笑いながらついていくレン、ランサー、アサシンの男三人。

それで残念がるキャロとフェイト。

「あー、エリオ逃がしちゃったね」

「ライダー？ おふざけが過ぎてるよ？」

「すみません、スズカ。つい本音がポロっと出てしまいました…」

本気だったの、ライダー!?

私はかつての記憶を思いだし一種の恐怖を感じた瞬間だった。

それから気を取り直してみんなで銭湯の中に入っていく私達。

なのはがスバルやティアナ、ランに銭湯での作法などを教えている。

ここでも教官つぶりを見せることでもないと思うけどね。

ヴィータ達も、

「中は結構変わったな…」

「ああ。十年も経っているのだから変わっているものだろう。

温泉の種類も増えていることだしな。

「仕事中でもなければ風呂好きの私としては全部のお風呂を制覇していたところだ」

「反応を気にしていれば大丈夫だと思うわよ、シグナム」

「そもいかないだろう?」

「曲がりなりにも副隊長だしなあ…」

「私は初めて入りますから結構楽しみなんですよ?」

「ああ…そういうえばフィアットちゃんは入ったことがなかったのね」

「はい。遊びに来てても大抵は高町家でみんなが入っていましたし…。ね? お姉様」

「そうね、フィア」

それで私達は温泉めぐりを開始するのだった。

でも、ここで先ほどお風呂好きを自負していたシグナムが暴走し始めた。

「ではせっかくですから入ったことのない新しいお風呂にしましょうか？」 主

「そうやね。私はどこでもええよ」

「どうせならシグナムが決めるよー」

はやてがそう答え、ヴィータがそう促すがシグナムはお風呂案内図をじっくりと睨み、

「そうか…ではこの寝転び風呂というのに…いや、なんだ？ この台風風呂というのは？ 想像ができないぞ？」

「ん…？」

「シホ、シグナムの様子がおかしいですよ…？」

「そうね、アルトリア。なんだろう…？」

「この高濃度茶カテキン風呂というのもいいが、大回転ジャグジー風呂というのもいいかもしれない。

この美肌湯というのも主には入ってもらいたいしな…」

ブツブツブツ…と掲示板と睨めっこして次々とお風呂の名前を呟っていくシグナム。

「…お姉様。私達は別れていきましようか？」

「そうね…。あの様子だと当分はかかりそうだから。アルトリア、ネロ、いきましよう？」

「はい、わかりました」

「うむ、わかったぞ」

「はやて、それじゃあの温泉好きの面倒お願いね…？」

「わかったわ…。はあ…」

はやてのため息を聞きながらも私達は別れた。

しばらくしてはやての「迷うくらいなら全部入ってきい！」という呆れ声の叫びが木霊してきた。

シグナムのお風呂に対する情熱と優柔不断さが垣間見えた瞬間だった。

その後に四人で泡風呂に入っているとそこにすずかとライダーがやってきた。

「シホちゃん、サウナにいかない…？」

「いいわよ、すずか」

「それなら私も行きます！ お姉様！」

それでアルトリア達と別れてサウナに行く私達。

サウナの中で、

「ふふ…こうして三人きりになるのは久しぶりだね」

「そうですね、すずか」

「…二人とも普通の会話をしていると、ところ悪いんだけど、サウナの中でそんなにくっつかれるとすごい暑いんだけど…」

そう、今サウナの中では右にすずか、左にファイアがいて私の腕に手を回しているのだった。

「いいと思うよ、シホちゃん。ちょうどサウナの中には他に人は誰もいないみたいだし…」

「人がいないのがちようどいいというのはどう言う意味でしょう、すずかさん…?」

「もう！ お姉様もわかってるくせに！ 暑いサウナの中でくっつけ合うお肌とお肌…そこから始まる触りっこ会！

………お姉様、キスしてもいいですか…?」

「…ファイア? あまりの暑さに熱暴走を起こしているんじゃない…?」

息が荒いしなんか言い回しに変態チックよ? 是非とも水風呂に行くことをオススメするわよ。

それとすずか、顔がすごい近いわよ…?」

「えへへ…二人つきりならもつと良かったんだけど、ファイアツトちゃんと二人でシホちゃんを独占…♪」

「んっ…すずか!!」 いきなりの吸血行為は反則…ッ! うあっ!! ふ、ファイアも反対の首をすずかを真似してアマガミしてこないでー!!」

それから二人は過激で表現できないくらいに事を私にしようとしてきたので数十秒後、私は暑さも理由にしてサウナから逃げ出すことになったのは、許して欲しい…。

イタツ! やめっ?! ヘタレとか言わないで! 場所と気持ちの問題なのよ…!!

…それから追記すると私がしばらくして戻ってみると二人はサウナの中で目を回してのぼせていたので急いでライダー達を呼んで救出し水風呂にぶち込んだのだった。

それで二人して「きやあー!?!」と叫び声を上げていたが、自業自得だろう。

なのは達もやってきて「何事!?!」という感じで心配していたのだが、私が「二人は暴走したのよ…」と哀愁を漂わせながら首元の両方の傷を指差す。

それでなのは達も事情がわかったらしく顔を赤くして、

「も、もう…すずかちゃんファイアちゃんは…」

「心配して損したわよ…」

「フェイト、すずか達は放っておいてキャ口達を探そっか…?」

「そうだね、アリシア…」

と、言葉を漏らしていた。

うん、正常な反応ね。



Side レン・ブルックランズ

なにやら女湯の方が騒がしいけどなにか起きているのかな…？

そうこうしているとランサーさんとアサシンさんもお風呂に入ってきた。

お二人共その鍛え上げられて引き締まったその肉体をいかに表に出している。

なぜかそれを見て何名かの男の人が小声で「うほっ…」とか言っていたけど………な

ぜか、急に怖気が走った!?

あー、あー！ 聞こえなかった。僕は何も聞かなかった。OK!?

そう自分に言い聞かせていた。

それがかぶりを何度か振り、改めて二人にどうやったらそんなに鍛え上げられるのか

聞いてみると、

「おう、小童。それならば僕の功夫を伝授してやろうか？ セイバーのマスターの教え

よりも確実に強くしてやるぞ？」

「あ、アサシン！ てめえ、レンは俺がスピードをエリオと一緒に鍛えてやってんだから

横槍してくんじゃねえよ！」

「呵呵呵！ 言いよるな、ランサーよ。小童よ、その弱気な性格改善と防御力をさらに向上させたければ儂を頼れ。いいな…？」

「は、はい！」

「レン！ そう簡単に心を揺さぶられるな！ もっと芯のある男でいやがれ！」

「えっと…僕はどうすれば…」

と、迷っているが遅れてエリオ君も入ってきて、つて！

ええ!?

なんで一緒にキャロちゃんもいるのー!?

「おう、エリオ。どうした、キャロまで一緒にいるじゃねーか？」

「えっと…それが女の子も十一歳以下なら男湯に入ってきてもいいと教えられたそうで

…どうしましょう？」

「ランサーさん、エリオ君を連れつつてもいいですか…？」

「はははっ！ いいぜ、どんどん連れてけ。おまけに一緒に女湯にでも逆に連れてつち

まえよ？」

「ランサーさん！」

「おっと…いいか、エリオ？」

「は、はいー！」

ランサーさんは笑みから一転して真剣な表情になりエリオ君の肩に手を置き、

「こんな機会は滅多にないんだぞ？ 男ならその機会を有効に使わんでどうするんだ…

？ ん？」

「どうもしませんよー！」

「そうかい？ なら妥協点で子供風呂に行つてこいよ。あそこなら平気だろ」

ランサーさんはえらく楽しそうだ。

アサシンさんも「ふっ…」と笑みをこぼしているし。

「れ、レンさーん…」

「ごめん、エリオ君。僕には前にシホさんから聞いたことだけど世界の意思には逆らえないんだよ…」

「うう…」

「エリオ君、子供風呂にいこ…？」

「うん、わかつたよ。キャロ…」

それでエリオ君はやつと諦めがついたらしくキャロちゃんと手をつなぎながら子供風呂の方へと向かつていった。

なぜか知らないけど「ドナドナ」という歌詞が頭に思い浮かんだんだけど、どうい

う意味だろうか……？

それからランサーさんに、

「さて……お遊……ゲフンツ……弟分がどつか行っちゃまったことだし……さて、レン！」

「な、なんでしようか……？」

「男同士の猥談と洒落込むとしようぜ？」

「は、はあ……？」

猥談って、なんだろうか？ でも、なにやら雲行きが怪しいです。

「でよー、お前もシホの嬢ちゃんと一緒にお風呂入ったことあるんだろ？ どうだ？

いい体していたか……？」

「そ、そそそそんな事は……！」

「素直になっておけよ。でないともまるでシホの嬢ちゃんの体が綺麗じゃないって言って

いるようなもんだぜ？」

「それは、そ、そうですねー……」

それからはアサシンさんも「興に乗った！」とか言って混ざってきて僕は恥ずかしい

告白をさせられたのは、忘れたい……。

シホさん、ごめんなさい……。



S i d e ラン・ブルックランズ

（キュピーン！）

ん…？

なんだろう…？

レンが恥ずかしい事を口に出しているような気がする。

さてはランサーさんあたりに気が弱いところを突かれてシホさんの恥ずかしい秘密などを暴露していたりするのかな…？

そうだとしたら一大事ね。

そんな事を思っていたらなにやらさつきまでどこかに消えていたキャラがなぜかエリオを引つ張って女湯にやってきた。

それでスバルさん達が、

「あ、エリオ。やつぱり来たんだ」

「いえ、その…はい。すみません」

「謝ることじゃないって…エリオはまだ子供なんだから平気だよ」

「そうね。今のうちに子供の特権で色々に見といたほうがいいわよ？」
「そうそう」

私も相槌を打っているとなぜか背後から気配!:

それで咄嗟に振り向いたけど時すでに遅くスバルさんが私とティアさんのタオルを奪っていた。

「ちよ!? スバルさん!」

「なにすんのよ! このバカスバル!!」

「うぶっ! だつて見といたほうがいいってティアとランがく…」

「心の準備くらいさせてください!」

「そうよ!」

私とティアさんでスバルさんに説教を与えている一方で、

「エリオ君…? 顔真つ赤だけど、大丈夫…?」

「…キヤロ。うん、大丈夫だ、問題ない(キリッ!」

「……全然、大丈夫そうに見えないよ……?」

エリオが挙動不審で意味不明な状態になっていたけど、やっぱりもう十歳だから意識しちゃうものなのかな?

レンも十歳を過ぎた辺りから恥ずかしくてシホさんや私と一緒にいらなくなつた

し。

そんな事を考えながらまたみんなで銭湯内を歩いているとなにやらシホさんや八神部隊長達が集まって話をしていた。

それで耳を澄ませて聞いてみると、なにやらセクハラとかだつたり、揉み魔とかだつたり。

なのはさんやシホさん達も全員揉まれたらしい。

内容的にそのうち私達もターゲットにされる事がもう決定づけらしい。

八神部隊長、やんちゃさんだなー…。

でもそれからなにかシリアスな空気になり、

「…私達の夢の部隊…こんななベストな形で始められた。このまままっすぐ何事もなく今回の事件を解決して、それぞれの明日に繋げていけたらええな…」

その八神部隊長の発言に私は胸がなにか暖かくなる感覚を味わった。

「きつと、いけます」

「ああ…」

「大丈夫な気がするよ。はやてちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃん、シホちゃん、フィアットちゃん、皆が揃えばきつと無敵だよ…」

「あの子達もやってくれそうな感じするし。それにもしなにかあつたらあたし達魔術事

件対策課もきつと救援に入るからバックは任せなさい！ はやて！」

「うん、おおきにな」

「頑張つていきましよう、はやて」

「うん、シホちゃん！」

この会話を聞いて思った。これからも私達も一緒になつてシホさん達隊長達を支えて機動六課が無事にやっていけるように頑張ろうと。

それから銭湯から出てスッキリしていると、

キーン！

「！ ロストロギアの反応が検知されました！」

それで慌ただしくなる一同。

私もバルムンクを握りお仕事モードになる。

アリサさんやすずかささん達も邪魔にならないように先にコテージに戻っているという。

それで露払いも済んだ後、八神部隊長が、

「それじゃお風呂から出たてだけど、機動六課フォワード陣、スターズ&ライトニング&セイバーズ…：出動や！」

「「「「了解！」」」」

それで私達は出現したロストロギアに向かっていく。

するとそこにはたくさんのスライムの姿があった。

これの詳細を聞き、私達地上戦力となのはさん達空戦戦力で分かれて分担してそれぞれ回収することになった。

それから戦闘は行われていったがみんなの攻撃がほとんど通じなかった。

それで色々と攻撃方法をアレンジして本体を見つけていくことに専念する。

するとティアさんが本体を見つけてくれてキャロと一緒に封印作業に取り掛かろうとするけど、生意気にもバリアを展開してきた。

「あのバリアは二層。スバル、エリオが一層目！　ラン、レンが続いて二層目を破壊した後、あたしとキャロが封印する！　いいわね？」

「「「了解！」」」

それでまずスバルさんとエリオがダブル攻撃で一層目のバリアを破壊。

そしてお次は私とレンの攻撃。

「ダブル斬氷閃で決めるわよ、レン！」

「うん、ラン姉さん！」

それでロードカートリッジした後、二人でバリアを切り裂き二層目を破壊した。

最後にティアさんとキャロが封印の魔弾を放ち、見事封印に成功する。

「お見事！」

なのはさんのお褒めの言葉をもらい、それから完全封印の作業をしようとするとそこでキャロが、

「私に封印させてください！」

キャロ自らが名乗り出たのでシャマル先生達はキャロに任務を任じた。



S i d e シホ・E・S・高町

キャロが封印作業をするというので私達は見守ることになった。

そこでフェイトが、

「ロストロギアの封印作業…昔を思い出すね」

「にやはは、そうだね」

「ええ。でも私は封印云々の前に一個破壊しちやった覚えがあるからうまく言えないのが悲しいところかしら…」

「あはは！」

それで三人で笑い合う私達。

それから無事封印成功の一報を受けてはやての「任務終了！」宣言で今回の出張任務は終わりを告げるのだった。

それからカリムに報告したり。

海鳴のみんなに機動六課に帰る事を言ったりしたり。

フォワードの評価などをなのはやヴィータ達としたり。

コテージの掃除などもしたり。

慌ただしくも充実した一日だったと私は思いながらも皆して機動六課に帰るのだった。

ただ、ティアナの表情が少し暗かったのが気掛かりだったかしら…。

何事もなければいいのだけどね…。

第二百二十八話 『出張任務（4） 出張任務の裏側で。』
士郎の一日』

S i d e 八神士郎

シホ達が午前中から地球に主張任務に向かった。

帰ってくるまでには今日一日いっぱいはかかるだろうな。

別段私としては構わないのだが、機動六課を守る戦力が私を含め、キャスター、ザ
フィーラ、ヴァイスだけという少なさ。

だから責任重大だろう。

と、いつても今のところ機動六課を狙うリスクを侵す奴はそうはいないだろう。

なによりなにもメリットがない。

まあ、はやての失脚狙いなら、やるやつもいるかもしれないが、やはりリスクが高い。

ゆえに私達は今日は一日ゆっくりしようと思う。

「ご主人様^{マスター}、少しよろしいでしょうか…？」

「なんだ？ どうしたんだ、キャスター」

「はい。本日は一日お暇ですのでちようどよいのでアインスに連絡を取ってみまさら、今日の午後にツルギ君と一緒に機動六課に遊びに来れるそうですよ…？」

「ほう…」

アインスとツルギが六課に遊びに来れるのか。

それは楽しみだな。

では久しぶりに家族サービスをするのでしょうか。

それで色々計画を立てようとしたが食堂に新たな来訪者が…。

「士郎の旦那、ちよつといいつすか？」

「ヴァイスか。どうしたんだ？」

「いえ、せつかくなのはさん達とフォワードのヒヨッコ共がいなくてから訓練場が空いてるじゃないつすか？」

「…まあ、そうだな」

「それでシャリーの奴にももう許可はもらってあるんで久しぶりにストームレイダーで訓練したいんすよ」

「なるほど…。…しかし、なぜ私にわざわざそんな話を持ちかけてくるんだ？」
「そこらへんはいつもの士郎の旦那らしく察してくださいよ。」

シホさんと同等の弓の腕を持ち『赤き弓兵』の二つ名を持つ士郎の旦那に銃の腕を見てもらいたいんすよ」

なるほど…。

弓と銃では勝手が違うが同じ狙撃手として見てもらいたいというわけか。

しかし、

「なあヴァイス。少しいいか…？」

「なんすか？」

「私はシホのように教導隊に属しているわけではない。

だからうまく教えられるかどうかは保証できんぞ…？」

それを伝えるとヴァイスは、

「なんだ。そんな事か。なら心配はしてないですから大丈夫つすよ。」

士郎の旦那はもつと自信を持って大丈夫ですよ？」

「そうか？　なら、午前中だけ付き合つてやろう」

「午後は用事でもあるんすか…？」

「ああ、機動六課にアインスと私の息子のツルギが遊びにくる。」

機動六課にいたるために最近家族サービスがろくにできていないのでね。

今日は思いっきり遊んでやろうと思った次第だ」

それでヴァイスは「なるほど」と手を叩く。

「了解したつす。なら、俺もツルギ君と遊ばせてもらって構わないですか？」

「ああ、好きにするがいい。…ただし、泣かしたら承知せんぞ？」

一応忠告はしておく。

それでヴァイスは一度頷いて、

「わかりやした」

「ではさつそく訓練場に行くとするか。みっちりしごいてやるぞ」

「うつす、士郎の旦那！」

それでヴァイスとともに訓練場に向かおうとするが、そこでキャスターが、

「ご主人様、私めはちよつと機動六課の周辺まわりを散策してきます。

結界もちゃんと機能しているか確認がしたいので…」

「わかった」

「では失礼しますね」

それでキャスターも外に出ていった。

それから訓練場で訓練をしていく。

その一部始終としては、

「ヴァイス！　そこはもつと狙いを絞れ！」

「うつつす！」

やら、

「もつと重心を調整して構えろ！」

「了解！」

やら、

「心をもつと澄ませて無の境地を開拓してみろ！」

「なんすか、それ!？」

やら、

「何度言ったら分かるんだ!？　この馬鹿弟子が——!!」

「いつから俺は士郎の旦那の弟子に:~!？」

「口答えは許さん！　喋る暇があつたらすぐに撃ち方構え！」

「は、はいいー！」

やら、

「一発でも的を大きく外してみろ:~。その時は、分かっているな:~?」

「ひーっ!？　さ、サー、イエッサー！」

やらと。

なにやら後半は私も変なテンションになってヴァイスをしごいてやっていたが、おかげでヴァイスの腕はかなり上達したと思う。

そして頭の中で変なテロップが流れだして、

『ヴァイス君、銃の熟練度が5上がった』

『士郎君、教導度、師匠度が3上がった』

と、いう変なナレーションが聞こえてきたが、つつこんだら負けだと思って無視した。後に暇なのでシャーリー嬢が私とヴァイスの訓練を管制していたらしく、訓練が終わった後にやってきて、

「士郎さん、シホさん達と一緒に教導をやってみませんか…？ 鬼教官としてフオワードのみんなの中で流行ると思いますよ？」

「そうか？」

「そ、それは同感っすね…士郎の旦那、鬼っす…ガクツ」

シャーリー嬢に続き、疲れ果てたヴァイスはそう言い残すと地べたにダウンした。

「ふむ、やりすぎたか…。」

力加減が難しいのだな、教導とは」

「でもいい線行っていると思いますよー！」

「そうかね？　しかし、今の私はこの機動六課の食と平和とついでにみんなの胃袋を守る戦うコック長。

ゆえにそれに専念したいために誘惑には耐えねばならん」

「やっぱり士郎さんはかつこいいですねー。」

背中から漢オーラが出てますよー」

なんだ、それは…？

まあ昔から後ろ姿は何度も写真に撮られたからな。

いまだに撮られていた理由は不明だが。

それより、

「さて、ヴァイス。そんなところで転がっていると邪魔だ。

スタミナが回復する昼食を作ってやるからさっさと復活しろ」

「了解っすー！」

「料理に釣られて復活するなんて現金ですね、ヴァイス陸曹は…」

「うるさいやい。俺は士郎の旦那の料理は好きなんだ。

この味を知つちまったらもう他の料理が下位に見えちまうぜ。

…まあ八神部隊長やシホさんの料理も同等に絶品ですけどね」

「その気持ちはわかります。

食後のデザートや間食のお菓子も絶品ですから！ ミッドの高級お菓子屋さんに引
けをとっていませんし！」

「そうだろうか？」

なにやらヴァイスとシャーリー嬢は私の作る料理でトークを開始しました。

まあ、悪い気はしないからよしとしよう。

そういうえば、キャスターは今頃何をしているだろうか…。

私はついそう思った。

思念通話で話し掛けてもいいのだが、それは野暮だろう。



士郎がキャスターの事を思い浮べている頃。

キャスターは機動六課内の海側に面した道を歩いていた。

「…ふむふむ。結果は常時問題なく作動していますねえ？」

魔導師はおろか魔術師でさえ発見できるかどうかの術式の細かい仕様の魔法陣の跡
を確認しながらキャスターは思わず笑みを浮かべる。

キャスターもただ食堂で士郎とともに働いているだけではない。

士郎達にはもう伝えてあるが機動六課はすでにキャスターの工房の中といっても過言ではない。

以前、聖杯大戦事件時に月村邸に結界を構築した事があったが黒化したセイバー・オルタにはまったく歯が立たず通用しなかったし、逆に破られもしてしまった。

まあそれもしょうがない。

あの時のセイバーは黒化して対魔力が1ランク落ちていたとはいえ、それでも尋常じゃない対魔力を常に体に纏わせていたのだ。

だから、あれは破られるのはある意味確定事項だったのだ。

だが、今回時間も余るほどあるために今キャスターが構築している結界はあの時以上の出来栄である。

だから、セイバー級の対魔力を持たない敵などたやすく御し征し打ち倒す事が可能だろう。

「くふふ……これでもしも敵さんが機動六課に攻めてきましても対抗策はバツチンです！

これで見事撃退すればご主人様マスターの中の私に対する株……もとい信頼はうなぎ登りの如く上昇すること間違いなしでしょう。

それでももしかしたら頭を撫でてくれながら褒めてくれるかもしれません。

もしやそれ以上も……！

想像したら……：……キヤー！

ミコーン！ もう、私つたら天・才！

ついでにそんな私のご主人様マスターもイケメン♪

くつくつく……早く誰でもいいですから無謀にもここに攻め込んできてくれませんか
ねえ？

盛大に歓迎しますよ？

ご主人様マスターにあだなす敵はすべて私の敵です。

覚悟してくださいましね？

あは〜♪」

コハツキーキャラ全開で策謀をし、さらつと攻め込んでこいなどと挑戦宣言を呟いて
いる物騒でとんでもないキャスターだった。

だが、常時思考が桃色で優先度士郎第一なためにまったく邪気を感じられない。

むしろ頼もしさすら感じるほどだ。

近い時期に機動六課に攻め込んで来るもの達よ、後悔するがいい。

ここは悪魔の眷属が数多く住み着いている魔境なり、とな。



Side 八神士郎

それからいつものメンバーがいないので少し淋しさを感じる食堂で、通信スタッフのアルト嬢とルキノ嬢、そしてはやての指揮代行を任されているグリフィスが三人揃って食堂へとやってきた。

「士郎さん！ いつもものお願いします！」

「わかった、アルト。」

しかし今日はスバルがいないから張り合う相手がない事だし量は控えめにしておくぞ。

仮にも女性なのだから色々と気を付けたほうがいいぞ？」

「なにか微妙に失礼な発言にも聞こえなくもないですけど、心遣いありがとうございます、士郎さん」

「ルキノとグリフィスは同じなのでいいですか？」

「はい、キャスターさん」

「ありがとうございます」

「いいえー。それより二人とも最近仲は進展していますか？」

「そ、それは……！」

「は、話せませんよー！」

キャスターの言葉にグリフィスとルキノの二人は揃って顔を赤くして話すのを拒否している。

まあ、アースラ時代からの付き合いらしく二人もなかなかに気が合っていてまだ付き合っていないのが不思議なくらいだと噂好きの女性局員達にはまことしやかに囁かれていたらしい。

私も食堂という場所にいるからそんな噂話をよく聞くおかげでその事を知った口だ。

ちなみに一番色々な噂をするものは恥ずかしがっている二人の隣でニヤニヤしているアルトと今はいないスバルの二人だったりする。

それからこれといって目立った客は来なかつたので食堂は無事終了し私はアインストツルギを迎えに正面玄関まで向かつた。

そしてやってくるとそこにはちようど受け付けでチェックしている二人の姿があった。

「あー。パパだー！」

ツルギは私を見つけた途端に笑みをこぼし私のところまで駆けてきた。

私もそれを両手で受けとめ思いっきり持ち上げる。

「私がない間も元気だったか？ ツルギ」

「うん！」

そこに遅れてアインスマもやってきて、

「士郎、やって来たぞ」

「ああ、アインスマ。久しぶりだな」

「そうだな。……………それで久しぶりの再会なのだからなにかやることはないのか……？」

なにやら期待の眼差しを送ってくるアインスマ。

だから私はアインスマの頭を撫でながらキスをするのだった。

「んっ……………ふふふ、合格ですよ♪」

「ふっ……………ならばよかった」

それでアインスマと私の上で肩車しているツルギの三人で笑を零しながら隊舎内を歩く。

「今日は主はやて達は出張任務でいないとキャスターに聞いたのだが……」

「ああ、だから今日は私の他にいるのはザフィーラくらいだろう」

「はやてお姉ちゃん達はいないけど、ザフィーラがいるの!? パパ！」

「ああ。だからいっぱい遊んでもらおうな、ツルギ」

「うん！ あ、それとパパ、ちよつといい？」

「どうした、ツルギ？」

「うん。シホお姉ちゃんに日課にしておきなさいって言われた魔力の制御ももうばっちしだよ。」

もう前みたいに暴走しないようになった」

「そうか。成長したな」

「うん」

一年か二年くらい前までは何度も電撃やら炎でおもちやをダメにしていたからなあ…。

そのたびに叱っていた。

シホにも結構苦勞かけさせたしな。

「今のツルギは本当に聞き分けがいいし、それにとってもいい子だから私は嬉しい…。」

大好きだぞ、ツルギ」

アインスも嬉しそうにそう話す。

「ママ、僕もママとパパの事が大好きだよ！」

満面の笑みでそうツルギは返してくるので私も嬉しくなってくる。

元の世界では味わえなかった幸せを私は噛み締めている。

実にいいものだな。

他の平行世界でも私のような衛宮士郎が存在しているかは分からないが、こんな自分もいいものだぞ、と教えてやりたい。

「…パパ？ どうしたの？ なにか考え事？」

物思いに耽っているとツルギが心配そうに声をかけてきたので安心させるように笑みを浮かべて、

「…いや、アインスがいて、ツルギがいて、大勢の家族や仲間にも囲まれていて私は幸せなんだな…と今一度噛み締めていたのだ」

「よくわからないけど…そっかー」

それでツルギと二人で笑い合う。

アインスも微笑んでいたのがよかった。

しかしそれをシャーリーがどこかで映像を録画していたみたいで、シホ達に内容をバラされたのでしばらくはそれをネタにからかわれることになるのは、別にいいか…。

逆に開き直って「いいだろう」と自慢してやったらみんなは「いいなあ…」と羨ましがっていた。

特にフィアット嬢なんかがまた暴走してシホに「早く私達も作りたいですね！」と堂々と言っていたので、シホはたまったものではなかったようで顔を真っ赤にしていたのが印象的だった。



今、ツルギはザファイラの背中に乗ってポツポ遊びをしている。

「ザファイラ、ゴー！」

「任された」

ズンズンと進んでいくザファイラ。

それでツルギも楽しんでいる。

「士郎」

「どうした、ザファイラ？」

「やはり子供とほいいものだな…」

「そうだな」

しみじみとそう語るザファイラ。

それでザファイラは将来子供好きがこうじて子供達とよく遊んだり鍛えたりするようになる。

これも性格が軟化してきたおかげだろう。

「あ、パパ！」

「なんだ？」

「組み手しよう！」

「わ、わかった」

ツルギも最近の子供の例に漏れず、大会まで開かれるミッドチルダの人気スポーツの一つである『ストライク・アーツ』を学んでいたりする。

しかもツルギは少し特殊な技の数々を使用する。

まず魔術の方ではもうシホの教えの成果もあり身体強化魔術を使いこなし六歳の子供にしては動きも早いし拳や蹴りの威力も高い。

魔導も併用して防御魔法を常時同時展開しているので防御力はかなりある。

そして攻撃術。

そこはツルギオリジナル魔術が効果を発揮する。

ツルギは『概念抽出』という魔術を使える。

どういう効果かと言うと……しいて言えば投影魔術より燃費がはるかに良いものである。

宝具の効果“だけ”を抽出して体や拳、武器に宿らせるといったものである。

だから話が変わるがエリオやキャロと同じくらいの年頃になったらツルギにも適正が合ったデバイスを与えるつもりだが、生身でもかなりすごい。

「どういふ事かというと、

「いくよ、パ・パ！」

拳を構えるツルギ。

だが小さく「概念抽出、ゲイ・ジャルグ…」と、とんでもない事を呟いている。瞬間、ツルギは私の魔法障壁を完全無視して拳を何度もぶつけてくる。

「くっ…！ また、強くなったな、ツルギ」

「そうでしょう？ パ・パ！ 近所の同い年の子とやるといい勝負ができるんだよ！」
普通に笑っているがやっている事はとんでもない。

下手したらうちのフォワード最年少のエリオとやってみると十秒数限定でだが、同等に戦えるかもしれないな。

他にもよく使う抽出する宝具は雷神インドラの神格の象徴宝具である『^{ヴァ}猛り狂う^{ジュ}雷神の鉄槌^ラ』等があげられる。

ヴァジュラは射出特化型の宝具である。

だから概念を抽出したら雷を体に纏ってまさに射出されるように高速移動ができるようになる。

私達はそれを『雷速歩法』と名付けている。

それで雷も纏っているから拳に雷の威力もプラスされるので中々にエグイ。

他にもゲイ・ボルク of 概念を抽出すると概念は『必ず心臓を貫く』なので、それが非殺傷で『魔法の核を貫く』に改変されて、組み手をしている相手が遠距離から放つてきた魔法の核を貫く拳を放てる。

ゆえに初見でも必ず打ち破れる。

ツルギは天然で賢い：いや、ある意味ずる賢いとも言っているので初めて戦う相手とは必ずゲイ・ボルク of 概念を体に纏って戦っている。

これ、もう普通にレアスキルじゃね：？というツツコミは無しの方向で頼む。

閑話休題

それから本気を出してこちらも反撃するわけにもいかないので全部受けでツルギ of 拳を耐える。

少しして組み手は終了し、

「パパ、僕強くなった：？」

「ああ。おまえは将来大物になるかもしれないな」

「やった！ パパに褒められたよ、ママ！」

「よかったな、ツルギ」

「うんー」

褒められて素直に喜んでるツルギを傍目に私は思う。

まだまだ私も現役のつもりだが、それでも多少疲れた。

やっぱりツルギはすごいな…。

将来が色々な意味で楽しみだよ。

「ザフィーラ、私が相手をしてやれない時は、頼むぞ…？」

「了解した。だが、ツルギは成長したら私もそのうち本気でやらねばいかな…才能に満ち満ちているからな。

まだ救いがあるとすれば同時に概念抽出できる数が今のところは二個というところか…？」

これで三種類以上の概念抽出を同時展開できるようになったらと思うと、想像しただけで怖いな…」

「確かにな…。

後は私とシホのように属性が「剣」だけに特化しているわけではないから投影魔術は使えるがそう何度も連続でできないし、真名解放も当然できないからそこが救いか。

もしこれも私達と同等にできるとしたらと思っただけでとんでもないからな」

「ああ、それは想像だけで恐ろしいな…」

それでザフィーラと二人で「ツルギがそこまでチートな子になんなくてよかった…」と安堵の息をつくのだった。

それからキャスター、ヴァイスやアルト、シャーリーなどとも仕事の合間にツルギは遊んで時間はあつという間に過ぎてゆき、遊び疲れたのか眠ってしまった。

「遊び疲れて寝てしまったか…」

「ああ。ツルギも楽しんだようでよかった。

士郎、私はこのままツルギと一緒に帰る。

だから主はやて達が帰ってきたら『お仕事、頑張ってください』と伝えておいてくれ」「了解した」

「それじゃ私達は帰るとするが、たまには帰ってきてくれ…」

「ああ、努力する」

それで別れ際、またアインスとキスをして、私達は別れてアインス達は帰っていった。さて、それでは夜食も気合いをいれて頑張るとするか。

明日からはまたにぎやかな食堂になるだろうからな。

頑張っていくとしようかね。

これは私こと八神士郎のある一日を描いた話である。

なのは嬢達のように続きで、マル！などは決して言わんぞ？

第百二十九話 『ホテル・アグスタ』

Side ラン・ブルックランズ

出張任務の翌日にシホさんとアルトリアさんとネロさんの三人が揃って行方不明になるという事があつたが一日してすぐに帰ってきた。

なにかあつたのか聞いてみたけど、シホさんは「ちよつと私と縁がある人達と会つてきたのよ」と楽しそうに語っていた。

でも内緒でなのはさん達との秘密みたいな会話に聞き耳を立てていたら、話の節々に“平行世界”という単語が聞こえてきた。

もしかしてシホさん達、平行世界に行つていたのかな…？

まあ、それは今はいい。

そのうち、嫌でもその縁があるという人とは会うかもしれないという気がしたので。それより話は変わるけど、今私達はヘリでとある場所へと移動中である。

こうしての任務は出張任務を含めると三回目なのでまだ慣れないものがあるが頑

張つてこなしていこう。

「…あらためて今までの流れと今回の任務のおさらいや」

八神部隊長がそう話す。

「これまで謎に包まれていたガジェットの製作者、そしてレリックの収集者は現状ではこの男」

そこには紫色の髪に白衣を着ている一人の男性が映された。

「違法研究で広域指名手配されている次元犯罪者…ジエイル・スカリエツテイの線を中心に捜査を進めている」

「こっちの捜査はおもに私が進めるんだけど、一応みんなも覚えておいてね」

フエイトさんがそう私達に話してくる。

でも、ガジェットの製作者か。

この人が私達の敵…。

「それと今日これから向かう先は『ホテル・アグスタ』です！」

「骨董美術品オークションの海上警備と人員警護が主な今日のお仕事だよ」

「取引許可の出ているロストロギアがいくつも出品されるので、それでレリックと誤認したガジェットがやってくるかもしれない。」

ですから私たちが警備員として呼ばれたです」

「これくらいの大形オークションだと密輸取引の隠れ蓑にもなるし、色々と油断は禁物だよ」

「現場には昨夜からすでにシグナム副隊長、ヴィータ副隊長、ファイアット副隊長、アルトリア空曹長他数名の捜査員が張り込んでいる」

「私達は建物の中の警備に当たるから前線は副隊長たちの指示に従ってね」

「……はい！……」

と、ここでキャロが気になっていたのか挙手して、

「シヤマル先生。さつきから気になっていた事があるんですけど……その四つの箱って

……」

「あ、これ？」

シヤマル先生の足元には四つのケースが置かれていた。

実は私も気になってはいたんだ。

「これは隊長達のお仕事着よ」

そう言つてシヤマルさんは笑う。

でも、それと呼応するようにシホさんの顔が少し顰めた。

なにがあつたんだろう？



S i d e シホ・E・S・高町

私達はそれぞれ着替えて支度をした。

それだけならまだいいんだけど…。

「…どうして、私は黒いスーツ姿なのかしら？…ま、ドレスを着るよりはいいんだけどね」

「んー…男装の麗人って感じやな」

「似合っているよ、シホちゃん」

「うん。始めて見たらどんな女性も虜にしちゃうと思うんだ」

《似合っておるぞ、奏者よ》

なのは達三人に、それと霊体化しているネロにまでそう言われて、まあいいかと思うことにした。

「それなら…」

私は顔を引き締めてルヴィアの執事時代に培った経験を遺憾なく発揮することにした。

「それではお嬢様方、会場へと向かうといたしましょうか。警護はわたくしめにお任せ下さい」

ニコツと笑みを浮かべながら執事の態度をとる。

「…あ、あかん…。惚れそうや」

「はやてちゃん、戻ってきて！」

「似合うどころの問題じゃないね…」

「そうですか？ それならばよかったです。お嬢様方も似合っていますよ？」

笑みを絶やさずにそう告げる。

「シホちゃん！ ほかの人の前でその笑みは禁止や！ 落ちる人が続発する!!」

「はて…？ 私にはわかりかねます。」

「私は執事のお仕事をこなしているだけですよ？」

「くっ…確信犯か。」

なかなか手ごわい。な、なら部隊長であるご主人様の命令や！ 笑みは禁止いッ
!!」

「…わかりました。ご主人様」

それで私は笑みを消して普段通りの表情になる。

「…ううっ…。こんなにシホちゃんが似合っているとは予想外や。悪ふざけが過ぎるで

？」

「ごめんごめん。こうやって昔は周りの貴族や執事に舐められないように気を張っていたから」

「シホちゃんの今までの経験ってすごいね…」

「うん…」

「そ、そんならそろそろ行こうか…」

少し疲れたような表情ではやて達は歩いていく。

そして受付によって四人で受付を済ます。

その際、私はすごい目で見られていたが気にしない。

「…バルディツシユ、オークション開始まであとどれくらい？」

《3時間27分です》

「そう…」

「それまで見学でもしていきましょうか。フェイトお嬢様」

「そうだね。…でも、その呼ばれ方は慣れないよ、シホ…」

それに周りの女性達が私達を見てるよ？ 少し恥ずかしい…」

「私とて恥ずかしいのですから我慢してください。」

私はこの時間のあいだは執事モードで行かせていただきますので」

一瞬、すれ違った道の方にユーノとヴェロツサがいたようにだけど、バレると恥ずかしいので知らないフリをしておいた。

途中で色々な人とも話を交わしていると、

「ふふ…シホさん。今日は執事なの？」

「あ、ミゼさん！ 来ていたんですね」

「私もいるよ、シホちゃん！ フェイトちゃん！」

「すずか！」

そこにはドレス姿のミゼさんとすずかの姿があった。

「すずか達も今日のオークションの警備？」

「うん。今はカレンさんにアリサちゃんとアリシアちゃん達が警備に回っているよ。」

それだけで地球製の魔術品らしきものがいくつか混入しているらしいの。

だから魔術事件対策課として警備にあたっているよ」

「私達は内部での視察ね。」

カレンさんとアリサさんとアリシアさんが今外で警備に回っているわ」

「これなら万全ね」

「アリシアも来ているんだ…」

「それより…ふふふ。シホちゃん、スーツ姿似合っているよ？」

「ありがとう、すずか」

「また後で時間があったら遊びに行くね」

「ええ。待っているわ」

「うん！」

それですずかは私の頬に軽くキスをしてミゼさんと一緒に手を振りながら歩いて行った。

「…なんか、すずかのシホにするキスが普通の光景に見えた…私の目がおかしかったのかな…？」

「どうなんだろう？ 私達はあつたらいつも挨拶代わりにしているし」

「そうだったんだ…フィアットもそこまで積極的じゃないのね」

「そうね」



Side ティアナ・ランスタール

今、あたしはスバルと八神部隊長に関して念話で話している。

《今日は八神部隊長の守護騎士団全員集合か：正確には八神家族の士郎さんとアインスさん、キャスターさんはいないけど》

《そうね。

あんたは結構詳しいんでしょ？

八神部隊長とかファイアット副隊長以外の副隊長の事》

《うーん…父さんやギン姉から聞いたんだけど、八神部隊長の使ってるデバイスが魔導書型でその名前が『夜天の書』って事。

ファイアット副隊長以外のシグナム副隊長とヴィータ副隊長とシャマル先生、ザフィーラは八神部隊長が個人で保有している特別戦力だったこと。

で、それにリイン曹長、士郎さん、アインスさん、キャスターさん…それと名前は知らないけど後二体いるサーヴァントの人を合わせて十一人揃って完璧な無敵の戦力だったことだよ》

八神部隊長、まだ二体もサーヴァントを使役していたんだ。

どれだけ強力なパーティーだったというのよ。

《ま、八神部隊長達の詳しい出自とかは匿秘だからあたしも詳しくは知らないけど…》
《それでも十分強力ね。レアスキル持ちの人は殆どがそうよね》

《ティア、なにか気になるの？》

《別に…》

《そ。それじゃまた後でね》

《ええ》

それでスバルとの念話を終了させるけどやっぱり思う。

六課の戦力は無敵を通り越してはつきり言っちゃうけどかなり異常。

八神部隊長がどんなすごい手を使ってこれほどの戦力を揃えたのか知らないけど。

隊長達は全員オーバーSランク。

副隊長達もニアSランク。

ほかの隊員達も前線から管制官まで未来のエリート達。

そしてサーヴァントという異常の塊のような存在。

あの年ですでにBランクのエリオに竜召喚士のキャロ。二人共フェイトさんの秘

蔵っ子。

そして魔術を使用してきて魔力変換資質『氷結』を二人共持っているランという

シホさんの愛弟子ともいうべき家族。

危なっかしいけど潜在能力と可能性の塊で優しい家族のバックアップもあるスバル。

やっぱり、うちの部隊で凡人はあたしだけ…。

でもそんなのは関係ないのよ！ あたしは立ち止まるわけにはいかないんだ。



一同が警戒をしているとやはりというべきかガジエツドがアグスタへと向かって侵攻してきた。

それに即座に気づいたシャマルが全員に連絡を入れる。

「クラールヴィントのセンサーに反応が出たわ。シャーリー！」

『はい！ やつぱりきました！ ガジエツド一型機影40…50！』

『三型…五…六…七機です！』

それでやつぱりとシャマルは思っていた。

それは別の警備をしていたシグナム達にも知らされ、

「エリオ、キャロ！ お前達は上に上がれ！ ティアナの指揮で防衛ラインの設置をする！」

「はいー！」

「ザフィーラは私と迎撃に出るぞ？」

「心得た！」

「えっ!？」

「ザファイラって喋れたの!？」

ザファイラが喋った事に驚いているがザファイラはマイペースに、
「守りの要はお前達だ。頼むぞ」

と言ってシグナムと外に迎撃に出て行った。

ファイアットとラン、レンも。

「それでは二人とも。私は副隊長達と出ますのでフォワードで集まって防衛ですよ？」

「わかりました!」

「頑張ります!」

「アルトリアさんはみんなを見ていてください!」

「お任せください!」

そしてファイアットも迎撃に出た。

「前線各員に、今回の状況は広域防衛線です。」

「ロングアーチーの総合管制と合わせて私、シャマルが現場指揮を行います!」

『スターズ3了解!』

『ライトニングF了解』

『セイバースF了解!』

『アルトリア了解!』

『スターズ4了解！ シヤマル先生！ あたしにも前線状況を見させてください！ 映像を見たいんです！』

「了解。クロスミラーージュに直結するわ。クラールヴィント、お願いね？」

《Ja.》

そしてシグナム、ヴィータ、ファイアットはバリアジャケットを纏って現場へと飛んでいく。

「新人達の防衛ラインまでは一機たりともいかせねえ！」

「お前も案外過保護だな……」

「そこが面倒見のいいヴィータらしいです」

「うるせーぞ！ シグナム、ファイアット！」

そんな話をしながらも三人は現場に到着して、

「私が大型を潰す。ヴィータとファイアットは小型を潰してくれ」

「おうよ」

「わかりました！」

そしてヴィータは鉄球を、ファイアットは実体の小銃を複数出現させ、

「まとめて……ぶつとばす！」

「マグナムランス……！ 貫きなさい！」

鉄球と槍が前線のガジェットを次々と貫いていく。

シグナムもレヴァンティンに炎を宿らせて、

「紫電……一閃！」

ガジェット三型を切り裂いていく。

ザファイラも違う場所で一型を複数相手取り確実に潰していく。

それをモニターで見ていたスバルとティアナ。

スバルは純粹に驚いていたが、ティアナは、

「これで能力リミッター付き……」

と、悔しい気持ちで手を握り締めていた。



近場で戦闘を見物していた紫色髪の少女、名をルーテシア。

そしてフードを被っているが鍛えられているだろう体を持つ男、名をゼスト。

その二人に通信が入ってきた。

相手はスカリエッティだった。

『いきげんよう。騎士ゼスト、ルーテシア』

「ごきげんよう。ドクター」

「なんのようだ…?」

ルーテシアは表情を変えずにスカリエッティに返事を返すが、ゼストはルーテシアとは対照的に警戒心を顕にする。

『冷たいね、騎士ゼスト。』

近場で見ているんだろう？

あそこにはレリックはないが実験材料として興味を引かれる品が一つあるんだ。

少し回収任務に協力してくれないかね？

君たちなら実に造作もないことだろう』

「断る。レリックが絡まない限りは不可侵を守ると言う約束だったはずだ」

『ルーテシアはどうだい?』

ゼストの拒否の言葉にスカリエッティは特に気にした素振りを見せずにルーテシアに問いかける。

それにルーテシアは、

「…いいよ」

『やはりルーテシアは優しいな。』

ありがとう。今度是非お茶とお菓子を奢らせてくれ。

君のデバイスに私が欲しているもののデータを送ったよ」

「うん……。ごきげんよう。ドクター……」

『ごきげんよう。よい知らせを待っているよ、ルーテシア』

それでスカリエッティとの通信は切れる。

ゼストはルーテシアに話しかけて、

「いいのか……?」

「うん。ゼストやアギトはドクターを嫌うけど、私はそんなに嫌いじゃないから……」

「そうか」

そして一度ルーテシアは頷くと地面に召喚魔法陣を出現させて、

「召喚……インゼクト・ツーク」

召喚された虫達は戦っている現場へと向かっていきガジェットに憑依すると途端にガジェット達の動きがよくなった。

それでシグナム達三人は苦戦をしだす。

さらにルーテシアはスカリエッティから頼まれたものを回収するために一体の人型を召喚し、

「いって、ガリユール……」

黒い人型はオークション会場へと向かっていった。



S i d e ティアナ・ランスター

「遠隔召喚!? 来ます!」

キャロの叫びと共に目の前から召喚魔法陣が浮かび上がり、そこからガジェットが召喚されてきた。

数は旧型が15台、新型が3台。

「すぐれた召喚師は転送魔法のエキスパートでもあるんです!」

「なんでもいいわ。いくわよ!」

「!」「おう!」「!」

「了解しました」

今までと同じ。

証明すればいい。

自分の能力と勇気を証明して…あたしはいつだってそうやってやってきた!

「私が前に出て大型を叩きます! ティアナ達は小型を叩いてください!」

「わかりました。アルトリアさん！」

「いきますよ！ はああああっ!!」

アルトリアさんは剣を構えて新型へとかかかっていった。

『防衛ライン、もう少し持ちこたえてね。』

ヴィータ副隊長がすぐに救援に向かうから。

アルトリアさんを中心に迎撃して!』

それであたし達は旧型へと攻撃を開始するが、

「スバル、エリオ、ラン、レン！」

「「「おう!」」」

それでフロントアタッカーのスバルとレン。

ウイングガードのランとエリオが仕掛けていく。

だが、みんなの攻撃はどれも当たらなかつたり当たってもAMFで防御されたりの繰り返しだった。

アルトリアさんも新型の迎撃に出ているがおそらくリミッター付きでさらにデバイスの剣がAMFに阻まれなかなか突破できないでいる。

しかし、

「この程度! 造作もない!」

剣にカートリッジが付いている訳でもないのに急に風が吹き荒れると二体同時に真つ二つに切り裂いてしまった。

やっばり強い！

そして指示は防衛だけど、攻めないと駄目だ！

「守つてばかりじゃ駄目です！ 全機落とします！」

『ティアナ、大丈夫？ 無茶はしないで！』

「大丈夫です！ 毎日何度も練習してきているんですから！」

それで後ろにいるエリオ達に指示を飛ばし、

「エリオ、キャロ！」

それにラン、レンもセンターまで下がって。

あたしとスバルの2トップでいくわ！」

「わ、わかりました！」

「二人で大丈夫ですか!？」

「平気よ！ スバル、クロスシフトA。いけるわね？」

「おー！」

それでスバルがガジェットをウイングロードで引き付けている間にクロスミラー
ジユを構える。

証明するんだ。

特別な才能や魔力がなくとも、一流の隊長達の部隊でだって、どんな危険な戦いでだって……!

すべてであたし、ランスターの弾丸がすべてを撃ち貫く!

それでカートリッジを四発ロードする。

『無茶よ、ティアナ!』

四発もカートリッジロードなんて……!

それじゃティアナもクロスミラージュもたない……!

「撃てます! 撃ちぬいて見せます! そうよね。クロスミラージュ?」

《Yes》

そして弾丸生成が終了し後は撃ち抜くだけ!

これで……すべて終わらせる!

「クロスファイヤー………シュートツ!!」

すべての弾丸がガジェットを貫いていく。

そうだ。あたしならやれるんだ!

でも、一つだけ弾丸が逸れてしまい、それはスバルへと向かっていつてしまった。

(スバル……!)

だけど、そこに一つの閃光が通り過ぎた。

そしてあたしの弾丸を貫いて消滅させていた。

誰がこんな芸当を！

ヴィータ副隊長も駆けつけてくれたが啞然としている。

そこに通信が響いてきた。

『ティアナ。あなたはもう下がりなさい。後は私がすべて射抜くわ』

「シホさん!？」

シホさんの通信の声と共に何度も矢が流星のようにガジェットに降り注いできてすべてを正確に射抜いていく。

でも、どこから狙撃を……!

それでモニターで確認して見てみるとホテルの屋上から矢を放っていた。

そんな……!?

ここからどれだけ距離が離れていると……!

そして最後の一体を貫くと、

『ふう……全機撃墜ね。』

ヴィータ、後はお願い。

勝手に抜け出してきちゃったからはやてに絞られてくるわ』

「おう…あんがとな。シホ」

『それとティアナ。後で二人で話をしようか?』

「…はい…」

それでシホさんとの通信は切れた。

「…それよりティアナ。」

今回はシホに救われたからよかったが、今のは直撃コースだった。

そこんところ分かってんのか!？」

「あ、あの…ヴィータ副隊長、今のも作戦で…」

「あんなのが作戦であつてたまるか! もういい。お前らは二人とも後ろに下がつてろ

!」

ヴィータ副隊長にそう言われてしまいあたし達は後ろに下がる事になってしまった。

それから裏手の警備に入るとエリオ達に告げてあたしは一人裏へと回っていった。

だけどスバルがついてきて、

「ティア。終わつたみたいだから戻ろう…」

「あたしはここを警備しているわ。あんただけで戻りなさい…」

「で、でもティア。ティアは悪くないよ。だから…」

「うるさい! さっさといけつて言つてんのよ!」

「…………ごめんね、ティア。また後で……………」

それでシユンとしながらスバルはその場を離れていった。

…バカだ、あたし。

心配してくれる相棒にもこんな言葉を言っちゃって。

本当ならあたしは謝るべきなのに…。

あたしが証明したいはずの兄さんの、ランスターの銃の事も証明したかっただけなのに……！

それで思わず壁に寄りかかり、

「…………あたしは…………あたしは……………」

悔し涙をいくつも流してしまっていた…。



S i d e シホ・E・S・高町

私は屋上で弓でガジェットを射抜いた後、はやての元に戻り、

「…それで、なにかいい訳はあるか？ シホちゃん」

「今回は私の独断だからどんなバツでも受けるわ。」

ただ、見ていてティアナが無理している風に見えたからつい手を出してしまったのよ」

「そか。まあ、今回はシホちゃんのおかげでスバルも助かったようやし、私からはお咎めもなく不問にしておくわ。」

でも、今後は勝手に動かないでな？」

「了解」

「それとシャーリー達の報告で召喚師の存在が出てきた。」

シホちゃんの目で確認できなかった？」

「そうね…。すぐに降りてきちゃったから確認はできなかったわ。」

もつと範囲を広げて見た方がよかったわね」

「シホちゃんの目でも目視はできなかったと言う事は少なくとも四キロ範囲外のところから召喚していたということか…あるいはどこかで隠れて召喚したかのどちらかやな」

「そんなところね」

と、そこに道の向こうから一人の男性が歩いてきた。

「そこのお嬢さん方。オークシヨンはもう始まっていますよ？」

「あつ…」

「いいのかい？ 中に入らなくて」

「ご心配ありがとう。でもこれでも一応お仕事ですので」

「そうね」

「どこかのお気楽査察官と違って忙しい身なんです」

「そうかい？」

「……………えいつ！」

はやてはその男性の胸にパンチを入れる。

そう。この人こそヴェロツサ・アコース。カリムの義理の弟で査察官だ。

それではやてと…ついでに私の頭も撫でられた。

「あはは。またお仕事ほつぼりだして遊んでいるんですか？ アコース査察官」

「ひどいなあく。こつちもこれでもお仕事中だよ。はやて、シホ」

「そう？ 私には遊んでいるようにしか見えなかったわよ？」

「そういうシホははやてに怒られていたようだけど？」

「ぐつ…痛いところを」

「あはははははッ！」

それで笑い出すはやてとヴェロツサ。

ええい、うるさいわよ。

それからはやてとヴェロツサと色々な話をしたのだつた。

第三百三十話

『ティアナとのお話（前編）』

S i d e シホ・E・S・高町

：オークションが終了し、色々な報告が行われている最中。

ティアナはやはり暗い表情のままだった。

あれはいけない。

このままだったらティアナは心を病んでしまう。

「報告は以上かな？」

現場検証は調査班がやってくれるけどみんなも報告してあげてね。

しばらく待機して何もなければ撤収だよ」

「[[[[[[はこ]]]]]]」

フオワードのみんなは、なのはの言葉に返事を返すがティアナだけは返事がない。

それでののははティアナと少しお話をしようと言って二人で歩いて行った。

私も行きたかったけど、今はなのはに任せてみよう。

それからしばらくしてなのはは戻ってきた。

「…なのは。ティアナはどうだった？」

「うん。もう無茶はしないって約束はしてくれたよ」

なのははそう言つて笑うけど、きつとティアナは納得はしていない。

あの子は昔の何度鍛えても腕が上達しなかつた私にかぶる。

それになにか思いつめているものがあるのだろう。

やっぱりティアナのお兄さんの事で思いつめているのだろう。

それでフツ…と一緒に調査報告をしているスバルとティアナに目を向ける。

見れば今は元気にはなつたけど…やっぱり私の勘が訴えている。

このままでティアナはまた間違いを侵すかもしれないという予感が。

と、そこにファイアがやってきて、

「兄さんは相変わらずですな〜」

「ユーノと会ってきたの？」

「はい。今はフェイトと話をしています」

「それじゃ私達も会つてきましようか」

「そうだね、シホちゃん」

それでティアナの事は今は一旦置いておいてユーノと話をしに行った。そしてユーノと会話を始める。

フエイトが、

「アコース査察官が戻られるまでユーノ先生の護衛を頼まれているんだ。なのは、交代
お願いできる?」

「うん。了解」

「それじゃ私達はお邪魔かしらね?」

「そうですね。私達はランとレンと一緒に現場検分をしましょう。兄さん、頑張る
んですよ?」

「ファイア、からかうなよ!」

「あはは。それじゃです」

それで私とファイアと一緒にランとレンと現場検分を行うのだった。
なのはとユーノは和気藹々と話をしている。

いい雰囲気ね。

でも二人共私ほどでもないけど鈍いからまだ当分は仕事一筋かもね。

その最中、

「…ラン。それにレン」

「はい？」

「なんですか、シホさん…？」

「ティアナなんだけど…二人でちよつと見てもらっていいかしら？ 少し不安なのよ」

「わかりました！」

「任せてください！ しつかりと見ておきます」

「何かあつたら報告よろしくね？」

「はい！」

これで一応安心だけどまだこれからだな。

状況がひどくなる前に言葉はかけといた方がいいと思うわね。

『はい！ 機動六課前線メンバーの皆さん。撤収準備が出来たから集合してねー？』

そこに声がかかってきたので私達は機動六課の隊舎へと帰るのだった。

そして隊舎前で集合して、

「それじゃみんなお疲れ様でした。今日の午後の訓練はお休みだよ」

「明日に備えてご飯食べて、お風呂に入ってゆっくりとしてね」

「無茶な訓練はしないようにね。私がいつも言い含めているからそこは守ってちょうだいね？」

いね？」

「「「「「はー」「」」」」」」

ちゃんと返事は返してくれたからよかったけど、やっぱり無茶はするんだろうなあ
…。

なのは、フェイト、私、シグナム、ヴィータ、ファイア、シャリーーのみんなで隊舎の中を歩いている時に、ヴィータが声をあげて、

「あのさ？　なのは、フェイト、シホ。

三人共、ちよつといいか？

ティアナのことに関して話してーんだけど…」

そう呼び止められる。

やっぱりヴィータも気になったようね。

ま、気にするなと言われても無理か。

それでロビーで話し合われる。

「強くなりてーつていうのは若い魔導師なら当然の思いだし、無茶も多少はするもんだ。

だが、ティアナは…時々度を超えてる。

あいつ、ここに来る前になにか思いつめるような事があったのか？」

「うん…」

それでなのは話し始める。

「ティアナにはね、執務官志望のお兄さんが、いたんだ…」

「いたんだって、なんだ？　もう管理局をやめち……いや、もしかしてもうこの世には……」

「うん……」

それでモニターを開き、そこにはティアナの兄の姿が映された。

「ティアナのお兄さん、ティーマ・ランスター。」

当時の階級は一等空尉。所属は首都航空隊。享年二十一歳……」

「かなりのエリートだったんだな……」

「そう。エリートだったから……なんだよね」

フエイトが声のトーンを落としてそう呟く。

「ティーマ一等空尉はとある亡くなった時の任務中、逃走していた違法魔導師に手傷を負わせたんだけど取り逃がしちゃって……」

「陸士部隊に協力を仰いだお陰でその日のうちに犯人は捕まったそうなんだ。」

「ただ、その任務のことで心無い上司がひどいコメントをして問題になっちゃったんだ」

「コメントって、なんて……？」

「犯人を追い詰めたくせに取り逃がすなんて首都航空隊の魔導師としてあるまじき失態だ。」

たとえ死んでも取り押さえるべきだった。

しかも行方不明になるなんてどういう事だ。馬鹿者め！つてね…」

「そして、さらにその上司は言ってしまった。

任務を失敗するような役立たずは云々…とかね」

「ティアナはその時、まだ十歳で、たった一人の肉親をなくして、そしてその最後の仕事が無意味で役に立たなかったと言われて、きつともものすごく傷つき苦しみ、悲しんで…」

「ティアナはそれで躍起になっているのよ。

きつと証明したいのよ。

お兄さんの教えてくれた魔法は役立たずじゃないつて事を…。

それにティーダさんの体はまだ処置すれば助かる見込みがあつた傷の状態で誰かに奪われてしまったらしいのよ」

「そうなのか…」

私はそれで過去を思い出す。

ティアナはやっぱ私の過去にかぶるところがある。

それで糸口が見つけ出せずにもがき苦しんでいるんだ。

今も、きつと無茶をし続けている。

「シホちゃん…」

「なに、なのは？」

「シホちゃんはやっぱり自分とかぶるとか思っているんでしょ？」

「まあね…養父の願いという点では私とかぶるわね。」

「だからティアナがまた無茶をしようとしたら、それがどんな事を叩き込もうと思う…」

「叩き込むって…」

「物騒だな…何をする気だ？」

「なに、別に。」

「私やなのは達の教導の意味を教えたいだけよ。」

「なのはが目指している教導の事も教えたいしね」

「そう…」

「そう言ってお話はそこで終了となった。」



S i d e ラン・ブルックランズ

お風呂でスバルさんからティアさんの事を詳しく聞いて、やっぱりティアさんは無茶をしているんだな…と率直に思った。

私も家族を失ったけどシホさんのおかげでそこまで思いつめることはなかったからこうして余裕を持つていられる。

だけど、もしシホさんがいなかったら私とレンは世界を恨んでいたかもしれない。

だからティアさんは今まで人一番頑張ってきたけどそれが身についていないと思つて焦っているんだと思う。

なのはさんの教導は確かに派手じゃないけど、でも基本に忠実だしわかり易い。

シホさんの教導も決して無茶はしてはいけないというのを徹底しているし。

なんでもシホさんが言うには反面教師だという。

昔、シホさんも無茶をしていて死にかけた事が何度もあったという。

だから私達にはそんな思いをしてもらいたくないのだろう。

隊舎の中を歩いていて、ふと外を見るとティアさんがいまだに訓練をしている光景を目にする。

ヴァイス陸曹が何度か言葉をかけてこちらへと戻つてきた。

「…ヴァイス陸曹」

「見ていたのか。ラン」

「はい。ティアさんはどうでした？」

「かなり思いつめてんな、ありや…。」

俺からすりや羨ましい位の才能をあいつは持つてんのかな」

「シホさんもティアさんの射撃の腕は前に褒めていました。あれは伸びるつて…」

「シホさんがね。シホさんから褒められたんなら相当のもんじゃねーか。

知ってるか？

シホさんの二つ名は『魔弾の射手』。

だから射撃型のほとんどの魔導師からすれば憧れの的なんだぜ？」

「はい、知っています。私にそんな二つ名は恐れ多いと言つてくるくらいですから…」

「あの人は謙虚だからな。ま、そこが憧れの的だつて気づいていないのがあの人らしい

けどな」

「ですね」

ヴァイス陸曹も分かっている。

そんなところがシホさんの魅力を余計引き立たせているのだ。

でも、やっぱりティアさんの件、これはやっぱりシホさんに報告したほうがいいね。

「ありがとうございます。シホさんに報告しておきますね」

「おう。お前もティアナに会ったら無茶もほどほどになつて言つておいてくれ」

「はい！」

それでヴァイス陸曹と別れてシホさんの部屋へと向かう。

そこではやっぱり色々となのはさんと同じように訓練内容やチームでも連携について考え込んでいるシホさんの姿があつた。

「…あ。ラン、来ていたのね」

「はい。シホさん、無茶はしていいですか？」

「私は無茶はあまりしないようにしているから大丈夫よ。昔にひどい目にあつたからね」

「そういえばシホさん達の過去話ってまだそんなに聞いたことがないですけど、まだ教えてくれないませんか？」

「そうね。なのは達と一緒に話せる時があつたら教えるわ。それに私自身の話になると長くなるから」

「わかりました」

いつか話してくれるって言うなら今は我慢しよう。

そしてアルトリアさんとネロさんも部屋に入ってくると、

「あ、ラン。いいところに。明日の早朝は私と剣の訓練をしませんか？」

「いいんですか。アルトリアさん!？」

「ええ。あなたには才能があります。ですから私の剣を教え込んであげましょう」

「しかし、アルトリアの剣は剛の剣…余のように柔のように舞うように剣を振るうのもいいだろう？」

「どちらも学ばせてもらいますので安心してください」

アルトリアさんとネロさんは剣の振り方は違いがあるので色々な動きを模索できるんだよね。

アルトリアさんは文字通り叩きつけるように切り裂く剛の剣。

逆にネロさんは舞うように横を切り裂いていくような柔の剣。

だから二人が剣の話になると長くなっちゃうんだよね。

それでシホさんも昔は苦勞したそうだし。

それにネロさんの剣はどっちかっていうとレンの方が向いているんだよね。

あの子は防御の後に反撃してカウンターで切り裂くスタイルだから。

「それよりティアナはどうだった…？」

「ヴァイス陸曹に聞いたんですけど、どうも自分は『凡人』だと思っているらしくて人の倍以上の訓練をしているそうです」

「そう、やっぱり…。ティアナは凡人じゃなくて非凡の才能なのね」

「そうですね、シホ。ティアナはとても才能を持っています」

ただ、ティアナ本人はそれを自己の意思で正面から見ないようにしているのかもしれない。見ていて不憫ですね」

「そうだな。ティアナはもつと自信を持つてもいいと思う。そうすればもつと才能を伸ばせるだろう」

シホさん、アルトリアさん、ネロさんは口々にティアさんを褒めている。

これを聞けばティアさんも思い直すと思うのにな。

「私からしても才能があるのは羨ましいくらいなのにな。私、魔術や武術の才能はないから……」

「……え？ シホさんって、才能はないんですか!?!」

信じられない。シホさんは私からすればかなり才能はあると思うのに。

「ええ。シホには剣や魔術の才能はほとんどないのですよ。」

今は色々事情もあつて様々な魔法を使えますが、それでも師匠の人達全員からどこまでいっても二流を越えられないだろうと言われてきたんですよ。シホは……」

アルトリアさんの言葉も信じられない。

「で、でもシホさんって『魔弾の射手』って呼ばれるくらいの腕を持っていますよね？」

「この弓の腕もだけどね。私のは魔術や魔法の腕は後付けみたいなものなのよ。」

昔に話したわよね？ 私には昔に災害で一度心を壊したって……。

私の弓の腕はね、それが原因ですぐに心を空にできるから異常な精度を持てるのよ」
「心を空に……」

「うん。それでそれ以外の私の技術はほとんどがツギハギの腕で戦場で何度も繰り返していくうちに身に付いたシグナム風に言うなら謂わば長年の努力と修練の賜物なのよ。でも、ティアナにはそんな厳しい道には入って欲しくないよ。」

だから無茶はダメだって言い続けているのよ。

なのも昔に無茶をして一度体を壊したから、無茶をし続けるのはダメだっていう思いは誰よりもわかっていると思うから……」

「なのはさんも……」

「ランよ。力というのはそんなに簡単に身につくものではない。だが無茶をしてまで身につける力はいずれ身を滅ぼす。それを覚えておいてくれ」

ネロさんの言葉には妙に説得力があった。

「は……」

それで私は素直に答えておいた。

それがきつと正解なんだって。

「叱ってもらえるうちが一番幸せなのよ？ 私、その言葉も無視して昔は駆け抜けてしまっていたから……」

シホさんはそう言ってどこか寂しくて遠い目をしていた。やっぱりシホさんの過去というものを知りたい。

レンと一緒に私達の家族になってくれたシホさんの過去を。

そんな想いを抱きながら私は自分の部屋に戻り、就寝した。

そして早朝の四時過ぎ。

隣のスバルさんとティアさんの部屋から物音が聞こえてきた。

それで悪いと思っただけ盗み聞きしてみると、どうやら二人で内緒の訓練を開始するらしい。

そしてなのはさんの早朝訓練の時に、

「それじゃ引き続き個人スキルね。基礎の繰り返しになるけど、ここはしっかりと頑張ろう！」

なのはさんの言葉に、スバルさんとティアさんはかなり大きい声で反応していた。

それになのはさんは「元気が出たようだね！」と声を出していたけど、反面シホさんは少し険しい顔になっていた。

やっぱりシホさんは見抜いているんだ。

でも、私も自分を鍛えないといけないから今はシホさんに任せるしかないね。

それでシホさんやアルトリアさん、ネロさんに様々な剣技を習っている間に、

「少し、様子見してみるわ。それでもまだ無茶をするなら私が直々に教え込むかもしれない……」

少し声のトーンが落ちてシホさんがそう言っていた。

私からはもう何も言えないけどティアさんがいい方向に改善できるように祈った。

それからティアさんは毎日スバルさんと内緒の訓練（バレているので内緒とは言わない）をしていた。

そんなある日に、ティアさんはシホさんの部屋へと呼ばれたのだった。

第三百三十一話 『ティアナとのお話（後編）』

S i d e ティアナ・ランスター

明日なのはさんが分隊ごとに模擬戦をするというので準備を入念にしている時だった。

シホさんがあたしを部屋に招いてきた。

なにを話されるのだろうかと思うながらも向かった。

「ティアナ・ランスター、入ります！」

『はい！ ちょっと待ってね？』

中からシホさんの声が聞こえてくる。

なにか中が騒がしいけど一応待っていると扉が開き、

「いらっしやい、ティアナ。さ、立っているのもなんだから中に入って」

「わかりました」

中に入るとそこにはアルトリアさんとネロさんの姿もあった。

二人共ゆったりとしているのであたしはどうしていいかと戸惑う。

「あ、楽しんでいいわよ。そこにある椅子に座っていていいから」

シホさんはそう言いながらもお茶などを用意している。

しばらくして、

「はい、ティアナ。簡素だけど地球製の紅茶よ」

「い、いただきます…」

それで紅茶を一口。

すると、

（お、美味しい…！ この味って桃子さんと同等の味がする!?!）

以前、任務でいった97管理外世界『地球』のなのはさん達の実家がある翠屋で出してもらったミルクティーや紅茶と同じくらいの味で、これのどかが簡素なのだろうと思
う始末である。

シホさんって魔術も武術も魔法も料理もなんでもできるしやっぱり優秀なんだわ。

一人シホさんの能力に打ちのめされている間にも、

「それじゃ、リラックスも出来ただろうし少し話をしましょうか」

「は、はい…」

「それでティアナ、早速聞くけど、あなた…なのはの訓練ではマジメには受けているけど身についていないでしょう?」

「ツ!?!」

急にそこを突かれてあたしは背に汗を掻いてしまった。

「その表情だと凶星のようね」

そう言つてシホさんは少し目を伏せる。

「最近のティアナの自主練を見ていて思ったことなんだけど、なのはの教導が意味を成していないと思つたのよ」

「そ、それは…」

「なにをそんなに悩んでいるの? なのはの教導はそんなに嫌…?」

「いえ、嫌ではありません。むしろこんな凡人のあたしなんかには勿体無いくらいです」

「…ティアナの悪い点ーね」

「…え?」

「その、自分には才能が無いと思ひ込んで卑下しちゃう姿のことよ」

「で、ですがあたしは本当に才能なんて…!」

「誰がティアナに才能がないって決めつけた…?」

それであたしは首を絞められるような気分させられた。

シホさんの目があまりにも真剣なものだったので。

「…あなたには才能があるわ。毎日見ている私が言うんだから確かよ…」

「…シホさんには才能があるからですか？」

「ん？」

シホさんはポカンとした顔になる。

でもあたしは続けた。

「シホさんはあたしにはない才能があるから、無いあたしを勇気つけるためにそんな事を言っているんですか？」

だとしたら余計なお世話だ。

才能がある人には敵わないんだから。

「……………はあ。そこからすでに勘違いしていたのね」

「そのようですね、シホ」

「うむ。軽い視野狭窄に陥っているようだな」

シホさんが呆れながらそう言う。

何か変なことを言ったのだろうか？

「ティアナ。一つ言っておくわ。私には魔術も魔法も武術も才能なんて無いわ」

「へ…？」

シホさんに才能がない!?

そんな、どうして!

だつたらどうしてここまで強くなれるの?

『魔弾の射手』と呼ばれるようになるまでに強くなつたの?

あたしが軽いショックを受けていると、

「私の師匠筋の人たちから散々言われてきたことだけどね。」

私には武や魔の才能はからつきしなのよ」

「嘘、ですよね…?」

「いいえ、それは本当です」

アルトリアさんが代わりに答える。

「シホには剣術や武術の才能はありません。」

あるのは積んできた経験を活かしての心眼なのです。

シホは今までに死ぬほどの努力を重ねてきて今の力を手にしてきたのです。

魔術の才能も今はかなりできますが所詮後から出来るようになった付け足しの程度。

魔法も資質に救われているだけで才能はありません」

「そんな…才能がないんですか? シホさんは…」

「ええ。私の誇れることといつたらそれこそ弓だけで一直線に飛ぶだけでティアナみた

いに精密にコントロールはできないから。

武術に関しても死ぬほどの努力を重ねてやっと二流の限界分を収めただけなもの。つまり私はどこまで言っても二流どまりで決して一流にはなれない運命なの。

まあ、そう言っても大抵の人は信じてくれないけどね」

そう言つてシホさんは苦笑いを浮かべる。

「でも、私に比べてティアナには才能がある。

あなたの精密な射撃と視野を広く持つてセンターガードでみんなに指示を出せる人が才能がない？

そんな訳ないわ。

ティアナは才能に溢れている。

周りがどんなに才能に溢れている人ばかりでもティアナはティアナよ。

そして想像してみて？ イメージするのは常に最強の自分を……」

「最強の自分……」

「そう、外敵なんて関係ないの。

常に最強の自分をイメージしていればどんな困難な事態になつても心を通ける。

ティアナが常に戦う相手とは自分自身のイメージに他ならないんだから。

だから、あなたは自身だけを見ていけばいいの。

他人の芝生なんて羨まなくていいの。

すっかりとした才能があなたの中には確かにあるんだから…」

そう、シホさんはあたしの腕を買ってくれている。

それがどんなに嬉しいことか、あたしは自然と涙を流していた。

「あ、あれ？ どうして…」

「色々溜まっていたのね。」

あなたはお兄さんの魔法は無駄じゃなかったと証明したいという事だけを考えていたから…だから自分の中に眠っている才能に気づけなかった」

シホさんは優しい笑みを浮かべてあたしの背中をさすってくれる。

「あたしには、才能があるんですか…？」

「ええ、あるわ。」

あなたがそれに気づけば自ずと身についてくるわ。

それになのはの教導もきつとあなたの為になる。

なのがどうしてこんなに無茶をしない教導をするか知っている？」

「い、いえ…」

「だつたらなのはに教導の意味を聞いてみなさい。」

きつとなのはなら教えてくれるわ。

それにティアナはやっぱりまだ視野が狭いのよ。

もっと広げてみれば自分はみんなに支えられているんだなと思う時が来るわ。

特にあなたの相棒のスバルとか。

スバルはティアナにいつでも付き合ってくれていたでしょう？」

「はい……」

「スバルがティアナを信頼しているように、私達もティアナを信頼しているのよ」

「信頼……」

「そう、信頼されている。でなきやフオワードのみんなもティアナの指示に的確に動いてくれるわけないわ」

「あ……」

「そうだ。こんなあたしの指示にみんなは文句を言わずに今まで付き合ってくれた。」

「そっか。あたしはみんなの信頼も見ぬふりをして一人で意固地になって我武者羅に踏ん張っていただけなんだ。」

「どう？ 思い当たるフシがあるんじゃない？」

「はい。あたしはみんなに支えられていて、そして同時にあたしがみんなを支えてあげなきやいけない……」

「そう。それが分かれば及第点ね。ティアナには、私のように過酷な道には進んで欲し

くないのよ……」

シホさんはそう言って少し儂い笑みを浮かべた。

「あの、聞いていいですか……？」

「なに……？」

「シホさん。あなたの過去に、一体なにがあつたんですか……？」

「ん……そうですね。しいて言えば………一人で勝手にあがいて地獄を見てきた。

ただそれだけね。私、反面教師だから」

なんでもないようにそう笑うシホさん。

でも、それは決して誇張ではなく嘘じゃないとあたしは思った。

シホさんの表情があまりにも真剣すぎたから。

だから……

「そうですか……ありがとうございます」

「うん。どういたしまして……それと明日の模擬戦はスターズは私が担当するから、だからティアナ達の全力を見せてきてね。

後、一つ言っておくけど……模擬戦は決して喧嘩じゃない。

己の力を誇示したい気持ちも分かるけど、習ったことを出し切らないと教えている人達に失礼だわ」

そこまで言い当てられた。

ここに来る前までにスバルと一緒に考えていた計画が一気に頭の中から霧散してしまつた。

そうだ。なにを焦っていたんだ。

あたしはあたしの力を出し切れればいいんだ。

「シホさん…気づかせてくれてありがとうございます。ありがとうございます。」

あたし、もう少しで大きな間違いを侵すところでした」

「そう。吹っ切れたようね。ティアナ、今あなたいい笑顔を浮かべているわよ？」

「そうですか…？」

「ええ。無理をしなくてもいいの。」

自然体のままの方が力を存分に発揮できるわ。

だから明日の模擬戦、楽しみにしているわよ」

「はい！ ありがとうございます!!」

「ええ。それじゃもう夜も遅いからさっさと寝て明日に備えなさい」

「わかりました！」

そうだ。あたしの今まで培ってきた成果を出していけばいいんだ。

無理無茶はせず自身の信じてきた力を…!

シホさんから習った一つの言葉…常にイメージするのは最強の自分！

そしてあたしは部屋に戻ると、

「あ、ティア。おかえり。シホさんに呼ばれていたようだったけど大丈夫…？」

「大丈夫よ、スバル。それよりスバル…」

「ん？」

「明日の模擬戦だけど、今日まで考えていた無茶な作戦はなしで行くわ」

「えっ!? で、でもいいの? せっかく二人で試行錯誤して考えてきたのに…」

「ええ、もういいのよ。あたしはあたしの力を全部出しきればいいんだから…」

「そうなんだ。ところでティア…なにか変わった?」

「そういうあんたが変わっていないのよ。あたしはこれからもランスターの魔法を証明していくわ。」

「だけでも無茶はしないって決めたのよ」

「そっか…。よかったあ…今までティア、余裕がないみたいであたし、心配していたんだ」

「そっか…。そうね、確かにシホさんの言う通りだったわね。」

「あたしは視野が気づかないうちに狭くなっていた。」

「こんなに頼れる相棒が近くにいるのにな」

あたしはそう言つてスバルの頭を撫でる。

「ティアく、もつと撫でて〜」

「調子に乗るんじゃないわよ!」

「ギブギブギブ!!」

スバルの首を思いつきり絞めてやった。

今日は久しぶりにいい眠りができそうね。



S i d e シホ・E・S・高町

ティアナが部屋から出て行つてしばらくした後、

「もう出てきてもいいわよ?」なのは、フェイト、ヴィータ、シグナム、フィア、はやて、

シャーリー?」

私がこのためにわざわざ投影したあらゆる魔術的な探知を遮断・透過する『身隠しの布』をみんなに渡して全員の気配を消させていたのだ。

それを解除するとわらわらとなのは達が狭い空間から出てきた。

「はあく…苦しかったわ。でも、さすがシホちゃんの青い君の秘密道具にも匹敵する宝具の布やね。」

私達七人の気配をあの幻術使いのティアナに察知させないやなんてな」

「それよりシユバインオーグ。いい話だったぞ」

「そうだな。ティアナの心にしつかりと響いていけばいいがな」

「大丈夫ですよ。きつとお姉様の気持ちは伝わっています」

「うん、シホのいう言葉は色々と感動した…」

「はい、とても感動しました！」

「シホちゃん、本来なら私がティアナを正さないといけなかったのに…任せちゃってごめんね」

「いいわよ、これくらい。もともと私が言い出した事なんだから…でもこれで明日は今まで以上に手強くなっているわね。」

スツキリとしたティアナなら模擬戦、いいところまで行くとと思うわ」

「そうですね、シホ」

「うむ。もう吹っ切れたようだからな。奏者よ。明日は厳しいぞ？」

「そうですね。それと明日模擬戦が終わったら…なのはの教導の意味を過去を踏まえて教えていこうか」

「そうだね。うう…明日、私達の過去を話すんだね」

「私の過去はまだ話さないけどね」

「シホ、ずるいよ…」

「話せるものではないでしょう？ 私の魔術もばらすことになるのよ？」

「あの…なにか大切なお話みたいですけど、私は聞いていていいんですか…？」

『あ…』

それでシャーリーがおずおずと声をあげて私達はバレたことを悟る。

それでシャーリーには全員に言わないという約束で私の秘密と過去を教えることになつた。

その際、やっぱり非常に驚かれたのが確かだ。



そして翌日、

「さて、午前中のまとめで2on1で模擬戦をやるよ。」

まずはスターズから。相手はシホちゃんだよ。バリアジャケットをまとつて準備して！」

「はい！」

「エリオとキヤロ、ランとレンはあたし達と見学だ」

「はい！」

そこにランが声を上げてヴィータに話しかけた。

「あの、ところでティアさんの件はどうになりました…？」

「万事シホが全部解決しちまったよ。もうティアナは無茶はしないって決めたそうだ」

「そうですか…。よかったです」

「姉さん、なんの事…？」

「あんたはもつと周りに気配りしなさい！」

「な、なにいきなり…!？」

ランとレンが口で何か言い合っているがヴィータは四人となのはを連れてビルの屋上で見学となった。

みんなの視線の先ではシホがスターズの二人と対峙している。

「それじゃ始めましょうか。ティアナ、わかっているとと思うけど…」

「はい！ あたしの全力を出し切ってみせます！ 無茶はせずに！ そしてイメージするのは常に最強の自分です！」

「それならよし…！」

そこに遅れてフェイトがやってきた。

「もう模擬戦始まつてる？」

「ああ、シホがさつきと始めたよ」

「にやはは…。私は働きすぎだと言われて今日一日は見学にされちゃった」

「ま、当然だな」

「うん。なのはは働きすぎだから。それを言うとなシホもメンタル関係で昨日かなり頑張ったもんね」

「うん！」

「なのはは少し頑張りすぎ。」

部屋に戻ってもずっとモニターに向かいっぱなしですよ？

訓練メニュー作ったりビデオでみんなの陣形をチェックしたりしているし…倒れなにか心配なんだから」

「えへへ。ごめんね、フェイトちゃん」

「なのはさん、それにシホさんも訓練中はいつも僕たちのこと見てくれますよね？」

「本当に、ずっと…」

「だから私達は頑張れるんです」

「う、うん…！」

フワード達にそう言われてなのは頬を赤くしているのだった。

そして模擬戦ではティアナの放つ弾丸、スバルの攻撃が丁寧の一つ一つ潰されていき二人は息を乱している。

それに対してシホはずっとツヴィリングフォルムで応戦するといった行動だった。

「スバル！　なんとしてもシホさんの本気を出させるわよ！」

「オツケイ！」

そしてスバルのウイングロードでスバルに追尾するようにクロスファイヤーシユートがシホに向かっていく。

「でやああああー！！」

スバルの拳がシホに直撃するがそれはシールドで防がれる。

だがシホの背後をクロスファイヤーが迫る。

スバルの攻撃を防御しているので片手でシホはすべて切り裂き、スバルも攻撃をいなされてシホから通り過ぎる。

「いまだ！　クロスファイヤー………シユート！」

またしても弾丸が迫ってくるがシホは危なげなく捌こうとする。

だがそれらの弾丸はすべてフェイクでシホが切り裂こうとした瞬間に消え失せ、またしても背後から一つの弾丸がシホを襲いにやって来る。

「フェイクか……。ならこれもフェイクかな？」

そうやってシホは今度こそ弾丸を切り裂いた。

しかしその弾丸は特殊性で切り裂かれた瞬間に弾けてシホの腕を覆う。

「これは……!？」

「はあ……はあ……バインド式の弾丸です。これ、結構神経使いますからなかなか使わないんですけどね……」

「そう、なかなかいい弾丸だわ。初見だとわからないものね。いいわ。少し私の本気を見せてあげる」

シホはバインド弾をもう片方の剣で切り裂き、

「フォルム、ファイアー！」

《A x d f o r m.》

そこにはとても巨大なギザギザした剣が握られていた。

これこそヘラクレスの斧剣を元にした剣である。

シホはそれを構えて、

《N i n e B u l l e t R e v o l v e r.》

「ナインライブズブレイドワークス!!」

まずスバルにその九つの斬撃を叩き込んでスバルは全部ガードできずにダウンする。

「ッ！」

《Sch・tzeform》

「ナインライブズ！」

ボツ！

今度は弓から九つの魔力矢が放たれてそれらはすべてホーミング性能でティアナに殺到する。

「わあああぁー！！？」

すべてを浴びてティアナは沈黙する。

「よし、模擬戦終了ね」

「あ、ありがとうございます…。」

「それじゃ…」

「うっ…」

「ティアツ!？」

そこでティアナが突然倒れてしまったのだ。

「どうしたの？」

「どうやら疲れが溜まっていたから強制的に眠りについてしまったようね…：しようがな
いか。」

スバル、ティアナは私がシャマル先生のところへ運んでおくからあなたは残りの模擬戦を見学していなさい」

「わ、わかりました…」

それでシホはティアナを医務室に運んでいき、

「どうしたの、シホちゃん？」

「はい。ティアナが気絶してしまいました。寝かせに来ました」

「そう。でもティアナ、気絶しているのにいい顔ね」

「そう思いますか…?」

「ええ」

「それじゃ起きるまでティアナを見ています」

「そう。それじゃ寝かすから服を脱がさなきゃね！」

「変にコスプレはさせないでくださいね…?」

「患者さんにそんなことはしませんよ」

「いえ、過去の実績がありますから…」

「そ、それを言われると…」

シャマルはそれで引き下がっていく。

それでシホは気絶しているティアナに、

「…それでいいのよティアナ、よく頑張ったわね…」

そうやってシホは安らかに眠るティアナの顔を覗き込んでいるのだった。

第三百二十二話 『過去と大切なこと』

S i d e ティアナ・ランスタール

「うつ…」

目を覚ました。

でも少し見慣れない天井だった。

それで最後の記憶を思い出そうとしていると横から声をかけられた。

「ティアナ、起きたのね」

そこには優しい笑みを浮かべたシホさんがいた。

綺麗だわ…。

つと、そんな事を考えている時じゃなくて。

「あたしは…」

「ここは医務室。ティアナは模擬戦後に気絶してしまったのよ。覚えてる？」
それで記憶が鮮明に思い出されてくる。

「そうだ。あたしは気絶してしまっただ。」

「す、すみません！ 気絶なんてしてしましまして…！」

「平気よ。付き合っていた私も久しぶりに休むことができたしね」

シホさんはそう言って笑う。

それで少し恥ずかしくなり、ふと下半身がスースーすると思ってみたらズボンを履いていなかった。

それでさらに恥ずかしくなった。

そこにシヤマル先生も部屋に入ってきて、

「あ、ティアナ。大丈夫？」

「はい。ご迷惑おかけしました…」

「そう。でもどこも怪我はないようで安心したわ」

「はい…」

それでシヤマル先生はあたしのズボンを持ってきてくれた。

ふと時間を見ると、

「九時過ぎ!?! よ、夜!?!」

「よく熟睡していたわよ。」

死んでるんじゃないかって思うくらい。

シホちゃんはティアナが起きるまで付き合うつて言うしね」

「はい。責任は最後まで見ないと思ひまして」

「最近あんまり寝ていなかったんでしよう？」

「は、はい……」

「溜まつていた疲れが一気に来ちやつたのよ。もうこんな無茶な行動はしないでね？」

「はい。わかつています。あたしはシホさんに正してもらいましたから」

「そう……。よかつたわね、シホちゃん。ティアナの心を救えたのね」

「はい、もうティアナは大丈夫だと思います」

「あ、あの！ シホさん、何から何までありがとうございます！」

「それはなのはやスバルにも言つてあげてね？ 二人共すごく心配していたから」

「はい！」

それであたしはズボンを履いて自室へと戻つて、

「あ、ティア！ やつと起きたんだね」

「ええ。心配かけたわね、スバル」

「ううん。大丈夫だよ。……それより今日は残念だったね」

「平気よ。改めてシホさんの心の器の大きさに気づかされたから。」

それよりなのはさんに謝りに行こうか。昨日までの無茶な訓練の件に関して」

「そうだね！」

それでオフィスまで二人で向かってみるけどそこにはフェイトさんしかいなかった。

「あ、ティアナにスバル。もう大丈夫？」

「はい！ ご心配おかけしました。ところでなのはさんは…？」

「今はまだ訓練場で色々とお仕事をしているところだよ」

「そうですか…それじゃ伝えといてください。なのはさんに謝りたいと…」

「わかった。それとね、二人共」

「はい…？」

「明日…ううん、もしかしたら今日にもなのはの教導の意味も兼ねて私達の過去を教えると思うから覚悟しておいてね」

なのはさん達の過去。それって…。

とりあえず、

「わかりました！」

「それじゃ失礼します」

それでスバルと二人で部屋に帰り際、

「なのはさん達の過去ってなんだろうね？」

「さあね。でも、大事な話だと思うわ」

「そうだね」

そして自室でゆっくりとしている時だった。

ブーブー！

突然アラートが鳴り響き、あたし達はすぐに準備をするのだった。



S i d e シホ・E・S・高町

アラートにすぐに管制室へと向かう私達。

そして中に入ると、

「ガジェット航空二型、四機編隊が十体、十二機編隊が三体：計76機確認されました。発見時から変わらずそれぞれ別の軌道で旋回飛行中です」

「場所はなにもない海上か。レリックの反応もないし、付近には海上施設も船もない」

「まるで撃ち落としに来いと誘っているような…」

その通りね。

こちらの戦力を測っているのだろう。

「テストアロツサ・ハラオウン執務官はどう見る?」

それです。まずフェイトに聞いてくるはやて。

「たぶんスカリエツティは私達の情報が欲しいからああしてガジエッドを動かしていると思うんだ」

まずフェイトがそう答える。

「うん。こちらは超長距離砲撃を叩き込めば済む話やしな」

「一撃で全機撃墜です!」

ラインが元気にそう声を上げる。

「うん。だからこそ奥の手は見せない方がいいと思うんだ」

「そうやな。この程度でリミッター解除は底を知られるからな。高町教導官はどないや?」

「こつちの戦力調査が目的ならなるべく新しい情報を出さずに今までと同じ行動で沈めていけばいいと思う」

「シユバインオーグ教導官はどうや?」

「そうね…逆転の発想をしたらどうかしら?」

「逆転の発想……？」

「そう。一撃で沈めてそれをこちらの奥の手と思わせるのよ」

「うーん……でも、それやとやっぱリミッター解除になってまうで？」

「忘れてるわよ、はやて。『魔術』にはリミッターなんて存在しないって……」

「ちよっ……！　ここでまさか宝具使う気か？」

「ええ。あの程度ならそんなすごい宝具を使わなくても撃墜可能。

みんなの奥の手も出さずにすぐにかたがつけられるからお得よ」

「うー……まだ宝具の存在を知られるのはまずいと思うんやけど？」

「平気平気……！」

それに宝具に対抗できるやつなんて私の世界じゃあるまいしそうそういるわけないわ」

「そか？　なら任せてええか？」

「ええ、任せて。この程度の宝具なら知られても痛くも痒くもないから。

私が知られてしまうもつとも怖いのは固有結界一つだけだしね」

もちろんこの発言に慢心要素はかなりあるだろう。

私はわざと言っているのだから。

でも今回はあえて切り札の一つを出す。

囿として危ない橋を渡ろうとしているのは百も承知だ。

でも、もしかしたらこれでアクションを起こす奴がいるかもしれない…。

そう、例えば隻眼の魔術師の男とかね。

これで何も起こらなければそれでいい。

でも、これでなにか反応を示せばアタリだろう。

そのうち行動を起こすかもしれないから待ち構えていないとね。

そんなこんなで作戦は決まり私達はフオワード陣が待っているヘリポートまで向かう。

そこではすでにみんなが集まっていた。

「ティアナ。もう大丈夫…?」

「はい! ご心配おかけしました! もう無茶な行動はしません!」

「うん。ならいいかな。」

それと今回の任務はシホ隊長が一撃で沈める予定だからみんなは見てるだけでいいよっ。」

「え…一撃でつて…」

「あんなに距離が離れているのにできるんですか?」

みんなが一樣に不安な表情をしている。

「任せなさい。見事一撃で沈めてやるわ。久しぶりに宝具を使うしね」

私の『宝具』という言葉にフォワード達がハテナな顔をする。

だが私はみんなの前でその異常性をすぐに見せることになる。

久しぶりに見せる私の本来の姿。

「――トレース・オン投影開始」

デバイスの弓ではなく使うのは投影した洋弓。

デバイスでは宝具の魔力に当てられて悲鳴を上げて耐えられないのでしようがない。

そして、

「トレース・フラクタル投影、重装」

投影する宝具は『フルンティンゲ赤原猟犬』。

それを弓に番えて私は時間をかけて魔力を注ぎ込む。



Side レン・ブルックランズ

宝具を使うと言ってシホさんはその手にデバイスではない弓を手に出した。

あれがシホさんの言う転送魔術？

こんな魔力のこもった弓を転送できるんだ。

でも、そんなものはまだ甘かった。

トレース・フラクタル
「投影、重装」

そう唱えた途端に現れたトゲがたくさんある剣？ それとも矢？ それらを転送し

てきた途端、寒気を感じた。

原因はその矢から溢れてくる凶悪なくらいの魔力。

それに思わず恐怖を感じている僕がいた。

見れば僕以外のメンバーもその矢から感じる桁違いな魔力に圧倒されて汗を流して

無言になっている。

「ひ、久しぶりだね。この感覚は…」

「…うん。やっぱりシホの使う宝具は魔法と比べて桁違いだ…」

「だな。あたしでも恐怖を感じちまう…」

「…ああ。だが私としては心地いい空気だ」

「はいです」

なのはさんもフェイトさんもヴィータ副隊長もシグナム副隊長もファイアット副隊長もシホさんの放とうとしている矢に圧倒されているようだ。

S i d e ラン・ブルックランズ

私は前からシホさんの使う魔術：転送魔術の事を聞いていたけど、私達の使う通常の魔術と比べてもその威圧感は桁違い。

まるで矢を番えているシホさんが別人ではないかと思うくらいの冷たさを感じてしまふ。

これがシホさんの魔術師としての顔の一端。

私の想像以上だ。

体の震えが止まらない。

レンが思わず私の手を握ってきたけど今回は私は私も握り返した。

だつて一人じゃなんか怖い。

ティアさんもスバルさんも手を握り合っていてなんとか耐えている。

エリオとキヤロもそうだ。

そして長い時間が経過したような感覚の中、静かにシホさんがその真名を解き放つ

た。

「…赤原を往け、緋の猟犬……………フルンティング
赤原猟犬!!」

そして放たれた赤い魔弾は一直線に海上へと向かって放たれていつて遠くの海上では何度も爆発音が響き渡る。

シホさんは、見えているんだろうな。

前に聞いた話だけどシホさんの視力は魔術で強化して最高四キロ先まで見渡せるといふ。

だから今も何度も起こっている爆発はシホさんが目視できているからなんだ。

「残り……………10、9、8……………とどめ……………壊れた幻想!」
ブローケン・ファンタズム

一際大きな爆発が感じられた。

そして、

『が、ガジェットド航空二型……………76機全機撃墜…。もう存在は確認できません』

ロングアーチからの報告が通信で聞こえてくるが、私達はただただその威力に目を見張ることしかできないでいた。

『シホちゃん、ご苦労さま。もうガジェットの反応はないからみんなを下がらせてええよ』

八神部隊長からの通信でシホさんは、

「了解よ」

もう、先ほどの魔術師としてのシホさんの姿はなく普段のシホさんの姿に戻っていた。

その手にはすでに弓は握られておらず無手だった。

それで私達は溜まっていた息を吐き出す。

あんなものは初めてだったからとても疲れた気分だ。



S i d e ジェイル・スカリエツィ

………なんだね？ あれは。

一つの魔法とは違う異質な魔力反応がガジェットに向かってきたかと思うとその矢は次々と軌道を変えて一体、また一体と撃墜していく。

ある時には軌道上にあるガジェットを三機か四機同時に貫いて爆発させる。

そして減っていくガジェット達。

撃墜させるために放ったものだがここまで一方的だと何のために出したのか分から

なくなってくる。

そしてもう後数機となって突然その矢は破裂するかのよう爆発を引き起こし残りのガジェット達を巻き込んで爆散した。

私の想像を遥かに越えた威力…。

一体機動六課はなにを放ったというのだ…？

魔導師の姿は確認できなかった。

だとしたら超長距離からの狙撃だともいうのか？

私が考えを巡らせているとそこに一通の通信が入ってきた。

誰かと思つて出てみると、

『やあドクター』

「おお…。魔術師殿か。どうしたのかな？」

『なに、君のおもちやが瞬くもなく撃墜されたと思つてね。見ていたぞ？』

「そうか。で、君はあれがなにかわかるのかい？」

『ああ。あれは“宝具”と呼ばれる神秘の塊だ』

「宝具…？」

『そうだ。しかもあれはシホ・E・S・高町の力の一端に過ぎない』

「あれで一端かい？」

『ああ。ここ数年、何度か私の鍛えた魔術師を送り込んではあるが奥の手を出したことなど一度もない』

「君は彼女の奥の手を知っているのかい？」

『さすがの私でもそこまでは知り得ていない。だが宝具を扱える異常性だけは確かだ』

ふむ、だとするとこれは機動六課の戦力を見直す必要があるな。

「わかった。情報感謝する」

『ああ。せいぜい頑張りたまえ。私の手が借りたかつたらいつでも言ってくれ。力にな

ろう』

「ああ」

『では失礼するよ。良い夜を…』

それで通信は切れる。

しかし、そうなるとシホ・E・S・高町……Fの遺産達よりも是非実験材料として入手したい人材だ。

どうやって彼女を捕らえようか？

真つ当な手段では彼女を捕らえる事はまず難しいだろう。

まずは外掘りから埋めていくか？

私の計画通りにまずは彼女達から…。

私は思惑を広げながらもその事だけを考えていた。

「ふふふ………あはははは！ 楽しみで仕方がないよ!!」



それから現場待機も解除されそれぞれが今日の事件はもう終わったことだし解散という流れになろうとしたがシホがそれを止めた。

「シャーリー、少しいいかしら？」

「はい？ なんですか、シホさん？」

「明日話す予定だったなのはの教導の意味を今みんなに教えない？ 私達の過去も踏ま

えて……」

「……いいんですか？」

「うん。私もいいと思うよ」

「そうだね」

なのはとフェイトも賛成したので全員で話をする事になった。

それでロビーに集まってシャーリーがモニターを展開して代表して話し出す。

「……昔ね、一人の女の子がいたの」

最初はごく普通の女の子だった。

シホという異世界からの来訪者の存在もあつたがまだ魔法と関わりを持たない一般人だった。

「友達と学校に行つて家族と一緒に幸せに暮らして、そういう一生を送るはずだった」
でも、ユーノとファイアットという双子の出会いで、それから始まるのはとシホの魔法との出会い。

「もともと魔術師だったシホさんは別として、魔法学校に通っていたわけでもなく、特別なスキルもあつたわけでもない。

偶然の出会いで魔法を得てたまたま魔力が大きかつただけの九歳の女の子」

「それが私…高町なのはなんだよ」

「ま、私はなのはとは違い魔術を行使してなのはの手伝いをしていただけけどね…」

「そして魔法と出会つてから数ヶ月して命懸けの実戦を繰り返した…」

なのはとフェイトが戦う光景が映されてエリオ達は驚きの声を上げる。

「私は当時、家族環境が複雑だったんだ。

あるロストロギアを巡つてなのはとシホとは敵同士だった。

この事件の中心人物は私のお母さん…プレシア・テスタロッサだった。

それから名前が取られてP・T事件と呼ばれた。

あるいはジュエルシード事件とも呼ばれているの」

そしてなのはのスターライトブレイカーの光景が映されて、

「集束砲!?! こんな大きな…!」

「九歳の女の子が…」

「ただでさえ大威力砲撃は体にひどい負担がかかるのに…」

「うん。当時の私は無茶を続けてきたんだ…」

なのはが少し暗い表情でそう言う。

「そして然程時も経たずに戦いは続いた」

「私達が深く関わった闇の書事件…」

「襲撃戦での撃墜未遂と敗北」

そしてなのははリンカーコアを奪われ、シホが重傷を負う光景が映されて、

「シホさんのあの傷…!」

「あんな大怪我を負ったら命の危険もあつたんじゃ…!?!」

「うん…。当時の私は即緊急入院しなければいけない程の大怪我を負った。まあ、少し

事情があつてすぐに治つただけだ…」

シホはアンリミテッド・エアの覚醒により覚醒したアルトリアの事を語った。

「それに打ち勝つたために選んだのは当時はまだ安全性が危うかったカートリッジシステ

ムの使用……」

「私は体の負担も無視して自身の限界値を無理やり引き出すフルドライブ……エクセリオンモード。」

誰かを救うため、自分の想いを通すための無茶を私は使用し続けた……。

だけどそんな無茶を続けて体に負担が生じないわけなかった……」

「事件が起きたのは入局二年目の冬……異世界での捜査任務の帰り。」

ヴィータちゃんやオリヴィエさん達と出かけた場所でふいに現れた未確認体。

いつものなのはちゃんだったら何の問題もなく味方を守って落とせるはずだった相手。

でも、その時未確認体はAMFでなのはちゃんの魔導を完全に封じてしまい……」

「私は……撃墜されてしまったの。もともと無茶も崇つていて動きが万全じゃなかったから簡単に敵的にされてしまった……」

「そして結果がこれ……」

そこではなのはの重傷の姿が映された。

それにフォワード陣は声を上げる。

信じられないのだろう。なのはのこんな姿が。

「なのはちゃんは無茶して迷惑をかけてごめんなさいって私達の前では笑っていたけど

…

「私の前だけでは何度も後悔して泣いていたわ…」

シホの言葉になのはは顔を赤くして、

「シホちゃん、それは言わない約束だよ」

「あ、ごめんごめん…」

今でこそこうして笑いあつて話しているけど当時のなのははもう飛べなくなるかもしれないという思いで壊れかけた。

「無茶をしても命をかけてもゆずれぬ戦いはある。」

だがティアナ。お前がミスシヨットをしたあの場面は命をかけてでもどうしてでも討たねばならない状況だったか？」

「…いえ、それは間違いだつたと思います。それを、シホさんに気づかせてもらいました」

「そうか。なら私からはもう言う事はない」

それでシグナムはフツと笑う。

「私は…みんなに同じ思いをしてほしくない。」

だから無茶なんてしなくてもいいように、みんなが元気で帰ってこれるようになってほしいでみんなに教導しているんだ」

「……………」

ティアナは少し泣きそうになっていて、なのはと二人で話す機会を作って二人で話すことになった。



S i d e スバル・ナカジマ

あたしは今シャリーさんやフォワードのみんなとなのはさんとティアの話す光景を見ていた。

「みんなはまだ原石のようなものなんだよ？　磨けば光る。

エリオはスピード、キャラは優しい支援魔法、スバルはクロスレンジの爆発力、レンは硬い防御での守り、ランは近接での大威力での斬撃…。

五人を指揮するティアナは射撃と幻術でみんなを守って知恵と勇気でどんな状況でも切り抜ける。

そんなチームが理想系でゆっくりだけどその形に近づいていっている」

耳を凝らしてよく聞いてみるとなのはさんはあたし達の事をどこまでも考えてくれ

ている。

嬉しくなってくる。

「それも、シホさんに教えてもらいました」

「うん、知ってるよ。実は私達もあの場にいたんだよ。」

シホちゃんに隠れていてって言われて隠れて聞いていたんだ」

「えっ!？」

「でも、私の言いたいことを全部シホちゃんに持つてかれちやったからなあ…。」

やっぱり私のお師匠さんにはまだまだ敵わないってところかな?」

「いえ、なのはさんの話も役に立ちました…」

「そう? なら嬉しいな。でもティアナも考えとしては間違いではないんだよ」

なのはさんはクロスミラーージュを持つと、

「システムリミッター、テストモードリリース」

そう言つてティアアにクロスミラーージュを渡して「モード2」って言つてみてといった。

そしてティアアが命令するとクロスミラーージュがダガー形態に形をとつた。

「ティアアは執務官志望だから、ここを出て執務官を目指すようになったらどうしても個人戦が多くなるし、将来を考えて用意はしていたんだよ」

それではなのはさんの気持ちに気づかされてティアアは涙を流して何度も「ごめんなさい

…」と言って謝っていた。

それであたし達も感激しているところに頭になにかを振り下ろされていた。

見るとシホさんがどこから持ってきたのか虎のストラップがついている竹刀を持ってあたしの頭を叩いていて、

「出歯亀もいいけど自分達の事も考えなさい。ティアナもやつと吹っ切れたんだから…」

「……はい……」

そうだ。なのはさんだけじゃなくてシホさん達もあたし達の事をしつかりと見てくれている。

それなら頑張らなきゃいけないよね！

「シホさん！なのはさん共々これからも教導よろしくお願いします！」

「ええ。みっちりとしごいてあげるわ。覚悟しておきなさいね？」

「……はい……」

そして翌朝、

フォワードの皆とフェイトさんと集まって、話をしながら訓練場まで向かう。

そこでフェイトさんが語る。

「技術が優れてて華麗に戦える魔導師をエースって呼ぶの。

その他にも優秀な魔導師を表す呼び名があるって知ってる？」

それであたし達はなんだろうと頭をひねる。

でもすぐにフェイトさんが、

「その人がいたら困難な状況も打破できて、どんな厳しい状況でも突破できる…：そういう信頼を持って呼ばれる名前、ストライカー…」

ストライカー、か…。

あたし達も将来そんな魔導師になれるかな？

「なのはやシホは訓練を始めてすぐの頃から言っていたんだよ？

うちの六人は優秀なストライカーになれるはずだって…。

だからうんと厳しく、そして大切に丁寧に育てるんだって豪語していた…。

だからそんな二人の気持ちに伝えられるように、みんな頑張っていこうね？」

「「「「はい！」「」」」」

なのはさん達がそんな事を思っていたんだ。

だったらなのはさん達の目指すストライカー。

必ずなつてやろう。

あたし達はそう思った。

そしてなのはさん達のところに到着して、

「それじゃ朝練頑張ろうか！」

なのはさんの一言であたし達は元気に返事を返すのだった。

第百三十三話 『ファイアットのシホ観察記録』

Side ファイアット・スクライア

…ん？

ああー！

やっと私の回が回ってきましたか。

………つて、なにメタな発言をしているのでしょうか。反省反省…。

さて、気を取り直しまして…。

…ティアナの一件が片付いて、ティアナはお姉様にさらに憧れを持ったらしいです。

それで最近はお姉様、ティアナ、それにたまに訓練に付き合うヴァイス陸曹の三人でよく個人レッスンをしている。

それではなはさんが少し嫉妬していたりするのは、まあしょうがないですよ。

それと近々お姉様達はフォワード達のみんなにお休みをやろうという話が持ち上がっている。

機動六課が始動してからずっと訓練漬けでしたからねえ…。

久しぶりの休日を楽しんでもらいたいですね。

え？ 私達にはないのか、って？

当然ありますよー。

ただそういう描写が描かれていないだけで適度に休息はとっています。

…って、また誰に説明しているのでしょうか、ホントに…。

さて、話が変わりますが本日は私が兼任している無限書庫の兄さんの手伝いで司書の仕事もありません。

それに機動六課での書類仕事も私にとっては軽いものばかりですから暇というわけでもありませんがお姉様でも観察してみましようかという事にしました。

「マグナ、お姉様は今どこにいるか分かりますか？」

《はい、今はオフィスで書類整理などをやっています。見に行きますか、マスター？》

「そうですね。それじゃ私も一緒に残りの分も終わらせてしましましょう」

それでオフィスに向かいお姉様に近づく。

けどお姉様は私が近づいているのがすぐに察知したらしくデスクに向かいながらも、

「…フィア？ 私になにか用？ 気配を殺しているようだけどバレバレよ」

「あ、あはー…バレちゃいましたか。さすがお姉様です」

「フィアは普段は優秀なのに、自分で言うのもなんだけど私絡みになると行動が甘くなるからすぐにわかるのよ」

椅子を回転させて私の方に向き直りながらお姉様はそう言う。

うう…そんな私、脇が甘いですかね。

お姉様をビックリさせるにはもっと精進が必要です。

頑張りましょう！ おー!!

と、一人、心の中で自分を鼓舞してから話しかける。

「お姉様、本日の予定はどうなっていますか…？」

「予定、ね…。そうね、午後の教導はなのが受け持つって張り切っていたのよ。

だから今日はちよっとくつろげる時間をもらった事だし今ある書類整理が終わったら自分事でもしようかな、と思っっているわ」

「そうですか。それじゃ今日は私も手が空いていますのでお付き合ひさせてもらっても大丈夫ですか…？」

「ええ、大丈夫よ」

と、そこにリインがフヨフヨと飛んでいるのを発見。

お姉様はそれはとてもいいカモを発見したような表情になる。

なにか悪巧みを思いついたのか、でもお姉様に限ってそんな事はないから、はたまた
リインにとって良いことなのか。

でも、私が考えている間にすでにお姉様はリインに話しかけていた。

「リイン、ちよつと今時間ある…?」

「ん? なんですか、シホさん?」

「ちよつとリインにしか頼めない事をお願いしようと思ったのよ」

「私にですか…?」

「そう。きつとそれははやてにとつて心の支えとなつただろうから…」

…? どういうことだろう。

はやてに関係する大事な事なのでしょうか?

「わかりました。えつと…今用事は、ありません!」

リインが元氣そうにそう声を上げてお姉様の頭の上に乗った。

いいな。

私もリインサイズだつたらお姉様の頭に…つて、そうだ!

最近していないのですっかり忘れていたが、私は昔はお姉様と一緒にいる時はフェ
レットの状態が普通だつたのだ。

「お姉様！ 久しぶりにフェレットモードになってもいいですか!？」

「別にいいけど…どうしたの？」

「はい！ リインを見ていたら昔を思い出しましてフェレットになってお姉様の肩に乗りたくまりました！」

「そ、そう…素直なのは結構なことね」

「フィアットさんも甘えん坊さんですね」

「リインにそう言われると少し悔しい気持ちになるのはどうしてでしょうか…？」

それでつい張り合ってしまう私とリインですがすぐにお互いに笑顔になって、私はフェレットモードになってお姉様の肩に乗る。

「そうです。フィアットさんも素直になればいいのです」

「そうですね」

するとオフィスにいる他の人達がなぜか「いいな」と呟いていたけど誰に対して言っていたのでしょうか？

やっぱりお姉様ですかね？

そんな事を考えていた。

「さて、それじゃ私・土郎・キャスターの共通工房へと向かいましょうか。そこでちよつと『平行世界の観測』でも…」

「えっ!？」

お姉様が何気なく呟いた発言に私とリインは揃って声を上げてしまった。

「お、お姉様…？ 今、聞き間違いだったら良かったんですけど、平行世界の観測と言いませんでしたか…？」

「ええ、言ったわよ？」

「し、シホさん！ やっぱり私は遠慮するですう〜！」

リインが飛んで逃げようとしているがお姉様は素早くリインの襟をむんずと掴む。

「もう…失礼しちゃうわね。もう前みたいにかつり失敗はしないから安心なさい。」

それに今回はリインがいないと話が始まらないんだからおとなしくついてきなさい」

「怖いですよー！ 平行世界に飛ばされちゃいます〜！」

私はもう落ち着きを取り戻しているというのにいまだにリインは飛ばされるのが怖いのか、ジタバタと暴れている。

そこにお姉様は、

「えいっ！」

「キュツ!？」

思いつきり襟を絞めて無理矢理リインを黙らせ、お姉様と真正面で向かい合い、

「もう、失敗しないって、言っているでしょう…？ ね…？」

「は、はいです…わかりましたですう…」

お姉様の黒い笑みでリインはついに反抗心が削がれたのかそれ以降は素直についてきた。

うん。お姉様は美人ですから怒りの笑みは怖いですよー。

私は反抗しなくて正解でした。

それから三人でお姉様達の工房に到着する。

そこにはすでに魔法陣が敷かれていて準備はバッチシであるようだ。

それで私は気になったのでお姉様に訪ねてみることにした。

「…ところでお姉様。今回も平行世界の観測らしいですが、リインが関係しているというのはどういう事でしょうか？」

「あ、それは私も知りたいです」

私とリインでそうお姉様に聞いてみる。

するとお姉様は笑みを浮かべながら、

「はやてとの一方的だけど約束を果たす時なのよ…」

「約束ですか？ はやてちゃんとの…？」

「ええ。フィアとリインは聖杯大戦事件の詳しい内容は覚えているわよね？」

「え？ えっと、はい…」

「私ははやてちゃんにお話を聞いただけでですけども…」

「それで十分よ。それでその事件ではやての身に何が起こった…?」

「なにがって…あつ!？」

「そ、そうです! 『反英雄ヤガミ』の宝具『闇の書の悪夢』の力で悪夢の世界に閉じ込められてしまいましたです!」

私とリインは同時にその解に至り、お姉様がこれからなにをしようとしているのかなんとなく理解できた。

「その通り…。そして、はやてはその悪夢の世界で誰かの声を聞いて勇気づけられて悪夢を跳ね除けて世界を脱出することができた」

そうです。

どうしてこんな大事な話を忘れていたのでしょうか。

リインも今思い出したかのような顔になっていきますし。

「第二魔法、平行世界の運営はうまく運用すれば時間も越えることができる…。」

だから、今から平行世界の過去のはやてを助けにいくわよ。

私達のこの世界に似た世界に繋ぐ架け橋になるために…」

「シホさん! ぜび、お付き合いですせてくださいです!」

リインは大声を上げてお姉様に抱きつく。

興奮しているらしく顔がとても赤い。

「うん。ラインもオツケイなようだし、始めるわね？」

あ、それと注意点としてはその世界ではまだラインは生まれていないし、まだ士郎とアインスも付き合っていないから当然ツルギも生まれていない。

そここのところの言葉を注意して発言してね？

でないと思図せずして未来の情報を与えてしまうかもしれないから……」

「了解です！」

「あの、私はどうしていれば……？」

私が聞くが、

「フィアはただ見守っていて。

はやての話からして干渉できるのはラインの言葉だけだから」

「わかりました」

「それじゃ始めるわね」

そしてお姉様は寶石剣を構える。

すると寶石剣から七色の光が溢れ出して魔法陣も赤く光り出す。

「……——私のイメージする時代と時期、場所へと接続……座標、固定」

お姉様は目を瞑りながらそう呟き、それから私達でも分からない難しい詠唱を唱え始

め出す。

すると少しずつだが目の前にリインサイズなら通れそうな穴が展開し開き出す。

リインはその穴を覗き込んだようでも驚きの声を上げた。

「はやてちゃん、氷の中に閉じ込められているです！」

「…座標は正確に合っていたようね。よかったわ」

お姉様は無事に成功して安堵の息を吐く。

でも寶石剣を構えているままだ。

きつとこれを解くとこの実験も終わってしまうのだろう。

「さあ、リイン。今、はやての心は折れかかっているわ。だからあなたが救うのよ」

「はいです！ ですが、どうやって救えば…？」

「はやてを思いながら語りかけなさい。」

そうすればはやてにもきつと言葉は届くはずよ。

時間も有限だからそう長く平行世界の間を繋いでいられないわ。

だから、早く済ませてね？」

「わかりましたです」

それでリインは一度目をつぶり息を何度も吐いたり吸ったりを繰り返す。

そして真剣な表情になり、

「いきますよー!」

と、大声を上げる。

そして優しい声を出して、

「大丈夫ですよ、はやてちゃん…」

《誰…?》

ッ! 今、はやての声が私にも聞こえてきました。

「はやてちゃんはとっても強い人です。だからこんな悪夢もすぐに抜け出すことができます…」

《…あなたは、誰なんや? どうして、私の事を…》

「はやてちゃんは知らなくても、私はよく知っています…」

おそらく向こう側でははやては誰なのか考えていることだろうと思います。でも、耳を傾けてください。

ラインは、あなたの家族なのですから。

私は思わず手に汗を掻きながらこれが成功することを祈った。

「こんな氷、はやてちゃんならすぐに壊せるはずです!」

《…無理や。体が一切動かせへんのよ?》

「…それは意思がまだ弱いからです…」

もつと、強く想ってください。

シグナムやヴェータちゃん、ザフィーラやシャマル…そしてアインズに士郎パ…じゃなくて士郎さん、キャスターさん、アルクエイドさん、志貴さんの事を。

はやてちゃんの大事な家族、大事な友達、大事な思い出、強い意志、強い心…。

それらをはやてちゃんが心から望めば、きっと奇跡は起きます。だから諦めちゃダメです！」

…今、かなりのシリアスモードなのにうっかりリンは士郎さんの事を士郎パパって言いそうになりましたね。

まあ、目を瞑っておきましょうか。

《…私にも、できるかな？ そんなすごいことが…》

「はい！ はやてちゃんが望めばなんでもできます！」

《…そか。なら気張らんとアカンな！》

どうやらあちらのはやても悪夢を跳ね除けられそうですね。

その証拠にリンが、

「その調子です。はやてちゃんの意味は今や無限大です。だからこんな場所、すぐに抜け出しましょう…？」

《…そうやな！ ありがとな。…それと、せっかくやからあなたのお名前、教えてくれへ

ん……?》

「今は、まだ教えることはできません……」

《……そうか。残念や……》

「でも、いずれまた会えます！ はやてちゃんが望むなら私はいつでもあなたに応えま
す！ だから……待っています」

《……そか。なら楽しみにしているわ!》

「はい！ 私のマイスターはやて……」

リインがその言葉を言い切った時だった。

「……ここまでね」

そう言ってお姉様は宝石剣の構えを解くと七色の光は消えていつて無色に戻って
い

く。
「シホさん……過去のはやてちゃんと会わせてくださってありがとうございます……」

リインは涙を流しながらそうお姉様に告げる。

「うん。さて、ここまでなら感動の展開で終われたんだろうけど……そこ……そこ……」

「!?!」

お姉様が入口に向かって竹刀を放つ。

「あいたあッ!?!」

するといきなり声が響いてきてそちらに向くとそこには頭を押さえうずくまっていたのはやての姿があつた。

「はやてちゃん…?」

「はやて…?」

「うう…シホちゃん、ひどいで? いきなりはないやろう?」

「盗み聞きをしているのはやてが悪いのよ。」

ふとした拍子で観測が失敗したら目も当てられないんだから…。で、なにか言う事は
?」

「ごめんなさい…」

「よろしい」

はやては素直に謝ってきたのでお姉様も素直に許したようである。

それから場は落ち着いてきて、

「…でも、やつぱりあの時の声はリインやったんやね?」

はやてはリインをその胸に抱きしめる。

「うぷっ…はやてちゃん、苦しいです」

「今はこうさせて。私を助けてくれてありがとうな。リイン」

「はいです…」

「そしてシホちゃん、世界を繋げてくれてありがとう」

「ええ」

それからはやてとリインの二人はとても仲良さげに部屋を出ていった。

そしてそれを見送った私とお姉様は、

「…これでよかったのよね。」

平行世界…しかも過去に干渉はあまりしない方がいいと思うんだけど、これは歴史通りに一つの平行世界のはやての未来を救えたわけだしね」

「そうですね…」

それで私達はこれからのなにをしようかという話になり、

「今日分の書類仕事は終わっていることだし、はやての件も解決したことだし…」

「なにをしましょうか…あ、そうだ。お姉様、久しぶりに“アレ”をやってくれませんか？」

「アレ…?」

私はある事を提案してみた。



時間は夜遅くになり、お姉様も私もつい熱が入ってしまいました。

そこに誰かがお姉様の工房に入ってくる気配がします。

「シホ、それにフィアット嬢も。二人とも食事もしないでなにをしているのだ?…つて、うおっ!」

どうやら声からして土郎さんらしいですね。

「土郎? どうした?」

「何驚いてるんだ?」

後から続いてシグナムさんとヴィータも入ってきたようです。

「うわっ!」

そして二人も驚きの声を上げています。

なにをそんなに驚いているのかというと、理由は一つ。

今、工房の中は、

「な、なんで工房の中が宝具だらけになっているんだ!」

そう、私が提案したのは久しぶりに宝具を投影してプチ見学会をしたいという話なのでした。

「…ああ、土郎」

「『…ああ、土郎』ではない。なんでこんなに宝具が散乱しているんだ?」

「いや、フィアが久しぶりに見たいって言うから私もやっていくうちについ熱が入っちゃってね。」

投影の定期点検の意味も兼ねていいかなと思つて…」

「なるほど…いざという時に投影できなければ宝の持ち腐れだからな」

「でしょ?」

それでシグナムとヴィータは投影された宝具を一つずつ見学して行つていようです。

「この赤くて歪な大剣は…ネロ殿の宝具だったか?」

「ええ。隕鉄の鞆…『アエストウス・エストウス原初の火』よ。」

マスターの私が投影できなくてどうするっていう感じね」

「こちらはキャスターの神宝である『すいてんにっこうあまてらすやのしずいし水天日光天照八野鎮石』ではないか…」

「そうね。なんとか投影できたわ。これは真名開放すると魔力が上昇する効果があるからいいわよね」

「こつちはいつもシホや士郎が使うお馴染みの『干将・莫耶』か。」

ランサーの『ゲイ・イ・ポル刺し穿つ死棘の槍』にライダーの『無銘・釘剣』も置いてあるな」

それから三人はそれぞれ見学していった。

私も一緒に混じつて見学をしている。

「この靴はお姉様がまだ空を飛べない頃によく使っていた『天駆ける踵の靴』ですね」

「この長い日本刀は私の戦いの時に使った『物干し竿』だったか?」

「他にもシホのお馴染みの宝具、『偽・螺旋剣』や『赤原獵犬』、『無銘・斧剣』まであるぞ。

ん…? 『偽・螺旋剣』の隣に一緒に置いてある剣はなんだ…?」

「ああ、それは『偽・螺旋剣』の改造前の宝具『吹き荒ぶ暴風の剣』よ」

「あ、やっぱり改造する前もあつたんだな」

「そりやあるわよ。」

エミヤも矢にして使うように『吹き荒ぶ暴風の剣』を『偽・螺旋剣』に改造したわけだし」

普通に言っていますけど宝具を改造するって結構すごいことですよ。

「この赤い槍と黄色い槍は『ディルムツド・オディナの『破魔の紅薔薇』と『必滅の黄薔薇』だったな」

「ええ、言っておくけど『必滅の黄薔薇』には触れないですよ? 傷がついたら治癒不可だから」

「それはもう知っているから触らん。」

ちなみに二槍と一緒に置いてあるこの二つのセットのような剣は一体…?」

「それは『大なる激情』に『小なる激情』よ。

どちらもディルムツドがもしセイバーのクラスで現界したら持っているだろう宝具ね。

そんなに。パツと見は派手じゃないけど、『大なる激情』の方は真名開放したら至近距離限定でだけどエクスカリバー級の斬撃を放つことが可能ね」

「ほう…エクスカリバー級とは。なにげに危ない代物なのだな」

「なっ！ これはアヴェンジャー…ライゼルの宝具だった『紅蓮』に『月下』か？」

士郎さんが驚いている。

それはそうですね。

これはかつて士郎さんを苦しめた宝具なのですから。

「ええ。士郎も解析したから剣の丘にはあるでしょ？」

「あ、ああ。確かにあるが…」

それではこの禍々しさを放っているのはもう一人のアヴェンジャー…アンリ・マユの短剣。

『左齒嚙咬』に『右齒嚙咬』か」

「そうよ。ちよつと古傷を暴くようど投影するのに抵抗があつたけどなんとかやつてみたわ」

「なんだ？ この短剣はソードブレイカーの性質も持っているのか？」

「よくわかったわね、シグナム」

それで他にも見学を開始すると、

「なあなあ！ この青白い槍はなんだ？ シホ！」

「それは北欧神話の主神オーディンの愛用の投擲槍で、真名開放して放つたら標的を貫くまで追い続ける効果を持つ『大神宣言』よ」

「そんなものまで……」

「ギルガメツシユの宝物庫はなんでもあつたからね。」

ちなみに隣に置いてあるのはケルト神話の主神ルーの五つの鍬の投擲槍。

真名開放すると五つの鍬からそれぞれ光が発射されて標的を吹き飛ばす効果を持つ『轟く五星』よ」

「だが、さすがにアーサー王伝説で登場する宝具達は投影しないのだな？」

「ええ、当たり前よ。」

『約束された勝利の剣』も『無毀なる湖光』も『転輪する勝利の剣』もだけど。

どれもAランク以上の宝具だから私では死を覚悟しないと投影は不可能かもね。

前にエクスカリバーをイリヤと一緒に投影したことがあつたけど二度としたくないと思つたほどだし……。

それに投影は出来ても中身がないハリボテができてしまうわ」
あれはすごかったですからね。

反動でお姉様はその後に気絶してしまいましたし。

「なるほど…それで、ふとした疑問だが、なぜ私達のデバイスまで転がっているんだ？」
シグナムさんがそう言う。

指差した方ではレヴアンティンやグラーフアイゼン、バルディツシュやレイジング
ハートその他知り合いのデバイスが数点転がっていた。

それでお姉様は、

「なんとなくやってみたらできたのよ。

武器としては使えるけど、当然意思はないし変形機能もないハリボテよ。

さて…それじゃ魔術の訓練も終了ということトレス・カットで、**投影破棄**」

そうお姉様が唱えるとそこらに点在していた投影品達が全部幻想のように消え去って
しまった。

改めて見てやっぱりすごいですね…。

「士郎、今から料理って平気…？」

「ああ。そのために呼びに来たものだからな」

それで私達は食堂へと向かおうとするが、そこでシグナムさんが、

「…なあ。シユバインオーグ、ちよつといいか？」

「なに、シグナム？ 急に改まって…？」

「ふとした疑問なのだが、ツルギは『概念抽出魔術』を使うよな？」

「ええ」

「先ほどの宝具をそれぞれ概念だけなら簡単に抽出できるのでから投影魔術より燃費はいいしお手軽に使えるよな？」

「そ、そうね…」

「言つてはなんだが、本当にツルギはチートだな…」

「……………」

その言葉が妙に記憶に残りました。

お姉様も士郎さんも黙り込んでしまいましたし。

いや、本当に将来ツルギ君はどうなってしまうのでしょうか…？

そんな事を思いました。

そしてこれは久しぶりにお姉様とゆつくり一緒に付き合えることが出来た私ことフィアットの一日でした。マル。

第百三十四話 『機動六課の休日』

S i d e シホ・E・S・高町

今頃、スバルとティアナは二人で遊んでいて、ライトニングもデート。

セイバーズの二人も久しぶりの休みを堪能していることだろう。

今日は朝の訓練後にフォワードのみんなには休みを与えて私達も久しぶりに手を休めているところだ。

それで私は久しぶりにヴァイスと一緒にガラクタいじりをしていたりする。

「…しかし、シホさん。」

せっかくの休日だっというのにこんな泥臭いところで暇を潰していいんですか…?」

「ええ。アルトリアもヴァイータと一緒に108部隊の教導についていっちゃったから手が空いていることだし、壊れているものを修理するのもいいかなと思っただけだし」

「なら、久しぶりにシホさんの料理を食いたいんですけどダメですかね?」

「私の…？ 別に構わないけど」

それで私とヴァイスは食堂へと向かいキャスターと会話を楽しんでいる士郎へと一声かける。

「どうした、シホ？ 仕事はいいのか？」

「ええ。今は特にこれといって忙しい事はないしね。それよりキッチン借りていい？」

「いいが、どうしたんだ？」

「いや、なんかヴァイスが久しぶりに私の料理を食べたいとかいうんで、どうせだからみんなの昼食も作ろうかなって」

「そうか…。ヴァイス、まさかお前…」

それで士郎が少し思案顔になりながらヴァイスを見るけどどうしたのだろうか？

「いやいや、士郎の旦那。そんな変なことは考えてないっすよ」

「そうか？ ならばいいのだが…シホを悲しませたら切り捨てるぞ？」

「ははー…肝に銘じておきます」

なんの話をしているのだろうか？

「士郎、それどういう意味…？」

「いや、シホは知らなくていい。お前はそのままできてくれ」

「そう…？」

「それとヴァイス、この件に関してはさすが嬢とフィアット嬢には話すのだけはやめておけ。裏で消されるぞ?」

「怖いっすね…」

どうしてここでするかとフィアットが出てくるのかわからないけど私が関わってもロクな事はないだろうと思ひ保留にしておいた。

それから私は有り合わせだけどみんなに食事を作りお菓子とかも作って隊舎にいる隊長陣のみんなを呼んだ。

「シホちゃん、料理とお菓子を作ったって聞いたけど」

「久しぶりのシホの料理だね」

「ふむ、アルトリアはこんな時に出かけているとは運のないやつよ。奏者の料理が食べれるというのに…」

「シホの嬢ちゃんの料理か。作ってもらえるなら食わせてもらおうとするか」

「…とところでお姉様はどうして急に料理なんて作ろうと?」

フィアがそう聞いてきたので素直に、

「いや、ヴァイスが久しぶりに私の料理が食べたいとか言うから、どうせならみんなの分もねって思ったのよ」

それでみんなは一斉にヴァイスの方へと向いて「へっ…?」と言う視線を向ける。

ファイアは一段と険しくなっているし。

それでなぜかヴァイスがタジタジになっていたけどどうしたのだろうか？
はやてがヴァイスの肩を叩き、

「ヴァイス君。シホちゃんも落とすのは並大抵の努力じゃ無理だよ…？」

「い、いえだから別にそんなやましい気持ちはないっすから！」

「おめーもなかなかやるもんだな、ヴァイス。見直したぜ！」

ランサーが豪快に笑いながらバンバンとヴァイスの背中を叩いている。

「しかし、シホは手ごわいですよ？ 私達全員が認める鈍感なのですから」

なにか、オリヴィエ陛下に失礼なことを言われている気分。

「それに、さすががそれを知ったら後ろから刺されますよ？」

「何度か聞きますけどさすがさんって魔術事件対策課の魔術師の人っすよね？」

「ええ。さすがはそこで魔術式デバイス開発も行っているからマリーさんの弟子みたいな間柄ね。」

ランとレンの初期のデバイス制作もさすがが担当したのよ」

「へ…もしかしてそのさすがさんってシホさんと出来ているんすか…？ そんな噂も聞きますし…」

「で、出来てるって言えば出来てるのかしらね？ 将来の約束もファイアと三人でしてい

るし。でも、健全な仲だからね」

そう言つて私が照れながら笑うとなぜか全員が頬を赤くした。

「これは…シホさんの噂は本当だったんっすね」

「ま、ヴァイス。諦めるこつたな。後で一緒に酒でも飲もうぜ？」

「はい、ランサーの旦那…」

ヴァイスがそれदनにか落ち込んでいたけど、本当にどうしたのだろう…？

「シホちゃんに気にせんでもええよ。人知れず一つの淡い想いが終わっただけやから」

「？ そ、そう…？」

「私もすずかもなんとか頑張つて将来の約束をするまでに漕ぎ着けたんですから、今更

他の人が入る余地なんてありません！」

「さすがだね、フィアちゃん。それじゃ将来、シホちゃんとすずかちゃんはユーノ君の妹

になるのかな…？」

「そうなるね、なのは」

なんか、なのは達が恥ずかしい事を言っている。

そ、それはそうだけど今はまだ予定なんだからそう持ち上げないで！

そ、それは今はいいとして、

「それよりみんな。せっかく作った料理やお菓子が冷めちゃうから食べて食べて！」

私がそう声をかけるとみんなはすぐに食べた。

「さすが奏者だ。まだまだ余は追いつけないな」

「そうですね、ネロ。とてもおいしいです」

「さすがだぜ。美味しいな。この魚の焼き加減も絶品だ」

サーヴァントの三人がまず褒めてくれた。

「さすがシホちゃん。私達の料理の腕が霞むよ…」

「そうだね。なのは…」

「私ももつと努力せな！」

なのは達がそう褒めてくれる。や、あなた達もかなり料理が得意よね？

「ううー…うまいぜ。これをいつまでも作って欲しいくらいに…」

「ヴァイス陸曹。きつとこれからいい事はありますよ」

「はいです！ 元気出してくださいです」

ヴァイスがなぜか涙を流しながら食事をしていてシャーリーとリンが慰めている。うむ、なかなか好評ね。作った甲斐があったわ。



…とあるアジトで、

「……………」

ナンバーズ13のトレディは街にもハッキングして入手している映像などを眺めていた。

そこにふとランとレンの二人が映つたのを見て、

「……………私も、出かけてみましょう。まずは普段着の入手でしょうか？」

それでスカリエッティに外出の許可申請を出していたという。



S i d e ラン・ブルックランズ

今、私とレンは二人で街を歩いている。

「姉さん、待ってよ」

「もう、レン。男の子なんだからしつかりとしなさいよ。」

シホさんにももつと男の子なんだからしつかりしなさいって言われているでしょう

？」

「だ、だけど……」

「あー、もう。そんなところが情けないのよ。もつと仕事や訓練の時のようにしつかりしなさい。あんたはやれば出来る子なんだから」

「う、うん。頑張る」

「ならいいけどね」

それでレンと一緒に散策していると、目の前に私達と同じ年頃の黒髪のショートカットの女の子が歩いてきた。

その子は私達、特に言えばレンの事をじっと見つめていた。

なんだろう……。不穏な気配がする。

「……………私はトレディと申します。突然で申し訳ございませんが、あなたのお名前を教えてくださいませんか……？」

「え？　え？　僕……？　れ、レン・ブルックランズだよ？　それとこちらが僕の姉のラン

姉さん」

「……………はい、レンさんにランさんですね」

流されるように私の名前まで教えちゃったし。

それでレンは突然の状況に追いついていないようである。

まあ、当然だけどね。

まさか逆ナン…？

「すみません、うちの弟になにをちよつかいかけようとしているんですか？」

「……………申し訳ございません。ですが、私はあなたの事が…レンさんの事が知りたいのです」

「はあっ!？」

「な、なんで!？」

「……………レンさんを画面越しで一目見た時から胸の動悸が治まらないのです。

……………私は、この気持ちなんなのか知りたいのです」

画面越しで、つて…まさか、ストーカー？ 盗撮犯？

「れ、レン！ この子、ちよつと危ないわよ。さっさと行きましょう!」

「……………あつ」

トレディという女の子が声を上げているが構わずレンの腕を引っ張ってその場を後にしようと思ったんだけど、私が引っ張ったのにレンはその場から動こうとしない。

「レン…?」

それで思わず振り向くと、レンはなにやら真剣な表情で、

「ラン姉さん、逃げちゃいけないような気がするんだ…」

「で、でもなにかおかしいよ、この子…」

「シホさんに教えてもらっただんだ。」

困っている子がいたら親身になって接してあげなさいって…それが女の子ならなおさらだって」

「うっ…」

いつも弱気なレンの癖になぜかいつもと迫力が違う。

そんな顔されちゃ私が悪者みたいじゃない…。

「あゝ、もうわかったわよ！ あんたの好きにしなさい！ でも私もついていくからね
!？」

「うん…ありがとう、ラン姉さん」

それでレンは笑顔を浮かべてトレディという女の子に話しかける。

「君は、トレディって名前なんだよね？」

「……………はい」

「どうして僕の事が気になるの…？」

「……………わかりません。」

ですが、先程も述べましたようにレンさんを見た途端に胸が締め付けられるような、そんな変な気分させられたのです…」

「そっか。うーん…僕もわからないなあ…」

「……………そうですか」

それでレンは「あはは…」と笑い、トレディは無表情のままシユンと落ち込む仕草を見せる。

不思議な子ね…。

感情の色があまり見えないからどこか機械的だけど、でもしつかりと自己出張をしている。

でも、私はレンのように鈍感じゃないからこの子の思いとやらの正体はなんなのかはなんとなく理解できるかも。

それで思い切つて言ってみることにする。

「…それってさ、恋なんじゃない？」

「……………恋?……………恋とは、一体なんなのですか?」

「え? そんな事も知らないの…?」

「……………申し訳ございません」

またシユンとなった。

つていうか恋も知らないとかどこの箱入り娘なの、この子?

それで仕方がなく私はトレディに恋についてレクチャーしてやった。

レン…? あの子はトレディの仕草に見とれていたらしくて話は聞いていなかった

みたいだから放っておいた。

「あのね、トレディさん」

「……………はい」

「恋っていうのはね？」

それから私はトレディに、恋とは人のことを好きになるや、好きな相手を自分のものにしたと思う愛情などかを教えてやった。

「……………自分のものにしたという想い、ですか」

そこで初めてトレディの表情に感情の波が見えた気がした。

「……………承知いたしました。ご教授感謝いたします、ランさん」

「いや、この程度なら感謝なんて…」

「……………レンさん」

「は、はい……！」

「……………いつか、あなたを私のものにします。」

それまで、待っていてください。

それではまたどこかで…」

聞きようによつては物騒な事を言うだけ言うと、トレディは私達から離れていき人ごみの中に消えていってしまった。

「ふ、不思議系な女の子だったね。ラン姉さん…」

「そうね。でも、なぜか知らないけど変なフラグ立てに協力してしまったような気がする…」

でも、これ以降私とレンは 트레이と衝撃の再会を果たす事になるのだが、今はまだ先の話である。



それから気を取り直して街を歩いていると目の前にアイスを頬張っているスバルさん達が見えた。

「あ、ランとレンだ！」

「え？ 本当だ。二人も街を散策中？」

「はい。お二人もですか？」

「う、うん…」

「レンは相変わらず態度が弱いね」

「そうなんですよ。訓練や仕事中、事件の時はしっかりとやるのにやっぱり普段はどこか弱気で…」

「まあレンはランに似て女顔だからね」

「それはひどいですよ、ティアさん……」

こうして普通にみんなで話せるのはできるんだからレンももつと強気でいけばいいのよ。

ま、こんな弱気な性格になっちゃったのには原因があるんだけどね。

やつぱりあの時の魔術事件のせいで消極的になっちゃったんだよね。

今ではこうして少し弱気に見えるくらいだけど当時はひどかった。

私達は親を失って心の支えを失った。

私は弟のレンを守ってやらないとつて弱い心を奮い立たせてきたけどやつぱり泣きそうだった。

そんな時に私達の前に現れたのがシホさんだった。

聞けばシホさんが魔術事件の魔術師を倒して捕まえて災害を抑えたっていう。

でも、何度も会う機会があってシホさんは、

『事件が起きてからすぐに助けることができずにごめんなさいね……』

と、言つて私達を抱きしめてくれた。

そのシホさんの気持ちだけでどれだけ嬉しかったか分からない。

だから私達にも魔導の才能以外に魔術の才能があると聞かされた時は嬉しかった。

私たちでもシホさんの役に立てると言う思いだから。

そしてシホさん達がミッドチルダに移住してきて私達を保護してくれてからはシホさんには魔術と武術を、アルトリアさん、ネロさんからは剣術を学んでいた。

三人ともレベルが高くてすぐに私とレンは覚えていった。

そして役に立ちたいという思いでレンと一緒に管理局に入局して魔導も学んだ。

それで私とレンには魔力変換資質『氷結』があることが分かり喜んだ。

そして様々な技能を取得しこうして今はシホさんの部下として過ごしている。

これからも頑張るんだ！

閑話休題

「それじゃあたし達と街を回ろうか！」

「そうですね」

スバルさんの提案で四人で街を回ることになった。

「レン？ せっかく男一人女三人なんだから喜びなさい？」

ティアさんがそう言う。

「そういえばそうですね。」

それでレンは顔を赤くして小さく「は、はい…」と答えていた。
うーん…やっぱり女々しいわね。

さっきのトレデイの時は少し男らしかったのに。

それから四人でゲームセンターに行ったり昼食を食べたりして楽しんでいる時に、
「あ、エリオとキャロの二人に連絡入れてみようか？ あつちも二人で楽しんでいるだ
ろうし」

「そうね」

それでエリオ達に連絡を入れてみる。

『はい、こちらライトニング3』

「はい。こちらスターズ3、そちらの休日はどう？」

「ちゃんと楽しんでる？」

「楽しんでるかな？」

「エリオ君、キャロちゃん、楽しんでるかな？」

『はい。まだ始めたばかりですけどなんとか楽しんでます』

「そっか。何か困った事とかないかなって思ってたね」

『ふふ、ありがとうございます！』

『おかげさまでありません』

「そっちはどんな感じ…？ こっちはランとレンと合流して四人で楽しんでいるところ
なんだけど」

ティアさんがそう聞く。

『えつと…予定通り公園で散歩して、これからデパートを見て回って…つて、感じです』
『その後、食事をして映画を見て夕方には海岸線の夕日を眺めるつてプランをシャ
ーリーさんに作ってもらっていますので』

「『はあ…？』」

それで思わず私達はなんのこっちやという感じで反応する。

なんだろう？ その、なんていうかどこぞの定番のカップルみたいな計画は。

『ちゃんと順番にクリアしていきます』

「クリアつて、あの子達は…訓練じゃないんだから」

「あはは…まあ、健全だ」

「そうですね」

「うん」

それで通信越しでエリオとキャロはなにかおかしなことがあっただろうか？という
顔になっているけどまだ若いから分からないのだろう。

「いや、こっちの話だから気にしないでね、二人共」

「それじゃなにか困ったことがあったらいつでもこっちに連絡してね？ 助けに行くから」

「街中での遊びもあたし達の方が先輩だから任せなさい」

『はい！』

『ありがとうございます！』

「じゃーねー」

それでエリオ達と通信を切った。

「でも、シャーリーさんも二人に任せればいいのにね」

「ま、まだお子様だから不安なんでしょう？」

「フェイトさんの困った顔が想像できるね」

それから四人で街を巡っていて、お店で買ったたこ焼きを頬張っている時に、

「でも、こんなのにのんびりと過ごすのは久しぶりね」

「だね」

「はい」

「うん」

「事件とか事故とか何も起きていないといいんだけど…」

「そうねえ…」

そうだね。それだとせっかくの休日がおじちゃんになっちゃうから。でも、すぐ近くで事件が起こっていることにまだ私達は気づいていなかった。



Side キャロ・ル・ルシエ

スバルさん達との通信を切った後、エリオ君と一緒に街を回っているとところでした。するとどこからか喧騒が聞こえてきて、

「エリオ君……！」

「うん、キャロ。行ってみよう！」

それでエリオ君と一緒に向かってみるとそこには右頬に傷跡を持っていて、どこかエリオ君に似た髪型だけど灰色の髪に黒い瞳の男の子が涙目で震えている少女を庇うように仁王立ちしていた。

そして仁王立ちしている男の子はガラの悪そうな8人の不良の人達を威嚇するように睨んでいた。

「おいおい坊主、オレたちはそこのお譲ちゃんにすこーし金を借りるだけなんだから邪

魔しないでくれるか？」

「その金欲しきがいい年した大人がよってたかってカツアゲかよ。情けねえ……！」

しかも女一人に対してこの人数……てめえ等は群れなきやなにも出来ない野良犬か？」

男の子は言葉は悪いけど女の子の事を守っているように感じた。

「このガキ！　だまって聞いてりや……！」

「痛い目に合いたいみたいだな……！」

「たかが野良犬が『狼』に勝てると思ってるのか？」

この男の子の言葉についてキレタ不良さん達は一斉に襲いかけられてしまいました。

それで私は思わず目を瞑りそうになった。

けど、男の子はその直前に不良さん達の顎や鳩尾に拳や蹴りを叩き込み、不良さん達

全員を沈ませた。

強い……！

「こんな所で遊んでるヒマがあるなら少しは鍛錬すんだこのチンピラ……！」

男の子はそう言って女の子を連れてその場から離れていこうとしていました。

でも、その後ろで倒された不良さん達の一人がすぐに起き上がり持っていたナイフで

彼を突き刺そうとしていました！

「うるせえ……っ！　この、クソガキがあ……っ!!」

「ツ！……やべっ！」

男の子は焦りの表情で振り向いています。

でもそこで隣にいたエリオ君が、

《Sonic Move》

ソニックムーブを使って移動し、手刀で不良さんの首筋に当て、気絶させていました。

エリオ君、かっこいい…！

それでエリオ君はその後、すぐに管理局に連絡を入れること数分して局員が駆けつけてきて、不良さん達を全員拘束して連行していきました。

エリオ君も一仕事が済んだとばかりに息をついていると、そこに先ほどの男の子が近づいてきました。

「さつきはありがとな。お前がいなきや、やられてたよ」

「いえ、ぼくはそんな…」

「謙遜するなつて。つと、そういえばまだ名乗ってなかったな。俺は“ロゴ”、“ロゴ・バルコム”だ」

「僕はエリオ、エリオ・モンディアル」

「私はキャロ・ル・ルシエです」

「エリオにキャロか。よろしくな！」

それからロボ君とは少しだけ他愛のない会話をして楽しんだ。年も私達と同じようでエリオ君ともすぐに仲良くなっていた。

だけど楽しい時間はすぐに終わりみたいで、

「…あ、もう約束の時間だ。俺はもういくけどまたどこかで会おうな。二人とも！」
それで私達は握手を交わし、ロボ君はどこかへと行ってしまいました。

「ロボ君か…。気があつたしまった会いたいね、キャロ」

「うん、エリオ君！」

それで私達はまたシャーリーさんの立ててくれたコースを回る道に戻っていったのだった。



…ところ変わってスバルの姉、ギンガはトレーラーの横転事故現場に立ち会っていた。

「陸士108部隊。ギンガ・ナカジマ陸曹です。検証のお手伝いに来ました」

「ありがとうございます。わざわざ来てもらい…事故の状況は分かっていますか？」

「はい。横転事故とだけ聞きましたが…」

それで聞く。

どうも事故の状況が奇妙で運転手は怯えていて証言では何者かに襲われて、荷物が勝手に爆発したという。

ギンガは爆発……？ と思案顔になり、荷物を調べてみるがどれも食料や飲料というものくらいしかなかった。

だが、一際目立つものをギンガは発見する。

（ガジェットの残骸!? それに割れた生体ポット！）

ギンガは直感的にこれは少しやばい事件だと感じた。



そしてスカリエッティのアジトでも、スカリエッティはウーノから報告を受けていた。

『レリック反応を追跡していたドローン一型がすべて破壊されました』

「なるほど……。破壊したのは局の魔導師か、それとも当たりを引いたか、おそらく後者だな」

『はい。確定はできませんがドクターのおっしゃるとおり後者だと思われれます』

「すばらしいね。さっそく追跡をかけるのでしょうか」

スカリエツティがウーノとそう話しているとそこに赤い髪の少女がやってきて、

「ならドクター。あたしもそれに出たいんだけど…」

「ノーヴェ。君か」

『ダメよ、ノーヴェ。あなたの武装はまだ調整中なんだし』

「今回出てきたのが本当に当たりなら自分の目で確認したい。トレディにも外出許可を与えたんだからいいだろう？」

「焦らずともあれはいずれここにやってくるだろう。」

ま、どちらかといえば保険に過ぎないがね…」

スカリエツティが保険といった。

その意味はまだ知られることはない。

それでノーヴェは素直に従いその場を離れていった。

『ドローンを出すのは様子を見てからにしましょう。妹達の中から適任者を選び行かせます』

「ああ。後は愛すべき友人にも頼んでおくでしょう。」

優しいルーテシア、聞こえるかい？

レリック絡みだ。少し手伝ってくれるかい？」

『わかった。ドクター…』

そしてスカリエツティは笑みを浮かべた。



Side エリオ・モンディアル

「！」

なにか物音を感じた。

それで僕はその場で足を止めた。

「エリオ君…？ どうしたの？」

「キャロ。今、なにか聞こえなかった？」

「何か？」

「ゴトつというか、ゴリつというか…」

それで物音が聞こえた路地裏に僕とキャロは駆けていく。

すると排水口の蓋が開かれてそこから一人の女の子が這い上がってくる。

それで僕はキャロにみんなに連絡を入れるように頼む。

「こちらライトニング4。緊急事態につき、現場状況を報告します。

サードアヴェニューF23の路地裏にてレリックとおもしきケースを発見。

それとレリックのケースを持っていたらしい女の子が一人」

「女の子は意識不明です」

「指示をお願いします！」

それを通信で聞いていたなのはさん達は、

『スバル、ティアナ、ラン、レン。ごめん、お休みは一旦中断』

『はい』

『大丈夫です』

『任せてください』

『が、頑張ります！』

『救急の手配はこっちです。二人はそのまま少女とケースを保護。応急手当をしてあげて』

「はい！」

フェイトさんの指示で応急手当を開始する僕達。

なにか、大きな事件が起こりそうな、そんな不安を僕達は感じるのだった。

第三百三十五話

『現れるナンバーズ達』

S i d e シホ・E・S・高町

私とネロ、なのは、オリヴィエ陛下、フェイト、ランサー、ファイア、シヤマルさん、リインは今へりに乗って現場に向かっている。

そして到着して女の子の様態をシヤマルさんが見ている時だった。

「…なんででしょうか？」

「この女の子には郷愁のような懐かしい気持ちにさせられます」

「オリヴィエ陛下もですか？」

「私もこの子は少し気になります」

「オリヴィエ陛下も反応したってことは、この子は一体なんなんだろうか？」

「とりあえずバイタルは安定しているわね。」

危険な反応もないし、心配ないわ」

「はい！」

「よかったー…」

「ごめんね、みんな。お休みの最中だったのに…」

「いえ、平気です！」

「ケースと女の子はこのままヘリで搬送するからフォワードのみんなはこっちで現場調査ね」

「俺達はどうするよ？ マスター。」

「変な制約をかけられちまつてるから戦闘には参加できねーんだろ？」

「普通に戦えるアルトリアが羨ましいね〜」

「ランサーが不満そうにそう愚痴る。」

「そうだね。」

「それじゃセイバー、ファイター、ランサーはシャマル先生と一緒にヘリの護衛を頼ん

でいい？」

「おう」

「任されたぞ」

「分かりました」

この三人がヘリの護衛につくのだ。

滅多なことがない限りは落とされないだろう。

「なのはちゃん、この子をヘリまで抱いていってくれる?」

「はい」

とりあえずこの子が誰なのかは今は保留ね。



Side 八神はやて

シャーリーが突然声をあげた。

話によればガジェットが地下水路に総数20、海上付近では12機単位が5グループ迫ってきていると。

まずいことになったな。

これでは市街地戦になってしまう。

と、そこにヴィータから通信が入ってきて、

『スターズ2からロングアーチへ。』

こちらスターズ2及びアルトリア。

海上で演習中だったんだけどナカジマ三佐が許可をくれた。

今、二人で現場に向かっている！ それともう一人…』

もう一つ通信が入ってきて、

『108部隊、ギンガ・ナカジマです。

別件捜査の途中だったんですけど、そちらの事例とも関係ありそうだったので参加してもよろしいでしょうか？』

ギンガか。心強いな。

ヴィータもアルトリアさんももうすぐに到着する。

これなら万全に相手できるな。

「うん、了解や。

ほんならヴィータはリインとファイアット副隊長と合流。協力して海上の南西方向を

制圧」

『わかった！』

『南西方向、了解です！』

『わかりました！』

「アルトリア空曹長はフォワード部隊のフォローに回って」

『了解いたしました』

「なのは隊長、フェイト隊長、シホ隊長は北西部から」

『『了解』』

「ヘリの方はシャマルとヴァイスくん、それにサーヴァント達に任せていいか？　ヘリをいざって時に守ってな」

『お任せあれ！』

『しつかり守ります』

『了解だぜ！』

『任せておけ！』

『必ず守ります！』

「ギンガは地下でアルトリア空曹長とスバル達フワード陣と合流。後々に別件の方も聞かせてな？」

『はい！』

それぞれに指示を与えてどこも人員は足りているので十分となった。

これなら大丈夫やろ。

フワード達はバリアジャケットをまとって地下へと入っていき、なのはちゃん達もそれぞれバリアジャケットをまとって戦闘区域に飛んでいった。

みんな、任したで。

◆ ◆
ルーテシアはビルの屋上でウーノから報告を受けていた。

『へりに確保されたケースとマテリアルは妹達が回収します。お嬢様は地下の方に…』

「ん…」

『騎士ゼストとアギト様は？』

「別行動…」

『お一人ですか…？』

「一人じゃないよ…。私にはガリユーがいるから…」

『失礼しました。協力が必要でしたら言うってください。最優先で行います』

それでウーノとの通信は切れ、

「いこう、ガリユー。探し物を探しに…」

そしてルーテシアは魔法陣を展開してその場から転移していった。

◆ ◆

Side ラン・ブルックランズ

「ギンガさんってスバルさんのお姉さんですよね？」

エリオがスバルさんに聞く。

「うん、そう。あたしのシューティングアーツの先生で歳も階級も二つ上だよ」

「はあー……」

キヤロも驚いている。

そうなんだー。姉妹揃って管理局入りか。

ま、私達も姉弟揃って入っているから他をとやかく言えないね。

「ギンガさん、デバイス同機で位置把握と通信ができます。準備いいでしょうか？」

『うん！』

それからギンガさんの全体通信で聞こえてくる話に私達も耳を傾ける。

『私が呼ばれた事故現場にあったのはガジェットの残骸と、壊れた生体ポットなんです。

ちようど5、6歳くらいの子供が入るくらいのもので、近くに重い物を引きずった跡のような物があったてそれを辿っていこうとした最中に通信を受けた次第です。

それからこの生体ポット……少し前の事件でよく似たものを見た覚えがあるんです』

『私もな…』

『人造魔導師の素体培養基…あくまでこれは推測なんです、あの子は人造魔導師の素体候補として作り出されたのではないかと…』

それを聞いていた私達は、

「人造魔導師って…」

「優秀な遺伝子を使つて人工的に生み出した子供に、投薬とか機械部品を埋め込んで後天的に強力な魔力や能力を持たせる…それが人造魔導師」

「倫理的な問題はもちろん…今の技術じゃ色々と無理な問題が生じてくる。」

「コストも合わないからよっぽどどうかしている連中でもない限り手を出したりしない技術なんだけど…」

「ひどいですね…」

「人をなんだと思つているのか…」

私達がそう話す。

それを聞いてエリオが少し微妙な顔をする。

前に話してくれた話を思い出しているのだろう。

だから、

「別にエリオの事をどうか言ってるわけじゃないからね？」

「そうだよ、エリオ君」

「はい…」

それでエリオは元気を取り戻す。

そんな時にキャロのデバイス、ケリユケイオンが反応を示し、

《動体反応確認。ガジエツトドローンです》

「来ます！ 小型ガジエツト六機！」

それで私達は構える。



Side シホ・E・S・高町

空の方では急に増えたガジエツトの反応で私達は囲まれていた。

『航空反応増大！ これって…嘘でしょ？』

『なんだ、これは…？』

一同の動揺の声が聞こえてくる。

それは私達も同じだ。

数が多すぎる。

『波形チェック。誤認じゃないの?』

『問題でません。どの反応も実機と変わりありません』

『こちらも目視で確認できるわ! この、ニンライブズ!』

私がニンライブズを放つがいくつかは透けて通り過ぎていく。

キリがないわね…。

いちいち解析をかけて潰していくのも面倒だし。

『幻影と実機の構成編隊…』

『防衛ラインを越させない自信はあるけどちょっとキリがないね』

『ここまで派手な引きつけをするってことは…』

『地下かヘリの方に主力が向かってる』

『なのは、シホ。私が残って抑えるからヴィータ達と一緒に…』

『フェイトちゃん!』

『トリオでも普通に空戦していたら時間がかかりすぎるから…限定解除すれば広域攻撃

でまとめて落とせる』

『それは、そうだけ…』

『嫌な予感がするんだ…』

「なら、フェイトじゃなくて私が残るわ。殲滅戦は大の得意だから」
「シホちゃんまで!？」

そんな時だった。

『割り込み失礼するで！』

ロングアーチからライトニング、セイバーズへ。その案も限定解除も部隊長権限で却下します』

「はやてー!」

「はやてちゃん! なんて騎士甲冑を!？」

「まさかはやての限定解除?」

『私も嫌な予感がしてな。』

クロノ君から限定解除の要請をした。

空の掃除は私がやるよ。

というわけではもちろん、フェイトちゃん、シホちゃんはヘリの護衛。

ヴィータとリイン、ファイアちゃんはフォワード陣と合流。ケースの回収任務にあたってな』

『了解!』

『了解です!』

『わかりました!』



Side アルトリア・ペンドラゴン

ヴィータと別れて地下を潜入していき途中でギンガと合流して、

「ギンガ。いい腕ですね」

「ありがとうございます、アルトリアさん。」

それよりもすぐでスバル達と合流です。急ぎましょう」

「ええ」

それでまた向かってきたガジェットをひと薙ぎで粉碎して、そしてスバル達と合流した。

「ギンガさん!」

「アルトリアさん!」

スバル達の方は無事のようにですね。

エリオとキャロ、ランとレンはギンガと初めて会った為、敬礼をしていた。

いい心がけです。

それから八人でガジェットを各自破壊していき、一際巨大な丸いガジェットを一閃で切り裂き爆発させる。

スバルとギンガも連携で沈めていく。

そしてあらかた撃破し終え、みんなでレリックの捜索をしている時でした。

キャロが見つけたと言っている。

だが私の直感がなにかが迫っていると叫ぶ。

そしてすぐに私はキャロの前に跳び、何者かの攻撃を防ぐ。

奇襲に失敗したのかその謎の影は数歩下がった。

その影は姿を現した。

そいつはなにかの召喚獣のようで虫のような生態だった。

「…何者だ？」

「……………」

その黒い召喚獣は答えない。

「きゃあああああっ!?!」

しかし突如背後でキャロの叫び声が聞こえてきた。

何事だと思って振り向くとキャロが持っていたケースは紫色の髪の毛の女の子に奪われ

キヤロはエリオごと吹き飛ばされていた。

「キヤロ!? エリオ！」

くっ！ スバル、ティアナ、ギンガ、ラン、レン！

こいつを抑えますからその女の子の方をお願いします！」

「「「了解！」」」」

それで私は魔力放出で黒い召喚獣へとかかっていく。

そいつは腕で抑えようとするが、

「無駄です！ 私の剣の前でその程度の防御では…弾くことは不可能です！」

「…!?」

剣を叩きつけて召喚獣を壁に叩きつける。

案外あつけないのですね。

それで外装が剥がれていますがそれでもその召喚獣は私に仕掛けてきます。

主の命令には忠実というところでしょうか？

しかし、

「…相手が悪かったな。風王鉄槌!!」

■ ■ ■ ■ ……!!?」

私の技を腹にもろに受けて腕のブレードも両方砕けてまたしても壁に叩きつけられ

る。

「ガリュー!!」

紫色の少女が召喚獣の名を叫ぶ。

「ガリューというのですか。ですが私の前では無に等しいですね」

ティアナがもうレリックのケースを紫色の少女から取り返していますから上等です。

「ルールー! ガリュー! 撤退だ!」

そこで新たな声が聞こえてきて、次には閃光弾のようなものが轟いてきて私達のと目と耳を封じようとしています。

ですが、甘い!

「この程度の閃光! 私に通用すると思いますか!?!」

魔力放出で逆にその閃光弾を吹き飛ばした。

「くっ?! こんなやつが機動六課にいたっていうのかよ!?!」

見ればそこにはリインと同じサイズの…おそらく融合騎がいた。
私は剣を向けて、

「今度は何者だ? 私の剣の錆になりたくなければ名のるがいい」

「くっ…あたしは烈火の劍精のアギトだ!」

「アギトですか。了解しました。」

しかし、私も手加減はいたしません。

おとなしく捕まってくださればこれ以上の危害は与えません」

「なに余裕かましてるんだよ！」

そう言つてアギトは私に火炎弾を放つてきますが私の対魔力の前では無に等しい。私の前ですべて弾かれていく。

「な!?! なんだよそれ! 反則だろ!」

「反則もなにもありません。さて、覚悟はいいですか?」

「くっ……!」

と、そこに、

《アルトリア! 全員無事か!》

《ヴィータですか。ええ、もうレリックも確保しましたから後は捕縛するだけです》

《上等だ! すぐにあたし達も到着するからいい感じに引きつけておいてくれ!》

《了解しました》

それでヴィータとの念話を終了させた後すぐに、

「なんだ!?! この魔力反応!?! 数は三つ、でけー!!」

「でやあああああー!! ぶち抜けー!」

ヴィータが天井をぶち破り、ラインとファイアットが魔法を展開し、

「チエーンバインド！」

「捕らえよ！ 凍てつく足枷！」

「ぶっ飛べー!!」

まずファイアットが二人を縛り上げ、リインが凍てつく足枷で凍りつかせ、ヴィータが負傷しているガリユーにさらにグラーフアイゼンを叩き込んだ。

それによって全員はいい感じに捕らえたようです。

「ヴィータ。ナイスタイミングです」

「おうよ！」

「みんな無事でよかったです」

「そうですね」

「私がいるのですから当然ですよ」

「さっすがアルトリアお姉さんです！」

それでスバル達もおおずと出てきて、

「さすがアルトリアさん…。」

さらにヴィータ副隊長達も強い…。

でも局員が公共の施設を破壊していいのかな？」

「まあ、ここら辺はもう廃棄都市区画だしね…」

「でも改めて力の違いを思い知らされました…」

「うん…」

私はエリオへと寄り、

「キャロ、大丈夫ですか…?」

「は、はい。大丈夫です…。エリオ君、もう大丈夫だから…」

「あ、うん…」

それでエリオは赤くなつてさらに赤い顔のキャロを降ろしていました。

ふふ、微笑ましいですね。

さて、では改めて捕縛しましょうか。

だがまだ詰めが甘かったようです。

「逃げられた!」

「こつちもです!」

ガリユーの方はいつの間にか消えていて、紫の髪の子とアギトも地面の下に逃げお
せていました。

なかなかの曲者ですね。

そして起こる地震。これは…。

「大型召喚の気配があります…。多分それが原因です」

「召喚師だったのですか。あの少女は…」

「レリックは確保したけどやばいな。」

崩れたらひとたまりもねえ…。

脱出するぞ！ スバル、ギンガ！

「はい！ ウイングロード!!」

それによって上へ上へとウイングロードが伸びていく。

こういう使い方があるから便利ですね。

「ティアナ、キャロ。早く脱出しましょう！」

「少し待ってください！ レリックを奪われないように少し細工をします！」

「細工、ですか…?」

「ええ。とっておきです！」

まずキャロがレリックの封印作業をしてティアナがそれを幻術で、と…。

なるほど。これは効果的ですね。

その作業が終了し、

「それじゃ脱出するぞ！ あたしは最後に出るからお前達は早く行け！」

「分かりました。殿、お願いしますよ。ヴィータ」

それで私達は地上へと脱出していった。

そして外に出ると大型召喚獣が見えたので私は空を飛びながらヴィータ、ファイアツト、リインと向かいフォワード陣も次々とやってきます。

アギトから火炎弾を受けますがレンが前に出て、

「防いでみせる！」

《Protection Power Plus.》

広範囲に展開したプロテクションですべて防ぎきっていた。

そしてレンの影からランが剣を構えて跳躍し、

「受けなさい！ 斬氷閃!!」

火炎弾が氷の刃と衝突しすべて消されていく。

そしてリインが紫色の髪の少女とアギトにバインドをかけてついに動きを封じました。

私達も全員合流し、捕縛準備はオツケイです。

「…ふう。子供をいじめているみてーでいい気はしねえが…市街地での危険魔法使用に公務執行妨害。その他諸々で逮捕する」

ヴィータがそう言った。もう大丈夫のようですね。



Side クアットロ

「デイエチちゃん、ちゃんと見えてる？」

「ああ。遮蔽物もないし空気も澄んでる…よく見えるよ」

「デイエチちゃんの目は特別製だからねえー」

「そこでデイエチちゃんが、

「でもいいの、クアットロ？ 撃っちゃって…」

「ケースは残せるだろうけどマテリアルの方は破壊しちゃうことになる」

「ふふふ♪ ドクターとウーノ姉さま曰く、あのマテリアルが当たりなら、本当に『聖王

』の器ならこんな攻撃くらいでは死んじやわないから大丈夫、だそうよ？」

「ふーん？」

「そこにウーノ姉様から連絡が入ってくる。」

『クアットロ。ルーテシアお嬢様とアギト様とアギト様が捕まったわ』

「ああ、そういえば捕まってましたね〜？」

『今はセイインが様子を伺っているけど…』

「フオローします？」

『お願いね』

「了解」

それでセインに通信をする。

『はいよ、クア姉』

「こつちから指示を出すからお姉様の言うとおりに動いてね？」

『んー…了解』

そして今度はルーお嬢様に念話をする。

《ルーお嬢様。なにやらピンチのようで？ お邪魔でなければクアットロがお手伝いし

ますよ？》

《お願い…》

《はい、お嬢様。ではクアットロの言うとおりに動いてくださいね？》

《言う言葉を…？》

《その赤い騎士に》

《わかった…》

それでデイエチちゃんを見るともうすでにチャージ完了している。

さて、では派手にぶっ放しましょうかね！

「IS。ヘヴィバレル…」

「さあ、ルーお嬢様。ご一緒に…逮捕はいいけど…」

それでルーお嬢様も一緒に喋る。

「大事なヘリは放っておいていいの？」

それをルーお嬢様が喋った瞬間、一同の動揺の顔が映された。

そう、それが見たいのよ。

でも、次の反応は少し思っていたのより違っていた。

「はん…今のあのヘリを落とすだつて？ んなわけねーじゃんか」

「!?」

どうして!?

ま、まあいいわ。

「デイエチちゃん。撃っちゃいなさい!」

「わかった! 発射!」

デイエチちゃんがヘリに向かって砲撃を発射するが、そこで私は異常を見ることになる。

ヘリから一人の女性が飛び出してくると、

「させません! 聖王…鉄槌砲!!」

七色の光の砲撃がデイエチちゃんの砲撃を打ち砕いてしまった!?

なによ、あれ!?

もしかしてあれがドクターが言っていた聖王のオリジナルでファイターのサーヴァント、オリヴィエ・ゼーケブレヒトの力だっというの!?

「ちい!？」 ディエチちゃん、撤退するわよ!

セインちゃんも、もういいからルーお嬢様達を救助して!」

《りよ、了解!》

それでセインちゃんがレリックのケースをまず奪おうとするが、

「——ようやく出てきましたか」

「うわっ!？」

そこには金髪碧眼の騎士が地面へと見えない透明な剣?で攻撃をしていてセインちゃんの腕がかなり切られてしまっていた!?

そんな! セインちゃんの気配を読んだ!?

「見え見えの気配でしたね。いつ出てくるか機会を伺っていたのですよ?」

なんて、チート……!

でもセインちゃんはなんとかルーお嬢様とアギトを掴んでディープダイバーで逃げおおせました。

さて、ならもう見ることはもうないから撤退しましょうか!

「デイエチちゃん！ 逃げるわよ！」

「あ、ああ。わかった！」

でも、決断が遅かったのか空から魔法を降ってきていた。

まず…!?

なんとか避けるがそこに紅い騎士が急接近してきて、

「ソードバレルフルオープン!!」

それもギリギリのところであわすが一本の魔力刃が当たってしまい腕が少し削れた
!?

本当にまずい!?

金色の魔導師が接近してきて、

「市街地での危険魔法使用、及び殺人未遂の現行犯で、逮捕します！」

「今日は遠慮しておきますよー！」

くっ！ 速い!?

でも紅い騎士がそれ以上のスピードで、空を何度も蹴って、って!? 空を蹴る!?

「逃げられると思わないでね…?」

「くうっ!?!」

なに…? 機動六課ってこんな化け物揃いだっただの!?

「ならー！ I S 発動！ シルバーカーテン！！」

それで私とデイエチちゃんは姿をくらませた。

でも、まだ甘かった。

金色の魔導師と紅い騎士が撤退したと思うと、黒い球体が迫ってきていた。

「広域空間攻撃!?!」

「うそ〜!?!」

それで急いでデイエチちゃんを掴んで飛んで逃走するけど逃走先に三人が待ち構えていて、一齐に砲撃の構えをしていた。

まずい、今度こそ防げないかもしれない！

《クアットロ、デイエチ。じつとしていろ!!》

そこにトローレ姉様の声が聞こえてきた。

《I S。ライドインパルス!!》

「トライデント…スマツシャー!!」

「エクセリオン…バスター!!」

「カラド…ボルク!!」

三つの魔法よりトローレ姉様のライドインパルスの方が速さが勝った。

これで逃げられる。

よかったわ〜。

「ふう…：トール姉様。助かりました」

「感謝…」

「ボーつとするな。さつさと立て。」

馬鹿者共め…：監視目的で来ていてよかった。

セインはケースは奪えなかったもののお嬢様の救出にはなんとか成功したようだ。合流して戻るぞ？」

トール姉様の男みたいな声に感動しながらもそれで撤退準備を始めているけど、なにか…：異様に耳に響いてくるような轟音がするは気のせいかしらね〜？

って、

「トール姉様!? なんか光がこちらに向かってきますけど!？」

「なんだと!？」

「まだあるのか!？」

それはなんだか狙ってきているような軌道だけどなんとかまたライドインパルスで逃げおおせる事に成功した。

それにしても最後の、まさか狙ったものだと言うのかしら？ 恐ろしい連中だわ…。



Side シホ・E・S・高町

うーん…山勘でグングニル…もちろん魔法バージョンよ。
いちいち宝具一つでぐちぐち言われたんじやたまらないから。

それを撃つてみたけど私の視線にも映っていないから逃げおおせたか。残念ね
…。

そこにヴィータの通信の声が聞こえてくる。

『ごめん…。こっちは召喚師連中には逃げられちまった…』

『まあええよ。レリックは無事やったんやから今回はそれで納めとこか』

「そうね…。ところでフォワード達はどうかだった？」

そこにアルトリアが割り込んできて、

『はい。なかなか上出来でした。』

私がほとんど戦ったようなものでしたが状況判断は的確でした。

なにより、もしレリックのケースを奪われてもその対処もしつかりとやっていたので

合格点です』

「アルトリアがそういうならいい具合ね」

『そうやね』

「うん」

「そうだね」

隣で聞いていたなのは達も頷いている。

まあ、何はともあれこれで今回の任務は終了ね。

.....

.....

.....

それから救出された少女だけど今は聖王医療院で眠らされている。

私となのは、そしてオリヴィエ陛下で見ているけどやっぱりどうも気になる。

でもまだこの心のわだかまりはなんなのか分からずじまい。

でも、シルビアとしての心がなにかを訴えてきている。

この子は人造魔導師だと話で聞いたけど……もしかしてこの元となった人物とは。

それでうさぎの人形を買って戻ってきたのはと交代で外にオリヴィエ陛下と出て、「オリヴィエ陛下…あの子はもしかして」

「ええ。もしかするかもしれませんがね」

そう。私とオリヴィエ陛下の考えではあの子はオリヴィエ陛下のクローン体…かもしれないと予測を立てていた。

第三百三十六話

『ヴィヴィオという少女』

S i d e 高町なのは

今私はシグナムさんにフェイトちゃんから借りたという車に乗せてもらい聖王医療院まで向かっている。

後ろの席には、

「でも、私まで乗せてもらっちゃってごめんね、シグナム」

「そうですね。ありがとうございます、シグナム」

シホちゃんとオリヴィエさんも乗っている。

「別に構わん。」

車はテストタロツサからの借り物だ。

だから気にするな。

そして向こうにはシスター・シヤツハがいらっしやる。

私とシユバインオーグが仲介したほうがいいだろう」

「はい……」

シホちゃんもカリムさんと親友の仲だし話しやすそうだよね。

「しかし、検査が終わり、なにかしらの白黒がついたとしてあの子はどうなるのだろうか……」

「ううん……当面は六課か教会で預かるしかないでしょうね。」

受け入れ先を探すにしても長期の安全確認が取れてからでないといけませんから……」

シグナムさんの発言に私はそう答える。

「それにあの子はまだしつかりと確認は取れていないけど、オリヴィエ陛下と同じ右目が翠、左目が赤色の虹彩異色……。これは聖王家の血を引いているという証にほかならない。」

だからこれだけでもう、あの子がどんな子だということかは分かりきっているからね」

「はい。おそらくあの子は私の……」

オリヴィエさんはそう言って顔を伏せる。

そこにシホちゃんが思案顔になって、

「シルビアさんが過去に私に言った王の再誕、というのはオリヴィエ陛下ではなくて、も

しかしたらあの子の事なのかもしれないという訳かもね」
シホちゃんがそう話す。

王の再誕…。

？
だとしたらあの子はやっぱりオリヴィエさんのクローン体という事になるのかな…

人造魔導師素体…。

どこからか入手したオリヴィエさんの遺伝子から生み出された悲しい宿命の子。

そう考えていると、通信が入ってきてモニターが開き、

『騎士シグナム、騎士シホ。聖王教会シャツハ・ヌエラです！』

「どうされましたか…？」

『すみません。こちらの不手際がありまして、検査の間にあの子が姿を消してしまいました…』

その報告を聞いてシグナムさんに急いで向かってもらおうように車のギアを上げても
らった。

そして聖王医療院に到着して、すぐにシスター・シャツハが出てきて、

「申し訳ございません！」

すぐに謝ってきたのでやんわりと「大丈夫ですよ」と言葉返して、

「状況はどうなっていますか…?」

「はい…。特別病棟とその周辺の封鎖と避難は済んでいます。」

今のところ飛行や転移、侵入者の形跡反応はありません」

その報告に、

(それじゃまだこの医療院のどこかにいるってことでいいのかな?)

私はそう判断した。

「外には出られないはずですよね?」

「はい…」

「それじゃ手分けして探しましょうか。」

いいわね?　なのは隊長、シグナム副隊長、オリヴィエ陛下」

シホちゃんという言葉でみんなで探すことになった。

私は外でないのなら中庭にいると思い、オリヴィエさんと一緒に探していると草むらの中から私のあげたウサギの人形を持ったあの子が飛び出してきた。

「こんなところにいたんだね…」

「うっ…」

「心配したんだよ。さ、病室に戻ろう?」

「ええ、それがいいでしょう」

私とオリヴィエさんで近づくが、どこかで見ていたのかそれより早く私達の前にシスター・シヤツハがバリアジャケットを纏ってちようど中間地点にいきなり現れたように立っていた。

「お二人共お下がりくださいい！」

シスター・シヤツハがそう言つてデバイス・ヴィンデルシヤフトを構えて睨むが、

「あ、あ、うあ……」

女の子はシスター・シヤツハの剣幕に恐怖を感じてしまったのか地面にへたりこんでしまい、ひどく怯えてしまつていて涙を流していた。

それで私はシスター・シヤツハに声をかけた。

「シスター・シヤツハ。少しいいですか？ 私に任せてください」

「あ、はあ……」

気の抜けた声でシスター・シヤツハは下がつてくれた。

それで私は女の子に近寄つてウサギの人形を拾つてあげ、

「……めんね。ちよつと、びつくりしたよね？ 大丈夫？」

「あ……」

女の子はなんとか落ち着いたようである。

「立てる？」

「うん……」

それで女の子は立ち上がった。

それと同時にシスター・シャツハにも念話を送り、

《緊急の危険はなさそうですね。ありがとうございます。シスター・シャツハ》

《はい》

それから私はお人形や女の子の服についたほこりをはらってあげて、笑みを浮かべながらゆつくりと話し出す。

「はじめまして。高町なのはって言います。お名前、言える……？」

「ヴィヴィオ……」

「ヴィヴィオか。」

いいね、可愛い名前だね。

……ところでヴィヴィオはどこか行きたかったの？」

「ママ………いないの………」

それで私は少し驚く。

もしかしてあの病室で「ママはここにいるよ」と言った事が聞こえていたようで効果があつたのかな？

「そっか。それは大変だね。それじゃ一緒に探そうか？」

「……………うん」

「よし。いい子だ」

後ろを見ればシホちゃんやシグナムさんも現場に来ていたようで優しい笑みを浮かべている。

それからヴィヴィオと一緒に話をした。



Side フェイト・T・ハラオウン

「…臨時巡察つて、機動六課に…?」

はやてと今話をしているんだけど結構重要なことみたいだ。

「ううん…この間の市街地での戦闘が見られていたみたいで、地上本部にそう言う動きがあるみたいなんよ」

「地上本部の巡察はかなり厳しいって話だよ…」

「うう…うちはただでさえツツコミどころ満載の部隊やしな。」

隊長陣しかり、サーヴァント達しかり…」

「いま、配置やシフトの変更命令が出たりしたら結構致命的だよ…?」

「ううん…なんとか乗り切らなアカンな」

それではやてにある事を聞こうと思う。

前々からはやてが隠していた六課の設立の真の目的。

「ねえ、はやて…?」

これは査察対策にも関係してくるんだけど、六課設立の本当の理由、もう聞いてもいいかな?

知ってそうなシホもまだ教えてくれないし…」

「…そうやね。

まあ、ええタイミングや。

今日これから聖王教会本部、カリムのところに報告に行くんや。クロノ君も来るよ」

「クロノも…?」

「なのはちゃんと一緒についてきてくれるかな?」

そんなときにまとめて話すから。私とシホちゃんが秘密にしてきたこと…。

サーヴァント達にも教えといたほうがええからダブルセイバー、ランサー、ファイターのみんなにも付いてきてもらったほうがええね。

それと緊急の事態に備えてアルクエイドと志貴の二人も六課に来させておいた方が

いいと思うんよ」

「そんなにやばめな事なの…?」

「念のための保険や。」

…まあ、アルクエイドはミットチルダは地球じゃないから、少し補正がかかってそんなに本気は出せへんけど、それでも十分強いからな」

そうだね。シホ曰く『本気を出せなくても私達をサーヴァント達も含めて余裕で完封できる』という話だし。

「そっか。それじゃ、なのはにシホは戻っているかな?」

画面を操作してなのは達に通信を繋げてみた。

すると突然泣き声が聞こえてきた。

何事だと思ったらあの保護された少女がなのは達とフォワードメンバーの中で大声で泣いていた。

いや、本当になんの事態…?

「あの…:なんの騒ぎなの? なのは」

『あ、あの、フェイト隊長。実は…』

なのはがなにかを伝えようとしているけど代わりに女の子が、

「いっっちゃやだー!!」

なにやら駄々をこねているようだ。

それで私達もなのは達のところへ向かってみた。

「あ、はやてにフェイト…」

「八神部隊長…」

「フェイトさん…」

みんなが困った顔で見てくる。

「エース・オブ・エースにも勝てへん相手はいるもんやね〜」

はやてがのんきにそう言っている。

《フェイトちゃん、はやてちゃん。あの、助けて…》

なのはからの救援要請が念話で聞こえてくる。

それで私が助けようと思ったけど、そこにちょうどいい感じで士郎さんとキャスター

がシホに呼ばれたのだろう、部屋にやってきた。

「シホから騒ぎがあると聞いたからやってきたが…なんだ。子供が泣いているのか」

「でしたら私の尻尾を使ってくださいいな♪」

キャスターが尻尾をいじって女の子に向けると女の子は興味を示したのか尻尾をモ

フモフしました。

「フカフカする…」

「ふふ♪ いつまでもいじつていいんですよ」

「ごめんなさい、キャスターさん」

「いえいえ、構いません。うちのツルギ君もいつも尻尾をいじつてきますから慣れたものです」

それで私も尻尾をいじっている女の子のウサギの人形を拾い、

「こんにちは」

「あう…?」

「ヴィヴィオ。こちらフェイトさん。なのはさんの大事なお友達だよ」

「ヴィヴィオ、どうしたの…?」

それからののはの念話が聞こえてくる。

《病院から連れ帰ってきたんだけど、どうも離れてくれなくて…》

《懐かれちゃったのかな…?》

《それでフォワードのみんなに相手してもらおうと思ったんだけど…どうもまだ怖いらしくて》

《《《《《すみません…》》》》》》

みんなが謝ってくる。

うん、それじゃしようがないね。

《それじゃ任せて》

《お願い》

それでヴィヴィオに話しかける。

「ヴィヴィオはなのはさん達と一緒にいたいのか？」

「うん……」

「でも、なのはさん、大事な御用でお出かけしないとイケないの。

でもヴィヴィオがわがまま言ったら困っちゃうよ。この子も」

お人形を操ってそういう仕草をさせる。

「ううっ……」

「ヴィヴィオはなのはさんを困らせたいわけじゃないんだよね？……ね？」

だからそのお仕事が終わるまで待っていいようか」

「うん……」

うん。言うことを聞いてくれた。

それでウサギの人形を返してあげた。

そこに土郎さんが声を出して、

「ならば、なのは嬢が帰ってくるまで私達がヴィヴィオの面倒を見ておきましょう。

子供の扱いはツルギで慣れているからな」

「お願いしていいですか、士郎さん？」

「ああ。それとヴィヴィオをこのままここで暮らさせるのなら遊び相手も必要だろう。」

アインズに連絡して家でお留守番をさせてしまっているツルギを連れてくるように
言っておこう」

「いいんですか？」

「ああ。まだツルギは学校に通っていないから一緒に育てるならちようど六課はいい環境だろうと思ってるのでな。」

歳もヴィヴィオと同じくらいみたいだしな」

「やったね、ヴィヴィオ。すぐにお友達ができるよ」

「お友達……？」

「うん」

まだ分からないという顔になるけどそこはしようがないだろう。

ツルギ君、ヴィヴィオといいお友達になってくれたらいいな。

それからヴィヴィオは士郎さんに任せて私達はヘリで聖王教会に向かう事になった。

ヘリの中では急遽呼び出したランサーにダブルセイバー、ファイターも揃いぶみであ

る。

「しっかし、士郎もすっかり主夫だな。慣れたもんだぜ」

「そうですね。シロウの成長は私としましても嬉しい限りです」

「親になって成長したということだな」

「ヴィヴィオも安心そうにしていますから任せて大丈夫でしょう」

ランサー、アルトリアさん、ネロさん、オリヴィエさんの順にそう話している。

「それより、ごめんね。騒がせちゃって…」

「ええよ。いいもん見せてもらったし」

「そうね、はやて」

はやてとシホがしきりに頷いている。

確かになのはにしては珍しい光景だったからね。

それでなのはも「にやはは…」と苦笑いを浮かべている。

「しっかし、あの子はどないしようかな？　なんなら教会に預けておくのもいいけど…」

「平気だよ。帰ったらもう少し話して様子を見るよ。」

それに士郎さんの言ってくれた件もヴィヴィオにはいい影響を与えると思うし…」

「そやるな。ツルギ君、かわええもんな。私の大事な弟分や！」

はやてが嬉しそうにそう話す。

朱銀髪でシホに似ているからどうしてもシホの子供に見えてしまうのが何とも言えないけど…。

はやてもはやてで、将来のお婿さん候補にツルギ君を上げているくらいだし。

まあ、はやてや私達は今は十九歳。そしてツルギ君は六歳。

一回りも二回りも歳が離れているけどはやて的にはオツケイらしい。

そんな話をしながらも聖王教会にへりは向かっていった。

第三百三十七話 『記された破滅の予言』

S i d e シホ・E・S・高町

それからヘリは聖王教会に到着して私達はカリムの執務室に向かった。

部屋に入るなり、初対面のなのはとフェイトはカリムに敬礼をして、

「失礼します。高町なのは一等空尉です」

「フェイト・T・ハラオウン執務官です」

「いらつしやい。」

初めまして、なのはさん、フェイトさん。

私は聖王教会教会騎士団の騎士、カリム・グラシアと申します。

どうぞ、こちらへ。

はやてとシホ、アルトリアさん、ネロさん、オリヴィエ陛下もゆっくりしていつてね。

それと……」

カリムの視線に映るのはフェイト達と一緒に初対面のランサーに向けられている。

その視線にランサーも気づいて反応する。

「ああ…。やつと俺か。俺はランサーだ。よろしくな、べっぴんな姉ちゃん」

「あら、ありがとうございます。

はい、よろしくお願いしますね、ランサーさん。

しかし、やっぱりこういう場では真の名前は名乗らないのですね」

カリムはランサーの真名を知りたいらしく、名乗ってくれないのに少し残念そうだ。

「あ？ ネロとアルトリア、オリヴィエはもう名乗っちゃまっているから俺も名乗った方がいいか…？」

「私の騎士の誓いで真名は公表しないと約束をいたします」

「そうか。なら…俺はクー・フリーンだ。よろしく頼むぜ、カリムの姉さんよ」

「はい」

ランサーも真名を教えているようだ。

これでカリムにはここにいるサーヴァントは全員名前を知られたことになるわね。だけど、カリムだから問題ないわね。

昔から内緒のことは本当に誰にも公表しないから私達も信頼しているし。

それで話し合う席に向かうとすでにクロノも着席していた。

なのは達も緊張しているようでわざわざ「失礼します」と言っただけに着席した。

「クロノ提督。少し、お久しぶりです」

「…ああ。フェイト執務官」

お互い硬い感じである。

もつと普段のように話せばいいのにね。

それでなにか、おかしな光景に見えた。

それでカリムも私と同じことを思ったのか笑みを零していた。

「お二人共、そう硬くならないで。」

私、クロノ提督、はやて、シホ達は個人的にも友人だからいつも通りで平気ですよ」

そうカリムが話すと先程までの堅いイメージがあったクロノも喋りが砕けたようで、

「と、いうわけだ。騎士カリムが仰せだから普段と同じで…」

「平気や」

「その通りね」

私達四人が砕けて話し出すと、なのは達も気分が和らいだのか、

「…はあ。それじゃ、クロノ君、久しぶりだね」

「お兄ちゃん、元気だった？」

なのはも砕けた喋り方になり、フェイトもクロノの事を『お兄ちゃん』と呼ぶ。

それで顔を赤くするクロノ。

やっぱり慣れないのかしらね…？

アリシアは常時『お兄ちゃん』か『クロノお兄ちゃん』がデフォオなんだけどね。

「…それは寄せ。もうお互いにいい歳なんだぞ？」

「兄弟関係に年齢は関係ないよ。」

それに、アリシアにもいつもお兄ちゃんって呼ばれているでしょ？　クロノ…

「ほほ…う？　クロノ君は本当はお兄ちゃんって呼ばれたいんかな？」

「そうね。そこは確かめておいたほうがいいわ。今後のためにもね…」

いいタイミングではやてが話してくれたので私もそれに乗った。

またいいネタが降りてきそうだわ。

するとクロノはやっぱり慌てだして、

「そ、そんなわけ無いだろう！」

「またまたあ〜？」

私達の仲でもう分かつとるんよ？

クロノくんの性癖くらい。なあ、シホちゃん…？」

「そうね。」

まだ言われ慣れていないと偽るのは実は初心を装っているとも噂されているからね

「君たち二人は…ますますエイミィに感化されて毒されていていつているな…」

「そうか…?」

「そうかしら…?」

「そうだろう?」

三人でそう言い合わせるように返事の返しを繰り返す。

でもこの勢いは絶やさせない!

最近、エイミイさんと連絡を取って新たに得たネタを話題に出す。

「それに、たまに家に帰るとよく怒らせてはマグダラで縛り上げられているってエイミイさんに聞くんですけど、やっぱりクロノって緊縛が趣味なの…?」

「それは引くわ…」

はやてと一緒にクロノをいじる。

久しぶりなので楽しくて仕方がない。

「シホ!

それはそもそもマグダラの聖骸布をエイミイに与えてしまった君のせいだという自

覚がないのか!」

「自覚はあるけど後悔はしていないわ…!」

「自信を持って言い切られた!」

それで笑いが部屋の中に起きる。

「さて…ゴホンッ！」

でも、いいタイミングでまたはやてが咳き込み、

「さて、それじゃ定番のおふぎけも済んだ事だし本題といこうか。

昨日の動きに関してのまとめと、改めて機動六課設立の裏表について、それから今後の話や…」

「いい感じに誤魔化された気がするが…そうだな。

騎士カリム、暗幕をお願いします」

「ふふ…もう少しお話を聞きたいところでしたが。

そうですね、わかりました。クロノ提督」

それで暗幕が引かれて部屋が暗くなる。

「六課設立の表向きの理由はロストログア・レリックの対策と独立性の高い少数部隊の実験例…。

知つての通り、六課の後見人は僕と騎士カリム、それから僕とフェイト、アリスアの母親で上官、リンディ・ハラオウンだ。

それに加えて非公式ではあるが、彼の三提督も設立を認め協力の約束もしてくれている」

「三提督が!？」

「初めて聞いたよ!？」

三提督に聞いて知らなかったなのはとフェイトは驚きの声を上げる。

「その理由は…私の能力と関係があります」

それでカリムは手に持つ束を広げる。

「私の能力…『プロフェーティン・シヨリフテン預言者の著書』」

これは最短で半年、最長で数年先の未来…それを詩文形式で書き出して預言書の作成を行うことができます。

二つの月の魔力が揃わないと発動できないからページの作成は年に一度しかできません。

予言の中身も古代ベルカ語で解釈によって意味が異なってくる難解な文章」

それを見てなのはとフェイトは分からないという顔になっていた。

「世界に起こる出来事をランダムで書き出すことで解釈ミスも含めれば的中率や重要性は割とよく当たる占い程度。」

つまりはあまり便利な能力ではないんですが…。

ですがシホのお陰で解説が抄っているんです」

「どうしてですか…?」

「忘れた…?」

私はシルビアと魂を融合させたのよ。

だから古代ベルカのシルビアさんの知識で古代ベルカ語も読めるのよ」

「あ、そっか！」

「あ、つと…それとですけど、もしかして聖杯大戦での予言をしたのってカリムさんが…」

「はい。私が作成しました」

それで何度目になるかわからない驚きの顔をするなのはとフェイト。

「聖王教会はもちろん、次元航行部隊のトップもこの予言には目を通す。」

信用するかは別にして有識者には予想情報の一つとしてな」

「ちなみに…地上部隊はこの予言がお嫌いや。」

実質のトップがこの手のレアスキルをお嫌いやからな…」

「レジアス・ゲイズ中将だね」

「そんな、騎士カリムの予言の能力に数年前から少しずつある事件が書き出されている」
クロノの目でカリムは予言を話し出す。

「『古い結晶』と『無限の欲望』と『魔の狩人』が集い交わる地、死せる王の下、聖地より彼の翼がよみがえる。」

死者たちが踊り中つ大地の法の塔はむなしく焼け落ち、それを先駆けに数多の海を守

る法の船も砕け落ちる』…と記されています」

「それって…」

「まさか…」

「ロストロギアをキツカケとする管理局地上本部の壊滅と、そして管理局システムの崩壊…」

カリムの発言に、なのはとフェイトは揃って息を呑む。

「これを解読していくといくつか分かるものがあります。

古い結晶とはおそらくレリックの事でしょう。

そして聖地より彼の翼がよみがえる…これはおそらくですが…」

カリムの視線はオリヴィエ陛下に移される。

「そうでしょうね。

おそらく私か…それともヴィヴィオのどちらかかでしょう。

あの子はまさしく私の血を継いでいます。

虹彩異色がいい証拠ですからね」

「だから、ヴィヴィオには厳重に警備をしていた方がいいと思うのよ。

そして、予言なんて打ち破ってやるわ…！」

「シホの嬢ちゃん、気合が入ってるな。」

なら俺も本気を出すとするとしようかね…？」

ランサーが私にそう言つて不敵な笑みを浮かべる。

「そのような予言は百害あつて一利なしです。シホ、必ず打ち砕きましょう」

「うむ。そうとなれば万全を喫するしかないな、奏者よ」

「ええ。だから必ずこの予言を阻止しましょう」

私がそう宣言する。オリヴィエ陛下やヴィヴィオを敵の手に渡すわけにはいかないからね。

ネロ達も気合を入れていた。

それで話は終了し、私達は六課へと帰ることになった。



Side 八神はやて

六課に帰ってきてきてロビーで、

「ほんならなのはちゃん、フェイトちゃん、シホちゃん、

これで今日はもう用はないからゆっくりしてな」

「うん」

「情報は充分揃ったし大丈夫だよ」

「ええ」

「ただと言っておきたいことがある。」

「あいな！」

三人は私の命の恩人で大切な友達や。

六課がどんな展開と結末になるかはまだ、分からない…けどな！」

「その話だけ出向を決めるときにちゃんと聞いたよ」

「私もなのはもシホも納得してここにいる。大丈夫…」

「それに私とシホちゃん、フィアちゃんの教導隊入りとかフェイトちゃんの試験とかはやてや八神家のみんな、すぐフォローしてくれたじゃない？」

「だから、今度ははやての夢をフォローしないとイケないって…」

「そうよ。はやては一人じゃないんだから…」

「あかん。それじゃ恩返しとフォローの永久機関や」

「それで四人して笑い合う。」

「友達って、そういうものだと思うんだ…」

「それで私は嬉しくなった。」

途端、なのはちゃんとフェイトちゃんとシホちゃんは、背筋を正して敬礼してきて、「八神部隊長、今のところ部隊長は何も間違っていないであります」

「だから大丈夫。いつものように堂々と命令してください。胸をはって、エヘツと…」
「そうです。それが、その元気こそが八神部隊長の取り柄なんですから」

「うん！　ありがとう、三人とも！」

それで三人と別れて部隊長室へと入り、引き出しからアルバムを取り出して、グレアムおじさんの所へと目が移る。

「グレアムおじさん…」

私の命は、グレアムおじさんが育ててくれて、うちの子たちが守ってくれて、なのはちゃん達に救ってもらって、生きてるけどアインスが繋いでくれた命や。

私の命は、悲しんでいる誰かを救うそのために使うんや。

そう、決意する。



S i d e 八神士郎

…さて、どうしたものか。

なのは嬢が帰ってくるまでヴィヴィオの面倒を見ていたのはいいのだが…私も懐かれてしまった。

そしてまだ若いつもりではいるのだが…、

「シロウ おじさん」、ありがとう！」

「…ああ。ヴィヴィオ、私の事はおじさんと呼んでも一向に構わない。

だから、ツルギと仲良くしてくれな…？」

「ツルギ…？」

「ああ、もうすぐヴィヴィオのお友達になる子の事だよ」

「お友達…。欲しい！」

「もうすぐ会えるからな」

「うん！」

そこになのは嬢とフェイト嬢が部屋に入ってきた。

「士郎さん、ごめんなさい。」

「ヴィヴィオ、迷惑かけなかつたですか？」

「ああ、大事無い。だから私ももう出て行くが、ヴィヴィオを寝かしつけてやってくれ」

「はい」

「シロウおじさん、またね！」

「ああ、ヴィヴィオ。またな」

それで私は食堂へと戻る途中で自宅にいるアインスと連絡を取り、

『士郎、明日にもツルギと一緒に機動六課に向かわせてもらうことにする』

「わかった、待っているぞ。アインス」

一緒にいたキャスターも声を上げて、

「それとご主人様^{マスター}。」

志貴とアルクエイドにも連絡を入れましたので近々機動六課に出向という形でやってくるそうですよ」

「これで八神家勢揃いだな…機動六課を城塞にでもする気か？　はやては…」

「さて、どうでしょうね…？」

『だが、私達家族が揃えば怖いものなど何も無いな』

アインスがそう言う。

「ああ。それは自信を持って言えることだな」

さて、これからどうなっていくのか？　楽しみではあるな。

第三百十八話 『母と子』

S i d e ラン・ブルックランズ

ヴィヴィオがなのはさんとフェイトさんの部屋で一緒に寝るようになって翌日、朝の訓練で、

「うー…やっぱ重い」

「僕も、二つとも巨大化して少しつらい…」

私はバルムンク、レンはアウルヴァンデルのモード2に苦しめられていた。

エリオはブースターが増えた。

ティアさんはダガーモードになった。

だけど私とレンのモード2は両方共巨大化した。

私のバルムンクはモード2はドラッチエンフォルム《Drachen form》。

スリムなシグナム副隊長のレヴァンティンと似た剣であったのに1.5mはある巨

大な大剣に変化してしまった。

特徴的なのは片刃の反対側の峰部分に三箇所ブースターがついていることだ。

そしてレンのアウルヴァンデイルのモード2はギガシルトフォルム《Gigasch
ild form》。

二つの盾が一回り大きくなり腕部分を覆い隠すくらいの巨大な盾に変化した。

当然、二重構造のギミックは変わらず展開すれば巨大な魔力刃が突き出てくるといった仕様である。

ここまで大幅な変化をするとは…。

これだとセイバーズ隊は対巨人戦闘に特化したものに仕立て上げたいのかと勘ぐってしまふ。

でも、魔力を込めると私の剣は龍の模様が浮かび上がるようになっていてそれが輝く事に力を増していくという仕様らしい。

「ランはガジェットを軽く薙ぎ払えるようになってシホちゃんが提案してのモード2。

ブースターを吹かす事でとんでもない突撃斬りが出来るのが魅力だね。

そしてレンはさらに広範囲で味方を守るようにモード1より強力なシールドと反射が展開できるモード2。

どっちも魔術師でもある二人なら扱えるだろうというシホちゃんやシャーリーの魔

改造が施されているんだよ」

「な、なるほど…」

「それじゃ慣れないといけませんね…」

「二人共。身体強化の魔術を使えば軽く扱えると思うから試してみてください」

シホさんの言葉に私とレンは身体強化を施してもう一度武器を持ってみた。

「あっ…」

「軽いです…」

「二人のデバイスは魔導師と同時に魔術師の力も併用して使われるタイプだから四人とは違って特殊だけど慣れていつてね？ モード3も二人はまた違う味を出しているからね？」

「は、はい…頑張ります」

それから訓練は行われていつて主に私が切込隊長をやらされ、レンがみんなをガードする部分に特化したスタイルだという事が判明した。

そして今日の訓練も終了し、汗をシャワーで流しに行く途中で、

「…でも、モード2もみんな大体慣れてきたね」

スバルさんがそういうのが私とレンはまだやつとコツを掴んだ程度だ。

「変化が少ないあたしとキャラはともかく、エリオとティア、ランにレンは大幅に変わっ

「たから大変そうだよね」

「形から変わってますもんね」

「あたしは別に…。ダガーモードはあくまで補助だし…それより大変なのはエリオ、ラ
ン、レンでしょ？」

「ストラーダはセカンド、過激だもんね」

《そうでしょうか？》

「私がかっこいいと思うよ。ストラーダ」

《ありがとうございます、レディ》

「それにセイバーズの二人は巨大化したもんね」

「そうなんですよー」

私のはガジェット三型と同等の大きさの大剣ですから少しまだ振り回され気味で…
モードの時と違って動きを変えるのがまだ慣れていないんですよ。

ブースターを吹かすとさらに振り回されますから」

「僕は…もう慣れたかな？ プロテクションもまた格段に強化されたからこれでさらに
みんなを守るし…」

「レンはメイン盾だもんね」

「ちゃんと攻撃もできますよー！」

『あははッ!』

それで全員で笑いながら隊舎へと戻っていききました。



S i d e シホ・E・S・高町

なのはと私で訓練場の後片付けも終了し、隊舎へと歩いていくとヴィヴィオを連れて
いるフェイトの姿があった。

それでなのはと一緒にフェイト達に寄った。

「ヴィヴィオー!」

なのはがヴィヴィオの名前を上げながら駆け寄っていく。

私はその後ろを歩きながら寄っていく。

ヴィヴィオもなのはにとととと歩きながら抱きついた。

「おはようヴィヴィオ。ちゃんと起きられた?」

「うん」

「おはようフェイトちゃん」

「おはようね、フェイト」

「うん、おはよう。なのは、シホ。：ヴィヴィオ、なのはさんとシホさんにおはようって」

「おはよう」

「うん、おはよう」

「おはよう、ヴィヴィオ」

「朝ごはん、一緒に食べられるでしょう?」

フェイトがそう聞いてきたので、

「うん」

「大丈夫よ」

それで四人で歩いていきながら食堂へと向かった。

それで食堂へと到着すると今日は機動六課に移動してくるために顔出しで来ていたらしいアインスが近寄ってきて、

「あ、シュバインオーグ」

「ん? どうしたの、アインス」

「いや、なに。ツルギが今日来ることになってるから話しておこうと思つてな」

「へー、ツルギが来るのね。ヴィヴィオ、よかったわね。もうすぐお友達が来るわよ?」

「お友達…?」

「うん、ヴィヴィオと同じ年くらいだからいいお友達になれると思うんだ」
「なのはがそう付け足してくる。」

「お昼過ぎに迎えに行ってくるから楽しみにしておいてくれ」

「ええ」

「ではな」

アインスはそう言つて隊舎の外に出ていった。

それから食堂で土郎の料理を食べながら、

「んむっ…土郎の料理の腕が上がったわね」

「うん。さすが六課のコック長だね」

「おいしーね」

「そうだね、ヴィヴィオ」

それで四人で料理を食べ終わってからデスクワーク作業をしようとなのはと一緒にオフィスに歩いている時だった。

ティアナがはやてに呼ばれて部隊長室へと向かつていった。

おそらく本局に行くのだからクロノにでも挨拶にいくのと一緒にティアナの紹介にいくのだろう。

それで残っているスバル、ラン、レンにデスクワーク作業が終わったら訓練でもつけ

てやろうという話になった。

ライトニング：フェイトとエリオ、キャロは前の現場調査にいったし、シグナム達副隊長陣はオフシフトだしね。

なのはがスバルに、

「前線メンバーは私とシホちゃん、スバルにセイバーズの五人だけだね」

「何も起きないことを祈ります…」

「そうですね。事件が起きないことはいいことです」

「うん…平和が一番」

そうね。予言の件もあるしランとレンにもクーデターの件をそれとなく吟味しておくのもいいかもしれない。

もしもの事態になって固まったらそれまでだから。



Side ティアナ・ランスター

あたしは八神部隊長の案内の下、本局にやってきたのだけど、これからフェイトさん

のお兄さんであるクロノ提督に会うというから緊張はするものだ。

「はーやて」

「ようこそ、クラウディアへ」

二人の男性が歩いてきたのでどちらかがクロノ提督だろう。

あたしはしっかりと敬礼をしておいた。

「すごい船やね。さすが新造艦や」

「まあな。…臨時査察を受けたと聞くが大丈夫だったのか？」

「うん。即時査問は回避できたよ」

何の話だろうか？ 査察？ 六課になにか問題があったのだろうか？

気になるわね。

「あ。そうやね。紹介しておくよ。うちのフォワードリーダーで、執務官志望の…」

「ティアナ・ランスター二等陸士であります！」

「ああ」

「よろしくー」

それから部屋に移動して階級の低いあたしは立っていようと待機している。

アコース査察官にどうだい？ と誘われているけどその欲望には耐えないといけない。

こんなところでボロを出したらいけないからね。
これもなにごとくも経験。だからしつかりとしないと。



Side スバル・ナカジマ

今日の分の書類仕事もなんとか終了。

それでこれからどうしようかと思っていたら、ふとなのはさんの方を見るとデータのセットが終わっているのにぼーっとしている光景が目に入った。

「なのはさん…？ えっと、なのはさん？」

「えっと、ごめん。なに？」

「いえ、データのセットが終わってますよって…」

「あ、本当だ。ダメだね。ボーツとしちやって…」

「いえ…」

なのはさんが開いていたデータはやっぱりヴィヴィオ関連のデータだった。

なのはさんも悩んでいるんだろう。

今後、ヴィヴィオがどういった人に預けられるのかとか悩みどころだし。

そこでお昼の鐘の音が鳴り、

「ちようどお昼だ。これからヴィヴィオとお昼を食べるんだけどスバルもどう…?」

「それではご一緒します」

「よかった。それじゃ…他には、あ！ いたいた」

なのはさんが見た方には黙々とデータを打ち込んでいるシホさんの姿があった。

シホさん、あれでかなりやり手だから非の打ち所がないというのはこの事だろう。

デスクワーク作業はお手の物だし。

それにあたし達に特別訓練と称して教えてくれる地球発祥だというチュウゴクブ
ジュツ…?という武術。

この魔力を一切使わない攻撃方法はとても有効だということが判明しているのであ
る。

センターガードのティアとフルバックのキャロはともかく、あたしとエリオ、ラン、レ
ンは習っている。

それでガジェットにシントウケイ?という攻撃方法を試しに使ってみたらAMFを
無視して中身に浸透し爆発を引き起こした時はびっくりした。

他にも瞬動術という移動法はマツハキャリバーを使っているあたしは併用できない

けど、他の五人は使っていて全員ソニックムーブをしているのではと思うほどの動きをしている。

エリオなんか瞬動術とソニックムーブを同時使用して移動が倍以上になったと喜んでた。

総じて隊長、副隊長陣は全員シホさんに習ったと聞くからやっぱりシホさんも超人の一人かもしれない。

昔は機械一式はアナログがデフォの魔術師だから全然ダメだったと後に聞いたけど、信じられないというのが最初の感想だった。

ティアにも聞いたんだけどシホさんは才能があんまりないと聞いた。

それなら必死に努力して色々な技能を会得してきたんだろう。

シホさんは謂わば努力の人なのだ。

魔術も魔法も武術も全部昔に戦場で渡り歩いてきた時に必死に習得したという話だし。

シホさん自身は私の教導は反面教師なのよと言っていたけど、それもあたし達の経験にしつかりと重なっていくのでいいことだと思う。

だから無駄な教え方もしないし、なのはさん同様実に覚えやすい教導をしてくれるので嬉しい限りである。

閑話休題

「シホちゃん。シホちゃんも一緒にお昼はどう？」

「そうね。それじゃご一緒させてもらおうかしら。待つてね、すぐにデータのセットを終わらせるから」

それからシホさんはあたしと比べてもかなり素早い操作をしてデータ処理を終わらせてやってきた。

それで三人で歩いている時にふとさつき思ったことをなのはさんに聞いてみた。

「この先、ヴィヴィオってどうなるんでしょうか？」

「ちゃんと受け入れてくれる家庭が見つかればそれが一番なんだけどね」

「そうよね。それに…」

シホさんはそこで少し思案顔になる。

なにか隠しているのかな？

それはともかく、

「難しいですよね。普通と違うから…」

「そうだね…。見つかるまで時間がかかると思うから…。だから当面は私が面倒を見てい

けばいいのかなって…。

ファイターもそこらへんは同意してくれたし。

エリオやキャロにとつてのフェイト隊長みたいな保護責任者みたいな形にしておこうと思つて」

「いいですね。ヴィヴィオ、喜びますよ！」

「そうですね。ヴィヴィオってなのはに一番なついているから」

「喜ぶかな…?」

「はい。きつと！」

「そうですね」

なのはさんが嬉しいことを言ってくれたのであたしも嬉しい気分になった。

それで部屋についてファイターさんが一緒になつて遊んであげているヴィヴィオに聞いてみたけどヴィヴィオはわからないって顔だった。

「ほらね。やつぱり分からないよ」

「…うーん。なんていえばヴィヴィオはわかつてくれるかなあ…?」

うん…。つまりしばらくの間はなのはさんがヴィヴィオのママだよってことだよ」

「ママ…?」

それでヴィヴィオはなのはさんを見上げる。

でも、少し言葉の間違えたかな？

なのはさんは、

「いいよ。ヴィヴィオのママでも…」

なのはさんはそう言って笑みを浮かべる。

「ヴィヴィオの本当のママが見つかるまでなのはさんがママの代わりだよ。

ヴィヴィオは、それでもいい…？」

「ママ…」

「はい。ヴィヴィオ」

なのはさんがそう答えるとヴィヴィオは突然泣き出してしまった。

それでなのはさんも慌ててあやしていた。

「ど、どうしましょう…？」

「平気よ、スバル。これはヴィヴィオなりの嬉し涙だから」

「そうですか？ シホさん…」

「きつとね」

それからみんなで一緒に昼食を食べました。

土郎さんの手作りのサンドイッチだと聞いたからとてもおいしかったです。

その後、ランとレンと合流してティアやエリオ、キャロはいないけど三人でなのはさ

んとシホさんの教導を受けました。

そして訓練も終わって帰り際に前から歩いてくる土郎さん、アインスさん、キャスターさんともう一人…小さい男の子がいました。

歳はヴィヴィオと同じくらいかな？

朱銀髪の男の子でシホさんにどこか似ていました。

「訓練は終わったか、シホ」

「ええ。ところで…」

シホさんが笑みを浮かべながら、

「ツルギ君。こんにちは」

「こんにちは。シホお姉ちゃん！」

「あの…シホさん、こちらの子は？」

あたしが思い切って聞いてみると、

「ああ、スバルは会うのは初めてだったわね。この子は土郎とアインスの子供で…」

「僕の名前は八神ツルギです！ よろしくお願ひします！」

「…土郎さんとアインスさんの!? わあ、可愛いですね」

「ありがとうございます！」

ツルギ君はやっぱりどこかシホさんに似ている笑みを浮かべた。

それに男の子だと教えてもらって初めて気づいたけど、どこか女の子みたいな中性的な顔つきだ。

「まだ小学校に通っていないから今日からヴィヴィオの遊び相手として機動六課で過ごすことになる。可愛がってやってくれ、スバル」

「ヴィヴィオ。お前の遊び相手だ。ツルギはしつかりとしているから色々と遊んでもらえ」

士郎さんとアインスさんがそうヴィヴィオに話す。

「ヴィヴィオちゃんって言うの……？」

「う……」

どうやらまだ同い年の子と話す機会が初めてなのかなのはさんに抱きついていて。

だけどツルギ君は笑みを浮かべて、手を差し出し、

「僕の名前は八神ツルギ。握手しよう？」

「……………うー、はい」

ヴィヴィオは怖々と、だけど勇気を出してツルギ君と握手をする。

握ったらツルギ君も「よろしく！」とブンブンとヴィヴィオの腕をふっていた。

純粹な子だね、ツルギ君は。

ヴィヴィオもそれから少しだけ心を開いたのか笑みを浮かべていた。よかったよ

かった。

それからあたしもツルギ君とお友達になった。

「それじゃまた明日ね。シホお姉ちゃん、なのはお姉ちゃん、スバルお姉ちゃん、ヴィ
ヴィオちゃん！」

それで士郎さん親子は自室へと向かっていった。

この様子だとエリオとも歳が近いから男の子同士でいい仲になりそうだね。

それでなのはさん達とも別れて夕食時。

食堂でエリオとキャロとフリードとラン、レンと一緒に食事をとっている時だった。

「…それにしてもなのはさんとフェイトさんがママって…」

「ヴィヴィオ、ものすごい無敵な感じ…」

「そうだね」

「うん」

「あははっ！ それだったらエリオとキャロはフェイトさんの非保護者で、ランとレン
もシホさんの非保護者、そしてなのはさんの教え子じゃない」

「えっと、それはそうなんですけど…」

それで四人とも苦笑いを浮かべている。

「そういえばエリオとキャロ的にフェイトさんはお姉さん？ それともお母さん？

どつち?」

つい興味本位で聞いてみた。

まずキャラコが、

「私は優しいお姉さん、ですね」

「僕はどつちだろう? 難しいかもしれないですね」

「エリオ君はフェイトさんの子供なのと、弟なのとどつちが嬉しいのかな? 明日、聞いてみようか?」

「ごめん、キャラコ。それはやめて!」

「あはは! それでランとレンはシホさんはどうなの?」

「そうですね。厳しくも優しいお姉ちゃんって感じですよ」

「はい…。魔術を教えてくださいの時はとても厳しいんですけど普段はああで優しいですから」

「だよ。思い悩んでいたティアも立ち直らせたくらいだからね。あ、そうそうエリオにレン」

「はい…?」

「なんですか?」

「士郎さんとアインスさんの子供で六歳の男の子のツルギ君って子が今日からアインス

さんと一緒に機動六課で暮らすそうなんだよ。

だから暇があったら一緒に遊んでやったら？ 男の子同士として」

「そうなんですか？」

「ツルギ君が来てるんですか」

「あれ？ レンは知ってるんだ」

「はい、うちは八神部隊長の近くだからよく会っていましたし。ね？ ラン姉さん」

「そうね、レン」

「そっか。うん、それじゃエリオ。ツルギ君は元気な子だから仲良くなれると思うよ。

…あ、でも少し女顔だから見間違うかもね？」

「エリオ君。変な間違いをしちゃダメだからね？」

「え？ え？ 突然なに？ キャロ？」

突然キャロはエリオに顔を寄せてそう言い含めている。

なにを間違うというんだろう？

「とにかく伝えたからね？」

「はい」

「わかりました」

うん、これからもっと楽しい毎日になりそうだね。ティアにも伝えてあげよう！

でも、シホさんに聞いた話でティアは思わず嫉妬するかもしれないかもね。
ツルギ君、かなりスペック高いから。



108部隊ではある部屋でマリィ、ゲンヤ、ギンガの三人が揃ってナンバーズ達の映像を見ていた。

「現場検証を合わせて、あらためて六課からデータをもらいました」

そして展開される映像ではナンバーズ達の足元に映し出される魔法陣状のテンプレートについて話し合う。

「使ってる動力反応、従来のものとは比べるとかなり高性能です」

「それじゃ、間違いねーようだな…」

「はい。この子達全員、最新技術で作られたのだろう戦闘機人で間違いありません」

それでゲンヤは厳しい顔つきになる。

「マリィさんとの解析を六課とすり合わせないといけないのですが…」

「通信で済む話って訳にはいかねーな。しかたがない…俺が出向くとする」

「はい。八神部隊長のお戻りは八時過ぎになるそうです」

「マリエル技官はお忙しいかい…?」

「私もご一緒します。最近はスバルの顔も見えていないですし」

それでゲンヤはふつと笑い、

「ありがとうよ。それじゃ時間まで好きにやっつけてくれ」

それでマリィはギンガと一緒に休憩室へと向かっていった。

それをゲンヤは見送りながら一枚の写真立てに目を向ける。

そこにはゲンヤの今は亡き妻、クイント・ナカジマの姿が映されていた。

眺めながら、

「やっぱりと言えば、やっぱりか…。」

まだ、なんにも終わっちゃいねえんだな」

どこか疲れたような声でそうゲンヤは呟くのだった。

そして移動中の車の中でギンガは、

(あの時の事件は、まだ終わっていない…。

母さんを殺した戦闘機人事件)

それでギンガはブリッツツキシャルバーを握り締めるのだった。

第三百十九話 『六課最強は？そして強さとは？』

季節は8月。

「俺はおもにガードウイングのポジションにつく志貴だ。これからよろしく頼む」

「私はアルクエイド。はやてのサーヴァントだから、はやての命令には基本従うけど色々と指図されるのは嫌いだから自由に敵の相手をするわねー。よろしくー」

こうしてアルクエイドと志貴も六課出向となつて八神家全員が揃っていた。

そんなある日に教導のなのは、シホ達はフォワード陣に訓練を課して今日も午前
の訓練が終了した。

「それじゃ午前中の訓練も終了だよ。お昼休みにしようか」

「「「「「ありがとうございます！」「」」」」」

六人は元気に挨拶をして訓練を終了した。

「みんな、午後は108部隊に向向研修だからそれまでは隊舎内で自由に待機して
ね」

「「「「「はい！」「」」」」」

それで全員で隊員寮に戻つてくるとヴィヴィオとツルギがモニターに向かつて教材用のビデオを見ていた。

ヴィヴィオはなのは達に気づくと「ママ！」と呼びなのはに抱きつく。

「ヴィヴィオとツルギ君は何を一緒に見ていたの？」

「なのはお姉ちゃんと、フェイトお姉ちゃんと、シホお姉ちゃんのビデオをヴィヴィオちゃんと一緒に見ていました」

ツルギが子供にしては利口そうに答える。

スバルがヴィヴィオに、

「なのはママとフェイトママはどっちも強いでしょう？」

「うん！…あ、そうだ。なのはママとフェイトママとシホお姉ちゃんは誰が強いのか？」

「うーん…どうだろうね？ 比べたりしないからわからないなあ」

「そうね。最近は本格的な模擬戦をしていなかったものね。私もユニゾンリミッターがかけられていて本気を出せないし…」

シホ達がのんきに話しているがそれを聞いていたスバル達フォワード陣達は、

「なのはさんとフェイトさんとシホさん、誰が強いのか？」

という思いを抱いていた。

・スターズ隊の主張

「やっぱなのはさんじゃない？」

航空戦技教導隊の教官で負傷ブランクがあつたとはいえ10年飛び続けた歴戦の勇士なんだし」

「エースオブエースは伊達じゃないだろうしね」

・ライトニング隊の主張

「でもフェイトさんだつて事件の現場に向かい続けて手荒な現場でも陣頭に立つて解決してきた一線級の魔導師ですよー」

「空戦ランクはなのはさんもフェイトさんも同じS+ですし」

・セイバーズ隊の主張

「でもやっぱりシホさんだと思います。」

なのはさんとフェイトさんはシホさんの弟子だという話ですから」

「そ、それに推定魔導師ランクと空戦ランクは両方ともSSでそれに魔術という強みがあります…魔弾の射手という異名も持っていますし」

六人がそれぞれ主張しあいお互いに譲らないという平行線。

そんな時にティアナが、

「六課で一番強いのは誰なのかしらね…？」

八神部隊長や副隊長達：アルトリア空曹長。

それにサーヴァントの皆さん、食堂勤務だけど士郎さんも空戦Sランク、アインスさんも空戦S+………なんか改めて思うけど機動六課の戦力って異常ね」

「あ……」

それで今度は誰が一番強いのかという話題になってだんだん話が膨らんでいき、

「というわけでっ！ 第一回！ 機動六課で最強の魔導師は誰だか想像してみよう大会……！！」

アルトとスバルがマイクを取り、メカニック陣を集めて予想をしだしていた。

「戦力がカンストしているサーヴァントの皆さんは抜いて、鉄板の最強候補は七人！」

「近接最強！ 古代ベルカ式騎士！ ヴィータ副隊長とシグナム副隊長！」

「おさめている武術が強みでバインド攻撃もお手の物、その手の槍で敵陣を斬り込む魔導師！ ファイアット副隊長！」

「六課最高のSSランク！ 超長距離砲持ちの広域型魔導師騎士。リイン曹長とのユニゾンって裏技もある八神はやて副隊長！」

「同じく最高のSSランク！ 『魔弾の射手』という異名を持ち魔術という神秘も行使し近距離、中距離、遠距離、超長距離を全部対応できてアルトリア曹長ともユニゾンできるシホ隊長！」

「そして六課最速のオールレンジアタッカー、フェイト隊長と説明不要の大本命！
エースオブエースのなのは隊長！」

「最強は誰だーーーーッ?!?!」

「「「おーーーーー!!」」」

メカニック陣の野太い雄叫びが木霊する。

「八神部隊長だ！」

「いや、ヴィータ副隊長！」

「シグナム姐さんっすね！」

「シホお姉様です！」

「なのはさんだよ！」

「フィアットさんも意外と…」

「フェイトさんに俺は決めた！」

「実は大穴で食堂勤務の士郎さん！ 漢だー!!」

それで色々な名前が挙がっていき会場は大いに盛り上がり上がっているのだった。

あまりの体育会系のノリについていけなかった残りのフオワード五人はあわあわしていたのだった。

それは隊長陣にも話が流れてくるほどだった。

休憩室で休憩をしていたシグナム、グリフィス、ランサー、シホ、ネロ、アルトリア、ファイアット、シャリーがルキノからその話を聞いて、

「なかなか面白そうなことをしているじゃねーか、あいつら」

真つ先にランサーが話に食いついた。

「わかった。報告ありがとうルキノ。何かあつたら直々に注意をしておくよ」

「お願いします」

「それにしても機動六課最強は誰だ、か…実際誰なんですかね？

サーヴァントさん達は欄外らしいですけど…」

シャリーがそう聞く。

「それはやはり状況によるんじゃないかしら？」

「そうですね。でも、それをいうとお姉様はどんな戦場でも勝つてきそうですけど…ほ

ら、貫禄とかで」

「そうだな。それに模擬戦の数だけ強さはバラけてくるからな…そういえば最近シユバインオーグと模擬戦をしていなかったな。久しぶりにどうだ？」

「別にいいけど私でいいの…？」

「ああ。なのはあまり乗ってこないしテストタロツサも控えめだからな」

「ま、そのうちにね…。やるならフォワードのみんなの前でやった方がいい勉強になる

だろうし」

「その約束、忘れるなよ？」

「シグナムは相変わらずですね」

「うむ。だが芯がしっかり通っていて良いではないか」

それからその場の全員でこれからどんな事に話が発展するか予想していたり。

聞き込み調査・その1 『八神はやて、リイン』

「個人での戦闘能力かあ…。私は弱いよ。だから空戦じゃなくて総合でランクをとって
いるんやし」

ティアナの差し入れのケーキをばくつきながらそう言う。

それでティアナは信じられないように理由を聞いてみると、

「すごいのは魔力だけや。だけど高速運用はできひんし並列処理は苦手やからな」

「大魔力と高速・並列処理は衝突するのが普通です」

「それやから私の魔力運用は『立ち止まって展開・発射』だけなんよ」

「それを私がユニゾンしてお手伝いしているんですよ！」

「それにや。後方支援専門の殴り合い用のスキルなんか無意味やからな。適性の低いスキルを鍛えたところで効率も悪い。」

ぶつちやけ六課の前線メンバーで私がガチンコで勝てるのはキャロくらいとちやうか?」

「もちろんフリードやヴォルテールは使用禁止ですよ」

「……………いや、最近はダブル高町教導官仕込みやからな。」

体力あるやろうな…。私がシホちゃんに習っていない瞬動術や浸透勁も覚えてきているんやろ?」

「まあ、それはあたしも覚えさせられました。」

便利ですよ。魔力を一切使わない格闘スキルなんて…銃が取り柄のあたしでも近寄られたら瞬動術+浸透勁でノックダウンできますし…」

聞き込み調査・その2 『シグナム副隊長、ヴィータ副隊長』

「個人戦技能、ねえ…? 個人戦にも種類があんだろ」

「えーと…それじゃ平均的な強さとか」

「平均的な強さだあ…? 追撃戦、決闘、戦闘状況や相性の違いにだって左右されるだろ?」

どんな状況でも平均的に強いってのは要は何でも屋つてことだがマルチスキルは対応力と生存率の上昇のためであって直接的な強さとは関係ねえぞ?」

「そうだ。実際隊長達六人でトーナメントすれば試合条件にもよるがやった回数だけ優勝者は違おうだろうな。そのくらい力は伯仲している。」

それに決闘以外では私は結構シュバインオーグとの戦いでは負け越しているからな
…」

「シグナム副隊長が…!？」

「ああ。シュバインオーグは戦闘の流れを掴むのに関しては六課の中で一番優れているだろうな。いつの間にかペースをあちらに握られているからな」

聞き込み調査・その3 『シホ隊長、ファイアット副隊長』

「そうね。やっぱり状況にもよるわね」

「そうですねえー。その分お姉様は心眼でどんな状況でもすぐに対応できてしまうのが強みですが、魔術を使わないでという少し火力不足になりますしね」

「ファイアもまずどの位置からでもバインドを放てる鋭さが重要になってくるからね。」

それから色々な技に繋げていくわけだし…。ファイアはもともとバインド使いだしね」

「とりあえず二人に言いたい事はまずどうやって自分より強い相手に勝つかね？」

「そうですね」

聞き込み調査・その4 『なのは隊長、フェイト隊長』

「うーん、誰が強いとか。私はよくシグナムと模擬戦をしているけど結構実力は五分五分かな?」

「うん。それじゃそんなみんなに問題だね。『自分より強い相手に勝つためには自分の方が相手より強くないといけない』って聞いたことある?」

一同はわからないといった感じの表情をする。

「『この言葉の矛盾と意味をよく考えて答えなさい』。これが問題だよ」

…それで隊長陣全員から聞き取り調査を終えて六人は考える。

「自分より強い相手に勝つためには自分の方が相手より強くないといけない、かあ…言葉遊びでもないわよね? どういう意味かしら?」

「やっぱり訓練を重ねて相手より強くなる事ですかね?」

「それだと倒しているのは自分より弱い相手になっちゃうよ?」

「そもそも訓練だけでそうそう強くなれたら苦労しないわよ!」

「自分より強い相手に勝つ方法か…なんだろうね?」

そんな時にヴィータがやってきて108部隊出向研修の話をされて六人は移動を開始する。

そんな中、地下の道を徘徊する者達が複数確認されたという報告が入ってくる。



フォワード六人はすぐさまアラートに従い現場に向かった。

『I型20機。III型4機。III型はなにやら初めて見るタイプだよ。前線は注意して！
付加ユニット付き…多足歩行型！』

その映像をスクリーンで見っていたヴェータは思わず歯ぎしりをする。
連想されるのだ。7年前に遭遇した未確認に。

しかしすぐに気持ちを落ち着かせて眺める。

『こちらからはライトニング1・2が緊急出動する。みんなはそちちの状況確認とガ
ジェットの迅速な撃破！』

『108部隊や近隣の武装隊員も警戒に当たってくれてる。スターズ1からは何か？』
『スターズ1からフォワードチームへ。AMF戦に不慣れな他の武装隊員達にガジェツ
トや危険対象をなるべく回さないように。』

こんな時のための毎日の訓練だよ。………六人でしつかりとやってみせて！』

「「「「「はい！」」」」」

そして六人はバリアジャケットを纏ってレールウェイの地下通路に入っていく。

その一方で中ではスカリエツティ側の戦闘機人のナンバーズ6のセイン、ナンバーズ11のウエンデイがナンバーズ4のクアットロの指示を受けていた。

「機動六課が出てきたけど、どうしようかクア姉。私的には前の青い騎士が出てきたら速攻で逃げたいんですけど…」

セインは前の戦いで気配だけで腕を切られてしまった過去を持つ。

だからアルトリアに対して苦手意識を植えつけられていた。

『そうねえー。ここでプチつと潰してもいいけどまだ不確定要素が多い…というかありすぎているからねえ。………まったくくなによあの戦力は』

クアットロはぶつぶつと呟く。

『とにかく今回の作業はⅢ型改のテストとお披露目だけなんだし、もうほとんど済んだでしよう?』

「まーだいたいのところはね」

『それじゃ空からおっかなーいのが飛んでくる前に早めに退いてらっしゃい』

「そーねー」

『III型改は放っておいていいわよ？ 量産ラインに投入するかはまだ決めてないし』
と、そこにウエンデイが話に割り込んでくる。

「はいはい！ クア姉!!」

『なーに、ウエンデイちゃん？』

「せっかくお外に散歩に出られたのにもう帰るのはつまんねーっス。

あいつらにちよこっつとちよっかい出したりしちやダメっスか？」

『そーおねえ？ これから大事なお祭りが待ってるんだし武装も未完成なあなたが破損でもしたら大変だから直接接触はしちやダメよ？』

でも見学と遠隔ちよっかいくらいなら良しとしましょう』

「わーい！ ありがとっス♪」

ウエンデイは喜び、セインはやれやれとため息をつく。

そして場面はフォワードに戻り、

「キョクルー!!」

キャロが五人分のブースト魔法を執行し、同時にフリードの火炎攻撃でガジェットを燃やし尽くしていき、

「うおおおー!!」

スバルのデイベインバスターがⅢ型を貫き、

「はああああー!!」

エリオがⅠ型を次々と切り裂き、

「シュート!!」

ティアナのクロスファイヤーシュートが次々とⅠ型を撃ち抜いていき、

「斬氷閃!」

レンの大型化したシールドザンバーで切り裂かれていき、

「ブーストスラッシュ! 私に断てないもの等無し!!」

ランのモード2で大剣の後ろ側のブースターを吹かし力づくで振り抜きⅢ型を真っ二つに切り裂く。

六人の攻撃は半端なく瞬く間にガジェットは潰されていった。

その戦果に108部隊は全員驚きの声を上げているくらいだから六人の実力が上がったのは確かだろう。

そこに新たなⅢ型の出現の一報を受けて向かうフォワード達。

それをウエンディ達は面白そうに見学していてそれぞれの技能を評価している。

「それぞれの特化技能はAA級ツスね」

「ぼいね。別々の特化技能を連携させて総合力を高めている」

「ま、分断してブツ叩くのが適切ツスよね」

「正解だ」

「まー連携戦だろうが単体戦だろうが負ける気はねえツスけどね」

それでウエンディは武装であるエリアルレイヴを構える。

「シッポ掴まれるとウー姉やトーレ姉に怒られっからさー発撃したらすぐ引つ込むよ」

「了解ツス」

そしてフォワードの方ではキャロがアルケミックチェーンでⅢ型を縛り上げる。

だが捕まえた途端、ウエンディの放った弾丸がⅢ型に命中。

効果は反応炸裂弾。

よって爆発を起こしそれはフォワード達を襲う。

それを見てセインはえげつねー…と呟いていた。

「ま、それでも六人セットなら防いじやうでしようねー」

ウエンディがそう呟くが、そこにセインが汗を流しながら、

「あ、甘く見たなウエンディ…。六人じゃなくて、一人だ…」

「ふえ…？ マジ？ 一人ツスカ…!?!」

画面には巨大なシールド《プロテクション・ギガント》を展開して完全防御をしてい

るレンの姿があった。

「ホレ。爆発直後にもうこっちの位置を特定。高速型のガードが二人もこっちに向かってカツ飛んできてる」

エリオとランがデバイスのブースターを吹かせて向かってきているのだ。

「ご丁寧に飛竜とオレンジ頭の誘導操作弾まで引き連れてるよ。」

クア姉とデイエチが向こうの隊長達に落とされかけた時とおんなじパターンだね」「んん、こいつらもなかなかやるもんス」

それでセインがIS・ディープダイバーで撤退しようとしている。

だがウエンディは逃げる前に落書きをするのだった。

その後すぐに撤退した。

それで一足遅く到着したエリオとランはもう何もいないのを確認後通信で、

「すみません逃げられました…」

「でも壁に何か書置きがあるね？」

『了解。合流して対策を続けましょう』

それから警戒は続けられたがもう新手は来ないと思われて、警戒態勢は解除された。通信越しで見えていたなのはヴィータ、シホはというと、

「まだまだ甘いな」

「うん。もつといい動きは出来たと思うわね」

「でも合格点ではあるけどね」

と、評価していた。

それを聞いていたはやてとリインは何を思ったか笑っていたり。

そしてお弁当が振舞われて全員はギンガとも合流して食事でありつく。

その際食事をしながらなのはに出された問題を聞いていた。

でも、ティアナとキャロはそれよりその旺盛な食事の量を発揮しているギンガ、スバ

ル、エリオ、ラン、レンに驚かされていた。

それはともかく、

「その問題の答えは分からない…。けど私としてはそれは否定すべき言葉だと思
な。」

母さんが言っていた。刹那の際に必倒の一撃を叩き込んで終わらせるのが打撃系の
スタイル。

出力がどうか、射程や速度や防御能力がどうか自分と相手のどちらが強かろうが
そんなの全部問題ない。

相手の急所に正確な一撃。狙うのはただそれだけ。私はそう思ってる」

「うん…」

それから六課隊舎に戻った一同はまた話し合っていた。

「…で、結局答えはなんなんだろうね？」

「あのですね、私達『誰が強いか』の聞き方が違っていたんじゃないかと…」

それでティアナが何かわかったらしくまた隊長陣に話を聞きに行く。

まずはやてに聞く。

「そうやね。なのはちゃんやフェイトちゃんに勝つんならガチンコ以外の広域戦闘限定なら少なくとも負けはないからそうやって戦うよ」

「最大射程と効果範囲ならお二人には負けませんから…でもシホさんには高速射程という事だったら負けてしまいますね。」

あの人は強化した目で四キロ先まで見渡せて射程も同格ですから」

「あとは集団戦やチーム戦。これなら誰にも負けない自信はある」

「うちの八神家は無敵です！」

お次にシグナムとヴィータ。

「相手の強さや自分の弱さに捕らわれて戦いの本質を忘れては仕方がない」

「自分の強さに驕るのはさらに愚かしい。ギンガの見解はその意味では正しいな」

「戦うのなら勝つ。騎士の一撃はそのためにある。お前も騎士の端くれならその気概を

忘れんな、エリオ」

「はいっ！」

お次にシホとファイアット。

「ランにレン。まずは相手より自分の得意分野で攻めてみなさい。そうすればおのずと答えは出てくるわよ」

「はい。自分の得意な分野に相手を引き込むんです。そうすればこちらのペースはそう簡単に崩されませんから」

「はい！」

お次にフェイト。

「キャラは誰が一番強いのか知りたいの？」

「ええつとですね…正確な戦力分析は後衛として必須ですからスバルさんやエリオ君、ランさんやレンさんが一生懸命でしたからだから私も一緒に考えたくまりました」

「そっか」

そして最後になのは。

スバルが代表でなのはに聞く。

「…というわけで相談して答えを出しました」

「そう。その答えは…？」

「はい。『自分より総合力で強い相手に勝つためには自分が持っている相手より強い部

分で戦う』です。

そのために自分の一番強いところを磨き上げてこれなら誰にも負けないって自信を
気概を持つて戦いに当たる！

それにチームがそれぞれの強い部分を持ち寄ればより万全に近くなる。

だから問題は正しくもあり間違っている……と、そんな感じなんですが」

「そう。じゃあそれが正解かどうかこれから実地で確かめていかなきゃね」

「え……？　なのはさん!?　正解は教えてくれないんですか!？」

「明日の朝練で多分わかるよ」

「ええええええ!？」

そんなこんなで悩め悩め若人よ、さればおのずと答えは出るよ。

と、言う感じで夜もふけていくのだった。

第四百十話

『それぞれの思惑』

Side シホ・E・S・高町

今日は朝から隊長陣みんなが集まって六課に今日から新たに外向扱いとなったギンガとマリーさんとすずかの紹介が行われていた。

「お知らせがあつて陸士108部隊のギンガ・ナカジマ陸曹が今日から外向となります」
「はい。108部隊、ギンガ・ナカジマ陸曹です。よろしくお願いします」

「「「「よろしくお願ひします」」」」

六人は歓迎ムードでギンガの外向を出迎えた。

「それから、もう一人…」

「どうもー」

フェイトの声でマリーさんが声を上げる。

「10年前からうちの隊長陣のデバイスを見てくれている本局技術部の精密技術官」

「マリエル・アテンザです」

「そしてもうみんなは前に会ったと思うけど…魔術事件対策課のデバイスマスターの…」

「月村すずかです。一応マリーさんの助手という形で六課に出向になりましたからよろしくね、みんな」

すずかも元気に挨拶をする。

「マリエル技官と月村技官はしばらく地上での任務があるということですので来ていただいた」

「デバイス整備も見てくれるそうなので」

「気軽に声をかけてね」

「よろしくね」

『はい』

でもそこで一人唸る人がいるのは、そつとしておくべきかな？

「うー…お姉様との有利な時間をすずかに取られてしまいます…」

「ふふふ…負けないよ、ファイアットちゃん？」

「スズカもやりますね」

「うむ、ここぞという時にやってきて奏者の気持ちを固めようとやってくるからな」

「おい。もう何回目だ、このやりとりはよ…?」

「まあ、いいではありませんか。これも若い青春です」

「スズカ、頑張ってください!」

もうこの話題は慣れねばならない。

二人のやりとりでそれを見ていたアルトリア、ネロ、ランサー、オリヴィエ陛下、そしてすずかについてきているライダーがそれぞれ声を上げている。

フォワード陣も私とすずかがアレな関係であることはもう知っているので顔を赤くしていたり…。

ギンガだけはわからないといった感じだがそのうち知るだろう。

「よーし…紹介も済んだことで朝練でもいっとくか」

「「「「はい!」」」」

それでそれぞれ部隊ごとに分かれて訓練に入ろうということになったそんな時になのはがギンガに、

「ギンガ、スバルの出来を見てもらっていいかな?」

そんな事を言い出して急遽スバルとギンガの模擬戦と相成るのだった。

それから私達は二人の模擬戦を見学していた。

二人のシューティングアーツによる戦いはギンガがやや優勢でスバルはやはり押さ

れている。

ギンガがスバルのプロテクションを砕きさらに拳を見舞った。

だがスバルはなんとかもう片方の手でプロテクションを展開して防いでいた。

「二人共なかなかね」

「ああ……いい出来具合だ」

それから反撃という感じでスバルがリボルバーキャノンでギンガに見舞った。

それをなんとか流したギンガはそれからスバルの猛攻を避けながら下がりウイング

ロードを展開。

それを追うようにスバルもウイングロードを展開して追う。

それからは二人して空での打ち合いが続いていく。

そしてそれを見ていたエリオとキャロが、

「なんかお二人共……」

「嬉しそうですね……」

ランとレンも、

「それになんか生き生きしています」

「楽しそうですね……」

それを聞いたティアナが、

「スバルはお姉ちゃんっ子で、ギンガさんもかなりスバルには甘いしね」と、二人を評価する。

「スバルもだいぶ使えるようになってきたな」

「入隊以降ずっとクロスレンジの基礎固めをしましたから」

「あたしとなのはが毎日毎日ぶっ叩いて鍛えているしなあ。あれくらいはできて上等だ」

そして決着はすぐについた。

ギンガの拳がスバルの顔面に当たる前に寸止めをされていた。

「はい、そこまで！」

なのはの声で模擬戦は終了となる。

二人は空の上で色々と話し合っていた。

そして地上に降りてきてヴィータがスバルに、

「反応は悪くなかったぞ。スピードが追いつかなかったがな」

「ありがとうございませす！」

ギンガもなのはとフェイトと話をしているようだ。

さて、そろそろ準備をしなくちゃね。

そしてなのはの号令がかかり、

「せっかくだからギンガも入れたチーム戦、やってみようか？ フォワードチーム七人

V S 前線隊長六人チーム！」

そう言った途端、ギンガの目は丸くなっていた。

「どうやら驚いたらしい。」

スバル達が説明を入れている。

「ギンガとスバルはデバイス攻撃のみだよ」

「はい！」

「それじゃ、やってみようか！」

『はい！』

そして団体模擬戦が行われるのだった。

.....

.....

.....

…そして、模擬戦終了後、

「はい、それじゃここまで！」

「全員防護服解除だぞー！」

見れば疲れきっていた七人の姿がそこにあった。

人数としてはあちらが多いがまだまだ負けてやるわけにはいかないからね。

それで悔しがるフォワード陣。

「…悔しい気持ちのまま、反省レポートまとめとけよ？」

「「「「「はい！」「」「」「」」」」」

ヴィータの言葉にそう全員は返事を返す。

「ちよつと休んだらクールダウンしてあがろうか。お疲れ様」

「「「「「ありがとうございます！」「」「」「」」」」」



Side 月村すずか

そしてクールダウンの光景を見ていた私とマリーさんとシャーリーさんは、

「うん。みんないい感じの子達だね」

「そうですね」

「エリオ達ですか？ それともデバイスの方…？」

「両方だよ（ですよ）」

私とマリーさんの返答にシャーリーさんも笑みを浮かべていた。

私も含めてマリーさんとシャーリーさんもデバイスいじりだから気が合うのかもしれないね。

そんな時にシホちゃんの話で聞いていたヴィヴィオちゃんとツルギ君の二人がやってきた。

「おはようございますー！」

「あ、えっと…おはよう」

「おはよう、ヴィヴィオ。それにツルギ君」

マリーさんは聞いていなかったのぢよつと驚くような感じで返事をし、シャーリーさんはもう普段のように返事をしていた。

なので私も、

「おはよう、ツルギ君。それと、あなたがシホちゃんから聞いていたヴィヴィオちゃん？」

「？ お姉ちゃん、誰…？」

「私は月村すずかかって言うんだよ。よろしくね、ヴィヴィオちゃん」

「うん！　　すぐかお姉ちゃん！」

「それじゃヴィヴィオちゃん、いこー！」

「うん、ツルギ君！　それじゃ、失礼します」

ヴィヴィオちゃんとツルギ君は手を繋いでシホちゃん達の方へと向かっていった。

そしてその後ろをザフィーラさんがついてきていた。

マリーさんも「ザフィーラ、久しぶりー」と言つて撫でている。

「ザフィーラさんは二人のお守りなの？」

「うむ、そうだ」

無駄な言葉は使わずただ返答を返してきてくれた。

「そうなんだ…。そういえば最近人型になった…？」

「士郎との訓練の時だけだな。なるのは…最近はヴィヴィオとツルギのお守りのために

この形態が定番と化してきた」

「そっか。頑張つてね、ザフィーラさん」

「応援、感謝する」

「…ところですかちゃん知っているようだけど、ツルギ君はいいとしてあの子は…

？」

「えっと、あの子はですね…」

私達が見る先では、

「ママ〜！」

「お姉ちゃん達、おはよう！」

「あ、ヴィヴィオ！ それにツルギ君！」

二人が手を握りながら走っていく。

フェイトちゃんが「転ばないようにね？」と言っているけど、あのままだと二人揃って転びそうだね…。

そして案の定、二人は同時に足をつまずかせて正面から転んでしまった。すぐにフェイトちゃんが助けにいこうとしているけど、なのはちゃんが、

「大丈夫。地面は柔らかいし綺麗に転んだ。

だから怪我はしていないよ」

「そうね。それに…ツルギ君。男ならそれくらい大丈夫よね？」

「う、ん…大丈夫だよ、シホお姉ちゃん…」

ツルギ君はやっぱり男の子だね。

それで一緒に転んだヴィヴィオちゃんの手を取りながら、

「大丈夫…？ ヴィヴィオちゃん…？」

「う、ん…大丈夫」

「立てる…?」

「うん、ヴィヴィオ、頑張る…!」

それでツルギ君の手を取りながらだけどヴィヴィオちゃんもなんとか立ち上がった。

「うん。合格だよ。ヴィヴィオ」

「頑張ったね。でも、なのはママは少し厳しいと思うよ…。

ツルギ君がいなかったらヴィヴィオ、一人で立ち上がれなかったと思うよ?」

「フェイトママは甘やかしすぎ。あれくらいすぐに復帰できるよ」

「でも…」

それでヴィヴィオちゃんの教育方針について話し出すのはちゃんとフェイトちゃん。
ん。

それを傍目に、シホちゃんがツルギ君に寄って、

「ツルギ君もよく泣かなかったわね。えらいわよ」

「うん! シホお姉ちゃん!」

それをシャーリーさんは見ながら、

「…と、こういうわけです」

「なんだ。なのはちゃんとフェイトちゃんの子供か…? って、ええええええ!?!」

なにか勘違いをしてしまったのか大声を上げるマリーさん。

それから説明をしてなのはちやんが保護している子供だという事がわかると、

「なあーんだ。保護児童か。てつきりなのはちやんとフェイトちゃんの子供かと思つたよ」

「いや、そんなわけないですつて…」

「え？ そうなの？ シホちゃんの秘術で女性同士でも子供が作れるつて話を聞いたんだけど…」

「……………こういう時に信憑性を持たせてしまうシホさんの魔術が勘違いを引き起こさせるんですよ…」

シャーリーさんはそれで少し疲れた表情になっていた。

マリーさんはそれで頷きながら、

「そうだね。それでだけど、すずかちゃんはまだシホちゃんと子供は作らないの…?」

そんな事をマリーさんに聞かれたので顔を赤らめながら、

「えつと…それは結婚してからということだ」

「そっか」

「え…!? 結婚するつていう話は冗談じゃなくて本気だったんですか!? すずかさん！」

「え、うん…」

シャーリーさんが驚いていたので了承の意味も込めて頷いておいた。
その後はなにやら小さく「これが百合なのねえー…」と感心しながら呟いていたけど、
もう慣れたし気にしないかな。



S i d e 高町なのは

食事を運んでいる途中で、

「ヴィヴィオ、髪の毛可愛いね」

「うん！　なのはママのリボンなの」

キャロに褒められてヴィヴィオは嬉しそうにそう話す。

うん、喜んでくれて嬉しいな。

「アイナさんがしてくれたんだよね」

「うん！」

「いい感じだよ、ヴィヴィオ」

「えへ〜」

それで全員で着席して料理を食べているところ、他の席から、

「しつかしまあ、子供って泣いたり笑ったりの切り替えが早いですよね」

「スバルのちっちゃい頃もあんなだったわよね」

「え？　そ、そうかな？」

と、ティアナとギングとスバルのやり取りが聞こえてきた。

また違う席では、

「リインちゃんもね」

「ふえー!?　リインは初めから大人でしたー」

「嘘を付け……」

「体はともかく中身は赤ん坊だったじゃねーか」

シグナムさんとヴィータちゃんの物言いにリインははやてちゃんにすがりついていました。

しかし、

「さて、どうやったか。昔はかなり喜怒哀楽が激しかったからなあ」

「そんなー……」

落ち込むリインの声が聞こえてくる。

当時を知っているから何とも言えないんだよね。

「そう考えるとツルギ君は利口ですよね」

ランがそう言い出す。

それにツルギ君は、

「え、なんですか？」

と、ツルギ君はハテナ顔になっていた。

「うん。…昔のレンを思い出すといつも泣いていたイメージしかないからね」

「ら、ラン姉さん！ 昔のことでしょ！」

それで騒ぎ出すランとレン。

「ほらほら。食事中は静かに騒がず食べなさい？ でないと、お仕置きをするわよ？」

キラランツ！ とシホちゃんの目が光る光景を幻視した。

それでランとレンはそれから静かに食事を食べ始めた。

うん。教育が行き届いているね。

アルトリアさんとネロさんも食事中は黙々と食べているし、シホちゃんの家では食事中は結構静かなのかもしれない。

ランサーさんや志貴さん、アルクエイドさんは食べ終わるとそうそうに出て行ったし。

すずかちゃんとライダーさんも静かに食べている。

というよりライダーさんの視線が妙にエリオとレンに向けられているのが気になる。

…もしかしてかもしれないけど前に言っていた吸いたい発言は本気かもしれない。

二人には気をつけるように言っておかないと。

朝になってライダーさんの手によって色々二人が抜かれていたら、きつとシホちゃんとフェイトちゃんが思わず卒倒してしまうかもしれないから…。

そんな事を思いながら視線をヴィヴィオに戻すとヴィヴィオはピーマンを残してしまっていた。

「ヴィヴィオ、ダメだよ？　しつかりとピーマンも食べないと」

「苦いの嫌い…」

「えー？　おいしいよ？」

フェイトちゃん、ナイス援護！

「しつかりと食べないとおつきくなれないんだからね？」

「うー…」

そこにはやてちゃんやシホちゃんがこちらに向いてきて、

「そうやな。しつかりと食べないとママ達みたいに美人になれへんよ？」

「そうよ、ヴィヴィオ。」

それにね、ピーマンにはとつてもたくさん栄養が入っているのよ。

ビタミンCが豊富で、風邪の予防や美肌効果にも打ってつけよ。

そしてピーマンの青臭さの成分にはピラジンと呼ばれる栄養素が含まれていて、血液をサラサラにする効果があつたり色々な病気にも対応してくれる万能な野菜なのよ。

他にも——……………」

「シホちゃん、話が長くなりそうだからそこまでいいよ？ ヴィヴィオもきつとまだわからないから」

料理の具材の話になるとシホちゃんはなにかスイッチが入ってしまったんだよね、昔から。

勉強にはなるからいいんだけどね。

「どういふこと？ シホお姉ちゃん…？」

やっぱりヴィヴィオにはまだ難しい話だったらしい。

「んー…つまりはやての言うとおりにママ達のような美人になりたかったらしっかりと好き嫌いはせずに食べようね」

「そうだよ、ヴィヴィオちゃん」

「ツルギ君…？」

「パパもママも料理に関しては色々と厳しいところがあるけどパパの味付け一つでとても野菜は美味しくなるんだよ！

それに慣れれば生でも美味しいよ！」

それでツルギ君はニカツと笑みを浮かべる。

さすが土郎さんの子供。

料理に關しても知識は親譲りだね。

それでヴィヴィオは、

「……………食べる」

「うん！　頑張って、ヴィヴィオちゃん！」

「頑張る……」

それでヴィヴィオはピーマンを口に入れてなんとか飲み込んでいた。

よかったよかった。

でもツルギ君、本当にヴィヴィオのいいお友達になれそうだね。

この年頃の男の子だと私の偏見かもしれないけど意地悪したりする子も多いかもしれないのにツルギ君は素直で純粹で優しい。

「うん。さすが私と土郎の息子だな」

アインスさんも嬉しい表情を浮かべているしこれが普段のツルギ君なんだろう。

教育がちゃんと行き届いていて他人なのに自慢してやりたい気持ちになる。

「……だってさ、キャロ。どうする？」

「…食べます」

他の席の子にも効果はあったみたいである。

それから食事後にマリーさんが、

「それじゃスバルとギンガをお借りしていきますね」

「わかりました」

二人はいつもの検診でマリーさんとクラナガンの医療センターに行くらしい。



スバルはマリー達と医療センターに行く前にティアナと一緒にデータの調べを行っていた。

「これで全部かな…?」

「見つからなかったら勝手に探すわよ。さっさと行ってきなさい」

ティアナにそう言われたのでスバルはオフィスを出ていこうとするが、そこでティアナに呼び止められる。

「あ、そうだ。スバル、あんたが検診の時によく買ってきてくれたアレ！」

「ああ、チョコポット？」

「そうそう。あたしも出すから隊長達とちびっ子たちの分、買ってきてあげてよ」
「了解！」

それでスバルは出て行くのだった。



S i d e レジアス・ゲイズ

オーリスに機動六課について調べてもらった。

その報告を今聞いているのだが、

「機動六課に関しては何もつかめませんでした」

「そうか。公開陳述会まで間もない。より有利な交渉材料を抑えておかねば」
「引き続きこちらの査察部を動かしませう」

そう報告が終わり私は機動六課についてモニターを開き確認する。

そこには様々なエース級の人材が揃えられていた。

あの、異世界の魔術師で有名であるシホ・E・S・高町一等空尉も所属しているのが

痛いな。

これは風の噂だが彼女に手を出そうとしたら何者かに消されるという都市伝説が囁かれている。

そんな噂など私は気にしないが、彼女の腹の中にはなにが潜んでいるかわからないからな。

サーヴァントという上級の使い魔の存在も危険視だろう。

たつたひとりで戦局をひっくり返す実力を秘めているという噂だ。

これが奴らの弱みになるのだろうと踏んでいるが、ただの使い魔だと突っぱねられればそれで話は終わってしまう。

くっ…忌々しい。

「それよりも、査察部や一部の部隊がこちらを調べて回っているようです」
「いつものことだ。いつもどおりに処理しろ」

「本局査察官に一人、希少能力を持つ査察官がいます。」

本腰を入れられたら深いところまで探られる可能性があります…」

またしても忌々しい。

このネズミどもめ。

それから報告を受けて、今度は逆に私から聞いてみることにした。

「アインヘリヤルの方はどうだ？ 捗っているか？」

「三号機の最終確認が遅れていますが、概ね順調です」

「遅らせるな。なんとしてでも陳述会までに終わらせるんだ」

「これから視察に行く予定です。それでは失礼します」

「ご苦労。これからも頼む」

「はっ！」

それでオーリスは部屋を出て行く。

しかし、やはり陳述会がうまくいけば私の計画は達成される。

さて、これから最高評議会の皆様に話をしに行こうか。



S i d e スバル・ナカジマ

それから医療センターでマリーさんの指示のもと検診は行われていった。

結果はオールグリーン。

問題なし。

それで用も終わりあたしはチョコポットをかうためにお店にやってきた。

「お待たせしました」

「ありがとうございます」

それでカードで払ってチョコポットのケースを受け取る。

あ、そうだ。

「すみません。それとすぐに食べる分を三つください」

「わかりました。すぐに用意します」

そして買い物も済んで、外で待っているギン姉と合流する。

「お待たせ！」

「今日はまたずいぶんと多く買ったわね」

「えへー。みんなへのお土産の分だよ」

「そう」

笑みを浮かべているところにさつき購入したすぐに食べれる方を取り出して、

「ギン姉、あーん」

「あーん」

それでギン姉の口にチョコポットを入れる。

ギン姉はそれをすぐに食べて、

「うん、おいしい」

「えへへ」

ギン姉が喜んでくれたのでよかった。

それでマリーさんの車を待っている間、

「でも、機動六課でスバルもティアナも生き生きしててなんか嬉しくなってきたなあ」
「まあ、時々いろいろあつたりして大変な目に遭うこともあるけど、機動六課に呼んでもらってよかったと今は思うんだ」

「そう。親友もいて憧れの人もいる部隊だもんね」

「あ、ギン姉もあたしの目標なんだよ？ もっと強くなっていつか追いつくんだ。待っていてね」

「生意気ね。そう簡単には追いつかせないわよ？ 私もスバル以上に強くなるんだから」

そう返されたので、

「が、頑張るよー！」

「ふふ…」

余裕の笑みで返された。

いつかきつと追いつく、いや追い抜くんだ！

それから少し静かになるあたしとギン姉。

でも、少ししてギン姉が言葉を発する。

「スバル。これから先、戦闘機人戦になると思うの」

「うん……」

「……………しつかりと、やっていこうね」

「うん。大丈夫だよ。あたし達には母さんが残してくれたリボルバーナックルがあるし、それに今はキャリバーズも一緒だしね」

うん。ギン姉とキャリバーズがいれば怖いものなんて何も無い。

それになのはさん達やみんなもいるから一人じゃない。だからあたしは戦えるんだ。



Side シホ・E・S・高町

はやてに部隊長室になのはとフェイトと一緒に呼ばれた。

なにか進展があつたらしいわね。

それではやてが話し始める。

「教会の方から最新の予言解釈が来たんよ。

やっぱり、公開意見陳述会が狙われる可能性が一番高いそうや」

やっぱりか…。

それぞれのトップの人達が集まってくるのだから狙うには絶好のチャンスとなつてくるからね。

「もちろん警備もうんと嚴重になる予定や。

機動六課も各員でそれぞれ警備にあたってもらう。

ほんまは前線まるごとで警備に当たらせてもらえたらええんやけど、建物の中に入れるんは私達四人だけになりそうや」

「まあ、四人揃っていけば大抵のことはなんとかなるよ」

「前線メンバーも大丈夫。しっかりと鍛えてきてるよ！」

「シグナム達副隊長達も今までにないくらい万全だし」

「みんなのデバイスリミッターも明日にはサードにまで上げていくしね」

「ここを押さえればこの事件は一気に好転していくと思う」

「うん」

「そうね…」

「きつと大丈夫だよ」

なのはがそう言う。

それと一つ不安なのは…、

「…そういえば、なのは」

「ん？ なに、シホちゃん？」

「最近頭痛がするって言っていたけど、大丈夫？」

「こないだの出勤後から言っているわよね」

「うん。なにか首筋からにかけてなにかに刺されたような跡があったの」

「そう。虫かしらね…？」

「多分そうだと思う。そんなにひどい頭痛じゃないから心配しないですよ、シホちゃん」

「ん」

「そう…？」

それで話は終了となったけど、ここで詳しくその刺された痕を調べておけばよかったと、後に思うことになる。

そして、この先状況はみんなにとっても、そして私にとっても最悪の事態になっていく事になるのは想像もできないでいた。



スカリエツティのアジトでは、

「さて、ナンバーズ諸君の武装も準備は整いつつある。もうすぐだ、もうすぐ面白い祭りが始まる！」

ひとつ、大きな花火を、打ち上げようじゃないか！　フフ、ハハハハハハ!!」

スカリエツティはナンバーズ達が見ている前でたくさんのレリックが並べられた光景を見ながら笑っていた。

「そして、隻眼の魔術師殿……」

「なんだね？」

そこに今まで隠れていたのか影から突如として隻眼の魔術師が姿を現す。

それにナンバーズの中でノーヴエなどが「ゲツ!？」と声を上げていた。

「そちらの準備はどうかね？」

「概ね順調だ。私だけの兵隊の数も、*“私自身”*もほぼ準備は整った。仕掛けもしておいたからな」

そう言つて隻眼の男はその手に数枚のカードを取り出す。

何のカードなのかはわからないがそれから魔力が溢れているのは確かだ。

「後は一緒に宴を楽しむだけさ。」

彼女らは私に任せたまえ。見事、成果を上げて見せよう」

「頼むよ。機動六課の守りはおそろく鉄壁だろう。そのための彼女らだ。期待している」

「任された……ククク、アハハハハ!!」

隻眼の男もスカリエツティと一緒に高笑いを上げるのだった。

第四百四十一話 『嵐の前の日常風景（表）』

Side シホ・E・S・高町

公開意見陳述会が四日後に迫ったそんなある時の朝の訓練時にヴィヴィオとツルギ君が早起きして見学に来ていた。

そんな時にツルギ君がエリオに話し掛けていた。

「ねえ、エリオお兄ちゃん！」

「ん？ どうしたの、ツルギ君？」

「僕と勝負しよう！」

「えっ…!?!」

そんな言葉がきっかけで急遽エリオ VS ツルギ君という対決が始まろうとしていたのであった。

エリオが少し情けない顔をしながら、

「あの一…シホさん」

「なに、エリオ？」

「辞退は、ダメですか…？」

「したらツルギ君が泣くから却下♪」

「ですよね…」

「あと、まだ六歳の子供に本気を出したらダメだからね？」

「ちゃんと手加減するのよ」

「わ、わかりました…なるべく努力します」

「やっぱりエリオとしては気が引けるのだろう。」

武器も持たない拳だけのツルギ君にどう挑んだらいいか悩む気持ちはわかる。

「エリオ、ツルギ君を泣かしちゃダメだぞー！」

「そこそこ相手をしてやりなさいねー」

「スバル！ ティアナ！ 戦闘経験のない子供が勝てるわけないじゃない!？」

「いや、ツルギ君かなり強いよ、ギン姉？」

スバルとティアナはもう完全に観戦ムードだし。

ギンガだけは常識人ね。

「え、エリオ君…負けちゃわないですよね？」

「さて、どうだろうね？ ストラダーは使わない肉弾戦だから、ツルギ君ももしかしたら、ね。」

でも、怪我はしないのが一番だけど…」

キャロとフェイトはどちらが勝つのか、というより純粹に心配しているご様子。

「ツルギ君、今日はどんな戦法をとってくるのかな…？」

「楽しみだね。エリオ君、苦戦しそうかも…」

ランとレンはツルギ君がどんな戦いをするのか楽しみらしい。

「ツルギ君、頑張つてー！」

「ふふふ、ヴィヴィオはすっかりツルギ君と仲良しだね」

幼いながらも応援するヴィヴィオと、もうさすが我が娘と言いたげに楽しんでいるなのは。

「私達が鍛えてやっているのだ。ツルギは強いぞ」

「ああ、そうだなシグナム」

「見物ですなー」

シグナムとヴィータとフィアもまるで自分も戦いたいかのように楽しみにしているようだ。

「では、はじめますよ？」

アルトリアがエリオとツルギ君の間に立って審判をつとめる。

「……………」

エリオは覚悟を決めたのか真剣な顔をしていて、ツルギ君もまだ小さいながらも様になつてゐる構えをする。

「はじめ！」

アルトリアの掛け声とともに、

「概念抽出！」

メイン抽出、『猛り狂う雷神の鉄槌』！

サブ抽出、『干将・莫耶』！

まずツルギ君が一瞬で準備を終わらせた。

そして次の瞬間には体が雷を纏い発光しだす。

そしてサブに『干将・莫耶』を追加したということは、二つある効果の一つである『二刀揃つて対物理・対魔術が向上する』が上乘せさせられているのだろう。

「うゝ…やつぱりこれ、すごくピリピリするよ」

「大丈夫…？ ツルギ君？」

「大丈夫だよ、エリオお兄ちゃん。それじゃ、いくよー！」

シュッ！

瞬間、ツルギ君は雷速歩法を使い高速で移動して一瞬でエリオの背後をとった。

「ツ!? 早い!」

「えーい!」

そしてすぐさまエリオの背中に雷の宿した拳をたたき込む。

「ぐっ! うわ!?!」

そしてエリオは耐えきれなかったのか数メートル吹き飛ぶ。

すぐに態勢を整えて地面を滑りながら着地するが先程のスタンパンチのダメージが残っているのか少し痺れ気味だ。

「す、すごい…普通に大人のパンチをもらった気分だよ」

「油断大敵だよ!」

ツルギ君はえっへん!と胸を張っている。

「そうだね。それじゃ僕も…!」

そう言つてエリオもソニックムーブと瞬動術を併用して高速で移動を開始する。

うむ、同時使用での移動の仕方が様になってきたわね。

それまだまだ瞬動術を習っていないなかったのだろうツルギ君は「あれ? あれ?」と慌てふためいている。

ふふふ、まだ目が追い付かないのね。

そしてエリオオがついに攻撃態勢に入りあまり傷が付かないように手刀で終わらせようとしているみたい。

でも、

ガツ！

「ツ!?!」

驚いたのは攻撃したエリオオの方であつた。

なんとツルギ君は手刀をとつさに振り向いて両手で受けとめていた。

「危なかつたあゝ…」

「いけない!」

ツルギ君は安堵の顔になり、逆にエリオオは危険を感じたのかすぐに離脱しようとするが、

「う、動かない!?!」

ツルギ君に両手で掴まれているので動こうとしても動けないのだろう。

ニカツとツルギ君が笑みを浮かべると、

「お返しだよ! せえーの!!」

掴んでいたエリオオの腕をそのまま振り回し独楽のように回転しだし、

「どっせーい!」

「がっ!？」

思いっきり地面に叩きつけたのだった。

あれは痛いわね…。

ダメージもかなりあるだろう。

種明かしすると身体強化で今はおそらくエリオ以上の力を発揮しているからあんなに軽く振り回せたのだろうね。

「エリオ！」

「エリオ君！」

フエイトとキャロが駆け寄ろうとするが、エリオはとつさに立ち上がり、

「だ、大丈夫です。フエイトさん、キャロ…。」

「あれれ？ 結構思いつきりやったと思っただけだな…!？」

「これでもなのはさんやシホさん達に鍛えられているからね。」

さて、それじゃ仕切り直しだよ、ツルギ君！」

「うん、エリオお兄ちゃん！」

それで二人はまたお互いにスピードの世界に突入していった。

「え…? な、なに、これ…?」

ギンガが呆気にとられながらそう呟く。

それで私はまだ機動六課での非常識な光景に慣れていないギンガの肩に手をおいて、
「あれがツルギ君よ。どう？ 強いでしょ」

「……………はい。私の常識を打ち壊してくれました」

「ギン姉も早く慣れたほうがいいよ？」

ただでさえここには強い人が大勢いるんだから…」

どこかたそがれながらもそうスバルは発言する。

まあ、常日頃私達よりはるかに強いサーヴァントのみんなに鍛えられているのだ。

自分の常識は壊すものと言わんばかりに壊される。

そしてそれで強くなるという方がおかしいと言っても過言ではない。

それでランサーが私の隣にやってきて、

「シホの嬢ちゃん、ツルギの坊主もやるもんだな。」

俺が直々に鍛えてやっているエリオに追い付いてくるなんてよ」

「まあ、使う魔術が反則級だからね」

「概念抽出とか言ったか…？」

「ええ、そうよ」

「士郎にはない能力だからな。士郎は自慢だろうな」

「あ、一応私と士郎も概念抽出魔術は使えるわよ？」

「なに？ そうなのか…？」

ランサーが多少驚きの表情で聞いてくる。

「うん。この魔術はツルギ君が最初に思いついたんだけど、やろうと思えば私達も昔からできたのよ。」

ただ、いままで普通に宝具を直に使っていたからそういう発想が思い浮かばなかっただけだね」

「ほ…？ そうなのか」

そんな話をしてしていると決着がついたのかツルギ君が大の字で横になっていた。

倒されたわけではなく単にスタミナ切れであるらしい。

簡単に使っているように見えて結構概念抽出魔術は神経を使うからね。

「うー…負けちゃったよ」

「…はあ、はあ…なんとか体力勝負で勝ちを得たよ」

「エリオ…。六歳相手にその様ではかつこが悪いぞ？」

私が直々に鍛え直してやろう。

午後にシスター・シャツハも来られる予定だ。

どうせだ。フォワードとギンガ全員相手をしてやる。覚悟をしておけ？」

シグナムの発言によって悲鳴をあげるフォワード陣はご愁傷さまね。

その一方で、

「ツルギ君、かっこよかったよ！」

「ありがとう、ヴィヴィオちゃん！」

でも、負けちゃったけどね……」

そう言って二人揃って笑いあっていた。

もうあんなに打ち解けちゃって……。

やっぱりツルギ君をヴィヴィオに紹介して正解だったわね。

士郎の采配には感謝だわ。



S i d e スバル・ナカジマ

あたしは常日頃、触りたい触りたいと思うモノがある。

いや、モノといったら失礼だけどあの、ふよふよとしていてたまに動くところを見ると

胸踊らされる愛らしさ。

つかんだらきつと幸せになれるんじゃないか、というジンクスが機動六課内で噂され

るほどのもの。

そう、それとは…、

「アルトリアさん！」

「なんですか、スバル？」

「その、失礼になってしまおうと思うんですけど、よろしかつたらその『アホ毛』を触らせていただけないでしょうか!？」

あたしがそう告白してみた。

でもお昼だったのでほとんどの人がいるために、隊長陣…特にシホさん辺りが「正気か!？」と言わんばかりの目であたしを見てきた。

やっぱり失礼だったかな…？

「スバル、なにいつてるの!？」

「このバカスバル! アルトリアさんに失礼でしょ!」

ギン姉とティアにも怒られてしまった。

「すみませんがスバル。このアホ毛は握らせるわけにはいきません」

それからアルトリアさんはいかにこのアホ毛が大事なものを熱弁しだし始めたが、ふと後ろからちよんちよんと肩をつつかれて振り向いてみるとそこには八神部隊長がいた。

なにやらおもしろそうな事を見つけて童心に帰ったような笑顔を浮かべて、

「（…スバル、アルトリアさんのあのアホ毛、触りたくないか？）」

「（触りたいです！）」

「（よろしい。ならば戦争や！）」

なぜ戦争…？

わけを聞いてみるとアルトリアさんのアホ毛を触ろうとするとまず間違はなくシホさんから始まり、なのはさん、ネロさん、オリヴィエさん達を敵に回すという。

なんでだろう…？

味わったことないけど、シホさんとなのはさんによる『O・H A・N A・S H I』という名の説教が待っているかもしれないという。

薄ら寒いものを感じるのはきつと気のせいだ。

なぜかどこからかティアがなのはさんに撃墜されるビジョンが脳裏に流れてきたんだけど、そんな事はもちろんなかったし、一体なんなのだろう…？

それはともかく八神部隊長の話に耳を傾ける。

「（そ、それじゃどうすれば…？）」

「（ここは私に任せとき！ それで隙をつけてスバル、アホ毛を掴むんや！）」

「（了解です！）」

それで八神部隊長はアルトリアさんに向かつていった。

「なあなあ、アルトリアさん」

「ん？　なんですか、ハヤテ？」

今、私がいかにスバルにこのアホ毛が大事かを語っているところなのですよ」

「まあ、ええやん。それよりちよつと私のデザートでも食べないか？」

「よろしいのですか…？」

「うん。士郎のデザートは美味しいからな」

それでアルトリアさんの興味はデザートに移った。

八神部隊長がこちらに向いて目で『いまや！』とあたしに語り掛けてきた。

なら、今がその時だ。

「アルトリアさん…！」

もらいました！」

あたしは勢い良くそのアホ毛に手を伸ばす。

あと、数センチというところで、

「天の鎖！」
エルキドゥ

突如としてかなりの魔力のある鎖があたしをぐるぐるに縛り始めてきた。

「ハ、これは…!？」

「スバル…？ させない、させないわよ…!!」

シホさんの滅多に見られない必死な顔にあたしは「そんなに握っちゃダメなの!」ていう思いに駆られた。

「あははー、スバルもアホやな」

「八神部隊長!?!」

さっそく見捨てられた!?

「はなからスバルには期待しとらん、よつと!」

ガシッ!

『あつ…』

八神部隊長はあたしをオトリに使ってアルトリアさんのアホ毛をガシッと掴んでいた。

あたしが触りたかったのにな…。

でも、次の瞬間、

——キイイイイイッ!

な、なにか、魔力が実体を持って高まっていくような気配を感じる。

な、なにが始まるの…？

「全員退避いー！ できるだけ遠くに逃げるのよー！」

シホさんがそう叫び、周りにいた人達はすぐに反応して逃げ出した。

そして、

キンツッ！ ドゴオーーン!!

あたしは、鎖に縛られていたために動けずに、いきなりの魔力の爆発により吹き飛ばされてなにが起きたのかもわからずに気を失うのだった…。



Side 八神はやて

私はやつてもうた、と少し後悔したかもしれへん…。

中心地にいたスバル以外はなんとか逃げられた。

けど、そこには恐怖の具現が起きていた。

あの圧倒的な暴威を奮ったセイバー・オルタナティブが降臨してしまっていたのだ。

話には聞いていたのに私はなんてことをしてしまったのだろう。

「あわわわわ…」

「…やってくれたわね、はやて？」

「はやてちゃん、少し、頭を冷やそうか…？」

おびえている私の背後でそんな怖い二人の声が聞こえてくる。
気のせいかな？

なのはちゃんからはかなり怖い気配がするんやけど!?

だけどある意味アルトリアさんが気を逸らしてくれた。

「…シホ、食事を用意せよ。王の勅命だ」

「は、はい！ ただいま！」

それでシホちゃんはすぐに食堂にいる士郎を呼びにいった。

「アルトリアさん、いったい何が!？」

「まがまがしい魔力を感じますね…」

「シホさんのあんな低姿勢の姿は初めて見ました…」

「そうだね、レン」

「スバルさん、おもいつきり吹き飛ばされていましたが大丈夫でしょうか…？」

「キュ、キュクルルル…」

「フリード？ どうしたの？ 怖いのか…？」

フワードのみなどとギンガはいろいろと不安を感じているようだ。しばらくして士郎がじきじきに料理を運んできた。

シホちゃんも料理を運んでいる。

「あ、アルトリア。料理を持ってきたぞ」

「た、食べてね…?」

士郎とシホちゃんは少し怯みながらもアルトリアさんに料理を配給している。

そして無言で食べだすアルトリアさん。

もつきゆ、もつきゆ、と音が聞こえてきそうな感じで食べていき、そして料理人の魂を砕く一言を言い放つ。

「まずい。しばらく食べないうちに腕を落としたな、シロウ」

「ぐはっ!」

士郎はそれでショックを受けたのか崩れ落ちた。

「士郎!」

そこにアインスがやってきてすぐに介抱して士郎を回収していった。

うん。ナイスや、アインス。女冥利に尽きるで。

「くうっ! やっぱり士郎の腕でもダメか!」

「シホ。今日は素直に“あれ”を用意せよ。でないと宝具を解放ぶっぱするぞ…?」

なにげに恐ろしいことをつぶやくアルトリアさん。

解放ではなく『ぶっば』するところどころにアルトリアさんの本気度がうかがえる。

でも、あれってなんやろうか？

でも、シホちゃんはそれで諦めた表情になり、

「わかりました、王様…。」

なのは、はやて！ あなた達も手伝いなさい！ 戦力は少しでも多いほうがいいわ
！」

「わかったよ、シホちゃん」

「わかったで」

それで一緒に厨房へと向かい、シホちゃんはパンやピクルス、ケチャップ、ハンバー
グを用意しだす。

「つて、ちよつと待った！

シホちゃん、まさかこの材料って…!!」

「そのまさかよ。」

アルトリアの味覚は反転して雑だと言うファーストフードを食べるようになってし

まうのよ」

「それは、なんというか…。」愁傷さま？」

「他人事のように言っているけどしつかりはやてにも罰を受けてもらうからね…?」

「え…?」

「グリフィス!」

「はいっ…!」

そこにはいつからいたのかグリフィス君が電卓を片手に持ちながら立っていた。

「これから使われる出費ははやての給料から差し引いておいてね?」

「了解しました、シホさん」

「そんなん!?!」

それから私の給料はアルトリアさんの胃袋の中にかなり消えていくことになるのであつた…。



S i d e シホ・E・S・高町

アルトリアの暴食な食事で痛い出費をしたはやては放っておいて、私は今、魔術事件対策課へと連絡をとっている。

そして出たのはミゼさんとアリサ。

『シホさん、久しぶりね』

『シホ、すずかはそちらでどう…？』

「楽しくやっているわ。」

ところでそちらの首尾はどうなっている…？

情報は集めているんでしょう？」

『ええ。こちらでも色々と動いているけど、隻眼の魔術師の動きは掴めていないわ』

『そうなのよ。あー、もう…全然居場所もアジトも掴めないからイライラするわ』

「落ち着いて、アリサ。それじゃ他になにか情報はあ…？」

それでミゼさんは少し顔を俯かせて、

『それが…管理局でミッドチルダを中心に現在確認されている魔術師の資質を持つ人達
が約三十人以上の人達が行方不明なのよ…』

「なんですって…？ それは本当？」

『そうなのよ。だから、シホ…なにか良くないことが起きるかもしれないから用心して
おいてね？』

「わかったわ、アリサ」

『あと、フェイトからもう聞いていると思うけど “ジュエルシード” もまだ七つの行方

がつかめていないわ。

それもきつと隻眼の魔術師か、スカリエツティが持っていると思うわ』

「そうね…」

『それじゃ後、詳しい資料はデータを送るから見ておいてね、シホさん』

「はい。情報提供感謝します、ミゼさん」

『それじゃまた会いましょうね、シホ』

「ええ、アリサ」

それで二人との通信を切る。

それから私は物思いにふける。

行方不明の魔術師達…。

ジュエルシード。

隻眼の魔術師…。

これはやっぱりなにか関係があるということかしら…？

公開意見陳述会で隻眼の魔術師は動きを見せるといふ予測は立てられている。

だったらもしかしたらこの行方不明の魔術師達も使われるかもしれない…。

そうなる、やりきれない事になりかねない。

それで、もしかしたら今も水面下で暗躍している魔術師脅威論をかざしている団体が

動き出すかもしれない。

それだけはなんとしても起こしてはいけない…。

そうなったら地球の過去の歴史にある「魔女狩り」のように「魔術師狩り」が起こつたら目も当てられない…。

おそらくそうなったらまず最初に地球が目をつけられる。

どうにかしないと…。

それで手を額に持っていき目を覆い隠しながら天井を見上げて椅子に背をあずけながら、

「はあ…。事態がわからないとままならないわね…」

そう言いながらも私は手元にある数本の特殊なカートリッジを見て、

「これを、使う時が来ないことを祈るばかりね…」

第四百四十二話 『嵐の前の日常風景（裏）』

Side トレディ

……私は公開意見陳述会が四日前に迫った日にクアットロ姉様にとある相談をしてみました。

「あら？ どうしたの、トレディちゃん？」

「………はい、クアットロ姉様。少し、相談したいことがあります……」

「珍しいわね。いつもモニターの前で睨めっこしていてハッキングやクラッキングをしているあなたから相談を受けるなんて……」

「………そこまででしょうか？ トーレ姉様達や妹達とも訓練は欠かしていないと自負しています……」

「反論も珍しい……。あなた、前より人っぽくなってきたわね」

「………ありがとうございます」

それでクアットロ姉様は呆れた表情になり、

「別に褒めたわけじゃないのよ？」

「……………そうですか」

（うーん…やっぱりいまい感情が読み取れない子なのよねー）

クアットロ姉様はなにか思案しているようですが、要件を早く聞いてしまいたしう。

「……………それで相談したいことなのですが」

「うんうん」

「……………一人の男の子を私のモノにするにはどうしたらよいでしょうか？」

「へ…？」

それでクアットロ姉様は少し驚いた顔になりました。

なにに対して驚いたのかはわからないですけど、しばらくして、

「あらく？ もしかして、トレディちゃんは好きな子でもできたのかしら？」

「……………好きかどうかは、まだわかりません。」

ですが彼のことを思ったり映像を見たりすると胸の動悸が早くなるのです」

それで私はレンさんの画像を展開します。

「あら…？ この男の子は確か…」

「……………はい。私達の敵である機動六課の前線メンバーの一人であるレン・ブルックラ

ンズ……レンさんです」

「あ、やっぱり。って、ことは敵同士の恋なのね？ 面白いわ！」

「……………ですからまだ恋と判明しては、いえ、反論してもいいようにオモチャにされるのはわかっていきます。」

ですからもう気にしません」

「残念ねえ」

「……………それでレンさんの姉のランさんに聞いたのですが、恋というのは相手のことを自分のモノにしたいという想い、らしいです。」

それで、そういうことに姉様達では多分ですが詳しくそうなクアットロ姉様に相談をしてみることになりました」

「ふんふん……？ なかなか面白いそうな話題ね？」

それでクアットロ姉様は面白い物でも見つけたような表情になり、

「それなら……まずはトレディちゃんにそのレンって子がずっと意識するように誘導したほうがいいわね？」

「……………誘導、ですか？」

「そう。例えば、その子の姉のランって子を誘拐するのよ！」

「……………なぜ、そういう話になるのですか？」

私はただ、レンさんを私のモノにしたいだけでして、ランさんを誘拐するのは目的と違うと思うのですが…」

「ふっふっふ、甘いわね、トレディちゃんも。」

一度あなたの力でお姉ちゃんを倒して誘拐、さらにはその男の子の心に傷を負わせる。

そして次に戦う時は、そうね…？

『姉を返して欲しくば私のモノになつてください』とでも言えば、後はトレディちゃんの手腕次第よ！」

「……………ですがきつと反論されます…」

「それなら、こうとも言えはいいのよ。『さもなければあなたの姉を殺します』ってね。」
そう言つてクアットロ姉様は舌なめずりをしながら話を締めくくります。

そして部屋を去り際に『頑張つてね』と言われましたけど、本当にこれが正しいのかわからないです。

ですが今のところ、私にはレンさんを私のモノにするプランをまったく思いつきません。

レンさんの心を傷つけてしまうと考えると、今までとは違った胸の痛みを感じるのになぜでしょうか…？

…そうですね。

他の人にも相談をしてみましようか。

それですまず向かったのは食堂で紅茶を飲んでいるチンク姉様にトーレ姉様に聞いてみることにしました。

だけど聞いた際に、

「はあ…クアットロもロクなことを言わんな」

と、トーレ姉様は呆れていました。

「トレディ。私の次に作られたお前の心の成長は姉としては嬉しいぞ」

「…………チンク姉様、ありがとうございます」

「だが、後悔だけはするなよ？ その恋とやらは我ら戦闘機人からしてみれば未知の感情だからな」

「……………はい、わかりました。用心します」

「うむ、ならばよいのだが…」

「失礼します。トーレ、チンク、トレディ」

「セツテか。どうしたんだ…？」

と、そこにセツテが部屋にやってきました。

トーレ姉様がそれに応えています。

ですが、私も皆には無表情とよく言われますが彼女も負けずの無表情の子だと思えます。

「空戦シムのスペースを使用したく許可をいただきに参りました」

「空いているのなら好きに使えばいい。私たちにいちいち許可をとる必要はないのだから」

「失礼しました。以後そのようにいたします」

そう言つてセツテは言葉の声色も変えずに機械的に謝罪をしてきました。

昔の私もこうだったのでしょうか？と、思い出してみます。

ですが自分にあまり興味がない私にはそう言つた細かな記憶は思い出せません。

過去から暇つぶしに毎日記録している端末を確認すればどうだったのかも確認できませんが…。

ちなみにこれを付けている事をウーノお姉様にバレた時には『まるで自分の成長日記ね』と言われた事に関して少し感情が揺らいだのを覚えています。

『それが恥ずかしいという感情よ』と言われた時にも少し納得できました。

「それから動作と言動にはもう少し気を遣え。あまりにも『機械すぎる』ぞっ！」
そう、トーレ姉様が言つた瞬間、私も少し胸が痛んだ気がしました。

私は、確かに戦闘機人であり、人であって人ではありません。

だからこの胸の痛みもなにかのミスなのかのミスなのかもしれません。

だけど、セツテは特に気にした感じも見せずに、

「はい、すみませんトーレ……」

やはり機械的に頭を下げていました。

「ほかの妹たちは動作チェックを終えて機体洗浄でもしている頃だろう。

どうだ……？ 親睦を深めてきたらどうだ？」

チンク姉様がそう言いますが、

「ありがとうございます。ですが空戦シムの実行を優先したく」

「……そうか。まあ頑張れ」

「はい。では失礼します」

それでセツテは部屋を出て行きました。

「あれもまた少々変わった子だな」

「我々の開発コンセプトを思えば、あれが一番完成度が高いとも言える。

余分なものはない、純粹たる戦機だ。

……だが、ただの機械では頭部に脳が詰まっている必要もない。

だから少しは考えることを覚えさせるさ」

「作戦決行まであと四日はあるものな」

私は思い切つて聞いてみることにしました。

「……………トーレ姉様」

「ん…？」

「……………チンク姉様」

「どうした、トレディ…？」

「……………私は、恋というものをしたという事は、兵器としては欠陥品なのでしょうか…？」

トーレ姉様のいう開発コンセプト。

それから逸脱したものは当然欠陥品として見なされてしまいます。

それで私は自分でも考えられないほどに胸の痛みを感じてしまいました。

だけどそこでチンク姉様が私より低くて足りない背でなんとか背中をさすってくれました。

「…安心しろ、トレディ。我々にも心はある。

だからそんな感情があつても誰も否定はしない。

お前のれつきとした気持ちなのだから大事にするんだ」

「そうだぞ。確かに私達は戦う兵器…戦闘機人だ。」

だが完璧な兵器になれなどもドクターは一言も言っていない。
だからお前もその胸の痛みを抱えていけ」

「……………トーレ姉様、気づいていたのですか？」

「ああ。お前は一言無表情だが、だがそれでも感情の波は常に変動している。
機械的ではない。

ただ、どう表現すればいいのかわからないのだろうか？」

「……………はい」

「これからお前ももっと成長していけば、考えや表情も豊かになっていくだろう。

その時まで我々がお互いに生きていくのはわからないがな」

そう言つてトーレ姉様は少し暗い笑いをする。

そうです…。

私達はこれから最大のテロ行為を起こすことになりました。

それで、もしかしたら誰かが負けてしまうかもしれない、欠けてしまうかもしれない。
せん。

私はこの知識にある家族というものとは少し違いますが、それでも信頼できる姉妹達
に誰も欠けてほしくありません。

「まあ、難しい話はあとにしよう。

さて、トレディ。気晴らしに姉と一緒に洗淨にいかないか？」

「……………はい。お供します、チンク姉様」

それで私とチンク姉様は温水洗淨施設に向かいました。

途中で妹のデイドとも合流して洗淨施設に到着します。

そこにはすでに先客がいたようです。

なにやらノーヴェとウエンデイが喧嘩をしているようです。

「相変わらず騒がしいようだな」

「……………そうですね、チンク姉様」

「チンク姉にトレディ姉…だつてこのウエン^バデイが…」

「おつかれーっス♪ チンク姉、トレディ姉」

ウエンデイはまるで懲りていないような感じでした。

「妹を捕まえてバカなどと言うな。お前も姉なんだぞ？」

「うん…」

ノーヴェはチンク姉様に窘められているようです。

ですので私もウエンデイに向かつていき、

「……………ウエンデイ、あまり姉妹達を怒らせることは推奨しません。不和が生まれたらいけませんから…」

「了解っス、トレディ姉。

ところでオットーは入らねーンスか？」

…あまり叱つても効果はないようですネ。

まいったことです。

ウエンディに話を振られたオットーも、

「僕は後で…集団洗淨は苦手です」

「そうなの…？」

「ちゃんと洗淨しないとばっちくなるぞー？」

「ディエチとセインがそう言つてオットーの事を心配していましたが、そこにディードが話に割り込んできました。

「すみません姉様गत。オットーの機体は私からだがちやんと洗淨していますから」

「そーいやそーか」

「ディードの物言いにセインも納得していました。

「一人ではきれいにしきれん部位もあるしな。協力しあわねばな」

そう言うチンク姉様はノーヴェにシャンプーハットをかぶせられていました。

…身長も相まって可愛らしいです、チンク姉様。

「ただでそこでオットーの性別についての話になりました。」

……：そういえば私も知りませんね。

クアットロ姉様も教えてくれませんかし…。

今度ハツキングして洗淨の光景を覗いてみましようか…？

…ちなみにどちらかだったのかは私の心の内にとどめておきます。

それはともかくそれでやはり感情の変動が激しいノーヴェは恥ずかしがっていました。

私も、こういう感情が表に出せれば良いのですが、残念です…。

それはともかく今日という一日をまたデータに残すとしましょう。

成長日記…？

いえ、これは姉妹の観察記録です。

そういうえば、あのドクターとよく密会をしている名も明かさなない魔術師の人物ですが

…。

彼はなにやら数枚のカードをいじっていましたがあれはなんなのでしょうか…？

それだけが私の脳裏に謎を残しています。

第四百四十三話 『公開意見陳述会（1） 前夜のそれぞれ
の想い』

Side シホ・E・S・高町

公開意見陳述会が前日に迫った夜のこと。

ロビーに集められた私達前線メンバー。

はやてが私たちのほうに向かって、

「…と、いうわけでいよいよ明日は公開意見陳述会や。

明日十四時からの開館に備えて現場の警備はもう始まっている。

なのは隊長とシホ隊長、ヴィータ副隊長にファイアット副隊長…。

ライン曹長とアルトリア曹長、セイバー、ファイターのサーヴァント二騎…。

そしてフォワードメンバー六名とギンガの各員はこれから出発して一足早く現場入り。
り。

ナイトシフトで警備開始という形や」

「みんな、ちゃんと仮眠はとった…？ 眠たい子はいない？」

フエイトの言葉にフォワードのみんなは「はい、大丈夫です！」としつかりと返事を返していた。

「私とフエイト隊長、シグナム副隊長、ランサーは明日の明日の朝に中央入りする。それまでの間、よろしくな！」

『はい！』

それで私達先行組は中央に用事があるというマリーさんとヘリポートまで向かい出発時間になったので各自へりに乗り込みを開始をしている時だった。

そこには土郎とアインスに連れられたヴィヴィオとツルギ君の姿があった。

ヴィヴィオは不安げな表情でなのはに視線を向けている。

その不安を感じ取っているのかツルギ君が手を握ってあげていた。

「…なのはママ…」

か細い声でなのはを呼ぶヴィヴィオ。

「あれ？ ヴィヴィオ、どうしたの…？ ここはヘリが飛ぶ場所だから危ないよ？」

「そう言つてやるな、なのは嬢。ヴィヴィオもお前のことを心配してこうして見送りに行きたいと言つたのだから…」

「そうだぞ、高町。これくらいのがままは聞いてやった方がいい」

士郎とアインズにそう言われてなのは少し苦笑気味に、

「すみません。士郎さん、アインズさん」

「なに、構わんさ」

「ヴィヴィオ？ ダメだよ。士郎さん達にわがママを言っちゃ…」

「ごめんなさい、なのはママ…」

そこに明日出発組のフェイト達がやってきて、

「なのは、夜勤がけは初めてだから不安なんだよ、きつと…」

それになのはも「そっか」と納得顔になって、

「なのはママは今夜は外でお泊まりだけど、明日の夜にはちゃんと帰ってくるから」

「ぜったい…?」

涙ぐみながらヴィヴィオはそうなのはに聞く。

それになのはも自信の笑みを浮かべて、

「絶対に絶対だよ…」

そう言って人差し指を出す。

「いい子に待っていたらヴィヴィオの好きなキャラメルミルクを作ってあげるから！」

「うん…」

「ママと、約束ね」

そう約束してなのはとヴィヴィオは指切りをする。

その一方で私なのは達を横目で見ながら士郎達に話しかけて、

「士郎……機動六課の守りは、頼んだわよ?」

「任せておけ。」

私とアインス、それにシャマルにザフィーラ、キャスターにアルクエイド、志貴、すずか嬢にライダー、ヴァイスがいる。

だから、完璧とはいかんが、もしものことがあってもヴィヴィオは最優先で守りきつてみせよう」

「よろしくね?」

「ああ」

「ツルギ君もヴィヴィオを守るのよ?」

「うん、シホお姉ちゃん! ヴィヴィオちゃんは僕が守るよ!」

それで私達は地上本部へと向かっていく。

そのヘリの中で、

「それにしても、ヴィヴィオは本当になのはさんになついちやっていますね」

「まったくですね」

スバルとティアナがそう言い出すのでなのはは、

「そうだね。結構厳しく接しているつもりなんだけど…」

「きつとわかるんですよ。なのはさんが優しいって…」

「えへへ…」

それで苦笑いを浮かべるなのは。

そこにリインが、

「もういつそのこと、本当になのはさんの子供にしちやえば、とか！」

「それも考えの一つ、なんだけどね…。いい受け入れ先が見つからない場合もあるし。

なにより、ヴィヴィオはオリヴィエさんの…」

「なのは、私は気にしませんよ。」

たとえヴィヴィオが私のクローンだとしても受け入れます」

「オリヴィエさん…」

オリヴィエ陛下がなのはの手を握り、

「私は、なのはのサーヴァントです。」

なのはの決定なのなら私はそれに従います。

それに、私自身もヴィヴィオを受け入れるのには賛成ですから」

「ありがとうございます、オリヴィエさん」

「そうね、なのは。必ずヴィヴィオは守りましょう」

「うん。シホちゃん！」

そうなのはと約束するが、ヴィヴィオとの指切りの約束は守られないという事になってしまう。



Side フェイト・T・ハラオウン

なのは達を見送りました私とヴィヴィオは寝室でヴィヴィオを寝かす準備をしていた。

「しっかし…俺の勘が言っているぜ？ なにかきな臭いことが起こるってよ…」

「そうだね、ランサー。だから準備だけはしっかりとしておいてね？」

いざって時には令呪も使う覚悟でいるから」

「マスターも心配性だねえ…。しかし、その覚悟だけはしておいた方がいいかもしれないねえからな。

もしかしてかもという事態になって万全を尽くせないとあっちゃ目も当てられねえ

…」

「そんな事態にならない事を祈るだけだよ。期待しているよ、ランサー」

「おう！」

心強いランサーの声に私も安心感を覚えている時だった。

そこに通信が入ってきた。

「マスター、誰からだ？」

「ちよつと待つてね？ えつと…」

画面を操作してモニターを開くとそこにはリンデイ母さんからの通信が来ているようだった。

それで繋げる。

『はい。元氣だった？』

「うん。こんばんわ、母さん」

「よう、リンデイ。そつちは元氣か？」

『ええ、ランサーさん。それとヴィヴィオもこんばんわ』

「えつと、こんばんわ」

ヴィヴィオもしつかりと挨拶できていることに安心しながらも、

「何かありました…？」

『うん。明日の陳述会なんだけどね。私も顔を出そうかどうしようかって迷っているの

』よ

「ああ、その事でしたか。それなら大丈夫だと思えますよ。

クロノも任務中ですし…。本局の方もあんまりいらつしやらないとか…」

『ああ、そう？　しばらくぶりに娘の顔も見たいし、ヴィヴィオとも会いたいんだけど』

リンディイ母さんはそう頬を染めながら呟く。

ああ、なんだ。最近帰っていないから寂しいんだね。

アリシアはよく帰っているとか言うけどね。

「あの、母さん？　私は警備任務ですし、ヴィヴィオは寮でお留守番ですから」

『あー、そっか。そうよねー』

と、なにやら残念そうにしながらも楽しそうに会話をしだす母さん。

傍目から見ても楽しそうで私は思わず笑みを零してしまうのだった。

それから通信を終えると、

「リンディイも相変わらなかつたな」

「そうだね、ランサー」

ランサーと二人で話し合っているとヴィヴィオがなにやら飾られている写真立てを見ながら、

「リンディイママもフェイトママのママ。こっちのママもフェイトママのママ…」

プレシア母さんの事を言っているんだね。

この写真はプレシア母さんとアリシアが映っているもので私は映っていないけど、でもいいんだ。

プレシア母さんは死んじゃったけど、私にはアリシアがいるから。

それでヴィヴィオに近づいて二つの写真を持ち、まずはプレシア母さんが映っている方を説明する。

「そうだよ。テストロツサのおうちのプレシア母さんと、ヴィヴィオはまだ会った事がないけどアリシアお姉ちゃん……」

そして今度はプレシア母さんはいないけど、リンデイ母さん達と撮った写真を見せて、

「真ん中がリンデイ母さん、周りにクロノお兄ちゃん、エイミィお姉ちゃん、クロノお兄ちゃんの子供達のカレンにデイエラ、私とアリシアとアルフとランサー……」

プレシア母さんが私に命をくれて、リンデイ母さんが今も私とアリシアを育ててくれるの」

「うー……?」

でもヴィヴィオは少しわからないという顔になっている。

まだ少し難しかったか。

それでヴィヴィオを抱きしめて、

「少し難しかったね。でも、プレシア母さんもリンディ母さんも私にとって大事なお母さんなんだよ」

「ヴィヴィオと一緒にすること…?」

「そうだよ」

するとヴィヴィオは笑顔になってくれた。

よかったよかった。

「おい、ヴィヴィオ。これ以外にも集合写真が結構あるから後でみんなで見るか?」

「うん、見たい!」

「いい返事だぜ。この事件を乗り切ったらみんなで写真を見せ合おうぜ、マスター?」

「そうだね。いいアイデアだよ、ランサー」

ランサーにしては気が利いた提案だったので私も快く了承した。

写真は機動六課が発足してからもみんなで撮りあっているから色々な写真が見れる機会もあるかもしれないので楽しみ。



「ツルギ、少しいいか…?」

「なあに? パパ?」

「どうしたんだ、士郎?」

私はアインズとツルギと明日に控えて眠りにつく前にツルギに相談をしておこうと思ふ。

「ツルギ、お前とヴィヴィオの身にもしものことがあるかもしれない。だから…」

もうお馴染みとなった私の詠唱『トリス・オン投影開始』と唱えてあるものを投影する。

それは『身隠しの布』。

「パパ、これは…?」

「これは身隠しの布。あらゆる魔術的な探知を遮断・透過するものだ。

もしもの事があつたらヴィヴィオと一緒にこれを被るんだ。

そうすれば熱源センサーを使われない限りは気配も消しておけるから身を隠せる」

「うん、わかった…。でも、パパ達は?」

「私とアインズ…それに他の戦えるメンバーももしものために控えておかないといけな
い」

「そうだぞ、ツルギ。」

だから、その時はアイナさんとヴィヴィオと一緒に部屋で隠れて私達が迎えに来るまで息を殺しておくんだぞ？」

するとツルギは少し不安げな表情になって、

「パパ：ママ：絶対迎えに来てね？」

「ああ、約束する。私は昔は出来たかもしれないが今はもう嘘や偽る事が嫌いなのでね。必ず迎えに来る」

「それならまた主はやてやシグナム達家族みんなと一緒に出かけよう、ツルギ」

「うん。絶対行くからね！」

それでやつと笑顔をつルギは浮かべてくれた。

この笑顔を守るためにおそらく襲撃してくるだろう敵はすべて私達で叩き落とそう。

答えを得た私、そしてシホは『大切な者達を守る正義の味方』なのだから。

それでふとある人物を思い出す。

出合いが違っていれば友になれただろう相手。

——ライゼル…。

お前との約束は今も守り続けているぞ。

だから安心して見ていてくれ。

そう決意した。

そしてその時、幻聴かもしれないが、

『——当たり前だ。私を負かしたんだ…私以外に負ける事は、私が許さん……』

と、ライゼルの言葉が聞こえてきたような気がした。

それで私は、『ふっ…』と笑った。

そしてアインスとツルギと一緒に眠りについた後、隣のキャスターの部屋に向かう。

そこでは念入りに機動六課の周りに設置した結界を目を閉じて再チェックをしているキャスターの姿があった。

キャスターの周りにはいくつもの呪術のコードが浮かんでいる。

邪魔するのでもないかな。と思い、外に出ようとするが、

「ご主人様…？ どうされたのですか？」

どうやらキャスターには気配で気づかれてしまったらしい。

「あ、すまん。キャスター、邪魔をってしまったか…？」

「いーえ。大丈夫ですよ」

それで様々なコードは瞬時に消え去っていつもの人懐っこい笑顔を浮かべるキャス

ター。

うん、やはりキャスターの笑みは癒しなのかもしれないな。

「?…どうされました?」

「いや、なんでもない」

いかな。見惚れていたというのも正直に言える訳もないしここは黙っておこう。

「むむっ!?! なにやら私はなにやら絶好のタイミングを逃してしまったような気がします!?!」

「気のせいだ」

よよよ…と少し演技が入ったような落ち込みを見せているキャスターに苦笑しながらも私は近寄って、頭を撫でる。

するとキャスターはハニカミの笑みを浮かべて「えへへ」と喜んでいた。

それで私も少し癒しを感じながらも、顔を引き締めて真剣な声で話しかける。

「キャスター…おそらく明日は一つの山場だろう」

「はい」

「みんなの居場所を守るために、お前の力…また貸してもらおうぞ?」

「お任せくださいまし。ご主人様のためならこのタマモ、存分に力をお貸しします…」
「頼むぞ」

そう言つて私は少しらしくない事をしたと思うがキャスターのおでこにキスをする。

「マママ、ご主人様…!？」

「これは私からの気持ちだと思つてくれ…」

「はうううう…エヘヘ♪ 頑張ります♪」

「では、頼むぞ」

「はい！」

それで私は部屋をあとにするが出て行つた後部屋の中から、

『やりましたよー！ タマモちゃん、またステツプアップです！ この勢いを殺しているものか!? いや、ない！ 反語!! クッフ…』

という言葉が聞こえてきた。

なぜか、いつも通りか…と納得する反面、残念な気持ちになつたのはきつと気のせいではないだろう。

そんな事を考えていると目の前から志貴とアルクエイドの二人が歩いてきた。

「あ、シロウだ。やつほー♪」

「やあ、士郎」

「ああ、志貴にアルクエイド」

それでロビーに移動して三人で会話をし始める。

「しかし……こうも俺の直感が嫌な予感するのはやっぱり例のスカリエツティか、それとも隻眼の魔術師か……おそらく両方だと思うけどな。仕掛けてくると思うかい？」

士郎

「ああ、だからシホ達がいなくて一番の戦力なんだから期待しているぞ。志貴にアルクエイド」

「任せろ。遠距離戦は俺もアルクエイドも苦手だけどここに近づかせないさ」

「はやてに居場所を守るように任せられているから……地球じゃないし本気は出せないけどめいめいっばい頑張るわよ。」

それとだけど、志貴。もううまく事が終わせられたらご褒美頂戴！」

「なにをだ……？」

志貴がアルクエイドの『ご褒美』という単語に分かりやすいように額に汗を浮かべる。

「私とセツ「言わせない！」……あうっ!? なにすんのよ、志貴ー！」

「大声でなにを口走ろうとしているんだ！ このアーパー女!!」

「いいじゃない！ 知らない仲じゃないんだしー！」

「だからってなーッ！」

それから二人はあーだこーだと言ひ合ひになっているが、まあ緊張をするよりこんな具合がこの二人にはちょうどいいのだろうな……。



Side ヴァイス・グランセニツク

ストームレイダーの中で色々とチェックをしている。

なのはさん達はもう現地入りしたので俺は後は六課に帰って一郎の旦那達と一緒に守りを固めるだけだ。

こんな時にシホさん達に鍛えてもらった腕が使えるのは複雑だが、まあ…ヴィヴィオを守るためだ。

いくらでも俺を使ってくれといった感じである。

そして一息ついていると外からティアナがやってきた。

その腕にはポットとコップが握られている。

気が利くねえ…。

「お疲れ様です。警備部隊からの差し入れです」

「おう。あんがとな」

それで俺とティアナはお茶を飲みながらなのはさん達の事を聞いてみる。

「それでしたら警備の端っこの方ですのんびりやっています」

「そうか」

「ご一緒してもいいですか？」

「ああ、いいぞ」

それでテイアナは俺が今背中を預けているストームレイダーと一緒に背中を預けて横に立って来た。

「…少し、いいですか？」

「なんだ？ 面倒な話なら勘弁な」

「すみません…。ヴァイス陸曹には狙撃の訓練を手伝ってもらっているの、昔はなにをしていたのか調べさせてもらいました」

あー、なんだ。その事か。

なんとなくだが把握したよ。

「どうせ、なんで狙撃手を辞めたんだ、とかだろう？ お前の考えはなんとなく分かるよ」

「はい…すみません。でも失礼を承知で聞かせてください。

ヴァイス陸曹は昔はエース級の魔導師だったというのに、なんで辞めてしまったんですか？

今もしかしたらもつと上を目指せたかもしれないのに……
まったく……。今もまだ自分のことで精一杯の癖に俺のことを心配してくれて、嬉しいやらんやら。

なら先輩として後輩を導くことをしないといけないかねえ……。

それでお茶を飲みながら空を見上げて、

「そうだなあ……。

調べたならわかると思うが、俺が一度狙撃手をやめるきっかけになった事件も調べたんだろ？」

「はい。ミスショットで危うく妹さんを打ってしまいそうになって……でも、シホさんの助けで怪我なく事件を解決することができたそうですね」

「ああ。あの時ほど自分の心の弱さを痛感したことはないね。

妹が人質に捕らわれたと知って俺は恥ずかしながらも焦りにかられちまった……。

そしてその結果がミスショットだ。

だらしなかつたらないな」

「そ、そんな事は……！」

それでティアナは一回顔を上げたがすぐに俯く。

おそらくあのミスショットの事を思い出して俺の経験と重ねているんだろうな。

だからティアナの頭をポンポンと軽く叩いてやり、

「過去の事を悔やむな。忘れられないっていう気持ちは分かるが、それを糧に成長もしたんだろう？」

「はい…シホさんに、それを教えられました」

「ハハツ…やっぱりシホさんか。すげーよな。俺達は同じ人物に同じような経験をして救われたんだぜ？」

「ふふ…似ているんですかね」

「違いねーかもな。つと、話がそれたな」

「いえ」

それで俺は話を軌道に戻す。

「まあ、そんな経緯があつて、俺は自分の未熟さを痛感させられて一回銃を下ろした。

そして試してみたかったヘリ操縦士の道に進んだ。

だが、今思えば一種の逃げだったのかもしれないが…それでもよかつたって思ってるし後悔もしてねえ。

そんな経緯があつてヘリパイロットになつて運良く憧れのシホさん達と同じ部隊に配属できたんだからな」

「前向きなんですね…」

「そう考えといたほうがお得だろ？」

「まあ、そうですね」

ティアナはそれで笑みを浮かべていた。

「何事も前向き思考の方がやっていけるんだよ。」

だからお前も頑張れよ。執務官志望のお嬢さんよ？」

「ッ！ 知っていたんですか!？」

「ははは！ まあな。後、お前には最初に教えとくが俺は機動六課が解散した後、また魔導師に戻ろうと考えている」

「えっ……？」

そこで驚きの表情をするティアナ。

「そこまで驚くことあねーだろ？」

お前の狙撃の訓練もたまに付き合ってたやっっているし、シホさんにも鍛えてもらっている。

腕が上がってきた…。

自信もついてきた…。

そして証明するんだよ。今度こそ俺は妹の誇りの兄でありたいと、な」

するとティアナは目を見開く。

ん？ なにか変なことを言ったか？

「やっぱり、ヴァイス陸曹はあたしと似ていると思います…」

「そうか…？」

なにか考え込んでいるのか何度か頷いて、しばらくして、

「ありがとうございます！ お話とご教授感謝します！」

「お、おう…。まあこれくらいならお安い御用だ。警備頑張れよ」

「はい！ それでは失礼します！」

それでティアナはわざわざ俺の紙コップも回収してその場から離れていった。

「まったく…落ち着きがないねえ。ま、それも若さか。そう思うだろう？ ストームレ

イダー」

《そうですね》

「それとストームレイダー、これからもよろしく頼むな」

《はい、マスター》

俺は、恵まれてるんだ。

そう思えばもうミスショットもしねーだろうな。

だからな、ティアナ。お前も同じく恵まれてるんだからもう焦ってミスショットをするなよ。

離れていく背中を見ながら俺はそう思うのだった。



Side エリオ・モンディアル

僕達が警備の手順の説明を受けていると、ふとした時にある知り合いの人物の顔を見た。

それというのは、

「あ、ロボ君だ！」

「キャラもわかったの？ だったら…！」

それで僕はロボ君に話しかけた。

「ロボ君！」

「ん？ あ、エリオ！ それにキャラもいるのか！」

「久しぶりですね」

「そうだな。お前達も管理局員だったんだな」

「うん。そう言うロボ君も…」

「ああ。俺はオジキ…じゃなくてジグルド提督が隊長の部隊、ブリューナク隊の一員なんだよ。聞いたことはあるか？」

「ごめん。ちよつと他の部隊の話は聞いたことがなかったから…」

「私も…」

「あはは。まあ気にしないぞ。見れば同じ警備担当みたいだからお互い頑張ろうぜ！」

「そうだね！」

「うん！」

ロボ君とそう話しているとランさんとレンさんの声が聞こえてきた。

「エリオ君、キャロちゃん。そろそろ移動だよ。あれ？ そちらの男の子は？」

「僕とキャロの知り合いのロボ・バルコム君です」

「そうなの。それじゃ紹介したほうがいいかな？」

「そうだね、ラン姉さん」

それでランさんとレンさんがロボ君に自己紹介をしようとしていたところでロボ君の方にも二人の女性が近寄ってきた。

一人は黒みかかった青い髪をポニーテールにしているランさん達と年齢が同じくらいの女性。
い女性。

そしてもう一人は赤みかかった髪で髪型はおさげでなのはさん達と同じくらいの年

齡の女性。

青い髪の女性が最初にロボ君に近寄ってきて、

「若、こちらにおいででしたか」

「探したぞ、ロボ」

「あ、〃セイラ〃さん。それに、〃鳳華〃おうか、陸曹」

新たな人達が出てきたので僕達はどうすればいいのかという感じになったが、ロボ君が「なら全員で自己紹介をしようぜ！」と提案してきたので僕達もそれに乗ることにした。

それでまずロボ君達が、

「エリオとキャロはもう知っていると思うけど俺はロボ。ロボ・バルコム三等陸士だ」

「私は若の側近を務めますセイラ・ヒラガ三等陸士と申します」

「あたしはブリューナクの第1小隊の隊長を務める獅堂鳳華^{しどうおうか}陸曹だ」

セイラさんに鳳華さんか。

それで僕とキャロとランさんとレンさんで自己紹介をした。

それから全員で少し会話をした。

特にセイラさんはなんでロボ君の事を若と呼ぶのかについてだと昔から一族でのやり取りでロボ君の一族とセイラさんの一族が従者関係でそれが今も継続しているとい

う話らしい。

少し時間が経ち、

「それじゃエリオ。俺達も警備担当だからもしなにか起きて会うことがあつたら共闘しようぜ！」

「うん！」

それで僕は別れたのだった。

あとでスバルさんとティアさん達にもロボ君達の事を教えておこう。



Side 高町なのは

シホちゃん達やスバル達と歩いているがそろそろ中に入る時間になってきたので、

「スバル、私達はそろそろ中に入るから…」

「そうね」

ポケットからレイジングハートを取り出す。

シホちゃんも呼応してアンリミテッド・エアを取り出していた。

「内部警備の時はデバイスは持ち込めないから、スバル。レイジングハートとアンリミテッド・エアをお願いしている?」

「あ、はい!」

「前線のメンバーでフェイト隊長からも預かっておいてね」

「頼むわよ」

「はい、わかりました!」

「アルトリアもスバル達のお守りを頼んだわね。ネロとオリヴィエ陛下は私となのはにそれぞれ霊体化してついているから」

「了解です、シホ」

そして夜は明けてきていよいよ公開意見陳述会が始まろうとしているのだった。

第四百四十四話 『公開意見陳述会（2） 始まるひと時

の宴』

S i d e 月村すずか

シホちゃん達が地上本部に向かっていった夜。

私はシャーリーさんと一緒にあるものを制作していた。

「…すずかさん」

「なに、シャーリーさん…?」

「このカートリッジですけど…どう考えてもおかしいです。いくらなんでもこれじゃ…」

「うん。それはわかっているの。」

「ただ、これの完成度を高めておかないと、きっとシホちゃんは…」
私は少しでもこれの完成度と安全度を上げておかなければいけない。

「きっとこれは使いどころを誤れば……。」

それで私はこのある種危険なカートリッジをとあるケースにいくつも入れて、ある作業”を行う。

失敗したら中身に込められた大切な魔力は霧散してしまいかねないから慎重に行わないといけない。

だから失敗は許されなんだ…！

それで精密な作業をしている時にシャーリーさんが話しかけてきて、

「これが、使われる時が来ると思えますか…？」

「わからない…。けど、シホちゃんはきつと必要になるって言っていた。

だからいつでも万全の状態で作る用に整えとかなきやいけないの。

シホちゃんはやると決めたら絶対使うと思うから。

本来、私はこんなものをシホちゃんに使って欲しくないから、最初にこれの制作を頼

まれた時は当然反対したんだよ…？」

「そうでしょうね…」

それでシャーリーさんと一緒にため息をつく。

これが使われる事態になりませんようにと、ただ願うばかりだよ。

そんな時に部屋の扉が開く音がしてフェイトちゃんが入ってきた。

「シャーリー、すずか。そろそろ私達も行くけど留守番お願いね？」

「任せてください、フェイトさん！」

「うん。ライダーもいるから警備は任せて。フェイトちゃん」

「よろしくね」

「うん。あ、それとシホちゃんに無茶はしないでね、と言っておいて」

「わかった。それじゃ行くね」

それでフェイトちゃん達も地上本部に向かっていった。

だけど、シホちゃんもただけどなのはちゃんやフェイトちゃん、はやてちゃんの事も心配なのは同じ気持ちだ。

だからみんな無事に帰ってこれるように、そしてみんなの帰って来れる居場所も守るように私も頑張ろう。



Side フェイト・T・ハラオウン

とうとう公開意見陳述会が開催される朝がやってきて私達はなのはやシホ達に遅れる形で地上本部までやってきた。

そして中に入る前にデバイスを誰かに預けないといけないのでエリオに連絡をとった。

「あ、エリオ？ 今大丈夫…？」

『フェイトさん！ はい、大丈夫です』

「今から少しそつちに向かうけど…」

『あ、はい。デバイスですよね？』

「うん、そう」

さすがエリオだね。

これを察しているということは、もう先になのは達はデバイスを誰かに預けて中に入った模様である。

それならすぐに渡せるね。

そんな事を考えていると霊体化しているランサーがふと、

《なんだ…？》

なにやら変に声のトーンを下げて警戒しだした。

《どうしたの、ランサー…？》

《いや、特に本部には違和感はねーんだがな…なんていうかな、感じるんだよ》

《なにを？》

《マスターも魔術師なら感じねーか？ 変な空気が漂っているんだよ》

《うーん…私は特には感じないかな？》

《そうか…？…なら俺の気のせいってことでもいいのか？》

ランサーにしてはあんまりパツとしない言い方だね。

やっぱり魔術より魔導を優先している私より感じるものがあるのかな。

《ここはシホの嬢ちゃんにも聞いておいたほうがいいぜ？》

シホの嬢ちゃんなら世界の異常には敏感だからな。固有結界を使えるだけに…》

《確かに…。シホに確認しておいたほうがいいかもしれないね》

《ああ。今ここで実体化できれば探索のルーンであらかた調べられるんだがな。

………そうだな。マスター、俺はちよつくら霊体化したまま単独行動させてもらう

ぜ》

《ちよ、ちよつとランサー!?!》

私が止めようとしたけどランサーの気配はすぐに消えてしまった。

もう、こんな時に限っていなくなっちゃうなんて…。

少し不安になっちゃうよ。

まあ、今のところは何も起きていないから大丈夫だよな。

いざという時にはラインで念話を試みてみればいいんだから。

それから私はエリオ達と合流して、はやてと私とシグナムのデバイスをエリオ達に預けて中に入っていた。

そしてなのはと合流する前に、私の前を歩くはやてがとある人を見て歩みを止めた。

「どうしたの、はやて？」

「どうされましたか、主……？」

私とシグナムが心配の声をかけるが、はやてはとつきに「シッ！」と声を出さないようにジエスチャーをする。

それで私とシグナムは声をひそめる。

そしてはやてが向いた方にいた人物に目を向けると、

《あれって……確か管理局の正義の象徴とか言われている。ジグルト・ブリュンヒルデ》
提督……？》

私はすぐにその人物のことが検討がついたので念話ではやてに問いかける。

それにはやても念話で返事をしてくれた。

《そや。私達がまだ中学生の頃にミッドチルダで重犯罪者の軍団がミッドチルダを破壊しようと思んだらしいよ。

だけど、ジグルド提督と部下の人達の活躍で未然に防いだとか言っているっていう話や》

《私もそのような話は聞きました。確かに……。歩き方から貫禄がにじみ出てきていますね。強そうだな……》

シグナムが目を光らせていた。

どうやら最近久しく無かったバトルジャンキー症が浮上してきたような感じだ。

まあ、私も最近はみんなにシグナムと同類だ、などと結構シヨツクな事を言われているから、あまり否定もできないけど賛同もできないところなんだよね。

《シグナムがそう感じるっていうことは、やっぱり強いんやろな?》

《そうですね。機会があれば一度勝負を申込みたいところです》

そんな会話をしていると、ジグルド提督とその連れの部下の人が小声ながらも話をしだした。

身体強化魔術で聴覚を強化して聞いてみると、

『ジグルド提督、此度の意見陳述会、どう思われますか?』

『大方、レジアスが考案しているアインヘリアルルの自慢話だろうが、今回の陳述会、無事に済まないだろうな』

ッ!?

ジグルド提督もなにかが起ると予想している……?

それで部下の人が、『というと、やはり……』と返しをすると、

『ああ。聖王教会の“予言”の件もある。

レジアスは無視するだろうが、我々だけでも用心しておこう。

他にも陳述会の襲撃に警戒している者もいるはずだ。

そういう連中と連携出来るよう心掛けて置け』

『はっ！』

そう言つて部下の人は隊の人達に連絡を入れていようである。

でも、そつか。

私達だけじゃないんだね、予言が当たるということを予想しているのは。

それではやてが、

《驚きやね。地上本部の一提督の人がこの手の話題を信じている言うんわ》

《そうだね》

《はい》

《でも、心強いわ。これならもしかしたらどうにかなるかもしれないな。》

ジグルド提督以外にも警戒している人がいればええね》

《そうだね》

それでも聞くことにはないという事ではやては会場の中に入っていき私はなの達は達と合流するために別れた。

そういえば、ランサーは今どこにいるんだろう…？



Side ヴィータ

おそらく攻めてくるであろう外敵…。

それに備えてあたしも含めて緊張が高まっていく中、映像で意見陳述会の中継映像が流れ出した。

そこではやはりというべきか、レジアス中将の演説が聞こえてくる。

それをあたしは聞き流しながらもいつでも戦えるようにグラーフアイゼンを握り締めながら警備をしている時に後ろで一緒に歩いているエリオから話しかけられた。

「…ひとまず、何を起こらなさそうな気配ですね、ヴィータ副隊長？」

「キョクルー！」

エリオがそう話し、飛んでいるフリードがそれに相槌を打つように一鳴きする。

それであたしは心を引き締めさせるように、

「油断するなよ？ しつかりと警備をしている。今のことに何時どこで何が起こるか

わからないんだからな？」

そう忠告する。

それにエリオと、一緒にいるキャラは元気よく「はい！」と答える。

二人の声に、『よし、いい返事だ』とあたしは満足しながらも別思考で思念通話でなのは達と会話をする。

《……それにしても、だ》

あたしはそう切り出し、

《いまいちよく分からねーんだけど……》

《どうしたの、ヴィータちゃん……？》

《やっぱり心配事？》

なのはとシホから返事が返ってきたので、あたしは「ああ」と相槌を打ちながら、

《予言どーりに事が起こるとして、内部のクーターって線は薄いんだろう……？》

《アコース査察官が捜査してくれた範囲ではね……》

《私もそこは大丈夫だと思うわ。ヴェロツサはおちゃらけているけど、そういう所は真

面目だから》

シホが安心して言うなら、まあ、大丈夫かな？

《なら、そうすつとだ。絞られてくるのは外部からのテロだ。

でも、だとしたら目的は何なんだよ？》

《うーん……》

《……》

あたしがそう聞かすが、なのはからは少し唸りが聞こえてくるだけであまりいい返事は返ってこなかった。

シホも無言だし。

《犯人は例のレリックを集めている連中……スカリエッティ一味だっけ？》

《うん》

《そうね》

《だとしたら、さらに目的がわからね……。局を襲って何の得がある？》

そう、聞く。

そう、ただ披露したいだけなら表舞台でもいくらでもできる。

それをスカリエッティはなんの目的で襲おうとしているのかあたしにはまだ分かっていない。

《兵器開発者なら、自分の兵器の威力証明、かな？》

《私もそうだと思うわ》

《管理局の本部を壊滅させられるような兵器や戦力を用意できるって証明できれば、欲

しがる人はいくらでもいるだろうし…》

ついさつきあたしが考えたことと同じことをなのは言った。

《でもよ…威力証明なら、他でもいくらでも出来る場所がある。リスクが高すぎるだろ

…?》

《だよね…》

なのはの声に不安の感情が混じっている。

それだけ、なのはも緊張しているっていうことか。

《やっぱり、どうにもわからねーな》

《そうだね。でも、まああんまり深く考えてもしようがないよ。

信頼できる上司が命令をくれる。私達はその通りに動こう!》

《だな》

それで話は一旦打ち切りかと思つたが、そこで黙っていたシホが話しかけてきて、

《それと、追加だけど多分きつと隻眼の男も一緒になつて出てくると思うわ》

隻眼の男か…。

そいつの目的もわからねーな。

それでシホに聞いてみると、

《多分、隻眼の男の目的はスカリエッティと同じ。

現在まだそんなに頼りにされていない魔術の運用性と驚異の証明つてところね》

《そんなもんか…？ もっとあると思うんだけどな》

《…わからないわ。未だに何を目的にして動いているのかすら判明していないんだから…》

シホや魔術事件対策課の捜査でも未だに不明瞭な事案の一つ。

隻眼の男の目的。

スカリエッティ以上に謎のベールに包まれている魔術師。

なにを以てかすのかさえ分かっていない。

スカリエッティはレリックを目的で動いているが、隻眼の男の行動は規模はちとで

けーが、いまだに愉快犯程度の認識でしかないからな。

謎ばかりだな。

《そして、後はスカリエッティと隻眼の男がもし手を組んでいて、もしも狙うとしたらやっぱり…》

それを聞いてあたしはすぐに次の言葉がわかった。

《ヴィヴィオ、か…》

《そう。もしくはオリヴィエ陛下。どちらも聖王の血が流れている。

だから機動六課の居残り戦力も士郎を筆頭に固めて置いてある。

だから、心配はないと思うんだけど、ね…》

《どうにも歯切りがワリーな？ 士郎達の力はシホが一番よくわかっているじゃないか》

《そうなんだけど…。どうにも胸にある不安が取れないのよ》

《大丈夫だよ、シホちゃん。そのためにこうして対策として私達以上の強さを持つみんなを集結させたんだから》

《そうね、なのは…。今はただ今日という一日が無事に済むことだけを祈りましょうか》

《うん！》

《おう》

それで今度こそ話はそれで幕引きとなった。

……

……

……

…それから会議が始まってから四時間が経過した。

もう夕暮れもささってきて空が赤く染まっている。

夜も近いのだろう。今は九月で夏は終わっているが、まだ夜になってもそんなに寒いとは感じられないと思う。

そんな事をいくつもあるマルチタスク思考で考えていると、ティアナが腕時計を確認しながらも、

「開始から四時間ちよつと、か……。中の方もそろそろ終わりね」

「最後まで気を抜かずにしつかりやろう！」

「はい！」

「キユクルー！」

スバルが元気な声を上げながら言い、エリオとキャロが元気よく「はい！」と答え、フリードも一緒になって鳴く。

真面目で結構だな。

「真面目ですね」

隣で立っていたアルトリアもあたしと同じことを思ったらしく、そう言葉を発していた。

しかし、いつも六人セットで一緒にいるのに、今はランとレンの姿が見えねーな？

ついでにギンガもだけどな。

ラインも気づいたのかフォワード連中に「ギンガとランにレンはどこに？」と尋ねる。

「あ、リイン曹長。三人でしたら北エントランスに報告に行ってくださいます」
ほお…？

こりや珍しいこともあつたものだな。
ギンガが心配で着いていったのか？

「しかし…ヴィータ」

「ん？ どうした、アルトリア？」

「そろそろ警戒度を上げておくことをオススメします。私の直感が嫌な警報を鳴らして
います」

「…そろそろ、来るってやつか？」

「おそらくですが…」

アルトリアがこう言うことは、多分そういう事だろう。

アルトリアの直感はずば抜けているからな。

それであたしとアルトリアは警戒を強めるのだった。



寡黙な男…ゼスト・グライガンツ。

『烈火の劍精』の融合騎、アギト。

両名は地上本部を見える位置で見ている。

「連中の尻馬に乗るのはどうも気が進まねーけど…」

アギトがそうぼやく。

「まあそう言うな。貴重な機会でもあるのだからな。

今日ここですべてが片付くのなら、それに越したことはないのだが…」

ゼストが平淡ながらも言葉に力を込める。

それにアギトは「まあね」と言葉を返す。

次には腕を組みながら表情を曇らせるアギト。

それで発したのは今ここにはいないルーテシアの心配であった。

「ルールー、大丈夫かなあ…?」

「心配ならあの子についているといい…。私は一人でも大丈夫だ」

「そもいかないよ！ ルールーにはガリニューや虫達がいるけど、旦那はひとりで、しかも体が…」

心配そうにアギトは表情を歪ませる。

下手したら泣き出す寸前みたいな表情にも見えてしまうだろう。

「…すまん」

「いいって、いいって！ それより旦那の目的はこのヒゲオヤジだっけ？」
モニターにはレジアス・ゲイズの顔が映っていた。

(レジアス…)

それを見てゼストは心の中でレジアスの名を呟く。

表情は、変わらないが辛そうだ。

「そこまではあたしがついていく…。旦那のことはあたしが守ってやるよ！」
「お前の勝手だ。好きにしろ」

「あー！ 好きにするともさ。ルールーや旦那はあたしの恩人だからな！」
言葉ではこう言うがゼストは心強いな、と思うのだった。

◆◇
Side トレディ

『妹達全員配置に着きました。ガジェットドローンも全機スタンバイ完了致しました』
通信越しでウーノ姉様の声が聞こえてくる。

結局、レンさんをどうやって私のものにするのか思いつかず、IS便りの強攻策になつてしまうだろう。

でも、それでもいい…。

レンさんを私のものにできれば。

「ふふ、楽しそうだな。トレディ」

「……………そうですか？……………チンク姉様？」

「ああ、あと少しで目的が達成できるような感じだぞ」

「……………そうですね。確かにそうなのかもしれません」

「だがな、喜ぶのは成功してからにするんだな。皮算用のなんたらという言葉があるからな」

「……………はい。心得ております」

それで私は右手に装着されている固有武装である“この子”を反対の手で撫でる。

「……………レンさん、もう少しです。もう少しであなたを…」

そう思いに耽つているとドクターの声が通信越しで聞こえてくる。

小さい声でも私は拾えるように造られているからその言葉がよく聞こえてくる。

『くくくくく…』

『楽しそうですね』

『ああ、楽しいとも。この手で世界の歴史を変えるんだ。そう、あつという間に！』

研究者として、技術者として、心が沸き立ち踊るようだよ。そうだろ、ウーノ？』

『はい』

『そして魔術師殿。あなたの方も吉報を期待しているよ』

『任せたまえ。くくく…』

画面で見ていた魔術師の男は魔法陣も無しにまるで転移するかのように姿が掻き消えた。

不気味な人…。

それからドクターの少し演説のようなセリフが続くがやがて、

『さあ、始めようではないか！ 宴の始まりだ!!』

ドクターのその言葉とともに私達ナンバーズは全機動き出す。

「いくぞ、トレディ！」

「……………はい、チンク姉様！」

そして私達の革命が始まった。

第一百四十五話 『公開意見陳述会（3） 攻防戦、それぞれの戦い』

S i d e ファイアット・スクライア

私は今、お姉様からの指示でヴィータ達から離れて魔術事件対策課の待機場所にいます。

フォワード達にはヴィータとアルトリアさんの二人が付いているから大丈夫でしょうし…。

そんな時に私の隣で待機しているアリサから話しかけられた。

「ねえ、ファイアット。」

シホ達から何かが起こるからって言われているけど、隻眼の魔術師もしかかて来ると思う…?」

「はい。私達の予想が正しければスカリエツティ一味と何かしらの繋がりを持っている

と思います。

それに、今ここ地上本部には主要な人物たちが集結しています。だから叩くのならば………」

「今、だつて事でしょ？」

「そういうことです」

アリサとそんな会話をしている時だった。

突如として地上本部内から鳴り響く警報。

だけどそれはすぐに鳴り止みすぐに中から爆発の音が聞こえてくる。

《お姉様！ お姉様！》

何度も呼びかけるが通信が妨害されているみたいで繋がらない。

「な、何事なの!？」

アリサがデバイスのベルファイヤを握り締めながら立ち上がる。

そしてすぐに私達の目の前に紫色の四角の魔法陣がいくつも展開される。

そこから次々とガジェットが転移してくる。

「転移魔法陣!？」 スティング！ アスコット！ 二人で魔術障壁を展開！ 攻撃に備え

なさい！」

「了解！」

アリサの指示にすぐ近くにいたアルテア・ステイング一等陸士とセラ・アスコット一等陸士の風雷コンビが前に出る。

二人は杖を構えながら、

「セラ！ 防壁をはるぞ！」

「オツケイ！ アルテア君！」

二人は同時に魔術を展開して雷と風が巻き起こり出してガジェットを次々と破壊していく。

だけど破壊されたガジェットから煙が上がりだしてこちらにまでどんどんと迫ってくる。

「なにっ？ この煙は！」

「セラ！ 絶対に吸うなよ！ きつと致死性かなんかの煙だろう！」

迫ってくる煙に対してアルテアが風の突風を出して煙を吹き飛ばす。

だけどまたしてもガジェットは煙を飛ばしてくるけど、背後から、

「任せて！」

「カレンさん！」

「カレン二等陸尉！」

後ろから赤い髪の女性、カレンさんが救援に来て飛び出してきた。

その手にはすでに籠手型のデバイスである『カグツチ』が装着されていた。

「煙であろうと、ガジェットであろうと、私の放射波動の前ではすべてが灰燼と化するのよ！ 燃え尽きろー!!」

カレンさんの手から赤く燃え上がる熱線が放射されてガジエツトを煙ごと焼き尽くす。

「ふんっ！ この程度なの？」

カレンさんの登場により私達の前に転移してきたガジエツトは瞬くもなく破壊された。

私の出番は、なかったらしい。

その間にもアリサが煙の効果を解析したらしく、

「あの煙は致死性ではないけど、麻痺性のものだけわ！」

全員データを送るからすぐに備えて!!」

『おー!』

そこに合流してきた魔術事件対策課の魔術師達が次々に叫びを上げる。

それで散開して各個撃破に当たろうとしたその時に、ガジエツトの出現に遅れて地響きが次々と起こり、次には地面に亀裂が入り盛り上がってきて穴があいた。

すると、そこから次々と異形なものが地面から出現し出す。

そいつ等の姿は一言で言ってしまうえば、顔の部分がない“骸骨”だった。

その手には禍々しい鉈のような剣が握られている。

私のお姉様から教えてもらった知識にこれは見事ヒットした。

そう、こいつらは骸骨人形^{ゴレム}。

魔術によつて作られた人口の怪物。

見れば空からもガジェットに紛れて怪鳥のように骨の翼を羽ばたかしている骸骨怪鳥がゆうに三桁は超えているだろう数が飛来してくる。

「……………ふむ。アリサよ。セイバーのマスターの予想は当たったようだな」

「アサシン！」

そこに状況を見守っていたのだろう、アリサのサーヴァントであるアサシンが実体化して拳を構える。

「ファイアット！ あたし達魔術師は空を飛べないから空の骸骨怪鳥の相手をお願いね！」

「わかりました、アリサ！ いきますよ、マグナ？」

《《わかりました》》

「セットアップ！」

私はマグナを掲げてセットアップをする。

そして緑色の甲冑を身に纏い、槍型のマグナ・スピアを構えて空を飛び、高速でランサーさん持込みの槍こなしで骸骨怪鳥を砕いていく。

そして途中で、

「(やつぱり魔術師も仕掛けてきましたか…。でも、一体狙いは何…?)

それに、こんな時に通信妨害があるなんて…完全に後手後手です…。ヴィータ達は大丈夫でしょうか?」

そんな事を思いながら撃破を続ける。

「■■■■■■ー！！！！」

けど、砕けた骸骨怪鳥が空中でまた復元されていくように元の形に戻っていく。

再生能力!?

ガジェットより厄介じゃないですか!

骸骨怪鳥は不気味な叫び声を上げながら群れをなして私に迫ってくる。

一匹一匹なら大したことないのに群れられるところも強敵になるうなんて…。

「でも…!」

私はカートリッジロードをし、

「フルムーンモード!」

《Fullmoonform》

槍から鎖鉄球へと変化させる。

「やああああー……ッ!!」

それを振り回して骸骨怪鳥を砕きまくる。

いくら再生しようとも復活する回数は有限のはずだ。

だから全部砕くまで頑張ろう!

「少し、つらいものがありますが、アリサ達も頑張っていることでしょうし私達も頑張りますよ、マグナ!」

《はい、マスター!》

そして私は突撃していくのだった。



Side アリサ・バニングス

ファイアットが空で骸骨怪鳥^物を相手にしている中、あたし達も分散して戦闘をおこなっている。

アサシンがより前線に出て次々と骸骨人形^{ゴレム}を砕いていく。

「ふっ。なるほど……どんなに砕いても再生するのは核を完全に破壊しきれないからか。しかし、儼の拳にかかれば……！」

アサシンの「フンッ、ハッ！」という気合の声と共に骸骨人形は完全に砕け散る。さすがアサシンね。

あたしも負けられないわね！

見ればアリシアもフェイトのバルディッシュと同型の『スピードスター』を構えて雷の斧を形成して切り込んでいる。

「スピードスター……」

そしてアリシアはデバイスと同じ名の魔術で雷を帯びた星型の魔術弾を放ってガジェットや骸骨人形を潰している。

骸骨人形から攻撃を受けるも杖部分で受け止めている。

そして、

「やあっ……」

軽快な動きでジャンプして後ろに下がり、そこから骸骨人形めがけて一気に前へと加速しスピードスターを横に構えながら横薙ぎに切り裂く。

ただどすぐに復元してくるが、

「再生なんて、させない……」

アリシアはなんと振り向きざまに再生しようと集まっている中心を見事に斧で切り裂いた。

すると骸骨人形は今度こそ土に還った。

「みんな！ 骸骨人形は核を潰せば再生しないよ！

ガジェットもAMFが効果を発揮しない私達魔術師にとってはただの鉄の塊にすぎないから用心して当たれば問題ない！ 頑張ろう!!」

『さすがアリシア隊長！』

『頼りになります！』

『了解！』

うちの魔術師達がアリシアの言葉に次々と声を上げてガジェットや骸骨人形を潰していく。

よし……！

あたし達の周りの敵の数は減ってきた。

この調子でいけば他のところの援護にも回れるわね。

だから、

「みんな！ アリサ・バニングスから命令します！

カレン二等陸尉のA班は他のブロックに援護をしに行つて。

アリシア三等陸尉のB班は——…」

指揮官の役割を任されているあたしは次々とみんなに言葉をかけていく。

でもふと、あたし達の目の前にブーメランのような武器を構えた桃色の髪の毛のヘッドギアをしている女性が空から降りてきた。

みんなも警戒しているのか挑まずに静観している。

「…なにやらトーレから相手をして来いと指示されて来てみましたが、どの程度の部隊なのか……。ですが、相手になります」

どうやら一筋縄ではいかない感じの敵みたいね…。

でもそこで、

「呵呵呵！ 機械の塊や木偶では相手としては不足であったのだ。どれ、小娘？ 一つ儂と手合わせ願わんか…？」

「貴様は…？」

「アサシンのサーヴァント…」

「サーヴァント…？ 危険視されている、あの？」

あたしにとつて最強の相棒であるアサシンが女性の相手になるようだ。

あー…、ご愁傷様。

よりよってアサシンを相手にしてしまうなんて、敵ながら同情をしてしまうわ。

これからある意味敵の彼女にとっての惨劇が始まってしまいうんだろうなあ…と、襲撃されている最中なのに思ってしまった。



S i d e アルトリア・ペンドラゴン

あちらこちらでガジェットや骸骨人形ゴイレムによって魔導師達が倒されている。

私としては救援したいところですが、今は急ぎ中に入ってシホ達のもとへと向かわなければいけません。

そして私の後ろを走っているフォワード達四人とフリードから目を離すわけにはいきません。

ガジェットだけならまだしも、骸骨人形ゴイレムは私が先陣を切って倒してきましたが、あの再生能力は厄介です。

戦闘能力もかなりありましたから殺傷攻撃に慣れていないフォワード達には不利でしょう。

そしてオーバーSランクの敵対反応を感じ取り、空へと飛んでいったヴィータとリイ

ンにもフオワード達の面倒を任せられていますから責任重大です。

「アルトリアさん！ あたし達も戦います！」

「そうです！ 今までの訓練を今発揮する時です！」

「スバル…ティアナ」

スバルとティアナにそう言われて私は一度その場で立ち止まる。

「僕達も大丈夫です！」

「だから一人で戦わないでください！」

「キュクー！」

「エリオにキャロ…それにフリードまで…。ふふ、確かにそうですね。私としたことがあなた達の出番を奪ってしまいましたね」

そう…。

もうこの子達は私達が安心して任せられるほどに心も体も技量も成長してきています。

ならばここは一緒に戦う時でしょうね。

「わかりました。ですがガジェットも倒すことには変わりませんが、骸骨人形ゴレムは特に注意してください。

彼らはガジェットと違い、沈黙だけではなく命すら奪いに来ます」

「わかっていきますよ！」

「任せてください！」

「骸骨の核は僕が切り裂きます！」

「援護は任せてください！ ね？ フリード！」

「キュックー！！」

頼もしくなりましたね…。

「これなら大丈夫でしょう。」

「ではいきます！」

「「はい！」」

そして全員で進み、私とスバルが先陣を切りながら進んでいく。

だがそこで、

「アルトリアさん！」

「わかっていきます！」

スバルの大声にすぐに私はオートガードを展開してなにかしらの攻撃を防ぐ。

粉塵が上がり次いでなにかしらの人型がスバル目掛けて突撃してくる。

「うらああああ！！」

「させません！」

すぐさま私は風王結界を盾にし何者かの攻撃を防ぐ。

粉塵が晴れたそこにはスバルに似た赤髪の少女が私の剣に蹴りをかましているようであった。

そして見た目は両足にスバルのマツハキャリバーに似ていて、それにリボルバーナツクルのホイール部分が追加されているような武装のようなものが装着されていた。

少女は私に攻撃を防がれたのが癪に障ったのか「チッ！」という盛大な舌打ちをして私の剣を足場にして即座に離脱をはかった。

「な、なんだお前!？」

「あなたこそ何者ですか？ どうやら戦闘機人のようですが…」

「アルトリアさん!？」

「ッ!？」

エリオの叫びに振り向くとそこにはスフィアに囲まれているティアナ達の姿があった。

「ノーヴェー？ 奇襲を仕掛けたのに失敗しちゃってどうするっスか？ 目的も忘れているっスよね?」

「う、うるせーぞ、ウエンデイ！ 忘れてねーよ！ 捕獲対象三名、特にタイプゼロは捕獲しろ、だろ?」

「ならいいッスー！」

そして遅れて現れた少女はまたも濃いピンク色の髪を後ろで纏めていて大きな盾のような武装を持っていた。

どうやらノーヴェエという少女の方が蹴りによる近接戦闘。

そしてまだわかりませんがウエンディという少女の方がスフィアを展開しているところからおそらく援護型というところでしょう。

「ふふふ…どうッスか？ これで手出しはできないッスよ？」

「舐められたものですね。四人とも、今こそ訓練の成果を見せる時ですよ！」

「「「はい！」」」

「キュックルー！」

そして四人＋フリードはすぐさまスフィアを破壊して私の後ろに並んだ。

「なっ!!」

ウエンディという少女は驚愕の表情をしています、私はその隙を見逃すわけ無いでしょう？

魔力放出で特攻をしかけて風王^{インシブル・エア}結界を振り下ろす。

「なっ!!? 早い！」

「ノーヴェエ！ あたしの後ろに下がるッス！」

『ガンツ!』という鈍い音で私の剣は盾に受け止められてしまいました。それがどうしたと言わんばかりにさらにさらに魔力放出で力を込めて威力を上げる。

「グツ!?!」

「ぬるい! はああああ!!」

盾ごと私は二人を壁に吹き飛ばした。

「ガツ!?!」

壁に激突して二人は溜まった息をすぐに吐き出してその場に沈む、がすぐに立ち上がってきた。

ふむ。

意外に頑丈なのですね。

「さて、形勢は私たちに有利ですね」

剣を構えながら好戦的な笑みを浮かべ、

「捕まる覚悟をしてくださいいね?」

「誰が!」

「そんな覚悟をするっすか!」

「ならばそれ相応の罰を受けていただきます」

そして戦闘が始まった。



S i d e シホ・E・S・高町

閉じ込められてしまった私達はここからの脱出を念頭に今動いている。

「会議室や非常口の道は完全にロックされているね」

「うん」

「そうね…」

はやて達とも連絡が出来ないのは痛いわね。

「エレベーターも動かないし外とも通信できない」

「状況がわからないとどうすればいいか、ってところね」

そこでふとフェイトがエレベーターの方を見る。

そこでは今でも隔壁を開けようという地道な努力が行われている。

「ここは私の出番、かしらね？」

「お願い、シホちゃん」

「任せて。^{トレス・オン}強化開始！」

魔術回路を開き、身体強化を行なう。

「はあああああー！ー！！」

そしてエレベーターの扉を無理矢理こじ開けることに成功する。

周りから歓声の聲が上がるが今は非常事態という事で急ぐことにする。

「なのは、フエイト。降りるわよ？」

「うん！」

それから私たち三人はエレベーターのワイヤーを掴み、手を魔力で覆って擦れないようにガードして降下を開始した。

なかなか荒業だけど今の状況で無い物ねだりはしている状況ではないからね。

《奏者よ。なかなか派手にやっておるな！》

「天^タ駆^{クラ}ける踵^リの靴^アを投影してもいいんだけど、この先何が起こるかわからないから魔力は温存しておかないとね！」

「だけど、陸士訓練校以来なんだけど結構役立つものだね」

「やっておいてよかったわね！」

「うん！」

それから降下を続けながら、

「そういえばフエイト！ ランサーは!?!」

「今はどこかにでかけちゃったからわからない！ きつとどこかで戦っているのかもしれないけど……！」

「そう……」

「こういう時にいないのも困りものね、ランサーは。」

「なのは、オリヴィエ陛下の方は一緒にいるわよね」

「うん！ ちゃんと霊体化して着いてきているよ！」

「ならいいわ！ さて、緊急時の合流地点も教えてあるし、アルトリアもいるから早く行きましょう！」

「うん！」

それで私達は急ぐのだった。



S i d e レン・ブルックランズ

「どうして……」

「レン、落ち着いて！」

「レン君、落ち着いて！」

ラン姉さんとギンガさんが落ち着かせるように僕に声をかけてくれるけど、聞かずにはいられない！

なんで？

どうして？

なんで君がここにいるの…!?

「ねえ、なんとか答えてよ！ トレディ!!」

「……………これが現実です。レンさん、あなたを今宵奪わせていただきます。……………チン

ク姉様、いきましよう！」

「うむ。姉についてこい、トレディ！」

僕達は動揺している間にもトレディともう一人のチンクという少女がこちらへと武装を構えて向かってくる。

「くっ！ レン！ しつかりしなさい！」

そこでラン姉さんに頬を叩かれた。

地味に痛い…。

「理由はどうであれトレディは私達の敵！ だから今は余計な考えはしまっておいて戦いなさい！」

「そうよ、レン君！ 考えるのは捕まえた後でも出来るわ！」

「ツ！ わ、分かりました！」

そうだね。

トレディ…。

君が何者なのか、どうしてこんな事をするのかは君を倒して聞かせてもらおうよ！

第四百四十六話

『公開意見陳述会(4)』

激化する戦闘』

Side ヴィータ

フォワード達のお守りはアルトリアに任せてあたしとリインは異変と同時に感じた
オーバーSランク相当の何者かに向かってユニゾンをして飛びだった。

「リイン！ 呼びかけ頼む！」

《はいです！》

そして直様リインは、

『こちら時空管理局です！ あなた達の飛行許可と個人識別データが確認できません。
直ちに停止してください！ それ以上進めば迎撃に入ります！』

『……………』

リインが警告するが、反応なしか…。

停止の指示も聞かなかったたので、しかたなく迎撃態勢に入ることにした。

それであたしはまずシュワリベフリーゲン——鉄球——を複数放って牽制に使い、相手の男がそちらに気を回している間に、その隙についてグラーファイゼンでギガントハンマーを叩き込む。

「おらぁー！！！」

「ツ！」

裂帛とともにアイゼンを振り下ろす。

相手との接触、次いで爆発が起こる。

すぐに距離を取って反撃がこないかを確認する。

手応えは確かにあった。だが…、

《ヴィータちゃん、未然に防がれてしまいました！》

「あー… わかつてるよ、リイン！」

リインの言葉にすぐに答える。

そしてハンマーを防がれた先には先ほど叩き込む前までは黒髪の見た目寡黙そうな槍を持った男の姿は、今は髪が黄金色に変わって魔力が実態を持つてオーラとなり立ち上げている。

おそらく一緒にいたあの前の廃都市戦の時に捕まえそこねた赤いチビ、確か…名前はアギトとか言ったか？の融合騎とユニゾンしたんだろう。

なにやら小声でつぶやいている。

シホに鍛えられた読心術で男の口の動きを読み取る。

(すまんな、アギト、か…)

…つてことは、あいつ等はあたしの攻撃に咄嗟に融合騎のアギトが無理にユニゾンしてあたしの攻撃を防いだってことか。

ということは、あたしの動きに反応が遅れたということになる。

《リイン…》

《はい？ なんですか、ヴィータちゃん？》

《油断はできねーが、あの男が本気を出さない限りはあたし達は多分負けることはねえ》
 《そうですね。でも、そんな事を言っていると士郎パパに『そんなことを言っていて負けたら恥ずかしいぞ？ 油断は慢心を招く。舐めていると足元を掬われるぞ』とか言われちゃいますよ？ ヴィータちゃん》

《わかつてるよ！ 油断も慢心もねー！ 最初から本気で奴らを叩き潰すぞ！ リイン！》

《それでこそ、鉄槌の騎士ヴィータちゃんです！》

この会話を数秒で終わらせ、あたしはグラーフアイゼンを男に構えた。

相手もおそらく騎士タイプ。

なら戦いの前に前口上が必要だろう。

多分、やつも答えてくれると思うし。こう…直感で。

「時空管理局機動六課所属スターズ分隊副隊長、鉄槌の騎士ヴィータだ！」

「…………ゼスト」

あたしの口上に低い声で、しかしはつきりと男は名前を名乗ってきた。

あたしは聞いたことのない名前だったが、後で調べればいくらでも出てくるだろうから、今は戦闘に集中する。

「勝負だ！」

「…………ツ！」

あたしが声を大きくそう宣言する。

そして男——ゼストは無言で槍をあたしに向けて構えた。

そしてあたしは一気に魔力をスピードに転換させブーストしゼストに突っ込む。

ゼストも両手で槍を構えて疾駆してくる。

動きは遅いが、その代わりに重さがかなりある。

最初のアイゼンと槍のぶつかった衝撃で、瞬時にパワータイプだという事をあたしは悟る。

だけども、あたしだって叩き込むことに関してはヴォルケンリッターを自負してい

る。

負けていらんねー！

「うらあああー！ー！」

「ぬう!?!」

アイゼンを思いつき振り抜きゼストを後方に弾き飛ばす。

よし！ あたしでも対応可能範囲のレベルだ。

ゼストの防御力はなのはよりかなり下、フェイトよりスピードはない、シホよりも俊敏でない。

サーヴァント連中と比べればその差は一回打ち合っただけで一目瞭然。

今まで人間では決して敵わないと言われてきたサーヴァントの奴らにフォワード陣だけじゃなくあたしも鍛えられてきたんだ！

だから、このくらいの敵を相手に遅れをとってはいけない。

ぜってー勝って目的を聞き出してやる！

それから何度もゼストと打ち合いを続けて、

「でやあああー！ー！」

「はあああー！ー！！」

グラーフアイゼンとゼストの槍が衝突を起こし、力が拮抗して、結果は鏖迫り合いと

相成った。

そこであたしは「聞き出すなら今しかねえ！」と思い咄嗟に問いかける。

なのはじゃねーけど、ただ叩き潰すだけじゃなく理由を聞かないことには話になんねーからな。

「ゼストって言ったな!? 目的を言えよ! 何を企んでやがる!」

「……………」

語りかけてもあえて無言を通すらしい。なら、まだ続けさせてもらう!

「納得できる内容なら管理局はちゃんと話を聞く! だからお前の話を聞かせろ! どうにかできるかもしれないぞ!」

「……………」若いな…（話で解決できればこうして戦いなど起こらないのだぞ? 幼き騎士よ）」

あたしのセリフがなにかの琴線に引っかかったのだろう。

ゼストはただ一言、「若いな」というセリフを残し、鏑迫り合いでさらに力を込めてきた。

舐められたな…。

そして、パワーで押し切ろーってか? 上等じゃん!

《リイン!》

《はいです！》

ラインとの連携でさらにあたしの方でも力を上げて罅迫り合いをさらに押し返す。

「なら、もう言葉は必要ねー！ 叩き潰してから白状させる！」

「くっ……！」

罅迫り合いは続く。

するとゼストの体から次々と炎が上がりだして槍に集中していつている。

（弾き飛ばされるのにそう時間はかからねーな……！）

あたしの考えは、どうやら正解らしく、やがてあたしとゼストの力が臨界点を超えたのか罅迫り合いが耐え切れなくなり、この場の空気が悲鳴を上げだして魔力がバーストして爆発を引き起こす。

それで罅迫り合いは一旦終了となり、あたしとゼストは距離をとる。

ゼストは槍を構えながらも薄く、しかしはつきりと口を緩めて、

「（若い、だが……）——いい騎士だ」

「ありがとう！」

褒められたので素直にそう返しておく。

なにか気のせいかな？ 融合騎のアギトがゼストの中で「褒めてる場合かよー！」と

駄々をこねている姿が幻視したような？

でも、何度か打ち合って分かったことがある。

それでラインに話しかける。

《《気づいたか、ライン？》》

《《はい！ 融合相性があまり良くないみたいですね。ユニゾンアタックの時に微妙にですがタイミングがずれています！》》

二人で相談をしながらもさらにゼストと打ち合う。

やっぱりな。手応えに若干違和感がある。

押し切れば勝機はこちらにある……！

今がその時だ！

だけどあちらもそれは分かっているらしく、

「アギト！ ユニゾンを解除しろ。あの騎士にフルドライブの一撃を叩き込む！」

「フルドライブか……。やつの切り札だろうが、どうやら底が見えたみたいだな！ あた

しはまだ全力を出し切ってねー！」

《《ヴィーたちちゃん！ 叩くなら今です！ タイミングを見誤らないようにお願いします

！》》

《《おうよ！》》

さらに見てみれば内輪揉めでも起こしているのかユニゾン解除はされなくて、代わり

に槍に炎が宿るといふ分かりやすい反応までしてくれる。

「…くぐぞー！」

「来い！」

それからまた戦いは激化していくのだった。



Side アルトリア・ペンドラゴン

ノーヴェという少女は何度も私に向かって腕部の武装からビームを撃ってきますが、そんなものが効くとお思いですか？」

剣を振るいすべて弾く。

「てめえ、一体なにもんだよ！」

「私ですか？ 私は機動六課セイバース隊長の融合騎ですが？」

「融合騎がこんなに強くていいのかよ!?!」

「何を言いますか。強さなど千差万別、貴女は融合騎を舐めている節があるようですね」

「くっそ！ ウエンデイ！ あたし一人じゃこんな化物相手は無理だ！ 援護を頼む」

！」

ノーヴェがウエンディという少女に助けを求めますが、無理でしょうね。

なんせあちらは私達が手塩にかけて鍛えてきたフォワード陣四人が相手なのだ。

その答えとも言うべきか返事が帰ってきました。

「む、無理っスよ〜！ こいつら戦闘機人の戦い方を分かっているのかセンサーでも幻術が作用してどいつが本物かわからない！」

私が見た先ではスバル達が何人にも出現してウエンディを包囲してジワジワと壁際に追い込んでいます。

数機のカジエットと連携して射撃をして戦っているようですが、数をものともしないでスバルとエリオが突っ込んでいき、カジエットのほとんどを破壊している。

いつの間にかこんなに強くなっていたのですね。

最初のあのカジエットとの模擬戦闘から比べればかなりのものです。

エリオなどは瞬動術を駆使してウエンディの背後に回り込んでストラーダによる電気を帯させた連打を叩き込んでいます。

ランサー持込みの槍による刺突だ。

その攻撃はさながらガトリングを連想させられる。

名前を付けるとすれば『サンダーレイジ・ガトリングシフト』でしょうか。

「やああああー!!」

「うわわわわあー!! スッ!!」

ウエンデイは盾と射撃融合型の盾をなんとか前面に出して防いでいるが、見るからに盾にストラダーによる傷が重ねられていきます。

そしてとどめを指すかのようにエリオの背後からスバルがウイングロードの道をマツハキヤリバーで走り距離を一気に縮めて、交換と言わんばかりに連打を繰り返していたエリオは二歩、三歩と下がり、一人が入れるスペースを作る。

ウエンデイは連打の雨が止んでホッと一息をついたようですが、それが罠です。

「うおおおおー!!」

「ッ!」

「受けるおー!! シホさん直伝! 炸裂拳!!」

ズガンッ! というものすごい音がして、ウエンデイは盾ごと吹き飛ばされてしまった。

そして壁に少しめり込んでいます。

あれは相当のものですな。

「ガフッ!」

「ウエンデイ!? てんめえー!!」

ノーヴェエが私の剣を振り切り、ウイングロードに似たスキルでスバルに向かっていきますが、スバルは振り向きざまに、

「せいやあー！！！」

「なっ?! うわあ！」

後ろを向いていて見えていないというのに、気配だけでスバルはノーヴェエの居場所を察したらしく回し蹴りを叩き込んだ。

それにノーヴェエはものの見事に直撃してしまい、地面を削りながら何度も跳ねてウエーデーのいた場所のとなりまで吹き飛ばされていった。

そしてようやく止まったと思えば、すでに私達が包囲しているという現状。

私は剣を向けて、

「チエックメイト、ですね」

「くっ……！」

二人の悔しがる声が漏れてくる。

テイアナとキヤロがバインドの作業に入ろうとしたその時だった。

突如として地面が盛り上がってきて二人と私達の間次第に狭い通路いっぱいっぱいの岩石巨人が出現する。

「なっ?! アルトリアさん！」

「心得ました！ 風よ、唸れ！ 風王鉄槌！！」
ストライク・エア

ティアナの声に即座に私は反応をし、巨人を砕くべく風王鉄槌を放つ。
ストライク・エア

風圧の塊は即座に巨人に衝突して粉々に砕け散る。

「エリオ君！」

「うん！」

キャロの声にエリオが反応し、巨人が砕けたあとに中心に残っていて再生しようとしているコアを真つ二つに切り裂く。

魔術師の繰り出すゴーレムはこうして一度粉々にしたあと、コアを破壊して二度倒さなければ完全には倒せないという厄介さなのです。

まずいですね。こいつを倒している間に彼女らにわずかな時間を与えてしまいました……！

それで私は即座に二人がいた場所に目を向けると、逃げたのでしよう。すでに二人はその姿を忽然と消していた。

逃しましたか。

「くっ…、逃したか！」

スバルが心底悔しがつている。

自分と関係している事だけにやるせないのでしょうか。

私もまさか魔術師が手助けをするまいと油断をしていたのがこのザマです。

これではアーチャー^{ミヤ}に笑われてしまいますね…。

今度出会ったら、次こそは捕らえてみせましょう。

そう決意して、気持ちを落ち着かせた後、

「スバル、今はしようがありません。また、倒す機会があるでしょうから今は私達の目的であるシホ達との合流に努めましょう」

「はい…」



アルトリア達からなんとか逃げおおせたノーヴェとウエンディは、

「うへ〜…最後のタイプゼロの攻撃を受けてから手がシビレっぱなしツス…」

「く、悔しいぜ！ 特にあの融合騎のアホ毛！ なんなんだよ、あいつ!?!」

「あれがまさしくチートって奴っスかね〜…?」

「知らねーよ!」

ウエンディがのんきに、そしてマイペースにそう呟いている。

その受けごたえに思わずノーヴェが痲癩を起こしたかのように悔しがる。

だが、そこに通信が開く。

相手は二人の姉であるチンクからである。

『ノーヴェ、ウエンデイ。聞こえるか?』

「なにつスカ…?」

『タイプゼロと魔導師二人の計三人と私とトレデイの二人で交戦中だ。できれば手助けをしてほしい』

「了解っス!」

「わかったよ、チンク姉!」

ウエンデイは軽く承諾し、ノーヴェに至つては敬愛しているチンクからの頼み事で先ほどの悔しい出来事も脳裏から吹き飛んでしまったのか、勝気な表情を浮かべて現場に向かう。



Side ギンガ・ナカジマ

戦闘機人二名と遭遇した私とランにレン君。

でも黒髪のショートカットの女の子とはどうやら二人は知り合いらしい。

特にレン君は信じたくないのかかなり動揺してしまっている。

でも事実戦闘機人だということには変わりないという事でなんとかランと一緒に説得をして、

「いくわよ。二人とも！」

「はい！」

私は眼帯をしている少女の方に、ランとレン君は手になにかを装着している少女に挑んでいった。

「お前は捕獲しろと言われている、だから倒させてもらおうぞ！」

「できるものならやってみなさい！」

そして私はウイングロードを展開してブリッツキヤリバーで走り眼帯少女に左手のリボルバーナックルを構えて疾駆する。

「ただ眼帯少女が数本ナイフを構えて、

「IS、ランブルデトネーター……！」

彼女の足元に戦闘機人特有のテンプレートが輝いた。

そしてナイフを私に向かって投擲してきた。

ただの投擲か……？

でも、その時瞬時に脳裏にシホさんとの訓練光景が流れてくる。

『いい、ギンガ？　もし敵がなにかを放ってくる事があつたら何事にも警戒を怠らない』

『ことよ』

『警戒、ですか？』

私はその時、何かはわからなかった。

『もし、その投擲が急に軌道を変えたりして迫ってきたら、ギンガはどうする？』

『それは、ガードするかプロテクションを貼ると思います』

『甘いわよ。もしそれが爆発してきたらどうするの？　ガードしても衝撃までは防げないわよ。だからガードするくらいなら即座にその場から離脱したほうがいいわ。』

離脱と同時に同時展開でプロテクションも維持しておいたほうがいいわね』

『わかりました。不測の事態に警戒しろってことですね』

『その通り。だから今からその訓練をしておきましょう。それでギンガも慣れてきたら今度は全員で一緒に相手をしてあげるわ』

そういつてシホさんは魔法ではなく、おそらくシホさんの魔術である転送魔術で複数

の剣を空中に浮かせていた。

『いくわよ！』ソードパレルフルオーブ 全投影連続層写！』

それを一斉に私向かって放ってきた。

それをなんとか交わすが、複数追尾機能でもついているのだろう私の後を追いかけてくる。

それで私はプロテクションを展開しようと手を構えるが、

『甘い！』ブローケン・ファンタズム 壊れた幻想！』

それで私の眼前に迫ってきていた剣達は一斉に爆発を引き起こして、私は思わず衝撃を和らげることもできずに地面に吹き飛ばされる。

『くっ……！』

『なまじ防御できる魔法があるからといってそれに頼りきりじゃ、いつか足元を掬われるわよ。もっとあらゆる事態を想定して考えて防御するか、回避するか、攻撃に移るかを決めなさい！ マルチタスクもあるんだからそれくらい可能でしょう？』

『はい！ 頑張ります！』

それからシホさんにありとあらゆる攻撃手段を叩き込まれた。

剣も実態剣だけあって非殺傷なんて生ぬるい攻撃じゃなく、一撃でも喰らえば即致命傷の攻撃だったからより集中できた。

それがすぐに思い起こされて、私は咄嗟にウイングロードの軌道を曲げて回避行動をとる。

すると先程まで私がいた場所にナイフが刺さり、次には爆発が起こって地面を吹き飛ばしていた。

あのまま直進していたらと冷や汗を流すとともに、シホさんの訓練を思い出してよかったと実感する。

「ほう…あの一瞬で私の能力を予想し見抜いたか。さすがだな」

「お褒めいただきありがとうございます！ でも、もう種は分かりました。今度はこちらから行かせていただきます！」

ナイフの軌道はほぼ一直線。爆発するタイミングは指定できるようだけど、能力名を宣言しない限り爆発までに僅かなタイムラグがある。

そのわずかな時間を回避に使い、反撃に移る。

これが射撃武器がリボルバーシュートしかなく、他はほぼ打撃の攻撃しかない私の戦闘方法だ。

もちろんもう一人の攻撃が逸れてくることも想定しながらも私は挑む。その時だった。

「ああっ!？」

「ラン姉さん!」

ランの悲鳴とレン君の叫びが聞こえてきた。

もしかして…!？」

「お前に他を気にする時間などこの私が与えると思うか？」

「くっ…!？」

また投擲されるナイフを咄嗟に回避する。

あちらは状況がわからないけどかなり押されているようね。

戦闘を長引かせるわけにはいかないわ。

短期決戦で仕留めないと!



一人、単独行動をとっていたランサーは謎の敵と相対していた。

「貴様、何者だ…?」

「……………」

敵は無言。

その姿は全身ローブ姿で顔まで覆い隠している。

しかしローブの上からでも分かるその体つきからして女性であることはあきらかである。

そして特徴的なのはその手に青白く輝く槍を持っているということだ。

さらによく目を凝らしてみれば穂先にはルーン文字が刻まれている。

「ランサーのサーヴァントか……？　しかし、サーヴァントの気配は……それに半分は人間か？」

「……………」

やはり無言。

しかし代わりに槍をランサーに向けて構えてくる。

ランサーはそれを戦いの合図と受け取ったようで、

「……いいぜ。なら戦おうじゃねえか！　謎の槍使いの女よ！」

ここにまた戦いが始まろうとしていた。

第四百十七話 『公開意見陳述会（5） 行動開始と不安な思い』

Side シホ・E・S・高町

なのはとフェイトとエレベーターのワイヤーを使い一階に降りて扉を（やっぱり無理矢理）こじ開けて外に出て走っている時に、

「高町一尉！ テスタロッサ執務官！ 騎士シホ！」

この声は！

それで私達は振り向くとそこには息を切らせたシスター・シャツハが私たちに駆け寄ってきた。

「シスター・シャツハ！」

「どうしてここに…？！」

「はやて達と一緒に会議室にいたはずじゃ…！」

シスター・シャツハは膝に手を置いて何度か息切れをしていたが、

「はあはあ………、すうー、はあー………はい。会議室の扉は有志の努力によつてなんとか開きました。それで私も急ぎ皆さんの後を追つてまいりました……！」

「はやてちゃん達は……？」

なのはが代表してはやて達の安否を聞く。

それにシスター・シャツハはすぐに、

「お三方とも会議室で待機をしています。今現在は各方面の方々たちにガジェットや襲撃者——戦闘機人やジェイル・スカリエツィ、隻眼の魔術師——やその他などの情報を説明しています」

説明、ね……。

今までもろくにガジェットなどの対応を取つてくれなかったのに話は聞いてくれるかしら？

まあ、ここまで事が大きくなつたからには話を聞かない他はないと思うけど……。

「……そう。それじゃ急がなくちゃね！」

そんな時だった。

「なのはさん！」

スバルの声が聞こえてきた。

振り向いてみればアルトリアやフォワード陣達（ギンガやランとレンの姿はないが…）の姿があった。

フェイトがそれで「いいタイミングだね！」とみんなを褒め称えている。

「お待たせしました！」

「デバイス達、しつかりとお届けにきました！」

スバル達の手にはなのは達のデバイス達がしつかりと握り締められていた。

そして、

「シホ、アンリミテッド・エアを…」

「ありがとう、アルトリア」

そこにネロも霊体化状態を解いて実体化をして、

「アルトリアよ。余の『アエストウス・エストウス』…いや『アエス』も持っておるか？」

「はい。大丈夫ですよ」

ネロもアルトリアからデバイスである『アエス』を受け取っていた。

殺傷のある攻撃を禁止された後は、ネロはこうしてアエスを主武器として使用しているのである。

だがしかし、ネロの能力を十全に振るうにはやはりネロ本来の武器である隕鉄の韃ふたじ…『アエストウス・エストウス』
『原初の火』でなければ宝具使用や高出力スキル使用時には耐え切れないのである。

だけど、力を制限されているとは言え、それでもネロはそれを難なく使いこなせているからやっぱり英霊の技量は伊達ではない。

「よしよし。アエスが戻ってくれば余にはもう怖いものはないぞ！」

《切り抜けちゃいますよー！ エンペラー！》

「おうとも、アエス！」

さらにネロのデバイスの人格はかなりアレである。

なぜかアエスはネロの事を「エンペラー」と呼んでいてネロの事を敬愛している節がある。

もし体があれば常に擦り寄っている猫を連想させられるだろう。

…ま、いいんだけどね。お互いがそれで良ければ。

頼りになることには変わりないしね。

「さあ、奏者よ！ 余とともにこの困難を見事切り抜けようぞ！」

「ええ。ネロ！」

そして、ネロと、アルトリアと私の三人が揃えば切り抜けられないものなどないのだ。

それはともかく、はやてとシグナムのデバイスも受け取ったシスター・シヤツハは、

「では、この子達は私が責任をもってお届けします」

「お願いします」

「お任せ下さい！ この身にかけて…」

それでシスター・シヤツハは会議室へと即座に戻っていった。

それでふと、先ほどエレベーターのワイヤーで降下時にフェイトに聞いたことを再度聞く。

「フェイト。さつきも聞いたけど、ランサーは今どうしてる…?」

「うん。待つて…念話で話しかけてみるね」

それでランサーに念話を試みるフェイトだったが、

《はははははッ！ なかなかやるみたいだな！ 槍使いよ！》

「ツツ!? ランサー、誰かと戦ってる…?」

ランサーは誰かとすでに交戦中か。

《…あん? マスターか? 今いいところなんだ。邪魔はしないでくれよ?》

「誰と戦っているの?」

《ああ。なんやらサーヴァントっぽいやつと戦っているぜ！ これがな、デイルムツドとの決闘の時のように楽しくてな！》

「戻ってこれる…?」

《無理だな。今はなんとか念話もしながら戦い続けているが、やつこさんは俺を逃がす気はないらしいしな。ま、俺としては「褒美だけだな！》

「もう…。状況が知りたいたいんだけど？」

《なら、マスター能力で視覚を俺とリンクさせりやいいだろ？俺の視限定だが映像は共有できるぜ》

「…わかった。やってみるよ」

どうやらフェイトはランサーとの念話に成功、内容を聞き出したらしい。

それからランサーとの会話内容をフェイトは教えてくれた。

だが、それに私は妙な懷疑心を抱く。

「…本当にその相手はランサーのサーヴァントなの？ランサーと視覚を共有してみてくれないかしら？ フェイト」

「う、うん。わかったよ、シホ」

それですぐにフェイトに視覚を共有したらしく、その表情はすぐに驚きに彩られた。

「…確かに、ランサーは槍を使う女性と戦っているよ。それもデイルムツドの時の戦い比べても同じくらいなほどの戦闘だよ、これ…」

「そう…」

フェイトがそう判断するなら、きっとそうなのでしようね。

でも、ランサーの説明に少し引つ掛かりを覚えた。

「フェイト、ランサーは確かにサーヴァント “っぽい奴” と言ったのよね？」

「う、うん。確かにそう言ったよ?」

「それならおかしいわ。サーヴァントはお互いにサーヴァントの気配や存在を感じできるから、ランサーの性格で嘘をつくと思えないから…その女性は半サーヴァントとでも言うの?」

「それはおかしいです、シホ。人間がサーヴァントの気配を出せるとは思えません」

「そうだぞ、奏者よ。それならばそれ相応の対価を望まねばその高みにはリスクが高すぎて登れないだろう」

「はい。もしサーヴァントの気配を出せるとするならば…方法は限られています」

そこにオリヴィエ陛下もなのは背後に実体化して、そう話す。

「もしかして、その数少ない方法って…」

「はい。『世界との契約』で生きた英霊になる以外は、おそらくないでしょう…」

それで私は少し衝撃を受ける。

もし、その方法を槍使いの女性は使っているとしたら、死後にエミヤと同じく無限の地獄を味わうことになる。

手遅れだったら、もうどうしようもないわね…。

私がそんな事を考えている時だった。

「ギン姉!」

スバルの叫びに全員が振り向く。

「どうしたの、スバル？ ギンガの身になにか起こったの？」

「は、はい…なんとかさつきまで通信ができたんですけど、今は事態が事態らしく通信が繋がらないんです」

「そうだ！なのはさん、先ほど私達は二名の戦闘機人と交戦したんですけど、あと少しというところで逃してしまつたんです！」

ティアナがそう説明してくる。

「ランさんとレンさんもギンガさんと一緒にいたと思います！」

「エリオ君、お二人共ともに繋がらないみたい！」

キャラコが悲壮そうにそう叫ぶ。

それより、ランとレンとも繋がらない!?

なにか嫌な予感がするわ…。

すぐに行動を開始しないと…!!

それと、忘れてはいけないけど機動六課も狙われている可能性が高い！

すぐに機動六課へと通信を私は試みた。

なぜか、フェイトが少し出遅れたみたいなきろい表情になっていて上げようとしていた手をつくりと落としたようだけど、今は気にしないでおこう。

「ロングアーチ。こちらセイバーズ。応答願うわ！」

『こちらロング……アーチ……』

「!? 通信が途切れとぎれ？」

「グリフィス、どうしたの!? そちらで今なにが起こっているの!？」

『はい……。大量のガジェ……トと怪奇……化物の集団……機動六課を目……けて襲いにかかつて

……ています、それを士郎さん達がな……とか防いでいるところですよ!』

少し聞こえにくいけど、なんとか内容は理解できた。

「応援は必要……?」

『今のところ……大丈夫……そうです。士郎さんに……繋がります』

それで少し回線が変わったのか士郎の声が聞こえてきた。

『シホか?』

「士郎! 大丈夫なの?」

『ああ。今のところはなんとか我ら八神防衛隊とすずか嬢にライダー、ヴァイス他待機

魔導師達で守りを固めている。こちらは気にせず、そちらはそちらの事態に当たれ

!』

「信じるわよ……?」

『ああ、任せろ。見事守りきってみせよう』

「任せたわ」

それで士郎及びロングアーチとの通信を切る。

「シホちゃん、どうだった…?」

「今のところは大丈夫そうよ。士郎達を信じましょう」

「そうだね」

「それじゃ、分散して班を分けるわよ!」

「「「はい!」」」」

「まず、スターズは——…」

私が代表して指示を出そうとしたその時だった。

「うっ…」

突如、なのはが額を押さえて少し倒れそうになり、オリヴィエ陛下がなのはを抱きとめる。

「大丈夫ですか、なのは…?」

「う、うん。オリヴィエさん…」

こんな時に最近なのはを悩まし続けている頭痛が出たか…。

でも、なんでこんなタイミングで?

「あっ!?!」

「こ、今度はどうしたの？　なのは…？」

そして次いでなのは、またしても今度は大声を上げる。

さすがのフェイトもなのはの突然の奇行に心配な声をかける。

なのはは顔を俯かせて少し青くなっている。

そして数秒して、突然顔を上げたと思ったら、

「シホちゃん！　お願い！　ちよつとオリヴィエさんと一緒に単独行動をさせて！　用

が済んだらすぐに戻るから…！」

「用が、って…」

「お願い…今は、私を信じて…」

稀に見ないなのはの弱気な頼みごとに、これは一大事かもしれないと思った。

でも、なのはが話してくれないことには対応もできない。

しかたなく私は決断をする。

「……………わかったわ。今はなのはを信じるわ。それじゃなのはとオリヴィエ陛下は作戦

メンバーから一時外れてもらうけど、いい？　みんな？」

『……………』

みんなからの反論は無し。

なのはの信頼あつてのことだろう。

「わかったわ。それじゃ、オリヴィエ陛下。なのはにもしもの事がないようお願いします」

「はい。なのは私が守ります!」

「ごめんね、みんな!」

それでののはバリアジャケットを纏って余裕のない表情をしながら、私たちに謝罪をしながらも飛びさっていった。

オリヴィエ陛下もその移動力を駆使してなのはの後を追尾している。

それを後ろ髪を引かれる思いで見送りながら、私はみんなに指示を出す。

「それじゃ、ライトニングは外に出て魔導師達と連携して空の敵を相手してもらっている? そして出来ることならランサーも見つけて援護をしてやって!」

「わかったよ、シホ。いいね? エリオ、キヤロ」

「はい!」

「わかりました!」

「キュクー!」

そして次は、

「私とアルトリア、ネロ、スターズの二人はギンガとランとレンの安否を確認、そして襲撃戦力の排除及び捕獲よ!」

「了解しました」

「うむ、任されたぞ！」

「はい！」

「了解です！」

全員に指示が行き渡る。

「みんな、無事に乗り切りましょう！」

『はい（うん）！』

「それじゃ、解散！」

それでフェイト達と二手に別れて移動を開始する。

でも、やっぱりなのはが心配だわ…。

そして、今日という一日でなのはの姿を見るのはこれきりになるなどという事を後々に思い知る事になるとは思いもしなかったのである…。



S i d e ラン・ブルックランズ

私たちの前に突如として現れた二人の戦闘機人。

そしてその片割れは前に休日をもらった日に偶然遭遇した『トレデイ』という少女だった。

接触した時間は少しだけだったが、私とレンの記憶に残る出会いだったのは確かだった。

そんな子が、今こうして私たちの前に立ちふさがっている。

最初、レンはそれで動揺してしまっただけで、ギンガさんと一緒になって説得してトレデイの前に対峙することになった。

ギンガさんは眼帯の少女と移動しながら戦闘をすでに開始している。

だけど、まだ私達はお互いににらみ合っているままであった。

「……トレデイ。どうしてこんな事を？」

「……………愚問です。……………私は戦闘機人。それだけあれば理由は十分なのではないですか？」

「うっ……」

レンが質問するが、トレデイは機械的にそう返してきた。

やっぱり無機質な子ね。

「……………そして、レンさん」

トレディは手を私たちの方にかざして、

「……………貴方を私のものにします」

「えっ!？」

「……………」

突然の告白的な発言にレンは顔に豆鉄砲を食らったかのように唾然としたあとにすぐに顔を赤くしていた。

「これがこんな時でなければ平和的なものであったのになあ…。」

「…なに、勝手に私の弟を嫁にするみたいな発言してんのよ?」

「……………ランさん。貴女が教えてくれたことではありませんか?」

「はあっ?」

「私は何か言ったっけ?」

「……………貴女はこう言いましたよね? 『恋とは相手を自分のものにしたいたいという想いだ』」

「た、確かに言ったけど、なんかかなり話が湾曲していると思うのは私の気のせい…?」

「でも、一つわかったことは…!」

「冗談! そんな一方的な支配で恋を正受させようと考えているなんて、あなたはまだまだ子供のようなね!」

「……………ダメ、ですか？」

コテン、と首を可愛げにかしげるトレディ。

普通に可愛いのに、どうしても場がアンバランスね。

「ほら！ レンもなんか言ってるやんなさい!？」

「う、うん！ ラン姉さん！ えっと…トレディ、それはもつとお互いの事をよく知って
からってというのは「あんたはあんたで何真面目に答えてんのよ!？」…うう…」

なんか目眩と頭痛がしてきた。

あちらで真面目に戦っているギンガさんとはまた違った空気だ。

でも、それでトレディが目を鋭くさせて、

「……………そうですか。では、力づくにでも…!？」

トレディがそう言うのと右手に装着されているなにかの武装を構えた。

「レン！ 来るわよ!？」

「う、うん!？」

私はバルムンクを構える。

レンもアウルヴァンディルを両手に展開していつでも防御できるように構えている。

「……………「クラツシャーバイト」、セット!？」

そう宣言した。

するとその武装が形を変えていき、蛇の顔みたいになって目の部分が光り口を開き出す。

「……………IIS、ウィップマニユピレート」

テンプレートが輝き、クラッシュャーバイトと呼ばれた武装から噴射口のようなものが展開しだした。

それをトレディは腕を何度も振る。

そして何度目かになる振り回しで私たちの方に向かって腕を向けてきた。

すると、トレディの腕から蛇の顔が射出されてきた。

「なにあれ!？」

「射出武器! ラン姉さん、下がって!」

《プロテクション・パワード》

レンが私の前に出てプロテクションを展開した。

そして高速で射出されてきた蛇の顔と衝突。

ガギギギツ! と衝突による摩擦音が響き渡る。

「くっ、ツ!」

「れ、レン!」

「……………無駄です。私のクラッシュャーバイトに噛み砕けないものなど、ありはしない!」

パキンッ!

トレディの言葉と同時にプロテクションに罅が入り、あっという間に噛み砕かれてしまった。

さらにアウルヴァンデイルにまでその牙を叩きつける。

「そんな！　ぐっ!?!」

「わっ!?!」

私はちょうどレンの後ろにいたために衝撃を殺すことができなかつたレンが吹き飛ばされて、

「ガッ!?!」

そのまま私も巻き込まれて後ろの壁にまで一気に叩きつけられてしまった。

私が壁側だったためにレンの体重分も一気に衝撃が来たために一瞬、気絶しそうになつたけどなんとかこらえてレンを抱き起こす。

「レン、しっかりしなさい!」

「う、うん…。あ!」

「どうしたの!?!」

「あ、アウルが…!」

私もそう言われてアウルヴァンデイルに目を向けると盾が両方共あの蛇の牙に晒さ

れてしまったのか噛み砕かれていた。

特に交差した時に右腕が前だったのか、右腕の盾の方はもう機能停止寸前にまで陥っていた。

《ま、マスター…私、は、大丈夫、です…》

「アウル！ ダメだよ！ すぐに修理しなきゃ！」

《……》

そしてアウルヴァンデイルは沈黙した。

アウルヴァンデイルの沈黙は、イコールでレンの無力化という構図がすぐに成り立つてしまう。

なら、残されたのは後は私のみ。

「…バルムンク。アウルヴァンデイルとレンの仇を取るわよ」

《了解です、マスター。私の姉妹の仇を取りましょう！》

ここに私とバルムンクの意識は強固に重なった。

「レンは見てて…。私があの子を倒してくるから！」

「くっ、見ているだけなんて…！」

レンは悔しきから涙を流しながらアウルヴァンデイルを撫でていた。

「いいわね？ …いくわよ。バルムンク、モード2！」

《Drachen form》

カートリッジをリロードしてスリムな剣が一気に大剣へと変化する。

「……………今度はランさん一人ですか。お相手します」

律儀に待つていてくれたのかトレディはまた手からクラッシュャーバイトを射出させて空に浮かせていた。

「行くわよ！ ブースト！」

峰部分の噴射口から火を吹かして私はトレディへと突撃する。

「……………噛み砕け、クラッシュャーバイト」

トレディも蛇を放ってきて、バルムンクと蛇が衝突する。

そして互いに拮抗してその場で立ち止まる。

「ツ、重い！ これはアウルヴァンディルが砕かれるわけだわ！ でも……！ バルムンク!!」

《さらに吹かします！》

噴射口からさらに魔力の火が上がり、私は少しずつだけ押し始めた。

「……………やりませぬ。ですが、そんなに力んで大丈夫ですか……？」

「なにを……………」

なにを言おうとしているの、と発言しようとしたができなかった。

なぜなら急にクラッシュャーバイトの勢いがなくなって、思わず私はバルムンクを前のめりに叩きつけてしまったのだ。

何が起きたのか分からずに、次の瞬間には私の体にクラッシュャーバイトが絡みついできていた。

そして思いっきり締め付けられる。

「ああっ!?!」

「ラン姉さん!」

思わず悲鳴を上げる私。

「……………私のIS、『ウィップマニキュプレート』はただクラッシュャーバイトを射出するだけが能ではありません。」

……………伸縮自在に、自由自在に鞭の動きや牙をコントロールすることができるのです。もちろん、威力もですがね……」

丁寧に落ち着いた表情で説明してくれるトレディ。

「ご丁寧に、説明ありがとね……でも、すぐにこんなもの振りほどいて……」

「……………そんな暇は与えません。……………私のもう一つのIS、発動します」

するとテンプレートが輝いて蛇の顔が私の眼前にまでやってきて、

「……………IS、『マインドハウリング』……」

蛇の目が怪しく輝いた瞬間、一気に私の視界が暗くなっていき意識がなくなってきた。

意識が途切れる寸前に、

「……………先に貴女を私のものにしますね。ランさん、お休みなさい…」

「うっ…」

そして完全に意識が途切れてしまった。

第四百十八話 『公開意見陳述会（6） レンの心の傷、癒しなす乙女』

Side シホ・E・S・高町

「ラン、レン、ギンガ…すぐに向かうからそれまで耐えて…!」

反応が帰ってこないが、それでも思念通話で語りかけを続けながら、私達は狭い通路を進んでいく。

敏捷が高いアルトリアとネロ、そしてスバルの三人が先行して進み、唯一移動手段に乏しいティアナを私が抱えて空を飛空する。

その時だった。

「ツ！ 奏者よ、この近くのエリアにサーヴァント…らしき者の気配がするぞ！ 気を引き締めよ！」

「らしき、って…やっぱり…?」

「うむ。余にもこの気配がサーヴァントなのか、それとも人間なのか、検討がつかない

ぞ。ああ、なにやらむずかゆくてイライラしてもどかしいぞ！」

《エンペラー、少し落ち着こうよー?》

「…う、うむ。すまぬ、アエス。余の理解できぬ事態について取り乱してしまった…許せ」
ネロが唸っているのをアエスがマイペースになだめている。

そして、私達の足も警戒のために止まってしまった。

「…アルトリアは、わかる?」

「いえ、私はサーヴァントから融合騎に変化した際の影響で他のサーヴァントの気配が少しは分かるのですが、ですがよく感じられなくなってしまったのです。

役に立てずに申し訳ありません、シホ…」

「いえ、気にしないで、アルトリア。…分かったわ。全員、全周囲警戒! 円陣を組むの

よー!」

「了解いたしました!」

「うむ。承知したぞ、奏者よ!」

「了解です!」

「ツ! わ、わかりました!」

アルトリアとネロからは強気な返事。

ティアナもちゃんと返してきてくれたが、遅れて返事をするスバルはギンガ達が心配

なのだろう、少し焦り気味に了解してきた。

焦る気持ちは私も当然ある。

でも、だからこそ余計に取り乱さずに落ち着いて行動しなきゃいけない。

そうしないともしも予測もできない事態に遭遇した時にすぐに対処ができずに後手に回らざるえないからだ。

その事をスバルに言葉で丁寧に指導してあげると、スバルは分かっただらしく呼吸を整えて落ち着きを取り戻した。

「よし！ それでこそよ、スバル！」

「はい！」

そして私もアンリミテッド・エアを双剣モード——ツヴァイリングフォーム——を展開していつ敵がやって来てもいいように腰を落として構える。

…そして急に辺り一体が静かになり、代わりに緊張感が立ち込め出して、誰が鳴らしたか唾を飲み込む音が私の耳に入ってきたと同時に、

「来るぞ！ アエス、ゆくぞつ！！」

ネロの雄叫びとともに天井が突如として崩落した。

「おんどりゃあー！！」

崩落して出来た天井の穴から何者かが飛び出してきた。

荒い音色を出しているが声からして女性なのは確かである。

姿はランサーの報告と同じ出で立ちで顔まで覆い隠すフードを着用していた。

振り上げている手には長物が握られていた。

その得物とは…。

「…あれは、方天戟？」

私が解析を即座にかけている間にもその方天戟の刃は先頭でアエスを構えているネロへと迫る。

そして方天戟とアエスが衝突する。

ガアンツ！と激しい音が響き渡り、

「ぬっ！」

ネロの少しくぐもった声が洩れる。

「オツ？ 受け止めたか」

「少し重いが、余はまだまだ余裕だぞ！」

「なら、どんどん行かせてもらおうぜ！」

それからフードの女性は身長以上はある方天戟を難なく振り回し、斬りつけ、刺突、薙ぎ、払いと変幻自在に攻撃を変えまくってネロを追い込む。

「ぐっ！ なかなかやりおる！」

「ネロ！ 援護します！」

アルトリアがすぐにネロ一人では分が悪いと踏んだのか横から風王結界インビジブル・エアを振り下ろす。

だが、フードの女性はニヤリと八重歯を覗かせて、
「一人だろうと二人だろうとオレの相手じゃねーよ！ おらあー!!」

方天戟を横に構えて盛大に薙ぎ払いを繰り返した。

その薙ぎ払いはすぐに衝撃波となって襲いかかってくる。

それに晒されたネロとアルトリアは、

「くっ！ やはり、この女性はサーヴァントか!?!」

「どうにもアエスでは荷が重いかもしれんなー!」

《そ、そんな〜!?!》

なんとか剣を盾にして持ちこたえていた。

そして攻撃が一時止んだ瞬間、アルトリアとネロは見計らっていたかのように同時に私達の方へと振り向いて、

「シホ、スバル、ティアナ！ 私とネロがこの場は食い止めておきます!」

「後は余達に任せてラン達を助けにいくのだ!」

アルトリアとネロがそう言ってきた。

「あ、アルトリアさん！」

「ネロさん……！」

スバルとティアアナが同時に二人の名前を叫んで心配の表情をする。でも私は、

「……行くわよ、二人とも」

即座に二人を信じてこの場を任せる決断をした。

ただスバルとティアアナはすぐに納得できなかつたのか私の方に顔を向ける。

「……あ」

しかし、ティアアナから洩れた声に今、私がどんな顔をしているのか理解してしまった。きっと今の私はかなり苦悶の表情をしているのだろう、そして二人は無言になった。

「……行くわー！」

「はい……」

二人は力なく返事をしてきた。

そして私は再びティアアナを抱えて、スバルとともに進みを開始する。

わざと見逃してくれているのか知らないけど、こちらにはフードの女性は一切攻撃を
してこなかつた。

アルトリア、ネロ……私達が戻るまで無事でいてね！

そう心の中で語りかけた。

二人も私の想いが伝わったのか、二人とも笑みを浮かべてコクリと頷きをして送り出してくれた。

二人の想いに感謝しながらも、

「急ぐわよ！」

「はい！」

狭い通路を駆け抜けて行った。



Side レン・ブルツ克蘭ズ

「あ、ああ……………」

目の前でラン姉さんがトレデイの手によって倒されてしまった…。

その光景がどうしてもあの時の…僕とラン姉さんの村を崩壊させた時の男の姿とかぶってしまう。

まだ小さい頃に体験した恐怖、野良の魔術師の手によって故郷が壊滅させられてしま

い、お父さんとお母さんも殺されてしまった…。

他にもたくさんの知り合いが殺されて行く様をこの目で見た。

でも、僕はもちろん、ラン姉さんもなにもできずに無力感を味わい悔し涙を流したあの悲しい記憶。

それからシホさん達と出会って保護責任者になつてもらい、一緒に住むようになってから少しずつだけ心の傷は次第に癒えていった。

そしてあの悲劇な事件のような事をどうにかできる力…魔術とそれを扱うための勇気と知識を覚えてもらった。

機動六課では仲間も増えて、力も付けてきて、心も体も強くなって成長してきている。そう、思っていた、はずなのに…。

勘違いしていたんだ。

いくら力をつけても、心を覆っていたメツキが、僕が心の底から強くなろうと願わなければ、もろくなつてすぐに剥がれて壊れてしまう定めなんだ。

こんな些細な事で僕の心の傷は再度開いて広がってしまい、弱気で泣き虫な姿の頃の僕に逆戻りしてしまった。

心の奥底から恐怖が芽生えてくる。

ラン姉さんを助けなきゃいけないのに、僕は…！

体が震えて、動けない！

そこに、

「チンク姉、トレディ姉！ 援護しに来たぜ！」

「来たっスよ！」

そんな……！

新たに援軍が二人も増えるなんて！

どうにか、どうにかしないと……！

そう思つて体を動かそうと思うのに、もう一人の自分が『諦めろ』と耳元で囁く。

「………さあ、レンさん。あなたも私のもとに……」

「こ、来ないで……！」

トレディがそう声をかけてくるが、僕は恐怖から地面に手をつきながらも後ずさるしかできない。

「………なんだ、こいつ？ 戦意が喪失してるぞ？」

「かつここの獲物っスね」

「………仕方ありません。ランさんがやられてしまい、頼りの相棒も機能停止寸前……これは当然の結果です。」

………二人とも、私はランさんを捕縛していなければなりません。お願いします」

「わかったぜ！」

「さっきの奴らに比べればちよろい仕事っス」

氣絶させられているラン姉さんを武器の鞭で吊るしているトレデイの代わりに、新たに現れた二人がジリジリと僕に迫ってくる。

なんて、無力なんだ、僕は…。

無力感と絶望に苛まれている僕は、このままラン姉さんと同じ末路を辿るんだ…。

でも、その時、

「諦めちゃダメよ！ レン君！」

ッ！ この声は、ギンガさん！

俯かせていた顔を上げると、あの眼帯の女の子の攻防を無理やり切り抜けてきたのだろう、傷だらけのギンガさんが僕の前に走りながらやってきた。

ザッ！とブリツツキヤリバーを滑らせて、その勢いのままに僕を抱える。

そしてその場を離脱しようとしているみたいだ。

でも…！

「ら、ラン姉さんが…！」

「…ごめんなさい、レン君。今はあなたを助けるだけが私の精一杯なの…！」

ギンガさんの悔しそうな声が聞こえてきた。

それで僕は反論の言葉は出なかった、出すことさえ許されなかった。

アウルヴァンデイルが砕かれ、心も折れてしまっている今の僕は文字通り足枷、役立たず…それ以外の何者でもないのだから…。

「逃がさんぞ！　IS、ランブルデトネイター！」

眼帯の少女が逃がすかと言わんばかりに迫ってきて、ナイフを数本放ってきた。

それで僕はなけなしの気力と魔力を振り絞ってアウルに集めて、

「ゴメン、アウル…！　プロテクション！」

《…プロ、テク、ション…》

いつもの滑らかな音声が嘘のようにアウルはノイズ混じりの言葉を発する。

そしてすぐに見て分かるほどにヒビだらけのプロテクションが展開されて、でもナイフは少し止まっただけで、すぐにパリンツ！と砕けてしまい、そのうちの一本がギンガさんの背中に刺さってしまった！

次の瞬間、ギンガさんの背中で爆発が起こった。

「ああつ!?　くつ、ウアアアアアーッ!!」

ギンガさんの心からの叫びとともにウイングロードを駆け抜けて行き、なんとか撤退することが出来たのか戦闘機人の追っ手はこない。

それでもギンガさんは僕を壁際に下ろした後、そこら一体を念入りに目を配り警戒し

ている。

僕はどうと、アウルに目を落とし、さらに後悔の念に駆られてしまっていた。

アウルは先ほどのプロテクションで限界をとうに超えてしまったのだろう、プスプスと煙を上げて完全に沈黙してしまっていた。

「…ゴメンね、アウル…ゴメンね…」

反応を返してくれない相棒に、僕は涙を流しながら、それでも言葉をかけ続けた。

そしてギンガさんが少しして戻ってきた。

「…ッ、レン君…大丈夫…？」

ギンガさんは苦悶の表情をしながらも僕の事を心配してくれた。

「…はい…大丈夫、です」

「それは本当…？」

真剣な表情をしてギンガさんが僕の目をまっすぐ見つめてくる。

その綺麗な瞳に、僕のボロボロの心の内のすべてを見透かされてしまうと恐怖してしまい、目をつい逸らして下に俯いてしまった。

情けない…。

いつもラン姉さんやシホさん、アルトリアさんにネロさん…他にもいろいろな人達に強くなろう、って言い聞かされてきて、僕自身も必ず強くなろうって努力してきたのに、

「…僕は、やっぱり弱虫なんです…」

「……………」

ついに思いの丈を言葉に出してしまった。

ギンガさんはただ無言。

僕は不謹慎にもギンガさんが無言でいる事に感謝してしまった。

「…親と故郷を無くしてから僕の心には虚無感がありました。

それを弱気な性格でさらに強固にして、でも同じ境遇のラン姉さんが一緒にいたら、僕はなんとか前向きに頑張つてこれた。

なのに、そのラン姉さんが捕まってしまうと、相棒のアウルも…やられてしまって、僕の心は、木っ端微塵に折れてしまいました…」

「……………」

思いの丈を表に出すたびに、さらに情けなさが粉となって僕の心に降り注ぐ。

でも言葉が続ける。

「…そして思うんです。僕は、ラン姉さん達のただの重荷なんだって…。いない方がいいんじゃないかって…」

「レン君…！」

パンッ！

ギンガさんに頬を思いつきり叩かれてしまった。

幻滅、されちやつたよね…。

でも、ギンガさんは叩いた後、僕の両頬に両手を添えてきて、

「情けなくなつていいじゃない？ 重荷になつたつて、いいじゃない？」

「えっ…？」

少し意味がわからなかつた。

でもギンガさんは言葉が続ける。

「重荷は一人で持てなかつたのなら、みんなで持つて支えればいいのよ。レン君の家族であるランも、シホさんも、アルトリアさん、ネロさんも……きつと嫌な顔をせずレン君の重荷と一緒に背負つてくれるわ」

「で、でもこんなもの背負つてくれたつて……！」

「…そう、後ろ向きにならないの。支え合う、それは家族として当然のことよ。」

なら、レン君の重荷を背負つてもらおう対価に、レン君がランやシホさんの重荷を背負えるようになるうとは思わない…？」

シホさん達の重荷を、僕が背負う…？」

「それができたら、どれだけ嬉しいだろう…！」

「それをただの夢で終わらせないのよ。ちゃんとした形にしなきゃ…！」

「形に……」

「レン君なら、きつとできるわ。あなたは確かに弱虫だけど、それでもいいじゃない。弱虫は弱虫なりに出来ることがきつと見つかるわ。」

そして、もしそれでもまだ道に迷うことがあるのなら……」
ギユツ……。

「あ……」

「私が一緒に探してあげる……」

ギンガさんが僕を優しく抱きしめてくれながらそう言ってくれる。

それで僕はまた涙を流す。

でも、これは悲しい涙じゃない。

嬉し涙だ。

ギンガさんの優しさに僕の心は振るい出されるような想いに駆られる。

そしてなぜか胸が『ドキンッ!』と高鳴った気がした。

この気持ちがあるのか、まだ分からないけど、もつと浸っていたい気分になせられた。
た。

「……僕は、まだ、頑張れるでしょうか?」

「レン君が諦めない限りね」

「はい…。少し、勇気が湧いてきました」

「そう。よ、かったわ…」

バタンツ…。

「ギンガさん!?!」

ギンガさんは突如として倒れてしまった。荒い息遣いをしていて苦しそうだ。

見れば背中から血を流していて少し血だまりができていた!

どうして今まで気づかなかったんだ!?

それでどうにかしようと思った矢先に、

「…見つけたっスよ?」

「つたく。探すのに苦労したぜ!」

先ほどの戦闘機人二人が現れた。

さっきまでの僕だったら諦めていたかもしれない…。

けど、もう弱音を吐きたくない! 諦めたくない! ギンガさんは僕が守るんだ!

そして立ち上がり、二人を睨む。

「…こいつ、さっきまでのガキか? まるで別人じゃねーか?」

「僕は、もう諦めないって決めたんだ! 戦う手段が無くても抵抗して見せる!」

「ほう…いい度胸じゃねえか! なら今度こそ完璧に心を折ってやるぜ!」

「あちやく…ノーヴェエの変なところが感化されちゃったつスね…」

あちらの二人がそれで構えてきたが、弱虫でもいい…最後まで強くあろう！

「——その思いを大切にしなさいね、レン…」

その時だった。

僕の背後からもつとも尊敬している人の声が聞こえてきたのは。

その人は、

「シホさん！」

「よく頑張ったわね、レン。…さて、私の家族達を痛めつけてくれたお礼をしなきゃね

？」

「ツッ!？」

シホさんは戦闘機人の二人に視線を向けて構えるのだった。

第四百四十九話

『公開意見陳述会（7）』

機動六課防衛

戦』

Side ティアナ・ランスター

通信が繋がらないギンガさんやランとレンの三人の所へと向かうあたし達。

あたしは自分で言うのも悲しいが移動手段はかなり乏しい。

フェイトさんやエリオの使うソニック・ムーブは適性の問題で使えない。

それでシホさんに習った前者のソニック・ムーブに似て非なる魔力を使用しない移動術である瞬動術を駆使すれば少しは移動もマシンになってくるが、所詮は付け焼き刃程度に過ぎず、行使してもそれほど移動力は稼げない。

よってスバル達みたいに素早く移動ができないのだ。

スバルはマツハキャリバー。

エリオはストラーダによる加速。

キャラは巨大化したフリードの背中に騎乗による移動。

ランはバルムンクのブースターによる吶喊。

唯一言えばレンも移動力はあたしとどっこいどっこいだけど、アウルヴァンディルの切り札を使えば、あるいは、ね…。

まあ、そんな訳で情けない事だけど今はシホさんに抱えられながらの移動と相成ってしまっている。

でもそれを引きずらないようにしないとね。

シホさんに教えてもらった言葉…。

『常にイメージするのは最強の自分』。

だからあたしはあたしの目指す頂きを目指して頑張ればいいのよ。

「…ティアナ？ どうしたの？ 急に体の力みが抜けたわよ？」

「…いえ、自分事ですので気にせず早く向かいましょう！」

「そう…？ わかったわ」

抱えられていたためにシホさんにすぐにこんな事態だけど感ずかれましたけど、どうにか誤魔化せた。

でも…うん、やっぱりこの言葉はあたしの心を落ち着かせてくれるみたい。

ご教授ありがとうございます、シホさん。

言葉には出さないけど、そう感謝するあたしだった。

そしてなぜかランの位置がどんどん遠ざかっていくのを感じながらも現場に到着した。

そこでは気絶しているらしいギンガさんの姿、そして両方の盾が砕かれているけど先ほどの戦闘機人二名と対峙しているレンの姿があった。

「ギン姉!」

スバルがすぐにギンガさんのそばに寄り添って抱き起こした。

「…大丈夫です、スバルさん。致命傷ではないので応急措置すれば大丈夫です!」

レンがなぜか何時もよりも頼もしく感じたのはあたしだけじゃないはず。

先ほどの叫びによる宣言がいい証拠だ。

それでシホさんがレンの頭を一度撫でた後、

「…さて、私の家族達を痛めつけてくれたお礼をしなきゃね?———トレス・オン 投影開始」

シホさんは転送魔術で呼び出したのだろう、十字の刀身が細い剣を計六本両手の指の隙間に挟んで構えていた。

あたしはそれをアワアワしているスバルと手当の知識に乏しいレンの二人の代わりにギンガさんの応急処置をしながらもシホさんの邪魔をしないように辺り一体を警戒

した。

それからシホさんの一方的な戦いが繰り広げられていた。

シホさんの投擲する剣は一切の妥協を許さず、

「嘘っス!？」

あのウエンデイという女の盾銃を安安と貫通させていた。

さらに、

「ブローレン・ファンタズム
壊れた幻想!？」

そのワードを発した瞬間、貫通した剣を中心に爆発が起こって盾銃は砕け散った。

「ああっ!? あたしのライディングボードが……!？」

「こいつ! チンク姉と同じ能力を!？」

「容赦はしないわよ? あなた達二人は私が捕縛するわ!？」

また手に赤い布を呼び出してシホさんが動きだそうとした時、あたしは何かの悪寒を感じた。

次にはシホさんに向かって黒塗りの短剣が高速で放たれていた。

「シホさんっ!？」

それであたしはとっさに叫び声をあげる以外に行動ができなかった。

「ッ!？」

シホさんもすぐに気づいたらしく持つていた布をしならせて短剣を弾こうとしたのはあたしでもわかった。

でも、次には衝撃を受け止められなかったのかシホさんの右腕があらぬ方に曲がっていた。

「あぐっ!？」

「「シホさん!」」

シホさんの悲鳴が上がる。

あたしとスバルとレンが叫ぶ。

でもあたしはすぐに状況判断のために短剣が飛んできた方を見る。

…そこには、不気味な骸骨の仮面が宙に浮いていた。しかも、複数も…!

その異様な光景にあたしは鳥肌が立って悲鳴を上げそうになるのをなんとかとつさに手で口を抑えて踏みとどまり、混乱しそうな頭を落ち着かせようと試みた。

でも、恐怖心だけは拭いきれずにただ気持ちが萎縮してしまい体が固まってしまった。

スバルとレンも言葉には出さないが恐怖しているらしく少し体を震わせていた。

ただ一人シホさんだけは左腕だけで布を持ち、苦悶の表情を浮かべながら、

「サーヴァントか!」

そう叫んだ。

返答は帰って来なかったが代わりと言わんばかりに、

『ククク…』

『クスクスクス…』

『アハハハ…』

『ケケケケ…』

男の声、女の声、子供の声、老人の声…様々な不気味な笑いがあちらこちらから聞こえてきた。

その笑い声にさらに恐怖心を煽られる。

ただその中で一言だけおそらく戦闘機人の二人に向けて言ったのであろう、『ヌシ等二人ハ撤退シロ…。ソレマデ時間ヲ稼グ…』という言葉が聞こえた。

それで戦闘機人の二人はしばらく迷ったが、少しして撤退して行った。

くつ、また逃がすなんて…！

「邪魔しないで…！
ソードパレルフルオープン 全投影連続層写！」

あたし達の周りの全方位に剣が現れて即座に射出されて次いで爆発が発生する。

しかし仕留めきれられなかったのか、あの不気味な仮面の気配はすべて消えさつていった。

そして不気味な笑い声だけがあたしの耳に唯一残り今だに木霊しているのだった…。
「もう、なんだっていうのよ…」

「だよね、ティア…」

「それより、シホさんとギンガさんの手当てを…！」
とりあえず、今できる最善をしなくちゃね。



「おらっっ！」

「ふんっ！」

暗い夜空の中、ヴィータとゼストの二人は己の信じる武器を手に火花を散らせながらも何度も打ち合いを続けている。

その戦いは苛烈を極めるもので介入する事はなかなかできるものではないだろう。それほどの戦いを二人は繰り広げていた。

…しかし、その二人の戦いはある者がかなりの離れた距離から見ている事はヴィータ・リインはもちろん、ゼスト・アギトすらも気づいていなかった。

その者はその手に大型の弓を持ち、二人に向けて構えた。

キリキリツツ！と矢を引き絞る音が鳴り今か今かと放たれる瞬間を待ちわびている。準備はもう完了している。

狙いはヴィータとゼストの二人に向けられ、さらに詳しく言えばヴィータに狙いを絞られていた。

しかし、まだ放つ瞬間ではない。

その者は直立不動でいつ放つてもいいように構えたまま動きを見せない。その牙なる魔弾は放たれたらどういふ結果になるかは想像に難しくない。

その弓兵が誰なのかは、まだわからない…。



Side グリフィス・ロウラン

「ルキノ！ 索敵を急いでください！」

「はい！ グリフィスさん！」

ルキノに敵の索敵をすぐにやってもらい、戦いに備えてもう外で待機している士郎さん達に報告する事が僕たちの仕事だ。

「それとですが、非戦闘員は全員退避は完了していますか？」

「そこらは事前に完了しています。特にヴィヴィオが狙われるだろう、となのはさん達全員が言っていましたからアインズさんがツルギ君と一緒に守っています」

「そうですか…報告ありがとうございます。頼もしいですね、ルキノは」

「いえ…」

そこでルキノが頬を赤く染めていて照れていた。

…？ なぜ照れるのでしょうか？

ただ褒めただけなのですが。

こんな時に一緒に退避してしまったシャーリーがいればおそらく何か言ってくるでしょうが…。

「索敵、出ました！ モニターに表示します！」

そんな事を頭の片隅で考えていた矢先にルキノの索敵が終了して、機動六課に接近中の敵がモニターに表示された。

「なんだ、これは…」

モニターを見て思わず絶句する。

それは今現在地上本部を襲撃しているガジェットや化け物の数とは比較にならないくらい多いのだ。

「嘘、ですよね……？」

ルキノも青い顔をして僕の方に向いてくる。

しかしこれが現実と認めなければいけない。

「……土郎さん。聞こえますか……？」

『どうした、グリフィス？』

「はい。敵の数を索敵したのですが、その……」

ついでに淀んでしまう。

しかし土郎さんはすぐに察したのか、

『敵の本隊が来ているのだな……？』

「はい。ですが、その数があまりにも……」

『わかった。後は任せろ。なんとかする。』

それと、いつも通りに落ち着いて取り組むといい。

そうすれば私達はそれに必ず応える』

「はい。頑張ってください。異常があったらすぐに報告します」

『よろしく頼む』

それで土郎さんとの通信を切る。

「ふふ……さすが土郎さんですね」

「そうだな、ルキノ。というわけだ。僕達は僕達ができることを専念しよう。頼むよ、ルキノ？」

「はい。任せてください！」

それから僕とルキノはまたモニターを凝視するのだった。



Side 八神士郎

…さて、シホの読み通り敵が攻めてきたようだな。

「キヤスター、準備はできているか…？」

「はい、ご主人様。わたくしめにお任せくださいまし！ 結界、起動します！」

キヤスターの言葉とともに機動六課周辺にキヤスターが今の今までコツコツと地道に作成してきた結界が起動して膜が展開される。

「ご主人様！ わたくしは結界維持といざという時の魔砲門を展開しますので、結界を抜けてきた連中をお願いします！」

「わかった！」

それで私は今この場にいる一同に指示を出す。

「志貴とアルクエイド、ザフィーラにライダーは前衛と防衛を頼むぞ」

「わかった」

志貴はそれでナナヤを構える。

「了解よー」

アルクエイドは爪を硬化化させて腕を何度も振っていざいかと結界の外に走っていく。

「任されました」

ライダーは釘剣を手に持ち志貴と一緒に敵を待っているようだ。

「任された」

ザフィーラは久しぶりに狼の姿から人型へと変化し拳を握る。

「そしてシヤマルとすずか嬢は補助と傷の回復を頼む」

「わかりました。クラールヴィント、頼むわね？」

《Ja.》

「任されました、士郎さん！」

シヤマルとすずか嬢が元気良く答える。

「そして私とヴァイスはアウトレンジからの狙撃で前衛の四人を援護だ」

「うつつす！ 士郎の旦那！ 久しぶりの出番だ。気合い入れて行くぞ。ストームレイダー！」

《お任せください》

ヴァイスはこの時のためにストームレイダーをへりから取り外して持ってきたのだ。今までの訓練の成果を出すいい機会だと思う。

「では、各自頼むぞ！」

『はい（おう）！』

私もブレイドテミス・ボウフォルムを手に構え、投影した矢をつがえて鷹の目で暗い空を駆けてくるガジェットと骸骨怪鳥を睨む。



それから機動六課防衛戦が開始された。

「この機動六課には、何人たりと侵入はさせせん！ 縛れ、鋼の軛！ でやあああああ

あーっ！！」

ザファイラの鋼の軛が次々と海面から突き出してきたガジェットを連続で貫いていく。

しかしそれでも全部は仕留めきれない。
だが、そのための残りの三人の仕事だ。

「そーれ！」

「切り裂く！」

「散りなさい！」

サーヴァントであるアルクエイド、志貴、ライダーの三人が取りこぼしを爪で砕き、ナイフで切り裂き、釘で貫いていく。

一人でも戦闘機一機分の攻撃力を持つ者が三人もいるのだからガジェットにとつてはたまったものではないだろう。

しかし、骸骨怪鳥は何度でも復活してくる。

「面妖な……。これも魔術師の仕業か？」

ザフィーラが思わず毒づく。

「ふっ！」

フルンティンダ

士郎が赤原獵犬を放ち、立て続けに骸骨怪鳥を貫いては追い続ける。

そして解析を使いなぜ何度も再生するのかを判明したのか念話を使い、

《みんな！ 骸骨怪鳥は一回潰した後には中心の核を潰さねば倒せん！ だから核の状態になった奴を私とヴァイスが優先的に射抜こう！》

それに全員は返事を返す。

「とういわけだ。腕の見せ所だぞ、ヴァイス！」

「了解つす！ 狙い撃つぜ！」

ヴァイスがスコープ越しに骸骨怪鳥の核を狙い次々と撃ち抜いていく。

その腕前はすであの誤射ミス事件以上に上がっていた。

これもシホや士郎のスパルタ訓練の成果だろう。

骸骨怪鳥は単体では不利と悟ったのか戦列を組んで飛行してくる。

しかし、一直線に並んだところを士郎が逃すわけがない。

「貫いてやるぞ！——I 我 a が m 骨 t h e 子 b o n e は o f 総 m y れ s w o r d 狂 :

偽・螺旋剣!!」

放たれたら偽・螺旋剣は直線上に並ぶ骸骨怪鳥やガジェットを音速で貫いていく。

掠っただけでも余波で破壊されるのだ。

宝具の威力を再確認できるところだろう。

そしてガジェットが集まっている中心の位置まで飛んで行った螺旋剣に最後の役目を果たさせるべく士郎はワードを紡ぐ。

「壊れた幻想！」

螺旋剣の内包に凝縮された幻想が破裂して爆発を起こし、そこを中心にごとごとくを

巻き込んで撃墜させる。

「久しぶりの全力戦闘だ。手加減はしないぞ！」

士郎はそう気合を入れて次弾の矢をつがえる。

ヴァイスもその士郎に感化されたのか、負けじと魔力弾を放ち続ける。

「魔力節約で貫通するのに特化した俺のライフル捌き、とくと味わえ！」

それを見ていたシャルとすずかはというと、

「なんか、改めて皆さんの凄さを実感しました…」

シャルがそう言葉をこぼし、

「そうですね。私達の支援が今のところ意味を成していませんから…」

すずかも同感らしくシャルに合いの手を返す。

「でも、ただじつとしていられるわけには行きません！」

それでシャルは疲れたらすぐに一回退避してきてね、と全員に念話を送るのだった。

しばらく迎撃が続いていたが、次第に学習したのかガジェットは突っ込んでくるだけじゃなく一箇所に集まって砲撃を開始した。

しかしそれはキヤスターの強固な結界の前には意味をなさず、弾かれて終わってしまっていた。

「みこーん！ 無駄無駄無駄！ わたくしの結界を壊せると思わないでくださいませね？」

そして、「お返しです！」と宣言し、

「全魔砲門術式展開！」

かつて月村邸にてセイバー・オルタナティブに使用された術。

だがあの時はあまりにもセイバー・オルタナティブの対魔力が高かったために無駄に終わってしまった。

だが、今回はただの機械であるガジェットと一般の魔術師にも劣る対魔力しか持たない骸骨怪鳥である。

結果はすぐにわかった。

魔砲門がいくつも展開されそこからあらゆる属性の魔力の塊の放出が放たれ、次々と被弾していき、燃えるもの、凍りつくもの、切り裂かれるもの：結果は様々だがガジェットのほとんどが墜落し、骸骨怪鳥も核だけとなりすぐ様士郎とヴァイスに撃ち抜かれていた。

戦果は圧倒的に士郎達に向いていた。

…その一方的な蹂躪劇をかなり離れた距離でモニター越しに見ていたナンバーズのオットーとデイード、そしてルーテシアはというと、

「機動六課の戦力を甘く見ていたね」

「そうですね…」

「……………」

オットーが無表情でそう呟き、デイードがそれに返す。

ルーテシアは無言で見ているだけだった。

「ドクターには不利だと思っただけ撤退してもいいと言われているけど…」

「ええ。ただなにもできないのも悔しいですね」

「…でも、あの戦力に挑むのは無謀…」

ルーテシアが口を開き『無謀だ』と下す。

それでそろそろ撤退も目処に考えようとしていた時に、

「……………」

「「!?!」」

突如として三人の前にフードを着た人物が転移してきた。

それに三人は驚き、一番びっくりしたルーテシアがガリユを召喚して前に出す。

しかし、フードの人物は手を前に出して、

「…手助けしてやる」

そう、言ってきた。

それで三人は怪訝な表情を浮かべるが、フードの人物が「魔術師の一派のものだ…」と
言う。三人はそれで納得したのであった。

そしてフードの人物はその手に二メートルはあるであろう刀を握った。

「(なんだ…? ああ剣から強大な力を感じる…)」

オットーは直感的にそう感じていた。

それはデイドとルーテシア、ガリユも同様だったらしく眉を少し歪めている。

そしてバチバチツ！と刀が放電しだし、フードの人物は刀を天に掲げた。

キャスターはふと異様な気配を感じていた。

「(この気配は…^{アムテラス}神体としてのわたくしが知っているような気配…?)」

妙な感覚に陥りながらもキャスターは士郎達に指示する。

「なにか巨大なものが放たれる予感がします！ 警戒を！」

キャスターがそう言ったが時遅く、一瞬にして夜空が閃光に照らされる。

次いで襲ってくる巨大な斬撃と雷にも匹敵する感電性。

「アルクエイド!？」

かろうじて志貴の叫びが聞こえてきたが、すぐに志貴もあまりの体に伝わる電撃に地面に墜落した。

ザファイラも、ライダーも次々と感電し墜落していく光景を見た後衛組は、

「キャスター! 結界維持を!!」

「はいです!」

士郎の叫びにも似た命令に結界に力を注ごうとしたキャスターだったが、

ザンツ!

その斬撃はいとも簡単に結界を切り裂いた。

そして威力を落とさずに機動六課隊舎に一筋の線を刻む。

当然、地面にも雷撃が即座に伝わり士郎達も悲鳴をあげて感電し一人、また一人と倒れるのだった…。

第百五十話

『公開意見陳述会(8) 宴の終わり』

陳述会会場でスカリエツテイ達一味について説明をしていたはやてだったが、

「えっ!？」

「…はやて? どうしたの?」

突如として昔にリインフォース・アインスが消えかけた時に感じた感覚を再び味わっていた。

カリムがはやてに話しかけるが、はやては聞いていなかったようひたすら不安に駆られる。

さらには右手の甲にある令呪にも痛みが走った。

それはつまりアルクエイドにも危機がせまっている令呪の警告の証。

それに思い至ったはやては痛みが走る右手を左手で握りしめながら、

「(…シヤマル、ザフィーラ…それにアルクエイドに士郎、志貴、アインス、ツルギ君達になにかあったんか!? 機動六課はどうなった!?)」

はやての心に不安の色が浮かぶ。

令呪がまだ存在している以上はアルクエイドは無事なのは確かだろうが、他の人達はどうなったかまではわからない。

ただひたすらはやてはみんなの無事を願うだけだった。



Side 八神リインフォース・アインス

：一体、なにが起こったんだ？

機動六課の避難所にツルギやヴィヴィオ達非戦闘員達と一緒に避難していたところでは覚えている。

だが、強烈な痺れを感じ気を失い、次に気がついた時には私は地面に横たわっていた。なぜかわからないが体がスタンしているようでまともに動かせない。

照明その他もすべてショートして落ちてしまっていて暗く、代わりに火の手が上がってその灯りだけが周りの状況を確認できるという感じだ。

それでツルギやヴィヴィオの安否を確認するためになんとか首を動かした。

そして見てしまった。

「そ、んな…」

そこにはツルギだけではなくほとんどの者が私と同じような惨状になっていた。皆一様に体が動かせないのかうめき声だけが聞こえてくるという状況。

「ツルギ、ツルギ…起きてくれ…」

私は体が動かせなくて近寄れない代わりに声で気絶しているツルギに話しかける。

「…マ、マ…」

かろうじてツルギの声が聞こえてきた。

よかった。無事だったのだな。

「よかった、ツルギ…」

「…ママ。体が、ビリビリして痛いよ…」

「すまない、ツルギ…。私も体が痺れて動かすことができないんだ。すまない…」
あまりの情けなさから涙を流しそうになる。

だが、今流す時ではない。

この状況をどう乗り切るか、打開するかを考えなければならぬ。

私達の考え通りなら…、

それで私はツルギの隣に目を向ける。

そこにはツルギ同様に気絶しているヴィヴィオの姿がある。

奴らの狙いはヴィヴィオだというのはあきらかだ。

だからなんとしても守らないといけない。

でも、考えたくはないが私達でこんな状況なのだから外で戦っているはずの士郎達もおそらく…。

「パパ達は、大丈夫かな…？」

私の顔に書いてあったのだろう、ツルギが私の考えていたことを言い当ててきた。

子供にこんな心配をかけさせるなんて私もまだまだだな。

「大丈夫だ、ツルギ。士郎。パパ達はきつと大丈夫だ…」

「うん…。強いパパ達なら大丈夫だよね…」

心配がるツルギを不安がらせないようにそう言葉を紡ぐ。

しばらくそう励ましていたが、

——ジャリッ。

人の足音が聞こえてきた。

みんなが動けない状況でその足音はよく耳に聞こえてきた。

「誰だ…？ 士郎達が救援に来てくれたのか…？」

そう希望的に考えを巡らしたのだがそれはすぐに打ち砕かれる。

歩いてきたのは紫色の髪 of 少女に黒い鎧のような体をしている人型の召喚獣の二人の姿があった。

その無言の表情からはなにも読み取れない。

ただ目線の先にはヴィヴィオが映されているのは確かだった。

「…ガリユ、多分この女の子」

やはり…！

ヴィヴィオが狙いなのはわかった。

ならば今意識がある私が守らないといけない。

頼むツ！ 動いてくれ！ 少しでもいいから！

そう願うがやはり痺れてしまい指先一本動かすことができない！

ここまで、なのか…？

私が諦めかけたその時だった。

『ツ!?!』

急に空気が振動したような気がした。

そして膨大な魔力がどこからか溢れてきていた。

発生源はどこだ？ と、視線を動かして私は驚いた。

「……………」

先ほどまで私同様に立ち上がることをすらできないでいたツルギがヴィヴィオの前に二人を通さないように立ち塞がるように両手を広げて立っていた。

顔は伏せられていてブツブツとなにかを呟いている。

「…？　なに、この子…？」

紫色の髪の少女もツルギに対して怪訝な視線を向けている。

「……………したんだ…」

「ガリユ…」

少女が召喚獣に指示を出してツルギを攻撃しようとしている！

このままでは…！

だけどツルギは、

「……………約束したんだ…」

そう言葉を発する。

そして同時に体に魔力が巡っていく。

胸元からなにか青白い光がもれてきて、

「…ヴィヴィオちゃんは、僕が守るって、約束…」

ツルギに異変が起き始める。

朱銀色の髪がどんどんと黄色に染まっていき、赤黒い魔力が体から噴き出してきて、

「約束、したんだーッ!!」

ツルギの咆哮とともにその赤黒い魔力が形を成して行って、次の瞬間には少女と召喚獣は壁ぎわにまで吹き飛ばされていた。

なにが、起きたんだ…？

「ああああああつ!!」

ツルギの叫びは続き、魔力が翼やブレードなど様々な形を形成して二人に襲いかかる。

「ッ…」

少女の悲痛な叫びが聞こえた気がしたが、ツルギの攻撃が止んだ後には強制転移でもしたのでらう、少女と召喚獣の二人の姿は消え去っていた。

「うっ…」

ツルギは敵が消えて安心したのかわからないが気絶してしまった。

黄色に染まった髪も元の朱銀色に戻っていき、赤黒い魔力も消えてしまった。

ツルギに一体何が起こったのか今はまだわからない。

しかし、ツルギの中でなにか変化があったのは確かな事実である。

またこのような事態になるかもしれないから士郎達や主はやてに相談をしておいた方がいいな。



Side フェイト・T・ハラオウン

機動六課と通信が完全に繋がらなくなってしまい、不安に思うが今は士郎さん達を信じるしかない。

だから今は私ができることをしよう。

それでエリオとキャロとは別行動してランサーの場所に向かって飛行している。

でも途中で空を飛行している戦闘機人の姿を発見した。

戦闘機人は私の近くに高速で近寄ってきて、

「探しましたよ。フェイトお嬢様」

「お嬢様…？ 一体何のことですか…？」

いきなりお嬢様と呼んできたために畏かと思いはるバルディッシュを構えて警戒する。

「ドクター…：ジェイル・スカリエツティが貴女をお待ちしています」

「スカリエツティ…！ なら、お前達は一体なにを企んでいるんだ！ スカリエツティの居場所を教えて！」

「ドクターと直接会いたいのならばすぐにご案内いたします。」

しかし、条件は貴女が我々に協力してくださいること、ですがね」
そう言つて戦闘機人は薄く笑う。

あまりにも露骨な挑発……!

でも、今は話を少しでも長く聞いて情報を得ないといけない。

だから、

「彼は……犯罪者だ! それも最悪の! そんな彼の言うことに従う義理なんで私にはない!」

「そんな悲しい事を言わないでください。ドクターはあなたやあの少年の生みの親でもあるんですよ?」

「確かにそうかもしれない……。けど、そんな事で私を従わせられると思わないことだ!」

それは完全な拒絶の言葉。

それに私の母はプレシアお母さん。

姉はアリシアだ。

リンディ母さんだっている。

だから……!

その思いを目に乘せて睨みを効かせた。

「…そうですね。なら、力づくでもあなたを捕らえます。IS、ライドインパルス！」
やっぱりこうなるんだね。予測はしていたけど戦闘は避けられそうにないか。

「行くよ。バルディッシュユ？」

《イエス、サー》

そして私と戦闘機人との戦いが始まった。



アサシン…李書文は戦闘機人、セツテと戦闘を繰り広げていた。

しかしそれはアサシンの圧倒的有利という展開で、

「くっ…！ ブーメランブレード！」

セツテがブーメランブレードをアサシンに目掛けて放つが、

「こんな幼稚な武器では僕は倒せんぞ？ ふんっ！」

迫ってくるブーメランブレードに対してアサシンは拳を突き出した。

うねりを効かせた殺人拳は飛んできたブーメランブレードをもの見事に叩き折った。

それにセツテは一瞬苦い顔をして、すぐに掌を構えて衝撃を放つ。

「そんなこけおどし！ 効かぬわ！」

しかし天然チートのアサシンは少しの足捌きだけで回避してしまった。

そして反撃とばかりにセツテに急接近し、

「アリスからは殺さずに捕らえろ、と命令されておるのでな。殺しはせん。しかし、逆に殺さなければよいのだろう…？」

それを間近で聞いたセツテは寒気を感じアサシンが飛べない空に退避しようとして動きだそうとして、

「…ああ、そうだ。もう主の両足は使えんぞ？」

「なっ！ ああっ!？」

飛ぶ前に足を碎かれセツテは地に落ちた。

「(い、いつの間に…?)」

セツテは動揺を隠せないで顔を歪める。

しかしそれもしようがない。

今回が初戦闘だったがために経験があまりにも足らなかつたこと。

二つ目は初の相手がアサシンだったことが敗北の要因だったからだろう。

武器のブーメランプレードも碎かれたために残り一本。

衝撃砲も回避されてしまう。

両足は砕かれ撤退も封じられてしまった。

もう手がほぼなく詰みの状況。

セツテが取る残された手段は…、

『…クアットロ。戦闘手段を封じられ帰投手段も消されました。

私はどうすればよいでしょうか？』

今も安全な位置で楽しんでいるクアットロに連絡することだ。

『ん〜…そうねえ？ セツテちゃん的にはもう戦えないのよね？』

『はい。敗北しました』

『そう。——それじゃ、怖い管理局に頭の中を覗かれてドクターの位置が知られるのはマズイから〜。』

残念だけど、セツテちゃんとはこれでお別れね？』

『は…？ クアットロ、なにを——…』

セツテが最後まで言い切る前に、

『えいつ☆』

間抜けな言い方だが、それでセツテの運命は終わってしまった。

セツテの視界は瞬く間に暗くなり、人形のようにガクツと崩れて前のめりに倒れこん

だ。

「…何事だ？」

突然のセツテの倒れようにアサシンは眉を上げて怪訝な表情を向ける。代わりに近くにいて戦いを見ていたアリサがセツテを抱き起こす。

「ちよつと、あんた大丈夫？」

「…アリサよ。その者は敵だぞ？ 少し不用心ではないか？」

「いいのよ。それよりさっきので少しおかしいと思ったのよ」

それでアリサは何度か呼びかけを続けた。

するとしばらくしてセツテは目を開く。

…しかし、それからがおかしかった。

視線を何度か振り、

「…あの、私は、誰でしようか？」

「…は？」

アリサとアサシンの気の抜けた声が上がると。

話は簡単であり、クアットロは最終手段の記憶抹消を簡単に使ってしまったのであった。



Side エリオ・モンディアル

フェイトさんと分かれて行動している僕とキャロとフリード。

まだ戦っている部隊の救援を頼まれているから僕達もフリードに跨って空を飛びながら見る。

ふと、見ると空で骸骨怪鳥と戦っているファイアット副隊長の姿があったので、

「キャロ。ファイアット副隊長を助けよう！」

「うん、エリオ君！ フリード、お願いね？」

「キュックー！」

それでファイアット副隊長に寄って、

「フリード！ ブラストフレア！」

「キュューー！」

フリードがブラストフレアを放つとファイアット副隊長が助かったと言わんばかりの表情で、

「助かりました。エリオにキャロにフリード」

「大丈夫ですか…?」

「なんとか持ち堪えていたんですが数が数でしたから…と！ 核も潰さないとですね！」

フィアット副隊長は実体化の槍を放ち骸骨怪鳥の核を潰していた。

「さて、やつと片付きましたからどこかの部隊の救援に向かいましょう」

「はい！」

それで三人で見える範囲で探索していると知っている人達が戦っていた。

それは、ブリューナク隊の人達だった。

「ロボ君！」

僕が叫ぶと骸骨怪鳥を倒したロボ君がこちらを振り向いてきた。

「その声、エリオか！」

振り向きざまにデバイスなのだろう、確かトンファー型だっけ？ それを残っている核を潰すのも忘れない手際は素直にすごいと思った。

「ロボ君達は大丈夫!?!」

「ああ、なんとか倒していつてるぜ！」

「他の人達は大丈夫ですか…?」

キャロが他の人達の安否を気に掛ける。

「ああ。キャロの心配は不要だ。全員無事だから。今は他の場所で戦っているぜ！」
「よかったです……」

それでキャロは安心そうに胸に手を置いた。

その時だった。

ものすごい地響きが轟く。

「なんだ!?! 骸骨人形が出てくる時の何倍もの地震だぞ!」

ロボ君がそう叫ぶけど、それはすぐに形を現した。

地響きが続きながらゆうに二十mはあるであろう岩石巨人が出現したのだった。

「で、でかい……! でも、あれだけの大物を召喚させるなんてどれだけ……!」

ファイアット副隊長が思わず叫ぶ。

そして眩き始める。

なにか考え事をしているみたい。

「……………ッ!」

それとは別にキャロがなにか決心したような顔つきになっているのが気になった。

そして、

「…エリオ君」

「なに? キャロ?」

「私に、勇気を分けて……」

キャラ口がそう言ってきたので僕はなにをすればいいのかわからなかったけど、手を握ってあげた。

「うん……。ありがとう、エリオ君！ 私、やってみる！」

それでキャラ口は足を一步前に出して、

「いきます！」

……天地貫く業火の咆哮、遙けき大地の永遠とわの護り手、我が元こに來よ、黒き炎の大地の守護者……」

キャラ口の詠唱と共にケリユケイオンが激しく輝く。

そして僕達の後ろに巨大な魔法陣が出現し出す。

「竜騎招來、天地轟鳴、來よ、ヴォルテール!!」

魔法陣から十五mほどの巨大な竜……ヴォルテールが姿を現す。

その姿は岩石巨人よりは小さいものの威圧感が半端ではない。

「オオオオオオ……ッ!!」

完全に顕現し、翼を広げて雄叫びを上げる。

「出来た……!」

キャラ口の嬉しそうな顔を浮かべる。

おそらくフリードを竜魂召喚した時以上に緊張したんだろうな。

失敗しないか、つて…。

でも、

「成功してよかったね、キャロ」

「うん！ ヴォルテール！ あの岩石巨人を倒して！」

ヴォルテールは無言で頷いて岩石巨人に拳を見舞おうとしたが、

「キャロ、待っててください！」

「ファイアット副隊長!？」

先ほどまで考え込んでいたファイアット副隊長が突然叫ぶ。

どうしたのだろうか？

「私の考えが正しければ、あの岩石巨人を倒したら悲劇が起きます！」

「えっ…?？」

悲劇…?？」

「あれは私達の使う魔導ではなく魔術での召喚です。」

あれほどの物を召喚するにはかなりの人数の魔術師の魔力が必要なはず。もし、

もしもですよ?…倒した瞬間にフリードバックがその魔術師達に襲いかかったら…」

そこまで聞いて僕も分かってしまった。

「キャラロ！ 倒しちゃダメだよ！」

「う、うん！」

それでキャラロはヴォルテールに命令して岩石巨人を押さえるだけにとどまらせた。「で、でもよ…別に敵の魔術師が倒れるんなら倒してもいいんじゃないの？」

ロボ君がそう発するが、ファイアット副隊長は深刻そうに、

「…今、公式に発表はされていませんが三十人以上の魔術師の行方が不明なのです」
それを聞いて納得した。

それじゃなおさら倒す事はできない。

「キャラロ！ あなたの召喚魔法を応用してリンクを切る事はできますか!？」

「で、出来るかわからないですがやってみます！」

それからしばらくしてキャラロは長い詠唱を唱えて、しばらくして岩石巨人はリンクが切れたのかただの岩の塊と化して沈黙した。

「よくやりました！ キャロロ！」

「は、はい…」

でもさすがのキャラロも魔力の使用のし過ぎでフラフラだったので僕が肩を支えてあげた。

「ありがとう、エリオ君…」

「気にしないで。今は休んで、キャロ」

「うん…」

それから僕達はロボ君達と残りの敵を倒す事に専念するのだった。



Side ヴイータ

今だゼストと打ち合いを続けているとどうやらやつと支援隊の部隊がやってくる気が配がした。

ゼストもそれに気づいたのだろう、苦虫を噛み潰したような表情をし、
「ここまでか…アギト、撤退だ」

それでユニゾンを解くゼスト。

「くそっ！ くそっ！ ここまで来たのに…！」

融合騎が地団駄を踏んでいた。

「…逃がすと思ってるのかよ？」

あたしは追撃をかけようとした。

ユニゾンを解いたって事は先ほどまでの打ち合いは出来ないはずだ。

なら、勝機はあたしにあると思いいグラーフアイゼンを構えたが、ふと、耳になにかが迫ってくるのを捉えた。

それで振り向くとあたしに向かって幾つもの矢が接近してきていた！

「くっ!?!」

それであたしはゼストを逃がすのは嫌だがその場から急いで離脱をはかった。

矢を見てすぐにわかった。

あれはあたしでは落とせないものだ。

さらにはホームイング機能でもあるのかあたしの後を追尾してきやがる！

これ以上はあたしでも追いつかれちゃう！

せめて、ラインだけでも！

「ユニゾン・アウト！」

「ヴィータちゃん!?!」

ラインは反論を言いたそうな顔をしたが、すぐに胸に守るように抱き寄せた。

次にはあたしの背中に次々と矢が着弾して爆発が起こる。

あたしの意識があつたのはそこまでだった…。

一瞬シグナムの姿が映ったような気がしたが、もうダメだ…。

シグナムは陳述会の部屋でシャツハからレヴァンティンを受け取りすぐに飛び出して行った。

そしてヴィータのもとに向かい、途中で撤退しているゼストの姿を見て「あれは…」と呟くが、今はヴィータの安否が先だと急ぎ、見れば無数の矢に襲われているヴィータの姿を見た。

そして墜落する姿を見て、

「ヴィータ！」

すぐに支えるがヴィータの背中が酷いことになっているのを見て苦い顔をする。

リインも、

「ヴィータちゃん！ しっかりするです!？」

涙を浮かべながらヴィータの顔に張り付くリイン。

シグナムも、

「間に合わず、すまん…ヴィータ」

シグナムは間に合わなかった事に悔やむのだった。

また、別の場所。

フェイトもトーレと戦っていたが、

「…さて、力の差がわかったでしょう？」

「黙れ！」

「聞き分けが悪いと始末が悪いですよ。」

しかし、さて…では今宵はここまですておきましようか。また、お会いしましょう。

ですが覚えておいてください」

光が瞬いた次の瞬間にはトーレの姿はかき消えていた。

ただ、『あなたでは私達には勝てません』とだけ言葉が聞こえてくるのだった。

「そんなことは、ない！」

フェイトはたとえ負け惜しみでも言わずにはいられなかった。



S i d e 八神はやて

突然のことだった。

スクリーンが展開し出して映像にスカリエツティの映像が映し出された。

同時に燃えている機動六課の映像や、地上本部各地の映像が映し出される。

そんな……！ 私達の機動六課が！

『ミッドチルダ管理局地上本部の諸君。気に入っていただいたかな？ ささやかながら

これは私からのプレゼントだ』

なにがプレゼントや。

私からしたら罰ゲーム以上のものや！

『これは治安維持やロストログア規制など技術促進を妨害し続ける管理局に対しての技術者からの恨みの一撃、とでも思ってくれたまえよ。

多少の血は流れただろうが、合理的に敵を制圧できる技術を証明することが出来ただろうか？

それとだが……魔術師殿』

するとまた違う映像が映り出し、そこにはフードを被った人物と、えっ!?

『エースオブエース……高町なのはと、その使い魔のオリヴィエ・ゼーケブレヒトは私達が頂いたよ』

フードの人物に持たれているのはちちゃんと、その後ろで俯いて手を握りしめていながらも攻撃が出来ないでいるオリヴィエさんの姿があつた。

そんな…。なのはちちゃん！

『さて、では今日はここまでにしておくとしようかね。だが、この素晴らしき力と技術が必要だと感じたのなら、いつでも私宛に依頼をくれたまえ。

格別の条件でお譲りするよ。ククク、アハハハハハ!!』

そしてスカリエッティの映像は途切れる。

隣でカリムが、

「予言は、覆らなかつた…!」

そう呟いているが、

「まだや。まだ、機動六課も、私達も終わってへん…! 絶対に諦めへん!」

私は再起をはかることを誓った。

第一百五十一話 『一夜、明けて…』

…隻眼の魔術師とスカリエツテイ一味の手によって、ランと、そして…なのは、オリヴィエを誘拐されてしまった。

地上本部の魔導師達とガジェットや骸骨人形との戦闘もあらかた終わりを見せ始めてきた。

それでシホは少しでもなのはの最後の足取りを辿ろうとするために、骸骨の仮面の集団に負わされた右腕の負傷を包帯で応急処置して動きを開始した。

スバル達には何度か止められたが、構わずにあちこちがガジェットや骸骨人形によって荒らされてしまった地上本部内を散策していた。

「…あれは…?」

シホはなのはの居場所を示す最後の頼みのシグナルが点灯していた位置までやってきて、あるものを発見した。

それは、

「レイジング、ハート……」

そこには待機状態に戻って放置されているレイジングハートの姿があった。

シホはそれを拾い、

「レイジングハート、私よ。分かる……？」

《はい、シホ……》

レイジングハートは返事だけを返してくれた。

しかし、その声は電子音とはいえあきらかに落ち込んでいることがわかるほど気落ちしていた。

「なにが、あったの。なのはとオリヴィエ陛下は、どうして拐われてしまったの？」

《はい……。状況は映像に残されていますので確認できます。しかし……》

「どうしたの……？」

レイジングハートはなにかを考え込むように無言になりしばらくして、

《マスターは何度も『お母さん……』と呟いていました》

「桃子お母さんの事を……？」

《はい。それに虚空に向かつて何度か話しかける姿もあり、はつきり言いまして挙動不

審の一言でした。マスターの様子は……》

「なのは…一体あなたに何が起きたというの？」

シホは表情を悲しみに歪めながらなのはの身を案じた。

《シホ…》

「なに、レイジンググハート…？」

《私は、マスター無しでは動くことも叶わない己の身が恨めしいです。もし、仮に私にマスターと同じく自由に動かせる体があったのなら今頃は…》

そうしてレイジンググハートは悔しがる。

シホはその様子を見て、レイジンググハートを撫でながら、

（なのは…。あなたに何があったのかわからない。でも、きつと助け出すわ！ 当然、ラ
ンも！ 二人とも…私の家族なんだから！）

シホはそう硬く心に誓うのだった。

そして一夜は明けた。



S i d e ティアナ・ランスター

…あの襲撃から一夜、明けてあたし達は撤収して機動六課にまで戻って検分をしていった。

機動六課の隊舎は何度も攻撃を受けたのかあちらこちらに破片が転がっている。

そして一番目立つのが縦に切られている機動六課隊舎の姿だった。

あたしはその傷跡を見て、

「一直線に切られているわね…。それに切り口を中心に溶けている。まるで焼いているもので切られたような…」

あたしはその切り口を見て、思わずゾツとする。

この切り口は隊舎の反対側にまで貫通している。

もし、隊舎の中で直線上に人がいたらどうなっていたか…。

ついつい最悪の事態を考えてしまう。

でも、不幸中の幸いと言うのもどうかと思うけど、ほとんどの職員・隊員は余波の雷による感電だけで済んだとの事だ。

一閃の直線上にいた土郎さん達も余波で倒れたというだけだという。

ただが一番重傷を負ったというアルクエイドさんは酷いという。

なんでも腕を飛ばされたとか言うし。

でも、志貴さんが言うには切られた腕を拾って後になんとかくつつけたらしい。

だから特に心配はないらしい。

ここはさすが英霊ね……。あたし達の常識にある治療法を無視して腕をくつつけちゃうって言うんだから。

：ちなみに、他の英霊であるキャスターさんには「そんなことできると思いますかー!?」とキレられ、ライダーさんには「あれは特別です。一緒にしないでください」と拗ねられてしまった。

それで検分を継続していると、なーんかそわそわしている奴を一人見つけてしまった。

そいつはスバルである。

ギンガさんが軽度ではない傷を負ってしまったて、今はエリオ、キャロ、レンの三人が病院まで見に行っている。

おそらく自分もお見舞いに行きたいらしい、というか行きたいに決まっている。顔にありありと書いてあるのだから。

「コーら、スバル」

それで軽く頭を小突いてやる。

それでやつとあたしの存在に気づいたのか俯いていた顔をあげて、

「…あ、ティア」

『…あ、ティア』じゃないわよ。行きたいんならさっさと要請をするなりなんなりして抜けていけばいいじゃない？」

「…うー、それはそうだけどー。あたしだけ特別扱いは嫌なんだよお。それにあたしはまだいいよ。ギン姉は傷を負ったけどすぐに退院できるくらいの怪我だったし…」

「背中から機械の部分が少し見えていたからね」

「うん。でも、あれくらいならギン姉は多分大丈夫…。だけど、心配なのはやつぱり…」
それでスバルはとある方に顔を向ける。

あたしもそれに誘われて顔を向ける。

そこには片腕を負傷しながらも疲労を一切見せないで検分しているシホさんとそれを補助しているアルトリアさんとネロさんの姿があった。

「やつぱり、シホさんよね…」

「うん。もちろんレンもだけど…なのはさんとランはシホさんにとつて家族同然だから。あたしは落ち込めないよ。シホさんの頑張っている姿を見ていたら」

「そうよね。報道は規制されていて一般には触れられていないけど、『エースオブエース、敵の手に堕ちる』っていう噂はもう管理局内には流れ始めているしね」

「シホさんとレンが一番辛いはずなんだよ。レンもあまりランの事には触れなかったけど、結構落ち込んでいたし…」

「そうね。なにより各地で現れた謎のフードの敵が気になるわよね」

「うん…」

まずアルトリアさんとネロさんが戦っていた謎の相手は、スカリエツティの映像が流れると同時に撤退したという。

同じくランサーさんが戦っていたという槍使いも同様に撤退した。

アルトリアさんとネロさんの息の合った姉妹コンビが敵一人に防戦一方だったという事実だけで衝撃ものだ。

ランサーさんもお互いにイーブンの戦いだったと話しているし。

そしてヴィータ副隊長を撃墜したという矢…おそらく弓使いが背後にいますと考えられる。

機動六課待機戦力をたった一撃で落とした一閃を放ったやつも気になる。

あの骸骨の仮面の集団も気になるといえば気になる。

なんせたった一回の投擲でシホさんの腕を折ったのだから。

それが集団にいると思うとやはりゾッとします。

あの場であたし達をいとも簡単に殺すことはおそらく出来たのに撤退したのも気に

なる。

これはただの驕りで『お前達なんか本気を出せばいつでも軽く倒せる』という余裕なのかは、わからない。

「シホさんが言うにはあれらは隻眼の魔術師の仲間だと判断されているって…」

「そうね。戦闘機人だけで頭を悩ませているのに、こんなに謎の敵が現れるなんて。ほんと、どうなるのかしら?」

「そうだね」

それからあたし達は検分を続けているとシグナム副隊長がやってきた。

「スバル、ティアナ」

「お疲れ様です」

「ああ。ところでシユバインオーグの様子はどうか?」

そう聞かれたのでありのままを話すと、

「そうか。なのはにラン、オリヴィエ陛下の三人を誘拐されたから、取り乱していないか心配したが、杞憂だったようだな」

「ヴィータ副隊長はどうですか?」

「峠は越えたさ。今はリインがそばについて目を覚ますのを待っている」

「そうですか…」

ヴィータ副隊長も大丈夫だと聞き安心する。

「後は私が引き継ぐ。二人はギンガや士郎達を見に行つてやつてくれ」

「はい」

それであたし達は病院まで向かうのだった。



Side レン・ブルックランズ

負傷したギンガさんにそのままついて行つて一夜を明かした僕。

ギンガさんは朝になったら目を覚ましてくれた。

「……(こ)は」

「目を覚ましましたか。ギンガさん」

「レン君…無事だったのね」

「はい。ギンガさんのおかげです」

ギンガさんは上半身だけ体を起こして、

「でも、ランは捕まってしまったのよね…」

「はい…。でも、ラン姉さんは必ず取り返します」

「そうね。レン君、私も協力するわ。そしてスカリエツティを捕まえて戦闘機人も全員捕縛する」

「はい！」

「あ！ ギンガさん！」

「よかった。目を覚ましたんですね！」

そこにエリオ君とキャロちゃんが病室に入ってきた。

「エリオ君、キャロ！」

ギンガさんも嬉しそうに頬を緩める。

「大丈夫ですか…？」

「ええ。これくらいならすぐに治るわ」

「よかったです。なのはさんとランさんが攫われてしまって、ヴィータ副隊長まで撃墜されたと聞いて、心配になっちゃったんです」

キャロちゃんは顔を少し俯かせながらそう語る。

確かにヴィータ副隊長も心配だ。

ギンガさんもそれを聞いて驚きの表情をする。

「なのはさんまで…」

「はい。機動六課もダメージを受けてボロボロです。でも、まだ終わっていません。取られたものは必ず取り返します！」

「レン（君）（さん）…」

僕がそう宣言するけど三人ともなぜか驚きの表情をしている。

どうしたんだろう…？

「なんか、レンさん。強気になりましたね」

エリオ君が代表してそう言ってくる。

でも、

「そんなことないよ。僕は今でも弱いままだし…。でもギンガさんの言葉で勇気がわいてくるんです。」

ラン姉さんも必ず取り返す、だからくよくよなんてしてられないんだ」

拳を強く握りしめて僕はそう言う。

「その意気だよ！ レン！」

そこに病室の外で聞いていたのかスバルさんとティアナさんが中に入ってきた。

「そうそう。機動六課はレリック捜査からスカリエツテイ一味の追跡になったから頑張りますよう」

『はいー！』

それではらく部屋の中は賑やかだった。



それを他の病室で聞いていた土郎達は、

「ふむ。レンも成長しているな」

「そうだな、土郎」

土郎とアインスがそう話し合っていた。

「しかし、あの攻撃で死傷者が出なかったのは奇跡だな。

あれはアルトリアのエクスカリバークラスのものだったからな」

「ああ、全員感電だけですんで後遺症が残ったものは一人もいなかったからな。

…ところで土郎。ツルギの事なんだが」

「わかっている。謎の力が目覚めたのだろうか？」

「ああ。そのおかげでヴィヴィオも攫われずにすんだ。ツルギはよくやってくれた。でも、なにかあの力は不気味なものだった」

赤黒い魔力の放出。

黄色に染まる髪。

魔力が様々な形をとり攻撃をした。

これだけで、ツルギの秘められた力の暴走と考えられているが、検査結果はなにもわからなかった。

不思議でならないのは確かである。

士郎達が心配がるのも頷けるといふものだ。

「まあ、今はまだ見守ろう。ツルギになにも異常がなかったのだから悪しき力ではないだろうしな」

「士郎がそう言うなら、私もそうする」

そうして士郎達はシヤマルやザファイラ、ヴァイスなどの様子を見に行くのだった。



S i d e シホ・E・S・高町

私達隊長陣…と言ってもなのはとヴィータのスターズ二人はいない状況だけど、ナカジマ三佐がいる陸士108部隊の隊舎にやってきていた。

ナカジマ三佐の話はカリムやクロノ、復帰した隊員達も一緒になって聞いていた。

内容は戦闘機人から始まり、ギンガとスバル、そしてナカジマ三佐の奥さん…クイント・ナカジマさんの事について。

話の内容としてはスバルとギンガは昔に戦闘機人の違法ラボでクイントさんが発見・保護したという事。

「…俺とクイントとの間には子供ができなくてな。そんな時に二人がやってきてな。クイントが育てるって言い出してな」

「そうなんですか」

「ああ。俺も賛成だった。だから二人を戦闘機人としてではなく普通の人間として育てることにしたんだ。

メンテや検査、研究なんかもあつたが二人は普通に育ってくれたよ。今のあの二人を見ればわかるだろう？

人間となんら変わらない生活を送っているからな」

「そうですね」

「だが、クイントが死んだのはすぐだった。特秘任務中の事故とかで死んじまって、死亡した原因や真相もいまだに闇の中…。

クイントはなにか見ちゃいけないもんを見ちまったんだと思う。俺の予想だがな」

そう言ってナカジマ三佐は顔を伏せる。

「俺も死ぬ覚悟で事件の真相に迫ればよかつたんだがな…。クイントとの約束でな。ギンガとスバルを立派に育て上げるってな…。」

だが、俺は諦めきれなかった。だからこつこつと地道に調べてきた。いつか告発する機会もあると思っていたからな」

そしてお茶を一気に飲んで、

「そんな時だった。八神が自分の事件に戦闘機人が絡んでくるかもしれないと予想して、俺んとこに話を持ち込んできたわけだ。あのチビだぬきがだよ」

ナカジマ三佐はそう言って笑う。

それにつられて私達も笑みをこぼす。

「ま、クイントやギンガ、スバルについてはこんなところだ。連中は二人を捕らえようとしていたらしいが、無事でなによりだ。」

…まあ、そちらさんは被害をかなり食ったらしいがな。

こちららも戦闘機人を一人捕らえたが、記憶を完全に消去されちまってスカリエツティの手がかりはありやしねえ。

だから、シホのお嬢よ。いつか必ず成果は出て事件は解決する。そして必ず家族を取り返せよ。ギンガとスバルの二人を精一杯使っていいからよ」

「…はい。ありがとうございます。ナカジマ三佐」

そう言われて私も心が少し落ち着いた。



S i d e トレディ

今、私の後ろを目の光が消えているランさんが着いてきている。今になって思う。

本当に、これでよかったですでしょうか。

クアットロ姉様の言うようにしてよかったですでしょうか、と。

でも、もう引き返すことはできないんです。

こうしてランさんを捕らえて洗脳したからには最後までレンさんを私のものに…。

そこにドクターから通信が入り、

『やあ、トレディ』

「……………ドクター」

『君が機動六課の隊員、あのシホ・E・S・高町の家族であるラン・ブルックランズを捕らえて洗脳したと聞いて話をしたくなったのだよ』

「……………そうですか。それで、私はどうすればよいでしょうか？」

『できればその子は私に預けてもらえないだろうか？ 見事、調整して洗脳を完璧にしてやろう』

「……………それは、拒否します」

『ほう……？ 私の命令を拒絶するのかい？ トレディ』

「……………そういうわけではありません。……………ただ、ランさんの事は私に任せてもらいたいのです」

『そうなのかい？ 一人で制御するのに苦労はしないかい？』

「……………大丈夫です。複数ある思考回路を一つ、活用すれば問題はありません」

『そうかい。ならば任せるよ。ただ、覚えておきたまえ。その子と、そして高町なのははシホ・E・S・高町と話をするための交渉材料だということを』

「……………はい。手綱は握っておきますので任せてください」

『頼むよ』

それでドクターとの通信は途切れる。

……………やってしまいました。

ドクターの命令に逆らってしまった。

でも、私はこれ以上はレンさんに見限られたくない。

だからこれ以上のランさんの調整はしないでおく。
失敗のリスクは高い。

でも、やってみせる。

そして知るんです。人を愛するという気持ちを…。

たとえば、間違った手段だとしても。私には他に選択肢はないのですから。

そうして道を歩いていると、前方にルーテシアお嬢様がある女性の入った培養液を見
ていました。

「……………ルーテシアお嬢様」

「トレディ…?」

「……………どうされたのですか? その女性は確か、ルーテシアお嬢様のお母様でしたよ
ね」

「うん…。らしいよ」

「……………らしい、ですか」

「覚えていないから…」

…そうなのですか。

「適合するレリックコアさえ見つければ、目を覚ます。ドクターにそう聞いた。11番
が見つければこの人は目を覚ます。」

そして私のお母さんになってくれれば、私に心が生まれるとも言っていた。だから、探すんだ…」

「……………そうですか」

ルーテシアお嬢様も手段がこれしかないから、それでも足掻いているのですね。見つかるのを。

私と似ていますね。

他に手段がないというところは。ぜひ、協力してあげたいです。



Side 八神はやて

戦闘機人にスカリエッティとレジアス中將は共闘していると踏んでオーリス三佐に聞いてみた。

だが、オーリス三佐とのお話はなにも掴むことはできなかつた。でも、絶対何か隠していると踏んでいる。

絶対令状で聞き出してみせる。

そして私はロツサに会いに向かっていた。

ちゃんと頼んでおいた申請が通ったかの確認に。

「来たか。はやて」

「ロツサ。ごめん、待たせたか？」

「いや、大丈夫だよ。しかし…さすがのはやてでもやっぱり元気がないかい？」

「うん…」

正直に言えば泣きたい。

なのはちゃんまで敵の手に落ちてしまっただけさえ落ち込んでいるのだから。

でも、それは顔に出さないでおく。

でも、ロツサはそれに気づいているらしく、

「…高町一尉は、残念だったね。でもまだ希望は残っているから落ち込むのはよしておいた方がいいよ。はやて」

「励ましてくれてありがとな。ロツサ。確かになのはちゃんやランを攫われたのは大失態や。部隊員達にも怪我人が大勢出てしまうたしな。

せやけど持つてかれたものは取り返す。そして今度はちゃんと守りきる！」

私がそう奮起しているとロツサが突然頭を撫でてきよる。

もう…もう子供じゃないんよ？

「やる気はあるからよかった。これで泣き寝入りしていたらはやてじゃないからね」

「当然や。まだ機動六課も私達も終わってへん。だから夜天の主として、機動六課部長として気張らなあかん。」

それで、ロツサ？ 例のものは？」

「ちゃんと済ませてあるよ」

それでそのあるものの前までやってくる。

そこには整備されている“アースラ”の姿があつた。

「…しかし、本気なのかい？ はやてやクロノ君の許可を取つたとは言えもう年季が入っているアースラをまた使うなんて…」

「わかつてる。アースラはもう休ませてやらないといけないということは。」

でも、最後の大仕事を務めさせてやりたいんよ。

機動六課隊舎が落ちた今、移動できる本部は絶対必要やからね。

まあ、ついでに言えば隊員達の住居がない身やからね」

「そうか。勝利を祈っているよ」

「うん！」

それで窓越しにアースラを見ながら、

(アースラ：最後の大舞台や。気張ってやってこう！)
絶対この事件を解決するという決意をするのだった。



Side シホ・E・S・高町

108部隊の隊舎から帰ってきて、士郎達のところに寄ってきたら、ヴィヴィオとツルギ君の姿が見えないことに気がかりを覚えて、私とフェイトは病院内を探していた。

そしてあらかた探して、あと残りは屋上だと思い登ってみた。

するとやつぱり二人は屋上にいた。

何か話しているようだ。

それで私とフェイトは耳を澄まして聞いてみる。

「…なのはママ、帰ってくるって約束、したんだ」

「うん…」

「でも、帰ってきてくれなかった…ヒック…」

「ヴィヴィオちゃん、泣かないで…」

「…なのはママの、嘘つきい…うわあああー…ん!!」

「ヴィヴィオちゃん、泣か、ないで…。う、うわあああん!!」

ヴィヴィオが泣き出してつられてツルギ君も泣き出してしまったようだ。

フェイトが思わず駆け出そうとしたけど、私は手を掴んで止めた。

「シホ、なんで…?」

「今は、二人だけにしてあげましょう。だから、我慢して。」

「だけど、戻ってきたら二人をちゃんと元氣つけてやりましょう」

「うん………、シホ。シホはなのはとランが攫われて、その、辛い…?」

「辛くない、わけないじゃない…。家族なのよ? でも、泣いていられない。必ず助け

るって意気込んでいた方がいいわ。」

「だから、フェイト。必ずこの事件を解決して、なのは達を助けましょう!」

「うん、シホ! 必ず…!」

フェイトと士気を高める私だった。

第百五十二話

『なのはのあと、隠された秘密』

…高町なのはは、暗い部屋の中で静かに目を覚ました。

(……、……は……?)

周りはいまだ薄暗い部屋の中であつたために、しかも手足も動かすことができずにいた。

そして周りがどこなのかも把握できないでいた。

それでしようがなく今私はどうしてこんな事になつてしまったのかを思い出すことにした。

あれは、確か…、と想いを馳せるのは少しずだが思い出していった。

(そう…シホちゃんとフェイトちゃんと公開意見陳述会会場から抜け出して、スバル達と合流した後だった…)



S i d e 高町なのは

「まず、スターズは——…」

それはシホちゃんがこれからのみんなの方針を打ち出そうとした時だった。

《高町なのは…》

「うっ!？」

突如として頭の中に謎の男の人の声が響いてきて、私は思わずたちくらみを起こして倒れそうになった。

それは隣でいたオリヴィエさんによつて支えられた。

「大丈夫ですか、なのは？」

「う、うん。オリヴィエさん…」

私はなんとか言葉を返すが、頭の中にまたしても男性の声が響いてくる。

《私の声が聞こえるな？ 高町なのは…》

《あなたは、誰なの…?》

《聞こえているようで何よりだ。ならば目にも神経を巡らせろ。そうすればお前にもあの映像が映し出されるだろう…》

それで私は目にも力を込めてみた。

瞬間、私の目には別の場所の光景が映し出された。

そこには、

《お母さん…!?!》

謎のフードの男性が私のお母さんを気絶させていて手に抱えている光景が映し出された。

《ククク…どうだ。高町なのは。お前の母は今私の手にうちにある》

《何が目的なの!?!》

《目的、か…。そうだな、隣にいるお前のサーヴァント、ファイター…オリヴィエ・ゼーケブレヒトを連れて指定する場所まで一緒に来るがいい》

《なんで、オリヴィエさんを…?》

《理由まで話すと思っているのか? 聞かれれば答えが必ず返ってくると思っただら間違いだぞ、高町なのは》

いちいち癪に障る言葉を男は言いながら私を脅迫してくる。

《いいか? お前とオリヴィエだけで来るのだ。他の者も連れてきたらお前の母の命はないと思え》

《くっ…!》

そして即座に私の頭の中に居場所が示される。

どうやってこんな芸当を仕掛けてきているのかわからないけど、お母さんが人質に取られているとなつては従うしかない。

それで謎の思念通話は終了して私は顔を青くしているのだろう、フェイトちゃんが心配げな表情で私の顔を怪訝な表情で伺つてきている。

今この場でみんなに協力を仰ぎたい。

でも、みんなに相談したらお母さんの命がない…！

もう、相手の言葉に乗るしなくなつてしまった…。

「シホちゃん！ お願い！ ちよつとオリヴィエさんと一緒に単独行動をさせて！ 用が済んだらすぐに戻るから…！」

「用が、つて…」

「お願い…今は、私を信じて…」

シホちゃんにもお母さんのことを伝えたかった。

でも、きつと私がいなくなつたらシホちゃんは探すと思う。

そうするだろうとすぐに予想できることが嬉しい…、そしてそのシホちゃんの気持ちの逆手にとる行動を取ろうとしている自分が今、いかに無力かを悟る。

そしてなんとかシホちゃんとみんなに了承をとつて私はオリヴィエさんとともにその場を後にした。

指定された場所に向かう道中、

「しかし、どうしたのですか、なのは。こんな行動をとってしまったては後後に響きますよ？」

「うん、わかっている…。でも、今はただ従うしかないの…」

「従う…？　なのは、なにか私たちに隠していますね？」

うっ…。オリヴィエさんには気づかれてしまった。

でも、オリヴィエさんには伝えてはいけないという事は言っていないかった。

なら…！

それでも私は不安になり一応念話で話しかけた。

《…うん。どういう仕組みかは知らないけど私に謎の男が思念通話をかけてきたの。そして、お母さんが捕らわれの身になっていたの…》

《桃子が!?!》

それでオリヴィエさんが驚きの表情をする。

そうだよ、私もとても驚いてる。

なにより、お兄ちゃんやお父さんが黙っているとは思えない。

謎の男はどうやってお母さんを誘拐したのか…？

お父さん達も無事なのか心配だ…。

いろいろと考えながらも指定された場所に私とオリヴィエさんは到着した。そこはどこかの廃場だった。

中には電気がついていなくていつかのランサーさんがデイルムツドさんと戦った戦場を思い出させてくれるようなところだ。

オリヴィエさんと慎重に中を進むと中心らしき場所に明かりが灯される。

そこにはフードの男性が立っていた。

しかもよく見ると地面に反射した光で顔が伺え知れてその顔の右目には線が入っていた。

もしかして、隻眼の魔術師!?

「あなたは、もしかして隻眼の魔術師ですか…?」

オリヴィエさんが手甲の腕を構えながら警戒する。

《そうだ。私は隻眼の魔術師…》

《またっ! どうして思念通話で会話を!》

《ククク…まだ手がかりは掴まれたくないからね》

私と隻眼の魔術師の間で思念通話が繰り返されているが、それはオリヴィエさんやレイジングハートには聞こえていないのだろう。

レイジングハートは《マスター…?》と話しかけてきて、オリヴィエさんもこちらを

伺いながらも警戒を続けている。

《そうですか。でも、いつ私にこんな仕掛けをしたんですか…?》

《お前も薄々気付いているのではないか?》

《それって…》

《そう、お前達がガジエットの出現の報告で出勤した時だ。

敵がすべて消えて、気が緩んでいる時を狙わせてもらった》

《やっぱり…。あれから頭痛がするようになったのは、あなたのせいだったんですね!》

《ククク…、そうだ》

《それはもういいです。…それで、お母さんはどこですか!》

《ふっ…。これかね?》

隻眼の魔術師はその手になにかの魔術なのだろう、地面に転がっている石が瞬時に形を取り出してそれは集まると光り輝き、お母さんと瓜二つの姿に変化した。

これって、もしかして!?

《罨ですか!?!》

《そう、お前とオリヴィエを誘い出すための紛い物だよ。お前の本当の母は今も第97管理外世界・地球で普通に暮らしていることだろう》

《騙したんですね…》

《その通り…。ところで高町なのはよ。ここは空気が薄いとは思わないか…?》
《なにを…うつ?!》

隻眼の魔術師の言葉に私はある事を自覚した。

息が、苦しい…!

突然、どうして?

それで私はその場に力が抜けて倒れてしまう。

「なのははつ?! 突然どうしたのですか?!」

《マスターツ!》

オリヴィエさんとレイジングハートが必死に話しかけてくるが、言葉が出せない。

思念通話で伝えようとしても集中ができずに魔力も練れない。

これ、は一体!?

《フッフ…、苦しいだろう? 私の魔術でお前の周囲だけ空気を薄くしてやったのだよ。

高山病の上位版と思って頂ければ幸いだ》

《ツ…、くっ…!》

思念通話ですらままならないこの状況。

どうにか、どうにかしないと…!

「貴様! なのはに何かしたのですか?!」

オリヴィエさんが殺気を出しながら拳を構えるが、隻眼の魔術師は不敵に笑みを浮かべるだけ。

「答えなさい！」

それでオリヴィエさんは魔力放出で七色の魔力の光を出しながら駆けていく。

だ、め…。オリヴィエさん、それは罠だよ！

私が罠だということも伝えることもできずにオリヴィエさんの拳が隻眼の魔術師に迫ろうとしたその時だった。

突如、隻眼の魔術師の前にフードを着た謎の人が現れて、その手に見覚えのある歪な短剣を握っていた。

オリヴィエさんも瞬時に気づいたのか足を止めようとしていたみたいだけど、完全に止まることができずに、フードの人もオリヴィエさんに駆け出してその短剣を突き刺した。

その時だった。

私とオリヴィエさんの間の繋がりが切られた感じがして、見れば右手の令呪が消えていた。

そんな…！

「なっ…!?!」

オリヴィエさんもその事に気づき、顔を驚愕に染められている。

次に魔力供給が途切れて力が抜けてしまったのかその場で膝をつく。

だが驚きはさらに続き、

「…告げる。」

汝の身は我の下に、我が命運は汝の拳に…。

聖杯のよる辺に従い、この意、この理に従うのなら——我に従え。ならばこの命運、

汝が拳に預けよう…。」

そこで初めて隻眼の魔術師は声を発した。

それがまさか再契約の呪文!?

でも、オリヴィエさんがそれに応じるわけがない!

だけど、

「そんな…!? 私は、あなたを主と望んでいない! なのに、なぜあなたの手の甲に令呪が!?!」

「ククク…成功したようだな」

隻眼の魔術師はその手に宿っている三画の令呪をさすりながら笑みを浮かべる。

「答えさない!」

オリヴィエさんは拳を握りながら隻眼の魔術師に仕掛けたけど、フードの人物がそれ

を遮る。

「くっ……！」

「サーヴァント・オリヴィエよ。第一の令呪に命じる。『主替えを承諾せよ！』」

「なっ!!？」

瞬間、オリヴィエさんの体に紫電が走って令呪の効果が体中に巡っているようにも見えた。

そして、オリヴィエさんはその場で立ち止まり、ギリギリと拳を鳴らしているように見えた。

顔は俯かせて悔しがっていることが大いにわかる。

「ふっ……。これで普通に話すことができるな。いや、*“アヴェンジャー”*の時の令呪がそのまま残っていた為に再利用できてよかったよ」

アヴェンジャーって……！

もしかして、ライゼルさんを召喚したのは隻眼の魔術師だったの!?

「……すみません、なのは！ 私が不甲斐ないばかりに……!!」

オリヴィエさんは今にも泣き出しそうな顔をしながら私に申し訳なさそうに話しかけてきた。

綺麗な顔が今はとても悔しそうに彩られている。

私は、その場に駆け寄りた。

でも、まともに息もできない状況でそれはできない。

悔しい……！

「さあ、オリヴィエ・ゼーケブレヒト！ お前には『聖王のゆりかご』を起動してもらおうぞ！ さて……高町なのはよ。しばし眠るがいい……」

隻眼の魔術師は私の首に指を当てた。

その指先には黒い呪いのようなものが宿っていることに気づいたのは、気絶したあとだった……。

……

……

……

「ツッ！」

そこまで思い出して、私は手足に力を入れてなんとか動こうとしたけど、『ガシャンツッ！』という足かせ手かせがはめられているために動くことができないことをまた思い出した。

「オリヴィエさんは！　ここは、どこ!？」

「——気分はどうかね？　エースオブエース…いや、高町なのは」

そこに暗い部屋に声が響いてきた。

そして明かりが点灯するとそこには、

「ジェイル・スカリエツティ!？」

「…ふむ、どうやら脳には異常は見られないようだね。魔術師殿はどうやって君を捕獲したのか心配したものだからね…」

スカリエツティは笑みを浮かべながらそう言う。

「…なにを。私に、なにをするつもりなの…?」

「ほう…。もうなにかされるといふ事は想定済みかね？　先読みのセンスはなかなかだよ。

では、ご期待に応じて少し話をしてやろうかね」

スカリエツティは「くつくつく…」と笑いながらもなにかの話をしだす。

「私は常々気になっていたのだよ。

魔術師殿に聞いたのだが、サーヴァントとはなにか触媒があればお目当ての英霊が召喚できるという。

だが調査した結果、高町なのは…君はなにも触媒もなくオリヴィエ・ゼーケブレヒトを召喚したというではないか？」

「それが…なんだって言うんですか？」

「フフフ…それで私は考えたのだよ。もしや、君は…いや、君達家族は『聖王家』の一族、その末裔なのではないかとね」

「なっ!？」

私はその発言に驚きの表情を作る。

どうしてそうなるのかと…!

「…君も信じられないだろう。私もそう簡単にはこの説には納得はしていない。

だがね、もし聖王家の“ゆりかご”に選ばれなかった数名かが古代ベルカ時代に他の世界に逃亡を図っていたら…とね。

ま、それも私の仮説に過ぎないがね…」

「……………」

スカリエッツィは笑みを崩さずにそう語る。

私はそれで言葉を失っていた。

そんな暴論をスカリエッツィは信じているのか、と。

「そのための、今回の試みだ。ウーノ…?」

「はい…」

そこに一人の女性がとあるケースを持って部屋に入ってきた。

あのケースは…もしかしてレリックケース!?

「その顔だと察しているようだね。そう、レリックだ。」

これは本来、オリヴィエ・ゼーケブレヒトのクローンである『ヴィヴィオ』に埋め込むものなのだったのだがね…!」

「ツ！ ヴィヴィオは?! 機動六課は?!」

私がそう聞くと、一瞬スカリエッティは笑みを消したが、すぐに余裕の笑みを取り戻して、

「…今回は失敗だよ。君とオリヴィエ陛下を捕らえて、ヴィヴィオも奪おうとしたのだがね。」

しかし、所詮クローンには用はない。

君達も気づいていたのだらう? 私がヴィヴィオを狙っていたことを…。

そのための機動六課待機戦力だったのだらう?

だから、君たちの考えの裏をかかせてもらった。警備に力を注げば、その分君たち本隊の戦力は分散するとね。

ヴィヴィオはいい役を買ってくれたよ。 デコイ 囮という名のね…!

それで君達が手に入ればヴィヴィオなど惜しくはないのだよ!」

そこまで語り終えてスカリエッティは大声で笑い出す。

私がこの先、なにをされるのかおぼろげに予想しながらも、

「ハハハハハ…フツ。さて、では実験と行こうか。」

さあ、高町なのは。体の力を抜きたまえ…今から君の体にレリックを埋め込もう」

「そんな…」

予想が当たり、私は少しながらも絶望を味わう。

叫びをあげようとも思ってたけど、それではスカリエッティを調子づかせるだけだ。

だからせめてもの抵抗として睨みを効かせることしかできなかった。

でも、レリックはどんどん私の胸の上まで持つてこられて、思わず私は涙腺が緩む。

嫌だ、やめて、と思うも抵抗などできない…。

「さあ、開始だ！」

そしてレリックは私の胸に入ってきた。

途端、体に激痛が走る。

こんな事に、なるなんて…！

どんどんとレリックは私の胸に入っていく、完全に入り込んだ途端、私の体に膨大な熱が生まれるのを自覚した。

「うっ、あつ?!」

「すごい！いい反応だ！レリックが高町なのはの体に適合するどころか溶けてし

まったぞ！ 全身に…!!」

私はスカリエツティの笑い声を冷めたもう一つの思考で聞きながらも、体の中で生まれた膨大な魔力を押しさえ込むことができずに外に漏れ出してしまった。

それは私の魔力光… “桃色”ではなく、オリヴィエさんと同じ “虹色”の魔力光へと変化していた。

信じられなかった…。

まさか、本当に私は聖王家の末裔だったというの…？

そこまでで私の意識は闇に沈んだ…。



…レイジングハートの残された映像を見ていたシホ達はどうだと、

「そんな…。隻眼の魔術師は、やはりスカリエツティと手を組んでいた…？」

「それより、あのフードの持っていた歪な短剣って、まさか!?!」

「ええ。間違いないわ…。あれは破戒^{ルル}すべき^レ全ての符^カ…」

シホがそう呟く。

その声には悔しさが滲んでいた。

「アヴェンジャー、ライゼルを召喚したのは、やっぱり隻眼の魔術師だったのね……」
シホは、心の中で、

（なのは、オリヴィエ陛下……必ず救うわ。だから、待っていて……!）

そう、誓うのだった。

第百五十三話 『想い、強く…』

アリシアは魔術事件対策課からとある場所へと出向してきていた。

その場所はというと、

「ヴェロツサー！」

「やあ、アリシア」

アリシアは人懐っこい笑みを浮かべながらヴェロツサに駆け寄った。

そう、ヴェロツサの本拠地である聖王教会である。

しかしなぜアリシアとヴェロツサが知り合いなのか？

それには事情がある。

それはというと…、ありたいに言えば聖王教会がアリシアの第二の保護責任者なのである。

リンディが正式な保護責任者であるが、それには理由がある。

それは聖杯大戦の時にまで遡ることなのだが、やはり死者蘇生という唯一の成功例として聖王教会が保護の名目で守っていると云ってもいいという感じである。

今もたまにアリシアを裏の組織が狙っているという情報がある。

だから魔術事件対策課の目的の一つに、危機に陥った際にアリシアを優先的に守るようにと全魔術師隊員には通達は済んでいるのが現状であった。

ゆえに今回のスカリエッティの襲撃事件も優先的に守られていたのは、アリシア自身は不満を持っていたりする。

「でも、君も狙われていたかもしれないと思うと少しゾツとするよ」

「大丈夫だよ。私だって強いんだよ？」

「強くてもやっぱり心配にはなるよ。君は…」

ヴェロツサはそれ以上を言いあぐねた。

それを察したアリシアは、

「…大丈夫だよ、ヴェロツサ。私には頼もしい妹と、他にもたくさん頼りになる友達がいるんだから…」

「だが、高町一尉は…」

「うん…。なのはは拉致されちゃった。けど、きつと取り戻すよ！ それはみんなもきつと同じ気持ちだと思うから！」

「そうだね」

それで二人は少し黙り込むが、すぐにヴェロツサはいつも通りの調子を取り戻して、
「さて、それじゃ今回君を呼んだ件だけど、いいかい？」

「うん！ なんでも言つて！」

「じゃ言わせてもらおうよ。今も君の妹のテストロツサ執務官が追っているスカリエツ
ティのアジトを僕とシャツハと三人で今回はなんとしても発見することだ」

「それって…私の必要ある…？」

「ああ、あるよ。」

ガジェットは今回の襲撃で君にも狙いを何度も定めてきた。スカリエツティが君の
ことも狙っているのは確かなことだ。

だから今回はそれを逆手にとつて利用させてもらう」

「それって、やつぱり…？」

アリシアもなんとなく先が予想できたのか少しばかりげんなりした表情になつてい
る。

「うん。そのまさかだよ。アリシアをこういうのはなんだけど困にしてガジェットをお
びき出す餌になつてもらいたいんだ」

「やつぱりそっか…」

「…こんな提案をした僕を責めないんだね？」

「そりゃあ少しばかりはムカツときたけど、大丈夫。ヴェロツサがしっかりと私のことを守ってくれるんでしょ…？」

それでヴェロツサは少しばかり不意を付かれたが、すぐにニヤツと笑みを浮かべて、「当然さ。君は僕が責任を持って守るよ」

「うん、期待してるよ…？」

アリシアは少しばかり頬を赤く染めながらヴェロツサにはにかみ笑顔を向ける。

その笑顔を見てヴェロツサはというと、

（その笑顔は反則だよ？　アリシア）

そう言葉には出さずに代わりにアリシアの頭を撫でるのだった。

「ふあつ！　もう、ヴェロツサ！　また私の事を子供扱いする！」

「いやいや、君が可愛いのがいけないんだよ」

「も、もう…言葉がうまいんだから…」

それで二人はイチヤイチャし始めようとするが、

「おっほん！」

そこで第三者が割り込んでくる。

「しゃ、シャツハ…」

「シャツハさん…」

そこには少し恐い笑みを浮かべているシャツハの姿があった。

シャツハは人差し指を立てながら、

「ロツサ？ それにアリシアさん？ 今回はじゃれ合うために集まったわけではないんですよ？」

こんな時までいちやつく暇があるのでしたらスカリエッティのアジトを見つける作戦でも立てましょうね？」

「……………小姑シャツハ」

「ロツサ…？ 今、何か言いましたか？」

「いえ、なんでもありません…」

シャツハの睨みにヴェロツサはあえなく沈黙した。

常日頃からの行いでパワーバランスはあきらかにシャツハに優勢であるために逆らえないのだ。

それで仕方なくヴェロツサとアリシアは今回は諦めて真面目に話を再開するのだった。



機動六課本部が壊れた隊舎からアースラへと移されて数日が経過した。

依然、手がかりは掴めずに、しかしシホ達は来るべき戦いのために鋭気を養っていた。

デバイスルームではシャーリーとすずかの二人が大破したアウルヴァンデイルを始め、各デバイスの点検・メンテナンス・改修作業を行っていた。

その場にはレンの姿もあつた。

「…アウルヴァンデイル、かなり派手にやられちゃったね」

「はい…。トレディの武装、クラツシャーバイト…。」

かなり破壊力がありませんでした。まさかアウルがたった一回の攻撃であっけなく噛み砕かれるなんて思いませんでした」

レンは悔しそうに拳を握る。

その気持ちはすずかとシャーリーもわかるためにどうかしてやろうという気持ちになつていた。

「それじゃレン君。アウルヴァンデイルだけど私とシャーリーさんの二人で強くしてあげよつか？」

「強く…?」

「そう、今度こそレン君が守りたいと思う人達を守る力を…。レン君が望むなら私達

は協力するよ？」

「さすがの言葉にレンはさらに拳に力をこめる。

そして、

「お願いします。すずかさん、シャーリーさん！ もうアウルが砕かれる姿は見たくありません。僕自身も心を折られないようにアウルと一緒に強くなります！」

「よく言ったよ、レン！」

「うんうん！ 強くなったね！」

「そうですか…？」

「すずかとシャーリーに褒められ、照れながらもそれでレンは思う。

「僕が強くなったのはギンガさんの言葉があったから…。」

あの言葉がなければいまだに弱気なままだっただろうと。

そしてまだ改修が完了していなくて傷が残っている待機状態のアウルを見やりながら、

「アウル…、強くなろう。僕達二人で」

《はい。今度こそ私の力を示します。》

「そして必ず救いましょう、マスターの姉君を…」

「うん！」

アウルはレンの気持ちに共感したのかAIながらもレンの気持ちに応えた。

少なからずアウルの中で自己の意思が確立してきた証である。

この調子なら将来はなのはとレイジングハート並みのコンビになっていけるだろう予感を期待させられる、とレン達のやりとりを見守っていたすずか達は思うのだった。しかし、ここでシャーリーが変な空気を纏いだしながら小声ですずかに話しかける。

「……………あ、すずかさん」

「……………なに？ シャーリーさん？」

「……………ついでですからスバルのマツハキヤリバーとギンガのブリッツキヤリバー、それにテイアナのクロスミラージュ…ファイナルリミッターを解除するついでに魔改造しません…？」

「……………面白そうだね。うん、それじゃやつちやおつか」

ここにきて変な案を言い出すシャーリーにすずかも乗り気で承諾し、デバイス達は強化される運命になってしまった。

さて、どんな強化をされるのか楽しみであり恐怖でもある…。

ついでに言えばそれを聞き耳を立てて聞いていたレンとアウルヴァンデイルはとうと、

「…今更だけど、アウルの事が心配になってきたよ」

《…大丈夫です。無事に帰ってきます、マスター》

二人はそれで心が震えていた。

アウルヴァンデイルに関しては恐怖心を覚え始めてきていたり…。



トレーニングルームでは剣の群れを空中に浮かせている士郎と、ストームレイダーを構えているヴァイスの二人がとある二人に目掛けて標準を合わせていた。

「…では、いくぞ。スバル、ティアナ！」

「本気で当てに行くからな？ 覚悟しろよ？」

「はい！」

そして士郎の全投影連続層写ソードパレフルオーブンが大声で気合を入れている二人に迫る。

まずスバルはその機動力を生かしてなんとか剣の群れの合間を縫って避ける。

当たりそうなものにはリボルバーナックルで逸らすや弾くなどの行動をして致命傷は避けている。

しかし決してティアナにまで剣の群れを届かさなないように配慮している。

とうのティアナはというとスバルの直線上の背後で魔力弾を生成してタイミングを

狙っている。

だがそう簡単に事は運ばずに士郎とは違う場所から狙っているヴァイスが精密射撃を繰り返している。

そのたびにティアナは反撃をして集中を切らされるといふ事を繰り返していて魔力弾を練れないでいた。

士郎はそこを突いてブレイドテミスのボウフオームで魔力矢を生成し、

「全投影連続層写よりこちらの方が得意だぞ！ フレイムアロー・ガトリンググシフト！」
ソードバレルフルオープン
 炎が燃え上がる矢が複数放たれる。

その正確無比な矢は二人の急所に次々と吸い込まれていく。

肩や膝、お腹などに避けることもできずに魔力矢は当たっていき、

「ぐっ!!」

「ツー！」

二人は苦悶の声を上げて苦痛で表情を歪める。

追い討ちをかけるようにヴァイスの精密狙撃がまた命中していき二人はダウンする。

「…どうした？ この程度の攻撃も避けられないのなら、戦闘機人戦では苦戦は必至だぞ？」

「まだ、まだ…！ 大丈夫です!!」

「あたし達はまだやれます！」

スバルとティアナはすぐに立ち上がって復帰してくる。

「スバル！ クロスシフトA！」

「了解！」

ティアナの命令とともにスバルが士郎に突撃を執行してくる。

士郎は「自滅覚悟か……？」と眩きながらもガトリングシフトを放つ。

それはすべてスバルの体に命中——…しなかった。

いや、命中したにはしたがそれはティアナの幻影だったためにスバルの姿は掻き消えてしまっていたのだ。

「どこにッ!？」

「ヴァイス！ 後ろだ！」

士郎はともかくヴァイスは居場所を特定できなかったために判断が遅れてしまった。

「どっせいッ！」

「ぐわっ!？」

スバルの鋭い拳がヴァイスの腹に吸い込まれていき、アウトレンジ戦法を得意とするヴァイスは反撃もできずにその場に沈む。

沈む際にヴァイスは、

「やっぱ、機動力の塊のスパル相手はきついつす…」

と、泣き言を吐いていた。

「ふっ…ヴァイスを沈めたところでいい気になるな？　ここからが本番だ」

士郎がボウフオームでガトリングシフトを繰り返しスパルの接近を許さない。

スパルは矢に当たらないように何度もマツハキャリバーを駆使して避けきる。

シールドやガードを駆使して当たりそうなものはやはり弾くなどで対応している。

（ふむ…避けるものは避ける。当たるものには必ずガードを発動して防ぎきる。なのは

嬢の教えがよく刻まれているな…なのは嬢が見れば喜びそうな成長した姿だ）

さらに、と…士郎は気づいているが、あえて見逃しているティアナの行動を見やり、

（そろそろか…）

士郎がそう思った瞬間、

「スパル！　後退!!」

「了解！」

スパルがウインググロードを展開してその場を離れた瞬間、

「クロスファイヤー…シユート!!」

たくさん展開したクロスファイヤーが士郎に向かって放たれる。

士郎は想定していたためにすぐにガトリングシフトで向かい撃つ。

そしてすべて衝突し、相殺し合って煙が立ち込める。

しかし魔力反応が落ちるどころかさらに上がっていった。

煙が晴れた先には二丁のクロスミラーージュを両方構えて、

「必殺！ フアントムブレイザー!!」

遠距離狙撃砲がビームとなって士郎に向かってくる。

あれを相殺するには私の方の火力が足らんな…と心の中でそうごちる。

ゆえに士郎の防御の奥の手を出した。

「――――I a m t h e b o n e o f m y s w o r d ―――…
 熾^{ロ!}天^ア覆^イう七^アつの円^ス環^ス!」

七枚の花弁が咲き誇り、ティアナのフアントムブレイザーは鉄壁の防御の前に威力をなくして完全に防がれてしまった。

「す…:…:ティアナの奥の手をなんなく防いじやった」

避けた後に事態を見守っていたスバルはその光景に驚いていた。

ティアナも防がれてしまって、さらにフアントムブレイザーに魔力を注ぎ込んだために荒い息をしながら地面に両手を着いていた。

「はあ、はあ…:やっぱりこれも通用しませんか」

「まだまだ喰らうわけにはいかんからな。何事も高い壁でいるべきだと思っ…:」

しかし、最後は後先考えずに撃ってきたな」

「いえ、結構必勝パターンはあったんですよ？ その証拠に…」

ティアナが「ほら」と言いながら士郎の背後に指をさす。

士郎も釣られて見てみるとそこにはスタン性の設置魔力弾が置かれていた。

それに士郎もなるほどと感心した。

「…先ほどの攻撃はこれの設置をするための罠ということか。切り札まで使い捨てにするとは恐れ入ったぞ」

「ありがとうございます！」

「いてて…おう、ティアナ。これなら奥の手の『サードモード』も使いこなせんじゃねーか？」

スバルの一撃を受けて倒れていたヴァイスが起き上がってきてそう話を続ける。

しかし、ティアナは少し不安そうな表情をしながら、

「…まだ完全に使いこなしていないサードモード…あたしが使いこなせるでしょうか？」

「ばあか…。卑屈になりすぎだ。今のお前なら必ず使いこなせるさ。さっきの遠距離狙撃砲がいい証拠だ。あんなもんを撃てればもう資格は十分だぜ？」

「その通りだ、ティアナ。もつと自信を持って。シホにも教えてもらったのだろう…？」

「！」

それでティアナはシホに教えてもらった言葉を思い出す。

「はい！ 常にイメージするのは最強の自分です！」

「分かっているのならばいい。そしてイメージしろ。ソードモードを使いこなす自身の姿を……」

士郎にそう言われてティアナは目をつぶりイメージした。

スバルを遠距離から守る自身の姿を。

数秒してティアナは目を見開き、

「はい！ 必ず使いこなしてみせます！」

「その意気だ」

「ティアア！ あたしもティアと一緒に頑張るよ！」

「だー！ だからって急に抱きつくな!!」

勢いで抱きついてくるスバルの顔を引き剥がすティアナの表情には気負いなどは見られないように士郎とヴァイスは安心して見守っていた。

「ほら。そろそろすずか嬢達にデバイスを預けてこい。フルメンテナンスをする話だろう」

「はい！」

スバルとティアナの二人はそれでトレーニングルームから出て行った。

「…さて、こんなもんで大丈夫っすかね」

「大丈夫だろう」

「士郎の旦那がそう言うなら大丈夫そうっすね。ところでエリオの方は今どうなってるすか…？」

「あまり構ってられないフエイト嬢の代わりにランサーがさらに槍の修練を仕込んでるところだ。シグナムとも打ち合っているようだからあれも成長するぞ」

「成長が恐ろしいっすね…」

「だな」

士郎達は成長期は恐ろしいな…と呟いているのだった。



アースラの医務室ではシャマルがシホの骨折した腕と、退院したばかりのヴィータの背中の傷を見ていた。

「…どうだ？ シャマル、あたしはもう大丈夫だけど…」

「まだ安静ね。いざって時に全力で動けないんじゃないやヴィータちゃんも不満でしょ？」

「ま、そーだな…」

「私の腕の方はどうなっていますか…?」

「待ってね、シホちゃん」

シヤマルが検査機器でシホの腕を見る。

しばらくして、

「うん…。もう大丈夫みたいね。アヴァロンが骨折にはあまり効果を発揮しないことが分かってからすぐに治癒魔法をかけて癒していったからなんとか動かす分には平気よ。完全治癒まで後は二日くらいね」

「ありがとうございます。二日か…」

「シホ…」

そこにヴィータがシホに話しかけてきた。

「ん…? なに、ヴィータ」

「うん。あのな、なのは、オリヴィエ、ランの三人…拐われちゃったよな」

「そうね…」

「もつと注意していればよかったって思ったことが——」「はい、そこまでよ……なんだよ。最後まで言わせろよ」

「ヴィータの泣き言なんて聞きたくないわ。鉄槌の騎士ヴィータはすぐに泣き言を言う

ほど弱くはないでしょ？ 弱音を吐くくらいなら『なのは達はあたしが救う！』くらい言うくらいがちようどいいし、それにヴィータらしいわ」

「そ、そうだよな！ あたしとした事が、少し弱気になってた！」

「その意気よ。私も、その気持ちでいるから平気なのよ」

「あつ…」

ヴィータはそこで思い出す。

自分以上に家族を数人も拐われたシホの方が辛いはずだということ。

「ごめん、シホ…」

「今度は何に對しての謝罪…？ ま、ありがたく受け取っておくけどね。それじゃ私は部屋に戻るわ。静養するのよ、ヴィータ」

それでシホは医務室から出ていった。

それを見送ったシヤマルとヴィータは、

「あいつが一番辛いはずなのにな…」

「そうね…シホちゃんは弱気な姿を見せないから」

「多分、戦いは近いと思うんだ。だからなのはの背中では守れなかったけど、シホの背中ではあたしが守るぜ！」

「うん。お願いね、ヴィータちゃん」

「おう！」

医務室を出ていったシホは自室に入ろうとした時に、

「シホちゃん……」

「お姉様……」

すずかとフィアットの二人に呼び止められた。

「すずかにフィア。どうしたの……？　もう夜だから眠りましょう？」

シホがそう言うが二人は少し決意のこもった目をして、

「シホちゃん、お願いがあるの」

「お姉様、お願いがあります！」

「な、なに……？」

二人の気迫に押されてつい何事かと思うシホ。

「こんな時にこんな話は変だと思うの。でも、言わせて……」

「お姉様。私達と正式に『パス』を繋ぎましょう」

「えっ……？……？」

二人の言葉にシホはしばし言葉を失うのだった。

第一百五十四話 『決戦への誓い』

Side シホ・E・S・高町

「——それやから、これからの方針は……」

はやてのこれからの行動方針内容が話されていていっている中、私は少し、というか、かなりぼーっとしていた。

なのはとオリヴィエ陛下、ラン：私の家族と言ってもいい人達が拐われてしまっているこんな状況だから集中しないといけない。

なのに、雑念が何度も頭に浮かび上がりなかなか集中できないという悪循環……。

二日前の夜にあつた出来事を思い出すとすぐに顔が赤くなってしまうというものだ。

「シホ……？ シホ……？」

そこにフェイトが苦笑いを顔に浮かべながら私に小声で話しかけてきた。

冷や汗も垂らしているようでなぜか不安感を誘う。

「……………ん？ なに、フエイト？」

それで私も小声で対応する。

「…なにをそんなに考え込んでいるかわからないけど、はやてがすごい形相で睨んでるよ……？」

「あつ……」

「……………」

見ればはやてがいい笑みを…具体的に言えば怒り出す一歩手前の笑みをその顔に出していた。

「だからな？ シホちゃん……」

「は、はい……」

つい姿勢を正して立ち上がり敬礼をしてしまった。

はやてのその笑みには条件反射で逆らってはいけないという気がするからだ。

「これからの私達機動六課の重要な行動方針の説明をしている最中に、なんで気持ちがあ上の空なんや……？ ん？」

「そ、それは……」

「それともなにか思い出しとるんか……？ たとえば、二日前の夜のこととかなく」

「ッ！」

はやてはニヒヒツと、悪い笑みをしてそう言ってくる。

「……………痛いところを突いてくる。」

見れば近くで座って聞いていたフィアとさすがが二人して、頬に両手を添えて「いやん♪」という感じにしている頬を赤く染めている。

二人とも少しは隠す努力をしてください…！ お願いだから！

「…え？ 二日前になにかあったんですか、シホさん？」

私はずかしくフィアの二人にそう念じている一方で、なにがあつたのかまったく知らないレンが純粹な眼差しで私の方に顔を向けてくる。

いや、レン。今はその汚れていない無垢な表情は私の心に堪えるからやめて…。

「シホさん、なにがあつたのかな、ティア…？」

「…あたしはなんとなく予想できるけど、だけと言わないでおくわ。子供も数名いるわけだし…」

「……………」

生ぬるい表情を浮かべているティアナがスバルにそう言葉を返していた。

エリオとキヤロはすでにハテナ顔である。

「フェイトさん、私もなんとなくですがわかりました。ついにシホさん達は……………なんですね？」

「うん。そうみたいだね。やったね、すずか、ファイアット」

「うん！」

「はいです！」

前日に病院から退院してきてアースラに移動してきたギンガはわかつたらしい。

やっぱりスバルとは違ってギンガは優秀ねえ。今はその優秀さが憎らしい…。

フェイトもフェイトで二人に「頑張ったね」とばかりの表情で言葉を贈っていた。

「…堕ちたな、シユバインオーグ。ふっ…」

「おい、シグナム。それはどーいう意味だ…?」

「言葉通りだ、ヴィータ」

シグナムがニヒルに笑い、ヴィータは思考がお子様（酷ッ！）なので分かっていない

ようである。

「奏者は余とは、してくれなかったのだ…」

「はあ…大丈夫ですよ、ネロ。そのうちまた機会はいくらでもありますから」

「…うむ、そうだな。ならば暇ができたら奏者を誘うとしよう！」

「ふう……………疲れますね」

ネロが落ち込んでいる中、アルトリアがため息をつきながらネロを宥めている。

それでネロは気持ち復帰しようだ。

そしてアルトリアから深くため息をついた後、私に念話を送ってきて《シホ、どうしてネロも呼ばなかったのですか…？》という追求の意味もかねたセリフが聞こえてくる。

いや、なんていうか、あれはあの場の二人の勢いに負けたからです、はい。

「ククク…シホの嬢ちゃんもやっぱり、中身はあれだなあ〜」

「やりましたね、スズカ」

ランサーは見透かしたように目をつぶりながら笑みを浮かべていて、ライダーはすずかの勇気を賞賛していた。

それぞれが各自で言いたい放題であるこの状況。

もう、穴があつたら入りたい気持ちに駆られる。

どうしてこんなにみんなに知られているのかというと、やはり二日目に遡る。

それで私は回想をする。



——二日前。

…どうしようか。

昨日のすずかとファイアの大胆発言から始まり、あれよあれよという間に事が進んでしまった。

イリヤも積極的に表に出てきて『擬似男〇器製造法』を二人に嬉々として教えている始末であった。

そして昨夜は………なんというのでしょうか。

私としても、すずかとファイアとしても激しい夜を過ごした記憶が脳裏に鮮明に残っている。

決戦前にパスを強固なものにしておこうという提案だったんだけど、早まったかなあ…、と思うことしばしば。

そう何回も私が考えているのは、現実からの逃避であつても、そうしていたい。

なぜかつて…？

それは翌朝…つまり現在の朝からなのだが、

「ふふふ…。シホちゃん、大好きだよ」

「お姉様、大好きですよ」

そう、すずかとファイアの二人がベッドの上でシーツを体に巻いているだけの状態で私の両腕を自分の腕を回してがっちり組んで占領している事態になっている。

この二人の態度が私の部屋のなかだつていうのが幸いなのかどうかは、わからない…。

「お姉様の…とても遅しかったです！ ああ…思い出しただけで頬が緩みますう」

「シホちゃんつてやつぱり元・男の子だったんだよね。昨夜はすごかったよ…？」

「う…」

両サイドからそう甘い声で話しかけられて私は顔がゆでダコのごとく顔が赤くなつてきているのだろうか？

「やつぱり、恥ずかしいわね…」

「恥ずかしかることなんてないよー」

「そうです。お姉様はもとは男性なのですからむしろ正常なのです」

そう言つて二人はさらに抱きついてきて離してくれない。

そんな事をしている時だった。

部屋の外から、

『シホちゃん、ちよつとええか？ 話があるんやけど…』

この声は…!?

「は、はやて!?!」

外からはやての声が届いてきた。

やばい。こんな現状を見られたら色々な意味でやばい！

『どないしたん…？　なんか妙に焦りのこもった声やね？』

「な、なんでもないわよ？　そ、それよりどうしたの、はやて？」

なんとか落ち着いて対応してはやてが中に入ってこないようにする。

今のうちに。

《すずか、ファイア。なんでもいいから服を着て！　時間を稼ぐから…！》

《は、はいです！》

《わ、わかったよ！》

すっかりとパスが繋がったことによつて行使可能になった魔術のラインによる思念通話を試みる。

幸い私はもう服は着終わった後だったからなんとも言い訳できよう。

すずかとファイアの二人も事態はしっかりと分かつているらしく服を着ようと試みているけど、

『なんかわからんけど、ちよつと見てもらいたい案件だから、中に入るで…？』

「ちよつ!!?　まつ!!」

私が直様に静止の声を掛けようとするが時すでに遅く、扉は無情にも「プシュー」と開かれてしまった。

そしてはやては私の部屋の中の光景をその目に映したのだろう。

私はなんとか制服の姿だが、さすがとフィアはまだ下着だけのあられない姿であった。言い訳不可能の状況である。

それで一瞬、はやては目を見開いて呆けた表情をする。

そして私達全員の時が止まる。

止まった時間の中だけで時計の針の音だけが「カチツ、カチツ」と時間の進みを正確に刻んでいる。

「……………」

「……………」

どれくらい時間が経っただろうか？

数時間…？ 数分…？ 数秒…？

実際はそんなに時間は経過していないはずなのに、それくらい経過したような気分にとさらされる。

そして、時は動き出す。

「…ふふふ。クスクス笑ってゴーゴー♪」

と、どこかで聞いたことがあるような意味不明な言葉を発しながら、はやては鼻血を垂らしてその場で気絶してしまった。

「…な、なんとかやり過ぎさせた？」

「そ、そうですね」

「うん…」

私達が後でごまかしてどうにかなるだろうとホツとしている時だった。

「あ、主!? どうされたのですか!？」

どこからかはやてのピンチに駆けつけたシグナムが現れた。

気絶しているはやてを直様介抱しているシグナムは、フツ…とこちらを見て、

「…シユバインオーグ。主に刺激的な光景を見せるな」

「あ、すみません…」

つい敬語で謝ってしまった。

とうにかシグナムは冷静ね…。

はやてを抱えてその場を後にしようとしているが、去り際に、

「…しかし、やはり狼だったのだな」

と、言い残して今度こそシグナムは去っていった。

私はそれで猛省しないといけないという気分にはさせられたのだった。



それで私達の関係が進んだことを知っているのは数名だが存在しているという事であった。

「…反省していますから、これ以上この話をほじくらないで」

「ま、ええわ。それじゃ私達のこれからの方針内容を言ってみ？ それが言えたら許したる」

「ええ。」

『私達は機動六課の方針は変わらずレリックの追跡、その過程にジェル・スカリエツティ一味と隻眼の魔術師一派がいるだけ。』

『そして誘拐されたなのは、オリヴィエ陛下、ランの追跡、保護をする』でいいのかしら…？』

「概ねオツケイや。だからみんな、気張っていこうな！」

「「「はい！」」」

はやての言葉に私達が大きく返事を返す。

だけど、そこでフェイトが口を開いて、

「でも、はやても色々は無茶はしたんでしょ？ 大丈夫…？」

「そこらへんは抜きなく大丈夫や。後見人の人達の黙認や協力はちゃんと固めてあるよ。安心してな。」

それに、ここで動けなきや最強戦力の塊と言わしめる機動六課の名が廃るといふも
や。

なのは隊長を除く隊長、副隊長陣、及びサーヴァント達はもういつでも動ける状態や。
だからみんな、いつでも動けるように待機しといてな」

「わかつたわ」

「それと…」

そこではやてはフォワード陣&ギンガのみんなに視線を向けて、

「フォワード陣のみんなのデバイスはそろそろ最終調整は仕上がっている頃やと思うん
だけど、そこらへんはどうや？　　すずかちゃん？」

「うん、はやてちゃん」

そこですずかが立ち上がり、各デバイスのデータをみんなに見えるように映し出す。

「マリーさんとシャリーさんと一緒に色々と魔改ぞ…ゴホンッ！」

すずかがそこで一旦、咳き込む。

言いかけていたけどほとんど聞こえていたので意味は為さないけど。

「改修作業の状況はまず、スバルのマツハキャリバーとギンガのブリッツキャリバー。

二機ともアウトフレームの装甲強化、魔力消費が1.4倍、本体重量が2.5倍に
なったよ。」

だから今まで以上に激しい動きをして全力機動を行っても耐えられる力を手に入れたよ」

それを聞いてスバルとギンガの反応は、

「すごい……！」

二人してその変化に驚いているようだった。

「どうかな……？ やれそう？」

さすがが不安そうにそう二人に問いかける。

それに対して二人は笑顔を浮かべて、

「これくらいなら上等です！」

「はい！ ブリッツキャリバーが強くなるのは私も嬉しいです。だから魔力消費なんて気にしません！」

「うん。よかった。それじゃ次はティアナのクロスミラージュ」

「はい！」

ティアナが力強く声を上げる。

「クロスミラージュだけど、まずキャリバーズと同じくアウトフレームの強化によって、ティアナの現状での限界以上の出力と魔力消費軽減の二点が実現したよ。

そして各モード全般にわたって精密度が増してティアナの思い通りに弾丸を放てる

ようにしたよ。

そして特徴的なのはモード3。これはティアナの腕次第だけど、なのはちゃんのレイジングハートのバスターモードかエクシードモード並の出力を出せるように調整したよ」

「そ、そこまで、ですか…?」

「うん。ここもやっぱり魔力消費軽減が手伝ってくれるから省エネでティアナに優しい設計だよ」

「ありがとうございます!」

「うん。それじゃ次はエリオ君のストラダー」

「お願いします!」

エリオがそれで立ち上がる。

「ストラダーだけど、より電撃を通しやすいようにお馴染むフレーム強化を施して、エリオ君の希望で追加した“ある技”を放つ瞬間だけ電撃放出量を3倍から4倍の威力を出せるようにしたよ」

「僕の希望を聞いてくれたんですね、すずかさん」

「うん。でも、戦闘時に使える回数は魔力消費も関係して一回が限度だからよく見極めて使ってね?」

「わかりました!」

「エリオ、その一回限りの一撃…精度を上げるために時間の限りできるだけ俺の槍術を教え込むからな?」

「お願いします、ランサーさん!」

なにやらエリオとランサーの間でなにか必殺技でも開発したらしい。

どんな内容かは私も聞いていないけど、それを使う機会はあるべくない事を祈りたい。

そして、案の定だがフェイトが心配そうな眼差しでエリオを見ている。

過保護なのはいいけど、あまり縛らないでね?

「そしてキャラ کوچャンのケリユケイオン、なんだけど…」

「どうしたんですか…? なにか問題でもあったんですか?」

「ううん…特に問題はないの。だけど他の子達に比べたらあまり変化は見られないかなって…。」

ブースト能力と龍魂召喚と龍騎召喚の全部をうまく使いこなせるように調整して強化したから強力になってはいるはずだよ、キャラ کوچャン」

「十分です。私はフルバックですからそれだけでも十分です!」

キャラは両手を胸の前に持ってきてギョツと拳を握り「大丈夫」とアピールする。

「ならよかった。そして最後にレン君のアウルヴァンデイル」

「どうなりました…？ アウルは復活しましたか？」

「うん。まずトレディって子の最大の一撃であるクラッシュャーバイトで砕かれた時の威力を計算したの。」

それでフレーム強化をして二倍くらいの強度を実現させたよ。だからもうそう簡単に砕かれることはないと思う。

後、リフレクションだけじゃなくてシールドアップソープも追加したの。

だからこれでさらにサードモードが有効利用できるようになったよ。

やっぱり戦闘始めは防御が主体になっているのは変わらないからそこらへんは心の片隅に置いておいてね」

「わかりました。アウル…頑張ろう！」

《はい、マスター》

画面越しに映し出されたアウルヴァンデイルと息を合わせて頑張ろうと誓うレンの姿を見て、

（成長したわね、レン。心も強くなった…もう、安心かな？）

私はそう思った。

「よし。みんなのデバイスは大丈夫そうやね。なら捜査開始は本日中を予定してる。出

動命令を待つてな。ほんなら解散や」

はやての声でみんなはそれぞれ会議室を出て行く。

だけど、そこにすずかが声を上げる。

「シホちゃん！」

「どうしたの、すずか？」

「うん…：デバイス関連の報告でまだ伝えていないことがあるの。例のカートリッジなんだけど…」

「完成、したのね…？」

「うん…。でも、やっぱりこれは最後の最後まで使わないでね？　これは体にどんな悪

影響を与えるかわからないから…」

すずかはとても不安そうにそう告げてくる。

私は、一回目をつぶり、そして開き、

「…大丈夫よ、すずか。私の切り札なんだからそう簡単に切ったりはしないわ。でも、やっぱり無茶しちゃうと思うからそこだけは今のうちに謝っておくわ」

「うん。なんてったって無茶が代名詞のシホちゃんだもんね。だから私が言えることはこれだけ…。無事に帰ってきてね？」

「ええ。なのはとオリヴィエ陛下、ランとともに全員無事に帰ってくるわ。約束する…」

私の本心からの言葉にすずかはやっと安心の表情になった。



それから私は士郎のところへと向かった。

そこにはヴィヴィオが一緒にいるからだ。

あれからヴィヴィオは少し落ち込んでいたけど、ツルギ君が励ましたおかげでどうにか落ち着いている。

そしてレイジングハートも一緒にいてもらっている。

私は部屋に寄って、

「ヴィヴィオ、いる…?」

「シホお姉ちゃん…?」

《シホ…》

そこではなにかヴィヴィオがレイジングハートに話し込んでいるようだった。

「シホお姉ちゃん、お願いがあるの…」

《シホ、お願いがあります》

「二人してどうしたの?」

ヴィヴィオはどうにも決心のこもった瞳で私を見てくる。

「レイジングハートに、私のありったけのなのはママに対する言葉を録ってもらったの」
《だから、私をシホと一緒にマスター救出に連れて行ってください》

「そう…」

ヴィヴィオもあれから色々と考えて、なのはに贈る言葉を考えたのね。

その気持ちを汲んであげるために、

「わかったわ。ヴィヴィオ、なのはママは必ず救出して帰ってくるからね。みんな無事
でね」

「お願いします、シホお姉ちゃん…なのはママを…」

それでヴィヴィオは涙を流しながら私に抱きついてくる。

それであやしなから、

「…レイジングハート。行くわよ。私達でなのは救出に！」

《はい！ マスターに私とヴィヴィオの言葉を贈るために…》

それで私はレイジングハートをポケットにしまい、

「行ってくるわね、ヴィヴィオ」

「うん！」

そんな時だった。

ちようどいいのかわからないけど緊急アラームの音が鳴り響いたのは…。
さあ、始めよう…。私達の反撃を。

第一百五十五話 『聖王のゆりかご、起動』

アースラの緊急アラームが鳴り響いている頃。

スカリエツティの配下であるナンバーズ達。

彼女達はレジアス・ゲイズ中将の地上部隊の切り札である魔導兵器・アインヘリアル三基をそれぞれ襲撃していた。

その中でアサシンの手により一人欠けてしまった為に、補欠要員ともいうべき人影がトレデイの隣にいる。

その彼女の姿はナンバーズと同じ服装を着用している。

そしてその手には青白い大剣であるデバイス、『バルムンク』が握られている。

トレデイの固有武装であるクラッシュシャーバイト経由でトレデイのIS『マインドハウリング』によって洗脳を受けてしまっているランの姿であった。

ランはバルムンクを強く握り、

「…敵魔導兵器、破壊します」

バルムンクはその青白い輝きを赤く染め上げて光の光剣を発生させる。

その真紅の光剣は何メートルもの長さへと伸びていき、そして、

「はあああああー！ー！ー！！」

ランは裂帛の叫びとともに巨大化したバルムンクの一刃をアインヘリアルへと振り下ろした。

そしてアインヘリアルはその巨体を真つ二つに切り裂かれて爆発、四散する。

そして役目を果たしたバルムンクはその巨大な光剣を収縮させてもとのモードの西洋剣に戻っていった。

「…任務、完了です」

無表情でランはトレディの後ろまで戻る。

「しつかし…こいつって意外に使えるツスね」

ランの戦果を魔導師達を倒しながら見ていたウエンディはそう呟く。

ウエンディのその手にはシホの黒鍵による投擲によって破壊されたはずのライディングボードが握られていた。

「……………でも、ウエンディのライディングボードが量産されていてよかった。

……………おかげでランさんの移動手段がデバイスによるブースター移動だけじゃなく

なった…」

「うはは…。数だけはあるっスからね」

ランは今はいライディングボードに乗って移動している。

そしてトレディに褒められてウエンディは上機嫌に笑う。

ただ、ライディングボードだけが量産計画があったというだけで他のナンバーズの固有武装は量産されていないのが不安といえど不安である。

だからシホに壊されたのがウエンディのライディングボードだけで運がよかったというべきか、どうなのかはわからない…。

「でも、さつきも言ったっスけど、そのランって子のデバイスがかなり強力なのは助かったっスよ。」

セツテが倒されたと聞かされた時はかなりびっくりしたっスからね…。

そのデバイスもランって子同様にドクターが改造しちやってA Iも封印されてるから本当の力は発揮できないけど…それでも充分セツテ分は働いてくれるっスからね」

「……………私としましては、ランさんにはこんな事をさせたくはありませんでしたが…」

トレディはそれで表情を俯かせる。

「仕方ないっスよ。あたし達は削られた分を補給できるほど人員はいないっスから使えるもんは使わないともったいないっス。」

トレディ姉はまだまだ迷いがあるね。人質をこんな事に使っているのかっていうね」

「………確かに、迷いはあります。ですがそれがドクターの望むことなら、従います」

「それでいいと思うツスよ？」

「………はい。ランさん、心苦しいですが、あなたの力、使わせていただきます」

「………」

ランは無言で頷きを返した。

そしてトレディ等一同は破壊されたアインヘリアルを後にするのだった。



それをモニターで見ていたウーノはというと、

「…各アインヘリアルは破壊に成功したそうです、ドクター」

「そうかい。さすがだね。素晴らしいね。」

もとは最高評議会が主導で進めていて、管理局が実用寸前までこぎつけていた技術だからね。

それを私が随分と時間をかけて改良してきた戦闘機人量産計画だからね。それくらい成果を出してもらわなければ困るというものだよ」

「はい。…それと撃墜されたセツテの代わりに補充要員の彼女ですが…」

「ああ。彼女の潜在能力は検査の結果、すぎまじいものがあつたからねえ…。」

機動六課は彼女の潜在能力を引き出す術を見つけていなかったようだが、私ならそれが可能だった。

ただ、残念だったのはいじれたのは彼女のデバイスだけだった。彼女自身はトレディがかたくなに拒否したのだから仕方がない」

「私の妹がすみません、ドクター…。」

「構わないよ、ウーノ。自己出張をするようになったのは私としても嬉しい誤算だからね」

スカリエツティは「くくく…」と笑い、トレディの成長を喜んでいる。

「さて、そろそろくらいかね？ 聖王の状態はどうなっているかね？ ウーノ」

「はい。現在、魔術師殿の手により玉座に座らされている状態です。やろうと思えばいつでもゆりかごの起動は可能ですよ。」

ドクターの夢がまた一つ、叶いますね」

「ああ、ゆりかごを見つけてからここ数年で聖王のクローンであるヴィヴィオを主体に置こうと考えていたが、サーヴァントとはいえ聖王本人がいる。」

これ以上に必要な人材はいない。だからヴィヴィオを隠れ蓑にしていつエースオブ

エースとともにオリヴィエを捕らえようかと計画を練ったものだ。

それも魔術師殿のお力添えで見事成功した。

だが、夢の始まりはここからだ、ウーノ。古代ベルカの叡智の結晶……ゆりかごの力をもつてここから始まるのだよ。

誰にも邪魔されない楽しい夢の始まりなのだよ」

スカリエッティは両手を空に掲げて恍惚の表情をその顔に刻むのであった。

ウーノもそれを聞いて微笑みを浮かべていた。

だが、その時だった。

警報の音が鳴り響いたのは……。



S i d e アリシア・T・ハラオウン

「どう？　ヴェロッサ……？」

「どうですか？　ロツサ？」

フェイトとナカジマ三佐の108部隊の調査。

そして今回性懲りもなく私を付け狙って次々と出現してきたガジエツトの群れ。

それを倒しながらどんどんと増えていくガジエツトに当たりを見つけたと確信し、そして見つけた洞窟の穴。

そこにヴェロツサが獵犬：『無限の獵犬』ウシエトリヒヤークトを放ち調査してもらっている時だった。

ヴェロツサがニヤリと笑みを浮かべて、

「ここで間違いないようだね。僕の放った獵犬が一撃で潰されるほどのセキリユティだ。

だからここがスカリエツティのアジトで間違いないよ」

「よく見つけましたね、ロツサ」

シャツハさんがヴェロツサを褒めていました。

うー…私も褒めようと思ったのに、いつも先を越されちゃう…。

それで頬を膨らませていると、ふと頭に温もりを感じて俯かせていた顔を上げるとヴェロツサが私の頭に手を乗せていて、

「アリシアも頑張ってくれたね。君の協力も立派に貢献しているよ。えらいよ、アリシア」

「ヴェロツサ…！ ありがとう！」

私は思わず嬉しくなってヴェロツサの首に手を回して抱きついた。

ヴェロツサもまんざらではない様子で顔を赤くしていたのもっとアピールしようかなと考えていたけど、

「…お二人共。お楽しみのところ申し訳ないですが、ガジェットに囲まれています」

「ゲッ…」

いつの間にか私達の周りにはガジェットの群れが出現していた。

どれだけいるっていうのよー？

ま、いつか。

「…なら、いくよ。スピードスター！」

《はい！》

バルディツシユの後継機である魔術式デバイスであるスピードスターを握りながらバリアジャケットを纏ってガジェットをシャツハさんとヴェロツサと迎え撃つ。

「アリシアさん。あなたは一応護衛対象ですので私より前に出ないように…」

シャツハさんがヴィンデルシャフトを構えながら私の前に出る。

でも、

「冗談！ 私だって一人前に戦えるんだから！ 頑張るよ!!」

スピードスターに雷を纏わせて向かってくるガジェットを切り裂く。

魔術はAMFでは無効化できない。だから対応されていないんだから戦力には充分

なるよ。

私だって魔術事件対策課のエースなんだから！

「そうですか。ですが無理はなさらずに」

「うん！ シヤツハさん！」

「ロツサ？ 騎士はやてに連絡を！」

「了解だよ」

それでヴェロツサははやてに連絡を入れたようである。

私も頑張ろう！



Side 八神はやて

シャーリーの報告によってアインヘリアルが全基戦闘機人の手によって落とされたという報告を受ける。

まさかアインヘリアル全基を叩かれるとはな…。

それに前回の地上本部襲撃の時より戦闘機人の動きが早くなってる。

これはなにか裏技を使っているな…？

それに、戦闘機人の中にはランの姿もあったという。

いいように利用されとるんやね。可哀そうに…。絶対助けたるからな。

「動きが早いですね」

「そうやね。早めに手を打たんと取り返しをつかないことになるのは目に見えとるからな。隊長達の投入はしづらいな」

「市街地に移動中というのもきついですね」

「やな」

そんな時だった。

通信が入ってくる。

シャーリーが応答をするとヴェロツサがモニターに移りだされてくる。

普段の様子ではなくどうやら緊迫しているようだ。表情でわかる。なにか掴んだんか？

『はやて、ヴェロツサだ。スカリエッティのアジトを発見した。』

シャツハとアリシアが迎撃に来たガジエットを片っ端から片付けているところだ。

だがどうにも量が多い。僕達だけではアジトに乗り込むのは厳しい。

だから応援要員を願いたい』

なるほど。アジトを、ね。

「わかった。こちらからはフェイト執務官とランサーの二人を向かわせる！」

『了解！ こちらもなんとか持ちこたえてみせるよ！』

それでロツサとの通信は切れる。

「フェイト執務官とランサーさんは…」

私が二人に連絡を取り報告をしようとしたけど、

『わかってるよ、はやて。アリシアもアコース査察官と一緒にいるんでしょ？ だって

ら私達の問題も絡んでくる。だから私とランサーがスカリエッテイのアジトに行くの

には異論はないよ！』

「任せるで？」

『うん！』

それでフェイトちゃんはOKやね。

するとそこにシャーリーの声が響いてくる。

「はやて部隊長！ 地上本部に向かっている戦闘機人を含む人員の中にこの間のヴィー
タ副隊長と戦った騎士の姿が確認されました！」

「スカリエッテイの手札は全部投入してわけかいな。上等や。私達機動六課の底力、見
せたるで！」



Side レン・ブルックランズ

『廃棄都市からも別の反応を感知しました。これは戦闘機人！ さらに…！』
ルキノさんの言葉はあまり僕の耳には入ってきいていなかった。

だって、なんで戦闘機人、トレデイ達と一緒にラン姉さんが一緒に行動しているんだ
！

「ラン、姉さん…」

「レン君、しっかり…」

そこにギンガさんが僕に安心させるような声で話しかけてきた。

「きつと、ランは洗脳をされている。だから私とレン君の二人でランを助け出しましょう」

「ギンガさん…」

「…ね？」

いつも僕に勇気を与えてくれるギンガさん。

傷ついても僕の事を守ってくれたギンガさん。

そんなギンガさんに恩返しする時が今なんだ。

ギンガさんから聞かされたスバルさんとギンガさんのお母さんの話。

なら、ラン姉さんを助け出すついでにこの問題も一緒に解決しよう。

僕はもう弱虫ではいられない。強くならなきゃ！

だから僕は強気な表情で、

「はい！ 僕と一緒に戦いましょう、ギンガさん！」

そう返事を返すのだった。

でも、その時にギンガさんはなぜか僕の事を頬を赤くして見つめてきた。

どうしたんだろう…？

「ギンガさん…？」

「え？ あ、なに、レン君？」

「急にぼーっとしちやつて、どうしたんですか？ 顔が赤いんですけど熱でも？」

「い、いやなんでもないのよ！」

急に取り乱してしまっているギンガさん。

その姿に一瞬見とれてしまったけど今は気を引き締めよう。

「(ううー…レン君の顔をあまり直視できない。どうしちやつたんだろう？ 私…)」

ギンガさんはなにか考え込んでいるようだけど、一体…？

その時、ティアさんが僕の肩に手を置いてきた。

どうしたんだろう？

「レン、ギンガさんはね、なかなか強敵よ。頑張りなさい」

「え？ は、はい…」

まだその意味はわからなかったけど、とりあえず頷いておいた。

その意味はいつか気づくことはあるだろう。

でも、今はこの件は置いておこう。



Side シホ・E・S・高町

『さあ、見ているかい？ 私のスポンサー達、そして愚かで鈍足な管理局の諸君。偽善の

平和を謳う聖王教会の諸君。

見るがいい。これこそ君達が忌避しながらも喉から手が出るほど欲した絶対の力だ

！』

スカリエッツィの喋りを聞きながらも別モニターでアリシア達がいる場所でおそらくあの紫の髪の召喚師の使い魔達が地震を起こして、なにかが地面から浮かび上がってくる。

あれはまさしく、

「聖王の、ゆりかご……」

私の魂に宿っているシルビアさんの記憶通りの聖王のゆりかご……つまり現存しているオリヴィエ陛下の宝具がその姿を現した。

スカリエッツィがなにかを語っているがそんなものは私の耳には入ってこない。

だつてとあるモニターが映し出されてそこには玉座に涙ながらに座らされているオリヴィエ陛下……さらに鎖で吊らされているなのは姿が映し出されていたからだ。

私は思わず「ギリッ」と歯噛みする。

「なのは……！ オリヴィエ陛下……！」

「なのはママ……！」

私と一緒に映像を見ていたヴィヴィオが叫ぶ。

だけど今、私を取り乱して叫んでも意味はない。

だから、強く拳を握りながら、

「必ず助ける。だから……ヴィヴィオ、ママは必ず連れ戻すから、待っていてね！」

ヴィヴィオの肩に手を置いてそう語りかける。

「お願いします……！」

「ええ！」

ここに、またヴィヴィオとの誓いを交わした。

なのは達の居場所はわかった。

後は乗り込むだけよ！

第一百五十六話 『機動六課、出撃』

S i d e ラン・ブルックランズ

……私は、今、なにをしているのだろうか？

わずかに残る意識で隙間を縫う感じで外の光景を覗ける。
だが、ただそれだけだ。

私の体は、心は、自由に動いてくれない。

歯がゆい……。

シホさん、レン、みんな……。

みんなに私の不甲斐なさを謝りたい。

もつと、強く……。

あの魔術事件で家族を失ってしまい願った想い。

それをシホさんが叶えてくれた。

私は確かに強くなれたんだ、って実感も湧いてきていた。でも、それは思い上がりだった。

あんな洗脳で私の意思は簡単に操られてしまう…。

今も頭になにかの電波が聞こえてきて今のこの僅かな意識もまるで湖の底に沈んでいくように暗くなってくる。

(挫折してはダメだ…！)

心が折れてしまったら私は完全に敵…！ 트레이の操り人形になってしまう。

だから僅かな意識だけでも抗うんだ！

きつと、チャンスは来る。

その時まで完全に沈まないように頑張ろう。

それに予感がする…。

私の弟が、レンが私を助けてくれるかもしれないというそんな漠然とした想い。

いつまでもウジウジしていてシホさんや私の後ろにいつも引っ付いてきていた弱虫のレン。

でも機動六課に私とともに来て、強くなっていくにつれてそんな弱気な姿は減ってきていた。

だから期待しているんだ…。

きっと、弱さを克服してさらに先へと進むレンの姿を…。

だから、

(…待っている。待っているよ、レン。助けてくれることを、待っている…)

その一心を胸に秘めて私はまたこの電波に抗い続ける。



「……………ランさん？」

トレディは隣でライディングボードに乗って飛行しているランの微妙な表情の変化に気づいた。

だがそれだけである。

「……………気の、せいですね。……………私のマインドハウリングは意思を断ちます。だってドクターがそう作ったのですから…」

でもと、思う。

私達戦闘機人とは違って人間の意思は時にして思いもよらない力を発揮するという
ことを。

だからトレディはランの洗脳操作に使っている複数ある意識領域をさらに追加して

洗脳を強化した。

それによってランの表情からはもうなにも感じられなくなった。

(……………これ以上の洗脳はランさんの脳を壊しかねない。……………だからこれが限界ですね。謝れる立場ではありませんが、すみません、ランさん……)

トレデイがその表情に苦心を浮かべていると同じ地上本部班であるチンクが隣までやってきて話しかけてきた。

「どうした、トレデイ？ 表情が沈んでいるぞ。なにか悩み事があるのなら姉に相談してみろ」

「……………いえ、ただ時にして人は計り知れない力を発揮するとドクターに話をされた事があるのです。」

……………だから戦闘機人である私達にも感情があります。

……………だから、そのような力を出すことができるのかと……

「……ふむ。〃心〃の力か。姉はそんな光景は……」

見たことがない、とチンクは続けようとしたがそれはかつて戦ったゼストとの戦闘でゼストが死に際に対して起死回生の反撃をしてきた為に右目を負傷した事を思い出した。

「そうだな……。姉にはそういうものは理解できる。ゼスト殿のあの時の心は、強かった」

「……………」

いつの事を話したのかわからなかったのかトレディは首を傾げる。

そんなトレディにチンクは苦笑してトレディの頭を撫でながら、

「トレディ。お前にもいつか分かる時が来るかもしれないな。…そうだな。案外近いうちに分かるかもしれないぞ?」

「……………そうでしょうか?」

「ああ。姉の言うことだ。だから信じろ」

「……………はい。チンク姉様」

トレディはそれで瞳に力を灯す。

そして思う。

(……………レンさんならば、見せてくれるのでしょうか……………)

そう思うのだった。

それからウーノによりメンバー選別が話される。

まずウーノはドクター…つまりジェイル・スカリエツティとともにラボに入る。それをトーレとセインが警護。

『それと魔術師殿から一人援軍が貸し出されました。これで警護は完璧です』
援軍とはおそらく地上本部襲撃にて現れた謎のフードの集団だろう。

そこにセイインが手を挙げて、

「はい、ドクター。その魔術師さんの仲間は信頼できるんですか……？」

『おや、セイイン。魔術師殿の仲間を信じられないかね？』

スカリエツティがモニターに顔を出してそう言ってきた。

それに対してセイインはというと、

「んー…信頼できないかって言われると、そりや信頼しなきゃやってられないと思うんですけどー…なんかきな臭い、と言いますか…」

「あ、それはあたしも思ったツス」

ウエンディもそれには賛同のようでセイインに続く。

それにスカリエツティも苦笑を浮かべながら、

『大丈夫だよ。魔術師殿は私のれっきとした協力者だ。私が信じるのだから君達も信じたまえ』

「あー…まあ、ドクターがそう言うんだったら信じますよ？ うん」

「そうツスね」

すぐに沈静化した二人だった。

それでウーノは話を再開する。

クアットロとデイエチが聖王のゆりかご行き。

オットーがルーテシアの警護。

残りのノーヴェ、ウエンデイ、デイード、チンク、トレデイ…そしてランが地上本部行き。

…という事になった。

それから各自健闘するようにと声をかけたウーノだったが、ここでもやはりセインがまた手を上げる。

「あ、もう一つ」

『セイン。今日は質問が多いわね』

「ごめん、ウーノ姉。でもさ、もうゆりかごが動いている以上関係ないと思うけど、聖王のクローンであるヴィヴィ様はもう放っておいてもいいんですか？」

『そうだね、セイン。確かにひと時の間でも計画の中核を担っていたのは確かだ。』

だがね。もうクローンより聖王本人がいるのだから計画には彼女は必要はないのだよ』

「そっか。結構会うのは楽しみにしていたんですけどねー」

セインは残念がるがその顔には「ニシシ」と笑みを浮かべているのだった。



アースラでは艦長席に座っているはやてがカリムとともに話をしていた。

「…さて、状況的にはなつてほしくない状況にまでなつてしまうたな」

『ごめんなさい、はやて。聖王教会の、いえ私の予言の不手際だわ。』

あの予言はオリヴィエ陛下から聞かされていた対軍宝具である『聖王のゆりかご』だつて分かつていたのに、ゆりかごのありかまで探し出すことはできなかった…」

「それはしょうがないわ。すでにスカリエツテイの手に落ちていたんだから探しようがないと言うもんや。だから気に病んだらあかんよ、カリム」

『ありがとう、はやて…』

はやてが沈んでいるカリムを励ましていると、そこにクロノがモニター越しに姿を現して、

『割り込み失礼するよ、はやて』

「クロノく…いえ、クロノ提督。こんな時にどないしましたか？」

『事態は分かっているんだろ…？』

「当然や。目の前にすでにそれがあるんやからな」

『ああ、そうだな。本局はあの巨大戦艦…『聖王のゆりかご』を極めて危険なロストロギアと認定した。』

それで僕達はもう動き出しているところだ』

「それは当然といえば当然やな」

海の主力部隊がすでにミッドに向かっていているという報告を聞いて、はやてはひとまず保険ができたと思う。

『地上部隊と協力して事態に当たるとするよ』

「任せたよ」

『ああ。それで機動六課は動けるか…?』

「もちのろんや。もうみんなはいつでも出せる…。あの襲撃で奪われたもの、なにもかも取り戻すつもりや」

『そうか。なのは達を、頼んだぞ。はやて。それにユーノから伝言を預かっている』

「ユーノ君から…?」

『ああ、なのはを無事救出できたなら伝えて欲しい。『なのは、もう君を一人にしない。僕が君を守るよ…!』』ってな…。あいつらしくもない慌てようだったよ』

そのキザなセリフにはやては思わず「クスツ」と笑みを浮かべて、

「残念やけど、ユーノ君に伝えておいて。そのセリフは直接本人の前で言え、つてね♪」
『くつくつく。確かに…。承知した。伝えておこう。それじゃそちらの健闘を祈るよ、はやて』

「任せときー！」

それでクロノとの通信を切ると、はやては笑みを浮かべて、

「なのはちゃん……。ユーノ君の重い腰を上げさせるほど心配させたんやから、無事に帰ってこないと承知せんからな……？」

はやてがそう言葉を零し、さてと、とモニターを開き会議室にいる機動六課戦闘員一同へと通信を繋ぐのだった。



Side シホ・E・S・高町

『……というわけで、理由はどうあれ……レジアス中将与最高評議会はジェイル・スカリエツティを利用してしようとしたけど、逆に利用されて裏切られてしまった。それがまさに今の現状というわけや』

やつぱり、組織なんてそんなものね。探せばどこにでも闇は存在する。

最高評議会はジェイル・スカリエツティという魔物を生み出してしまった。

そして下克上をされてしまった。

まさに革命ね。

そんな計画にオリヴィエ陛下となのは、ランが利用されていると思うと腹が立つてくる。

『おまけでいまでも空にゆりかごは飛んでいて、地上ではガジェットや戦闘機人が闊歩している。それで地上の人達の平和を脅かしている。見過ごすことのできない事態や』
「そうね」

『だからなんとしてでも止めなあかん』

それで私達全員は頷く。

「ゆりかごには主力艦隊が向かっている。戦闘機人とガジェットにも各部隊が対応に当たることになっている」

フエイトがそう切り出す。

「だから私達は部隊を三つに分けて、行動しましょう」

私が続けてそう話す。

『まずスカリエツティのラボにはフエイト隊長とランサーさんが向かってもらう』

「任せて、はやて」

「マスターは俺がしっかりと守ってやるぜ！」

フエイトとランサーが力強い声を上げる。

「任された」

シヤマルさんとザフィーラも声を上げる。

『最後に、私を含むシホ隊長、アルトリアさん、ネロさん、ファイアット副隊長、ヴィータ副隊長はゆりかごに向かう！』

「わかったわ、はやて」

「任されました、ハヤテ」

「うむ。承知したぞ」

「なのはさんを助けにいきましょう！」

「そうだな。ファイアット！」

私達も元気に声を上げるのだった。

それから会議は終わり、それぞれが外に出ていく中、見ればフェイトの前にエリオとキヤロが集まって会話をしていた。

聞き耳を立てる気はないので私も出ていこうとすると、私の前にもレン…それとギンガがやってきた。

…ふむ、ここで話しておくのもいいかもね。

「シホさん…」

「ごめんね、レン。家族であるランを助けたのは私も同じ気持ちだけど、別々になっ

ちやつたから…」

「いいですよ。シホさんはなのはさんを助けに行つてあげてください。僕は僕でラン姉さんを助けます！」

「(ホントに強くなったわね、レン…)」

それで私はレンの頭を撫でながら、

「頑張るのよ。ランにあなたの言葉を届けるのよ。そうすればきつと、ね…」

「はい！ 頑張ります！」

「それと…」

私はギンガの方へと視線を向けて、

「ギンガ。レンの事、お願いね」

「はい、シホさん。任せてください。レン君は私が守ります！」

「それなら安心ね。任せたわよ」

「はい！」

それから少し時間が経過して降下ポイントに近づいてきていた。

その残りわずかの三分で私達とフワード陣は集まっていた。

私が代表して前が出る。

こんな時になのはならどんな言葉をみんなにかけるだろうか…？

いや、なのはを模倣するのではなくて、私自身の言葉をみんなに伝えよう。そう意気込み私はみんなに面と向かう。

「…さて、みんな、聞いて。今回の任務はかなりハードなものになると思うわ。

なのはとオリヴィエ陛下、ランが誘拐されたこんな時だからみんなは思いつめていると思う。だからまずは目を瞑って心をリラククスして」

そう言うతోフォワード陣は目をつぶり何度も深呼吸をしていた。

「…どう？ 肩の力は抜けたかしら？」

「「「「「はい」」」」」

「なら、まだ目を瞑っていて。そして瞼の裏に思い出して。今までの訓練を。なのはと私達が教えてきた指導を…」

すると少しみんなは苦い表情をする。

おそらく訓練の日々を思い出しているのだろう。

私としてもかなり苦しいものがあつたと思うからその気持ちはわかる。

「さて、思い出したところでもう目を開けていいわよ」

それで全員は目を開ける。

「みんなは挫折そうになったことも何度もあると思う。でも耐えてきた。そして強くなった」

のはいはずよ。だから…」

私は一度言葉を切り、

「みんな全員無事にまた集まれることを祈りましょう！ それじゃ健闘を祈るわ！ 私からは以上よ！ それじゃ機動六課フォワード隊、出動!!」

『はい!』

そしてみんなが出ていく中、スバルがその場に残って、

「あ、あの、シホさん！なのはさんの事をお願いします!」

「ふふ…言われなくとも。スバルの憧れのなのはさんは必ず助け出してくるわ」

「お願いします!」

何度もお辞儀をしてスバルは部屋を後にしていった。

そしてスバル達がヴァイスの代わりにアルトが運転するヘリで出ていった後、
「ほんなら、隊長陣も出動や!」

はやての声に私達は声を上げる。

降下ハッチが開いて私達は飛び出していった。

降下している最中でそこにカリムの通信が聞こえてくる。

『機動六課隊長、そして副隊長の能力限定、完全解除：はやて、シグナム、ヴィータ、シホ、フェイトさん、ファイアットさん：皆さん、どうか』

「しつかりとやるよ！」

はやてが答える。

「迅速に解決します！」

フェイトが答える。

「任せなさい、カリム！」

そして私が答える。

『はい！ リミット、リリース!!』

カリムの解除宣言に私の中で力が完全に解除された事を自覚する。

「アルトリア！」

「はい、シホ！」

さあ、今こそ完全解放された私の力を見せるとき、

「ユニゾン・イン!!」

制服姿から赤原礼装のジャケットを通り越してアルトリアの甲冑姿になりその手にエクスカリバーフォルムを携えて私は空を翔ける。

。靈体化しているネロが話しかけてきて、

《奏者よ。余を出すタイミングはいつでもよいぞ！ さあ、華麗に暴れようではないか！》

「そうね、ネロ！」

そしてゆりかごへと向かう途中でフェイトが近寄ってきて、

「シホ…。シホのアンリミテッド・エアのリミットブレイクはなのはのブラスター以上にとても強力…。だから最後の切り札として取っておいてね？」

「わかつてるわ。こんなものは使わないに越したことはないんだから」

私はそうフェイトに言いながらも心の中で、

（ごめん、フェイト…。多分使うことは決定事項。私のラストフォルムでならきつとできるはずだから…。無茶しちゃうと思うけど許して）

と、心の中で謝罪しておく。

「それと、なのはの事、お願いね。シホ！」

「任せて！ なのはは必ず救出するわ！」

「フェイトちゃん、そろそろコースが外れてまうで？」

そこにはやてがそう言ってきたので、

「うん！ わかった！」

「フェイト隊長、地上と空はあたし達に任せろ！」

「はい！ お姉様のために、このフィアット、本気を出させていただきます！」

「うん。それじゃお互い頑張ろう、シホ」

「そうね、フェイト」

私達は拳を合わせた。

それでフェイトはスカリエッテイのラボへと向かっていった。

そしてレイジングハートも、

《シホ、マスターのもとに！》

「ええー！」

そしてゆりかごに到着して私達は戦闘を開始しながら侵入経路を探りながらガジェットを倒していく。

「ストライク・エア!!」

風の衝撃波を幾度も放ち、

「ソードバレルフルオープン!!」

魔法の剣軍を展開し一気に放つ。

「ツ！ キリがないわね！ でも……！」

なのはとオリヴィエ陛下を救出することはもう決定事項なのよ。
だから、通させてもらおうわよ！！

あ

第百五十七話 『決戦（1） フォワード陣の戦い』

Side クロノ・ハラオウン

『…クロノ、聖王のゆりかごの詳細は今のところこれで全部だよ』

「わかった。感謝するよ、ユーノ。お前がいなかったらもしかしたら情報が伝わらずに後手に回っていたかもしれないからな」

ユーノからゆりかごの詳細を聞き、思わず歯噛みする。

二つの月の魔力が受け取れる位置まで到達してしまつたら、本格的に地上を滅ぼせるような攻撃が可能となる。

しかも空間攻撃も可能とするとは…。

これでは僕達の艦隊ともさしでやりあえるではないか。

「これではスカリエッティを捕まえてもゆりかごが止められなければそれですべてが終わってしまう…」

『そうね』

母さんも同様らしく相槌を打っていた。

そこにユーノと一緒にいるアルフが顔を出して、

『スカリエツティはフェイトと、それにアリシアが捕まえるよ！ だってフェイトは今までスカリエツティを捕まえるために頑張ってきて、アリシアもそんなフェイトを応援しながらも鍛えてきたんだから！』

アルフの力のこもった言葉に僕は「そうだな」と答える。

『なのはも、きつとシホが救ってくれるはずだ。僕は信じているよ。だってシホはいつも絶望的な状況を覆ってきたんだから』

「ああ。それにリミッターを完全解除されたシホには僕達の常識を覆す切り札がある。もしかしたら僕達が到着する前にけりをつけているかもしれないという楽観的希望も浮かんでしまうほどにな…」

僕その言葉に、しかし母さんが、

『でも、それだけシホさんはまた無茶をしてしまうということよね。無事に帰ってきて欲しいと思っているわ』

「そうだな、母さん。しかし大丈夫でしょう。シホには頼れる騎士二人と姉がいますから」

『アルトリアさんにネロさん、イリヤさんね。そうね、彼女達がいればシホさんのストツパーにはなつてくれるでしょうね』

「はい。だから今は現状出来ることは進めておきましょう。たとえ無駄に終わつてしまふと思えてもね」

僕はシホ達を、機動六課を信じているからな。

だから、頑張つてくれ。みんな。

僕は今はそれだけを祈るだけだった。



S i d e レン・ブルツ克蘭ズ

僕達が戦闘機人とラン姉さんを迎え撃つ地点まで向かう途中で先に志貴さんとアルクエイドさんが降りていった。

どうにも暴れてくるという。

それで到着ポイントまで後、少しというところでガジェットⅡ型に襲われていた。

でもアルトさんの飛行の腕でなんとか持ちこたえている。

「アルト！ ハッチを開きながら飛べるか!？」

ヴァイスさんがそうアルトさんに吠えた。

「はい！ ヴァイス陸曹、いけます！」

「上等！ 士郎の旦那！ 俺達二人で狙撃しますよ！」

「いい案だ、ヴァイス。私もそう考えていたところだが先に言われてしまったな」

ヴァイスさんの言葉に士郎さんはクツクツと笑みを零してその手にブレイドテミス・ボウフォームを構えてハッチが空いたのを見計らって、

「狙い撃つぜ！」

「射抜く！」

ヴァイスさんの狙撃と士郎さんの弓矢による射撃が背後に迫ってきていたガジェットII型を全部射抜いた。

「さつすがご主人様マスターです！ ますます惚れさせていただきますよー♪」

「しかし、本来Bチームである私とキャスター、ヴァイスがスバル達が心配となり残っておいてよかつただらうかね？」

「いいんじゃないっすか？ あつちは志貴さんとアルクエイドさんだけでガジェットごときに遅れは取るとは思えないっすから」

「確かにな」

「腕を切られても平気な顔でいるお方に心配は不要ですよ、ご主人様^{マスター}」

微妙に毒を吐いているキャスターさんの言葉はこの際、聞かなかったことにしておこう。

アルクエイドさんが聞いたら怒って反転しちゃいそうだし…。

「みなさん！ そろそろ現場に到着します！ どうかお気を付けて！」

アルトさんの声に僕は構える。

それでティアさんと会議を開始する。

「さて、それじゃ事前にチェックよ。ここは最前線^{フロントライン}…だからあたし達はなんとしてでも戦闘機人を足止め、さらに捕縛しないとイケない」

「首都防衛隊の人達はAMF戦闘や戦闘機人との戦闘は慣れていないからね」

「そうね。だから私達で止めるわよ、スバル」

「うん、ギン姉！」

「僕達も精一杯頑張ります！」

「はい！ そしてランさんが来たら即座に捕縛して洗脳を解く事が最優先です！」

「うん。ラン姉さんは僕に任せて。僕が強くなったところを見せるんだ…そしてさらに先に行く！」

僕がそう宣言する。

それにギンガさんが僕の肩に手を置いて笑みを浮かべながら、
「もうレン君は充分強くなつたわよ。それはもうみんなわかっているから…だから絶対にランを助けましょうね」

ギンガさんの言葉にみんなの顔を見回す。

すると全員が無言で頷いてくれた。

うん。もう弱気な僕とはお別れだ。

だから…！

「皆さん、頑張りましょう！」

「……うん（おう）！」「……」

それで僕達はヘリのハッチから全員飛び出した。

バリアジャケットを纏い、僕はすずかさんから移動用の形態も聞かされていたので使用する。

「アウル！ フライトシールドを！」

《はい！ フライトシールド起動》

それに従って僕の片方の盾が腕から外れて巨大化し僕一人が乗るのに十分なほどの広さとなり浮かび上がる。

フライトシールドシステム。

すずかさんが新たに開発した移動&飛行用の魔法円盤であるこの装置はアウルの魔法改造の一つの成果である。

これは僕の魔力で浮かんでいるのでガス欠になったらピンチになるけど移動する際だけの魔法なのでそんなに魔力使用量も激しくない。

見れば、フリードも竜魂召喚で巨大化しエリオ君とキャロちゃんを乗せて飛行している。

スバルさんとギンガさんもマツハキャリバーとブリッツツキャリバーを駆り走っている。重くなったって聞いたけどそんな気配は見せていないので頑丈だな、と思った。

唯一走りでティアアさんがついてきているけどそれでも充分早い。常日頃からの体力訓練の賜物だね。

士郎さんとキャスターさん、ヴァイスさんはヘリからは飛び降りずにヘリの警護をする、そしてもしもの時のための予備戦力というらしい。

だから僕達だけでやらなきゃいけないんだ。頑張ろう！



Side トレディ

『……チンク姉様。あちらから数人かが向かってくるよ』

オットーの通信に私は即座にレンさん達が来たと思った。

「ケツ！ 上等だぜ！ チンク姉、セカンドはあたしが相手をするぜ」

「気をつけるんだぞ、ノーヴェ。正面から迎撃してくるということはそれだけこちらに勝つ自信があるということだ」

「大丈夫だつて！」

「そんならノーヴェと一緒にあのオレンジとも相手をするツスよ。デイドはどうするツスカ？」

「でしたら私も一緒に付き合わせていただきます」

……セカンドと幻術使いの子にはどうやらこの三人が挑むようですね。

姉としましては心配ですが、頑張ってもらいたいですね。

「ところであのちびっ子二人と飛龍は…」

ウエンデイがそうオットーに聞くとオットーが通信で、

『あの二人はルーテシアお嬢様が相手をしてくださるそうです』

「……………でしたらレンさんのお相手は私とランさん」

「ファーストの相手は姉の役目ということだな。あの時の決着をつけるのもいいかもしれないな。ではいくぞ！ 姉に続け!!」

「「「おう（はい）！」「」」」

チンク姉様の言葉とともに私達は挑んでいった。



S i d e ギンガ・ナカジマ

キヤロとエリオ君がああの時の紫の髪の召喚士の少女を追っていったところで、私達は今離れるのはまずいと思った。

でもその時、私とレン君・スバルとティアナの間にあの時の眼帯少女のナイフが突き刺さり爆発を起こした。

それによってスバルとティアナとは分かれてしまった。

そして私とレン君の前には眼帯の少女と、あの時のトレディという少女、そしてランの姿があった。

その瞳には光が宿っていないのでやはり洗脳されていると踏んだ。

私達で助けないといけないわね。

「ラン姉さん！ きつと助けるからね！」

「……………」

レン君がそう叫ぶがランはその表情を一ミリも変えずにバルムンクを構えて切っ先をレン君に向けてきた。

「やっぱり、やるしかないんだね。ラン姉さん」

「トレディ。ファーストの相手は姉が務める。だからそちらも二人がかりで頼むぞ」

「……………はい、チンク姉様」

そう、あの子の名前はチンクというのね。

「IS・ランブルデトネイター！」

戦闘機人のテンプレートが光り輝き、先ほどと同じように私とレン君の間にナイフが刺さり分断される。

そして私にはチンクが迫ってきて、

「あの時は名乗れなかったが私の名はチンク！ 今度こそお前を捕獲する！」

「こちらこそ！ 私はギンガ・ナカジマ！ あなたを捕縛します！」

そして戦いが始まるうとした時にティアナから念話が伝わってきて、

《みんな！ 無理に倒す必要はないわ。少しでも時間を伸ばして時間稼ぎをして！ それなら少しは奴らの行動を遅らせられるから！》

そう伝わってくるが、

「フツ…浅はかだな。その程度で我らを倒せると思つていゝとはな」

ツ?! 念話が筒抜けになつてゐる!?

それにティアナもわかつたらしく、

《それじゃこれで念話は終了するわ。みんな、頑張つて。あたしもスバルと一緒に戦うから！》

どうやらティアナは無事スバルと合流できたみたいね。

なら大丈夫ね。あの二人のコンビはかなり強いからね。

あと、心配といえば一人で戦つてゐるレン君だけど、

《ギンガさん！ 僕なら一人で戦つてゐるレン君だけど、

そう伝わつてきたので私は信じることにした。

今のレン君なら大丈夫だという確信があるから。

というわけで、

「では、いくぞ?」

「どこからでも!」

私とチンクとの戦いが始まった。



S i d e スバル・ナカジマ

「ティア。3対2だけど…どう見る？」

「スバル、その質問は愚問よ。あたしとあんたの力が合わされば…」

「最強！」

ティアと同時にそう叫ぶ。

さて、それじゃ行こっか。

奴らを倒しに…！

「…よう。お前達二人で大丈夫か？ 半人前程度の腕なんだろう？」

赤髪の子がそう話しかけてくる。

けど、

「お構いなく。それよりそつちも三人だけで大丈夫なのー？」

そう挑発する。

すると思つたとおり赤髪の子は怒り心頭の表情で「なんだとツ!」と叫んでくる。

ティアが小声で「状況判断能力を下げる作戦、行くわよスバル?」と言つてきたので、「うん!」

笑顔で頷いておいた。

あちらも盾持ちの子が「ノーヴェ? また痲癩が出ているツスよ? 落ち着くツスよ」と宥めている。

劍持ちの子も少し疲れた表情でいる。

どうやらあんまりあちらはチーム仲はよくないみたいだね。

これなら、いける。

「行くよ! ウィングロード!!」

あたしはウィングロードを展開して空を駆ける。

それに赤髪の子:ノーヴェは同じくエアライナーとかいうISであたしに追いついてきた。

「あたしの得意な領域に入ってくるなんて度胸あるね!」

「うっせ! あたしもこれはお前には遅れをとらねーよ!」

「とか言いつつ前はやられていたよね?」

「この野郎! 嫌なもん思い出させんじゃねーよ! はあー!!」

ノーヴェエが蹴りを放ってきたが、あたしはその向かってくる足に目掛けてカウンターのごとく拳をぶつける。

それによつてホイール部分がすぐに摩擦を起こしてギヤリギヤリと唸りをあげていた。

「ッ！ こんのー！」

「ゼロ距離！ いける！」

リボルバーナックルを嵌めている手とは反対側の手を握りしめて、魔力をこめる。

そして本来弱いはずの拳の殴打をノーヴェエの腹に叩き込む。

「ガッ!？」

だがそれはノーヴェエには効果覿面だったようで見事に腹を押さえてうずくまる。

「ううっ…てめえ、何をしやがった…!？」

「んー、内緒だよ」

ただ、浸透する拳を叩き込んだだけ、つて教えても理解できないと思うしね。

「さて、諦める…?」

「誰が…!？」

それからまた戦闘は続く。



S i d e ティアナ・ランスター

スバルはいいように戦闘を有利に運んでいるようね。

それじゃあたしも頑張るとしましょうか。

右手はダガーモード、左手はガンモードで構えてあたしは二人に立ち向かう。

「シッー」

両手剣の子があたしに向かって剣を上段で振り下ろしてくるが、その程度の剣筋。

シホさんの攻撃と比較すればとても遅い。

ネロさんやアルトリアさん、ランサーさんの放つスピードに慣れてしまっているあたしにとってはとても遅いのだ。

ダガーモードでいなして、次には瞬動術で剣持ちの子の背後に回り込み、銃を放とうと…。

「デイドー！ 避けるッスー！」

盾から砲撃を放ってきたウエンデイの攻撃はあたしには直撃した。

だけどそれは残念だけど幻術なのよね。

瞬動術を使う前に幻術で増やしておいたあたしの分身であざむく。

そして二人がちやうど並ぶ位置になったので、

「クロスファイヤー…シユート!!」

「ッ！」

「わわわッス！」

二人はなんとか避けていたけど、スレスレで避けている程度ではなっていないわね。

これならソードモードを使うまでもないかしらね？

そう思った瞬間だった。

頭にシホさんの叱咤の声が聞こえてきたような気がした。

それはつまり、

「（慢心はするな。常に本気で挑め、って事ですよね？ シホさん）」

そういうことだ。

相手は追い込まれた時が一番危ないのだ。

何をしでかすかわからないから。

だから常に先を読んで撃墜することを考えよう。

足元を掬われたらたまらないからね。

だから本気で倒しに行く！



Side エリオ・モンディアル

僕とキャラロとフリードは紫の髪の女の子とガリユーと戦闘を繰り返していた。

「どうしてこんなことをするんだ！」

僕が叫ぶが女の子は無言を通す。

「お願い、話して！ 話してくれなきゃどうにもできないよ！ だから手伝えることなら教えて！」

キャラロもそう語りかける。

だけど女の子はダガー状のナイフを放ってきた。

僕はガリユーの攻撃を払ってブースターを吹かしてキャラロの前に立ってナイフをなぎ払う。

ガリユーも女の子の隣にやってきて両手のブレードを構える。

「お願いだから……！」

キャラロも語りかけをやめずに続ける。

それで少女は少し迷いの表情を浮かべたのを僕は見逃さなかった。

これならまだ話せる余地はあるかもしれないから。

僕達はこの女の子の心を救いたい。

この子の瞳はとも寂しいものを感じる。

だからその理由をまずは聞き出さないといけない。

だから戦いながらも語りかけはやめないんだ！



Side レン・ブルックランズ

あちこちで戦いの音が聞こえてくる中、僕はトレディとラン姉さんと向かい合う。

「トレディ……。ラン姉さんを開放、してくれないかな？」

「……………それは無理です。ドクターの命令ですので。……………それに、私はレンさんをごの手にするために手を尽くさせていただきます」

「どうして、僕にそんなにこだわるの……？」

「……………レンさんを、どう気になるかでしょうが。……………そうですね、一目見た時からあ

あなたの事が気になって仕方がないのです。…………だから私はこの胸をくすぶる気持ちを知りたいのです」

「それって…」

それって所謂、一目惚れって奴？なのかな…？

僕の表情を察したのかトレディは、

「…………それはなにか知っている顔ですね。ぜひ、教えてください！」

「そ、それはね…？」

「…………それは？」

「い、言えないよ！」

「……………そうですか。ならば力ずくで聞かせていただきます」

「ああ、もう！」

なんでこんな変な空気になってしまったんだろうか!?

なんかどこことなくラン姉さんの表情も影が差ってきているのは気のせいかな!?

二人して武装を構えてくる。

でも、さつきまでの空気はすぐになりを潜めたのか二人は真剣な表情になっている。

なら、

ジャキツ！

僕は両手のアウルを構える。

もう碎かれることはないはずだ。

「そうだよね、アウル！」

《はい。私はもう碎かれることはありません。私を信じてください、マスター》

「うん。いくよ！」

《はい！》

それで僕は片方の盾を掴む。

「クライスブーメラン！」

盾を放ち、

「……………噛み碎け。クラツシャーバイト！」

放った盾とトレディの蛇の顔の武装が衝突する。

蛇は盾を噛み碎こうと歯を伸ばすが、

「無駄だよ！ アウル！」

《回転を上げます！》

魔力によって回転速度を上げて摩擦を起こさせて弾く。

そして盾は僕の手に戻って装着される。

「よし！ 碎かれていない！」

「……………驚きました。レンさんのデバイスはかなり頑丈になられたのですね。ですが…ランさん」

ラン姉さんが前に出てバルムンクを構える。

そして赤い魔力が立ち上り、バルムンクはソードモード…魔力大剣モードに変化する。

本来ならフェイトさんのザンバーモードのように青白いザンバーのはずが今は赤く染まっている。

これはきつと改造されちゃったんだね、バルムンク…。

「……………さあ、耐えられるものなら耐えてください」

「うあああああー!!」

ラン姉さんがバルムンクを横薙ぎに振るってきた。

それを僕は、

《プロテクション・ギガントス》

パワードの上に行くギガントスでなんとか防ぎきる。

でも、すごい衝撃だ。

「アウル、大丈夫…?」

《平気です。それよりアブソープを開始します》

「うん。ここからは持久戦だから頑張ろう、アウル！」

《はい！》

二人を相手に僕は勝たなきゃいけないんだ。

そしてラン姉さんを救い出す！

第百五十八話 『決戦（2）』 ライトニングの攻防』

管理局地上・中央本部……いや、レジアス・ゲイズ中將のもとへと目指していたゼスト・グランガイツと烈火の劍精・アギトは飛行中でありながら一時停止を余儀なくされた。

その理由は目の前に桃色の髪をポニーテールにして騎士甲冑を纏うまさに騎士の風格を漂わせる女性・シグナムと八神はやてのユニゾンデバイスであるリインフォース・ツヴァイ。

その二人がゼスト達の進む道を遮るように立ちふさがっていたからだ。

「旦那！ あんときのバツテンちびに新顔だ！」

「……ああ。油断するなよ、アギト」

「あいよー！」

ゼストはアギトに警戒を促しながらも戦士の勘をフルに働かせて、目の前の相手は強敵だと肌で感じ取りシグナムを警戒していた。

アギトも前回にヴァイータにやりこまれたことを思い出して油断なく構える。

対してシグナムは戦う前の心を落ち着かせるための儀式かのように目をつぶり、ゼストが目の前にやって来るのを待ち構えるかのようにであった。

ゼストがシグナムの前で動きを停止させる。

それによってシグナムは目を開き、その鋭い目つきでゼストを見る。

ゼストは構える槍をまだ戦うわけではないので下に下げてシグナムに問う。

最初の一言は「管理局の騎士か……？」と。

それに対してシグナムは、

「時空管理局、機動六課ライトニング隊・副隊長、シグナム二等空尉です。

前所属は首都防衛隊。あなたの後輩という事になりますね。ゼスト・グランガイッ

／＼殿

「……そうか」

ゼストは名前を知られていることに、一瞬空白をうむが、前の戦いの時にもう一人の小柄な少女の騎士……名をヴィータと聞いたか？に名乗ったな、と思いつく。

そして首都防衛隊という言葉に、もう隠す必要はないともゼストは思った。

ゆえに、シグナムは今の俺にとってはレジアスに会う前のただの障害でしかないとも思った。

戦いとなれば本気を出さなければ勝ちを拾えないだろう相手……この残り短き命を燃

やす時が来た。

そう判断したゼストの目には寡黙ながらも炎が宿っているようにシグナムは感じた。

(…立ち会っただけでこの気迫。さすが元・ストライカー級の魔導師だな。だが、私にも引けない理由がある)

シグナムは強敵に立ち会ってすぐに感じた高揚感を胸に押さえ込み、落ち着いて話を振る。

「…中央本部に何をしに行かれるのですか…? やはりスカリエッツィの命令で破壊活動ですか?」

違うだろう、と分かっているもあえてシグナムはそう問いかける。

それに対してゼストは低い声ながらもどこか懐かしみを感じさせる声を出しながら、「スカリエッツィの命令ではない。これは俺の独断だ。…そう、古い友人に、レジアスに会いにいくだけだ」

「それはやはり、復讐のためですか…? あなた達の事を見捨てた、あるいは切り捨てたレジアス中將に対しての…」

「言葉で語れることではない…道を開けてもらおう。さもなくば…」
そう言いゼストは槍を構える。

それでシグナムは即座に剣へと手を伸ばし、しかしまだ鞘から剣を抜かず、

「言葉にしてもらわねば、譲れるものも譲れません。私の独り言と流してもらって結構です」

「……………」

突然シグナムは昔話でもするかのように少しだが口元を緩ませ語り始める。

「私は…いや、夜天の魔道書の騎士である私達は今の主である八神はやてを足の病魔と闇の書の呪いから救うために事件を起こしたことがあります」

「……………」

シグナムの語りにはゼストは無言で通す。

しかし、上げた槍をまた下げたことから聞いてくれる事を心の中で感謝したシグナムは語る。

「色々な魔導師、あるいは生物から魔力を蒐集しました。これが間違った方法だと分かっている…」。

しかし、とある少女から真実を教えられて我らは彼女と言葉を交わしました。

そして彼女は我らを救ってくれるばかりか消えていくかもしれない仲間の命までも救ってくれました。

あの時、言葉を交わしていなければどうなっていたかは、わかりません…。

ですが言葉を交わしたことによって我らは確かに救われたのです」

目をつぶり過去の事を思い出しながらシグナムは語る。

そう、件の彼女、シホはシグナム達の事情を理解してくれてさらに救うとも言ってくれた。

結果、はやては助かり、シグナム等騎士達も救われて、さらには闇の書とともに消えようとしていたリインフォース・アインスマでも救ってくれた。

それがシグナムにとつてどれだけ嬉しいことだったかは想像に難しくない。

素直に喜びを表現できるヴィータを羨ましいとも思ったことが幾度もある。

そう、そして言葉を交わしたからこそ「今」があるのだ。

だからゆえにシグナムは語りかけをしたのだ。

そして、それを聞いていたゼストは彼女の言葉が本当の事、真実なのだと悟る。

「…話は戻します。言葉にしてくださいれば我らもなにか協力できるかもしれません。だから話してください。あなた達の事情を…」

シグナムは剣ではなく代わりに手を差し出す。

その姿はかつてのなのはの聞く姿勢に近しいものがあるかもしれないと自身で思いながらもシグナムはゼストの言葉を待つ。

「だ、旦那あ…」

アギトはシグナムの言葉に少し感情移入したのか弱々しい声を上げながらもゼスト

を見上げる。

ゼストも無言で目をつぶり決断しようとしている。

「シグナム、さすがですう……」

リインはすでに少し涙目になりつつある。

「……すまない」

果たして、ゼストの口から出された言葉は拒絶の言葉であった。

「お前の言葉は確かに真実だろう。その目が語っている。

……しかし、我らにはもう、時間がない。このチャンスを逃したらもう後は死を待つのみ。の愚者となってしまうからな。

ゆえにこれは二度目の警告だ。

道を開けてくれ。どうしてもレジアスに会わなければいけないのだ。できなければ

お前を、倒す……！」

「……………そうですか。残念です。

そしてあなたの体の事情もなくなりますが察しました。あなたの体は……」

「……それは言わないでくれ。自分の体の事は自分が一番よくわかっている。

そして俺の身勝手な事情に一言も文句を言わずにここまで着いてきてくれたアギトの想いに応えるためにも……」

ゼストはアギトの頭に手を乗せた。

それにアギトは顔を赤くしながら、「旦那あ…」と声を零していた。

ゼストはそれを気にせず、ただ一言。

「押し通るまで！」

それによつてゼストの体から魔力が吹き出してくる。

さながら使い切る寸前の蠟燭に灯る火が大いに燃え上がらせるかのように、わずかな命をさらに削るかのように…。

「もう、止められないのですね…。ですが我らも引くに引けない事情があります。ゆえに中央本部への道へは私とこの…」

「祝福の風・リインフォース・ツヴァイがお相手をいたします！」

それによつてシグナムは今度こそ鞘からレヴァンティンを抜き放つ。

そしてレヴァンティンから炎が吹き出して剣を熱くする。

だが、その光景に先程までゼストに頭を撫でられていたアギトは思わず声を上げる。

「…アギト。どうかしたか…？ どこか不備でもあったか？」

「い、いや…なんでもねーよ。旦那（あの炎…もしかしたらあの騎士はあたしのロードにふさわしい魔導師じゃ…）」

アギトは少し考えこむが、すぐにその思いを捨て去る。

「（だけど、今はただの敵なんだ！ 旦那の想いに応えるためにも……こんな雑念は払わな
いと……！）」

それでアギトは何度か頭を振って、

「いこう、旦那！」

「うむ」

「……ユニゾン・イン!!」

ゼストとアギトのユニゾンにより、それによってゼストの髪色は黄金色へと変化し目
の色も赤く染まる。

服装も所々が金色に変わり槍から炎を上がらせる。

「いきましよう、シグナム！ あの人の事情をなんとしても聞き出しましょう！」

「ああ、リイン！……いくぞー！」

「ユニゾン・イン!!」

シグナムもまたリインとユニゾンをする。

それによってシグナムの髪と甲冑はリインの影響を受けたのか薄紫色へと変わり、ゼ
ストと同じくレヴァンティンから炎を上げる。

「いくぞー！」

「まいますー！」

シグナムとゼストはそれによって互いに武器を構えて激突する。



S i d e キャロ・ル・ルシエ

紫色の髪の女の子はガジェットに乗りながら私に攻撃を仕掛けてきている。

でも、何度も見る迷いの表情。

きつと突破口はあるはずです。

「事情を話して！　お願いだから！」

エリオ君も必死にガリユーと戦いながらも女の子に話しかけている。

それに彼女は、

「…ドクターにお願いされたから」

そう言って攻撃してくる女の子。

私もそれで応戦する。

それで私と女の子は地上へと降りる。

フリードには悪いと思ったけど、正面同士で話し合いたいのだ。

「ドクターは私が探しているレリックの11番、これを探す手伝いをしてくれるっていうの……だから私はドクターの命令に従って動いているの……」

私は思わず「そんなことで……？」と返してしまった。

でも、それが彼女の癩に触ってしまったらしいの。

少し視線が冷たくなり、

「そんな事……あなたにとつてはそんな事でも私にはとても大切なことなの！」

そう言つて私に何度も射撃魔法を放ってくる。

なんとかガードをするけど被弾は免れずに私は少しずつボロボロになっていく。

「探し物とかのことを言つたんじゃないの！」

「うるさい……」

短く拒絶されてしまった。

でも、まだ諦めない……！

「……ゼストも、アギトもいずれはいなくなつちやう。でも、レリックの11番を探し当てればお母さんが目を覚ます。」

そしてお母さんが帰ってきたら私は不幸じゃなくなる……幸せになる」

「違う！ そんなのは幸せなんかじゃないよ！」

「そうだ！」

そこにガリユを大きく吹き飛ばしているエリオ君が私の隣にまで降りてくる。

「キャロ！ もつと語りかけて！ 君の想いを！」

「うん！ エリオ君！ ねえ、聞いて！ 犠牲の上での幸せなんて本当の幸せなんかじゃないの！」

あなたのお母さんだつてそんな事をきつと望んでいない……だからそんな間違つた道を進んじゃダメ！」

「でも、これ以外には方法がないの……だから」

「レリック以外の選択肢をなくしちゃダメ！ 諦めちゃダメ！ きつと、他にも手はあるはずだから！ だからそれを私達と一緒に探そう……？」

「他の、レリックを必要としない方法……」

「うん！」

「僕も一緒に探すよ！」

「あなた達は……？」

「私は、アルザスの竜召喚士、管理局機動六課の魔導師キャロ・ル・ルシエ！」

「同じくエリオ・モンディアルと飛竜、フリードリヒ！」

「オオオオオーンッ！」

「さあ、私達の手を取って！ 一緒にいこう！」

そう言つて私とエリオ君は彼女に手を差し出す。

でも、そんな時だった。

突如としてモニターが開き、そこには眼鏡をかけた戦闘機人の姿が映し出されて、

『ダメですよ？ ルーテシアお嬢様。そんなまやかしの言葉に惑わされちゃ〜』

「クアットロ：でも、他の道ももしかしたらあるかもしれない…」

『ふう：ルーテシアお嬢様。断言しましょう。そんな方法はあるわけありません。ドクターがしてくださる方法が最善なのです』

「データラメを言うな！ きつとあるはずなんだ！」

そこにエリオ君が叫びをあげる。

うん、そうだよ。きつとある！ 信じなきゃ！

『うるさいですね〜？ ルーテシアお嬢様、そんなガキどもなんてあなたには必要はありません。ぶっ殺しちやつてくださいいな』

「でも…」

『あらら。迷いがあるようですね〜？ でしたらその迷い、私めが無くさせていただきます』

そう言つてクアットロという戦闘機人はなにかを操作し出す。

するとルーテシア：ルーちゃんは苦しみだして、同時に魔法陣が浮かび上がり次々と

虫型の召喚獣が姿を現す。

『さあ、ルーテシアお嬢様！ そのガキどもを殺してくださいな！ そいつらはあなたの敵ですよ！』

「貴様！」

「ひどい！」

私とエリオ君が叫ぶが時すでに遅く、なにかの洗脳操作でも受けたのか、ルーちゃんは涙を流しながらも、

「あなた達は、私の、敵……！」

憎しみのこもった瞳で私達を睨んできた。

もう、どうすることもできないの……？

ルーちゃん……。



Side フェイト・T・ハラオウン

合流したシスター・シャツハとアリシアとともに私とランサーはアジトの中へと入っ

ていった。

道行く先々でガジェットに襲われるがそこはランサーが私達の魔力温存のために前で戦ってくれるのでとてもありがたい。

「おらあッ！」

またランサーがガジェットの群れを破壊して前まで戻ってくる。

「弱ーくせして数だけはいやがるな…」

「そうだね、ランサー…」

「シスター・シャツハは大丈夫ですか？」

「はい。私は大丈夫です。フエイト執務官」

「アリスアはどう…?」

「うん！ 私も大丈夫だよ。フエイトは気にしないで。それより一緒に任務ができて嬉しいよー！」

そうアリスアは言ってきたので私も「そうだね」と返した。

そんな時だった。

なにかの気配を感じ取り上を見るとガジェットが天井を破壊して私達に落とそうとしている。

そうはいかない…！

それで私達は即座にその場から離れようとしたが、シスター・シャツハがなぜかその場にとどまって足元を見ていた。

見るとそこには地面から手が伸びてきていた。

シスター・シャツハは即座に判断したらしくヴェインデルシャフトで地面を破壊して地下へと落ちていった。

心配したが、念話で、

《私の方は大丈夫です。そちらのことは任せました！》

そう言ってきたので私達は進むことにした。

だけど目の前からあの時戦った戦闘機人が歩いてきた。

「フェイトお嬢様。こちらに来たということは帰投ですか？ それとも反逆ですか？」

「どちらでもない。あなた達を逮捕するためだ！」

「そうですか。残念です……」

そう言つて戦闘機人は残念がる。

そこにアリシアが、

「…ねえ、フェイト。お嬢様つてことはもしかして……」

「うん。そうだよ、アリシア」

「どう言う意味だ……？」

ランサーは分かっているようであった。

「ほら、ランサー。フェイトは、その、私の、でしょ…?」

「あ? あ、ああ! そうだったな。忘れていたぜ」

ランサーもようやく思い出したらしい。

「アリシアお嬢様もできればこちらに来ていただきたいのですが…」

「ふん! むぎむぎと敵についていくなんてするわけないでしょ! ベー!」

「あ、あはは…」

アリシアは昔からの天真爛漫っぷりで舌を出して反撃していた。

「ならば、無理やりにも着いてきていただきます。IS・ライドインパルス」

戦闘機人がISを展開して挑もうとしてくる。

だがランサーが前に出て、

「やめときな。お前ごときが俺に敵うとも思っていないのか?」

「思っていないですよ。ですから…お願いしますよ」

そこには槍を構えたフードの女性が姿を現した。

「ほう…またお前か。なら相手になるぜ。マスター、後は頼んだぜ?」

「うん。ランサーも負けないでね」

そう言つてすぐさまにランサーとフードの女性は一瞬で姿を消した。

やはり、あの人もサーヴアントなのかな？

それより気持ちを切り替えて私とアリシアは戦闘態勢を取ろうとするがそこに、モニターでだがスカリエッツィの姿が映される。

『やあ、ごきげんようだね。フェイト・テストアロッサ執務官・そして：アリシア・テストアロッサ』

「スカリエッツィ!？」

さらには、

『そして、聞こえているかい？ Fの遺産に竜召喚士、聞こえているかい？』

「エリオ！ キャロ！」

『フェイトさん！ アリシアさん！』

『そちらで戦っているんですか！』

エリオとキャロの声が聞こえてくる。

あつちも必死に戦っているんだね！

でも、そこに人の気持ちを逆撫でしてくるかのよう、

『私の起こした祭りは楽しんでいてもらえているかい？』

「何が祭りだ！」

「そうだよ！ こんな祭りなんて願い下げだよ！ この重犯罪者！」

『ふふふ…重犯罪者ね。人造魔導師や戦闘機人計画、そして君達の母親が完成させた Project FATEの事かい…？』

「全部だ！」

「うん！ 確かにお母様はそれを作った。でも、そのおかげで私はフェイトと出会うことが出来た！」

『おや？ それを君達の保護している二人に伝えてもいいのかね？ なあ、Fの遺産に竜召喚士？』

エリオとキャロに話は聞こえているようだ。

でも、いいんだ。

私はアリスアのクローンだっことは前もつてもう知らせてあるから。

その証拠に、

『大丈夫です！ 僕はフェイトさんの事はもうすでに知っています！ ね？ キャロ？』

『うん！ だからあなたなんかの口車なんかには乗りません！』

ありがとう。エリオ、キャロ…。

それにスカリエッティは、

『フフフ…そうか。つまらないなあ。話していたのかい。二人に聞かせて君を苦しめて

あげようと思っていたのだが、考えが外れたようだ。だが、まあいい』

スカリエツティは指をパチンと鳴らす。

すると地面から赤い線が伸びてきて私とアリシアを捕まえようとしてくる。

「アリシア！」

「うん！ スピードスター！ ガンズモード！」

私はザンバーフオームで、アリシアはガンズフオームで撃ち抜こうとしたけど、赤い線は意思でも持っているかのように動き、躲す。

そして次第に数は増えていき私達は背中合わせに包囲されてしまい線の檻に二人して閉じ込められてしまった。

「くっ……！」

「こんなもの……！」

私とアリシアはなんとか脱出を試みようとするがビクともしない。

A M F も濃いので無駄に魔力は消耗できない。

アリシアは魔術だからなんとか抜け出せるかもしれないけど、きつと私一人残して脱出なんてアリシアは考えないと思うから手詰まりだ。

もう、切り札を切るしかないのかな…。

と、そこに直接スカリエツティの声が聞こえてくる。

「君達二人を閉じ込める事ができた事は僥倖だよ。特にアリシア・テスタロッサは死者蘇生の成功例。ぜひ手に入れたかったのだよ」

ツ!? やっぱリアリシアも狙いのうちだった!?

いけない! このままだと!

私はすぐさまに切り札を出せる準備を始めようとするのだった。

第百五十九話

『決戦（3）』

ゆりかご内部侵入』

「なのはママ…」

「ヴィヴィオちゃん、大丈夫だよ。シホお姉ちゃん達がきつと、なのはお姉ちゃん達を助けてくれるよ。僕らはただ信じよう」

「うん…」

ヴィヴィオはアースラの一部屋でアインスとツルギと一緒に皆が無事に帰ってくることを祈っていた。

「そうだ、ヴィヴィオ。シユバインオーグ達が必ず全員を助けてくれる。今は信じよう」

アインスがそうヴィヴィオに話しかける。

それにヴィヴィオはただ頷くだけだった。

「頼むぞ、みんな…。そしてこれ以上ヴィヴィオに不安を与えてやるな。なのは…」

アインスはそう未だ囚われのなのはに言うのだった。



聖王のゆりかご一帯では今もなお魔導師達とガジェットによる激しい攻防戦が繰り広げられていた。

「魔導師隊！ 私は正面を叩く。それやから打ち零しを頼むわ！」

『はい！』

はやての指示で魔導師隊は声を上げる。

そしてはやての広範囲魔法がガジェットに炸裂する。

しかし、やはり濃いAFMの効果がじわじわと効いているためにやはり威力が落ちてしまい全機を撃墜までにはいたらないでいた。

しかしそこはやはりエース揃いの魔導師隊。

はやての打ち零しを見事左右から正確に、そして確実に撃ち落としていた。

「よー！」

はやてはガッツポーズを取る。

しかし、そこに悪い知らせが舞い込んでくる。

ゆりかごのハッチから次々と追加戦力であるガジェットが放たれて質で押している魔導師に対し、ガジェットは量で押しているという感じでなかなか優勢に持ち込めないという状況。

A M F の中で魔法行使はかなりの精神力を消費する。

だが文句は言っていない。

ここが抜かれたら一気に市街地まで範囲は及んでしまう。

だから泣き言は言わないようにしているはやて。

「みんなー、ここが最前線やー！ だから気を抜かずに確実に落としていこう！ 魔導師の力を見せる時や!!」

『おうー!』

はやての激励で魔導師達はさらに広範囲に及ぶ戦闘を繰り広げるのだった。

そんな中、侵入口を探しているシホ、ヴィータ、ファイアットに一報が入ってくる。

『シユバインオーグ一尉！ 侵入できそうなゲートを発見しました!』

「入口の大きさはどれくらいですか!?!」

シホは応答に伝えてそう聞き返す。

『そ、それが侵入経路の壁が思った以上に硬くなかなか突破できません…! どうすればいいでしょうか!?!』

「そんな弱気な発言はなしで！ 私が開けますのですぐに向かいます！」

『了解です！ お待ちしています！』

それで魔導師の通信は切れる。

「…というわけよ。ヴィータ、ファイア！ いくわよ!!」

「おう！」

「はい！」

ヴィータとファイアの返事にシホは頷くとはやてに通信を開き、

「はやて！ 宝具を使って侵入口を開けるから宝具の使用許可を！」

『わかったわ！ 許可する！ 思いつきりやってええよ！』

「了解！」

返事を返したあと、シホはゲート周辺とその反対側で戦っている魔導師に指示を出した。

そしてシホ達は入れそうなゲートの前に固まって侵入口を開けようと奮闘している魔導師達のもとへと到着して、

「魔導師の皆さん！ 私が突破口を作りますので離れていてください！ 先ほどの指示通りをお願いします！」

『了解！』

シホの一言にすぐにその場から離れていく魔導師達。

ここはさすが『魔弾の射手』という異名が効果を発揮していく。

信頼度が半端ではない。

シホ自身もすぐに退避してくれたことをありがたく思い、そして魔術回路を開いて魔術師の顔になり、

「投影開始……ッ！」
トレース・オン

アンリミテッド・エアを一旦モードリリースして、無銘の弓を投影する。

やはり宝具を使うとなれば投影した弓の方が馴染んでいるためである。

アンリミテッド・エアの弓形態である『シュツツエフォルム』を使ってもよいのだが、そこは気分の問題になってくるために誰も突っ込んでほしくない。

さらに、

「投影、重装……！」
トレース・フラクタル

詠唱を重ねる。

それによってさらに投影を重ねる。

それでシホの手に顕現するのはやはり手馴れた宝具である頭身が捻れた宝具。それを弓に番えて弦を引き絞る。

「I a m 我 g a t h e r 母 i n g 子 t h e は b o n e 骨 o f の m y れ s a n g 狂 u i n g う……」

その詠唱によって宝具がさらに鋭く、鋭利に尖っていき、そして、

「偽・螺旋剣!!」
カラド・ホルク

放たれた真名開放によって轟音を響かせて音速を突き破りゆりかご内部を貫通していく。

それはさながら雷光のごとく雷を纏いながら進んでいき、貫通した通路を焦がしている。

そしてついには威力を落とさずにゆりかごの反対側まで偽・螺旋剣は突き抜けてしまった。

シホはそろそろ頃合だろうと思い、

「ブロークン・ファンタズム
 壊れた幻想!!」

内包された神秘と魔力が暴力的に膨れ上がって一気に破裂する。

それによって事前にシホの指示でゆりかごの反対側で指定された場所から退避していた魔導師達はそれを見る。

爆発によって巻き込まれたガジェットの群れが次々と爆散していく様を。

「すげー……これが『魔弾の射手』、シホ・E・S・高町一等空尉の本当の力……。転送魔術の威力……!」

「このAMFの中、それを軽く無視するかのような絶大な力……。敵には回したくないも

のだな……」

「俺、ファンになりそうだな……」

などと声がいくつが上がるほどにシホはその実力を見せつけた。

……ここで一つ、補足して付け加えると本来の偽・螺旋剣もここまでの威力はないはずだった。

普通に考えればこの世界に来る前までのままだったらゆりかごを貫通するほどまではなかったのである。

しかし、ここでこの世界で会得したシホの力が真価を發揮する。

シルビア譲りのSSランクオーバーのリンカーコアと、そして鍛えに鍛えた魔術回路の魔力が融合したことによって化学反応を起こして威力が件なみ上昇したのである。

さらには確かに魔術師もこの世界に何百人も生まれてきたが、それでもいまだに神秘の理解は中々されていない。

その為に、シホがほぼ神秘を独占している形であるから総じて考えれば威力が上がるのは当然であった。

最後にアルトリアとユニゾンしているのでアルトリアの魔力も相乗しているのも効果を發揮している。

—— 閑話休題

「…相変わらずすげー威力だな」

ヴィータはゆりかごの反対側から聞こえてきた爆発音を耳にして顔を引き攣らせる。

「さすがお姉様です！」

ファイアットは目にフィルターでもかかっているのか普段よりシホの姿が神々しく見えている。

《さすが奏者だ！ 余はますます惚れたぞ！》

未だ霊体化して待機しているネロがそう叫ぶ。

《さあ、シホ。ナノハとオリヴィエのもとへと向かいましょう！》

「ええ、アルトリア！」

アルトリアの言葉とともにシホ達三人は偽・螺旋剣カラド・ボルクによって空いた穴からゆりかご内部へと侵入していった。

「スターズ2、セイバーズ1、2、ゆりかご内に侵入しました！」

『わかりました！ すぐにゆりかご内部の調査を開始します。位置情報がわかり次第すぐに知らせます！』

「わかりました！」

だが、入った途端に、

「ッ!？」

「なんだ!？」

ゆりかご内部に入った途端に急に濃密なAMFに襲われてシホ達は浮遊魔法が効力を無くしてキャンセルされていくのを悟る。

「濃いわね……」

「そうですね……」

「ああ。あたし達でこれじゃ、エース級じゃないと入ってこれねーぞ?」

「そうね。………ファイア! リンカーコアをサブにして、魔術回路をメインに変更後に身体強化を決行よ!」

「了解です!」

それでシホとファイアットは身体強化を施して魔導をサブに切り替えた。

これによってAMF下でも普通に消費しなくても移動できる。

「お、おい! あたしはどうするんだよ!？」

だがヴィータは魔術師ではないので慌てていた。

それを見越してシホはヴィータに振り向く。

「ヴィータは駆動炉破壊まで魔力とカートリッジを温存してもらいたいわ。ヴィータの切り札は破壊に打って付けなんだから……！」

「わ、わかったよ……。それじゃ飛行魔法だけに魔力を注ぐことにする」
「洗々だがヴィータは従った。」

「さ、というわけで進むわよ！」

「おう（はい）！」

それで三人はゆりかご内を進んでいった。



S i d e ヴィータ

今、あたし達は向かってくるガジェットを倒しながら進んでいる。

と言つても主に撃墜しているのが、

「はあっ！」

「えいっ！」

シホがアンリミテッド・エア、エクスカリバーフォームを振るい、フィアットがマグ

ナ・スピアを振るって次々と破壊していく。

あたしも破壊しているにはいるんだけど、ごく僅かである。

うー…確かにあたしのラストフォルムを使うにはすごい魔力が必要になるから温存しておくことには越したことはないんだけどな。

そんな時だった。

ゆりかご内をサーチしていた本部の奴から連絡が入ってきたのは、

『シユバインオーグ一尉！ 玉座の間と駆動炉の位置が判明しました！』

そう知らせをしてきた。

そしてマップがディスプレイに表示される。

だけど、

「ッ!？」

「なんだと!」

あたし達が進んでいるのは駆動炉の方で玉座の間はまさに反対側だったのだ。

なんてこった!

これじゃ後手後手じゃねーか!

だから手段は限られてくる。

「……………一手に分かれましょう」

シホがそう決断してくる。

あー…あたしと同じ考えってことか。

なら、あたしが言うべき言葉は決まってる。

「なら、駆動炉へはあたしが「私も一緒に向かいます！」…って、ファイアット!」

まさかファイアットがシホと別行動を取るとは思っていなかったので私は思わず言葉を失ってしまいました。

「なんですか、ヴィータ？ 私はお姉様と離れていても大丈夫ですよ。私とお姉様は魔

術的にも、魔導的にもリンクしているのですから安心ですからね」

そう言ってファイアットは満面の笑みを浮かべる。

…つたく。

出鼻を挫かれた気分だけ。

「…たーつく、わかったよ。それじゃあたしはファイアットと駆動炉に向かうから、シホ、なのはとオリヴィエを救えよ?」

「ええ、任せなさい。それに私には…」

それでシホはなにもいない虚空を見つめる。

多分、そこにはネロが霊体化しているんだろうな。

ネロがついているんだ。

ならあたし達がいなくても大丈夫だな。

「というわけよ。だから、二人とも、駆動炉の破壊は任せたわよ！」

シホにそう言われる。

もちろんだ！

「任せておけ！ 鉄槌の騎士ヴィータは破壊することに関しては誰にも負けねえ！」

「お願いね。ファイアもヴィータのことを守ってね？」

「はいです！ お任せ下さい、お姉様！」

「それじゃ、行くわ」

それでシホは高速で反対側…玉座の間へと走っていった。

よし…。

「あたし達もいくぞ！ ファイアット！」

「はい！」



Side クアットロ

玉座の間で私とデイエチちゃんは色々設定をしている。

あの胡散臭い魔術師の令呪と言った奴だったかしら？ それで無理矢理玉座に座らされてゆりかごを起動しているオリヴィエ陛下がいるから大丈夫だとは思うけど、年には念を押ししておかないとね。

「ふふふふ……。今のところは上々ね」

「……さっきのあの魔導師の一撃は驚いたね」

「そうね、デイエチちゃん。まさかこのゆりかごを貫通するほどの威力を出すとは思っていなかったわ」

そう、先ほどの一撃には驚かされた。

AMFを纏っているゆりかごの力を簡単に貫通させるほどの威力を出すシホ・E・S・高町の攻撃。

まさかこんなところでもう奥の手を使ってくるなんて思っていなかったけど、あんなものをそう何発も撃てるとは思わない。

もうやつはネタ切れを起こしていると思うわね。

今この玉座の間に向かってきてきているけど、切り札がない今、倒すのは容易いわね。

さらに、奴の顔が絶望に染まる姿を想像すると、胸が高鳴るようだわ！

「……デイエチちゃん」

「…ん。任せて、クアットロ。足止めは私がなんとしてでもしてくる」
「お願いね？」

それでデイエチちゃんは玉座の間を出ていった。
でも、あなたじゃきつとやられちゃうでしょうね。

奴はあなたの砲撃程度で潰れる奴じゃないわ。

だから、せいぜい少しでも時間を稼いでね、デイエチちゃん。
ふふふ。



Side デイエチ

もうすぐここにあのエースオブエースとオリヴィエ陛下を助けに来るために彼女が
やってくる。

あたしなんかで敵うかわからないけど、クアットロの命令だ。

撃墜させてもらうよ。

それであたしはイノームスカノンを構えてチャージを開始する。

「IS・ヘヴィバレル」

テンプレートが輝き、あと少しで彼女がやってきてこれは放たれる。見えた。

これで、決める！

「発射！」

あたしの砲撃が放たれて彼女に直撃する。

間違いない。

少しの間があつたが私の砲撃は彼女に直撃した。

だけど、あたしは次の瞬間、ありえないものを見た。

確かに直撃したはずなのに、彼女は少し煤がついただけでほぼ無傷で向かってくる。

そして携えている剣を上段に構えて、

「…風王鉄槌!!」
ストライク・エア

振り下ろされた剣から凶悪な魔力の風があたしに向かってくる。

あんなもの…オットーのレイストームと比較にならないほどのものだ。

そしてその風の塊はあたしと…そしてイノーマスカノンと同時に直撃した。

あたしは衝撃を受けて大きく吹き飛ばされ、地面に転がる。

イノーマスカノンも真空の刃によって真つ二つに切り裂かれて爆散してしまった。

なんて、強さ…。

あたしは選択肢を間違えたんだ。

こんな化物と戦って時間を稼ぐことを考えていた私は、バカだ。
時間稼ぎすらままならないなんて…。

そしてろくに動かせない体にさらになにか鎖が巻き付く感覚を覚えて、
「…あなた程度で足止めなんてしている時間はないのよ…眠っていないさい」
彼女は冷徹にあたしを一瞥した後に、奥へと進んでいった…。

ごめん、クアットロ…。

心の中で謝罪しながらも、そこであたしは意識を闇に落とすのだった。



S i d e シホ・E・S・高町

先ほどの戦闘機人を戦闘不能にして先に進んでいる中、

《奏者よ。大丈夫か!?!》

ネロが念話で話しかけてくる。

《…ええ。アルトリアが直前に風の防御壁を展開してくれたおかげでなんとかなつたわ》

《はい。ギリギリでしたね》

《…そうか。ならばよいのだ。して、奏者よ。まだ余は出てはいけないのか？》

《ええ。ネロにはまだ力を温存してもらいたいのよ》

《むう…。わかつたぞ》

《ごめんね、ネロ。でも、まだ敵にはネロの存在がいる事を悟られたくないのよ…》

《……》

そうしてネロは押し黙ってくれた。

そして私達はいよいよ玉座の間に到着した。

そこには、眼鏡をかけた戦闘機人と玉座に座らされているオリヴィエ陛下、そして鎖で吊るされているなのはの姿があつた。

「なのは！ オリヴィエ陛下下！」

「あらく？ もう到着しちやつたんですねー？ デイエチちゃんも役立たずね。ま、いいわ。よくぞ来られましたね。玉座の間へようこそ」

「大規模騒乱罪その他、たくさんの罪であなたを拘束するわ。おとなくし捕まりなさい」「ふふふ…あなたの家族達が捕らわれているというのに涼しい顔なのね。あなた、本当

に助ける気があるんですか〜？」

「そのつもりよ。あなたを捕まえてなのは達も必ず開放する！」

私は即座に戦闘機人に斬りかかる。

だけど影のように彼女の姿は掻き消えてしまった。

これは…あの時の幻影！

ということとは！

どこかに本体がいる！

《ネロ！》

《おう！ 奴を見事見つけてみせよう！》

ネロの気配が離れていくことを確認して、そこにいやらしい声がモニター越しに響いてくる。

『いきなり斬りかかるなんて危ないですね〜？』

「そんな余裕を出していいの？ その間になのは達を助けるわ」

『どうぞ、ご自由に〜…』

「…？」

なに…？ この余裕は。私はなにかを見落としているの？

一応警戒しながらも私はなのはが縛られている鎖を外していく。

そんな時だった。

「…シ、ホ…」

「オリヴィエ陛下!？」

「気を、つけなさい…」

玉座に座らされているオリヴィエ陛下がなんとか大声をあげる。

その時だった。

なのはの手が私の体に触れてきて、

「…シホちゃん」

「なのは、大丈夫!？」

「…お願い、シホちゃん…」

「なに…?？」

私が目が少しうつろなのはに語りかける。

だけどそこに、

「なのはは畏、です…!？」

オリヴィエ陛下の二度目の叫び。

「ツ!？」

途端、なのはの手からなにかが私の体に流れてきて、次にはアルトリアとユニゾンし

ていて治癒能力が向上しているというのに、それを上回るかのような衝撃と激痛が私の体を駆け巡る。

「うわあああッ!?!」

思わず叫びを上げてしまい私は地面に転がる。

痛みが走る体を無理してなのはを見上げると無表情でハイライトが消えた瞳で、

「…シホちゃん、お願い。〃死んで〃…」

なのはの口から信じられない言葉が聞こえてきた。

ついでなのはの体から〃虹色〃の魔力が溢れてきた。

虹色!?! なのはの魔力光は桃色のはず!

しかも虹色って、オリヴィエ陛下と同じ〃カイゼルファルベ〃!?!

これって、一体…!?!

第一百六十話

『決戦（4）

闇落ちの心。

進む戦況』

ゆりかごの玉座の間に到着したシホだったが、戦闘機人のクアットロは幻影だったためにこの場にはいなかった。

だが、シホはそれは今は置いておくことにして玉座の間に無理矢理座らされているオリヴィエと鎖で吊るされているのはを救出するために、まずなのはに手を伸ばした。だがその時にオリヴィエの叫び。

『なのはは、畏です！』
という叫び。

それによってシホの脳裏に悪寒が走る。

だが半場救出していたなのはの手がシホの体に触れる。

それによってシホの体に衝撃と激痛が駆け巡る。

その思いがけない衝撃によってシホは地面に転がって痛みによる呻きを上げる。

「なのは…どうし、て…?」

シホはなんとかなのはに声をかけるが、なのはは虚ろな目をしながらシホを見下ろし、

「…お願い、シホちゃん。〃死んで〃…」

と、無情の言葉を言い放つ。

意味が分からずにシホが少し混乱しているがすぐにその答えがクアットロが映るスクリーンの先から聞こえてきた。

『アーツハツハツハ！ いいザマねえ。シホ・E・S・高町！』

クアットロの人を見下しているかのような笑い声にシホは思わずスクリーンを睨む。

だがクアットロは動じた様子はなく笑みをさらに深めて、

『クツクツクツ…！ 姉妹のように思っていた相手に『死んで』なんて言われる気持ちはどう？ 苦しい？ 苦しいでしょう?』

「きさ、ま…！ なのはに何をした!?!」

『あら〜? もう分かっているんではなくてー? 高町なのはの意識は今私達が握っているのよ！ さあ、高町なのは？ あなたの力を見せてちょうだい!』

「…はこ」

なのははクアットロの言葉に頷き、その手に紫色の水晶玉を取り出す。

「それは…ツ!？」

《まさか!》

シホは目を見開いて驚愕し、一緒に事態を見守っていたレイジングハートも声を上げる。

そう、それはまさにレイジングハートを紫色に染め上げたような、しかしそれはまさにレイジングハート瓜二つだったのだ。

「…『レイジングハート・プルート』、セットアップ…!」

そのなのはの言葉によってなのはは虹色の光に包まれる。

そして患者の着ているような服装から、バリアジャケットを纏っていく。

その姿はエクシードモードと装飾はほぼ同じものだったが、唯一服色だけは紫色であつた。

さらには杖状へと変化したレイジングハート・プルートは金色のフレームの部分が銀色で中心に紫の宝石が埋め込まれている感じのレイジングハートの姉妹機ともいう感じにほぼ同じ姿であつた。

「そんな!？」 これって、レイジングハートと同じ…!」

《私と同型機なのですか!?!》

なのははセットアップが終わると、まだ倒れているシホに向けて杖の先を向ける。

『どーう？ なかなかの完成度でしょう？』

「どうやってレイジングハートのデータを…！」

『んー…。特別に教えてあげてもいいわよ。それはね、私の姉妹にハッキングやクラッキングが得意な子がいてね。』

その子がこの時のことを想定していたドクターの指示で管理局のデータベースに入してその杖のデータを入手してくれたのよー』

クアットロの上機嫌な言葉に、シホは思わず驚愕する。

（管理局のデータベースに侵入!? それなりに強固なはずの防壁を突破するほどの腕を持つている子がいるの!?)

シホはその思いがけない能力を持っている子の力に戦慄を覚えていた。

それはつまり、その子が本気を出せばデバイスのデータだけではなくかなり深い情報まで掘り出せるということだ。

最悪、ハッキングできるということは情報操作も難なくされてしまう恐ろしい能力だ。

見逃しておくことはできない…!

そう、シホは思った。

ちなみにその能力を保持しているナンバーズは言わずもがな現在レンと交戦中の13番の名を持つ『トレディ』である。

トレディ自身は軽くやっけているつもりなのだろうが、周りから見たらまさに異常とも言うべき能力を持っていた。

スカリエッティがトレディが完成した時にはそのハッキング能力には目を見張ったといえ、その凄さが分かるだろう。

だからゆえにスカリエッティは13番の名を持つトレディを若い番号の子達より早く目を覚まさせたという秘話があったりするのである。

—— 閑話休題

『さあ、高町なのは！ その生意気な女を殺しちやいなさいな！』

「了解…。…シホちゃん、おとなしくしてね？ 痛みも少なくて、一瞬で殺してあげる…。…」

「ぐっ…。…」

瞬間、レイジングハート・プルートの先端から虹色の砲撃が放たれ、シホ目指して向かってくる。

「やられるか……！」

咄嗟にシホは痛み軋む体を無理して起き上がり、縮地を使いその場を離脱する。

だが、すぐに避けて良かったとシホは思い知ることになる。

『ドゴオツ！』という破砕音とともに玉座の間の地面はかなりの深さで抉れていたからだ。

背後の壁などは見るも無残な事になっていた。

（非殺傷設定じゃ、ない……！）

最初からそんなものは搭載されていないとシホは思っていたが、初めて目にするそれにはやはり驚愕を禁じえない。

一切の遠慮無く放ってきた事に、なのはは完全にクアットロに支配されていることを悟り、シホは、

（これは……一筋縄ではいかないわね）

と、内心で苦心の言葉を零していた。

「……でも、今更引き返せないのよ！　なのは、あなたの洗脳を解除して救うからね！」

「……………」

シホの宣言に、しかしなのはは無言で杖を構えるのだった。

シホもシホで、

《アルトリア！ 体を早急に治療して！ 今から修羅場になるから傷ついた状態ではないのはの猛攻に対処できないわ！》

《わかりました、シホ！ 全て遠き理想郷を起動します！》

それでシホの体の痛みは次第に薄れていく。

そしてエクスカリバーフォルムを構えて強く握り直し、

「いくわよ！ なのは!!」

ここに来て初めてシホとなのはの本気同士の戦いが始まるのだった。



シホとなのはが戦いを開始した一方で、ヴィータとファイアットは駆動炉にガジェットを倒しながら向かっていった。

「やつー！」

「オラア！」

ファイアットの槍のデバイス、マグナ・スピアがランサー持込みの槍さばきで次々と貫いていく。

そしてヴィータもカートリッジと魔力温存でだが、だがしかしシユワリベフリーゲン

で次々と撃墜していく。

そしてあらかた撃墜し終えて片付けてしまった二人は背中合わせに一度呼吸を落ち着かせて、

「しっかし…なんだ？　ファイアット、本当にお前分のカートリッジも必要最低限以外は全部貰ってよかったのか？」

「はい。構いませんよ。私には強化魔術があります。それにトリニティデバイスである私のマグナ・スピアはカートリッジがなくとも充分強力ですから！」

そう言っただけでファイアットはマグナ・スピアを肩に立てかける。

ヴィータもそれなら、とファイアットから二、三個残しカートリッジをほぼ受け取り、

「よし！　それじゃ進むとしましょう——…ヴィータ!？」

「あ？　なんだ、ファイアットってええええ!？」

ヴィータが反応をしつかりと返す前にファイアットが首根っこを掴んでその場から即座に離脱して下がる。

「ケホッ、ケホッ！　一体なんなんだよ、ファイアット?！」

「私の『探知魔眼』が警告を示してきました…。そしてもう少し遅かったら私達はあれに貫かれていました…!」

「あれって…?！」

そうやってヴィータはファイアットの探知魔眼という奴で判明したものの方を見る。

するとそこにはガジェットとは一線を画したデザインで禍々しい鎌を持つガジェット。その名を『ガジェットドローンIV型』。

しかし、そんな名を知らないファイアットは違う種類のガジェットか…？と警戒をする。

そのガジェットは駆動炉へと続く道からそれを死守する守護者のように続々とやってくる。

「…まるでカマキリみたいなガジェットですね。要警戒ですね、ヴィータ！」

「……………」

だがそこでファイアットはヴィータの様子がおかしい事に気づく。

ファイアットの声には答えず無言で顔を俯かせている。

さらには体はブルブルと震わせて、指が食い込んでいるのか手のひらから血がにじみ出ている。そしてグラーファイゼンを握る手に力が入る。

「ヴィータ…？ どうしましたか？」

「——許さねえ…」

「…え？」

ファイアットは不安な気持ちになってヴィータに話しかけるが、ヴィータは聞いていな

かったようで、

「許さねえ許さねえ許さねえ！　なのはを襲った奴、全部ぶっ壊してやる!!」

さらに目を「キツ！」と見開いた。

その目には憎悪が籠められている事を悟ったファイアットは、そして思い出す。過去になのはを襲って重傷を負わせたアンノウンの機体の事を。

ヴィータはそれを思い出したのだろう。

駆けようと足に力を込めているのが分かる。

「…チエーンバインドー！」

咄嗟にファイアットはチエーンバインドを展開してヴィータを縛り上げる。

「なっ!?　ファイアット、何しやがる!?　あいつらはなのはを——!!」

「落ち着きなさい!」

「ツ!」

ズビシツ!とファイアットはヴィータの頭に手刀を叩き落とす。

強化魔術を込められていたために鋼鉄とはいかずとも重い一撃だったために結果は、

「いつてえええツ!」

思いつきり大声で叫んで痛みの声を上げるヴィータ。

「…それで、少しは落ち着きましたか?」

「お、おう……」

それで頭を冷やし落ち着いたのかバインドも消えてヴィータは自由になる。でももう暴走はしないようで、代わりにバツが悪そうな表情をする。

「…すまねえ、フィアット。嫌なもんを思い出しちまった」

「いえ、しようがないですよね。ヴィータはなのはさんの事をお姉様と同じかそれ以上に大事に思っているんですから怒るのは人間の証です。

ですが場を弁えてくださいね？ 私達は駆動炉を破壊しにきただけであつてガジェットを殲滅するために来たわけではありません」

「…おう。そうだな」

「まあ、あいつらは私に任せてください。ここで消耗するのは私だけで十分です」
そう言つてフィアットはガジェットドローンIV型へと歩を進ませる。

「フィアット！」

だがそこで背後からヴィータが声を上げて、フィアットは一瞬後ろを向き、

「…任せるぞ！」

「はいです！」

それでフィアットはマグナ・スピアを構えながら笑顔をヴィータに向けるのだった。

そして、

「…さて、それではヴィータを駆動炉にまで送り届けなければいけません。…ですから、即座にご退場願いますよね？」

ファイアットの立つ地面に緑色の魔法陣が浮かび上がる。

「結界とバインド使いとして腕を振るわせていただきます…！ チェーンバインド!!」

一体のガジェットドローンIV型にチェーンバインドを放つファイアット。

そしてバインドが絡みつくと本来拘束用の魔法なのにまるで自分の腕のようにしならせて振り回し始める。

それに巻き込まれて次々と他のガジェットIV型は潰れ、ひしゃげ、破壊されていく。

「ギギッ!？」

「フフフ…何か言いたいようですが、言わせません。私の魔法には手加減の文字はないのです！ さて、そろそろですね…」

ファイアットは何を思ったかバインドで縛っていたもう度々の衝突によりポロポロのガジェットドローンIV型に向かって呐喊する。

だがただの呐喊ではない。

「プロテクションスマッシュ!!」

これもまた本来防御魔法ではないプロテクションであるが、それを纏いながらガジェットドローンIV型に呐喊したのだ。

それは効果抜群でプロテクションで押しつぶされて爆発してしまった。

さらに残りのガジェットドローンIV型にファイアットは目をつける。

地面には巨大な魔法陣が描かれてこれから大型の魔法が放たれることは見ていた
ヴァイターにもわかった。

そして、

「アレスターチエーン!!」

幾重にも魔法陣からバインドが放たれてそこに残っていたガジェットドローンIV型
に巻き付く。

「魔術を融合させた私の術を受けてください！ バインド、魔力収束…強化開始！」

バインドに強化をかけてさらに強度を強める。

それによって縛られる力がさらに増してどんどんと圧迫されてきて、圧力に耐えられ
なくなったガジェットドローンIV型は次々と爆散していく。

「よし！ 終了です！」

「まさに圧殺だな…」

「はい。今の縛り上げの威力はかなりのものだったと思います。人間だったら即ミンチ
でしたね」

「恐ろしいなあ…。しかもあまりバインドやプロテクションはその性能的に魔力食わな

いから魔力節約になっているっていう感じか」

「はい。この魔力節約法はフォワードのみんなにも教えてありますので役立っていますよ。さ、ヴィータ。先に進みましょう。敵は全面的に私に任せてください!」

「おう!」

それで二人は駆動炉へと進んでいくのだった。



地上ではシグナムとゼストが今だに繰り広げていた。

「ハアアッ!」

「オオオオッ!」

シグナムの剣とゼストの槍が衝突して激しい音を響かせる。

その際にシグナムは、

(やはり、ヴィータの言っていた通りユニゾンに微妙なズレが生じているようだな…。だが、ここは譲れないんだ。なんとしても止めるぞ!)

そう思い、剣にさらに力を込める。

「ぬッ!」

僅かにだがシグナムに押し負けてきているゼストは思わず声を上げる。

《旦那！ あたしがアシストするから負けるな！》

「おう！」

アギトの必死な声と共に剣に炎が宿り、今度はシグナムが押されてきた。

だがこちらにも負けてやれないと言わんばかりに、

《シグナム！ 頑張るです！ 炎熱加速するですよ！》

「ああ！」

シグナムのレヴァンティンにもさらに炎が宿る。

二人の炎がお互いをさらに燃やせ上がらせる。

後はもうお互いの信念が優ったほうに軍杯が上がるというとても言うように。

そしてそれは訪れた。

「負けられんのだ！ レジアスに会うまでは！ 俺の信念はここで終わらせんぞ！！」

「ぐっ!!」

ゼストの叫びとともにシグナムはついに完全に押し負けてしまった。

ここでついに力量だけでシグナムを打ち負かしてしまったゼスト。

後方へと吹き飛ばされそうになるシグナム。

だが、すぐにそれは誰かに支えられた。

「ツ…。誰だ？」

「…どうやら苦戦しているようだな、シグナム」

シグナムを支えていたのは赤い外套に身を包み白髪褐色の武人。

そう、

「士郎か！」

「ああ。手助けに来た」

「しかし、地上の警備は…」

「そちらはアルクエイドと志貴に任せてきた。だから安心するんだな。それより…」

士郎はゼストを見る。

ゼストはすでに息もたえたえで倒れてもおかしくない状態だったのだ。

ユニゾンを解いていることから消耗具合は押し知るべしということだろう。

シグナムを吹き飛ばした瞬間を突いて離脱しようとしていたのだろうか、士郎の登場

でそれができなくなってしまうのだ。

「ゼスト・グランガイツ殿だな…？」

「お前は…？」

「八神士郎二等空尉。私もシグナムと同じく以前は首都防衛隊出身だ」

「そうか…」

「だ、旦那。まずいよ…。もう旦那の体は戦えないよ…！」

「しかし…」

ゼストとアギトがお互いに話し合っているとところに、

「取り込み中のところすまないが、ゼスト殿。あなたがレジアス中將に伝えたい事を教えてもらいたい」

「士郎、なにを…？」

「今は私に任せてくれ」

「…わかった」

士郎の言い分にシグナムはなにか考えがあるのだろうかとうと静観することにした。

「お前に話すつもりは…」

「話によっては通しても構わないと思っている」

「…なに？」

「レジアス中將に会いたいのだろうか？ ならば止めるよりいつそのこと合わせてしまった方が事件解決に繋がるかもしれないからな。ただ、私とシグナムの同伴という条件付きだがね…」

一気に捲し立てて喋り、士郎は笑みを浮かべる。

「…いいのか？ しかし、罨ではないか？」

「今のあなたの限界間近の体に鞭打つことはさせんと約束しよう。抵抗しても返り討ちにする自信はあるからな」

「対した自信だな…」

「私は負けるわけにはいかないからな。で、どうする？ 私達を倒して無理して進むか、それとも安全に進むか…」

ニヒルに士郎は笑う。

しかし、これはもう前者の選択はゼストにはできない事だった。

だから後者を選ぶしかないのだ。

うまい具合に話に乗せられたな…とゼストは苦笑を零すのだった。

「…わかった。レジアスには手は上げないと約束しよう。だから連れて行ってくれ。レ

ジアスの元へと…」

「わかった。ならば案内しよう。一応腕は拘束させてもらう」

それで士郎はマグダラの聖骸布を投影して腕だけに巻きつける。

効果はすぐにわかったらしく、

「なるほど…。拘束の布か。動かすことができん」

「理解が早くて助かるよ。では、いくぞ、シグナム」

「あ、ああ…」

「どうしたか…？」

「いや、なんでもない」

シグナムは内心で（私が戦う意味があつたのだろうか…？）と呟く。

だが士郎もなんとなく察したのだろう。

「シグナム。お前の戦いは無意味なものではない。お前がいなかったら私も戦う事になつただろう」

「そうか」

それでシグナムは内心で（さすがだな、士郎）と言葉を零した。

オマケでだが士郎の頭の上ではリインがすでにベストポジションを会得していてなぜかアギトが羨ましそうな目をリインに向けているのだった。

「やっぱり士郎。パパの頭は私のベストポジションですう♪」

「バツテンちび！ 後で代われ！」

「嫌ですよ〜！」

なにやら戦争中だということのほんわかかな空気が士郎の頭の上で流れていたのは、まあ三人は気にしないことにするのだった。

目指すはレジアス中將の執務室。

五人は進んでいくのだった。

第六十一話 『決戦(5) スバルの想い、ティアナの強さ』

地上で戦闘機人と戦闘を繰り返しているフォワード部隊。

センターガードのティアナ・ランスターはウエンディとティードの二人の戦闘機人と戦闘をしていた。

一緒に戦っていたスバルとは離れてしまい、一度は廃ビルの中まで追い込まれてしまっていたティアナだったが、

(自らビルに入ったのは罠だなんて、気づくかしらね…?)

ティアナはわずかに笑みを浮かべて今現在、フェイクシルエットと戦っている二人を視界に入れながら思考をクリアにしていた。

「シホさんから教えてもらった戦い方…。自分の優位になるように敵を誘導する。

言葉にするだけなら簡単だけど、そううまく敵も罠に乗ってくるとは限らない。

だから、追い込まれている風に装い、一撃で沈めるチャンスを待つ……！」

そう、いつも頭の中で思う言葉はただ一つ。

『イメージするのは最強の自分。外敵なんて必要ない。ただ常に戦う相手とは自分自身のイメージに他ならない』というシホの言葉。

それを胸に秘めていつ敵が向かってきても冷静に対処できるように心を落ち着かせる。

ただでさえ手札には限りがある私には戦略を組む方法しかないんだから。

そう、思うがすぐに思い直す。

「（そうよね……。ない物強請りは駄目。卑屈になつてはいけない。あたしはあたしなんだ。誰でもないあたし自身なんだ。だからあたしでやれる全力を相手にぶつける……！）」

そう、もうほぼ準備は完了していた。

後はいつこちらの罠にはまるかを待つのみ。

時間稼ぎをしてもいい。

でも、今は倒して捕縛する事も先決であるからだ。

そして、ついにウエンデイとデイドはティアナの放ったシルエットを全部破壊して

ティアナの位置を特定したらしく迫ってきていた。

「(来る……!)」

それでティアナは片方のクロスミラージユをダガーモードにしてもう片方を “ある場所” にセツトした。

カートリッジも装填してある為にいつでも準備はオツケイである。

そして二人は現れた。

ウエンディはライドイングボードに乗って、デイドはツインブレイズの双剣を構えながら飛行してティアナのところまでやってきた。

まずは先制とばかりにデイドがティアナに突撃を仕掛ける。

「はあっ!」

「ハッ!」

ティアナのダガーモードとデイドのツインブレイズが衝突する。

だがしかし双剣に対して片方だけのダガーだけで受け止めるには少々力不足である。だけどティアナはそれを受け止めた。

デイドは受け止められるとは思っていなかったらしくその表情が少しだが驚きに彩られる。

「どうしたの……? あなたの自慢の双剣なんですよ? もっと力を入れたらどう?」

「舐めないでください！」

それでデイドは少しばかり頭に血が上ったのか何度もティアナにツインブレイズを叩きつけていく。

だがティアナはそれを片方だけだというのに、受け止め、いなし、防ぐことを繰り返して、後一步を踏み込ませない。

「なんで、なんで……！ 私のツインブレイズはあなたなど簡単に倒せるはずです！」

「お生憎ね。あたしはあなた以上の双剣使いに修行を今までずつとうけて来たのよ？」

こんな遅い連撃、受け止めきれないなら弟子失格だわ！」

「くっ！」

表情に乏しいデイドが少し悔しそうな表情をする。

それだけ自信をなくさせるほどにティアナはデイドの攻撃を受けきっていたのだ。

「デイド！ 熱くなるなッス！」

後方からウエンディのエアリアルレイブの砲撃がティアナに発射される。

それを見たティアナは即座に射線上にいるデイドの前へと移動する。

普通ならここでデイドは退避して、砲撃がティアナに当たるところを今現在頭に血が上っているデイドは一瞬の間を出してしまい離脱に遅れてしまったのだ。

「！ いけない！」

すぐにウエンデイは砲撃を消そうとするがそれより早く、

「ガツ!？」

右方向からなにかの砲撃が放たれてウエンデイに直撃する。

「わあああぁー!?!？」

それで壁に突っ込んだウエンデイはそのまま気絶するかのよう意識を手放した。

そして、ウエンデイの残した砲撃に避けそこなつたデイドもなんとかツインブレイズを振るい、エリアルレイブを切り裂いた。

切り裂いた後、即座にティアナの方へと振り向いたがそこにはすでにティアナの姿はなかつた。

「どこに!？」

「(ち)ち(ら)らよー!？」

なんとティアナはデイドの真正面からダガーモードで突撃をしてきたのだ。

一瞬、呆気を取られるデイドだが、すぐに思考を取り戻して迎え撃つた。

「打ち合いならば負けません……!？」

大きく上段からツインブレイズを両方ともティアナに振り下ろした。

だがここでもデイドはミスを犯す。

本来なら気づけたはずだったのだ。

ティアナの姿は幻影だったために切り裂いたと思った途端に掻き消えてしまった。

「ッ!？」

「残念…。それはあたしの幻影。本命は——…!」

ティアナの声はこの場からではなく少し離れた場所から響いてきた。

それでデイドは声が聞こえてきた方に向くとそこには砲身が伸びて巨大化したクロスミラージュ、ソードモード：『クロスミラージュ・ブレイズ』を構えてすでに射撃体勢に入っていた。

そして、

「う、ああああ!!」

デイドは諦めずにティアナに突っ込むがもうチャージは完了していた。

「必殺！ ファントムブレイザー!!」

オレンジ色の砲撃魔法がデイドに向かって放たれて、デイドは、

「ツツツツ!!」

その砲撃についに飲み込まれてしまった。

後に残ったのは目を見開きながら気絶しているデイドの姿であった。

「やったわね…」

それでティアナは一息をつく。

それで二人を捕縛するために歩を進めようとしたその時だった。

「——驚いた。まさかウエンディ姉様にデイドまでやられるなんて……」

「ツ!?!」

「でも、僕の存在を忘れていたのは致命的だったね。幻影使い……。IS・レイストーム」
そこに天井を突き破ってオットーがティアナに向かって風の一陣・レイストームを放った。

それに晒されてティアナは大きく吹き飛ばされる。

「きゃあああつー!」

そして壁に激突して頭から血を流していた。

「うっ……」

ズルズルとティアナは壁からずり落ちてその場で膝をつく。

そして目の前にオットーが下りてきて、またその手にレイストームを放とうとISを発動しようとする。

「よく頑張ったね。でもここで終わりだよ……」

「それは、どうかしらね……?」

窮地に追い込まれているはずなのにティアナは不敵な笑みをオットーに向ける。

「この状況でなぜ笑える……? もう手はないはずだ」

「それはあんたの勝手な思い込みでしょ？ 策士はね、いくつもの策を仕込んでいるもんですよ」

なお笑みを崩さずティアナは指を一本立てた。

それでなにかの魔法動作だと思ったオットーはさっさと倒してしまおうとしたその時だった。

『ドウンッ！』という砲撃音とともになにかの反応がオットー目掛けて向かってくる。

「ッ!?」 反応がでかい！ これは…!」

オットーが振り向いた先にはオレンジ色の巨大な砲撃が迫ってきていた。

「! レイストーム!!」

オレンジ色の砲撃とレイストームが衝突する。

そしてなんとか相殺できたことを確認したが、それでティアナに向ける注意をなくしていたことに気づいたオットーは振り返るがもう顔の目の前にはクロスミラージュの砲身が掲げられていた。

「チェックメイト、ね…」

ダンッ!

ティアナの放った弾はオットーの胸に見事直撃した。

さらにまだ終わらないとばかりに、放電音がしだしてオットーの体を電流が流れ出

す。

「うあああああー!?」

「あたしのスタン弾の威力はどう? ま、時期に気を失うから関係ないけどね」

「この、オレンジ色の悪魔め…うつ」

それで電流による感電でオットーはついに意識を手放すのだった。

「嫌な捨て台詞を残して気絶するんじゃないわよ。つたく…」

そうティアナは愚痴るが今度こそ勝ちを拾えたと確信してその場にへたり込む。

「でも、遠隔操作でブレイズモードが起動してくれるのは助かったわね。さしずめセツティングしておいてよかったわ」

そう、今回の決め手はブレイズモードではなく、物陰に隠しておいたもう一丁のクロスミラーージュだったのだ。

すずかの魔改造でクロスミラーージュは担い手の手から離れても自分の意思で事前にカートリッジロードしておけば砲撃を放てるように予備魔力が内蔵されていたのだ。

これで一回ウエンディを撃墜したのであった。

しかしそれだけではオットーは狙い打てなかった。

驚くべきはその設置した射線上に誘導するティアナの手際を褒めるべきだろう。

一直線にしか放てない砲撃を二度も狙って当てるにはかなりの計算と誘導が必要に

なってくるのだから。

…まあ、そんなことなど知るよしもない戦闘機人三人は慢心はしていなかったのだからがティアナの手の上で踊らされる形で撃墜されてしまったのである。

こうしてティアナ VS ウエンディ・デイド・オットーはティアナの勝利で幕を閉じるのであった。



…ティアナが三人を討ち取る少し前にまで遡る。

Side スバル・ナカジマ

「うおおおおおー！！」

「おりやああああー！！」

あたしのリボルバーナックルの拳と、確かノーヴェとか言ったつけ？ その子のスパイクのような蹴りによる武装が衝突する。

それでまたしても拮抗してすぐに弾かれてあたしはウイングロードに飛び乗る。

あちらもあたしのウィンググロードに似たISを展開して飛び乗る。

「ふんっ！ やるじゃねーか！」

「ノーヴェもね！」

「ふんっ…」

「えへへ…」

敵同士だと言うのにあたしとノーヴェはお互いに笑みを浮かべていた。

「ねえ…？」

「なんだよ？」

「あたし達は同じ戦闘機人だよね」

「あー、そうだな…」

「でも、こんな戦争を起こさなくても生きていけるんだよ？ 笑えるんだよ？」

「そんなのは無理だ…。あたし達にはそんな道はねえんだよ！」

「いや、ある！ あたしとギン姉はこうして人間として、人として暮らしていける！」

だからノーヴェ、あなたもあたし達と一緒に暮らしていけるんだよ！」

「そんな話…信じられるか！」

「信じて！ あたし達はきつと分かり合える！ 一緒に笑い合えるんだよ！」

「ッ…！」

それでノーヴェエの表情は少し葛藤しているように見える。

あと、少し…。

もう少しでノーヴェエは心を開いてくれる！

あたしがそう思ったその時だった。

「あー！ もうなんとでもなれ！ あたしに言うことを聞かせたきやあたしに勝つことだな！」

そう、ノーヴェエは啖呵を切ってきた。

「…うん。やつぱりあたし達は似ているね。やつぱり最後には拳同士で語り合わないやつていけない、ティアア曰く脳筋つて奴だね！」

「なんか知らねえけどその言葉、無性にムカついた！ かかってこいよ！ 勝つのはあつただからな！」

「言つたね？ それじゃ、いくよ!!」

「来い!!」

それで再度あたしとノーヴェエはロードを作り空を駆ける。

そして何度も拳と蹴りを打ち合わせていく。

…昔は戦いなんて怖かった。

自分も傷つくし相手も傷つけちゃうから…。

でも、戦う事で分かり合えることもあるんだ。

だから、今は分かり合うために本気を出そう！

「だから、いくよ？ マツハキヤリバー！」

《はい、相棒！ 私達の力をあの方に見せ付けてやりましょう！》

「うん！ いくよ！ ギア・エクセリオン！！」

マツハキヤリバーから水色の魔力による翼が生えてきて、さらに加速力をアップさせる。

「これなら！」

「いっくぞー！！ リボルバーシュート！！」

「うおおおおー！！ リボルバース・パイク！！」

あたしとノーヴェエのおそらくかなり上位の攻撃が衝突する。

でも、負けない！

ノーヴェエに勝って、分かり合うんだ！

あたしの拳はそのためにあるんだ！

破壊のためじゃない！ そう、わかりあうために！

「そう！ いつでもあたしは全力全開！！」

「ッ!？」

それでノーヴエの攻撃をいなして拳に魔力をためる。

「受けてみて！ 一撃必倒！ デイバインバスター!!」

「だ、駄目だ！ 防ぎきれない!？」

それであたしのデイバインバスターがノーヴエの腹に直撃する。

「これで、とどめだぁー!!」

さらに魔力をこめて一気に開放する。

「うわぁあぁあッ!!」

それでノーヴエは地面を何度も跳ねて次第に転がる。

あたしはすぐにそばに駆け寄って、

「…大丈夫?」

「…お、お前がやったことだろ?」

「そうだったね」

「でも、負けたのになんかいい気分だ…。次は、負けねえからな?」

「うん! いつでも相手になるよ!」

「くっ…」

最後に笑みを浮かべてノーヴエは気絶した。

「これで、任務完了! ティア達を助けにいかなきゃ!」

「スバルー！」

そこにちようどよくティアの声が聞こえてきた。

ティアはバインドで三人ほど捕らえてこちらに向かつてきた。

「嘘!?! ティア、三人も倒したの!?!」

「ええ、なんとかね。そっちもやってみたよね。スバルー！」

「うん！」

あたしは満面な笑みでティアに返す。

「…後は、ギンガさんにレン、エリオにキヤロね…。消耗したあたし達じゃ邪魔になりそうだからね」

「確かに…、疲れたね。そうだよね、マツハキヤリバー？」

《はい。そうですね、相棒》

「ふふ…」

さつきはあまり気にしていなかったけど、マツハキヤリバーに相棒だと認められて嬉しいな。

シホさん達も勝つてなのはさんを救出しているといいな。そう思ってたしは空を見上げた。

第一百六十二話 『決戦（6） レンとギンガの覚悟』

アルクエイドと志貴はガジェットが攻めてきている道を一気に駆け抜けて次々と倒しているところだった。

アルクエイドはその爪を硬質化させて潰していき、志貴は短刀・七夜を振るい切り裂いていく。

背後から二人に当たらないように魔導師達の援護射撃が飛んできて二人の打ち零しを倒していく。

ゲンヤはそれを背後で控えている車両から見守りながら、指示を出していた。

「…しかし、あの二人はあのタヌキの切り札らしいが、かなりのもんじゃねーか。圧倒的だ」

そう呟く。

それほどに二人は戦果を上げていたのだった。

これなら突破されることはないか…？ と安心しているところに、

「ナカジマ三佐ー」

「ふっ…当たり前だろ？ 多分、報告にあったサーヴァントに似た気配を持つ奴だろ？
なら俺達の出番だ」

それで二人はその黒い獣へと向かっていくのだった。



ギンガとチンクは廃都市の退れた道をじぐざぐに移動しながらもお互いに攻撃を繰り返している。

しかし、それは地上本部襲撃事件の時の焼き回しのようなものであった。

ギンガは近づけば直接攻撃できる、だがそれはチンクのテリトリーに侵入するという
こと。

逆もまたしかり、チンクは近づけばランブルデトネイターで攻撃できる、だが近づき
すぎるとギンガの素早い攻撃に対処できない。

ゆえにどちらも中々一步を踏み出せずに膠着状態に陥っているのだった。

「はあ、はあ…あなたのナイフ、後何本あるの？」

「ふう、ふう…さてな。そちらもいい加減体力は尽きないか？」

「お生憎様。体力には自慢があるのよ」

「なるほど…。ならばやはり直接私が手をくださなければいけないようだな」
それでチンクはさらにナイフを数本構える。

それに対してギンガはリボルバーナックルを回転させていつでも突撃できるように構える。

「…ブリッツキャリバー、ここで彼女に遅れを取るわけにはいかないわ。イチかバチかの賭けを仕掛けてみようと思う。一緒に駆け抜けてくれる…？」

《どこまでもお供します、マスター》

「ありがとう…。いくわよ！」

《はい！》

それでブリッツキャリバーは魔力を注がれてスバルのマツハキャリバーと同じく翼を宿す。

その翼が大きく羽ばたき、魔法陣も輝きを増していく。

左手のリボルバーナックルも回転速度を上げさせて唸りを上げる。

「…むっ？ ついに賭けに出たか？」

「ええ。あなたを倒すためには一歩踏み出さないといけないようだからね」

「ならばこちらも相応のものを用意しよう」

それでチンクは空中に何十本ものナイフを浮かばせる。

普通に考えればそれを見ただけで気力を削がれてしまうかもしれない光景であったが、ギンガは対照的に笑みを深めた。

「なぜ笑える？ この状況、お前に勝ち目は薄いのだぞ？」

「…いえ、どうもこの光景は少し、というかかなり見慣れているんですよ」

「見慣れてる…？」

「あ…：気にしないでもいいわよ。こちらの事だから」

チンクの姿がどうしてもシホの劣化版の光景に見えて仕方がないギンガだった。

「さて、それじゃ行かせてもらうわ！」

「来い！ 姉には負けは許されないのだ！ オーバーデトネーション!!」

そしてギンガは一気にギアをトップにまで持っていきウイングロードを展開してチンクへと呐喊する。

それをチンクはまるでシホの全投影ソードパレルフルオーブン連続層写のようにナイフを全部ギンガ目掛けて放ってきた。

「ブリッツキヤリバー！ 全方位プロテクション!! 致命傷コース以外のものは捨て置いていいわ！」

《はい！》

ギンガはナイフの嵐の中を駆け巡る。

だがすぐに爆発の連鎖に襲われていく。

度重なる爆発により起こる煙によってギンガの姿がどんどん見えなくなっていく。

「くっ！」

『ボンッ！』という破裂音と共にまた一つナイフが爆発する。

それをギンガは最小限の防御だけでなんとか凌いでいく。

部分部分で爆発する箇所をブリッツキャリバーが計算してそこにだけ絞ってプロテクションを展開する。

そしてギンガは目視で避けられる物は自力で避けていく。

その繰り返しが数分続いた。

「これで、仕留められたか……？」

チンクはほぼ手持ちのナイフを消耗しきった状態でこれ以上の戦闘には支障をきたす状況だった。

だからこれをもし掻い潜ってくるとしたらもう手がないと思った。

ゆえに倒れていてくれよ？ と願うだけ。

だが、それは爆煙の中から伸びてきていたウイングロードが健在である事でナイフの嵐が破られたことを悟る。

『ギイイイーンッ！』というブリッツキャリバーの駆動音が聞こえてきて、次いでギンガ

の『はああああー！！』という叫び声が聞こえてきてチンクはせめて防衛することだけを考えて腕を交差させた。

「決めるわよー！」

爆煙の中から飛び出してきたギンガは体中に傷を負いながらも、しかし致命傷は一切受けていない状態で抜けてきたのだ。

ブリッツキヤリバーとの息の合った連携があつたからこそできた芸当である。

「くっ……！」

「リボルバー……シユート!!」

リボルバーナツクルから魔力弾が放たれナイフも構えていない無防備なチンクに激突した。

「ぐうっ!!」

『ズザザッ!』と地面を踏ん張りながら耐えて防ぎ切つたが、次の一手がもうないチンク。

それでチンクはもうダメだと諦めて両手を上げて降参ポーズをする。

それを見てギンガは振りかぶっているリボルバーナツクルをチンクの顔一步手前で急停止させる。

「勝負、ありつてところかしら……？」

「ああ。降参だ。私にはもうナイフがほぼないからお前に太刀打ちできる力は残されていないのでな」

「そうですか。だったら騒乱罪の罪であなたを逮捕します」

それでチンクは素直にギンガのバインドによる拘束に従ったのであった。

「さて、レン君！」

ギンガは今二対一で孤軍奮闘しているレンの元へと向かおうとしているのだった。



Side レン・ブルックランズ

「はああああー!!」

「くっっ！」

ラン姉さんのバルムンクによるおお振りの斬撃がまた僕とアウルに襲いかかってくる。

それを防ぎ、また距離を取ってアブソーププロテクションを展開する。

それは思ったとおりでトレデイのクラッシュャーバイトが迫ってきたからだ。

それもさらに防御する。

「……………理解できません。……………レンさん、あなたは先程からガードばかり。……………なにがしたいのですか？」

「それはまだ話せないんだ。でも、トレディ、僕は君と戦いながらも話が見たいんだ」

「……………話、ですか？」

トレディはコテンと首を傾げて怪訝な表情になる。

その表情一つ一つは無機質な感じながらもその中に可愛さも秘めているからつい見とれてしまう。

でも、そんな邪な気持ちは今は抑えて話を続ける。

「…ねえ、トレディ。君は恋という感情を知りたいんでしょう？」

「……………はい。……………レンさんに抱くこの感情がまだ恋だとはつきりとわからない以上、それが本当なのか確かめたいのです」

「僕をそこまで思ってくれるのはとても嬉しいよ、トレディ…」

「おおおおおー!!」

「ラン姉さん、今は邪魔しないで！」

僕とトレディの会話など関係なしだと言わんばかりに攻撃してくるラン姉さんの攻撃をアブソーププロテクションで防ぐ。

プロテクションとバルムンクの魔力刃の衝突により『ギギギギッ!』と削られる音が響くが今は耐えなきや…!

それで何度も斬撃を受けながらも話を続ける。

「でも、一方的じゃダメなんだ。お互いに想いあつていないと無理矢理僕の心を奪つても後悔するだけだよ?」

「……………ですが、レンさんに振り向いてもらうためにはこうするしかないのです…」
シユンツと顔を俯かせてそう弱々しい声でトレディイは語る。

そうか…。戦闘機人だからそう言った方面の感情にはやつぱり乏しいんだね。

「それなら、まずはお友達から始めよう。トレディイ!」

「……………お友達から、ですか?」

「そう…。まだ僕は君のことをそんなにわからない。だからお友達から始めてその気持ちかトレディイの本当のものなのか確かめていこう!」

「……………ですが、私はあなたの敵なのですよ? レンさん?……………そんな時間が与えられるなんてことが…」

「まだわからないじゃないか! トレディイの罪はきつと重いものになると思う…。でも、いつか償つてまともな道を進むことができる!」

「……………それは、つまり私に投降しろということですか? レンさん」

「うん！ こんな事はもうやめて、僕達と一緒に歩いていこう！」

そう言つて僕はトレディに手を差し出す。

だけどトレディは少し悲しい表情になる。

「……………できません。私は、あなたの姉君であるランさんを捕らえたばかりか洗脳までしてしまいました…。こんな私がレンさんと歩んでいくことなど…」

「そんなことはどうだっていいよ！ ラン姉さんはまだ死んでいない！ まだ手遅れじゃない！ なら、まだやり直せるから！」

「……………レンさん。ですが…」

「…そんな悲しい表情をしないで、トレディ。周りがなにか言つてきても僕がトレディの事だけは信じるから…！」

「……………あつ……………」

それでトレディは目を見開いて涙を一滴垂らす。

「……………こんな私を、信じてくれるのですか？……………こんな、私を…」

それで僕は笑顔を向けながらも、

「うん、信じる！ 僕は君の味方になるよ。だから…」

「……………レン、さん…」

もう少して説得できるかもしれないと思つた時だった。

『トレデイちゃん？ そんなガキの言葉なんて聞く必要はありませんよ？ 私がその耳を閉ざしてあげるわ』

「……………クアット口姉様!?! なにを…グツ!?!」

スクリーンにメガネの戦闘機人が移り出すとなにかを操作したのかトレデイが頭を押さえだして苦しみ出す。

「トレデイになにをした!?!」

『あら〜？ あなたの世迷い事に聞く耳立たせないように意識を手放させただけですよ〜?』

「そんな…!?!」

『それじゃトレデイちゃん。そんなガキなんて倒しちやいなさい!』

「……………はい。クアット口姉様」

それでトレデイの瞳から光が消え失せて僕に向けてクラッシュャーバイトを向けてきた。

ラン姉さんもバルムンクを構えて仕掛けようとしてくる。

「なんてことを…」

許さない…。あと少しでトレデイを説得できたかもしれないのに。

でも、なら一回倒すしかないんだね…。

それで僕はアウルに話しかける。

「…アウル。アブソープ充填度は、今どれくらい…?」

《はい。ライトシールド、レフトシールド共に現在90パーセントです》

「そっか…もう少し充填度を上げておきたいけど、でも…いくよ！ アウル!!」

《はい！ カートリッジロード!》

それでアウルはカートリッジを装填する。

それによつてラン姉さんとトレデイによる攻撃でシールドに吸収していた魔力と、そして足りない分の魔力を一気に補い100パーセントにする。

「アウルヴァンデイル！ サードモード、リリース!!」

《シエルブローフォルム、展開します!》

そうして円上の盾が両方共光り出す。

そして肘あたりまでシールドが伸びていき関節部分に噴射口が出現する。

さらに手にまで光は及んでいきスバルさんのリボルバーナツクルのようにナツクルを纏う。

手の甲にはアウルのシールド部分についていたスファイアが現れる。

そう、これこそアウルの戦闘形態。

「う、うう…!」

「ああああー!!」

トレディとラン姉さんが僕に向かってくる。

でも、僕はそれを迎え撃つ!

まずはラン姉さんだ!

「アウル! ライトシールド、魔力開放!」

《はい! ライトシールド、充填魔力開放します!》

瞬間、右腕のシールドに溜まっていた魔力が爆発して肘部分の噴射口から炎が吹き上がる。

僕は右腕を掲げてラン姉さんに向けて腕を構える。

そしてラン姉さんに向けて円上のゲートが出現する。

「アウル! 駆け抜けるよ!」

《はい! シールドエネルギー、拳に集束! ゴー!!》

そして僕は噴射口からの炎を推進力に一気にラン姉さんへと突撃する。

「あああー!!」

「これが、僕の、覚悟だー!! ライト・シールド・シユラーゲーション!!」

拳にシールドを纏いながらラン姉さんのバルムンクと激突する。

ラン姉さんは負けじとバルムンクの魔力を上げて強度を上げているようだ。

でも、負けない！

押し通る！！

「いつけえええええーッ！！」

裂帛の叫びとともに力を込める。

そしてラン姉さんのバルムンクの魔力刃に罅が入りついには砕け散り、もとの大きさに戻ったバルムンクを足で蹴り飛ばして勢いのままにラン姉さんに拳を見舞う。

「ッ!？」

そのままラン姉さんは壁に激突して意識を失って気絶する。

「あああああーッ！！」

でも、まだ暴走状態のトレデイが残っていた。

だけどまだ僕にはレフトシールドが残っている。

「アウル！」

《はい！ レフトシールド、充填魔力開放します！》

そしてまた噴射口から魔力による炎を吹かす。

「クラッシャーバイトーッ！！」

「うおおおーッ！！ レフト・シルト・シユラーゲン！！」

クラッシャーバイトと僕の左のナックルが激突する。

それで拮抗する。

ガリガリと音がしてアウルに罅が少し入る。

でも、まだだ！

《ラケーテン・ブースト！》

アウルの言葉とともに噴射口からさらに炎が上がりその炎の勢いはついには僕の体以上に吹き上がる。

「貫徹ー！！」

そして『ガシャンッ！』という破碎音とともにクラツシャーバイトは粉々に砕け散る。

「ッ!!?」

「いっけえええー！！」

クラツシャーバイトが砕けて無防備なトレディ目掛けて僕は再度拳を叩きつける。

「ああっ!!」

トレディは叫びを上げてその場で蹲る。

「はあ、はあ……」

僕はもう魔力をほぼ使い切ったために息もキレキレでこれ以上戦えることはできない状態だ。

「……………レンさん」

でも、そこで正気に戻ったのかトレディの淡々とした声が聞こえてきた。

「……………参り、ました」

それでトレディはその場で気絶した。

「やった…のかな？」

《はい。やりました、マスター》

それで僕もシエルブローフォルムを二度も使用した為に凄まじいGの影響で力を使い果たしてその場で倒れそうになる。

だけど、そこで誰かに支えられる。

それで顔を上げるとそこにはラン姉さんをその手で支えていたギンガさんの姿があった。

「…やったわね、レン君。かつこよかったわよ」

「ありがとうございます。ギンガさん…」

僕が感謝の言葉を出すと、次にはもつとも聞きたかった人の声がギンガさんの隣から聞こえてきた。

「——まったく…。雑な助け方をしてくれたわね、レン。私もバルムンクもボロボロ

よ…?」

「ら、ラン姉さん！」

「…ま、助けてくれてありがとね。レン」
「うん！」

僕はついに取り戻したんだ。ラン姉さんを！
やったよ。シホさん！

第一百六十三話 『決戦（7）ライトニングの決着』

フェイトとアリシアはスカリエッツィの発生させている赤い檻に閉じ込められていた。

「くくく…気分はどうかね？ プレシア・テストロッサの研究によって生み出されたアリシア・テストロッサのクローンであるフェイト・テストロッサ…」

「くっ!？」

「フェイトはたとえ私のクローンだとしても私のれっきとした妹だよ！」

「アリシア…」

フェイトはアリシアのその言葉にまた胸が熱いものがこみあげてくるものを感じていた。

「まあ、いい。そして、シホ・E・S・高町の真実の魔法の力で生き返ったアリシア・テストロッサよ。私は君のことを研究したくてしようがなかったのだよ」

「ひっ!？」

「アリシアに触れようとするな! この外道が!」

フェイトがそう叫ぶ。

それにスカリエッティはそれでも余裕の笑みを崩さずに、

「いいねえ。その反抗的な目…。アリシア・テスタロッサには似ていないが、君達の母であるプレシア・テスタロッサには似ているよ」

「当然だよ! 私とフェイトはお母様から生まれたんだから。だからそれは必然だよ!」

アリシアがそう叫んで『ガチャッ!』とスピードスター・ガンズモードを構えてスカリエッティへと放つ。

「させると思うか…?」

だがその弾丸は控えていたトーレによって弾かれた。

アリシアはそれで悔しそうに顔を歪ませる。

「…アリシア・テスタロッサ。君もやはりプレシアの娘だね。すぐにカツとなるとろは親譲りというところか」

「お母様の悪口を言わないで!」

なおも叫ぶが檻から出られない二人は悔しそうにするしかできなかつた。

それをモニターの先で見ているエリオとキヤロは、

「フェイトさん！」

「アリシアさん！」

ルーテシアと戦いながらもその光景を見ていた。

だけど戦闘と説得に集中するためには今はこちらに意識を向けなければいけないと思つた二人は、クアットロに洗脳されたとしても再度ルーテシアの説得をするのだつた。

「ガリユーー！ 君の主人が苦しんでいるんだよ！ 主の事を考えられるなら一緒にルーを止めよう！」

「……………」

エリオの呼びかけにガリユーは動きを止める。

だが、現状ではなにも変化がない。

キヤロもルーテシアに向かつて、

「ルーちゃん！ もつと自分の意思を持って！ 洗脳なんかには支配されちゃダメ！」

「…あなた達はいいいね」

「えッ…？」

ルーテシアのその言葉にキャロは一瞬説得の言葉を止める。

「友達がいて、家族がいて、暖かい空間に囲まれている…。でも、私にはそれはない…。ゼストも、アギトもそのうち私の事を忘れてどこかへ行っちゃうんだ…。一人は、一人は嫌だああああー!!」

「ルーちゃん…」

心を閉ざしてしまい、自分を一人だというルーテシアのその姿にキャロは涙を流し、次にはルーテシアを移動術を使い抱きしめていた。

「ッ…!?!」

「ルーちゃん…ルーちゃんは一人じゃないよ…?」

「うるさい! 離れろー!」

それでルーテシアは体から魔力を放出させてキャロの体を傷つける。

でもキャロは決してルーテシアを抱きしめている手を緩めずに決して離そうとしなかった。

「ルーちゃんは決して独りじゃない。孤独なんかじゃないんだよ…」

そのゼストさんとアギトちゃんって子も、きつとルーちゃんの事を大事に思っている…。きつと、ルーちゃんの帰りを待っているよ…?」

「そんなの、嘘だ…!」

「嘘じゃない……！」

「ッ!？」

キヤロは大声でルーテシアの言葉を否定して叫んだ。

ルーテシアもその叫びによって言葉に詰まった。

「二度繋がった絆はそう簡単に切れるものじゃないんだよ？ だから大丈夫！ それに、私達もいるよ……？ 私達がルーちゃんの友達になつてあげる……ルーちゃんのお母さんを助ける手助けも絶対にする！」

「で、も……そんな口約束……」

「口約束なんかじゃない！」

そこにガリユアの攻撃をストラダーダで何度も受け止めて耐えているエリオが叫ぶ。

「僕達はきつと分かり合えるんだ！ だからさつきも言ったように僕達の手を取って！」

ルー!!」

「エリ、オ……」

「グッ……。……そ、そうだよ、ルーちゃん！ 私達は、どこにもいかない……！ ルーちゃんが離れようとするなら私達はさらに追いかけて、そして捕まえる！」

「あ……」

それで洗脳されているというのにルーテシアの瞳から涙が垂れる。

『ルーテシアお嬢様！ そんなー！』少し黙っている、クソメガネ!!』ツ?!』

またスクリーンからクアットロが洗脳を強化しようとしたが、そこでエリオの心からの叫びでそれはかき消された。

「僕達の邪魔をするな！ ルーは貴様なんかの良い様に利用されていい子なんかじゃない!!」

普段の温厚で誰にでも優しい笑顔を向けるエリオにしては珍しくクアットロに対して怒りを示してキレていた。

『くっ……!』

それでクアットロの映像は消えた。

どうやらルーテシアの事を諦めたのだろう。

「さあ、ルーー！ 僕達と共に行こう！」

「そうだよ！ ルーちゃん！」

「エリオ…キヤロ…私は、あなた達と一緒にいたい…もう寂しい思いをしたくない…!」その瞬間、ルーテシアを支配していたものが砕けた感覚をルーテシアは感じた。

洗脳を自力で振りほどいたのか目から次々と涙が溢れてきてルーテシアは今だに抱きついているキヤロの胸に顔を埋める。

「そうだよ、ルーちゃん…。それでいいんだよ」

「そうだよ、ルー。もう僕達は君の友達なんだから……」

「うん……！ ガリユール！」

それでルーテシアはガリユールを呼ぶ。

それでガリユールはルーテシアの隣に佇んで、

「ガリユールも、いつまでも一緒にいてね……？」

「……………」

言葉を話せない代わりにガリユールはその場に片膝をついて頷くのだった。

「フェイトさん！ アリシアさん！ ルーはこの通り確保しました！ だから、負けな
いでください!! 僕達がついています！」

「そうです！ 私達は応援しています！ きつと、フェイトさん達は過去の因縁を断ち
切れるって事を信じて……！」

エリオとキャロはスクリーンの向こう側で捕まっている二人に向かってそう叫んだ。



S i d e フェイト・T・ハラオウン

エリオ、キャロ：強くなったね。

もう、私がついていなくても頑張れる強さを手に入れたね。

だから私達は過去の因縁をここで解消するよ。もう、迷わない！

「…アリシア、二人にここまで応援されたんだから、頑張らなきゃいけないね？」

「そうだね、フエイト！」

それで私は右腕を天に掲げる。

それによつて右手の甲にある令呪が輝く。

「なにつ!? これは…！」

「第一の令呪に命じます！ 来て、ランサー!!」

《おうよ!》

それで今どこかで槍使いの女性と戦っているはずのランサーをこの場に顕現させる。

風が吹き荒れて一瞬にしてランサーが私達の目の前に現れる。

「マスターの命のもと、馳せ参じたぜ！」

そう言つてランサーは私達を捕らえている赤い線の檻をゲイ・ボルクをひと振りして

砕いてくれた。

「…ランサー！ 戦闘機人の相手をお願い！」

「わかったぜ！」

「私とアリシアはスカリエッティをやる……！」

「うん！ フェイト！」

そして私はスカリエッティと戦うために真・ソニックフォームを起動する。

「オーバードライブ！ 真・ソニックフォーム！」

「スピードスター！ ソニックガンズフォーム！」

私は真・ソニックフォームになってバルディッシュ・ライオットフォームの双剣を携える。

アリシアのスピードスターもガンズフォームの砲身が伸びて大型のロングレンジライフルに変化する。

「いくよ！ アリシア！」

「うん、フェイト！」

そうやって私とアリシアは高速で駆け抜ける。

一瞬、ランサーの方に目を向ければ、

「オラオラオラ……ッ!!」

「ッ！ グアッ!?!」

「これで、しまいだ！」

ゲイ・ボルクをおお振りでおお振り回して戦闘機人の腹に当てて壁まで吹き飛ばして戦闘

不能にしていた。

さすがランサーだね。

私達もここですべての因縁を断ち切る！

「スカリエツテイ、覚悟！」

「…いいのかね？ 私を倒しても13人の戦闘機人の体内に私のコピーを仕込んでい

のだよ？」

「なにつ!？」

「そんなつ!？」

「どれか一人でも生き残ればすぐに私は復活して、ひと月もすれば私の記憶を受け継い

で蘇るのだよ…」

「そう…。馬鹿げてるけど、きっと全員捕まえるよ。私達機動六課は全員逮捕するんだ

から！」

「そうだぜ！ そんなくだらねえ仕組みなんざ糞くらえだ！」

「ほう…。トーレをあつけなく倒したか。ランサーのサーヴァント…いや、クー・フリー

ン？」

「てめえ…俺の真名を」

「君は有名だからね。そしてフェイト・テストアロッサ。君は私によく似ているんだよ」

「なにを…?」

「私は自分で作り出した生体兵器達…。君は自分で見つけ出した自分に反抗しない子供達に使い魔。」

それを自分の思うように作り、いや、自分の目的のために使っている!」

「そんなことは、ない!」

「そうかね…? 君もあの子達が自分に逆らわないように教え込み、自分のコマとしていいように戦わせているだろう?」

「フェイトはそんな子じゃない!」

「アリシア…」

アリシアが涙目でその声を発してくれた。

「フェイトはそんな理由であの子達を引き取ったんじゃない! 哀れみを感じたんじゃない! フェイトは心からエリオとキャロの幸せを望んで今まで育ててきたんだよ!」
「その通りだ。てめえの身勝手な事情をマスターと混同させんじゃねえよ! カスが…ッ!」

アリシア、ランサー…。

『そうです! 僕達は自分で選んでフェイトさんに着いてきた!』

『それは私達の意思! あなたなんかの思い込みで勝手に判断しないでください!』

『僕達はフェイトさんを支えたいために機動六課に入つて強くなろうと思つたんだ!』
『その想いだけは違わない! 否定させない!』

エリオ、キャロ…。

『だから、フェイトさん! 僕達の事は気にせず自分の事を信じてください! フェイトさんは間違つていません!』

『そうです! 迷つたら頼つてもいいんです…。甘えてきてもいいんです…。私達がそうだったように、今度は私達がフェイトさんを勇気づけます!』

「そうだよ、フェイト! お姉ちゃんはどこまでもフェイトの事を信じているからね!」
「そうだけ。お前はいい女だ。だから信念を最後まで貫き通せ。俺の誇れるマスターでいろ!」

みんな…!

「うん! 私は何度も迷うかもしれない…。立ち止まってしまうかもしれない…。でも、みんながいればどこまでもいけると思う…。だから、いこう! アリシア、ランサー!!」

「うん、フェイト!」

「おうよ!」

「ほう…。ならば私自ら相手になろう」

そうやってスカリエツティは腕を何度も操作してまた赤い線の攻撃をしてくる。だけど私達はそれを何度も破壊する。

「ライジングガノン！ ファイアアツ！」

「おらっ！」

アリシアの電磁砲が焼き焦がし、ランサーのゲイ・ボルクが砕く。

そして攻撃の間際に私の方に一瞬振り向き、

「いつて！ フェイト!!」

「いきな！ マスター!!」

そして私の進む道を示してくれた。

これで、終わりだ！

ライオットザンバーを連結させてスカリエツティに振りかぶる。

それによってスカリエツティはその手で受け止めるが、私はさらに力を込める。

「ふふ…。実に惜しいね。君の力があつたら。まあ、いい。どのみち君達はここで私とともに滅ぶことになるのだからな」

「なにっ!?!」

「私が倒されればこのアジトは崩壊するのだからな…」

「そんな…!?!」

私がショックを受けているが、それは第三者からの言葉で遮られた。

「あー…自爆装置つてやつか？ それならさつき、槍使いの女との戦いの間についてに壊しちまったぜ？ その部屋に誘導されていたみたいで場所が場所だったみたいでな。派手に暴れちまったからな」

「なにつ!? 魔術師殿は私を裏切ったのか!?!」

そこで初めてスカリエッティの余裕の笑みが消え去った。

「ここでも隻眼の魔術師…。」

やはり情報を集める必要があるみたいだね。

でも、今はまず!

「もうこれで後顧の憂いはなくなった! スカリエッティ、覚悟!!」

ライオットザンバーを振りかぶって一気に叩き込んだ。

それによつてスカリエッティは壁に激突してその場で動かなくなる。

「やったね、フェイト…!」

「やったな、マスター!」

「うん!」

これで長年によつて追いかけてきたスカリエッティを捕まえることができたんだ。

そしてアコース査察官とシスター・シャツハからも二人のナンバーズを確保したとい

う報告を聞く。

スバル達もそれぞれ確保したという。

後は、シホ……。任せたよ！



S i d e 八神士郎

ゼスト殿をマグダラで拘束したまま私とシグナム、リイン、そしてアギトはレジアス中將の執務室へと入る。

道中、拘束されている事に安心したのか局員の者たちはすんなりと通してくれたのは良かったと思う。

そして入るとそこにはレジアス中將と、確か娘のオーリス三佐だったか？ それと一人震えている局員の女性の姿があった。

「ゼストか……」

「ああ。レジアス、お前に会って話したかったぞ」

やはり旧知の仲らしく戦いはしないだろう。

だが、皆の目はごまかせるだろうが私の目を欺けると思うな？

「すまない、ゼスト殿。お話の前に邪魔者の排除をしたい…」

「なに…？ それは…」

ゼスト殿に返答は返さずに私はすぐに行動を開始する。

黒鍵を投影して一人震えていた女性局員の右手に向けて投擲する。

「なっ!？」

「土郎、なにを!？」

「土郎。パパ!？」

全員がなにかしらの反応を示すが、その女性局員だけは「チツ…」と舌打ちをして腕を振るう。

そしていつの間にか女性の腕にはなにかの爪だろうか？ そんな感じの武装が浮か

び出してきていた。

「…どうして気づいたのですか？」

「貴様から匂ってくる血の匂いで気づかせてもらった。貴様、戦闘機人だな？」

「ええ…ばれてしまったのなら仕方ありません」

そして女性の姿は次第に紫髪から金髪へと変わって姿は戦闘機人の姿へと変わった。

そして即座にレジアス中将の頭に爪を向けて、

「人質ですよ……」

「グッ……！ レジアス！」

「父さん！」

ゼスト殿とオーリス三佐が叫ぶが私は構わず、

「勝手にやればよかろう。ただ、もうお前の腕の神経は繋がっていないがな……」

「えっ……？」

それで全員が戦闘機人の腕を見る。

そこにはいくつもの針が深々と腕に突き刺さっていたからだ。

「ぎあっ!!」

「その隙、逃がさん！」

即座に私は戦闘機人との距離をゼロにまで近寄り浸透勁をぶちかます。

「カッ……!? あっ……」

白目を向いて戦闘機人はその場にへたりこんで気絶した。

よし、これでもう邪魔者はいないな。

私の解析魔術の目から逃れられると思うなよ……。

「さあ、これでもう君達を害するものはいない。じっくりと話し合おうといい」

「八神士郎二尉、感謝する。さて、レジアス、お前に問いたい」

「なんでも聞いてくれ…。お前になら話そう」

「ああ、お前は俺の部下達を殺すように命じたのか？」

「違う！ あれは、スカリエッティから人造魔導師素体を用意してくれと言われて、お前達が目を付けられていることを知った。

だから俺はお前に戦闘機人事件から身を引くように命じたのだ。だから、ゼスト。お前達が強行しなければあれは起きなかったことなのだ。

俺の指示が遅かったために、お前の部下達を、そしてお前すらも犠牲にしてしまったのだ」

レジアス中將はそれで顔を手で覆い後悔するような表情になる。

「そうか…。お前が最高評議会に繋がっていたことは…？」

「ああ。認めよう」

「俺達の正義はどこで間違ってしまったのだろうか…」

「すまん…全ては俺の責任だ。世界のためと裏と繋がってしまった俺の弱い心が招いてしまった事なのだ」

「そうか…」

それきり二人は黙り込んでしまった。

しかし、しばらくして、

「儂はおそらく、これから今までしてきた事に対しての裁判にかけられるだろう…」
「俺も、そうだな…。だが、もう俺は時間がないのだ」

時間がない…？

ああ、なるほど。

シホはこの時のために私に “これ” を託してきたのか。

「ゼスト殿、一ついいか？」

「なんだ？」

「貴殿の体、確実に治るといったら、どうする？」

「なに…？」

「旦那の体は治るのか!？」

そこにアギトがパアツ！と嬉しそうな顔をして見てきた。

「…いや、無理だ。俺の体はもうとうの昔に限界を越えている。だから後は死を待つのみなのだぞ？」

「それを覆すのがシホの能力だ」

「シホというと、シユバインオーグ一尉の事か？」

レジアス中將がそう聞いてきた。

私はそれに応えるべく、懐からあるものを取り出す。

「その通りだ。シホは聖なる錬金術師の担い手…ゆえにこんなものを私に託してくれた」

その瓶をテーブルの上に乗せる。

「これは…?」

「秘薬、”エリクシール”…。どんな難病、死の病、体の病気を瞬く間に健康状態にまで全快させる万能薬だ」

「そんなものが…」

「旦那！ 飲んでくれ！ あたしは飲まなきゃ怒るからな!?!」

「しかし…俺は一度死んだ身なのだぞ？ 効くのか?」

「今ここで生きている以上は効いてもらわなければ困る。シホはこの薬を製造・限定生産態勢に漕ぎ着けるまでに3年もの歳月をかけたのだから。使われた方がこの薬も幸せだろう」

それでゼスト殿はしばらく葛藤していたが、

「ゼスト…。飲んでくれ。お前はまだ生きていていいのだ」

「レジアス…わかった」

レジアス中將の一声で決心したらしく、ゼスト殿はそれを一気に飲み干した。

するとわずかだがゼスト殿の体は光りだし、そして、

「お、おお、おおおー!!? なんだ!? 今まで俺の体を苦しませていた痛みがなくなっていく!? それどころか魔力が、溢れてくる…!」

「旦那ア!」

アギトが涙を浮かべてゼスト殿に抱きついていてる。

それほどに嬉しいのだろう。

「さて、これで私の役目は済んだな。ゼスト殿、罪は生きている限り償える。だから死ぬとは決して考えるな?」

私がそう言うと、

「…ああ。死を覚悟していた俺にもう一度チャンスをくれて感謝する。八神士郎二尉」

「あの、その…旦那のことを救ってくれて、ありがとな! 士郎さん!」

「気にするな。私が助けたかったのだからな。そして私の目の黒いうちは私の信念故に悲劇など生み出させんさ。」

「…まあ、その感謝の想いはありがたくもらっておこう。ああ、それとシホにも後で感謝の言葉を言うのだな」

「ああ。そうだな、そうさせてもらおう…」

それでゼスト殿は目をつぶる。

「あ! そうだ! 旦那、ルールーを助けにいかないと!」

「しかし、俺はもう逮捕されるのだろうか…?」

「ええ、残念ですが…ですが、今、報告がありました。ルーテシアは私達の部隊のものが保護したという話です」

「スカリエツティは…?」

「そちらもテストアロツサ執務官が逮捕したそうです」

「そうか…ならばもう安心だな」

それでゼスト殿は指に嵌めてある指輪をシグナムに渡す。

「これは…?」

「この指輪の中には最高評議会やスカリエツティ、その他にも関係していた者たちのあらゆる情報が収められている。これがあれば色々と役立つだろう。使ってくれ」

「感謝します」

「では、俺も捕まるとしよう。思い残すことはないからな。…そうだ。シグナム殿。アギトのことをお願いしていいか?」

「旦那ッ!?!」

「アギト。お前もうすすすは分かっているのだろうか? シグナム殿はお前に相応しい

ロードだという事を…」

「そ、それはそうだけだよ…」

それでアギトは少し不安そうにしている。

「素直になつたらどうだ？ お前も惹かれていたのだろう」

「ああ……。でも、用事が済んだらあたしも一緒に捕まるからな!? だから、今は考えさせ
てくれ」

「ああ。待っているぞ、アギト」

シグナムは穏やかに笑うのだった。

アギトも赤い顔をしながら、

「…おう」

と、答えていた。

これは、また八神家族が増えそうな予感がするな。

楽しみである。

後は、お前たちだけで、シホ…。

第百六十四話 『決戦(8)』 星の目覚め、暴走するゆり

かづ』

クアットロはシホ達から隠れている下層のエリアで次々と消えていくモニターを見ながらため息をついた。

「…トレディちゃんやチンクちゃん、ルーテシアお嬢様もみんな、つまらないわね。私の教えがあればもつと粘れたでしょうにね」

それでクアットロは眼鏡を取り外し、髪を降ろした。

そしてまさしく悪の笑みを浮かべて、

「ま…私がいればなんとでもなるでしょうね」

それでお腹をさすりながら「…そうですね、ドクター♪」と呟くのだった。

そして数少ないモニターの向こう側では今も尚激闘が繰り広げられていた。

「いいわ。いいわよ、高町なのは。もつとその生意気な女を苦しめちゃいなさい！」

モニターの監視に夢中になり、クアットロは自分の周辺は絶対に安全だと過信し、警戒を怠っていた。

いままさに赤い皇帝が迫っていることもつゆ知らずに…。



シホとなのはの戦いは完全に殺し合いと言っても過言ではない状態にまで陥っていた。

「…アクセルシューター、ファランクスシフト…」

「ッ！」

—なのはの周りに虹色のアクセルシューターが通常のなのはの限界以上の数を散りばめられていた。

さながらそれは綺麗な弾幕のようでシホは思わず舌打ちをする。

「（殺傷設定なのはは当たり前、数も威力も当たったらただでは済まない。さらには冷酷に、冷酷になのはは私を殲滅しようとして掛けてきている…！ このままじゃ…！）」

目視できる範囲でシホはアルトリアとユニゾンしたことにより会得しているその機動力をバネにアクセルシューターの嵐を時には避け、エクスカリバーで切り裂き、防御する事を繰り返し返す。

そしてユニゾン時にセイバーのクラススキルである『対魔力』を纏っているのにも関

わらず、当たってしまいうアクセルシューターはシホの体を少しづつ傷つけていく。

「(防ぎきれない!?)」

《私の対魔力を越える威力をナノハは持っているということですか…!》

シホはその事実になのはは英霊級の力を手にしていることを悟る。

アルトリアも純粹になのはの力の向上に驚いていた。

それで防戦一方になりつつある戦況。

手加減をしている場合ではないが、本気を出したらなのはを最悪殺してしまうかもしれないから奥の手も使えない。

いや、純粹魔力攻撃に変換すればできないこともないのだが、チャージに時間を有してしまうから、現状チャージの時間も許してくれないなのはには手詰まりな状況である。

それでアクセルシューターの嵐に囲まれている中で、シホはふと悪寒を感じ咄嗟になのはの方へと顔を向ける。

そこではレイジングハート・プルートを構えてチャージを完了しているなのはの姿があった。

「チイツ!?!」

「————ダイバインバスター!!」

虹色の砲撃がシホに向けて迫ってくる。

それで防ぐためには瞬時に詠唱を終えなければいけない。

「I am the bone of my sword:!!」

手を掲げて即座に詠唱を完了させるシホ。

胸の内では（間に合え……!）と叫びながら、

「熾天覆う七つの円環——!!」

七つの花卉が咲き誇り、そこにはシホの防御の数少ない手であるロー・アイアスが出現した。

そしてなのはのデイベインバスターと衝突する。

それによって攻撃は拡散して様々な場所に散っていく。

玉座の間が狭い場所ともありそれは室内を次々と破壊していく。

それは天井にもおよんで運悪くシホの頭上の天井が崩れてきてシホに降り注いだ。

「ッ!」

そして、シホは瓦礫に晒される…。

……

「ッ！ お姉様!?!」

「ファイアット！ どうした!? 駆動炉まであと少しだけ!」

「は、はい…（お姉様、無事でいてください…）」

ファイアットはそう祈った。

そしてファイアットとヴィータの二人はついに駆動炉の部屋まで到着する。

「ついに、到着しましたね…」

「ああ。お前がいなかったらもつと苦戦したろうな…。ありがとな、ファイアット」

「ありがとうございます。でも、ここでの仕事はヴィータの順番ですよ」

「おうよ！ いくぞ、グラーフアイゼン!」

《応ッ!》

「リミットブレイク!!」

《ツェアシュテールングスフォルム、起動》

それによってグラーフアイゼンはその形状をまるで掘削機のようにドリルが先端に出現した。

「いくぞ！ おおおおおー！ー！ー!! 貫けー!!」

《ツェアシユテールングスハンマー!》

ドリルが高速回転し、それを駆動炉の防御結界へとぶつける。

削られるような音がしだして、しかし弾き飛ばされてしまった。

「うあつ!？」

「ヴァータ!」

ファイアットがヴァータを受け止める。

それだけならよかったのだが、センサーが反応を示したのか、

『駆動炉への侵入者の存在を感知しました。危険な攻撃をしたため、排除します』

「ツ!!」

それによって様々な方向からビームが射出されて二人を襲う。

だが咄嗟にファイアットがプロテクションを展開してヴァータを守った。

「ヴァータ! あなたは気にせずに駆動炉の破壊に専念してください! 防御は私が専

念します!」

「おう! すまねえ!」

それでヴァータはグラーフアイゼンを握り締めながら、

「…あたしとお前で碎けないものなんてないんだ。そうだよな、アイゼン?」

《当然だ。我らならどんなものでも碎けるだろう》

「そうだな…。いくぞ！ アイゼン!!」

《任された!》

それでヴィータはまた駆動炉へとツェアシュテールングスハンマーをぶつけていく。
今度こそ砕いてやるという意気込みで、

「アイゼン！ 今こそ全カートリッジを注ぎ込む時だ!!」

《おう！ カートリッジ全ロード!》

それによってファイアットからも受け取ったカートリッジで威力を何倍にも膨れ上がらせて握る手に力を込める。

それによって、ビシッ!という音を上げて駆動炉にヒビが入る。

だが、同時にグラーフアイゼンにも少しずつであるがヒビが入っていく。

「アイゼン！ こんなところでくたばるあたし達じゃねー! 破壊と粉碎はあたし達の領分だったじゃねーか! 気合を入れるぞ!!」

《ああ! 死ぬ気でやるぞ!》

「上等だ!! いくぞぞー!!」

後部の噴射口からさらに火が吹き上がり威力を上げていく。

ギシギシと破壊音が響いていって、ついに、

ガシャーンーンンッ!!

駆動炉はものの見事に破壊された。

「やったぜ！ これであたし達の勝利は間際だぜ!!」

《やったな、マスター!》

「おうよ！ お前も頑張ったな、アイゼン!」

そこにプロテクションを解いて近寄ってきたファイアットが、

「さ、早くお姉様達の元へと向かいましょう!」

「おう!」

それで二人はシホ達のいる玉座の間へと向かっていくのだった。



S i d e シホ・E・S・高町

…くっ。

体中が痛い…。

天井が崩れてきて私は間に合わずに下敷きになってしまった。
なんとか魔力放出で瓦礫を吹き飛ばす。

吹き飛ばして辺りを見れば、いまだに涙を流しながら玉座に座らされているオリヴィエ陛下の姿があり、その傍らには無表情のなのはが杖を構えている。

「…ままならないわね」

あちらは私が攻撃をあまりしなかったためにほぼ無傷な状態。

比べてこちらは体中から血が流れてきていてアルトリア自慢の青いドレスも赤く染め上げている。

《シホ…。大丈夫ですか？》

「ええ…。なんとかまだ無事よ、アルトリア」

アルトリアが心配そうに話しかけてきてくれるのが幸いだ。

そこに、

《シホ！ ナノハを助けたいんならもつと本気で倒さなきやダメよ！》

「まあ、ね…」

イリヤも目を覚ましてそう言ってきた。

しかし、見ればいまだにアクセルシューターの弾幕がなのはの周りを巡っていて守っている。

玉砕覚悟で突っ込めばなんとかなるだろうけど、

《アルトリア！ アヴァロンを起動してシホの傷を癒して！ 私達はこんなところで終

わるわけにはいかないのよ！」

《はい！ イリヤスフィール！》

それで体中の傷が治っていく感覚に入る。

それで幾分痛みも抜けてきたのか体が軽くなってきた。

これなら、いける！

「…アルトリア。イリヤ。今から攻めていくわよ？　なのはには少し痛い目にあつてもらうかもしれないけど…」

《その意気です、シホ。ここできつい一撃をナノハに叩き込んで目を覚まさせてあげなさい！》

《うん！　いつまでもあんなんじやナノハも可哀想だからね！》

意見は全員一致。

レイジングハートも声を上げて、

《シホ…。マスターのもとに私を届けてください》

「でも、危険よ？」

《それは百も承知です。ですが、なんとかします！》

「わかったわ。あなたを信じるわよ？　レイジングハート？」

《お任せ下さい》

おそらくなのはヴィヴィオの言葉を届けたいんだろうな。なら、架け橋くらいにはならないといけないわ。

「いくわよー！」

《はい！》

《いつでもいいわよー！》

《お願いします、シホ！ マスターのもとへ…！》

それで私はエクスカリバーフォームを構えて、魔力放出で一気になのはの距離を詰める。

当然、なのははアクセルシューターを放ってくるが私はそれを対魔力で防いで一気に詰め寄る。

そして剣を振り上げる。

するとなのはは防御でもするだろうプルートを盾にする。

剣と杖が衝突する。

だがあちからも頑丈なのか「ギリギリ！」と受け止められた。

「ッー！」

「さすが、スカリエッティ謹製の杖ね。でも、この一瞬が欲しかったのよ！ レイジングハート!!」

《はい！》

それで私の懐からレイジングハートが勢いよく飛び出してなのは目の前に浮かぶ。

《マスター！》

「ツ!？」

レイジングハートの呼びかけになのはの表情が強ばる。

おそらくなのはの意識がまだ残っている証拠だろう。

《マスター！ 目を覚ましてください！ あなたはこんなところで倒れる人ではないでしょう！》

「……………」

それでなのはの動きが停止する。

多分意識が抗っているのか、洗脳力が揺らいでいるんだろう。

その証拠に先程まで常時展開されていたアクセルシューターがすべて消えていたからだ。

《私は、あなたがまた自由に大空を飛ぶ姿を共に共有したい…。私はあなたの相棒なのですから！》

「レイジング、ハート…」

《そして、ヴィヴィオの言葉をあなたに贈ります！》

それでレイジングハートから光が照射されてモニターが浮かび上がる。

私も初めて見るヴィヴィオの映像だがそこには泣きそうな顔をしたヴィヴィオの姿が映し出されていた。

『なのはママ……！ ヴィヴィオだよ？ 見えているかな？』

「……ッ、……」

『なのはママ……帰ってきてきて。ヴィヴィオはあの日に約束したキャラメルミルクの約束をまだ諦めてないよ！ なのはママの作ったキャラメルミルクが飲みたい！』

「……ヴィヴィ、オ……ッウ!？」

それを聞いて効果があったのかなのはは頭を押さえだして苦しみ出す。

それでも映像は録画のために続いていく。

『私、いい子になるから……！ なのはママの誇れる自慢の娘になるから！ だから帰ってきて、なのはママ!!』

「ヴィヴィオ……!？」

なのはの叫びが玉座の間に轟く。

瞳にも光が戻ってきたのか目から大量に涙を流している。

「これなら……!？」

それで映像は途切れる。

「ヴィヴィオ……！ あなたの思いは無駄にはしない！ 引き継ぐわ！」

「なのは！ 正気に戻りなさい！ みんな、あなたの帰りを待っている！ フェイトやアリシア、はやて、すずかにアリサ、フィアットにユーノ……！ 他にもたくさんの人が……！！」

「シホ、ちゃん……」

「それに、私もあなたの事を大切に思っているわ。だって、あなたは私の家族なんだから……」

「シホちゃん……！」

「だから、戻ってきなさい！ なのは……！！」

最後のひと押しとも言おう私の叫びになのは私に涙を流しながら抱きついてきた。

「ごめん、ごめんね、シホちゃん……！！ いっぱい傷つけちゃったよね?! いっぱい辛い思いをさせちゃったよね?!」

「いいのよ、なのは……。あなたが無事ならそれでいいのよ。……さ、オリヴィエ陛下と一緒に機動六課へ帰りましょう……? ヴィヴィオや、みんなが待っているわ……」

「うん……」

これでなのは取り戻した。

だけどそこでモニターが開いてクアット口とかいう戦闘機人が写り出す。

その表情には焦りが浮かんでいる。

『なにをしているの！ 高町なのは！ そいつを殺しなさい！』

「もう、あなたの言うことなんて聞かない……！ 残念だったね」

『そ、そう……。フンツ……でも、私を見つけて倒さない以上はゆりかごやオリヴィエ陛下は止められな『ほう……こんなところにいたか。探したぞ』……へ？』

そこに私の頼りになる皇帝の声が聞こえてきた。

ネロは霊体化してゆりかご内をクアットロを探すためにくまなくしらみつぶしになつて探していた。

そしてあらかた通常の通路は調べ終わり、最後に深部へと続く道を発見したのだ。

後はここくらいだろうな……、とネロはほくそ笑み、ついにクアットロを発見したのだ。

クアットロの表示しているモニターの先ではシホがなのはの洗脳を解いた光景が映りだしていて、それをネロは見て、

（さすが奏者だな！）

と、シホを褒め称えていた。

それではこいつを倒すだけだな…と実体化してクアットロの背後に立つ。

そして声を発する。

「ほう…こんなところにいたか。探したぞ」

そう声をかけるとクアットロは間抜けな表情をしてこちらへと振り向く。

ネロはそれでもなんとも間抜けな表情だと思った。

だが仕事はしないとな…と、シホに念話を繋げる。

《奏者よ！ 余の場所を辿れ！ さすればおのずとこやつ(position)の位置を特定できるだろう！

余は奏者の魔力温存のために攻撃はしないことにする。だから止めは任せるぞ！》

《ええ！ 任せて、ネロ！》

それにシホは強く返事を返す。

場所は玉座の間に戻り、

「位置、特定…。後は、振り下ろすのみ！」

『まさか、壁抜き…!?!』

クアットロが通信越しに叫んでいるが、構わずシホはエクスカリバーフォルムを構えて魔力を充填させていく。

そこになのはもレイジングハート・プルートを持って、

「シホちゃん！ 私にも手伝わせて！」

「でも。レイジングハート・プルートの使えるの……？」

「大丈夫。私の言うこと、聞いてくれるよね？ プルート？」

《…了承。私はあなたに使われるために生み出されました。ならば異議はありません
…》

「ありがとう…プルート」

それでののはもプルートを構えて、レリックによる恩恵で一瞬でチャージを完了させる。

「シホちゃん！ やろう!!」

「ええ、なのは!!」

そして二人はその真名を紡ぐ。

「約束された……!!」

「全力全開！ スターライト……!!」

エクスカリバーフォルムが黄金に輝き、プルートの尖端には極大な虹色の魔法陣が描かれる。

「勝利の剣……!!」

「ブレイカー……!!」

真名開放とともに黄金と虹色の極光が交わり合いながら螺旋を描き、クアットロのい

る空間へと迫っていく。

壁など関係なしと言わんばかりの暴力の権化の二つの攻撃。

「いやああああああー！！？」

クアットロの心からの叫びが響き渡るが、極光は関係なしにすべてを飲み込んでいく。

それで叫びも極光の中へと溶けて消えていった。

その威力はクアットロを飲み込んだ後も継続して続いていき、ついにはゆりかごの深部を貫通して大穴を開けて空へと消えていった。

「…ちよつと、やりすぎたかな？」

なのはがそれでどこか懐かしいセリフを吐く。

それに対してプルートとレイジングハートは二機揃って、

《いいんじゃないでしょうか？》

《同意。いいと思います》

…なかなか息のあつた掛け合いだった。

さすが姉妹機なだけはある。

「ツ……！」

だが、そこでシホが苦悶の表情をしてエクスカリバーフォームを地面に刺して膝をつ

く。

「シホちゃん!？」

「ごめん、なのは…。ちよつと無理が祟つたみたい…アヴァロンを連続で使用したのも相乗しているみたいで…。でも、あと少し。オリヴィエ陛下を助け出せばゆりかごは停止する…」

それでののはシホを肩を貸し立たせてオリヴィエの元へと向かう。

「オリヴィエさん…、今助けるからね…」

「オリヴィエ陛下、今助けます…」

二人がオリヴィエのもとにあと少しでたどり着くというところで、瞬間、目の前の空間が歪み出す。

「!？」

二人はそれで動きを止める。

それで歪みからフードを着たガタイのいい男性が出現する。

みればそいつは右目に線が入っていた。

そして思わず叫ぶ。

「隻眼の魔術師!？」

「フフフ…よくぞここまでたどり着いたものだな。シホ・E・S・高町よ」

「…今更、何をしに現れたのよ…？ やろうと思えばあなたをこの場で倒すことも可能よ」

「その体でよく言う…。まあ、いい。スカリエツテイからはもう引き出す情報は引き出したからな。奴はもう私にとって不要なのだよ。後は、仕上げだ」

それで隻眼の魔術師は右手を掲げる。

その手にある最後の一面を残す令呪が輝き、

「さあ、最後の令呪に命じる！ オリヴィエ・ゼーケブレヒトよ！ ゆりかごを最高速度で上昇させ地上を焦土と化せ!!」

「なっ!？」

シホとなのははその内容に思わず絶句する。

「うっ!?! ああああぁー!?!?!」

そこにオリヴィエの叫びが響き渡り、次いで船体が急激に揺れだして、急な上昇に伴いシホとなのはは思わず体にかかるGに耐えられずに両手を地面につく。

「ハハハハハハッ！ さあ、シホ・E・S・高町よ！ 止められるものなら止めてみる！」

「貴、様…ッ!」

「まあ、ここまで来れたご褒美として私の名前を教えてやろう。私の名は、ヴォルフ・イエーガー」だ。生きていたらまた会おう。さらばだ」

それで隻眼の魔術師：いや、ヴォルフ・イエーガーはまた歪みの中に消えていった。
「()まで、来て……！」

シホはこの事態をどうにかしないと地上、ミットチルダが焦土を化してしまう。

そしてなんとか力を込めて立ち上がり、どうにかしようと思いを巡らせるがなかなかいい案が浮かんでこない。

()までなの……?)

つい、そんな事を考えてしまったその時だった。

シホの周りの景色が急に色褪せて、ゆりかごの揺れも止まり、なのはやオリヴィエの姿も時間が停止したかのように止まってしまっている。

「これは……!？」

シホにはこの現象は覚えがあった。

過去に一度体験した語りかけの言葉。

【…我を求めよ】

脳に直接干渉してくる様なそんな声が聞こえてきた。

「世界……！ 抑止力の声!!」

シホは、再度世界に試されることになる…。

第百六十五話 『決戦（9） 抑止力の声、そして——』

急浮上する聖王のゆりかご…。

それによつてはやては追いつけずに中に侵入することもできずにいた。

「シホちゃん、アルトリアさん、ネロさん、なのはちゃん、オリヴィエさん、ヴィータ、ファイアちゃん…！ みんな！！」

まだ中にいるみんなの名前を叫び、涙腺が緩みそうになるのをはやては必死に堪える。

そこに回線が開き、映り出したのはクロノだった。

『はやて！ ゆりかごが急に上昇速度が上がったと聞いたが…！』

「く、クロノ君…。どないしようか…。このままじゃ…ツ！」

『落ち着け、はやて！』

「でも、クラウディア艦隊の方も…」

はやての言葉にクロノは沈痛な表情になり、

『…ああ。このままではクラウディア艦隊はゆりかごが軌道上に到着する予定時刻までには間に合わない…。くつ…、ここまで来て、これとは…!』

「そか…。もう、手はないんかな?」

『そう弱気になるな。まだ、ゆりかごの中には“シホ”がいる!』

「…ツ! そうや。まだシホちゃんならなんとかできるかもしれない!」

『そうだ。だから今はもうシホにすべてを託すしか道はない…信じよう』

「そやな!」

それではやては先ほどの二倍以上の速度で上昇していくゆりかごを眺めた。

…それは立派なストライカー級魔導師にまで成長したフォワード達も見ていた。全員合流していたために、一同は空を眺めながら、

「シホさん…なのはさん…」

スバルが弱気な声で二人の名を呟く。

「スバル。今はシホさん達を信じましょう…。きつと、なんとかしてくれる…」

「うん、ティア…」

「（そうですよね、私の師匠……？）」

そこにティアナがスバルを勇気づける。

自分も不安になりながらもなんとかかしてくれろと信じて……。

「そうですよ！ きつとシホさん達なら……！」

「はい！ きつとなんとかしてくれませう！」

「キュクー！」

エリオとキャロにフリードもゆりかごに残っているシホ達の事を信じていた。

「シホさん……。弱さを克服した僕をまた見てもらうために、無事で帰ってきてください
！」

「レン……。きつと、大丈夫よ！ シホさん達なら！」

「そうよ、レン君。あのシホさん達だもの。なんとかかしてくれるわ！」

「はい……！」

レンがその言葉を発し、ランもシホ達ならやってくれろと信じる。

ギンガはその二人の肩に手を起きながら信頼の笑みを浮かべていた。

「フェイト…」

「大丈夫だよ、アリシア。なのは達なら、きっと大丈夫…」

「うん…」

スカリエツティのラボから外に出てきたフェイトとアリシアはゆりかごの一報を聞いて今にも飛び出しそうな思いで、しかしシホ達の事を信じて、ただ無言で空を眺めていた。

そこにランサーが険しい目つきをしながらも、

「…シホの嬢ちゃん。早まんじゃねえぞ？ 世界と契約だけは絶対にするなよ…」

「ツ!？」

ランサーの言葉に二人は思わず振り向く。

どういふ事かと問いたですと、

「今、俺達サーヴァントにも世界からのバックアップの恩恵がきやがった。それでこの事態をなんとかしろ、ってことなんだろうよ。おそらく今、シホの嬢ちゃんは選択に迫られているだろうよ…」

「それじゃ、今、シホは抑止力と対話しているって事…?」

「多分な…。このまま自身の力で乗り切るか、それとも生きた英霊になってこの事態に対処するか…道は険しく限られているぜ」

「そんな…。シホ…」

士郎とキャスター、シグナムにリインも空を見上げていた。

「ツ!? ご主人様マスタ！ この気配は抑止力です！ わたくしにも力が回ってきました！」

「抑止力からのバックアップが来たということは…今まさに世界の危機ということか
！」

「シホさん…」

「シユバインオーグ…信じているぞ」

四人はただ眺める事しかできないでいた。だがシホならなんとかしてくれろと信じていた。

また場所が変わり、地上でいまだに黒い獣と戦っているアルクエイド達。

「ツ！ こんな時にバックアップの力が増したわ！」

「そうだな！ しかし、俺たちではあそこまで飛んでいけそうにないから…」

「なら代わりにかいつを倒さなきゃね！」

「ああ！」

それで二人はまた態勢を整えて爪とナイフを黒い獣へと向けていった。

アースラの一室。

そこではさすが目がつぶり、両手を組んで祈っていた。

「シホちゃん…シホちゃん達は無事で帰って来れるよね？」

すずかはただそう祈るしかできないでいた。

そこにアースラの護衛任務を勤めていたライダーが、

「スズカ…。世界からのバックアップで力が上がりました。私は、どうすればよいのでしょうか…」

珍しく弱気な発言ですずかに尋ねるライダー。

「今は、信じるしかないよ、ライダー…。シホちゃんを、信じよう」

「はい。今まで幾度の困難を乗り越えてきたシホならばあるいは、この状況も打破できると信じています」

二人でシホ達を信じることにしたのだった。

アリサ含む魔術事件対策課も通常の魔導師隊と同じくガジェット迎撃任務についていた。

だが、それもクアットロがシホの斬撃となのはの砲撃によって倒された事によって全機が機能停止した事によって余裕が出来たのか、アリサは魔術師隊の指揮を執るのをやめて空を見上げていた。

「…シホ。なのはを助けているわよね…？」

そうアリサは呟く。

「アリサよ…」

そこに少し険しい顔をしたアサシン、李書文が話しかけてきた。

「どうしたの、アサシン？」

「抑止力からバックアップが来たようだ。力が上がってきている…」

「ッ!? まさか!」

それで再度アリサは空を見上げて、

「シホ…。なにが起きているかわからないけど、負けるんじゃないわよ!」

そう言葉を発するのだった。

とある場所で、一人の老人と金髪に赤い瞳の少年が空を眺めながら、

「…さて、お姉さんはこの事態をどう切り抜けますかね？　僕が手助けをしてもいいんですけどね」

「さてな。しかし、ここで終わるわけがなからう。儂の弟子を舐めてもらっては困るぞ…？」

「ふふっ…。確かに。では僕らはいつでも動けるように待機していきましょうか」

「そうじゃな…」

「それに…」

少年は空から視線を外し、ある場所…そう、今アルクエイド達と戦っている黒い獣を険しい目つきで見ながら、

「僕の『盟友』を勝手に使っているあの憎たらしい『魔術師』にもそのうち顔合わせもしたいですしね…」

「ほう…。やはりあれは…」

「ええ。その通りですよ、 “宝石翁”」

「そうじゃな。じゃが、まずはこの困難を切り抜けたらシホにご褒美でもやらんとな。なあ、 “ギル”よ」

二人は焦る仕草もせずのにんきに空を眺めているのだった。



Side シホ・E・S・高町

【我を求めよ…】

抑止力の声が私の脳に直接響いてくる。

まさか、抑止力が動く事態にまで発展してしまうなんて…。
隻眼の魔術師…いえ、ヴォルフ・イエーガー。許さないわ。

《シホ！ これは…!?!》

《シホ！ もしかしてこれって抑止力!?!》

「アルトリア!?! それにイリヤも時間は停止していなかったの!?!」

《ええ。なぜかはわかりません。ですが私にも聞こえてきます》

《うん。私もシホと一緒に聞こえるよ》

まさか、アルトリアとイリヤにも聞こえているなんて。

そんな思惑は関係なく抑止力の声は響いてくる。

【死後を対価にその身を世界に捧げよ。さすれば人を超越した力を手にいれこの世界を救う事が出来る…】

そう、抑止力は囁いてくる。

一回目の時と同じ言い回しをしてくるのは、学習能力がないのか、はたまたそういうシステムなのか…。

でも、もう私の答えは決まっている。

とつくの昔に一度断ったではないか。

「残念だけど、その誘いは断らせてもらおうわ」

【ほう…。私の誘いを断ればこの世界は滅ぶぞ？ お前はそれでもよいのか…？】

「お生憎様。あなたの力を借りなくてもなんとかして止めてみせるわ。…あなたが接触してくれたおかげで頭を冷やすこともできたしね」

【理解できぬ…。世界と天秤にかければその身を我に捧げるくらい容易いだろう】

「人間を、舐めるな…！ こんな困難、越えられないほど私達人間は弱くない！ 脆くない…！」

てしまい、地上を焦土に変えてしまおうでしょう…」

「そうですか…それじゃやっぱり…」

と、そこに、

「奏者よ！ 気絶している戦闘機人を持つてきたぞ！」

そこにネロがクアットロを担いで戻ってきた。

次いで、

「シホ！」

「お姉様！」

ヴィータとフィアも玉座の間に入ってきた。

見れば私が道中倒した戦闘機人も担いでいる。

おそらくこちらに来る途中に見つけてきたのだろう。

「お、お姉様!? すごい怪我ですよ!?!」

「なのは！ 目を覚ましたんだな！」

みんなが騒ぎ出したが、私は目をつぶり神経を集中させる。

そして心の中で呟く。

《アルトリア、イリヤ…。今から少し、いえ、かなり無茶をするわ》

《うん。シホの覚悟はもうわかっているよ。抑止力の誘いを断ったんだから後は私達が

後始末をしないといけないもんね》

《そうですね、イリヤスフィール。シホ、サポートはお任せ下さい。シホの全力を支えきってみせます！》

《ありがとう、アルトリア、イリヤ。いくわよ!!》

《《うん（はい）！》》

それで私は特注の品のカートリッジを取り出してエクスカリバーフォームに三本差し込んでいく。

それに気づいたのだろう、ファイアが驚いた顔をしながら、

「お姉様!? ま、まさか、あのカートリッジを使う気ですか!？」

「ええ。もう後、私に出来ることはこのゆりかごを完膚無きまでに破壊すること。」

でも、今のままじゃ魔力が圧倒的に足りない。だからこの『一つに一ヶ月分の私の魔力が濃縮して込められているカートリッジ』を使用する時が来たわけよ!」

そう、このカートリッジは私の思いつき。

五年くらい前から一本のカートリッジにどれくらいまで魔力が注ぎ込められるのかをすずかとともに研究・発展させてきたカートリッジの進化系。

一ヶ月分の魔力を濃縮させて一本に収めるにはかなり改造しなければいけなかったが、完成した時には、その危険性からまず使うときは来ないだろうなと思っていた私の切り札。

副作用による負荷がどれくらい体にかかってくるかわからないからだ。
でも、今こそ使う時なのだ。

「シホちゃん……………ツ……………」

なのはが何かを言いたそうな瞳だったが、なにかをグツとこらえたのだろう。

少し悲しそうな表情になりながらも、無理して笑顔を浮かべてただ一言、

「……………頑張つて！」

「ありがとう、なのは」

「あたし達はもうカートリッジも残されてねえから、頼むぞ、シホ！」

「ええ。なるべく頑張るわ。ヴィータ」

「奏者よ！ 頑張るのだぞ！ 余は応援しているからな！」

「ええ。ネロ！」

「お姉様…帰ったらすぐにシヤマル先生に体を見てもらいますからね!？」

「ふふっ……ええ。覚悟しておくわ」

全員から言葉を貰って私も覚悟が決まった。

最後に私はいまだに玉座に縛り付けられていて涙を流し続けているオリヴィエ陛下に近寄り、

「オリヴィエ陛下……。このゆりかごを破壊させてもらいます。ですから罪を感じる必要はありません」

「シ、ホ……」

「悪いのはすべてヴォルフ・イエーガーです。だから……」

「ごめんなさい……シホ。………任せます！」

「はい！」

最後にオリヴィエ陛下の言葉をもらい私は玉座の間の中心に立ち、神経を集中させる。

「……さて、いくわよ！　イリヤ!!」

《うん！　オールマジックサーキット 全魔術回路、及びリンカーコア接続！　オーバードライブ!!》

イリヤの叫びとともにイリヤの400本の魔術回路と私の27本の魔術回路、そしてシルビアさん譲りのオーバーSランクのリンカーコアをすべて接続する。

それに伴い私の体が悲鳴をあげ出す。

それだけタイムリミットがあるということだろう。

私は今、固有結界以上の無茶をしようとしている。

でも、私は一人じゃない！

「次！ アルトリア!!」

《はい！ すべての魔力の流れは把握しています。暴走しないように常に監視しています！

さらにシホの体に宿る 「^ア全て遠き理想郷^ロ」 と私の持つ 「^ア全て遠き理想郷^ロ」 をコネクト！ シンクロ、オン!》

二つの 「^ア全て遠き理想郷^ロ」 を同調させることによって私とアルトリアのユニゾン適合率を120%にまで引き上げる。

それによって全力機動によって起こる反動による傷をすぐさまに修復させる効果を発揮する。

「よし！ アンリミテッド・エア、行くわよ！ カートリッジロード！」

《了解！ カートリッジロード!》

まず、一本カートリッジをロードする。

それによって私の中の魔力がただでさえ全部接続したことで膨れ上がっているのに、さらに一気に何十倍にも増大する。

そして発動する。

アンリミテッド・エアのラストフォルムを！

「リミットブレイク!!」

それによってエクスカリバーフォルムが光り輝き、次第に一本の剣が二本の双剣に分かれていく。

その光り輝く双剣はアンリミテッド・エアの干将・莫耶をもとにして出来た双剣形態『ツヴィリングフォルム』の発展進化系。

二刀それぞれがエクスカリバー以上の出力を秘めている性能を発揮する。

やはり私には双剣が手に馴染むわね…。

そして、フォルム名は…。

「エクスカリバー・ツヴィリングフォルム！」

黄金に光り輝く双剣を左右に構えてさらにもう二本のカートリッジをそれぞれロードする。

それによってさらに双剣は光り輝いてくる。

「いくわよ！ 伸びろ！ エクスカリバー・ツヴィリング!!」

瞬間、二刀の先から鋭い黄金の極光の刃が伸びていき、ゆりかごの内部をそれぞれが何度も貫いていく。

そして私は目をつぶり、外側まで貫通するのを待つ。
ただでさえ巨大な聖王のゆりかごだ。

貫通するにはかなりの魔力が必要になってくるが合計三ヶ月分の魔力が今私の中に渦巻いているのだ。

これくらいできないでどうする!?

そしてしばらくして外側まで貫通したのを確認したのか、アンリミテッド・エアが、
《マスター！　外側まで貫通しました！》

「よし！　後は…切り裂くだけよ!!」

エクスカリバー・ツヴィリングを握る手に力を込める。

足場をきちんと固定してその場で大回転を始める私。

「うわあああああー……!!　切り裂けえー……!!」

エクスカリバー・ツヴィリングは約束された勝利の剣の秘めたる神秘をそのままに、
ただ「切り裂く事」だけに特化させたラストフォルム。

本来、再構築など不可の宝具、しかも宝具の中で最高位に近い聖剣、そして星が作り出した神造兵装で最強の幻想である約束された勝利の剣だ。

しかし、デバイス化したことにより、中身を詳しく解析できるようになったのだ。

それによりアンリミテッド・エアの中に複数あったブラックボックスを数年かけて解凍・解析していき、ある一つのブラックボックスの中に約束された勝利の剣をさらなる高みにまで強化できるプランが記録されている事が判明した時にはアルトリアとともにとても驚いたのは記憶によく残っている。

——閑話休題

ゆえに、切り裂けないものなど例外がない限りは今の私には存在しない！

そのままなのは達のいる空間だけを切り裂かないようにエクスカリバー・ツヴェリングを何度も振り回していく。

何度も体から軋みの音が鳴り、他にも神経、毛細血管がちぎれる音が聞こえてくるが、その度に「全て遠き理想郷」が破損箇所をすぐさまに修復していく。

視界が何度も赤くなったり元に戻ったりとを繰り返している。

ここが踏ん張りどころよ。耐えて！ 私の体……！

そこには誰も欠けていなかった。

捕らわれのなのはとオリヴィエの姿も確認された。

シホとともに侵入したファイアットとヴィータ、ネロの三人も無事であった。

倒した戦闘機人二名もすっかりと抱えられている。

そう、みんな無事だったのだ。

「シホちゃん！ みんな…ッ!!」

はやても安全を確認して安心したのか周りの魔導師達と一緒に歓喜の涙を流したのだった。

ただ、シホだけは地上に降り立ったと同時にアルトリアと強制ユニゾン・アウトもせず、に気絶して深い眠りについてしまった。

それで直様シホは聖王病院に搬送されることになったのだった…。

第百六十六話

『——おはよう』

「ふう……」

クラウドディアの艦長席でクロノは安心の吐息を吐く。

聖王のゆりかごが黄金に輝く巨大な二つの刃で切り裂かれていき爆発を引き起こす光景をモニターで見っていたので皆の安否も確認できてよかったと思う。

そこに別モニターが開き、

『クロノ！ 状況はどうなったんだ?! ゆりかごが爆発したって聞いたけど!』

『シホ達は怎么样了んだい!』

相手はユーノとアルフだった。

……ああ、直で見えていなかったのかとクロノは内心でひとりごちて、

「心配するな、二人とも。シホ含めゆりかごに侵入したメンバー、捕らわれのなのは達、実行犯の戦闘機人達は全員無事だ」

『そ、そうか……。じゃあフィアも無事なんだね。よかった……。』

『よかった……。』

モニターの向こう側でユーノとアルフも安心したのか吐息を吐く。

だが、まだ安心しきれないというのが現状である。

「クロノ提督。地上より入電。」

まず、レジアス中將が管理局に罪を認めて出頭したとの事。

次に、シユバインオーグ一尉が倒られたそうです。あまりの体と魔力の酷使に運ばれた聖王病院にて入院が決まったそうです。本人は今現在意識がなく危険な状態との事」

「わかった。報告ご苦労。さて、これよりクラウドディア艦隊はそのまま第二種警戒体制へ移行し待機だ。当分は様子を見る」

「了解しました」

クルーにそう言い、クロノはまだ映し出されているモニターのユーノ達に目を向けて、

「さて、ユーノ。この通り僕はまだ現場待機の状態だ。お前達だけでも先にシホ達のもとに行つてやれ」

『わ、わかった！』

「それとなのはも検査入院らしいからさっさと告白してこい。当分会えないかもしれないな

いからな」

『余計なお世話だよ！　ま、まあ行かせてもらおうけどさ……』

「ああ。それと後ほど資料作成を手伝ってもらおうからな」

『わかつてるよ。じゃー！』

それでユーノとの通信は切れる。

それで背もたれに体を預け、今一度息を吐き、

「(……今回はどうにかなったが、これからが大変だぞ。みんな……)」

まだ機動六課の試験運用期間は終わっていない。

やるからには卒業のその時まで存分に成果を示さなければならぬ。

それに他にもなのはの体に埋め込まれたレリックの件や、最高評議会の今まで行ってきた所業の徹底調査、そして隻眼の魔術師……いや、ヴォルフ・イーガー率いる戦闘集団にもなんらかの対策を練らなければいけない。

問題はまだまだ山積みである……。

しかし、

「(とりあえずはスカリエッティ関連は解決の目処は立った。機動六課設立の目的は、先ずは達成というところだな……)」

これから出てくる問題は後手に回ざるを得ないが、その都度対処して行けばいい。ど

う転ぶか分からないが、管理局はそこまで脆くはないからな……」
そこまでクロノは考えていた。



「シホちゃん！ シホちゃん！」

「奏者よ、しつかりするのだ！」

「お姉様！」

担架で運ばれていくシホの横をなのは達が追従していく。

なのはの殺傷設定による過激な攻撃や落盤による負傷、エクスカリバー・ツヴェリリングを使用するために使った三本のカートリッジによる肉体への過剰な負荷……様々な要因が重なりシホはかなり危険な状態に追い込まれていた。

ユニゾンしているアルトリアがユニゾン・アウトされないのがいい証拠である。

そのままシホは治療室へと入っていきランプが灯されて手術が開始された。

なのは達は治療室の前でシホの無事を祈った。

「……この気持ちは十年前を思い出させてくれますね」

「そうだね、フィアちゃん……」

十年前といえばシホが仮面の男……リーゼロッテに致命傷を食らって運び込まれた時のことを思い出される。

もう、あの時のようにシホには無茶をさせないようにと皆が思っていたのに、今回もまたこうして同じ状況になってしまっている。

なのは達は無力感が襲いかかる。

「……奏者からはしつかりと魔力は送られてきている。だからきつと大丈夫だ。奏者なら必ず帰ってくるだろう」

「そうだね。ネロさんがそう言うなら信じられるよ」

「なのはー!」

と、そこにユーノとアルフが急いで駆けつけてきた。

その勢いのままなのはを抱きしめる。

「ツ!? ユーノ君!? どうしてここに……?」

「君が救出されたと聞いていても立つてもいられなかったんだ! それより、よかった……なのはが無事で……」

「うん……」

それでのなのもユーノからの温もりを感じて安心したのか安らぎの笑みをする。

「なのは……君に伝えたいことがあるんだ」

「ユーノ君……。うん、でも今はまだ待ってもらっていいかな？」

「わかっているよ。シホが目覚めたあとでなら、聞いてくれるかな……う？」

「うん……。その時はちゃんと聞くね」

なのはとユーノがいい雰囲気になっているところに、

「ママー……!!」

「なのは——」

さらにヴィヴィオやフェイトもやってきてとてんやわんやな状況になってきた。

フォワード陣達もやってきたりして人が集まってくるたびに騒ぎが起きているので最終的には看護婦さん達に『静かにしてください！』と注意を受けてしまったという始末である。

……現在シホが手術を受けているというのに結構肝が据わっている連中である。

……それからシホの手術は終わり、病室へと移動されたのだがいまだにシホとアルトリアはユニゾンしたままで金髪碧眼状態のままである。

目も覚めないために当分はみんなが交代でお見舞いに来ることになったのである。



……それから一週間が経過したが今だにシホは目覚めない。

ネロがずつと着いて面倒を見ているのだがなかなか目覚めないために、

「奏者よ……。いいかげん目覚めんか。そしていつものように余の名前を読んでくれ……」

ネロはシホの枕元に顔を寄せて腕組をしてシホの寝顔を覗き見る。

「奏者の寝顔も見ていて飽きないが、やはり元気に動いている方が眩しいのだぞ？ 奏者はそれがわかっていない……」

ツンツンとシホの頬をつつきながらそう続ける。

そこに『コンコン』とドアを叩く音が聞こえてきて、

「誰だ？ 入ってきて良いぞ」

「はい……」

「うん……」

それでドアが開くとそこには花束を抱えているランとレンの姿があった。

「おお。ランにレンであったか」

「はい、ネロさん。……それでシホさんはまだ同じ調子ですか？」

「うむ……。今だに目覚めん。思念通話も試みても会話は不可能な状態だ。だがそれで

もしつかりと魔力が送られてきているから心配はしていないのだがな……」

「僕が成長した姿を見てもらいたいのには、残念です……」

「そうであるな。レンはもうあまり弱気な姿は見せないようになったからな。そこは奏者が見たら驚くだろう」

「はい！」

「時にランよ。もう体はよいのか？」

「はい……。結構トレデイに強烈な洗脳を受けていたんですけど、トレデイが私の限界を見極めてくれていたのかそんなに後遺症はなかったんですよ」

「トレデイには感謝だね、ラン姉さん」

「そうか。それで逮捕した戦闘機人達はどうしているのだ……？ 見に行ったりしているのだろうか？」

「はい。昨日に見に行きました。そこでは何名かは従わなかったためにスカリエッティとともにかなり嚴重な施設に入れられたそうです。

あ、もちろんトレデイは更正プログラムを受けていますのでまだわかりませんが近いうちには出てこられるという話です」

そう、今戦闘機人達はウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロはスカリエッティとと

もに軌道拘置所でそれぞれ別々に入れられている。

そして残りのチンク、セイン、オットー、ノーヴェ、デイエチ、ウエンデイ、デイード、トレデイ、それにルーテシアとアギト、ゼストは海上隔離施設でギンガの指導のもとで更正プログラムを受けている。

ちなみにだがクアットロに記憶を消されたセツテは更正プログラムを受ける以前の問題なのでギンガの指導のもとに追加で一般常識を教え込まれている。

それとフェイトがスカリエッティに隻眼の魔術師……いや、ヴォルフ・イエーガーについて聞いているのだがあまり芳しくない。

その理由はというとスカリエッティ自身がいつ、どこでヴォルフ・イエーガーと出会ったのか、さらにはどんな情報を提供したのかすらも覚えていなかったのだ。

これはおそらく暗示をかけられていたのだろうという事だが、

『この私が……ッ！ あのような男に訳も分からずに操られて協力していたとは……！ なんと屈辱だ！』

と、スカリエッティは嘆いていたそうだ。

よってヴォルフ・イエーガーの手がかりは無きに等しい。

「そうか。次に余は奏者に付きつきりで看病しているから知らないのだが、なのはの方はどうなったのだ？ レリックを埋め込まれたからなにかしら体に変化が生じたのだろうか？」

「はい。なんでもなのはさんの体に溶けたレリックはもう完全に摘出不可能なほどに融合してしまっていたらしくて、代わりに封印処置をされたそうです」

「レリックの機能だけを封印したからなのはさんの魔力光も虹色から桃色に戻ったので、なのはさんは一安心していました」

「なるほどのう……。封印ということとは限定解除もできるということか」

「はい。聖王教会のカリムさんの手によって封印が解除できるように設定できたということですよ。だからいざという時には虹色の魔力を振るえるらしいです」

それは、なんとも。

なのははいざという時には決戦兵器になれる力を手にしたことになる。

スカリエツティは害を与えるどころかなのは的には得する形になったのは皮肉なのかなんなのかという現状である。

「わかった。今のところは現状把握した。ありがとう、ラン、レン」

『はい！』

「それじゃお花、替えてきますね」

ランがそう言つて病室に飾られているお花を替えにいかうとしたので、

「ならば余も付き合おう」

「なら僕も」

それで三人でシホの眠る病室を後にする。

三人が出ていった後、シホの体が発光している事も露知らずに。

それから三人は部屋を戻ってくると驚きの表情を顔に貼り付ける。

だつて、そこにはアルトリアと分離し、朱銀色の髪に戻っているシホが窓の外をアルトリアと一緒に見ていたからだ。

「そ、奏者……?」

「シホ、さん……」

「アルトリアさん……」

三人に名前を呼ばれてシホとアルトリアはゆっくりと三人の方へと振り向く。

そこには笑顔を作つたシホとアルトリアがいて、一言。

「——おはよう。ネロ、ラン、レン……」

「——おはようございます。ネロ、ラン、レン……」

二人にその声をかけられてこれが現実なのだど自覚した三人は一斉に二人に飛びかかった。

「奏者あ——!!」

「シホさん!」

「アルトリアさん!」

そしてシホは熱い歓迎を受けるのであった。

「……よしよし。ごめんなさいね、ずっと心配させちゃって」

「まったくだ。余がどれほど心配したことか!」

シホがネロの頭を撫でながらそう言つて、ネロは感情の赴くままにシホにまるで犬のように擦り寄る。

ランとレンもそんなネロを羨ましそうに見ながらも涙を流していたのだった。

しばらく、病室から嬉し泣きが続いたが、一旦落ち着いたあとに、

「……しかし、やはりあのカートリッジはもう使えませぬね、シホ」

「そうね。あの時は使う以外に選択肢がなかったから使用したけど、もう使う気にはなれないわね……」

そう、例のカートリッジがシホの体に与えたダメージが深刻なものだったために、す

でにすぎかがこのカートトリツジを封印処置を施しているほどだからである。

よつてもうあのカートトリツジは使えないということだ。

「だけど、あれを使ったおかげで魔術回路にはなんにも影響がないことがわかったから、これからは通常のカートトリツジなら使うようにしていこうかな……」

そんな事を言い出すシホ。

そう、今まで魔術回路になんらかの影響があるかもしれないかと思っていたために使う機会がなかったのだ。

それを今回のことで使うきっかけができたことはある意味成長なのかもしれない。

それからシホの目覚めは機動六課にすぐに知らされてみんなが来たがっていたようだがやはり順番制のために悔しがっていた人が数名いたらしい。

他にもシホが目覚めた事によってもう気兼ねすることはなくなったためにユーノがなのはプロポーズをして見事OKをもらったという。

やはりシホのおかげでみんなは元気になるのだろうという事が分かった瞬間である。

——それから、

「……やっぱり、事件が解決したのはいい気分ね。まだ残っている事案があるとはいえ」

「そうだな、奏者よ」

「はい、シホ」

聖王病院の中庭の中を衰えた体力のために車椅子を使って移動しているシホ達。

「これからまた大変になると思うけど、また頑張りますよね。アルトリア、ネロ」
「はい。お任せ下さい。私はシホの剣です。昔も今もその想いは変わりありません」

「その通りだ。余はどこまでも奏者についていくからな」

「……ありがとね、二人とも」

それでシホは感謝をするのであった。



……とある施設。

そこにはヴォルフ・イエーガーが玉座のような椅子に座っていた。

「……シホ・E・S・高町は健在か。やはり見込み通りだな。なあ、そう思うだろう……？」

ヴォルフ・イエーガーはある培養液に入れられている人物にそう話しかける。

返事が返ってこないが、それでもヴォルフ・イエーガーは気にしない。

「ああ……。しかし、早く会いたいな」

誰かに会いたいと言いつつヴォルフ・イエーガー。

それを培養液に入れられている銀髪の少年は無言で聞き入る。

その少年の胸には七つの青い宝石が埋め込まれていた。

知っているものが見ればすぐにわかるだろうロストログアである。

しかも心臓部には穴が開けられている跡があるではないか。

その少年は、さて……。誰なのだろうか。

「まだだ。まだ時期ではない。だが必ず君に会うよ……。なあ、"シルビア"……」

ヴォルフ・イエーガーはなにゆえシルビアの名を呟いたのか……？

まだまだ謎だらけである。

第百六十七話 『外伝15 シホの入院生活』

シホが一週間に渡る昏睡から目を覚まして一日が経過した。

九月も後少しで終わりを迎え秋の暦がやってくる季節。

とうのシホはと言うと……暇を持って余していた。

リハビリする程体力は落ちていないので、検査入院期間ということで明日には退院できるとはいいが、従来シホは常になにかをしていないと落ち着かないのだ。

例えば家事だったり、鍛錬だったり、教導だったり、と……。

それでつい出てしまう一言。

「暇ね……」

「シホ、後一日の辛抱です。ですから我慢してください」

「ま、そうなんだけどね……」

アルトリアにそう言われ、かなり落ち着きがなかったのかと悟るシホ。

これも職業病故のものなのだろう。

体が動かかせないなら投影魔術の修行でもしてもいい……？ とアルトリアに相談し

てみたが、

「まだ魔術回路の方は完全には修復しきっていませんし安定もしていません。ですからなにか起きたら後が怖いですよ？　ですから魔術修行も禁止です」

「奏者のしたい事は余も一緒にしたいが……奏者の体の方が大事だ。だから、手助けできず済まぬ、奏者……」

と、ピシャツ！とアルトリアに言われてしまった。

ネ口も不甲斐ないと言わんばかりの空気が出ているから逆にシホも申し訳ないと思うほどであったという。

垂れ下がったシツポが見えたのは幻覚だろう。

そんな今にも少しずつ溜まっていくストレスでどうにかなりそうであったシホだが、そんな時に病室に来院の影が……。

扉がノックされた。

それで三人は反応をする。

「誰か来たみたいね。さて、この気配は……」

病室に誰か来たのかを当てるために神経を研ぎ澄ませるほどまでに、再三言うがシホは暇を持て余している。

果たして病室に入ってきたのは、

「やつほー。シホちゃん、元気かー?」

「やつぱりはやてね」

「思ったとおりハヤテでしたね」

「うむ。はやてだったな」

「な、なんや……? 私、なにかしてもうた……?」

三人の暇を潰す機会に使われたはやて、いと哀れ。

それはさておき、シホは姿勢を正して、

「さてつと、よく来たわね、はやて。何も出せないけどゆつくりしていつてね」

「わかったわ」

シホの普段通りにはやてもすぐに順応して普通に受け答えをする。

これはもう十年來の付き合いだから当然のやりとりである。

それではやては予備の椅子に座る。

「そうだ。紅茶でもいいてこよう。待つておれ、はやて」

「あ、ありがとな。ネロさん」

それでネロは部屋を出ていった。

「……でも、一週間で寝ていたからあまり情報が入ってきていないのが辛いところね。ゆりかごを破壊してからいろいろあったんでしょう? スカリエツティ関連とか……」

「うん。そこんところは大体解決しているところやね。今もフェイトちゃんガスカリエツテイから情報引き出しを頑張っているとこらだし……。」

後、ベストさんの渡してくれたメモリーから最高評議会や他にも様々な裏データが入っていたんで一回管理局を綺麗に出来るかもしれないとか色々やね……。

あ、そうや！ シホちゃん、ベストさんといえば今も海上隔離施設にいるんやけど、後で会いに行ってみて？」

「え、なんで……?」

「もう、そこは色々分かってるやろ? シホちゃんが作ったエリクシールのおかげでベストさんの命が延命できたんやから、直接お礼を言いたいわって話やで」

「あー……、そういえばもしもの時のために士郎に渡しておいたっけ……? それを使ったのか……」

すぐにそれに気づくあたりシホも成長しているところだな、と黙って聞いていたアルトリアが思っていたり。

「わかったわ。そのうち顔を出させてもらおうわ」

「そうしとき」

と、そこにネロが人数分の紅茶を持ってきた。

「さあ、余が直々に淹れた紅茶だ。飲んでもよいのだぞ?」

「おおきにな。ネロさん」

それではやては一回匂いを嗅いだ後に紅茶を一口。

そしてすぐにカツ！と目を見開き、

「！ すごい……。うちの士郎が淹れるものより美味しい……。さすがローマ！」

「うむうむ。良きに計らえ！」

「それではシホ、私達も……」

「そうね、アルトリア」

シホとアルトリアもはやてに続いて一口紅茶を飲む。

「うん。さすがね、ネロ。また美味しくなったわね」

「そうですね。……この味があつたなら後十年は戦えたほんです」

「うむ！ よかったぞ！」

「いえいッ！とガッツポーズをするネロ。」

次いでシホに向けて頭を差し出す。

その行動にはやては『？』と首を傾げたが、シホは苦笑しながら手を差し出してネロの頭を撫でる。

それでネロは幸せそうに笑みを深くする。

「はあ、なんかネロさんは犬みたいやね〜」

「奏者の犬か……。それもいいかもしれないな」

「やめなさい、ネロ。畜生道に落ちてはいけません！」

なにやら妄想もとい想像したのか、どこか恍惚とした表情になるネロに対してアルトリアが必死に呼び止める。そんなやりとりが続く。

しかし犬耳にしつぽをつけて首輪をするネロの姿はどこかいけない想像を駆り立たせられるというもの。

でも、それでもどこかしつくりくるのはやはり犬属性というのがかなり定着しているのも頷ける。

「……ところで、はやて？」

「なんや、シホちゃん？」

「事後処理、今どうなの……？」

「聴かんといて！」

それではやては耳を両手で塞ぐ。

なにやらそれですぐにシホは察したらしく、

「やっぱり、結構溜まっているのね……？」

「(コク……)」

それではやては無言で頷く。

「スカリエッティ事件でなあ、まずアースラを使ったことから始まり、リミッター完全解除、各戦闘の状況説明、判明した事案、民間への被害報告、事件が終わった後でも機動六課隊舎の復旧とか……他にも色々あるんよ。」

それで私一人じゃ追いつかないから機動六課総出でなんとか一段落ついて私が今ここに来ているんよ？ 他のみんなは今頃ダウンしているよ？」

それを聞いてシホは申し訳なさそうな表情をして一言「手伝えなくて、その、ごめん……」と萎縮してしまった。

でも、はやては「気にせんでええよ」と言つて、

「シホちゃんが一番の功労者なんやから。それにまだシホちゃんには伝えられていないやろうけどな。シホちゃんは今回の事件の功績で評価をされて昇進の話があるんよ？」

「え、私に……？？」

「そりやそうやろ？ 他のみんなもそれなりに活躍したけどな。やつぱり未曾有の危機だったゆりかごを単独破壊したのはすごいことや。一部ではすでに英雄視されているんやで、シホちゃん」

英雄視……。

それを聞いてシホは少し悩む素振りをする。

別に構わないのだが好きで英雄視されるのもどうかと思う。

ただただ必死でゆりかごを破壊して私達の世界を守ったというだけだったから。だがそれでも大勢の命を救ったのは確かなことで。

それでうんうんと悩んでいるシホの肩にアルトリアとネロが手を置いて、

「シホ。もつと自信を持つても良いのですよ。あの時、抑止力の声を振り切つてまでここまで成果を果たしたのですからそれはシホの勲章です」

「そうだぞ、奏者よ。もう奏者は立派に英雄だ。歴史に名を刻むことだからもうすでに英霊の座に招かれてもおかしくはないと思うぞ」

そう二人に言われてシホは少しまだ悩む素振りをしながらも「うん…」と頷くのだった。

「……やつぱりあの時抑止力の声を聞いてたんやね、シホちゃん」

「ええ」

「後で聞いた話なんやけど、サーヴァントの皆がほとんどが抑止力のバックアップを受けたって話なんや。ネロさんもなんやろ……？」

「ああ、そうだな。余にも力が回ってきたのは確かだ」

「そんなことが……」

そこまで事が大きくなっていたとは知らなかったシホは少し驚いていた。

「ま、ゆりかごが壊れたあとは通常に戻ったらしいんやけどな。そのせいでアルクエイ

ドと志貴は戦っていた獣を逃したって話やしな」

「はやて、獣って……?」

「うん。なんでも体中から様々な武装を生やしてまるでバーサーカーのように襲いかかってきたんやって」

「バーサーカー、か……。だとするとこれで七体か」

「多分な……多分この獣も隻眼の魔術師、いやヴォルフ・イエーガーの手が入っているんやろな」

キヤスターの結界と機動六課共々を切り裂いた一閃……おそらくセイバー。

ヴィータを撃墜した矢……おそらくアーチャー。

ランサーと互角の勝負をしたという槍使いの女……おそらくランサー。

アルトリアとネロと二人がかりでなんとか戦っていた方天戟を使う女……おそらくライダー。

オリヴィエとなのはの契約を破戒した……おそらくキヤスター。

複数人いるだろう骸骨の仮面をつけた異形……おそらくアサシン。

そして今回の獣……おそらくバーサーカー。

「スカリエッツィの件が解決したからまだ少し余裕はあるけど、いつまでも放っておけないわね。」

ヴォルフ・イェーガーがどうやってこれらの戦力を調達したのかも考えなければいけないしね」

「そうやね。ま、当分はおとなしくしていると思うから多分大丈夫やと思うけどな」

「そうかしらね……?」

「そう思っておいたほうが気楽になれるよ?　いつまでも気を張っていたらいつか参ってまうで」

「確かに……」

「だから今はシホちゃんもゆつくりと今日一日は体を休めて明日から頑張ってもらおうで?」

「ええ。任せておいて、はやて」

それから真面目な話はもう無しということになり、それなら!とはやてはある話を出す。

「そうや。シホちゃん、昨日に来たランとレンに聞いていると思うけどユーノ君の話は……」

「ええ。聞かせてもらったわ。なのはにプロポーズしたんでしょう?」

「そうや！ いい加減やつとかつて感じだったけどな」

「なのはが誘拐されてからより一層なのはの大事さが身に沁みたのね」
そうなのである。

なのはを魔法の世界に招いた責任もあるだろうけど、それでもユーノはなのはの事をいつも心配していた。

あの撃墜事件の時などは一番後悔していたのは印象に残っている。

それで今回のあれだ。

いい加減ユーノ自身でなのはを守ってやりたいという気持ちにもなったのだろう。

『なのは！ もう君を一人にしない！ 僕が君を守るよ!!』とユーノはなのはに告白したというが、その想いは積み重ねられたものであり並々ならぬものだったのだろう。

「それだと、一回高町の家に報告しないとね。恭也兄さんと士郎お父さんが実力行使を出不さないように私もついていかないとね」

「それなら一日だけどなのはちゃんとシホちゃん達に休暇届を出しておくわ」

「ありがとね、はやて」

「なんのなんの。これくらい軽い仕事やで！」

ニカツ！と笑みを浮かべるはやて。気分はノリノリである。

「あー、でもなのはちゃんもええなあ。ユーノ君、私も少し狙っていたんよ？」

「それはまた……先を越されたわね」

「うん。内緒やよ?」

「わかつているわ」

「私も誰かいい相手がいればええんやけど、なかなか見つからないんやよね」

「いい出会いがあるわよ、はやて」

「そうです、ハヤテ。いつかですがいいめぐり合わせがあるでしょう」

「そうだぞ。気長に待つのもいいものだぞ」

いつの間にかはやて慰め会になりつつある病室。

だがそこにもまた扉のノックの音が聞こえてきた。

「ん? 今日以来院が多いわね……? 誰かしら?」

すると扉の先から、

『シュバインオーグ一尉。ジグルドだ。入ってもよいかね?』

「ジグルド提督!」

シホが声を上げる前にはやてが驚きの声を上げた。

シホの認識ではジグルド提督とは「管理局の正義の象徴」とまで言われている人物であり、なにやら革命を起こすとも言いう野心的な人物である。

『ん? その声は……八神二佐もいるのかね?』

「は、はい……。どうぞ、ジグルド提督。今は大丈夫です」

『そうか。では入らせてもらおうぞ』

それでジグルドが病室の中に入ってきた。

後ろに仮面をつけたタスラムともう一人初見の誰かを引き連れて。

「さて、久しぶりだな。シュバインオーグ一尉。目を覚ましたと聞いて見舞いに来させてもらった」

「ありがとうございます、ジグルド提督。ところでどうして今回は失礼ですが来られたのですか……?」

「なに……。君はあのゆりかごを破壊したということとはもうすでに民間にも報道されていて英雄視されているからな。他にも管理局の中で憧れの一人でもある。だから挨拶をしたかと思ったのだ。こんな理由でいいかね?」

「はい、構いません」

「そうか。しかし、今回は本当によくやってくれた。君のおかげで最悪の事態が防げたといつても過言ではない。私からも感謝の言葉を贈らせてくれ」

「あ、その、ありがとうございます……」

それでシホは少しばかり恥ずかしそうにお辞儀をするのだった。

「さすがだな。謙虚なのはどうかと思うがそこも君の魅力でもある。いつまでもその心

を忘れないでくれ」

「はい」

「さて、元気そうだなによりだな。そうだ、今日は私の部下を紹介しに来たのだ。タスラムは以前に紹介したな。もう一人の方を紹介しよう。ウイルソン？」

「は。ジグルド提督」

それで後ろに控えていた眼鏡をかけている赤に近い茶髪青年がシホの前に出てきた。

一瞬、シホは心の中で、

(どこか一成に似ているわね……)

と、思っていたりした。

「初めまして。シュバインオーグ一等空尉。それに八神二等陸佐。私はジグルド提督の補佐を勤めるウイルソン・ターナーと申します」

「よろしく願います」

シホとはやては二人して挨拶を交わして握手をするのだった。

それから他愛ない話をして時間が経ち、ウイルソンがそろそろ時間です、とジグルドに言い、

「シュバインオーグ一尉。八神二佐。すまない。これからまた人と会う約束をしている

ので失礼をするよ。そして君とはいずれ、正義の在り方について語り合おう……」

「正義の在り方、ですか……?」

「そうだ。少しでいい。考えておいてくれ。ではな。いくぞ、タスラム、ウィルソン」

「は」

「(コクリ……)」

それで三人は病室を出て行くのだった。

「なんや、不思議な人やったね……」

三人が去った後、はやてがそう呟いた。

そしてシホもまた戦技披露会の時に感じた気持ちを出していた。

「(やっぱり、ジグールド提督はなにか取り返しのつかない事をするような……、そんな不安感を感じたわね……)」

この不安感。

いずれシホはこの不安感の意味を知ることになる。



そして一日が経過してやっと退院したシホは復帰した機動六課隊舎に帰ってきて、

『お帰りなさい！ シホさん！』

と、みんなに盛大に歓迎を受けたのだった。

第百六十八話 『外伝16 JS事件解決パーティー』

……シホが聖王病院から無事復帰してきて数日が経過した。

特にこれといった事件も起きていないので毎日ジェル・スカリエツィ事件……通称JS事件の事後処理に追われる毎日であった。

だがそれも『赤いブラウニー』であるシホの参戦によりはやても助かると思いながらも書類作業を終わらせていった。

それで十月の始まり頃にやっと聖王教会からや管理局本部へのもろもろの報告書も作成し終わり、機動六課も通常運営にまで戻ってきた。

すなわち飽くなき教導によるフォワード六人みんなの特訓である。

それで今日も一日、教導が終わりを迎える。

「……はあ、はあ……」

ランが地面に両手をついて荒い息を零していた。

「おら、ラン！ お前だけが他の五人より教導が遅れてんだ。しつかりとしろよ！」

「は、はい……。ヴィータ副隊長」

「もう少し頑張りましょうね」

「はい、ファイアット副隊長」

今日も今日とてランが追加メニューをヴィータとファイアットに言い渡されてヴィータにしごかれていた。

それもしょうがないといえましょうがないのかもしれない。

いくらJS事件は解決しているとはいえ、それと鍛錬内容は別物であるのだから。

それにあつさりとはいかないが敵のトレディに洗脳されて拉致されてしまった事実は消せないのである。

それでシホ達も厳しいヴィータ教導官様には苦笑をしながらも口出しはしないのである。

「ほら！ 今日はずつとシホも帰ってきて機動六課隊舎も復帰して事件解決パーティーがあるんだからもう少しくらい頑張りよー！」

「ツ！ はい！！」

事件解決パーティー……その甘美な響きにランはすぐさま復活して今日一日の残りの教導内容を消化していくのだった。



一方で医務室ではなのはがシャマルに身体検査を受けていた。

「うーん……」

「どうですか、シャマル先生……?」

体を調べるサーチの光を浴びながらなのははシャマルに問う。

それに対してシャマルは色々と検査を繰り返しながらも、

「うん。もう体の不調はないようね。レリックも暴走もなく安定しているし異常は無し

よ。お疲れ様、なのはちゃん」

「ありがとうございます、シャマル先生。……あ、ところでプルートは今どうなっていま

すか……?」

「プルート……? うーん、そこはシャリーとすずかちゃんに聞いてみないと分から

ないわね……。後で行ってみるといいわね」

「はい、わかりました」

スカリエッティの手により作成されたレイジングハート・エクセリオンの姉妹機であるレイジングハート・プルート……。

それはもしかしたら使用者であるのはに害があるかもしれないとシャーリーとす
ずかが徹底して調べ上げているところである。

だがしかし、調べ上げた結果、スカリエツティも時間的猶予もあつて悪意ある部品を
組み込まなかったのかどうかは分からないが、機能に関してはまともな通常のデバイス
となんら変わらないという。

ただ意見があるとすればレイジングハートと比べると数段フレームが頑丈に作られ
ている特注製だという。

それはなぜか……？と問われるとこう診断される。

通常の性能ではなのはの虹色の魔力には耐えられないからだ。

レイジングハートも一回試しに使ってみたのだが、たった一回の使用でフレームが悲
鳴を上げたらしい。

よつて、なのはが限定解除して虹色の魔力を使おうとしてもレイジングハートでは使
えないのである。

よつて虹色の魔力を使う時だけはプルートを使ったほうがいいという結果に落ち着
いたのである。

それを聞いて、レイジングハートはというと、

《……それではマスターは私を使ってくれなくなる。いけません、更なる進化をしなけ

れば置いてかれてしまいます……ッ!」

と、シャーリー達に自身の改造案を提示しているという。

これで将来は独自で動ける自立形態を手に入れることになるのだが……今はまだまだなので、場に合わせてレイジングハートとプルートを使い分けていく事になったのである。

—— 閑話休題

それでののはは制服を着直すと、ちようど部屋に人が入ってきた。

その相手とはユーノとヴィヴィオであった。

ちなみにユーノはかなり残業時間が溜まっていたらしく当分は無限書庫を休みにしてもらったらしい。

近々高町家に挨拶に行くのだからちようどいいかもしれないな、とユーノは呟いていたとかなんとか。

「あ! ユーノ君にヴィヴィオ!」

「なのは……。もう大丈夫かい……?」

「なのはママ、大丈夫?」

「うん！ もう元気いっぱいだよ！」

それでなのは元気のポーズをしてみせる。

それに安心したのかヴィヴィオが「よかったあ〜」と安堵の息を吐く。

ヴィヴィオと手を繋いでいたユーノも安心したのか笑みを浮かべて、

「なのは。もう無理はしないでくれ。これからは時間が許す限りはなのはの近くにいたいから」

「うん……ありがとう、ユーノ君」

それで二人して頬を紅く染め上げる。

中々にいい雰囲気である。

この二人、一旦急激に離れる経験をしたためか昔からお互いに信頼し合っているのも影響していて一気に距離を縮めたのである。

なのはがユーノのプロポーズを受け入れたのも一つの答えである。

そんな仲睦ましい二人を見てヴィヴィオも空気を読めるいい子であり、なのはの手とユーノの手を取って、

「なのはママ。ユーノパパ。これからももつと、もーつと仲良くしていこうね！」

「うん！」

「ありがとう、ヴィヴィオ。パパって言うてもらえて嬉しいよ」

ヴィヴィオもなのはとユーノが恋人関係になってからはユーノの事を『ユーノパパ』と呼んで慕っているのである。

この三人が揃えばいつものごとくはやてが「甘い」と砂糖を吐いている光景をよく見るという。

そして、そんな光景を医務室でされているものだからどこか蚊帳の外にいるシャマルも少し表情を引き攣らせながらも、

「なのはちゃん、ユーノ君……。お願いだから桃色空間を作らないで……。私、なんだか無性に悲しくなつてきちゃうわ」

「あ、すみません……」

普通の人間ではないシャマルからしてみれば普通に恋愛できるなのは達が羨ましいという思う感情も無くはないのである。

でも、そこははやての守護騎士である。

だからはやてと一緒に時を過ごせればそれだけでいいというある意味逃げの思考に走るのも致し方ないのかもしれない。

それはともかく、時間もちようどいいと言う感じなのでシャマルも一旦は医務室から離れて食堂に向かおうとするのは達に着いていこうとしていた。

なんせこれから盛大にパーティーが開かれるのだから。



ランがヴィータとファイアットにしごかれていた間、食堂内ではコック長である士郎を中心としてキャスターやリインフォース・アインス、シホ、フェイトなど料理を作れるメンバーみんながせわしなく動き回っていた。

残りのフォワードのメンバーは今現在は汗を流しているところまでまだ食堂には来ていない。

「さあ、あと少しだ。みんな、頑張つて作業をしてくれ。せつかくの無礼講のパーティーだ。盛大に盛り上げるぞ！」

『おー！』

士郎の言葉に全員が元気に返事を返すのであった。

そこにサーヴァント連中もやってきた。

ランサーにネロ、アルトリア、ライダー、オリヴィエ、志貴、アルクエイドと勢揃いである。

今更であるがこんなに身近に揃っているのにお互いに争わないというのはそれはそれで仲良くなったものである。

まあ、聖杯大戦の時からすでに敵対していなかったのだから、気を許しているのだから、う事は百も承知である。

もちろんマスター達があの仲良しというのもあり、模擬戦以外ではフランクな関係を保っているのである。

伊達に十年も現界しているわけではない。

それとオリヴィエに関してなのだが、無事なのはのサーヴァントに戻れたとだけ伝えておこう。

なのはの再契約で本来二つあったはずの令呪は一つしか残らなかったが、それでも再契約できたのはなのはは嬉しいらしく気にしていないとのこと。

まあ、自害させようなんてなのはは欠片も思っていないので令呪が残っていればそれでいいという考えである。

「おっ！ 中々いい匂いがしてくんじゃねーか」とランサー。

「うむ。奏者の料理が食べれると思うと余は楽しみだぞ！」とネロ。

「そうですね、ネロ。私もシロウやシホの料理は楽しみです」とアルトリア。

「……………私はできれば生の血を……。いえ、なんでもありませんよ？ ええ」とライダー。

「おいおい……。アルクエイドは変な気は起こしていないよな？」と志貴。

「あつたりまえでしょ、志貴。わたしがもし血を飲んだら暴走してここにいる全員を敵

に回しちゃうわよ。きつと……」とアルクエイド。

「フフ……中々にそれは勘弁したいところですね」とオリヴィエ。

と、サーヴァント連中は色々とすでに盛り上がっていた。

そこにお風呂から先が上がってきたのか、ツルギを連れだしたエリオとレンがやってきた。

それで準備をしているアインスが近くに寄ってきて、

「すまないな、エリオ、レン。ツルギの面倒を見させてしまつて……」

「いえ、構いませんよ。僕もツルギ君は弟みたいでなんか楽しいですし」

「はい。僕も以下同文です」

「ツルギ。二人に迷惑はかけていないか……?」

「かけていないよお! ママ、僕のこと信じていないの?」

「そんな事はないさ。ツルギはいい子だからな」

そう言つてツルギの頭を撫でるアインス。

それにツルギも嬉しそうに表情を綻ばせる。

それを見てレンとエリオは少し羨ましそうにしていた。

レンにランは今はシホ達という家族がいるが、本当の親は魔術師事件で失つてしまつたのだから父に母がいるツルギが羨ましいのだろう。

エリオに関して、親はいるにはいるだろうが会うことも出来ないのだからいないのも同然である。なのでレンと同じ気持ちを抱いている。

だがそんな感情はおくびにも出さず、いつも通り笑顔に振舞うほどには二人は成長しているのである。

「エリオくーん」

「キユクー」

「あ！ キヤロにフリード！」

「あたし達もいるわよ」

「うん。美味しそうな料理が並んでいるね！」

そこに遅れてフォワード女性陣（ランはいない）もやってきた。

アルトやルキノ、シャーリー、すずか、ヴァイス、ザフィーラもやってきてより一層食堂が騒がしくなってきた。

「あ、みんな。大体揃つとるんね〜」

「そのようですね。主はやて」

「はいです！」

「あ、八神部隊長にシグナム副隊長にリイン曹長」

そこに最後らへんなのだろうはやてとシグナムとリインがやってきた。

でも、まだ遅れている人員がいた。

「ま、待つてくださいい！ 私もいます！」

「あたしもだ！」

「私もいますよ！」

教導特別メニューを終わらせたランとヴィータ、ファイアットがすぐに汗を流してやってきたのだ。

「ランとヴィータとファイアちゃんも来たんね。後は……なのはちゃん達にシヤマルやね」

「ちようどよかったかな……？ はやてちゃん」

そこにはやての背後から最後のメンバーなのだろうなのは達がやってきた。

「ちようどええね。うん、それじゃ料理も多方テーブルに並んでいるようやし……そんなら私が挨拶をせんとな」

それではやてはマイクを持ち、壇上に立つて全員に聞こえるように声を張り上げる。

『えー……お集まりの皆さん。ご苦労様です。機動六課部隊長の八神はやてです。』

今回のこのパーティーは機動六課設立の目的の一つであるスカリエツティ逮捕という目的がまずは達成できたということで開かせていただきました。

ですがまだまだ機動六課は続いていきます。ですから皆さんもこれから気を抜か

ずに頑張っていきましょう。

……と、まあそんな堅苦しい挨拶は今回はこれくらいにしよう……無礼講なん
でみんなパーティーを楽しみましょう！ あ、お酒は二十歳以下は飲んじやダメやよ！

それでは、乾杯！』

『乾杯！』

はやての音頭でみんなが一斉にジュースが入ったコップを空に掲げた。
それからは食堂は楽しいパーティー会場へと変貌したのである。



Side シホ・E・S・高町

ふう……久しぶりにこうして料理をしたから楽しいものね。

そんな事を思いながらも私はなのは達夫婦がいる席へと足を運ぶ。

「なのは、ユーノ。飲んでいるかしら？」

「あ、シホちゃん。うん、そこそこには飲ませてもらっているよ。でも、明日の教導に響くから控えめだけだね」

「ま、そりやそうでしょうけどね。ところでユーノは近々なのはとヴィヴィオと一緒に高町家に挨拶に行くんでしよう?」

「う、うん……。そうだね。緊張してくるよ」

「士郎お父さんはなにか暴動を起こすかもしれないから私も付き合わせてもらうわ。ちようど忍さんにも挨拶しないといけないしね」

私がそう言うとうーノは一瞬目を見開く。

どうしたのだろうか……?

「……もしかして、シホ。すずかとフィアとその、やっちゃったっていうのは本当なの?」

「うん、そうだよー!」

「そうですよー! 兄さん!」

私が返答する代わりにフィアとすずかがその場にやってきてすぐさま私の腕をそれぞれで絡ませてくる。

どうやらお酒が回っているらしい、少し酒臭いかな。

「そ、そうなんだ……」

それでユーノは表情を引き攣らせてそれ以上は追求してこなかったけど、どうも居心地が悪くなったので私はその席を後にした。

それで色々と回っているとティアナと目があつた。

「あ、シホさん！」

「ティアナ。楽しんでいる？」

「はい！ あ、それとシホさんの言葉、とても励みになりました……。それで戦えたもんです！」

「そう、それならよかつたわ」

今もティアナは私の贈った言葉を大事にしてくれているのね。

嬉しいものね。

そういえば、だけど。

ふと気になったのでティアナに聞いてみることにする。

「ねえ、ティアナ。こんな時になんだけどあなたのお兄さんであるティーダさんの件なんだけど、少しいい……？？」

「えっ、構いませんけど……？？」

「私、もしかしたらどこかで会っているかもしれないのよ。そのお兄さんに……」

「えっ……!!？」

それでやっぱりティアナは驚愕の表情をする。

「ど、どこですか!？」

「いえ、なんというか詳しくはわからないんだけど、ティアナに雰囲気似ている人と会った事があるってだけで、当人かまではわからないのよね……だからあまり期待しないですね？」

「は、い……」

そう、ジグルド提督の側近であつたタスラムさん……。

彼は言葉も発しずにまるで人形のように見えたけど、どこかティアナに雰囲気似ていたというのが私の率直の感想なのよね。

だから今はそう詳しく話せないけど、いつかまた会えるかもしれない。

それだからティアナにはまだタスラムさんの事は内緒にしておこうと思う。

期待させて違っていたらかなり悲しい結果になってしまうからね。

それから気持ちを切り替えているんな場所にいたりして楽しんだ。

こうしてまたみんなで楽しみたいものね……。

第一百六十九話 『外伝17 高町家と月村家への帰省』

……………十月も半場を過ぎて少し寒くなってきたある日の事。

制服姿ではなく普段着を着用したシホ、アルトリア、ネロ、すずか、ライダー、フィアット、なのは、オリヴィエ。

それにユーノ、ヴィヴィオが機動六課の玄関前で待機していた。

このメンバーが普段着でどこかに出かけるといっただけで少し大事かもしれないが普通に溜まっている休暇を帰省に利用するだけである。

特になのはとシホは色々な意味で有名だから帰省といえはマスコミが騒ぎそうだが、そこはクロノが揉み潰したとだけ……。

「それじゃ、みんな。明後日には帰ってくる予定だから私達がいけない間、機動六課の守りはお願いなね……って言っても私達がいなくてもランサーやアルクエイドを筆頭に強者が残っているから大事ないと思うけどね」

そう言ってシホは改めて自分達が抜けても平気で稼働する機動六課戦力を見て頬を爪で掻きながら苦笑いを浮かべるのであった。

それでヴィータがまず前に出てきて、

「おう！ とにかくできるだけリフレッシュしてこいよ？ シホとなのはは特にな。

通常のシフトに戻ってから教導を頑張っていたんだから今回はいいい機会だ。

シホとなのはとフィアットつていう教導隊メンバーが抜けるのは少し痛い、その分みっちりとフォワード達を鍛えておくからな！」

ニシシ！とヴィータは笑い『グツ！』と親指を立てた。

それにシホ達もありがたい思いであり、そこでなのはは前々から思っていた一言をヴィータに告げる。

「……ねえ、ヴィータちゃん。やっぱり私達教導隊のところに来る気はない……？」

「そうね。ヴィータならいい線行っていると思うわよ？」

「そうですね。ヴィータは面倒見がいいですしね」

「そうか……？」

なのは、シホ、フィアット現教導隊メンバーにそう言われて頭を掻くヴィータ。

「まあ、一応考えとくよ……。ま、いってこい」

「いってらっしゃい！なのはさん！」

「その間、ヴィータ副隊長に鍛えられておきますから！」

スバルやラン達にそう言われてシホ達は笑顔を浮かべた。

「いつてきまーす！」

ヴィヴィオの元気な声でシホ達はヴァイスのへりに乗り込む。

「それじゃ、行くつすよ。皆さん」

『お願いしまーす！』

「それじゃ、テイクオフ！」

それでへりは転送ポートエリアまで飛んでいくのであった。



それで前の出張任務の時のようにすずかの家の転送ポートに出現したシホ達一行。

「出張任務以来ね……」

そうシホがしみじみと語る。

「そうだね、シホちゃん。それじゃ、今からお母さんに連絡を入れておくね？」

そう言ってるのはが携帯端末を取り出して桃子に電話をかけている。

その一方でユーノは少しばかり……というかかなり緊張した面持ちであった。

「き、緊張してきたね……改めて土郎さんと桃子さんに挨拶するわけだからね」

「兄さん、もう少しリラククスしたらどうです？ そんなんじや本番で倒れちゃいますよ？ ただでさえ無限書庫にこもりつきりだったんですから体力も落ちてそうですし……」

ファイアットがそう言い、ユーノの背中をさする。

それのおかげかユーノは先ほどより心にゆとりが出てきたのかかけている眼鏡をクイツと上げて、

「大丈夫だよ、ファイア。ありがとう」

「いえいえ。今回は兄さんの一世一代の本気を出す日ですからこれくらいお安い御用ですよー！」

「ユーノパパ。安心してー？ なにかあったらヴィヴィオが慰めてあげるから」

「ありがと、ヴィヴィオ……」

ユーノがヴィヴィオに慰められているところになのはが電話を終了したのかこつちに戻ってきた。

「なのは、どうだった……？」

「うん、シホちゃん。一応電話は出来たよ？ ただ……」

そこでなのはの表情が曇る。

何事かとシホ達は思う。

「どうされたのですか、ナノハ……？　モモコ達となにか起こりましたか？」

アルトリアが代表してなのはに話しかける。

「うん、アルトリアさん。私がスカリエツティに捕まっていたことは伝わっていたらしくてね。もう電話越しに涙を流されちゃった……」

「それは仕方がなからう。桃子は奏者以上になのはの事を大事にしているのだから。親として子の心配をするのは当然のことだな」

「そうなんだけどね。ネロさん……」

「なのは。まずは帰って無事であることを説明しましょうか。まずはそれからですよ」

「うん、オリヴィエさん。まずは心配かけたことを謝罪しなくちゃね！」

それでなのははキリツ！と表情を引き締めて拳を握る。

「その意気よ、なのは」

「そうだよ、なのはちゃん」

「はい。桃子はそこまで怒ることはないでしょう。むしろ、心配するでしょうからね」

シホとすずかとライダーでそう励ます。

それでシホ達は忍達に報告する前にまずは翠屋に向かうことにしたのだった。

だが道中、やはりというべきか久しぶりに地元の人達に顔を出すので「久しぶりね」

とか「元気にしてる？」とか色々と声をかけられるのであった。

そんなこともあったが無事に翠屋の前に到着した一同。

特になのはとユーノは緊張している顔になっていた。

「そ、それじゃ、なのは……いこうか」

「そうだね、ユーノ君……」

二人は決意をした顔つきになっていた。

シホ達もいるにはいるのだが結構蚊帳の外状態であるのは言うまでもないことだが

……。

「なのはママ。ユーノパパ。早く入ろう?」

ヴィヴィオが二人の手を引っ張って、ついにドアノブに手をかけて中に入る。

途端、

「なのはー!」

扉を開けた瞬間に桃子が泣き顔でなのはに抱きついたのだった。

「お、お母さん……た、ただいま」

「お帰りなさい。つて、そうじゃないでしょう!?! 悪い人達に体を弄られたっていう話

じゃない! どころが悪いところはない? 痛いところはない!?!」

桃子はもう少し混乱気味にだがなのはの体をあちこち触り始めて傷はないかと確認

している。

「大丈夫だよ、お母さん。心配かけてごめんね……ッ！」

それでののはも桃子に抱きついて無事を証明するのであった。

そこに桃子の後ろから士郎と美由希の二人がやってきて、

「おかえり、なのは。無事でよかったです」

「うん。そうだね、お父さん。おかえり、なのは」

「ただいま！」

それから家族の団欒のような光景が続いたのであった。

でも、さすがにシホもいることを忘れられているのもなんかと思い、残りの面々も翠屋の中へと入っていく。

「ただいまです、桃子お母さん。士郎お父さん。美由希姉さん」

「あつ！ シホちゃんも帰ってきていたのね。お帰りなさい！」

それから他の面々も挨拶を交わす。

最後にヴィヴィオがなのはとユーノの手を取り、

「なのはママとユーノ。パパの娘の高町ヴィヴィオです。よろしくお願いします！」

ペコリとお辞儀をするヴィヴィオ。

だがそれが今日一番の衝撃だったのかもしれない。特に士郎の反応がすごかった。

「ほう……なのは娘なのか。よろしく頼むよ。ヴィヴィオ。私の事は士郎とでも呼んでくれていい」

「はい！ 士郎さん！」

「私の事は桃子さんって呼んでね！」

「はい！ 桃子さん！」

「じゃあたしの事は美由希お姉ちゃんでもいいよ」

「はい！ 美由希お姉ちゃん！」

ヴィヴィオはそれぞれも指定された呼び方で呼ぶようになり馴染み始めている。

「でも、なのはももう子供持ちかあ……あたしより先にだなんて生意気なあ」

「にやああー！ やめてお姉ちゃん！」

美由希がなのはの頭をグリグリしている微笑ましい光景が展開されている中で、一方では士郎とユーノが真剣な顔で話し合っていた。

「さて、ユーノ君。ヴィヴィオにパパと呼ばれていたようだが、説明してもらえるかな？」

「はい。今日はそのために来させて頂いた次第です」

「そうか……。それじゃ今日はもう閉店にしようか、桃子。家で話をしよう」

「そうね、あなた。ユーノ君もいいわよね？」

「はい。覚悟はもう決めてきましたから大丈夫です」

それで翠屋は今日は閉店となり全員で家に向かうことになった。

だが、その際にシホとすずか、ファイアット、アルトリア、ネロ、ライダーの六人は一時なのは達と別れることにした。

理由はというと次は自分達の関係を忍に伝えるためであるからだ。

そのために本日は予定を作ってもらいドイツから恭也とともに帰ってきているはずだからだ。

「それじゃなのはにユーノ。士郎お父さん達の説得は頑張つてね。私達も忍さんに報告してくるから」

「うん。わかったよ、シホちゃん。そちらも頑張つてね」

「ええ」

それで一同は別れるのであった。



S i d e 高町なのは

シホちゃん達と別れてから久しぶりの我が家に入っていき居間でユーノ君とオリヴィエさんとヴィヴィオと待っていると、お父さんとお母さんが真剣な面持ちで私達の前の席に座る。

「……さて、それじゃユーノ君」

「は、はいー」

「緊張しなくてもいいよ。楽にしてくれて大丈夫だからね」

ユーノ君の緊張した声ですぐにお父さんが和らげるように声を出してくれた。

さすがお父さんだね。

「それじゃ、話してくれるかな？」

「はい……。その前に僕の覚悟を聞いてくれても構いませんか？」

「いいわよ。言ってみて」

「はい。ありがとうございます」

それでユーノ君も一回深呼吸をした後、私も驚くような真剣な表情になり、

「僕は今回の事件でなのはが誘拐されたと聞いた時、頭の中が真っ白になりました。

いつでも身近にいて元気にしているなのはの姿を見ていたから心配ないと思いついていたんです。

でも、その考えが覆されてなのはは僕の近くからいなくなってしまうました。

その時の感情はとて一言では言い表せないくらいのものであったのは言うまでもありませんでした」

「そうか……」

お父さんはそう言ってまだ探るような表情になっているけどユーノ君の言葉を最後まで聞いてくれるようでもまだ口出しはしてこない。

「なのはをこの世界に巻き込んだのは僕です。ですから言い訳はしません。でも、それでも僕はなのはの事をとても大切に思っています。

最初は師匠関係という間柄でしたが今回の件で僕はなのはの存在が僕を強く勇気づけてくれるという気持ちと、そして僕もなのはを守りたいという思いがとても強くなりました。

そして今までひた隠してきたなのはに対する思いにも正直になろうという気持ちにさせられました」

それを聞いて私は頬が赤く染まるのを自覚する。

ユーノ君……そこまで私のことを考えてくれていたんだね。

今まで気づかなくてごめんね、ユーノ君。

「なのはの事を好きだという気持ちはもう変わりません。ですから考古学者でひ弱な僕ですが、それでもなのはの身を守ることができます。

ですから言わせてください。土郎さん、桃子さん。娘さんを……なのはを僕にくださいー！」

そう言つてユーノ君は頭を下げた。

私も嬉しい気持ちになつて一緒になつてお父さん達に頭を下げて、

「お父さん！ お母さん！ 私からもお願い。私、ユーノ君と……そしてヴィヴィオとも一緒ならもつと元気にやつていけると思うの。だから……！」

「……………」

しばらくお父さんとお母さんは無言で目を瞑つていたが、次第に目を開いて、

「二人とも、頭をあげなさい」

「はい……………」

それで私とユーノ君は頭を上げてお父さん達の顔を見ると、そこには満面の笑みを浮かべているお父さん達の表情があつた。

そして、

「ユーノ君。任せてもいいんだね？ 最後までなのはと一緒にいてくれるんだね？」

「はい！ 約束します！ なのはとヴィヴィオは僕が守ります！」

「ユーノ君……………」

「ユーノパパ……………」

お父さんがそういうと言う事は！

「わかった。ユーノ君。なのはを君に任せるよ。これからは私の事をお義父さんと呼ぶことを許すよ」

「ッ！ ありがとうございます！」

「しかし、ユーノ君の覚悟を聞いてよかったよ。でなかったら私はまず『私を倒してから言うんだな！』というつもりだったんだよ」

そう言つて「はっはっは！」と笑うお父さん。

やっぱり物騒なこと考えていたんだね……。

そうならなくてよかったよ。

でも、これで認められたから！

「ユーノ君！ これから末永くよろしくお願ひします」

「うん。僕もこれからよろしくね、なのは」

それで私とユーノ君はいつまでも見つめ合っているのであった。

だがすぐにお父さん達に、

「でも、結婚してからだだから。子供を作るのは！」

「あらあら、ふふふ。あなたもやっぱりまだまだ過保護ね」

「当然だ」

ふええー！? まだ一回もやっていないからよかったよ。

「そういえば、話は変わるけどお父さん」

「ん? なんだい、なのは?」

「うん。そのね、すずかちゃんとフィアちゃんがね……」

それを伝えたらお父さんの表情が固まったのは言うまでもなかったみたい。



S i d e シホ・E・S・高町

今頃なのは達はちゃんと報告できている頃かしらね?

でも、私も今回は覚悟を決めないといけない。

なんせ、その、すずかとフィアと、その、やつちやって、しかもそれから二人とも生理が来ていないというから。

それが意味することは……。まあ、言わずもがなである。

「すずか、フィア……」

「ん? なに、シホちゃん?」

「なんですか、お姉様？」

「すずかはデバイスマイスターだからそんな激しい動きはしないから安心はしているんだけど、ファイアは少しだけ激しい動きは控えめにしてね？」

「えっと、うん。わかったよ、シホちゃん」

「わかりました。お姉様」

二人もどういいう意味か察したのか頬を赤らめながらも頷いてくれた。

「むー……奏者あゝ」

「そう落ち込むことはないでしょう、ネロ。いつかチャンスはありますから」

「スズカ、やりましたね！」

そんなやりとりが後ろを歩いている三人から聞こえてくるけど、今は気にしないことにしておく。

それで月村邸にやってくると忍さんと恭也さんに雫ちゃん、ノエルさん、フェアリンさんが出迎えてくれた。

「よく帰ってきたわね、すずか。それに皆も」

「シホちゃんもよく帰ってきたね。歓迎するよ」

「ただいま、お姉ちゃん。お義兄ちゃん」

「こんにちは、忍さん。恭也兄さん」

「こんにちはです、忍さん、恭也さん」

「ご無沙汰しています、シノブ、キヨウヤ」

「来てやったぞ、忍、恭也よ」

「ただいま戻りました、忍、恭也」

それから全員挨拶を交わして月村邸の雑談室へと通されて、私達は席に着席する。

「それで今回はなのはちゃんとユーノ君の報告でこちらに来たつて聞いたけど、それだけじゃないんでしょう？」

そう忍さんが切り出してくる。

さすがが分かつている。

私達の仲を積極的に支援してくれただけあつてなんとなくなのだが私が言う事ももう予想しているのだろう。

「はい、忍さん。それでなんですけど、私の錬金術で例のアレを作つてその、すずかどフィアと、やつてしまいましたんですよ」

「やつぱりねえ……。予想していたからそんなに驚きはないわ」

「忍。アレとは一体何だ……。？」

忍さんはわかっているようだったけど、恭也兄さんは分かっているいらしく、忍さんが雫ちゃんに聴かせるわけにはいかないのか耳打ちをしていた。

すると恭也兄さんもわかったらしく、少しばかり表情が赤くなった。

「そ、そうか……もうそんな関係になったのか。3人とも」

「はい。それともう一つサプライズ報告なんですけど……すずかとファイア、二人とも生理が来ていないんですよ」

「えっ!?! 本当に……!?!」

「それってやつぱり、そうなのか……」

「すずかお嬢様。おめでどうございます!」

「ファイアツト様もおめでどうございます」

四人にそう言われて素直に受け入れられてよかったという感想になった。

「よかったわね、雫。従姉妹ができるわよ?」

「いとこ? なに、それ……?」

「まだ雫はわからないか。ま、そのうち分かる時が来るわよ」

「うん!」

雫ちゃんもなんとなくだけどわかったらしく頷いていた。

素直でいいわね。

「それですが、とある次元世界で女性同士で重婚可能な結婚式が挙げられるところがあるんです。そこで三人で結婚式をあげようと考えています」

「そう……もう三人とも大人の仲間入りね。生まれるのを楽しみにしておくわ
「はい！」

「うん、お姉ちゃん！」

「で・も……やっぱりシホちゃんも中身はあれだったんだねえ。忍さんは嬉しいわよ」
「か、からかわないでください。恥ずかしいではないですか……」

『アハハハハ！』

それから部屋の中にはみんなの笑い声が木霊しているのであった。

そして翌日は高町家と月村家がみんな集まって軽いパーティを開くのであった。

みんな、とても楽しそうな表情を浮かべていたので良かったと思う。

これからの生活ががさらに楽しみになってきたわね。

第一百七十話

『外伝18

戦慄の影響ゲーム（前

編）』

十月の暦がもう少しで終わる今日この頃。

少し前に地球まで帰省してきて色々と報告やらパーティーやらをして帰ってきたシホ達。

なぜかシホは少し胸騒ぎのようなものを感じていた。

しかし、その胸騒ぎがなんのものかまでは分からず悶々とつつかえ棒のように胸に残るようなそんな感じ？

それでお昼時の食堂。

ほとんどのものが食堂に集まって食事をしている時間帯。

とある部隊長……まあ、はやてがなのだが呟いた一言……。

「なんか最近スクランブル要請も緊急発進もないから少し暇やね〜」

その一言が食堂に集まっていた各々のメンバーに聞こえていて、

『部隊長がそんな事を言ってもいいのだろうか……?』という思いに駆られたかどうかはわからないが、次第に皆も『確かにそうだねー』と思うようになっていた。

そして異変は起きた。

突如として食堂の扉が『パンツ!』と開かれる。

それで全員が何事かとそちらに振り向くが、そこには誰も立っていない。

はて……? 誰が開けたのだろうかと思う一同。

「誰が開けたんでしょうか……?」

ラインが食事のミニトマトをフォークで器用に刺しながらそう呟く。

しかし、そこでシホの胸騒ぎが最大にまで達したことに誰が気づいただろうか?

「みんな! なんか危ない気が……!」

シホがそう席からいきり立ち、一同に危険を教えようとするが、それを遮るかのよう
に食堂のはやての席、その隣で『ボンツ!』という小爆発のようなものが上がる。

「わっ!? なんや!?!」

「大丈夫ですか、主ははやて!?!」

「はやてちゃん!?!」

シグナムとシャマルがはやての心配を直様にする。

「あ、うん。大丈夫だよ? でも、なんやろ……?」

未だはやての周りには煙が立ち上っていて状況が確認できない。
しかし、煙がすべて晴れる前に、

「——呼ばれて飛び出て、パンパカパーン!!」

なぜか、誰の声とも分からない愉快そうな叫びがはやての隣から聞こえてきた。

しかし、そこで近くで食事を摂っていた志貴とアルクエイドが二人して『んっ……?』と首を傾げる。

「なあくんか、どこかで聞いたことがあるような声ね……?」

「アルクエイドもか? 俺もごく身近で聞いたことがあるような声なんだよな……」

二人してなんだろうと考えているが、煙は完全にはらわれるとそこにははやての隣に一人の女性がいた。

その格好は、なんとというか和服……おそらく割烹着だろうか? それにミニスカの要素が加わったようなきわどい姿。

その足から覗く絶対領域と脚線美が男心を攪るだろう。

そして手にはひまわりの飾りが施されているほろき握られている。

さらには頭には耳が生えていて、尻尾まで生えている。

琥珀色の瞳がどこか可愛らしい。と、同時に厄介事を持ち込んできたような様子である。

どこかの魔術師の狐を彷彿とさせる出で立ちである。

当然、その誰かさん（もうキャスターでいいや……）もその登場を見ていたために、「パ、パクリ!?」パクリですよ、ご主人様！ あんの女はわたくしのアイデンティティをパクリましたよ!? しかも狐耳とか……ッ！ ナメてんのか、おらア!？」

「お、落ち着けキャスター……!。いつも以上に壊れているぞ!？」

そんな少しはつちやけた主人と従者の光景がカウンターの途中で繰り広げられているが、今はあまり関係がなく、先程までうんうんとしていた志貴とアルクエイドも誰か分かったらしく目を見開いている。

そして他の面々も色々と驚いている中、女性はピースサインをしながらも、

「大変お待たせいたしましたあ! 今日も元気なみんなのアイドル! 魔法少女マジカルアンバー! ここに推・参!!」

バーン! と決めポーズをしてそう語る女性、いや、マジカルアンバー……。

魔法少女という単語にシホが少しトラウマ的な表情を浮かべながらも、

「な、なんでよ……!」

久しぶりに若かりし口癖を呟くのだった。

「というか琥珀さんだよな!」

志貴がそう言ってマジカルアンバーに叫ぶ。

だが、マジカルアンバーははてな?という表情をして、

「……はて? 琥珀とは誰のことでしょうか?」

「え? 琥珀さんじゃない、のか……?」

「おそらく人違いでしょう。私はこの世界の人間ではありませんから」

その一言に平行世界という概念を知っているシホ達やサーヴァント、事情を知っているのは達は目を見開く。

どこかで『これも特異点世界の影響か……?』という場に合わない真面目なセリフが聞こえてきたが、そんな真面目空間など吹き飛ばすものだ。マジカルアンバーがほうきをブンブンと振り回しながら、

「私はこことは別の平行世界からやってきました。私にかかれば平行世界などたやすく移動できますからいくらでもどこまでもいけますよ」

それを聞いて思わずシホと土郎がぐりと膝と手を地面につく。

「そ、そんな……大師父でもあるまいし、そんな簡単に平行世界を行き来できるなんてえ……私ですらまだまだ自由にいけないのに……ッ!」

シホの表情はかなり泣きが入っている。

士郎も泣きはしないが、落ち込みようは半端ないほどであった。

「なにかわかりませんが、傷つけたなら謝りますよ？ 責任は負いませんが。あはー♪」

「琥珀さんだ……、琥珀さんがいる……」

「やっぱり性格は使用人そのものよねー……」

マジカルアンバーは愉快に笑う。

志貴とアルクエイドは少し呆れの表情をしていた。

だが、そこで今ままであまりの事態に固まっていた他のメンバーも起動し始める。

「そ、それでマジカルアンバーでいいんか？ ここ機動六課に何しに来たんや……？」

機動六課代表としてマジカルアンバーにそうはやてが話しかける。

だが、返ってきた答えは、

「何をおっしゃいますか？ 貴女方が私を呼んだんじゃないですかー」

『は……？』

全員がその場で首を傾げる。

まったく身に覚えがないからだ。

だがマジカルアンバーは陽気に笑いながら、

「私は分かっているんですよ？ ちゃんと『暇』という言葉聞いてこの場にやってき

たんですからー。あはー♪」

それで全員が思い至ったのかはやてに白い視線を送る。

「わ、私のせいやないやろ!? ま、まあ暇だーって言ったのは確かやけど、それでもみんなも頷いていたやんか!」

はやての必死の言葉に全員は視線を逸らす。

みんな、結構な薄情者である……。

そんな機動六課事情はいいとしてマジカルアンバーは笑顔を浮かべながら、

「そんな皆さんに朗報ですよー。私がそんなみなさんの暇をつぶしに参りましたー!」

「へー……どんな事をしてくれるんだ?」

ランサーがそう言つて『つまんなかったらただじゃおかねーぞ?』という視線を少し好戦的に投げかける。

「も、もう……ランサー、そんな睨むような態度をとつちやダメだよ!」

フェイトがそう言つてランサーを嗜める。

「いいえー。構いませんよ。ですが、それにご期待できるように遊びを提供するのが私の使命ですから。お任せ下さい!」

そう言つてマジカルアンバーは着物のたもとをまさぐりだす。

そして取り出したのは、なぜかきのこのマークが描かれている白いツボ。

「……………これは?」

「はい。これは『笑いのツボ』と言いましたえ、ここから出てくる煙を吸うと笑いが止まらなくなる一品ですよ！」

「なんか、嫌だな。それ……」

ヴィータがそう判断する。

「なあ、それつてどこまで笑えるんだ……？」

「そうですねえ……吸う量にもよりますが、幻覚が見えて悶え苦しむまで続けられますよー？」

「もうそれ麻薬じゃねーか?! 却下だ! 却下!!」

再度ヴィータがバンバン!とテーブルを叩き、笑いのツボを却下する。

「そうですかー? 笑えば幸せになれると思うんですけどねー……。仕方がありません。では次は……」

そう言つてゴソゴソとまたまきぐるマジカルアンバー。

それを見ていたティアナはふと（あの中つてどれくらいものが入っているんだろう……?）というくらいには不思議な光景だったと後に言う。

「お次はこれですわねー」

お次に取り出したのはなにやらボタンが一つ。分かりやすく『押すな』とまで書かれているではないか

そして、それを見てなのはが思わず身の危険を感じて体を震わせる。

「あ、あの。マジカルアンバーさん……そのボタンつてもしかして押すとなか爆発とかするんですか……？」

「あー、まあ、爆発はしますね。そして副産物で周りにいた人全員の中身（魂）がランダムに入れ替わりますから結構取り返しがつかなくなりそうですねー」

笑顔でそんな事をのたまうがとんでもない。

そんなことをされたら本気で取り返しがつかなくなるではないかということでもまた却下されるのであった。

「ぶー……みなさん、欲張りですねえ。でしたらなにがいいんですか？」

頬を膨らませてぶー垂れるマジカルアンバー。

「それじゃ全員で遊べるものはなにかないのかしら……？」

シホがそういう提案を試してみる。

するとマジカルアンバーの表情がまるで空気を得た魚のように笑顔になり、またまきぐり出す。

そして取り出したるは四角いケースに入れられているボードゲーム。

「ジャジャジャーン！ 今回取り出したるはボードゲーム！ 名前を『人生に影響があるゲーム』！ 略して『影響ゲーム』ですよー！」

「そこは『人生ゲーム』じゃないのかな……?」
「さすががそう眩くが詮無きことである。」

それにそこで見ていたヴィヴィオとツルギが『みんなで遊べる』という事で随分乗り気になっている。

「ねえ、なのはママ! ユーノパパ! これやろう! すごく楽しそう!」

「うん、ヴィヴィオちゃん。士郎パパ、やってみない!」

「まあ! 気に入っていただけで、マジカルアンバー、感激ですよ! それではやってみますか?」

「うん!」

ヴィヴィオとツルギの二人は素直に頷くのであった。

それで周りで見っていた一同も二人が楽しそうなのに断るのも無粋だろうと思ったので、

「……仕方がない、か。少し危険な匂いがしなくはないけどやってみましょうか」

「そうだな、シホ。なにかあれば破壊すればいいのだからな」

シホと士郎がそんな事を言っているが、影でマジカルアンバーが不敵に笑うのは誰も気づかなかったのである。

そして後に後悔することになる。このゲームをやってしまった事を……。



そしてやるメンバーと見学するメンバーが決められていく。

まず、見学するメンバーはお腹になにか影響があつたらたまらないということですから、かといふアットが見学。

それ以外にもアルトやルキノ、シャリー、ヴァイス、アインスは見ている方が楽しいということで見学になる。

そしてやるメンバーは、

シホ、なのは、フェイト、はやての隊長組。

アルトリア、ネロ、ランサー、ライダー、オリヴィエ、アルクエイド、志貴、キャスターのサーヴァント組。

士郎、ヴァイタ、シグナム、シャマル、ザフィーラ、リインの八神家組。

スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、ラン、レンのフォワード組。

ヴィヴィオ、ツルギの子供組。

特別ゲストのユーノの総勢27人という大人数フルメンバーという事になった。

そしてジャンケンがされて最初にルーレットを回すのはアルクエイドになった。

「やったー！ いっちばーん！」

ランラン気分でアルクエイドは影響ゲームのルーレットを回すのであった。

そして出た数字分マスを進める。

そしてついた場所の文字を読む。

そこには、

—— 『ゲームが終わるまで全休み』。

「え……………？」

アルクエイドの間抜けな声が聞こえた。

次の瞬間、なぜか発動していないはずなのに宝具・千年城ブリュンスタッドが発動する。

「え？ え？ 私、発動していない……………?!」

全員が困惑する。当然アルクエイド自身も困惑するが落ち着く前に鎖が伸びてきてアルクエイドを縛り上げて玉座まで強制的に持つていかされて眠りにつかされる。

アルクエイドの「くう……」という可愛い寝息が聞こえてくるのであるから完全に寝に落ちたのと言うまでもない。

「あ、アルクエイドローツ!？」

志貴の叫びが木霊する。

「こ、これって一体……!？」

「あ、言っていないませんでしたね？ これは止まったマスに書かれていることが実際に起きるゲームですよ」

『実際に……!?!』

「あ、ご安心を。殺生事は起こりませんので。それに付け足しますとこのゲームは始めたら誰かがゴールするまで途中で止める事はできませんから。あはー♪」

そのマジカルアンバーのセリフに一同は思った。

（悪夢のゲームだ！）と……。

それで全員は手を止めているが、次の出番はユーノであったが、どうしても進める気にはならなかった。

だが、このゲームの怖さはここから始まる。

そう、勝手にルーレットが回り出したのだ。

「ルーレットが勝手に!？」

「これも伝えていませんね？ 一定時間回さないと勝手に回りだしますよ」
「な、なんだって!？」

そしてユーノが止まったマスにはこう書かれていた。

——『角に指を100回ぶつける』。

「……………」

内容にユーノは絶句する。

しかし、勝手に体が動いて角際まで動いてしまう。

そして始まるユーノの悲劇。

「一回……ッ！ グッ!? 二回、ああっ!？」

「ユーノ君!」

「ユーノパパ!」

「兄さん!」

なのは達の声がユーノ以上に悲壮感に包まれている。

そして次の出番はアルトリアであった。

「くっ……！ 次は私ですか。仕方がありません。見事やり遂げてみせましょう！」
表情を引き締めてアルトリアはルーレットを勢いよく回す。

内容は、

——『二日間、絶食』。

「……………、ゑ……………？」

その内容にアルトリアは顔から表情が消える。

周りのみんなもあまりの内容に顔を逸らしてしまふほどに……。

まさにアルトリアにとっては地獄の内容であった。

どこからか『絶食でござるー！』という天の声が聞こえてきたが、さて……誰の声だったのだろうか？

……結果、アルトリアは精神的リタイアと相成った。

近くのテーブルにまで身を預けて一人密かに泣き出しているではないか。

そして今だにユーノの「50回……ッ！ もう、嫌だー！」という声が聞こえてきていてみんなのテンションを大いに下げてくれる。

言っておくがこれはまだただの一巡目の途中である。
地獄はこれからだ。

第一百七十一話 『外伝19 戦慄の影響ゲーム（後編）』

「やらなきゃ、いけないのよね……」

次の出番はティアナであった。

しかしまだ三人だけなのにすでに残念な結果になっているだけに回したくない気持ちでいっぱいであった。

しかしティアナはめげなかった。

（イメージするのよ！ 常に最強の自分を！ そうすればこの試練も乗り越えられる……ッ！）

シホの受け入りの言葉で勇気をだしルーレットを回す。
そして内容は、

—— 『一日、スクール水着姿になる』。

ランの笑い声が聞こえる中、続けなければいけない状況に全員は疲弊していた。だが、ここである意味癒しの出番がやってくる。

そう、次の出番はなのはであった。

「が、頑張るよ！」

そして出たマスは、

——『10分、膝枕をする』。

強制的になのはは正座姿になり、なぜか指の打ち付けでダウンしていたユーノが頭を預ける形になる。

「ああ、なのはの膝枕は癒されるね……」

「うん。どうせならいつまでもしてあげたいな」

それを見てシホ達はこう思った。

なのはは当たり前マスかと……。

そして次はあまりやって欲しくない子の出番であった。

「こ、怖いけど頑張る……！」

ツルギであった。

怖々とツルギはルーレットを回す。
そして出たマスは……。

——『髪が伸びる』。

「わっ……」

ツルギの髪が腰まで伸びてしまった。

ウェーブもかかかっていて女顔であったのがさらに効果を増して女の子と言われても否定できない姿になってしまった。

だが、そんなツルギは、

「(あの子と同じ髪型になった……。もう切るのはやめようかなあ……。)」
と、思っていたり。

ちなみにあの子というのはまだ謎である。

次はフェイトの出番であった。

「わ、私の出番だね」

「マスター、頑張れよー」

「う、うん。ランサー……」

それでルーレットは回される。

そして出たのは、

——『素直になる』。

「素直になる……？ これって……」

全員が首を傾げるが、そこでフェイトに異常が起きていることに気づく。

どこか赤い顔をしてモジモジし出す。

そしてそつとランサーの前までやってきて上目遣いでランサーを見つめる。

「ま、マスター……？ ど、どうしたよ？」

「ランサー……好き、好きなの。今までずっと隠してきたけど、もういいよね……。私の

彼氏になってください……！」

「ッ!？」

「フェイトさんが……」

「とつても可愛い……」

フェイトの思わずの告白にランサーは目を見開き、エリオとキャロがフェイトの豹変

ぶりに顔を赤くする。

そして告白してしまったフェイトはというと正気に戻ったのか、

「あッ……な、なんで!? 私、我慢しようって思っていたのに! ら、ランサー、さつきのは忘れて!!」

フェイトが泣き顔でそう言うがランサーは真剣な表情になり、フェイトの腰に手を回して、

「……いんや。もうマスターの気持ちは充分聞かせてもらったぜ。これが俺の答えだ……」

そしてランサーはみんなが見ている中でフェイトにキスをする。

それに男性陣が「うわあ~~~~!!」と悲愴の声を上げ、女性陣が「きゃ~~~~!!」と黄色い叫びを上げるのであった。

しかしフェイトももう素直に受け入れているのかとても嬉しそうであったのは言うまでもなかった。

「いやあ、こんな役得もあるもんなんだねえ」

「もうっ、バカ……」

「ははは! さて、次は俺の順番か……」

ランサーはなにが来てももう引かねえ気分でルーレットを回した。

内容は、

——『天罰』。

「はっ!?!」

次の瞬間、空から雷が降り注いできてランサーに直撃する。

「ぐあああああ——!?!」

「ランサー!?!」

そして出来る上がるは黒焦げのランサーであった。

「ランサーさんが死んだ!?!」

「スバル! この人でなし!!」

「ティア!?! あたしじゃないよおく……」

「いや、なぜか絶対に言わないといけない気がしたのよ……」

スバルとティアナがコントを繰り広げた一方で、

「……もしかしたら、これはプレシアの怒りだったのかもしれないわね」

シホがそう呟いていた。

そして次ははやてであった。

「私の出番やね。なんやろなー？ 当たり前だといいな〜」

少し浮かれ気分であつたが、そこで一気に落とされる。

——『二日分の書類に立ち向かう』。

「なあっ!？」

はやてが大声をあげる。

そこにこの場にいなかったはずのグリフィスが姿を現して、

「部長。書類がなぜかいきなりぎょうさん舞い込んできました……。なので遊んでいないで仕事してください」

「そんなあ!？」

ある意味、自業自得の結果に終わったはやてであった。

グリフィスにドナドナされていくはやてが哀れで仕方がない。

『暇だ』なんて言わなければこんなことにはならなかったのに。南無……。

次はヴィータの出番であつた。

「はやて、あたしははやての後を追わないからな？」

そんなセリフを吐きながらルーレットを回した。

そして出た内容は、

——『一日、小人になる』。

「……………」

ヴィータはリインサイズになってしまい、泣き顔になりかけていた。

「ヴィータちゃん、可愛い！」と、なのは。

「ヴィータ副隊長、可愛いですよ！」と、スバル。

「ヴィータちゃん、可愛いです！」と、リイン。

他にも次々と可愛いと言われてもうヴィータは諦めた顔になっていた。

「ヴィータちゃん！ 次は私です！ 絶対大人になります！」

リインが奮起してルーレットを回す。

そして出た内容はというと、

——『この薬を飲んで、一日成長する』。

「やったですー！」

リインの前には『まききゅーDX・ハイパー』と書かれた瓶が置かれていたためにそれを一気飲みする。

だが、規模が違った。

結果はリインの体格はそのままに（アウトフレームフルサイズ）の十倍の大きさに変化してしまったのであった。

「うえーっ！ こんな成長なんて嫌ですうー！」

リインは隊舎の外で部屋にまで響いてくる声で大泣きしていた。

それで次はシャマルであった。

「わ、私ですね。いきますー！」

出た内容は、

——『一日、子供になる』。

「やりました！ 子供モードですー！」

「シャマル先生が子供って、なんか違和感がないわよね」

「うん、むしろ自然な感じがします」

「え!? それって、どう言う意味ですか!？」

シャマルが怒っている中、次はオリヴィエであった。

結果は同じく『一日子供になる』であったが、こちらはなんとというか、

「わ、笑わないでください……。ですが、クラウス達との過ごした時期を思い出しました」

との事。

次はキャスターの出番であった。

出たマスは、

——『好きな異性に一日話しかけられない』。

「……………わたくしに死ねと仰るのですか?」

一日程度と思うだろうが、キャスターにとっては一日でも拷問である。

よってかなりのもので一日が過ぎたら大変な事になるだろうことは予想に難しくな

い。

「次はヴィヴィオの出番だね！」

「ヴィヴィオ！ 気をつけてね？」

「うん、なのはママ！」

そしてヴィヴィオはルーレットを回す。

そこにはこう書かれていた。

——『二日間、大人になる』。

ヴィヴィオの体が光り、次にはサイドポニーがチャームポイントの綺麗な女の子に変化していた。

でも、中身は成長していないので、

「なのはママ。なんかとつても視界が広がったの！」

「よかったね、ヴィヴィオ」

ヴィヴィオはとてご機嫌だった。

そしてこの二日間で色々と検査されて、ヴィヴィオは将来デバイスで大人モードを会

得することになるのだが、まだ先の話である。

そして次はキャロであった。

内容は、

——『三十分、くしやみが止まらなくなる』。

「へくちゆ、は、は、はくちゆ……ふ、フェイトさん、助けて、へくちゆ……」

「ああ、キャロ！」

それでフェイトが急いでテッシュの箱をアルト達に持ってきてもらうように頼むのであった。

続いてエリオの出番がやってきた。

「ぼ、僕の出番だね。いきますー！」

そして回るルーレット。

なぜかエリオの時だけルーレットが光り輝いている。

これは一体？

そこで事態を見ていたマジカルアンバーが声を出す。

「それはミラクルターンですね。なにが起きるかわかりませんが、私にとつても（愉快

な）出会いがありそうです〜」

そして止まるマス。

そこに書かれていた内容は、

——『一日、魔法少女になる』。

「……………え？」

わけがわからないよ…………。

次の瞬間、次元が歪んでそこから一本のステッキが飛び出してくる。

「次元を飛び越えて、私、爆誕!!」

「ゲツ!! カレイドステッキ!!」

「あらー? 土郎さんではないですかー。お久しぶりですねえ。まあ、今回はさつそく私のご主人様具が決まったようですね。さあ、私を手にとってください。

そして力を合わせて（私にとっての）悪と戦いましょう!」

「悪って…………」

「エリオ! 絶対に触れるなよ! そいつは危険だ!!」

土郎が叫ぶがもうエリオの体は支配されていて、一気にカレイドステッキに手を伸ば

していた。

そして掴んでしまう。

そしてエリオの体が輝き出す。

「やふー！ 男の娘、ゲットですよ！ 一気に行きます！ コンパクトフルオーブン！
鏡界回廊最大展開！」

「うわあっ!?!」

エリオの叫びが響く。

光の中で大量の赤い羽根のエフェクトが舞い、エリオが一つの羽根を掴むと手からま
ず光が覆っていき腕、腰、足と次々と着装されていく。

その姿はふんだんにフリルとリボンがあしらわれていて最後にエリオの髪が腰まで
さらさらには伸びてまさに女の子のような姿になる。

——それを見ていたフェイトとキヤロが鼻血を出していたが、ここではあまり触れ
ないようにはしないといけない……。

最後にあざとくポーズを大いに満面の笑顔で決める。↑（ここ重要）。

「新生カレイドルビー、プリズマエリオ………改めプリズマエリス！ 爆・誕!!」
ルビーが最後にそう叫ぶ。

そこには魔法少女が存在していた。

そしてエリオは正気を取り戻し、何度も周りや自分の姿を見比べる。頭を整理して色々と自覚するとともに、

「——うわあああああ!?!」

「……ああ、エリオの苦悩が見て取れるわね」

シホがそう呟くのであった。

その後、しくしくと泣くエリオ、いやエリスを慰めながらもゲームは進む。

周りから『エリスたん』とかほざいている輩がいるが気にはいけない。

次はザファイラであった。

「私か。では、いくとしようか」

狼姿のままルーレットを器用に回すザファイラ。

出たマスはというと、

——『一日、本物の犬になる』。

「わんつ！ ハッハッハッハッ！ ワオーン！」

ザファイラはそのまま外に飛び出して庭で遊んでいるのであった。

「ザファイラ、哀れな……」

士郎が悲しそうに呟く。

気を取り直して次はレンの出番であった。

「いきますー！」

そして回されるルーレット。

出た内容は、

——『5分間、影に飲まれる』。

ズブズブ！とレンの体が影に沈んでいく。

なぜか影の中から、『クスクス、なんで先輩じゃないんでしょうか？ まあ、いいです。いただきます』という声が聞こえてくるのではないか。

「し、シホさん、助けッ——……！」

「レン!!」

シホが手を伸ばすが時すでに遅くレンは影に飲み込まれてしまった。

そして5分後、レンはやつれた表情で帰ってきてその間の記憶を無くしてしまっていた。

なにをされたのかは最後まで判明しなかったのであった。

知らない方が幸せなこともあるだろう……。

「次は私だな」

シグナムが強気な表情でルーレットを回す。

怖いものなど何もないと言わんばかりの涼しい表情であった。

だが、次の瞬間、羞恥に染まる。

——『えっちな下着姿になる』。

「なん……だと……?」

今度こそ男性陣が野太い声を上げる。

ティアナのスクール水着もいいものだが、それでもシグナムの姿には負ける。

なんていうか、もう紐だけだろうという際どい格好であった。

「み、見るなあ——!!!?」

シグナムは食堂から高速で走り去っていった。

おそらくはやてのところに向かったのだろうが、もう色々と手遅れである。

赤い顔をしながらも次の出番であった志貴がルーレットを回す。

—— 『地下王国へご案内』。

「なんでだー!？」

志貴は一気に地下に落とされてメカ○翠やらネコ○ルク、赤い髪の悪魔といったどこかで見たとあるような生者共に追いかけられるハメになるのであった。

特に『兄さ〜〜』と赤い髪を振り乱して襲いかかってくる鬼には絶対に捕まってはいけないという強迫観念が志貴をより一層走らせる。

ちなみに時間制限がないことから、ゲエムが終わるまで逃げなければいけないのだから。哀れ……。

志貴が地下に落とされている間にネロがルーレットを回していた。
内容はというと、

—— 『魂の相棒と共に熱唱する』。

「ふむ？ 魂の相棒とな……?」

「いくわよ、セイバー！ 今こそ私達の出番の時よ！」

いきなり現れたなぜか角や尻尾を生やしている女の子がネロとともにマイクを持つ。

「さすがに「ライダー!？」と叫ぶが帰ってこないことから志貴と同じ条件なのだろう。幸運Eは伊達ではない。

「やっつと、私の出番か……」

「パパ、頑張つて!」

「任せろ、ツルギ!」

——『とある竜娘の作ったスープを完食する』。

そして士郎の目の前に出されたスープは……、なんというのか表現できないものであった。

グツグツとマグマのように泡を上げていて、士郎の脳内では『ニゲロニゲロドアラケロー』と衛宮切嗣の声が聞こえてきたとかなんとか。

しかし、逃げることはできない。

「い、いくぞー!」

「士郎! 無茶はダメよ! 私にも解析できないスープよ!」

「しかしここで引くわけにはいかない! いぎ、参る!!」

士郎が一口スープを口にした瞬間、士郎の体は思いつき椅子から飛び跳ねるように

きりもみ回転をしていた。

何を言っているのかわからないが（ry）。

「苦！ 辛！ 甘！ 酸っぱ！ 濃！ ぐあああああ!？」

「士郎!？」

「士郎。パパ!？」

アインストツルギが心配になって寄りかかるが、士郎は手で制して立ち上がる。

「こ、ここで引いては漢がすたる！ 食べきってみせる！ 強化開始!!」
トリス・オン

食道と胃を強化して士郎は一気にスープを喉に流し込む。

何度か苦悶の声を上げるが士郎はなんとか飲みきった。

そして、笑みを浮かべ、

「ふ、私を倒したければこの三倍は……グフツ!？」

椅子に座り、士郎はお腹の痛みにも必死に耐えているという無残な光景がそこにはあった。

だがしかし、それで士郎の漢度がさらに上がったのは言うまでもない。

なんせ女性スタッフ数名がその男気に頬を赤く染めているからであるからだ。

「うー……次はあたしですね。いきまます!？」

スバルがルーレットを勢いよく回す。

そして出た内容は、

——『ツツコミ（物理）を幸運Eの人にする』。

「えっ!? 戦闘機人モード!?」

——IS、振動破砕発動——

「なっ!? ぐふうっ!?」

なぜか士郎のお腹に拳が吸い込まれていき、士郎は思いつきり吹っ飛ばされていた。先ほどのスープからの追い打ちはかなり鬼畜である。

「あああああっ!? 士郎さん、ごめんなさいい!?」

スバルが慌てて士郎に駆け寄っていく中、やっと一巡目最後の人物であるシホの出演がやってきた。

「なんか最後つてのも、嫌よね?」

「シホちゃん、頑張つて!」

「ええ、なのは……」

そしてシホが回すのであった。
出たマスは、

——『一日、二十歳歳をとる』。

「はあ……」

シホは色々と諦めた。

次の瞬間、シホは煙に包まれる。

一同は二十年後のシホがどんな姿になっているのか期待半分不安半分で見っていた。

だが、結果は、

「あれ……？ シホちゃん、全然変わっていないね……う？」

そう、全然変わっていないかったのだ。二十年も歳をとればいくらか衰えるものだがシホはシワ一つなく美貌を保っていたのであった。

(こんな形で証明されるなんてね……)

シホは内心でそんな事を考えていた。



……それから一日かけて何度も酷い目にあいながらもシホ達はなんとかゴールすることができた。

もうこんな事は二度とゴメンだ、という感想が全員の総意であった。

ちなみにマジカルアンバーはとても愉悦そうな表情をしながらも「いつかまた来ますねー」と言つてその場を後にしたのだつた。

シホ達的には『二度と来るな！』が感想であつたのは言うまでもない事であつた。

第七七十二話 『外伝20 海上隔離施設の人々のその後』

暦が十一月に入り、肌寒くなってきた今日この頃。

シホとランとレンの三名は海上隔離施設にやってきていた。

ここにはシホはいつかは来よう来ようと思っていたのだが、なかなか三人でいけるタイミングが掴めずにズルズルと十一月まで引き伸ばしてしまったのであった。

だが、やっと来れる事が出来た。

ここにはチンク、セイン、オットー、ノーヴェ、デイエチ、ウエンデイ、デイード、トレデイ、セツテの戦闘機人九名。

そしてルーテシアにアギト、ゼストも一緒に過ごしている。

そう、シホが特に会いたかったのはゼストであったのだ。

シホが作成したエリクシール……その初めての使用者というある意味検証の証明者といっても過言ではない人物だからだ。

ゼストは一度、死んだ身である。

だがスカリエツティの手により人造魔導師として復活を遂げた。

しかし、その代償とも言うべきか体の細胞が戦うたびに傷ついていき、あの決戦の日の時点で戦えていたのも奇跡と呼ぶにふさわしいほどの評価を治療した医師に言われたそうだ。

そして、エリクシールでその破損していく細胞を一気に活性化させて死ぬ前の健康体の体まで回復して残り短かった命が延命できたというのはさらに奇跡と呼ばれている。

それでシホはエリクシールを作成した者として、ぜひゼストの体を解析して不慮の事態が起きていないかを検査したかったのだ。

——急に死亡したという事になったら不良品としてまた一から作り直さなければいけないからだ。さらにゼストに申し訳が立たなくなる。

そんな簡易検査もどきと、後、もう一つはトレデイにも会いたかったからである。

家族であるランを誘拐して洗脳し、さらにはレンまでシホの手から奪おうとしたトレデイという子がどういう子なのかを一度見たかったためである。

実はシホは廃都市戦や聖王のゆりかごで戦闘した戦闘機人以外とはまだ改めて顔合

わけをしていないためにお互いに自己紹介をしておいた方がいいというのも今回の訪問の理由である。

……まあ、レンが自らトレディと会いたいと言い出したからの三人での訪問なのもあるわけだが、レンの気持ちの問題でもあるため、シホはあまり深くは触れないのであった。

そして受付を終えて、シホ達はまずこちらから一方的に更正プログラムを受けているメンバーの様子を見れるようなガラス越しの場所に移動する。

そこではギンガの更正プログラムを聞いているナンバーズの姿があった。

「まあ、改めて見てみるとゼストさん以外は本当に女の子しかないのよね……」
「そうですよ、シホさん」

「だからゼストさんは少し肩身が狭いというのが現状だという話です」

更生施設の現状にシホは苦笑いを浮かべて、ランが相槌を打って、レンが現状の状況を的確に伝える。

だが、しかし別にそれはスカリエッティのラボ時代と大して変わらないし、寡黙なゼストならば男性と女性という違いの垣根はあまり気にされないのかもしれないが……。

ルーテシアとアギトなどは特になついているのか、ルーテシアはゼストのあぐらの上に座っていてアギトは頭に乗っていたりする。

そんな微笑ましい光景を見られて、シホは改めて助けられてよかったと思うのであった。

しばらくそんな更正プログラムの光景を見ていたが、一旦休憩に入るらしくギンガがいくつか発言してこちらの扉に向かってくる。

「プシューッ!と扉が開きギンガが皆のいる部屋から出てくるとこちらに気づいたの
だろう、

「シホさん! レン君、ランも! よく来てくれましたね!」

笑顔でシホ達に対応してくれるのでそれにつられてシホ達も笑顔を浮かべて、

「久しぶりね、ギンガ。ナンバーズのみんなの様子はどう……?」

「はい。やはり閉鎖的な空間でしか暮らしていなかったせいかな、社会的知識は乏しいですが……それでも出所後には戦闘機人としてではなく、人間として暮らしていくんですから、みんな誠意的に更生プログラムに取り組んでくれています」

「そう……。それならなによりね。あ、ギンガ。私、ほとんどの子とはまだ顔合わせをしていないのよ。だから時間は作れる? 挨拶をしておきたいのよ」

「大丈夫ですよ! 時間はいくらでもありますから。それに彼女達の数名もシホさんに会いたがっていますからちょうどいいです」

「私に……?」

それでシホは首を傾げる。特別、彼女達と接点は持たないから不思議なのである。

でも、それを見越してギンガが、

「シホさんは色々と有名ですからね。やつぱり一番大きい理由はゆりかごの破壊ですね。あれほどの事をしておいて興味を持たれないというのは正直ないと思います」

「やつぱり、そうかしらねえ……」

「うんうん……」

それで困り顔で頭を掻くシホ。背後で「うんうん」と何度も頷いているランとレンの姿があった。

「後は、そうですね。ゼストさんが助けられたのが大きいと思います。彼女達はみんな大なれ小なれゼストさんの事は心配だったそうです。

当然ですが、シホさんの薬がなければ今はもうもしかしたら鬼籍に入っていたかもしれないんですから」

「そう……」

なにを思ったかシホは目をつぶり少しばかりの笑みを浮かべるのであった。

それになにか良いものを感じたのかギンガにラン、レンもつられて笑みを浮かべる。

「さ、それじゃ準備をしますね」

そうやってギンガが先導しようとするが、先にシホが声を上げる。

「あつ、ギンガ。彼女達と会う前にまず先にゼストさんとだけ会わせてもらっていいかしら?」

「ゼストさんと、ですか……?」

「ええ。私の魔術で色々と簡易検査をしておきたいのよ。あの薬を作ったものの責任として一度診ておきたいから」

「わかりました。それでは個室を用意しますね。ランにレン君はどうする……?」

それで黙って成り行きを見守っていたランとレンの二人は笑みを浮かべて、

「それじゃ私達は先に彼女達と会っておきます」

「うん。トレディともお話したいですし……」

「そう……。レン君はトレディにご執心よね」

それでギンガの目つきが少し鋭くなる。

それに対してレンは「あれ? 僕、なにか変なこと言った……?」と小声でランに相談し、ランには「あんたも鈍感だよ」と返しているのであった。

もしここにゲンヤがいれば「おい、ポーズ?」とか怖い笑みで肩に手を置かれてさらに妙に力が込められながらどやされていたに違いない。というかあの親バカなら普通にやりかねない……。

それはともかくとしてランとレンは先にナンバーズのみんなに会いに行つた。それとは別にシホはどこか別の部屋でゼストと面会を受けることになった。

部屋に通されてシホはゼストが入ってくるのを待つ。

しばらくしてゼストが部屋に入ってきた。

そこには寡黙な表情ながらも少しばかり緊張しているのか表情筋が引きつっているゼストがいた。

「……シュバインオーグ一尉」

「ゼストさん、ですな」

「こうして会うのは、初めてだな……」

「ええ……」

二人してこうして初めて会うもの同士、緊張もあるのだろう、どう切り出しているのか分からずに少し沈黙が降りる。

しかしいつまでもこうしてはいられないとシホが切り出そうと口を開きかけるが、それより早くゼストがシホに向かって頭を下げる。

「八神士郎二尉から聞いている。まずはお礼をさせてくれ。俺のこの体を、命を救って

くれて感謝する。シユバインオーグ一尉」

「気にしないでください。私はとある理想をかつて心がけてただ人助けを昔からしてきたもので、少しでも救える命があるならと知識にある薬を作ったわけで、使ってもらえるなら薬も幸せでしょう。私もゼストさんを助けることができたことが嬉しいですし……」

「昔から人助けか……。君のその知識というの興味を持たされるが、よかつたらでいいが君のかつて志していたという理想である正義を聞かせてくれないか？」

ゼストのその問い……。

それは、シホの過去に問いかけるものであった。

衛宮切嗣の理想を受け継ぎ、この世界に来る前まで志していた『すべてを救う正義の味方』という自身の生き方の一つだったもの。

それをここで話していいものか、いや、とシホはかぶりを振り、隠す必要などないと素直に話すことにした。

「……私はかつて、養父のかざしていた理想である『すべてを救う正義の味方』を志していました」

「正義の味方、か……」

「はい。私の経歴はご存知ですか……？」

「ああ。スカリエッティ経緯で知っている。別の世界の人間だということ。」

「はい。私はその理想を実現するために、前の世界ではあらゆる手を尽くしてきました。紛争地域に自身の力である魔術で乗り込んでいき、この手で悪の行いをする犯罪者を時には倒し、そして最悪は手をかけてきました」

「それは……つまり」

話の内容を察したのかゼストは少しばかり険しい表情になる。

「はい。私は養父同様に歪んでいたのでしょう。十のうち九を生かすために一を切り捨てて事態の解決をはかってきたんです」

自身を曝け出すシホ。

そこまで話すことでもないのについつい語りだしてしまうシホ。

ゼストの瞳には嘘偽りは許さないという意思が込められていたのも一つの要因とも言える。

「……そうか。察するにそれで世界を追われた、というのか？」

「当たらずとも遠からずです。すべてはさすがに話すことはできませんから。でも、この世界に来てから私の理想は変わったんです」

「ほう……変わったのか」

「はい。そのきっかけを作ってくれたのは最初は死んでしまった義理の姉の手紙からで

した。そして、その後には高町なのは一尉の家族に拾われて、私は少しずつ自身の理想が変わっていくのを自覚したんです」

そう。この世界に来てからシホは『自身の正義とは一体なんだったのか?』と思いつつむようになり、思いつめ過ぎてある時には気絶してしまう事態にもなったことがあった。

でも、その度になのはや桃子に士郎、恭也、美由希と言った家族達が支えてくれて、仲間が増えていくうちに自身の血生臭い過去を打ち明けるといふ傷を開くことと同義の行方も行うほどにシホはみんなに心を開いていった。

そして、最初は姉の願いから来るものだった『大切な人達を護れる正義の味方』という理想……。

まだ当時はあやふやなものだった理想。しかし、それも今となつては本気で志しているシホ。

過去の自分と決別したわけではない。むしろ反面教師として未だに心に残している。だがしかし、新たな理想を得たことで視界がさらに広がったことも確かなことである……。

広がった視界は、大切な人達をしつかりと映し出す。

かつては体を救うだけで心までは救えなかった……、だが今はしつかりと心も救つて

いるとシホは思う。

いや、それはシホの生き方を見てきた周りも認めている。それを一番分かってくれるのはアルトリアだ。

彼女は这个世界に来る前の自身のことを知っている数少ない人物だ。

彼女の口からいつだったのだろうか、こう話されたことがある。

『シホは、もうかつてのシロウではないのですね。……いえ、もう一人のシロウももうあの時のシロウではないのは分かっています。』

話は戻します。告白しますが、今のあなたの生き方はとても私には眩しく、そして愛おしいものです。

かつて誓った事ですが、私はあなたがその理想をずっと掲げるといふのなら最後まで付き従います。

だって、過去も含めて私はあなたの一振りのシホを守護する剣なのですから……』

そう眩しい笑顔で言われた時にはとても心が満たされていくのをシホは感じた。

それを、思い出していると、ふとゼストが穏やかそうな声をシホにかけてくる。

「……その様子だと、心配はいらぬようだな」

「えっ?」

「最初は『正義の味方』という絵本の中だけの絵空事を本気で目指している危うい思考を

持つ人物だと思ったのだ。

しかし、その表情を見るに俺が助言をする前にすでに答えを見つけていると思ったのだ。……改めて教えてくれないか？ 君の今の正義を……」

「はい。『大切な人達を護れる正義の味方』です。この理想を志す限り、私は必ず仲間や家族達を守りぬく事を誓います」

「そうか。安心した……」

その、心の底から安心した表情を見て、切嗣の死に際と被ったと、シホは思った。

「それを聞いて俺も君の夢を応援したくなった。……話を変えるつもりはないが、レジアスも、また新たに立ち上がって欲しいものだな」

「はい。レジアス元中将も生きている限りはまだ立ち上がれることができます。そして今度こそ管理局の未来の礎になってくれると思います」

「そうだな」

それでシホとゼストは二人して笑みを浮かべるのであった。

それからシホは本来の目的であるゼストの体の検査を解析の魔術で行っていき、エリクシールが欠陥なく機能していることを確認できたことに安堵をするのであった。



そしてゼストとの少し長い話を終えて、シホもナンバーズ達の場所にやってくるのであった。

そこでシホは改めて対面する。

スカリエツティが残した遺児とも言うべき彼女達と。

シホが来たことに気づいたのか、まずアギトがシホの元に飛んでくる。

「シホさん！ あたしはアギトっていうんだ！」

「ええ。よろしくね、アギト」

「それで前々からお礼が言いたかったんだ……。旦那の事を助けてくれてありがとう
！」

「旦那？ もしかしてゼストさんの事……？」

「ああ！ 旦那とルーラーはあたしの命の恩人なんだ。だからもう助からないことは分かっていたのに、それをシホさんが覆してくれた……。だからあたしはシホさんの頼みならどんな事でも協力するぞ！」

「ありがとね。でも、そんな簡単に『どんな事でも』というのはよした方がいいわよ？
あなたの身も大事にしなさい」

「おう！」

それでアギトは笑顔を浮かべながらゼストの頭に乗っかりに行った。

続いてルーテシアがやってきて、

「……私はルーテシア・アルピーノです。お母さんを助けてくれたと聞いています。ありがとうございます」

「いえ、よかつたわ」

そう、ルーテシアの母親であるメガーヌもシホのエリクシールで意識を取り戻した一人である。

シホの作成したエリクシールはほとんどは捕らわれていた人達のために使われていったのである。

「これからも、長い付き合いになると私は思うわ。だからよろしくね、ルーテシア」

「はい、シホさん……」

それでルーテシアもゼストの元へと向かっていった。手を繋いでいることから仲は良好とのことである。

それから他のナンバーズのメンバーも近寄ってくる。

チンクが少し恥ずかしそうなノーヴェエを後ろに従えながら、
「あなたがシュバインオーグ一尉……いえ、シホさんだな。私はチンクだ」

「あ、あたしはノーヴェエだ。よろしくな、シホさん」

「ええ。よろしくね、二人とも」

「ああ。ところでギンガに戦い方を教えたというのはシホさんか？」

それでシホは言伝で聞いたチンクの戦闘方法を思い出す。

「確か、あなたのISは武器爆発系だったわね」

「そうだ。だから初手では見破られないと過信していたのが災いしたのかギンガにはすぐに見破られてしまっただけ」

「そういえば、私が武器を爆発に使う敵の場合の戦闘法を伝授したっけ……」

「やはりな。あなたも武器を爆発させる特技を持つという。出所したら一合わせ願いたい」

「わかったわ。いつでも相手してあげるわよ。でも、当然……」

「分かっている。威力は抑えることをここに宣言しておくさ」

それでチンクはニヤツと笑う。それにシホも釣られてニヤツと笑う。

どうやらシホとチンクも相性は悪くないようだ。

続いてやってきたのはウエンディとセインだった。

「私はセインだ。よろしく。シホさん」

「あたしはウエンディです。よろしくです！」

そう言って握手をするシホと二人。

しかし、セインはともかくウエンデイの表情は幾分硬い。

どうしたのかとシホは思い、ふとウエンデイとの初めての出会いを思い出す。

「……ああ。そういうえば、ウエンデイの盾の武器、破壊してしまった事があったわね」

「あ、大丈夫つすよ？ 幸い量産されていたんで数はあつたつすから。予備はまだまだあるしね」

「ならいいけど……」

「でも、ただの投擲であたしのライディングボードを貫通して破壊するとかどんだけ力が込もつていたつすか……？」

「あれは私の技術の一つでね。やろうと思えば習得は難しくないわよ。投げ方にコツがあるけどね」

「はー……すごいですね」

ひたすら感心しているウエンデイだった。

そこに少し怯えながらもデイエチが近寄ってきた。

「……ゆりかごの時には世話になりました。あたしはデイエチです」

「あの時はあんまり構ってやれなくてごめんなさいね。時間もそんなになかったから……」

「いえ、あの時はしょうがないと思つています。聞けばなのはさんはシホさんの家族と

いうではないですか。ならあの時の対応は当然です」

「そう言ってくれると心休まるわ」

それでデイエチとも話を終えて次にやってきたのはオットー、デイードの二人。

「僕はオットー……。そしてこちらは僕の双子のデイードです」

「デイードです。さつそくで悪いのですが、あのオレンジ頭……ティアナ・ランスターに

双剣の対応の仕方を伝授したのもシホさんですか……？」

「ええ、そうよ」

「そうですか。あなたが双剣でゆりかごを破壊したほどの腕を持っているのも知っています。それで相談なのですが、私に双剣の技術を伝授して欲しいのです」

「それって、やつぱり……？」

「はい。正直に言えば悔しかったのです。私のISは『ツインブレイズ』。双剣を操る技術です。なのに私の攻撃はティアナさんには徹底的に防がれてしまったのです。しかも片腕だけで……」

「そう。あなたに足りないものはなにかわかる……？」

そう、シホは問いかける。

それにデイードは自信を持って、

「経験と技術です。能力があるだけではただ使えるだけとわかったのです。ですから私

も能力に頼るだけではなく経験と技術も磨いていきたいのです」

「そう……。私の教えは厳しいわよ?」

「構いません。ぜひ、お願いします!」

デイドはそう言って頭を下げた。

そこまで誠意を見せられては断ることもできないな、と思うのでシホはいつか教えることを約束したのだった。

そして次にやってきたのは、物静かな子。セツテであった。

「セツテ、です……」

少し怯えが入りながらも挨拶するセツテ。

セツテは唯一記憶をクアットロに消されたために家族とも言えるナンバーズ達との記憶が共有できないという申し訳ない気持ちがある。

それでも自分に良くしてくれる姉達に少しずつであるが心を開いてきていて全員の事を『姉様』をつけて呼んでいる。

記憶を失う前は本来の戦闘機人のコンセプト通りのまるで機械と言ってもいいほどの無機質な子であった。

それが、記憶をリセットされただけで性格改変の効果も見られるのは、はたして幸せなのか不幸せなのかは、一見して判断はできない。

だがしかし、それでもセツテ本人は良くしてくれる姉達の事をとて大切に思っているのは確かだ。

だからこのまま記憶を失っていてもいいかな、とも思い出しているらしい。

「記憶がないのは大変だと思うけど、頑張るのよ」

「は、い……」

それでセツテもわずかに笑みを浮かべるのであった。

そして最後にやってきたのはトレディである。

「……………トレディです。よろしくお願いします、シホさん」

その独特の間がある喋り方の少女。

彼女に会うために今回シホは来たといっても過言ではない。

「そう、あなたが……。よろしく、トレディ。それとランがお世話になったようだけど

……………」

「……………はい。大変申し訳ありませんでした。私の身勝手な思いのためにランさんを利用してしまったのは私のれっきとした罪です。

……………生涯をかけて償っていくつもりです。もちろんレンさんの心も傷つけた

事も含めて、あなたの家族を苦しめたことを今、謝罪します」

「トレディ……………」

そう言つてペコリと頭を下げるトレディ。

それでランとレンも少し感情移入したのか泣きが入っている。

「いいわ。許してあげる。聞けばランの洗脳の力をもっと上げるとスカリエッティに言われていたらしいけど、あなたの判断でそれはしなかつたのでしよう？」

「……………はい。ランさんの心が崩壊してしまう危険性がありましたので、ある程度までで抑えておきました」

「ありがとう。そのおかげでランは何も後遺症は残らずこうして無事に過ごさせているわ」

「……………いえ」

「それに、あなたの身勝手な思いつて奴。それは感情としては別に悪いものではないわ。あなた、レンの事が……………なんでしょう？」

「……………はい。私は最後の戦いの時からさらにレンさんの事を、思うようになりませんでした……………」

そう言つて少し俯きながらも頬を赤く染めるその姿はまさしく乙女であり、人間とまったく変わらない姿であった。

それでレンも釣られて顔を赤くしていたり。

「よかつたわね、レン。将来の彼女候補ができたわよ？」

「か、からかわないでくださいよ、シホさん！」

「えー？ そんなこと言って内心嬉しいんでしょう？」

「ラン姉さんも乗っからないで!!」

それでランレンの姉弟喧嘩が始まりそうだったが、そこにギンガが割り込んできて、

「レン君……?」

「は、はい……? なんですか、ギンガさん?」

「いつか、私も宣言するから覚悟しておいてね?」

「は……?」

それはつまりトレディのライバル宣言である。

それでトレディも表情が乏しいながらも少し好戦的な目つきになり、

「……………負けません」

「受けて立つわよ」

それで二人の間で火花が散っていたのをシホは見たという。

それからレンを中心にいじられる光景が続いたという。

……ちなみにだが、チンク、ノーヴェ、デイエチ、ウエンデイ、トレディ、セツテの

六人はナカジマ家の子にならないかとゲンヤに誘いを受けているらしい。

他にもセイン、オットー、デイドの三名は聖王教会にスカウトされているという。

アギトはシグナムの融合騎として八神家に誘われているし、ゼストもルーテシア、メ
ガーンと一緒に隔離世界で静かに暮らしていくという話である。

更正プログラムが終了後は色々賑やかになりそうな気持ちでいっぱいだな、とシホ
は思うのであった。

第六章 正義の在り処編

第百七十三話 『それぞれの進路と異変』

十一月も半場に入り、珍しくも雨が降り出す直前の薄暗い曇り空。

スバルとギンガの母親であるクイント・ナカジマやティアナの兄であるティーダ・ラ
ンスターのお墓があるミッドチルダ西部のポートフォール・メモリアルガーデン……。

そのとある区画に喪服姿の数名の人ばかりができていた。

その数名の中で代表なのか一人の男性が前に出てそのお墓にその手に持っている花
束を手向ける。

そして、

「…………… ジョン……………今年も来てやったぞ」

『ジョン』。

そのお墓に眠っている人の名前なのだろう、男性はそう小さく呟く。

それに呼応して後ろで立っていた中で一人だけ少年がいたが、少年の肩は少しだけだ
が震えだしていた。

少年は涙を堪えながらも黙ってその男性の言葉を聞いていた。

男性も少年の微小の変化に気づいていたのだろう、しかしここはあえて触れないで続ける。

「お前の無念……必ず晴らしてみせる！」

男性はそう宣言した。

するとポツポツと雨が降り始めて来た。

この雨は皆の表情を更に暗くさせる効果でもあるのだろう、全員から感情は何えな

い。そして一見、男性の言葉は復讐に対する恨みつらみにも聞こえそうな、そんな発言。

だが、男性は復讐という事は一切考えていない。

そう、これから行おうとしていることはある意味、*“革命”*なのだから。

——誰かがそれを先に行うかもしれない。

——それを待つて便乗するのもいいかもしれない。

——そうすれば*“すべて終わった後”*の事も色々と考えられる。

だがしかし、そんな中途半端な気持ちでこれからの事を行うのでは最後まで決してた

もちはしない……。

男性はそれを深く、そう深く理解し分かっているために、

「みんな、此処から先は非常に辛い戦いになる……家族と静かに暮らしたい者がいるなら、咎めはしない。すぐに此処から離れろ」

男性はその後ろに控えている人達の身を案じながらも告げる。

しかし、

『……………』

男性の言葉に、誰もそこを離れようとしなかった。

むしろそれぞれが『どこまでもついていきます!』という意気込みで離れようとしなかったのである。

その行動に男性は目頭が熱くなることを自覚する。

しかし、決して涙は流さない。

今はまだ流す時ではないからだ。

流すのならば目的を達成したあとでもいいではないか。

そう心を強く、そう強く鋼のように固くし、そして宣言する。

「わかった……ならばもう何も語らん。今はただ、この作戦に全力を注ぐ! 行くぞ!!」

『応っ!!!』

男性の言葉にその場の全員が大きく返事を返すのであった。

その決起集会のような場面に、しかし誰にも気づかれる事はなく、誰もこの事実を知る者は存在しなかった。

そしてこの事件が機動六課をさらなる戦いに巻き込むことになることも、まだ誰も予想できないのであった……。



場所は変わり、機動六課隊舎。

スバルとティアナの部屋。

そこで窓越しにティアナは外を見て、

「雨が、降り出してきたわね……」

そう呟く。

「そうだね、ティア」

それに一緒に部屋にいたスバルが頷く。

「それよりティア。執務官補佐試験、100点満点でよかったね」

「……ありがとう」

スバルの賛辞の言葉に少し顔を赤くさせながらティアナは返事をする。

「ま、フェイトさんから私の執務官補佐をしないかという話を聞かされた時は正直驚いたけど、まあなんとかなつてよかつたわ」

「うん！ ティアの夢にまた一步近づいたもんね！」

「そうね。フェイトさんのもつとで執務官補佐を経験して、そこからあたしも兄さんの目指した執務官になるのよ。これは必ずよ」

「ティアなら、やれるよー！」

「おだてても何も出さないわよ？ それよりあんたも湾岸特別救助隊レスキューからスカウトきてるんだから、気張りなさいよ？」

「う、うん……」

そう言われてスバルの表情は少し曇る。

心情的には嬉しいのは嬉しいのだが、今までいつも一緒だったティアナと離れ離れになつてしまうことに対して不安になつているのがスバルの正直なところである。

ティアナ本人には話さないことだが……。

と、そこに『コンコンッ！』と扉をノックされる音が響いてくる。

「あ、はい！ 入つていいよ！」

スバルがそう言うのと扉が開いて二人の女子……キャロにラン、ついでにフリードが

入ってくる。

「あら……。二人が一緒に来るなんて珍しいわね？」

「あはは。はい、キャロと機動六課解散後のこれからについて話し合っていたらティアさんとスバルさんの話も聞きたくなっただけです。私達フォワードもそれぞれの進路に向かつてバラバラになってしましますから」

「そうね。エリオにキャロは辺境自然保護隊に行くことになって、ランにレンはシホさんの元の配属先である魔術事件対策課の魔術師として活動していくのよね」

「はい。機動六課解散後もシホさんと一緒に職場に働けるのは正直に言えば嬉しいです。親離れ出来ないみたいでなんか、あれですけどね……」

「タハハ……。とランは頭を掻きながら笑う。

「それにつられてキャロも『クスツ』と笑い、

「シホさんと一緒に職場で働けるんですからいいじゃないですか。私もエリオ君と一緒に働くのはとても嬉しいです！　ね？　フリード」

「キョクー！」

フリードも嬉しそうに羽をバサバサと揺らす。

「そっかー……。キャロ、エリオと頑張るんだよ？　エリオはああ見えて意外にそっかしくて流されやすいから、そこをキャロが手綱を握っていてあげないとね！」

「はい、スバルさん！ 私、頑張ります！」

両手の拳を胸の前で握ってキャラは気合を入れる。

すでにキャラの尻に敷かれようとしているエリオ。

彼の将来は、さて、どうなることやら……。

それから色々女子トークをしている四人。

そこでランはふと、スバルの机の上に置いてある写真立てに気づく。

「……あれ？ スバルさん、この写真って……写っているのはスバルさんとティアさん

に、後このメガネの似合う可愛い女の子は誰ですか……？」

「あ、リオンの事だね」

「リオン、さんですか……？」

ランとキャラが誰のことだろうと首をかしげている。

それに対してスバルとティアは少し懐かしい気持ちになりながらも、

「リオンっていう子はね、あたしとティアの訓練校時代のパートナーの一人だったんだ

よっ。」

「パートナーって事は、コンビじゃなくてトリオだったんですか？」

「ええ。自前のデバイス持ちって事で一括りにされちゃってね。訓練校の初めから最後

まであたしはスバルとリオンの二人に振り回されていたわ……」

ティアナがしみじみとそう呟くが、そこにスバルが『待った!』と声を張り上げて、「あたしとリオンだけが迷惑かけていたわけじゃないでしょ、ティア!」そ、そりやほとんどはあたし達だけど、役にも立っていったでしょ!? ねー?」

「まあね、少なくともリオンはスバルよりはしつかりとあたしとの歩幅を合わせてくれたわね。あんたはどんどん先に行っちゃうから追いつくのに苦労した覚えはあるからね」

「うー……確かに、そうだけどお……」

反論できないのかスバルは『うー』とうめき声を上げるしかできないのであった。

「ま、リオンって子はね。特に真面目な子だったわ。スバルとおんなじ位にはあたしに話しかけてきたし、少し一般常識が欠如気味だったけど意外性はスバルに負けていなかったわ」

「へー……そうなんですか」

「仲が良かったんですか?」

「うん! あたしとティア、そしてリオンは休みの日にはよく遊びに行くほどの親友だったんだ!」

「そうね。最初は組まされただけの仲だったけど、一緒に切磋琢磨していくうちに色々支え合う仲にはなっていたのは確かね。あの“特殊能力”にも何度も助けられて

いたしね」

「特殊能力……？ なんの魔法ですか？」

キャラコがそう尋ねる。

それにティアナは苦笑いを浮かべながらも、違うと言つて、

「リオンはね、五秒先までの未来を見れる『予知能力』を持っていたのよ」

「えっ、それってかなりレアスキルじゃないですか!？」

ランがその声を上げる。そう、それが本当ならかなりのレアスキルである。

魔法とは違う異質の能力。

一種では超能力とも呼ばれる能力。

「確かにね。後、他にもなにかもう一つ目に特殊な能力を持っていたとか言っていたけど、そちらは結局最後まで教えてくれなかったわね」

「はー……さすがスバルさんにティアさんの親友の人ですね。普通じゃない規格外な能力を持っています」

ランが感心しながらそう呟く。

しかし、そこでティアナが反論の声を上げる。

「ちよつと、ラン。なんか今の言葉、なにか引つ掛かりを覚えたんだけど、自覚してる？」

「え？ 正直な事を言っただけですよ？ だって……」

それでランは機動六課の常識離れした人達の名前を上げていく。

まず『魔弾の射手』『本物の魔法使い』のシホと士郎を筆頭に、聖王家の隠れ末裔であるのは、英霊という人間の一つ上の高次元の存在達、夜天の魔道書の最後の主であるはやてにその守護騎士達、聖王オリヴィエのクローンであるヴィヴィオなど……。

機動六課はそう言った特殊な能力を持っている者達の巣窟である……と、誰かが上手い事を言っただろうか？

「……言われてみると、確かにあたし達の周りって普通の人が少ないわね」

ティアナもそう思ったのか深くそう思うのであった。

他の三人もそれは同様であつたらしく深く頷いている。

ま、それは一旦置いておいて、

「あー、でもリオン。会いたいなあ……」

「そうね。久しぶりに話がしたいわね」

「え？ 普通に会いに行こうと思えば会えるんじゃないんですか？」

「うんうん……」

キャロの言葉にランも頷いている。

しかし、そこでスバルとティアナの二人は表情を曇らせて、

「わからないのよ。リオンがどこに配属されているのか、どこで暮らしているのかさえ

も……」

「うん。あたし達も何回か管理局本局に行つて居場所を聞いてみたんだけど、なぜかわからないの。一辺倒で教えてくれなかつたんだよ」

「そんな事が……」

「多分特殊な任務についていると思うのよ。だから公表できないんじゃないかなつて……」

「無事に暮らしていればいいけどなあ、リオン……」

スバルとティアナはそれでリオンの事を心配に思いながらもまだ降り続けている雨を窓から眺めているのであった。

そして二人はいずれまた再会することになる。

それが、どんな形であろうとも……。



スバル達がそんな会話をしている一方で、フェイトとランサーは二人で執務官の任務をこなしていた。

今日も今日とてスカリエッティや最高評議会と深く関係していた研究所やいまだに

行方をくらししている要人などの居場所の捜査などを主に行っている。

この広い次元世界でまず違法な研究所を見つけること自体難しい。

だがそれはゼストの託してくれたメモリーによってあらかた居場所は特定されている。

その中には関わっていた最高評議会の息がかかったメンバーの顔写真なども含まれていたためにすぐに見つけ次第検挙できるから。

それでフェイトはランサーを先頭に一部屋ずつ扉を開けて誰かいないかを探っている。

サーチの魔法を使ってもいいのだがやはり直に見て確認できたほうがいいと、こうして地道な作業を行っているのだ。

そして、最後の一番奥の部屋の前まで到着して、

「……ランサー、お願い」

「あいよ」

フェイトの指示でランサーは勢いよく扉をこじ開けて中に入っていく。

だがそこで異変を察知し、

「フェイト！ お前は入ってくるな！」

以前まではフェイトの事を『マスター』と呼んでいたが、恋人同士になったことでラ

ンサーは名前で呼ぶようになった。

それはともかくとして、

「ど、どうしたの？ ランサー……？ 中で一体何が……」

「まだ駄目だ……」

険しい表情でランサーはフェイトの入室を拒む。

それはなぜか……？

答えは簡単であった。

その部屋には数人もの“綺麗”に体を切断されて息絶えている死体がいくつも血の海に転がっていたからだ。

血の匂いが部屋中に充満してどこか鉄臭く、慣れていないものなら貧血を起こしかねないそんな無残な空間。

壁には血飛沫が舞ったのか赤黒く変色している。

「ひでーもんだ……。誰の仕業だ？」

ランサーは生きているものももういない事を確認して部屋の中を散策し始める。

そしてすぐになにかを発見した。

「……いつは……」

ランサーは見る。

壁に殺された人の血で描かれたのだろう、ミットチルダの言葉で血文字で、

——『我等は混沌を求めぬ者。外道なる愚者が創る偽りの世界を壊し、その愚者の血をもつて新たな世界を創る』。

と、書かれていたのだ。

「こいつは、事件の匂いがしてくるぜ……。早くたぬきの嬢ちゃんに知らせねえといけねえな」

ランサーはすぐにフェイトとともにはやての元へとこの内容を報告することになるのであった。

そして、この事件の捜査はすぐに動ける機動六課が中心となって開始されることになるのは、少し先の話である。

第七十四話

『事件に対する思いと、そして想い』

フエイトとランサーが最高評議会の息のかかった違法研究所でおそらく元最高評議会のメンバーであったのだらう者達の数々の死体の発見された所謂猟奇殺人の報告の旨をフエイトのまとめた報告書で見えていたはやてとリインはいうと、

「うーん……まだスカリエツテイの事件が解決してそんなに時間が経っていないのに、もう最高評議会の息がかかったメンバーや研究者達が殺されるような事件が起きてしまったか……」

「はいです。はやてちゃん、おそらく犯人は管理局の誰かと繋がりを持つ誰かだと思います。フエイトさんが捜査した研究所もゼストさんの託してくれたメモリーのデータがなければわからない場所にありましたから」

「そうやね。でも、もうあらかた最高評議会の息がかかったメンバーの情報は管理局全体に公表されとるから、戦闘機人のトレディのようにハッキングできるような能力を

持っている人物がいたとしたら、犯人像は分からなくなってくるからな……」

それではやては報告書とにらめっこをする。

その表情は少し暗い。

スカリエツティ事件が解決してからここ最近事件という事に遭遇していなかったからいざ部隊指揮をすることになる為にはやてはこの先の様々な思惑や起こるであろう連続する事案を考える。

リインもはやての顔の隣で難しい顔になっている。

「それに……」

それではやては例の血文字が収められている映像のデータを見る。

「『我等は混沌を求める者。外道なる愚者が創る偽りの世界を壊し、その愚者の血をもつて新たな世界を創る』。……なんや、意味深なメッセージやね」

「です」

「多分やけど、この『愚者』というのは最高評議会のメンバーの事を指しとるんやろな。今回殺されたのがそのメンバーなのがいい証拠や」

「そして管理局システムは戦闘機人によって殺害された最高評議会の三人が作ったシステムです。これになにか意義を唱える誰かが行った事なのかもしれません」

「あるいは恨みの犯行か……。まだまだ調べないといけないことが山積みやね」

それではやては少し表情を歪ませる。

スカリエツティという調査する対象がいればいくらでも捜査しようがあるが、今回は一からの捜査だからだ。

しかし、本来捜査とは一から調べて成果を上げていくものである。

だからはやてもそれをしっかりと理解しているために気持ちを引き締めて対応にあたることにする。

表情もキリツと引き締めて、

「さて、そうやな……。この事件は本局から捜査するようにもう依頼が来ていることやから、まずは私達で捜査を開始しないといかんね」

「そうですね、はやてちゃん」

それではやては捜査するメンバーを選出する。

「まず、フェイトちゃんとシグナム、エリオにキャロのライトニング隊&ランサーはもう一度現場の取り調べをしてもらうとしようか。なにか発見できるかもしれへんからな」

「はい！ それではフェイトさんに伝えておきますね」

まずフェイト達はもう一度殺害現場の調査という事になった。

まだ先日のことであり死体は回収されているが捜査の手がまだ入っていないのである。

普通、事件が起こればすぐに捜査現場は取り調べがされるものだが、あいにくと次元世界のある無人世界にその研究所があった為にまだ派遣隊が編成されていないのだ。

それですまず先遣隊としてライトニング隊が当てはめられたのである。

「それで次になのはちゃん、オリヴィエさん、ヴィータ、スバル、ティアナのスターズ隊。シホちゃんとアルトリアさん、ネロさん、ランにレンのセイバース隊の二隊はこちらで捕捉して保護している最高評議会のメンバーの護衛についてもらう……。」

分かっているうちに狙われるとしたら彼らやからな。

それにこちらは大人数だけ敵の数は未知数……。多いに越したことはないからな」
「わかりました。シホさんとなのはさんに報告しておきます。でも、ファイアットさんは妊娠しているために出撃できないのは痛いですね」

「やなー。防御と治療ができるメンバーが一人減るのは辛いところやけど、まあシホちゃんがいるからまずいとはいかないけど大丈夫やろう」

「そうですね」

はやてとリインはそれで笑みを浮かべていたが、どう見てもフラグ発言にしか聞こえないのはどういう事だろうか？

もし、シホがこの場にいたら『こら、やめなさい!』とツツコミを入れていたことだろう。



それでフェイト達がアルトの運転するヘリで現場に向かっていったのを確認した後、シホ達も最高評議会のメンバーが保護されている施設に向かっていった。

「でも、猟奇殺人か……。誰がこんな事をしたのかしらね？」

まずシホがそう切り出す。

シホも過去に幾度か魔術協会や聖堂教会の連中に報復された経験があるだけに色々と思うところがあるのだろう。

「うーん……。まずは目的を知りたいところだね、シホちゃん。でも、大体予想できるのが管理局の業だけだね」

そう言っただけはため息をつく。

今回殺された人物達が管理局の中の今では地にまで落ちてしまっているが、スカリエッティ事件まではトップの座に居座っていた組織である最高評議会と息のかかった関係のある人物達である。

だからおのずとこの事件を起こした人物達は最高評議会に恨みのある人物だという事に限られてくる。

それで過去にゼストやクイント、メガーヌも犠牲になったのだ。

その事も今では最高評議会の暗躍した事件の一つでしかないのは悲しいことである。追求していけばいくほどに醜い暗躍によって不幸にあった人達が浮き彫りになってきているのが今の現状である。

なのはの弁である『業』は、両手で数え切れないほどに存在し、今も増え続けている。管理局の闇は奥深い物だ、それと立ち向かう事になる今まで事実を知らされなかつた善良な局員の人はこれ今回の事件で知つたためにたまったものではないだろう。

ゆえに管理局を一回クリーンな組織に戻そうと各々が躍起になっている。

それなのに今回起きてしまった事件は……闇に葬り去られた者達の復讐かもしれない。

それを思うとシホ達は一様に彼、もしくは彼女達の犯行を悪質な犯罪者だ、許せないほどの悪者だ、と断定できないのが痛いところである。

もし復讐のために動いているのだとしたら彼らも被害者なのだから。

それでも、

「でも、許される事ではないわよね。復讐による犯行は悪手と言っても過言じゃないわ。いずれは最高評議会のメンバー達も法という裁きに下されるのだから、それを待つのもいいかもしれないに……」

「それが、我慢できなかったから今回のような事件が起きちゃったんだよね」

「ええ……いつかクロノが言ったセリフだけど『世界は、いつだって……こんなはずじゃないことばかりだ』ってね。

復讐するのはしようがないと言われても、今回殺された人達にも親家族はいたでしょう。

復讐は憎しみを生む、そして起こる犯行、それによって殺された者の家族達もまた憎しみの感情を生み復讐心を生み出す、そしてまた復讐し返される……その繰り返しは悪循環し、次第に大きくなっていき、いずれはテロ、紛争、戦争と、規模を拡大させていく。

だから私達はそうさせないために犯人達を捕まえて法による裁きを受けて被害者達に償ってもらうために今回の事件、早急に解決しないとね」

「そうだね、シホちゃん！ 頑張ろう！」

「ええ！」

それでシホとなのはは拳を合わせる。

そしてお互いに「ニッ」と笑みを浮かべて事件解決を速やかに行うことを誓うのであった。

そんなシホ達の光景を見ていたアルトリア、ネロ、オリヴィエはというと、

「立派な心がけです。あのシホがここまで立派に成長しているのは師としましては嬉しい限りです」

アルトリアが我が事のように嬉しそうに頷いている。

「さすが奏者だ！ 余も奏者のために一肌脱ごうではないか！」

ネロがシホの気持ちになにかを感じたのだろう、さらに惚れたと言わんばかりに顔は笑顔にしていた。

「(なのは、私はかつて戦争を鎮めるために聖王のゆりかごを動かしました。今でもそれは後悔していません。

ですがそれによって悲しんだであろうクラウス、リッド、クロゼルク……他にもたくさんの方々に今、どういう顔をすればいいのか分かりません……。

ですが、それでも戦争を止めようと頑張るなのはの姿は私にも勇気を与えてくれます。ですからいずれ来るだろう別れの時でも最後まであなたの下で過ごさせてもらいます。

それが私の聖王家の末裔であるあなたにできる罪滅しなのかもしれないのですから……)」

オリヴィエはなのに対して心の内でそう誓っていた。

……少し離れた場所ではヴィータがランとレンと会話をしていた。

話題はシホとなのはの会話に関することであるが。

「ヴィータ副隊長。やっぱりシホさんは色々と考えているんですね。私、とっても感激しました。やっぱりシホさんは正義の味方という言葉がふさわしいと思いますよ！」

ランがそうヴィータに言っていたが、それに対してヴィータは少し微妙な表情であった。

それにすぐに気づいたレンがどうしたのだろうか、尋ねてみたところ、

「いや、なんていうか……やっぱお前等はまだシホを完全には理解できていないんだなってな」

「「えっ……?」」

それに二人はハテナマークを頭に浮かべる。

それとともにある思いが生まれる。

「私、シホさんの事を理解しているつもりですよ？ レンもそうでしょう?」

「うん。シホさんは僕達姉弟と救ってくれたとつても尊敬できる人ですから」

「まあ、な。そこは否定しねーよ。でもさ、お前等、まだシホの過去を聞いたことがないんだらう?」

それにランとレンの二人は苦笑を浮かべながらも頷く。

そう、ランとレンの二人はシホの家族でありながらもいまだにシホの過去について聞かされたことがないのだ。

それに対して悔しい思いを抱いているのも確かなことで。

後ろめたいことでも語ってくればきつと分かり合えると二人は思っている。

その旨をヴィータに伝えてみたが、それに対してヴィータは頭を掻きながらもそこで真剣な表情になり、

「おい、二人とも。いつか聞かされる時が来るかもしれないねーが、絶対にシホの事を拒絶してやるなよ？ ああ見えてシホはまだ脆いところがあるのは確かだからな。家族と言ってもいい二人がシホの事を少しでも否定したらそこで絆は壊れちまうかもしねーからな……」

「シホさんの過去は、そこまでひどいものなんですか……う？」

レンが少し怯え腰でそう尋ねる。

それにヴィータは「全部は答えられねーが」と前置きをして、

「シホの過去は壮絶なものなんだろうな。闇の書の守護騎士として色々な世界を繰り返していたあたし達ですら、シホの過去は一言では言い表わせねーからな。シホもある意味被害者だからな」

「シホさんが被害者、ですか……？ 一体なにが……」

ランがさらに追求しようとするが、そこでヴィータは「待った」と手を出して、
「あたしから言えるのはここまでだ。後はシホ本人から聞くんだな」

それ以降ヴィータは黙り込みを決める。

これ以上は覚悟を決めて来いという事なのだろう。

シホの闇はそれほど深いものなのだから……。

そして奥の方で座っていたスバルとティアナはというと、

「ティア……なんだろう？ とつても嫌な胸騒ぎがするんだ……」

「……奇遇ね。あたしもなんか嫌な事が起こりそうな、そんな予感がするわ。なんていうのかしら、なのはさんがさらわれた時のような嫌な事が起こりそうな気がするわ」

「ティアがそう言うとなんか当たりそうで怖いね……。こういう時のティアの言うことは外れた試しがないから」

「もうっ……」

「イタタタタツツ!? ティア、痛いよ!」

それでティアナはスバルの頭をガシガシと搔きながらも、

「そんなに不安がらないの。そのために今まで鍛えられてきた力が真価を発揮する時な

のよ。そんな不安なんてさらに強い気持ちで吹き飛ばしてしまえばいいのよ。わかった!？」

「は、はいー!」

それでスバルは条件反射なのだろう土下座をして謝っていた。

当然、その次の展開は「恥ずかしいからやめなさい! このバカスバルツ!!」と再度頭をグリグリされる展開がなされていた。

それは他の面々も見ているために自然と笑みが零れる様な空間に変わっていた。

みんながみんな、少なからず緊張していたのだ。

だがそれも適度にリラックスできたのはいい事だ。

落ち着いた気持ちで任務に当たれば想定外の事態でない限りはなんとかやっつけていくのだから。

シホ達はただ体を鍛えただけではなく、しっかりとメンタル部分も鍛えてきたのだ。

やわなことでは今のフォワード達の心を折る事は難しいだろう。

……だが、こうしていられるのもここまでだろう。

これからまた起こるであろう事件で数名の心に傷を作ることになるのだから。

そんな事が起きるとは露知らず、シホはみんななら無事に任務を果たせられると信じるのだった。

第七十五話 『襲撃、暗殺者の名は……』

最高評議会の判明しているメンバーが収容されている監獄施設。

そこにシホ達は到着して色々支度をしていた。

この施設の周辺になにかしら反応があったら反応するオートスフィアを数十個設置して暗殺者集団の襲撃に備える。

各自バリアジャケットをすでに纏っていて、融合騎であるアルトリアも青いドレスの上に甲冑を纏い、ネロとオリヴィエのサーヴァント二人も戦闘服（英霊のデフォルトの姿）になる。

施設の人にはシホが説明に当たる。

「いいですか？ いいと言うまで施設の中の鍵を開けてはいけませんよ？」

「はい。この施設の警備体制は完璧とまではいきませんが、管理局の精鋭達を作った犯罪者を閉じ込めておく施設ですから抜かりはありません」

「そうですか。それならよいのですが……。では施設周辺の警備は私達にお任せ下さ

い。襲撃者が来てもしつかりと対応させてもらいます」

「お願いします」

そう言つて警備員は帽子のつばを掴みながら挨拶してくる。

それにシホも敬礼で答える。

それからシホ達は外で警備を開始しながら、各自思念通話で話をする。

《……さて、それじゃ作戦を伝えるわ》

《《はい！》》

シホの思念通話にみんなが反応を返す。

《もう配置に付いているからわかると思うけど、まず私とネロが東側、なのはとオリヴィエ陸下が西側、ランにレン、アルトリアが南側、ヴィータにスバル、ティアナが北側を警備。》

もし何かの反応があったら即座に全員に通信を繋げること。そしてオートスフィアで映像を常時記録すること。最後にみんなの力に頼ることになるわ。ここで今まで鍛えてきた力を発揮するのよ》

《《了解！》》

《それと、ロングアーチスタッフが常に待機しているからみんなも気負いせずにね》

そこに、

『私達が監視しとくから後のことは任せとき!』

はやての声が通信で聞こえてくる。

続いて、

『敵影の反応はすぐに察知したら報告しますからお任せ下さい!』

『スカリエッティ事件での戦闘機人やガジェットでの後手に回った経験を活かしてセンサーも強化しましたのでいつでも対応します!』

シャーリーとルキノの頼もしい声が聞こえてきてスターズ、そしてセイバーズの面々はバックアップがちゃんとなされている事に安心し、もし戦闘が起きたら頼りにさせてもらおうと思ったのだった。

それで全員はそれぞれで各自警備を開始するのであった。

その中、ランとレンがプライベート通信でヴィータに話しかけていた。

「ヴィータ副隊長」

『……ん? どうした?』

グラーフアイゼンを肩に担ぎながらヴィータはランの言葉に反応して言葉を返す。

「先ほどの話の続きですが……私達、シホさんの過去を聞きたいと思っています」

「うん。今の僕とラン姉さんがあるのはシホさんのおかげなんです。そうじゃなかったら僕達ももしもの話ですが、復讐者に落ちていたかもしれないから……」

それでレンは何かを思っているのか、目を瞑っている。

瞑りながら、

「そんな僕達を擲い上げてくれたシホさんには感謝の言葉がいくらあっても足りません。だから、僕とラン姉さんはシホさんの過去を聞いても絶対に拒絶しないつもりです。

シホさんが僕達を受け入れてくれたように、僕達もシホさんを必ず受け入れます」

「うん！」

ランとレンがそう言つて力強く握りこぶしを作る。

それを黙つて聞いていたヴィータは「ふっ……」と笑みを零して、

『お前等がそこまで覚悟を決めてんなら、あたしはもうなにも言う事はないぜ。』

後でシホに相談してみるんだな。あ、でもそんな時はフォワード全員集めてだからな。

奴らにもシホの過去は伝えとかないといけないしな。

前になのはの過去の過去を語つた時、シホだけは語らなかつたからいい機会だしな』

「はい！ シホさんに絶対聞いてみます！」

「うん！ 頑張ろう、ラン姉さん！」

『ククク……』

そんな二人の様子を見てヴィータは小さく笑い、『お前はもう幸せを掴んでるぞ、シ

ホ』と思うのであった。



それから警備は何度か交代しながらも継続されて時間は深夜の十二時近くまで迫ってきていた。

「……もうすぐ十二時ね。このまま何事も起こらなければいいけどね」

「そもいかないうらだぞ？ 奏者、警戒せよ。なにかが迫ってきている」

「あ、やつぱり……？」

ネロの言葉にシホは緩んでいた意識を即座に警戒態勢に移行する。

そこに同時にロングアーチから報告の声が聞こえてくる。

『ロングアーチからスターズ、そしてセイバースに通達します！ 監獄施設周辺に百を

越える敵影の反応をキャッチしました』

『どうやら転移魔法のようで次々と反応が増えてきています！』

シャーリーとルキノの報告にシホは一度頷いて、

「了解！ 索敵と生体反応、最終的な敵の数の把握を専念してお願いね！」

『了解！』

そしてシホ達の目の前には何十人もフードを着ている謎の集団がいた。

《なのは！ こちらで敵が現れたわ！》

《うん！ こっちでも十人くらいが集団が目の前に現れたよ！ オリヴィエさんが先行

して倒しにかかっているとこころ！》

《シホ！ こちらでも出現を確認しました。交戦に入ります！》

《シホさん！ あたし達のところにも十人以上の敵が現れました！》

それぞれの報告が入ってくる中で、

（全方位で攻めてきたか……。本格的に狩りに来たわけか。でも、そう簡単にはいかせないわよ！）

一瞬で思考をまとめてシホはその手にアンリミテッド・エア、ツヴィリングフォルムを展開して構える。

「ネロ！ 全員生きたまま制圧するわよ！」

「うむ！ 任せられよ！」

シホは一瞬で敵の一体に肉薄し右手の剣を振るう。

しかし、敵の一体はシホの攻撃に的確に反応してその手に持つ剣で受け止めてしまった。

それに対してシホは内心（へえ……）と純粹に驚いて、しかしすぐに気持ちを切り替えて次々と劍戟をぶつけていく。

シホの攻撃を最初は受け止めていたが、シホのギアも上がってきているためにすぐに反応できなくなってきた敵は一旦空中に浮き上がって、その手に換装でもしたのだろう銃が握られている。

そして引き金が引かれて銃口から数発の弾丸が放たれる。

シホもそれをすぐに察して、すべて劍で払い落とす。

ネロも大劍ですべて弾いていた。

「実弾兵器！ 殺傷設定の武器か！ 全員に通達！ 敵は遠慮という言葉を知らないようだわ。各自防御魔法に頼らないで避ける事に専念して！」

『了解！』

全員の声が聞こえてきて、シホは遠慮をする事をなくした。

「……………あなた達がそう来るなら私も遠慮はしないわ。いくわよ！ 投影開始！！」
トレス・オン

そしてシホは劍の群れを投影して空中に浮かび上がらせる。

「全投影連続層写！！」
ソドパレルフルオーブン

一気に放たれた劍の群れは複数の敵に的確に足や手などに突き刺さっていく。

そこにシホの背後にネロが飛び降りてきて大劍を構えながらも、

「奏者よ。実体剣を使ってよかったのか……？　あくまでも敵は人間なのだろうか？」

「いえ、私の解析の目はすぐに見抜いているわ。奴らは……機械の人形よ！」

「むっ！　それはまことか！」

それでネロは視線を敵に向ける。

そこにはシホの剣で貫かれながらもお構いなしと言わんばかりに突撃をかましてくる機械兵士がいたのだ。

「ロングアーチ！」

シホが機械兵士に全投影連続層写ソードバレルフルオープンを連続して射出を繰り返しながらもロングアーチに通信する。

それにシャーリーはすぐに反応を返してくれる。

『わかってます！　今、解析中………解析結果出ました！　監獄施設周辺の敵対反

応、そのほとんどが機械兵士です』

「やつぱりね。でも、ほとんど………？」

シホが疑問の声を出すすとすぐにシャーリーは答えてくれた。

『はい。サーチの結果、一体だけ生体反応が確認できました。それが検出された区画は北側のスターズ2のヴィータさん、スターズ3のスバル、スターズ4のティアナが交戦しているエリアです！』

「ツ！ ヴィータ！ 通信は聞いたわね？」

『おう！』

「おそらく指揮している奴がいると思うのよ。そいつを決して逃がしちゃダメよ！」

『わかってる！ ぜってーふん捕まえる！』

「私達もそれぞれ持ち場の機械兵士を片付けたらすぐに向かうからそれまで三人だけで頑張りなさいね！」

『わかったぜ！』

『了解です！』

『やるだけやってみます！』

三人の返事を聞き、シホも自身の戦闘に神経を集中させるのであった。



「スバル！ ティアナ！ あたしが道を切り開くからお前等二人が指揮している奴に突っ込め！」

「あたし達がですか!?!」

「でも、この場で突破力があるのはヴィータ副隊長ですよ！」

ヴィータの提案にスバルは驚き、ティアナはヴィータの方が適任だと言う。

だが、ヴィータはやれやれといった感じにかぶりを振り、

「状況を考えてからものを言え！ 確かにあたし達の中で突貫力があるのはあたしだつて事はわかつてるよ……。」

だがな、あたしが行つちまったらお前等がお留守になつちまう。

さつきから見えていたがお前等は機械兵士を一体も倒しきれていねえだろ？ ならあたしが周りの奴らをぶつ倒している間にお前等二人が指揮者を倒すんだ。

これくらいならできるだろ？」

ヴィータの正論の言葉に二人は「ぐう」の声も出さず反論できないために渋々だが、しっかりと頷いた。

「よし……。そんじゃ、いくぜー！」

それでヴィータはその手に鉄球を出して、

「くらいやがれ！ シュワルベフリーゲン!!」

グラーフアイゼンで鉄球を打ち放ち、それらは次々と機械兵士に直撃していく。

「駆ける！ スバル!!」

「はい！ ウイング…ロードッ!!」

道が開けてヴィータの言葉を合図にスバルとティアナの二人はウイングロードを駆

けていく。

ヴェイターがうまい事直線上の機械兵士をシュワルベフリーゲンで次々と撃墜しているために二人は一切被害に遭わずに指揮者まで一直線で向かう。

『スバル！ ティアナ！ 解析出たよ！ 一番奥の奴が一人人間よ！』

シャーリーの報告に、スバルは笑みを浮かべて感謝の言葉を贈る。

「ありがとうございます！ いくよ！ リボルバー……シュートッ！」

リボルバーナックルに魔力を集めていき次には青い魔力弾が放たれる。

それは指揮者に向かつていく。

まずは最初の一手。

これが決まれば事を優位に運べる可能性は上がる。

しかし、指揮者はそこで手に双剣型なのだろうデバイスを取り出して、スバルのリボルバーシュートを迎撃した。

右手に持つ黄色い剣、左手に持つ緑の剣、それはシホのツヴェリングフォルムに酷似しているデザインだった。

リボルバーシュートは双剣のたったの一閃で斬り伏せられてしまった。

しかもおかしい事に普通は四散するだろう魔力がまるで消滅したかのように消えてしまった。

しかし、スバルとティアナの二人はその事には気づかずに、

「スバル！ あたしが援護射撃と攪乱をするから一発相手にかましてやりなさい！」

「オツケイ、ティアア！」

それでスバルはマツハキヤリバーで敵対者の周りを何度も移動し続け打ち込むチャンスを探る。

ティアナはフェイク・シルエツトでスバルと自身の分身を生み出し様々な動きをさせながら攪乱させる。

スバルはティアナのフェイク・シルエツトの分身に紛れ込み、いざ突撃と機会を計ろうと思っていた矢先に敵対者は一直線にスバルに向かって駆けてくる。

「ッ!？」

「嘘ッ!？」

二人の驚き様は当然だった。

なにせフェイク・シルエツトの分身とあわや衝突するかもしれないと普通なら回避しながら動くだろうはずなのに、敵対者は分身を一切気にせずに向かってくるのだ。

すでに何度もスバルの分身と当たっている筈だが、敵対者は衝突の恐怖はないのだろうか？と思わず思ってしまう程にフェイク・シルエツトを完全無視している。

「くっ!?! (センサーの類でも使っているって言うの!?!)」

思わず内心で毒づきながらもティアナは、ならばと、

「それならこれでどうよ！」

ティアナ本人と他の分身のティアナが全員クロスファイアを精製する。

思念通話でスバルに《タイミングは任せるわよ！》と話して、

「受けてみなさい！ 虚実入り乱れたあたしのクロスファイアを！」

ティアナの「シュートツ!!」という掛け声と共にクロスファイアの弾丸の嵐が敵対者に殺到する。

これにさすがの敵対者もその場で足を止めて両手の双剣ですべて叩き落とそうと構える。

だが、クロスファイアの後にすぐにスバルが追従し、リボルバーナツクルのタービンを回しながら、

「うおおおおおーっ！ リボルバー・キャノン!!」

クロスファイアを囷にしながらもスバル自慢の打撃魔法であるリボルバー・キャノンが敵対者の顔面に迫る。

それを敵対者はギリギリの角度で避けようとする。

スバルの拳と敵対者の羽織っていたフードが接触しているのか『チリチリッ……』という擦れる音が聞こえてくる。

だが、決定打にならなかつたのか敵対者はジャンプして後方に下がる。

だけどその時に敵対者が被っていたフードがスバルのリボルバーナックルのタービ
ンで起きた風に揺られたのだろう、それが後ろに下がりフードの下に隠れていた敵対者
の顔があらわになる。

「えっ………っ？」

一瞬の意識の忘却。

スバルは目の前の光景が脳が理解できていなく拳を振り抜いたまま茫然自失となる。

それは………、

あらわになつた敵対者の顔は、肩口まで伸びた黒い髪、整つた顔立ちは可愛くて、眼
鏡をかけているのか知的な印象を与えてくれるそんな彼女。

しかし、今の彼女の表情は無表情に近く、且つ今すぐにでも泣き出しそうな、そんな
夢い印象である。

そしてスバルは彼女の事を知っていた。

つい先日話の話題に出たスバルとティアナの同期。

「リ、オン………っ？」

スバルはただ彼女の名前を呟いた。

そう、敵対者の正体は『リオン・ネームレス』。

スバルとティアナの親友、その人だったのだ。

第一百七十六話 『リオンの猛攻と違和感な表情』

最高評議会の元・メンバー、他に最高評議会に関わった研究者がバラバラ死体という凄惨な殺され方をして捜査中のフェイト達に発見された。

それで機動六課部隊長であるはやては本局からの命令で捜査の為に動き出した。

そして今現在判明している最高評議会の息がかかったメンバーが収容されている監獄施設にスターズとセイバーズの二隊は護衛のために召集された。

敵はいっ現れるか分からないという状況での護衛任務。

警戒は夜遅く、十二時過ぎまで行われていた。

だが、はやての読みは当たっていたらしく十二時を過ぎた頃になって監獄施設の周辺に転移魔法の反応が観測され襲撃者達が姿を現した。

それで直様応戦するシホ達。

東西南北でそれぞれ警護にあたっていたシホ達は余裕を持ってそれに対応した。

襲いかかってくる敵はシホの解析の魔術ですぐに正体が割れた。

それはなんと機械の兵士だったのだ。その手には殺傷兵器である剣や銃を握ってい

る。

それで全員は魔法の防御ではもしもの時に大事に至つたらいけないとすぐに判断して回避に専念しながらも各々で撃破していく。

そんな中で襲撃者の中に一人だけ生体反応が観測されたためにちょうどその警備にあたっていたヴィータ、スバル、ティアナはその人間を逃がさないために機械兵士の攻撃をヴィータがすべて引き受けて、スバルとティアナが向かっていった。

牽制攻撃でスバルが放つた一撃は襲撃者の主武装なのだろう双剣で切り伏せられたが、それでも構わずスバルとティアナの二人は襲撃者に攻撃を仕掛けていった。

だが、おかしな事にティアナの仕掛けたフェイク・シルエツトが相手にまったく通用しなかったのだ。

それでセンサーの類が使われているのだろうとティアナは予測しながらも、ならばと実体とフェイクの全方位でのクロスファイアシュートを実行した。

そして襲撃者は思ったとおり足を止めて撃ち落とそうとするが、そこを狙っていたスバルがリボルバーナックルを構えて一気に駆けた。

その拳が直撃するあと少しという所で襲撃者はギリギリの状態で避け切った。だがそれによつて着ていたフードが顔部分が捲れてしまい素顔を晒してしまった。

フードの下に隠れていた本当の顔は、

「リ、リオン……?」

「えっ!? リオンなのツ!」

スバルの呆然とした声の背後でティアナも誰かが分かったのか驚愕の声を上げる。

素顔を晒した事によってリオンの動きは一時停止する。

そして泣き笑いのような、そんな表情になりクシヤッと顔を歪ませながらも、

「……………、久しぶりだね。ティア、スバル……」

「ツ!!」

リオンの表情は暗い。

なにかを必死に堪えているようなそんな声。

だがそれも黒い闇によって覆い隠してリオンは二人に話しかける。

それに対してスバルとティアナは普段なら致命的だとも言うべき大きな隙を作り出してしまっていた。

でも、リオンはそんな二人の様子に静の動作で双剣をダランと構えたままかかつてはこない。

「できれば……こんな形の再会はしたくなかったよ……」

それがちょうどいいと言うべき状態だったために二人の混乱をよそに会話を一方的に続ける。

「り、リオン……」

「ん？ なに、スバル……？」

スバルのからうじて発せた言葉にリオンは平常心で返す。

「ツ！ スバル！ 気を引き締めなさい！ 相手は襲撃者よ!!」

「ティア!？」

ティアナはスバルよりも早く意識を持ち直して、リオンの事情は今ほ心の隅に追いやつてクロスマirrorジユを構えながらスバルを叱咤する。

「ティア、どうして……!？」

「今はリオンを捕まえることだけ考えなさい！ 話し合うことなら捕まえた後でもいくらでもできるんだから!？」

そのティアナの言葉にスバルはようやく落ち着いてきたのか、

「うん!？」

「よし……さて、リオン。貴女がなんでこんな事をしているのか疑問は絶えないけど、今はあかし達のもとに捕まってもらうわよ!？」

ティアナの宣言に、リオンは思わず「クスツ……」と笑みを溢す。

「さすがティアだね。少しでも動揺を誘えたらと思っただけど、すぐに復帰しちゃうんだから……おまけにスバルまで冷静にしちゃうんだから。やっぱり二人はいいコン

「じだね」

「ありがとう……。こんな状況じゃなければ嬉しい言葉だったんだけどね」

表情を険しくさせながらもティアナはクロスミラージュを構えていつでも撃てるという意思を示す。

そして、スバルは心の中で、

(……そうだ。あたしはまだティア、それにエリオ、キャロ、ランにレンの六人で一緒になのはさんやシホさんの教導を受けたり、仕事を一緒にしていきたい。

でも、それは無理なんだ。みんなもそれぞれの進路がある。

ティアはお兄さんの夢である執務官という夢に向かって動き出している。

エリオにキャロも一緒に同じ職場で頑張っていくって言っている。

ランとレンもシホさんと同じ職場で働くと言っている。

あたし自身も念願の湾岸特別救助隊レスキューからお声がかかってきているから、それを頑張りたい。

だからいつまでもみんなと一緒にいられないんだ。そばで一緒に守りそして守られないんだ……。

今回もティアの言葉がなきやあたし一人じゃすぐにティアのような決断はできなかったと思う。

リオン……あたし達の親友。

今はどういう理由があつてこんな事をしているのかすぐに聞き出したいけど、でもきつと間違つた道なんだ！ だからあたし達が間違つた事をしているリオンを止めなきゃいけないんだ！

だから……ツ!!)

そう思い、スバルも覚悟を決めて、

「……リオン。今は理由は聞かない。聞いても馬鹿なあたしじゃすぐに理解できないと思うから。だから今は想いをこの拳に乗せてリオン、君を更正させるよ!! いこう、マツハキヤリバー!!」

《はい。その言葉を待っていました、相棒!》

スバルの言葉にマツハキヤリバーもいつものボディに戻ってくれたと安堵の気持ちになり、エンジンを吹かす。

「うん。スバルもらしきに戻ってきたね。でもね、ティア、スバル。わたしはまだ捕まるわけにはいかないんだ……」

そう言つてリオンは双剣を構える。

そして詠唱をする。

「唸りを上げろ、フオンシエン風神!」

それによって左手の緑の剣から風が巻き起こり出す。

「轟きを上げろ、雷神！」
レイシエン

さらに右手の黄色い剣から雷が発生し出す。

「【電気】と【風王】の魔力変換資質!？」

「リオンはこんな能力も持っていたの!？」

スバルとティアナの驚きをよそに、リオンは双剣を二人に向けて構える。

「うまく避けてね? 当たったら痛いどころじゃすまないから! 『疾風迅雷』サンダーストーム ツ!!」

瞬間、リオンの双剣から膨大な魔力エネルギーが凶器となつて放出される。

それは竜巻に電流が混ざっているようなものであり、もし直撃したら渦の中で感電して一巻の終わりだろう。

「こんな至近距離でこんな魔法をぶっぱなしてくるリオンは容赦を知らないのだろうか?」

今から回避するには時間が足りない。

そのためにスバルはティアナの前に即座に移動して手をかざして、

「レンほどあたしの防御は頑丈じゃないけど、ティアが後ろにいる! だから防いでみせる! プロテクション・EX!!」

「スバル!」

そしてリオンの疾風迅雷とスバルのプロテクション・EXが激突する。

ギヤリギヤリッ！とスバルのプロテクションを削っていく。

「ぐ、ぐっ……………ッ!!」

スバルは必死に耐えるが少しずつだが後ろに押されていく。

「マツハ、キャリバー……………ッ!」

《足場は気にせずにプロテクションに集中してください。相棒の足は私が支えます!》

「スバル、頑張りなさい!」

「うん、ティア! ウオオオオオオー……ッ!!」

スバルはさらにプロテクションに魔力を注ぎ込む。

それでまた拮抗し出す。

「これなら……………!」

ティアナがそう呟くが、そこでリオンがある言葉を呟く。

「シルバールレッド……………カートリッジロード」

「!?!」

ただでさえ強力な暴風なのにさらに威力を上げようというのか。と二人は目を見開く。

そこでティアナはもう防げないとすぐに決断をして、ほぼ無意識にスバルの腰を両手

で掴んでその場をシホ持込みの瞬動術で移動をかます。

「わっ!？」

「くっ!？」

二人はそれで地面に転がるように横たわる。

そして二人がなんとか避けられたが、結果として暴風は勢いを増してスバル達の背後にある監獄施設に向かっていく。

「まさか、リオンの目的は……!？」

「もしかして、あたし達が避けるだろう未来を予測した!？」

そこで見ればリオンの口元には僅かに笑みが浮かべられている。

それは直感的にスバルとティアナは『やばい!』と感じ取れるくらいに笑みだった。

監獄施設に向かっていった暴風があと少しで衝突するということで、しかし、その前に朱銀髪の女性が立ちほだかる。

女性は手を構えて、

「―――I a m ^体 the ^剣 bone ^出 of ^来 my ^て sword ^る――― ……

熾天覆う七つの円環――!!」

そこに桃色の七つの花卉が咲き誇り、疾風迅雷を完全に防ぎ切った。

そう、シホ達が機械兵士達を倒して駆けつけてきてくれたのだ。

「スバル、ティアナ！」

「シホさん！」

「よかった！」

スバルとティアナの二人は頼もしい仲間達が駆けつけてきてくれた事に喜びを覚える。

そう、四箇所に散っていたスターズとセイバーズのメンバーが機械兵士を倒しきって合流してきたのだ。

しかし、それを見ていたリオンは心穏やかではないらしく、

「スバル、ティア……」

二人に聞こえるように声を出す。

それで二人はリオンの方へと向く。

「これだけのエース達が相手じゃ無理があるからね。ターゲット達を殺せなくて悔しいけど、此処は退かせてもらおうね」

それでリオンの足元に転移専用の魔法陣が現れる。

「逃がさねーぞー！」

そこでヴィータがグラーファイゼンの噴射口から炎を吹かしながら回転してリオンの迫っていく。

「そう。まあ、今回は防衛出来ただけでも良しとしましょうか」

『いや、それがそうもいかなかったんよ、シホちゃん』

そこにはやての声が届いてきた。その声はもうにも暗い。

どうしたのだろうとシホは何があつたのか問いかけると、

『悪い知らせや。私達機動六課以外の場所で護衛任務にあたっていた局員達が機械兵士の大群の物量に押し切られてしまつて護衛対象者を殺害されてしまうみたいなんよ』

「なんですつて!?!」

そのはやての報告に一緒に聞いていた全員にも激震が走る。

「敵はリオン、一人だけじゃないって事なんだね……」

スバルは俯いて小さくそう呟いた。

その表情はかなり辛いものがあつたのは言うまでもない事である。

「スバルさん……。先ほどの女性の人は、やっぱり……」

ランが顔を俯かせているスバルにそう話しかける。

それでさらにスバルは拳をギュツと握りしめて、

「うん、そうだよ。彼女がリオン。なんでこんな事をしているのかわからないけど、絶対に捕まえるよ。」

聞きたいことが山ほど出きたから、絶対に捕まえて理由を聞き出す。

だって、なぜかはわからないけどリオン、とても苦しそうだった！

あたし達に助けをきつと求めてきていた！」

「スバル、あんたもそう感じたのね……？」

「うん、ティア。だって、あんな表情がただの暗殺者に出せるわけがない！ きつと、理由があるんだよ！ あたしは最後までリオンのことを信じたい!!」

スバルの涙を流しながらも発するセリフに、黙って聞いていたシホ達も口を出すことにしたのかスバルに近寄ってきて肩に手を置いて、

「スバル。それにティアナも。あのリオンって言う子はどんな子かまた後で聞くことになると思うけど、彼女を助きたい……？」

シホの問いかけに二人は、

「はい、助けたいです！ きつとリオンは……ッ！」

「あたしもです。訓練生時代からの仲ですから少しはリオンの事はわかっていてもいいです。だから彼女の表情には違和感を感じたんです。こう、無理やりやらされているようなそんな感じがしました」

「そう……」

それでシホは少し考え込んだ後、

「うん。わかったわ。それなら私も二人の意思に協力させてもらおうわ」

「いいんですか!？」

そこになのはも近寄ってきて、

「スバル、彼女のこと helped たいんでしよう？ 私も昔、フエイトちゃんを助けたいって

躍起だったからスバルの気持ちは痛いほどわかるよ。だから私も協力するね！」

「なのはさん！ ありがとうございます！」

「さて、それじゃ情報集めでも開始しましょうかね。魔術事件対策課にでも協力を要請してみますか」

シホはアリサ達に協力を仰ぎに行くつもりらしい。

これはもう機動六課だけでは対処できない問題にまで膨れ上がってきているからだ。

管理局全体の問題にまで発展しないことをシホはただただ祈るばかりだった。

第七十七話 『リオンの能力考察、そして黒幕の影

?』

……………先日の襲撃者、リオン・ネームレスの正体が明かされてから一夜が経過した。

どうにかシホ達が護衛した監獄施設の最高評議会の関係者達は守ることができた。

だが悪いことに他の部署が守っていた場所が警備を抜かれて関係者達は数名殺害されてしまったという。

それでシホ達が守った施設は今も嚴重な警備が敷かれていて再度の侵攻を許さない構えである。

そして機動六課は捜査を再度一からやり直していた。

オフィスフロアでは数時間仮眠をとった後にシホが画面に向かって色々と調べていた。

「(リオン・ネームレス……………スバルとティアナの訓練校での同期で情報が正しければ現在スバルと同じ十五歳……………)」

シホはリオンについて色々と調べ上げていた。

しかし、リオンの訓練生時代の前の情報と、そして卒業した後の情報が一切公開されていない事に思わず眉をひそめる。

情報は常に更新しているはずの管理局が彼女だけ情報を公開していないのはおかしいことである。

これはもしやとシホは思い、

「誰かが情報操作をした、としか言えないわね……。でも、そんな芸当、出来る人なんて……」

それでまだ情報が不足気味なために現状は手詰まり状態になってきてしまった。

シホはそれで一回「うーん……」と伸びをしてデスク作業で固まった背筋を柔らかくする。

そこに、「ピタツ」とシホの頬に冷たいものが触れられる。

それにシホは「ヒヤッ!？」と声を上げる。

見ればそこにはファイアットがジューズを持ちながら持っていた。

「ふい、ファイア……。驚かさないと」

「ふふ……。そんなつもりはなかったんですけど、お姉様がそこまで集中しているのも珍しいなと思ひまして……」

「そうかしら? 基本、私は手を抜くという事はしないからいつも通りだと思っただけだね」
「そうでしたね」

それでフィアットは笑みを浮かべる。

それからすぐに表情を引き締めながらもジューズをシホに渡しながら、

「それより、やはり今回の事件は混乱しそうですか?」

「ええ。まだ黒幕が誰かわかっていないから、それにまた被害者が出てしまったからね」
それでシホは眉間にしわを寄せる。

前の世界であつたらどんな手を使つても首謀者を特定したらすぐさまに手を打つていたシホからすれば今の自分は甘くなつたな、と自覚しながらもこれくらいがちょうどいいかもしれないかなとも思っている。

「……………私がお手伝いできずにすみません。お姉様……………」

そこでシユン……………となつてフィアットが謝ってくる。

「そう言わないの。今はフィアはお腹の子供の事だけ考えていて……………。すずかと一緒にしつかりと産んでもらいたいんだから。私達の子供を……………」

「はいです!」

シホがフィアットの頬を撫でながらそう告げると、フィアットも頬を朱に染めて嬉しそうに返事を返してくれる。

「ですが、今回の事件はさつきも言いましたけどスカリエツィ事件並みに業が深い事になりそうです。最高評議会のメンバーが殺害されていくというのがいい証拠ですね」
「そうね。これからまだ増えていくと思うと早く止めないといけないという気持ちにさせられるわ」

それでシホとファイアットの二人はこれからどうするかという気持ちになっていた。

「ところでフェイトの方はどうだったのかしら？　なにか新しい情報でも掴めたかしら？」
「？」

「聞いてみましょうか」

「そうね。ちよつと待ってね……」

シホは今もどこかで捜査をしているフェイトに連絡をとった。

しばらくして画面が開きフェイトの姿が移り出す。

『シホ？　どうしたの？』

「ええ。なにか新しい情報でも掴めたかなと思つて連絡を取つてみたんだけど、状況は捗っている……？」

『うーん……事件現場の捜査はあんまり芳しくないね。ランサーがルーン魔術で探つて
いるけど、あまりいい情報は掴めていないし……』

「そう。困ったわね。少しこちらでも手詰まっているのよ」

『私の方もそうだね。今は昨晚に起きた殺害現場で捜査協力をしているところだけど、いい情報はあまりないから……。せいぜい機械兵士の残骸から少しでも情報が引き出せればという感じで、待つしかないけどね』

「あ、そうね。まだ機械兵士の解析は終わっていないのよね」

『うん。あ、そうだ。新情報かはどうかはまだ分からないけど、今からあるデータを送るね』

それでフェイトはシホにとあるデータを送ってきた。

「これは……?」

『見てみればシホならすぐにわかると思う。それじゃ私、これからまた捜査の再開をするからここで切るね』

「わかったわ。それじゃまた」

『うん!』

それでフェイトはシホ達に笑顔を見せながら画面を切った。

ブツンツ!と切れた後、シホ達はフェイトから送られてきたファイルを見ようとす
る。

「しかし、新情報か……。なにかしらね?」

「さあ、なんでしようか……?」

ファイルを開くとそこには最初の被害者の現場の映像が出た。

何度か撮影された画像らしく、もうシホが知っているものとそう大差はない。

これが新情報……？と思ったが、そこで画面端に書かれている文章を見てシホはある事に気づいた。

「これは……」

そこにはこう書かれていた。

『被害者のバラバラ死体は物理的にありえない切り方をされている。どんなに綺麗に切ったとしてもここまで綺麗には切り裂くことは現代の魔法技術ではほぼ不可能である』……と。

「これは、調べる必要がありそうね」

「そうですね、お姉様。私もこの内容にはピンと来るものがありました」

「フィアも？　だとすると私の考えもあながち間違いないようね。まずは確認を取りに行きましょうか。」

フィア、スバルとティアナは今はどうしてる……？」

「はい。今二人はすぐに出動できるように部屋で待機しています」

「わかったわ。それじゃ確認をしに行きましょうか。リオンさんの事について……」



それでシホはフィアットと別れた後、スバルとティアナの部屋の前にやってきて、呼び鈴を鳴らす。

中から「はい」とスバルの声が聞こえてきた。

「シホよ。入っていいかしら?」

『あ、はい。どうぞ!』

それでシホは扉を開いて中にいるそれぞれマツハキヤリバーとクロスミラージュを磨いているスバルとティアナの二人を見る。

二人の表情はやはりとすべきか少し暗いものがあつた。

やはりリオンの事を考えているのだろう。

それをシホもすぐに察することができたために、

「……………スバル、それにティアナ。大丈夫?」

「はい……………大丈夫です」

「あたしもです」

気丈に笑顔を見せながらそう言うってくるが、それはどう見ても無理している笑顔にしか見えなかつたためにシホは何回か視線をさまよわせた後に、二人の手に自身の手を乗

せて、

「無理はするものではないわ。鈍感な私でもすぐに察せるくらいに今二人の顔は落ち込んでいるわ」

「……………」

それで二人は無言になる。

しばらくしてスバルは肩を震え出させて、

「…………シホさん。リオンは、リオンはなんでこんな事をしてしまっているんでしょうか…………？」

「スバル…………」

「きつと、リオンにもなにか特別な深い事情があると思うんです。昨日のあの表情がそれを物語っているのは確かなことでした」

「そうね…………。きつとなにかあるのでしようね。ティアナもなにか思うことはあるんでしょうか？」

シホは涙目になっているスバルの背中を優しくさすりながらも、ティアナにそう問いかける。

ティアナは泣きはせずとも苦い表情にはなっていた。

普段のクールさから考えればなかなか見れるものではないが、親友のためだと思えば

なにも不思議なことではない。

それだけスバル、ティアナ、そしてリオンの三人は親友だつてことだろう。

「そうね……。私から言えることは最後まで信じてあげることよ」

「信じてあげること、ですか……?」

「そう。決して訪れるだろう結末は綺麗なものではなくても、見限つてしまつたらそこでリオンさんとの絆は切れてしまうわ。昔にね……」

そこでシホは少し昔のことを思い出しながらもある話をし出す。

「私にも親友と呼べる友がいたの」

「それって……もしかしてこの世界に来る前の話ですか?」

「うん、そう。その人はね、性格がかなり捻じ曲がついていたけど私にとっては数少ない友達だった。」

でも、とある事情があつて敵対同士になつちやつてね。最後まで分かり合えることは決してできなくてその人はあつてただけど死んじゃつた……」

「そう、なんですか……」

そう。シホが語る友というのは間桐慎二の事である。

彼も聖杯戦争という歪んだ戦いの末に死んでしまつた一人である。

シホ、もとい士郎は最後までわかり合おうとしたがそれは叶わずに終わつてしまつ

た。

シホはスバルとティアナの二人にはそんな悲しい想いをして欲しくないのだろう、シホの一方的なエゴかもしれないが語りをする。

「だから、二人にはそんな悲しい事にはなつてほしくないのよ。だからなにがあつてもリオンさんのことを信じてやつて。

しつかりと捕まえて、事情を聞いて、なにか問題があつたなら二人で手助けしてやるのよ。私達も昨日も言つたけど協力するわ。だから気持ちをしつかりと持ちなさい」

「はい！」

それで二人は重しになつていたなにかが抜けたのか暗い表情ではなくなつていた。

それでシホも当分は心配はいらないかなと思つて、本来ここに来た理由を思い出したので二人に聞くことにした。

「それでだけど、ねえ二人とも？ リオンさんだけど、なにか特別な力がいくつかあるとか言う話を聞いたらしいわね？ 少し私にも教えてくれないかしら？」

「あ、はい。いいですけど……」

「なにか気になることでもあつたんですか？」

スバルとティアナはそれで怪訝そうにシホに尋ねる。

シホも気になつているために、

「ええ。ちよつと確認しておかなくちゃいけないと思つてね」

「わかりました」

それで二人はリオンの知っている限りの能力を教えてくれた。

それで主が上がったのが先読みの能力。超能力とも言うべき能力で内容は『五秒先の未来が見れる』というもの。

「五秒先の未来がね……。少し厄介な能力ね」

「はい。五秒先の未来を見ることで、いつもあたし達が起こすだろう騒動を事前に伝えてくれました」

「そう。それではなにか能力を持つて言つてなかつた?」

「そうですね……」

それでティアナは少し考えながらも、

「あ! それとなにか特殊な目を持つていふ話と聞ききました。詳しくは教えてくれませんでしたか……」

「そう。なるほどね……」

それでシホはなにかに思い至つたのか少しすつきりした表情になる。

「シホさん? 何かわかつたんですか……?」

「ええ。それで少し話は変わるけど、昨日のリオンさんの戦いでなにか違和感とかな

かった？ 違和感に感じた事ならなんでも言ってみて」

「……えつと、あつ、そうだ！ ティアのフェイク・シルエツトがリオンには全く通用しなかつたんです！」

「……通用しなかつた？」

それでシホは少し視線を鋭くする。

そのシホの変化に気づいたのだろう。

二人は少し緊張しながらも、

「は、はい。あたしとスバルの数人はいる分身をリオンはまったく無視してスバルに一直線に向かつて来たんです」

「それに思い返せばあたしの魔法も切り裂いた時に破裂するだろうはずなのにすぐに消える、いえ……消滅といってもいい感じに消えちゃいました」

「ティアナのフェイク・シルエツトを無視して、ね……。私でもたまたまに騙されるのに……」

そう。シホも教導中に希に行う練習試合ではティアナのフェイク・シルエツトには思わず舌を巻く思いを何回かしている。

解析魔術を使えばどうということはないが、なにも練習試合で使うほどでもないという事で本物の戦闘以外では解析魔術は使用していないのだ。

それで今回の護衛任務もシホは解析魔術を使い、すぐさまに敵が機械兵士だとわかったのであるわけだし。

「そして切り裂かれて消滅するように消えた魔法……」

消える。それはまずありえないのだ。

なにかあろうと魔力は一回四散するものだ。

それが魔力反応もせずに消えるということは……。

確信に近づいてきた事をシホは思いながらも二人にある事を問う。

「その戦い方、どこかで体験した事はない? いえ、多分しているはずよ」

「えっ……?」

「体験ですか……? 今回が初めてだと……、いえ」

そこでティアナは何かに気づいたのか言葉を止めて考え始める。

シホも思い至ったわね、と思いながらも話の続きを聞く。

「何回か体験しています。そう、サーヴァントの皆さんとの戦闘で……!」

「あーっ!?! そうだ! 志貴さんだ!」

「やっぱりね」

そう、フォワードの皆と隊長達 VS サーヴァント達という本格的な戦いも何度もやっているためにほとんどシホ達の能力は判明しているのである。

その中で志貴の戦い方はアサシンのクラスでもあり一撃でもくらったらダウンしてしまうほどに耐久値が低いので、練習試合でも魔眼を使用しているのだ。

そう、〃直死の魔眼〃を。

「これで分かったわね。まだ本当かはわからないけど、リオンさんのその目の能力は〔直死の魔眼〕だわ」

「直死の魔眼……」

でもそこでシホの中ではまた疑問が発生する。

リオンはその直死の魔眼をどうやって会得したのか……？　そしてどうやって制御しているのか……？と。

志貴やライダーのように眼鏡に仕掛けがあるわけでもないし。

そもそも魔眼殺しの眼鏡は蒼崎橙子クラスの魔術師しか作れないものである。

この世界ではそんな魔術師などいるわけがない、とは言い切れない。

現に隻眼の魔術師……ヴォルフ・イエーガーと言ったまだ未知数の強力な力を持つ魔術師がいるのだから。

「(リオンさんについてはある程度推測できたけど、まさかヴォルフ・イエーガーが裏で糸を引いているんじゃないかしら……。これはもしかしたら本当に魔術事件対策課の出番かもしれないわね)」

現状、事件についてはなんの進展もなかったが、また新たな謎が発生した事は確かなことであつた。

第百七十八話 『とある模擬戦と苦しむ声』

シホがスバルとティアナの話を聞いてから数日、フォワード達はまた教導の中にいた。

その早朝訓練の時間。

「おしー！ いくぞ、お前等！」

『はいー！』

ヴィータが声を張り上げてシユワリベフリーゲンを実戦用に放ちながら訓練をする。

それをフォワード達は避けるか防ぐなど色々な方法を取っていた。

そしてそれをなのはとシホがモニターで観察している方法をとっている。

いつもの教導の最後にはアルトリア・ネロ・シホの三人か、なのはとオリヴィエの二人、時間があつた時はフェイト・ランサーペアによる本格的な連携戦が待っている。

そのために最後まで気が抜けないフォワード達である。

しかし、今日は一味違っていた。

教導の訓練の最後に行う連携戦がアルクエイドと志貴によるペアが待ち構えていた。

「え……今日はアルクエイドさんに志貴さんですか？」

「うん、そーよ。これははやての方針でねー。詳しくは聞いていないんだけどね」

そう言つてアルクエイドが「あはは」と呑気に笑う。

その一方で志貴はというと、

「アルクエイドはともかくとして「あ、志貴ひどーい！」うるさいぞ！……とにかく今日は俺の直死の魔眼の訓練にも付き合つてもらうぞ」

アルクエイドを適当にあしらいながら志貴がそう言葉を発する。

志貴は魔眼殺しの眼鏡を外してその目を青く光らせる。

同時に志貴の視界にはツギハギだらけの線が出現する。

それは当然、スバル達にも見えていて死線が丸見えである。

志貴はもう英霊ともあり慣れたものだが、しかしこれを長時間施行するにはやはり神経をすり減らすために中々できないことだが、今回は少し我慢しながらも模擬戦に参加することにしたのだった。

志貴は七ツ夜を構えながら指定位置にアルクエイドとつく。

それにスバル達は不安そうにしながらもそれぞれ構えをする。

特にリオンの能力（仮ではあるが……）をシホによつて知らされてからすぐにこの模

擬戦というのはなにかあるとスバルとティアナはすぐに思い至った。

だが、もう始まろうとしている模擬戦は止める事はできない。

『それじゃ、一分後に始めるねー!』

そこでなのはの通信が聞こえてきたために、ティアナ達は一分間の間に作戦会議に入る事にする。

「いい? アルクエイドさんの怪力は言わずもがな強力よ。でも、それは避けきればなんとかなる、と思う……!」

「……ティアさん。そこはできれば言い切って欲しかったです」

エリオが少し弱腰でそう呟く。

それはティアアナも分かっているために「ごめんね……」と前置きの言葉を言って、

「でも、アルクエイドさんの攻撃は一撃でも当たったらそこでダウンだと思いなさい!」

「は、はい……! フリード、最初から本気で行こう!」

「キョクー!」

それでキャラコが竜魂召喚をしてフリードが本来の巨大な姿へと早変わりする。

「エリオ君!」

「うん!」

それでエリオがフリードに乗り込みその手綱を握る。

「エリオ君！ 前衛を任せたいけど今回はフリードと一緒に援護に回ってもらっていいかな!？」

「任せてよ、キャロ！」

それでエリオとフリードは飛翔して空に舞い上がる。

「うん……。前衛のエリオを欠くのは少し痛いけど、そこはセイバーズのランとレン、そしてあたし達の攻撃の要であるスバルに任せるわ！ あたしは背後で援護を、キャロは全員分のブーストを！」

「任せてよ、ティア！」

「はい！ アルクエイドさんの攻撃は僕が防ぎ切ります！」

「切り込みは私に任せてください！」

「わかりました！ 頑張ります！」

それで四人は元気よく声を上げる。

それでティアナは「後は……」と残りの命令を口に出す。

「後は、そうね。志貴さんのあの変幻自在な動きにも厄介だけど、一番注意するのは直死の魔眼よ！ あれはあたしのフェイク・シルエツトを完全に無効化できる力を持っているわ！」

そう、志貴の視界には生きているモノには必ず死の線と点が写って見えるはずだが、

フエイク・シルエットによる幻術は死の線が映りにくい……。

多少は映るだろうが、あきらかに人のそれと比べれば薄いものだろう。

それで志貴はそれを戦力としてみず、ただの幻影と判断できるために無視できるのだろう。……それでも志貴は油断せず、に切り裂くとは思わなかった。

そのために志貴の直死の魔眼には幻術は通用しないということになる。

これは事実上ティアナの得意技を初手から封じられているといつても過言ではない事象だ。

アルクエイドは多少誤魔化せる事はできるだろう……。

しかし、志貴には通用しないのだからアルクエイドと今回は組んでいるということもありうまいように切り伏せられるだろう。

ただ、それ以前に志貴の実力は聖杯大戦で証明されたように本気を出してもアルクエイド以下なのだから、パワーバランスははつきり言ってあきらかにアルクエイドはパラメーターがカンストしていると言ってもいい。

これでは志貴とアルクエイドにとつてはフォワードのみんなが一斉にかかっても赤子の手をひねる程度の気分で撃墜されるのは目に見えている事実である。

しかし、あくまで模擬戦。されど模擬戦とも言われたらそれでお仕舞いだが、一撃……そう、一撃だけでも二人に与えることができればそれで模擬戦は終了する。

その一撃を六人で導き出すのだ。

『それじゃ、始め!』

そこでのなのは始めのコールがかかった。

「いくわよ、みんな!」

『おうッ! (はいッ!)』

それでまずキャラが、

「ブーストアップ×5!」

全員の体にブーストをかける。

それによって打撃力・防御力をアップさせた。

続いて、

「アクセラレーション×5!」

次に使用したのは移動系魔法の効果を上げる魔法。

それによってまずスバルがいの一番にアルクエイドへとウィングロードを展開して

突貫していく。

「うおりゃああああーッ!!」

「せい♪」

「うわっ!?!」

アルクエイドの指先一弾きだけでスバルのリボルバーナックルの拳は逸らされてしまった。

「ちよつ、指先だけでつて、それつて反則ツ!？」

しつかりとツツコミをしつつもウイングロードを旋回させて一回その場を離脱していく様はさすがである。

しかし、アルクエイドにはスバルの重たい拳も指先だけで反らせるほどの力を持つというのは、さすが公式チートなだけはある。

スバルは内心でプライドを少し傷つけられていた。

「うわあ……さすがアルクエイドさん」

「…………気をそらしている暇を与えらると思ふかい？」

「ツ!？」

スバルの移動する隣を追尾する志貴の姿があつた。

さすが敏捷のランクがA+なだけはある。

「くっ!？」

「スバルさん！ 援護します！ いくわよ、レン!？」

「うん！ ラン姉さん！ アウル、ザンバーを!？」

《わかりました！ シールド展開!》

ランはバルムンクの刃に氷を宿らせる。

レンも同様にシールドザンバーを展開させて氷を纏わせる。

ここで二人の魔力変換資質である「氷結」が効果を発揮する。

そして二人は剣とシールドザンバーを構えて、

「斬氷閃！」

二人は氷の刃の斬撃を放ち、それは志貴に殺到する。

「……やられると思うか？」

高速で志貴はナイフを振るい斬氷閃の刃を二本とも切り裂いてしまった。

「そう簡単にいくと思ったら……、ッ!？」

斬氷閃の影に隠れる形でティアナのクロスファイアシユートが隠れて志貴に迫ってきていた。

「なるほど……考えたね。しかし」

さらなるスピードで志貴はなんなく切り裂く。

そしてまず迫ってきていたランとレンの二人に掬い上げからの蹴りを見舞った。

それをレンがアウルヴァンデイルのシールドで防ぎ、ガンツ！という鈍い音を鳴らせる。

レンが防御したことを好機と見たのかランがレンの背中を蹴り空へと飛び上がり、セ

カンドモードの大剣へと変化させて志貴へと上段から振り下ろす。

だがそれは志貴の前に突如として移動してきたアルクエイドの腕で防がれる。

「私の上段からの振り下ろしを!？」

「せーのッ!」

アルクエイドはランの大剣を掴みながらラン自身も持ち上げてレンに投げ飛ばした。

その腕力は相当のものである。

「え? うわっ!」

レンはランをそのままぶつけられる事になり受身も取れずに後ろへと尻餅をつく。

「ら、ラン姉さん、バルムンクが重い……!？」

「ご、ごめん!、すぐどくから!」

バルムンクはセカンドモードは大剣のために重さはファーストモードの2.5倍に

まで上がっているのです。それがそのままランごと乗れば相当の重荷になる。

それで二人してあたふたしているところに、

「いっくよー!」

腕を何度も回してアルクエイドが拳を振りおろそうとしている。

「これはやばい!?! と二人は思ったが、そこに、

「フリード! ブラストフレア!」

「キョクー！」

キヤロの声にはなくエリオの声に反応して攻撃をしているのは気にしてはいけな
いが、フリードが口から火球をいくつも放ち、アルクエイドに浴びせる。

だがそれも腕の一振りで軽く消されてしまった。

「やっぱり反則級ですな……」

そう言いながらも起き上がりながら直様に離脱してまた距離を開けて攻撃を放つ
ンとレン。

ちなみにだが、当たると、弾くでは意味合いが違うので当たり判定ではない。

アルクエイドがランとレン、エリオと相對している間に、志貴がすでにティアナと
キヤロをその視界に捉えていた。

「させない！」

スバルがそこに拳を構えて志貴に迫ってくる。

志貴は迎撃をしようとする、が……突如として目の前にティアナの弾丸が迫ってくる
ことに気づく。

しかし志貴の目にはすぐに幻術だと悟る。

スバルの拳と幻術の弾丸、どちらを迎撃をするかは考えるまでもなかった。

スバルの拳を捕らえて、柔道技のように投げ飛ばす。

それでスバルは地面に叩きつけられてしまつて口から一気に溜まつた空気を吐き出す。

「うう……」

頭をグワングワンと揺らしながらもスバルはなんとか立ち上がろうとするが、

「沈め……」

そこに志貴の手刀が入つてついにはスバルはそこでダウンしてしまつた。

「これで一人……」

「スバル……ッ！」

ティアアナが叫ぶが、そこに続けざまにアルクエイドの声が聞こえてくる。

「志貴ー！ 3人とも倒しちやつたよー！」

そこには地面に転がつているエリオ、ラン、レン、そして小さい姿に戻つて落ちてい
るフリードの姿があつたために前衛はこれで全滅。

それでティアアナもキャロも悔しそうな表情になる。

「でも、ただやられるわけにはいかないのよ！ キャロ、底力を見せるわよ！」

「はい！ ティアさん！ さらに倍のブーストアップ！」

それでティアアナの能力が向上する。

「いくわよ！ サードモード！」

それでティアナはブレイズモードを起動する。

「照準固定！ ファントムブレイザー!!」

ティアナ渾身の狙撃砲が放たれる。

それは真つ直ぐに志貴へと向かっていく。

志貴からしてみれば避けようとすれば避けられるが、しかしその諦めない気持ちに敬意を買って切り裂こうとナイフを振ろうとする。

ナイフとファントムブレイザーが衝突する後一歩のところまで、

「シフト！ 拡散!!」

極太の狙撃砲がそこで幾重にも分散して志貴の体に命中していく。

「ぐあっー！」

『そこまで!』

そこでののはの模擬戦終了の言葉が聞こえてくる。

どうやらなんとか勝ちを拾えたわね、とティアナは大きい息を吐く。

「やれやれ……やられちゃったか」

「もう、志貴？ しっかりとしてよねー？」

「す、すまん……アルクエイド。……それより、ティアナちゃん、少しいいかい？」

「あ、はい。なんででしょうか？ 志貴さん」

突然志貴に話しかけられたので姿勢を正して視線を合わせる。

「これで少しは直死の魔眼対策はできたかな……?」

「あ、はい！ なんとなくですができました！」

「そうか。よかった……俺は教えるのは苦手だからね」

「いえ、いい戦いを学ばせてもらいました」

「はい！」

そこにキャロも真剣な表情で頷いていた。

「それなら、いい……必ず友達を救ってやるんだぞ！」

「はい！ 必ず！」

それでフォワード陣 VS 志貴・アルクエイドの模擬戦は辛勝だが勝つことはできた。

しかし、これで改めて実力の差を思い知らされたティアナ達なのであった。



……とある管理外世界の薄暗い廃墟の中、そこではリオンが廃墟の中で横たわりな

がらも苦しみに必死に耐えていた。

「ぐうっ！ うああああ……！」

何処からかギリギリと何かを締め付ける音が響き、片手で強く胸を抑え、悶え苦しむリオン。

そこに空中に浮かび上がる画面からとある人物の顔が映し出されていた。

その人物は男性であつて冷酷に、そして嘲笑うかのような声で、

『リオン……一体いつまで遊んでるつもりだい？ 俺様はもうすぐ“あの方”に報告せ

ねばならんのに何故あの小娘共相手に戸惑つた？』

「そ、それは……。す……すみません……——さん……次こそは……必ず……」

そう答えたりオンに対して男はニヤリと下衆な笑みを浮かべながらある命令を下した。

『そうか……それじゃあお前には……』

それでリオンは男性からされた命令に目を見開いた。

それは『スバルとティアナの二人を殺してこい』という命令だったからだ。

リオンは驚愕に満ちた顔で「そんな……」と悲壮に呟く。

男はそんなリオンを無視して続ける。

『場所は後でコチラから連絡する。楽しみにしている』

「で、でも……!」

『ほう……? 俺様に口答えでもしようというのかい?』

「い、いえ……そんな事は!」

『ふむ、ここでお前にバツを与えておこう』

画面越しで男はなにかのコアをギュツと握る。

途端、リオンの胸の痛みがさらに悪化しだして、またしても苦しみ出す。

『これでいう事を聞く気になったかい?』

「うああああッ!」

しかしリオンはなんとか聞こえているだけであんまり余裕はなかった。

そして男は釘を刺す様にこう続けた。

『嫌ならかまわないんだぞ? あの小娘共をコチラに来るよう、手続きして実験動物と

して扱うだけだ』

「ッ!!」

リオンは苦虫を噛み締める様な表情で「わかりました…」と呟いた。

『それでいいんだよお。それじゃいい知らせをまつてるぞ、リオン』

それで通信は切れる。

そして辺りが静寂に包まれるとリオンが何かを押し殺し、堪えている声が響いた。

「うっ……ひつく……ティア、スバル……ひつく……助けて……」

リオンの鳴き声と助けの言葉だけが廃墟の中で虚しく木霊するのであった。

第百七十九話 『魔術事件対策課への訪問』

S i d e シホ・E・S・高町

……あの事件からすでに一週間が経とうとしている。

それなのに未だ手がかりは無しと来ている……。

ここまで来るとスカリエッティ事件のように長丁場になりそうだと私達機動六課は思うようになってきていた。

仮りそのめの日常が今日もまた過ぎようとしていた。

そんな中、私は魔術事件対策課へと向かっていた。

さすがに私達だけで調査するには限界を感じてきていたのかもしれないからだ。

例によって他の部署も様々な場所で最高評議会の息のかかったメンバーの護衛に当たっているが、いつ機械兵士やリオンさんに襲われるかもしれないかという恐怖に苛まれていくという。

それで私達機動六課も、次は誰かの護衛につかされるか分らないから厄介だ。

護衛する人物が善良な人ならまだいい……だけど、中にはこの事件に期を見て逃げ出そうとする輩もいるそうで護衛と脱走の二重の危険性を孕んでいるという少し厄介な事態にまで及んできている。

それでもし脱走して、そしたらそれが責任問題に発展し、さらに果てには脱走後に殺されたという事になったら管理局の面子を潰す事にまでなってしまう。

「(はあ……厄介極まりないわね)」

魔術事件対策課へと続いている道を歩きながらも私は色々な思考を巡らせていた。

この際、強引にでも私一人でのフリーでの捜査を——……。

そんな思考が頭を過ぎる、だがすぐに頭に機動六課のメンバーみんなの顔が浮かんでくる。

そう、もう昔のように無闇矢鱈に動き回って敵を余計に増やす行為をして、その代償として私の帰りを待っているフィアとすずかの二人やみんなが悲しみ涙する光景など見たくはない。

昔のようにすべてを救う正義の味方の時の私だったのなら遠慮など後回しにしていたのだろうけど、あいにくともう私の正義は“大切な者達を護れる正義の味方”に変わっているのだ。

だから命令違反をしてまで無理や無茶をしたらみんなに……特にイリヤに叱られてしまう。

そんな事を思っていたらちようど思考が読まれていたのだろう、脳内にイリヤの思念通話が伝わってくる。

《そうよ、シホ。私はいざとなったら気絶した時のシホの体を操作して守ってやれることはなんとかできるわ。だけど、もうシホの命はシホ一人だけのものじゃないんだから……。》

アーチャーみたいに自らが嫌われ役になったり、キリツグのように十のうちの一を切り捨てるなんて考えをしたら……今度こそ、私はなんとしてでもシホを、コロスワ……》

あはは……。まいったわね。

イリヤにはすべてお見通しのようなのである。

伊達に私の中にいるわけではないということだ。

《うん、わかっているよ、イリヤ。私はもう道は踏み外さないわ》

《うん。わかっている》

なので思念通話で感謝の返事を返しておいた。

だけど、イリヤはこうして少しでも私が理想をまた変えようとする考えを起こした時

には必ず私のストツパーとなって私の正義を思い出させてくれる。

感謝はしているし、面倒などと思う事もない。

いつでもイリヤと一緒にいれる事が私にとってはとても嬉しい事なんだから、今のこの温かい日常を過ごしていくのも悪いものじゃないと実感させてくれる。

と、そこに霊体化していたネロからも思念通話が伝わってくる。

《そうだぞ、奏者。余は奏者のその歪ながらも真つ直ぐと進む綺麗な魂と心を心の底から気に入っている。

だから奏者はこれからも変わらずにいてくれ。余を……幻滅だけはさせないでくれよ?》

ネロの少し不安な気持ちが進められている言葉が聞こえてきて、

《………ええ。ネロ。それにイリヤ。そしてここには今日はフォワード達の教導でないアルトリアにもだけど、不安や心配はかけないように努力はするわ》

《うん! それでこそシホ。私の可愛い妹ね!》

《だからこそ奏者の事が余は好きなのだ!》

自惚れているわけじゃないけど、私は愛されているんだなあ、としみじみと思う。

なんで昔はこの幸せな気持ちの事にも気づけないほどに駆け抜けてしまったのだらうと思う……しかし、それでも後悔はしない。

それがリンや大師父、橙子さんが助けてくれなければ本来辿るべきはずだった私の進む道の一つだったのだから。

この今の道も決して後悔はしないだろう。

私は決して後悔ということはしてはいけないのだから。

過去を清算してやり直すなどという愚行な行為は絶対にしないと誓う。

.....

.....

.....

.....そうこう考えているうちに魔術事件対策課の隊舎へと到着していた。

それで隊舎の中へと入ろうと受け付けに向かうとちようどそこには少しクセっ毛があつて赤い髪が目立つカレンさんがいたので挨拶をする。

「こんにちは、カレンさん。久しぶりですね」

「あ、シホさん。こんにちは、久しぶりね。今日シホさんが魔術事件対策課に来た用件つてやっぱり今話題の、あれ.....?」

カレンさんはそれで少し苦い表情になる。

もうなんとなくだが察しているのだろう。

私も別に隠す必要もないし、

「はい。最高評議会のメンバー達が次々と殺されていつている事件について部隊長のミゼさんに相談を持ちかけに来たんです」

「やっぱりね。ま、私もそろそろ来る頃じゃないかなーとは思っていたのよ。それじゃ元々シホさんはこの部署だけどシホさんを知らない人もいると思うからミゼ部隊長のところまでは私が案内するわ」

「お願いします」

それで受け付けも済ませた後に私はミゼさんのいる部隊長室までカレンさんに連れていってもらっているところである。

だがその道中、通り過ぎる道すがらではよく女性局員の黄色い悲鳴が何度も聞こえてきていてなんだろう、と思っているとカレンさんが苦笑気味に、

「シホさんも人気者よねー」

「えっ？ 今のって私に對してだったんですか？」

「あれ？ 気づいてなかったの？ シホさんはスカリエツティ事件であれだけ活躍したんだからこうなるのはある程度は予想はついていたと思っただけだね」

カレンさんがそう言ってくれる。

……た、確かにそうだけど、やっぱり改めて騒がれると少し気後れしてしまうのは致し方ない。

頬が赤くなっていないか心配である。

「ま、行く先々で言われると思うから慣れることね」

「はい……………」

そんなこんなで私は部隊長室までカレンさんに案内してもらった。

到着してカレンさんは用があると言ってその場を後にしていった。

「さて……………」

それから私は深呼吸をして扉をノックする。

『コンコンツ』と扉を叩くと中から『はい』という返事が返ってきた。

それで私は扉を開く。

そこではミゼさんがモニターに目を向けて色々と作業をしていた。

そこにはかつて周りからの劣等感から来る後ろ向きな姿など微塵もなく、まさに部隊長と言わんばかりの立派な姿があった。

その姿を見て私は内心では（…………あの戦いから十年、成長しましたね）と思う。

デスクワークでキーを叩く音がしばらく続き、キリの良いところに来て来たのだろうか

…………開いていたモニターを閉じて私に目を向けてきて、

「待たせてしまつてごめんなさいね、シホさん。ちよつと外せない案件があつてそちらを優先してしまつたわ」

「いえ。構いません。それより……あれから成長しましたね、ミゼさん」

「えっ……急に改まつてどうしたの、シホさん……？」

「いえ、ただ……ディルムツド・オディナの言葉を真つ直ぐに受け止めて成長したミゼさんの姿を見たら、なんと言いますか立派になられたんだなど……」

「まあ……」

それでミゼさんも嬉しかつたのか頬を赤く染めて少し嬉しそうになる。

そして少し黙つてしばらくして、

「……ありがとう、シホさん。どれもこれも全部シホさんが手伝つてくれたおかげなのよ？」

魔術に才能があつてもやっぱり能力としては低い私を見捨てないでここまで育てて部隊長の座にまで上り詰めさせてくれたのは、シホさんの教えがあつたからよ」

「そうですか。よかつたです」

それで私とミゼさんは少ししみじみとしながらもお互いに笑みを浮かべる。

昔は聖杯大戦で敵対関係ではあつたけれど、こうしてみれば関係も変わつてくるものね。

十年前の私達からは考えられないことね。
お互いに、だけど。

そう思っているとミゼさんの前にモニターが開く。

モニターの先には少し幼そうな女の子の姿が映っていた。

『ミゼ部隊長さん！ お飲み物をお持ちしたのです！』

「あら。ありがとうね、ロツテ。入っていいわよ」

『はいなのです！』

扉が開き、そこには飲み物が入ったカップとそれが置かれているお椀を持っている子がいた。

外見は銀髪のロングで蒼い瞳の片目にモノクルをかけている身長はキャロと同じくらしいの約135cmくらいの女の子である。

その子には私も見覚えがあり、機動六課に配属される前までは私が魔術を鍛えてあげていた子の一人である、今は確か十三歳の名前を『ロツテ・ヒナ』。

それでイリヤを思わせるその外見も相まって可愛らしいので、ついロツテの頭に手を乗せて撫でる私がいる、と。

「久しぶりね、ロツテ」

「ひゃあつ！ くすぐったいのです、シホさん！ でも、お久しぶりなのです！」

それで誰もが見惚れるような満面の笑顔を私に向けてくるので余計頭の撫でを強くしてしまふ程である。

この子は魔術事件対策課では所謂マスコットキャラとしてのキャラをその手にしているのである。

その低い身長も相まってやっぱり可愛いのよね。

「ほんっー！」

そこで今まで黙っていたミゼさんの咳払いが聞こえてくる。

あ、いけないわね。用件を忘れていたわ。

それでロツテの頭から手を離す。

だが……、

「あっ……」

しかし、そこでどこか寂しそうな表情をするのは狙ってやっているのかは定かではない。

もし狙ってやっているのだとしたらかなりの策士の才能があるだろう。

「ごめんね、ロツテ。また後でね」

「はいなのです。あ、お茶を淹れてきましたので飲んでください。自信作なのです」

それで私の席とミゼさんの席の前のテーブルにお茶を置くロツテ。

その作法はさすが慣れていようで不備はない。

お茶淹れが板についてきているわね。

それでロツテはお辞儀をして「それでは失礼しました」と言つて部屋を出ていった。

「ロツテ。いい子に育つてきていますね」

「ええ。彼女は最初の頃は記憶喪失で情緒不安定だったんだけど、今では義理の姉のスノウのおかげもあつて少し大人しいけどそれでも優しい子になっているわ」

「そうですか」

ちなみにスノウという人物は本名『スノウ・ヒナ』。

ロツテと同じく魔術事件対策課に勤めている階級は二等陸尉。

ロツテを少し成長させたような外見で十七歳だというのに身長が低いことがコンプレックスになっている。

でもそれを気にせず義理の妹のロツテを面倒見ているいい子である。

閑話休題

それからロツテの淹れてくれたお茶を一口味わつて静かな空間をミゼさんとともに味合う。

そしてしばらくしてミゼさんがカップを置き、「さて……」と前置きのセリフを言つて、

「それじゃ真面目な話し合いといきましょうか。シホさん」

「はい。それで本日のご用件ですが、本当なら機動六課部長のはやてが来るのが普通なのですが、今の事件で手が塞がってしまつて代わりに私が本日来させてもらいました」

「そうなの。はやてちゃんも大変よね。初の部隊長の座だから。最初の頃、私も大変だった記憶があるわ」

「そう言つて懐かしむミゼさん。」

しかしすぐに姿勢を正して、私の方に視線を戻してくる。

視線は逸らさずに挑む。

これ、交渉事の鉄則である。

そうすれば相手の感情や考えていることがなんとなくわかつてくるからだ。

なので私も回りくどいことはせずに単刀直入で本題に切り込もうと思う。

「まず、私達機動六課が今受け持ちしている案件は最高評議会のメンバーを狩る者達の追跡任務となっています」

「ふむ……」

それで今わかるあたりのデータが入ったメモリーをミゼさんに渡して、

「後ほど目を通しておいてください。これには今判明している事が入っています」

「これを私に渡すということは、つまりそういうことなのね？」

さすがミゼさん。するどいわね。

隠す必要もないので「はい」と答えた後に、

「私達機動六課と魔術事件対策課の合同捜査を行いたいと考えています。そのメモリーの中に理由は書いてありますが、どうにもこの事件の影に隻眼の魔術師……ウォルフ・イエーガーの姿がありそうだと私達は予測しているんです」

「隻眼の魔術師が……。だとしたら私達も動くべきね。魔術による事件が起きるかもしれないという予測だけで私達が動くのに何も問題はないわ」

「ありがとうございます。できる限り情報が入り次第ミゼさんにもデータを送りますので、魔術事件対策課の魔術師達にもすぐに出動できるように手配しておいてください」
「わかったわ。アリサに指示を出しておくわ」

「お願いします」

交渉成立となり、「これから短い期間だけよろしく」という意思表示の握手を交わした後は、今の魔術事件対策課の近況などを聞いている時だった。

誰かからの通信が入ってきたのは……。

私は一回ミゼさんに視線を送り、ミゼさんも『出ても大丈夫よ』とウインクをしてくれたので気兼ねなく通信に出ることにした。

相手はフェイトだった。

なにか情報が入ったのだろうか……？

「どうしたの、フェイト……？」

『あ、シホ。うん、ちよつと情報が出てきてね。すぐに機動六課に戻ってきてもらってもいいかな？』

「ええ。大丈夫よ。……でも、今この通信では話せないことなの？」

『……うん。ちよつと特殊な案件なんだ。機動六課の身内に関するの事もあるし』

それで私はなんとなく予想できた。

おそらくリオンさん絡みでスバル、ティアナ関係だろう、と。

「ええ、わかったわ。少し帰りが遅くなるけど帰らせてもらおうわ」

『早く帰ってきてね』

「ええ」

それでフェイトとの通信を切り、ミゼさんの方へと向き直り、

「という訳ですみませんがすぐに帰らせていただきます。ミゼさん」

「わかったわ。なにか事情がありそうだしすぐに帰った方がいいと思うから。私に話し

てもいい情報だったら教えてね」

「はい、それでは失礼しました」

それで私は部隊長室を後にして魔術事件対策課の隊舎から出ると急いで機動六課への帰路の道を進むのであった。

第一百八十話

『幕間

ミゼ・フローリアンの出世街

道』

Side ミゼ・フローリアン

シホさん達機動六課が何かしらの新情報を掴んだのだろう、フェイトさんから通信が入ってくるなりシホさんは急いで機動六課へと帰っていった。

それを私は隊舎の外で見送りながら、ふと訓練場へと足を運ぶ。

そこでは様々な魔術の訓練光景が目に入ってくる。

時には属性による直接ダメージから始まり、自作したのであるうゴレムを操って戦うものや、手から糸でも垂らして操作しているのだろう武器が空を行き交っている。

その中で特に目に入ったのがアリサさんが拳や足に属性ゆえの炎を纏わせてアサシンさんと武術による訓練をしているというもの。

アリサさんは昔からシホさんに師事を受けてきたこともあり、その格闘センスは魔術事件対策課の中でも1、2位を争うほどの腕前である。

アサシンさんもアリサさんの成長が嬉しいのか、たまにはあるが口元を綻ばせて、「やりよるな、アリサ。儂の攻撃を訓練とはいえこう何度も受け流すとは……もう鮫島より強くなっているのではないか？」

「それが心の底からの言葉なら本当は嬉しいけどね、アサシン。でも、本当のことを言いなさい。あたしはまだまだだつて、アサシンから一本を取るまではあたしはこの鍛錬は緩めないわよ！」

「くくつ、よかろう。ならば言わせてもらおう」

そう言つてアサシンさんはアリサさんの下段からの足による振り上げをその手で掴んで、まるでムチを打つようにアリサさんを一回空に浮かせてそのまま叩きつけた。

あれは相当痛そうだ……。

「あぐつ!？」

「まだまだだな。クンフーがなつておらん。昔に比べれば多少はよくなつてきておる。だがまだまだこの程度で満足されては儂は師匠として許さんぞ」

アリサさんは肺から空気を吐き出した後に、少ししてから立ち上がり、汚れたところをパンパンと叩きながらも笑みを浮かべ、

「わかつているわよ、アサシン。だからもつとあたしを強くして！ シホのように強くして！」

「その意気や良し。ほれ、まだまだやれるであろう？」

「当然よ！ ついでにそのマスターをからかう根性を叩き直してあげるわ！」

「呵呵呵！ 大口を叩きおる！」

そう言つてアリサさんはまたアサシンさんに挑んでいくのであった。

……これはまだまだ続きそうである。

これは、機動六課と合同捜査になったことを伝えるのは後でいいわね。

それから私は部隊長室へと戻り、今日の作業を軽く済ませてからロツテが淹れてくれたお茶が入っているポットが置かれていて触つてみるとまだ少し温かいのでそれをコップに注いで飲みながら一息つく。

思えば、ここまでやって来るまでに色々と苦勞をしたわね……。

それで私はここ十年の出来事を回想し始める。



あの聖杯大戦が終わってから私は言峰綺礼の一味だったとして知っている内容はすべて告白した。

それも微々たるものでしかなかったけどね。

刑務所で暮らす半年の間に私はシホさんに何度も手紙を送った。

内容は色々であつたけど、主にこれからの私に人生についてこう、悪い言い方をすればシホさんも利用していたという後ろめたい気持ちもあつた。

だつて、シホさんに魔術を習いたいと何度も手紙を送つたのだから。

ディルムツド様の言葉通りに私は人生前向きに考えて歩く速度でもいい、けど少しづつでもいいから進んでいこうと思つたから。

そのためには私の唯一の取り柄である魔術は私を上ランクに上げてくれるには一番手つ取り早いと思つた。

だからシホさんに師事をした。

それでシホさんは嫌な顔もせず私に私が収監されている施設まで足を運んでくれて何度も魔術のイロハについて一から教えてくれた。

聞くにシホさんも昔は人に教えるなんて奢がましいと思うくらいに魔術師としてはてんでダメだつたらしい。

その話を聞いて、率直な感想を私は言った。

「それって、冗談なの……？」
と。

でも、シホさんの過去の話を聞いていくうちにその話が事実だということを知る。そして改めて知る。

シホさんの異常性を。

元は男性だったという事実も相当にすごいものだけど、それ以上にこの世界に来る前までやってきた事を聞くとそんな些細なことなんて頭から過ぎていってしまう。

それはやはり聖杯戦争というものがきっかけで入った魔術の世界。

それから私の想像をはるかに凌駕するほどの経験をシホさんは繰り返し行って、今の実力のシホさんにまで上り詰めたわけだ。

それを聞いて、私はまだまだ舐めていたな……と思った。

そしてそれくらい努力すれば才能がなくても強くなれるのだと思わせてくれた。

シホさんはある意味体現者なのだ。

戦闘者としては恵まれなかった体ながらも一生懸命努力をして未来の自分と戦えるくらいにまで強くなり、あの黄金のサーヴァントともやりあったという。

聞きたびにすごい！と思うことしばしば。

そんな中、シホさんは語る。

「ミゼさんには私みたいになれとは言いません。むしろなつてほしくないです。私がかたどってきた道は茨の道でしたから。真似するだけ人生を無駄にします」

「そんなことつ……………」

なんとか言い返そうとするが、そのシホさんの真剣な表情に言葉を詰まらせてしまった。

今思えばそこです。私はデイルムツド様との約束を無駄にすることろだったのだ。言葉を詰まらせた時点でまだまだ私には覚悟が足りないのだということだから。

だから少し考えて言葉を発した。

「…………確かに、シホさんのような人生を送ることは私にはおそらく無理だと思うわね」

「そうです。ですから……………」

「だけど、それでも一生懸命努力する人生は悪いものじゃないわ。シホさんは今までの事を後悔はしていないのでしょうか？」

「当然です。後悔などしてしまつたら今まで切り捨ててしまつた人達に対して最大限の侮辱行為となつてしまいますから」

「なら後悔しないようにこれから生きていきましよう？ 私もシホさんの事は恩人として、そして師匠として尊敬しているんだから。だからこれからも後悔だけはしないでね。私も後悔しない人生を送れるように努力するから……………」

「はい」

それでシホさんは笑みを作ってくれた。

よかった。

こんな私の言葉でもシホさんにはしつかり届いているのだと安心できた。

「ところで……」

そこでシホさんは話の切り替えとしてとある話を私に持ちかけてきてくれた。

「私、今はリンディさんやレティさん、他にも支援してくれる人を増やして行って、魔術事件に対応できる課を作ろうと考えているんです」

「え、それってやっぱり……」

「はい。これからは聖杯大戦で大師父が言ったように魔術師がどんどん増えてくるでしょう。魔導師が中心のこの世界でそう言った未知の力と言ってもいい魔術に翻弄されている人を助けて救うんです」。

そして、逆に魔術による事件を起こす輩も出てくると予測しています。ですから魔導師には対抗できなくとも、魔術なら魔術師を当てればより解決は出来ると踏んでいるんです」

そう、シホさんから相談を受けて最初、なぜ私に話を持ちかけるのかという疑問が浮かぶ。

それから少しシホさんの話は続いていく中、私は意を決して話しかけてみた。

「ねえ、シホさん。どうして私にこの話を持ちかけてくれるの……?」

「あ、そうですね。まずはそこから話をしないといけないでしたね」

それでシホさんは真剣な表情になりある話をしました。

「正直に言えば私は部隊指揮とかには適性がないんです。小隊を率いるならできそうですが、それが限界だと思えます。それに私はまだいまは小学生ですから……」

あ、確かにシホさんは実年齢はともかく今は小学生だ。

だから部隊を起すにはさすがに無理があるわね。

けど、そんな話を私に持ちかけてくるということは、

「シホさん、もしかしてその構想段階の課を私に指揮してほしいとかは言わないわよね？」

「あ、よくわかりましたね。はい。まだ名前は決まっていませんがミゼさんには部隊長の場に立つてもらってこれから増えてくるだろう魔術師達を率いて欲しいんです」

「で、でも……そんな大仕事、私にできるの？ 私は魔術以外はからつきしなのよ？」

「いえ、実はそんな事はないんですよ。前にあるテキストを幾度か受けてもらったことがありますよね？」

「……？ え、ええ」

そう、何度か管理局公認の適正テキストを受けたことがある。

でも、それがなんなのだろう？

「それを上の人達に見せたんですけど、ミゼさんの性格、収監施設でも絶えず積み上げてきた魔術の能力、ディルムツド・オディナを召喚、使役した能力……他にもありますがミゼさんは総合で見て部隊を率いる適性が高いことがわかったんです」

「私が、部隊指揮適性をクリア、していたの……?」

「はい。ですから収監施設から出所したら私の魔術修行と並行して指揮官部隊研修を受けてみる気はありませんか? ミゼさんならきつと立派な部隊長になれると思います」

「そ、そうかしら……? で、でも私なんか……」

「ディルムツド・オディナとの約束を破るつもりですか?」

「ツ……!」

そのセリフでつい私はシホさんを鋭い目で見てしまったことは許されるだろう。

シホさんも申し訳なきような表情をしながらも、

「ディルムツドの事を出してしまつてすみません。ですが、やる前から諦めるんですか? もう後悔はしないで前に進んでいくと決めたんでしょう? なら少しの可能性でもあるなら賭けてみませんか。あなたは期待されているんです」

私が、期待されている。

こんな犯罪者の私が期待されているのね。

魔術師としての腕も買われているのは確かにあるだろうけど、でも後ろ向きに考えて

もまた約束を破ってしまいかねない。

なら後悔せずに少しの可能性にも賭けてみようかしら。

生きている限りは何度でも這い上がることはできるんだから。

それで私は考えがまとまって、

「わかつたわ、シホさん。こんな私にも芽があるのならそれを育てていきたい。だからこれからも私を強くさせてちょうだい。どんな困難にも負けない強い心を身につかせてちょうだい」

「はい。ミゼさんならそう言ってくれればと信じていました」

それから私の部隊の隊長への道が開いた瞬間だった。

出所したら私は一生懸命勉強をして部隊指揮官研修を受けた。

そしたらなんと一発で合格できた。

それにはシホさんもすごく喜んでくれた。

シホさんもシホさんで様々な人との支援という名の交渉をしたらしく、下地はできていてすぐにも魔術師を保護・育成・事件に対応する課、その名を『魔術事件対策課』が発足できる段階にまで出来上がっていたらしく、私はすぐに部隊長の座に収まっていた。

正直、こんなにうまくいっているのが不思議なくらいで最初の頃は夢ではないかと何

度も思ったことだ。

でも、魔術事件対策課に入ってくる子達が増えていくうちにシホさんに教わった魔術の知識を私も教えることがいつの間にか出来るようになっていた事に驚くとともに、こんな私でもやればできるんだという自信にも繋がった。

そしてもちろんシホさんやアリサさん、すずかさん、士郎さんと言った知っている人達も魔術事件対策課の魔術師として入ってきてくれて、どんどん小規模だった魔術事件対策課も大きくなっていった。

もちろん私一人で処理できないほどに膨れ上がってきたけど、私と同じく部隊指揮官研修を受けているというアリサさんが私の手伝いをしてくれて私はとても部下に恵まれているのね、と実感もした。

そして、私は現在に至るわけだ。



ここまで上り詰めてこれたのもシホさん達のおかげだ。

私一人だけだったら何をしたらいいか未だに迷っていたかもしれない。

たくさんの助けがあつて今の私があるのだ。

この感謝という恩を今度は私が、私に期待してくれた皆さんに返していいけるように、もつと強くなろう。

そして今回のこの事件も合同捜査という形だけどシホさんにも恩返しできるチャンスだわ。

だから十全の体制で機動六課に協力して早くこの物騒な事件を解決しよう。

私の犯した罪はまだ洗い流せていない。

でも、デイルムツド様の言葉がある限り、私は踏ん張れます。

ですから、デイルムツド様……まだまだ未熟な私ですが見ていてください。

ミゼは、決して挫けないように、芯が通っている強い女になれるように頑張ります！

第一百八十一話 『謝罪と新たな情報』

Side シホ・E・S・高町

魔術事件対策課の部隊長であるミゼさんとの合同捜査の要請が実現して、さてこれからだという時にちょうどいい感じにフェイトからなにやら新たな情報を掴んだという知らせを受けて私は機動六課の隊舎へと帰っている途中だ。

しかし、こんなことなら車の資格でも取得しておくべきだったか？

魔術事件対策課と機動六課の隊舎の位置は結構離れているために今日はバスを使って向かった次第である。

私とアルトリア、ネロ、ファイアとラン、レン、すずかにライダーの家にもすぐに帰れるように時間があったら運転免許の講習を受けておくのも一興かもしれない。

今まで取ろう取ろうと思っていて、しかし流していたからちようどいいしね。

これから生まれてくる私達の子供達にも不都合な思いはさせたくないしね。

そんな事を思いながらも私はバスを利用して機動六課隊舎へと帰ってきた。そんな時に入ってくる通信。

相手を見てみるとはやての名前が表示されている。

大方今はどこにいるのか？という感じの事だろう。

それで私はすぐに通信に出るとスクリーン映像がアンリミテッド・エアを通して表示されてはやての顔が映り出す。

『あ、シホちゃん。よかったわ、すぐに出てくれて』

「なにか急用な出来事でもあったの？ フェイトから新情報が入ったと知らせを受けて、ミゼさんとも話をそこそこに切り上げてきて今は機動六課の隊舎前まで帰ってきたところよ」

『そか。ならちようどええな。そのままブリーフィングルームまで足を運んでくれるかな？ シホちゃん以外のメンバーはもう集まっとるから』

「了解したわ」

『ほんなら待つてるでー』

はやては笑みを浮かべながらも手を振って通信はそこで『ブツンッ！』と切れる。

切れた後に私の隣にネロが霊体を解いて実体化してその場に立ち、

「ふむ。はやてのあの笑み、なにやらその新情報とやらはかなりのものだったと予想は

できることだな、奏者よ」

「そうね。ま、捜査が進展することは良いことだわ。いい意味でも、悪い意味でも、ね」
「うむ、確かに奏者の言う通りだな。その新情報が必ずしも好転の鍵となるとは限らない。いい情報は時にして同時に悪い情報すら運んでくる時があるからな。」

まずはその情報を深く吟味し、咀嚼して理解し、その隠された裏をも読み取らなければいけない。

でなければ情報に振り回されてあたふたするのは目に見えているからな」

「ええ、そうね。でも、さすがネロね。私もそうだったけど新情報の一報にそこまで裏読みをしているなんてね。さすが皇帝の異名は揺るがないわね」

「うむー、奏者に褒められたぞ。余はとても嬉しいー」

そう言つてネロは私に抱きついてくる。

昔からそうだったけど、やつぱりネロは過去に色々な情報を相手取ってきた一皇帝だけあつて鋭い洞察力を発揮する。

これでしつかりと民の想いを理解していればどうなっていたか……、いや、ネロの過去に対して変なことを考えてはいけない。

サーヴァント全体に共通することだけど、下手したらその英霊の過去の生き方を侮辱、もしくは否定することにまで発展してしまいかねない。

だから過去については掘り下げてはいけないのだ。

マスターとしても、一人の人間としてもそこだけは触れてはならないなにかがあるのだからね。

それに、私も突っ込めるところではないし……。

私がそんな事を考えているとはつゆ知らずネロは私に擦り寄ってくる。

そんなネロの頭を優しく撫でながらも私達はブリーフィングルームまで向かうのであった。



そしてブリーフィングルーム前まで到着して中に入るためのボタンを押す。

扉はすぐに開いて部屋の中へと入るとまずはやてとリインの姿があった。

あちらもすぐに私とネロの入室に気付いたのだろう、

「シホさんにネロさん、お帰りなさいです」

「あ、シホちゃんにネロさん。早かったね。はやく席についてな」

「ええ、わかったわ」

はやての言葉に従い、私は空いている席を探す。

見れば他のメンツはまずなのは、オリヴィエ陛下、ヴィータのスターズの隊長、副隊長。

ライトニングのフェイトにシグナム、ランサーの隊長、副隊長。

ファイアにアルトリアのセイバース。

……ファイアに関しては妊婦さんということもあり参加はしなくてもよいのではないかと私は思っています。

「ねえ、ファイア。会議とはいえあなたは参加はしなくても……。もしお腹の子になにかあったら」

「お姉様、ご心配ありがとうございます。でもこれは私が希望したからです。戦闘には参加はできませんが、情報だけでも目に通しておけば心配の種は減りますから！」

「そう？……なら、いいけど」

そうやって私はファイアの隣が空いていたのでそこに着席する。ネロも私の隣の席に着席する。

それともう一つ、気になっていたことがある。

それは、

「ねえ、はやて」

「なんや？」

はやては私の言葉に少し思案の表情になるが、すぐに私の言いたい事が分かったのかすぐに手をポンツ！と叩く。

ここはさすが部隊長などころはあるわね。私の言いたいことを察したのだろう。

「シホちゃんの言いたいことはなんとなくだけでも分かったわ。それになのはちゃんやフェイトちゃんにも聞かれたしなー」

やっぱり……。

私が疑問に思っただから2人も反応するのは当然と言うべきか。

「うん。私とフェイトちゃんもはやてちゃんに聞いてみたんだよ」

「私は事情は理解していたけど、やっぱりちよつと、ね……」

なのはは当然問いただしたらしい。

フェイトに関しては事情を理解しているがゆえに、でもという思いだろう。

なので改めてはやての方に向けて私は聞いてみることにした。

「それで、はやて。聞かせてもらうけど、フォワードのみんなは今回は参加させないでよかったの？」

「やっぱり、駄目かな……？」

「ダメとは言わないけど、スカリエツティ事件を乗り越えたスバル達ならたかが新情報くらいで心は揺るがないと思うわよ。」

私の予想だけど、おそらくスバルとティアナが関係しているんでしょ？」

「うっ……」

それではやては少し硬い表情になる。

次には何かを言おうとしているのだろう、口を開こうとして、しかしそこで別方向から声が聞こえてきた。

「主はやてはスバルとティアナの事を思つて敢えて今回はフォワードのみんなを呼ばなかったのだ」

「シグナム……」

シグナムはそう言う。

と言うことはやつぱりスバルとティアナに関係すること。つまりリオンさん関連だろう。すぐに察することができる。

しかし、

「でもはやて。二人に伝ええない事で後悔をしてしまうかもしれないわよ？」

「そうだけ？ あいつらはまだまだ未熟だ。だがな、それでも一人前の戦士だけ？」

「ランサーの言う通りです。はやて、敢えて伝ええないというのは悪手です。後悔してもいい、しかし情報は伝えておいた方がいい。それがスバルとティアナの為にもなりません」

私の言葉にランサーとアルトリアが助け舟を出してくれる。

そう、もうスバル達はおんぶに抱っこの子供ではない。しっかりと自身で考えて判断できる立派な戦士だ。

だから決して聞かせてしまっても悪くはなろうとも最低な事にはならないだろう。むしろよく考えていい方向に転換してくれるはずだ。

私達はそれをスカリエツティ事件で魅せられたのだから。

あの子達の成長とともにね。

それをはやてに言い理解してもらおうと、はやても堪忍したのだろう、

「わかったわ……。そうやね、私はスバル達の為やと思って今回は呼ばなかったけど、裏返せばスバル達をまだ完全に信じきれてなかったわけやね。部隊長として部下を信じられなければ隊長失格や。今からでもスバル達を呼ぶことにしようか！ リイン！ さっそく頼むわ！」

「はいです、はやてちゃん！」

それでリインははやての指示ですぐにスバル達に連絡のための通信をしている。

それを見て私達はホッと息を吐くのであった。

ヴィータなんかは「さすがはやてだぜ！」みたいな満足げな表情をして、シグナムもはやてに直接言えなかったのだろう、はやての思い直して安心の表情になっていた。

はやてもはやてで部隊長として自覚できたようでよかったわ。これでこそ部隊長の姿よね。

「よかったね、シホちゃん……」

「そうね、なのは」

なのはが小声でそう言ってきたので私もしっかりと頷いておいた。

……しばらくして、スバル達フォワード陣のみんながブリーフィングルームにやってきた。

「フォワード部隊、参りましたー」

ティアナが強い声で五人を連れて挨拶してくる。

うん、ここはしっかりしているわね。

「うん、よく来てくれたんね。と、その前にみんなには謝っておきたいことがあるんよ」

『はい?』

はやてがそう言って先ほど私達に諭された事を包み隠さずにフォワード達に伝える。

はやても罪悪感があつたのだろう、頭を下げていた。

そんなはやての姿にまずティアナが口を開く。

「頭を上げてください、はやて部隊長。あたし達の事を思つて敢えて呼ばなかったっていうのには少し反論したいところですけど、その分部隊長の思いも知れてよかったですから」

「そうですね！ きつとりオンが関係していることは確かなことです。

でも、あたし達はそこまで弱くないです。きつと、リオンを助けますから」

ティアナとスバルはそう言つて強さを遺憾なく発揮してくれた。

やっぱり強くなつたわね。改めて実感できるわね。

「うん。僕達はもう弱くありません。並んで皆さんと戦いたいですから。ね、キャロ？」

「うん、エリオくん！」

「私達はまだまだ未熟ですけど足を引つ張るほど弱くはありません。必ず力になります

！」

「ラン姉さんの言う通りです。だから遠慮なんてしないで全力で僕達を頼ってください

！」

エリオ、キャロ、ラン、レンも負けじと声を上げる。

特にレンは良い事を言つたわ。後で褒めてあげないとね。

「うん……ほんとみんなゴメンなあ。それと、ありがとうな」

それではやては改めて謝り、そして感謝の言葉を言うのだった。

少しして全員が着席し、スクリーンを写すために部屋の中が暗くなった。

そして映し出されるのはあの時に戦った機械兵士の残骸だった。

フェイトが立ち上がってみんなに説明を開始する。

「それじゃ、もうみんなも知っていると思うけどこの機械兵士だけど、——コードネームはキリングドールと名付けられました」

キリングドール……殺人人形か。

確かに、殺傷兵器を軽く使ってきたのだからこの名前が妥当なところね。

「キリングドールは魔導の力で動きながらもその実それは防衛にのみ使われています。ですから主武装は実大剣に銃の二パターンに今のところは限られています。」

ガジェットのように後継機型も出てくるかもしれないからみんな、十分注意してね」
フェイトの言葉に私も含めて無言で頷く。

「そしてここからが本命……スバルにティアナは特に覚悟して聞いてね？」

「は、はい！」

「了解しました！」

それでフェイトはある画面に移行させる。

それはキリングドールの残骸から発見されたのだろう、映像機器。

それをフェイトは起動後の画面に移す。

再生されるとその映像機器から映像が流れ出す。

『うまく再生されているかね?』

そこからは顔を仮面で隠し、男とも女とも判断できない声で話す人物の映像が流れ出していた。

『まあ、いいだろう。さて、では私からある提案だ。私から指定するのはスバル・ナカジマとティアナ・ランスターの二名だ』

「えっ……」

「あたし達……?」

いきなり名前を呼ばれて困惑の表情を浮かべる二人。

確かに呼ばれば吃驚するものだ。

なにか狙いだ……?」

『この二名を二日後にミッドチルダ東部の“パークロード”に寄越してこい。もちろん、この二名だけだ。』

他のものがやってきたら、そうだな。遊びに来ている観客を無差別に殺していくというのはどうだろうか……?』

『なっ!』

それで私達は思わず叫びを上げる。

こいつはなにを考えているんだ！

無差別に殺害するなんて……。狙いは最高評議会の残党ではなかったのか？

『それを起こしたくなければ二人だけで来い。友達が待っているからねえ。ククク、ヒハハハハハハッ！』

そこで映像は途切れて映像端末も爆発してしまった。

「……………これが相手の指定だよ。だから、スバルとティアナには聞かせたくなかったんだ。あまりにリスクが高い任務だからね。できれば私達で秘密裏に処理しようという考えもあつたんだよ？」

そう言つてフェイトは辛そうな表情になる。

確かにこれは二人には辛い任務ね。

観客の命も掛かっていると大問題だ。

しかし、スバルとティアナの二人はどこか決意をしたような表情になつていて拳を握りしめていた。

これは………もしや。

「あたし、やります！ 責任重大ですけど、なんとかやつてみます！」

「あたしもやります。リオンが待っているというんなら、やります！」

二人は覚悟を決めたのだろう、その気持ちはもう揺らぎはないという感じだ。

「わかったわ。だけどこちらでも手は打たせてもらうで。やられっ放しなんてこちらの気が収まらないわ！」

はやても覚悟を決めたのだろう、二人に任せることにしたようだ。
手を打つ、というのは……おそろく。

まあ、私達も出来ることをしていこう。

誰も死人は出させないわ……！

私はもちろん、私達の信念に賭けて！

第百八十二話 『リオン、再び』

あの謎のスバルとティアナを指定してきた人物の映像から翌日の夜………つまり明日、パークロードに二人だけで向かうことになっている。

そんな中でスバルとティアナは自室で黙り込みながらもお互いに真剣な表情でデバイスを磨いていた。

明日、もしかしたらまたリオンと戦うことになるかもしれない。いや、絶対に戦うことになるだろう。

二人はそれを予測しながらもどうやってリオンを説得、あるいは捕縛するかを考えていた。

そんな折、スバルがティアナに話しかける。

「……………ねえ、ティア」

「なに？ スバル？」

「明日のことなんだけどね……………」

「ええ。わかっているわ、スバル。どんなことになっても必ずリオンを説得するんでしょ？」

「うん……………。でもね、リオンにもあたし達に話せない事情とかもあると思うんだ。それで結局は戦闘も起こると思う」

「そうね」

ティアナもそれを予測していたのだろう、少し疲れた表情になる。

それからすぐに表情を引き締めて、

「でも、まずは戦闘は回避の方向でいきましょう。あたし達が戦闘になったら無関係なパークロードに遊びに来ている一般市民にも被害が出ちゃうんだからね？」

「うん。やっぱりそれが問題だよね。対等に話をしたいのにリオンの背後にいる奴のせいであたし達は後手に回らざるえないからね……………」

「そう。リオンの背後にいる奴の尻尾くらいは掴みたいわね。そうすればシホさん達が必ず対応に当たってくれるはずだから」

「八神部隊長もなにかしら手を打つて言っていたから……………だから、あたし達はあたし達でできるだけの事をしよう。精一杯！」

スバルは腕を上げて「ふんすつ！」と息を吐く。

それにティアナは思わず笑い出す。

「ふふっ、相変わらずスバルらしいわね。難しいことはとりあえず後回しにして目の前の問題だけを片付けることだけに集中しちゃうんだから……」

「ダメ、かな……?」

それでスバルは少し不安そうに瞳を揺らす。

「いえ、ぐじぐじ後ろ向きに考えるよりかは健全でいいんじゃない? そう、あたし達はいつもやることなすことすべてぶつつけ本番で挑んでいった。今回もそれでいいと思うわよ。いつも通りよ」

「そうだね! いつも通りだよね、ティアア!」

スバルはそれで嬉しそうに声を弾ませる。

「(そう、いつも通りのあたし達でいけばいいのよ……。でも、どうしてだろう? この胸にあるっ不安が消えないのは……)」

ティアナは外面だけではスバルを元気づけるくらいには余裕はあった。

だけど内心ではかつてない不安でいっぱいであった。

それがなにかは分からないが、きつとあたしのターニングポイントになりえるかもしれない出来事が起こるかもという漠然な思いであった。

スバルはリオンを説得することに燃えて、ティアナは得も知れない不安感に塗りつぶ

されないように心を強くしながらも、二人はお互いに明日のために鋭気を養うためにすぐに就寝についた。



そして、翌日。

つまり予告された日のこと。

スバルとティアナの二人は私服でありながらもお互いにデバイスは肌身離さずに持ち歩きパークロードに訪れていた。

シホ達は今頃どこかで待機しているのだろう、どこかで見守ってくれているという思いで二人は人がたくさん出歩いている中、真剣な表情で先を進んでいき指定された場所へと向かっていく。

そして到着したその場所にはこれまた私服姿のリオンの姿があった。

リオンの周りだけなぜか人が寄り付いてこないから実質大声でも上げない限りは三人の会話は観客達には聞こえることはないだろう。

「……………」

そしてリオンは無表情でこちらへと振り向く。

それに思わずスバルは声を上げようとしたが、それを堪えてらしくないと思いつつも冷静な声で、

「リオン……………」

「スバル、ティア……………来てくれたんだね……………」

「ツ……………！」

リオンは声を発する。

しかしその音色は嬉しい半分悲しい半分のような感じであった。

そしてその瞳はかなりの具合で揺れていて、それを見た二人はまるで暗闇の中をさ迷う子供のように見えたという感想を思い一瞬言葉を詰まらせる。

でも、それではいけないとスバルは思い質問を投げかける。

「ねえリオン、教えてほしいんだ」

「なにを……………？」

「どうして、その、暗殺者なんか……………」

「どうして、か……………」

それでリオンは顔を俯かせて表情に影を作らせて、

「簡単な答えだよ、それが私の唯一与えられた仕事だったから」

「なっ！」

それで黙って聞いていたティアアナが思わずといった声を上げる。
それでもリオンは気にせず話を続ける。

「少し、昔話でもしようか。私はある人からあのみんなで過ごした訓練校に、自分たちの配下にふさわしい戦士をさがす」という密命を受けていたの」

「自分たちの配下に……………」

「ふさわしい戦士をさがす……………」

スバルとティアアナはリオンの言葉に困惑の表情を浮かべる。

「そう。それが唯一与えられていた任務だったの」

「そんな……………それじゃリオンは最初からあたし達を狙って接触してきたっていうの？」

「ううん……………最初はだれでもよかつたんだ。それがたまたまスバルとティアアの二人だけだった……………ただそれだけのこと」

「でもそれじゃおかしいんじゃない……………」

「ティアア……………」

スバルの前に半歩出てきてティアアが言う。

「それなら最初から最後まであたし達を勧誘して仲間に取り入れればよかつたじゃない？　なのにリオン、あなたは結局最後まであたし達を勧誘してこなかった。これはどう

いう事……………?」

「うん。やつぱりティアは鋭いね。私もね、最初は勧誘しようとしたんだ。けど、なにも夢や希望もなかった私と比べて二人には立派な夢があった。

スバルは高町なのは一等空尉やシホ・E・S・高町一等空尉のように強く、そしてたくさんの人を助けられるような人になりたいっていう夢。

ティアは死んでいるかもしれないお兄さんの夢を継いで立派な執務官になるっていう夢。

私には、眩しかった。いや、眩しすぎた……………。

だから私は二人の勧誘を諦めた……………」

リオンの告白に二人は少し悲しい表情になる。

「リオン、夢や希望もないなんて、悲しいこと言わないでよ……………。見つければいいじゃない?」

「無理なんだよ、スバル。私には、最初から、そして最高評議会のあいつ等を殺してからもうそんな権利もないんだから」

「権利だなんて……………ッ!」

スバルがそう叫んだ瞬間だった。

突如としてどこからともなく「ドオオオオン!」という爆発音が響いてくる。

「なに!?!」

「爆発!?!」

スバルとティアナの二人はそう叫ぶ。

そして同時に観客が次から次へと悲鳴を上げて逃げ出していく。

「リオン、これって!?!」

「ああ、安心してティア。あれはただの空砲の音だから。私達の戦いには一般人は巻き込みたくないからね」

そしてリオンの言ったとおり観客のほとんどはいつの間にか避難誘導でもされたのだろう、いなくなっていて残ったのはリオンとスバル、ティアナの三人だけになった。

「これで、思う存分戦える……………」

そしてリオンはバリアジャケットを纏う。

その姿はあの深夜の時はあまり気にしていなかったので見られなかったが青を基調としたもので、上半身には黒いボロボロのフードを纏っていた。

その手には鐳の部分にリボルバーがある銀色のサーベル型のデバイスが握られていた。

デバイス名は『シルバー・ブレット』。

それを握り、リオンは二人に向けて構える。

「いくよ」

「待つて、リオン！ あたし達はまだ！」

「スバル、今はあきらめなさい！ 空砲とはいえ一般市民に危害を加えようとしたのは確かなんだからリオンを逮捕するわよ！」

「でも！」

「前にも言ったわよね!? 事情を聴くことなら捕まえた後にでもできるつて！」

「あ、うん！」

「いくわよ！」

「セツトアップ！」

そして二人は覚悟を決めてバリアジャケットを纏った。

「準備はいいね？ いくよ！」

リオンはシルバー・ブレットを構えて二人に疾駆してくる。

それをスバルが前衛、ティアナが後衛で構えて対抗する。

「リオン！ きつと事情は聞き出すからね!? だから、今は！」

それでスバルはリボルバーナックルのタービンを回転させながらマツハキヤリバーを吹かして突撃をする。

ティアナもクロスミラージュを片方で構えてクロスファイアを精製する。

「うおおおおりゃー！！」

スバルの渾身の拳がリオンの迫る。

それをリオンは刀身で衝撃を抑えるようにしながら受け止める。

そのまま反動を利用して回転をしてスバルの背後に回り遠心力がかかった剣の切り付けをしようとする、がそこでティアナのクロスファイアが通過して、リオンはすぐにバックステップで避けきる。

「っ、さすが……………」

「動きは止めさせない！」

スバルは攻撃がいなされたことを察したすぐにウィンググロードを展開して急反転をしてティアナのクロスファイアに集中しているリオンの背後を取る。

そのまま高速で足蹴りをかまそうとする、が、リオンは意表を突いたはずがクロスファイアに突撃していきスバルの足蹴りを難なく避けてティアナに突撃していく。

「あたしが狙いか……………。常套手段ね。でも……………」

“大地を掴め”！！

ティアナはクロスミラーージュをモード2、ダガーモードにして瞬動術をかまして今度こそリオンの意表をつくことをした。

瞬動術をかました瞬間、ティアナの地面が爆ぜる。

それは単純で突撃してくるリオンの目の前に一瞬で移動をかまして、

「〃振動を放て〃!」

ダガーモードを構えている反対の手を独特の握りをして魔力球を展開して構えて、ティアナは目を見開いているリオンの胸に魔力球とともに手を添えた。

「破ッ!」

瞬間、ティアナの足先から伝達し手の先まで伝わってきた力が一気にリオンに向けて解放されて振動をリオンの体の内部にまで振動させる。

「カフッ!?!」

それでリオンは思わず前のめりにのけぞる。

そう、ティアナが使用したのはシホお得意の中国拳法の浸透勁をリオンに叩き込んだのだ。

過去になのが編み出してヴィータに叩き込んだオリジナルの技、デイベインシエイクバスターという技がある。

今回ティアナが使用したのはこれをなのがシホとともに完璧に調整して完成したその名も『新・デイベインシエイクバスター』という技になる。

ティアナは銃型のデバイスを使うことから後衛型だと思われるが近距離戦の技能も充実しているのである。

閑話休題

それでリオンは地面に倒れてそこにティアナが首筋にダガーをつけながらも、「あたしを援護タイプだと思っていたリオンの負けね。それでもシホさん達に鍛えられているだけあるのよ？」さて、降参しなさい。リオン」

ティアナがそう言つて降伏宣言をリオンに突きつける。

スバルもリオンの背後に立ち無言で警戒している。

だけでも、リオンはそこで小さいながらも呟く。

「……………私には、後がないんだ。……………だから、こんなところで、負けるわけには……………」

「ッ!？」

リオンの体に雷と風の魔力が吹き荒れる。

それによつてそばにいたティアナは思わず吹き飛ばされる。

「ティアア!? くっ!」

スバルがすぐにウィングロードを展開して空に飛ばされたティアナをだっこする。

そんなことも構わずリオンは発する。

「負けるわけには、いかないんだあああ——!!」

咆哮とともにリオンの体からスパークが発生してその場に積乱雲を発生させる。

「モード2！ 風神！ 雷神！」
フオンシエン レイシエン

シルバー・ブレットが双剣タイプの風神と雷神へと変化する。

そしてそれをスバルとティアナの二人に構える。
フオンシエン

風神には風が纏わりつき、雷神には雷が宿り放電現象を発生させる。

「あああああああー！！」

目を大きく見開きながらも見た目暴走しているかのようにそれぞれの属性が宿っている双剣をまだ態勢を整えていないスバルとティアナの二人に振り下ろした。

それは緑と黄色の魔力刃を発生させて向かっていく。

「いけない！」

スバルは急いでプロテクションを展開しようと手を構えるが、それより早く二人に魔力刃が衝突してしまった。

「うわあああー！！」

「きゃあああー！！」

二人の体に電気が流れて感電してしまい、風の刃でさらにバリアジャケットを切り刻まれていく。

そして「ドサツ」と二人は地面に倒れる。

「はあ、はあ、はあ……………」

リオンは荒い息をしながらも気持ち次第に落ち着いてくる。

そして落ち着いたと思つた矢先に自身がやってしまった事を自覚して目を見開く。

「あ……………わ、私はなにを……………?」

リオンの目には倒れて起き上がってこない二人の姿が映る。

「あ、ああああああああ!!? スバル、ティア!? そんな、私は……………!!?」

先ほどの攻撃は無意識だったのであろう、リオンはその場でやってしまった事を後悔してしまっていた。

親友達を傷つけてしまった……………。

傷つけずに捕縛しようと考えていたのに、私は!と……………。

それでリオンはすぐに駆け寄ろうとするが、そこで、

「リイオくん? 手間取ったようだけど終わったようだねえー?」

「ヒッ! あなたはッ!」

そこで謎の男性の声が聞こえてきたのだった。

リオンはその声に思わず脅えるのであった。

第一百八十三話 『黒幕、現る』

リオンはその聞こえてきた声に思わず体を強張らせる。

なぜそこまで脅えてしまうのか……………。

それでリオンは脅えながらも眼鏡に指がいくのはさすがだろう。

「リオン？ なんだい、そんなに脅えてしまつて……………管理局の犬を倒したんだよ？」

もつと喜んだらどうだいッ！」

男は下卑た笑みを浮かべながらリオンに近づいてくる。

「モ、モリアさん……………」

リオンに『モリア』と呼ばれたその男の姿は白衣を上に着ていて下にはなにやら鍛えているのだろうか…服がパンパンになっている。

太っているわけでもなく痩せているでもないそんな体型。

髪色は銀色でぼさぼさであり、瞳は赤。肌の色は少し白いので不健康そうに見えたりもする。

「リくオくん？ この二人を倒したことは評価してあげようか。だがね…俺様は少し気に入らないことがある。わかるかい？ ええッ!?」

「ひっ!?!」

下卑た笑みから急に表情を変えて狂気とでも言うように目を見開いてリオンにモリアは叫ぶ。

それに対してリオンはずっと脅え眼のままである。

モリアは脅えてしまっていて声もまともに出せない状態をいのように利用しようと考えたのだろう、誰が聞いているわけでもなく説明しだし始めた。

「ああ、リオン。俺様の作った中では出来損ないながらも傑作の部類に入る少女。

お前はなぜ今回の戦いで予知能力とあの力を使わなかったのかね?」

「そ、それは……ッ!」

「俺様は確実にこいつらの息の根を止めろと命令したよなあ!」

静かに怒り出してからいきなり激昂したりと忙しい男である。

しかしそれでリオンはまた脅えてしまい黙り込んでしまった。

それを見てモリアは少し熱が冷めたのか冷えた表情になり、

「あー、あー………やっぱりお前じゃ無理かあ。出来損ないのお前じゃなあ」

「ッ………!」

『出来損ない』という言葉に反応してリオンはモリアに対して反抗的な目つきをしてしまふ。

だがそれがモリアの癩に触ってしまったのか、

「……………なんだい、その目つきは？ 反抗的だねえ。いけないねえ。でも、そんなに反抗的な目ができるならまだ芽はあるのかね？ そうだ！ 俺様閃いたぞ！」

モリアは急に笑顔になり手を叩くとリオンに向かってある命令をする。

「リオン、命令だ。最後のチャンスとして今度こそこいつらをこの場で殺せ！」

「ッ!!」

「できるだろう？ お前ならねえ。さもなくて……………」

そう言ってモリアはその手になにか光るものを出して、それを指で挟んで『ギュツ』と握る。

それに呼応してリオンは胸を抑えて少しばかり苦しむ仕草をし始める。

「う、っう……………」

「わかつているだろう。お前は俺様には逆らえないんだよ！ さあ、さつさと殺せよ！」

モリアが大声でそう命令する。

それに対してリオンの返答は、

「……………できません」

「……………あ?」

拒否の言葉であった。

モリアもそれで間抜けな言葉を零すのだからリオンの言葉はそれほど意外だったのだろう。

「できません……………私にはやっぱりできません……………!」

「俺様に逆らうのかい、リオン?」

モリアが静かに怒りを再発させてきながらもリオンは言葉を続ける。

「お願いです! スバルとティアだけは、見逃して下さい!!」

「ほう……………で?」

「私に出来る事なら何でもします! 息の掛かった最高評議会の残りのメンバーを全員殺せと言うなら必ず殺して見せます!」

機動六課の隊長達を殺せと言うのなら殺します! 此処に来た一般客を殺せと言うのなら殺します!!」

リオンの本心からの言葉。

スバルとティアナを心から大切に思っているからこそその言葉。

しかし、それはあまりにも……………、

「だから……………だから……………スバルと……………ティア……………だけは……………だけはあああつ

!!!

と、涙を流しながら何度も土下座の姿勢で頭を下げ、スバルとティアナの命を懇願する。

モリアはそれで少し「ふむ………」と考え始めて、

「ふむ……確かに親友を自分の手で殺すのは少々酷だったか……」

とモリアは先ほどまでの態度を一変させて優しい笑みを浮かべ殊勝な態度を取る。

それにリオンは希望が通ったと喜びの表情をとる。

が、実際は違う。

モリアはリオンの希望を引き裂くことを言い出した。

「ではコイツ等は俺様が直々に殺すとしよう！」

笑みを浮かべながらそんなことをのたまうモリアにリオンは脳が理解できなかったのか「え………」と声を出す。

理解できなかった、理解したくなかった、でも目の前の男、モリアはそう言ったのだ。

それは真実でその手にどこからかナイフを取り出しスバルとティアナの二人に向かつて歩を進めるモリア。

「やだ……やめて！ やめてください！ お願い！ やめて!!」

「もう無駄だよーん！ 俺様の決定事項は覆らないのだ！」

「だめー!!」

リオンがモリアに向かって駆け出すがモリアがまたなにかのコアを握りしめるとその場でリオンは倒れて動けなくなってしまった。

「ぐうつ!?……………誰か、誰かスバルとティアを助けて! お願い!!」

「無駄だよ! もうこれでエンドだ!」

モリアがナイフをまずはスバルに振り下ろす。

が、その時に一筋の閃光が瞬いた。

それは一直線にナイフめがけて向かってきて振り下ろしている時だというのに見事に弾いて、さらにはモリアの腕も一緒に逆方向に曲げてしまっていた。

「ぐああああつ!! だ、誰だ!! このパークロード内には管理局の人間はこいつら以外はいないはず!!」

そこにはナイフの真ん中を貫いて地面に突き刺さっている矢が存在していた。

「矢、だと!? まさか、これは!」

「あ……………」

それでリオンは辺りを見回すがどこにも誰もいない。

「ええい! 約束が違うじゃないか! ならばパークロード周辺に配備しておいたキリングドールを全機起動して一般人を惨殺してやるよ!!」

そうやってモリアは装置のボタンなのだろうスイッチを力強く押す。

それでキリングドールはまだ避難中の一般人を襲うはずだったのだ。

しかし作動はしたというのに何も起こらない。

どころか騒ぎすらも起こっていない。

これにはさすがのモリアも焦りの色を浮かべたのか、

「どうしてだい!?! なぜ、動かない!」

そんな時だった。

モリアの顔の前にモニターが展開したのは。

そこに映し出された人物は何を隠そう機動六課部隊長である八神はやてだったのだ

から。

『あはは、やっと会えたんね。黒幕さん………? いえ、モリア・モルドレットさん?』

はやては怖い笑みを浮かべモリアにそう話しかけた。



少し時は遡り、シホとなのははパークロードから少し離れた空の上にあった。

「シホちゃん、スバルとティアナは大丈夫かな?」

「なのはは二人の隊長さんでしょうか？ 二人を信じてあげなさい。いざつて時には私も出張るから。それに、動いているのは私達だけじゃない。はやても今頃魔術事件対策課と連携して周辺一帯をサーチし終わっている頃よ」

「うん、そうだね。はやてちゃんはこのな時が一番怖いからね……………」

二人はそんなことを話しながらもサーチャーでスバル達を観察していた。

そして二人はリオンと少し話して戦闘に入る。

「リオンさんは一般人は巻き込むことはしないのね」

「うん。まともな子でよかったね」

そしてティアナが真・ディバインシエイクバスターをリオンに叩き込む光景を見て、

「なのはの教えが実ったわね……………」

「シホちゃんの教えの成果だよ」

「いやいや」

「でもでも」

そんな言葉の掛け合いをしながらもそれから状況が一変して二人はやられてしまった。

それになのはは「スバル！ ティアナ！」と駆けようとしたすが、そこでシホの「まだよ！」という言葉でなのはは動きを止める。

「まだ我慢よ、なのは……。きつと黒幕が現れるから、私達はそこを狙うのよ。キリングドールははやて達になせましよう」

シホの冷静な声でなのはも「うん」と頷いて状況を見守る。

そしてモリアと名乗る男性が出現する。

「シャーリー！　すぐに検索してはやてちゃんに伝えて！」

『了解です、なのはさん！』

なのはの指示でシャーリーがすぐにモリアに関して検索を開始する。

その間にも事態は動く。

「あのモリアが握っているコアは……。もしかしたら」

「うん、シホちゃん。多分あれはリンカーコアだよ」

「やっぱりね。リオンさんはあれで縛られているのね。となれば……。……！」

それでシホは弓矢を握り今にもスバルに振り下ろそうとしているナイフ目がけて矢を放つ。

そして着弾。

ナイフを貫き、モリアの腕も逆方向に曲げてしまう。

「さすがシホちゃん！　魔弾の射手の二つ名は伊達じゃないね！」

「褒めるのは後にして、いくわよ！　なのは!!」

「うん！」

シホとなのははそれで空を駆けていく。

その間にもモリアがキリングドールを起動しようとかほざいているが、それももう遅い。

なぜかというと、

チリチリチリ……………。

パークロードの東側ではキリングドールの残骸が辺り一帯に散らばっている。

その中心には志貴が黒衣を纏いながら立っていた。

「……………ふん。動いていなければメカ翡翠すらにも劣るんだな」

「さっすが志貴ね！」

アルクエイドと一緒にいて志貴を褒めていた。

また、西側のある場所では、

「ふん！ はっ！」

「やあっ！」

『バカーンッ！』という音を響かせながらもキリングドールを拳で粉々に砕いているアサシンの姿があり、マスターのアリサも愛機であるヴェルファイアを振り回しながら切り裂いていた。

魔術事件対策課で今回はアリサとアサシンが援軍でキリングドールを粉碎していた。

「腕を上げたな。アリサよ」

「ふん。あたしにかかればこんなものよ」

そして南側ではライダーとラン、レン、エリオにキャロがいて、

「しっ！」

「シールドザンバー！」

「斬氷閃！」

「ブリッツスラッシュ！」

「フリード！ ブラストフレア！」

ライダーが釘剣を放って次々と貫いていく。

レンがシールドザンバーで切り裂いていく。

ランがバルムンクを振るい氷の刃を放って切り裂く。

エリオが雷撃の斬撃を叩き込む。

キヤロが命令してフリードが火炎を放つ。

「よし！ 終了ですね」

「そうだね、レン！」

「私の隠密行動にかかればこれほどの敵はたやすいですね」

「さすがライダーさんです！」

「後はスバルさん達が心配ですね……………」

最後に北側では、

「おらあ！」

「やつ！」

「紫電一閃！」

「おらあ！」

一番キリングドールが多かったのだろうランサーにフェイト、シグナムにヴィータの

隊長、副隊長陣が破壊していつていた。

なぜこれほどに早くキラードールの在り処を判明できたのかというと、それははやての広域スキャン魔法に加えて、前日からすでにダブルアサシン（志貴&李書文）にライダーの三人が張り込みについていたのだ。

霊体化していればサーチされないという利点を活かしてはやては指示を出していたのである。



そして現在に至るのである。

『さて、モリア・モルドレッドさん。あなたを逮捕するで?』

「ふん。この程度で俺様を逮捕する? 笑わしてくれるねえ!」

『ずいぶん余裕やね。もう少ししうちのエース二人が到着するよ?』

「別に。それに今回はリオンが使えるか最後の試練を与えに来ただけなのだから。それも失敗だ。よって、ここで死ね!」

モリアはそれでリオンのリンカーコアなのだろうコアを一気に握りつぶそうとする。
「ぐううっううああああああああっ!!」

それでリオンは尋常ではない苦しみの声をあげる。

だがモリアは気づいていなかった。

モリアの背後で倒れていたはずのスバルがゆらっと立ち上がっているのを。

そして、

「リオンになにをしているんだあああああ——!!」

——I S、振動破砕発動——

「うおりやあああああ——!!」

スバルの渾身の一撃がモリアの顔面にめり込む。

それで普通ならスバルのI Sの効果で顔面破壊くらいはするものだろう、だが、

「ぐぶべらああっ!!」

「ツ！ 感触がおかしい!？」

殴られたモリアは派手に吹き飛び、20メートル先まで吹き飛んだ。

だがそれでも小破程度でしかなかった。

「かっつぺー！ ま…前歯欠けた…」

「嘘……………。前歯だけ!? どんだけ頑丈なの!」

「くっ……………よくも俺様の顔を。まあ、いい。もうリオンはじきに死ぬ。それでは俺様も退散するでしょうかね。そ、それでは諸君。ば〜いば〜いきくん、てな!!…あつまだ歯がイタツ」

そう言いながらもモリアの背中が開きバーニアが展開して空を飛行して逃げ出した。

「あ、待てー!!」

スバルが叫ぶがモリアは人が出すにはありえないほどのスピードを出して飛行していき、途中で転移魔法でも使用したのだろう、姿を消してしまった……………。

「くっ！ 取り逃がすなんて……………!」

スバルが本気で悔しがっているところに、そこにシホとなのはが遅れて到着した。

「スバル！ モリアは!」

「逃がしてしまいました。すみません……………」

「いや、大丈夫よ。なのは、ティアナの方をお願い!」

「うん!」

まだ気絶しているティアナの方をなのはに任せて、シホは息が荒くなつて今にも死にそうな顔になっているリオンを手に抱えて、

「きつとりオンさんはリンカーコアを抜かれていたのよ。そして先ほど完全には潰されなかったとはいえ命に関わってくるわ」

「シホさん！ リオンを助けてください！ お願いします!!」
「任せて！」

それでシホはその手に、

トレス・オン
「投影開始。是、破戒すべき全ての符」

そしてシホは破戒すべき全ての符をリオンの胸に刺した。

するとリオンの体が光って先ほどまで青かったリオンの顔ももとの血色のいい顔に戻ってきて息も落ち着いてきていた。

「ふう……………これで一応平気なはずよ」

「ありがとうございます、シホさん！ よかった、リオン……………」

「でも、一応シヤマル先生に診せた方がいいわね。起きたらリオンさんから事情も聞きたいしね」

「そうだね、シホちゃん。帰ろう、機動六課へ」

「そうね。帰りましょうか」

黒幕の一人であったモリアは逃亡。

また事情を知っていそうな敵を逃してしまった。

でも、戦果はあった。

リオンを助けることができたし、今後は事情や内情も聞けるかもしれない。また一歩だけ進んだことは確かなことであった。



『モリア。状況はどうなっている？』

「はっ。準備は順調。あなた様は後は宣戦布告するだけですよー？ キリングドールの量産は俺様にお任せを……………」

モリアは画面に映し出される人物にそう告げた。

『そうか。我らの悲願、今こそ果たす時だな。これからも頼むぞ、モリア。では私はこれで切る。なにかあったらまた報告を頼む』

「くくくつ。わかりましたよー」

『ではな』

それでモニターは消える。

そしてモリアはまた下卑た笑みを浮かべながら、

「……………そう、準備は順調。今のうちにその悲願とやらに酔っておけよ。俺様がお前を

踏み台にするその時までな！」
モリアは邪悪に笑うのであった。

第百八十四話 『事情聴取と過去』

……あなたは■
■
■
■。

—— そんな!?

—— 私が、私達がなんとかするから……。

—— でも!

—— もう、時間がないわ。ごめんね……。

クル、くる、繰ると……。

悪夢は、何度も繰り返される……。……。夢が繰り返される限り、彼女のカルマは無くならない。



……リオンをモリアの手から助け出して翌日、医務室でリオンは眠りについていった。

目を覚まさないリオンの横では徹夜をしたのであろうスバルとティアナの二人が目に隈を作りながらもリオンの手を握ってあげていた。

まだ先日の傷が治りきっていないというのに、よくやるわね……。と医務室を預かるシャマルは少し呆れながらも、しかし目をつむってあげていた。

スバルが少し暗い感じに表情を俯かせながらも、

「リオン、魘されているね」

「そうね。訓練校の時にはこんな姿を見たことがないから、まだまだあたし達にはこんな姿を見せられなかったって事かしらね」

そう、リオンは先ほどから何度も悪夢を見ているのだろうか、汗を掻き魘されている。

時折、「みんな……。」「や「やだ、姉さん……。」「ううっ……。や、やだ……。みんな……。死

んじやヤダ……っ！」と物騒なことまで呟いている。

みんなというのは誰なのだろうか、姉さんというのは誰のことなのだろうか、生き死にに關係する過去があるのか、という疑問が湧く。

が、それは話してくれるかはわからないがリオンが目を覚ました後にでも聞けることだろうと今は気にしないことにしたスバルとティアナの二人。

聞き耳を立てているシャマルも気になつていよう、

「スバル。リオンちゃんからなにかその『みんな』や『姉さん』という単語に關係して、
そんな話題は聞いたことはない……？」

「いえ……聞いたことはありません。なんで、話してくれなかつたんだろう？」

そう言つてスバルはさらに涙目で俯く。

そんなスバルの頭をティアナは撫でながらも、

「きつと、あたし達に話せないことだったのよ。その理由は、スバルもわかるわよね
……………」

ティアナのその問いにスバルは静かに「うん」と頷き、

「きつと、リオンの出生に關しての事だと思ふ。あたしも戦闘機人の件はティア達に話
すのは少し躊躇した経験があるからわかる……………」

スバルは己の過去もリオンに重ねながらもそう言葉を続ける。

そんな時だった。

「うっ……みんな、姉さん！ ダメ！ 私は放っておいていいから、逃げて………ツ
!!」

と、一際大きな声を上げて最後に、

「姉さんツ!!」

そう言うところで上半身を起き上がらせてリオンは虚空に手を伸ばしながら目を覚
ました。

そんなリオンの姿に三人は驚きながらも、まずスバルはリオンの伸ばした手を取って
あげて、

「大丈夫だよ、リオン。ここにはリオンを害する者はいないから」

安心させる笑みを浮かべた。

ティアナもリオンの肩に手を置き、

「だから安心しなさい……」

「スバル………？ ティア………？」

リオンは起きたばかりでまだ寝ぼけ眼なのか何度も目をパチクリさせている。

そして、

「ツ！ 眼鏡はどこ！」

急にリオンは目を閉じて眼鏡を探す行動を取り始める。

そんな態度にティアナは安心した表情で、「はい」とリオンに眼鏡を渡す。

リオンは急いで眼鏡をかけると安心した表情になり、落ち着いたのか改めて今の現状を理解して把握すると、

「あつ!? スバルッ! ティアッ! 二人とも大丈夫!? モリアさんに何も酷い事されてない!」

「平気だよ、リオン……シホさん達が助けてくれたから」

「ええ」

二人がそう答えるとリオンは涙をボロボロと流し、

「よかった……スバル、ティア……二人に何かあつたら私、わたし……ッ!」

両手で顔を覆い、安堵の声を上げる。

そんなリオンを安心させるように何度も安らぎの言葉をかけるスバルとティアナ。

そこには訓練校時代の頃の仲良し三人組の姿があつた……。

……それからしばらくしてようやく落ち着いてきたのか、

「それよりリオン。貴女、まだ眼鏡をかける時に目をつぶっているのね。目を開けなが

らできないの?」

「そ、それは、事情があつてね……………」

「ふーん? まあ、いいけどね」

ティアナはそれで流すことにしたのだった。

それからリオンは二人に向き直つて改めて言葉を発する。

「二人とも…………ごめんなさい。私の勝手な我儘で二人に迷惑をかけるばかりか、二人を傷つけた。謝つて許される事じゃないのは解つてるけど、それでも…………うつ…………ひつく…………ごめんなさい」

それでまた涙を流し始めるリオン。

そんなリオンにスバルとティアナの二人は、

「安心して」

「うん。気にしていないから!」

あつけらかとそう答えた。

そんな二人にどう対応したらいいか迷っているリオンを置いて、そこに医務室の扉が開く音がする。

そこにははやてを筆頭にシホ、なのは、フェイト、ヴィータ、シグナムの隊長、副隊長長陣。

それにアルトリア、ネロ、オリヴィエ、ランサー、志貴のサーヴァント陣。そして残りのフォワード四人のメンバーが医務室に入ってきた。

それに対してリオンは少し身構える。

それを察したのだろう、はやては安心の笑みを浮かべながら、

「安心し。リオンさんには危害とかは加えるつもりはないからな。気持ち楽にしてくれると助かるわ」

「は、はい……………」

それでリオンも安心したのか肩の力を抜く。

それから少し静かな雰囲気部屋が満たされる。

「うん。これでええな。さて、それじゃリオンさん。これから本題に入らせてもらうけど。ええな？」

「……………はい」

「それじゃ突然で悪いんやけど、リオンさんの体を調べる時に気付いたんやけどね。

わたしやなのはちゃん、フェイトちゃん。それにシホちゃんのDNAがリオンさんの体から検出されたんや。それに他にも大勢の別々の遺伝子がな。改めて聞くで？

「アタ……………何モンや？」

「ッー」

はやての鋭い眼差しに加え、言外に「嘘は許さない」という威圧感が込められている。

リオンは涙を流しながら諦めたかのような儂い顔付きで話し出す。

「わかりました……………お話しします」

それではやて達はリオンを会議室へと連れていき話を聞くことになった。

この会話内容が外に漏れないように常にシャーリーやさすがが見張っていてくれるという。ありがたいことである。

それで全員が席に着席してリオンがポツリポツリと話し始める。

「私の正体を話す前に言っておきます。私は、本当はこの世に生きちゃいけない存在なんです」

「生きちゃいけない存在……………？ それって、どういう事？」

スバルが困惑の表情でそう尋ねる。

他の周囲の六課のメンバーも困惑の表情を浮かべている。

命とは千差万別だが皆がそれぞれ思い思いに生きている。

それを自身で否定するリオンの胸中にはいまだわからないことだらけだ。

だけど、これからそれを聞ける。

たとえそれがパンドラの箱の中身だとしても……………。

「私は人としてではなく、生物兵器として作られた存在なんです。

モリアは私知りませんが誰かに秘密裏に生物兵器の開発を考案しました。// エー
ス級魔導師を大量生産し、戦力の増強をしよう” って……っ”

「そんな………！」

「それじゃ、もしかしてあなたも………？」

フェイトとエリオが少し表情を蒼白とさせながらそう聞く。

それにリオンは、「はい」と頷いて、

「その為にモリアはまず、あらゆるエース級魔導師やストライカー級の魔導師達の遺伝子を片っ端からかき集めました。

その中には当然、はやてさん、フェイトさん、なのはさん、シホさんの遺伝子データも含まれていたそうです」

「なるほどね」

そこでシホが声を上げる。

「なにかわかったん？ シホちゃん」

「ええ。少しおかしいと思っていたのよ。私の魔力変換資質【風王】………これは現在確認されているのは私だけ。なのにリオンさんは普通に使っていた。これはつまり私の

遺伝子が働いた結果ということになるわけよ」

「はい。シホさんの言う通りです。」

モリアは「プロジェクトF」のデータや管理局で登録された当人の戦闘データを元に短期間で大量のクローンを産み出す方法をアイツは編み出した。

ただ産まれたクローン達は魔力ランクが低く、精々CかBが限界だった……」

リオンはそれを言い終わるとここからが本題だという感じで無意識のうちに拳を強く握りしめながら語る。

「だからモリアは最後の方法として……」あらゆるエース級魔導師の遺伝子を組み合わせ、最強の魔導師を産み出す……つまり合成獣（キメラ）を創るという方針で研究し、産み出されたのが……この私なんです」

「胸糞悪い話だなあ、おい？」

「全くですね。人の命を何だと思っっているのでしょうか」

「全くですね」

「うむ。狂人、というやつだな。どこの世にもそんな輩はいるものだからな」

サーヴァント陣が本音を言う。

それは皆同じ気持ちのために無言で頷いていた。

「だけど私も魔力は低く、当時は体も弱かったから何もできなかった。」

その都度モリアから虐待を受けて何が悪いのか分らなくて何時も泣いていた。

そしてある日アイツは私たち20人のクローンを一つの部屋に集めて、『最後の実験を行うからこれが終わったらお前らを解放してやる』と言ってまるで自由をあげるような言い方で私たちを連れていきました」

そこでまたリオンの瞳から涙が流れ出して、より一層拳の握る力が強まる。爪が皮膚に食い込んでいるのだろう。血が垂れている。

「でもそれは真つ赤なウソ。

その部屋は人間とは別に魔法生物の合成獣の研究で失敗した怪物たちの：エサ場でした。

20人いた私たちは1人、また1人と怪物たちに食べられて、最後に残ったのが私だけ。それでようやく分かった。

アイツは：アイツ等は初めから私たちを生かすつもりなんて無かった。

『解放』って意味は私たちクローンの世話から解放される、つまり処分ってことだった！

でもそれに気付いた瞬間には怪物の爪を受けて死を待っただけかと思っただけだ。この魔眼を開眼したの」

そう言つてリオンは眼鏡を外し、一度閉じて再度開くと両目が怖いくらいに綺麗な蒼い眼に変わった。

それに志貴は内心で「やっぱりな……………」と思っていた。

「やっぱり直死の魔眼だったか……………」

「そういう名前なんですか？」

「ああ。俺も同じ眼を持つているからわかる」

「そうなんですか。ともかく、この魔眼を開眼した瞬間に自然と理解できたの。

これはあらゆるモノを殺せる眼だつて。

この眼には「線」と「点」が見えて、それに沿ってやれば例え素手でも確実に敵を殺せるつて解つたの。

だからこの魔眼で怪物たちを皆殺しにした。

あとはモリアを殺すだけだったんだけど、出血に加えて体を激しく動かしたからすぐ気を失つて……………気付いた時にはモリアにリンカーコアを抜かれてアイツの飼犬をやらされた……………」

リオンの悲痛な告白に全員が言葉を失っていた。

どうしたらそこまでひどい仕打ちができるのか……………。

「モリア・モルドレッド……………許せないな」

「ああ、そうだなシグナム。あたしのアイゼンで触れること自体が嫌なほどだぜ」

ヴィータとシグナムがモリアに対しての怒りを顕わにする。

それくらい怒りが込められているものであるのだ。リオンの告白は。

「ねえ、フェイトちゃん」

「うん、なのは。言わなくてもわかるよ。モリアは必ず私達の手で捕まえよう……!」

「うん!」

なのはとフェイトも逮捕に熱意を燃やしていた。

他の面々も隠し切れない怒りで燃え上っていた。

ここに全員の意見が一致した。

モリアは必ず捕まえることを。

そしてリオンの語りは再開して、

「あとは魔導師としての基礎訓練と一般知識を叩き込まれて、任務としてあの訓練校で行かされてスバルとティアに出会った。

最初はただのターゲット程度しか見ていなかったけど……2人と過ごすうちに楽しく、うれしく思えてきたの…。

クローンの皆は兄妹って感じだったけど、兄妹は皆死んでから私にとって初めての友達。スバルとティアだけだった。

だからモリアへの報告の時は『誰もいない』って言えた。

例えコアを握られても、ひどい仕打ちを受けても、友達を守ってる”って実感できた

から…耐えられた。

暗殺の命令を受ける時も「2人ともう一度会う」って約束を支えに耐えた」

六課のメンバーである者は驚愕の表情でリオンを見つめる。

またある者はこのような非人道的な方法を取ったモリアに対し怒りを覚えながら拳を強く握り締めながらリオンの言葉を聞くなど様々だったが、スバルとティアナは特に酷く、涙を流しながらリオンの話を聞き続けた。

そしてリオンは涙を流しながらスバルとティアナに話しかけた。

「ごめんね、今まで黙ってて、ごめんね。気持ち悪いよね？　こんな…人間ですらない私なんて」

我慢の限界だったのかスバルとティアナは涙を流しながらリオンを抱きしめた。

「ティア？　スバル？」

「この…バカリオン！　どうしてそんな大事なことを私たちに相談してくれなかったの！？」

「ツ!!…ティ…ア…」

ティアナの言葉にリオンは目を見開く。

「リオン…ごめんね。そんなツライ目に…苦しい目にあってたのに気付けなくて…ごめんね」

「スバ……ル……」

スバルの言葉にまた涙腺から再び涙がなかれるリオン。

「リオン、覚えてる？ あの時『私が危機に陥ったら助けてくれるかな』って……」

「うん。覚えてる」

「だったらもう、遅いかもしれないけど改めて言わせて。力になるよ、リオン」

「ど、どうして？ わたしは人間じゃないし、人殺しなのにどうして私に構うの？」

リオンはこんな私にまだ構ってくれる二人に対して少し信じられなかった。

だが、スバルとティアナの二人は構わずに言い放った。

「そんなの」

「決まってるじゃない、バカリオン」

二人は今できるだけの笑みをリオンに向ける。

そして、

「友達だから(だ) よ!!」

「ツ………ふっ、グッ……、ごめんなさい。

ティア、スバル、ごめんなさいっ……ごめんなさいっ……ふっ、ぐすっ……うああああ

ああああああああああああん!!

ごめんなさい！ ごめんなさい！ うああああああああああああああああああ

あん!!!」

リオンはダムが決壊したかのように泣き続けた。今まで溜め込んでいたモノを涙で洗い流す様に……………。

聞いていた周りのメンバーは三人に深い友情の絆を感じて、改めて助けられてよかったと思うのであった。

第百八十五話 『罪の償いの仕方。そしてモリアとは

…』

Side シホ・E・S・高町

リオンさんがスバルとティアナの間で泣き続けているのを私達は温かい目で見ていた。

しばらくして泣き止んだのか目尻が赤く腫れ上がっていないながらも、もうそこには先ほどのまでの悲壮感に包まれているリオンさんの姿はもうなかった。

これならもう安心だろうか……と私は思い結論付けて、リオンさんに話しかける事にした。

「リオンさん、少しいいかしら？」

「あ、はい。なんででしょうか？」

シホ・E・S・高町一等空尉

「シホで構わないわ」

「あ、それじゃ私の事もリオンで構いません……」

そう言つてリオンさん……いえ、リオンは少し恥ずかしいのか俯く。

うん、まだスバルとティアナ以外には心は開きにくいという感じか。

まあ、それもしかたがない事である。

モリアに今までやられてきた過去を聞いたら納得もしてしまふしね。

私も思うところはある。

聖杯戦争が終結した後リオンとともに魔術協会に提出するための資料作りのために故人となった黒幕、元凶の言峰綺礼が居座つていた冬木教会に入った地下で私達を待つていたのは、見るに堪えない姿にまで変貌していた私にとってどこか見覚えがある子供達の姿があつたからだ。

彼、彼女らはすでに全員息絶えていたが、言峰綺礼の残した日記によると彼らは私と同じ災難孤児だつたらしくもしかしたら一歩間違えたら自分もあそこにいたかもしれないなかつたからだ。

そう考えると彼らには失礼かもしれないが切嗣に引き取られた私はやっぱり幸運だつたのかもしれない。

リンが言うには彼らは協会の人間が丁寧に埋葬したらしいが、検査の結果、なにかの魔力供給の役割をやらされていたという。

考え付く限りでは第四次聖杯戦争から現界し続けていたギルガメッシュをこの世に留めておくために利用されていたのだろうという事らしい。

ひどい話だ……………。

そしてリオンもこれと似たような経験をしたいわば被害者なのだ。

だから一概にお前が悪いとはけっして言えない。だけどケジメはつけないといけないのも事実な訳で……………。

「それじゃ、リオンと呼ばせてもらうわ。それでリオン。あなたはこれからについてはどうするつもりなの……………?」

「これから……………?」

「そう。これからよ。あなたはモリアにリンカーコアを握られて無理やり動かされていったって理由があった。

だけどなんにせよ曲がりなりにも幾人もの人の命を奪ったのは隠しようもない事実な訳だわ。だからなにかしらの罰は受けることになるわ……………」

私がそう言葉をかける。

それでリオンはさらに俯いてしまい、代わりに、

「シホさん! 何も今話すことじゃないじゃないですか!」

スバルが非難のこもった視線と言葉を私に浴びせてくる。

それはまだ年齢の若い者。

特にエリオやキャロも同様であるようで目が訴えてきていた。

しかし、今言わなくてもいはずれば立ち向かわなければいけない問題だ。

嫌われ役は誰かがやらなければいけない。この程度なら過去の経験から慣れているから問題はないし。

それを思えばしつかりと理解して黙っているティアナやなのは達は良い方ね。

だから、

「たしかにそうね。でも、リオンはもう犯罪者としてのレッテルが貼られている。だから今のうちに決断はしておいた方がいいわ。でないと、これからの新たな人生の一步すらも歩き出せないで停滞してしまうから……」

私がそう言うのとスバル達は渋々とだがわかったらしく、悔しそうに、でも我慢するよう言葉に言葉を慎んだ。

それを見計らってなのかりオンが小さい声で、しかし、しつかりと聞こえるように話し始める。

「……………管理局には、出頭するつもりです。でも、それ以降の事は考えていません」

「考えていない……………？ それってどういう事か聞いてもええか？」

「……………」

はやてが聞くがそこでリオンはまた沈黙して俯いてしまった。

それになにかを感じたのか、なのはが少し厳しい感じの声で話しかける。

「……………もしかして、リオンさん。あなたは死んで罪を償おうとか考えていない、よね？」

「ッ……………！」

なのはの考えは、どうやら当たっていたのだろう。

リオンは目を見開いて今にも泣き出しそうな表情になる。

それにスバルとティアナは驚愕の表情と瞳をして、

「リオン……………？　それ、本当なの？」

「嘘、よね……………？」

スバルとティアナは信じたくないという感じで、嘘であってという気持ちなのだろう、リオンにそう問いかける。

それにリオンは辛そうな顔をしながらも、

「……………私は、生きていちゃいけない存在なんです！　たとえモリアの命令だったとしても、私は、この手で……………たくさんの人の命を奪ってしまった……………」

私はスバルやティアアの横に並び立てるような立派な人間にはもう、なれないんです

……………！

この手は……もうたくさん血を浴びてしまっているんです！

こんな、こんな私なんかいつそ死んだほうが……ッ！」

室内に頬を叩く音が響く。

誰がやったのか？ わかっている。

私が叩いたのだから。

それで私に叩かれた頬を押さええているリオンを含めた全員の視線が私に向けられてきていた。

「……………そう簡単に死んだ方が、なんて言わないで。

あなたはまだ殺めた人に対して涙が流せる……………。

罪の償い方の考えは共感できないけど、罪を自覚して償おうとは考えている。

だからもつと前向きに考えなさい」

「前向きに……………」

「そう。殺めた人の分の命も生きて、生き続けて罪を償っていくのよ」

そう。私もリオンと同じで過去にたくさん人の命を理想のためと理由をつけて誰に命令されるでもなく自分の意思で殺めてきた。

リオン以上に私は犯罪者だ。

それでも私は自殺しようとはせずに殺した人の分も生きようという思いで今まで生きてきた。

だから私ほどではなくともリオンにも同じ気持ちで生きて欲しい……………。

そんな、私の気持ちを通じたのかはわからないが、

「私は、生きていて、いいんですか……………？」

それでリオンはまたしても涙を流し始めました。

それで私はリオンの頭を撫でてやりながら、

「少なくとも、スバルやティアナ、そして私達はあなたがこれからも生きてくれることを望んでいるわ……………。だから、あなたもけっして自分から死のうなんて考えちゃダメよ……………？」

「はい……………はい……………ッ！」

それでポロポロと今日何度目かになる涙を流して何度も頷くりオン。

よかった……………。これで自殺とかをする心配はもうないわね。

こんなに綺麗な涙を流しているんだから。

それからは話を変えて知っている限りの情報をリオンから聞き出す私達だった。



……それから、リオンは中庭でスバル達フワード達やヴィヴィオ、ツルギ君などと会話を交わしているところを会議室の窓から眺めながら、隊長達だけでの会議を始めた。

「……さて、リオンからあらかた情報は引き出せたけど、なにか意見ある人はいるか？」

「はい」

はやての言葉でまずフェイトが手を上げる。

「フェイトちゃんか。ええで」

「うん。まずリオンさんから聞き出した話を集計すると改めてモリアが用心深い事がわかったと思うんだ」

「たしかにそうだな。モリアはネームレスに何も情報を与えていなかったようだからな」

フェイトの言葉にシグナムがそう返す。

でも、ちよつとシグナムに言っておきたいことがある。

それで私がシグナムに話しかけようとしたけど、先にヴィータに言われてしまった。

「おい、シグナム。たしかにネームレスっていうのはリオンの名前だけだ………：リオ

ン自身は忌み嫌っているんだから名前で呼んでやれよ？」

「む……………たしかにそうだな。気をつけるとする」

そう。

リオンの本名。

『リオン・ネームレス』。

リオンという名前は合成獣キメラに殺されたというリオン以外の十九人の兄弟姉妹達につけられた名前だからまだ許せるが、問題はネームレスという苗字。

これはモリアが『誰でもない』という意味でつけたという。

リオンは言った。

『私はたくさんの人の遺伝子から作り出されました。だから誰でもない……………ゆえに名無し、ネームレスなんです』

どこか悲しそうにそう言った時のリオンさんの表情は忘れられないものだ。

「リオンは、私と同じなんだね……………」

「フェイトちゃん……………」

フェイトが共感できたのだろう、少し俯きながらそう呟く。

それになのが心配そうにフェイトの名を呼ぶ。

たしかに、フェイトという名前は『Project F.A.T.E』から失敗作の

意味も兼ねてプレシアがつけた名前だ。

だからフェイトも気持ちが変わるのだろう。

モリアとの違いは最後の時にはプレシアと分かり合えた事だろう。

「すまん、テストタロツサ。苦い記憶を思い出させてしまったな」

「ううん。大丈夫だよ、シグナム。母さんとは最後には分かり合えたんだから私にとつてはいい思い出だよ。」

それと比べるとリオンはとても可哀想だね」

「たしかにそうね。リオンはモリアに無感情のままにつけられてしまったんだからね……………」

「やっぱり、モリアは捕まえないといけないね。またリオンさんのような子を出さないためにも……………」

なのはが拳を握り締めながらそう強く宣言する。

それほどに腹に煮えくりかえるものがあるのだろう、モリアの所業には。

今ももしかしたら他にリンカーコアを抜き取られて無理やり戦わされている人がいるかもしれないと思うとも立ってもいられなくなってくる。

しかし、現状では手がかりは……………。あ、そう言えば。

「そう言えばはやて」

「ん？ なんや、シホちゃん？」

「ええ、はやて。ふとした疑問なんだけどうやってモリアの本名が判明したの？」

「ああ、その事やね。調べるには簡単やったんよ。モリアという名前と顔を照合したらすぐにリストが出てきたからな」

「そうなの……………。詳しくはあったの？」

「うん、それなんやけどな。モリアの過去の経歴は元・執務官だったんやつて……………」

「執務官!？」

フエイトが声を荒げる。

あんな非道なことをしておいて元・執務官だったというのは私もちよつと信じられないわね……………。

「うん。みんなが信じられないのも頷ける。でも、事実なんや。なんでも過去にとある任務に失敗して全身を大火傷してほぼ死に体だったらしいんや。なんとか一命は取りとめたらしいんやけど、少して姿をくりましたそうや……………」

『……………』

モリアの意外な過去に私達は思わず言葉を失う。

でも、

「そこが、モリアの人生のターニングポイントだったわけね」

「ま、そうなるね。でも、同情はできないかなあ。リオンの話を聞く限りは……………」
「たしかにね」

昔は昔だ。それからなにがあつたのかは知らないけど同情の余地はないわね。
と、なると、

「シユバインオーグ。奴の体を映像で見たな？」

「ええ、見たわ。となると少しおかしいわね。整形にしても完璧に火傷の跡が消えていた。あれは一体なんなのかしらね」

「シホちゃん。他にも気になることがあるよ。モリアは空を飛んで移動しながらも転移魔法をしたんだよ？」

「たしかにな……………」

そうね。移動しながらなんて座標がズレてしまつてうまく転移なんてできるどころではないだろう。

もしくは、高速の演算機を内蔵していれば、もしくは……………。

そこで私はある事に気づく。

「モリアは背中から直接バーニアが展開したわね。」

それにスバルの振動破碎の拳をくらつたのにまるでケロつとしていたらしいわ。手応え的には鉄を殴つたかのような硬さだったらしい。

「ここから結論出される結果は……………」

「まさか……………」

「モリアは全身機械の可能性があるということか?」

私達の中でモリアという人物がなんなのかが少しずつではあるが判明してきたのか
もしれない。

だとすればまだ早計かもしれないが、モリアは自身の科学力だけで生身の代わりに機
械の体を手に入れたかもしれない、という予測が立てられる。

他にも合成獣^{キメラ}や、生物兵器製造技術、リンカーコアを引き抜くという下手したら命を
奪う紙一重の行為と、上げていくと狂っているとしか言えない所業の数々……………。

強敵になるという可能性が出てきたわけだ。

私達の頭を悩ますには十分である。

これからの捜査はまた気を引き締めないといけないわね。



モリアは自身の研究室でシホによってあらぬ方向に曲げられた腕を文字通り修理し
ていた。

色々な機器が自動で動いて部品を取り替えていく。

そして換装が終了したのだろう、何度も「キュイン」と鳴る腕を動かしながら、
「ふむ………さすが俺様だ。」

この程度ならもう簡単に治せるのだからね」

そしてモリアは胸に内蔵されている“あるもの”を感じながら、

「しかし、ある方から譲り受けたこの魔導ジェネレーターは最高だねえ。おかげで魔力が尽きることがなくなったわけだからな」

恍惚とした表情を浮かべながらも、モリアは、

「………さて、あの方がそろそろ動き出す。そこから俺様の計画も始動することになる。いや、楽しみだねえー」

モリアは不気味に笑うのであった。

第百八十六話 『これからの捜査方針、ヴィヴィオの悩

み』

シホ達はブリーフィングルームでおそらく大量生産されているだろうキリング・ドールや合成獣^{キメラ}を作成したモリア、さらにおそらく他にバックに控えているだろう資金供給源のさらなる黒幕組織の存在について話し合っていた。

モリアが表舞台に出てきたことによつて魔術事件対策課との合同捜査もより捗るであらうと見込まれてはいる。

モリアの背後には必ずなにかしらの組織が暗躍しているのは確かなことだ。かつてのスカリエッティと最高評議会の関係然り、ガジェット^{ガジェット}の量産性然り。

これを今回の事案に当てはめていくとモリアと謎の組織の関係性が浮き彫りになってくる。

そしてキリング・ドールを量産するための資金源なども必ずどこかに流れているルートがあるわけであり、他にも合成獣^{キメラ}や、もう最高評議會は潰れたも同然であるために使

用されていない技術であるはずの Project F・A・T・E の技術を流用することによって編み出された新たな製法による人工生命の作成によって生み出されたリオン達というある意味犠牲者たち……………。

これらをすべて作成するための研究所も必ずどこかに存在するはずだ。

捜査することが増えてしまったのは致し方ないことであるが、それも想定済みである。

さらにはモリア自身が機械の体かもしれないという情報もあるだけに技術力に関しては確かなのだろう自信があることは伺える。

「……………——というわけで、フェイトちゃんはモリア・モルドレッドのアジトを見つめることを中心に捜査してもらいたい。ランサーさんが一緒につけば怖いものはあらへんやろ？」

「うん。ランサーが一緒なら怖くないよ。なんだってわたしの彼氏さんなんだから……………」

はやての方針にフェイトは真面目半分惚気半分で強気な表情で答えた。

「うーん……………さりげなくナチュラルに惚気られると彼氏がいない私としては嫉妬して

しまうわー。

……………まあ、ええわ。次にシホちゃん」

「ええ」

名前を呼ばれてシホが返事をする。

呼んだはやてはシホにある意味すごい命令を下す。

「使えるものはなんでも使ってもええよ？」

「……………、え？」

はやての言葉にシホは一瞬訳が分からずに遅れて疑問の声を発する。

「やから、魔術を駆使して徹底的に裏を取ってもええつてこと。昔はよくすずかちゃんやアリサちゃんとか誘拐された時に結構頻繁に使っていたやろ？」

「隠密系の宝具とか暗示系の魔術とか魅了の魔眼とか……………」

「あ……………」

シホも過去のあれこれについて思い出したのだろう、納得したように何度も頷いている。

ではなぜシホはこの方法を今まで使用しなかったのか？ということになってくるのだが、これにはとある訳があった。

管理局の方でそのシホの有り余る行動力に関して『待った！』がかかったからである。

何故？とシホが尋ねたところ、返ってきた答えは『まだ魔術が世に浸透していないために出過ぎた行動はほしくないでほしい』と口を酸っぱくして言われたためである。

それでシホは思ったことはというと、

『もし悪い魔術師が同じことをして私に言ったように言えるか？』だったらいい。

——結果はわかる通り、ヴォルフ・イエーガーという魔術師が暗躍しているから管理局は裏目に出てしまつて泡を食っているが……………。

そして、基本シホ、そして八神士郎は使えるものはたとえポスターや木の枝でさえも強化魔術で加工して使つてしまうほどの“魔術使い”である。

まだ投影魔術が自由自在に使えなかった未熟な頃は未熟なりに足掻きを見せる意味では重宝したものである。

今は暗示系の魔術も使えるようになっていたので犯人の情報も引き出すのは相手の対魔力が高くない限りは可能である。

……………そんな便利な能力をシホは制限されてしまつたのである。

『郷に入っては郷に従え』ということわざがあるが、魔術使いであると同時に魔導使いでもあるシホにとって魔導師としての考え方も少しズレがあるのである。

だからシホにとっては魔導だけではやはり物足りなかったらしい。

そんなシホにはやては好き勝手やってもいいよ、と言っているのである。

普通ならやるなど言われるのに、逆に許可するとははやてに心配の眼差しを向けるシホ達。

「……………いいの?」

それでシホは改めて確認のために聞き直した。

それにはやては黒い笑みで無言で頷き返す。

詰まる所は『GO!サイン』である。

「……………はやてが久しぶりに黒いなあ」

「さすがです、主はやて」

そんなはやてにヴィータは『やれやれ』と言った表情をし、シグナムはまさに『さすがの采配です』という感じに頷いていた。

「あ、あの……………真面目に調べる私の立場は?」

「御愁傷様だよ、フェイトちゃん……………」

これからまた情報を一から調べあげようと奮起していたフェイトが悲しそうにそう

言う。

それになのはが目尻に涙を溜めながらフェイトの肩に手を置いて慰めていたのであった。

ちなみになのはとヴィータはこんな時でも変わらずに教導を言い渡されていた。どんな時でも訓練は怠つてはいけないということである。



シホ達があらかじめ方針が決まってきた頃、中庭でリオンを中心にフォワード達とヴィヴィオ、ツルギが集まっていた。

「…………でも、シホさんはこんな時にどうしてリオンさんにあんなことを聞いたんでしょうか？」

エリオがまだよく分かっていなかったらしくみんなに聞いていた。それに対してティアナが苦笑いを浮かべながら、

「きつとシホさんなりにリオンの危うさに気づいたんだと思うわ」

「危うさ、ですか……………？」

キャラ口が首を傾げる。

エリオもそうだがまだキャラも幼さゆえに経験が少ないだけにまだ気持ちを読み取ることができていないのだろう。

そんなキャラの頭をランは優しく撫でながら、

「キャラも成長すればわかってくるよ。シホさんは人の気持ちの浮き沈みには敏感なんだよ。恋愛こゝろに関して鈍感だけどね」

「ラン姉さん、それフォローになっていないよ……………?」

「え? そうかな?」

ランの物言いにレンがすかさずツツコミを入れていた。

そんなランレンはほつとくことにしたスバルは、リオンの手を握りながら、

「……………でも、リオンが無事でよかったよ」

「スバル……………」

「あの時リオンのリンカーコアがモリア・モルドレッドに握りつぶされそうになった時はあたしは無我夢中でモリアを殴り飛ばしていたからね。それでもシホさんの助けがなかったらリオンは今頃どうなっていたか……………」

それで少し涙を浮かべてうつむくスバル。

ティアナも気絶してしまっていただけになんにも手助けができなかったことに責任を感じているのか無言で厳しい表情になっていた。

そんな二人の様子を見てリオンは大事にされているんだ、と感動しながらもスバルとティアナの二人の手を握る。

「そんなことないよ。スバルとティアは私をいつも支えてくれていた。そうじゃないと今頃はモリアの仕打ちで心が潰れていたかもしれないから。だから、ありがとう……」。今でも私を友達だつて信じてくれて」

リオンは二人に抱きつき今ある幸せを噛み締めていた。

それでまた和やかな空間が出来上がる。

「あの、リオンお姉ちゃん……」

「ん？ なに、えつと……ヴィヴィオちゃん？」

「リオンお姉ちゃんは、その、……」

少しヴィヴィオは言いよんどんでいた。

ツルギが手を握つてあげながら「頑張つて、ヴィヴィオちゃん」と鼓舞していて、ヴィヴィオも踏ん切りがついたのかりオンにあることを訪ねる。

「リオンお姉ちゃんは何を造られたんですよね？」

「っ!？」

ヴィヴィオから意外な言葉が出てきてリオンはもちろん、他の全員も目を見開く。

まだ幼いヴィヴィオからこんな話をされるとは思っていなかったために、なんでこん

な事を聞いたのかと

叱ろうとした時、

「ヴィヴィオもね、リオンお姉ちゃんと同じで造られた存在なの」

しかしヴィヴィオのその言葉に一同はまたしても言葉を失う。

「でも、なんで造られたのかわからないの。なのはママやユーノパパはそんなヴィヴィオでも気にしないって受け入れてくれたの。でもね、いつも一人になったら思うの。ヴィヴィオはなんで造られたんだろうって……」

それでヴィヴィオの瞳に光るものが見えた。

「スカリエッテイっていうおじさんはヴィヴィオを捕まえようとしたらしいの。でも、ヴィヴィオのことはなのはママを捕まえるためのデコイだって言ったらしいの。だから……ヴィヴィオは、ヴィヴィオは生み出された理由が知りたいの。それがどんな結果になってもいい、ヴィヴィオにはなのはママ達がいるから我慢できるの……」

「ヴィヴィオ……」

「ヴィヴィオちゃん……」

「……………ごめんなさい。ヴィヴィオの一方的な言い分でした」

それでヴィヴィオは頭を下げる。

しかし、ヴィヴィオのその初めて聞く告白に一同は思う。

ヴィヴィオも複雑な気持ちを幼いながらも抱えていることを。

だから、リオンはヴィヴィオの頭を撫でながら、

「……………ヴィヴィオちゃん。きつと、生まれた理由なんて関係ないと思うんだ。どんな事情があつたにせよ今生きてる……………暖かい人達に囲まれている。それだけでいいと思う。それを私はシホさんに教えられた。だからヴィヴィオちゃんも深く悩んじゃダメだよ？」

クシヤクシヤと頭を撫でられながらも、ヴィヴィオは「うん……………」と涙を流しながらも笑顔になってくれた。

「大丈夫だよ、ヴィヴィオちゃん！ ヴィヴィオちゃんは僕が守るから！」

ツルギがぶんぶん握った手を振ってヴィヴィオを慰めた。

それに対してヴィヴィオはと言うと、

「うん！ ツルギちゃん！」

事もあろうにちゃん付けでツルギを呼んでしまった。

その理由は簡単であるゲムで腰まで伸びてしまった赤い髪を切らないでそのままに流しているからヴィヴィオの中ではツルギは少しばかり女の子認識されているからだ。

「ヴィヴィオちゃん、僕は男の子だよー！」

結果、うわーんという感じでツルギが叫ぶ羽目になってしまっている始末だ。

「ふふふ、可愛いナイト(?) 様だね」

「リオンお姉ちゃんも疑問符をつけないでよー!？」

それで終始和やかな空気になったのと言うまでもないことである。

そしてもうリオンとヴィヴィオは二人とも暗い表情ではなくなっていた。

……その後、ヴィヴィオの告白内容をスバル達から聞いたのははヴィヴィオを猫可愛がりしたそうだ。



とある施設である男性が壇上に立ち、並んでいる隊員一同に向かって目を向ける。

「諸君、機は熟した。今こそ我らの悲願を果たす時だ。いざ始めるとしよう。——聖戦を！」

男性の言葉に隊員達は『ウオオオオオオオーツ!!』と雄叫びを上げるのであった。

これからミッドチルダはまた暗雲が立ち込めるだろうことは分かりきった宣言だった。

シホ達は、これにどう対処するのか？ 事件を解決することができるのか？
……それを知るのは果たして神かあるいは。

第百八十七話 『畏、そして現れる騎乗兵』

はやての許しを得て翌日、シホはキリンググドールの残骸が保存されているラボへと赴いていた。

おそらくなにかの発見があるだろうという予測で。

シホの近くに一緒にいるのはアルトリアとネロは当然として一緒に捜査をすることになっているギンガがついている。

シホは本心としてはフェイト辺りにも一緒に同行して共同で捜査できたらよかったなあ、くらいな気持ちでいたが、それでもギンガの捜査能力も108部隊で鍛えられているので期待はできるからいいとした。

ギンガ自身も今もつばらは捕えられている戦闘機人達の教育の任務についているが、それは現在他の人に任せてシホに捜査協力をしている形である。

「ですが、こうしていきますとスカリエッティ事件の時のような緊張感がありますね」
ギンガがそう呟く。

それにシホとアルトリア、ネロも同意のようで無言で頷いた後、

「確かに……。パークロードの一件から一歩間違つたら大惨事になっていたかもしれない

ないからね……」

「うむ。あの時は事前に情報があつたからこそ対処できたのだ。しかし、モリアの奴もこれで用心深くなっているのだろう、なかなか動きを見せてくれないからな」

「厄介、ですね……」

納得といった感じでギンガは頷く。

そこにアルトリアも会話に参加してくる。

「そしていつまた暴動を起こすのかもわからない現状では、やはり私達は後手に回らざるえないのが現状です。なにか彼らにつながる情報が今回の捜査で見つかればよいのですが……」

「そう不安がるな、アルトリアよ。奏者が本腰を入れて捜査をするのだ。なにかしら手がかりは見つかるだろうさ！」

「そうですね。シホの力ならば！」

従者であるアルトリアとネロはシホ本人がいる中でそんな会話をしているのでそれを聞き耳を立てているシホはというと、

「(……あんまり期待はしないでほしいわね。私でも捜査の限界があるんだから。あ、胃が緊張で痛んできた……)」

あまりの期待度に内心で緊張をしているシホなのであった。

ギンガもそれを聞いて感心した表情を浮かべながら、

「シホさんはそれほどの捜査能力をお持ちだったんですか？ 初耳です」

「あ、それに関してはねー……」

それでシホは管理局上層部から魔術の多量使用の禁止令を出されていたことをギンガに話す。

ギンガはそれを聞いていくうちに少し、いやかなり上層部に対して不満を顕わにしていた。

「そんな……捜査に役立つのならば使えるものは使わなければいけないのに、シホさんに禁止令を出すなんて……」

魔術が認知されるようになってからかなり時が経ちますのに……」

そう言つてギンガは心底残念がっていた。

シホは「でもね」と言葉を續けて、

「私だけこんな扱いなのは理由があつてね。まあ、昔にやらかしたことが原因なんだけど、ジュエルシード事件や闇の書事件で大っぴらに強力な魔術を使つちやつたじゃない？

それが原因で上層部もその力が自分達に向くんじやないか、とか恐れられちやつてね。」

そして他にもなものはやフェイト、はやてにアリサ、すずか、士郎と当然私も含めてだけど強力な力を秘めているサーヴァントを従えているからそれも後押しをしているのが現状なのよ」

そう言つてシホはため息をつく。

シホがこの世界に来てからもう十年も経過してある程度信頼は得てきているのだが頭が固い者はいくらでもでてきている。

幾分魔術による捜査を許されている魔術事件対策課も危険対象に指定されているのだからままならない。

魔術と魔導、方向性は違えど同じ人間が使う術なのだからそれを正しい方向で使えるように指導していけばいいものを……とシホは昨今で抱えている悩みをギンガに話す。

「はあ……やはり確執みたいなものがあるんですね」

「その通りです、ギンガ。今まで使い慣れてきた魔導の他に魔術という新しい力が出てくれば組織とすれば警戒する対象に含まれるのは当然とすべきか、そんなところですね」

「アルトリアの言うとおりね。考えてみて、ギンガ」

「なにをですか……？」

「逆の考え方をすれば私達の元の世界である魔術が繁栄している世界では、魔導という

新たな要素が出てきたらどうなる……?」

それでギンガは少し考えた後に、

「警戒、しますね……」

「でしよう?」

ギンガの表情は理解も納得もできるが、だけど、だからこそ手を取り合つて共存すればさらによりよく発展していけるといけるという考えが浮かぶ。

「少しずつでも共存できれば……」

そのギンガの小さな眩きもシホ達は聞き取り、

「そう。それが今の私達の世界の現状なのよ。力は力、異分子でもいつかは共存できる。

それがいま私達の時代で試されているのよ。

だから悪く言えば一歩間違えれば魔導師と魔術師による戦い……いや、もしかしたら戦争にまで発展してしまう可能性も未来には孕んでいる」

「そんな……ッ!」

シホの最悪の未来予測にギンガは声を荒げて叫ぶ。

「安心してください、ギンガ。そうならないように今も上ではリンディを始めとした魔術師支持派が共存の道を上層部に訴えかけているのです」

「うむ。いつの世も争いは絶えぬが、なにも剣を取り争うこともせず、言葉で戦ってい

ければそれで道はいつか開かれるというものよ」

アルトリアとネロの言葉に幾分落ち着いてきたのか、ギンガは安心した表情で「そうですね」と頷く。

そしてシホも頷いた後に「それにね……」と言葉を続けて、

「かの三提督である『ラルゴ・キール提督』、『レオーネ・フィリス提督』、そして『ミゼツト・クローベル提督』のお三方も魔術師に対しては支持派に回ってくれているのよ」

「三提督が……」

ギンガはその三名の名前が出たことよってより安心感を浮かべた顔になった。

それだけ三提督達が偉大かが分かる一面である。

この三人がバックにいるとなれば安心度はかなり増すといってもいい。

「これなら……」

「ええ、一応安心と言つてもいいと思うわ。……これで不穏分子がなければの話だけれどね」

「不穏分子ですか？」

「ええ。三提督がもしかしたら標的になるかもしれないからね。実際モリアは大勢の観客を人質に取ろうとしたから」

「リオンもそのモリアという人物に利用されていたんですよね、シホさん？」

「ええ。幸いなんとか救えて今は機動六課でほとぼりが立つまで匿っているところよ」「よかった……。リオンが無事で……」

胸に手を持っていきギンガは安心そうに優しい顔になる。

「……さて、と。それじゃ話もそこそこにいきましようか」

「はい、了解です。シホさん！」



それからシホ達はキリングドールの場所まで到着した。

「それで、シホさん。これからどうするんですか？ これらはもう何度も検査を受けたんですよね？ 今更でてくるものなどないと思いますけど……？」

「ま、見ていなさい。私流の捜査を見せてあげるわ」

そう言つてシホはキリングドールの残骸に手を添えて、

「トレス・オン
解析開始」

キリングドールの解析を開始したのだ。

ことシホの解析魔術に關してはだれにも負けないう自信はあるとシホは思っている。

なんせ宝具すら解析してしまうほどの性能を發揮するからだ。

衛宮士郎時代にも壊れたストーブや電化製品などを解析して悪いところを交換して幾度も瀕死の状態から復活させてきたのだから。

そして今回行う解析は宝具解析の応用である。

シホの解析と投影の手順は大まかに六つ。

——創造の理念を鑑定。

——基本となる骨子を想定。

——構成された材質を複製。

——制作に及ぶ技術を模倣。

——成長に至る経験に共感。

——蓄積された年月を再現。

この六の工程を踏んで最後にすべての工程を覆して一つの幻想を形にするのである。そして今回注目するのはこの六の工程のうちの一つ。

制作に及ぶ技術を模倣。

これを使うわけだ。

この手順を踏むときにシホの脳内には作り出された光景や過程などの景色なども見えることがある。

ただそれだけではどこで作られているかはまだわからない。

だからさらにその工程にだけ神経を限定して絞って解析をかけていく。

そうすればさらに周りの風景や場所が視えてくるからだ。

一種の透視、サイコメトリーにも近い能力である。

……数分間目をつぶって解析作業をしていたシホは少しして、

「……トレース・オフ
解析終了」

そう言って閉じていた目を開ける。

「どうですか、シホ?」

「どうなのだ、奏者よ?」

「なにかわかりましたか、シホさん?」

三人の問いかけにシホは、

「ええ、このキリングドールの製造工場の位置をある程度掴んだわ。ギンガ、地図を

……。おそらくミッドチルダのどこかにあるはずだわ」

「わ、わかりました! すぐに用意します!」

そう言つてギンガはミッドチルダの地図を取りに行った。

ギンガが地図を取りに行つている間にシホは近くにあつた椅子に腰掛けて一呼吸をする。

「ふう……やつぱり限定解析は神経を使うわね」

「お疲れ様です、シホ。しかしやはりシホの解析魔術は強力ですね」

「うむ。さすが宝具を解析できるほどのものだな」

「まあ、これくらいにしか役立たないんだけどね……」

シホは「あはは」と笑うが、アルトリアが「そんなことはありません」と言葉を繋ぐ。

「シホの魔術は確かに特化型ですが、ですがそれでも極めれば使い道はさらに広がっていきますね。」

その成果としましてはツルギ愛用の魔術『概念抽出』がその一例です」

「うむ。奏者はもう立派な魔術師だ。魔術が使えない余からすれば羨ましいものだぞ？」

「そうね。ありがとうね、二人とも」

「はい」

「うむー！」

シホの心の底からの感謝の言葉に二人は素直に嬉しそうに頷くのであつた。

それからしばらくしてギンガが地図を持ってきてシホは解析魔術で読み取った風景や場所などを地図や映像などで特定していった。

そしていくつか候補が上がりますぐさま四人は移動を開始することにしたのだった。



四人はバリアジャケットや戦闘服などを纏って特定した隠された工場の居場所をつきとめて中へと侵入していった。

アルトリアが前衛、シホとギンガが中間、ネロが殿を務める形で工場の中を移動していく。

事前に入る前に解析をかけて工場内部の移動通路や部屋割りなどもシホは把握しているので心配はなく安心して、しかし緊張感をもって進んでいく。

そしてあるでかい扉がある部屋を発見した。

「ここが怪しいわね」

「はい」

「奏者よ、誰が突入するか？」

「そうね……アルトリア、頼める?」

「了解いたしました」

そしてアルトリアが扉を無理やりこじ開けて中へと侵入していき、続いて三人も中へと入っていく。

部屋の中は暗いままだったがシホは電気のスイッチを発見してオンにする。

そして照明が照らされたそこにあつたのはゆうに百体以上はあるキリングドールの姿があつた。

「ビング、ですね。シホさん、さすがですね」

「ありがとう。さて、それじゃはやてに通報しておこうかしらね。工場の一つを発見したって……」

そう言つてシホは通信を試みようとするが、

「あれ? 繋がらない……?」

「シホさん! こちらも繋がりません!」

ギンガも通信を試みたようでシホと同じく繋がらないようであつた。

「まさか……ここは罠か!」

——その通りだよ!

その時、謎の女性の声が響いてきた。

「誰っ!？」

シホ達は辺りを見回し、見れば金網で作られている二階部分にフードを纏った人がいた。

「奏者よ！ わずかながらサーヴァントのような気配を感じるぞー！」

「また、サーヴァントのような気配なのね？」

「うむ！」

そしてフードの人物が二階から飛び降りてきて地面に着地して、

「また会ったなあ！」

「また……？？ それではあなたは……！」

「そうさー！」

そう言つてフードの人物はフードを自ら剥ぎ取つた。

そして下から現れたのはギザギザの短髪ながらも銀色に輝いている髪、そして紅い瞳。

身長はライダーと同じくらいの女性だった。

「銀色の髪に紅い瞳……？？ まさか、あなたはホムンクルス？」

「お？ よくわかったな！ 俺は、まあ名前がないんでな。ライダーでいいぜ！ ま、とにかくここからは逃がさねえぜ？」

「その言い様だと、もうなにか事件が起きているという事ですか？」

「さてな……。マスターには何も聞かされていないからな」

「マスター……。まさかヴォルフ・イエーガー！」

「またビンゴだな！ まあ、そんなことはいいんだよ！……戦おうぜ？」

その言葉が合図となったのだろう、キリングドール全機が起動する。

そしてライダーは一枚のカードを取り出して、

「あのカードは?！」

「いくぜ？ 夢幻^{インストール}召喚!!」

瞬間、カードが光り輝き魔法陣が出現して光の帯がライダーに絡みついていく。

そして光が晴れた先には方天戟を手に持ち、紅い鎧を身に纏うまさに武神のような姿のライダーの姿があったのだった。

第百八十八話 『クーデター』

モリアおよびキリングドールの製造工場の手掛かりを掴んでギンガ、アルトリア、ネロを連れてやってきたシホ達の目の前に突如として現れたライダーと名乗る女性。

彼女は一枚の騎乗兵が描かれているタロットカードのようなものを取り出すと「インストール！」と叫んだ。

途端、彼女の体にカードからあふれ出る魔力の帯に包まれていつて光が晴れた先には先ほどのまでの簡素な恰好ではなく赤い装飾が目立つ鎧を身に纏ってその手には身の丈以上の長さの方天戟が握られていた。

おそらくサーヴァントのような気配というのはあのカードが関係がありそうであるのは明白だ。

しかし、彼女の体からあふれ出ている闘気、これは間違いなく本物であるのは経験則でシホ達全員は察知していた。

「戦う前に聞かせてもらえるかしら？」

「あんだ……？　せつかくやる気だしてんのに戦いはやめるとかは勘弁だぜ？」
「できれば戦いはしたくないわ。でも、それより先ほどのカードはなに……？」

シホは単刀直入でそのことを聞いた。

カード自体にサーヴァントの力が宿っていて、さらにはサーヴァントの能力を疑似的に体に再現するなど元の魔術の世界でも聞いたことがない。

そんなことが発覚すればそく封印指定にかけられていてもおかしくない代物だ。

「あー………これな。俺もあんま知らねー」

「………真面目に答えなさい」

シホは視線に殺気を込めて再度ライダーに問いかける。

しかしライダーは本当に知らないらしく、手をブラブラさせながらだるい声で、

「だーかーらー………知らないっていつてるだろ？　俺はマスターにこれを使いこなせるように調整されて作り出されたホムンクルス体だ。だから詳しくは知らないし、それに………」

ライダーはニヤリと口角を上げる笑みを浮かべて、

「知っていてもそう簡単に教えるわけねーだろ？」

「………」

シホはこれ以上は無駄な詮索だと思い、ならば覚悟を決めることにする。

「ギンガ。ネロと一緒に周りのキリングドールの相手をしてもらっていいかしら？ もちろん最大限警戒はして手加減無用よ」

「あ……は、はい！ お任せください！」

「任されたぞ！ 奏者よ！」

それでギンガは左手のリボルバーナックルを構えて戦闘態勢に入り、ネロも隕鉄の韃の大剣をいつでも飛び出せるように水平に構える。

「そしてアルトリア。彼女……ライダーを私と二人で即座に倒すわよ。なにか胸騒ぎがする……早く機動六課に戻らないとなにかが間に合わないかもしれないから」

「了解しました。確かに私も直感が危険の前兆を感じ取っています。いざという時はユニゾンも検討に入れていきましょう」

「わかったわ」

シホ達の即席の作戦が決まったところでライダーが声をかけてくる。

「もういいかー？」と。

ライダーの表情は好戦的なようで今すぐにでも戦いたいという気持ちが顔に現れて目がすでにぎらついている。

「ええ。準備はできているわ。言っておくけど私達もあなたを本気で倒すつもりでいく

わ。そして捕まえてヴォルフ・イエーガーの事を聞かせてもらおうわ！」

そうやってシホはアンリミテッド・エア、ツヴァイリングフォルムを構える。

アルトリアも風王結界で覆われているエクスカリバーを構える。

「そんじゃ、いくぜ!!」

ライダーの言葉が合図となりキリングドールも含めて全員がそれぞれ行動を開始した。



シホ達がライダーとキリングドールと戦闘を開始した同時間に地上本部では『ラルゴ・キール提督』、『レオーネ・フィリス提督』、『ミゼット・クローベル提督』の三提督が集会を開いていた。

話している内容は今現在ミッドチルダを騒がせている最高評議会の残党狩りのことに関してだ。

「……………さて、我らがこうして話をしている間にもどこかで最高評議会のメンバーが殺害されているかもしれないと思うと、やるせないねえ」

「そうだねえ」

ラルゴの発言にレオーネがお茶を飲みながらも返事を返す。

「今、機動六課の皆さんが捜査に動いているそうだけど、状況は芳しくないという話ですね」

「うむ」

「聞き及んでいるぞ。なんでもキリングドールという殺傷兵器を開発して暴れまわっているという話じゃな」

ミゼットの心配の声が混じっている発言にラルゴとレオーネの二人も現在の状況は理解しているらしく三人ともに悩ましい表情になっている。

それでミゼットが空間ディスプレイを表示した。

そこにはモリア・モルドレットの顔写真とリオンの顔写真が表示されていた。

それをラルゴとレオーネの二人の前にも表示して、

「この、モリアという男……。かつて管理局の執務官として働いていたという調べがいつているわ。」

そして現在機動六課で保護しているというこの少女、リオン・ネームレスという子はこのモリアの手によって人工的に作られた生命体らしいのよ」

「なんと……。違法な技術にもこのモリアという男は手を出しているというのか？」

「そのようです。このリオンという少女はリンカーコアを抜かれてモリアの操り人形と

化していたようですが、シユバインオーグ一等空尉の手によって解放されたそうだが「ほう……。彼女か。さすがだな。伊達にミッドチルダの英雄ではないか」

三提督の中でシホの評価はかなり高い。

あのJ・S事件を解決に導いた機動六課の中で一番活躍した功労者だからだ。

聖王のゆりかごを破壊し尽くした光景は上層部なら誰でも見ていたのだからシホの実力は折り紙付きで知られている。

今も昇進の話が持ち上がっているが、まだシホは返事を保留しているという。

それでいい返事を三提督も待ち望んでいるのが本音のところである。

他にもジェイル・スカリエツティによつて捕らわれていた人々を作成したエリクシールを無料で提供して全員回復させたことから『聖女』だのというあだ名で呼ばれていたりする。

ゼスト・グランガイツのもう死しか待っていないなかった体も全快にまで回復させたところからエリクシールの性能は確かな効果を発揮していることは確かであるのは事実だ。

シホ自身もいまも暇があれば量産をしているというから『聖なる錬金術師』というあだ名も広まっている。

それからシホの話が少し続いた後に脱線していた現在の事件の話を開いたところで、扉がノックされる。

「誰ですか……?」

ミゼットが扉の向こうの人物に声をかける。

扉の先では男性の声で、

「お取込み中のところ申し訳ございません。ジグルド・ブリュンヒルデ提督です」という声が聞こえてきた。

それにミゼットが笑顔を浮かべて、

「おお、ジグルド坊ですか。何用ですか? 入ってきて構いませんよ」

ミゼットが『ジグルド坊』と呼ぶほどにジグルドは信頼を得ているのである。

しかし、次の瞬間その信頼は裏切られることになる。

「では、失礼します。……入れッ!」

入れという言葉が合図だったのである。突如として扉が勢いよく、そう蹴破られるかのように『バーン!』と開かれてジグルドと数人のものが入ってくる。

「なんだなんだ!?!」

「何事じゃ!?!」

「……………ッ！」

ラルゴとレオーネはいきなりの事態に目を見開き、ミゼットもあまりの事態に言葉を失っていた。

「……………さて、おとなしく私の言うことに従ってもらいましょうか。偉大なる三提督よ」

「これは何の真似ですか、ジグルド坊……………？」

「見ての通り、クーデターですよ。ミゼット提督」

それでミゼットも信じられないといわんばかりに目を見開く。

だがすぐに気持ちを落ち着かせて、

「なにが目的ですか、ジグルド『提督』？」

ミゼットは真剣な表情になり先ほどまで『ジグルド坊』と呼んでいたのに今では『ジグルド提督』と言い直している。

「なに……………あなた方は素直に私の人質になってももらいたいですよ。……………モリア」

「はっ！」

『ッ!?!』

ジグルドの背後から遅れて出てきた男の姿に三人はまたしても目を見開く。

そう、その男は先ほどまで話していたモリア・モルドレッド……………その人であつたのだ。

「くくく、もう電波ジャックは整っておりますよ、ジグルド提督？ さっそく放送します

か?」

「ああ、頼む」

「……………」

ミゼット達三人はジグルドの大剣型デバイス『アスカロン』の刃を自分たちに向けられている事に対して悔しい表情になっているのであった。



そして機動六課でも事態は動いていた。

「シャーリー! シホちゃん達と通信は繋ぐことができたか!」

「いえ! 何度も回線を変えたりして試みていますが全部繋がりません!」

はやてが管制室でシホ達に通信が繋がらないことに焦っていた。

シホに事前に言われていたのだ。

『私達ともし通信が繋がらない事態になったら機動六課の戦力を全員第二次警戒態勢に移行しておいて。魔術事件対策課の方にもそう伝えておいて……きつと何か良くないことが起きると思うから』

と、はやては伝言を受けていたのだ。

できれば当たってほしくない事態だったがはやては仕方がないとシホの言葉をそのまま実行すべく、シャーリーにその旨を伝えた。

それでシャーリーはすぐさまに機動六課戦闘メンバーに通達をした。

「(シホちゃん……無事でいてな。私達は私達でこれから起きることに対処していくわ。でも、すぐに帰ってくるんよ!)」

はやてはそう願う。

そして隣で浮いているリインが、

「シホさん達、無事でいてくれればいいです……」

はやてが敢えて口に出さなかった不安を代わりに言ってくれることに対して少しの感謝の言葉を贈りたかったが、今は緊急事態になりそうなことなので無言で頭を撫でる事にしたのであった。

そんな時にグリフィスがルキノからなにやら報告を受けているのに気付く。

「どうした、グリフィス君……?」

「は、はい、八神部隊長。緊急事態です!」

「なに……?」

そんな時に管制室のスクリーン……否、機動六課のあらゆるスクリーンにとある光景が映し出される。

「この映像は……ジグルド提督!! それに三提督まで!」

そこには三提督に剣を向けているジグルドの姿が映し出されていた。

画面先でジグルドが口を開く。

『この映像を見ている時空管理局局員、そして一般市民よ。聞け。私はブリューナク隊長、ジグルド・ブリュンヒルデだ。見てわかると思うが私は現在偉大なる三提督を人質に取っている』

「なんやて!?!」

はやての驚きをよそにジグルドは言葉が続ける。

『私が要求することは唯二つ。あの“J・S事件”に大きく関与していたとある人物を此処に連れて来い! そして、この管理局の全制度の撤廃を要求する!!』

そのあんまりな要求にはやて以外にもこれを見ていた時空管理局局員すべてが怒りを顕わにした。

『当然そんな要求はそう簡単にのめないことは予想できるだろう。だが、私の目的を聞けば納得する者もいるだろう……モリア、流せ』

モリアが画面に現れてはやては面を食らっている間にも、次々と最高評議会が行ってきた悪行がネットにばら撒かれていく。

しばらく黙っていたジグルドは、

『……さて、分かってもらえただろうか。私の目的は最強評議会やそれに関わったであろう者達の粛清だ。そのための今回のクーデターである。』

時間は24時間！ もし要求が呑めない場合は三提督の身は……さて、どうなるだろうか？』

そこでジグルドは邪悪な笑みを浮かべる。

「くっ！ やられた！」

『ガンツ！』とはやては拳を叩きつける。

悔しがるはやてをよそにジグルドはまだ続ける。

『仮にこの要求が呑めない場合は、守りが薄手になつて無関係の地域に配置したキリングドールを暴れさせる!!』

なお、この要求とは関係なく私の部隊であるブリューナク隊のメンバーとキリングドールの混合部隊で約二時間後に一斉に最高評議会の残党が潜んでいるだろう施設に攻撃を開始する。家族を巻き込みたくなければ……素直に出てくるのだな。

さて、私からは以上だ。諸君らの誠意ある返答を期待している！』

それで画面は切れて映らなくなりスクリーンは通常にまで戻される。

だが、そんなことなど今は気にしている余裕はもうすでない。

これから各地で最高評議会関係者に対しての市民達による暴動が起きることは予想

に難しくない。

……下手をすればキリングドールが各地で暴れまわる。

状況としては最悪な事態だ。

「でも、まだや！　まだ間に合う！　ジグルド提督を必ず説得する!!」
はやては説得できるだろうことを願うのであった。

第百八十九話 『緊急会議、そして出撃』

ジグルド・ブリュンヒルデによつて行われたクーデターが起きた事によつて時空管理局ミッドチルダ地上本部に激震が走った。

ジグルドの提示した要求は二つ。

まず一つ目は「J・S事件」に大きく関与していたとある人物の出頭。

そして二つ目は時空管理局の全制度の撤廃。

この二点だ。

まず一つ目のとある人物というのはある程度予想できる。

それは現在刑務所にて服役しているあのジェイル・スカリエツテイと裏で協力体制をとっていたレジアス・ゲイズ元中将のことだろう。

彼は現在は役職も階級も剥奪され身一つだけの存在だが、それでも地上本部にもたらした業績は認められていて『不足した戦力で地上の平和を護り通した英雄』という通り名もあるくらいだ。

それを彼に話したら涙を流して『すまない、すまない……』と謝罪の言葉を述べたという。

……話は戻ろう。

ジグルドはおそらく最高評議会に一番加担していたであろうレジアスを大義の名のもとに肅清することが目的なのだろう。

そのためにあの三提督まで人質に取るという暴挙に出たのだから。

しかし、それでも二つ目の要求は到底受け入れられないことである。

確かに最高評議会は裏で様々な非道な行為を行ってきたことは確かな事実だ。

それでも時空管理局全体が関与していたわけではない。

中にはその行い自体知らなかった、そして真面目に職務に全うしていた管理局職員がほとんどだ。

全制度の撤廃という事は今まで築き上げてきた管理局の歴史も葬ることになる大惨事な事態になる。

そんなことになったらほとんどの管理世界が無法地帯と化してしまい、犯罪が減るところかむしろ増加してしまう。

ジグルドにそこまでの考えが及んでいないのか、と問われてしまう話になってくる。

そう、もうジグルドはすでに提督という役職ではなく第一級指定犯罪者というレッテ

ルが張られて現在多くの部隊に所属している魔導師や執務官が彼および彼の部隊であるブリューナク隊の逮捕に動き出している。

しかし、そう簡単に逮捕に乗り込めないのが今の現状である。

まずは市民による最高評議会元メンバーとそれに関与していた研究者に対する非難の暴動が各地で起こっているのが多くの局員がその鎮圧に当たっている。

次にジグルドのクーデター宣言からすでもう一時間が経過している。

後、一時間後には要求に関係なく最高評議会メンバーが入れられている施設にキリングドール及びブリューナク隊が攻撃を開始し始めてしまう。

最高評議会に関わったメンバーのリストはありがたいことに悪事とともに一緒にネットの海にばら撒かれていたので施設の発見が早かったので警備の手はすぐに回る。

だが市民は彼らの粛清を第一に掲げている。

しかし、粛清＝殺されるという図式がすぐに浮かぶのは明白でメンバーのほとんどは恐怖に怯えていて半ば半狂乱を起こしているものも少なくないという。

その対処にも現在多くの魔導師と魔術師が対策を練っているところだ。

……このことによって、出撃できる部隊が限られてきているのだ。

残り一時間では時空管理局本局の本隊の部隊は到着できないからだ。

ここで地上と海での連携ができていないのはJ・S事件の教訓から来る経験則を学ん

でないのか、あるいはこんなにすぐに事件が起こることを予期できていなかったのか……おそらく後者であろう。

ともかく地上部隊だけでこの事件に対処しなければいけない。

それで臨時的に出れる部隊は通信越しで会議を行っていた。

当然はやてもモニターの向こうの様々な部隊長と会話をしていた。

『……………それで、後一時間後にはジグルド提督……………いや、もうすでに元・提督だな。彼の部隊、ブリューナク隊がキリングドールという殺傷兵器を使って各地で幽閉されている最高評議会のメンバーや息のかかったものに攻撃を開始するというが……………』

『そのようですね。この中でキリングドールについての詳細な能力を知っているものはいるかね?』

一人の部隊長がそう声を発した。

まずはキリングドールの性能を知らなければ話にならない。

殺傷兵器を使ってくるというのだから用心に越したことはない。

そのための質問。

そこにはやてが「はい」と声を上げる。

『君は……………そうか。奇跡の部隊と言われている部隊長の八神二佐か』

「奇跡の部隊などと……………恥ずかしいですね」

『そう謙遜しない方がいいぞ。ただでさえ有名なのだからな。……さて、では八神二佐。詳しい資料をお願いできるかね?』

「わかりました。シャーリー、各部隊長さん達に詳しい資料を転送してな」

「了解しました!」

それではやてのそばで待機していたシャーリーが各部隊長に向けて現在判明しているキリングドールの詳しいマニュアルなどを送信する。

『これは……違法とされている実弾を使用する銃に、デバイスではなく本物の実大剣か』
「はい。私達の部隊は今回のジグルド元提督のクーデターに大きく関与しているキリングドールの製作者であるモリア・モルドレットの事を調査していました」

『最近巷で何人もの最高評議会のメンバーを殺害していたという事件だな。聞き及んでるのか?』

「はい。それで今回ジグルド提督の傍らにモリアの姿も確認できたために同一犯行と断定しました」

『なるほど……』

はやての発言に聞いていた部隊長たちは納得したように頷く。

『しかし……あの『ミッドチルダの正義の象徴』とまで言われてきていたジグルドさんが、このような強行手段に手を出すとは。彼の身になにがあったのか……?』

その部隊長の発言にはやても含めて沈黙が下りる。

『ミッドチルダの正義の象徴』とはジグルドのあだ名であり過去にとある凶悪犯がミッドチルダを恐怖に陥れようとしたことがあり数人の仲間の尊い犠牲者が出たが解決に導いてミッドチルダを救った立役者なのだ。

それをはやては聞き及んでいて、もしかしてと思い、

「……シャーリー、その事件の犯人はなにか関係あるか調べてくれるか？」

「わかりました」

はやての指示ですぐにシャーリーは過去の事件を調べ始める。

はやてははやてでまた会議に耳を傾けようとしたところでシャーリーの「あっ！」という叫び声でまたシャーリーの方へと向いて、

「どうしたんや、シャーリー？ 大声出して……」

「い、いえ！ もうしわけございません、八神部隊長。ですがジグルド提督と繋がりました」

「……………なんやて？ 詳しく教えてちょうだい」

「はい。その過去の事件の首謀者はヴィクトールというかつて管理局地上部隊のある部隊の隊長だった男で……………その、最高評議会の息がかかったものでした。最高評議会の息のかかったものリストにも載っていましたから間違いありません」

「そうか……」

それではやてはなにかが繋がったと言う思いと、もうこれでジグルドがなぜこのクレーターを起こしてしまったのかわかってしまった。

そう、ジグルドの目的は肅清と大義名分を掲げているがその実は復讐という愚かな行為なのだ。

誰かがいつかは起こすのではないかと思っただけに起こした人物が人物だけに残念でならないとはやては思った。

それですぐさまにはやては会議で聞いていた部隊長各自にジグルドの過去を送信する。

それを見やるとほとんどのものが「やはり、復讐だったか……」と残念そうに顔を俯かせた。

『とにかく、ジグルドの目的は大体把握できた。あとは対策だ』
それで会議は進んでいく。



会議が終了した後、はやては機動六課戦闘メンバーを招集して決まった方針を伝え

る。

「各部隊長たちとそれぞれ意見交換などをして話し合った結果、私達は戦力を分散することになった」

それを伝えると全員が「やっぱり………」という表情になった。

その一番の理由としては機動六課戦力はかなりの人数であるからだ。

もちろん理由としてはサーヴァントという最大戦力を保持していることとJ・S事件を乗り切った猛者たちの集まりだというのも理由に挙げられる。

「それでまずヴィータを抜いたのはちゃん、オリヴィエさん、スバル、テイアナに補助としてヴァイス君のスターズ第一部隊で指定した場所に三十分後に向かってほしい」

「了解だよ、はやてちゃん」

「わかりました、はやて」

「了解です」

「了解しました！」

「うっす！」

五人が返事を返す中、そこで声を出す人が一人。

「なあ、はやて。あたしはなんで入っていないんだ……？」

ヴィータが当然の疑問を口にする。

ヴィータはなのはを守ることを第一優先にして考えている。

だから分けられることに対して少しだけ不満があったのである。

要するになのはにたいしてデレ状態と言ってもいい。

それを聞かれることを予想していたはやては「うん」と頷き、

「ヴィータの疑問はもつともや。ヴィータはなのはちゃんを守りたいんやもんなあく」

「ばっ!? はやて、違うからな!? あたしは別になのはのことなんか……」

それでヴィータは一度なのはの方へと向く。

それに対してなのはは首を傾けながら、

「ん? なにかな、ヴィータちゃん……?」

「…………ツ! う、うるせえー!」

「にやあつ!? 私、何も言っていないのに!」

恥ずかしさがすぐに臨界点を突破したのかヴィータは吠えて、なのははそれで泣きが入る。

そんなほほえましい光景に、しかしはやては時間を押していることも考えてすぐにヴィータをなだめる。

「まあまあ、ヴィータ少し落ち着き。なのはちゃんとわかれる理由はな。今現在シホちゃんがアルトリアさん、ネロさん、ギンガとともに捜査に向かった後に行方不明に

なっているのはもうみんなわかってるな？　だからその処置としてヴィータはランとレンを指揮してほしいんよ」

「な、なんだよはやて。それを先に言えって！」

「ごめんごめん。それで第二部隊のメンバーはヴィータ、士郎さん、キャスターさん、ラン、レンの急ごしらえのセイバース第二部隊や」

「わかつたぜ、はやて！」

「了解した。せいぜい足手まといにならないように努力しよう」

「わかりましたあ！　このタマモ、働かせいただきますよー！」

「が、頑張ります！」

「J・S事件で活躍できなかった分頑張ります！」

ヴィータ達五人も元気に声を出す。

この中で一番の戦力はやはりシホと同等の能力を持つ士郎だろう。

遠中近で活躍できる貴重な存在だから重宝されることは間違いない。

「そしてフェイトちゃん、ランサーさん、シグナム、エリオ、キャロ、フリードのライトニング第三部隊や」

「わかつたよ、はやて」

「おう、この槍に勝利を誓うぜ」

「ならば私もレヴァンティンにかけて勝つてみせます」

「頑張ろうね、キャロ！」

「うん、エリオ君！」

「キユクー！」

フエイト達も気合を入れて返事をする。

やや近接戦闘寄りのメンバーに傾いてはいるが、しかしそれでも十分な戦力である。

「そして最後に私八神はやて、リイン、ライダーさん、志貴、アルクエイドの主力級の集まりである第四部隊で戦場を引つ掻き回すわ！」

「はやてちゃんも前線に出てくるの!？」

「まあ、そうなんよ。戦えるものは猫の手も借りたところらしいから出し惜しみは無しやー！」

そう言うてはやては意気を上げていく。

「そして最後にみんなに伝えることがある」

はやての言葉に全員がはやての方へと振り向いて言葉を待つ。

「ジグルド提督の部隊、ブリューナク隊には知り合いがいる子もおるやろう」

それでエリオとキャロ、ランにレンは少し俯く。

以前に警備の時にお世話になったロボやセイラ、凰華達の事を思い出しているのだろ

う。

「今回の戦いはつらい現実も見えてくる。あちらにも事情はあるやろう。そして掲げている正義もあるやろう……でも、彼らの行動は絶対に間違つとる。だから必ず捕まえて犯罪を未然に防ぐんや。もう、私達にはこれくらいしかジグールド元提督達の暴走を止める術はないんやからな。説得もなんでも使うんよ！ みんな、気張りや!!」

『はい!』

それで全員は気持ちを切り替えてこれからの戦いに思いをはせた。

「それとアインス」

「なんですか、主はやて?」

「もし、シホちゃん達が私達がいけない間に機動六課に帰ってきたら先に戦場で待つているって伝えておいてな?」

「わかりました、伝えておきます」

「ザフィーラにシャマルは機動六課の守りをお願いな」

「任された」

「はい、はやてちゃん」

それで機動六課の居場所を預かるラインフォース・アインスとファイアット、すずか、ザフィーラ、シャマルに見送られながら一同は分散してそれぞれの戦場へと足を運んで

いった。

彼らの暴走を止めるために………！

第九十話

『ライダーとの戦い、そして……』

ジグルドがクーデターを起こした時間帯にシホ達はサーヴァントの力を使えるカードで文字通り変身したライダーと名乗る女性と約100体くらいはいるであろうキリングドールを相手取っていた。

ギンガとネロがキリングドールの殲滅作業を行っていた。

だが、ネロはともかくギンガはキリングドールと戦うのは今回が初めてでありどう戦うかはその都度ネロに話しかけていた。

「ネロさん、キリングドールの対処の仕方を教えてください！」

「うむ、任された！」

それで複数いるキリングドールを横薙ぎに切り裂いた後、ネロはまずキリングドールの性能をギンガに教えた。

「聞くのだ、ギンガ。キリングドールは実弾を使用した銃と実大剣を使用してくる。

この魔導の栄えている世界では異様な兵装だ。

だから防御魔法になるべく頼らず回避に専念するのだ。当たったら痛いどころでは済まないからな」

「わかりました！」

それでギンガはウインググロードを展開して回避に専念している。

そこにネロはさらに助言をする。

「ギンガ！ キリングドールは魔力の防御も使用しているが、その実は装甲はかなりの数を量産している割に脆い！ よってギンガもスバルと同じく戦闘機人モードの『振動破砕』で木端微塵にしてやるのだ!!」

「えっ！ 使つてよろしいのでしょうか……？」

「おうともよ。相手は命など無きに等しき機械の塊だ。情けなど無用だ！」

「わ、わかりました……！ IS、発動！」

その瞬間、ギンガの瞳が金色に変わり左手のリボルバーナックルに異様な力が宿る。

そしてギンガは勢いのままに一体のキリングドールの懐に飛び込んでいく。

途中、銃弾が飛んでくるがそれは間一髪のところを避けていき、ついにはキリングドールの懐に入り込んだ。

そして、

「喰らいなさい！ はっ！」

ギンガの拳は見事キリングドールの胸に突き刺さり内部振動を発生させてキリングドールは機能を停止するどころか爆散してしまった。

ギンガはその勢いを殺さずに立て続けに足にも力を宿し近くにいた数体のキリングドールを思いつきり蹴り飛ばす。

次々と破壊していくキリングドールの光景にネロ自身も切り裂きながらも感心した表情で見ている。

「さすがギンガだ。スバル以上の動きをしているな。余もうかうかしてられないな！」

そう言つてネロもまた切り込んでいく。

この二人はまるで戦場の中を踊っているかのように破壊し続けている。

そう、ロンドのように。

二人が強いのか、あるいはキリングドールが弱いのか……おそらく両方なのだろう。

今のところ、ガジェット並の脅威は感じさせないキリングドールだった。

……まあ、旧ベルカ時代から存在した兵器と比べれば圧倒的にキリングドールは弱いのだろう。

経験値もあまり積んでいないから動きがまだまだ単調である。

今のところ負ける要素は感じられないくらい勢いだ。

……一方シホとアルトリアはライダーの攻撃に防戦一方であった。

ライダーの振るう方天戟の威力がライダー（メドゥーサ）の怪力並みの威力を發揮しているからだ。

一発一発はあのヘラクレスには及ばないが、攻撃回数が異常である。

「おらおらおらあー！！」

「くっ！ どころかの戦鬪狂を相手しているみたいね！」

「全くです！ そしてこの力はどう考えてもサーヴァントのそれです。油断なりません！

ライダーは何度も振り回しからの薙ぎ払いを行ってきた、シホはすでにアンリミテッド・エアは待機状態にして干将・莫耶を使い迎撃している。

高性能のデバイスとはいえ替えが効かないからもし破壊されたらシャレにならない。

それほどの怪力でこのライダーは方天戟を振り回しているのだ。

アルトリアも同様でなんとか剣戟をタイミングよく重ねて弾いている。

ライダーの攻撃はやはり計画性がないといえれば有利に感じるだろうが、それが野生のカンのごとくすべてシホとアルトリアの攻撃に対処しているのだから厄介極まりない。

時にはランサーのように刺突を何度もくり出してくるから危険である。

「あはははっ！ 面白いね、やっぱり戦いってのはこうじゃなきゃなー！」

「少し黙りなさい、戦闘狂！ アルトリア、いったん一人で対応お願い！」

「任せました！」

シホは一回ライダーの攻撃を弾くと後方に跳躍をしてその手に手慣れた洋弓を投影する。

そして、

「——I am 我 the 骨 bone of 子 my 捻 sword れ——……」

その手に螺旋剣を投影して真名解放のトリガーを押す。

「アルトリア、避けて！ カラド・ボルグ 偽・螺旋剣!!」

至近距離からのカラドボルグをライダー目がけて放つ。

アルトリアも瞬時に風を頼りに移動をして回避する。

カラドボルグは空間を突き破りライダーをおそらく貫くだろう。

だというのに、

——ニヤリ。

ライダーはその口元に好戦的な笑みを浮かべる。

そして方天戟に魔力が集まっていくと同時に、方天戟がなにやらガシヨンツ！ という音とともに変形していき、まるで鎌のような形態になって、そして、

「怪力一閃！ おらあ!!」

鎌を振り回した瞬間にとてつもない衝撃波が発生しだしてカラドボルグを襲う。本来突き抜けるまで止まらない矢がそれによって真つ二つに切り裂かれてしまったのである。

その衝撃は撃った本人であるシホは当然で、その威力を知っているアルトリアでさえも驚愕の表情を形作る。

「ばか、な……ッ！」

シホは現実感がなくただただ驚愕の言葉を発していた。

アルトリアも口には出さないがやはりシホとおんなじ感想であるのは容易に想像できらるだろう。

しかし、すぐにアルトリアは思考の停止から復帰して、

「シホ！ 彼女は確かに強いのです。サーヴァントの能力を完璧に模倣しています。よって私達も今こそ力を一つに！」

「そ、そうね。いくわよ、アルトリア！」

「はいー！」

そしてアルトリアはシホに融合するように二人の中で光のまゆが形成される。

そして、

「ユニゾン・イン！」

その言葉を合図に二人は融合を果たし、シホの赤原礼装のバリアジャケットがアルトリアの騎士甲冑姿に変化していく。

だが今回のは少し違うものであった。

今までであったらそのままアルトリアの青いドレスを身に纏うのが通例であったのだが、改良を重ねた結果、アルトリアのドレスの色が赤色に変化していた。

これは耐久性を上げるためにアルトリアのドレスと赤原礼装を融合させたら生まれたシホの新たな騎士甲冑姿なのだ。

ネロと並んだらまさにおそろいのような姿になったと思えばわかるであろうか……？

とにかくシホはアンリミテッド・エア、エクスカリバーフォームを構えてライダーに向き直る。

「……………へえ、それがあんたらの本気モードって奴か。二人合わされば二倍じゃなくて二乗になる……………いい能力だねえ」

「これを出したからにはあなたには倒れてもらうわ。覚悟しなさい！」

「いいねえ……………やっぱり戦つてのは予想外のこと起きてこそつてもんだ。なら、俺も奥の手を出すとするか」

「……………なに？」

《気を付けてください、シホ！ 彼女の周りに魔力が集束されていきます！》

アルトリアの言葉通り、ライダーの周りの魔力がライダーの足元に集まっていく。そして現れる魔法陣。

魔法陣から光が立ち上り少しずつであるが地面からなにかが這い出して来る。

それは黒い鬣がある赤いとても巨大な馬であった。

それを見てシホは内心で「やはり……………」と納得をした。

「方天戟に赤い馬……………そこから導き出されるそのカードの正体は……………」

「そう。呂布、呂布奉先……………中国の偉大な傑物の一人だよ。このクラスカードに宿っているサーヴァントの魂は！」

「それじゃその馬はやっぱりかの有名な赤兎馬、か……………」

「わかっているじゃねーか！」

そう言ってライダーは赤兎馬に飛び乗り着席すると、

「俺と赤兎馬の速力と怪力についてこれるものなら、ついてきな！ いくぜ!!」

ライダーは片手で手綱を持ちもう片方で方天戟を持ってシホ目がけて突貫してきた。

その速さはまるで雲耀のごとく……………。

シホはすんでのところまで瞬動術を使い避けることができたが、シホの元いた場所は赤兎馬の足跡がくつきりとできていた。

「あんなものをくらえばただでは済まない……………!!」

赤兎馬の速力はライダー（メドゥーサ）のペガサスには劣るだろうが神獣化しているために当たったただではすまないことをシホは悟る。

「とにかく移動をしないと……………考えるんだ!」

「考える暇なんて与えないぜ!」

そう言つてライダーは赤兎馬のスピードと馬上で方天戟を何度も振り回してシホへと突撃してくる。

シホもシホで負けないために魔力放出で何度もエクスカリバーを振りかぶっていく。

「おおおおおーっ!!」

「はああああーっ!!」

二人の攻防は苛烈を極め、何度も弾かれては突撃を繰り返していく。

しかし、やはりスタミナはライダーの方が上らしく赤兎馬にも乗っているので上限し
らずだろう。

その反面シホは少しながらも荒い息をしていた。

《シホ! ここはエクスカリバーを使うべきです……………ッ!》

《それはだめよ。そしたら彼女は死んでしまう。捕まえないといけないんだ。甘い判断
だと言われようと私はもうあきらめたくないのよ!》

そう、シホはもうむやみに殺さないという誓いを立てているのだ。だから必ず双方無事で事を終わらせなければ誓いに反してしまう。

その誓いの件を知っていたアルトリアはシホの想いを思い出し、

《……………そうでしたね。シホの想いも理解できずすみませんでした》

《いや、いいよ。でもなんとかしないとイケない。せめてライダーが宝具を使用する事態にならなければいいけど……………、あ！》

《どうされましたか、シホ!?》

《うん。殺さずに無力化できる方法を思いついたわ。いちかばちかの賭けね。付き合ってくれる? アルトリア……………?》

《何をいまさら。私はシホの剣です。どこまでもお供します》

《よし、ありがとう。いくわよ!》

《はい!》

それでシホとアルトリアの中である方法が導き出される。

そして時が来るのをひたすら待つのみ。

「……………なんだあ? 急に思考モードだったのがなにか俺の対策でも思いついたか? ま、なんでもいいけどな。全部俺と赤兔馬で吹き飛ばしてやるぜ!」

そう言って再度シホとライダーは激突を繰り返す。

それをキリングドールをなんとか全滅させて見ていたネロとギンガはというと、

「なんとこの戦いでしよう。私じゃ入れませんね……」

「うむ。余も今から手を貸すのは奏者が許さないだろう。見守るしかないな（………しかし、奏者よ。防戦一方では拉致があかないぞ？ どうするつもりなのだ？）」

ネロはシホが体力が底をついてきているのを察していた。

ゆえにどうするのか見守っていた。

しばらくしてライダーが痲癩を起しだした。

「ああ、もう拉致があかねえなー!! もう、飽きたしそろそろ決めるぜ？」

そう言つて赤兎馬に赤いオーラが宿つていく。

おそらく宝具を使う前兆なのだろう。

だが、シホは一言、「トレース・オン」と唱えて黒い鉄球をその手に出現させる。

それを見てネロはなるほどと、納得した。

あれならば………。

「受けるがいいさ！ 俺の宝具、赤兎馬の威力を！ 『赤兎——無双制覇』!!」

ライダーと赤兎馬が赤い弾丸と化して超高速でシホへと突撃してくる。

「シホさん！」

ギンガが悲鳴を上げるがネロはある意味で落ち着いていた。

これからシホが行うのは時間の逆光。宝具殺しの異名を持つカウンター宝具。

「……………後より出て先に断つ者……………ッ！」

「おせえよ！ 発動前に殺してやるぜ！」

そのワードに気づかずにはライダーは駆け抜けてくる。

もう手遅れだというのに……………。

コード承認を受けて鉄球が光り輝き短い剣へと姿を変える。

シホの腕に紫電が走るが今は気にしてはられない。

そして放たれる真名解放。

「——斬り抉る戦神の剣!!」

一筋の閃光がすべての時間を遡り、突き抜けていく。

ライダーは何が起きたのかわからないかのようにその眼を見開き硬直している。

そう、赤兎馬はフラガラックによって貫かれていたのだ。

そして光の粒子となって消えてなくなる。

フラガラックの狙う対象は宝具。だからライダーは貫かれなかったのだ。宝具は赤

兎馬だったのだから。

同時にライダー自身も地面に大きく叩きつけられて反動で胸からクラスカードが排出された。

それをシホは拾い、

「勝負あり、ね」

「……………みたいだな」

シホはライダーに勝利宣言をする。

それに対してライダーは悔しそうな顔をしながらも笑みを浮かべながら地面に寝そべっていた。

「さて、それじゃあなたを逮捕するわ。おとなしく同行されなさい」

「それは無理な相談だなあ……………」

「えっ……………？ なっ!？」

シホは気づいてしまった。

ライダーの体が少しずつだが手足から塵に変わっていつているのを見て、どうして!? という思いになる。

理由はライダーが語りだした。

「俺はなあ、もし負けて捕虜にされそうになったら緊急コードが発動して証拠隠滅されるように作られてるんだよな、これが」

「そんな……………」

「あ、そう悲観すんなよ？ 俺はこの戦いで一生分を使い切った。だから悔いはねえんだからよ」

「でも……………」

「ま、納得はしねえだろうな。そんなら代わりに俺のマスターをぶん殴つといてくれよ。こんな人生を歩ませた代償としてな」

そう言つてライダーは「にしし！」と笑う。

それにシホは、

「……………わかつたわ。ヴォルフ・イエーガーは必ずぶん殴るわ」

「おうよ。それじゃ先に行くぜ？ じゃーなー！」

そしてライダーは完全に塵になつて消滅してしまつた。

「……………」

しばらくシホは無言であつたが、そこに、

「奏者よ……………」

「シホさん……………」

《シホ……………》

三人がシホにどう言えはいいか言いあぐねているが、シホは一回涙を強引に手でふき

取り、

「さ、戻りましょう！ きつと今頃何か起こっているはずだから！」

空元気でシホは前を向いて歩く選択をした。

その意思をくみ取って三人はシホとともに機動六課へと戻るのであった。

シホの手にはライダーのクラスカードだけが寂しく握られていた……………。

第百九十一話 『スターズ隊の戦い、驚愕するティアナ』

オリヴィエ、スバル、ティアナ、ヴァイス率いるなのはのスターズ隊はある施設の守りについていた。

この施設には数人の最高評議会の息のかかった者たちが入れられている場所だ。そんなこともあつて厳重に見張りがされていた。

なのは達と他の部隊の人も含めて五十人くらいはいるだろうか………？

そんな中を総合指揮することになったのはがみんなに向かつて挨拶をする。

「……さて、こうして急場しのぎで集められた部隊ですが私がこの部隊の指揮を務めることになりました高町なのはは一等空尉です」

それから各部隊の代表のものとも挨拶を交わしていきなのはは早速とばかりに本題に入る。

「さて、それですがもうじきここにもジグルド元提督が率いるブリューナク隊とキリ

ングドールの兵隊がやってくると思います。もちろん狙われるのはこの施設に入れている最高評議会の息のかかった者たちだと思われれます。それで私達は彼らを守るためにここに集まったわけです」

「しかし、高町一等空尉。彼らはジグルドさんのいう通り犯罪者です。だから………」
「だから、なに………？」

ある一人の魔導師がそう言葉を続けようとしてなのはの睨みも効いた笑みに萎縮してしまい言葉を途切れさせた。

しかしなのはもわかつている。

こんな状況になることは目に見えていた。

最高評議会のメンバーもジグルドも両方とも犯罪者。

しかし、ジグルド達はその犯罪者を肅清と称して殺しにかかってきている。

気持ちは分からなくもないがそれでも人殺しを黙って見過ごすほど落ちぶれていない。
い。

こんな時のために今まで培ってきた守る力をたえ犯罪者だとしても守るのが管理局魔導師の責務だ。

その旨を吟味して説明していく。

そしてその発言した魔導師も「はい、了解しました」と言って納得してそれから作

戦進行の成り行きを黙って聞いているのであった。

そんな姿を見てスバルとティアナは思念通話である会話をしていた。

《ねえねえティア。やっぱりなのはさんってかつこいいよね！　こんな時に冷静に作戦を立てているから》

《こんな時だからよ。一人でも冷静を欠いたら相手の思うつぼだからね。はあー………》

ティアナは思念通話でため息をつくという器用なことをしていた。

そんなティアナの態度にスバルはふと不思議に思ったことを聞くことにした。

《なんか、ティア。不安そうだね》

《そうかしら………？》

《そうだよー。なんかいつも以上に不安に駆られている感じだよ？　もうリオンは助け出したんだから後はジグルドさん達を捕まえるだけ、簡単じゃないけどいつも通りの実力を出せばなんとかなるって！》

《それだけなら、いいんだけどね………》

そう言つてティアナは胸に手を添える。

なにか不安なのだ。

この気持ちはリオンとパークロードで戦う前日に感じた胸の痛みとおんなじ感覚

だった。

何か良くないことが起きる。

そう、ティアナの直感が告げていた。

そこまで考えて、

(いけないいけない！ スバルにこういった手前であたしが不安に潰されていたんじゃダメじゃない……………ッ！ 今は作戦に集中しないと！)

そう思つてティアナは自身の頬を何度か軽く叩く。

痛い、と感じながらも気まぐれ程度には気分は落ち着いてきたところで、

「おい、ティアナ」

「……………えっ？ なんですか、ヴァイス陸曹？」

「なんですか、じゃねーぞ。とつくに作戦会議は終わったから俺たちも配置につくぞ。

幸い前衛部隊はスバルにオリヴィエさんと他数名が担つてくれるから俺たちは後方からの確に支援ができる」

「そ、そうですね。精一杯頑張ります……………」

「ならいいが、なあティアナ。こんな時になんだがお前、なんかまたミスショットをやるような気配がするぞ？」

「ばっ、ばかな事言わないでください！ もうあんなことはやりませんから！」

「そうか？　なら俺の勘違いだったか。だがな、ティアナ。悩みがあるんだっただらさつさと打ち明けとけ。じゃねーと本番で取り返しのつかねえことになるかな。今回の作戦はそれほど重要度は高いんだからシャキツとしていけよ」

「わ、わかつていますよ」

「ならばよし！だ。お互い頑張ろうぜ」

そう言つてヴァイスは配置についていった。

そんな後姿を見送りながらも少しばかり頬が赤くなっていることに気づいたティアナは再度頬を叩いていた。

（こんなものはただの気の迷いだ。すぐに消えてなくなるからあたしは冷静になるのよ。ヴァイス陸曹がかつこよく見えたなんて口に出せないから………ッ！）

そんなことを考えているまだ自身の気持ちに気づかないティアナなのであった。



そして時間通りになつてたくさんのキリングドールと複数のブリューナク隊がここ
の施設に向かつて多方面からしかけてきた。

「まずは相手の出鼻を挫きます！　砲撃部隊、私に続いてください！　デイバインバス

ター!!」

「撃ちぬくぜー!」

「いきますー! ファントムブレイザー!!」

なのはの指揮のもとブレイズモードを構えるティアナ、ストームレイダーを構えるヴァイス、と砲撃ができる後衛の魔導師による砲撃が次々とキリングドールに向かっていく。

特に激しかったのがなのはのデイバインバスターでその一撃だけで十体くらいのキリングドールが破壊されてブリューナク隊のメンバーも数人戦闘不能に追い込む。

こういう時に相手を殺さずに鎮圧できる魔導師の力は便利なものである。

「ひゅー♪ さすがなのはさんだ。おい、ティアナ負けてらんねーぞ」

「そうですね。狙い撃ちます」

しばらく砲撃の嵐が続く。

しかし相手もただやられていくわけではなくキリングドールを盾にして攻撃をしてくる。

こうしてきたら後は膠着することになる。

しばらくにらみ合いが続き、しばらくして、

「……………ん? はっ、なのは! この気配はサーヴァント、らしきものようです!」

「やっぱりヴォルフ・イエーガーが絡んできていたね。オリヴィエさん、お願いできる？」

「わかりました。この手に勝利を……！」

そう言つてオリヴィエは気配を感じた方へと突貫していく。

しかし同時に複数の矢がオリヴィエに向かって飛んでくる。

「矢！　ということとは相手はアーチャーのサーヴァントですか！」

オリヴィエがクラススの正体に気づき始めてきたことに、関係なしに矢は魔導師部隊に次々と降り注いでくる。

あちらこちらから「ぐわっ！」や「ぐっ！」という苦悶の音が響いてくる。

その弓捌きはオリヴィエを真正面にしても他に気を回せるほどに器用で大胆であった。

幸いなのはやスバルはプロテクションで身を守っていたがこれで形勢逆転と言わんばかりにオレンジ色の髪をして目を覆うバイザーをかけているジグルドの右腕と言われている男、「タスラム」がその手に銃型のデバイスを構えて無言で駆けてきていた。

「あいつ、正気か!?　銃一丁でこの部隊につっこんでくるなんて！」

ヴァイスがそう言葉を発しながらもストームレイダーで狙いをつける。

しかし、そのあまりにも早い移動で弾丸が当たらない。

ティアナもブレイズモードを構えて撃とうとしているのだが、先ほどからタスラムが現れたと同時に起こり始めた動悸に頭が少しパニックになっていた。

（どうして!? なんてあの人を見ていると動悸が早まるの!?）

震える銃口を狙いを定めながらもティアナはタスラムに向かって魔弾を放つ。

それが運が良かったのか、あるいはタスラムが敢えて喰らったのかティアナの魔弾は顔にヒットする。

そしてバイザーが吹き飛ばされる。

その隠された顔が顕わになった時だった。

「あっ……………」

ティアナの思考はしばし停止してしまった。

そこにはタスラムという男が立っていた。

しかし素顔はティアナに似ていて優しげながらも今は戦闘のために厳しくなっている。

しかしティアナはその素顔に驚愕を禁じえないでいた。

だって、タスラムの正体は、

「……………ティアナ。腕を上げたね」

「兄、さん……………」

「なんだと!」

そう、タスラムの正体はティアナの兄、『ティード・ランスター』だったのである。

その衝撃の事実にはティアナはただただ茫然としてしまい、ヴァイスは心の底から驚きの声を上げていた。

当たり前だ。

ティードは六年前にあの事件で重傷を負い病院に搬送中に体ごと行方不明になってしまっていて正式には死亡扱いだったのだから。

だが、今ティアナの目の前にティードは生きた姿でそこにいる。

それが嬉しい反面、どうして犯罪組織に加担しているのかという思いがティアナのクロスミラーージュを持つ手を震わせた。

今にも銃口を落としそうになりながらもなんとか必死に堪えてティアナはティードに威嚇の意味も込めて銃口を向けている。

ティードもティードで優しい笑みを浮かべながらも、しかしすぐにつらそうな表情になり、

「ティアナ。通させてもらおうよ。この先には殺さなきゃいけない人たちがいるんだ」

「ダ、メよ。兄さん、やめて! こんなことは……………」

ティアナはどうとう堪え切れなくなってきたのか涙をポロポロと流しながらも必死

にティーダにやめてと必死の説得をする。

そんなティアナの横でヴァイスが堪忍袋の緒が切れたような憤怒の表情を浮かべている。

「てめえ………ティアナの兄貴なんだろうが！　なんで今までティアナの前に顔を出さないでいた!?　こいつがどんだけ悲しい思いをしていたかわからねえほど馬鹿じゃねーだろ?!　それになんだ！　今更顔を出したと思ったら犯罪者気取りか!?　ふざけんじやねーよ!!」

ヴァイスが珍しくティアナのために怒りを顕わにしている。

しかしこれはティアナの今までの想いを知っていれば当然の反応であった。

兄の意思を継いで執務官になろうと頑張ってきたというのに今ティーダはティアナの敵として立ちはだかっている。

それがヴァイスにはどうしても我慢ならなかった。

そんなことを兄がしていることなのかと！　否！　断じて否だ！

そうヴァイスは思い、

「てめえはティアナの兄貴失格だ！」

「………そうだね。君のいう通り僕はティアナの兄としては失格なのだろうね。でも、瀕死の僕のことを助けてくれたジグルド提督の恩義に報いるためにも今は心を修羅と

化すよ。そこを、どいてもらうよ？　いくよ、幻影の牙……………ミラージュフアング」
《了解です》

ミラージュフアングというデバイスはそう発して強行突撃形態であるダガーモードへとその姿を変える。

それでティアナも胸が苦しいながらも同じくクロスミラージュをダガーモードへと変えて、

「兄さん、あなたを止める……………！　やああああ————！！」

「来い、ティアナ！　はああああ————！！」

そこからはティアナとティーダの銃剣による剣戟が始まった。

お互いに魔力刃をぶつけ合い戦いを演じる。

時に魔弾も放ち距離を離しながらも戦いは続いていく。

しかし次第にそれはティアナが優勢になり始めた。

やはりシホの教えがよかったのか、ティーダは少し息を切らせているのに対してティアナはまだまだ余裕でいる。

「やはり、強いねティアナ。間違えたよ」

「兄さんを目指して強くなったのよ！　なのに、だつてのに……………ッ！」

ティアナの信念は少なからず揺らいでいた。

今まで信じてきていたものがまるごと崩れ去ったかのような喪失感を味わう。

内心ではもうはち切れんばかりに心がぐちゃぐちゃであった。

もう、このたまりにたまった困惑をすべてティーダにぶつけようと思うくらいには。

だがそんな時だった。

遠くである言葉が響いてくる。

「――クナインライフズ射殺す百頭グ!!」

その言葉とともに九つの矢がまるでホーミングレーザーのように背後にある施設に向かっけいき直撃して破砕音を響かせる。

そう、九つの矢は施設をまるごと破壊してしまったのだ。

当然中にいたものも無事ではないだろう……………。

「勝負は決したようだね。僕たちは退散させてもらおうよ。……………ティアナ、また会おう」

そう言っけティーダ含む残りの部隊は転移魔法を使用して各自撤退をってしまったのであった。

「くっ!」

そこに今まで前衛で戦っていたスバルがティアナ達のもとへとやってきて、

「やられた! 守り切れなかった!!」

スバルが悔しそうにそう嘆く。

だがそこになのはも空から降りてきて、

「大丈夫だよ、スバル。さしずめ施設の人達および最高評議会のメンバーは地下に逃げていたから無事だよ。今通信が入ってきているからそれも確認済み。確かに逃がしてしまつたのは悔しい……………。けど、まだ誰も死んでいない。逆転できるよ！」

「そうです。私もサーヴァントらしきものを逃がしてしまいました。収穫はありました。あとはシホ達と話し合う必要がありますね」

オリヴィエもなのはの隣に現れて苦い表情ながらもそう告げる。

だが、今ティアナはそんなことに気を回している余裕はなかった。

「……………」

無言で俯き涙を流していたのだった。

そんなティアナに対してヴァイスはなんと言葉をかけていいかわからないが、とりあえず泣いているティアナの頭に手を乗せて、

「元氣出せ……………奴は必ず俺たちで捕まえようぜ。な？ ティアナ」

ヴァイスの下手な慰めでもティアナは無言ながらも頷くのであった。

第九十二話 『ファング隊…友達との戦い』

なのは達スターズ隊が戦闘を繰り広げている時、同時にライトニング隊もキリングドール率いるブリューナク隊と戦闘を繰り広げていた。

現在の守護部隊の指揮および隊長はフェイトが一任されているために前線部隊はほぼランサーとシグナムが中心となってキリングドールを押しとどめている。

そんな中、キリングドールでは敵わないと悟ったらしく敵部隊後方からとある三人の人物が姿を現す。

その人物たちとは、

「ロボ君!？」

「セイラさんに凰華さん!？」

エリオがロボの名を、キャロがセイラと凰華の名を叫ぶ。

出てきたのはブリューナク隊に在籍している魔導師である、

ロボ・バルコム三等陸士。

セイラ・ヒラガ三等陸士。

獅堂鳳華陸曹。

この三人であった。

ロボはとある休日のにエリオとキャロが知り合った時からの知り合いで、セイラと鳳華に関しては公開意見陳述会での警備の際に知り合いになった関係である。

ロボはエリオの姿を確認すると「ニツ」と笑みを浮かべる。

「おー、エリオ。それにキャロか。こんなところで会うなんてなあ……………」

「お久しぶりです。エリオさんにキャロさん」

敵同士だというのにロボとセイラは二人ともエリオとキャロと普段通りのような態度で話しかけてくる。

その態度にエリオは我慢ならなかったのか、

「ロボ君！ どうしてこんなことに加担するの!? 君までジグルド提督の悪事に協力して犯罪者になることはないんだよ!」

「そうです！ セイラさんもこんなことをしないでおとなしく投降してください!」

エリオとキャロが必死になって二人を説得する。

しかしその説得が裏目になったのかは定かではないが、先ほどまで気安い感じだったのに急にロボとセイラの表情から感情が消えて次の瞬間には怒りの表情に近いものになっていった。

それにエリオとキャロはビクツ！と肩を震わせた。

どうしてそんな表情になるというのだろうか、どうしてそんなに怒りを顕わにするのだろうか、と。

「……………何も知らないくせにオジキの悪口を言うなよ」

冷え切ったような声でロボはエリオに話しかける。

周りでたくさんのキリングドールと魔導師が争っている中でこの場だけはどこか切り取られたように話し声がよく響いてきた。

「オジキはな。偉大な人なんだよ。でも最高評議会が裏で色々と悪事を働いていたのに分かっていても確たる証拠が見つけれなくていつも嘆いていた。俺の親父が死んだときもそうだ」

「ロボ君の、お父さん……………？」

「俺の親父……………ジョン・バルコムはオジキとともに最高評議会が裏から手引きして起こした事件を解決するために、このミッドチルダを守るために戦い、そして親父は散った……………」

ロボは淡々と語る。

その表情を俯かせながらもしつかりと聞こえるように、
「オジキも親父も正義を貫いた。それでも、最高評議会の連中ときたら……………ッ！」

ギリツ！と歯ぎしりをするロボ。

そこにはエリオ達の知っている人懐っこい性格のロボはいなく、代わりにまるで最高評議会に牙をむく狼のような、狩人のような冷酷な姿があった。

「だから、復讐するの……………」

「勘違いをするな。これは復讐とかそんな小悪党の考えそんなことじゃねーんだよ。オジキも言ったろ？ これは粛清だと！」

「それでも！ もう最高評議会の人達はいずれ裁かれることになっている！ 罪を認めている！ だからこれ以上の粛清なんて意味ないよ！」

「意味ない、だと？ これだから甘ちゃんなんだな」

「僕たちが甘いだって……………」

「そうだろ！ 最高評議会の連中は罪を認めている？ 償っている？ いいや、それはないね。そんなものは一時凌ぎの言い訳だ。出所して外に出てくればまた同じことを繰り返す。また罪もない人々の不幸を招く。俺たちはそれが一番許せねーんだよ！」

「そんなことは……………」

「ない、と言い切れるのか……………」

「それは、けど……………」

それでエリオの言葉は止まってしまふ。

「失ったものの気持ちなんて所詮仲間を失ったことのない奴になんかわからないんだよ！」

それを聞いてエリオは少し涙目になり、対して黙って見守っていたキャロはカチンときた。

エリオはかつて家族だと思っていた人達に捨てられた過去がある。

仲間を失うという事は今のところはないが家族という縁を確かに失ったのだ。

キャロも部族から追放されてフリードやヴォルテルがいたが寂しい思いをした。

エリオとキャロはフェイトが現れるまで深い暗闇の中にいた。

だから理由は違えど失ったものの気持ちもわかるのだ。

だからキャロは言う。

「あなたこそエリオ君の過去のことを何も知らないくせにでかい口を叩かないでくださいー！」

「エリオの過去……………？」

「エリオ君は……………！」

キャロが言いかけるときに突然肩に重みを感じてキャロは振り向くとそこにはどこか寂しい表情をしたシグナムがいた。

どうやら話を聞いていたのだろう。

「キャロ…………。彼らに今エリオのことを話しても聞き入れてもらえないだろう……………」

「でも、シグナム副隊長！」

「今は頭を冷やせ」

「コチン！と軽く突かれてキャロはシユン…………と大人しくなる。

それでエリオとキャロの脇を通りシグナムが前に出てくる。

同時にあちらも静観していた獅堂鳳華が前に出てくる。

「私は機動六課ライトニング分隊副隊長シグナム二等空尉だ」

「あたしはブリューナク隊第一小隊“フアング隊”の隊長、獅堂鳳華陸曹だ」

二人が名乗りあつた瞬間に一瞬だが二人の間で火花が散つたのをエリオ達は感じた。

「お前たちの目的はやはり復讐ではなく肅清なのか……………」

「そうよ。あたし達はそのために今まで牙を研いできた」

「そうか…………。お前たちの上司であるジグルド元提督には不信感などはないのだな

？」

「あるわけがない。我らは彼のことは十分に理解しているし目的もしつかりと聞いています。だから信頼している」

「その目的とは一体なんだ？」

「聞かれて話すと思ってるの？ 少なくともあたしは話さないね。聞きたければ……………」

そう言って風華はデバイスなのか、それとも本物の真剣なのか定かではないが簡素な刀『村雨』を構える。

それに呼応してシグナムも鞘からレヴァンティンを抜き、構える。

「倒してから聞けという事か」

「ご明察だ。ロボ、セイラ……………いくぞ。ファンング隊の戦いというものを見せてやるぞ」

「おう！」

「了解しました！」

それでロボはトンファー型のデバイスである『プランカ』を構える。

セイラもその十本の指に装着させている爪の先から銀色の尖った糸を垂らして構える。

「やるしかないんだね……………」

「フリード、いくよっ？」

「キュクー！」

それでエリオとキャロも構えを取る。

最初に飛び出してきたのは凰華だった。

シグナムに向かって突撃してくる。

「誰よりも勇敢に……誰よりも速く……戦場を駆け抜ける先駆けの牙……我等は我欲に動く醜い獣に^{ケダモノ}あらず。理想の為なら汚れる覚悟を背負う気高い獣だ！ 参る!!」

そして六人の戦いが始まった。



「うおりゃー!」

ロボが両腕に持たれているブランカを何度も勢いよく振ってエリオのストラダーダに衝撃を与えていく。

それに対してエリオは何度も受ける攻撃をなんとか受け流しては反撃をして捌いていた。

「ははっ! やるな、エリオ!」

「ロボ君もね! こんな戦いじゃなきやもつと楽しめただろうに!」

「確かにな。でももう俺は、俺たちの正義は止められねーんだよ!」

「僕たちだって掲げている正義はある!」

「そりやあるだろうな！　だが俺たちの正義には劣る！」

「そんなことはない！　いくよ、ストラーダ！」

《《わかりました！》》

それでエリオは一旦ロボから瞬動術で離れてストラーダのブースターを点火させる。

「いくよロボ君！」

《《スピーアアングリフ！》》

電撃の魔力を吹かせながら突撃していくエリオ。

それに対してロボはというと、

「ブランカ！　ギアを上げていくぞ！」

《《了解だぜ！》》

そしてロボは何度もブランカを振っていく。

次第に振っていく速度が上がっていくにつれて風が巻き起こりだして、そしてエリオ

と激突する。

二人はぶつかった瞬間に同時に後方へとはじけ飛んだ。

ロボはまだまだ余裕という表情をしていたが、エリオは違った。

「……………ストラーダ。今の攻撃、見えた？」

《《なんとかですが。十度の打撃を受けて私達は吹き飛ばされました》》

そう、ロボはあの一瞬の瞬間にストラダーダに十にもおよぶブランカの打撃を繰りだしていたのだ。

エリオの突撃とロボの十連撃、二人の攻撃はそれによって拮抗してはじけ飛んでしまったのだ。

「あの連撃をまともに受けたらやばいね」

《そのようです。現に今も私のボディは衝撃が残っているために震えています》

エリオはストラダーダの先を見る。

先ほどの衝撃がまだ殺し切られていないようで僅かながら震えているのだ。

ロボの力がエリオと同年代でありながらかなり強いという事が窺い知れる。

「でもー」

それでエリオはストラダーダに魔力刃を展開させる。

「僕は負けられないんだ！」

「俺も負けられねえんだよ！ オジキの理想のためにな！」

それでエリオとロボはまた再度激突を繰り返していくのであった。

………一方、キャロとセイラの戦いはキャロの劣勢であった。

「キュ、キュクー!？」

「フリード!？」

竜魂召喚で真の姿で戦っているフリードがセイラの操る十のうちの五本の糸によって拘束され何度も地面に叩きつけられていた。

「ふふ……私の縛糸の威力はいかがですか？」

セイラは片手の糸でフリードを拘束していたのだ。

しかも叩きつけるほどの操作性を持っているのでまだまだセイラの底は知れない。

「フリード! 引きちぎって!」

キャラはブースト魔法をフリードにかけてフリードは思いつきり力を込めて糸を引きちぎった。

「よし! フリード、ブラストフレア!」

「ガア——!」

フリードの口から火球が放たれてセイラへと迫る。

しかしセイラは慌てずに糸を前方にまとめて、そして、

「ストリングシールド!」

銀の糸が色を、形を変えて一つの盾へと変貌してフリードのブラストフレアを防ぎきってしまった。

「そんな! フリードのブラストフレアが……ッ!」

「まだまだ甘いですよ。私の糸術はまだまだいくつもあります。そしてロボ様………若の邪魔立ては許しません！」

「くっ!?!」

接近しては縛られ、距離を置いて攻撃すれば糸による反撃かシールドで防がれてしま
う。

フルバックのキャロにとつてこれほど戦いにくい相手はいないだろう。

しかし、今回の目的はあくまで防衛。

よつて、彼らの攻勢を後ろの施設に通さなければいいのだ。

そんな思いでキャロは必死にセイラに喰らいついていた。

「おおおおおー!!」

「でやああああー!!」

シグナムと凰華はそれこそ乾坤一擲の想いでお互いに剣をぶつけあっていた。

何度も剣戟の音が響き渡る。

「獅堂陸曹、貴様やるな！」

「お前こそな、シグナムー」

二人はお互いに褒めあっていた。

おそらく鳳華もシグナムと同じく戦闘バトルジャンキー狂なのだろう。

案外なにもなければ気が合うのかもしれない。

「しかし、何度か打ち合ってみたからこそ分かる。獅堂陸曹、お前は私には勝てないという事が」

シグナムはこう言うが決して慢心から来る言葉なわけではない。

戦うのならば常に本気で戦う。

それこそベルカの騎士だ、と常日頃から言っているからだ。

だからこそ嘘はつかずに正直な気持ちで鳳華の力量を見抜いてこの言葉が出たのだ。

それに対して鳳華というと、

「はあー……分かつちやいたけどな。あたしにはそれほど剣の腕はないってな。でもな、あたしだってただやられるほどお人よしじゃないんだよな」

すると鳳華の手の甲にある宝珠が光り輝く。

それにシグナムは「むっ」と声を上げる。

「あたしは剣士じゃない。本当は『召喚士』だ！　いくぞ、来れ我が守護獣！　我が身を護る盾となり、我が眼前の敵を討ち倒す剣となれ！　てんおう天凰召喚!!」

「ビュオオオオーツ!!」

瞬間、鳳華の足元に魔法陣が形成されてそこから三メートルはゆうに超えている紅い大型の鷹が姿を現す。

「獅堂陸曹、これがお前の力か?」

「いんや、まだだ! いくぜ、天鳳! 憑依融合!!」

そしてまたしても天鳳が光り輝き鳳華と体を重ねていく。

「これは!? まさかユニゾンと同じ!?!」

シグナムは性質が似ている経験をしているためにすぐに鳳華の力を見抜いた。

光が晴れてそこにはもう天鳳という鷹の姿はなかった。

代わりに鳳華の背中には紅い翼が生えて手も鉤爪のように尖っていて刀は二本の小太刀へと変貌していた。

まさに憑依した姿がそこにはあったのだ。

「ふう………この憑依融合は時間制限もあるが召喚獣と召喚士の心が重なっていないとできない秘法なんだ。そんなじゃ、いくぜ!」

「ツ!?!」

シグナムは次の瞬間には目を見開く。

一瞬………そう、一瞬でシグナムの右肩を鳳華は通り過ぎてすれ違い様に小太刀を振

るっていたのだ。

シグナムの右肩からは血流きが多少あがりシグナムは痛みから肩を押さえる。

「これは……………早いな」

「そうさ！ この形態ならかなりのスピードを出せる。次は、ただじゃおかないよ？」

「面白い！ 真正面から叩つ斬る！」

シグナムは怯むどころか逆に楽しそうに笑みを浮かべて久しぶりに来る高揚感に身を任せて己もスピードの限界を駆使して風華とぶつかり合うのであった。



「あちらはあちらで楽しそうだねえ。なあ、槍兵の嬢ちゃんよ？」

「……………」

ランサーは横目で三者三様の戦いを見ながら三度目の戦いとなるフードを羽織った謎の槍使いの女と戦っていた。

槍使いの女はランサーの声掛けにも相も変わらず無言を通していた。

「おうおう。まただんまりか？ つたく、調子が狂うぜ。なら、殺しあうか…………？」

「……………今はお前の相手をしているほど暇じゃない」

「お！ 初めて喋ったな」

ランサーは敵だというのに面白そうに笑う。

それに対して槍使いの女は、槍を施設に向けて構える。

「……………今は殺さないでおいておく。いくぞ……………大神——」

宝具発動の真名解放の途中でランサーは槍の真名を悟ったのだろう。

大きく目を見開く。

そう、それはルーン魔術の祖と言われているとある神の持つ槍の名。

それは！

「——宣言ッ!!」

グングニル。

その真名解放とともに槍は青白い光とともに施設へと高速で向かっていき、突き刺さった瞬間に一気に膨大なエネルギーを放出させて爆音とともに貫いていき施設はポロボロと崩れ去っていった。

「……………まさかなあ、てめえの正体が奴とはな」

「……………もうここに用はない。さらばだ……………」

それでフードの槍使いの女は高速でその場を離れていった。

そして施設が破壊されたのを合図としロボ、セイラ、凰華もそれぞれキリがよく弾幕

攻撃をして目くらましをし生き残った隊員とともに転移魔法で撤退していくのであった。

去った後はというと、

「私がしっかりと指揮を取っていればこんなことにはならなかったのに……………」

「まあ、宝具を使われたんだ。あれはしょうがないぜ、フェイト。次を頑張ろうぜ」

落ち込むフェイトにランサーが励ましの言葉をかけていたのだった。

そしてエリオ達はというと、

「ロボ君達にとつての正義って何なの……………」 僕たちの管理局の正義は間違っている

とでもいうの……………」

「エリオ君……………」

エリオは自身の正義について悩み、キャロも一緒になって考え込んでいたのであった。

第百九十三話 『武だけを鍛えた男。そして暗殺者』

シホがいないために臨時でセイバーズ隊に入れられたヴィータと士郎にキャスター、そしてランとレンは他の隊とともにキリングドールと戦っていた。

「ふっー」

士郎の放つ矢が次々とキリングドールを貫通させていく。

その様はまさに一発必中。

いかにキリングドールが群をなしていようと士郎の弓矢による攻撃に加えて
ソードパレルフルオープン
 全投影連続層写による追撃で次々と破壊されていく。

シホと同様もしくはは男性ゆえに力は士郎の方が上のために力量は同等のものであり
 ユニゾンはできないにしても足手まといになどなるうはずがない。

「炎天よ、燃えよ！ 密天よ、狂え！ 氷天よ、凍れ！ バンバン行きますよー！ せー
 のお！ 三呪層入り乱れ攻撃ー！！」

そして士郎のサーヴァントであるキャスターも負けじと呪符を構えて炎渦巻く炎天、疾風荒れ狂う密天、すべてを凍てつかせる氷天とそれぞれを絨毯攻撃のように放ちコツコツとキリングドールを刻んでいた。

「ラケーテン・ハンマー！」

ヴィータも眼前の敵を打ち砕くためにグラーフアイゼンの噴射口から爆炎を吹かして突撃していく。

一体、また一体と潰しては高速で回転して動きを止めないその猛攻は違う場所で戦いながらも見ている魔導師たちにとつてとても勇気づけられるものであり、「俺も！」や「いや、私も！」と血気盛んにキリングドールに突撃していく。

当然キリングドールも負けじと実弾銃を放ってくるのだが、別に急に魔弾みたいになるわけでもなく当たったら爆発するといった炸裂弾系のものはいまのところ確認されていいために弾の軌道を読むことは容易く、さらに練度に関しても今まで鍛えてきた実力をいかんなく発揮しているために次々と避けていく。

言ってしまうえばJ・S事件で戦いを切り抜けたものがほとんどのためにガジェットよりあきらかに低スペックな性能であるキリングドールでは正直に言ってしまうと役不足になってしまうのだ。

だが数だけはいるのでそれぞれが厄介さを感じながらも撃破していく。

そんな中、一本の青白い光の剣が空高く昇っていく。

それと同時にある女の子の叫びが全域に響いてくる。

「みなさん！ 一気に切り裂きますので空に退避してください！」

それは光の剣を構えているランの声であった。

この光の剣、通称『バルムンクザンバー』はスカリエツティの手によって魔改造を施されてあのアインヘリアルすらも一刀両断してしまったほどの威力を誇っているのだ。

しかしランの洗脳が解除された後はランの力量不足で使えないでいた代物だったのだが……。ここ最近の特訓でやつとのことで振り回せるほどにランは成長したのだ。

そして、

「バルムンクザンバー奥義！ 大・斬・氷・閃!!」

一気にランはバルムンクザンバーを振りぬくと巨大な氷の刃が発生して次々と斜線上にいたキリングドールを切り裂いていく。

まさにアインヘリアルを切り裂いた時同様の威力を發揮しているのだ。

大斬氷閃が通り過ぎた後には余波で地面が凍り付いていくというおまけつきであり、殲滅戦では最大の効果を發揮することは請け合いである。

それをランのそばでアウルヴァンディルを構えて反撃の時を予期して待機しているレンはというと、

「すごいなあ、ラン姉さん……。もう使いこなせるようになったんだね」

「もちのロンよ！ ブイ！」

レンの褒め言葉にブイサインをして答えるラン。

そんなときであった。

レンはふとした時に殺気のような視線を感じてとっさにアウルヴァンディルを前方に構える。

次の瞬間には目の前に一人の男性が現れてアウルヴァンディルのシールドに拳を叩き込んでいた。

「うわっ!？」

レンはそのあまりの強烈な拳の衝撃を殺しきれずに後方へと吹き飛ばされてしまっていた。

「レンッ!？」

ランがすぐさまにレンに駆け寄り抱き起した後に拳を放った男性を見る。

その男性は冷酷な視線を向けてきているために二人はビクッ!となる。

その男性とはブリューナク隊のジグルドの参謀であるウイルソン・ターナーであった。

「あ、あなたは!」

「……………私はウイルソン・ターナー。ジグルド提督の参謀を務めています。あなた方には消えてもらいます」

そう言いウイルソンは鉄甲が装着されている拳を構えた。

そして一気にランとレンに詰めようとして、

「ラン！ レン！」

ギンツ！

迫ってきていた拳をとつさのところ、で士郎のブレイドテミスによって防がれていた。

「間に合ったか………」

「士郎さん！」

「助かりました！ でも、キリングドールの迎撃は!?!」

「今はキャスターがなんとか頑張っているので大丈夫だ。それより………」

二人に安心感を感じさせる笑みを浮かべた後に士郎はウィルソンに鋭い目を向けると、

「お前がジグルド提督の参謀というのは聞こえていた。ならばお前を倒せば少なくとも戦力低下は免れないという事だな？」

「ふっ、確かにその通りでしょう。ですがそう簡単にはやられませんよ？ 八神士郎二等空尉」

「ほう………。私のことを知っていたか」

「もちろん。ジグルド提督から伺っておりましたからね。あなたも私と同じく武の才能がないという事もね」

「む……………」

それを聞いて士郎は眉を細める。

どこでその情報を入手したのかは知らないが、だからといって自身のことをそう簡単に語られるのも面白くない。

そう士郎は感じ、

「……………確かに私には武の才能も魔術の才能もなかっただろうさ。だがな、努力し続けることを止めなかったから今の私があるのだ」

「ほう……………それは羨ましい。私もですね、魔導の才能がなかった。そして世界に新たに魔術という第二の力が出てきたことにより私にもチャンスはあるかもしれないと、そう思った。しかし、私には魔術回路は宿らなかつた……………ですから二流でもリンカーコアも魔術回路も両方備えているあなた方には嫉妬の感情を覚えるばかりです」

「なんだ……………？ 不幸自慢でもしたいのか？ 今はそんなことをしているほどお互い暇ではなかるう？」

ウイルソンの自虐発言に士郎は付き合っただけとばかりに突き放す。

それにウイルソンは「確かに」と笑みを浮かべる。

そして拳を構えて、

「だが、八神士郎二等空尉。あなたが言ったように私もこの拳だけを今までずっと鍛え

てきた。

そしてジグルド提督はそんな私の努力を認めてくれた。そんなあの人だからこそ私はいままでずっと着いてきたのです。

その努力の成果を、あなたに体験してほしい、味わってほしい」

「なるほど………。自身の居場所だけは明確なのだ。いいだろう。……ラン、レン」

「は、はい！」

「なんででしょうか？」

「こいつは私が片を付ける。お前たちは引き続きキリングドールの殲滅を頼む」

「わかりました！」

「了解です。士郎さんもお気をつけて！」

それでランとレンの二人は戦場に戻っていった。

そして士郎とウィルソンの二人は対峙する。

「さて、では始めるとするか。お互い才能なし同士。なに、簡単なことだ。実力を見せつけなければよいのだからな」

「同意ですね。では、いざ………」

「ああ。いくぞぞ？」

同時に二人は駆け出した。

士郎はブレイドテミス・ソードフォームの双剣を。

ウイルソンはただひたすらに両の拳を構えて疾駆する。

「はあー！」

ウイルソンが拳を振るうと士郎は右手の剣で受け止め左手の剣でがら空きの胴に切りつける。

しかしさすが魔導が基本の世界で武だけを鍛えてきたウイルソン。

剣を拳で弾き飛ばす。

しかし、士郎とてこのような手合いや実戦は過去に幾度も行ってきた。

そして今でこそたくさんの自身より上位者の能力を保持する者たちが機動六課にはゴロゴロしているために料理人であるが暇なときはよくオリヴィエやアルトリア、ランサーとは何度も模擬戦をやってきてさらなる練度の向上を目指してきた。

そのおかげですがに本気のサーヴァントとの戦いでは負けてしまうが、試合レベルでならシホともどもいいところまで喰いつけるまで成長したのだ。

だからここで負けるわけにはいかない。

英霊エミヤにも勝った……ライゼルにも自身の正義を示して勝利した。

ゆえにこんなところで負けてやるほど士郎は甘くないのだ。

そして、だからこそウイルソンの実力に敬意を評し本気で倒すことを決めた。

ブレイドテミスを待機モードに戻し一瞬で干将・莫耶を投影する。
 そしてある言霊を唱える。

「鶴翼、欠落ヲ不ラス」

干将・莫耶をあらぬ方向へと放り投げて再度干将・莫耶を投影してウイルソンに切りかかる。

それに初めて見る先方にウイルソンは眉を顰める。

だが士郎の猛攻は止められない。

「心技、泰山ニ至リ」

ウイルソンの拳で弾かれた干将をすぐに破棄して莫耶もまた空へと投げる。

「心技、黄河ヲ渡ル」

再度干将・莫耶を投影。

さすがにこう何度も武器を放棄するのにウイルソンも困惑の目を浮かべる。

「唯名、別天ニ納メ」

そこでウイルソンの危機察知能力が危険を示す。

そしてふと気づく。

なにかが自分に迫ってきていると。

それで横目で見てみると左右あちこちから今までウイルソンが弾いた干将・莫耶がす

べて向かってきているのだ。

さらには士郎の持つ干将・莫耶が一メートル以上に巨大化してギザギザな刃を突き出す。

これこそ士郎自身の秘奥義、『干将・莫耶オーバーエッジ』、そして『鶴翼三連』。

「まさかこれ狙いか!?!」

「気づいたか。だが、遅い!——われら両雄、ともにてんをいだけず共二命ヲ別ツ……!」

一気にウイルソンに干将・莫耶オーバーエッジを振り下ろす。

なんとかウイルソンは両手の鉄甲で防ごうとする、だが勢いは止まらなくこのままならウイルソンは士郎の刃に切り裂かれるだろう。

しかし士郎は殺してはならないと咄嗟に剣の刃を平らにして切り裂くのではなく叩きつけた。

これによって腕を切り裂かれる代わりにウイルソンは地面に叩きつけられていた。

「がっ! 無念。ジグルド提督、すみません……うっ……!」

そしてウイルソンはあまりの衝撃に無念の言葉を吐きながらも気を失ってしまった。

戦いは終わった。それで周りに散らばっていたウイルソンを襲うはずの干将・莫耶の群もそれに呼応して消え去った。

「ふう……」この技はある意味初見ゆえの必殺なのだがな。私も手加減するようになって

たな」

そう士郎はごちる。

こうしてウィルソンは捕縛されて敵の指揮は崩壊だろうと思った時だった。

「八神二等空尉！」

「どうした……………？」

一人の魔導師が血相を変えて話しかけてくる。

士郎は嫌な予感がしてすぐに事情を聴く。

すると予想もしないことを言われた。

「……………その、なんと申してよいものか。残存していた敵魔導師はすべて撤退。不自然な撤退でおかしく思い、施設の警備に連絡を取って見たところ……………」

「なにがあつたんだ？」

「はっ……………それが突如として骸骨のような仮面をつけた集団に襲われたらしく的確に最高評議会のメンバーだけをナイフで殺して去って行ってしまったそうです……………」

「なんだと!？」

それで士郎は考え込む。

そんな芸当をできるのは以前シホ達を追い込んだ仮面の集団……………すなわちアサシンのサーヴァントの仕業だと断定したのだ。

「くっ……やられた。まさかアサシンが紛れ込んでいたとは！」

それで士郎は苦虫を噛んだような表情で、しかし、

「……………至急全員に通達だ。もう敵はいないとな」

「はい。わかりました！」

それで魔導師はその場を離れていく。

そして一人士郎は考え込みながらも、

「(アリス嬢とアサシンに連絡をするか。あるいは志貴だけでもなんとかなるかもしれないが、『気配遮断』のスキルは私達にとつて天敵だからな……………アサシンに対抗するにはアサシンをぶつけるしかない)」

そう結論付けたのだった。

そしてその後、はやての担当した警備の方でもとある者の乱入でおかしな事態になったそうだが、なんとか抑えることはできたと連絡が来たために一刻も早く機動六課に戻って緊急会議をしないといけないと士郎はセイバース隊の機動六課メンバーにそう伝えるのであった。

第百九十四話 『戦闘報告。語られるクラスカードの謎』

ライダーを打ち倒したシホ達と、ブリューナク隊の迎撃に出ていた機動六課メンバーが機動六課隊舎に全員戻ってきたのは迎撃作戦開始からちょうど二時間後の事であった。

ジグルドの言う二十四時間という期限時間まで残り二十時間となってそれぞれ思うことはあるだろうが現在全員が無事にここ機動六課に帰ってこられたことを喜ぶところだろう。

だが、ジグルドの言う肅清は機動六課が守りを務めた場所以外でも行われて数か所でキリングドールによる数の猛攻で突破されてしまい数名の最高評議会メンバーの死者が出てしまったという報告を受けている。

今のところは攻勢は収まってひと時の静寂の時間が続いているが何時また攻撃が開始されるかもしれないという緊張状態に機動六課を含めた管理局地上部隊の魔導師たちは少なからず疲弊していた。

「……………まあ、とにかく全員無事でよかったと言っておけば安心と言えば安心やな」

はやてが全員が集まったブリーフィングルームで開口一番にそう切り出した。

戦闘での疲れもあるだろう、しかし今も予断を許さない状況にはやては会議を始める前に即席の栄養食を食べておいた。もちろん土郎とアインスの手製だ。土郎は戦闘での疲労もあるだろうがそれより全員を気遣ったのである。

もちろんそれは他のみんなも同様に作ってもらっていた。

だが、気持ち的に食事が喉を通らなくて疲れも残っているティアナはせめてとりあえずのどを潤すことだけでもということに栄養ドリンクで済ませておいた。

「色々と各自報告もせんとあかんやろうが、まずはシホちゃん、ギンガ、アルトリアさん、ネロさんの四名は無事に帰ってきてくれてよかったわ」

「ねぎらいご苦労であった、はやてよ」

「感謝の言葉、ありがとうございます、はやて」

「ありがとうございます。八神部隊長」

「ありがとう、はやて。それで色々と報告書は読ませてもらったけど、あのジグルド提督が、ね……………」

シホとしては少し納得ができないだろうところがある反面で「やっぱりか……………」という気持ちもあったという。

以前から野心を覗かせていたジグルドの姿を見ているシホとしては、いつかはやるの
だろうという感じで考えていたのも確かなことで事前に止められなかったのが悔やま
れるという思いである。

「うん、そうなんよ。……さて、戦闘での各自報告の前にシホちゃん達の話聞いた方
がええね」

「わかったわ。まず私達はモリアのキリングドール製造工場の在り処をつきとめて向
かった先には百体以上の鎮座したキリングドールが発見されたわ」

「それはお手柄やね。でも、通信ができなくなったのも含めてなにかあったんやろ……
？」

それにシホは「ええ………」と返事を返し、一枚のカードを取り出す。

それには一緒になって話を聞いていたオリヴィエ、ランサー、ライダー、キャスター、
志貴、アルクエイドが反応を示す。

「おい、シホの嬢ちゃん。なんなんだそのカードは………？　　わずかながらだがサー
ヴァントの気配がするぜ？」

いの一歩にランサーがこのカードについて疑問を口にする。

他のサーヴァント達も口には出さないがおんなじ感想なのだろう。

話してくれと目で訴えてきていた。

「これは私達が交戦したライダーと名乗るホームクルスから聞き出した話によるとサーヴァントの魂が宿っているっていう、通称『クラスカード』よ」

「……………英霊の魂が、ですか。シホ？」

ライダーがシホの言葉に反応してそう聞いてくる。

「そう。ちなみにこのクラスカードに宿っている英霊の真名は古代中国の武将の一人であつた『呂布奉先』よ」

「呂布と来たか……………」

士郎が呟くがミッドチルダ組はただ名前だけでは分からないらしく、シホが事前に会議用に準備した資料を各自のデバイスに転送した。

それで見やると次第に驚きの表情に変わる。

「最強の武将……………数多くの裏切りをした将……………」

「そんな人の魂がこのカードに宿っているっていうんですか？ シホさん」

「そうらしいわね。実際に宝具である赤兎馬を召喚する光景も目にしたから間違いないわ」

それにオリヴィエは少しばかり怒りの表情を浮かべていた。

「英霊の魂をカードに無理やり押し込めてただの力として使つたのですか？ そのホームクルスは……………」

「……………そのようね」

「許せません！ そのような外道のようない仕打ち、私は容認できません！」

「確かにねえ。カードに意識も削られて入れられるんじゃないや本当にただの道具だからねえ」

「そうだな、アルクエイド。シホ、このカードの製作者はやはり、あいつなのか……？」
「ええ、おそらくね。ライダーも否定はしなかったから。そう——ヴォルフ・イエーガーよ」

その名前が出た途端に反応は分かれるがそれぞれ思うところがあるのだろう、厳しい表情になる。

「だとするとだ。これで今までの妙な違和感も証明されちゃうわけだな」

「そうだね、ランサー」

ランサーがそう言っただけでフェイトが同意する。

そしてランサー達は自分たちが戦った相手の宝具名を話そうとする。

まずオリヴィエが、

「私が交戦したサーヴァントらしき者はクラスはアーチャーでした。そして使った宝具は『ナインライブズ』……………」

「今度はナインライブズか」

「ナインライブズってシホさんと士郎さんの魔法名にもありますよね？　なんの英霊なんですか？」

スバルがそう聞いてくる。

それに対してシホはこう返す。

「ギリシャ神話最大の英雄、ヘラクレスよ……」

それでシホはまたヘラクレスの情報をみんなに流す。

それでまた驚きの声が続いてくる。

「彼の宝具は『十二の試練』に『射殺す百頭』。特に強力なのが『十二の試練』。この効果は同じ攻撃では一度は殺せても二度目は一切効かなくなりそれぞれ違う攻撃を十二回当てて殺さないと倒せない厄介なものよ。……本来なら、ね」

「本来なら……ですか？」

キャラが首をかしげる。

「そう、クラスカードを使っているのだとしたらおそらく宝具の能力は弱体化しているはずよ。カードで疑似的に宝具の能力を再現するんだからいくらでも制約はあってもおかしくないわ」

「確かに……」

それで他のみんなも次々と続ける。

「俺が戦った奴はそれは偉大な宝具を使ったぜ？」
グングニル
大神宣言だ」

「お次はオーディンか。神霊クラスのサーヴァントまでカードにするなんて度し難い……」

それでお決まりのごとくシホはオーディンの資料を転送していた。

「北欧神話の主神の持つ宝具って……とんでもないですね」

「そうだね、ラン姉さん」

ランがそう呟きレンがそれに同意という感じに頷く。

「そして、おそらく私達のところに現れたサーヴァントらしき奴の正体はアサシンのクラスカードを使っているのだろう。そして宝具は知らないがおそらく正体は『ハサン・サツバーハ』だろうな」

「やはり、シロウもそう思いますか？」

そこにアルトリアが反応する。

「第四次聖杯戦争時に似たような能力を使うアサシンと遭遇しました。ですからおそらく間違いありません。宝具は複数に分裂するものでしょうね」

「なんと！ アルトリアよ。お主、以前に戦ったことがあるのならばすぐに正体もわかっただであらう？」

「すみません、ネロ。言い訳ですが私もアサシンと交戦したのはごく僅かな時間だけな

のです……………」

ネロにそう言われるがアルトリア自身確かに第四次でもハサンと戦った事はない。イスカンドルの固有結界で跡形もなく退場してしまったからだ。印象にはあまり残っていないのだろう。

それでアルトリアは過去に思いを馳せていた。

「よし。これで半分だけクラスカードに宿っているサーヴァントの魂は判明したわね。あと残りのクラスで真名が判明していないのを言えばセイバー、キャスター、バースーカー……………いや、キャスターはもう大方判明しているわね」

「そうですね。以前に私は『破戒^ルすべ^ルき^レ全^イての符^カ』を使われてなのはとの契約を切られました。ここから推測するにこのクラスカードに宿っているサーヴァントの魂の正体は……………」

「裏切りの魔女メデИАアね」

「その通りだな。ここまでするとよほど第五次聖杯戦争と縁が深いようだね」

「そうですね。アサシンを除きほぼここにいる者も含めて第五次聖杯戦争に関係の深いものが集まっています」

そう……………セイバーはアルトリア、ランサーはクー・フーリン、アーチャーはヘラクレス、ライダーはメドゥーサ、キャスターはメデИАア……………ここまで第五次が揃って

ると奇妙な縁を感じるものだ。

「さらには聖杯大戦ではデイルムッド・オディナにギルガメッシュ、ランスロット……そして今回のハサン・サツバーハ。ほとんどが聖杯戦争に絡んでいます。ここまで来るともうイスカンドルがもし出てきても私は驚きません」

アルトリアはイスカンドルの事を思い出しているのだろう。少し苦い表情になっている。

「ならあれもなんらかのサーヴァントのカードを使ったなにかやったんやろうな」

「はやてちゃんのところにも現れたの………？」

なのはは初耳と言わんばかりにそう聞く。

まあつい数時間前の事であるし知らないのは仕方ないことだ。

ただ、はやては、あるいは一緒に同行したライダー、志貴、アルクエイドは難しそうな表情になって、

「シホさん、実はですねー。どこからともなくそのバーサーカーと思われる獣が現れたんです」

リインがそう語る。

でも、「ですが」とリインは続ける。

「その黒い獣はどこからともなく現れて体中からたくさんの凶器を生やして私たちに突

撃してきたところまでは……まあよくもないですがある意味想定内だったのです。ですけどそこでいきなり謎の金髪赤目の少年が現れて空間をゆがめて鎖を出して黒い獣をがっしりと縛り上げて、去り際に……『こいつは僕の盟友ともなんですよ。ですから僕が代わりに処分しておきますね』と言って爽やかな笑顔を浮かべながらどこかに去って行ってしまったんです」

「金髪赤目の少年……？ 空間をゆがめる？ そこから鎖を出した？……ねえライダー？」

「………はい、シホ」

シホの問いかけにライダーはなにを言われるのかすぐに察したのだろう、どこか頭が痛いような表情をしていた。

「その子の姿って、もしかしてギルガメッシュの小さいバージョン……？」

「認めたくはありませんがまさにギルガメッシュの小さいバージョンでした。あの四日間の世界で何度も見かけましたから間違いないです」

「え!?! あれってあの金ぴかだったの!?!」

「そうだったのか……」

アルクエイドと志貴はそれで初めて気づいたのだろう、驚いている。

「まさか、あの野郎。言峰と一緒に死んだんじゃなかったのか……?」

ランサーが少しげんなりしたような表情でそう呟いた。

「ですがギルガメッシュでした。間違いありません」

ライダーも信じたくないのだろう、だが目で見た真実は否定しようがない。

「……はあ、わかったわ。とにかくそのバーサーカーは小ギルに回収されたのね?」

「そうなるわ」

それでギルガメッシュを知っている者は反応は違うが静観するしかないという事でお流しにすることになったのだった。

……それから話の軌道を無理やり戻してサーヴァントの件は一応全員了解したという事になる。

しかし問題はというと、

「やっぱり、ヴォルフ・イエーガーはどうやってこれらのカードを作成したのか、その一点に限るわよね」

「そうだね。聖杯がない今どうやって英霊を召喚、しかもその魂をカードに無理やり封印したかだね」

シホの疑問になのはがそう返す。

そこにフエイトが、

「やっぱり盗まれたジュエルシード計七つが関係しているのかな……?」

「案外それかもしれないわね」

ヴォルフ・イエーガーの謎がまた深まった瞬間である。

しかし今はどう考えてもどうにもならないので一旦ヴォルフ・イエーガーについては置いておくことになった。

そして次は本題であるブリューナク隊との関係性などを話すことになった。

ティアナの事を思えば先に話をするべきだったのだろう、だがしかしやはり強敵の方が優先されてしまったのは致し方ことないことであった。

第百九十五話

『正義とは……、そして語られる過去』

クラスカードによる疑似的にサーヴァントの能力を会得するホムンクルスたちの話が一段落済んで、今度は本題であるブリューナク隊について話し合われることになった。

「……………それで士郎。ジグルド提督の参謀だと自称するウイルソン・ターナーという男を捕らえたと聞くが、なにかジグルド提督について話は聞くことはできたか？」

シグナムがそう聞く。

しかしそれに士郎は「いや……」と言って首を振る。

そう、ウイルソンはジグルドの起こした事件については一切話さないを徹底しているのだ。

聞くたびに何度も『私からはなにもいう事はありません。ジグルド提督の信頼を裏切るわけにはいきませんから』と口をそれ以外一切開かないから厄介であるのだ。

それは魔術事件対策課でシホには劣るが暗示をかけられる魔術師もいるにはいるのだが、論理に反するとして強硬な手段は取らないでいるというのも現状である。

「そうかあ。ターナーさんは話さなかったかあ。まあ、無理に聞き出すのもなんかなっ

て感じやしね。それじゃ残りのブリューナク隊の主要なメンバーについて話していいか」

はやての発言でまずティアナが少し無理してそうな顔つきで立ち上がる。

そんなティアナの肩にヴァイスが手を置く。

「……………大丈夫か、ティアナ？ 無理すんな。俺が代わりに話をつけてやってもいいんだぞ？」

「ありがとうございます。ヴァイス陸曹。でも、これはあたしの身内の問題なんです。だから……………」

そう言われてはヴァイスも引き下がるしかないと思っただけらしい。

頭を掻きながらため息をつき、

「……………はあ、わかったよ。ならさっさと報告しな。ただしあとで愚痴でもなんでも聞いてやるからな」

「ありがとうございます……………ヴァイス……………さん」

「ん……………」

そこでヴァイスはティアナの自身を呼ぶ呼び方に対して微妙な違和感を覚えた。

そして少し考えて「あつ……………」と理解する。

「(今、ティアナは俺のこと『陸曹』ではなくて『さん』付けで呼んだのか……………?)
い

や、まさかな………」

ヴァイスはティアアナに限ってそんなわけがないなど結論付けて会議の話を黙って聞いておくことにした。

ただそれは他のものにも当然聞こえていたらしく特に特にはやてはニヤニヤとした笑みを浮かべていたのはティアアナもヴァイスは気づかないでいた。

とにかく本題に入るとして、

「ブリューナク隊に、あたしの兄………ティード・ランスターがいました」

「ティアナの兄やて？　でも、確か………」

「はい。兄は六年前のあの事件で重傷を負いさらには行方不明になっていました。ですが会話の内容的にジグルド提督に助けられてそのままスラムと偽りの名で身を隠していたそうです………なんで兄がそんなことをしてまで自身の正体を隠していたのかはわかりません。ですがこうして敵になった以上………あたしが兄を捕まえます！」

ティアナは少し悲しそうにしながらもそう決意する。

それにスバルは「ティア………」と小さく心配そうに呟く。

それを聞いていたはやては「わかった」と一呼吸は喜んで、

「でもな、ティアナ。ティアナだけじゃないんやで？　みんなで捕まえような。一人で無理して強がってもぼろが出てしまうからな」

「……………はい」

それでティアナも少しばかり表情はよくなっていた。

「よし。それで他の主な人員についてはわかつているのはいるか？」

「はい」

それでエリオが手をあげる。

「エリオか。話してみ？」

「はい。ブリューナク隊のロボ・バルコム君にセイラ・ヒラガさん、そして獅堂鳳華陸曹の三名です。ロボ君はなんでも過去にお父さんを最高評議会が関わっていた事件で殺されたそうなんです……………」

「例の事件やね……………？ バルコムか。その人の名前も死亡リストに載つとつたな」

「それで、これで主な構成員は全部かな？ あとは末端の魔導師といったところだね」

フェイトがそう締めくくる。

「そうだね、フェイトちゃん。このメンバーにはモリア・モルドレッドとジグルド提督を入れてブリューナク隊なんだね」

「つまり、モリアのキリングドール製造ラインの資金源はジグルドの奴のところってわけだな、はやて」

「そうなるな、ヴィータ。ただ、ジグルド提督だけでモリアの研究を支えていたと考える

とあきらかに違和感あるな。なんていうかどこからその資金を調達したかにも考えさせられるからなあ……」

「おそらく別のパイプも持っていたんでしょね。それこそ最高評議会並みの権力者が誰かね。どこにでもお金は持っている人はいるし、それを道楽に使う輩も少なくないから」

シホの予想にみんなは概ね納得のようである。

それでこれからの方針を話し合おうとした時にエリオがシホ達にある質問を投げかける。

「シホさん、少しいいですか？」

「ん？ どうしたの、エリオ？」

「はい。正義ってなんですか……？」

「正義……？」

「………わからないんです。ロボ君と戦って僕は今まで時空管理局が正義を担ってきたと思っていましたけど、ロボ君たちにとってはまた別の正義がある。だから明確な正義というものがなんなのか知りたいんです！」

「エリオ君………」

「エリオ………」

エリオの告白にキャロとフェイトは心配げにエリオの名を呟く。

「シホさん！　僕も知りたいです！」

そこにレンも声をあげる。

それにシホは少し困ったような表情をしながらも、しかたないなあと言う思いで話すことにした。

「それじゃエリオ、それにレンも。後、スバルにティアナ、キャロにラン……………あなた達にとつての正義って明確にある……………？」

「僕たちにとつての正義……………」

それにフォワードの六人は少し考え始める。

しばらくして、

「わからない、です……………」

スバルが代表して答える。

「ただ「でも」と続けて、

「あたしはなのはさんやシホさんのように助けを求めている人を助けられるような人を目標にして今まで頑張ってきました。正義というわけではありませんが、しいて言えば人助けが私にとつての目標であり正義なのかもしれません」

「そう。スバルはそう考えているんだね。私はその想いだけでも嬉しいよ」

「はい！」

なのは褒められてスバルは元気に返事をする。

「……………あたしは今まで兄の夢を引き継ぎたいと言う思いで執務官を目指してきました。……………でも、兄が生きていてこんな事件の片棒を担いでいると知って少し兄が信じられなくなってきました。」

でも、執務官になるという夢はもうあたし自身の目標です。だから諦めたくないです。だから、どんな時でも冷静になつて犯罪者を逮捕するのがあたしの目標であり正義なのかもしれません。明確じゃなくてすみません」

「ううん。ティアナは間違っていないよ。私だつてなにが絶対な正義だなんて思ったことはないから。正義っていうのは自身で信じるものだと思つてる。正義なんて人それぞれによつて異なる事が当然なんだから」

フェイトがティアナの想いに共感して、そして正義はそれぞれ違うということを教えた。

「エリオとキャロはどう思つてるんだ？　話してみろ」

ランサーにそう言われて二人は少し考えた後にポツポツと答え始める。

「……………まだ、わかりません。ロボ君の言う正義は正しいものなのかもしれませんし、かと言つてそれを認めたら僕はなにか足を踏み外してしまうかもしれない恐怖がありま

す」

「私もエリオ君とおんなじ感想です。まだそんなに理解できません。なにが正しいのかも違うのか……」

まだ子供なりに考えて答えたのだろう、しかし恥を感じることはない。まだこれからも成長していくのだからいつか自信を持つて答えを見つけてくれればいい……といふ思いでランサーは笑みを浮かべながらも二人の頭を撫でるのであった。

「まだ二人はガキなんだからこれから見つけていけばいいんだよ。人生のまだ半分も生きてちやいねーんだからな」

そう言つて陽気に笑うランサーを見て他のみんなも「ランサーの言うとおりだね」と納得しているのであった。

そして最後にランとレンが答える。

「私とレンはシホさんに助けられた時からシホさんと同じ道を行きたいと思つています」

「うん、そうです」

そんな二人の発言にシホは少し恥ずかしそうに頬を赤くしながらも、

「私なんかを見本にしなくてもいいのよ？」

と答える。

「でも、シホさんがいなかったら今の僕とラン姉さんはなかったんです。だから………信じさせてください」

「それにちようにいいと言いますか、シホさんの正義を教えてくださいませんか？」

「私の正義、か………」

そう言われてシホは話すべきか悩む。

だが、そこでアルトリアが、

「シホ。いい機会です。ここでシホの過去を語るときではありませんか？ 以前にナ

ノハとフェイト、はやての過去をフォワードのみんなに語りましたがシホだけは流してしまっただけではないですか」

「そう、ね。みんなならもう拒絶はしないでくれると信じたい」

それでシホは過去を思い出しながらも語り始める。

それにシホの過去を知らないフォワード達にギンガ、ヴァイスは興味深げに耳を傾ける。

——シホ、いや、衛宮士郎の原初の記憶の始まり。

——衛宮切嗣の理想である『すべてを救う正義の味方』を引き継いだ月下の夜。

——巻き込まれてしまった第五次聖杯戦争。そこで体験した様々な真実。

——聖杯戦争終結後に世界に出て己の正義を貫いた半生。

——そして死にかけた時に助けられた事実。義理の姉イリヤの想いに答えて新しい体に宿った事。

——今の世界にやってきて判明した様々な事象。

——新たな理想である『大切な者たちを守る正義の味方』を明確にできた事。

シホはすべてを語り終えると、

「これが、私と士郎のすべてよ」

「……………」

初聴きのみんなはしばらく黙っていた。

シホと士郎は理由はどうあれ過去にたくさんの人を殺してきた。

改めて聞いたなのは達も黙るのは仕方がないことだとある意味ドライに捉えていた。

だがここで援軍の声が上がる。

それは英霊のみんなだった。

「確かにシホは切嗣のように理想のためにその身を汚してきました。ですがそれは我ら英霊にも言えることなのです」

「確かにな。奏者以上に我らも屍を重ねてこうして英霊になったのだからな」

「……………はい。私も攻めてくる者は容赦なく石化して姉様たちを守っていましたから」

「俺もなあ。たくさんのお戦いをして殺したな。ま、相手も殺すつもりで来たんだからお互

い様だな」

「私もベルカの民を守るために必死に戦いました」

「俺もアルクエイドを守るために攻め込んできたやつは殺したな」

「んー……………私も殺す奴は殺していたかなあ？」

「わたくしも殺されそうになったから殺しました♪」

アルトリアが、ネロが、ライダーが、ランサーが、オリヴィエが、志貴が、アルクエイドが、キャスターが、自身の過去の行為を語る。

「英霊になるものは善悪に関係なく人殺しなのです。以前に切嗣はあることを言いました。た。

『英雄とは栄光や名誉をかざして人殺しを容認する生き物』だと。

癪に障る言葉ですが否定ができないのが痛いところなのです。

だから、シホとシロウもある意味被害者なのかもしれません。元は私たちの残した罪過でシロウは聖杯戦争に巻き込まれたのですから」

アルトリアがそう言っつて話を締める。

それでまた一旦話は止まる。

だがしばらくして、

「……………シホさんのした事は確かに許されないものかもしれません。でも、信じたいで

す！　僕たちは今までシホさんの事を不審に思ったことはありません。そしてこれからもきつと……ッ！」

「レン………ありがとう」

「あたしもシホさんを信じます。だって、あたしの師匠なんですから」

ティアナにもそう言われて感極まる想いであった。

それから他のみんなもそれぞれシホと士郎の事を信じると言ってくれた事にシホは拒絶されないで安心し、なのは達もよかったと笑みを浮かべているのだった。

それから話の軌道を戻して会議を再開した一同はある事を決めて次の作戦行動まで身を休めるのであった。

第百九十六話 『ある男達の覚悟、決戦前夜』

………時間は夜になった。

ジグルドが三提督を捕らえるクーデターを起こしたのはお昼前の事だったから時間的には残り約十三時間を切ったところか。

そんな中、シホはとある隔離施設へと足を運んでいた。

ここにも最高評議会の最重要人物が幽閉されているのだ。

しかし、あえてジグルド達はここをキリングドールやブリューナク隊の面々には襲わせなかった。

それはなぜか………？

答えは簡単だ。

ここに幽閉されているのはもつとも近く最高評議会やスカリエツティに資金協力などを行っていた人物、『レジアス・ゲイズ』がいるのだ。

そこにシホが訪れたのはある相談をするためである。

訪問席でシホは待っているとしばらくしてレジアスが監視員に連れられて部屋へと

入ってきた。

レジアスはシホの姿を確認すると一瞬驚きの表情をして、それ以降は何事もなく席へと着席した。

そして話が行われる。

「レジアス中将……………少し、痩せられましたか?」

「ああ、少しな。それとシユバインオーグ一尉、今の儂は中将などという肩書きはない。だから好きなように呼んで構わんぞ」

「そうですか? それではレジアスさん、と呼ばせてもらいます」

「いいだろう。それで何用で来たのだ? まあこれだけ騒がしいのだから儂の耳にも情報が入ってきているからある程度は予想はできるがな」

「はい。用件はジグルド提督についてです」

するとレジアスは「やはりな……………」と言い険しい表情になる。

そこには地上本部を指揮っていた頃のレジアスの顔があった。

「ジグルドか……………。あの若造にも儂は悪いことをしたと思っている。儂が直接関与したわけではないが最高評議会の幹部が昔にある犯罪者集団と協力しミッドチルダを震撼させる事件を起こした。儂はその事実を知ったのはもうすでに終わった後であった。ジグルドの部下……………特にジョン・バルコムという男の死にジグルドは痛くショックを

受けていたのをよく覚えている。もちろん、その事件に関与したメンバーは秘密裏に処分されたが結局はあとの祭りであった……………」

そう言つてレジアスは顔を手で覆い後悔していた。

「つまり、その事件でジグルド提督は最高評議会の裏の顔を知つたのですね？」

「おそらくな」

それで後悔しながらも昔の出来事に思いを馳せているレジアス。

そこにシホがとある相談を持ち掛ける。

この相談はある意味危険な橋渡しのものだ。

しかしこれはレジアス以外に務まらない。

「レジアスさん。お願いがあります」

「なんだ……………？　言つてみる」

「はい。一度ジグルド提督の要望で三提督が捕らわれている施設に出向いてもらいたいです」

「それは、ジグルドの要望なのか？」

「はい。ジグルド提督は『最高評議会およびJ・S事件に深く関わつたとある男をこの場に連れてこい』というものと『時空管理局の全制度の撤廃』というものです」

「あの、バカ者が……………！　今まで築きあげてきたものを無くしたらどれだけの被害や

損害が出るのかもわかっていないのか!？」

それでやはり怒りを顕わにするレジアス。

当然だろう。レジアスはこうして最高評議会に関わってきたものその実はミッドチルダの平和を第一に考えて行動してきた男なのだ。

それを壊そうとするのはレジアスの今までの苦労も水の泡にするにも等しい行為である。

「シユバインオーグ一尉……あのバカ者の場所へと儂を連れて行ってくれ!」

「いいんですか……? 死の危険があるかもしれないですよ?」

「構わん。儂は一度死を覚悟した身だ。今更命乞いなどせんよ。代わりにあのバカ者の目を覚まさせてやるのが儂の奴に贈れる唯一の罪滅ぼしだ」

「わかりました」

シホもレジアスの覚悟を汲み取ったのだろう。「ですが」と前置きをして、

「決してあなたは死なせません。あなたはまだ地上本部に必要とされている人なのですから」

シホがそう言うのとレジアスも「わかつとるわい」と笑い、

「儂はまだせねばいけないことがあるのだ。こんな隔離施設でのうのうと隠居暮らしをするなど耐えられん。今度こそ正しく地上本部を導かねばならないのだ。だからな、

シユバインオーグ一尉。こんな儂だが護衛をお願いできるか？」

「お任せください。あなたは我ら機動六課が守ります。この命に代えても……………」
それでシホとレジアスはお互いに笑みを浮かべるのであった。



……………一方、とうのジグルドはというと部下たちに三提督の世話を任せて一人個室に入っていた。

そこである手紙をしたためていた。

それが一通り書き終わるとそれを胸の内ポケットにしまい、背もたれに身を預けてある過去を思い出す。

「ジョン……………もうすぐだ。もうすぐすべてが終わる」
そして回想をするジグルド。

……………

……………

……………

六年前のこと、まだジグルドが提督ではなく階級は三佐でまだ一部隊でしかなかったブリューナク隊の部隊長を務めていた頃の話。

ジグルドには信頼する男がいた。

その男の名は『ジョン・バルコム』。

ジョンは『猛獣狩りのジョン』や『地上の白き牙』という二つ名で呼ばれて次元犯罪者の中では結構の割合で恐れられていた存在であった。

ジグルドはそんなジョンとコンビを組んで地上本部を今まで守ってきた。

だが当時は時空管理局で最高評議会のとある奴の指示で汚職に手を染めている上層部の者がいるとの情報を手に入れたジグルドはジョンやまだ新米で若かった頃の鳳華とウィルソンを含めた十人の部下を連れてその研究所に潜入してその証拠を手に入れるようと奥まで入り込んだ。

だが、それはジグルドたちを誘い出すための罠だったと気付いた時には既に遅く、六人の部下が襲われた。うち三人は即死。残りの三人も既に虫の息だった。

ジグルド自身も至近距離から敵の自爆に巻き込まれ、重傷を負った。

そこから更に追い打ちをかけるように暗闇の奥から八十人以上のテロリストたちがやってくる気配を感じた。

ジョンはすぐに凰華と生き残った部下たちにこう命じた。

『ジグルドを連れて撤退しろっ！ 殿は俺がやる』と。

だが無謀すぎた。

いつものジョンなら問題なかったのだがジョンもジグルドと同じく重傷を負っていた。

そんなことをすればどうなるか目に見えていた。

ジグルドはジョンに『そんなことはやめろ』と止めたがジョンは止まらなかつた。

ジグルドは親友のジョンを見捨てるくらいなら、せめて自身も共に地獄に行く覚悟だった。

だがジョンはこう言った。

『馬鹿言つてんじゃねえ！ お前の命はお前だけのモノじゃない！ お前を慕う部下達の命も預かっている！ だからこんなところであきらめるな！』

そう、ジョンはジグルドに言った。

そして、

『ジョンッ！ すぐに援軍を呼んでくるから待つていろ！』

それでジグルドは悔しそうに、だがジョンの言う通りに撤退をした。

しかしこの時、動かない男たちがいた。ジョンの直属の部下であるレフティー、ロツ

シ、トミーの3人だった。

『どうした？ お前たちも早く行け』

『いえ……俺たちも、ジョン副隊長と残らせてください！』

『分かって言ってるのか？ 俺は逃げん！ 覚悟は出来ているのか？』

『勿論です！』

『……ふっ！ お前らのようなバカヤロウに会えて嬉しいぜ！』

そうジョン達4人の覚悟が決まったとき、

『いたぞおっ！ 逃げられないと思って観念しやがったなっ！』

ヴィクトールの部下八十人が一斉に襲いかかってきた。

『いけええ！ 野郎どもっ！ ぶっ殺せ！！』

ボロボロになったジョン達4人が立ち上がり構えた。

『いいな皆っ！ 悔いの無い、男の生き様……見せてやろうぞ！』

『応っ！！』

『行くぞ！！』

『うおおおおおおおっ！！！！』

そこからジョン達4人とヴィクトールの部下達八十人の激しい戦いが始まった。

普通ならこの圧倒的な人数差で飲み込まれて終わるはずだった……そう、普通なら。

『うおおおおおおおおおつっ!!』

此処に居るのは深手の重傷だが多くの次元犯罪者から恐れられたジョンという名の“狼”が躍り掛かっているのだ。

彼の怒りの攻撃は敵はおろか部下のレフティー、ロツシ、トミーの三人をも震え上がらせた。

この先制攻撃が効いたのかジョンの攻撃で十人以上が戦闘が不可能になり、残りの半分がジョンの気迫に呑まれたのだ部下達三人は“勝てる!”そう思っていた。

しかし、彼の猛攻は此処までだった。

『ぐうっ!』

深手を負っていたジョンは片膝をつき、息も絶え絶えだった。

『副隊長!!』

『しっかりして下さい! 副隊長!!』

そんなジョンを見た敵側の隊長格の男はすぐに察した。

“この男を潰すのは今しかない!”と。

『相手は死にぞこないだ! 行けー!!』

『うおおおおおおおおおつ!!』

敵は数の暴力で潰しにかかったがレフティー達も負けていなかった。

『副隊長を守れ!!』

『おう!』

レフティー、ロツシ、トミーの三人もジョン程ではないがそれでも彼らは戦った……
決して敵に背を向けなかった。

その勇氣と男氣は賞賛に値するものだった。

だがそれでも運命の女神は彼らに微笑んでくれなかった。

先に力尽きたレフティーは敵に捕まり、人質状態にされたのだ。

『レフティー!!』

『くそ! 一対一^{サシ}で勝負しろ! 卑怯だぞ貴様ら!!』

『うるせえっ! こいつの命が惜しかったら大人しくしな!』

『お前らがボスの……ヴィクトール様の部下になるなら助けてやってもいいぜ?』

そんな事をのたまう敵。

それに、

『何!?!』

『ふざけるな!!』

『ならコイツを殺すぜ?』

『貴様ーッ!!』

『舐めんじゃねえ!!!』

!!!』

そんな緊迫状態に怒号を上げたのはレフティーだった。

『我が身可愛さに、お前ら悪党共に下げる頭は持ってない！ それに、俺達の魂は……ジグルド隊長に預けているんだ!!』

!!』

これを聞いたジョン達は感動に震えた。

『そうだっ!』

『その通りだ!』

『よくぞ言った、よくぞ言ったレフティーっ!!』

『へへ、さあやれよ……俺の気持ちを変えられるかやってみろ！ 憶えとけバカヤロウ

……俺とお前じゃ、志ってモンが違うんだ!』

啖呵を切ったレフティーだが、それでも敵に無残に殺され、彼の断末魔が響いた。

そしてレフティーを殺した男は薄笑いを浮かべていた。

『……はっ！ 正義漢ぶって死ぬ方がバカなんだよ!』

だがその言葉はジョンの逆鱗に触れることとなる結果となった。

『分かるまいっ……貴様のような馬鹿には……ッ!』

『何い?……うべえ!?!』

ジョンの言葉に反応し、視線を合わせようとした瞬間にジョンに殴り飛ばされたのだ。

そしてジョン、ロツシ、トミーの眼は怒りと闘志が燃え上がっていた。

『地獄でその罪の清算をさせてやる……死にたい奴から掛かって来い!!』

再び激しい戦闘が開始されたが、ついにロツシとトミーが力尽き、敵の銃弾に倒れた。

『ロツシ! トミー!』

『ガフツ……じよ、ジョン……副隊長……!』

『副隊長と共に戦えて……光栄です……俺達、最期はブリューナクの戦士として戦い、死ぬ

ことを……願ってました』

『な!?!』

『願いが叶い、思い残すことは……ありません。ありがとうございます……!』

『何を言うか! あきらめるな!!』

『す、すみません……!』

『俺らには、これが……限界……です。じよ、ジョンふく』

—— ダアン! ダアン! ——

『!!』

ジョンに自分達の思いを伝えようとしたロツシとトミーは突然敵の銃撃を受け、即死した。

『ロツシ！ トミー!!』

『ほほう、美しいな、死に花談義か……バカが！ 喋る暇があるなら敵に噛み付くんだよ

!』

『おつ……お前は……っ?!』

顔に2本の横傷を持つ男の名はヴィクトール……今回の事件の首謀者であり、ティーダ・ランスターのかつての上司。

ジグルドとジョンにティーダの一件で退職させたことで逆恨みし、このミッドを壊滅することを企む男。

そうしてるとあろうことかヴィクトールはトミーの遺体を汚れた靴で踏みじり始めた。

『で？ こんな死にぞこないはいいとして、ジグルドはどこだ?』

『おのれーっ！ 仏になんてことを！ 貴様が汚い足で踏んでいるのは誰かわかっているのか!!』

『そんなことよりジグルドはどうしたよ？ 奴は裏社会の間じゃあ、首だけで高い金で

買い取ってくれる奴がいるんだ。それにジョン、貴様には随分世話になったからな。そのプライド、ズタズタに引き裂いてやるっ』

『はっ！ テメエの思い通りにはくたばらんぜっ！ それにティーダもな、テメエの様な腰抜けで醜いアホ面は気に食わないってよ!!』

『……………気にイラネエ！ やれ野郎ども!! なぶり殺しにしてやれえ!!』

ジョンとヴィクトールたちの激しい戦いが続いている最中、さなか 鳳華たちが通信でジョンに連絡を入れていた。

『ジョンさん！ 聞こえますかジョンさん！ 私達ももう少しでそちらに着きます！ だからジョンさんもがんばってください——……………』

『来るな!!』

『!?!』

鳳華の通信にジョンは叫んだ。

それに鳳華は驚く。

『来るなよっ 誰も来てはならん！ この世には俺の命よりもっと重いものがある！ 耐えろ！ 耐えてくれーっ!! お前らには明日がある！ 明日を造るためにその命

とっておけーっ』

『ジョンさん……』

ジョンは悟ったのだ。

自分は今もう助からないと……だから彼は死にかけの自分のために仲間が来ることを拒んだのだ。

そして……、

『どうだジョン、わかったか？　これがホワイトデビルのヴィクトールだっ！　お前が唯一越えられん男だっ！　泣け！　そして命乞いしろ！』

『ゼイ……ゼイ……己の身が可愛くて泣く男なんぞ、ブリューナクの戦士には一人もおらんぜ……』

『ちっ！　どこまでも小賢しい！』

『ヴィクトール……お前に言っておくことがある……』

『何……？』

『お前はいずれ、俺達を敵に回したことを後悔することになるだろう……俺の、仲間によつてな……っ！』

『やかましいっ!!』

動けないジョンをいたぶる音が続いた。

『グツ!! グハアアツ!!』

『さあ泣け! “助けてくれ”と叫んでみる! そうすりや早く楽にしてやるぞ!!』

『だれが……誰が、貴様のような下等生物ごときに……願い下げだ……ツ!』

『きつ、貴様あああああつ!!』

怒りで頭に血が上ったヴィクトールは近くに壁から突き出た鉄パイプに向けてジョンを押し付け、彼の脇腹に深く刺した。

そこにジョンの悲鳴はなかったが、

『はあつ……はあつ!』

パイプで脇腹を刺され、磔状態にされていた。

『はあーっはっはっはっはっ! 死に損ないの串刺し一丁上がりだ! ほれ泣け!

悲鳴上げろ!! はーはっはっはっ!!』

それを通信越しで聞いていたジグルドや凰華たちは悔しくてたまらなかった。

ジョンを傷つけるヴィクトール達が、助けることが出来ない自分自身が悔しくてたまらなかった。

そんな中、ジョンの頭の中に“諦める”という言葉は無かった。

『ぐううううっ! ぬううおおあああああつ!!』

『なっ!? こいつ! 自分からパイプを……!!』

『ヴィクトール……っ！ 最期が誰もかれも泣き叫ぶと思ったら大間違いだ！』

フラフラに、だが確実にジョンはヴィクトールに近づき、足を踏み出した。

ヴィクトール本人は無意識に後ろに下がっていた。

ヴィクトールはこの瞬間ジョンを恐れた証拠だった。

ジョンは刺さったパイプを無理やり抜き取り、ヴィクトールを睨み付けた。

その眼光はまさに獲物に狙いをつける「狼」そのものだった。

『俺の……心に宿る正義の魂は、例えこの身体を失っても……再び俺の、俺たちの次の世代に宿る！ 貴様の様な小悪党ごときに、滅ぼされることはない！』

そういつてジョンは持っていたパイプをヴィクトールに投げつけた。

普通なら避けられるスピードだったにも関わらずヴィクトールは動けなかった。

その結果、

『ガッ……！』

ヴィクトールの左頬を掠め、鮮血が舞った。

そしてヴィクトールの部下達はジョンの圧倒的な迫力に呑まれ、完全に戦意を喪失していた。

『ひっ、ひい!!』

『こいつ、化け物だ……！』

『に、逃げろ！』

『こんな奴を相手に出来るか！ 俺は抜ける!!』

『俺もだ!!』

『あつ！ 待てテメエ等!!』

ヴィクトールが待てと命令するが彼らは全く聞かなかつた。

所詮彼らはヴィクトールが金や脅しだけで集められた寄せ集め。

従う義務があつても義理が無い彼らにもはや統率というものは存在せず、結局残つたのは昔からヴィクトールに付いてきた直属の部下三十人弱のみとなつた。

これに怒りを覚えたヴィクトールはジョンに向かつて何度も殴り続けた。

『こ、コノヤロー!! 起きろコノヤロー! まだくたばるには早いんだよ! もっと、もっと痛い目に合わせなきや割に合わないんだよ!!』

そう叫ぶヴィクトールだが、ヴィクトールの部下達はジョンの状態に気づき、止めに入つた。

『ぼ、ボス……っ!』

『やめてくださいいっ……ソイツ、もう死んでます』

『何?』

『死んでます……』

『ーっつ!! ちっ!! つまらねえ!! さっさと引き揚げるぞ野郎ども!』
『はい!!』

『で、でもボス、ジグルドの奴はいいんですか?』

『知るか! あんな死に損ない! 興味が失せたわ!』

そう言うヴィクトールだが、実際はいつジョンの援軍が来るか分からないため早く撤退したかったのだ。

ジョンのおかげでヴィクトールの兵隊が半分以上が逃げ出したのは良い事なのだが、その代償はあまりにも大きすぎた……。

そしてしばらくして回復魔法をしてまず凰華達部下がジョンを助けに向かった。

だがすでにそこにはヴィクトール達の姿はなくボロボロになって死んでいるジョン、レフテイー、ロツシ、トミーの姿があった。

『ジョンさん! みんな!! そんな………』

凰華が悲痛の声をあげる。

だがそんな時だった。

『うつ……おお、その声は……風華か……』

『ジョンさんッ!? まだ、生きていられたんですね!』

ジョンだけはなんとか風華の声に反応して息を吹き返したのだ。

『ブリューナク、隊の……ハア、ハア、奴らは……どうなった?』

『ブリューナク隊はジョンさんにレフティー、ロッシ、トミーが逃がしてくれたおかげで残りの者は全員無事です!』

『そ、そうか。風華、聞け……最高評議会の奴らは、ゼイ……ゼイ……何か、とんでもない事を、企んでる……ハア、ハア……その、何かは、まだ、わからん……だが、やばい事は、間違い……無い……』

ジョンは近い未来に最高評議会が何かをしてくるかすことを予想しての言葉なのだろう。しかしもう自身の命が燃え尽きようとしていたのを悟ったのだ。

だからこれだけは伝えた。

『じ、ジグルドは、何処だ? アイツにも伝えなければ……!』

ジョンは必死にジグルドの名を呼んだ。

それに風華は「大丈夫です」と言って、

『ジグルド隊長にはすでに通信で伝えていきます。隊長はすぐにこちらに來ます』

『そ、そうか……』

しばらくしてまだ負傷から治っていない体で、しかし急いでジグルドはジョンのもとへとやってきた。

『ジョンッ！ しつかりしろ！ ジョン！ この程度でくたばるお前ではないだろ！』

『おおっ……ジグルドッ。……はは、すまねえな……お前に、重いモンを、背負わせちゃうな……ハア、ハア、あ、後を頼むぞ……最高評議会の奴らをぶちのめして、管理局の中を変える。そして、ロボを……ロボを、一人前の男に、してやってくれ……』

『ああ、わかつてる。すでに次元犯罪者であるヴィクトールのアジトを特定した。奴が捕まるのは時間の問題だ』

ジグルドはそう言うが、本当は嘘であった。

ジョンが心残りになっている心配を少しでも消す為にジグルドはワザと嘘を言ったのだ。

それを聞いてジョンは安心した表情になり、

『はははっ、目に浮かぶぜ……だが、悔るな……奴は頭が切れる。そうなるのも想定してるはず、だ……』

『大丈夫だ。すでに奴の逃走ルートに部下たちを配置させている。今頃は奴も捕縛されている！』

それを聞いてジョンは今度こそ安心した顔になり、

『さすがジグルドだな……ははっ……ゴホッゴホッ』

大きく咳き込み血を吐くジョン。

ジグルドはもうジョンの命が残りわずかであるかと悟ったのだろう。

焦りの表情を見せる。

『ジョン！ 五分だ、五分待つてろ！ 今すぐヴィクトールを連れて、お前の前にひれ伏せさせてやる!!』

『五分だと……？ バカヤロウツ……五分も、待てる、か……』

それでジョンの顔色がさらに悪くなり、

『ジョンさん!!』

『しつかりして下さい!!』

『ジョン死ぬな！ 約束したはずだ！ 絶対死なないと!!』

風華が、ウィルソンが、ジグルドが必死に呼びかけを続ける。

『悪いな、俺は、待つのは……昔から、嫌いなんだよ……しかたねえ、あの世に逝った、女房に、謝りに、いく、と、する、か……』

そう言い残し、ジョンは動かなくなつて静かに目を閉じて、そして逝つた……。

それが分かつたのだろう、風華もウィルソンも涙目で顔を伏せる。

『ジヨオオオオンツツ!!』

ジグルドの悲痛な叫びがその場に響いたのであった。

そしてその後、ジグルドはジョンのデバイスである『ブランカ』を丁寧に預かり、ジョンを含む数名の遺体を速やかに埋葬した。

そしてヴィクトール含むテロリスト達を全隊員でくまなく捜査してようやく捕まえてこうしてミッドチルダに侵攻しようと企んでいたヴィクトールの野望は潰えてジグルドはこうして『ミッドチルダの正義の象徴』と言われるようになった。

しかし、ジグルドはまだ最高評議会の陰謀を暴いていないためにあることをジョンに誓った。

『ジョン……必ずお前の無念は晴らす。最高評議会の野望は私が潰す！ この手にかけて!!』

そう、誓ったのだ。

しかし、最高評議会の闇は深く、なかなか尻尾を掴めなかった。

そうして時だけがだらだらと過ぎていって、スカリエツティが事を起こし、ゼストの手によって最高評議会の悪事がようやく明るみに出てジグルドは好機だと思った。

これで私達の“とある”願いは達成できるかもしれないと……。

あとは決行するのみだ。



こうしてジグルドはクーデターを見事起こして見せた。
管理局に蔓延っている毒を一掃するために。

……………こうして聞けば美談かもしれない。

だが、やっていることは犯罪者とさほど変わらないのが現状である。

さらには管理局の全制度の撤廃を要求しているが、別段この件に関しては失敗してもいいと思っている。

そう、*“ある事象”*を世界の歴史に刻むだけにジグルドは動いているのだから。

「そう……………クーデターを起こした以上はもう後戻りはできないんだ。ジョン、必ず我らの宿願は達成して見せる。だから、見ていてくれ……………」

ジグルドは今今は亡きジョンに再度誓いを立てていた。

それからしばらくしてジグルドの部下が部屋に入ってくる。

「どうかしたか？」

「はい。管理局から通信です。明朝にレジアス・ゲイズを連れて機動六課がここへとやってくるそうです」

「そうか………わかった。下がっていいぞ」

「はっ！」

それで部下は部屋から退出する。

そして、

「(レジアス………恨みはないと言えば嘘になるが、『贄』になってもらうぞ………)」

ジグルドはそう心の中で呟き、眠れない夜を明かす。

戦いは明日、というわけである。

先ほど書いた手紙は部下に頼んで“とある場所”へと発送した。

第九十七話 『口上戦』

ジグルド達ブリューナク隊と機動六課含む地上部隊の少し長い夜は終わりを迎えて翌朝になった。

機動六課がレジアスを施設へと連れていくのは九時過ぎという事になっている。

他の部隊はもし機動六課が失敗をしてレジアスが殺されてしまい、キリングドールが各地で暴れる事態になった時にすぐに動けるように待機している状態だ。

つまり、機動六課にすべての運命が握られているわけになる。

だから失敗したら機動六課がすべての責任を取らされるかもしれないという事だ。

はやては出発前に気合を入れるために前線メンバーをブリーフィングルームに集合させた。

「さて、こうして集まったわけやけどこれから私等がすべての運命を握る作戦に出発することになる」

はやての言葉に全員が気合を入れる。

「迷いもあるだろう、葛藤もあるだろう……でも、それはジグルド提督を捕まえた後にもいくらでもできる。だから今日の作戦、みんなして切り抜けような！」

『はい！』

「よし！ 機動六課！ 出発——……………」

はやてが出発と言おうとした時にブリーフィングルームの扉が開かれてリオンが中に入ってきた。

「リオン……………」

「どうしたのリオン……………」

スバルやティアナなどはどうしてここでリオンが部屋に入ってくるのだろうかと思った。

だがリオンは気にせずに、

「私も、私も戦場に連れて行ってください！」

「なんやて……………」

リオンは突然自分も戦場に連れてつてくれと言いだしてはやてやなのは、フェイト、シホの隊長陣の表情は厳しものになる。

この大事な作戦に機動六課ではなく別の、しかも罪を犯しているリオンが入ったら土壇場でもし裏切りをされたらたまったものではない。

もちろんリオンがそんな事をするとは思っていない。

しかし、一部隊を預かる身としてははやてはリオンの部隊への参加を賛成できなかった。

「理由を聞こうか。リオン、なんでこんな大事な作戦に参加しようって思ったんや？」

「そうよ。リオン、あなたはもうこれ以上戦わなくてもいいんだから」

はやての言葉にシホが追従する。

「それとも、もしかしてモリアに復讐でもするの………？」

フェイトの言葉にリオンは「いえ」と首を振る。

だつたらなんでしょう。

リオンは口を開き、

「確かにモリアに対しては恨みはなくなりました……。でも、それとは別に私はたくさんスバルやティアに迷惑をかけました……。そしてモリアもまだみなさんに迷惑をかけています。だから少しでもお手伝いがしたいんです。モリアを捕まえる手助けをしたいんです！ だからお願いします！ 私も参加するのを許してください!!」

そう言つて精一杯頭を下げるリオン。

それではやてはどうしたものかという表情になる。

この限られた戦力の中で確かにリオンの力はありがたいものだ。

しかし、やはりというべきか部隊長としてはなかなか賛成できない。

連携という意味でも即席で参加するリオンはみんなとは連携を取りにくいからもしかしたらお荷物になる可能性も否めない。

チームプレーは大事だ。

今までともに訓練を重ねてきた仲間だからこそ時には何倍もの力を発揮することも稀ではない。

だからこそはやてはリオンの「参加は無理や」と言おうとした時だった。

「八神部隊長！　お願いです！　リオンの参加を許してください！」

「あたしからもお願いします。リオンの面倒はあたしとスバルが見ますから！」

「でも、本当に大丈夫なんやろうな……？」

はやては二人の気持ちを察して、でもと決定を出すのに悩む。

「大丈夫です！　リオンは訓練生時代に何度も一緒にトリオを組んできた仲です。だから今回もきつとうまくいかせます！」

「スバル。ティアナ。その言葉に二言はねーな？」

ヴィータが睨みを効かせながらスバルとティアナの二人にそう問いかける。

それは暗にもし足手まといなら容赦しねーぞということである。

それに二人は無言で大丈夫という意味で頷く。

「はあー……だとき、はやて。なんならあたしもスターズ分隊の副隊長としてこの三人のお守りをするぜ？ そんならいいか？」

「ヴィータ……うん、なら任せてええか？」

「おう！ 任せとけ！」

はやてにようやくリオン参加のお許しを受けてスバル達は喜んだ。

だがそこではやてが「ただし！」と声をあげて、

「勝手な行動はダメな。私欲だけで動いて隊に迷惑だけはかけないように。ええな？」

「わ、わかりました！」

それでリオンの参加も決まったことで。

「さて、それじゃ改めて機動六課、出撃や！」

『了解！』

一同はそれぞれ動き出した。



ジグルドは今ある残存魔導師とモリアの製造した各地に配置してある以外のキリングドール残りすべてを従えて三提督を後ろ手に縄で縛りながらも機動六課とレジアス

が来るのを今か今かと待っていた。

そんな時にミゼットがジグルドに向けて話しかける。

「ジグルド坊……………」

「はい。なんでしようか、ミゼット提督？」

「もしや、このクーデターはジョン坊のために起こしたのですか……………」

「……………」、なにを言うかと思えば。私は私の意思でこのクーデターを起こしたのです。

そこに嘘偽りはありません」

「そうですか……………」。ならもう一つ聞きます。……………ジグルド坊、あんた、もしかして死

ぬ気なの？」

「さて、どうでしょうね……………」

ジグルドは「ふつ……………」と笑い誤魔化す。

それはこれから来る機動六課が握っているということである。

未来というのは不確定だ。

いついかなる時に何が起こるのかわからない。

だから準備を怠らなかつた。

自身を徹底的に追い込んできた。

それが今回で成果として現れるのだ。

そう、ジグルドは心の中で思い、そして、

「ジグルド提督、来ました……」

「来たか……」

見れば機動六課前線メンバーがレジアスを連れてやってきていた。

しかしジグルドはレジアスの後ろにいる機動六課勢ぞろいの戦力に少しばかり武者震いを感じていた。

そう……… たった、二十人にも満たない人数だというのにはやてを筆頭にシホ、なのは、フェイトの隊長陣、そしてヴィータ達副隊長陣、そしてフォワード陣。さらにはサーヴァント勢。

それに対してこちらはジグルド自身にタスラム、鳳華、ロボ、セイラ、モリアそして六十人ほどのブリューナク隊の魔導師たち。そして総動員してあるキリングドール五百体以上。

数にしては圧倒的にこちらが有利だ。

しかし、それでも決して怯まない気の強さを感じる強者たちの姿。

その姿にジグルドは管理局の未来の一端を感じた。

だが今はそんな思いは胸の奥にしまっておくことにするジグルド。

「八神君。レジアスを連れてきたという事は私達の要望に応じるという事でいいかな

「？」

「いえいえ。ただの一部隊である私めがそんな簡単に管理局の全制度撤廃なんて大それたことをできるわけがありません。ですから代わりにレジアス殿をお連れした次第です」

「ほう………ということは片方だけでも応じるというわけだな？」

「それもまた御冗談を。レジアス殿はまだ管理局に必要とされているお方です。そんな簡単に見殺しにするわけあらへんです」

「では………交渉決裂ということでもいいのかな？」

「いえ、まだです。ですがその前にレジアス殿があなたにいくつか言いたいことがあるそうです。聞いていただけませんか？」

「……………いいだろう」

はやてとジグルドの最初の口上戦はひとまずという感じでレジアスが発言することで収められた。

しかしあのまま口上戦が続けられていたらどうなっていたか想像したくないフォワードの面々は顔を青くしていたり……………。

「こうして会うのは久しぶりだな。ジグルド “元” 提督よ」

「ええ、確かにな。レジアス “元” 中将」

お互いに役職の前に『元』をつけて皮肉から始まるあたり二人の仲の悪さが垣間見える瞬間である。

「まずはお前に言いたいことがある。聞いてもらえるか？ ジグルドよ」

「いいだろう。言ってみろ」

「まずは六年前のあの事件はすまなかった。儂が気づいておれば止められたものを。ジョン・バルコムを筆頭に数名の犠牲者を出してしまった事は申し訳なく思う」

「ほう。ジョンの事を知っていたか」

「知っているとも。当時の若いものでは腕の立つ魔導師であったからな。ジョン・バルコムは」

「ならば、なぜ……なぜ見殺しにした!? お前なら止められたのだろう!？」

ジグルドはそう叫ぶ。

ジョンの息子であるロボも言葉には出さないが悔しそうに顔を歪めている。

彼も当時は四歳でまだ物心はついておらずジョンのことはジグルドを通してでしか知らなかったがそれでもその武勇伝には憧れを持っていた。

だからこそロボは必死に耐えている。今か今かと牙を研いで……。

「大体にして『管理局の正義の象徴』という称号も本来なら私ではなく、ジョンに与えられるべき肩書きだった」

「何……?」

「わからんか? ジョンは私たちを逃がすためにレフティ、ロツシ、トミーと共に大軍と戦い、己の正義と信念を貫いて死んだ……」

ジグルドは一度視線をはずし、空を見上げた。

「奴こそ本物の正義を貫く覚悟を持った本物の漢おとこだった……」

再び視線をレジアスに戻すがそ瞳には怒りが籠っていた。

「だが、現実はどうだ? マスコミ連中は彼等を唯の殉職者扱い。対して無様に生き恥をさらした私を英雄扱い……私にとって『管理局の正義の象徴』は途轍もない重荷だったよ。」

そしてレジアス、貴様ならこの苦しみ……わかるのではないか? 事故とはいえ、かつてゼスト殿を死に追いやった貴様なら……!」

「!?!」

そう言われてレジアスは目を見開く。

そう、それはレジアスが犯してしまった過ち……。

「そう、確かに儂の至らなさがあつた。スカリエツティか……。今思えば儂もどうかしていたと思う。しかし、もう儂は二度とそんな奴とは協力はせんと誓っているのだ。そして今度こそ管理局の未来を支えていきたいのだ」

「貴様ごときが変えられるとは到底思えないがな」

「ふつ、言うな青二才が。ならば、こんなことクーデターなどをしてお前は管理局を本気で変えたいと思ってるのか？」

「思っているとも。私は今まで……己が罪を……朋友ともを見殺しにした罪はどう償うべきかこの六年の間ずっと考えてきた……その答えをようやく見つけた。償うべき罪を……裁かれるべき罰を!!」

ジグルドの言葉を聞いたレジアスの表情は怒りに満ち始めた。

「それがこの反乱クーデターか!?こんな事をして貴様の親友が喜ぶと思ってるのか!？」

「思わん!。だがこれ以上胡坐をかいたら未来を担うべき多くの若者たちが評議会のエサにされるのは目に見えていた。だからこの反乱を起こしたのだ!」

「何もかも矛盾しているぞジグルド!。ならば貴様の正義とは一体何だ!？」

レジアスの質問に対し、ジグルドは「フツ……」と不敵な笑みを浮かべて答えた。

「悪をなして巨悪を絶つ……それがこのジグルド・ブリュンヒルデが背負う罰であり、掲げる正義だ!!」

そうジグルドは言い放った。

しかし、それはもう後戻りのできない宣言とも言える。

だからこそレジアスは問う。

「……それがどれだけ大変な事かわかって言っているのか？」

「その覚悟はある」

「覚悟とな？　はっ、笑わせてくれる。所詮もうお前とその部下達は管理局には必要とされない犯罪者集団なのだぞ？　そこを理解していないほど愚かではあるまい？」

「……ああ、ああ、分かっているとも。それでも私の考えに賛同してくれるものがある」と私は信じているのだよ、レジアス」

「くく……。その理解者というのははぐれ者かなにかか？　よほどのものでなければお前の考えになど賛同なぞせんだろう」

「ならばお前にはそれはいるとでもいうのか……？」

「今の儂にはいないだろうな」

レジアスは『今は』という部分を強調して言った。

それはいずれ立て直して増やしていくという意味も込めてある。

それに気づいたのであるうジグールドは、

「レジアス……お前にそんな未来があるとでも思っているのか？」

「まだまだ儂は諦めんぞ。儂を信頼してくれるものがある限り何度でも復帰して見せる

ともー」

「ならばお前の未来、正義の名のもとに私が断ち切つてやろう！」

それでジグルドはデバイスであるアスカロンの剣先をレジアスに向けた。

「ほう……先に刃を抜いたか、ジグルド。ならばこの口上戦は儂の勝ちだな」

「抜かせ。貴様はいつでも肅清出来る故にこの口上戦の勝ちを貴様に譲っただけだレジアス！」

口上戦はひとまずレジアスが勝利する形に終わった。

先に刃を抜いたのだからジグルドにはなにも言うべきことはない。

そして完全に臨戦態勢のジグルドにそれに乗ってやる気になっているブリューナク隊の面々。

「……さて、すまないな、八神よ。どうも熱くなってしまうて戦う以外に方法はなくなってしまったようだ。だから後は頼むぞ」

そう言つて謝るレジアス。

素直に謝れるようにもなったのだから少しは性格が丸くなった証拠だろう。

そんなレジアスに対して、

「あはは。わかつてました、なんとなくこうなるのは。ではレジアスさん、あなたの護衛はランにレン、ギンガが務めます。お願いな、三人とも」

「お任せください！ 必ず守ります」

「僕たちが責任をもつて！」

「了解しました！」

それでレジアスを連れて後方へと下がる三人。

「……………さて、ではジグルド提督。先に剣を抜いたのはあなた方です。よって交渉はそちらが先に破ったという事で私達があなた方を捕まえます」

「ふん。さすがタヌキだな」

「いえいえ。この程度は普通ですって」

「ならば、モリア……………。各地のキリングドールを起動しろ」

「くくく。了解ですよ、ジグルド提督」

それで悪い笑みを浮かべたモリアが一つのボタンを押そうとしていた。だがその時、

——ザンツ！

「はへ……………？」

モリアのボタンを持つている手が落ちた。

モリアは何が起きたのかわからずに目を点にする。

そこに気配遮断を行っていた志貴の姿が顕わになる。

気配を現すと同時にモリアの腕を切り落としたのだろう。

地面に落ちた腕はバチバチと火花を上げている。

「くっ!？」

「やはり機械の腕だったか……しかしこれで各地のキリングドールはただの鉄クズになっただけだ」

ボタンを拾い上げた志貴がモリアを睨みながら言う。

「く、くそう！ て、撤退だ!!」

そうモリアは叫んで無意味な弾幕をまき散らしてその場から転移して消え去った。

「ふう、逃がしたか……」

それでシュンツ！と志貴は一瞬にしてはやての隣へと移動する。

「ナイスや、志貴」

「なんだろうな……？ 命令とはいえ俺は前にもこんなことをしたことがあるだけになんかやる気だせないな」

「まあまあ。……それじゃジグルド提督。おとなしく三提督を解放してください」

「そう簡単にはできない相談だ。まだ、キリングドールは五百体以上はこちらにいるのだぞ？ ブリューナク隊、構え！ 私達の底力を見せてやるぞ!!」

『おーーーー!!』

それでキングドールは全機起動してブリューナク隊の面々も向かってきた。ここにこのクーデターの最後の戦いが幕を開けた。

第九十八話 『圧倒的な力。抗うのはさらに異形の力』

機動六課とジグルド率いるブリューナク隊との戦いの火蓋は切って落とされた。

まずキリングドールが率先して機動六課の面々へと迫ってくる。

そのキリングドールの五百体以上の数は少数の構成員である機動六課にしてみれば圧倒的に不利だろう。

……そう、本来ならば。

機動六課は数より質を重視されている。

その結果がこれだ。

シホと士郎が弓を構えて、

「トレス・オン
投影開始……ッ！」

二人して圧倒的な威力を誇る螺旋剣を投影しようとする。

「I am the bone of my sword……カ
ラド・ボル
ク
螺旋剣

!!

放たれた二本の魔剣は真正面から迫ってきているキリングドールに着弾する。

そしてシホと士郎の二人はワードを唱える。

「ブローケン・ファンタズム壊れた幻想!!」

その一言によって偽・螺旋剣はその神秘を解放し爆発を引き起こした。

その爆発に巻き込まれたキリングドールはほぼ三分の二を破壊されて他残りの三分の一も機能停止とまではいかないが動きが鈍くなっていた。

「くっ！ シュバインオーグ一尉と八神士郎二尉！ これがあのだ二人の本気か!」

ジグルドが驚愕の表情になりながらもそう叫ぶ。

そう、シホと士郎の二人がいればそれこそ十全の状態ならばやりようによってはブリューナク隊だけではなく数隊もの魔導師隊とも圧倒的な力を誇示しながらもやりあえるほどの脅威だ。

だが、ジグルドは勘違いをしている。

実際はまだまだシホと士郎は本気を出していない。

シホはアルトリアとユニゾンをしてセイバーフォルムをまだ展開していないし、それこそシホと士郎の本気と言えど固有結界であり、そんな奥義を使うほど追い込まれていないのだからそれを聞いたならジグルド達は驚愕して顎が外れてしまうのではないか

……?

それはともかくとして、残りのキリングドールも負けじと剣や銃を構えて突撃してくる。

だが、そこには突撃隊であるサーヴアント勢が勢いを見せる。

「いかせてもらいます。風よ……荒れ狂え！ 風王鉄槌!!」
ストライク・エア

「さあ、ゆくぞ！ 天幕よ、落ちよ！ 花散る天幕!!」
ロサ・イクトウス

「遅いぜッ！ おらおらおら!!」

「いきます！ 聖王……鉄槌砲！」

「貫きます！ はあ！」

「炎天よ、はしれ！」

「切り裂く！ うけてみろ！」

「いっくわよー！ そーれッ！」

アルトリアの風王鉄槌が鉛玉となって突撃していき砕き、ネロの原初の火の大剣が華麗に切り裂き、ランサーの槍がなん体ものキリングドールを同時に貫き、オリヴィエの放つ聖王鉄槌砲が直撃して破壊しつつ、ライダーの釘剣が突き刺さりそのまま怪力で振り回されて潰され、キャスターの呪術が跡形もなく焼き払い、志貴の直死の魔眼の刃がすべてを切り裂き、アルクエイドの爪がことごとくを捻じり潰す。

……そう、すでにそれは戦いではなく蹂躪劇。
さらには、

「エクセリオンバスター！」

「トライデントスマッシュャー！」

「いくでえ！ クラウソラス！」

「飛龍一閃！」

「シユワリベフリーゲン！」

なのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータたちも魔法で砲撃を繰りだして各個撃破しているからすでに戦いと呼べるものではなかった。

フォワードたちやヴァイスはその圧倒的有利な戦いに進んで前に出ることもなくキリングドールは10分もかからずすべてを狩りつくされてしまったのだ。

数の有利性はすでに失われてしまい人数の数は機動六課より少し多い程度のブリューナク隊も機動六課の圧倒的な力を前に気持ちを吞まれてしまいなかなか前に出れないでいた。

そしてランサーが破壊したキリングドールの顔部分にガシツ！と足に乗つけて、
「……さて、それじゃこれからどうするよ？ まだ戦うか、大将さんよ……？」

そう、ジグルド達に告げる。

その様はまさに悪人のようだ、と見ているだけであつたスバルは思ったという。

「確かに君たちの戦力は侮れないものがあるだろう……。しかし、ここまで来て諦めるわけにはいかないのだよ」

そう言つてジグルドはアスカロンを構える。

それで気持ちではすでに底まで来ていた他の魔導師たち……ティータ、凰華、ロボ、セイラも負けるものかとそれぞれデバイスを構える。

「……ジグルド提督。もう無駄なあがきはやめて投降してください」

そこにはやてがそう言つて投降を促す。

「まだだ！　まだ私達はこんなところで終わらない！」

——そう、こんなところで終わつてもらつては困るよ、ジグルド提督……。

そんな時に敵味方全員に聞こえるように思念通話が響いてくる。

「この声は!?　ヴォルフ・イエーガー！」

シホが叫ぶ。

そう、この声はあのヴォルフ・イエーガーの声だったのだ。

「ヴォルフ・イエーガー……?　ということではモリアを通して私の計画にサーヴァント

を貸し出してくれたのはお前なのか？」

《ふふふ……そうだ。今からセイバー、アーチャー、ランサー、アサシンの四体をお前に貸し出そう。うまく使ってくれよ？ ライダーとバーサーカーを失った今、これでも私の貴重な戦力たちなのだからな》

「それは構わないがお前の目的は何だね？」

《なに、簡単なことだよ。あそこにいる機動六課セイバース隊隊長であるシホ・E・S・高町一等空尉殿を捕らえてほしいのだ。私から直接の用があるからな》

「なんだと……ッ!？」

『ッ!？』

そのヴォルフ・イエーガーの申し出にジグルドはもちろん聞いていた全員が驚きの表情をする。

どうしてシホをヴォルフ・イエーガーは必要としているのか？ そしてなんの用があるというのか？

それはヴォルフ・イエーガーにしかわからない。

「シホをそう簡単に差し出しはしませんよ、ヴォルフ・イエーガー！」

「そうだ！ 奏者は余のマスターだ！ みごと守ってみせよう！」

アルトリアとネロがいまだ姿を現さないヴォルフ・イエーガーに向かって叫ぶ。

それに対してヴォルフ・イエーガーの返答はというと、

《よかろう。しかし、シホ・E・S・高町は必ず私のもとに来ることになる》

「私があなたのもとに……？　悪い冗談ね。何を根拠にそんなことを言うのか聞かせてもらってもいいかしら……？」

今度はシホ本人がヴォルフ・イエーガーに問いかける。

その理由を話せという意味を込めて。

《ふふふ……こう言えばわかるか？　私はシルビア・アインツベルンの一族のものとね……》

「なっ!？」

そうヴォルフ・イエーガーは言った。

シルビア……いや、この世界のアインツベルンの一族はシルビアを残してはるか昔のベルカ時代に滅びているはず……。

なのにヴォルフ・イエーガーはその一族だといった。

なにか重要なことを聞けそうなことである。

しかし……、

「だからと言って、そうやすやすとあなたのもとへは行かないわよ！」

《……まあ、言いだろう。来なければ強制的に連れていくのもありだからな。また思念

通話をする》

そう言ってヴォルフ・イェーガーの思念通話は聞こえなくなった。

と、同時に機動六課の周囲になにやらわらわらと気配が感じられるようになる。

「奏者よ！ 注意せよ！ この気配はおそらくアサシン！ だがもう空気に溶け込んで気配は感じられなくなっている……厄介だ！」

ネロが大剣を水平に構え周囲一帯を警戒しながらシホにそう言う。

そしてジグルド達ブリューナク隊の近くにもフードを着ている三人の人の姿が現れた。

おそらくアサシン以外の残り三人。

まだ正体はわからないセイバーのクラスカードを持つもの。

ランサーⅡオーデインのクラスカードを持つもの。

アーチャーⅡヘラクレスのクラスカードを持つもの。

この三名なのだろう。

そして三人はその手にクラスカードを出す。

次には自身の眼前へとクラスカードを構えて、

「……クラスカード、セイバー………インストリアル夢幻召喚！」

「……クラスカード、ランサー………インストリアル夢幻召喚！」

「……クラスカード、アーチャー………インストリアル夢幻召喚！」

瞬間、三人の地面に魔法陣が現れてそこから光の帯が伸びてきてそれぞれの体へと巻き付いていく。

次第に光の繭が形成されていき次の瞬間に三人の繭の光は晴れる。

そしてそこにいたのは、

一人は青白い槍を持ち、黄金の鎧に兜を身に纏い青いマントを羽織っていて左目に眼帯をしている神話でのオーデインの戦闘衣装をした女性であった。その腰にまで伸びる銀色の髪に赤いルビーの瞳がうまく交わって強者を体現している姿であった。

これがランサー……オーデインのクラスカードの力を身に纏ったホームクルスの姿なのだろう。

そして二人目は巨大な弓を持ち、聖杯戦争で登場したバーサーカーの姿にさらに胸を覆う布を纏っている鉛色の体の色をしたボブカットの銀髪赤目の女性であった。

これがアーチャー……ヘラクレスのクラスカードの力を身に纏ったホームクルスの姿。

最後の一人は二メートルはあるであろう巨大な刀を持ち、髪型は平安時代によく使われた鬘（みづら）であり銀色ながらもアンバランスではなくしっかりと整っている、そして豪華な古代の装束を着用している。

その姿から連想されるのは日本の英雄だろうというのは予想できる。以前に雷の刃で機動六課の隊舎を切り裂いたことからおそらく正体は……、それですぐさまにシホと士郎はその刀を解析する。もちろん他の二人が持っている槍に弓も。

それで弓の解析結果はもちろん本物。槍も本物であった。

そして刀の解析を終えて、

「まさかね……」

「シホちゃん。あの刀の持ち主の英霊はなにかわかったの……?」

なのは聞いてくる。

それにシホは少し顔色を悪くしながらも、

「あの刀の真名は『布都御魂』……これから割り出せる英霊、いや、神霊は雷と剣の神で

ある『タケミカヅチ』よ」

「えっ!?!」

「それ、ホンマかシホちゃん!?!」

なのはがその名を聞いて驚き、はやてが日本人ゆえに知っているメジャーな名前に驚きを隠せないでいる。

タケミカヅチ。

その神は火神である軻遇突智（カグツチ）の首を切り落とした際に生まれたという伝説があり、あの『神武東征』で有名な神武天皇の危機の際に布都御魂を授けたことで有名な神であり、日本ではそれは深く信仰されている。

そんな神をクラスカードにしてしまうとは、ヴォルフ・イエーガーはかなりどうかしていると言っても過言ではない。

そして、聖杯戦争で三騎士と呼ばれるセイバー、アーチャー、ランサーに半神半人であるヘラクレスも入れると三人とも神霊クラスであることにもう驚きを通り抜けてよくやる……！という感想が出てくるというものだ。

「……ジグルド、と言ったか。お前の目的を暗すがいい。道は我らが切り開く！」

そう言つてアーチャー（ヘラクレス）は弓を構えて、

「射殺す百頭!!」
ナインライブズ

宝具の真名解放を行い九つの矢が機動六課へと向かつて放たれる。

「みんな！ 散開！ アサシンもいるから奇襲には気を付けて！」

全員はなんとかナインライブズの矢の直線状から退避できた。

しかしアーチャーの狙いはシホ達ではなかった。

それはジグルドを通す道を作るためである。

ジグルドはアスカロンを構えて開いた道を一直線に駆け抜けていきついには機動六

課包围網を抜いた。そして後方へと下がっていたレジラスへと目をつける。

それに対してレジラスは「来るか……！」と呟く。

当然、ランやレン、ギンガが守ろうとするが、

「私の道を塞ぐことはできませんぞ！ どけえ!!」

魔力が発光して体に青いオーラを纏うジグルドに対して、

「いかせません!」

レンがアウルヴァンデイルをモード2、大型シールド形態にしてジグルドの道を塞ぐ。だが、

「そのような盾など、温い……ッ!」

突撃する勢いもつけてアスカロンを横薙ぎに振るう。

「うわあっ!」

「レンっ!」

「レン君!」

ジグルドの強烈な力によってレンは盾ごと横に吹き飛ばされてしまった。

そしてついにジグルドとレジラスの距離が後二メートルという距離にまで近づく。

お互いの視線が交差する。

ジグルドはその眼に「レジラス、その首もらった!」という意思をこめて。

レジアスはその眼に「すまん、ゼスト。先に逝く……」という思いをこめて目を閉じる。

そしてついにレジアスの首にアスカロンの刃が到達しようとした次の瞬間、

——ガキンツッ！

なにかで受け止められる音が響き渡る。

「ツッ!」

ジグルドと、そして目を閉じていたレジアスは目を見開き双方に驚愕の表情を形作る。

そこには一本の槍があった。

そう、その槍の持ち主は……、

「……レジアス。お前はこんなところで終わる男ではあるまい……?」

「ぜ、ゼスト……?」

そう、ジグルドの刃を受け止めたのはゼスト・グランガイツその人だったのだ。

ゼストはジグルドのアスカロンを思いつきり弾き、そして宣言する。

「我が友の命、このゼスト・グランガイツがお守りいたす!!」

ここにかつての友の共演が果たされたのであつた。

第百九十九話 『大混戦』

「ゼスト・グランガイツ、だと……？」

ジグルドは驚愕の表情をする。

そう、ゼストは今現在は海上隔離施設で戦闘機人やルーテシアとともに過ごしているはずなのだ。

ここにいるわけがない。

しかし、今こうしてゼストはここにいます。

「ゼスト……。なぜお前がここにいるのだ……？」

「あたしもいるぜ！」

ゼストの肩にはアギトもいた。

しかしそんなことよりもゼストがここにすることが不思議でならなかったレジアスはそうゼストに向かって聞く。

それに対してゼストは、

「八神二佐が手を回してくれたのだ。そう、昨日の夜の事だった……」



シホがレジアスのところへと向かっていた時の事だった。
海上隔離施設にははやてがやってきていた。

そして面会室で、

「ゼストさん、お久しぶりです」

「ああ、八神二佐。久しいな」

「はい。それで今回私が来たのには理由がありました」

「今起きている事件のことか……？ ニュースに関しては制限されていないので聞いて
いるぞ」

「そうなんです。それでレジアスさんが命の危機にさらされるかもしれないんです」

「なんだと？ 詳しく聞かせてくれ」

「はい」

そしてはやてはジグルドが起こしたクーデターについてゼストに詳しく教えた。

それも見越してはやてはある提案をする。

「今、地上部隊の魔導師はもろもろ各地の守りで人手不足です。海の方でもまだ動くには時間がかかるそうで明日の午後過ぎにならないと本局の魔導師隊は来れないそうなんです。ですからゼストさん。あなたの力を貸してくれませんか……？」

「無論、貸せるものなら貸し出そう。しかし、俺は現在はこの通り獄中生活だ。なのに、大丈夫なのか……？」

「そこは問題ありません。カリム……？」

『はい』

そこに聖王教会のカリムがモニター越しに姿を現した。

『ゼストさん。あなたを私の権限で仮出所の形で解放します。ですからどうかレジアス中將を助けてやってください。かつてストライカー級の魔導師であったあなたなら申し分ありませんから』

「すまない……恩に着る」

カリムがここぞという時に権力という力を行使してゼストの仮出所を許可したので。これでゼストは一時的にだが外に出れる。

そんな時に、どこに隠れていたのか突然小さい花火が上がりゼストの肩の上にアギトの姿が現れる。

「旦那が出るっていうならあたしもでるぜ！」

「あー、アギト。ちつぱい花火やと思ったらやつぱりいたんか」

「おう、八神隊長！　旦那だけじゃ不安だからユニゾンできるあたしもいた方が百人力
だろ？」

「アギト……。俺にとつて最後になるかもしれない戦い、力を貸してくれるか？」

「あたぼうよ！　旦那はルールーのお母さんと遠い土地で一緒に暮らす暁にもう戦いから身を引くことは知っているからな。だから最後の戦い、ペアッ！と派手なものにしようぜ！」

「おう……。最後の戦い、レジアスのためについやそう」

「頼みます！」

『お願いします』

はやてとカリムは二人にお礼を言うのであった。

しかし、仮出所に対して色々な手続きもあつて現場には遅れて合流することになってしまい、レジアスの身を案じながらも遅れてやってきた時にはすでに戦闘は始まつていてジグルドがレジアスに刃を向けようと走つていたのを見てゼストは即座にレジアスのところへやってきて自慢の槍でジグルドのアスカロンを受け止めたのだ。

そして現在に至る。



「……………というわけだ」

「ツ！」

すべてを話し終えてゼストは槍を構えた。

それに対してジグルドは苦い表情をする。

当然だ。

ゼストはジグルドにとって憧れの一人であつたのだから。

その憧れの人物が目の前に現れて宿敵を守る。

これはどう見ても苦い表情を浮かべるには十分だ。

戦鬪の腕に関しても敵うかどうか。

「八神が……………儂は助けられてばかりだな。機動六課には」

「そうだな。だが俺が来たからにはお前は必ず守る……………」

普段寡黙なゼストがここまで饒舌になるのには理由などいらぬ。

昔のように語らいあう。

それこそレジアスとゼストの仲だったのだ。

「さて、それではジグルド。貴様は俺が直々に相手をしてやろう」
「……………あこがれの人が相手とはいえ負けませんよ」

そして構えるジグルド。

それでランとレン、ギンガは再度起き上がってレジアスの護衛につくのであった。

「旦那！　いくぜ！」

「うむ」

『ユニゾン・イン！』

ゼストはアギトとユニゾンをして、

「いくぞ、ジグルド？」

「はい、ゼスト殿」

二人の戦いが始まった。



一方、残りのブリューナク隊と偽サーヴァント達と戦っている機動六課はというと、
「いくぜ！　槍使いの嬢ちゃんよ！」

そう言つてランサーは地面にルーン魔術を施していく。

四隅にARGZ、NUSZ、ANSZ、INGWZを刻んだ決闘の陣。

そう、この陣は、

「もう三回くらい戦って何度も逃がしちまったからな。もう逃がさねーぜ……？」

アトゴウラ
四枝の浅瀬！ 背水の陣って奴だな！」

「……………いいだろう。私と貴様の最後になるかもしれない戦い、存分にやりあうとするか」

ランサーの背水の陣である四枝の浅瀬を披露したというのにランサーは余裕な表情でグングニルを構えてお互いに疾駆する。

クーフリリン オーディン
ランサーとランサーの戦いが幕を開けていた。

違う場所では、

「ツ!! スバルツ! ティアツ! ヴァイスさんツ! 5秒後に10時と2時、6時の方向からアサシンのナイフが来るツ!!」

『ツ!!』

リオンの未来予知により三人+ヴァイスは即座に四方へと向き、四方八方から投擲されてくるアサシンのナイフの迎撃に入った。

「リボルバー……キャノンツ!!」

「クロスファイヤー……シユートツ!!」

「竜……穿牙ツ!!」

「撃ちぬくぜ!」

スバルはリボルバーキャノンを放つてアサシンのナイフを弾き、ティアナはクロスファイヤーを放つて撃ち落とす、リオンは双剣を交差させて叩き落とす、ヴァイスはストームレイダーを構えて迫ってくるナイフを正確に撃ち落とす。

「リオンの予知能力、相変わらずスゴイよ!」

「ホント、アンタが教えてくれるおかげで対処出来るわ」

「二人のおかげだよ。二人が信じてくれるから、私はしっかりと予知を伝えられる!」

「話には聞いていたが、すげーな……投げられるまでこの俺でもナイフの軌道には気づけなかったぜ。サンキューな」

「はい! それじゃこのままティアのお兄さんのところに向かおう!」

「おう!」

「ええ!」

「任せとけ!」

三人は衰えないトリオの力で、おまけにヴァイスの助けもありアサシンのナイフの嵐

が吹き荒れる中、ティーダのもとへと向かっていく。

そして、

「兄さん！」

「ッ！ ティアナか！」

ティーダは待ち構えていたかのように四人の前に立つ。

「兄さん……あなたはここで逮捕します！ 覚悟してください!!」

「ティアナ……そうか。だが僕はまだ負けられないんだ。ジグルド提督に恩を返すまでは……ッ！」

「おうおう！ 前にも言ったがな！」

そこでヴァイスが声を上げる。

やはり妹を持つている身としてはティーダの行いは許せないところがあるのだろう。

「ジグルド提督に恩を返すとか言っているが、それはただの建前で本当は現実から逃げてるだけのセリフじゃねーのか？」

「そ、そんなことは……ッ！」

「なら、ティアナの目をしっかりと見やがれ！ 今でもお前の事を助けようと必死にあがっている妹の姿をな！」

ヴァイスにそう言われてティーダはティアナの目を見ようとして、反射的に伏せてし

まう。

それでヴァイスは「やっぱりな！」と言って、

「お前はティアナに負い目を感じてるんだろう？ 自慢の兄になれなかったとかなんとかの理由をこしらえてよ！」

「僕は、僕は……ッ！」

「恩だとかそんなものは抜きにして兄妹で話し合わねーか？ まだお前は生きている。やり直せるんだぞ!!」

「ヴァイスさん……」

ヴァイスのティードダに対する説得を見ていたティアナはヴァイスの言葉に少しずつ惹かれていた。

友達でも仲間でもないこの感情はいったい何だろう……？と。こんな戦いの中だとこの胸がドキドキする。

でも、今はこの気持ちは言わないでおくことにした。

そう、せっかくヴァイスが説得をしてくれたのだ。

このチャンスを有効に使わせてもらわないと！

「兄さん……あたしのもとへ戻ってきてください。そしてやり直そう？ また二人で……」

「ティアナ……すまない」

それでティードは握っているミラージュフアングを地面へと落とし、その場で膝をつき涙を流す。

そう、ティードはヴァイスとティアナの説得で戦わずして降伏したのだ。

それで「一旦落ち着、かな……？」とスバルは思った。

しかし、リオンだけは五秒先の最悪の未来を予知した。

「ツ！ みんな、すぐにティードさんを守って！」

「えっ………？」

「早く!!」

リオンの必死の叫びに即座にティードを囲むように四人が構える。

瞬間、ティードに向かってナイフが向かってきていたのだ。

「これって、アサシンのナイフ!? どうしてティードさんを!!」

スバルが叫ぶ。

それに対してリオンは冷静な顔になりながらも、

「私はさつきティードさんが五秒先にはアサシンのナイフで貫かれるのを未来視した

……。きっと戦わないものは不要だと切り捨てられたんだと思う！」

「そんな………！」

「だから！ ティーダさんは決して死なせないように私がナイフの軌道を予知する！
乗り切ろう、みんな！」

『おうー！』

それでスバル達は気配遮断で攻撃されるまで居場所を感知できないアサシンのナイフを徹底的にリオンの予知能力で払い落とすことを繰り返すことになった。

そしてまた違う場所では、

「いくぞー！ 獅堂陸曹!!」

「こいー！ シグナム!!」

この場では先日の蒸し返しのような光景であるシグナムと凰華の二人がお互いの信念をかけて剣を重ねあっていた。

そんな二人の戦いの様子を残りの魔導師達と戦っていて時折飛んでくるアサシンのナイフを撃ち落としながら第三者視点で見ているという高等テクを駆使しているヴィータはというと、

「なんだ……？ バトルジャンキーが二人いるな？」

と呟いていた。

そしてエリオとキャロ、ロボとセイラの二人の戦いも二対二のコンビでの戦いにもつれ込んでいた。

エリオがキャロの操るフリードの体に乗って、キャロもエリオの後ろでブーストに専念している。

「いくよ、ロボ君！」

「来い！ エリオ！」

「若！ 援護します！」

フリードが急加速してエリオはその勢いのままにロボへとストラダーダを構える。

セイラの糸が迫ってくるが盾形態ではないのでフリードのブラストフレアでなんとか焼き払える。

「（エリオ君の役に立ってる！ 私、頑張れる………!!）」

キャロは心の中でエリオの役に立っていることに喜んでいた。

だがそんなことは顔には出さずにエリオの援護に回っていた。

そして志貴とアルクエイドはというとアサシンの本体を探していた。

「もう！ こいつら弱いくせにしつこいわよ！」

「愚痴を言うな、アルクエイド！ 少しでも早くこいつらの本体を倒して状況を打破するんだ！」

「わかってはいるわよ、志貴！ でも、あ……………うるさいッ!!」

アルクエイドがアサシンの分身体を次から次へと切り裂いて志貴も同じアサシンゆえにある程度予測できているアサシンの気配を探って退治していた。

そしてアーチャーとの戦い。

アーチャーは最初の一撃であるナインライブズを放った時以来、大きい攻撃を放っていない。

何度も矢を放ってくるがそれは士郎達で対応できるレベルだ。

このことに士郎は技はチャージが必要なのではと考えていた。

それで、

「キヤスター！ ライダー！ なのは嬢！ フェイト嬢！ はやて！ おそらく

射殺す百頭はチャージの時間が必要だと思う。それと十二の試練はクラスカードゆえにおそらく持つていないだろうから一気に畳みかけるぞ！」

士郎はそう判断し四人に指示を下す。

「わかりました、ご主人様！ ふふふ……ここは必殺の一撃でも」

「………わかりました。いざという時には宝具を使います。タイミングは任せます」

「わかりました！ カリムさんからもブルーートの使用許可とカイゼルファルベ状態への移行も許可されていますのでいつでもいけます！」

「真・ソニックフォーム！ いけます!!」

「わかったで士郎！ リイン、ここはユニゾンしてラグナロクを撃つ時や！」

「はいですー！」

キヤスターが何度も足を振るって「ここは必殺の………」と呟き、ライダーはいつでもペガサスを召喚できるように構えて、なのははブルーート承認の許可ももらってリミッター以上の力を解放しようとしていて、フェイトも真・ソニックフォームを展開してライオットザンバーを構え、はやてはリインとユニゾンをしていつでもラグナロクを撃てるように後方で待機する。

士郎自身もカラドボルグを投影していつでも放てるようにしている。

そして最後にセイバーとの戦い。

すでにシホとアルトリアはユニゾンをしていてエクスカリバーフォルムを構えて疾駆している。

「はあっ！」

「シッ！」

シホが振りかぶって剣を当てに行くがセイバーはその素早い機動で何度も避けていく。

「奏者よ！ 援護するぞ！ いくぞ！ 謳え！ ラウス・セント・クラウドイウス!!」

「ふっ！」

ネロの必殺技が放たれるがセイバーは刀を一振りしてそこから発生する雷の刃がネロの大剣へと直撃して、ネロは「ぐううっ!」と言いながらも後方へと吹き飛ばされていく。

「好きなようにはさせません！ 聖王……鉄槌砲!!」

「温い……い！」

オリヴィエが聖王鉄槌砲を放つがセイバーは刀を振るってその砲撃を真つ二つに切り裂いてしまった。

その圧倒的な力に三人は一度一か所に合流してセイバーと視線を合わせながらも相談をする。

「やつぱり、セイバー……タケミカツチのクラスカードの恩恵を受けているからすさまじいわね」

「うむ。確かに強いし早い。さすが劍神だな……余では相手にならないかもしれないな」

「はい。確かにセイバーにふさわしい力量を備えています。あれは本当にただのホムンクルスなのですか？」

三人はそれぞれセイバーに対して評価していた。

それぞれが思うところがあるがそれでも三人ともセイバーの実力を認めていた。

だが攻めてこないのを好機と感じたのだろう、

「………来ないのならば、こちらから決めるぞ？」

そう言ってセイバーは刀を振り上げる。

次の瞬間には刀に雷のエネルギーが集中していく。

この現象は、

「まさか、宝具を解放する気か！ 奏者よ！ どうするか!？」

「そうか。なら宝具には宝具………アルトリア、行くわよ？」

『はい、シホ!』

それでシホもエクスカリバーを上段に構えて光の魔力を集めていく。

ネロとオリヴィエは宝具の打ち合いになると悟り、すぐにシホの後方へと下がる。

そして、

「――約束エされた………!」

「――布都御………!」

二人の宝具が解放されようとしたその時だった。

「ぐあああああ………ツ!!」

ジグルドの苦しみが込められている叫び声が聞こえてきたのは……。

第二百話

『男達の壮絶なる戦い』

ゼストとジグルドの戦い。

ゼストはかつてストライカー級の魔導師であった。

いや、力が当時のものまで戻った今、かつてをつける必要性はない。

そう、ゼストは今もストライカー級の魔導師なのだ。

それはシホも真正面から魔術という反則なしで戦えば負けるかもしれないと言われ、めたほどの腕前を持っている。

そんな十全の能力を発揮できるゼストに烈火の劍精・アギトが融合すればどうなるか……？

ただでさえリインとユニゾンしたシグナムすらを不十分の体で圧倒した腕だ。

それはもうかなりのものになるだろう。

シグナムはある時にこう言った。

『私は確かに本気で戦った。そこに嘘偽りはない。だからこそ力が戻られた今のゼスト殿と負けてもいい……本気で戦ってみたい』。

……と。

あのバトルジャンキーなジグナムが笑みを浮かべながらそう言い切ったのだ。

だからこそゼストの腕は底知れないものだと思われる。

そんなゼストの力を若い時から聞かされてきたジグルドは当然己の限界を超えなければ勝てない相手だろうという思いはあった。

……だから、ジグルドは今このとき解放する。

己の体に宿っている竜の血を……！

「ゼスト殿。私の本気の力を見せる。見ていただきたい」

「よかろう」

それでゼストは自慢の槍を地面についてジグルドが本気になるのを待った。

そしてジグルドはその待つてくれるゼストの心にさらに感銘を覚え、感謝し、己の全開を發揮する。

「ぬんっ！」

ジグルドの体から大量の魔力が放出されていく。

次第にジグルドの体は青く変色していき目が赤く染まっていく。

爪が伸びて尖っていき背中の部分から二対の翼が生える。

「はあああああああーっ!!」

そして先ほど放出された魔力が今度は再びジグルドの体へと戻っていく。

一度放出された魔力が体の表面へと纏わっていく。

そして一瞬だがジグルドの体が発光して、それが収まると、

「……………ゼスト殿。お待たせした。これが我がブリュンヒルデ家に流れる竜の血を具現化した形態……………『ドラゴンフォーム』です」

「……………」

ゼストは驚きの表情をしているものの槍を握りしめる力は衰えていない。

むしろ強敵に会いまみえたことに対して少し歓喜しているところすらある。

なぜジグルドがこのような姿になれるのかというと、ブリュンヒルデ家の歴史をひも解いていく必要がある。

元々ブリュンヒルデ家は “竜と交わった” という言い伝えがあり、その家系に生まれた人間は高ランクの魔力……………最低でもAランク相当のもの、を持っている。

そしてブリュンヒルデ家には数十年に一度、先祖返りとして最も竜の血を色濃く生まれた子は “ドラゴンフォーム” というレアスキルが備わっている。

背中から竜の翼、皮膚から竜の鱗が浮かび、鋭い爪と牙を生やした姿へと変身するという。

そんな言い伝えを具現化した男がジグルド・ブリュンヒルデなのだ。

この姿になった後に残るのは倒された敵の姿だけ……。

ゼストもこの倒されたものの一覽に収まる男なのか……？

この二人の勝負は今始まろうとしている。

先に動いたのはジグルドであった。

その翼から発せられる魔力をバネに一気にゼストとの間合いを詰める。

そのスピードは常人が出せるものでは決してない。

だがそんなスピードを出していても、

「ぬんっ！」

ガキツ！

「ツ!?!」

「まだ、見えるぞ?」

なんとゼストはその動体視力と反射神経だけでジグルドの最速の横薙ぎからの切り付けを槍を盾にすることで受け止めてしまったのだ。

そんなゼストにジグルドは一瞬思考を停止させたが即座に槍を弾き後方へと下がり

一言。

「……………まさか、私のトップギアのスピードによる斬撃を受け止められるとは思っていませんでしたよ。さすがストライカー級の魔導師ですね」

「なに……………俺とてただでこの命を差し出すわけにはいかなからな。……………帰りを待っていてくれるものがある。俺を必要としてくれる友がいる」

ゼストの頭に思い浮かべられるのはルーテシアやアギト、そして自身を慕ってくれる戦闘機人の子達。

そして長年の友であるレジアス。

この思いがある限りもう二度とゼストは敗北はしないと誓っている。

もちろんそんな恥ずかしいことは寡黙なゼストは語らないが今現在はアギトがユニゾンしているために脳内の考えが結構だだもれ状態だったりしているために、

『旦那……………あたしは嬉しいよ！ 旦那がそんなにあたしやルーラーのことを大切に思っていたなんて……………』

中でいやんいやんと体を動かしているアギトの存在をあえてゼストは無視した。

そう、顔には出さないでおくべきだ。

俺は寡黙なのだから……………。

そんなどうでもいい一幕があつたが、ゼストの「アギト、いくぞ」という声とともにアギトが「おう！」と言って、

『一気に行くぜー！ 旦那、受け取りな！ 炎熱加速!!』

瞬間、ゼストの槍に炎が宿る。

そして槍を構えて、

「はあああああー！ー！ーッ!!」

裂帛の叫びとともにゼストはジグルドへと向かって駆けていく。

そのスピードはドラゴンフォーム状態でのジグルドにも負けていない。

ジグルドも負けじとアスカロンを構えて、

「負けられないのだよ！ おおおおー！ー!!」

ジグルドも負けじと同じくらいの気合のこもった叫びを上げてゼストに向かって高速で駆け抜ける。

そして互いの武器が交差する。

瞬間、金属がかち合う凄まじい音がそこら中に響き渡る。

ギギギッ！とジグルドのアスカロンとゼストの槍はつばぜり合いをしていて力も同等ということになり、

「…………やるな」

「ゼスト殿。あなたこそ！」

ただただゼストはジグルドの力と技量を冷静に褒めて、ジグルドもゼストの腕に改め

て感銘を覚えていた。

そして始まる。

劍戟による激しい武器のぶつかり合いが………ッ！

ジグルドはアスカロンを何度も振り回し劍戟をぶつけていく。

それに対してゼストは水平に構えて槍による刺突を繰り返し連打する。

劍戟と刺突。

本来はかみ合わない異なった攻撃が二人の技量の高さゆえに高次元戦闘を演出している。

何度もぶつかっては一回距離を置き、再度お互いに突撃を開始する。

そんな過激な戦いがどれくらい続いただろうか………？

「ふう、ふう………」

「はあ、はあ………」

ジグルドとゼストは互いに多少の荒い息を吐き、だがしかし負けじと劍と槍を衝突させる。

その戦いをレジアスの護衛として間近で見っていたランにレン、ギンガはその高次元の戦いに魅せられていた。

「すごい、戦い………」

私とバルムンクじゃまだあそこまで到達するのは無理そうだ

ね……」

《マスターの発言には異を唱えたいところですが遺憾ですが認めましょう。私達はまだあそこには届かないでしょう》

ランとバルムンクはそんな会話をしていた。

「ねえ、アウル？ あの攻撃を受け止められるようになったら僕も強くなれているかな……？？」

《それはマスター次第です。しかし、すでにマスターは強くなれていますよ。だからもっと上を目指しましょう。遥かなる壁が我らを待っています》

「そうだね、アウル！」

レンもアウルヴァンディルとそんなこれからの成長を予感させる会話をしていたのだった。

そしてギンガはというとランとレン、二人のそんな会話を聞いていて、
「(ランとレン君……。ゼストさんとジグルド提督の戦いに触発されてまた一步強くなったわね。かつこよくなつてね……。レン君！)」

ギンガはランとレン……。いや、正確には特にレンを応援していた。

想いを寄せる相手であるがゆえに……。

そして二人の戦いは終盤に入ったのだろう。

「まだだ……まだ倒れんぞ。そしてこの戦いをもっと続けていたい！ こんな心の底から楽しめる戦いは初めてだからな！」

ジグルドはその表情はとても爽やかなものだった。

「……………続けたければ投降しろ。ジグルド。そうすればいつでも模擬戦でできるのかも
しれないぞ？」

ゼストがそう言つてジグルドを説得する。

しかしその言葉で正気に戻つたのだろう、ジグルドは「いえ……………」と言つて首を振り、

「私にはもうそんな未来は残されていないのですよゼスト殿……………。だから、ここで決
めさせてもらおう！ 行くぞ！ フルドライブ!!」

「引き際を誤つたようだな、ジグルド。ならば……………フルドライブ!!」

ジグルドとゼストは互いにフルドライブを發揮する。

そして同時に地を蹴り、渾身の一撃を叩き込もうとしようとしていた。だけどそれは
第三者の介入で止まつてしまった。

——ザシュツ！

「なっ!?!」

ゼストが目の中の光景に目を見開く。

るドリルを高速で回転させる。

ギユイイーーン！という音とともにジグルドの胸が削られていつているのだ。

当然そんな現在進行形で広がっている胸の穴をさらに傷つけられて、

「ぐあああああー！ー！ー！！」

ジグルドの苦痛にもがき苦しむ叫びが戦場一帯すべてへと響いていく。

「モリア・モルドレッド！ 貴様！！」

それでゼストが高速でモリアの隣へと移動してモリアのドリルの腕を槍で切り裂いた。

その反動でジグルドの胸に刺さっていたドリルは抜け落ちた。

しかし同時にそれはジグルドの体から大量に血がまき散らされていくということになる。

地面に倒れて青い顔をしているジグルドはすでに死に体に近い状態であった。

それに対して腕を切り裂かれたモリアはというと、

「くひひ！ そんなものじゃ俺様は殺せないよー！！」

「なんだと!？」

すると切断されたはずのモリアの腕は見る見るうちに再生していく。

ナノマシン技術……………。

再生機械がモリアの体に埋め込まれているために数秒もせずにはモリアは腕を回復させていた。

「ああー……………。ヴォルフ・イエーガー殿からいただいた魔導ジェネレーターは最高だねえ♪ これがあればどんな傷も魔力とナノマシンがある限り全身機械の俺様の体でも再生可能なんだからねえ！ きひひ……………」

モリアが一人自慢に酔いしれてもうジグルドにはあまり眼中にないらしく、冷めた視線を向けて、

「さて、ジグルドオ。もうお前は絶対に助からねーんだよ。なにが宿願だ。なにが粛清だ。なにが管理局を変えるだ……………。寝言は寝て言えよ」

「ジグルド！ おい、しっかりしろ！」

「カフツ……………ククク」

ゼストがジグルドを必死に呼びかける。

だがジグルドはそこで笑いを浮かべていく。

「なあにかおかしいんだ、ジグルド？ お前はもう……………」

「……………わかつて、いたさ。モリア、貴様が裏切ることなど……………」

「なに……………？」

「私はお前が裏切ること、も……………想定、していたのだよ……………カフツ！」

「ジグルド！ もう喋るな！」

「……………いや、言わせてくれ、ゼスト殿……………。私の、真の目的は絶対悪という烙印を押されて悪となり、…………最後に正義の味方に倒されて後世の歴史に正義の味方に倒される悪人として……………名を刻んで、そして管理局に蔓延している汚職や最高評議会のような連中を払拭することが最大の目的、だったのだよ……………当初の予定では私を、倒す役目はシユバインオーグ一尉に任す予定だったのだがな……………ふふふ、まかり通らないものだな……………グッ……………」

「は、ははは……………あははははははは！ とんだ自己犠牲だよジグルド！ しかしそんな計画ももうオジャンだな！ これからは俺様が世界を破壊してやるよ!! このモリア・モルドレット様がな!!」

そう言つてモリアは高笑いを続ける。

だがジグルドは最後の力を振り絞つて、

「……………ふっ……………できるものなら、やってみるが、いいさ、モリア。知つて……………いるか？ 悪は最後には正義の味方に倒されるのが……………お決まりなのだよ……………?」

そう言つてジグルドはその眼から光を失いそのまま目を閉じて命を無くし、逝つた……………。

「……………ジグルド！ くっ……………」

ジグルドの体を抱きかかえていたゼストは逝ったことを悟ってしまいその顔を悲痛に歪ませた。

「さて……………ジグルドは逝ったことだ。後は俺様が好きなようにして……………」

——バシユツ！

「……………ひゅ？」

モリアは今度はジグルドと同じことをされたかのようにフードを着ている隻眼の男……………ヴォルフ・イエーガーに首を捻じり千切られていた。

しかし、モリアは全身機械であったために、首だけでも生きていたために、

「……………ヴォ、ヴォルフ殿？ な、なにを……………？」

「私の予定を狂わさないでもらいたいな、モリアよ？……………まあ、いい。ジグルドは残念だったがここがお前の最後のだろう。暴走しろ、魔導ジェネレーター……………いや、『疑似聖杯のカケラ』よ」

瞬間、モリアの体の方に内蔵されていた魔導ジェネレーター、否『疑似聖杯のカケラ』が暴走を開始してモリアの体を突き破りそこから黒い獣が数十体以上も飛び出してきた。

「ガールルルツ……………」

「ガアアアアツ……………」

「ルルルルルウツ……………」

その黒い獣はどんどんと分裂を繰り返して増殖していく。

そんな光景に、しかし一旦戦いは中断したのだろうシホ達がこちらへとやってきたのは……………!

「ヴォルフ・イエーガー!? これはいったいなに!? ジグルド提督はどうして……………!?!」
「それはそのゼスト・グランガイツに聞くのだな。……………さて、シホ・E・S・高町、交渉しようではないか……………」

「交渉……………?」

ヴォルフ・イエーガーがシホに持ち出した交渉とは一体なんなのか?

増殖し続ける黒い獣は一体なんなのか?

謎は加速的に増えていく……………。

第二百一話

『ヴォルフ・イエーガーの真の目的』

「オジキ！ オジキーーー!!」

「そんな……………おじ様……………」

「隊長ツ！ くっ……………」

「ジグルド提督……………」

戦闘を中断してロボ、セイラ、凰華、ティーダ……………他にも生き残っていたブリューナク隊の魔導師達がゼストの腕の中で息絶えているジグルドを見て涙を流していた。

そんな中で機動六課は全員集結して交渉をしたいというヴォルフ・イエーガーと向かい合っていた。

セイバーにランサー、アーチャー、アサシンはヴォルフの命令なのか戦闘は中止している。

しかし唯一いまだにモリアの体から生み出された黒い獣は数を増やしている。もう数えるのがばからしく思えるほどに増えているので厄介だ。

「……………シホちゃん。三提督達は志貴とアルクエイドが確保したからもう安心してええよ」

「ありがとう、はやて。でも、こいつらは一体……………」

そこにふとあの四日間の記憶を覚えているアルトリア、ランサー、ライダーはシホと士郎に言う。

「シホ、それにシロウ。思い出してください。あの四日間の出来事を……………あなたならば覚えがあるでしょう?」

「ツ! そうか、アヴェンジャーの無限の残骸達!」

そう、今も際限なく増殖し続けている黒い獣はあのアヴェンジャーとうり二つの姿をしていたのだ。

姿はおぼろげながらもその鋭い爪で何度も戦ったのをシホと士郎は忘れない。

「それによ……………そのヴォルフ・イエーガーがなんか知ってんじゃねーのか?」
ランサーの言葉にシホは再度ヴォルフ・イエーガーに問いかけようとする。

「……………ヴォルフ・イエーガー。聞くわよ? あの黒い獣はなに……………?」

「……………なに。疑似的に作り出した聖杯のカケラを埋め込んで暴走させたなれの果てだよ」

「……………こともなげにヴォルフはそう言う。」

「聖杯、聖杯………か。とことん私達は聖杯とは縁があるのね」
「そのようですね、シホ」

ユニゾンを解除していたアルトリアがシホの隣でそう話す。

そしてヴォルフ・イエーガーがある提案をしてくる。

「さて、それではシホ・E・S・高町よ。私のもとへと着いてきてもらえないか？」

「なんであなたに着いていく必要があるのか事情を説明してちょうだい？」

「私はお前に渡したいものがある。そのためにはどんな非道な行いでもしよう。………」

そう、この黒い獣をミッドチルダ中で暴れさせるとかな」

『なっ!?!』

それに全員は驚愕する。

するとヴォルフ・イエーガーはこの黒い獣を制御できるというのかという話になってくる。

「胡散臭いな。お前がこれを全部制御できているとでもいうのか？」

士郎がそう言う。だがヴォルフは「フツ………」と笑みを浮かべて右手をすつと上げる。

そして士郎を指さす。

士郎は何を行うのかと思った次の瞬間には黒い獣一体が士郎目がけて飛びかかってきた。

それを士郎はとっさに干将・莫耶を投影して受け止める。
だが、

「ぐっ!？」

パワー負けしているのかどんどんと後方へと追いやられていく士郎の姿に一同はすぐに魔法や攻撃をかまして黒い獣を葬った。

それでヴォルフ・イエーガーは「どうだね……………?」と言ってくる。

それで喉けられた士郎本人も含めて全員はヴォルフ・イエーガーが黒い獣を制御化に置いていいることを悟る。

「さて、もう一度問おう。シホ・E・S・高町……………私に着いて来い。そうすればその間だけでもこいつらの暴走はさせないことを保証しよう」

「くっ……………ッ!」

それでシホは悔しいのか拳をギリギリと握りながらも、

「……………わかったわ。ヴォルフ・イエーガー、本当に私がついていけばこいつらは暴走させないのね?」

「約束しよう」

「それなら、いくわ」

「シホッ!？」

「シホさん!」

「奏者!」

みんながシホの苦渋の決断に驚く。

「シホちゃん! みんなで倒せばなんとかなるよ! こいつらの核を潰せば…………ツ
!」

「そうです! だからあの男に着いていく必要はありません!」

みんながみんな、シホを呼び止める。

しかしシホは首を振り、

「ダメよ…………。見たでしょう? たった一体の黒い獣に士郎がパワー負けしている光景を。そんなものが今も増殖し続けている。すでに数はわからないほど膨れ上がっているわ。こんなものが全部暴走したらたとえサーヴァントであるネロ達の力があっても多勢に無勢。だから私はいくわ」

「でもツ!」

スバルがそう叫ぶ。

そんなスバルの頭に手を乗せて笑みを浮かべながらシホは、

「大丈夫よ。少なくとも殺されることはないと思うから。だからみんなはもしもの事があつたら私を抜きにしてあの黒い獣を倒して…………士郎、いざって時は固有結界で殲滅し

てね?」

『……………ッ!』

「わかった……………」

全員がシホの決意に仕方なく従うしかなかった。

そこでネロが声を上げる。

「奏者よ! なにかあつたらすぐに令呪を使つて余を呼ぶのだぞ! 余がいれば奏者は

大丈夫なのだからな!!」

「ええ、ネロ」

「では行くのでしょうか」

「……………ええ」

それでシホはヴォルフ・イエーガーの近くに寄ると地面に転移のための魔法陣が浮かび上がり、シホとヴォルフ・イエーガーはその場から姿を消した。



……………そしてシホとヴォルフ・イエーガーが転移した場所はどこか薄暗い洞窟の中のようであった。

「ここは……?」

「私の研究施設だよ。さて、着いてきたまえ」

「わかったわ」

それでシホは警戒をしながらもヴォルフ・イエーガーの後を着いていく。

そして到着した場所はまさに実験室と言えるような空間であった。

そこでシホは驚きの光景を目にする。

「なっ!! 人が培養液の中に入っている!!」

そう、そこには何十個にも及ぶ培養カプセルが存在しており、その中には男女関係なく約三十人ほどの人が入っていた。

そこでシホはふと思いつく。

「三十人くらいの人? そういえば……そうだ!」

それでシホは思い出す。

そう、その三十人とは以前に行方不明になったという魔術師たちの人数と同じ数だったのだ。

それでシホはその瞳に怒りのようなものを宿す。

「ヴォルフ・イエーガー! この人たちに何をしたの!? 答えによつては……ツ!」

「安心しろ。この者たちは私の計画が済めば解放する手はずになっている」

「その言葉、信じていいのね……………?」

「ああ」

それでシホはまだ手を出さずに事を見送る。

まだまだ秘密がありそうだからだ。

叩くのならは全部の秘密を知ってからでも遅くない。

そう考えてシホはヴォルフ・イェーガーが歩いていく姿を黙って着いていく。

そしてさらに奥に進んだ先にはまた培養カプセルがあり、その中にはとある男の子が入っていた。

その男の子の顔を見てシホはまたしても驚く。

「ノア!?!」

「そう……………君の知るノア・ホライゾンだ」

「どうして彼が……………言峰綺礼に心臓を抉り取られて死んだはずだったのに」

「そう、確かに彼は死んだ。そして管理局に死体を持つていかれた。しかし最高評議会は彼の死体はホムンクルスというだけで興味の対象となり、結果研究対象として色々な実験に使われようとしていた。だから私はさせまいと彼を強奪した」

「最高評議会はノアまで……………」

「しかし私の目指す道には彼の体は好都合だった。彼は元・小聖杯を宿した少年だった。

だから私は彼の体に七つのジュエルシードを宿した。見てみる、彼の胸を」
それでシホはノアの胸を見る。

心臓を抉られた場所は塞がっていないが、代わりに七つのジュエルシードが魔法陣を描くように円状に埋め込まれていた。

そしてヴォルフ・イエーガーは語る。

「私は考えた。彼を再度疑似とはいえ聖杯の器として役目を果たさせることを……。それでジュエルシード七つに私は願った。『聖杯であれ』と……。そうして結果、ノアは深い眠りにつきながら聖杯の機能を取り戻した。しかもすっかりと中身があるな」
「中身がある……？？ それってつまりノアに願えばどんな願いも叶うってこと!?!」

「いや、そう簡単なことじゃない。一定期間の間、魔力を充填しないと願望器として効果を発揮しないのだ。そのために三十人もの魔術師を誘拐して魔力をノアへと送るよう設定した。」

そして魔力は何度か充填してその数少ないチャンスを生かして私は七体のサーヴァントをクラスカードとして具現化した。ある、目的のためにな」

「そのある目的って、なに……？」

「その前にシホ・E・S・高町……。いや、シルビアよ。本来の姿に戻ったらどうだ？
そうすれば私も正体を君に話そう」

その言い回しにシホは驚く。

本来の姿に戻れ………という事はシルビアの姿になれという事でも、

「どこで知ったの………？」

「さてね………」

とぼけるヴォルフにシホは「まあいいわ」と言つて一度目を閉じる。

《イリヤ………行くわね？》

《はあ、わかつたわ》

そう言つてイリヤに話しかけてとある作業を手伝ってもらう。

そして、

「………リバーズ。モード、シルビア………」

シホがそう呟いた瞬間、シホの朱銀色の髪が光り輝いて粒子を散らすように朱色の成分が抜け落ちていく。

そして先ほども朱銀色であったシホの髪は完全に銀色へと変わっていた。

しばらくしてシホは眼を見開く。

するとシホの特徴的な琥珀色の瞳はルビー色へと変貌していた。

つまるところはアインツベルン製のホムンクルスと同じく銀髪赤目の状態になった

のだ。

その姿はかつてのイリヤの母であるアイリスフィール・フォン・アインツベルンとほとんどうり二つである。

当然だ。この体の素体はイリヤなのだ。

だから似ているのは必然。

「……………では、話していただきましょうか。ヴォルフ・イェーガーよ」

しかも先ほどまでのシホの口調ではなく、喋り方はどこか貴族を感じさせる丁寧なものである。

そう、今シホはシルビアへと姿を変えているのだ。

いや、この言い方はおかしい。

シホとシルビアは魂を融合したのだ。

だからこの姿はシルビアでありシホでもある。

シホの時の姿もシホでありシルビアでもあるのだ。

少しややこしいが、まあそんなところである。

「フフフ……………会いたかったぞ。シルビアよ」

「私はあなたのことを知りません。できれば私を知っているわけを教えてくださいませんか？」

「いいだろう。私はヴォルフ・イエーガーという名は偽りのもの。本名は『セヴィル・アインツベルン』。この右目の宝珠に宿っている意識生命体だよ」

そう言つてヴォルフ・イエーガーは右目を開く。

そこには確かに宝石が収まっていた。

しかしそれよりもシルビアは驚く。

「その名前は……ッ！ まさか、セヴィルなのですか!？」

「思ひ出したかね？ 姉さん……」

ヴォルフ……いや、セヴィルはシルビアの事を姉さんと呼んだ。

つまりは、そういう事だ。

「し、しかしあなたは……!」

「そう……。アインツベルンの一族は予言でも危険視されて姉さんを残して全員が殺されてしまった……。でも、私は意識を宝石に転換してどうにか生き残ったのだ」

「セヴィル……ッ!」

そう言つてシルビアはセヴィルに抱き着く。

もう死んだと思つていた弟が目の前に姿を変えてるとはいえ生きているのだ。

嬉しくないわけがない。

しかし、シルビアはしばらくしてセヴィルから離れて、

「……………しかし、セヴィル。あなたは今までヴォルフ・イェーガーとして悪事を重ねてきましたね。許されぬことです」

「ああ、ああ……………わかつていとも。だからこれで最後にしようと思っっているのだ。長い年月を送り私の魂はなんとか保ってきたがそれももう限界だ。

あと、一年もしないでこの宝珠は朽ちて私は死んでしまおうだろう。

だから私の願いはただ一つ。姉さんが『創造物質化』を再び使えるようになることなのだ」

「再び、創造物質化を……………?」

それでシルビアは思った。

セヴィルは魔術の世界のインツベルンと同じく失われた術を追い求めるあまりかつての威光に取り憑かれているのかもしれない、と。

「……………キャスター」

そう言つてセヴィルは今の今まで姿を見せなかつたキャスターを呼ぶ。

するといつの間にかそこにはフードを着た女性が立っていた。

「キャスター、ですか……………? しかし、メディアでも私が失つた創造物質化を蘇らすことは不可能では……………」

「何を勘違いしているのかは想像はつくが、このクラスカードは裏切りの魔女メディア

ではない。ルールブレイカーを使ったのは「投影」したからだ」

「投影………？ まさか、ではそのクラスカードの正体は！」

「そう、英霊エミヤ。いや、本来のエミヤとは違うが、シホ・E・S・高町が英霊化してクラスカードに宿つたのがこのキャスターの正体だ」

そう言つてキャスターは無言でクラスカードを地面に置く。

それを恐る恐るシルビアは拾う。

そしてキャスターと呼ばれたホムンクルスは役目を果たしたのか塵となつて消えてしまった。

「セヴィル……。聞きます。今までどうして敵対行動を行つてきたのですか？ こんな回りくどいことをしなければ私達は素直に巡り会えたというのに………」

「姉さん、いや、シホ・E・S・高町には成長してほしかったのだ。危ういままでは姉さんの魂と融合していても不安だからな。だが、結果シホ・E・S・高町は自身の正義を明確にできた。だから私はこうして姉さんと会う決意をしたのだ」

「セヴィル………」

——キシッ！

すると右目の宝珠に突然ヒビが入る。

「くっ!? 予定より早く私の魂の崩壊が始まったか! 姉さん、そのクラスカードを胸に当ててくれ! そうすればクラスカードはシホ・E・S・高町の魂と協調して融合するはずだ!」

「し、しかしセヴィルは……?!?」

「私の事はもういいのだよ。それより今まで使わせてもらっていたこの体の本来の持ち主を保護してやってくれ……。ノアや捕らえていた魔術師達も……。そして、最後に私がいなくなり制御が外れて暴走するであろう黒い獣の群れを退治してくれ。無責任だとは思う。だがお願いする」

そうセヴィルは言う。

宝珠のヒビはどんどんと広がっていき、

「さよならだ、姉さん……」

完全に砕け散ってセヴィルはその場に倒れこむ。

「セヴィル……さようなら」

シルビアはもう間に合わなかった事を悔やみながらも、

「……………リバーズ。モード、シホ……………」

本来のシホに戻っていく。

そして、

「ヴォルフ・イエーガー……いえ、セヴイル。あなたの気持ち、受け取ったわ。全員助けるから……。でも、ライダーとの約束、『あなたを殴る』って約束、果たし損ねてしまっ
たわね……」

そう愚痴りながらもシホはクラスカードを胸に当てて、

トレスオン
「協調開始……」

協調を開始する。

するとクラスカードはシホの体へと吸収されていき、そして、

——ドクンッ！

シホの体に失われた力が戻ってくるのを感じる。

しかしシホは同時に悲しい思いを感じていた。

「便利だけこんな災いを呼ぶかもしれない力……。私は欲しくなかったのにね」

そう言いながらもシホはアンリミテッド・エアの格納スペースに入れられている宝石
剣を取り出して、

「またここに来るわ。ノアに魔術師のみんな。必ず助けるから待っていて……」

シホはそう言って暴走しているであろう黒い獣に襲われようとしている機動六課のみんなのもとへと七色の光に包まれながら転移するのであった。

第二百二話

『シホの新たな世界』

……ヴォルフ・イエーガー……いや、セヴィル・アインツベルンが死んだ時間にとんと増殖し続ける黒い獣が次々と暴走を開始していた。

「くっ！ シホが戻るまで黒い獣は暴走することはないのではなかったのか!？」

士郎が干将・莫耶で襲い掛かってくる黒い獣を切り裂きながらもそう愚痴る。

そう、黒い獣はすでに数えきれないほどに増えてしまっていて機動六課の戦力だけでは対処できなくなってきた。

黒い獣は三提督が捕らわれていた施設を中心にどんどん拡散していき、その広がりには下手をすれば大災害と呼ぶにふさわしいほどに地上を黒く染めていた。

その光景を空に浮かんでみていたなのは達はその光景に絶句していた。

「そんな……これはもう私達では対処できないよ!」

なのはが少し絶望感を感じながらもひたすらにデイバインバスターを黒い獣に向かって放っていた。

だがそんな中を機動六課の敵であったセイバー、アーチャー、ランサー、アサシンは

突き進んでいた。

四方に散ろうとしている黒い獣を四人は東西南北に散らばって対処していた。

「切り裂けッ！」

セイバーは雷の刃を放って黒い獣をこれ以上進ませないように切り裂いていく。

「グングニル
大神宣言!!」

ランサーはグングニルを放って次々と貫いている。

「ナインライブズ
射殺す百頭!!」

アーチャーは出し惜しみは無しだとばかりにナインライブズを放っていた。

「……………かかれ」

「……………マスターの最後の命令、果たして見せる」

「……………ククク」

アサシンは次々と分身してダークを放って一撃で仕留めていく。

それを見てネロ、アルトリア、オリヴィエ、ランサー、ライダー、キャスター、志貴、アルクエイドも触発されたのか、

「昔の敵は今の友……………とも言いが、今は余達もともに戦おうぞ！」

そういつてネロは大剣を構えて踊るように切り裂いていく。

「決めます！ シホが帰ってくるまであなた方はここから出ることを許しません！」

アルトリアはエクスカリバーを振るいストライクエアを放って吹き飛ばしていく。いざという時には宝具解放をしようと思っていた。

「……そうですね。完全に敵ではないのです。今はともに戦う時です！」

オリヴィエはそう言って聖王鉄槌砲を負けじと放っていた。

「ククク……昔を思い出すぜ！ 血がたぎってきたぜ！」

ランサーは昔の乱戦を思い出して血がたぎって逆にギアが上がっていた。

「ここで使わずにいつ使うのですか！ スズカ、使わせていただきます！ 騎英ベルレフオーンの手綱!!」

ライダーは思念通話ですずかの許可をとってペガサスを召喚して突撃していった。

「赤皇帝には遅れを取るようではいけません！ ここは必殺のー！」

キャスターは呪術を使わずに走り込みをして何度も「去勢拳ーッ!!」と蹴りを叩き込んでいた。

周りからは魔術を使えよ！と全力ツツコミを受けていたがキャスターは己の道を走っていた。

「志貴！ いっくわよ！ アサシンに後れを取らないようにね！」

「ああ！ 俺たちの力を見せる時だな！」

志貴とアルクエイドがいつも通りの仲の良さで次々と切り裂いていった。

……敵味方のサーヴァントが入り乱れて黒い獣を次々と葬っていた。

それでなのは達も勇気づけられて「みんな！　ここで防がないとミッドチルダは地獄になる！　だから本気を出すよ!!」となのはが叫び、全員が『おー!』と叫んで魔導師組も次々と立ち向かっていった。

そんな中、ゼストが、

「お前達はどうするのだ……?」

地獄のような戦場の中でいまだにロボ達リユニーク隊は意気消沈していた。

「オジキ……俺は、どうすれば……?」

ロボは心の支えを失ったために戦う気力を無くしていたのだ。

しかしゼストがロボの肩に手を置き、

「少年よ。今はジグルドのためにも戦う時ではないのか……?　そしてお前たちの大将はミッドチルダにないを思っていたか思い出せ!」

ゼストがのジグルドが何をもってしてこのクーデターを起こしたのかを語り、ブリユニーク隊を勇気づける。

そして、

「俺はこの戦場に行く。お前たちもジグルドを思うのなら、立ち上がれ……」

そう言つてゼストは黒い獣の群れへと進んでいった。

「俺は、俺は!」

「若！ おじ様のためにもここは立ち上がりましょう！」

「ああ！ セイラ！ いくぞー！」

「はいー！」

ロボとセイラは立ち上がった。

そして凰華とティーダも「そうだな」と再びデバイスを握りしめて、

「いきましようか、獅堂陸曹」

「そうだな。ティーダさん！ みんな、立ち上がれ！ 今こそジグルド提督の弔い合戦を開始するぞ！！」

『おーーー！！』

凰華の鼓舞する言葉でブリューナク隊は全員士気を取り戻して立ち上がり次々と向かっていった。

そう、敵味方関係なく全員が一致団結して黒い獣に立ち向かっているのだ。

この光景を見られないジグルドは、しかし死んでもみんなのことを見守っているだろう。

「オジキ！ 見ていてくれよ！ 俺は最後まで戦って見せる！」

それでロボはブランカを振るって黒い獣を打ち倒していく。

……しかし、全員が立ち向かったはいいがやはり数が多すぎたためになかなか攻勢

に出れないでいた。

そんな時にはやてが接近戦にまで追い込まれてピンチになる。

「くっ！ やられる!?!」

黒い獣の爪がはやてに迫ろうとしたその時だった。

『おいおい………情けないぞ。我がうつしみよ?』

「へ………? この声は?」

途端、はやての目の前にキャスターのクラスカードが浮いていて黒い獣の爪をなにかの謎の力で受け止めていた。

そこに金色の髪少年が姿を現して、

「どうも、お姉さん!」

その子は小ギルであった。

「ギルガメツシュ!?!」

はやてが警戒するが、小ギルは「大丈夫です」と前置きをして、

「今回はあなた方を助けに来たのですよ。それに………彼らがともに戦うとうるさいのでね」

そう言って小ギルはその手に『セイバー』『ファイター』『ランサー』『バーサーカー』のクラスカードを持っていた。

それを『キャスター』のクラスカードが浮いている空に放ち、

「さあ、約束の時ですよみなさん！ 暴れて構いません！ 召喚！！」^{サモン}

小ギルの言葉でクラスカードから莫大な魔力が発生して次第に体を形作っていく。

そして、

「……………セイバーのサーヴァント、アルトリア・ペンドラゴン。参る！」

「ファイターのサーヴァント、クラウド・G・S・イングヴァルド、いくぞぞ！」

「ランサーのサーヴァント、デイルムツド・オディナ、今こそ誓いを果たす時！」

「■■■■■■■■■■——ッ！」

「キャスターのサーヴァント、ヤガミ。ククク……………！ 久方ぶりに暴れるとしよう！」

黒い甲冑を身に纏い黒く染まっているエクスカリバーを構えたセイバーが、クラウドが、デイルムツドが、狂化しながらもきつちりと黒い獣だけを標的にしているランスロットが、不敵な笑みを浮かべながら今か今かと飛び出そうとしているヤガミが、この戦場に降臨したのだ。

「なぁー！？」

当然、はやては驚くが五人はそれぞれ行動を開始する。

瞬く間に五人の攻撃は黒い獣を駆逐していく。

道中でそれぞれ宿敵と合流して色々と会話をしたところ、心配は

ないのだろう。むしろ安心するというものだった。

まさにこの戦場には十体以上のサーヴァントが暴れまわっているという異常事態。

しかし、そんな状況でも本体を潰さない限りは無限に増えていく黒い獣。

士郎はそんな光景を見て、全滅させなければいけないと決心をして固有結界を使おうと詠唱を始めようとしたその時にブレイド・テミスの格納スペースに入っている宝石剣がなにかの反応を示しだして士郎は宝石剣を取り出す。

すると宝石剣から七色の光が漏れてきて、次の瞬間には士郎の前にシホの姿が出現した。

「シホは……………」

「シホ！ 無事だったのか！」

「士郎！ ということは座標は合っていたようね！ それにしてもやっぱり黒い獣は暴走を開始していたのね……………」

「暴走した理由を知っているのか？」

「セヴィル……………いえ、ヴォルフ・イエーガーが倒れたことで制御下を離れたんだと思うわ」

「ヴォルフ・イエーガーは死んだのか……………」

「ええ……………詳しい事情はあとで話すわ。今は……………」

「そうだな……………」

シホの行おうとしていることを士郎も悟ったのだろう。

「シホは詠唱に専念しろ。私が詠唱中はシホを守ろう！」

「お願いね？」

士郎がシホに向かって迫ってくる黒い獣を干将・莫耶で切り裂き迎撃してシホの詠唱を邪魔させない士郎。

そんな光景を目にしながらもシホは目をつぶって詠唱に入る。

—— I 体 a m は t h e 剣 b o n e で o f 出 m y 来 s w o r d . て い る

シホの詠唱はただ眩くだけだというのに戦場で戦っている全員の耳に届く。それで全員はシホが行おうとしていることを悟ったのだろう。

より一層迎撃に力を込める。

a n d 心 f i r e は i s 硝 m y 子 b l o o d . 血 S t e e l 潮 i s は m y 鉄 b o d y . で

「これって、シホさんの声！ シホさんは例の固有結界を使おうとしているのかな！」
 「ラン姉さん！ たぶんそうだと思うけど今はレジアスさんを守ることに専念しよう！」

「レン君のいう通りね！」

ランとレンとギンガがレジアスを守りながらも戦っていた。

シホの詠唱はまるで浸透するかのよう響いていく。

I have created over a thousand blades.

「やっぱり悲しい詠唱だね……今からシホは心を開こうとしている。私達はそれをただ聞き届けるしかないんだね」

フェイトがシホの自身の心も抉る詠唱を聞くだけで自身の事でもないので心が張り裂けそうになっていた。

しかし、ここからシホの詠唱は変わっていた。

Unaware of loss,

I ^大notice ^切a ^なthing ^もto ^のprotect ^を.

「え……………？ 詠唱内容が変わっているんか？」

はやてが詠唱内容の変更にすぐに気づいた。

そう、シホの詠唱は十年前のと違い変化していた。

新たな正義である『大切な者達を守る正義の味方』を志したことで変化したのだらう。

With ^担stood ^いpain ^手to ^はpledge ^誓manufacture ^をweapons ^こ

シホは聖王のゆりかごでの戦いのときに世界と本気で渡り合った。
そして世界とは契約をせずに自身の正義だけで乗り切った。

promised ^約for ^東one ^のsteel ^丘arrival ^で

この時からシホの心象世界は変化を起こしていたのだ。

さらには体内になるアヴァロンとアルトリアの持つアヴァロンをフルにシンクロさせることによって世界はさらなる変化を遂げていたのだ。

Yet, those. This is the end of the only thought.

シホの新たな境地。

二度と破らない、破らせない。

そんな思いを込めたことで変化した詠唱内容、そして心象世界。

それを今、解き放つ………！

unlimited blade works. I stay my body.

シホの詠唱内容が終了する。

瞬間、地面に炎が走っていく。

そう、黒い獣と戦っている機動六課、ブリューナク隊、サーヴァント達………すべて

を巻き込んで世界は塗り替えられていく。

そして世界は新たに新生する。

しかし、そこはもう赤い荒野ではなかった。

さまざまな剣が突き刺さっているのは変わっていないが地面には草原が広がり蒼天の青空に眩しい太陽……………。

そう、シホの心象世界は詠唱内容が温かいものに变化していたように世界も同様に温かい空間へと変化していたのだ。

その光景に以前の世界を知っているのは達はとても嬉しそうな表情を浮かべていた。

変わったのだ……………。もうシホがエミヤと同じ道を辿ることは二度とないという証のようなものだろう。

「……………いくわよ？ 無限に湧く黒い獣よ。数の貯蔵は十分か？」

そしてシホが手を上げるとすべての剣が引き抜かれて空へと上がる。

太陽の光をうけて剣たちすべてが活気溢れているかのように光り輝く。

「全剣整列！ 穿て！ 一斉掃射！！」

剣軍が次々と綺羅星のように黒い獣へと殺到していく。

「ギ、ギイーーーーッ!!?」

「ガアツ!？」

「ギヤアアアツ!!」

劍軍に貫かれて黒い獣たちは生き残った者は逃げようとする。

しかしすべてもう固有結界の中に閉じ込めたのだ。

逃げ場はない。

「吹き飛びなさい!!」

シホの命令で連続で突き刺さっていく劍達。

そして貫かれる黒い獣たち。

まさに蹂躪劇を見ているようだ。

一体、また一体と潰されていきついには数を二桁まで減らされていた。

トレス・オン
「解析開始!」

そしてシホは残りの黒い獣を解析する。

それでついに核になっている『疑似聖杯のカケラ』を持つ本体を発見したのだ。

それで、

「アルトリア!　いくわよ!」

「はい、シホ!」

『ユニゾン・イン!』

ユニゾンしてセイバーフォームへと変化する。

そしてエクスカリバーフォームを構えて、剣先を本体の黒い獣へと向けて構えて、解き放つ。

「約束エックスされた……勝利の剣カリバー……ッ!!」

核を持つている本体の黒い獣はエクスカリバーで焼き払われてついには消滅した。

それで残りの黒い獣もすべて消滅して、シホは固有結界を解除する。

そう、戦いは終わったのだ。

ジグルドが死んでしまった事は悲しいことだがそれでもきつとブリーユーナク隊の面々も前を向いて歩いていけるだろう。

シホのもとへと駆け寄ってくるみんなを目にしてシホは「終わったのね………」と
思った。

その時だった。

——ダンッ!

シホの胸に銃弾が撃ち込まれていたのは……。

「なっ!?!」

それで撃った先を見るとそこには首だけの状態で生き汚く生きていたモリアが口か

ら銃口を出してシホを撃っていたのだ。

「キヒヒ！　これで貴様もおしまいだ！　最後のあがきを見せたぜ！」

モリアがまた嬉々とした叫びを上げているが、シホは倒れなかった。

それはなぜか？　答えは簡単。

シホの胸の傷は最初からなかったかのように塞がっていたのだ。

「はっ……………？」

それでモリアは思考を停止させる。

そんなモリアにシホは近づいて剣を振り上げる。

モリアは「ひっ！　やめ——…?!」と言うがもう遅い。

シホの剣はモリアの顔に剣を振り下ろされ、しかし顔の横に剣は落とされた。

それでモリアは殺されると思っていたのか泡を吹いて気絶してしまった。

「……………あなたには聞きたいことが山ほどある。だから殺さないわよ……………」

モリアの件はこれで一応片がついた。

それからみんながどうして傷がすぐに塞がったのか、ヴォルフ・イエーガーはどうなったのか、とシホは色々と聞かれることになるのであった。

とりあえず落ち着いて話し合える場所で話すとしてシホはみんなに納得してもらったのであった。

第二百三話

『シホの身に起こった事実。そして

ジグルドの手紙』

ジグルドとブリーユーナク隊により起こされたクーデターはジグルドが死亡したこと
で一応の決着を見せた。

市民達も管理局が全力で迅速に対応して一応は騒動は鎮静を見せた。

今はこれに乗じて犯罪を犯すものが出てこないように当分は厳しく取り締まってい
く事で話は決まった。

三提督もケガもなく無事救出されて親族たちはたいそう喜んだという。

黒い獣が暴走するという異常事態に陥ったもののそれらもすべて機動六課を中心と
した者たちによってすべて駆逐されたとメディアには報道されて機動六課の評価はま
た格段と上がったという。

キリングドールを開発したモリアも最後にはあっけなく気絶して、今頃事情聴取が行
われていて今現在は管理局の執務官の団体がシホ達が発見したモリアのキリングドール

ル製造工場をくまなく捜査しているという。

これによってモリアに研究のための資金を提供していた支援者達もおのずと逮捕されるだろう。

そしてジグルドが死んだ後、残されてしまったロボ、セイラ、鳳華、ティード、ウィルソンを含むブリューナク隊は素直に管理局に捕まって今後の扱いをどうするか上層部で話し合われているところだ。

もちろんリオンも理由はどうあれ犯罪を犯したことには変わりないので保護という形で今は隔離施設へと入れられている。

スバル達と別れる際、

『また、一緒に遊ぼうね。スバル、ティア………』

とリオンは言っていたのでスバルとティアナもとくに心配はせずにリオンがまた外に出てこれることを祈っていた。

ゼストとレジアスもまた隔離施設へと戻ったが特に不安なことはないという。

特にゼストはレジアスを守りきる事が出来た為にもう満足であるらしい。

レジアスもジグルドの行ったことでもなにか思ったのか誠意的にこれらかの管理局の未来を考え始めているという。レジアスが管理局に復帰するのはいつの日になることやらである。

それとだが、小ギルの手によって復活した『セイバー（アルトリア）』『ランサー（ディルムツド）』『ファイター（クラウス）』『キャスター（ヤガミ）』『バーサーカー（ランスロット）』なのだが、戦いが終わった後、魔力が切れたのかまたクラスカードに戻ってしまい小ギルの手に戻っていったという。

そしてセイバー（タケミカヅチ）、アーチャー（ヘラクレス）、ランサー（オーデイン）、アサシン（ハサン・サツバーハ）のクラスカードを持っていたホムンクルス達もヴォルフ・イエーガーがいなくなったことで戦う理由がなくなったらしく、小ギルが彼ら四人を預かるという事で話は落ち着いた。

そのとうの小ギルはシホ達に、

『お姉さん、そのうち僕の組織に招待しますね。宝石翁もいますから大丈夫ですよ』
と、言ってホムンクルス達とともにどこかへと去って行った。

その際、シホはゼルレッチが小ギルと協定を結んでいることにひどく驚いたという。落ち着いたらゼルレッチとも話し合いを行った方がいいな、という事に落ち着いた。

……そして最後に話題がひっきりなしの機動六課はと言うと、

「……………さて、それじゃシホちゃん。もろもろの事件が解決したという事でシホちゃんの身に何が起きたのか教えてくれるか？」

「わかったわ、はやて」

それでシホはヴォルフ・イエーガー……いや、セヴィル・アインツベルンの真の目的をはやて達に通じた。

話が進んでいくうちにセヴィル・アインツベルンの本当の顔が明らかになっていくにつれて一同の表情はどう判断していいかという思いになっていた。

そう。セヴィルはシホに創造物質化を再取得してもらうために今まで試練のような感覚で敵対していたのだ。

だからもう死んでいなくなったとはいえないのはオリヴィエを始めとする被害を受けたみんなにはあまり受け入れられない話であった。

しかし、それでも、

「セヴィルは理由はどうであれ私に希望を託してくれた。だからこの力は有効に使わせてもらおうと思っている。あ、それとはやて。この力が蘇った事は緘口令を敷いてくれないかしら？ この事実を知ってわらわらと人が集まってくることは容易に想像できるから」

「わかったわ。この話はここにみんなだけの胸にとどめておくことにする。それでいいな？ みんな？」

『うん！』

それでシホの力は全員胸の中だけで納まることになったのである。

「でも、そうなるとノア・ホライゾンや他にも三十人も誘拐された魔術師のみんなも保護しないといけないね。それに誘拐された人の家族にも報告しないといけないし」

フエイトがそう言う。

「そうだね、フエイトちゃん。シホちゃん、後でその居場所を教えてね。みんなで助けにいこう！」

「そうね、なのは」

シホ達は近いうちにヴォルフ・イエーガーの秘密施設へと捜査を開始することを決めた。

色々な発見はあるだろうが、これで今まで長年に続いた魔術師失踪事件やジュエルシード強奪事件などのものもろの事件も解決したことになる。

後は、ジュエルシードを埋め込まれて疑似とはいえ聖杯の器になっているノア・ホライゾンをどうやって人の手に触れないで対処するかにかかってくる。

安易に願いを叶える願望器になってしまっている以上、もしもノアの体が欲がくらんだもの手に渡ったら大変なことになるからだ。

だからノアの体に埋め込まれているジュエルシードをすべて摘出して聖杯の器としての効果を無くしてノアの体は今度こそ土に返すという話に落ち着きそうである。

これでシホのセヴィル・アインツベルンとの関係性についての話は一応終わった。
本題はここからだ。

「それでシユバインオーグ。お前の体は確かにあの時モリアによって撃たれたはずだ。なのに傷は一切残っていないかった。これはどう説明をしてくれるのだ？ よもやあの一瞬で魔力を流して一瞬で回復したということではあるまい？」

シグナムがそう聞いてくる。

それはシグナムが聞かなくとも全員が気になっていたことだ。

それに関してはいずれシホはみんなに話さなければいけないと思っていた。

「シホ……………」

「奏者よ……………」

「シホちゃん……………」

「お姉さま……………」

アルトリアとネロ、すずかにファイアット。

この四人だけは事情を知っているらしくシホに心配な表情を向ける。

そう、これから話すことはシホの今後について大事な話になってくるのだ。

もう誤魔化しは聞かない。

どうせなら盛大にバラしてやろうという気持ちでシホはこの問題の経緯を話し出す。

「これはJ・S事件での聖王のゆりかご戦でのことだった……………」

そう、忘れもしない。

シホと洗脳されていたのはが戦ったゆりかご戦。

その時にシホはゆりかごを破壊するためにユニゾンしてアルトリアの持つ宝具と自身の体に宿っている宝具……………つまり『すべて遠き理想郷』。

この本来二つは存在しないはずの同じ宝具をフルにシンクロさせたのだ。

その結果、二つの宝具は二つ存在するという矛盾を否定するためお互いに干渉しあい、そして融合してしまった。

「……………私は今現在アヴァロンを所持していません。シホの体内のアヴァロンと融合してしまっただからです」

アルトリアがそう話す。

つまり、シホの中には今現在二つ分の効果を持ったアヴァロンが存在することになる。

「それでその結果、私の体に異変が起こったのよ。本来のアヴァロンの効果は不老不死。これは本来の持ち主であるアルトリアしか持ちえなかったはずだった。だけど、それが私の体に定着してしまっただけのために私は……………」

「まじか……………」

「そんな………」

シホが一旦言葉を切る。

それでも言いたいことは分かっていたため、一同は目を見開いて次には顔を俯かせてしまった。

「そう。みんなの想像通り……私は不老不死になってしまったのよ」

そのシホの衝撃の言葉によって真実を知った一同は、ただただ呆然とするしかなかった。

みんなが無言になってしまっていて重たい空気が部屋中に張りつめている。

しかし、そんな中シホは口を開いて、

「みんな。そんなにショックを感じないで……」

「でも！ シホちゃん！ もうシホちゃんは死ねないんだよ！ みんなとおんなじ時間を共有できないんだよ！？」

なのはが泣きながらそう叫ぶ。

そしてそれが合図だったのだろう。

他のみんなも反応は様々だったがシホの身を案じて涙を流してくれていた。

そのことに対してシホはとても胸が温かくなる思いを感じていた。

私はこんなにみんなに思われて幸せだな、と………。

だからシホは笑みを浮かべて、

「大丈夫………。私は決して一人じゃないから。私の中のイリヤとアルトリアとネロが生涯一緒になって付き合ってくれる。同じ不死である大師父もいる………。それにすずかとフィアに私の未来の楽しみを繋げられた」

そう、シホはすずかとフィアの二人との間に自身の血を分けた子供を授かったことで生涯独りぼっちになることはないのだ。

もしも今いるみんなが寿命で全員いなくなつたとしても、その意思を継ぐ子孫達が生きていく。

その子供達を見守ることができればシホはそれだけで幸せなのだ。

この世界に来る前のもとの世界ではそんな思いをできないかもしれない闘争の中で時を過ごしていた。

それを思えば今ある幸せを守ることが第一なのだ。

置いてきた者たちがいる……。

悲しませた者たちがいる……。

それでももうシホは後悔しないと決めたのだ。

その人たちの分もシホは生きることを決めた。

その想いをみんなに話すと、

「まったく、お前さんらしいな……」

「まったくですね」

ランサーとオリヴィエには呆れられてしまっていた。

それでもそこには確かな笑顔もあつた。

それで他のみんなもシホの言い分を認めてシホが暮らしやすいように色々と考え始めるのであつた。

そう、シホの未来はまだまだ続いていくのだから……。



……後日、シホはブリューナク隊が入れられている隔離施設へと赴いていた。

シホの話が一段落した日に機動六課にとある手紙が送られてきた。

その中身にはブリューナク隊にとつてもとても貴重なものが入っていたからだ。それを届けるためにシホはやってきたのだ。

面会室ではまずは代表としてではないのだがロボとセイラがいた。

「シホさん、どうも」

「この間はお世話になりました、シホさん」

「いえ、いいわよ二人とも。それで隔離施設での暮らしはどう？」

「そうですね……ブリューナク隊のみんなと一緒に過ごしているから不自由はないです」

「私も若と一緒に過ごせればそれだけで……」

「そう」

それでシホはあることをロボとセイラに伝える。

「ロボ君にセイラさん。昨日ね、機動六課にとある手紙が届いたのよ。今日はそれをブリューナク隊のみんなに渡したくてこうして来たのよ」

「その手紙ってまさか……」

「そう。ジグルド提督が寄越した手紙よ」

「オジキが!？」

「おじ様が!？」

それで二人の顔は驚きに染められる。

それでシホはさつそくとばかりに手紙を二人に渡そうと懐から出す。

それを二人に渡す。

二人は震える手で、でもすぐさまに手紙を開く。

その中身は……、

『機動六課の諸君。この手紙が届くころには私はもうこの世にはいないのだろう。』

まずは謝らせてほしい……。私は最高評議会を肅清して最後には悪として正義の味方である君たち機動六課に討たれることによつて市民の怒りの感情をすべて一緒にあの世に持つていくことを計画した。

こんなことを起こして今更謝れる頭はもうないが……。この手紙を残してしまうであらうブリューナク隊の面々に届けてほしい。厚かましいが私の最後の願いを受けてくれ』

それが一枚目の機動六課へと宛てた手紙だった。

「私は二枚目は見ていないわ。だからあなた達の手で開封してあげて」

「はい……」

それでロボは二枚目の手紙を開く。

そこにはこう書かれていた。

『まずは凰華……管理局に深い恨みを持つお前は、長い間私とジョンの為によくついて来てくれた。感謝してもし切れない……。ありがとう。』

そしてタスラム……。いやティーダ。計画の為とはいえ、私の我儘につき合わせてたつた一人の家族を……。妹に会わせないようにしていた……。許してくれ……。許してくれ

……。そして妹と仲良く暮らすのだぞ。

ウイルソン……お前の知識、そして武術は決して並大抵の者が習得できるものじゃない。だが、いつまでも私のそばじゃなく、私よりもっと上をゆく人間の下で知恵と武を生かせ……。

セイラ……いつもロボの側近としてよく戦ってくれた。姉弟として育てて来たお前たちの成長を見るのが、いつの間にか私の楽しみになっていた。お前がロボに好意を抱いていたのは分かっていた。だから言っておく……お前たちは自由だ。もう私の為に戦わなくていい……私はずっとお前たちの幸せを祈っている。愛してるぞ……我が娘よ。

ロボ……お前はよく戦った。父を失っても父の誇りを守るためにお前は戦い続けた。お前に教えていたな、『ジョンの語る正義は「悪党に絶対屈しない」』と……お前の人生はまだまだこれからだ。本当はお前の成長を見届けたかった。お前ならきつと……いや、絶対に父をジョンを超える立派な男に……勇敢な戦士になつていてと思う。ロボ……先に逝く私を許してくれ。だがいつもお前と共にいる事を忘れないでほしい……頑張れよロボ……負けるなよ、ロボ……我が息子よ！

だが……それでも私はお前の……ブリーナク隊の皆が幸せになつていて、願っている。いつか……また会おう！ 我が盟友達よ!!』

その手紙を最後まで読み切つてロボとセイラは大粒の涙を流していた。

「おじ様……………おじ様……………ッ！」

「解らない……………解らないよオジキ……………今まで俺は俺を育ててくれたオジキの力になりたくて戦つてきたのに……………今さら俺は何のために戦えばいいんだよ……………！　あまりにア
ンタは立派過ぎて俺には解らないよ……………！」

セイラはひたすらロボの背中で涙を流していて、ロボはそんなジグルドの手紙に涙を流してジグルドがもう二度と帰つてこない悲しみを再確認して未来への不安を口にしていた。

「ロボ君にセイラさん……………。あなた達はまだ若いわ。深く悲しんだら少しでもいい。ジグルド提督の事を思いながらも自身の答えを見つけていってほしい。きっと、ジグルド提督もそう思っているはずだわ」

シホの言葉にロボとセイラはひたすら「はい……………はいッ！」と頷いているのであった。それからしばらくシホは二人と面会を続けていた。

そして隔離施設から出てきて、

「アルトリア……………ネロ……………」

「はい」

「うむ」

そこにアルトリアがアンリミテッド・エアから出てきて、ネロが霊体化を解除して現れる。

「ジグルド提督が命を賭して示した未来……。私達は間違わずに進んでいこうね」

「わかっています、シホ」

「当然だ。奏者のことは一生守るからな！」

「ええ！」

それでシホは「これからが大変ね！」と言つて機動六課へと帰っていくのであった。

第終章 これからも続く道

エピローグ

『シホの進む先は光に満ちて

……』

ブリューナク隊が起こしたクーデター事件はこうして終結した。

それ以降はこれと言つてめぼしい事件は起こらなくて機動六課の穏やかな時間は少しずつだが流れていく。

機動六課卒業までの短い期間中、ティアナがヴァイスに自身の想いを打ち明けたりという事があったが、さて……。

本人達はそれ以降も時間はわきまえてデートくらいはしているようで、同室のスバルがなのはに「最近ティアアがあんまりかまってくれない……」とぼやきをしていたとか
なんか。

まあ、幸せなのはいいことだ。

そのうち、隔離施設にいるティータにティアナとヴァイスは報告をしにいくという。そんなおめでたい話があったが、J・S事件や様々な事件が起こった物騒な年は終わって、新年を迎えて、バレンタインも風習がないために機動六課の中だけで実行して、そして春になった。

そう、機動六課解散の日だ。

はやてが全員にスピーチをして、

「みんな、今までありがとうな。これからの職場でも頑張ってください。お疲れ様でした」

『はい！』

最後のあいさつは滞りなく終了して、

「さて、それじゃみんな。最後に挨拶があるから着いてきて」

なのはにそう言われてフォワードの面々はなのはの後をついていく。するとみんなを迎えたのは満開の桜だった。

スバルやティアナは「わあ、きれい……！」と言って喜んでいた。

ミッドチルダにはないがわざわざ桜を訓練場に設置していたのだ。

「フォワード隊、整列ー！ーッ！」

ヴィータのその言葉にフォワード達が隊長たちがいる前に並んでいく。

「……さて、それじゃみんな！ 今までありがとう！ みんながいたおかげでこうして無事に機動六課が卒業を迎えられることができたんだよ」

「いえ、そんな……」

なのはの言葉にティアナが謙遜してそう言う。

そう、いつも教導で教えてもらっていたスバル達からすれば、やっぱりなのはやシホ、フェイト達は頭が上がらない存在なのだ。

「もう、謙遜なんてしないの。みんなは立派になった……一年前に比べればたくましく成長した。教えていた身としてはとても嬉しいよ。ね、シホちゃん？」

「ええ、そうね。確かにみんなは成長したわ。それを誇りに持つてみんなはこれからも日々精進してほしい」

シホにまでそう言われて六人は恥ずかしい気持ちで、でも嬉しくなっていた。

「それだけでなく、みんな。デバイスは持つてきている……？」

なのはにそう言われてフォワードのみんなはそれぞれデバイスを出す。

それになのはは「さすがいつも相棒は手放していないね！」と言う。

それに六人は少し嫌な予感を感じながらも、

「あの、なのはさん？ なにをするんですか……？」

スバルが代表してなのはにそう聞く。

「うん。最後は湿っぽくしたくないからみんなで最後に元気で模擬戦をするの！　そして盛大に卒業しよう!!」

『ええー!?』

フオワード＋フェイトが大声を上げる。

エリオが「フェイトさんも知らなかったんですか!」と声を上げているのはスルー。でも、ここで自身の成長を見せれるのはいいことだとみんなは思い、六人とも「やろう、みんな!」というスバルの掛け声でやる気になっていた。

「も、もう勝手なんだから……」

フェイトがそう言いながらもバルディッシュを取り出す。

結局はしたいのだからしようもないことである。

「あ、当然サーヴァントのみんなやアルトリアさんは参加しないからなあ?」

「そ、そうですよねー……」

もし参加していたらそこには死体が転がることになるだろう。

それでシホ、なのは、フェイト、ヴィータ、シグナムの隊長陣はバリアジャケットを展開する。

ここにファイアットも参加予定だったのだが、もう妊娠七か月のお腹をしているのだから当然参加はダメになった。

フィアットは「参加しなかったです……」と言っていたのをシホが「お腹の子に障るから我慢ねフィア」となだめていた。

そしてフォワードのみんながそれぞれデバイスを構える。

「いづくよー！」

いつも元気なフォワードのムードメーカーで立派に成長したスバル。

「今度こそ、なのはさんに届けてみます！　そう、常にイメージするのは最強の自分よ。

あたし！」

立派にみんなのリーダーを成し遂げたティアナ。

「いくよ、キャロ！」

「うん、エリオ君！」

一番最年少の二人だがそれでもフェイトを驚かすくらいに成長をしたエリオにキャラクター。

「レン！　ここでヴィータ副隊長を倒すわよ！」

剣士として、そして切り込み隊長として成長したラン。

「うん！　防御は僕に任せてラン姉さん！」

一年前の弱気の心を克服して強くなったレン。

「それじゃー……いづくで！」

「始めさせてもらいますー！」

はやてと卒業を祝うために来ていたギンガによって最後の模擬戦のカウントダウンが開始する。

「レディー………ゴー!!」

そしてその言葉とともに模擬戦は始まったのだった。

結果はどうなったかは、全員の顔を見ればわかるというものだ。

全員が全員いい顔をしていた………。

最高の卒業式になったのは間違いなかったのだ。



そしてみんなはそれぞれの道を歩んでいった。

なのはは戦技教導官を続けて、その間にユーノと正式に結婚して男の子を授かることになった。

ヴィヴィオとオリヴィエとともに五人で楽しく暮らしたそうだ。

ヴィヴィオはS・t・ヒルデ魔法学院で友達とともにストライクアーツを学んで日々

勉強も頑張っているという。

フェイトもランサーと正式に結婚した。

子供に関してはランサーは英霊なので無理なのではないかと危惧されていたが、シホが創造物質化を使いどうにかしたためになんとか女の子を授かることに成功した。

執務官を続けながらも子育てに励んでいる。

はやては特別捜査官に戻って守護騎士達や志貴、アルクエイドとともに頑張っている。

ただ、「友達関係でなんで私だけ男がいないんやー!」と嘆いでいたとかなんとか。でも、近い将来ティアナの義理の姉になるかもしれないらしい……。

アリスはウィルソンを部下にしてそしてそのまま結婚した。

それで生まれた子供はアサシンが鍛えているとのこと。

そして魔術事件対策課第二部隊の部隊長となって日々を送っている。

よくミゼとは一緒になって飲んでいるという。

アリシアもヴェロツサと結婚して女の子を授かっていた。

アリシアとヴェロツサは二人とも陽気な性格のために子供は反面教師で自然と賢い子になって聖王教会を手伝っているという。

士郎とキャスター、アインスはツルギとともにシホの家の近くに引越した。

そして日々魔術事件対策課で頑張っているという。

ツルギもヴィヴィオと一緒にS.t. ヒルデ魔法学院に通って毎日を楽しんでいる。

ただ、ちよつとした事件があつたのは、後日語られるだろう……。

スバルは特別救助隊で誠意仕事を励んでいるという。たまに会うティアナとは会うたびに色々と遊んでいる。

そしてトレディ等戦闘機人達もナカジマ家に数名加入して賑やかになっているらしい。

ティアナはヴァイスと将来の結婚を考えて結婚できる歳になったら結婚する予定らしい。

執務官にもなれたしヴァイスとの仲も上々でいい暮らしをしているという。

エリオはキャロとともに自然保護隊に入ってコンビで活躍しているという。フェイトとしては二人の仲なら付き合ってもいいよ、らしいがそこにルーテシアが入って三角関係になっていると、このことで前途多難である。

ランとレンはシホと同じ職場である魔術事件対策課に入って日々を過ごしている。

ランはその強気な性格でやはり切り込み隊長を任されるようになって活躍している。

レンもシールダーとしてみんなの援護をして鉄壁を誇っている。

……ただ、レンは女性関係に関してはエリオと同じくギンガとトレディとの間で三角関係になって「僕、どうする!？」という事態になっているとかなんとか……。

ブリューナク隊の面々はそれぞれ短くない期間を隔離施設で過ごし、出所後それぞれ活躍したという。

ロボとセイラはジグルドの言葉通りに未来を目指して突き進んでいき、おしどり夫婦として活躍したという。

ティータはティアナとヴァイスの関係を認めながらもどういうわけかはやてと良い仲になっているとか噂をされているという。

ウィルソンはアリサを新たな主人として見出して補佐しているという。

鳳華は日々シグナムと一緒にコンビを組んで悪をなすものを倒しているという。

リオンは一度フェイトの家に引き取られた。

その際のやり取りはというと、

『私が……フェイトさんの？』

『うん。私達の家族として迎えたいの』

『でも私は……』

リオンは少し戸惑いを見せる。

『確かにリオンは罪を犯したけど今はソレに向き合おうとしている。私はその手助けをしたい。今のリオンに必要なものは、**“繋がりに”**だと思う』

『つな……がりに？』

『そう……リオンが本音を言える存在がスバルとティアナだけじゃなく、家族という繋がりも……必要だと思うんだ。ランサーはどうか？』

もう分かっているだろうにフェイトはランサーにそう聞く。

それでランサーも『わかってるぜ』という顔をし、

『俺は異論はねえぜ？ こんなかわいい嬢ちゃんが妹になるなら大歓迎だ』

『もう、ランサー!』

『ははは。んで、どうだ? リオンの嬢ちゃん……俺達と家族にならないか?』

それでリオンは少し恥ずかしからくる顔の赤みはあるものの、

『え、えと……よ、よろしくお願いします。姉さん、兄さん……』

という微笑ましい光景があったという。

そしてその後正式に管理局員になり、その特殊性の腕を買われて特殊部隊の隊長になったという。

小ギルはゼルレッチとともに地球を拠点に魔術師の団体施設を設立していて世間を常に騒がしているという。

ヴォルフ・イエーガーが作り出したホムンクルスの四人もここで働いているという。

………全員が全員思い思いの人生を送っている。

そんな中、シホ達はというと、

「はあ、はあ、はあ………」

シホは走っていた。

今にも嬉しそうな顔をしながらも病院へと続く道を。

「奏者よ、急ぐのだ！ あと少しですすかかファイアットが子供を産んでしまうぞ！」

「そうです、シホ！ 急ぎましょう！」

「わかつているわ！」

アルトリアとネロの二人に急かされながらも今すぐに同時に生まれるだろう子供を見るために走っていたのだ。

そしてシホが病院に到着して分娩室の前にやってくるとそこにはライダーとランとレンが事態を見守っていた。

「ライダー！ ランにレン！ 私の子供は!?!」

「シホ、大丈夫です。まだ生まれていませんよ」

「まだこれからですよ、シホさん！」

「うん、間に合ってよかったですね、シホさん！」

「よかったあ……間に合ったわ」

シホがそう言って分娩室の前で一緒に事態を見守っていると、すぐ中から赤ちゃんの泣き声が二人分聞こえてきた。

そう、すずかかファイアットの二人は違う赤ちゃんながらも二人同時にシホの子供を産んだのだ。

腹違いの双子という事になった。

すぐさまシホは分娩室の中へ入って行って、

「すずか！　ファイア！　頑張ったわね！」

「うん、シホちゃん……………」

「はいです、お姉さま……………」

多少の疲れは見られるだろうが二人は無事に子供を産めたことに安堵の表情を浮かべていた。

「よし！　名前は決まっていたから言うわね！　すずかと私の子供の名前は『士織』。

ファイアと私の子供の名前は『クオン』よ！」

「士織ちゃんかー。いいね！」

「やった！　昔からの名前が採用されました。クオンちゃん、このお姉さまがあなたのお母さん？　いや、お父さん？　ですよー」

赤ちゃんの名前が決まったことに全員はたいそう大喜びをしたのだった。

それからはシホ、すずか、ファイアット、アルトリア、ネロ、ライダー、ラン、レン、そして士織、クオンを加えて大家族になって全員で楽しく過ごしたのであった。

そして時は流れていき……………、

……

……

……

ほとんどの知っている者は先に逝った。
そんな中で、

「シホちゃん……………」

「お姉さま……………」

「すずか、ファイア……………」

そこには年老いて寿命を全うしようとしていたすずかとファイアットの姿があった。

そしてシホが若いままの姿で二人の手を握ってあげていた。

やはり、不老不死ともなればいずれは別れは来る。

なので三人で最後を過ごしたいと言って土織とクオンには病室の外で待つてもらった。

ている。

「楽しかったよ、シホちゃん……」

「私もです……」

「私も、二人と過ごせた時間は忘れないわ……そして“これからよろしくね”」

「うん……」

「はいです……」

そしてしばらくして「ピー………」という延命装置の無機質な音が響いて二人は逝った。

それをシホは無言で悲しんで、外にいる土織とクオンに会いに出ていく。

そこには二人の他にアルトリア、ネロ、ライダーの姿があった。

しかしアルトリアとネロはともかくライダーがまだ現界できているのはまだ契約が切れたばかりだからか………？

「シホお母さん……」

「ファイアお母さんにすずかお母さんは逝ったんだね？」

「ええ……」

それでシホは自身よりも年上に見える土織とクオンを抱きしめながら、

「それじゃ、私は行くわね。もう二人はこれから自由に生きなさい。でも、修業は怠るの

「はダメよ……?」

「わかっています」

「私達の子供にもそれは徹底させます。それよりさようなら、シホお母さん」

「ええ……」

シホはたまには帰ってくると言ってネロとアルトリアとともに旅立つことにしたのだ。

もう私の助力は必要ないだろうという決断をしたために……。

それでシホは士織とクオンとは名残惜しみながらも別れてアルトリアとネロと、そしてライダーと四人で歩いていた。

「……さて、それじゃいくとしましょうか? イリヤ」

《ええ、シホ》

イリヤがシホの中から言葉を返す。

「アルトリア」

『はい、シホ』

アルトリアがアンリミテッド・エアの中から声を出す。

アルトリアは今は魔力節約でよくアンリミテッド・エアの中で過ごしているのだ。

「ネロ」

「うむ！」

ネロは頷く。

「ライダー」

「はい」

ここでなぜかライダーの名前を呼ぶシホ。

「そして、『すずか』に『フィア』！」

そしてシホは死んだはずの二人の名前を呼んだ。

すると、

「うん！」

「はいですー！」

そこには先ほど死んだはずの二人の姿があった。

しかも二人とも若かりし頃の姿に戻っている。

ただし、『リイン』サイズで……………！

そう、シホは二人に事前に創造物質化を執行して、死んだ瞬間に二人の魂は肉体から離れてユニゾンデバイスとして生まれ変わったのだ。

最初はシホもこの提案には渋ったのだが二人はシホといつまでも一緒にいたいと言って考えを曲げなかったのだ。

それゆえにシホは二人に降参した。

だからライダーもずずかとの契約は続いたままで現界していられる。

「これからどうしようか、みんな……?」

シホが全員にそう問いかける。

『シホの赴くままにいきましょう』

アルトリアが。

《そうだよ、シホの好きなようにいこう！ 過去の私達の世界の聖杯戦争に殴り込みで

もする……?》

イリヤが。

「そうだぞ、奏者！ 余はどこまでも着いていくぞ！」

ネロが。

「そうだよ、シホちゃん！ 私はいつまでも一緒だよ」

ずずかが。

「あつ！ ずずか、ずるいです！ 私もお姉さまといつまでも一緒ですからね？」

ファイアツトが。

「フフツ………これからの旅路は騒がしいものになりそうですね、シホ」

ライダーが。

シホの問いかけに全員が全員思い思いに騒がしく喋りながらも言葉を返す。
それでシホは心の内で、

「(私は一人じゃない……ずっとみんなと一緒にいてくれる。これからもずっと……)」

シホは胸にある幸せを抱きながらもおもむろに宝石剣を取り出す。

そう、長年の修行でシホは完全に宝石剣をマスターしたのだ。

シホが宝石剣を出したのを合図に、すずかとファイアットはシホの腕に絡みつくように
ミニ魔導書の姿へと変わり、ライダーとネロは霊体化してシホの背後につく。

「それじゃみんな、これからもよろしくね！ 行くわよー！」

『はいー！』

それでシホ達は七色の光に包まれながらどことも知れない平行世界へと旅立つので
あった。

シホ達の物語はまだまだ続いていく……。

しかし、いったんこのお話は終わりにしよう。

シホを主役とするお話はこれでおしまいなのだから……。